# 四街道市稲荷塚遺跡

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ —

［第１分冊］

平成21年３月

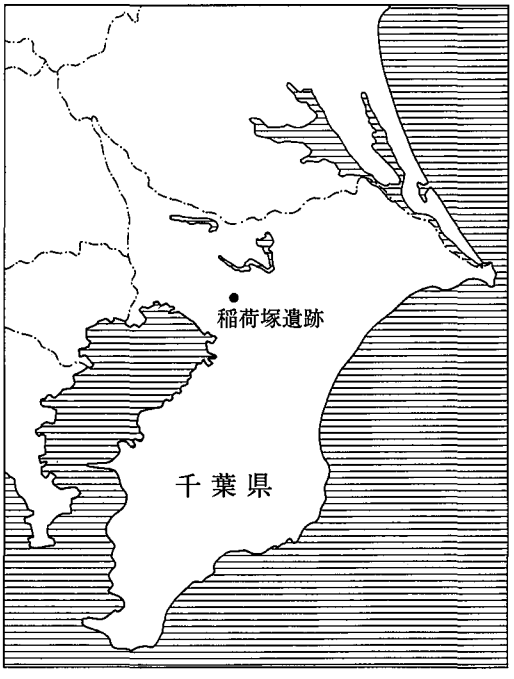
独立行政法人　都市再生機構

財団法人　千葉県教育振興財団

# 四街道市稲荷塚遺跡

## — 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ —

## [第１分冊]



SI－107 出土遺物

SI－004 出土遺物

SI－121 出土遺物

SI－148 出土遺物

# 序　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第613集として，独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市稲荷塚遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，旧石器時代から中・近世まで，遺構・遺物が出土していますが，特に奈良・平安時代において，多くの竪穴住居・掘立柱建物が見つかるなど，千葉県の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係機関，また，発掘作業から整理作業まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成21年３月

財団法人　千葉県教育振興財団

理事長　　福　島　義　弘

# 凡　例

1　本書は，独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県四街道市物井字稲荷塚1,298－２ほかに位置する稲荷塚遺跡（遺跡コード228－016）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，独立行政法人都市再生機構の委託を受け，財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の組織，担当者及び期間は第１章に記載した。

5　本書の執筆は，第１章・第５章・第７章第１節及び第４節・付章第２節１・３を上席研究員糸川道行，第２章・第３章及び第７章第２節・第３節を所長（平成18年度）古内茂，第４章・第６章を上席研究員（平成19年度）岸本雅人，付章第１節を上席研究員西野雅人が担当した。表組のうち第３章縄文時代に関係するものについては古内が，それ以外は岸本が作成した。なお奈良・平安時代の土器・施釉陶器の原稿・表作成について，上席研究員小林信一の教示を得た。平安時代の炭化種実分析を株式会社パレオ・ラボに委託し，その成果を付章第２節に掲載した。編集は岸本・糸川が行った。

7　文字資料の一部については，大学共同利用機関法人人間文化機構国立歴史民俗博物館　平川南館長に判読していただいた。石器等の石材は（有）考古石材研究所柴田徹氏の鑑定によった。また，北武蔵産須恵器について加藤恭朗・黒済和彦・富田和夫・根本靖・渡邉一各氏から，三河産土師器について城ヶ谷和広・永井宏幸各氏から，平安時代の炭化種実について（財）山武郡市文化財センターの大谷弘幸氏から，各々御教示をいただいた。

8　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，四街道市教育委員会，独立行政法人都市再生機構の御指導・御協力を得た。また，出土土器について古代生産史研究会の会員諸氏からの御指導を得た。

9　本書で使用した地形図は，下記のとおりである。

第４図　国土地理院発行　１／25,000地形図「佐倉」（平成10年6月）・「千葉東部」（平成10年４月）（縮尺変更，1/50,000にして使用）

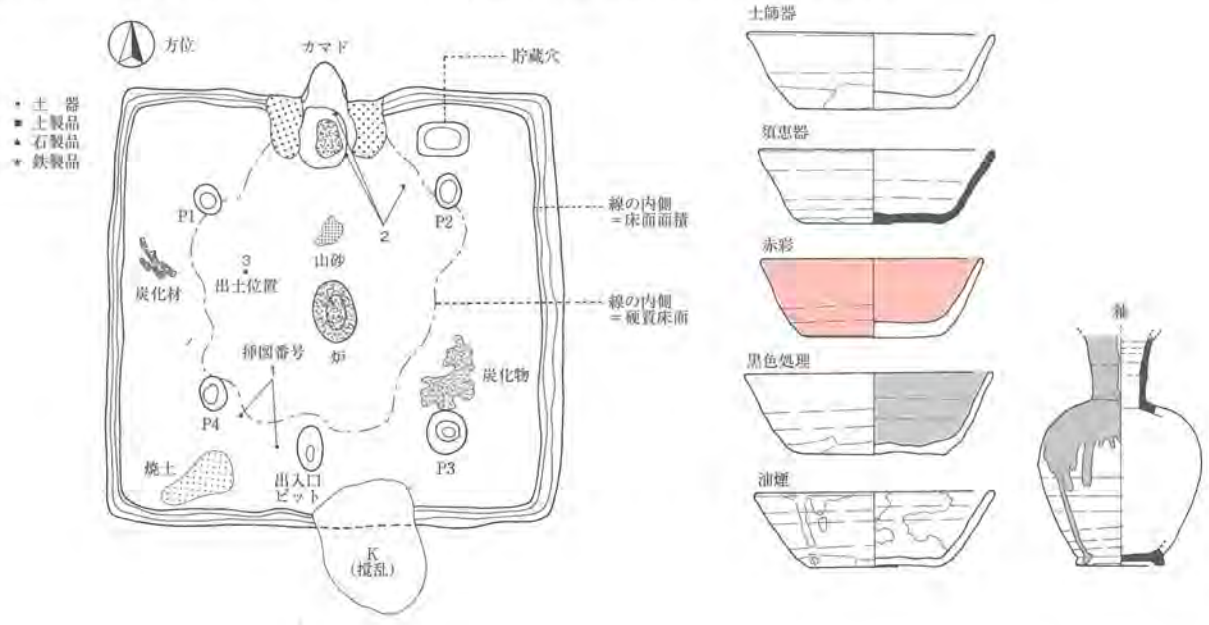
第353図　明治13年・15年参謀本部陸軍部測量局作成1/20,000図「臼井村」・「中川村」・「下志津村」・「佐倉」（縮尺変更，1/40,000にして使用）

上記以外　住宅・都市整備公団（当時）による物井地区現況図

10　写真図版１，遺跡周辺航空写真は京葉測量株式会社による昭和44年撮影のものを使用した。

11　本書で使用した図面の方位及び測定値は，すべて調査時の旧公共座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）に則っている。

12　挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は，次のとおりである。



# 目　次

《第１分冊》


第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査の概要…… 1
　　１　調査の経緯と経過…… 1
　　２　調査・整理の方法…… 7
　第２節　遺跡の位置と環境…… 7
第２章　旧石器時代…… 12
　第１節　概要…… 12
　第２節　層序…… 12
　第３節　発見された石器群…… 14
　　１　第１文化層…… 14
　　２　第２文化層…… 16
　　３　第３文化層…… 22
　　４　第４文化層…… 23
　　５　単独出土の石器…… 27
第３章　縄文時代…… 28
　第１節　概要…… 28
　第２節　早期の遺構・遺物…… 29
　　１　炉穴…… 29
　　２　陥穴…… 33
　　３　土坑…… 34
　第３節　前期の遺構・遺物…… 34
　　１　竪穴住居跡…… 34
　第４節　グリッド出土の遺物…… 44
　　１　土器…… 44
　　２　土製品…… 57
　　３　石器…… 57
第４章　弥生時代・古墳時代…… 75
　第１節　概要…… 75
　第２節　竪穴住居跡…… 75
　第３節　古墳…… 91
　第４節　遺構外出土遺物…… 91
第５章　奈良・平安時代…… 93
　第１節　概要…… 93

第２節　竪穴住居跡…… 93

《第２分冊》

第５章　奈良・平安時代…… 369
第２節　竪穴住居跡…… 369
第３節　竪穴状遺構…… 476
第４節　掘立柱建物跡・柵列・塀…… 481
第５節　土坑…… 526
第６節　遺構外出土遺物…… 542
第６章　中・近世およびそのほかの遺構・遺物…… 546
第１節　概要…… 546
第２節　土壙墓…… 548
第３節　土坑…… 550
第４節　塚…… 575
第５節　小穴…… 577
第６節　井戸状遺構…… 587
第７節　溝状遺構…… 588
第８節　遺構外出土遺物…… 597
第７章　まとめ…… 598
第１節　全体の概要…… 598
第２節　旧石器時代…… 600
第３節　縄文時代・弥生時代…… 600
第４節　奈良・平安時代の集落について…… 602
付章　自然遺物の分析…… 619
第１節　貝サンプルの分析結果…… 619
第２節　炭化種実の分析…… 622

《第３分冊》

報告書抄録

# 表目次

《第１分冊》

第１表　稲荷塚遺跡年度別調査概要…… 3
第２表　稲荷塚遺跡遺構種別一覧…… 8
第３表　縄文時代土坑・陥穴等観察表…… 72
第４表　縄文時代石器一覧表…… 72

《第２分冊》

第５表　縄文・弥生・古墳時代竪穴住居跡
観察表……626
第６表　古墳時代遺構出土土器計測表……627
第７表　古墳時代遺構外出土土器計測表……628
第８表　奈良・平安時代竪穴住居跡観察表……629

第９表　奈良・平安時代竪穴状遺構観察表……644
第10表　掘立柱建物跡・柵列・塀観察表……645
第11表　奈良・平安時代土坑観察表……646
第12表　奈良・平安時代遺構出土土器計測表……647
第13表　奈良・平安時代遺構外出土土器計測表…690
第14表　銅製帯金具計測表……690
第15表　刀子計測表……690
第16表　鉄鏃計測表……692
第17表　鎌計測表……693
第18表　釘・錐・棒状製品計測表……693
第19表　穂摘具計測表……694
第20表　その他の金属製品計測表……694
第21表　紡錘車計測表……695
第22表　椀形鍛冶滓計測表……696
第23表　支脚計測表……696
第24表　土製品計測表……696
第25表　羽口計測表……696
第26表　玉類計測表……697
第27表　砥石計測表……697
第28表　軽石計測表……698
第29表　中・近世土坑墓観察表……698
第30表　中・近世土坑観察表……699
第31表　小穴観察表……701
第32表　溝状遺構観察表……702
第33表　中・近世遺構外出土土器計測表……702
第34表　銭貨観察表……703
第35表　稲荷塚遺跡・線刻・ヘラ書き土器一覧…703
第36表　文字資料一覧……706
第37表　打ち欠き土器一覧……708

# 挿図目次

《第１分冊》

第１図　稲荷塚遺跡の位置
第２図　物井地区の遺跡と周辺遺跡
第３図　稲荷塚遺跡年度別調査区位置図
第４図　グリッド呼称法
第５図　地区区分図
第６図　遺構位置図
第７図　下層発掘区及び検出地点位置図
第８図　基本土層
第９図　第１地点遺物出土状況図
第10図　第１地点出土遺物実測図
第11図　第２地点出土遺物実測図
第12図　第３地点遺物出土状況・遺物実測図
第13図　第４地点遺物出土状況・遺物実測図
第14図　第５地点遺物出土状況図
第15図　第５地点出土遺物実測図
第16図　第６地点遺物出土状況図
第17図　第６地点出土遺物実測図
第18図　第６地点出土遺物実測図
第19図　第７地点遺物出土状況図
第20図　第７地点出土遺物実測図
第21図　第８地点遺物出土状況図
第22図　第８地点出土遺物実測図
第23図　第９地点遺物出土状況・遺物実測図
第24図　単独出土遺物実測図
第25図　FP－001・002・003・004・005・006・007・008・009
第26図　FP－004出土土器
第27図　FP－005・008・009出土土器
第28図　SK－033・034・057・114・271・274・283
第29図　SK－284・285・286・288・289・290・291・302
第30図　SK－303・320・321
第31図　SK－001・038・104・233・254
第32図　SI－005・007・025・028
第33図　SI－005・007出土土器
第34図　SI－025出土土器
第35図　グリッド出土土器（1）
第36図　グリッド出土土器（2）
第37図　グリッド出土土器（3）
第38図　グリッド出土土器（4）
第39図　グリッド出土土器（5）
第40図　グリッド出土土器（6）
第41図　グリッド出土土器（7）
第42図　グリッド出土土器（8）
第43図　グリッド出土土器（9）
第44図　グリッド出土土器（10）
第45図　グリッド出土土製品
第46図　グリッド出土石器（1）
第47図　グリッド出土石器（2）

第48図　グリッド出土石器（3）
第49図　グリッド出土石器（4）
第50図　グリッド出土石器（5）
第51図　グリッド出土石器（6）
第52図　グリッド出土石器（7）
第53図　グリッド出土石器（8）
第54図　グリッド出土石器（9）
第55図　グリッド出土石器（10）
第56図　グリッド出土石器（11）
第57図　SI－032・122
第58図　SI－029（1）
第59図　SI－029（2）
第60図　SI－044・051
第61図　SI－066
第62図　SI－079・083
第63図　SI－084
第64図　SI－115（1）
第65図　SI－115（2）
第66図　SI－116
第67図　SI－227・242・古墳時代遺構外出土遺物
第68図　SX－001・005
第69図　SI－001・002
第70図　SI－003
第71図　SI－004（1）
第72図　SI－004（2）・006
第73図　SI－008
第74図　SI－009
第75図　SI－010
第76図　SI－011
第77図　SI－012
第78図　SI－013
第79図　SI－015・017
第80図　SI－018・019
第81図　SI－020
第82図　SI－021
第83図　SI－023
第84図　SI－024・026
第85図　SI－030・031
第86図　SI－033
第87図　SI－034・035
第88図　SI－040
第89図　SI－041
第90図　SI－042
第91図　SI－043
第92図　SI－045
第93図　SI－046
第94図　SI－047
第95図　SI－048
第96図　SI－049
第97図　SI－050
第98図　SI－052・053
第99図　SI－054
第100図　SI－055・056
第101図　SI－057
第102図　SI－058
第103図　SI－059
第104図　SI－060
第105図　SI－061（1）
第106図　SI－061（2）
第107図　SI－062
第108図　SI－063
第109図　SI－064
第110図　SI－065
第111図　SI－067
第112図　SI－068
第113図　SI－069
第114図　SI－070
第115図　SI－071
第116図　SI－072
第117図　SI－073（1）
第118図　SI－073（2）
第119図　SI－074
第120図　SI－075
第121図　SI－076
第122図　SI－077
第123図　SI－078
第124図　SI－080
第125図　SI－081
第126図　SI－082
第127図　SI－085
第128図　SI－086・087
第129図　SI－088
第130図　SI－089
第131図　SI－090・091
第132図　SI－092（1）
第133図　SI－092（2）
第134図　SI－093（1）
第135図　SI－093（2）
第136図　SI－094
第137図　SI－095（1）

第138図　SI－095（2）
第139図　SI－096
第140図　SI－097
第141図　SI－098・099・100・102
第142図　SI－101（1）
第143図　SI－101（1）
第144図　SI－103（1）
第145図　SI－103（2）
第146図　SI－104
第147図　SI－105・106・107
第148図　SI－108・109
第149図　SI－110・111
第150図　SI－112・113（1）
第151図　SI－113（2）
第152図　SI－114
第153図　SI－117
第154図　SI－118（1）
第155図　SI－118（2）
第156図　SI－119
第157図　SI－121
第158図　SI－123・124・125
第159図　SI－126
第160図　SI－131
第161図　SI－132
第162図　SI－133・134
第163図　SI－135
第164図　SI－136
第165図　SI－137
第166図　SI－138（1）
第167図　SI－138（2）
第168図　SI－139・140
第169図　SI－141・142
第170図　SI－143・144・145
第171図　SI－146
第172図　SI－147（1）
第173図　SI－147（2）
第174図　SI－148
第175図　SI－149
第176図　SI－151（1）
第177図　SI－151（2）
第178図　SI－152
第179図　SI－153（1）
第180図　SI－153（2）
第181図　SI－153（3）
第182図　SI－154
第183図　SI－155（1）
第184図　SI－155（2）
第185図　SI－156（1）
第186図　SI－156（2）
第187図　SI－157
第188図　SI－158・161
第189図　SI－162・163
第190図　SI－164
第191図　SI－165（1）
第192図　SI－165（2）
第193図　SI－165（3）
第194図　SI－167
第195図　SI－168
第196図　SI－169
第197図　SI－170
第198図　SI－171（1）
第199図　SI－171（2）
第200図　SI－172・173
第201図　SI－174
第202図　SI－175
第203図　SI－176・177
第204図　SI－178（1）
第205図　SI－178（2）
第206図　SI－179
第207図　SI－180
第208図　SI－181
第209図　SI－182
第210図　SI－183・184
第211図　SI－185
第212図　SI－186
第213図　SI－187・188
第214図　SI－189・190
第215図　SI－191（1）
第216図　SI－191（2）
第217図　SI－192（1）
第218図　SI－192（2）
第219図　SI－193
第220図　SI－194
第221図　SI－195
第222図　SI－196
第223図　SI－197・198
第224図　SI－199
第225図　SI－200

《第２分冊》

第226図　SI－201
第227図　SI－202
第228図　SI－203
第229図　SI－204（1）
第230図　SI－204（2）
第231図　SI－205
第232図　SI－206
第233図　SI－207（1）
第234図　SI－207（2）
第235図　SI－208（1）
第236図　SI－208（2）
第237図　SI－209
第238図　SI－210
第239図　SI－211（1）
第240図　SI－211（2）
第241図　SI－211（3）
第242図　SI－212（1）
第243図　SI－212（2）
第244図　SI－213
第245図　SI－214
第246図　SI－215
第247図　SI－216
第248図　SI－217
第249図　SI－218
第250図　SI－219
第251図　SI－220・221
第252図　SI－222・223・224
第253図　SI－225・228
第254図　SI－229
第255図　SI－230
第256図　SI－231
第257図　SI－233
第258図　SI－234・235
第259図　SI－236
第260図　SI－238
第261図　SI－239
第262図　SI－240
第263図　SI－241・243
第264図　SI－244（1）
第265図　SI－244（2）
第266図　SI－245A
第267図　SI－245B
第268図　SI－246A（1）・246B
第269図　SI－246A（2）
第270図　SI－247・248・249
第271図　SI－250
第272図　SI－251・252A・252B
第273図　SI－253
第274図　SI－254
第275図　SI－255
第276図　SI－256
第277図　SI－257（1）
第278図　SI－257（2）
第279図　SI－258・259
第280図　SI－260・261
第281図　SI－262（1）
第282図　SI－262（2）
第283図　SI－263
第284図　SI－014・016・022・027・120
第285図　SK－005・006・008・016・018・257
第286図　SB－001・002
第287図　SB－003・004・005
第288図　SB－006・007
第289図　SB－008・009
第290図　SB－010・011
第291図　SB－012・013
第292図　SB－014・015
第293図　SB－016・018・019
第294図　SB－020・021・022
第295図　SB－023・024
第296図　SB－025・026・027
第297図　SB－028・029
第298図　SB－030
第299図　SB－031・032
第300図　SB－033・034
第301図　SB－035
第302図　SB－036・037
第303図　SB－038・039
第304図　SB－040・041
第305図　SB－042・043・044
第306図　SB－045・046
第307図　SB－047
第308図　SB－048A・048B・048C
第309図　SB－050
第310図　SB－051A・051B・052
第311図　SB－053・054
第312図　奈良・平安時代土坑（1）
第313図　奈良・平安時代土坑（2）
第314図　奈良・平安時代土坑（3）

第315図　奈良・平安時代土坑（4）
第316図　奈良・平安時代土坑（5）
第317図　奈良・平安時代土坑（6）
第318図　奈良・平安時代土坑（7）
第319図　奈良・平安時代遺構外出土遺物（1）
第320図　奈良・平安時代遺構外出土遺物（2）
第321図　中・近世遺構位置図
第322図　土坑墓
第323図　中・近世土坑（1）
第324図　中・近世土坑（2）
第325図　中・近世土坑（3）
第326図　中・近世土坑（4）
第327図　中・近世土坑（5）
第328図　中・近世土坑（6）
第329図　中・近世土坑（7）
第330図　中・近世土坑（8）
第331図　中・近世土坑（9）
第332図　中・近世土坑（10）
第333図　塚
第334図　小穴（1）
第335図　小穴（2）
第336図　小穴（3）
第337図　小穴（4）
第338図　井戸状遺構
第339図　溝状遺構（1）
第340図　溝状遺構（2）
第341図　溝状遺構（3）
第342図　溝状遺構（4）
第343図　溝状遺構（5）
第344図　溝状遺構（6）
第345図　溝状遺構（7）
第346図　溝状遺構（8）
第347図　中・近世遺構外出土遺物
第348図　下総国郡郷等位置図
第349図　駅路の変遷
第350図　明治年間の地形
第351図　遺跡周辺の古墳群・古墳時代後期集落分布
第352図　遺跡周辺の奈良・平安時代集落分布
第353図　線刻・ヘラ書き土器一覧（1）
第354図　線刻・ヘラ書き土器一覧（2）
第355図　線刻・ヘラ書き土器一覧（3）
第356図　文字資料一覧（墨書・朱書・刻書）
第357図　打ち欠き土器一覧（1）
第358図　打ち欠き土器一覧（2）
第359図　打ち欠き土器一覧（3）

# 図版目次

《第１分冊》
巻頭図版１　SI－004・SI－107・SI－121・SI－48出土遺物

《第３分冊》
図版１　遺跡周辺航空写真（昭和44年撮影）
図版２　稲荷塚遺跡空中写真(1)（北から）
稲荷塚遺跡空中写真(2)（南から）
図版３　稲荷塚遺跡空中写真(3)（北東から）
稲荷塚遺跡空中写真(4)（東から）
図版４　稲荷塚遺跡空中写真(5)（合成）
図版５　Ａ区空中写真 平成７年度（西から）
Ｂ区(北区)空中写真 平成８年度(南から)
図版６　Ｂ区（南区）及びＤ区空中写真
平成８年度（南から）
Ｅ区空中写真 平成８年度（南から）
図版７　Ｆ区空中写真 平成10年度（南西から）
Ｈ区空中写真 平成15年度（北から）
図版８　Ｃ区調査前 平成７年度（北西から）
Ｃ区確認調査終了 平成７年度（西から）
Ｇ区（南区）調査前 平成13年度（西から）
図版９　Ｇ区（南区）完掘 平成13年度（南西から）
Ｇ区（北区）完掘 平成13年度（南西から）
Ｇ区(中央区)完掘 平成14年度(北西から)
図版10　第１文化層第１地点（南から）
第２文化層第３地点（南から）
第２文化層第４地点（南から）
図版11　第２文化層第５地点（南から）
第２文化層第５地点（西から）
第２文化層第６地点（北から）
図版12　第３文化層第７地点（南から）
第３文化層第８地点（南から）
調査風景
図版13　縄文石器集中（22L－88付近）（北西から）
縄文石器集中（22K－79付近）（北から）
土層断面（22L－02）
図版14　FP－1（西から），FP－2（西から）
FP－3（西から），FP－4（南から）

FP－5（南から），FP－6（北から）
FP－7（北から），FP－8（南西から）
FP－9（西から）

図版15　SI－005（東から），SI－007（北から）
SI－025（北東から）

図版16　SI－028（東から），SK－033（南から）
SK－034（南から），SK－114（南から）
SK－271（西から）

図版17　SK－283（南から），SK－284（北西から）
SK－285（北東から），SK－288（東から）
SK－289（南西から），SK－290（北西から）
SK－291（南東から），SK－302（東から）

図版18　SK－303（東から），SK－320（北東から）
SK－321（南から），SI－025貝出土状況（北東から），SK－001（南東から）
SK－038（南から），SK－104（北から）
SK－233（西から）

図版19　SI－032（南から），SI－122（東から）

図版20　SX－001（西から），SX－005（東から）
SX－005（北から）

図版21　SI－029（南東から），SI－029カマド（南東から），SI－044（西から）
SI－044遺物出土状況（西から）
SI－051（西から），SI－051カマド（南から）

図版22　SI－066（東から），SI－066カマド（南から）
SI－079（北東から），SI－083（東から）

図版23　SI－084（北から），SI－084遺物出土状況（東から），SI－115（南から），SI－115カマド付近遺物出土状況（南東から），SI－115カマド（南から），SI－116（南から），SI－116遺物出土状況（南東から），SI－116カマド（南から）

図版24　SI－227（南から），SI－001（北西から）
SI－002（東から）

図版25　SI－003（北東から），SI－003カマド（南東から），SI－004（南東から）
SI－006（東から）

図版26　SI－008（西から），SI－008カマド（南から）
SI－009（北から），SI－010（南西から）
SI－010カマド遺物出土状況（西から）

図版27　SI－011（南から），SI－011カマド遺物出土状況（南西から），SI－012（北西から）
SI－012カマド（南から），SI－013（南東から），SI－013カマド（南東から）

図版28　SI－015（南西から），SI－017（西から）
SI－018（西から），SI－018カマド遺物出土状況（南西から）

図版29　SI－019（南から），SI－019カマド（南から）
SI－020（南東から），SI－020遺物出土状況（南から），SI－020カマド遺物出土状況（南東から），SI－021（西から）

図版30　SI－023（西から），SI－023カマド（西から）
SI－024（南西から），SI－024カマド（南西から，SI－026（北東から）

図版31　SI－030（北西から），SI－031（南東から）
SI－033（南西から）

図版32　SI－034（北から），SI－040（北から）
SI－040遺物出土状況（東から）
SI－040カマド遺物出土状況（南から）
SI－041（南から），SI－041遺物出土状況（南から），SI－041カマド遺物出土状況（南から）

図版33　SI－042（東から），SI－042カマド（南から）
SI－043（東から），SI－043遺物出土状況（東から），SI－043カマド（南から）
SI－045（北東から），SI－045カマド（東から）

図版34　SI－046（東から），SI－046遺物出土状況（東から），SI－046カマド（南から）
SI－047（南から），SI－047遺物出土状況（南から），SI－048（南から），SI－048カマド遺物出土状況（南から）

図版35　SI－049（西から），SI－049カマド（西から）
SI－050（南から），SI－050遺物出土状況（東から），SI－050カマド遺物出土状況（南から）
SI－052（南東から），SI－052カマド（南東から）

図版36　SI－053（南から），SI－053カマド（西から）
SI－054（南東から），SI－054カマド（南から）
SI－055（上）・SI－056（下）（南から）

図版37　SI－057（南から），SI－057カマド（南から）
SI－058（東から），SI－059（東から），SI－059カマド（南から）

図版38　SI－060（西から），SI－060Aカマド（北東から），SI－060Bカマド（南から）
SI－061（東から），SI－061カマド遺物出土状況（南から），SI－062（南から），SI－062遺物出土状況（南から），SI－062カマド（南から）

図版39　SI－063（東から），SI－063カマド（南から）
SI－064（南から），SI－064カマド（南から）
SI－065（西から），SI－065カマド（南から）

図版40　SI－067（西から），SI－067遺物出土状況（西から），SI－067カマド（南から）

SI－068(北東から), SI－068カマド(南から)
SI－069（南から), SI－069カマド遺物出土状況（南から）

図版41　SI－070(南から), SI－070遺物出土状況(南から), SI－071（西から), SI－071カマド遺物出土状況（南から), SI－072（東から）
SI－072遺物出土状況（南から), SI－072カマド（南東から）

図版42　SI－073（下)・SI－074（中)（西から）SI－073カマド(南東から), SI－074カマド(南から), SI－075（西から), SI－075カマド（南から), SI－076（北から), SI－076カマド（東から）

図版43　SI－077(東から), SI－077遺物出土状況(東から), SI－077カマド（南から）
SI－078(北から), SI－078遺物出土状況(北から), SI－078カマド（西から）
SI－080(南から), SI－080遺物出土状況(東から), SI－080カマド（南から）

図版44　SI－081（南から), SI－082（西から), SI－082カマド（南から), SI－085（東から）
SI－085カマド遺物出土状況（南から）

図版45　SI－086(東から), SI－086カマド(南から)
SI－087(南から), SI－087遺物出土状況(北から), SI－087カマド（西から）
SI－088（南から), SI－088カマド遺物出土状況（南から）

図版46　SI－089(西から), SI－089カマド(南から)
SI－090(北西から), SI－090カマド(東から)
SI－091（西から), SI－091カマド遺物出土状況（西から）

図版47　SI－092(東から), SI－092遺物出土状況(東から), SI－092カマド（南から), SI－093（西から), SI－093遺物出土状況（東から）
SI－094(南から), SI－094遺物出土状況(東から), SI－094カマド遺物出土状況（南西から）

図版48　SI－095（南から), SI－096（南西から）
SI－096遺物出土状況（西から), SI－096カマド（南から), SI－097（南から), SI－097遺物出土状況（南から), SI－097カマド遺物出土状況（南から）

図版49　SI－098（南から), SI－099（東から）
SI－100(東から), SI－100カマド(南から)

図版50　SI－101(南から), SI－101遺物出土状況(西から), SI－101カマド（南から）
SI－102(南から), SI－102カマド(南西から)
SI－103(東から), SI－103遺物出土状況(北から), SI－103カマド遺物出土状況(南から)

図版51　SI－104(南から), SI－104遺物出土状況(東から), SI－104カマド（SK－053含む）（南から), SI－105（南から), SI－105カマド（南から), SI－106（東から), SI－106カマド（南から）

図版52　SI－107（右)・SI－108（左)（西から）
SI－107カマド遺物出土状況（南東から）
SI－108カマド遺物出土状況（西から）
SI－109(南から), SI－109カマド(南から)
SI－110(南から), SI－110カマド(南から)

図版53　SI－111(南から), SI－111カマド(南から)
SI－112(東から), SI－112カマド(南から)
SI－113遺物出土状況（東から）
SI－113（下)・SI－114（上)（南から）
SI－113カマド（南から), SI－114カマド遺物出土状況（南から）

図版54　SI－117（南から), SI－117カマド遺物出土状況（南から), SI－118（南から), SI－118カマド遺物出土状況（南から), SI－119（南から), SI－119カマド遺物出土状況（南から）

図版55　SI－121(南から), SI－121遺物出土状況(北西から), SI－123（南東から), SI－123カマド（南西から), SI－124（南から), SI－124カマド（南東から）

図版56　SI－125(西から), SI－125カマド(南から)
SI－126(南から), SI－126遺物出土状況(西から), SI－126カマド（南から）
SI－132（西から）

図版57　SI－133（南から), SI－134（西から）
SI－135（南から), SI－135カマド遺物出土状況（南から）

図版58　SI－136（左)・SI－137（右)（北西から）
SI－136カマド遺物出土状況（南から), SI－136カマド（南から), SI－138（西から）
SI－138カマド遺物出土状況（南から）
SI－139（中)・SI－140（右)（北西から）
SI－139カマド（東から）

図版59　SI－141（南から), SI－142（右)・SI－143（下)（北から), SI－144（南から）

図版60　SI－145（東から), SI－146（南から), SI－148（北から), SI－148遺物出土状況（西から）

図版61　SI－149（南東から），SI－151カマド遺物出土状況（東から），SI－152カマド遺物出土状況（南から），SI－151（北から）
SI－153カマド（南から）SI－154カマド（南から），上からSI－155・SI－156・SI－153・SI－154・SI－152（南東から），SI－155カマド（南から），SI－156カマド（西から）

図版62　SI－157（北から），SI－157カマド（南から）
SI－158（西から），SI－164（西から），SI－164カマド遺物出土状況（西から）

図版63　SI－165新（東から），SI－165新カマド遺物出土状況（南から），SI－165旧（北から）
SI－165旧カマド（西から）
SI－167（東から），SI－167カマド（南から）

図版64　SI－168（南から），SI－168カマド遺物出土状況（南から），SI－169（南から），SI－169カマド（南から），SI－170（西から）

図版65　SI－171（西から），SI－171カマド（西から）
SI－172（南から），SI－172カマド（南から）
SI－173（南から）

図版66　SI－174（南から），SI－174カマド遺物出土状況（南から），SI－175（北西から）
SI－175遺物出土状況（北から），SI－175カマド（北東から），SI－176（西から）
SI－176新カマド（西から），SI－176旧カマド遺物出土状況（西から）

図版67　SI－177（南から），SI－178（西から），SI－178カマド（南から），SI－179（北から）
SI－179カマド（南東から）

図版68　SI－180（西から），SI－180遺物出土状況（西から），SI－180カマド（南から）
SI－181（北西から），SI－181遺物出土状況（西から），SI－181カマド（南西から）
SI－182（南から），SI－182カマド遺物出土状況（南から），SI－182カマド（南から）

図版69　SI－183（南から），SI－183カマド（南から）
SI－184（西から），SI－184遺物出土状況（南から），SI－184カマド（西から）
SI－185（南から），SI－185カマド（南から）

図版70　SI－186（東から），SI－186カマド遺物出土状況（東から），SI－186カマド（東から）
SI－187（南から），SI－188（南から），SI－188遺物出土状況（南から），SI－188カマド（南から）

図版71　SI－189（北西から），SI－189 15年度全景（北から），SI－189カマド（西から）
SI－190（南から），SI－191（西から），SI－191カマド（西から）

図版72　SI－192（南から），SI－192カマド（西から）
SI－193（南から），SI－193カマド遺物出土状況（南から），SI－194（南から），SI－194カマド遺物出土状況（南から）

図版73　SI－195（南から），SI－195カマド（南から）
SI－196（南から），SI－196カマド（南から）
SI－197（南から）

図版74　SI－198（南東から），SI－198カマド遺物出土状況（南から），SI－199（南東から）
SI－199カマド（東から）
SI－200（南から），SI－200カマド（南から）

図版75　SI－201（南から），SI－201カマド（南から）
SI－202（西から），SI－203（西から），SI－203カマド遺物出土状況（南から）

図版76　SI－204（東から），SI－204カマド遺物出土状況（東から），SI－205（東から），SI－205カマド（南から），SI－206（南東から）
SI－206カマド遺物出土状況（南から）

図版77　SI－207（南から），SI－207カマド（南から）
SI－208（東から），SI－208カマド（南から）
SI－209（下）・SI－210（上）（東から）
SI－210カマド遺物出土状況（南から）

図版78　SI－211（北東から），SI－211カマド遺物出土状況（南東から），SI－212（南から）
SI－212カマド遺物出土状況（南から）
SI－213（西から），SI－213カマド（東から）

図版79　SI－214（北東から），SI－214カマド（南から）
SI－215（北西から），SI－216（東から）
SI－216カマド遺物出土状況（東から）

図版80　SI－217（南から），SI－218（南東から）
SI－219（南から）

図版81　SI－220（南から），SI－221（南東から）
SI－222（南東から）

図版82　SI－223（右）・SI－224（左）（南から）
SI－225（北から），SI－228（南から）

図版83　SI－229（西から），SI－230（南西から）
SI－231（南西から）

図版84　SI－233（西から），SI－234（南西から）
SI－235（南から）

図版85　SI－236（上）・SI－238（下）（南から）
SI－239（南西から），SI－239カマド（東から）
SI－240（南西から），SI－240カマド遺物出土状況（南から）

図版86　SI－241（南東から）．SI－242（南から）
SI－243(南から)，SI－243カマド(南から)
図版87　SI－244(西から)，SI－244遺物出土状況(西から)，SI－244カマド（西から）
SI－245A（下)・SI－245B（上）（南から）
SI－245Aカマド（南から），SI－245Bカマド（南から），SI－246A（南から），SI－246Aカマド（南から）
図版88　SI－246A・SI－246B（南から）
SI－247（南から），SI－248（西から）
図版89　SI－249（南東から），SI－249カマド（南東から），SI－250（北から），SI－250カマド（東から），SI－251（北から），SI－251カマド（北西から）
図版90　SI－252A・SI－252B（北から），SI－252Aカマド遺物出土状況（西から)，SI－253（北から），SI－253カマド（南から），SI－254（西から)，SI－254遺物出土状況（北から）
SI－254カマド（南西から）
図版91　SI－255(北西から)，SI－255カマド(西から)
SI－256（西から），SI－256カマド遺物出土状況（南西から），SI－257（北から）
SI－257新カマド遺物出土状況（東から）
SI－257旧カマド（南から）
図版92　SI－258(東から)，SI－258カマド(南から)
SI－259（東から），SI－259カマド遺物出土状況（北東から），SI－260（東から）
SI－260カマド遺物出土状況（東から）
図版93　SI－261（南東から），SI－261カマド遺物出土状況（南から），SI－262（南東から）
SI－262遺物出土状況（南東から），SI－262カマド(南東から)，SI－263(南西から)
SI－263カマド遺物出土状況（南西から）
図版94　SI－014（西から），SI－016（南西から）
SI－022（西から），SI－027（西から）
SI－120（南西から），SK－008（西から）
SK－016（西から），SK－018（北から）
図版95　SK－257（北から），SB－001（南から）
SB－002・SB－003・SB－004（東から）
SB－005･SB－006（東から），SB－007（南から），SB－008（東から）
SB－009（南から），SB－010（東から）
図版96　SB－011・SB－012（東から），SB－013～SB－016･SB－019（西から），SB－020（東から），SB－021（南東から），SB－022（南から），SB－023（北から），SB－025・SB－026（北から），SB－027（東から）
図版97　SB－028（東から），SB－029（西から）
SB－030（北から），SB－031（北から）
SB－032（北から），SB－033（東から）
SB－034（北から），SB－035（北から）
図版98　SB－036（西から），SB－037（西から）
SB－038（東から），SB－039（東から）
SB－040（西から），SB－041（北から）
SB－042（西から），SB－043（南から）
図版99　SB－044（南から），SB－045（東から）
SB－046・SB－047（北東から），SB－048A・SB－048B・SB－048C・(北から)
SB－050（南東から），SB－051A・SB－051B（北から），SB－052（東から），SB－053・SB－054（西から）
図版100　SK－003（北東から），SK－010（北から）
SK－011（西から），SK－012（北から）
SK－013（東から），SK－014（東から）
SK－019（南から），SK－020（北から）
図版101　SK－021（西から），SK－022（北から）
SK－023（南から），SK－024（北から）
SK－025（南から），SK－026（西から）
SK－027（南東から），SK－028（南から）
図版102　SK－029（南から），SK－030（西から）
SK－031（北から），SK－035（西から）
SK－036（南から），SK－037（南から）
SK－039（北東から），SK－042（東から）
図版103　SK－043（南から），SK－044（南から）
SK－045（東から），SK－046（北から）
SK－047（東から），SK－048（東から）
SK－051（南東から），SK－052（東から）
図版104　SK－055（南東から），SK－059（北から）
SK－060（南から），SK－103（北から）
SK－107（西から），SK－108（西から）
SK－109（北から），SK－110（北から）
図版105　SK－111（北から），SK－112（北から）
SK－113（北から），SK－115（北から）
SK－124（北から），SK－125（北から）
SK－138（北から），SK－142（西から）
図版106　SK－143（北東から），SK－223（西から）
SK－238（西から），SK－239（西から）
SK－240（西から），SK－241（東から）
SK－243(東から)，SK－244～SK－247(北から)
図版107　SK－248（北から），SK－250（北東から）
SK－252（北から），SK－256遺物出土

状況（南東から），SK－260（北西から）
SK－261（北から），SK－262（西から）
SK－265（東から）
図版108　SK－266（東から），SK－270A・SK－270B・SK－270C（北東から）
SK－275（東から），SK－276（南から）
SK－277（北から），SK－292（南から）
SK－293（東から），SK－294（南から）
図版109　SK－295（南西から），SK－296A・SK－296B（南西から），SK－297（南西から）
SK－298（南から），SK－299（南から）
SK－300（南から），SK－301（南から）
SK－304（北から）
図版110　SK－307（北から），SK－308（西から）
SK－310（北東から），SK－311（北西から）
SK－316（北西から），SK－317（東から）
図版111　SD－003（東から），SD－003（西から）
SD－003（東から），SD－003（北西から）
SD－003（北から），SD－004（北から）
SD－005（右）・SD－025（左）（北から）
SD－005（右）・SD－025（左）（北から）
図版112　SD－011（西から），SD－013（北から）
SD－014（南から），SD－014（南から）
SD－014（北から），SD－020（西から）
SD－021（北西から）
図版113　SD－022（東から），SD－023・土坑群（西から），SD－024（東から），SD－028（西から），SD－029（西から），SD－030・SD－031（南から），SD－034・SD－035（北西から）
図版114　第１～６地点出土石器
図版115　第７～９地点及び単独・出土石器
図版116　SI－005・SI－007住居跡出土土器
図版117　SI－025住居跡出土土器
図版118　FP－004炉穴出土土器（1）
図版119　FP－004炉穴出土土器（2）
図版120　FP－005・FP－008・FP－009（1）炉穴出土土器
図版121　FP－009（2）・グリッド出土土器（1）
図版122　グリッド出土土器（2）
図版123　グリッド出土土器（3）
図版124　グリッド出土土器（4）
図版125　グリッド出土土器（5）
図版126　グリッド出土土器（6）
図版127　グリッド出土土器（7）－１
図版128　グリッド出土土器（7）－２・(8)
図版129　グリッド出土土器（9）
図版130　グリッド出土土器（10）
図版131　グリッド出土石器（1）
図版132　グリッド出土石器（2）
図版133　グリッド出土石器（3）・(4)－１
図版134　グリッド出土石器（4）－２・(5)－１
図版135　グリッド出土石器（5）－２・(6)・(7)－１
図版136　グリッド出土石器（7）－２・(8)－１
図版137　グリッド出土石器（8）－２・(9)
図版138　グリッド出土石器（10）
図版139　グリッド出土石器（11）
図版140　土製品（抉状耳飾・土器片錘・焼成粘土塊・研磨土器片）
図版141　SI－001・002・003・004出土土器
図版142　SI－004・006・008出土土器
図版143　SI－008・009・010・011出土土器
図版144　SI－011・012・013・017・018出土土器
図版145　SI－018・019・020・021出土土器
図版146　SI－021・023・024・029出土土器
図版147　SI－029・030・031・033・035出土土器
図版148　SI－035・040・041出土土器
図版149　SI－042・043・044・045・046出土土器
図版150　SI－046・047・048・049・050出土土器
図版151　SI－050・051・052・053・054・055・056・057・058出土土器
図版152　SI－058・059・060・061出土土器
図版153　SI－061・062・063出土土器
図版154　SI－063・064・065・067出土土器
図版155　SI－068・069・070・071出土土器
図版156　SI－071・072・073出土土器
図版157　SI－073・074・075出土土器
図版158　SI－075・076・077・078出土土器
図版159　SI－078・079・080・081・082出土土器
図版160　SI－082・083・084・085出土土器
図版161　SI－085・086・087・088出土土器
図版162　SI－088・089・090・091出土土器
図版163　SI－091・092出土土器
図版164　SI－092・093・094出土土器
図版165　SI－094・095出土土器
図版166　SI－095・096・097出土土器
図版167　SI－097・098・100・101出土土器
図版168　SI－101・103出土土器
図版169　SI－103・104出土土器
図版170　SI－105・106・107・108・109出土土器
図版171　SI－109・110・111・112・113出土土器
図版172　SI－113・114・115出土土器

図版173　SI－115・116出土土器
図版174　SI－116・117・118出土土器
図版175　SI－118出土土器
図版176　SI－118・119・120・121・122・123出土土器
図版177　SI－124・125・126・131出土土器
図版178　SI－131・132・133・134・135出土土器
図版179　SI－135・136・137・138出土土器
図版180　SI－138・139・140・141・142出土土器
図版181　SI－142・143・144・145・146・147出土土器
図版182　SI－147・148・149出土土器
図版183　SI－151出土土器
図版184　SI－151・152・153出土土器
図版185　SI－153出土土器
図版186　SI－153・154・155出土土器
図版187　SI－155・156出土土器
図版188　SI－156・157・158・161出土土器
図版189　SI－161・162・163・164・165出土土器
図版190　SI－165出土土器
図版191　SI－165・167・168・169出土土器
図版192　SI－169・170・171出土土器
図版193　SI－171・172・173・174・175・176出土土器
図版194　SI－176・177・178・179出土土器
図版195　SI－179・180・181・182出土土器
図版196　SI－182・183・184・185・186出土土器
図版197　SI－186・187・188・189出土土器
図版198　SI－190・191・192出土土器
図版199　SI－192・193・194・195出土土器
図版200　SI－195・196・197・198出土土器
図版201　SI－198・199・200・201出土土器
図版202　SI－201・202・203・204出土土器
図版203　SI－204・205出土土器
図版204　SI－205・206・207・208出土土器
図版205　SI－208・209出土土器
図版206　SI－209・210・211出土土器
図版207　SI－211出土土器
図版208　SI－211・212出土土器
図版209　SI－212・213出土土器
図版210　SI－214・215・216出土土器
図版211　SI－217・218・219出土土器
図版212　SI－220・221・222・223・224・225・227・228出土土器
図版213　SI－229・230出土土器
図版214　SI－231・233・235・236出土土器
図版215　SI－236・238・239・240出土土器
図版216　SI－240・241・242・243・244出土土器
図版217　SI－244・245A・245B出土土器
図版218　SI－245B・246A・248・249出土土器
図版219　SI－249・250・251・252A・252B・253出土土器
図版220　SI－253・254・255出土土器
図版221　SI－255・256・257出土土器
図版222　SI－257・258・259・260・261出土土器
図版223　SI－261・262出土土器
図版224　SI－262・263，SB－002・009・013・022・029出土土器
図版225　SB－030・032・035・038・039，SK－011・016・019・043・107・110・142・244・245出土土器
図版226　SK－245・246・247・248・249・250・251出土土器
図版227　SK－252・253・256・257・264・265・307出土土器
図版228　SK－308・315，P－049・065，SD－003出土土器
図版229　SD－003・005・010・023・024・030出　土土器
図版230　遺構外出土土器（1）
図版231　遺構外出土土器（2）
図版232　鉄製品（1）
図版233　鉄製品（2）
図版234　鉄製品（3）
図版235　鉄製品（4）
図版236　鉄製品（5）
図版237　鉄製品（6），椀形鍛冶滓
図版238　鉄製品（7），銅製品
図版239　鉄製品（8）
図版240　銭貨
図版241　土製支脚（1）
図版242　土製支脚（2）
図版243　土製支脚（3），羽口，土製品，玉類
図版244　石製紡錘車
図版245　砥石（1）
図版246　砥石（2）
図版247　軽石
図版248　文字資料（1）（墨書・刻書）
図版259　文字資料（2）（墨書・朱墨・刻書）
図版250　文字資料（3）（墨書・朱墨・刻書）

# 第1章　はじめに

## 第1節　調査の概要

### 1　調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構の前身である住宅・都市整備公団（平成12年に都市基盤整備公団に改組）は，首都圏の人口増加に対応するため，千葉県四街道市物井地区に大規模な宅地造成を目指した土地区画整理事業を計画した。

このため千葉県教育委員会では，事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて関係諸機関と慎重な協議を重ねてきた。その結果，一部については緑地や公園等として現状を保存し，やむを得ない部分については，発掘調査による記録保存の措置を講じることとなった。

発掘調査は，千葉県教育委員会の指導のもと，財団法人千葉県文化財センター（平成17年に財団法人千葉県教育振興財団に改組）が受託して実施することとなり，昭和59年から調査が開始された。

事業地内には多くの遺跡が所在している。記録保存の対象とされたのは，稲荷塚遺跡（第１・２図）のほか，御山遺跡，棒山・呼戸遺跡，小屋ノ内遺跡，新久遺跡，清水遺跡，出口遺跡の一部，出口・鐘塚遺跡，高堀遺跡，館ノ山遺跡，郷遺跡，古屋城跡の一部，北ノ作遺跡，嶋越遺跡，中久喜遺跡といった諸遺跡である。以上のうち，御山遺跡の一部，出口・鐘塚遺跡，小屋ノ内遺跡，郷遺跡，中久喜遺跡については，報告書が刊行されている[1)]。なお現状保存部分は，古屋城跡の大部分，出口遺跡の一部である。

今回報告する稲荷塚遺跡は，事業地内の総面積，発掘総面積とも45,104㎡である。発掘調査は平成６（1994）年度から開始され，平成15（2003）年度までに断続的に進められてきた。整理作業は平成12年度から開始され，平成20年度をもって，本書刊行の運びとなった。各年度の作業概要と担当者等については第１表に記し，発掘範囲は第３図に示した。

### 2　調査・整理の方法

物井地区の調査にさいしては，全域を公共座標に基づいた50m×50mの方眼網で覆い，大グリッドとした。大グリッドの呼称は，西から東へ１・２・３…，北から南へＡ・Ｂ・Ｃ…と名付け，両者を組み合わせて使用した。さらに大グリッド内を5m×5mの100個の小グリッドに分割し，西から東へ00・01・02…，北から南へ00・10・20…と名付け，両者を組み合わせて名称をつけた（第４図）。したがって，各々の小グリッドはたとえば22L－34のようになる。

座標は，平成14年４月１日に世界測地系に沿った新座標に改定されたが，物井地区の調査はそれ以前から実施されているため，旧座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）に則っている。基準点網図の一起点である24L-00（平成６・７年度調査区内所在点）は，旧座標でX=－34,800.0000,Y=33,000.0000である。JGD2000系変換値ではX=－34,444.7996，Y=32,706.3143，北緯35°41′20″，東経140°11′41″である[2)]。

発掘調査はおおむね上層確認調査→上層本調査→下層確認調査→下層本調査の順で実施した。上層の確認調査は，調査区全域に幅1m～2m，長さは任意の調査坑を，調査対象面積に対して原則として10％設定し，遺構・遺物の分布を確認した。下層の確認調査については，調査区全域に２m×２mの調査桝を，調査対象面積に対し４％設定し，石器等の遺物の有無を確認した。上層・下層の本調査は，確認調査の結果

第１図　稲荷塚遺跡の位置（1：50,000）

第１表　稲荷塚遺跡年度別調査概要

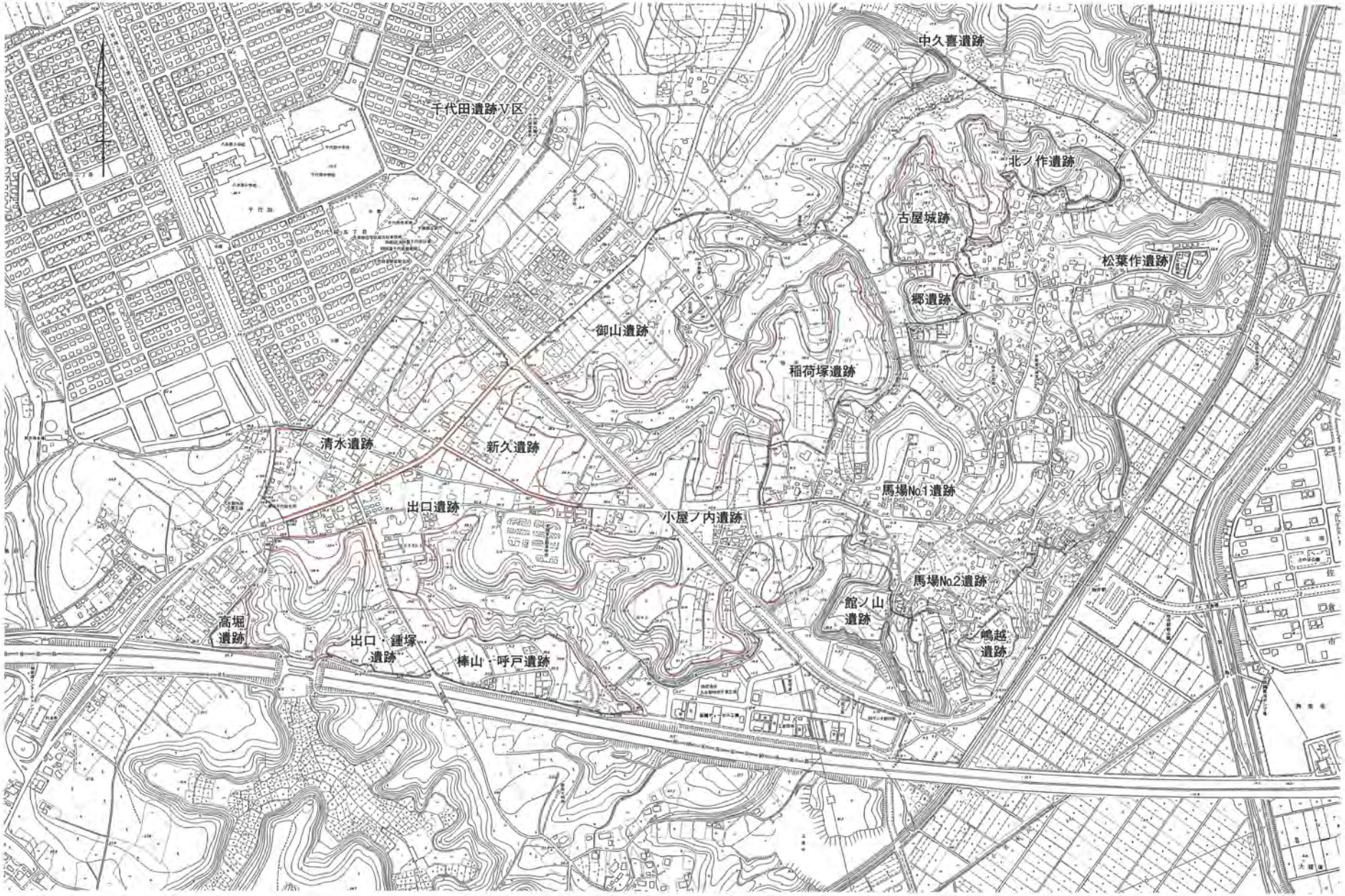
【発掘調査】

| 年度(平均) | 期　間 | 確認調査 上層(㎡) | 確認調査 下層(㎡) | 本調査 上層(㎡) | 本調査 下層(㎡) | 完了面積(㎡) | 区域 | 担当職員 調査(研究)部長 | 担当職員 所長 | 担当職員 職名 | 担当職員 氏名 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6年度 | 11.1～3.28 | 1,400/14,000 | － | 14,000 | － | － | A区 | 西山太郎 | 田坂　浩 | 副所長 | 相京邦彦 | 6・7年度にA区同一地点を調査 |
| | | | | | | | | | | 主任技師 | 福田　誠 | |
| | | | | | | | | | | 技師 | 岩谷久美子 | |
| 7年度 | 4.3～5.31 | －/－ | 560/14,000 | － | 200 | 14,000 | A区 | 西山太郎 | 矢戸三男 | 分室長 | 伊藤智樹 | A区完了 |
| | 6.1～1.31 | 10,860/10,860 | － | 8,000 | 0 | － | B区 | 西山太郎 | 矢戸三男 | 分室長 | 伊藤智樹 | 上層確認・本調査のみ |
| | 6.21～6.30 | 360/360 | 8/360 | 0 | 0 | 360 | C区 | 西山太郎 | 矢戸三男 | 分室長 | 伊藤智樹 | C区確認調査のみで完了 |
| | 11.1～3.27 | 3,500/3,500 | － | 3,500 | － | － | D区 | 西山太郎 | 矢戸三男 | 分室長 | 伊藤智樹 | D区同一地点の上層調査（確認・本調査） |
| | | | | | | | | | | 技師 | 岡崎友子 | |
| 8年度 | 4.1～5.7 | －/－ | 184/3,500 | － | 169 | 3,500 | D区 | 西山太郎 | 藤崎芳樹 | 室長 | 伊藤智樹 | D区同一地点の下層調査（確認・本調査）、D区完了 |
| | 4.3～9.30 | －/－ | 620/14,000 | 6,000 | 0 | 14,000 | B区 | 西山太郎 | 藤崎芳樹 | 室長 | 伊藤智樹 | 上層本調査及び下層確認調査，B区完了 |
| | | | | | | | | | | 研究員 | 平松長寿 | |
| | | | | | | | | | | 主任技師 | 山口典子 | |
| | | | | | | | | | | 技師 | 田中　裕 | |
| | 8.1～3.26 | －/－ | 336/6,800 | 6,800 | 100 | 6,800 | E区 | 西山太郎 | 藤崎芳樹 | 研究員 | 平松長寿 | E区完了 |
| | | | | | | | | | | 主任技師 | 井上哲朗 | |
| | | | | | | | | | | 技師 | 田中　裕 | |
| 10年度 | 10.7～12.15 | 2,650/2,650 | 80/2,000 | 2,650 | 0 | 2,650 | F区 | 沼澤　豊 | 折原　繁 | 副所長 | 加藤修司 | F区完了 |
| | | | | | | | | | | 主任技師 | 石田清彦 | |
| 面積小計 | | 18,410/31,370 | 1,788/40,660 | 40,950 | 469 | 41,310 | | | | | | |

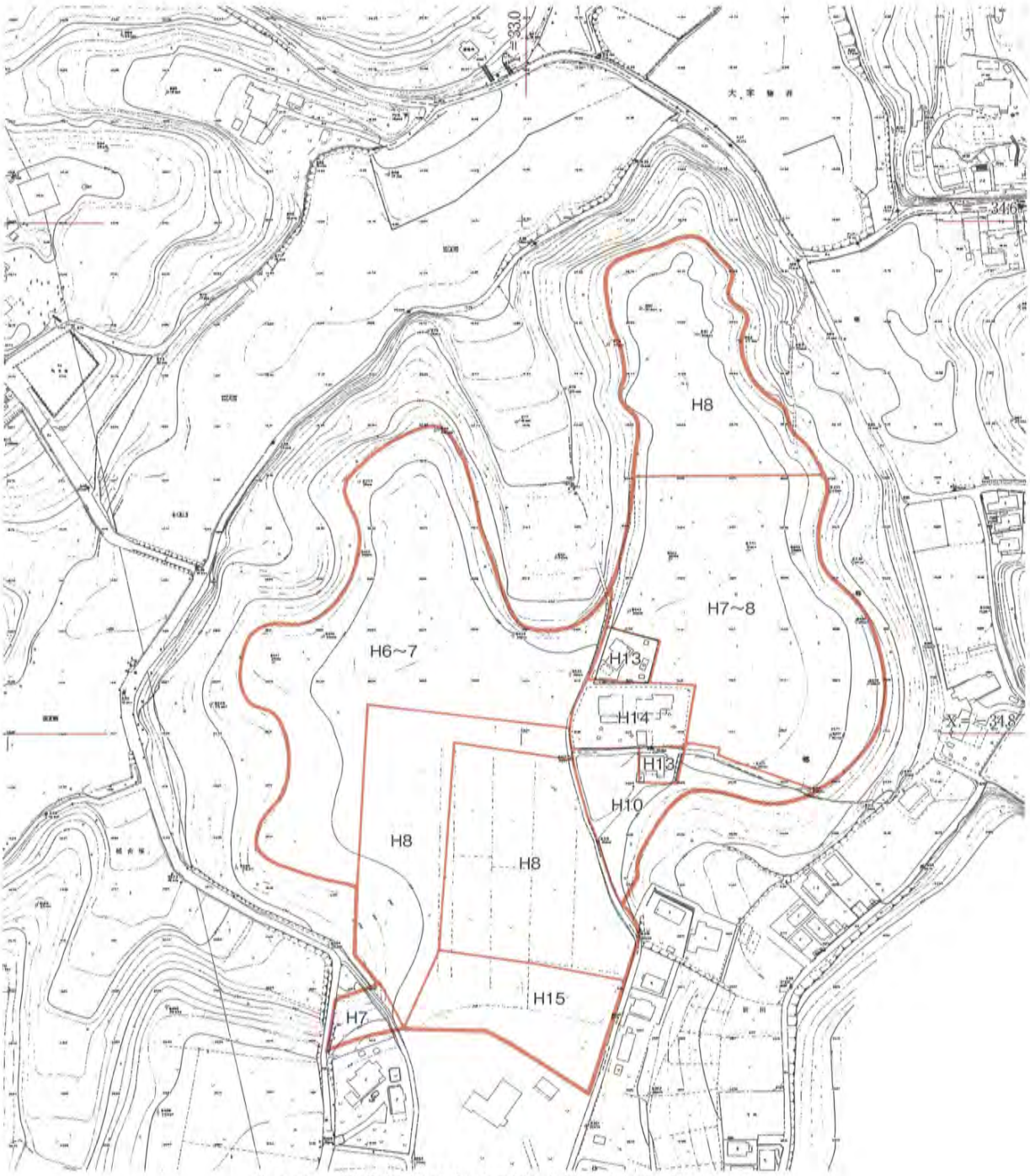
| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13年度 | 2.1～2.28 | －/625 | 24/625 | 625 | 0 | 625 | G区 | 佐久間豊 | 石田廣美 | 室長 | 萩原恭一 | G区の一部完了 |
| 14年度 | 5.1～6.10 | －/970 | 84/970 | 970 | 0 | 970 | G区 | 斎本　勝 | 古内　茂 | 上席研究員 | 西野雅人 | G区完了 |
| 15年度 | 1.15～3.8 | －/2,199 | 88/2,199 | 2,199 | 0 | 2,199 | H区 | 斎本　勝 | 古内　茂 | 研究員 | 田中　裕 | H区完了 |
| 面積小計 | | －/3,794 | 196/3,794 | 3,794 | 0 | 3,794 | | | | | | |
| 面積総計 | | 18,410/35,164 | 1,984/44,454 | 44,744 | 469 | 45,104 | | | | | | |

【整　理】

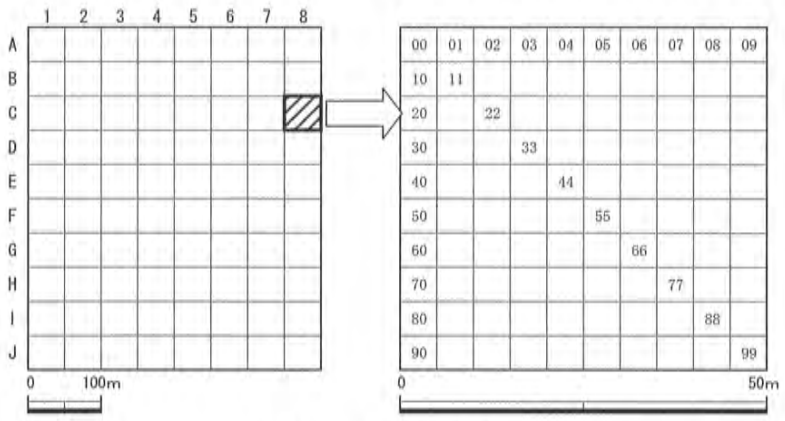
| 年度 | 期間 | 作業概要 | 担当職員 調査(研究)部長 | 担当職員 所長 | 担当職員 職名 | 担当職員 氏名 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12年度 | 4.1～3.31 | 水洗・注記～記録整理・接合の一部 | 沼澤　豊 | 石田廣美 | 主席研究員 | 高橋博文 | 整理対象は平成6年度～平成10年度調査分 |
| | | | | | 室長 | 萩原恭一 | |
| | | | | | 上席研究員 | 玉井ゆかり | |
| 14年度 | 4.1～3.31 | 記録整理・接合・実測・挿図・写真図版作成の一部 | 斎本　勝 | 古内　茂 | 上席研究員 | 西野雅人 | 同上 |
| | | | | | 上席研究員 | 新田浩三 | |
| | | | | | 整理技術員 | 山岡磨由子 | |
| | | | | | 主席研究員 | 太田文雄 | |
| | | | | | 整理技術員 | 木島桂子 | |
| 15年度 | 4.1～3.31 | 接合の一部～実測・トレースの一部，写真撮影 | 斎本　勝 | 古内　茂 | 研究員 | 田中　裕 | 同上 |
| | | | | | 主席研究員 | 太田文雄 | |
| | | | | | 整理技術員 | 木島桂子 | |
| | | | | | 整理技術員 | 大久保奈奈 | |
| 18年度 | 4.1～3.31 | 記録整理・実測・トレース・拓本の一部～挿図・図版作成の一部 | 矢戸三男 | 古内　茂 | 主席研究員 | 石倉亮治 | 同上 |
| | | | | | 上席研究員 | 岸本雅人 | |
| | | | | | 上席研究員 | 糸川道行 | |
| 19年度 | 4.1～3.31 | 記録整理～実測・トレース・挿図・図版作成の一部 | 矢戸三男 | 豊田佳伸 | 上席研究員 | 岸本雅人 | 整理対象は平成13年度～15年度調査分を含むすべて |
| | | | | | 上席研究員 | 糸川道行 | |
| | | | | | 上席研究員 | 沼澤　豊 | |
| 20年度 | 4.1～9.30 | 原稿執筆・編集の一部～報告書印刷・刊行 | 大原正義 | 豊田佳伸 | 上席研究員 | 糸川道行 | |
| | | | | | 上席研究員 | 小林信一 | |
| | | | | | 上席研究員 | 沼澤　豊 | |



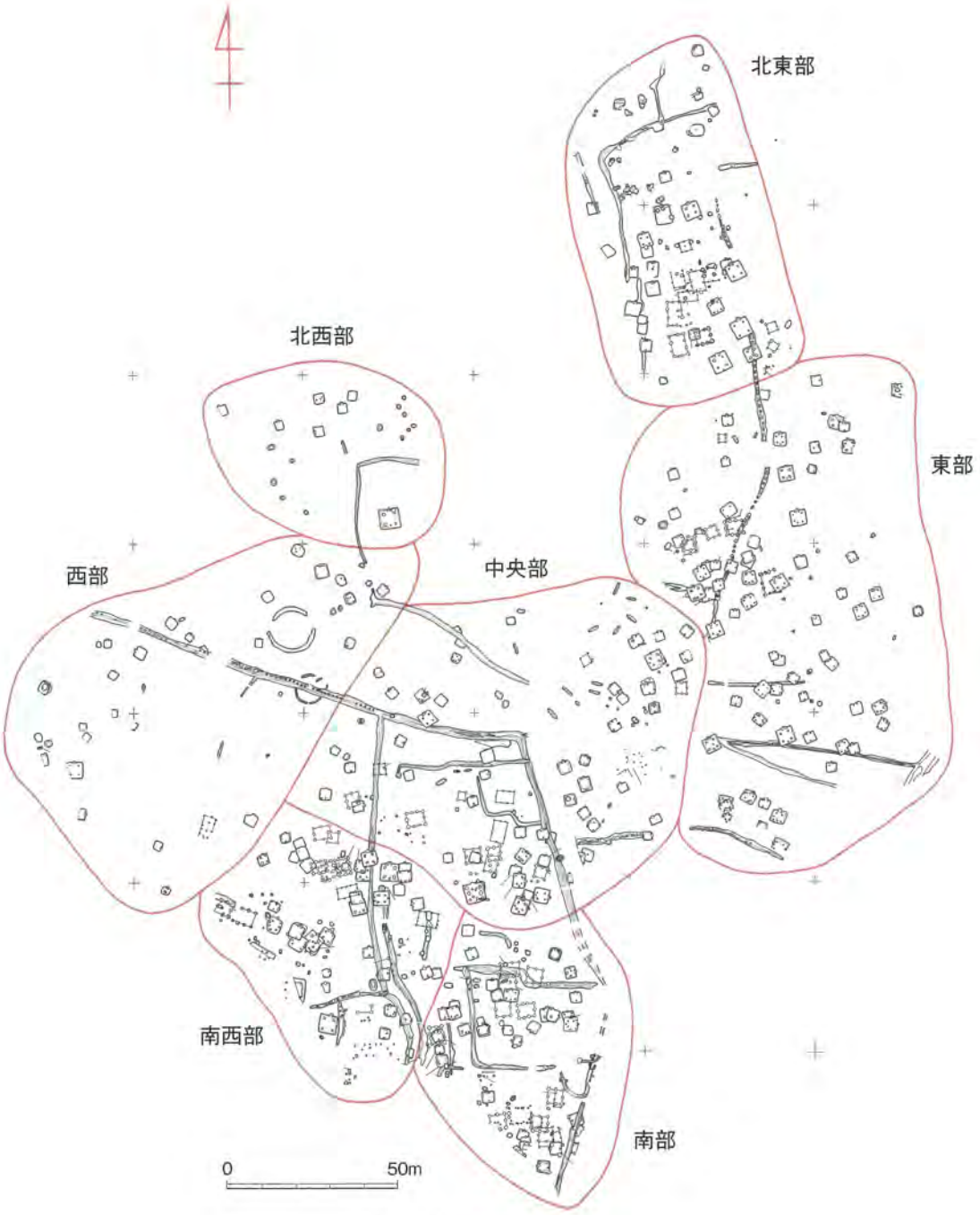

第２図　物井地区の遺跡と周辺遺跡（1：10,000）




第３図　稲荷塚遺跡年度別調査区位置図（1：2,500）




第４図　グリッド呼称法




第５図　地区区分図

をもとに範囲を決定して実施した。

遺構番号は下三桁または下二桁が数字であるが，その前に遺構の種別を表す略号を付けた。遺構略号は，竪穴住居等の竪穴建物がSI，掘立柱建物がSB，土坑・炉穴がSK，溝状遺構・道路状遺構がSD，古墳や方形区画墓等がSX，その他の小穴がP，縄文時代の炉穴がFPである。そして数字との組み合わせにより，たとえばSI－001，FP－01のように呼称した。整理作業では調査時の名称を継承し，名称変更を最小限にとどめた。遺構略号と遺構の内容に違いを生じたものも少数あるが，原則として変更していない。

遺物の注記は，遺跡コード，遺構番号，遺物台帳に記載された遺物番号を，順に書き込んだ。上層や下層の遺物包含層など，グリッド出土遺物については，上記の遺構番号がグリッド名に換わる。なお直接書き込むことが好ましくない遺物については，袋または札に記した。

土器の実測は手計測と写真によるものがあるが，後者のものが多い。土製品・石器の実測は手計測によった。鉄製品の実測は全点に対しX線写真撮影を実施した後に，手計測を実施した。

第５図は，遺跡全体を北東部，東部，中央部，南部，南西部，西部，北西部の７区に分割した図である。この地区区分は，遺構の位置を大まかに把握することと，遺構の位置の記述に統一性をもたせるために設定したものである。なお，これは目安程度の大まかなものであり，地形的特徴や遺構密集地等を意図した区分ではない。

## 第２節　遺跡の位置と環境

稲荷塚遺跡は，平成19（2007）年度時点では千葉県四街道市物井字稲荷塚ほかに所在する。四街道市は千葉県北部の中央西寄りに位置し，県庁所在地の千葉市に隣接する市である。

稲荷塚遺跡の南東方向約0.6㎞の地点には，JR総武本線物井駅が所在しており，鉄道路線は遺跡周辺では南西から北東方向に走行している。南方には東関東自動車道が東西に走行しており，遺跡からの最短直線距離はおよそ0.７㎞である。また稲荷塚遺跡の北西方向には，県道136号線が南西から北東方向に走行しており，遺跡中心部からの最短直線距離はおよそ0.4㎞である。136号線は，北東方向でJR佐倉駅近辺に達し，南西方向では東関東自動車道四街道インターチェンジ付近で，南北に走行する県道千葉臼井印西線（64号線）に合流している。南西から四街道市物井，同亀崎，佐倉市羽鳥，同寺崎にまたがる道路である。稲荷塚遺跡は136号線から，四街道市千代田公民館に至る道路がつきあたる台地上に位置する。千代田公民館が位置する台地は，物井地区内の御山遺跡が所在する台地であり，稲荷塚遺跡は御山遺跡の台地からは支谷を挟んで東やや南方向に位置する。

物井地区遺跡群は，北流して印旛沼に注ぐ鹿島川と手繰川の支流に挟まれた台地上にある。下総台地・常総台地といわれる東関東中央の台地は，河川から入り込む支谷によって樹枝状に刻まれており，本遺跡周辺でも同様である。稲荷塚遺跡が所在する台地は，東方の鹿島川から入る谷が北から東西に取り巻く状況を呈しており，南側を除いて地形は区切られている。なお稲荷塚遺跡と鹿島川の最短直線距離はおよそ0.75㎞である。さらに台地北側は北から南に支谷が入り込んでいる。台地上平坦部の標高は30ｍ～31ｍ前後であり，東側が西側よりもわずかに高い。周囲の谷部平坦面の標高はおおむね14ｍ～15ｍであり，台地平坦部との高さの差は16ｍ前後である。台地の南側は小屋ノ内遺跡の所在する台地にそのまま続くが，東西の谷が南方にやや回り込んでおり，台地平坦面の幅が幾分狭くなっている。

稲荷塚遺跡周辺の遺跡については，基本的にこれまでの物井地区内の遺跡の報告書に記述されている[3)]。また四街道市内における当財団の調査報告としては，池花南遺跡等の内黒田遺跡群の報告書があり[4)]，同書にも周辺遺跡の様相が記述されている。当財団以外では，（財）印旛郡市文化財センターや四街道市教育委員会によって，多くの報告書が刊行されている。なかでも周辺の遺跡の記述については，郷野遺跡の報告書がもっとも充実した内容である[5)]。周辺の遺跡については，それら既刊の報告書に譲り，また古墳時代後期から奈良・平安時代の遺跡については第７章第４節において記述したため，本章では記述を省略する。

第２表　稲荷塚遺跡遺構種別一覧

| 時　代 | 遺構名 | 遺　構　番　号 | 遺構数 |
|---|---|---|---|
| 縄文時代 | 炉穴（FP） | 001, 002, 003, 004, 005, 006, 007, 008, 009 | 9 |
| | 陥穴（SK） | 033, 034, 057, 114, 271, 274, 283, 284, 285, 286, 288, 289, 290, 291, 302, 303, 320, 321 | 18 |
| | 竪穴住居（SI） | 005, 007, 025, 028 | 4 |
| | 土坑（SK） | 001, 038, 104, 233, 254, 272（図面なし） | 6 |
| 弥生時代 | 竪穴住居（SI） | 032, 122 | 2 |
| 古墳時代 | 竪穴住居（SI） | 029, 044, 051, 066, 079, 083, 084, 115, 116, 227, 242 | 11 |
| | 古墳（SX） | 001, 005 | 2 |
| 奈良・平安時代 | 竪穴住居（SI） | 001, 002, 003, 004, 006, 008, 009, 010, 011, 012, 013, 015, 017, 018, 019, 020, 021, 023, 024, 026, 030, 031, 033, 034, 035, 040, 041, 042, 043, 045, 046, 047, 048, 049, 050, 052, 053, 054, 055, 056, 057, 058, 059, 060, 061, 062, 063, 064, 065, 067, 068, 069, 070, 071, 072, 073, 074, 075, 076, 077, 078, 080, 081, 082, 085, 086, 087, 088, 089, 090, 091, 092, 093, 094, 095, 096, 097, 098, 099, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 113, 114, 117, 118, 119, 121, 123, 124, 125, 126, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 157, 158, 161, 162, 163, 164, 165, 167, 168, 169, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224, 225, 228, 229, 230, 231, 233, 234, 235, 236, 238, 239, 240, 241, 243, 244, 245A, 245B, 246A, 246B, 247, 248, 249, 250, 251, 252A, 252B, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261, 262, 263 | 229 |
| | 竪穴状遺構（SI）〈SK〉 | （014, 016, 022, 027, 120）〈005, 006, 008, 016, 018, 257〉 | 11 |
| | 掘立柱建物（SB） | 001, 002, 003, 004, 005, 006, 007, 008, 009, 010, 011, 012, 013, 014, 015, 016, 018, 019, 020, 021, 022, 023, 024, 025, 027, 028, 029, 030, 031, 032, 033, 034, 035, 036, 037, 038, 039, 040, 041, 042, 043, 044, 045, 046, 047, 048A, 048C, 050, 051A, 051B, 052, 053（SK119～SK123・SK128・SK129）, 054（SK117・SK118・SK135～SK137・SK139～SK141） | 53 |
| | 柵列（SB） | 026, 048B | 2 |
| | 土坑（SK） | 010, 011, 019, 043, 049, 056, 103, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 113, 115, 125, 126, 127, 130, 138, 142, 239, 244, 245, 246, 247, 248, 249（墓？）, 250, 251, 252, 253, 255, 256, 264, 265, 276, 293, 294, 296A・B, 297, 299, 307, 308, 311, 315 | 47 |
| 中・近世その他 | 土坑墓（SK） | 012, 013, 028, 029, 030, 031, 275 | 7 |
| | 井戸（SK） | 238 | 1 |
| | 土坑（SK） | 002, 003, 007, 009, 014, 015, 017, 020, 021, 022, 023, 024, 025, 026, 027, 032, 035, 036, 037, 039, 040, 041, 042, 044, 045, 046, 047, 048, 050, 051, 052, 053, 054, 055, 059, 060, 063, 064, 065, 066, 067, 068, 069, 070, 077, 078, 079, 080, 083, 084, 085, 096, 097, 101, 102, 105, 124, 131, 132, 133, 134, 143, 153, 154, 155, 156, 162, 175, 179A, 179B, 180, 181, 187, 194, 196, 197, 217, 221, 223, 224, 225, 226, 227, 230, 235, 236, 240, 241, 242, 243, 258, 259, 260, 261, 262, 263, 266, 267, 269, 270A, 270B, 270C, 273, 277, 280, 287, 292, 295, 298, 300, 301, 304, 305, 306, 309, 310, 312, 313, 314, 316, 317, 318, 319, 322（P018） | 124 |
| | 塚（SX） | 002, 003, 004 | 3 |
| | 小穴（P） | 001, 002, 003, 004, 005, 006, 007, 008, 009, 010, 011, 012, 013, 014, 015, 016, 017, 019, 020, 023, 024, 025, 026, 027, 028, 029, 030, 032, 033, 034, 035, 036, 037, 038, 039, 040A, 040B, 041, 042, 043, 044, 045, 046, 048, 049, 050, 052, 053, 055, 056, 057, 059, 060, 061, 062, 063, 064, 065, 066, 067 | 60 |
| | 溝状遺構（SD） | 001, 002, 003, 004, 005, 006, 007, 008, 009, 010, 011, 012, 013, 014, 015, 016, 017, 018, 019, 020, 021, 022, 023, 024, 025, 026, 028, 029, 030, 031, 033, 034, 035, 036 | 34 |
| 欠番 | 竪穴住居（SI） | 036, 037, 038, 039, 127, 128, 129, 130, 150, 159, 160, 166, 226, 232, 237 | 15 |
| | 掘立柱建物（SB） | 017, 049 | 2 |
| | 土坑（SK） | 004, 058, 061, 062, 071, 072, 073, 074, 075, 076, 081, 082, 086, 087, 088, 089, 090, 091, 092, 093, 094, 095, 098, 099, 100, 106, 116, 144, 152, 157, 161, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 169, 170, 171, 172, 173, 174, 176, 177, 178, 182, 183, 184, 185, 186, 188, 189, 190, 191, 192, 193, 195, 198, 199, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 214, 215, 216, 218, 219, 220, 222, 228, 229, 231, 232, 234, 237, 268, 278, 279, 281, 282 | 92 |
| | 小穴（P） | 018, 021, 022, 031, 047, 051, 054, 058 | 8 |
| | 溝状遺構（SD） | 027, 032 | 2 |

第6図　道構位置図

0　50m
(1/1,000)

※中・近世道構の番号は第321図に掲載

注

1　渡辺修一・矢本節朗　1994　『四街道市御山遺跡（1）　—物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—』（財）千葉県文化財センター

岡田誠造　1999　『四街道市出口・鐘塚遺跡　—物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—』　（財）千葉県文化財センター

古内茂他　2005『四街道市小屋ノ内遺跡（1）　旧石器時代編　—物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—』（財）千葉県文化財センター

糸川道行他　2006『四街道市小屋ノ内遺跡（2）　縄文時代～中・近世編　—物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ—』　（財）千葉県教育振興財団

糸川道行他　2007『四街道市小屋ノ内遺跡（3）　—物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ—』　（財）千葉県教育振興財団

沼澤　豊　2008『四街道市郷遺跡・中久喜遺跡　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』　（財）千葉県教育振興財団

2　数値は，「Web版ＴＫＹ２ＪＤ　Ver.1.3.79　パラメータ　Ver.2.1.1」による。

3　前掲注１に同じ。

4　渡辺修一　1991　『四街道市内黒田遺跡群—内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書—』（財）千葉県文化財センター

5　飯島伸一他　2002　『郷野遺跡—四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）—』（財）印旛郡市文化財センター

# 第２章　旧石器時代

## 第１節　概要

本遺跡の旧石器時代関連の調査は，前述したように数次にわたることとなったため当初設定した大グリッドに基づき調査を実施してきた。調査にあたっては大グリッドをさらに100分割して，一定の割合で試掘し，遺物の有無を確認するような手順ですすめてきたが，年度により斜面部や小区域の調査となった場合には一部任意の小グリッド設定により調査を実施した。

その結果，本遺跡では図示（第７図）したように９地点において旧石器時代の石器が確認されたため，それぞれのグリッドを拡張し，その分布範囲を把握するという手順で調査をすすめた。出土地点は遺跡に入り込む小支谷を挟む西部域に集中しており，石器群の出土層位から大きく４時期に分けられた。そのため本報告では，最下部出土の石器群を第１文化層とし，順次上層にむかって第２・第３・第４文化層という認識で整理作業をすすめることとした。出土石器群の規模・内容という点についてみると，大規模なものは認められず最大規模の第６地点とした石器群も小グリッド（５ｍ×５ｍ）に収まる程度の分布であった。総じて小規模の分布構成とみてよいものであろう。

一方，本遺跡は既に報告されている「小屋ノ内遺跡」（注１）と地形的には連続しており，一連の遺跡として位置付けた場合，その規模から旧石器時代の人びとの活動という点を考えると，中心は小屋ノ内遺跡にあったともいえよう。次に各文化層について簡単に触れておきたい。

**第１文化層**　本文化層は，第Ⅸ層のいわゆる暗色帯の上層部から出土した石器群をもってこれにあてた。第１地点と第２地点がこれに該当する。ただ第２地点出土石器に関しては試掘中に第Ⅸ層から出土したものであって単独出土としても取り扱える。本文化層は，層序的には小屋ノ内遺跡の第１文化層に近いものと考えられる。

**第２文化層**　出土層位についてみると，暗色帯への漸移層である第Ⅶ層からの出土である。出土地点としては第３～６地点の計４か所から検出されており，量的にも最多といえる文化層である。後述するように第６地点では黒曜石の剥片・砕片類が大半で石器の細部加工が行われていたことが明白な出土状況を示していた。本文化層は，層序的にみれば小屋ノ内遺跡の第２文化層に近いものと考えられる。

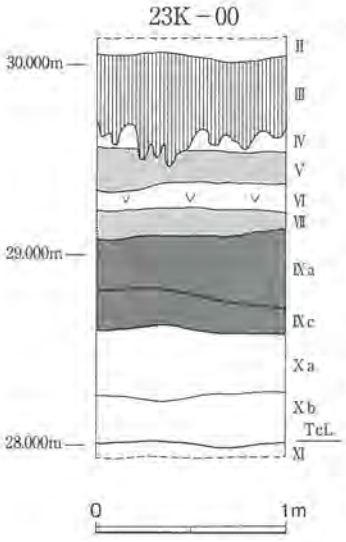
**第３文化層**　第７・８地点出土の石器群がこれに該当する。出土層序は第Ⅴ層であり，クラック帯のみられるハードローム下層，鍵層となるＡＴ層までには至らない。本文化層は，層序的には小屋ノ内遺跡の第３文化層に近いものと考えられる。

**第４文化層**　製品が１点のみの出土地点で単独出土と考えられたが，明確に第Ⅲ層から出土しているため独立した時期を考えた。だが，第Ⅲ層は元来第Ⅳ層以下の堆積層が風化して堆積したものであるため正確な時期を把握することはできない。

## 第２節　層序（第８図）

図示した層序は，遺跡の西側中央に位置する23Ｋ－00グリッドを柱状に示したものであり，本遺跡の標準的層序といえる地点である。第Ⅰ層（表土）と第Ⅱ層の約2/3は削平されており，層厚は隣接する小屋ノ内遺跡と大差は認められない。

第７図　下層発掘区及び石器検出地点位置図




第８図　基本土層

**第Ⅲ層**　黄褐色土（ソフトローム）　計測地点での層厚は40cm～50cmと厚く，堆積状態は良好といえた。他の地点では30cm～40cmの程度の堆積となる。

**第Ⅳ層**　褐色土　いわゆるハードロームであり，上部は風化により凸凹が著しい。部分的には消失する場所も認められる。

**第Ⅴ層**　褐色土　上部暗色帯に対比できる層であるが，本遺跡一帯では第Ⅳ層と比較し明確な色調の差異は認められない。

**第Ⅵ層**　明黄褐色土　鍵層となるＡＴ（姶良丹沢パミス）含有層であり，色調の差は歴然としている。厚さは10cm～15cmを測る。

**第Ⅶ層**　黒褐色土　下部暗色帯への漸移層であり，上部は暗褐色，下部では黒褐色に近い色調を呈している。

**第Ⅸ層**　黒褐色土　下部暗色帯にあたり，色調は黒褐色を呈している。約50cmの厚さで堆積しており，場所によっては間層（第Ⅸｂ層）が認められるが，本地点では認められなかった。

**第Ⅹ層**　褐色土　立川ローム層の最下層部にあたる。

## 第３節　発見された石器群

### １　第１文化層

#### （１）第１地点（第９・10図）

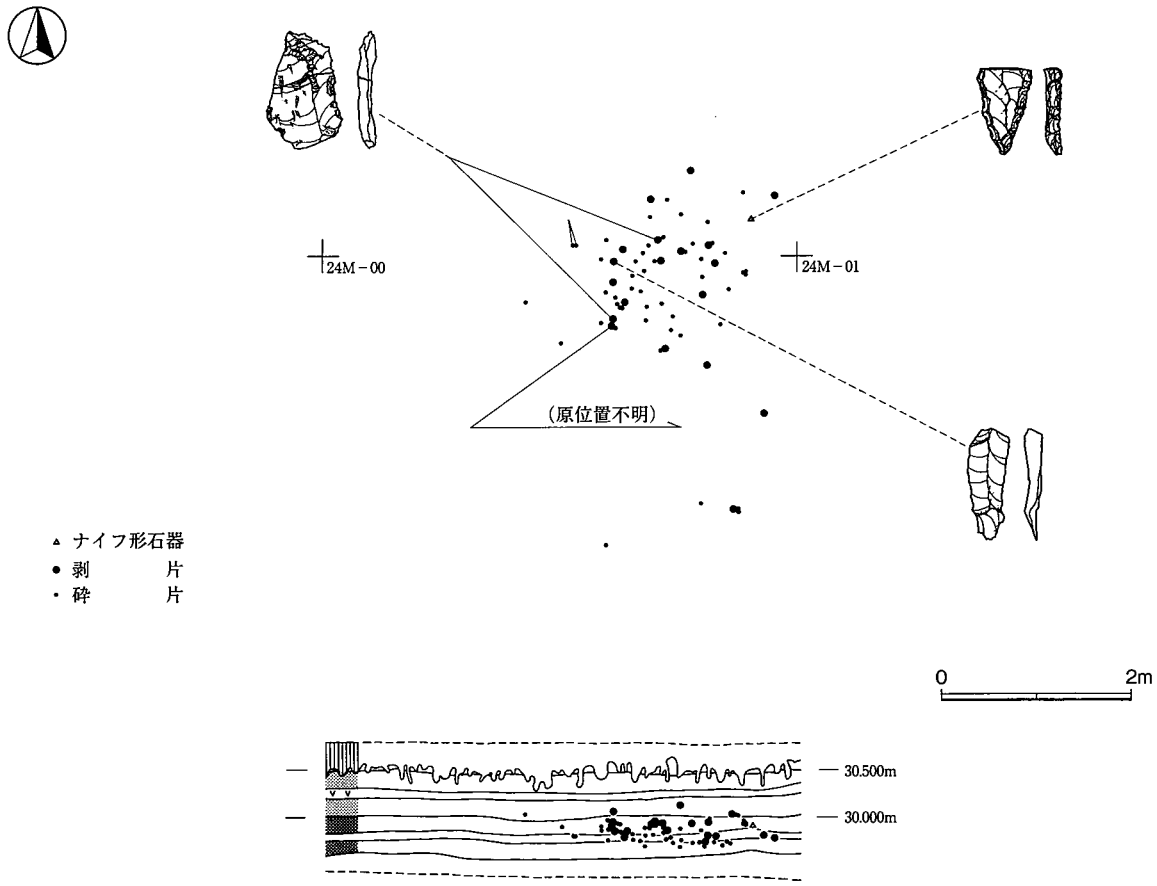
**概要**　本地点は，24M－00グリッドから24L－90グリッドにかけて径２ｍの範囲で濃密に分布が認められた。出土層位についてみると，主体は第Ⅸa層といえよう。出土した石器群の総数は67点を数えるが，剥片・砕片の類が多く，製品としてはナイフ形石器の欠損品が１点検出されたのみである。砕片の多くは，重さが0.1g以下であり，44点を数えた。使用されていた石材では黒曜石が多く，他の石材としては，凝灰岩１点と頁岩２点が検出されているのみである。以上の点から考えると，本地点では主に黒曜石を素材とした石器製作が行われていた場所となろう。またナイフ形石器の欠損品は廃棄されたものとも考えられる。

**石器・石材**　出土品の多くは剥片・砕片であり，実測可能なものは３点にとどまった。１はナイフ形石器の欠損品で，両側面に調整剥離が施され作りとしては良好である。裏面での調整は認められない。石材は黒色頁岩である。２は剥片で，打点部を折断しているが使用痕等は認められない。石材は硬質細粒凝灰岩である。３は接合した剥片で，表裏の側縁に微細な剥離痕がみとめられる。石器として使用していたものであろう。石材は黒曜石であり，表面には小石等の異物を混入するが透明度も有する。他の剥片・砕片の類も同様な石質と見なされた。

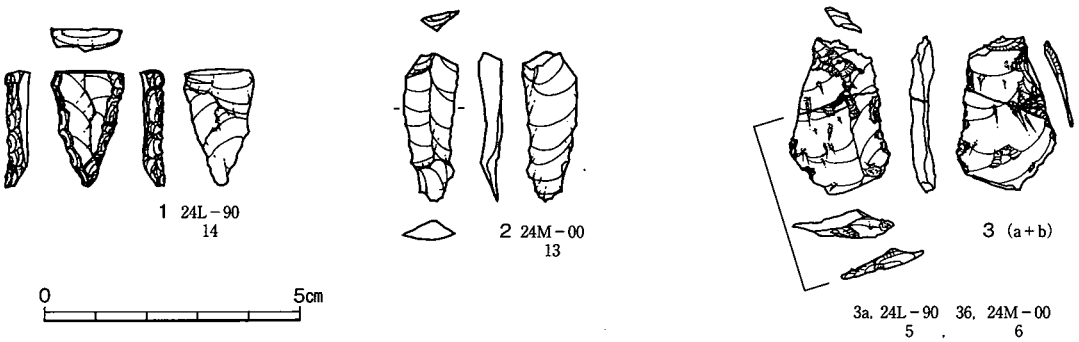
#### （２）第２地点（第11図）

**概要**　本地点では１点の剥片が23L－66グリッドから確認調査中に発見されただけである。その後，周囲を拡張して精査したが石器は検出できなかった。

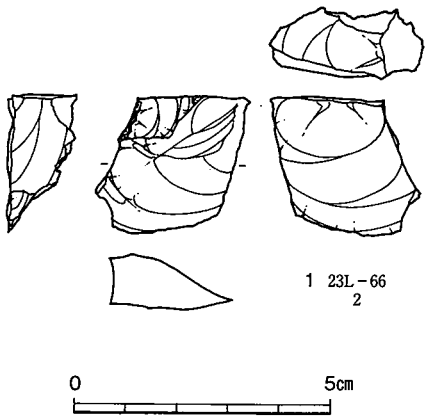
**石器・石材**　打面を残した分厚い剥片で，石器の素材としては十分な形状を呈したものである。剥離された後の二次剥離は認められない。石材は珪質岩である。




第９図　第１地点遺物出土状況図（1/80）




第10図　第１地点出土遺物実測図（2/3）



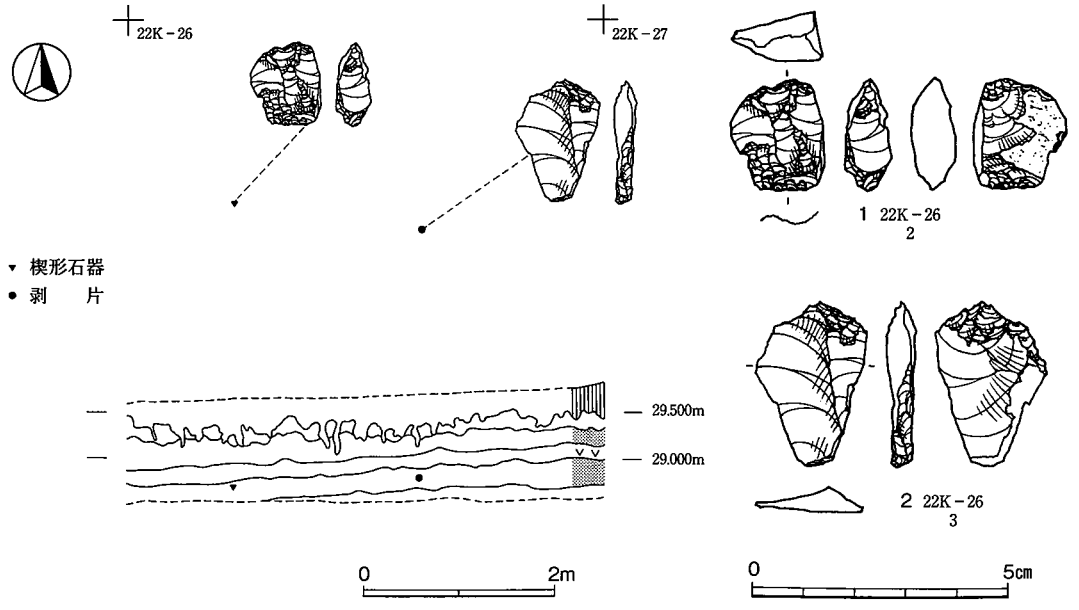

第11図　第２地点出土遺物実測図（2/3）

## 2　第２文化層

### （１）第３地点（第12図）

**概要**　本地点は遺跡の東より斜面部に位置しており，２点のみの出土であった。出土層位は第Ⅶ層中となる。グリッドでは22K－26となり，周囲の拡張を試みたが出土範囲の広がりは認められなかった。

**石器・石材**　１は縦方向に折断後，上下両端に整形のための剥離が施され鋭利な角度を作出している。楔形石器としてよいであろう。上下両端は使用により若干磨耗痕が認められる。石材は黒曜石で，第１地点で出土したものよりも透明度が高く不純物の混入も認められない。２は打面部を数回の加撃によって削除し形状を整えている。調整剥離は裏面右側縁に沿って施されており，ここを刃部として使用したものであろう。剥片の部類に入れたが，用途としては削器に近いものと考えられる。石材は黒曜石で，透明度が高く不純物の混入も認められない点は１と同様である。同一母岩の可能性も高い。

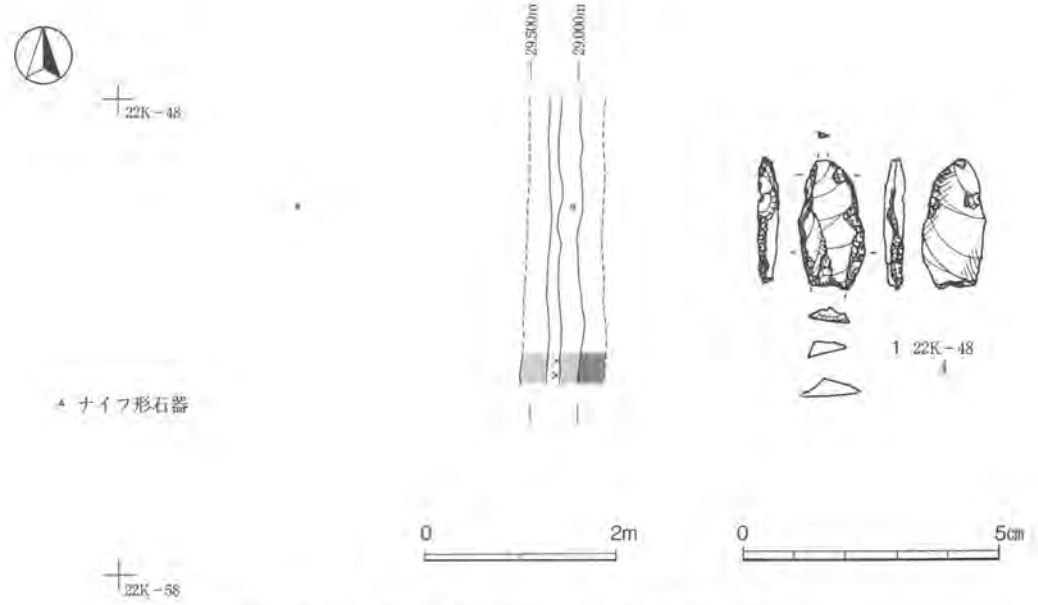



第12図　第３地点遺物出土状況・遺物実測図（2/3）

（2）第４地点（第13図）

**概要**　本地点も１点のみ第Ⅶ層中から出土したものである。出土地点は第３地点から南東に約10m程離れた地点で，グリッドでは22K－48となる。調査時には周囲を大きく拡張して精査したが石器の出土は確認できなかった。

**石器・石材**　図示したナイフ形石器は，縦長の剥片を素材として作出されたもので基部を欠損する小形品である。調整剥離による加工は左右の側縁に認められ，右側縁では先端部付近にまで及ぶ。裏面での加工は認められず，作りは概して粗雑なものといえよう。石材は黒曜石であり，ここでもガラス質の透明度の高い石質を採用している。

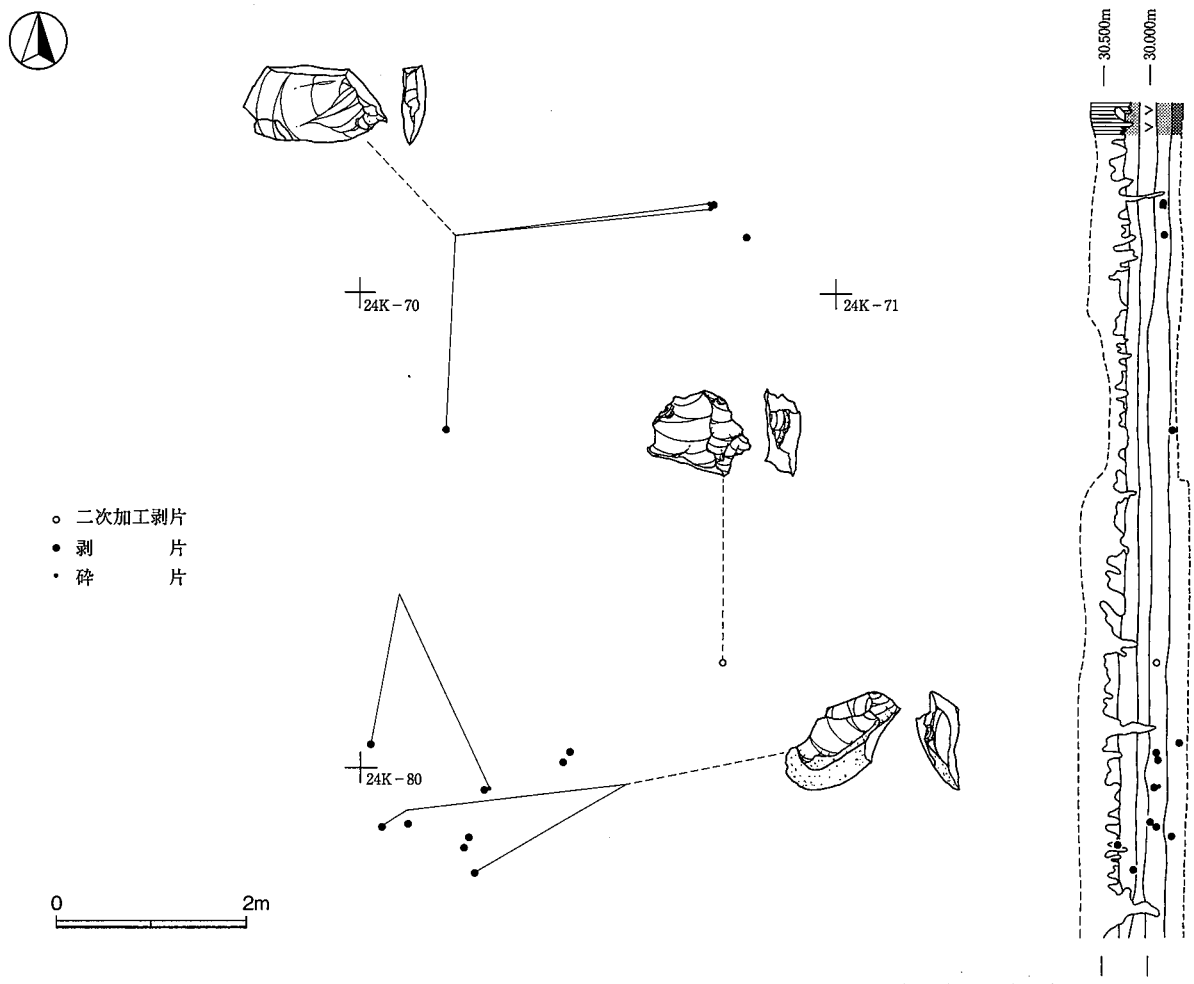



第13図　第４地点遺物出土状況・遺物実測図（2/3）

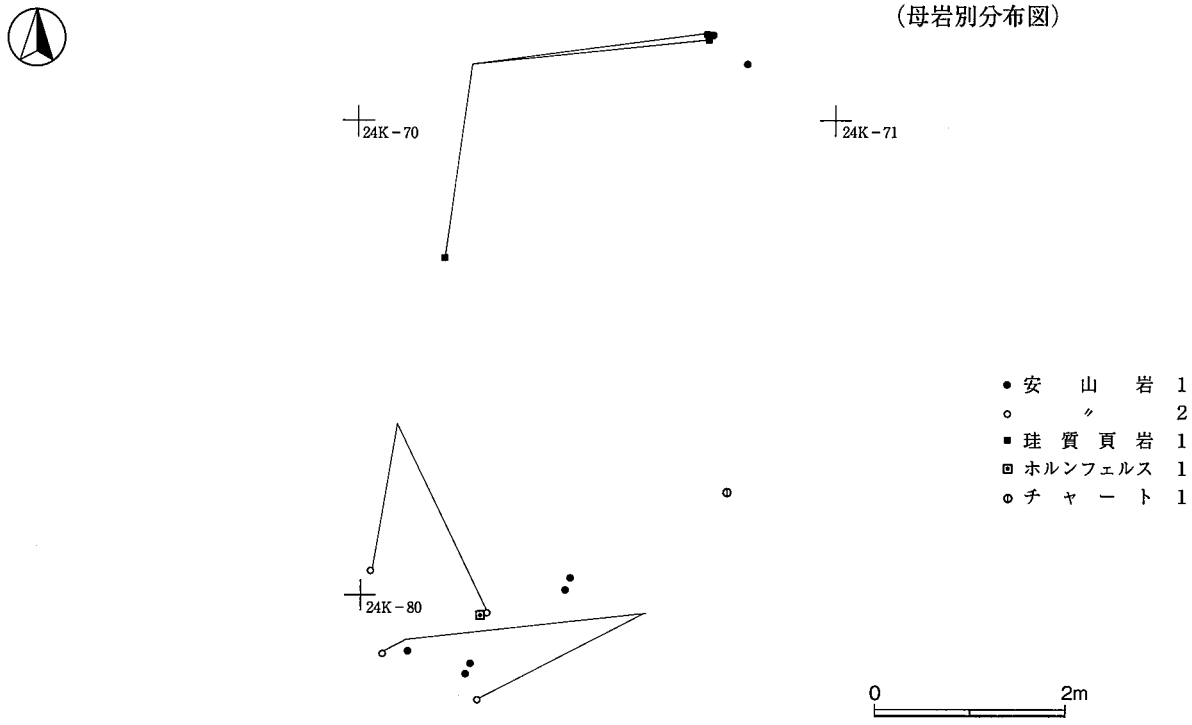
（3）第５地点（第14・15図）

**概要**　本地点の石器群は散漫な分布状態で検出され，出土点数は15点と少ないながらも24K－60・70・80の各グリッドにまで及ぶ。出土層位の主体は第Ⅶ層であり，その一部は第Ⅳ・Ⅴ層にも包含されていた。しかも，かなりの高低差を有するが，接合関係が認められたため明確に同一時期の所産といえよう。使用石材に関して言及すると，ここでは黒色安山岩が主体を占めており，黒曜石は皆無であった点が特筆できる。他では安山岩・チャート等であり，これらの石材は僅少であった。

**石器・石材**　出土した石器群についてみると，製品にまで加工されているものは皆無で，３点の砕片の他はすべて剥片であった。これらの中には石器素材となり得るような大きさを有するものも存在するが，形状の整った剥片は少なかった。このため図示は３点にとどめた。１は横長の剥片で，小さめの石核から剥離されたものであろう。表裏ともに二次的な剥離は施されていない。裏面での剥離は，本剥片が剥離される以前の剥離痕である。石材はチャートである。２は横長の薄く剥離された剥片で，素材として十分活用できると思われるが，加工痕や使用痕は認められない。ただ二次剥離という点では，砕片２点が接合しており，加工への意識が窺われる。石材は硬質頁岩である。３も小剥片ながら接合した資料である。表面には自然面を残す。石材にはトロトロ石を使用している。他に８点の黒色安山岩が出土しているが，図示については省略した。

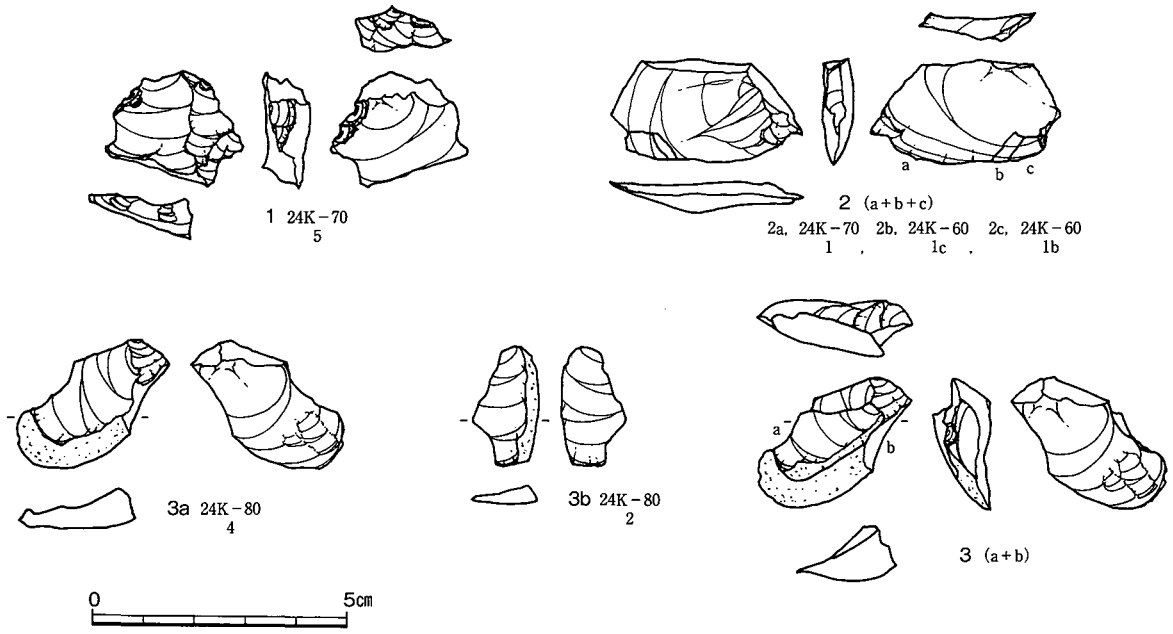



（器種別分布図）




（母岩別分布図）

第14図　第５地点遺物出土状況図（1/80）



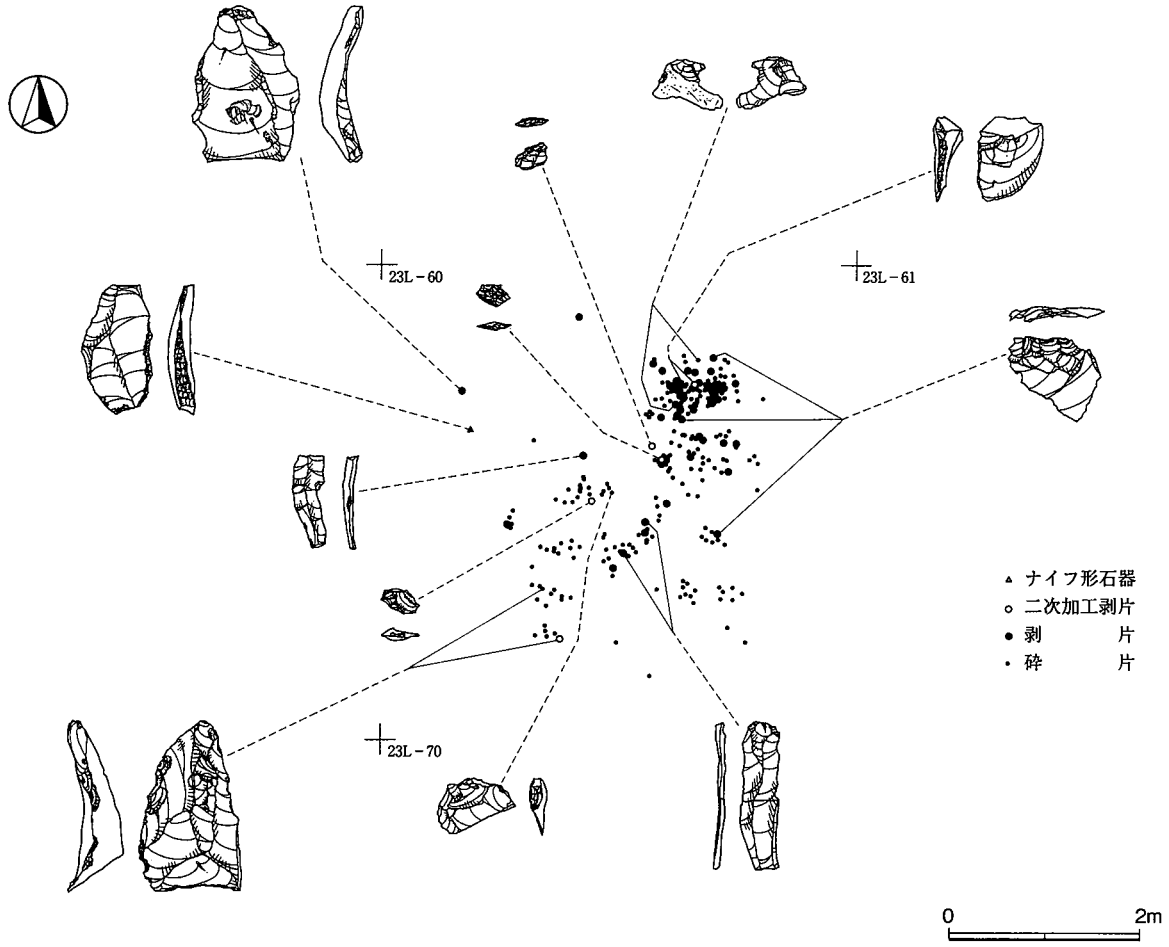

第15図　第５地点出土遺物実測図（2/3）

（４）第６地点（第16～18図）

**概要**　本地点は，西よりの台地中央部からやや南において検出された石器集中地点で，集中地点と呼称できる唯一の地点といえよう。23L区の60グリッドのみで分布範囲は収まり，径４ｍの小範囲ながら砕片まで含めると300点余の出土点数を数えた。出土層位は，最も集中している点では第Ⅶ層を中心としているが，南西部分から出土した石器群は第Ⅵ層へと出土層位が変化しているため，時期差も考慮しつつ整理をすすめた。しかし，接合関係をみると，高低差も認められており同一時期の石器群として取り扱うこととした。

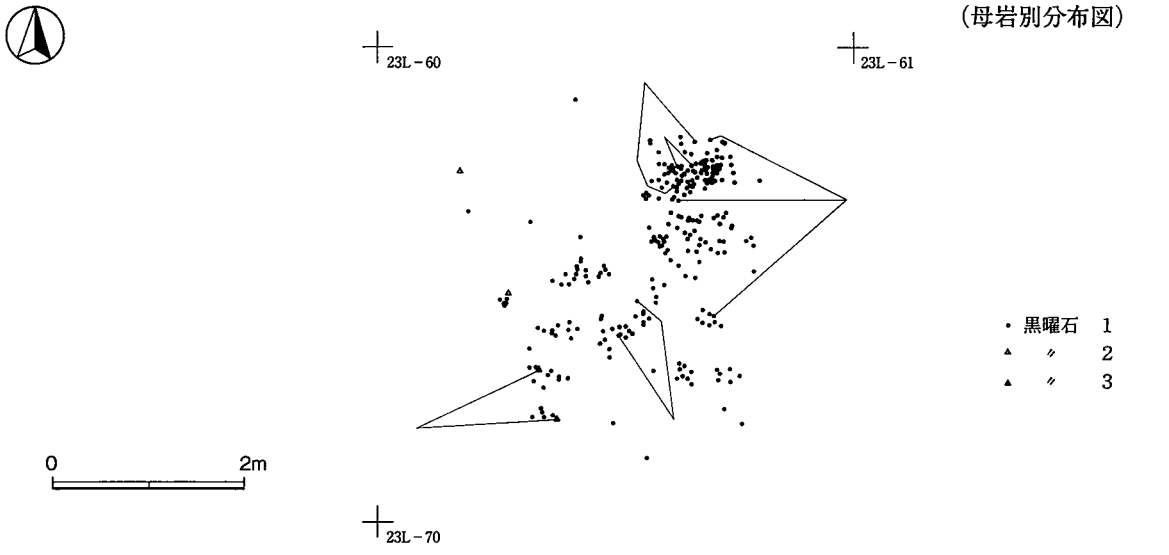
また本地点の特徴として，出土石器の中で重さが0.1gを越える剥片は36点，さらに0.5g以上を計測できるものは接合資料を含めても８点と少なかった。結果的には，その約９割近くが砕片で占められていた。いわば典型的な石器製作跡といえる性格の地点であろう。このため図示できた資料は，接合資料を含めて12点と少ない。また使用されている石材についてみても，すべてが黒曜石で占められており，他の石材は皆無であった。

**石器・石材**　１は縦長剥片を素材としたナイフ形石器で，先端の一部を欠損する。打点部は削除され，右側縁は先端部に至るまで微細な調整剥離が施されている。一方裏面では疎らに調整剥離を加えるだけで製品に仕上げ，透明度の高いガラス質の黒曜石を素材としている。２は本地点出土の最大の剥片で9.97gを計測する。背面が高く湾曲した素材の打点部を削除し，石器としての形状を整えている。二次剥離は表面左側上部に整形のための剥離が認められ，他は簡単な調整を若干加えることにより石器に仕上げている。削器状の石器として利用したものであろう。色調は，分厚いためかやや濁った半透明を呈したものであり，裏面には小石の含有が認められた。３～５は，ほとんど砕片として取り扱われる大きさである。ただ剥離後に施されたものと考えられた小さな剥離痕が存在するため図示したが，果たして石器として使われたかどうかは疑問である。６は，剥片の接合と剥片石器を図示したものであり，打面部の整形（６b）をみてとれる。石器として利用された６aは主剥離面の左側縁に調整剥離を施し，削器状の石器に加工して

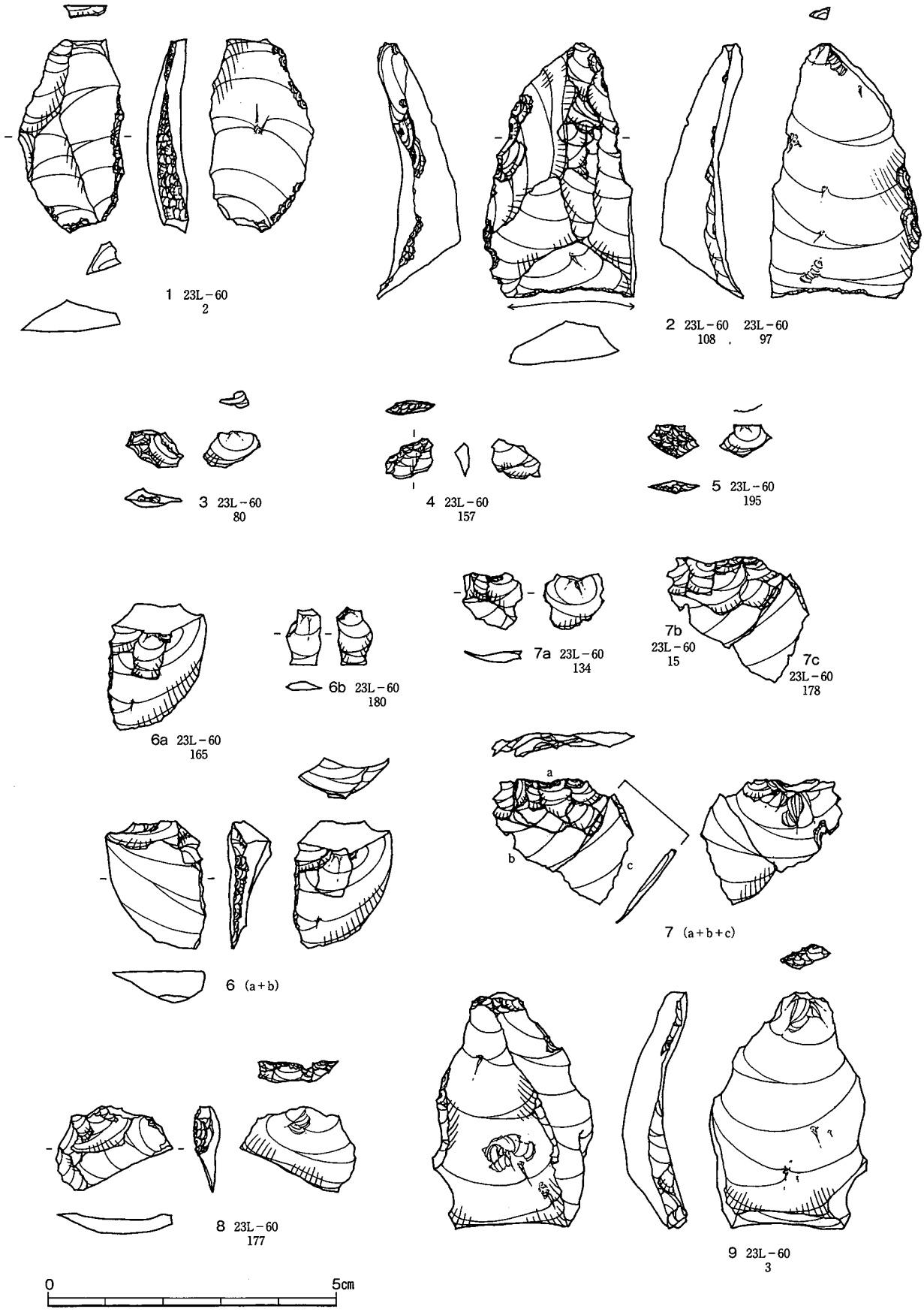



（器種別分布図）

（母岩別分布図）

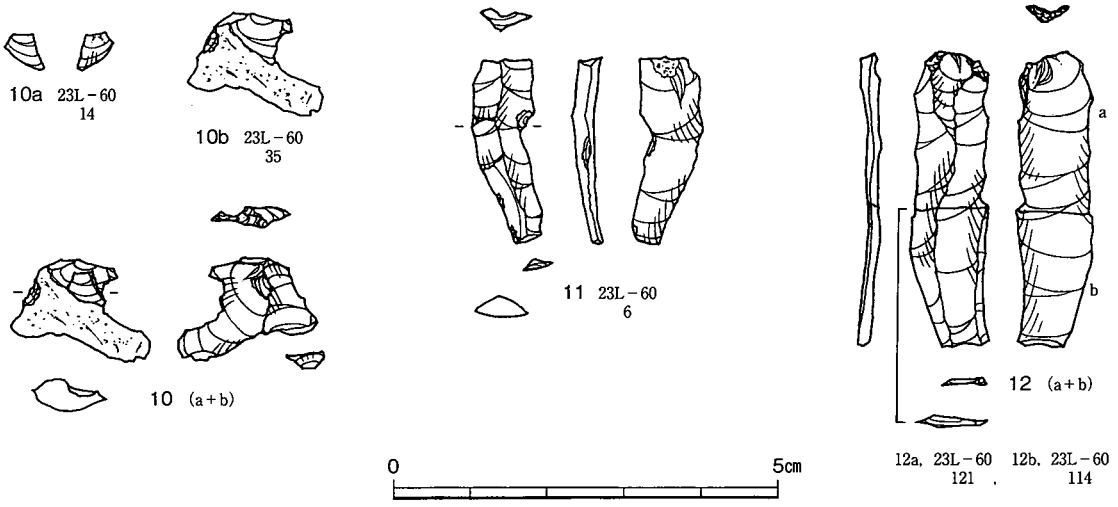



第16図　第６地点遺物出土状況図（1/80）




第17図　第６地点出土遺物実測図（1/1）(1)

いる。本資料は１と同様に透明度が高い黒曜石を素材としている。７も３点が接合したものであり，左側縁では使用痕らしき痕跡を残している。８も７と同様に透明度の高い素材を用い，剥離後，右側面を表面から裏面にむかって数回微細な剥離を施している。石器として利用したとすれば，掻器状の石器と推測できる。９は大形の縦長剥片で，小さな整形剥離が左側縁中央部に認められる。石器の素材として十分な形状を有しており，切断するような石器として利用されていたものと思われる。色調は，若干白濁した黒曜石で，異物の混入も認められた。10は，砕片の10aが接合したもので，左側縁に小さな剥離が認められるが，石器製作を意識したものではない。表面では自然面を認めるが裏面はガラス質のきれいな面である。11は小形の石刃状剥片で，表裏面に微細な調整痕が認められる。おそらく石器として使用されたものであろう。石質はきれいなガラス質である。12も石刃状剥片で，折断されたものが接合した例である。しかし，接合はするものの明確な使用痕等は認められなかった。本資料もきれいなガラス質の黒曜石を利用している。



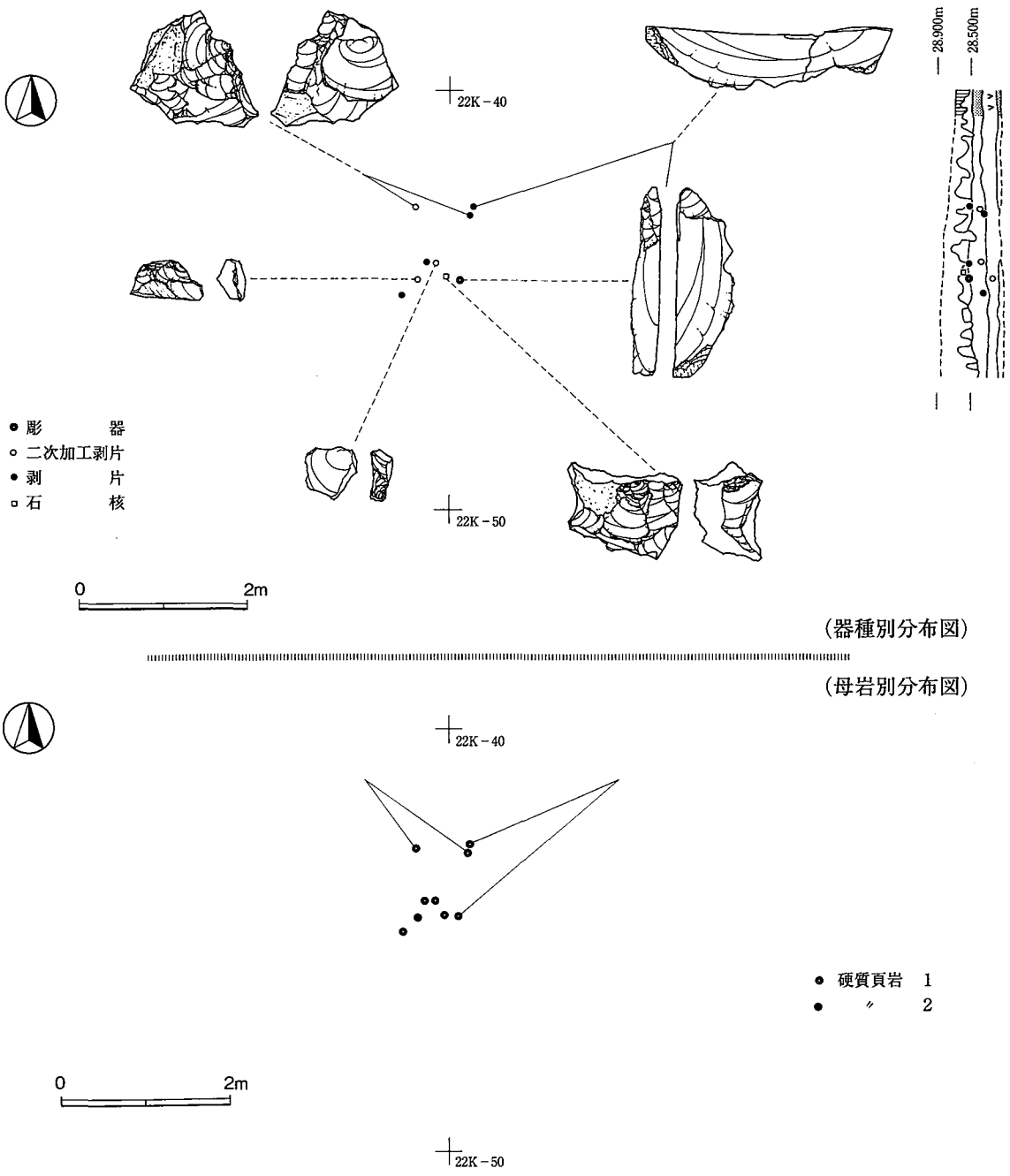

第18図　第６地点出土遺物実測図（1/1）(2)

## ３　第３文化層

第７地点（第19・20図）４・５層

**概要**　本地点の石器群は，西側台地の突出した部分から検出されたものである。ここでの石器群も小規模で，計９点が出土したにとどまった。その範囲は，21K－59・22K－50グリッドにかけて約１mに収まるものであり，使用されていた石材も硬質頁岩１種のみであった。出土層位は第Ⅳ層～第Ⅴ層となり，第２文化層と比較すると明らかに上部となる。

**石器・石材**　１aは節理面に沿って剥離された大形剥片を折断し，折断面に沿って樋状剥離を２～３回加えて彫器面を作出している。本遺跡で出土した唯一の彫器である。また使用痕は下端部の剥離面でも僅かに認められる。２は剥片間の接合例であり，２aでは使用の痕跡は認められない。表面の一部には節理痕がみられる。２bでは，打面部となった一部を抉るように剥離を施しており，石錐としての機能も考えられる。３は小剥片であるが，側面に微細な調整痕が認められる。石器とすれば，掻器のような使用が想定できよう。４も小形の剥片で，右側縁に二次剥離の痕跡がみられる。５は石核で，下部に数回の剥離を加えており，残核を利用して石錐状石器としての使用も考えられる。



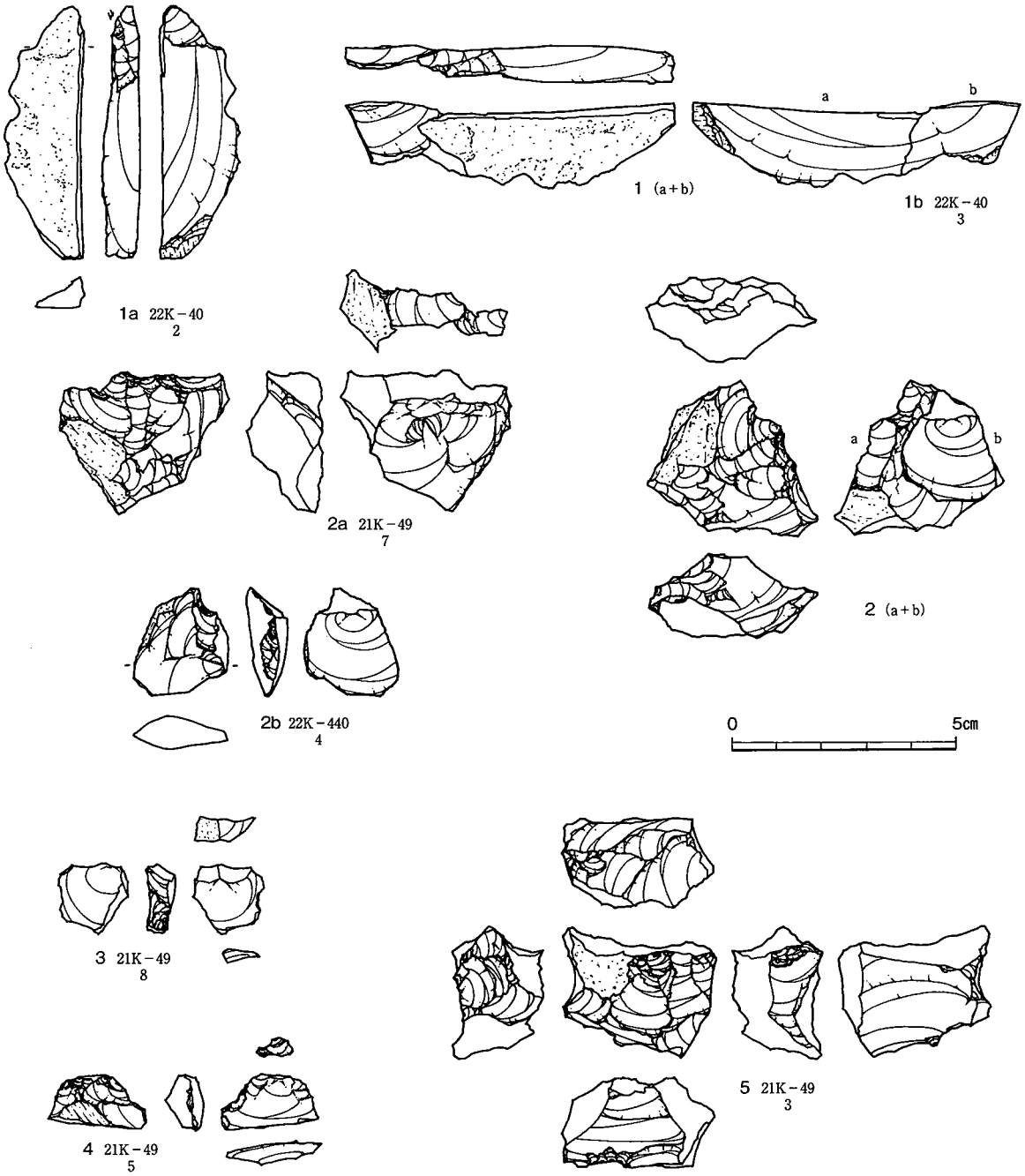

第19図　第７地点遺物出土状況図（1/80）

## 4　第４文化層

### （１）第８地点（第21・22図）

**概要**　本地点の石器群も小規模で，周囲の拡張を試みたが23K－04グリッドを越えて出土することはなかった。合計10点が出土し，そのうちの４点は礫であった。ここでの剥片は図示したような大形品でいずれも石器として使用していたことが窺われる。出土層位は第Ⅲ層下部から第Ⅳ層の最上部となろう。使用されていた石材は多種にわたる。

**石器・石材**　１はガラス質黒色安山岩の大形剥片で表面には自然面を残し，断面は三角形を呈したものである。右側縁中央部に二次剥離痕が認められるところから石器として使用していたものと考えられる。２

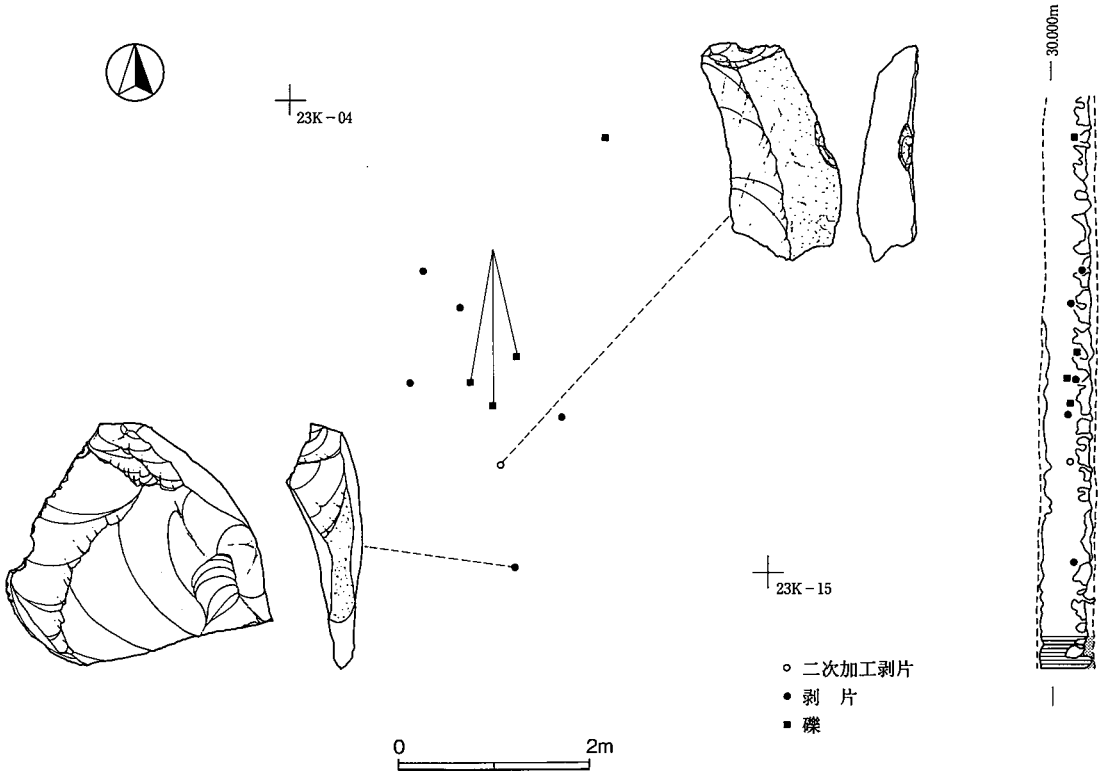



第20図　第７地点出土遺物実測図（2/3）

は淡い灰緑色を呈した硬質細粒凝灰岩の大形剥片で，左側縁では使用痕とともに微細な刃こぼれ痕が観察できる。削器のような使用が考えられよう。

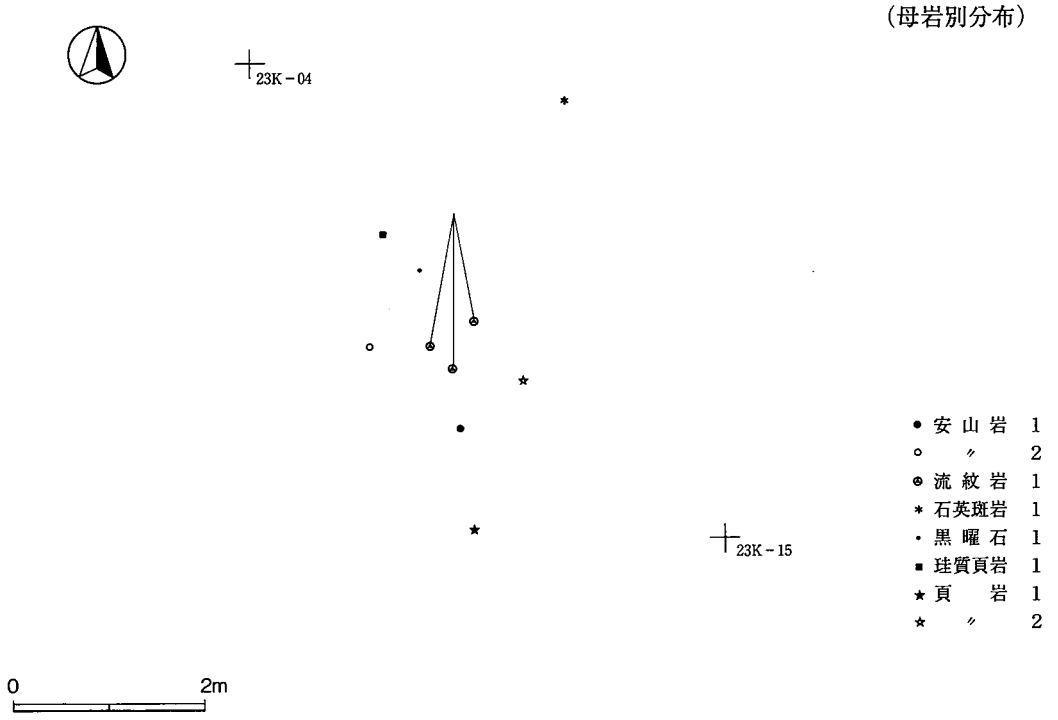
（２）第９地点（第23図）

**概要**　本地点での石器は１点のみで，東側台地の25J－44グリッドから出土したものである。出土層位は第Ⅲ層の上～中部にあたる層から出土しており，いわゆるソフトローム層であり，流失の可能性も考えられるため単独出土として捉えたほうが妥当とも思われた。

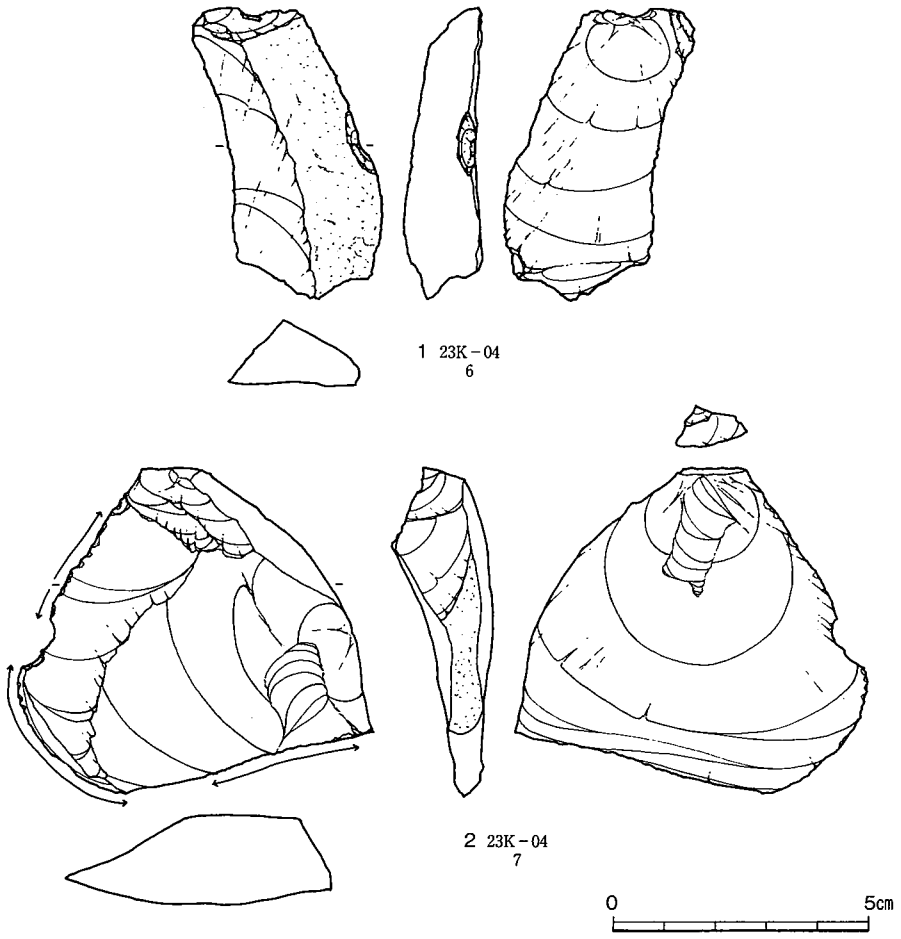



（器種別分布）

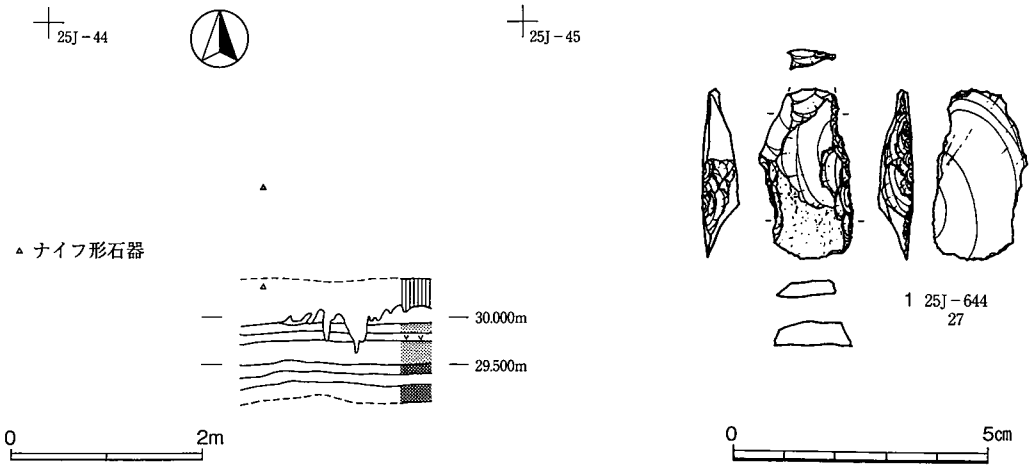
（母岩別分布）




第21図　第８地点遺物出土状況図（1/80）




第22図　第８地点出土遺物実測図（2/3）



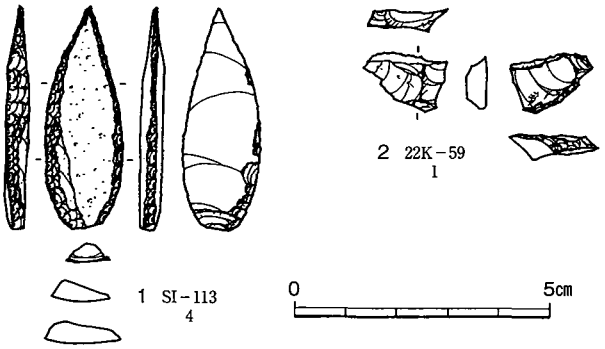

第23図　第９地点遺物出土状況（1/80）・遺物実測図（2/3）

石器・石材　硬質頁岩製の台形石器で，両側面を整形後に裏面方向から小さな調整剥離によって台形石器に仕上げている。表面刃部には自然面を残す。

5　単独出土の石器（第24図）

概要　単独出土の石器として扱ったものは，縄文時代以降の遺構や包含層の精査によって検出されたものであり，図示したものの他に数点の剥片・砕片が出土している。

石器・石材　1は精巧な作りの尖頭器で，表面には平坦な自然面が残る。周縁は基部を除き加工が行き届いている。裏面では基部付近に軽く整形を施している。石材には硬質頁岩を採用，出土地点はSI－113号住居跡の覆土中である。2は黒曜石製の剥片で，僅かな調整痕が認められるため図示した。出土地点は22K－59グリッドからである。




第24図　単独出土遺物実測図（2/3）

# 第３章　縄文時代

## 第１節　概要

本遺跡において検出された縄文時代に属する確実な遺構としては，早期の炉穴・陥穴及び前期後半の住居跡などがあげられる。また遺物についてみると，土器では早期の撚糸文系土器から晩期末葉の土器群に至るまで不連続的ではあるが，多様な土器群が出土している。さらに石器についてみるならば，既報告分（小屋ノ内遺跡）で触れたようなチャートを素材とした石器製作跡が検出され同様な石器・剥片類が出土しており，複数の地点で石器の製作がおこなわれていたことを確認できた。以下，次に時期別にその概要を記していく。

**早期**　この時期では炉穴と陥穴が検出されている。炉穴の検出地点は北に向かって延びる舌状台地の先端部にあたり，大グリッドに置き換えると24・25H区となる。この一帯では，奈良・平安期の住居跡は散漫な分布状況であったため，炉穴の遺存状態は比較的良好であった。また，陥穴は舌状台地を形成する支谷の谷頭周辺に集中的に検出されている。大グリッドでいう24K区にあたり，谷頭を囲むように不規則な方位で，いわゆるTピットと称される横に長く，しかも深く掘り込まれた陥穴群が検出できた。

一方，遺構を伴わない撚糸文系土器や沈線文系の土器群は，出土量は僅かであり25H・23J区から発見されている。

**前期**　本遺跡で，唯一住居跡の存在が認められた時期であり，前期後葉に属する住居跡が近接して４軒検出できた。検出地点は22・23K区となり，台地の先端に近い位置となる。出土土器群もほぼ同時期のものであり小規模な集落を営んでいたものであろう。これら４軒の住居跡のうち，SI025では多量の土器が出土しており，浮島式と諸磯式の両文化を比較する好資料を得ることができた。小屋ノ内遺跡の調査では前期末葉の土坑が１基検出されたにとどまったが，集落の存在は継続的な居住を想起させるものとなろう。

しかも，前期中葉に位置する黒浜式土器も相当量出土しており，住居跡等の遺構は検出できなかったがその出土量から小規模なものと思われるが，居住域を形成していたものと推測できる。土器の出土地点は住居跡の検出された 22・23K区と25H区の２か所となり，量的には住居跡群の存在する22・23K区がまさっていた。

**中期**　この時期に属する土器群も前期には及ばないものの広範な分布が確認できた。グリッドでいえば，24H・25区から25I区，23J区から22・23K区，22・23L区において比較的多く出土している。これらは土器型式でいえば，五領ヶ台・下小野式から阿玉台式を経て加曽利E式に至る時期であり，中期初頭から後葉に位置付けられるものである。しかも主体を占めるものは中期初頭の土器群であり，23K区や22L区では大形破片の出土が認められた。これらの土器群は，前期から中期へと変化する様相が垣間見られる貴重な資料を提供したものといえよう。

**後期**　この時期も遺構の存在は確認できなかったものの多量の土器群が出土している。形式的にみれば加曽利B式から安行２式にわたるものであった。しかし，堀之内式に比定できる土器は，小屋ノ内遺跡同様ここでも皆無であった。出土地点は，23L区と23M区を中心とした地点が濃密で，次いで25K区や25I区でも疎らな分布が認められた。

石器についてみると，当該期では石材にチャートを用いた石器製作跡が確認されている。その分布は

22・23L区,22・23M区を中心として径約50m×80mの範囲に及ぶ（第７図参照)。そこでは多数の石核・剥片類が出土しており，土器群の分布と重複するため同時期に営まれたものと推測できる。その剥離方法は隣接する小屋ノ内遺跡にみられた技法と共通しており，石器製作の広範な展開に注目できる。

晩期　本期に属する土器群は22・23M区及び23L区で少量ながら出土している。後述するように晩期では後葉の土器が中心を占めており，一部に弥生時代に属する土器もみられた。ただ出土量も少なく後続する土器群も認められなかったため，本期の中に含めて記述することとした。また晩期後葉の土器群は小屋ノ内遺跡でも若干出土しており，後続する初期弥生土器も含めて興味深い資料といえよう。

## 第２節　早期の遺構・遺物

### １　炉穴（第25～27図，図版14)

炉穴群は24・25H区に集中して９か所で検出されている。その形状をみると，一般的にみられる長楕円を呈したタイプが主となっている。また足場と火床部との関係をみると，重複しているFP-004を例にとれば一定の方向性は存在せず，任意に順次作り替えているような形状を呈している。

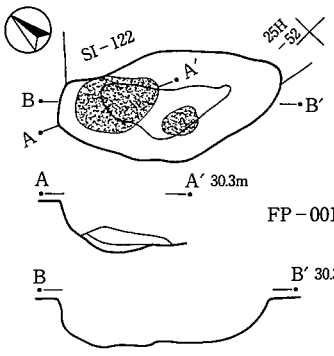
FP－001　本跡は25H－52グリッドにおいて検出されたものである。足場から火床部に向かう主軸は，ほぼ北西方向にあり，東壁はSI122によって切られているものの掘込みは深く，一応の形状は把握できた。長軸で2.3m，幅は1.2mを計測する。確認面からの掘込みは45cmとなる。焼土は壁面に接し約20cmの厚みを有し，その底面はよく焼けていた。土器等の遺物は認められなかった。

FP－002　本跡は台地の斜面部にあたる24H－47グリッドから検出されたものであり，径約80cmの円形を呈した炉穴である。確認面からの掘込みは15cmと浅い。斜面部に位置しているため足場部分は削平された可能性も考えられる。火床部ともいえる底面は赤褐色によく焼けていた。遺物は出土していない。

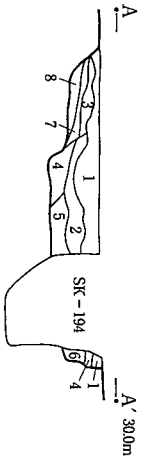
FP－003　本跡はFP－002の北に隣接して検出されたものである。形状・規模ともにほぼFP－002と同様である。確認面からの掘込みは20cmに満たない。底面の中央部が火床となっており，約10cmの厚さの焼土が認められた。ここでも遺物は出土していない。

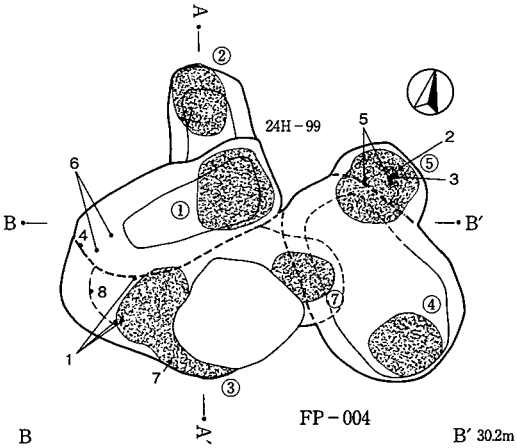
FP－004　本跡は24H－89･99グリッドで検出されたものであり，炉穴群の中で最も複雑な重複関係にあった。火床の位置から，少なくとも６基の炉穴が存在していたものと理解できる。構築の前後関係については，遺存部の形状や火床の位置及び堆積土の観察からA→D→B→Cの順で使用された後にF→Eの順で構築されていったものと思われた。構築に際しての掘込みは，確認面から計測するとC跡が50cm，D跡が40cm，F跡が62cmとなり，火床部はそれよりも若干掘り下げられていた。遺物はB・C・E跡の覆土から出土しており，その位置からB・E跡に伴うものと理解できた。

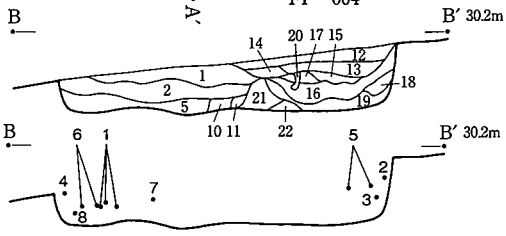
遺物はすべて表裏に条痕を施した深鉢で胎土には多量の繊維を含む。茅山上層式となろう。１は６点が接合した大形片である。口縁部から胴上半部が遺存したもので，口唇部には幅１cmの篦状工具による押し引きが一定の間隔で認められる。また胴上半部に隆起した粘土紐接合部にも同様な工具で押圧を加えている。色調は表面が暗褐色，裏面は黒褐色を呈し，焼成は良好である。２・３は，接合はしないものの施文具・胎土等から同一個体と思われる。２は口縁部片で，口唇には刻目を施し，胴部にも押引痕を付している。縦方向の押引文は３にも認められ，隆帯には軽く刻目を加えている。色調は２・３とも橙褐色であり，３の器面は若干剥落している。４は胴部破片であり，ここでも有段部に篦状工具を押引くようにして刻目を施している。色調は淡褐色で，焼成は良好である。５も有段部の大形片で，上部に複数の工具の押引に




FP－001
1．暗赤褐色土　焼土主体
2．黄褐色土　　ローム土主体

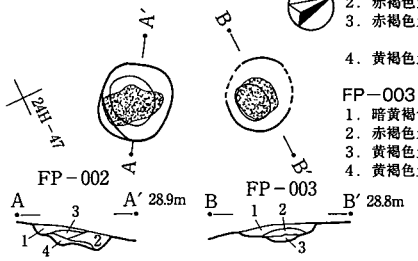


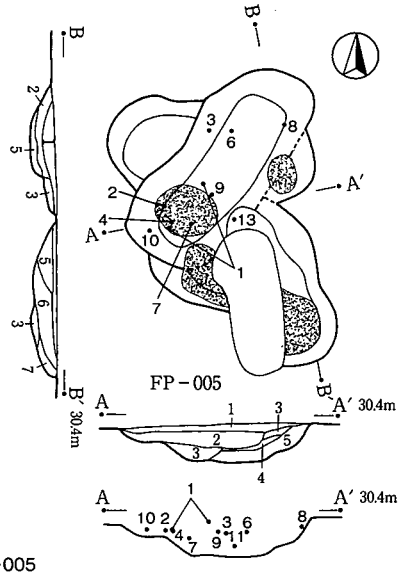



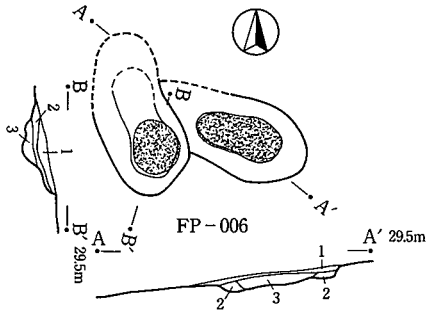

FP－002
1．暗黄褐色土　焼土粒多混、しまりなし
2．赤褐色土　　焼土、しまり強
3．赤褐色土　　褐色土、焼土粒混、しまりあり、
　　2より焼土混少
4．黄褐色土　　ローム、しまり弱

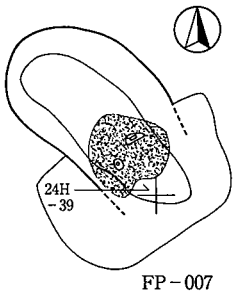
FP－003
1．暗黄褐色土　焼土粒多混、しまりなし
2．赤褐色土　　焼土、しまり強
3．黄褐色土　　ローム塊、しまりなし
4．黄褐色土　　ローム混、焼土粒少混、しまりなし




FP－004
1．暗黄褐色土　ローム土多混
2．黒褐色土　　ローム土混
3．暗褐色土　　ローム土混
4．暗黄褐色土　ローム土多混、焼土粒混
5．暗黄褐色土　ローム土多混
6．暗赤褐色土　焼土粒多混
7．暗黄褐色土　ローム土多混、焼土粒混
8．暗赤褐色土　焼土粒多混
9．暗黄褐色土　ローム土多混、焼土粒混
10．暗黄褐色土　ローム土多混、焼土粒混
11．暗赤褐色土　焼土粒多混
12．暗黄褐色土　ローム土多混
13．黒褐色土　　ローム土混、焼土粒少混
14．暗褐色土　　ローム土、焼土粒混
15．暗赤褐色土　ローム土、焼土粒多混
16．暗黄褐色土　ローム土主体、焼土粒混
17．暗黄褐色土　ローム土多混、焼土粒混
18．暗褐色土　　ローム粒混、焼土粒混、
　　ややしまりあり
19．暗黄褐色土　ローム土主体、焼土粒混、
　　ややしまりあり
20．黄褐色土　　ローム土主体、焼土粒混
21．暗褐色土　　焼土塊混、しまりあり
22．暗黄褐色土　ローム主体、焼土粒混、しまりあり

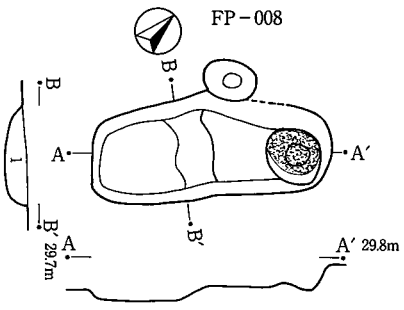


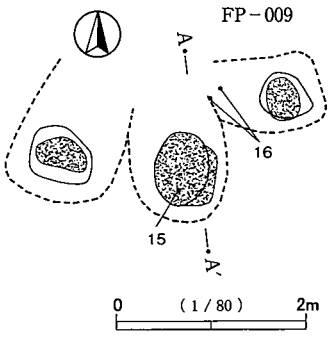




FP－005
1．暗黄褐色土　ローム土主体、ややしまりあり
2．暗褐色土　　ローム土主体、焼土粒多混、
　　ややしまりあり
3．暗黄褐色土　ローム土主体、焼土粒少混、
　　ややしまりあり
4．暗赤褐色土　焼土粒多混、ややしまりあり
5．暗黄褐色土　ローム土主体、暗褐色土混、
　　ややしまりあり
6．暗黄褐色土　ローム土主体、焼土粒混、
　　ややしまりあり
7．暗黄褐色土　ローム土主体、焼土粒多混、
　　ややしまりあり

FP－006
1．黒褐色土　　焼土粒混、しまりなし
2．暗赤褐色土　焼土粒多混、しまりなし
3．赤褐色土　　焼土主体、しまりあり



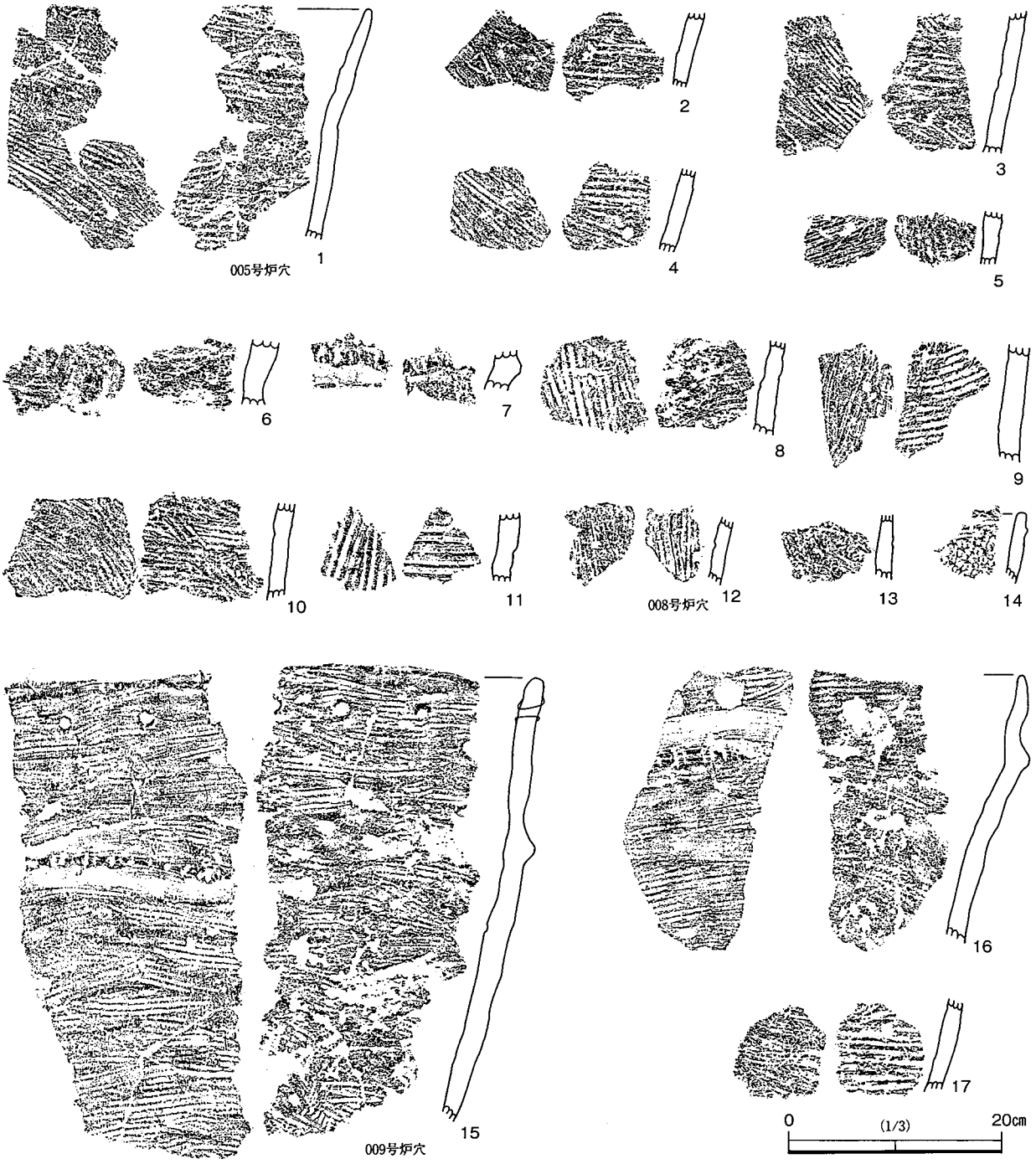



FP－008
1．褐色土　ローム粒主体、焼土ブロック・
　　焼土粒混、しまりあり

第25図　FP－001・002・003・004・005・006・007・008・009

第26図　FP－004出土土器

より文様を創出している。僅かな有段部にも刻目を施すところは前出の土器群と同様である。色調は表裏ともに暗褐色ないし褐色で，焼成は良好とはいえず，器面はザラついている。6は辛うじて口縁部まで接合した例で，表裏面は条痕文のみで覆われている。口唇部の作りは，やや丸味をもたせているものの，ここでも条痕が付されている。焼成は良好で，色調は表裏ともに淡褐色を呈する。7は胴部の大形片で，僅かに隆起した有段部に棒状工具を押し付け文様化している。器面は赤褐色で，裏面は暗褐色，焼成は良好




第27図FP－005・008・009出土土器

である。8は口縁部片が接合したもので，計7か所に焼成前の穿孔が等間隔に認められた。連続した穿孔から推測すると，おそらく全周していたものであろう。口唇は丸味を有し，緩やかに湾曲する口縁から推測すると，原形はかなり大形の深鉢であったものと思われる。色調は淡褐色で，焼成は良好である。

FP－005　本跡はFP－004の東に近接しており，25H－90グリッドから検出されたものであり，その一部は25H－80グリッドにも及ぶ。A・B跡はSK－164によって破壊されてはいるが，火床は4か所に確認できた。重複関係は確実なものとは言い難いが，火床の遺存等からB→C→D→Aの順に構築されていったものと考えられる。掘込みの深さは，遺存状態の良好なD跡で約20cmとなり，全体としては浅い。遺物は主

にA跡から出土しており，11点を図示することができた。

遺物は１を除き，すべて小破片である。１～５は，施文・胎土・色調から同一個体と思われる。１は数点が接合し，口縁部まで確認できた。器厚は５㎜～６㎜と薄く，口唇部付近では一層顕著となる。条痕のみの施文で，色調は褐色，焼成は良好である。６・７も同一個体で，太い隆帯が特徴といえよう。器厚は厚く頑強な作りである。７の隆帯上には篦状工具を押し付けた痕跡がみられる。色調は表面が赤褐色で，裏面は褐色となる。９・10の条痕は表面では浅く，８・11は明確な条痕が施文されている。

FP－006　本跡は24H－48・49グリッドにおいて検出されたものである。２基が重複し，B跡→A跡の順となる。確認面からの掘込みは浅く，ともに足場部分のプランは明確に把握することはできなかった。火床部についてみると，B跡では顕著な痕跡は認められなかったが，A跡には浅いながらも掘込みがあり，しっかりした痕跡を残していた。遺物は，掘込みも浅く皆無であった。

FP－007　24H－39グリッドで検出されたものの，SK－180・181によって破壊されており焼土の存在により本跡が確認できたというものであった。足場の部分も辛うじて認識できる程度であり，平面図のみの作図で終了した。ここでも遺物は皆無であった。

FP－008　本跡は24H－78グリッドの西よりに検出され，単独ということもあり遺存状態は良好といえた。規模は長軸で2.5m，幅は最大で1.1mとなる。火床部には掘込みが認められ，火床はよく焼けていた。また，足場部分には段差がみられ，10cm程低くなっていた。

遺物の出土量は少なく，図示した３点のみであった。12は表裏の条痕は浅く，器厚も５㎜～６㎜と薄い。色調は褐色で，焼成は良好である。13・14は表面に縄文が認められ，本跡に伴うものではない。参考までに図示したが，胎土には繊維を含む。

FP－009　24H－48グリッドで検出されたものの周囲は大きく撹乱を受けており，全体プランを把握するには至らなかった。火床部の存在により３基以上が存在していたものと思われた。ただB跡の覆土内から図示したような大形片が出土しており，このことからB跡が最後に構築された炉穴となろう。

遺物は３点のみの図示であるが，大形片と同一個体と思われる小破片が他に若干出土している。15は数点に破損してはいるが，B跡の火床直上から一括して出土したものである。大形片にかかわらず，湾曲の度合いが少ないため，かなり大形で平縁の深鉢であったものと思われる。口唇部は比較的平坦であり，その直下には３か所で焼成前穿孔が認められた。穿孔は等間隔であるため全周する可能性が強い。胴部に巡る１条の隆帯上には篦状工具による押圧が施される。器面は褐色ないし暗褐色を呈し，裏面には剥落が若干認められるものの焼成は良好といえる。16はA･B跡のほぼ中間地点から一括して出土したものであり，B跡に伴うものと思われた。器形は，その形状から緩やかな波状を呈するものとなろう。口唇部直下には指頭によるものであろうか，1.5cm程の窪みがみられる。また，その下には条痕による帯状の整形痕を残す。色調は暗褐色ないし黒褐色であり，裏面では剥落が目立つものの，焼成は良好といえよう。17は胴部片で，条痕は裏面で明確である。色調は赤褐色を呈しており，焼成も良好である。

## ２　陥穴（第28～30図，図版16～18）

本遺跡では，陥穴とされる遺構が計18か所で検出されている。いずれも遺物の出土は認められないが，縄文時代に属するものと思われるため，ここで一括して記載しておきたい。これら陥穴は，その形態により３タイプに分類できる。

1－長軸が長く４ｍ前後となり，幅は最大でも１ｍ程度のもの（SK－033・034・271・283～285・288～291・302・303)。このタイプは24I区で集中的に検出されており，獣類を捕獲する陥穴とすれば当該地が狩猟場となっていたものと考えられよう。

2－開口部が楕円形や隅丸形で深い掘込みの認められるもの（SK－114・274・321)。SK－114は22M－17グリッド，SK－274は23M－24グリッド，SK－321は23M－90グリッドから検出され，調査地点の南に偏っている。

3－ほぼ長方形を呈し，底面にピットを設けるもの（SK－320）となる。このタイプは１基のみで24N－22グリッドで検出されており，SK－321の位置と近い。

3　土坑（第31図，図版18～19）

縄文時代に属すると思われる土坑が５基検出できた。これらはSK－001のように，その出土遺物から早期の項で扱うことが適切ではない土坑も存在するが，量的に少ないため便宜的にここで扱うこととした。

SK－001　本跡は唯一遺物を出土した土坑で，23K－74グリッドで検出されている。この周辺では前期の土器群が多量に出土しており，次いで後期の土器群も認められる。本跡の形状は撹乱のため不整の楕円形を呈しており，東西の径は1.5ｍと比較的大きなものであった。しかし確認面からの掘込みは浅く，約20㎝で，その北側覆土中から上半部の欠損した深鉢が出土している。

出土土器（第31図１）は深鉢で小形品といえよう。器面は褐色で篦状工具できれいに整形されており，文様は認められない。裏面は黒色で粗い整形となり，底面のみ淡い褐色を呈する。底面中央は瘤状を呈しており，特徴的な作りといえよう。胎土には砂粒と若干の白色鉱物を含む。無文のため型式を断定するには至らないが，底部の作りから前期後半に位置付けられるものと考えられる。

SK－038　本跡は25K－58グリッドから検出された小土坑で長径１ｍ，短径0.7ｍとなる。中央部では掘込みが認められ，約30㎝の深さを有していた。出土遺物は皆無であった。

SK－104　本跡は22K－88グリッドから検出されたもので，規模は小さい。長径1.3m，短径1.1ｍとなる。確認面からの掘込みは23㎝となり，北側壁面に沿って小規模な貝ブロックが認められた。主体はイボキサゴで，他に若干のオオノガイが認められたが，ここでも土器等の遺物は皆無であった。

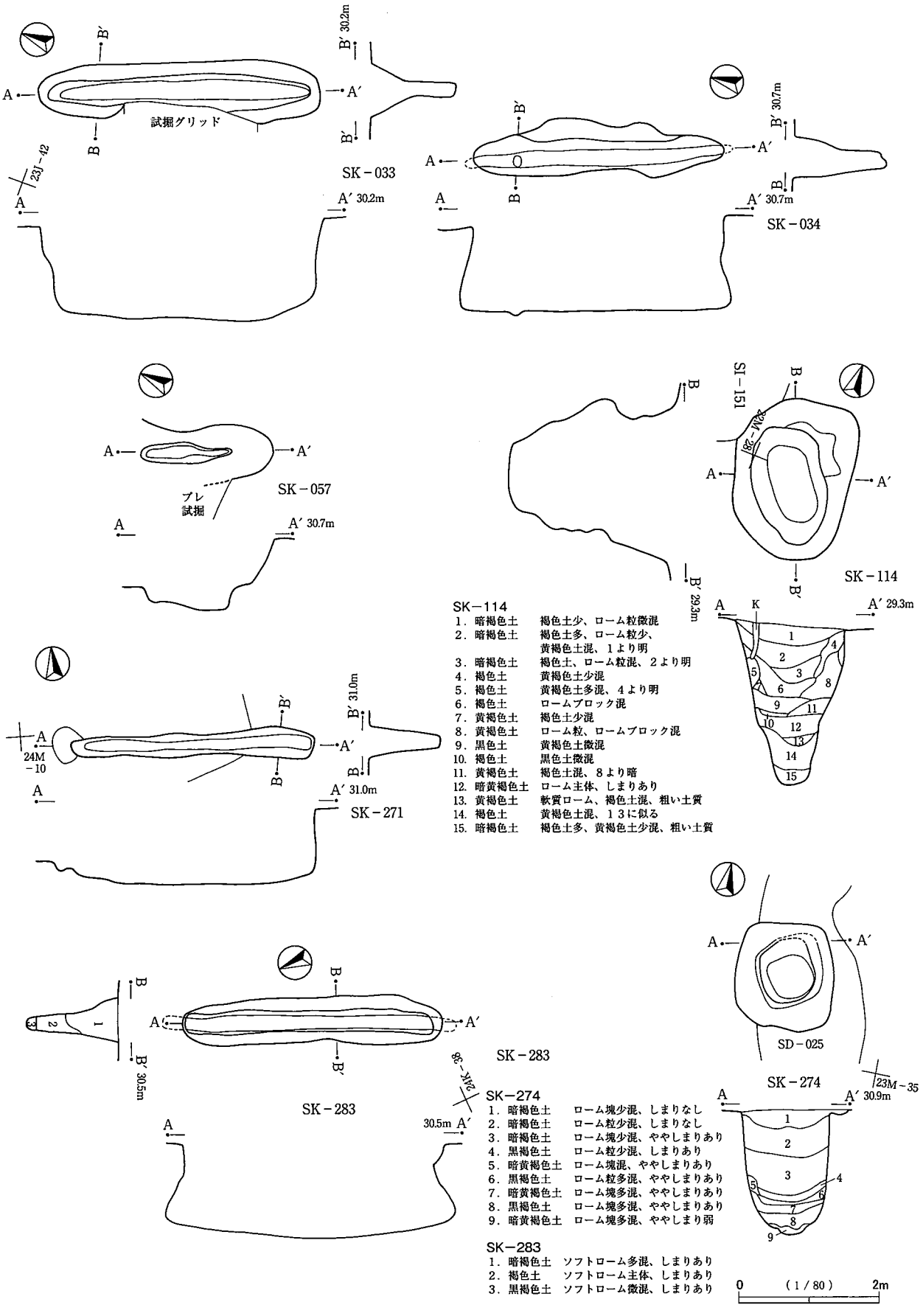
SK－233　本跡は25H－90グリッドから検出され，FP－005に隣接した位置にある。形状は楕円形で，重複しているものか，有段構築であるのか明確にはできなかった。長径は2.6m，短径1.8ｍを計測し，土坑としては大きいものといえる。掘込みは約60㎝の深さを有しており，出土遺物は皆無であった。

SK－254　本跡は調査区南部の23M・24M区にかけて位置している。形状は不整の楕円形で長径2.3m，短径1.2ｍを計測する。確認面からの掘込みは約50㎝と深いが，出土遺物は皆無であった。

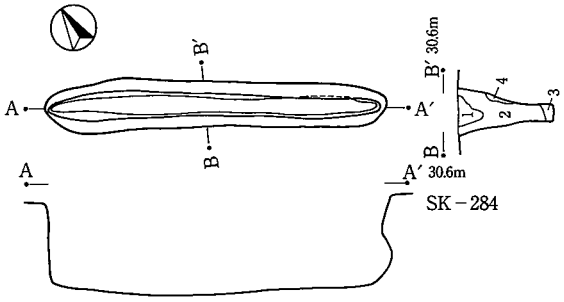
## 第３節　前期の遺構・遺物

1　竪穴住居跡（第32～34図・第36図１～６，図版15）第36図はグリッド出土土器（２）

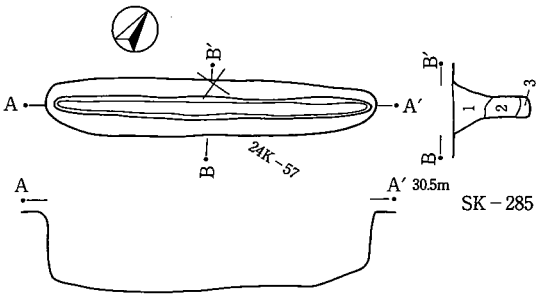
本遺跡で確実に集落跡が確認できたのはこの時期であり，22K・23K区にかけて４軒の住居跡が近接した形で検出されている。住居跡に伴う土器群は浮島系土器が主体を占めており，前期後半の集落跡と位置付けられる。さらに22K・23K区内の各グリッドでも多量の浮島系土器群が出土しており，周辺域での活発な活動を裏付けている。出土土器の中には，細い粘土紐を器面に貼付する浮線文などを特徴とする諸磯B



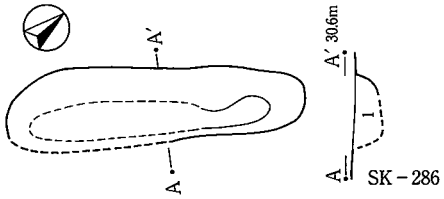

第28図　SK－033・034・057・114・271・274・283



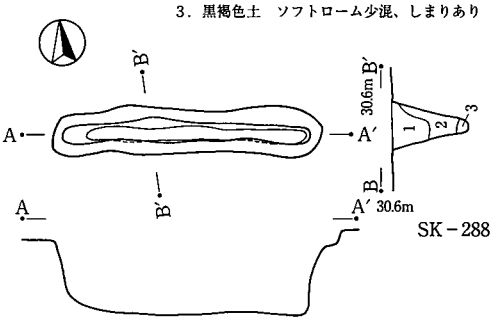

SK－284
1．黒褐色土　ソフトローム少混、しまりあり
2．褐色土　　ソフトローム粒主体、しまりあり
3．黒褐色土　ソフトローム少混、1より黒い
4．ハードローム



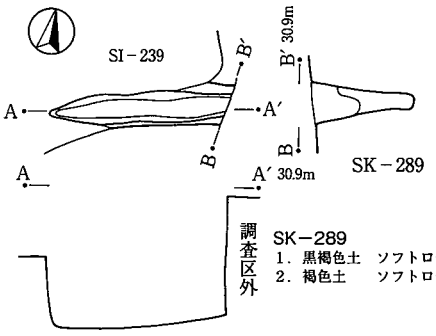

SK－285
1．暗褐色土　ソフトローム、ハードローム塊少混、しまりあり
2．褐色土　　ソフトローム粒多混、しまりあり
3．黒褐色土　ソフトローム少混、しまりあり



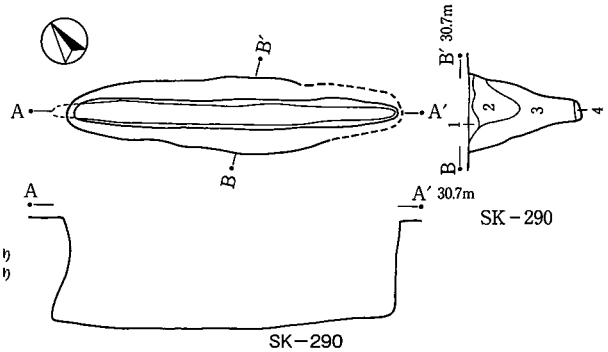

SK－286
1．黒褐色土　ソフトローム多混、しまりあり



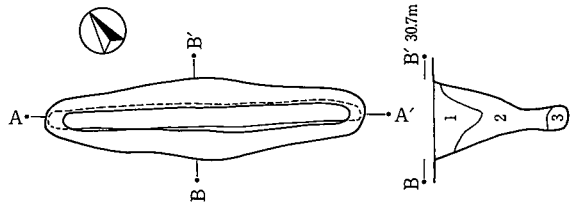

SK－288
1．黒褐色土　ソフトローム少混、しまりあり
2．暗褐色土　ソフトローム、新期テフラ主体、しまりあり
3．黒褐色土　ソフトローム少混、しまりあり



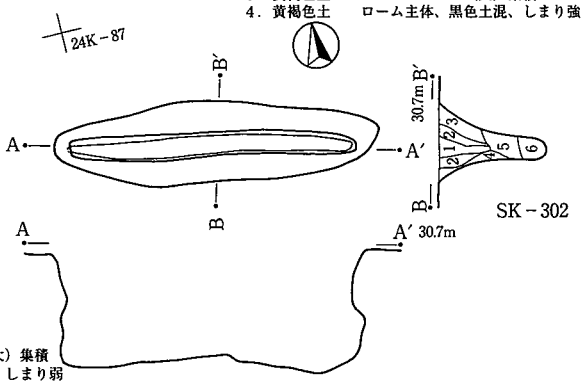

SK－289
1．黒褐色土　ソフトローム少混、しまりあり
2．褐色土　　ソフトローム主体、しまりあり




SK－290
1．黄暗褐色土　黒褐色土、ローム混
2．暗黄褐色土　ローム主体
3．黄褐色土　　ロームブロック（大）集積
4．黄褐色土　　ローム主体、黒色土混、しまり強



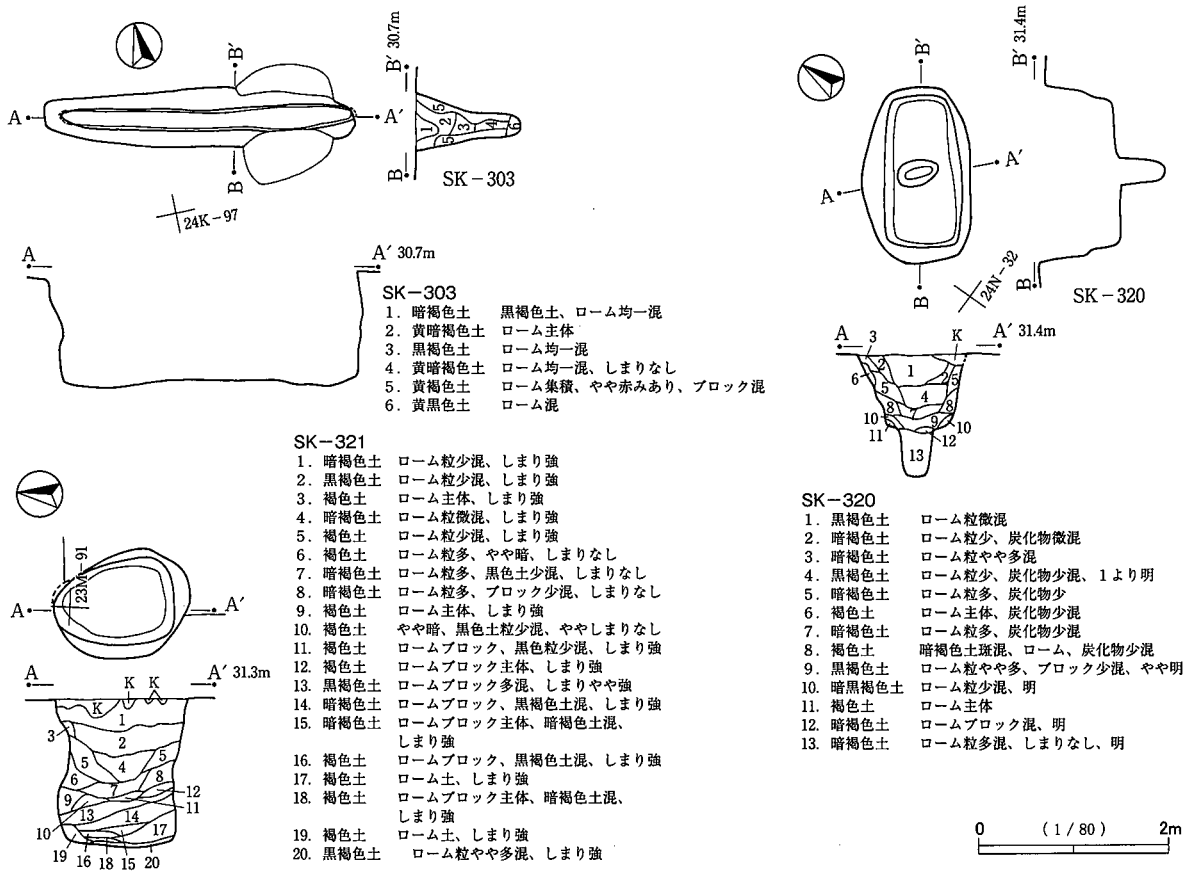

SK－291
1．暗黄褐色土　ローム混
2．黄褐色土　　ロームブロック（大）集積
3．黄黒褐色土　ローム、黒色土混、しまり弱




SK－302
1．暗褐色土　　黒褐色土、ローム均一混
2．黄暗褐色土　ローム主体
3．暗黄褐色土　ロームブロック混
4．黄褐色土　　ローム集積、やや赤みあり、ブロック混
5．暗黄褐色土　ローム土主体、しまり弱
6．黄黒色土　　ローム混

0　（1／80）　2m

第29図　SK－284・285・286・288・289・290・291・302

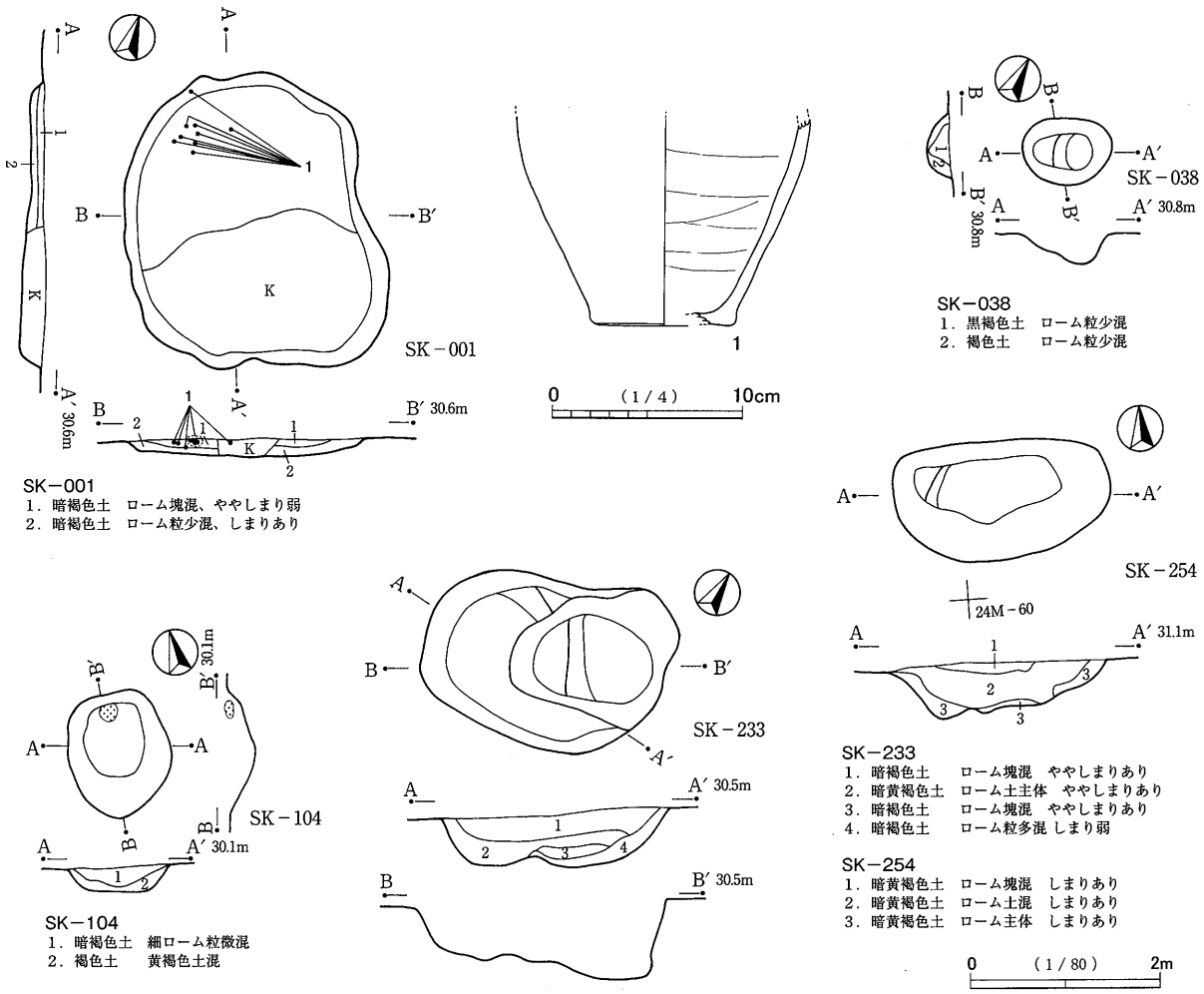



第30図　SK－303・320・321

式土器も含まれていたが，その比率は少なく1割程度にも満たないものであった。そのため，これらの住居跡群は浮島式土器の文化圏の中で捉えることができよう。

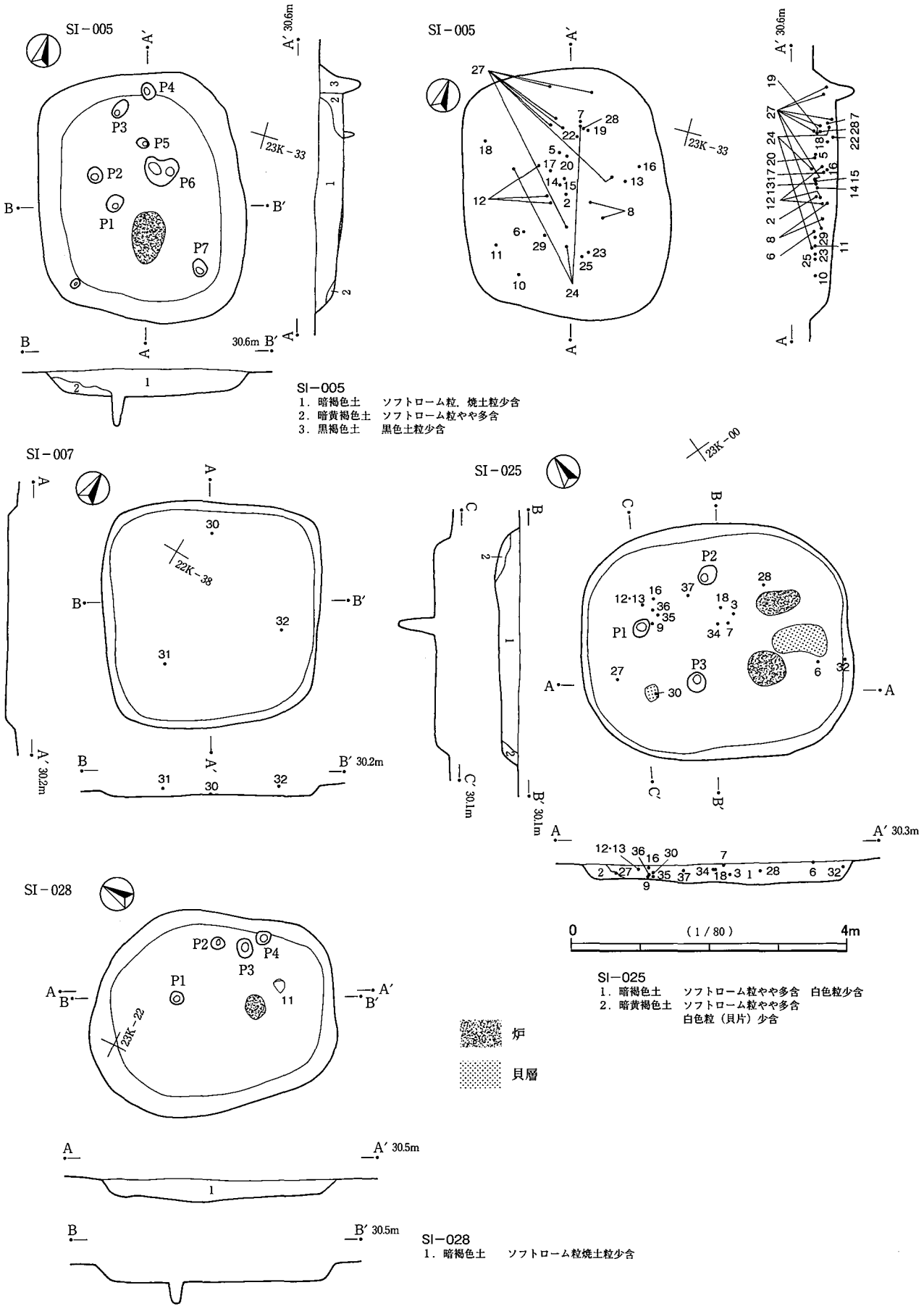
SI－005　本跡は23K－32グリッドで検出され，北に隣接するグリッドにSI－028が存在する。平面形は隅円方形ないしは小判形を呈したもので，炉跡の位置から主軸方向はS－16°－E（N－16°－W）となり，長径で3.7m，短径で3.0mを計測する。壁面は，上面が崩落したものか緩やかな傾斜をもって立ち上がる。床面はソフトローム層中にあり，踏み固められたような痕跡は認められなかった。炉跡は，やや南より中央に位置しており数cmの焼土が堆積していた。遺構内にはピットが7か所で検出されており，それらの深さは11.2cm～52.7cmを計測（P1－52.7cm，P2－11.2cm，P3－40.3cm，P4－28.3cm，P5－16.5cm，P6A－26.0cm・B－37.1cm，P7－27.1cm）した。その深さからP1・P3・P6は柱穴となろう。ただP4については，植物根によるものであった。堆積土についてみると，壁ぎわではソフトローム層の流れ込みが認められ，中央部では若干焼土粒を混入した暗褐色土の堆積層で覆われていた。遺物は前期後半の浮島式土器が主体となり，大形片の出土もみられたが，実測可能な土器は存在していなかった。土器は住居内のほぼ中央部から多く出土している。

出土遺物は土器のみであり，量的には豊富で施文具の相違により様々な文様を描出している。1～4は胎土に繊維を含むものであり，黒浜式に属するものである。1は撚糸文の一種で，原体を一定の間隔に巻いたものであり，利根川下流域ではしばしばみられる施文法である。原体の撚りは器面の乾燥が十分でなかったためか明確ではない。4は口縁部片で粗いRLの縄文を施文している。器面の色調は褐色ないし赤褐色である。5・6も撚糸文を施文した胴部片で，原体はRで細く撚られている。器面の色調は淡褐色を

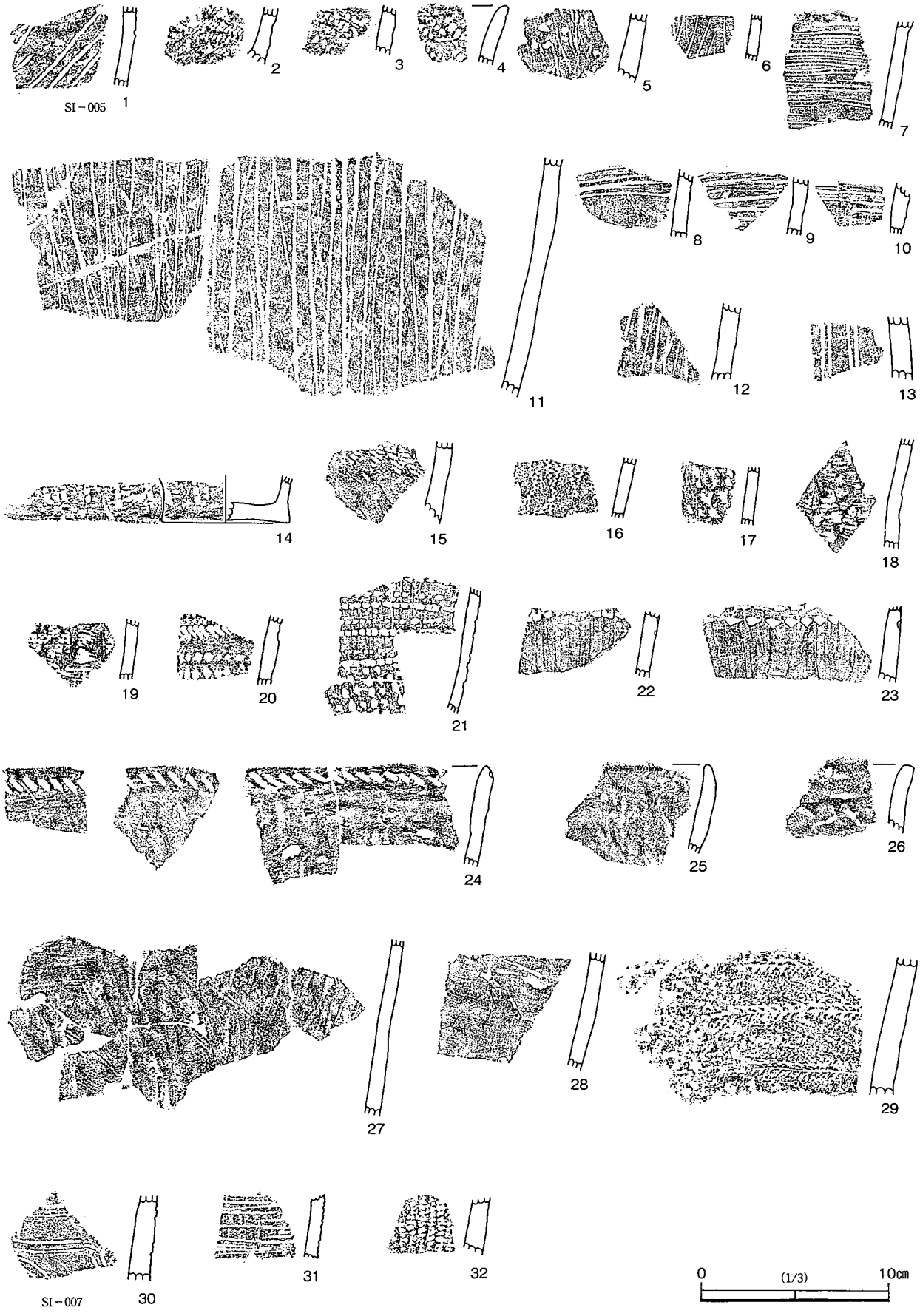



第31図　SK－001・038・104・233・254

呈する。胎土に繊維の混入は認められず，６の器厚は５㎜と薄く，焼成は良好である。７～13は半截竹管状の工具を縦・横方向に用いて施文したもので，いずれも胴部破片である。11の大形片は接合はしないが同一個体であり，大形の深鉢となろう。遺存部での径は推定約30cmとなる。住居の南西コーナーよりから出土している。器面の色調は内外面とも淡褐色ないし淡黒褐色である。器厚は1cm前後で頑強な作りとなっている。14・15は半截竹管状の工具を縦・斜め方向に連続して押捺しており，14での施文は底部にも及ぶ。16～19は貝殻腹縁を上下に斜行させて波状文を作出しており，16では腹縁が整然と押捺されている。器面の色調は19は赤褐色で，他は黒褐色となる。20は棒あるいは篦状工具を横位に連続して押し付け文様を描出する。色調は内外面とも褐色ないし暗褐色で，少量の雲母と白色鉱物・砂粒を多く含む。焼成は良好である。21～23は篦状工具により，いわゆる三角文が横方向に連続して施されているものである。21は３点が接合した小形の深鉢で，刺突による文様が器面全体に縦・横走する。色調は暗赤褐色を呈する。22・23は上部に三角文が施され，無文部の縦方向に篦状工具で丁寧に調整されている。いずれも胎土は精選されており同一個体の可能性も否定できない。色調は暗褐色で焼成は良好である。24～28の胴部は無文であり，篦などの工具で粗く整形されただけである。24は同一個体の口縁部片で，２点が接合した。緩やかな波状を呈するようで，推定口径は約24cmとなる。口縁最上部を斜め方向に施す刺突文が特徴的である。器内外面は粗く整形され，凹凸もそのまま残されている。25も小さな波状を形成するものと思われる。口縁の内




第32図　SI－005・007・025・028




第33図　SI－005・007出土土器

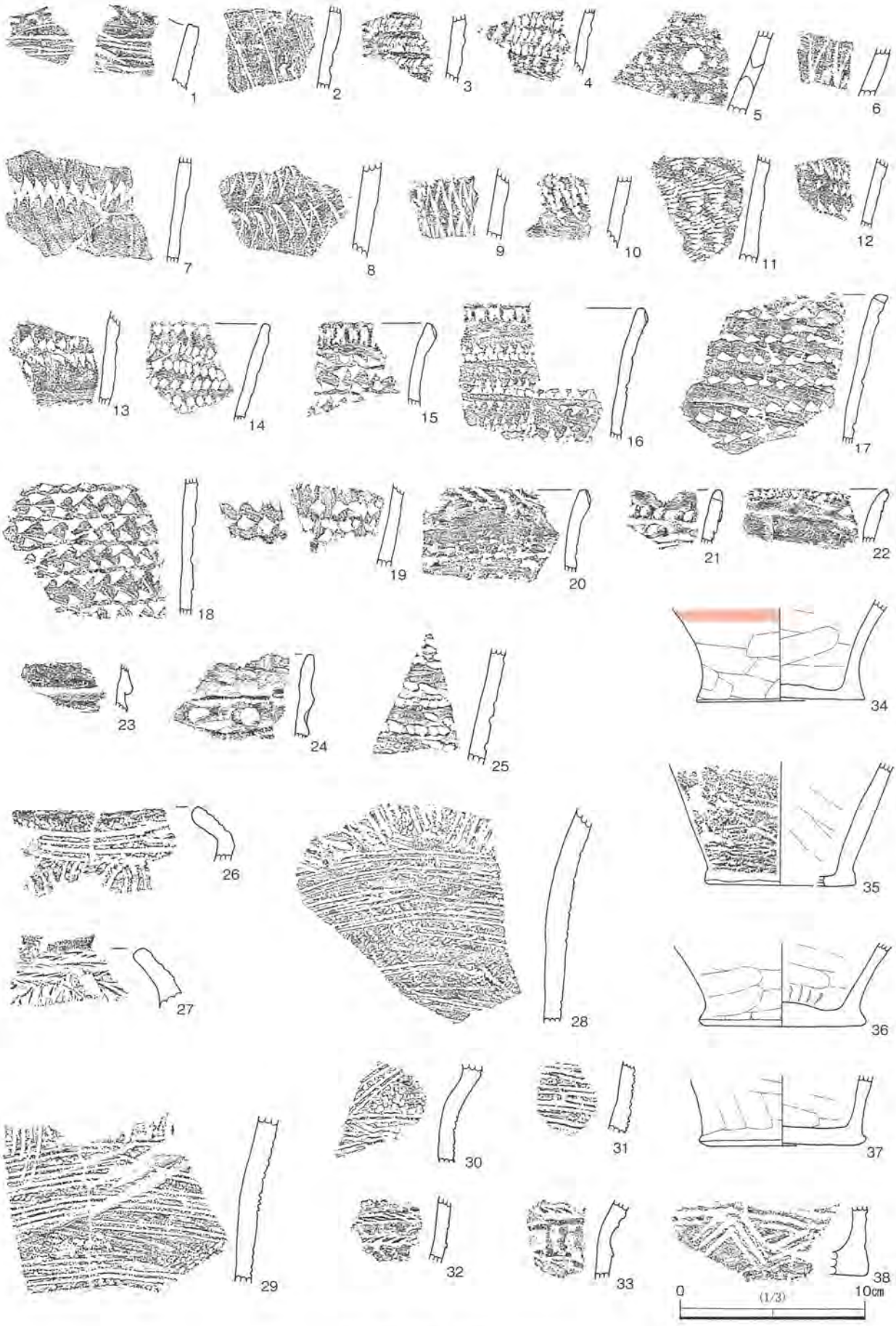
湾から器形は浅鉢か胴部にくびれを有するタイプと考えられる。26も器厚は８㎜と厚く頑強な作りであるが，器面の整形は稚拙なのもである。27の器面も同様に粗い。しかし28は内外面とも丁寧な作りで，表面は篦状工具による調整痕が認められる。ここでは無文の類として取り扱ったが，胎土・色調から23と同一個体とも考えられた。29は明らかに諸磯ｂ式と見做される大形の胴部片である。文様はRLの縄文を地文とし，横走する半截竹管文の上から連続的に爪形文を付している。胎土には小石を多く含むところが，浮島系土器群と異なる点といえる。色調は表面が赤褐色で，裏面は黒褐色を呈する。焼成があまく，器面の剥落が著しい。

SI－007　本跡は22K－38グリッドを中心に，その一部は22K－27・28・37グリッドにかけて検出されたものである。平面形は，ほぼ隅円方形を呈しており，南北方向にやや長い。炉跡は検出できなかったが主軸方向はS－31°－E（N－31°－W）となり，長径で3.3m，短径で3.2mを計測する。壁面は明確ではなく傾斜が著しく，床面はソフトローム層中に設けられていた。検出面からの掘込みは浅く，覆土の厚さも約８㎝と薄い。炉跡やピットも検出できず，遺物の出土量は僅少で図示した他には砕片が数点みられただけである。

出土遺物で図示できたものは３点と少ない。30は，器厚は厚いが，内外面は丁寧に仕上げられている。文様は上部に半截竹管文による連続した爪形文がみられるが，以下は任意に施された半截竹管文が器面を覆う。胎土には少量の小石と白色の鉱物を含み，焼成は良好である。31は，前出の７～10にみられるような半截竹管を横走させることにより文様を描出している。32の表面には縄文が認められる。縄文原体は太く，撚りが密なため中期の所産と思われる。

SI－025　本跡は22K－09グリッドで検出されたもので，最も北に位置し，掘込みもしっかりしたものであった。平面形は隅円方形ないしは小判形を呈したもので，主軸方向はS－58°－Eとなる。住居の大きさも長径で4.0m，短径で3.45mを計測し最大となる。確認面からの掘込みは20㎝～30㎝を測り，壁面は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。床面はソフトローム層下部にあり明瞭であった。炉跡は，中央東よりに２か所で認めら，いずれも数㎝の焼土が堆積していた。遺構内にはピットが３か所で検出されており，その深さは，P1－56.3㎝，P2－16.4㎝，P3－27.4㎝で，P1は主柱穴となっていたものと思われる。堆積土についてみると，壁ぎわの一部ではソフトローム層の流れ込みが認められたが，その大半はローム土を含む暗褐色土で覆われていた。遺物の出土量は豊富であったが，復元可能な土器は見出せなかった。これらはP1･P2間で多く出土している。なお，本跡では数か所に貝ブロックの堆積が認められ，マガキを主体とし，ウミニナ・オキシジミ・アサリなどの貝種が検出されている（付章第１節貝サンプル分析の項を参照）。

本跡は，出土遺物という点でも最多であった。主体を占める土器は，やはり浮島系となるが，総体的にみてSI－005よりも諸磯ｂ式の出土割合は多くなる。１・２は半截竹管あるいは篦状工具により，平・斜行の沈線により文様を描いている。１は小片ながら斜傾した口縁から大きく波状をなす口縁部を想定できる。口唇には篦状工具による刺突が認められる。２は縦方向の細い沈線の他に，上部に横走する沈線も僅かに認められる。いずれも内外面は褐色を呈し，焼成は良好といえる。３～５は半截竹管を爪形状に連続して押捺していくものである。３の施文は左から右方向に施している。器面は褐色で，裏面は黒褐色となる。４の器厚は４㎜と薄く，器面は淡褐色，裏面は黒褐色である。いずれも焼成は良好といえる。５は焼成後の穿孔が裏面に向かってなされる。器面の文様は浅く，施文後に軽くなでているため全体にはっきりしない。４と同様な色調である。６～12は貝殻腹縁による連続波状文のみられるものを一括した。二枚貝




第34図　SI－025出土土器

の腹縁により施文したもので,10・11はハイガイなど殻の表面に条溝を有する腹縁を用いている。なお12の上部には貝殻腹縁的な文様もみられる。器面は6・12が暗褐色，7～10が赤褐色,11が黒褐色となり，いずれも焼成は良好である。13～20は三角文か，それに近い文様を有するもので,15・16・20は口縁部で，口縁上端に付された半截竹管の押圧や逆「く」の字となる口縁部の作りは，この時期の特徴をよく表現している。器面の色調は18が橙褐色で，他は褐色ないし暗褐色となる。21～24は輪積痕の認められるもので，21・24では半円状の工具による刺突が横方向に連続的にみられる。22の口唇部には細かな半截竹管による押捺が連続して巡るようである。色調は22・24が橙褐色，他は褐色ないし暗褐色である。25は，拓影では太い縄文のごとくみえるが，棒状工具を刺突や押引きすることにより文様を描出したもので，文様的には21や24と近似するものといえよう。色調は淡い褐色で，裏面では横方向に調整痕が認められる。胎土は精選され，焼成も良好で堅致なものである。26～33は諸磯b式土器であり,26・27の大きく内湾した口縁部や27・32・33にみられる細い粘土紐を貼付した浮線文は，この時期特有のものである。28・29は大形片で，粗い縄文を地文としており，胎土に小石を含む点が類似しているため同一個体の可能性もある。色調はともに褐色である。30～33も胎土に小石を含んでおり一群の土器と見做される。ただ，焼成については堅致なものが多い。34～38は底部である。34・35は諸磯b式となる。34は上端の一部に赤彩が認められる。おそらく器形は浅鉢形となろう。基底部からの立ち上がりが特徴的である。褐色を呈し，胎土は精選され焼成も良好である。35は胎土に白色鉱物や小石を多く含む。器面は赤褐色で，内面は黒褐色となる。焼成はよくない。36・37の基底部の作りも特徴的なものである。36の内面中央部は厚い。文様がないため即断はできないが,37は胎土や器面の整形から浮島式と考えられる。38の胎土には繊維が混入されており，黒浜式となろう。底部付近にまで半截竹管による文様が施されている。色調は表面が赤褐色，裏面は黒褐色で，器面では剥落が目立つ。

SI－028　本跡は23K－22グリッド中心に，その一部はK22－11・12・21グリッドにも及ぶ。平面形は，不整ながらも楕円形に近い。主軸方向はS－25°－Eとなり，長径で3.6m，短径で3.0mを計測する。壁面付近ではローム土の混入が認められ，壁面の傾斜が著しい。炉跡は中央東南より設置されており，その径約30cmで，若干掘り込まれた中に焼土の堆積が認められた。床面はソフトローム層中に設けられており，確認面から約30cm掘り込まれていた。遺構内にはピットが4か所で検出されており，その深さは，P1－30.7cm，P2－6.8cm，P3－11.9cm，P4－12.3cmで，P1が主柱穴となっていたものと思われる。覆土の厚さは20cm～30cmでローム土と僅かな焼土粒を含む暗褐色土により構成されていた。

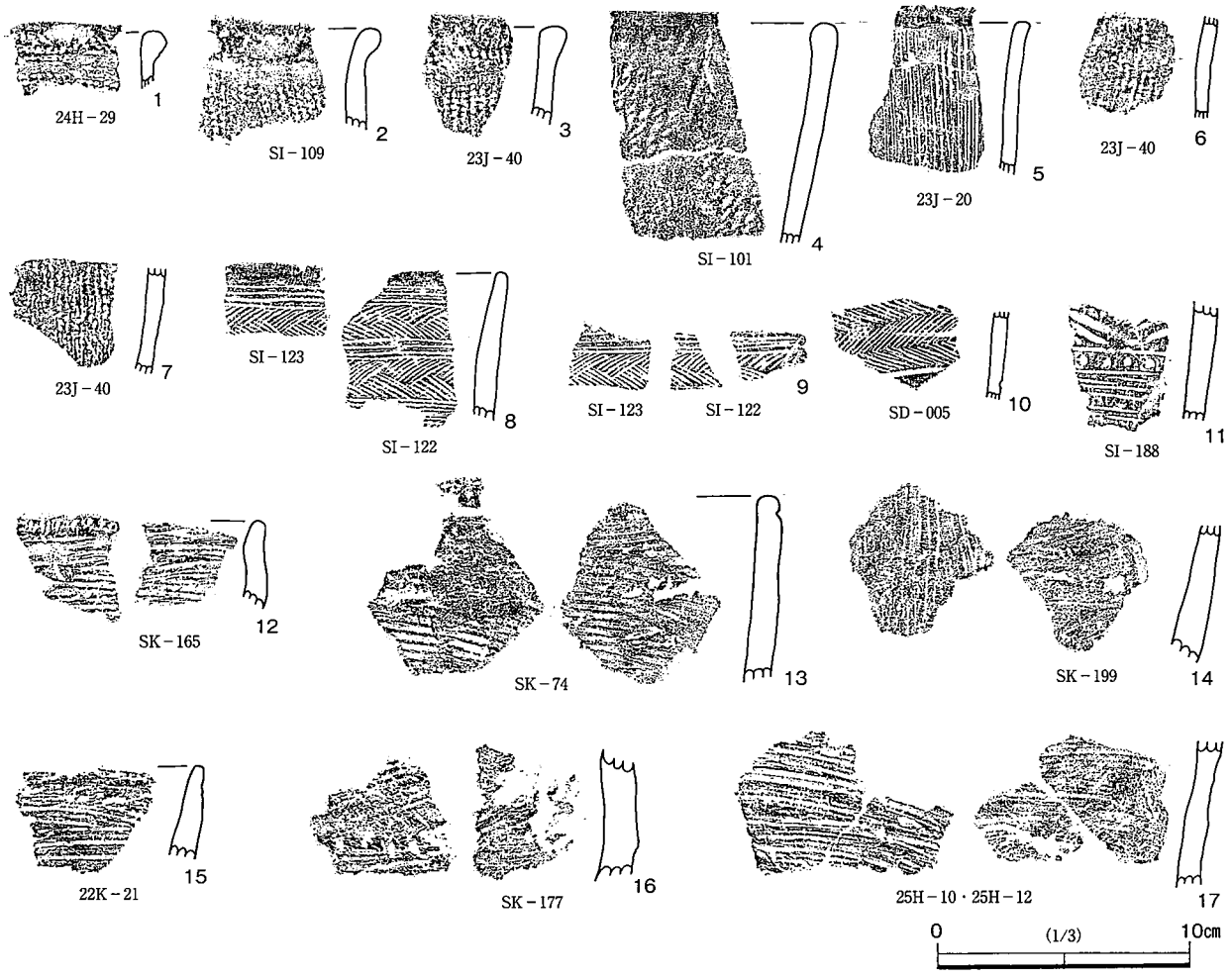
本跡での出土遺物は少量で，挿図作成の都合上,グリッド出土土器（2）に掲載した（第36図1～6）。時期的には前期前半の黒浜式に属するものもみられた。1・2は胎土に繊維を含む。1は波状口縁の一部で，器面は箆状工具で簡単な整形が施されるのみで，文様らしきものは認められない。2は浅い沈線による肋骨文が描出されている。3～6は後半の土器群で，胎土に繊維の混入は認められない。いずれも浮島系に属するものとなろう。3・4は胴部の小片で，半截竹管による沈線で文様を構成する。胎土には砂粒や微細な白色鉱物の混入が著しく，同一個体の可能性が高い。ただ，器面の色調は3が褐色で，4は黒褐色となる。裏面はともに赤褐色に近い。5の文様は認められない。おそらく底部周辺となろう。6は口縁部で，その上端には半截竹管による押捺が巡る。

## 第４節　グリッド出土の遺物

１　土器（第35～56図，図版121～140）

早期（第35図）　１～７は撚糸文系土器で，23J区を中心に出土したものである。１は肥厚した口縁部が特徴的でRLの縄文を口唇部にまで施文している。口縁直下には異なる原体により，横方向に文様帯を形成しており，井草Ⅰ式となろう。２・３も口縁部の肥厚は認められるが，前者よりも顕著ではない。施文にはLRの縄文を口縁の上端から縦走させている。４の縄文は，浅く疎らに施されており，口縁の内側がやや肥厚する。５は平坦な口唇部を呈し，口縁端部が外反する。文様は半截竹管状の工具で器面全体に施文しているものと思われる希有な例である。撚糸文を意識したものともいえよう。５・６は縄文を施文した胴部片で，縄文原体はいずれもRLである。

８～11は沈線文系の土器群である。８・９は25H区の弥生期の住居跡内から出土しており，器厚や施文・胎土から同一個体と考えられた。文様は細い沈線で鋸歯文を描き，その間を４本一組の沈線で区画する。10は溝状遺構（SD－005）から出土したものであり，前者同様に細い沈線で主文様を構成する。横走する沈線は単独で前者よりもやや太い。これらは施文具・文様構成から沈線文系の土器群でも古式の様相を示すものといえよう。11は25I区の奈良・平安期の住居跡から出土，胴部片で斜行する沈線と細い沈線により文様が構成され，その間に刺突文を施す。田戸下層式にみられる文様である。




第35図　グリッド出土土器（1）

12～17は炉穴群の周辺から出土しており，炉穴群と同時期の所産となろう。内外面に条痕文が認められる。12の口唇部では篦状工具による押捺が施され，16では僅かな隆帯上を棒状工具により押捺する。

**前期（第36～38図）**　第36図の土器群は胎土に繊維が混入されている土器群で，前半期に属する一群の土器である。出土地点は22K・23K区に多く，25H・23J区でも若干出土している。

７～９は，使用している原体から関山式に比定できよう。７は２点が接合した口縁部で，撚りを密にした原体（R－L－ｒｒｒ）を異方向に回転させることにより，羽状縄文の効果を作り出している。８・９は節の異なる原体（R－L・R－RR・LL）を使用し，撚りを戻すことにより，独特な縄文を表現している。

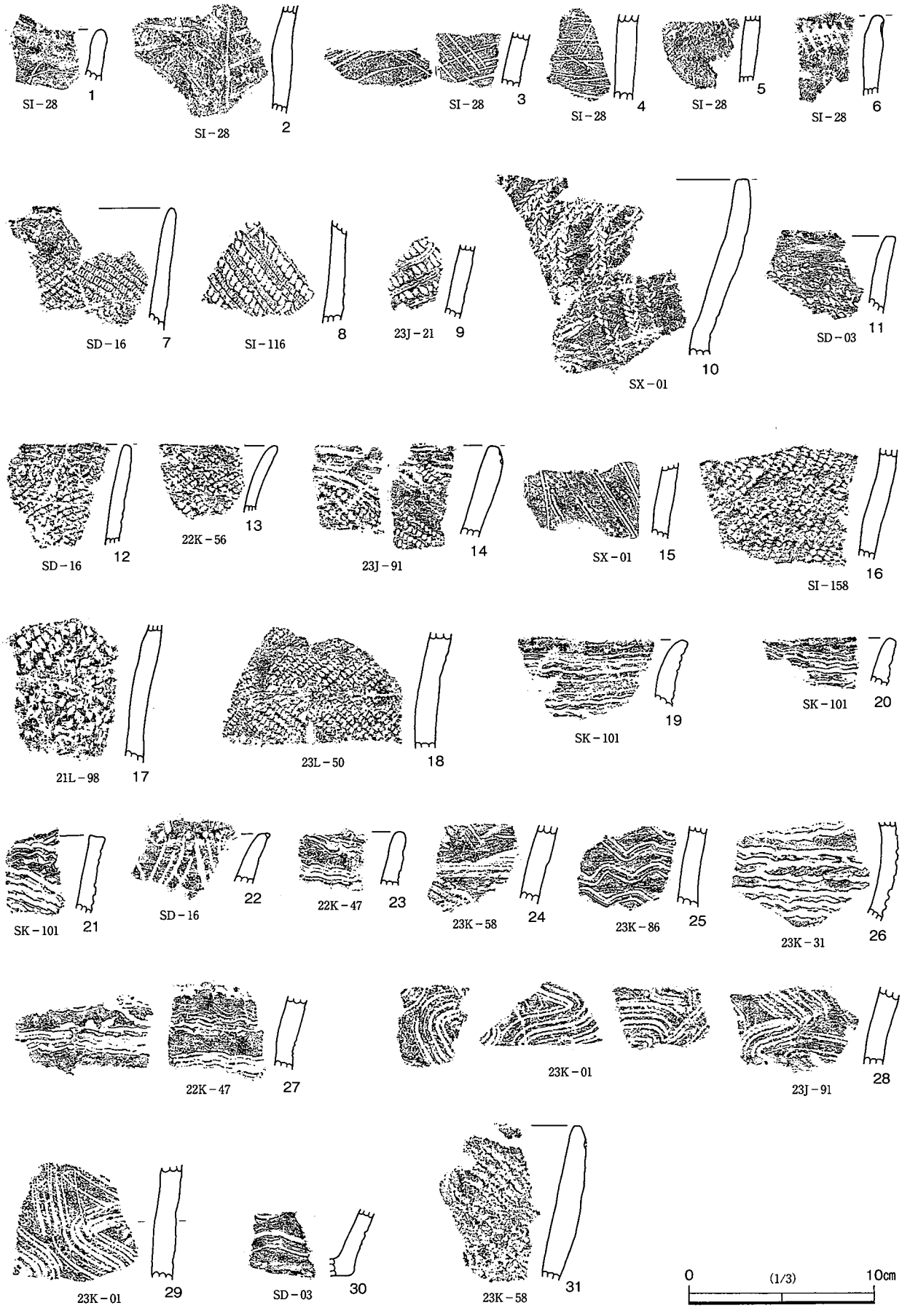
10～18は縄文を主体とした文様構成で，様々な原体を用いている。形式的には黒浜式でも比較的古式なものといえよう。10は口縁部片であり，撚りの異なる原体を束ねて押捺したもので，口縁部は緩やかに外反する。12は口縁直下にループ文らしき陰影と撚りを密にした縄文をみることができる。前段階の所産とも考えられる。14・15は半截竹管文を加えたもので，15の縄文は，浅い施文で粗雑なものとなっている。17は粗い撚りの原体LRを異方向に回転させている。18は原体の回転方向を変えることにより羽状縄文の効果を表現している。

一方，19～30は半截竹管や櫛歯状工具により多様な文様を描出しているもので，28・29には接点は認められないが，同一個体であり縦方向に流水状の文様がみられる。30は，28・29の底部と考えられる。31は僅かに口縁の一部が遺存しており，貝殻腹縁を斜行させて器面を飾る。このタイプの土器は僅少ではあるが，しばしばみられる土器である。器厚は厚い部分で14㎜を計測する。

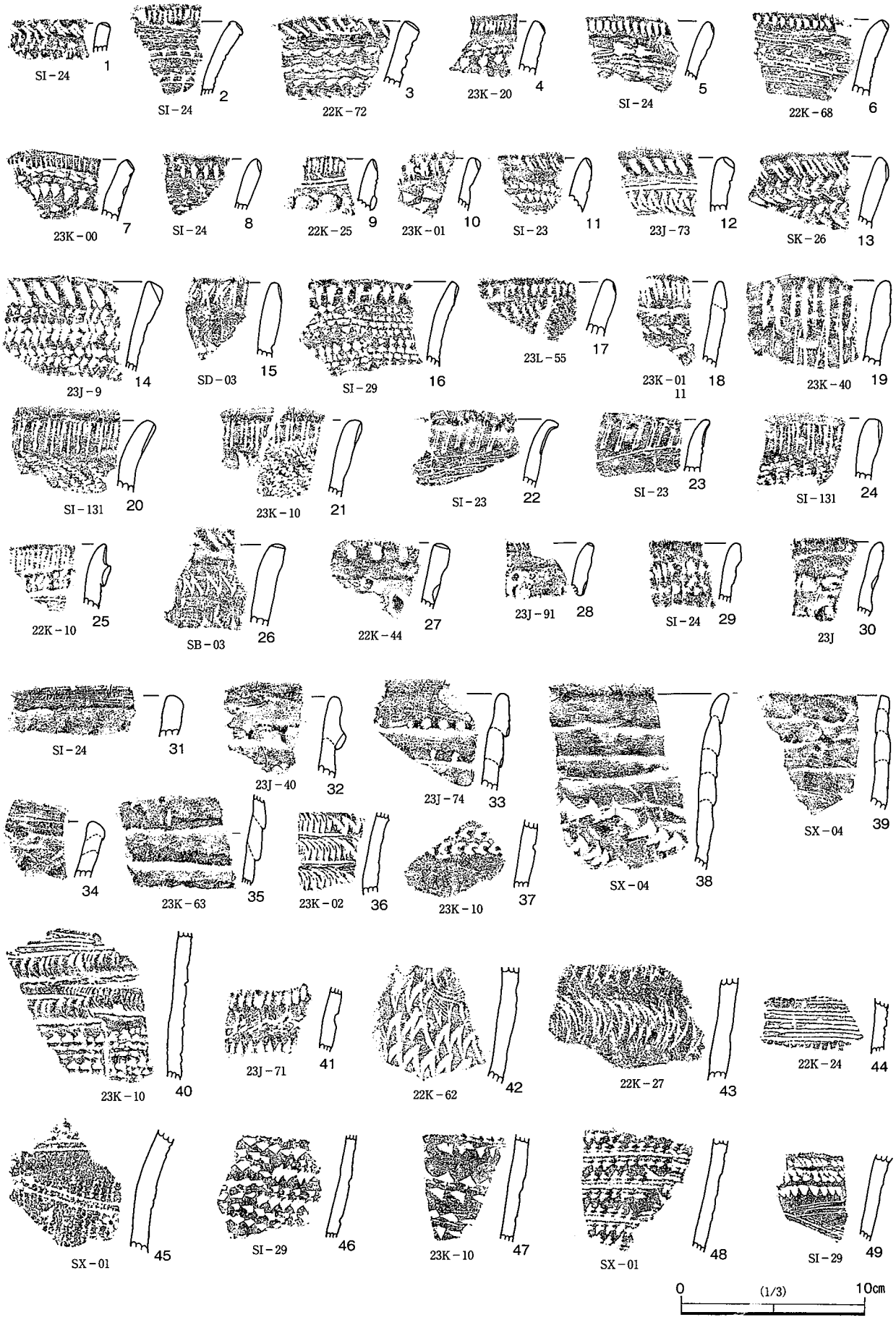
第37図の土器群は口縁部を半截竹管による押捺，胴部を貝殻腹縁による波状文が施されているものを一括して掲載した。いわゆる浮島系の土器群であり，集落形成期に位置付けられるものとなろう。出土地点は，22K・23K区を中心として，その周辺となる23J・22K区などとなる。また35・36は25J区に存在した塚（SX－004）の調査時にも出土している。このことは塚を造築するにあたり，その盛土を23K区周辺から運搬してきたものと推測できる。

１～28は口唇部から口縁直下にかけて半截竹管や棒状工具による押捺が施されているもので，その押捺にも長短の変化が認められる。１～８・17は10㎜にも満たないが，18～24では15㎜～20㎜と長い。口縁下に施文される文様には，半截竹管による平行線文・変形爪形文や貝殻腹縁による波状文，棒状工具による刺突文（９）などもみられる。口縁部の形状は平縁を基本とし，大きな波状を呈するもの（７）や小さな波状を形成するもの（20～22）もみられる。20・21は同一個体である。26～28は口唇部に施文されている例である。29～35は輪積痕を残した口縁部で，29は篦による整形が認められる。30では，篦状工具により一定の間隔をおき押捺し文様としている。また口縁直下には浅く回転させた縄文が認められるところから末葉に位置付けられるものである。31は指頭による押圧や瘤状の突起が形作られる。33でも指頭による整形が認められる。39～50は胴部に施された文様を採拓したものであり，半截竹管や貝殻腹縁を用いて変化に富んだ文様を創出している。

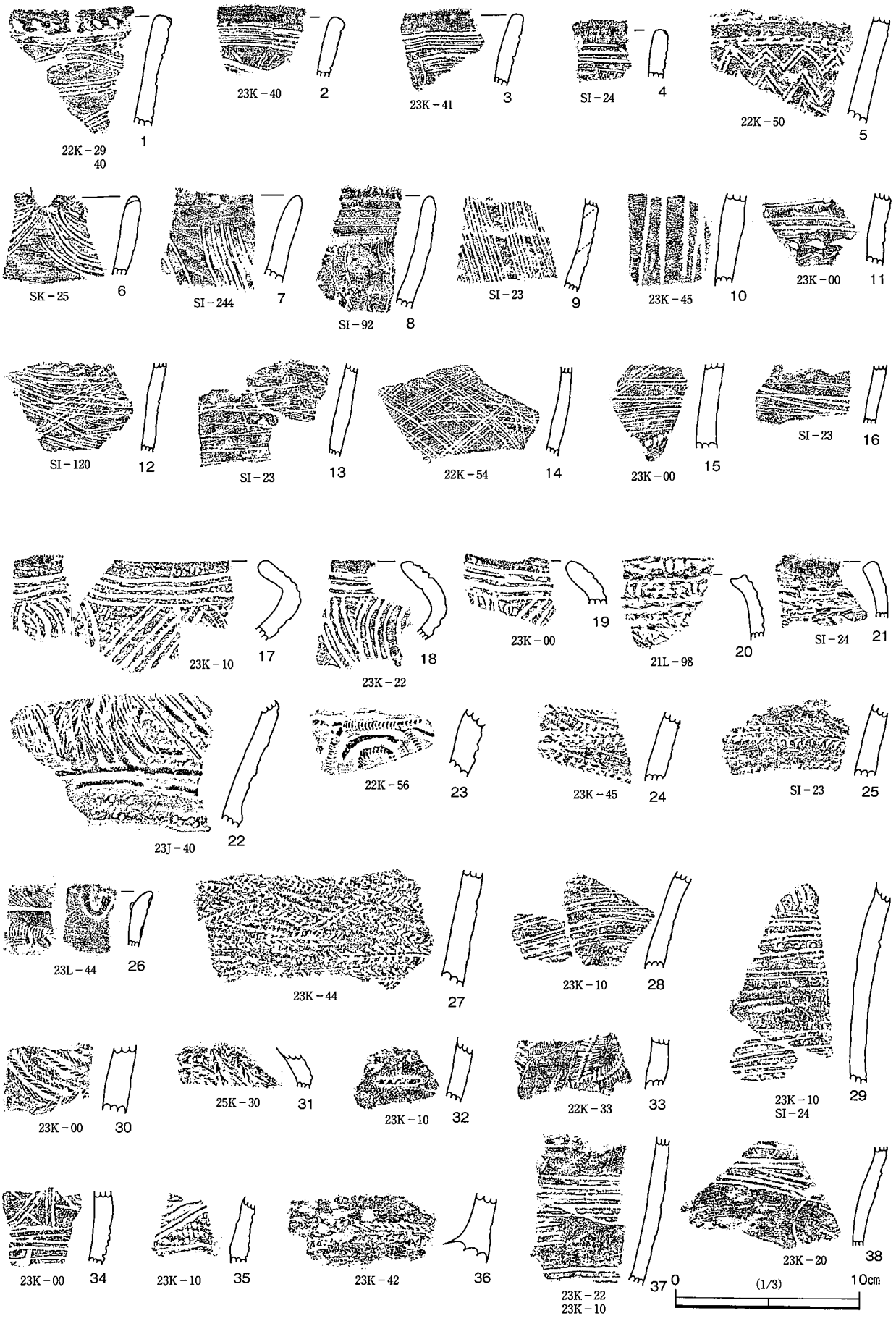
第38図の土器群のうち，１～16は半截竹管や櫛歯を使用し平行沈線・山形・格子文等を描いており，概ね浮島系土器群に伴うものと見做される。出土地点は，前者と同様に23K区に集中していた。施文具には半截竹管・篦・櫛歯などを使用したもので，口縁部の作りは，波状となる１・６を除き，平縁タイプが多いものと思われる。１は口唇部に接する部位で棒状工具による押捺が巡る。２・３は数条の櫛歯で平行沈線を描く。５は半截竹管による鋸歯文が特徴的であり，これらは文様的には諸磯的な様相ともいえよう。




第36図グリッド出土土器（2）




第37図グリッド出土土器（3）




第38図　グリッド出土土器（4）

また，６・７や９・10での文様はSI－005で出土した土器群と共通している。11では横方向に列点を加えてた珍しい例である。12～16は，半截竹管や櫛歯状工具により細線で描出されている文様が特徴的である。

17～38は微細な粘土紐の貼付やキャリパー形の口縁部が特徴的である。また共通点として胎土に小石や白色鉱物が多く含まれており，色調は赤褐色を呈している。出土地点は23K区が主となり，22K・25K区でも若干出土している。これらの大半は諸磯B式に該当するものである。17～21は口縁部で大きく内湾し，波状口縁となろう。18・20を除き，地文に縄文が認められる。文様は半截竹管を駆使し平行線や曲線で構成される。20・21には極細の粘土紐を貼付している。26も口縁部で，表面には33と同様な連続爪形文がみられ，内面には「U」字状に粘土紐を貼付している。22は口縁直下の大形片で，地文には縄文を施文し，貼付した浮線上を半截竹管で押し引きしている。23～25・27～38は胴部片で，半截竹管文や浮線文によって器面が飾られている。36は底部片で，横走させた半截竹管文の上を，さらに篦により斜位に刻み目を施している。

前期末～中期初（第39図）　本時期とした土器群は，縄文あるいは結節縄文によって施文され，一部の口唇部には縄文原体の押圧が認められる。出土地点は25J・23K・25K区などであり，23J・21K・22K・22L区でも若干出土している。出土量として決して多いとはいえないが，一部に前期末葉の様相を残しながらも中期初頭にかけて位置付けられる土器群で注目に値する資料といえよう。

１は口縁部付近の大形破片であり，器面全体に施された浅く粗い縄文の原体はLRである。輪積痕部分を刺突により鋸歯状の文様を作出していることが特徴的といえる。こうした口縁部のつくりは，いまだ前期末からの影響から脱却していないものと見做される。２は口縁部の小片で，僅かに縄文を施文した痕跡が認められる。また，輪積痕を鋸歯状に整形する口縁部の作りは，１と共通するものである。

３～５は口縁部に輪積痕を一条残しており，それによって文様としての効果を持たせたものであろう。こうした口縁の作りは下小野式によくみられるものである。６～11は口唇部に棒状工具（６・７）や縄文原体の一部（８～11）を押し付けたものである。このうち６～８では輪積痕の痕跡が認められる。９・10の例で鮮明にみられる絡条体圧痕の押捺は前期末に出現するが，一般的には口縁直下に横方向に押圧されるものが多い。ここでは，このタイプは認められなかったため下小野式の一部として扱った。以上の口縁部片では４・10・12などに「S」字状の結節文が付随する。13～20は胴部片であり，15・19では撚りの異なる原体を組み合わせて羽状の効果を作出している。また16･17は同一個体で，18･20も同様となる。なお，13はSI－025住居跡から出土したものであるが，便宜的に本群に含めて掲載した。

21～24は底部であり，22を除き文様は認められない。21・23・24は胎土及び底部の作りからみて前期後半に属するものと考えられるが，作図の都合によりここで掲載した。

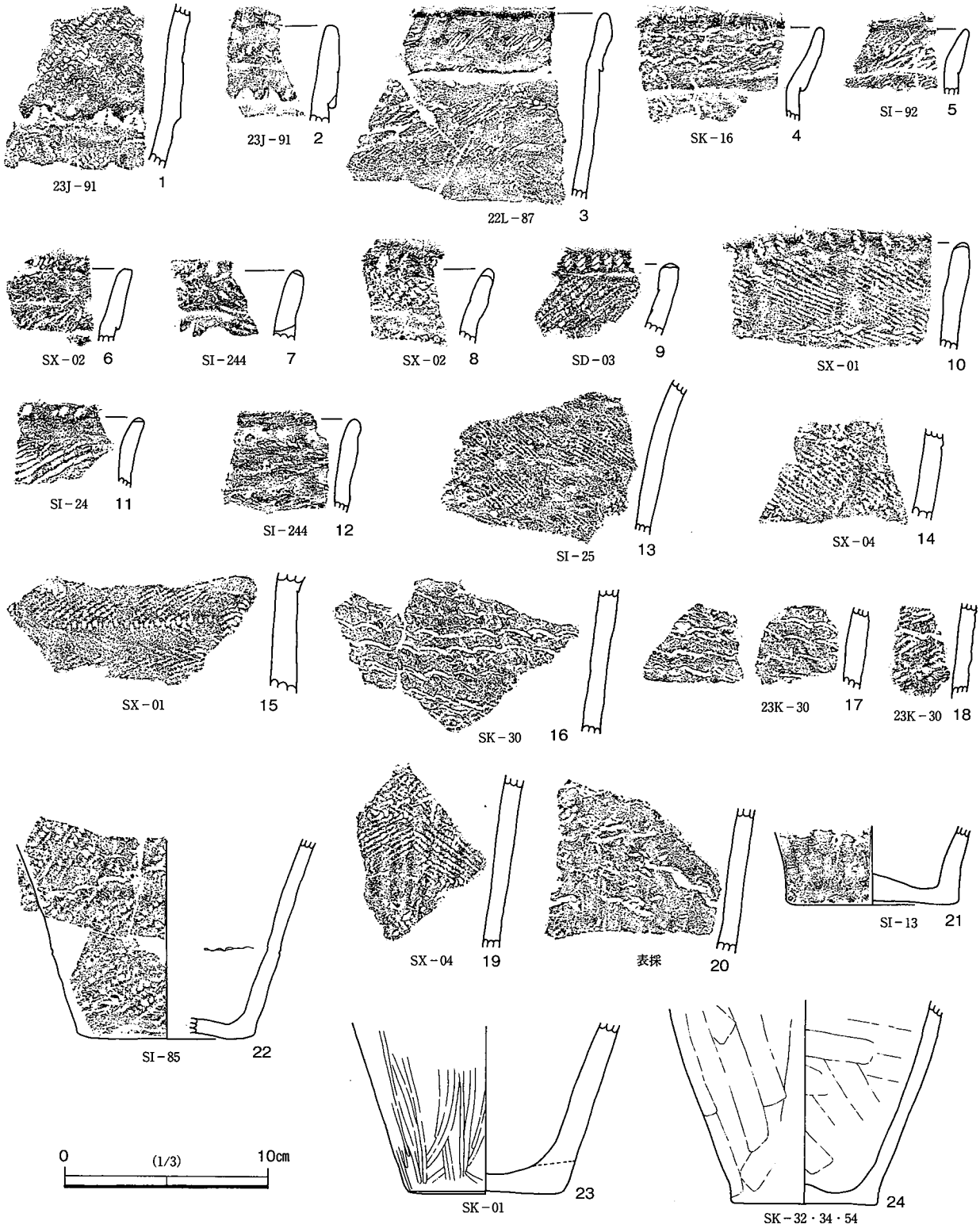
これらの土器群は，総じて焼成は良好とはいえず，色調は淡い灰褐色（７・12・14・15・22）や淡褐色（１・５・６・９・19・20・21）や赤褐色（10・16～18・23・24）を呈している。３の大形口縁片の器面は淡褐色ないし赤褐色で黒斑を伴っている。胎土では15･16･19には小石や白色鉱物の混入が認められた。

中期（第40図）　ここでは縄文を主文様とする土器群と竹管状工具による施文や押引きにより文様を描出する土器群，沈線や微隆起と縄文を組み合わせた土器群などを掲載した。資料的には少ないが中期全般に及ぶものである。出土地点は，25I・23J区ではやや多く，24H・21K・22L区などでも出土しており薄い分布ではあるが，広範囲にわたって出土している。

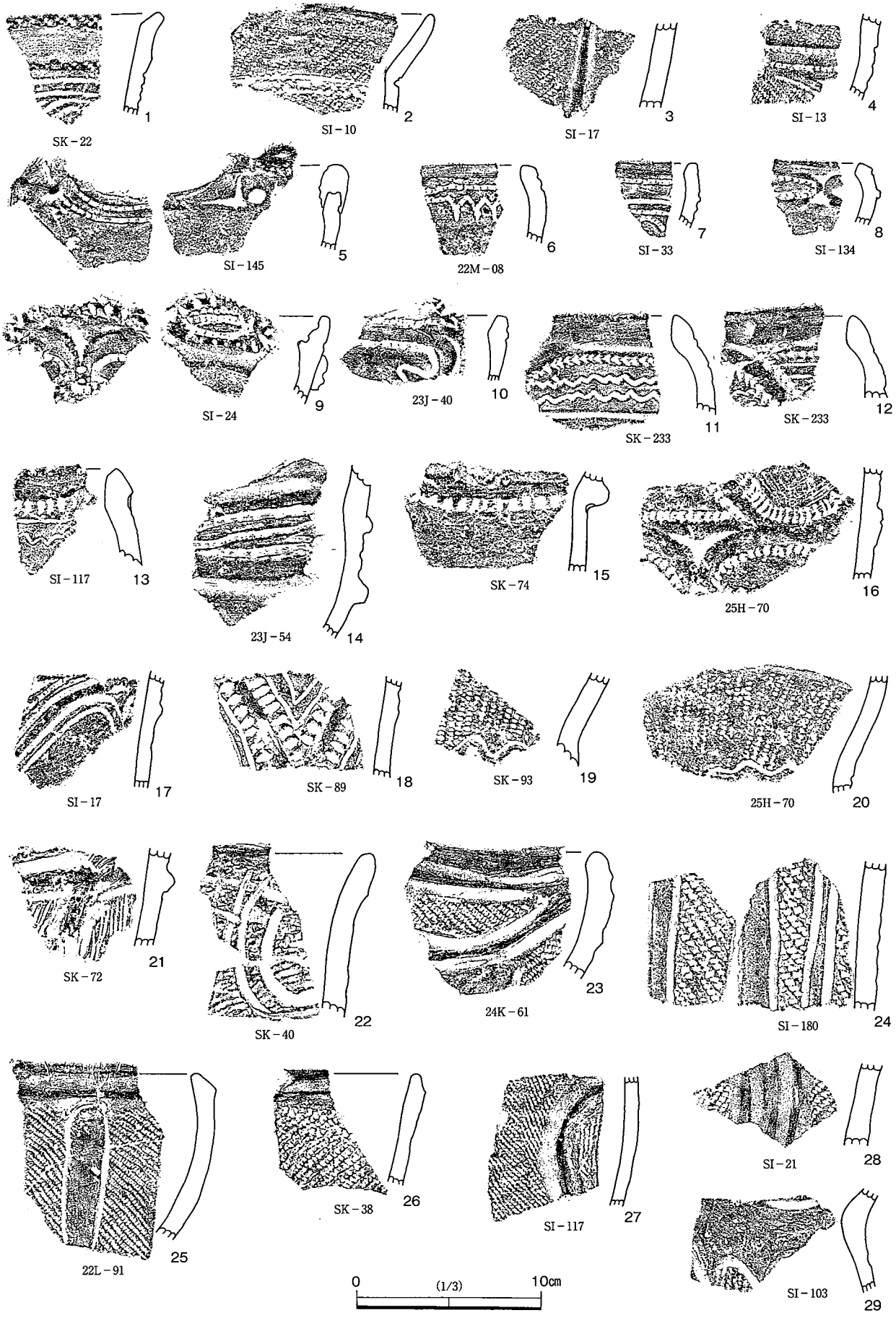
１～４は口縁部の作り，施文等から初頭に位置付けられる五領ヶ台式に属するものとなろう。縄文を地

文とし，細い沈線や隆線（３），密な押引き（４）などにより文様を作出している。

５～20は阿玉台式である。５は口縁に粘土を貼付し突起部を形成したものの一部であり，裏面には三叉状の文様が認められる。竹管状工具による押引文は細く密であり，６～８も同様な工具を使用している。９の突起部裏面でも文様が施されている。10も細い押引文で飾られており，阿玉台式でも古式に属するものといえよう。一方，11～18の押引文では幅広の工具を使用している。14～17は胴部片であり，太い粘土




第39図　グリッド出土土器（5）




第40図　グリッド出土土器（6）

紐の貼付が特徴的である。19・20は文様構成・胎土から同一個体と考えられる。地文の縄文から阿玉台式期でも新しい部分に位置付けられよう。ここでの縄文の撚りは，すべてRLとなっている。胎土についてみると，明らかに雲母を混入するもの（3・4・9・13・16・19～20）と，雲母の認められないもの（5～7・12）とがあり，4・16・17・19・20では小石・白色鉱物が多く混入されている。

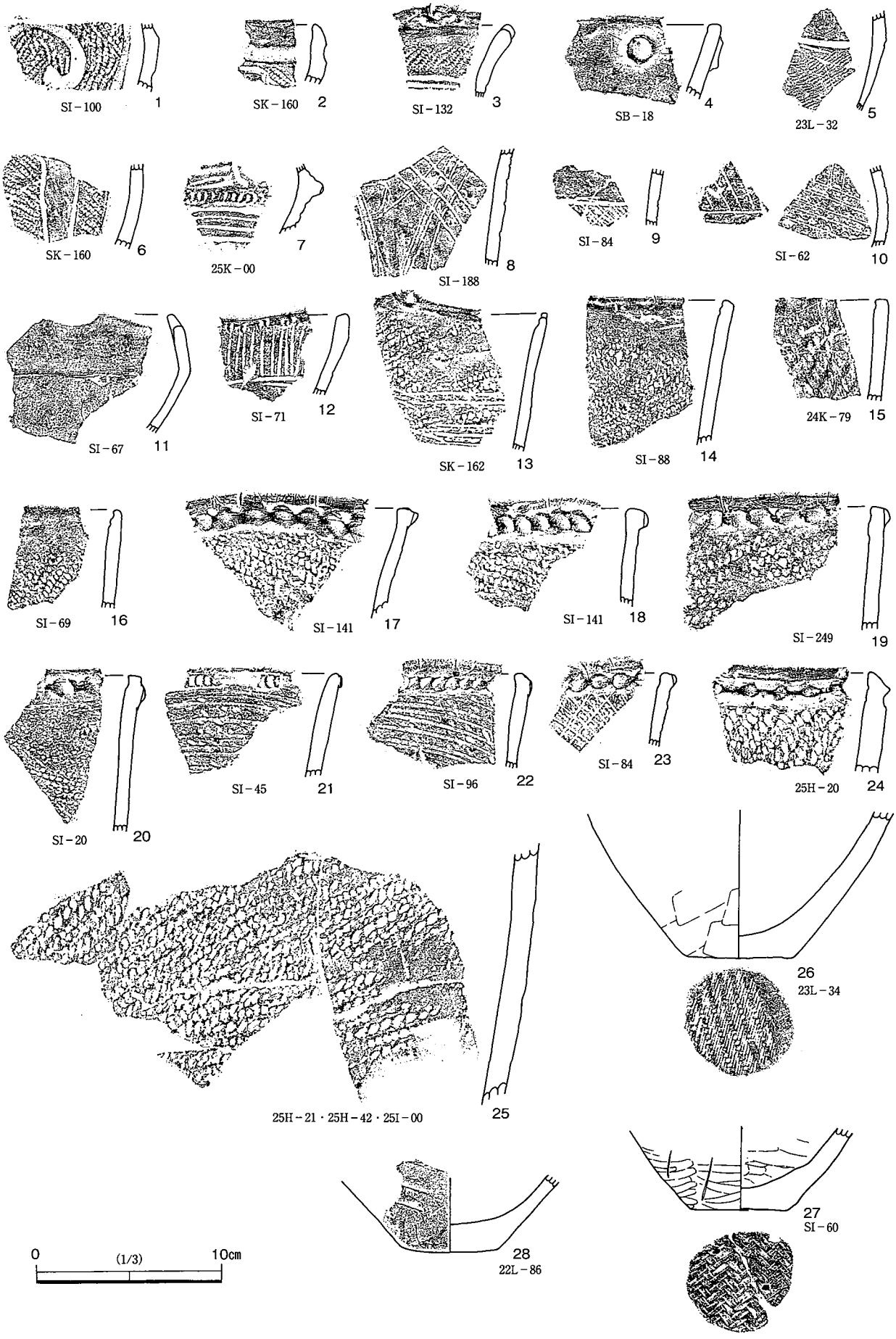
21～29は，いわゆる加曽利E式に該当するものである。ここでも量的には少ないが，古いタイプのものから終末期にいたる土器群が出土している。21は条線と隆帯により文様を構成する。22は口縁に把手を有するタイプで，縄文地の上に沈線で曲線を描いている。23は隆帯の上下に幅広の沈線を施すことにより，縄文部分を磨り消している。24は胴部片で，磨り消し部を太い沈線で区画している。25～29は終末期に位置付けられるものである。25～28は隆線が特徴的であり，沈線で区画する部分（25）や隆線に沿って（27・28）磨り消しを施している。29は縄文の部分を太い沈線で囲むタイプであり，大木式的な要素を含むものである。ここで使用されている縄文原体はRL（23・28），LR（24～26），無節のR（22・27）となる。

後期（第41～43図）　後期に属する土器群を一括した。形式的にみれば加曽利B式・安行1・2式で構成される。出土地点は，加曽利B式では22L・23L・24K・25K・25H・25I・25Jの各区，安行1・2式では溝状遺構（SD－003）や22M・22L・23L・24L・23Kの各区となり，安行式期では若干北方向へ移動するように思われた。

第41・42図は加曽利B式に属する土器群である。2・5・6・7・10・11の器内外面は，きれいに調整されている。1は縄文地の上に太い沈線で渦巻文を描く。胴部片であるが，その湾曲の度合いから球形の胴部を想定できる。3・4は，それぞれ口唇部に小さな突起とボタン状粘土の貼付が認められる。6・10も丸味を有した器形で，いずれも小形品となろう。7も同様な断面を呈しており，注口土器の一部と考えられる。5は薄手の作りであり，時期的には下降するものであろう。11には文様は施されていない。大きく屈曲する口縁部から，器形は浅鉢形となろう。

8・9・12～16は深鉢形で沈線と縄文によって文様が構成される。8・9は沈線の類似性から同一個体と思われる。斜行する沈線は右から斜め下へ，次いで左から斜め下への施文となる。12は緩やかな波状を呈する口縁部を形作る深鉢で，浅い沈線の他に口唇部直下に爪形による押捺が加えられる。13も小さな波状口縁を呈する小形の深鉢である。口縁内面には鮮明な一条の沈線を巡らす。地文に縄文を施文した後，半截竹管による平行沈線を横走させる。14～16は縄文を主文様としており，15では篦による細い沈線が認められる。内面の沈線は14・16で二条，15は一条である。

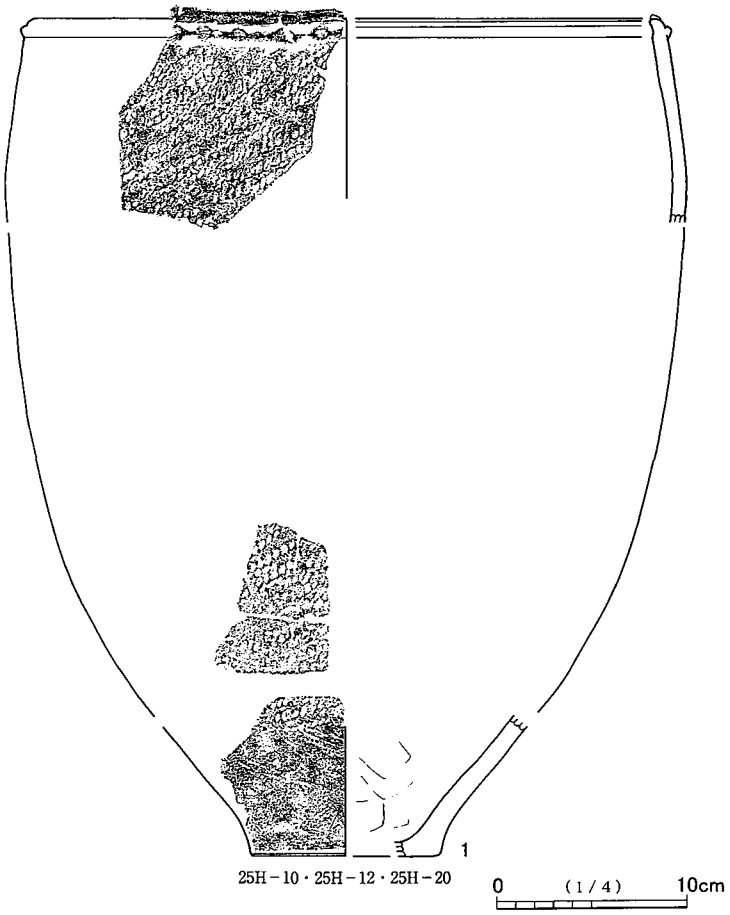
17～25及び第42図の土器群は紐線文系の深鉢である。21では貼付した粘土紐の一部が欠損しており，粘土紐の貼付痕跡が鮮明に残る。23は粘土紐を貼付した後，深い沈線が格子目状に施されている。21・22では浅い沈線を横走させたもので，時期的には後半期の所産となろう。24・25は同一個体で接合しなかった破片が数片存在する。胴部片の遺存からかなりの大形品であったものと思われた。25H－21グリッド付近から径10mの範囲で出土したものである。三角形に近い口唇部の作りが特徴的である。口縁に粘土紐を貼付後，上下を棒状工具で沈線様に整え，隆起している部分に指頭による押圧を加えている。器面の縄文はLRの原体を強く回転させており，色調は淡褐色ないし暗褐色となる。第42図の深鉢も大きな形状を呈しており，推定口径は約35cmを計測する。20数片に破損して25H－10・11・12・20グリッドで出土しており，24・25とほぼ同一地点の出土ということができる。口縁部の作りは前者と異なり粘土紐を貼付後，指頭による押圧を加えただけである。器面の縄文は撚りの粗い原体LRを軽く回転させたもので，色調は赤褐色




第41図　グリッド出土土器（7）

を呈している。このように25H区では，少なくとも２個体の大形深鉢が出土しており遺構の存在も想定できたが，それらしき落ち込みは検出できなかった。

第43図は後期後半の安行式土器群を一括した。１～６は深鉢以外のものである。１は大きく内湾する口縁部で瘤状に粘土を貼付した後，帯状に縄文を施文し上下あるいは左右を幅広の沈線で飾る。器面の無文部では調整が行き届いている。２～４は瘤状部に刻目を施したものであり，２は波状を呈した口唇部に，３は口唇部に貼付された瘤に，４は横方向に貼付された瘤状部に刻目を加えている。５・６は台付鉢の底部である。５の内面はよく調整され円滑な面を作出している。６では径1.2cm～1.5cmの孔が焼成前に穿たれており，左右の２か所で確認できる。これらは概ね安行２式となろう。




第42図　グリッド出土土器（8）

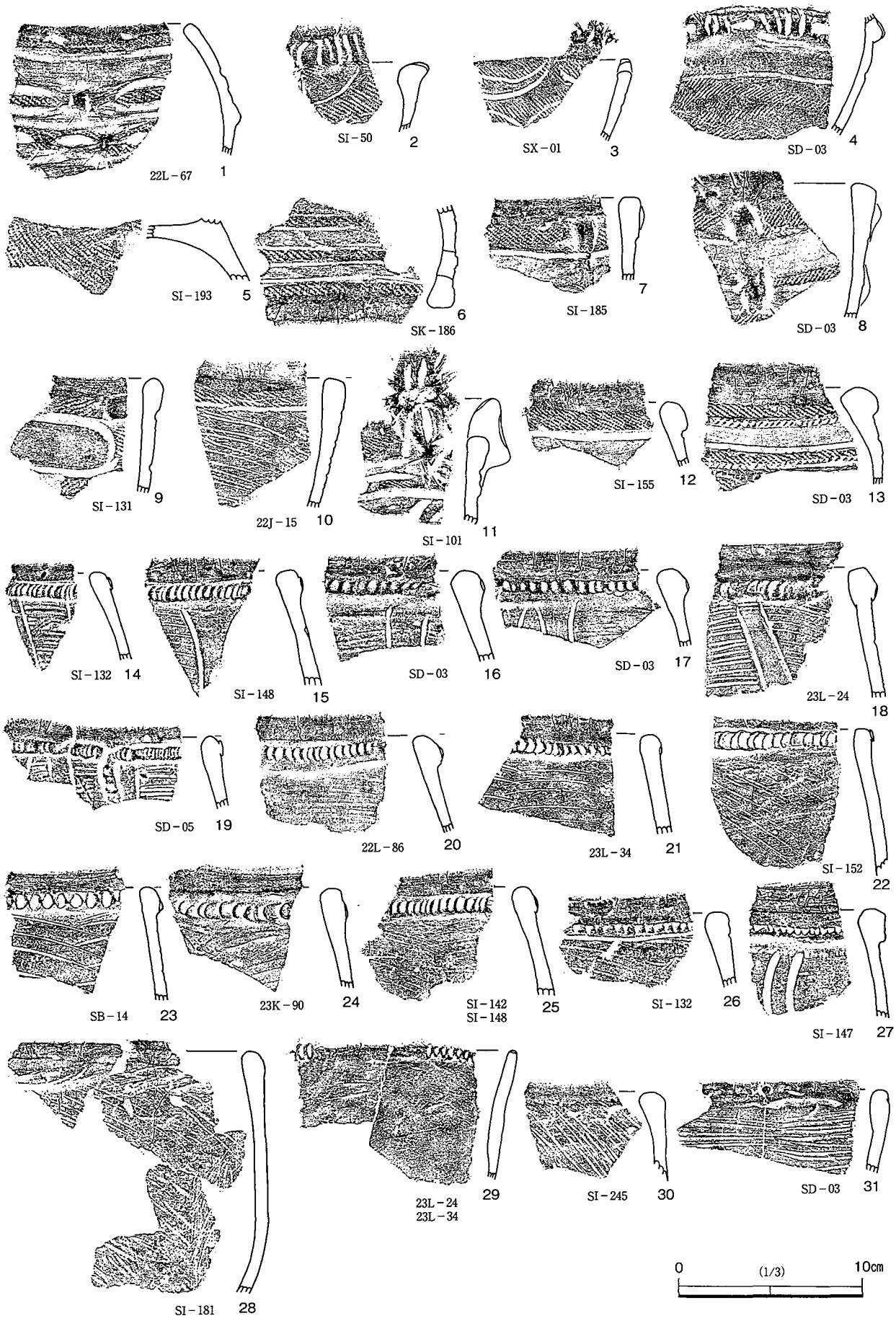
７～13は帯縄文系の深鉢で７・８では瘤状突起が貼付されている。９は薄くボタン状に粘土塊を貼付し，口縁は波状を呈する。10の口縁も波状となろう。これらは口縁部の作りや瘤状突起から安行１式となろう。11は口縁に粘土塊を貼付し，小さな把手を形成する。下部には入組文らしき沈線が認められ，時期的には晩期に属する可能性も比定できない。12･13は大きく内湾する器形で安行２式の特徴をよく表現している。13の縄文帯下部では篦による連続した刺突が整然と横に巡る。

**晩期～弥生初（第44図）**　ここでは晩期に属する土器群を掲載したが，一部弥生初期と認められる土器についても本項に含めた。

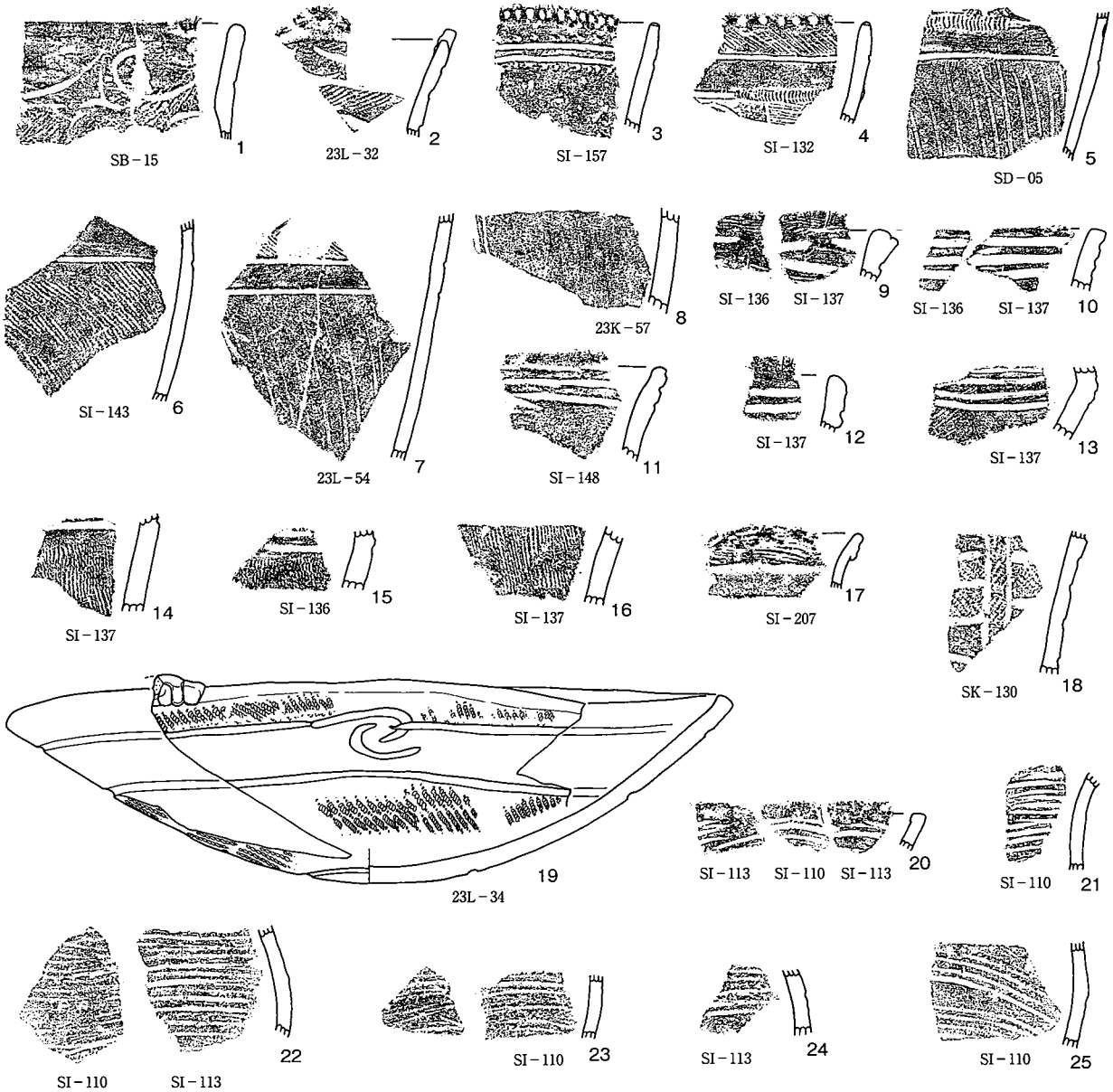
１・２・19は三叉文や入組文の描出から晩期前半に位置付けられよう。19は23L－34グリッドから一括で出土した丸底を呈した浅鉢である。ほぼ2/3が遺存し，口唇部では１か所にのみ小突起が認められ，他は失われている。文様はRLの細縄文と沈線により構成され，体部の縄文は部分的に施されている。色調は黒褐色を呈し，器内外面では丁寧な調整が隈無く施され，無文部では光沢さえ感じられる。

３～16は晩期後半に位置付けられる土器群で，３～８口縁部付近では比較的細い沈線，密で連続的な爪形文，竹管による刺突文などが施文され，胴部には縄文や浅い沈線がみられる。９～16はいずれも小破片であり，口縁部は太く，明確な複数の沈線が巡る。９は口唇直下に瘤状の突起が認められる。14～16は沈線下に施される撚糸文に類似性が認められるため同一個体と思われる。17は口縁部を二重にした深鉢で，撚糸文は口唇部にも及ぶ。

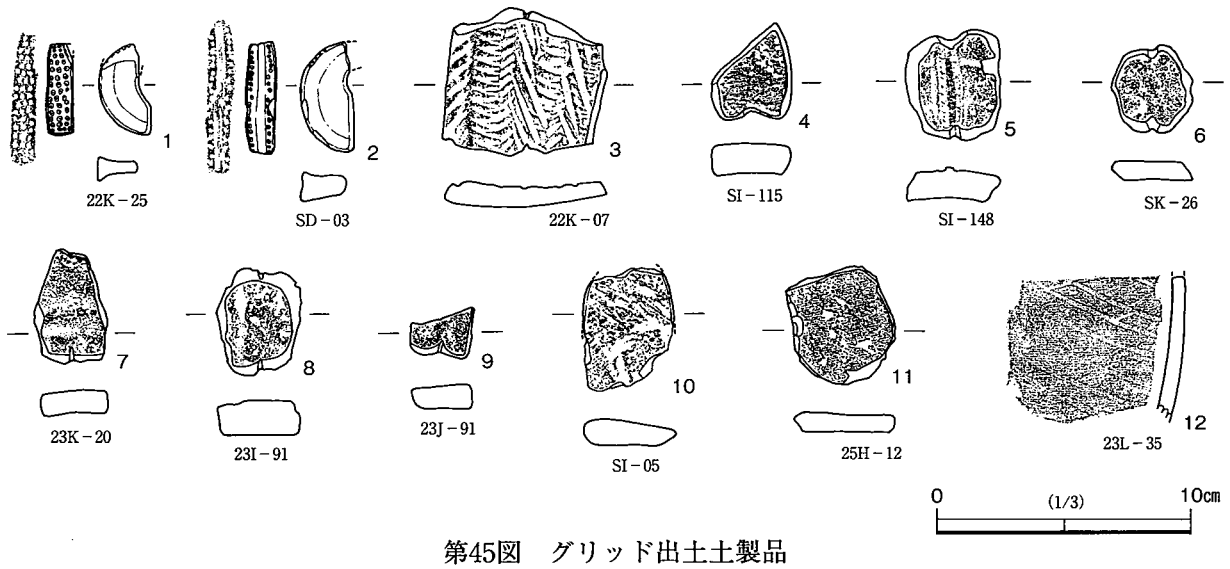
18は奈良・平安期と考えられる土坑（SK－103, 23L－32グリッド）から出土した胴部片で，沈線により




第43図　グリッド出土土器（9）




第44図　グリッド出土土器（10）




第45図　グリッド出土土製品

区画された空間をRLの縄文で充填する。沈線の一部に原体の回転により押し出された粘土が認められるところから，縄文は沈線を引いた後に施文している。類似する文様は晩期の土器群には見出せず，強いていえば野沢Ⅰ式に近似するように思われる。単独の出土で断定はできないが注目しておきたい。色調は淡い暗褐色で，焼成は良好である。

20～25は初期条痕文系の小形壷で底部を欠失している。SI－110（24I－49グリッド）から６点，SI－113(25I－30グリッド）から４点出土した。口縁・頸部・胴部と存在するものの接合関係は認められない。22の胴部片では推定径が15～16cmを計測する。口唇部は，粘土を内側に折っているためやや肥厚した口縁部を形成する。器面は棒または竹管状工具により横走する条痕文を描出する。胎土には若干小石・白色鉱物を混入しているが，焼成は良好である。いずれにせよ器形・施文等から本遺跡周辺で製作されたもので搬入品とは思われない。

## ２　土製品（第45図）

土製品としては抉状耳飾・土錘の他に，焼成粘土塊や研磨痕を有する土器片が出土している。

１・２は抉状耳飾の欠損品で，１は22K－25グリッドから出土，中央部は薄く約３㎜，外側面は９㎜，遺存重量は5.1ｇを計測する。黒褐色を呈し，外側面では径1.5㎜の円形竹管文による文様が施されている。２は溝状遺構であるSD003から出土したものである。厚さは中央部で約６㎜，外側面は10㎜，遺存重量は9.7ｇを計測する。ここでも径1.5㎜の円形竹管文による文様が中央の沈線を境として２列に認められる。色調は淡褐色を呈する。

３～９は土錘で，３は浮島式土器の口縁部片を利用したもので，重さは40.1ｇを計測する。４～９は中期に属する土器片を利用したもので，５～８は文様・胎土から阿玉台式となる。欠損品も存在するが，４は13.0ｇ，５は21.2ｇ，６は9.8ｇ，７は13.4ｇ，８は4.3ｇ，９は20.1ｇを計測する。

10は焼成された粘土塊で上下の一部を欠損するが，長方形に近い形状を呈したものであろう。意識的に整形されたようで側面は丸味を帯びている。表面には草木の痕跡が多く残されている。重さは18.6ｇを計測する。

11･12は加工された土器片である。11は無文の胴部片で，左側面を数回剥離したように打ち欠いている。内面はきれいに調整され，滑らかな面を作り出しており後期の所産と考えられた。重さは16.2ｇを計測する。12は上端を平坦になるまで研磨している。僅かな痕跡を残す沈線から晩期の土器と思われる。重さは32.6ｇを計測する。

## ３　石器（第46～56図，図版131～139）

縄文時代に該当する石器は，量的には多いものの定形石器といえる製品は少なく，とりわけ狩猟具である石鏃は９点の出土にとどまった。他には削器・掻器・石錐などがみられたが，これらの石器群も僅かなものであった。しかし，図示したように二次的な剥離を有するものや使用痕の認められる不定型な石器の出土は，第46～48図に示したように22･23L区，22･23M区を中心に石核の類とともに多量に出土している。この22・23L区，22・23M区では小さな屑片をふくめると，約400点以上の石器類が出土しており，剥片石器の製作跡といえるものであった。周辺では主に後期の土器群が出土しており，平面的にみれば重複することから時期的にも後期の所産となる可能性が強い。特に出土した石核を観察すると，既刊の「小屋ノ内

遺跡」で出土した石核と多くの共通点が認められ，一連の石器製作跡と位置付けられるものと考えられる。

一方，礫を素材とした石斧･敲石等の石器類は少なく，図示した以外には礫片が若干出土したにとどまった。隣接する小屋ノ内遺跡と比較しても半数以下の出土といえる。

**有舌尖頭器**（１・２）　草創期に属する有舌尖頭器が２点出土している。この時期に伴う土器は認められなかったが，活動の痕跡を残したものといえよう。１は先端の一部を欠損する。分厚い剥片を素材としたもので，現存する長さは6.2cmを計る。SI－092（25J－37グリッド）の覆土から出土しており，石材は黒色頁岩である。２は両端を欠損している。表裏面の整形剥離は丁寧で，有舌尖頭器特有の鋸歯状を呈した側縁の作りは特徴的といえよう。現存する長さは3.5cmを計る。SI－245（25K－80グリッド）の覆土から出土しており，石材は珪質頁岩である。

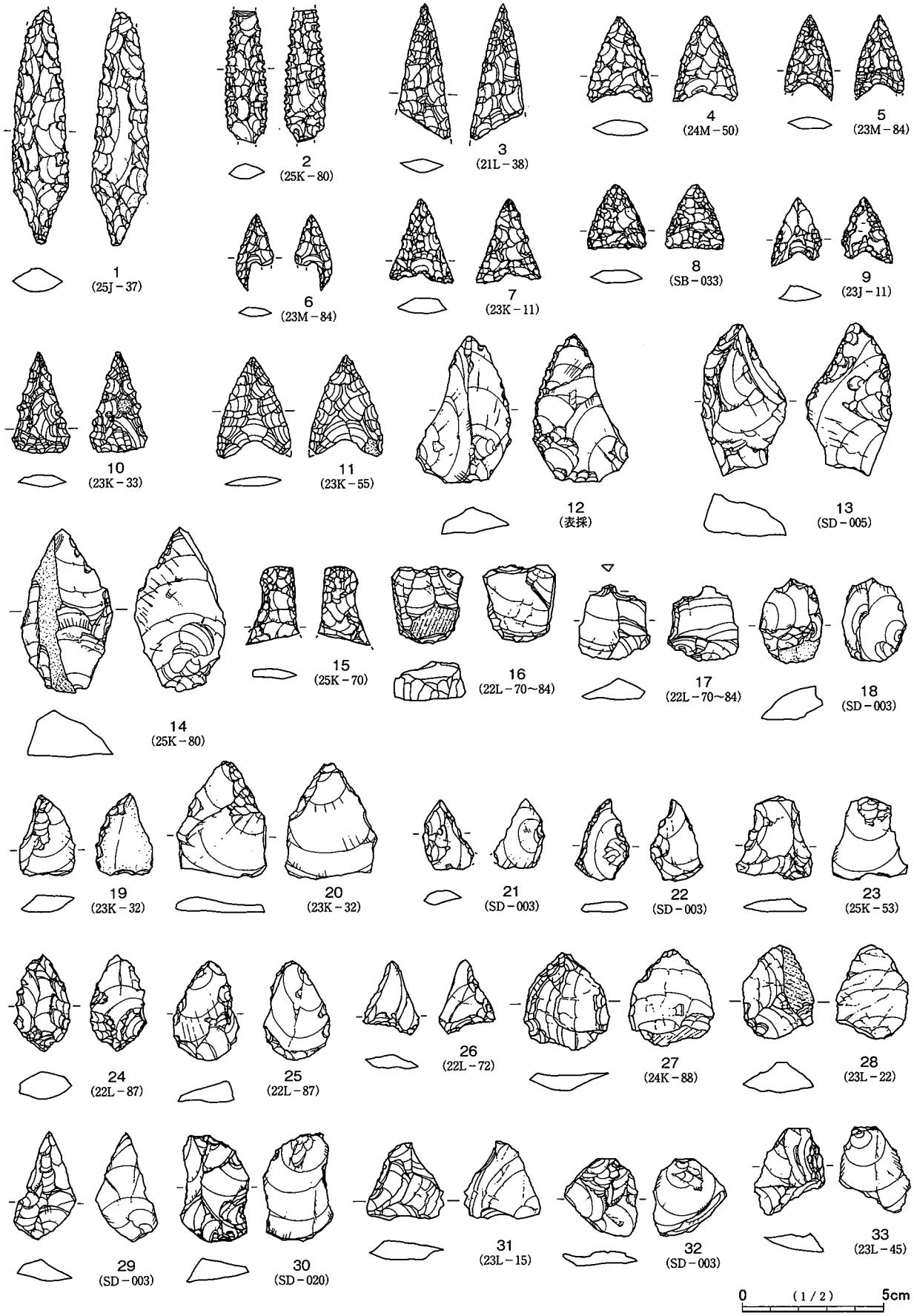
**石鏃**（３～11）　３は，基部は欠損するが，表裏面はきれいな押圧剥離で整形された大形品である。４は玄武岩製で表裏は，一次剥離面を残さず全面に加工のための剥離が行き届いている。５・６・８はチャート製である。５・６はともに一部欠損するが，薄い剥片を巧みな剥離によって形状を整えている。６の基部にみられる抉りは深く長い脚部を作出する。７・９・10は黒曜石で，７の形状はほぼ正三角形となり，基部での抉りは認められない。９は粗雑な作りで，表裏面に一次剥離面を残す。10は二等辺三角形を呈したもので，側縁の整形は粗く基部での抉りは認められない。これらの石質は良質で若干縞状の黒色帯がみられるが，ほぼ透明といえる。11は黒色頁岩製で，一部に自然面が認められる。ほぼ完形品であり，形状も整った作りといえよう。以上のように９点の石鏃では４種類の石材が採用されているが，本遺跡ではチャート以外の石器製作跡は確認できないため，黒曜石等はむろん他地域からの搬入品となろう。

**削器**（12～14）　12は縦長の剥片を素材とし，裏面右に刃潰し状の剥離を加えて削器としている。一次剥離面を多く残しており，旧石器時代の所産とも考えられるが，表土層からの出土でもあり，ここに含めた。石材には不純物を多く含有する黒曜石を用いている。13も同様な作りで，裏面に刃部作出のための剥離を施している。粗雑な作りではあるが，打面部は削除しており，形状はナイフ形石器に近い。石材はメノウで白色の縞模様が認められる。SD－005の溝状遺構から出土している。14は尖頭器様の形状で，打面や分厚い側面あるいは自然面をそのまま残す。刃部も表裏を数回の小さな剥離で作出しており，稚拙な作りといえよう。石材は黒曜石で若干気泡を含む。SI－245の覆土中から出土した。

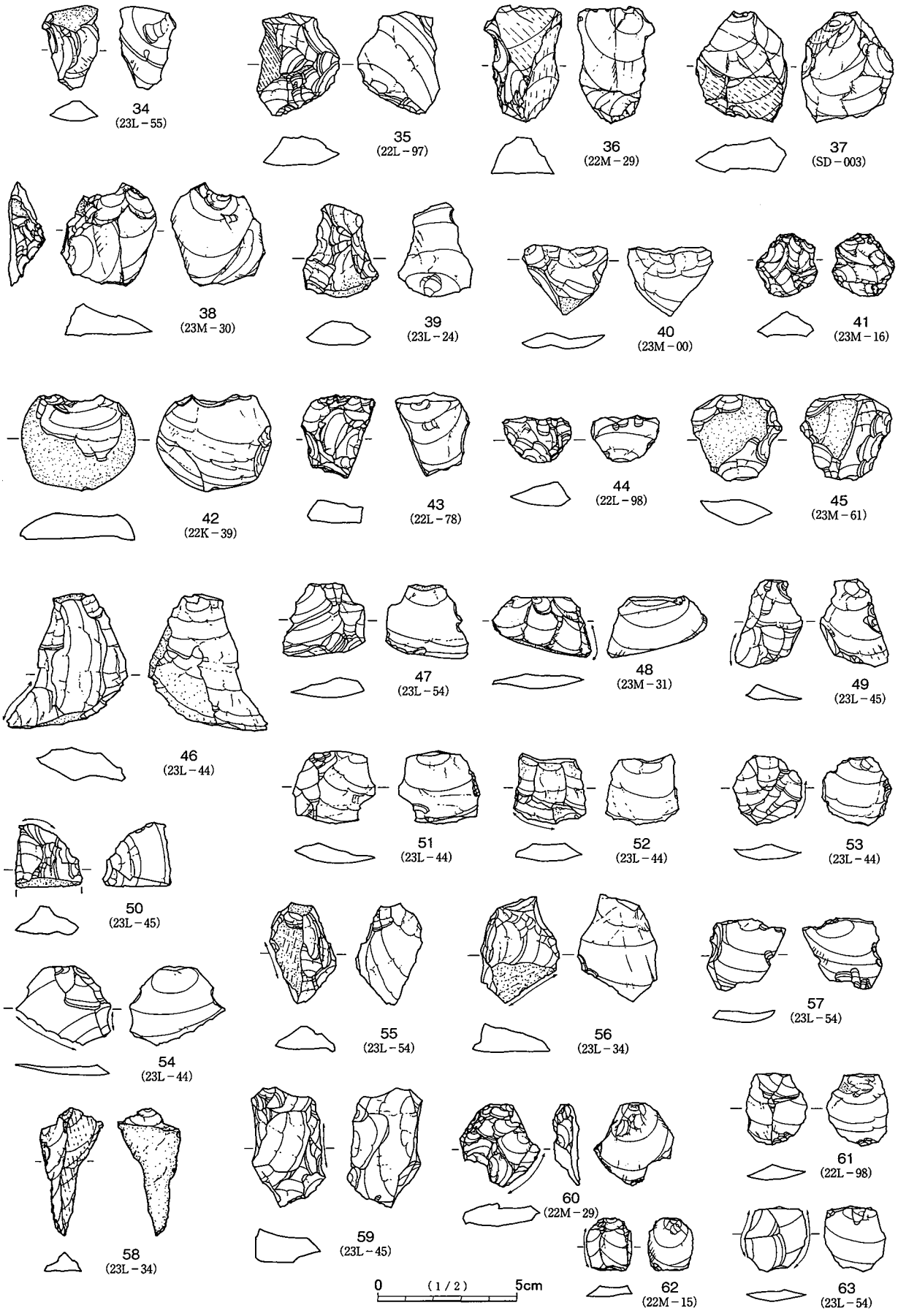
**掻器**（15・16）　15は刃部の多くが失われているが，上部はつまみ部となろう。欠損部から推測すれば刃部が横型を呈したスクレイパーとなろう。薄い剥片に正確な押圧剥離を施し精緻に仕上げている。石材は良質の黒曜石を用いている。16は後述する一連のチャート製石器であり，刃部は裏面から数回の剥離によって作出された小形の掻器である。

**石錐**（17・18）　ともに小剥片の先端部を２～３回の小さな剥離で整形し，石錐としている。石材は２点ともチャートである。

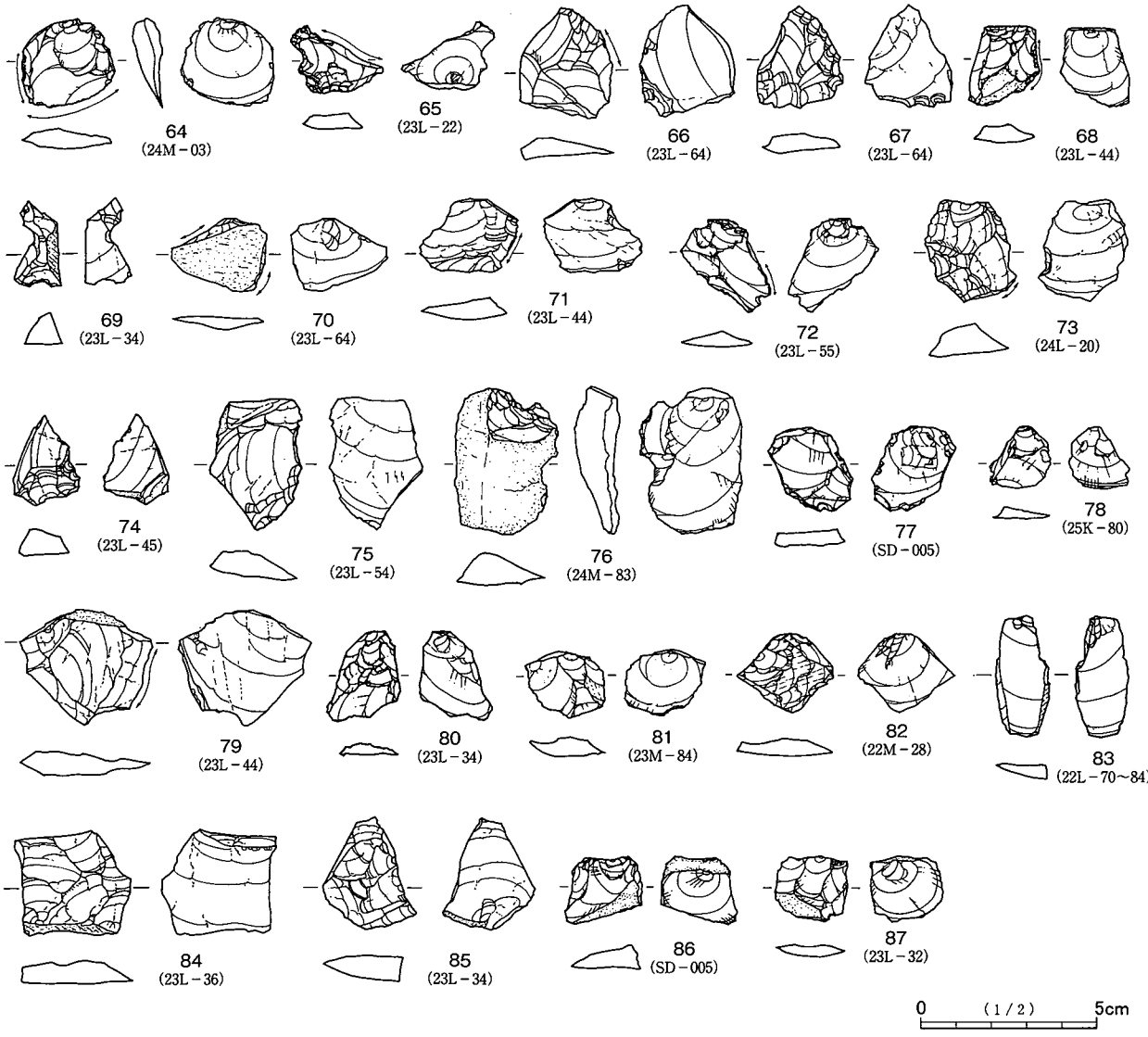
**その他石器群**（19～102）　ここでは定形石器までには至らず，製品と呼ぶには相応しくないものを一括して図示した。内容的には，その形状により石鏃の未製品，二次剥離・使用痕等の認められる剥片，石器素材として十分な形状を呈するもの，残核状の分厚い剥片を石器として利用している場合の剥片などであり，これらの中には石器として使用されているものも少なくない。石材についてみると，41・77・78・86・87・91・98は黒曜石，57・90は硬質頁岩，20はガラス質黒色安山岩，94はメノウ，他はすべてチャートである。




第46図　グリッド出土石器（1）




第47図　グリッド出土石器（2）

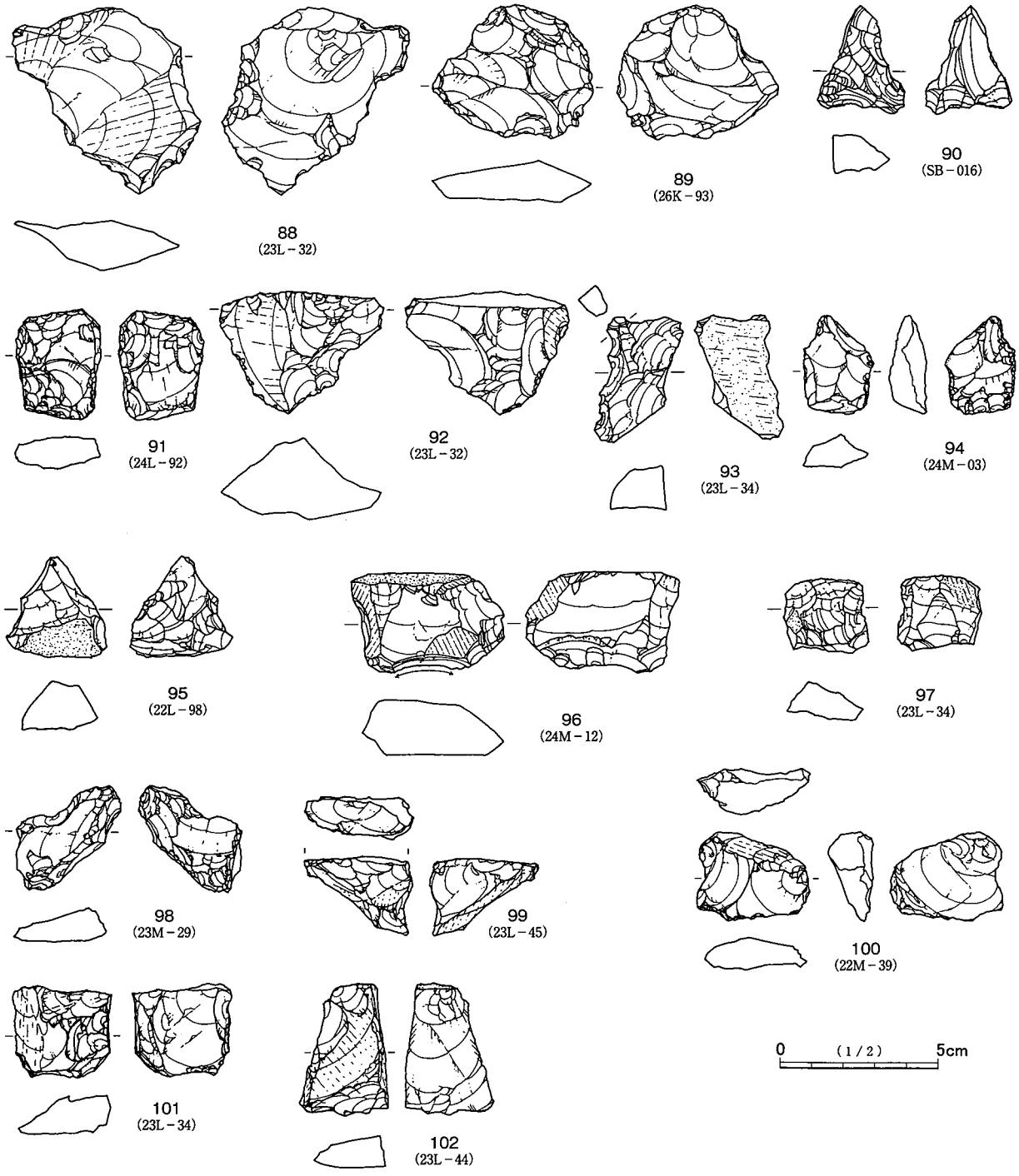



第48図　グリッド出土石器（3）

19～28, 31～34は，残された形状から石鏃の未製品と考えられる。19・24・26などは，それ自体でも使用可能と思われるほど整形されている。

29・30, 35～87は，二次剥離を有するもの，使用痕の認められもの，良形の剥片で石器製作が可能といえるものなどを一括した。これらの中には明確に二次剥離を施すもの（30・35・36・41・42・45・67）が認められる。用途としては削器などを想定できるが, 41は円形掻器に近い。また使用痕のような刃こぼれや微細な調整剥離を施している剥片は，薄く剥離されたもの（51～54・61～66）に多い。こうしたタイプの剥片も何らかの形で使用されていたものと考えられる。

88～102は，残核の再利用品や分厚い剥片の側面を整形し，石器としているものを一括した。石器としてみた場合，削器・石錐・楔形石器などとなろうが，抉りを有する削器は「小屋ノ内遺跡」でも認められており，矢柄研磨などが想定できよう。88の表面は節理面で，加工は下端部を抉るような形で小さな剥離が認められる。一方，裏面では打点部は未整形で，左側面と右上部に意識的な剥離が認められる。側面の剥離は削器，下端部は錐としての機能が想定できる。89はほぼ円形を呈した分厚い剥片で，右側縁に数回の剥離を施し刃部を作出している。掻器のような使用が考えられる。90は残核を利用したものである。平




第49図　グリッド出土石器（4）

面形では石鏃を想定できる。裏面での剥離は左部分に２～３回認められる。この部分は錐として使用されていたものであろうか。91は下部と左右の側面を折断し，その後，下端部を主に微細な調整を施している。上部も，表裏面から剥離され刃部を作出しており，楔形石器としての機能が想定できる。92は明らかに残核であり，下部に若干の剥離痕がみられる。93も90と同様な作りである。上部の突起は錐を意識したものとも思われる。94も先端部の加工が特徴的である。周囲には微細な調整痕が施されている。95も残核を利用したもので先端部と裏面に小さな剥離を認めることができる。96は，薄い板状母岩の一部を利用したものであり，石核としては十分な形状を保持しておらず削器として使用したものであろう。下部には微細な

調整剥離が認められる。97も裏面の右側縁下部に若干の調整剥離がみられる。98は折断後，周囲を整形し，上部を抉るように大きく剥離した部分を石器として用いている。99は打面部の左に微細な調整痕とともに使用による刃こぼれが観察できる。100は下端左側に調整剥離を施し削器として使用している。101も下端部に調整を加え削器として使用している。102は石器の素材として，十分な形状を有しているが，調整剥離や使用痕は認められない。石器素材としての分厚い剥片であり，ここに含めた。

**石核・残核（1～88）**　ここでは，まだ剥片剥離の可能な石核，残核として認められるものなどを一括して掲載した。これらの形状についてみると，節理面をうまく利用して原石から剥離した板状母岩の存在が特徴的である。上下両面に節理面を残しており（2・3・8・12・15・32），分厚い石核が得られた場合には剥片を剥離し，薄いものでは簡単な整形により石器として使用している。また平坦な節理面は打面として有効で，順次打面を転位させながら剥片剥離作業をすすめていったものであろう。小さくなった残核は，その事実をよく物語っている。なお，石材は82がメノウで，他はすべてがチャートによって構成されている。

1は石核として最大で，まだ剥片剥離は可能と思われる。2は柱状を呈し，縦3.8cmを計る典型的な石核である。表面にも節理面が認められるため，本格的な剥離作業はおこなわれていない。いわば，本遺跡での石核原形に近いといえる資料である。

3～8は複数面に節理痕が認められる。8の厚さは1.1cm～0.8cmと薄く，石核としての剥片剥取はせず，大きな剥離により意識的に湾曲部を作出したような資料といえる。突出部や湾曲部を石器として利用したものと考えられるが，明確な調整痕等は認められない。

9～12は一部に節理面が存在するが，平坦な面を打面としてあらゆる方向から剥片を剥離している。打面調整はほとんどなされていない。12は厚さ2.5cmを計り，上下に節理面を残す。表裏及び両側面から剥片を剥取しているが，内部に2条の節理面を観察できるところから目的とする剥片が得られず放棄したものと考えられる。

13～16は，いわゆる残核で十分剥片を剥離した結果，廃棄されたものである。13の打面部は3㎜程を残すだけとなっている。

17～31も目的を達したものと思われる。しかし17では左側縁に数回の剥離が施され，23では上部左側に抉るように調整が加えられる。いずれも削器のような使用が想定できる。

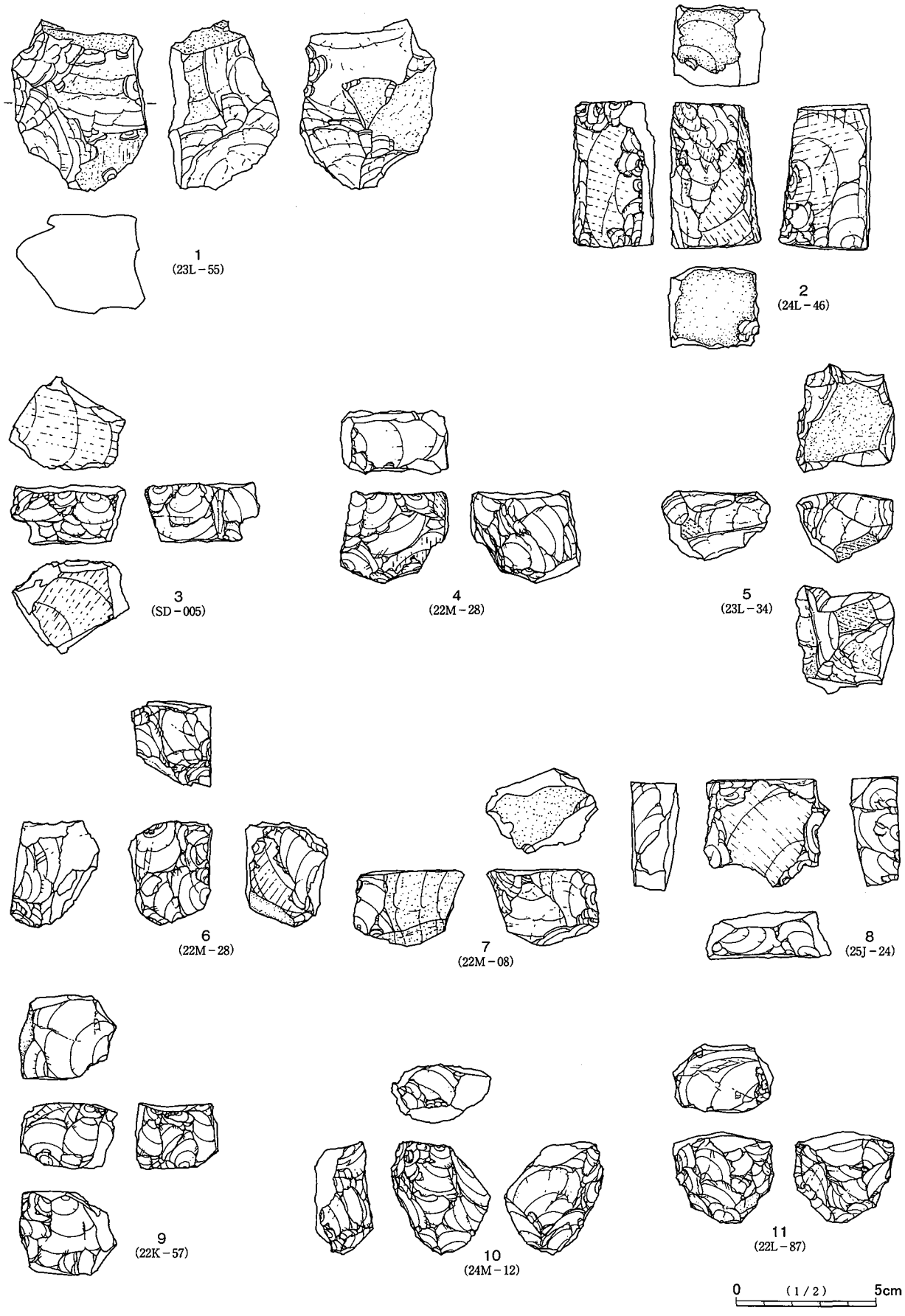
32は，表面に大きな剥離面を残すものであり，裏面は節理面に沿った剥離となる。

33～35は，残核としては比較的形の整ったもので，平坦な節理面が大きく残る。33の表面上部には整形剥離が認められ鋸歯状の刃部を形成する。さらに打面とした平坦部にも微細な調整痕がみられ，石器として使用していたことは確実である。

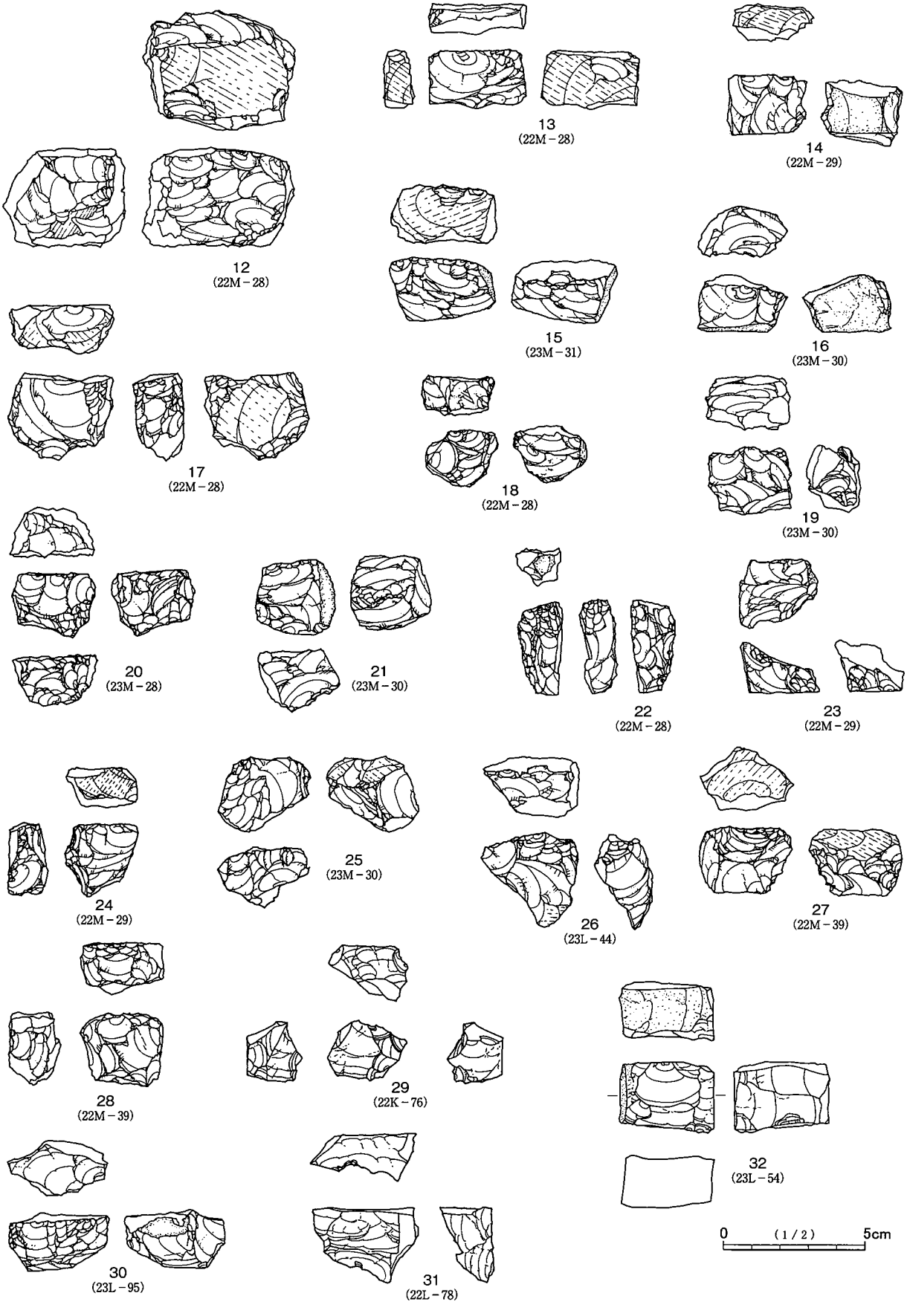
36～47も十分石核としての目的を達したものと思われる。ただ43の裏面右側縁では，やや湾曲した部分に磨耗痕が認められた。

48は剥片ともいえようが，周囲にみられる剥離痕からここに含めた。右側縁上部では，裏面に整形のための剥離を施し，錐状の突起を作出している。この種の石器では湾曲部の使用も考慮する必要があろう。

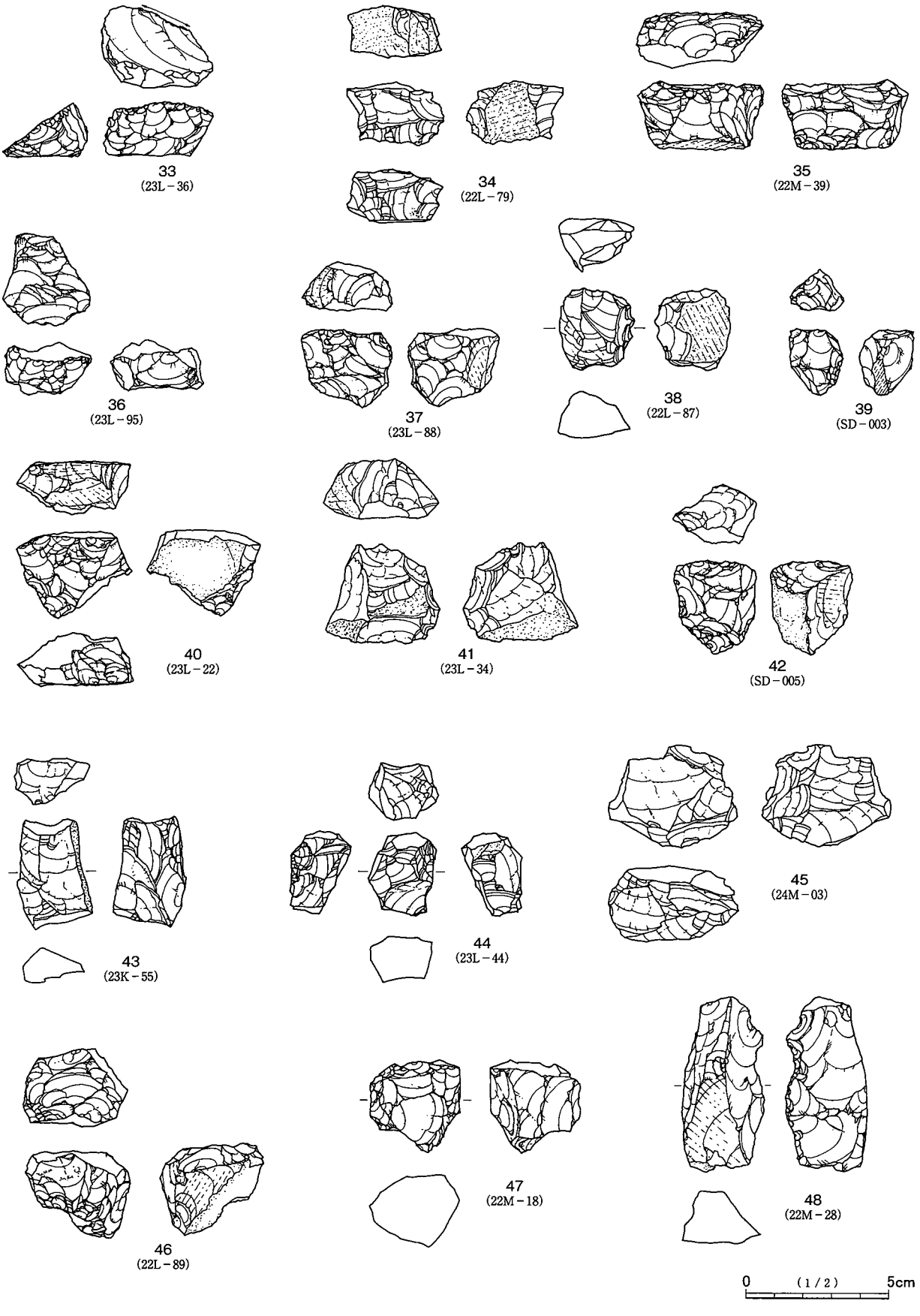
49～51・54・55・59・60・63～65・67～88は剥片剥離を終了し，小型化した残核となろう。これらの中には50のように打面調整が認められる残核も存在する。また，59・63・64などは剥片剥離を兼ねた打面調整とも理解できる。80は残核を分割し，右側縁を調整して石器として使用している。左の側縁にも使用痕



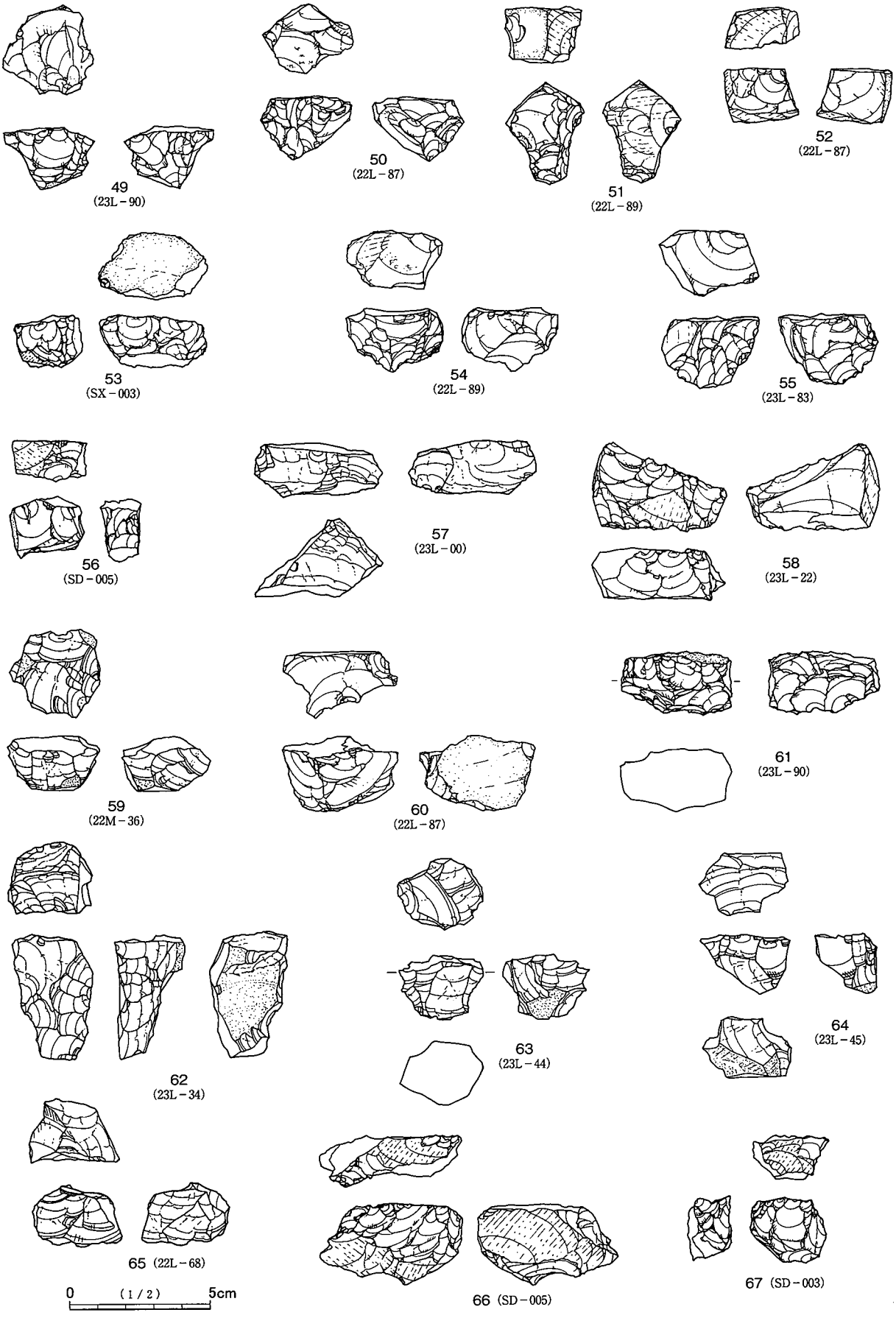

第50図　グリッド出土石器（5）




第51図　グリッド出土石器（6）



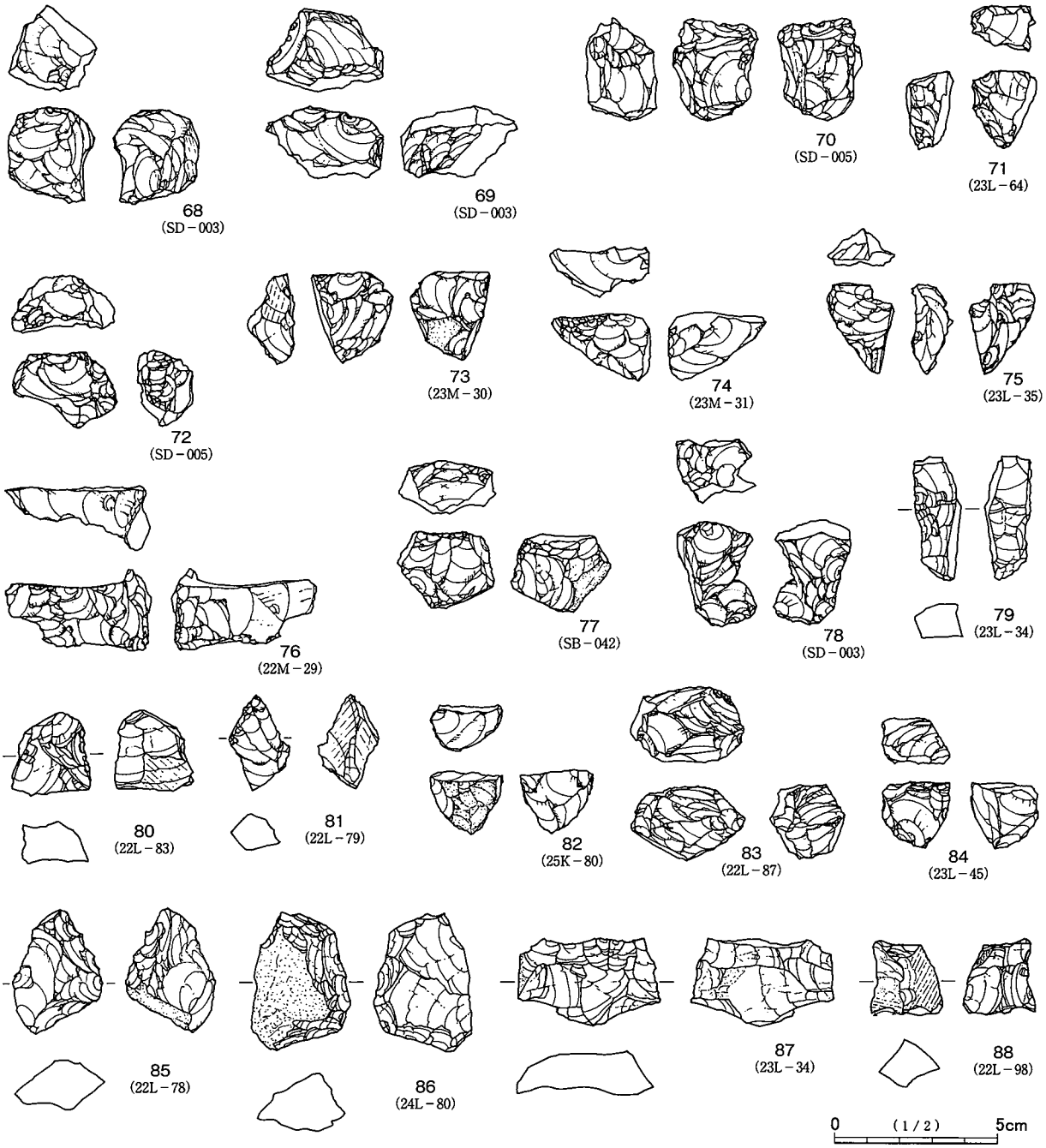

第52図　グリッド出土石器（7）




第53図　グリッド出土石器（8）

らしき痕跡を残す。82は唯一のメノウ製で表面には自然面が認められる。81・84なども貪欲に剥片剥取した結果の残核といえよう。85でみられる裏面の小剥離は打面調整によるもので，加工のための剥離ではない。86の先端部は整形のための剥離で，使用による磨耗痕が認められる。楔的な石器としての使用が考えられる。87は全面に剥離が認められ，裏面上面を打面としている。以上のように，小型化した残核を観察すると，石器製作に適した石質を有している石核については，余すところなく剥片を剥離していたものと理解できる。

52・53・56～58・61・66は主に上下の平坦な面を打面として剥片を剥取しており，52・56は小型化し，いかにも残核を思わせるものである。53の節理面を構成している赤化した異鉱物層は厚く１～２㎜となり，表面と右側面で剥離面が観察できる。57・58も節理面を打面として利用し，58の表面では大きな剥離痕が




第54図　グリッド出土石器（9）

認められる。61は節理面を打面としているものの，下部からの剥離面が目立つ。66の表面観察では，凸凹が著しく良好な剥片が得られたとは思えない石核となる。裏面下端にみられる湾曲部は若干磨耗痕が認められるため使用された可能性が強い。

62は，柱状の石核が裏面の節理面から破損したにもかかわらず，左右両面から隈無く剥片を剥取している。

**磨製石斧（１）**　磨製石斧は唯一，22M－12グリッドから出土したものである。扁平な礫を素材とし，簡単な整形剥離で周囲を整えた後，刃部のみ研磨したものである。石材には安山岩を用いている。

**打製石斧（２～６）**　２は磨耗が著しく，原形が失われている。石材はホルンフェルスで，石質的にも打製とすることが妥当であろう。３は上部が欠損したもので，刃部も若干磨耗している。石材はホルンフェルスである。４はほぼ完形品といえる。右側縁は刃器状の鋭いエッジを有し，庖丁のような用途が想定できる。石材はホルンフェルスで，表面はやや磨耗している。５・６は打製石斧の約1/2が遺存したものである。その形状から分銅形となろう。石材は，５がホルンフェルス，６が石英斑岩である。

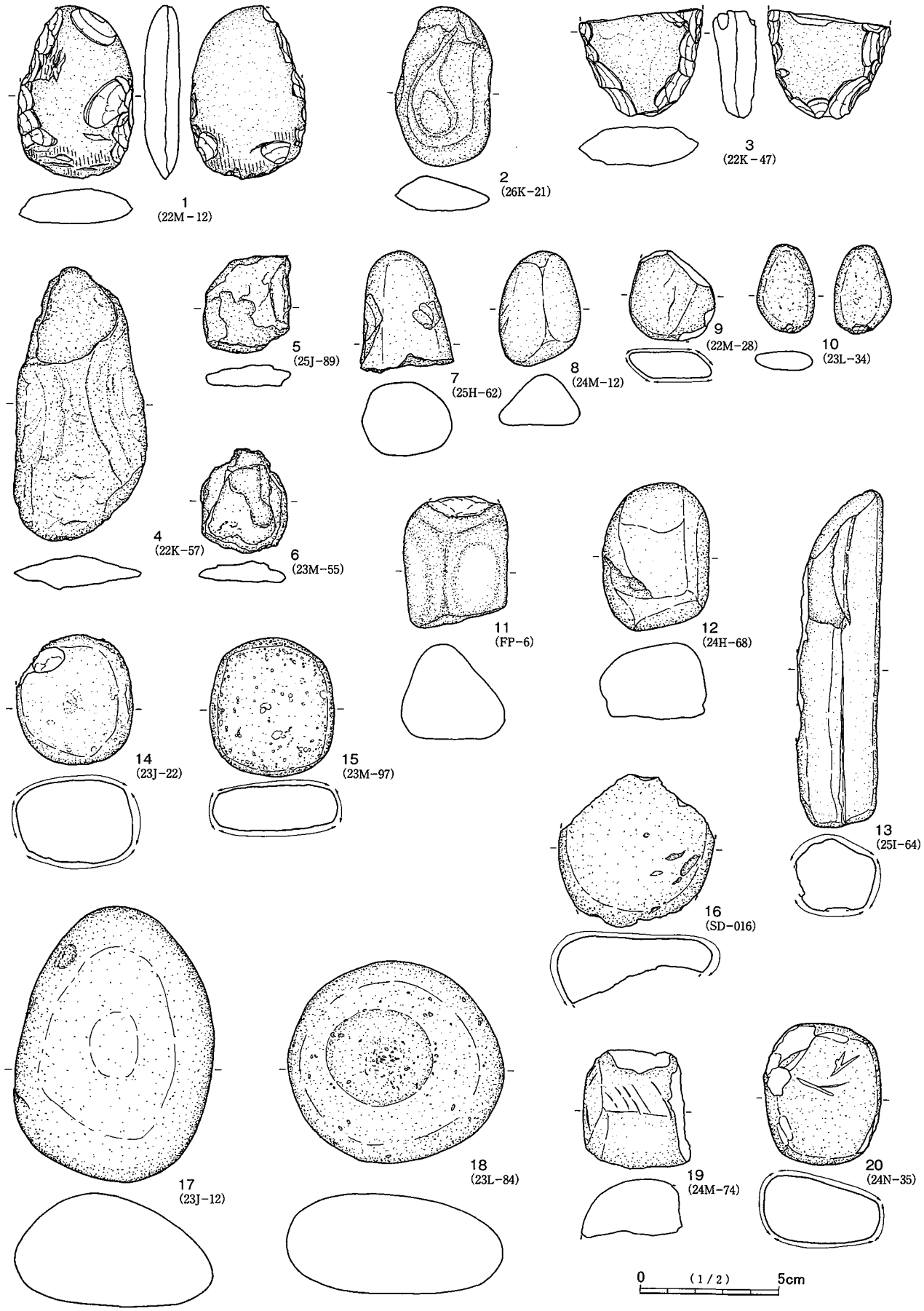
**敲石（７～13）**　７は大半を欠損しており，左側面に打痕が認められる。欠損部での使用痕はみられない。石材は安山岩である。８は完形品で上下両端に若干の打痕が認められる。石材はホルンフェルスである。９は扁平な自然石を利用したもので，一部を欠損する。両端に打痕が認められるが，表面も円滑な面を形成している。石材は安山岩である。10は小形で扁平な自然石で，下端部に敲打の痕跡をのこす。石材は緑泥片岩である。11は欠損した礫の欠損部を使用したもので，下部の面は磨耗が著しい。磨石との兼用であろう。石材は閃緑斑岩である。12は完形品で，表裏面の中央部と左側面に打痕が認められる。石材はチャートである。13は柱状の敲石で，上下の端部を使用しており，下部は平坦な面を形成する。また右側面は使用により磨耗し滑らかな面を呈している。石材は黒雲母片麻岩である。

**磨石（14～26）**　14・15は長期にわたって使用されたものであろう。14は丸味を帯び，上部が一部欠損する。被熱によるものであろう。石材は安山岩である。15は側面が平坦に変形している。石材は多孔質安山岩である。16は，約1/3が欠損しているもので，表面が若干磨耗している。石材は砂岩である。17・18はともに完形品で，表裏の中央部は滑らかな面を呈している。17が石英斑岩，18は安山岩である。

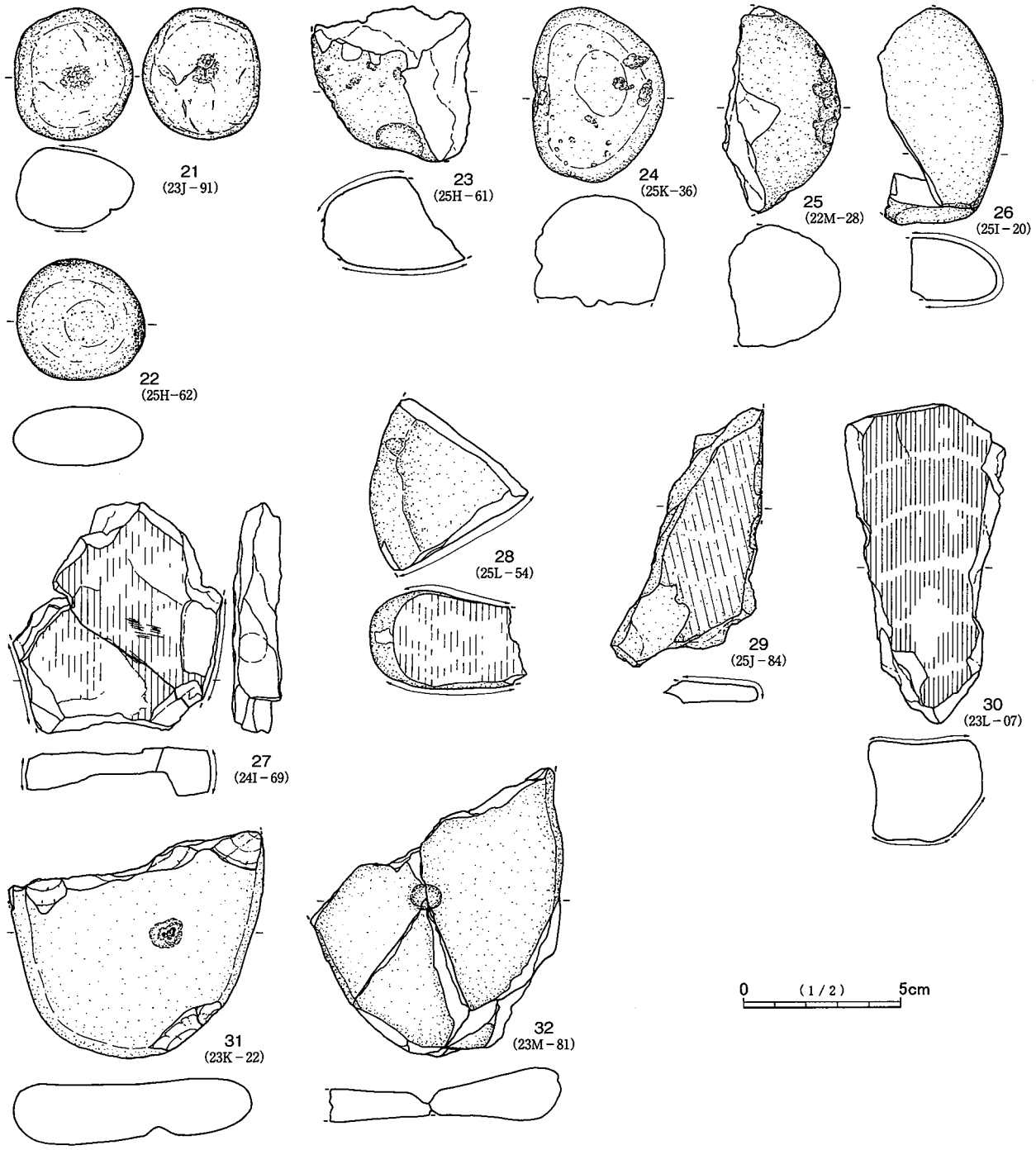
19は左側面での使用が著しく滑らかな面を形成し，破損した右側面では打痕が認められる。石材は安山岩である。20は上部を若干欠損するが，表裏側面ともに顕著な使用が認められる。石材は黒雲母花崗岩である。21は完形品で，中央部に打痕を残す。石材はチャートで，表面観察からはいかにも堅固な感じを受ける。22も完形品であるが，表面は円滑な面を形成しており敲打による使用痕は側面に認められる。石材は石英斑岩である。23は1/4ほどが遺存したもので，表裏面は使用の痕跡が顕著であった。石材は安山岩である。24は裏面が欠損しているが，周囲は使用による磨耗が認められる。石材は安山岩である。25は約1/3が遺存するものであり，表面は磨耗が著しい。原形はかなり大形のものであったと思われる。石材は砂岩である。26はSI－114の覆土内から出土したもので，３点が接合した。使用痕は明確ではないが，表面は滑らかな面となっている。石材は安山岩である。

**砥石（27～29）**　27は平坦な破損面を砥石として用いたものである。時期的に縄文期とする積極的な根拠はない。石材は砂岩である。28は石皿の破片で，側面を砥石に再利用したものである。これもSI－236から出土している。石材は砂岩である。29は表面のみに滑らかな研磨痕が認められる。石材は緑泥片岩である。石斧の素材とも考えられるが，縄文期の所産とする積極的な根拠はない。

**石皿（30～32）**　30は大型品の一部である。表面と裏面の一部に円滑な面を有している。その大きさから




第55図　グリッド出土石器（10）




第56図　グリッド出土石器（11）

台石としての使用も考えられる。石材は閃緑岩である。31は欠損品ではあるが，形状の整った石皿である。裏面には凹部が１か所認められる。石材は安山岩である。32は緑泥片岩製で，周囲を整形しつつ楕円状に加工し石皿としての形状を整えている。表裏に１か所づつ凹部が認められ，中央部は僅かではあるが，使用により湾曲している。

## 第３表　縄文時代土坑・陥穴等観察表

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 長径[m] | 短径[m] | 深さ[m] | 壁[形状] | 位置[グリッド] | 出土(実測)遺物 | 備考 重複[旧][新] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-001 | 第31図 | - | 縄文後期 | 楕円 | 3.1 | 2.6 | 0.2 | 急 | 23K-84 | 深鉢1 | 単独 |
| SK-033 | 第31図 | 16 | 縄文 | 長楕円 | 4.1 | 1.0 | 1.4 | 急 | 23J-42 | − | 単独,陥穴 |
| SK-034 | 第28図 | 16 | 縄文 | 長楕円 | 3.6 | 0.8 | 1.3 | 急緩 | 24K-62 | − | 単独,陥穴 |
| SK-038 | 第31図 | - | 縄文 | 楕円 | 1.0 | 0.7 | 0.3 | 緩急 | 25K-59 | − | 単独 |
| SK-057 | 第28図 | - | 縄文 | 長楕円 | (1.9) | 0.8 | 0.9 | 直 | 25K-07 | − | SI-083,陥穴 |
| SK-104 | 第31図 | - | 縄文 | 円 | 1.3 | 1.1 | 0.3 | 緩 | 22K-99 | 貝少量 | 単独,土坑 |
| SK-114 | 第28図 | 16 | 縄文 | 楕円 | 2.3 | 1.7 | 2.3 | 急 | 22M-28 | − | SI-151,陥穴 |
| SK-233 | 第31図 | - | 縄文 | 不整楕円 | 2.8 | 1.9 | 0.6 | 直急 | 25H-91 | − | 単独 |
| SK-254 | 第31図 | - | 縄文 | 楕円 | 2.3 | 1.3 | 0.5 | 緩 | 24M-50 | − | 単独 |
| SK-271 | 第28図 | 16 | 縄文 | 細長楕円 | 3.5 | 0.4 | 1.0 | 緩 | 24M-10 | − | SI-196,陥穴 |
| SK-272 | - | - | 縄文 | 円 | 0.9 | 0.8 | − | − | 23L-34 | − | SI-272,土坑,平面図なし |
| SK-274 | 第28図 | - | 縄文 | 隅丸方 | 1.5 | 1.4 | 1.8 | 直 | 23M-24 | − | SI-025,陥穴 |
| SK-283 | 第28図 | 17 | 縄文 | 細長楕円 | 3.7 | 0.7 | 1.3 | 直 | 24K-28 | − | 単独,陥穴 |
| SK-284 | 第29図 | 17 | 縄文 | 細長楕円 | 3.6 | 0.5 | 1.0 | 直 | 24K-49 | − | 単独,陥穴 |
| SK-285 | 第29図 | 17 | 縄文 | 細長楕円 | 3.5 | 0.6 | 0.8 | 直 | 24K-57 | − | 単独,陥穴 |
| SK-286 | 第29図 | 17 | 縄文 | 細長楕円 | 3.2 | 0.8 | 0.3 | 直 | 24K-58 | − | 単独,陥穴 |
| SK-288 | 第29図 | 17 | 縄文 | 細長楕円 | 2.9 | 0.5 | 0.8 | 直 | 24K-39 | − | 単独,陥穴 |
| SK-289 | 第29図 | 17 | 縄文 | 細長楕円 | (1.9) | 0.4 | 1.1 | 直 | 24K-59 | − | SI-239,陥穴 |
| SK-290 | 第29図 | 17 | 縄文 | 細長楕円 | (3.6) | 0.8 | 1.2 | 緩 | 24L-04 | − | 単独,陥穴 |
| SK-291 | 第29図 | 17 | 縄文 | 楕円 | 3.4 | 0.9 | 1.4 | 緩 | 24K-85 | − | 単独,陥穴 |
| SK-302 | 第29図 | 17 | 縄文 | 細長楕円 | 3.4 | 0.9 | 1.1 | 緩 | 24K-87 | − | 単独 |
| SK-303 | 第30図 | 18 | 縄文 | 細長楕円 | 3.3 | 0.6 | 1.1 | 緩 | 24K-87 | − | 単独 |
| SK-320 | 第30図 | 18 | 縄文 | 隅丸長方 | 1.9 | 1.1 | 0.8 | 直 | 25N-22 | − | 陥穴 |
| SK-321 | 第30図 | 18 | 縄文 | 楕円 | 1.4 | 1.1 | 1.6 | 直 | 24M-90 | − | 陥穴 |

## 第４表　縄文時代石器一覧表

| 挿図番号 | 器　種 | 石　材 | 現重量(g) | 出土地点 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第46図-1 | 有舌尖頭器 | 黒色頁岩 | 6.32 | SI-092 | 29 |
| 第46図-2 | 有舌尖頭器 | 珪質頁岩 | 1.97 | SI-245 | 96 |
| 第46図-3 | 石鏃 | チャート | 1.51 | 21L-38 | 1 |
| 第46図-4 | 石鏃 | 玄武岩 | 1.25 | 24M-50 | 1 |
| 第46図-5 | 石鏃 | チャート | 0.69 | SI-263 | 2 |
| 第46図-6 | 石鏃 | チャート | 0.36 | SI-263 | 3 |
| 第46図-7 | 石鏃 | 黒曜石 | 1.11 | SI-024 | 29 |
| 第46図-8 | 石鏃 | チャート | 0.91 | SB-033 | 2 |
| 第46図-9 | 石鏃 | 黒曜石 | 0.62 | SI-032 | 2 |
| 第46図-10 | 石鏃 | 黒曜石 | 0.99 | 23K-33 | 1 |
| 第46図-11 | 石鏃 | 黒色頁岩 | 1.43 | 23K-55 | 16 |
| 第46図-12 | 削器 | 黒曜石 | 5.42 | 表採 | |
| 第46図-13 | 削器 | メノウ | 8.07 | SD-005 | 6 |
| 第46図-14 | 削器 | 黒曜石 | 10.99 | SI-245 | 2 |
| 第46図-15 | 掻器 | 黒曜石 | 0.68 | 25K-70 | 23 |
| 第46図-16 | 掻器 | チャート | 5.13 | 22L-70~84 | 1c |
| 第46図-17 | 石錐 | チャート | 2.28 | 22L-70~84 | 1g |
| 第46図-18 | 石錐 | チャート | 3.04 | SD-003 | 6b |
| 第46図-19 | 石鏃未製品 | チャート | 1.88 | SI-005 | 65 |
| 第46図-20 | 石鏃未製品 | ガラス質黒色安山岩 | 3.40 | SI-005 | 62 |
| 第46図-21 | 石鏃未製品 | チャート | 0.88 | SD-003 | 7 |
| 第46図-22 | 石鏃未製品 | チャート | 0.86 | SD-003 | 6c |
| 第46図-23 | 石鏃未製品 | チャート | 1.69 | SI-020 | 60 |

| 挿図番号 | 器　種 | 石　材 | 現重量(g) | 出土地点 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第46図-24 | 石鏃未製品 | チャート | 2.65 | SI-146 | 1 |
| 第46図-25 | 石鏃未製品 | チャート | 2.26 | SI-146 | |
| 第46図-26 | 石鏃未製品 | チャート | 0.84 | SI-009 | 12 |
| 第46図-27 | 石鏃未製品 | チャート | 3.18 | SI-249 | 11 |
| 第46図-28 | 石鏃未製品 | チャート | 3.09 | 23L-22 | 1 |
| 第46図-29 | 剥片 | チャート | 1.70 | SD-003 | 6a |
| 第46図-30 | 剥片 | チャート | 3.34 | SD-020 | 11 |
| 第46図-31 | 石鏃未製品 | チャート | 2.09 | SI-199 | 49 |
| 第46図-32 | 石鏃未製品 | チャート | 1.69 | SD-003 | |
| 第46図-33 | 石鏃未製品 | チャート | 2.07 | 23L-45 | 19 |
| 第47図-34 | 石鏃未製品 | チャート | 1.72 | 23L-55 | 5 |
| 第47図-35 | 剥片 | チャート | 5.46 | 22L-97 | 10 |
| 第47図-36 | 剥片 | チャート | 6.16 | SI-155 | |
| 第47図-37 | 剥片 | チャート | 6.91 | SD-003 | |
| 第47図-38 | 剥片 | チャート | 4.72 | SI-154 | |
| 第47図-39 | 剥片 | チャート | 2.52 | 23L-24 | 5 |
| 第47図-40 | 剥片 | チャート | 1.76 | 23M-00 | 1 |
| 第47図-41 | 剥片 | 黒曜石 | 1.89 | SI-204 | 225 |
| 第47図-42 | 剥片 | チャート | 6.77 | 22K-39 | 1 |
| 第47図-43 | 剥片 | チャート | 3.63 | SI-141 | |
| 第47図-44 | 剥片 | チャート | 1.65 | 22L-98 | 42 |
| 第47図-45 | 剥片 | チャート | 5.47 | 23M-61 | 1 |
| 第47図-46 | 剥片 | チャート | 9.76 | 23L-44 | 43a |

| 挿図番号 | 器　種 | 石　材 | 現重量(g) | 出土地点 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第47図-47 | 剥片 | チャート | 2.28 | 23L-54 | 36 |
| 第47図-48 | 剥片 | チャート | 1.95 | SI-153 | |
| 第47図-49 | 剥片 | チャート | 1.83 | 23L-45 | 1d |
| 第47図-50 | 剥片 | チャート | 2.16 | 23L-45 | 1e |
| 第47図-51 | 剥片 | チャート | 2.26 | 23L-44 | 25 |
| 第47図-52 | 剥片 | チャート | 2.13 | 23L-44 | 2 |
| 第47図-53 | 剥片 | チャート | 1.51 | 23L-44 | 51 |
| 第47図-54 | 剥片 | チャート | 1.67 | 23L-44 | 45b |
| 第47図-55 | 剥片 | チャート | 3.42 | 23L-54 | 12 |
| 第47図-56 | 剥片 | チャート | 4.12 | 23L-34 | 59a |
| 第47図-57 | 剥片 | 硬質頁岩 | 1.11 | 23L-54 | 26 |
| 第47図-58 | 剥片 | チャート | 2.33 | 23L-34 | 77a |
| 第47図-59 | 剥片 | チャート | 7.20 | 23L-45 | 55 |
| 第47図-60 | 剥片 | チャート | 2.93 | SI-155 | |
| 第47図-61 | 剥片 | チャート | 1.23 | 22L-98 | 13 |
| 第47図-62 | 剥片 | チャート | 0.69 | SK-139 | |
| 第47図-63 | 剥片 | チャート | 1.11 | 23L-54 | 20 |
| 第48図-64 | 剥片 | チャート | 1.66 | SI-171 | 201 |
| 第48図-65 | 剥片 | チャート | 0.95 | SK-103 | |
| 第48図-66 | 剥片 | チャート | 2.25 | 23L-64 | 1a |
| 第48図-67 | 剥片 | チャート | 1.89 | 23L-64 | 1b |
| 第48図-68 | 剥片 | チャート | 1.43 | 23L-44 | 27 |
| 第48図-69 | 剥片 | チャート | 0.88 | 23L-34 | 35 |
| 第48図-70 | 剥片 | チャート | 0.90 | 23L-64 | 1c |
| 第48図-71 | 剥片 | チャート | 1.56 | 23L-44 | 5 |
| 第48図-72 | 剥片 | チャート | 0.74 | 23L-55 | 28 |
| 第48図-73 | 剥片 | チャート | 2.37 | 24L-20 | 1 |
| 第48図-74 | 剥片 | チャート | 1.20 | 23L-45 | 21 |
| 第48図-75 | 剥片 | チャート | 3.80 | 23L-54 | 27 |
| 第48図-76 | 剥片 | チャート | 5.51 | SI-175 | 43 |
| 第48図-77 | 剥片 | 黒曜石 | 1.44 | SD-005 | |
| 第48図-78 | 剥片 | 黒曜石 | 0.36 | SI-245 | |
| 第48図-79 | 剥片 | チャート | 3.67 | 23L-44 | 56 |
| 第48図-80 | 剥片 | チャート | 0.79 | 23L-34 | 77b |
| 第48図-81 | 剥片 | チャート | 0.91 | SI-263 | 4 |
| 第48図-82 | 剥片 | チャート | 1.41 | SI-151 | |
| 第48図-83 | 剥片 | チャート | 1.18 | 22L-70~84 | 1i |
| 第48図-84 | 剥片 | チャート | 4.17 | 23L-36 | 1a |
| 第48図-85 | 剥片 | チャート | 2.78 | 23L-34 | 83 |
| 第48図-86 | 剥片 | 黒曜石 | 1.11 | SD-005 | |
| 第48図-87 | 剥片 | 黒曜石 | 0.51 | SI-132 | |
| 第49図-88 | 剥片 | チャート | 18.39 | SI-132 | |
| 第49図-89 | 剥片 | チャート | 14.87 | SI-049 | 77 |
| 第49図-90 | 剥片 | 硬質頁岩 | 3.59 | SB-016 | 2 |
| 第49図-91 | 剥片 | 黒曜石 | 4.82 | SI-182 | 20 |
| 第49図-92 | 剥片 | チャート | 15.81 | SI-132 | |

| 挿図番号 | 器　種 | 石　材 | 現重量(g) | 出土地点 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第49図-93 | 剥片 | チャート | 5.61 | 23L-34 | 38 |
| 第49図-94 | 剥片 | メノウ | 2.98 | SI-171 | 65 |
| 第49図-95 | 剥片 | チャート | 6.54 | 22L-98 | 23 |
| 第49図-96 | 剥片 | チャート | 17.75 | SI-192 | 3 |
| 第49図-97 | 剥片 | チャート | 4.53 | 23L-34 | 63a |
| 第49図-98 | 剥片 | 黒曜石 | 4.51 | SI-197 | 1 |
| 第49図-99 | 剥片 | チャート | 3.54 | 23L-45 | 13 |
| 第49図-100 | 剥片 | チャート | 4.58 | SI-156 | |
| 第49図-101 | 剥片 | チャート | 5.62 | 23L-34 | 71a |
| 第49図-102 | 剥片 | チャート | 5.69 | 23L-44 | 35 |
| 第50図-1 | 石核 | チャート | 53.32 | 23L-55 | 18 |
| 第50図-2 | 石核 | チャート | 38.30 | SI-219 | 2 |
| 第50図-3 | 石核 | チャート | 14.88 | SD-005 | |
| 第50図-4 | 石核 | チャート | 18.75 | SI-151 | |
| 第50図-5 | 石核 | チャート | 16.25 | 23L-34 | 11 |
| 第50図-6 | 石核 | チャート | 16.93 | SI-151 | |
| 第50図-7 | 石核 | チャート | 13.67 | 22M-08 | 1 |
| 第50図-8 | 石核 | チャート | 16.75 | SI-094 | 59 |
| 第50図-9 | 石核 | チャート | 14.69 | SI-030 | 9 |
| 第50図-10 | 石核 | チャート | 13.48 | SI-192 | 2 |
| 第50図-11 | 石核 | チャート | 14.30 | SI-146 | |
| 第51図-12 | 石核 | チャート | 50.79 | SI-151 | 51 |
| 第51図-13 | 石核 | チャート | 4.25 | SI-151 | |
| 第51図-14 | 石核 | チャート | 4.18 | SI-155 | |
| 第51図-15 | 石核 | チャート | 8.60 | SI-153 | |
| 第51図-16 | 石核 | チャート | 5.47 | SI-154 | |
| 第51図-17 | 石核 | チャート | 9.89 | SI-151 | |
| 第51図-18 | 石核 | チャート | 3.65 | SI-151 | |
| 第51図-19 | 石核 | チャート | 7.09 | SI-152 | |
| 第51図-20 | 石核 | チャート | 6.59 | SI-151 | |
| 第51図-21 | 石核 | チャート | 6.96 | SI-152 | |
| 第51図-22 | 石核 | チャート | 3.20 | SI-151 | |
| 第51図-23 | 石核 | チャート | 4.43 | SI-155 | |
| 第51図-24 | 石核 | チャート | 4.61 | SI-155 | |
| 第51図-25 | 石核 | チャート | 7.04 | SI-152 | |
| 第51図-26 | 石核 | チャート | 9.04 | 23L-44 | 49 |
| 第51図-27 | 石核 | チャート | 7.01 | SI-156 | |
| 第51図-28 | 石核 | チャート | 7.87 | SI-156 | |
| 第51図-29 | 石核 | チャート | 4.61 | 22K-76 | 1 |
| 第51図-30 | 石核 | チャート | 6.12 | SI-207 | |
| 第51図-31 | 石核 | チャート | 6.07 | 22L-78 | 11 |
| 第51図-32 | 石核 | チャート | 12.23 | 23L-54 | 38 |
| 第52図-33 | 石核 | チャート | 7.91 | SI-200 | 1 |
| 第52図-34 | 石核 | チャート | 6.16 | 22L-79 | 2 |
| 第52図-35 | 石核 | チャート | 10.68 | SI-156 | |
| 第52図-36 | 石核 | チャート | 7.24 | SI-207 | 4 |

| 挿図番号 | 器　種 | 石　材 | 現重量(g) | 出土地点 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第52図-37 | 石核 | チャート | 7.16 | SI-194 | 3 |
| 第52図-38 | 石核 | チャート | 5.93 | 22L-87 | 5 |
| 第52図-39 | 石核 | チャート | 2.47 | SD-003 | |
| 第52図-40 | 石核 | チャート | 9.93 | SK-103 | |
| 第52図-41 | 石核 | チャート | 13.01 | 23L-34 | 88 |
| 第52図-42 | 石核 | チャート | 8.20 | SD-005 | |
| 第52図-43 | 石核 | チャート | 6.51 | 23K-55 | 1a |
| 第52図-44 | 石核 | チャート | 6.54 | 23L-44 | 26 |
| 第52図-45 | 石核 | チャート | 18.02 | SI-171 | 8 |
| 第52図-46 | 石核 | チャート | 13.86 | SI-148 | 29 |
| 第52図-47 | 石核 | チャート | 11.93 | SI-147 | |
| 第52図-48 | 石核 | チャート | 15.28 | SI-151 | |
| 第53図-49 | 石核 | チャート | 8.39 | SI-149 | |
| 第53図-50 | 石核 | チャート | 6.50 | SI-146 | |
| 第53図-51 | 石核 | チャート | 8.93 | SI-142 | |
| 第53図-52 | 石核 | チャート | 4.40 | SI-146 | |
| 第53図-53 | 石核 | チャート | 8.99 | SX-003 | |
| 第53図-54 | 石核 | チャート | 7.24 | SI-142 | |
| 第53図-55 | 石核 | チャート | 9.52 | SI-138 | 4 |
| 第53図-56 | 石核 | チャート | 4.75 | SD-005 | |
| 第53図-57 | 石核 | チャート | 9.55 | 23L-00 | 2a |
| 第53図-58 | 石核 | チャート | 12.46 | SK-103 | |
| 第53図-59 | 石核 | チャート | 9.01 | 22M-36 | 10 |
| 第53図-60 | 石核 | チャート | 9.50 | SI-146 | |
| 第53図-61 | 石核 | チャート | 11.43 | SI-149 | |
| 第53図-62 | 石核 | チャート | 12.09 | 23L-34 | 7 |
| 第53図-63 | 石核 | チャート | 6.73 | 23L-44 | 45a |
| 第53図-64 | 石核 | チャート | 5.43 | 23L-45 | 1b |
| 第53図-65 | 石核 | チャート | 6.34 | 22L-68 | 1a |
| 第53図-66 | 石核 | チャート | 9.96 | SD-005 | 15 |
| 第53図-67 | 石核 | チャート | 4.93 | SD-003 | |
| 第54図-68 | 石核 | チャート | 8.19 | SD-003 | |
| 第54図-69 | 石核 | チャート | 7.76 | SD-003 | |
| 第54図-70 | 石核 | チャート | 8.88 | SD-005 | |
| 第54図-71 | 石核 | チャート | 2.92 | 23L-64 | 6 |
| 第54図-72 | 石核 | チャート | 4.70 | SD-005 | |
| 第54図-73 | 石核 | チャート | 3.57 | SI-154 | |
| 第54図-74 | 石核 | チャート | 2.93 | SI-153 | 4 |
| 第54図-75 | 石核 | チャート | 1.91 | 23L-35 | 27 |
| 第54図-76 | 石核 | チャート | 5.94 | SI-155 | |
| 第54図-77 | 石核 | チャート | 5.18 | SB-042 | 2 |
| 第54図-78 | 石核 | チャート | 5.28 | SD-003 | |

| 挿図番号 | 器　種 | 石　材 | 現重量(g) | 出土地点 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第54図-79 | 石核 | チャート | 2.53 | 23L-34 | 50 |
| 第54図-80 | 石核 | チャート | 3.74 | 22L-83 | 24 |
| 第54図-81 | 石核 | チャート | 1.76 | SI-143 | |
| 第54図-82 | 石核 | メノウ | 2.28 | SI-245 | 1 |
| 第54図-83 | 石核 | チャート | 7.66 | SI-146 | 5 |
| 第54図-84 | 石核 | チャート | 2.86 | 23L-45 | 11 |
| 第54図-85 | 石核 | チャート | 5.97 | SI-141 | |
| 第54図-86 | 石核 | チャート | 10.02 | SI-190 | 10 |
| 第54図-87 | 石核 | チャート | 7.49 | 23L-34 | 67 |
| 第54図-88 | 石核 | チャート | 3.10 | 22L-98 | 14 |
| 第55図-1 | 磨製石斧 | 安山岩 | 158.00 | 22M-12 | 2 |
| 第55図-2 | 打製石斧 | ホルンフェルス | 103.00 | SI-061 | 77 |
| 第55図-3 | 打製石斧 | ホルンフェルス | 97.00 | 22K-47 | 1 |
| 第55図-4 | 打製石斧 | ホルンフェルス | 228.00 | 22K-57 | 1 |
| 第55図-5 | 打製石斧 | ホルンフェルス | 37.00 | SI-082 | 16 |
| 第55図-6 | 打製石斧 | 石英斑岩 | 157.00 | 23M-55 | 1 |
| 第55図-7 | 敲石 | 安山岩 | 100.00 | 25H-62 | 1 |
| 第55図-8 | 敲石 | ホルンフェルス | 50.00 | SI-192 | 62 |
| 第55図-9 | 敲石 | 安山岩 | 24.00 | SI-151 | 145 |
| 第55図-10 | 敲石 | 緑泥片岩 | 39.00 | 23L-34 | 43 |
| 第55図-11 | 敲石 | 閃緑斑岩 | 300.00 | FP-006 | 1 |
| 第55図-12 | 敲石 | チャート | 308.00 | 24H-68 | 1 |
| 第55図-13 | 敲石 | 黒雲母片麻岩 | 480.00 | SI-104 | 82 |
| 第55図-14 | 磨石 | 安山岩 | 292.00 | SI-033 | 41 |
| 第55図-15 | 磨石 | 多孔質安山岩 | 186.00 | SI-261 | 26 |
| 第55図-16 | 磨石 | 砂岩 | 219.00 | SD-016 | 5 |
| 第55図-17 | 磨石 | 石英斑岩 | 1250.00 | SK-018 | 1 |
| 第55図-18 | 磨石 | 安山岩 | 980.00 | 23L-84 | 1 |
| 第55図-19 | 磨石 | 安山岩 | 142.00 | SI-178 | 106 |
| 第55図-20 | 磨石 | 黒雲母花崗岩 | 291.00 | SI-255 | 1 |
| 第56図-21 | 磨石 | チャート | 190.00 | 23J-91 | 1 |
| 第56図-22 | 磨石 | 石英斑岩 | 259.00 | 25H-62 | 1 |
| 第56図-23 | 磨石 | 安山岩 | 350.00 | 25H-61 | 1 |
| 第56図-24 | 磨石 | 安山岩 | 360.00 | SI-064 | 37 |
| 第56図-25 | 磨石 | 砂岩 | 197.00 | SI-151 | 11 |
| 第56図-26 | 磨石 | 安山岩 | 141.00 | SI-114 | 42 |
| 第56図-27 | 砥石 | 砂岩 | 246.00 | SI-114 | 1 |
| 第56図-28 | 砥石(石皿) | 砂岩 | 306.00 | SI-236 | 1 |
| 第56図-29 | 砥石 | 緑泥片岩 | 135.00 | SI-084 | 8 |
| 第56図-30 | 石皿 | 閃緑岩 | 1850.00 | SI-131 | 27 |
| 第56図-31 | 石皿 | 安山岩 | 1290.00 | SI-028 | 11 |
| 第56図-32 | 石皿 | 緑泥片岩 | 1020.00 | SI-157 | 21 |

# 第４章　弥生時代・古墳時代

## 第１節　概要

本遺跡において検出された弥生時代に属する遺構としては，竪穴住居跡２軒（SI－032・SI－122）のみがあげられ，その他の遺構の検出はない。また，遺物についてみると，住居跡内出土の遺物は極端に少なく，グリッド出土の遺物をみても同時期に属する遺物は皆無である。検出された２軒の住居跡は，台地中央部に北から南に侵入する支谷により，東西に分割されたそれぞれの台地の北端部に位置する。住居跡の帰属時期については出土遺物が僅少のため詳細には不明な点が多いが，住居形態等からSI－122が弥生後期から終末期，SI－032が弥生終末期から古墳時代初頭に比定できるものと考える。

古墳時代に属する遺構としては，竪穴住居跡11軒（SI－029・SI－044・SI－051・SI－066・SI－079・SI－083・SI－084・SI－115・SI－116・SI－227・SI－242）と古墳２基（SX－001・SX－005）があげられる。古墳は２基ともに円墳で，すでに墳丘部は削平され周溝のみの検出にとどまり，主体部は検出されなかった。古墳は支谷により分割された西側台地の中央部に位置し，住居跡は東側台地を主体に位置する。住居跡11軒と古墳２基の帰属時期については，出土遺物及び周辺遺跡の状況から古墳後期に比定できると考える。

## 第２節　竪穴住居跡

計測値等の表記について，規模で長さとしたものは主軸長，幅は副軸長である。主軸方向とは，原則としてカマドに対面する辺から直交してカマド中心に向かう方向とし，北からの方位を観察表に記載した。副軸は主軸に対して直交する方向とした。数値は壁上端間のものであるが，カマドのあるものについては，その突出部を含めない計測値である。なお，以上は奈良・平安時代の竪穴住居跡についても同様である。

### SI－032（第57図，図版19）

**位置**　調査区西側台地北端部の23J－11グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さ3.2m，幅3.1mの隅丸方形をなす。確認面からの深さは10cm前後と浅く，壁は緩やかに立ち上がり，壁溝はない。

**床面**　ほぼ平坦で，硬化面はない。

**柱穴**　３か所検出された。床面からの深さはP1・P2で31cm～34cmを測るが，南東隅のP3については16cmと浅く柱穴ではない可能性もある。

**炉**　東壁際のほぼ中央に位置する。平面形は長さ45cm，幅35cmの楕円形を呈し，堀方は中央部で最深10cmを測り，レンズ状を呈す。焼土はわずかにみられるのみである。

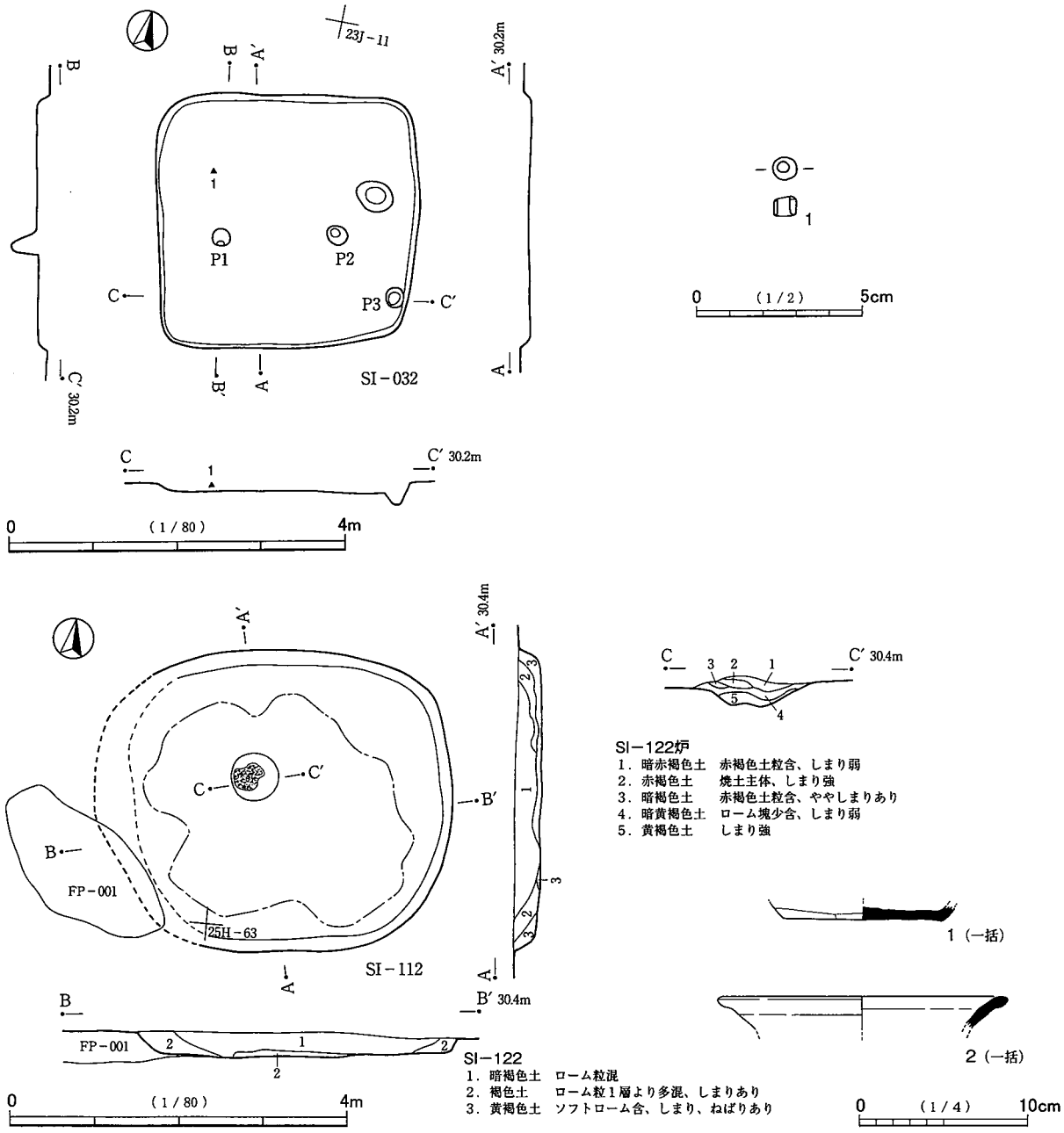
**堆積土**　暗褐色土主体である。

**出土遺物**　図示できた遺物は滑石製の臼玉１点のみである。片面には未加工の部分が認められ，管玉から臼玉に再加工したと思われる。その他の遺物は流れ込みの土師器小片が数点出土したのみである。

### SI－122（第57図，図版19）

**位置**　調査区東側台地北端部の25H－53グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さ4.3m，幅3.6mの楕円形をなす。確認面からの深さは30cm前後で，壁は緩やかに立ち




第57図　SI－032・122

上がり，壁溝はない。

床面　ほぼ平坦で，床面中央の炉を中心にアメーバー状に硬化している。

柱穴　なし

炉　床面中央に位置する。平面形は径57cmの円形を呈し，堀方は中央やや北よりで最深10cmを測り，底面中央部がやや高まっている。焼土はやや厚めでしまりは強い。

堆積土　暗褐色土主体で，自然堆積と思われる。

出土遺物　本跡に伴う遺物は皆無で，流れ込みの土師器・須恵器の小片が十数点出土したのみである。図示できた遺物は須恵器片２点で，１は産地不明の杯底部片，２は東海産の甕口縁部片である。いずれも一括取り上げである。

重複遺構　縄文早期の炉穴FP－001を切っている。

SI－029（第58・59図，図版21）

位置　調査区西側台地北東部の23J－85グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さ6.0m，幅6.0mの方形をなす。確認面からの深さは50cm前後で，壁は直に立ち上がりる。壁溝は北東隅にある貯蔵穴周辺で途切れる以外はほぼ全周する。

床面　若干の凹凸はみられるが，ほぼ平坦といえる。硬化面は特に認められないが，床面積は33.11㎡と大きく，本遺跡検出住居跡の中では大規模住居といえる。カマドに対向する南壁中央下に深さ30cm前後の出入口ピットが検出された。

柱穴　4か所検出された。床面からの深さは60cm～85cmを測り，いずれも大きく深く掘り込まれている。4か所とも柱の抜き取り穴が認められる。

貯蔵穴　カマド右袖脇に構築。長さ120cm，幅100cmの楕円形をなす。深さは55cm前後で底面はほぼ平らである。カマドよりの部分には一段浅めのテラス状の平面が設けられている。

カマド　北壁中央に位置する。構築材の遺存は良く，煙道部は鋭角的に壁外に突出する。煙道傾斜角は60°を測り急である。

堆積土　暗褐色土主体である。自然堆積と思われる。

出土遺物　カマド右袖周辺に多く，左（西）壁側に少ない。図示できた遺物は9点である。1～3は土師器杯である。1・2は底部丸底で，いずれも1/2以下の遺存である。2は口縁部が緩やかに外反して立ち上がる。3は器高が高い杯でやや小さめの平底を有し，体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。外面口縁部下には一段の稜を有し，口縁は垂直に立ち上がる。4は土師器小鉢で口縁部は受口状を呈し，外面は二次被熱による煤が厚く付着している。5～7は土師器甕でいずれも最大径は胴部にもつ。5はほぼ完形に近く，外面に二か所の黒斑がみられる。内面は全体的に器面の剥離が顕著である。6は接合点はないが器面・胎土・調整の状況から同一個体と思われる。内外面ともに二次被熱により厚く煤が付着し，器面の磨耗が顕著である。7は住居跡の広範囲に散在する破片が接合した。外面には黒斑がみられ，全体的に薄く煤が付着する。内外面ともに器面の磨耗等はあまりみられない。8はふいごの羽口の先端部で，アメ状溶着及び還元・酸化被熱が明瞭に認められる。9は椀形鍛冶滓で，堆積土上層から出土した。

SI－044（第60図，図版21）

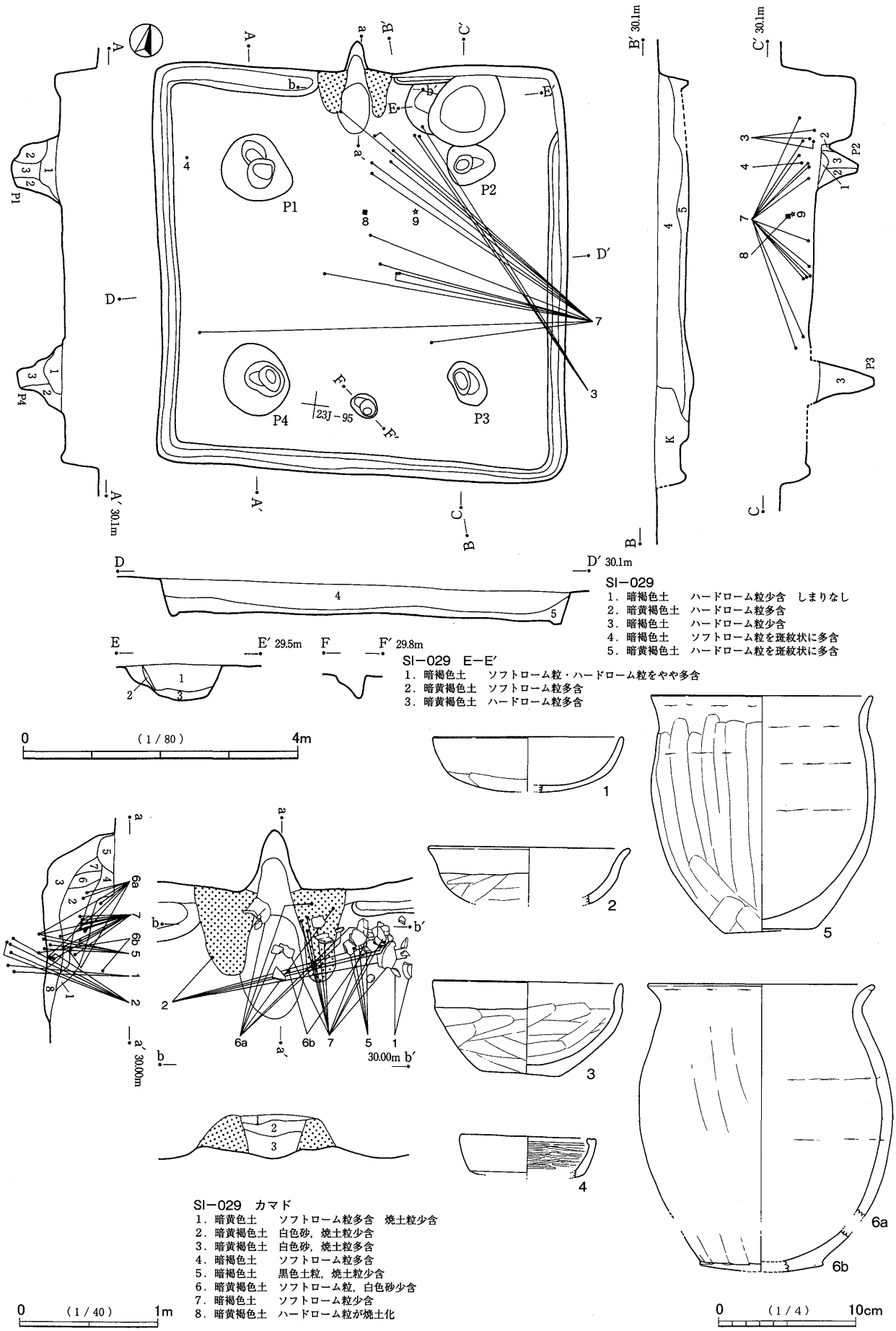
位置　東部南側，調査区東側台地南端部の25L－18グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さ5.0m，幅5.1mの方形をなす。確認面からの深さは50cm前後で，壁は直に立ち上がりる。壁溝は壁直下に深めにしっかりと構築され，カマド両袖まで全周する。南西隅は中・近世の道路状遺構SD－011に切られているが，床面は遺存する。

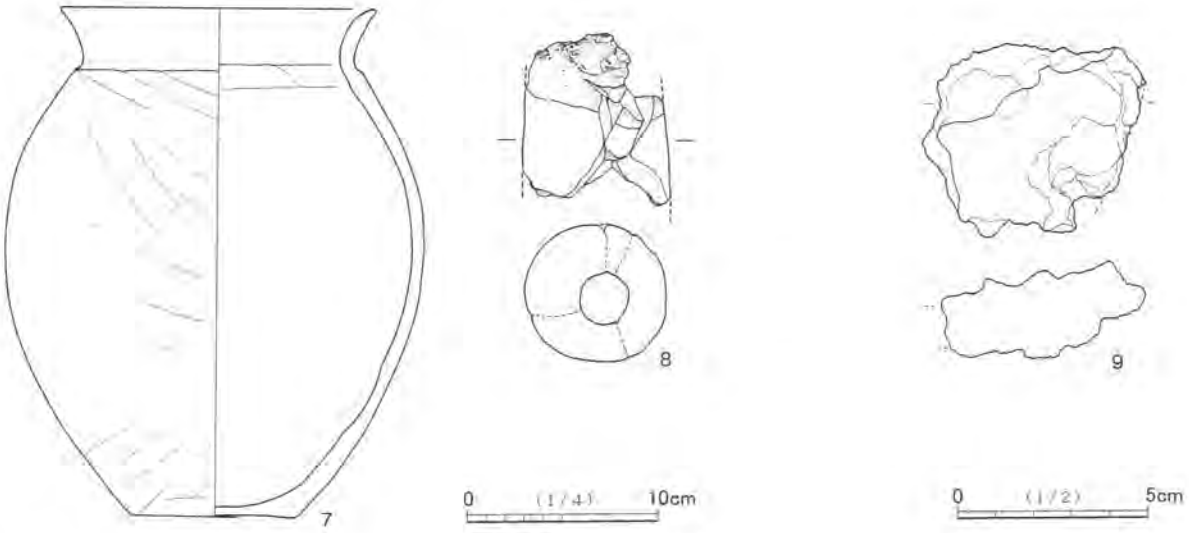
床面　中央部で若干の凹はみられるが，ほぼ平坦といえる。硬化面は特に認められず，床面積は23.66㎡を計測する。カマドに対向する南壁中央下に深さ20cm前後の出入口ピットが検出された。

柱穴　4か所検出された。床面からの深さは49cm～75cmを測り，いずれも深く掘り込まれている。柱の抜き取り穴は認められない。

カマド　北壁中央に位置する。構築材の遺存は良く，煙道部は平面形三角形に壁外に大きく突出し，カマド両袖部は壁外にまで及ぶ。煙道傾斜角は70°を測り急である。火床部は全体に床面から20cm程度深く掘り込まれており，焼土は薄く散在する程度である。また，焚き口部周辺に焼土粒が散在しており，使用後の煤や焼土を掻き出したものと思われる。


P1
P2
P3
P4
23J－95
SI－029
1．暗褐色土　ハードローム粒少含　しまりなし
2．暗黄褐色土　ハードローム粒多含
3．暗褐色土　ハードローム粒少含
4．暗褐色土　ソフトローム粒を斑紋状に多含
5．暗黄褐色土　ハードローム粒を斑紋状に多含
SI－029　E－E′
1．暗褐色土　ソフトローム粒・ハードローム粒をやや多含
2．暗黄褐色土　ソフトローム粒多含
3．暗黄褐色土　ハードローム粒多含
0　(1／80)　4m
SI－029　カマド
1．暗黄色土　ソフトローム粒多含　焼土粒少含
2．暗黄褐色土　白色砂，焼土粒少含
3．暗黄褐色土　白色砂，焼土粒多含
4．暗褐色土　ソフトローム粒多含
5．暗褐色土　黒色土粒，焼土粒少含
6．暗黄褐色土　ソフトローム粒，白色砂少含
7．暗褐色土　ソフトローム粒少含
8．暗黄褐色土　ハードローム粒が焼土化
0　(1／40)　1m
0　(1／4)　10cm

第58図　SI－029（1）




第59図　SI－029（2）

堆積土　黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

出土遺物　遺物は少なくそのほとんどか小片で，図示できた遺物は４点である。１はほぼ完存する東海産須恵器蓋で，床面から出土した。外面は厚薄はあるが全面に自然釉が付着する。２は底部丸底の土師器杯で，内外面ともに器面の磨耗・剥落が顕著である。３は床直出土の砥石である。石材は流紋岩である。４はほぼ完形の鉄製穂摘具で，堆積土上層から出土した。穿孔部二か所は方形を呈している。

SI－051（第60図，図版21）

位置　調査区東側台地南東部の26K－71グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さ3.4m，幅3.3mの方形をなす。深さは50cmで，壁は直に立ち上がる。壁溝は壁直下に深めにしっかりと構築され，カマド両袖まで全周する。北西壁及びカマドの一部は平安時代の竪穴住居跡SI－050に切られている。

床面　床面は全体に軟質である。カマドに対向する南東壁中央下に深さ５cm前後のごく浅い出入口ピットが検出された。柱穴はない。

カマド　北西壁中央からやや東に寄った位置にある。火床部はわずかに凹むがほぼ平坦で，火を受けた痕跡はあまりみられない。袖の一部はSI－050の壁溝により切られており，遺存状態はあまり良くない。

堆積土　少量のローム粒を含む暗褐色土を主体とする。自然堆積と思われる。

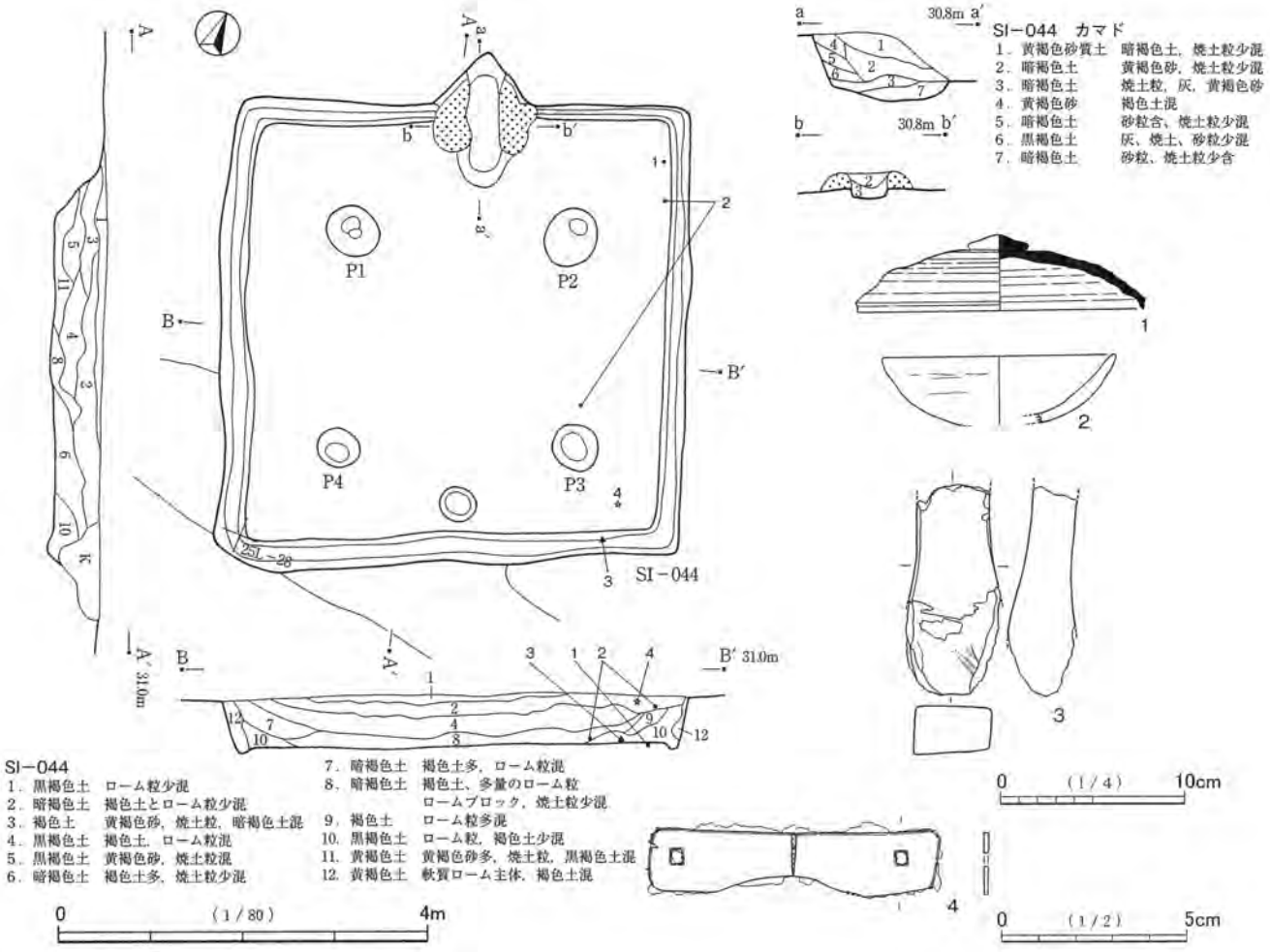
出土遺物　遺物は極めて少なく，図示できた遺物は１点のみである。１はカマド右袖付近から出土した，底部丸底の土師器杯である。内外面とも器面には丁寧なミガキが施され，胎土はきめ細かく密である。内外面ともに黒色処理の痕跡が部分的に認められる。体部外面下位には一段の稜が巡る。

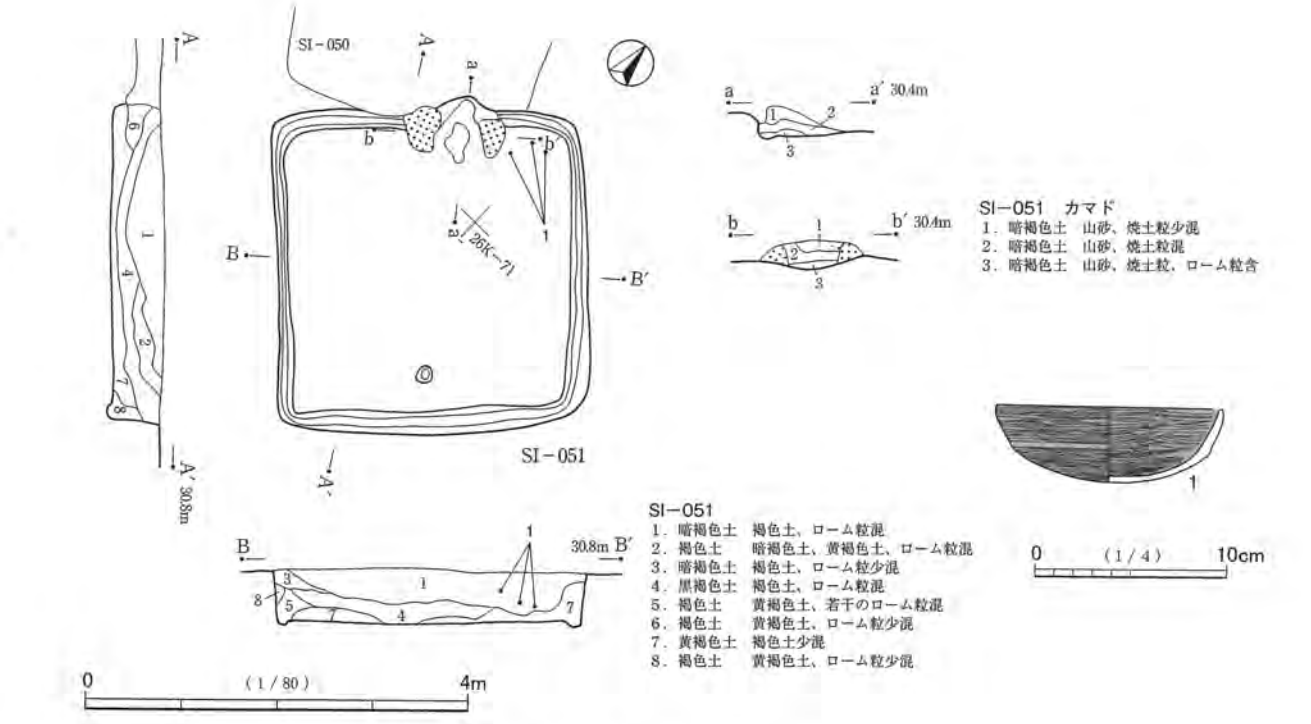
SI－066（第61図，図版22）

位置　調査区東側台地南寄りの25K－53グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さ4.7m，幅4.5mの方形をなす。確認面からの深さは50cm前後で，壁は直に立ち上がる。壁溝は壁直下に深めに構築され，カマド両袖まで全周する。壁は北西から南西にかけて上端幅約1.5mの中・近世の境界状柵列遺構に切られ，一部破壊されているが，床面はかろうじて遺存している。

床面　南東側から北西側にかけてやや傾斜し，若干の凹凸もある。台地中央部に北から南に侵入する支谷が，本跡北西側に存在する影響も考えられる。硬化面は特に認められず，床面積は19.07㎡を計測する。




第60図　SI－044・051

カマドに対向する南壁中央下に出入口ピットが検出された。ピットは重複して２基検出され，若干の移動が考えられる。深さは旧が12cm，新が20cm前後である。

**柱穴**　４か所検出された。床面からの深さは34cm～68cmを測り，若干のばらつきがある。柱の抜き取り穴は認められない。

**カマド**　北壁中央に位置する。SD－014により切られているため上部は遺存しない。火床部は床面からわずかに凹み，堆積土は黒褐色土を主体に焼土粒が多量に含まれている。煙道部は住居の壁をほとんど掘り込むことなく，袖を壁に貼り付けたような構造で，煙道傾斜角は垂直に近い。

**堆積土**　少量のローム粒を含む暗褐色土を主体とする。自然堆積と思われる。

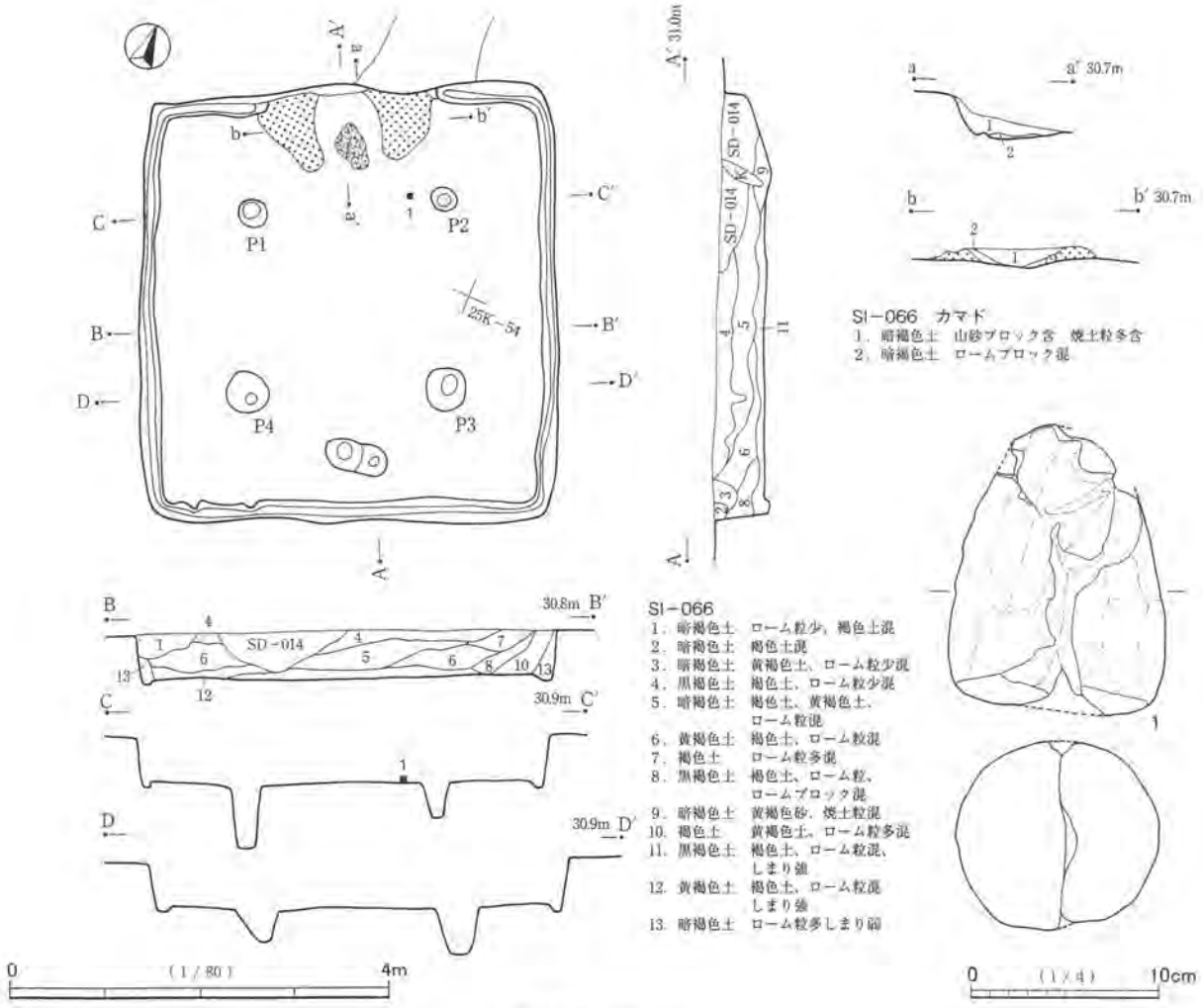
**出土遺物**　遺物は極めて少なく，図示できた遺物は支脚１点のみである。支脚はカマド外右袖付近の床面から出土し，上端部を欠損する。

### SI－079（第62図，図版22）

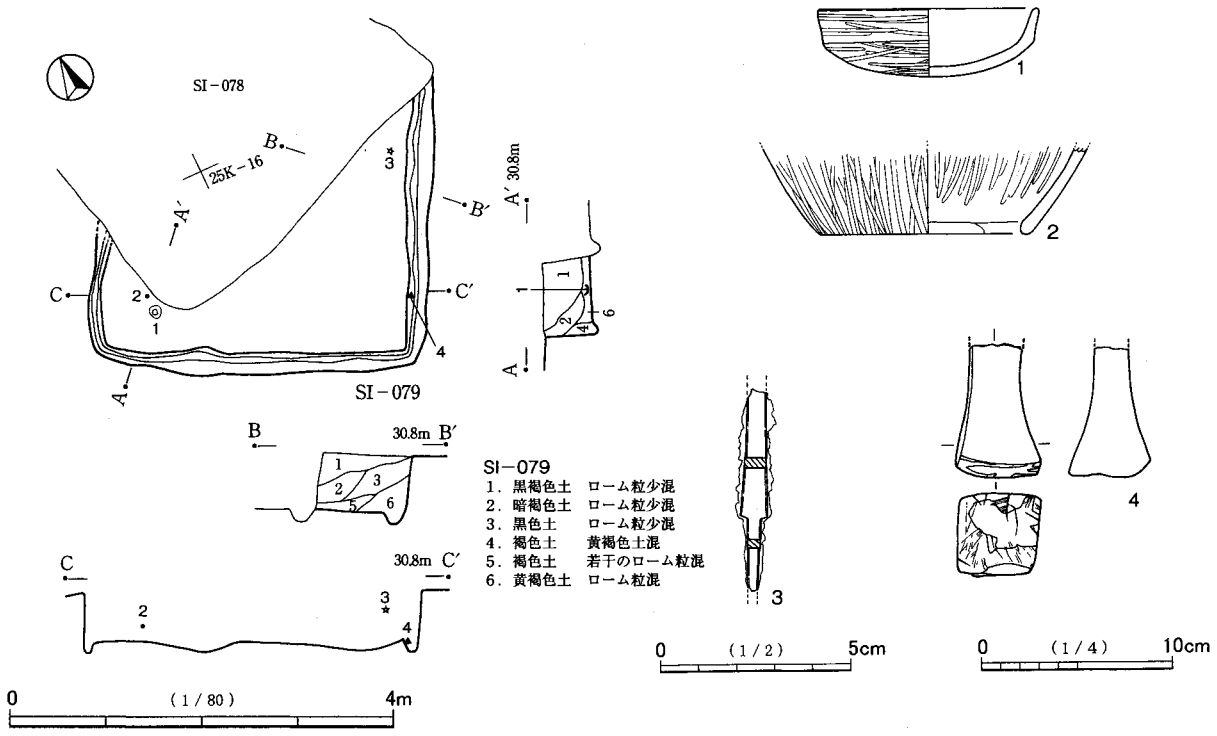
**位置**　調査区東側台地中央部やや南寄りの25K－16グリッドを中心に位置する。

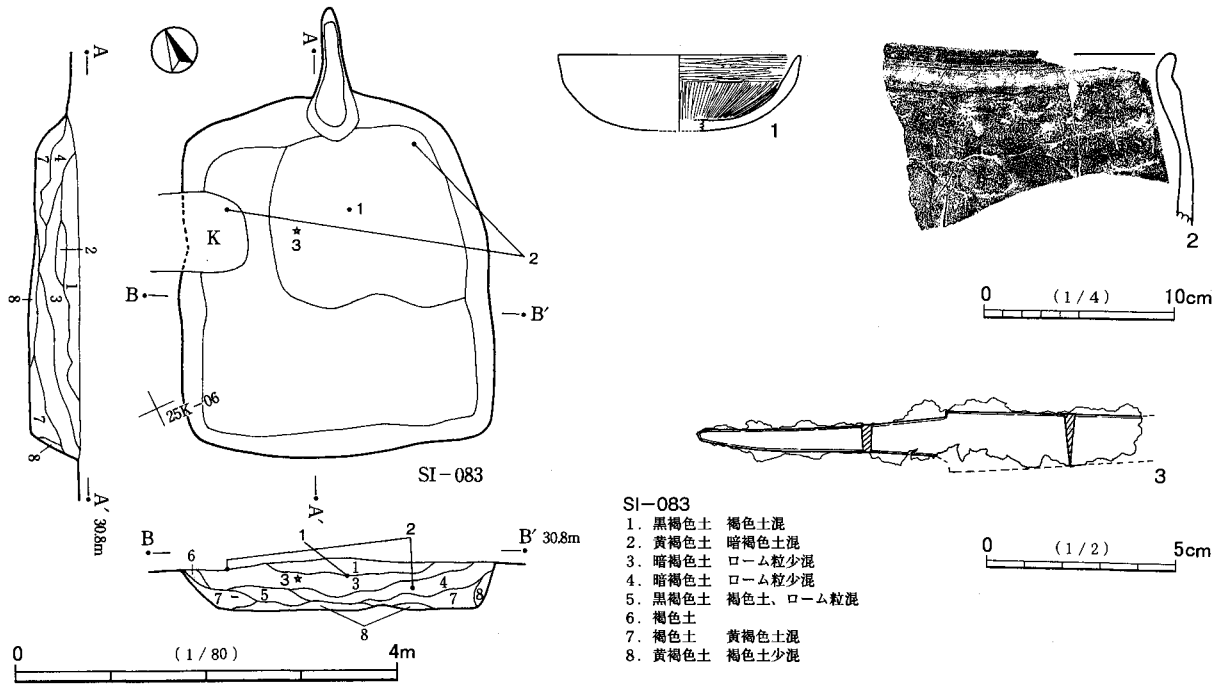
**形状・規模**　計測可能な部分での計測値は，長さ3.3m，幅3.5mを測り，平面形は方形をなすと思われる。確認面からの深さは60cm前後と深く，壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は壁直下に20cm前後と深めに構築されるが，重複のため全周するかどうかは不明である。

**床面**　遺存する部分は緩やかな凹凸がみられ，平らとはいえない。硬化面は認められず，柱穴はみられ




第61図　SI－066




第62図　SI－079・083

ない。カマドはおそらく北東壁に構築されたと思われるが，住居SI－078の構築時に破壊されたものと思われる。

**堆積土**　少量のローム粒を含む黒褐色土を主体とする。

**出土遺物**　遺物は少なく図示できた遺物は４点である。１は底部丸底の土師器杯で，ほぼ完形である。正位の状態で床面から出土した。体部外面中位には一段の稜をもち，口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。内

外面ともに二次被熱により煤がまばらに付着する。外面調整はやや雑なミガキが施され，内面はやや磨耗している。2は土師器の甑下端部で，下端部は全周遺存している。3は鉄鏃片である。茎部から篦被部にかけて遺存する。4は砥石で，石材は流紋岩である。

**重複遺構**　北側約半分を奈良・平安時代の住居SI－078に切られており，遺存率は低い。

SI－083（第62図，図版22）

**位置**　調査区東側台地中央部やや南寄りの25K－06グリッドを中心に位置する。同時期の住居跡SI－079より北に約3m隔たっている。

**形状・規模**　長さ3.8m，幅3.3mの隅丸方形をなす。確認面からの深さは40cm前後である。木の根の撹乱等により，遺存状態はあまり良くない。壁溝及び柱穴は認められず，壁は開き気味に立ち上がる。

**床面**　木の根による撹乱が影響してか，かなりの起伏がある。軟質ローム中に構築されているため，はっきりした硬化面はみられない。

**カマド**　北東壁中央に位置する。中央部に木の根が入り込み，両袖ともに破壊され，構築材が周辺に散乱するのみである。火床部はほとんど被熱の痕跡はなく，焼土粒が散乱するのみである。煙道部も同様に木の根が入り込み，明瞭に確認できていない。

**堆積土**　少量のローム粒を含む暗褐色土を主体とする。

**出土遺物**　北壁側のカマド周辺からの出土がほとんどであるが，量的には少ない。図示できた遺物は3点である。1は底部丸底の土師器杯で，内面は丁寧なミガキが施されている。外面及び破断面は劣化が顕著である。2は土師器甕の口縁部片で，口縁部は若干窄まっている。3は鉄製品の刀子で，茎部は完存する。刃部は中位まで遺存するが，刃こぼれが顕著である。その他に図示していないが，モモ核が1点出土した。

**重複遺構**　南東壁部分で縄文時代の陥穴SK－057を切っている。

SI－084（第63図，図版23）

**位置**　調査区東側台地のほぼ中央部で，北から侵入する支谷にやや近い25J－84グリッドを中心に位置する。同時期の住居跡SI－083より北西に約10m隔たっている。

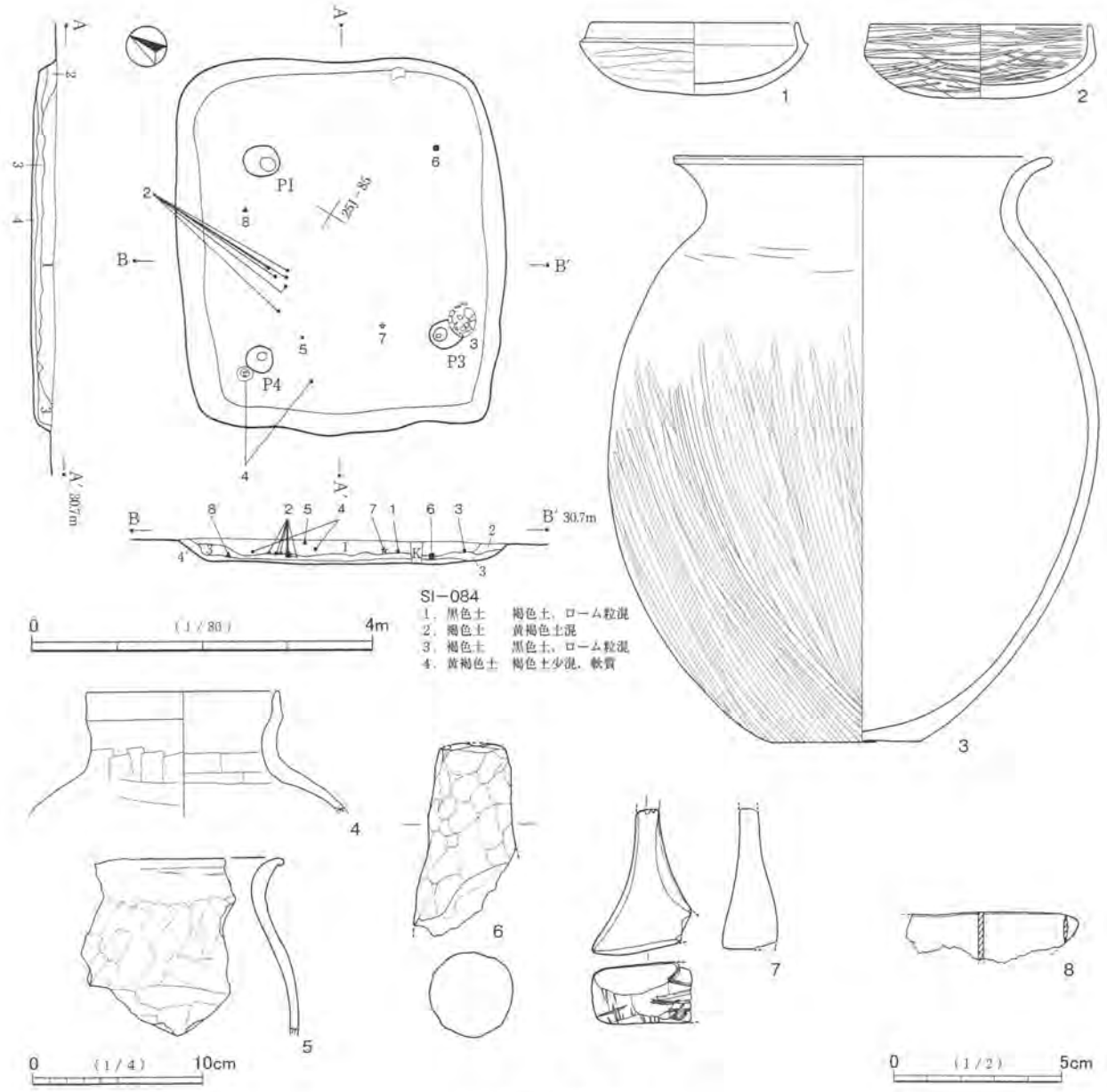
**形状・規模**　長さは4.4m，幅4.8mの長方形をなす。確認面からの深さは30cmである。南西壁から南隅付近に山砂と焼土が散乱していたが，床面に火を受けたような痕跡はなく，流れ込んだものと考えられる。

**床面**　軟質ローム中に構築されているため，はっきりした硬化面はみられない。多少の凹凸はあるがほぼ平らといえる。壁溝及びカマドは検出されず，壁は緩やかに立ち上がる。

**柱穴**　3か所検出された。床面からの深さは16cm～32cmを測り，比較的浅い。柱の抜き取り穴は認められない。

**堆積土**　黒色土主体で，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　図示できた遺物は8点である。1・2は底部丸底の土師器杯である。1は内外面及び破断面ともにやや劣化が目立ち，外面にみられる黒斑も薄く残るのみである。2は内外面ともに粗いミガキが施され，二次被熱により厚く煤が付着する。いずれも床面より浮いた状態で出土した。3はやや大ぶりの土師器甕で，外面胴下端部から胴部上位にかけ丁寧な縦方向のミガキが施されいる。底部外面から胴下端部にかけては，円形の大きな黒斑が明瞭にみられる。内面は肩部から底部にかけ剥離が顕著にみられ，底部からその周辺は全域に炭化物がうっすらと付着している。煮炊きに使用した時の痕跡と思われる。4はひさご型の土師器小型壺で，口縁部は完存する。内外面ともに二次被熱により煤が付着し，器面も赤化して




第63図　SI－084

いる。5は土師器小型甕の口縁部片で，内外面ともに二次被熱により厚く煤が付着する。6は支脚の上部片，7は砥石，8は鉄製の穂摘具で，いずれも床面よりも浮いた状態で出土した。7の石材は砂岩である。

**SI－115**（第64・65図，図版23）

位置　調査区東側台地北寄りの25I－01グリッドを中心に位置する。舌状に突出する台地先端に近い中央平坦部に立地する。

**形状・規模**　長さ5.7m，幅4.8mの長方形をなす。確認面からの深さは40cm前後である。同時期の住居の床面積としては，最大のSI－029の33.11㎡に次いで二番目に大きく，24.79㎡を測る。壁溝は東壁直下やや北寄りの部分で木の根による撹乱により破壊されているが，全周していたものと思われる。

**床面**　中・近世の土坑や木の根の撹乱により破壊されている部分もあるが，それ以外はほぼ平らである。床面は軟質ローム層中に構築され，硬化面は認められない。柱穴・出入り口ピットは検出されなかった。

**カマド**　北壁中央に位置する。焚き口部付近は中・近世の土坑SK－235により床面ごと破壊されている。

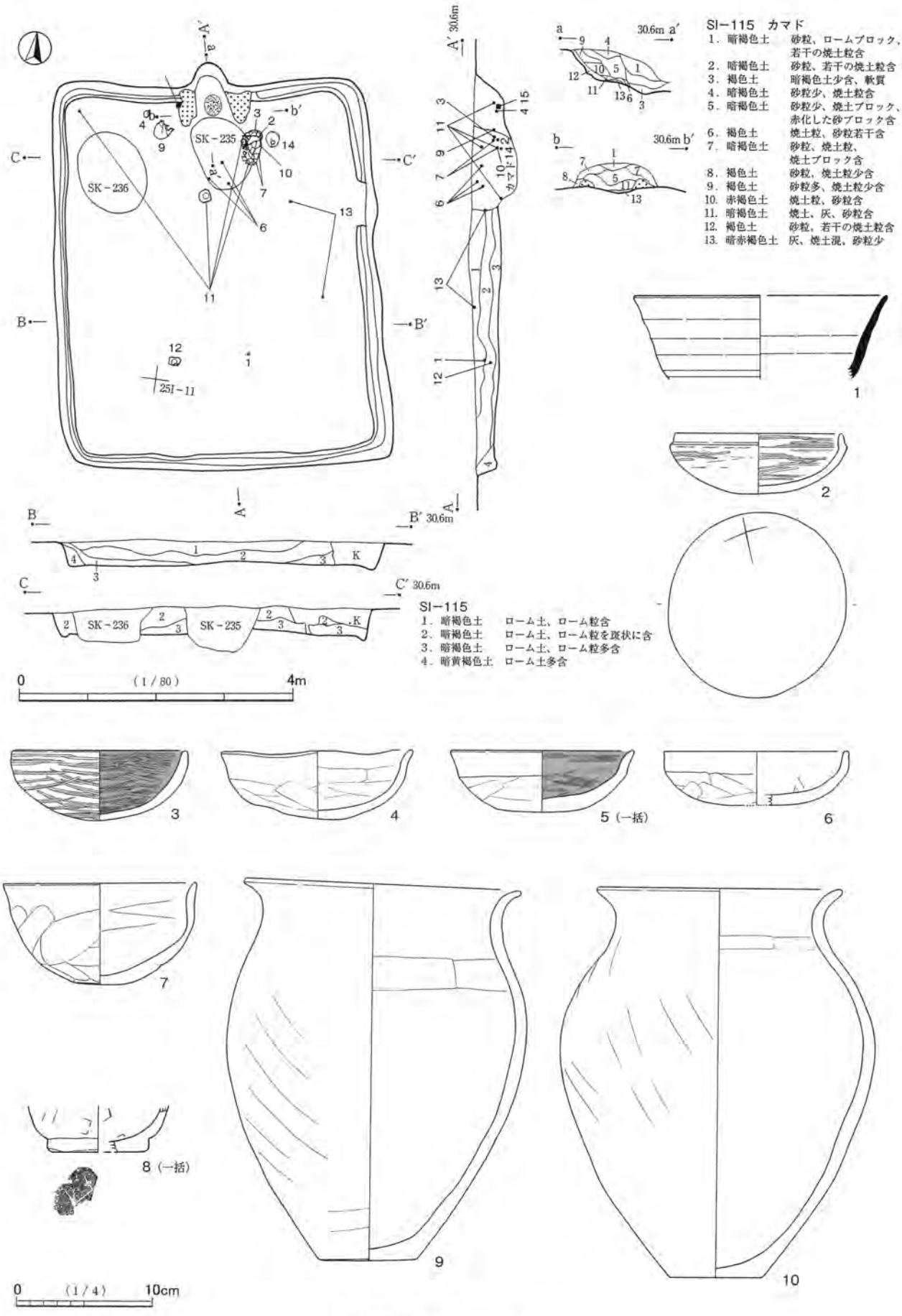
カマド自体は壁に貼り付くように構築され，煙道部のみが壁を掘り込んで作られている。煙道傾斜角は約45°を測る。火床部は掘り込みはほとんどなく平らで，火床底面は楕円形に焼土化している。

堆積土　ローム土・ローム粒を含む暗褐色土を主体とする。自然堆積と思われる。

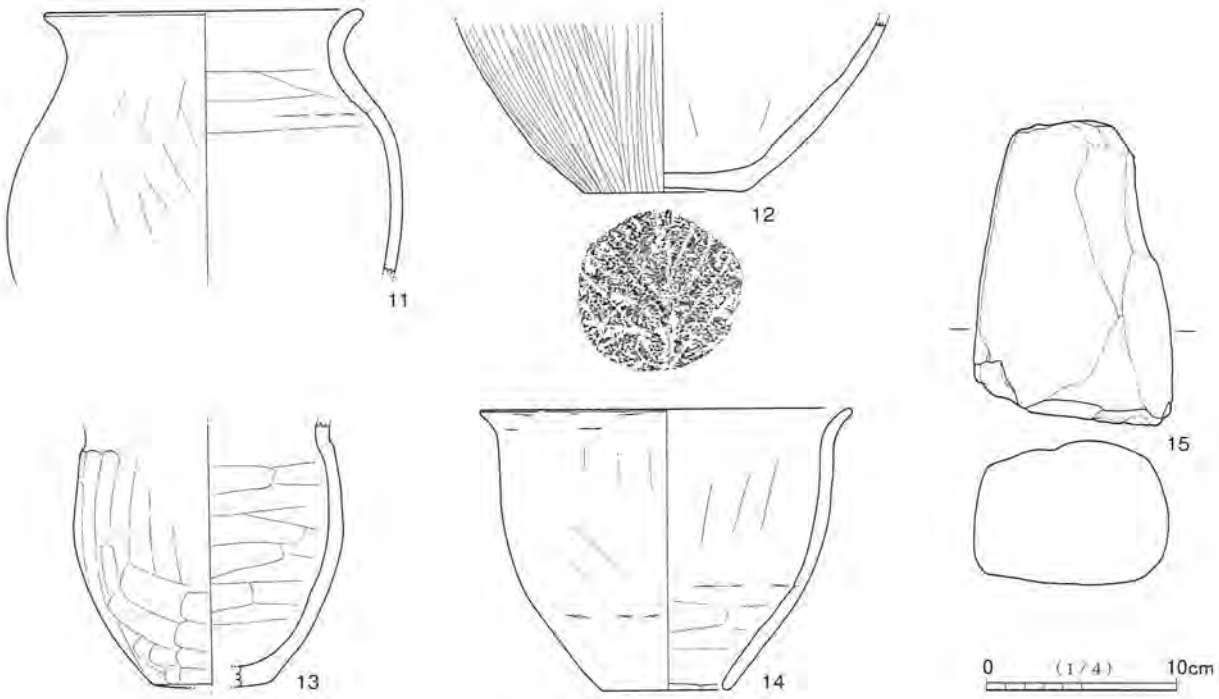
出土遺物　堆積土中に混入する遺物の量はそう多くはないが，カマド周辺で完形に近い土器を数点出土した。図示できた遺物は15点である。1はやや大型の東海産須恵器の杯である。2～7は底部丸底の土師器杯である。2・3は10の甕の下から折り重なるように出土した。2は破片が接合した完形で，内外面にやや粗いミガキが施されている。外面は全体的に器面の剥落が顕著であるが，底部を中心に黒斑がみられ，側面には『+』の線刻が施されている。3は2の上に折り重なるように出土した破片が，ほぼ完形に近い状態まで接合したものである。内面はやや丁寧なミガキ後，全面に黒色処理が施されている。外面には二次被熱により煤が広範囲に付着している。4はカマド左袖脇から出土した。器形の歪みが激しく，口縁部は波を打ったように巡り，平面形は楕円形を呈している。内外面ともに調整は雑で，特に外面には器面の凹凸が目立つ。底部内面には二次被熱により煤が円形に付着し，外面には大きく黒斑がみられる。5は一括で取り上げた破片が接合したものである。内外面ともに磨耗が顕著である。口縁部は直下に一段の緩やかな稜を有し外反気味に立ち上がる。内面には黒色処理が施され，外面には底部を中心に大きく黒斑がみられる。6は5同様口縁部下に一段の緩やかな稜を有すが，口縁部へは直に立ち上がる。内外面ともに二次被熱により煤が付着し，器面は磨耗が顕著である。7は椀に近い深めの杯で，カマド右袖脇から10の甕の内側に入れ子状態で出土した。ほぼ完形である。小さめの底部が形成されているが，調整が粗いため丸底気味で安定感はない。口縁部付近で若干の歪みがあり，平面形は楕円形を呈している。内外面ともに大きな黒斑がみられる。8は一括で取り上げた手捏風の土器片で，小型の高台付椀の破片と思われる。外面の調整は粗く，高台貼り付け部分は指で軽く押さえつけた程度である。底外には木葉痕が残る。9～13は土師器の甕で，13はやや小型である。9はカマド左袖脇から横位に寝かされ，押し潰された状態で出土した。最大径を胴部上位にもち口縁部は小さめに外反する。内外面ともに二次被熱により器面の剥離が激しく，特に内面は全体に厚く煤が付着し黒褐色を呈している。外面は全体に赤化が顕著にみられる。使用頻度が高かったものと考えられる。10は遺物が集中するカマド右袖脇の床面から横位に寝かされ，押し潰された状態で出土した。頸部はやや窄まり，胴部が球形気味である。10も9の器面の状態と同様であり，使用頻度が高かったものと考えられる。11は胴部上位から口縁部にかけて遺存しており，口縁部付近は完形である。カマド焚き口部からまっすぐに1m隔たった床面から，口縁部を下にした逆位の状態で出土した。12はカマド対壁に近い床面から少し浮いた状態で出土した，底部から胴部下位にかけての破片である。内外面ともに二次被熱により剥離・煤の付着が顕著にみられる。外面は縦位の丁寧なミガキが施され，胎土には雲母が多量に含まれており，常総甕と思われる。底部外面には木葉痕が全面に残っている。13は口縁部欠損の小型甕である。本住居跡より東に約4m隔たった，住居跡SI－117の堆積土中から出土した土器片と遺構間接合した。14は10の甕の東脇床面から口縁部を下にした逆位の状態で出土した。完形品である。外面には大きな黒斑がみられる。15は支脚上部片で，カマド左袖にもたれかかる状態で出土した。

SI－116（第66図，図版23）

位置　調査区東側台地北端寄りの25H－81グリッドを中心に位置する。同時期の住居跡SI－115より北に約7m隔たっている。舌状に突出する台地先端に近い中央平坦部に立地し，本遺跡の古墳時代遺構としては最北端となる。


SI−115 カマド
1. 暗褐色土 砂粒、ロームブロック、若干の焼土粒含
2. 暗褐色土 砂粒、若干の焼土粒含
3. 褐色土 暗褐色土少含、軟質
4. 暗褐色土 砂粒少、焼土粒含
5. 暗褐色土 砂粒少、焼土ブロック、赤化した砂ブロック含
6. 褐色土 焼土粒、砂粒若干含
7. 暗褐色土 砂粒、焼土粒、焼土ブロック含
8. 褐色土 砂粒、焼土粒少含
9. 褐色土 砂粒多、焼土粒少含
10. 赤褐色土 焼土粒、砂粒含
11. 暗褐色土 焼土、灰、砂粒含
12. 褐色土 砂粒、若干の焼土粒含
13. 暗赤褐色土 灰、焼土混、砂粒少
SK−235
SK−236
カマド
SI−115
1. 暗褐色土 ローム土、ローム粒含
2. 暗褐色土 ローム土、ローム粒を斑状に含
3. 暗褐色土 ローム土、ローム粒多含
4. 暗黄褐色土 ローム土多含
0 (1/80) 4m
5 (一括)
8 (一括)
0 (1/4) 10cm

第64図 SI−115 (1)




第65図　SI－115（2）

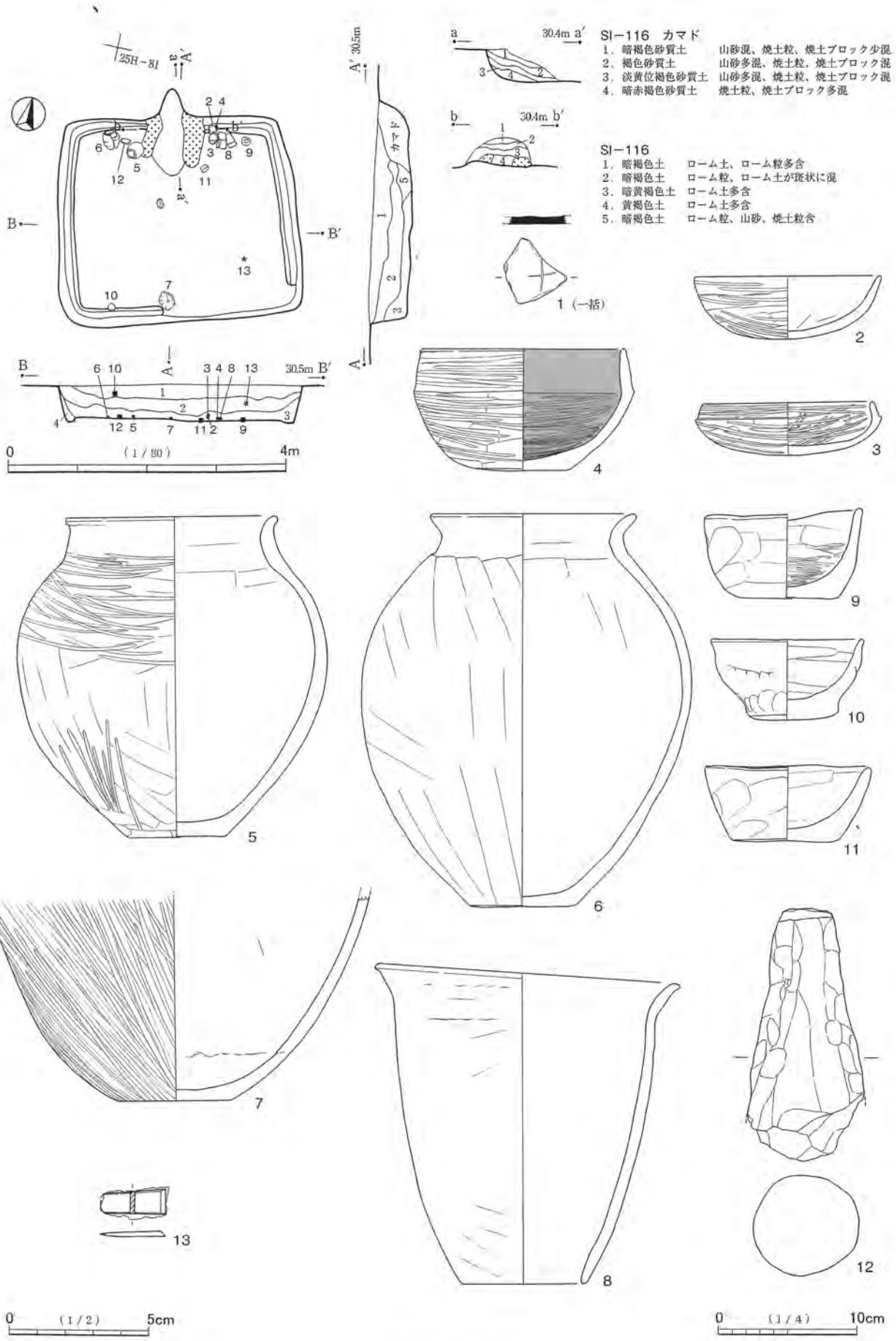
**形状・規模**　長さ2.9m，幅3.4mの方形をなす。確認面からの深さは50cm前後である。壁溝は全周せず，カマド対壁中央から南東隅にかけて途切れている。

**床面**　壁直下から中央に向かってやや凹んでいる。軟質ローム中に構築され，硬化面は認められない。柱穴・出入り口ピットは検出されず，壁はほぼ垂直に立ち上がる。

**カマド**　北壁中央に位置する。カマド自体は壁に貼り付くように構築されている。煙道部のみが壁を鋭角に掘り込んで作られており，煙道傾斜角は約80°を測り垂直に近い。火床部の掘り込みはほとんどなく平らである。火床底面の焼土化はみられないが，カマド内堆積土下部には焼土ブロック及び焼土粒の包含は多量である。

**堆積土**　ローム土・ローム粒を多く含む暗褐色土を主体とする。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　堆積土中に混入する遺物は少ないが，カマド両袖周辺から甕・甑・杯等が完形に近い状態で出土した。遺物出土状況はSI－115と酷似している。１は須恵器杯の底部片で，外面に『＋』の線刻が施されている。須恵器はこの１点のみである。２・３は完形に近い杯でカマド右袖脇から出土した。２は口縁部が開き気味の丸底杯で，内外面ともに二次被熱により煤が付着し，器面の剥離が顕著である。正位の状態で出土した４の鉢の中に，入れ子状態で出土した。３は口縁下に一段の稜をもち，そこから内彎して口縁部が立ち上がる，いわゆる須恵器模倣杯である。正位の状態で出土した。４はほぼ完形の鉢で内面黒色処理が施されており，２の杯を内部に入れた状態で出土した。外面上半部は二次被熱により部分的に厚く煤が付着し，器面の剥離が顕著である。５・６はいずれもカマド左袖周辺の床面から横位の状態で出土した，ほぼ完形の甕である。やや小さめの底部で最大径を胴部中位にもち，頸部は窄まり気味で小さく開く口縁部に至る。内面はともに頸部周辺まで二次被熱により器面の剥離が顕著である。７はカマド対壁中央下から出土した甕で，胴部下位から底部にかけて遺存する。外面は縦位のミガキが密に施され，底部から胴部下端には明瞭な黒斑がみられる。内面は二次被熱により器面の剥離が顕著である。８は甑でカマド


SI－116　カマド
1．暗褐色砂質土　山砂混、焼土粒、焼土ブロック少混
2．褐色砂質土　山砂多混、焼土粒、焼土ブロック混
3．淡黄位褐色砂質土　山砂多混、焼土粒、焼土ブロック混
4．暗赤褐色砂質土　焼土粒、焼土ブロック多混
SI－116
1．暗褐色土　ローム土、ローム粒多含
2．暗褐色土　ローム粒、ローム土が斑状に混
3．暗黄褐色土　ローム土多含
4．黄褐色土　ローム土多含
5．暗褐色土　ローム粒、山砂、焼土粒含
25H－81
カマド
30.4m
30.5m
1（一括）
0　（1／80）　4m
0　（1／2）　5cm
0　（1／4）　10cm

第66図　SI－116

右袖周辺の床面から，横位に押し潰された状態で出土した。内面は全体的に二次被熱により器面の剥離が顕著で，外面には黒斑が二か所にみられる。胴部下位には外側から内側に開けた，径６㎜前後の小孔が穿たれている。９～１１は手捏土器である。９・11はカマド右袖周辺の床面から出土し，10は南西隅付近の堆積土中層から出土した。いずれも二次被熱により煤が部分的に付着している。12は下端部を欠損する支脚である。カマド左袖周辺の床面から横位の状態で出土した。13は用途不明の鉄製品である。観察表では欠損がないとみて楔状鉄製品としたが，楔であるかどうか不明である。欠損がない場合は何らかの工具であり，図の右端に刃部をもつものである。しかし図の右端は欠損している可能性があり，その薄さから刀子の茎とも思われる。図の左端部は欠損がなく，刀子とみた場合茎尻となる。中央と南東隅の間の中層から出土した。

SI－227（第67図，図版24）

**位置**　調査区東側台地南端部の25L－13グリッドを中心に位置する。同時期の住居跡SI－044から西へ約18m隔たっている。

**形状・規模**　長さ4.6m，幅4.6mの方形をなす。確認面からの深さは50㎝前後で，壁は東側は直に立ち上がり，西側でやや急である。壁溝は壁直下に深めにしっかりと構築され，カマド両袖まで全周する。カマドを中心としたほぼ東西を中世の溝状遺構SD－031に切られているが，床面及びカマドは遺存する。

**床面**　硬化面は特に認められず，ほぼ平坦といえる。床面積は18.62㎡を計測する。カマドに対向する南壁中央下に深さ20㎝前後の出入口ピットが検出された。

**柱穴**　５か所検出された。主柱穴は四隅からの対角線上に整然と位置し，床面からの深さは52㎝～76㎝を測り，いずれも深く掘り込まれている。床面中央部に位置するＰ５は深さ40㎝を計測し，補助柱穴と思われる。

**カマド**　北壁中央に位置する。煙道部は壁外にあまり突出せず，カマド両袖部は壁にくっつく形で構築されている。火床部は中央と焚き口部中央には２か所の緩やかな窪みがみられる。焼土は散在する程度で，使用頻度はあまり多くないようである。北隅の床面上にはカマド構築材を主体とした山砂が２か所に認められた。

**堆積土**　全体に焼土粒が微量に混入しているのが特徴的である。

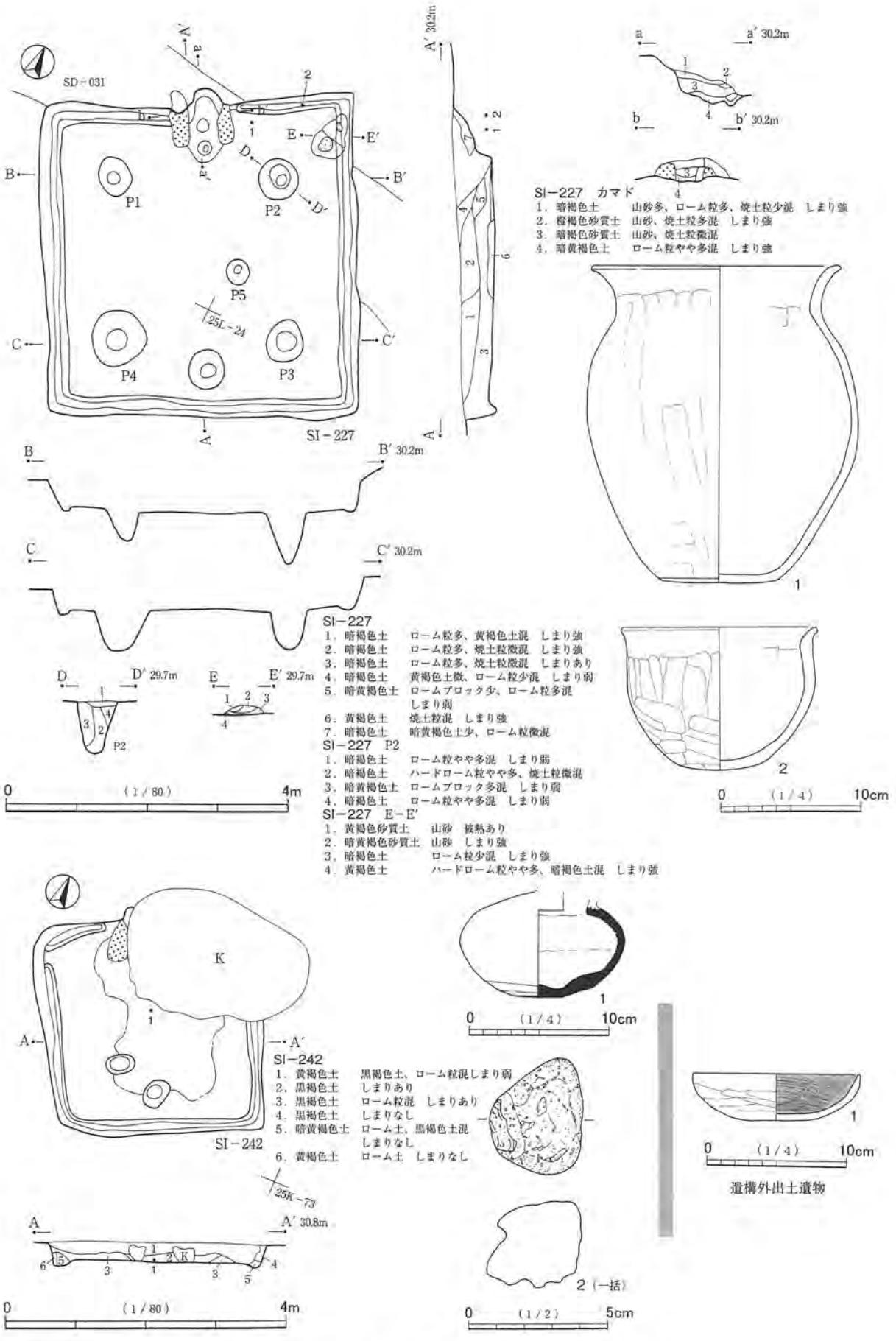
**出土遺物**　遺物は少なく，図示できた遺物は２点である。１はカマド右袖脇床面から出土した土師器の甕である。内外面ともに激しい二次被熱により胴部上位から底部にかけ器面の剥落が著しく，煤も厚く付着している。２は底部丸底気味の土師器小型甕で，北壁直下の壁溝上面から出土した。内面中位から底部にかけ器面の剥落が激しい。外面には黒斑がみられる。胴部下端から底部にかけては径４㎝前後の穿孔が外側から施されている。それ以外はほぼ完形で，祭祀的要素を伺わせる。

**重複遺構**　北側隅からカマドにかけ中世の溝SD－031に切られている。

SI－242（第67図，図版86）

**位置**　調査区東側台地南部の25K－62グリッドを中心に位置する。北西側には北から侵入する支谷の先端部を望み，同時期の住居跡SI－066から南西へ約７m隔たっている。

**形状・規模**　長さ3.1m，幅3.1mの方形をなす。確認面からの深さは30㎝前後である。北側隅からカマドにかけては現代の攪乱により大きく破壊されており，床面及びカマドの大部分は遺存しない。壁は全体的にやや急に立ち上がり，壁溝は西側隅で一部途切れる以外は全周すると思われる。




第67図　SI－227・242・古墳時代遺構外出土遺物

床面　硬化面はカマド周辺から出入り口ピットまでの床面中央部に認められ，ほぼ平坦といえる。床面積は約8.40㎡を計測し，同時期の住居跡では最も小規模といえる。カマドに対向する南壁中央下に深さ20cm前後の出入口ピットが検出された。

柱穴　出入り口ピット近くに深さ20cm前後のピット状の穴がみられるが，浅く締まりがないため主柱穴とは考えられない。

カマド　北西壁中央に位置するが撹乱により大きく破壊され，わずかに左袖の一部を遺存するのみである。

堆積土　黒褐色土を主体とするが，木の根の撹乱が入り堆積状況は不明である。

出土遺物　遺物はほとんどなく，住居中央の堆積土下層から出土した須恵器と，一括で取り上げた軽石のみである。１は東海産須恵器の平瓶で，頸部から口縁部にかけ欠損する以外は完形である。２は白色系の軽石である。

## 第３節　古墳

SX－001（第68図，図版20）

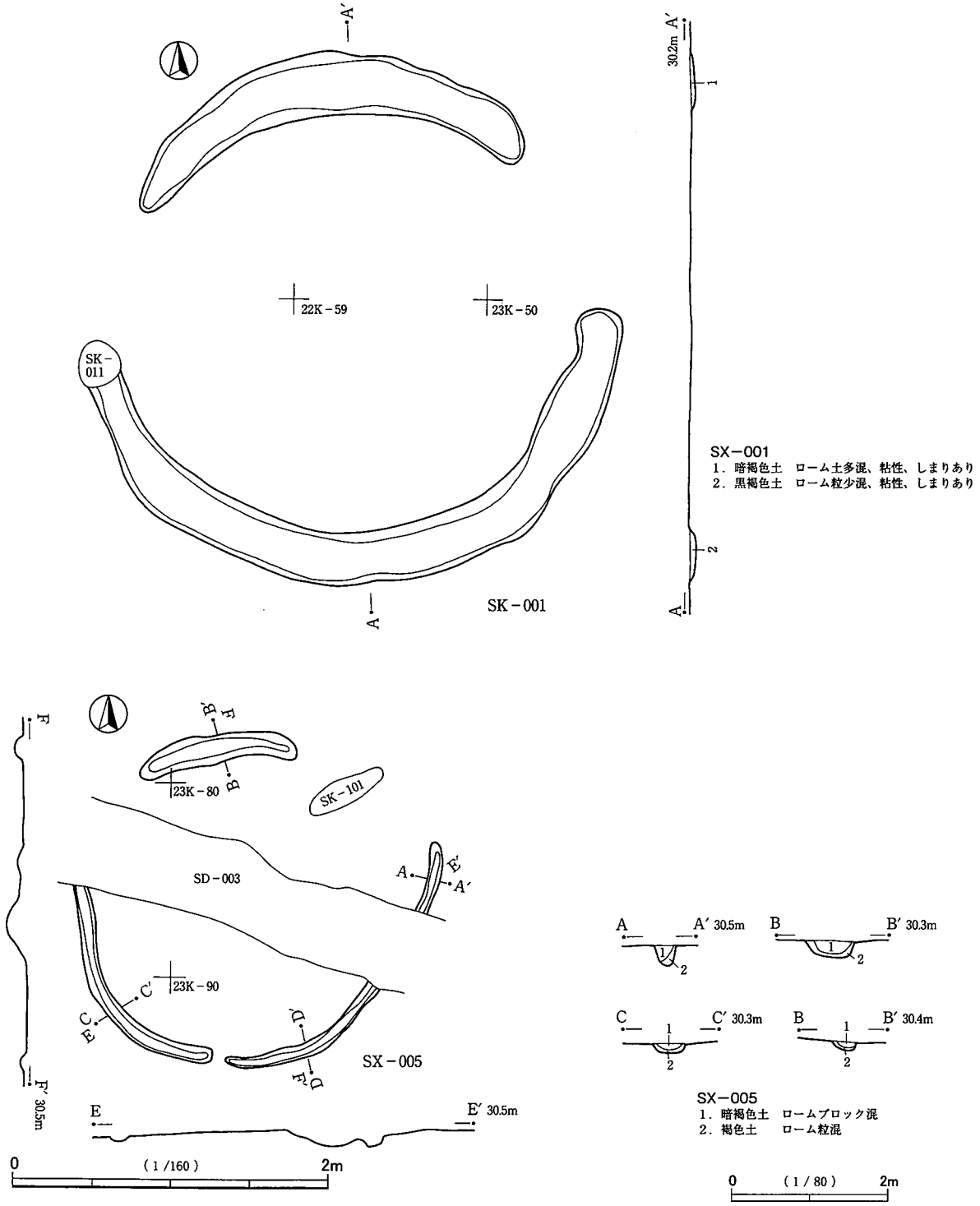
台地中央部に北から南に侵入する支谷により，東西に分割された西側台地中央部やや西よりの22K－59グリッドを中心に位置する。地形的には台地西側に太く入り込んだ樹枝状の谷津を望む台地縁辺部といえる。古墳の墳丘はすでに削平されており，周溝のみの検出で，ほぼ正円に近い円墳と思われる。周溝底面は平らである。本周溝の確認レベルが低くかったのか，周溝深は極めて浅く10cm前後である。確認面での形状は，２地点でそれぞれ４ｍ前後ずつ途切れている。この途切れた部分はいわゆる陸橋的要素も考えられるが，周底との比高差があまりないことなども考慮すると，もともと全周していた周底の可能性もある。周溝底面内側における墳丘長は直径約11.0m，全長は約13.5m，周溝幅は約0.9m～約1.4mを計測し，中規模円墳といえる。周溝覆土内からは十数点の遺物が出土したが，ほとんどが本跡に伴わない流れ込みで，図示できたものはない。本跡の構築時期については，決定的な決め手はない。しかし，その他の遺構との関連から推察すれば７世紀代が妥当と考えられる。

SX－005（第68図，図版20）

平面形は不正な円形を呈すが，小規模円墳と思われる。墳丘は遺存せず，周溝のみが検出された。調査区西側台地中央部の23K－80グリッド周辺に位置し，同時期の古墳SX－001からは南に７ｍ隔たっている。ほぼ中央部を東西に中・近世の溝（境界状柵列遺構）に切られている。周溝は南側，北西側，北東側の３か所で途切れている。小規模古墳であることもあり，この部分を陸橋と捉えて良いのか疑問が残る。周溝底面内側における墳丘長は直径約7.8m，全長は約8.7m，周溝幅は約0.4m～約0.8mを計測する。出土遺物はなく，構築時期決定根拠に乏しいが，選地やその他の遺構との関連から推察すればSX－001とほぼ同時期とみるのが妥当と考えられる。

## 第４節　遺構外出土遺物（第67図，図版230）

ここで取り扱う古墳時代帰属の遺構外出土遺物は，24L－51グリッド一括で取り上げた土師器の杯１点のみである。ほかには奈良・平安時代の竪穴住居跡覆土内出土の土器も数点みうけられたが，ここではあえて抽出せず，遺構内出土の流れ込み土器として処理した。よって，ここでは純粋に遺構外出土遺物のみ




第68図　SX－001・005

を取り扱うこととした。

1は遺跡中央部の24L－51グリッド一括で取り上げた，古墳時代後期の土師器杯片である。底部は丸底気味で，復元口径12.0cm，器高3.3cmを計測する。内面は丁寧なミガキが施され，黒色処理の痕跡がみられる。外面はやや雑なヘラケズリが主体で，若干黒味を帯びる。

# 第５章　奈良・平安時代

## 第１節　概要

本遺跡で検出された奈良・平安時代の遺構は，竪穴住居229軒，竪穴状遺構11基，掘立柱建物53棟，柵列２条，土坑47基である。竪穴状遺構としたものはカマドが検出されなかった小規模な方形遺構を主体とするが，楕円に近い不整形のものを少数含む。その性格として残りの悪い竪穴住居，大規模な土坑，カマドをもたない竪穴建物が考えられる。また土坑については，帰属する時代が不明瞭であるものが多いが，奈良・平安時代の土器片が主体的に出土したものを本章で掲載した。

竪穴住居等から出土した遺物の様相から，集落は８世紀前葉から10世紀代頃まで継続するとみられる。竪穴住居によっては出土遺物が少なく，推定時期が不明なものもあるが，おおよその数量を記述する。集落形成期の８世紀前葉は数軒であり，少ない。８世紀中葉・後葉は20軒から30軒の間で推移すると思われる。９世紀になると若干数量が増えて30軒から40軒の間と思われる。10世紀頃は10軒以下に減ると思われ，台地上での集落は衰退する。

## 第２節　竪穴住居跡

### SI－001（第69図，図版24）

**位置**　調査区中央やや西寄りの23K－97グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.2m，幅が3.7mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

**柱穴・貯蔵穴**　出入口ピットが１箇所検出された。また貯蔵穴と思われる径0.8m，深さ５cm～10cmの窪みが，南（右前）隅部で検出された。

**壁溝**　全周する。なおカマド下については，原則として壁溝の記述を除外する。

**カマド**　北東壁中央に位置する。構築材は山砂主体である。上部の遺存が悪い。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　竪穴全体から散在的に出土した。図示できた遺物は３点である。１はロクロ土師器杯，２は千葉産の須恵器甕，３は常総型の土師器甕である。いずれも遺存が少ない。

**重複遺構**　カマド前に位置するSK－002に切られている。またカマド右袖が撹乱を受けている。

### SI－002（第69図，図版24）

**位置**　調査区西部中央寄りの23K－52グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.8m，幅が3.3mで，やや横長の方形をなす。深さは30cmである。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

**柱穴・貯蔵穴**　貯蔵穴と思われる径65cm，深さ35cmの円形の窪みが，左奥（南東）隅部で検出された。上部は長さが45cm，幅が40cm程度内側に張り出している。この部分の深さは６cm～８cmである。本来のものではなく，埋め戻されて床面が形成されていたと思われる。

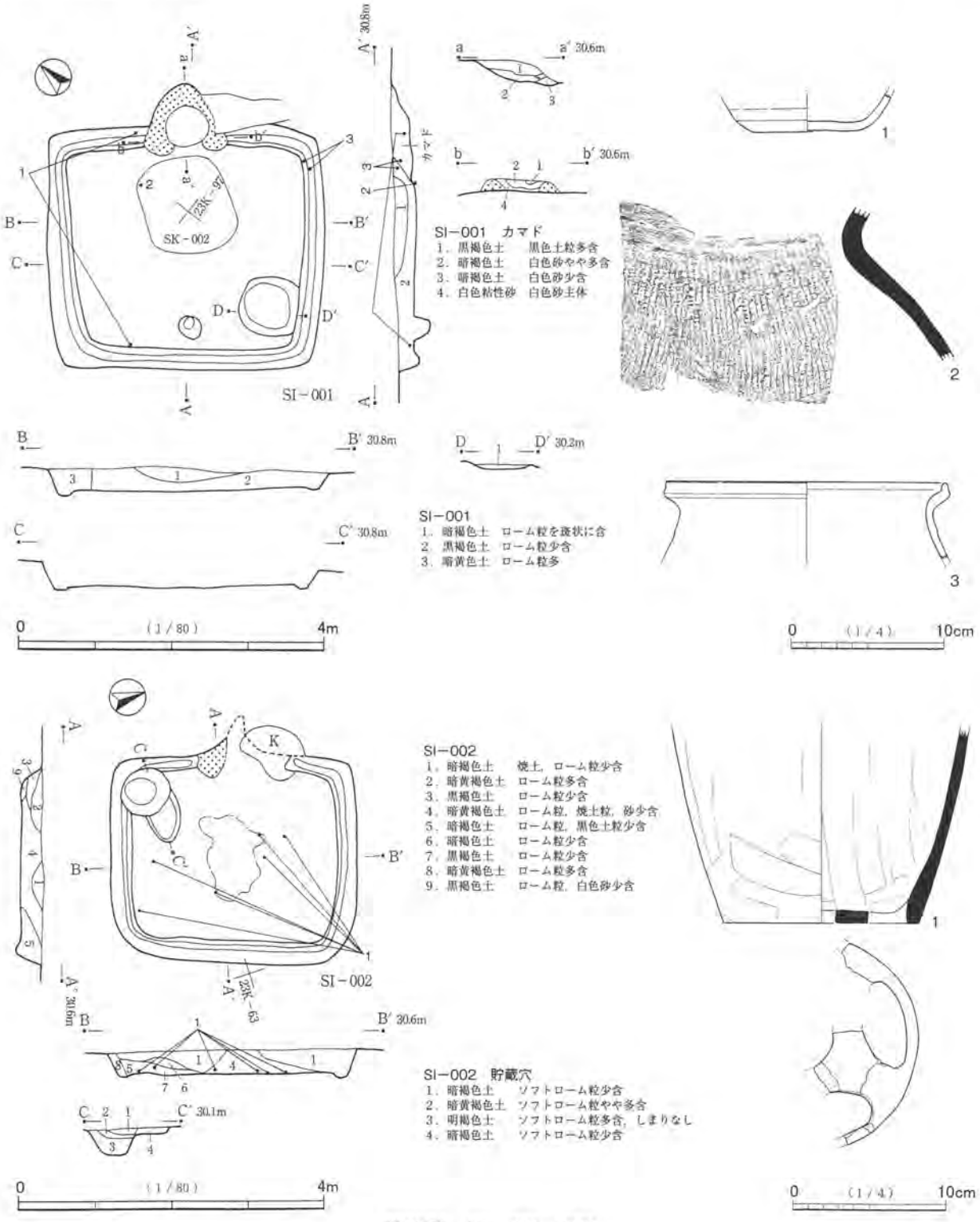
**壁溝**　全周する。

**カマド**　西壁中央に位置する。撹乱を受けて，右袖から煙道部を欠損している。左袖部分は構築材の山

砂がみられるが，あまり遺存がよくない。火床部下は床面よりもかなり窪んでいるが，使用により深くなったことと，掘りかたが深いことの双方の理由が考えられる。

**堆積土**　暗褐色土・暗黄褐色土主体である。

**出土遺物**　竪穴全体から散在的に出土しているが，右（北）壁際・前（東）壁際がやや少ない。図示できた遺物は千葉産と思われる須恵器甑１点で，胴部下位から底部にかけての一部の破片である。色調は褐色で，土師器的である。




第69図　SI－001・002

SI－003（第70図，図版25）

位置　23K－85グリッド周辺で，調査区中央西寄りに位置する。

形状・規模　長さが2.8m，幅が3.1mの方形をなす。深さは20cmである。カマド側の辺がやや長い。

床面　ほぼ平坦である。床面の硬化は中央の一部と中央から南東壁寄りの部分にみられる。出入口ピットは検出されていないが，カマドに対向する南東壁中央が出入口部と思われる。

カマド　北西壁中央に位置する。構築材の遺存は悪く，前側がかなり流失している。

堆積土　黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

出土遺物　カマド周辺に多く，左（南西）壁側に少ない。図示できた遺物は8点である。1・2は千葉産の須恵器杯，3・4はロクロ土師器杯，5・7は千葉産の須恵器甕，6は常総型の土師器甕，8は千葉産の須恵器甑である。3は完形に近い遺存であるが，3以外は1/2以下の遺存である。3は体部内外面に「上万」と思われる横位の墨書がある。ややずれるが，土器の表裏の関係に位置している。器面はやや荒れている。やや細かく割れているが，南東壁側中央の一地点から出土した。出土層位は下層である。なお正位・倒位等の状況は不明である。4は大型の杯である。

SI－004（第71・72図，図版25）

位置　調査区中央西寄りの23K－68グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが2.7m，幅が2.8mの方形をなす。深さは30cmである。右（北）辺がやや長い。

床面　ほぼ平坦である。特に硬化した面はみられない。

柱穴　床面上では5箇所のピットが検出された。東壁際中央にあるものは出入口ピットで，深さは15cmである。他の4穴の深さは12cm～20cmである。位置が不整なため，柱穴とは思われない。

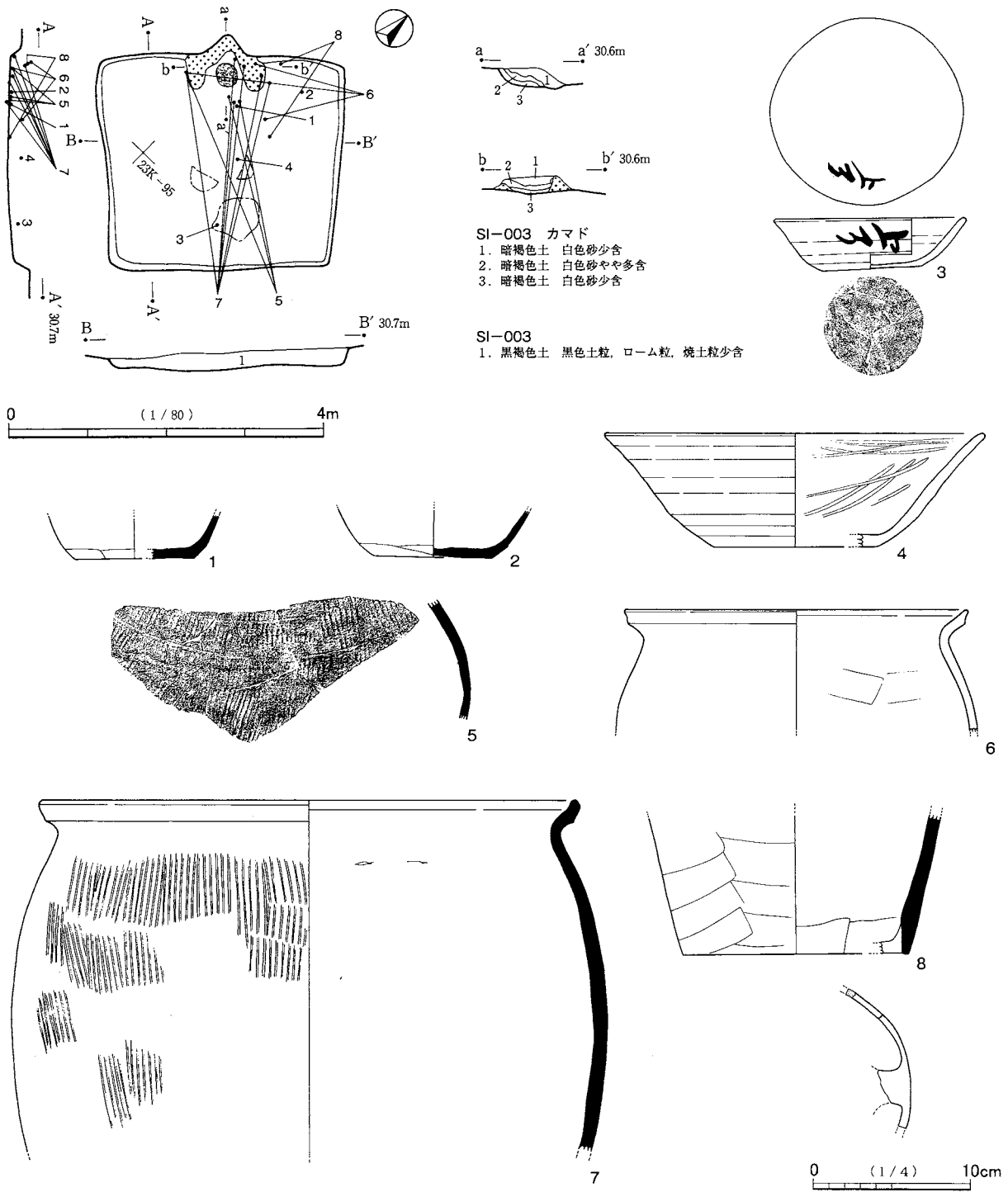
カマド　西壁左（南）寄りに位置する。左奥（南西）隅に近い位置にあり，隅カマド的である。構築材の山砂はカマド堆積土上層に多くみられるが，下層には少ない。下層は黒色味のやや強い色調である。遺存は概して悪い。

堆積土　暗褐色土主体で，少量の焼土粒・炭化粒を含む。自然堆積と思われる。

出土遺物　カマド周辺から中央にかけて多く出土した。図示できた遺物は11点である。1・2は千葉産の須恵器杯，3・4はロクロ土師器杯，5～7は千葉産の須恵器甕，8～11は土師器甕である。1は白色粒の含有が多いが，質感から千葉産と思われる。8・9・11は常総型の甕である。

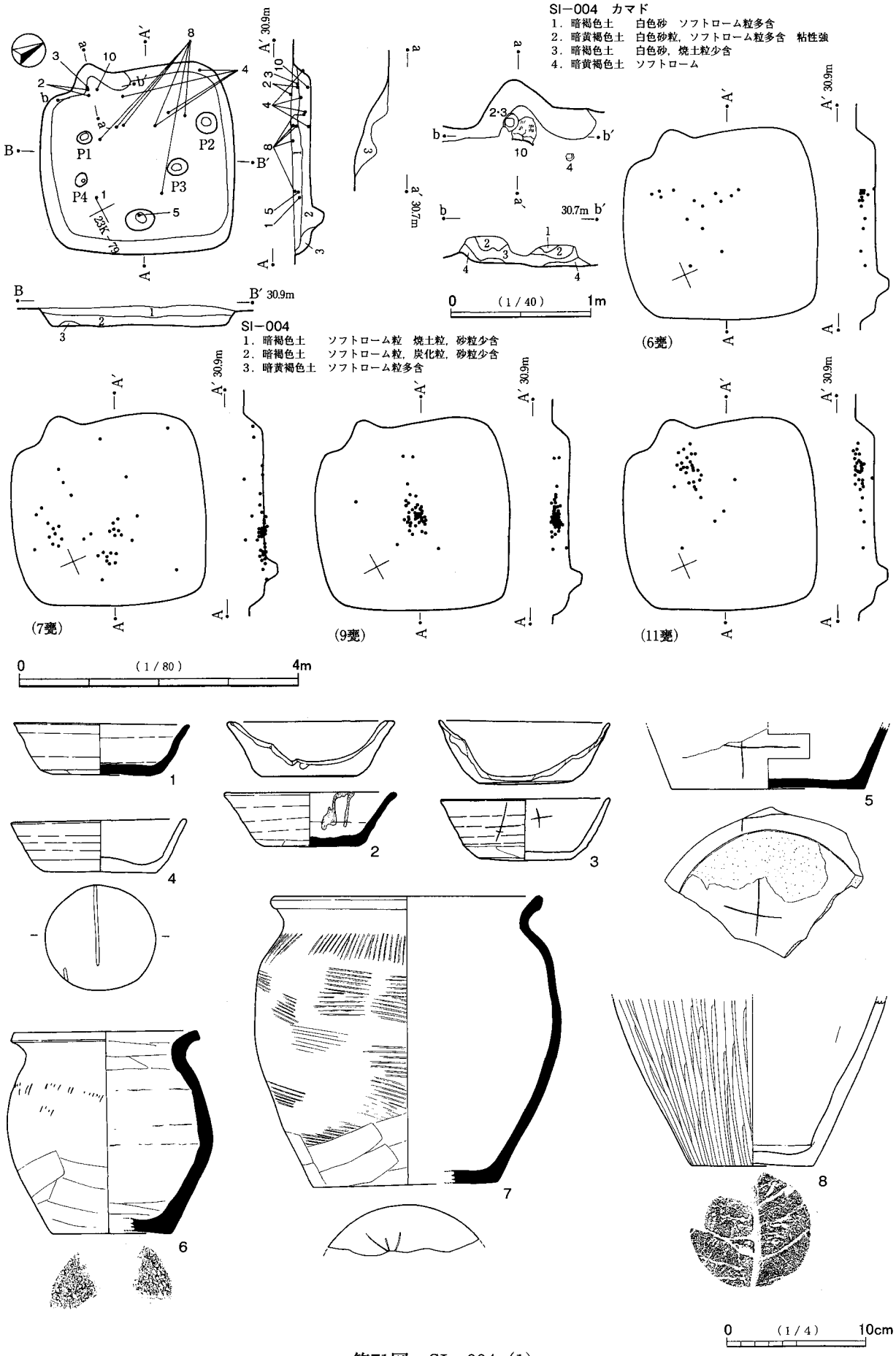
2は内面に油煙が付着し，灯明具として使用された土器である。欠損部は口縁部の一部のみで，完形に近い土器である。欠損箇所の周囲の口縁・体部が割れて接合している。接合箇所は口縁部周で1/3程度である。その他には破損箇所がない。破損箇所近くの体部内面に逆「へ」字状風の条線があるが，ヘラ書きと思われる。欠損・破損部分はやや不整であるが弧状を呈しており，打ち欠き・打ち割りされた可能性がある。3の体部内外面には線刻がある。内面のものは「＋」である。外面のものはやや横位の線が不明瞭であるが，同様に「＋」と思われる。あるいは，横線は土器製作時の傷またはロクロ目の線を利用しているのかもしれない。口縁部の1/2弱を欠損している。また欠損部分を含んで口縁・体部の3/4弱が割れて接合しているが，2箇所の弧状部分が連続した形状である。2同様，打ち欠き・打ち割りされた可能性がある。4は底部外面に，ほぼ中心を貫く焼成前の線が1条ある。製作時の痕跡とも思われるが，ヘラ書きとしておきたい。

5も「＋」のヘラ書きが胴部外面下位と底部外面の2箇所にみられる。

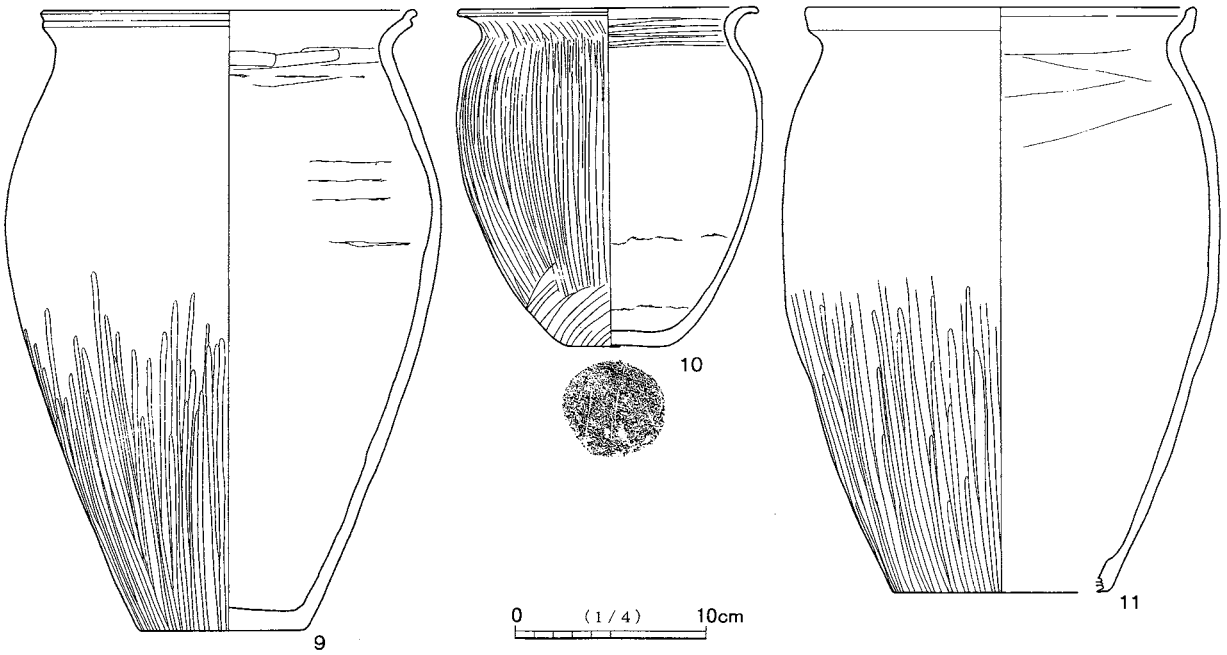


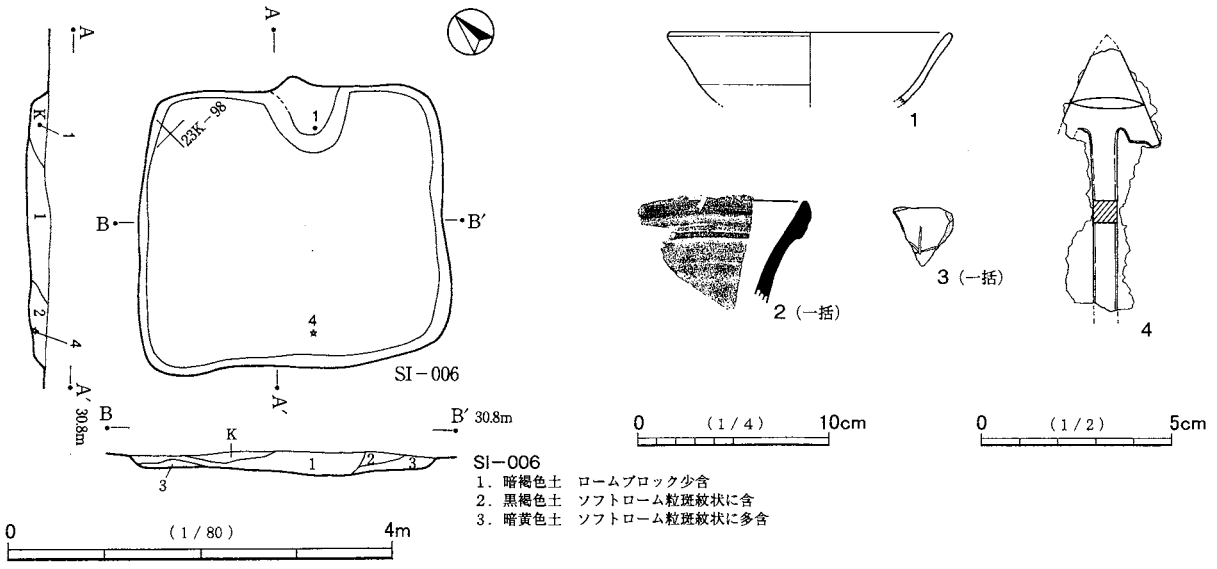

第70図　SI－003

7の胴部外面の平行タタキは縦横に施されており，部分的に格子目状となっている。底部外面にヘラ書きがあり，3条の線がみられる。そのうち2条は接しているが，交差するのかもしれない。欠損部にかかるため，不明瞭であるが，文字ではなく記号と思われる。6は胴部外面に平行タタキが施されているが，下半は手持ちヘラケズリにより完全に消されている。上半にはみられるが，器面の荒れ及びナデにより，かなり不明瞭である。器壁は厚く，小型のわりに重量感のある土器である。


SI−004　カマド
1．暗褐色土　白色砂　ソフトローム粒多含
2．暗黄褐色土　白色砂粒，ソフトローム粒多含　粘性強
3．暗褐色土　白色砂，焼土粒少含
4．暗黄褐色土　ソフトローム
SI−004
1．暗褐色土　ソフトローム粒　焼土粒，砂粒少含
2．暗褐色土　ソフトローム粒，炭化粒，砂粒少含
3．暗黄褐色土　ソフトローム粒多含
P1
P2
P3
P4
30.9m
30.7m
(6甕)
(7甕)
(9甕)
(11甕)
0　(1/40)　1m
0　(1/80)　4m
0　(1/4)　10cm

第71図　SI－004（1）




第72図　SI－004 (2)・006

10はやや小型の甕である。搬入品であり，濃尾型の甕である※)。

器形・製作技法・胎土のどれをとっても，在地及び周辺地域ではみられないものである。粗いハケ目が外面と口縁部内面に施されている。外面のハケ目の方向は縦方向で，上から下に施していると思われる。口縁部と胴部外面下位は斜方向で，胴部下位のハケ目は中・上位のハケ目を切っている。口縁部内面のハケ目の方向は横方向である。胴部内面はていねいなナデが施されており，器壁の段差はほぼ消されている。底部外面は木葉痕があると思われるが，ナデのために判然としない。胎土は黒色粒・小石を多量に含む。口縁部は強く外反し，端部は水平に延びている。器壁はかなり薄く，軽量感がある。色調は橙褐色・淡褐

※）(財)愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター　城ヶ谷和広氏・永井宏幸氏からのご教示による。なお，その他の土器からみられる暦年代については９世紀初頭頃と思われるが，この甕と年代的に整合するとのことである。
城ヶ谷和広 1997 「東海地方における古代の土器生産と流通（予察）」『古代の土師器生産と焼成遺構』 窯跡研究会

色で，焼成は良好である。

常総型の甕８・９・11は各々別個体である。９は甕としては比較的遺存がよい。底部外面はナデが施され，木葉痕はみられない。

２・３・６はカマド内の出土である。６は口縁部を竪穴内側に向けた横倒れの状態で，火床部中央の底面から出土した。２・３は６の左隣の下層からで，やや傾いた２枚重ねの正位で出土した。下が２，上が３である。２の破片はやや前方の上層に散っている。２・３・６は土器の様相及び出土状況から，カマド廃棄の祭祀に伴う遺物と思われる。カマド周辺及びカマドのある奥（西）壁側からは，４・８・11？が出土しているが，床面に接した破片は少ない。９は中央主体，11はカマド前方から中央にかけて出土したが，多くの破片が床面よりも高い位置である。５は出入口部柱穴上部から出土したが，上層の出土であり，出土位置が意図的なものか断定しがたい。

SI－006（第72図，図版25）

**位置**　調査区中央やや西寄りの23K－98グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.9m，幅が3.2mの方形をなす。深さは20cmである。

**床面**　傾斜はないが，凹凸がある。硬化面はみられない。植物痕や後世の土地利用の影響を受けていると思われる。

**カマド**　北東壁中央に位置する。若干の山砂と焼土粒がみられるが，浅いうえに撹乱を受けており，遺存が悪い。

**堆積土**　少量のロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　竪穴全体にみられるが，分布は薄い。堆積土が薄いことが影響していると思われる。図示できた遺物は４点である。１・３はロクロ土師器杯，２は千葉産の須恵器甕，４は鉄鏃である。２は口縁部の破片，３は底部の破片で，１も遺存が少ない。３は底部外面に３条線の交差するヘラ書きがある。欠損部にかかるためやや判然としないが「大」と思われる。なお書き順も現在の「大」と同様である。「大」とみるのは，２画目の入りが１画目の横線よりも長く延びないことによる。４は鏃身から棒状部の一部まで遺存する。鏃身は広身の三角形である。切先を欠く。逆刺をもつが，段状となっている。棒状部と茎の境で欠損している可能性があるが，錆膨れが著しいため，判然としない。

４は南西（前）壁際中央の床面から出土した。本住居では出入口ピットが検出されなかったが，４の出土位置は出入口部に相当すると思われる。祭祀的様相をもつ可能性があるが，このことだけで断定するのは難しい。

SI－008（第73図，図版26）

**位置**　調査区南西部西寄りの22M－01グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

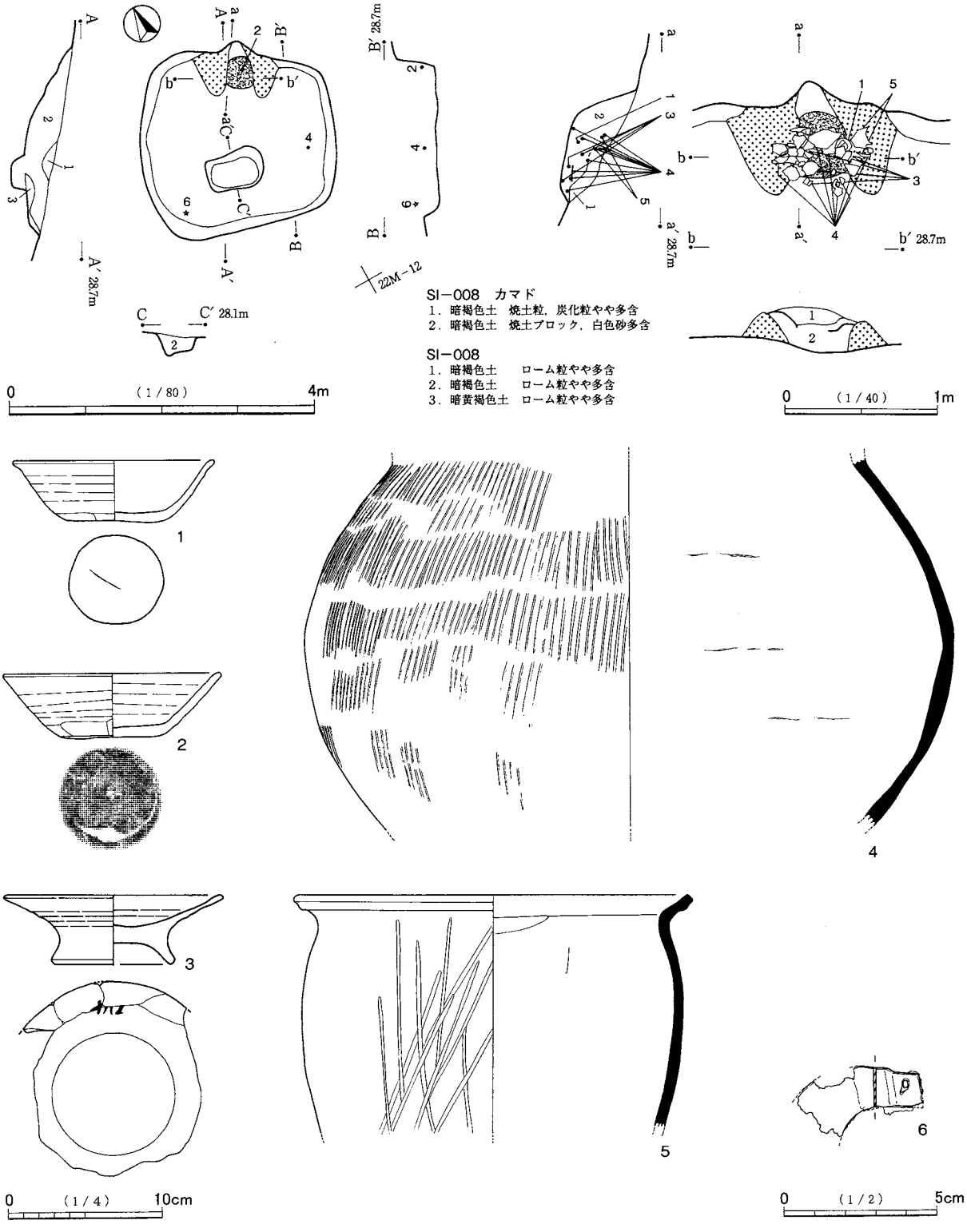
**形状・規模**　長さが2.5m，幅が2.6mで，台形的な隅丸方形をなす。深さは最深で50cmである。東辺が短く，西辺が長い。

**床面**　北側がやや高く，南側がやや低い。若干の凹凸もある。硬化面はみられないが，中央やや南に土坑が存在する影響も考えられる。

**貯蔵穴等**　中央やや南側に，やや不整な長方形の土坑がある。長さが76cm，幅が45cm，深さが28cmである。底面は凹凸がある。土層断面では，上から切っている様相はみられないが，堆積土に差がないだけで，

他遺構の可能性もあると思われる。本竪穴に伴うとすれば，まず貯蔵穴が考えられる。ただし竪穴内での位置，平安時代の当地域を考慮すると通常のものではないであろう。本竪穴が何らかの工房であり，それに関係するものが考えられるが，根拠に欠ける。出入口部とも思われるが，かなり内側である点が疑問である。また掘りかたの可能性もあるが，これも断定しがたい。

カマド　北壁中央に位置する。被熱痕跡が顕著であり，袖部から煙道部，火床部にかけ赤色化した面が




第73図　SI−008

広がっている。堆積土も焼土粒・塊を多く含む。ただし上部の遺存があまりよくない。

**堆積土**　ローム粒をやや多く含む暗褐色土主体である。土坑内も竪穴の主要な堆積土と同様である。

**出土遺物**　カマドからの出土遺物が多い。また北側から東側に分布するが，土坑上及び南・西の壁際が少ない。南西側が少ないのは，堆積土が薄いためであろう。図示できた遺物は6点である。1・2はロクロ土師器杯，3はロクロ土師器高台付皿である。4・5は千葉産の須恵器甕である。6は鉄製品で，製品名を特定しがたい。

1は底部外面に焼成前の1条線がある。ヘラ書きの可能性があるが，単なる製作時の痕跡とも思われる。2の糸切り痕は回転としたが，回転が弱く，静止的である。3の高台部はやや高さがある。「加」と思われる墨書が体部外面に正位でみられる。4は大型の甕である。内面は無文の当て具痕が顕著で，凹凸がある。5は外面に平行タタキが施されているが，ナデによりほとんど消されている。やや常総型の土師器甕的な土器である。被熱痕跡が著しく，内外面の一部が暗灰色，黄灰色に変色している。6は穂摘具に似た形態であるが，大きく曲がっているため，穂摘具と断定しがたい。しかし曲がりは錆びて歪んだ2片を接合しているためと思われ，本来の形状を留めていない可能性が考えられる。片側の端部付近が遺存する。非常に薄い作りである。孔は空いたままの状態でみられる。その端に繊維の痕跡が遺存している。孔に通した紐が錆付いたものかもしれない。

1～5はカマド内から出土した。なお4の一部は東（右）壁側中央中層にも散っている。2は火床部中央下層から正位で出土した。1は2の右隣下層から出土し，3の主要部は2の前方から出土した。1は倒位，3主要部は正位の可能性があるが，判然としないため不明としておきたい。4は下層から上層に及び，5は上層の出土である。3が墨書をもつことと1～3の出土状況から，1～3はカマド廃棄の祭祀に伴う遺物と考える。4も1～3のセットに加わると思われる。5は祭祀に加わることと，単なる廃棄と，双方の可能性が考えられる。

SI－009（第74図，図版26）

**位置**　調査区南西部西寄りの22L－71グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。西方の竪穴住居群も比較的近い位置にある。

**形状・規模**　長さが2.5m，幅が2.9mの方形をなす。深さは30cmである。

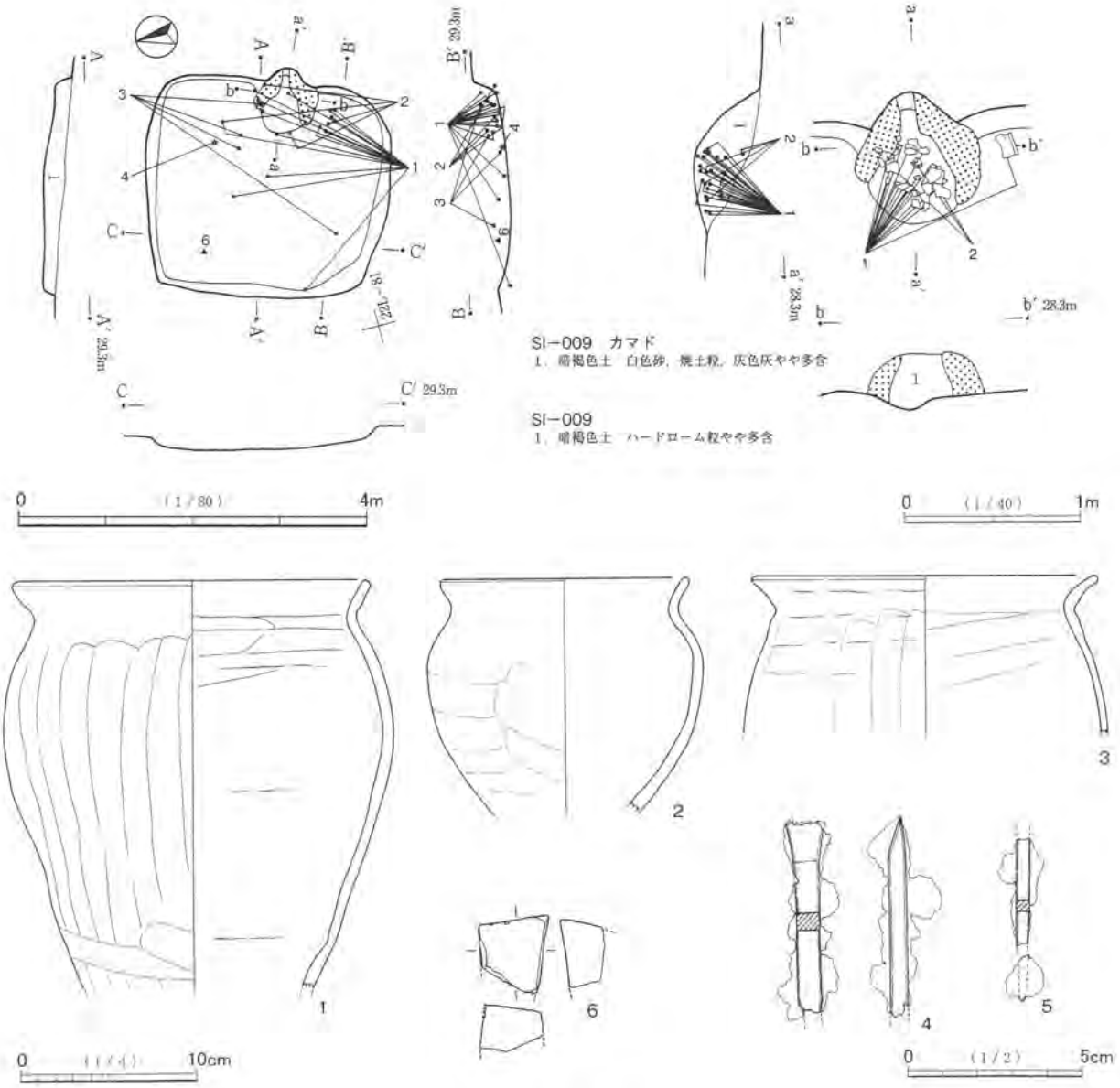
**床面**　中央が深く，壁際が浅い。確認面から床面まで浅いため，耕作や植物痕の撹乱により，やや損なっていると思われる。硬化部分は中央に点在してみられるが，広い面は遺存しない。

**カマド**　東壁やや南寄りに位置する。構築材は山砂を主体とし，よくしまっている。堆積土は灰をやや多く含む均一な土層である。しまりがなく，軟質である。

**堆積土**　ハードローム粒をやや多く含む暗褐色土層である。

**出土遺物**　カマド内・周辺からの出土が多く，他は少ない。図示できた遺物は6点である。1～3は土師器甕で，在地の製品である。4・5は鉄製品で，4はノミと思われる。5は棒状品で，性格が不明である。6は砥石である。

1は底部周辺を欠くが，口縁部から中位までは比較的遺存がよい。2は小型の甕である。被熱により，内面と胴部外面下位の荒れが著しい。4は刃部から茎の一部まで遺存する。錆膨れが著しいため形態がやや不明瞭であるが，切先は図のように広がり，尖ると思われる。棒状部は破損部近くでわずかにすぼまり，茎に移行すると思われるが，これもやや判然としない。5は鉄鏃の茎，紡錘車の紡軸，釘等が考えられ，




第74図 SI－009

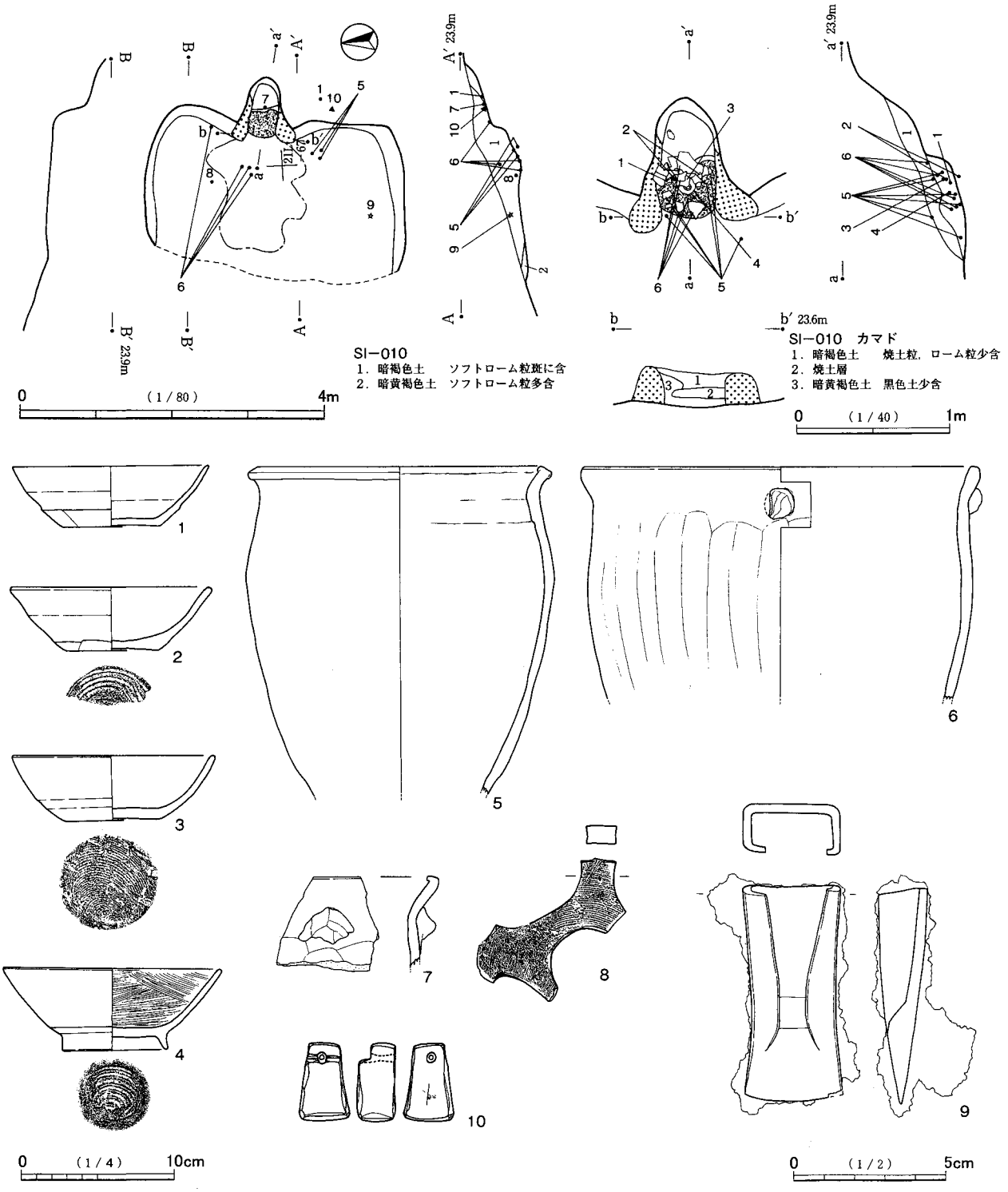
あるいは4の末端部かもしれないが，そのいずれとも断定しがたい。4・5とも本質は付着していない。6の石材は流紋岩である。元々は方柱状であるが，折損して片方の小口面側が遺存する。折損面も使用されているが，やや平滑でない。また図左側面と下面もややざらつきがある。図上面と右側面・小口面の3面は平滑である。下面は2面をもち，左側面はやや凹凸がある。

1をはじめ カマド内及び右外側から多く出土したが，カマド前方や左側にも散っている。出土層位は下層を主とするが，上層にも及んでいる。2・3もカマド周辺からの出土で，層位も下層から上層にわたる。4はカマド左前方の床面からの出土である。

SI−010（第75図，図版26）

位置 調査区西端南寄りの21L－67グリッドを中心に位置する。西方に狭小な支谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

形状・規模 幅が3.4m，深さは45cmである。西（前）壁側の流失により，長さが不明である。形態は方形と思われるが，横長・縦長等は不明である。




第75図　SI－010

**床面**　遺存する床面は東側が高く，西側に下っている。ただし西側については雰囲気を留めるものの，若干損なっていると思われる。カマド前から中央部にかけて，若干の硬化範囲が遺存している。

**カマド**　東壁中央に位置する。構築材は山砂を主体とし，混じりけが少ない。堆積土は下層に焼土層があり，焼土ブロックを多く含むが，最下層にはあまり焼土が含まれない。

**堆積土**　ソフトローム粒を斑状に含む暗褐色土を主体とする。

**出土遺物**　カマド内から多く出土した。カマド以外からは多量でないが，満遍なく出土している。図

示できた遺物は９点である。１～３はロクロ土師器杯，４はロクロ土師器高台付杯，５は土師器甕，６～８は土師器甑，９は袋状鉄斧，10は砥石である。

１の底部は全面に一方向の手持ちヘラケズリが施され，２・３の底部は回転糸切り後無調整である。３は体部下端もヘラケズリが施されていない。４は口縁部の一部を欠くが，完形に近い土器である。欠損部は小さく，意図的なものか断定しがたい。１～４は被熱により，概して色調の変化，器面の荒れがみられる。特に３・４は顕著である。３の外面は灰白色に変色する部分が多く，器面の剥離も著しい。４も内面の灰黄色化，褐色化及び剥離が著しい。４は被熱により内面の黒色処理が消えているかもしれない。

５～８は器壁の厚い土器である。７は把手周辺の破片である。５・６とも口径が広い。５は胴部最大径をやや下回る程度で，６は胴部最大径をやや上回っている。５は口縁端部が内外に肥厚し，７も内面側に突出している。６は外面の口縁部下に不整なボタン状の把手が１箇所遺存している。口縁部は1/2弱遺存するが，１箇所しかみられない。対向する位置に２箇所存在すると思われる。７の把手も不整であるが，三角錘状にやや尖っている。６と７は別個体である。８は５孔をもつ底部破片の一部である。須恵器的な作りであるが，底部外面に回転糸切り痕があり，褐色の色調からも，須恵器窯で焼成されていない可能性があるとみて，土師器とした。

９は完形であるが，錆膨れが著しい。やや小振りの鉄斧である。刃部先端側は撥状に軽く開く形態である。柄の装着部は鉄板を両側から折り返して袋状に作り出し，横断面形は長方形をなす。袋部の長さは４cm程度であり，全長の半分である。刃先の研ぎ出し範囲は表裏面とも１cm弱程度の幅と思われるが，錆のため不明瞭である。10の石材は流紋岩である。懸垂用の孔をもつ提砥で，完形品である。孔部分は図上面側に抉り込みがあり，左側面からみて「L」字状の段となっている。なお孔上部の小口面からみて「L」字状の段の下面に孔から続く溝がみられる。このことから，当初は方柱状の砥石に穿孔されたが，その後小口角部分の欠損や磨滅等の事情により，段状に加工されたものと思われる。全面が使用されて平滑である。段状部分の孔両側に筋状の痕跡がみられる。研ぎ痕と思われるが，段状に加工した際の痕跡かもしれない。図下側の小口面は長軸側中央がやや高く，若干の丸みをもつ。また面と面との境が直角状でなく，磨られて，わずかな面をもつ部分が多い。

３・４は火床部中央下層から２枚重ねの倒位で出土した。４が下，３が上である。被熱の状況及び出土位置から，支脚に転用された土器といえる。３・４の周囲からは，１・２・５～７が出土した。なお１・５・７はカマド周辺にも散っている。10はカマド右方で，確認プランよりやや外側から出土したが，近接した位置であるため，本住居出土遺物と同等のものとして扱う。カマド内の土器群は，最終的にカマド廃棄の祭祀に使用された可能性も考えられるが，単に遺棄・廃棄されただけとも思われ，祭祀的様相については断定しがたい。

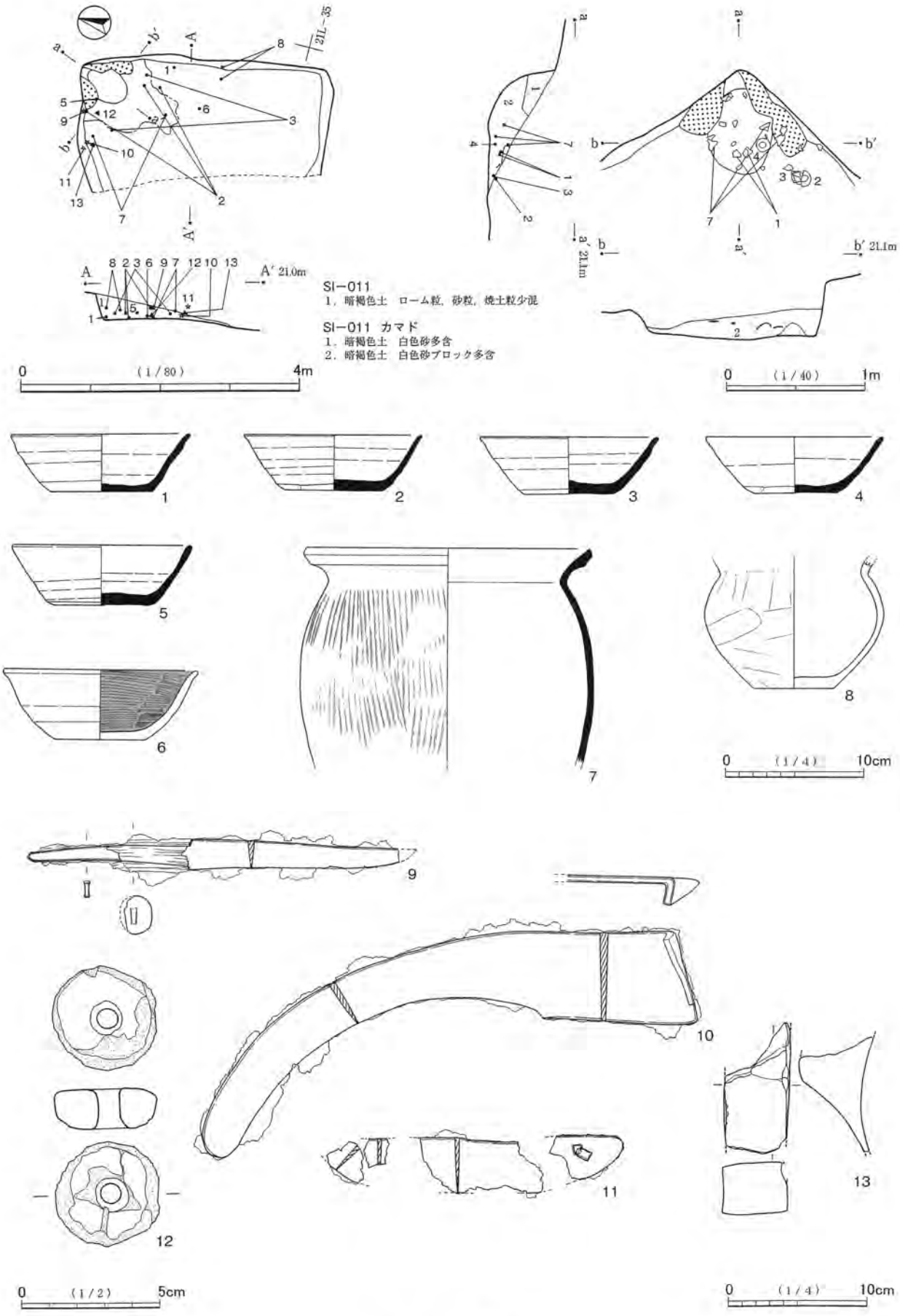
SI－011（第76図，図版27）

位置　調査区西端の21L－24グリッドを中心に位置する。西方に支谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　西側の流失により，竪穴の遺存は東側半分強程度である。南北方向の長さが3.6m，深さが45cmである。東西方向の長さが不明である。形態は方形と思われるが，横長・縦長等は不明である。

床面　遺存する床面はほぼ平坦である。カマド前に硬化面がみられる。

カマド　北東隅に位置する。山砂がみられるが，多量ではなく，構築材に暗褐色土の使用も考えられる。


SI−011
1．暗褐色土　ローム粒，砂粒，焼土粒少混
SI−011 カマド
1．暗褐色土　白色砂多含
2．暗褐色土　白色砂ブロック多含
A 8 2 3 6 9 7 12 10 13 A′ 21.0m
a a′ 21.1m
b b′ 21.1m
0 (1/80) 4m
0 (1/40) 1m
0 (1/4) 10cm
0 (1/2) 5cm
0 (1/4) 10cm

第76図　SI－011

前側の遺存は悪い。火床部に赤色化した面はみられず，袖部の被熱痕跡も顕著ではない。

**堆積土**　少量のローム粒を含む暗褐色土である。

**出土遺物**　カマド内・周辺から多く出土した。堆積土の遺存が少ないため，竪穴全体に分布していたか不明である。図示できた遺物は13点である。１～５は千葉産の須恵器杯，６はロクロ土師器杯，７は千葉産の須恵器甕，８は小型の土師器甕である。９～11は鉄製品で，９は刀子，10は鎌，11は穂摘具である。12・13は石製品で，12は紡錘車，13は砥石である。

４は接合して完形の土器であり，２・３も遺存がよい土器である。また１も2/3程度遺存する土器である。３は口縁・体部の一部が「U」字状に欠損し，その欠損部に続いて２片が接合している。欠損部と接合部は打ち欠き・打ち割りされた可能性が考えられる。４は口縁・体部の1/2弱が割れている。接合部は打ち割りされたことも考えられるが，出土時点で割れていたかどうか判然としない。そのため可能性の指摘に留める。２はやや細かく割れ，１は整った割れ方ではない。ともに意図的な状況をみるのは難しい。

７は口縁部が1/2強遺存するが，胴部の遺存は少ない。胴部内面に当て具痕の凹凸が若干みられる。８の底部外面は全面にヘラケズリが施されている。

９は遺存のよい刀子で，欠損は切先のわずかな部分のみである。柄の木質も　刃部寄りのところでよく遺存している。背関，刃関とも直角に切り込みが入る。10は完形の鎌である。刃部と基部の境が刃側で明瞭である。11は数片に割れており，やや遺存が悪いが，右側端部寄りの目釘が遺存している。目釘は角釘で，頭部を右斜め下方に「L」字形に折り曲げている。目釘孔も方形である。裏面に握り柄（木台部）が付くが，その木質が若干付着して遺存している。目釘は折れており，裏面での遺存はわずかである。

12は滑石製の紡錘車である。表面は剥離する部分が多いが，孔内側はあまり磨耗していない。13の石材は流紋岩である。片方の小口面側の一部から，薄くなった本来の中央側の一部まで遺存する。大きく破損しているため，小口面は遺存しない。図下側が非常に薄くなっているが，片側の破片となった後も使用され続けた結果であろう。破損面を除いて平滑である。図上部の破損面は使用されていないと思われる。

４はカマド火床部前側で，右袖寄りの底面から倒位で出土した。１は割れて破片となったが，カマド火床部前側中央から正位で出土した。４の左隣となる位置である。２・３はカマド右袖前方の下層から，近接して出土した。２は倒位，３は横向きの出土である。２の破片はカマド前方に分布し，３の破片も左袖前方に散っている。７もカマド内･周辺からやや広域に出土し，５はカマド左袖部分の下層から出土した。鉄製品・石製品はカマドの左側の北壁際下層から比較的まとまって出土した。層位は９がやや高いが，カマド左袖近くから出土した影響であろう。鉄製品・砥石等の道具類はカマドの左側の壁際，またはその上方にまとまって保管されていたと思われる。出土状況から，１～４の杯はカマド廃棄の祭祀に伴う遺物と考える。

### SI－012（第77図，図版27）

**位置**　調査区西端の21L－36グリッドを中心に位置する。西方に支谷を臨み，東から西に下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　長さ5.0m，幅4.8mの方形をなす。深さは45cmである。西壁側の多くと南壁側の西寄り部分が流失している。

**床面**　北東側の床面は遺存するが，壁が存在しない周辺の床面及び南西側主柱穴（P4）周辺の床面は遺存しない。遺存する部分を比較すると，北東側が高く，南西側に下っている。なお北東側と南東側の差

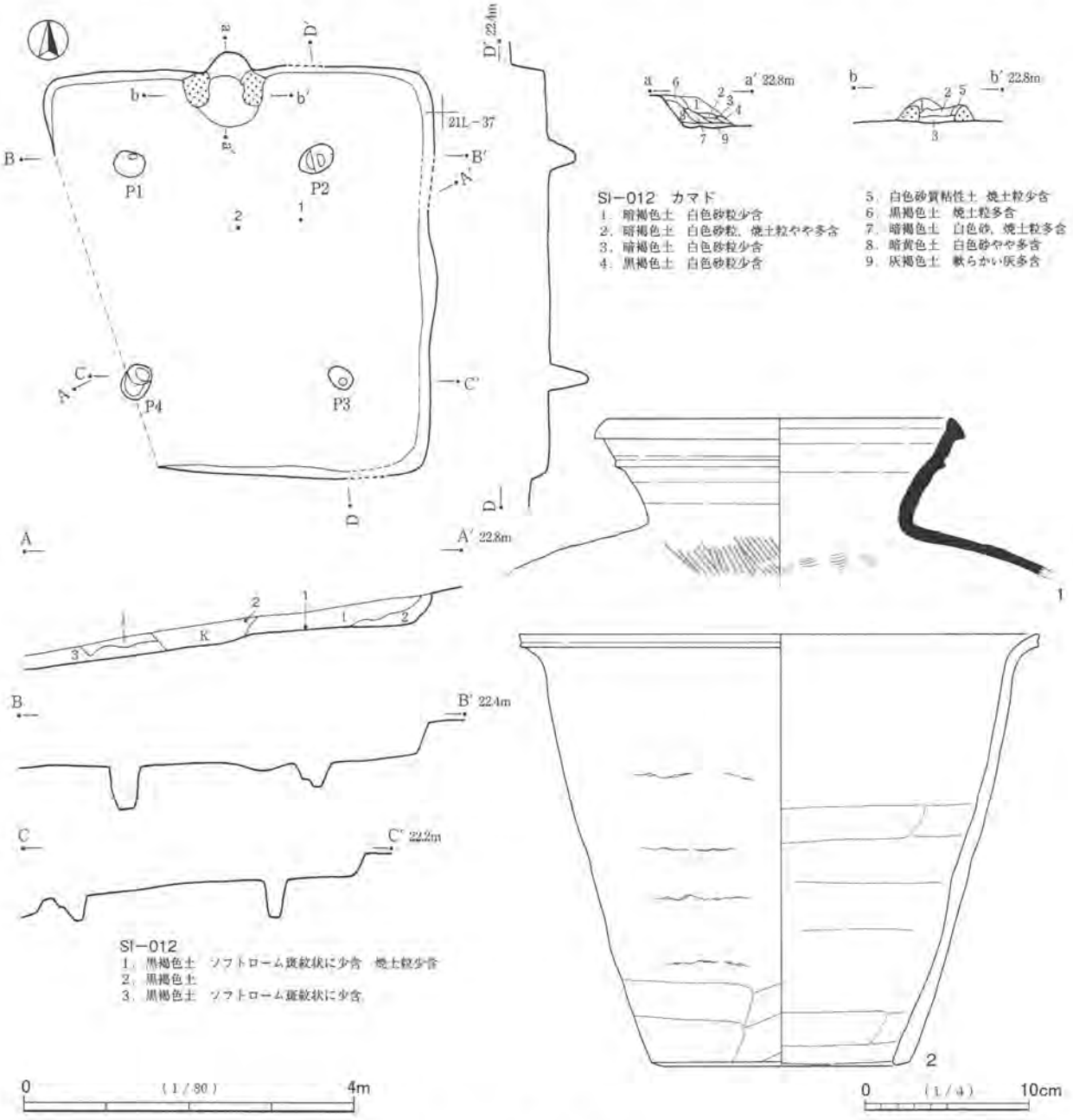
はやや少ないが，北東側と北西側の差はやや多い。中央部に若干の硬化範囲が遺存している。

**柱穴**　主柱穴が4箇所検出された。

**カマド**　北壁中央に位置する。上部と前側の遺存は悪いが，袖部下半部は遺存している。構築材は山砂が主体である。内壁はやや赤色化し，特に左袖は焼土粒・ブロックがみられる。火床部もやや赤色化しているが，あまり顕著ではない。灰が堆積土下層にみられる。

**堆積土**　ソフトローム粒を斑紋状に含む黒褐色土が主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　少量である。図示できた遺物は2点で，1は須恵器大甕，2は土師器甑である。1は外面及び口頸部内面に暗緑色の釉が多く付着している。胴部内面は同心円文の当て具痕がみられるが，ナデによってかなり消されている。胎土に黒色粒がみられる。焼成は良好で，色調は灰白色である。湖西等の東海産と思われる。2の胴部外面は下位を除いて，ヘラケズリ後横方向のナデ，ヘラナデが施されているが，回




第77図　SI－012

転台上で調整されたような雰囲気をもつ。ヘラケズリ以前に平行タタキが施されたようにも思われるが，判然としない。底部は５孔であったかもしれないが，痕跡がみられないため単孔としておく。

１は中央北東寄りの床面から出土した。２は中央北寄りの上層から出土した。２は本住居がかなり堆積した後の流入遺物であり，本住居の構築時期からかなり離れていると思われる。

SI－013（第78図，図版27）

**位置**　調査区西端寄りの22K－60グリッドを中心に位置する。西方に谷がある。確認面は北東から南西に若干下っているが，北東から北西へはほぼ平坦である。

**形状・規模**　長さが3.5m，幅が3.6mの方形をなす。深さは60cmである。

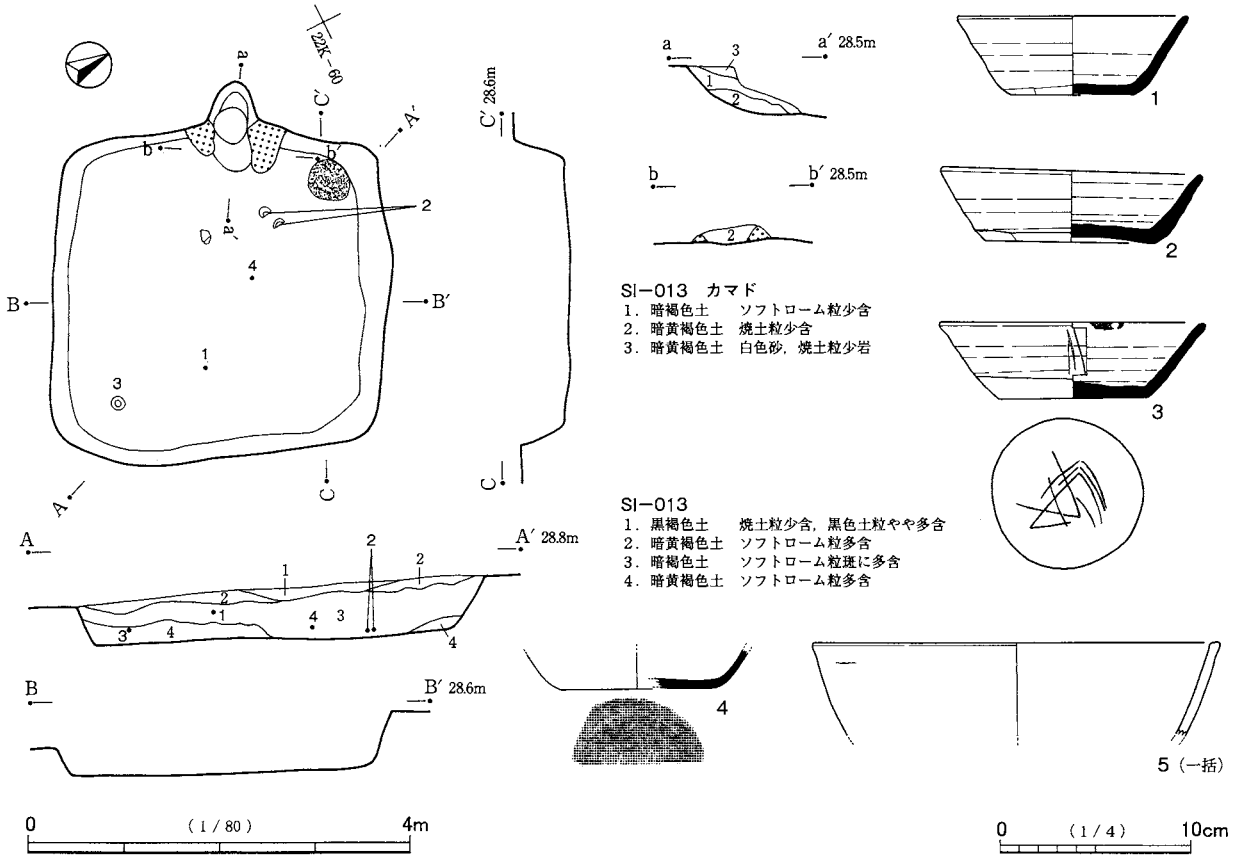
**床面**　北から南にやや下っている。硬化面はみられない。

**カマド**　遺存するカマドは付け替え後のカマドであり，北西壁中央に位置する。付け替え前のカマドが北隅に位置するが，火床部のみの遺存であり，構築材の山砂等は除去されている。火床部は赤色化した面がみられる。付け替え後のカマドには，構築材の山砂がみられるが，あまり遺存がよくない。左袖部分には若干の焼土ブロックがみられる。堆積土も山砂・焼土粒の包含は少量である。

**堆積土**　最上層中央に黒褐色土層があるが，それ以下はローム粒を多く含む土層が主体である。

**出土遺物**　少量であるが，遺存のよい須恵器杯が数点出土している。図示できた遺物は５点である。１～４は須恵器杯，５はロクロ土師器鉢である。１は千葉産，２・３は新治産，４は南比企産である。

３は完形で，まったく割れていない土器である。油煙の付着が口縁端部の内外面に１箇所みられ，灯明




第78図　SI－013

に使用された土器である。油煙付着箇所近くの口縁・体部外面に，線刻がある。縦方向の細い３条線で，横線はみられない。底部外面にも多状の不整な線刻がある。形状から五芒星を意図した可能性がある。２も完形に近い土器であるが，口縁部に小さな２箇所の欠損がある。そのうちの１箇所は逆三角形状に破損して，おそらく２片に割れ，１片は接合しているが，１片は欠損している。土器は逆三角形の下頂部を境として，1/2強・1/2弱程度の割合で，２片に割れている。逆三角形の破損部は打ち欠き・打ち割りされた可能性がある。２片の割れも意図された可能性があるが，土圧等の影響もあるため断定しがたい。２の体部外面にも線刻と思われる箇所があるが，焼成がややあまいため判然としない。１・４の遺存は少ない。

５も小片である。口縁端部は角張った形態で，内面には１条の沈線が廻り，外面もやや窪んでいる。口縁部は内湾していないが，鉄鉢形土器といえよう。

２はカマド右袖前方の床面近くから主として２片に割れて出土した。また３は左前隅近くの下層から出土した。２・３とも正位・倒位等の状況が不明である。堆積土の２層以下が埋め戻されているとすれば，２・３はカマド・竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性が高くなるが，良好な出土遺物が２・３以外にないため，やや断定しがたい。

SI－015（第79図，図版28）

**位置**　調査区西端の21L－07グリッドを中心に位置する。西方に谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　長さが2.3m，幅が推定2.2mの方形をなす。深さは20cmである。斜面にかかるため，南側が流失している。

**床面**　現状では北から南に下っているが，南側は床面を損なっている。北壁際は比較的平坦であり，本来はあまり傾斜していないと思われる。硬化面はみられない。

**カマド**　東壁中央に位置する。山砂・焼土が部分的に多くみられるが，袖部等は遺存していない。カマド下は床面よりも窪んでいるが，使用に伴い深くなったことが考えられる。

**堆積土**　少量のローム粒・焼土粒を含む暗褐色土である。

**出土遺物その他**　出土遺物はないが，奈良・平安時代の遺構と思われる。

SI－017（第79図，図版28）

**位置**　調査区西端寄りの21K－78グリッドを中心に位置する。西方に谷を臨む緩斜面に立地する。確認面は北東から南西に下っているが，北東から北西への傾斜は弱い。

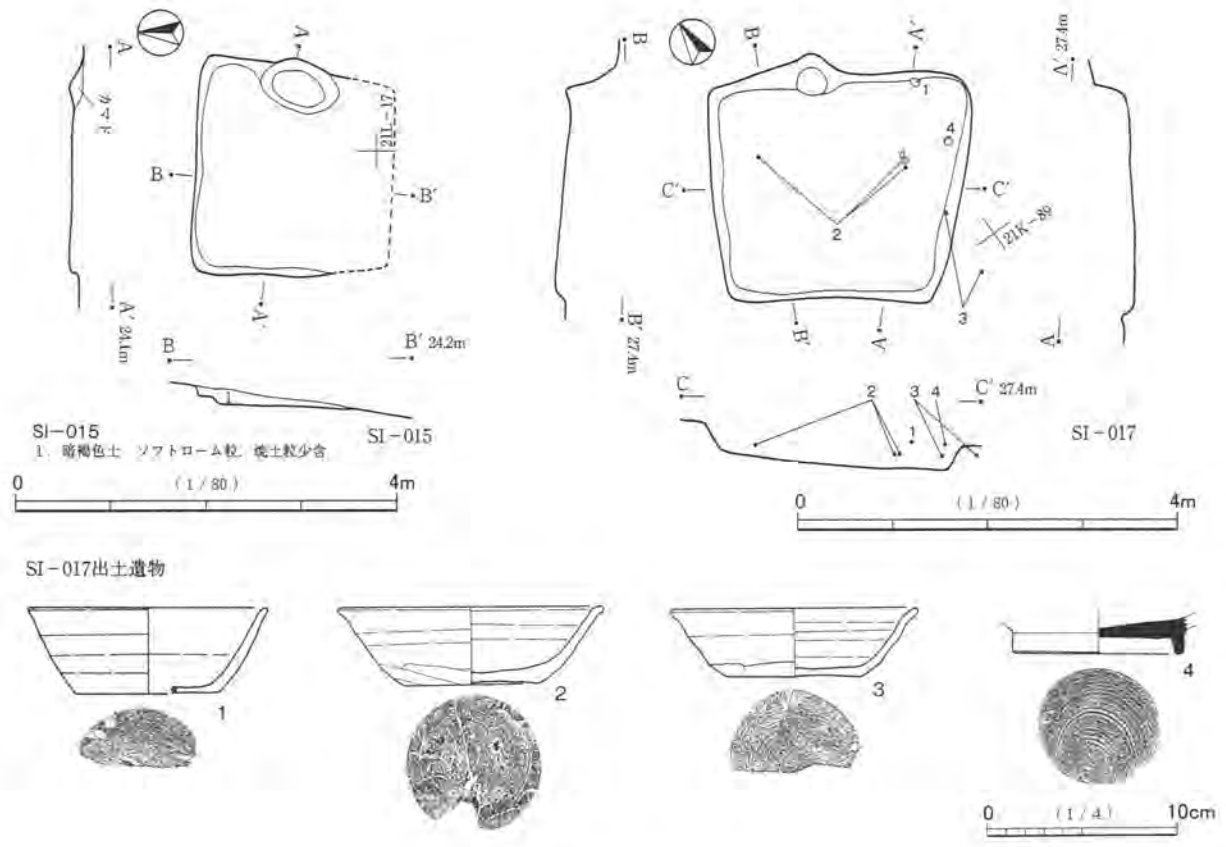
**形状・規模**　長さが2.4m，幅が2.7mで，やや逆台形的な不整の方形をなす。深さは40cmである。

**床面**　北から南に下っている。カマド前から中央にかけて硬化している。

**カマド**　北東壁北（左）寄りに位置する。カマドの位置に山砂・焼土がやや多くみられるが，袖部等は遺存していない。カマド下は若干窪んでいるが，使用によって深くなったことが考えられる。

**出土遺物**　東側にややまとまってみられるが，その他は少ない。図示できた遺物は４点である。１～３はロクロ土師器杯，４は灰釉陶器碗である。２・３は回転糸切り離し後，手持ちヘラケズリが施されているが，１は無調整である。４は底部内面には釉が施されていない。口縁・体部の全周が欠損しているが，除去されて硯に転用されたものと思われる。底部内面がやや滑らかになっているように思われるが，本来の器面の様相かもしれない。底部外面には顕著な使用痕がみられない。

１～４はいずれも床面から浮いた位置の出土である。堆積土が自然堆積であれば，竪穴内に若干堆積し




第79図　SI－015・017

た後に，入り込んだ遺物である。周囲からの廃棄や流入，上方からの転落等が考えられる。

SI－018（第80図，図版28）

位置　調査区西部やや北寄りの22K－42グリッドを中心に位置する。北西方向に谷があるが，比較的平坦な地点に立地する。確認面はわずかに南西に下っている。

形状・規模　長さが3.1m，幅が3.4mの方形をなす。深さは30cmである。南東辺がやや長い。

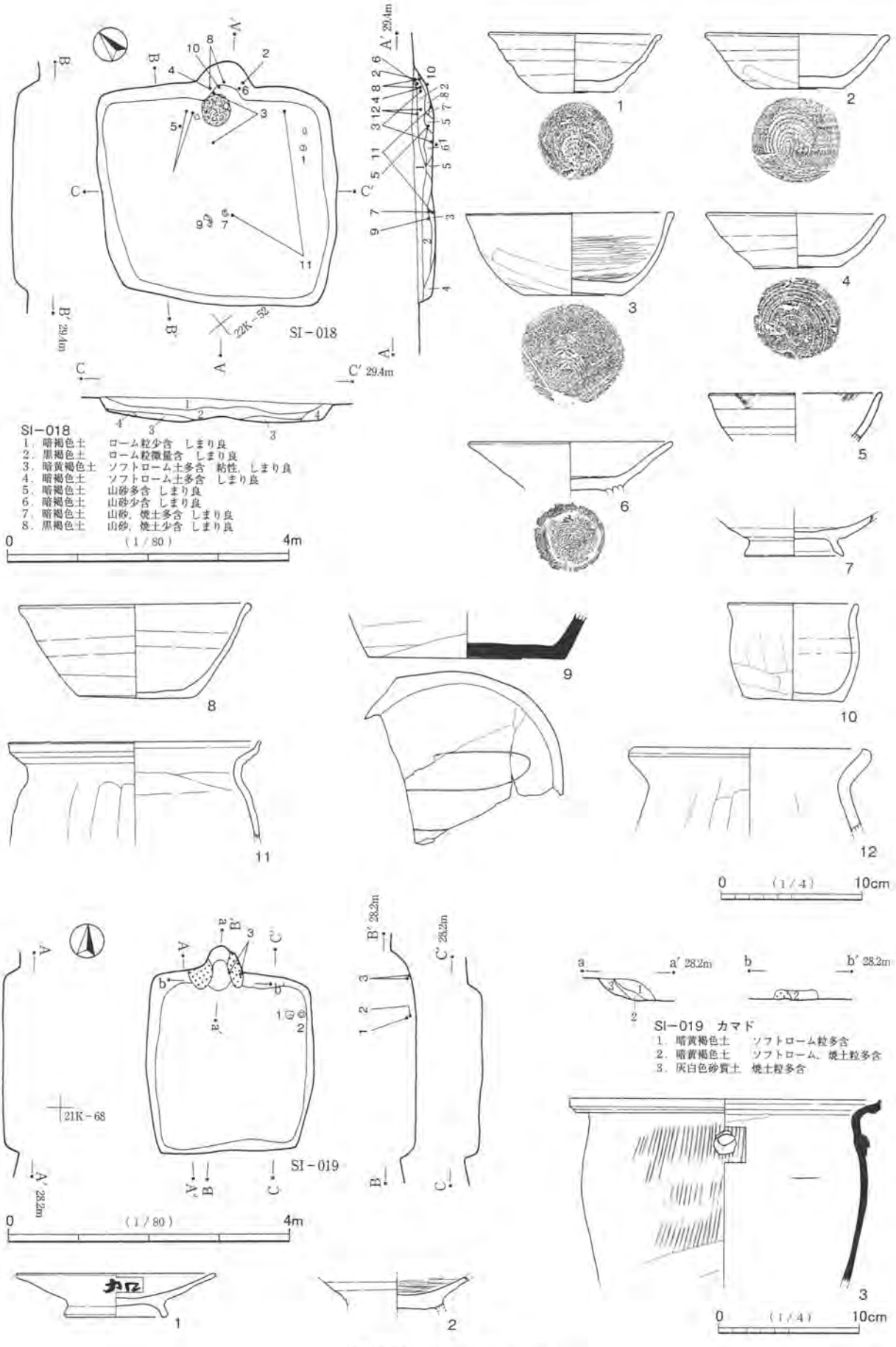
床面　北から南にわずかに下っている。硬化面は顕著でないが，中央がわずかに硬化している。

カマド　北東壁中央に位置する。構築材は遺存しない。火床部はわずかに赤色化した面がみられる。

堆積土　壁際・下層はローム粒を多く含むが，上・中層は暗褐色土・黒褐色土主体で，ローム粒の包含は少ない。自然堆積と思われる。

出土遺物　カマド内及びカマド周辺に多く，中央や東（右奥）隅側にもみられる。その他の分布は希薄である。図示できた遺物は12点である。１～５・８はロクロ土師器杯，６・７はロクロ土師器高台付杯，９は千葉産の須恵器甕，10～12は在地の土師器甕で，10は小型品である。６の杯部は器高が低く，皿的な器形である。７は杯部の遺存が少ないが，同様の器形である。10は小型甕としたが，やや須恵器のコップ形土器に似た土器である。

杯のうち３・８は大型品で，３は椀形の器形である。５は小片から復元図化した。口縁部に油煙が付着しており，灯明具である。図示した内外面の油煙は反転したため，同一時のものであるが，図化していない別破片に油煙があり，油煙は少なくとも２箇所ある。２・４・10は遺存がよく，６・８も比較的遺存がよい。２は口縁部を若干欠くが，他は割れていない。欠損部が小さいため，打ち欠きされたかどうか判然




第80図　SI－018・019

としない。４は口縁・体部の1/2弱が割れて接合するが，その他は割れていない。カマド内から出土しており，打ち割りされた可能性が考えられる。６の杯部も口縁部が若干欠損するだけで，割れていない。高台部は遺存しないが，意図的に除去されてカマド廃棄の祭祀に使用されたものと思われる。８の欠損部は口縁・体部の２箇所であるが，弧状や不整な逆三角形状を呈しており，打ち欠きされたことも考えられる。しかしその他も割れているので，断定しがたい。10の欠損部は口縁部の1/2弱で，その他は割れていない。打ち欠きされた可能性があるが，欠損が体部の深い位置まで及んでいないためやや断定しがたい。１～６・８～10は赤色化・器面の荒れ等の被熱痕跡がみられる。特に１・８・10は顕著である。７は口縁・体部の全周を欠損する。打ち欠きされた可能性があるが，判然としない。

９は底部外面に大きなヘラ書きがある。「Ｚ」や「乙」を丸くしたような形の記号である。ヘラ書きを記入するため，須恵器甕としては丁寧なナデが施されている。

11の口縁部はやや須恵器的な作りである。色調も黒褐色であるが，全体の器形・技法から土師器とした。12は器壁が厚い。口縁端部はやや内湾し，内面が突出している。

２～６・８・10・12はカマド内及びその周辺から出土した。２・６はカマド右側奥から内側に傾いた倒位の２枚重ねで出土した。２が下，６が上である。10はカマド中央やや左寄り奥側からやや傾いた倒位で出土した。10のさらに奥からは，８の一部が倒位で出土した。３・４はカマド左寄りから２枚重ねの倒位で出土した。４が下，３が上である。被熱状況から，以上の土器群の一部または多くが支脚に転用されたことが考えられ，特に10・８は有力な候補である。しかしカマド内の数箇所の位置で倒位であること，構築材が遺存しないことから，甕片の12が不明である以外は，最終的にカマド廃棄の祭祀に関わる土器群と思われる。なお５は小片であるが，灯明具のため，セットに加わる土器と思われる。その他，１は右奥隅近くの床面から出土し，７・９は中央の下層から出土したが，ともに正位・倒位等の状況は不明である。これらも竪穴廃棄の祭祀に関わる土器群かもしれないが，断定しがたい。

**SI－019**（第80図，図版29）

**位置**　調査区西端の21K－58グリッドを中心に位置する。西方に谷を臨み，東から西に下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　長さが2.6m，幅が2.4mのやや不整な方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

**床面**　平坦で，壁際を除いて広く硬化している。

**カマド**　北壁やや西寄りに位置する。構築材は山砂主体であるが，あまり遺存がよくない。火床部はやや窪んでいるが，赤色化した面はみられない。

**出土遺物**　主としてカマド内・周辺及び北東隅付近から出土した。その他のところは少量である。図示できた遺物は３点である。１・２はロクロ土師器高台付皿，３は千葉産の須恵器甑である。

１は体部外面に正位で「加」と書かれた墨書がある。内面に黒色の付着物があり，また内面と高台内の底部外面に赤色の付着物もみられる。赤色物は朱墨と思われる。黒色物は墨痕と思われるが，痕跡が薄く，煤の付着かもしれない。口縁・体部が1/2程度欠損するが，他は割れていない。欠損部の破断面は緩やかな弧状が３箇所連続しており，打ち欠きされたことも考えられるが，やや判然としない。２は口縁・体部の全周と高台部のほとんどを欠損している。欠損部は打ち欠きされて，硯または祭祀具に転用された可能性がある。内面はヘラミガキが施されており，比較的滑らかであるが，墨痕等はみられない。

３の遺存は少ない。不整なボタン状の把手が胴部外面最上位に貼付されている。

1・2は北東隅部の下層から並んで出土した。1は内側で正位の出土と思われる。2は壁際で，正位か倒位か不明である。土器の状態・出土状況が祭祀的である可能性をもつと考える。

SI－020（第81図，図版29）

**位置**　調査区西部やや北寄りの22K－53グリッドを中心に位置する。北西方向に谷があるが，比較的平坦な地点に立地する。確認面は東から西にわずかに下っている。

**形状・規模**　長さが2.3m，幅が2.3mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

**床面**　平坦で，中央部の狭い範囲に硬化面がみられる。

**カマド**　付け替え後のカマドが北東壁やや左寄りに位置する。付け替え前のカマドが北西壁中央に位置する。その部分の堆積土に少量の山砂・焼土粒がみられるが，構築材はほとんど遺存していない。北東壁のカマドも下部が遺存するが，上部の遺存が悪い。土器の出土状況から，上部は破壊されたものと思われる。

**堆積土**　少量のローム粒を含む暗褐色土が主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　カマド内・周辺から遺存のよい土器が多く出土した。カマド以外からの出土も多いが，壁際からの出土は少ない。図示できた遺物は12点である。1・2は千葉産の須恵器杯，3～5がロクロ土師器杯，6～8はロクロ土師器高台付皿，9・10は千葉産の須恵器甕，11は土製支脚である。12は鉄製品である。鎌と思われる。1の切り離しはヘラ切りとしたが，回転糸切りと思われる点もあり，土師器かもしれない。

2・3・6・7は遺存がよい土器で，特に3・7は口縁部の一部を若干欠損する以外は割れていない土器である。3は口縁端部に油煙が付着しており，灯明具である。6の欠損部も口縁部の一部で小さいが，遺存部分は割れて接合している。2の欠損部は口縁・体部の一部で，不整な弧状を呈している。また欠損部から続く数片が割れて接合しているが，主要部分との接合線は弧状である。2・6・7はカマドからの出土であり，欠損部は打ち欠きされたと思われる。2は破損部も打ち割りされた可能性があるが，出土状況から土圧によるとも思われる。6の破損部は不整であり，意図的か断定しがたい。4の口縁・体部は1/6強程度を残して欠損し，5は全周を欠損する。4・5の欠損部はやや不整であるが，カマドからの出土であり，打ち欠きされた可能性がある。5は体部外面に墨書があるが，欠損部に多くかかっており，判読できない。8のロクロ目は凹み部分が沈線となり，渦巻状に周回している。金属器的な質感を表現した可能性がある。

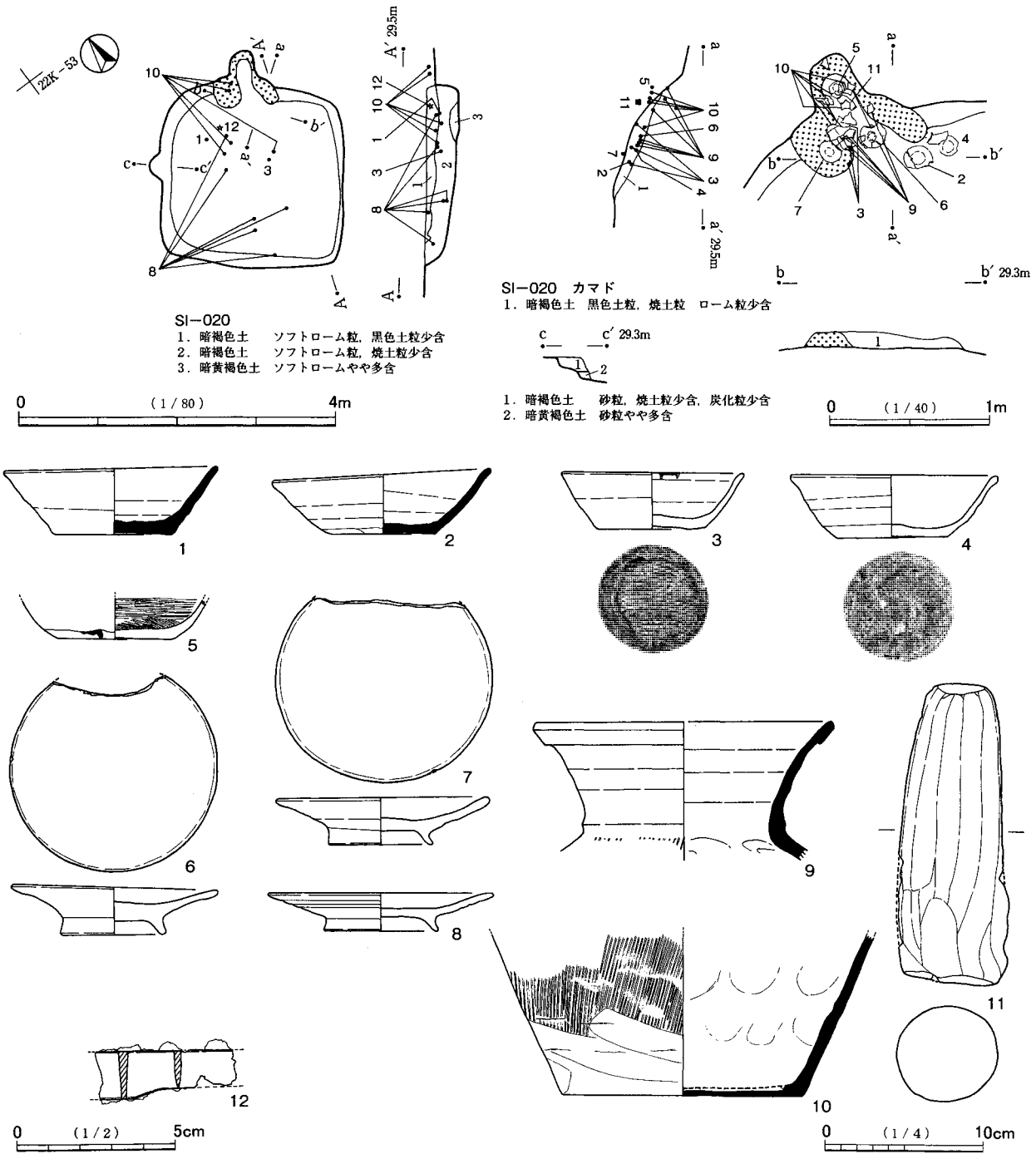
9は口頸部の破片，10は胴部下位・底部の破片であるが，タタキ目の間隔が，9は広く，10は狭いことから，別個体と考える。

12は小型の鎌と思われる。基部から刃部にかけての破片である。

2・4はカマド右袖前方の下層から並んだ正位の状態で出土した。2が内側，4が外側である。6はカマド火床部前側中央の下層から倒位で出土し，7はカマド左袖上から正位で出土した。11は煙道部下位の壁側に倒れた状態で出土し，5はその奥の壁面から出土した。倒位と思われるが，やや判然としない。3は6・7間の下層の他，カマド左側の前方に散って出土した。カマド内からは9・10も出土し，10はカマド左袖前方にも散っている。1は中央ややカマド寄りの中層から出土した。正位・倒位等は不明である。

以上の遺物群のうち，2・4～7・11はカマド廃棄の祭祀に関わるものと思われる。1・9・10は遺存が少ないため，関わる土器か不明である。3はカマドからやや遠いことと中層からの出土のため，これも廃棄の祭祀に関わるか不明である。

SI－021（第82図，図版29）




第81図　SI－020

**位置**　調査区中央北西寄りの23K－58グリッドを中心に位置する。

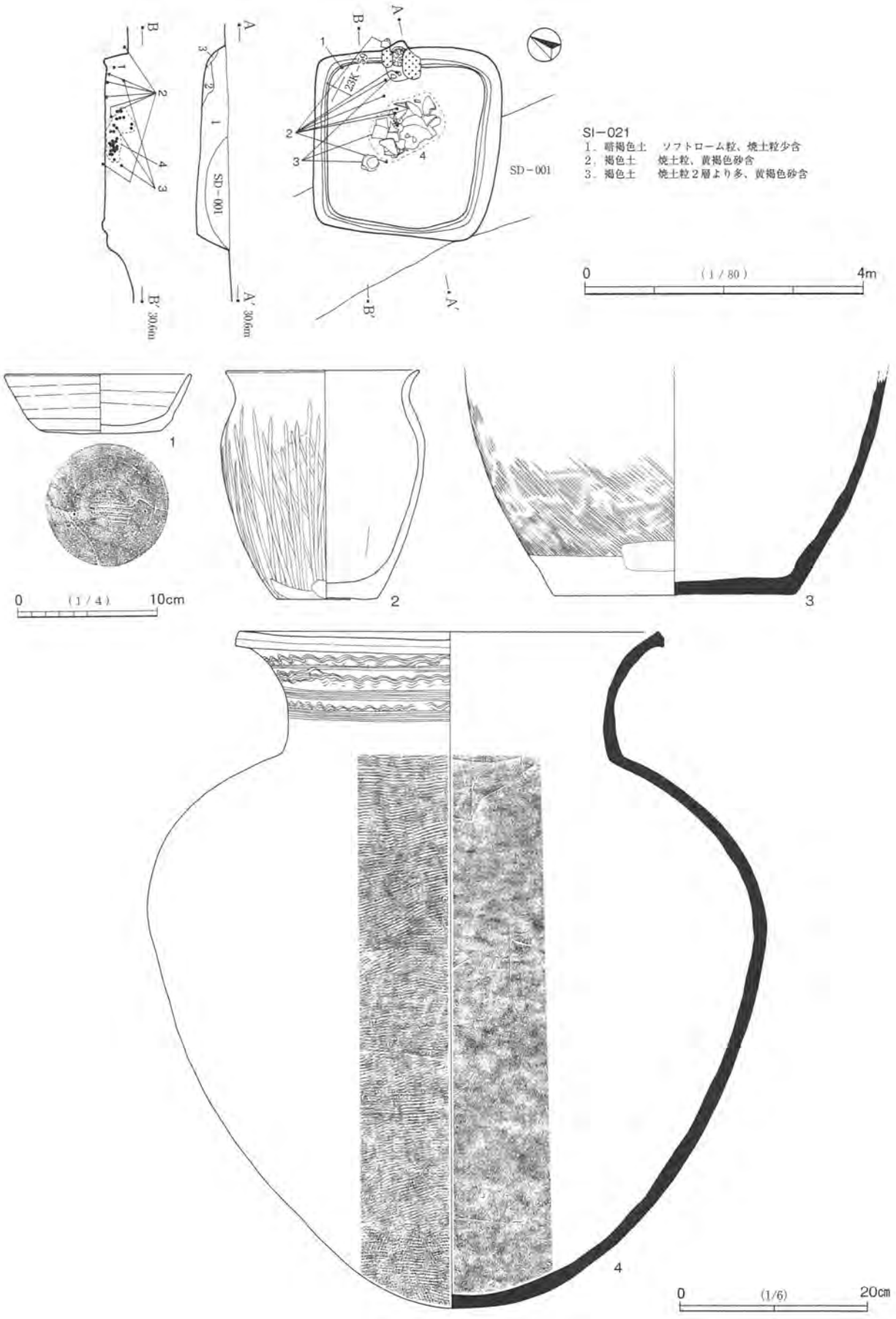
**形状・規模**　長さが2.8m，幅が2.7mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。右（南東）辺がやや長い。

**床面**　平坦である。硬化面は顕著でないが，カマド前が若干硬化している。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北東壁中央に位置する。遺存は悪く，右袖下部のみの遺存である。袖部は山砂をやや多く含むが，その上層はローム粒，下層は焼土粒をやや多く含む。

**堆積土**　少量のローム粒を含む暗褐色土を主体とする。自然堆積と思われる。


SI－021
1．暗褐色土　ソフトローム粒、焼土粒少含
2．褐色土　焼土粒、黄褐色砂含
3．褐色土　焼土粒２層より多、黄褐色砂含
SD－001
0　(1/80)　4m
0　(1/4)　10cm
0　(1/6)　20cm

第82図　SI－021

出土遺物　図示できた遺物は４点である。１はロクロ土師器杯，２は小型の土師器甕で，在地の土器である。３は新治窯産の須恵器甕である。比較的大型の製品である。４は須恵器の大甕で，超大型品である。湖西等の東海産と思われる。１は口縁・体部の一部を欠損するのみで，遺存のよい土器である。遺存部分は若干割れている。２は胴部の器壁が薄く，軽量感がある。３の内面は剥離が顕著であり，液体の貯蔵用として長く使用された土器と思われる。

１は左奥（北）隅下層から正位で出土した。２はカマド周辺から中央までやや広域に出土した。出土層位は床面から中層にわたる。３は底部等の大型破片が中央やや左前側から出土したが，小破片はカマド前に散っている。出土層位は中・上層である。４は竪穴中央からつぶれた状態でまとまって出土した。出土層位は下層を主体とするが，一部破片は中・上層まで散っている。３・４はSD－001との重複がなければ，より遺存していたと思われる。また２も同様の可能性がある。

４は本住居の中央があまり埋まらない段階で一括して廃棄された遺物と思われる。ただし壁際はかなり堆積していた可能性がある。あるいはこの場所に据えて使用されたかもしれないが，断定しがたい。３は４周辺がかなり堆積した段階の窪地に廃棄された遺物と思われる。１は下層からの出土であり，本住居に比較的近い時期の遺物であろう。２も同様の可能性があるが，やや判然としない。１～４以外の遺物は少量である。

重複遺構　南西側を通るSD－001に切られているが，SD－001の方が浅いため，壁下部から底面は遺存する。また前（南西）側から中央にかけて一部に撹乱を受けている。

SI－023（第83図，図版30）

位置　調査区西側中央寄りの23K－24グリッドを中心に位置する。北東方向に北から入る支谷がある。本住居付近は比較的平坦であるが，南から北にわずかに下っている。

形状・規模　長さが3.3m，幅が3.1mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

床面　ほぼ平坦であるが，北東壁際がわずかに低い。中央が顕著に硬化している。

壁溝　全周する。

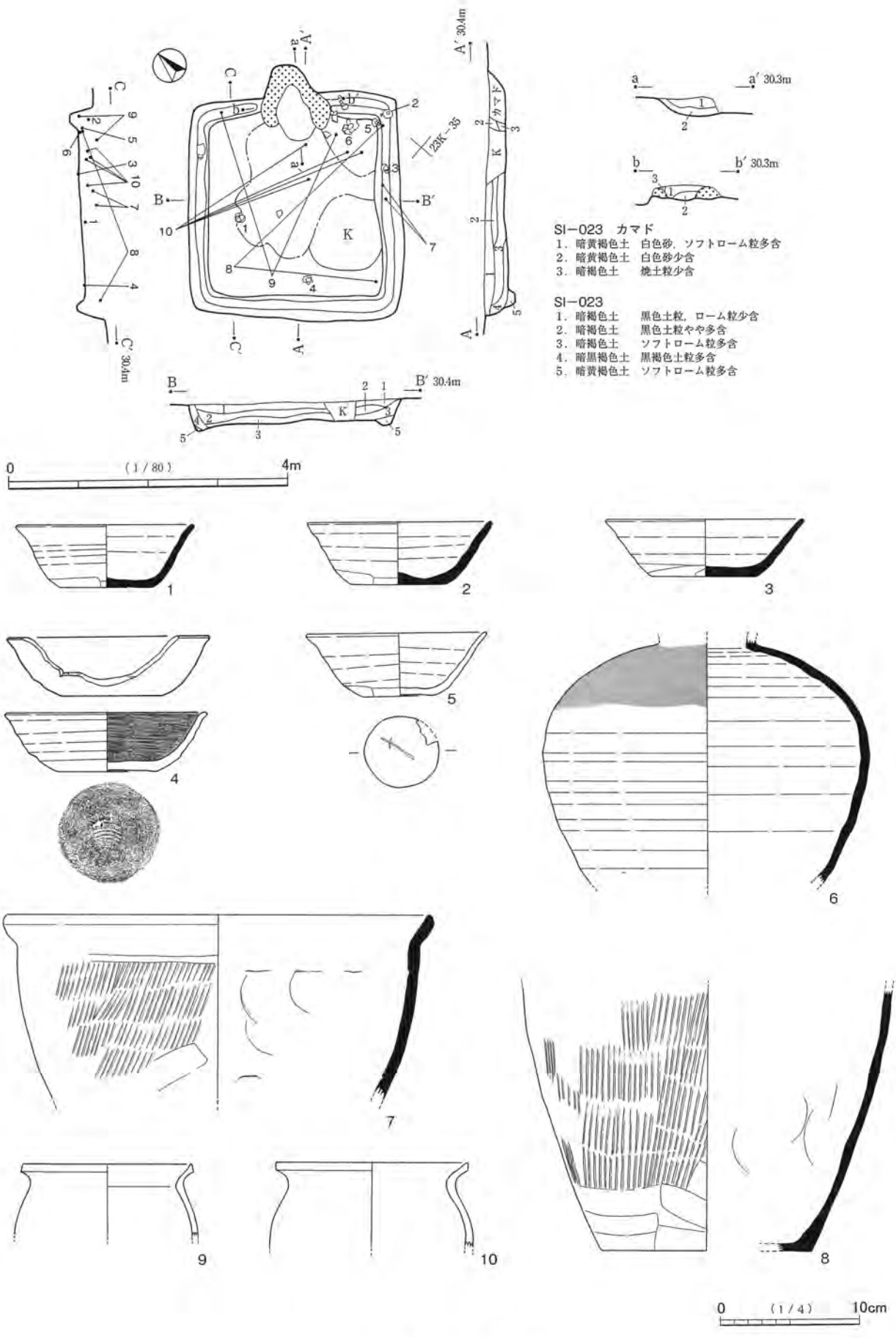
カマド　北東壁中央に位置する。上部前側の遺存がやや悪い。袖部は山砂を多く含むが，下部はローム粒を多く含む。

堆積土　暗褐色土で，下層ほどローム粒の含有が多い。

出土遺物　全体的に出土するが，カマド部分は少ない。図示できた遺物は８点である。１～３は千葉産の須恵器杯，４・５はロクロ土師器杯である。６は須恵器壷で，猿投等の東海産と思われる。７は千葉産の須恵器甕または甑，８は千葉産の須恵器甕，９・10は小型の土師器甕である。

１・２・５は遺存がよく，特に２はひびが入る程度で割れていない完形品である。５は底部外面に「×（＋）」のヘラ書きがある。口縁・体部の２箇所が小さく欠損し，もう１箇所に小さな接合部分がある。それら以外は割れていない土器である。三箇所の欠損・破損部分の形態は，弧状・逆三角形状であるが，破断面が著しく不整であり，意図的な状況を認めるのは難しい。また１も細かく割れており，それを意図的とみるのは難しい。４は内面に黒色処理が施されている。口縁・体部の２箇所が比較的整った形で欠損するが，欠損部間の一方が割れて接合する。土器だけで意図的な状況をみるのはやや難しいが，出土状況から打ち欠きされた可能性が考えられる。４・５は二次的な被熱痕跡が顕著である。３は遺存があまり多くない。

６はややまとまって出土したが，３割程度の遺存である。７～10は遺存が少なく，特に７は一部からの


SI−023　カマド
1．暗黄褐色土　白色砂，ソフトローム粒多含
2．暗黄褐色土　白色砂少含
3．暗褐色土　焼土粒少含
SI−023
1．暗褐色土　黒色土粒，ローム粒少含
2．暗褐色土　黒色土粒やや多含
3．暗褐色土　ソフトローム粒多含
4．暗黒褐色土　黒褐色土粒多含
5．暗黄褐色土　ソフトローム粒多含
0　(1/80)　4m
0　(1/4)　10cm

第83図　SI－023

復元図化である。9・10は同一個体と思われる。

2・5・6はカマド右側，右奥（東）隅から出土した。2は隅部中層から倒位で出土し，5は2の内側の下層から正位で出土した。6の出土層位は床面・下層である。3は右（南東）壁際奥寄りの壁溝から出土した。1は中央左寄りの下層から出土し，4は出入口部と思われる床面から出土した。ともに，正位・倒位等の状況は不明である。7～10の出土層位は概して中・上層であり，7以外は広く散っている。

堆積土が埋め戻されているのであれば，2・5は竪穴住居・カマド廃棄の祭祀に関わる可能性があるが，人為的堆積といえる根拠が乏しく，断定しがたい。1・4もセットに加わる可能性があり，特に4は単独でも可能性があると思われる。しかし出入口ピットが検出されなかったので，これも可能性の指摘に留めておく。2・5については上方から転落したことも考えられる。以上のように竪穴廃棄の祭祀としては，4が比較的有力であるが，1・2・5については，たとえ土器そのものが何らかの祭祀的行為に使用されたとしても，最終的には単なる廃棄・遺棄等様々なことが考えられる。その他の遺物については，廃棄以上の様相がうかがえない。

SI－024（第84図，図版30）

位置　調査区西部北東寄りの23K－11グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが4.2m，幅が3.9mのやや縦長の方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

床面　傾斜はないが，凹凸がある。凹凸は中央に撹乱を受けた影響と思われる。中央が硬化している。

柱穴　出入口ピットが見つからなかったが，カマドに対向する南壁壁際が出入口部である。

壁溝　全周する。

カマド　北壁中央に位置する。両袖部は比較的よく遺存する。構築材は山砂を主体とするが，下部はローム粒をやや多く含む。袖上部から煙道部壁面が赤色化している。カマド内堆積土は焼土粒を多く含み，特に中層に多い。

堆積土　黒褐色土主体で，上層はローム粒の含有が少なく，下層は多い。自然堆積と思われる。

出土遺物　やや少量の遺物が散在的に出土した。竪穴全体に分布するが，西壁際がやや少ない。図示できた遺物は2点である。1は新治窯産の須恵器高台付盤，2も新治窯産の須恵器杯である。1は口縁部の3/5程度を欠損するが，他は割れもなく遺存する。東壁際北寄りの床面・壁溝上から正位で出土した。竪穴廃棄に際して遺棄されたものと思われ，祭祀的様相をもつと思われる。欠損部は打ち欠きされたものであろう。2は底部周辺の接合破片で，口縁・体部の全周を欠損する。欠損部は不整であり，打ち欠きされたか不明である。しかしカマド前の床面から出土しており，カマド廃棄の祭祀に伴い，意図的に破壊された可能性も考えられる。

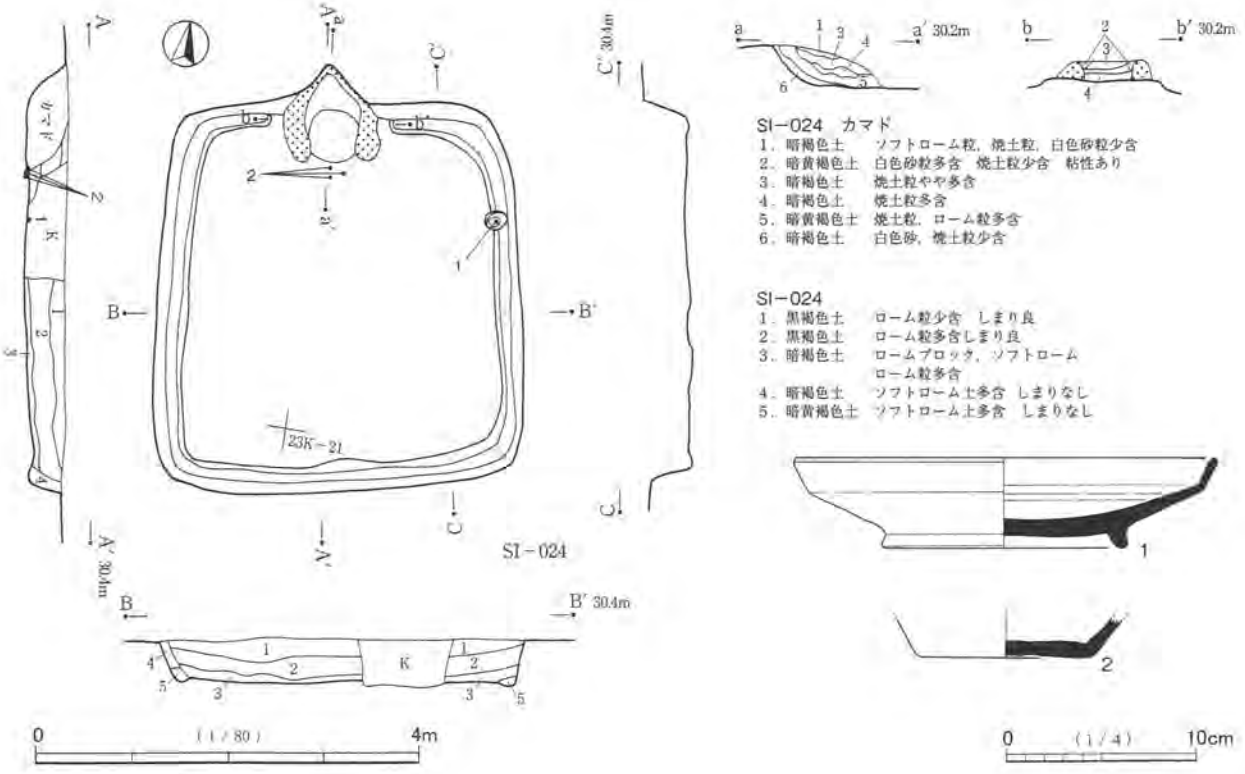
SI－026（第84図，図版30）

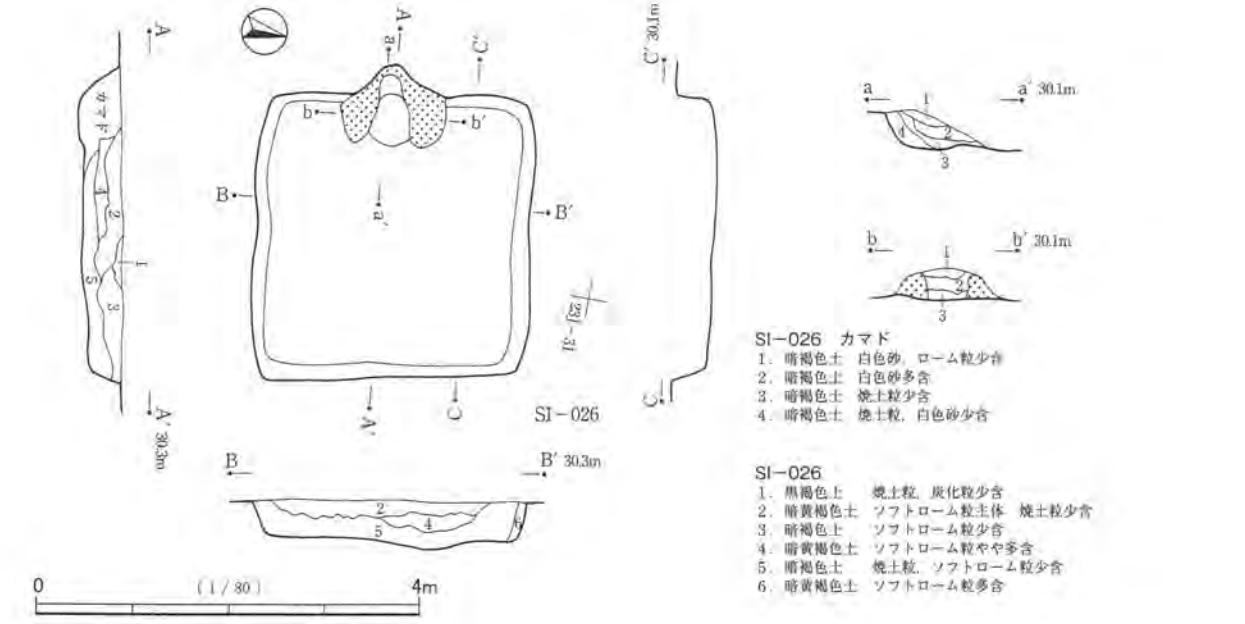
位置　調査区北西部の23J－30グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.0m，幅が3.0mの方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

床面　傾斜はないが，凹凸がある。硬化の差は不明瞭で，全体に硬質である。

カマド　西壁中央に位置する。両袖部は比較的よく遺存する。構築材は山砂を主体とし，硬質である。袖下部はローム粒をやや多く含む。また内壁は焼土粒をやや多く含み，特に左袖側は赤色化が強い。カマド内堆積土は中層に焼土粒をやや多く含むが，下層は少ない。カマドの前側は，底面を馬蹄形の土手状に掘り残している。その部分の高さは周囲の床面から1cm～6cmである。




第84図　SI－024・026

**堆積土**　2・4層はローム粒主体または多く含む土層である。下層の5層はローム粒の包含が少ないが，遺物量も少ないため，上層の2層まで埋め戻されていると考える。

**出土遺物**　少量の遺物が散在的に出土した。図示できた遺物はない。カマド内から土製支脚が出土したが，遺存状態が悪いため図化していない。

### SI－030（第85図，図版31）

**位置**　調査区西部の22K－57グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.7m，幅が2.3mの長方形をなす。確認面からの深さは10cmであり，遺存が悪い。

床面　平坦で，中央が硬化している。

カマド　北壁中央に位置する。構築材は山砂を主体とし，両袖の下部が遺存する。

出土遺物　堆積土の遺存が少ないため少量である。図示できた遺物は１点で，ロクロ土師器高台付皿である。高台部が全周遺存するが，口縁・体部の遺存は一部である。カマド内と東壁際中央付近に散って出土した。祭祀的様相をもつ遺物か不明である。

SI－031（第85図，図版31）

位置　調査区北西部の22J－38グリッドを中心に位置する。北方から西方に谷を臨み，東から西に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　長さが2.8m，幅が2.5mで，縦長の方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

床面　東から西にやや傾斜し，凹凸も著しい。中央から東西の壁際近くまで硬化している。

カマド　北壁中央に位置する。両袖部の壁際付近が遺存するが，遺存は概して不良である。両袖部には山砂がみられるが，下部の遺存であり，ローム粒をやや多く含む。煙道部壁面が焼けて赤色化している。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体で，ロームの含有は，下層・壁際と一部を除いて少量である。自然堆積と思われる。

出土遺物　少量の遺物が散在的に出土した。図示できた遺物は２点である。１はロクロ土師器杯で，口縁・体部外面に正位で墨書がみられる。則天文字の「而」を省略したものと思われる。遺存良好で，欠損部は口縁・体部の一部のみである。遺存部分はやや細かく割れている。カマド右の北東隅側床面から正位で出土した。欠損及び破損が意図的になされたものか判然としない。２は東海産と思われる須恵器大甕の胴部破片である。内面の同心円文当て具痕はナデによって消され，かすかな痕跡である。内面の長破線で囲んだ範囲周辺が磨耗しており，硯または砥石に転用されたものとみられる。カマド左袖前方の下層から出土した。

SI－033（第86図，図版31）

位置　調査区北西部の23J－22グリッドを中心に位置する。

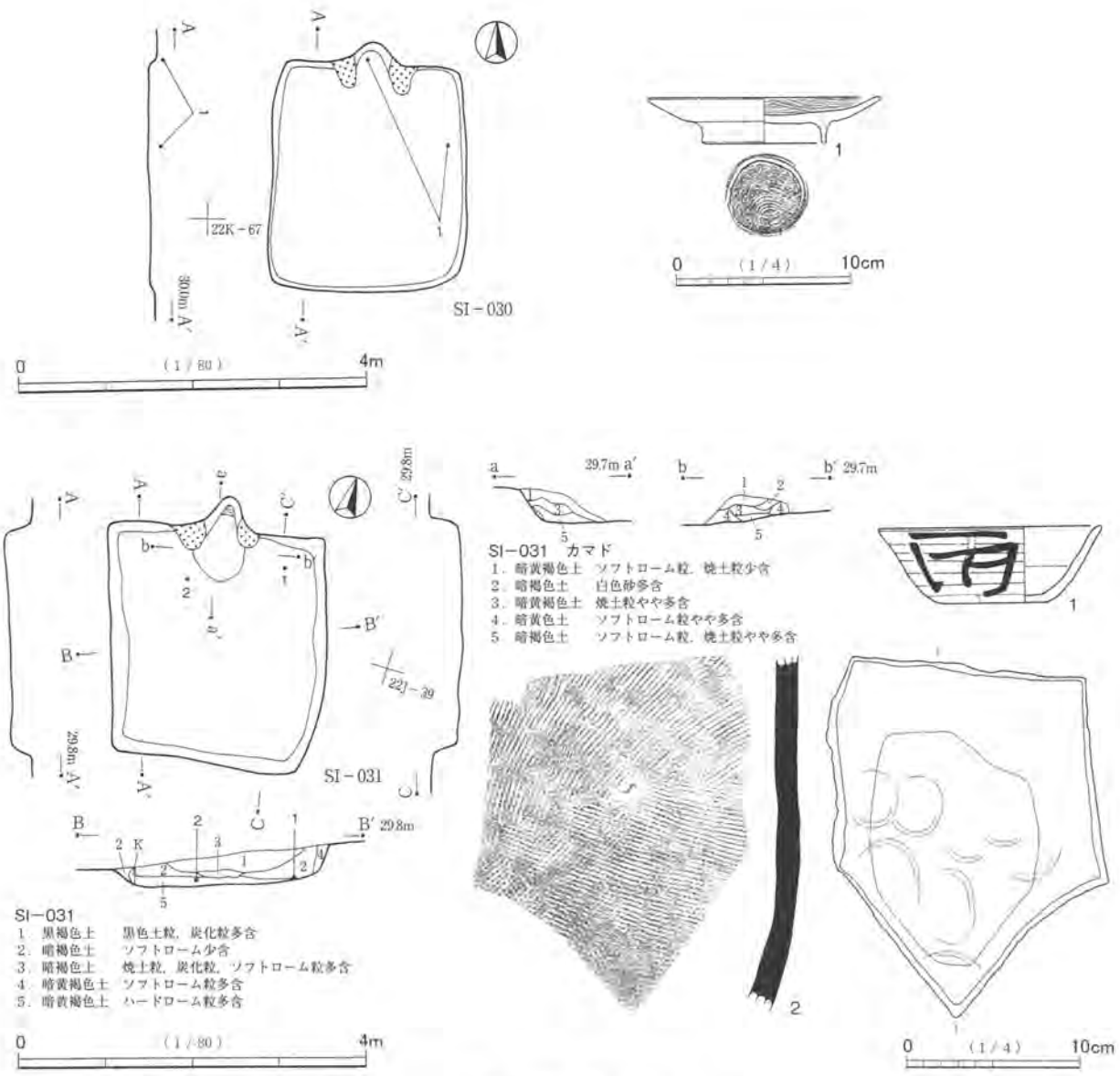
形状・規模　長さが3.0m，幅が2.9mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

床面・掘りかた・出入口部　床面はほぼ平坦で，中央が幾分硬化している。北東（右奥）・南東（右前）・南西（左前）の三隅部で，床面からの深さが11cm～35cmの窪みが検出された。また右前・左前の中間の南壁際中央でも，深さ21cmの窪みが検出されたが，これは出入口ピットと思われる。これらの窪みをつないで，深さが５cm～６cmの溝状の窪みがあり，これは掘りかたと思われる。貼り床層は全体に軟質である。なおカマド部分の底面も10数cm窪んでいる。掘りかたの可能性もあるが，カマドの使用に伴い深くなったことも考えられる。

カマド　北壁中央に位置する。両袖部の前側の遺存が悪いが，壁側は比較的よく遺存する。構築材は山砂を主体とするが，下部はローム粒を多く含む。火床部は赤色化した面がみられる。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体で，ローム粒の含有は少量である。レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。

出土遺物　カマド及び竪穴全体から多くの遺物が出土した。図示できた遺物は８点である。１は千葉産の須恵器杯である。２は非ロクロの土師器杯と思われる。３～５はロクロ土師器杯である。６は千葉産の須恵器甕または甑とするが，須恵器窯で焼成していない可能性があり，その場合は土師器とした方がよい




第85図　SI－030・031

ものである。７・８は土師器甕である。

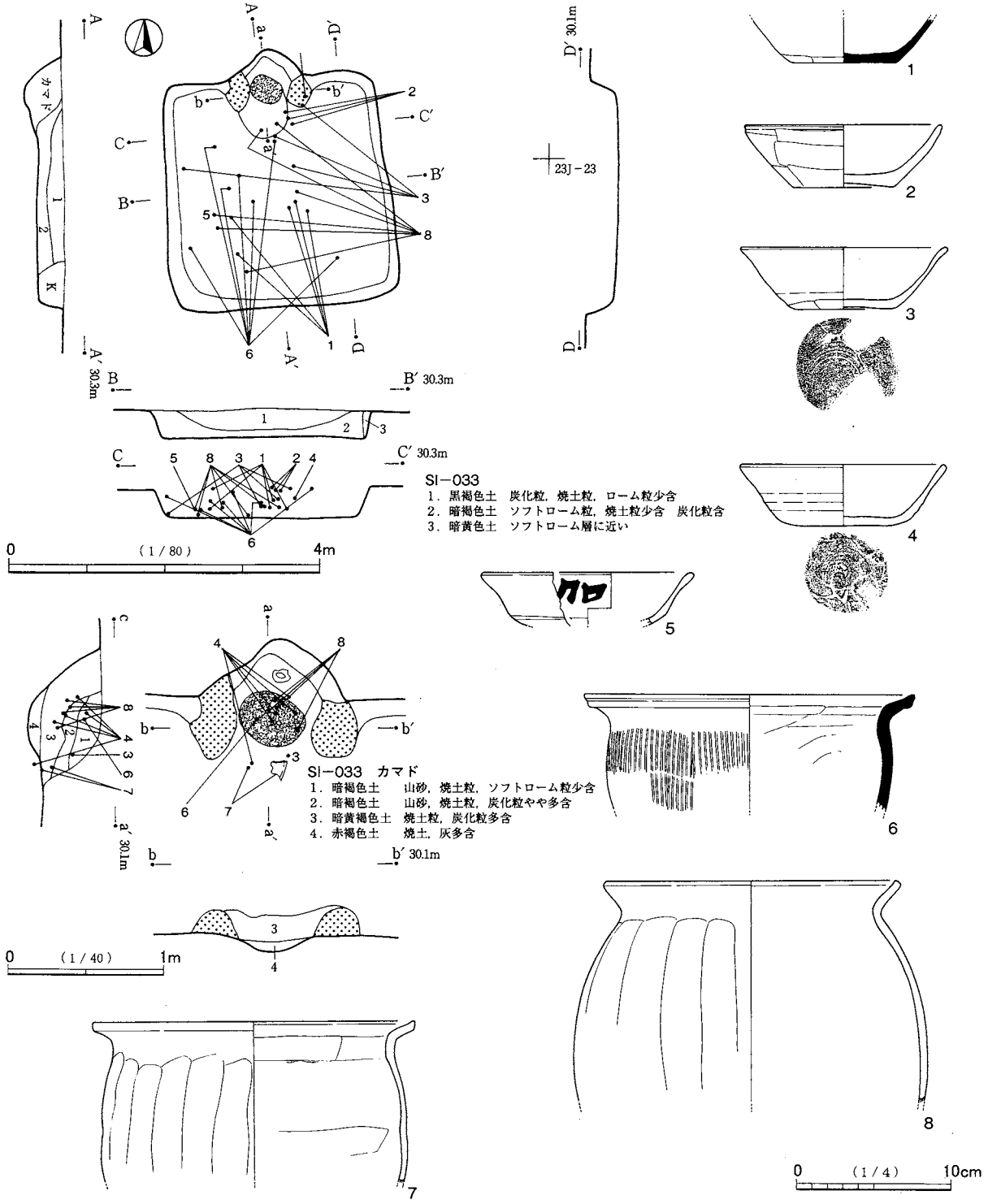
５は口縁・体部外面に正位で「加」の墨書がある。器形は小片から復元図化した。２は完形に近い土器で，一部が小さく欠損・破損する以外は割れていない土器である。欠損及び欠損から続く接合部は緩い弧状の形態を呈し，打ち欠き・打ち割りされた可能性が考えられる。杯類については，２以外は遺存があまりよくない。また１～５の杯類はすべて被熱痕跡が強い。１は内面の多くに煤が付着している。

６は胴部外面に平行タタキが施されているが，色調が黄褐色を呈する。６～８の遺存は少ない。

２はカマド右前側から出土したが，層位は上層である。カマド内・周辺からは３・４・６～８が出土したが，６・８は竪穴内に広く散っている。図示した遺物の出土層位をみると，７を除いて中・上層主体である。２は祭祀的に使用された可能性も考えられるが，本住居に伴うとみるのは難しく，単に廃棄されたものと考える。他の遺物もほとんどが不要物として，本住居に廃棄されたか，流入したものであろう。

### SI－034（第87図，図版32）

**位置**　調査区西部の22K－64グリッドを中心に位置する。




第86図　SI－033

**形状・規模**　SD－003に破壊され，遺存するのは北隅側周辺のみである。形状は方形と思われ，確認面からの深さは10cmである。長さ・幅の正確な数値は不明であるが，カマドの中心から北隅までの距離がおよそ幅の半分とすると，幅が2.8m～2.9m程度と推測できる。

**床面**　遺存する床面はほぼ平坦である。硬化箇所はみられないが，本来的にないか不明である。

**カマド**　北西壁に位置する。壁の中央と思われる。山砂・焼土がやや多くみられるが，遺存は悪い。特に左袖は大部分を壊されている。

**出土遺物**　少量の土器片が出土したが，図示できた遺物はない。

**重複遺構**　北隅側周辺以外の多くの部分がSD－003に切られている。

SI－035（第87図）

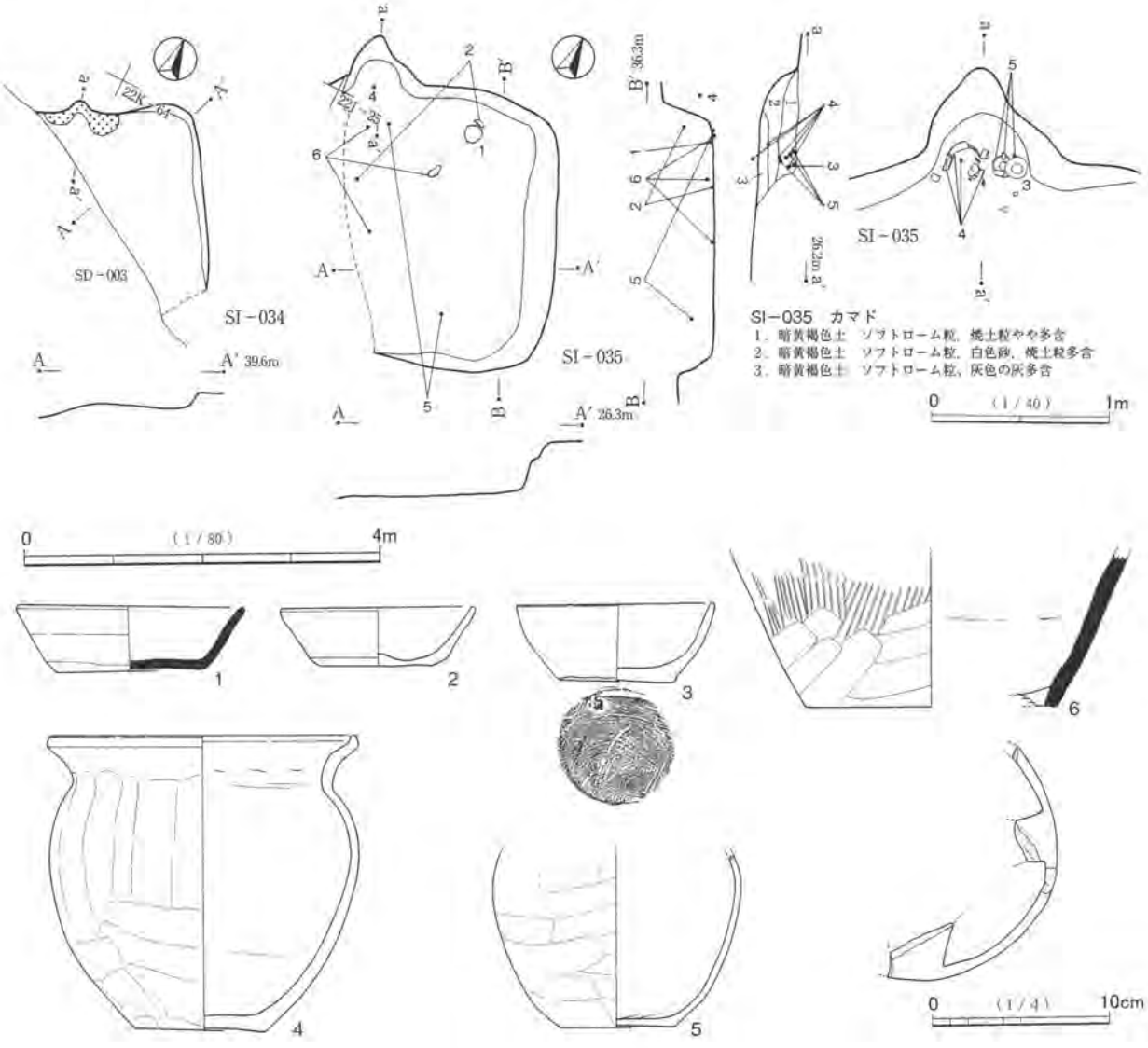
**位置**　調査区北西部西端の22J－25グリッドを中心に位置する。北西に谷を臨む斜面に立地し，確認面は北東から南西に下っている。

**形状・規模**　長さ3.2mの方形をなす。深さは50cmである。西側が流失しており，幅が不明である。

**床面**　北東から南西にやや下っているが，確認面がかなり傾斜していることを考慮すると，比較的平坦といえる。また西側は若干損なっていると思われる。硬化はみられないが，本来的にないか不明である。

**カマド**　北西壁に位置する。壁中央部分と思われる。底面付近しか遺存せず，袖部等はみられない。火床部奥側がやや赤色化している。カマド内堆積土下層は焼土粒・灰を多く含み，中層は山砂・焼土粒を多く含む。

**堆積土**　暗褐色土主体の均一的な土層である。カマド構築材の山砂，焼土粒をやや多く含む。なお土層




第87図　SI－034・035

断面図については，大きな木根が存在したため作成しなかった。

出土遺物　カマド内及び北側での出土が多い。中央から南側にも分布するが，壁際は少ない。図示できた遺物は６点である。１は千葉産の須恵器杯，２・３はロクロ土師器杯，４・５は土師器甕，６は千葉産の須恵器甑である。

１～３は遺存がよく，３は割れのない完形である。１も口縁端部をわずかに欠くが，ほぼ完形である。ひびが入る程度で割れていない。２の欠損・破損部は主として２箇所で，１箇所は口縁部の小さな弧状部分，もう１箇所は口縁部から底部までのやや大きな部分である。遺存部分も大きく２片に割れる他，口縁・体部に小さく逆三角形状に割れる部分がある。欠損・破損部分は打ち欠き・打ち割りされた可能性がある。２の底部は全面に回転ヘラケズリが施されているが，３は回転糸切り後無調整である。祭祀的な土器と思われ，底部調整は意図的に省略されたものと考える。

４・５は小型の甕である。４は細かく割れているが，胴部・底部がほぼ遺存する。口縁部は1/2以上を欠く。５は器壁が薄い。

１はカマド右側，右奥隅近くの床面から，おそらく正位の状態で出土した。２は１に接して出土したが，一部がカマド前方の中層に散っている。３はカマド内右側の堆積土上層から正位で出土した。右袖が遺存すれば，その内壁の位置と思われるが，あるいは右袖の位置かもしれない。４はカマド内左側からつぶれた状態で出土した。土器の状態はやや斜めに傾いた正位である。５の主要部分は３と部分的に重なって，３の下から正位で出土した。なお一部の破片は遠く南（前）壁側上層にもみられる。６もカマド前と中央の床面から出土した。

以上の土器群のうち，３・４はカマド廃棄の祭祀に関わるものであろう。カマド構築材はその際に除去されたことも考えられる。また１・２もカマド・竪穴廃棄の祭祀に関わるものと思われる。

SI－040（第88図，図版32）

位置　調査区東部南側の26L－30グリッドを中心に位置する。東方から南方にかけて谷があり，確認面は北西から南東にわずかに下っている。

形状・規模　長さが2.8m，幅が3.1mで，やや横長の方形をなす。確認面からの深さは20cmである。

床面　比較的平坦であるが，凹凸がある。北東側で撹乱を受けており，その影響も考えられる。中央が硬化している。

柱穴等　北西側に径30cm，深さ20cmの小ピットがある（P1）。また南東隅部に径63cm，深さ53cmのピットがある。周囲に遺構がないため，貯蔵穴の可能性が考えられる。P1は本住居の主柱穴としてもよい位置にあるが，他の三箇所が検出されなかったため柱穴とは思われない。本住居に伴うものか，不明である。

カマド　北壁中央に位置する。遺存は悪く，左袖は失われている。右袖は壁側下部のみの遺存である。火床部底面は焼土粒・ブロックがみられるが，特に強く赤色化した面はみられない。

堆積土　遺存が少ないが，上層は黒褐色土，下層は褐色土である。下層はロームの含有が多い。

出土遺物　堆積土が薄いが，遺物は全体的に出土した。特にカマドに比較的遺存のよい遺物がみられる。図示できた遺物は16点である。１～７はロクロ土師器杯，８～10は千葉産の須恵器甕，11・13は土師器甕，12は千葉産の須恵器甕または甑，14は千葉産の須恵器甑である。15・16は鉄製品で，16は刀子である。15は製品名を特定しがたい。

７は体部外面に正位で「水」の墨書がある。１はやや大型の杯である。１～７の杯はすべて被熱痕跡が

強い。１・５は遺存がよく，３・６も比較的遺存がよい。１は器面が荒れ，内面の剥離が顕著である。口縁端部も多くが損耗している。土器の状況から支脚への転用が考えられる。５も内面の剥離が顕著である。口縁端部の欠損・破損箇所が主として３箇所あるが，その破断面はいずれも弧状を呈し，打ち欠き・打ち割りの可能性がある。大きく遺存する部分も２片に割れているが，これは火を受けてもろくなったためかもしれない。３は口縁・体部から底部に及ぶ欠損が全体の1/4以上ある。また７は口縁・体部の1/2近くが欠損する。ともに土器そのものからはやや判然としないが，カマドから出土しており，打ち欠きされた可能性がある。しかし７は確認面に近いため，断定しがたい。また破断面が黒みを帯びている。破損後の被熱とも思われるが，破損以前の被熱痕跡が断面内部まで及んでいる可能性の方が高いと考える。

８～14の甕・甑はいずれも遺存が少ない。ただし10は底部がほぼ遺存しており，確認面よりも上部に遺存していたと思われる。12の胴部外面のタタキは格子目である。胴部内面には当て具痕がみられるが，上部はヘラナデが施されていると思われる。色調が黄褐色であり，黒斑と思われる箇所があり，窖窯で焼成されていないことも考えられる。

15は刃部・背部の一部に若干の欠損があるが，ほぼ完形である。短い基部が刃部から鈍角の関をもって作り出され，さらに上方にわずかに折り返されている。全体に薄い製品であるが，刃部が尖るのに対し，背部はやや厚みがある。穂摘具と同様の大きさであり，非常に薄い点も似ている。穂摘具と似た機能であることも考えられる。ただし目釘孔がみられないことと，柄の取り付き方は鎌と同様であり，穂摘具とは違いがある。繊維を切断するものではないのかもしれない。なお小屋ノ内遺跡SI－410の20とSI－416の19が似た製品と思われる※)。しかし小屋ノ内遺跡のものは円弧側が刃部と思われるのに対して，本製品は直線的な側が刃部である点で異なっている。ただしSI－410の20については，刃部側と背部側の理解が違っているのかもしれない。またSI－416の19の場合は，基部を右手にみた場合，直線側と円弧側の関係が明らかに本製品と逆である。しかしこれも左鎌的なものとみるならば，背部と刃部を逆に考えることが可能である。この点は類例の増加によって解決すると思われ，今後の検討課題としたい。16は小型の刀子である。茎のほとんどと切先先端を欠く。刃部の遺存はよく，6.5cm程度の長さと思われる。背関が遺存し，直角に切り込みが入る。刃関は遺存しない。

１・３・７・10はカマド内の煙道部の位置から出土した。なお３は一部の破片が南壁際左寄りに散っている。また10も一部の破片がカマド前の上層から出土した。１は正位，３・７も傾いているが正位の出土である。５は南東隅側の床面から正位で出土した。カマド以外の出土遺物の層位は，多くが下層・床面からの出土である。

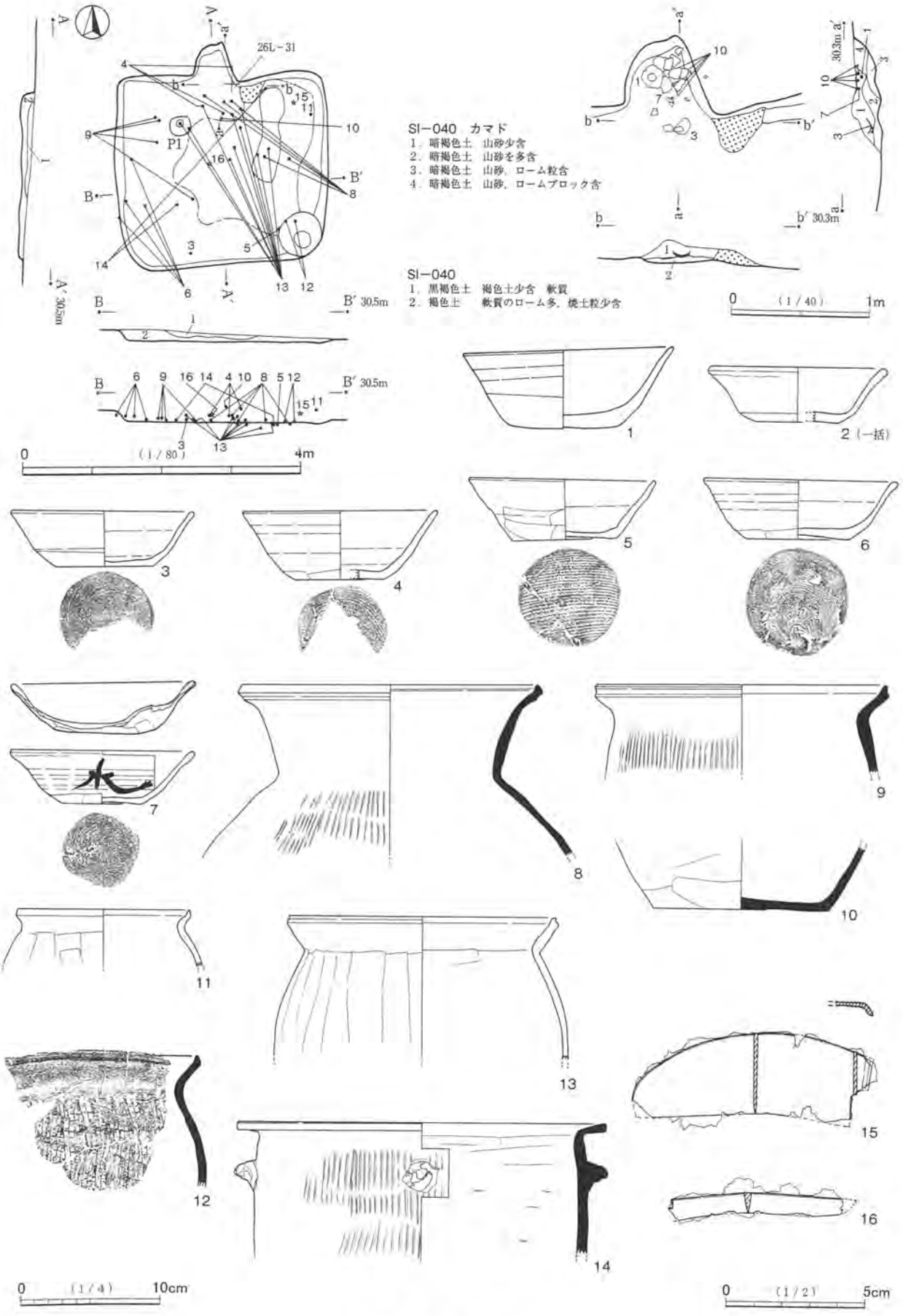
出土遺物のうち，１・３・７・10については，カマド廃棄の祭祀に関わるものと考える。なお３の破片が遠く前壁側から出土したのは，意図的な状況の可能性がある。竪穴から出土した遺物については，廃棄の祭祀に関わるものがあるか断定しがたいが，５に若干の可能性が考えられる。

**SI－041**（第89図，図版32）

**位置**　調査区東部南東側の26L－22グリッドを中心に位置する。東方から南方にかけて谷があり，確認面は北西から南東にわずかに下っている。

**形状・規模**　長さが3.1m，幅が3.2mの方形をなす。確認面からの深さは50cmである。やや北辺が長く，若干逆台形的な形態である。

※）糸川道行他　2007　『四街道市小屋ノ内遺跡(3)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』（財）千葉県教育振興財団


SI−040 カマド
1．暗褐色土　山砂少含
2．暗褐色土　山砂を多含
3．暗褐色土　山砂，ローム粒含
4．暗褐色土　山砂，ロームブロック含
SI−040
1．黒褐色土　褐色土少含　軟質
2．褐色土　軟質のローム多，焼土粒少含
26L−31
P1
30.5m
30.3m
0 (1/40) 1m
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm
0 (1/2) 5cm

第88図　SI−040

床面　平坦である。カマド前から出入口部にかけて硬化している。

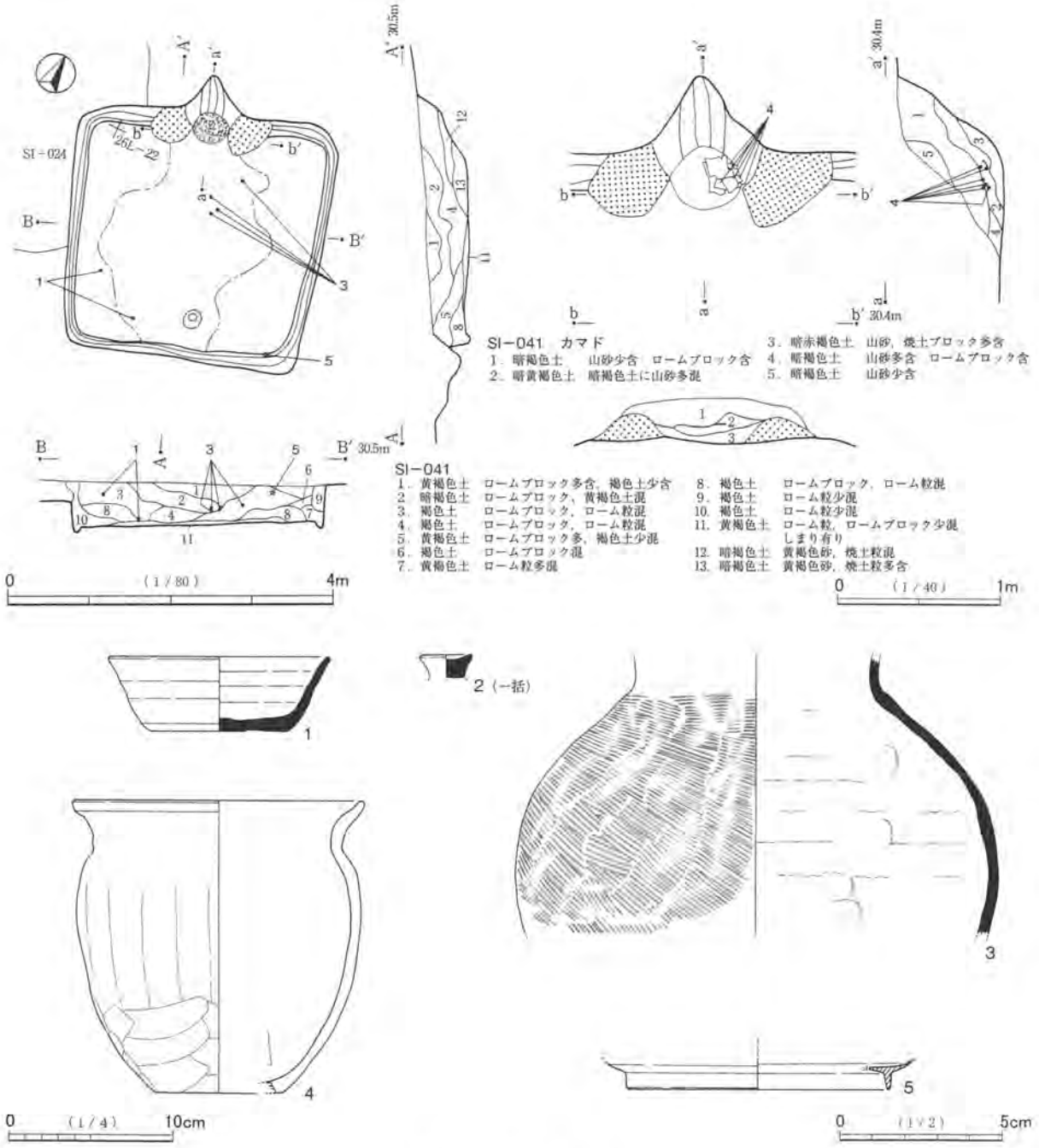
柱穴　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径が20cm，深さが７cmである。

壁溝　全周する。

カマド　北壁中央に位置する。両袖部が遺存するが，前側の遺存が悪い。構築材は山砂を主体とする。火床部底面はやや赤変し，硬化している。煙道部の壁は比較的急で，溝状になっている。カマド堆積土下層は山砂と焼土ブロックを多く含む。

堆積土　概してローム粒・ロームブロックが多く，層位も複雑である。埋め戻されたと思われる。

出土遺物　散在的な分布で，少量である。図示できた遺物は５点である。１～３は須恵器で，１は杯，２は蓋，３は甕である。産地については，１は千葉産と思われる。２は千葉産か新治窯産か判然としない。




第89図　SI－041

3は新治窯産である。4は土師器甕である。5は銅製品で，高台付の皿と思われる。

1は外面に火襷がみられる。2はつまみ部分で，黄灰色の色調である。4はやや小型の甕で，口縁部から胴部の大部分を遺存する。欠損部は底部と底部から続く胴部下位の一部である。底部の欠損は接合部ではずれた可能性もあるが，意図的な穿孔とも思われる。その場合も，甑として使われたことと，カマド廃棄の祭祀に伴って穿孔されたことの双方が考えられる。5はいわゆる佐波理の皿と思われる。高台周辺の小破片である。高台がおよそ1/8遺存する。器面の厚さが1㎜から2㎜程度であり，極めて薄い作りである。

4は火床部のやや右側上方から横につぶれた状態で出土した。口縁部は中央に向いている。この土器のみで，カマド廃棄の祭祀をみるのは難しい。1・3・5は，1の一部破片が下層出土であるのを除いて，中・上層から出土したが，堆積土が埋め戻されているならば，上層出土と下層出土の違いはない。

**重複遺構**　北西側でSI－042と重複し，本住居が切っている。また南側でSD－010と重複し，本住居が切られているが，本住居の方が深いため，上部の破壊に留まる。

**SI－042**（第90図，図版33）

**位置**　調査区東部南側の26L－21グリッドを中心に位置する。東方から南方にかけて谷があり，確認面は北西から南東にわずかに下っている。

**形状・規模**　長さが4.0m，幅が3.8mの方形をなす。確認面からの深さは40㎝である。

**床面**　ほぼ平坦で，右（北東）壁側を除いて硬化している。硬化は中央が顕著である。

**柱穴**　主柱穴が4箇所検出された。また出入口ピットが南東（前）壁際中央で検出された。径が30㎝，深さは15㎝である。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北西壁中央に位置する。両袖部の構築材は山砂を主体とし，左袖内壁は赤色化している。火床部底面は赤色化が弱いが，ロームが焼けて硬化している。

**堆積土**　ローム粒・ロームブロックを含むが，暗褐色土・黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　散在的な分布で，やや少量の出土である。図示できた遺物は3点である。1は新治窯産の須恵器杯，2は湖西産と思われる須恵器高台付杯，3は武蔵型の土師器甕である。

1は比較的遺存がよく，欠損は口縁部の1/3である。2は底部外面で高台部の内側縁に，断続的な爪形の圧痕が2/3周程度廻っている。口縁・体部は4/5程度欠損している。その他は遺存するが，2片に割れて接合する。器面は滑らかな質感であるが，底部内面は磨滅していると思われる。口縁・体部の多くが除去されて硯に転用された可能性がある。3は口縁部から胴部中下位までよく遺存する。破断面はほぼ水平であるが，接合箇所ではずれたものと思われる。

1は左奥（西）隅下層から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。2はカマド左袖部分の上層，3は中央やや左の中層からの出土である。

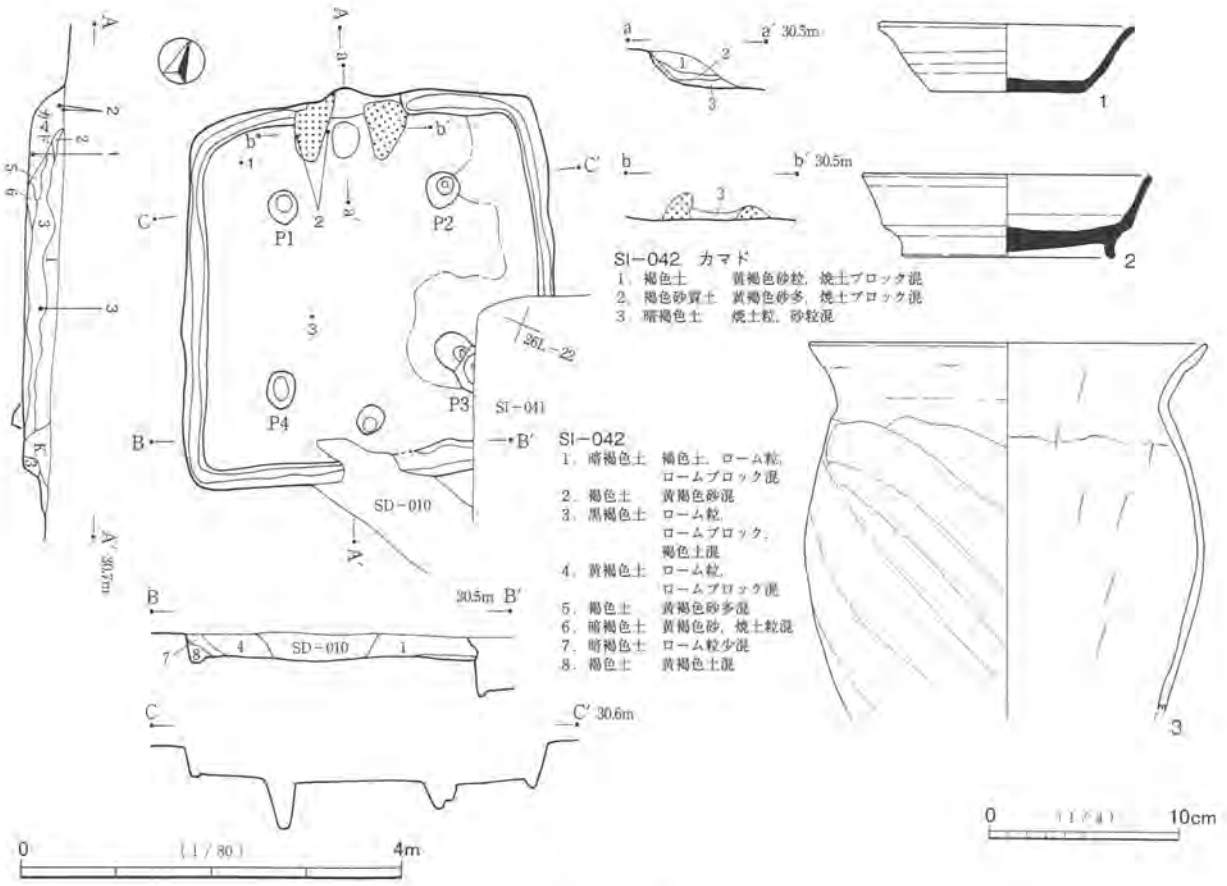
**重複遺構**　南東側でSI－041，南西側でSD－010と重複し，本住居が双方に切られている。SD－010と重複する部分の欠損は少ないが，SI－041は本住居よりも深いため，重複部分が破壊されている。

**SI－043**（第91図，図版33）

**位置**　調査区東部南側の25L－19グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.1m，幅が3.5mで，横長の方形をなす。確認面からの深さは30㎝である。

**床面**　平坦である。左右の壁際を除いて広く硬化しているが，特に中央の硬化が顕著である。




第90図　SI－042

**柱穴**　出入口ピットが南東（前）壁際ほぼ中央で検出された。径が37cm×24cm，深さは20cmである。

**壁溝**　全周する。

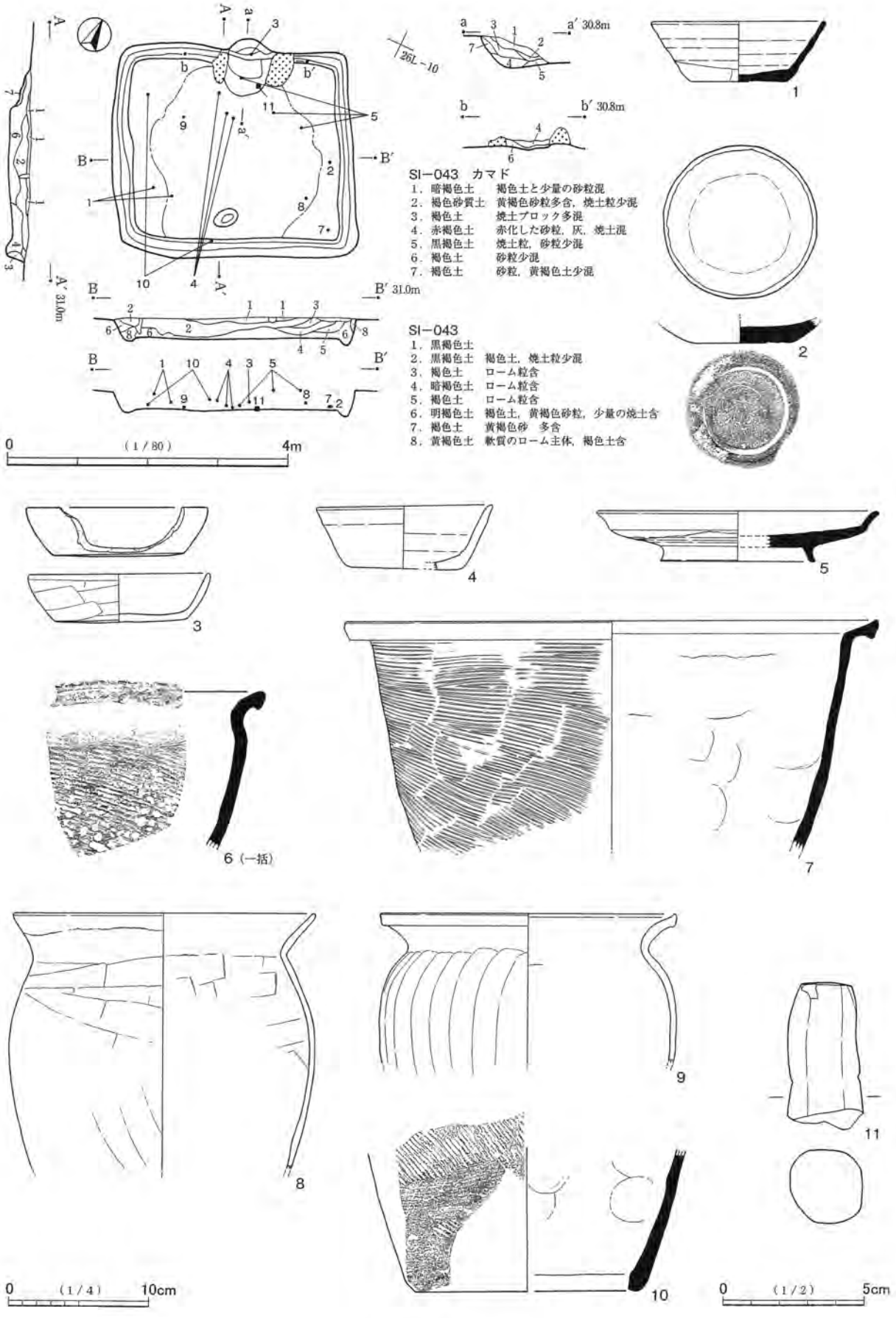
**カマド**　北西壁中央に位置する。上部の遺存が悪く，右袖が火床部からやや遠い。構築材は山砂主体で，左袖はしまりが強い。火床部下層は焼土・灰を含む。火床部底面は床面よりもかなり窪んでいるが，使用により深くなったことと，掘りかたが深いことのどちらか，または双方ともが考えられる。

**堆積土**　上・中層は黒褐色土主体であるが，下層はローム粒をやや多く含む。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　全体的に出土したが，中央がやや少ない。図示できた遺物は11点である。１・２は須恵器杯であるが，２は転用硯である。３・４は土師器杯で，３は非ロクロの土器，４はロクロ成形の土器である。５は須恵器高台付盤，６・７は須恵器甕または甑，10は須恵器甑である。８・９は土師器甕で，８は武蔵型，９は在地の甕である。11は土製支脚である。須恵器の産地は，２が湖西産と思われる以外は，新治窯産である。

２は口縁・体部の全周が除去され，上からみた形がほとんど円形である。破断面は若干磨られている。底部内面はわずかに黒みを帯びる部分があり，墨痕の遺存と思われる。３は底部外面に木葉痕が若干遺存する。口縁・体部の1/4弱が欠損する他は，割れもなく遺存する土器である。被熱により，器面の剥離や変色・煤の付着がみられる。欠損部は打ち欠きされたものと思われる。４も口縁部の一部と底部中心周辺を欠くが，比較的遺存がよい。ただしやや細かく割れている。１・５の遺存は一部である。

８の口縁部は3/4周が遺存する。胴部の遺存はあまりよくない。甕・甑類では，６が大形の破片であるが，


SI−043　カマド
1．暗褐色土　褐色土と少量の砂粒混
2．褐色砂質土　黄褐色砂粒多含，焼土粒少混
3．褐色土　焼土ブロック多混
4．赤褐色土　赤化した砂粒，灰，焼土混
5．黒褐色土　焼土粒，砂粒少混
6．褐色土　砂粒少混
7．褐色土　砂粒，黄褐色土少混
SI−043
1．黒褐色土
2．黒褐色土　褐色土，焼土粒少混
3．褐色土　ローム粒含
4．暗褐色土　ローム粒含
5．褐色土　ローム粒含
6．明褐色土　褐色土，黄褐色砂粒，少量の焼土含
7．褐色土　黄褐色砂　多含
8．黄褐色土　軟質のローム主体，褐色土含
a′ 30.8m
b′ 30.8m
B′ 31.0m
A′ 31.0m
0　(1/80)　4m
6（一括）
0　(1/4)　10cm
0　(1/2)　5cm

第91図　SI－043

器形の大きさを考慮すると一部の遺存である。また他の土器も一部の遺存である。

3はカマド内奥側から倒位で出土した。11はカマド前右側の底面から横に倒れた状態で出土した。カマド廃棄の祭祀時に，支脚が当初の位置からはずされ，欠損部のある杯が伏せて置かれたものと考える。2は右壁際中央の下層から正位で出土した。当初からこの位置にあったものが廃棄時に遺棄されたか，意図的に置かれたことが考えられる。いずれにしても祭祀的な様相をもつと思われる。他の遺物については，遺存が少なく，出土層位も床面・下層のものは少ないことから，単なる廃棄か，流入した状況であろう。

SI－045（第92図，図版33）

位置　調査区東部南西側の25L－06グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.9m，幅が3.1mの長方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

床面　やや凹凸があるが，傾斜はない。中央が硬化している。

柱穴　主柱穴が4箇所検出された。右側の柱穴（P2・P3）は二つのものが連接した形態を呈しており，柱の抜き取りまたは竪穴住居の建て替えが考えられる。出入口ピットが南東(前)壁際中央で検出された。径は40cm×32cm，深さは17cmである。

壁溝　全周する。また左（南西）壁の壁溝が延びて左奥側の柱穴（P1）に接続している。

カマド　北西壁中央に位置する。両袖が遺存する。構築材は山砂主体で，少量のローム粒が混じる。両袖ともしまりが強い。カマド堆積土は下層に焼土ブロックを含み，中層は山砂が多い。

堆積土　主として，上・中層は黒褐色土・暗褐色土，下層は褐色土である。レンズ状に堆積し，自然堆積と思われる。

出土遺物　カマド右・右奥（北）隅にやや集中している他は，散在的で少量である。図示できた遺物は4点である。1は千葉産の須恵器杯である。2は新治窯産の須恵器杯である。色調は暗黄灰色で，千葉産とも思われるが，胎土に白雲母がみられるため，新治窯産としてよいと考える。3は非ロクロの土師器杯で，器形から古墳時代の須恵器蓋模倣杯の混入品と思われる。4は常総型の土師器甕である。1～4はいずれも遺存が少ない。出土層位も上・中層が多く，下層でも床面からはやや離れた高さである。周囲から廃棄されたか，流入したものと思われる。

SI－046（第93図，図版34）

位置　調査区東部南側の25K－99グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが2.6m，幅が2.6mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。やや南辺が長く，台形的な形態である。

床面　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

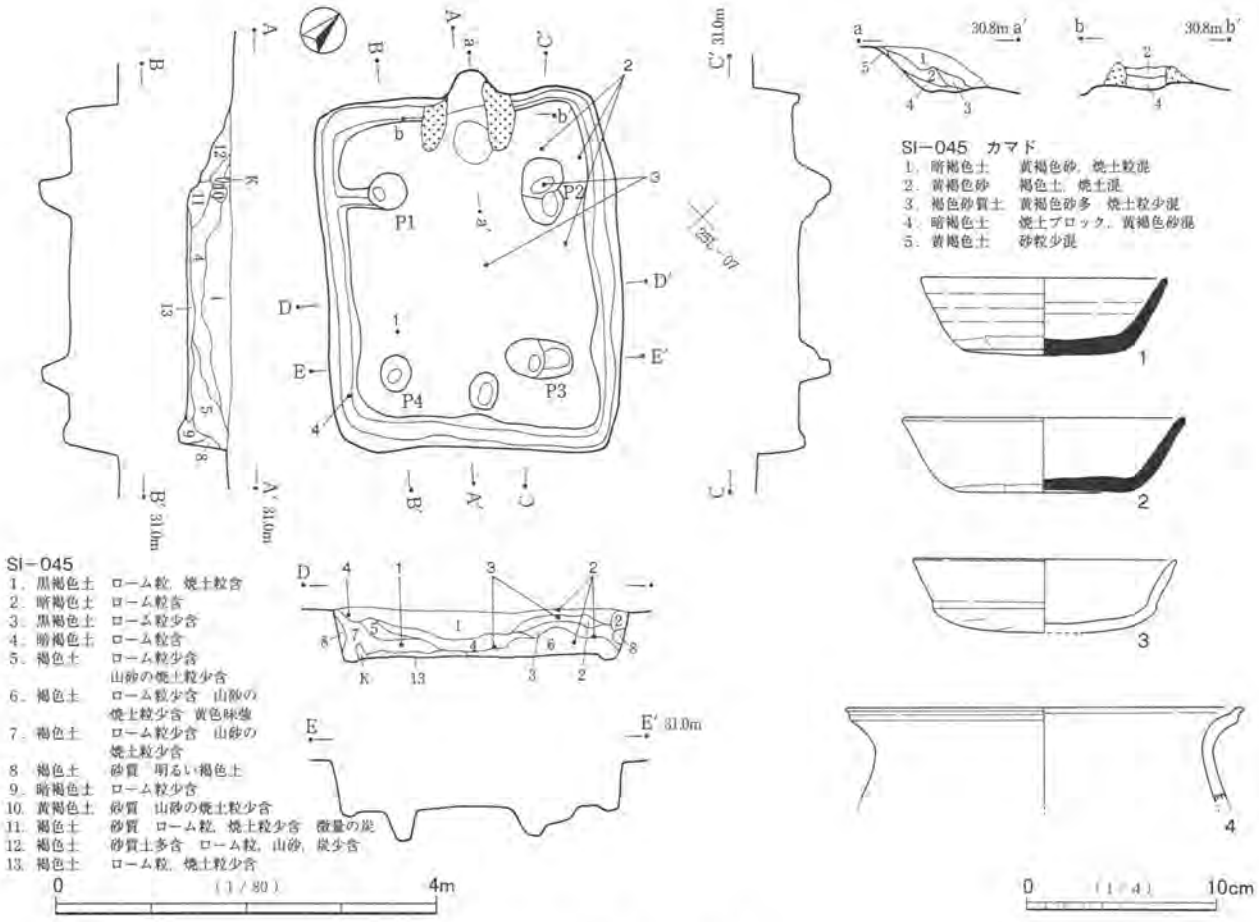
柱穴　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は42cm×33cm，深さは30cmである。

壁溝　全周する。

カマド　北壁中央に位置する。右袖前側を損なっているが，袖部の遺存は比較的よい。構築材は山砂主体である。カマド堆積土下層は多量の焼土ブロックと灰がみられる。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体であり，自然堆積と思われる。

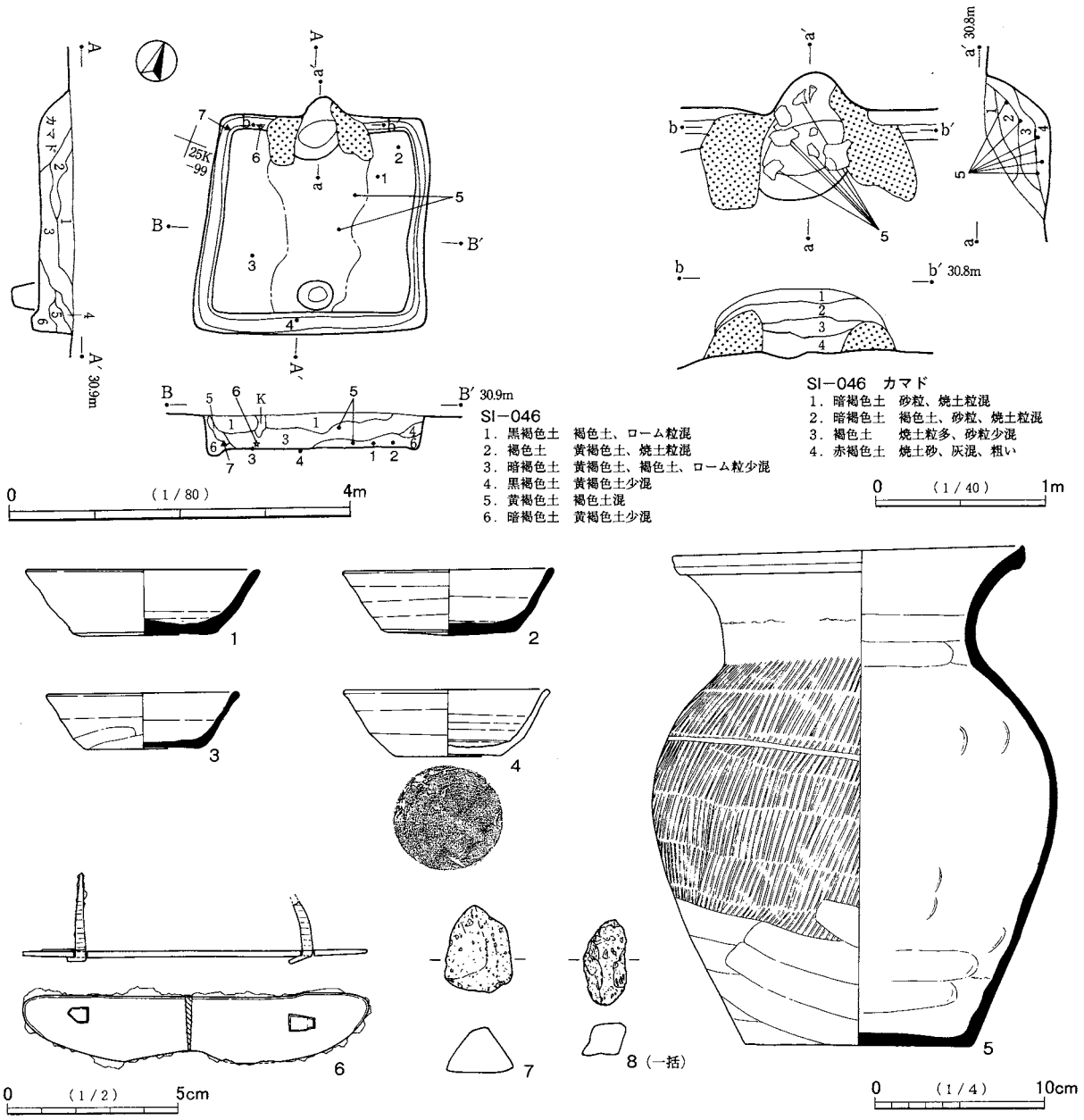
出土遺物　少量で散在的な出土であるが，遺存のよい遺物がみられる。図示できた遺物は8点である。1～3は千葉産の須恵器杯，4はロクロ土師器杯，5は千葉産の須恵器甕である。6は鉄製品で，穂摘具である。7・8は軽石である。




第92図　SI－045

1～4は遺存がよく，特に1・4は割れもひびもない完形品である。1～3は，器面の荒れ・変色等の被熱痕跡がみられ，4もその可能性がある。2は口縁・体部の一部が欠損する。欠損部とそれに続く接合部分はあわせて逆台形状の形態である。その他は割れていないが，火を受けてもろくなっており，ひびが数箇所入っている。器面はやや赤変し，内面は剥離が目立つ。欠損・接合部分は意図的な破損の可能性もあるが，断面がやや不整であり，土器がもろいために割れただけかもれない。3の遺存部分はやや細かく割れている。口縁・体部の三箇所他が欠損しているが，欠損部分は不整であり，土器だけから意図的な状況をみるのは難しい。5は口縁部から底部まで，全体の2/3弱程度遺存する。6は木質の柄を除いて完形で，目釘もよく残っている。刃部中央が磨り減っている。左側の目釘は先端まで遺存し，長さは2.6cmである。裏面からの長さは2.4cmである。右側の目釘は先端をわずかに欠損する。頭はともに左側に折り曲げられている。握り柄（木台部）は腐食して遺存しないが，目釘周辺に錆付いた木質がわずかにみられる。ここで市原条里制遺跡市原地区で出土した，木台部が遺存する穂摘具と比較すると※），市原条里のものは穂摘具の長さが10.9cmであるのに対し，本製品は長さが10.2cmとわずかに小振りである。また目釘の長さも，市原条里のものが3.2cmであるのに対し，本製品はやや短い。しかし低地出土と台地出土のものでは，劣化の進行で大きく異なることもあり，差は少ないとみることができよう。市原条里のものの木台部の幅は3.8cmであり，本製品のものもそれに近い数値と思われる。その他の数値も近似値と思われる。7・8とも小片である。7は三角錐状で，4面をもつ。いずれの面も比較的平坦である。

※）大谷弘幸　1996　「穂摘み具の変遷と稲の穂首刈り－市原条里制遺跡の鉄製穂摘み具から－」『研究連絡誌』第46号　（財）千葉県文化財センター




第93図　SI－046

1はカマド右袖前方の床面，2は右奥（北東）隅の床面と，比較的近い位置からともに正位で出土した。3は左前側の床面から出土した。出土時に割れていることもあり，正位か倒位か判然としない。4は出入口の柱穴に近い南壁際中央の床面・壁溝上から倒位で出土した。5は多くがカマド内下層から割れた状態で出土した他，一部が中央の中・下層にみられる。6はカマド左袖外脇の北壁際下層から出土した。7は北西（左奥）隅部の下層から出土した。

以上の遺物のうち，1・2・4は竪穴・カマド廃棄の祭祀に関わるものであろう。また5についても，使用できる状態のものを破壊したかどうか不明であるが，1・2と連動してカマド内下層に廃棄されたものと思われる。6もその可能性があるが，通常カマド左側に保管されていたものが遺棄されただけとも思われ，祭祀的様相があるかどうか断定しがたい。さらに3についても竪穴廃棄の祭祀に関わる可能性があるが，これも断定しがたい。

本住居の出土遺物は，床面やカマド内に遺存のよい遺物がみられるが，大半を占めるその上部堆積土の

出土遺物は，少量で小片の土器が主体である。カマド・竪穴廃棄の祭祀後は，あまり土地の利用がされなかったのであろう。

SI－047（第94図，図版34）

位置　調査区東部南東側の26K－92グリッドを中心に位置する。

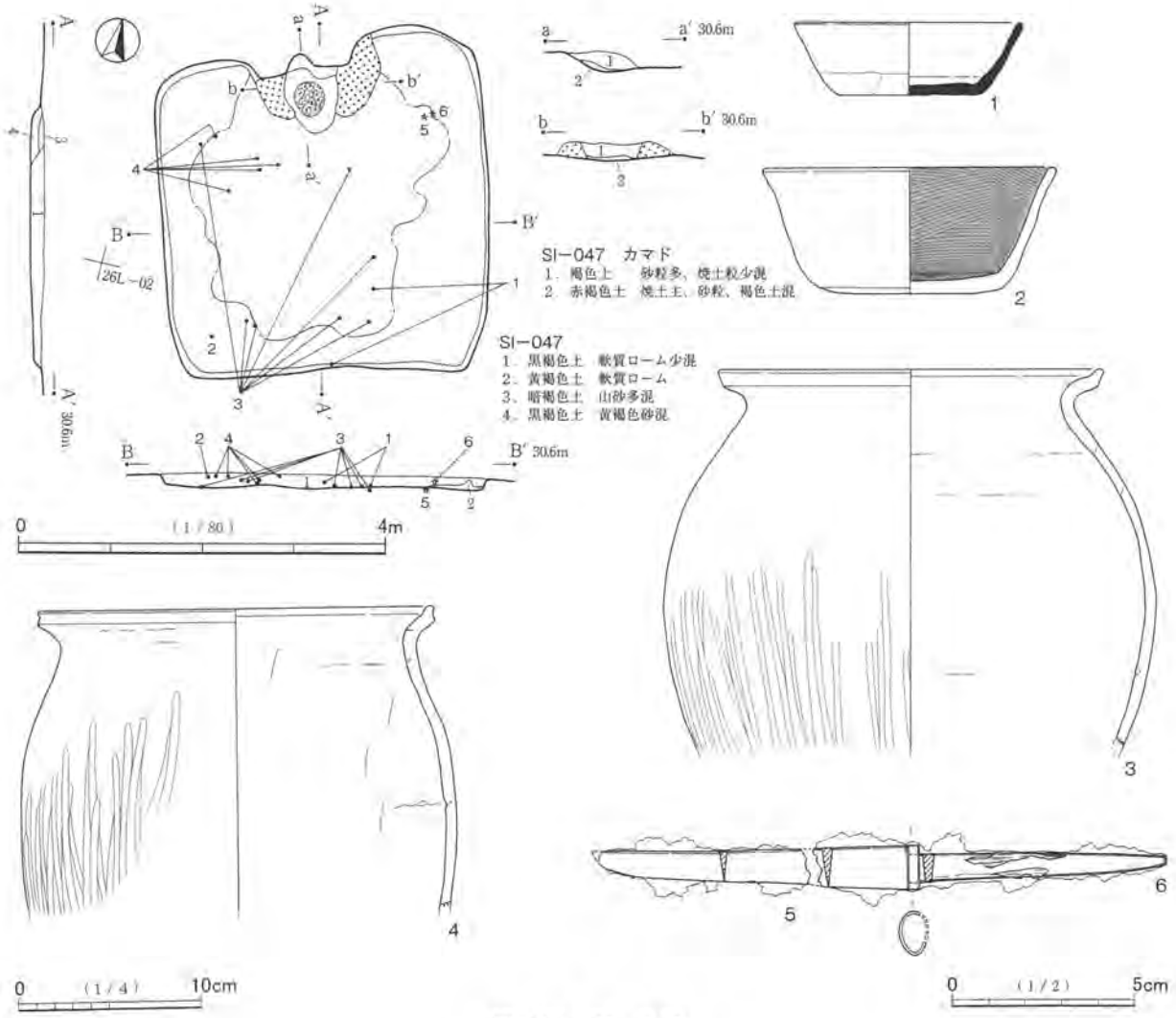
形状・規模　長さが3.8m，幅が3.6mの方形をなす。確認面からの深さは20cmである。やや東辺が長い。

床面　平坦で，中央が硬化している。

カマド　北壁中央に位置する。方形プランからほぼ突出しないで構築されている。確認面では煙道部上端の壁が，北壁よりもやや内側にあり，両袖部分の壁は北壁を結ぶラインよりもかなり内に入っている。カマド後方は棚状施設的に使われていたのかもしれない。竪穴自体の遺存が少ないため，カマドの遺存も良好ではない。両袖の構築材は山砂主体であるが，ローム粒を含む。火床部底面はよく焼けており，カマド堆積土下層は焼土主体である。

堆積土　黒褐色土主体で，ロームは少量である。自然堆積と思われる。

出土遺物　散在的な出土である。やや少量であるが，床面まで浅いことも影響していると思われる。図示できた遺物は６点である。１は新治窯産の須恵器杯，２はロクロ土師器杯，３・４は常総型の土師器甕である。５・６は鉄製品で，刀子である。同一個体と思われる。




第94図　SI－047

全体に遺存はあまりよくないが，２は1/2程度，４は口縁部が比較的よく遺存している。２は大型で，深い土器である。鉄鉢形土器と認識されていたことも考えられる。内面は黒色処理が施されているが，外面も黒色部分や黒色味を帯びる部分がかなりある。３は器面が荒れているが，４はあまり荒れていない。５・６は一部を欠くが遺存のよい刀子である。鏑も比較的よく遺存している。茎は柄の木質の一部が錆びて付着している。背関は直角に切り込まれる。刃関はやや不明瞭である。直角的であるが，わずかに斜めになると思われる。刃部は切先先端を欠く図としたが，この部分は使用時の磨滅や欠損も考えられる。繊維質が刃部の表裏面に多く付着している。

SI－048（第95図，図版34）

**位置**　調査区東部南東側の26L－04グリッドを中心に位置する。東方に谷があり，確認面は西から東にわずかに下っている。

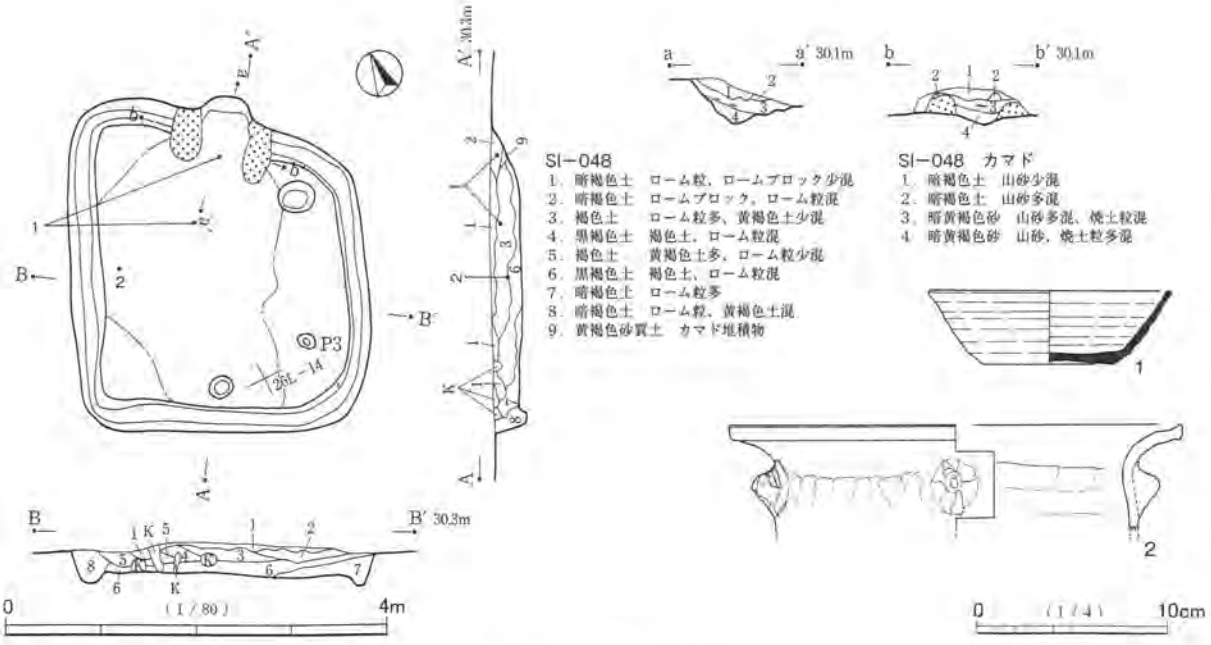
**形状・規模**　長さが3.5m，幅が3.2m，確認面からの深さは30cmである。左（北西）辺が長く，台形的な方形をなす。

**床面**　概ね平坦であるが，中央から西寄りにかけては，木の根に影響されて凹凸がある。中央が硬化している。

**柱穴**　出入口ピットが南西壁際中央で検出された。径は28cm×22cm，深さは10cmである。右側に２箇所のピットがある。主柱穴の可能性があるが，左側で検出されなかったため，判然としない。左側の主柱穴は竪穴外であったことも考えられるが，憶測の域を出ない。

**壁溝**　全周する。全体に深めでしっかりと掘られている。部分的に凹凸がある。

**カマド**　北東壁中央に位置する。両袖の構築材は山砂を主体とする。内壁はやや赤色化するが，わずかな範囲である。天井部は崩落しているが，器掛け口部分と思われる部分がやや窪み，その上方の一部が赤色化している。火床部底面中央は床面よりも深いが，使用により深くなったことと，掘りかたが深いことのどちらか，または双方とも考えられる。




第95図　SI－048

堆積土　全体にローム粒・ロームブロックを含むが，根による撹乱が著しいため，人為的堆積か自然堆積か判然としない。

出土遺物　ほとんどが土器片の小破片で，量も少量である。また上層から出土したものが主体である。図示できた遺物は２点である。１は新治窯産の須恵器杯，２は土師器甑である。１は40％程度の遺存で，２も把手部分の小片である。１・２とも中・上層からの出土である。

重複遺構　特に遺構番号を付与していないが，左（北西）辺側に根切りの溝がある。その溝に切られて左前（西）隅部等の壁の一部を損なっている。

SI－049（第96図，図版35）

位置　調査区東部南東側の26K－93グリッドを中心に位置する。東方に谷があり，確認面は西から東にわずかに下っている。

形状・規模　付け替え後の新カマドを基準にみると，長さが4.1m，幅が3.7mで，縦長の方形をなす。付け替え前の旧カマドからみると逆になり，横長の方形である。確認面からの深さは40cmである。

床面　概ね平坦である。左（北西）側を除いて硬化しているが，中央部がやや著しい。

柱穴　主柱穴が４箇所検出された。左奥側の柱穴（P1）は複雑な形態で，左前側の柱穴（P4）も底面が連接した形態を呈している。柱の抜き取りまたは建て替えの可能性が考えられる。出入口ピットは検出されなかった。旧カマドの竪穴住居出入口側と思われる右（南東）壁際中央部分は撹乱を受けている。

壁溝　全周する。

カマド　新カマドは北東壁中央に，旧カマドは北西壁中央に位置する。新カマドの袖部は比較的遺存がよく，構築材は山砂を主体とする。両袖内側から上面にかけて，強く赤色化している。また火床部も底面のロームがやや赤色化する。底面は床面よりもかなり深いが，使用により深くなったことと，掘りかたが深いことのどちらか，または双方とも考えられる。旧カマドは左壁側中央に若干の山砂の堆積がみられた。床面に火熱を受けた部分が遺存している。

堆積土　黒褐色土主体で，中・下層はローム粒の包含が多い。

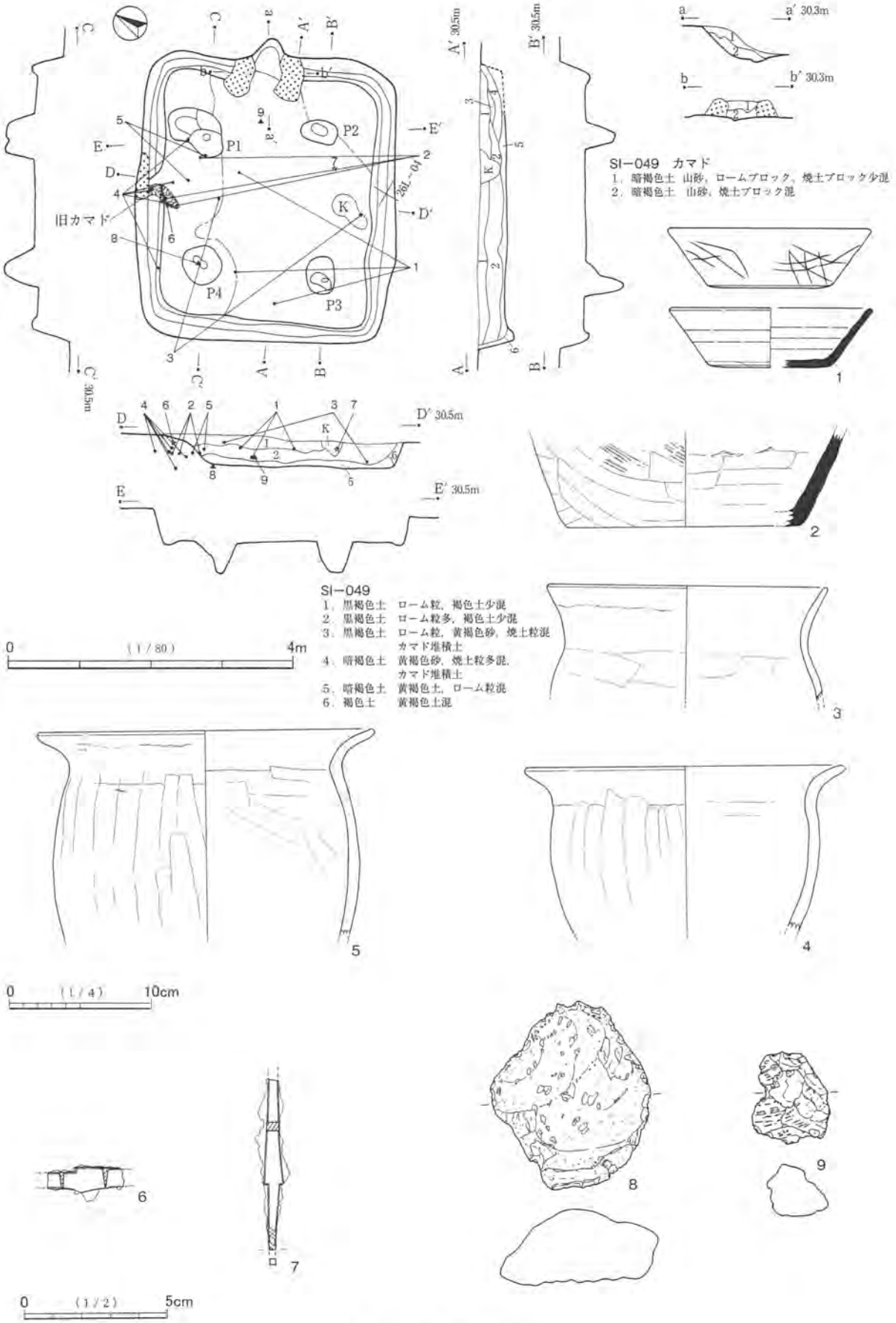
出土遺物　全体的に出土するが，旧カマドと新カマドの間の北側からの出土が多い。図示できた遺物は９点である。１は新治窯産の須恵器杯，２は新治窯産の須恵器甕である。３～５は土師器甕で，３は武蔵型，４・５は在地の甕である。６・７は鉄製品で，６は刀子，７は鉄鏃である。８・９は軽石である。

図示した土器・鉄製品はいずれも一部の遺存である。１は口縁・体部外面に線刻がある。いくつもの細い条線が交差する不整なものであるが，一部九字切り状を呈しており，傷ではないと考える。６は小型の刀子で，関部分の破片である。背関は浅いが直角に切り込みが入る。刃関はわずかに直角的になるか，屈曲点をもつだけか，不明瞭である。刃部の関部分はやや幅が広い。７は棒状部から茎にかけての破片である。茎尻を欠損する。棒状部が長い長頸鏃である。棒状部は茎との境でわずかに幅広となる。直篦被的な台形篦被である。茎は巻き付けられた植物繊維質が若干みられる。９は赤みを帯び，一部は強く褐色化している。火を受けたものと思われる。

８は柱穴P4内で，ほぼ床面と同じ高さから出土した。９はカマド前方の下層から出土した。出土遺物は中・上層から出土したものが多く，概して周囲から廃棄されたか，流入したものと思われる。

SI－050（第97図，図版35）

位置　調査区東部中央の26K－60グリッドを中心に位置する。


P1
P2
P3
P4
K
旧カマド
SI−049 カマド
1．暗褐色土 山砂，ロームブロック，焼土ブロック少混
2．暗褐色土 山砂，焼土ブロック混
SI−049
1．黒褐色土 ローム粒，褐色土少混
2．黒褐色土 ローム粒多，褐色土少混
3．黒褐色土 ローム粒，黄褐色砂，焼土粒混 カマド堆積土
4．暗褐色土 黄褐色砂，焼土粒多混，カマド堆積土
5．暗褐色土 黄褐色土，ローム粒混
6．褐色土 黄褐色土混
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm
0 (1/2) 5cm

第96図 SI－049

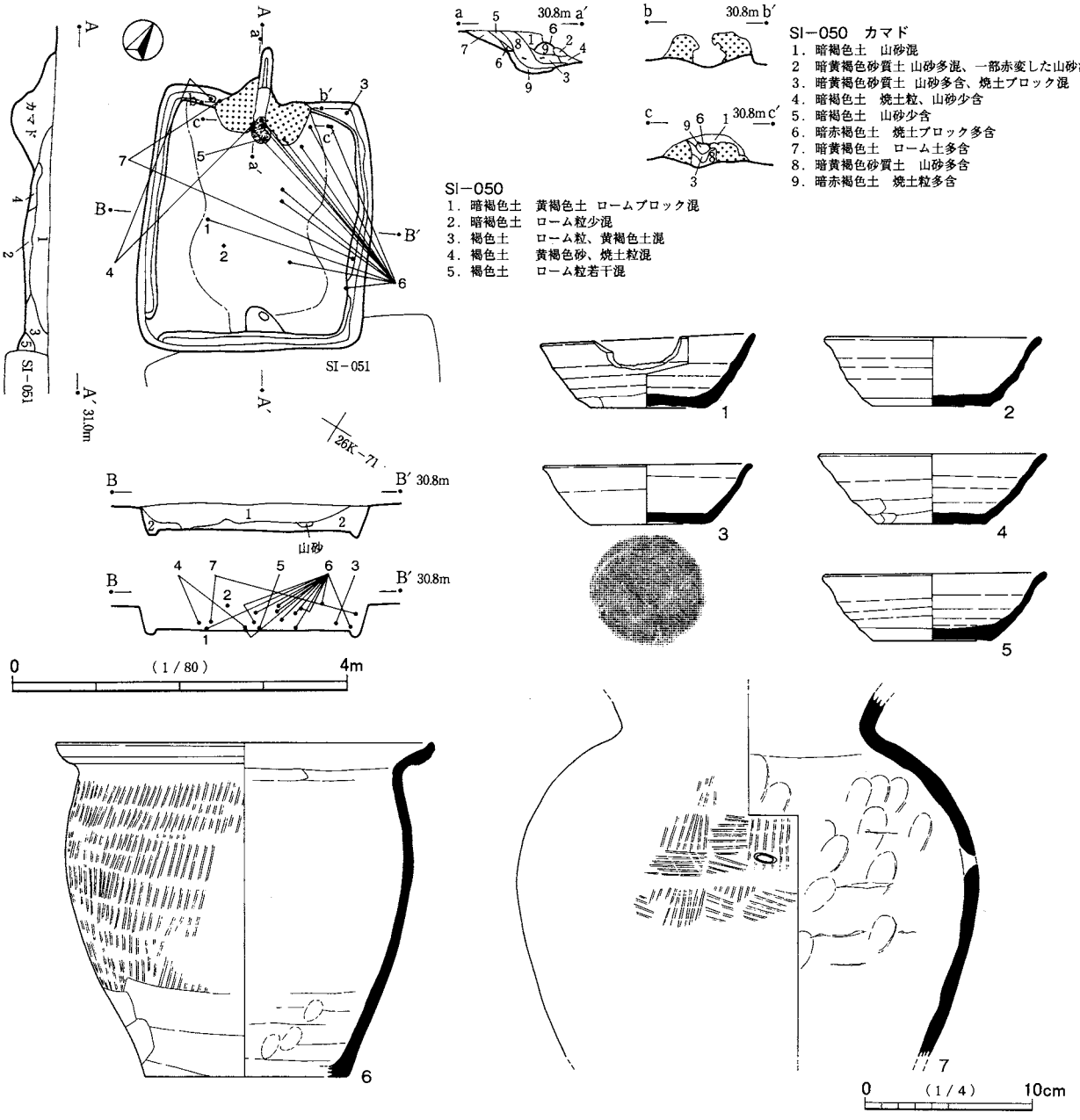
**形状・規模**　長さが3.2m，幅が2.7mで，縦長の方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。壁溝から続く形であるが，径はおよそ30cm，深さは26cmである。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北西壁中央に位置する。煙道部が溝状に細長く延びているが，延び始める部分の底面が赤色化している。カマドの遺存はかなりよく，天井部の一部が残っている。構築材は山砂を主体とするが，下部はローム粒・ブロックを多く含む。両袖内側は内部まで赤色化している。火床部底面もやや赤みを帯び，内側に焼土ブロックの大きな塊を２箇所検出した。天井部の一部が崩落したものと思われる。底面は床面よりもかなり深いが，使用により深くなったことと，掘りかたが深いことのどちらか，または双方とも考えられる。




第97図　SI－050

堆積土　ローム粒・ブロックを含む暗褐色土が主体である。下層はロームが少量である。

出土遺物　全体的に出土するが，カマド周辺がやや多い。図示できた遺物は７点である。１～５は須恵器杯で，１・２・４・５は千葉産である。３は南比企窯産と思われる。６は千葉産の須恵器甕，７は新治窯産の須恵器甕である。

１・３・５は遺存がよく，３は割れていない完形品である。１は口縁部の一部が小さく弧状に欠損する以外は割れもなく遺存する土器である。５は口縁・体部の1/3弱が欠損している。その欠損部に続く接合部と合わせた形態は，やや不整な弧状である。それ以外は割れ・欠損のない土器である。出土状況も考慮すると，打ち欠き・打ち割りされたものと思われる。また１の欠損部もその可能性がある。

６は口縁部が全周遺存し，胴部の遺存もかなりよい土器である。底部は周縁の遺存が多いが，中心側を欠く。底部の多くが破壊されたとも思われるがやや断定しがたい。７は横方向後縦方向の平行タタキが施され，一部格子目状になっている。胴部内面の凹凸は細かい窪みが連続しており，指頭痕と思われる。一部に指紋・掌紋とみられるところがある。三和窯産的な調整技法と思われるが，胎土に若干の白雲母がみられることから新治窯産とする。胴部最大径のところに穿孔が１箇所ある。穿孔による割れは内面に広がっており，外面から内面に穿孔されたものと思われる。

６の口縁部付近の破片は，カマド内から口縁部を左袖に向けた横位の状態で出土した。その他の破片はカマド右側から中央及びやや前方の右側に広く分布している。出土層位は床面から上層にわたる。カマド内では，５が６の右前からやや傾いた正位で出土した。欠損部は右袖に向いている。４はカマド内とカマド左袖脇下層から出土したが，遺存は1/2強であり，あまりよくない。７はカマド左脇の壁際下層及び右壁際やや前側上層から出土した。穿孔をもつ破片は右壁側からの出土である。１は中央やや左側の床面から正位で出土した。３は右奥（北）隅の床面から倒位で出土した。２は上層からの出土である。

以上の出土遺物のうち，５・６はカマド廃棄の祭祀に関わるものと思われる。ただし６は竪穴内上層から出土した破片が多い点で問題があるが，カマド内に遺棄された遺物が壊れて広く散ったものと考える。７は穿孔部をもつ点で祭祀的な土器と思われるが，その部分の破片がカマドから遠い上層出土であるため，カマド廃棄の祭祀に関わるといえる状況でない。３はカマド・竪穴廃棄の祭祀に伴い設置された場合と，隅部に保管または上方で保管された遺物が転落した場合の二通りが考えられるが，カマド内の状況から前者の可能性が高いと考える。また１も竪穴廃棄の祭祀に伴い，その場に置かれた可能性が考えられる。

重複遺構　南側でSI－051と重複し、本住居が切っている。

SI－052（第98図，図版35）

位置　調査区東部中央の25K－78グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.3m，幅が2.8mで，やや縦長の方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

床面　ほぼ平坦である。全体に硬質であるが，特に中央が硬化している。

柱穴　主柱穴と思われる小穴が３箇所検出された(P1･P2･P4)。右前側のP3が検出されていないことと，P4が内寄りな点に問題があるが，可能性のある遺構としておく。出入口ピットが南東壁際中央で検出された。径は21cm×16cm，深さは22cmである。P4の右側で近い位置にある。

壁溝　全周する。

カマド　北西壁やや右寄りに位置する。両袖は壁側がよく遺存する。構築材は山砂を主体とするが，やや白みの強い粘質土も混じり，しまりが強い。

堆積土　ローム粒・ブロックを含む黒褐色土・暗褐色土で，壁際・下層はロームの含有が多い。レンズ状に堆積し，自然堆積と思われる。

出土遺物　少量で土器小片が主体である。図示できた遺物は２点である。１は新治窯産の須恵器杯である。底部外面に１条線のヘラ書きがある。そのヘラ書きに直交する形で「＋」の線刻を加え「キ」状にしている。線刻は不整で，縦横とも２重の線になっている。「#」の崩れともいえるかもしれない。２は石製の紡錘車で，石材は滑石である。ほぼ1/2弱の遺存である。使用時の上面である図下側の面は剥離しており，使用面が遺存しない。本来の重量は50ｇ程度と思われる。

１は左やや前寄りで，床面のやや上から出土した。２は左壁際中央壁溝上から出土した。

重複遺構　左前（南）隅側がSD－012に切られているが，本住居の方が深いため，上部の欠損に留まる。

SI－053（第98図，図版36）

位置　調査区東部中央やや南西寄りの25K－87グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.5m，幅が3.7mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。西辺がやや長く，やや台形的な形態である。また中央がわずかに張り出しており，幾分亀甲形的でもある。

床面　四隅が中央よりもやや低いが，貼床が施された影響があると思われる。壁側の床面はやや黒色土混じりであり，本来はほぼ平坦であろう。中央が硬化している。

柱穴　主柱穴が４箇所検出された。主柱穴間は平行四辺形的な形態であり，竪穴と相似形にならない。出入口ピットが西壁際中央で検出された。径は19cm×17cm，深さは６cmである。竪穴のプランはこの部分でやや張り出している。

壁溝　全周する。

カマド　東壁やや右（南）寄りに位置する。遺存はやや不良で，特に左袖は根の撹乱を受けて前側を失っている。両袖の構築材は山砂を主体とするが，やや白みの強い粘質土も混じり，しまりが強い。内壁は部分的に赤色化している。

堆積土　ローム粒・ブロックを含む暗褐色土で，下層はロームの含有が多い。

出土遺物　少量で土器小片が主体である。図示できた遺物は２点である。１は常総型の土師器甕である。奥（東）壁際左寄りの床面から出土した。２は砥石で，石材は砂岩である。硬質で緻密な質感である。図の上部と下部が欠損していると思われるが，やや不明瞭であり，この状態で完形品かもしれない。図示した上面は左側等にややざらつく部分があるが，滑らかな部分が多い。その他には上面ほど平滑な部分がなく，主として図上面が使用されたのであろう。なお右側面は細かい凹凸が多いが，やや滑らかであり，若干の使用がうかがえる。図の下面と折損面と思われる部分はほとんど使用されていないと思われる。上面右（南）壁際隅部寄り床面から出土した。

重複遺構　左（北）側がSD－012に切られているが，本住居の方が深いため，上部の欠損に留まる。前（東）側でSI－054を切っている。また左壁のほぼ中央から左奥（北東）隅側が，撹乱を受けて欠損する。

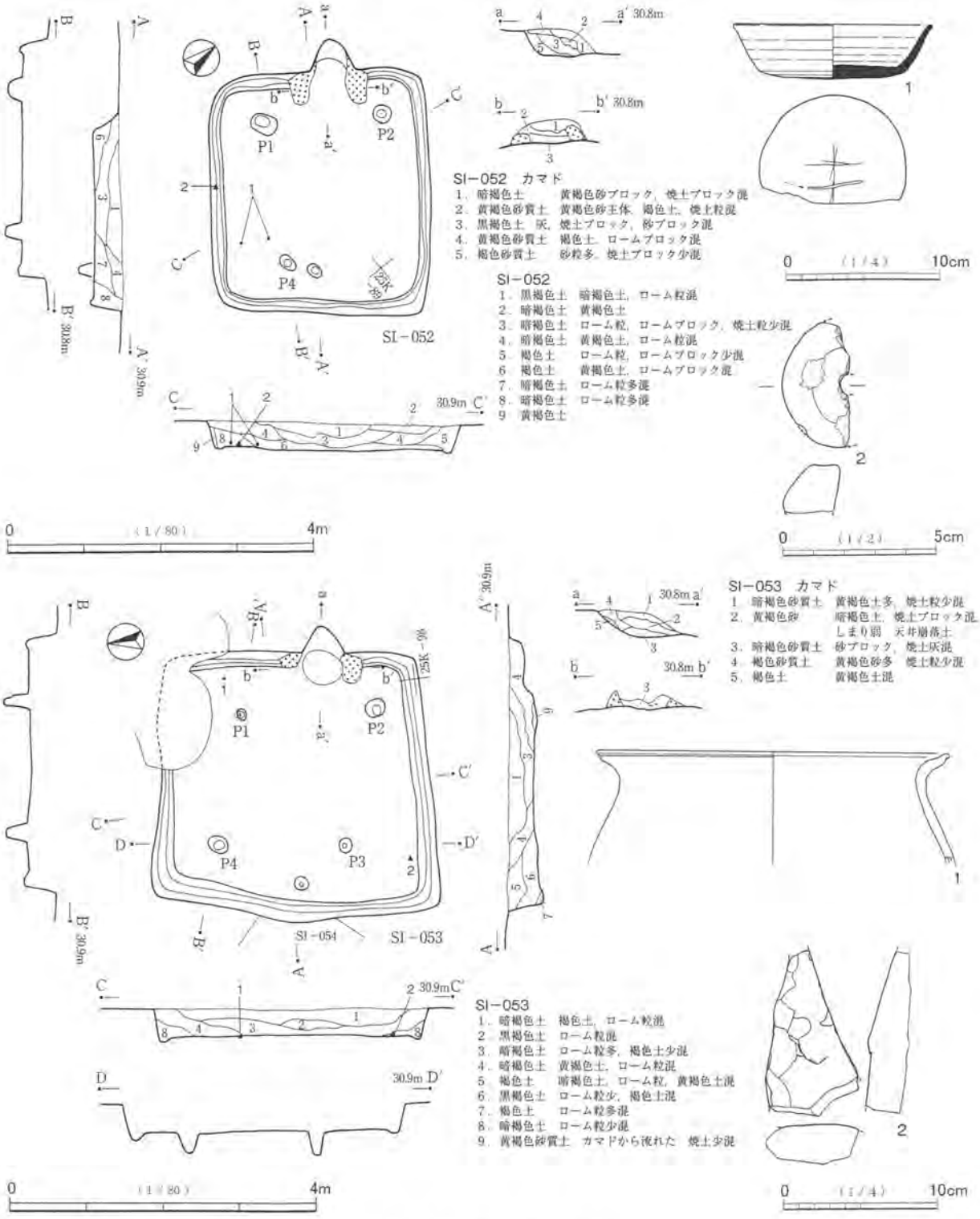
SI－054（第99図，図版36）

位置　調査区東部中央やや南西寄りの25K－86グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが4.0m，幅が4.7mで，横長の方形をなす。確認面からの深さは60cmである。

床面　ほぼ平坦である。中央が若干硬化しているが，あまり強いものではない。

柱穴　主柱穴が４箇所検出された。竪穴の規模が比較的大きいのに対し，主柱穴はやや内に寄っている。

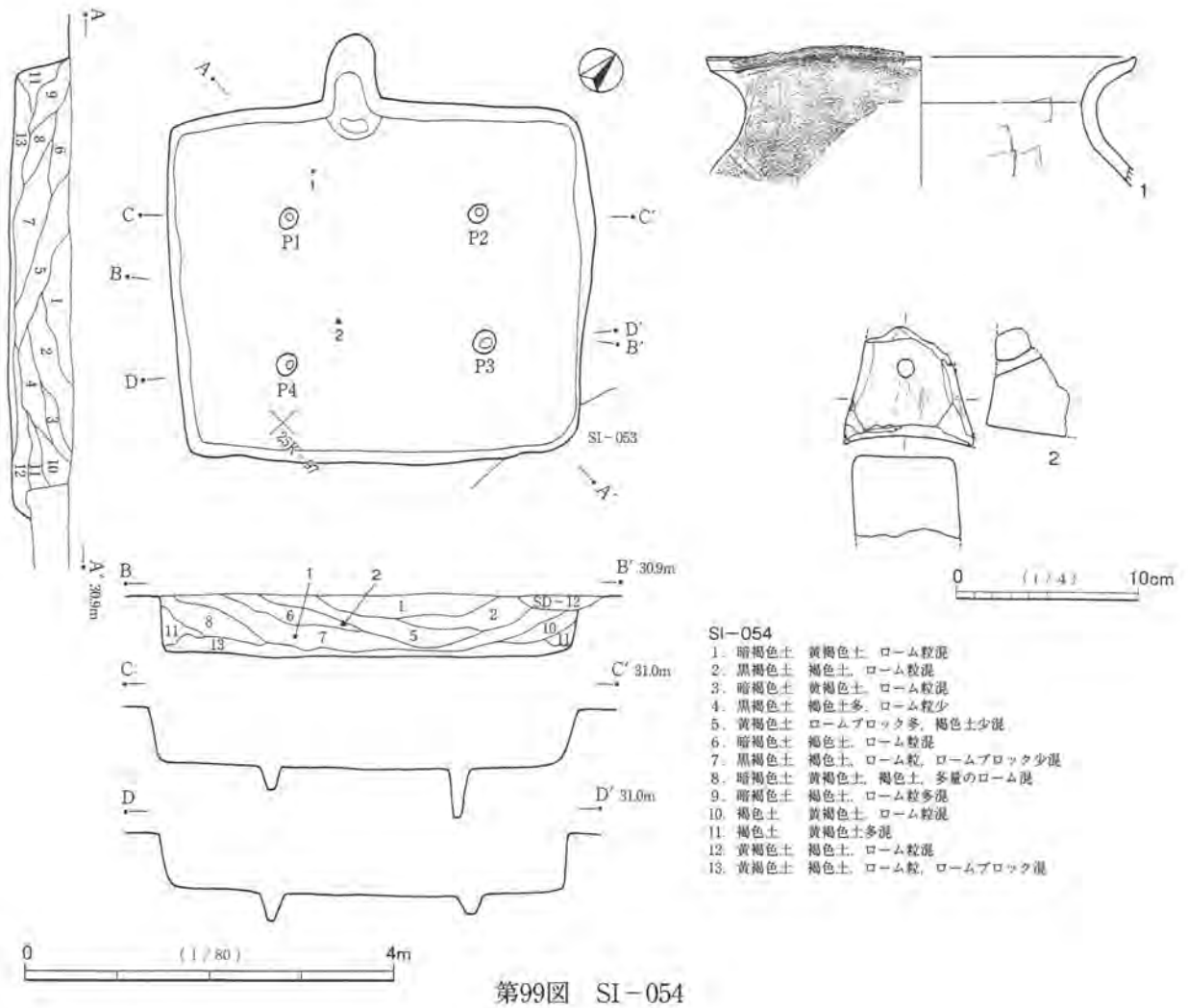



第98図　SI－052・053

出入口ピットが南東壁際中央で検出された。径は14cm×７cm，深さは８cmである。

カマド　北西壁中央に位置する。若干の淡黄色砂質粘土を検出したが，流出したものの一部であり，両袖とも遺存していない。火床部からは焼土粒を検出したが，強い被熱痕跡は遺存していない。火床部底面はやや窪んでいるが，床面からあまり深いものではなく，規模も小さい。灰のかき出し等使用に伴うものであろう。煙道部はプランからかなり突出しており，壁は比較的なだらかに立ち上がる。

堆積土　暗褐色土・黒褐色土主体であるが，一部に下層から上層までロームブロックを多く含む土層が




第99図　SI－054

みられる（5層）。また全体に複雑な土層であり，人為的堆積と思われる。

**出土遺物**　少量で土器小片が主体である。図示できた遺物は2点である。1は常総型の土師器甕である。カマド前方の中層から出土した。2は砥石である。石材は流紋岩である。本来は方柱状で大型の砥石である。小口側の破片であるが，懸垂用の孔が穿たれて，提砥として再利用されたものである。図上面と左右側面・下部の小口面は平滑である。図の下面は破損しており，本来の砥面がほぼ遺存しない。薄い部分に穿孔されているため，下面上部の破損は穿孔前のものであろう。あるいは穿孔のため，ある程度意図的に打ち欠いたことも考えられる。角部分も図左側等で使用されて，若干の面をなすが，軟質の石材のため，欠けやすかったのかもしれない。中央の上層から出土した。

**重複遺構**　北（右奥）側がSD－012に切られ，右前（東）隅側がSI－053に切られている。しかし両遺構よりも，本住居の方が深いため，中下部・床面は遺存している。

**SI－055**（第100図，図版36）

**位置**　調査区東部中央の25K－67グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.6m，幅が2.7mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

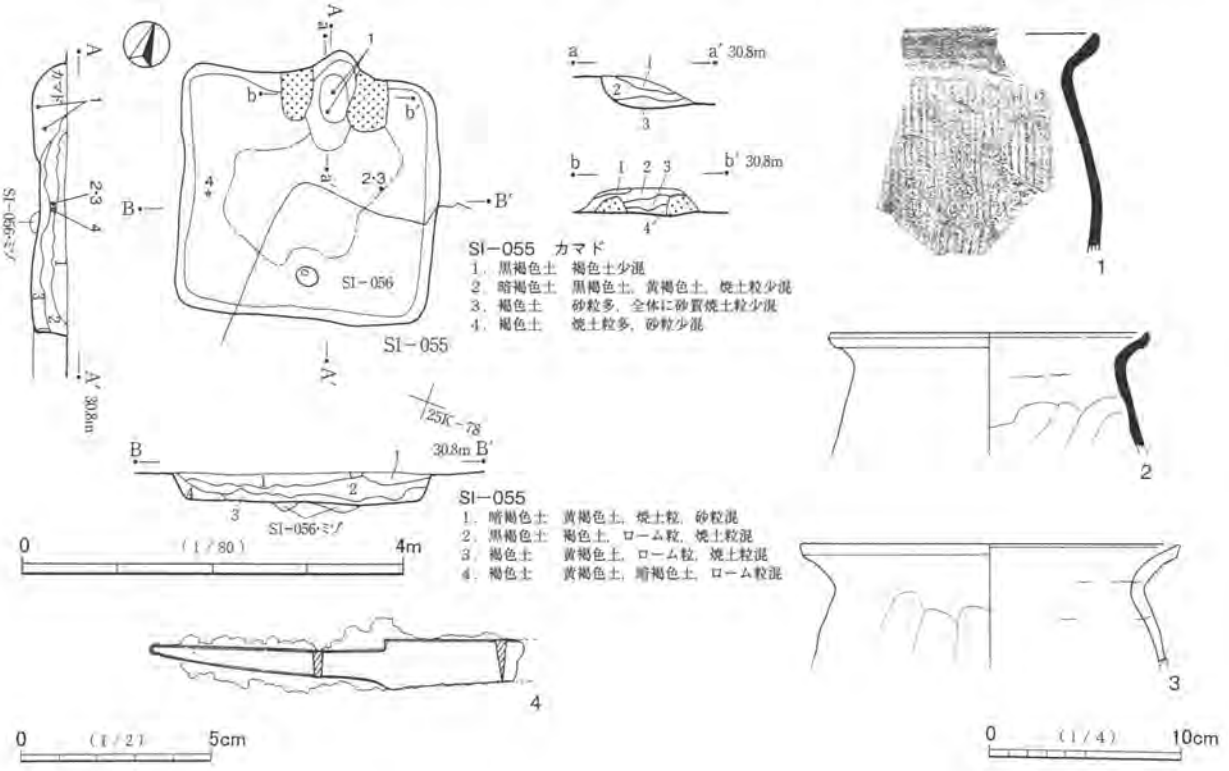
**床面**　平坦で，中央が硬化している。

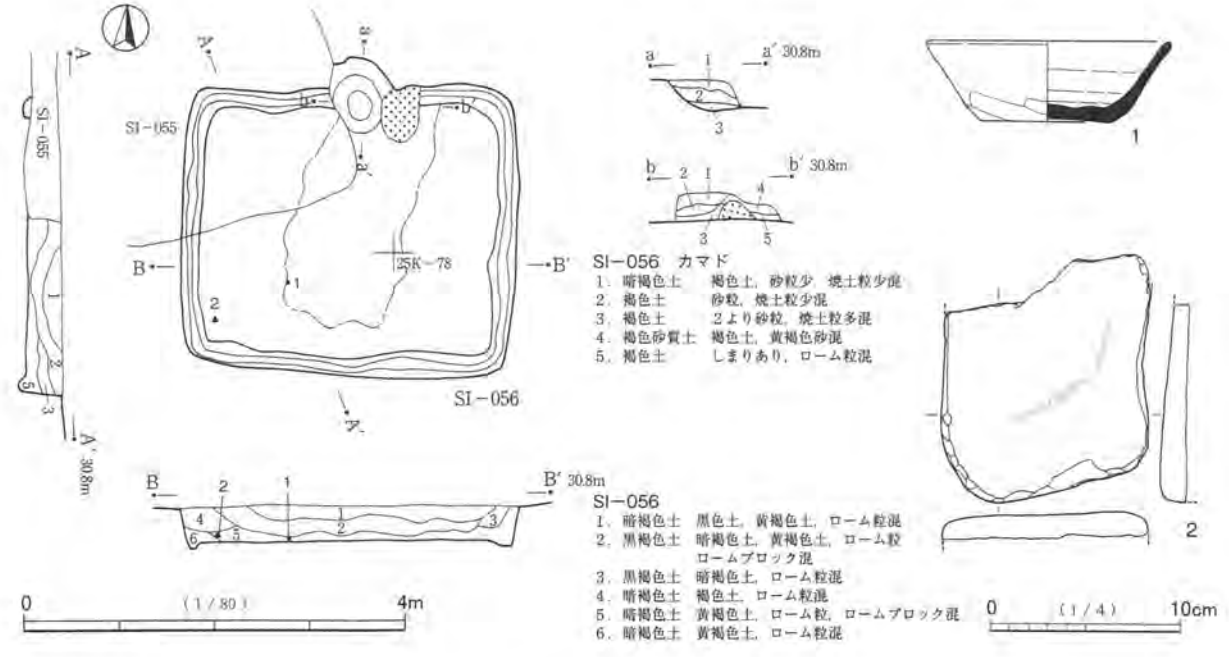
**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は25cm×20cm，深さは16cmである。

カマド　北壁中央に位置する。両袖が遺存し，構築材は淡黄色砂質粘土を主体とする。カマド内堆積土下層は焼土粒が多い。

堆積土　下層はローム粒をやや多く含み，，中層は黒色味が強い土層である。自然堆積と思われる。

出土遺物　少量で散在的な出土である。図示できた遺物は４点である。１・２は千葉産の須恵器甕であるが，１は甑も考えられる。３は在地の土師器甕である。４は鉄製品で，刀子である。１～３はいずれも小破片である。２は胴部外面の平行タタキの痕跡が，ナデによって消されている。胴部内面は当て具痕




第100図　SI－055・056

の凹凸が顕著である。4は茎から刃部中央近くまでの破片である。茎は茎尻まで遺存する。背関は直角的に，刃関は浅く斜めに切り込みが入る。

出土位置は，1がカマド内，2・3は中央右寄りの中層，4は西壁際中央の中層である。

**重複遺構**　南東側でSI－056と重複し，本住居が切っている。

SI－056（第100図，図版36）

**位置**　調査区東部中央の25K－77グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.1m，幅が3.5mの横長の方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央に位置する。火床部中央・煙道部から右袖は遺存するが，左袖はSI－055に切られて遺存しない。構築材は淡黄色砂質粘土を主体とする。カマド内堆積土下層は焼土粒がやや多い。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　少量で散在的な出土である。図示できた遺物は2点である。1は千葉産の須恵器杯，2は砥石である。1は割れていない完形品である。中央やや左前側のほぼ床面上から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。2の石材は流紋岩である。図の上部側が欠損している。また図の下面側は，石材が剥離して欠損したと思われ，板状になっている。図示した上面はほぼ全面的に使用され，平滑である。筋状の研ぎ痕が一部に連続してみられる。土器調整痕のハケ目に似た状態である。図の下側の面はほとんど使用されていないため，ざらついている。ただし一部に粗い筋状の痕跡があり，下面側の剥離後，若干使用されたのかもしれない。左側面の中央と小口面の一部に砥面がみられる。その他については，一部で砥面が剥落した可能性もあるが，あまり使用されていないと思われる。上面と他の面との境は左右側面の一部で角張るが，やや丸みをもつ部分が多い。南西（左前）隅部の下層から出土した。

**重複遺構**　北西側でSI－055と重複し，本住居が切られている。しかし本住居の方がわずかに深いため，床面・壁溝はほぼ遺存している。

SI－057（第101図，図版37）

**位置**　調査区東部西寄りの25K－95グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.0m，幅が3.0mの方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

**床面**　凹凸があるが，傾斜はない。東西(左右)の壁側を除いて硬化している。特に中央が顕著である。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央やや右寄りで検出された。径は53cm×39cm，深さは13cmである。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央に位置する。両袖の壁側が遺存するが，根の撹乱等を受けて前側の遺存が悪い。構築材は淡黄褐色山砂と白色粘土の混合土である。火床部の窪みは浅い。煙道部の壁はかなりの急傾斜である。カマド内堆積土下層の奥側は焼土を主体とするが，前側は灰を多く含み，黒みの強い色調である。

**堆積土**　ローム粒・ブロックを多く含む土層が下層・壁際だけではなく，中層から上層にかけてもみられる（5層・8層・10層等）。層位も複雑であり，埋め戻されていると思われる。

**出土遺物**　非常に少量で，土器小片が主体である。図示できた遺物は3点である。1は新治窯産の須恵器杯，2は新治窯産の須恵器甕または甑である。3は鉄鎌である。

1は口縁・体部の2箇所をあわせて1/4強欠損するが，比較的遺存がよい。体部内面に「×」の線刻がある。

3は遺存のよい鎌である。欠損は切先部分と，基部折り返し部分の一部である。刃側は直線的な基部から弧を描く刃部となり，その境は明瞭である。表面に植物質繊維が付着する部分がある。1～3はいずれも北東隅周辺から出土した。1は下層から上層にかけて出土し，2は中層から，3は下層から出土した。1～3を含む少量の遺物は埋め戻しの土とともに廃棄されたか，以前から土中や周囲に存在したものであろう。

SI－058（第102図，図版37）

**位置**　調査区東部中央の26K－40グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.8m，幅が2.6mで，やや縦長の方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

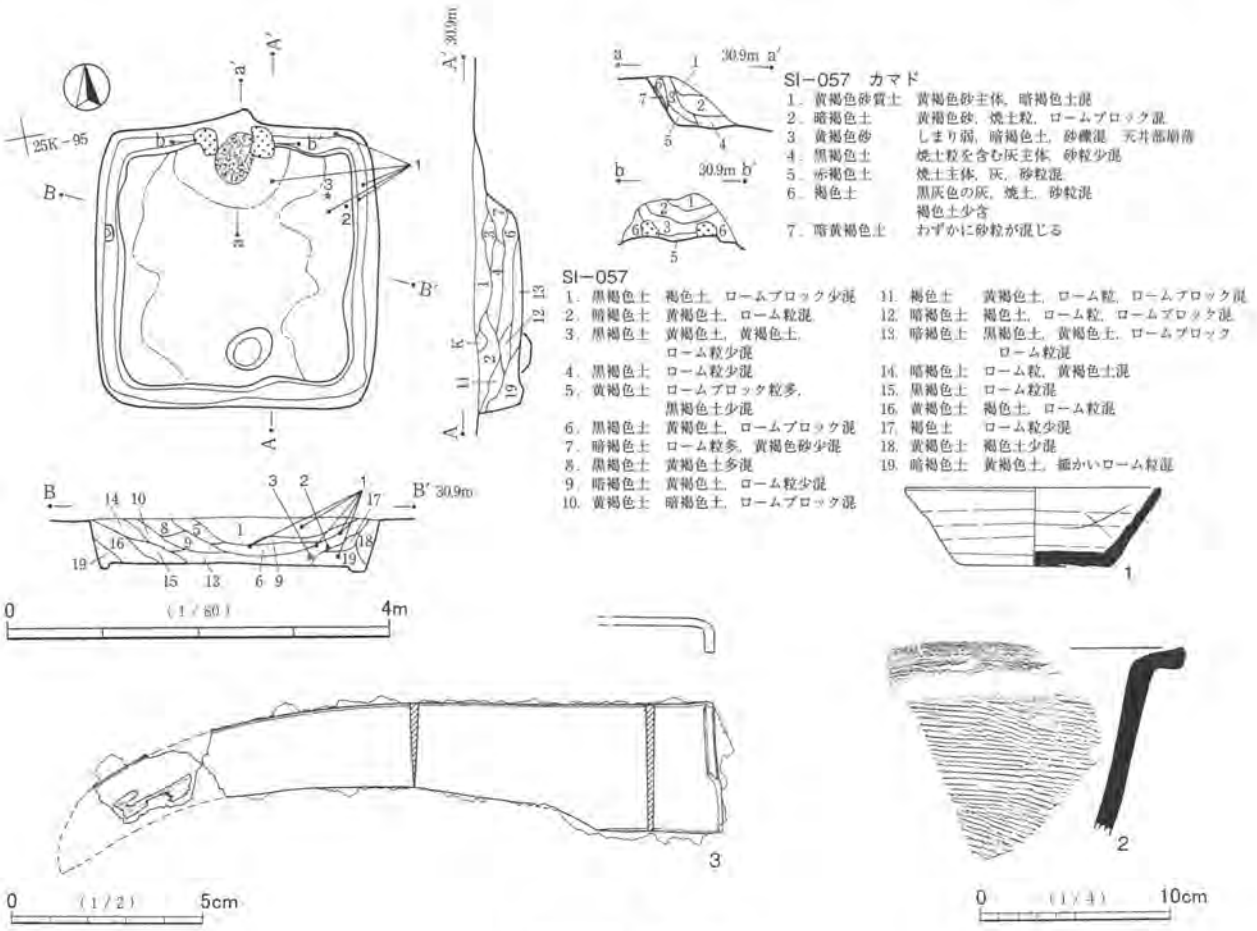
**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

**壁溝**　全周する。

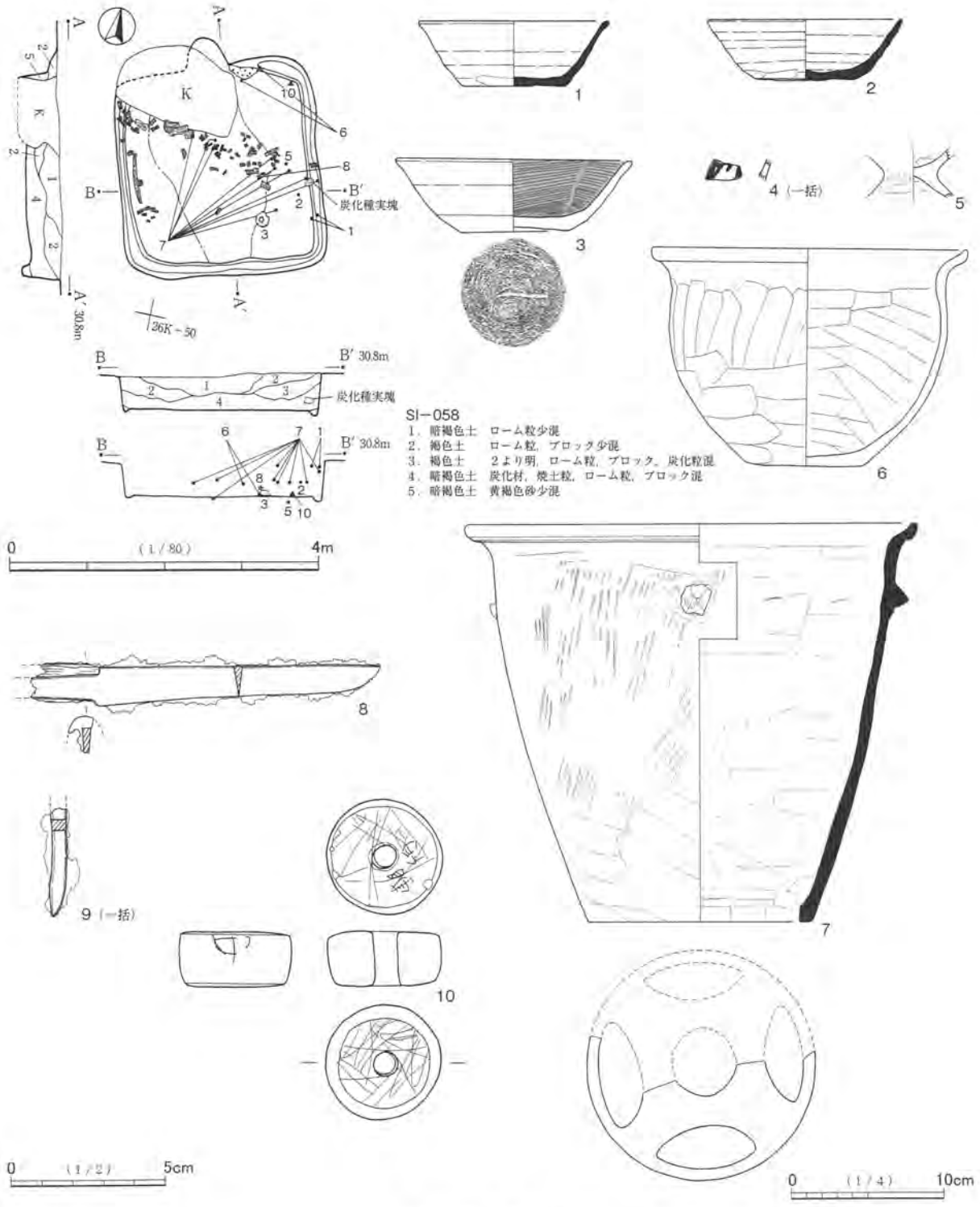
**カマド**　北壁中央に位置する。撹乱を受けて多くが破壊されている。右袖壁側に山砂がみられるが，袖の遺存はこれのみである。また煙道は最も突出する部分から右側の壁が若干遺存している。

**堆積土**　下層は焼土粒・炭化材を多く含み，東壁際では炭化種実塊が出土した。遺物出土状況及び炭化材の量から，失火ではなく，上屋の解体後，廃材が焼却されたものと思われる。堆積土にローム粒・ロームブロックが含まれるが，上層は少量であり，焼却後は自然堆積と思われる。

**出土遺物**　図示できた遺物は10点であるが，堆積土中から出土した遺物は少量で，散在的な出土である。1・2は千葉産の須恵器杯，3・4はロクロ土師器杯，5は武蔵型の土師器台付甕，6は在地の土師器甕，




第101図　SI－057




第102図　SI－058

7は千葉産の須恵器甑である。8・9は鉄製品で，8は刀子である。9は釘と思われる。10は石製品で，紡錘車である。

4は体部の小片である。外面に墨書があるが，遺存が少なく，判読できない。3は完形品で，破損もない。5は底部から台部にかけての小破片である。胴部の器壁が薄く，焼成も良好である。6は口縁部・胴部上位の1/3を欠くが，比較的遺存のよい土器である。器高のわりに口径が大きく，やや鉢的な器形である。底部内面に煤が付着しており，被熱時点では，より破損が少なかったとみることができる。7は欠損も多

いが，口縁部から底部まで遺存する。把手は対向する位置に２箇所遺存している。４箇所存在するかどうかは，欠損部のために不明である。１箇所の接着部は方形であるが，もう１箇所はやや崩れている。また上部はともに尖っている。整った形態と，崩れた形態の中間的な様相である。

８は刃部に欠損がなく遺存する。茎は刃部寄りの遺存で，茎尻側を欠損する。背関は直角であるが，刃関は鈍角で茎に移行する。柄の木質が一部分遺存する。刃部も所々に繊維質が付着している。９は棒状品である。頭部側を欠損するため，やや不明瞭であるが，釘の可能性が高いと思われる。先端から胴部の途中までの破片であろう。10の石材は滑石である。角の部分にわずかな欠損があるだけで，ほぼ完形である。上面に３文字の線刻がある。上の文字は「丁」と思われる。中央の文字は，上が「四」，下が「止」で，「岡」の意味である。下の文字は偏が「目」，旁が「車」である。現在の似た文字として「暉」がある。また上下面とも多条の線刻がある。不整な線刻であるが，五芒星を意図したものと思われる。さらに側面にも「中」に似た形の線刻がある。

３は中心と南東隅の中間の床面から倒位で出土した。10は北東隅部の床面から出土した。３は竪穴住居廃棄の祭祀に伴って，その場所に置かれたものと思われる。また10は上方から転落した可能性もあるが，線刻をもつことから，転落・設置に関わらず，意図的に遺棄されたものと思われる。８は中央右側の下層から出土し，祭祀的様相をもつかもしれないが，断定しがたい。その他の遺物については，床面から出土するものもあるが，小片や破片の一部であり，層位も中・上層主体である。周囲から廃棄されたか，流入したものと思われる。なおカマドは様相不明であるが，廃棄の祭祀が行われた可能性が考えられる。

**重複遺構**　北西側が撹乱により，破壊されている。撹乱については近・現代の土坑と思われ，特に遺構番号を付与していない。また東壁北側上部も，撹乱によりやや損なっている。

**SI－059**（第103図，図版37）

**位置**　調査区東部中央やや東寄りの26K－42グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.1m，幅が4.1mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

**床面**　ほぼ平坦で，左右の壁際を除いて硬化している。硬化は中央がやや強い。

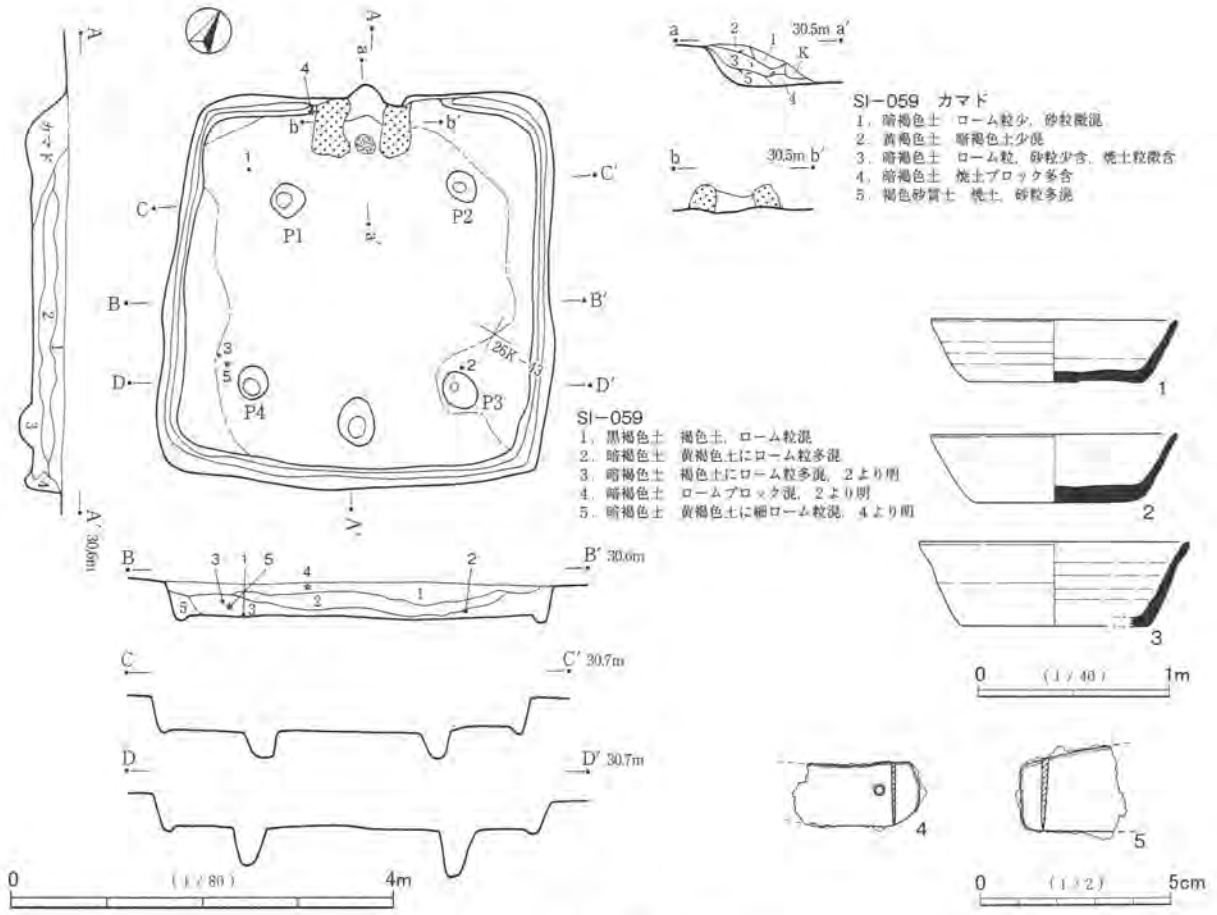
**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。また出入口ピットが南東壁際中央で検出された。径は49cm×41cm，深さは12cmである。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北西壁中央に位置する。両袖の遺存は良好である。構築材は山砂が主体である。壁側の基部は地山を掘り残しており，住居構築の際の計画性がうかがえる。両袖内壁と火床部底面の赤色化が強い。火床部はあまり大きな掘り込みがされていない。煙道部の立ち上がりは急な傾斜である。壁溝は両袖の外脇で立ち上がっており，カマド下を廻っていない。カマド内堆積土は下層に焼土を多く含む。

**堆積土**　上層は黒褐色土，中・下層は暗褐色土である。中・下層はローム粒の含有が多いが，レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　少量で散在的な出土である。図示できた遺物は５点である。１～３は新治窯産の須恵器杯である。いずれも遺存はあまり多くない。４・５は鉄製品である。４は穂摘具，５は鎌である。４は片方の端部側の破片である。略円形の目釘孔がみられるが，孔は一部に直線的な部分がある。目釘は遺存しない。図示した面に木質がわずかにみられる。このことから図示した面は，握り柄（木台部）の付く面と思われる。欠損部は錆に覆われており，破損は古い時期のものである。５は薄い作りと形態から穂摘具の可能性




第103図　SI－059

もあるが，目釘または目釘孔がみられないため，鎌の切先部分と思われる。出土遺物の平面位置・出土層位に祭祀的様相はうかがえない。周囲から廃棄されたか，流入したものと思われる。

SI－060（第104図，図版38）

**位置**　調査区東部東寄りの26K－46グリッドを中心に位置する。東方に谷を臨み，西から東に下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　長さが2.5m，幅が2.5mで，やや丸みのある方形をなす。確認面からの深さは60cmである。

**床面**　平坦で，中央が硬化している。

**柱穴・貯蔵穴等**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は32cm×25cm，深さは23cmである。南西隅部に土坑がある。形態はやや不整な円形で，底面は平坦である。上面径は86cm×79cm，床面からの深さは37cm，底面径は62cm×55cmである。上部にBカマドがあり，Bカマド構築以前に掘り込まれ，埋め戻された土坑と思われる。位置・規模から貯蔵穴の可能性がある。

**壁溝**　ほぼ全周する。南壁際左（西）寄りが判然としないが，Bカマド・土坑に近いためであろう。基本的に全周とみてよいと考える。

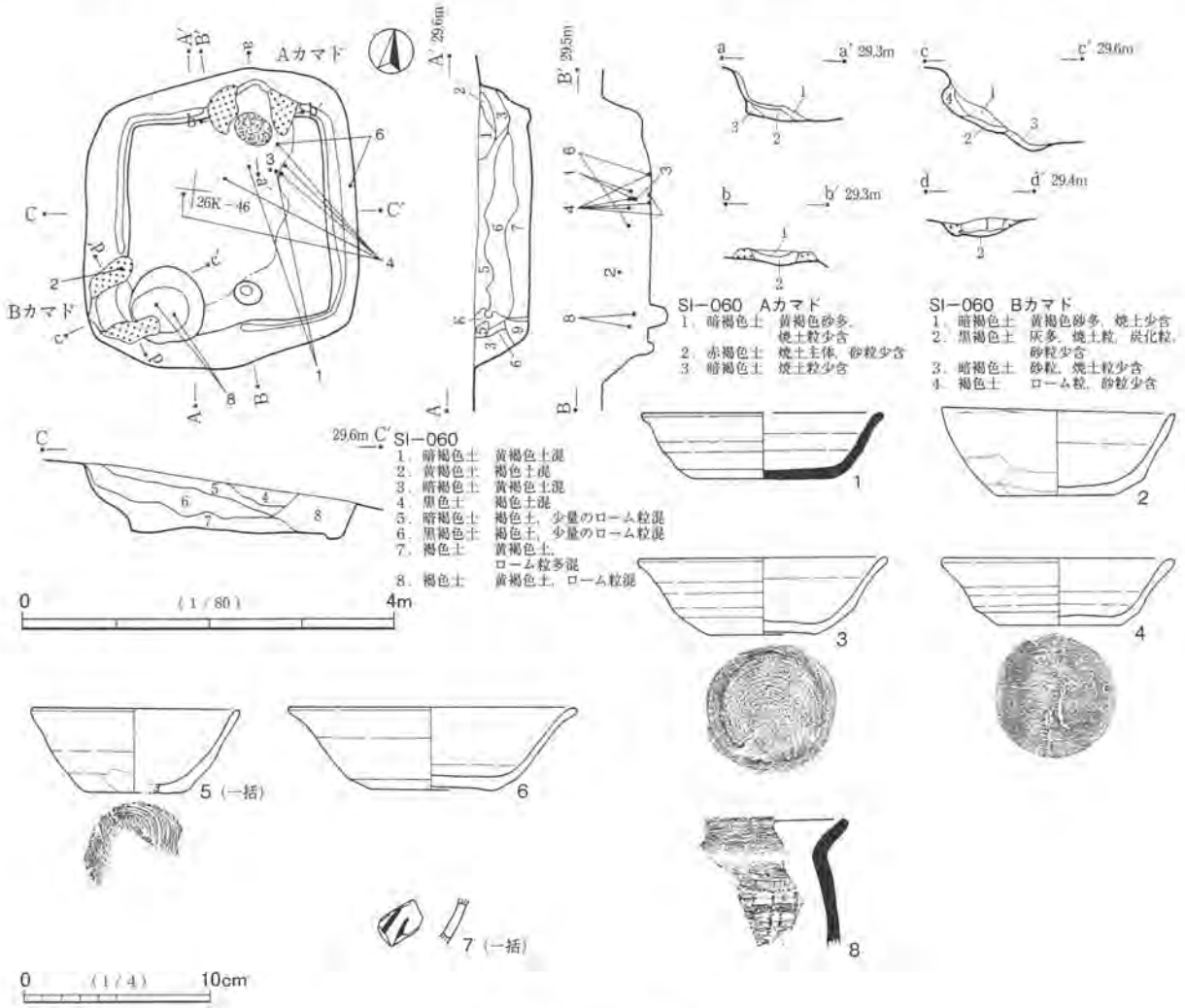
**カマド**　2基のカマドがある（Aカマド・Bカマド）。Aカマドは北壁東（右）寄り，Bカマドは南西隅部に位置する。Aカマドの両袖は下部が遺存するが，上部が欠損している。構築材は山砂が主体である。左袖内壁は赤色化した面が遺存し，火床部底面及び奥壁の立ち上がり部分も赤色化している。カマド内堆積土下層は焼土主体の土層である。

Bカマドの両袖は多くが壁に作られている。前側は床面にかかるが，遺存が悪いと思われる。構築材は山砂が主体であるが，白色粘土と褐色土も含まれている。火床部奥側から煙道部の立ち上がる底面は，被熱により赤色化が著しい。煙道部底面の上部はオーバーハングしている。Bカマド下には，先述した貯蔵穴と思われる土坑がある。この土坑については，当初Bカマド下の掘りかたと考えたが，位置がBカマドよりもやや左（南）にずれること，底面が平坦であること，堆積土に山砂・焼土粒が含まれないこと等により，Bカマド以前の遺構と判断した。

A・Bカマドの前後関係については，遺存に極端な差がみられないことから，判断が難しい。土坑（貯蔵穴）とBカマドの前後関係から，Aカマド・出入口ピット・土坑が一連のセットで古く，Bカマドが新しい，とみるのが比較的素直な解釈といえよう。AカマドとBカマドの同時存在は，複数のカマドをもつ他の竪穴住居のあり方から，あまり考えられない。ただし出入口ピットについては，Bカマド使用時の場合でも，機能していたかもしれない。

**堆積土**　主として上層が暗褐色土，中層が黒褐色土，下層が褐色土である。下層はローム粒を多く含むが，中・上層のローム粒は少量である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　Aカマドの前方に多く，Bカマド前方にも若干量みられる。その他は希薄である。図示できた遺物は8点である。1は千葉産の須恵器杯，2～7はロクロ土師器杯である。8は須恵器甕としたが，




第104図　SI－060

須恵器窯で焼成していない可能性があり，土師器かもしれない。須恵器ならば千葉産である。

7は体部の小片である。外面に墨書があるが，遺存が少なく判読できない。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。2は完形に近い土器である。口縁部がわずかに欠損するが，他はひび程度で割れていない。器面が荒れて，一部に煤が付着している。また一部の器面に黄灰色の変色がみられる等，被熱痕跡が顕著である。4も若干遺存がよいが，やや細かく割れている。他は遺存があまりよくない。8は平行タタキが縦横に施され，格子目状となっている。

2はBカマド右袖上から正位で出土した。土器の状況と合わせてみると，カマド廃棄の祭祀に関わる可能性が考えられる。その他の遺物については，破片の一部が床面から出土するものもあるが，概して中・上層から出土している。祭祀的な様相はうかがえず，周囲から廃棄されたか，流入したものと思われる。

SI－061（第105・106図，図版38）

**位置**　調査区東部中央の26K－21グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.0m，幅が3.0mの不整な方形をなす。確認面からの深さは50cmである。西壁側上部は根が多いため，壁が崩れ，上端が外側に広がっている。同様に南壁・東壁も部分的に崩れている。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。北東隅付近は貼床が施されており，やや軟質である。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は42cm×29cm，深さは10cmである。中央に向かってやや斜めに掘られている。底面は凹凸がある。

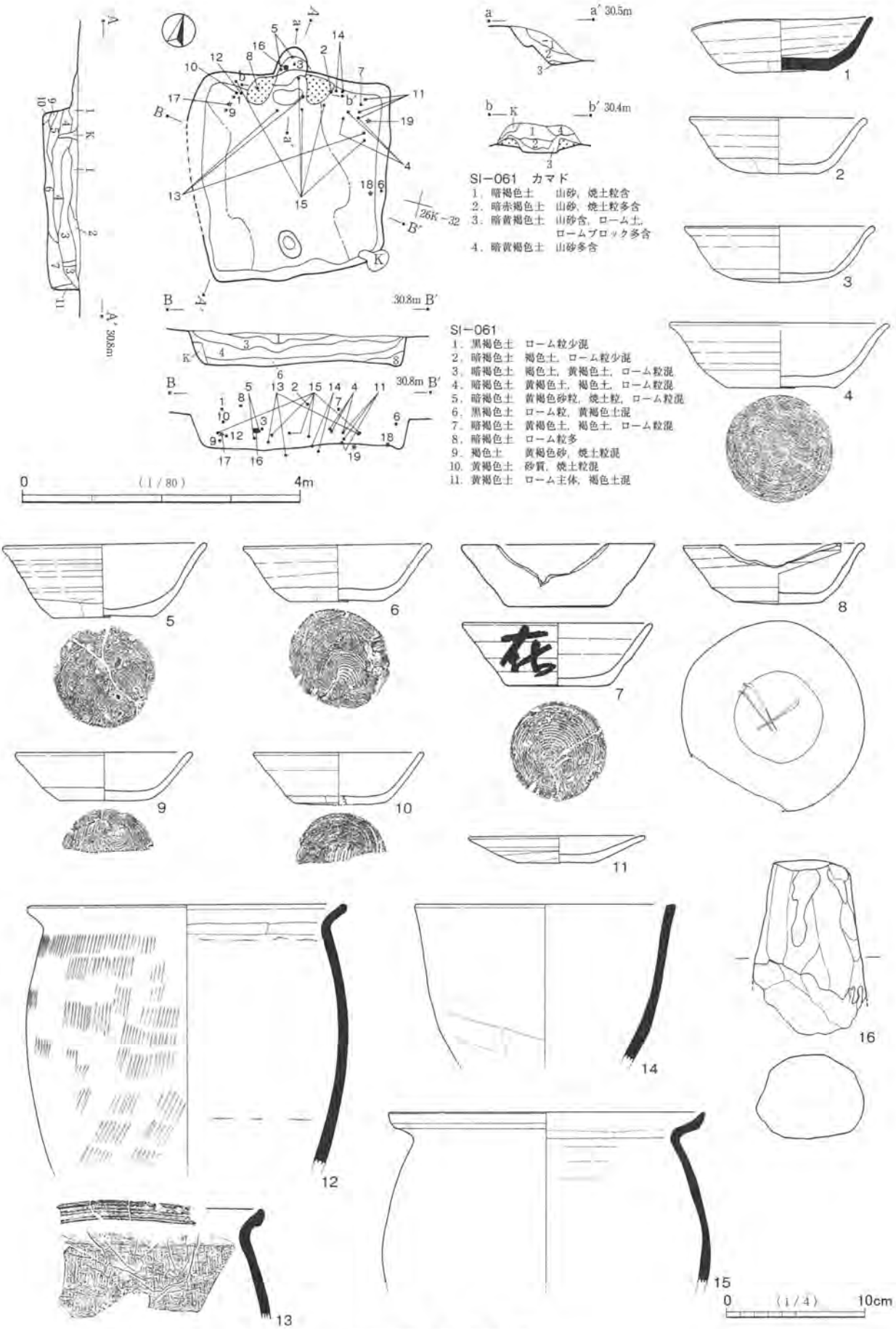
**カマド**　北壁中央に位置する。両袖の遺存は壁側で良好であるが，前側はやや流出していると思われる。構築材は山砂が主体である。両袖内壁はやや赤色化している。火床部底面は床面よりもやや窪んでいる。煙道部の壁面は中位で一段の平坦部を設けて立ち上がる。カマド内堆積土は中層に焼土粒を多く含む。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体で，上層はローム粒の含有が少ない。自然堆積と思われる。

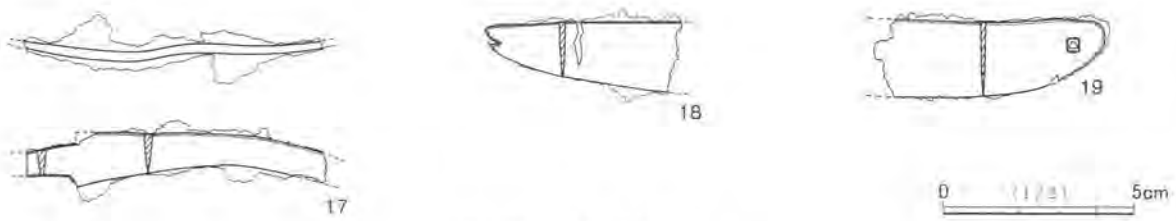
**出土遺物**　カマド内及びカマド左右の北壁側の出土が多いが，中央以南にも若干量みられる。またカマド左脇の壁際他，各壁の壁際での出土も目立つ。図示できた遺物は19点である。1は千葉産の須恵器杯。2～10はロクロ土師器杯，11はロクロ土師器皿，12・13・15は千葉産の須恵器甕である。14は千葉産の須恵器鉢としたが，土師器かもしれない。器形としては須恵器の方が妥当と思われる。16は土製支脚である。17～19は鉄製品で，17は刀子，18・19は穂摘具である。

7は口縁・体部外面に「在」とみられる正位の墨書がある。また8も底部外面に「＋」状のヘラ書きがある。杯皿のうち遺存のよいものとしては，1・6～8がある。それら以外の土器はあまり遺存がよくない。7・8は口縁・体部の一部が欠損する以外は遺存する土器である。8の遺存部分は割れていないが，7は2片に割れて接合する。ただし7は被熱により土器がややもろくなっており，後に割れたことも考えられる。欠損部はともに弧状を呈し，7は墨書に近い位置である。7・8の欠損部は打ち欠きされたものと思われる。1の欠損・接合部分も一箇所は弧状の形態である。また他に口縁部の1/3強が欠損する。この部分がやや不整であるが，1も打ち欠き・打ち割りされた可能性がある。杯皿類における上記以外の欠損・破損については，土器だけでは意図的な状況を認めがたい。

12～15の遺存は一部である。16は上部が遺存するが，下部を欠損する。17は刃部の途中から茎の途中までの破片である。茎尻側の多くと切先側を欠く。波打っており，当初の状態を保っていない。刃関はやや斜めであるが，深く切り込まれている。背関部分は欠損している。18は形態から刀子も考えられるが，薄い作りであり，刃部が若干の弧状と思われることから，穂摘具とした。目釘孔を確認できないが，錆膨れ




第105図　SI−061（1）




第106図　SI－061（2）

が著しいためと思われる。なお目釘孔が本来ないのであれば，穂摘具というよりも穂摘具的な類似の製品とした方がよいかもしれない。19は片側の端部から中央部付近までの破片である。方形の目釘孔があるが，錆のため不整な小円形となっている。目釘は遺存しない。

3・5・16はカマド煙道部底面の中位平坦部から出土した。3は口縁部から底部まで1/2程度の遺存である。5は底部が遺存するが，口縁・体部は1/3程度の遺存である。ともに被熱痕跡が顕著で，やや細かく割れている。またともに若干の山砂が付着しており，支脚に転用されていたものと思われる。しかし出土位置は支脚が使用されていた位置ではないことから，これらの遺物は最終的にカマド廃棄の祭祀に使用されたと考える。

3・5・16以外の出土遺物のうち，単独で床面から出土したものは18・19の鉄製品のみである。土器類は概して中・上層からの出土で，1・7・8も上層からの出土である。堆積土が自然堆積とすると，これらの遺物の出土位置に祭祀的な様相を認めることは難しい。

SI－062（第107図，図版38）

位置　調査区東部中央やや北寄りの25K－19グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.8m，幅が3.8mの方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

床面　平坦で，全体に硬質である。中央の硬化がやや強いが，壁側との差は少ない。

柱穴　北東隅と南西隅に小穴を検出した。南西隅のもの（P4）は非常に深く，木根と思われる。北東隅のもの（P2）についても，他に主柱穴が検出されていないため，主柱穴ではないと思われる。

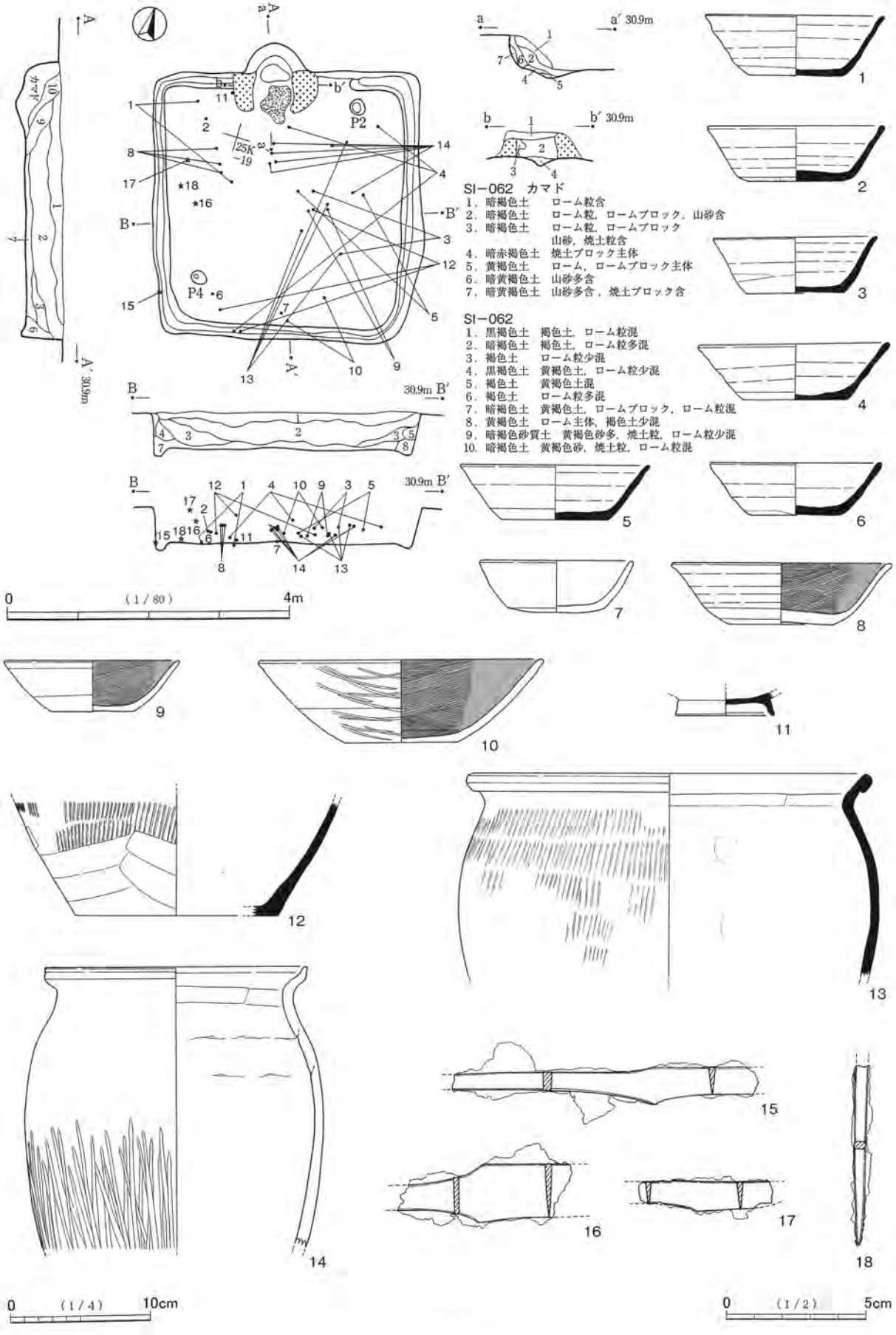
壁溝　ほぼ全周する。カマド右側にみられないが，基本的に全周とみてよいと考える。

カマド　北壁中央やや左寄りに位置する。両袖の遺存は比較的よい。構築材は山砂が主体である。また煙道部壁面の両脇もかなり奥まで山砂が貼られている。内壁の赤色化が両袖から煙道部側まで長く延びている。カマド内堆積土下層には，焼土ブロックを主体とする土層があり（4層），この上面が火床であったと思われる。火床部底面の奥側の立ち上がりも赤色化している。火床部底面は床面よりもかなり窪んでいる。使用によることと，掘りかたのどちらか，または双方とも考えられる。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体である。中層はローム粒を多く含むが，レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。

出土遺物　かなり多く出土した。分布はカマド側から中央に多く，壁際は少ない。図示できた遺物は18点である。1～6は千葉産の須恵器杯，7～10はロクロ土師器杯，11は千葉産の須恵器高台付杯，12・13は千葉産の須恵器甕，14は常総型の土師器甕である。15～18は鉄製品で，15～17は刀子である。18は棒状品である。鉄鏃の茎の可能性が高いと思われるが，やや断定しがたい。

10は大型の杯である。8～10は内面に黒色処理が施されている。10は外面も黒色味が強い。杯のうち，1は比較的遺存がよく，4もややよいが，他はあまりよくない。破損・欠損に意図的な可能性の高いもの


SI−062　カマド
1．暗褐色土　ローム粒含
2．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック，山砂含
3．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック
山砂，焼土粒含
4．暗赤褐色土　焼土ブロック主体
5．黄褐色土　ローム，ロームブロック主体
6．暗黄褐色土　山砂多含
7．暗黄褐色土　山砂多含，焼土ブロック含
SI−062
1．黒褐色土　褐色土，ローム粒混
2．暗褐色土　褐色土，ローム粒多混
3．褐色土　ローム粒少混
4．黒褐色土　黄褐色土，ローム粒少混
5．褐色土　黄褐色土混
6．褐色土　ローム粒多混
7．暗褐色土　黄褐色土，ロームブロック，ローム粒混
8．黄褐色土　ローム主体，褐色土少混
9．暗褐色砂質土　黄褐色砂多，焼土粒，ローム粒少混
10．暗褐色土　黄褐色砂，焼土粒，ローム粒混
P2
P4
30.9m
0　(1/80)　4m
0　(1/4)　10cm
0　(1/2)　5cm

第107図　SI－062

はみられない。12・13は同一個体ではない。

15は切先側と茎尻を欠損する。15の関部は背・刃とも角をなさず，茎から刃部へ屈曲点をもって移行する。ただし背は刃部から茎へ緩やかに幅を減じて，茎の背が直線的となるところでわずかに直角となる部分がある。わずかであるため不明瞭であるが，背関を意図したものの可能性がある。刃部側の欠損部は錆に覆われており，古い欠損である。16・17も関部分周辺の破片である。16はやや大型の刀子である。大きさは異なるが，関の形状は15と似ている。17の背は直線的であるが，わずかに浅い関があると思われる。刃関は錆のためやや不明瞭である。茎から刃部へは緩やかに弧を描いて幅を広げ，屈曲点をもって刃部に移行すると思われる。18は細く，比較的長い棒状の鉄製品である。上部を欠損するが，末端を遺存する。上部に木質が付着している。このことから鉄鏃の茎，釘が考えられるが，細いことから前者の可能性が高いと考える。

1はカマド左側の床面から，やや散って出土した。鉄製品は西壁際から出土した。特に16～18は壁際中央からやや北寄りにまとまっている。出土層位は床面から上層にわたっている。西方に竪穴住居が多く，廃棄されたものと思われるが，本住居の西側で保管されていた可能性も考えられる。図示した遺物の出土層位は中・上層が主体である。7・11は床面出土であるが，遺存が少ない。出土遺物は概して周囲から廃棄されたか，流入したものと思われる。

SI－063（第108図，図版39）

**位置**　調査区東部中央の25K－27グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.4m，幅が4.7mで，やや横長の方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

**床面**　平坦で，中央が硬化している。

**柱穴**　主柱穴が4箇所検出された。また出入口ピットが南東壁際中央で検出された。径は27cm×24cm，深さは33cmである。

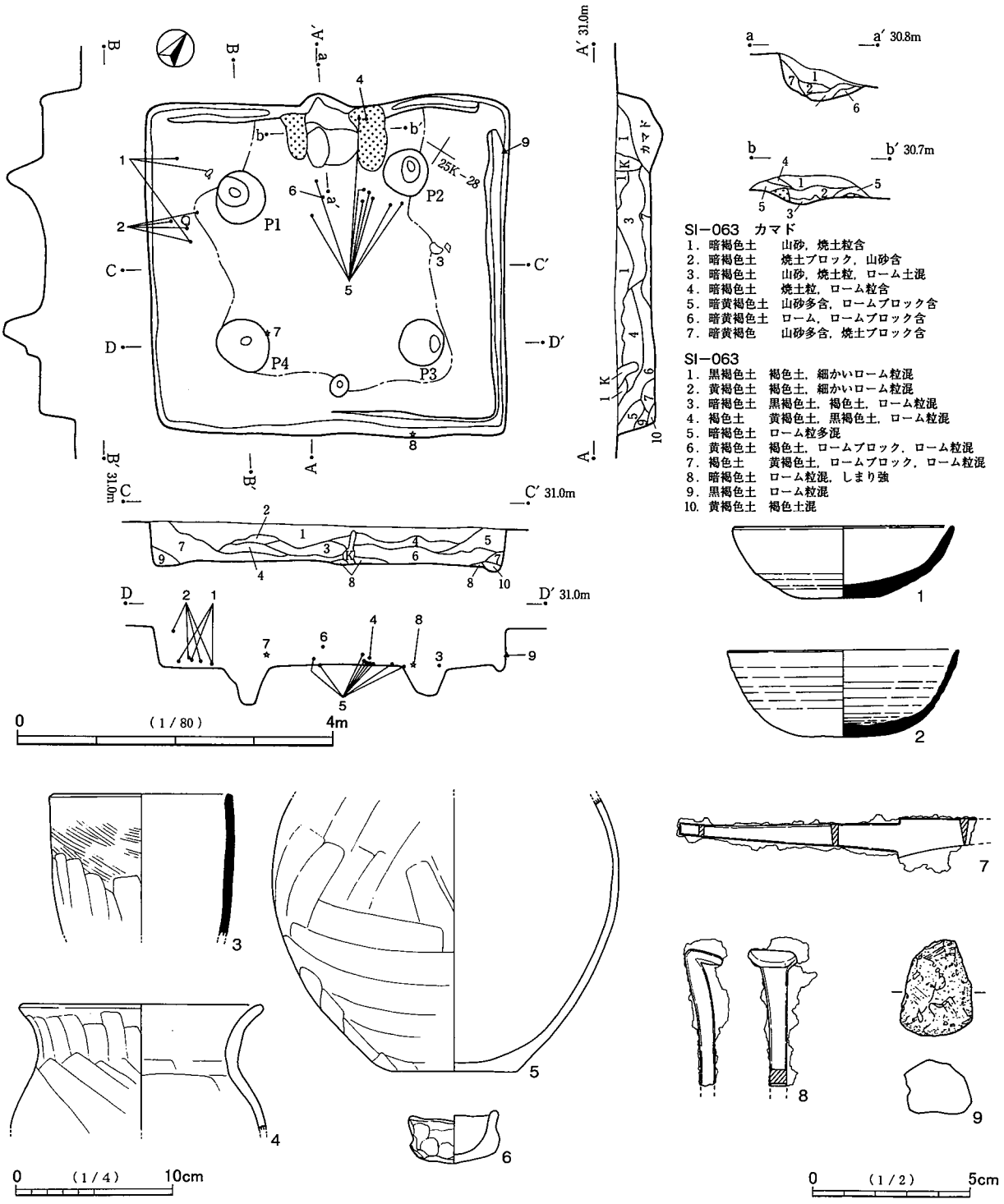
**壁溝**　北東（右）壁，南東（前）壁の東半分及びカマド左右の北西壁の大部分に廻る。南西（左）壁と南東壁の西半分にはみられない。また北（右奥）隅部も途切れている。

**カマド**　北西壁中央に位置する。袖の遺存は悪く，上部が流出している。特に右袖は扁平である。右袖は本来の位置か問題があり，外脇に流出した構築材を袖部と把握しているように思われる。より内側に存在した分は失われたのであろう。火床部分には，赤色化した面がみられない。火床部底面は床面よりもかなり窪んでおり，使用によることと，掘りかたのどちらか，または双方とも考えられる。

**堆積土**　ローム粒・ブロックの占める割合が概して高く，部分的にブロック状に分けられる黒褐色土等も入り込んでいる。人為的に埋められたものと思われる。

**出土遺物**　やや少量で，散在的な出土である。図示できた遺物は8点である。1・2は新治窯産の須恵器杯，3は千葉産の須恵器鉢，4・5は在地の土師器甕，6は手捏土器である。7・8は鉄製品で，7は刀子，8は釘である。9は軽石である。

1は口縁部が小さく欠損するのみで，完形に近い土器である。遺存部分は数片に割れている。2は底部が遺存するが，口縁・体部の遺存は1/4程度である。3は口縁部は全周遺存するが，体部下位から底部を欠く。3は器種を鉢としたが，コップ形土器の大型品としてもよいと思われる。口縁部は全周遺存するが，胴部の多くを欠損する。5は上半部を欠くが，胴部下位から底部にかけて遺存する。6は比較的遺存が良好であるが，底部と口縁部の一部を欠損し，一部がやや細かく割れている。9はやや赤みを帯びる部分があり，

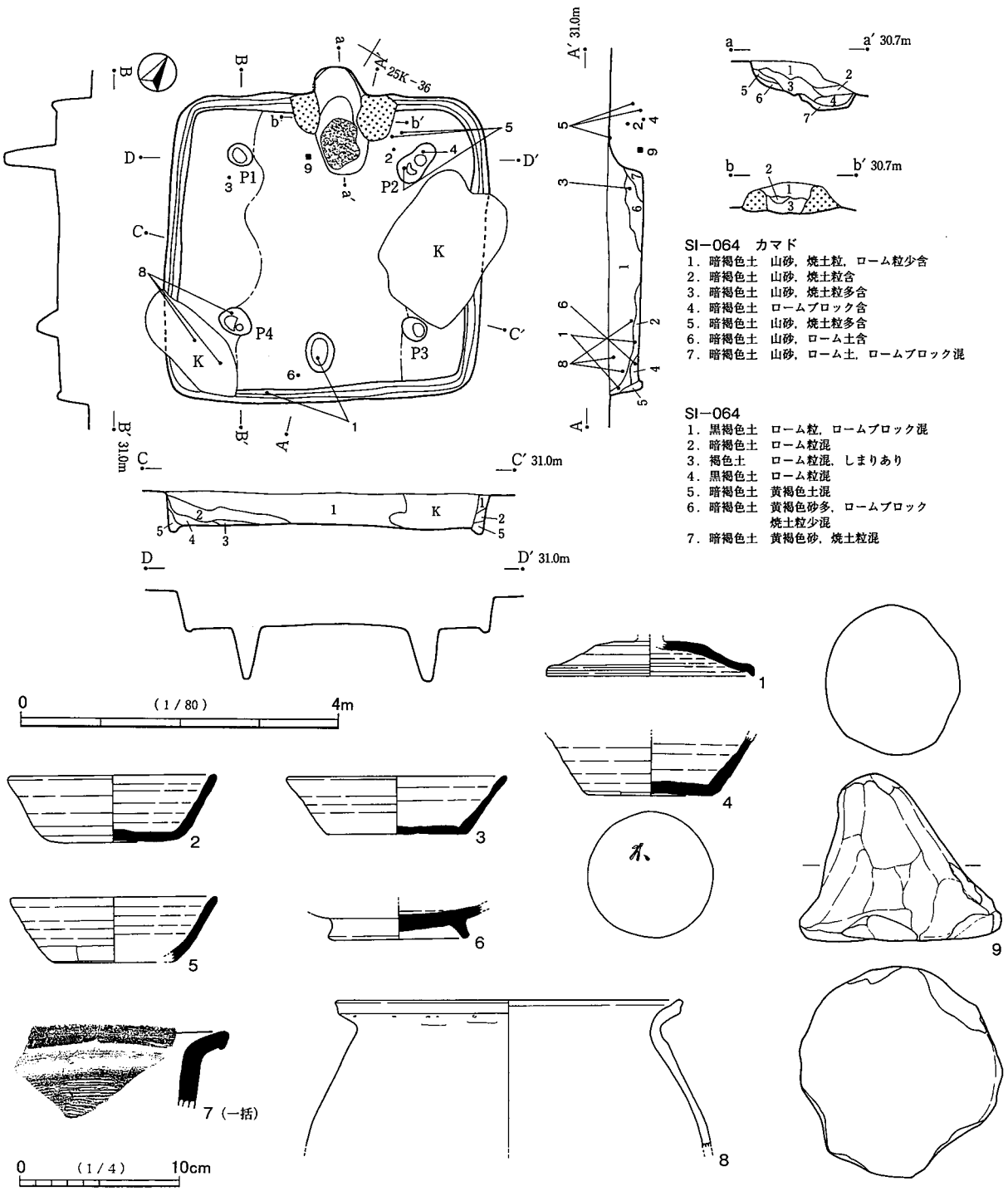



第108図　SI－063

火を受けたと思われる。

7は茎と刃部の根本側が遺存する。背関・刃関とも浅い。背関は直角に，刃関はやや斜めに切り込まれている。8は頭部が「L」字形に折れ曲がる折頭型の角釘である。先端部は遺存しない。

1は左壁側奥寄りの下層・床面から出土した。2もほぼ同様の状況であるが，破片の1点は上層から出土した。4はカマド右袖奥上面から，倒位で出土した。5は4の近く及びカマド前方の床面・下層から，やや散って出土した。6はカマド前方の中層から出土した。3は中央右寄りの床面から出土し，7はP4




第109図　SI－064

脇の下層，８は前壁右寄りの壁溝上，９は右壁際で，北隅近くの下層から出土した。

以上の遺物のうち，４・６はカマド廃棄の祭祀に関わる遺物かもしれない。その際にカマドは意図的に破壊されたことも考えられる。５についても若干の可能性があると思われるが，４・６以上に断定しがたい。他の遺物については祭祀的な様相をもつかどうか判然としない。

SI−064（第109図，図版39）

位置　調査区東部中央やや西寄りの25K－36グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.9m，幅が4.0mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。北東（右）壁側中央と南（左前）隅付近が撹乱を受けて，損なっている。

床面　平坦で，左右の壁側を除いて硬化している。

柱穴　主柱穴が４箇所検出された。P4は他に比べ，かなり浅い。P2・P4の径はやや大きく，底面が二段になっている。柱は抜き取りされたことが考えられる。また出入口ピットが南東壁際中央で検出された。径は50cm×36cm，深さは22cmである。底面は住居中央に向かって低くなる。

壁溝　全周する。

カマド　北西壁中央やや右寄りに位置する。両袖の遺存は比較的よい。構築材は山砂を主体とする。煙道部上部の壁面は赤色化し，左袖内壁のやや赤色化した面が遺存している。カマド内堆積土下層は焼土粒・焼土ブロックを多く含む。火床部底面は床面よりもかなり窪んでおり，規模も大きい。使用によるだけでなく，当初からの掘りかたも大きいと思われる。

堆積土　黒褐色土主体であり，自然堆積と思われる。

出土遺物　カマドの左右と，南（左前）隅側から出入口部にかけてやや多く分布している。その他は少量で散在的な出土である。図示できた遺物は９点である。１は須恵器蓋，２～５は須恵器杯，６は須恵器高台付杯，７は須恵器甕または甑である。２～７は新治窯産である。１も新治窯産と思われるが，東海産の可能性も考えられる。８は常総型の土師器甕，９は土製支脚である。

４は底部外面に「不」とみえるヘラ書きがある。図示した土器に遺存のよいものはない。９は円錐状の形態を呈する。下端面が広いわりに，長さが短いものである。

９はカマド左袖前方の床面から出土した。カマド廃棄の祭祀に伴い，本来の位置からはずされて遺棄された可能性がある。他の遺物には特に祭祀的様相がうかがえず，周囲から廃棄されたか，流入したものと思われる。

SI－065（第110図，図版39）

位置　調査区東部中央西寄りの25K－45グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが2.6m，幅が3.1mで，横長の方形をなす。確認面からの深さは20cmである。

床面　平坦で，中央がやや硬化している。

カマド　北壁中央に位置する。両袖が遺存する。構築材は山砂を主体とする。右袖内壁の一部に赤色化した部分がみられる。火床部には赤色化した面がみられない。火床部底面はやや窪んでいるが，灰のかき出し等，使用に伴うものであろう。

堆積土　ローム粒を含む暗褐色土である。

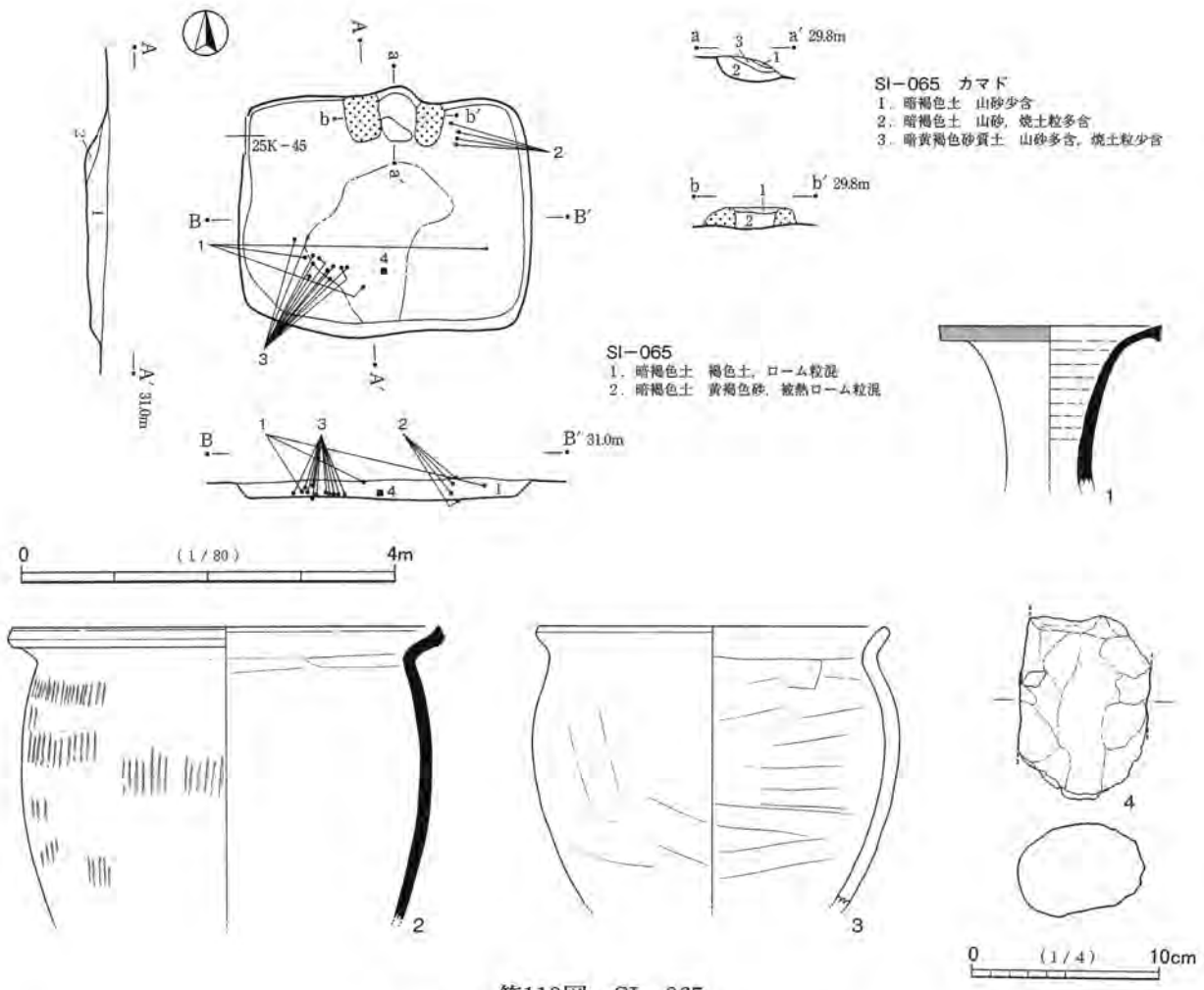
出土遺物　堆積土が薄いため多量ではないが，全体的に出土している。図示できた遺物は４点である。１は須恵器長頸壷で，湖西産と思われる。２は千葉産の須恵器甕，３は在地の土師器甕，４は土製支脚である。１は口頸部の一部破片であり，２も一部の遺存である。２は胴部外面に焼けた山砂が付着している。３は口縁部から胴部中位までは比較的遺存がよい。器壁が厚い土器である。

１は中央やや南側に広く散って，層位も下層から上層にかけて出土した。２はカマド右外側の床面から上層にかけて出土した。３は中央からやや南西側の位置にまとまって，主として床面・下層から出土した。４は中央やや南側の下層から出土した。

SI－067（第111図，図版40）

位置　25K－52グリッド周辺で，調査区中央北東寄りとも東部中央西寄りともいえるところに位置する。

形状・規模　長さが3.4m，幅が3.3mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。




第110図 SI−065

**床面** ほぼ平坦である。中央がやや硬化しているが，壁側との差は顕著でない。

**柱穴** 出入口ピットが南西壁際中央で検出された。径は40cm，深さは14cmである。

**壁溝** 全周する。

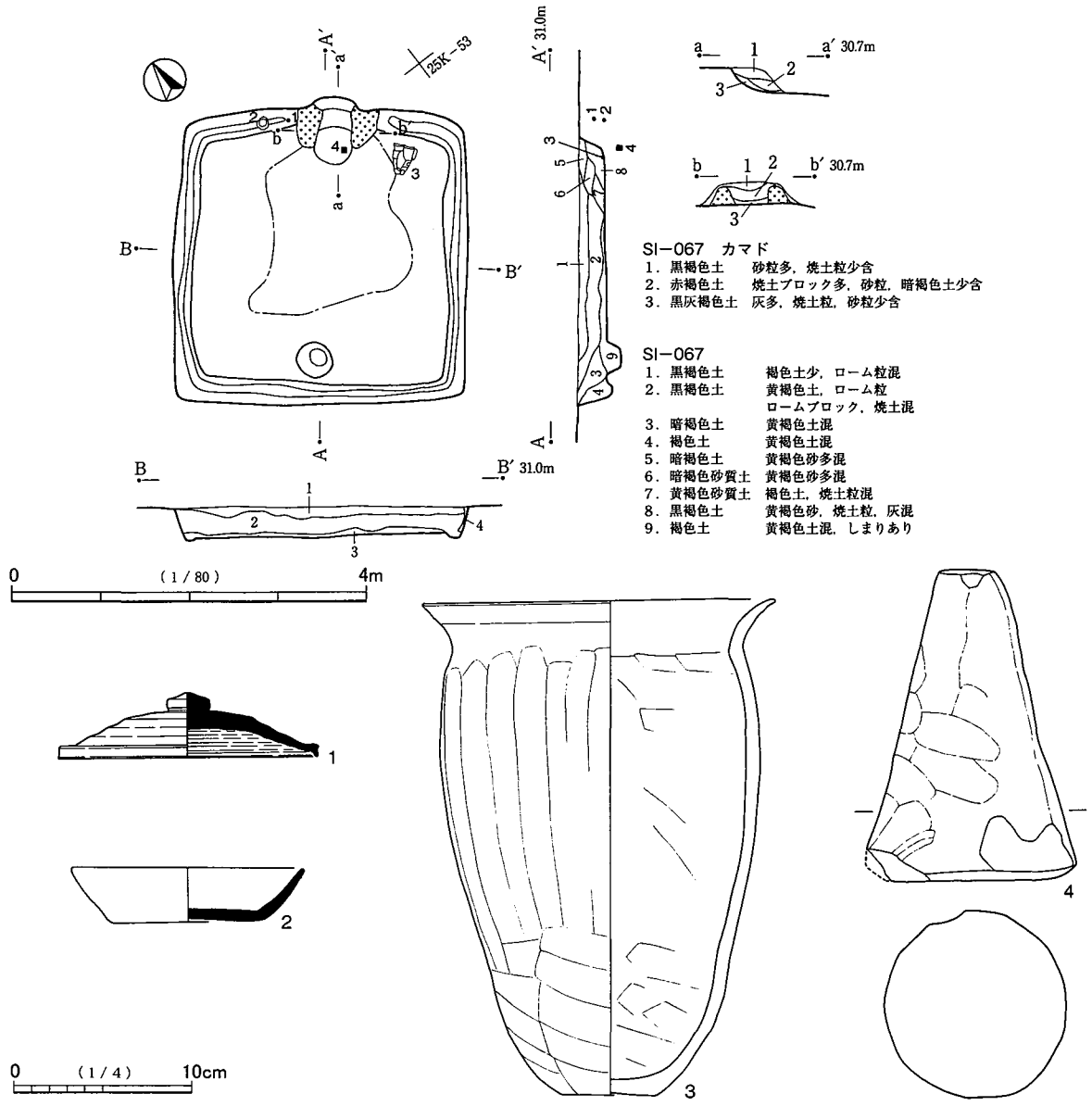
**カマド** 北東壁中央わずかに右寄りに位置する。両袖の遺存は比較的よい。構築材は山砂を主体とする。両袖内壁は強く赤色化している。火床部上の堆積土も焼土ブロックを多く含む。

**堆積土** 黒褐色土主体で，下層・壁際はローム粒・ブロックの含有が多い。自然堆積と思われる。

**出土遺物** 図示できた遺物は4点で，いずれもカマド内・周辺から出土した。それら以外の遺物量はやや少量で散在的な出土である。1は湖西産と思われる須恵器蓋，2は新治窯産の須恵器杯，3は在地の土師器甕，4は土製支脚である。1を除いて，遺存のよい遺物である。

1は40%程度の遺存である。2は口縁部の1/2弱が欠損・破損している。使用・被熱に伴い，器面の荒れが著しい。欠損・破損部は出土状況と合わせてみると，打ち欠き・打ち割りされたものと思われる。3は破損しているが，接合してほぼ完形の土器である。甕としては非常に遺存良好な土器である。胴部外面に焼けた山砂が付着しており，特に上位に多い。4は成形にあたって繊維質を多く混ぜている。

1はカマド左外脇の壁際下層から出土した。2もカマド左外側の壁溝上から正位で出土した。3はカマド右外脇の床面から，口縁部を壁側に向けてつぶれた状態で出土した。4はカマド内やや右側の底面から，上部を煙道部側に向け，横に倒れた状態で出土した。以上の遺物のうち，4は本住居で使用されていたも




第111図　SI−067

のとみてよく，２・３もその可能性が高いと思われる。２・４は意図的に遺棄されたものと思われ，カマド･竪穴住居廃棄の祭祀に関わるものと考える。３は破損したため，単に遺棄されたことも考えられるが，２・４とセットになる可能性もある。他の遺物が少量であることから，後者の可能性が高いと考える。

SI−068（第112図，図版40）

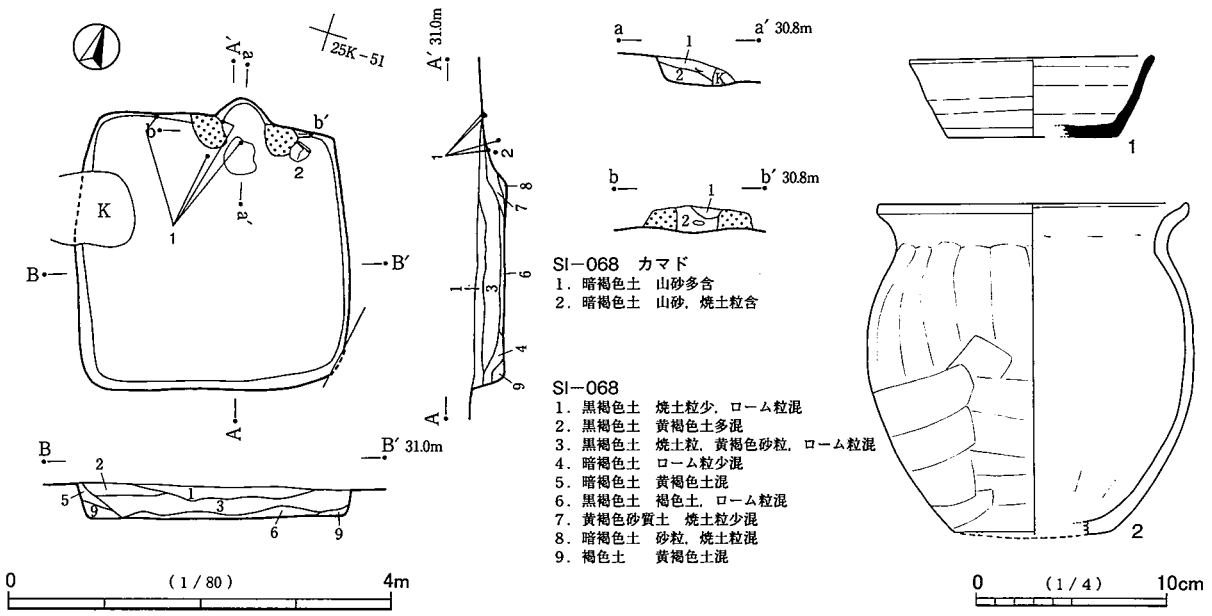
位置　調査区中央北東寄りの25K−50グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.9m，幅が3.9mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

床面　ほぼ平坦である。壁際を除いて，所々硬化している。硬化範囲は広い面にならないが，それは床面がソフトローム中にあるためと思われる。

カマド　北壁右寄りに位置する。カマド両袖は壁側が遺存する。構築材は山砂を主体とし，混じりけが少ない。左袖内壁と上面が赤色化している。火床部には赤色化面がみられない。底面は床面からわずかに窪んでいる。

堆積土　黒褐色土主体であり，自然堆積と思われる。




第112図 SI－068

出土遺物 図示できた遺物は２点で，ともにカマド付近から出土した。それら以外の遺物量は少量で散在的な出土である。１は新治窯産の須恵器杯，２は在地産の土師器甕である。１は内外面に火襷をもつ。口縁部の２箇所が逆三角形状に欠損し，底部中央も欠損する。遺存は全体の3/4程度で，接合個体である。一部細かく，一部大きく割れている。欠損部が意図的なものか，土器だけでは断定しがたい。２は底部の多くを欠損するが，口縁部・胴部の大部分を遺存する甕である。遺存部分はかなり細かく割れている。

１はカマド内中央からカマド左外側にかけてやや散って出土した。層位は中・上層である。２はカマド右袖外脇の下層から，口縁部を壁側に向けて倒れた状態で出土した。２の底部は打ち欠いて抜かれたものと思われる。甑として再利用されたことと，カマド廃棄の祭祀により破壊されたことの二通りが考えられる。１は中・上層からの出土という点で弱いが，平面位置から祭祀に関わる可能性も若干考えられる。

SI－069（第113図，図版40）

位置 調査区東部北側の25J－54グリッドを中心に位置する。

形状・規模 長さが2.7m，幅が2.5mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

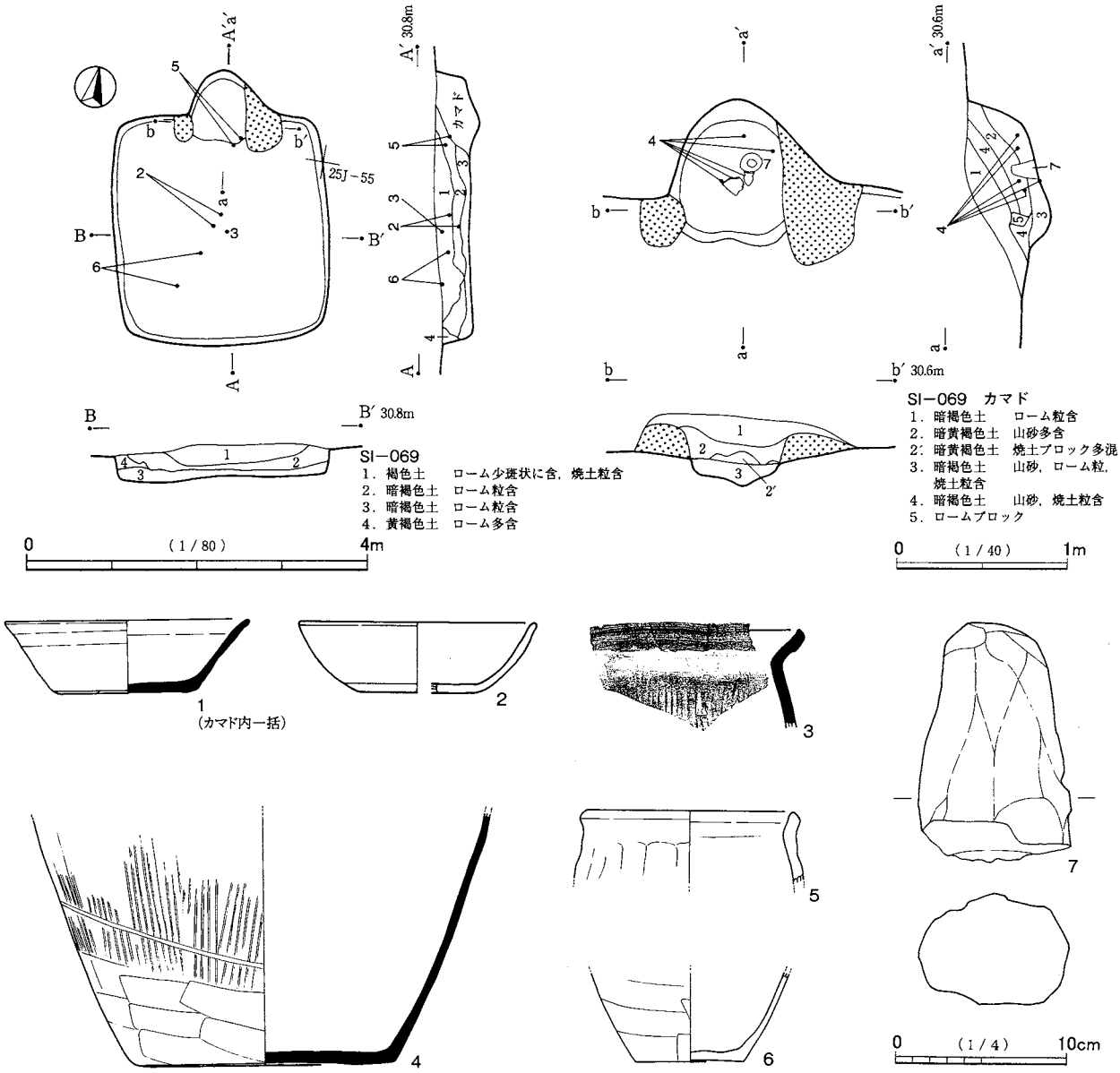
床面 平坦で，壁際を除いて，やや硬化している。

カマド 北壁中央に位置する。遺存はやや不良で，特に左袖は少ない。構築材は山砂を主体とする。火床部奥側で，土製支脚（７）が正立した状態で出土した。使用時の原位置を留めるものであろう。火床部底面は床面よりも窪んでいる。支脚の状態から，使用に伴い深くなったものと思われるが，規模が大きいため，それ以前に掘りかたが広くやや深かったことも考えられる。

堆積土 褐色土・暗褐色土主体である。壁際にロームを多く含む部分もみられるが，基本的に自然堆積と思われる。なお中央から南西にかけて，上層に焼土粒の分布範囲がみられるが，後世のものであろう。

出土遺物 カマド内から中央にかけて少量の出土である。図示できた遺物は７点である。１は千葉産の須恵器杯，２はロクロ土師器杯，３・４は千葉産の須恵器甕，５・６は小型の土師器甕である。

図示した遺物に遺存の良好なものはない。ただし６は底部が遺存し，４も底部の多くを遺存している。４は器壁が薄く，作りがよい。６の底部中央には１条の沈線状の筋がある。ヘラ書きではなく，木葉痕の




第113図　SI－069

遺存またはヘラケズリに伴う砂粒の移動であろう。ただしナデのためにケズリ痕は不明瞭である。強いケズリがあったか不明であり，木葉痕の可能性が高い。１は変色・煤の付着等，被熱痕跡が顕著である。

４はカマド内で７周囲の中･下層から出土した。また１もカマド内から出土したが，破片の接合であり，位置・層位は不明である。２・５・６の出土層位は，主として中・上層である。出土遺物は，７が遺棄された以外には，廃棄されたか流入したものであり，特に祭祀的様相はうかがえない。

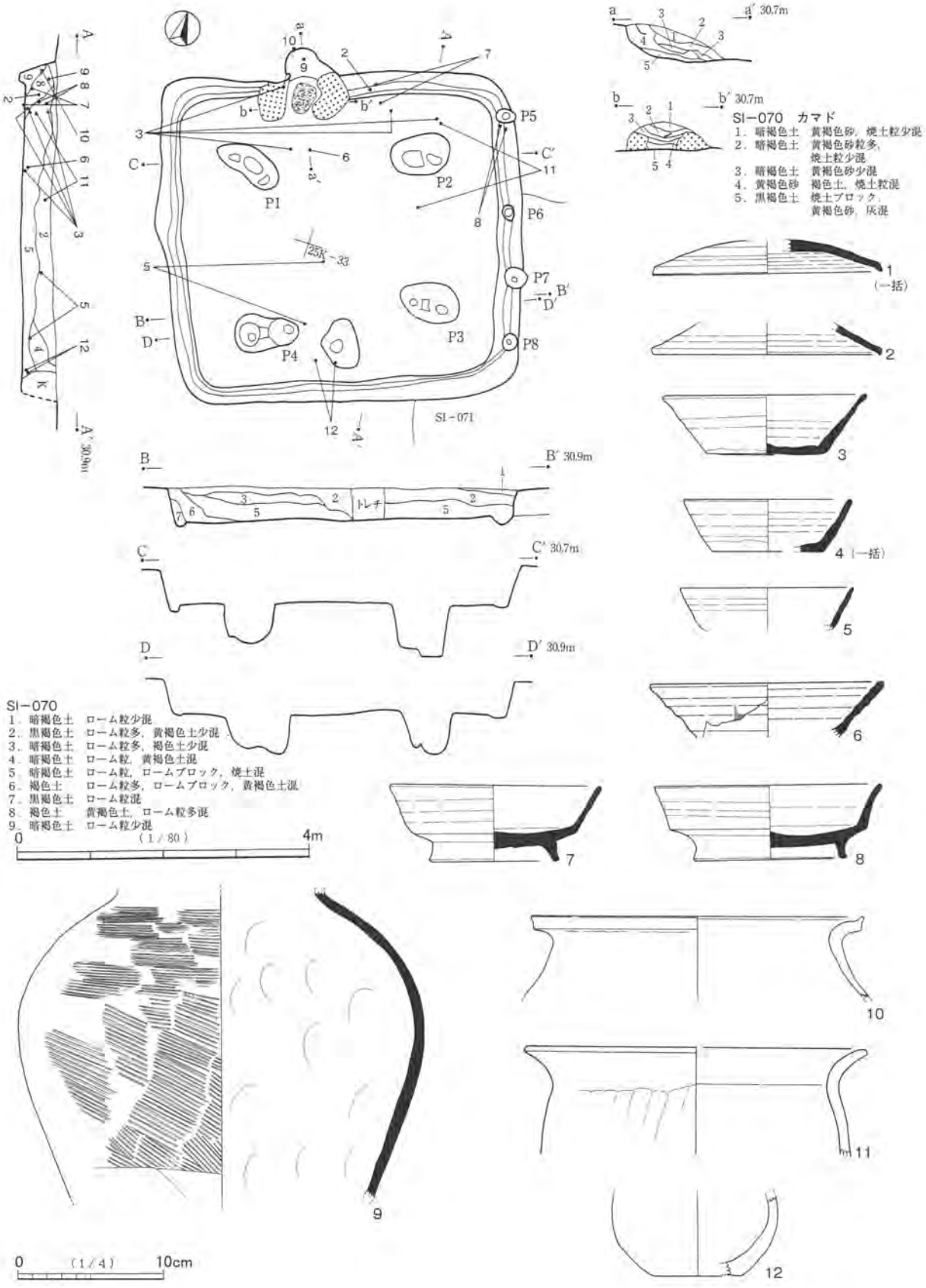
SI−070（第114図，図版41）

**位置**　調査区東部西寄りの25K－23グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.6m，幅が4.9mで，やや横長の方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

**床面**　平坦である。中央が硬化しているが，壁側との差は少ない。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。また出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は67cm×48cm，深さは28cmである。壁柱穴が西辺の壁溝で４箇所検出された（P5～P8）。径は14cm～29cmである。壁溝底面からの深さは，P5が11cm，P6が20cm，P7が29cm，P8が22cmである。壁柱穴間の距離は，P5･P6間が1.45m，


SI－070
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．黒褐色土　ローム粒多，黄褐色土少混
3．暗褐色土　ローム粒多，褐色土少混
4．暗褐色土　ローム粒，黄褐色土混
5．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック，焼土混
6．褐色土　ローム粒多，ロームブロック，黄褐色土混
7．黒褐色土　ローム粒混
8．褐色土　黄褐色土，ローム粒多混
9．暗褐色土　ローム粒少混
0　(1/80)　4m
SI－070　カマド
1．暗褐色土　黄褐色砂，焼土粒少混
2．暗褐色土　黄褐色砂粒多，焼土粒少混
3．暗褐色土　黄褐色砂少混
4．黄褐色砂　褐色土，焼土粒混
5．黒褐色土　焼土ブロック，黄褐色砂，灰混
SI－071
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
トレチ
0　(1/4)　10cm

第114図　SI－070

P6・P7間が93cm，P7・P8間が87cmである。主柱穴の上面・底面の規模はいずれも大きく，底面は高低差がある。建て替えまたは柱の抜き取りが考えられる。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁左寄りに位置する。両袖の構築材は山砂を主体とするが，下部はローム粒を含み，しまりが強い。カマド内堆積土下層は，焼土ブロックと灰を含み，黒みのある土層である。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。ローム粒を比較的多く含むが，レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　多量の遺物が出土した。分布はカマドのある北側に多い。南側はやや少ないが，SI－071と重複する影響も考えられる。図示できた遺物は12点である。１～９は新治窯産の須恵器である。１・２は蓋，３～６は杯，７・８は高台付杯，９は甕である。10～12は土師器甕で，10は常総型，11・12は在地産である。12の底部外面には静止的な糸切り痕がみられる。

６の体部外面には，朱書がみられる。欠損部にかかり，遺存が少ないため判読できない。実測図は小片から復元図化したものである。１・４の外面には火襷がみられる。７・８は遺存のよい土器である。７は口縁・体部の1/3程度を欠く他は遺存する。８は口縁・体部の３箇所を欠損し，欠損部は合わせて口縁部のおよそ1/3である。７・８ともに遺存部は２片が接合している。欠損部が意図的であるか判然としない。３も底部・体部下位の遺存はよいが，口縁部は2/3欠損する。３・７・８以外の遺物は遺存が少ない。９は内面に同心円文の当て具痕がみられる。同心円文はナデによって消され，痕跡が弱まっている。12は器壁の厚い土器である。内面は黒ずんでおり，焼成がややあまい。被熱による外面の剥離が顕著である。

７はカマド右外の北壁際下層から出土した。６はカマド前方の下層から出土した。12は出入口部柱穴付近の下層から出土した。その他の遺物の出土層位は，一部の破片が床面・下層であるが，概して中・上層である。出土遺物のほとんどは周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。６・７・12も祭祀的様相をもつとはいえない出土状況である。

**重複遺構**　南東側でSI－071と重複し，遺構の観察からでは本住居が切られているようにみえる。しかし東壁に壁柱穴をもつ点で，本住居が古いのか疑問がある。出土遺物をみると，12が新しいと思われるが，あまり例をみない器形であり，判然としない。総体的な遺物の様相は本住居の方がSI－071よりも古いと思われる。問題が残るが，遺物の様相をとって本住居が古いとしておきたい。なお本住居の方がSI－071よりも若干深いため，床面は遺存している。また北西側がSD－013に切られるが，SD－013はかなり浅い遺構である。その他南側でSK－046，西側でSK－047に切られるが，ともに小さい遺構のため，本住居の欠損は少ない。

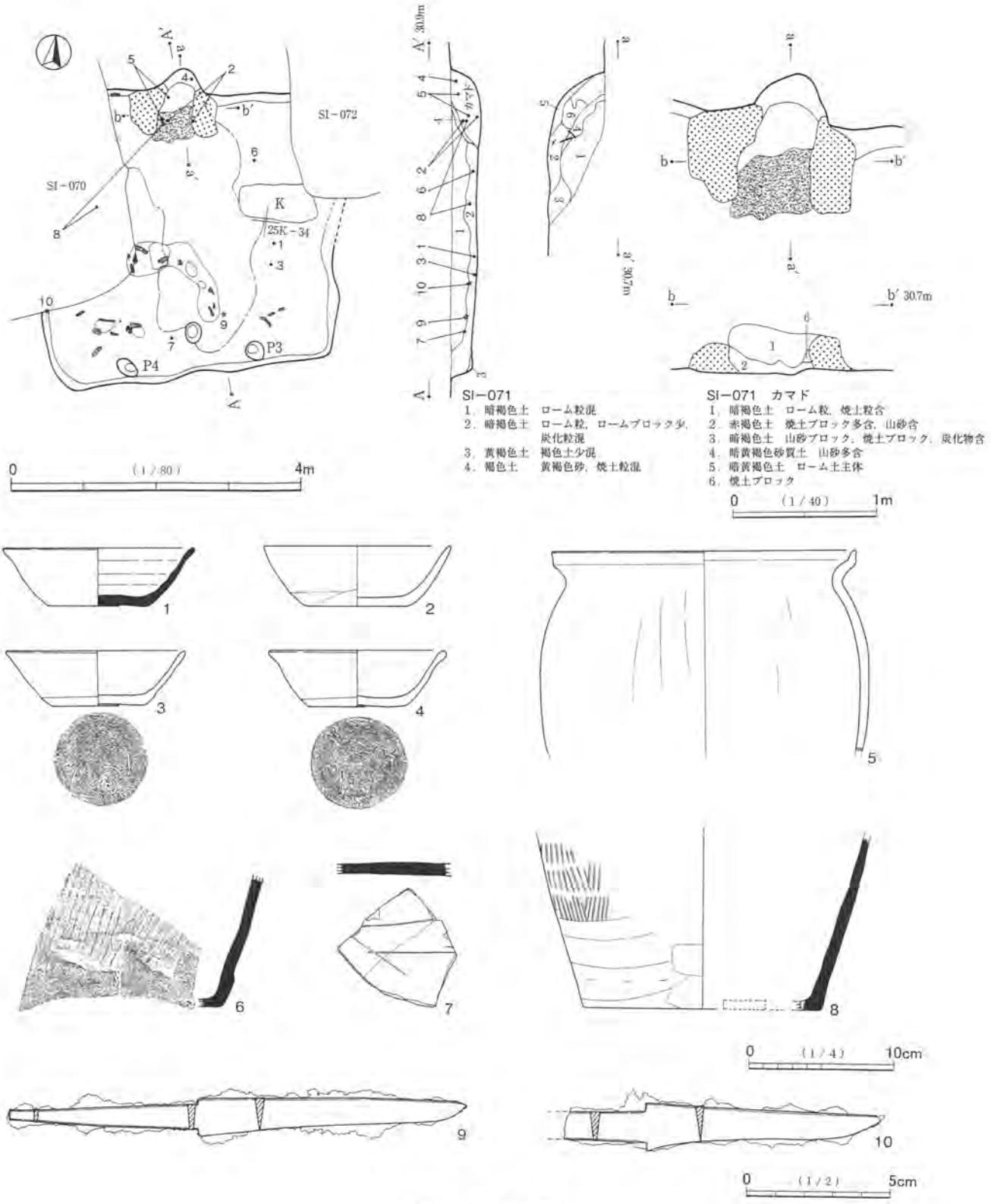
### SI－071（第115図，図版41）

**位置**　調査区東部西寄りの25K－33グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.1m，幅が4.0mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。重複遺構により，北西側をやや大きく，北東側をやや小さく欠損しており，形態がやや不明瞭である。西辺が長く，台形的な形態と思われる。

**床面**　平坦で，中央が硬化している。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は28cm×23cm，深さは20cmである。また２箇所のピット（P3・P4）が南壁壁際で検出された。出入り口部の柱穴を挟んで，左右の対称的な位置にある。深さ




第115図　SI－071

は50cm弱で，双方ともしっかりしたものである。南側の主柱穴と思われる。北側の主柱穴は検出されなかった。重複遺構等の影響と思われるが，検出されてもよいと思われる北東側でみられないことから，竪穴外に存在する可能性も考えられる。

カマド　北壁中央に位置する。両袖の構築材は山砂を主体とする。両袖内壁の中位以下が赤色化して，堅くしまっている。カマド内堆積土下層は，焼土ブロックを多量に含む。火床部は赤色化した範囲がかな

り広くみられる。底面は平坦で，床面からほとんど窪んでいない。

**堆積土**　暗褐色土主体で，ローム粒を含む。下層は少量のロームブロックに加えて，若干の焼土粒・炭化材がみられる。炭化材・焼土は特に中央以南に分布するが，全体的にはあまり多量でなく，一部の廃材・不要物の焼却程度であろう。その後は自然堆積と思われる。

**出土遺物**　カマド内にやや多くみられる。竪穴内は多量ではないが，全体的に分布している。やや南壁際に多い。図示できた遺物は10点である。１・６～８は千葉産の須恵器で，１は杯，６・７は甕，８は甑である。２～４はロクロ土師器杯，５は常総型の土師器甕である。９・10は鉄製品で，刀子である。

４は体部の一部を欠くだけで，遺存のよい土器である。口縁・体部の２箇所が対向する位置で逆台形状・逆三角形状に割れている。また両者をつないで遺存の大きな部分も２片に割れている。カマドから出土しており，この割れ方が意図的とも思われるが，断定するのは難しい。３は口縁・体部の1/2弱を大きく弧状に欠損する。また欠損部に続く口縁部が小さく割れている。その他は割れずに遺存する。被熱により外面は煤の付着や淡褐色に変色する部分があり，底部内面はひび割れしている。欠損部は打ち欠きされた可能性がある。７は底部外面にヘラ書きがある。３条線で，２条は斜めに交差し，１条は交差する１方の線に平行する。もう１条の線と交差すると思われるが，欠損部にかかるため判然としない。底部内面は滑らかであり，磨られたものと思われる。底部片が砥石または硯に転用されたのであろう。

９は完形の刀子である。背関・刃関とも直角に切り込まれている。10は刃部と茎の刃部寄りが遺存する。茎尻側を欠くが，刃部はほぼ遺存する。背関は直角に，刃関はわずかに斜めに切り込まれている。

４はカマド煙道部わずかに右寄りの壁側上層から，やや斜めに傾いた正位で出土した。また２・５及び８の一部もカマドから出土したが，いずれも遺存があまりよくない。８は中央左（西）に散っている。３は中央右前（南東）寄りの床面から出土した。また１は３北側の床面から出土したが，やや遺存が悪い。１・３ともに正位・倒位等の状況は不明である。６は下層であるが，遺存が少ない。７・９・10は床面からやや高い位置での出土である。

以上の遺物のうち，３・４は竪穴住居・カマド廃棄の祭祀に関わる可能性が考えられるが，積極的に断定しがたい。その他の遺物には特に祭祀的様相がうかがえず，廃棄されたか，流入したものと思われる。

**重複遺構**　北西側でSI－070，北東側でSI－072と重複する。SI－070との新旧関係は先述したように問題があるが，遺物の様相から本住居の方が新しいとしておく。SI－072との関係は，本住居の方が新しい。また中央東側が若干の撹乱を受けている。

### SI－072（第116図，図版41）

**位置**　調査区東部西寄りの25K－24グリッドを中心に位置する。

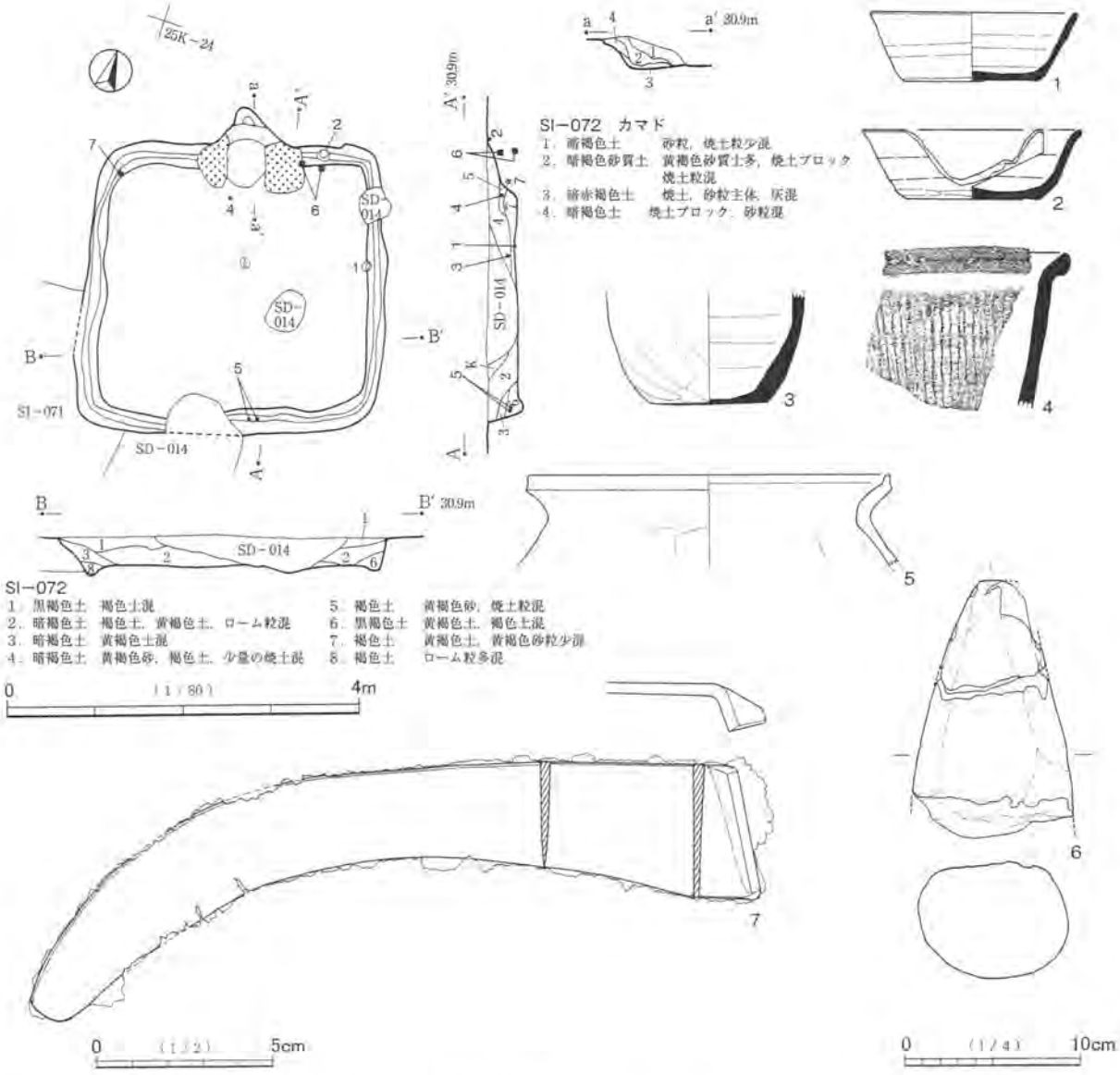
**形状・規模**　長さが3.3m，幅が3.4mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

**床面**　ほぼ平坦である。ハードローム層まで達していないため，全体に軟質であるが，中央がやや硬化している。

**壁溝**　全周する。幅がほぼ一定である。

**カマド**　北壁やや右（東）寄りに位置する。両袖の構築材は山砂を主体とする。左袖内壁が赤色化している。火床部から煙道部壁面への立ち上がりは傾斜が急であるが，上部で傾斜がやや緩やかになる。カマド内堆積土下層は，焼土及び赤色化した山砂が主体で，灰が混じる土層である。

**堆積土**　一部でやや細かく分かれるが，主体は黒褐色土・暗褐色土である。自然堆積と思われる。




第116図　SI－072

**出土遺物**　カマド前方や外脇からの出土が多い。図示できた遺物は７点である。１・２は千葉産の須恵器杯である。３も千葉産の須恵器と思われる。器種は小型の甕としたが，鉢またはコップ形土器に相当するものかもしれない。４は千葉産の須恵器甕または甑，５は常総型の土師器甕，６は土製支脚である。７は鉄製品で，鎌である。

１は完形の杯で，まったく破損のない土器である。被熱により，器面が荒れ，外面の一部が赤色化し，また煤が付着している。２も口縁・体部の一部が欠損・破損するが，その他は割れのない遺存良好な土器である。欠損・破損部の形状はやや丸みをもつ逆三角形で，その半分が接合，残りは欠損のままである。その部分は打ち欠き・打ち割りされたものと思われる。３は胴部下位から底部が遺存するが，上部は欠損する。底部外面は中型・大型品と同様の同心円状の繊維または砂目痕がみられる。被熱により外面がやや褐色化している。

７は大型の鎌である。ほぼ完形であるが，錆が進み，非常にもろくなっている。基部の折り返しはやや斜めに立ち上がる。

１は東壁際中央の床面から斜めに傾いた正位で出土した。２はカマド右外脇北壁際上層から倒位で出土

した。6はカマド右袖外脇の上・下層から出土した。3は中央ややカマド寄りの下層から，斜めの正位で出土した。7は北西隅の壁際から，刃部を上にして壁に立てかけたような状態で出土した。

1は上部から転落した様相と思われる。2は周囲から廃棄されたと理解する他，竪穴外に置かれた本住居の土器が，ほぼ確認面まで堆積した時点で，竪穴内にずれて入り込んだ可能性も考えられる。また7については，本住居で使用されていた遺物の可能性が高いと思われる。

1・2・6は遺物の状態から，竪穴住居・カマド廃棄の祭祀に関わる可能性があるが，土器の出土状況が斜めであることや上層等の出土であることから，断定しがたい。周囲からの廃棄の他，本住居で使用された遺物であるならば，竪穴外の空間や上部からの転落・流入が考えられる。なおその場合，元の場所にあった段階で，何らかの祭祀的様相をもっていたかもしれない。3についても祭祀的様相をもつ遺物かもしれないが，1・2以上に断定しがたい。

**重複遺構**　南西側でSI－071と重複する。出土遺物の様相から本住居の方が古いと考える。ただし本住居の床面・壁溝はほぼ遺存している。また北東から南西にかけて延びるSD－014と重複し，本住居が切られている。SD－014は底面に等間隔にピットが掘られており，本住居の床面を一部破壊している。

**SI－073**（第117・118図，図版42）

**位置**　調査区東部北西寄りの25K－13グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.1m，幅が4.2mの方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

**床面**　SI－074と重複する北東側は貼床が施されているが，この部分を掘りすぎている。本来はほぼ平坦であろう。中央部を主体として硬化面がみられる。

**柱穴**　主柱穴が4箇所検出された。P1・P2は深くしっかりと掘り込まれ，P3・P4はやや浅い。また出入口ピットが南東壁際中央で検出された。径は75cm×54cm，深さは34cmである。壁側に向かって斜めに立ち上がる。

**壁溝**　カマド脇を除いて全周する。

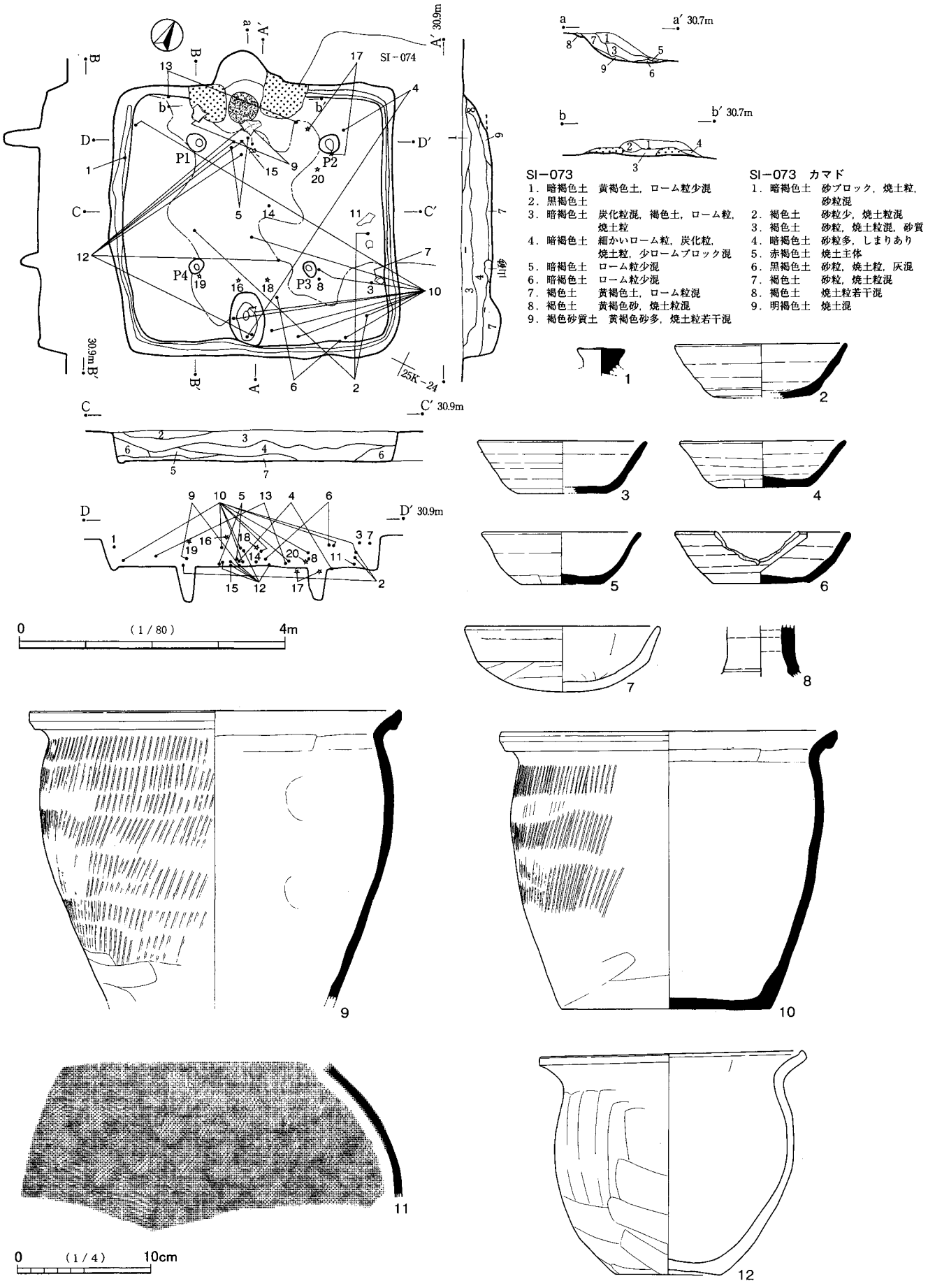
**カマド**　北西壁わずかに左寄りに位置する。両袖は下部が遺存するが，上部の遺存が悪い。構築材は山砂を主体とする。両袖内壁が赤色化し，特に左袖は著しい。煙道部壁面もやや赤色化している。

**堆積土**　暗褐色土主体で，自然堆積と思われる。

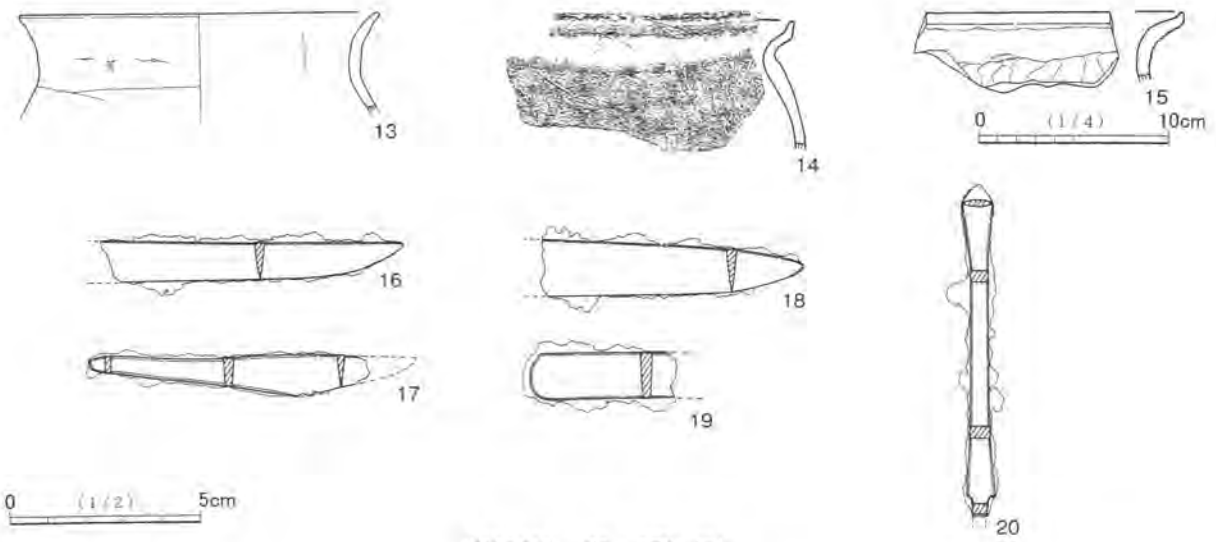
**出土遺物**　多量の遺物が出土した。全体的に分布するが，西壁側がやや少ない。図示できた遺物は20点である。1～6は千葉産の須恵器である。1は蓋，2～6は杯である。7は古墳時代の土師器杯で混入品である。8は須恵器長頸壺，11は須恵器大甕で，ともに東海産と思われる。9・10は千葉産の須恵器甕である。12～15は土師器甕である。12・15は在地の甕で，12はやや小型の土器である。13は武蔵型，14は常総型の甕である。16～20は鉄製品で，16～19は刀子，20は鉄鏃である。

1はつまみ部分である。6は口縁・体部の一部に欠損・破損があるが，遺存のよい土器である。欠損部の形態は逆三角形である。欠損部に続いて1/2弱が破損している。欠損・破損部は打ち欠きされた可能性がある。10は欠損箇所が多いが，口縁部から底部まで連続して遺存する部分がある。11の内面には同心円文の当て具痕がみられる。ナデにより消されて痕跡程度であるが，目の細かいものである。外面の平行タタキも目が細かい。黄灰色の自然釉が付着している。胎土は黒色粒・白色粒がみられるが，精良である。器壁は薄く，焼成は良好である。12は胴部外面に黒斑がみられる。被熱痕跡が顕著である。

16・18は刀子刃部の破片で，ともに切先が遺存する。18の刃部はやや厚みがある。19は茎の破片である。




第117図　SI－073（1）




第118図　SI－073（2）

茎尻が遺存する。厚みがあり，18と同一個体と思われる。17は小型の刀子である。切先側を欠く他は遺存する。関部分は不明瞭であるが，背関はわずかに浅い段差があると思われる。刃関は，茎が次第に幅広となり，屈曲点をもって刃部に移行すると思われる。20は鏃箭式の鉄鏃である。遺存は比較的よく，鏃身の切先から茎の一部まで遺存する。棒状部はやや長さがある。茎との境で若干広がるもので，台形状の篦被である。

図示した遺物の出土層位は床面から上層にわたっている。また２・４・10・12等は広範囲に出土している。出土遺物は基本的に周囲からの廃棄や，流入によるものであろう。遺存のよい遺物の中では，12がカマド前と出入口部分の下層から出土した。

**重複遺構**　北東側でSI－074と重複し，本住居が切っている。

**SI－074**（第119図，図版42）

**位置**　調査区東部北西寄りの25K－13グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.2mである。幅が重複遺構の存在のために不明であるが，長さをやや上回ると思われる。形態は横長の方形をなすものであろう。確認面からの深さは40cmである。

**床面**　凹凸があるが，本来は平坦と思われる。遺存が少ないため，不明瞭である。中央がやや硬化している。

**カマド**　北壁に位置する。やや右寄りに位置する可能性があるが，判然としない。遺存は比較的よい。両袖の構築材は山砂を主体とする。内壁は赤変して硬化した部分がある。煙道部は方形プランからの突出が弱い。

**堆積土**　暗褐色土主体で，下層はローム粒の含有が多い。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　図示できた遺物は５点である。１～３は新治窯産の須恵器である。１は杯，２は高杯または高盤，３は甕または甑である。４・５は土師器甕で，４は武蔵型，５は常総型である。

１は口縁・体部に欠損部がある以外は，割れもなく遺存する土器である。欠損部は口縁部周の1/2弱ある。割れ口は不整であるが，一部階段状に下っている。出土状況と合わせて，打ち欠きとみてよいものである。４は武蔵型の甕としては非常に遺存のよいものである。欠損部は底部中央と口縁部のごく一部である。その他はやや細かく割れているが，ほぼ遺存する。底部中央の欠損部は，一部不整に広がるが，概ね

長径3.5cm，短径2.7cmの楕円形の形態を呈している。また口縁部の欠損は，やや丸みをもつ逆三角形状である。4も出土状況と合わせて，底部の欠損部は穿孔，口縁部は打ち欠きされたものとみられる。

1はカマド内で左袖脇下層から正位で出土した。また4はカマドの左方，北西隅寄りの下層から，口縁を壁ややカマド寄りに向けた横倒れの状態で出土した。1・4は土器の状態・出土状況から，カマド・竪穴住居廃棄の祭祀に関わる遺物と思われる。3・5はカマド周辺から出土しているが，遺存が少ないため，1・4に関わる遺物とはいえない。出入口と思われる南壁際から出土した2も小破片のため，同様である。

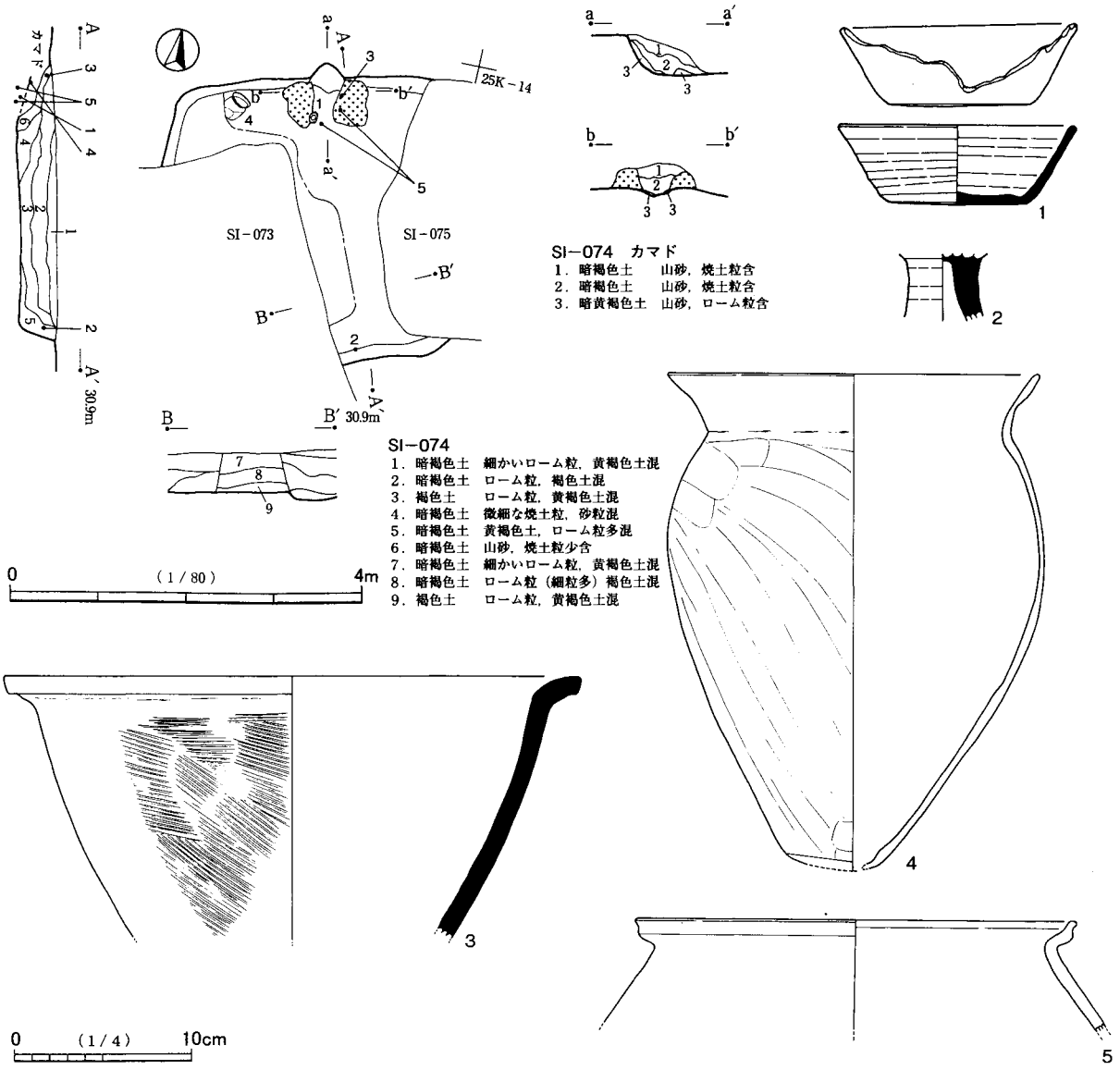
1～5以外の遺物は少量であるが，遺構の遺存状態がよければ，竪穴の規模に見合う量が出土したものと思われる。

**重複遺構**　南西側が大きくSI－073に切られ，東壁側もSI－075にかなり切られている。

## SI－075（第120図，図版42）

**位置**　調査区東部北西寄りの25K－14グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.9m，幅が3.1mで，わずかに横長の方形をなす。また西辺がやや長く，若干台形




第119図　SI－074

的である。確認面からの深さは50cmである。

**床面**　東西の壁側がやや低いが，施された貼床を発掘したためと思われ，本来は平坦であろう。なお土層断面図９層が貼床を構成する土層である。竪穴中央が顕著に硬化している。

**カマド**　北壁中央に位置する。両袖は前側や上部の遺存がやや悪いが，壁側はよい。構築材は山砂を主体とする。両袖内壁は赤色化している。火床部底面からやや上方の左前側に焼土ブロックの集中範囲がある。また煙道部壁面の立ち上がり中央部分にも焼土ブロックの塊がある。火床部底面はわずかに窪む。灰のかき出し等，使用によるものであろう。

**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体である。レンズ状に堆積し，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　カマド内・周辺で多く出土した。南壁側は少ない。図示できた遺物は11点である。１・２・４～８は千葉産の須恵器で，１・２は蓋，４～６は杯，７は高台付杯，８は甕である。３は土師器蓋で，甲斐または駿東方面産と思われる土器である。９・10は常総型の土師器甕，11は土製支脚である。

１は小振りの蓋で，外面に火襷がみられる。２は大振りの蓋である。遺存は一部である。３は比較的遺存がよいが，細かく割れている。精良な土器である。７は口縁端部をわずかに欠損するが，完形に近い土器である。４～６も比較的遺存がよい。４・７は「＋（×）」の線刻がある。４は底部内面，７は体部内面にみられる。５は口縁・体部の1/2弱が欠損する。欠損部は弧状が連続した形状で，打ち欠きされたものと思われる。また欠損部に続いて口縁・体部の1/3が破損して接合している。この破損部も打ち割りされたものかもしれない。なお４・７を含め，他の土器の欠損部等が意図的なものであるか判然としない。７は器面が荒れており，被熱によると思われる。

９の胴部外面は焼けた山砂の付着が著しい。

４は中央ややカマド寄りの下層から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。７はカマド左袖外脇の北壁際下層から正位で出土した。11は北西隅部の床面から上部を下にした倒位の状態で出土した。１はカマド右方の下層から出土した。10は広く散っているが，概ね下層からの出土である。その他の遺物は，上層出土や，破片の一部が中・上層から出土したものである。なお図示できた遺物はないが，カマド煙道部で，土器片が上方から流れ込んだような状態で多数出土した。

以上の遺物のうち，11・７はカマド廃棄の祭祀に関わる可能性が考えられる。他の遺物については判然としないため，周囲から廃棄されたか流入したものとみておく。

**重複遺構**　西壁側でSI－074と重複し，本住居が切っている。

### SI－076（第121図，図版42）

**位置**　調査区東部北西寄りの25K－15グリッドを中心に位置する。

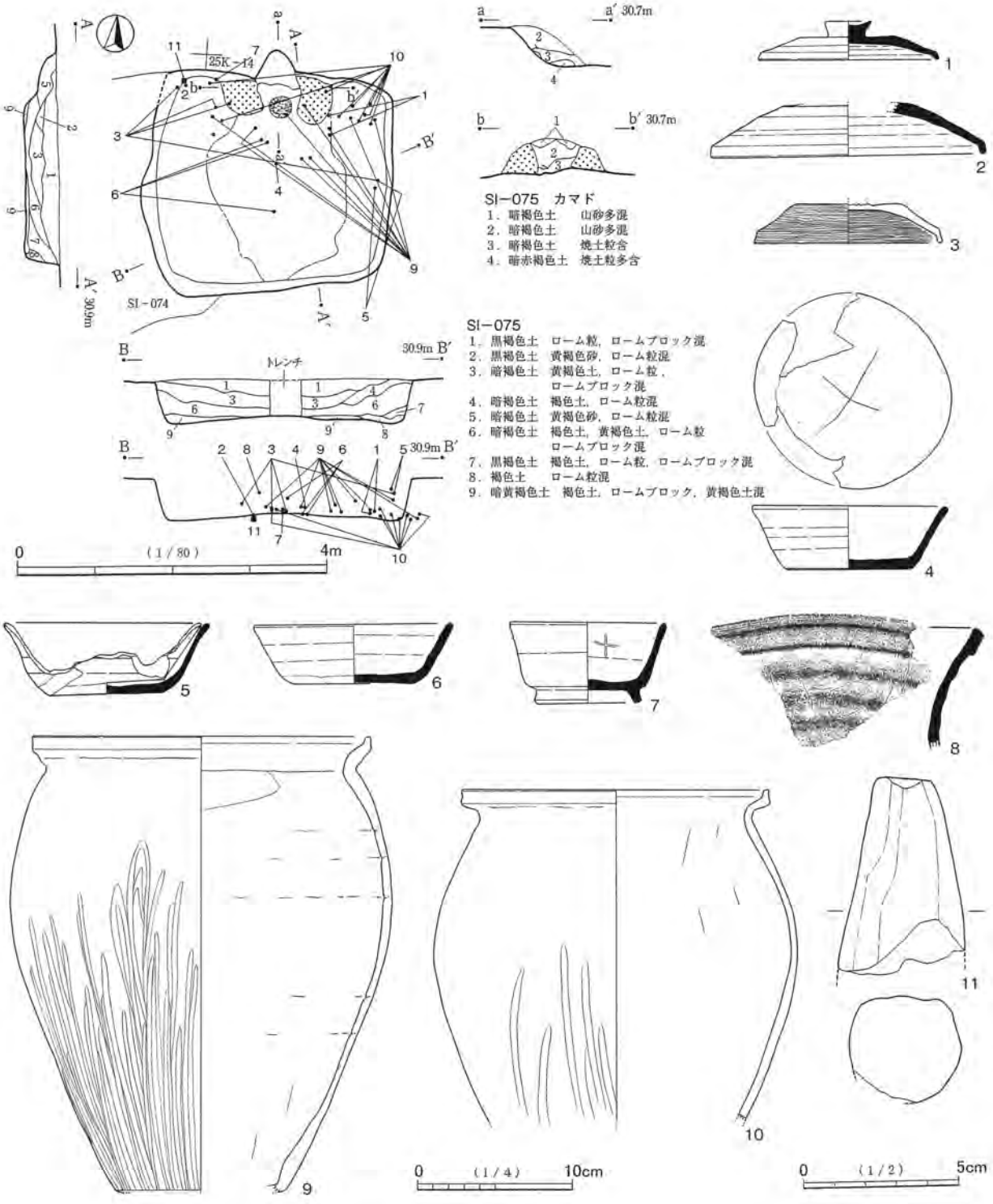
**形状・規模**　長さが3.5m，幅が3.6mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

**床面**　平坦で，右（北）壁側を除いて硬化している。

**柱穴**　出入口ピットが東壁際中央で検出された。径は23cm，深さは18cmである。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　西壁中央に位置する。遺存は比較的よい。両袖の構築材は山砂を主体とするが，暗褐色土が斑状に混入する。両袖内壁は赤色化し，特に左袖上半部が顕著である。火床部底面は平坦で，赤色化した面はみられない。左袖から中央寄り前方の床面に焼土粒が若干散乱している範囲がある。カマド内堆積土中位は多量の焼土ブロックを含む（３層）。




第120図　SI－075

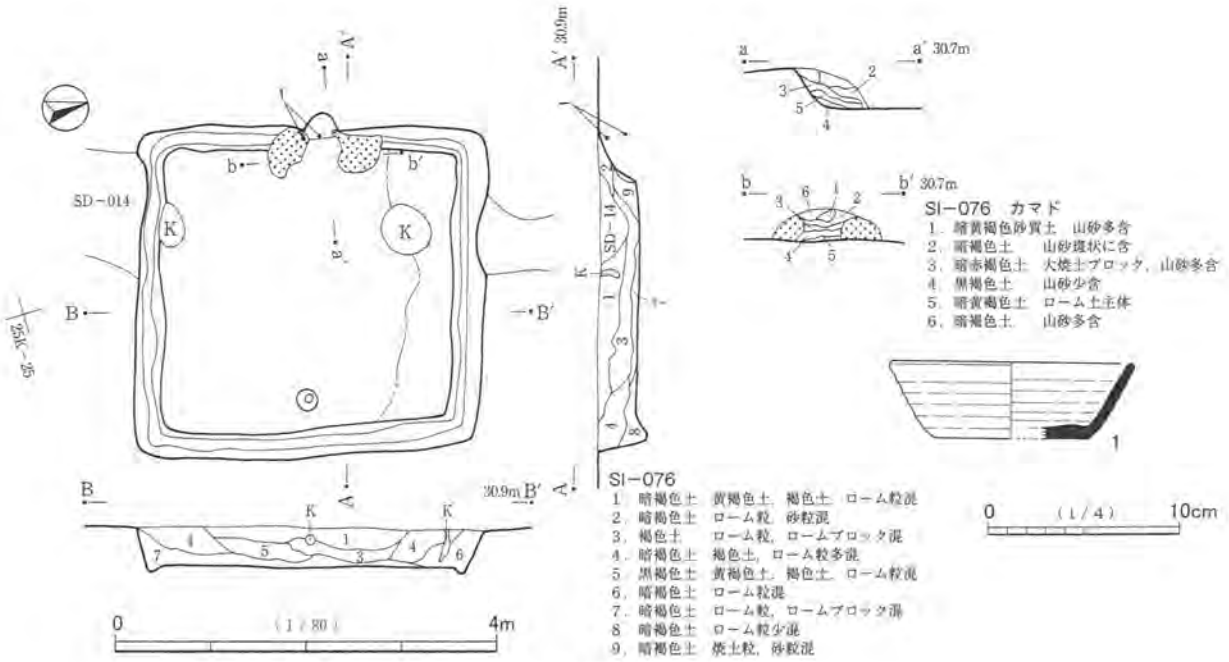
**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。レンズ状に堆積し，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　極めて少量である。図示できた遺物は，新治窯産の須恵器杯１点である（１）。遺存は40%程度で，あまり多くない。カマド内奥側の上・下層から出土した。

**重複遺構**　南北に走行するSD－014によって，西壁側を切られている。

## SI－077（第122図，図版43）

**位置**　調査区東部北西の25K－26グリッドを中心に位置する。




第121図　SI－076

**形状・規模**　長さが4.2m，幅が4.1mの方形をなす。確認面からの深さは60cmである。南辺がやや長く，若干台形的な形態である。東壁南側が撹乱を受けて欠損する。

**床面**　概ね平坦であるが，若干の凹凸がある。左右の壁側を除いて硬化している。

**柱穴**　主柱穴が4箇所検出された。また出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は27cm，深さは11cmである。主柱穴は比較的大きく，概して深い。底面には柱の当たりがみられる。

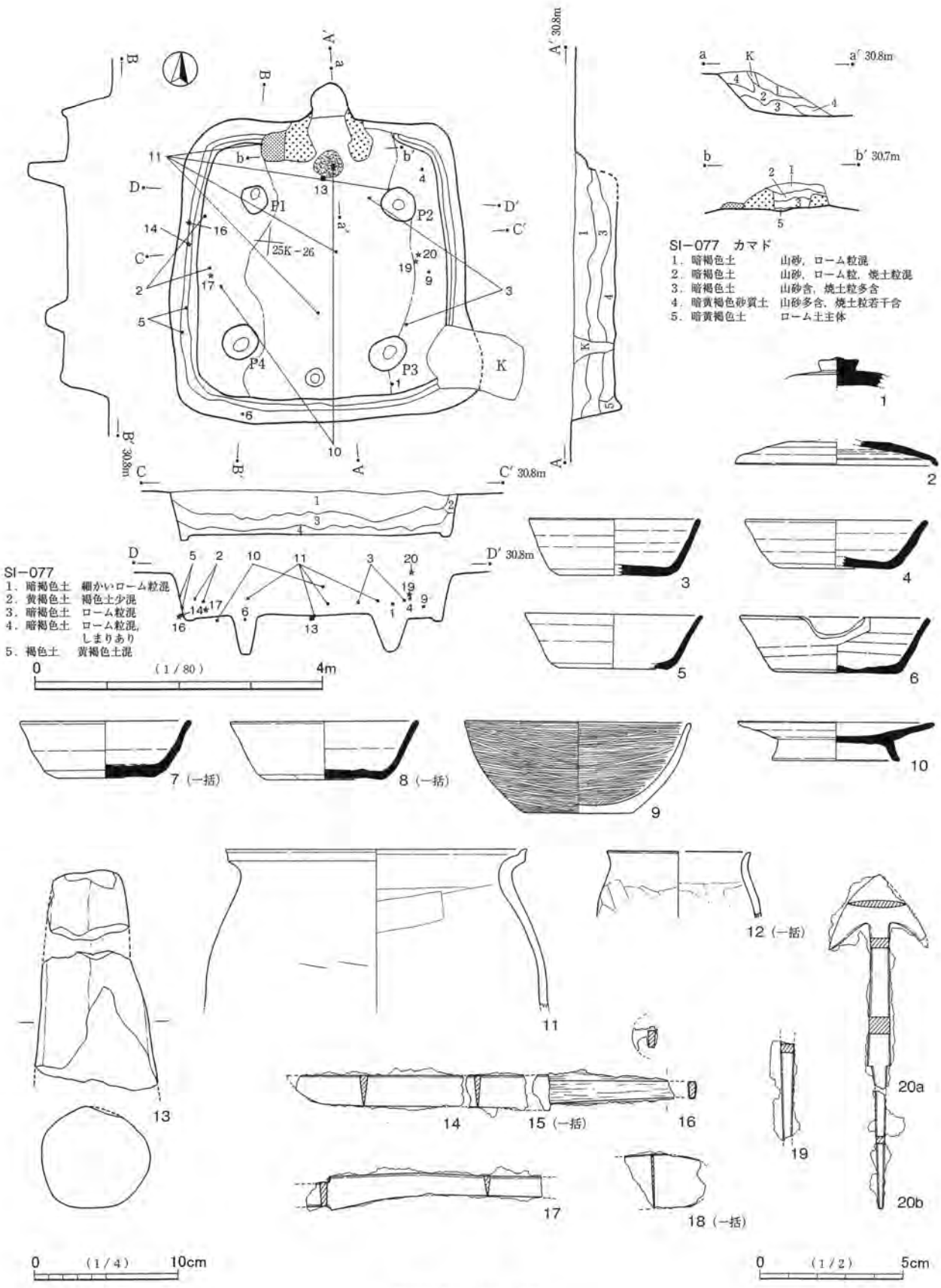
**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央に位置する。構築材は山砂を主体とする。左袖の外脇に若干流れている。両袖内壁は赤色化する。また煙道部上方の壁面も焼けた山砂がみられる。遺存する両袖前側寄りの底面は緩やかに窪み，わずかに赤色化している。この部分は火床部底面の可能性があるが，かなり前側に位置する点が疑問である。両袖の遺存は比較的よいと思われるが，この位置が火床部とすると，前側の遺存が悪く，袖部がかなり長いことになる。何らかの事情によりカマド前寄りの底面も強く火を受けたが，本来の火床部はより奥側に位置すると思われる。あるいは作り替え等によりカマド位置が後退したことも考えられるが，前者の解釈の方が妥当であろう。カマド内堆積土下層は多量の焼土を含む。

**堆積土**　暗褐色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　堆積土が深いわりにやや少量で，そのほとんどが土器の破片である。出土層位も床面から上層にわたっている。北側が南側よりやや多い。図示できた遺物は20点である。1～8・10は須恵器で，1・10は新治窯産，他は千葉産と思われる。1・2は蓋，3～8は杯，10は高台付皿である。9は甲斐または駿東方面産と思われる土師器杯である。11・12は土師器甕で，11は常総型，12は小型品で在地の土器である。13は土製支脚である。14～20は鉄製品である。14～17は刀子であるが，14・15・16は同一個体である。18は穂摘具である。19は棒状品で，用途不明である。20は鉄鏃である。

土器類のうち，6は非常に遺存がよいものである。口縁・体部を小さく弧状に欠損する以外は，割れていない土器である。出土状況と合わせてみると，欠損部は打ち欠きされたものと思われる。9は内外面に




第122図　SI－077

ヘラミガキが施されている。遺存は少ないが，焼成良好で精良な土器である。

14・15・16は切先や茎尻等，部分的に欠損するが，比較的遺存がよい。背関・刃関とも直角に切り込み

が入る。茎は柄の木質が多く遺存する。17は刃部の多くと茎の刃部側の一部を遺存する。切先側を欠く。背関・刃関とも直角に切り込みが入る。刃関は浅く，錆のためやや不明瞭である。刃はかなり研ぎ減りしていると思われる。18は片方の端部側付近の破片である。目釘孔や木質の付着はみられない。19は鉄鏃の茎や釘等の可能性があると考え，縦方向に図示したが，刀子の茎の可能性も考えられる。20は折れているがほぼ完形である。鏃身は広身の三角形式で，逆刺がやや深い。棒状部はやや短く，短頸鏃の範囲内のものであろう。篦被部分の広がりはごく小さいか，ほとんどなく，直線的である。錆のためやや不明瞭であるが，四面関にみえる。

13はカマド火床部の可能性のある部分の前方の床面から倒れた状態で出土した。上部をカマド側，基部側を中央に向けている。6は南（前）壁際西（左）寄りの床面から，壁に立てかけたような状態で出土した。鉄製品の14・16・17は西壁際中央の下層から近い位置関係で出土した。本来的に出土位置に近い場所またはその上方で保管されていた可能性がある。また19・20も対向する東壁側中央で14・16・17と対称的な位置であるが，中・上層からの出土である。6を除く土器類は，一部の破片が床面から出土した以外は，中・上層からの出土である。

以上の遺物のうち，6は廃棄時の早い時点で上方から転落したことも考えられるが，土器の状態・出土状況を考慮すると，意図的に遺棄された遺物とみられる。竪穴住居廃棄等，何らかの祭祀に関わる遺物と考える。また13はカマド廃棄の祭祀に関わる可能性が考えられるが，カマド周辺の良好な遺物が少なく，断定しがたい。その他の遺物には特に祭祀的様相がうかがえず，基本的に周囲からの廃棄または流入に伴うものであろう。

SI－078（第123図，図版43）

**位置**　調査区東部北西の25K－06グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.7m，幅も3.4mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。南（右）辺がやや長く，やや不整な台形的形態である。カマド右側，右奥（南東）隅部が張り出しているが，古墳時代の竪穴住居であるSI－079と重複する影響とみられる。カマド右側の壁をSI－079堆積土中ではなく，地山層に求めたことによるものであろう。また右前側もやや張り出している。

**床面**　平坦で，中央がやや硬化している。

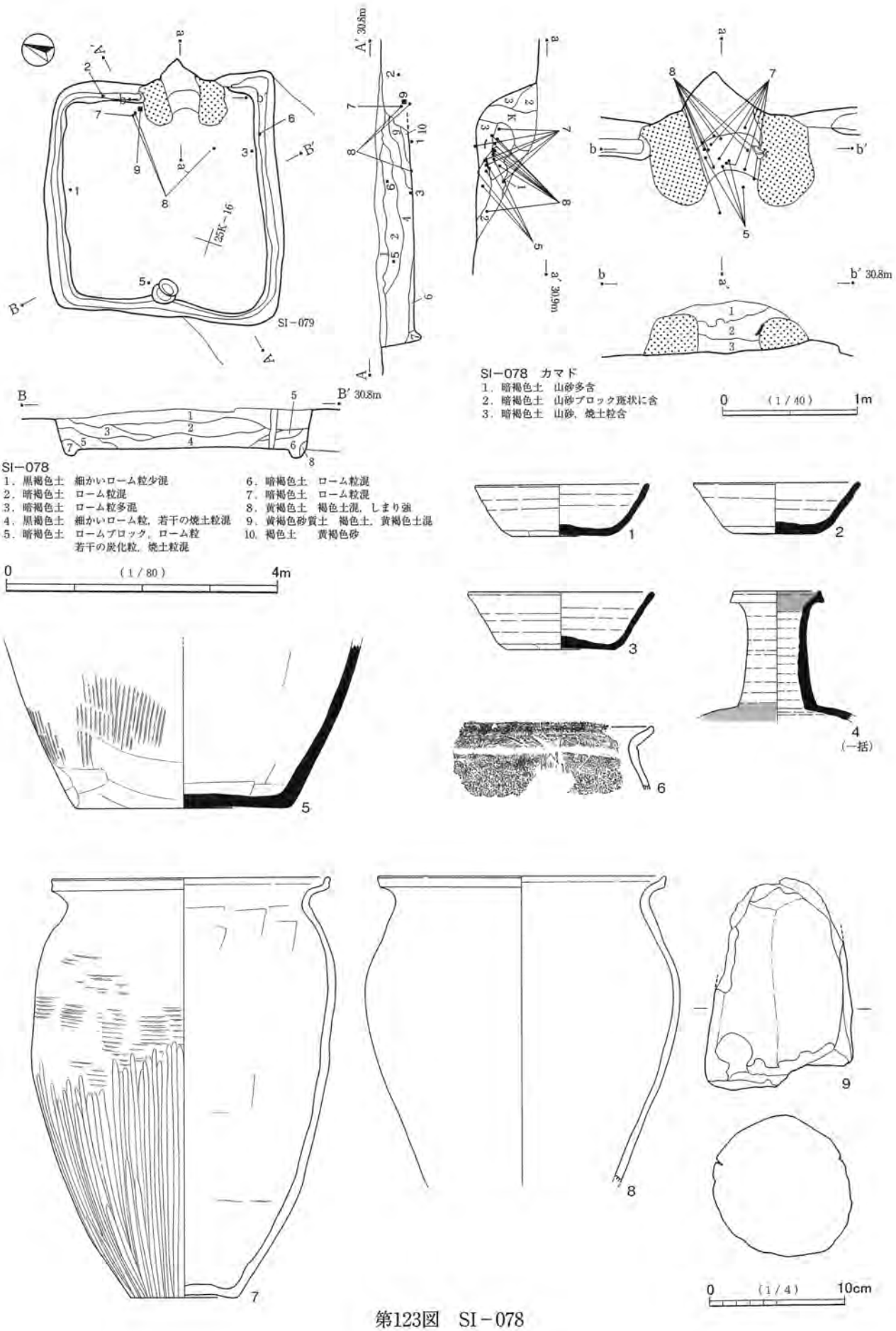
**柱穴**　出入口ピットが西壁際中央で検出された。二つのピットがカマド側に向かって縦やや斜めに重なったような形態を呈している。底面の深さに差があり，中央側が深く，壁側がやや浅い。長径は39cm，短径は30cm～35cm，深さは，中央側が26cm，壁側が17cmである。このような二連のピットは他の住居や小屋ノ内遺跡にもみられるため，作り替えではなく，一体のものと思われる。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　東壁右（南）寄りに位置する。両袖の遺存は比較的よい。構築材は山砂を主体とする。両袖内壁はよく焼けて赤色化する。火床部底面も同様に赤色化・硬化している。中央部は木根によって撹乱を受けている。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。中層（2・3層）にローム粒が多く含まれるが，下層（4層）は黒みがあり，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　カマド内からの出土が多い。カマド外周辺もやや多く分布するが，その他は散在的である。図示できた遺物は9点である。1～3は千葉産の須恵器杯である。4は須恵器長頸壷である。猿投等の東


SI－079
SI－078
1．黒褐色土　細かいローム粒少混
2．暗褐色土　ローム粒混
3．暗褐色土　ローム粒多混
4．黒褐色土　細かいローム粒，若干の焼土粒混
5．暗褐色土　ロームブロック，ローム粒
若干の炭化粒，焼土粒混
6．暗褐色土　ローム粒混
7．暗褐色土　ローム粒混
8．黄褐色土　褐色土混，しまり強
9．黄褐色砂質土　褐色土，黄褐色土混
10．褐色土　黄褐色砂
SI－078　カマド
1．暗褐色土　山砂多含
2．暗褐色土　山砂ブロック斑状に含
3．暗褐色土　山砂，焼土粒含
0　(1/80)　4m
0　(1/40)　1m
0　(1/4)　10cm
(一括)

第123図　SI－078

海産と思われる。５は千葉産の須恵器甕である。６は小型の土師器甕で，在地の土器である。７・８は常総型の土師器甕である。９は土製支脚である。

１・２は遺存がよい土器である。１は口縁端部にごくわずかに欠ける部分があるが，ほとんど破損のない完形品である。２は口縁・体部の所々を欠損するが，90％遺存する土器である。遺存部分は若干割れて接合する。土器からは破損に意図的な様相がうかがえない。３は1/2程度の遺存である。４は口頸部外面と，内面の上半部が茶色に発色している。胴部外面と口縁部内面は，黄灰緑色の釉が付着している。

７は比較的遺存がよい土器である。底部外面は須恵器甕に似た繊維痕・砂目痕がみられる。木葉痕はみられない。なお底部径は通常の常総型甕と同様の大きさである。

９はかなり太いわりに，長さが短い支脚である。

９はカマド左袖外脇の床面から出土した。また５・７・８がカマド内中・下層から出土した。８はカマド右袖前方床面や９近くの床面・下層に散っており，５も遠く出入口部の壁側中層からも出土した。１は左（北）壁際中央の床面から倒位で出土した。２はカマドと左奥（北東）隅中間の壁際中層から出土した。３は右（南）壁際奥（東）寄りの床面から出土した。

１は意図的な設置または本来この位置に保管されていたことの他，廃棄時の早い時点で上方から転落したことも考えられる。ただし土器の状態は斜めではない。意図的な遺棄ならば，竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性がある。２は中層，３は遺存があまり多くないため，１と関係するか断定しがたい。５・６・７・９の出土状況はカマド廃棄の祭祀に関わることも考えられるが，断定するにはやや弱いと思われる。

**重複遺構**　南側でSI－079と大きく重複し，本住居が切っている。

SI－080（第124図，図版43）

**位置**　調査区東部で中央やや東寄りの26K－33グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.0m，幅が3.8mで，やや縦長の方形をなす。確認面からの深さは50㎝である。重複遺構はないが，右奥（北東）隅部の壁が張り出しており，SI－078と似た形態を呈している。南東（右前）隅部周辺が撹乱を受けて，欠損している。

**床面**　平坦で，中央部を主体に広く硬化している。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。北東側のP2はやや西に向かって斜めに掘り込まれている。

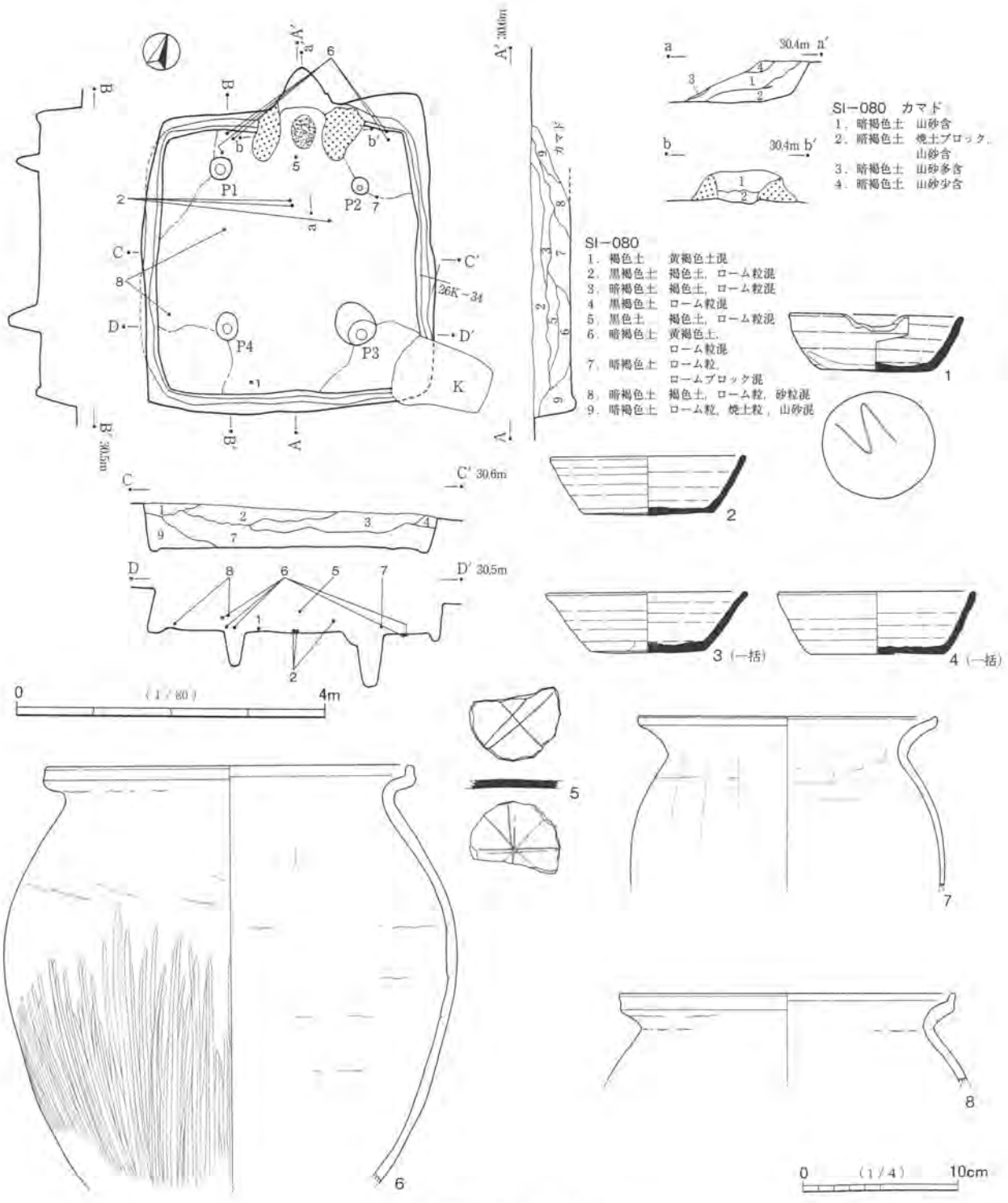
**壁溝・壁**　壁溝は全周する。左右（東西）の壁は垂直的で，一部は壁上端の方が，壁直下よりも内側になっている。

**カマド**　北壁やや右寄りに位置する。カマドの規模はやや大きい。両袖の構築材は山砂を主体とする。両袖内壁はよく焼けて，左袖は上部全体が，右袖もかなり内側まで赤色化する。火床部はほぼ平坦で，底面中央が赤色化している。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　全体から出土したが，カマドの左右・前方が多く，中央がやや少ない。図示できた遺物は８点である。１～５は須恵器杯で，３は新治窯産，３以外は千葉産である。６～８は土師器甕で，６・８は常総型の甕，７は在地の甕である。

１は完形に近い土器で，口縁部の一部を小さく弧状に欠損する以外は，割れていない。底部外面に「Ｓ」字状のヘラ書きがある。内外面に火襷がみられる。欠損部は打ち欠きされたものとみられるが，記号的な火襷部分に意図的になされたものかもしれない。５は底部片である。底部内外面に線刻がある。外面は大




第124図　SI－080

きくみて４条の交差線で，そのうちの２条は，２重・３重の雑な平行線となっている。全体の形状は星形（五芒星）を意識したものと思われる。また比較的丁寧な１条線の「＋（×）」と，雑な平行する２条線の「＋（×）」を，斜めに交差させたものかもしれない。前後関係は不明であるが，当初の「＋（×）」に，後に「×（＋）」を加えて，五芒星にしたことも考えられる。内面の線刻は線が弱いが，「＋」である。一部二重線となっている。半円以上の破断面は細かく打ち欠きされて，形が整えられたものであろう。線刻はともに端まで達しており，内外面の線刻が先，打ち欠きが後である。また直線状の破断面は後に欠損したも

ので，円盤状であったことも考えられる。２～４及び６～８はあまり遺存がよくない。８は内面の多くが黒色を呈している。

１は出入口側の南壁際左寄り床面から倒位で出土した。５はカマド前側中央の中層から出土した。１は土器の内容・出土状況から竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性がある。また５は中層出土であるが，カマド内といえる位置である。竪穴全体は自然堆積と思われるが，カマド部分は破壊され，埋め戻されているかもしれない。その場合カマド廃棄の祭祀に関わることも考えられる。しかし他からの廃棄を否定するほどの根拠とは思われないため，可能性の指摘に留める。その他の遺物は中層からの出土や，破片の一部が中層出土である。遺存も多くなく，周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

**SI－081**（第125図，図版44）

**位置**　調査区東部で中央やや東寄りの26K－02グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.9m，幅が3.1mの方形をなす。確認面からの深さは60cmである。北壁の中央から東側周辺が撹乱を受けて，欠損している。

**床面**　ほぼ平坦で，中央がやや硬化している。

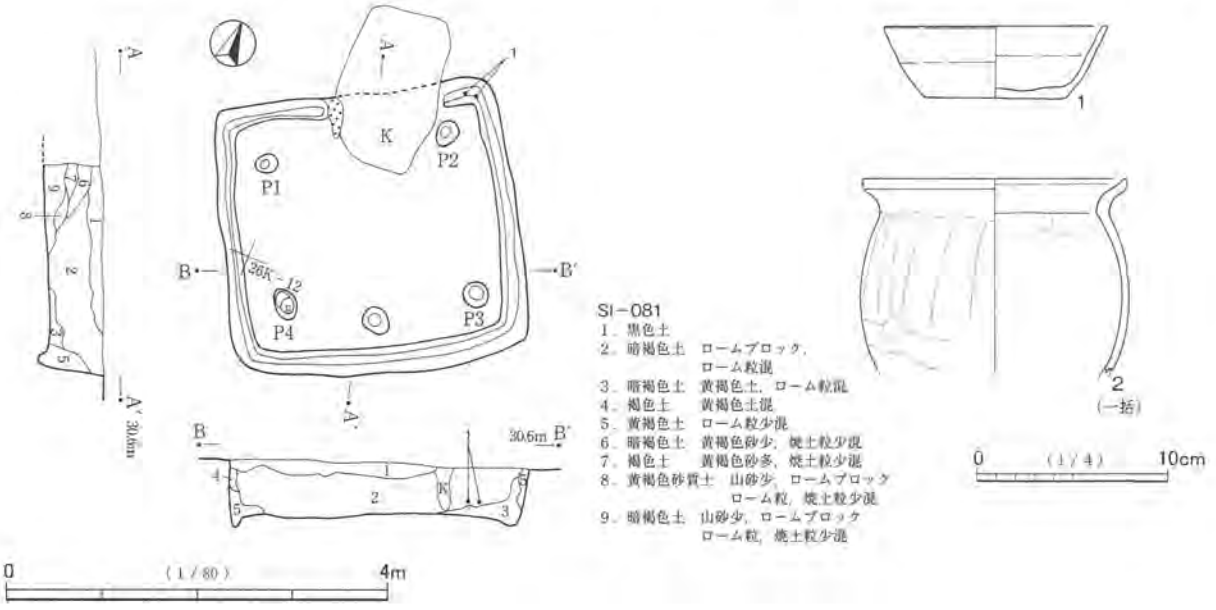
**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。隅に近接する位置にあり，竪穴の規模のわりに柱穴内空間が広い。また出入口ピットが南壁壁際中央で検出された。径は29cm×25cm，深さは13cmである。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央に位置する。左袖の一部が遺存するが，その他は撹乱を受けて遺存しない。カマド側の堆積土は山砂と焼土粒を含む。

**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体である。中・下層はローム粒の含有がやや多いが，レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　少量で散在的な出土である。図示できた遺物は２点である。１はロクロ土師器杯と思われるが，千葉産の須恵器杯の可能性もある。切り離しがヘラ切りと思われる箇所があるが，底部中央が欠損しているため，判然としない。色調は褐色・黒褐色である。２は小型の土師器甕で，在地の土器である。遺




第125図　SI－081

存は，1が1/2，2は一部である。1は北東隅から出土したが，床面からやや高い位置である。2は位置不明である。遺物は周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－082（第126図，図版44）

位置　調査区東部やや北寄りの25J－89グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが4.6m，幅が4.8mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。南壁の中央やや東寄り部分周辺が撹乱を受けて，欠損している。

床面　平坦で，中央が硬化している。

柱穴　主柱穴が4箇所検出された。南西側のP4がやや北壁側に寄っている。また出入口ピットが検出され，南壁壁側の中央からやや左（西）寄りに位置する。縦長の形態で，長径は46cm，短径は26cm，深さは22cmである。

壁溝　全周する。

カマド　北壁中央に位置する。両袖の遺存が比較的よい。構築材は山砂を主体とする。両袖内壁は赤色化が著しい。火床部底面は窪むが，あまり深くはなく，灰のかき出し程度によるものであろう。若干の凹凸がある。カマド内堆積土下層は，山砂と焼土ブロックを多量に含む。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体で，自然堆積と思われる。

出土遺物　少量で散在的な出土である。出土層位は上層に偏っている。床面や下層からも若干出土したが，土器小破片が目立つ。図示できた遺物は3点である。1・2は新治窯産の須恵器杯，3は常総型の土師器甕である。1・2は体部外面に線刻がある。1は「＋」状のものである。2は「卄」状の右側の縦線に斜めの1条線が入ったものである。「卄」状ではなく，「卅」状の可能性もあるが，欠損部があることと器面の磨耗のため判然としない。3は胴部外面に焼けた山砂が付着している。1は1/2強の遺存，2・3は一部の遺存である。遺存の非常によいものはない。

3はカマド内及び周辺の床面・下層から出土した。1・2はやや左前（南西）側の床面からかなり高い位置で出土した。出土遺物は概して周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－085（第127図，図版44）

位置　調査区東部北西の25J－92グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.4m，幅も3.4mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

床面　平坦で，中央がやや硬化している。

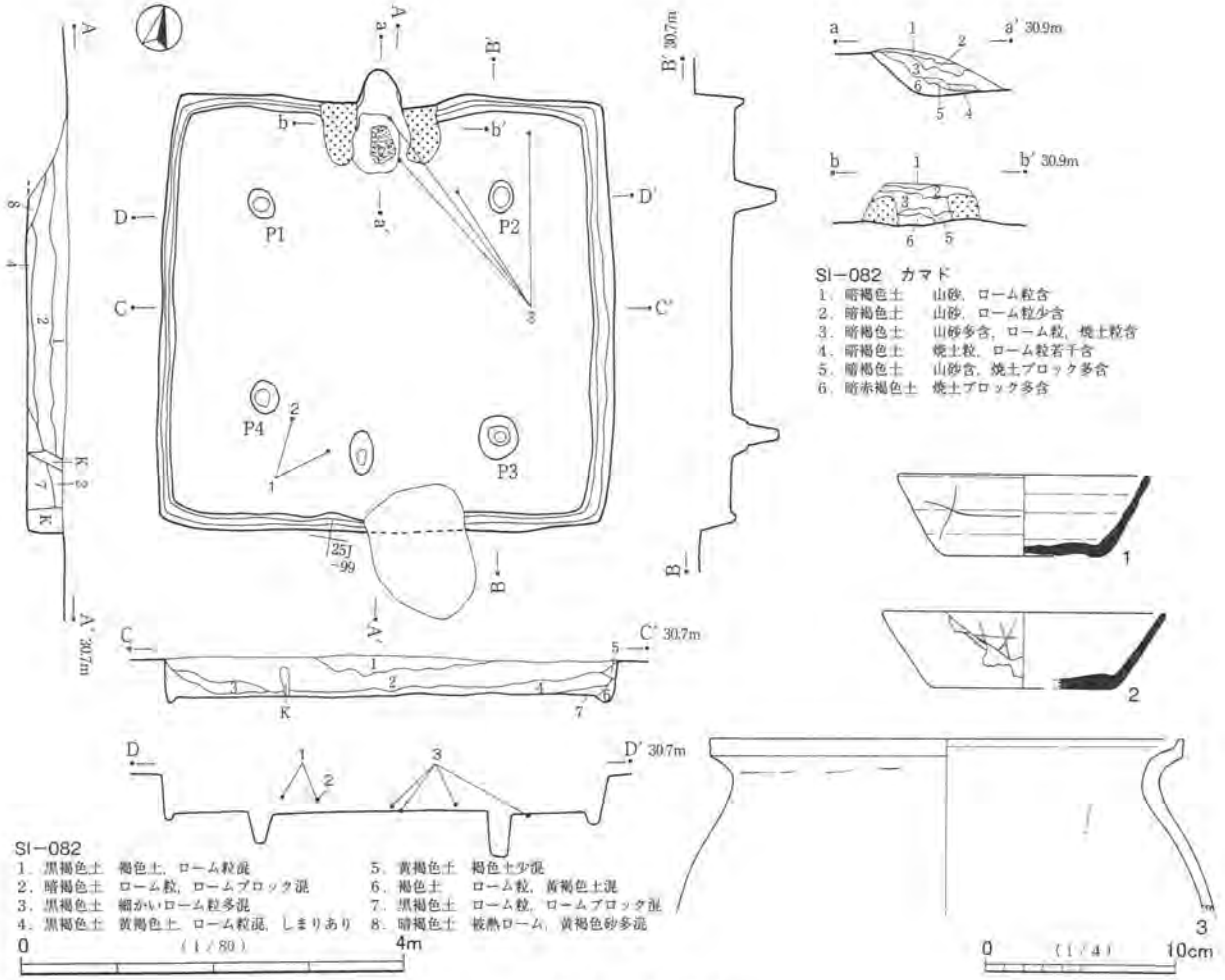
柱穴　出入口ピットが南壁壁側中央で検出された。径は32cm，深さは15cmである。

壁溝　東壁・西壁・南壁に存在するが，その間の隅部は途切れている。カマドのある北壁及び北側両隅には廻らない。東壁は重複遺構に切られる部分にも本来廻るとみてよい。

カマド　北壁中央に位置する。両袖が遺存するが，あまり良好ではない。構築材は山砂を主体とするが，基底部付近は黒褐色土が混入する。両袖内壁は赤色化している。器掛け口付近の上層から，赤変して硬化した大きな焼土ブロックが出土した。天井部の崩壊土と思われる。火床部は燃焼した面を検出することができなかった。火床部下の底面は深く，広い。カマド使用に伴うだけでなく，当初の，または作り替え時の掘りかたを露呈させたものであろう。

堆積土　暗褐色土・黒褐色土主体で，自然堆積と思われる。

出土遺物　カマド内及び周辺から多くの遺物が出土した。中央から南側にも分布するが，カマド側の方



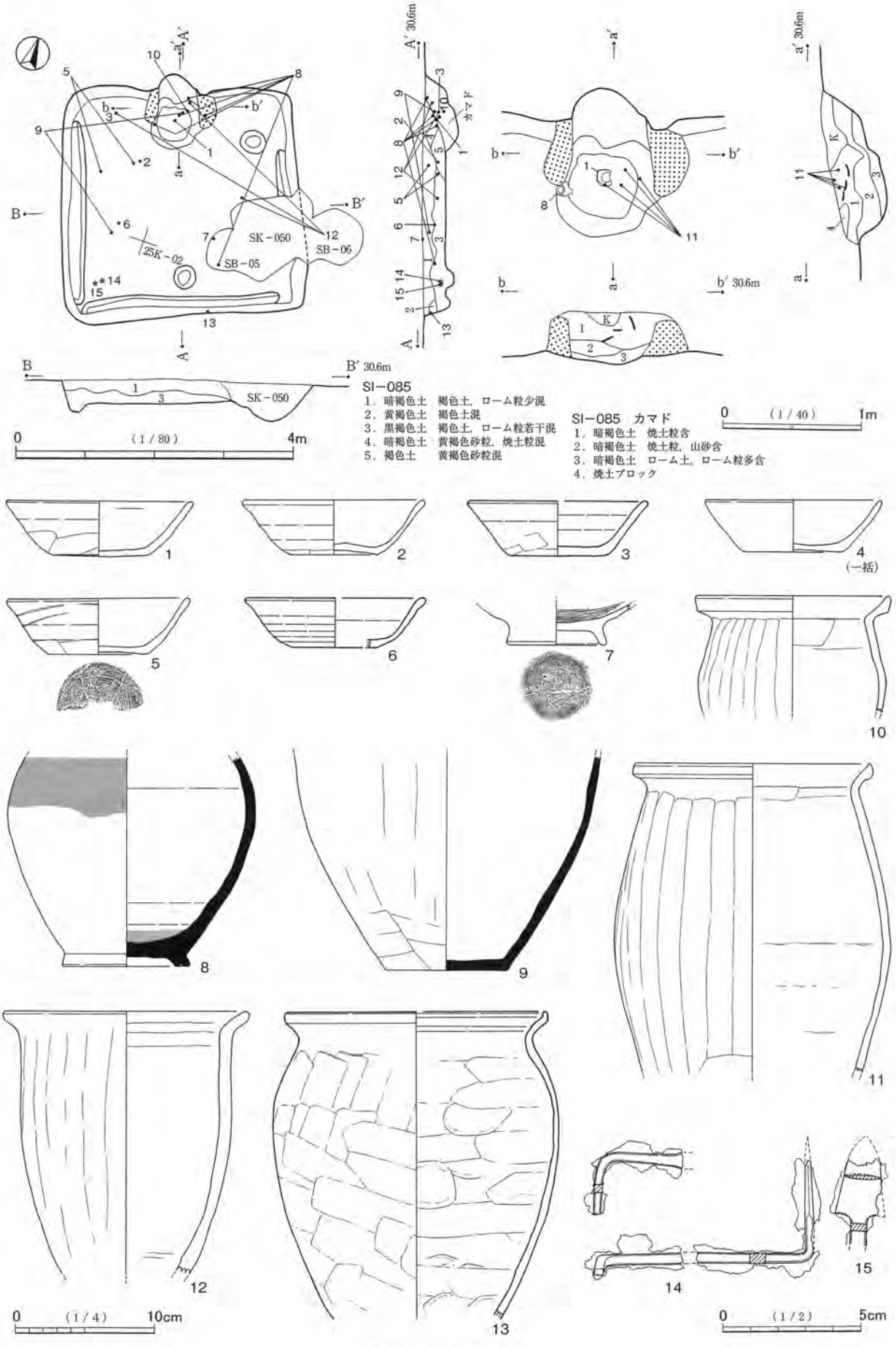

第126図　SI－082

が多い。図示できた遺物は15点である。１～６はロクロ土師器杯，７はロクロ土師器高台付杯である。８は須恵器壷で，東海産と思われる。９は千葉産の須恵器甕である。10～13は土師器甕で，いずれも在地の甕である。10は小型品である。14・15は鉄製品で，鉄鏃である。同一個体と思われる。

１～13の土器に，遺存のよいものはみられない。杯類の中で最も遺存のよい１でも60％程度である。１は器面が著しく荒れているが，被熱によると思われる。６の外面にみられる黒色物は一部に光沢があり，単なる煤ではなく，油煙とも思われる。やや不明瞭であるが灯明具として使われた可能性がある。内面も荒れている。５も６同様と思われる点があるが，６以上に不明瞭である。

８は胴部下位から底部の遺存がよく，９の底部も遺存する。８は高台接地部にほぼ一方向の筋状の痕跡が多数みられ，製作時の痕跡と思われる。胎土は白色粒･小石，黒色粒が多くみられ，混入物がやや多い。焼成は良好である。９の底部はあまり大きくないが，整形は須恵器甕と同様の繊維痕･砂目痕がみられる。胴部外面は平行タタキ後ヘラケズリが施されている。タタキはケズリによって多く消されているが，一部に遺存している。器形や胴部上位まで及ぶまでケズリは土師器的であるが，色調は灰色であり，明瞭な須恵器である。11の口縁部形態は須恵器的である。しかし色調が褐色であり，タタキ痕もみられないことから，土師器としておく。胴部外面に山砂が付着している。12は器壁が厚く，重量感のある作りである。

14・15は鉄鏃であるが，２箇所で直角に折り曲げられている。再加工のための材料として折り曲げられたが，使用されることなく，廃棄状態となったものと思われる。鏃身は切先等を欠き，棒状部と茎は多く


SK－050
SB－05
SB－06
25K－02
カマド
SI－085
1．暗褐色土　褐色土，ローム粒少混
2．黄褐色土　褐色土混
3．黒褐色土　褐色土，ローム粒若干混
4．暗褐色土　黄褐色砂粒，焼土粒混
5．褐色土　黄褐色砂粒混
SI－085　カマド
1．暗褐色土　焼土粒含
2．暗褐色土　焼土粒，山砂含
3．暗褐色土　ローム土，ローム粒多含
4．焼土ブロック
0　(1／80)　4m
0　(1／40)　1m
0　(1／4)　10cm
0　(1／2)　5cm

第127図　SI－085

を遺存するが，棒状部の途中で欠損するため，2片に分かれる。茎尻は遺存しない。鏃身は長三角形式で，逆刺をもたない。棒状部はやや短く，短頸鏃の範囲内のものであろう。棒状部と茎の境近くで破損しているため，箆被の様相は不明瞭であるが，棒状部は直線的と思われる。曲げられた箇所は，一つが棒状部の上部，もう一つは茎の中位である。

カマド内から出土したものに，1・8～12がある。1は火床部中央の中層から正位で出土し，8の多くも中・上層から出土したが，一部が南壁側やや右寄りに散っている。8の底部は左袖に接して，やや斜めに傾いた倒位で出土した。9・12も接合する破片が広く散っている。14・15は南西隅から出土したが，出土層位は床面からやや高い位置である。図示できた遺物の出土層位は概して中・上層である。

カマド内及び周辺から多く出土した土器群はカマド廃棄の祭祀に関わる可能性もあると思われる。しかし出土層位に中・上層のものが多いこと，広く散っていること，遺存の良好なものが少ないことから，断定しがたく，可能性の指摘に留めておきたい。

SI－086（第128図，図版45）

位置　調査区東部北西の25J－81グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.1m，幅が3.2mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

床面　ほぼ平坦である。硬化面はみられない。

カマド　北壁やや右寄りに位置する。確認面から床面まで浅いため，両袖の遺存はあまりよくない。また火床部も赤色化した面は遺存していない。火床部底面は床面からやや窪んでいるが，灰のかき出し等使用に伴うものであろう。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体で，ローム粒の含有は少量である。自然堆積と思われる。

出土遺物　少量の遺物が散在的に出土した。図示できた遺物は3点である。1は新治窯産の須恵器杯，2は非ロクロの土師器杯である。3は小型の土師器甕と思われるが，外面の雰囲気が手捏土器的である。しかし内面の調整はヘラナデであり，底部外面もナデが施されているため，甕としておきたい。

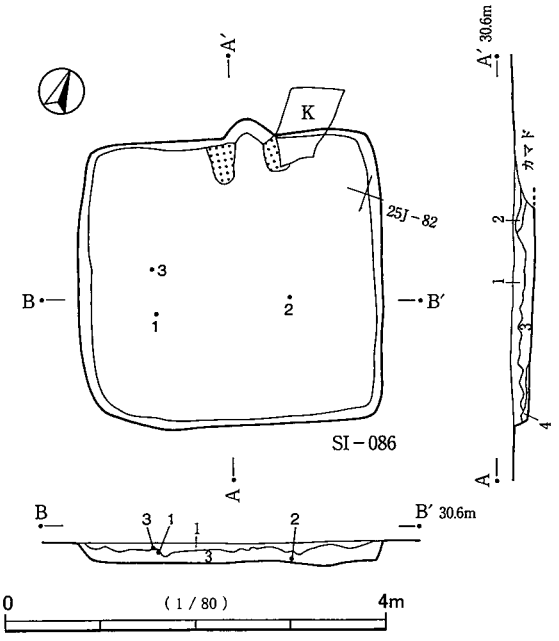
2は完形品で，破損もない土器である。小型で浅い丸底の土器である。1の遺存は一部である。2は中央やや東寄りの床面から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。1・3は中央やや西寄りの上・中層から出土した。

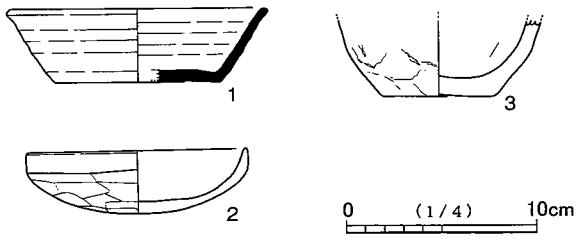
1は比較的古い須恵器杯であるが，2よりも新しいと思われる。2の出土層位から，本住居はかなり古い竪穴住居の可能性がある。

SI－087（第128図，図版45）

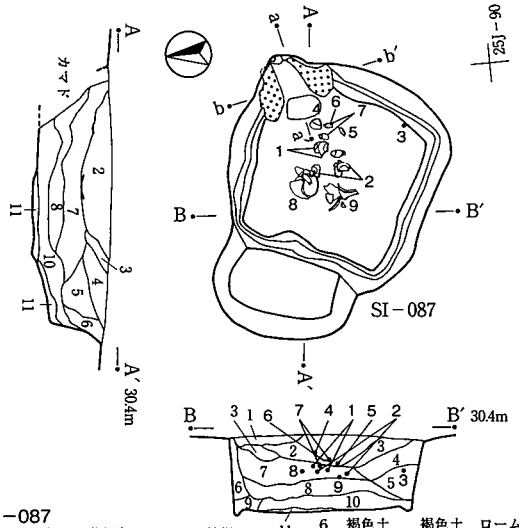
位置　調査区東部北西の24J－89グリッドを中心に位置する。

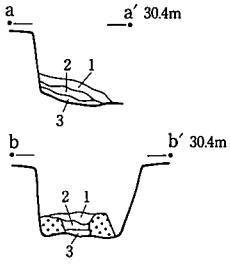
形状・規模　方形プランの北西辺に張り出しが付くプランである。張り出し部を含めてみれば，長方形的なプランである。隅にカマドをもち，出入口ピットは検出されなかった。そのため主軸方向の把握が難しいが，表では南西辺（図の右辺）から北東辺（図の左辺）に向かう方向を主軸方位とした。その長さが2.2mである。主軸に直交する長さ（幅）は，張り出し部を除くと2.1m，含めると3.05mである。確認面から床面までの深さは80cm，張り出し部底面までの深さは70cmであり，かなり深い遺構である。張り出し部長軸の長さが確認面で1.5m，底面で1.07m，短軸の長さが北西辺壁溝から確認面まで0.9m，底面で63cmである。張り出し部底面は床面よりも7cm浅い。あまり大きな差ではないが，張り出し部がやや浅いことから，出入口が張り出し部側にあることも考えられる。



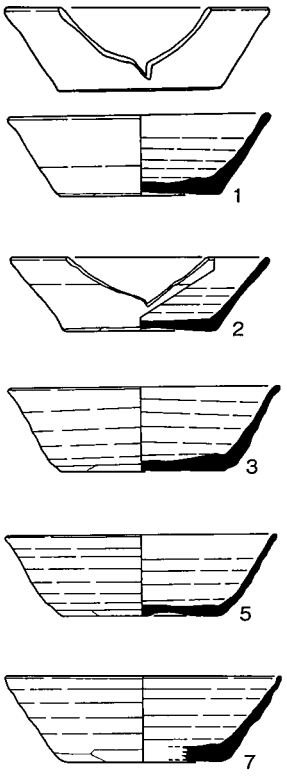

SI－086
1．黒褐色土　褐色土，ローム粒少混
2．暗褐色土　黄褐色砂，焼土粒少混
3．暗褐色土　褐色土多，ローム粒少混
4．褐色土　黄褐色土混

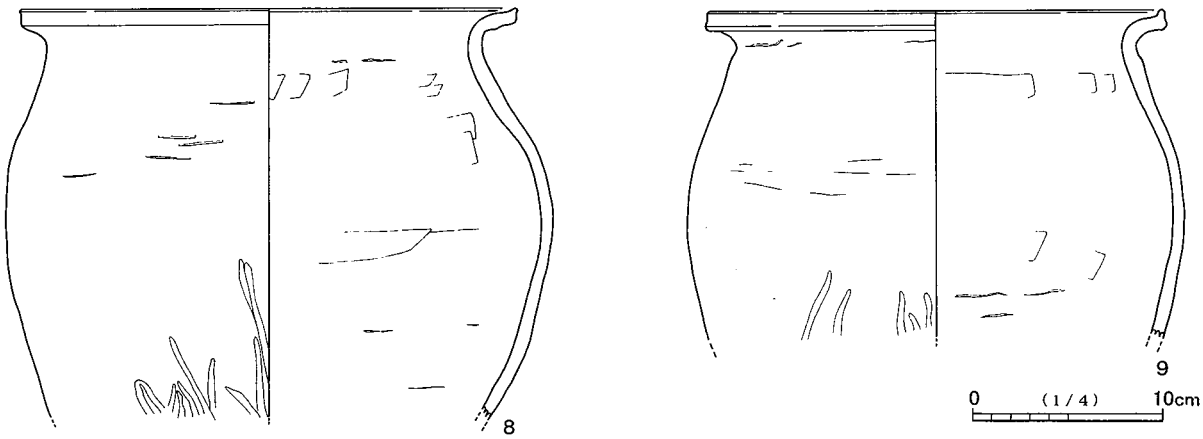



SI－087　カマド
1．暗黄褐色砂質土　山砂多，焼土粒含
2．暗赤褐色土　1層に焼土粒，焼土ブロック混
3．暗褐色土　山砂，焼土粒，ローム粒混

SI－087
1．暗褐色土　黄褐色土，ローム粒混
2．黒褐色土　ローム粒，ロームブロック少混
3．暗褐色土　黄褐色土，ローム粒混
4．暗褐色土　褐色土が斑状に入り，ローム粒少混，緻密
5．暗褐色土　褐色土，ローム粒混，緻密
6．褐色土　褐色土，ローム粒混
7．暗褐色土　ローム細粒，大粒混，ややあらい
8．褐色土　ローム大粒，ロームブロック多混
9．暗褐色土　ローム大粒混
10．褐色土　ローム粒少
11．褐色土　ローム粒，黄褐色土混




第128図　SI－086・087

床面　床面・張り出し部底面とも平坦である。床面は顕著な硬化面がみられないが，ハードローム層中に作られているため，硬質である。

壁溝　方形プラン内は全周する。張り出し部底面壁際にはみられない。

カマド　北東隅部に位置する。確認面下ではプランからの突出がほとんどなく，煙道部の壁は垂直に立ち上がっている。遺存する両袖は壁の中位以下にみられる。構築材は山砂を主体とする。両袖内側は赤色化し，特に左袖は上面も赤色化している。カマド内底面は壁際から床面に向かって下り，手前で若干窪んでいるが，被熱痕跡は遺存していない。カマド内堆積土は中層に多量の焼土ブロックを含む。

堆積土　ローム粒・ロームブロックが中・上位の７層，中・下位の８層に多く含まれる。７層よりも上位の層は暗褐色土・黒褐色土主体で，ローム粒を多量に含む土層はみられない。７・８層等にロームが多いのは，深い遺構であるためかもしれないが，床面から７層までは埋め戻された可能性があると思われる。その上位層は自然堆積であろう。

出土遺物　図示できた遺物は９点である。１～７は新治窯産の須恵器杯，８・９は常総型の土師器甕である。

１・２は遺存がよく，３・４は1/2強，５～７は1/2以下の遺存である。１は口縁・体部の一部が逆三角形状に欠損している。遺存部分はその欠損部の下頂部を境に２片に割れて接合する土器である。２もほぼ同様の状態であるが，図示したやや大きく割れた部分の反対側端部も小さく欠損する。１・２の欠損部は打ち欠きされた可能性がある。ただし２の小さな欠損は自然の破損かもしれない。

１～９は３を除いて，方形プランの中央から集中的に出土した。出土層位も中・上位で，７層と２層の境付近である。３は南東壁際からの出土でやや離れている。しかし出土層位は中層で，他の遺物と近似している。その他の遺物は少なく，張り出し部からも数点の出土である。

遺物は，竪穴が中･上位まで埋め戻された後，一括して廃棄されたものと思われる。１･２の様相から，これらの行為が祭祀的な様相をもつ可能性がある。しかし逆に１・２は単なる破損であり，深い竪穴をある程度埋め戻した後，出土遺物全体を単に廃棄しただけとも考えられる。３以下の遺物の遺存があまり良好でないことから，後者の可能性が高いと思われる。また１・２が打ち欠きされた土器であるとしても，出土状況に祭祀性があるか断定しがたい。

その他　本竪穴は全体のプランが特異であり，また小規模で深い遺構である。隅部にカマドをもつ点は時期的なことも考えられるが，総合的にみて本竪穴だけで人が居住する施設とは思えない。厨房専門の施設である竈屋と思われる。

SI－088（第129図，図版45）

位置　調査区東部北西の25J－61グリッドを中心に位置する。

形状･規模　長さが3.4m，幅が3.0mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。東辺がやや長い。

床面　平坦で，中央の硬化が顕著である。壁側も比較的硬質である。

壁溝　カマド部分を除いてほぼ全周するが，西壁南寄り部分で，途切れる箇所がある。この部分の南北の壁溝が一直線状ではない。またこの部分の壁が抉れている。何らかの構造物が存在したのかもしれない。

カマド　北壁中央に位置する。両袖はともに幅が狭い状態で遺存する。構築材は山砂を主体とする。左袖内側は赤色化した部分がみられる。カマド内堆積土については，２層が焼土粒を多く含む。下層の３層はロームブロックが主体である。火床部下底面はかなり深いが，使用に伴って深くなっただけでなく，当

初または作り替え時の掘りかた底面が深いのであろう。堆積土及び出土遺物の状況からも，火床面は２層と３層の境前後にあると思われる。

**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体である。中層（２層）はローム粒を多く含むが，全体的にみて自然堆積と思われる。なお焼土が南西隅床面及びその近くの西壁際床面に分布しており，南西隅部は被熱痕跡もみられる。

**出土遺物**　カマド内からやや多く出土した。また多量ではないが，全体的に出土している。図示できた遺物は９点である。１～３は須恵器杯，５・６は須恵器高台付杯である。１・３は新治窯産，５・６は千葉産である。２はやや不明瞭であるが千葉産と思われる。４は非ロクロの土師器杯である。７は新治窯産の須恵器甕，８は千葉産の須恵器甕，９は常総型の土師器甕である。

１は底部外面に線刻で「丈」と思われる文字がある。主として口縁・体部の２箇所を欠損するが，比較的遺存のよい土器である。２も口縁・体部の３箇所を欠損するが，比較的遺存がよい。１・２の欠損部分のうち，１の線刻に近い欠損部は整った弧状であり，打ち欠きされた可能性が高いと思われる。その他は，ともに遺存部分が割れていることもあって，断定しがたい。３は内外面に火襷がみられる。口縁・体部の全周を欠くが底部は遺存する。４は1/2弱の遺存で，被熱による器面の荒れが著しい。５・６は有台の土器であるが，５は小型品，６は大型品である。６は口縁部の一部を欠損するが，遺存のよい土器である。高台端部はややシャープな作りである。５は口縁・体部の2/3弱を欠損する。

７は焼成が良好で硬質の土器である。胴部内面の当て具痕は肩部で明瞭であり，頸部側が深い。８は小型の甕である。胴部外面に平行タタキが施されているが，色調は褐色である。

６はカマド内のやや後方で，カマド堆積土３層上面からやや傾いた倒位で出土した。３層上面は火床面及びその延長上と思われる面である。支脚に転用された可能性がある。６以外で比較的遺存のよい１・２の出土層位をみると，１は上・中層，２は床面・下層である。２は深い位置であるが，広く散っている。

６は居住者が遺棄した遺物であるが，その出土状況からは支脚転用とカマド廃棄の祭祀に伴って置かれたことの二通りが考えられる。６以外の遺物は周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－089（第130図，図版46）

**位置**　調査区東部北寄りの25J－58グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.5m，幅も4.5mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

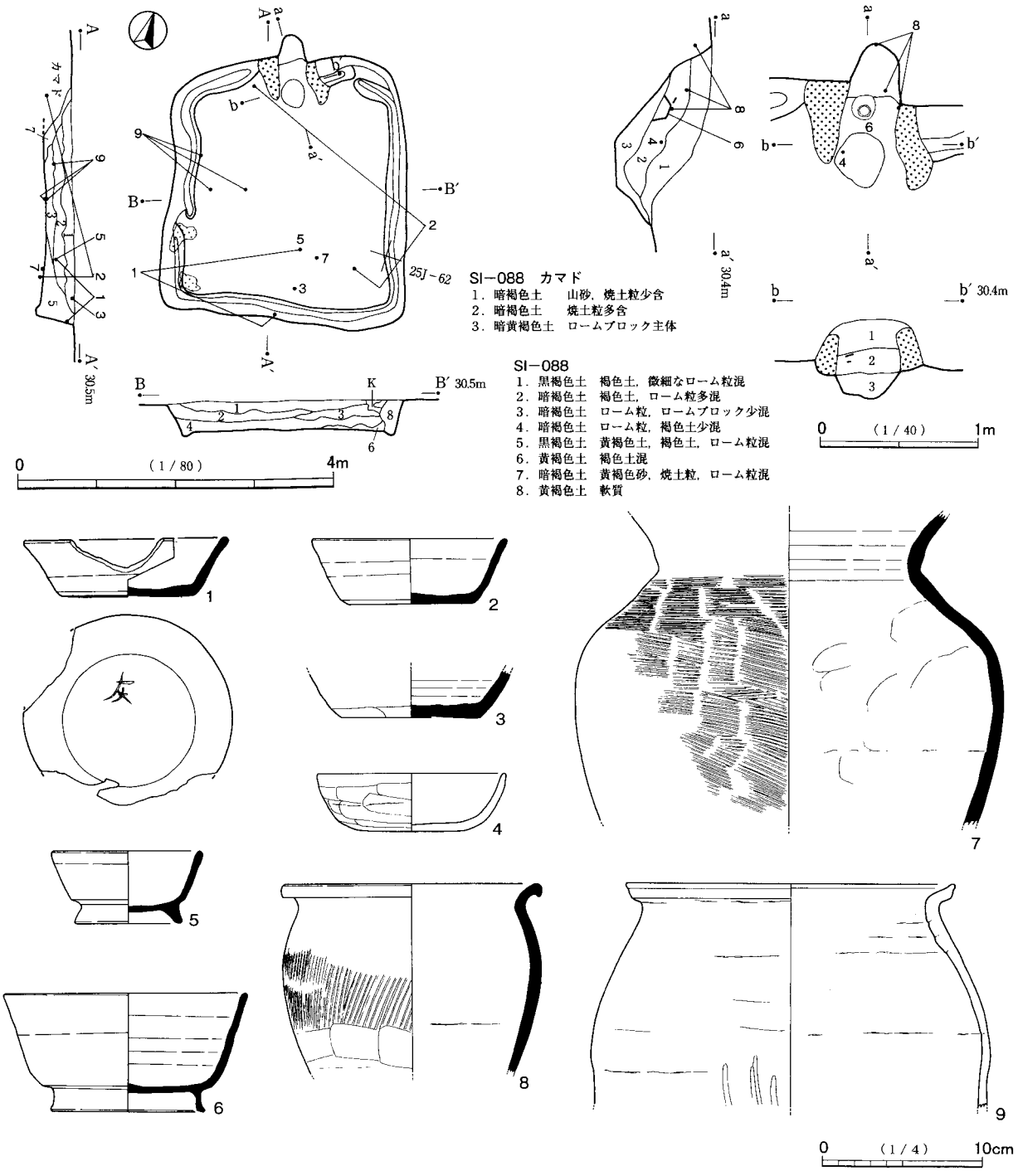
**床面**　傾斜はないが，凹凸がある。中央が硬化している。四隅や壁側は中央よりもやや深く掘り込まれ，貼床が施されている。その影響で中央に比べ軟質である。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。柱は建て替えが認められる。内側から外側に移されたもので，その際に柱穴内側が埋め戻されている。その痕跡は特に北東のP2・南西のP4に顕著である。また出入口ピットが南壁側中央に位置する。径は31cm×24cm，深さは25cmである。

**壁溝**　全周する。全体的に幅が広い。深さは均一でなく，所々に凹凸がある。

**カマド**　北壁中央に位置する。両袖の遺存が比較的よい。構築材は山砂を主体とし，しまりがある。両袖内壁及び火床部底面は赤色化している。底面の被熱痕跡は強く，ロームのしまりがない。カマド内中・下位からは，焼土ブロック・焼土粒が多量に出土した（２・４層）。

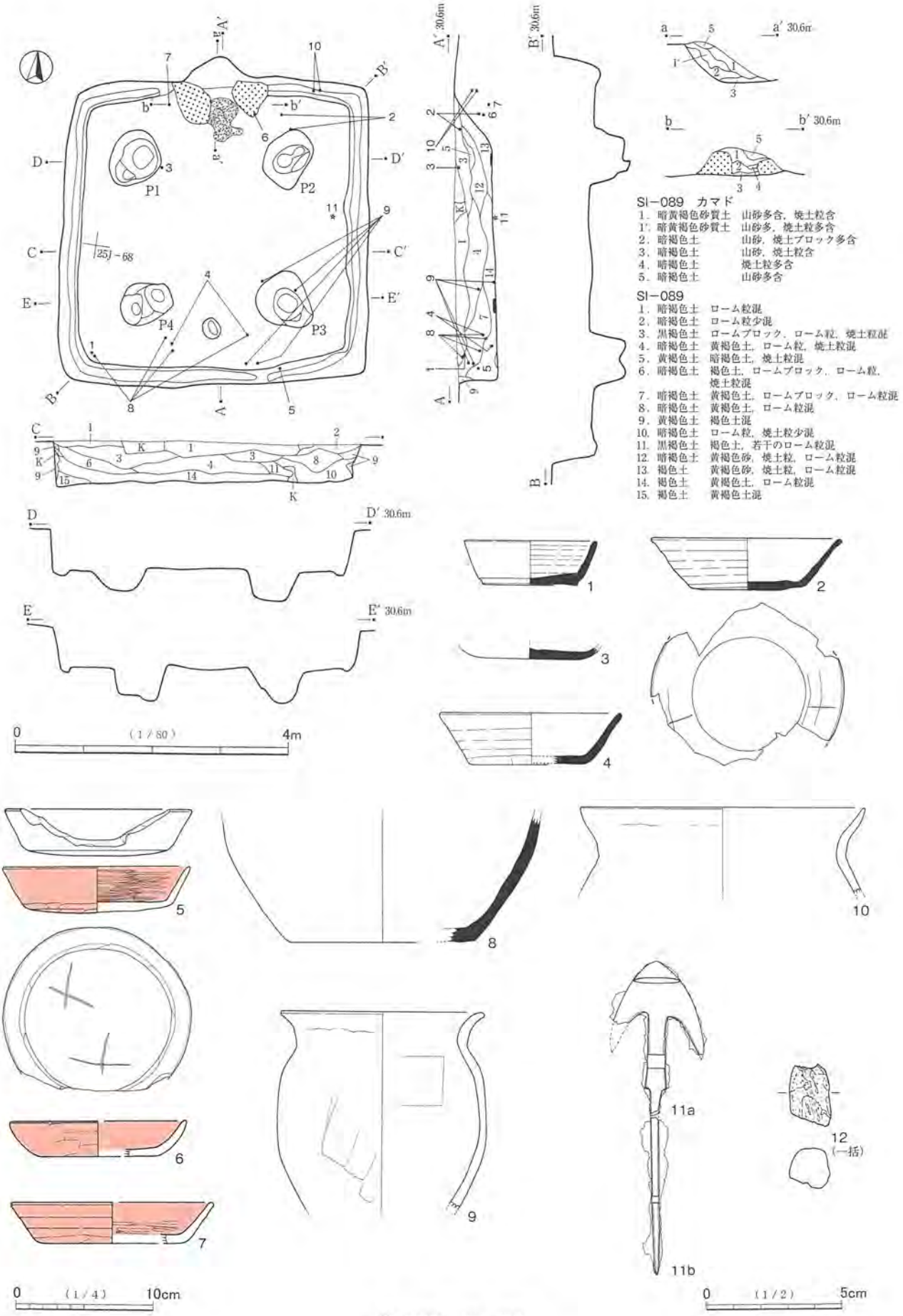
**堆積土**　ローム粒・ロームブロック・焼土粒・山砂等の含有の程度により，やや細かく分層できる。しかし大きくみれば暗褐色土主体であり，自然堆積と思われる。




第129図　SI－088

**出土遺物**　やや多量の遺物が出土した。各所に分布するが，中央と西側がやや少ない。図示できた遺物は12点である。１～４は新治窯産の須恵器杯，５～７はロクロ土師器杯である。８は新治窯産の須恵器甕である。９は小型の土師器甕で在地の土器である。10は武蔵型の土師器甕である。11は鉄鏃，12は軽石である。土器類のうち，５は比較的遺存がよく，２も2/3程度遺存するが，他は概して遺存が少ない。

１は体部下端が窪み，底部が高台風に作り出されている。小型品であり，やや特殊な土器である。２は体部外面に「＋」の線刻が２箇所みられる。線刻は対向的な位置関係である。３は内面の一部に油煙が付着しており，灯明具として使用された土器である。５～７は内外面全面に赤彩が施されている。５は口縁・体部の1/3弱を弧状に欠損する以外は割れていない土器である。底部外面に「＋（×）」の線刻が２箇所み


SI－089　カマド
1．暗黄褐色砂質土　山砂多含，焼土粒含
1'．暗黄褐色砂質土　山砂多，焼土粒多含
2．暗褐色土　山砂，焼土ブロック多含
3．暗褐色土　山砂，焼土粒含
4．暗褐色土　焼土粒多含
5．暗褐色土　山砂多含
SI－089
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒少混
3．黒褐色土　ロームブロック，ローム粒，焼土粒混
4．暗褐色土　黄褐色土，ローム粒，焼土粒混
5．黄褐色土　暗褐色土，焼土粒混
6．暗褐色土　褐色土，ロームブロック，ローム粒，焼土粒混
7．暗褐色土　黄褐色土，ロームブロック，ローム粒混
8．暗褐色土　黄褐色土，ローム粒混
9．黄褐色土　褐色土混
10．暗褐色土　ローム粒，焼土粒少混
11．黒褐色土　褐色土，若干のローム粒混
12．暗褐色土　黄褐色砂，焼土粒，ローム粒混
13．褐色土　黄褐色砂，焼土粒，ローム粒混
14．褐色土　黄褐色土，ローム粒混
15．褐色土　黄褐色土混
P1
P2
P3
P4
25j－68
0　（1／80）　4m
0　（1／4）　10cm
0　（1／2）　5cm
11a
11b
12
（一括）

第130図　SI－089

られる。欠損部は打ち欠きされた可能性がある。6・7は小破片から復元図化した。8は内外面の剥離が顕著である。液体貯蔵用として長く使用された土器と思われる。

11は切先から茎尻までみられる遺存のよい鉄鏃である。ただし錆が進行し，劣化が著しい。欠損は図示した左側の逆刺等，鏃身の一部である。また茎の上位で折れ，接合しないが，全長をうかがえる資料である。鏃身は広身の三角形式で，深い逆刺をもつ。木質が図示した右側の逆刺の表面にわずかに付着している。短頸鏃で，棒状部はかなり短い。棒状部は茎との境でやや広がる。茎はかなり長く，棒状部の2倍以上ある。12は小片である。全体に赤みを帯びており，火を受けたと思われる。

5は南壁際右寄りの中層から出土した。竪穴内側に斜めに傾いた正位での出土である。11は東壁際中央の床面から出土した。2はカマド右外側からの出土であるが，層位は中・上層である。その他の遺物は遺存も少なく，概して床面から高い位置での出土である。5は中層からの出土であるが，状況から壁上方から落下した可能性がある。その場合本住居に伴うことも考えられる。また土器の状態から祭祀性をもつといえるものである。11も遺存がよい遺物であり，本住居に伴う可能性がある。5・11以外について，図示できないものを含めてみると，出土遺物が比較的多いわりに遺存のよい遺物が少なく，遺物は概して周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－090（第131図，図版46）

位置　調査区東部北寄りの25J－58グリッドを中心に位置する。東方に支谷を臨み，西から東に若干下る緩斜面に立地する。

形状・規模　長さが2.7m，幅も2.6mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。カマド左側の壁は傾斜が緩やかであり，確認面での壁上端が右側よりもかなり後方である。この部分に平坦面はみられないが，棚状施設的なものといえる可能性がある。その部分まで含めた長さは2.77mである。

床面　ほぼ平坦である。全体に硬化しているが，特に中央が顕著である。

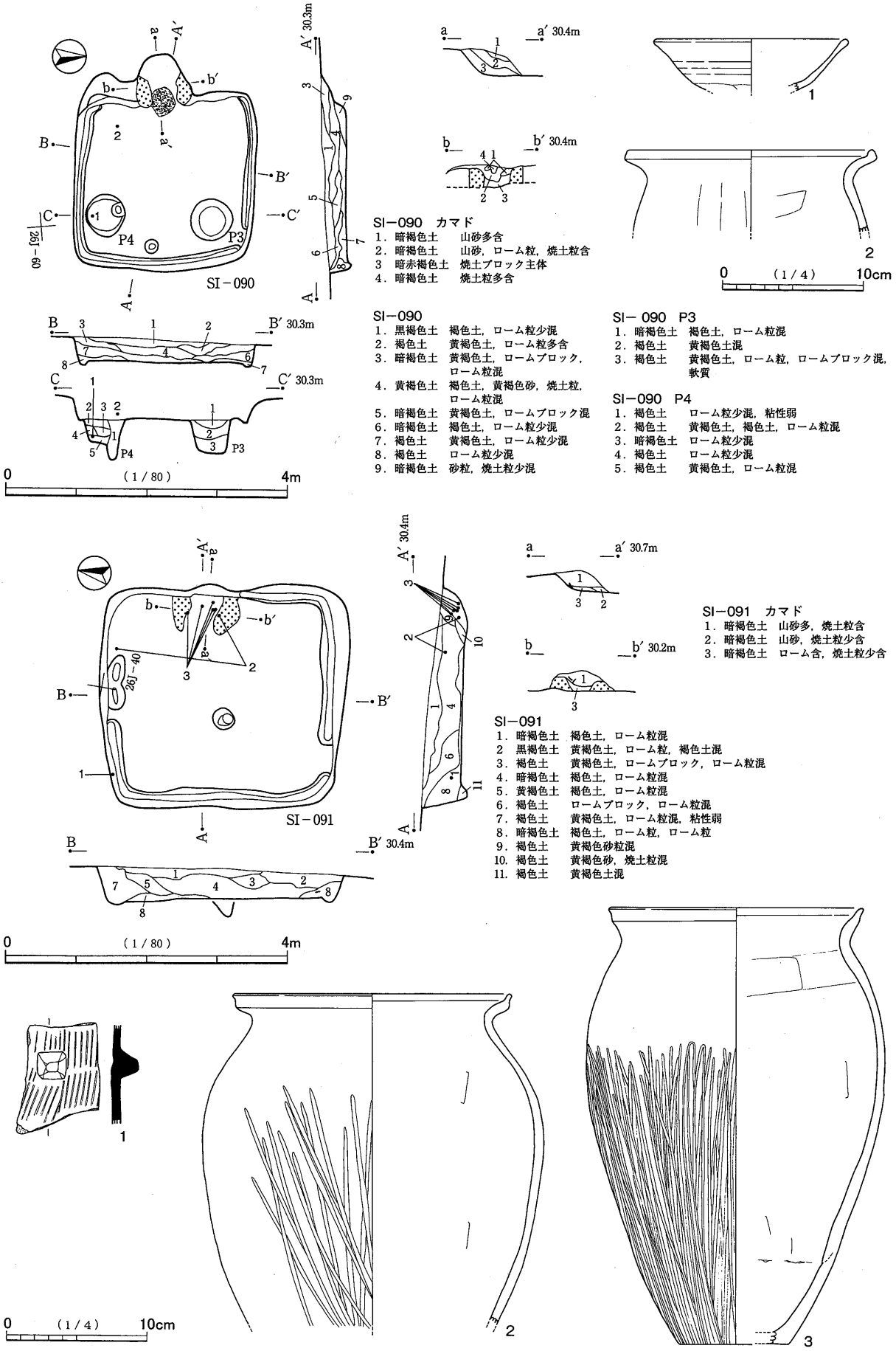
柱穴　出入口ピットが東壁際中央に位置する。径は20cm前後で，深さは17cmである。また東壁両隅側の床面から大きな掘りかたが検出された（P3・P4）。周囲に対応する掘立柱建物の柱穴がないことと，本住居の中で整った位置にあることから，本住居の柱穴と思われる。なお西壁側からは，組となる柱穴が検出されなかった。竪穴外に存在した可能性が考えられる。P3・P4の平面形は円形で，径は60cmである。床面からの深さは，P3が47cm，P4が36cmである。P4では，柱痕が土層断面で確認された（P4の1層）。

壁溝　カマド側の壁を除く三壁にほぼ巡っている。

カマド　西壁中央に位置する。カマド袖部は方形プランの内側にあまり張り出していない。左袖は若干遺存するが，右袖はほとんど残っていない。構築材は山砂を主体とする。左袖背後の壁も傾斜が緩やかであり，その内側に山砂を貼って袖を構築している。左袖内壁は赤色化しており，上部の所々にも赤色化した部分がみられる。火床部底面は，ロームが焼けて赤色化及び硬化している。床面からほとんど窪んでいない。カマド内堆積土下層は焼土ブロックを主体とする。火床部奥側付近は，木の根により若干の撹乱を受けている。

堆積土　ローム粒・ブロックをやや多く含む土層もあるが，レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。P4の柱痕はローム粒の含有が少量である。周囲の埋土はローム粒を含む褐色土・暗褐色土である。

出土遺物　少量の土器片が出土した。散在的で，出土層位も下層から上層に散っている。図示できた遺物は2点である。1はロクロ土師器杯，2は在地の土師器甕である。ともに小片から復元図化した。1は




第131図　SI－090・091

P4掘りかた埋土からの出土である。2は左奥側の下層から出土した。

SI－091（第131図，図版46）

位置　調査区東部北寄りの26J－40グリッドを中心に位置する。東方に支谷を臨み，西から東に若干下る緩斜面に立地する。

形状・規模　長さが3.2m，幅が3.6mで，やや横長の方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

床面　傾斜はないが，若干凹凸がある。硬化面はあまり明瞭でない。中央と右（南）壁側中央が若干硬化していると思われるが，他との差は少ない。なおロームと山砂により，左（北）壁側中央付近に貼床が施されている。

柱穴　中央に，径27cm，深さ24cmのピットがある。ほぼ対角線上の交点に位置するため，本住居の柱穴の可能性がある。出入口ピットは検出されなかった。

壁溝　左奥（北東）隅付近を除いてほぼ巡っている。左壁中央，右壁前（西）寄りに途切れる部分があるが，左壁側はわずかであり，本来は続くと思われる。

カマド　東壁左寄りに位置する。方形プランからほとんど突出していない。両袖が遺存するが，袖の幅が細く，特に左袖が顕著である。両袖は内部の中央上半が赤色化している。火床部底面は床面とほぼ同じ高さである。焼土が若干散っているが，赤色化した面は遺存していない。木の根により若干の撹乱を受けている。

堆積土　暗褐色土主体で，自然堆積と思われる。

出土遺物　図示できた遺物は3点である。1は千葉産の須恵器甑，2・3は常総型の土師器甕である。1は把手部分周辺の小破片である。把手は方台状であり，崩れていない。3は1/2の遺存であるが，口縁部から底部まで遺存している。底部は木葉痕がみられる。撹乱等の影響がなければ，より遺存が良かったと思われる。

3はカマド内から出土した。本来は正位の状態であったかもしれないが，判然としない。またカマド廃棄の祭祀に伴い，意図的に割られて置かれたことも考えられる。しかし断定しがたいため，単なる廃棄または遺棄としておきたい。2の一部もカマド内から出土したが，一部は左壁際に散っている。

図示できなかった土器片等の遺物量はやや少量である。東壁側にやや多く分布している。

SI－092（第132・133図，図版47）

位置　調査区東部北寄りの25J－37グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが4.2m，幅が4.0mで，やや縦長の方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

床面　西から東にわずかに下るが，ほぼ平坦といえる範囲である。中央が硬化している。

柱穴　主柱穴が4箇所検出された。また出入口ピットが南壁際中央に位置する。径は31cm×22cm，深さは20cmである。

壁溝　全周する。

カマド　付け替え後の新カマドが北壁東（右）寄り，付け替え前の旧カマドが西壁南（西壁に向かって左）寄りに位置する。新カマドの両袖は比較的遺存がよい。袖の大部分が方形プラン内に位置する。構築材は山砂を主体とする。両袖内側及び火床部底面は赤色化している。火床部底面は床面とほぼ同じ高さである。カマド内堆積土下層は焼土粒を多く含む。旧カマドは構築材の多くが除去されているが，一部が焼土混じりで出土した。煙道部の壁は方形プランから半円形に突出している。突出度は新カマドとほぼ同様

である。旧カマドの堆積土中層は焼土ブロックを多く含む。堆積土の一部は竪穴の壁面を埋め戻していると思われる。

**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体で，ロームの含有は少量である。自然堆積と思われる。

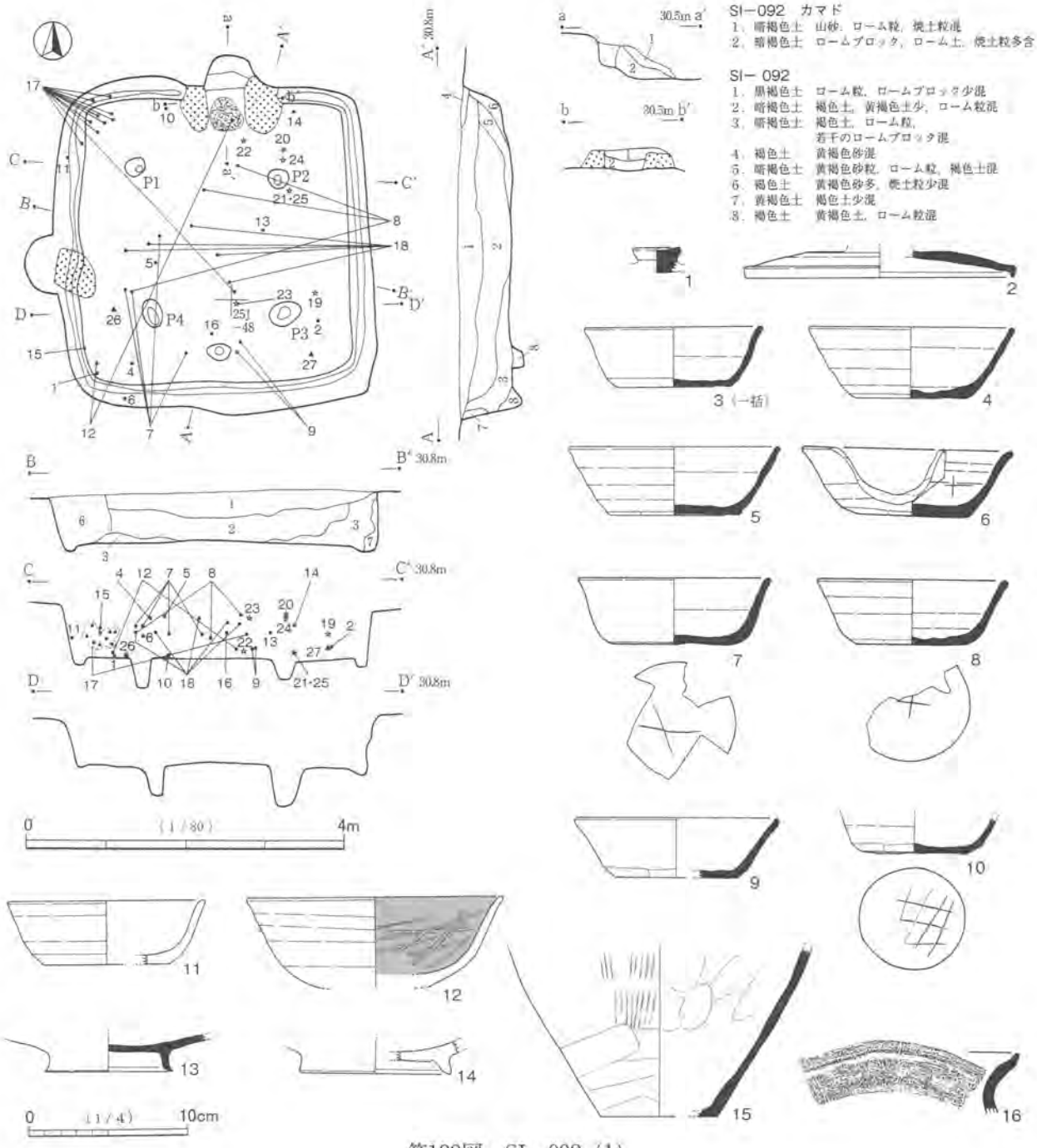
**出土遺物**　竪穴全体から多量に出土した。図示できた遺物は28点である。1～10・13・15・16・18は千葉産の須恵器で，1・2は蓋，3～10は杯，13は高台付盤または皿，15・16は甕，18は甑である。7と16は土師器的な色調であるが，質感から千葉産の須恵器と思われる。11・12はロクロ土師器杯，14はロクロ土師器高台付杯または皿である。17は常総型の土師器甕である。19～25は鉄製品で，19～21は刀子，22は鉄鏃である。23はノミまたはタガネか，鉄鏃である。24・25は棒状品で，製品を特定しがたい。26・27は砥石である。28は軽石の小片である。

蓋杯類のうち，6はかなり遺存のよいものである。また12は口縁・体部の遺存がよい。その他はあまり遺存がよくない。6は口縁・体部の一部を「U」字状に欠損する他は遺存する。遺存部分については欠損部から続く1片が接合するが，その他はひびが入る程度で割れていない。その接合箇所の隣接部分の体部内面に，「＋」の線刻がある。欠損部は打ち欠きされたものと思われる。また接合箇所も線刻との関係から打ち割りされた可能性があるが，やや断定しがたい。7・8・10も底部外面に刻書がある。7は「＋(×)」のヘラ書き，8は「＋（×)」の線刻である。10は4条線と3条線が格子状に交差する線刻で，九字切りの省略形と思われる。刻みが弱いため，若干不明瞭な部分がある。1はつまみ部分の破片であり，2と同一個体の可能性があるが，出土位置が離れており，断定しがたい。12は被熱により内外面とも器面の荒れが顕著であり，口縁部外面は煤が付着している。13の高台端部は尖っており，シャープな作りである。

甕甑類では，17の遺存が比較的よい。17は胴部外面に焼けた山砂が付着している。18の遺存はあまり多くないが，口縁端部から底部外周まで遺存する。把手は方台状で，丁寧な作りである。

19は切先側と茎尻側を欠損する。背関は直角に切り込みが入る。刃関も直角的と思われるが，浅く，錆と研ぎ減りによる丸みをもつため不明瞭である。刃部側の欠損部は錆に覆われており，古い時期の欠損である。20は茎尻から刃部根本側まで遺存する刀子である。背関・刃関部分は錆膨れが顕著であるが，直角に切り込みが入る。刃側の欠損が顕著である。21は茎の破片である。茎尻に近い部分であるが，茎尻は遺存しない。19と同一個体の可能性が考えられる。22は切先から茎まで，比較的よく遺存する鉄鏃である。茎は上部の遺存で，やや多く欠損している可能性がある。刃部は広身の三角形式で，逆刺をもたない。棒状部が短い短頸鏃である。棒状部は直線的であるが，茎に向かって徐々に広がっていく。篦被は四面関である。23はノミまたはタガネで工具とみる見方と，鉄鏃とみる見方の二通りが考えられる。鉄鏃の場合，鏃身は鏨根式である。刃部と茎からなり，刃部はほぼ遺存する。茎についてはやや判然としないが，上部で破損していると思われる。刃部は幅の変化が少ないが，茎側がやや広がる。横からみた切先は図の表裏面から「V」字状に尖る。茎は細く刃部との間に四面関を形成する。24は上部と下部末端を欠損するが，末端の欠損はわずかであると思われる。下半部はねじりが加えられている可能性があるが，錆膨れとも思われ，不明瞭である。釘または何らかの工具と思われる。25は細い棒状品である。鉄鏃の茎や紡錘車の紡軸等が考えられるが，判然としない。

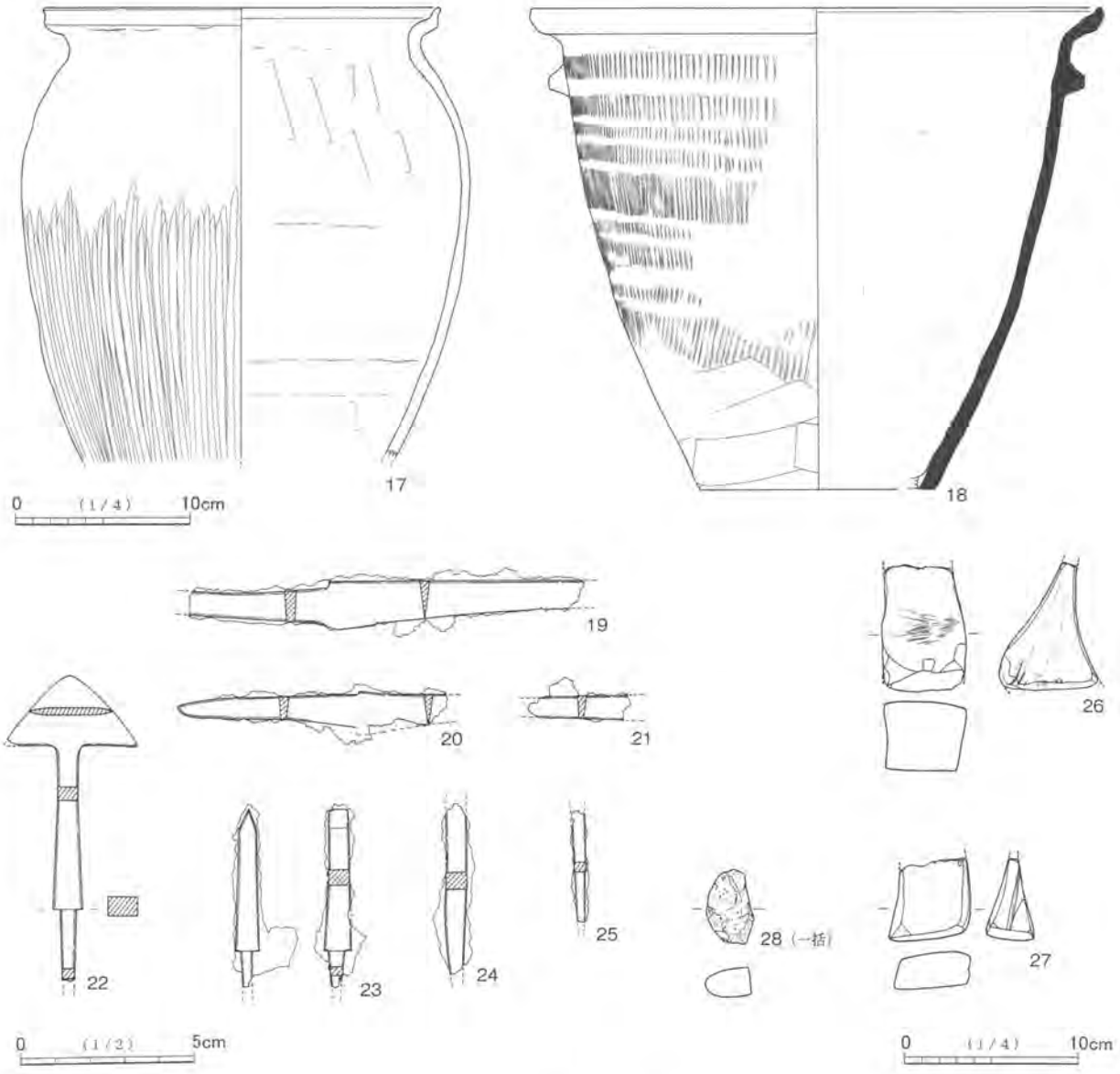
26・27とも片方の小口面側をもつ砥石で，中央の薄くなった部分で折れたか割られたものである。材質はともに流紋岩である。26の折損面は若干使用されていると思われる。27の折損面についてはやや不明瞭であるが，特に使用されていないと思われる。その他の面は26・27とも使用されている。筋状の研ぎ痕も




第132図　SI－092（1）

みられる。26は強弱があるが各面にみられ，27は図の右側面に顕著である。

10はカマド左袖外側の床面から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。線刻をもち，カマド廃棄の祭祀に伴う遺物の可能性がある。その場合，口縁・体部は全周打ち欠きされたことも考えられるが，判然としない。12の一部はカマド内から出土し，一部は南西（左前）隅部下層に散っている。また6は左前隅部寄りの南壁際から出土した。層位は中層であるが，ある程度土砂が堆積した時点で壁上方から落下したものならば，本住居の遺物であり，祭祀的な様相ももつといえよう。6・10以外で刻書をもつ7・8の出土層位は上層であり，単なる廃棄であろう。カマド・竪穴住居廃棄の祭祀という視点からみて，10はやや可能性があるが，・12・6は断定しがたい。その他，遺存のよい17も中・上層からの出土である。また鉄製品はカマドの前方から比較的まとまって出土したが，層位は上層が多い。26は左（西）壁側やや前寄




第133図　SI－092（2）

りの床面から出土し，27は右前（南東）隅近くの下層から出土した。

出土遺物全体をみると，広域に散っているものが目立つ。また出土層位は床面から確認面まで及ぶが，中・上層から出土するものが多い。祭祀的様相の可能性のある一部を除いて，出土遺物は概して周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－093（第134・135図，図版47）

位置　調査区東部北寄りの26J－41グリッドを中心に位置する。東方に支谷を臨み，西から東に下る緩斜面に立地する。住居構築時の地山はより緩やかであったが，その後の流失により，傾斜が強くなったものと思われる。

形状・規模　長さが4.1mで，確認面からの深さは最も遺存のよい西壁際で80cmである。東壁側が流失しているため，幅が不明である。プランはやや丸みをもつ方形である。

床面　東側は一部に床面の雰囲気を残すが，あまり遺存がよくない。カマド前から西側中央は遺存がよく，平坦である。ただし西壁際中央の床面が，周囲よりも3cm～7cm高まっている。その長さが1m強，

幅が50cm～60cmである。カマド前から中央が硬化している。

柱穴　出入口ピットが南壁際に位置する。東壁が欠損しているので，やや不明瞭であるが，右（東）寄りに位置すると思われる。径は25cm前後で，深さは15cmである。主柱穴が西側で２箇所検出された。北東側は土坑状であるが，主柱穴を含むと思われる。南東側は検出されなかった。

カマド　北壁に位置する。壁での位置は中央か，やや西（左）寄りと思われる。両袖の前側はやや遺存がよくないが，奥側は比較的遺存がよい。構築材は山砂を主体とする。両袖内側は赤色化及び硬化している。火床部底面は床面より若干窪み，焼土ブロックがみられる。カマド内堆積土下層は山砂・焼土粒・焼土ブロックを多く含む。

堆積土　黒褐色土主体で，ロームの含有は少量である。自然堆積と思われる。

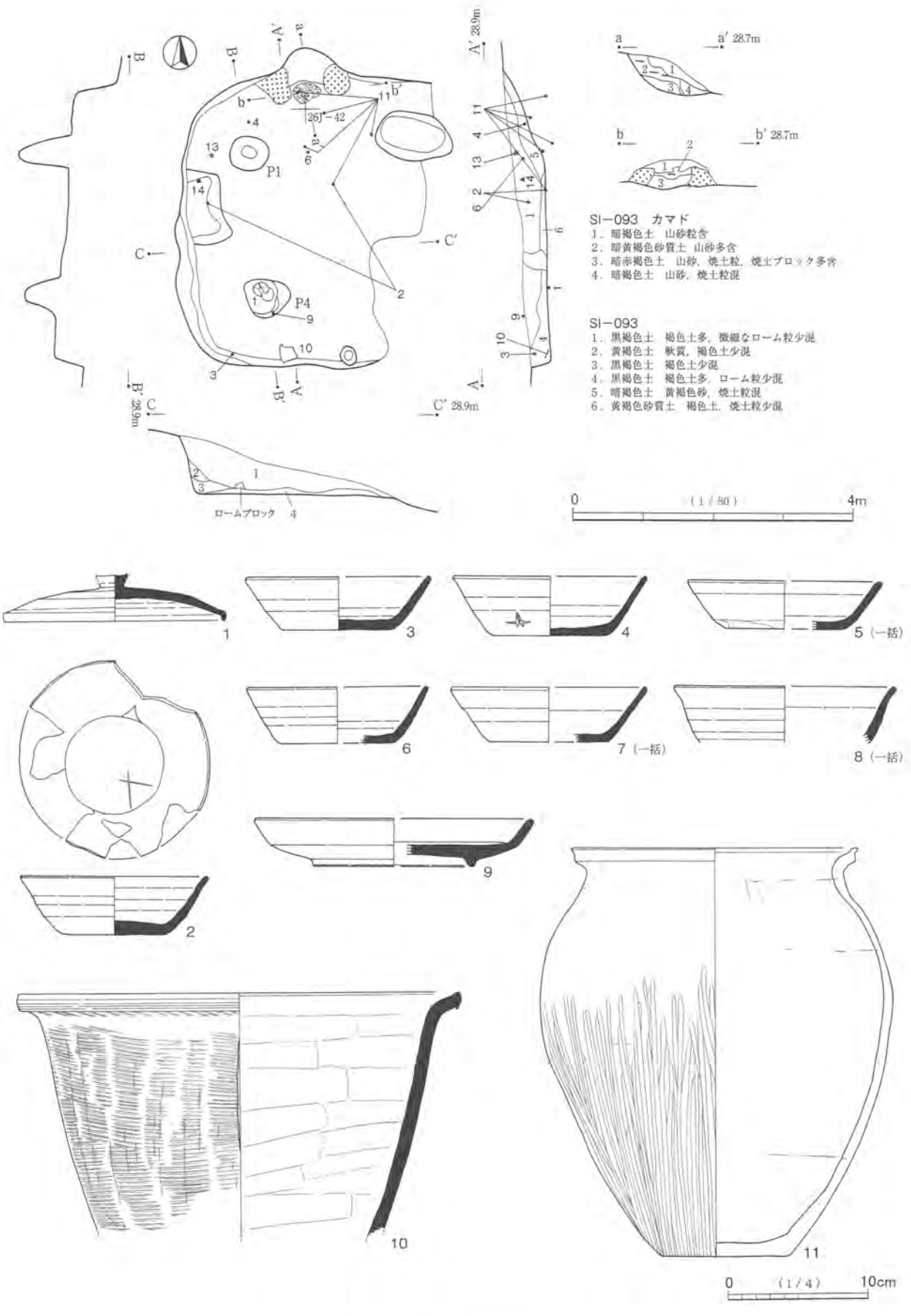
出土遺物　竪穴全体から多量に出土した。東側の分布がやや少ないが，堆積土の遺存が少ないためであろう。図示できた遺物は14点である。１～９は新治窯産の須恵器で，１は蓋，２～８は杯，９は高台付盤である。10は色調が橙褐色であり，千葉産と思われる須恵器甕または甑である。11・12は常総型の土師器甕である。13は鉄鏃，14は砥石である。

１は接合して完形の土器である。つまみを境にやや大きく破損するが，口縁部の２箇所が細かく割れている。そのうちの１箇所は不整な弧状を呈し，打ち割りされたことも考えられる。２はやや遺存のよい土器である。底部内面に「＋（×）」の線刻がある。４も体部外面に１条線と２条線が直交する線刻がある。横からみて「キ」，正位で「サ」に似た形の記号である。３は被熱により，褐色味を帯び，底部内面の剥離が顕著である。５は内外面に火襷がみられる。１・２以外はあまり遺存がよくない。特に４～８は小片から図化した。

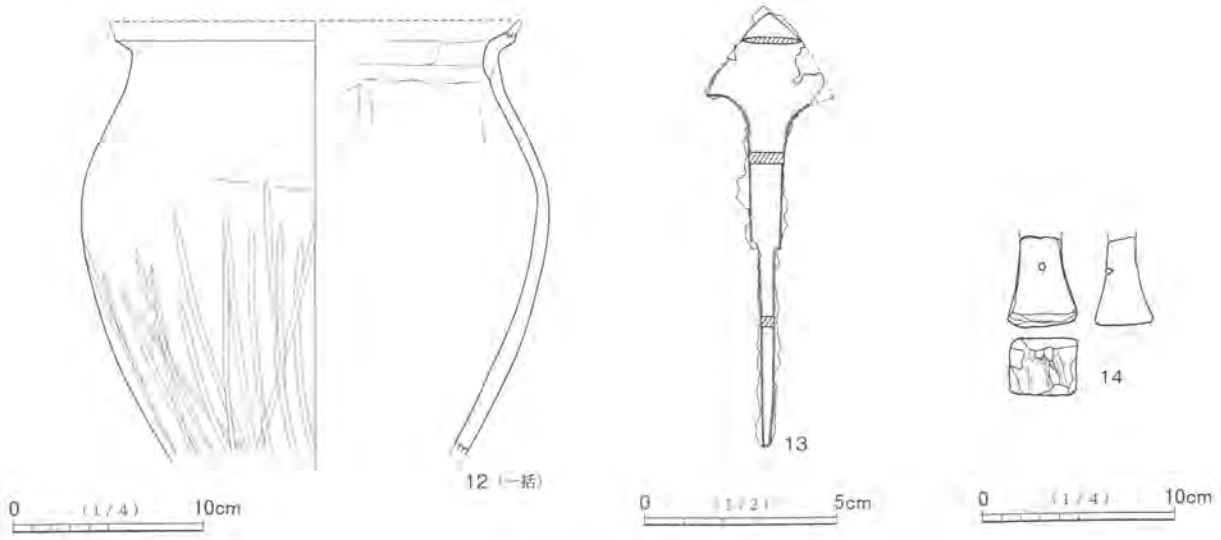
10も一部の遺存である。胴部内面の当て具痕がナデによってかなり弱まっている。また指紋が目立つ。胴部外面には，縦の１条線が1.5cm～２cm程度のやや規則的な間隔で，８条～10条程度みられる。これらは焼成前のもので，製作に関わるものと思われる。一方，それとは別に縦方向及び斜め縦方向の筋状痕跡が集中する部分が２箇所ある。焼成後のもので研ぎ痕と思われる。破片を砥石に転用したものであろう。11は甕としては比較的遺存のよいものである。

13は切先から茎尻までかなりよく遺存する鉄鏃である。ただし鏃身の一部を欠き，錆による劣化が激しい。鏃身は広身の三角形式である。逆刺をもたず，棒状部から徐々に広がって身左右の端部に至るため，若干菱形的な形態である。棒状部がかなり短い短頸鏃である。棒状部は直線的で，茎との境は広がらないと思われるが，錆膨れが著しく，やや不明瞭である。茎は棒状部よりも長い。茎は巻き付けられた植物繊維が若干遺存している。14の石材は流紋岩である。片方の小口面側が遺存する。本来は小型の方柱状の砥石であるが，研ぎ減りして薄くなった部分で折れたか割られたものである。薄い部分に孔があるが，貫通していない。穿孔して提砥にすることが意図されたが，何らかの事情により断念されたものである。その理由は判然としないが，石材が比較的硬質であるためかもしれない。折損面はあまり使用されていないが，他は全面が使用されている。小口面には，筋状の研ぎ痕も多くみられる。

１はP4内から倒位で出土した。出土の高さは，床面とほぼ同じである。11の主要部分はカマド内中位から横倒れの状態で出土した。底部はカマド前側，口縁部は奥側に向けている。接合する破片がカマド前方に散っている。２は一部の破片が床面からの出土であるが，一部は中位からの出土である。10は南壁際下層からやや斜めに傾いて出土した。




第134図　SI－093（1）




第135図　SI－093（2）

出土遺物のうち，１は完形で柱穴内からの出土であることから，竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性がある。また11はカマド廃棄の祭祀に関わるものか断定しがたいが，比較的遺存がよいことから，本住居で使用されたものが遺棄された可能性がある。それら以外は概して中・上位からの出土であり，周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－094（第136図，図版47）

位置　調査区東部北寄りの25J－24グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.2m，幅が3.3mの方形をなす。確認面からの深さは20cmで，かなり浅い。

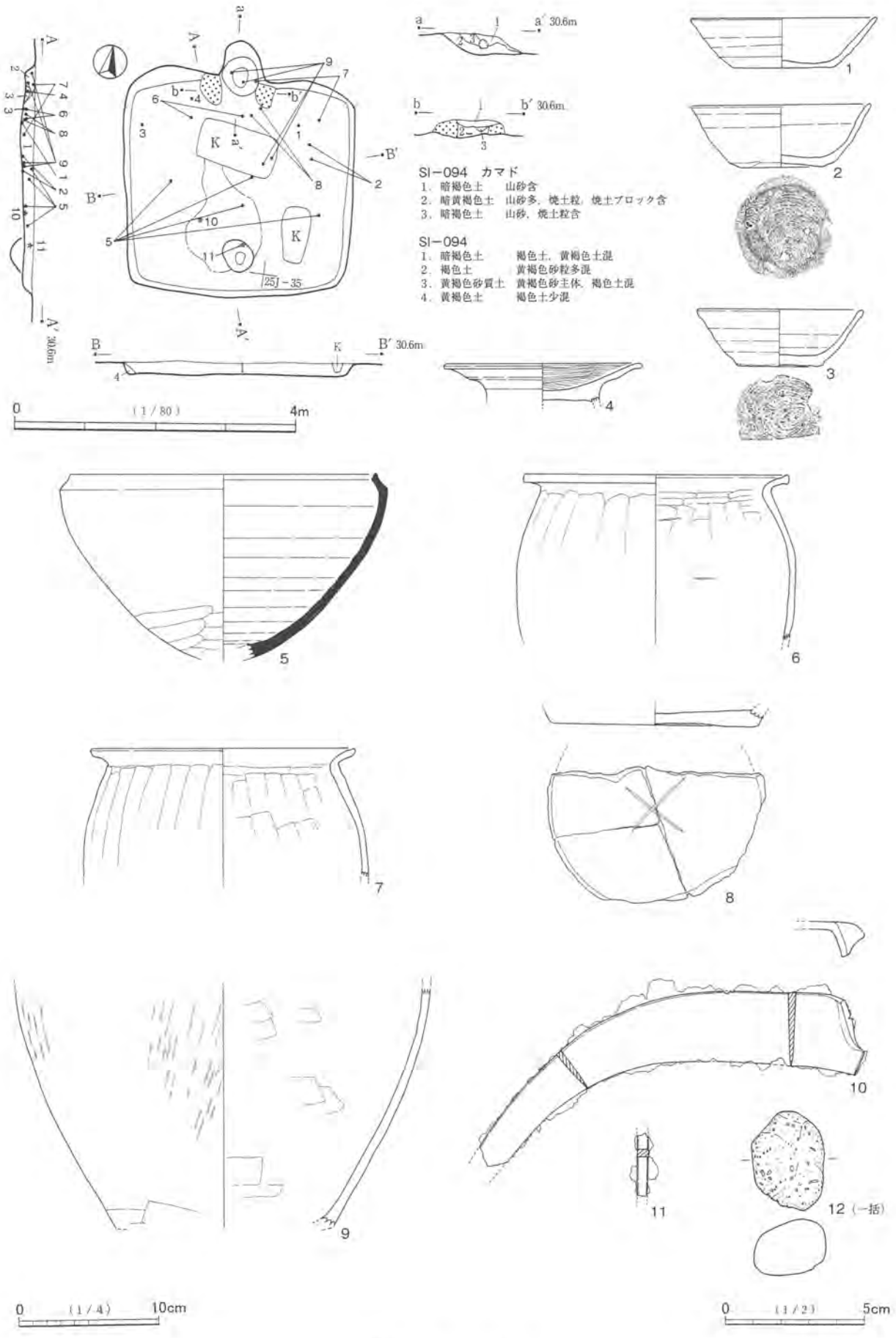
床面　中央カマド寄り部分と南東側に撹乱を受けている。床面は平坦で，中央が若干硬化している。ただし硬化面は撹乱の影響を受けて，中央側の遺存が悪い。床面はソフトローム中に構築されたため，壁側は軟質である。

柱穴　出入口ピットが南壁際中央に位置する。径は49cm×41cmで，深さは14cmである。柱穴はすり鉢状に掘られ，底面はハードローム層に達している。

カマド　北壁中央に位置する。両袖が遺存するが，右袖の遺存があまりよくない。ただし右袖は外壁側に山砂が若干張り出している。構築材は山砂を主体とし，上部は混じりけが少ないが，下部はやや暗褐色土を含む。両袖内側はやや赤色化している。火床部底面は床面よりわずかに窪んでいる。底面上には，径10cm強程度の大きな焼土ブロックの塊があり，その上部に伏せた甕（９）が置かれていた。甕は両側から押されてつぶされたような状態であった。焼土ブロックは土製支脚であり，９はその補助として使用された支脚転用の土器と思われる。カマド内堆積土下層は山砂・焼土粒を多く含む。

堆積土　暗褐色土主体である。堆積土が薄いため，やや判然としないが自然堆積と思われる。

出土遺物　竪穴全体から出土した。出土量は多量ではない。しかし比較的規模が小さく，浅い竪穴住居のわりには多いといえよう。図示できた遺物は12点である。１～３はロクロ土師器杯，４はロクロ土師器高台付皿である。５は千葉産の須恵器で，鉄鉢形土器である。６・７は在地の土師器甕である。８・９も甕で，土師器としたが，須恵器的な要素もみられる土器である。10・11は鉄製品で，10は鎌である。11は棒状品で用途不明である。12は軽石である。


SI－094　カマド
1．暗褐色土　山砂含
2．暗黄褐色土　山砂多，焼土粒，焼土ブロック含
3．暗褐色土　山砂，焼土粒含
SI－094
1．暗褐色土　褐色土，黄褐色土混
2．褐色土　黄褐色砂粒多混
3．黄褐色砂質土　黄褐色砂主体，褐色土混
4．黄褐色土　褐色土少混
25J－35
0　(1/80)　4m
0　(1/4)　10cm
0　(1/2)　5cm
12（一括）

第136図　SI－094

3は内面に油煙が付着しており，灯明具として使用されたものである。3の底部外面は回転糸切り後無調整であるが，1はほぼ全面に回転ヘラケズリが施され，2は外周に手持ちヘラケズリが施されている。4は高台の突出が低いが，底部が全体に突出しているため，輪状の貼り付け高台と同様の高さとなっている。内面はヘラミガキが施されている。

5は口縁端部がやや鋭く，全体に端整な作りである。内外面はかなり褐色味をもつ色調であるが，断面内部の色調は灰色味をもち，三層の色調をなす。6・7は胴部内面に薄いハケ目状の痕跡がみられるが，木口を使用した縦方向のヘラナデであろう。6と7は器形・大きさが似ており，内面の調整技法も同様であることから，同一個体と思われる。8は底部外面に「＋（×）」のヘラ書きがある。底径は大きく，外周に繊維状・砂目状の痕跡がみられる等，須恵器的な作りである。底部外面中央はナデが施されているが，ヘラ書きを記入するためであろう。内面は被熱により，器面の剥落が著しい。9は胴部外面に平行タタキが施されているが，ナデ・ヘラケズリによって消され，痕跡的である。胴部内面の当て具痕もヘラナデによって消され，部分的な遺存である。被熱により，器面の剥落が顕著な部分がある。8・9は同一個体と思われる。

10はやや小型の鎌である。遺存がよいが錆が進んで，非常にもろい。切先は遺存しているようにも思われるが，錆と薄いため不明瞭である。また基部の刃部側は刃をつぶしているのかもしれないが，同様の理由で中央・切先側の刃部と明瞭な差がみられない。11は鉄鏃の茎や紡錘車の紡軸，釘等が考えられるが，特定しがたい。12は一部にやや強く赤みを帯びた部分がある。火を受けたと思われる。

8・9はカマド内及び周辺から出土した。9の一部は支脚転用品である。祭祀的様相は不明であるが，本住居で使用されたものが遺棄されたとみられる。5は特殊な土器であるが，中央から東西にやや広く散って出土し，祭祀的様相を認めがたい。8・9以外の出土遺物は本住居で使用された遺物か不明であり，概して周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－095（第137・138図，図版48）

**位置**　調査区東部北寄りの26J－21グリッドを中心に位置する。東方に支谷を臨み，現状では西から東に下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　長さが4.1m，幅が4.4mで，やや横長の方形をなす。確認面からの深さは30cm～80cmである。

**床面**　西から東に若干下る。中央から西側は床面までやや深く，全体に硬質であるが，特に中央が硬化している。

**柱穴**　主柱穴が4箇所検出された。柱穴の形態から柱の建て替え，または撤去が考えられる。出入口ピットは検出されなかった。また古いものが，東壁側に存在する可能性があるが，重複遺構に切られているため，検出されなかった。

**壁溝**　欠損部分が不明である他は巡っている。全周すると思われる。

**カマド**　カマドの痕跡は北壁中央と西壁中央の2箇所にみられる。どちらも破壊されており，両袖部等は遺存していない。しかしその他の遺存は，北カマドの方がよいことから，北カマドが付け替え後の新カマド，西カマドが付け替え前の旧カマドであろう。北カマドの底面は床面よりわずかに窪んでいる。奥側には赤色化した面がみられ，その中央は特に強く焼けている。底面上にも赤色化した山砂が堆積しているが，前側は焼土粒・焼土粒混じりの暗褐色土が堆積し，底面はあまり硬化していない。

西カマド部分は，焼土ブロックが多量に混入した暗褐色土が堆積しており，北カマド使用時には既に埋

め戻されていたと思われる。火床部は遺存せず，壁溝も巡っている。

**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体で，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　竪穴全体から多量に出土した。図示できた遺物は29点である。1～4・6～11は千葉産の須恵器杯で，5は南比企窯産と思われる須恵器杯である。12･13はロクロ土師器杯，14は非ロクロの土師器杯，15は千葉産の須恵器高台付杯である。16はロクロ土師器で蓋と思われるが，高盤の可能性も考えられる。17・18・20は須恵器甕，19・23は須恵器甕または甑である。産地は17・23が千葉産である。18～20はやや不明瞭であるが，新治窯産と思われる。21・22は常総型の土師器甕である。24～28は鉄製の刀子，29は鉄鏃である。

杯のうち，4・5・13・14には刻書がある。4は底部外面に「＋（×）」のヘラ書き，5・13・14は体部内面に「＋」の線刻がある。5は回転糸切り離し痕がよく残る。外周の端がやや磨耗しているが，切り離し後はほぼ無調整の杯である。胎土は白色針状物を若干含む。8・10は火襷がみられる。杯類には，完形に近く遺存するものはないが，1～3は比較的遺存がよい。しかし欠損部に意図的な様相はうかがえない。16は内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。口縁端部はやや下方に突出し，内面側は沈線状になっている。蓋としては大型の土器であり，やや特異である。香炉の蓋であろうか。あるいは高杯（盤）の可能性があるかもしれない。

18は胴部・底部の遺存が比較的よい甕である。19・20は同一個体の可能性がある。22は口縁部から胴部下位まで半周前後が遺存する甕である。

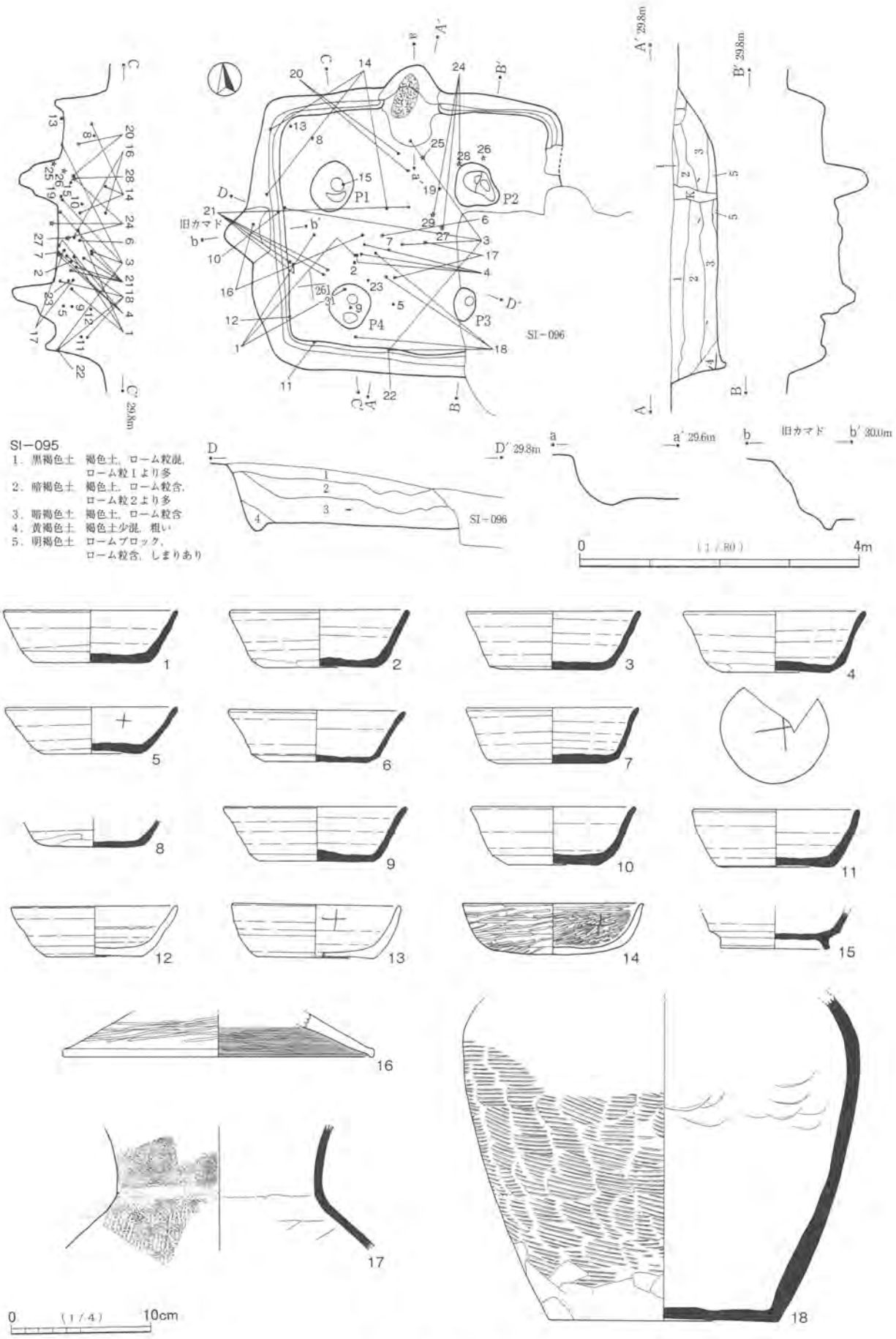
刀子のうち，24は刃部がほぼ遺存する。茎はほとんどを欠損するが，関部分は遺存する。背関は深く直角に切り込みが入る。刃関は浅く，錆のため不明瞭であるが，わずかに直角をなすと思われる。刃部が長い製品である。刃部は切先側を除いてやや曲がっている。25も茎の一部と刃部が遺存する。錆のためもろくなっているが，切先も遺存する。関部分の形態は不明瞭であるが，ともに深い切り込みをもたない。刃関は緩やかな弧を描く。背関もほぼ同様であるが，わずかに角を取っていると思われる。26・27は切先側と茎尻側を欠く破片である。26の背関・刃関，27の背関は直角をなす。27の刃関は錆・欠損のため判然としない。28は切先部分の破片である。27または26と同一個体の可能性が考えられる。29は茎の多くを欠損するが，鏃身・棒状部が遺存する鉄鏃である。錆膨れが著しく，形態がやや不明瞭である。鏃身は長三角形または柳葉式である。鏃身の棒状部寄り部分が最も幅が広く，緩やかな弧を描いて棒状部に至る。斜めの両関である。棒状部は鏃身よりも短い短頸鏃である。棒状部と茎との境は錆のため不明瞭であるが，棒状部はやや広がると思われる。

刻書をもつ土器のうち，13は北西（左奥）隅床面からの出土である。4は中央床面からの出土である。また5は南壁側中央下層から出土し，14は北西側の中・上層にやや広く散って出土した。13・4は床面出土であるが，割れて遺存もあまり多くないため，祭祀的な様相をもつ可能性は低いと思われる。鉄製品がカマド右前方から中央にかけて，ややまとまって分布している。出土層位は，25・26・29が床面・下層，27・28は中層である。

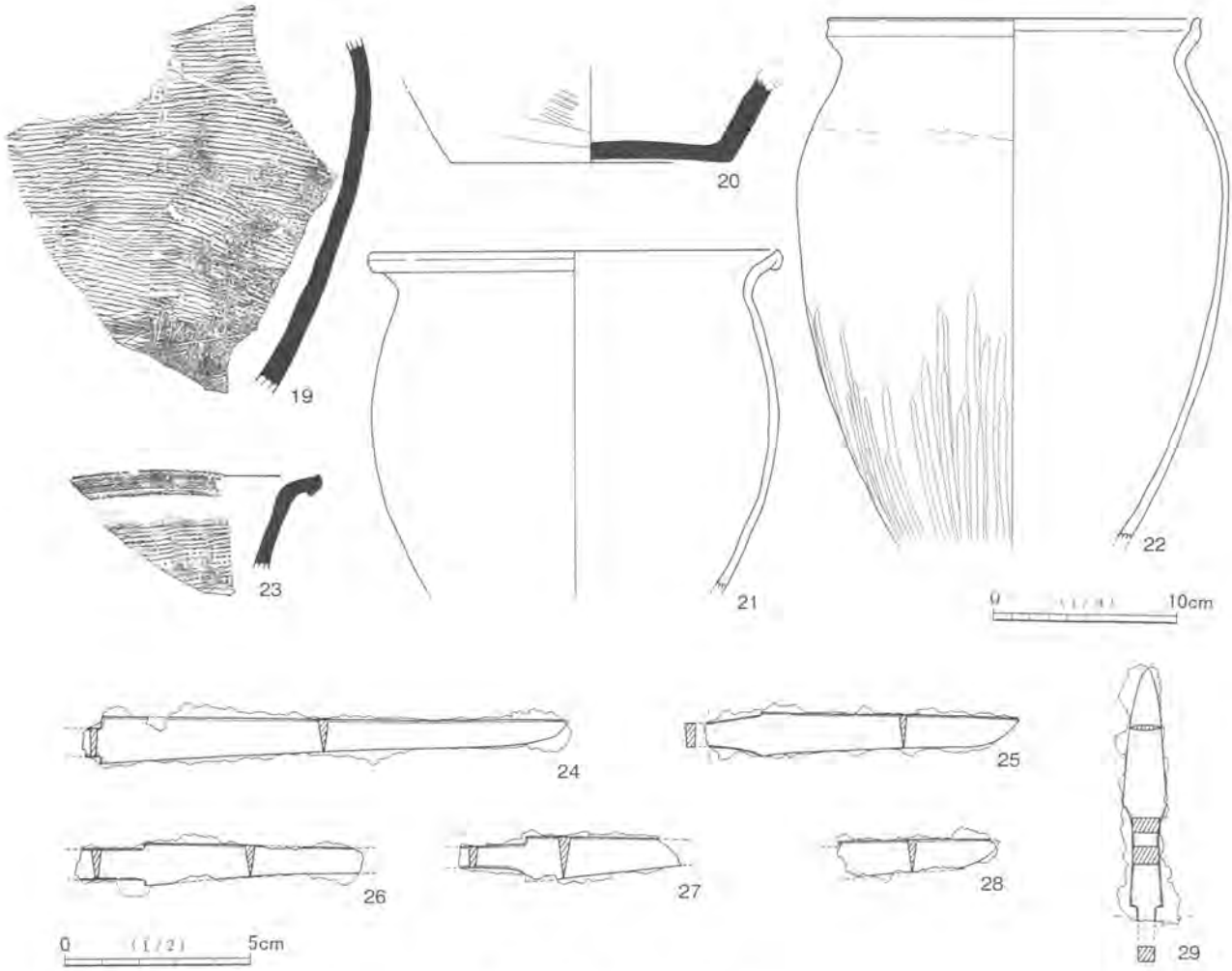
出土遺物は，上記のように床面・下層から出土するものもあるが，中・上層から出土するものも少なくない。概して周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　南東側でSI－096と重複し、本住居が切られている。

**SI－096**（第139図，図版48）




第137図　SI－095（1）




第138図　SI－095（2）

位置　調査区東部北寄りの26J－31グリッドを中心に位置する。東方に支谷を臨み，現状では西から東に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　長さが2.9m，幅が3.4mで，横長の方形をなす。確認面からの深さは20cm～80cmである。

床面　比較的平坦であるが，西から東にわずかに下る。中央が若干硬化している。

柱穴　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は14cm～17cm，深さは12cmである。

壁溝　出入口部の南壁中央で途切れる他は，カマド部分を除いて巡っている。

カマド　北壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。左袖上部の壁側は確認面から遺存するが，右袖は若干欠損している。構築材は山砂を主体とする。両袖内側は赤色化している。火床部底面も中央に焼土が散っている範囲がみられる。底面は床面よりわずかに窪むが，高低差は少ない。カマド内堆積土下層は焼土粒を多く含む。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体で，自然堆積と思われる。

出土遺物　カマド前方から多く出土した。南側はやや少ない。図示できた遺物は11点である。１～３は須恵器蓋で，１・２は新治窯産，３は千葉産である。４～６は千葉産の須恵器杯，７・８はロクロ土師器杯である。９は千葉産の須恵器甕，10は新治窯産の須恵器甕，11は武蔵型の土師器甕である。

蓋杯はいずれも一部の遺存である。８は底部から体部下位の内面に煤と思われる黒色物が付着している。

9はやや小振りの甕である。遺存は多くないが，口縁部から胴部中位までは半周弱遺存する。11は口縁部から胴部中位まではやや遺存がよい。口縁部は「コ」の字にやや近い形態である。最大径付近に焼けた山砂が付着している。

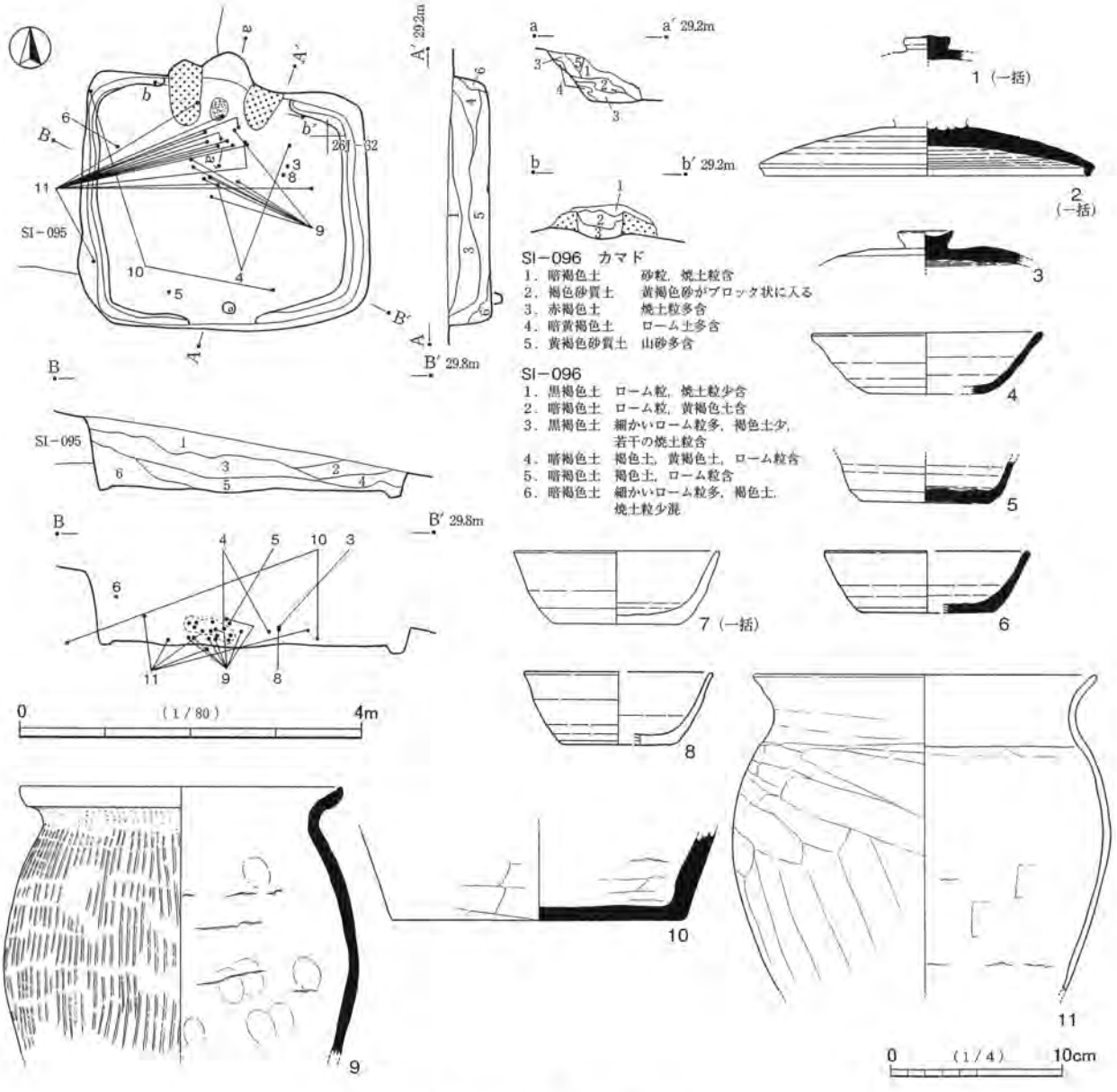
9・11はカマド前方の下層・中層から出土した。ともに割れて散っているが，比較的まとまった分布状態である。

**重複遺構**　西側でSI－095と重複し，本住居が切っている。

SI－097（第140図，図版48）

**位置**　調査区東部北東の26J－04グリッドを中心に位置する。東方に支谷を臨み，西から東に下る斜面に立地する。調査区内ではかなり標高の低いところに構築されている。

**形状・規模**　長さが3.8mの方形をなす。確認面からの深さは最も遺存のよい西壁際で60cmである。東壁側が流失しており，幅が不明である。




第139図　SI－096

床面　遺存している西側は平坦で，堅くしまっている。中央に顕著な硬化面がみられるが，重複遺構が存在することと，斜面に立地することによって，一部の遺存である。

柱穴　主柱穴が４箇所検出された。西側の柱穴はかなり隅に近い位置である。東側の柱穴も同様とすると，本住居の幅が3.8mからそれを若干下回る程度と思われる。４箇所の主柱穴は，いずれも底面がすり鉢状である。出入口ピットは検出されなかった。

壁溝　西壁・南壁で巡っている。本来的には全周することも考えられるが，東壁側が斜面であるため，断定しがたい。

カマド　北壁西寄りに位置し，左袖と北西隅部間の間隔は狭い。方形プランからの突出は小さい。両袖の構築材は山砂を主体とし，混じりけが少ない。両袖内側の特に上半部が強く赤色化している。火床部底面はやや奥側で焼土・炭化粒を検出したが，顕著な赤色化・硬化面は遺存していない。底面は床面とほぼ同じ深さで，平坦である。

堆積土　黒褐色土主体で，自然堆積と思われる。

出土遺物　遺存のよい西側では，満遍なく出土している。東側も本来的にはかなり分布すると思われる。遺存のよい遺物がカマド周辺でみられる。図示できた遺物は11点である。１・２・３は新治窯産の須恵器杯，４は非ロクロの土師器杯，５は新治窯産の須恵器甕である。６～８は在地の土師器甕，９は常総型の土師器甕である。10は砥石，11は軽石である。

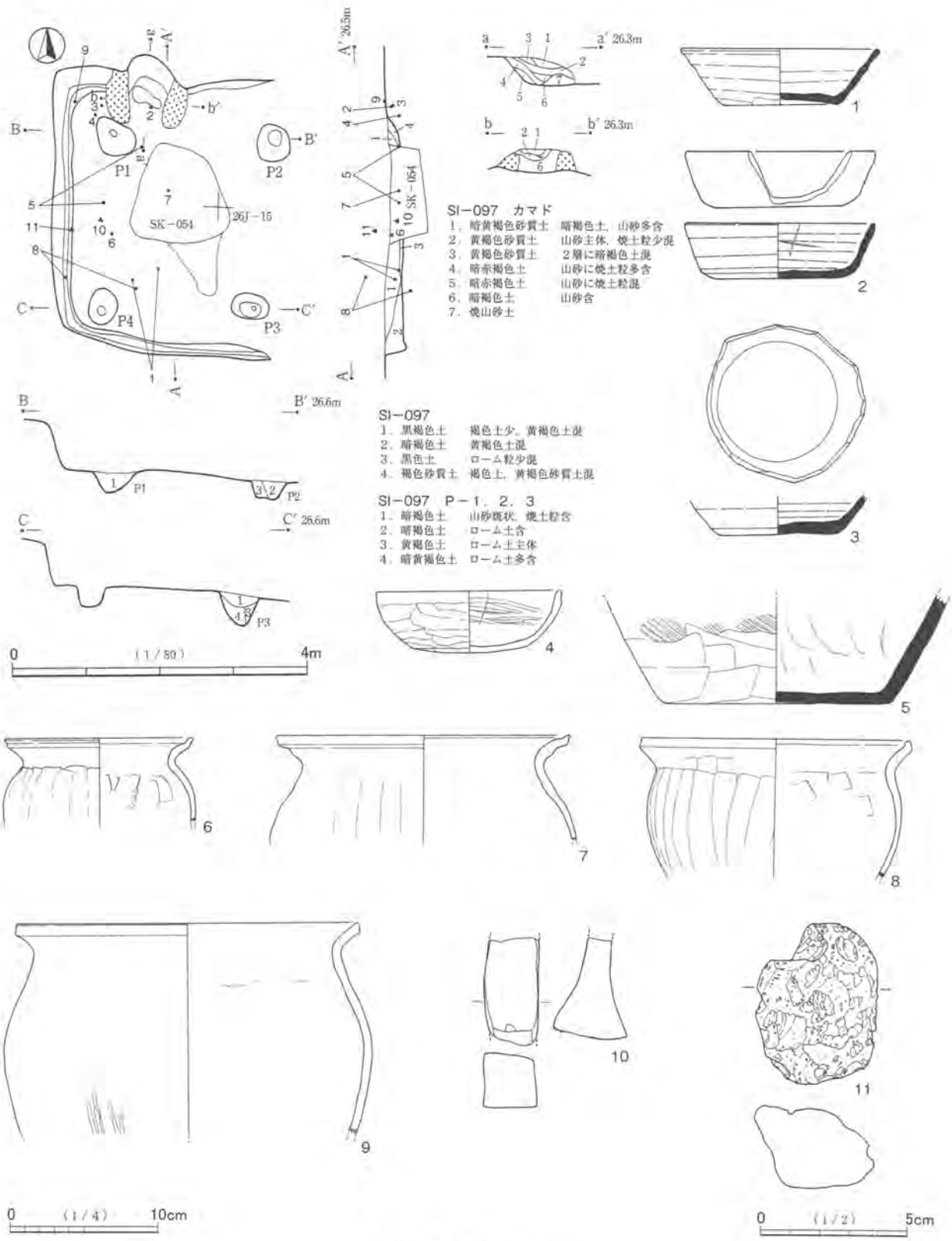
１・２・４はいずれも口縁・体部の一部が欠損するのみで他は遺存する良好な土器である。欠損部の形態はいずれも不整で，１が逆三角形状，２が逆台形状，４が弧状を呈する。１の遺存部は数片に割れており，２も口縁・体部の１片が欠損部に続いて割れている。４は欠損部以外には，口縁端部の一部がわずかに欠けるだけで，割れていない土器である。２・４はともに口縁・体部内面に「＋」の線刻がある。線刻と欠損部の位置は比較的近く，２の線刻は欠損部に向かって左側，４は右側にある。２の線刻は大きく遺存する方に施されている。４は被熱により，器面が全面磨耗している。２は火を受けているか判然としない。以上の状況から，２・４の欠損部は打ち欠きされたものと思われる。１もその可能性があるが，遺存部分が割れていることと，出土状況に特異性がないため，やや断定しがたい。３は口縁・体部の全周を欠損する土器である。破断面は凹凸が著しいが，大きくみれば比較的水平である。一部弧状に連続する部分があり，全周打ち欠きされたものと考える。器面は荒れており，被熱によるものと思われる。

杯に対して，甕の遺存はいずれもあまり良好でない。６は小型の甕で，８もやや小型品である。

10の石材は流紋岩である。片側の小口面が遺存する。薄くなった部分で欠損する。折損面は使用されていないが，その他は全面が使用されている。小口面にややざらつきがあるが，他の４面は滑らかである。

２はカマド内火床部中層から正位で出土した。やや傾くが，その傾きは少ない。なお２の１片の破片は出土時点で割れているが，主要部分と分離していない。２は厚い山砂の上にのった状態で出土した。山砂は２に接した部分はあまり強く赤色化していないが，その下方はかなり赤色化している。４はカマド左袖外側，北西隅部のほぼ床面上から，やや傾いた正位で出土した。また３は左袖に接する袖外側のほぼ床面から，わずかに傾いた倒位で出土した。１はやや南西寄りの床面・下層から出土した。甕は散在的な出土である。

以上の遺物のうち，２～４はカマド廃棄の祭祀に関わるセットの遺物と思われる。２は正位の出土であり，山砂も充填されていないため，支脚転用ではないと考える。なお３・４はカマド上方等から落下して




第140図　SI−097

きた可能性も若干考えられるが，その場合でもカマド廃棄の祭祀に関わる遺物と考える。それら以外では，1が祭祀に関わる遺物かもしれないが，出土状況からは断定しがたく，遺物の様相からも決定的ではない。他の土器には特に祭祀的様相がうかがえず，周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　カマド前方から中央部でSK−054と重複し，本住居が切られている。

SI－098（第141図，図版49）

位置　調査区東部北端の26J－00グリッドを中心に位置する。東方に支谷を臨み，西から東にわずかに下る緩斜面に立地する。

形状・規模　長さが推定3.1m，幅が3.4mの方形をなす。確認面からの深さは15cmである。確認面から床面まで浅い竪穴住居のため，東壁側が流失しており，長さが推定値である。

床面　中央から西側は遺存しているが，東側を若干損なっている。遺存部分はほぼ平坦で，中央がやや硬化している。

壁溝　床面が遺存しない東側を除いて，巡っている。本来的には全周することが考えられる。

カマド　カマドの存在は不明瞭である。東壁際と思われる部分に焼土範囲がみられ，すり鉢状に若干窪んでいる。径は29cm～33cmで，床面からの深さは９cmである。カマドの痕跡の可能性があるが，断定しがたい。位置的に出入口ピットとも思われるが，対向する西壁側にカマドの痕跡がうかがえない。

堆積土　暗褐色土主体である。遺存が少ないため，自然堆積か人為的堆積か不明である。

出土遺物　少量の遺物が散在的に出土した。図示できた遺物は４点である。１・２はロクロ土師器杯，３は千葉産の須恵器甕である。４は棒状の鉄製品で，製品を特定しがたい。

１は内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。２は土師器としたが，器面がざらつき，千葉産須恵器の可能性もある。３の底部外面はナデ・ヘラケズリが施されており，土師器的な調整がみられる。内面の剥離が著しい。１・２は小片から図化した。３も一部の遺存である。４は棒状品の中途から端部まで遺存する。鉄鏃の茎，紡錘車の紡軸等が考えられる。細長いため，釘の可能性は低いと思われる。

堆積土が薄いため，１～４の出土層位は床面・下層であるが，散在的な出土である。

SI－099（第141図，図版49）

位置　調査区東部北端の25J－17グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.3mの方形をなす。幅が重複遺構のため不明である。確認面からの深さは10cmであり，極めて浅い竪穴住居である。

床面　平坦で，中央がやや硬化している。

壁溝　重複遺構により不明な部分以外は巡っている。全周するものと思われる。

カマド　北壁中央に位置する。構築材の山砂や焼土が若干散っているのみで，ほとんど遺存しない。比較的明瞭に山砂の塊が残る部分が両袖部分とも思われるが，判然としない。

堆積土　黒褐色土主体である。遺存が少ないため，自然堆積か人為的堆積か不明である。

出土遺物　少量の遺物が散在的に出土した。図示できた遺物はない。

重複遺構　西側でSD－014と重複し，本住居が切られている。西壁側の壁は遺存しない。

SI－100（第141図，図版49）

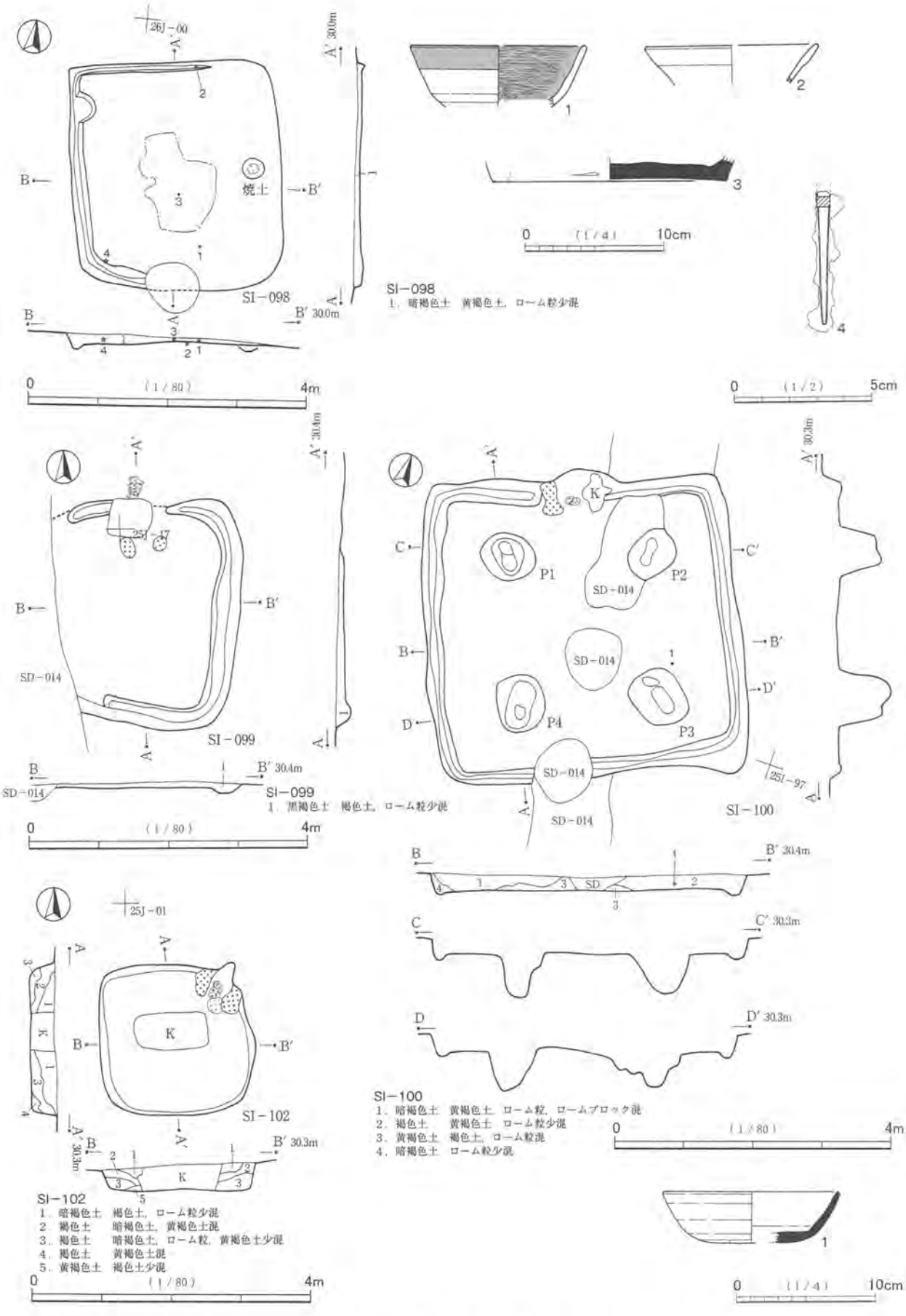
位置　調査区北東部南寄りの25I－86グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが4.4m，幅が4.5mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

床面　ほぼ平坦で，中央がやや硬化している。

柱穴　主柱穴が４箇所検出された。いずれも規模が大きく，柱は住居廃棄時に抜き取られたか，建て替えられたものと思われる。出入口ピットは検出されなかったが，重複遺構に破壊された可能性がある。

壁溝　全周する。




第141図　SI－098・099・100・102

カマド　北壁中央に位置する。プランからの突出は弱い。左袖が遺存するが，右袖は木の根によると思われる撹乱で破壊され，遺存しない。構築材は山砂を主体とする。左袖内側はかなり強く赤色化している。火床部底面は床面と同じ深さであり，平坦である。中央に赤色化・硬化する面がみられる。

堆積土　ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体である。

出土遺物　非常に少量である。図示できた遺物は新治窯産の須恵器杯１点である（１）。小片から図化した。胎土に粒径のやや大きい黒褐色粒を多く含む。器面は磨耗している。平面位置は竪穴の南東寄りで，下層から出土した。

重複遺構　SD－014が本住居の北壁東側から南壁中央にかけて南北に通っており，本住居が切られている。

SI－101（第142・143図，図版50）

位置　調査区北東部南寄りの25I－94グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが5.5m，幅も5.5mの規模で，整った方形をなす。確認面からの深さは40cmである。南西隅部が撹乱を受け，破壊されている。

床面　平坦で，中央がやや硬化している。

柱穴　主柱穴が４箇所検出された。竪穴の規模が大きいため，かなり深い柱穴である。南西側のP4はやや内側に寄っている。北西側柱穴P1の径は，他の柱穴よりも大きい。出入口ピットは南壁壁際のほぼ中央で検出された。径は27cm×19cm，深さは10cmである。

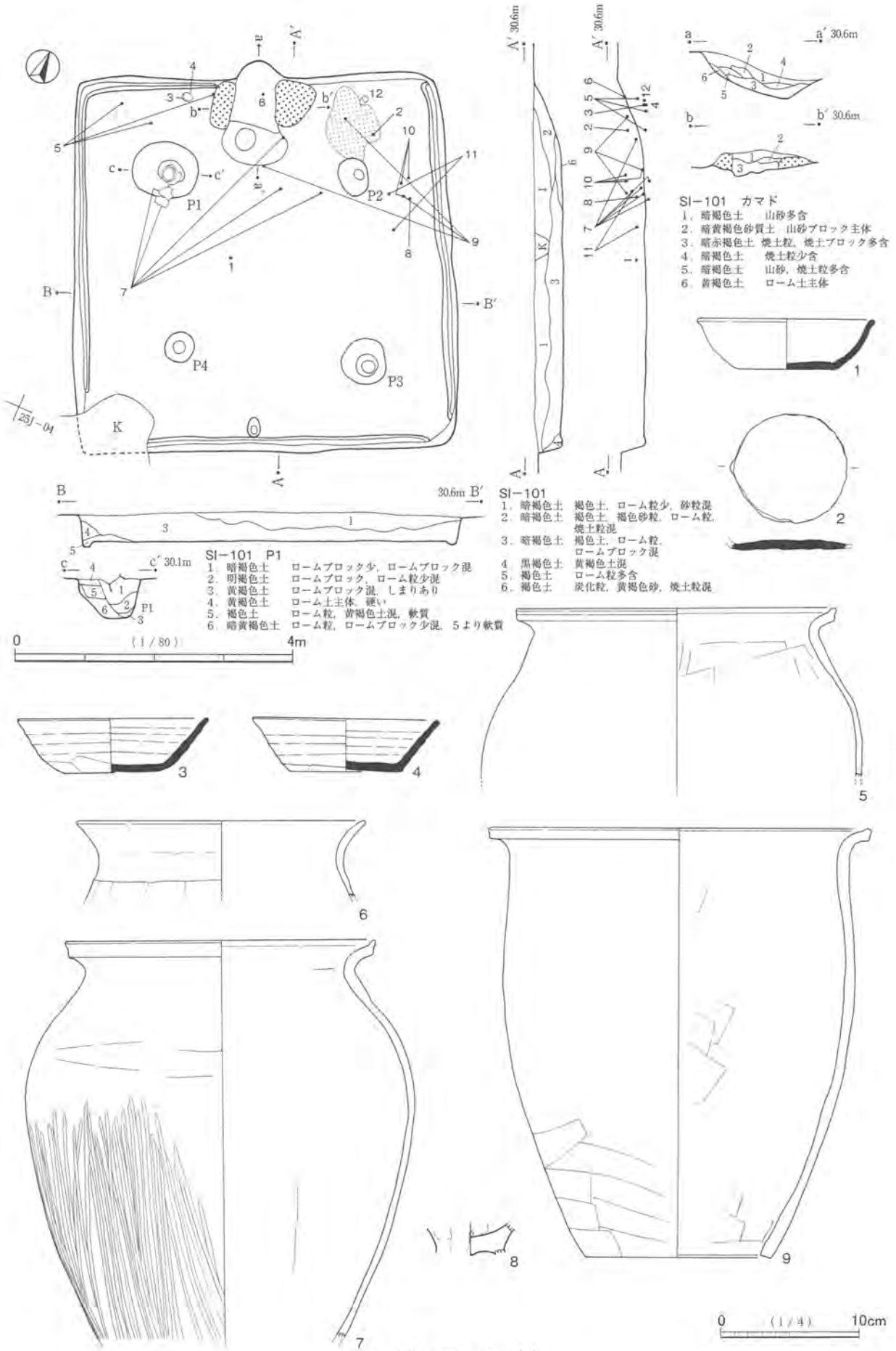
壁溝　東・西・南の三壁は南東隅部で途切れる他は巡っている。北壁はカマドの左側で巡るが，カマドの右側で巡っていない。

カマド　北壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖が遺存するが，両袖間が広いため，流失した部分も多い。構築材は山砂を主体とする。左袖内側の手前が赤色化している。右袖内側は遺存が悪い。火床部中央にハードロームの底面が赤色化・硬化した範囲がみられる。火床部底面及びその前方は，広い範囲で床面よりも深くなっている。カマド使用に伴うだけではなく，当初からの掘りかたが深いか，カマドの付け替え等によって深く掘り込まれたものであろう。カマド内堆積土下層は，焼土粒・焼土ブロックを多量に含む。

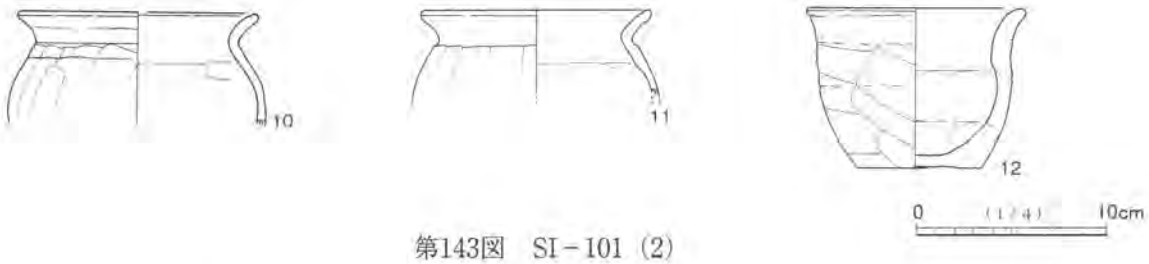
堆積土　P1の堆積土のうち，西壁側上層はローム土主体であり，貼床と思われる。P1内上層から甕（７）が出土しているが，その部分の土層は暗褐色土主体で，ローム粒は少量である。しかし甕の様相から，堆積土は埋め戻されたものと思われる。他の柱穴については埋め戻されているか不明であるが，P1とは規模が異なるため，同様でなくてもよいと思われる。柱穴上の堆積土全体については，暗褐色土主体であり，自然堆積と思われる。カマド右外側の床面に焼土が堆積している。

出土遺物　北側に多く，南側に少ない。図示できた遺物は12点である。１～４は新治窯産の須恵器杯である。ただし２は底部片を円盤状に加工したものであり，再利用後の製品名は円盤形土製品または転用硯である。５～７・10～12は土師器甕，９は土師器甑である。８は台付甕としたが，手捏土器の可能性もある。遺存が悪く，武蔵型といえる根拠がない。10～12は在地の小型品，６は武蔵型の甕，５・７は常総型の甕である。９は常総型の甑である。

３・４は完形で，ともにまったく割れていない土器である。１は遺存が少ない。２はほぼ底部全体が使われている。破断面は概ね丁寧に磨られており，平面形は円形をなす。底部内面中央は滑らかであり，磨




第142図　SI－101（1）




第143図　SI－101（2）

られたものと思われる。

12は口縁端部の一部に欠損部・接合部分がある。その他は割れていない遺存良好な土器である。器壁が厚く，小型のわりに重量感のある土器である。底部外面には木葉痕はみられない。むしろ須恵器甕に近い様相であるが，調整が丁寧でないだけかもしれない。胴部外面に黒斑があるので，土師器である。6・8・10・11は一部の遺存である。5は胴部中位以下を欠損するが，口縁部は遺存する。7は胴部下位・底部を欠損するが，比較的遺存のよい甕である。特に口縁部は5同様すべて遺存している。8は内面の調整がやや丁寧であるが，底部の調整は雑である。器面の磨耗が著しいため，台が付くのか判然としない。，9の遺存は多くないが，口縁部から胴部下端まで遺存する土器である。

3・4はカマド左袖外脇の下層から2枚重ねで出土した。4が下，3が上である。土器はやや竪穴内側に傾いた斜正位の状態である。また12は北壁際右（東）側床面で，カマドと北東隅の中間から出土した。土器は口縁部を壁側に向けたかなり斜めの正位，または横位に近い状態である。2は右奥（北東）側中層から出土した。7の主要部分は北西側柱穴P1内の堆積土上位からやや傾いた正位で出土した。なお正位といっても，胴部下位から底部は欠損している。また7の破片はカマド前から前方に散っている。散った破片の出土層位も床面・下層である。5はカマドの左外側の床面・下層から散って出土した。9はカマド前方，右外側及び右壁奥寄りから広く散って出土した。出土層位は床面から上層までわたっている。北東側柱穴P2と東壁間の下層から上層では，9の他に8・10・11が出土している。また2も比較的近い位置である。この付近にある程度まとまって廃棄されたことが考えられる。

P1は他の柱穴よりも規模が大きい。7を納めるため，壁周囲を大きく掘ったものと思われる。出土状況から，7の欠損部は意図的に除去されたことも考えられる。ただし胴部上位から下位にかけての一部も大きく欠損しており，破断面は整ったものではない。

7は単なる廃棄品ではなく，竪穴住居廃棄の祭祀に関わる遺物の可能性が高いと思われる。3・4については元々カマド左側の壁際に置かれていたことと，壁上方から落下してきたことの二通りが考えられるが，7の存在から，カマド廃棄の祭祀に関わる可能性がより高いと考える。また12も3・4・7とセットの可能性があると思われる。その他の遺物には特に祭祀的様相がうかがえず，周囲から廃棄されたか流入したものであろう。2がやや特異であるが，層位がやや高いため，セットに加わるものと認めがたい。

**SI－102**（第141図，図版50）

**位置**　調査区北東部南西端の25J－01グリッドを中心に位置する。西方に北から入る支谷があり，確認面が東から西に若干下っている。

**形状・規模**　2.2m×2.2mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。隅カマドで出入口ピットも検出されなかったため，主軸方向が判然としない。四辺はほぼ東西南北に沿っており，便宜的に南辺から北辺に向かう方向を主軸方向とした。

床面　わずかに東から西に下るが，ほぼ平坦といえる範囲内である。中央が硬化していると思われるが，撹乱を受けており，やや判然としない。

カマド　北東隅に位置する。煙道部はプランから若干突出し，壁は急角度で立ち上がる。両袖の構築材は山砂を主体とするが，ややローム混じりである。両袖内側は部分的に赤色化するが，特に左袖上部が著しい。火床部底面は床面よりわずかに窪む。やや左袖寄りに赤色化した面がみられるが，暗褐色土に焼土ブロックが混入しており，しまりがない。また火床面の手前に大きな焼土ブロックの塊がある。

堆積土　暗褐色土・褐色土主体である。ローム粒の含有量はやや少なく，自然堆積と思われる。

出土遺物　非常に少量で，図示できた遺物はない。

SI－103（第144・145図，図版50）

位置　調査区北東部南寄りの25I－75グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが5.5m，幅が5.4mの規模で，整った方形をなす。確認面からの深さは60cmである。

床面　平坦で，全体に硬質である。中央が硬化しているが，壁側との差は顕著でない。

柱穴　主柱穴が4箇所検出された。対角線上に位置し，整った配置である。全体にやや壁寄りの位置であるが，東側のP2・P3は若干内に入る。出入口ピットは検出されなかったが，出入口側はカマドに対向する南東壁中央と思われる。

壁溝　全周する。

カマド　北西壁中央わずかに右寄りに位置する。プランからかなり大きく突出する。両袖の遺存は特に良好ではないが，後天井が遺存する。構築材は山砂を主体とする。後天井は確認面上で検出された。煙道の煙出口は判然としない。内壁は焼土化した山砂が硬化して貼り付いている。また上面もやや赤色化している。両袖の内側から上部にかけても，強く赤色化及び硬化している。また火床部底面も中央の焼土化が著しく，しまりがない状態である。カマド内堆積土下層は，焼土粒・山砂・灰を含む。また中位等に焼土ブロックを多量に含む土層がみられる。

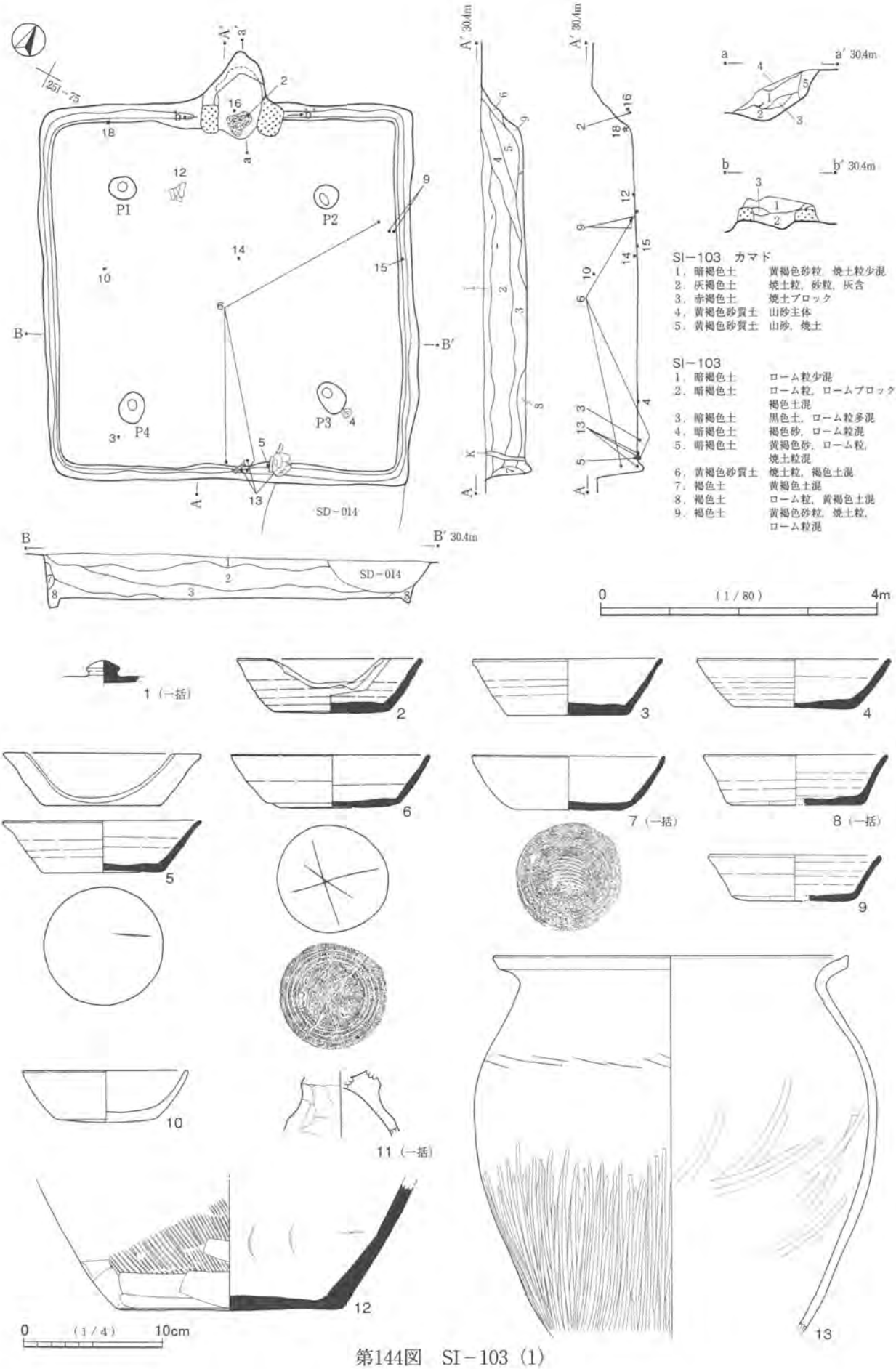
堆積土　暗褐色土主体である。ローム粒の包含は上層に少なく，下層に多い。自然堆積と思われる。

出土遺物　比較的多量の遺物が全体から出土した。遺存のよい遺物は，特にカマド内及び南東（前）壁際やや右寄りから出土した。図示できた遺物は18点である。1は新治窯産の須恵器蓋である。2～9は須恵器杯で，2～5・8・9は新治窯産で，6・7は南比企窯産と思われる。10は非ロクロの土師器杯と思われる。11は土師器台付甕である。台部のみの遺存であり，武蔵型かどうか判然としない。12は新治窯産の須恵器甕，13は常総型の土師器甕である。14～16は在地の土師器甕で，15・16は小型品である。17は新治窯産の甑である。18は鉄製品で，鎌と思われる。その他図示していないが，モモ核が1点出土した。

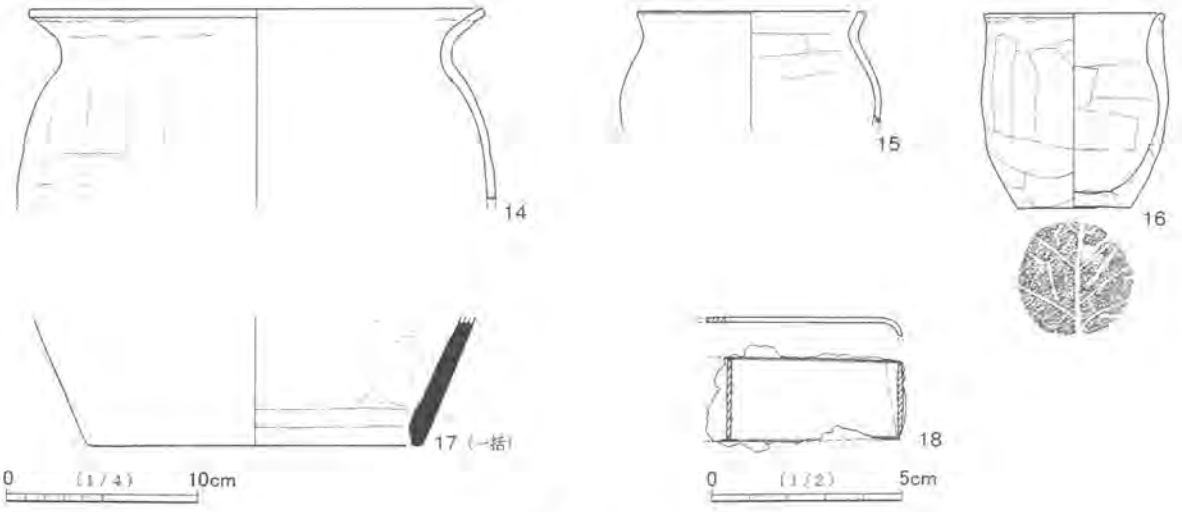
1はつまみ部分の破片である。外面は褐色，内面は暗褐色を呈し，土師器的な色調である。しかし胎土に白雲母を多く含むことから，新治窯産の須恵器とした。

5は底部外面に1条線のヘラ書きがある。また6も底部外面に「米」状の線刻がある。2の内面にも一方向の擦痕がみられるが，器面が磨耗しており，意図的なものか判然としない。

杯のうち，4・5は遺存がよく，2・3・6もやや遺存がよい。5は口縁・体部の2箇所を欠損及び破損している。1箇所はやや大きく，口縁部周で2/5程度が欠損したものである。破断面は整った弧状を呈し，かなりの部分が磨られて平滑である。この様相だけで打ち欠きされた土器といえる。もう1箇所は打ち欠き部分の中心からほぼ対向する位置にあるもので，小さく逆三角形状に欠損・破損している。2片に割れ，




第144図　SI－103（1）




第145図　SI－103（2）

1片は欠損するが，1片は接合して遺存する。欠損・破損部以外は割れずに遺存しており，逆三角形状部分も意図的な破損の可能性が高いと思われる。2の口縁・体部で図示した部分の欠損も，破断面がかなり整った弧状であり，打ち欠きされたものであろう。その対向する側の口縁・体部もやや大きく欠損している。やや不整であるが，打ち欠きされた可能性があると思われる。4の口縁・体部も一部が欠損し，欠損部から両側に続く2片の接合破片と合わせると，割れ口は不整な弧状を呈している。その部分から対向する側も弧状に割れて接合しており，双方とも打ち割りされたものと思われる。その間の大きく遺存する部分は底部中央を境としてほぼ二等分に割れているが，これは土圧等による自然の破損かもしれない。

6・7はよく似た土器である。回転糸切りによって切り離された後，回転ヘラケズリが施され，外周の糸切り痕が消されている。底部はかなり薄い。色調は淡褐色・灰白色である。胎土は褐色粒・暗褐色粒を含み，白色針状物がみられる。4・8・9は内外面に火襷がみられる。特に9は顕著である。

10は非ロクロの杯と思われるが，器面が磨耗しており，やや判然としない。

11の台部外面は粗いヘラケズリによって凹凸が著しく，やや作りが悪い。内面はヘラナデが施され，比較的平滑である。焼成は良好である。12の底部外面には，縄目状の圧痕が一部にみられる。13はやや大型の甕である。胴部下位・底部を欠損するが，口縁部はすべて遺存する。胴部上位から中下位にかけては半周強の遺存である。胴部外面は剥離する部分がやや目立つ。胴部内面中位には，細長いナデもみられる。14・15は遺存が少ない。16は底部外面全面に明瞭な木葉痕がある。胴部と口縁部のくびれがあまりない器形である。胴部外面のヘラケズリは粗い。作りがやや雑であり，手捏的な土器である。被熱により器面の磨耗が顕著で，口縁部内面を主体に煤けている。口縁部から胴部中位まで半周強を欠くが，他は割れずに遺存する。17は小片から図化した。遺存が少ないため，判然としないが，本来は5孔の甑と思われる。

18はやや小型の鎌で，基部側の破片と思われる。右端側が上方に折り返されているが，端部は若干欠損している。薄い作りであるが，X線写真でも目釘穴がみられないため穂摘具ではない。刃部と基部の刃潰ししている部分の境は錆のため不明瞭である。

2はカマド内やや右袖寄りの位置で，層位的には1層と2層の境から，やや内側に傾いた正位で出土した。上方から落下してきた可能性もあるが，置かれた可能性の方が高いと思われる。打ち欠きされており，いずれにしてもカマド廃棄の祭祀に関わる土器であろう。また16はカマド内中央から倒位で出土した。出

土層位は2よりわずかに高い程度で，2とほぼ同じと思われる。16の下には焼土ブロックの大きな塊があり，合わせて支脚として使われた可能性がある。ただし2の存在により，最終的には2とセットになると思われる。なお欠損部は意図的に除去された可能性がある。ただしその場合でも，必ずしも祭祀的なものではなく，除去しなければ焼土ブロックにかぶせることができなかったためかもしれない。2・16の状況からカマド内堆積土2層は埋め戻されたものといえよう。

5は南壁際中央やや右寄りの床面から出土した。また13の主要部分が5を覆う状況で，5の上部から出土した。13の破片がその付近に散っている。5は正位・倒位等の状況が不明である。6が5・13の近くから出土した。出土層位は，一部が床面であるが，一部は中層である。また6の一部は遠く右壁際中央やや奥寄りの床面から出土した。4は右前側の柱穴P3脇の床面から出土した。正位と思われるが，やや判然としない。また3は左前側の柱穴P4近くの床面から出土したが，正位・倒位等の状況は不明である。以上の3～6・13のうち，4・5・13は，竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性が高いと思われる。また6もやや不明瞭な点があるが，その可能性がある。3については出土位置から4と対になる可能性があるが，土器からは断定しがたい。その他の遺物には特に祭祀的様相がうかがえない。多量に出土した土器片等は，概して周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　本住居の東隅側が南北に通るSD－014に切られている。ただし本住居の方が深いため，下位から床面は遺存している。

SI－104（第146図，図版51）

**位置**　調査区北東部南寄りの25I－64グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.3m，幅が4.2mの方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

**床面**　傾斜はないが，やや凹凸がある。中央がやや硬化しているが，壁側との差は顕著でない。

**柱穴**　主柱穴が4箇所検出された。対角線上に位置し，整った配置である。全体にやや壁側寄りであり，竪穴の規模のわりに柱穴間が広い。出入口ピットも南東壁際中央に検出された。径は45cm×32cm，深さは43cmである。

**壁溝**　重複遺構により不明な部分を除いて巡る。本来的にはカマド部分を除いて全周すると思われる。

**カマド**　北西壁中央に位置する。右袖が遺存するが，中央から左側は重複遺構に破壊されている。煙道部の壁は一部遺存していると思われる。プランからの突出はあまり大きくない。遺存するカマド内堆積土下層は，焼土粒を多く含む。

**堆積土**　黒褐色土主体である。下層・壁際はローム粒をやや多く含むが，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　比較的多量の遺物が全体から出土した。図示できた遺物は25点である。1・2は新治窯産の須恵器蓋である。3～12は須恵器杯である。産地をみると，千葉産が3・4・6・9・10・12，新治窯産が7・8・11，南比企窯産が5である。このうち6は千葉産か新治窯産かやや不明瞭であるが，千葉産の可能性が高いと思われる。13はロクロ土師器杯，14・15は千葉産の須恵器高台付杯である。16はロクロ成形の鉄鉢形土器である。17・19は千葉産の須恵器甕，18は新治窯産の須恵器甕または甑である。20～25は鉄製品で，20は鉄鏃である。21も鉄鏃と思われるが，工具等，他の製品かもしれない。22・23は釘，24は鎌と思われるが，やや断定しがたい。25は環状の金具で，壷金具といわれるものである※）

3・9・12は刻書をもつ土器である。3は体部外面に線刻がある。横位の「土」にみえるが，文字では

※）本製品については当財団整理技術員　大久保奈奈氏から教示を得た。

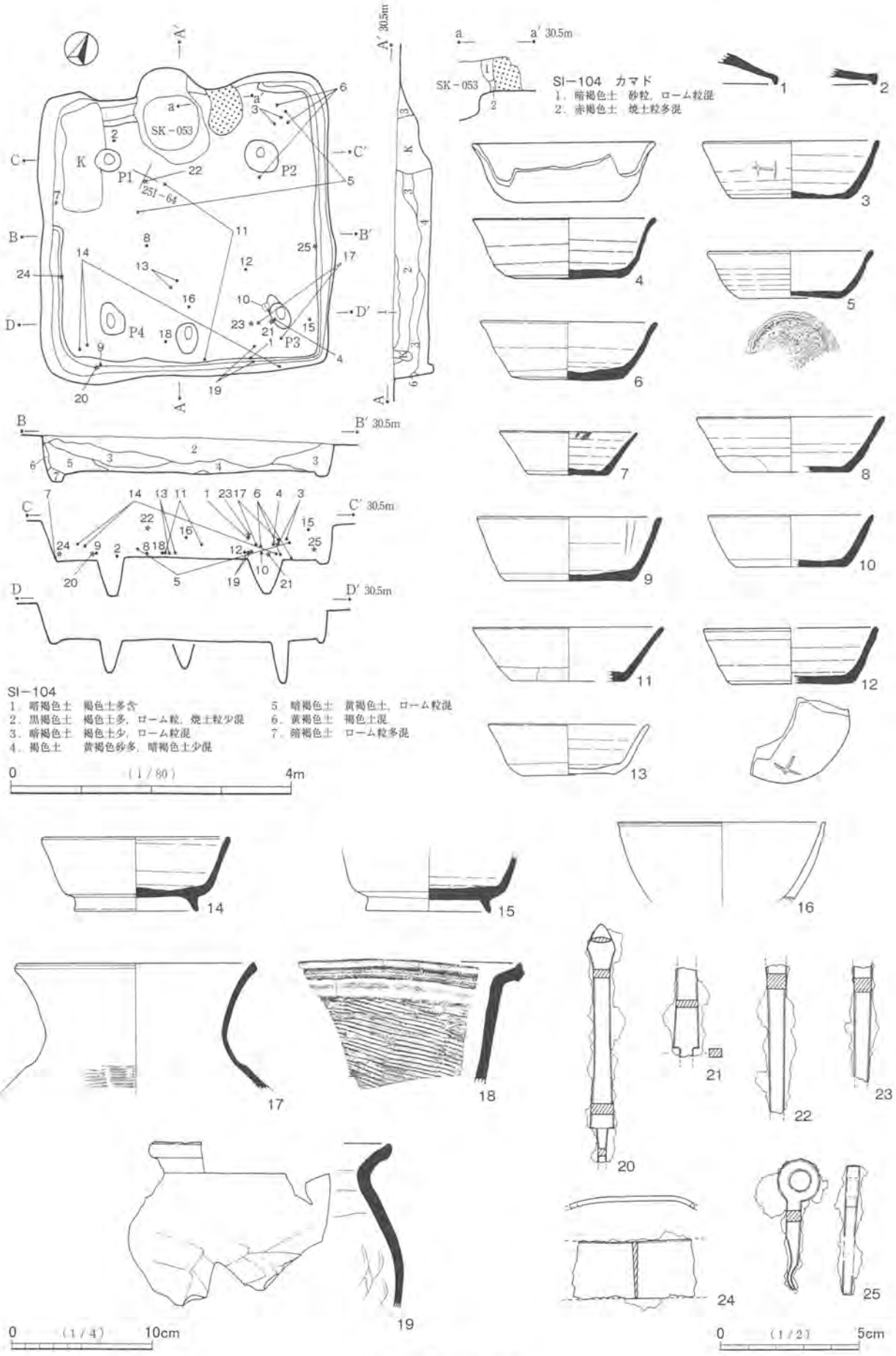
なく，記号かもしれない。9は口縁・体部内面に2条平行線の線刻がある。12は底部外面に「＋（×）」のヘラ書きがある。杯類の中では，3・4・13が遺存がよい。3は口縁・体部の2箇所を小さく逆三角形状・逆台形状に欠損する他は欠損がない土器である。欠損部間をつないで2片に割れているが，その他には割れがない。両欠損部と小さな破片部分を合わせると，口縁部周で1/2弱である。線刻は大きな破片側にある。欠損部及び小さな破片部分は打ち欠き・打ち割りされたことも考えられるが，断定しがたい。4は口縁・体部の1/2周を欠損するが，他は割れずに遺存する。欠損部は両端がやや深く「U」字状を呈し，その間の体部は残りがよく，比較的水平である。形状から打ち欠きされたものと思われる。13の欠損部は小さいが，そこから続く1/3程度がやや細かく割れている。意図的なものかわからない。7は内面に黒色物が付着している。油煙ではなく，漆と思われるがやや判然としない。千葉産の杯の中で火襷がみられるものに，3・9・10・15がある。

16は口縁端部外面に沈線があり，また内面側もわずかに窪んでいる。頂部は比較的水平であり，金属器的な雰囲気がうかがえる。19の胴部外面は平行タタキが施されているが，ナデによって消され，痕跡程度である。また胴部内面には当て具痕があるが，上位はナデによって弱まっている。色調は褐色を呈し，土師器的である。また調整もやや土師器的な雰囲気をもつ。

20は切先から茎の一部まで遺存する鉄鏃である。茎尻は遺存しない。鏃身部分は錆膨れが特に著しい。鏃身は鏨箭式である。棒状部は鏨箭式の鉄鏃にしては，あまり長くない。茎との境でやや広がっている。茎は細く，篦被部分は四面関である。21は鉄鏃とみると，棒状部の下部から茎の上部がわずかに遺存するものである。棒状部は直線的であるが，茎との境がわずかに広がっている。茎は鉄鏃としてよい厚みがあるが，棒状部はやや薄く，鉄鏃と断定してよいかやや疑問がある。何らかの工具の可能性も若干考えられる。22・23は棒状品で，鉄鏃の茎やその他の道具も考えられるが，やや厚みがあることと，最も普遍的と思われることから，釘の可能性が高いと考える。ともに胴部の破片で，頭部と先端部を遺存しない。24はその幅からみて破損した鎌の破片と思われる。しかし破損部の左右両端が同一方向にやや湾曲しているため，やや断定しがたい。破損していると思われるが，両端は錆に覆われており，古い欠損である。このままの状態で別の製品かもしれない。また破損した鎌が他の用途に再利用されたことも考えられる。やや不明瞭であるが，鎌の可能性が高いとみておきたい。25は現状で長さが5㎝弱の小型の鉄製品である。図示した上端が小さな環状をなす。下部は先細りとなるが，やや曲がりくねっており，また若干平たくなるようである。しかし錆による劣化が著しく，本来の形状かどうか不明瞭である。ねじりは加えられていないと思われる。下部は細くなるため，木製品に取り付けられたものであろう。環状部分は，肘金具（肘のように直角に曲がった金具）を掛けたり，繊維製品を通したりするためのものであろう。用途の一つに，扉や箱の開閉装置が考えられる。

遺存のよい土器と線刻をもつ土器の出土位置をみると，まず3は北東隅付近からの出土であるが，層位は中・上層である。また4は南東側の柱穴P4上からの出土であるが，層位は上層である。3・4は倒位で，やや傾いた状態で出土した。13は中央前寄りの下層から，9は南隅付近の下層から，12は中央右寄りの下層から，各々出土した。以上の土器群を含めて，遺物の出土状況には特に祭祀的様相がうかがえない。図示しない土器片の多くは堆積土上位から出土しており，出土遺物は概して周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　カマドの多くが，SK－053に切られている。また左壁北寄りから隅にかけて，床面まで及び


SI－104
1．暗褐色土　褐色土多含
2．黒褐色土　褐色土多，ローム粒，焼土粒少混
3．暗褐色土　褐色土少，ローム粒混
4．褐色土　黄褐色砂多，暗褐色土少混
5．暗褐色土　黄褐色土，ローム粒混
6．黄褐色土　褐色土混
7．暗褐色土　ローム粒多混
SI－104　カマド
1．暗褐色土　砂粒，ローム粒混
2．赤褐色土　焼土粒多混
SK－053
P1
P2
P3
P4
K
0　（1／80）　4m
0　（1／4）　10cm
0　（1／2）　5cm

第146図　SI－104

撹乱を受けている。

SI－105（第147図，図版51）

位置　調査区北東部南寄りの25I－72グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.1m，幅が3.2mの方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

床面　ほぼ平坦で，中央がやや硬化している。

柱穴　浅いピットが４箇所検出された。そのうち南壁際中央のものは出入口ピットと思われる。径は18cm～21cm，深さは15cmである。その他の３箇所については，通常みられる４本柱の主柱穴とはならない。しかしP1・P2が幅の中軸線上またはその近くに位置し，P3が対角線上に位置することから，本住居の柱穴の可能性がある。

壁溝　全周する。

カマド　北壁右（東）寄りに位置する。プランからの突出は小さく，煙道部壁が小さく突き出る。かなり遺存がよく，両袖から奥壁中・下位まで構築材の山砂が続いている。内壁は赤色化・硬化している。火床部底面は平坦で，特に赤色化した面はみられない。硬化した床面がそのまま底面まで続いている。カマド内堆積土下層は，焼土粒を多く含む。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体である。ローム粒の包含は上層に少なく，下層に多い。そのためやや判然としないが，自然堆積の可能性の方が若干高いと思われる。

出土遺物　図示できた遺物は２点である。１・２とも千葉産の須恵器杯である。１はやや遺存がよく，２は一部の遺存である。１の遺存部分はやや細かく割れている。１はカマド前方の下層から集中して出土した。２はカマド内上層からの出土である。１・２とも特に祭祀的様相はうかがえない。１・２以外の遺物量は少なく，出土層位も上位に偏っている。

SI－106（第147図，図版51）

位置　調査区北東部南西寄りの25I－80グリッドを中心に位置する。西方に北から入る支谷を臨み，確認面が東から西に下っている。

形状・規模　長さが3.5m，幅が3.5mの方形をなす。確認面からの深さは50cmである。北西隅付近の壁壁・床面が張り出している。

床面　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

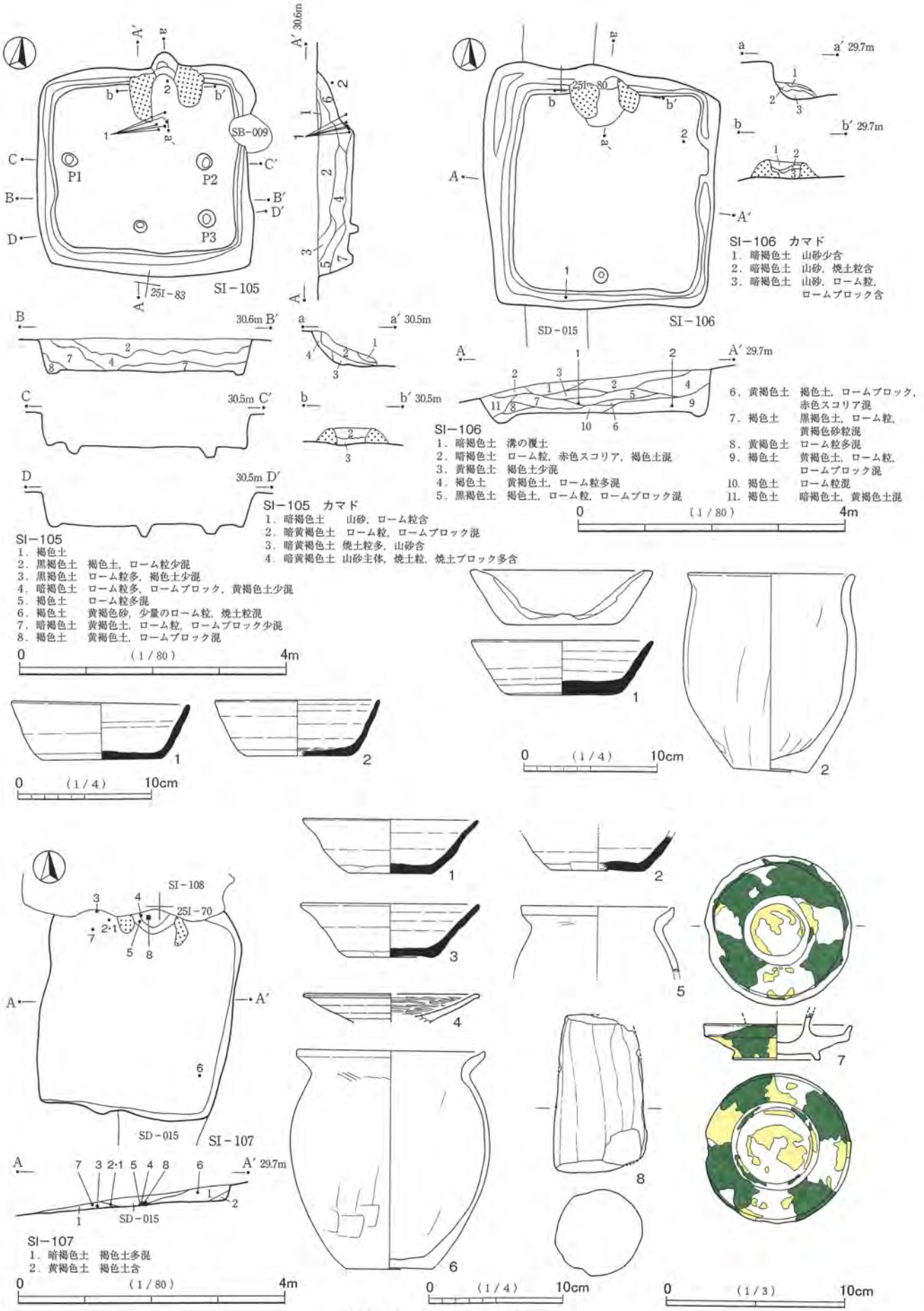
柱穴　出入口ピットが南壁壁際の中央で検出された。径は24cm×21cm，深さは25cmである。

壁溝　東壁北寄りで若干途切れる他は，巡っている。なお途切れる部分も浅く巡るように思われるが，判然としない。また張り出している北西隅付近は作り直して床面を拡張した可能性が考えられる。

カマド　北壁中央に位置する。プランからの突出は非常に小さく，煙道は急傾斜で確認面まで立ち上がる。右袖はあまり遺存がよくない。袖を含むカマドの底面が，床面よりも窪んでいる。当初か作り替えに伴う掘りかたといえよう。火床部底面の凹凸はあまり目立たず，比較的平坦である。底面のハードローム面に被熱痕跡がみられる。カマド内堆積土は中層に焼土粒を含む。

堆積土　ローム粒・ロームブロックを多く含む土層が，上位から下位まで所々みられ，土層はかなり細かく分かれる。若干の緩斜面に位置する影響も考えられるが，人為的堆積の可能性が高いように思われる。

出土遺物　図示できた遺物は２点である。１は新治窯産の須恵器杯，２は小型の土師器甕で，在地の土器である。１は口縁・体部の1/3強を大きく欠損する。その他は割れずに遺存するが，口縁端部は小さく




第147図　SI－105・106・107

欠けている部分が多く，一部にやや目立つ欠損もある。また器面は全体に磨耗している。大きな欠損部は打ち欠きされた可能性が考えられる。南壁際左寄りで，層位は下位と中位の境程度のところから出土した。正位・倒位等の状況は不明である。２は完形品である。口縁部と胴部のくびれが少なく，やや寸胴の器形である。口縁部から胴部上位の一部がやや細かく割れ，ひびもあるが，一個体の状況で出土した。東壁際北寄りの下層から，口縁部を上にした斜めの状態で出土した。

図示した以外の遺物は非常に少量であり，人為的堆積と思われる状況と整合する。１・２は床面からの出土ではないが，堆積土が埋め戻されているならば，その差はあまり問題にならないであろう。完形及び打ち欠きと思われる土器群であり，竪穴住居廃棄の祭祀に関わることも考えられる。しかし断定するにはやや弱い状況と思われ，可能性の指摘に留める。

**重複遺構**　西側を南北に貫くSD－015に切られている。ただしSD－015は浅いため，上位のみの欠損である。

SI－107（第147図，図版52）

**位置**　調査区北東部南西寄りの24I－79グリッドを中心に位置する。西方に支谷を臨み，確認面が東から西に下っている。

**形状・規模**　長さ3.2mの方形をなす。確認面からの深さは10cmである。浅いことと緩斜面に立地することにより，西壁側は流失しており，幅が不明である。また横長・縦長等の形態も不明である。

**床面**　東壁際は遺存がよく，比較的平坦である。西側にいくほど遺存が悪くなるが，図示した実線の範囲までは床面の雰囲気を残す。現状ではそこまででも東から西に緩やかに傾斜している。そこから西方は傾斜がやや強くなる。硬化面はみられないが，遺存していないとすべきであろう。

**カマド**　北壁に位置する。やや右寄りに位置すると思われる。SI－108と重複することと，床面まで浅いため，両袖下位の前側は遺存するが，他は欠損している。プランからの突出は小さいと思われる。

**堆積土**　暗褐色土である。遺存が少ないため，自然堆積か人為的堆積か判然としない。

**出土遺物**　カマド内・周辺からやや多く出土した。全体の出土量は多量でないが，堆積土の遺存が少ないわりには多い。本来は比較的多量の遺物を包含していた可能性がある。図示できた遺物は８点である。１～３は須恵器杯で，１・３は千葉産，２は新治窯産である。４はロクロ土師器皿で，高台付と思われる。５・６は小型の土師器甕で，在地の土器である。７は三彩陶器托，８は土製支脚である。

３は遺存良好で，欠損部は口縁部の一部のみである。遺存部分は３片の接合破片であり，あまり割れていない。１片はやや大きく，他の２片は口縁・体部の2/5程度の破片である。欠損部及び２片の接合破片は打ち欠き・打ち割りされた可能性が考えられるが，やや断定しがたい。被熱により，赤色化・黒色化する部分がある。６は口縁部から底部まであり，図上で復元できる土器である。底部付近の遺存はよいが，上半部の遺存は少ない。１・２・４・５は一部の遺存である。４は高台があると思われるが，欠損しているため，やや判然としない。

７は口縁部の多くと受け部の上部を欠損するが，その他は遺存している。口径等は表記載の通りであるが，補足すると高台部の高さは５mm，受け部の外径は3.7cm～3.9cm，内径は2.9cm～3.0cmである。高台はやや外方に開き，断面は方形である。内外面ともロクロを使用したナデによって仕上げられ，器面内外面には，白・緑・褐色の釉が施されている。口縁端部は磨耗が著しく，頂部から内面は釉のほとんどが剥落している。施釉は４単位で，緑釉の発色が鮮やかである。緑釉はやや黄色みを帯びた明るい緑色を呈するが，

濃緑色の小斑点が全体にみられる。褐釉は橙色を呈する。施釉は外面では比較的よく対称性を保つが，内面は一部崩れている。褐釉は緑釉間に施され，また緑釉がみられない受け部内面と高台部内側にも施されている。胎土は粒子が細かく軟質で，色調は黄白色である。

8は上端面・下端面とも遺存しているか，欠損しているか不明瞭である。双方とも遺存しているとすれば，かなり短い支脚である。消耗した端面が平坦に調整されたことも考えられるが，断定しがたい。

1～3・7はカマド左外側床面から出土した。3・7とも正位・倒位等の状況は不明である。4・5・8はカマド内底面から出土した。8は立った状態で出土しており，使用時の位置を留めると思われる。6は東壁際南寄りの下層から出土した。3・7はカマド・竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性も考えられる。しかし7は3等の他の土器と年代的な隔たりがあり，かなり長く伝えられた遺物と思われる。上部が破損し，口縁部の傷みも顕著なことから，必ずしも祭祀的な出土状況と断定しがたい。

**重複遺構**　北側でSI－108と重複する。本住居の方が新しいと思われるが，遺存が悪いこともあって，重複する部分を検出することができなかった。

SI－108（第148図，図版52）

**位置**　調査区北東部南西寄りの24I－69グリッドを中心に位置する。西方に支谷を臨み，確認面が東から西に下っている。

**形状・規模**　長さが2.7m，幅が2.5mの方形をなす。確認面からの深さは30cm～80cmである。形態は台形的な方形である。重複遺構に切られ，北西（左前）隅部付近を欠損する。

**床面**　ほぼ平坦で，全体に硬質である。中央が他よりやや硬化している。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　東壁南（右）寄りに位置する。カマド右袖外脇はすぐ隅部となり，広い空間は存在しない。プランからの突出はあまり大きくない。煙道の立ち上がりは住居壁よりわずかに傾斜する程度で，垂直に近い。両袖は壁側の遺存がよいが，前側の上部はやや流失している。構築材は山砂を主体とする。左袖はややオーバーハングしており，内壁から奥側の袖上部が赤色化する。右袖も左袖ほどではないが，赤色化している。煙道部壁上半部も赤色化及び硬化した山砂が貼り付いている。火床部底面は平坦で，床面からそのまま続いている。カマド内堆積土下層は，灰を主体とし，一部に焼土ブロックがみられる。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。ローム粒を多く含む土層もあるが，自然堆積と思われる。東側から西側に向かって堆積した様相がうかがえる。なお右（南）壁際中央の床面に，炭化物・焼土粒の分布がみられた。

**出土遺物**　少量で散在的な出土である。図示できた遺物は5点である。1は新治窯産の須恵器杯，2は非ロクロの土師器杯である。3・4も非ロクロの土器である。杯的な形態であるが，手捏土器と思われる。5は土玉である。

3は完形品である。口縁部の一部にひびが入るが，割れていない土器である。2はやや遺存がよい。欠損部は口縁・体部の2/5程度である。遺存部分はやや割れているが，出土時点では崩れていない。4は1/2弱，1は一部の遺存である。2・3は器壁が厚い。2は器壁の厚いことと外面のヘラケズリが縦方向である点で，3と似ているが，3・4より浅い形態であることと，ヨコナデが顕著なため，杯とした。底部内面の荒れが著しく，外面もやや荒れている。3は内面がヘラナデ調整であるが，比較的滑らかである。外面のヘラケズリは，幅が広い。4は3と似た形態であり，器壁もやや厚いが，2・3よりは薄い。内面の

調整は平滑である。しかし被熱により底部の荒れが顕著であり，内外の器面もかなり黒ずんでいる。外面は3よりも手捏的である。5はほぼ完形の土玉である。側面の片側が黒ずんでいる。煤が付着していると思われるが，焼成時の色調かもしれない。表面は荒れている部分が多い。

3はカマド内前側やや左寄り下層から正位で出土した。底面からはやや高い位置であり，周囲に焼土ブロックと灰が堆積している。2はカマド右袖前側から袖に接して正位で出土した。層位は床面である。4は出土位置が不明である。5は右壁際中央の中位から出土した。1は撹乱部分からの出土である。

2・3はカマド廃棄の祭祀に関わる土器と思われる。2の欠損部は打ち欠きされた可能性がある。4も2・3と共通する要素をもつが，遺存が少なく，出土地点が不明なため，2・3との関係が判然としない。5も祭祀的な遺物であるが，2・3との関係は不明瞭である。古墳時代の遺物かもしれない。

**重複遺構**　南側でSI－107と重複する。本住居の方が古いと思われるが，深いため，欠損は南（右）側の上位に留まる。また北西隅部付近でSI－109と重複し，本住居が切られていると思われる。

SI－109（第148図，図版52）

**位置**　調査区北東部南西寄りの24I－69グリッドを中心に位置する。西方に支谷を臨み，確認面が東から西に下っている。

**形状・規模**　長さが4.2m，幅が4.6mで，横長の方形をなす。確認面からの深さは5㎝～1.1mである。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が壁側よりやや硬化している。

**壁溝**　全周する。

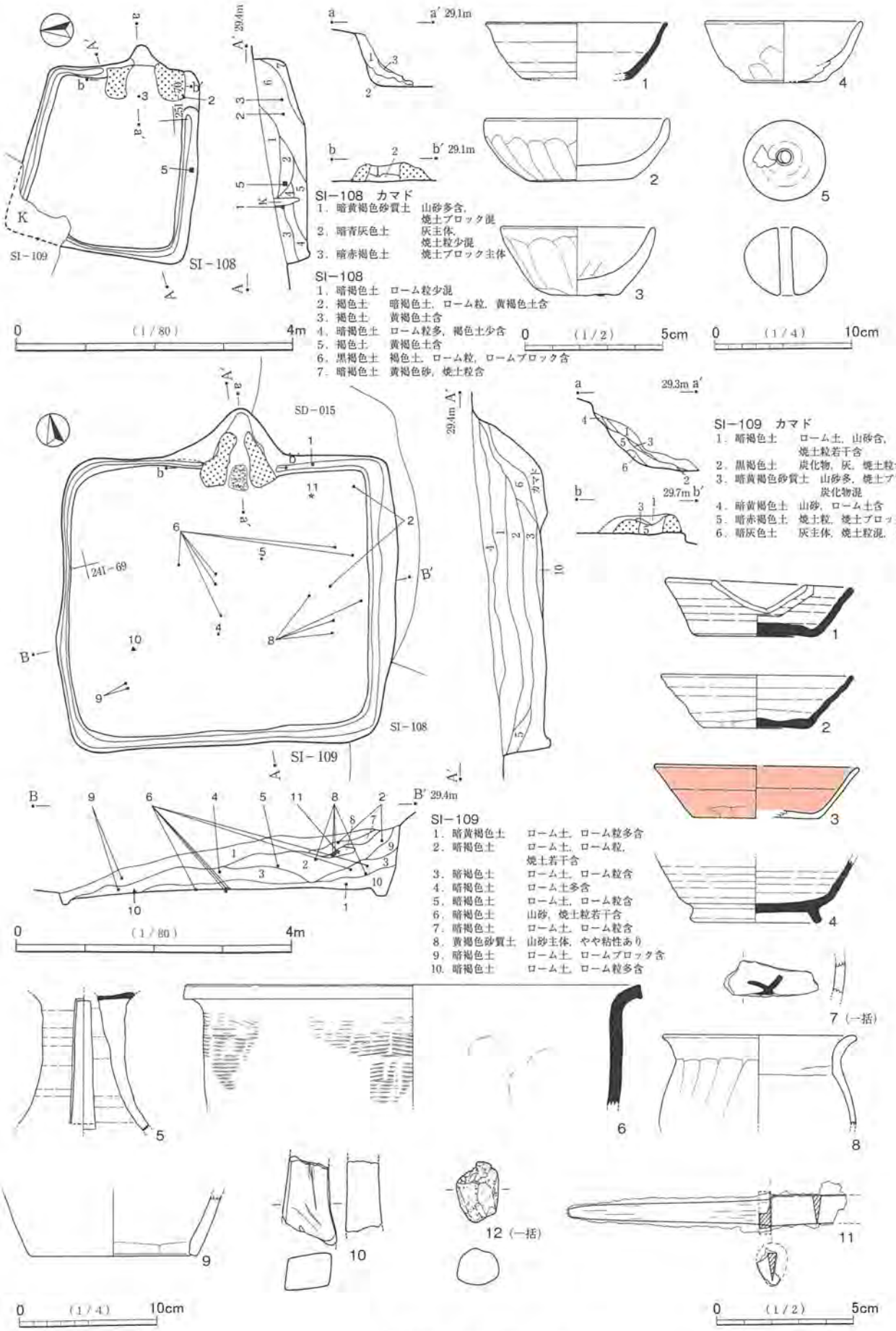
**カマド**　北壁の中央からやや右寄りに位置する。プランからはかなり大きく突出する。煙道部の壁は火床部底面からややなだらかに立ち上がる。両袖の遺存はよい。構築材は山砂を主体とし，混じりけが少ない。両袖内壁の下半部が赤色化及び硬化している。両袖外側の壁は削り出されている。左側は斜面であるが，右側はある程度の平坦面となっており，棚状施設的な機能をもつと思われる。火床部底面は平坦で，床面からほぼ同等の深さで続いている。焼土ブロックが集中する範囲がみられる。火床部から煙道部にかけての底面上には，多量の灰が堆積する。その上部は焼土粒・焼土ブロックがかなりの厚さで堆積する。焼土ブロックは天井部の崩落土であろう。

**堆積土**　ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。上層から下層まで，一部を除いてほとんど層位は変わらなくみえる。ロームの割合でかろうじて分層できる状況である。上層がやや明るく，下層が暗い色調である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　出土量は中量である。堆積土の土量からみると，あまり多いとはいえない。全体に分布するが，堆積土の遺存が少ない西側は遺物も少ない。図示できた遺物は12点である。1・2・4～6は新治窯産の須恵器である。1・2は杯，4は高台付杯，5は高杯または高盤，6は甕または甑である。3はロクロ土師器杯である。7は常総型の土師器甕である。8は小型の土師器甕で，在地の土器である。9は常総型の土師器甑である。10は砥石，11は鉄製の刀子，12は軽石である。

1は遺存良好で，欠損部は口縁・体部の1箇所のみである。欠損部は逆三角形状で，打ち欠きされたものと思われる。欠損部とほぼ同じ大きさの破損部が，欠損部の比較的近くにある。破損部は2片の小片が接合しているが，打ち割りされたものと思われる。遺存が良好なものは，1以外にはみられない。

7は甕胴部の小片で，外面に墨書が施されている。欠損部に続き，墨痕も薄いため，判読できない。3は内外面に赤彩が施されている。5は脚部の破片で，一段長方形の透かしが対向する位置に2箇所入るも




第148図　SI－108・109

のである。透かしを境に割れており，片側の遺存である。

10の石材は流紋岩である。小口面は遺存しない。折損面は使用されていないが，その他の４面はよく使用され，平滑である。図の上面には筋状の研ぎ痕がみられる。11は刃部の根本側から茎尻まで遺存する刀子である。鏑は一部が遺存する。茎部分は柄の木質がよく遺存している。背関は直角に切り込みが入る。刃関は木質が厚いため不明瞭であるが，直角的と思われる。

１はカマド右の壁際下層から，底部が壁に接したほぼ真横の状態で出土した。竪穴廃棄後の比較的早い時点で廃棄されたもので，上方から落下したと思われる様相である。土器には打ち欠き等の状況がみられるが，出土状況に祭祀的様相があるかどうか判然としない。10は左前（南西）側の床面から出土した。１・10以外の遺物の出土層位は，中・上層が多い。６・７は接合破片の一部が床面・下層から出土したが，一部は中層出土である。出土遺物は概して，周囲から廃棄されたか流入したものであろう。

**重複遺構**　南東隅部付近で，SI－108と重複し，本住居が切っている。また東側でSD－015と重複し，本住居が切られている。しかしSD－015は浅いため，本住居の欠損は上位に留まる。

SI－110（第149図，図版52）

**位置**　調査区北東部西寄りの24I－49グリッドを中心に位置する。西方に支谷を臨み，確認面が東から西に下っている。

**形状・規模**　長さが3.3m，幅が2.7mで，縦長の方形をなす。確認面からの深さは25cm～90cmである。

**床面**　やや凹凸があるが，傾斜はない。ハードローム層中に作られ，全体に硬質であるが，中央が壁側より硬化している。

**壁溝**　南西隅で浅くなって途切れる他は巡っている。全周に近い状況である。

**カマド**　北壁中央に位置する。プランからの突出はあまり大きくない。両袖の遺存は比較的よい。構築材は山砂を主体とし，混じりけが少ない。右袖はカマド内堆積土下層（６層）の上部に構築されており，作り直されたことがわかる。作り直し後の火床面も６層上面にある。カマド前側には山砂がみられ，作り直し前の崩れた構築材の残りと思われる。両袖内壁は赤色化及び硬化している。火床部の焼土範囲は広く，前側や煙道側まで延びている。作り直し前の火床部底面は床面よりもやや窪んでおり，使用に伴うものであろう。

**堆積土**　ローム粒・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土が上位から中位にかけて厚く堆積している。最上層の１層以外は，人為的な堆積と考えられる。

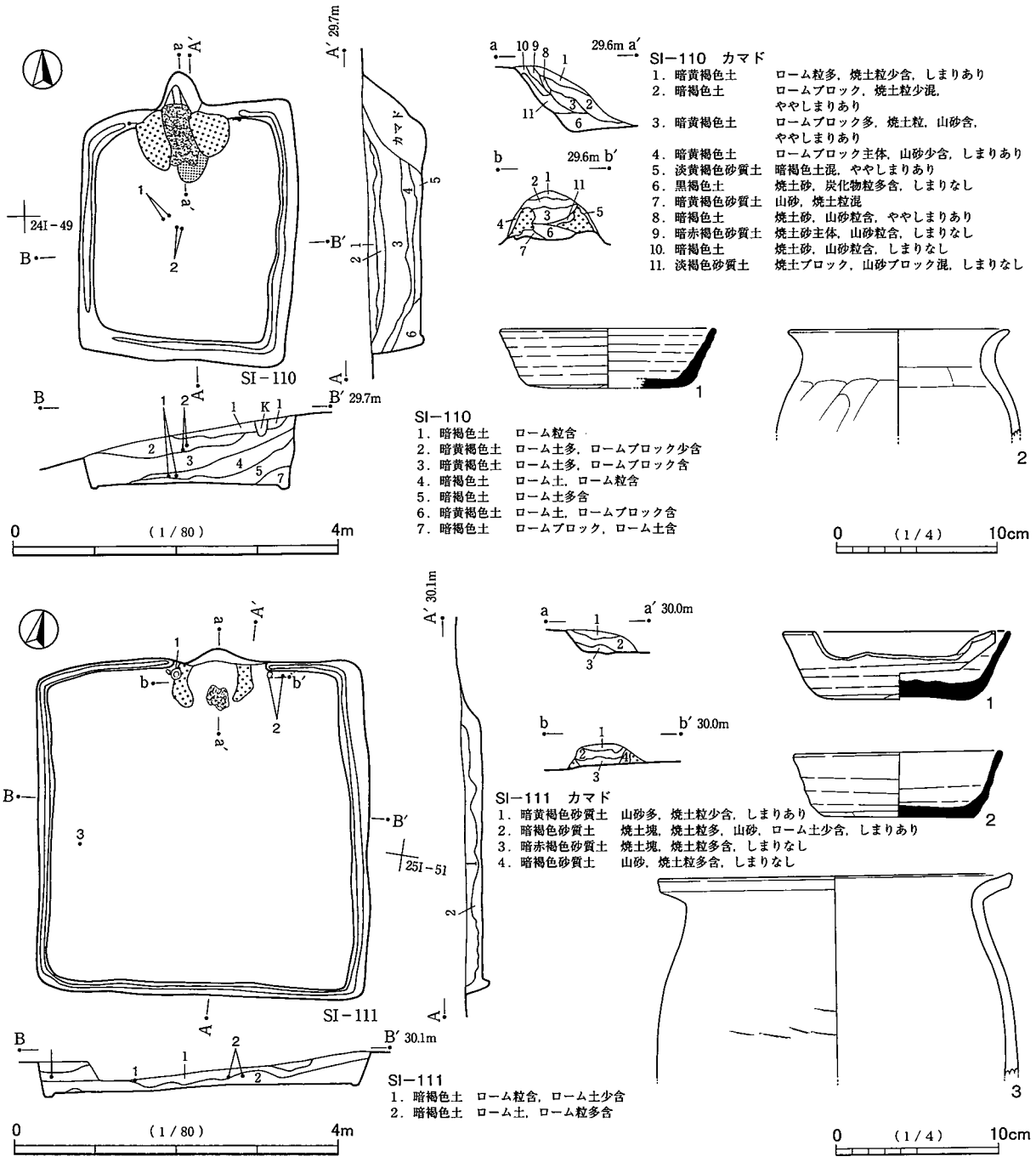
**出土遺物**　少量で，カマド前方に分布している。図示できた遺物は２点である。１は新治窯産の須恵器杯である。２は小型の土師器甕で，在地の土器である。ともに遺存は少ない。１はカマド前方の下層，２は中央の上層から出土した。埋め戻された堆積土は，遺物をあまり含んでいないといえる。出土層位の高低もあまり意味の違いはないであろう。

**重複遺構**　西側でSD－016と重複し，本住居が切られている。しかし重複部分のSD－016は非常に浅いため，本住居の欠損は少ない。

SI－111（第149図，図版53）

**位置**　調査区北東部やや南西寄りの25I－40グリッドを中心に位置する。西方に支谷があり，確認面が東から西に下るが，やや台地内側に立地するため，高低差は少ない。

**形状・規模**　長さが4.2m，幅が4.1mの方形をなす。確認面からの深さは10cm～40cmである。




第149図　SI−110・111

**床面**　やや凹凸があるが，全体に堅くしまっている。カマド前から中央が壁側よりやや硬化している。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁の中央からわずかに右寄りに位置する。プランからの突出は小さい。左袖の一部と右袖基底部の範囲を確認できたが，構築材の遺存は悪い。火床部底面に赤色化及び硬化した面がみられる。袖の基底面も火床面も床面と同じ高さである。壁溝はカマド両脇で立ち上がり，カマド下には巡らない。カマド内堆積土下層は焼土粒・焼土ブロックを多く含む。

**堆積土**　暗褐色土主体である。下層でローム粒を多く含むが，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　カマド周辺からの出土が目立つが，その他の分布は薄く，全体量は少量である。図示できた遺物は３点である。１・２は新治窯産の須恵器杯，３は常総型の土師器甕である。

1は口縁部の1/3強を欠損するが，欠損部以外は割れていない比較的遺存良好な土器である。欠損部は3箇所あり，1箇所は大きなもの，もう1箇所は小さなもの，残る1箇所はわずかなものである。大きな欠損部の破断面は逆台形状の形態で，比較的水平に欠損している。一部に磨れている部分があるが，全体には及んでいない。形状から打ち欠きされたと考えられる。小さな欠損部は逆三角形状の形態を呈する。わずかなものは胎土に含まれる小石が抜けただけかもしれないが，やや不自然な様相がうかがえる。大きな欠損部の中央から対向的な位置にあり，人為的なものと思われる。刀子等の鋭利な工具によって，切り込みが入れられたのではないだろうか。逆三角形状部分は自然破損の可能性もあるが，他の2箇所が人為的とすると，これも人為的な可能性が高い。2の遺存は6割程度である。欠損部は整ったものではない。3は口縁部から胴部上位までの一部の破片である。

1はカマド左袖上で，北壁際から，斜めに傾いた正位で出土した。2はカマド右袖外側の北壁際下層から出土した。1・2はほぼ同様の高さから出土した。1はカマド上方から転落した可能性が考えられる。土器の様相と出土位置から，カマド廃棄の祭祀に関わる遺物と思われる。2は1と対称的な位置から出土したが，1とセットになるものか，断定しがたい。遺存が悪いため，図化していないが，2の右側から土製支脚が出土している。カマド廃棄の祭祀時に，カマド内から抜き取られた可能性も考えられる。

SI－112（第150図，図版53）

位置　調査区北東部中央やや西寄りの25I－30グリッドを中心に位置する。確認面は東から西に下るが，やや台地内側に立地するため，高低差は少ない。

形状・規模　長さが4.5m，幅が3.5mの長方形をなす。確認面からの深さは遺存のよい部分で17cmである。浅い竪穴であり，南西側が流失している。

床面　北東隅付近に遺存している。その他は床面の雰囲気がうかがえるものの，遺存は悪い。北東隅の床面はかなり硬化している。

柱穴　中央で検出されたピットは，北西隅・南東隅の対角線上に位置する。南西隅が不明なため，やや不明瞭な点があるが，プランの中央に位置すると思われる。本竪穴の主柱穴であろう。径は35cm×30cm，深さは50cmである。しっかりとした掘り込みをもつピットで，中央に黒褐色土，両脇にローム粒・ロームブロック混じりの暗褐色土が堆積していた。棟持柱を立てた柱穴と思われる。

カマド　北壁中央に位置する。遺存は極めて悪く，壁からやや離れて，両袖が流失したと思われる山砂の集中範囲が2箇所検出されたのみである。火床部底面は床面と同じ高さであり，窪んでいない。赤色化した面はみられない。

堆積土　全体にローム粒混じりの土層である。浅いために，自然堆積か人為的堆積か判然としない。

出土遺物　竪穴の遺存が悪いため少量である。堆積土が遺存する東壁側には偏りなく分布するので，本来は竪穴全体に包含されていた可能性がある。図示できた遺物は2点である。1は常総型の土師器甑，2は在地の土師器甕である。1は口縁部から胴部上位までの一部の遺存である。胴部中位以下を欠損するが，形態から甑と思われる。

その他　長方形プランであることと，中央に主柱をもつことから，通常の竪穴住居とは異なる性格をもつ竪穴建物と思われる。

SI－113（第150・151図，図版53）

位置　調査区北東部中央の25I－20グリッドを中心に位置する。西方に支谷があり，確認面は東から西

に下るが，台地内側に立地するため，高低差は少ない。

形状・規模　長さが3.4m，幅が3.5mの方形をなす。確認面からの深さは40cm～70cmである。

床面　若干の凹凸があり，わずかに西に下るが，ほぼ平坦といえる範囲である。全体にやや軟質であるが，中央がやや硬化している。

カマド　北壁中央に位置する。ほとんど遺存せず，カマド構築体の様相はうかがえない。左壁側に構築材の山砂粒と焼けた山砂ブロックがまとまってみられた程度である。火床面も遺存していない。カマド部分は床面よりも20cm以上深く，円形に掘り込まれている。両袖を含む範囲であり，当初からの掘りかた，または作り替えに伴う掘りかたと思われる。

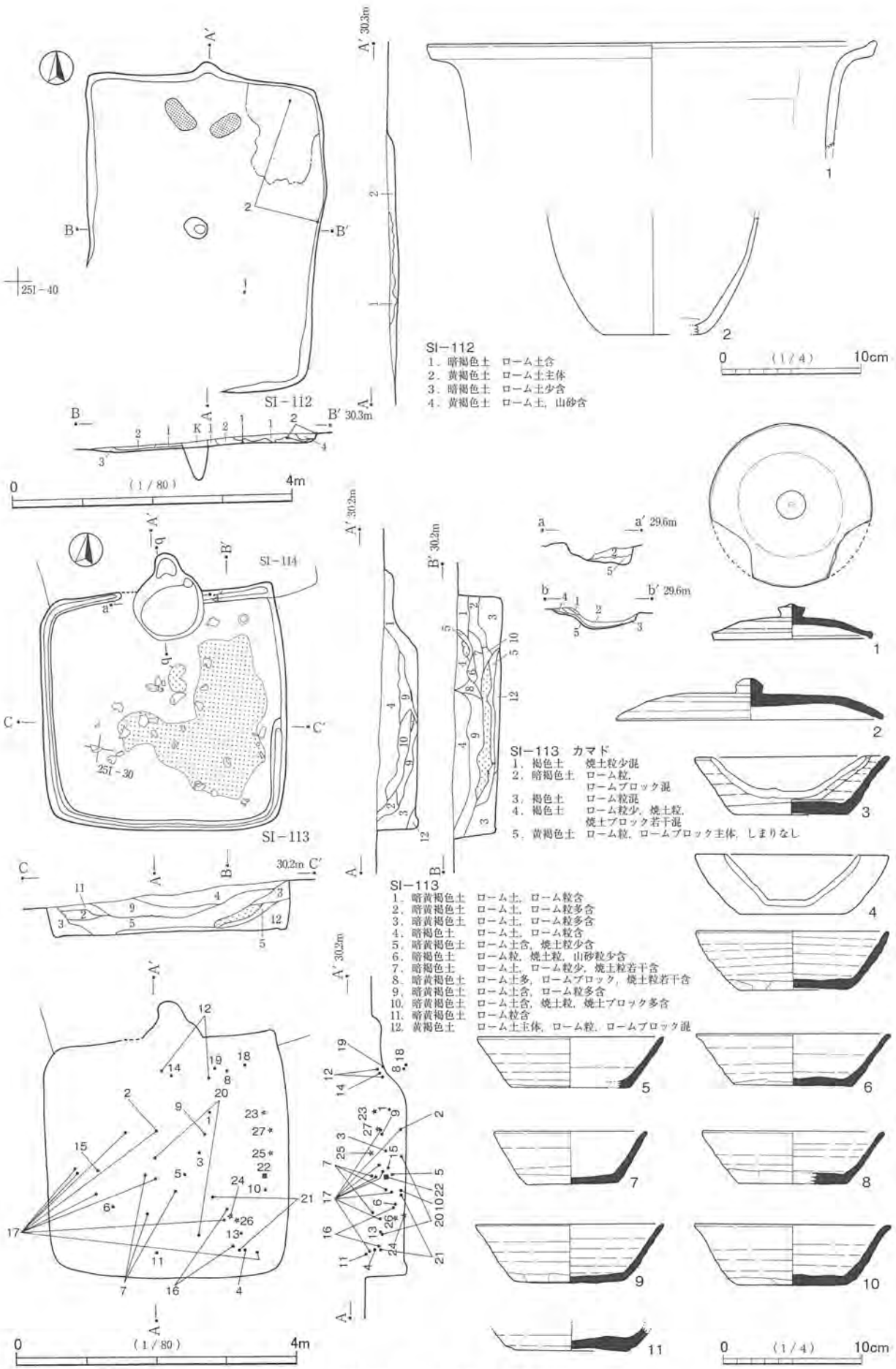
堆積土　9層以下は，概してローム粒を多く含む。また下層に焼土層が堆積している(図の網点部分)。ロームや焼土の含有量によって，一部が細かく分かれる。レンズ状に堆積する部分もあるが，中位までは埋め戻されていると思われる。なお上層の4層は自然堆積の可能性も考えられる。焼土層は東壁側を主体として，中央に延びており，中央にいくほど薄くなる。遺物はその上面から出土したものが多い。焼土層は床面からやや高い位置にあるため，不慮の火災とは思われない。また中央の焼土が薄いため，焼土等が東側から投棄された可能性も考えられる。しかし焼土範囲の広さを考慮すると，竪穴内で燃焼行為があった可能性が高いと考える。竪穴廃棄後の窪みで焼却行為があり，その後焼却面上も埋め戻されたのであろう。なお焼却の中心は竪穴東側にあったと思われる。

出土遺物　多量の遺物が出土した。平面分布は東側から中央にかけて多く，北西隅・南西隅側はやや希薄である。遺物の分布密度が濃い部分は，焼土範囲と概ね一致する。図示できた遺物は27点である。1・2は須恵器蓋，3～11は須恵器杯，12～14は非ロクロの土師器杯，15は須恵器高台付杯，16・17は須恵器甕である。須恵器はすべて新治窯産と思われるが，17は千葉産かもしれない。しかし新治窯産の可能性の方が高いとみておく。18・20・21は土師器甕で，18は在地の甕，20は常総型，21は武蔵型である。19は常総型の甑と思われる。22は土製支脚である。23～26は鉄製品で，23は鉄鏃，24は刀子，25・26は穂摘具である。27は鉄滓で，椀形滓である。

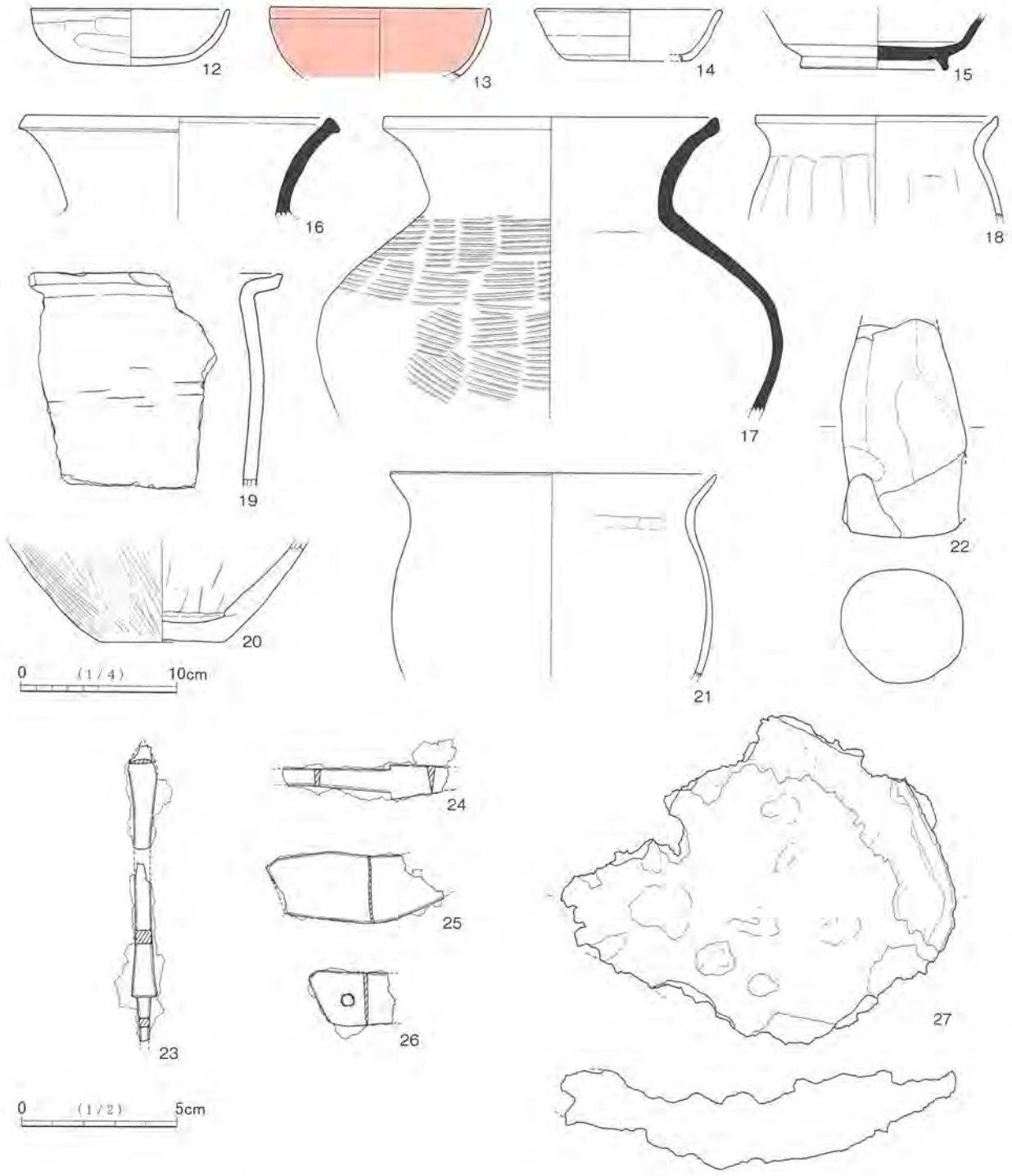
1は小型の蓋，2は大型の蓋である。1は口縁・天井部の2箇所を弧状に欠損する以外は，割れていない遺存のよい土器である。欠損部は整った形態を呈し，失われた口縁部周はまったく同じ長さである。欠損部は打ち欠きされたといえるものである。なお外面で欠損部端から5㎜ほどの位置に暗灰色の弧線があるが，石膏を入れたときの染みであり，当初からのものでないことを断っておく。現時点では，石膏を除去している。2は乳頭状の小さなつまみが付く。口縁端部内面には，浅い沈線が巡り，かえりの名残がうかがえる。口縁・天井部はやや大きく欠損している。

3・4は口縁・体部の1箇所が大きく弧状・逆台形状に欠損している。ともに比較的整った形態であり，打ち欠きされたものと思われる。3はその他に口縁部の2箇所が欠損・破損している。1箇所は小さな逆三角形状を呈し，1片が接合して遺存する。もう1箇所は端部のわずかな欠損である。それ以外には割れずに遺存する土器である。逆三角形状部分は打ち割りされた可能性がある。4は大きな欠損部以外は，比較的よく遺存するが，数片に割れている。また口縁端部の一部が小さく欠損する。破損・欠損が意図的になされたものか断定しがたい。3・4以外では，6・7がやや遺存がよいが，欠損・破損に意図的な様相は認めがたい。4・7には火襷がみられる。

13は全面に赤彩が施されている。12・14もその可能性があるが，器面が荒れているため，判然としない。




第150図　SI－112・113（1）




第151図　SI－113（2）

施されていない可能性が高いとみる。

16・17の器面は，荒れや剥離が著しい。18は口縁部から胴部上位まではほぼ遺存しており，破断面が比較的水平である。20の器壁は厚い。19・21は一部の遺存である。21の口縁部は長く，中位に接合痕がみられる。胴部外面は横方向のヘラケズリが施されている。

23は鑿箭式の鉄鏃である。棒状部の中央と茎尻側を欠損する。鏃身は切先をわずかに欠くが，遺存はよい。棒状部は非常に長いものではないが，長頸鏃といえる範囲内のものであろう。棒状部は茎との境で若干広がるもので，台形状の篦被である。茎は細く，四面関である。24は関付近の破片である。切先と茎尻

は欠損する。背関は直角に切り込みが入る。刃関は錆のため不明瞭である。急角度の切り込みであるが，わずかに斜めになると思われる。25はかなり小型の穂摘具である。両端部を欠損する。図の右側部分は目釘孔を境に欠損していると思われる。遺存部分から方形の形態と思われる。図左側の目釘孔は遺存しない。木質の付着はみられない。やや波打った状態で遺存している。26は片方の端部側の破片である。目釘孔が空いた状態で遺存している。ほぼ円形の形態を呈する。木質の付着はみられないが，質感から図示した面に握り柄（木台部）が取り付いていたと考えられる。26は片側が遺存し，円形の目釘孔がみられる。27は椀形の鍛冶滓である。かなり大きなものである。

遺物は焼土層上の中位から出土したものが多い。この中には祭祀的な様相をもつと思われる１・３・４や土製支脚が含まれる。なお土製支脚は22の他，もろいため図示していないが，もう１点存在する。これらの存在から，遺物等の廃棄と焼却行為が祭祀的なものである可能性が考えられる。しかしその他の多くの遺物に，特に祭祀的様相がうかがえないことから，断定はしがたく，可能性の指摘に留めておく。

**重複遺構**　北側でSI－114と重複し，本住居が切っている。

SI－114（第152図，図版53）

**位置**　調査区北東部中央の25I－20グリッドを中心に位置する。西方に支谷があり，確認面は東から西に下るが，台地内側に立地するため，高低差は少ない。

**形状・規模**　長さが4.2m，幅が4.0mの方形をなす。確認面からの深さは30cm～80cmである。

**床面**　平坦である。全体に硬質であるが，中央が壁側より硬化している。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。出入口ピットは検出されなかったが，本来存在したとしても，南壁側にあるSI－113に切られ，欠損したと思われる。

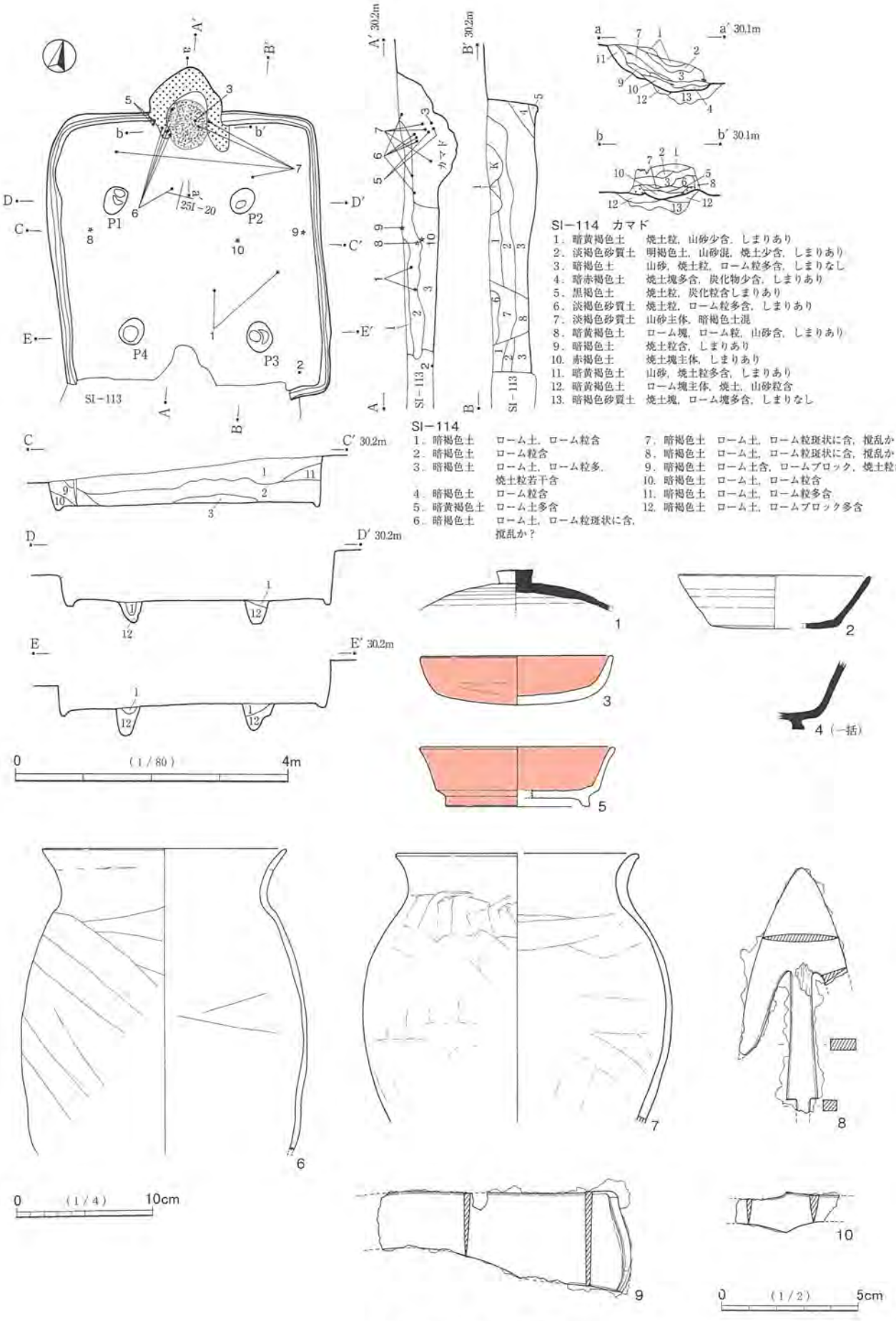
**壁溝**　重複遺構により不明な部分以外は巡っている。全周すると思われる。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランから大きく突出する。両袖の遺存は上部でやや悪いが，下半部は遺存している。構築材は山砂を主体とし，混じりけは少ない。袖部の山砂は煙道部壁側まで続く。両袖内壁は赤色化し，火床部底面も広範囲に赤色化している。カマド下は床面よりも大きく深く掘り込まれ，かなり埋め戻されている（12･13層）。カマドはその上に構築され，焼土主体の土層が堆積している（10層）。カマド下の底面は，当初または作り替え時に伴う掘りかた底面と考えられる。

**堆積土**　ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土層である。中・下位はロームを多く含む（３層）。柱穴の堆積土は，上部はやや暗褐色土を含むが，概してローム粒・ロームブロックを多く含み，埋め戻されていると思われる。竪穴の堆積土も床面から中位までは埋め戻されている可能性があるが，やや断定しがたい。

**出土遺物**　カマド周辺からの出土が目立ち，全体的に分布するが，量的にはあまり多量でなく，遺存のよい遺物も少ない。図示できた遺物は10点である。１は新治窯産の須恵器蓋，２は新治窯産の須恵器杯，３は非ロクロの土師器杯，４は東海産の須恵器高台付杯，５はロクロ土師器高台付杯である。６・７は土師器甕で，６は武蔵型，７は在地の土器である。８～10は鉄製品で，８は鉄鏃，９は鎌，10は刀子である。

３は口縁・体部の1/2程度を欠損するが，比較的遺存のよい土器である。内外面全面に赤彩が施されている。器面はかなり荒れている。カマドから出土したが，欠損部が意図的なものか不明である。遺存部は２片に割れているが，出土時点では離れていない。５も内面に赤彩が施されている。外面は器面の磨耗のため判然としないが，同様に施されていると思われる。４は一部の破片である。外面は若干暗赤色の色調




SI−114 カマド

1．暗黄褐色土　焼土粒，山砂少含，しまりあり
2．淡褐色砂質土　明褐色土，山砂混，焼土少含，しまりあり
3．暗褐色土　山砂，焼土粒，ローム粒多含，しまりなし
4．暗赤褐色土　焼土塊多含，炭化物少含，しまりあり
5．黒褐色土　焼土粒，炭化粒含しまりあり
6．淡褐色砂質土　焼土粒，ローム粒多含，しまりあり
7．淡褐色砂質土　山砂主体，暗褐色土混
8．暗黄褐色土　ローム塊，ローム粒，山砂含，しまりあり
9．暗褐色土　焼土粒含，しまりあり
10．赤褐色土　焼土塊主体，しまりあり
11．暗黄褐色土　山砂，焼土粒多含，しまりあり
12．暗黄褐色土　ローム塊主体，焼土，山砂粒含
13．暗褐色砂質土　焼土塊，ローム塊多含，しまりなし

SI−114

1．暗褐色土　ローム土，ローム粒含
2．暗褐色土　ローム粒含
3．暗褐色土　ローム土，ローム粒多，焼土粒若干含
4．暗褐色土　ローム粒含
5．暗黄褐色土　ローム土多含
6．暗褐色土　ローム土，ローム粒斑状に含，撹乱か？
7．暗褐色土　ローム土，ローム粒斑状に含，撹乱か？
8．暗褐色土　ローム土，ローム粒斑状に含，撹乱か？
9．暗褐色土　ローム土含，ロームブロック，焼土粒含
10．暗褐色土　ローム土，ローム粒含
11．暗褐色土　ローム土，ローム粒多含
12．暗褐色土　ローム土，ロームブロック多含

第152図　SI－114

を帯びている。胎土は緻密で，非常に硬質である。高台の作りもシャープで，接地部の幅が広い。６の器壁は薄く，７も６ほどではないが，器壁は比較的薄い。

８は切先から茎の一部まで遺存する鉄鏃である。鏃身の一部と茎の多くを欠損する。鏃身は広身の長三角形式で，長大なものである。逆刺も非常に長い。図示した左側部分が遺存する。棒状部がかなり短い短頸鏃である。両側面は直線的であるが，茎に向かって徐々に幅を広げ，茎との境が最も幅広である。木質が図示した面側の棒状部の鏃身寄り部分に付着している。９は基部から刃部中央付近まで遺存する。基部の刃側は直線的に幅を減じ，屈曲点をもって弧を描く刃部となる。その境は明瞭である。10は関周辺の破片である。背関は直角的であるが，やや丸みをもつ。刃関部分は刃部と茎の境が鈍く尖り，茎はその屈曲点から徐々に幅を減じていく。刃側は研ぎ減りして緩やかな弧を描くが，全体に欠けて鈍くなっている。

３は最終的な火床面やや右寄りから正位で出土した。６・７はカマド内及び周辺から出土した。層位は，６が上層，７は下層から上層である。カマド内・周辺で遺存のよい遺物は３だけであり，この１点でカマド廃棄の祭祀に関わる遺物かどうか断定しがたい。図示した遺物の層位は，中層から上層のものが多い。出土遺物は概して，周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　南側でSI－113と重複し，本住居が切られている。

SI－117（第153図，図版54）

**位置**　調査区北東部中央の25I－02グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが5.0m，幅が5.1mの方形をなす。確認面からの深さは60cmである。

**床面**　平坦である。カマド前や主柱穴P2・P3間，P3・P4間等，所々硬化しているが，中央は硬化面がみられない。壁側もやや軟質な部分が多い。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。床面からの深さはいずれも50cm以上である。底面から30cm程のところまでは垂直的な壁であるが，その上部は大きく開いて立ち上がる。柱痕は確認できなかった。出入口ピットは検出されなかった。

**壁溝**　全周する。壁への立ち上がりはややオーバーハングしている部分がある。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランからの突出はあまり大きくない。両袖の遺存は比較的よい。構築材は山砂を主体とし，全体にしまっている。両袖内壁は赤色化が顕著である。また火床部も赤色化した面がみられる。火床面はカマド底面より15cm上方にある。カマド底面は床面よりも10cm程深く，当初または作り替えや補修に伴う掘りかた底面と思われる。前側下層に灰を多く含む層が堆積していることから，灰のかき出しが行われているが，火床面は使用に伴い，次第に高くなったのであろう。

**堆積土**　ローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土層が主体である。床面際を除いて，均一な土層であるが，下層にいくほどローム粒が増加する。焼土が床面から検出されたが，焼土主体ではなく，黒褐色土に焼土粒・炭化粒が多量に混入している状態である。南側・中央西側・カマド右側にまとまった範囲がみられる。床面は火を受けた痕跡がうかがえる。壁溝内の堆積土もローム粒を多く含むが，やや暗い色調である。柱穴の堆積土下層はロームを主体とする。上層はやや暗い色調で，竪穴堆積土に近い土層である。柱は柱穴・堆積土の状況から，抜き取られた可能性がある。竪穴の堆積土はロームを多く含むため，やや判然としないが，自然堆積の可能性がやや高いように思われる。

**出土遺物**　全体的に分布する。土器破片主体であるが，ある程度の量が出土している。図示できた遺物は９点である。１は新治窯産の須恵器蓋，２・３は新治窯産の須恵器杯，４は非ロクロの土師器杯，５・

6は常総型の土師器甕である。7は鉄製品で，刀子である。8・9は軽石である。

1は小片から図化した。天井部外面に焼成後の1条線があり，線刻とも思われるが，器面の磨耗が顕著なため，単なる傷かもしれない。2・3は1/2以下，4は1/2程度の遺存である。4は全面に赤彩が施されている。器面はかなり磨耗している。5は胴部の破片で，外面に「符」と書かれた正位の墨書がある。6は口縁部周辺と底部周辺を欠くが，胴部の遺存は良好である。ただしやや細かく割れている。胴部下位側の破断面は水平的であり，胴部上位側も比較的水平な部分が多い。なお5と6は別個体である。

7は切先側を若干欠くが，その他は遺存する刀子である。茎尻は錆に覆われているが，遺存する。錆は柄の木質を多く含むものである。背の一部にも木質がみられる。背関は浅く直角的に切り込みが入る。刃関は現状では角をなさず，斜めに刃部から茎に移行する。8は一部に赤みの強い部分がある。火を受けたものと思われる。

6はカマド部分上層からつぶれた状態でまとまって出土した。胴部上位を煙道部壁側，胴部下位を竪穴側に向けていると思われる。出土位置はカマドの器掛け口部分と思われる。7は北西側主柱穴P1と北壁間の下層から出土した。6は底部と口縁部が除去されて，カマド廃棄の祭祀に使用された可能性が考えられる。その他の遺物の多くは広く散っており，出土層位は中・上位を主体とする。一部を除いて，出土遺物の多くは，周囲から廃棄されたか流入したものと思われる。

SI－118（第154・155図，図版54）

位置　調査区北東部中央やや南東寄りの25I－45グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが5.2m，幅が5.0mの方形をなす。確認面からの深さは70cmである。

床面　中央は平坦であるが，東西の壁際がやや低い。全体に軟質で，特に硬化した面はみられない。

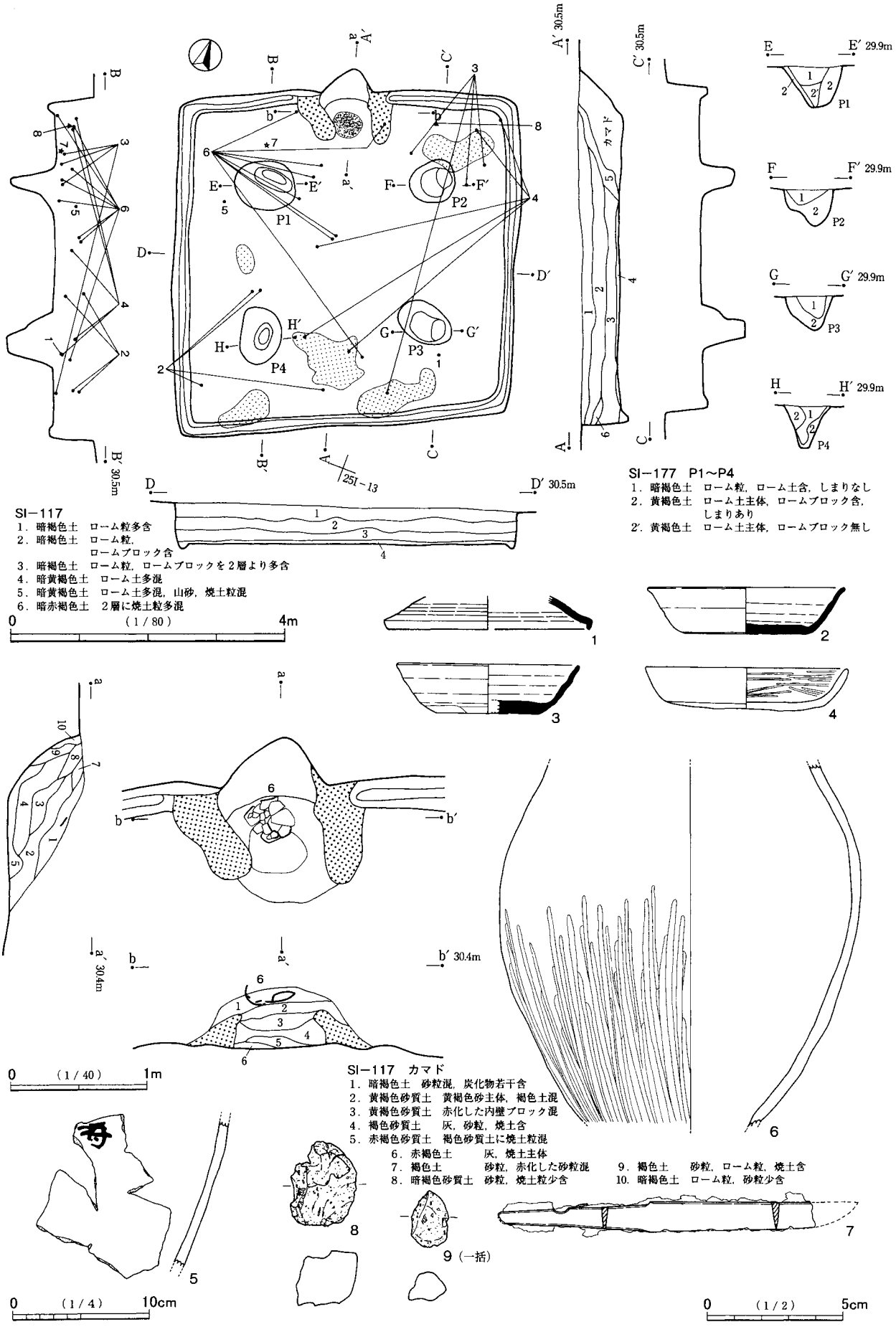
柱穴　主柱穴が4箇所検出された。また東西壁にそれぞれ3箇所ずつ，計6箇所の壁柱穴がある。そのうち東壁中央を除く5箇所の柱穴は，壁に入り込んでいる。主柱穴のうち，カマド側の2箇所では柱痕と思われる痕跡を確認できたが，南壁側の2箇所では確認できなかった。出入口ピットは検出されなかった。

壁溝　全周する。壁への立ち上がりはややオーバーハングしている部分が多い。

カマド　北壁中央に位置する。方形プランからはやや大きく山形に突出する。両袖の遺存は比較的よい。構築材は山砂を主体とする。両袖はかなり内部まで赤色化している。火床部は焼土ブロックが厚く堆積している（4層）。火床部からカマド前方は，広く掘り込まれ，底面は床面よりも20cm以上深くなる部分がある。その部分の堆積土（6～9層）上に両袖や火床面が位置することから，掘り込みは使用によって深くなっただけでなく，当初または作り替え等に伴う掘りかたと思われる。

堆積土　暗褐色土・黒褐色土主体である。ローム粒の含有は上・中層で少ない。自然堆積と思われる。中位の一部に焼土を多く含む土層がみられる。北側の柱穴の堆積土は，暗褐色土とローム主体の黄褐色土に分かれる。暗褐色土部分は柱状であり，柱痕の可能性がある。南側の柱穴には柱状の層位がみられず，抜き取りされた可能性があるが，やや断定しがたい。なお北側も柱が切断されて，持ち出された可能性があるので，柱がそのまま遺存していたとはいえない。

出土遺物　多量の遺物が竪穴全体から出土した。図示できた遺物は30点である。1～10は新治窯産の須恵器杯，11は非ロクロの土師器杯である。12は土師器甕の胴部片と思われる。13は新治窯産の須恵器高台付杯，14～17は須恵器高杯または高盤である。14・17の産地がやや不明瞭であるが，すべて新治窯産と思われる。18は湖西窯産と思われる須恵器甕の胴部片で，朱墨の転用硯である。19は新治窯産の須恵器短頸


SI−117
1．暗褐色土　ローム粒多含
2．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック含
3．暗褐色土　ローム粒，ロームブロックを２層より多含
4．暗黄褐色土　ローム土多混
5．暗黄褐色土　ローム土多混，山砂，焼土粒混
6．暗赤褐色土　２層に焼土粒多混
0　(1/80)　4m
SI−177　P1〜P4
1．暗褐色土　ローム粒，ローム土含，しまりなし
2．黄褐色土　ローム土主体，ロームブロック含，しまりあり
2′．黄褐色土　ローム土主体，ロームブロック無し
SI−117　カマド
1．暗褐色土　砂粒混，炭化物若干含
2．黄褐色砂質土　黄褐色砂主体，褐色土混
3．黄褐色砂質土　赤化した内壁ブロック混
4．褐色砂質土　灰，砂粒，焼土含
5．赤褐色砂質土　褐色砂質土に焼土粒混
6．赤褐色土　灰，焼土主体
7．褐色土　砂粒，赤化した砂粒混
8．暗褐色砂質土　砂粒，焼土粒少含
9．褐色土　砂粒，ローム粒，焼土含
10．暗褐色土　ローム粒，砂粒少含
0　(1/40)　1m
0　(1/4)　10cm
0　(1/2)　5cm
9（一括）

第153図　SI－117

壷である。20～22は土師器甕である。20・21は同一個体と思われる。系譜が不明瞭であるが，在地の土器と思われる。22・23は常総型の甕である。24は須恵器甑である。産地は不明瞭である。25・26は金属製品で，25は鉄鏃，26は銅製の腰帯である。27～30は軽石である。その他図示していないが，モモ核が１点出土した。

杯に刻書をもつものが多い。３は体部外面にヘラ書きがある。文字か記号か判然としない。文字とした場合，判読できない。５・７は底部内面に１条の線刻がある。ともに底部内面の中央部付近が端から端まで刻まれている。６は底部外面に「Ｅ」状のヘラ書きがある。８も底部外面に「卄」状の線刻がある。器面が磨耗しているため，ヘラ書きか線刻か不明瞭である。ヘラケズリの砂粒移動またはヘラ書きによる条線に線刻の条線を加えたもののように思われる。９は底部破片を円盤状に加工したものの内外面に「＋（×）」の線刻がある。円盤状の加工と線刻のどちらが先か判然としない。10も底部内面に「＋（×）」の線刻がある。またこれも円盤状に加工された底部破片の一部と思われる。12は外面に黒色物が付着している。墨書の可能性もあるが，判読できない。甕と思われる破片であり，煤の付着とも考えられる。

７の口縁・体部は4/5周程度欠損している。欠損部はその形状から打ち欠きされたものと思われる。また５の欠損部も同様の可能性が考えられる。その他，１の口縁・体部の欠損も打ち欠きされた可能性があるが，遺存部分がやや細かく割れているため，断定しがたい。

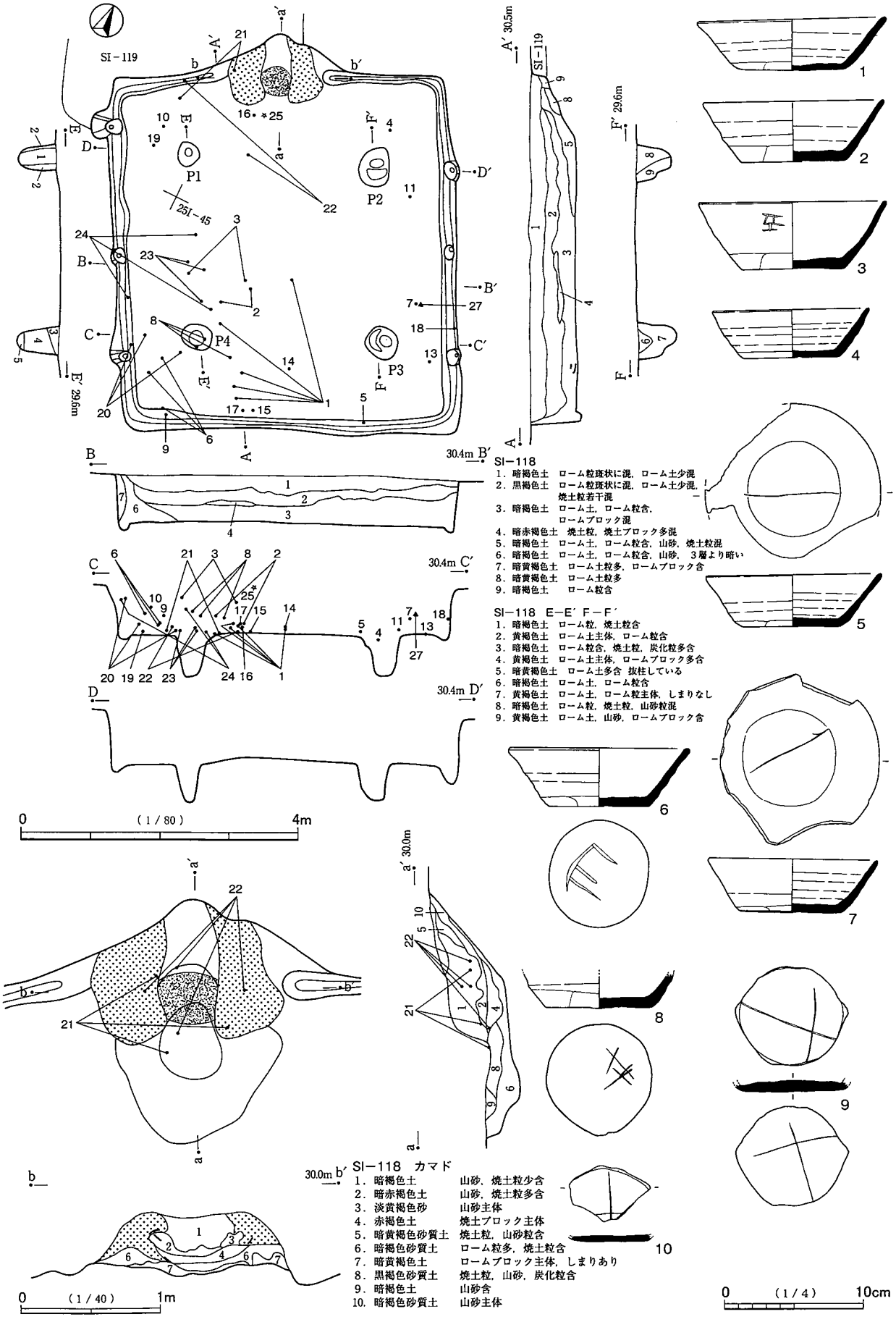
14・16・17の脚部には，長方形と思われる透かしがある。17の透かしは幅が広い。18は内面に朱墨の痕跡がみられる。内面に同心円文がみられるが，痕跡的であり，当初から比較的滑らかな質感と思われる。19は遺存が良好である。口縁部の多くを欠くが，胴部・底部は割れもなく遺存する。

20・21は復元図の形態は合わないが，質感は似ている。20の遺存が少ないため，口径が大きくなり過ぎた可能性がある。同一個体とみておきたい。口縁部が大きく開くかなり長胴の甕と思われる。

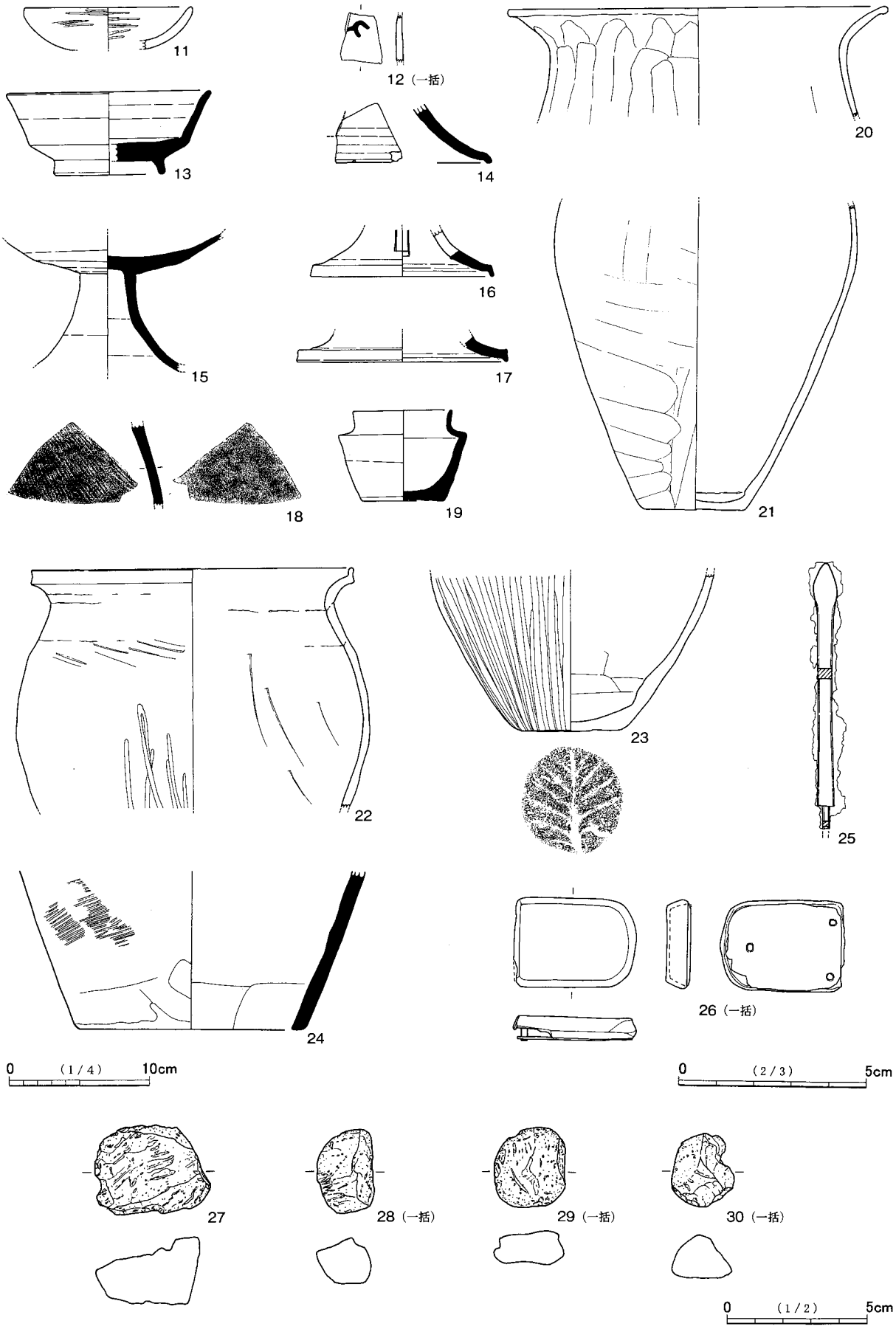
24は平行タタキをもつが，色調は褐色で土師器的な焼成である。底部は５孔となる様相がうかがえない。遺存が少ないためかもしれないが，須恵器であるならば三孔，二孔の可能性も考えられる。産地が不明瞭であり，千葉産としてもやや違和感がある。白雲母末がわずかにみられることから茨城産の須恵器としておきたい。

25は切先から茎の一部まで遺存する鉄鏃である。茎尻は遺存しない。鏃身は鑿箭式である。棒状部はやや長さがあるが，鑿箭式の鉄鏃としては，それほど長くない。両側面は直線的であるが，茎との境でわずかに広がっている。茎は細く，篦被は四面関である。26は帯先金具で，いわゆる鉈尾である。やや小型の製品である。裏金具も遺存しており，遺存良好である。側辺が帯幅に平行し，先端で緩やかな弧状を呈する。幅と長さの比は１：1.4である。脚鋲は３本あり，裏金具に鋲先端がみられる。丸みをもつ先端側中央に１本，その反対側の両隅に２本である。暗緑色の膜状の物質が，表金具の上面の多くと，裏金具の一部に付着している。この物質については黒漆の塗膜の可能性が考えられたため，国立歴史民俗博物館の永嶋正春氏に実見していただいたところ，漆ではなく，被熱によって鉈尾の成分の一部が溶着したものとのことである。30はやや赤みの強い部分があり，火を受けた可能性がある。

線刻等をもつ土器のうち，５は南壁際右よりの下層から出土した。しかしその他は，床面よりも高い位置である。５自体も判然としないが，特に祭祀的な様相はうかがえない。図示した出土遺物全体の層位をみると，下層から出土したものもあるが，中・上層から出土したものもかなり多い。また平面分布をみると，広く散っているものがかなりある。以上の様相から，出土遺物は概して，周囲からの廃棄・投棄及び




第154図　SI－118（1）




第155図　SI－118（2）

流入によるものと思われる。なお26の出土位置は不明である。

**重複遺構**　北側でSI－119と重複する。出土遺物の様相からは本住居の方が古いと思われる。

### SI－119（第156図，図版54）

**位置**　調査区北東部中央の25I－34グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　幅が3.3m，確認面からの深さは30cmである。SI－118との重複により，長さが不明瞭であるが，2.9m程度と推定される。形態は横長の方形をなすと思われる。

**床面**　西壁際が高く，東壁際が低いが，中央は比較的平坦である。特に硬化した面はみられない。

**柱穴**　北東隅でピットが検出された。貯蔵穴の一種と思われる。出入口ピットは検出されなかったが，SI－118と重複する影響が考えられる。

**カマド**　北壁右寄りに位置する。構造物としてのカマドは遺存せす，破壊されたものと思われる。両袖は，ローム土の基底部が遺存擦るのみである。その上に焼けた山砂を多量に含む暗褐色土が堆積している。火床部には，焼けた山砂ブロックの集中範囲がみられる。土製支脚（8）が立った状態で出土した。平面的には，中央からやや右に寄っているが，使用時の位置とみてもよいと思われる。カマド前側の底面が床面よりもやや深く窪んでいるが，平面範囲が狭く，使用に伴う程度の窪みと思われる。

**堆積土**　上層は黒褐色土，下層は暗黄褐色土である。下層にローム粒の含有が多いが，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　カマド内からやや多く出土した他は，散在的な出土である。図示できた遺物は9点である。1～4はロクロ土師器杯，5はロクロ土師器皿，6は千葉産の須恵器甕または甑，7は土師器鉢である。8は土製支脚，9は砥石である。

1・4はやや遺存がよいが，欠損部も目立つ。遺存部分はともにやや細かく割れている。2・3は遺存が少ない。5は口縁部の多くを欠損するが，底部周辺は遺存する。底径はかなり小さい。器壁が厚く，重量感がある。4・5の底部調整は回転糸切り後無調整である。6は小片から図化した。7の口縁部は外面側で凹み，内面側で上方にやや突出する。内面には浅い沈線がみられる。8はほぼ完形で，非常に長い支脚である。9は小型の砥石である。石材は流紋岩である。短軸の断面は三角形で，長側面三面はよく使用されて滑らかである。図の右側面は長軸方向の中央が凹んでおり，図の下面は短軸方向の中央が凹んでいる。小口面も使用されており，ともに筋状の研ぎ痕がみられる。

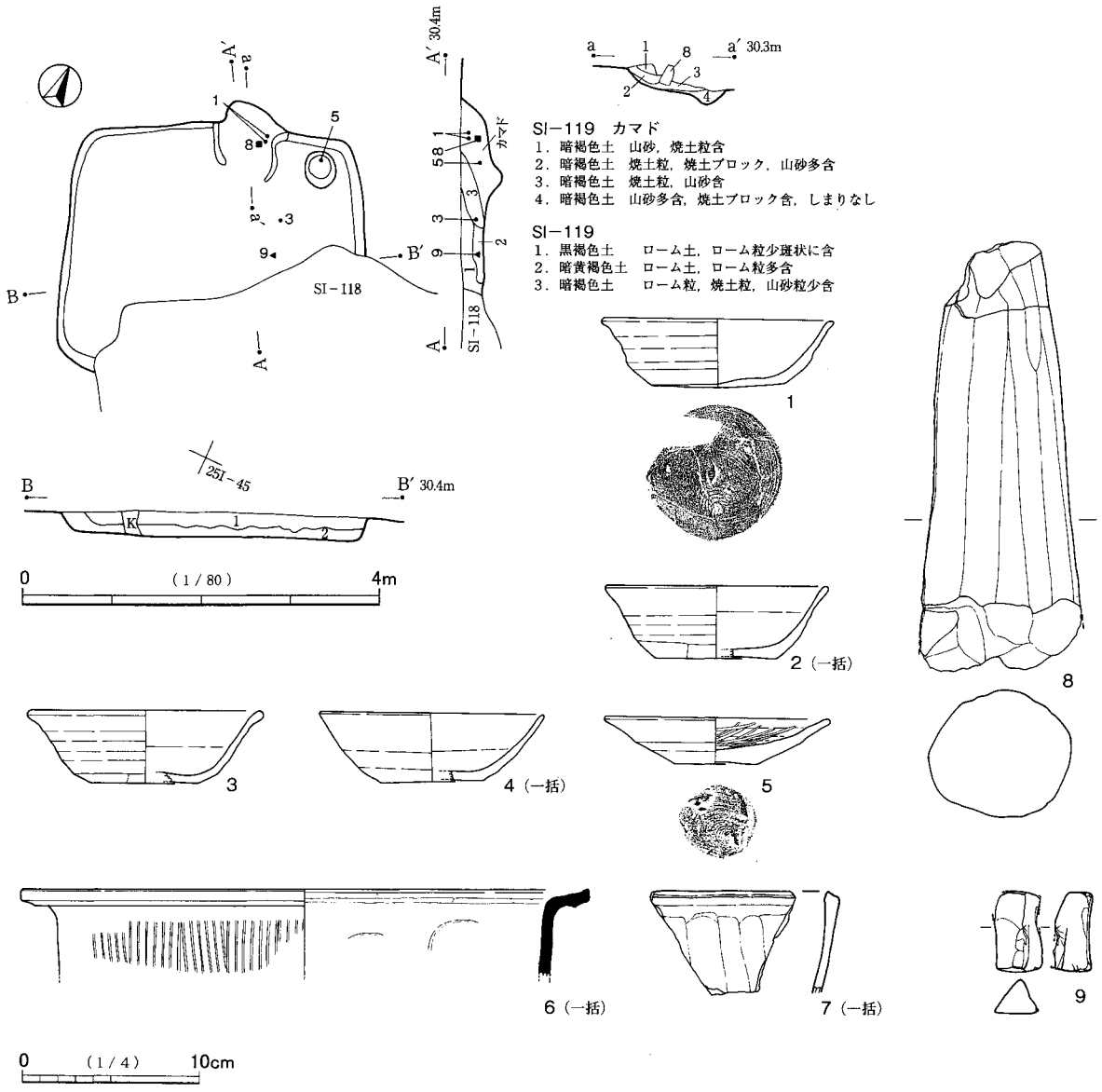
1は土製支脚8付近から出土した。層位はカマド底面からやや高い位置である。1・8の周囲からは土器片がやや多く出土したが，他に図化できる遺物はなかった。5は北東隅ピット上で堆積土下層から出土した。カマド内から比較的多くの遺物が出土したが，特に祭祀的な様相はうかがえない。

**重複遺構**　南側でSI－118と重複する。出土遺物の様相からは本住居の方が新しいと思われる。

### SI－121（第157図，図版55）

**位置**　調査区北東部北寄りの25H－50グリッドを中心に位置する。北及び東西の三方に谷を臨み，確認面は南から北に若干下っている。しかしやや台地内側に立地するため，傾斜は緩やかである。

**形状・規模**　やや台形的な方形プランである。南東隅にカマドをもつ。出入口ピットは検出されなかった。そのため主軸方向の把握が難しいが，表では北辺（図の左辺）から南辺（図の右辺）に向かう方向を主軸方位とした。長さが2.9mで，主軸に直交する長さ（幅）も2.9mである。確認面からの深さは30cm～50cmである。




第156図　SI－119

**床面**　西側が高く，東側が低い。床面は比較的しまっている。重複遺構の影響もあり，中央と壁側に硬化の差があるか不明瞭である。

**カマド**　南東隅部に位置する。プランからは全体的にわずかに突き出る程度で，あまり突出していない。煙道部の壁は垂直的な立ち上がりである。構築材は山砂を主体とするが，やや暗褐色土等の混じりが多い。遺存はあまりよくない。左袖内側と奥壁部分は，山砂が赤色化している。

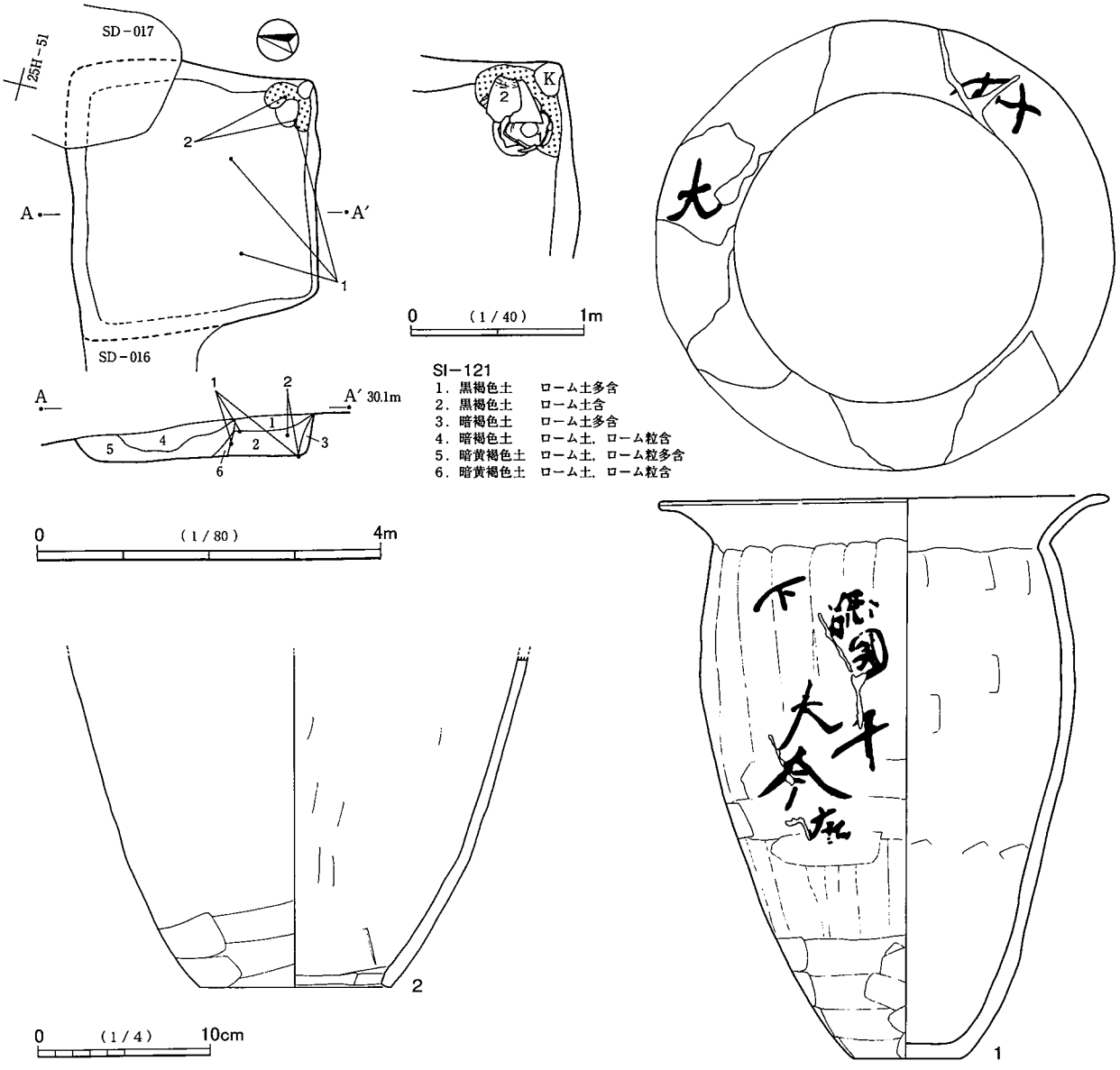
**堆積土**　黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　図示できた遺物は２点である。１は在地の土師器甕，２は常総型の土師器甑である。１は口縁部から底部まで，所々を欠損するが，非常に遺存のよい土器である。胴部外面に長文の墨書がある。「下総国千…大今在…」と判読できるもので，縦位及び一部斜位に記入されている。また口縁部内面に「大」・「村」の墨書がかなり離れた位置関係をもって記入されている。「下」と「総」はかなり斜めの位置関係であるが，「総」と「国」はほぼ縦位の位置関係となる。「国」と「千」はやや間が空いている。「千」は「千葉郡」を略したものと考えられる。「大今在」は縦位であるが，「大今」は土器に対してやや斜めである。また「今

在」は向きを変えて斜めに施されている。１の器形はかなり長胴である。口縁部は「く」の字状に開く形態で，最大径は口縁部にある。底部は小さく，カマドに据えない場合，転倒しやすい器形である。器面はやや荒れており，特に上半部と底部付近が顕著である。墨書文字の「国」付近から下位の胴部外面は全体に黒ずんでいる。特に胴部下位の黒ずみが強い。そのため全体的に赤外線による墨書探索を試みたが，検出されなかった。器面の荒れのため，消えたことも考えられるが，かなりの薄墨でなければ，判明している以上の多文字は記入されていない可能性が高い。口縁部内面の墨書については，円周を三等分した位置に存在する可能性を考えたが，遺存するその位置に墨書はみられない。特に分割されていないならば，欠損部に存在したことも考えられる。

２は胴部下端に欠損がない土器である。底部の孔は単孔で，正円に近い整った形態である。下位はよく遺存し，上位近くまで遺存する。下端面はヘラケズリによって平坦に面取りされている。下端部内面のナデ・ヘラナデはその後に施されている。外面は使用により荒れて，一部剥離している。

１・２の主要部はともにカマド内から出土した。１はカマド内底面上から正位で出土した。一部は割れ




第157図　SI－121

てつぶれた状態であり，破片の一部がカマド前方や竪穴西側等の中層・上層に散っている。２は１の上から横倒れの状態で出土した。底部を壁側に向けている。

１・２はカマド廃棄の祭祀時に，カマド内に納められた土器群である。２の破断面は整ったものではないが，中位での出土であり，確認面からやや深い位置である。重機等の影響はなく，当時の意図的な除去と思われる。１の破損が意図的であるかどうかの判断は難しいが，２の状況から一部は打ち割り・打ち欠き等が意図的になされたことも考えられる。

１・２以外の出土遺物は少量であり，散在的な出土状況である。

**重複遺構**　SD－016が本住居の北側を東西に走行し，本住居を切っている。またSD－016から直角に延びるSD－017が本住居の北東隅部を切っている。

SI－123（第158図，図版55）

**位置**　調査区北東部北寄りの25H－44グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　やや不整な方形プランである。北隅にカマドをもつ。出入口ピットは検出されなかった。そのため主軸方向の把握が難しいが，表では南東辺から北西辺に向かう方向を主軸方位とした。長さが3.0m，幅が2.8m，確認面からの深さは30cm～55cmである。

**床面**　ハードローム上面を床面としており，やや凹凸があるが傾斜はない。壁際を除いて広く硬化している。

**カマド**　北隅に位置する。煙道部の壁がプランからわずかに突き出る程度で，あまり突出していない。他の隅部もやや丸みをもつが，北隅は特に直角でない。丸みをもつというよりは，両袖部の壁が比較的直線となることを意図したプランと思われる。両袖の構築材は山砂を主体とするが，植物繊維が混入している。前側でやや遺存が悪いが，遺存する内側及び上方の赤色化は顕著である。カマド下底面は，床面よりも最深で20cm程度掘り込まれている。底面はほぼ床面と同じ高さまで埋め戻され（６・10層），カマドはその上に構築されている。両袖間中央に焼土を多く含む土層が堆積し（９層），その範囲が火床面である。掘りかたは当初またはカマド作り替え時の整備に伴うものであろう。

**堆積土**　暗褐色土主体であるが，上層は黒みが強く，下層はローム粒の含有が多いため，やや黄色みが強い。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　出土遺物は非常に少量である。図示できた遺物は武蔵型の土師器甕１点である（１）。口縁部付近の小片から図化した。出土位置は不明である。

**重複遺構**　北側でSD－016と重複し，本住居が切られている。

SI－124（第158図，図版55）

**位置**　調査区北東部北端の25H－13グリッドを中心に位置する。北方に谷を臨み，確認面は南から北に下っているが，傾斜はやや緩やかである。

**形状・規模**　やや台形的な方形プランである。隅カマド的で，出入口ピットが検出されなかったため主軸方向の把握が難しいが，表では南辺から北辺に向かう方向を主軸方位とした。長さが3.5m，幅が3.2mで，やや縦長の形態である。確認面からの深さは40cm～80cmである。

**床面**　壁際は低い部分が多いが，中央付近は平坦である。中央，特にカマド前方付近が硬化している。

**壁溝・壁**　カマドから右側にみられないだけであり，ほぼ全周する。壁は斜めに立ち上がる部分が多い。特に南壁から西壁の傾斜がやや緩やかである。

カマド　西辺の北西隅近くに位置する。カマドの長軸方位が竪穴中心から南東隅部に向かっており，隅カマド的な位置といえる。煙道部の壁はプランからまったく突出していない。両袖は比較的よく遺存する。構築材は山砂を主体とするが，下部はローム粒を多く含む。内側と上方に赤色化した部分がみられる。火床部底面には赤色化した範囲がみられない。底面は床面よりも深くなく，むしろ奥側は壁に続いて高くなっていく。左袖手前の床面には炭化粒・灰がみられ，カマドからかき出されたものと思われる。カマド内堆積土下層は焼土粒を含み，その上層には灰を多く含む土層も堆積する。またやや上部に焼けた山砂がみられる。

堆積土　暗褐色土主体であるが，上層はやや黒みが強く，最下層・壁際はローム粒の含有が多いため，やや黄色みが強い。レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。

出土遺物　非常に少量である。図示できた遺物は須恵器甕の胴部片１点である（１）。内面に同心円文当て具痕がみられるが，ナデで消されて，一部に若干みえる程度である。またヘラケズリも施されている。内面は滑らかであり，転用硯とも思われるが，やや判然としない。産地はやや不明瞭であるが，新治窯産と思われる。カマド右側前方，北壁寄りの下層から出土した。

SI－125（第158図，図版56）

位置　調査区北東部北寄りの25H－33グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが2.2m，幅が2.4mのやや不整な方形をなす。確認面からの深さは60cmである。

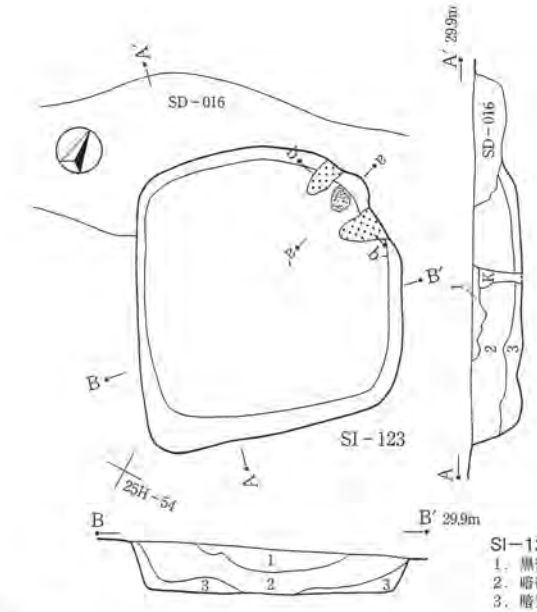
床面　凹凸が著しいが，傾斜はない。床面はハードローム層中であり，全体に硬質である。特に硬化の差はみられない。

カマド　北壁中央に位置する。前天井が遺存している点で，他のカマドよりも良好な遺存状態である。ただし左袖側の一部が重複遺構に切られて欠損する。煙道部付近が方形プランから小さく突出する。構築材は山砂を主体とする。両袖及び前天井部の内側は赤色化している。カマド内堆積土下層は焼土が混入し，堅く焼きしまっている（13層）。顕著な赤色化はみられないが，火床面の土層と思われる。カマド部分から左側前方にかけては，ハードロームを主体としてやや暗褐色土混じりの土で貼床が施されていると思われる。カマドはその貼床の上に構築されている。

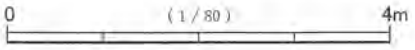
堆積土　南東隅から中央にかけての床面に，炭化物の集中範囲がある。その範囲中の一部には，山砂もみられる。炭化物の上部は，下層から主として暗黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土の順に堆積する。下層にロームの包含量が多いが，レンズ状に堆積しており，炭化物の堆積後は自然堆積と思われる。

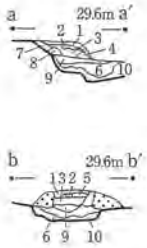
出土遺物　図示できた遺物は新治窯産の須恵器蓋１点である（１）。口縁・天井部の一部を弧状に欠損する以外は割れもない遺存良好な土器である。口縁部内面にかえりがある。かえりは口縁端部よりも内側に入っている。頂部はかなり鋭い。つまみは低く大きいものである。円の中心からややずれて貼り付けられている。中央が若干突出する。天井部内側は広く回転ヘラケズリが施され，平坦面を形成している。欠損部は打ち欠きされた可能性がある。北西側の下層から傾きのない倒位で出土した。倒位といっても蓋であるので，正位の土器的な状況で使用されたかもしれない。なお層位的には南東側の炭化物範囲と同様である。この土器は竪穴住居廃棄の祭祀に使用された可能性が考えられる。しかし遺存・出土状況の良好な土器はこの土器１点のみであり，断定しがたい。

１以外の遺物は常総型の土師器甕片がわずかに出土したのみである。１が遺棄または廃棄された後は，堆積土にほとんど遺物が入り込まなかった状況と思われる。

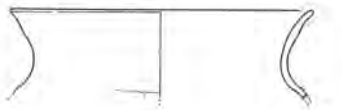



SI－123
1．黒褐色土　ローム粒含
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒含
3．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多含

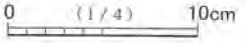


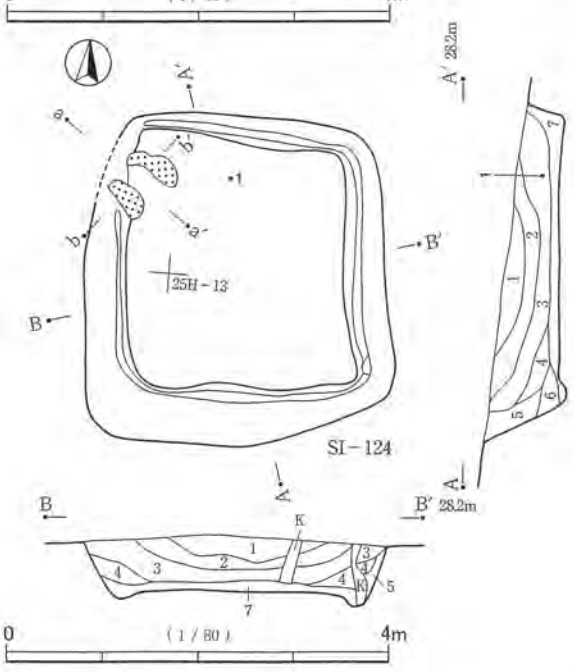




SI－123　カマド
1．暗黄褐色砂質土　赤褐色砂粒，明褐色砂粒多混，しまりなし
2．赤褐色砂質土　焼土主体
3．暗黄褐色砂質土　赤褐色砂粒，明褐色砂粒多含，しまりなし
4．暗褐色砂質土　赤褐色砂粒，明褐色砂粒，炭化粒含，しまりなし
5．明褐色砂質土　赤褐色砂粒，明褐色砂粒含
6．暗黄褐色砂質土　明褐色砂粒多含，しまりなし
7．暗赤褐色砂質土　赤褐色砂塊主体，暗褐色土，明褐色砂粒含しまりなし
8．暗褐色砂質土　赤褐色砂粒，明褐色砂粒，炭化粒含
9．暗赤褐色土　炭化粒，明褐色砂粒含，しまりあり
10．暗黄褐色土　ローム塊主体，暗褐色土含，しまりあり



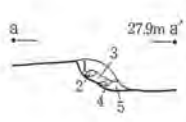
1（一括）



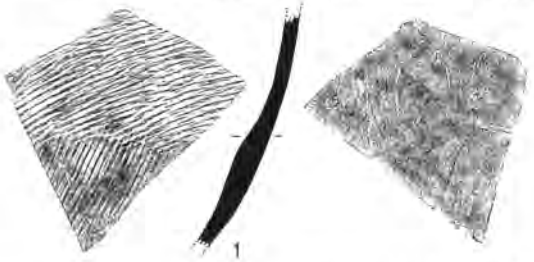




SI－124
1．暗黒褐色土　ローム粒，ロームブロック少混，しまりあり
2．淡暗黒褐色土　ローム粒，ロームブロック混，炭化物少混
3．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック少混
4．暗褐色土　褐色土主体，ローム粒，ロームブロック2層より多混
5．暗黄褐色土　ロームブロック多混，しまり弱
6．暗褐色土　褐色土主体，ロームブロック多混，しまりあり
7．暗黄褐色土　ソフトロームにロームブロック多混，しまりあり

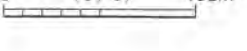


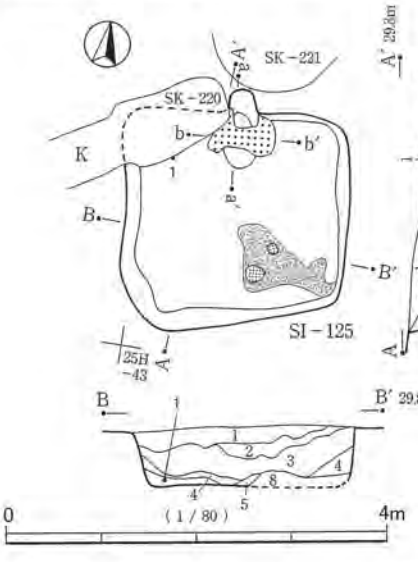




SI－124　カマドa－a′
1．褐色土　焼土粒，砂粒少混，しまり弱
2．橙色土　焼土砂主体，しまりあり
3．暗赤褐色土　褐色土に焼土粒多混，しまり弱
4．褐色土　褐色土に灰多含，しまりなし
5．褐色土　焼土ブロック，褐色土，山砂混，しまり弱

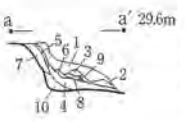


1




SI－125
1．黒褐色土　ローム粒，ロームブロック含
2．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック含
3．暗黄褐色土　ローム土多，ロームブロック含
4．暗黄褐色土　ローム土，ロームブロック多含
5．黒褐色土　炭化粒多，ローム土，ロームブロック含
6．暗黄褐色砂質土　山砂多含，一部赤化
7．暗褐色土　山砂多含
8．炭化材




SI－125　カマド
1．暗黄褐色土　ローム粒，山砂粒含，しまりあり
2．暗褐色土　焼土粒少含　しまりなし
3．淡褐色砂　山砂主体，しまりあり
4．灰褐色砂質土　炭化粒，灰多含，焼土塊含，しまりなし
5．暗黄褐色砂質土　山砂含
6．暗赤褐色砂質土　焼けた山砂塊，灰多含しまりなし
7．暗黄褐色土　焼土粒，山砂粒含，焼けたローム塊含しまりあり
8．明赤褐色砂　焼土，しまりあり
9．淡褐色砂質土　山砂，しまりなし
10．暗褐色砂質土　灰，焼土，ローム粒多含，しまりあり
11．暗褐色砂質土　灰，焼土塊多含，しまりなし
12．暗赤褐色砂質土　焼土主体，しまりなし
13．暗黄褐色土　焼土混，固く焼きしまる

1




第158図　SI－123・124・125

**重複遺構**　北東側でSK－220と重複し，本住居が切られている。また北側至近の位置にSK－221が存在する。確認面より上部で本住居が切られていると思われる。

**SI－126**（第159図，図版56）

**位置**　調査区北東部中央西端の24I－07グリッドを中心に位置する。西方に支谷を臨み，確認面が東から西に下っている。

**形状・規模**　長さが3.4m，幅が3.3mの方形をなす。確認面からの深さは15cm～90cmである。

**床面**　西壁際でわずかに低くなるが，概ね平坦である。硬化面はみられない。

**壁溝**　西辺北側が不明瞭である他は全周する。西辺北側も本来巡る可能性が考えられる。

**カマド**　北壁に位置する。中央からわずかに右寄りの位置である。方形プランから山形に突出する。両袖は比較的よく遺存する。構築材は下部を除いて山砂を主体とする。下部はローム主体である。両袖の内側は赤色化し，火床部底面もやや赤色化している。カマド前側の下層は灰を多く含む土層が堆積している。火床部底面の窪みは浅く，使用に伴う程度のものと思われる。

**堆積土**　概してローム粒を多く含むが，土層の色調は暗褐色・黒褐色主体である。ロームの含有の多さは緩斜面に立地する影響であり，自然堆積の可能性の方が高いように思われる。

**出土遺物**　東側がやや多く，西側がやや少ない。全体量はあまり多くない。分布は堆積土の遺存量に比例したあり方であり，西側の遺存が良ければ，満遍なく分布すると思われる。図示できた遺物は９点である。須恵器はすべて新治窯産である。１・２は須恵器蓋，３～５は須恵器杯，６はロクロ土師器杯，７は須恵器甕，８は小型の土師器甕，９は砥石である。

１は内面に１条のヘラ書きがある。口縁部は全周欠損する。ヘラ書きは欠損部に続く。３は遺存のよい土器である。口縁部の２箇所を小さく欠損し，欠損部から続く口縁・体部の一部が割れて接合する。欠損部の形態は逆三角形状・「W」字状，破損部の形態は逆台形状である。打ち欠き・打ち割りされた可能性が考えられる。６は全面に赤彩が施されている。底部外面は静止糸切り離し後，外周に手持ちヘラケズリが施されている。７はやや大型の甕である。胴部下位から底部にかけての一部破片から図化した。焼成がややあまい。８は完形で，まったく割れていない土器である。器壁が厚く，大きさのわりに重量感がある。接合痕が胴部中上位の一部にみられる。底部外面はナデが施されているが，細かい凹凸が目立ち，丁寧な調整ではない。胴部外面のヘラケズリはかなり粗いものである。以上，８には手捏土器的な様相がうかがえる。なお被熱により，剥離痕が内面下半の所々にみられる。３・８以外には特に遺存のよいものはない。

９の石材は石英片岩である。緻密で硬質な石材である。片方の小口側寄り中央部分に懸垂用の孔が穿たれており，携帯用の提砥である。元は長方体でやや薄手の砥石と思われるが，幅が狭くなった部分で折れたか割られたものであろう。こちらの狭くなった側にも穿孔未遂の孔が上下面にあるが，貫通していない。提砥の孔としては未貫通の孔の方が通常の位置であるが，端に寄り過ぎて破損の危険があったため，貫通を断念したものであろう。全面が使用されており，上下面・左右側面は平滑である。図下部の未貫通孔側の小口面も窪んだ部分を除いて使用されており，また筋状の研ぎ痕もみられる。

３は中央やや西寄りの床面から倒位で出土した。破損部分は散っていない。８は北壁の北西隅寄りの下層から倒位で出土した。９は南壁際やや右寄りの床面から出土した。図示したその他の遺物は，中層から上層にかけて出土した。

以上の遺物のうち，３・８は竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性が考えられる。９については判然とし

ないが，その他の遺物は概して周囲から廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　カマド右側から南東隅にかけてSD－019が走行し，本住居を切っている。しかしSD－019はかなり浅いため，本住居の欠損は上位に留まる。

SI－131（第160図）

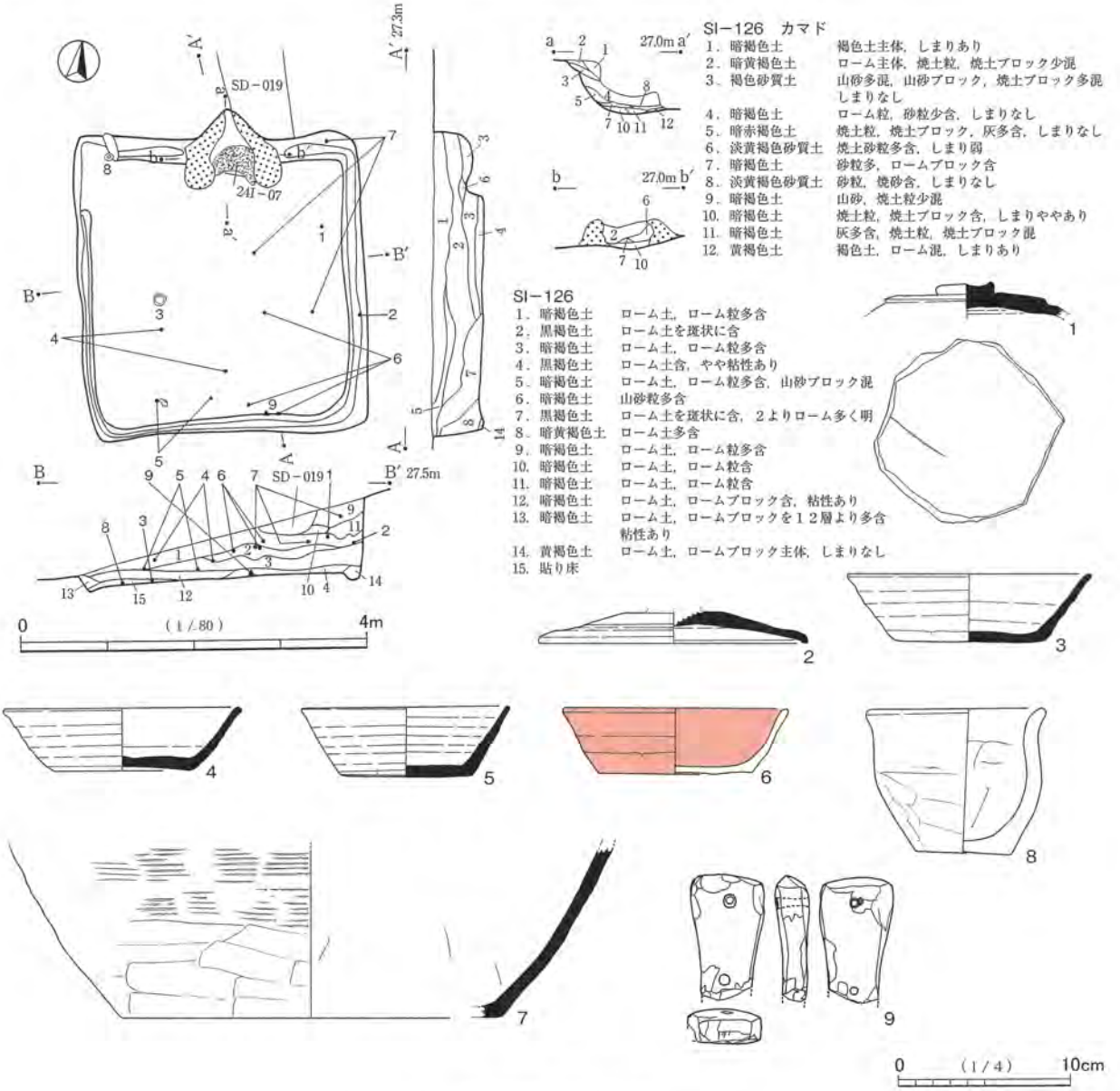
**位置**　調査区中央西寄りの23L－07グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さ4.6m，幅4.3mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。東（右前）隅が張り出しており，やや平行四辺形的なプランである。

**床面**　ほぼ平坦である。中央からカマド側半分は硬化しているが，中央からカマド対壁の南東（前）壁にかけては硬化面がみられない。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。柱穴間を結ぶ形態はやや逆台形である。出入口ピットは検出されなかったが，南東壁側中央が出入口部と思われる。

**壁溝**　南（左前）隅部から前壁・左壁の中央以上に巡らないが，その他は巡る。




第159図　SI－126

カマド　北西壁中央に位置する。方形プランからの突出は非常に小さい。両袖が遺存する。構築材は山砂を主体とする。カマド内堆積土は下層に焼土ブロック・灰がみられる。焼土粒は中層に多く堆積する。

堆積土　ローム粒・ロームブロックを比較的多く含む。左奥側の柱穴P1脇の床面から貝ブロックが出土した。やや断定しがたいが，上位にロームを多く含む土層がある（２層）ことから人為的堆積と思われる。

出土遺物　カマドの左右前方と中央から前壁際中央にかけて，やや多く出土した。遺物量はあまり多くないが，遺存のよいものも若干みられる。図示できた遺物は11点である。１は須恵器蓋，２～５は須恵器杯，６はロクロ土師器杯，７は須恵器長頸壷，８は須恵器甕，９は須恵器甕または甑，10は常総型の土師器甕，11は砥石である。須恵器の産地は，１～４・９が新治窯産，８は猿投等の東海産である。５は千葉産か新治窯産か難しいが，千葉産の可能性が高いとみておきたい。７は東海産と思われるが，新治窯産の可能性も考えられる。

６は底部外面に「千」と思われる墨書がある。なお左側が欠損しているため，「仟」も考えられる。墨痕は濃い。内外面の剥離が顕著である。５も底部外面にヘラ書きがある。２条のやや長い平行線をもつものである。片方に短い１条線が斜交する可能性があるが，判然としない。底部は遺存するが，口縁・体部の全周を欠損する。体部下半の1/3周程度が遺存するが，2/3は底部際まで欠損する。底部内面は滑らかである。外面も比較的緻密な質感であるが，内面は磨られていると思われる。破断面は研磨されていないが，1/3部分，2/3部分とも水平的であり，意図的に除去されたものであろう。転用硯と思われる。

２は口縁・体部の一部が欠損する他は，割れていない遺存のよい土器である。欠損部破断面の形態は連続する弧状を呈する。打ち欠きされたものと思われる。二次的な被熱により，口縁・体部の外面の多くがかなり黒ずみ，また器面は全体に荒れている。特に欠損部に対向する口縁部付近の磨耗が著しく，わずかに欠ける部分もある。

９はバケツ形の器形で，やや大型の土器である。遺存度は低いが，比較的大型の破片である。10は口縁部から胴部下位まで遺存するが，全体の1/3程度と思われる。胴部中･下位の外面はかなり黒ずんでいる。

11の石材は流紋岩である。片方の小口側が遺存するが，薄くなった部分で折れたか割られたものである。片側は遺存しない。折れた部分の破断面は使用されていないと思われる。他は全面が使用され，特に上下面は平滑である。小口面はややざらつくが，筋状の研ぎ痕がみられる。筋状のものは弱く細いものが多い。面と面との境は角張るが，左右両側面と小口面との間はやや丸みがある。

２は前壁際中央の床面から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。５は中央やや左奥寄りから出土した。10は右奥側の柱穴P2内及び周辺から出土した。層位は床面及びP2堆積土上位である。９は左側ややP1寄りの下層から出土した。図示した遺物は，８を除いて床面・下層からの出土である。

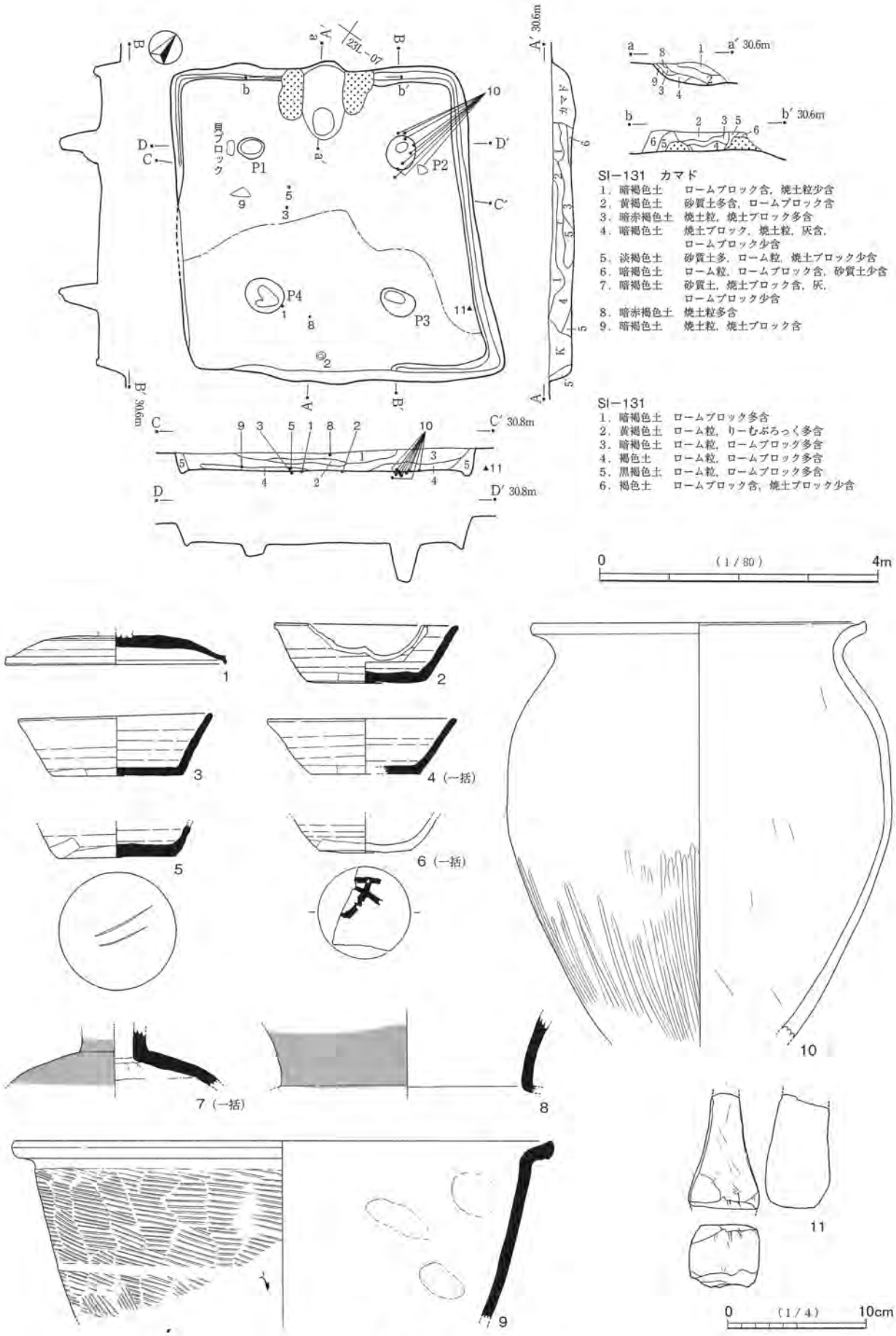
出土遺物のうち，２は出入口部からの出土であり，竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性が高いと考える。また10は柱が抜き取られた後に廃棄されたものであり，祭祀的な可能性も考えられる。その他，５やP1脇の貝ブロックも祭祀に伴う可能性があるが，やや断定しがたい。

重複遺構　南隅付近をSD－003が走行し，本住居を切っている。

SI－132（第161図，図版56）

位置　23L－32グリッドを中心として，調査区中央西寄りに位置する。

形状・規模　長さ3.3m，幅3.4mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。西辺が短いため，北壁が方形からやや傾いている。



SI−131　カマド
1．暗褐色土　ロームブロック含，焼土粒少含
2．黄褐色土　砂質土多含，ロームブロック含
3．暗赤褐色土　焼土粒，焼土ブロック多含
4．暗褐色土　焼土ブロック，焼土粒，灰含，ロームブロック少含
5．淡褐色土　砂質土多，ローム粒，焼土ブロック少含
6．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック含，砂質土少含
7．暗褐色土　砂質土，焼土ブロック含，灰，ロームブロック少含
8．暗赤褐色土　焼土粒多含
9．暗褐色土　焼土粒，焼土ブロック含
SI−131
1．暗褐色土　ロームブロック多含
2．黄褐色土　ローム粒，りーむぶろっく多含
3．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック多含
4．褐色土　ローム粒，ロームブロック多含
5．黒褐色土　ローム粒，ロームブロック多含
6．褐色土　ロームブロック含，焼土ブロック少含
貝ブロック
P1
P2
P3
P4
カマド
23L−07
A′ 30.6m
B′ 30.6m
C′ 30.8m
D′ 30.8m
0　(1/80)　4m
4（一括）
6（一括）
7（一括）
0　(1/4)　10cm


第160図　SI−131

床面　ほぼ平坦である。中央が硬化しているが，壁側にもやや硬質なところがある。

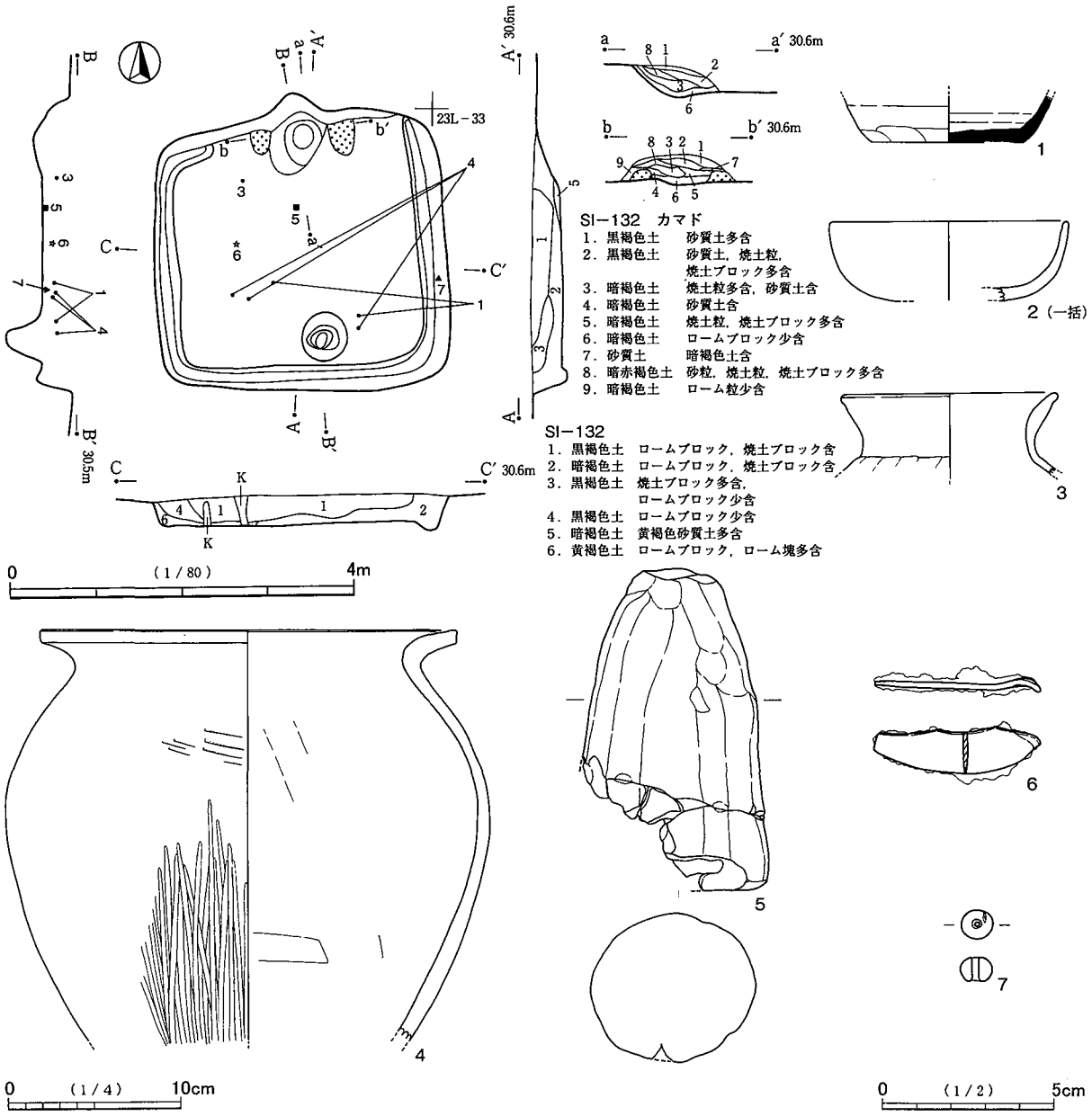
柱穴　出入口ピットが南壁際中央よりわずかに右寄りの位置で検出された。径は55cm，床面からの深さは41cmである。

壁溝　カマド部分及びその左右を除いて巡る。

カマド　北西壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖の遺存は不良で，前側がかなり欠損している。カマド内堆積土は下層にロームの包含が多く，その上層に焼土粒を多く含む土層がみられる。火床部底面は窪んでいるが，床面からはあまり深くない。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体である。中・上位の一部に焼土を多く含む土層があるが，概ね自然堆積と思われる。

出土遺物　全体的に出土したが，壁際はやや少なく，中央から南側半分の分布密度がやや高い。遺物量はやや多い。図示できた遺物は７点である。１は新治窯産の須恵器杯，２は非ロクロの土師器杯である。




第161図　SI−132

3・4は土師器甕で，3は在地の土師器甕，4は常総型の甕である。5は土製支脚である。6は鉄製品で，穂摘具類似の製品である。7は土製の小玉である。

1は口縁・体部の全周を欠損する。底部は遺存するが4片の破片が接合したものである。欠損部は弧状の形態が連続する部分もあり，打ち欠きされたことも考えられるが，断定しがたい。2は小破片から図化した。赤彩は施されていない。3の遺存は口縁部付近の一部のみである。やや小型の甕である。4も少ない遺存部分から図化したものである。胴部内面の剥離が顕著である。

6は小品であるが，完形か完形に近いものである。図の左端端部を若干欠損しているかもしれない。製品名が不明瞭であるが，穂摘具に似た形態のものである。また機能としては小型の刀子と似ている可能性もある。全体に薄い作りである。直線的な側の中央がやや鋭いが，全体の様相から，円弧側が刃，直線的な側を背としてよいと思われる。図の右端部分が若干上がっているが，意図的に折り曲げたもので，右端部に小さな柄が付くと思われる。目釘孔はみられない。左端の切先側両面に，わずかに木質が付着する。7はほぼ完形である。色調は黒色を呈する。

5はカマド前方の床面から出土した。7は東壁際やや南寄りで，床面とほぼ同じ高さのところから出土した。図示したその他の遺物は，床面からやや高い位置である。5は本住居で使用されていたもので，カマド廃棄に際して本来の位置から意図的に取りはずされているのかもしれない。しかし下部の多くが欠損しているため，単に廃棄されただけとも思われる。その他の遺物には特に祭祀的様相がうかがえない。

SI－133（第162図，図版57）

位置　調査区中央西寄りの23L－21グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さ2.5m，幅2.6mの方形をなす。確認面からの深さは10cmであり，非常に浅い。西辺が短く，やや不整な形態である。

床面　ほぼ平坦である。硬化面は判然としないが，床面まで浅いことが影響していると思われる。

カマド　西壁中央に位置する。方形プランからかなり大きく突出するが，竪穴の遺存が悪いため本来のあり方かやや不明瞭である。構築材の山砂や焼土が若干みられるが，構築体としてはまったく遺存しない。火床部底面は床面よりわずかに窪んでいる。

堆積土　暗褐色土主体である。ローム粒の包含は中央側で少なく，壁側で多い。自然堆積の可能性が高いと思われるが，遺存が少ないため，やや断定しがたい。

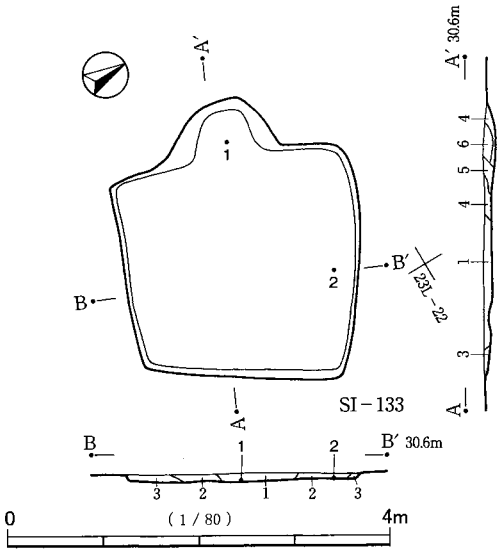
出土遺物　少量で散在的な出土である。図示できた遺物は2点である。1はロクロ土師器杯，2はロクロ土師器高台付杯である。1は小破片から図化した。底部調整は回転糸切り離し後無調整である。2の杯部はやや丸みをもつ椀形の器形である。割れているが，高台部は遺存する。1はカマド内中央の底面から出土し，2は右壁側中央の床面から出土した。

SI－134（第162図，図版57）

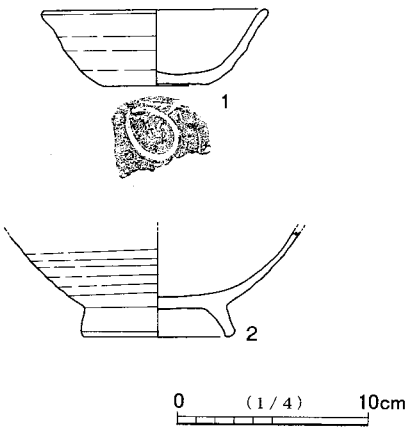
位置　23L－53グリッド周辺で，調査区の南西寄りに位置する。これまでの区分からみると，南西部・中央部の境目に位置する。

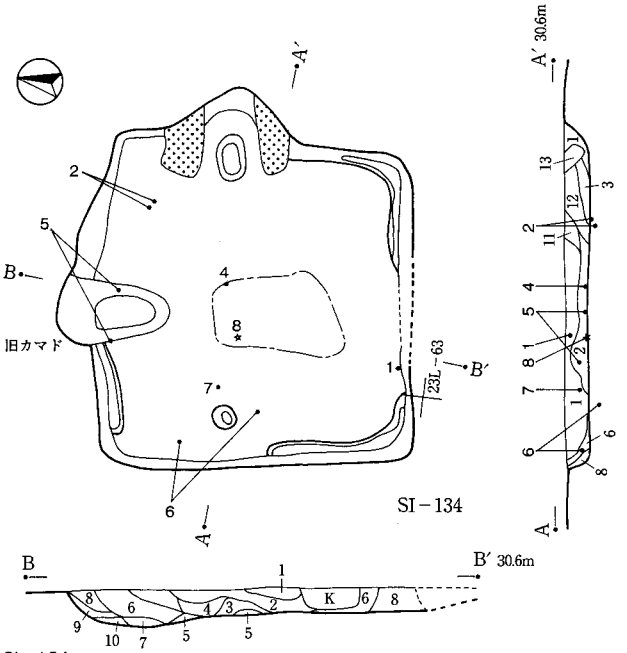
形状・規模　長さが3.6m，幅が3.4mの方形をなす。確認面からの深さは25cmである。北（左）辺が長く，やや台形的な形態である。南（右）壁側中央が撹乱を受けて欠損する。

床面　壁側が軟質であるため，掘りすぎてしまった。中央はほぼ平坦で，硬化している。中央と壁側との硬化の差は顕著である。

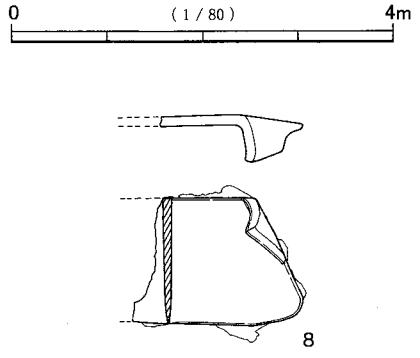


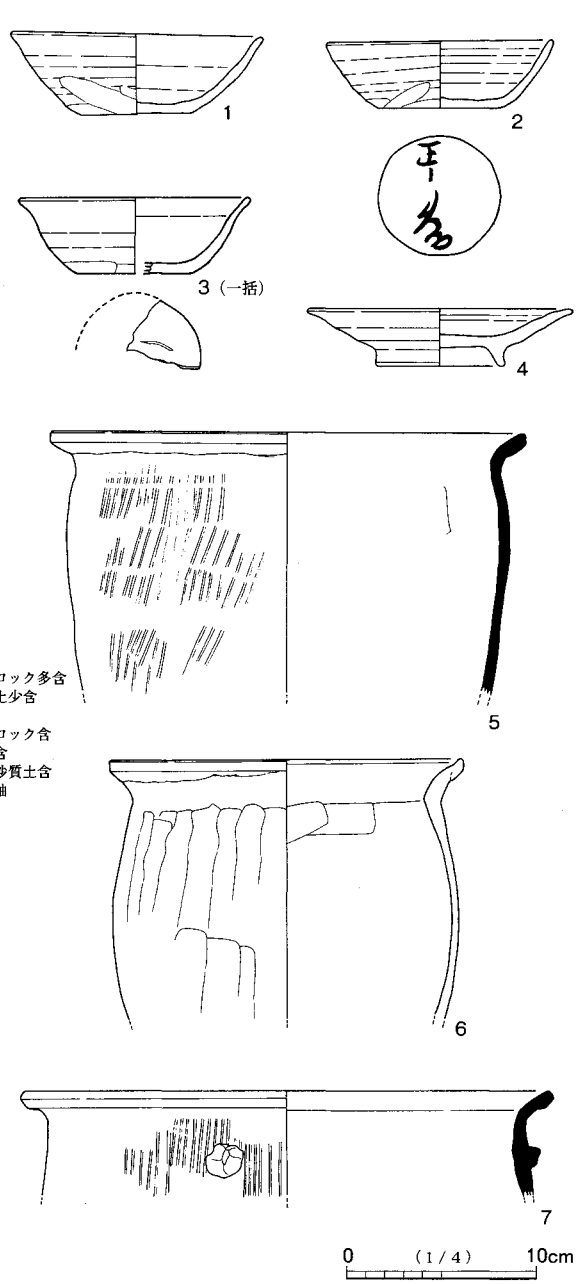

SI－133
1．暗褐色土　ローム粒少含，均質
2．暗褐色土　ローム粒，焼土粒少含
3．黄褐色土　ローム粒多含
4．黒褐色土　焼土粒少含
5．黄褐色土　砂質土多含，焼土粒含
6．黒褐色土　焼土粒，焼土ブロック多含




SI－134
1．黒褐色土　ロームブロック，焼土ブロック含
2．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック含
3．黒褐色土　ロームブロック，焼土ブロック少含
4．黒色土　ロームブロック少含，しまりなし
5．褐色土　砂質土多，ロームブロック，焼土ブロック少含
6．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック多含，焼土ブロック少含
7．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック多含
8．褐色土　焼土ブロック，砂質土少含
9．暗褐色土　ローム粒少含
10．褐色土　ローム粒，ロームブロック含
11．淡褐色土　砂質土多，焼土粒少含
12．褐色土　ロームブロック少，砂質土含
13．淡褐色砂質土　黒褐色土混，カマド袖




第162図　SI－133・134

柱穴　出入口ピットが西（前）壁際やや左寄りの位置で検出された。古い出入口ピットが南壁側に存在する可能性があるが，検出されなかった。撹乱により破壊されたことも考えられる。

壁溝　部分的に巡っているが，本来は全周の可能性が考えられる。

カマド　付け替え後の新カマドが東壁北（左）寄りに位置し，付け替え前の旧カマドが北壁中央に位置する。方形プランからの突出はともにやや大きい。旧カマド部分は焼土が散っており，構築材である山砂も若干みられるが，構築体の遺存はない。火床部底面は床面よりもかなり深い可能性があるが，壁側を掘りすぎたため，深さの程度が判然としない。新カマドも両袖が遺存するが，遺存状態はあまり良好でない。両袖間が広く，左袖はかなり流れていると思われる。構築材は山砂を主体とするが，黒褐色土が若干混じっている。赤色化等の焼けた痕跡は不明瞭である。火床面も不明瞭であるが，堆積土下層に若干の焼土ブロックがみられる。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体である。自然堆積と思われる。

出土遺物　南(右)壁側を除いて満遍なく分布する。右側が少ないのは，撹乱による影響が考えられる。図示できた遺物は８点である。１～３はロクロ土師器杯，４はロクロ土師器高台付皿，５は千葉産の須恵器甕または甑，６は在地の土師器甕，７は千葉産の須恵器甑である。８は鉄製品で，鎌である。

２は底部外面に「正－富」と判読できる墨書がある。遺存する墨痕は薄く，不明瞭である。口縁・体部の1/3を欠損する他はほぼ遺存しており，比較的遺存良好な土器である。遺存部分の一部は細かく割れている。欠損部は連続する逆三角形状であるが，片方が大きい。打ち欠きとも思われるが，遺存部分が多く割れているため，断定しがたい。なお２以外には特に遺存のよいものはない。１は1/2程度の遺存であるが，かなり細かく割れている。３は底部外面にやや屈曲した１条線のヘラ書きがある。欠損部にはかかっていない。４は二次的な被熱により，一部が焦げており，また全体に赤みが強い。底部付近は細かく割れている。７は把手が遺存する破片で，小片から図化した。把手はかなり崩れた形態で，頂部がやや尖っている。８は基部側の破片である。折り返しは直角的に立ち上がり，上部でやや内に傾く。

２は新カマド左袖前方で左壁寄りの床面から出土した。主要部分について，正位･倒位等は不明である。墨書をもつ土器であり，祭祀的様相があるかもしれないが，やや断定しがたい。２以外の遺物の出土層位は床面から上層にわたる。概して遺存が悪く，特に祭祀的様相はうかがえない。周囲から廃棄されたか流入したものであろう。

重複遺構　北側でSB－018と重複し，本住居が切られている。

SI－135（第163図，図版57）

位置　23L－41グリッド周辺で，調査区の南西寄りに位置する。これまでの区分からみると，南西部・中央部・西部の境目付近に位置する。

形状・規模　長さが3.5m，幅も3.5mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

床面　ほぼ平坦である。硬化面は判然としない。

柱穴　出入口ピットが南壁際中央に位置する。径は29cm×25cm，床面からの深さは17cmである。また南西隅にやや大きなピットがある（P4）。径は49cm×41cm，床面からの深さは57cmである。位置・規模から貯蔵穴と思われる。

壁溝　南西隅でわずかに途切れるが，ほぼ全周としてよいであろう。

カマド　北壁右寄りに位置する。方形プランからの突出は小さい。状態は悪く，構造物としては遺存し

ない。構築材は山砂を主体とし，土層断面にみられるが（10層），壊れた両袖の一部であろう。その内側は焼土が多く堆積するが，袖内側の焼土化した部分も含むと思われる。火床部には赤色化した面がみられない。底面は床面よりも窪んでいるが，あまり深くはなく，カマド使用による程度のものと思われる。カマド内堆積土下層は焼土の他，灰も多く含む。

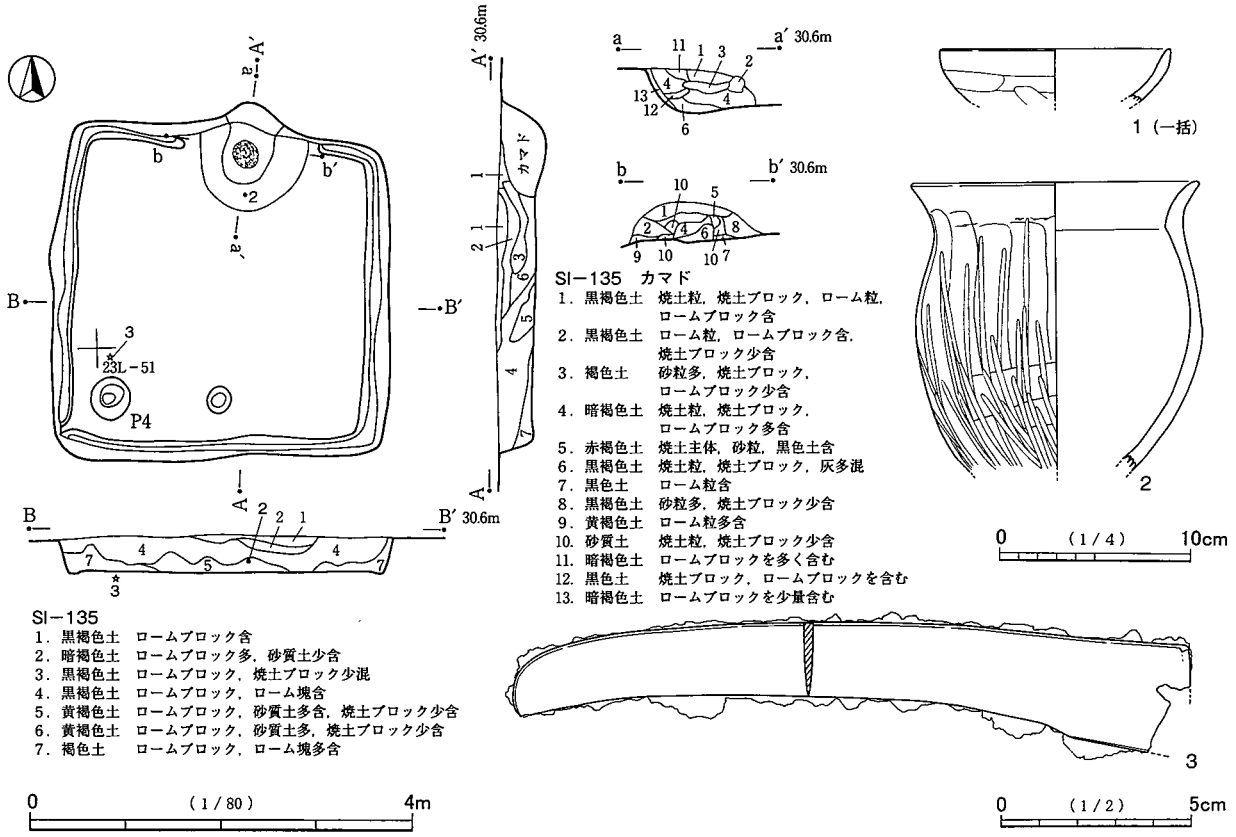
**堆積土**　概してロームブロックが多く混入しており，埋め戻されたものと思われる。

**出土遺物**　図示できた遺物は３点である。１は非ロクロの土師器杯である。２は小型の土師器甕で，在地の土器である。３は鉄製品で，鎌である。

１は小破片から図化した。赤彩は施されていない。２は遺存のよい土器である。口縁部には欠損がなく，胴部も多くが遺存する。胴部下位から底部は欠損し，胴部上位の一部も欠損している。胴部上位欠損部周辺の外面は剥離が著しく，やや細かく割れている。その他に割れは少なく，特に剥離が顕著な部分に対向する側はあまり割れていない。剥離は被熱によるものと思われ，特にこの部分だけが，他より強く火を受けたものと思われる。３はやや小型の鎌である。遺存がよく，欠損は基部の刃側だけである。基部側の裏面には，柄の木質の痕跡がみられる。また刃部にも若干木質が付着する部分がある。刃側の刃部と基部の境は明瞭である。

２はカマド前側の中層から倒位で出土した。３はP4よりも北側の床面から出土した。２はカマド廃棄の祭祀に伴うものと思われる。廃棄に際して，カマド構築材は除去されたとみられる。３も廃棄の祭祀に関わるかもしれないが，P4近くの壁側から出土したことから，遺棄された以上のことをいえるか難しい。

図示した以外の遺物は少量である。本住居は廃棄に際し，カマドを除去し，３を遺棄した。その後埋め戻し，ある程度堆積した時点で２を設置した。さらにその後も埋め戻しを行ったと考えられる。




第163図　SI－135

SI－136（第164図，図版58）

位置　調査区南西部の23M－03グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.7m，幅が3.6mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

床面　若干の凹凸があり，また北西側がやや低い。中央がやや硬化していると思われるが，あまり明瞭なものではない。

カマド　北壁中央に位置する。煙道部側が方形プランからやや大きく突出するが，袖の多くはプラン内にある。両袖が遺存するが，両袖間がかなり広く，欠損部分も多い。構築材は山砂を主体とし，よくしまっている。火床部底面はやや深く窪んでいる。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体である。

出土遺物　カマド周辺から遺存良好な土器が出土した。竪穴全体では，カマド前方から南東側にやや多く分布するが，南西側はやや希薄である。遺物量は多い。図示できた遺物は９点である。１・２は千葉産の須恵器杯，３・４はロクロ土師器杯，５は千葉産の須恵器大甕，６は新治窯産の須恵器甕である。７・８は在地の土師器甕で，７は小型品である。８も比較的小型の甕と思われる。９は鉄製の刀子である。

１は口縁・体部の一部を欠損する以外は割れていない遺存良好な土器である。欠損部の形態は逆台形状の一部が段となって，不整な「W」字状になっており，打ち欠きとみられる。２は1/2程度の遺存である。口縁部内外面の一部が黒ずんでおり，二次的に火を受けたものと思われる。３・４は割れのない完形品である。３は内外面の多くが黒ずんでいる。特に外面は光沢をもつ部分が目立ち，油煙が付着したものと思われる。灯明具として使用されたものであろう。４も赤みの強い部分があり，器面に暗褐色の斑状を呈する部分が多いことから，二次的に火を受けたと思われる。

５は非常に大型の土器であり，器壁も厚い。器面の色調は黒褐色である。断面の色調は鈍い褐色であるが，内部はやや灰色味を帯びる。６は器面の磨耗が顕著である。７・８は器壁が薄い。８の底部内面は剥離が著しい。

９は刃部の根本側から茎にかけての破片である。切先と茎尻は遺存しない。背関・刃関とも直角に切り込みが入る。身の図示した面に繊維質が付着している。

１はカマド左袖外脇の中層から，やや傾いた正位で出土した。３はカマド右袖外脇の下層からかなり傾いた正位で出土した。カマド内では須恵器甕等の大きな破片が重なって出土したが，図示できたものは６だけである。６及びカマド内の破片は中・上位からの出土である。また４は中央南寄りの中層からの出土である。正位・倒位等の状況は不明である。２・８の出土層位は床面・下層であるが，遺存のよい土器ではない。その他の遺物は床面から高い位置の出土である。

出土遺物のうち，１・３はカマド廃棄の祭祀に関わる土器と思われる。ただし出土層位が床面よりも高い位置であり，土器が傾いていることから，上方から落下してきた可能性が考えられる。また堆積土が中位まで埋め戻された後に据え置かれた可能性もあるが，人為的堆積か断定しがたい。もし人為的であるならば，４も祭祀的な土器の可能性が生じる。図示できなかったカマド内の土器片も，カマド廃棄の祭祀に関わる可能性がある。しかし本住居の出土遺物はかなり多いため，単なる廃棄とも思われ，可能性の指摘に留める。結局のところ，祭祀に関わる可能性が高いのは１と３のみである。本住居出土遺物の多くは，周囲からの廃棄や流入によるものであろう。

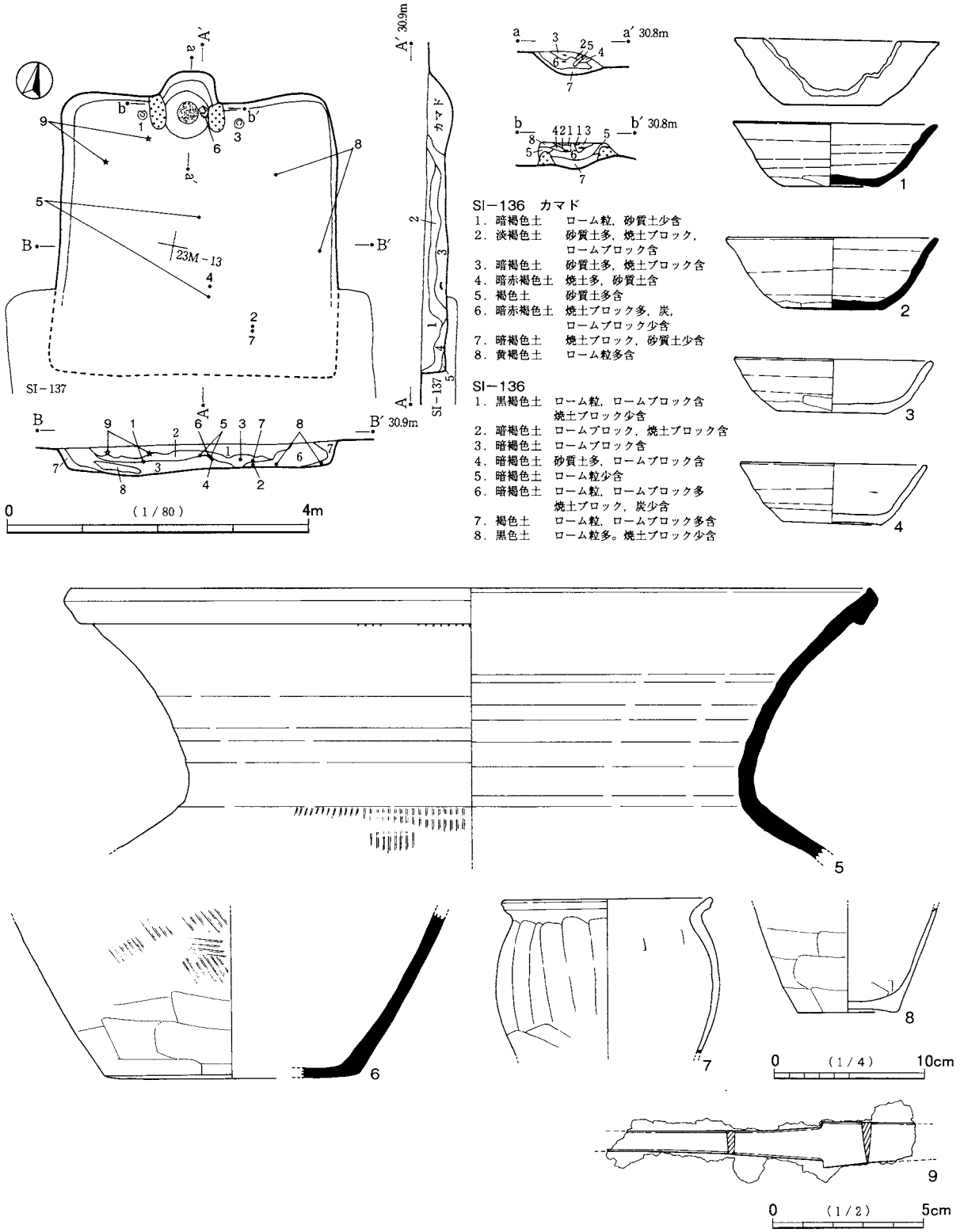
重複遺構　南側でSI－137と重複し，本住居が切っている。しかし本遺構の重複部分については，土層

断面で確認したが，平面的には検出することができなかった。

SI－137（第165図，図版58）

位置　調査区南西部の23M－13グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが4.5m，幅が4.9mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。やや平行四辺形的な形態である。




第164図　SI－136

**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

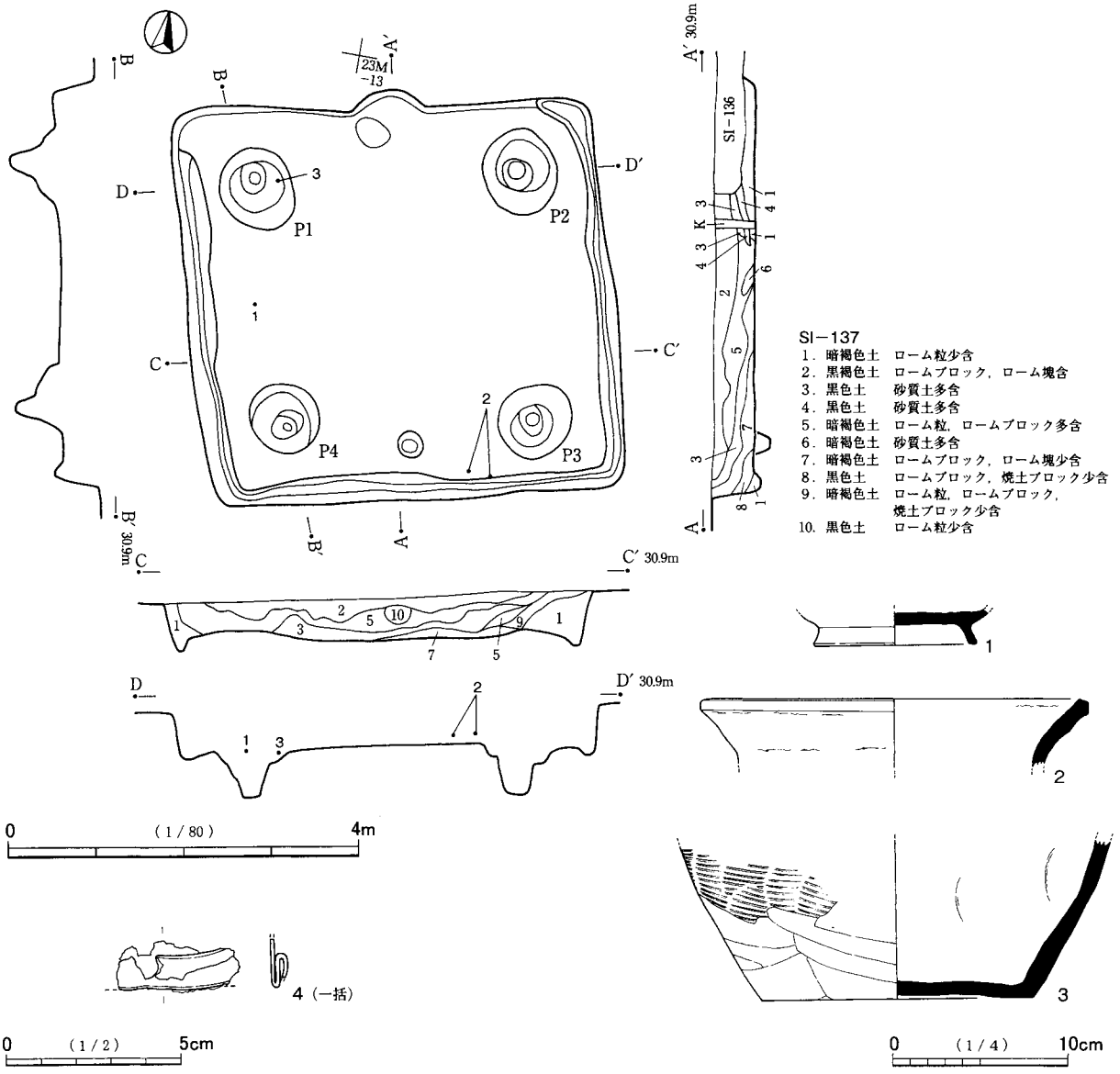
**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。隅寄りに位置し，柱穴間面積が広い。床面での柱穴径はいずれも大きく，80cm～１ｍを計る。柱は廃棄または建て替えに際して抜き取られたものと思われる。出入口ピットが南壁際中央で検出された。径が30cm，床面からの深さは16cmである。

**カマド**　北壁中央に位置する。SI－136に切られた影響で，遺存していない。方形プランからの突出は小さい。構築材の山砂がカマド部分の堆積土下層に若干量みられる（４層）。

**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体である。ローム粒・ロームブロックの包含が特に中位に多い。人為的堆積か自然堆積か判然としない。

**出土遺物**　少量で散在的な出土である。図示できた遺物は４点である。１は千葉産の須恵器高台付杯である。底部の破片であり，器種は盤とも思われる。２・３は新治窯産の須恵器甕である。４は鉄製品で，用途不明である。

１は口縁・体部の全周が欠損する。底部内面中央が磨耗しているため，転用硯として再利用されたもの




第165図　SI－137

と思われる。口縁・体部の欠損は意図的に除去されたのであろう。ただし磨耗部分はあまり滑らかでなく，範囲も狭いため，当時のものかやや疑問がある。なお高台部内側や破断面は磨れていない。２・３は一部の破片である。ともに白雲母を多く含む。４は薄い鉄板を二重に折り曲げたものである。また図示した面からみて裏側の方に若干湾曲している。本来の形状ではないと思われる。

１は西側中央の床面から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。２は南壁際右寄りの下層から出土し，３は北西側柱穴P1内で，床面と同等の深さから出土した。

**重複遺構**　北側でSI－136と重複し，本住居が切られている。なお本住居の方がSI－136より深いため，重複部分でも下位から床面は遺存している。

**SI－138**（第166・167図，図版58）

**位置**　調査区南西部の23L－83グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.5m，幅も4.5mの方形をなす。確認面からの深さは60cmである。四隅がやや丸い。

**床面**　中央がやや高く，壁側がやや低いが，壁側部分は掘りかたがやや深い影響を受けている。土層断面の観察では，ローム粒・ロームブロックを含む暗黄褐色土で，貼床が施されており，本来はほぼ平坦であろう。中央が硬化しており，壁側との差が著しい。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。北西側の柱穴P1は２箇所のピットがある。他の柱穴の形態も２箇所及びそれ以上のピットが連結した状態である。カマドの状況と合わせて，建て替えられたことがわかる。床面からの深さは，P1内側が46cm，P1外側が41cm，P2内側が58cm，P2外側が50cm，P3内側が48cm，P3中央が56cm，P3外側が45cm，P4内側が39cm，P4中央が44cm，P4外側が40cmである。P3・P4の内側部分は中央に寄り過ぎており，柱抜き取りのために掘削されたものかもしれない。出入口ピットは検出されなかった。

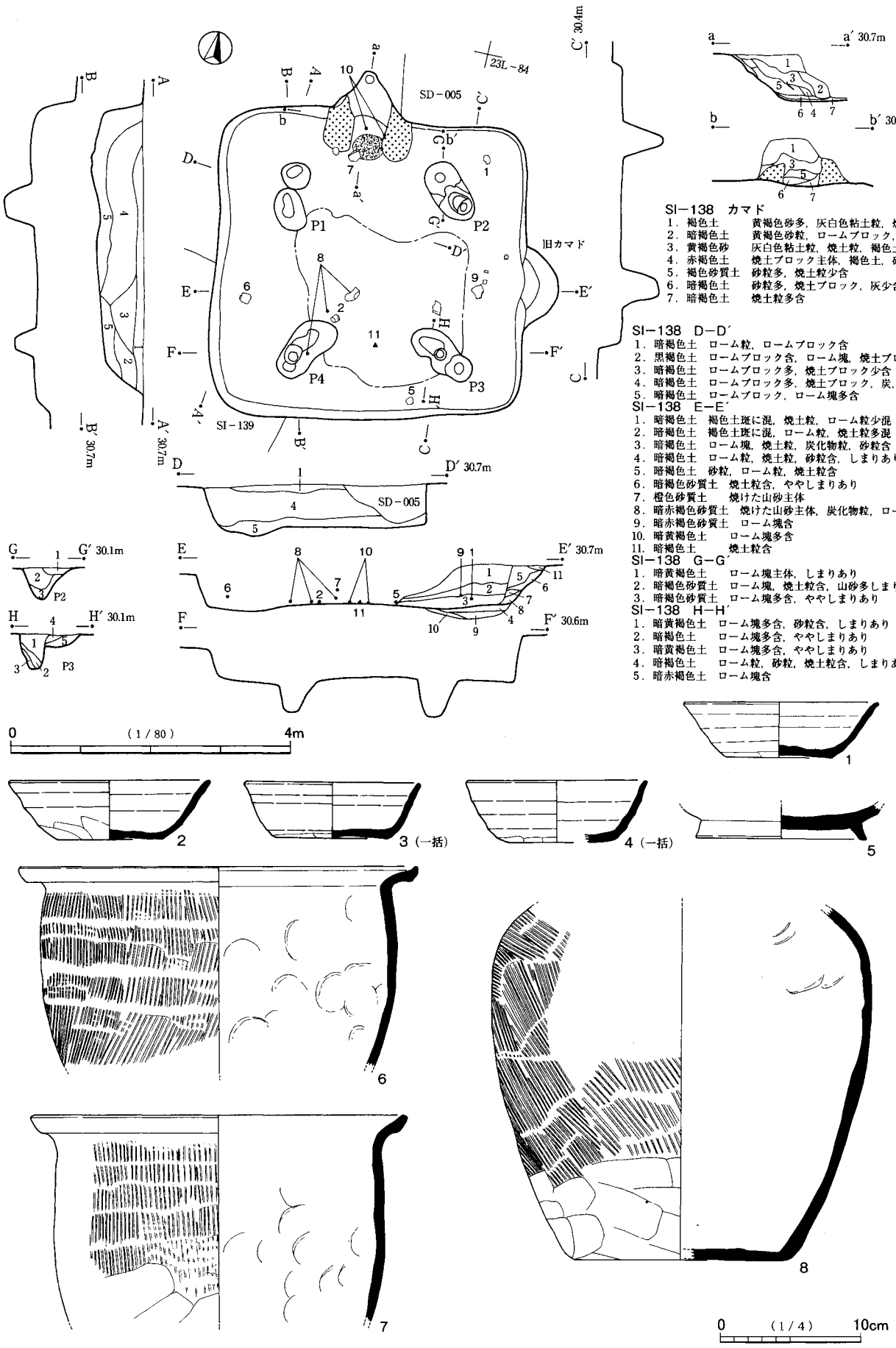
**カマド**　付け替え後の新カマドが北壁中央に位置し，付け替え前の旧カマドが東壁やや南寄りに位置する。方形プランからの突出はやや大きい。旧カマドは除去されており，袖等の遺存はない。カマド部分壁側と下部に，山砂と焼土が堆積する部分がある。火床部底面は床面よりもかなり深く，当初段階か，その後の使用に伴って深く掘り込まれたものである。新カマド使用時には埋め戻されて，床面が平坦にされていたと思われる。新カマドの両袖は比較的遺存がよい。構築材は山砂を主体とし，混じりけが少ない。両袖内側は赤色化し，右袖側は硬化も顕著である。カマド内堆積土最下層は焼土粒を多く含み，その上層にも若干の焼土ブロックがみられる。火床部底面の窪みは床面からわずかなものである。

**堆積土**　暗褐色土主体である。中・下位はローム粒・ロームブロックを多く含む。人為的堆積か自然堆積か判然としない。

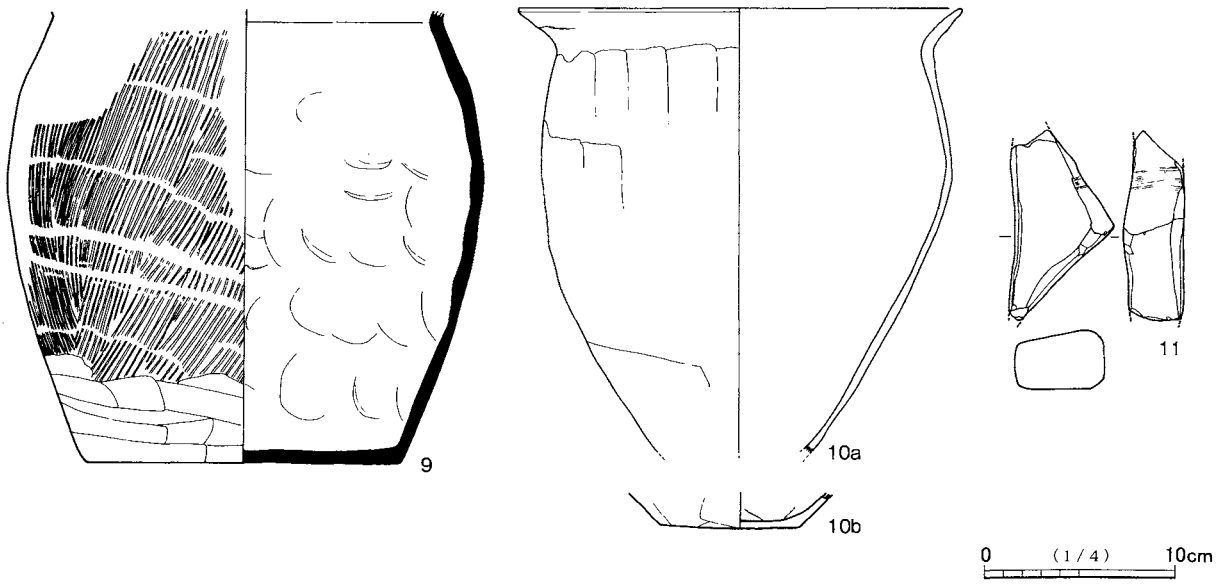
**出土遺物**　多量の遺物が竪穴全体から出土した。図示できた遺物は11点である。１～４は千葉産の須恵器杯，５は新治窯産の須恵器高台付杯である。６・７は千葉産の須恵器甕または甑である。８・９は須恵器甕で，８は新治窯産，９は千葉産である。10は土師器甕である。武蔵型の甕的な器形であるが，胴部上位のヘラケズリが縦方向である点で，在地的な様相がうかがえる。11は砥石である。

１・２は底部が遺存するが，全体の遺存はあまり良好でない。３・４は部分的な遺存である。５は口縁・体部のほぼ全周を欠損するが，高台部付近が破損もなく遺存する。底部内外面には，磨られた明瞭な痕跡がみられない。破断面も不整であり，欠損に意図的な様相はうかがえない。

６～９も部分的な遺存である。６の内面は当て具痕の他，タタキ目的な細い隆線が所々にみられる。ただしほぼ１条である点で，外面の平行タタキとは異なっている。ヘラナデの痕跡であろうか。７の内面も




第166図　SI－138（1）




第167図　SI－138（2）

当て具痕の他に，ハケメ状の痕跡がわずかにみられる。同心円文ではなく，ヘラナデの痕跡と思われる。8は器面の磨耗が著しい。9の底部は製作時の縄目状または砂目状の痕跡が同心円または渦巻状によく遺存している。焼成が良好な土器である。10は細かく割れているが，口縁部から底部まで比較的よく遺存する。特に口縁端部の欠損がないため，口径値に誤差がない。底部破片は胴部下位と接合しないため図化しなかった。胴部はや黒みを帯びているが，底部は赤褐色の色調である。別個体の疑いもあるが，底部が強く火を受けたためであり，同一個体の可能性が高いと考える。

11の石材は砂岩である。縦断面が三角形状を呈する。使い込まれたため，このような形態になったのかもしれないが，元々方柱状ではない可能性も考えられる。図上部は破損しており，折損面は使用されていない。図下部はほとんど続かないと思われる。折損面を除いて使用されているが，図右上の側面は他よりも使用が少なく，やや凹凸がある。ただし幅の方向に筋状の研ぎ痕がみられる。上下面と左及び右下の側面は滑らかである。面と面との関係は直角的であるが，平滑な面同士の境はわずかに丸みをもつ。

10はカマド中位からつぶれた横倒れの状態で出土した。口縁部を煙道側に胴部下位を竪穴中央側に向けている。底部ははずれており，すぐ右脇から出土した。カマド内からは7も出土したが，層位は中層である。1は北東隅の下層から正位で出土し，5は南壁際右寄りの下層から倒位で出土した。

出土遺物のうち，10は本住居で使用されていた可能性がある。カマド廃棄の祭祀に伴うことも考えられるが，単に遺棄されただけとも思われ，祭祀的様相があるか断定しがたい。また5は竪穴住居廃棄に際して出入口部の壁際に置かれたことも考えられるが，遺物の状態からはやや断定しがたい。また1は5以上に不明瞭である。出土遺物は多量で，大半が土器片である。一部を除いて，周囲から廃棄され，流入したものと思われる。

**重複遺構**　南側でSI－139・SI－140と重複し，ともに本住居が切っているようにみえる。なおSI－139出土遺物は本住居出土遺物との新旧関係が不明瞭であるが、小片のため遺構の観察を優先する。また東側がSD－005により切られている。しかし本住居の方が深いため，重複部分の床面は遺存している。

### SI－139（第168図，図版58）

**位置**　調査区南西部の23L－93グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.4m，幅が3.7mのやや横長の方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

床面　比較的平坦であるが，四隅側がやや低い。全体にローム粒・ロームブロックを含む暗黄褐色土で貼床が施されている。四隅側は中央よりも掘りかたがやや深く，床面の発掘は若干その影響を受けている。中央が硬化している。

柱穴　主柱穴が3箇所検出された。本来は4箇所であるが，右前（北東）側の柱穴はSI－138に切られて遺存しない。また左前側の柱穴P4の内側にも，径が29cm×23cm，深さが30cmのピットがある。左奥側のP1とP4を結ぶ線上に位置することから，本住居に伴うもので，補助柱穴と思われる。出入口ピットが東壁際中央から検出された。径は40cm×30cm，深さは13cmである。

壁溝　遺存しない部分を除いて巡る。本来は全周とみられる。

カマド　西壁中央に位置する。煙道部側が方形プランから若干突出するが，袖はプラン内にある。両袖は比較的よく遺存する。両袖の内側は赤色化し，火床部底面も若干赤色化している。底面の窪みはごくわずかである。カマド内堆積土下層は焼土ブロック・山砂を含む。

堆積土　概してローム粒・ロームブロックを多く含む。

出土遺物　遺物量はやや少量で土器片主体であるが，遺構の規模や遺存状態からみれば，あまり少ないとはいえない量である。図示できた遺物は2点である。1は新治窯産の須恵器蓋，2は新治窯産の須恵器高台付盤または杯である。

1はつまみ部分周辺の破片である。つまみの径は大きく，扁平である。2は底部付近の破片である。高台は2/3弱の遺存である。体部はほぼ水平に欠損している。破断面は磨られていないが，整った形態であり，加工されていると思われる。底部内面はあまり滑らかではないが，中心部がやや磨られているように思われる。また底部外面の高台内側部分はやや黒ずんでいるが，墨痕と断定できるものではない。やや不明瞭であるが，転用硯の一種としてよいであろう。

1はカマド内中位から出土し，2は左（南）壁中央の床面から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。ともに祭祀的様相はうかがえない。出土遺物のほとんどが周囲からの廃棄または流入によるものと思われる。

重複遺構　北東(右前)側でSI－138，南(左)側でSI－140と重複する。遺構の状態からはSI－138に切られ，SI－140を切っていると思われる。

SI－140（第168図，図版58）

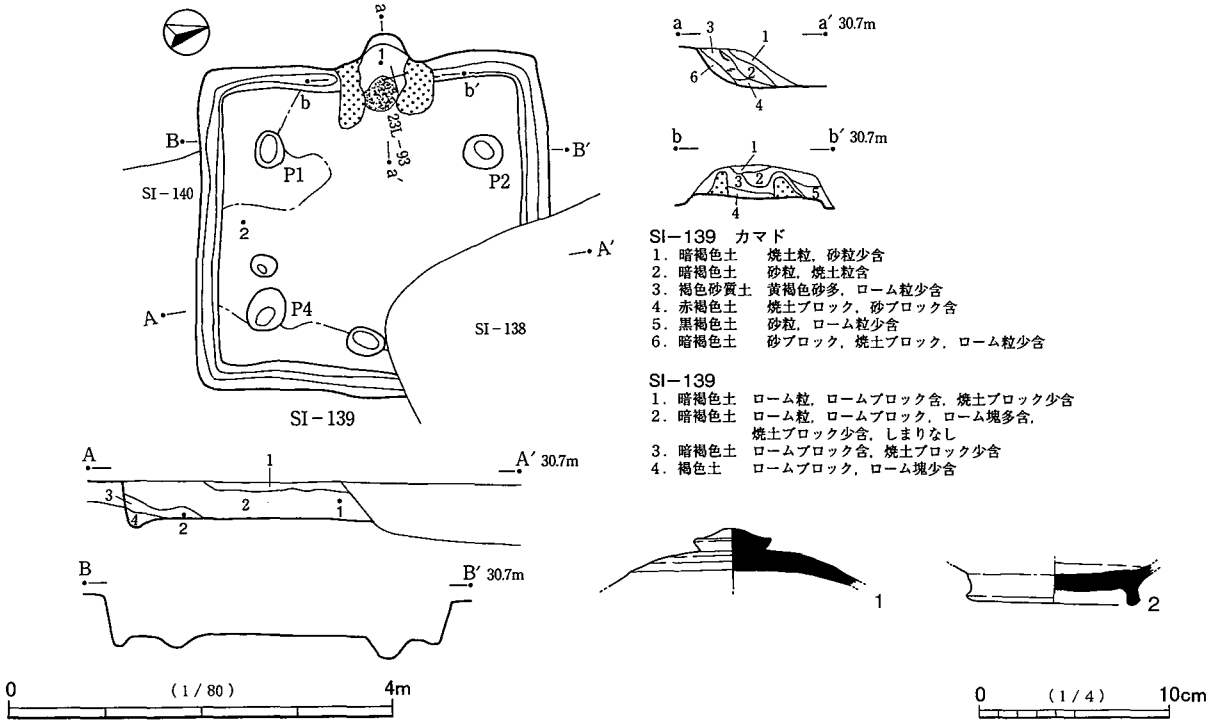
位置　調査区南西部の23L－93グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが4.5mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。東側が調査区外にあるため，幅が不明である。また重複遺構の存在により北壁の遺存が少なく，長さもやや不明瞭である。幅については，柱穴の位置から4.3m前後と推測される。プランはわずかに縦長の方形と思われる。

床面　中央がやや高く，壁側がやや低い。壁側はローム粒・ロームブロックを含む暗黄褐色土で貼床が施されていると思われる。中央部はほぼ平坦である。壁側も本来は中央部と同じ高さであり，全体に平坦であったと思われる。壁際を除いて広く硬化している。

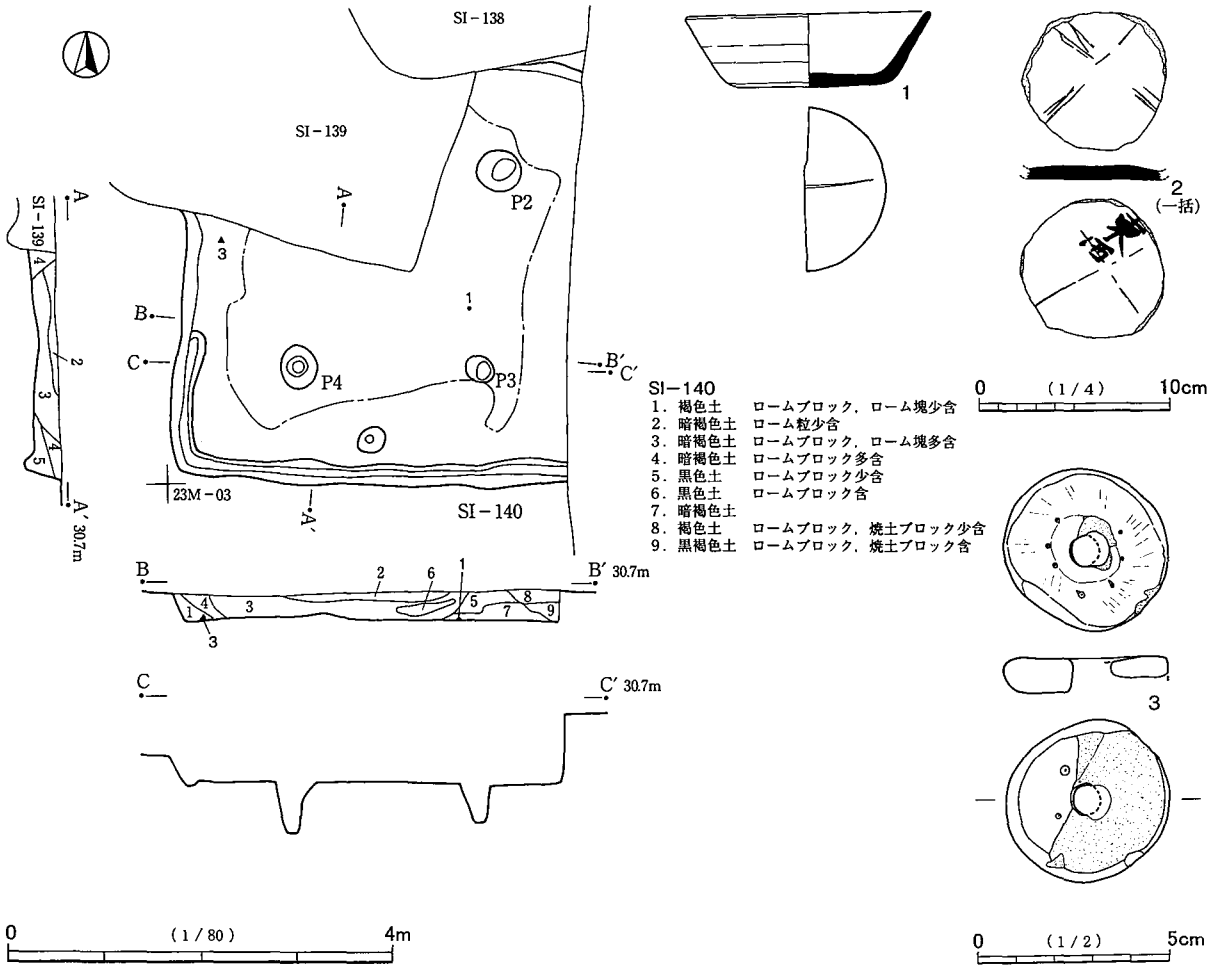
柱穴　主柱穴が3箇所検出された。本来は4箇所であるが，北西側の柱穴はSI－139に切られて遺存しない。出入口ピットが南壁際中央から検出された。径は33cm×27cm，深さは20cmである。

壁溝　南壁と西壁南側に巡る。西壁北側と北壁にはみられないが，壁際をやや深く発掘したためと思わ




SI－139　カマド
1．暗褐色土　焼土粒，砂粒少含
2．暗褐色土　砂粒，焼土粒含
3．褐色砂質土　黄褐色砂多，ローム粒少含
4．赤褐色土　焼土ブロック，砂ブロック含
5．黒褐色土　砂粒，ローム粒少含
6．暗褐色土　砂ブロック，焼土ブロック，ローム粒少含

SI－139
1．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック含，焼土ブロック少含
2．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック，ローム塊多含，焼土ブロック少含，しまりなし
3．暗褐色土　ロームブロック含，焼土ブロック少含
4．褐色土　ロームブロック，ローム塊少含




SI－140
1．褐色土　ロームブロック，ローム塊少含
2．暗褐色土　ローム粒少含
3．暗褐色土　ロームブロック，ローム塊多含
4．暗褐色土　ロームブロック多含
5．黒色土　ロームブロック少含
6．黒色土　ロームブロック含
7．暗褐色土
8．褐色土　ロームブロック，焼土ブロック少含
9．黒褐色土　ロームブロック，焼土ブロック含

第168図　SI－139・140

れる。本来は全周するとみられる。

カマド　出入口ピットの位置から，北壁中央に位置すると思われるが，重複遺構に切られて遺存しない。

堆積土　概してローム粒・ロームブロックを多く含む。

出土遺物　やや少量である。図示できた遺物は３点である。１・２は須恵器杯で，１は千葉産，２は新治窯産である。３は石製の紡錘車である。

１は底部外面にヘラ書きがある。遺存するのは１条線であるが，欠損部に続くため，「＋（×）」の交差線となる可能性も考えられる。口縁・体部の２箇所が弧状に割れて接合するが，打ち割りされた可能性がある。しかし欠損部分が多いため，断定しがたい。器面は滑らかであるが，全体的であるので当初からのものであろう。２は須恵器杯の底部片を円盤状に加工したものである。底部外面に「東酒」の墨書があり，墨書を切って「＋」の線刻が施されている。また底部内面にも「＋」の線刻がある。内面の線刻は複数条の交差線であり，また中央は途切れ途切れである。不整でやや浅い部分もあるため不明瞭であるが，条線は最も多いところで５条程度みられる。内面の線刻と外面の線刻の傾きは同様である。周囲の加工は墨書の後になされているが，線刻との前後関係は判然としない。一部が磨耗しており，尖った部分が研磨されたものと思われる。器面は滑らかであり，特に外面が顕著である。磨られている可能性がある。３の石材は滑石である。扁平な紡錘車で，下面の3/5程度を欠損する。上面の欠損はわずかである。上面に貫通していない小孔が８箇所みられる。孔はやや不整な円形をなすが，円周全体がドーナツ状にわずかに窪んでいる。同様に下面も遺存部分に未貫通の小孔が２箇所みられる。小孔間を詳細に観察したが，小孔は存在しないと判断した。小孔間の間隔から欠損部分に２箇所あると思われる。下面の小孔は計４孔と推測され，上面の1/2である。小孔は呪術的な意味があると思われる。上面の小孔の周囲に放射状の擦痕がある。線が細く弱いため，呪術的なものと認められるか難しいが，若干そのような要素が含まれるかもしれない。

１は中央やや右前寄りの床面から出土した。２の出土位置は不明である。３は西（左）壁際中央の床面から出土した。１・３の出土位置には祭祀的様相が特にうかがえず，その他のほとんどの遺物も周囲からの廃棄または流入によるものであろう。

重複遺構　北側でSI－138・SI－139と重複する。遺構の状態からはSI－138・SI－139の双方に切られていると思われる。

**SI－141**（第169図，図版59）

位置　調査区南西部の22L－78グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.0m，幅が2.9mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。南西隅付近が撹乱を受けて欠損する。また北側でも若干の撹乱を受けていると思われ，壁上端が突出する部分がある。

床面　平坦で，中央が壁側よりも著しく硬化している。

柱穴　出入口ピットが南壁際中央から検出された。径は30cm，床面からの深さは20cmである。また北西隅部と南壁際西寄りからもピットが検出された。北西隅のものの径は57cm×38cm，深さは31cm，南西隅寄りのものの径は29cm×26cm，深さは32cmである。ピットについては，撹乱された部分があるため，本竪穴に伴うものか判然としない。

壁溝　カマドの左右を除いて巡る。なおカマドの右側は他と比べてかなり浅いが，存在すると思われる。全周に近い状況といえよう。

カマド　北壁中央に位置する。方形プランから大きく突出する。構造物はまったく遺存していない。ま

た構築材の山砂がカマド部分の堆積土にもあまりみられない。しかし焼土粒・焼土ブロックが堆積しており，壁側にはやや多くみられる。火床部底面は若干窪んでいるが，あまり深いものではない。被熱により，ややぼろぼろで，若干暗い色調を呈する。

**堆積土**　暗褐色土主体であるが，下層は焼土ブロックを多く含む。廃棄時または直後に若干の焼却を行ったものと思われる。その後は自然堆積と思われる。

**出土遺物**　カマド前から中央の出土が多く，南側はやや少ない。遺物量はやや多い。図示できた遺物は11点である。１は千葉産の須恵器杯である。２～４は土師器杯で，２は非ロクロの土器と思われる。３・４はロクロ成形の土器である。５はロクロ土師器皿，６は千葉産の須恵器甕，７は在地の土師器甕，８は土製紡錘車，９は用途不明の鉄製品，10・11は軽石である。

５は底部内面に「丈」の墨書がある。被熱により内面の一部が黒ずみ，器面に剥離がみられる。外面も荒れている。１は遺存良好な土器である。欠損は口縁部の一部であり，形態は逆三角形状である。欠損部に続く一部が弧状に割れて接合し，そこからひびが中心の少し先まで入っているが，破損には至らない。被熱等により器面の荒れが著しく，外面の所々に煤が付着する。欠損・破損部は打ち欠き・打ち割りの可能性も考えられる。２は口縁・体部の2/3を欠損する。遺存部分は割れていないが，欠損部が意図的なものか断定しがたい。３は2/3弱遺存するが，細かく割れている。二次的に被熱しているが，色調や器面の荒れが異なるものが接合しており，割れた後に火を受けたことがわかる。４の遺存は一部である。被熱により黒ずむ部分が多い。

６は胴部の器形や調整が土師器的である。しかし色調は灰色であり，明らかに須恵器窯で焼成されたものである。底部がやや大きく，縄目状・砂目状の痕跡がみられる点も須恵器的である。７は一部の破片から図化した。

８は土器の底部片を紡錘車に転用したものである。孔部分で破損し，1/2強の遺存である。側面は丁寧に磨られて丸みをもち，平面形も円形を呈する。図示した面の周縁近くがやや窪んでおり，紡錘車の上面と思われる。元の土器は在地の土師器甕と思われるが，大型のロクロ土師器杯で，高台付きの可能性も考えられる。９は細い棒状品で，断面形態は方形である。紡錘車の紡軸，鉄鏃の茎，釘等が考えられるが，特定しがたい。。10は一部で褐色味が強いが，被熱痕跡か断定しがたい。11もやや赤みがある。

５はカマド前方の下層から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。床面に近い高さからの出土は５だけであり，遺存のよい１も床面からやや高い位置での出土である。しかし１・３～５には，明瞭な被熱痕跡がみられることから，５と他の遺物を区別できるか難しい。５はカマド廃棄の祭祀に関わる可能性があるが，以上の状況から断定しがたく，他の遺物とともに不要物として廃棄され，焼却されたことも考えられる。

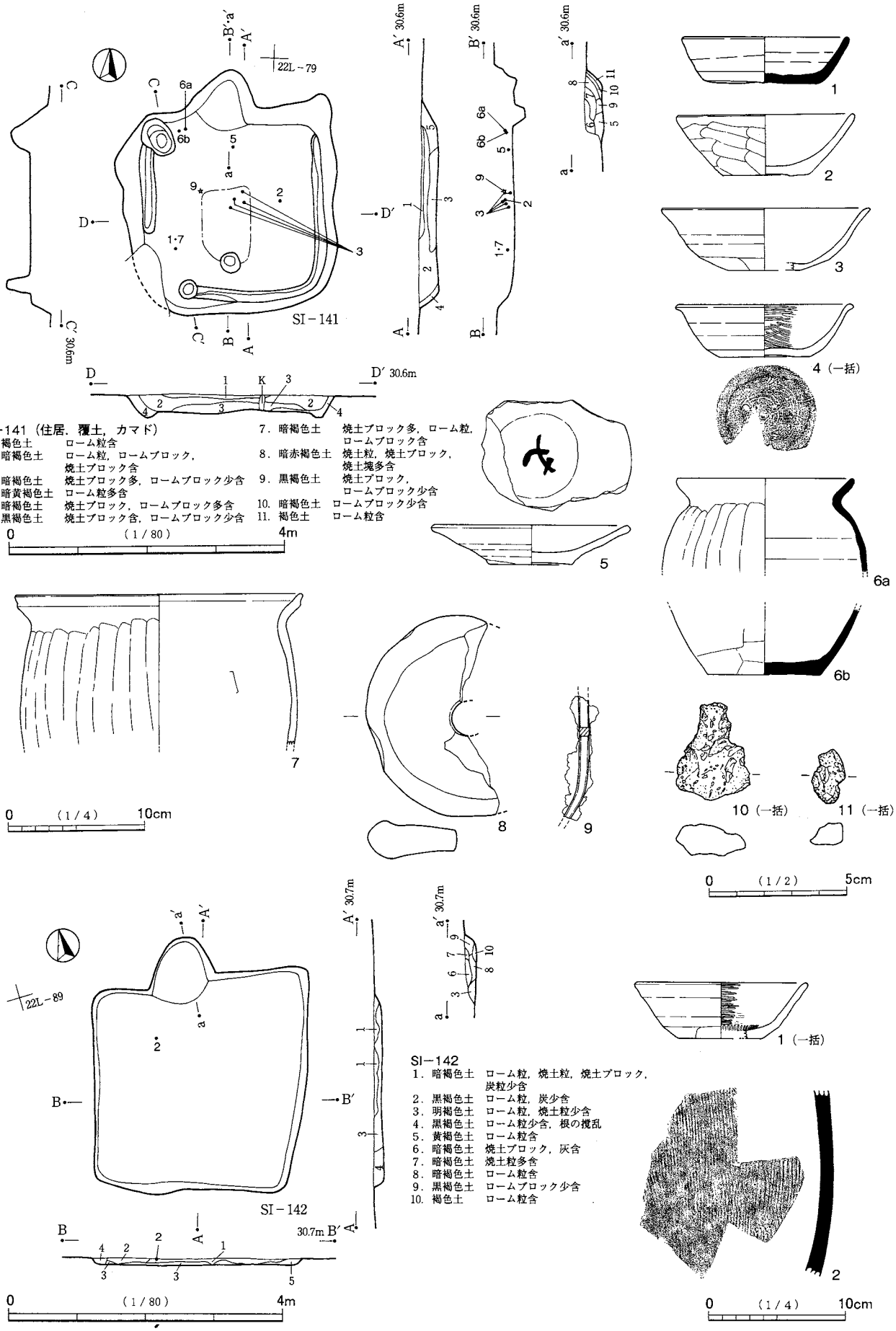
### SI－142（第169図，図版59）

**位置**　調査区南西部の22L－89グリッドに位置する。

**形状・規模**　長さが3.4m，幅も3.2mの不整な方形をなす。確認面からの深さは10cmであり，非常に浅い。遺存が悪いため，プランの把握にやや不安がある。現状では東辺が長く，北辺は方形に対して傾きがある。北東隅がやや張り出した形態である。

**床面**　平坦である。硬化面はみられない。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランから大きく突出する。構造物は遺存せず，山砂もカマド部分




第169図　SI－141・142

の堆積土にもあまりみられない。しかし焼土粒・焼土ブロック・灰が若干堆積している。火床部底面は平坦で，床面の深さと変わらない。赤色化した面はみられない。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。遺存が少ないため，自然堆積か人為的堆積か判然としない。

**出土遺物**　少量であるが，堆積土の遺存が悪いわりには出土量がある印象である。図示できた遺物は2点である。1はロクロ土師器杯である。小片から図化した。2は須恵器甕の胴部片である。産地はやや不明瞭であるが，胎土に白色針状物を多く含むと思われることから，南比企窯としておきたい。

1は出土位置不明である。2はカマド左側前方から出土した。

**重複遺構**　東側でSI－148と重複し，本住居が切っている。

SI－143（第170図，図版59）

**位置**　調査区南西部の22L－79グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.0m，幅も3.2mの方形をなす。確認面からの深さは20cmであり，やや浅い。

**床面**　平坦である。硬化面はみられない。

**カマド**　北西壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。構造物は遺存しないが，山砂や焼土ブロックがカマド部分に堆積している。山砂や焼土は多くみられる部分がある。火床部底面は平坦で，床面の深さと変わらない。赤色化した面はみられない。

**堆積土**　暗褐色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　少量で散在的な出土である。図示できた遺物は2点である。1・2とも非ロクロの土師器杯である。1は在地の土器で，1/2程度の遺存である。外面のヘラケズリは細かく，内面のヘラミガキも密に施されており，丁寧な作りである。2は畿内産土師器で搬入品である。1/3程度の遺存である。扁平な丸底で浅い器形である。内面に放射状の暗文が施されている。外面のヘラケズリは器面が磨耗しているため，不明瞭である。色調は橙褐色である。胎土は褐色粒・黒色粒・白色粒を含むが，比較的緻密である。内面の一部に剥離がみられる。

1は中央の下層，2は左（南西）壁側中央の中下位から出土した。

**重複遺構**　南側でSI－148と重複し，本住居が切られている。

SI－144（第170図，図版59）

**位置**　調査区南西部の23L－92グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.2m，幅が2.5mの方形をなす。確認面からの深さは10cmであり，非常に浅い。

**床面**　平坦で，中央が硬化している。

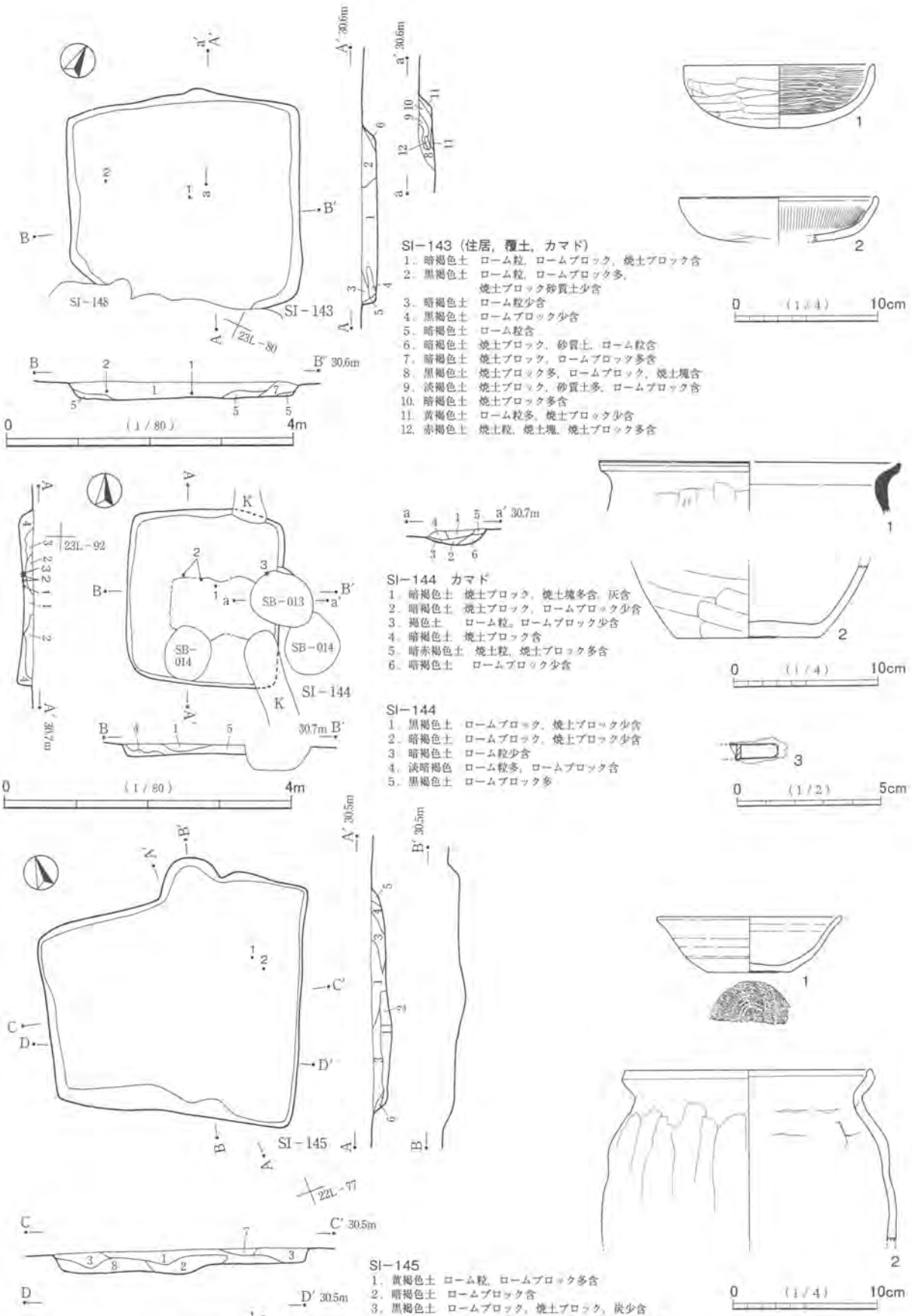
**カマド**　東壁中央に位置する。重複遺構に切られたため，左袖のごく一部のみの遺存である。

**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体である。遺存が少ないためやや判然としないが，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　やや少量の出土である。図示できた遺物は3点である。1は千葉産の須恵器甕または甑である。小片から図化した。2は在地の土師器甕である。底部周辺の破片で，底部の欠損はない。底径が大きい点でやや須恵器的である。調整もわずかに須恵器甕的な部分がみられるが，ヘラケズリが施されており，須恵器的な様相は多くが消されている。また胴部外面に黒斑がみられることから，土師器としての焼成である。被熱により赤みが強く，内面は剥離が著しい。3は鉄製品で，刀子茎尻の破片と思われる。

1・2は中央の床面から出土した。3は東壁際床面で，SB－013との境部分から出土した。

**重複遺構**　SB－013・SB－014と重複し，本住居が切られている。




SI－143（住居，覆土，カマド）
1．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック，焼土ブロック含
2．黒褐色土　ローム粒，ロームブロック多，
　焼土ブロック砂質土少含
3．暗褐色土　ローム粒少含
4．黒褐色土　ロームブロック少含
5．暗褐色土　ローム粒含
6．暗褐色土　焼土ブロック，砂質土，ローム粒含
7．暗褐色土　焼土ブロック，ロームブロック多含
8．黒褐色土　焼土ブロック多，ロームブロック，焼土塊含
9．淡褐色土　焼土ブロック，砂質土多，ロームブロック含
10．暗褐色土　焼土ブロック多含
11．黄褐色土　ローム粒多，焼土ブロック少含
12．赤褐色土　焼土粒，焼土塊，焼土ブロック多含

SI－144　カマド
1．暗褐色土　焼土ブロック，焼土塊多含，灰含
2．暗褐色土　焼土ブロック，ロームブロック少含
3．褐色土　ローム粒。ロームブロック少含
4．暗褐色土　焼土ブロック含
5．暗赤褐色土　焼土粒，焼土ブロック多含
6．暗褐色土　ロームブロック少含

SI－144
1．黒褐色土　ロームブロック，焼土ブロック少含
2．暗褐色土　ロームブロック，焼土ブロック少含
3．暗褐色土　ローム粒少含
4．淡暗褐色　ローム粒多，ロームブロック含
5．黒褐色土　ロームブロック多

SI－145
1．黄褐色土　ローム粒，ロームブロック多含
2．暗褐色土　ロームブロック含
3．黒褐色土　ロームブロック，焼土ブロック，炭少含
4．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック，焼土ブロック含
5．暗褐色土　焼土粒少含
6．黒褐色土　焼土粒，炭少含
7．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック含
8．ローム粒，ロームブロック多含

第170図　SI－143・144・145

SI－145（第170図，図版60）

位置　調査区南西部の22L－66グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.5m，幅も3.7mの不整な方形をなす。確認面からの深さは30cmである。中央の一部が撹乱を受けて，床面まで欠損していると思われる。

床面　東側が高く，西側が低い。また全体に凹凸が著しい。硬化面はみられない。

カマド　北壁右寄りに位置する。方形プランからは若干突出する。北壁はカマドの右側と左側で向きが異なる。プランからの突出も右側からは小さく，左側からはやや大きい。構造物は遺存しないが，焼土・炭化物がカマド部分に堆積している。ただし焼土・炭化物は南側や西側にも若干みられる。カマドについては，プランからの張り出し以外には痕跡が乏しい。

堆積土　ローム粒・ロームブロックを多量に含む土層が中央・上位にみられる。撹乱による影響と思われるが判然としない。この土層が撹乱によるものでなければ埋め戻された土層といえるが，断定しがたい。

出土遺物　少量である。図示できた遺物は２点である。１はロクロ土師器杯で，やや小片である。色調がやや淡く，器面がざらつく点千葉産の須恵器的な様相があるが，土師器でよいと思われる。２は在地の土師器甕である。口縁端部はやや内湾気味である。胴部外面に煤や焦げた山砂が付着している。焼成はよいが，接合痕が一部に明瞭であり，やや作りが雑である。

１は北東側の上層から出土し，２は１近くの下層から出土した。

SI－146（第171図，図版60）

位置　調査区南西部の22L－87グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西にわずかに下る緩斜面に立地する。

形状・規模　長さが3.3m，幅が3.2mの方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

床面　北東側がやや高く，南西側がやや低い。中央がやや硬化している。

柱穴　主柱穴が４箇所検出された。右側に寄っており，東側のP2・P3と壁の間の距離が非常に近い。西側のP1・P4は，上端が竪穴内側に張り出している。またP3も規模がやや大きい。柱は廃棄時または作り替え時に抜き取られたものと思われる。出入口ピットは検出されなかった。

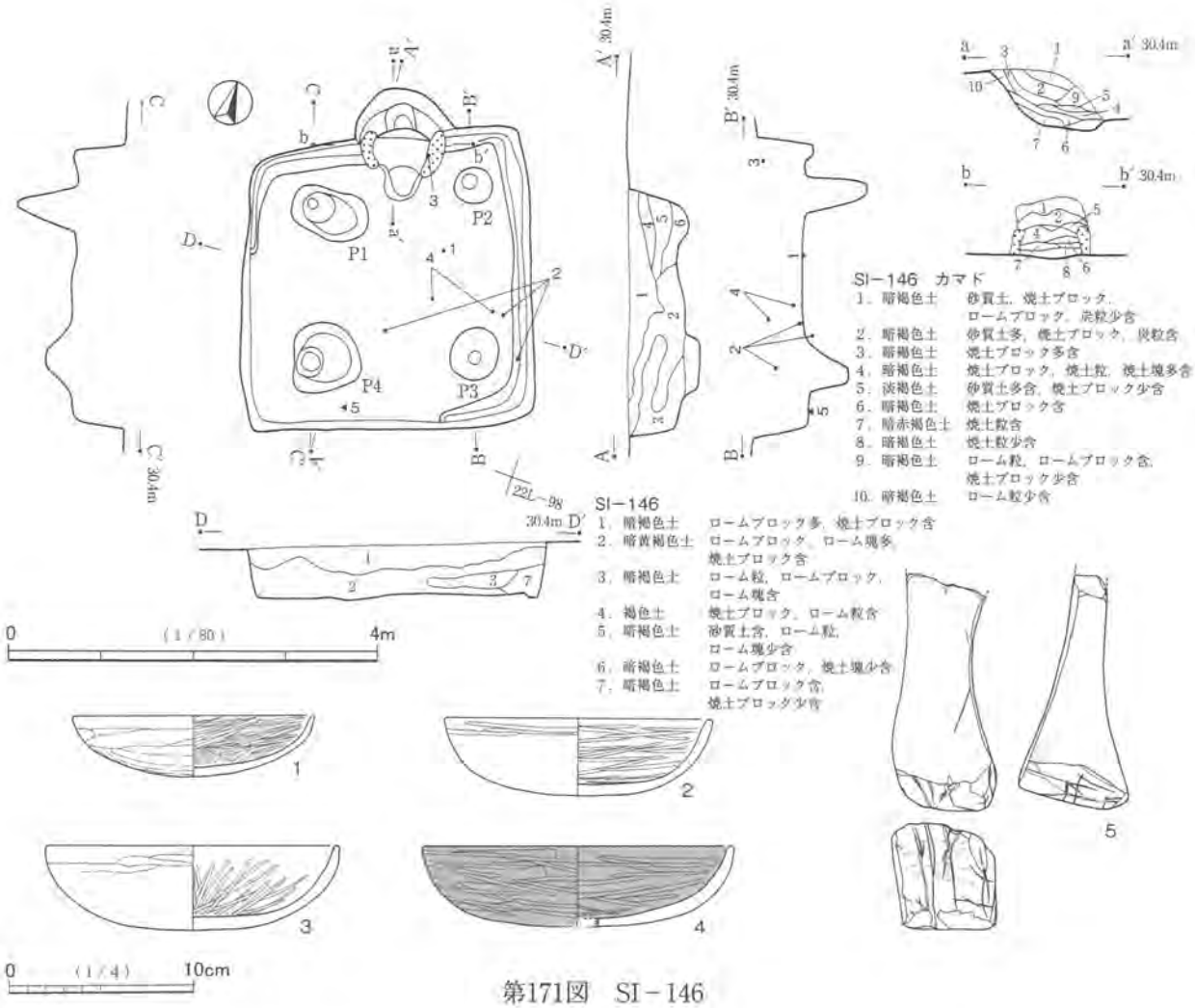
壁溝　東壁とカマドを除く北壁に巡る。西壁・南壁は北西隅・南東隅付近に巡るが，半分以上に巡らない。

カマド　北壁右寄りに位置する。煙道部側が方形プランから大きく突出する。両袖はともに幅が狭い状態で遺存する。構築材は山砂を主体とし，混じりけが少ない。両袖間は広く，上部を主体にかなり欠損している。カマド内堆積土下層は焼土粒・焼土ブロックを含む。火床部底面は床面よりもやや深く，掘りかた底面か，使用に伴い深くなったものである。

堆積土　暗褐色土・暗黄褐色土主体である。ローム粒・ロームブロックを比較的多く含む。

出土遺物　やや少量である。図示できた遺物は５点である。１～４は非ロクロの土師器杯，５は砥石である。１～４はいずれも丸底で浅い器形である。１～４の内面は全面にヘラミガキが施され，４は外面にも多く施されている。１の外面は底部を主体に赤みが強いが，赤彩ではないと思われる。１・２はやや遺存がよく，３・４は1/2以下の遺存である。欠損・破損に意図的な様相はうかがえない。

５の石材は流紋岩である。本来は縦長で方柱状の砥石であるが，中央の薄くなった部分で折れたか割られたものである。小口面の片側が遺存し，折損面も含めて全面が使用されている。図の上下面と左右の両側面は非常に滑らかである。小口面と折損面はざらつきがあるが，筋状の研ぎ痕が多い。筋状の研ぎ痕は




第171図　SI－146

他の面にもわずかにみられる。

1は中央やや右寄りの床面から出土した。3は平面的には右袖の位置であるが，確認面近くからの出土である。2・4は一部が床面・下層からの出土であるが，一部は上層である。5は南壁際左寄りの床面から出土した。出土遺物には特に祭祀的様相がうかがえず，周囲から廃棄されたか流入したものであろう。

**SI－147**（第172・173図）

**位置**　調査区南西部の22M－18グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

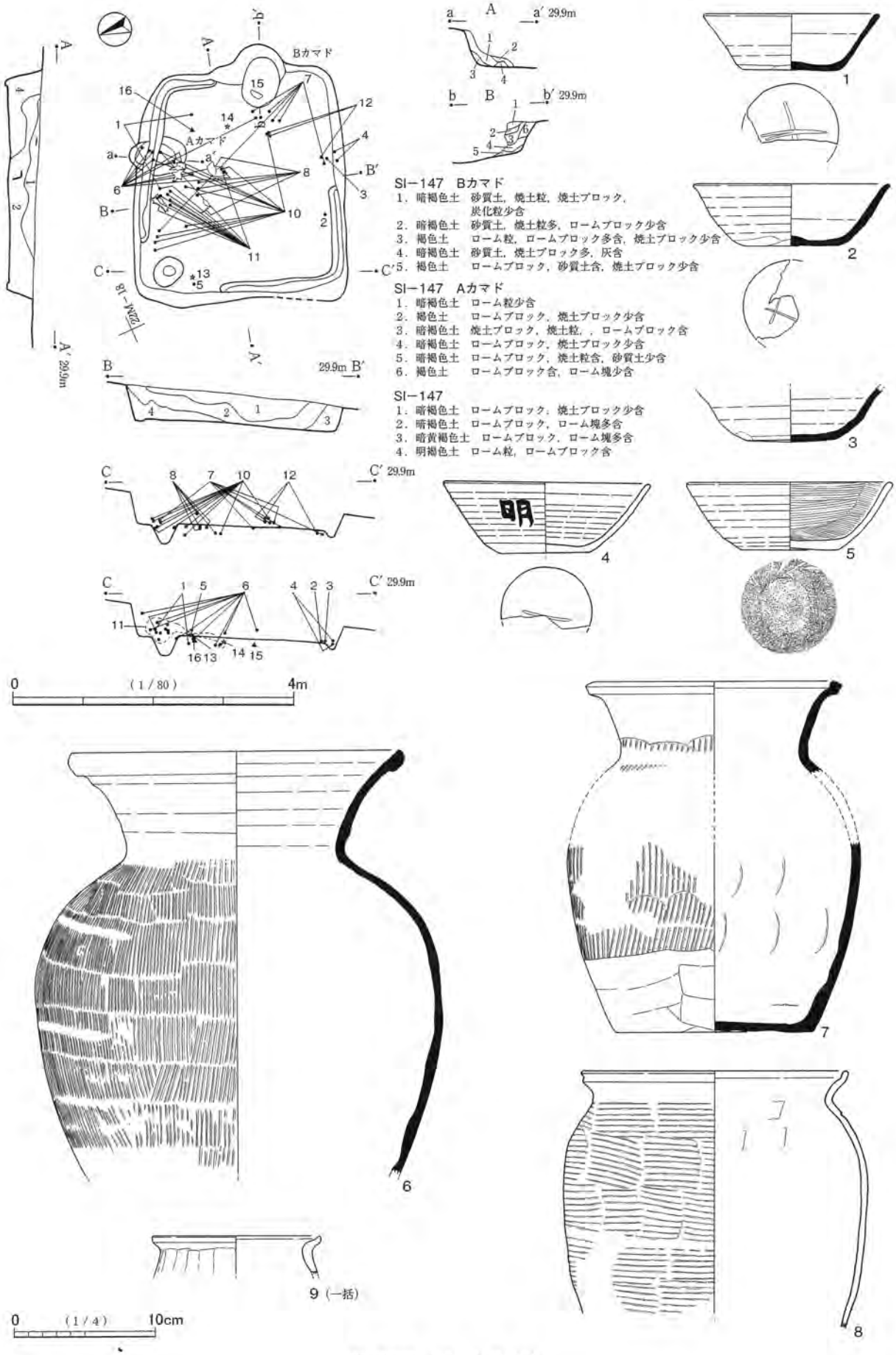
**形状・規模**　長さが3.3m，幅が3.0mで，やや縦長の方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

**床面**　南東（右奥）側の床面を掘りすぎたため，やや不明瞭である。北（左）側がやや高く，南（右）側がやや低いと思われる。硬化面はみられない。

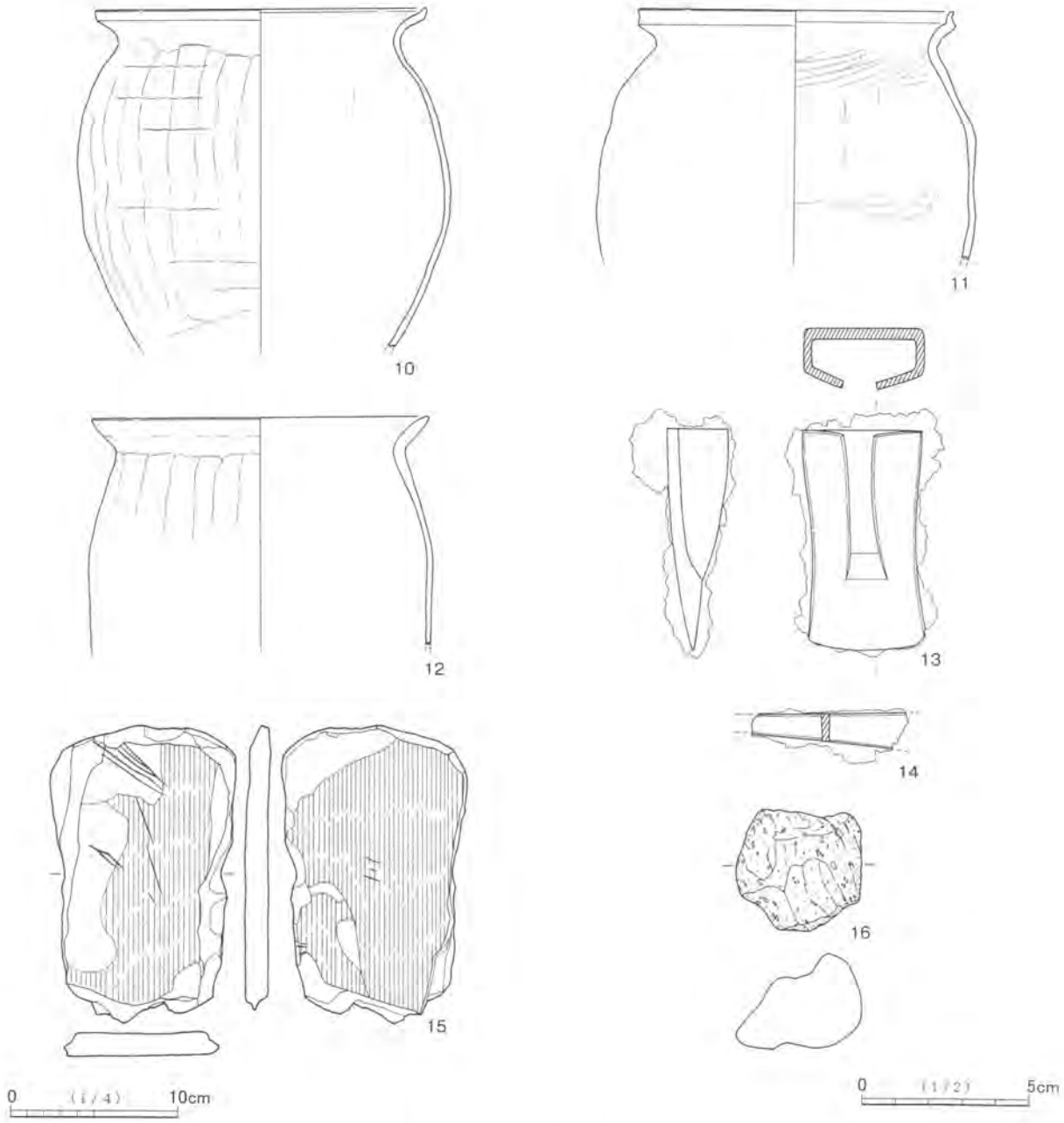
**柱穴**　北西（左前）隅でピットが検出された。径は44cm×35cm，床面からの深さは31cmである。規模がやや小さいが，貯蔵穴的なものと思われる。

**壁溝**　ピットのある左前隅側周辺は巡らない。掘りすぎた右奥側周辺が不明であるが，左前隅付近を除く大部分に巡ると思われる。

**カマド**　東壁右（南）寄りと北壁北寄りの2箇所に検出された。前者をBカマド，後者をAカマドとする。ともに構築体の遺存はなく，新旧関係が不明であるが，他の竪穴住居の様相から2基の同時使用は考




第172図 SI－147（1）




第173図　SI－147（2）

えにくい。図はBカマドを上にして示した。左右前後（奥）の記述はBカマドを基準としたが，便宜的なものである。2号カマドは灰の堆積がほとんどなく，構築材である山砂の堆積も少量である。焼土粒・焼土ブロックの堆積も若干量である。Aカマドの堆積土には，山砂・焼土粒・焼土ブロックを多く含む土層がみられる。Aカマドの火床部は赤色化した面がみられない。底面は浅く，床面からの窪みはあまりない。Bカマドの火床部底面は掘りすぎた部分に近いため不明瞭であるが，床面からはあまり窪んでいないと思われる。

**堆積土**　暗褐色土主体で，下層はローム粒・ロームブロックの包含が多い。下層にロームが多いが，レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　Aカマド周辺から多く出土した。Bカマド周辺もやや多い。中央から南西（右前）にかけてやや少ない。遺物量はやや多い。図示できた遺物は16点である。1～3は千葉産の須恵器杯，5はロクロ

土師器杯である。4はロクロ土師器杯としたが，千葉産須恵器の可能性もある。6・7は千葉産の須恵器甕である。8は常総型の土師器甕と思われる。9は小型の土師器甕で，在地の土器である。10～12も土師器甕で，10は在地の甕，11は常総型の甕である。12は在地の甕と思われる。13･14は鉄製品で，13は袋状鉄斧，14は刀子である。15は砥石，16は軽石である。

4は体部外面に正位で「明」の墨書がある。1・2は底部外面に「＋（×）」のヘラ書きがある。図示した向きからみて，1の横線は縦線を切っている。横線は一部二重であり，下の線が上を切っていると思われる。右側でやや下方に曲がる線がみられるが，上の線から続くものと思われる。2は縦線がやや深く，横線が浅いものである。そのため先後の関係が判然としない。1～5に遺存の極めて良好なものはなく，破損・欠損も意図的な様相はうかがえない。

6はやや大型の甕である。口頸部の遺存がややよく，胴部も中・下位まで1/2周程度が遺存する。焼成は良好であるが，胴部内面は剥離が著しく，外面も磨耗している。7は6と似た器形であるが，6よりも小型の土器である。遺存は一部であり，口縁部と胴部片に接点がない。8は胴部外面に横方向のタタキ状の痕跡が顕著である。タタキの可能性もあるが，若干の違和感があり，小口の端を使用したヘラナデであろう。軟質部が磨り減ったハケ目状の工具を使用したものと思われる。胴部内面も当て具痕と思われる部分がわずかにあるが，不明瞭である。これも当て具痕ではなく，ヘラナデが深く入ったものと思われる。胎土に白雲母を多く含み，色調は褐色である。器面はやや凹凸がある。以上から須恵器ではなく，常総型の土師器甕と思われる。もしも胴部の製作技法が平行タタキであったとしても，須恵器的な技法をもつ常総型の甕であろう。10は口縁部から胴部中位までやや遺存がよいが，胴部下位から底部を欠く。器壁が薄く，焼成は良好である。胴部外面に山砂が付着している。全体に赤みや黒みが強いが，色調の異なるものが接合しており，破損後も火を受けたことがわかる。11は口縁部から胴部上位までは割れているが，ほとんど欠損がない。器面の凹凸が顕著である。12は口縁部に接合痕がみえる点で，やや武蔵型の甕的であるが，胴部上位のヘラケズリが縦方向のため，在地の土器と思われる。10同様，胴部外面に山砂が付着するが，12は黒雲母の含有が多い。

13は完形であるが，錆膨れが著しい。やや小振りの鉄斧である。刃部先端側の平面形は撥状に軽く開く形態である。柄を装着するために折り返された鉄板は中央がやや高く，横断面形は五角形的な長方形である。袋部の長さは4㎝程度であり，全長の1/2強である。刃先の研ぎ出し範囲は，錆のため不明瞭である。14は刀子の茎の破片である。刃部側は幅が広くなる。茎尻は遺存しない。15の石材は緑色片岩で，扁平な板状の砥石である。図下部は折損しているのかもしれないが，判然としない。この状態でほぼ完形とみてもよいと思われる。上下の面は不明であるが，仮に図示した左側の面を上面，右側の面を下面とすると，下面は平滑な部分が多い。上面は下面と比べるとやや平滑度が劣るが，面としての使用はされたものと思われる。下面よりも使用頻度が少ないのであろう。筋状の研ぎ痕が上下面にみられるが，これは上面に多く，下面に少ない。15は材質からみて，古墳の石棺材が再利用されたものと思われる。平面形は縦長の台形状である。周囲が若干打ち欠きされ，形が整えられたと思われる。側面・小口面は概して面というほどの広さをもたないが，一部に平滑な部分がある。その一つが下面からみて左側下方部分であり，滑らかな部分が下面から続いている。また下面からみて左上の角部分もかなり磨られている。石材が剥離しやすい材質であるため，周縁は若干欠損していることも考えられ，側面も現在みられる以上に使用されていた可能性がある。強い被熱痕跡はうかがえないが，出土位置から若干火を受けたことも考えられる。なお砥石

としての使用・出土状況から，中世板碑の混入の可能性は低いと考える。

1はAカマド周辺の下層・床面から出土した。2は右壁際やや前寄りの床面から出土した。4も右壁際中央の床面から出土した。13は左前側でピット脇の床面から出土した。甕類は概ねカマド周辺から出土した。10・11はやや広く散っている。16は左壁側やや奥寄りの床面から出土した。図示した遺物の出土層位をみると，11は中位・上位から出土する破片も目立つが，概して床面・下層からの出土が多い。15は2号カマド内の底面から出土した。

1・2・4については，遺存があまり良好ではなく，特に祭祀的な状況はうかがえない。15についても判然としない。13は壁際に遺棄された可能性がある。図示した遺物は下層出土のものが多いので，竪穴住居廃棄に近い時点で多く廃棄（遺棄を含む）されたものと思われる。

SI－148（第174図，図版60）

位置　調査区南西部の22L－89グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが4.0m，幅が3.3mで，縦長の方形をなす。確認面からの深さは20cmであり，かなり浅い竪穴である。

床面　細かい凹凸はあるが，概ね平坦である。左右の壁際を除いて硬化している。

柱穴・ピット　北西隅側でピットが検出された。径は28cm×24cm，床面からの深さは15cmである。浅いことと，他に検出されていないため，柱穴とは思われない。本住居に伴うものかどうかも，判然としない。

壁溝　全周する。

カマド　北壁左寄りに位置する。床面まで浅いことと，重複遺構の存在により，遺存が悪い。左袖の一部が遺存するが，右袖は欠損する。ただし左袖の前側を掘りすぎたため，基底部の輪郭の一部は床面の痕跡から復元した。構築材は山砂主体であるが，暗褐色土がブロック状に含まれる。基底部はロームを主体とする。火床部底面は全体に浅い掘り込みである。強く赤色化した痕跡はみられない。

堆積土　暗褐色土主体である。遺存が少ないため，自然堆積か人為的堆積か判然としない。

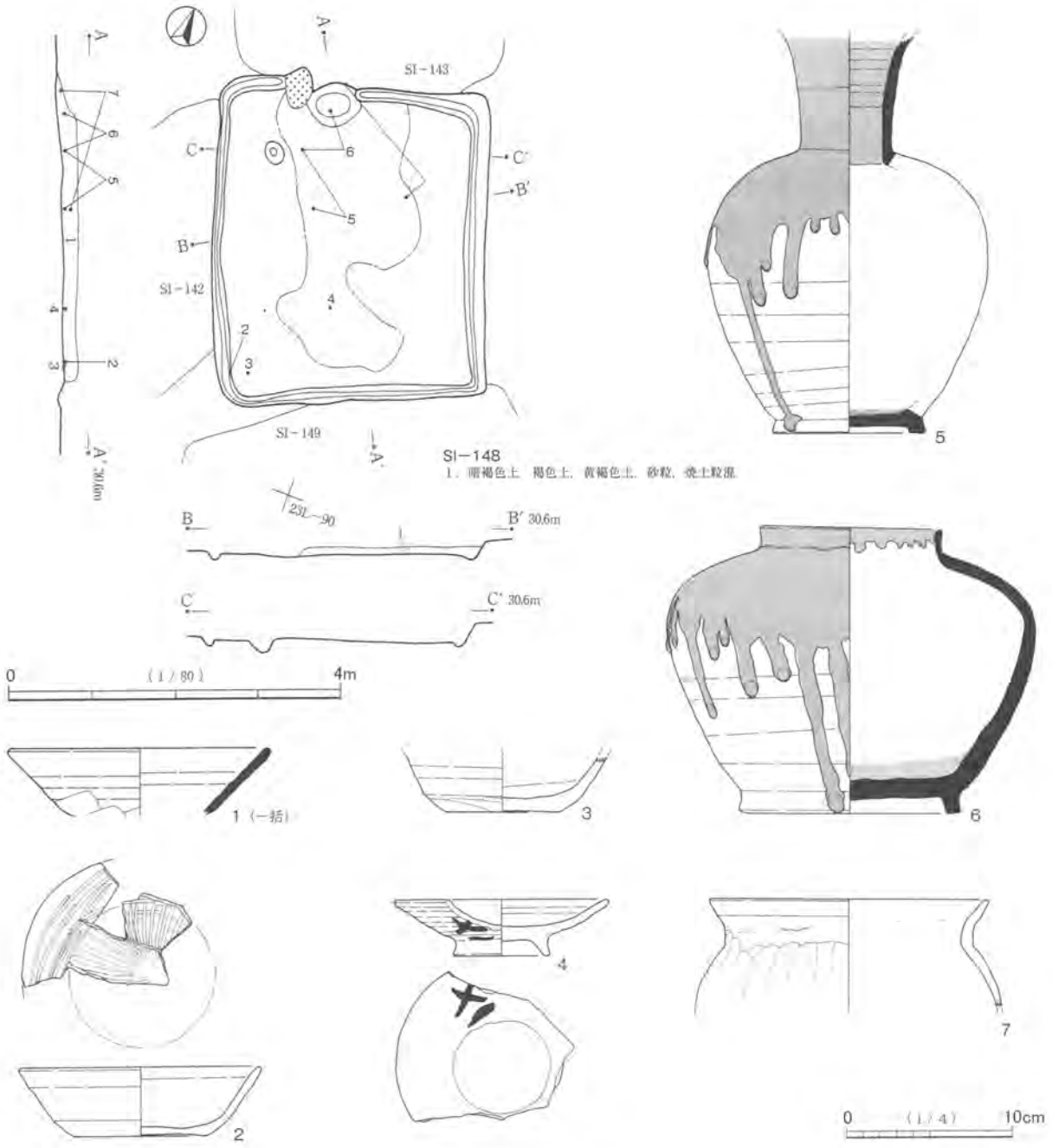
出土遺物　図示できた遺物は7点である。1は千葉産の須恵器杯，2・3はロクロ土師器杯，4はロクロ土師器高台付皿である。5・6は灰釉陶器で，5は長頸壷，6は短頸壷である。7は在地の土師器甕である。

4は体部外面に墨書がある。欠損部にかかるが，「千」と思われる文字である。ただし1画目がずれている点がやや難点である。2画目・3画目は横・縦の順である。向きはやや斜めの倒位であるが，高台付きの皿であるため，記入しやすい方向から書いているのかもしれない。内面は滑らかでやや光沢があるが，ミガキ痕は不明瞭である。高台部は遺存するが，口縁・体部の多くを欠損する。1～3も遺存はあまりよくない。2も内面にヘラミガキが施され，見込み部分は放射状を呈する。

5・6はともにかなり遺存がよい。5は口縁部の全周を欠損するが，頸部以下の欠損は部分的である。6は口縁部の2/3と高台の1/2以上を欠損するが，胴部の遺存は非常によい。ともに細かく割れている。6は器壁が厚く，重量感がある。

7は一部の遺存である。被熱により，赤みが強い。

5・6はカマド左袖前方の床面から細かく割れた状態でまとまって出土した。6の一部はカマド火床部に，5の一部は中央寄りに散っている。4は中央南寄りの床面から出土した。2・3は南西（左隅）側の床面からの出土である。図化に至らない土器片等の遺物量はやや少量である。




第174図　SI－148

5・6の出土範囲は北西側に所在するピットと重なる。6は器種・遺存度から火葬骨を収納した骨蔵器の可能性が考えられる。その場合，ピットは6を納めたものと思われる。また同一地点で出土した5は火葬墓に供献された器と考えられる。細かく割れているのは，出土面まで浅いためと思われる。火葬骨・灰等の内容物は検出されなかったため，失われたものと思われる。5・6が火葬墓関係の遺物であれば，本住居とは直接の関わりがないことになる。しかし遺物から推測されるだけであり，ピットの性格を含めてやや断定しがたい。

**重複遺構**　北側でSI－143，南側でSI－149、西側でSI－142と重複する。他住居のカマドの遺存状況や上層からの精査状況により，SI－142・SI－149よりも本住居の方が古く，SI－143よりも新しいと考えられる。

**SI－149**（第175図，図版61）

位置　調査区南西部の23L－90グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.8m，幅が4.1mで，やや横長の方形をなす。確認面からの深さは20cmであり，かなり浅い竪穴である。

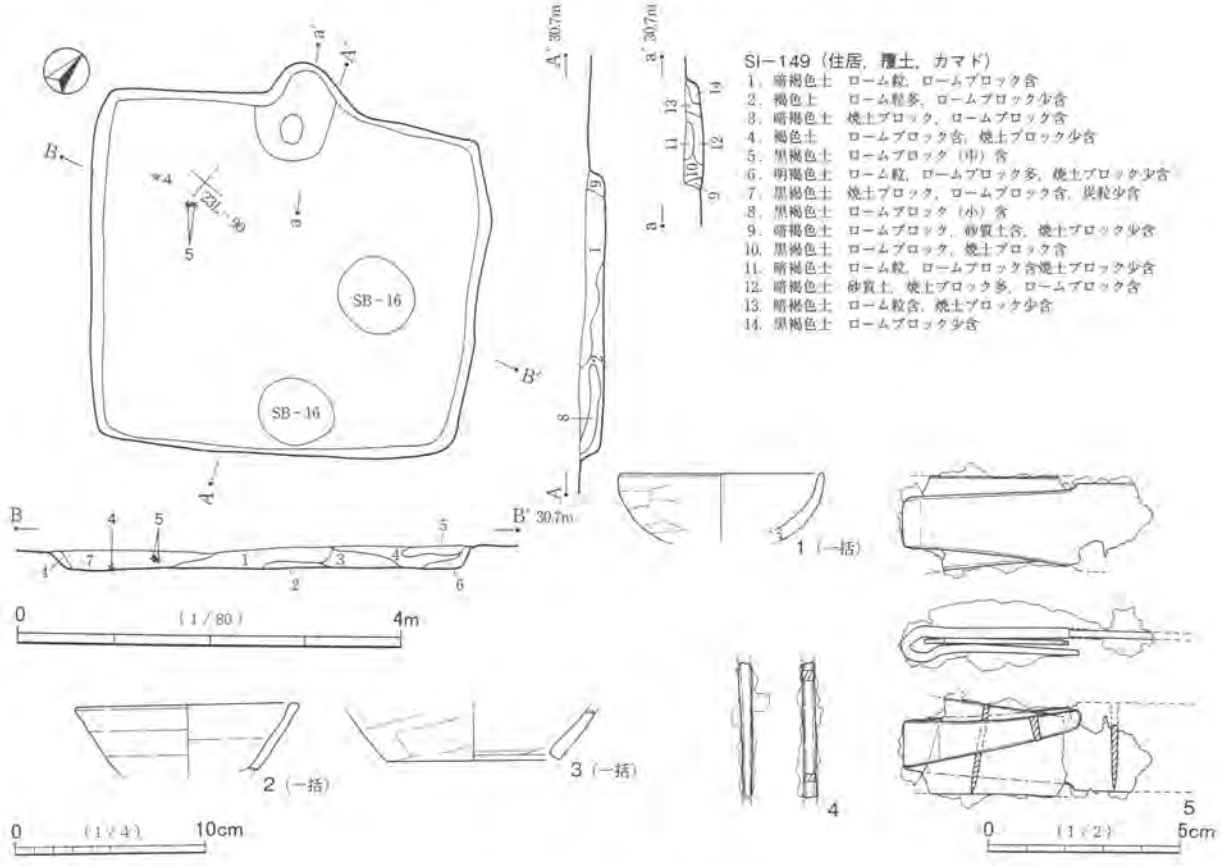
床面　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

カマド　北西壁中央に位置する。煙道部側が方形プランから若干突出する。構築体は遺存しない。火床部底面の高さは床面とほとんど変わらない。赤色化した面はみられない。カマド部分の堆積土下層は山砂と焼土ブロックを多く含む。

堆積土　暗褐色土・黒褐色土主体である。遺存が少ないためやや不明瞭であるが，自然堆積と思われる。

出土遺物　やや少量である。図示できた遺物は５点である。１は非ロクロ土師器杯，２はロクロ土師器杯，３は在地の土師器甑である。４・５は鉄製品である。５は刀子であるが，４は製品を特定しがたい。

１～３はいずれも小破片である。２は二次的な被熱により，内外面に剥離痕がある。また内面は褐色化している。４は細身の棒状品である。図の上部側がやや扁平であるが，特に機能に関わるものではないと思われる。紡錘車の紡軸，鉄鏃の茎，釘等が考えられるが，判然としない。５は道具としては不要となった刀子を折り曲げて丸めたものである。錆のため，やや不明瞭であるが，茎を二つに折り曲げ，その間に身の破片を挟んだものと思われる。挟まれたものは図の上側が刃側であろう。茎はほぼ遺存するが，身は一部の遺存である。現状での長さは6.6cm，幅は2.5cm～３cmである。厚さは錆膨れのため不明瞭であるが，１cm弱程度であろう。伸ばした長さをみると，茎長が9.7cm，身の幅は2.3cm程度と思われる。背関は遺存しており，やや深く直角に切り込みが入る。刃関部分は欠損している。再利用を図って折り曲げられたが，




第175図　SI－149

小鍛冶の材料として使用されることなく，廃棄状態となったものであろう。

4・5は重複するSK－106上から出土しているため，SK－106に関わる遺物の可能性がある。1～3の出土位置は不明である。

**重複遺構**　北側でSI－148と重複し，本住居が切っていると思われる。また東側でSB－016と，西側でSK－106と重複し，両者に切られている。

**SI－151**（第176・177図，図版61）

**位置**　調査区南西部の22M－28グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西に若干下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　新旧二つのカマドがあり，新カマドを奥にしてみると，長さが4.1m，幅が4.8mの横長の方形をなす。旧カマドからみた場合は長さと幅が逆になる。確認面からの深さは60cmである。プランはやや平行四辺形的な形態で，若干不整である。

**床面**　北東（右やや奥）側がやや高く，南西（左やや前）側がやや低い。中央がやや硬化しているが，壁側との差はあまり顕著でない。なお左右前後（奥）の記述は新カマドからみたものである。

**柱穴**　主柱穴が4箇所検出された。左奥(南西)側の柱穴P1と右前(北東)側の柱穴P3は隅に寄っている。柱穴間を結ぶ形態は不整な方形で，竪穴のプランに対しても対称性を欠く面がある。出入口ピットが東壁際中央で検出された。新カマドの竪穴に対応する出入口施設である。旧カマドの竪穴に対応する出入口ピットは検出されなかった。ただし南壁やや東寄り部分の壁溝に途切れる部分があり，その付近が出入口部に相当すると思われる。

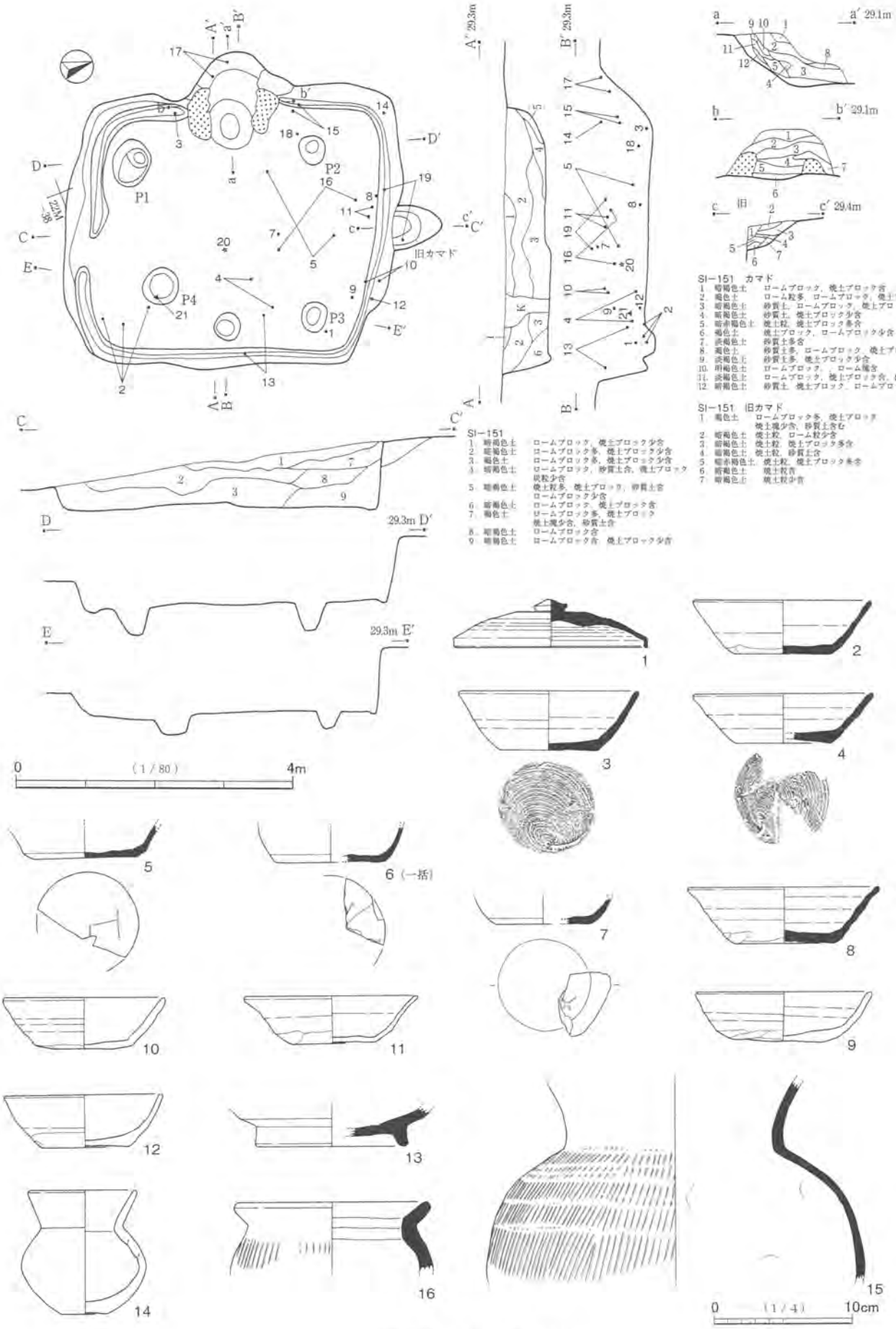
**壁溝**　上記の部分と新カマド部分を除いて巡っており，ほぼ全周するといえる。

**カマド**　付け替え後の新カマドが西壁中央に位置し，付け替え前の旧カマドが北壁中央に位置する。方形プランからの突出はかなり大きいが，床面まで深いため，煙道部の遺存がよいという面もあると思われる。旧カマドは除去されており，袖等の遺存はない。旧カマド部分の壁下には，壁溝が巡る。旧カマド側の堆積土には，少量の焼土ブロックと山砂がみられる。新カマドの袖部は比較的遺存がよい。火床部底面は床面よりも若干窪んでいるが，あまり深さはなく，灰のかき出しに伴う程度のものであろう。カマド内堆積土下層は焼土を含むが，底面よりもやや高い位置に多くみられる。

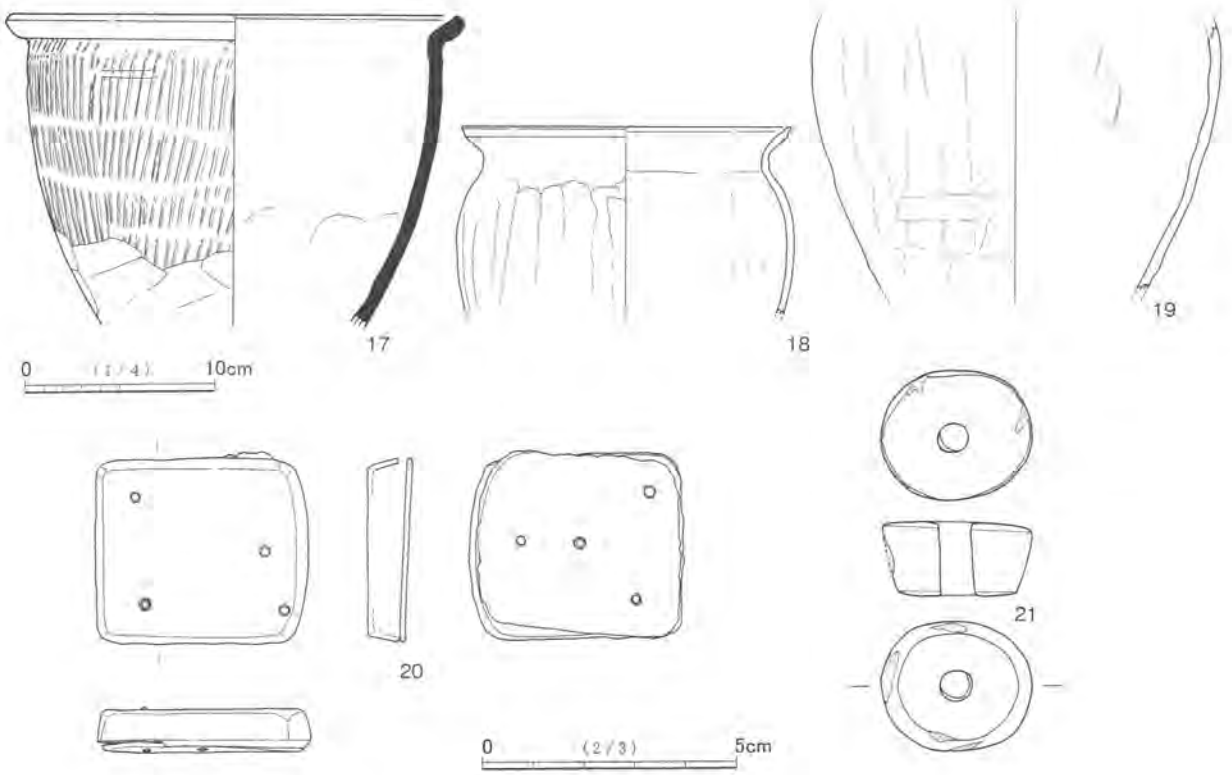
**堆積土**　最上層はロームの包含が少ないが，概してロームブロックの包含が多い。しかし地形にやや傾斜があるため，人為的堆積か自然堆積か判然としない。

**出土遺物**　多量の遺物が竪穴全体から出土したが，左壁側中央の分布密度が低い。図示できた遺物は21点である。1は須恵器蓋で，東海産と思われる。2～8は須恵器杯である。産地は，3・4が東金子窯産，2・5～8が千葉産である。9～12はロクロ土師器杯，13は新治窯産の須恵器高台付杯または盤である。14は土師器坩で，古墳時代土器の混入品である。15～17は千葉産の須恵器甕，18・19は在地の土師器甕である。20は金属製品で，銅製の腰帯である。21は石製品で，紡錘車である。

1はつまみから口縁部の一部にかけての破片である。胎土は緻密で，焼成は良好である。高温で焼成されたためか，内部に若干の気泡がみられる。内面の一部が剥離している。須恵器・土師器杯のなかでは，12が口縁端部の一部がわずかに欠損するだけで，ほぼ完形の土器である。12以外では2の遺存がややよいが，極めて遺存のよいものは存在しない。3・8は底部の遺存がよいが，口縁・体部の遺存は少ない。2の遺存部分はやや細かく割れて接合している。破損・欠損に特に意図的な様相は認めがたい。3はやや焼




第176図　SI－151（1）




第177図　SI－151（2）

成があまく，下位は褐色の色調である。４も底部がわずかに赤みを帯びる部分がある。５～７は底部外面に記号と思われる刻書をもつ。刻書はいずれも欠損部に続く。５は「コ」と「エ」の中間的な形態のヘラ書きである。６はやや斜めに走る２条線のヘラ書きで，欠損部で交わる可能性がある。７は「＋（×）」で，１条が焼成前のヘラ書き，１条が焼成後の線刻と思われる。５～７の色調はいずれも黒色である。器面は全体に磨耗している。12は焼成があまいように思われるが，二次的に火を受けたことも考えられる。

14は口縁部の多くを欠くが，胴部には欠損がない。また遺存部分は割れていない。混入品であるが，遺存良好な土器である。

15～17の千葉産の須恵器甕は三者三様である。15は頸部をもち，胴部の張る相対的にやや大型の甕である。16は小型の甕，17は甑的な器形の中型の甕である。16は器壁が非常に厚く，作りが雑である。17も口縁端部の作りがやや雑である。18はやや小型の甕である。15～19も遺存はあまり多くない。

20は帯先金具で，いわゆる鉈尾である。裏金具も遺存しており，遺存良好である。側辺は帯幅に平行し，先端はわずかに丸みをもつ。幅と長さの比は１：1.2である。脚鋲は５本であるが，遺存するのは２本である。鋲の位置は先端側中央に１本，その反対側の両隅側に各１本であり，これらは表金具，裏金具とも孔が貫通している。さらに中央に１本，左図上の表金具上面からみて右下隅に１本あるが，中央のものは表金具に孔がみられず，右下隅のものは裏金具に孔がみられない。すなわち中央の鋲は表金具に鋳出されて，裏金具の孔に貫通し，右下隅のものは裏金具に鋳出されて，表金具の孔に貫通するものであることがわかる。やや大型の製品のため，鋲が５本使用されたのであろう。なお鋲が遺存するのは，中央の１本と，表金具からみて左下側のものであり，裏金具に鋲先端がみられる。鋲が３本欠損したためか，裏金具は表金具に対して，若干ずれて錆付いている。

なお銅製品ではあるが，表金具が褐色味を帯び，裏金具の周囲が淡緑色になっているのは，被熱による

影響と思われる。21の石材は流紋岩である。表面の所々にわずかな欠損があるが，ほぼ完形に近い遺存である。

12は右（北）壁際前寄りの下層から出土した。正位・倒位等の状態は不明である。２は左前（南東）隅付近の下層から出土した。主要部分は倒位の状態である。図示した遺物の出土層位は下層から上層にわたっているが，中・上位での出土が多い。２・12は遺棄された可能性が考えられるが，出土遺物の多くは周囲から廃棄されたか，流入したものと思われる。

**重複遺構**　新カマドの右（北）方で，SK－114とわずかに重複し，本住居が切られている。

**SI－152**（第178図，図版61）

**位置**　調査区南西部の23M－30グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西に若干下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　長さが3.6m，幅が3.9mの方形をなす。確認面からの深さは10cm～60cmである。

**床面**　東側がやや高く，西側がやや低い。ただし西側は西辺の2/3近くが撹乱を受けており，その影響も考えられる。SI－154と大きく重複するが，その部分は貼床が施されている。そのため床面の硬化は判然としない。貼床部分の土層はロームブロックを多く含む褐色土である。

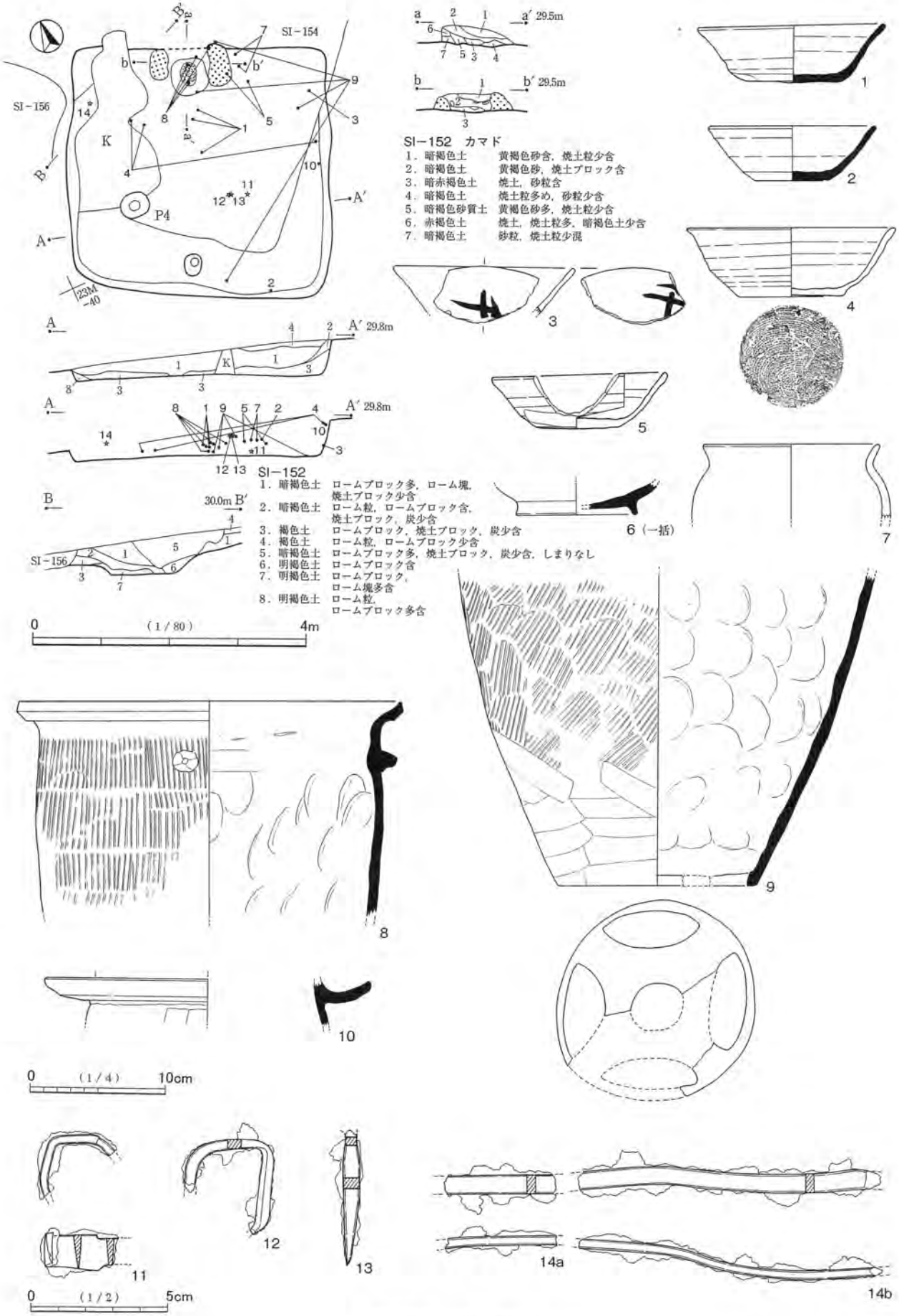
**柱穴**　出入口ピットが南西壁際中央で検出された。径は34cm×25cm，床面からの深さは18cmである。また中央から左前（西）側でピットが検出された。径は45cm×36cm，深さは23cmである。

**カマド**　北東壁やや左寄りに位置する。SI－154と重複する影響で，煙道部側を検出することができなかった。両袖が遺存するが，左袖側の遺存があまりよくない。構築材は山砂を主体とするが，下部は若干の暗褐色土・ロームを含む。右袖内側は赤色化した部分が遺存する。火床部底面の窪みは非常に浅い。顕著に赤色化した面はみられない。カマド内堆積土は中央の下層で焼土を多く含む。

**堆積土**　ロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。埋め戻されているかもしれない。

**出土遺物**　全体的に出土したが，カマドのある北東側半分からの出土が多い。南西側が少ないが，堆積土の遺存が少ないことが影響していると思われる。図示できた遺物は14点である。１・２は千葉産の須恵器杯である。４もロクロ土師器杯と思われるが，千葉産の須恵器杯の可能性もある。３・５はロクロ土師器杯である。６は新治窯産の須恵器高台付杯または盤である。７は小型の土師器甕で，在地の土器である。８・９は千葉産の須恵器甑である。10は千葉産の須恵器羽釜である。11～14は鉄製品である。11は刀子である。12は不明瞭だが釘の可能性がある。13は釘であろう。14は製品を特定しがたい。

３は「千」の墨書が体部内外面にみられる。外面は横位，内面は正位で，外面の墨書の真裏に内面の墨書の一部がかかる。１・５は口縁・体部の一部が欠損するだけの遺存良好な土器である。５の欠損部は整った「U」字状の形態であり，打ち欠きされたものと思われる。遺存部分は欠損部から続いて２片に割れて接合する。１片は小さく，１片は大きいものであるが，割れ方は弧状を呈している。欠損部と小さい破片を合わせると口縁・体部の1/2弱の欠損・破損である。小さい破損部も打ち割りされた可能性が考えられる。器面は全面が磨耗しており，特に底部内面の剥離が著しい。胎土は褐色粒の含有が顕著で，粒径も大きい。１の欠損・破損のうち，細かく割れた部分は弧状または弱い「W」字状を呈している。そこからほぼ対向する部分が小さく逆三角形状に割れて接合する。またその２箇所をつないで，口縁部から底部の一部までやや大きく割れて接合する。１の欠損・破損も打ち欠き・打ち割りされた可能性があるが，割れが多く，やや断定しがたい。４の底部調整は回転糸切り離し後ほぼ無調整である。色調は全面的に黒灰色，暗灰黄


SI－154
SI－156
K
P4
A
A′ 29.8m
B
B′ 30.0m
a
a′ 29.5m
b
b′ 29.5m
SI－152 カマド
1．暗褐色土　黄褐色砂含，焼土粒少含
2．暗褐色土　黄褐色砂，焼土ブロック含
3．暗赤褐色土　焼土，砂粒含
4．暗褐色土　焼土粒多め，砂粒少含
5．暗褐色砂質土　黄褐色砂多，焼土粒少含
6．赤褐色土　焼土，焼土粒多，暗褐色土少含
7．暗褐色土　砂粒，焼土粒少混
SI－152
1．暗褐色土　ロームブロック多，ローム塊，焼土ブロック少含
2．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック含，焼土ブロック，炭少含
3．褐色土　ロームブロック，焼土ブロック，炭少含
4．褐色土　ローム粒，ロームブロック少含
5．暗褐色土　ロームブロック多，焼土ブロック，炭少含，しまりなし
6．明褐色土　ロームブロック含
7．明褐色土　ロームブロック，ローム塊多含
8．明褐色土　ローム粒，ロームブロック多含
6（一括）
0　(1/80)　4m
0　(1/4)　10cm
0　(1/2)　5cm
14a
14b

第178図　SI－152

褐色である。色調を重視して千葉産の須恵器としたが，ロクロ土師器との区別が難しい。また2も褐色味を帯びた部分があり，土師器との区別がやや難しいが，黒色部分が多いこととややざらつく質感から千葉産の須恵器とした。

8は口縁部から胴部中位までの一部の遺存である。9とは別個体である。把手が1箇所みられるが，不整な円錐形で，上部がやや尖っている。貼り付けの際に強く押されたため，把手部分の内面が突出している。また内面には指紋がみられる。焼成は良好である。9はやや大型の甕で，胴部中上位から底部の一部までの遺存である。胴部は半周以上遺存する部分がある。中心の円孔はやや崩れており，周囲の4孔もあまり丁寧な作りではない。器面はやや荒れている。10は小破片から図化した。羽部分の幅が広い。器面は灰黄色であるが，断面内部の色調は褐色である。

11は刀子の刃部根本側付近の破片である。大きく曲がっており，再加工に供する予定のものであったと思われる。背関は直角に切り込みが入る。刃関部分は弧を描くが，錆の影響とも思われる。直角的な可能性があるが，やや不明瞭である。12は現状で「コ」の字状的な形態であるが，棒状品が曲がったものかもしれない。右側の下端は細くなっており，ほぼ先端(または末端)と思われる。本来が棒状品であるならば，釘の可能性が高いと思われる。13も釘と思われる。先端が遺存しており，かなり尖っている。破損部がその下方よりやや細いが，「L」字形に曲がる部分が細くなっているのであろう。折頭型の頭部が破損していると思われる。14は長くやや薄い棒状の鉄製品である。やや曲がっているが，本来の形状とは思えない。

1はカマド前方から出土したが，床面から中位にわたっている。5はカマドの右側中位の出土である。1・5とも正位・倒位等の状況は不明である。3は右奥（東）隅側から出土したが，層位は中下位である。8・9はカマド内下層から出土した。9は右（南東）壁際や前（南西）壁際等まで広く散っているが，主要部はカマド内からの出土である。やや前側から底部を左袖側に向けてつぶれた状態で出土した。鉄製品の11・12・13は平面的には近くから出土した。ただし出土層位はやや離れている。

**重複遺構**　北側でSI－154と大きく重複し，本住居が切っている。またSI－156が本住居の左壁北側にほぼ接触する近さで位置する。確認面では重複していないが，上部で重複していると思われる。

**SI－153**（第179～181図，図版61）

**位置**　調査区南西部の23M－31グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西にわずかに下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　長さが4.2m，幅が4.4mの方形をなす。確認面からの深さは50cm～70cmである。やや平行四辺形的な形態である。

**床面**　東側が高く，西側が低い。中央が硬化している。

**柱穴**　主柱穴が4箇所検出された。主柱穴の配置は竪穴住居のプランに対して，全体に奥（北東）側に寄っている。特に右奥（東）側の柱穴P2は東隅に近い位置である。左前（西）側の柱穴P4の内側寄りでピットが検出された。径は37cm×29cm，床面からの深さは14cmである。主柱穴の深さは24cm～48cmであり，主柱穴よりも浅いピットである。位置的に主柱穴とは思われず，本竪穴に伴うものならば補助的な柱穴であろう。出入口ピットは検出されなかったが，南西壁側が出入口と思われる。ピットの未検出はSI－154と重複する影響も考えられる。

**壁溝**　左奥（北）隅付近は巡らない。またSI－154と重複する前（南西）壁左側付近は不明であるが，他の状況から巡ると思われる。左右と前側の三壁は本来ほぼ巡ると思われる。

カマド　北東壁中央に位置する。現状では煙道部が方形プランから大きく突出するが，両袖・火床部は方形プラン内に位置する。煙道部の近くには土坑があるため，煙道部も土坑と重複している可能性がある。本来は山形に突出すると思われる。両袖が遺存するが，上部と前側の遺存があまりよくない。構築材は山砂を主体とするが，下部はローム粒を含む。袖内側は赤色化しており，特に右袖が顕著である。左袖内には，土師器甕22の口縁部から胴部破片が縦に入っている。袖の山砂に覆われているので，袖を構築する際に補強目的で入れられたものであろう。あるいは作り替えを含む構築時に混入したものかもしれない。火床部底面はやや広く赤色化している。火床面は床面からあまり深く窪んでいない。カマド内堆積土下層は焼土を多く含む。

堆積土　暗褐色土主体である。中・下層はロームブロックを多く含む。

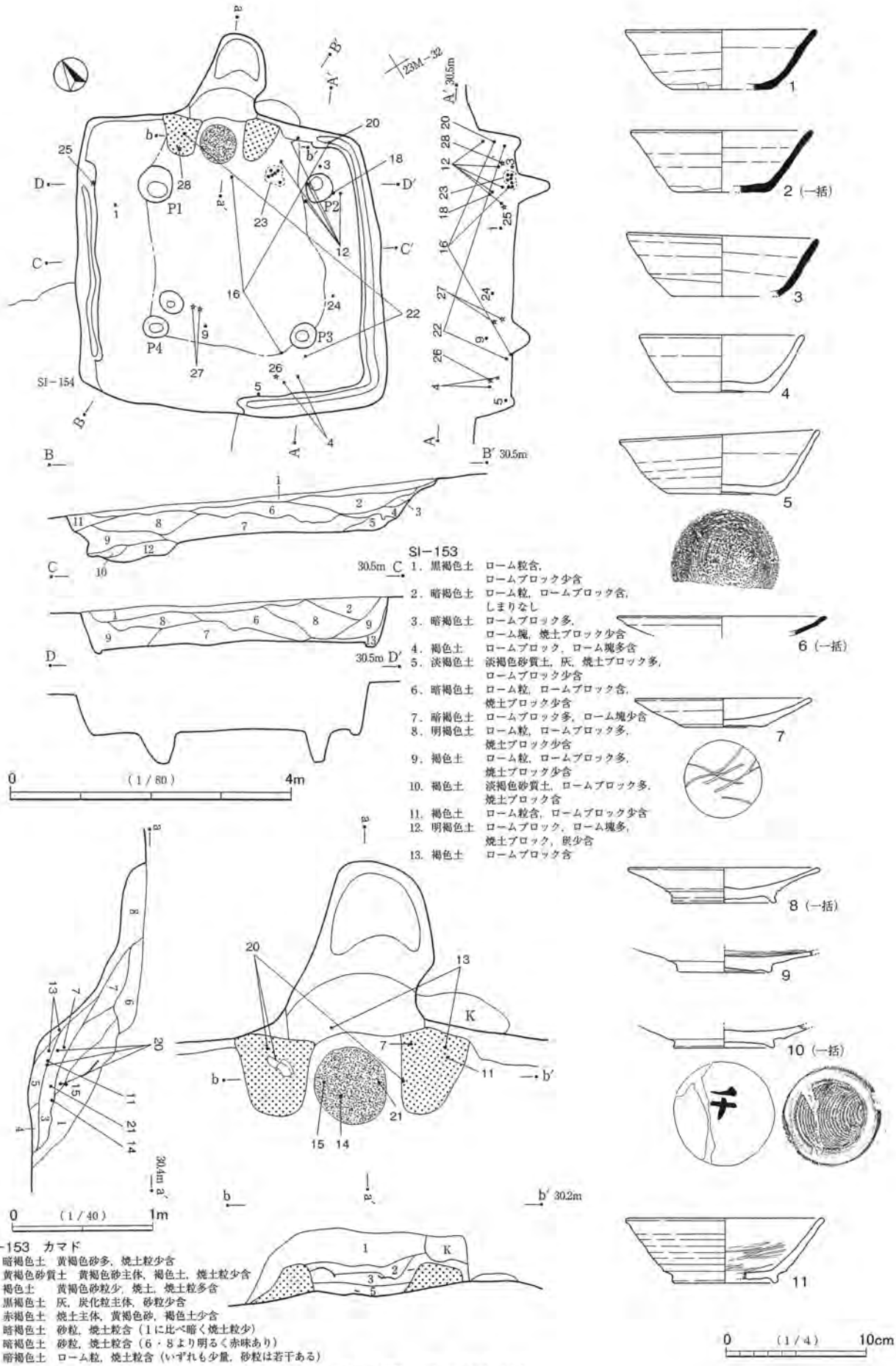
出土遺物　竪穴全体から多量に出土した。図示できた遺物は29点である。１～３は千葉産の須恵器杯，４・５はロクロ土師器杯，６は灰釉陶器皿，７はロクロ土師器皿，８～10はロクロ土師器高台付皿，11はロクロ土師器高台付杯である。12～19は千葉産の須恵器である。器種は12が鉢，14～19が甕である。13は甕または甑である。20～23は土師器甕である。20が常総型，21～23は在地の甕である。22・23はやや小型の甕である。24は新治窯産の須恵器甑である。25～28は鉄製品で，25は紡錘車，27は鉄鏃，28は鑷子である。26は鉤座金具と思われる。29は砥石である。

７は底部外面にヘラ書きと思われるものがある。概ね３条×１条が斜めに交差したものを主とする不整な形状のものである。条線はヘラミガキ的なものである。10の底部外面には「千」の墨書がある。墨痕は薄い。図示した杯皿類のなかには，極めて遺存の良好なものは存在しない。破損・欠損には特に意図的な様相がうかがえない。５・７・11は器面がかなり荒れており，特に５は内面の剥離が著しい。

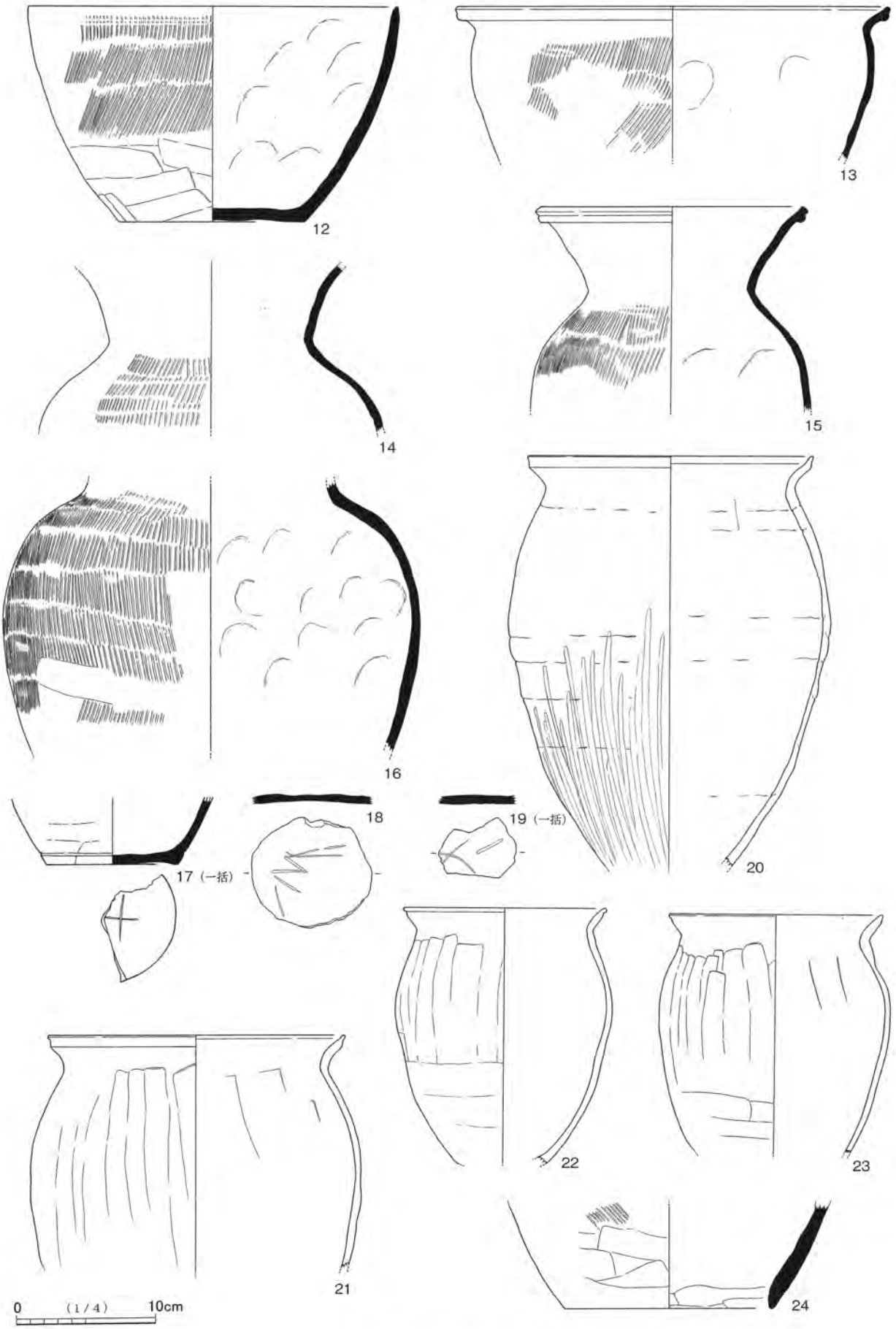
12は須恵器甕の胴部中位を口縁部とした形態である。口縁部は一部の遺存であるが，底部は1/2以上遺存する。底部外面は同心円状の縄目・砂目痕がみられる。14～16は頸部をもつ甕である。15は口縁端部が遺存する。口頸部が長くやや大きいわりに，胴部はやや小振りである。17～19は須恵器甕の底部周辺の破片で，底部外面にヘラ書きをもつものである。17は「W」または「M」条の形態の他，数条の条線がみられる。ヘラ書きの痕跡は浅く，やや不整である。破断面は比較的丁寧に加工して，円盤状にしている。薄いが底部外面に回転糸切り痕がある。18は「×（＋）」と１条線がある。19も「×（＋）」で，明瞭に刻まれている。中央近くにみられる。底部外面には縄目状・砂目状の痕跡もみられるが，ナデによりかなり消されている。ロクロ成形の甕である。

20は接合痕が多く，やや作りが雑である。白色粒・白雲母の含有が顕著である。22は被熱により赤みが非常に強い。器面は荒れている。20・22の胴部外面には焼けた山砂が付着している。23は底部周辺を欠くが，口縁部から胴部下位までは遺存がよい土器である。胴部外面は剥離が著しい。24は一部の破片である。５孔の甑であるが，橋状部は遺存しない。

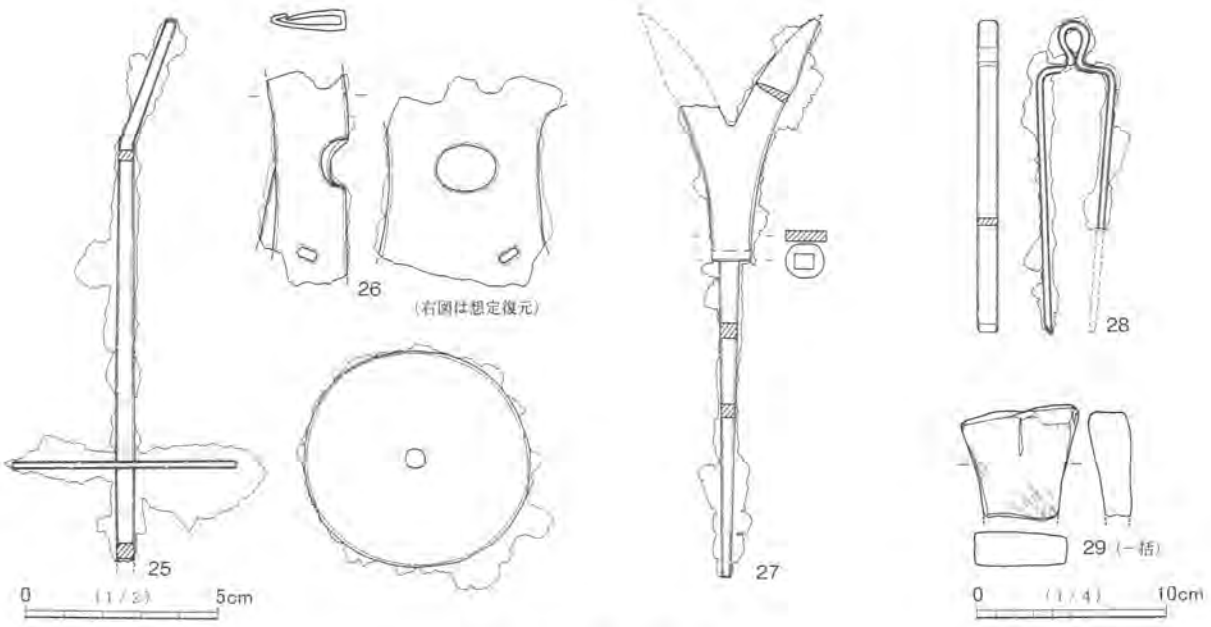
25は比較的遺存がよい紡錘車である。紡輪は欠損がなく，紡軸は上部先端から紡輪下部の途中まで遺存する。しかし紡輪は錆膨れの顕著な部分がある。図示した面が下面で，一部に繊維質が付着している。紡輪は大型のものである。孔形は紡軸が遺存するため，X線写真でも形態がやや不明瞭である。肉眼観察では円形といえるほどではないが，やや丸みをもつと思われる。なお紡軸の断面は基本的に方形であるが，孔に接する部分は多角形状の形態と思われる。孔との隙間を少なくするため，円形に近い形にされているのであろう。紡軸は先端側が曲がっているが，本来は直線状のものである。上部先端に，鉤はみられない。




第179図　SI－153（1）




第180図　SI－153（2）




第181図　SI－153（3）

紡輪上から先端までの長さは11.8cmである。

26は鉤座金具と思われる。鉤座金具は基本的に「扉に空けられた鉤（鍵）穴の磨耗を防ぐための補強板」※）であるが，26は二つに折りたたまれたものと思われる。折りたたみを開いた復元形で考えると，方形に近い鉄板の中央にやや大きな円孔があり，四隅には，扉に取り付けるための長方形の目釘小孔があると思われる。ただし26で確認できる目釘孔は一つである。26が廃棄に際して二つ折りにされたのは，再利用に供する意図があったことも考えられる。なお鉤座金具の円孔及び扉の鍵穴はクルル鍵を差し込むためのものであり，26の出土は小屋ノ内遺跡同様，稲荷塚遺跡においても鍵をもつ掘立柱建物が存在したことを示すものである。

27は雁又式の鉄鏃である。鏃身は大型のもので，二股を呈する刃部の間の抉りが深い。刃部の片側は多くを欠くが，片側は切先近くまで遺存する。鏃身と棒状部の境は不明瞭であるが，刃部の下方の直線的な部分を棒状部とみておく。茎との境付近の棒状部側面は直線状であるが，表裏面が厚みを増す。そのため茎は棒状部の境よりも細くなり，篦被は四面関となる。茎は比較的よく遺存する。茎尻を若干欠損すると思われる。28は鑷子と書いて「せっし」と読んだが，広辞苑（新村出編『広辞苑』第５版　岩波書店　1998）によれば，「せっし」の項目で，正しくは「じょうし」と読むとする解説を付け加えている。両先端部が毛抜き状になったピンセットと考えられる。比較的遺存がよく，欠損部は図示した右側の先端側のみである。厚さ２㎜，幅５㎜の薄い棒状の鉄板を，頭部側で小さく環状にし，さらに折り返して弾力性をもたせている。脚部先端は尖っているが，側面の幅は均一で，細くならない。

29の石材は流紋岩である。本来は長方体の砥石で，片方の小口側が遺存する。図の上下面及び左右側面とも使用により平滑である。小口面はやや凹凸があるが，面の長軸方向に擦痕がみられる。折損面も同様である。石材が軟質のためやや不明瞭であるが，小口面・折損面とも若干使用されたものと思われる。筋状の研ぎ痕が上面や折損面に若干みられる。

カマド内及び周辺から比較的多く出土した。それらを列挙すると，13～16・20～23の須恵器・土師器の

※）合田芳正　2002　「鉤（鍵）座金具」『青山考古』第19号　青山考古学会

甕の他，杯類の７・11，鉄製品の28もある。16・22はかなり広域に散っている。23はまとまって出土し，層位も床面・下層のため，本住居で使われていた遺物か，時期的に近いものと思われる。

出土遺物の層位は床面から上層にわたっている。出土状況に顕著な祭祀的様相をもつものはみられない。出土遺物は概して廃棄されたか流入したものと思われる。

**重複遺構**　南東側でSI－154と重複し，本住居が切っている。

SI－154（第182図，図版61）

**位置**　調査区南西部の23M－30グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西にわずかに下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　長さが4.9m，幅が5.1mの方形をなす。確認面からの深さは30cm～70cmである。

**床面**　ほぼ平坦である。全体に堅くしまりがある。特に硬化した範囲については不明瞭である。

**柱穴**　主柱穴が３箇所検出された。本来は４箇所であるが，西側の柱穴P4はSI－156に切られて遺存しない。柱穴の規模は大きく，底面は概ね平坦である。P1・P2の深さが60cm～70cm前後で，かなり深いため，当初の掘りかたが大きいと思われる。出入口ピットは他遺構と重複する影響もあって検出されなかったが，南西壁側が出入口部であろう。

**壁溝**　SI－156に切られた西隅側周辺が不明であるが，その他は巡っている。本来全周すると思われる。

**カマド**　北東壁中央に位置する。SI－153に切られて，右袖側が遺存しない。方形プランからの突出はあまり大きくない。左袖は遺存し，内側が若干赤色化している。火床部底面は赤色化が著しい。床面からの窪みはわずかである。カマド内堆積土下層は焼土を多く含む土層が厚く堆積する。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体であるが，概してローム粒・ロームブロックを多く含む。

**出土遺物**　やや少量であるが，他遺構に切られていなければ，かなりの量が出土したと思われる。図示できた遺物は千葉産の須恵器甕１点である。非常に大型の甕である。遺存は口縁部の一部である。中央やや左前側の床面から出土したが，SI－152とSI－156に非常に近い位置でもある。遺物の時期は本住居よりも新しいと思われ，重複する他住居の遺物か他住居に近い時期の遺物と思われる。

図化に至らない土器破片をみると，新しい時期のものも混在しているが，やや古相の新治窯産の須恵器杯，武蔵型の土師器甕，常総型の土師器甕，非ロクロの土師器杯等がみられる。須恵器杯は千葉産よりも新治窯産の方が多く，本住居の時期を示唆していると思われる。

**重複遺構**　北東側でSI－153，南側でSI－152，南西側でSI－156と重複し，本住居がそれらのいずれにも切られている。

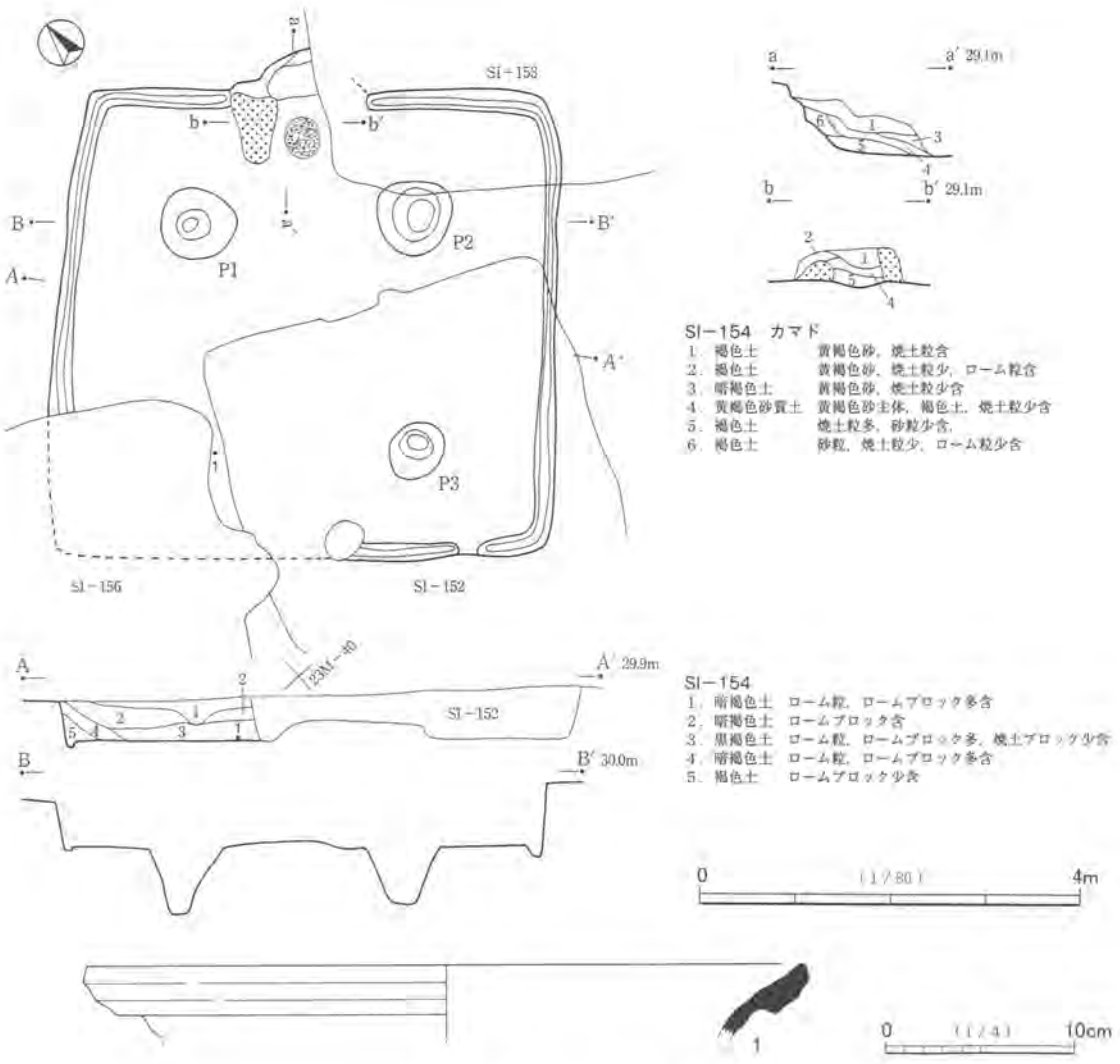
SI－155（第183・184図，図版61）

**位置**　調査区南西部の22M－29グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西にわずかに下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　長さが4.0m，幅も4.0mの方形をなす。確認面からの深さは50cm～1.0mである。

**床面**　北側が高く，南西側が低い。ハードローム層中に作られ，全体に硬質である。中央が他よりやや硬化している。右（南東）壁際中央に床面よりも３cm～13cm程度高まった部分がある。壁際での高まりの幅が1.4m，中央への奥行きは50cmである。台状部分上面から壁上端までの高さは80cmである。

**柱穴・ピット**　南西壁際右寄りのところでピットが検出されたが，SI－156の主柱穴である。かなり深く，右に寄っているので，本住居の出入口ピットではない。右壁側の台状部が出入口施設とも考えられるが，



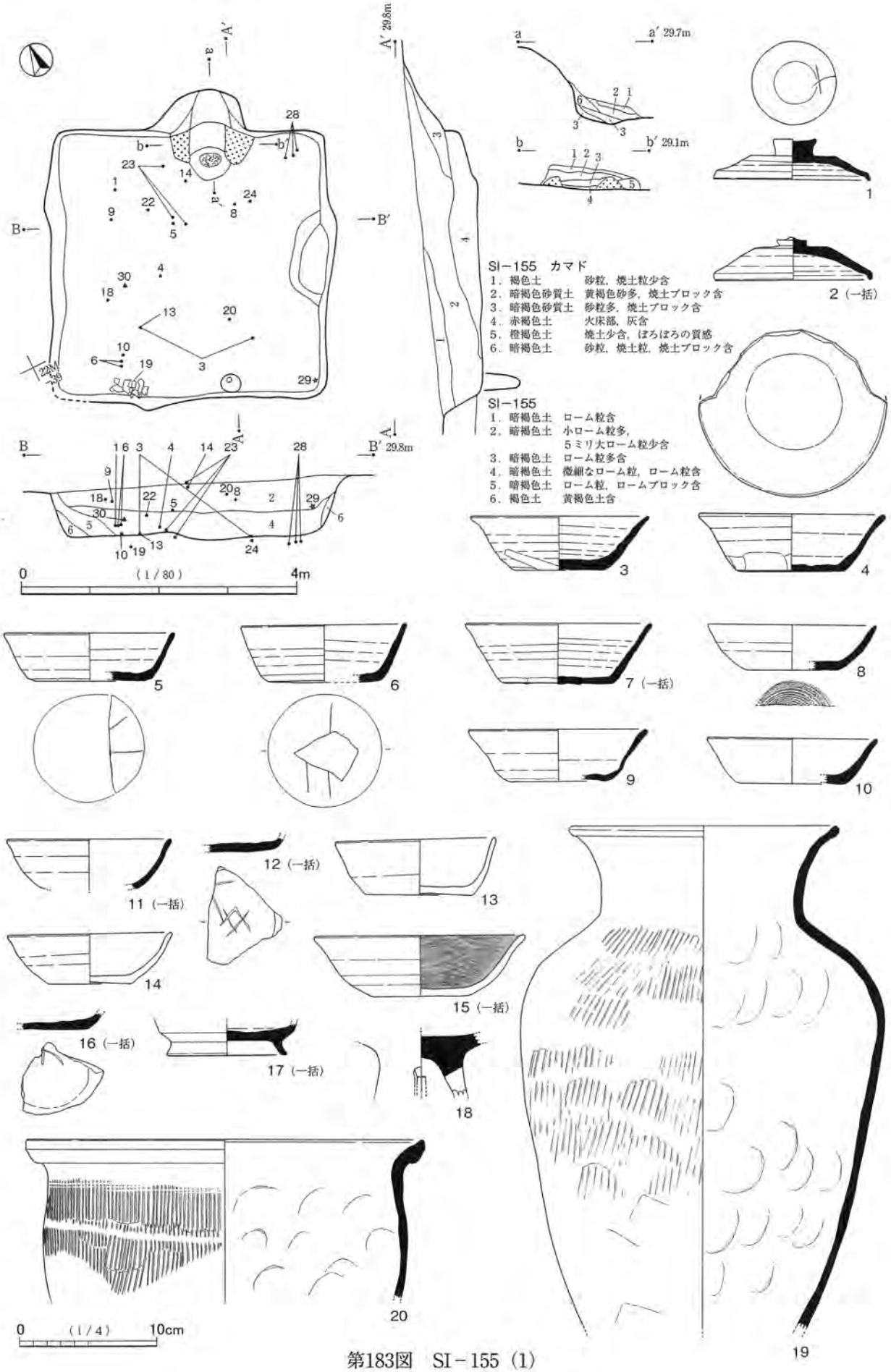

第182図　SI－154

カマドに対向しない壁側である点で疑問がある。出入口ピットは検出されなかったが，南西壁側を出入口側と考えておく。

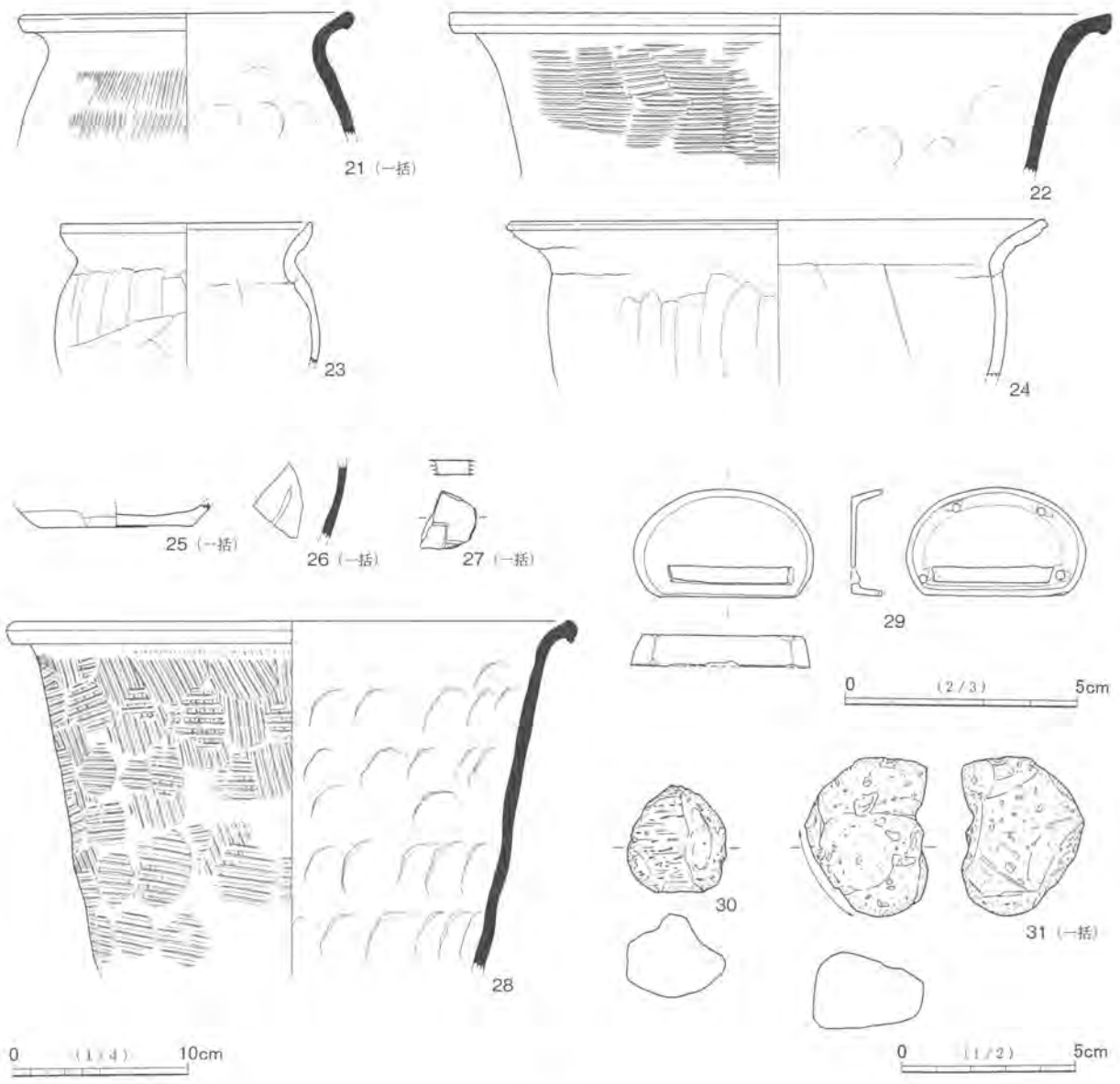
カマド　北東壁やや右寄りに位置する。煙道部側が方形プランから突出するが，袖と火床部は方形プラン内にある。両袖の遺存はやや少ない。火床部底面は床面よりもやや深く窪んでおり，窪みの奥側が赤色化している。カマド内堆積土下層は焼土を多く含み，灰もみられる。

堆積土　暗褐色土主体である。中層の色調がやや暗い。下層はロームブロックをやや多く含む。自然堆積と思われる。

出土遺物　多量の遺物が竪穴全体から出土した。図示できた遺物は31点である。１・２は千葉産の須恵器蓋である。３～12・16は須恵器杯である。産地は，新治窯産が４・７，東金子窯産が８・10，南比企窯産が11である。その他のものが千葉産で，３・５・６・９・12・16と多くを占める。ただし，16は土師器との区別が難しい土器である。13～15・25はロクロ土師器杯であるが，13は千葉産須恵器の可能性もある。17は新治窯産の須恵器高台付杯，18も新治窯産の須恵器高杯である。19～21・26は千葉産の須恵器甕であるが，20は甑の可能性もある。22・28は新治窯産の須恵器甕または甑である。23・24は土師器甕で，23は小型品である。23・24は在地の土器である。27も土師器甕と思われるが，小片であり，杯の可能性もある。




第183図　SI－155（1）




第184図　SI－155（2）

29は銅製品で，腰帯である。30・31は軽石である。

刻書をもつ資料が多い。1は天井部外面に「＋（×）」のヘラ書きがある。5は遺存部分に2条線のヘラ書きがある。欠損部で「×（＋）」となることが考えられる。6も欠損部を補って考えると，1条～2条の縦横の交差線になると思われる。「#」を意図したものと思われるが，五芒星かもしれない。いずれにしても不整な形である。刻線が弱いためやや判然としないが，線刻と思われる。12の底部外面は，「＋（×）」のヘラ書きと「#」の線刻が記されたと思われる。16の底部外面もヘラ書きがある。欠損部にかかるため判読できないが，文字と思われる。「大」・「万」等が考えられる。17は底部外面に「キ」状のヘラ書きがある。ヘラミガキ状の浅い線で，欠損部に続くため，形はやや判然としない。内面にも1条の線がみられる。焼成後のもので，線刻の可能性があるが，単なる傷かもしれない。26は須恵器甕の胴部片である。外面に「ノ」状のヘラ書きがあるが，調整痕とも思われる。27は底部外面にヘラ書きがある。小片であり，欠損部に続く部分が多い。記号か文字か判然としない。

1の遺存は比較的よいが，やや細かく割れている。つまみはやや大きく，頂部は窪んでいる。2は遺存

が少ない。つまみはやや小さく，扁平な擬宝珠形を呈する。3はかなり遺存がよい。口縁部の2箇所を小さく欠損する。その形態は弧状・不整な「W」字状である。後者は一部微小破片が接合する。遺存部分は大きく2片に割れる他，若干の破損がある。欠損・破損は打ち欠き及び打ち割りされたものと思われる。4の欠損部は整った形態であり，打ち欠きとみてよいものである。欠損部は口縁部から体部上位であり，その形態は欠損部の正面からみて逆台形状である。口縁部の欠損はちょうど1/2である。体部の破断面は細かい凹凸があるが，大きくみれば水平である。遺存部分はほぼ割れていないが，口縁部が1箇所小さく割れて接合する。この割れも意図的なものかもしれない。6の欠損部は，口縁・体部の3箇所と底部中央である。3箇所の欠損部は口縁部周を三等分する位置にある。遺存部分は4箇所の欠損部を境に割れている。ほぼ3片の接合破片であるが，1箇所欠損部に続く口縁部が小さく割れて接合している。欠損・破損は意図的な打ち欠き・打ち割りと思われる。14は器面が荒れており，特に外面の磨耗が著しい。25の遺存は底部から体部下位までの1/2強程度である。かなり大型の杯と思われる。内面はミガキが施されているが，ミガキ痕は不明瞭である。

18は脚部上部から底部中央にかけての破片である。脚部に長方形の透かしが1箇所遺存する。

19の胴部は細長く，張りの少ない形態である。器面はかなり荒れており，特に胴部内面の剥離が著しい。21の胴部外面は平行タタキ後ナデが施され，タタキ目がかなり薄れている。22の内面は細かい凹凸があり，指紋・掌紋がみられる。当て具痕の痕跡は手指のナデにより弱まっている。28の胴部外面は平行タタキが横方向の後，縦方向に施されている。ただし胴部中位以下は縦方向のタタキが少ないと思われる。

29は丸鞆で，形態は横長の半円形である。表金具は遺存するが，裏金具が欠損する。細長の孔が，表金具の上面下部にみられる。表金具の裏面には，革帯に固定するための脚鋲が4本鋳出されている。鋲の位置は下部の両隅と上部のやや左右に寄ったところである。いずれも先端を欠損する。表裏面の色調は錆のために灰緑色を呈するが，やや黒ずみを帯びる部分もみられる。

3は中央前側のやや離れた2箇所から出土した。層位は床面である。4は中央やや左の下層から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。13は中央左前側の床面から出土したが，3の1地点と同一の場所である。19は前（南西）壁際左寄りの床面からまとまって横倒れの状態で出土した。口縁部を中央側，胴部下位を左前（西）隅側に向け，胴部側はやや細かく割れている。28は右奥（東）隅，カマド右方の床面から出土した。10・24は床面からの出土であるが，ともに遺存の少ない土器である。23の一部は床面出土であるが，一部は確認面付近からの出土で，高低差が大きい。なお平面位置はカマド右前方である。1・6の出土層位は下層であるが，床面からはかなり離れている。層位的には，中・上位から出土した遺物も多い。

出土遺物のうち，19は竪穴住居廃棄時か近い時期に廃棄または遺棄されたものと思われる。また3・4は祭祀的様相をもつ土器と思われ，竪穴住居廃棄の祭祀に関わることも考えられる。しかし中央周辺からの出土であり，廃棄時かどうかやや断定しがたい。詳細な出土状況も不明であり，可能性の指摘に留める。出土遺物は中・上位からの出土も多く，量的には周囲からの廃棄または流入による遺物が多いと思われる。

**重複遺構**　南側でSI－156と重複し，本住居が切られている。ただしSI－156よりも深いため，竪穴下位から床面は遺存している。

**SI－156**（第185・186図，図版61）

**位置**　調査区南西部の22M－39グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南

西にわずかに下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　長さが4.7m，幅が4.5mの方形をなす。確認面からの深さは15cm～70cmである。

**床面**　ほぼ平坦であるが，西側の壁際がやや低い。壁際を除いて広く硬化している。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。柱穴P1・P2はカマド側の南東壁に近い位置にある。左前（北）側の主柱穴P4はやや内側に寄った位置にある。出入口ピットが北西壁側中央で検出された。径は35cm，床面からの深さは25cmである。

**壁溝**　SI－155と重複する北側部分が不明であるが，その他は巡っている。本来全周すると思われる。

**カマド**　南東壁わずかに左寄りに位置する。方形プランからはやや大きく突出する。両袖の遺存は，左袖がやや良好である。土製支脚（13）が火床部中央で立った状態のまま出土した。最終的な使用時の位置を留めるものと思われる。下部を欠損するが，上部は遺存している。底面からやや浮いており，若干埋まった堆積土上で使用されたものと思われる。火床部底面はやや窪むが，使用に伴う程度のものであろう。カマド内堆積土下層は焼土を多く含む。

**堆積土**　ローム粒を多く含む暗褐色土を主体とする。自然堆積か人為的堆積か判然としない。

**出土遺物**　カマド周辺から多く出土した。図示できた遺物は14点である。１～４は須恵器杯で，１は東金子窯産，２～４は千葉産である。５は非ロクロの土師器杯，６～８はロクロ土師器杯，９～11は千葉産の須恵器甕，12は千葉産の須恵器甑，13は土製支脚，14は砥石である。

３は遺存がよく，口縁・体部の一部が弧状に欠損する他は，ほぼ割れのない土器である。欠損部は打ち欠きされたと思われる。杯で非常に遺存のよいものは，３だけである。５は底部と口縁・体部の1/4程度の遺存である。口縁・体部の多くを欠損するが，破断面の様相から打ち欠きされた可能性がある。２・４・５・７は二次的に火を受けており，３もその可能性がある。全体に器面が荒れ，赤みを帯びているが，２・５は暗褐色・黒色に焦げた部分もある。また７は外面の一部に山砂が薄く付着している。

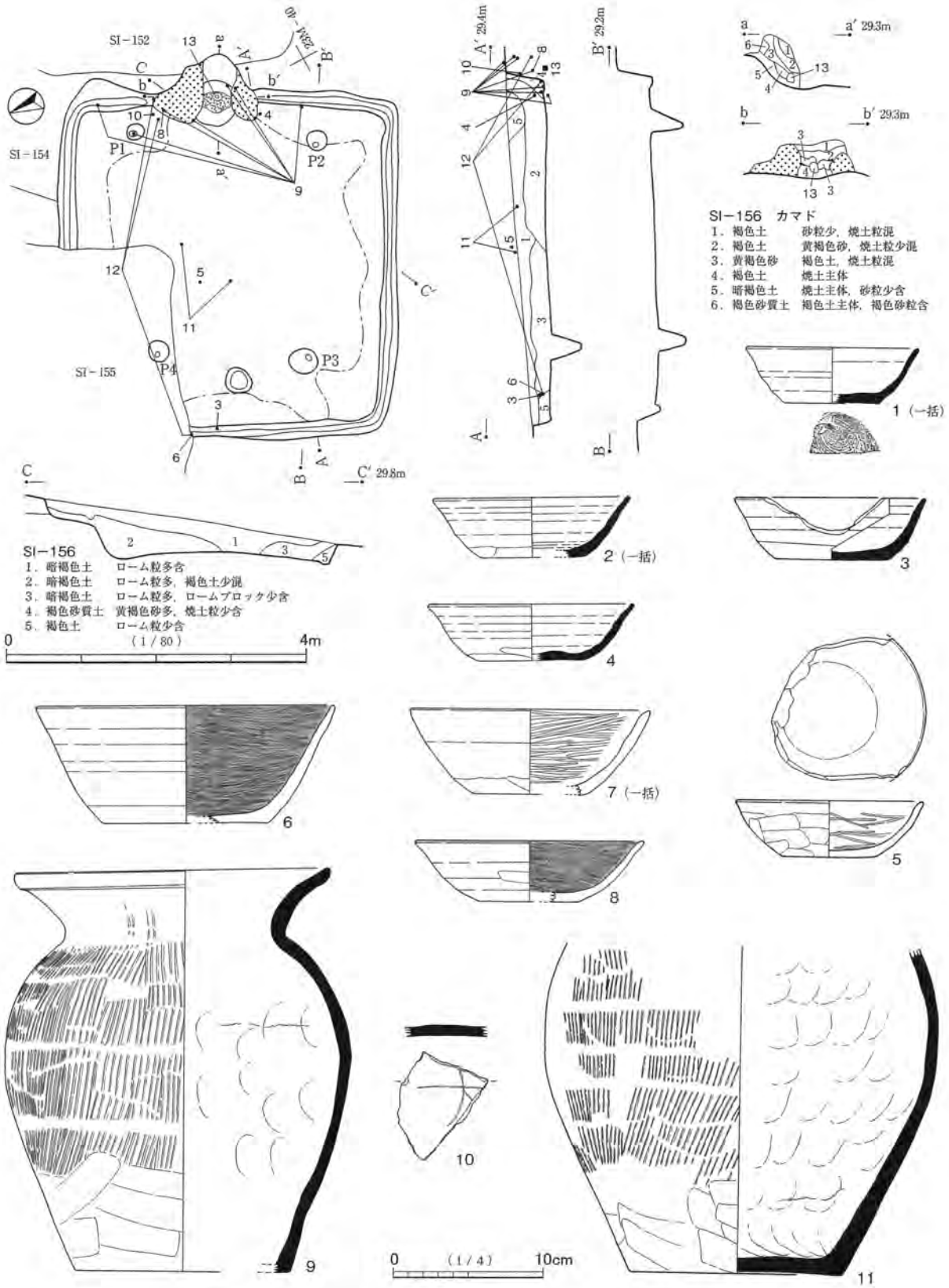
９は底部をほぼ欠損するが，全体としては比較的遺存のよい土器である。口頸部はほぼ全周遺存する。器壁が厚く，重量感がある。10は底部片である。外面に「大」と思われるヘラ書きがある。11は底部周辺の遺存はよいが，胴部上位の遺存は少ない。底部外面には同心円状の縄目・砂目痕がよく遺存している。12は一部の遺存であり，把手も１箇所のみみられる。接着部の形態は整った方形である。上部はやや尖っており，方台状とならない。

13の側面は縦方向に多く面取りされている。14の石材は流紋岩である。小口部分の角の破片である。図示した平面を上面とすると，上面は非常に滑らかである。側面と小口面の区別は難しい。遺存が少ないが，ともに上面に比べてややざらつきがある。

３は前（北西）壁際中央からの出土であるが，層位は床面からやや浮いている。正位・倒位等の状況は不明である。カマド周辺から出土したものとしては，４・８・９・10・12があるが，12は広く前壁側下層にも散っている。９はカマド内左右から多く出土した。８・10・12は左袖付近から出土した。層位は，10が床面で，８・12は下層である。４は右袖外脇下層から出土した。５・11は中央上位から出土した。

出土遺物のうち，３は祭祀的な様相をもつ可能性があるが，床面からやや離れ，詳細が不明であるため断定しがたい。ヘラ書きをもつ10も小片であるため，カマド廃棄の祭祀に関わるものと認めがたい。他も同様であり，本住居出土遺物の多くは，単に廃棄・遺棄され，また流入したものであろう。

**重複遺構**　北側でSI－155と重複し，本住居が切っている。ただしSI－155の堆積土下層中に構築された

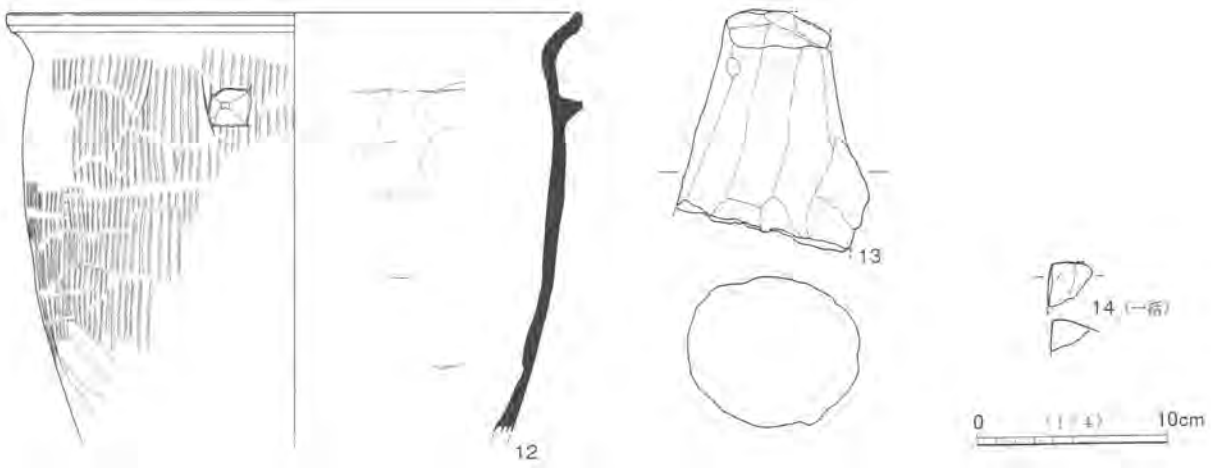



第185図　SI－156（1）

本住居の床面については，検出することができなかった。

SI－157（第187図，図版62）

位置　調査区南西端部の23M－81グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から




第186図　SI－156（2）

南西に下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　長さが5.4m，幅も5.4mの方形をなす。確認面からの深さは20cm～１mである。比較的整った方形であるが，西辺がやや長い。

**床面**　東から西にわずかに下るが，ほぼ平坦といえる範囲内である。四隅を除く広い範囲が硬質であり，中央と壁際で顕著な差がみられない。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。また出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は39cm×32cm，床面からの深さは18cmである。

**壁溝**　全周する。

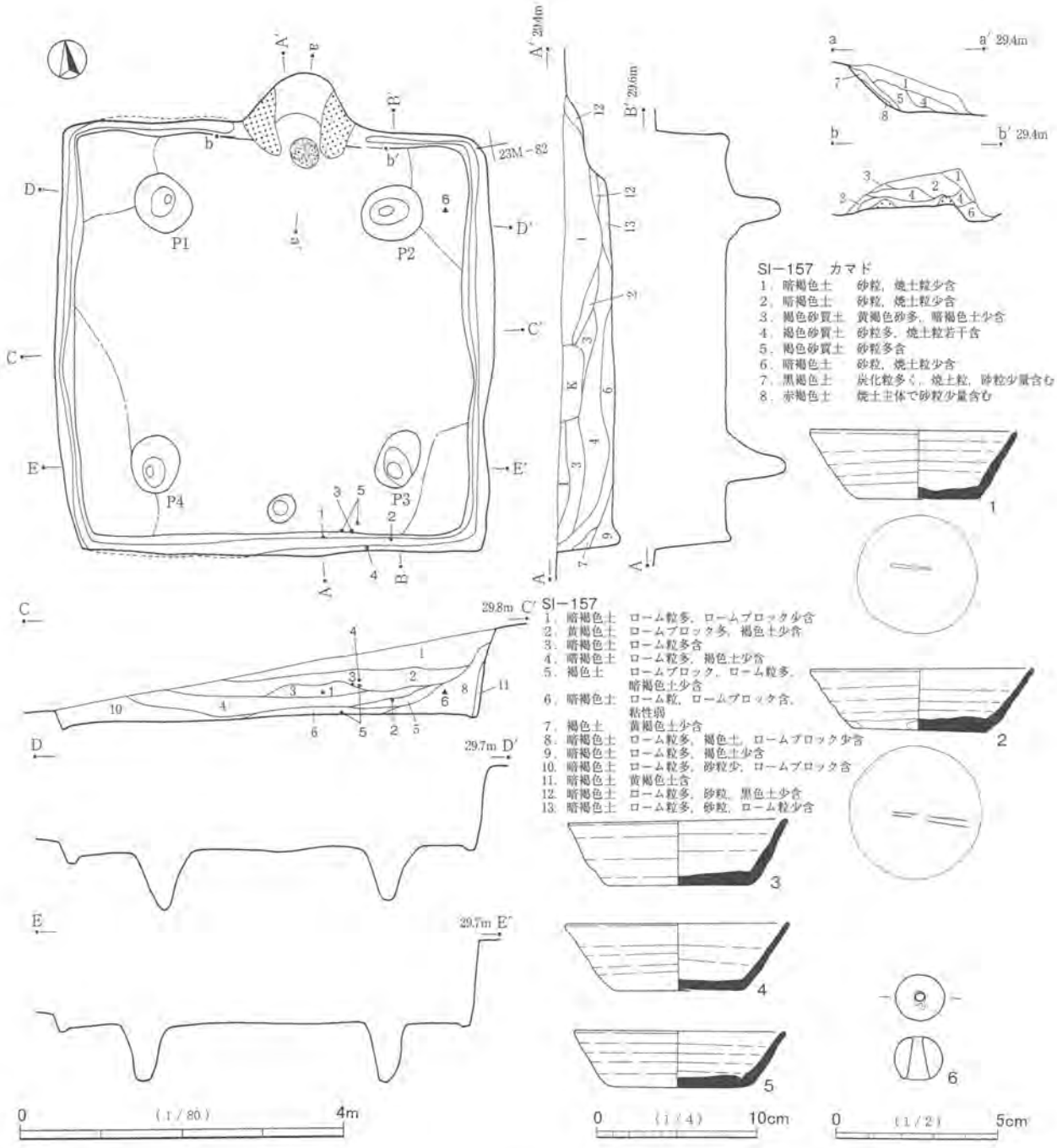
**カマド**　北壁中央やや右寄りに位置する。方形プランからはやや大きく突出する。両袖は下部が遺存するが，上部の遺存が悪い。両袖内側は一部に赤色化した部分が遺存し，煙道部の壁もやや赤色化している。火床部底面には焼土が濃く堆積する部分があるが，やや前側であり，燃焼部の中心は若干後方に位置すると思われる。

**堆積土**　中・上位にロームブロックを多く含む土層（２層）があるが，緩斜面に立地するため，埋め戻されているかやや断定しがたい。

**出土遺物**　出土量は竪穴住居の規模が大きいわりに，かなり少量である。図示できた遺物は６点である。１～５は新治窯産の須恵器杯，６は石製の丸玉である。

１～５はいずれも比較的遺存のよい土器である。１は底部外面に１条のヘラ書きがある。２も底部外面に２条の平行線がある。やや判然としないが，焼成後の線刻と思われる。１・２・４は口縁・体部の一部が破損・欠損するが，他の部分は割れていない土器である。破損・欠損部の形態は，１が逆台形状，２が弧状の連続した不整な「W」字状であり，４も弧状が連続した形態である。３もそれらと似た状況であるが，破損・欠損部が1/2弱を占め，割合が大きい。５は口縁・体部の２箇所が，小さく逆三角形状に破損・欠損する土器である。破損・欠損部は対向する位置にあり，その下頂部を結んで，大きく遺存する部分がほぼ２等分に割れている。器面は磨耗が著しく，口縁端部の所々が欠損する。器面の磨耗は２も顕著であり，１・３・４もやや荒れている。１～５の破損・欠損については，いずれも打ち割り・打ち欠きされた可能性が考えられる。

６の石材はヒスイである。孔径が３㎜～７㎜でかなり差がある。図の下部側から上部側に向かって漏斗




第187図　SI－157

状にすぼまっている。下部から上部に穿孔されたものと思われる。孔の表面はらせん状と思われる横線がみられる。穿孔時の痕跡であろう。色調は淡灰緑色である。古墳時代遺物の混入品と思われる。

1～5は南壁際右寄りで，主として中位から比較的近接した位置関係で出土した。1は正位，3は倒位で出土し，ともに傾きはない。4は壁にもたれかかった斜めの正位で出土した。かなり傾いており，横位といった方が適切な状態である。5は破片の一部が正位で出土した。なお別破片は床面からの出土である。2は正位・倒位等の状態が不明である。6は北東隅部の中位から出土した。

堆積土が埋め戻されているならば，1～5は竪穴住居廃棄の祭祀に伴う可能性が高いと思われる。出入口ピットに近い位置から出土しているので，出入口部に関わる祭祀であろう。しかし堆積土が自然堆積で

あるならば，祭祀的様相をもつ土器群が他所から一括して廃棄されたことも考えられる。なお４は上方から転落した可能性が考えられる。ただし最終的に自然落下であったとしても，出入口部の祭祀に関わる可能性が考えられる。

１～５以外の遺物は，カマド周辺から若干出土したが，他は少ない。出土遺物の様相からは，堆積土が埋め戻されたように思われる。

SI－158（第188図，図版62）

位置　調査区南西部の23M－61グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　長さが3.0m，幅が2.7mの方形をなす。確認面からの深さは最も遺存のよい部分で30cmである。斜面に立地し，床面まで浅いため，南西側を欠損する。

床面　北側から南側に下るが，南側の遺存が悪いためであり，本来はより平坦であろう。カマド前から中央はやや硬化しているが，壁側との差は顕著でない。

壁溝　壁の遺存が悪い南側を除いて巡っている。本来は全周する可能性がある。

カマド　北壁中央左寄りに位置する。方形プランからはやや大きく突出する。両袖等の構築体はまったく遺存しない。

出土遺物　少量であるが，竪穴の遺存が悪い影響が考えられる。図示できた遺物は３点である。１はロクロ土師器皿と思われるが，須恵器の可能性もある。なお須恵器の場合，産地が判然としない。２はロクロ土師器杯である。３は小型の土師器甕で，在地の土器である。

１は口縁部の２箇所をわずかに欠損するだけで，割れていない完形に近い土器である。体部外面に「八」の墨書が正位でみられる。器面は全面的に磨耗しているが，被熱によるものと思われる。そのため，墨痕の残りが悪い。欠損は意図的なものとも思われるが，磨耗が著しいため不明瞭である。また灯明具の可能性もあるが，磨耗により断定しがたい。２は口縁・体部の小片である。外面に墨書があるが，判読できない。３内面のヘラナデはハケ目的である。

１はカマド右側の床面から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。袖が遺存していれば，右袖の外脇になると思われるが，やや判然としない。

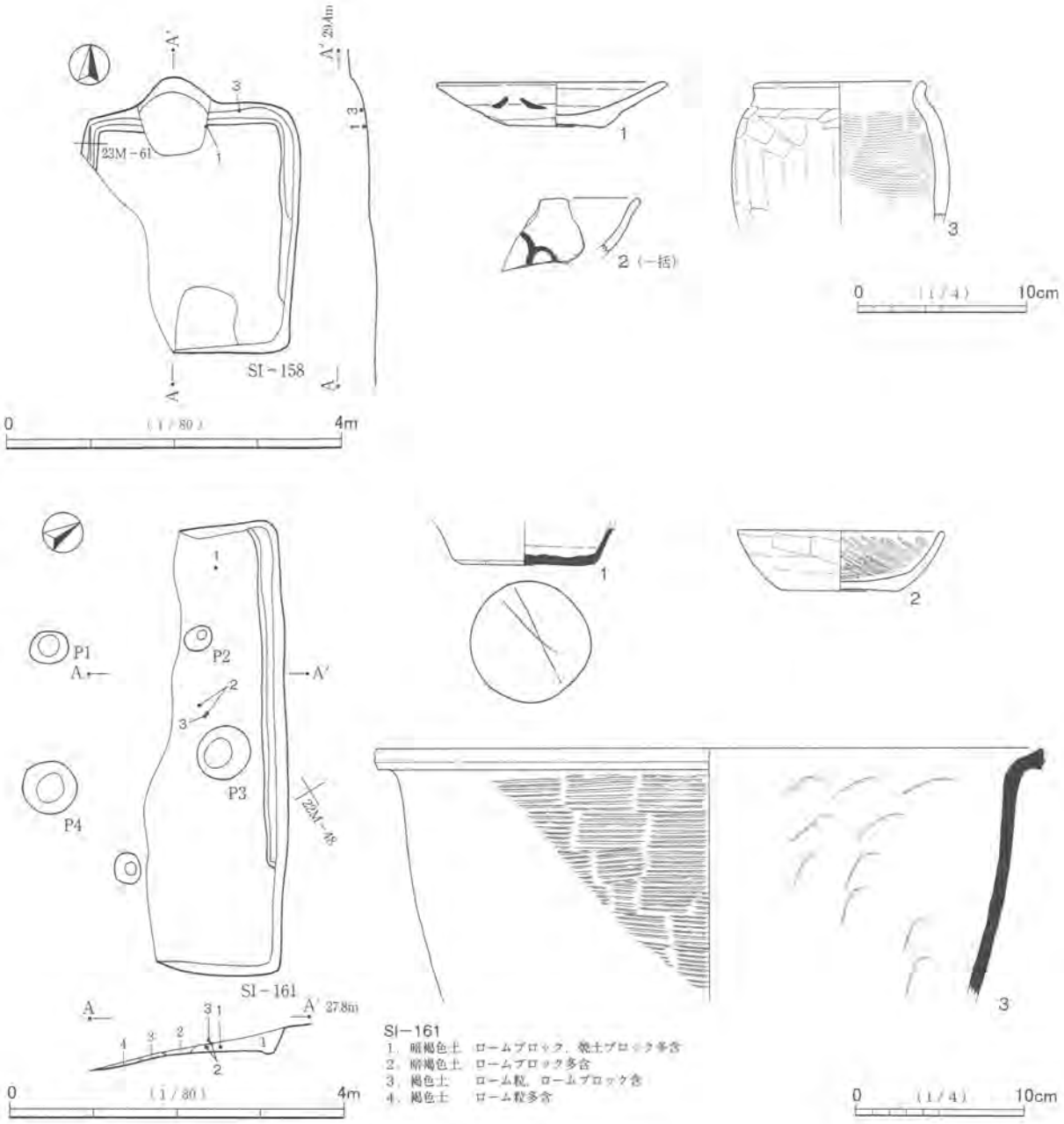
SI－161（第188図）

位置　調査区南西端部の22M－47グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　北東辺側の一部が遺存するだけで，多くの部分が流失している。規模は不明瞭である。北西壁から南東壁までの長さが5.4mであるが，壁を正確に検出したか，不安がある。幅が不明である。確認面からの深さは最も遺存のよいところで27cmである。

床面　比較的よく遺存する北東辺側の比較では，南側がやや高く，北側がやや低い。硬化面については不明瞭である。

柱穴　主柱穴と思われるピットが４箇所検出された。いずれもかなり深さがあるため，主柱穴としてよいであろう。また南東側でピットが検出されたが（P5），出入口ピットと思われる。径は36cm×34cm，床面からの深さは18cmである。P5が出入口ピットとすると，南東壁が離れすぎているため，本来の壁であるか疑問がある。




第188図　SI－158・161

**壁溝**　北東辺の多くに巡っている。本来は他壁に巡ることも考えられる。

**カマド**　流失しており，遺存しない。北東壁にはみられない。近隣の竪穴住居の状況から，北西壁または南東壁に設置されたものと思われる。

**堆積土**　ロームブロック・焼土ブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。遺存が少ないため，自然堆積か人為的堆積か判然としない。

**出土遺物**　少量であるが，竪穴の遺存が悪い影響であろう。図示できた遺物は３点である。１は千葉産の須恵器杯，２は非ロクロの土師器杯，３は新治窯産の須恵器甕または甑である。

１は底部外面に「×」のヘラ書きがある。底部は遺存するが，口縁部の全周を欠損する土器である。口縁・体部の欠損が意図的であるか，判然としない。２の内面はヘラミガキが施され，焼成は良好である。３の内面はナデ・ヘラナデにより当て具痕の凹凸が弱くなっている。部分的に指紋・掌紋がみられる。

1は北隅下層，2・3は北東辺側中央下層から出土した。

SI－162（第189図）

位置　調査区南西端部の22M－69グリッドを中心に位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西に下る斜面に立地する。

形状・規模　東辺側が遺存するが，多くの部分が流失している。東辺の長さが6.6mである。規模は失われた部分が多いため不明瞭であるが，柱穴の状態から，一辺6.5m～7m程度と思われる。確認面からの深さは最も遺存のよいところで60cmである。

床面　北東側がやや高いが，比較的平坦である。硬化面については不明瞭である。

柱穴　ピットが5箇所検出された。このうちP1～P4は主柱穴である。いずれもかなり深さがあり，しっかりとした作りである。ただし底面の絶対的な深さが，かなり異なっている。標高値をみると，P1は27.08m，P2は26.71m，P3は25.93m，P4は26.55mである。P1の底面を基準に比べると，P2はP1よりも37cm深く，同様にP3は1.15m，P4は53cm深い。P3が最も深い柱穴である。床面が平坦であったとすると，P3は遺存のよい北東隅側の床面から1.9m，P4は1.3mとなる。P3の確認面での径は44cmであり，この規模で床面から1.9mもの深さのピットが掘れるのか疑問がある。竪穴構築当時は現在よりも緩斜面であったと思われるが，ピットの状況から，西側についてはかなり土を盛って貼床を構築していたものと思われる。

西壁側中央にあるP5は，径47cm×44cm，確認面からの深さが25cmである。底面の標高は26.55mであり，P4と同様である。ピットの中心はP3とP4を結ぶ線上からわずかに外に出るが，一部は線上にかかっている。P5の性格として考えられるのは，出入口ピットと上屋を支える柱穴の二通りである。前者を考える場合，対向する東壁側にカマドの痕跡がうかがえない点が難点である。また後者の場合は，東側のP1・P2間にみられないことが難点である。西側が斜面であることを考慮すると，柱穴の可能性が若干高いと思われる。

壁溝・床溝　壁下にはみられない。しかしP1・P2を結んで「コ」の字状に巡る溝がある。幅が15cm～20cm前後で，通常の壁溝と同様である。遺存がよい部分の深さは10cm前後である。流失した西側部分に続くが，斜面側に方形に巡るか不明である。

カマド　流失しており，遺存しない。東壁にはみられない。近隣の竪穴住居・立地の状況から，北壁に設置される可能性が最も高いと考える。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体である。自然堆積の可能性が高いと思われるが，遺存が少ないためやや断定しがたい。

出土遺物　少量であるが，竪穴の遺存が悪い影響であろう。図示できた遺物は2点である。1は新治窯産の須恵器蓋である。口縁部から天井部にかけての一部の破片である。つまみは遺存しないが，天井部はその端の部分で欠損している。2は軽石である。1・2とも出土位置は不明である。

その他　柱穴・床溝・規模からみて，上屋構造が台地平坦部の竪穴とは異なると思われる。

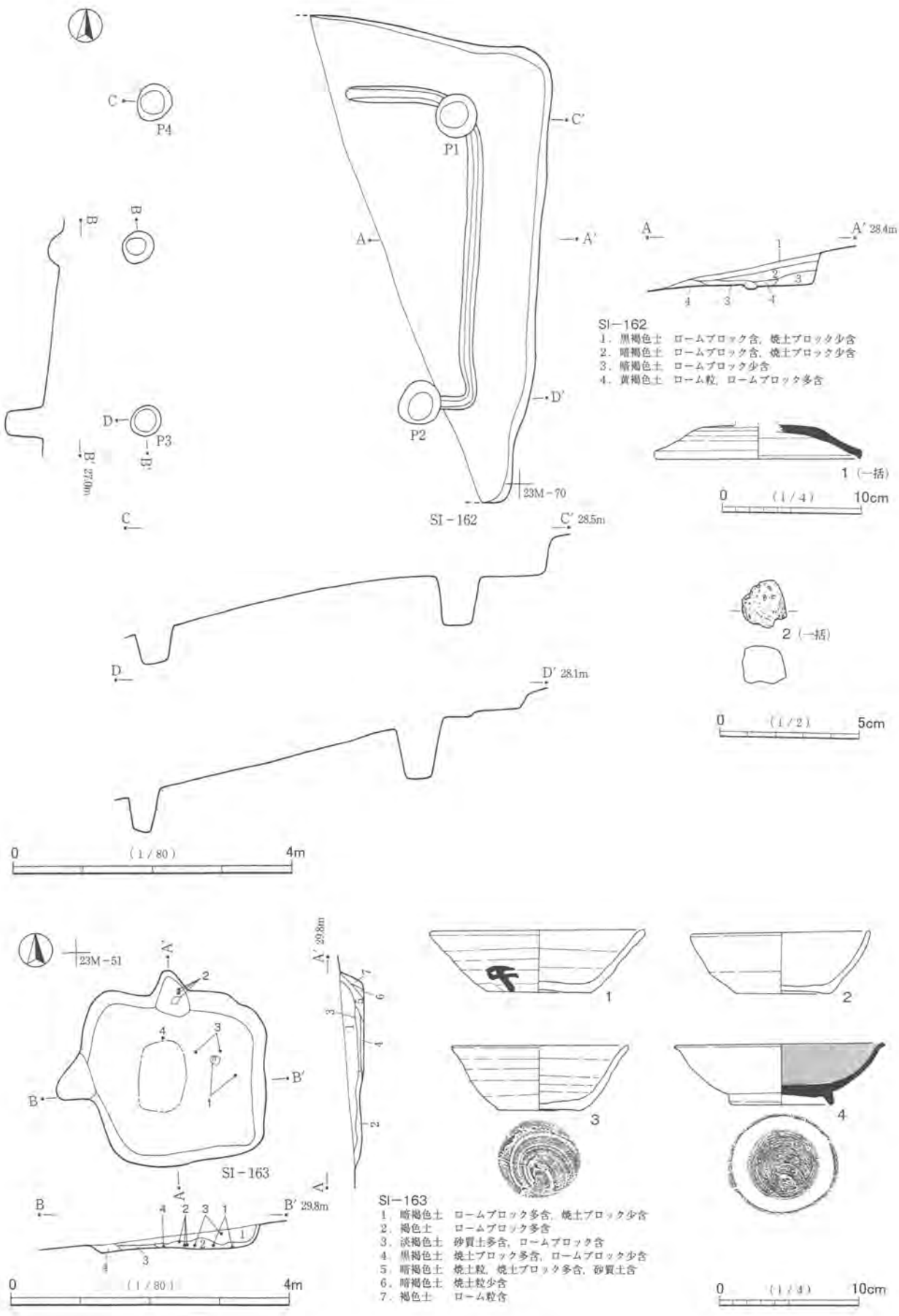
SI－163（第189図）

位置　調査区南西部の23M－51グリッドに位置する。南西方向に狭小な支谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　長さが2.4m，幅が2.7mの方形をなす。確認面からの深さは10cm～40cmである。

床面　北東側がわずかに高いが，ほぼ平坦といえる範囲である。中央が硬化している。

カマド　北壁中央に位置する。煙道部側が方形プランからやや細長い三角形状に突出する。両袖等の構




第189図　SI－162・163

築体はまったく遺存しない。

堆積土　ロームブロックを多く含む暗褐色土が主体である。自然堆積か人為的堆積か判然としない。

出土遺物　主としてカマド内及び中央の北側から多く出土した。図示できた遺物は4点である。1～3はロクロ土師器杯，4は灰釉陶器碗である。1は接合してほぼ完形の土器である。体部外面に「千」の墨書が正位でみられる。破損部は口縁・体部の3/4に及ぶ。「千」の一部が破損部にかかっている。破損が意図的であるか，判然としない。2もかなり遺存のよい土器である。ただし口縁部から底部まで部分的に細かく割れている。強い長期の被熱により，灰白色・黒色・赤褐色に変色する部分がある。3は底部が遺存するが，口縁・体部の欠損がやや多い。底部調整は回転糸切り後弱いナデ程度であり，ほぼ無調整である。焼成は良好である。4は内面全面に釉が施されている。高台は角高台である。

2はカマド内からの出土である。出土位置と土器の状態から，土製支脚に転用された土器と考えられる。

1は中央左（東）側の床面から出土した。底部を含む破片が正位・倒位等の状態であるか不明である。3はやや右奥（北東）側の下層・上層から出土し，4はカマド前方の床面から出土した。出土状況に祭祀的様相があるか，判然としない。

SI－164（第190図，図版62）

位置　調査区南部の24M－55グリッドに位置する。

形状・規模　新旧二つのカマドがあり，新カマドを奥にしてみると，長さが3.2m，幅が3.4mの方形をなす。旧カマドからみた場合は長さと幅が逆になる。確認面からの深さは50cmである。

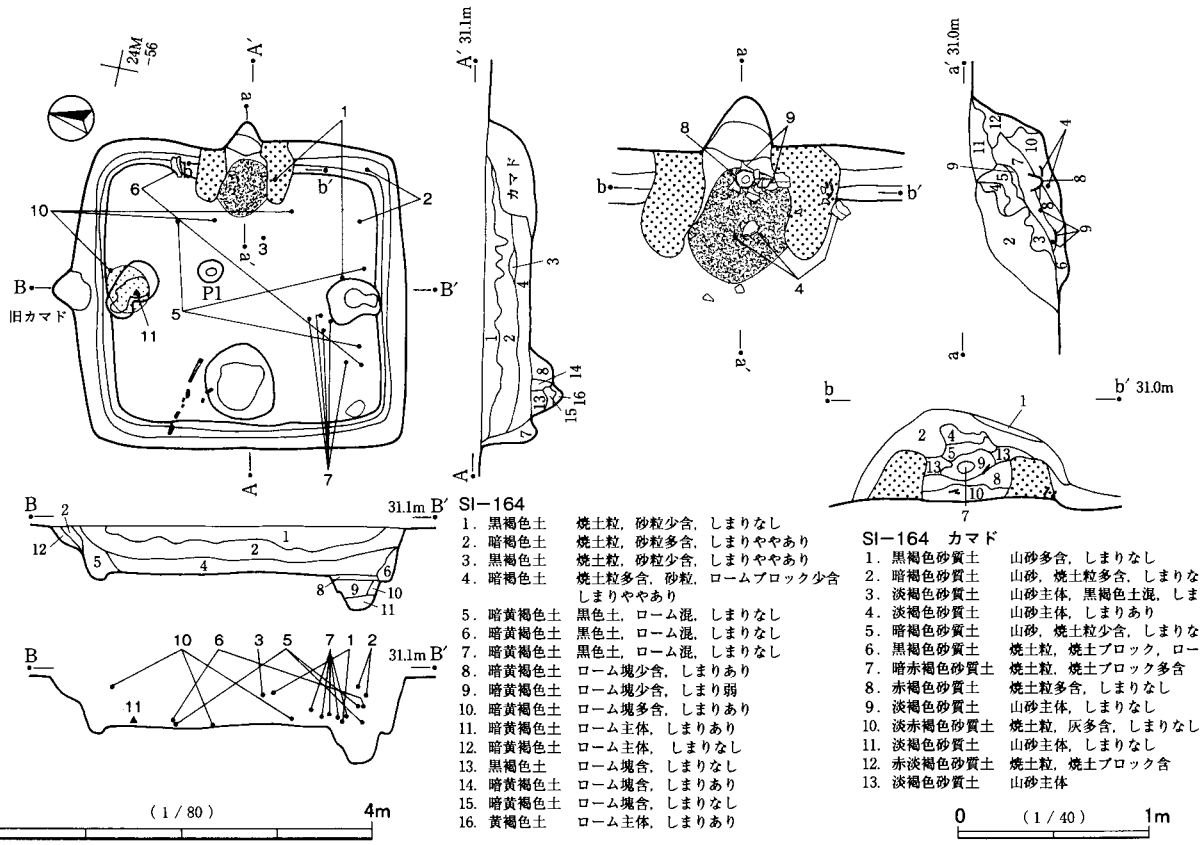
床面　全体に貼床が施されており，平坦である。全体的にやや硬化しているが，四隅が若干軟質である。貼床の土層は，主としてやや粒径の小さいロームブロックを多量に含む暗黄褐色土で，堅くしまっている。

柱穴等　ピットが西壁際中央と南壁際中央及び中央やや北東寄りの3箇所で検出された。西壁際のものは，新カマドの住居の出入口ピットである。径が80cm×70cm，床面からの深さは22cmである。南壁際のものは旧カマドの住居の出入口ピットである。径は53cm×33cm，深さは22cm～39cmである。底面は高低差があり，壁際がやや浅く，中央側が深い。なお貼床が施された影響で，双方ともピットの壁を掘りすぎている。中央にあるP1は径27cm×24cm，深さは20cmである。整った位置になく，本竪穴に伴うものか不明である。貼床の一部を発掘したものかもしれない。

壁溝　全周する。

カマド　付け替え後の新カマドが東壁中央に位置し，付け替え前の旧カマドが北壁中央に位置する。方形プランからの突出はあまり大きくない。旧カマドの構築材は除去されているが，北壁際中央の床面に，やや赤色化した火床面が遺存している。火床面下の底面は床面よりも最大で15cm程度低く，使用に伴う掘り込みや旧カマドの掘りかたと考えられる。旧カマド部分の壁下には，壁溝が巡る。新カマドの袖部は比較的遺存がよい。両袖内壁は一部でかなり内部まで赤色化し，煙道部壁面もやや赤色化している。火床部底面には赤色化した面がみられない。底面は床面よりも若干窪んでいるが，あまり深さはなく，灰のかき出しに伴う程度のものであろう。カマド内堆積土下層はやや奥側に焼土粒・灰を多く含む土層が堆積し，その上部及び中央下層に焼土粒・焼土ブロックが多く堆積する。

堆積土　暗褐色土・黒褐色土主体で，上層は黒みが強い。中・下層は若干のロームブロックを含む。レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。炭化材が西（新カマドからみて前）壁際左寄りの下層から出土した。

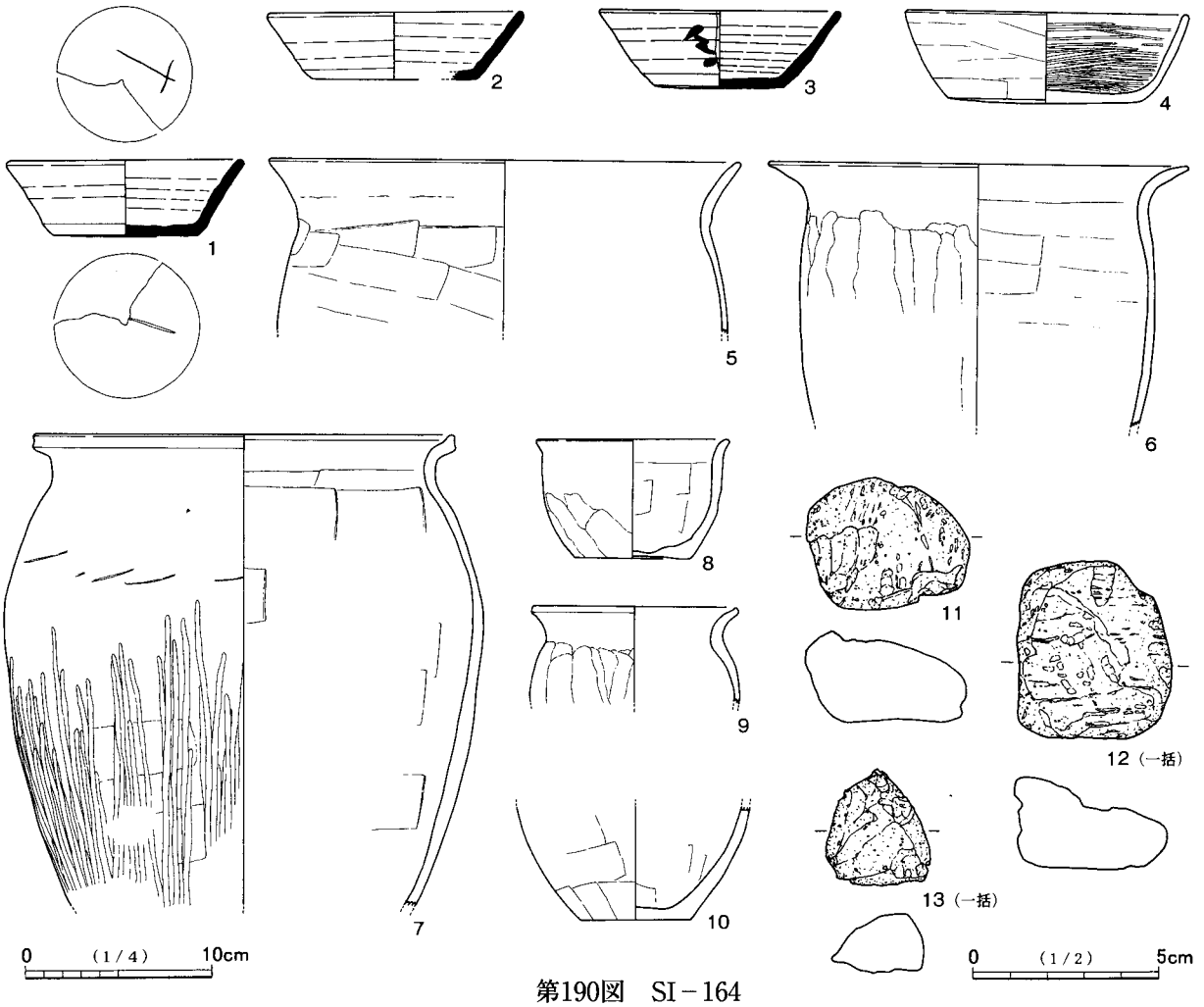



SI−164

1. 黒褐色土　焼土粒，砂粒少含，しまりなし
2. 暗褐色土　焼土粒，砂粒多含，しまりややあり
3. 黒褐色土　焼土粒，砂粒少含，しまりややあり
4. 暗褐色土　焼土粒多含，砂粒，ロームブロック少含，しまりややあり
5. 暗黄褐色土　黒色土，ローム混，しまりなし
6. 暗黄褐色土　黒色土，ローム混，しまりなし
7. 暗黄褐色土　黒色土，ローム混，しまりなし
8. 暗黄褐色土　ローム塊少含，しまりあり
9. 暗黄褐色土　ローム塊少含，しまり弱
10. 暗黄褐色土　ローム塊多含，しまりあり
11. 暗黄褐色土　ローム主体，しまりあり
12. 暗黄褐色土　ローム主体，しまりなし
13. 黒褐色土　ローム塊含，しまりなし
14. 暗黄褐色土　ローム塊含，しまりあり
15. 暗黄褐色土　ローム塊含，しまりなし
16. 黄褐色土　ローム主体，しまりあり

SI−164　カマド

1. 黒褐色砂質土　山砂多含，しまりなし
2. 暗褐色砂質土　山砂，焼土粒多含，しまりなし
3. 淡褐色砂質土　山砂主体，黒褐色土混，しまりなし
4. 淡褐色砂質土　山砂主体，しまりあり
5. 暗褐色砂質土　山砂，焼土粒少含，しまりなし
6. 黒褐色砂質土　焼土粒，焼土ブロック，ローム粒多混
7. 暗赤褐色砂質土　焼土粒，焼土ブロック多含
8. 赤褐色砂質土　焼土粒多含，しまりなし
9. 淡褐色砂質土　山砂主体，しまりなし
10. 淡赤褐色砂質土　焼土粒，灰多含，しまりなし
11. 淡褐色砂質土　山砂主体，しまりなし
12. 赤淡褐色砂質土　焼土粒，焼土ブロック含
13. 淡褐色砂質土　山砂主体




第190図　SI−164

出土遺物　遺物分布は南西（左前）側がやや希薄であるが，中央から北東（右奥）側にかけて多くの遺物が出土した。カマド内からの出土も目立つ。図示できた遺物は13点である。１～３は新治窯産の須恵器杯である。４は非ロクロの土師器杯と思われるが，ロクロ成形かもしれない。５～７は土師器甕，８～10は小型の土師器甕である。５は武蔵型，７は常総型である。６は在地の甕と思われる。小型の甕は在地の土器である。11～13は軽石である。

１は底部外面に１条線のヘラ書き，底部内面に「＋（×）」の線刻がある。３も体部に墨書があるが，欠損部にかかり，墨痕が薄いこともあって，判読できない。３の色調は若干灰色味を帯びるところもあるが，全体に黄褐色味が強い。しかし底部内面から体部にかけての部分が凹むことから，新治窯産の須恵器と思われる。１～３は全体に遺存がやや少なく，２は底部の遺存が少ない。４は比較的大型の土器で，やや箱形的な器形を呈する。

５は口縁部に接合痕がみられる。やや器面が磨耗している。６・７は焼成良好である。７の胴部内面は黒色の色調である。８は完形の土器であるが，底部に３㎜弱×２㎜弱の小孔がみられる。小孔は小石が抜けただけのようにも思われ，土器だけでは，意図的なものか判然としない。しかし底部が非常に薄く作られていることと，カマド内から出土していることから，穿孔された可能性があると考える。小型品であり，手捏土器的な，祭祀用の土器と思われる。外面の一部に黒斑がみられる。

８はカマド内火床部奥側の下層から正位で出土した。出土位置は支脚の位置としてよいと思われるが，土器に強い被熱痕跡はうかがえない。出土状況と土器の状態からカマド廃棄の祭祀に関わる可能性が考えられる。８周囲の下層からは，４・９が出土したが，カマド廃棄の祭祀に関わるものと認めがたい。11は左(北)壁際中央床面近くで，旧カマドの火床範囲上から出土した。なお顕著な被熱痕跡はうかがえない。その他の遺物の出土層位をみると，破片の一部が床面から出土したものはあるが，概して床面から離れている。出土遺物の多くが，単に廃棄されたか流入したものと思われる。

SI－165（第191～193図，図版63）

位置　調査区南部の24M－85グリッドに位置する。

形状・規模　長さが4.0m，幅が3.9mの方形をなす。確認面からの深さは50㎝である。新旧２箇所のカマドがある。長さと幅があまり差がないが，上記の数値は新カマドからみたものであり，旧カマドの竪穴は逆になる。なお調査時点では，旧カマドの竪穴をSI－166，新カマドの竪穴をSI－165としたが，床面・壁面をほぼ共有する竪穴であることと，遺物の明瞭な分離ができないことから，遺構番号はSI－165の１軒のみに統合した。ただし一部の遺物の注記は，SI－166のままである。

床面等　貼床が全体に施されている。貼床を構成する土はロームブロックを主体とする暗黄褐色土で，堅くしまっている。貼床はカマド付け替えに伴って修復された床面の可能性がある。なお土層断面の様相から，そのときに壁面も修復された可能性があるが，やや断定しがたい。床面は平坦で，中央を主体に広く，顕著に硬化している。

柱穴　４本柱の主柱穴が検出された。西側のP1・P4は通常の位置であるが，東側のP2・P3は東壁際に位置する。P2・P3の床面からの深さは70㎝前後でかなり深い。P1・P4と同等の深さであり，P2・P3も主柱穴と認められるものである。P2・P3の中間に旧カマドが位置し，旧カマド上部の屋根はかなり高かったと思われる。主柱穴間の形態は台形である。北東側で検出されたピットは主柱穴にふさわしい位置であるが，深さが10㎝であり，主柱穴とは認められない。組となる南東側のピットも不明瞭である。主柱はカ

マド付け替え前後で動かなかったとみられる。

旧カマドの竪穴の出入口ピットが西壁際中央から検出された。径は48cm×35cm，深さは14cmである。旧カマドに向かってやや縦長の形態である。また新カマドの竪穴の出入口ピットも南壁際中央から検出された。横に並んだ二つのピットが接した形態である。西側のピットの径は45cm×36cm，深さは19cm，東側のピットの径は59cm×25cm，深さは13cmである。西側のものは中軸線上に位置する。新カマドになった後も，出入口施設が付け替えられた可能性があるが，一連の場合も考えられる。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　付け替え後の新カマドが北壁中央に位置し，付け替え前の旧カマドが東壁中央に位置する。方形プランからの突出はともにやや小さい。旧カマドの構築体は多くが除去されているが，構築材の山砂を多く含む土層が右側の壁際にみられる。天井部・袖部の崩落土であるが，カマドの付け替えに際して完全に除去されなかったか，煙道部を埋めて壁面を修復した際に含まれていたものであろう。旧カマドの底面は床面よりもやや深い。底面上にはロームブロックを含む黒褐色土（16層）が堆積し，その上部に焼土粒・灰を含む暗褐色土（14層）が堆積する。16・14層の上部にロームブロックを多く含む暗黄褐色土（15層）があるが，堅くしまっており，カマド付け替え後の貼床である。15層上面は床面とほぼ同じ高さであり，その下部及ぶ背後は埋め戻された土層である。15層の奥に焼土ブロックを含む土層がみられ（9層），旧カマドの火床であろう。旧カマド最終時の火床面は底面よりも高い位置にあったものと思われる。

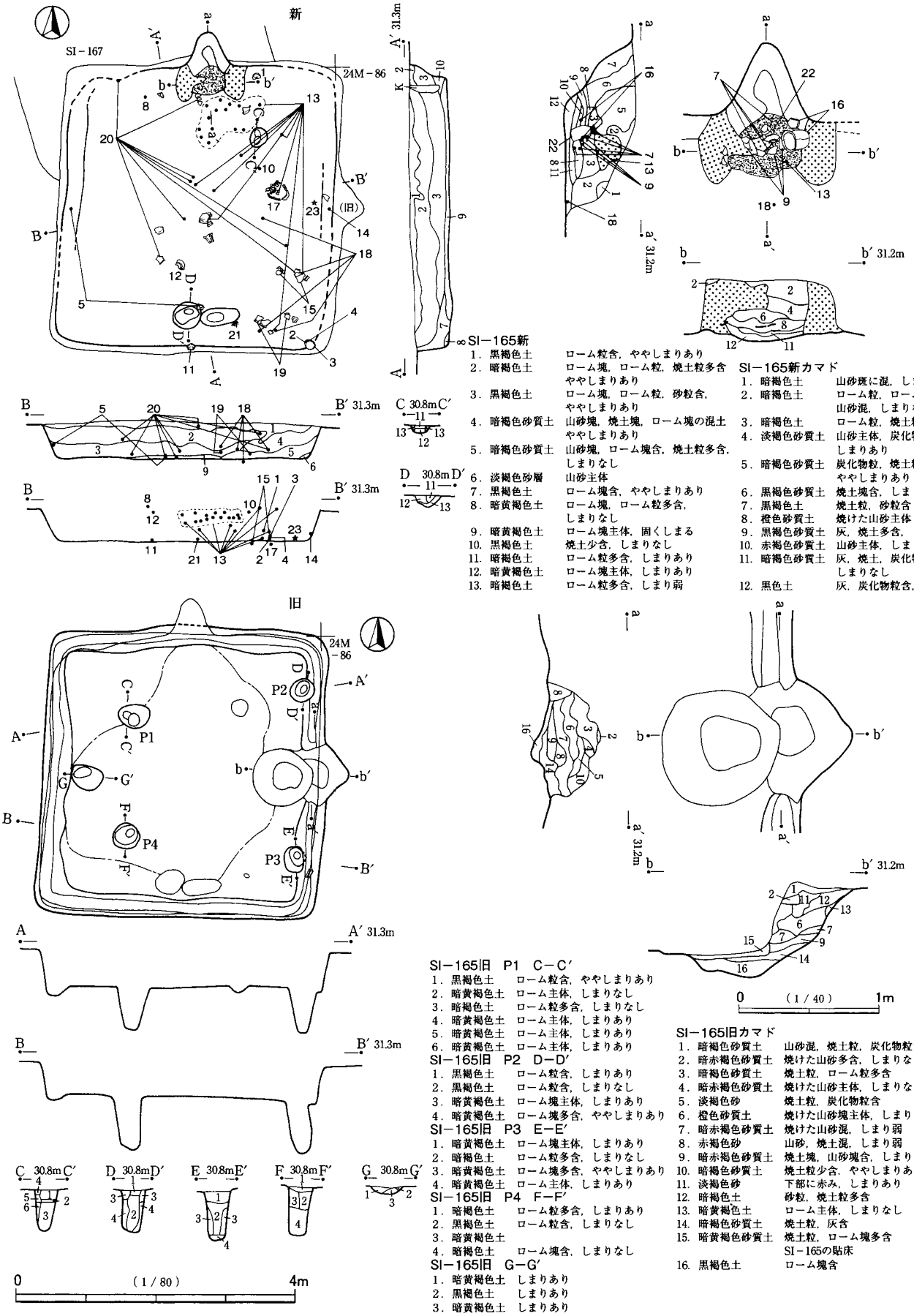
新カマドの遺存は概して良好であり，前天井の一部もみられる。ただし右袖は木根の撹乱を受けており，一部で遺存が悪い。構築材は山砂主体で，混じりけが少ない。両袖内側はかなり内部まで赤色化している。

火床部底面は被熱により硬化が顕著である。床面からの窪みはやや浅い。堆積土最下層は灰・炭化物を多く含み（12層），その上部に焼土を多く含む土層（8・11層）が堆積する。土製支脚（22）が火床部中央，12層上面から立った状態で出土した。最終使用時の位置を留めるものと思われる。支脚上面上からは，土器片が数点重なった状態で出土した。支脚がやや短いため，高さ調節として転用されたものであろう。

**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体である。中層にロームをやや多く含むが，自然堆積と思われる。P2・P3は柱状の土層（2層）がみられる。しまりがなく，柱痕と思われる。周囲はロームブロックを多く含む。P4もしまりのない柱状の黒褐色土がある（2層）。やや不明瞭であるが，柱痕と思われる。

**出土遺物**　多量の遺物が出土した。全体に分布するが，北側がやや多い。図示できた遺物は23点である。須恵器はすべて千葉産のものである。1～7は杯で，1～3は須恵器，6はロクロ土師器杯である。4・5・7は土師器としたが，須恵器か土師器か不明瞭である。8・9は須恵器高台付皿である。10は須恵器高台付杯としたが，皿の可能性もある。11は灰釉陶器碗，12はロクロ土師器高台付杯である。13～15は須恵器甕である。16～20は土師器甕で，18が常総型である以外は在地の土器である。16・20は小型，19もやや小型の甕である。21は須恵器甑である。22は土製支脚，23は鉄製の刀子である。

杯は遺存のよいものが多い。2・3はまったく破損のない完形の土器であり，4は接合して完形の土器である。また1は口縁端部の欠損が目立つが，全体としては非常に遺存のよい土器である。杯皿類のうち，1・7・9は二次的な被熱痕跡が顕著である。これらはいずれも器面が著しく荒れ，黒みや赤みが顕著な部分がある。また3はそれらとは異なるが，外面に光沢をもつ黒色物が多く付着している。油煙の可能性があるが，内面には黒色物がみられない。2枚重ねの灯明具の内側とも推測されるが，奈良・平安時代の灯明具は単独で出土することが多いため，断定しがたい。4は底部外面に「正」の墨書がある。破損部は




SI－165新

1. 黒褐色土　ローム粒含，ややしまりあり
2. 暗褐色土　ローム塊，ローム粒，焼土粒多含，ややしまりあり
3. 黒褐色土　ローム塊，ローム粒，砂粒含，ややしまりあり
4. 暗褐色砂質土　山砂塊，焼土塊，ローム塊の混土，ややしまりあり
5. 暗褐色砂質土　山砂塊，ローム塊含，焼土粒多含，しまりなし
6. 淡褐色砂層　山砂主体
7. 黒褐色土　ローム塊含，ややしまりあり
8. 暗黄褐色土　ローム塊，ローム粒多含，しまりなし
9. 暗黄褐色土　ローム塊主体，固くしまる
10. 黒褐色土　焼土少含，しまりなし
11. 暗褐色土　ローム粒多含，しまりあり
12. 暗黄褐色土　ローム塊主体，しまりあり
13. 暗褐色土　ローム粒多含，しまり弱

SI－165新カマド

1. 暗褐色土　山砂斑に混，しまりあり
2. 暗褐色土　ローム粒，ロームブロック，山砂混，しまりなし
3. 暗褐色土　ローム粒，焼土粒少含，しまりあり
4. 淡褐色砂質土　山砂主体，炭化物粒，暗褐色土含，しまりあり
5. 暗褐色砂質土　炭化物粒，焼土粒含，ややしまりあり
6. 黒褐色砂質土　焼土塊含，しまりなし
7. 黒褐色土　焼土粒，砂粒含
8. 橙色砂質土　焼けた山砂主体
9. 黒褐色砂質土　灰，焼土多含，しまりなし
10. 赤褐色砂質土　山砂主体，しまりなし
11. 暗褐色砂質土　灰，焼土，炭化物粒多含，しまりなし
12. 黒色土　灰，炭化物粒含，しまりなし

SI－165旧　P1　C－C′

1. 黒褐色土　ローム粒含，ややしまりあり
2. 暗黄褐色土　ローム主体，しまりなし
3. 暗褐色土　ローム粒多含，しまりなし
4. 暗黄褐色土　ローム主体，しまりあり
5. 暗黄褐色土　ローム主体，しまりあり
6. 暗黄褐色土　ローム主体，しまりあり

SI－165旧　P2　D－D′

1. 黒褐色土　ローム粒含，しまりあり
2. 黒褐色土　ローム粒含，しまりなし
3. 暗黄褐色土　ローム塊主体，しまりあり
4. 暗黄褐色土　ローム塊多含，ややしまりあり

SI－165旧　P3　E－E′

1. 暗黄褐色土　ローム塊主体，しまりあり
2. 暗褐色土　ローム粒多含，しまりなし
3. 暗黄褐色土　ローム塊多含，ややしまりあり
4. 暗黄褐色土　ローム主体，しまりあり

SI－165旧　P4　F－F′

1. 暗褐色土　ローム粒多含，しまりあり
2. 黒褐色土　ローム粒含，しまりなし
3. 暗黄褐色土
4. 暗褐色土　ローム塊含，しまりなし

SI－165旧　G－G′

1. 暗黄褐色土　しまりあり
2. 黒褐色土　しまりあり
3. 暗黄褐色土　しまりあり

SI－165旧カマド

1. 暗褐色砂質土　山砂混，焼土粒，炭化物粒含
2. 暗赤褐色砂質土　焼けた山砂多含，しまりなし
3. 暗褐色砂質土　焼土粒，ローム粒多含
4. 暗赤褐色砂質土　焼けた山砂主体，しまりなし
5. 淡褐色砂　焼土粒，炭化物粒含
6. 橙色砂質土　焼けた山砂塊主体，しまりあり
7. 暗赤褐色砂質土　焼けた山砂混，しまり弱
8. 赤褐色砂　山砂，焼土混，しまり弱
9. 暗赤褐色砂質土　焼土塊，山砂塊含，しまりあり
10. 暗褐色砂質土　焼土粒少含，ややしまりあり
11. 淡褐色砂　下部に赤み，しまりあり
12. 暗褐色土　砂粒，焼土粒多含
13. 暗黄褐色土　ローム主体，しまりなし
14. 暗褐色砂質土　焼土粒，灰含
15. 暗黄褐色砂質土　焼土粒，ローム塊多含，SI－165の貼床
16. 黒褐色土　ローム塊含

第191図　SI－165（1）

口縁・体部の一部で，口縁部周で1/2弱である。３片が接合したもので，大小の弧が連接した形態である。打ち割りされたものと思われる。５は遺存が少ないが，「得」の朱書が体部外面に正位でみられる。また「得」近くの口縁・体部が小さく破損・欠損するが，その部分の形態が弧状を呈し，打ち欠き・打ち割りされた可能性が考えられる。６も体部外面に墨書があるが，小片であり，判読できない。７はやや大型の杯である。遺存は少ない。

９は口縁・体部の数箇所を欠損するが，かなり遺存のよい土器である。遺存部分は大きく割れて接合するが，一部に小片もみられる。８・10は小片である。10の内面は磨耗して滑らかであり，転用硯の破片と思われる。11も転用硯の破片である。底部内面は朱墨が付着しており，平滑である。貴重な朱墨の硯として，東国の集落としては比較的高級な灰釉陶器が選択されたものと思われる。釉は底部内面中央には施されていない。高台はやや丸みをもつ角高台である。胎土は比較的大粒の小石を含む。

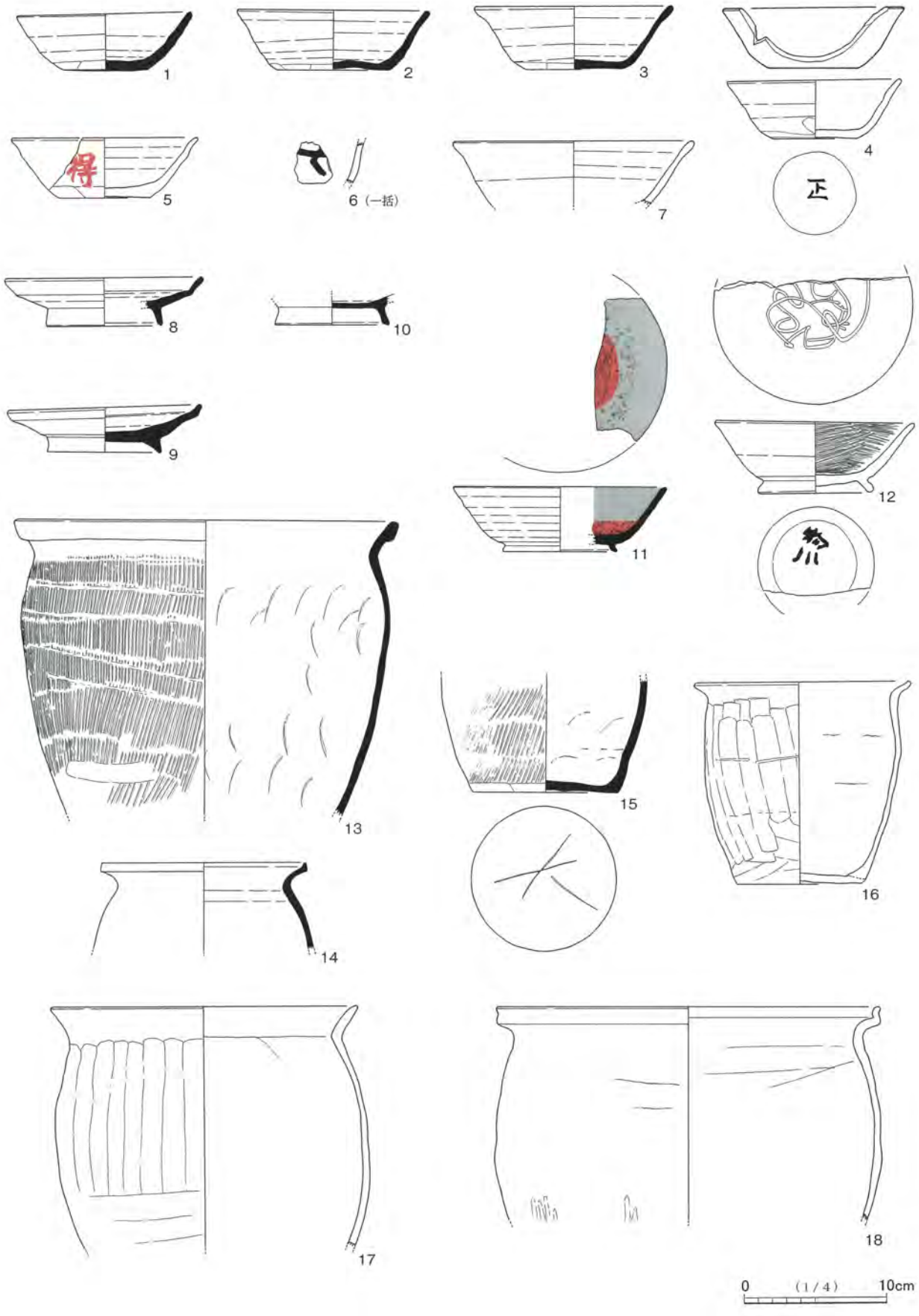
12は底部外面に「物川」と書かれた墨書がある。書体はやや稚拙な印象を受ける。内面は丁寧なヘラミガキが施されている。底部内面のミガキは不整ならせん状を呈し，やや特殊な土器の可能性がある。1/2強の遺存である。

13は口縁部から胴部上位の遺存が比較的よい。一部は赤みが強く，細かく割れている。14は一部の破片である。土師器的な器形・調整であるが，灰色味を帯びる部分が多いことから，須恵器とした。灰色の色調は被熱によるとも思われるが，判然としない。15は底部が多く遺存する。外面にヘラ書きがある。文字の「大」に似た形であるが不整であり，交差線の「×」と１条線の記号としておく。胴部下位は直立的である。16は完形で，大きく割れた破片の接合個体である。口縁部が最大径で，胴部の張りが少ない鉢形的な土器である。底部外面は手持ちヘラケズリが施されているが，一部に敷物の痕跡が残る。底径も大きく，やや須恵器的な様相がうかがえる。17も口縁部から胴部中位までの遺存がよい土器である。特に口縁部は欠損が少ない。胴部は細かく割れている。胴部内外面の一部が剥離している。18は一部の破片である。19は口縁部が最大径で，胴部が丸みをもつ器形である。遺存は少なく，胴部下位・底部を欠損する。胴部は短いと思われ，16とは異なる器形であるが，鉢形的である。20はロクロ成形の甕である。底部周辺は遺存がよい。底径はやや小さく，底部外面に須恵器的な様相もみられない。21は一部の破片であり，把手をもつ部分を図化した。把手は方台状の形態がかなり崩れている。接着にさいして強く押されたため外面は窪み，内面はやや盛り上がっている。しかし強く押しただけであり，雑な貼り付けである。

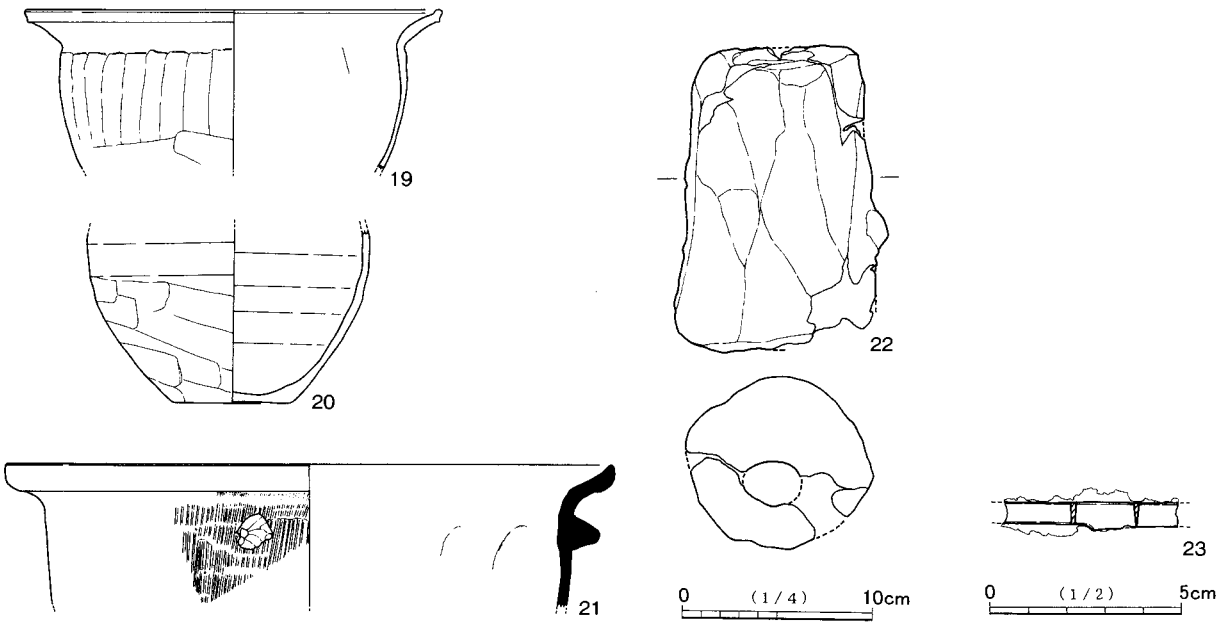
23は小型の刀子である。関部分周辺の破片である。切先と茎尻は遺存しない。刃関はやや斜めに切り込みが入る。背関は錆のために判然としない。

新カマド内及び周辺からは多くの遺物が出土した。カマド内では支脚22の周囲から，７・９・16が出土した。16は右側からかなり傾いた正位で出土した。口縁部は中央側に，底部は右袖側に向いている。７・９は割れて，支脚近くから出土した。７の破片は支脚の上面から数点重なった状態で出土した。被熱痕跡も強く，支脚の補助に転用されたものである。破損した土器片を適当な大きさに割って，支脚にのせたものと思われる。９も被熱痕跡が強く，支脚に転用されたものであろう。１は右袖外脇の中層から横になった状態で出土した。単なる廃棄の他，本住居で使用された土器が上方から転落したことも考えられる。

２・３・４は南東隅壁溝上の下層から３枚重ねの正位で出土した。３が上，４が中央，２が下の状態である。２の底部は床面よりもわずかに高い。４・２はやや傾いている。傾きは隅部側が低く，中央側が高い状態である。４の一部破片が旧カマド部分から出土したが，位置の特定はできなかった。17は旧カマド




第192図　SI－165（2）




第193図　SI－165（3）

前方の床面から出土した。つぶれているがまとまった状態での出土である。旧カマド付近の下層からは，14・23が出土したが，23は鉄製品の小片である。14は支脚に転用された土器かもしれない。11は南壁際中央の床面から正位で出土した。ちょうど主軸線上に位置する。５の主要部分は11近くで新出入口ピット脇の床面近くから正位で出土したが，破片の一部が西壁際中央の中層に散っている。この破片の位置は旧カマドの竪穴の中軸線である。中層出土であるが，意図的な状況の可能性がある。

13・18・20は広く散っている。出土層位は床面の破片もあるが，中・上層にわたる。13は新カマド前方の上層を主体に出土した。15・19・21は南東側の下層から出土した。８・10・12は上層出土である。12は倒位で出土した。

出土遺物のうち，２・３・４は日常的に隅部に保管されていたことも若干考えられる。しかし以下の理由から本住居廃棄の祭祀に関わるものと考える。一つは４が墨書をもつことであり，二つ目は同じく４が打ち割りされていること，三つ目は４の打ち割りされた破片が旧カマドから出土したこと，四つ目は２・３がまったく割れていない完形であるにもかかわらず遺棄されたこと，五つ目は３の外面に黒色物（油煙？）が付着することである。なお５番目の理由から火を使用した祭祀であったと思われる。５・11も本住居廃棄の出入口に関わる祭祀に使用されたものと思われる。その理由として，11の場合は朱墨の転用硯であることとと主軸線上から出土したことであり，５の場合は「得」の朱書をもつことと新出入口ピットから出土したこと，さらに破片が旧竪穴の中軸線に位置すること，があげられる。このようにみてくると，新カマド内から出土した多くの遺物及びその周辺から出土した１も，カマド廃棄の祭祀に関わる可能性が高いとみられる。９はあまり割れていない状態で支脚に転用されたが，祭祀にあたって破壊されたことも考えられる。さらに17も祭祀にあたり，胴部下位・底部を除去されたことが考えられるが，やや断定しがたい。

その他の遺物にも祭祀的な出土状況のものがあるかもしれないが，判然としない。「物川」の墨書をもつ12も確認面近くからの出土である。広域に散っているものや中・上層から出土したもの，遺存が少ないものの多くは，堆積土が埋め戻されているのでなければ，単に廃棄されたか流入したものと思われる。

**重複遺構**　北側でSI－167と重複し，本住居が切っている。

SI－167（第194図，図版63）

**位置**　調査区南部の24M－75グリッドに位置する。

**形状・規模**　長さが3.1m，幅が3.7mの横長の方形をなす。確認面からの深さは45cmである。南側が重複遺構に切られて遺存しない。形態はやや平行四辺形的あるいは逆台形的になると思われる。

**床面**　中央はほぼ平坦であるが，東壁側がやや高く，西壁側がやや低い。中央が硬化している。

**柱穴**　主柱穴が4箇所検出された。出入口ピットは検出されなかったが，重複遺構の影響が考えられる。南壁側中央が出入口側と思われる。

**壁溝**　遺存しない部分を除いて巡っている。本来全周すると思われる。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランから三角形状に突出するが，あまり大きなものではない。右袖は比較的遺存はよいが，左袖は前側や上部が多く流失している。両袖内側はやや赤色化している。火床部底面は床面よりもやや窪んでいるが，あまり深さはなく，灰のかき出しに伴う程度のものであろう。底面上の最下層はロームブロックが多く堆積している。その上部に焼土粒を多く含む土層が堆積し，最終的な火床面に伴うものであろう。

**堆積土**　中･下位にロームブロックを多く含む土層がある（4･5層）その上部は黒みが強くなるが，ロームの含有もやや多い。壁際はロームの含有が少ない。壁際は自然堆積であるが，その後埋め戻された可能性が考えられる。柱穴の堆積土は概してロームを多く含む。P3の上面はSI－166の床面であり，堅くしまっている。一方ロームを多く含むものの，P1は上部中央に黒みの強い土層があり，柱痕の可能性も考えられる。

**出土遺物**　少量であるが，中央から南側を多く欠損することや，埋め戻しと思われることの影響が考えられる。カマド内・周辺から北西側にかけて分布する。図示できた遺物は2点である。1・2は土師器甕である。1は武蔵型，2は在地の甕である。1は小片から図化した。2も口縁部から胴部上位の一部の破片である。口縁端部は欠損する。1・2ともカマド内から出土した。

**重複遺構**　南側でSI－165と重複し，本住居が切られている。

SI－168（第195図，図版64）

**位置**　調査区南部の24M－65グリッドに位置する。

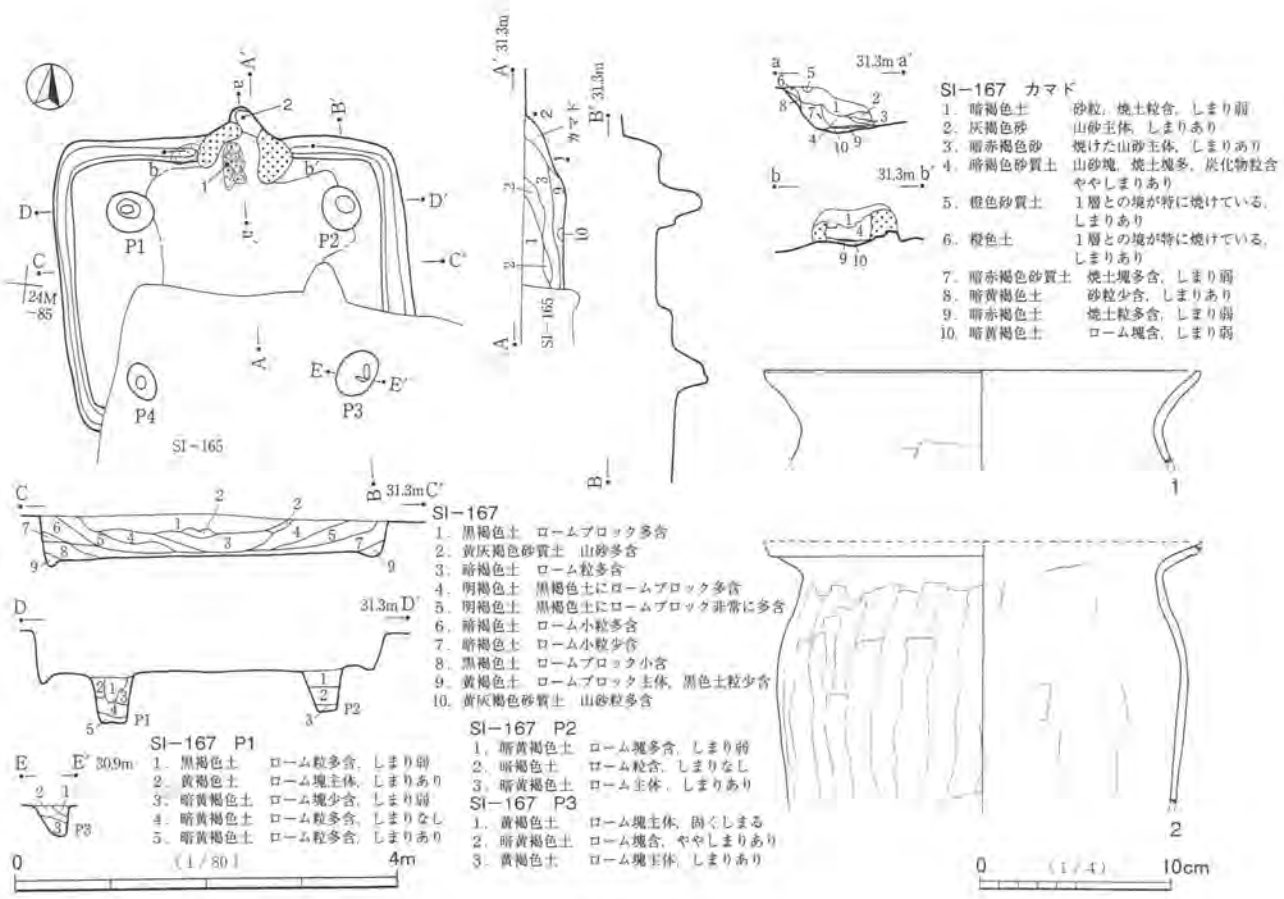
**形状・規模**　長さが3.2m，幅が3.3mの方形をなす。確認面からの深さは45cmである。南東隅がわずかに張り出し，南西隅がやや内に入る形態である。

**床面**　ほぼ平坦である。中央の硬化が著しく，壁側とかなりの差がある。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央に検出された。径は44cm×25cm，床面からの深さは23cmである。上面形はカマドに向かって縦長の形態である。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖の遺存は比較的よい。構築材は山砂を主体とし，堅くしまっている。両袖内壁は中央がやや中まで赤色化している。火床部はあまり強く赤色化した面がみられない。底面はやや広範囲に窪んでおり，ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土層（13層）が堆積している。左袖はこの土層の上に構築されている。当初の掘りかたか，作り替え時の底面を若干埋め戻し，均した土層の上に構築されたのであろう。カマド内堆積土は，奥側下層に焼土粒を多く含む土層が堆積する。

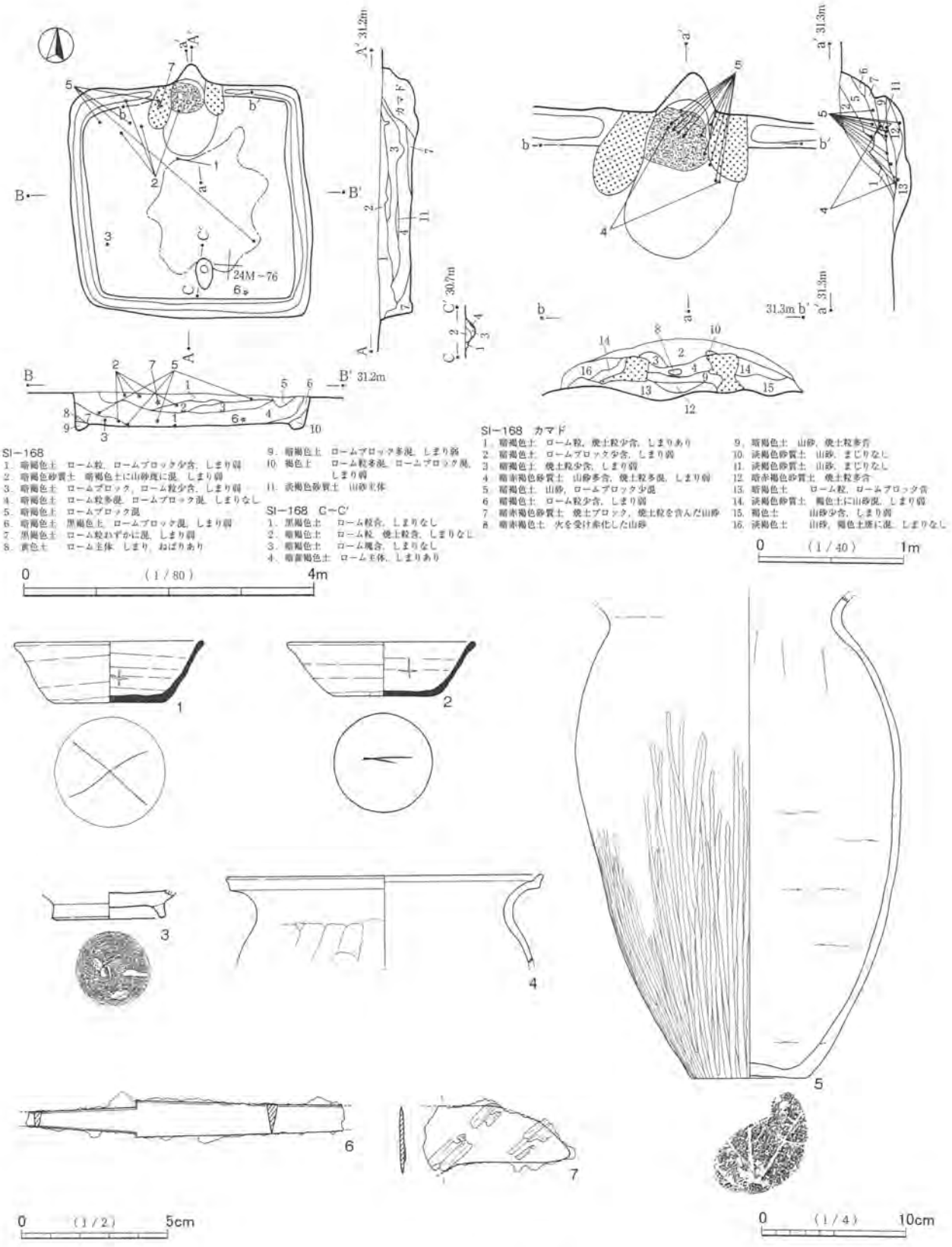



第194図　SI－167

**堆積土**　暗褐色土を主体とする。上層はローム粒・ロームブロックの含有が少なく，下層はやや多い。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　カマド周辺に多い。カマド周辺以外も全体的に分布するが，密度は低く，遺物量はあまり多くない。図示できた遺物は7点である。1・2は千葉産の須恵器杯，3はロクロ土師器高台付杯である。4・5は土師器甕で，4は在地，5は常総型の甕である。6・7は鉄製品で，6は刀子，7は鎌である。

1は「＋（×）」の刻書が底部外面と体部内面にある。底部のものは焼成前のヘラ書き，体部のものは焼成後の線刻である。口縁・体部の3/4を欠損するが，底部は遺存する。遺存部分の破損は体部の一部である。欠損部の破断面は水平的なところがあり，打ち欠きされた可能性が考えられる。体部内面の線刻は水平的な部分の真下にあるが，欠損が及んでいない。線刻が先，打ち欠きが後とすると，線刻を施すのはやや難しくなり，また打ち欠きについては細心の注意が必要である。打ち欠きが先，線刻が後であれば，打ち欠き時に線刻を気にする必要はなく，線刻を施すのもより容易となる。後者の可能性が高いと思われ，左手で遺存する口縁・体部を握り，右手で線刻を施したのではないだろうか。2も体部内面に「＋（×）」の線刻がある。また底部外面も「×」のヘラ書きと思われるものがあるが，ヘラケズリの痕跡とも思われ，記号であるか判然としない。口縁・体部の一部が欠損するが，比較的遺存がよい。一部に欠損を含む破損の状況をみると，口縁・体部の1/2強が「W」字状に割れ，また別の部分が小さく逆三角形状に割れている。その2箇所間の大きく遺存する部分が底部中心を境に二つに割れている。この破損の状況は意図的とも思われるが，やや断定しがたい。3は底部周辺が遺存するが，口縁・体部の全周を欠損する土器である。また高台も一部の遺存である。底部外面中央に糸切り痕がある。平行で静止糸切り的であるが，高台部接着




第195図　SI－168

時のロクロナデにより周囲が消されていることから，回転糸切りの可能性を高く考えたい。底部内面が比較的滑らかであり，転用硯とも思われるが，やや断定しがたい。明瞭な墨痕はみられない。底部内面に筋状の沈線が数条あるが，記号とは思われない。傷または研ぎ痕と思われる。

4は一部の遺存である。5は口縁端部を欠損するが，上位から底部までよく遺存する土器である。胴部中位以下は1/2周程度が遺存する。

6は切先と茎尻を欠損するが，その間の遺存は比較的よい。錆の進行が進み，非常にもろい状態である。背関・刃関とも直角に切り込みが入る。背関はやや深く，刃関は浅い。7は鎌の切先部分の破片である。目釘穴がみられないので穂摘具ではないと考える。表裏面に植物繊維が付着している。

1はカマド前方の床面から出土したが，正位・倒位等の状況は不明である。2はカマド内及び左側から出土したが，出土層位が下層から上層にわたっている。5はカマド内の中・下層から多く出土し，一部はカマド左側から北西隅部に及んでいる。4もカマド内からの出土である。3は西壁際やや南寄り下層から出土した。6は南壁際右寄りの下層から出土した。7はカマド左袖の位置であるが，上層の出土である。

1は土器の様相・出土層位からカマド廃棄の祭祀に関わる可能性がある。2も土器をみると，その可能性が考えられるが，一部破片の出土層位が上層であり，断定しがたい。他の遺物に祭祀的様相はうかがえない。出土遺物はその多くが，廃棄されたか流入したものと思われる。

SI－169（第196図，図版64）

位置　調査区南部の24M－44グリッドに位置する。

形状・規模　長さが3.6m，幅が3.4mの方形をなす。確認面からの深さは20cmである。四隅がやや丸みをもつ。

床面　ほぼ平坦である。中央の硬化が著しく，壁側と差がある。本竪穴はSI－177の上部に構築されている。そのため床面を構成する土層は暗褐色土を多く含むが，中央はロームブロックを多量に含む。床面の構築に際して，中央にロームブロックを敷き詰めたものと思われる。

柱穴　主柱穴が4箇所検出された。南側の2箇所は南側両隅部にある。北側の2箇所は北壁から離れるが，東西壁からは近い位置にある。P2～P4の3箇所は規模がかなり大きい。柱が抜き取られたことも考えられるが，床面の土層が暗褐色土を多く含む影響かもしれない。出入口ピットは検出されなかったが，重複遺構の影響が考えられる。南壁側中央が出入口側と思われる。下部に存在するSI－177は出入口ピットが南壁際中央に検出された。本竪穴の南壁とはかなり離れているため，本竪穴に伴うものではないであろう。

壁溝　全周する。

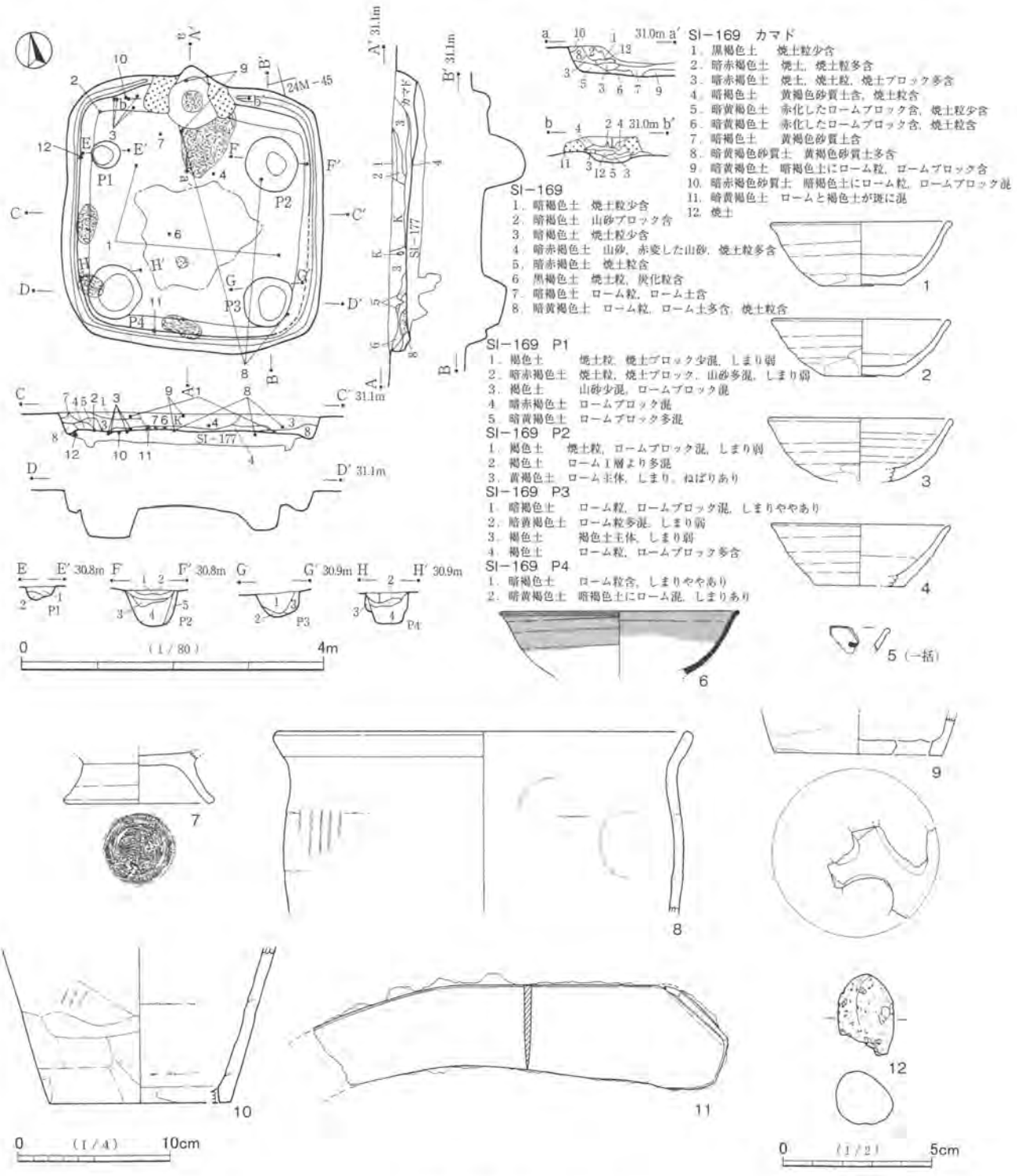
カマド　北壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。床面までやや浅いため，遺存はあまりよくない。構築材は山砂を主体とするが，ロームや褐色土を含む。ロームの含有は下部に多い。両袖内壁はやや赤色化し，しまりが弱いが，内部はしまっている。火床部底面中央はやや赤色化している。カマド内堆積土をみると，中央は上位から中・下位まで焼土粒を多く含む。下層は焼けたロームブロックを含む。

堆積土　暗褐色土を主体とする。焼土が下層に堆積している。特にカマド前方・西壁際・南壁際等に集中範囲がみられる。柱穴の堆積土は比較的ローム粒・ロームブロックが多いが，しまりの弱い土層が多い。自然堆積と思われる。

出土遺物　竪穴が浅いわりに，出土量は多い。カマド周辺に多いが，全体に分布している。図示できた遺物は12点である。1～5はロクロ土師器杯，6は灰釉陶器碗である。7はロクロ土師器高台付杯で，足高高台杯である。8は土師器甕，9・10は土師器甑である。8～10は在地の土器である。11は鉄製の鎌，12は軽石である。

図示した土器に非常に遺存のよいものはない。５は口縁・体部の小片で，体部外面に墨書があるが，判読できない。４の底部は回転糸切り離し後無調整であるが，１・２はほぼ全面に手持ちヘラケズリが施されている。６は口縁・体部上位の内外面に灰釉がみられる。

８は口縁端部がやや内湾する。胴部外面に平行タタキ，内面に当て具痕がみられるが，外面はナデ，内面はナデ・ヘラナデによって痕跡が弱くなっている。９は底部周辺の破片である。孔は中心孔の一部と周囲の２孔の一部が遺存する。かなり崩れた形態であり，対称形をなさない。底部外面に回転糸切り痕がみ




第196図　SI－169

られる。10は胴部下位から底部までの一部の遺存である。橋状部の端で欠損し，周囲の孔の一部が遺存する。10も胴部外面に平行タタキがみられるが，ヘラケズリにより消され，わずかな遺存である。内面は強いナデが施されている。８～10には，須恵器の技法がみられるが，質感から須恵器窯で焼成されていないと思われ，土師器とした。９・10は同一個体の可能性がある。

11は中央付近から基部側を遺存し，切先側を欠損する。折返し部分は鎌の長軸に対して，斜方向である。刃側の刃部と基部の境はやや不明瞭であるが，基部の端から５cm近くのところまで刃潰しされていると思われる。

２・３・９・10等，図示した遺物もカマド内及び周辺からの出土が多い。９はカマド内からの出土である。８はカマド近くの他，広く散っている。１も広域の出土である。11は南壁際やや左寄りの床面から出土した。12は左（西）壁際奥（北）寄りの床面から出土した。遺物は遺存が良好でなく，出土状況と合わせて祭祀的様相はうかがえない。ほとんどが廃棄されたか，流入したものと思われる。

**重複遺構**　平面的にはSI－177全体を含む形で重複し，SI－177の上部を切っている。SI－177から本竪穴への建て替えが考えられるが，SI－177の堆積土が埋め戻されているか判然としないため，やや時間差があることも考えられる。また明瞭な掘り込みを把握できなかったが，中央にローム粒・焼土粒を含まない黒みの強い土層が堆積している。その下層から煙管が出土しており，近世の土坑が存在したものと思われる。底面は本竪穴の床面を損なっていない。なお土坑はプランが不明瞭であり，遺構として扱っていない。

SI－170（第197図，図版64）

**位置**　調査区南部の24L－95グリッドに位置する。

**形状・規模**　東側が調査区外に入るため，調査できたのは南西隅周辺の一部である。長さ・幅ともに不明である。確認面からの深さは50cmである。

**床面**　平坦である。やや不明瞭であるが，中央が硬化していると思われる。

**柱穴**　主柱穴・出入口ピットともに検出されなかった。主柱穴は存在しない可能性が高い。カマドは西壁側に付かないと思われるため，出入口ピットは南壁際にあると考えられる。なおピットの有無が不明瞭な場合，カマドが東壁側，出入口が西側の可能性もあるが，出入口が南側の可能性の方が高いであろう。

**壁溝**　検出した範囲では巡る。本来全周すると思われる。

**カマド**　調査範囲内では検出されなかった。西壁には設置されず，南壁側も可能性が低いと思われる。周囲の竪穴住居の状況からは，北壁・東壁の双方に可能性があるが，西壁側に出入口ピットがみられないことから，北壁側に存在する可能性が高いと考える。

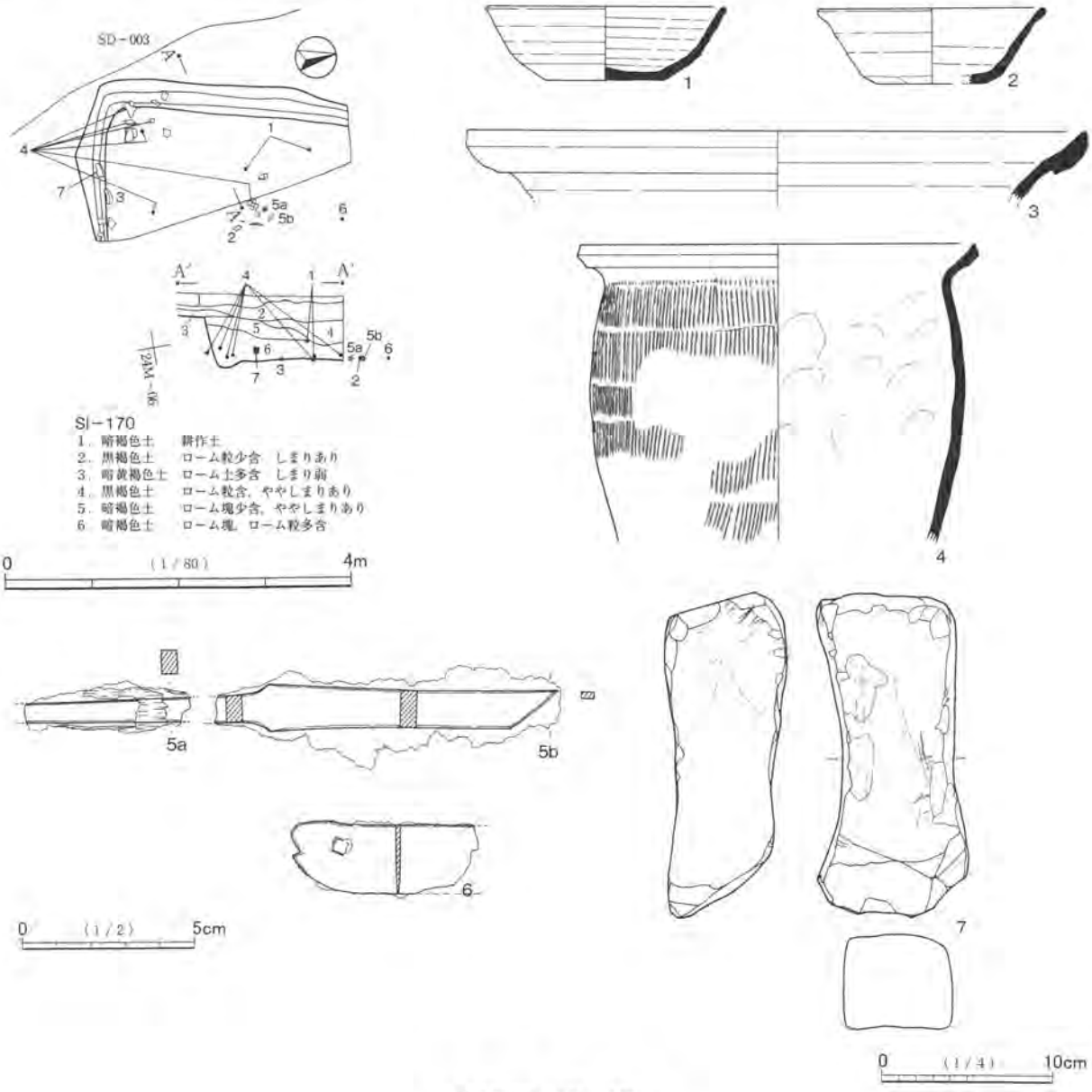
**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体である。ローム粒・ロームブロックの包含が下層にやや多いが，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　中量の遺物が出土し，調査した範囲の全体に分布する。調査が遺構の一部であることを考慮すると，多量の遺物を包含していると考えられる。図示できた遺物は７点である。１～４は千葉産の須恵器である。１・２は杯，３・４は甕である。５・６は鉄製品で，５は刀子または何らかの工具である。６は穂摘具である。７は砥石である。

２は小片で，１もあまり遺存がよくない。３は大甕の口縁部片で，遺存は一部の破片である。４は胴部下位から底部を欠損するが，口縁部は1/2周以上遺存する。褐色の土師器的な色調である。胴部外面に平行タタキが施されるが，ナデにより痕跡が弱くなっている。胴部外面の一部に焼けた山砂が付着している。

胴部内面は焦げて，一部が強い黒色を呈する。また内面は口縁端部から胴部中位まで，剥離痕がやや目立ってみられる。

５は欠損が少ない点では遺存良好であるが，錆膨れが顕著な点では不良である。接合しないため２片となっているが，同一個体と思われる。刃部が遺存するが，錆のため刃が不明瞭である。刀子と思われるが，刃が切先側にしかない何らかの工具の可能性も考えられる。しかし厚みのある刀子の可能性を高く考えておく。切先の平面形はかなり角張っている。背関・刃関はともに緩やかな弧を描いて茎から刃部に移行する。茎の破片は柄の木質が多く付着している。茎尻は欠損すると思われるが，錆と木質のために不明瞭である。欠損の場合，古い時期のものである。６は片方の端部側から中央近くまでの遺存である。方形の目釘孔がみられる。孔は図の右上部分まで広がっており，目釘の頭はこの方向に曲げられたものと思われる。中央の刃先はやや丸みがあるため，欠損も考えられるが，磨り減った可能性もあると思われる。木質が図示した面にわずかに付着しており，この面に握り柄（木台部）が存在した可能性がある。７の石材は流紋岩である。緻密で硬質の石材である。両小口面とも遺存する。図示した右側の面は凹凸があり，滑らかさ




第197図　SI－170

で他の面に劣っている。この面を下にして使用されることが多かったといえよう。したがってこの面を下面として記述する。ただしやや滑らかであり，筋状の研ぎ痕が多くみられるので，頻度は少ないが下面を上にして使用されることもあったことがわかる。左右両側面及び図示していない上面は非常に滑らかである。下面を除く３面は研ぎ減って，中央が緩やかに窪んでいる。図下部の小口面は上下面に対してかなり斜めである。砥面として若干使用されていると思われるが，細かい凹凸があるので，使用頻度は少ないといえよう。図上部のもう一方の小口面も若干斜めであるが，片側よりはかなり立っている。この小口面は平滑な面を多くもつ。石材の色調は淡黄褐色であるが，両小口面の表面は濃い褐色を呈する。元々の石材表面の色調と思われるが，やや断定しがたい。

図示した遺物の出土層位は床面から下層である。４は南西隅周辺から出土した。５は中央寄りの床面から，７は南壁際西寄りの下層から出土した。

SI－171（第198・199図，図版65）

**位置**　調査区中央南側の24M－03グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.6m，幅が4.4mの方形をなす。確認面からの深さは50cmである。

**床面**　暗褐色土とロームの混合土による貼床が，隅部を主体に施されている。右前（南西）側がやや高く，左奥（北東）側がやや低いが，左奥側は貼床をやや掘り過ぎている。また耕作機械による撹乱が著しいことも影響していると思われる。本来はより平坦であろう。中央が硬化している。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。また出入口ピットが西壁際中央で検出された。径は39cm×31cm，床面からの深さは20cmである。主柱穴は中央に寄っており，柱穴外の空間が広い。主柱穴を結ぶラインは台形的な方形であり，竪穴プランに対して整った対称形とならない。しかしP1・P3は左奥隅・右前隅を結ぶ対角線上に位置する。P4は出入口ピットに近い位置であり，対角線上からかなりずれている。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　東壁中央に位置する。煙道部側が方形プランから長く突出する。両袖は比較的遺存がよい。構築材は山砂を主体とし，混じりけが少ない。両袖内側はかなり中まで赤色化している。火床部底面も中央部分がよく焼けて，赤色化が顕著である（13層）。火床面の上部は黒褐色土で，焼土塊も含むが，炭化物粒も含有する。焼土は火床面の奥側底面上にも多く堆積する。カマド前方がかなり深く窪んでいるが，掘りかた底面と思われる。ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻して，床面を整えたものと思われる。カマド際の部分は焼土粒・山砂を多く含む。

**堆積土**　上層にロームを主体とする土層があり（２層），下層もロームブロックを多く含む（３層）。また上層は若干の焼土を含み，左側に小さな集中範囲もみられる。通常であれば，埋め戻されたと思われる状況であるが，全体に耕作機械による撹乱が及んでいるため，断定しがたい。柱穴の堆積土はすべて，下層がロームを主体とし，上層に黒褐色土が堆積する。柱は抜き取られたものと思われる。

**出土遺物**　多量に出土した。竪穴全体に分布するが，特にカマド内及び周辺に多い。図示できた遺物は19点である。１は千葉産の須恵器杯，２～４はロクロ土師器杯，５はロクロ土師器高台付皿，６は武蔵型の土師器台付甕，７は千葉産の須恵器甕，８は常総型の土師器甕である。９～15は鉄製品である。９は鉄鏃，11は刀子，13・16は鎌である。14も鎌と思われるが，やや不明瞭である。10・12・15・17は用途不明である。18は鉄滓で，椀形滓である。19は石製の紡錘車である。

２は底部外面に「厨」の墨書がある。口縁・体部の一部が欠損するだけで，遺存良好な土器である。欠

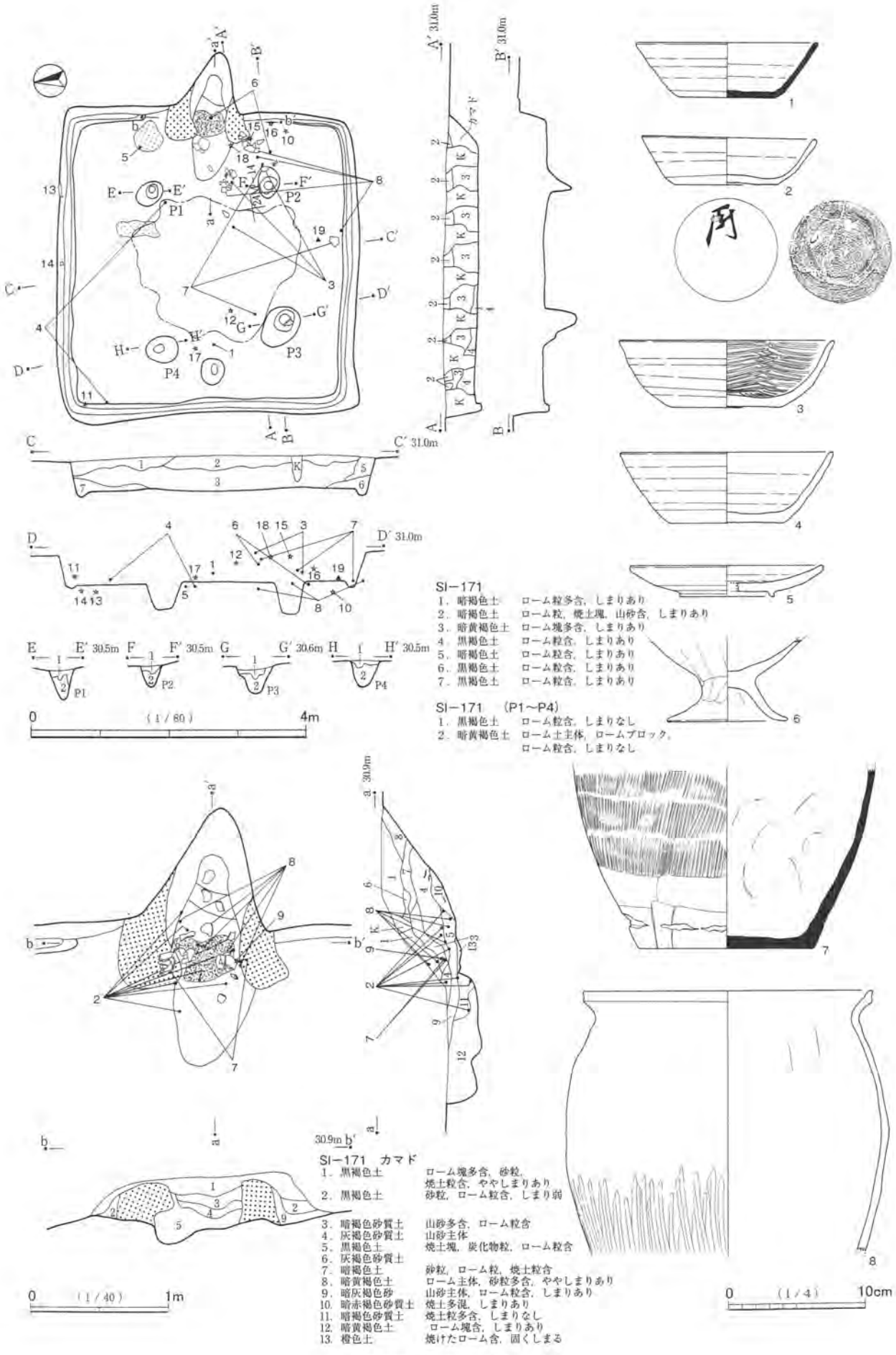
損部は弧状を呈し，打ち欠きされた可能性が考えられる。しかし遺存部分がやや細かく割れているため，やや断定しがたい。なお破損は墨書に及んでいる。二次的な被熱により，内外面の一部に煤が付着し，強く赤みを帯びる部分もある。また底部を主体として，内外面に器面の剥離が多くみられる。また3も底部外面等に黒みを帯びる部分が多く，全体に荒れているため，二次的に火を受けたものと思われる。杯皿のうち，2以外はあまり遺存が良好でない。3は底部が多く遺存するが，口縁・体部上位の欠損が多い。

6の胎土は黒雲母を多く含む。胎土は台の付かない武蔵型甕と同様と思われる。やや小型の甕と思われる。台部付近の器壁はやや厚いが，甕部分の器壁が薄い。7の底部外面はナデにより，製作台上の痕跡がかなり消されている。8はやや細かく割れているが，口縁部から胴部上位はほぼ遺存する。

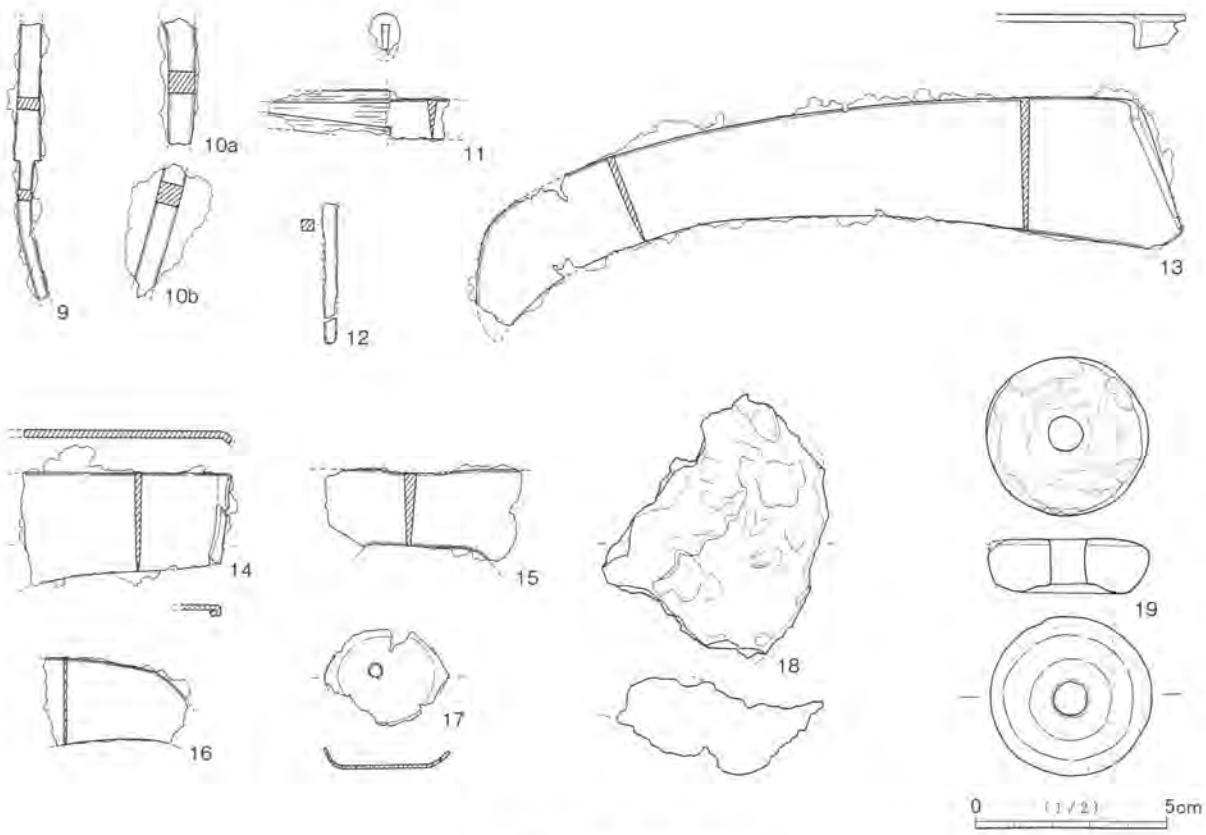
9は棒状部の途中から茎の途中までの破片である。棒状部の側面は直線的であるが，茎に向かってわずかに幅が広がる。茎は錆膨れが特に顕著であり，剥落や接合時の歪みにより，やや曲がっている。10は棒状品である。2片あり接合しないが，割れ口は新しく，同一個体と思われる。鉄鏃の棒状部，釘等が考えられれるが，製品を特定しがたい。11は茎から身の根本にかけての破片である。茎部分の木質が比較的よく遺存する。そのために背関が不明瞭であるが，やや浅く直角に切り込みが入ると思われる。刃関はやや深い直角関である。12は細い棒状品で，紡錘車の紡軸，鉄鏃の茎，釘等が考えられるが，製品を特定しがたい。13は切先をわずかに欠損するだけであり，完形に近く遺存する。14は鎌の基部側の破片と思われるが，やや断定しがたい。折返しと思われる図左端部分は上方に短く立ち上がる。全体に薄い作りで，図上部は背側，下部は刃側とみてよいものである。孔はみられない。鎌と断定しがたい理由の一つは，左端寄りはやや幅が狭いのに対し，刃部側と思われる右端部分の方が幅が広い点である。また右端部分はやや直線的であり，その先に続かないことも考えられる。以上やや疑問の点もあるが，鎌の可能性が高い製品とみておきたい。やや古く破損したものかもしれない。15は板状の鉄製品である。幅は鎌的である。図の上側がやや厚く，背側とみられる。図の下側は薄く，刃側と思われる。しかしあまり鋭くならないため，鎌とするには疑問があり，用途不明としておく。大きさのわりに重量感があり，新しい時期の遺物が混入したものかもしれない。16は鎌の切先側の破片である。切先先端は欠損する。木質の付着はみられない。17は薄く小さな鉄板を浅い皿状にしたものである。図の底面は円形で，周囲には切れ目が入ると思われるが，1/2程度が欠損しており，不明瞭である。目釘穴と思われる孔が一つ，底面の中心よりややずれた位置に小孔がある。目釘孔と思われるが，鉄板が薄いために，空いたものかもしれない。目釘孔であれば，何らかの木製品に留められたものと思われるが，不明瞭である。使用時の状態は図示しない面が表面であることも考えられるが，この点も判然としない。18は椀形の鍛冶滓である。

19の石材は滑石である。下面は孔部分が段状となっている。擦痕が多くみられる。また上面の周縁に欠損する部分が多い。

2・6～9はカマド内から出土した。出土層位は6が中層である以外は下層である。7の破片の多くは左袖脇下層から出土した。9は右袖脇下層から出土した。6はカマド右外側床面に散っており，8もカマド右袖前方及び右壁際中央寄りの床面にやや広く散っている。カマドの右外側からは，鉄製品10・15・16，鉄滓18が出土した。10は床面下，貼床の土層中から出土した。16は下層であるが，床面からやや浮いている。15・18は上層から出土した。また5はカマド左袖外側の床面から出土した。13・14は左（北）壁際の壁溝内から出土した。また11も左前（北西）隅際下層から出土した。4は左側に広く散っているが，下層・床面からの出土である。19は右（南）壁際中央の床面近くから出土した。




第198図　SI−171 (1)




第199図　SI－171（2）

カマド内から出土した2は遺存がよく，「厨」の墨書をもつことから，カマド廃棄の祭祀に使用されたものとみられる。なお顕著な被熱痕跡については，祭祀時に火を受けたことや灯明具であったこと，あるいは補助を含む支脚に転用されたこと等が考えられる。なお支脚転用品であったとしても，最終的には祭祀に使用されたと思われる。欠損・破損については不明瞭であるが，その際に実施されたことも考えられる。カマド内出土遺物のうち，鉄鏃9は2とセットになる可能性が考えられるが，その他の土器は判然としない。

左壁際やカマド右方等の壁際を主として，鉄製品・鉄滓が多く出土した。それらの空間に鉄製品や小鍛冶に関わる道具が収納・保管されていた可能性が考えられる。上層出土のものは単なる投棄とも思われるが，上部から落下した可能性も考えられる。

平面位置をみると，広く散っているものが目立つ。出土層位は床面から上層にわたるが，図示した遺物については下層出土のものも多い。遺物の廃棄・流入は，竪穴廃棄後の早い時点から行われていたといえよう。

SI－172（第200図，図版65）

位置　調査区中央南側の24L－84グリッドに位置する。

形状・規模　長さが3.4m，幅が3.5mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。南東隅がわずかに張り出す形態である。

床面　平坦で，中央の硬化が著しい。

壁溝　全周する。

カマド　北壁中央に位置する。方形プランからの突出はやや大きい。遺存状態は良好でなく，右袖は攪

乱に切られて欠損する。左袖は下部が遺存するが，一部木の根による撹乱を受けている。内側の一部が強く赤色化している。火床面は床面とほぼ同じ高さで検出された。ほぼ両脇の壁溝を結ぶ線上に位置する。焼土と大粒の焼土ブロックが堆積し，所々が硬化しているが，全体的にはややしまりがない。またあまり強く赤色化していない。焼土粒を多く含む土層は，火床面からやや奥側にかけて堆積している。

**堆積土**　焼土と炭化材が床面上に広く堆積している。上屋の焼却または焼失があったと思われる。焼土上は暗褐色土主体である。下層はローム粒の含有が多いが，焼土上は自然堆積と思われる。

**出土遺物**　土器片は比較的多く出土した。分布も全体的である。図示できた遺物は7点である。1・2はロクロ土師器杯である。3～6は金属製品である。3・4・6は鉄製品，5は銅製品である。3は馬具の中の轡の引手に似た製品である。4は紡錘車の紡輪，6は鉄鏃である。5は用途不明である。7は砥石である。

1は完形に近い土器である。内外面に黒色部分が多く，千葉産の須恵器とも思われるが，判然としないため土師器としておく。欠損部は口縁部のごく一部である。その部分に続いて小さく割れて接合する。それ以外は割れていない。欠損・破損部は「W」字状で，打ち欠き・打ち割りされた可能性がある。2は体部外面にヘラ書きがある。判読できない。文字的な形態であるが，記号かもしれない。

3は環状部と棒状部からなる。環状部は長楕円形を呈する。片側の長半径の中央に棒状部が取り付く。棒状部の途中で破損している。環状部は欠損がない。環状部は棒状部に対してかなり立った斜めの角度で取り付いている。引手に似た製品であるが，部分的な破片であり，馬具としてよいかやや断定しがたい。4は径が4㎝強の紡輪で，小型の製品である。周縁の一部を欠損する。孔は円形である。径が3㎜と小さく，挿入される紡軸も厚みのないものである。5は銅製品の小破片である。厚みが1㎜程度で非常に薄いが，図の左端部分で，やや厚くなる。佐波理鋺等の一部の可能性があるが，断定しがたい。6は切先から茎の上部まで遺存する鉄鏃である。鏃身は細身の長三角形式または柳葉式で，短いが鋭い逆刺をもつ。片面が丸みをもつが，その裏面はやや平坦であり，方丸造りの鏃身である。棒状部のかなり長い長頸鏃である。幅・厚みとも薄く，鏃身・茎を含めて全体に細身の作りである。茎との境は台形状に幅が広がる。茎の遺存はごくわずかである。7の石材は砂岩である。図上部の小口面が遺存するが，下部の小口面は欠損する。図示した上面の中央付近が厚く，山形の形態を呈する。図の下面は中央に向かってわずかに窪んでいる。上下面・左側面は平滑である。右側面は使用されているが，ややざらつきがあり，使用頻度が低い。小口面はざらつきがあり，ほとんど使用されていない。折損面もほぼ使用されていないと思われる。筋状の研ぎ痕が所々にみられるが，あまり多くない。

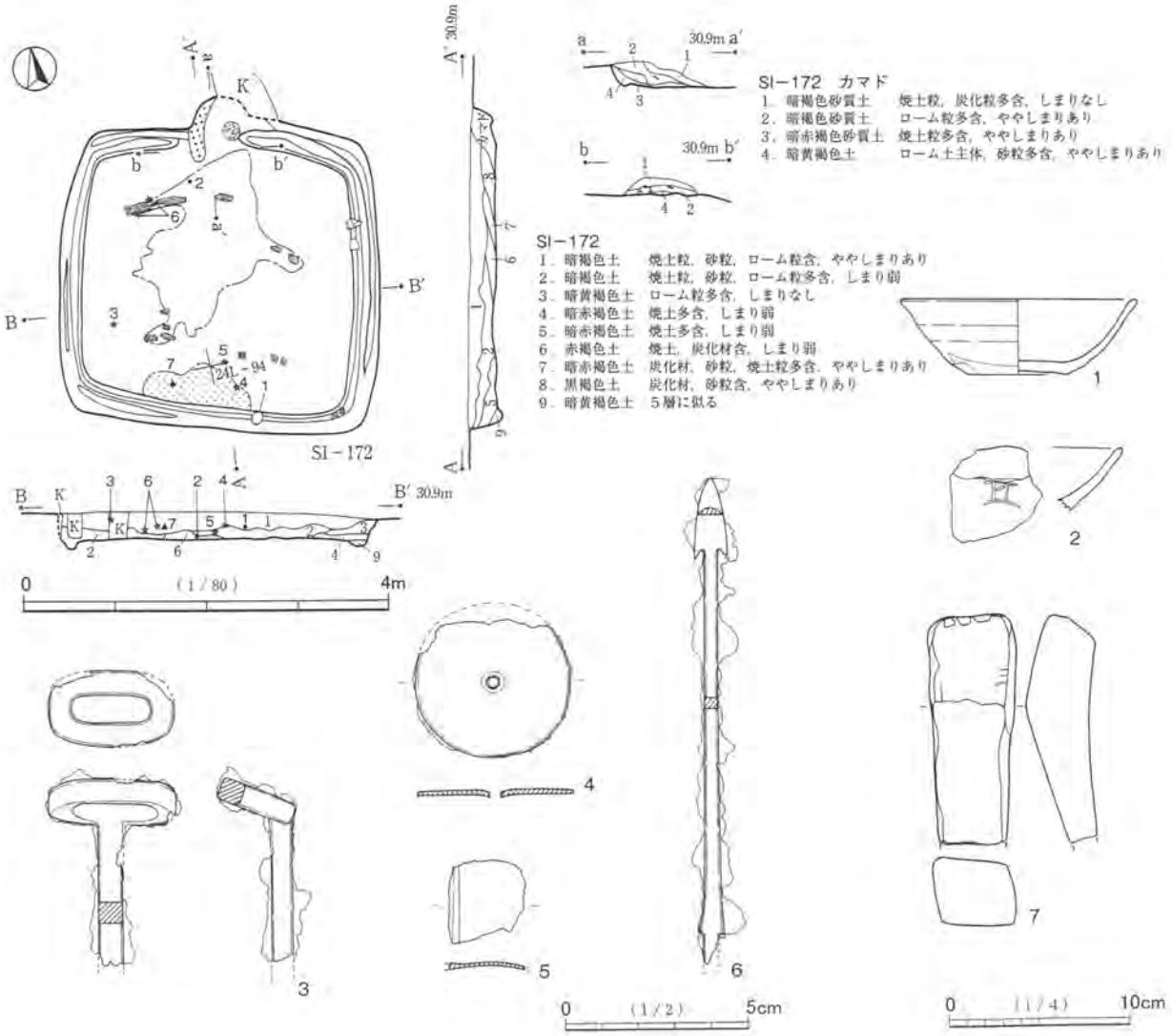
1は南壁際やや右寄りの中層から正位で出土した。わずかに斜めに傾いており，上方から落下した可能性も考えられる。2はカマド左袖前方の下層から出土した。鉄製品・砥石のうち，4・5・7は南壁中央の中・下層からやや近い位置関係で出土した。3は南西側中層，6は北西側中・下層からの出土である。1は祭祀的な出土状況の可能性も考えられるが，断定しがたい。

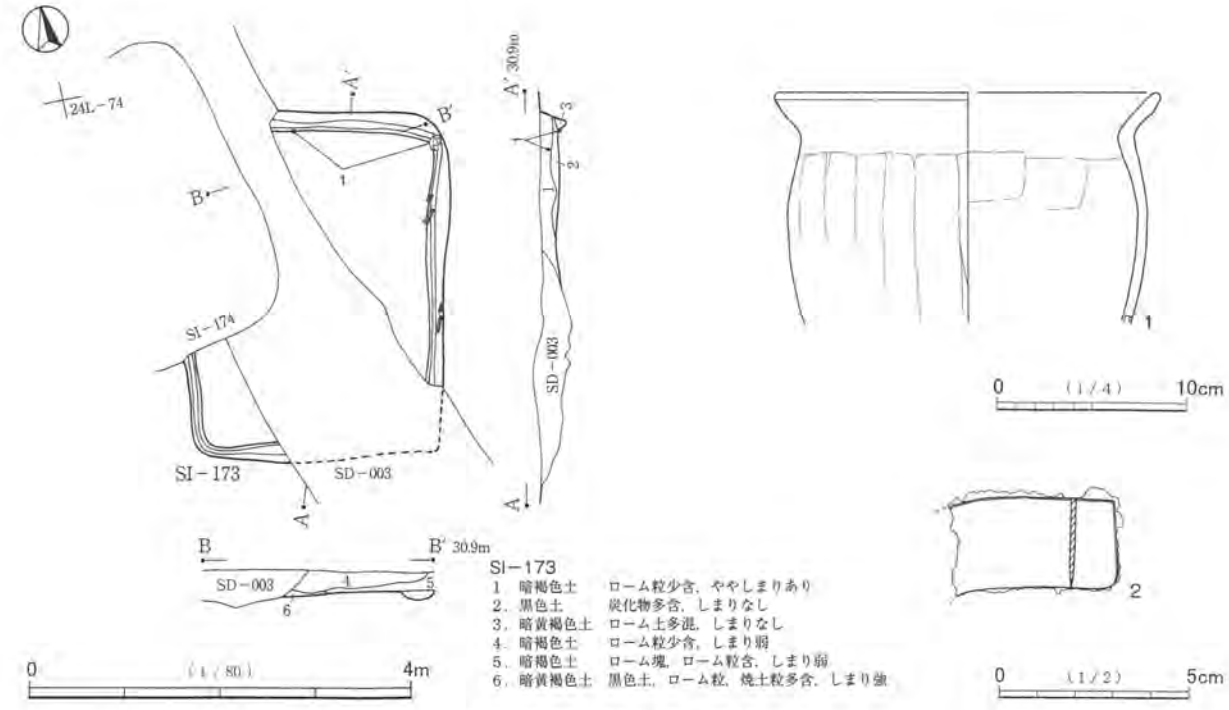
**SI－173**（第200図，図版65）

**位置**　調査区中央やや南側の24L－74グリッドに位置する。

**形状・規模**　長さが3.7m，幅が2.7mの長方形をなす。確認面からの深さは20㎝である。重複する他遺構によってかなり欠損する。遺存部分は北東側と南西隅部である。

**床面**　遺存部分は平坦である。中央が硬化していると思われるが，溝SD－003に切られているため，




第200図　SI－172・173

不明瞭である。

**壁溝**　遺存部分は巡る。本来全周すると思われる。

**カマド**　検出されなかった。北壁・東壁には設置されない。存在する場合，南壁側に付くことは考えにくいため，西壁側と思われる。

**堆積土**　暗褐色土主体である。北側下層は炭化物を多く含む。東壁際から若干の炭化材も出土した。廃材の焼却が考えられるが，顕著な量ではないため，上屋全体ではないと思われる。堆積土が薄いため，やや不明瞭であるが自然堆積と思われる。

**出土遺物**　少量であるが，浅いことと，他遺構の重複による影響が考えられる。図示できた遺物は2点である。1は土師器甕で，在地の土器である。口縁部から胴部中位までの一部の遺存である。器面は荒れており，胴部外面の剥離が目立つ。北壁際の下層から出土した。2は鉄製品である。鎌か，穂摘具に似た製品である。目釘孔が不明瞭なため，穂摘具であるか断定しがたい。薄い作りで，片方の端部側が遺存する。鎌の切先部分の可能性が考えられるが，端部が直線的な部分が長い点が疑問である。鎌でないとすれば，繊維に関わる製品が考えられる。木質が全面の各所に付着しているが，炭化しているものや，不整な方向のものがみられる。近くに炭化材が出土しており，その一部が付着したものであろう。柄の木質ではないと思われる。出土位置は不明である。

**重複遺構**　北西隅側から北東隅側にかけてSD－003が縦断し，本住居を切っている。また北西側でSI－174と重複する。本住居とSI－174の新旧関係が不明である。本住居の出土遺物が少ないためやや不明瞭であるが，出土遺物からは本住居の方が新しいと思われる。

SI－174（第201図，図版66）

**位置**　調査区中央やや南側の24L－73グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.2m，幅が3.6mの横長の方形をなす。確認面からの深さは45cmである。

**床面**　西側が高く，東側が低いが，貼床が東側に厚く施された影響と思われる。貼床を構成する土層はローム主体の暗黄褐色土である。東壁側は掘りかた底面が露呈しており，本来の床面は若干高い位置にある。床面は発掘した面よりも平坦であったと思われる。中央から出入口部周辺にかけて硬化している。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は45cm×30cm，床面からの深さは25cmである。やや縦長の形態である。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖は比較的遺存がよく，しまっている。構築材は山砂を主体とし，概して混じりけが少ないが，基底部側はロームブロックを多く含む。両袖は内側中位が赤色化している。火床部底面は床面からあまり窪んでいない。焼土が多く堆積し，火床面が明瞭である。断面に前天井・後天井の残存と思われる山砂がみられる。

**堆積土**　上層は暗褐色土，中・下層は暗黄褐色土である。上層はローム粒・ロームブロックの含有が少なく，下層は多い。上層の一部に焼土がみられる。上層は自然堆積と思われるが，中・下層が自然堆積か人為的堆積か判然としない。

**出土遺物**　やや少量の遺物が全体的に出土した。図示できた遺物は4点である。1・2は千葉産の須恵器杯，3は非ロクロの土師器杯，4は常総型の土師器甕である。2は口縁・体部の一部を欠損する以外は破損のない遺存良好な土器である。欠損部は逆台形的な弧状を呈し，打ち欠きされたものと思われる。二

次的な被熱により，内面はやや剥離が目立ち，灰白色・黒色・褐色となる部分がある。１・３は遺存があまりよくない。１の底部は比較的よく遺存するが，口縁端部はわずかな遺存である。３は全体に黒褐色の色調を呈する。４は胴部中位に最大径をもつ。

２は中央やや右（東）寄りの中層から正位で出土した。１・４は上・中層からの出土である。

堆積土中・下層が埋め戻されていれば，２の出土状況が祭祀性をもつ可能性があるが，断定しがたい。他の遺物には祭祀的様相がうかがえない。出土遺物はその大半が，廃棄されたか，流入したものと思われる。

**重複遺構**　東側をSD－003が縦断し，本住居を切っている。また南東側でSI－173と重複するが，SD－003が重複部分を切っているため，本住居とSI－173の新旧関係が不明である。ただし出土遺物からは本住居の方が古いと思われる。

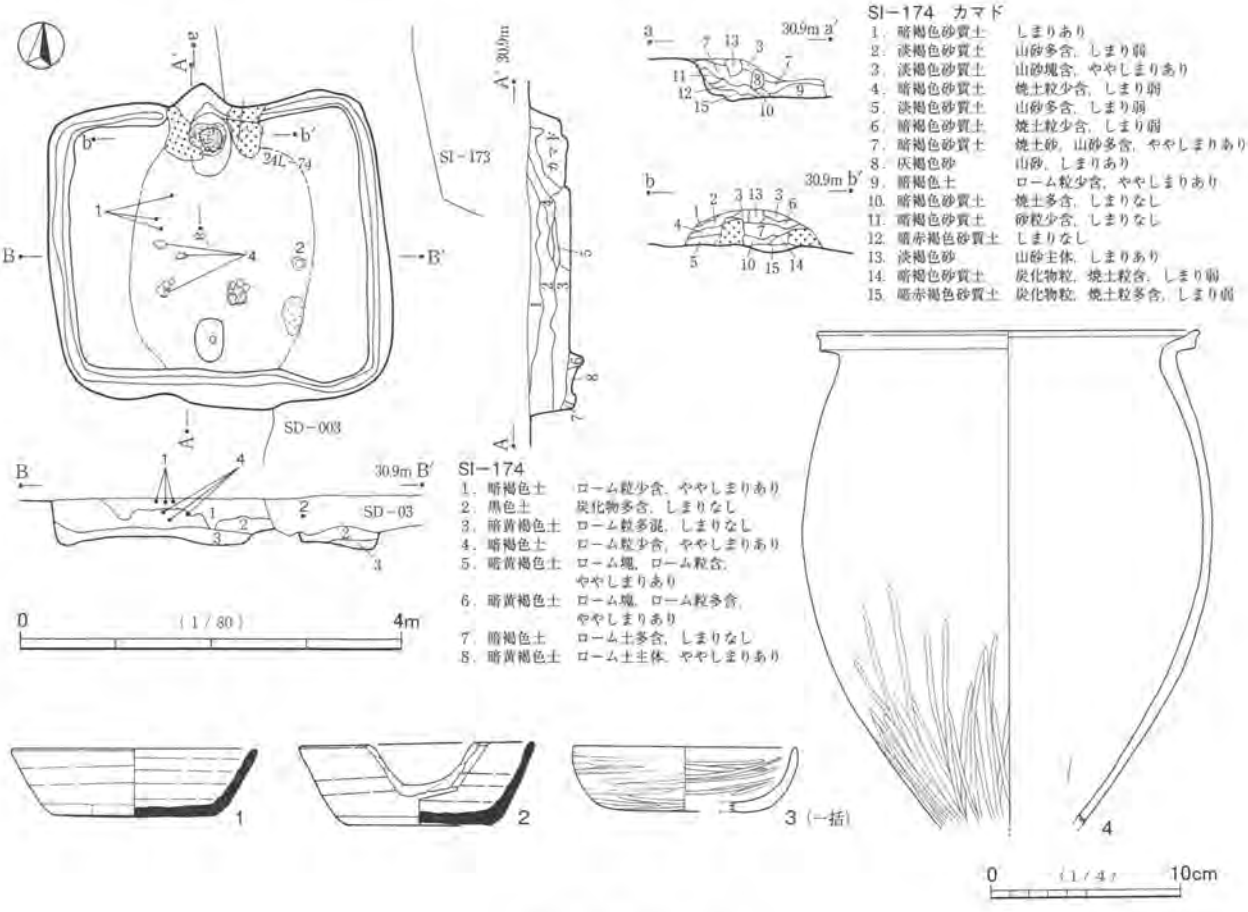
### SI－175（第202図，図版66）

**位置**　調査区南部の24M－83グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.1m，幅が3.4mの方形をなす。確認面からの深さは55cmである。新旧２箇所のカマドがあり，前後（奥）左右の記述は新カマドを奥にして，みた場合のものである。

**床面**　左（南東）側を主体として，広く貼床が施されている。貼床を構成する土層は，ロームブロックを多量に含む黄褐色土層で，堅くしまっている。床面は平坦で，中央が硬化している。掘りかた底面は不明瞭なピットを除けば，左奥隅に近い部分が最も深く，床面から16cmの深さである。

**柱穴等**　右（北西）壁際奥寄りで，ピットが１箇所検出された。径は24cm×18cm，床面からの深さは22




第201図　SI－174

cmである。竪穴内には他のピットが存在しないため，柱穴の可能性は低いと思われる。性格は判然としないが，掘りかた底面の一部かもしれない。

**壁溝**　全周する。左奥（南）隅で広がっているのは，床面を掘りすぎたためである。

**カマド**　付け替え後の新カマドが南西壁中央に位置し，付け替え前の旧カマドが北東壁中央に位置する。南寄りのカマドは数が少ないものである。また旧カマドの対向する壁に設置されるのも同様に例が少ない。ただし周囲に存在するSI－186・SI－259は西カマドであり，若干の関連性がうかがえる。北西壁に作られなかったのは，北方至近の位置にSB－036が存在したためかもしれない。なお周囲には，北カマドの竪穴の他，東カマドの竪穴もみられる。時期を考慮していないが，バラエティに富んでいる。

旧カマドは方形プランからの突出が小さい。両袖等の構築体は除去されており，遺存しない。壁際の堆積土をみると，中層に山砂が多く，下層に焼土が多い。

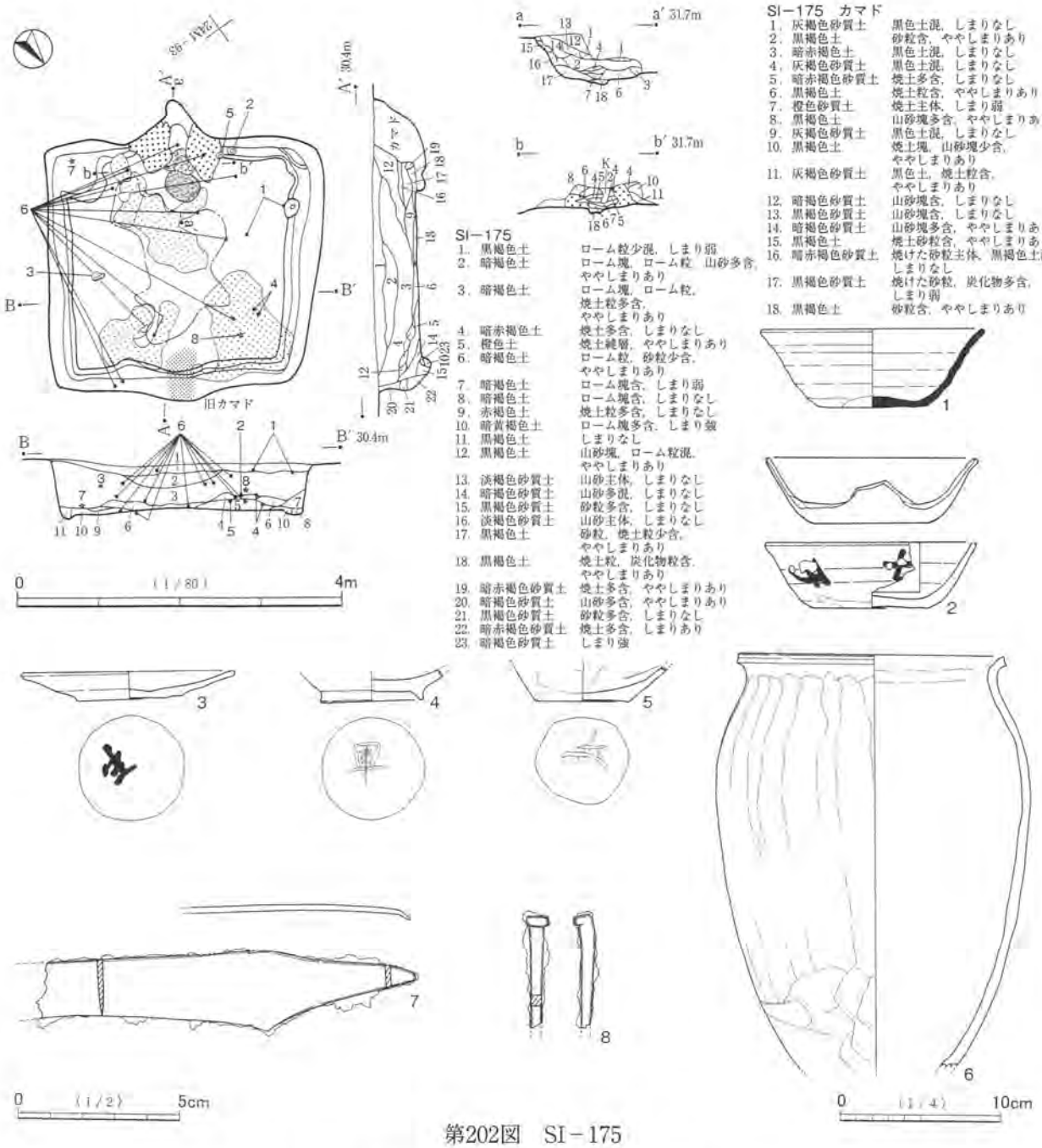
新カマドは方形プランから三角形状にやや大きく突出する。両袖は比較的遺存がよい。構築材は山砂を主体とし，下部を除いて混じりけが少なく，しまっている。下部はロームブロックを含む黒褐色土である。火床部には焼土の堆積がみられるが（７層），底面よりやや高い位置である。底面上は山砂を含む黒褐色土が堆積し，やや奥側と前側には炭化物も多くみられる。火床部底面は中央が床面よりも若干窪んでいるが，規模は小さい。カマド下は当初の壁溝が巡っている。新カマドはその部分の壁溝を埋め戻し，新たに床を貼った後に，構築されている。

**堆積土**　焼土が床面・下層に広く堆積しているが，壁際の堆積土にのっており，竪穴中央に向かって緩やかに傾斜した状態で検出された。顕著な炭化材がみられないことから，主柱等上屋の主要な構築材は焼却されていないことが考えられる。埋め戻されているのでなければ，竪穴廃棄直後ではなく，廃棄後しばらくして不要物を焼却したものと思われる。焼土上の堆積土は，暗褐色土・黒褐色土主体である。上層を除いてロームをやや多く含むが，レンズ状に堆積しており，焼却後は自然堆積と思われる。

**出土遺物**　かなり多量の遺物が全体的に出土した。図示できた遺物は８点である。１は千葉産の須恵器杯である。２～４はロクロ土師器で，２は杯，３は皿である。４は高台付皿と思われる。５・６は土師器甕で，５は小型品である。ともに在地の土器である。７・８は鉄製品で，７は刀子，８は釘である。

１は底部外面に焼成前の１条線がある。ヘラ書きで，「＋（×）」とも思われるが，かなり不明瞭であり，製作時の痕跡としておく。２は体部外面に「手」・「七」と書かれた二字の墨書がある。ともに横位の墨書で，やや離れたところに位置する。口縁・体部は大きく1/2程度が欠損する。大きな欠損部の破断面は丸みをもつ「W」字状である。その欠損部以外は比較的遺存がよく，口縁端部に小さな逆三角形状の欠損がある以外は割れていない土器である。欠損部は打ち欠きされたものと思われる。「七」は欠損部にかかっている。墨書周辺の器面はかなり剥離が目立ち，「手」にも及んでいる。二次的な被熱と思われるが，土器の焼成は良好で，器面が滑らかである部分も多い。３は底部外面に「生」の墨書がある。口縁・体部の1/4弱が逆台形状に欠損する以外は割れていない，かなり遺存良好な土器である。欠損部は打ち欠きされたものと思われる。高台は付かないが，底部全体がわずかに突出している。４・５は底部周辺の破片である。４は底部外面に「里」のヘラ書きがある。「里」の縦線は一番下の横線を突き抜けている。内面が荒れて，一部剥離している。５は底部外面にヘラ書きがある。「キ」状または「中」状であるが，浅いためやや不明瞭である。文字ではなく，記号と思われる。底部外面はナデが施されている。

６は胴部外面の黒みが強い。焼成良好な土器である。




第202図　SI－175

7は切先側を欠損するが，刃部の途中から茎尻まで遺存する。刃関・背関とも直角の関を形成せずに，茎に移行する。刃側は茎との境がやや尖っている。茎は短い。刃部の根本側が広いが，茎尻は尖っており，長三角形状の形態を呈する。8は細身の釘である。頭部が遺存するが，先端側を欠損する。

2・5はカマド右袖外脇の中・下位層から出土した。2がやや高く，5がやや低い位置である。2は正位，5は倒位での出土である。3は中・上位，4は中・下位からの出土である。7は左奥隅の下層から出土した。6はカマド内から中央・前壁際まで広域に散っている。出土層位は床面から上層に及ぶが，中層を主体とする。

2・5はカマド近くからの出土であるが，床面からやや高い位置であるため，祭祀性をもつ状況か断定しがたい。他の遺物も特に祭祀的様相はうかがえない。出土遺物はその大半が，廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－176（第203図，図版66）

**位置**　調査区南部の24M－74グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.6m，幅が3.5mの方形をなす。確認面からの深さは20cmである。新旧２箇所のカマドがあり，前後（奥）左右の記述は一部を除いて新カマドを奥にして，みた場合のものである。

**床面**　中央から西側がSI－178と大きく重複し，その堆積土中に構築されたため，その部分の床面をわずかに掘りすぎていると思われる。重複していない部分の床面は平坦である。中央が硬化している。

**柱穴**　主柱穴・出入口ピットともに検出されなかった。出入口ピットが存在した場合，SI－178の堆積土中となるため，検出が難しいと思われる。

**壁溝**　SI－178と重複しない部分は巡っている。SI－178と重複する部分は不明であるが，巡ると思われる。本来全周するものであろう。

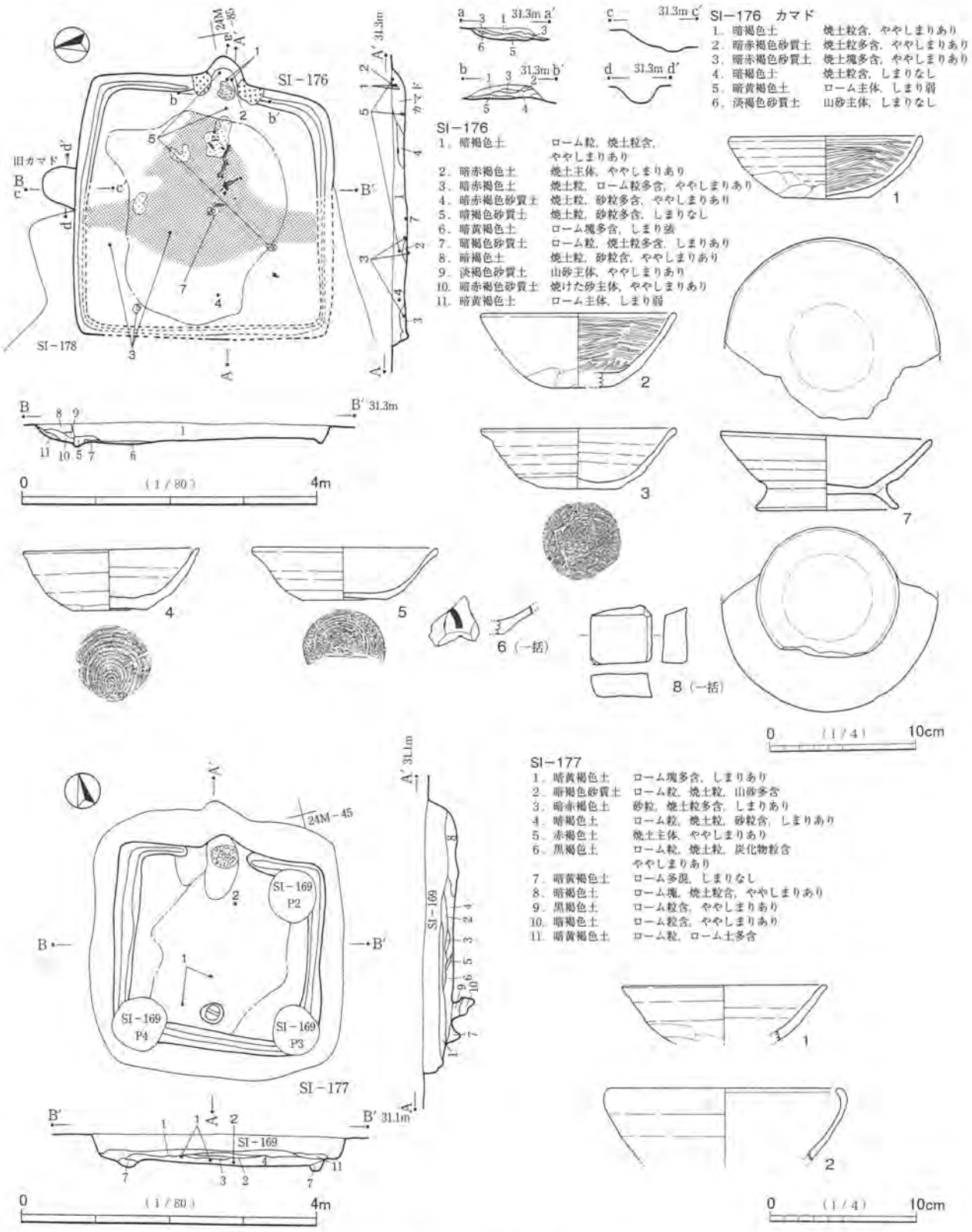
**カマド**　付け替え後の新カマドが東壁中央に位置し，付け替え前の旧カマドが北壁やや東（旧カマドからみて右）寄りに位置する。方形プランからの突出はともにやや大きい。旧カマドの構築体は除去されているが，その部分の堆積土に若干の山砂，焼土がみられる。カマド底面には径30cm，床面からの深さ10cmの窪みがある。使用に伴う窪みか火床部分の掘りかたと思われる。新カマドの両袖は遺存するが，あまり良好な状態ではなく，上部と前側がかなり流失している。火床部底面には焼土が堆積し，煙道部壁面にかけて赤色化している。火床面はほぼ左右に壁溝をみる位置にある。底面は床面と同じ高さであり，窪んでいない。カマド内堆積土は中位に焼土が多くみられる。

**堆積土**　山砂が新旧のカマド前から中央の床面を主体として，広く堆積している。カマド構築材が流出したものであろう。また炭化材が新カマド前方から中央にかけてみられ，焼土も新旧カマド前方に堆積している。ただし焼土・炭化材の分布はあまり多くない。その上部の主要な堆積土は，ローム粒・焼土粒を含む暗褐色土である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　堆積土の遺存が少ないわりには，比較的多くの遺物が出土した。図示できた遺物は８点である。１～６はロクロ土師器杯，７はロクロ土師器高台付杯で，８は砥石である。

６は体部から底部にかけての小片である。体部外面に墨書があるが，判読できない。３は遺存がよく，欠損は口縁・体部のごく一部である。遺存部分は一部がやや細かく割れている。土器だけでは，欠損・破損が意図的なものか断定しがたい。７はまだ若干低いが，やや足高の高台をもつ。かなり遺存がよく，欠損は口縁・体部と高台の一部である。杯部の欠損は逆三角形状である。欠損部に続く一部が割れて接合している。欠損部と破損部を合わせると，口縁・体部の1/2弱である。二次的な被熱により，内面の荒れが著しい。また黒く焦げた部分が多い。２は部分的な遺存，１・４・５も良好な遺存ではない。４は口縁部の多くを欠き，端部の遺存はわずかである。遺存する口縁・体部は２片に割れて，底部を含む破片と接合する。欠損部の破断面は概ね水平であり，打ち欠きされた可能性がある。４の底部は回転糸切り後無調整であるが，１・２は手持ち，３・５は回転ヘラケズリが施されている。４も体部下位の調整は手持ちヘラケズリである。１・２の内面はヘラミガキが施されている。体部が丸みをもち，椀的な器形である。

８の石材は流紋岩である。やや硬い質感である。方柱状の砥石で，遺存は一部である。小口面は遺存しないが，他の４面は遺存する。図示した平面図の広い面は折損面であり，使用されていない。図示していない裏側も同様である。図上側の面はかなり斜めであり，上面と思われる。上下面・左右両側面とも平滑である。両側面と下面との境は角が取られ，わずかな面や丸みをもつ。上面と左側面との境は角張るが，




第203図　SI－176・177

右側の角は欠けている。

7は中央の床面から正位で出土した。3は主として前壁際左寄りの床面から正位で出土した。中央と左壁際にやや広く散っている。5は主として中央やや右前寄りの床面から倒位で出土したが，カマド内まで広く散っている。1・2もカマド内からの出土である。4は前壁側中央下位の出土である。

SI－178との重複により，右前（南西）隅部がやや不明瞭であるが，7の平面位置は対角線を結ぶ交点，すなわち本竪穴の中心点とみてよいものである。この出土状況から，土器の欠損・破損部は打ち欠き・打ち割りされたものと思われる。出土状況と土器の状態を合わせて，竪穴住居廃棄の祭祀に関わる遺物と思われる。その際に火を焚く行為が行われたと思われ，単なる廃材の焼却だけではなかった可能性が高い。山砂の分布も，意図的にカマドを破壊した可能性が考えられる。想像をたくましくすれば，7の上部に何らかのものを盛った状態で，燃やされたことも考えられる。3は7とセットの可能性があり，出土層位や遺存度にやや難点があるが，4・5もその可能性が考えられる。1・2はカマド内出土であるが，セットになるか判然としない。その他の多くの土器破片は単に廃棄されたか流入したものであろう。

**重複遺構**　西側で大きくSI－178と重複し，本住居がその上部を切っている。

**SI－177**（第203図，図版67）

**位置**　調査区南部の24M－44グリッドに位置する。SI－169の床面下から検出された遺構である。

**形状・規模**　長さが2.7m，幅が2.9mの方形をなす。確認面からの深さは40cmであるが，SI－169の床面までの上部20cm分は欠損している。SI－169の床面から本竪穴の床面までは20cmである。やや平行四辺形的な形態である。

**床面**　東側がやや低く，西側がやや高い。ハードローム層に達しており，全体に硬質であるが，中央がより硬化している。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は30cm，床面からの深さは29cmである。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央に位置する。袖部等の構築体は遺存しない。また煙道部側の壁もSI－169に切られ，遺存が悪い。そのため方形プランからどの位突出するか判然としない。火床部底面には，やや赤色化した範囲がみられる。床面よりも若干窪んでいるが，あまり深くはなく，灰のかき出し程度のものであろう。

**堆積土**　上層はSI－169の床面を構成する土層であるため，SI－169構築時の影響を受けている。下層はローム粒を含む暗褐色土である。中位に焼土粒を多く含む土層がみられる。埋め戻されているか，自然堆積であるか判然としない。

**出土遺物**　少量で散在的な分布である。図示できた遺物は2点である。1はロクロ土師器杯である。2は鉄鉢形土器である。ロクロ土師器と思われるが，千葉産の須恵器の可能性も若干考えられる。いずれも小片である。

**SI－178**（第204・205図，図版67）

**位置**　調査区南部の24M－74グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.2m，幅も4.2mの方形をなす。確認面からの深さは60cmである。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。南東隅は床面を掘りすぎたが，隅部の掘りかた底面がやや深い影響を受けたためである。壁側を主体に貼床が施され，床面を構成する土層は若干の暗褐色土を含む。特に隅部はその含有がやや多い。

**柱穴**　主柱穴が4箇所検出された。また出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は52cm×46cm，床面からの深さは27cmである。カマド側の主柱穴P1・P2は北壁際に位置する。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央に位置する。全体的に方形プランから大きく突出する。両袖の遺存はあまり良好でな

い。両袖内側はやや赤色化し，火床部はかなり赤色化している。カマド底面は火床面の中央から前側が，床面よりもかなり深く，また広く窪んでいる。カマド使用によることと掘りかた底面のどちらか，または双方とも考えられる。カマド内堆積土は火床面部分に焼土を多く含み(12層)，その奥側は炭化物を含む(18層)，12層の手前側の窪んだ部分はローム粒を含み（17層)，12層はその上にのっている。窪んだ部分がかなり埋まった状態で，カマドが使用されたことがわかる。

**堆積土**　床面上で，炭化物・焼土が検出された。分布は特に南壁側中央に顕著である。中・上位にロームブロックを多量に含み，しまりのある土層が堆積している（２層)。上層の１層については判然としないが，２層までは埋め戻されていると思われる。

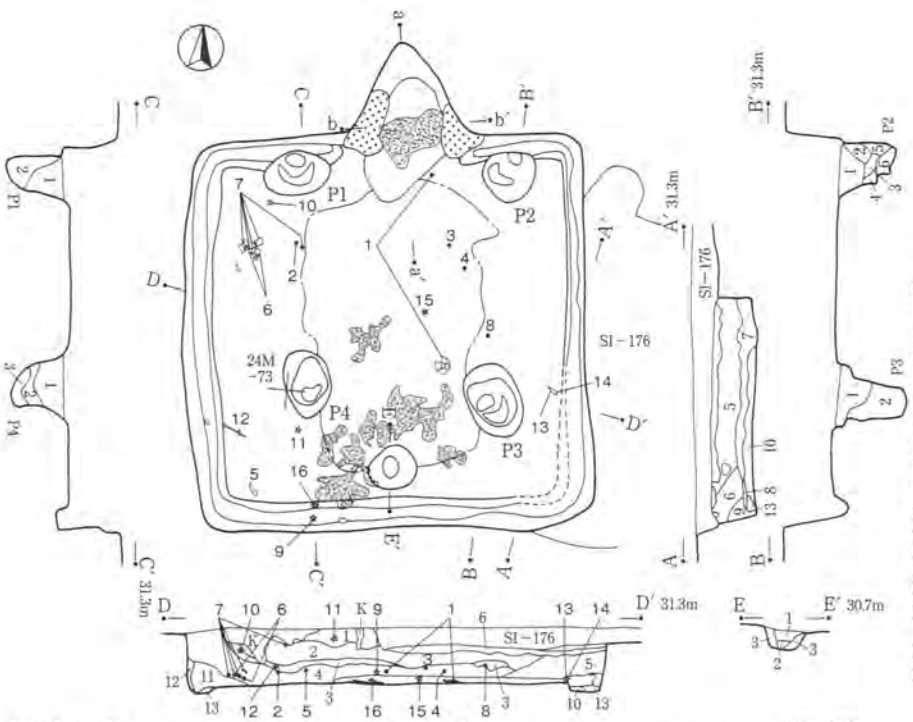
**出土遺物**　竪穴全体からやや多量に出土した。図示できた遺物は16点である。１はロクロ土師器杯としたが，千葉産須恵器の可能性もある。２・３はロクロ土師器皿である。４・５・８は千葉産の須恵器で，４・５は甕または甑，８は甑である。６・７は小型の土師器甕で，在地の土器である。９～15は鉄製品である。９・10は刀子である。11は穂摘具と思われる。12は紡錘車，13～15は釘である。16は鉄滓で，椀形滓である。

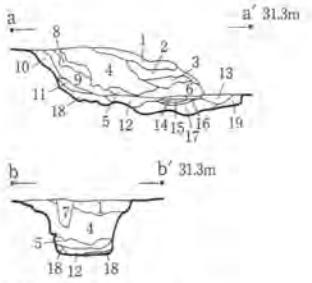
２は内面に「本」の墨書がある。やや小さい破片であるが，墨書の欠損は少ない。１は欠損部が少なく，遺存の良好な土器である。欠損部は口縁・体部の一部を主とするが，接合部分もわずかな隙間がある。口縁部の欠損は逆三角形状であるが，隣の接合破片と合わせると弧状の形態である。他の遺存部は５片に割れている。これらが意図的であることも考えられるが，断定しがたい。２以外では，７の遺存が一部でよいが，他は部分的な遺存である。

６は器面がかなり荒れている。７は胴部下位から底部の遺存が少ないが，上部はやや遺存がよい。特に口縁部は3/4弱遺存する。６・７とも器壁が薄い。８の把手は方台状で，比較的整った作りである。

９は厚みがあり，短刀または小刀型の大型の刀子である。茎を主体とする破片で，身は茎寄り部分がわずかに遺存する。柄の木質が茎の中央付近から茎尻まで，よく遺存する。そのために茎尻付近の形態がやや不明瞭である。身の断面は錆膨れのため，想定される厚さの復元形である。刀子または小刀の柄部分を主とする破片である。茎尻まで遺存するが錆膨れのため，やや不明瞭である。刃関は深いが，斜めに作り出される。背関は錆のため判然としない。存在しても浅いと思われる。10は身の破片である。切先から茎近くまで遺存すると思われる。刃部は若干曲がっている。切先は三角形状の形態である。11は穂摘具の目釘孔付近の破片と思われる。しかし背側から刃側と思われる方向が「く」の字に湾曲しているため，やや断定しがたい。目釘孔の形態はやや角張る円形であるが，孔の部分で破損している。穂摘具であれば，刃先は欠損していると思われる。12は軸の下部末端側を欠損するだけで，遺存のよい紡錘車である。しかし錆の進行が進み，非常にもろくなっている。紡軸の上部先端は短く曲がっており，糸を掛けるための鉤がみられる。紡輪上や紡軸には，巻き付いた糸が若干遺存している。紡輪上から鉤までの紡軸の長さは19.6㎝である。孔形及びその部分の紡軸の断面形は不明瞭である。紡軸の断面は基本的に方形であるが，紡輪部分は図の想定よりも若干丸みをもつ可能性がある。13は頭部を「Ｌ」字形に折り曲げた角釘で，ほぼ完形品である。先端側でわずかに木質が付着している。頭部を上からみた形は長方形である。14は小型の釘である。頭部が遺存するが，先端を欠損する。木質が多く付着している。15も頭部側が遺存する。断面は13と14の中間の大きさである。16は椀形の鍛冶滓である。表面の一部に炭化していない木質が付着している。

１は主として中央やや南東寄りの床面から正位で出土した。一部の破片がカマド前側に散っている。図示した遺物の平面位置は散在的で，特にまとまった状況はみられない。ただし鉄製品のうち，９・12・



SI－178　カマド

1．暗褐色砂質土　砂塊，焼土粒，ローム粒少含，ややしまりあり
2．暗褐色土　ローム粒，砂粒含，ややしまりあり
3．暗褐色砂質土　砂塊，焼土粒，炭化物流多含，しまり弱
4．暗褐色土　砂粒，焼土粒，炭化物流，ローム粒含，しまり弱
5．淡褐色砂質土　焼土粒含，ややしまりあり
6．黄褐色土　ローム塊主体，しまりあり
7．黒褐色土　砂粒少含，しまり弱
8．暗褐色砂質土　焼土粒，砂粒多含，しまり弱
9．淡褐色砂　山砂主体，ややしまりあり
10．暗褐色砂質土　ローム粒含，しまり弱
11．暗褐色砂質土　焼土粒，炭化物流多含，しまり弱
12．橙色砂質土　焼けた山砂塊主体，しまりあり
13．暗黄褐色砂質土　ローム塊，焼土塊含，しまり強
14．黒褐色砂質土　焼土粒，炭化物流含，ややしまりあり
15．灰褐色砂　山砂主体，しまり弱
16．暗赤褐色砂質土　焼けた山砂と暗褐色土混，しまりなし
17．暗褐色砂質土　焼土粒，ローム粒含，しまりなし
18．暗褐色砂質土　炭化物粒含，しまり弱
19．暗黄褐色砂質土　ローム塊，山砂塊，炭化物粒，焼土粒含，しまり強

SI－178　P1

1．黒褐色土　焼土粒，ローム粒，炭化物含，しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム塊多含，ややしまりあり

SI－178　P2

1．黒褐色土　ローム粒，焼土粒含，しまり弱
2．暗黄褐色土　ローム塊少含，しまり弱
3．黒褐色土　焼土粒少含，しまり弱
4．暗褐色土　ローム粒含，しまり弱
5．暗黄褐色土　ローム塊含，しまり弱
6．暗黄褐色土　ローム塊主体，ややしまりあり

SI－178　P3

1．暗褐色土　ローム粒，焼土粒，砂粒，炭化物粒含，ややしまりあり
2．暗黄褐色土　ローム塊均等かつ多含，ややしまりあり

SI－178　P4

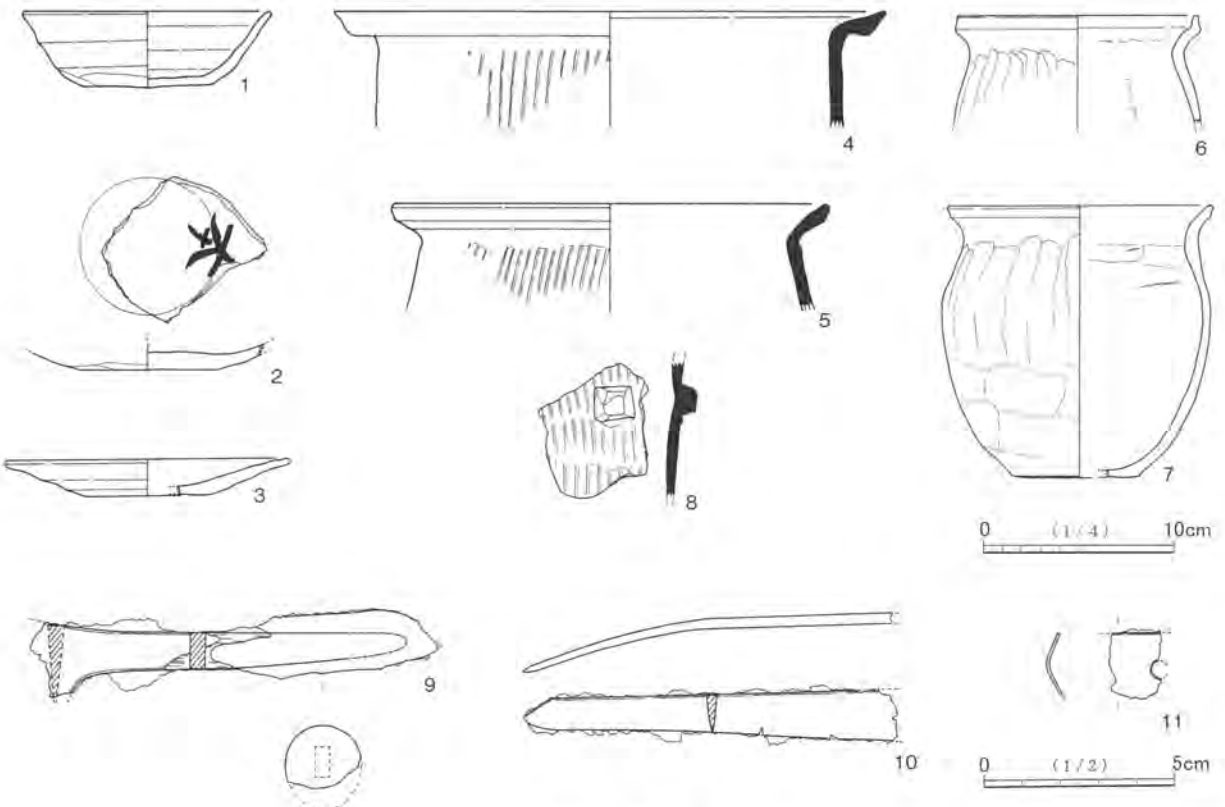
1．暗褐色土　ローム塊，焼土粒，炭化物多含，しまりなし
2．暗褐色土　ローム粒含，しまりなし
3．暗黄褐色土　ローム塊主体，しまりあり

SI－178　E－E′

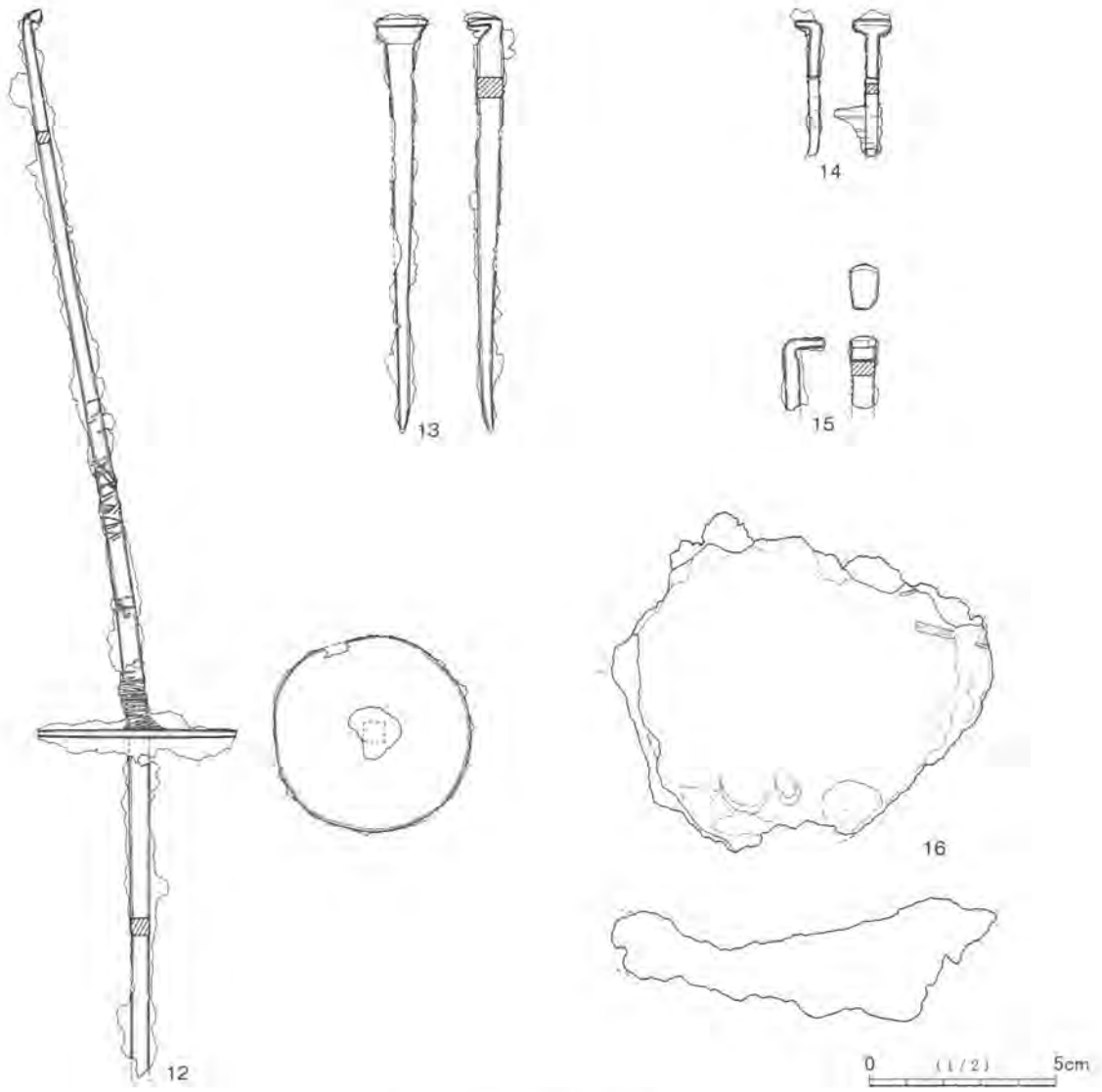
1．暗黄褐色土　ローム粒，焼土粒多含，しまり弱
2．暗褐色土　ローム粒少含，しまりなし
3．暗黄褐色土　ローム塊含，しまりあり

SI－178

1．暗褐色土　ローム塊，焼土粒，炭化物粒含，ややしまりあり
2．暗黄褐色土　ローム塊多含，しまり強
3．黒褐色土　炭化物多含，ローム粒含，ややしまりあり
4．暗黄褐色土　ローム塊，焼土粒，炭化物粒多含，しまり強
5．暗褐色土　ローム塊多含，しまりあり
6．暗褐色土　ローム粒，焼土粒含，しまり弱
7．暗黄褐色土　ローム塊主体，暗褐色土混，しまりあり
8．暗灰色砂質土　山砂多含，しまり弱
9．黒褐色土　ローム粒少含，しまり弱
10．暗黄褐色土　ローム塊多含，しまり強
11．黒褐色土　ローム粒含，しまり弱
12．暗黄褐色土　ローム主体，しまりなし
13．暗黄褐色土　溝の埋設土




第204図　SI－178（1）




第205図　SI－178（2）

13・14は壁際から出土し，鉄滓の16も同様である。また10も比較的壁に近い位置である。出土層位をみると，１以外では，13～16が床面であり，９も下層からの出土である。ただしこれらは鉄製品・鉄滓であり，遺物の比重が大きいことが影響しているかもしれない。また中上位まで埋め戻されているならば，あまり出土層位の差を考慮する必要がないかもしれない。

１は若干の祭祀的様相をもつ可能性があるが，断定しがたい。他の遺物にも祭祀的様相をもつと断定できるものはなく，大半が廃棄されたか流入または再流入したものと思われる。

**重複遺構**　東側で大きくSI－176と重複し，本住居が切られている。ただしSI－176が浅いため，本住居の欠損は上部に留まる。

**SI－179**（第206図，図版67）

**位置**　調査区中央南側の24M－03グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.9m，幅が3.2mの方形をなす。確認面からの深さは35cmである。全体を確認できるが，耕作機械による撹乱が著しい。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

柱穴　主柱穴・出入口ピットともに検出されなかった。

壁溝　東壁中央が不明であるが，撹乱による影響であり，本来全周すると思われる。

カマド　西壁中央に位置する。煙道部側が方形プランから若干突出する。撹乱により遺存が悪い。特に左袖前側と右袖壁側は影響を受けている。両袖内側はやや赤色化した部分が遺存している。火床部は赤色化した面がみられない。底面は床面よりもかなり深く窪んでいる。使用によることと掘りかた底面のどちらか，または双方とも考えられる。カマド内堆積土は最下層が黒褐色土で（4層），焼土・炭化物はその上層（3層）に多くみられる。

堆積土　暗褐色土・黒褐色土を主体とし，下層はローム粒を多く含む。やや判然としないが，自然堆積と思われる。

出土遺物　図示できた遺物は6点である。1は千葉産の須恵器杯，2はロクロ土師器杯，3は千葉産の須恵器甕，4は在地の土師器甕，5は土製支脚，6は軽石である。

1は遺存があまりよくない。2はかなり遺存のよい土器であるが，細かく割れている。破損に意図的な様相をみるのは難しい。内面は二次的な被熱により，底部から体部下位にかけて黒ずんでいる。また赤色化した部分もみられる。3は口頸部が延び，胴部が膨らむ器形の甕である。頸部は同種の器形のなかでも，かなり長い方である。口縁端部から胴部下位まで遺存するが，全体の遺存は多くない。二次的な被熱により，色調が黒色・褐色・灰黄色に変色する部分がみられる。特に胴部外面上位の黒色化が顕著である。内面も荒れ，部分的に剥離している。4はやや遺存のよい土器で，口縁部から底部までみられる。特に口縁部は3/4弱が遺存する。色調は黒みを帯びる部分が多い。なお胴部の接合破片の一部が隣接する破片と色調が異なっており，破損した後に火を受けたものと思われる。3・4は撹乱を受けていなければ，より遺存がよかったと思われる。

5はほぼ完形であるが，かなり短い支脚である。6は全体的に黄褐色の色調を呈するが，被熱痕跡ではないと思われる。

5はカマド内奥側の下層から，倒れた状態で出土した。平面位置はかなり奥に寄っており，やや断定しがたいが使用時の位置ではないと思われる。4は5の周囲及び前方からまとまって出土した。出土層位も5と同様に下層を主体とするが，口縁部等の破片は上層に及ぶ。3は主として，中央右寄りの下層から出土したが，一部がカマド内上層及びカマド右外脇下層に散っている。2は前（東）壁際やや右寄り上層から出土した。図示しない土器片の出土量はやや多量である。全体的に出土したが，カマド周辺に多い。

4・5は本住居で使用されていたものが遺棄されたと思われる。また3もその可能性が考えられる。2は他所からの廃棄の他，上方から落下した可能性も考えられる。

重複遺構　南側でSI－192と重複し，本住居が切っている。また東側はほぼSI－171に接している。確認面よりも上部で重複したと思われる。遺物からはSI－171が若干古いように思われる。

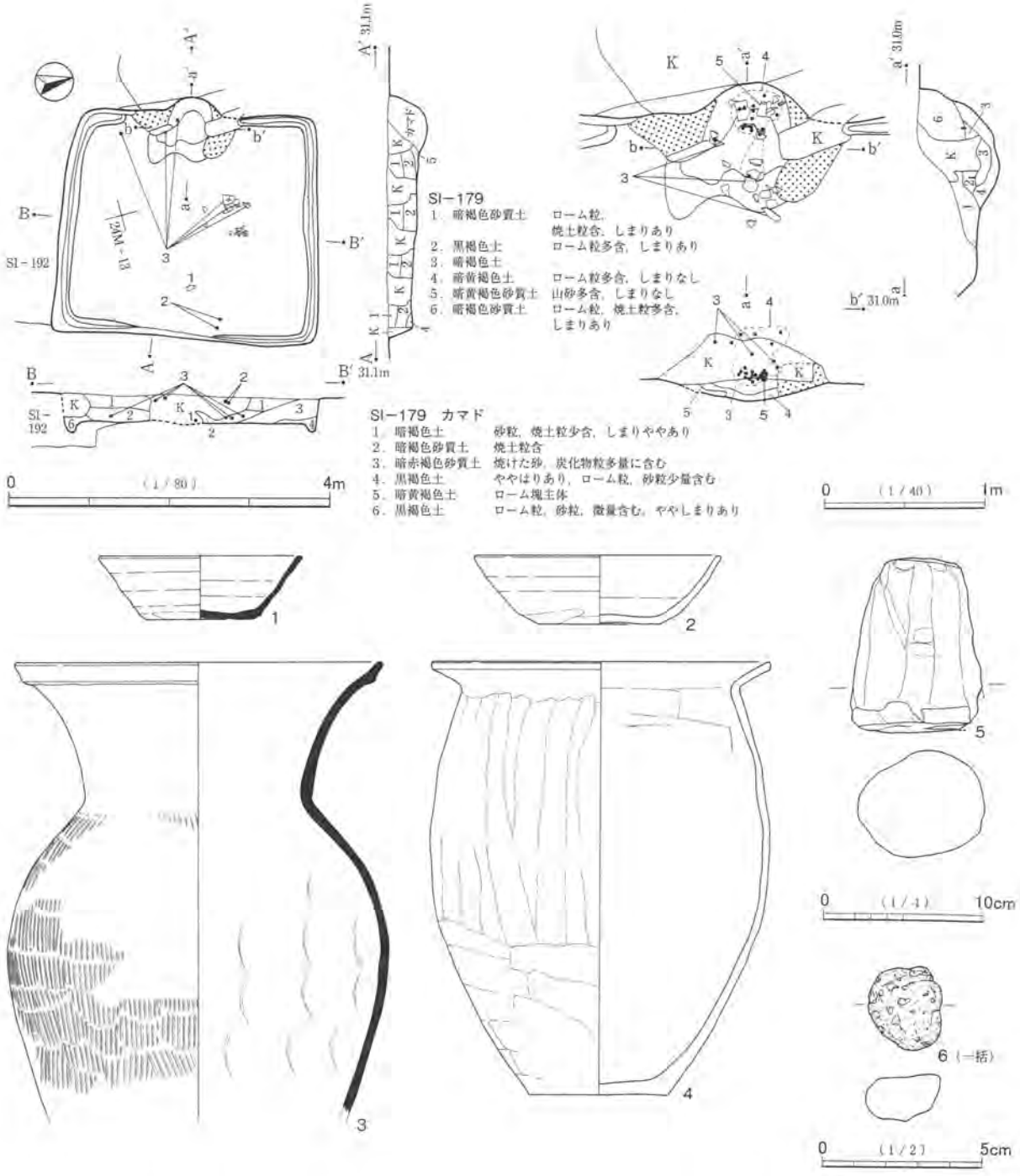
SI－180（第207図，図版68）

位置　調査区中央の24L－72グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.4m，幅も3.4mの方形をなす。確認面からの深さは45cmである。

床面　ほぼ平坦で，中央が硬化している。壁際はやや軟質で，暗褐色土が混じるが，深く掘り込まれてはいない。

柱穴　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は45cm×30cm，床面からの深さは9cmである。




第206図　SI－179

**壁溝**　西壁の北西隅寄りで巡らないが，その他は巡る。この部分の床面をやや掘りすぎたと思われ，本来は全周であろう。

**カマド**　北壁右寄りに位置する。方形プランからの突出は小さい。遺存は良好で，やや落ちているが前天井部もみられる。構築材は山砂を主体とし，両袖の下部を除いて混じりけが少ない。また堅くしまっている。両袖の下部はロームを主体とし，基底部は地山が掘り残されている。両袖内側は顕著に赤色化し，前天井の下側も赤色化した部分が遺存している。火床部底面も被熱痕跡が明瞭である。ただし焼土主体の土層（7層）は底面よりもわずかに高い位置にある。また炭化物が焼土範囲の前方で多くみられる。最下層は暗褐色土の含有も多い。火床部底面は床面よりも若干窪んでいるが，あまり深くはなく，灰のかき出

し等の使用によるものであろう。

堆積土　暗褐色土・黒褐色土主体である。中層に焼土を多く含む土層があり（２層），竪穴の中央からやや南側に集中範囲がみられる。焼土が堆積するが，全体的にみて自然堆積と思われる。

出土遺物　やや多量の遺物が竪穴全体から出土した。図示できた遺物は14点である。１は須恵器蓋，２～７は須恵器杯である。８・９はロクロ土師器杯，10は千葉産の須恵器甕または甑である。11～13は土師器甕である。12は常総型，11・13は在地の甕で，11は小型品である。14は石製の紡錘車である。

１～７の須恵器のうち，３～７は千葉産である。１は白雲母末を含むと思われることから新治窯産と思われる。しかし器面の色調が暗黄灰色，断面の色調が内部は灰色，内外面側が褐色であり，千葉産の須恵器的である。判別が難しいが，新治窯産としておく。時期的にやや古いようにも思われる。やや大型の蓋で，遺存はつまみから口縁部までの一部である。２もやや判然としないが，新治窯産と思われる。口縁・体部の欠損は２箇所ある。１箇所は「W」字的な欠損であり，打ち欠きとも思われるが，他の１箇所は大きく不整に欠損しているため，意図的なものか断定しがたい。４は朱墨が体部外面と底部外面にあるが，ともに判読できない。前者は横位に記入され，欠損はしていない。後者は欠損部にかかり，遺存が悪い。底部外面にはヘラ書きもあるが，欠損部にかかっている。６は口縁部の3/4を欠損する。欠損部の破断面は比較的水平である。打ち欠きされた可能性が考えられるが，やや断定しがたい。褐色化・黒色化する部分があり，二次的な被熱と思われる。

８は口縁・体部の一部を逆三角形状に欠損するが，かなり遺存のよい土器である。欠損部に続く口縁・体部が小さく割れて接合するが，双方合わせた形態が弧状を呈する。その他は割れていない。欠損・破損箇所の口縁部は口縁部周のちょうど1/3である。以上から欠損・破損部は打ち欠き・打ち割りされたものと思われる。内面を主体に器面が荒れ，口縁部外面がやや褐色化するなど，二次的に火を受けたと思われる。９も二次的な被熱により，器面が赤色化・黒色化する部分がある。また内面に剥離の目立つ部分がある。外面も一部に剥離がある。２～９の杯は，８の遺存が最もよく，他のものは８に及ばない。

11は図示した口縁部から胴部中位までの遺存がかなりよい。破断面はやや水平的で，凹凸の差は少ない。胴部の器壁が非常に薄い。10・12・13は器形の大きさからみると，遺存は部分的である。

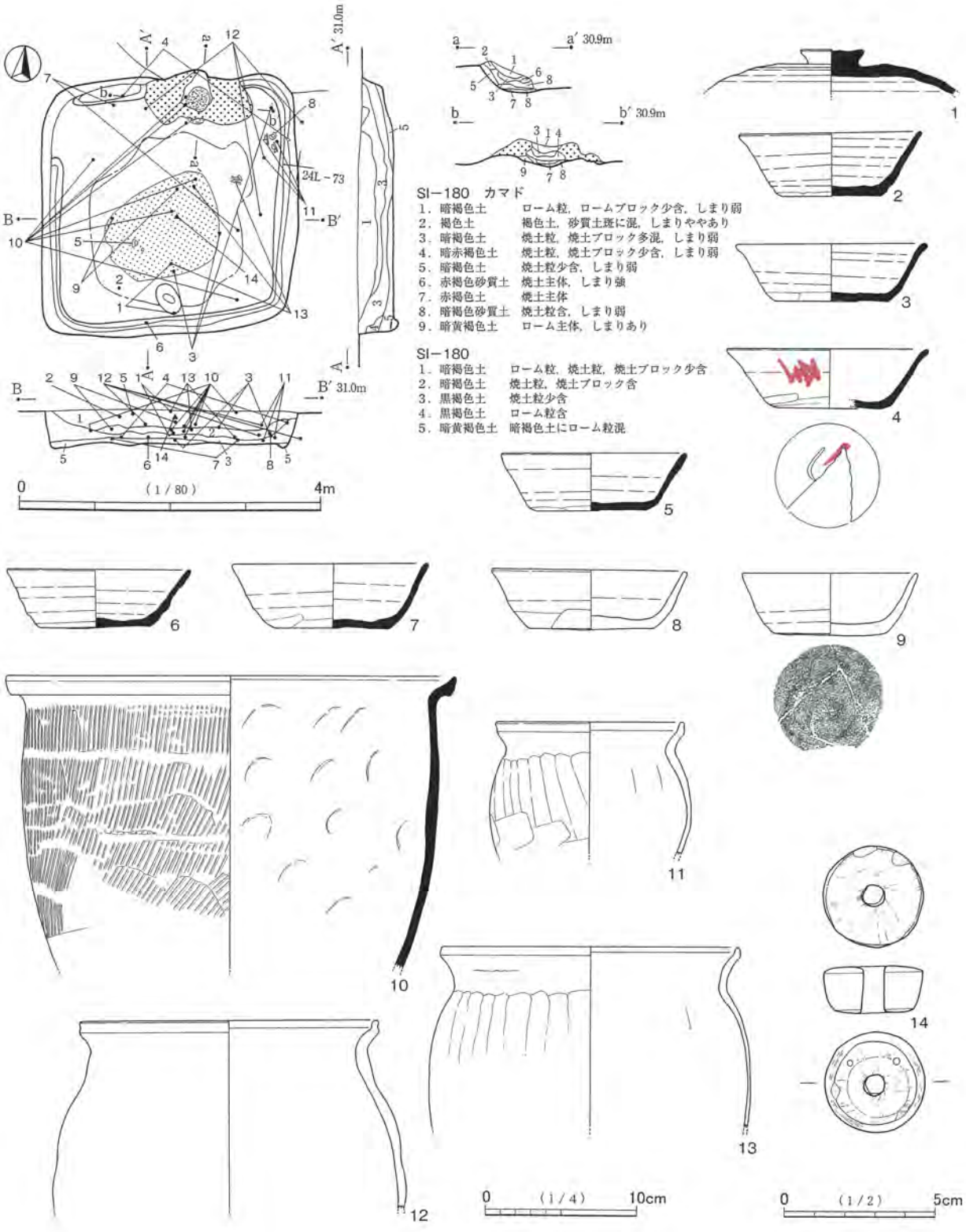
14の石材は滑石である。上下面の周縁の一部が欠損するが，ほぼ完形である。

６は南壁際下層から傾きのない正位で出土した。８は右壁際下層から出土した。正位と思われるが，やや判然としない。６・８とも下層であるが，床面からは若干浮いている。祭祀的様相をもつ可能性があるが，出土層位・他の遺物の状況からみて断定しがたい。ただし祭祀的でなくても，本住居に遺棄された可能性は考えられる。朱書等をもつ４は散っており，出土層位も下層・上層であることから，祭祀的状況と認めがたい。その他の出土遺物の層位は，床面から上層にわたっている。また平面位置も広く散っているものが多い。６・８等一部の遺物が判然としないが，大半の遺物は周囲から廃棄されたか，流入し続けたものと思われる。

SI－181（第208図，図版68）

位置　調査区中央の24L－82グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.7m，幅が3.8mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。北隅がやや張り出し，北西（左）辺がやや長い形態である。耕作機械による撹乱を全体に受けているが，床面には達していない。




第207図　SI−180

**床面**　南隅側がやや高く，北隅側がやや低いが，その他は概ね平坦である。中央がやや硬化しているが，壁側との差はあまり顕著でない。出入口ピット周辺が広く掘り込まれて，貼床が施されている。貼床を構成する土層はローム粒・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土が主体であるが，一部に黒みの強い土層がある。西隅周辺の床面もやや暗褐色土を多く含む。なお出入口部以外はあまり深く掘り込まれていないと思われる。

柱穴　主柱穴が４箇所検出された。また出入口ピットが南西壁際中央で検出された。径は87cm×65cm，床面からの深さは21cmである。底面は壁側が中央側よりも５cm浅い。ピットの規模が大きいが，出入口の構築材以外は埋め戻されて床面を形成すると思われる。主柱穴のうち，北（右奥）側のP1がやや隅に寄っており，確認面の形態とやや似た様相である。しかしいずれも対角線上に位置しており，比較的整った位置にある。

壁溝　東隅部でやや浅くなる部分があるが，全周といえよう。

カマド　中軸線は北東壁の中央からわずかに右寄りに位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖の遺存は良好で，左袖前側は前天井の一部に続く。構築材は下部を除いて山砂を主体とし，混じりけが少ない。下部は山砂に加えて，ロームブロックを多く含む。両袖内側は赤色化している。カマド底面は当初または作り替え時に際して，掘りかたが広く深く掘り込まれている。底面上の堆積土はロームブロックを多く含む暗黄褐色土であり（４層），埋め戻されたまたは埋まった土層である。カマドは，この掘りかた部分の少なくとも一部を埋め戻して，構築されている。４層の上部には，焼土層（３層）と炭化物を多く含む土層（５層）が堆積している。３層は中央からやや奥側，５層はやや前側にみられる。３層部分が最終的な火床面である。カマド底面よりも上方で，ほぼ床面と同じ高さに位置する。カマド堆積土は煙道部側も焼けた山砂を多く含む。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体である。下層はローム粒を多く含む。柱穴は中央部分が暗い色調であり，柱痕と思われる。柱は床面近くで切断されたか，抜かれていないと思われる。

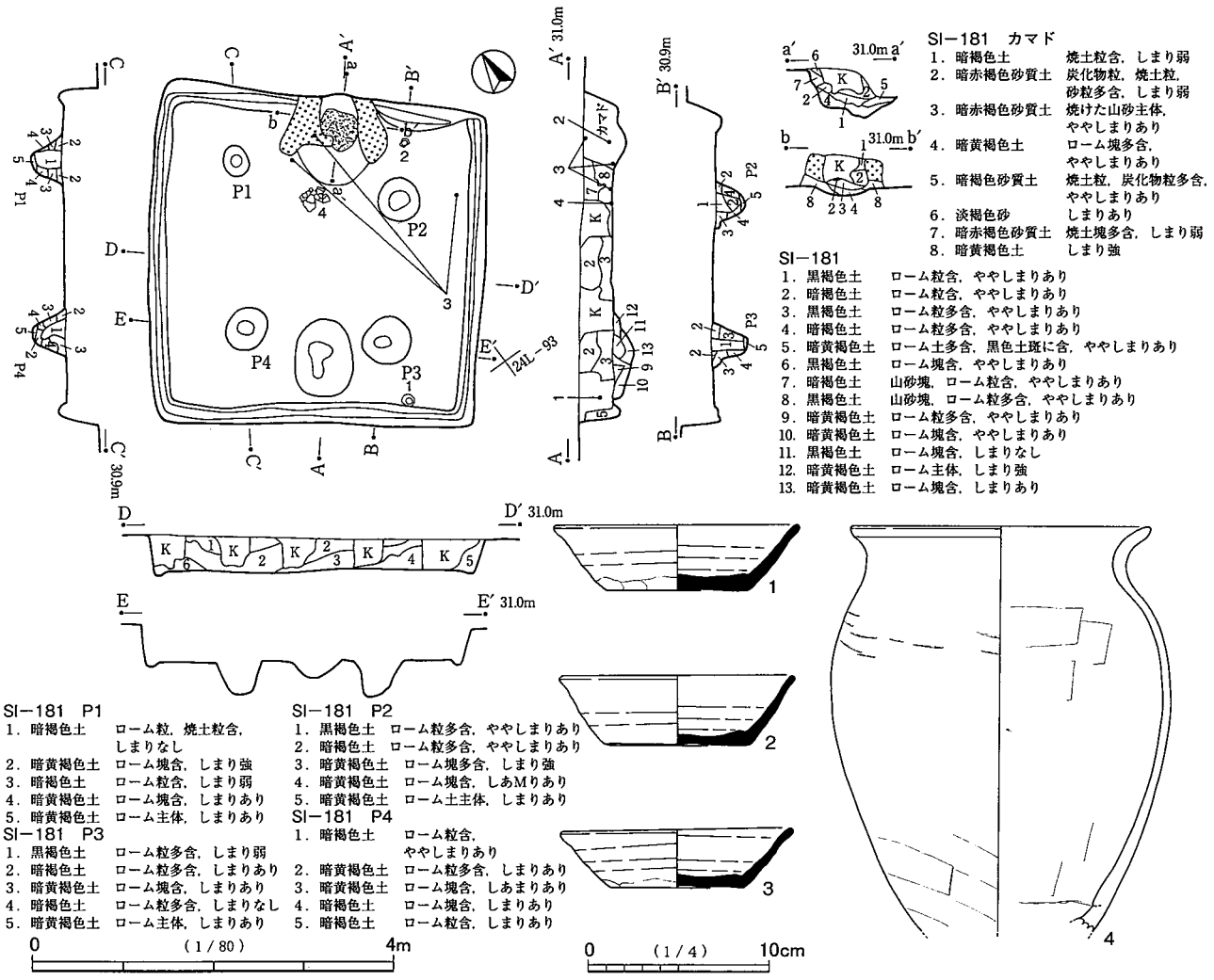
出土遺物　図示できた遺物は４点である。１～３は新治窯産の須恵器杯，４は常総型の土師器甕である。１はほとんど完形で，割れていない土器である。口縁端部のごくわずかな部分が欠けているが，小石等が抜けたか，発掘時を含めた後世の意図的でない欠損と思われる。２は底部が遺存するが，口縁・体部の多くを欠損する。欠損部は口縁部周で約3/4に及ぶ。欠損部以外はひびが入るが割れていない土器である。欠損部の破断面は一部が磨られており，打ち欠きされたことが確実な土器である。３も比較的遺存のよい土器である。口縁・体部の３箇所が欠損する。欠損部の形態は逆三角形，不整な「W」字状である。遺存部分はやや細かく割れているため，やや断定しがたいが，遺存する破損部の一部を含めて，打ち欠き・打ち割りされた可能性がある。

４は常総型の甕としては，やや小型の土器である。口縁部・胴部上位の遺存がかなりよいが，底部周辺を欠損する。器壁が厚く，大きさのわりに重量感がある。

１は前（南西）壁際右（南）寄りの上層から正位で出土した。２はカマド右外脇の下層から正位で出土した。３はカマド周辺と右（南東）壁際に散って出土した。カマド部分は左袖上と左袖前の床面，右壁際は奥(東)寄りの床面からの出土である。４はカマド前方の床面からつぶれた状態でまとまって出土した。

２～４はカマド廃棄の祭祀に関わる遺物の可能性が考えられる。２は出土層位が床面でないことがやや難点であるが，遺物の様相は最も祭祀的である。逆に３・４は遺物そのものがやや弱いが，出土層位は可能性を高めている。３の左袖上のものも，カマドにのっていたと考えれば，問題はないであろう。３は全体の破損自体が意図的であることも考えられる。また堆積土が埋め戻されているならば，１もその可能性があるが，断定しがたい。

１～４以外の出土遺物は少量である。遺存のよい遺物が数点で，土器片が少ないという状況はやや不自然と思われる。堆積土が埋め戻されているか判然としないが，その可能性が高いのかもしれない。




第208図　SI－181

## SI－182（第209図，図版68）

位置　調査区中央南側の24L－92グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.1m，幅が3.4mのやや横長の方形をなす。確認面からの深さは45cmである。耕作機械による撹乱が南北方向に何条も縦走する。

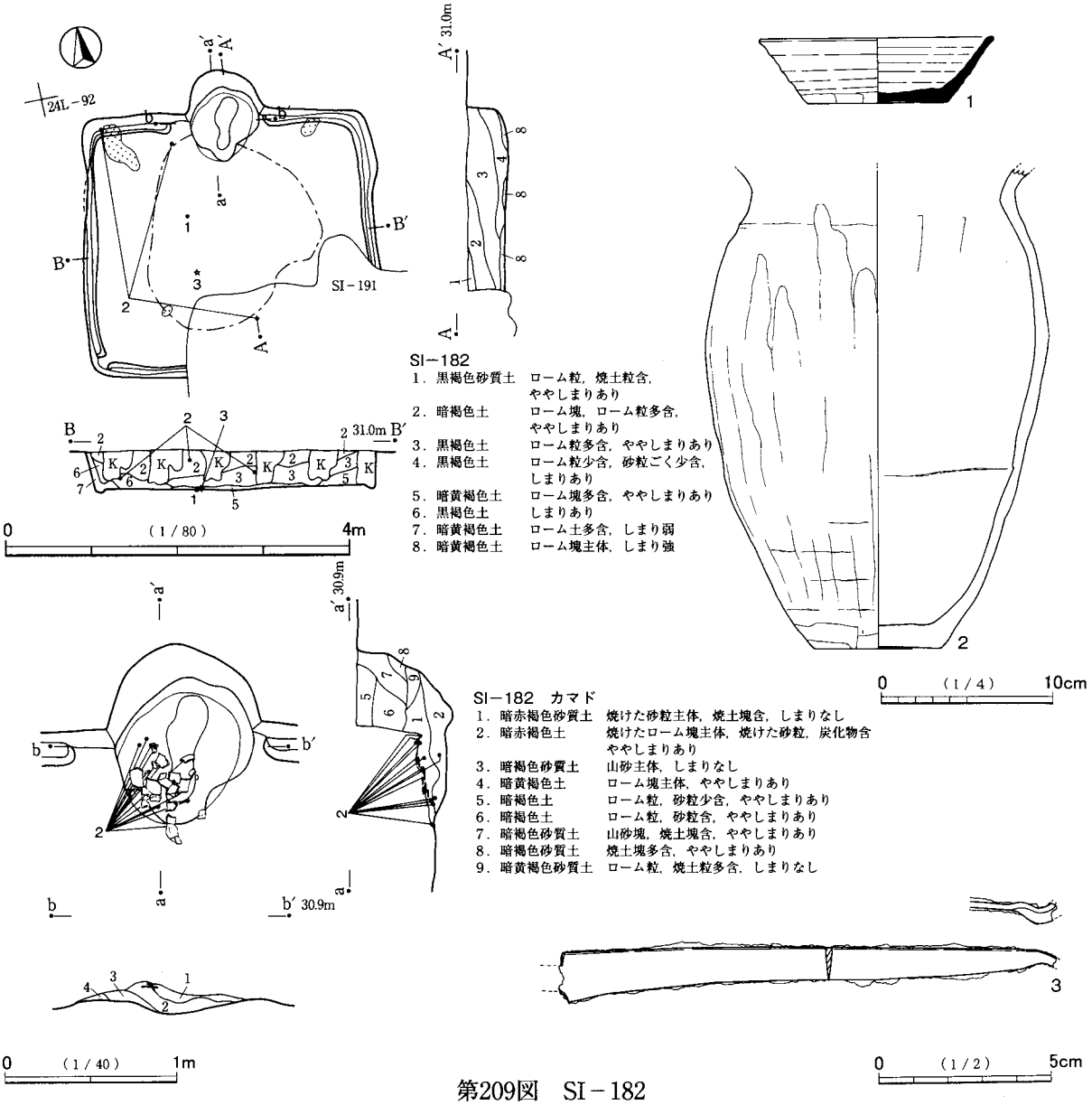
床面　撹乱は床面まで達しないため，床面は遺存する。平坦で，中央が硬化している。

柱穴　主柱穴は存在しない。出入口ピットは検出されなかったが，SI－191に切られて欠損したものと考えられる。出入口はカマドに対向する南壁側中央であろう。

壁溝　欠損部分を除いて巡る。本来全周すると思われる。

カマド　北壁中央に位置する。遺存は悪く，左袖下部の一部がみられるのみである。カマドの両側が撹乱を受けており，それにより両袖は大きく破壊されたものと思われる。ただし撹乱を免れたと思われる袖下部の遺存も悪いことから，カマド廃棄時に人為的に破壊されたことも考えられる。火床部は焼土ブロック主体の土層が広く，やや厚く堆積している。底面は床面よりも若干窪むが，それほど深くはなく，カマド使用によるものであろう。

堆積土　暗褐色土・黒褐色土主体であるが，概してローム粒・ロームブロックをを多く含む。なお焼土が壁際を主体にやや床面から浮いて堆積している。焼土の広がりは小さい。




第209図　SI－182

**出土遺物**　少量の遺物が散在的に出土した。図示できた遺物は3点である。1は新治窯産の須恵器杯，2は在地の土師器甕である。3は鉄製品で，刀子である。

1は1/2以下の遺存である。2は下半部の遺存がよいが，全体的に細かく割れている。3はほぼ身部分の破片である。身が長い刀子である。切先先端をわずかに欠く。切先側が波打つ状態で曲がっている。背関は直角をなし，刃関も直角的である。関部分で破損し，茎が遺存しない。

1・3は中央の床面から出土した。2はカマド内下層を主体に出土したが，一部は北西隅や南側に広く散っている。2は本住居で使用されていたものが遺棄されたのであろう。意図的に破壊されたことも考えられるが，断定しがたい。

**重複遺構**　南東側でSI－191と重複し，本住居が切られている。

## SI－183（第210図，図版69）

**位置**　調査区中央の23L－59グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.2m，幅が3.3mの方形をなす。確認面からの深さは60cmである。

**床面**　ほぼ平坦である。ハードローム層に達しており，全体に硬質であるが，中央がより硬化している。

柱穴　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は82cm×54cm，床面からの深さは19cmである。中央に向かって縦長の形態である。規模が大きいが，柱材以外の部分は，床が貼られていると思われる。

壁溝　全周する。

カマド　北壁右寄りに位置する。カマド右脇は北東隅部である。方形プランからの突出はやや小さい。両袖部はやや流失しているが，後天井の一部が袖部から続いて遺存する。構築材は山砂を主体とし，しまっている。両袖内側は赤色化している。火床部は中央に若干の被熱痕跡がうかがえるが，あまり赤色化していない。底面は凹凸があるが，床面からあまり窪んでいない。

堆積土　ローム粒・ロームブロックの包含が壁際下層と最上層に少なく，中・上位に多い。最上層は自然堆積の可能性があるが，大半が埋め戻されていると思われる。

出土遺物　ごく少量の遺物が散在的に出土した。図示できた遺物は２点である。１・２とも新治窯産の須恵器で，１は杯，２は高台付杯または盤である。２は底部周辺の破片であり，１も1/2以下の遺存である。１・２とも西壁側中央に位置し，１は中層，２は上層からの出土である。

本住居は廃棄に際して必要な道具を持ち去り，遺物をあまり含まない土で埋め戻されていると思われる。

その他　西方至近の位置にSB－034が位置する。本住居が人為的堆積と思われる理由の一つとして，この掘立柱建物が存在があげられる。

SI－184（第210図，図版69）

位置　調査区中央の24L－30グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.1m，幅が2.8mのやや縦長の方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

床面　北西（左前）側がわずかに高いが，概ね平坦である。中央の硬化が顕著である。

壁溝　全周に近いが，北（左）壁東（奥）寄りで一部途切れている。

カマド　東壁左寄りに位置する。カマド左脇は北東（左奥）隅部である。方形プランからの突出はやや小さい。遺存はやや不良で，特に右袖はかなり崩れている。構築材は山砂を主体とし，堅くしまっている。下部はローム粒を多く含み，また地山のローム層を掘り残して，基底部としている。火床部底面は地山のロームが焼けて硬化し，底面上には焼土を多く含む土層が堆積する。底面は緩やかに窪むが，床面との高さの差がほとんどない。

堆積土　暗褐色土・黒褐色土主体で，ロームの含有は概して少ない。自然堆積と思われる。

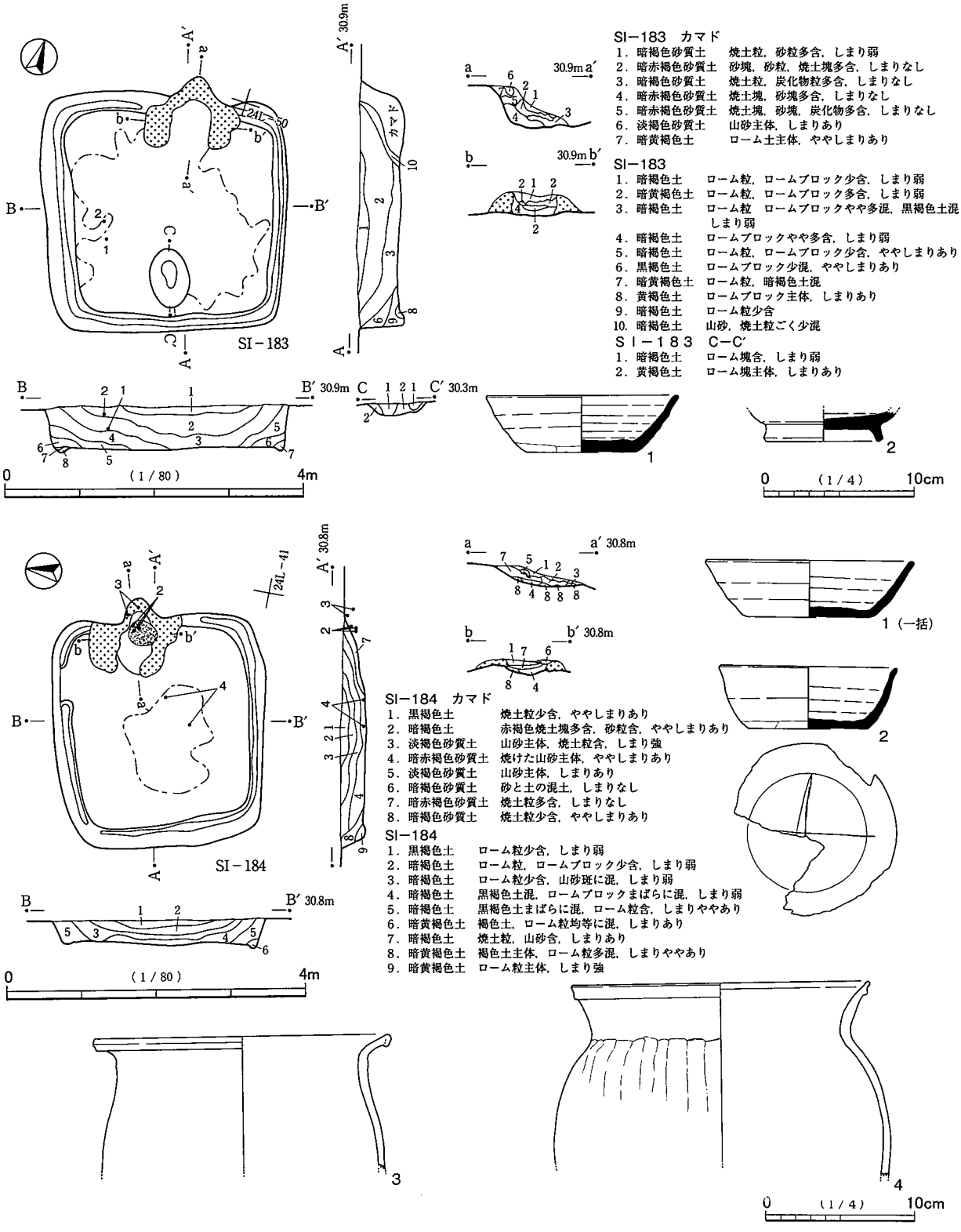
出土遺物　やや少量の遺物が出土した。分布はカマド周辺に多い。図示できた遺物は４点である。１・２は千葉産の須恵器杯，３・４は常総型の土師器甕である。２は底部外面に「キ」状の線刻がある。平行する２条線は間隔が近く，底部周縁で重なっているため，形態は「＋（×）」とも思われる。遺存はあまり多くない。欠損部に意図的な様相を認めることは難しい。１も遺存が少なく，３は小破片である。４も部分的な遺存である。

２・３はカマド内から出土し，４は中央の床面から出土した。１は出土位置が不明である。２は線刻をもつ土器であるが，出土状況が祭祀的であるか断定しがたい。出土遺物の大半が廃棄されたか，流入したものと思われる。

SI－185（第211図，図版69）

位置　調査区南部の24M－62グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.8m，幅が4.6mの横長の方形をなす。確認面からの深さは65cmである。やや逆台




第210図　SI－183・184

形の形態である。

**床面**　平坦で，中央が広く硬化している。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。また出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は52cm×33cm，床面からの深さは16cmである。中央に向かって縦長の形態である。主柱穴間も横長の方形プランであるが，確認面のプランよりも，方形に近い。なおプランの対角線が柱穴中央を通るのは北東側のP2のみであり，

他の３柱穴はややずれている。特に南側のP3・P4が顕著である。

壁溝　全周する。

カマド　北壁中央に位置する。方形プランからの突出はやや小さい。構築材の山砂は前方等の周囲にかなり流出しており，上部の遺存が悪いが，両袖下半部の遺存は良好である。構築材は混じりけが少なく，袖部は堅くしまっている。両袖内側は赤色化している。右袖に接して混じりけの少ない山砂がみられるが（17層），天井の崩落土と思われる。火床部底面も，赤色化及び硬化した面がみられる。底面は床面からほぼ平坦に続き，ほとんど窪んでいない。火床部焼土層（19層）の奥側及び前側に，炭化物を多く含む土層（20層）がみられる。19・20層の上部には，あまり焼土を多く含む土層がみられない。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体である。中・下位はローム粒・ロームブロックを多く含む。柱穴部分の堆積土は複雑である。P2･P3には柱痕と思われる部分があるが，ロームが多く含まれる土層もあるため，断定しがたい。堆積土は全体的にみて自然堆積と思われる。

出土遺物　やや多量に出土した。西壁側が若干少ないが，その他は満遍なく分布する。図示できた遺物は11点である。１は新治窯産の須恵器蓋，２～７は千葉産の須恵器杯，８は東海産と思われる須恵器甕，９は在地の土師器甕である。10・11は鉄製品で，10は鎌または穂摘具である。11は用途不明であるが，刀子の可能性が考えられる。

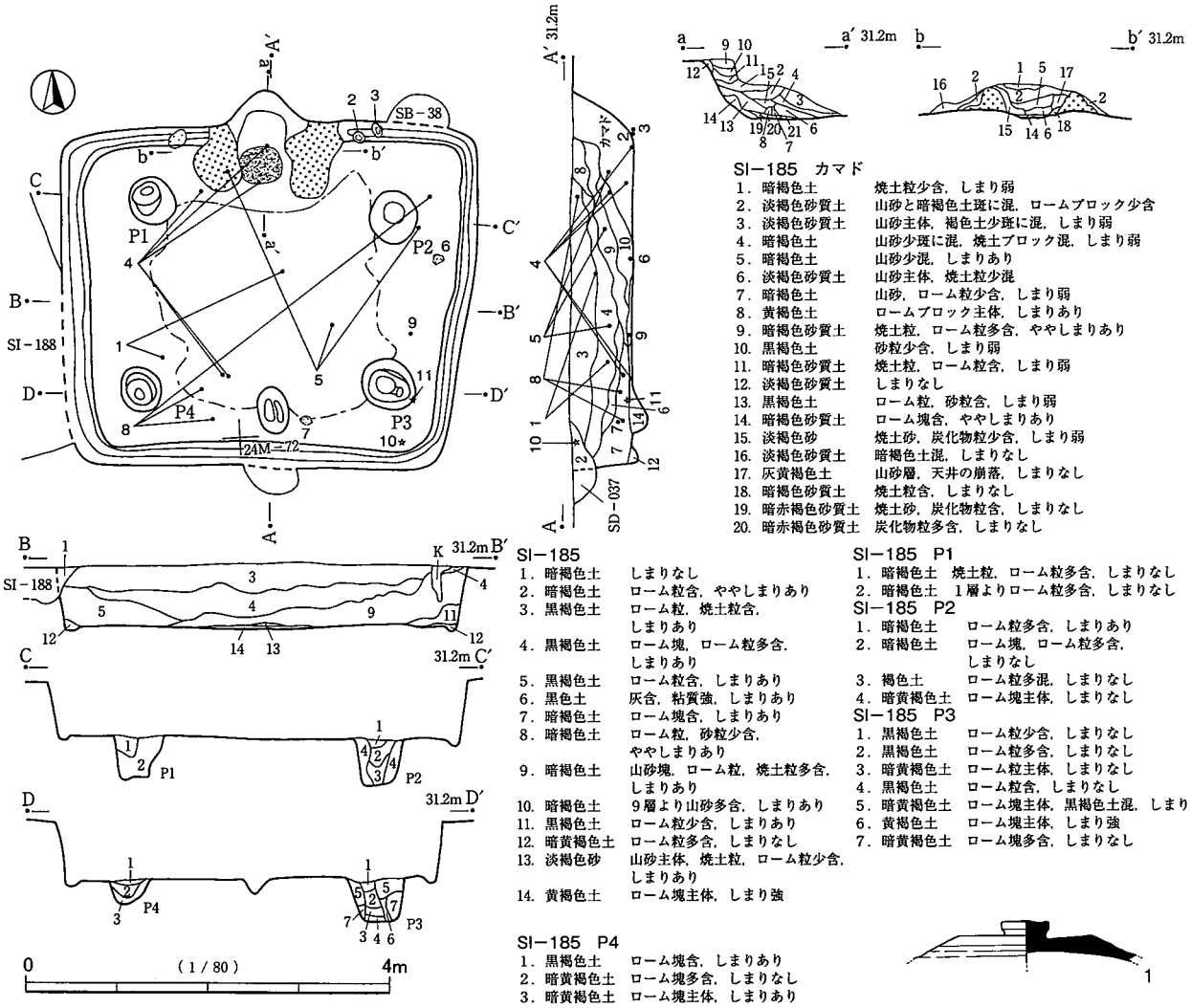
１はつまみ周辺の小破片である。２・３は口縁・体部の一部をやや大きく欠損する他は割れていない比較的遺存のよい土器である。欠損部は口縁部周で1/2弱であり，その形態はともに逆台形状である。ともに打ち欠きされたものと思われる。またともに器面が荒れており，被熱痕跡か使用が著しいものと思われる。４は底部外面にヘラ書きがある。縦長で見ると「リ」を続けて書いたような形態，横長でみると「Ｓ」字状の形態である。底部はよく遺存するが，口縁・体部は断続的に1/2以上を欠損する。全体は比較的遺存がよい。遺存部分は細かく割れている。５も底部外面に１条の線刻がある。欠損部が多いため，「＋（×）」の可能性も考えられる。５～７は1/2以下の遺存である。

８の外面は釉の付着により，一部に光沢をもつ。内面はやや黄色みを帯びた灰色の色調である。焼成は堅緻，胎土は若干小石を含むが，概して緻密である。比較的小形の破片から図化した。９は口縁部から胴部上位までの一部が遺存する。器面がやや荒れているが，焼成はよい。胎土は黒雲母をやや多く含む。

10は薄い作りである。全体が緩やかな弧状を呈する。目釘孔については確認できない。木質の付着はみられない。11は図示した左側下部に刃がある。右側は刃こぼれ，上部は欠損しているのかもしれない。何らかの製品の一部であるが，遺存が少ないため，判然としない。

２・３はカマド右袖外脇で，北壁壁溝上から床面と同じ高さで出土した。２・３は並んで出土し，２がカマド寄りである。土器の状態はともに傾きのない正位である。６は東壁際やや奥寄りのほぼ床面から正位で出土した。７は南壁際やや右寄りで，出入口ピット脇から正位で出土したが，高さは床面からやや浮いている。４はカマド内・周辺及び南側に散って出土した。層位は床面・下層を主体とする。図示したその他の遺物の出土層位をみると，概して中・上層が主体である。11が床面から出土したが，小片である。

２・３はカマド・竪穴住居廃棄の祭祀に関わる遺物と思われる。また４・６・７についてもその可能性が若干考えられるが，断定しがたい。その理由として，４は細かく破損し，広く散っていること，６・７は遺存が良好でなく，合わせて７は床面出土でないことがあげられる。しかし６・７の遺存については，底部中心を境に半裁されたとも思われる。その他の遺物には，特に祭祀的様相がうかがえない。中・上層




SI－185 カマド

1. 暗褐色土　焼土粒少含，しまり弱
2. 淡褐色砂質土　山砂と暗褐色土斑に混，ロームブロック少含
3. 淡褐色砂質土　山砂主体，褐色土少斑に混，しまり弱
4. 暗褐色土　山砂少斑に混，焼土ブロック混，しまり弱
5. 暗褐色土　山砂少混，しまりあり
6. 淡褐色砂質土　山砂主体，焼土粒少混
7. 暗褐色土　山砂，ローム粒少含，しまり弱
8. 黄褐色土　ロームブロック主体，しまりあり
9. 暗褐色砂質土　焼土粒，ローム粒多含，ややしまりあり
10. 黒褐色土　砂粒少含，しまり弱
11. 暗褐色砂質土　焼土粒，ローム粒含，しまり弱
12. 淡褐色砂質土　しまりなし
13. 黒褐色土　ローム粒，砂粒含，しまり弱
14. 暗褐色砂質土　ローム塊含，ややしまりあり
15. 淡褐色砂　焼土砂，炭化物粒少含，しまり弱
16. 淡褐色砂質土　暗褐色土混，しまりなし
17. 灰黄褐色土　山砂層，天井の崩落，しまりなし
18. 暗褐色砂質土　焼土粒含，しまりなし
19. 暗赤褐色砂質土　焼土砂，炭化物粒含，しまりなし
20. 暗赤褐色砂質土　炭化物粒多含，しまりなし

SI－185

1. 暗褐色土　しまりなし
2. 暗褐色土　ローム粒含，ややしまりあり
3. 黒褐色土　ローム粒，焼土粒含，しまりあり
4. 黒褐色土　ローム塊，ローム粒多含，しまりあり
5. 黒褐色土　ローム粒含，しまりあり
6. 黒色土　灰含，粘質強，しまりあり
7. 暗褐色土　ローム塊含，しまりあり
8. 暗褐色土　ローム粒，砂粒少含，ややしまりあり
9. 暗褐色土　山砂塊，ローム粒，焼土粒多含，しまりあり
10. 暗褐色土　9層より山砂多含，しまりあり
11. 黒褐色土　ローム粒少含，しまりあり
12. 暗黄褐色土　ローム粒多含，しまりなし
13. 淡褐色砂　山砂主体，焼土粒，ローム粒少含，しまりあり
14. 黄褐色土　ローム塊主体，しまり強

SI－185 P1

1. 暗褐色土　焼土粒，ローム粒多含，しまりなし
2. 暗褐色土　1層よりローム粒多含，しまりなし

SI－185 P2

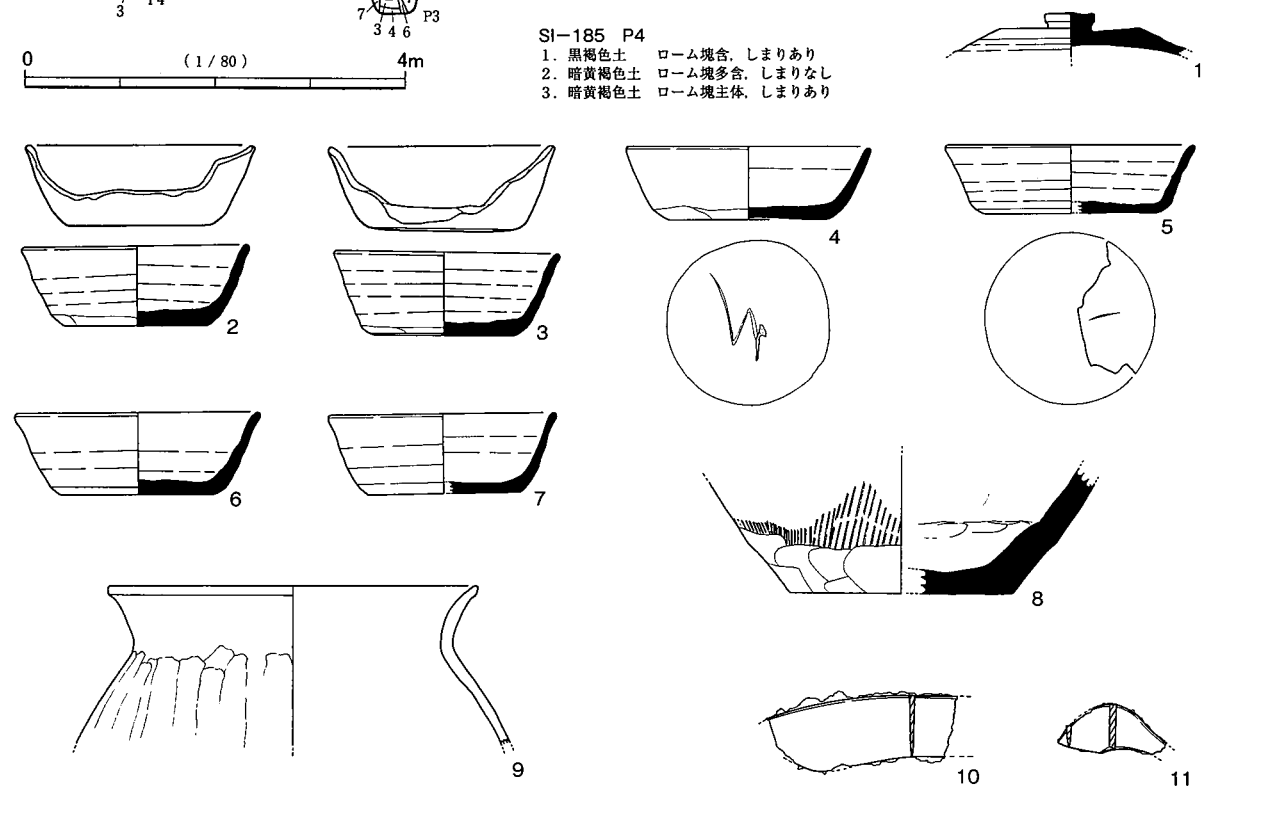
1. 暗褐色土　ローム粒多含，しまりあり
2. 暗褐色土　ローム塊，ローム粒多含，しまりなし
3. 褐色土　ローム粒多混，しまりなし
4. 暗黄褐色土　ローム塊主体，しまりなし

SI－185 P3

1. 黒褐色土　ローム粒少含，しまりなし
2. 黒褐色土　ローム粒多含，しまりなし
3. 暗黄褐色土　ローム粒主体，しまりなし
4. 黒褐色土　ローム粒含，しまりなし
5. 暗黄褐色土　ローム塊主体，黒褐色土混，しまり弱
6. 黄褐色土　ローム塊主体，しまり強
7. 暗黄褐色土　ローム塊多含，しまりなし

SI－185 P4

1. 黒褐色土　ローム塊含，しまりあり
2. 暗黄褐色土　ローム塊多含，しまりなし
3. 暗黄褐色土　ローム塊主体，しまりあり




第211図　SI－185

から出土した多くの遺物については，単に廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　西側南寄りでSI－188，南側でSB－037、北側でSB－038と重複し、本住居がそれらから切られている。

**SI－186**（第212図，図版70）

**位置**　調査区南部の24M－81グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.9m，幅が3.0mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。確認面は南から北にわずかに下っている。

**床面**　北（右）側がやや低いが，わずかに掘りすぎていると思われる。その点を考慮するとほぼ平坦である。中央がやや硬化している。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は46cm×28cm，床面からの深さは18cmである。中央に向かって縦長の形態である。

**壁溝**　南（左）壁と前（東）壁に巡る。カマドの左右と右壁は明瞭な壁溝が巡らない。しかし右壁側も浅いが巡るように思われる。やや掘りすぎた影響と思われ，本来は全周に近い状態であろう。

**カマド**　西壁右寄りに位置する。方形プランからの突出はやや大きい。遺存がよく，やや落ちた前天井もみられる。構築材は下部を除いて山砂を主体とし，混じりけが少ない。下部は山砂を主体とするが，暗褐色土を含む。両袖ともしまりがある。右袖内側は赤色化し，かなり内部まで及んでいる。左袖は赤色化した部分の遺存が悪い。火床面は両袖と前天井に囲まれた範囲にみられ，下層に焼土が堆積している。カマド底面は火床面よりもやや深く，範囲も広い。また床面よりも深く掘り込まれている。カマドは，ロームブロックを多く含む土で底面をある程度埋め戻して，その上に構築されている。底面の窪みは当初または作り替え時に伴う掘りかたである。

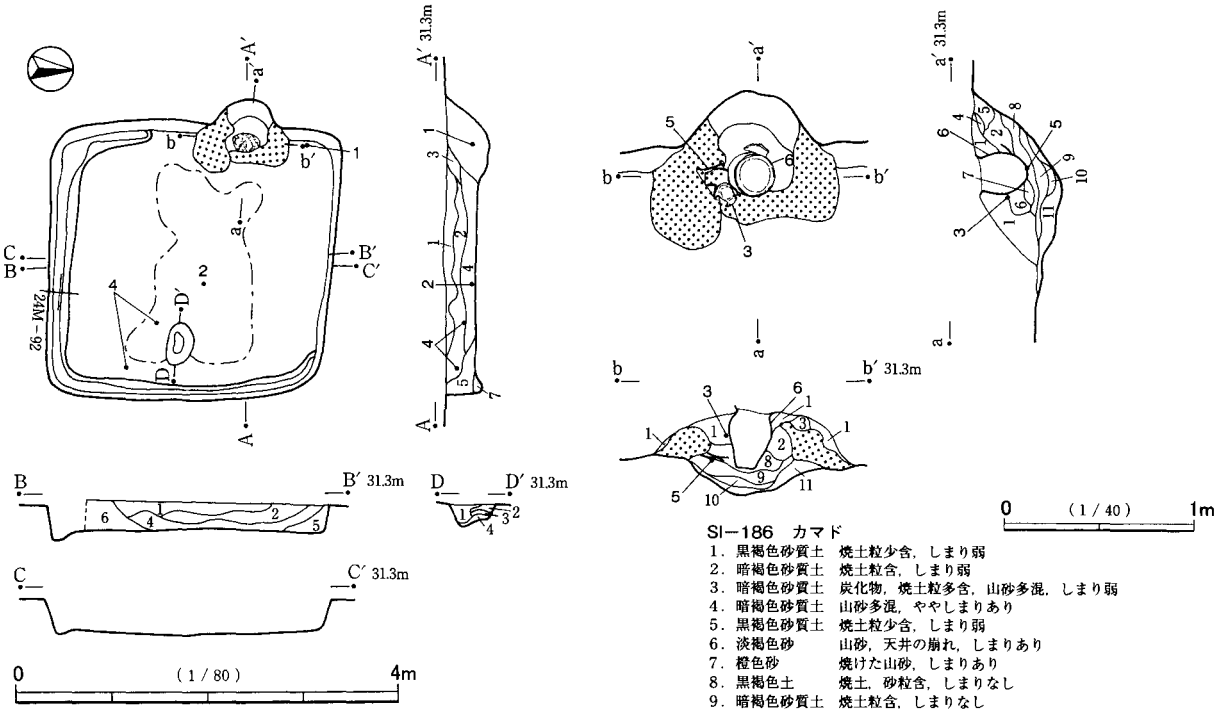
前天井の崩落土も下部が赤色化している。カマド内からは土師器甕（6）等の遺存のよい土器群が出土したが，前天井部分が甕6に密着した状態であり，遺物との関係でも遺存良好である。

**堆積土**　黒褐色土･暗褐色土主体で下層にロームブロックを含むが，中･上層はロームの含有が少ない。なお南側はロームブロックを多く含む暗褐色土層である（6層)。やや不自然な状態であり，人為的堆積とも思われるが，断定しがたい。また南側のみ埋め戻され，他は自然堆積とも考えられるが，判然としない。以上の状況から，本住居の堆積土は人為的か自然か不明としたい。

**出土遺物**　カマド内から遺存のよい遺物が出土した以外は，やや少量で，散在的な出土である。図示できた遺物は6点である。1・2は千葉産の須恵器杯である。3はロクロ土師器杯としたが，千葉産須恵器の可能性もある。4・5は千葉産の須恵器甕，6は常総型の土師器甕である。

3は口縁・体部の一部を欠損するが，かなり遺存のよい土器である。欠損部は逆台形状で整った形態である。欠損部から続いて口縁・体部の多くが割れて接合している。出土状況と合わせてみると，欠損部は打ち欠きされたものと思われる。接合部分は打ち割りされた可能性があるが，出土時点では形を保っており，意図的なものかやや断定しがたい。底部内面は全体に黒ずんでおり，一部は体部内面に及ぶ。外面も黒ずむ部分と赤みをもつ部分がみられ，二次的な被熱痕跡と思われる。2は小破片であり，1も遺存は良好でない。

4は頸部が長く延び，胴部が膨らむタイプの器形である。5はかなり大型の土器である。4・5も遺存は少ない。6は完形で，ほとんど割れていない甕である。ただし底部周縁の一部が剥落し，隙間が空いて




SI−186

1. 暗褐色土　ローム粒，焼土粒少含，しまりあり
2. 黒褐色土　ロム粒少含，しまり弱
3. 暗褐色土　山砂塊，焼土粒含，しまりなし
4. 暗褐色土　山砂塊，焼土粒含，ややしまりあり
5. 黒褐色土　ローム粒少含，しまり弱
6. 暗褐色土　ローム塊多含，しまりあり
7. 暗黄褐色土　ローム粒多含，しまりなし

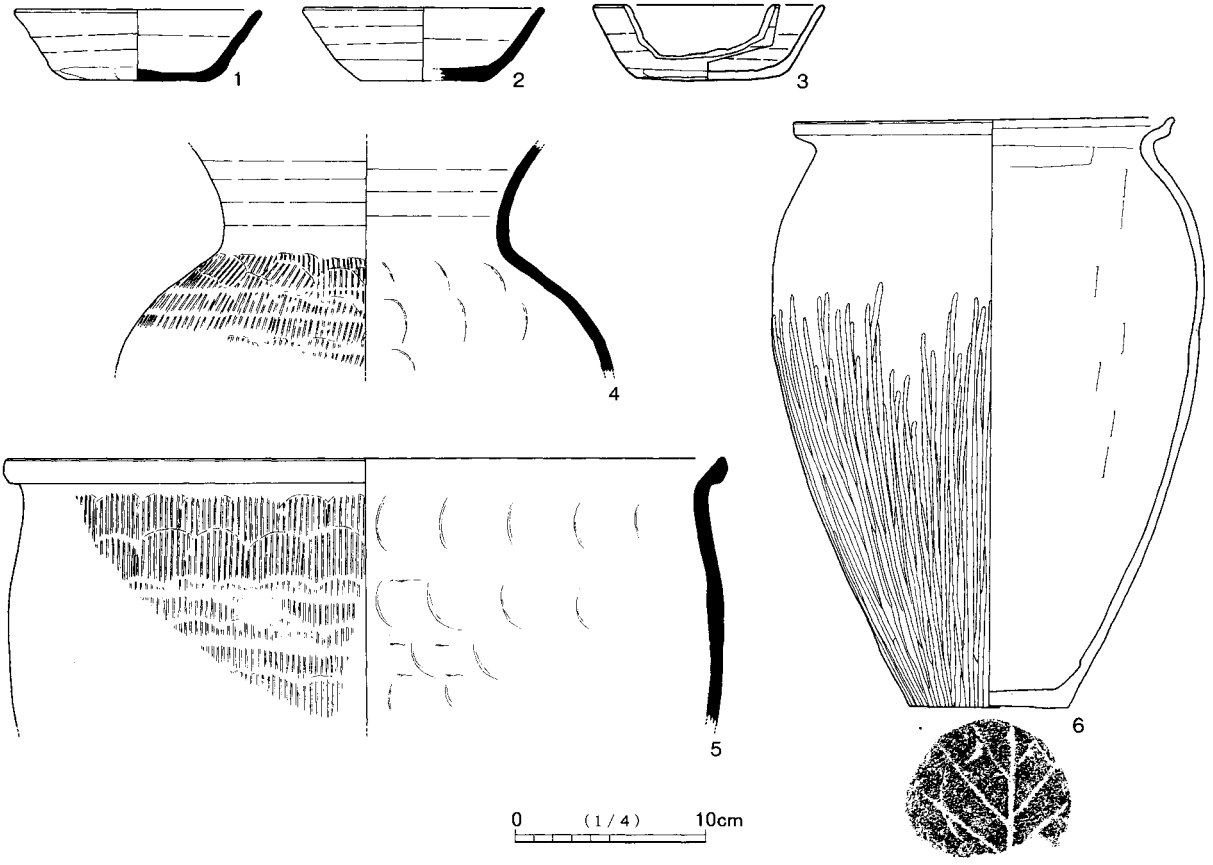
SI−186　D−D′

1. 黒褐色土　ローム粒多含，しまり弱
2. 暗黄褐色土　ローム塊多含，しまり強
3. 黒褐色土　ローム粒少含，ややしまりあり
4. 暗黄褐色土　ローム塊多含，しまり強




SI−186　カマド

1. 黒褐色砂質土　焼土粒少含，しまり弱
2. 暗褐色砂質土　焼土粒含，しまり弱
3. 暗褐色砂質土　炭化物，焼土粒多含，山砂多混，しまり弱
4. 暗褐色砂質土　山砂多混，ややしまりあり
5. 黒褐色砂質土　焼土粒少含，しまり弱
6. 淡褐色砂　山砂，天井の崩れ，しまりあり
7. 橙色砂　焼けた山砂，しまりあり
8. 黒褐色土　焼土，砂粒含，しまりなし
9. 暗褐色砂質土　焼土粒含，しまりなし
10. 橙色土　焼けたローム主体，しまりややあり
11. 暗黄褐色土　ローム塊多含，しまりあり




第212図　SI－186

いる。底部の断面がやや薄い土器である。また底部から胴部下位にかけてひびも入っている。廃棄されたときにこの状態であったと思われ，その時点で実用でなかったと考えられる。口縁部から胴部のかなり下方までは，ひびもみられない良好な土器である。胴部内面下位に，土器製作時の接合箇所があり，顕著な段差をもつ。黒斑が胴部下位から底部にかけての内外面の一部にみられる。

３・５・６はカマド内から出土した。６は火床部上から正位で出土した。胴部中位から下位にかけての一部が，前天井に密着した状態である。火床面の焼土層（10層）上面から６の底部まではおよそ11cmの高さである。土製支脚の出土はなかったが，使用時と同様の高さとみてよいと思われる。３は６の手前からやや傾いた正位で出土した。前天井にのった状態と思われる。５は６と左袖の間から，６胴部下位と同じ高さで出土した。１はカマド右外脇で，奥壁際の下層から出土した。２は中央の下層から，４は前壁左寄りの中・上層から出土した。

６は実用に堪えなくなったため，単に遺棄されたことも考えられる。しかし３の存在から，３とともにカマド廃棄の祭祀に関わる可能性の方が高いと考える。底部の隙間も意図的なものかもしれないが，底部外面の剥落が，意図的であるか断定しがたい。５は破片であるが，カマド廃棄の祭祀時に，図化していない土器破片とともに，３・６の周囲に配された可能性が高い。以上のカマド出土遺物以外のものは，単に廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－187（第213図，図版70）

位置　調査区南部の24M－60グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.4m，幅が3.6mの方形をなす。確認面からの深さは20cmである。

床面　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

カマド　北壁中央に位置する。床面まで浅いことや撹乱によって遺存が悪く，両袖下部の遺存である。火床部底面の窪みは床面からわずかな深さであり，灰のかき出し等の使用によるものであろう。堆積土下層は焼土粒を多く含むが，顕著に赤色化した面はみられない。

堆積土　焼土及びローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土・暗褐色土である。焼土は南東隅側や中央に集中箇所がみられる。自然堆積と思われるが，堆積土が薄いためやや不明瞭である。

出土遺物　やや少量であるが，堆積土が薄いことが影響している。遺物の分布密度はあまり低くなく，全体的に出土している。図示できた遺物は４点である。１・２はロクロ土師器杯，３は灰釉陶器碗，４はロクロ土師器高台付杯である。

１～４はいずれも遺存が少ない。１・２の底部調整は回転糸切り後無調整である。１は二次的な被熱により器面が荒れ，赤色化した部分もみられる。２の底部はやや突出し，粘土が付着している。かなり雑な作りである。３は小片である。底部内面には釉が施されていない。高台は三日月状である。４も高台部周辺の小片である。高台は径が小さく，「ハ」の字形に開くものである。底部内面は凹凸が著しい。

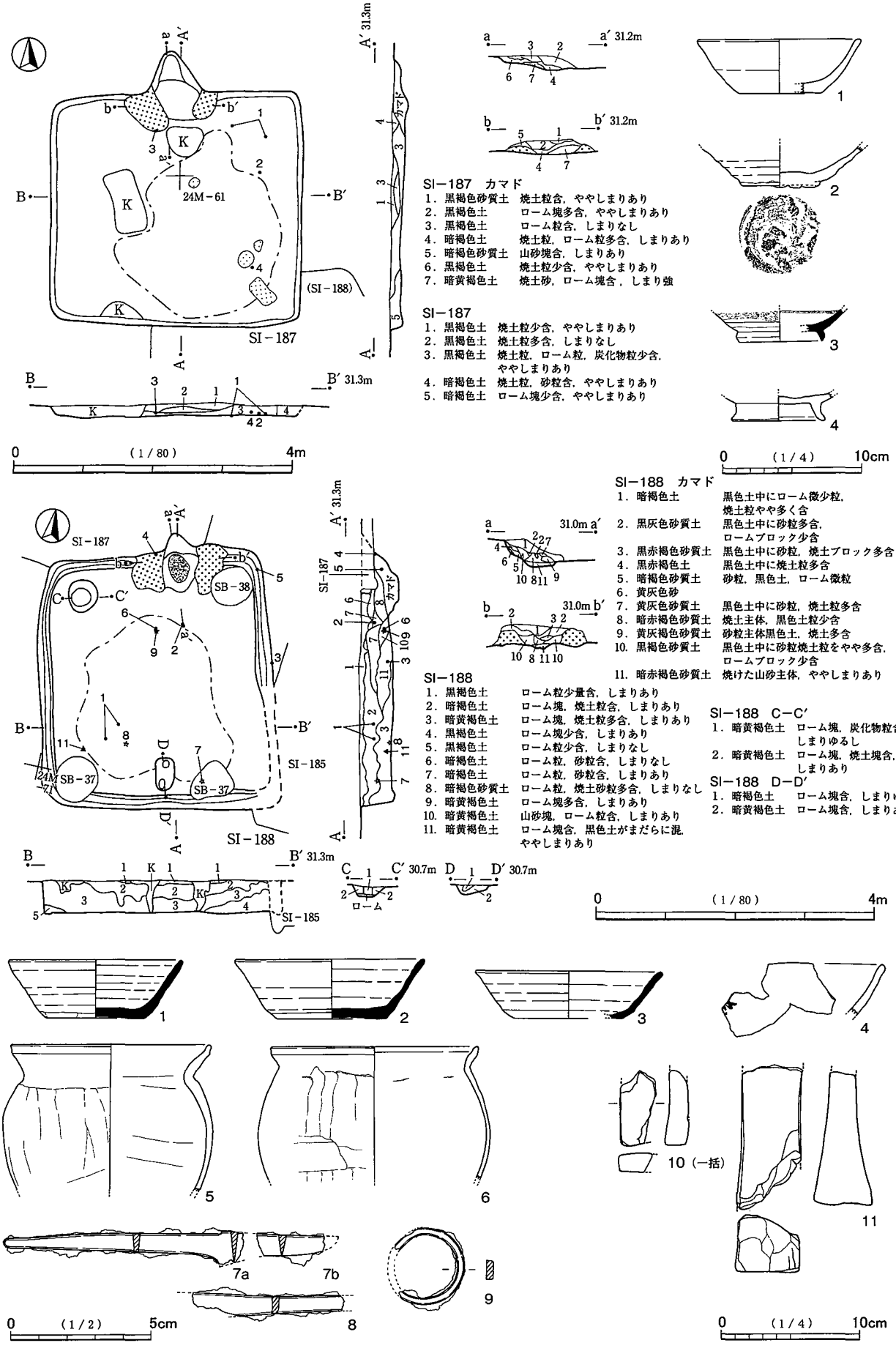
１・２は北東側床面，３はカマド左袖前側下層，４は南東側床面から，各々出土した。遺存のよい遺物はみられず，出土遺物は単に廃棄されたか，流入したものであろう。

重複遺構　南東側でSI－188と重複し、本住居が切っている。

SI－188（第213図，図版70）

位置　調査区南部の24M－61グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.7m，幅が3.4mのやや縦長の方形をなす。確認面からの深さは45cmである。




第213図　SI－187・188

床面　やや凹凸があるが，傾斜はない。中央から南壁側にかけて顕著に硬化している。

柱穴　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は47cm×26cm，床面からの深さは13cmである。中央に向かって縦長の形態で，ほぼ同じ深さの底部が中央寄りと壁寄りに２箇所ある。またピットが北側両隅・南西隅及び南東隅近くで検出された。そのうち北西隅部のものを除く３箇所のピットは，掘立柱建物の柱穴である。北西隅部のピットもその可能性が考えられるが，組となる柱穴がみられず，判然としない。掘立柱建物の柱穴でなければ，貯蔵穴であるが，類例に乏しい。径は40cm～45cm，床面からの深さは15cmであるが，確認面からの深さは61cmである。

壁溝　SI－185との重複部分が不明であるが，その他は巡る。本来全周するものであろう。

カマド　北壁右寄りに位置する。方形プランからの突出は小さい。SI－187によって上部が切られ，また右袖の一部もSB－038に切られている。両袖下半部の遺存はよく，しまりがある。構築材は山砂を主体とし，遺存する上部は混じりけが少ないが，下部はロームブロックを多く含む。左袖下は地山が一部掘り残されている。右袖内側は赤色化した部分がみられる。火床部底面は中央が床面よりもやや深く窪み，焼土が堆積している（11層）。火床範囲は明瞭である。その上層も焼土をやや多く含む。煙道部壁面には，山砂が薄く堆積している。左袖前方の床面には，炭化物の集中範囲がみられる。

堆積土　ロームブロックの包含が中位以下に多い。上位もロームを含むが，暗褐色土・黒褐色土主体である。中位以下は埋め戻されていると思われるが，上位は判然としない。

出土遺物　やや少量である。分布は南側と北東側に多いと思われる。図示できた遺物は11点である。１～３は千葉産の須恵器杯，４はロクロ土師器杯である。５・６は小型の土師器甕で，在地の土器である。７～９は鉄製品で，７・８は刀子である。９は用途不明である。10・11は砥石である。

２は1/2遺存するが，１・３はそれ以下の遺存である。４は体部外面に墨書があるが，遺存が少なく，判読できない。５は下半部を欠くが，上半部の遺存がよい。６は一部の破片である。５・６とも被熱により赤みが非常に強い。また５の口縁部は焦げて黒く変色した部分が多い。特に内面が顕著である。

７は茎が遺存するが，身は一部の遺存である。身は茎寄り部分とそれに接合しない中間部分の破片である。切先は欠損する。背関は浅く直角をなすと思われる。刃関は斜めに切り込みが入る。８は茎の破片である。茎尻は欠損する。図示した右側が茎尻寄り，左側が身寄りである。９は環状を呈すると思われる鉄製品である。環状とみた場合，遺存は3/4強で，ほぼ円形に沿った形である。幅が７㎜，厚さは２㎜で，やや幅が広く薄い製品である。

10・11の石材はともに流紋岩である。10は方柱状の角部分の破片である。図示した平面が中央に向かってやや窪んでいるのに対し，その裏側は窪んでいないので，主として図示した面が上面として使用されたと思われる。上下面と図左の側面は平滑である。小口面はざらつきがあり，あまり使用されていないが，筋状の研ぎ痕がみられる。折損面は使用されていない。11は方柱状の砥石の一部である。小口面は遺存しないが，図下部の折損面左側は小口面近くと思われる。あるいは小口面がわずかに遺存している可能性があるが，石材が軟質であり，判然としない。なお下部の折損面には，筋状の研ぎ痕が２条みられるので，破損した後も使用されたことがわかる。上部の折損面は凹凸があり，あまり使用されていないと思われる。上下面・左右の両側面は平滑である。

図示した遺物の平面位置は散在的である。４はカマド左袖上から出土したが，SI－187の出土遺物の可能性もある。出土層位をみると，床面から中位にわたるが，堆積土の下半が埋め戻されているならば，高

さの違いはあまり意味をもたないといえる。いずれにしても出土遺物には特に祭祀的様相がうかがえず，大半が廃棄されたか，流入したものと思われる。

**重複遺構**　北側でSI－187・SB－038，東やや南側でSI－185，南側でSB－037と重複する。本住居は掘立柱建物とSI－187に切られ，SI－185を切っている。

**SI－189**（第214図，図版71）

**位置**　調査区南部の24M－80グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.5m，幅が3.4mの方形をなす。確認面からの深さは35cmである。拡張されており，上記の数値は拡張後のものである。拡張前の規模はやや判然としないが，長さがおよそ3.2m，幅が3m強程度と思われる。深さはやや深く40cmである。

**床面**　拡張後の床面は，拡張前の床面にロームブロックを多く含む黄褐色土で貼床を施して，作られている。貼床の厚さは３cm～４cm前後であるが，新旧の床面を明瞭に検出できなかった部分がある。新旧の床面とも，ほぼ平坦と思われる。中央を主体に硬化しているが，拡張前の床面は範囲が狭い。拡張後の床面は拡張前の硬化面の周囲にも広がり，カマド前や右（南）壁際にも及んでいる。

**壁溝**　拡張後の竪穴は全周する。拡張前の竪穴は右壁・前（西）壁に巡るが，左（北）壁及び東（奥）壁側は不明瞭である。左前（北西）隅部で曲がるため，拡張後の左壁壁溝の前に浅く続くと思われるが，検出されなかった。奥壁側も右壁同様に隣接して巡る可能性があるが，カマドもあり，判然としない。

**カマド**　拡張後のカマドは東壁左寄りに位置し，拡張前のカマドは東壁中央かやや右寄りに位置する。拡張後のカマドの方形プランからの突出はやや小さい。両袖の遺存はよい。構築材は山砂を主体とし，概して混じりけが少ないが，最下部は黒褐色土である。黒褐色土は壁溝の堆積土と思われ，以前に巡っていた壁溝の上部に構築されたものであろう。両袖内側はかなり内部まで赤色化している。火床部底面上には焼土がみられず，黒褐色土が堆積している。焼土や灰はほとんどかき出されたものと思われる。焼けた山砂を多く含む土層は底面よりも上部にみられる。天井部・袖部の崩落土と思われるが，あるいは火床面がやや上方に位置したのかもしれない。カマド底面は広く，やや深く掘り込まれ，カマドはその上に構築されている。底面の窪みは付け替え時または作り替え時の掘りかたである。

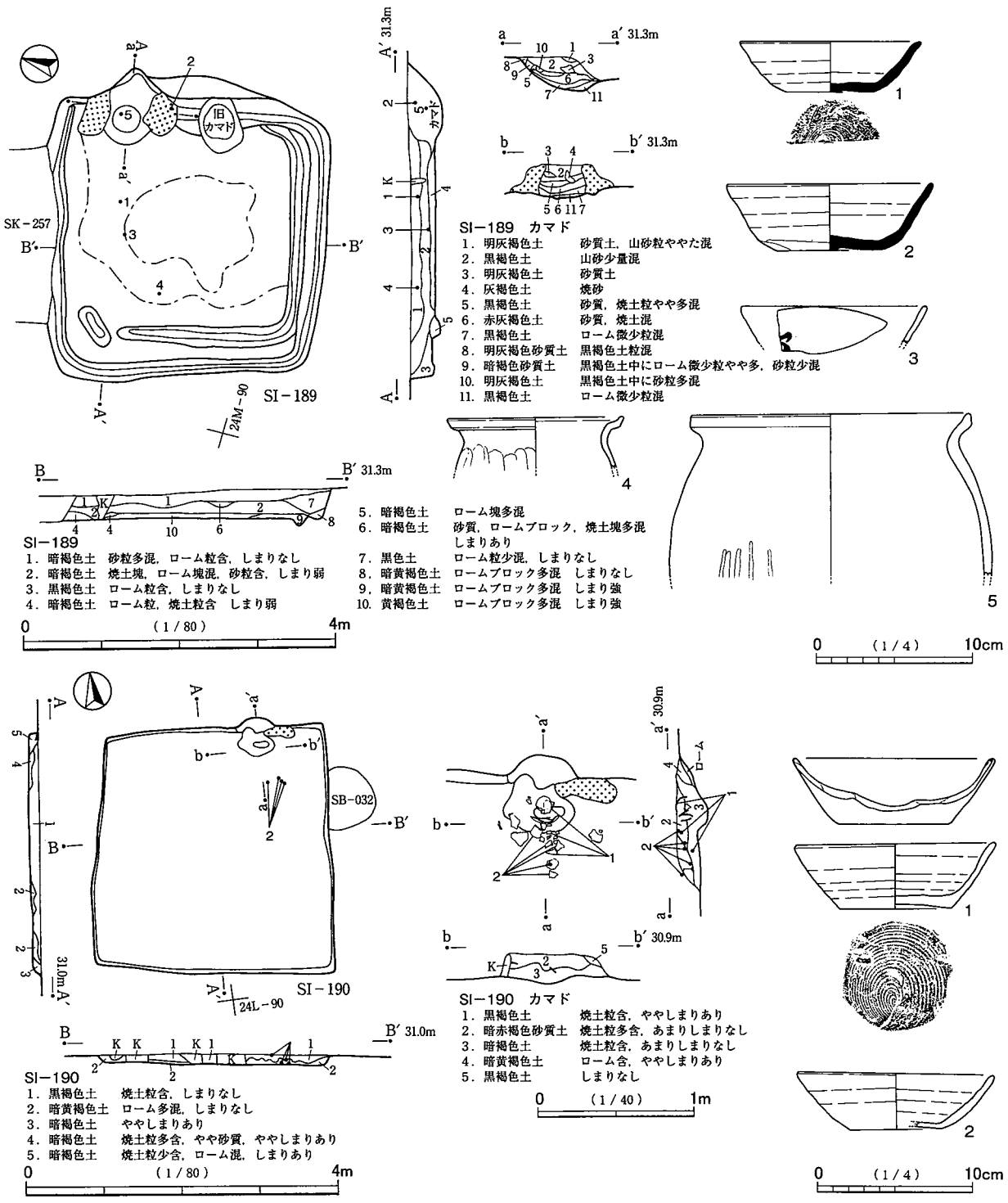
拡張後のカマドの右方に，床面よりも10cm低い窪みが検出された。構築材はまったく遺存せず，焼土の堆積も不明瞭であるが，その位置から旧カマドの底面と思われる。

**堆積土**　暗褐色土主体で，上層はローム粒を，下層はロームブロックを含む。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　少量である。分布は中央から北側にかけてやや多いと思われる。図示できた遺物は５点である。１は東金子窯産の須恵器杯である。２は千葉産の須恵器杯と思われるが，ロクロ土師器の可能性もある。３はロクロ土師器杯である。４は小型の土師器甕で在地の土器と思われるが，千葉産須恵器の可能性も考えられる。５は常総型の土師器甕である。

１～５はいずれも遺存が少ない。３は体部外面に墨書があるが，遺存が少ないため，判読できない。１の底部調整は回転糸切り後無調整である。内外面に火襷がある。胎土は白色・淡黄色の砂粒・小石を多く含み，器面がややざらつく。２は内面の多くと底部外面の一部が黒ずんでおり，二次的に火を受けたものと思われる。

２はカマド右袖上，５はカマド内中層から出土した。１・３・４の出土層位は下層・中層である。３がやや低いが床面から浮いている。平面位置は１・３が中央やや左寄り，４は中央前寄りである。




第214図　SI－189・190

図示した遺物も遺存が少なく，出土遺物のほとんどが単に廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　北側でSK－257と重複し，本住居が切られている。しかし本住居の方が深いため，壁下位から床面は遺存している。

## SI－190（第214図，図版71）

**位置**　調査区中央南寄りの24L－80グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.2m，幅が3.1mの方形をなす。確認面からの深さは15cmであり，非常に浅い。東壁側を除いて，耕作機械による帯状の撹乱が所々南北に縦走している。

床面　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

カマド　北壁右寄りに位置する。右袖の右脇は北東隅部である。方形プランからの突出が現状では小さいが，竪穴の遺存が悪いことを考慮する必要がある。カマドの遺存も悪く，右袖の壁側のみが遺存する。左袖は遺存しない。火床部底面に赤色化した面はみられない。底面は床面よりも低く窪む部分があるが，範囲が小さい。使用に伴う程度の窪みであろう。カマド部分堆積土下層は焼土粒を含むが，あまり濃密ではない。その上層も焼けた山砂が多くみられる。

堆積土　床面には，少量の炭化材がみられる。若干の廃材等が焼却されたものと思われる。全体的には焼土粒を含む黒褐色土主体である。焼却後は自然堆積と思われるが，堆積土が薄いためやや断定しがたい。

出土遺物　やや少量であるが，堆積土が薄いことを考慮すると，密度は低くない。本来はかなり多くの遺物を包含していたと思われる。カマド内及びその周辺から多く出土した。図示できた遺物は２点である。１・２はともにロクロ土師器杯である。１は口縁・体部を口縁部周で1/2欠損する。欠損部の形態から打ち欠きされた可能性が考えられる。ただし遺存部分側も一部が細かく割れ，若干の欠損がある。２も底部中央や口縁部等に若干の欠損があるが，遺存部分が3/4程度あり，全体の遺存度では１よりも良好である。遺存部分はやや細かく割れており，土器だけでは意図的な破損とは認めがたい。１・２とも底部調整は回転糸切り後無調整である。

１はカマド火床部中央からかなり傾いた倒位で出土した。若干の破片が前側に散っている。２もカマド内前側及びカマド前方から出土した。なお１・２の周囲には図化できなかった土師器甕の破片が出土している。在地の土器で，被熱痕跡は顕著である。胴部はやや多く遺存するが，口縁部･底部の遺存が少ない。そのなかの若干大形の胴部片が，１の前側で１を囲むような状態で出土した。

竪穴の遺存が悪いことや耕作機械による撹乱があるため，やや不明瞭であるが，カマドは廃棄時に破壊され，１・２及び周辺の土器片はカマド廃棄の祭祀に伴う遺物の可能性が考えられる。その見方が妥当であるならば，２も意図的に破壊された可能性がある。

１・２及びその周辺以外の土器破片等は単に廃棄されたか，流入したものであろう。

重複遺構　SB－032と重複し，本住居が切っている。

SI－191（第215・216図，図版71）

位置　調査区中央南寄りの24M－02グリッドを中心に位置する。

形状・規模　新旧二つのカマドがあり，新カマドを奥にしてみると，長さが3.9m，幅が4.3mの横長の方形をなす。旧カマドからみた場合は長さと幅が逆になる。確認面からの深さは55cmである。耕作機械による帯状の撹乱が南北に多く縦走しており，それによって特に西壁が著しく破壊されている。

床面　撹乱は一部が床面に及んでいるが，達しないものが多く，ほぼ遺存する。床面は若干凹凸があるが，比較的平坦である。中央の硬化面は壁側との差があまり顕著でないが，一部でやや強く硬化している。ロームブロックを含む暗褐色土で，全体的に貼床が施されている。掘りかた底面は全体に凹凸があり，隅部だけが深くなるあり方ではないと思われる。

柱穴　主柱穴が４箇所検出された。新カマドからみて左前（北西）のP4は左（北）壁側に寄り，右（南）側のP2・P3はやや内に寄っている。主柱穴間を結ぶ形態も横長の方形であるが，若干台形的である。出入口ピットが南壁際中央やや東寄りで検出された。径は55cm，床面からの深さは21cmである。規模が大きいのは，貼床が施された影響であり，本来の柱材はより小さいものである。旧カマドの竪穴に対応する出

入口施設である。西壁際からは検出されなかった。西壁側は通常，新カマドの竪穴の出入口側であるが，貼床のために検出が難しかったことが考えられる。旧カマドの出入口ピットについては，出入りが新カマドに対して横方向となるため，新カマドの竪穴に伴ったか不明であるが，カマド付け替え後も，出入口の位置が変わらなかった可能性も考えられる。

壁溝　全周する。

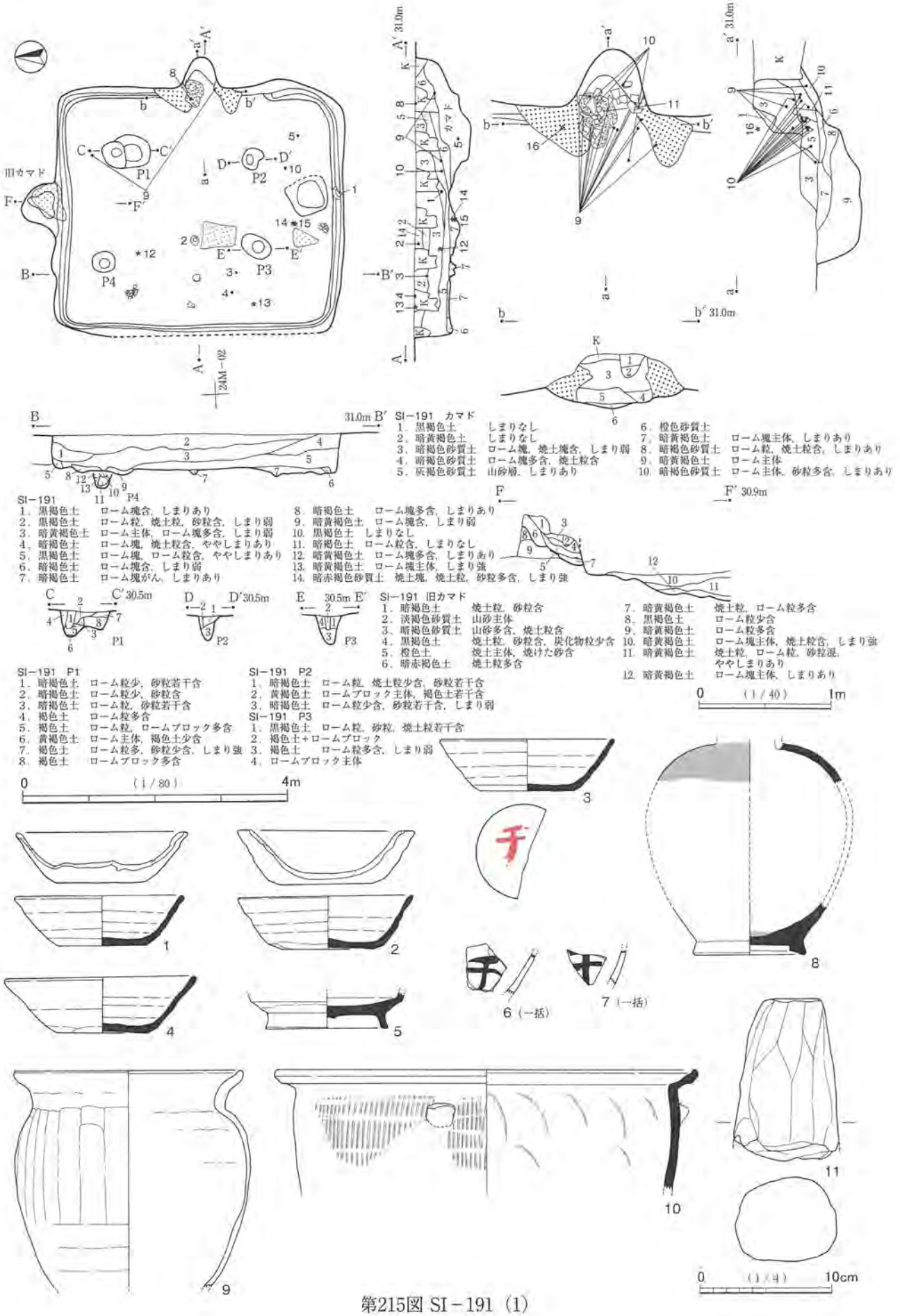
カマド　付け替え後の新カマドが東壁中央に位置し，付け替え前の旧カマドが北壁中央に位置する。ともに方形プランからの突出はやや大きい。旧カマド構築材はほぼ除去されており，袖等の遺存はない。ただし煙道部壁・底面の一部と堆積土の一部が遺存している。カマド付け替えに際して，特に除去される必要がなかったのであろう。堆積土は下層に焼土層があり（旧カマド５層），その上部に山砂を多く含む土層がみられる。旧カマド下部は，カマド付け替えの際に掘削されて，北壁及び壁溝が作られている。上部が埋め戻されているかどうかは判然としない。旧カマド前方の掘りかたは，床面から20cmの深さになる部分があり，かなり深い。

新カマドは耕作機械による撹乱がなければ，かなり遺存がよかったと思われる。部分的に破壊されているが，遺存のよい部分もある。両袖の構築材は混じりけが少ない山砂で，しまっている。内側は赤色化している。火床部中央やや左奥側から，土製支脚（11）が立った状態で出土した。その下部は出土時点では存在したが，非常にもろい状態であり，取り上げることができなかった。下部は灰褐色の色調であり，あまり火を受けた様子はみられなかった。固定するために底部が若干埋められていたと思われる。支脚下部の周囲には焼土が堆積しており（新カマド６層）。火床面を構成した土層である。11はやや左に寄っているが，以上の状況から最終的な使用時の位置を留めるものと思われる。11から前方のカマド底面は非常に深く，範囲の広いものである。床面から底面までは最深で35cmである。カマド作り替え時または当初からの掘りかたである。カマドはローム主体の暗黄褐色土で埋め戻した上に構築されている。最終的な火床面は床面とあまり変わらない高さに位置する。

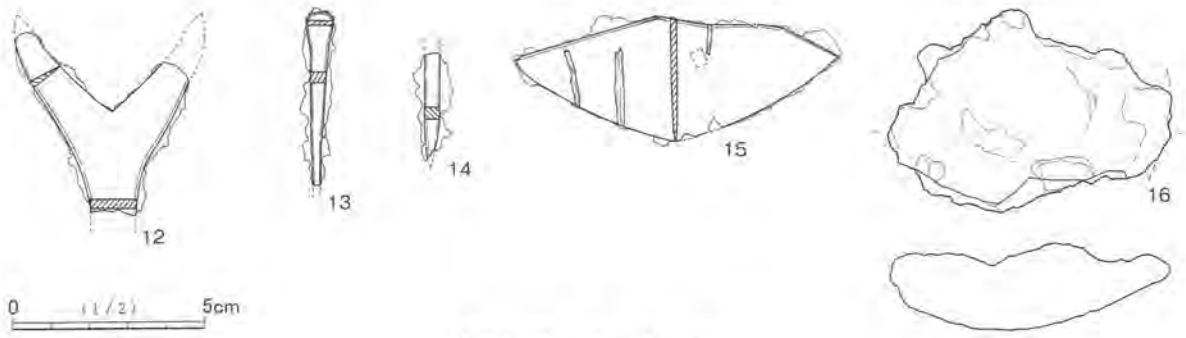
堆積土　主として上下層はローム粒を含む黒褐色土，中層はローム主体の暗黄褐色土である（３層）。中層までは埋め戻された可能性が考えられるが，やや断定しがたい。また中・上層に若干の焼土を含み，中央から南側にかけての一部に集中範囲がみられる。柱穴の堆積土については，P1にみられる暗褐色土でロームの包含が少ない柱状の土層は柱痕と思われるものであるが，その他は不明瞭である。

出土遺物　多量の遺物が出土した。分布が多いのは，カマド内・周辺から右奥（南東）側及び中央から前（西）側にかけてである。左（北）壁側と右前（南西）隅部はあまり多くない。図示できた遺物は16点である。１～４は千葉産の須恵器杯，５は新治窯産の須恵器高台付杯，６・７はロクロ土師器杯，８は東海産と思われる須恵器長頸壷，９は在地の土師器甕，10は千葉産の須恵器甑，11は土製支脚である。12～15は鉄製品で，12は鉄鏃，13・14は不明，15は穂摘具に似た製品である。16は鉄滓である。

１・２とも口縁・体部を欠損するが，比較的遺存のよい土器である。欠損の割合は，１が口縁部周で1/2弱，２は2/5程度である。欠損部の形態は，２が整った弧状，１も比較的整った逆台形状である。１の遺存部分は割れていない。２は２片の接合個体である。出土時点で割れているが離れていないため，廃棄時点では割れていなかったことも考えられる。以上から１・２とも欠損部は打ち欠きされたものと思われる。３は底部外面に「千」と書かれた朱書がある。また６・７も「千」の墨書をもつ小片である。体部外面に正位で記入されている。ともに内面は黒色処理・ヘラミガキが施されている。５は底部周辺の破片であり，




第215図 SI－191（1）




第216図　SI－191（2）

3・4もあまり遺存が良好でない。

8は底部周辺が遺存するが，上部の遺存は胴部上位の一部である。暗灰緑色の釉が胴部上位外面と底部内面に付着している。胴部の破片は断面内部に含まれていた気泡が膨張しており，内面にいくつかの膨らみがみられる。9はやや小型の甕である。胴部下位から底部を欠くが，口縁部・胴部上位の遺存は比較的よい。胴部中位以下の一部が被熱により剥落し，赤色化も著しい。10はやや大型の甑である。胴部外面上位に把手部分が1箇所みられるが，大部分が剥落しており，接着部の遺存である。接着部の形態は方形である。胴部外面に若干の山砂が付着している。

12は雁又式の鉄鏃の破片である。遺存は鏃身・棒状部の一部であるが，鏃身と棒状部の境は不明瞭である。鏃身下方の直線的な部分を棒状部とみておく。鏃身は大型で，二股を呈する刃部の間の抉りが広く，深い。刃部の両切先とも欠損する。刃部の遺存は図示した左側の方がよく，右側はやや悪い。鏃身の表裏面には，木質・植物繊維質が広く付着している。図示した表面はやや不規則な状態の繊維痕である。13は図示した上部がやや薄いため，刀子の茎が考えられる。しかし錆により欠損している可能性があり，他に釘，鉄鏃の茎等も考えられる。15は穂摘具に似た形態であるが，両先端が尖り，目釘孔がみられない点で，典型的な穂摘具と異なる。薄い作りで，刃部は弧状を呈する。背も一直線状ではないが，直線的な部分がある。図示した面に若干の繊維質が付着している。長軸に対して直交する方向である。繊維質の付着は，裏面にはみられない。用途は判然としないが，穂摘具と同様の大きさ・薄さであることから，穂摘具と似た工具と思われる。14は釘や，鉄鏃の茎部分等の破片である。釘の先端や茎尻側の遺存である。15とともに出土しており，その目釘の可能性があるが断定しがたい。15には明瞭な目釘孔が観察されないため，一応別個体と考えておきたい。製品名は断定しがたい。16は椀形の鍛冶滓である。

9・10は新カマド内下層で，11の周囲から出土した。9はカマドの左前方，10は右前方で，ともにカマドからかなり離れた位置に散っている。1は出入口ピットと右（南）壁間の壁溝上で，下層から正位で出土した。やや傾いているが，傾斜はあまり強くない。しかし上方から転落した可能性も若干考えられる。14は出入口ピット近くで，掘りかたの土層中から出土した。12は中央左側で，中・下位からの出土である。図示したその他の遺物は上層からの出土である。8は新カマド内の平面位置であるが，確認面からの出土である。また16は左袖部分の上層から出土した。2は中央上層から正位で出土した。

1は出入口部からの出土であり，竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性が考えられる。その他の遺物には，特に祭祀的様相がうかがえない。ただし2は打ち欠きされたと思われる土器であり，堆積土がかなり多く埋め戻されているならば，若干の可能性が考えられる。

**重複遺構**　北側でSI－181と重複し，本住居が切っている。

SI－192（第217・218図，図版72）

位置　調査区中央南寄りの24M－12グリッドを中心に位置する。

形状・規模　２回建て替えられており，計３時期の変遷がある竪穴住居である。便宜的に最初の竪穴をSI－192①，次をSI－192②，最後をSI－192③として記述する。①・②は北カマド，③は東カマドの竪穴である。壁溝が①から②・③の竪穴に拡張されていると思われるが，やや不明瞭である。そのため規模もやや不明瞭であり，推測の要素を含む。なお耕作機械による帯状の撹乱が南北方向に多く入っている。

③の規模は，長さが4.6m，幅が4.8m～5.4mで，やや横長の方形をなす。②の規模はその逆で，やや縦長の方形をなす。①の規模はやや不明瞭であるが，長さが4.5m～4.8m，幅が4.2m～4.4程度で，やや縦長の方形をなすと思われる。確認面からの深さは50cm～60cmである。建て替えに際して貼床が施されたため，①の床面は③に比べ，数cmから５cm程度深い。②の床面は，貼床前のものと貼床後のものの双方の可能性があるが，整った状態では遺存していないとみた方が妥当であろう。壁溝拡張後の形態はやや台形的である。

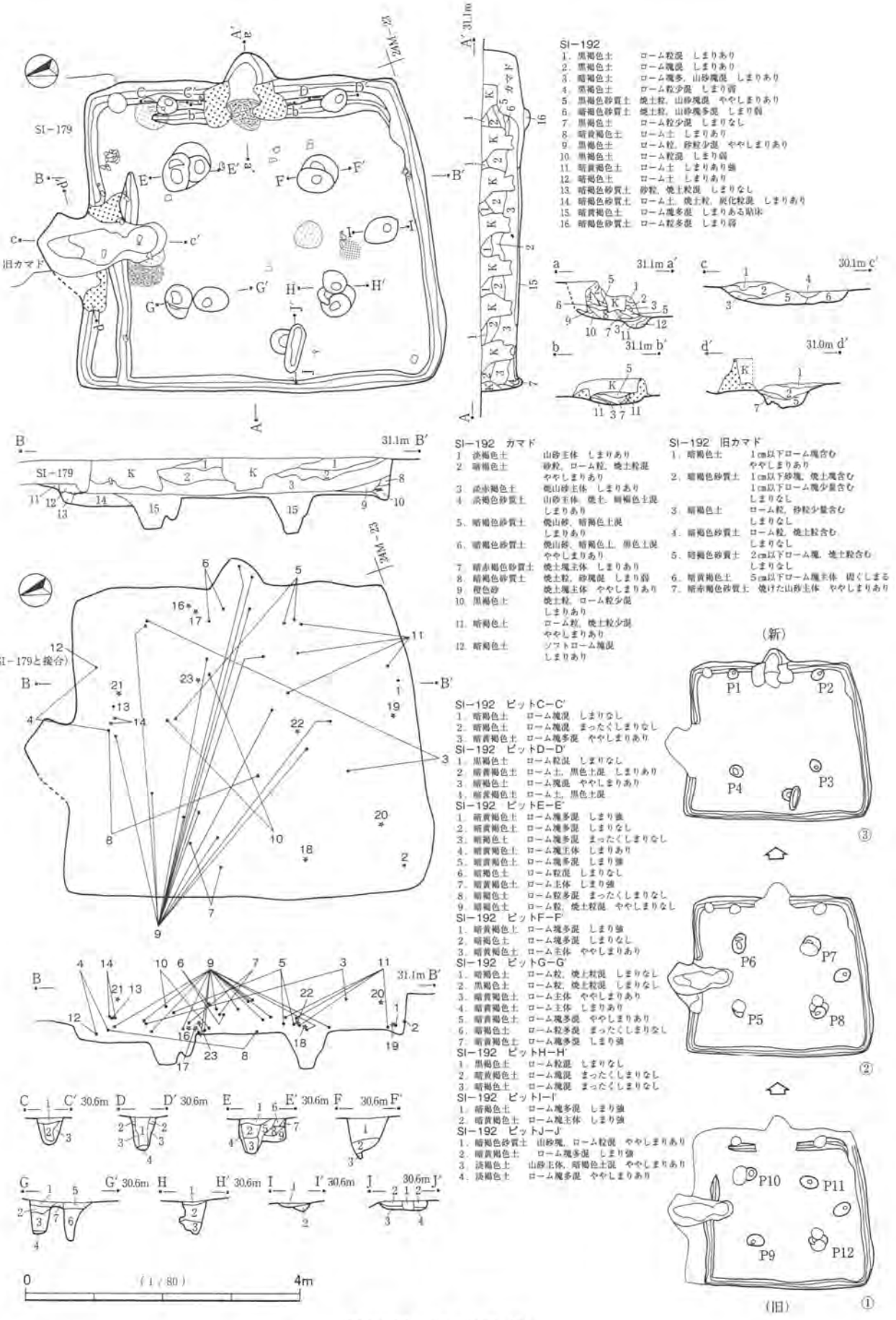
床面　貼床前の床面も，貼床後の床面もほぼ平坦である。貼床後の床面は中央がやや硬化しているが，貼床された影響で，強い硬化がみられるのは中心付近であり，範囲が狭い。貼床を構成する土層は，ローム ブロックを多量に含む暗黄褐色土層で，堅くしまっている。貼床前の床面は中央がやや広く硬化していると思われるが，若干不明瞭である。中央南寄りの旧床面において，焼けて赤色化した部分が検出された。径は40cm～45cmである。そこからやや南の旧床面上には，山砂の分布もみられる。

柱穴　①～③の各竪穴で主柱穴が４箇所検出された。①のものはP9～ P11，②のものはP5～ P8，③のものはP1～ P4と思われる。①・②の竪穴は同様の位置であるが，拡張にさいして，②は①の各柱穴よりもやや外側に作られたと理解した。①・②の各柱穴は通常の位置であるが，③については，東側の２柱穴を東壁際に移したと思われる。東側のP6・P7は埋め戻され，上部に貼床が施されている。西壁側は同様の位置であるが，②に比べ，やや内側に位置すると思われる。

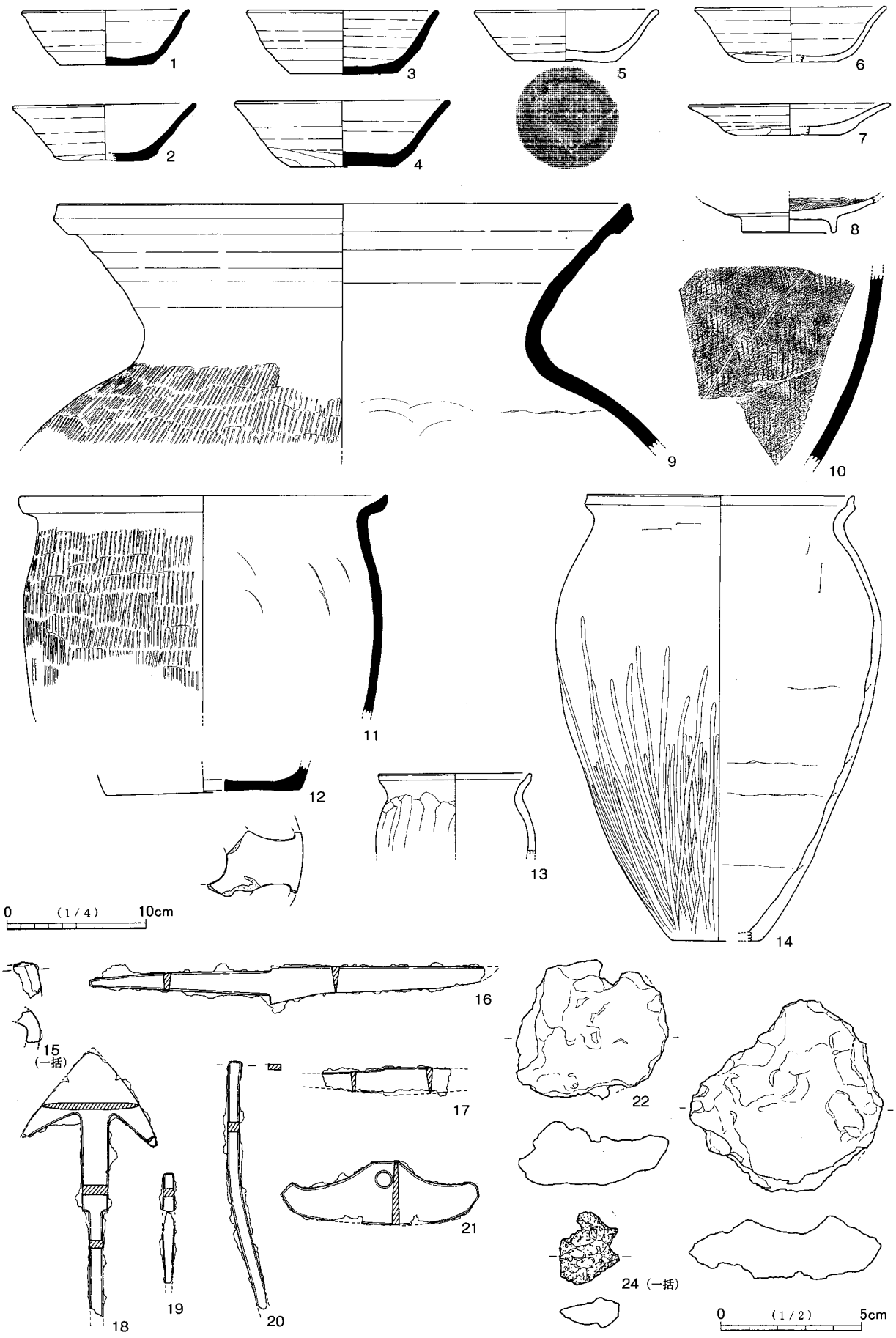
出入口ピットが，南壁際中央と，西壁際中央やや右（新カマドからみて）寄りの位置で検出された。前者が①・②，後者が③に伴うものであろう。なお前者の場合，①・②で位置が変わらなかったと理解しておきたい。①・②のピットの径は55cm×40cm，床面からの深さは15cmで，中央に向かって縦長の形態である。③のピットは半円形のものとやや細長い溝状のものが連接した形態である。溝状のものは中央に向かって縦長の形態である。双方合わせた規模は，長さが37cm～72cm，幅が21cm～68cm，深さは11cm～17cmである。溝状部分の方がやや深い。①・②のピットは北カマド中軸線と一直線上の位置関係であるが，③のピットは東カマド中軸を通る線上から右にずれて位置する。

壁溝　各竪穴で全周する。南壁・西壁下の壁溝は各竪穴で共通し，南側及び西側への拡張はされていない。北側・東側は内側で壁溝が検出され，①の壁溝と思われる。①の壁溝は一部で検出されなかったが，全周すると思われる。①から②への建て替えにさいして，壁が北側・東側に拡張され，新たな壁の下に壁溝が設けられた。③については，カマド位置の変更があったが，壁溝は②から変更がないと思われる。

カマド　①・②のカマドは北壁中央に位置し，③のカマドは東壁中央に位置する。②のカマドはやや大きく突出する。③のカマドはそれほど大きく突出せず，両袖はプラン内に位置する。カマド付け替えに際して，②のカマドの多くが除去されているが，左袖が壁際に遺存している。右袖の構築材は遺存しないが，地山が掘り残された基底部が遺存している。カマドは東壁に付け替えられたが，わずかな幅であるので壁溝が掘られなかったのであろう。旧カマドの底面は中央側に向かって延びている。底面の幅が内側の壁溝




第217図　SI－192（1）




第218図　SI－192（2）

付近でやや狭くなるが，そこから中央側は再び広くなり，円形状を呈する。この部分は①のカマドの火床部分と思われる。堆積土はロームブロックを主体とする暗黄褐色土（６層）である。堅くしまっており，貼床と考えられる。この部分については，②のカマド使用時点で，床が貼られていたと思われる。②のカマドの火床部はより奥側にある。堆積土最下層はロームブロック・焼土粒を含む暗褐色砂質土（５層）であるが，その上部に焼土主体の土層（７層）が堆積しており，火床面の土層と思われる。②最終の火床面は埋まったか埋められた土層の上に位置する。焼土の平面位置は拡張された北壁を結ぶ線上の前後にあり，火床中心の位置はかなり奥側である。この焼土層は床面よりもやや低い位置にあるため，特に除去されなかったのであろう。なおカマドが付け替えられた時に，②のカマドの煙道部が埋め戻されて壁が構築されたかどうかは不明瞭である。

③のカマドは両袖及び火床部中央上部に，耕作機械による撹乱が入っており，上部の遺存が悪い。両袖の構築材は山砂を主体とし，混じりけが少ない。内側は赤色化している。下層に堆積する焼土の平面位置は中央からやや前側であり，火床面とみられる。火床面の深さはほぼ床面と同じであるが，焼土層の下方には，埋められた①の住居の壁溝がある。

**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体である。下層はロームブロックを多く含むが，自然堆積と思われる。

柱穴のうち，P1・P2の土層断面には柱状の部分がある。この部分の土層は暗褐色土・黒褐色土で，しまりのない土層である。周囲はロームを多く含み，ややしまりのある土層である。柱痕と思われる。柱穴部分の柱材は抜き取りされなかったことがわかる。ただし柱は切断されたかもしれない。P6･P10の土層は，P6部分の上部に貼床が施されている。少なくともP6は埋め戻されていることがわかる。土層断面の様相から，P10部分も埋め戻されていると思われるが，しまりが弱く，やや不安がある。③の住居の柱穴は４本柱＋壁際の補助柱穴（P1・P2）の可能性も若干考えられる。しかしP1・P2は他と同程度の深さをもつことから，一応右下の図のように理解しておきたい。P7・P10部分の土層もロームブロックを多く含み，上部が堅くしまることから，貼床が施されたものと思われる。西側のP4・P5・P9及びP3・P8・P12の土層には，明瞭な柱痕がみられない。また貼床部分も不明瞭である。柱は抜かれた可能性があるが，切り合いが多いため，断定しがたい。

出入口ピットの土層断面をみると，南壁際のP7は埋められ，貼床が施されている。一方，西壁際のP8は柱状の暗褐色土があり，その周囲はロームブロックを多く含む土層である。柱状部分は柱痕と思われる。

**出土遺物**　多量の遺物が竪穴全体から出土した。図示できた遺物は24点である。１～４は千葉産の須恵器杯である。５・６はロクロ土師器杯としたが，６は千葉産の須恵器の可能性もある。７はロクロ土師器皿，８はロクロ土師器高台付皿である。９・11は千葉産の須恵器甕で，９は大型品である。10は須恵器甕で，南比企窯産と思われる。12は千葉産の須恵器甑である。13は小型の土師器甕で，在地の土器である。14は常総型の土師器甕である。15は羽口である。16～21は鉄製品で，16･17は刀子，18は鉄鏃，21は火打(燧)金である。20は紡錘車の紡軸であろう。19は判然としない。22・23は鉄滓で，椀形滓である。24は軽石である。

杯皿類のうち，５はやや遺存がよいが，他は1/2以下である。５は内外面の一部に強く赤みをもつ部分がある。器面も荒れており，二次的に火を受けている。なお遺存部分はやや細かく割れている。破損・欠損に意図的な様相は認めがたい。８は底部が遺存する。内面はヘラミガキが施されている。滑らかな質感であるが，転用硯ではないと思われる。

9は口縁部から胴部上位までの一部が遺存する。千葉産としては非常に大型の甕である。10は胴部片である。胴部外面は平行タタキが二方向から施され，斜格子状となっている。またヘラ描きの沈線があるが，調整痕と思われる。内面はわずかに同心円文と思われる当て具痕があるが，ナデによりほとんど消されている。内面はやや滑らかな質感であるが，8同様硯に転用されたものではない。胎土は白色針状物をやや多く含む。また白色・灰黄色の砂粒・小石を含むが，比較的緻密である。色調は灰色で，焼成は堅緻である。11は胴部外面の一部に焼けた山砂が付着する。12は5孔式の底部の破片である。中心孔と2箇所の周辺孔の一部が遺存する。14は口縁部から胴部下位までかなり遺存のよい土器である。特に胴部中位は全周遺存する。底部は小さいが，遺存は周縁の一部である。遺存部分はやや細かく割れている。胴部外面中位から下位にかけてのヘラミガキはやや入念でなく，ミガキ以前に施された横方向のヘラケズリの痕跡が部分的に残っている。

15が羽口先端の破片である。表面が灰黒色化している。16は切先をわずかに欠くだけであり，完形に近い刀子である。ただし錆の進行が進み，もろくなっている。刃関部分で身幅が広がり，深い直角の関をなす。背関もやや浅いが直角に切り込みが入る。17は関付近の破片である。錆が著しいため，状態が悪い。背関は不明瞭であるが，ごく浅く直角に作り出されると思われる。刃関は遺存が悪く，判然としない。18は切先から茎の途中まで遺存する鉄鏃である。鏃身は広身の三角形式で，逆刺をもつ。錆のため若干欠損するところがある。棒状部はかなり短く，短頸の鉄鏃である。棒状部の側面は直線的であるが，茎との境でわずかに広がる。篦被は，直角の両関であり，四面関ではない。繊維質が茎にわずかに付着している。また繊維の巻き付け痕と思われる痕跡が部分的にみられるが，錆と一体化している。19・20は棒状の鉄製品である。ともに細身の製品である。20はやや長さがあるので，紡錘車の紡軸と思われる。19も同様で，20と同一個体であることも考えられる。なお同一個体でない場合，19は釘や鉄鏃の茎等も考えられる。21はほぼ完形の火打金である。山形を呈する上部の中央にやや大きめの円孔がみられる。左右両端の上部はやや高まる。火打石をぶつける下縁側は緩やかな弧状を呈するが，中央はやや直線的である。錆による劣化のため，一部を欠損する。22・23は椀形の鍛冶滓である。24は黄色みを帯びる部分があるが，被熱痕跡かどうか判然としない。

遺物の出土層位は床面から上層にわたるが，中・上層からの出土が多い。また平面的に広く散っているものが目立つ。14は旧カマドの東方からまとまって出土したが，上層からの出土である。9は新カマド内他，広域に分布するが，層位は中・上層を主体とする。比較的遺存のよい5も中・上層からの出土である。やや多く出土した鉄製品も出土の偏りはみられない。16はカマド左袖外脇下層から出土し，また18が新出入口ピット右脇の下層から出土したが，ともに祭祀的様相をみるのは難しい。出土量のわりに遺存のよい遺物は少なく，ほとんどが単に廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　北側でSI－179と重複し，本住居が切られている。

**SI－193**（第219図，図版72）

**位置**　調査区中央の24L－20グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.0m，幅が3.9mの方形をなす。確認面からの深さは50cmである。重複遺構により南側の上部を欠損するほか，撹乱を受けて，南東側の1/4弱と北西側の一部が床面まで破壊されている。

**床面**　遺存する部分はほぼ平坦である。中央が硬化しているが，硬化面はかなり破壊されている。遺存する部分をみると硬化はかなり強く，壁側と差がある。

**柱穴等**　出入口ピットは検出されなかった。南壁際中央に存在すると思われるが，撹乱により破壊されたのであろう。主柱穴は存在しない。

**壁溝**　北西側の撹乱部分を除いて巡る。本来全周するものであろう。南東側は壁溝が遺存しており，撹乱が壁溝底面まで達していない。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランからの突出はあまり大きくない。遺存はやや不良で，両袖とも前側を欠損している。右袖は壁側上部もかなり欠損する。構築材は山砂を主体とする。混じりけの少ない部分が多いが，下部はロームブロックを含み，一部に暗褐色土を含む。左袖内側は赤色化した部分が遺存している。火床部底面は焼けて，地山のロームが赤色化・硬化している。その範囲の前側は焼土粒とともに炭化物も多くみられる。カマド内堆積土下層は焼土粒を含むが，焼土粒は底面直上よりもやや上部に多い。火床部底面は床面よりもやや深い。カマド使用によって窪んだ他，掘りかたが深かったことも考えられる。

**堆積土**　ローム粒を含む暗褐色土を主体とする。下層はロームの含有が多い。

**出土遺物**　やや多量である。現状ではカマド周辺及び北側から多く出土しており，南側に少ない。しかし南側については，撹乱や重複遺構に切られた影響が大きく，本来はより多く包含していたと思われる。図示できた遺物は４点である。１は千葉産の須恵器杯である。２はロクロ土師器杯としたが，千葉産須恵器の可能性もある。３は在地の土師器甕，４は新治窯産の須恵器甑である。

２は口縁・体部の一部を欠損するが，かなり遺存のよい土器である。欠損部の形態は逆台形状である。打ち欠きされた可能性も考えられるが，遺存する口縁・体部が全体に割れているため，断定しがたい。個々の破片も逆台形状の形態である。二次的な被熱により赤みが強い。４の遺存はあまり多くないが，口縁端部から底部端部まで遺存する。底部の遺存はわずかであるが，５孔式の甑である。被熱により下位を主体に赤みを帯びている。また胴部外面下位に山砂が付着している。１・３の遺存は少ない。

２は主としてカマド内及びカマド右前方の下層から出土した。一部が遠く西壁際南寄りの壁溝直上に散っている。４はカマド内下層，３もカマド内上層及びカマド左前方の下層から出土した。１は東壁際やや南寄りの床面から出土した。２はカマド廃棄の祭祀に関わる可能性が若干考えられるが，断定しがたい。他の遺物には祭祀的様相がうかがえない。大半の遺物は単に廃棄・遺棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　南側でSD－020と重複し，本住居が切られている。ただし本住居の方が深いため，壁の下半及び床面は遺存している。

SI－194（第220図，図版72）

**位置**　調査区中央南西寄りの23L－88グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.8m，幅も2.8mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。耕作機械による帯状の撹乱が南北に縦走し，やや多く欠損する。特に西壁側の破壊が著しい。

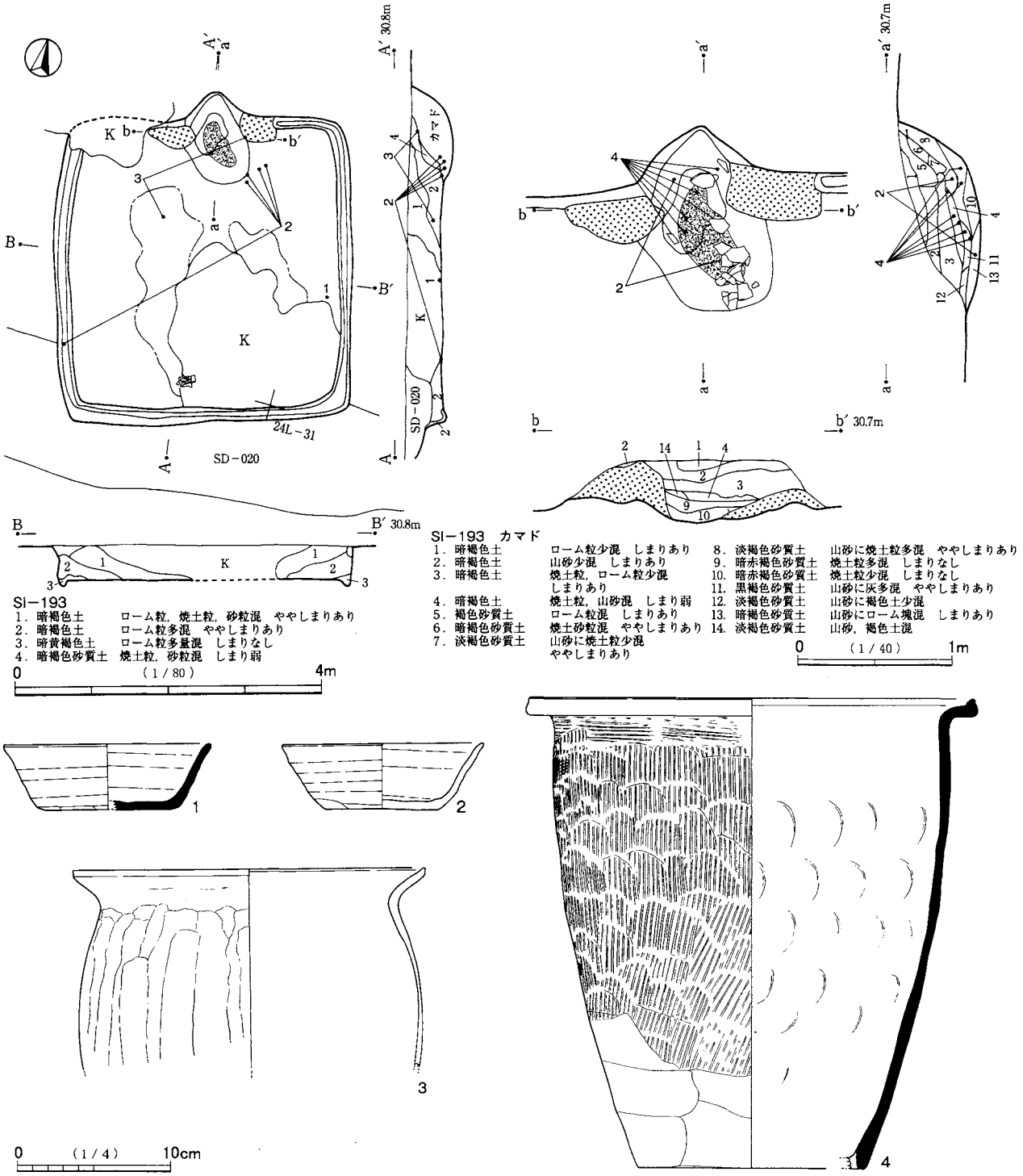
**床面**　遺存する部分はほぼ平坦である。中央が顕著に硬化している。壁側はロームブロックを主体とする暗黄褐色土で貼床が施されている。西壁側は撹乱の影響が著しい影響もあって，床面を掘り抜き，掘りかた底面を露呈していると思われる。図示した撹乱の範囲内は床面を損なっているが，掘りかた底面はほぼ遺存しているとみられる。

**柱穴等**　出入口ピットは検出されなかった。破壊された可能性があるが，判然としない。主柱穴は存在しない。

**壁溝**　比較的遺存のよい部分は巡っている。本来全周すると思われる。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランからやや大きく突出する。中央に撹乱を受け，全体の遺存はあまりよくないが，両袖壁側の遺存は比較的よい。構築材は山砂を主体とし，堅くしまっている。両袖内側ともかなり内部まで赤色化している。堆積土下層に焼土主体の土層があり(10層)，火床範囲であろう。底面からはやや浮いている。底面直上の土層は焼土・炭化物を含む黒褐色土である。底面は床面からやや窪んでいるが，あまり範囲が広くなく，使用に伴う程度のものであろう。

**堆積土**　暗褐色土主体である。中・下層にロームの含有がやや多いが，自然堆積と思われる。




第219図　SI－193

出土遺物　やや多量で，全体的に出土した。撹乱を受けていなければ，現状の２倍近い遺物が出土したと思われる。図示できた遺物は５点である。１・２はロクロ土師器杯である。３・４は在地の土師器甕で，４は小型の甕である。５は軽石である。

１は口縁部の一部を小さく欠損する以外は割れていない遺存良好な土器である。打ち欠きされた可能性があるが，欠損部がやや小さいため，断定しがたい。２は底部外面にヘラミガキ的な条線が数条みられる。ヘラ書きの可能性があるが，不整であり，単なる調整痕とも思われる。底部外面の調整は，その部分を除けば，回転糸切り後無調整である。遺存は少ない。３・４も遺存が少ないが，焼成はともに良好である。

１は左前（南西）隅の床面から出土した。正位・倒位や傾きの状況等は不明である。平面位置は床面を損なった範囲内からであるが，掘りかた底面はほぼ遺存していることから，１の出土状況は当初の状態をあまり損なっていないと思われる。２・４・５は上層出土，３は下層であるが，床面からやや浮いている。

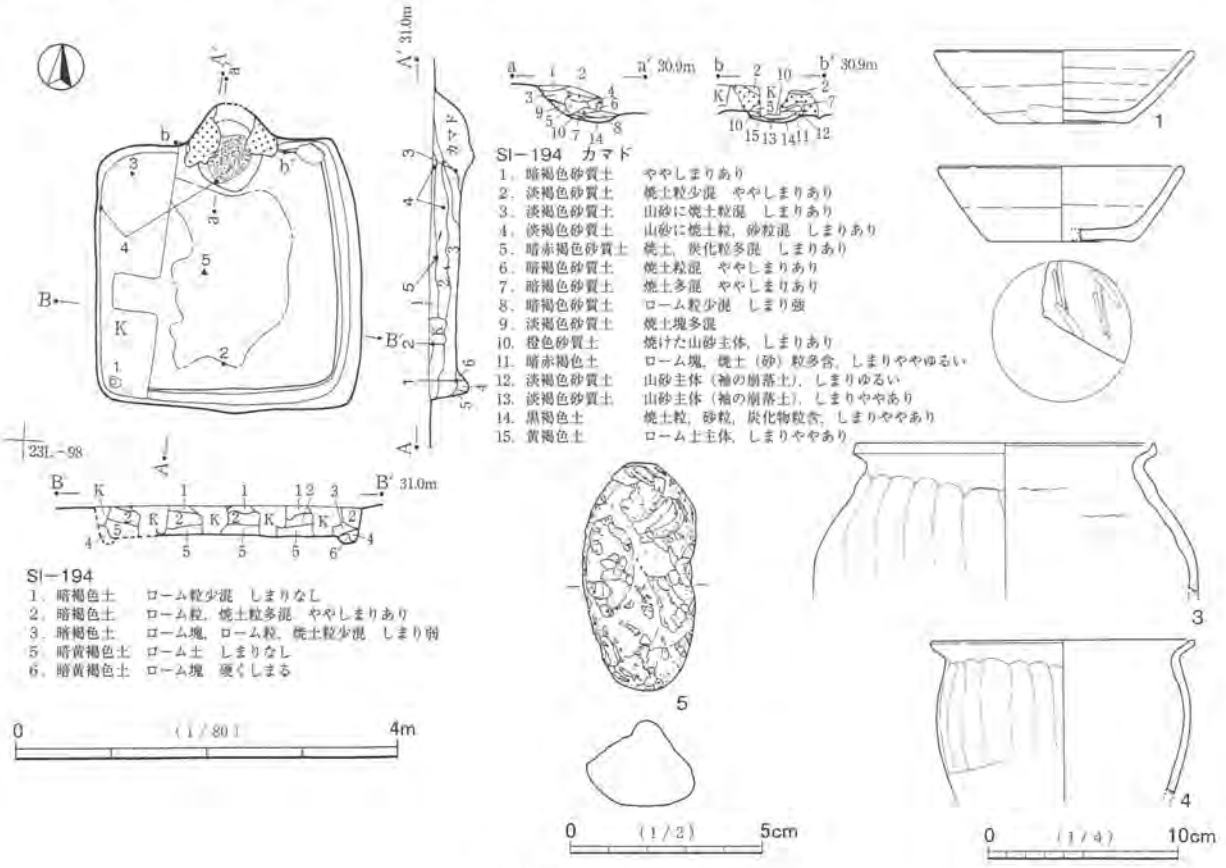
１の出土状況は祭祀的な可能性があるが，断定しがたい。１が判然としないが，他の出土遺物の大半は単に廃棄されたか，流入したものと思われる。

SI－195（第221図，図版73）

位置　調査区中央南寄りの24M－00グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.3m，幅が3.2mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。部分的に耕作機械による帯状の撹乱を受けている。

床面　SI－196と大きく重複し，その堆積土上に作られている。全体にロームブロックを含む暗黄褐色土で貼床が施されているが，壁側等でやや検出が難しい部分があった。特に南側は若干掘りすぎている。把握できた部分をみると，ほぼ平坦である。中央の硬化が顕著である。




第220図　SI－194

**柱穴等**　出入口ピットは検出されなかった。南壁際に存在する可能性があるが，SI－196との重複のため不明である。主柱穴は存在しないと思われる。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランから大きく突出する。両袖上部は周囲に流出しているが，下半部の遺存はよい。構築材は山砂を主体とし，しまりがある。両袖内側は赤色化している。火床部の焼土範囲（10層）は底面よりもやや高い位置にある。また炭化物を多く含む範囲（11層）が，焼土範囲の中央から前方にかけての下層にみられる。底面上には焼土の他，ローム粒を含む土層が堆積する（12層）。カマド底面は床面よりもかなり深い。両袖も12層上に作られているため，当初または作り替え時の掘りかたと思われる。

**堆積土**　黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　遺物量はやや多量で，竪穴全体から出土した。図示できた遺物は９点である。１はロクロ土師器杯，２は新治窯産の須恵器高台付盤，３は須恵器壺，４～６は在地の土師器甕，７は千葉産の須恵器甑，８は手捏土器である。９は鉄製品で，刀子である。

１はまったく割れていない完形の土器である。油煙が口縁部内面を主としてほぼ全周に厚く付着している。外面の油煙は一部が底部まで垂下して付着し，その周辺はかなり黒ずんでいる。体部下位から底部外面も一部黒ずむ部分がある。小型の土器であり，灯明専用の器として製作されたものであろう。２は口縁部全周を欠くが，底部周辺の遺存がよく，高台の欠損はわずかである。他の遺物よりも古く，SI－196の時期のものである。３も底部周辺の破片である。胎土は白色・灰色・黒色等の細砂粒・小石を若干含むが，比較的緻密である。しかし焼成はややあまく，色調もかなり黄色みを帯びる灰色である。産地は不明である。

４は遺存があまり多くないが，口縁端部から底部まで連続して接合する。やや寸胴の器形である。５は胴部の小片である。外面に墨書があるが，遺存が少なく，判読できない。なお甕の場合，黒色物は煤の付着であることも考えられる。しかし縦横にみられ，形も比較的明瞭であることから墨書と思われる。墨痕はやや薄い。６の胴部は膨らみがなく，最大径は口縁部にある。７は胴部外面に斜格子目のタタキがみられる。底部は５孔式で，糸切り痕はみられない。８は口縁・体部の小片である。

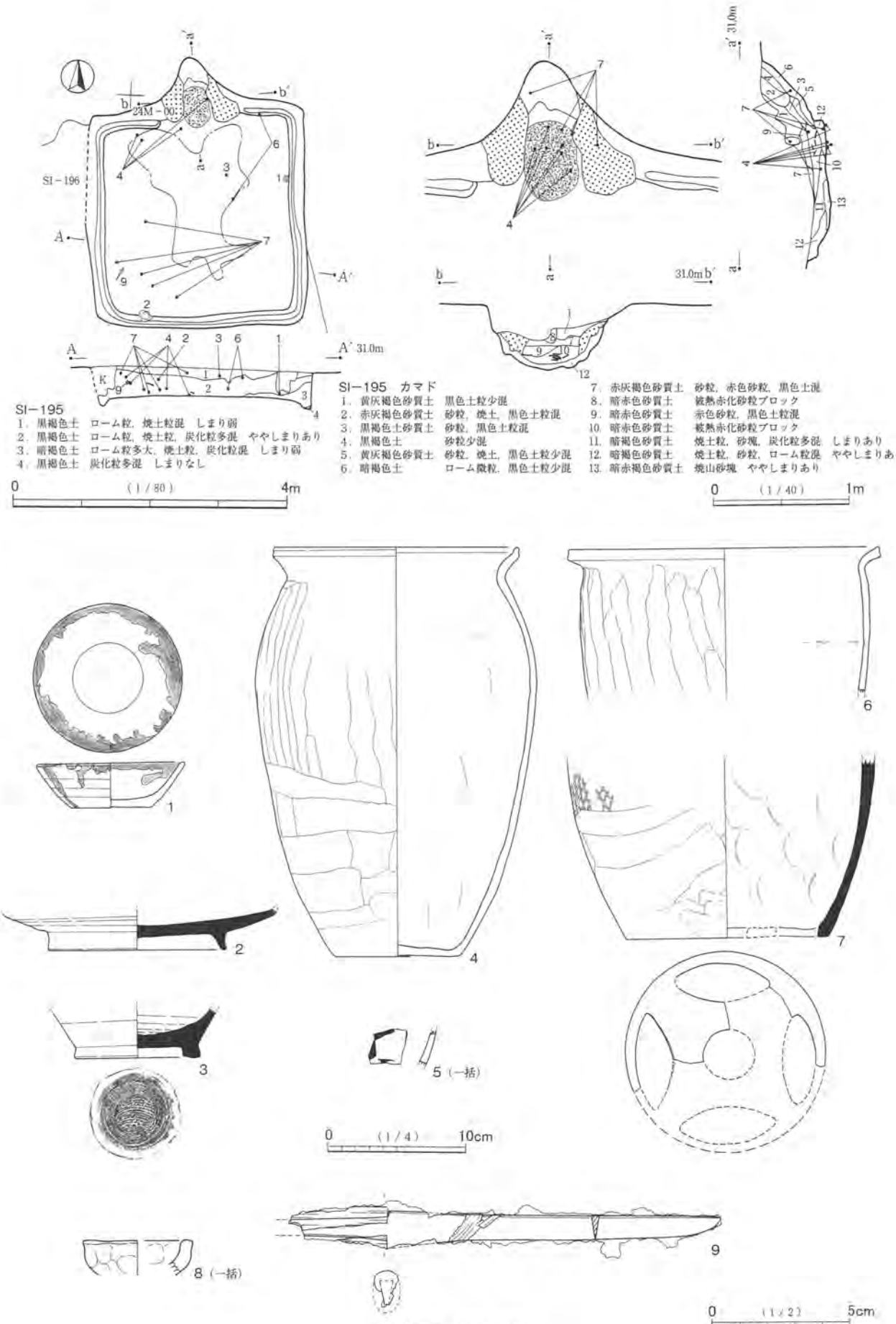
９は比的遺存良好な刀子で，切先から茎の途中までみられる。茎には柄の木質も多く遺存している。また身のやや茎寄りの表裏面にも繊維質が斜め方向に付着している。背関・刃関はともに直角に切り込みが入る。

１は右（東）壁際やや奥（北）寄りの下層から出土した。正位・倒位・傾き等の状況は不明である。４・７はカマド内から出土したが，７は南西側まで広く散っており，４もカマド左前方に散っている。出土層位は下層・床面もあるが，中・上層にもわたっている。２は南壁左寄りの上層から出土したが，時期の古い遺物が本竪穴に流入したものである。３は上層，９は中層からの出土である。

出土遺物のうち，１は土器そのものが祭祀的なものである。出土状況から竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性の他，上方に所在した祭祀に関わる施設からの落下も考えられる。１以外の出土遺物には，特に祭祀的な出土状況はうかがえない。出土層位も床面から上層にわたっている。多くの遺物は単に廃棄・遺棄されたか流入したものであろう。

**重複遺構**　SI－196と大きく重複し，本住居が切っている。

**SI－196**（第222図，図版73）


SI－196
24M－00
31.0m
SI－195
1．黒褐色土　ローム粒，焼土粒混　しまり弱
2．黒褐色土　ローム粒，焼土粒，炭化粒多混　ややしまりあり
3．暗褐色土　ローム粒多大，焼土粒，炭化粒混　しまり弱
4．黒褐色土　炭化粒多混　しまりなし
SI－195　カマド
1．黄灰褐色砂質土　黒色土粒少混
2．赤灰褐色砂質土　砂粒，焼土，黒色土粒混
3．黒褐色土砂質土　砂粒，黒色土粒混
4．黒褐色土　砂粒少混
5．黄灰褐色砂質土　砂粒，焼土，黒色土粒少混
6．暗褐色土　ローム微粒，黒色土粒少混
7．赤灰褐色砂質土　砂粒，赤色砂粒，黒色土混
8．暗赤色砂質土　被熱赤化砂粒ブロック
9．暗赤色砂質土　赤色砂粒，黒色土粒混
10．暗赤色砂質土　被熱赤化砂粒ブロック
11．暗褐色砂質土　焼土粒，砂塊，炭化粒多混　しまりあり
12．暗褐色砂質土　焼土粒，砂粒，ローム粒混　ややしまりあり
13．暗赤褐色砂質土　焼山砂塊　ややしまりあり
0　(1/80)　4m
0　(1/40)　1m
0　(1/4)　10cm
0　(1/2)　5cm

第221図　SI－195

位置　調査区中央南寄りの24M－00グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが6.0m，幅も6.0mのかなり整った方形をなす。確認面からの深さは60cmである。東辺がやや短い。耕作機械による帯状の撹乱を多く受けている。

床面　全体的に厚く貼床が施されている。貼床を構成する土層は概してローム粒・ロームブロックを多く含むが，ロームの含有量の違いによって，色調に違いがある。床面は多少の凹凸があるが，比較的平坦である。中央から左奥側が硬化している。中央の硬化がやや強いが，顕著な強さではない。

柱穴　主柱穴が6箇所検出された。通常の4本柱の柱穴に加えて，左右（東西）両壁側の中間に柱穴がある。床面からの深さをみると，左壁側中間のP6は隅のP1・P5よりも浅く，右壁側中間のP3も隅のP2・P4よりも浅い。しかしP3は北西側のP1よりもわずかに深いため，全体としては差が顕著でない面もある。

出入口ピットは南壁側中央で検出された。径は73cm×63cm，床面からの深さは27cmである。位置は南東側の主柱穴P4，南西側の主柱穴P5を結んだ線上で，ややP4寄りのところである。

P2・P3周辺にいくつかのピットがあるが，整ったところには位置しない。黒色土の含有が多い貼床部分を発掘したものと思われる。

壁溝　全周する。

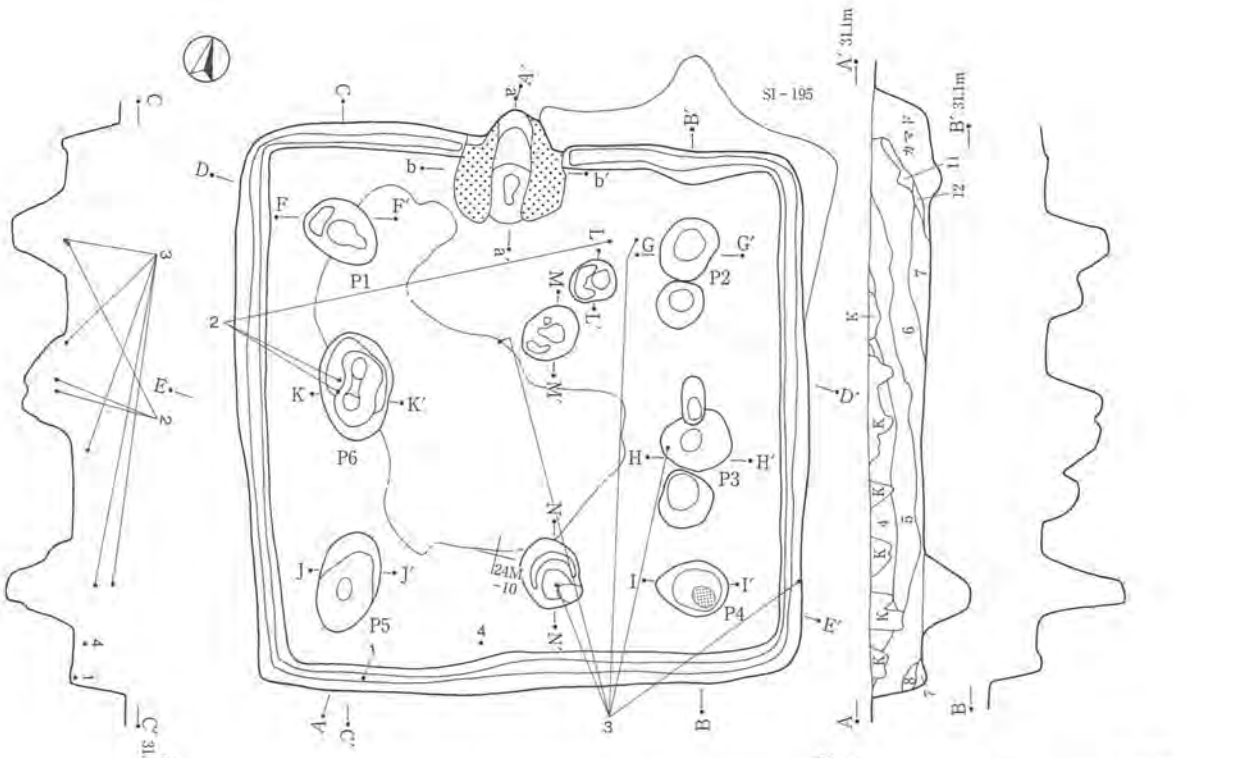
カマド　北壁中央に位置する。煙道部が方形プランから突出するが，カマドの多くはプラン内に位置する。左袖は比較的よく遺存するが，右袖上部の遺存が悪い。構築材は山砂を主体とするが，若干のローム粒を含む。最下部はロームに加えて暗褐色土も多く含む。両袖内側は赤色化し，特に左袖はよく遺存している。カマド内堆積土は細かく分層できるが，焼土粒・焼土ブロックは概ね下半全体に堆積している。火床部底面には赤色化した面がみられないが，被熱によりブロック状となり，若干硬化している。底面は床面よりもやや深く窪んでいるが，範囲は狭い。左袖下方は深さ25cm程度の窪みがあり，山砂・焼土が堆積していた。当初またはカマド作り替え時の掘りかたが埋め戻されたものと思われる。

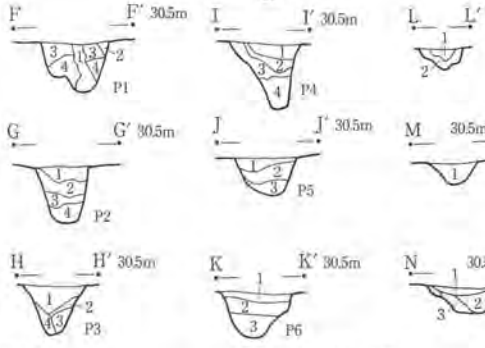
堆積土　暗褐色土・黒褐色土主体であるが，下層及びピット内は，ローム粒・ロームブロックを多く含む。P1に柱痕と思われる土層があるが，他は不明瞭である。堆積土は概ね自然堆積と思われる。

出土遺物　竪穴全体から出土したが，遺物量はやや少量である。図示できた遺物は6点である。1は須恵器蓋で，湖西窯産と思われる。2は新治窯産の須恵器杯，3・4は非ロクロの土師器杯である。5はロクロ土師器高台付杯で，足高高台杯である。6は土師器椀または鉢である。

1の内面は朱墨が付着しており，硯に転用された土器である。遺存は少なく，転用された後に破損したものである。口縁端部は折り返されており，やや大型の蓋である。朱墨は口縁端部近くまでみられる。つまみは遺存しないが，硯に転用された時点で除去されたと思われる。天井部外面に灰黄色の釉が若干付着している。2は比較的遺存のよい土器である。欠損部は口縁・体部の1/3強で，底部は遺存する。遺存部分は若干割れている。欠損・破損に意図的な様相はうかがえない。底部周縁に回転ヘラケズリが施され，やや丸みをもつ底部である。底部外面に2条以上，やや不整な擦痕がみられる。ヘラ書きとも思われるが，製作時の痕跡とみておきたい。

3・4・6は古墳時代後期の土器と思われる。4は口縁部の破断面を研磨し，杯として再利用している。その他は割れずに遺存する土器である。丸底の土器で，内面はヘラミガキが施されている。また漆仕上げされていることも考えられるが，断定しがたい。焼成は良好であるが，外面はやや荒れている。4は遺存が1/2弱，6は小破片である。




**SI－196**

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 暗黄褐色土 | ローム塊，焼土粒，砂粒，炭化粒混 しまりあり |
| 2. | 黒褐色土 | ローム粒混 しまりなし |
| 3. | 暗褐色土 | オーム塊，砂塊，焼土粒混 |
| 4. | 黒褐色土 | ローム粒，焼土粒少混 ややしまりあり |
| 5. | 黒褐色土 | ローム粒混 しまりあり |
| 6. | 暗褐色土 | ローム粒多，焼土粒，炭化粒混 ややしまりあり |
| 7. | 暗褐色土 | ローム粒，焼土粒，炭化粒混 ややしまりあり |
| 8. | 暗赤褐色土 | 焼土，黒色土混 しまりなし |
| 9. | 黒褐色土 | ローム粒多混 しまりなし |
| 10. | 暗褐色土 | ローム粒多大混 ややしまりあり |
| 11. | 暗褐色砂質土 | 焼山砂，ローム粒多混 ややしまりあり |
| 12. | 暗赤褐色砂質土 | 焼山砂多，炭化粒，ローム粒混 ややしまりあり |

**SI－196 カマド**

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 黒褐色砂質土 | 砂粒多，焼土粒焼混 |
| 2. | 黒褐色土 | ローム粒，ロームブロック混 |
| 3. | 赤灰色砂質土 | 被熱あり |
| 4. | 赤灰褐色砂質土 | 被熱砂粒混 |
| 5. | 赤灰褐色砂質土 | 被熱砂粒，砂ブロック混 |
| 6. | 暗褐色砂質土 | 砂粒，焼土粒多混 |
| 7. | 暗褐色土 | ローム粒，焼土粒混 |
| 8. | 赤灰色砂質土 | 被熱砂粒 |
| 9. | 赤灰褐色砂質土 | 被熱ブロック，砂粒混 |
| 10. | 赤灰褐色砂質土 | 赤化砂粒多混 |
| 11. | 明灰褐色砂質土 | 赤化砂粒多，赤化砂ブロック焼混 |
| 12. | 赤褐色砂質土 | 暗褐色土粒焼混 |
| 13. | 赤暗褐色土 | 焼土多混 |
| 14. | 赤褐色土 | 暗褐色土粒焼混 |
| 15. | 赤暗褐色土 | 焼土多混 |
| 16. | 赤褐色土 | 暗褐色土粒少混 |

**SI－196 P1**

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 暗褐色土 | ローム塊少混 しまりなし |
| 2. | 暗黄褐色土 | ローム塊多混 しまり強 |
| 3. | 暗黄褐色土 | ローム塊多混 しまりあり |
| 4. | 暗黄褐色土 | ローム塊多混 しまりなし |

**SI－196 P2**

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 暗褐色土 | ローム粒混 しまあり |
| 2. | 暗黄褐色土 | ローム塊多混 しまりあり |
| 3. | 暗黄褐色土 | ローム塊多混 しまり弱 |
| 4. | 暗黄褐色土 | ローム塊 ややしまりあり |

**SI－196 P3**

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 暗褐色土 | ローム塊少混 しまりあり |
| 2. | 暗褐色土 | ローム粒少混 しまりあり |
| 3. | 暗黄褐色土 | ローム粒 しまりあり |
| 4. | 暗黄褐色土 | ローム粒 しまり弱 |

**SI－196 P4**

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 暗黄褐色土 | ローム塊混 しまりあり |
| 2. | 暗黄褐色土 | ロームブロック混 |
| 3. | 暗黄褐色土 | ローム塊混 しまり弱 |
| 4. | 暗黄褐色土 | ロームブロック混 しまり弱 |

**SI－196 P5**

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 暗褐色土 | ローム塊混 ややしまりあり |
| 2. | 暗黄褐色土 | ロームブロック多混 ややしまりあり |
| 3. | 暗黄褐色土 | ロームブロック多混 しまり弱 |

**SI－196 P6**

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 暗褐色土 | ローム粒混 ややしまりあり |
| 2. | 暗褐色土 | ローム塊混 ややしまりあり |
| 3. | 暗黄褐色土 | ローム塊 しまりあり |

**SI－196 L－L′**

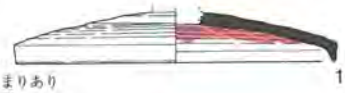
| | | |
|---|---|---|
| 1. | 黒褐色土 | ローム塊混 ややしまりあり |
| 2. | 暗黄褐色土 | ローム塊混 しまりあり |

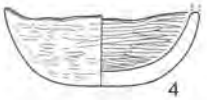
**SI－196 M－M′**

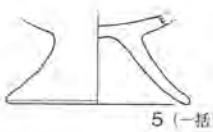
| | | |
|---|---|---|
| 1. | 暗褐色土 | ローム粒多混 ややしまりあり |

**SI－196 N－N′**

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 黒褐色土 | ローム粒混 しまりあり |
| 2. | 暗褐色土 | ローム塊混 しまりあり |
| 3. | 暗黄褐色土 | ローム塊多混 しまりあり |





0 （1／80） 4m

0 （1／4） 10cm

第222図　SI－196

５は３・４・６とは対照的に10世紀代と思われる土器である。高台部周辺の一部の遺存である。底部内面の剥離が著しい。高台部脚端部が3/4強欠損する。

１は南壁際左寄りの壁溝上で，床面と同じ高さから出土した。４も南壁際で中央やや左寄りの下層から正位で出土した。２はやや広く散っているが，P6堆積土上層・床面から出土した。３も広く散っている。出土層位は床面から上層にわたっている。

本住居の出土遺物は時期的に混在しているが，１・２の出土層位から奈良時代の竪穴住居と思われる。４は古墳時代後期の遺物であるが，奈良時代に再利用されたものと思われる。３・５・６は混入であろう。

４はやや浮いているが，土器の様相や出土状況から，祭祀的な遺物と思われる。竪穴住居廃棄の祭祀に使用されたものかもしれないが，やや断定しがたい。１が朱墨の硯である点でセットとなることも考えられるが，遺存が少なく，これも断定しがたい。他の遺物には特に祭祀的様相はうかがえない。多くの遺物は単に廃棄されたか流入したものであろう。

**重複遺構**　北東側でSI－195と大きく重複し，本住居が切られている。しかし本住居の方が深いため，下部は遺存している。

**SI－197**（第223図，図版73）

**位置**　調査区南部中央寄りの23M－29グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.1m，幅が3.6mの横長の方形をなす。確認面からの深さは10cm以下である。床面まで非常に浅い住居である。

**床面**　中央の硬化が著しく，壁側と差がある。非常に浅いため，わずかに欠損する部分がある。しかし硬化面の状況から，比較的よく遺存していると思われる。ほぼ平坦である。

**柱穴**　出入口ピットは検出されなかったが，南壁側中央に存在すると思われる。主柱穴は存在しない。

**カマド**　北壁中央に位置する。若干の焼土が集中して分布するが，遺存は悪く，両袖等はみられない。方形プランからの突出の状態も不明瞭である。カマド堆積土には，構築材である山砂がわずかにみられる。下層に焼土を多く含む土層が堆積している。カマド前方に若干の山砂がみられるが，構築材が流出したものと思われる。カマド底面は床面から10cm程度であり，やや浅い窪みである。北側に，径23cm，深さ15cmのピットがあるが，カマドとは別物であるかもしれない。

**堆積土**　暗褐色土である。遺存が少ないため，自然堆積か人為的堆積か判然としない。

**出土遺物**　非常に少量で散在的な出土である。遺存のよい遺物もみられない。図示できた遺物は須恵器甑１点である（１）。口縁部・胴部上位の小破片で，胴部外面上位に不整な形態の把手がみられる。接着面の形態は不整な円形または三角形で，頂部はやや尖っている。外面に斜格子のタタキが施されている。タタキ目は口縁部外面にもみられるが，口縁部は多く消されている。口縁端部はやや内湾気味に上方に立ち上がる。なお須恵器としたが，須恵器窯で焼成されていないことも考えられる。須恵器であれば千葉産である。西壁際やや北寄りの床面から出土した。

**SI－198**（第223図，図版74）

**位置**　調査区南部中央寄りの23M－49グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.3m，幅が3.5mの方形をなす。確認面からの深さは60cmである。

**床面**　平坦である。床面はハードローム層に達しており，全体に硬質であるが，中央が壁側よりもやや強く硬化している。硬化範囲のなかでもその中央が最も硬化している。

柱穴　出入口ピットが南壁側中央で２箇所並んで検出された。ピットの径は，左側が20cm×20cm，右側が20cm×15cmで，同様の規模である。床面からの深さは，左側が20cm，右側が28cmである。ともに底面が狭く，ピットの断面はやや尖っている。両ピットの距離は，底面間で35cm，隣合う上端間で20cmである。主軸方向の中軸線は，やや右側のピットに近いが，両ピット間を通る。両ピットの解釈については，二通りが考えられる。一つは，一方からもう一方への作り替えであり，もう一方は，双方同時に機能したものとする考えである。なお本遺跡では，縦方向の２連のピットはあるが，横方向で接しないピットの検出例がないため，後者の可能性は低いかもしれない。主柱穴は存在しない。

壁溝　全周する。底面は規則的な凹凸をもつ部分がある。西壁は北寄りにあり，東壁は間欠的であるがほぼ全体にみられる。また南壁は一部に存在する。凹凸の一つの単位は長さが15cm前後で，凹凸のない壁溝底面からの深さは数cmである。

カマド　北壁中央に位置する。煙道部が方形プランからやや鋭く突出するが，あまり大きなものではない。両袖が遺存するが，上部はやや流失している。構築材は山砂の他に，暗褐色土･黒褐色土を多く含む。袖最下部は黒みが強い。また左袖は両側も暗褐色土の含有が多い。両袖内側は赤色化した部分が遺存していない。火床部底面は中央が赤色化しているが，その範囲は狭い。カマド内堆積土は下層に焼土があまり多く堆積していない。灰のかき出し等が丁寧に行われたものと思われる。カマド底面は床面よりも若干窪んでいるが，あまり深くない。ただしかなり前側まで続いている。

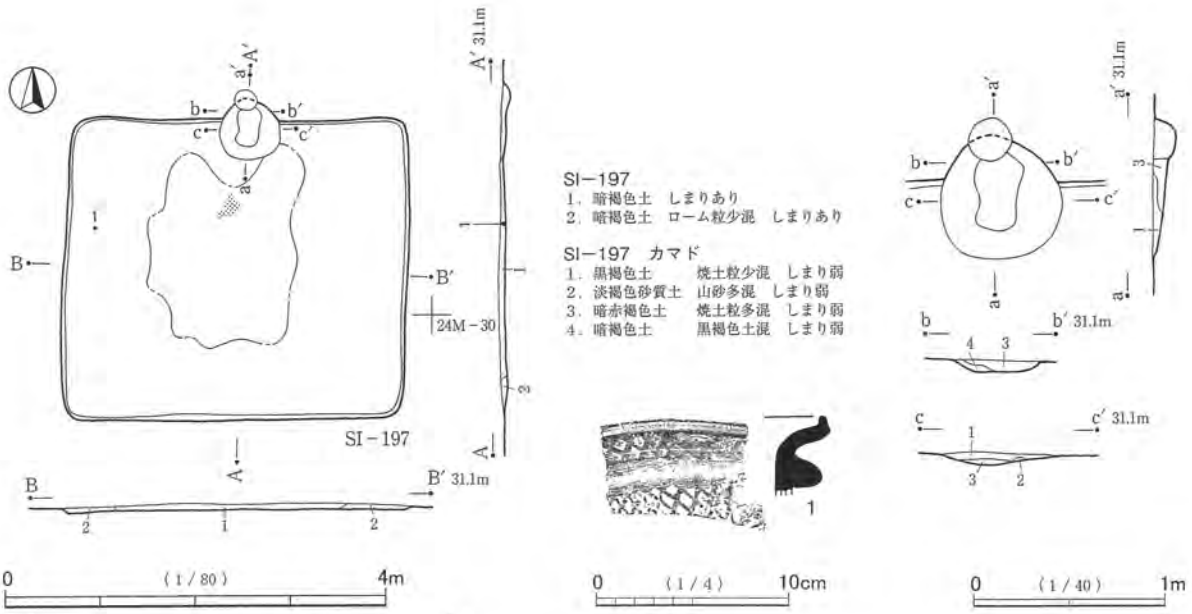
堆積土　暗褐色土主体である。ロームの含有は壁際でやや多いが，全体的にはあまり多くない。レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。

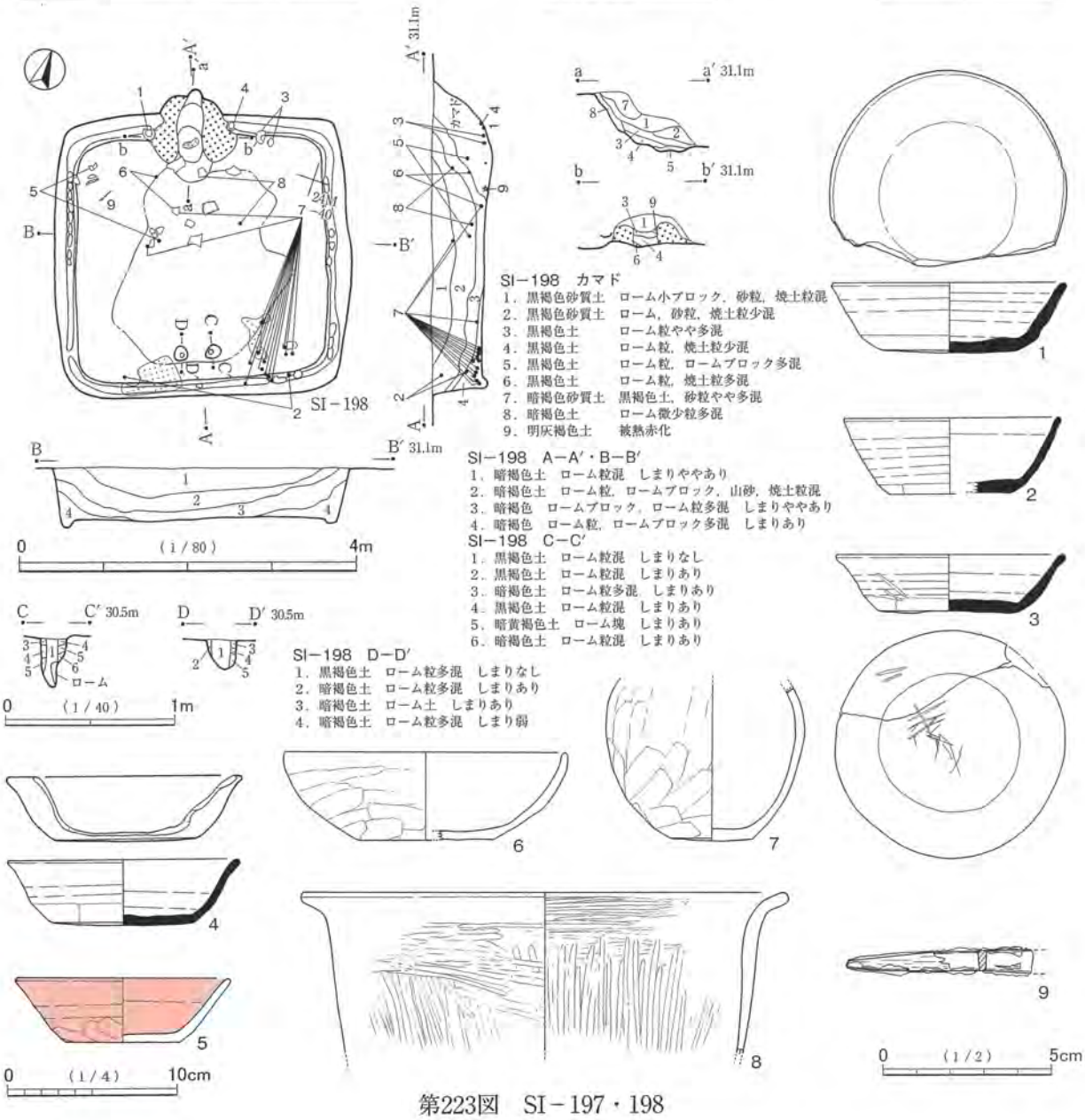
出土遺物　遺物量はやや少量である。全体的に分布するが，北側が南側よりやや多い。図示できた遺物は９点である。１～４は新治窯産の須恵器杯，５はロクロ土師器杯，６は非ロクロの土師器杯である。７は小型の土師器甕，８は土師器甑で，ともに在地の土器である。９は鉄製品で，刀子である。

１は口縁・体部をやや大きく破損・欠損する。かなりの部分が接合するため遺存はよいが，破損・欠損部を合わせると，口縁部周でほぼ1/2である。それ以外は割れずに遺存する。破損・欠損部の形態は一部で不整であるが，概ね弧状を呈する。なお焼成がややあまく，器面が磨耗しているため，端部の割れは二次的なものかもしれない。３は体部外面と底部外面に線刻がある。体部外面のものは不整な２条の平行線である。底部外面のものは３～４条の線刻と１条の線刻が直交する交差線と「×(＋)」を主とするもので，その間にも不整な線刻(ヘラ書き？)がある。口縁部の１箇所を小さく欠くだけの遺存良好な土器である。欠損部の形態は逆三角形状である。下頂部を境に２片に割れている。破損は底部の周縁に及び，数条の線と１条線の交差線の線刻に及んでいる。小さい方の遺存部と欠損部を合わせると，口縁部周で2/5程度である。４もやや遺存のよい土器である。口縁・体部の1/3を欠損するが，その他は割れていない。欠損部は逆台形状を呈し，比較的整った形態である。出土状況と合わせて打ち欠きされたものとみられる。また１・３も４と同様に，打ち欠き・打ち割りされたものと思われる。２は遺存が少ない。

５は内外面に赤彩が施されている。遺存は少ない。６はやや大型の土器である。やや深いが盤状風の形態である。赤彩は施されていない。内面の一部に煤が付着し，器面の剥離もみられることから，二次的に火を受けたものと思われる。遺存は少ない。

７は器壁の薄い土器である。全体に黒ずんでいる。胴部内面下位の剥離が著しい。口縁部から胴部上位を欠くが，胴部・底部の遺存はややよい。８は一部の遺存である。内外面にヘラミガキが施され，特に内




第223図　SI－197・198

面は丁寧で，滑らかである。焼成も良好である。

9は茎の破片で，茎尻も遺存する。柄の木質がやや多く遺存している。

1はカマド左袖外脇・北壁際の壁溝上から，かなり傾いた正位で出土した。4は1と対称となるカマド右袖外脇・北壁際の壁溝上から出土した。土器の状態は北壁にもたれかかるような状態の正位であるが，正位というよりも横向きとした方が妥当かもしれない。3は4の脇で，下層から正位で出土した。

7は主として南壁際右寄りの下層から出土したが，一部の破片が中央・カマド前方に広く散っている。層位も上層のものがみられる。9は北西側の床面から出土した。2・5・6・8は，散った出土状況である。層位も一部に下層の破片があるが，中・上層からの出土が多い。

出土遺物のうち，1・3・4はカマド廃棄の祭祀に関わる遺物と思われる。なお1・4については上方から転落したことも考えられるが，その場合でも祭祀に関わるものとみてよいであろう。その他の遺物には，特に祭祀的様相がうかがえない。ただし7は本住居の廃棄時期に近い時期の遺物と思われる。1・3・4以外の遺物は遺存が概して少なく，また図示しない土器片量もやや少量である。1・3・4以外は，大半が廃棄されたか流入した遺物と思われる。

SI－199（第224図，図版74）

位置　調査区中央西寄りの23L－15グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.0m，幅が3.2mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。やや逆台形の形態である。右奥（北）隅周辺は撹乱を受けて，欠損する。

床面　厚みのある貼床ではないが，壁側は若干の暗褐色土を含む。そのため右（北東）壁側をやや掘りすぎている。この点を考慮すると，床面はほぼ平坦である。硬化面は中央を主体に，カマド前から出入口部周辺までみられる。

柱穴　出入口ピットが南東壁際中央で検出された。径は85cm×66cm，床面からの深さは21cmである。規模が大きいが，床面での確認状況から，柱材は壁際に位置するとみられる。ピットの堆積土はロームブロックを含む暗黄褐色土で，堅くしまっており，柱材の周囲は貼床が施されているといえよう。

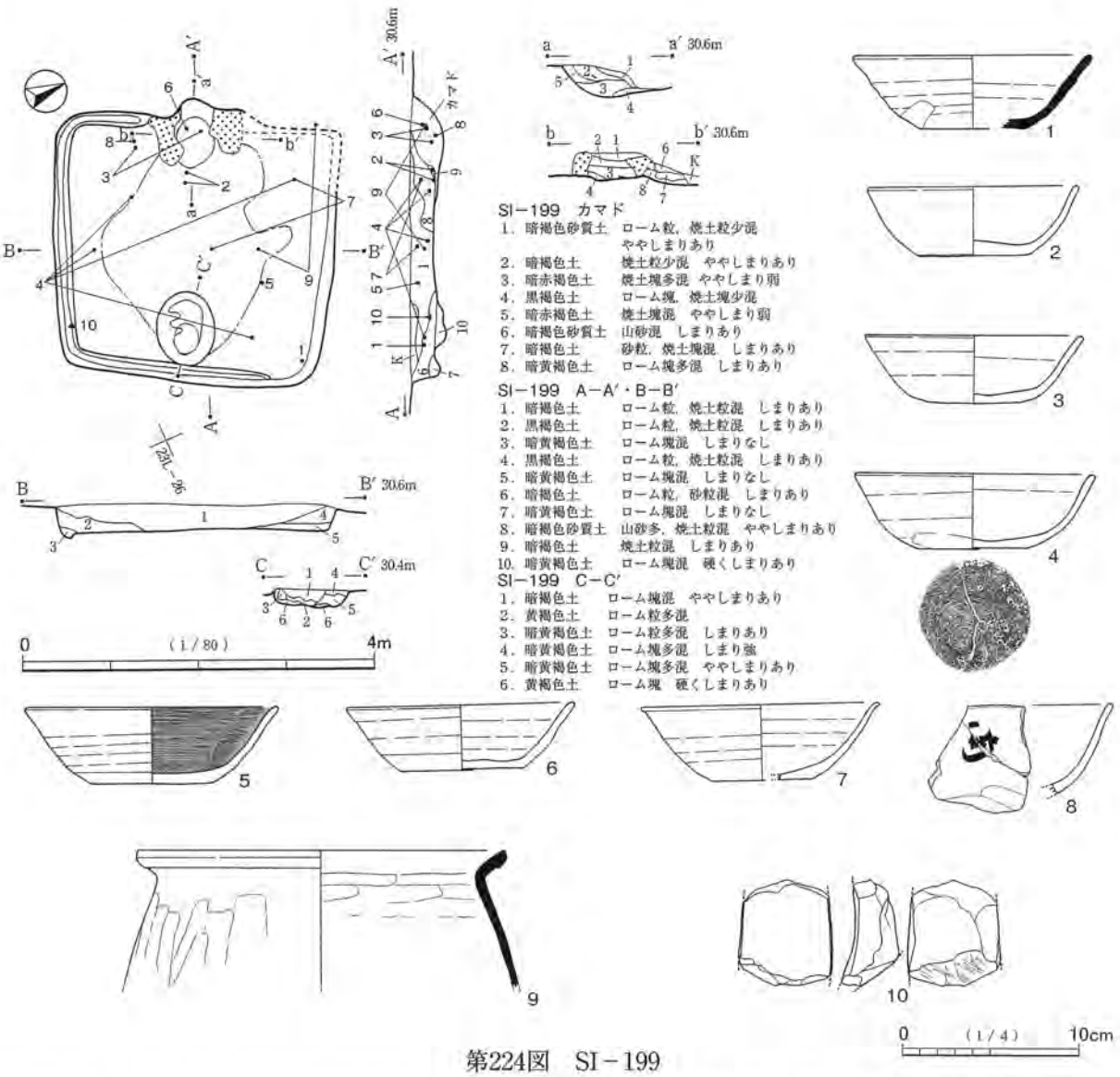
壁溝　右壁側を除いて検出された。右壁側が未検出であるのは，掘り過ぎと撹乱によるものであり，本来は全周すると思われる。

カマド　北西壁中央に位置する。方形プランからの突出はあまり大きくない。両袖が遺存するが，右袖前側の遺存が悪い。構築材は山砂を主体とするが，暗褐色土を若干含む。両袖内側は赤色化し，かなり内部まで及んでいる。火床部は赤色化した面がみられないが，被熱により底面が硬化している。土製支脚の破片が底面の右袖脇から出土したが，遺存が少ないため，原位置を留めるものか不明である。なおこの支脚片は図化していない。底面は床面よりやや深く窪んでいる。窪みはカマド使用によることや掘りかたが考えられるが，掘りかたの場合，あまり大規模なものではない。堆積土下層は焼土ブロックを多く含む。

堆積土　ローム粒を含む暗褐色土・黒褐色土主体の土層である。自然堆積と思われる。

出土遺物　遺物量は中程度の量であるが，竪穴の規模からみると，やや多い。分布は全体的である。図示できた遺物は10点である。1は千葉産の須恵器杯，2～8はロクロ土師器杯，9は千葉産の須恵器甕，10は砥石である。

8は体部外面に「南」の墨書が横位で書かれている。内面はヘラミガキが施されているが，黒色処理はみられない。体部は丸みをもつ椀形の器形である。8は小片であるが，8以外の杯も遺存の非常によいも




第224図　SI－199

のは存在しない。３・４はやや遺存がよいが，欠損部も多い。３は口縁・体部の２箇所，合わせて口縁部周で1/2以上を欠損する。欠損部の形態は不整な「W」字状・逆台形状であり，打ち欠きされたことも考えられるが，遺存部分も若干割れており，断定しがたい。４及びその他の土器の破損には意図的な様相がうかがえない。１～４・７・８は二次的な被熱により，器面に荒れ・剥離，黒ずみ等がみられる。このうち４は外面に黒色物が多く付着し，一部に光沢がみられる。また内面も外面ほどの黒みはないが，全体に黒ずんでいる。５は内面に黒色処理・ヘラミガキが施されている。外面も黒ずむ部分が多く，一部に光沢もみられる。火を受けた可能性が考えられるが，５の場合は黒色処理の影響かもしれない。

９の胴部外面の調整は手持ちヘラケズリであり，タタキ目はみられない。内面に当て具痕と思われる部分があるが，不明瞭である。口縁部の形態と，やや暗い灰黄色の色調から千葉産の須恵器としたが，在地産の土師器であることも若干考えられる。器壁が薄いことから，外面のタタキは完全に消され，内面の当て具痕もヘラナデによってほぼ消されたと理解したい。

10の石材は流紋岩である。方柱状の砥石の一部の破片である。図示した左図の面は弧を描いており，元々の砥石のほぼ中央部に相当すると思われる。両小口面とも欠損し，下面も遺存しない。左図の面を上面とすると，上面及び若干遺存する左右の両側面は滑らかである。右図下部の面は破損後に使用された面であ

る。上面と比べると滑らかさに乏しいが，平坦な面をもつ。また細かい筋状の研ぎ痕が多くみられる。図上部左側にもやや平坦な面があり，これも破損後の砥面である。やや弱いが上面に対して平行する擦痕がみられる。ただし滑らかさには欠ける。下部のその他の部分については，使用が判然としない。

3はカマド内及びカマド左外側の下層から出土した。カマド周辺では，6がカマド内から，2が前方の下層から，8が左外側の床面から，各々出土した。図示したその他の遺物には，床面から出土したものがない。4は広く散っており，7・9も散った出土状態である。3はカマド廃棄の祭祀に関わる可能性もあるが，カマド内の破片は土製支脚の近くから出土しており，支脚の高さ調整に使われたことも考えられる。あるいは火を受けた他の土器群等と同様，単に廃棄されただけとも思われ，祭祀的な様相を断定しがたい。墨書をもつ8も小片であり，出土状況に祭祀性があるか判然としない。

SI－200（第225図，図版74）

位置　調査区中央西寄りの23L－36グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.0m，幅が2.9mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。耕作機械による帯状の撹乱が南北方向に多く縦走している。撹乱は床面よりも上部で留まるものが多いが，一部は床面を破壊している。床面より上位はかなり破壊されている。

床面　厚みのある貼床ではないが，壁側は若干の暗褐色土を含む。そのため西側の壁際をやや掘りすぎている。この点を考慮すると，床面はほぼ平坦である。中央が硬化している。

壁溝　東壁と南壁はほぼ巡る。西壁側にみられないのは，掘りすぎたためであろう。本来は全周すると思われる。

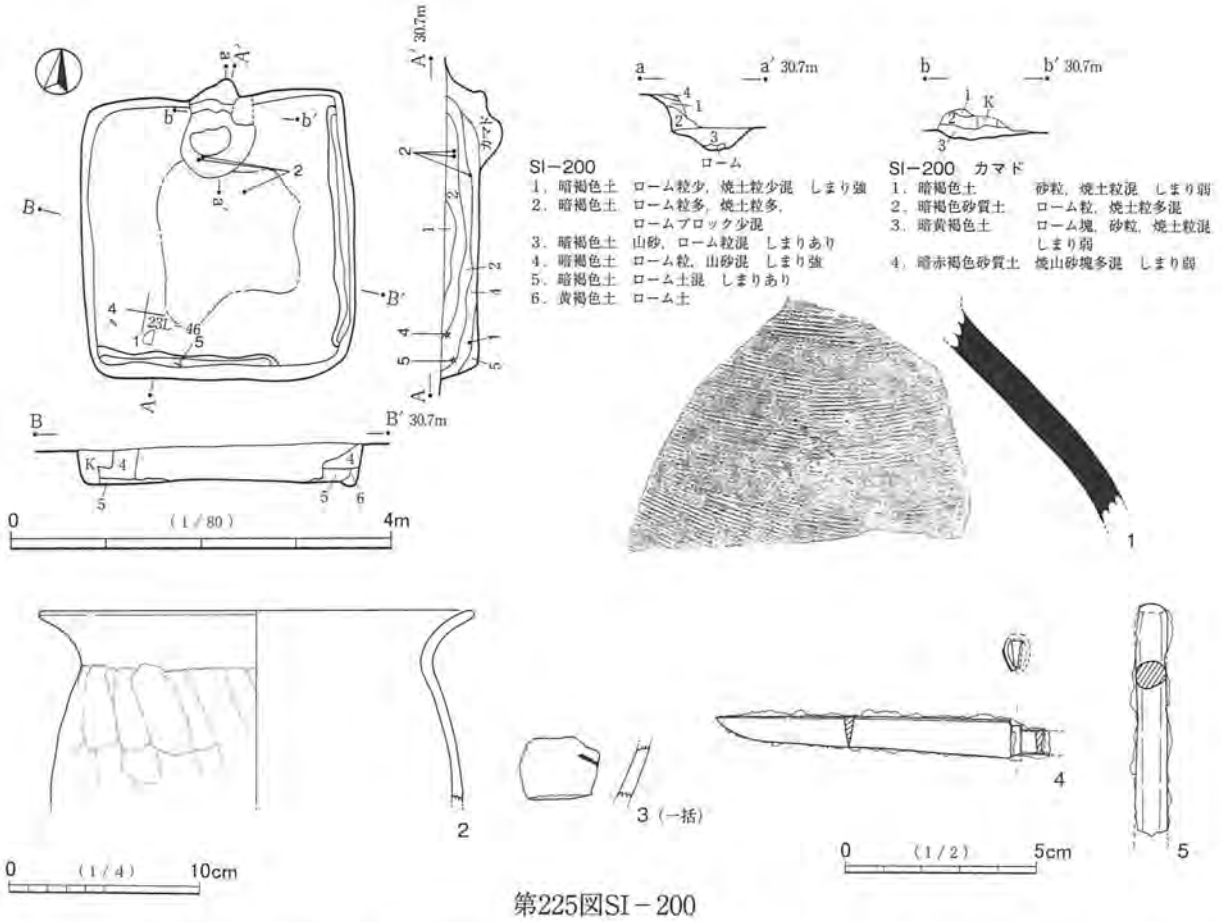
カマド　北壁中央に位置する。方形プランからの突出はやや小さい。両袖等は破壊されて，まったく遺存しない。構築材の山砂はカマド部分の堆積土に若干みられる他，竪穴の堆積土中に流出している。火床部に赤色化した面はみられない。カマド底面は床面から20cmの深さであり，かなり深い。カマド使用によるだけでなく，当初または作り替え時の掘りかたと思われる。掘りかた内にはロームブロック・山砂・焼土を含む暗黄褐色土が堆積している。カマド使用時にはかなり埋まっていたと思われる。焼土を多く含む土層はその上部に堆積している。

堆積土　暗褐色土主体である。ロームの含有は壁際・下層に多く，上・中位にやや多い。レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。

出土遺物　遺物量は少量で，散在的な分布である。図示できた遺物は5点である。1は東海産と思われる須恵器大甕，2・3は在地の土師器甕，4・5は鉄製品で，4は刀子である。5は性格不明である。

1は胴部上位の破片で，上部は口頸部に移行する部分で破損していると思われる。内面は同心円文の当て具痕と思われるが，ナデによりほとんど消されている。胎土は白色・灰色の小石を含むが，精良である。磨られた面など，転用された痕跡はみられない。2は口縁部から胴部上位にかけての一部の破片である。内面は全体に剥離が目立ち，口縁部外面も一部に剥離痕がある。3は胴部の小片である。外面に墨書と思われる1条の線があるが，煤が付着したものかもしれない。

4は身が欠損なく遺存する。茎は身側部分の遺存で，多くを欠く。切先は尖っている。関部分は鏨が図示した面の側に遺存する。背関は直角に，刃関は斜めに切り込みが入る。5は棒状の鉄製品である。太さがあり，断面は丸みをもつ方形である。大きさのわりに重量感がある。表面は錆びているが，内部はあまり錆びていない可能性が強い。現代遺物が混入したものであろう。




第225図SI－200

1は南（前）壁際左寄りの下層から出土した。2はカマド前側の上層・下層から出土した。3は出土位置が不明である。4・5は南西隅側の上層から出土した。

千葉県教育振興財団調査報告第613集

# 四街道市稲荷塚遺跡

－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－

〔第１分冊〕

平成21年３月25日発行

編　　集　　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　　行　　独立行政法人　都市再生機構
財団法人　千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡８０９－２

印　　刷　　株式会社　弘　文　社
千葉県市川市市川南２－７－２

# 四街道市稲荷塚遺跡

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ —

［第２分冊］

平成21年３月

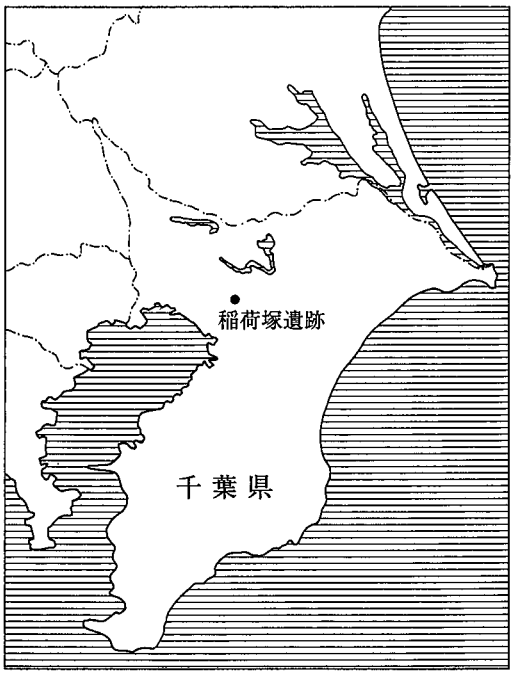
独立行政法人　都市再生機構

財団法人　千葉県教育振興財団

# 四街道市稲荷塚遺跡

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ —

［第２分冊］



# 第２分冊目次

本文目次

《第２分冊》


第５章　奈良・平安時代…… 369
　第２節　竪穴住居跡…… 369
　第３節　竪穴状遺構…… 476
　第４節　掘立柱建物跡・柵列・塀…… 481
　第５節　土坑…… 526
　第６節　遺構外出土遺物…… 542
第６章　中・近世およびそのほかの遺構・遺物…… 546
　第１節　概要…… 546
　第２節　土坑墓…… 548
　第３節　土坑…… 550
　第４節　塚…… 575
　第５節　小穴…… 577
　第６節　井戸状遺構…… 587
　第７節　溝状遺構…… 588
　第８節　遺構外出土遺物…… 597
第７章　まとめ…… 598
　第１節　全体の概要…… 598
　第２節　旧石器時代…… 600
　第３節　縄文時代・弥生時代…… 600
　第４節　奈良・平安時代の集落について…… 602
付章　自然遺物の分析…… 619
　第１節　貝サンプルの分析結果…… 619
　第２節　炭化種実の分析…… 622


# 表 目 次

《第２分冊》


第５表　縄文・弥生・古墳時代竪穴住居跡観察表……626
第６表　古墳時代遺構出土土器計測表……627
第７表　古墳時代遺構外出土土器計測表……628
第８表　奈良・平安時代竪穴住居跡観察表……629
第９表　奈良・平安時代竪穴状遺構観察表……644
第10表　掘立柱建物跡・柵列・塀観察表……645
第11表　奈良・平安時代土坑観察表……646
第12表　奈良・平安時代遺構出土器計測表……647
第13表　奈良・平安時代遺構外出土器計測表……690
第14表　銅製帯金具計測表……690
第15表　刀子計測表……690
第16表　鉄鏃計測表……692

第17表　鎌計測表……693
第18表　釘・錐・棒状製品計測表……693
第19表　穂摘具計測表……694
第20表　その他の金属製品計測表……694
第21表　紡錘車計測表……695
第22表　椀形鍛冶滓計測表……695
第23表　支脚計測表……696
第24表　土製品計測表……696
第25表　羽口計測表……696
第26表　玉類計測表……697
第27表　砥石計測表……697
第28表　軽石計測表……698
第29表　中・近世土坑墓観察表……698
第30表　中・近世土坑観察表……699
第31表　小穴観察表……701
第32表　溝状遺構観察表……702
第33表　中・近世遺構外出土土器計測表……702
第34表　銭貨観察表……703
第35表　稲荷塚遺跡・線刻・ヘラ書き土器一覧…703
第36表　文字資料一覧……706
第37表　打ち欠き土器一覧……708

# 挿図目次

《第２分冊》

第226図　SI－201
第227図　SI－202
第228図　SI－203
第229図　SI－204（1）
第230図　SI－204（2）
第231図　SI－205
第232図　SI－206
第233図　SI－207（1）
第234図　SI－207（2）
第235図　SI－208（1）
第236図　SI－208（2）
第237図　SI－209
第238図　SI－210
第239図　SI－211（1）
第240図　SI－211（2）
第241図　SI－211（3）
第242図　SI－212（1）
第243図　SI－212（2）
第244図　SI－213
第245図　SI－214
第246図　SI－215
第247図　SI－216
第248図　SI－217
第249図　SI－218
第250図　SI－219
第251図　SI－220・221
第252図　SI－222・223・224
第253図　SI－225・228
第254図　SI－229
第255図　SI－230
第256図　SI－231
第257図　SI－233
第258図　SI－234・235
第259図　SI－236
第260図　SI－238
第261図　SI－239
第262図　SI－240
第263図　SI－241・243
第264図　SI－244（1）
第265図　SI－244（2）
第266図　SI－245A
第267図　SI－245B
第268図　SI－246A（1）・246B
第269図　SI－246A（2）
第270図　SI－247・248・249
第271図　SI－250
第272図　SI－251・252A・252B
第273図　SI－253
第274図　SI－254
第275図　SI－255
第276図　SI－256
第277図　SI－257（1）
第278図　SI－257（2）
第279図　SI－258・259
第280図　SI－260・261
第281図　SI－262（1）
第282図　SI－262（2）

第283図　SI－263
第284図　SI－014・016・022・027・120
第285図　SK－005・006・008・016・018・257
第286図　SB－001・002
第287図　SB－003・004・005
第288図　SB－006・007
第289図　SB－008・009
第290図　SB－010・011
第291図　SB－012・013
第292図　SB－014・015
第293図　SB－016・018・019
第294図　SB－020・021・022
第295図　SB－023・024
第296図　SB－025・026・027
第297図　SB－028・029
第298図　SB－030
第299図　SB－031・032
第300図　SB－033・034
第301図　SB－035
第302図　SB－036・037
第303図　SB－038・039
第304図　SB－040・041
第305図　SB－042・043・044
第306図　SB－045・046
第307図　SB－047
第308図　SB－048A・048B・048C
第309図　SB－050
第310図　SB－051A・051B・052
第311図　SB－053・054
第312図　奈良・平安時代土坑（1）
第313図　奈良・平安時代土坑（2）
第314図　奈良・平安時代土坑（3）
第315図　奈良・平安時代土坑（4）
第316図　奈良・平安時代土坑（5）
第317図　奈良・平安時代土坑（6）
第318図　奈良・平安時代土坑（7）
第319図　奈良・平安時代遺構外出土遺物（1）
第320図　奈良・平安時代遺構外出土遺物（2）
第321図　中・近世遺構位置図
第322図　土壙墓
第323図　中・近世土坑（1）
第324図　中・近世土坑（2）
第325図　中・近世土坑（3）
第326図　中・近世土坑（4）
第327図　中・近世土坑（5）
第328図　中・近世土坑（6）
第329図　中・近世土坑（7）
第330図　中・近世土坑（8）
第331図　中・近世土坑（9）
第332図　中・近世土坑（10）
第333図　塚
第334図　小穴（1）
第335図　小穴（2）
第336図　小穴（3）
第337図　小穴（4）
第338図　井戸状遺構
第339図　溝状遺構（1）
第340図　溝状遺構（2）
第341図　溝状遺構（3）
第342図　溝状遺構（4）
第343図　溝状遺構（5）
第344図　溝状遺構（6）
第345図　溝状遺構（7）
第346図　溝状遺構（8）
第347図　中・近世遺構外出土遺物
第348図　下総国郡郷等位置図
第349図　駅路の変遷
第350図　明治年間の地形
第351図　遺跡周辺の古墳群・古墳時代後期集落分布
第352図　遺跡周辺の奈良・平安時代集落分布
第353図　線刻・ヘラ書き土器一覧（1）
第354図　線刻・ヘラ書き土器一覧（2）
第355図　線刻・ヘラ書き土器一覧（3）
第356図　文字資料一覧（墨書・朱書・刻書）
第357図　打ち欠き土器一覧（1）
第358図　打ち欠き土器一覧（2）
第359図　打ち欠き土器一覧（3）

# 第５章　奈良・平安時代

## 第２節　竪穴住居跡

### SI－201（第226図，図版75）

位置　調査区南西部中央寄りの23L－95グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.0m以上，幅が3.7mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。重複するSI－202とともに発掘したため，南壁側を検出できなかった。そのため本来の長さと確実な形態が不明である。耕作機械による帯状の撹乱が南北方向に多く縦走している。

床面　ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土で，貼床が施されている。SI－202と重複する南側は，202の上部に作られている。貼床は，重複部分と壁側がやや厚く，中央北側がやや薄いと思われる。南西側が若干低いが，貼床をやや掘りすぎたのであろう。その他は比較的平坦である。中央が硬化している。

柱穴　出入口ピットは検出されなかった。南壁際中央に存在する可能性があるが，重複遺構の存在により不明である。主柱穴は存在しない。

カマド　北壁中央に位置する。方形プランから大きく突出する。両袖が遺存するが，前側がやや欠損している。ただし前側はプラン内にあまり大きく突き出していないと思われる。また煙道部はピットによって一部が破壊されている。ピットは他遺構の柱穴と思われる。耕作機械による撹乱も中央に入っているが底面には達していない。構築材は山砂を主体とする。両袖内側及び火床部には，赤色化した部分が遺存していない。火床部底面は床面から10cm程度窪むが，あまり大きなものではなく，使用によっても生じる程度のものである。窪み部分はロームブロックが多く堆積し，焼土はその上部にやや多くみられる。

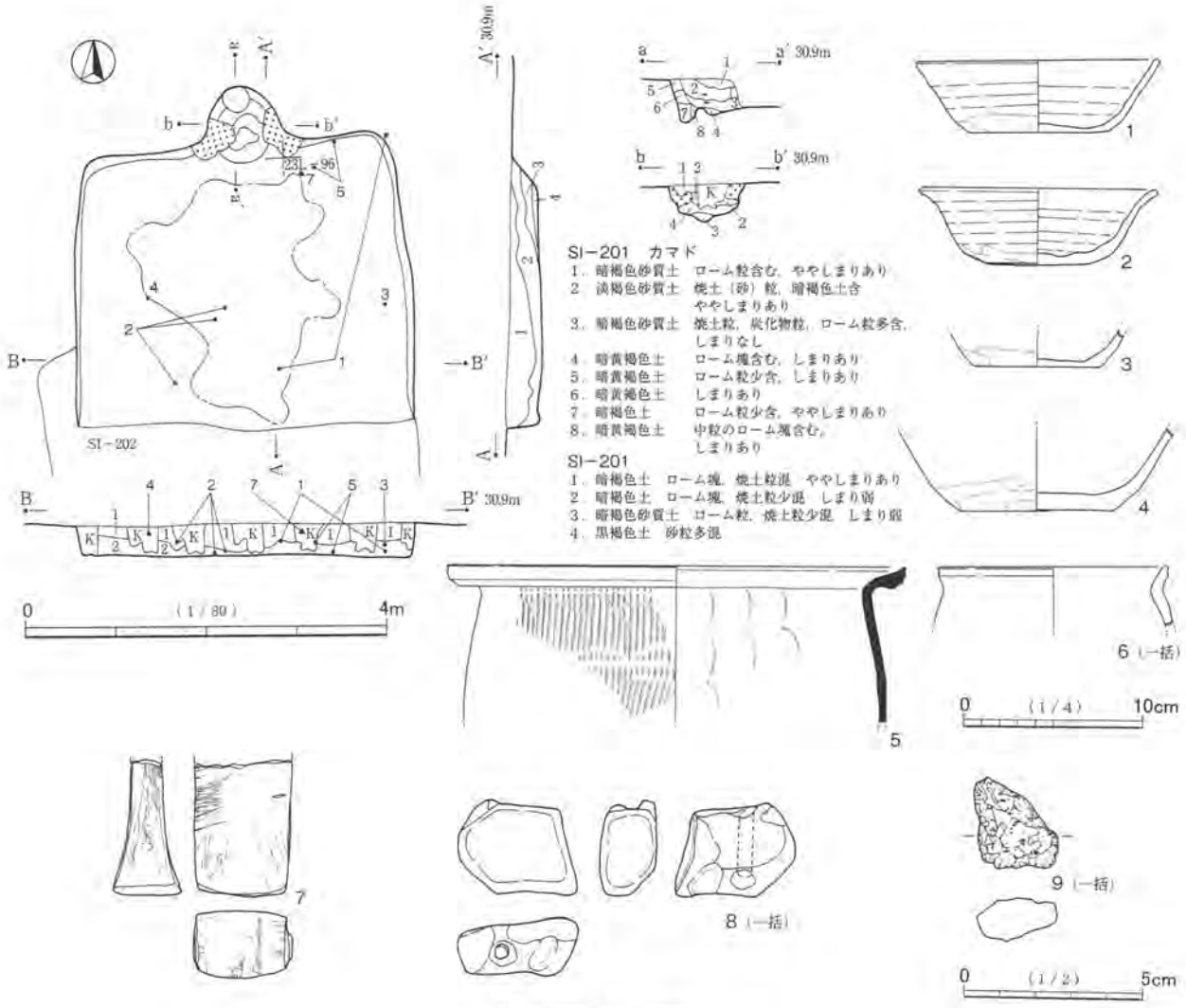
堆積土　暗褐色土主体である。自然堆積と思われる。

出土遺物　やや多量で，全体的に出土した。図示できた遺物は９点である。１～４はロクロ土師器杯，５は千葉産の須恵器甕または甑である。６は小型の土師器甕で，在地の土器である。７は砥石，８は用途不明の土製品，９は軽石である。

１・２の遺存はあまり多くなく，３も底部の小片である。また４も底部から体部にかけての一部の破片である。黒色物が付着しており，特に底部内面に顕著である。また体部外面上位にも，口縁から垂下した状況で付着している。内面は剥離が著しい。色調も黒ずむ部分が多く，一部赤みも強いため，二次的に火を受けたと思われる。黒色物は油煙または漆と思われる。５・６の遺存も少ない。

７の石材は流紋岩で，やや硬質である。片方の小口面側の破片である。図の上下面・左右の両側面は非常に滑らかである。小口面はかなり滑らかさに欠ける。また一部に欠損があるが，平坦な部分が多い。筋状の研ぎ痕が縦横に多くみられる。折損面はほぼ使用されていないと思われる。筋状の研ぎ痕は他の砥面にもみられ，特に左側面に多い。左側面のものは一部「○」状及び不整であり，線刻的なものの可能性があるが，判然としない。８の面はあまり平滑でない。孔は自然のものであり，遺物ではないことも考えられる。

５はカマド右外の下層・中層から出土した。７は５に近いカマド右袖前方からの出土であるが，層位は上層である。１は広く散っており，２もやや散っている。ともに下層・中層からの出土である。３は中層，４は上層からの出土である。図示した遺物は遺存も多くなく，床面だけから出土したものもない。図示し




第226図　SI－201

ないものも含めて，概して単に廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　南側でSI－202とやや大きく重複し，西側でもSI－207と壁を接する状態で重複する。双方とも本住居が切っている。

## SI－202（第227図，図版75）

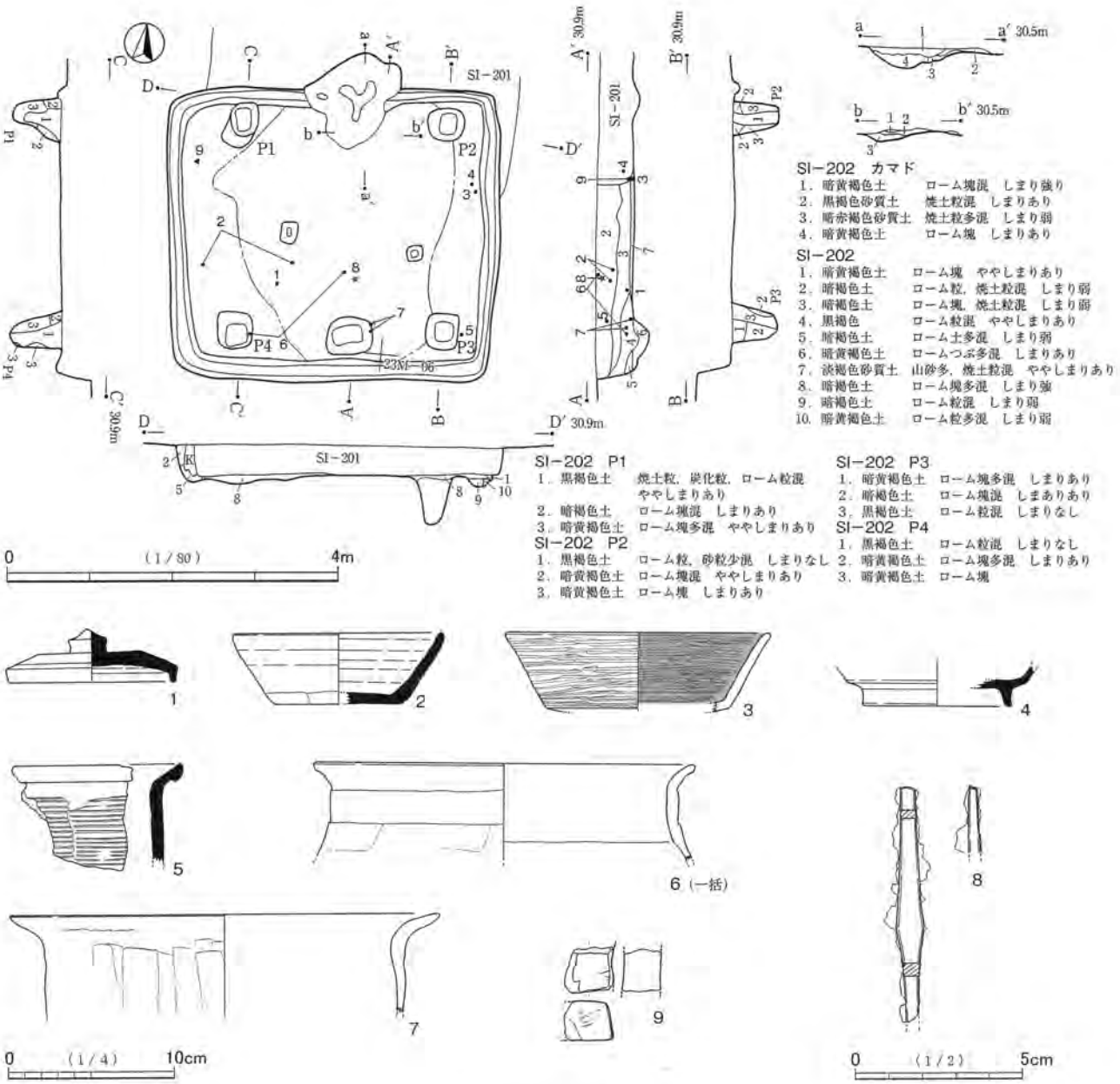
**位置**　調査区南西部中央寄りの23L－95グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.5m，幅が4.0mで，横長の方形をなす。確認面からの深さは45cmである。耕作機械による帯状の撹乱が南北方向に多く縦走している。

**床面**　ほぼ平坦である。左右（東西）の壁側を除いて，広く硬化している。

**柱穴**　主柱穴が4箇所検出された。四隅近くに位置する。東西壁との間はやや広いが，南北壁との間が狭い。特にP1は北壁の壁溝に接している。そのため確認面の形態は横長であるが，主柱穴間はほぼ正方形である。また個々の柱穴の形態が円形ではなく，上面・底面とも方形である。P1は上端・底面とも縦長の方形である。P2は上端がやや横長であるが，底面は縦長の方形である。P3は上端が縦長，底面は正方形である。P4は上端・底面とも正方形である。上端の長さが35cm～45cm前後，底面の長さが18cm～28cmである。なおいずれも柱痕が明瞭である。

出入口ピットが南壁際中央やや右寄りで検出された。形態は上面・底面ともに横長の長方形である。方




第227図　SI－202

形を基調とする点が，主柱穴と同様である。主軸方向の長さが47cm，主軸と直交する方向の長さが56cm，床面からの深さは18cm～23cmである。なお土層断面でやや落ち込む黒褐色土部分は柱痕と思われる。

その他，床面からは２箇所のピットが検出された。中央から若干左右に位置するが，やや不整な位置である。ただしともに形態が方形である点で，主柱穴等に通じている。右側のものはほぼ正方形の形態で，上端の長さが20cm前後，深さは27cmである。左側のものは縦長の方形で，上端の長さが27cm，幅が20cm，深さは21cmである。小規模なピットであるが，底面の形態も方形である。以上の様相から，やや判然としないが，本住居に伴う可能性があると思われる。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央やや右寄りに位置する。方形プランからやや大きく突出する。SI－201に破壊され，両袖等は遺存しない。焼土はカマド底面の前側に多くみられる。底面は床面よりも20cm窪み，規模も大き

い。カマド使用によって深くなっただけでなく，当初または作り替え時の掘りかたと思われる。

**堆積土**　最下層は山砂を多く含む部分があり，壁際はロームを多く含むが，主体は暗褐色土である。自然堆積と思われる。柱痕部分の堆積土は黒褐色土である。周囲はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・暗黄褐色土である。

**出土遺物**　全体的に出土しているが，遺物量はやや少量である。本来的に少ないことも考えられるが，SI－201によってカマドとその周辺を切られた影響もあると思われる。図示できた遺物は9点である。1・4・5は千葉産の須恵器で，1は蓋，4は高台付杯，5は甕または甑である。2は新治窯産の須恵器杯，3はロクロ土師器杯である。6・7は土師器甕で，6は武蔵型，7は在地の土器である。8は鉄製品で，タガネと思われる工具である。9は砥石である。

1はやや遺存がよい。口縁から天井部の1/4を欠損する他，口縁端部の欠損が多い。つまみは遺存する。遺存部分は2片に割れている。欠損・破損に意図的な様相はないと思われる。1以外の土器は，遺存が少ない。6は明瞭な「コ」の字形口縁をもつ。外面は「コ」の字の上下で沈線状となる。

8は刃部先端から茎の一部までの遺存である。茎尻は遺存しない。棒状部の先端が側面からみて斜めに加工されており，短い刃部をもつ。また上面からみると，わずかに丸みをもつ。先端は刃部といえるほどの鋭さはなく，使用部とした方が妥当かもしれない。以上のことから，金属の切断や加工用であるタガネの可能性が高いと思われる。棒状部から茎へは屈曲するだけで移行し，関をもたない。その部分の幅が最も広い。茎には木質の付着がみられない。木柄が付かないことも考えられるが，判然としない。9の石材は流紋岩である。一部の小破片で，本来の砥石の上下面と片側の側面が遺存する。破損面は3面あるが，左側の面は筋状の研ぎ痕がみられ，やや平坦である。あまり平滑ではないが，破損後も使用されている。上下の破損面は使用されていないと思われる。

1は中央からやや南西側の床面から出土した。特に祭祀的な様相はうかがえないが，本住居の廃棄時期に比較的近い可能性をもつ遺物である。出土遺物の層位は床面から上層にわたっている。図示しないものも含めて，そのほとんどが単に廃棄されたか，流入したものと思われる。

**重複遺構**　北側でSI－201，西側でSI－207と重複する。本住居はSI－201に切られ，SI－207を切っている。なおSI－201よりも若干深いため，重複部分も床面が遺存している。

### SI－203（第228図，図版75）

**位置**　調査区南西部中央寄りの23M－04グリッドを中心に位置する。

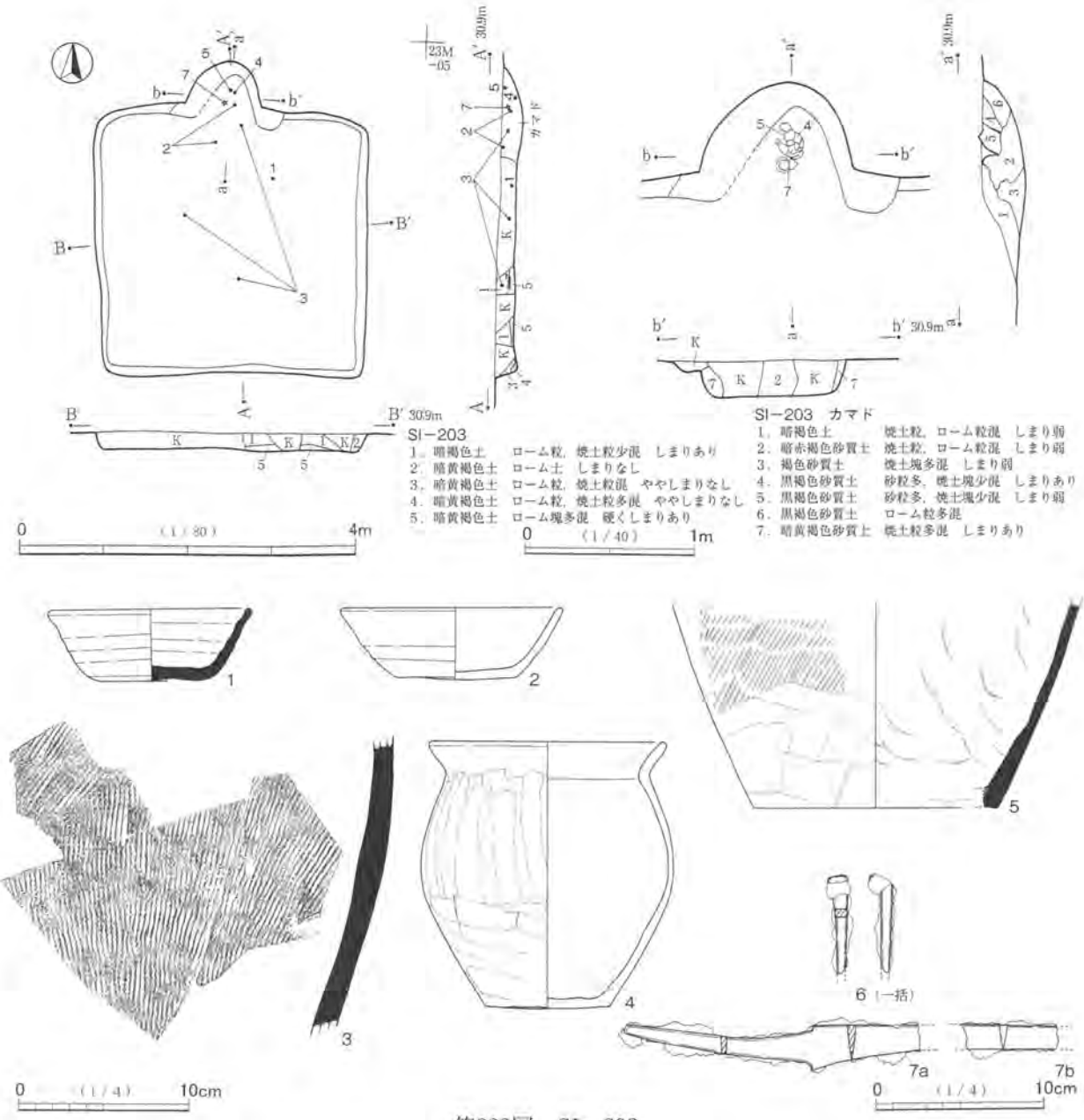
**形状・規模**　長さが3.3m，幅も3.3mの方形をなす。確認面からの深さは15cmである。耕作機械による帯状の撹乱が縦横に多く入り，遺存が悪い。

**床面**　遺存が悪いために検出が難しく，一部を除いてやや掘り過ぎている。遺存する部分の状況から，床面は平坦と思われる。中央の硬化が顕著であるが，範囲を確認できない。

**柱穴**　出入口ピットは検出されなかったが，撹乱により欠損した可能性が考えられる。主柱穴は存在しないと思われる。

**壁溝**　検出されなかった。浅い竪穴であるため，撹乱がなくても検出されないことが考えられる。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランからやや大きく突出する。両袖等の構築体は遺存しない。撹乱によりほとんど破壊されたと思われる。構築材の山砂が堆積土に若干みられる。カマド中軸は撹乱を免れており，遺物が出土した。焼土粒・焼土ブロックが下層に多く堆積しているが，火床部底面に赤色化し




第228図　SI−203

た面はみられない。底面は床面よりも若干窪んでいるが，あまり大きな差はない。

**堆積土**　暗褐色土主体である。壁際を除いてロームの堆積が少ない。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　やや少量であるが，撹乱と堆積土の薄さを考慮すると，密度は高いといえよう。カマド内及び周辺に多く分布する。図示できた遺物は7点である。1は千葉産の須恵器杯である。2はロクロ土師器杯としたが，千葉産の須恵器の可能性もある。3は須恵器大甕である。4は小型の土師器甕で，在地の土器である。5は千葉産の須恵器甑である。6・7は鉄製品で，6は釘，7は刀子である。

2は口縁・体部から底部の一部を欠損するが，比較的よく遺存する。口縁・体部の欠損は不整な逆三角形状であるが，底部まで続いている。隣接する破片と合わせるとやや整った形態である。ほぼ対向する側は遺存するが，口縁から底部周縁まで逆三角形状に割れている。その他の遺存部分は大きな破片である。やや断定しがたいが，欠損・破損は打ち欠き・打ち割りされた可能性が考えられる。1は遺存が少ない。

3の外面はやや黒ずんだ灰色であり，やや褐色味も帯びている。内面の色調はむらがあり，暗灰色の部

分と灰色の部分が縞状をなしている。胎土は若干の小石を含むが，比較的緻密である。焼成は良好で，硬質である。産地はやや判然としないが，東海産と思われる。4は3/4程度遺存する土器である。底部はほぼ遺存する。胴部の器壁が薄く，作りのよい土器である。被熱により赤みが強く，胴部内面の一部に剥離痕がみられる。また口縁部内面には灰白色に変色した部分がみられる。5の遺存は少なく，胴部下位の一部である。5孔式の甑で周辺孔の一部が遺存する。

6は小型の角釘で，頭部が遺存するが，先端を欠損する。頭部は折れ曲がっているが，その角度は直角までいかない。ただし頭部の錆膨れがやや顕著である。7は身の中途で2片に割れている。切先を欠くが，茎は茎尻まで遺存している。背関は直角に切り込みが入る。刃関はやや深いが弧状であり，明瞭な角をもたない。関部分の身幅が最も広く，刃側は屈曲点から緩やかな弧を描いて幅を減じている。茎はやや上方に反っている。

4はカマド内中央やや奥側の下層からやや傾いた倒位で出土した。やや細かく割れているが，比較的よく形を保って出土し，遠くに散っていない。4の周囲からは5・7も出土した。2は主要部分がカマド前方から出土したが，一部破片がカマド内から出土した。3は一部がカマド前側から出土したが，中央に広く散っている。なお図化していないが4の手前からはロクロ土師器杯の底部片が倒位で出土した。

カマド内の出土遺物のうち，2・4・7はカマド廃棄の祭祀に関わる可能性が考えられる。しかし4はその出土位置から土製支脚への転用品とも思われる。4周囲の土器群も支脚の高さ調節に使われたものかもしれない。4の被熱痕跡は支脚に転用されたと確実にいえる強さではないが，逆に否定もしがたい。あるいは支脚に転用された土器群が最終的に廃棄の祭祀に使用されたことも考えられる。なおカマド内の遺物については，撹乱が著しいことから，出土した遺物以外にも存在した可能性がある。

**重複遺構**　本住居のカマド煙道部先端で，わずかにSI－202と重複する。

SI－204（第229・230図，図版76）

**位置**　調査区南西部中央寄りの23M－16グリッドを中心に位置する。

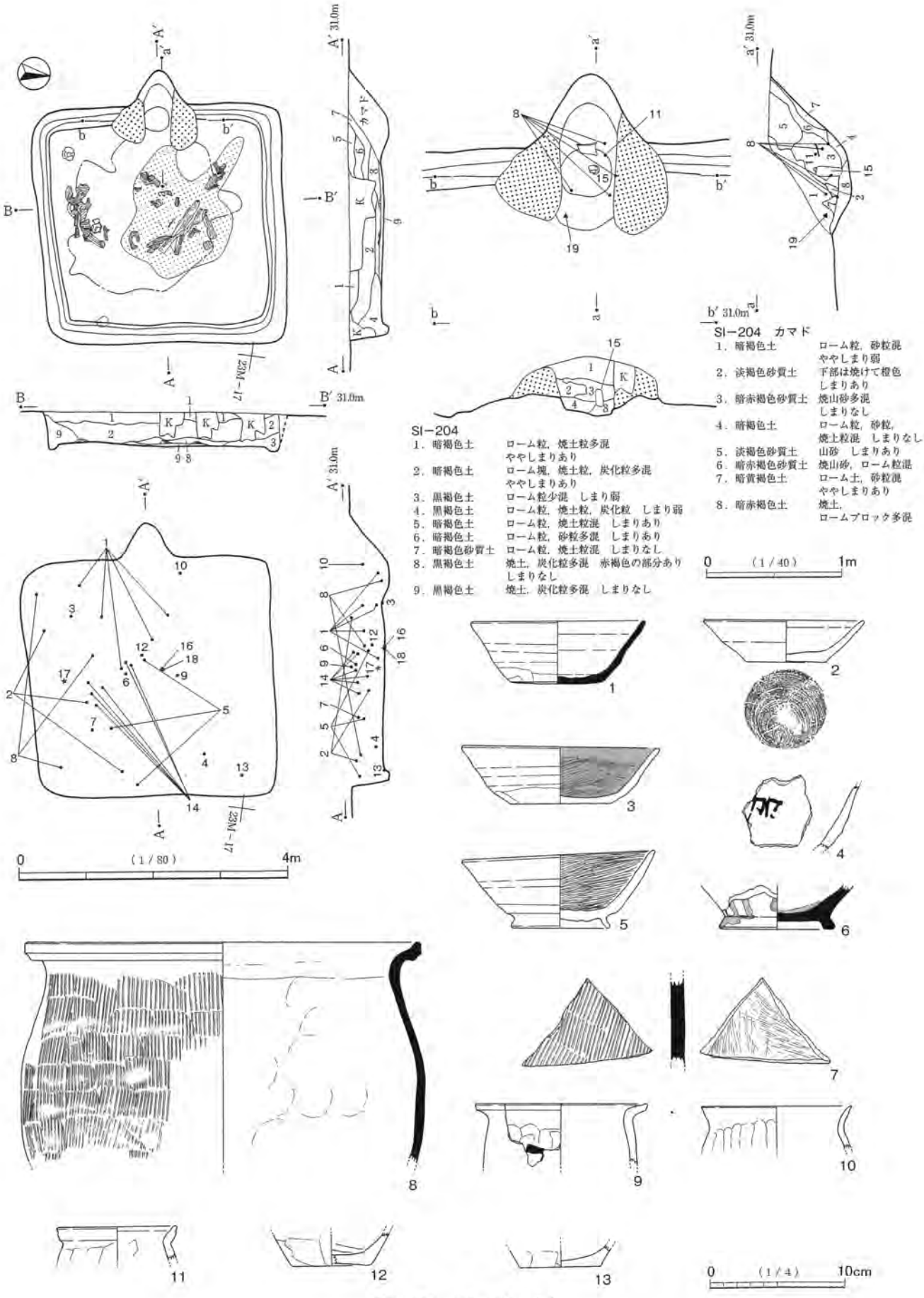
**形状・規模**　長さが3.6m，幅が3.7mの方形をなす。確認面からの深さは50cmである。東側は耕作機械による帯状の撹乱が南北方向に数条みられる。

**床面**　南側がやや高く，北側がやや低いが，平坦といえる範囲内である。中央がやや広く硬化している。

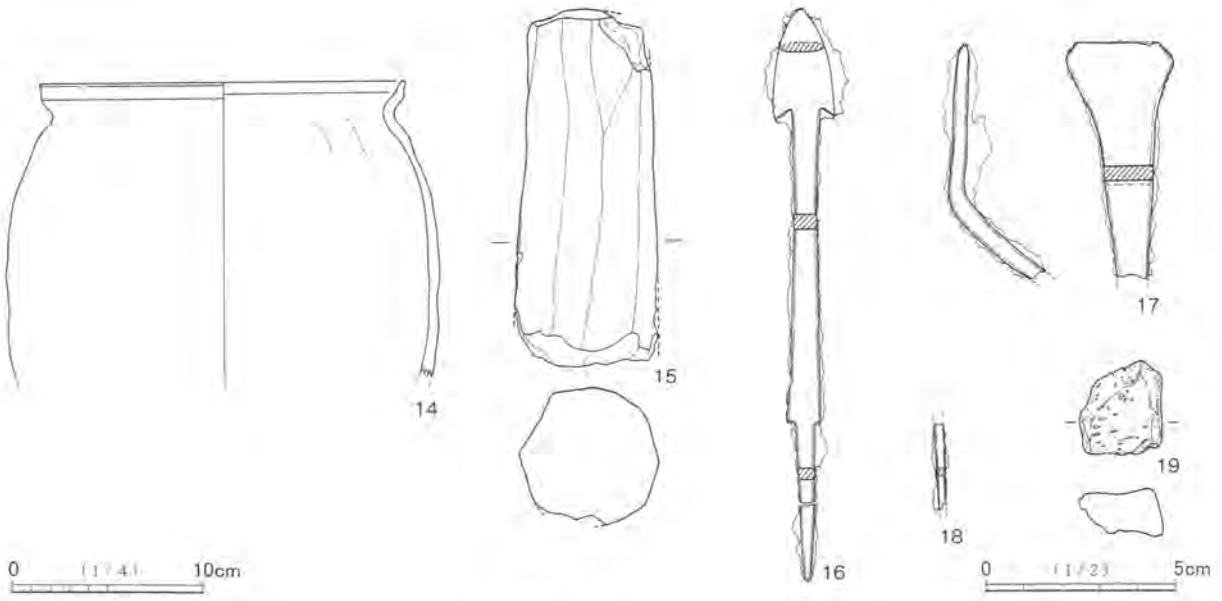
**壁溝**　全周する。

**カマド**　西壁中央に位置する。煙道部が方形プランから突出するが，袖部の多くがプラン内に位置する。左袖の遺存はよいが，右袖上部のほぼ半分が撹乱により破壊されている。構築材は山砂を主体とし，上部は混じりけがないが，下部は黒褐色土を多く含む。また基底部は黒褐色土に加えてロームブロックを多く含む。両袖内側は赤色化している。火床部底面には赤色化した面がみられない。土製支脚（15）が中央やや右寄りの下層から立った状態で出土しており，原位置を留めるものであろう。支脚の下端部は堆積土最下層（8層）中にあり，最終的な火床面は底面よりもやや高い位置にあったことがわかる。8層は焼土・ロームブロックを多く含む土層である。支脚の周囲には，焼けた山砂等の焼土を多く含む土層（3層）が厚く堆積している。3層上部で奥側に堆積する5層は山砂主体であり，天井部の崩落土であろう。

**堆積土**　多量の炭化材と焼土が中央を主体として検出された。出土の深さは床面及び床面からわずかに高い位置である。本住居の上屋が焼却されたか，焼失したものであろう。その上部は暗褐色土・黒褐色土主体の土層である。焼却または焼失後は自然堆積と思われる。




第229図　SI－204（1）




第230図　SI－204（2）

出土遺物　多量の遺物が竪穴全体から出土した。図示できた遺物は19点である。１は千葉産の須恵器杯２～４はロクロ土師器杯，５はロクロ土師器高台付杯，６は須恵器壺である。７・８は須恵器甕である。６・７は東海産と思われる。８は千葉産である。９～13は小型の土師器甕で，在地の土器である。14は常総型の土師器甕，15は土製支脚である。16～18は鉄製品である。16は鉄鏃で，17も鉄鏃と思われる。18は用途不明である。19は軽石である。

４は体部の小破片である。外面に「加」の墨書が正位でみられる。３は口縁部の２箇所を小さく欠損するだけで，遺存のよい土器である。欠損部の形態はともに逆三角形状である。遺存部分には比較的大きな破片が接合するが，欠損部付近は一部で細かく割れている。内面は黒色処理・ヘラミガキが施されている。２はやや遺存がよいが，口縁部の欠損は合わせて1/2程度ある。底部も一部が欠損する。遺存部分はかなり細かく割れている。５は底部が遺存するが，口縁・体部は1/2強欠損する。１は遺存が少ない。３・５は被熱痕跡が顕著であり，２も火を受けていると思われる。３は内外面の器面の荒れが顕著で，内面の黒色処理は一部消えている。５の内面も底部から口縁・体部の一部で剥離が顕著である。２も器面が荒れている。

６は底部内面と胴部外面に，暗緑色の釉が付着している。７の破断面は磨耗する部分があり，砥石として使用された可能性がある。外面の色調は暗灰色である。内面は暗灰色の部分と灰色の部分が縞状をなし，やや黄色みを帯びる。胎土は緻密で，硬質の焼成である。

８は赤褐色・黒褐色の色調である。やや細かく割れている。隣接する破片で色調が異なるものが多く，破損後の被熱に違いがあったのであろう。９は胴部外面の一部に黒色物がみられる。墨痕と思われるが，煤の付着かもしれない。遺存が少なく，詳細が不明である。９～13はいずれも小片である。10は黒みが強く，11は赤みが強い。色調に変化がなければ，10・11は12・13と同一個体にならないと考えられる。14は胴部外面に焼けた山砂の付着がみられる。やや細かく割れているが，色調に変化はみられない。

15は上部から下部まで径があまり変わらない。側面は２cm前後の幅で面取りされている。

16は非常に遺存のよい鉄鏃である。茎の途中で破損するが，切先から茎尻まで遺存する。ほぼ完形の可

能性があるが，茎の破損部に隙間が空くので，茎がもう少し長くなることも考えられる。鏃身は長三角形式で，逆刺をもつ。錆膨れが顕著である。植物繊維の巻き付け痕が茎の一部にみられるが，錆と一体化している。17は方頭斧箭式と思われる鉄鏃の破片である。遺存は鏃身及び棒状部の一部であるが，鏃身と棒状部の境は不明瞭である。鏃身下方の直線的な部分を棒状部とみておく。鏃身はやや大型である。刃部先端は本来的には尖ると思われるが，鏃身はやや厚みがあり，現状では錆のため鈍くなっている。棒状部側がかなり曲がっているが，本来は直線状と思われる。なお17は工具の可能性が若干考えられるが，形態から鉄鏃の可能性の方が高いと考える。18は棒状品である。釘，紡錘車の紡軸等の他，針や錐等もが考えられるが，特定しがたい。19の表面は褐色の色調を呈する部分と灰白色の部分がある。前者の色調は火を受けたことによるものと思われる。

3は左奥（南西）側の床面からつぶれた状態の倒位で出土した。16・18は中央の床面から出土した。竪穴のほぼ中心点の位置である。焼土・炭化材範囲の中に位置する。カマド内からは1・8・19が出土した。1・8はカマド外にも広く散っている。出土層位は，1が下層～中層，8は下層～上層である。遺物の出土層位をみると，3・16・18以外では，4・13・17が下層・床面であるが，その他は1・8を加えて，中・上層からの出土が多い。

3・16はその出土状況から，焼却時における竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性が考えられる。その他には特に祭祀的な様相がうかがえず，焼却後，多くの遺物は単に廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　重複していないが，南（左）壁際至近の位置にSB－041が存在する。本住居とSB－041との同時存在は不可能である。

SI－205（第231図，図版76）

**位置**　調査区南部西寄りの23M－57グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.1m，幅が3.2mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。西辺・北辺がやや長く，南辺がやや短い。

**床面**　東側が高く，西側が低い。中央を中心に広く硬化しているが，硬化はあまり強くない。

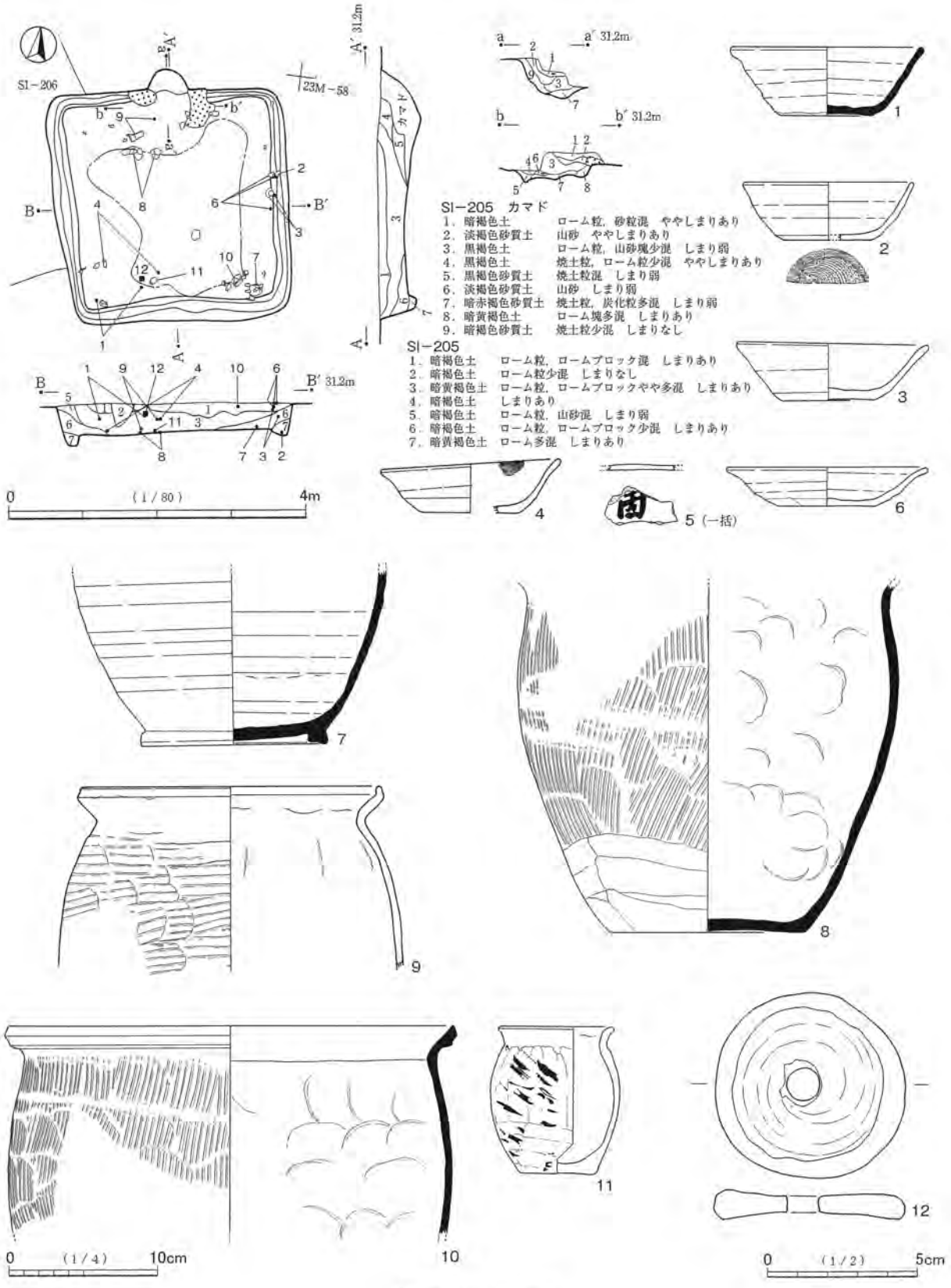
**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央に位置する。プランからの突出は小さく，両袖はプラン内に位置する。遺存が悪く，左袖は壁際のみの遺存であり，右袖も上部をかなり欠損している。両袖内側及び火床部に赤色化した部分はみられない。カマド底面は凹凸が著しいが，最深で床面よりも20cm程度深く，かなり掘り込まれている。袖の下方も窪んでいることから，底面は使用によって深くなっただけでなく，当初または作り替え時の掘りかたといえる。右袖部分の底面はロームブロックを多く含む暗黄褐色土で埋め戻され，袖はその上に構築されている。左袖は撹乱によって判然としない。両袖間の堆積土下層は焼土・炭化物を多く含む。

**堆積土**　暗褐色土・暗黄褐色土主体である。下層はローム粒・ロームブロックの含有がやや多いが，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　多量の遺物が竪穴全体から出土した。図示できた遺物は12点である。1は千葉産の須恵器杯，2～5はロクロ土師器杯である。6はロクロ土師器皿としたが，千葉産の須恵器の可能性もある。7は東海産の須恵器壷，8・10は千葉産の須恵器甕，9は常総型の土師器甕である。11は小型の土師器甕で，在地の土器である。12は土器片転用の紡錘車である。

5は底部の小片である。外面に「丙」と書かれた墨書がある。2～4は二次的な被熱により，器面が荒




第231図　SI－205

れており，３・４は内面に剥離痕が多くみられる。３は口縁・体部を1/2近く欠損する。また接合しているが欠損部から続く破損部分もある。欠損部は比較的整った形態である。欠損・破損部は打ち欠き・打ち割りされた可能性が考えられる。杯皿のうち３は1/2以上の遺存であるが，その他は1/2以下である。

7は底部が欠損なく遺存する。灰黄色の釉が底部内面に付着し，底部外面にもやや多くみられる。また高台部や胴部下位にも一部に付着している。高台部外面の釉は暗灰緑色の光沢をもつ部分がある。外面は暗赤褐色，暗灰色，内面は灰色の色調である。胎土は若干の小石を含むが，概して精良である。焼成は良好で，硬質である。猿投窯産と思われる。

8は底部が割れているが，ほぼ欠損なく遺存する。胴部外面上位の一部にみられる当て具痕は，痕跡的であるが同心円文である。上位以外にはみられない。消されているか，無文の当て具痕が併用されたと思われる。9の胴部外面の調整痕はタタキ目に似ているが，須恵器のものとはやや質感が異なる。胴部内面はヘラナデが施されている。当て具痕はみられないが，ヘラナデで消されているのかもしれない。外面の調整痕は，木口の端によるナデや，ヘラの当たりであることも考えられる。

11は割れていない完形品であるが，底部にわずかな孔がみられる。底部外面には小さな窪みがあり，そこを中心にひびが入っている。孔はそのために生じたものである。窪みは焼成前のもので，胎土中の小石が抜けた痕跡のようにもみえる。意図的なものか，判然としない。胴部外面の一部に，黒色物が付着している。煤の付着とみるには不自然であり，墨痕と思われる。筆先を整えたかのような痕跡であるが，祭祀的な意味をもつ可能性がある。赤みの強い部分が多いが，器面は荒れていない。使用時に孔が空いていなかったとすれば，日常的な使用も考えられるが，やや小さ過ぎると思われ，祭祀的な土器と考える。孔も当初からのものの可能性がある。

12はロクロ土師器杯の底部片を再利用した紡錘車である。中央に丁寧な円形の穿孔が施されている。側面も丁寧に磨られており，ほぼ円形の平面形を呈する。元の土器からみると，図示した面は底部外面である。わずかに回転糸切り痕がみえ，その後回転ヘラケズリが施されている。底部内面はヘラミガキが施され，平滑である。黒色処理は施されていない。

7は南東（右前）隅の床面から正位で出土した。11は南（前）壁側中央やや左寄りの床面から横に倒れた状態で出土した。8も横に倒れた状態で，カマド前方の床面から出土した。2は東（右）壁際の壁溝から出土した。図示した上記以外の遺物は中・上層からの出土が多い。4・9の出土層位は一部が下層であるが，一部は中層である。3の主要部分は傾きのない倒位で出土したが，上層からの出土である。12の平面位置は11に近いが，これも上層からの出土である。5は出土位置が不明である。

以上の遺物のうち，2・7・8・11は本住居で使用されていた遺物の可能性があるが，使用されていないとしても本住居の廃棄時期に近い遺物であろう。11はミニチュアともいえる祭祀的な土器であるが，出土状況に祭祀性があるか判然としない。7・8は11以上に不明瞭である。3は打ち欠きされた可能性があるが，上層出土であり，本住居に関わる祭祀的な出土状況と認めがたい。以上，出土遺物の多くは単に廃棄・遺棄されたか，流入したものと思われる。

**重複遺構**　西側でSI－206と重複し，本住居が切っている。

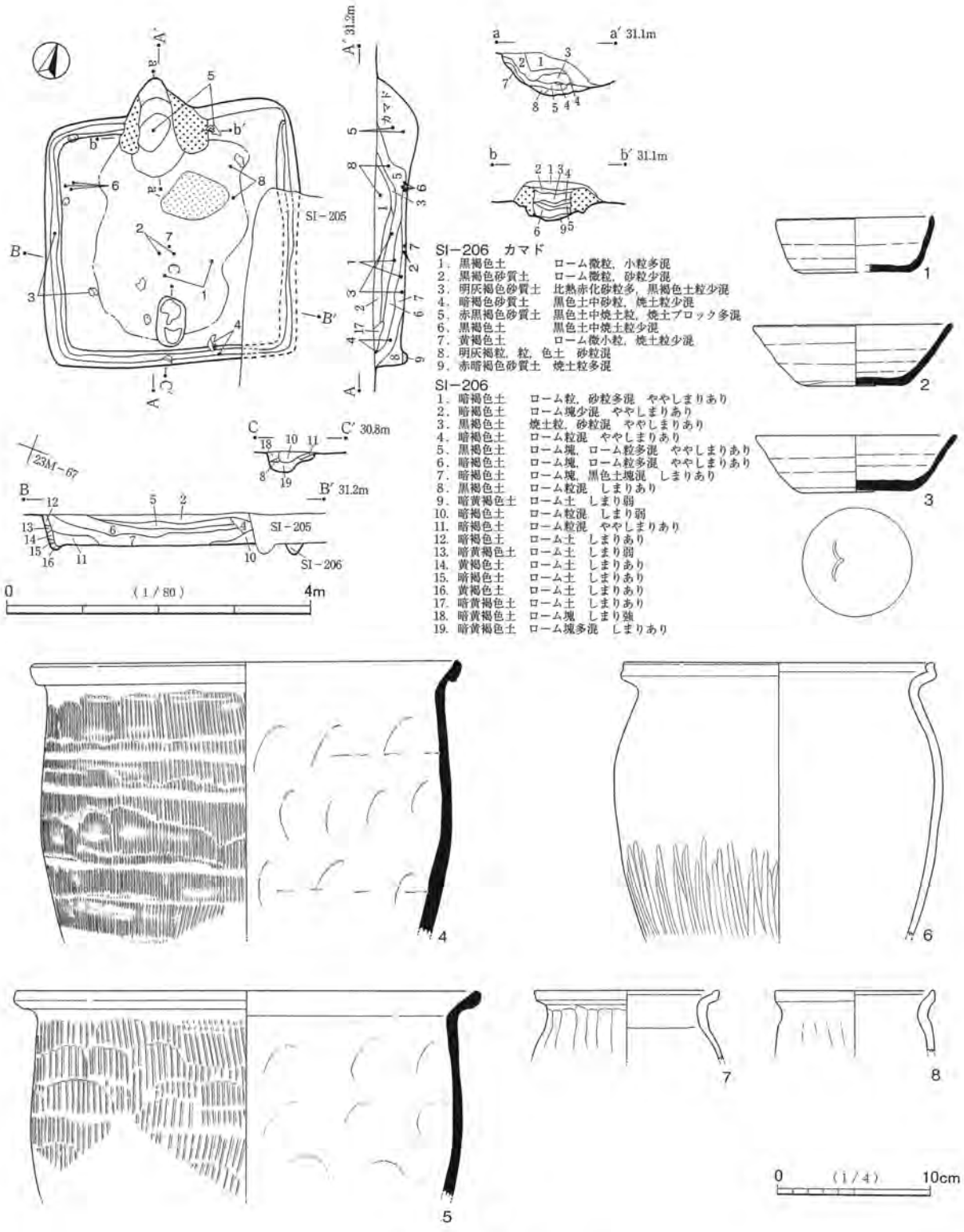
**SI－206**（第232図，図版76）

**位置**　調査区南部西寄りの23M－57グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.3m，幅も3.3mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。東辺がやや長い。

**床面**　ほぼ平坦である。左右（東西）の壁側を除いて広く硬化しているが，硬化はあまり強くない。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は65cm×39cm，床面からの深さは13cm～24cmである。中央に向かって縦長の形態で，奥側が深く，壁側が浅い。




第232図　SI－206

壁溝　全周する。

カマド　北壁中央わずかに左寄りに位置する。煙道部側がプランから突出するが，両袖前側はプラン内に位置する。両袖の遺存は比較的よい。構築材は山砂を主体とするが，一部に黒褐色土を含む。下部は薄いが，黒褐色土を多く含む。その下部の底面際の土層はロームブロックも多く含む。両袖内側中位は赤色化しているが，火床部には赤色化した面がみられない。焼土を多く含む土層は底面よりも若干高い位置に

あり（５層），最終的な火床面は底面よりも上方であったと思われる。カマド底面は床面よりも25cm程度深く，かなり掘り込まれている。窪みは両袖の内側下方に及ぶことから，底面は使用によって深くなっただけでなく，当初または作り替え時の掘りかたでもある。堆積土下層は焼土も含まれるが，黒色土の含有が多い。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。一部にロームを多く含むが，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　全体的に出土したが，遺物量はやや少量である。図示できた遺物は８点である。１～３は千葉産の須恵器杯，４・５は千葉産の須恵器甕または甑である。６は常総型の土師器甕である。７・８は小型の土師器甕で，在地の土器である。

３は底部外面にヘラ書きがある。「人」に似た形であるが，記号と思われる。２は口縁・体部の一部を欠損するが，比較的遺存がよい。欠損部は口縁部周で1/2弱で，形態は不整な「W」字状である。その他は遺存するが，全体に割れている。欠損部は打ち欠きされた可能性があると思われるが，断定しがたい。３は底部の一部と口縁・体部の多くを欠く。１は小破片である。２・３よりも古相をもつ土器である。

４・５はやや大形の破片であるが，土器全体からみると遺存は少ない。４はやや焼成があまい。６は一部の破片である。白雲母・小石を多量に含む。７・８も口縁部付近の一部の破片である。６～８はいずれも黒ずみや赤みの強い部分がある。

比較的遺存のよい２は中央の床面から出土した。３の主要部分は南西寄りの床面から出土した。５はカマド内中層及びカマド右袖外脇の中層から出土した。遺物の出土層位は床面から上層にわたっている。２・３については祭祀的様相が若干考えられるが，可能性を高くみることはできない。概して遺存が少なく，大半の遺物が単に廃棄されたか流入したものであろう。

**重複遺構**　東側でSI－205と重複し，本住居が切られている。

**SI－207**（第233・234図，図版77）

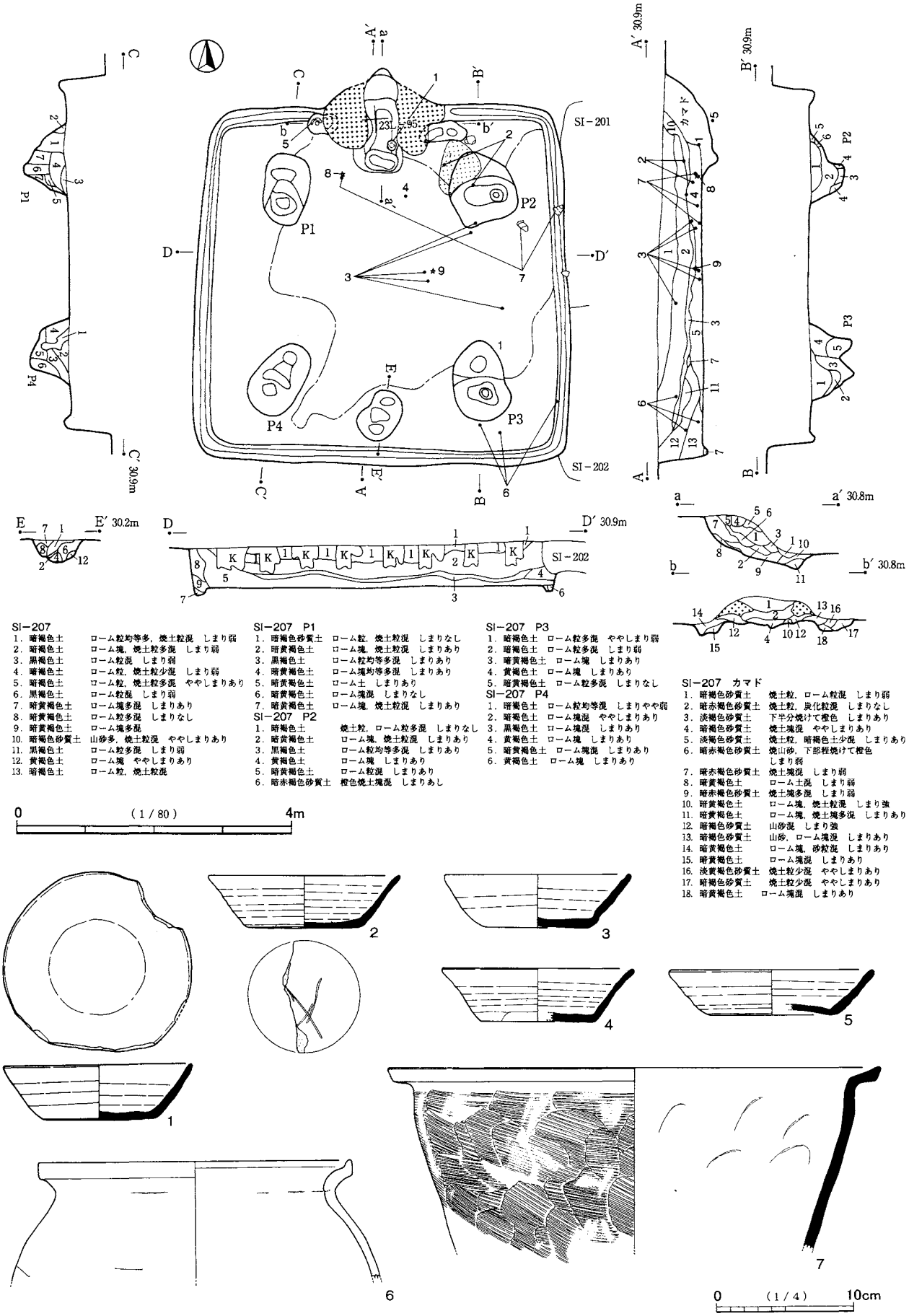
**位置**　調査区南西部中央寄りの23L－95グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが5.3m，幅も5.3mの方形をなす。確認面からの深さは65cmである。耕作機械による帯状の撹乱が南北方向に多く入り，上・中位のかなりの部分を破壊している。

**床面**　平坦で，中央から東壁際の一部まで広く硬化している。硬化はあまり強くなく，中央と壁際の差は少ない。なお床面は主としてロームブロックを多く含む暗黄褐色土で，貼床が施されている。中央は薄いが，壁側，特に隅部はやや厚いと思われる。また北東側の柱穴P2からカマド側の床面に焼けた山砂の範囲がみられる。貼床に含まれる土層であり，作り替え以前のカマドの構築材であろう。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。各柱穴の規模は大きい。南東側のP3は２箇所のピットが重なった形態であるが，他の柱穴もP3に準じた様相である。主柱穴が２組あると理解できるもので，建て替えが行われた住居である。P3は柱位置の違いが明瞭であるが，北西側のP1は断面の形状から，柱はあまり動いていないと思われれる。北東側のP2・南西側のP4はややずれた可能性が考えられる。建て替え以前の柱穴は柱が抜き取られ，埋め戻されたと思われる。建て替え後の柱穴も柱痕の存在は不明瞭である。P1の６層が柱痕とも思われるが，断定しがたい。P3は土層断面の様相から，南側部分が北側部分を切っていると思われ，奥から手前に柱を移したものと思われる。

出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は79cm×50cm，床面からの深さは24cm～34cmである。中央に向かって縦長の形態である。底面は３箇所あり，中央が深く，奥側が浅い。規模が大きく，掘り直され




SI－207
1．暗褐色土　ローム粒均等多，焼土粒混　しまり弱
2．暗褐色土　ローム塊，焼土粒多混　しまり弱
3．黒褐色土　ローム粒混　しまり弱
4．暗褐色土　ローム粒，焼土粒少混　しまり弱
5．暗褐色土　ローム粒，焼土粒多混　ややしまりあり
6．黒褐色土　ローム粒混　しまり弱
7．暗黄褐色土　ローム塊多混　しまりあり
8．暗黄褐色土　ローム粒多混　しまりなし
9．暗黄褐色土　ローム塊多混
10．暗褐色砂質土　山砂多，焼土粒混　ややしまりあり
11．黒褐色土　ローム粒多混　しまり弱
12．黄褐色土　ローム塊　ややしまりあり
13．暗褐色土　ローム粒，焼土粒混

SI－207　P1
1．暗褐色砂質土　ローム粒，焼土粒混　しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム塊，焼土粒混　しまりあり
3．黒褐色土　ローム粒均等多混　しまりあり
4．暗黄褐色土　ローム塊均等多混　しまりあり
5．暗黄褐色土　ローム土　しまりあり
6．暗黄褐色土　ローム塊混　しまりなし
7．暗黄褐色土　ローム塊，焼土粒混　しまりあり

SI－207　P2
1．暗褐色土　焼土粒，ローム粒多混　しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム塊，焼土粒混　しまりあり
3．黒褐色土　ローム粒均等多混　しまりあり
4．黄褐色土　ローム塊　しまりあり
5．暗黄褐色土　ローム粒混　しまりあり
6．暗赤褐色砂質土　橙色焼土塊混　しまりあし

SI－207　P3
1．暗褐色土　ローム粒多混　ややしまり弱
2．暗褐色土　ローム粒多混　しまり弱
3．暗黄褐色土　ローム塊　しまりあり
4．黄褐色土　ローム塊　しまりあり
5．暗黄褐色土　ローム粒多混　しまりなし

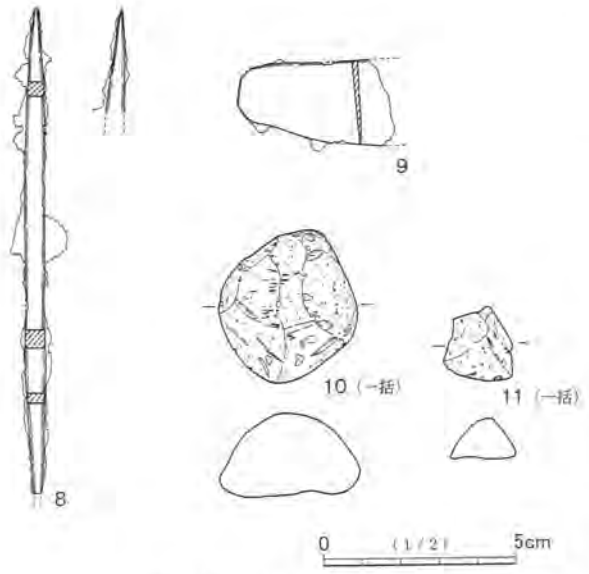
SI－207　P4
1．暗褐色土　ローム粒均等混　しまりやや弱
2．暗褐色土　ローム塊混　ややしまりあり
3．黒褐色土　ローム塊混　しまりあり
4．黄褐色土　ローム塊　しまりあり
5．暗黄褐色土　ローム塊混　しまりあり
6．黄褐色土　ローム塊　しまりあり

SI－207　カマド
1．暗褐色砂質土　焼土粒，ローム粒混　しまり弱
2．暗赤褐色砂質土　焼土粒，炭化粒混　しまりなし
3．淡褐色砂質土　下半分焼けて橙色　しまりあり
4．暗褐色砂質土　焼土塊混　ややしまりあり
5．淡褐色砂質土　焼土粒，暗褐色土少混　しまりあり
6．暗赤褐色砂質土　焼山砂，下部程焼けて橙色しまり弱
7．暗赤褐色砂質土　焼土塊混　しまり弱
8．暗黄褐色土　ローム土混　しまり弱
9．暗赤褐色砂質土　焼土塊多混　しまり弱
10．暗黄褐色土　ローム塊，焼土粒混　しまり強
11．暗黄褐色土　ローム塊，焼土塊多混　しまりあり
12．暗褐色砂質土　山砂混　しまり強
13．暗褐色砂質土　山砂，ローム塊混　しまりあり
14．暗黄褐色土　ローム塊，砂粒混　しまりあり
15．暗黄褐色土　ローム塊混　しまりあり
16．淡黄褐色砂質土　焼土粒少混　ややしまりあり
17．暗褐色砂質土　焼土粒少混　ややしまりあり
18．暗黄褐色土　ローム塊混　しまりあり

0　（1／80）　4m




第233図　SI－207（1）




第234図　SI－207（2）

ていると考えられる。出入口施設は建て替え時には作り直されていると考えるが，それ以外でも随時修繕された可能性がある。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央に位置する。プランからの突出はやや小さく，両袖はプラン内に位置する。耕作機械の撹乱により上部の一部を欠損するが，両袖の遺存は比較的よい。構築材は山砂主体である。上部は混じりけが少ないが，下部は暗褐色土を含み，ともに堅くしまっている。なお両袖の山砂は壁の後方上部，煙道部の両脇まで続いている。両袖内側はかなり内部まで赤色化している。また赤色化は煙道部壁面まで続く。また火床部底面も被熱痕跡が広くみられ，地山のローム面の硬化・ブロック化が著しい。カマド底面は前側で床面から20cm深く掘り込まれている。位置的には前天井にかかるか，そのやや前と思われる。範囲はあまり広くない。灰のかき出し等，カマド使用によるものと思われるが，深さがあることからそれだけでなく，当初または作り替え時の掘りかたの可能性も考えられる。堆積土下層は焼土を多く含む。

ピットが両袖外脇から検出された。深さは左側が16cm，右側が18cmである。両袖の端にかかっているが，袖の外脇が若干崩れたとすると，平面位置からは共存もあり得るように思われる。しかし土層断面をみると，左側のものはロームブロックを含む暗黄褐色土，右側のものは焼土粒も多く含む土層で埋め戻され，両袖がその上部に構築されたと思われる。両ピットについては，作り替えを含むカマド構築以前のものとみておきたい。

**堆積土**　暗褐色土主体であるが，ローム粒・ロームブロックを多く含む。下層は焼土粒も多く含む。ローム粒・ロームブロックの含有が多いが，レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　多量の遺物が竪穴全体から出土した。図示できた遺物は11点である。１～５は新治窯産の須恵器杯，６は常総型の土師器甕，７は新治窯産の須恵器甕である。８・９は鉄製品で，９は穂摘具である。８は製品名が判然としないが，何らかの工具であろう。10・11は軽石である。

１は遺存良好な土器で，欠損部は口縁部の1/4強のみである。遺存部分は口縁部の１箇所を小さく弧状に破損するが，他は割れていない。欠損部の形態は緩やかな弧状を呈する。欠損・破損は打ち欠き・打ち割りされたものと思われる。２は底部外面に「×（＋）」または「キ」状のヘラ書きがある。１以外には遺存のよいものがなく，３は1/2強遺存するが，２・４・５は1/2以下である。１～４は器面が荒れている。特に１の全面，３の外面は顕著である。１の外面は剥離も目立つ。１・２は赤みを帯びる部分もみられ，二次的に火を受けたと思われる。４もその可能性があるが，やや不明瞭である。３の外面は液体に長く触れたことや長期の使用によることも考えられる。５も器面が荒れているが，あまり顕著なものではない。ただし硬質の焼成のため，劣化が少ないようにも思われる。

６の遺存は口縁部から胴部上位までの一部である。胴部がやや膨らむ器形である。７はバケツ形の甕である。大形の破片であるが，遺存は少ない。器面が荒れ，特に内面の磨耗が著しい。３外面と同様の原因

が考えられる。

8は完形に近く遺存する製品である。図の下端がわずかに欠損するとしたが，欠損していないことも考えられる。先端は鋭く尖っている。下部も細い作りであるが，茎と思われる。下部には木質の付着がみられない。断定しがたいが，木柄が付かないことも考えられる。9は薄い作りである。片方の端部側が遺存する。目釘孔は錆に覆われていると思われ，判然としない。X線写真においても，可能性をもつ箇所はみられるが，かなり不明瞭であり，図化していない。木質の付着はみられない。

1はカマド前側の床面からやや傾いた正位で出土した。5はカマド左袖脇のピットから出土した。2は右奥（北東）側の下層・中層から出土した。8はカマド左袖前方の下層から出土した。図示した遺物の出土層位は下層が多いが，3・6の一部は上層に散っている。平面位置については，7が広く，3もやや広く分布する。6も若干散っている。

1はカマド廃棄の祭祀に関わる遺物と思われる。やや斜めの出土状態のため，上方から落下した可能性も若干あるが，その場合でも祭祀的な遺物と思われる。1以外の遺物には特に祭祀的な出土状況がうかがえない。2・5も不明瞭である。図示したものは下層出土が多く，特に5は本住居廃棄以前の遺物である。しかし図示しない多量の土器片は中・上層からも出土しており，一部を除く大半の遺物が単に廃棄されたか，流入したものとみられる。

**重複遺構**　東側でSI－201・SI－202と重複し，本住居が切られている。ただし本住居の方が深いため，壁下位・床面は遺存している。

### SI－208（第235・236図，図版77）

**位置**　調査区南部西寄りの23M－78グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.9m，幅が2.9mの方形をなす。確認面からの深さは35cmである。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が広く，やや硬化している。南側は重複したSI－209の堆積土中に床面が形成されたため，硬化はあまり強くない。

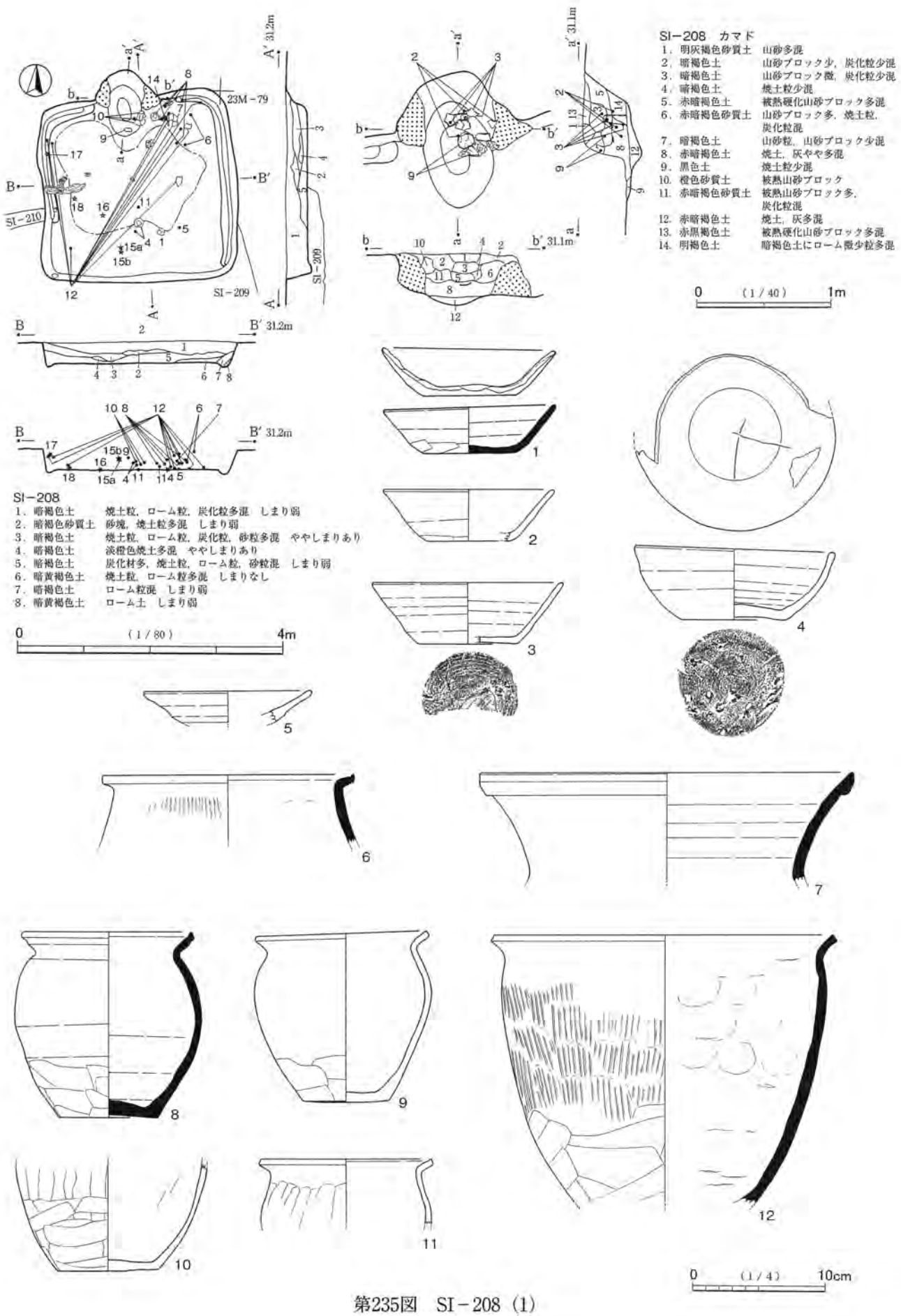
**柱穴**　出入口ピットは南壁際中央に存在すると思われるが，検出されなかった。未検出であるのは，床面がSI－209の堆積土で，ピットの堆積土と色調の差がないためであろう。主柱穴は存在しない。

**壁溝**　重複部分で検出されなかったが，全周すると思われる。

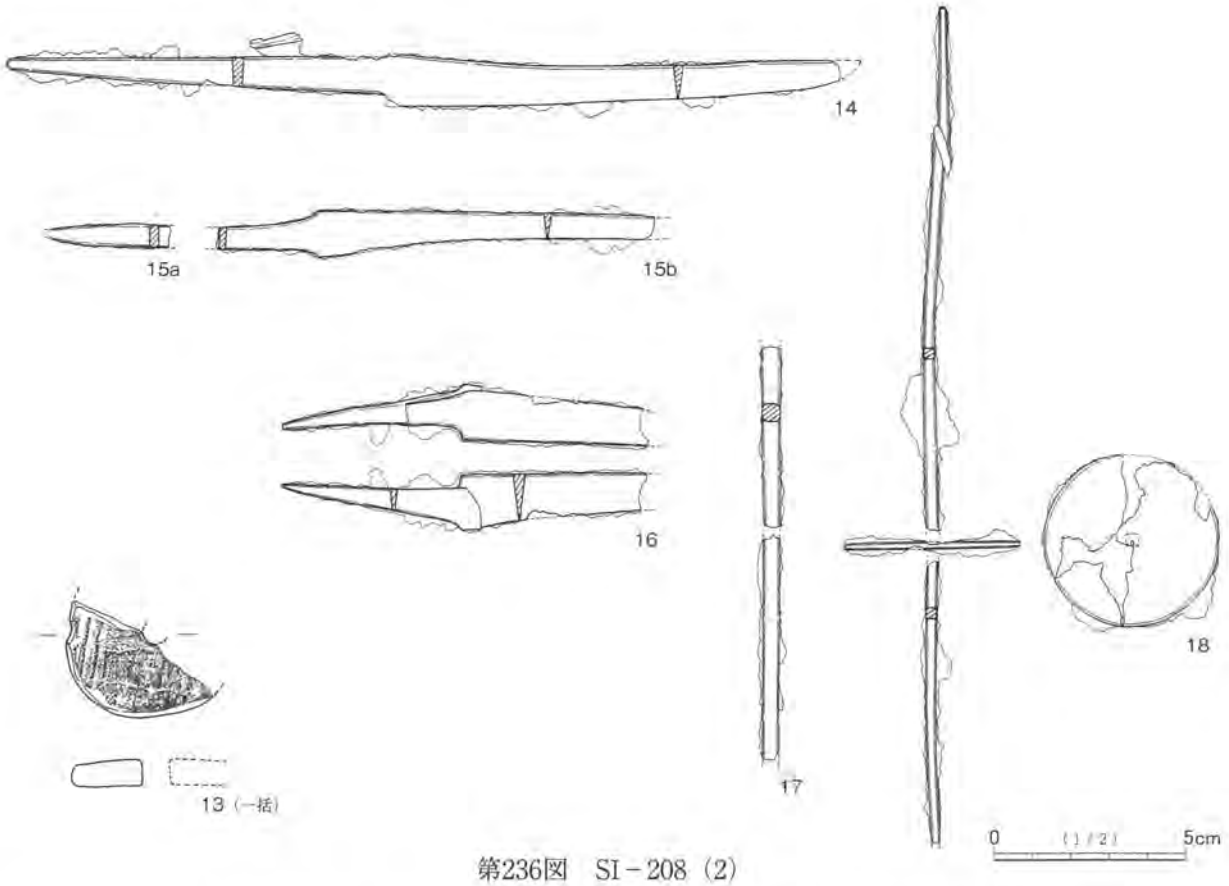
**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランからの突出はやや大きい。両袖は壁際で若干遺存する。かなり欠損しており，遺存状態が悪い。構築材は山砂を主体とするが，下部はローム粒を多く含む。両袖内側は赤色化している。火床部中央の奥側から，土製支脚が立った状態で出土した。やや斜めに傾いているが，最終的な使用時の位置を留めるものと思われる。堆積土最下層は，焼土・灰を多く含む暗赤褐色土であるが（12層），支脚はその上面に立っており，最終の火床面はカマド底面よりもやや上部である。12層の上部も同様の土層（8層）が厚く堆積している。カマド底面は床面よりも窪んでいるが，それほどの深さはなく，使用に伴う程度の窪みと思われる。

**堆積土**　炭化材が西壁側やカマド周辺等の床面上で検出された。西壁側のものは大形である。炭化物は下層で非常に多く，上層でも多く含まれる。焼土粒も全体に多く含まれるが，集中した出土はみられない。本住居の上屋は解体後片付けられ，廃材が廃棄物とともに焼却されたものと思われる。堆積土はロームもやや多く含まれるが，暗褐色土主体である。焼却後は自然堆積と思われる。

**出土遺物**　やや多量の遺物が竪穴全体から出土した。図示できた遺物は19点である。1は千葉産の須恵




第235図　SI－208（1）




第236図　SI－208（2）

器杯，２～４はロクロ土師器杯，５はロクロ土師器皿，６・７・８は千葉産の須恵器甕である。８～11は小型の甕で，９～11は在地の土師器である。12は千葉産の須恵器甑である。13は土器片転用の紡錘車である。14～18は鉄製品で，14～16は刀子，18は紡錘車である。17も紡錘車の紡軸の可能性があるが，やや断定しがたい。その他図示していないが，ドングリ大の炭化植物が１点出土した。

１は黒色部分が多いため須恵器としたが，ロクロ土師器の可能性がある。口縁・体部の1/2近くを欠損するが，他は割れずに遺存する。欠損部の形態は逆台形状で整っており，打ち欠きされたものと思われる。内面の所々に剥離痕がある。２・３は器面全面が荒れ，剥離も著しい。ともに赤みが強く，また一部に黒ずむ部分もあり，被熱痕跡が顕著である。２は底部を欠損するが，口縁・体部は比較的遺存がよい。３は1/2以下の遺存である。３の底部調整は回転糸切り後無調整である。４も１同様口縁・体部の1/2を欠損する。遺存部分の体部下位・底部は割れていないが，口縁・体部上位は割れている。欠損部の形態は比較的整っているが，遺存部分が割れているため，打ち欠きと断定しがたい。底部内面に「＋（×）」のヘラ書きがある。口縁・体部は丸みをもち，椀形の器形である。器壁が厚く，また底部調整に繊維痕がみられ，やや雑な作りである。５は小片である。高台付の可能性があるが，やや不明瞭である。

杯皿類のうち，２・３の被熱痕跡は顕著であり，本住居の焼却に伴う一時的なものだけではないと思われる。２・３はカマド支脚及び補助に転用されたものと思われるが，出土状況とも矛盾しない。その他の土器にも被熱痕跡がみられるが，主として本住居の焼却時によるものと思われる。

６外面の平行タタキはかなり弱く，消えている部分も多い。遺存は少ない。７は口頸部の小片である。８・９はロクロ成形の甕である。８の底部外面は粗い繊維痕・砂目痕がみられることから，須恵器としたが，土師器の可能性も考えられる。９も８と似た調整であるが，黒斑があることから土師器とした。底部

外面はナデにより，繊維痕等がほぼ消されている。8・9ともに口縁部から胴部中位までの一部を欠くが，9はかなり遺存がよく，8も比較的よい。8は底部外面付近を除いて赤色化が著しく，口縁部・胴部上位の一部は暗灰白色に変色している。底部内面周辺は剥離痕が著しい。9もかなり褐色味の強い部分がある。また剥離痕が胴部内面上位の一部に顕著である。8は被熱の様相から支脚に転用されたものと思われ，9もその可能性が考えられる。10はやや割れているが，胴部中位から底部まではほぼ遺存する。内面の黒ずみが著しく，一部に剥離も目立つ。11は口縁部・胴部上位の1/2弱の遺存である。10・11は在地の土器である。12は黒斑状の部分をもつことから須恵器窯で焼成されていないことも考えられる。底部が削除された可能性があり，本来は甕であったかもしれない。筒抜けの甑として使用されたものと思われる。

13は新治窯産の須恵器甕または甑の胴部片を再利用した紡錘車である。孔部分で欠損し，1/2以下の遺存である。現在の重さは7ｇであるが，そこから推測して元々の重さは17ｇ前後と思われる。孔・側面とも丁寧に磨られている。土器としてみると，拓本を図示した外面は平行タタキが施されている。内面は比較的平らであるが，紡錘車としての使用によるものかもしれない。胎土は白雲母を多量に含む。

14は切先をわずかに欠損するだけで，遺存がよい。かなり長い刀子である。関部分は若干の欠損があるが，背関は小さく直角をなし，刃関はやや深い直角をなす。茎の背の一部に木質が付着するが，炭化しており，周囲に存在した炭化材が錆に付着したものと思われる。関付近から茎は錆膨れが多いが，切先側はかなり遺存がよい。15ｂは切先と茎尻を欠くが，その間は比較的よく遺存する。身がやや長い刀子である。関部分は角をなすが，刃関はやや鈍角的である。背関もわずかに鈍角であるが，錆の影響であり，本来はより直角的な可能性がある。16は切先側を欠くが，その他は遺存する刀子である。ただし身と茎は錆膨れによりほぼ厚み分がずれているため，本来の形態を保っていないと思われる。境付近で折れた茎と身が重なっており，また茎は身に対して斜めに接合していると考えられる。茎の長さは正確な数値が出ないが，6㎝程度と思われる。背関は深く直角に切り込みが入る。刃関は錆膨れのため不明瞭であるが，やや浅い直角関か，斜めの関と思われる。茎は茎尻に向かって細くなる。身は関部分が最も広く，切先側に向かって細くなる。15aは刀子で，茎尻側の破片である。茎尻端部をわずかに欠損する。長軸方向に筋状の線が数本みられる。15ｂと同一個体と思われる。17は棒状の鉄製品である。2片の破片であり，その間は接合しない。図のようにみると上方・下方に続き，より長い製品である。性格を断定しがたいが，あまり厚みがないことと直線的なこと，また集落遺跡には比較的多量に存在したと思われることを考慮すると，紡錘車の紡軸の可能性が最も高いと思われる。18は紡軸の下部末端側を欠損するが，比較的遺存のよい紡錘車である。しかし紡輪は薄く，割れて若干欠損しており，やや遺存状態がよくない。また紡軸も細いため折れやすく，良好な状態を保つことが難しい製品である。紡輪の径は4.5㎝前後でやや小型の紡錘車である。孔は欠損が及ぶためやや不明瞭であるが，孔形は隅の丸い方形と思われる。紡軸上部は先端まで遺存しているが，鉤はみられない。紡輪と接合しないが，近いところで破損したと思われる。なお錆膨れのため，上部でややずれる部分がある。紡輪上から先端までの長さは推定で14㎝である。

2・3・9はカマド内から出土した。2・3はやや奥側の中・下層から出土した。2・3の出土範囲中央からは図示していない土製支脚が存在する。9は土製支脚の手前の中央部下層から出土した。胴部上位から底部までの主要部分で，やや傾いた正位での出土である。口縁部・胴部上位の破片がやや離れてカマド前側の中層から出土した。口縁部破片の一部は煤が多く付着し，赤みも強い。廃材とともに火を受けた部分であろう。8はカマド右袖前方の下層を主体に出土した。割れてやや散っているが正位の出土である。

14は８の下部で床面から出土した。10は８と並んでやや内側の下層から正位で出土した。その他カマド右前方からは，６・７及び12の一部が出土した。６・７の出土層位は中・上層で，12は床面から上層にわたっている。なお12は左（西）壁際まで広く散っている。１・４は中央南側の下層から正位で出土した。19は左壁側中央の床面で，炭化材の脇から出土した。16は中央やや左寄りの床面から出土した。15･17は前（南）壁側中央の中層から出土した。18は左壁際北寄りの上層から出土した。鉄製品の出土位置は中央から南西側に多いが，やや散っている。

１・４は廃材焼却時の祭祀行為に伴う遺物の可能性があり，８・９・14はカマド廃棄の祭祀に関わる可能性が考えられる。また２・３・10もその可能性が若干考えられる。しかし断定はしがたく，可能性の指摘に留めたい。鉄製品16・19は単に廃棄されたものと思われる。本住居の出土遺物は，一部が祭祀に伴う可能性があるが，廃材焼却時やその後に廃棄されたか，流入した遺物も多かったと思われる。

**重複遺構**　南側でSI－209と重複し，本住居が切っている。

**SI－209**（第237図，図版77）

**位置**　調査区南部西寄りの23M－78グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.9m，幅が4.0mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

**床面**　ローム粒・ロームブロックを多量に含む黒褐色土で，全体的に貼床が施されている。そのため床面の把握がやや難しく，西側を若干掘り過ぎていると思われる。その点を考慮すると，床面は平坦といえる。硬化面は中央を主体に東壁際中央までみられる。硬化の強さは均一でなく，部分的に強い。特に出入口ピット奥の中央から南側部分は強く硬化している。

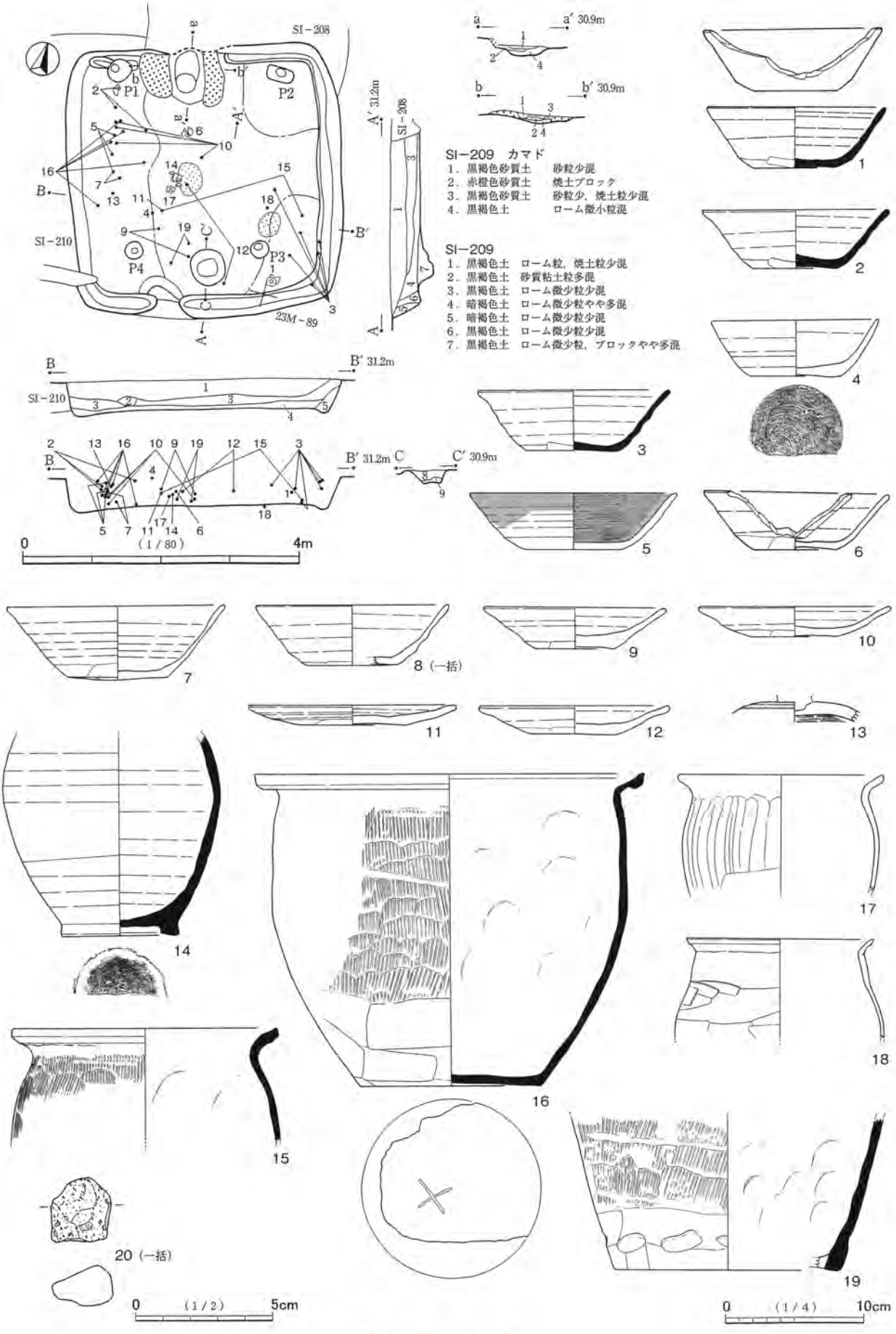
**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。床面では明瞭でなく，貼床を除去したときに検出された。北側のP1・P2は北壁際で両隅に近い位置にある。南側のP3・P4はほぼ通常のところに位置する。出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は52cm，床面からの深さは20cmである。出入口ピットの堆積土はローム粒・ロームブロックをやや多く含む暗褐色土で，下層は硬化していた。出入口施設は下層の上に作られ，そのために硬化したものと思われる。

**壁溝**　SI－210との重複により，西側で検出できなかったが，ほぼ全周すると思われる。南壁左寄り部分で途切れる部分があり，床面から８cm高まっている。性格が不明瞭であるが，出入口ピットに近い位置であり，出入口施設に関わる可能性が考えられる。

**カマド**　北壁中央やや左寄りに位置する。SI－208に切られ，上部を欠損する。また山砂は前方に多く流出しており，下部の遺存も悪い。左袖は下部が若干遺存するが，右袖は痕跡的な遺存である。右袖の形については，わずかに残る山砂と，袖基部の構築材と思われるロームブロック混じりの黒褐色土から推定した。両袖は方形プラン内にある。煙道部壁は多くが失われているが，プランからの突出はあまり大きくないと思われる。左袖内側及び火床部に赤色化した部分はみられない。火床部底面は床面から10cm程度窪んでいる。底面からやや浮いて焼土を主体とする土層がみられる。その上下は黒褐色土主体である。

**堆積土**　黒褐色土主体で，ローム粒は床面上・壁際を除いて，概して少ない。自然堆積と思われる。なお南東側の床面に若干の焼土範囲がみられる。

**出土遺物**　多量の遺物が出土した。カマドから北東側にかけての出土が少ないが，それ以外は多く分布する。図示できた遺物は20点である。１～３は千葉産の須恵器杯，４～８はロクロ土師器杯，９～12はロクロ土師器皿である。13はロクロ土師器蓋と思われる。14は灰釉陶器壷，15・16は千葉産の須恵器甕，17は


SI－208
SI－210
P1
P2
P3
P4
23M～89
SI－209　カマド
1．黒褐色砂質土　砂粒少混
2．赤橙色砂質土　焼土ブロック
3．黒褐色砂質土　砂粒少，焼土粒少混
4．黒褐色土　ローム微小粒混
SI－209
1．黒褐色土　ローム粒，焼土粒少混
2．黒褐色土　砂質粘土粒多混
3．黒褐色土　ローム微少粒少混
4．暗褐色土　ローム微少粒やや多混
5．暗褐色土　ローム微少粒少混
6．黒褐色土　ローム微少粒少混
7．黒褐色土　ローム微少粒，ブロックやや多混
0　4m
（1／80）
8（一括）
20（一括）
0　（1／2）　5cm
0　（1／4）　10cm

第237図　SI－209

在地の土師器甕，18は武蔵型の土師器甕，19は千葉産の須恵器甑，20は軽石である。その他図示していないが，ドングリ大の炭化種子が１点出土した。

１は口縁・体部の一部が欠損する他は割れずに遺存する土器である。欠損部は口縁部周で1/2弱で，形態は比較的整っており，打ち欠きされたものと思われる。６も比較的遺存のよい土器である。欠損部は口縁・体部の一部，口縁部周1/4弱で，形態は逆三角形状である。口縁・体部は欠損部以外にも破損がある。破損部の形態・大きさは欠損部とほとんど同じである。遺存する他の部分は欠損部と破損部の下頂部を境に大きく２片に割れている。欠損部・破損部は打ち欠き・打ち割りされたもので，また意図的に同じ大きさにされたものと思われる。二次的な被熱により，器面の荒れが著しく，特に底部内面付近の一部が顕著である。また赤色化も顕著である。１・６以外では２・３の遺存がよく，特に３は完形に近い。ともにやや細かく破損しており，破損・欠損に意図的な様相をみるのは難しい。その他の杯皿類に非常に遺存のよいものはなく，破損等も意図的でないと思われる。８～10は千葉産須恵器との区別が難しく，特に８はどちらともいえない土器と思われる。13はつまみの取れた蓋の天井部破片と思われる。内面はていねいにヘラミガキが施されている。外面は回転ヘラケズリが施されている。あるいは香炉の蓋かもしれない。

14は胴部外面全面に施釉されている。灰緑色の釉が多くかかり，厚みをもつ部分はガラス質で光沢がある。底部外面は施釉されていないが，高台接地部の一部に釉がかかっている。また底部内面に降灰釉がみられる。素地の色調は灰白色で，胎土は精良である。器面には黒色粒が吹き出している。胎土内部の気泡が膨らみ，内面の一部に盛り上がる箇所がある。

16は底部外面に「＋(×)」のヘラ書きがある。18の口縁部は「コ」の字状を呈する。19は５孔式の甑である。

６はカマド前方の中層から倒位のつぶれた状態で出土した。中層からの出土であるが，６の下方には流出した山砂が堆積している。なお山砂の上面と６の高さには４cm～５cm程度の差があると思われる。カマド廃棄の祭祀により，カマドを破壊し，崩した山砂の上に６を置いた可能性が考えられる。しかし高さの差があるため断定しがたく，可能性の指摘に留める。なお６は被熱痕跡が強いことから，支脚転用品または灯明具であったことも考えられる。１は南壁際右寄りの中層から出土した。正位・倒位等の状況は判然としない。１も打ち欠きされたと思われる土器であるが，出土層位が中層であるため祭祀的な出土状況か断定しがたい。図示した遺物の出土層位をみると，床面から上層にわたるが，中・上層が多い。平面的にも広く散っているものが目立つ。一部が判然としないが，出土遺物の大半は単に廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　北側でSI－208，東側でSI－210と重複し，SI－208に切られ，SI－210を切っている。なお本住居の方がSI－208よりも深いため，壁下位・床面は遺存している。

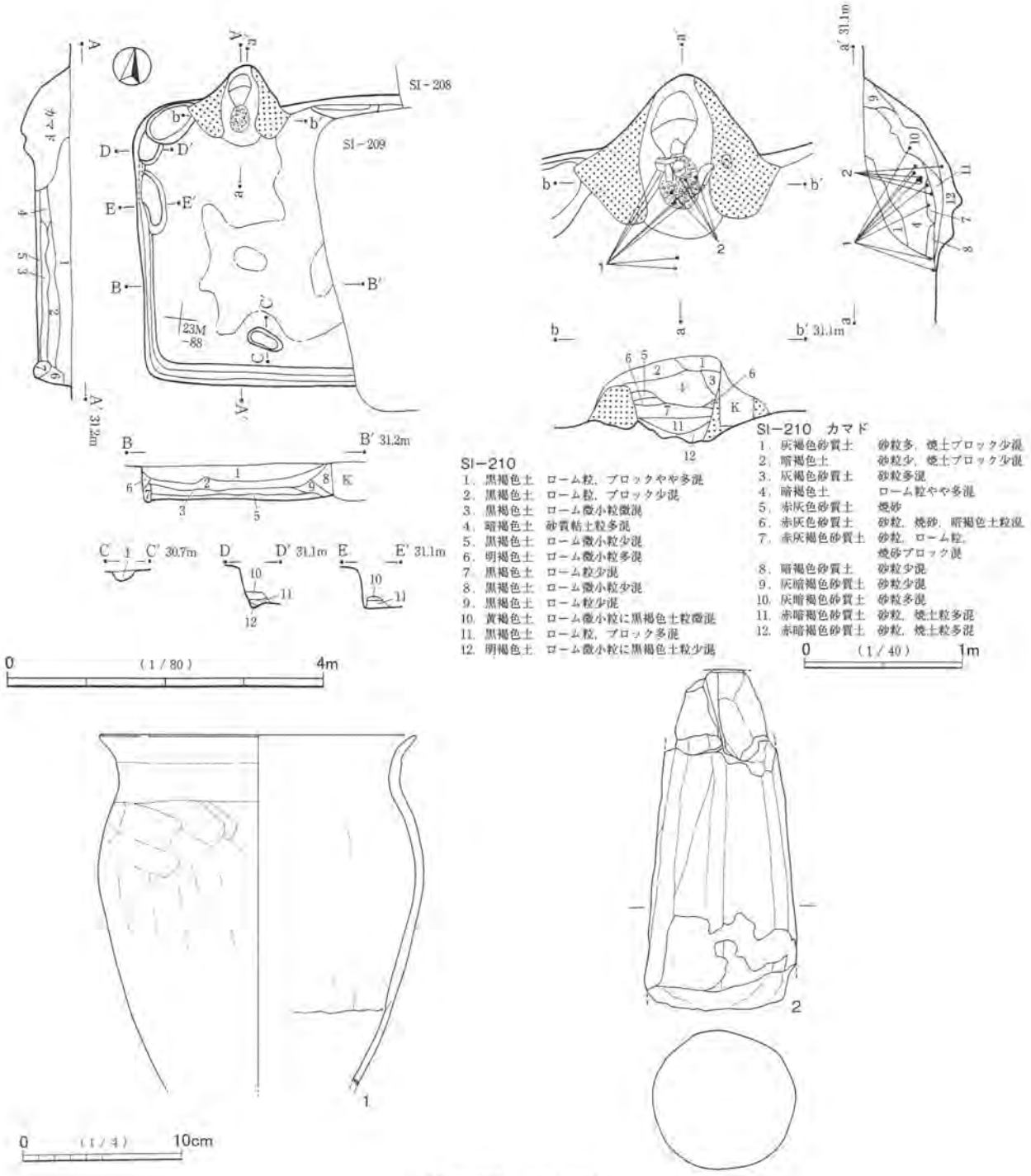
### SI－210（第238図，図版77）

**位置**　調査区南部西寄りの23M－78グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.6mの方形をなす。確認面からの深さは45cmである。幅がSI－209に切られたため，不明である。

**床面等**　平坦で，中央が硬化している。西（左）壁際北寄りにかけて，１段の段が壁溝の上に築かれている。段を形成した構築土は，下部がロームブロック混じりの黒褐色土，上部がローム主体の土である。上面は平坦であり，意図された盛土と判断した。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際に位置する。径は49cm×24cm，床面からの深さは16cmである。やや横に長




第238図　SI－210

い形態である。平面位置は左寄りと思われるが不明瞭である。中央であれば，プランは縦長の方形となる。主柱穴は存在しない。

壁溝　遺存する部分は巡っており，全周すると思われる。

カマド　北壁左寄りに位置する。方形プランからの突出はやや大きい。右袖は撹乱を受けて遺存が悪い。左袖も前側の遺存がやや悪いが，壁側はよく遺存する。構築材は山砂を主体とするが，下部はロームの含有が多い。両袖内側は赤色化し，煙道部の壁面まで続いている。火床部も中央に赤色化した面がみられる。堆積土下層は焼土を多く含むが，よく焼けた範囲は最下層（12層）上面である。底面に若干堆積した土層上が最終の火床面とみられる。土製支脚（2）が火床面のやや奥側から立った状態で出土した。最終の使

用時を留めるものであろう。カマド底面は床面よりもやや窪んでいるが，あまり大きなものではなく，使用に伴う程度のものと思われる。

**堆積土**　黒褐色土主体である。ロームの包含は上層でやや多いが，中・下層は少ない。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　図示できた遺物は２点である。１は武蔵型の土師器甕，２は土製支脚である。１は胴部下位から底部を欠損するが，口縁部の遺存はかなりよい。口縁部の形態はしっかりした「コ」の字状ではないが，「コ」の字に近づいた形態である。被熱痕跡が内外面に顕著である。２は上部から下部までかなりよく遺存する。上部側の一部を若干欠損する。２はカマド内下層から出土した。上部の破片が若干周囲に散っている。１は２の周囲から出土した。遺物量は少量で，散在的な出土である。遺物量は遺構重複により少なくなっているが，本来的にもかなり少ないと思われる。

**重複遺構**　東側でSI－209と重複し，本住居が切られている。

**SI－211**（第239～241図，図版78）

**位置**　調査区南部の23M－89グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.5m，幅が3.6mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

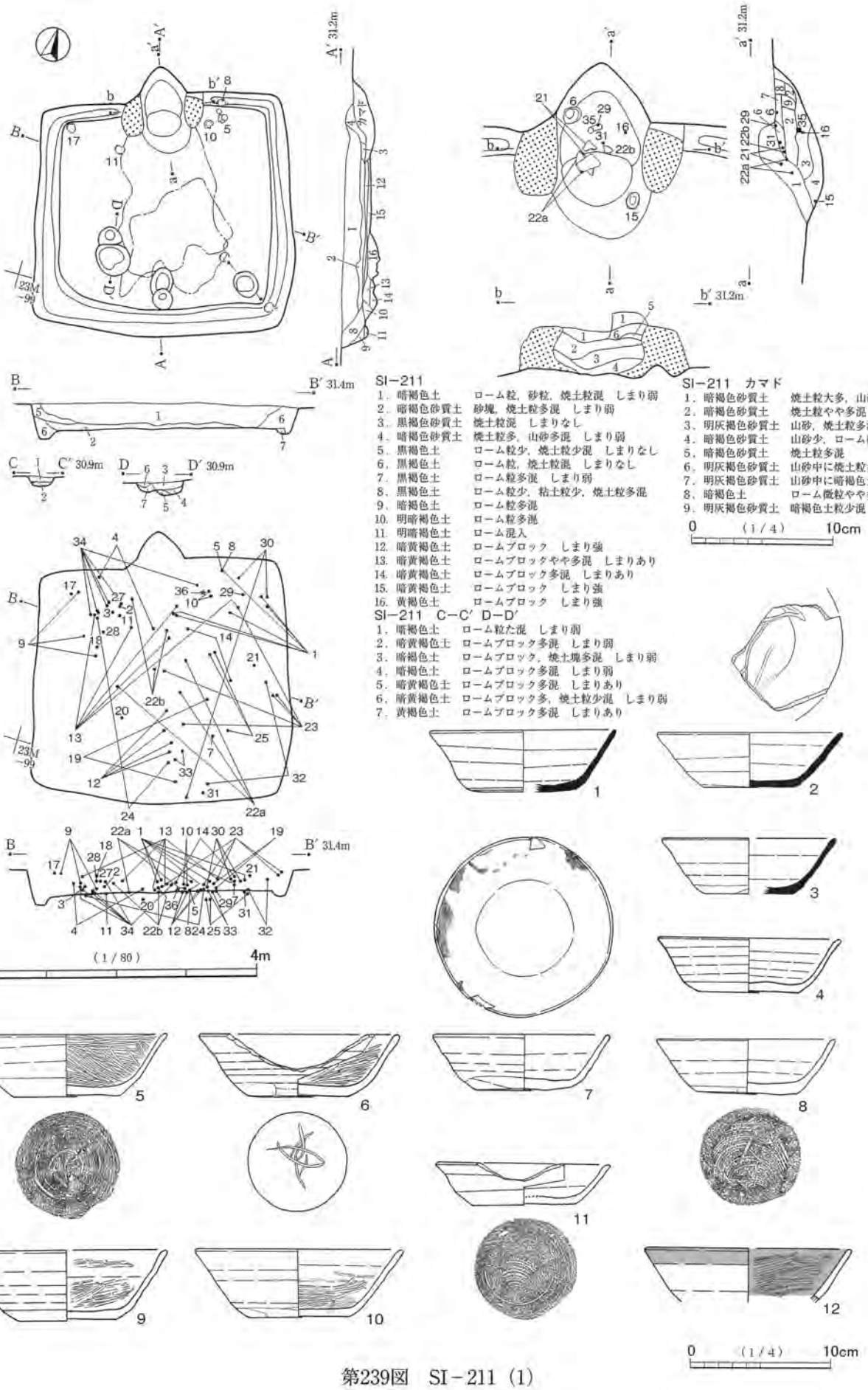
**床面**　３面の床面が層をなして認められた。当初の床面は粗く掘り込まれた掘りかた底面上に，ロームブロック主体の黄褐色土が埋め戻されて整形されたものである。掘りかた底面は凹凸が著しいが，中央が浅く，周囲が深い。当初の床面は所々硬化するが，硬化範囲を面でとらえることができなかった。その床面上に厚さ数cmの貼床が２回施されている。貼床を構成する土は，ともにロームブロック主体の暗黄褐色土であり，堅くしまっている。土層の差はないが，硬化面が上下に２面みられたため，当初の床面が形成された後に，床面が２回修復されたことがわかった。中位の床面の硬化面は東西の壁側を除く中央にみられ，範囲が広い。上位の床面の硬化面も中央にみられるが，遺存は中位よりも狭い範囲である。中・上位の床面の硬化は強く，壁側との差は明瞭である。以上のように明瞭な床面が３面あるため，各床面の正確な把握が難しかったが，各床面ともほぼ平坦と思われる。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。縦長の形態で，２連のピットが連接したような形態である。径は61cm×29cm，床面からの深さは，壁際が20cm，中央側が15cmである。床面が何度も修復されているため，出入口ピットも作り直されたものかもしれない。ただし連接状の出入口ピットは他の竪穴でもしばしばみられるものであり，作り直されたといえるか断定しがたい。しかし逆に他の住居でも作り直しているとみるべきかもしれない。

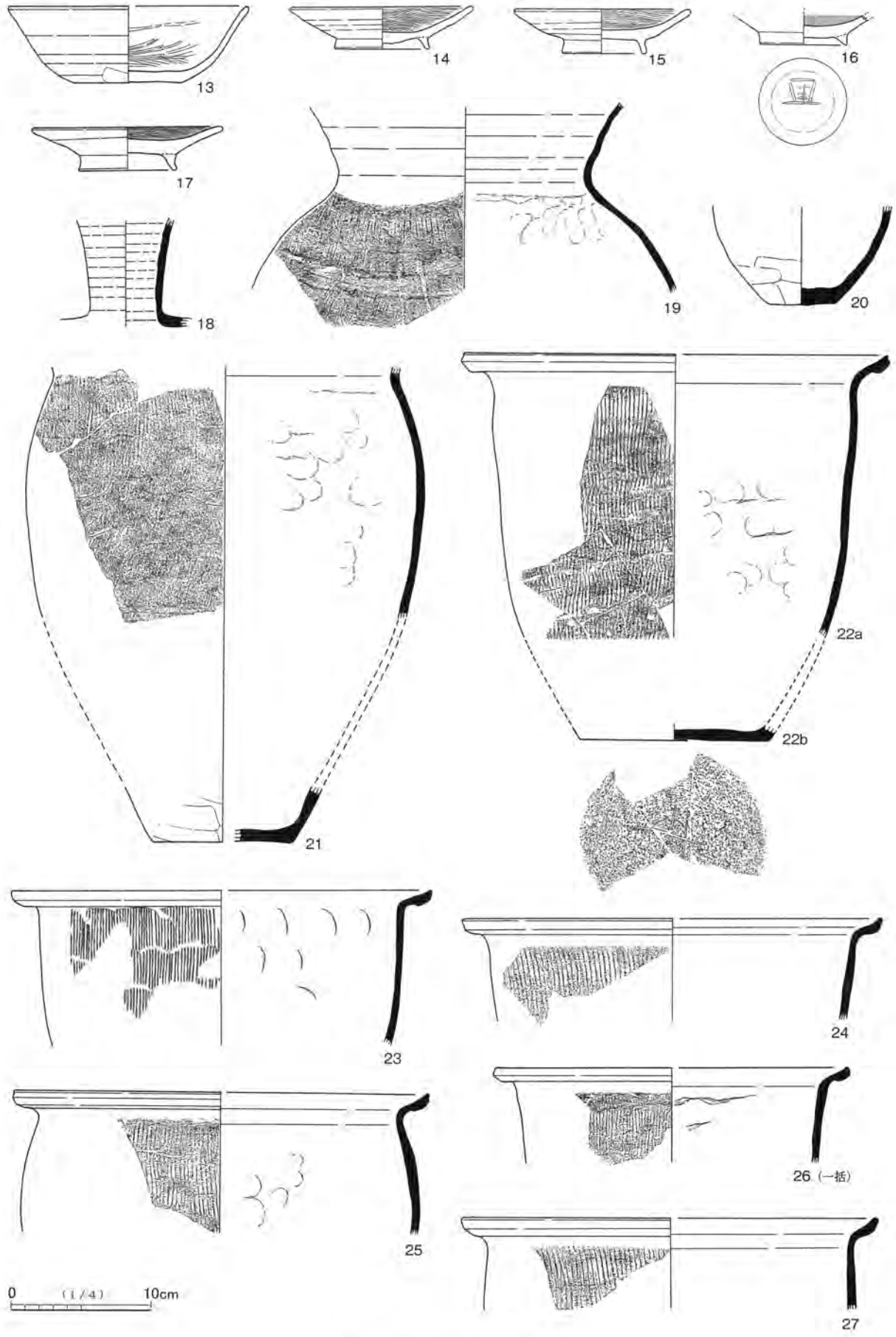
その他，床面上ではピットが２箇所検出された。南東隅のものの径は40cm×34cm，深さは16cm，中央やや南西寄りのものは二つのピットが連接した形態である。規模は双方合わせた長径が71cm，幅が前側が50cm，奥側が32cm，深さは前側が20cm，奥側が13cmである。平面位置からは，双方とも主柱穴と考えにくい。

**壁溝**　全周する

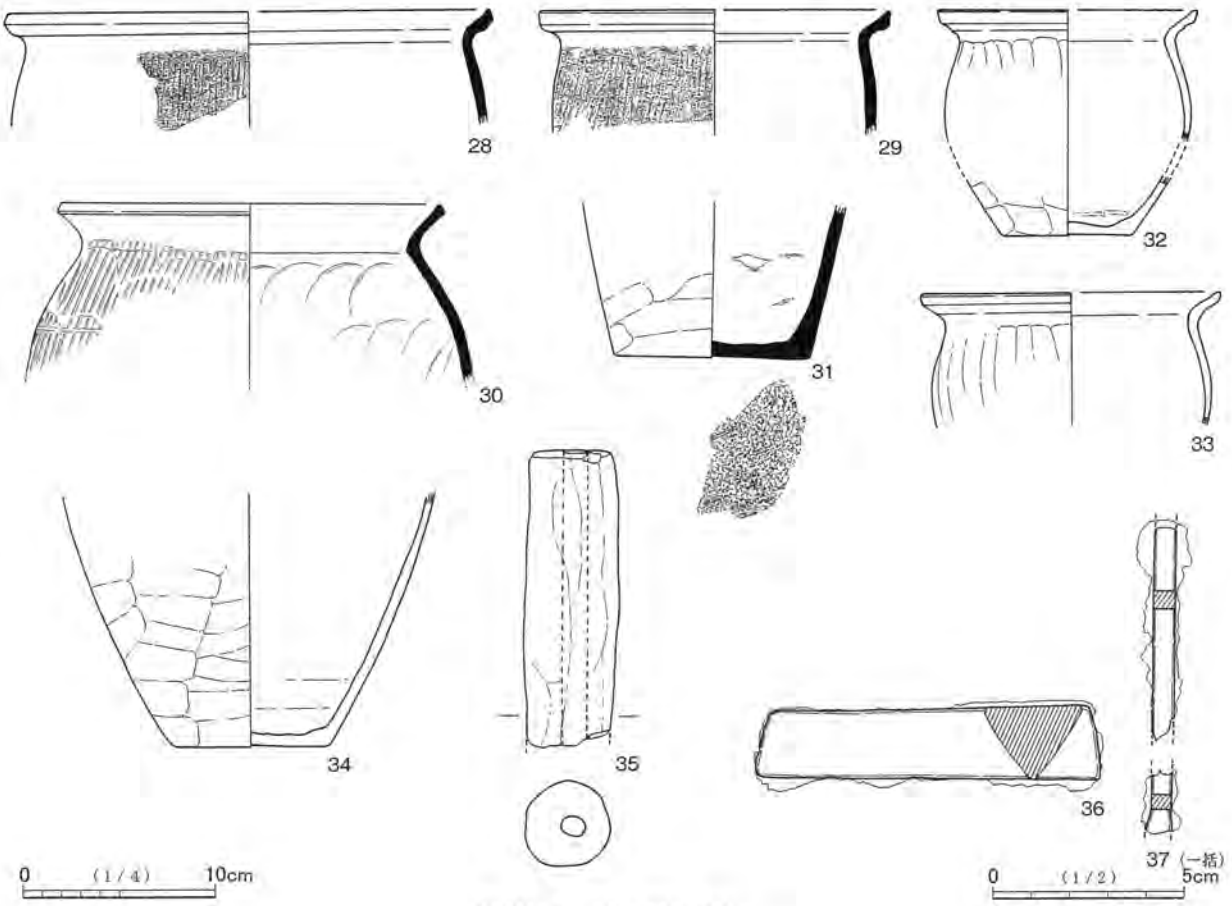
**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランから若干突出するが，両袖の多くはプラン内に位置する。前側が遺存しないが，両袖の遺存は比較的よい。構築材は山砂を主体とするが，下部は暗褐色土・ローム粒を多く含む。両袖内側はかなり内部まで赤色化している。火床部底面は顕著に赤色化した面がみられない。焼土の含有は堆積土最下層（４層）に少なく，その上層（３層）にやや多い。底面は床面よりも窪んでいるが，あまり深くはなく，使用による程度のものと思われる。




第239図　SI－211（1）




第240図　SI－211（2）




第241図　SI－211（3）

**堆積土**　暗褐色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　多量の遺物が竪穴全体から出土した。図示できた遺物は37点である。１～３は千葉産の須恵器杯である。４～17はロクロ土師器で，４～13は杯，14・15・17は高台付皿である。16は高台付きのロクロ土師器で，杯と思われるが，皿の可能性もある。18は灰釉陶器と思われる長頸壺である。19～31は千葉産の須恵器甕である。32～34は在地の土師器甕で，32・33は小型の甕である。35は鞴羽口である。36・37は性格不明の鉄製品である。

杯皿類は遺存のよいものがかなりある。およそ3/4以上遺存するものをあげると，６～８・10・11・14・15・17である。このうち７は接合して完形の土器である。口縁・体部の一部を小さく逆三角形状に破損している。大きく遺存する部分は破損部の下頂点から中心を通って割れ，ほぼ二等分されている。口縁部内外面に油煙が付着し，特に内面に著しい。灯明具として使用された土器である。破損は打ち割りされたものと思われる。６・11は口縁・体部の一部が弧状に欠損するが，他は割れずに遺存する。欠損部は打ち欠きされたものと考える。

６は底部外面に記号と思われる不整なヘラ書きがある。五芒星を意図したものであろう。文字・記号資料としては，６の他に２・16がある。16は底部外面に「里」のヘラ書きがある。２は底部内面に記号と思われるヘラ書きがある。不整な形態で，ヘラミガキに似た線で書かれているため，調整痕とも思われる。しかしあまりみられないものであり，ヘラ書きとしておきたい。

８・10も６・11と似た遺存状態であるが，欠損部に続いて破損部がある。双方合わせた形態は，８が不整な「W」字状，10が逆台形状であり，これらも打ち欠き・打ち割りされたものと思われる。また14・15

の皿部も，口縁・体部の一部が破損・欠損するが，多くが割れずに遺存している。これらの破損等も意図的な可能性がある。15は高台部も多く欠損する。

杯皿類は器面の劣化や赤み・黒み等の変色があるものが目立ち，二次的に火を受けたものが多いとみられる。2・4・12の被熱痕跡が不明瞭であるが，それらも可能性を否定しがたい。灯明具の8の他，遺存のよい上記の土器群は，いずれも顕著な被熱痕跡をもつ。

甕類に遺存のよいものはない。19は長い口頸部をもち，胴部が膨らむタイプの器形である。21も胴部に若干の膨らみをもつ。20は小型の甕である。22は底部外面に「キ」状のヘラ書きがある。「キ」とみた場合，横線が先，縦線が後である。31も底部外面にヘラ書きがある。「＋（×）」または「キ」状と思われるが，遺存が少なく，不明瞭である。22～29はバケツ形的な器形である。23～29のなかには，甑が存在する可能性がある。30は土師器甕的な器形であるが，外面のタタキ，内面の当て具痕とも明瞭である。31の胴部はやや小さい底部から，急角度で立ち上がる。胴部下位はかなり細身である。34も胴部がやや細身である。

35はやや細長い筒状の形態である。片側を欠損する。被熱による灰黒色に変色した部分やガラス状に溶着した部分がみられないため，欠損部に羽口先端が存在したと思われる。表面の一部にやや褐色化した箇所がみられる。また焼土化した山砂が若干付着している。比較的硬質であり，もろくなっていない。36は三角柱状の鉄製品で，鋳造品である。断面が三角形で，長側面3面をもつ。そのうちの1面は他よりも幅が広い。2面の小口面は長側面3面に対して，垂直的であるが，わずかに斜めになる。重量感があり，新しい時期の混入品と思われる。37は棒状の鉄製品である。錆による劣化が著しく，形態が不明瞭である。図上下の欠損部は錆に覆われており，古い欠損である。あるいは双方ともこれ以上続かないのかもしれないが，判然としない。

遺存のよい遺物の出土状況をみると，まず15が右袖前のカマド底面から正位で出土した。6はカマド内で，左袖脇から傾いた正位で出土した。出土層位が確認面に近いが，上方から転落したことも考えられる。カマド内では35が中央やや奥側の下層から出土した。やや傾いているが立った状態での出土である。鞴羽口が支脚に転用されたのであろう。また16が右袖寄りの下層から出土したが，正位・倒位等の状況は不明である。5・8・10はカマド右袖外脇の下層からいずれも正位で出土した。出土位置は，8が壁際，5が8の手前，10は5から右袖寄りの斜め前方である。11はカマド左袖前の床面から正位で出土した。

17は北西隅から正位で出土したが，出土層位は上層である。14はカマド前方下層と竪穴中央右寄りの中層から出土した。7は右前側の下層から出土した。7・14は正位・倒位等の状況が不明である。

カマド廃棄の祭祀に関わる可能性があるものとして，5・6・8・10・11・15・16・35をあげることができる。6は上層出土であり，5・8・10も床面からわずかに高い点が難点であるが，5・8・10はその可能性が高いと思われる。6も上部から滑落したとみれば，十分に可能性がある。その他では7が竪穴住居の廃棄に関わるものかもしれないが，床面から若干高い点が難点であり，断定しがたい。

その他の遺物にも祭祀的な出土状況をもつものがあるかもしれないが，断定することは難しい。平面位置が広く散っているものが多いことから，単に廃棄されたか，流入したものが多いとみておきたい。ただし出土層位をみると，床面から下層のものが多いため，壁際が若干埋まっていたとしても，竪穴廃棄の時期からそれほど離れないものが多いと思われる。

SI－212（第242・243図，図版78）

位置　調査区南西部23M－43グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.0m，幅が3.2mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

**床面**　平坦で，壁際を除いて広く硬化している。硬化は南壁側やカマド前が他よりも顕著である。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際やや右寄りに位置する。径は52cm，床面からの深さは18cmである。左（西）側が撹乱を受けており，遺存が悪い。右（東）側は遺存しており，本来は縦長の形態と思われる。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央わずかに右に寄って位置する。方形プランからの突出は大きい。構築体はまったく遺存せず，意図的に破壊・除去されたものと思われる。土製支脚（15）が火床部の奥側から立った状態で出土した。最終使用時の位置を留める可能性があるが，カマドが破壊されたことや周囲の出土遺物の様相を考慮すると，納め直されたことも考えられる。支脚の基底面は堆積土最下層（５層）上部に位置する。使用時の位置とすれば，最終の火床面は底面よりも高かったことになる。しかし堆積土はかなり上部まで埋め戻された可能性があり，断定しがたい。また最終の火床面が５層上面で，カマド廃棄後，その上部が埋め戻されたことも考えられる。カマド底面は被熱によりぼろぼろの状態である。底面は床面よりも10数cm窪むが，使用による程度の窪みと思われる。カマドの堆積土をみると，焼土ブロックは下層にも含まれるが，中層の方が多い。上層には崩壊した山砂主体の土層も堆積している。

**堆積土**　暗褐色土主体である。カマド部分を除いて自然堆積と思われる。

**出土遺物**　中程度の量であるが，竪穴の規模や遺存のわりにはやや多い。図示できた遺物は20点である。図示できない土器片量がやや少量であるのに対し、比較的多い。１～12はロクロ土師器杯である。13は東海産と思われる須恵器甕である。14は小型の土師器甕で，在地の土器である。15は土製支脚である。16～19は金属製品で，16～18は鉄製品，19は銅製品である。16・17は鎌である。18・19は用途不明である。20は軽石である。

９は底部内面に「万」の墨書がある。墨痕は薄い。また１・12は体部外面に墨書があり，11は底部内面に文字と思われるヘラ書きがあるが，それらは判読できない。11・12は小片であり，ともに墨書やヘラ書きが欠損部にかかっており，遺存が不十分である。９の墨書はすぐ近くが欠損している。墨書は底部内面の周縁に位置するが，字体が小さいので，欠損部にも文字が存在したかもしれない。

１は接合して完形の土器である。また２・３・５・７も比較的遺存がよい。１は灯明具で，油煙が内面を主体として顕著に付着している。口縁から体部中位までのほぼ1/2が破損している。破損は油煙が付着していない側を主体とするが，墨書にはかかっている。破損部は比較的整った形態である。破損は打ち割りされたとみられ，墨書や油煙との関係も意図されたものと思われる。

２～８・10・11も二次的に火を受けているとみられる。２・４・５・７・10は器面の荒れ・剥離や赤色化等の変色が目立ち，もろくなっている。なかでも２は最も顕著である。２・５はカマド内から出土しており，支脚転用の可能性が考えられる。なお12も火を受けた可能性があるが，小片のため判然としない。

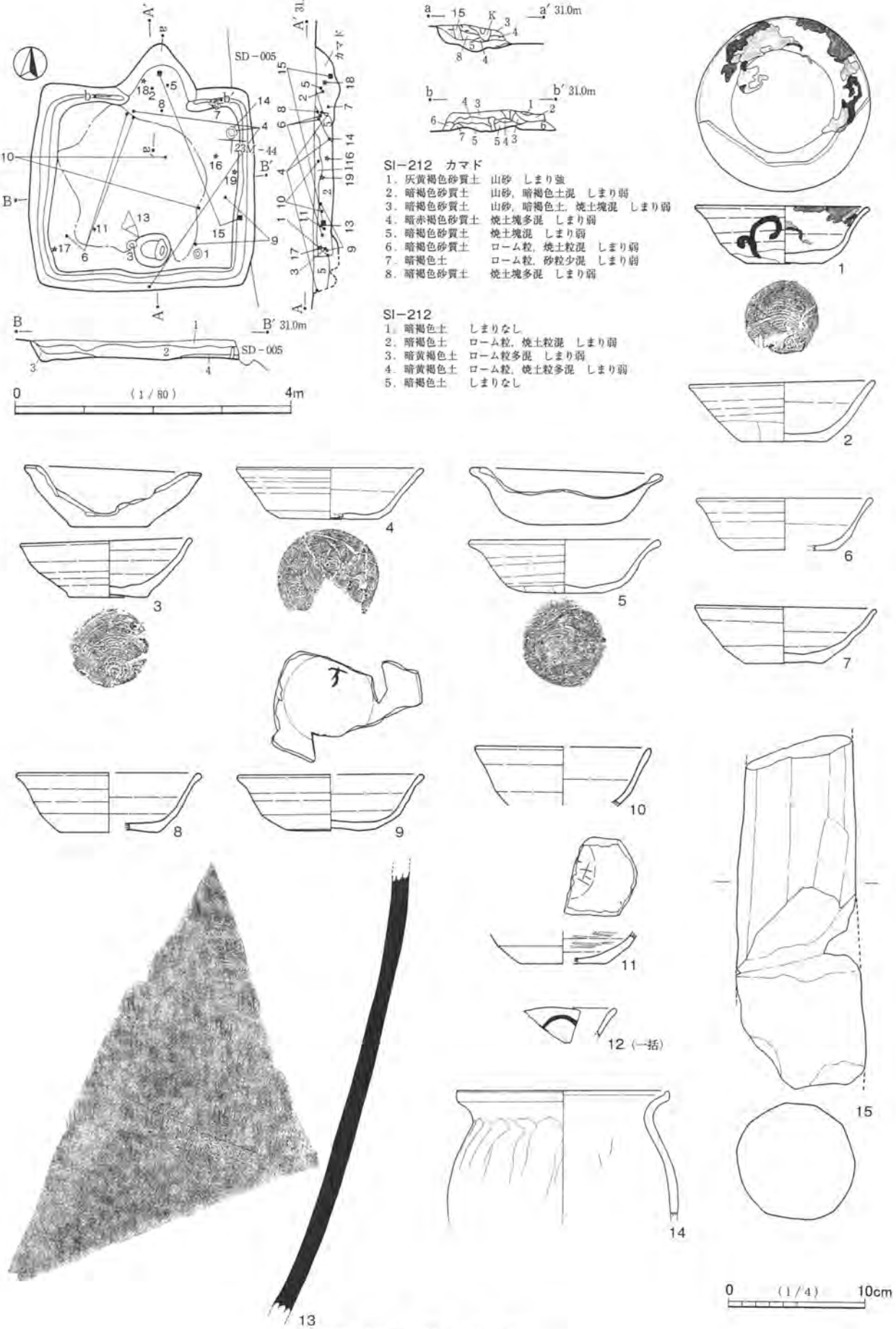
５は口縁･体部上位のほぼ1/2が欠損する。欠損部の形態は逆台形状で，打ち欠きされたものと思われる。遺存する口縁・体部は割れているが，出土時点では離れていない。もろくなっているため，後で割れたことも考えられる。２は全体的に破損している。口縁・体部の一部に欠損があり，打ち欠きされたものとも思われるが，非常にもろいため断定しがたい。３も口縁・体部の一部が欠損する他はひびが入る程度で割れていない土器である。口縁部周の欠損は1/3弱である。破断面は一部不整であるが，全体的には比較的整っており，打ち欠きされたものと思われる。底部は回転糸切り後無調整で，高台風に突出している。４は遺

SI－212　カマド

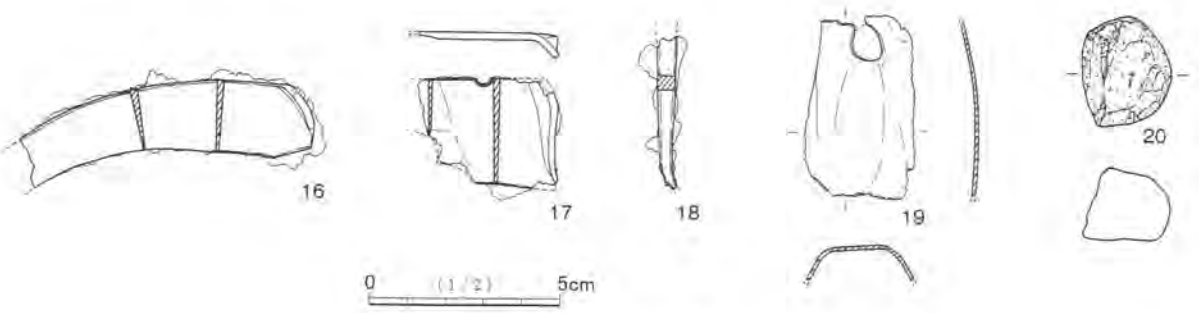
1．灰黄褐色砂質土　山砂　しまり強
2．暗褐色砂質土　山砂，暗褐色土混　しまり弱
3．暗褐色砂質土　山砂，暗褐色土，焼土塊混　しまり弱
4．暗赤褐色砂質土　焼土塊多混　しまり弱
5．暗褐色砂質土　焼土塊混　しまり弱
6．暗褐色砂質土　ローム粒，焼土粒混　しまり弱
7．暗褐色土　ローム粒，砂粒少混　しまり弱
8．暗褐色砂質土　焼土塊多混　しまり弱

SI－212

1．暗褐色土　しまりなし
2．暗褐色土　ローム粒，焼土粒混　しまり弱
3．暗黄褐色土　ローム粒多混　しまり弱
4．暗黄褐色土　ローム粒，焼土粒多混　しまり弱
5．暗褐色土　しまりなし




第242図　SI－212（1）




第243図　SI－212（2）

存が1/2程度である。７はやや遺存がよい。破損しているが，土器の状態だけで意図的な様相をうかがうことは難しい。８～10の遺存は少ない。

13は大甕の胴部片である。内面に同心円文の当て具痕が痕跡的にみられる。外面は一部に横方向の平行タタキと思われる部分があるが，ヘラケズリとも思われ，やや不明瞭である。胎土は小石を若干含むが，比較的緻密である。焼成良好で，堅緻である。14は口縁部から胴部上位にかけてはほぼ遺存する。若干もろい土器であるが，被熱によるためだけでなく，焼成がややあまいと思われる。

15は非常に長い支脚である。下部側の遺存が多いが，上部を欠損する。ただし上部が確認面に達しているため，本来は遺存していたと思われる。16は小型の鎌である。中央付近から基部まで遺存するが，切先側を欠損する。折返しの上部が高く，やや長く立ち上がる。刃側の刃部と基部の境は，右側断面の左方である。小型のためやや不明瞭であるが，屈曲点をもつと思われる。17はやや大型の鎌で，基部側の破片である。18は棒状の鉄製品である。細身で断面は方形である。釘，鉄鏃の茎，紡錘車の紡軸等が考えられるが，特定しがたい。19は銅製品の破片である。薄い銅板の左右側を図示した側からみて山折りに折返し，中央は比較的平坦な面をもつ。中央の上部にやや大きめの孔をもつ。表面は縦方向の擦痕をもつ。用途が不明瞭である。

２・５はカマド内上層で，支脚の前方からほぼ並んだ正位の状態で出土した。２は左側，５が右側で，２が若干前に出ている。また８・18がカマド内上層から出土した。なお15の一部が東壁際南寄りから出土した。７は北壁際右寄り，カマド右外脇の下層から，つぶれた倒位の状態で出土した。１は南壁際右寄りの下層から正位で出土した。３は南壁側中央で出入口ピット左脇の下層から正位で出土した。13は３よりもやや中央寄りの位置で，下層から出土した。14は右壁際北東隅寄りの下層から倒位で出土した。遺存部分が確認面に達していないため，胴部中位以下は意図的に除去されたものと思われる。４・６は広く散っており，一部は上層からの出土である。９・10もやや散って出土した。９・10・11・16・17・19の出土層位は中・上層である。

以上の遺物のうち，２・５・15はカマド廃棄の祭祀に関わる土器と思われる。15が最終の位置を留めるものであっても，構築材が除去されたことを考えると，祭祀に関わるとみてよいと思われる。また１・３・７・14もカマド・竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性が考えられる。これらの出土層位が床面に接していないことがやや難点であるが，祭祀を行う時点で，若干の土砂が堆積していたこともあり得ると思われる。竪穴住居廃棄と土器等の廃棄に大きな時間差を考えなくてもよいのではないだろうか。13は大形の破片であり，同様の可能性があるかもしれないが，断定しがたい。広く散っている４・６や鉄製品については，祭祀的様相がうかがえない。出土遺物は一部を除いて，単に廃棄されたか流入したものと思われる。

**重複遺構**　東側でSD－005と重複し，本住居が切られている。

SI－213（第244図，図版78）

**位置**　調査区南西部の23M－54グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.9m，幅が3.8mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。右前（北東）隅側が張り出している。重複するSD－005に切られて右奥（北西）隅側の形態が不明であるが，やや台形的な形態と思われる。

**床面**　SD－005によって西側の多くを欠損する。遺存する部分は平坦で，左右の壁側を除いてやや広く硬化している。

**柱穴**　出入口ピットが東壁際中央やや右寄りに位置する。径は54cm，床面からの深さは28cmである。

**壁溝**　遺存する左右（南北）壁下及び前（東）壁下は巡っている。カマドのある西壁が不明瞭であるが，本来全周する可能性が考えられる。

**カマド**　西壁中央わずかに左寄りに位置する。方形プランからの突出はやや小さい。両袖は前側を除いて，遺存が良好である。構築材は山砂主体であり，混じりけが少なく，堅くしまっている。両袖内側は焼けた範囲が広く，またかなり内部まで赤色化している。火床部底面も地山のローム層が焼けてぼろぼろになっている。堆積土最下層はやや薄い暗褐色土（７層）で，その上部に灰白色の灰を多く含む土層が厚く堆積している。焼土もやや多く含まれるが，灰がかなり目立つ。最終の火床面は７層よりも上部にあったものと思われる。底面は床面よりも17cm窪んでいる。かなり深さがあり，使用によるだけでなく，当初または作り替え時の掘りかたであることも考えられる。

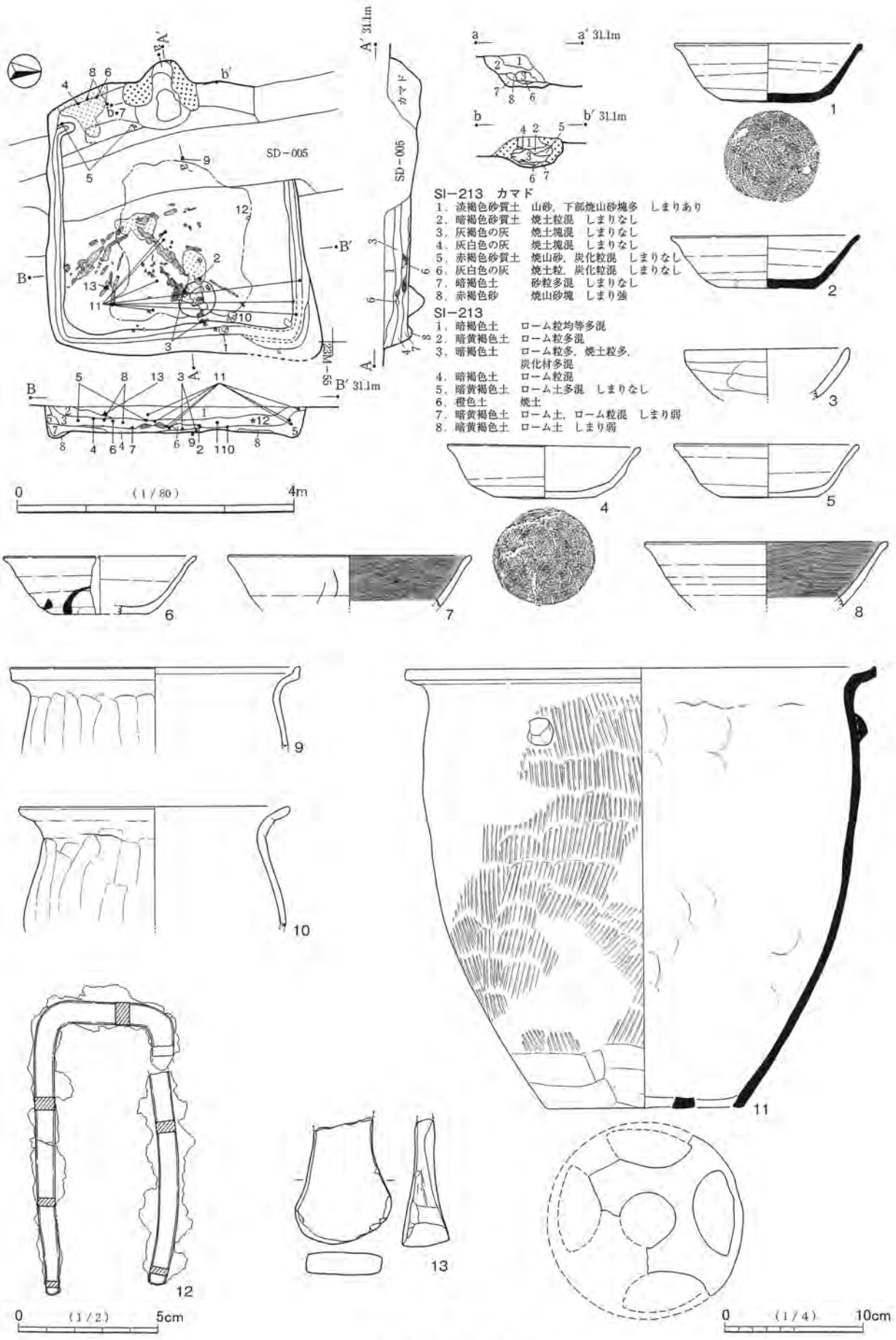
**堆積土**　多量の炭化材が床面上及び下層中から出土し，焼土の集中範囲も所々にみられる。出土遺物に遺存の良好なものが少ない。本住居の上屋が片付けられ，焼却されたものであろう。炭化材等の上部は暗褐色土主体である。ロームの包含がやや多いが，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　やや多量の遺物が出土した。遺存する部分は全体的に分布する。重複部分はカマド前方周辺であり，より密な分布であった可能性がある。図示できた遺物は13点である。１・２は千葉産の須恵器杯である。３は非ロクロと思われる土師器杯である。４～８はロクロ土師器杯としたが，このうち６は千葉産須恵器の可能性もある。９・10は在地の土師器甕，11は千葉産の須恵器甑である。12は鉄製品で，閂受け金具である。13は砥石である。

１はほぼ完形，２は完形である。１・２とも数片に割れている。２の破損は口縁・体部が弧状・逆三角形状に破損している。前者が大きく，口縁部周で１／２弱，後者は小さく，一部である。両者は対向する位置にある。他の遺存部分は両者の下頂部間を境に２片に割れている。破損状態が意図的なものか不明瞭である。その他の杯は，４が1/2強の遺存であるが，４以外は遺存が少ない。６は体部外面下位に黒色の付着物がある。墨痕の可能性があるが，煤かもしれない。７・８は大型の杯で，内面に黒色処理・ヘラミガキが施されている。

９・10も遺存が少ない。10は器面の荒れが著しい。11の遺存はそれほど多くないが，口縁部から底部まで遺存する。把手は１箇所遺存する。ボタン形で，接着部の形態は円形である。５孔式の甑で，中心孔はやや歪んでいる。胴部内面はナデ・ヘラナデによって，当て具痕がかなり消されている。

12は折れて接合しない部分があるが，ほぼ完形の閂受け金具である。横からみると「コ」の字形の形態で，両脚部が長い。閂の受け幅は3.5cmである。断面形は長方形で，全体にやや厚みがないが，端部側に向かっ


SD－005
カマド
B′ 31.1m
SI－213　カマド
1．淡褐色砂質土　山砂，下部焼山砂塊多　しまりあり
2．暗褐色砂質土　焼土粒混　しまりなし
3．灰褐色の灰　焼土塊混　しまりなし
4．灰白色の灰　焼土塊混　しまりなし
5．赤褐色砂質土　焼山砂，炭化粒混　しまりなし
6．灰白色の灰　焼土粒，炭化粒混　しまりなし
7．暗褐色土　砂粒多混　しまりなし
8．赤褐色砂　焼山砂塊　しまり強
SI－213
1．暗褐色土　ローム粒均等多混
2．暗黄褐色土　ローム粒多混
3．暗褐色土　ローム粒多，焼土粒多，炭化材多混
4．暗褐色土　ローム粒混
5．暗黄褐色土　ローム土多混　しまりなし
6．橙色土　焼土
7．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒混　しまり弱
8．暗黄褐色土　ローム土　しまり弱
0　(1/80)　4m
0　(1/2)　5cm
0　(1/4)　10cm

第244図　SI－213

てより薄くなる。脚端部はあまり尖らずに丸みをもつが，欠損していない。脚部先端には曲がりがなく，扉の外側に突き出ていない可能性がある。13の石材は流紋岩である。研ぎ減りして薄くなった部分で折れたか割られたもので，片方の小口側が遺存する。図の上下面及び左右の両側面は非常に滑らかである。小口面及び折損面は面の長軸方向に擦痕がみられ，若干使用されているが，平坦な面はなく，ざらつきもあるので使用頻度は低い。小口面は丸みをもつが，当初の石材の状態を留めていると思われる。

1は前（東）壁際右寄りの下層から倒位で出土した。2は前壁側中央で出入口ピット奥の下層から，傾いた倒位で出土した。4の主要部分はカマド左袖外脇の中層から正位で出土した。11は中央から前壁側の下層から上層まで広く散って出土した。図示した遺物の出土層位は床面から上層にわたるが，中層が多い。1・2の出土層位もやや高く，祭祀的な様相をみることは難しい。出土遺物の多くは，単に廃棄されたか，流入したものと思われる。廃材とともに廃棄されたものも多かったと思われる。

**重複遺構**　SD－005が中央やや奥側で南北に横断し，本住居を切っている。

SI－214（第245図，図版79）

**位置**　調査区南西部南寄りの23M－75グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.5m，幅が3.6mの方形をなす。確認面からの深さは60cmである。

**床面**　北側がやや低く。南側がやや高い。隅部付近を除いて広く硬化しているが，中央が顕著である。ただし一部に軟質の部分がある。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は25cm，床面からの深さは10cmである。床面では4箇所のピットが検出されたが，主柱穴かどうか判然としない。南側のP3・P4は主柱穴としてもよい平面位置であるが，深さが16cmと20cmであり，浅い。北西側のP1はやや中央寄りに位置するが，カマドとの位置関係からは妥当かもしれない。東壁際のP2はP3に近い位置であり，主柱穴にはなり得ない。P1・P2の深さは20cm強である。以上から，P3・P4は主柱穴の可能性があり，P1も若干の可能性がある。竪穴内の4本柱であれば北東側の主柱穴は存在したと思われるが，浅いこともあって，検出されなかったとみておきたい。

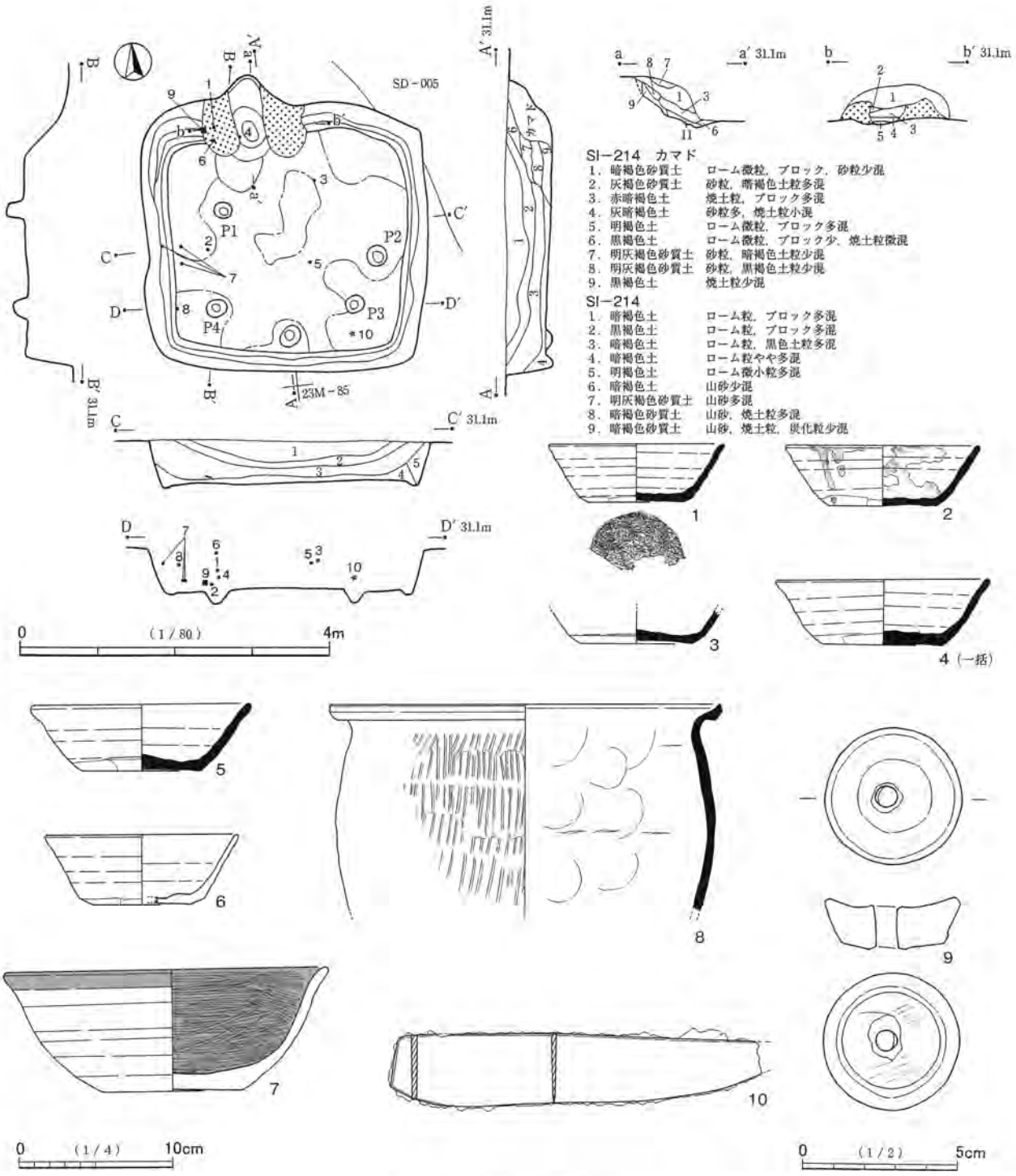
**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁左寄りに位置する。方形プランからの突出はあまり大きくない。両袖が遺存するが，上部の遺存がやや悪い。構築材は山砂主体であるが，上部や外側に暗褐色土を含み，下部にロームを含む。両袖内側は赤色化しているが，火床部底面は赤色化した面がみられない。焼土は堆積土下層にみられるが，底面からやや浮いた位置である。底面中央が床面よりも窪むが，あまり深さはなく，使用による程度の窪みと思われる。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　やや少量である。分布は東側に少なく，西側に多い。図示できた遺物は10点である。1～5は千葉産の須恵器杯である。6はロクロ土師器杯としたが，千葉産須恵器の可能性もある。7はロクロ土師器杯，8は千葉産の須恵器甕または甑である。9は土製の紡錘車である。10は鉄製品である。名称が判然としないが，穂摘具と似た製品と思われる。

2は内面に漆が付着している。漆の容器かパレットとして使われたものである。4は比較的遺存がよいが，やや細かく割れている。5も60％程度の遺存で，やや遺存がよい。底部の欠損がないが，口縁・体部は1/2以上を欠損する。4・5の欠損・破損に意図的な様相はうかがえない。他の杯の遺存は少ない。7




第245図　SI－214

は大型の土器で，鉢的な大きさである。体部はやや丸みをもつ。底部の遺存がよいが，口縁・体部を3/4以上欠損するため，全体からみた遺存割合は低い。内面に黒色処理・ヘラミガキが施されている。8は一部の遺存である。内面に接合痕がみられる。

9はほぼ完形である。表面の色調が黒色を呈する。千葉産の須恵器と同様の色調であり，須恵器窯で焼成されたものと思われる。上面は周縁が高く，孔周囲が低く窪んでいる。下面は孔周囲がやや高まっている。孔の中心は上下面の中心からややずれている。10は薄い作りである。遺存がよい製品で，図示した右端が欠損していると思われるが，欠損していない可能性も若干考えられる。目釘孔はみられない。X線写

真でも不明瞭であり，存在しないと思われる。また木質の付着もみられない。幅の広い図左端に柄が付くとすれば，鎌的である。しかし，小型の鎌が存在するものの，形態は穂摘具により似ているといえよう。

図示した出土遺物はすべてが床面から浮いている。そのなかでも２・９は下層から出土した。２の平面位置は西側中央，９はカマド左袖外脇である。他の遺物は中・上層を主体とした出土である。９は紡錘車で，カマド近くからの出土である。また４の破片１点がカマド内中層から出土した。ともに祭祀的な出土状況とみるのは難しい。漆付着の２や比較的遺存のよい５も同様である。出土遺物のほとんどが単に廃棄されたか，流入したものと思われる。

**重複遺構**　北東隅でSD－005と重複し，本住居が切られている。しかし重複はわずかであり，本住居の欠損はごく少ない。

### SI－215（第246図，図版79）

**位置**　調査区南西部の23M－85グリッドを中心に位置する。

**重複遺構その他**　SD－005・SK－270と大きく重複し，それらに切られている。遺存が少なく，様相が不明瞭である。本遺構の時期・性格も判然とせず，SK－270同様，中・近世以降の土坑の可能性がある。またSD－005内から縄文土器がまとまって出土しており，縄文遺構の可能性も考えられる。しかし出土遺物は奈良・平安時代のものが最も多い。不明瞭であるが，一応奈良・平安時代の竪穴建物とみておく。

**形状・規模**　形態は不整な方形で，やや丸みがある。遺存が少ないが，南北方向の長さが3.55m，東西方向の長さが3.0m，確認面からの深さは40cmである。主軸方向は不明である。

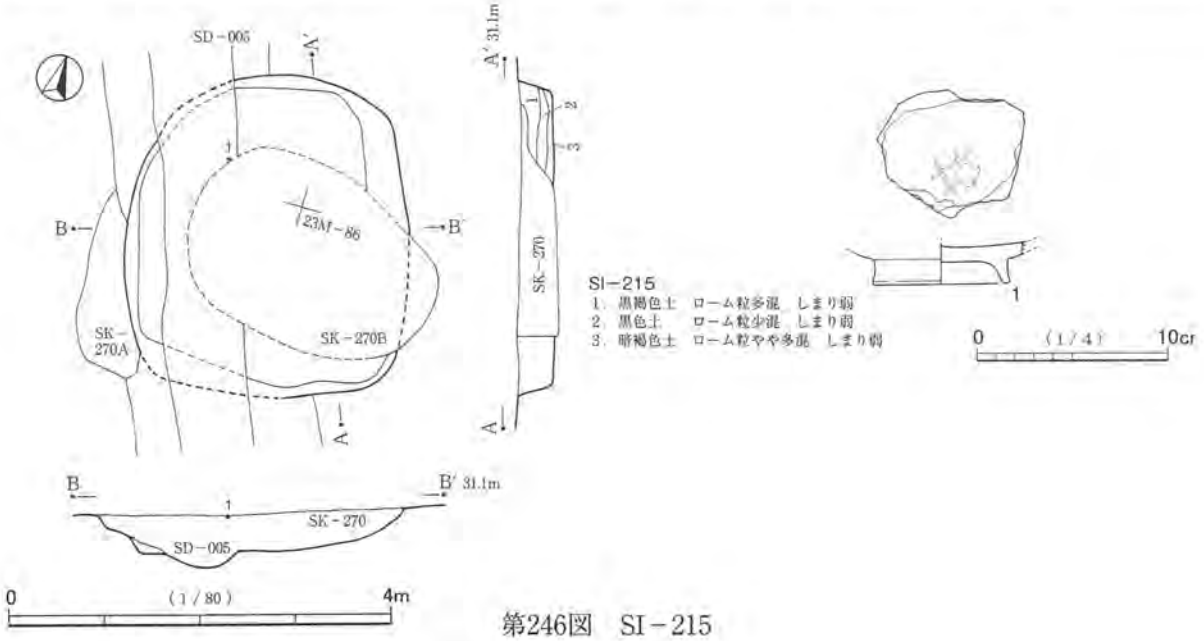
**床面**　不明瞭である。SK－270に伴うと思われる硬化面を検出したが，本遺構に伴うものかもしれない。SK－270も合わせた底面（床面）は比較的平坦であるが，一部の壁側がやや高い。なおSD－005の底面（床面）は本遺構及びSK－270の底面よりも深い。

**柱穴**　出入口ピット・主柱穴ともに検出されなかった。主柱穴は存在しない可能性がある。

**壁溝**　検出されなかった。

**カマド**　検出されなかった。堆積土の様相からも，設置壁の場所をうかがい知ることができない。

**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体である。一部の遺存であり，不明瞭であるが，自然堆積と思われる。




第246図　SI－215

出土遺物　少量の遺物が散在的に出土した。遺物量は本来少ないか不明である。図示できた遺物はロクロ土師器高台付杯または皿１点である（１）。底部内面に「#」の線刻がある。底部周辺の破片である。重複遺構内で確認面から出土した。

SI－216（第247図，図版79）

位置　調査区南西部の23M－14グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが4.8m，幅が4.4mで，やや縦長の方形をなす。確認面からの深さは50cmである。耕作機械による帯状の撹乱を多く受けている部分がある。

床面　ローム粒・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土で，全体的に貼床が施されている。床面は平坦で，中央が硬化している。

柱穴　主柱穴が４箇所検出された。規模が大きく，右前（北東）側のP3を除いて，二段に掘り込まれているため，柱は抜き取りされたと思われる。出入口ピットが東壁際中央で検出された。径は47cm×44cm，床面からの深さは20cmである。

壁溝　全周する。

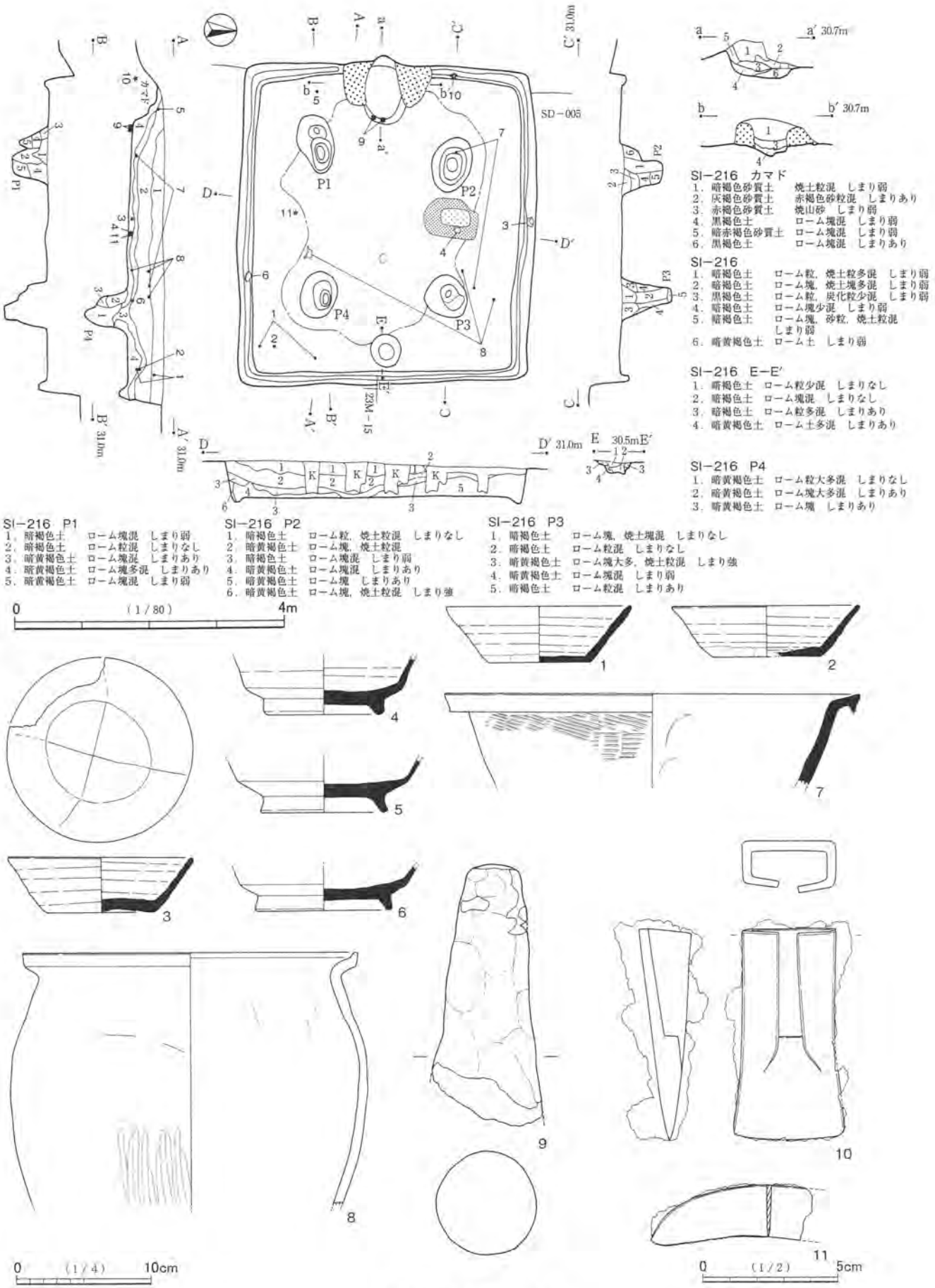
カマド等　西壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。SD－005に切られ，上部をわずかに欠損するが，両袖の遺存はかなりよい。構築材は山砂を主体とし，しまっている。ただし両袖基底部はロームブロックを含む黒褐色土（６層）である。両袖内側は広く，内部まで深く赤色化している。６層は当初または作り替え時の掘りかた底面を埋め戻したものであり，前側は床面に近い高さである。火床部には赤色化した面がみられない。堆積土最下層（４層）は焼けたロームブロックを含む黒褐色土で，その上部に焼けた山砂が多く堆積する（３層）。火床ではなく，構築材の崩落土と思われる。

北壁側の床面において，山砂で囲まれた施設が検出された。主柱穴P2・P3間でP2寄りに位置する。山砂内側の底面は被熱によりやや硬化している。堆積土はロームブロック・焼土粒を含む暗黄褐色土である。焼土の含有はあまり多くないが，床面上で検出されたことから，炉の一種といえるものであろう。

堆積土　暗褐色土・黒褐色土主体である。ローム粒をやや多く含むが，自然堆積と思われる。

出土遺物　全体的に出土したが，やや少量である。図示できた遺物は11点である。須恵器はすべて新治窯産である。１～３は須恵器杯，４～６は須恵器高台付杯，７は須恵器甕，８は常総型の土師器甕，９は土製支脚である。10・11は鉄製品で，10は袋状鉄斧，11は鎌である。

３は遺存がよく，欠損部はほぼ口縁・体部の１箇所である。欠損部の形態は逆台形である。欠損部に続く一部が小さく弧状に割れて接合する。その他はほぼ割れずに遺存する。内面に「＋（×）」の線刻がある。交点が底部内面の中心近くを通り，先端が口縁端部まで達するもので，内面いっぱいを使っている。欠損部は線刻で区画された1/4近くを占めており，打ち欠きとみられる。また欠損部に続く破損部は打ち割りされた可能性がある。線刻は破損部にかかって施されている。欠損部に近い口縁・体部の線刻は，ロクロ目による凹面には施されず，途切れ途切れである。一方，欠損部から遠い線刻はロクロ目の凹面まで施されており，途切れていない。両者のあり方は対照的であり，不連続であるのも意図されたものと思われる。線刻は破損部にかかっていることから，順序は線刻が先，打ち欠き・打ち割りが後と思われる。線刻の不連続側は打ち欠きの目印または，打ち欠き予定のため雑になったことが考えられる。なお打ち欠き→線刻→打ち割りという順序も考えられるが，可能性が低いと思われる。３の底部外面の調整は回転ヘラ切り後，弱いナデが施された程度である。また体部外面下位にはヘラケズリが施されていない。体部調整の省略は


SD－005
P1
P2
P3
P4
カマド
SI－216 カマド
1．暗褐色砂質土　焼土粒混　しまり弱
2．灰褐色砂質土　赤褐色砂粒混　しまりあり
3．赤褐色砂質土　焼山砂　しまり弱
4．黒褐色土　ローム塊混　しまり弱
5．暗赤褐色砂質土　ローム塊混　しまり弱
6．黒褐色土　ローム塊混　しまりあり
SI－216
1．暗褐色土　ローム粒，焼土粒多混　しまり弱
2．暗褐色土　ローム塊，焼土塊多混　しまり弱
3．黒褐色土　ローム粒，炭化粒少混　しまり弱
4．暗褐色土　ローム塊少混　しまり弱
5．暗褐色土　ローム塊，砂粒，焼土粒混　しまり弱
6．暗黄褐色土　ローム土　しまり弱
SI－216 E－E′
1．暗褐色土　ローム粒少混　しまりなし
2．暗褐色土　ローム塊混　しまりなし
3．暗褐色土　ローム粒多混　しまりあり
4．暗黄褐色土　ローム土多混　しまりあり
SI－216 P4
1．暗黄褐色土　ローム粒大多混　しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム塊大多混　しまりあり
3．暗黄褐色土　ローム塊　しまりあり
SI－216 P1
1．暗褐色土　ローム塊混　しまり弱
2．暗褐色土　ローム粒混　しまりなし
3．暗黄褐色土　ローム塊混　しまりあり
4．暗黄褐色土　ローム塊多混　しまりあり
5．暗黄褐色土　ローム塊混　しまり弱
SI－216 P2
1．暗褐色土　ローム粒，焼土粒混　しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム塊，焼土粒混
3．暗褐色土　ローム塊混　しまり弱
4．暗黄褐色土　ローム塊混　しまりあり
5．暗黄褐色土　ローム塊　しまりあり
6．暗黄褐色土　ローム塊，焼土粒混　しまり強
SI－216 P3
1．暗褐色土　ローム塊，焼土塊混　しまりなし
2．暗褐色土　ローム粒混　しまりなし
3．暗黄褐色土　ローム塊大多，焼土粒混　しまり強
4．暗黄褐色土　ローム塊混　しまり弱
5．暗褐色土　ローム粒混　しまりあり
0　(1/80)　4m
0　(1/4)　10cm
0　(1/2)　5cm

第247図　SI－216

器壁がやや薄くなったためとも思われる。しかし製作当初から線刻や打ち欠き等に供される予定の土器であるため，調整は全体的に省略されたのであろう。器面の質感からまったくの未使用とは断定しがたいが，他の土器と比べると磨耗は少ない。当初から，または頻繁に使用される以前に，祭祀的な土器として使用されたものと思われる。１・２の遺存は少ない。

４～６は底部の遺存がよいが，口縁・体部が全周欠損している。４は一部が平坦で，またその部分の端部が丸く磨耗しているため，破損後再使用されたものと思われる。５・６も同様の可能性があるが，やや不明瞭である。４・６の器面には赤みを帯びる部分があり，また６の底部外面は煤が付着している。４・６は二次的に火を受けたと思われる。５は被熱痕跡が判然としない。また４～６の器面はいずれも磨耗が著しい。

７はバケツ形の甕である。７・８の遺存は少ない。10は完形であるが，錆膨れが著しい。やや小振りの鉄斧である。刃部先端側は撥状に軽く開く形態である。柄の装着部は鉄板を両側から折り返して袋状に作り出している。横断面形は長方形であるが，図右側の折返しがやや上方に上がっている。袋部の長さは４cm弱で，全長の半分である。袋部内に明瞭な段差をもつ。刃先の研ぎ出し範囲は錆のため不明瞭であるが，裏面では１cm程度の幅と思われる。11はやや小型の鎌で，切先側の破片である。裏面に木質の付着が目立つ。

３は右（北）壁際中央の床面近くから出土した。上向きであるが，壁にもたれてかなり斜めになった状態で出土した。４は山砂で囲まれた部分の床面から正位で出土した。なお３・４の平面位置は副軸の中軸線上である。６は左（南）壁際前（東）寄りの床面近くから出土した。斜めの正位で，３と同様の状態である。９はカマド前側，埋め戻された掘りかた上で出土した。２片の破片が並んで出土した。左側が上部の破片で正位の状態である。右側がそれ以下の破片で，倒れた状態である。長軸がカマドの主軸方向と平行する。

３・４・６・９以外では，10・11が床面近くから出土した。10はカマド右外脇の壁際からの出土である。その他の１・２・５・７・８については，７・８の一部が下層出土であるが，概して中・上層主体である。

図示した遺物のうち，９はカマド廃棄の祭祀に関わり，３・６は竪穴住居廃棄の祭祀に関わるものと思われる。３・６については上方から落下したことも考えられるが，その場合でも祭祀的な使用を否定するものではない。４もその可能性があるが，山砂範囲からの出土であり，実用であることも若干考えられる。また10も祭祀に関わるものかもしれないが，カマド脇に日常的に保管されていた可能性も考えられ，祭祀的と断定しがたい。４体部の磨耗については，祭祀時に行った可能性と，それ以前に転用砥等の実用品として再利用された双方が考えられる。

３・４・６・９以外の遺物は，特に祭祀に使用されたものと断定しがたい。図示しない遺物とともに多くが単に廃棄されたか流入したものと思われる。

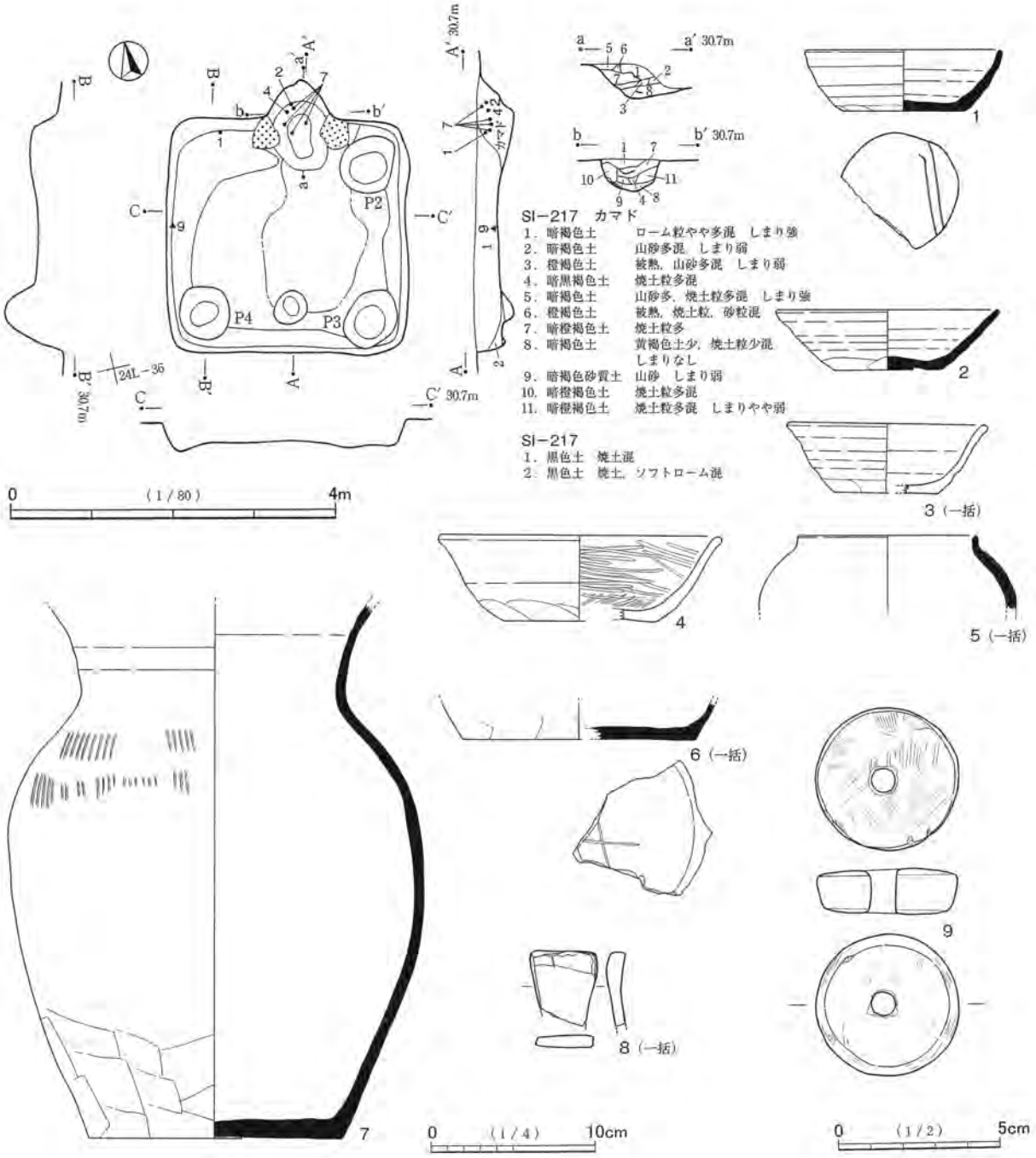
**重複遺構**　西壁際でSD－005と重複し，本住居が切られている。ただし本住居の方が深いため，欠損は上部に留まる。

**SI－217**（第248図，図版80）

**位置**　調査区中央の24L－26グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.9m，幅が3.0mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

**床面**　四隅や壁際を主体に貼床が施されている。貼床をやや掘り過ぎたため凹凸があるが，本来は平坦であろう。硬化面はカマド前から出入口ピットにかけてみられ，中央からやや右に寄っている。




第248図　SI－217

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は40cm前後，床面からの深さは17cmである。東両側と南西の３隅部で大きなピットが検出されたが，掘りかた底面を露呈したものであろう。南西側のP4がやや深いが，P2・P3は浅く，北西隅部に明瞭なピットがみられないため，主柱穴は存在しないと考える。

**壁溝**　明瞭に検出されなかったが，平面・断面の様相から巡る可能性が高い。不明瞭であるのは，壁際の床面が十分に把握できなかったことによる。

**カマド**　北壁中央わずかに右寄りに位置する。方形プランからの突出はやや大きい。両袖の遺存はあまりよくない。火床部底面に赤色化した面はみられない。底面は床面よりもやや深い。使用によることと掘りかたの双方が考えられる。焼土の包含は堆積土最下層（８層）に少なく，その上層に多い。火床面は底面よりもやや上部にあったと思われる。しかし焼土の濃密な層はみられない。灰のかき出し等の影響が考

えられる。

**堆積土**　黒色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　やや少量である。カマド内及びその周辺からの出土が多い。図示できた遺物は９点である。１・２は千葉産の須恵器杯，３・４はロクロ土師器杯，５は新治窯産の須恵器短頸壷，６・７は千葉産の須恵器甕，８は砥石，９は石製の紡錘車である。

１は底部外面にヘラ書きがある。２条の平行線であるが，ヘラケズリ痕と交差した「キ」状を意図した可能性がある。２は土師器的な質感であるが，底部外面にヘラ切り痕があると思われることから，須恵器とした。１・４は比較的遺存がよいが，２・３は1/2以下の遺存である。１・４の欠損・破損に意図的な様相はうかがえない。４は大型の杯である。二次的な被熱により，器面の荒れ・剥離及び赤色化・黒色化が著しい。

５は口縁部から胴部上位にかけての一部の破片である。６も底部の破片で，外面に「×（＋）」のヘラ書きがみられる。７は長く延びる口頸部と膨らむ胴部をもつ器形である。比較的遺存がよく，頸部から底部まで連続して接合する。被熱痕跡が明瞭であるが，特に内面の剥離が著しい。

８の石材は流紋岩である。現状では扁平な板状の砥石である。片方の小口面側が遺存する。破損面を除いてよく使用され，滑らかな質感である。一部に筋状の研ぎ痕もみられる。９の石材は一部が蛇紋岩化しているカンラン岩である。わずかに欠ける部分があるが，ほぼ完形である。やや薄いために上面と下面の径の差が少ない。上面は擦痕が多くみられる。

２・４・７はカマド内中・上層から出土した。９は左（西）壁際ほぼ中央の床面から出土した。１は北壁際で，カマド左袖と北西隅の中間の位置から出土したが，層位は上層である。９は平面位置・層位から祭祀的状況であることも考えられるが，断定はしがたく，可能性の指摘に留める。２・４・７も祭祀的な様相をみるのは難しい。出土遺物は，その大半が単に廃棄・遺棄されたか，流入したものであろう。

**SI－218**（第249図，図版80）

**位置**　調査区中央の24L－36グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.6m，幅が3.7mの方形をなす。確認面からの深さは35cmである。

**床面**　四隅を主体に貼床が施されている。床面はほぼ平坦であるが，四隅の貼床部分については，床を掘り抜いて掘りかた底面を露呈してしまった。その部分の床面も本来は比較的平坦であろう。硬化面が中央から南壁側にかけてみられる。

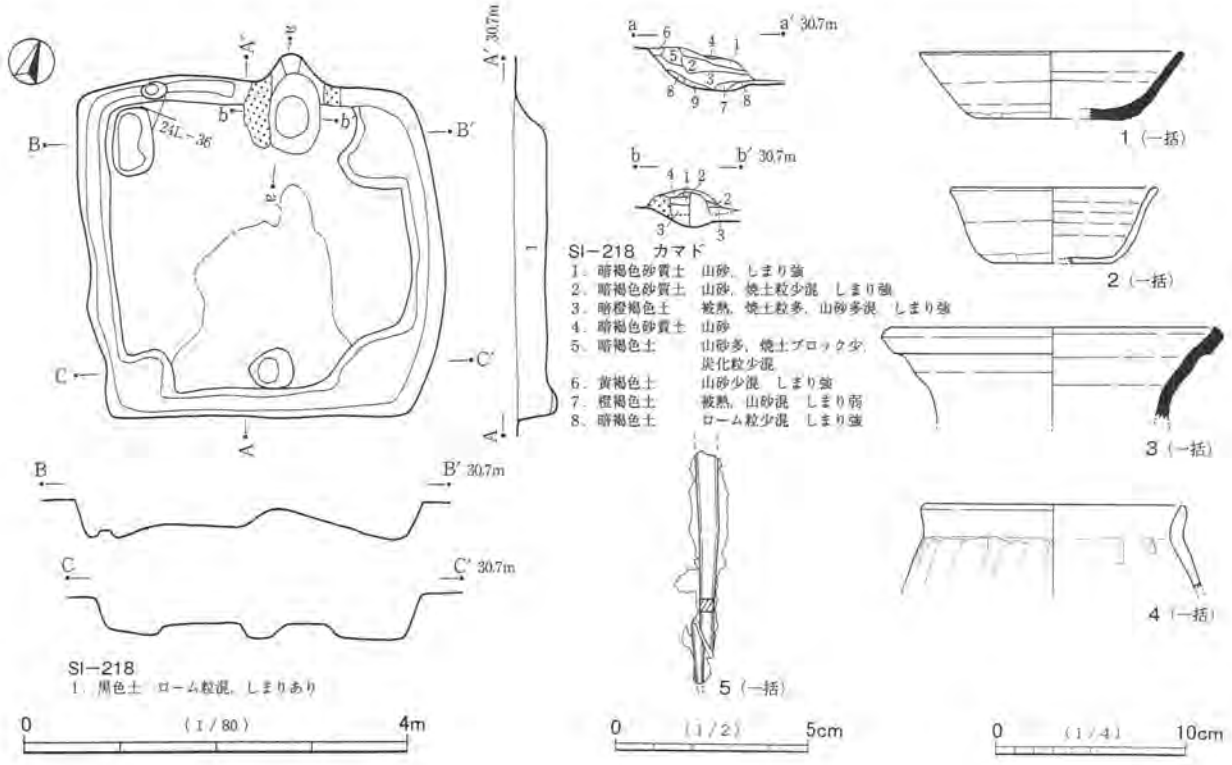
**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は48cm×44cm，床面からの深さは26cmである。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁右寄りに位置する。方形プランからの突出はやや小さい。遺存状態は不良で，右袖は中央から前側を欠損し，左袖も上部の遺存が悪い。火床部底面に赤色化した面はみられない。底面は床面よりもやや深い。使用によることと掘りかたの双方が考えられる。焼土を多く含む土層（７層）は中央から前側の底面上にみられる。中・上層は山砂を多く含み，構築材の崩落土を主体とする土層であろう。意図的に破壊されたものか，判然としない。

**堆積土**　黒色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　少量である。図示できた遺物は５点である。１は千葉産の須恵器杯である。２はロクロ土師器杯としたが，千葉産の須恵器の可能性もある。３は千葉産の須恵器甕である。４は在地の土師器甕で，




第249図　SI－218

やや小型の土器である。５は棒状の鉄製品で，用途不明である。

２は箱形の器形で，やや遺存がよい。１は1/2弱の遺存である。３・４は一部の破片である。４は口縁部が短い器形である。５は直線的な製品であるが，図の下部側で，錆膨れのためややずれている。また図の上部も錆のため劣化している。釘，鉄鏃の茎，紡錘車の紡軸，何らかの工具等が考えられるが，特定しがたい。やや厚みがあることと，多量に存在したと思われることから，釘の可能性が若干高いとみておきたい。いずれも出土位置は不明である。遺物及び出土状況には，特に祭祀的様相がうかがえず，ほとんどが単に廃棄されたか流入したものであろう。

### SI−219（第250図，図版80）

**位置**　調査区中央の24L－46グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが4.2m，幅が3.6mで，縦長の方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

**床面**　四隅を主体に貼床が施されているが，貼床を掘り抜いて掘りかた底面を露呈してしまった。中央の床面はほぼ平坦で，四隅の床面も本来は中央から比較的平坦に続くと思われる。左右（東西）の壁側を除いて，顕著に硬化している。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は58cm×41cm，床面からの深さは29cmである。形態は縦長の楕円形である。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランからの突出はやや小さい。両袖が遺存する。構築材は山砂主体であるが，下部は暗褐色土を多く含む。左袖内側は赤色化した部分が遺存している。火床部底面には赤色化した面がみられない。底面は床面よりもやや深い。使用によることと掘りかたの双方が考えられる。焼土の包含は前側の最下層（９層）と中層（２層）に多い。

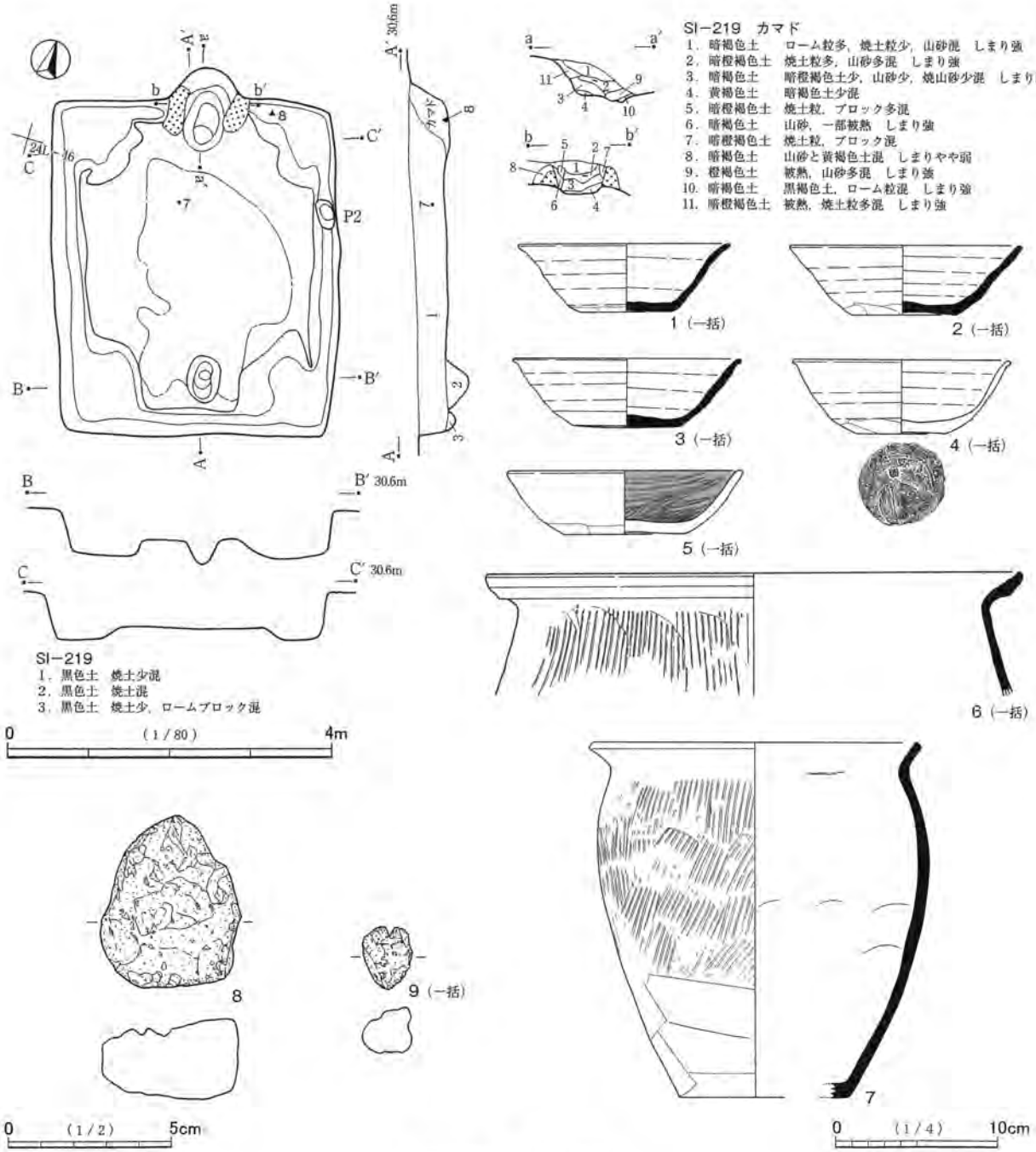
**堆積土**　黒色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　多量である。図示できた遺物は９点である。１～３は千葉産の須恵器杯，４・５はロクロ土師器杯，６・７は千葉産の須恵器甕，８・９は軽石である。

良好に遺存する杯はなく，２・３・４が1/2前後，１・５は1/4程度である。２の器面は赤色の発色が顕著である。５は内面に黒色処理・ヘラミガキが施されている。そのため内面は著しく劣化していないが，外面は磨耗が著しく，赤みも強い。二次的に火を受けたものと思われる。

７はやや遺存がよい。口縁部から底部まで連続して接合するが，底部は多くを欠損する。被熱により赤色化が顕著である。６は一部の遺存である。

８は褐色味をもつ部分が所々にみられる。やや判然としないが，火を受けた可能性が考えられる。




第250図　SI－219

7は中央カマド寄りの中層から出土した。接合破片に位置不明のものが多く，それらは散っていると思われる。8はカマド右外脇の床面から出土した。図示したその他の遺物は出土位置が不明である。

遺物及び出土状況に祭祀的様相はうかがえない。また多量の遺物量であるが，遺存のよい遺物は少ない。出土遺物のほとんどが単に廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－220（第251図，図版81）

位置　調査区中央の24L－55グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが4.2m，幅が3.5mの方形をなす。確認面からの深さは20cmである。

床面　大きな土坑があるため，やや不明瞭であるが，ほぼ平坦である。中央が顕著に硬化しているが，土坑にかかった部分が不明瞭である。

柱穴　出入口ピットが検出されなかったが，土坑が存在する影響と思われる。主柱穴は存在しない。

壁溝　全周する。

カマド　東壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖の遺存は悪く，特に右袖はかなり欠損する。火床部底面には赤色化した面がみられない。底面の窪みは小さく，床面からあまり深くない。カマド使用による程度の窪みである。堆積土最下層（4・6層）は薄いが，焼土の包含は多くない。焼土はその上層（2層）に多く含まれる。

堆積土　暗褐色土主体で，概してロームの含有も少ない。自然堆積と思われる。

出土遺物　少量である。図示できた遺物は新治窯産の須恵器蓋1点である（1）。灰白色粒を多量に含む。小石も若干みられる。40%程度の遺存である。出土位置は不明である。

重複遺構　床面上で大きな土坑（遺構番号未付与）が検出された。土坑の堆積土は黒色土主体である。土層断面からは切り合いを確認できず，土坑上面での床面の有無も判然としなかった。したがって本住居と土坑との新旧関係は不明である。

SI－221（第251図，図版81）

位置　調査区中央の24L－56グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.0m，幅が3.2mの方形をなす。確認面からの深さは20cmである。

床面　南西側が高く，北東側が低い。中央が硬化している。

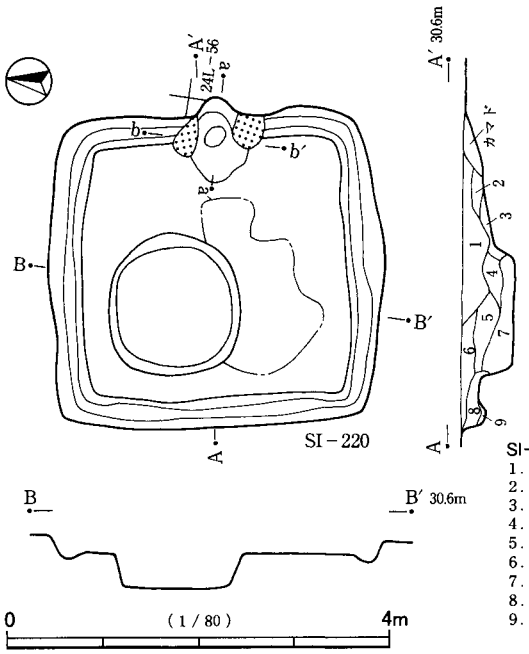
柱穴　出入口ピットは検出されなかった。主柱穴は存在しない。

壁溝　東（右前）隅部で途切れる部分があるが，ほぼ全周といえるものである。

カマド　北西壁左寄りに位置する。方形プランからの突出はやや小さい。両袖の遺存は悪く，前側と上部を多く欠損する。両袖に焼土ブロックがみられる。被熱により赤色化及び硬化した構築材が崩落したものと思われる。堆積土下層は焼土を含むが，火床部底面に赤色化した面がみられない。底面の窪みは小さく，床面からあまり深くない。カマド使用による程度の窪みである。

堆積土　主軸線上の床面上で，炭化材が一直線状に検出された。炭化材は他の場所にもみられるが，非常に少ない。ただし下層は炭化物・焼土粒の含有が多い。炭化物の量から焼失ではなく，上屋等が解体され，片付けられた後，廃材が焼却されたものと思われる。堆積土は暗褐色土であるが，概してローム粒の含有が多く，焼却後に埋め戻されたものと思われる。ただし床面までやや浅いため，本来の中・上層まで埋め戻されているか不明としたい。

出土遺物　少量である。図示できた遺物は5点である。1は千葉産の須恵器杯である。2は小型の土師

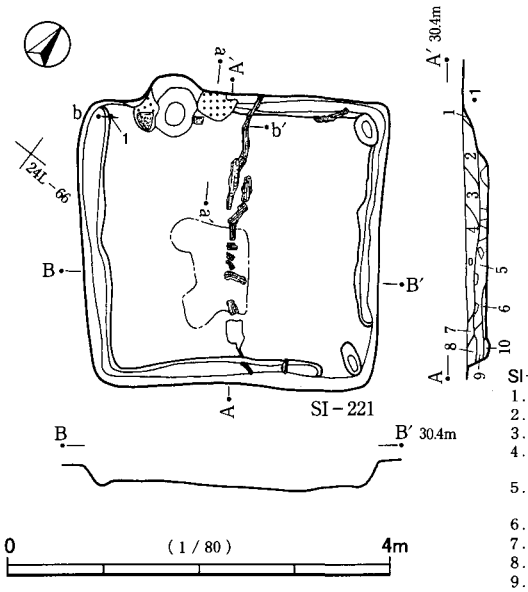



SI－220　カマド
1．暗褐色土　焼土粒多痕しまり強
2．暗橙褐色土　焼土粒多，ローム粒少，山砂混　しまり強
3．暗褐色土　ローム粒少，山砂混　しまり弱
4．暗黄褐色土　暗褐色土少混
5．暗褐色土　焼山砂多混　しまり強
6．暗黄褐色土　ローム粒少，焼土粒少混　しまり強
7．暗褐色土　焼土粒やや多混　しまり強

1（一括）

SI－220
1．明暗褐色土　ローム粒微，ロームブロック微混　しまり強
2．暗褐色土　焼土粒混　しまり強
3．暗褐色土　ロームブロック多混　しまり弱
4．黒色土　ローム粒微，焼土粒微混　しまり弱
5．黒色土　ローム粒微混　しまり強
6．暗褐色土　黒色土多，ローム粒，焼土粒混
7．暗褐色土　ローム粒多，焼土粒少混　しまり強
8．暗褐色土　ローム粒少混　しまり強
9．暗黄褐色土　ローム粒多混　しまり弱

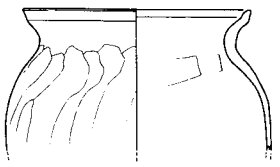
0 (1/4) 10cm



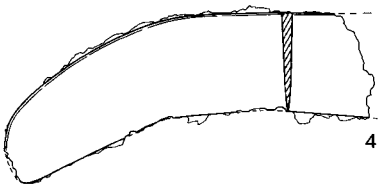

SI－221　カマド
1．暗褐色土　ローム粒多混
2．暗橙褐色土　焼山砂多，焼土粒多混　しまり強
3．橙褐色土　暗褐色土混　しまり強
4．暗褐色土　炭化粒微，焼土粒焼混　しまり弱
5．暗黄褐色土　ローム粒少，山砂少混　しまり弱
6．暗橙褐色土　焼土粒微，山砂混　しまり弱
7．暗褐色土　ローム粒多混　しまり弱
8．暗褐色土　ローム粒多，ブロック混　しまり弱
9．暗褐色土　焼土粒多　しまり強
10．暗褐色土　ローム粒少混　しまり強
11．暗褐色土　焼土粒多　しまり強

1

SI－221
1．灰褐色砂質土　山砂に暗褐色土少混　しまり強
2．暗褐色土　ローム粒多，ブロック少混　しまり強
3．暗褐色土　ローム粒多，炭化粒少混　しまり強
4．暗褐色土　ローム粒多，焼土粒少，炭化粒やや多混　しまり強
5．暗褐色土　炭化物多，ローム粒多，焼土粒多混　しまりあり
6．暗黄褐色土　焼土粒少混　しまり強
7．暗褐色土　ローム粒多混　しまり強
8．暗褐色土　ローム粒やや多混　しまり強
9．暗褐色土　ローム粒少混　しまり強
10．暗黄褐色土　ハードローム粒少混　しまり強

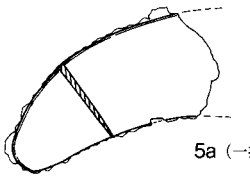


2（一括）

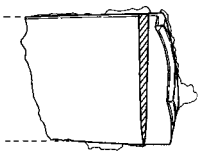


4（一括）

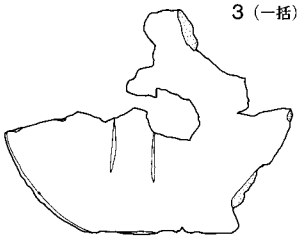
3（一括）



5a（一括）



5b（一括）



0 (1/2) 5cm

0 (1/4) 10cm

第251図　SI－220・221

器甕で，在地の土器である。３は千葉産の須恵器甕である。４・５は鉄製品で，鎌である。

１～３の遺存は少ない。３は底部外面に「＝」状のヘラ書きがある。ヘラ書きがあるためか，調整は丁寧で，敷物の痕跡がナデによってかなり消されている。器面の色調は褐色であるが，断面内部はやや灰色味を帯びる。１の外面は煤が多く付着している。２は胴部中位以下を欠くが，口縁部はすべて遺存する。胴部内面は剥離の著しい部分がある。

４は切先から中央付近までの破片である。植物繊維痕が裏面の広範囲に付着している。５は切先側と基部側の２片が遺存するが，その間を多く欠損する。基部の表面に植物繊維痕がみられる。基部の刃側で，錆膨れの左方はかなり尖っている。通常は刃のない部分であるが，刃としてもよい鋭さである。折返し側も比較的尖っているが，やや鈍い。

１は西（左奥）隅から出土した。２・３の出土位置は不明である。

その他　炭化材の出土状況をみると，中央に太い柱材が置かれ，周囲に細い柱材が置かれたものと思われる。中央の柱材は燃え残り，周囲の柱材は多くが燃え尽きたのであろう。あるいは中軸線上にあることから，そのような偶然ではなく，意図された状況かもしれない。すなわち竪穴住居廃棄の祭祀に伴って，中軸線上に柱材が並べられ，周囲はある程度除去されたという理解である。しかし後者のように理解できる類例がないと思われることから，単なる焼却の可能性を高く考えておきたい。

SI－222（第252図，図版81）

位置　調査区中央の24L－67グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.2m，幅が3.4mの方形をなす。確認面からの深さは20cmである。

床面　ほぼ平坦である。左右の壁側を除いて硬化している。特に中央の硬化が著しい。

柱穴　４箇所のピットが検出されたが，位置が不整であり，概して床面から浅い。貼床や床の軟質部を除去したものと思われる。P1・P3・P4は前両隅と左奥隅部に位置する。残る右奥隅部は明瞭なピットにならないが，若干低くなっており，他と同様に掘りかた底面を露呈したと思われる。四隅を主体として，貼床が施されているとみてよい。出入口ピットは検出されなかった。

壁溝　全周する。

カマド　北西壁左寄りに位置する。床面まで浅いこともあって，遺存が悪い。煙道部側の形態は不明瞭である。方形プランからの突出はあまり大きくないと思われる。両袖の遺存は下部であるため，山砂に加えて，ロームブロック・暗褐色土を含む。火床部底面には赤色化した面がみられない。底面の窪みは床面からあまり深くない。カマド使用による程度のものであろう。堆積土は焼土粒をやや多く含むが，濃密な焼土層はみられない。

堆積土　暗褐色土主体である。自然堆積と思われるが，堆積土の遺存が少ないため，やや断定しがたい。

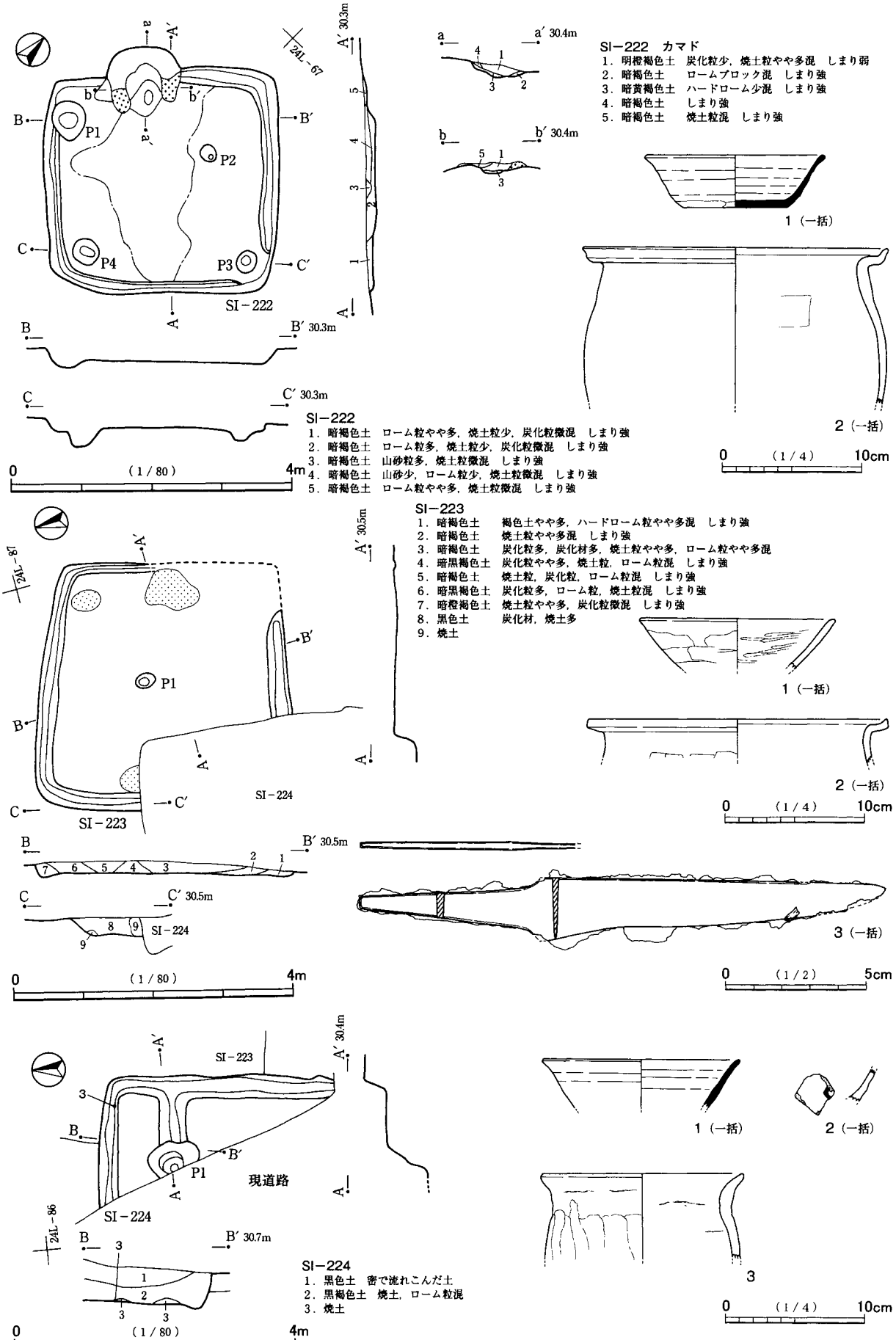
出土遺物　少量である。図示できた遺物は２点である。１は千葉産の須恵器杯，２は常総型の土師器甕である。２は小破片であり，１も遺存が少ない。ともに出土位置が不明である。

SI－223（第252図，図版82）

位置　調査区中央の24L－86グリッドを中心に位置する。確認面が西から東にやや下っている。

形状・規模　長さが3.5m，幅が3.6mの方形をなす。確認面からの深さは最も遺存がよい部分で20cmである。床面まで浅いため，確認面が低い南東側の一部を欠損ずる。やや台形状の形態と思われる。

床面　ほぼ平坦で，中央がやや硬化している。部分的に硬化が強い。




第252図　SI－222・223・224

柱穴　床面中央やや北寄りで，ピットが１箇所検出された。径は28cm×21cm，床面からの深さは32cmである。本住居に伴う可能性は低いと思われる。出入口ピットは検出されなかったが，重複遺構に破壊された可能性がある。主柱穴は存在しない。

壁溝　欠損部分を除いて巡る。本来全周するものであろう。

カマド　ほとんど遺存しないため不明瞭である。まとまった量の山砂は堆積土中にもみられない。床面上にいくつかの焼土範囲があるが，そのうち東壁際中央と西壁際北寄りで検出されたものが，カマド痕跡の可能性がある。北壁側には存在しない。

堆積土　暗褐色土主体である。焼土粒・炭化物粒を概して多く含む。床面上で若干の廃材等が焼却されたのであろう。ロームの含有は比較的多い。堆積土が薄いため，自然堆積か人為的堆積か判然としない。

出土遺物　少量である。図示できた遺物は３点である。１はロクロ土師器杯である。２は在地の土師器甕としたが，千葉産須恵器の可能性もある。ともに遺存は少ない。１は二次的な被熱痕跡が顕著である。３は鉄製品で，大型の刀子である。錆のため所々に欠損があるが，ほぼ完形である。刃部は関部分が最大幅である。背関・刃関とも角をなさず，屈曲点から弧を描いて茎に移行する。身の表裏面に繊維質が付着する部分があり，茎にもわずかに木質がみられる。その一部には明瞭に炭化しているものがあり，堆積土に含まれている炭化材が付着した可能性がある。１～３の出土位置はいずれも不明である。

重複遺構　西側でSI－224と重複し，本住居が切られている。

SI－224（第252図，図版82）

位置　調査区中央の24L－86グリッドを中心に位置する。

形状・規模　西側が調査区外の現道路部分に入っているため，調査したのは北東隅付近の一部である。長さ・幅ともに不明である。確認面からの深さは55cmである。

床面　北側がやや低いが貼床を除去している可能性がある。部分的な調査のため不明瞭であるが，本来は平坦と思われる。比較的深いため，床面は全体に硬質である。硬化範囲が不明であるが，中央が硬化していると予測される。

柱穴　北東側の主柱穴１箇所を調査した。他の主柱穴と出入口ピットは調査区外に位置するとみられる。

壁溝　調査範囲内では巡る。全周すると思われる。東壁の壁溝から直角に床溝が延びて主柱穴につながっている。

カマド　検出されなかった。調査区外の北壁か西壁に位置すると思われる。

堆積土　黒色土・黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

出土遺物　少量である。図示できた遺物は３点である。１は新治窯産の須恵器杯，２はロクロ土師器杯である。３は在地の土師器甕で，小型の甕である。２は体部外面に墨書があるが，小片で遺存が少なく，判読できない。１も小片である。器面は全面が荒れ，赤みも顕著な部分がある。二次的な火を受けていると思われる。３も遺存が少ない。器面が荒れ，内面は剥離が著しい。３は北東隅の床面から出土した。１・２の出土位置は不明である。

重複遺構　東側でSI－223と重複し，本住居が切っている。

SI－225（第253図，図版82）

位置　調査区中央南東寄りの25L－70グリッドを中心に位置する。南東方向に支谷を臨み，確認面が北西から南東に下っている。

形状・規模　長さが2.7m，幅が2.5mの方形をなす。確認面からの深さは最も遺存がよい部分で40cmである。

床面　西側から東側に下っている。南東側は床面の雰囲気を留めるが，若干損なっていると思われる。特にカマド右，南東隅は床面と確認面の高さにほとんど差がない。硬化面はみられない。

柱穴　出入口ピットは検出されなかった。西壁側に存在する可能性があるが，判然としない。重複遺構による影響はないと思われる。主柱穴は存在しない。

カマド　東壁に位置する。遺存が悪いため不明瞭であるが，方形プランからやや大きく突出すると思われる。右袖は遺存しない。左袖部分は構築材の山砂が若干みられるが，前方に開いており，前側は流出していると思われる。火床部底面に赤色化した面はみられない。底面は床面からやや深く，大きく窪んでいる。当初または作り替え時の掘りかたと思われる。堆積土は暗褐色土主体で，山砂及び焼土の含有は少量である。

堆積土　黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

出土遺物　少量である。図示できた遺物は２点である。１はロクロ土師器杯，２はロクロ土師器高台付杯である。ともに遺存は少ない。２は底部周辺の破片である。１の底部は回転糸切り後無調整で，やや高台風に突出する。２はカマド左袖付近と思われる部分の下層から出土した。１の出土位置は不明である。

重複遺構　西側でSD－028と重複し，本住居が切られている。

SI－228（第253図，図版82）

位置　調査区中央南東寄りの25L－60グリッドを中心に位置する。南東方向に支谷を臨み，確認面が北西から南東に下っている。

形状・規模　長さが2.3m，幅が3.3mの横長の長方形をなす。確認面からの深さは遺存がよい部分で15cmであり，非常に浅い。遺存が悪く，プランの名残を留める範囲を記録化しただけのようにも思われる。横長の竪穴はあり得るが，本来的なものか不明瞭である。規模も不確実な数値であるが，参考値として提示する。

床面　現状では西側から東側に下っている。またやや凹凸がある。硬化面はみられない。上記のとおり全体的に遺存が悪いと思われる。

柱穴　出入口ピットは検出されなかった。主柱穴は存在しない。

カマド　北壁左寄りに位置する。床面よりも窪んだ火床部底面が遺存するだけで，構築体は遺存しない。不明瞭であるが，方形プランからやや大きく突出すると思われる。底面に赤色化した面はみられない。

堆積土　暗褐色土主体である。遺存が悪く，自然堆積か人為的堆積か判然としない。

出土遺物　少量である。図示できた遺物は３点である。１はロクロ土師器高台付杯，２・３は在地の土師器甕である。１は足高高台杯の脚部片である。上端は杯部との接合部ではずれている。２は口縁部から胴部へのくびれがなく，直線的である。鉢とした方がよいかもしれない。３の口縁端部は内弯し，内面側に突出する。ロクロ成形の可能性が考えられる。２・３も遺存が少ない。いずれも出土位置が不明である。

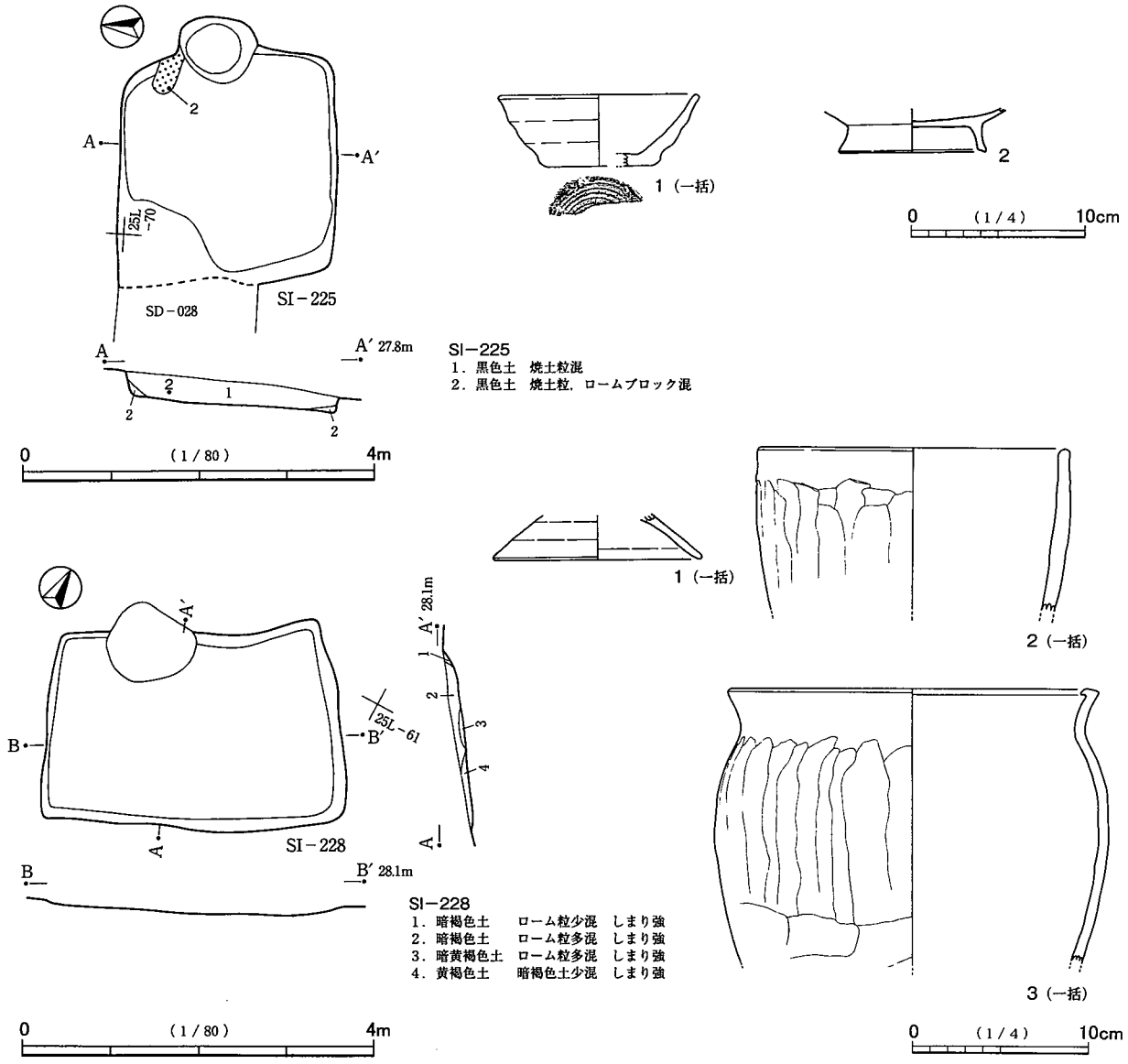
SI－229（第254図，図版83）

位置　調査区東部南端の25L－46グリッドを中心に位置する。南方に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　長さが3.6m，幅が4.1mの横長の方形をなす。確認面からの深さは15cm～55cmである。

床面　平坦で，中央が顕著に硬化している。

柱穴　出入口ピットが南壁際右寄りで検出された。径は51cm×46cm，床面からの深さは27cmである。対




第253図　SI－225・228

角線上に主柱穴が４箇所検出された（P1～P4）。また北壁側中央からも主柱穴的なピットが検出された（P5）。P1～P4は全体に右側に寄っており，右（東）壁側の空間が狭く，左（西）壁側の空間が広い。特に左前（南西）側のP4が内側に寄っているため，４柱穴間の形態はやや逆台形を呈する。P5の径は51cm×42cm，深さは30cmである。主柱穴よりもやや浅いが，比較的深さがある。中軸線に若干かかる位置にあり，補助柱穴の可能性がある。さらに左壁際奥寄りからも大きなピットが検出された。径が72cm，深さは31cmである。本住居に伴うとすれば，いわゆる貯蔵穴であるが，断定しがたい。位置的に他遺構の可能性が高いと思われる。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁右寄りに位置する。方形プランから大きく突出する。両袖の遺存はあまりよくない。火床部底面に赤色化した面はみられない。底面は床面からやや深く窪んでいるが，範囲が狭く，使用に伴う程度の窪みと思われる。堆積土下層に焼土粒がみられるが，少量である。その上部の中・上層に山砂主体の土層が堆積している。構築材の崩落土を主体とする土層である。

**堆積土**　上層は暗褐色土，下層は暗黄褐色土である。

出土遺物　やや多量である。図示できた遺物は13点である。１～６は千葉産の須恵器杯，７は非ロクロの土師器杯，８は千葉産の須恵器高台付杯，９は新治窯産の須恵器高杯，10は新治窯産の須恵器甕，11は千葉産の須恵器甑，12は土製支脚，13は鉄製の刀子である。

１・３・６・８は底部外面に刻書がある。１・３はヘラ書きである。６・８はやや不明瞭であるが，線刻と思われる。いずれも記号で，１・６は「＋（×）」である。３は中心を除く底部外面全体に不整な条線が多くみられる。そのなかに「W」または「M」字状の形がみられる。８は３条の平行線と１条線が直交し，直交する１条線に平行する１条線がみられる。欠損部にかかっており，続く線刻が欠損部側に存在したことも考えられる。

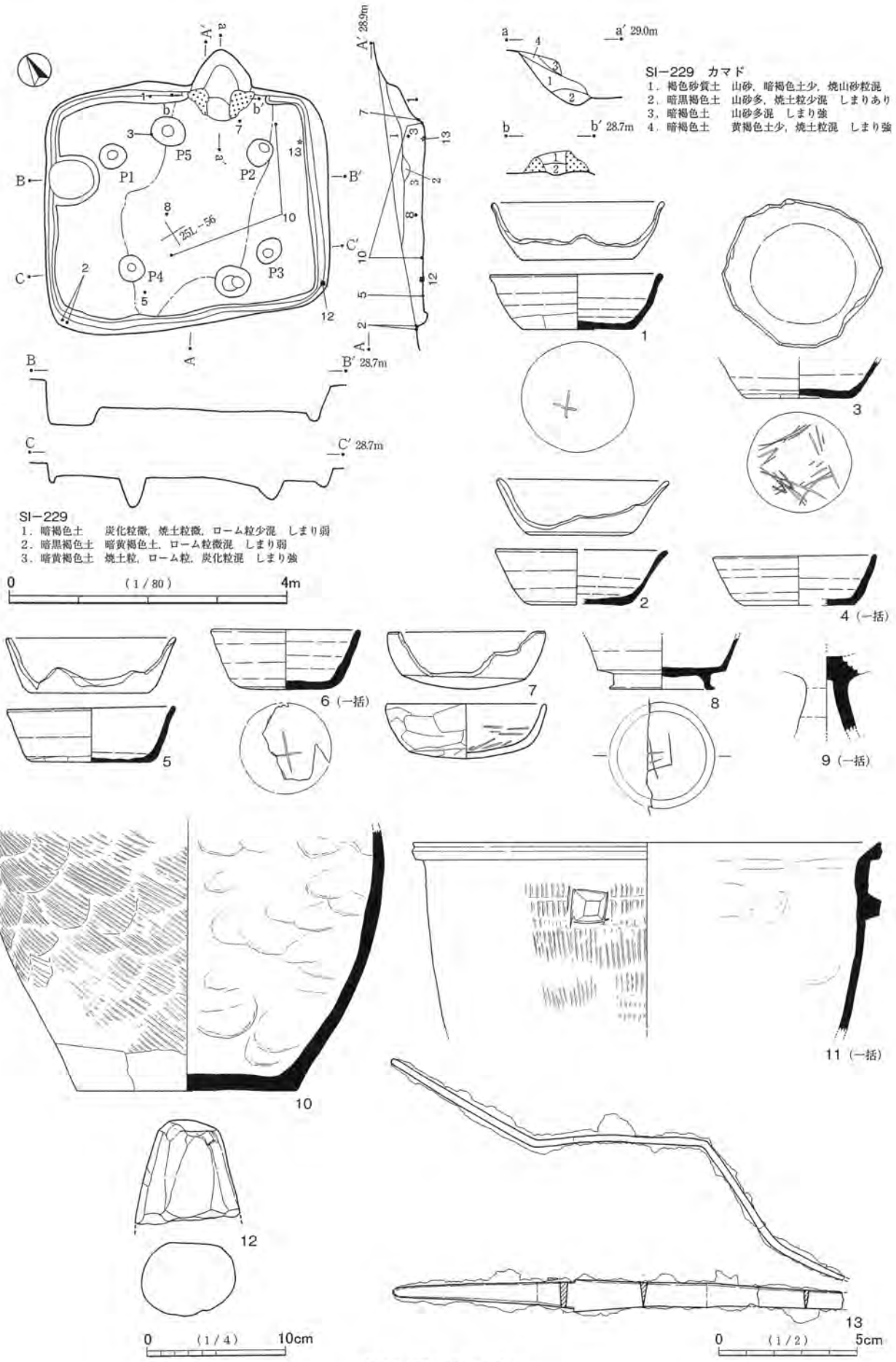
杯類は遺存のよいものが多い。１・２・５・７はおよそ90％以上，３は60％程度の遺存である。４・６・８は1/2以下で，６は小片である。１は口縁･体部の一部を欠損し，また欠損部の両側が割れて接合する。欠損・破損部を合わせて1/2弱である。その他には割れがない。７も口縁・体部の一部を欠損する他は割れずに遺存する土器である。欠損部の口縁部周は1/4強である。１の欠損・破損部及び７の欠損部は比較的整った形態であり，打ち欠き・打ち割りされたものと思われる。また３は口縁部の全周を欠損するが，全周打ち欠きされた土器と思われる。２は口縁・体部から底部に続く一部が欠損し，欠損部に対向する側が割れて接合している。欠損部の口縁部周はほぼ1/4，破損部の口縁部周は1/2弱である。欠損部・破損部は打ち欠き・打ち割りの可能性があると考える。５は口縁・体部の一部がやや細かく欠損・破損し，その対向する側は大きく割れて接合している。欠損・破損は打ち欠き・打ち割りとも思われるが，やや断定しがたい。

４～７は器面が荒れ，強く赤みを帯びる部分があるため，二次的に火を受けていると思われる。

10は上半部を欠損するが，下半部は比較的遺存のよい土器である。上部の破断面が比較的水平である部分が多いが，意図的な欠損か断定しがたい。遺存する胴部は比較的大きく割れているが，上部の一部にやや小さな破片がある。11は把手をもつ部分の小破片である。把手はやや大型で，整った方台状を呈する。胴部への接着も丁寧である。

13は切先付近を欠くだけであり，遺存良好な刀子である。ただし切先側の小破片とその他の大破片の２点に分かれ，また大きく折れ曲がっているため，使用時の形状を留めていない。２片の破損部は錆に覆われており，古い欠損である。大型破片は２箇所で曲がっているが，小破片の方も若干曲がっており，廃棄された時点では，折れ曲がる箇所が３箇所であったと思われる。破損は曲がる箇所近くである。背関は直角に切り込みが入る。刃関は錆のためやや不明瞭であるが，同様と思われる。茎の背の一部に柄の木質と思われるものがわずかに付着している。13は再利用目的の破損品と思われるが，再度使用されることなく，廃棄状態となったものであろう。

１は北壁際中央やや左寄りの床面近くから出土した。カマド左外側の位置でもある。２は左前（南西）隅の床面近くから出土した。３の平面位置はP5上端の端部で，中層から出土した。５は前（南）壁側やや左寄りの床面から出土した。７はカマド右袖前方の床面近くから出土した。１～３・５・７はいずれも正位・倒位等の状態が不明である。４・６・９・11は出土位置が不明である。８は中央の下層から出土した。10は底部を含む大形の破片が右奥（北東）隅寄りの床面から出土し，一部が中央やや前寄りの床面から出土した。なお10は位置不明の破片もやや多い。12は右前（南東）隅の壁溝内で床面と同じ深さから出土した。13は右（東）壁際奥（北）寄りの床面から出土した。


SI−229
1．暗褐色土　炭化粒微，焼土粒微，ローム粒少混　しまり弱
2．暗黒褐色土　暗黄褐色土，ローム粒微混　しまり弱
3．暗黄褐色土　焼土粒，ローム粒，炭化粒混　しまり強
0　(1/80)　4m
SI−229　カマド
1．褐色砂質土　山砂，暗褐色土少，焼山砂粒混
2．暗黒褐色土　山砂多，焼土粒少混　しまりあり
3．暗褐色土　山砂多混　しまり強
4．暗褐色土　黄褐色土少，焼土粒混　しまり強
0　(1/4)　10cm
0　(1/2)　5cm

第254図　SI－229

図示した出土遺物は竪穴住居・カマド廃棄の祭祀に関わるものが多いと思われる。その可能性が高いものとして1・2・5・6・7・12があり，3・8・10・13も若干の可能性が考えられる。より細かくみると，カマド周辺のものとして1・6・7，隅部のものとして2・12があり，5は出入口部に比較的近い位置である。13は意図的に折り曲げられているかもしれないが，鉄製品でこのような行為が行われるか断定しがたい。10の出土状況は一部が不明である。3・8は堆積土が埋め戻されていれば可能性が高いが，人為的な堆積か不明瞭である。3・8・10・13については可能性の指摘に留める。

以上，本住居の出土遺物は祭祀的な様相を示すものがやや多くみられる。しかし図示しない土器片も比較的多く出土している。祭祀終了後は単に廃棄されたか流入したものが多いと思われる。

SI－230（第255図，図版83）

**位置**　調査区東部南端の25L－57グリッドを中心に位置する。南方に下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　長さが2.8m，幅が3.5mの横長の方形をなす。確認面からの深さは35cm～65cmである。

**床面**　平坦で，中央が硬化している。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際やや左寄りで検出された。径は23cm×15cm，床面からの深さは15cmである。また北西隅側でピットが検出された（P1）。径は35cm×23cm，深さは17cmである。対応するピットがないため，主柱穴とは思われない。本住居に伴うものかも不明である。

**壁溝**　検出されなかった。

**カマド**　北壁やや右寄りに位置する。方形プランからやや大きく突出する。両袖の遺存は悪く，特に右袖は基底部のみの遺存である。左袖内側は赤色化している。火床部底面に赤色化した面はみられない。底面は床面からほとんど窪んでいない。堆積土下層に焼土粒がみられるが，少量である。

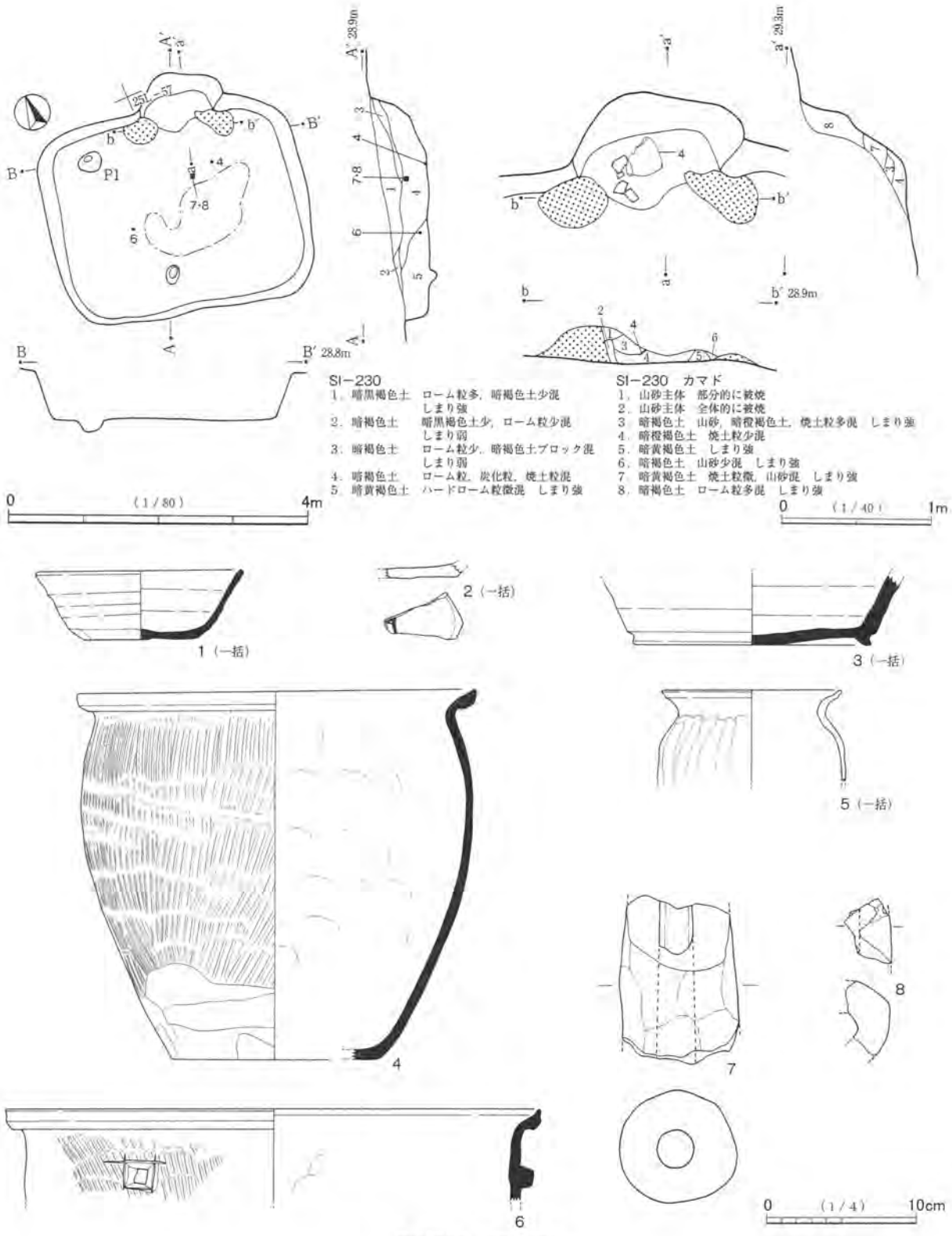
**堆積土**　暗褐色土主体であるが，下層は黄色味が強く，上層は黒みが強い。ローム粒は中・下層に少なく，上層に多い。上層のロームは多くが高所からの流れ込みによるものであろう。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　やや多量である。図示できた遺物は6点である。1は千葉産の須恵器杯，2はロクロ土師器杯，3は東海産と思われる須恵器壺，4は千葉産の須恵器甕である。5は小型の土師器甕で，在地の土器である。6は千葉産の須恵器甑，7・8は鞴の羽口である。

1は底部の遺存がかなりよいが，口縁・体部は一部の遺存である。2は底部付近の小片である。底部外面に文字と思われる墨書があるが，遺存が少なく，判読できない。内面は黒色処理・ヘラミガキが施されている。4は底部を多く欠くが，胴部の遺存がかなりよい土器である。口縁部は1/2以下の遺存である。遺存部分は大きく割れており，一部は大形の破片である。胴部外面は間隔の広い平行タタキが施されている。胴部内面の当て具痕はナデによりやや弱まっている。胴部内面に若干の接合痕がみられる。5は一部の遺存である。6は把手をもつ部分の破片である。把手は整った方台状を呈する。胴部外面には接着に際しての切り込みがみられる。やや強く押されたため，内面が若干ふくらんでいる。

7は先端，末端とも欠損する。図の上部側がやや暗灰色に変色しており，先端に近いと思われる。磨耗が顕著であり，砂質の質感を呈する。8は先端部の破片である。孔周囲が黒色化し，小口面はガラス化した部分もある。7・8は被熱等の違いから，色調や堅さが異なるが，同一地点から出土しており，同一個体であろう。

4はカマド内を主体として出土し，また一部がカマド右袖前方の床面から出土した。図示していないが，カマド内からは土製支脚片が中央の中層から出土している。7・8は中層，6も床面からやや高い位置で




第255図　SI－230

の出土である。4は本住居で使用されていたものが遺棄された可能性が考えられる。

SI−231（第256，図版83）

位置　調査区東部南端の25L－67グリッドを中心に位置する。南方に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　長さが3.8m，幅が4.4mの横長の方形をなす。遺存がよい北側の深さは60cmである。南壁東寄り付近の壁・床面が流失している。南西隅部の壁が遺存しているので，東側部分の床面は南壁近くま

で遺存すると思われる。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

**柱穴**　主柱穴が４箇所検出された。北東側のP1はやや内に寄り，南西側のP4はやや西壁側に寄っている。北東側のP2と南東側のP3もわずかに同様の傾向がある。そのため主柱穴間の形態はやや台形状である。４本柱の主柱穴以外のピットが２箇所検出された。一つは南壁側中央のピットで，径が46cm，床面からの深さが37cmである。P3・P4間に位置する。出入口ピットの可能性が高いと思われるが，本住居構築時も緩斜面であったとすると，補助柱穴の可能性も考えられる。深さは主柱穴と同等である。もう一つは西壁側やや南寄りに位置するもので，径は50cm，深さは36cmである。本住居に伴うとすれば，まず出入口ピットが考えられる。その場合二通りの可能性が考えられる。一つは本来の出入口ピットはこのピットで，南壁側のものは柱穴であること，もう一つは双方とも出入口ピットであり，前後は不明であるが片方からもう片方へ変更した可能性である。なお西壁側のものが補助柱穴である可能性は低いと思われる。

**壁溝**　東西及び北壁に巡る。南壁側にはみられず，本来的に巡るかも判然としない。

**カマド**　北壁中央に位置する。煙道部側が方形プランからやや大きく突出するが，両袖の多くはプラン内に位置する。両袖下半部が遺存するが，上部や前側の遺存が悪い。特に右袖は基底部のみの遺存である。火床部底面に赤色化した面はみられない。底面は大きく，床面からやや深く窪んでいる。両袖は窪みの上に構築されていると思われ，使用による窪みに加えて，当初または作り替え時の掘りかたでもあると思われる。焼土は底面上の堆積土（４・６層）に少量で，その上層（２・３層）に多い。最終的な火床面は４層が堆積したその上部にあったと思われる。

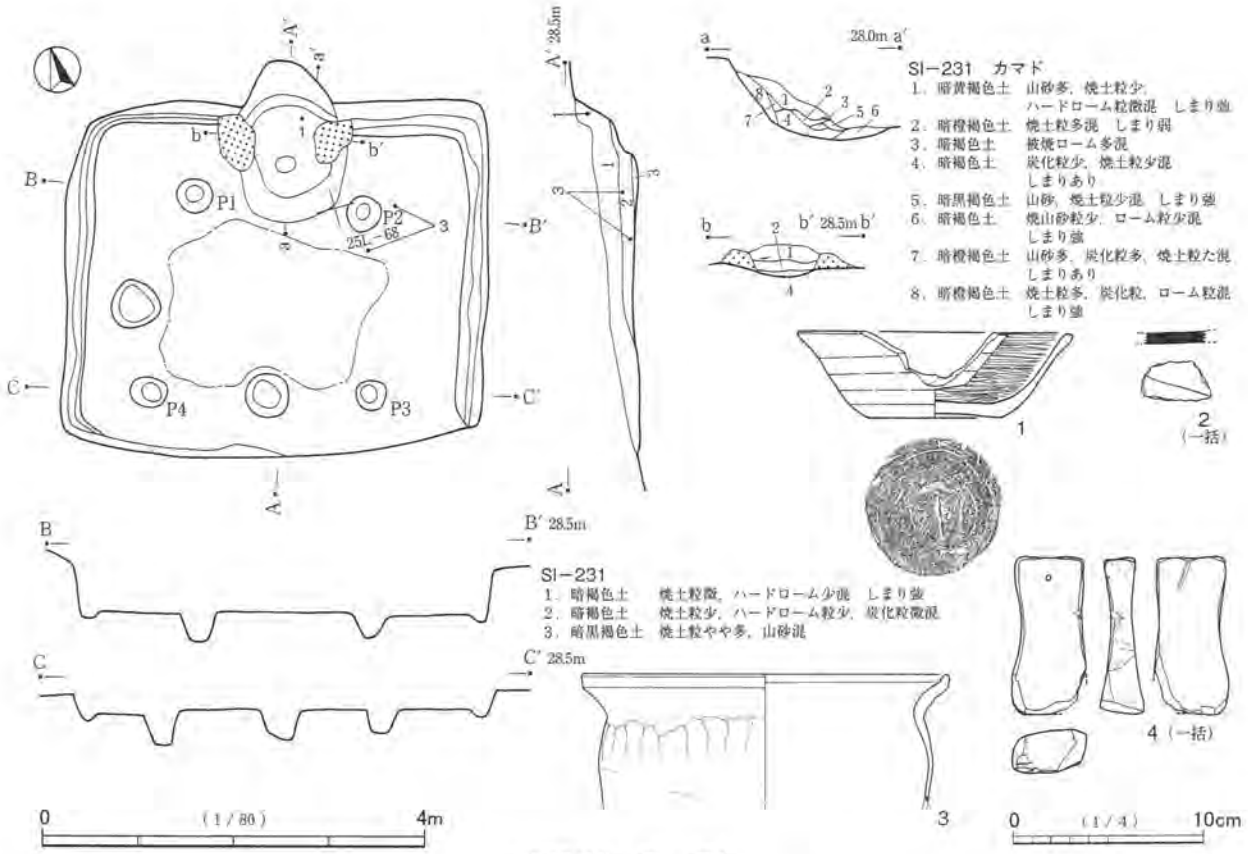
**堆積土**　暗褐色土主体である。ローム粒の包含量は少量である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　やや多量である。図示できた遺物は４点である。１はロクロ土師器杯，２は千葉産の須恵器甕である。３はやや小型の土師器甕で，在地の土器である。４は砥石である。

１は遺存がよく，口縁・体部の一部を不整な逆三角形状に欠損する他は破損もない土器である。欠損部は打ち欠きされたものと思われる。器面は荒れ，一部に剥離もみられる。剥離痕は特に内面に目立つ。また赤みや黒みの強い部分もあり，二次的な被熱痕跡が顕著である。２は小片である。底部外面に「Ｔ」字状の刻書がある。なお「Ｔ」とみた場合，横線は焼成前のヘラ書き，縦線は焼成後の線刻である。ただし，縦線の方はやや不明瞭であり，発掘時の傷とも思われる。また線刻の方はヘラ書きの線を後に刻んだことも考えられるが，その当否を決定することはできない。３は口縁部・胴部上位の1/2弱の遺存である。胴部の器壁が非常に薄く，作りのよい土器である。

４の石材は流紋岩である。本来は方柱状の砥石であるが，薄くなった部分で割れたか折られたものと思われる。上部が折損面であるが，若干使用されており，小口面となっている。左図を上面とすると，折損面寄り中央に孔がみられる。しかし孔は浅く未貫通であり，提砥としての使用は断念されている。孔下方の最も薄い部分で割れているが，穿孔着手時に破損した可能性が考えられる。未貫通であるのは破損によるのかもしれない。上下面及び両側面は滑らかになっている。下部の小口面は使用されているが，ややざらつきがある。また一部に鋭い筋状の研ぎ痕がみられる。筋状の研ぎ痕は下面の折損面寄りにもみられるが，やや幅が広いものである。

１はカマド内やや右奥側の上層から出土した。正位か倒位のどちらかで，あまり傾いていないと思われるが，判然としない。３は北東側の床面・下層から出土した。




第256図　SI－231

1はカマド廃棄の祭祀に関わるものと思われる。なおそれ以前に灯明具や支脚への転用も考えられるが，油煙の付着はみられない。また支脚転用といえるほど被熱痕跡は強くないように思われる。被熱痕跡の強さについては，内面にヘラミガキが施され，土器が比較的精良である影響があるかもしれない。灯明や支脚ではなく，火を使用した祭祀行為に供されたことも考えられる。1以外の遺物には特に祭祀的様相がうかがえない。1以外の出土遺物の多くは単に廃棄されたか，流入したものと思われる。

**SI−233**（第257図，図版84）

**位置**　調査区東部南端の25L－77グリッドを中心に位置する。南方に下る緩斜面に立地する。現状で台地平坦部からおよそ4m低い位置である。

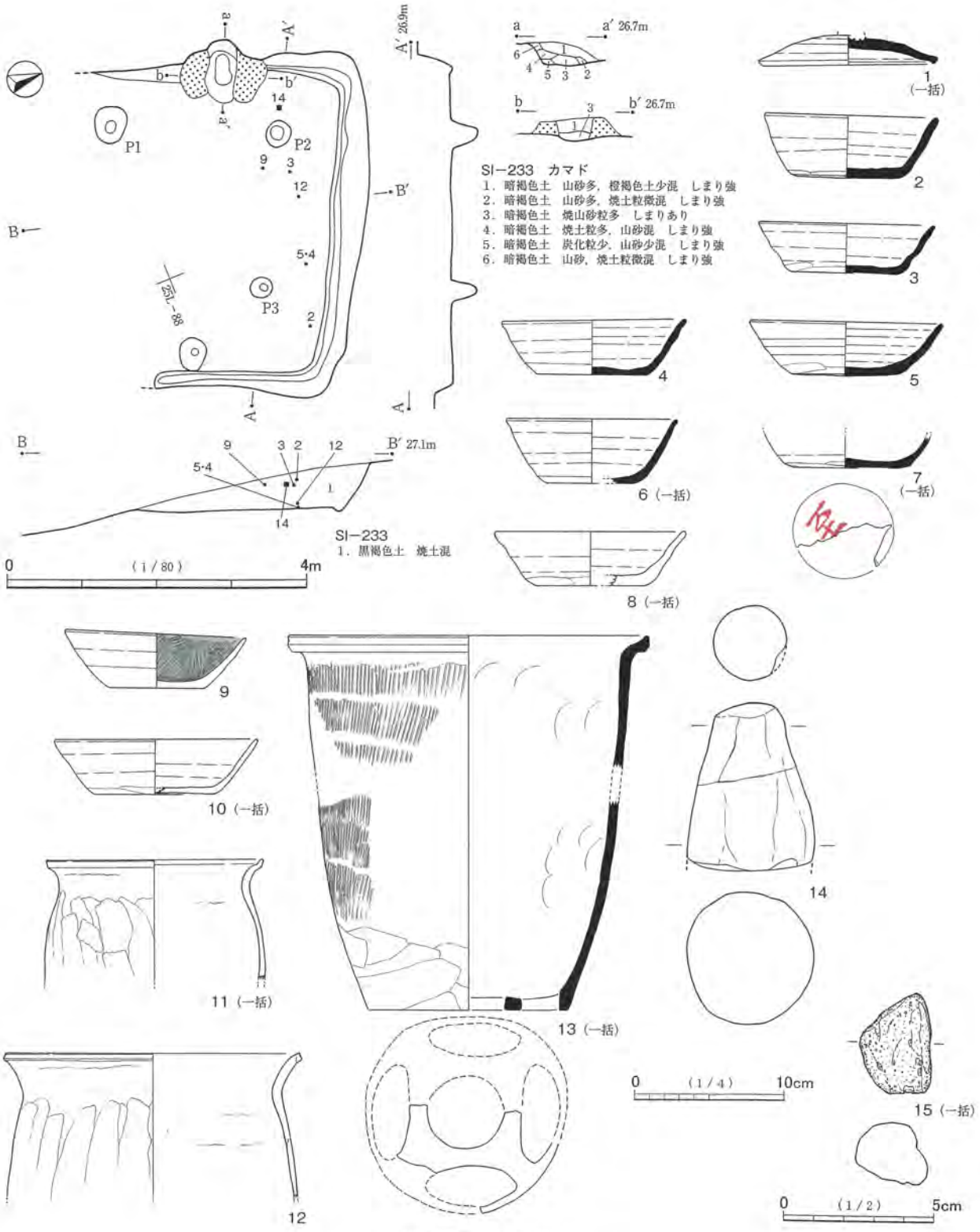
**形状・規模**　長さが4.5mの方形をなす。遺存がよい北側の深さは60cmである。南側は流失しており，幅は不明である。カマドや主柱穴の状況から4.4m前後と推測されるが，かなりの誤差を含むと思われる。

**床面**　遺存する部分は平坦である。硬化は不明瞭である。壁下位・床面の一部は粘土層に達している。南側の床面は黒色土中に作られた可能性がある。また構築当時の地形はより緩やかであったと思われる。

**柱穴**　4箇所の主柱穴のうち，3箇所が遺存している。南東側の主柱穴は検出されなかった。出入口ピットが東壁際で検出された。位置が中軸線上であれば，幅は4.7m程度であるが，やや右に寄っていることも考えられる。径は46cm×29cm，深さは25cmである。

**壁溝**　遺存のよい北側では巡る。流失した南側は斜面であるため，本来的に巡るか判然としない。

**カマド**　北壁に位置する。壁のどのあたりに位置するか不明瞭であるが，中央の場合竪穴プランのバランスが悪くなるため，やや右寄りに位置すると思われる。方形プランからの突出は小さい。両袖が遺存するが，右袖の遺存がややよく，左袖の遺存は不良である。火床部底面の窪みは比較的浅い。堆積土下層は




第257図　SI－233

焼土化した山砂を多く含む暗褐色土である。焼土は底面際にやや多い。

**堆積土**　黒色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　多量で，全体的に分布する。図示できた遺物は15点である。１は東海産と思われる灰釉陶器蓋，２～７は千葉産の須恵器杯，８～10はロクロ土師器杯である。11・12は在地の土師器甕で，11はやや小型品である。13は千葉産の須恵器甑，14は土製支脚，15は軽石である。

1は比較的遺存がよいが，つまみは剥落している。遺存部分は数片に割れている。欠損は一部が連弧状であるが，意図的なものか不明瞭である。口縁部に灰釉が施されている。天井部内外面の口縁部寄りに他の陶器の一部等が釉着している。重ね焼きされた痕跡である。胎土は小石・白色粒を若干含む。色調は灰白色である。

7は底部外面に「至」の朱書がある。朱墨が選択されたのは，器面の色調が黒みをもつ影響が大きいと思われる。須恵器杯のなかに非常に遺存のよいものはないが，2・3・5はやや遺存がよい。欠損・破損に意図的な様相は認めがたい。土師器杯では，10の遺存がよく，9もややよい。10は口縁・体部の一部を弧状に欠損する。打ち欠きの可能性も考えられるが，遺存する部分が不整に割れ，底部にも若干の欠損があることから，やや断定しがたい。9は口縁・体部の1/2弱を不整な連弧状に欠損する。他はほぼ遺存するが，欠損部に続く部分が弧状に割れて接合する。欠損・破損が意図的であるか，断定しがたい。9の内面は黒色処理・ヘラミガキが施されている。

11は口縁部の1/2弱，12は口縁部の1/3強が遺存する。13も全体の遺存は少なく，上位と下位の破片が接合しない。5孔式の底部である。中心孔は整った円形である。比較的丁寧な作りである。

図示した遺物のうち，位置のわかるものは7点である。そのうち，4・5・12は床面・下層から出土したが，他の2・3・9・14は上層からの出土である。1・10は位置が不明である。出土状況に祭祀的様相をみるのは難しく，大半が単に廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－234（第258図，図版84）

位置　調査区東部南端の25L－66グリッドを中心に位置する。南方に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　幅が2.8mの方形をなす。遺存がよい北側の深さは50cmである。南側は流失しており，長さは不明である。小型で隅カマドをもつ竪穴であるため，長さとあまり変わらないと思われる。出入口ピットも検出されなかったため，主軸方向がやや不明瞭である。しかしカマドは北壁側により多く入っているため，南辺から北辺に向かう方向を主軸方向とした。

床面　遺存する部分は平坦で，中央が硬化している。

壁溝　東西及び北壁の三壁に巡る。流失した南壁側は斜面であるため，本来的に巡るか判然としない。

カマド　北西隅に位置するが，やや北壁側に偏っている。煙道部はプランから若干突出し，壁は急角度で立ち上がる。両袖はプラン内に位置する。両袖は壁側で遺存するが，前側を欠損している。左袖内側は赤色化した部分が遺存している。カマド底面は前側でやや深く窪んでいる。窪みの中心は左袖の前方で，床面からの深さは20cmである。窪みはカマド使用によって深くなった他，当初か作り替え時の掘りかたであったことも考えられる。窪みに堆積した土層はロームブロックを含む暗褐色土で，埋まったか埋められた土層である。焼土粒・炭化粒を含む土層がその土層の上部にあり，火床面部分の土層と思われる。

堆積土　黒色土主体である。自然堆積と思われる。

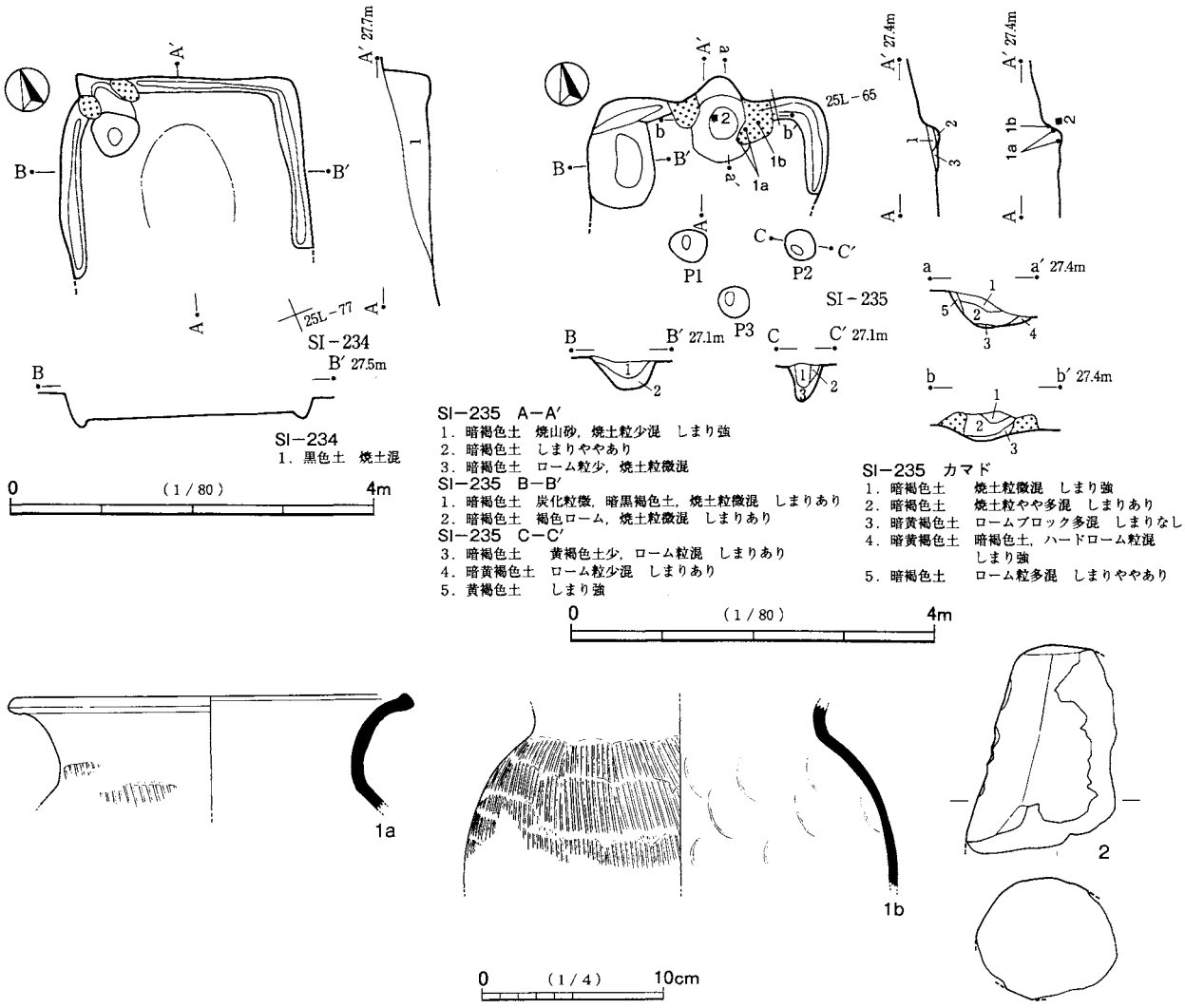
出土遺物　遺物の出土はなかった。

その他　出土遺物がないが，遺構の様相から奈良・平安時代の竪穴建物としてよいものである。なお詳細な時期は不明であるが，隅カマドであることから，比較的古い可能性がある。

SI－235（第258図，図版84）

位置　調査区東部南端の25L－64グリッドを中心に位置する。南方に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　幅が2.7mの方形をなす。遺存がよい北側の深さは30cmである。中央から南側は流失して




第258図　SI－234・235

おり，長さは不明である。検出されなかった部分は竪穴の1/2以上と思われる。

**床面**　遺存する部分が少ないが，平坦である。硬化は不明瞭である。

**柱穴等**　南側で３箇所のピットが検出されたが，位置が不整であり，本竪穴に伴うものか不明である。

**壁溝**　遺存のよい北側では巡る。西壁側は広く，深い。他の土坑と思われるが，壁溝を掘り過ぎているのかもしれない。南側はどこまで巡るか不明である。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖の遺存はあまりよくない。特に左袖は前側を多く欠損する。火床部底面の窪みはやや浅い。底面は被熱により地山のロームブロックがぼろぼろの状態である。焼土粒をやや多く含む土層がその上部に厚く堆積している（２層）。土製支脚（２）が中央やや左寄りの２層中から正位で出土した。底面からわずかに高い位置である。下部を欠損するため，使用時の位置を留めるかやや不明瞭であるが，下方に支えがあるか埋め戻されていれば，機能することが可能と思われる。

**堆積土**　暗色土主体である。遺存が少ないため，自然堆積か人為的堆積か不明である。

**出土遺物**　少量であるが，堆積土が少ないことを考えると，分布密度は低くない。図示できた遺物は２点である。１は千葉産の須恵器甕，２は土製支脚である。１は口頸部が長く延び，胴部が膨らむタイプの

器形である。遺存は少ない。焼成は良好である。カマド右袖上から出土した。

SI－236（第259図，図版85）

**位置**　調査区東部南端の25L－54グリッドを中心に位置する。南方に下る緩斜面に立地する。

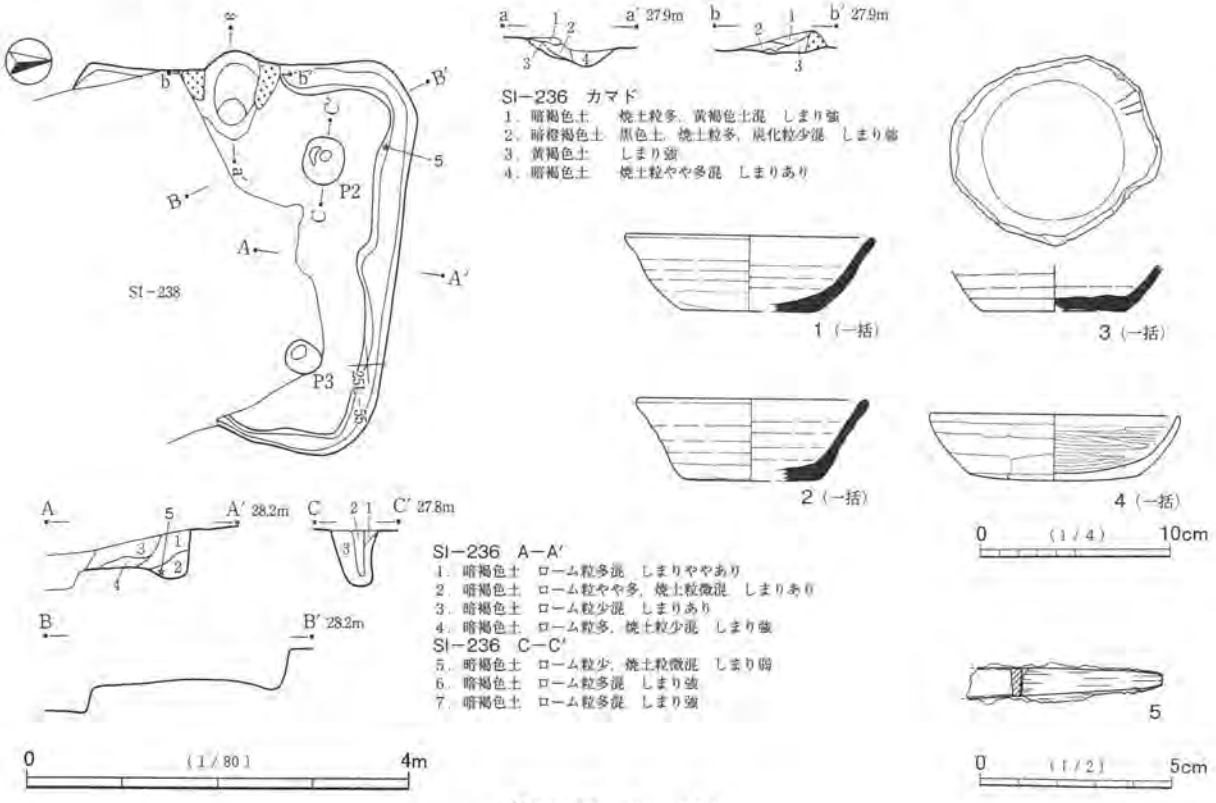
**形状・規模**　長さが4.1mの方形をなす。最も遺存がよい部分の深さは40cmである。SI－238と大きく重複することと斜面に立地することから，北壁側を主体として全体の1/2弱が遺存する。幅は不明瞭である。しかしわずかに検出された左奥（南西）隅等から3.9m前後と推測されるが，この数値はかなりの誤差を含むものと思われる。

**床面**　右奥（北西）側は遺存がよく，平坦である。右前（北東）側は遺存が悪い。中央が遺存していないため，硬化範囲は不明である。

**柱穴**　出入口ピットは遺存していないが，東壁際に存在したと思われる。4箇所の主柱穴のうち，右(北)側の2箇所が遺存している。左前（南西）側の主柱穴は検出されなかった。左奥（北西）側の主柱穴は不明瞭であるが，SI－238のP1西側部分が相当するかもしれない。しかしこの推測は左前側の主柱穴が検出されていない点でやや弱い。また主柱穴間の形態とプランとのバランスも悪い。むしろSI－238のP1の東側部分の方が位置的に適合するが，柱穴の深さからみて，この部分はSI－238の柱穴と思われる。主柱穴間とプランについてはSI－238もバランスが悪いことから，この点は問題にならない。以上のように左奥の主柱穴については不明瞭なため，存在の可能性の指摘に留める。

**壁溝**　遺存のよい北側では巡る。南側はどこまで巡るか不明である。

**カマド**　北壁に位置する。壁のどのあたりに位置するか不明瞭であるが，中央またはやや右寄りに位置すると思われる。方形プランからの突出は小さい。両袖の遺存は悪く，特に左袖は痕跡的である。火床部底面は奥側でやや浅く，前側でやや深く窪む。焼土は前側でやや多く，奥側で多量に含まれる。




第259図　SI－236

堆積土　暗褐色土主体である。ロームの包含は壁際と下層に多く，中央側はやや少ない。壁際では上層の方が下層よりも多いが，緩斜面に立地する影響であろう。自然堆積と思われるが，やや不明瞭である。P2の２層は中央に細長い土層であり，柱痕と思われる。暗褐色土で，ローム粒の包含が少ない。周囲はローム粒を多く含む。

出土遺物　やや多量である。遺構の遺存が少ないことを考慮すると，本来はかなり多量と思われる。図示できた遺物は５点である。１～３は新治窯産の須恵器杯，４は非ロクロの土師器杯，５は鉄製の刀子である。１～４はいずれも遺存が少ない。３は口縁部の全周を欠損するが，底部には欠損がない。体部内面に平行する３条線の線刻がある。線刻は欠損する部分に続くと思われ，欠損以前に施されたものであろう。５は茎の破片である。柄の木質が表裏面に付着している。

５は右（北）壁際奥隅寄りの壁溝内から出土した。１～４の出土位置は不明である。出土遺物のほとんどが単に廃棄されたか，流入したものと思われる。

重複遺構　南側でSI－238と大きく重複し，本住居が切られている。

SI－238（第260図，図版85）

位置　調査区東部南端の25L－54グリッドを中心に位置する。南方に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　長さが3.2m，幅が推定3.8mの横長の方形をなす。最も遺存がよい部分の深さは55cmである。南西側が流失している。

床面　遺存する部分は平坦である。中央が硬化している。

柱穴　主柱穴が４箇所検出された。主柱穴間の形態はやや台形的であり，またプランからみて相似する対称形ではなく，傾きがある。北西側のP1はピットが二つ連なった状態で，底面は段状をなす。柱の抜き取りが考えられるが，他の３柱穴は脇を掘った形跡がみられない。浅い隅側の部分は重複するSI－236の主柱穴とも思われる。ピットが西壁際中央と思われる位置で検出された（P5）。径は30cm，深さは30cmである。性格については，カマドに対向する位置ではないが，出入口ピットの可能性が考えられる。そうでなければ補助柱穴であろう。いずれにしても副軸の中軸線上に位置するため，本住居に伴うものとみられる。南壁側中央は撹乱を受けており，出入口ピットが存在したとしても欠損している。

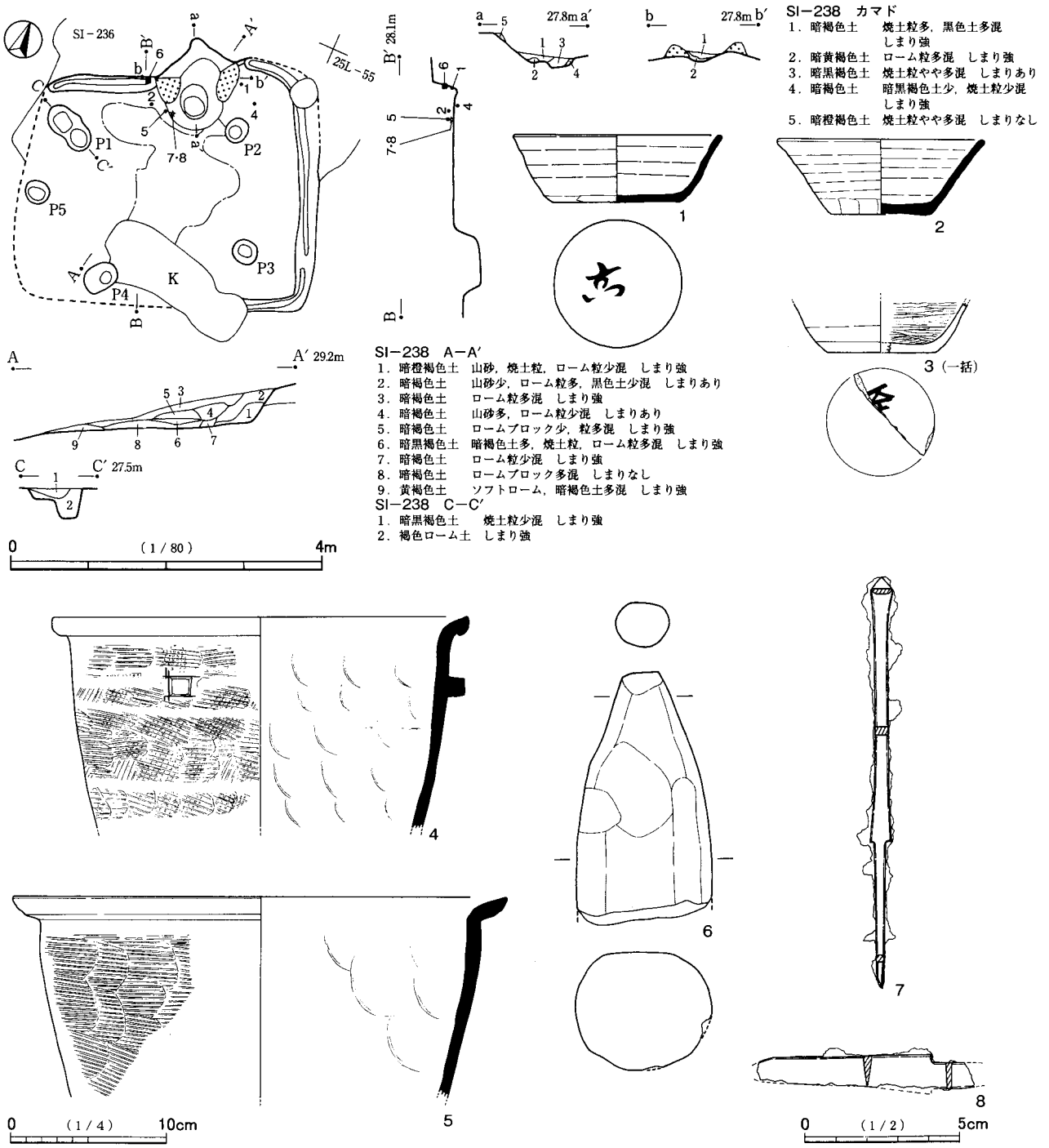
壁溝　遺存しない南西側を除いて巡る。南壁東側にもみられるため，全周すると思われる。

カマド　北壁右寄りに位置する。方形プランからやや大きく突出するが，袖部の多くはプラン内に位置する。両袖の遺存はあまりよくなく，上部・前側を多く欠損すると思われる。火床部底面に赤色化した面はみられない。底面は中央やや前側で若干窪んでいるが，使用に伴う程度の窪みと思われる。堆積土は黒みが強いが，焼土粒をやや多く含む。

堆積土　ロームを含む暗褐色土である。斜面のためやや細かく分層できるが，ロームの包含は上層と下層で多く，中層でやや少ない。自然堆積と思われるが，やや不明瞭である。

出土遺物　カマド周辺からの出土が多い。図示できた遺物は８点である。１は千葉産の須恵器杯，２は新治窯産の須恵器杯，３はロクロ土師器杯，４は千葉産の須恵器甑，５は新治窯産の須恵器甕または甑，６は土製支脚である。７・８は鉄製品で，７は鉄鏃，８は刀子である。

１は完形で，破損もない土器である。底部外面に「高」の墨書がある。２は口縁・体部の一部を欠損するが，遺存のよい土器である。遺存部分は口縁・体部の破片６点と底部付近の破片１点の接合である。口縁・体部の破片は比較的似た大きさである。１は部分的に黒みが強く，２もやや赤みを帯びる部分がある。




第260図　SI－238

やや断定しがたいが，二次的に火を受けた可能性があると思われる。3は底部外面に「至」の墨書がある。底部から体部にかけての破片で，遺存は少ない。墨書は欠損部にかかっている。

4は把手1箇所をもつ上部の破片である。把手はやや小さいが，直方体状で，しっかりとした作りである。胴部外面の平行タタキは縦斜方向の後，横斜方向に施され，斜格子状となっている。5も口縁部を含む破片であり，遺存は少ない。灰白色粒・小石を多く含む。焼成は堅緻である。

6の上部はかなり細いが，磨耗したためかもしれない。7は完形の鉄鏃である。鏃身は鏨箭式で，関をもたない。鏃身の片面はやや平坦であり，その裏面はやや丸みをもつ。片丸造りと思われる。棒状部はやや長い。小振りの鉄鏃であるため，絶対的な長さはそれほどのものではないが，長頸鏃の範囲内のもので

あろう。棒状部は茎寄りで，若干台形状に広がり，茎との境が最も幅広である。茎は薄く，若干四面関状であるが，錆のため不明瞭である。篦被部分は突起をもたず，スカート状に開いて茎に至る。８は身と茎の破片である。切先側を若干欠き，茎尻側は多くを欠損する。身はかなり短いと思われる。背関は深く直角に切り込みが入る。刃関は刃が欠損しているため，不明瞭である。やや浅い関と思われる。

１はカマド右袖外脇の床面から出土し，２は主要部分がカマド左袖外脇の床面近くから出土した。ともに正位・倒位等の状況は不明である。２の破片３片は位置を特定できないが，２片はカマド内から出土しており，あまり散っていない。６もカマド左外脇で，北壁際の下層から出土した。４は北東隅寄りで，カマド右袖とP2の中間の床面から出土した。５・７・８は遺存するカマド左袖前方の床面から出土した。３は出土位置が不明である。

以上の遺物のうち，１・２・６はカマド廃棄の祭祀に関わるものと思われる。完形の鉄鏃７は破片の８と同一位置で出土した点で弱いが，同様の可能性が考えられる。あるいは８も祭祀に使われたものかもしれない。祭祀時に，支脚は本来の位置からはずされて，カマド左脇の床面近くか，左上方に置かれたものと思われる。左上方の場合は，比較的早い時点で転落したものである。なお断定しがたいが，下部の欠損が意図的であることも考えられる。完形の杯１がカマド右脇に，遺存のよい杯２がカマド左脇に置かれた。２の破損・欠損は土圧の影響も考えられるが，１が破損していないことから意図的な打ち割り・打ち欠きの可能性が高いと思われる。あるいは正位・倒位等の状況に違いがあるのかもしれないが，不明である。また鉄鏃７がカマド左袖前方に置かれたが，その際に左袖前側が破壊された可能性も考えられる。４・５については遺存が少なく，祭祀に関わるものとみるのは難しい。

図示しない土器片量はごく少量である。全体的にみて堆積土の遺存がやや少ないことを考慮しても，包含量は非常に少ない。祭祀終了後は，あまり遺物が入り込まなかったとみられる。

**重複遺構**　北側でSI－236と大きく重複し，本住居が切っている。

### SI－239（第261図，図版85）

**位置**　調査区中央北東寄りの24K－59グリッドを中心に位置する。

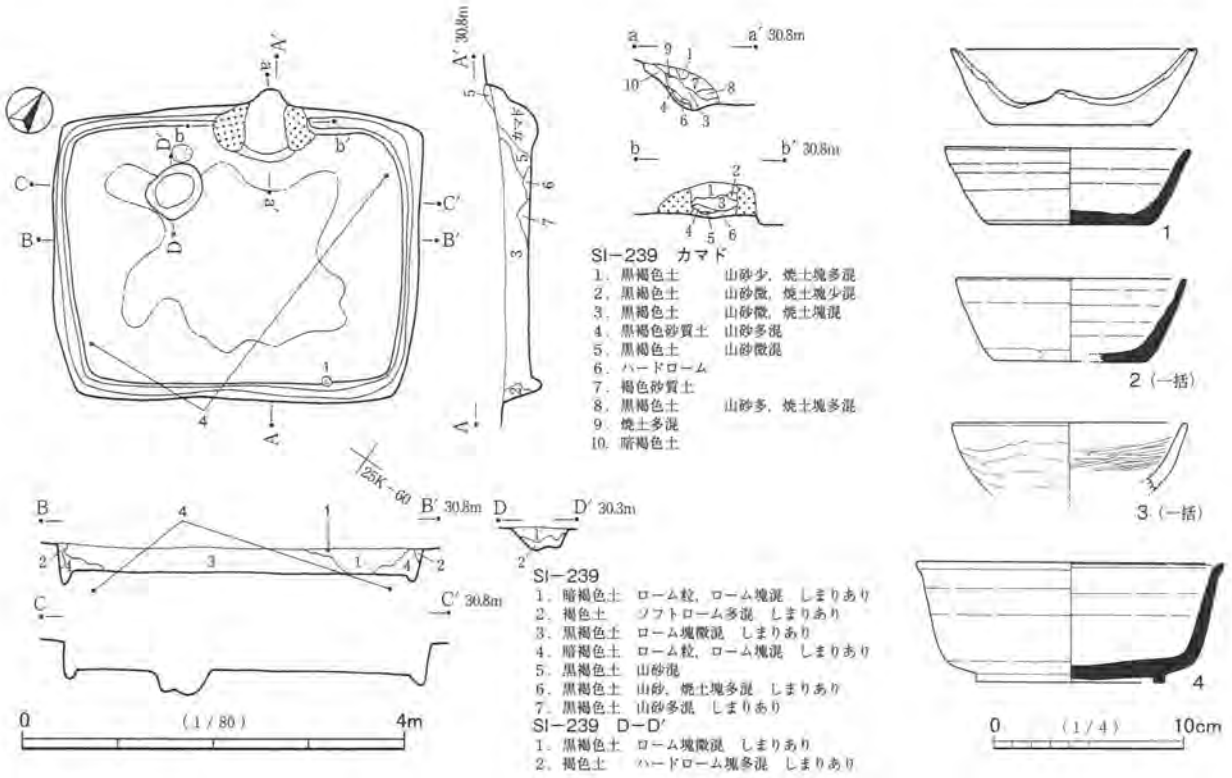
**形状・規模**　長さが3.1m，幅が3.9mの横長の方形をなす。確認面からの深さは30cm～45cmである。カマド部分周辺はやや高い確認面から発掘したため，他より若干遺存がよい。

**床面**　四隅・壁際を主体として貼床が施されている。掘りかた底面は凹凸が著しいが，床面からの深さは最大で20cmである。床面はほぼ平坦で，中央が硬化している。

**柱穴等**　左奥側の床面でピットが検出された。径は58cm×50cm，床面からの深さは20cmである。性格は不明である。後世の土坑か，本住居に伴うものであれば貼床部分を発掘したものと思われる。土層断面からは竪穴との切り合い関係をみることができなかったが，本住居よりも新しい土坑の可能性が高いように思われる。精査したが，出入口ピットは検出されなかった。主柱穴は存在しない。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁右寄りに位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖の遺存はややよい。しかし天井部等の構築材が前方に流出している。構築材は山砂を主体とするが，若干の黒色土を含む。また基底部はハードロームブロックを主体とする。両袖内側は赤色化している。火床部には特に赤色化した面がみられない。火床部底面の窪みは浅く，使用に伴う程度のものであろう。堆積土中・下層は黒褐色土主体である。焼土粒・塊を含むが，多量ではない。上層に天井部等が崩落したと思われる山砂が多くみられる。




第261図　SI－239

**堆積土**　黒褐色土主体で，ロームの含有は少ない。自然堆積と思われるが，やや不明瞭である。

**出土遺物**　図示できた遺物は４点である。１・２は千葉産の須恵器杯，３は非ロクロの土師器杯，４は永田・不入窯産の須恵器高台付杯である。

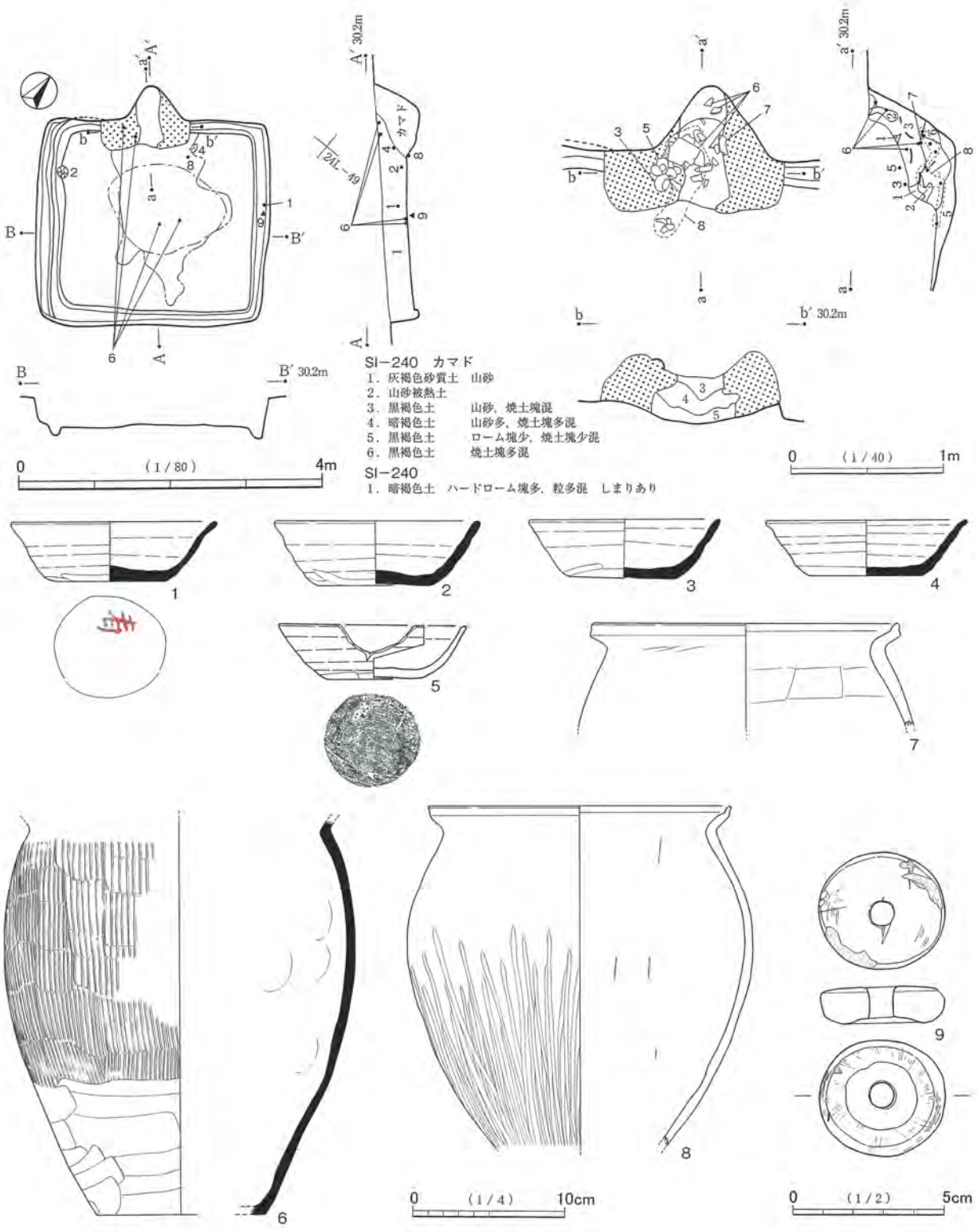
１は比較的遺存がよいが，口縁・体部を欠損する。欠損部は２箇所で，１箇所は大きく，もう１箇所は小さい。欠損部は口縁部周で合わせて1/2程度である。大きい方は図示したとおりの不整な「W」字状である。小さい方は逆三角形状である。その他には破損がない。欠損部は打ち欠きされたものと思われる。２は小破片である。３は口縁・体部の遺存は比較的よいが，体部下位から底部を欠損する。全体に煤が付着しており，二次的に火を受けたと思われる。４は1/4強の遺存である。胎土は若干の白色粒等を含むが，精良であり，焼成も堅緻である。底部内面は滑らかであるが，元々の質感と思われる。色調はやや明るい灰色である。

１は南東（前）壁際右寄りの確認面から正位で出土した。４は床面下の貼床土層中から広く散って出土した。２・３は小片であり，位置が不明である。１は最終的には祭祀に使用された遺物と思われる。しかし上層出土のため，出土状況に祭祀性があるか不明である。ただし出入口に近く，上方から落下した可能性も考えられるため，若干の可能性があるかもしれない。４は本住居廃棄以前の遺物であり，構築以前である可能性も高い。

図示した遺物は１を除いて遺存が少ない。また図示しない土器片量は非常に少量である。堆積土があまり厚くないが，本住居の廃棄後，少なくとも中・下層には，あまり遺物が入り込まなかったといえる。

### SI−240（第262図，図版85）

**位置**　調査区中央東寄りの24L－48グリッドを中心に位置する。確認面は北西から南東にやや下っている。




第262図　SI－240

**形状・規模**　長さが2.7m，幅が3.1mのやや横長の方形をなす。確認面からの深さは30cm～40cmである。

**床面**　ハードロームブロックを多く含む暗黄褐色土によって，全体に貼床が施されている。掘りかた底面は凹凸が著しく，規模の大きな掘り込みが４箇所ある。隅部・壁際よりもやや内側の方が深い。床面からの深さは最大で30cm強である。掘りかた底面上では，壁際で壁柱穴の可能性が若干ある小穴が20個程度検出された。床面からの深さは９cm～27cmである。しかし位置が不規則であり，壁柱穴と断定しがたい。

床面は西側がやや高く，東側がやや低い。硬化面はカマド前から中央を主体としてみられるが，廃棄時の床面の硬化面である。床面除去時にその数cm下から，もう一つの硬化面が検出された。やや範囲が狭いが，遺存が中央に留まったものである。以上のことから，床面はいったん硬化が進むまで生活した後に，大きく修復されたことがわかる。なお痕跡を残さない小さな修復は絶えず行われていたことが考えられる。

**柱穴**　主柱穴・出入口ピットは床面上及び床面除去後も検出されなかった。

**壁溝**　全周する。左（南西）壁の壁溝はやや内側に位置する。底面からの立ち上がりが直線的でなく，段状である。

**カマド**　北西壁ほぼ中央に位置する。方形プランからやや大きく突出する。確認面下の遺存はかなりよい。構築材は山砂を主体とし，若干の暗褐色土を含むが，基底部付近はハードロームブロックの含有が多い。カマド内の堆積土は全体に黒みが強いが，中層は焼土粒・塊の含有が多く，赤みもやや強い。しかし火床部に赤色化した面はみられない。カマド底面の窪みは広く，やや深い。両袖はその上部に構築されている。カマドは，やや深く掘り込まれた掘りかた上に構築されたものであろう。

**堆積土**　ローム粒・ハードロームブロックを多量に含む暗褐色土である。一気に埋め戻されたものと思われる。

**出土遺物**　図示できた遺物は９点である。図示できない土器片と合わせて，中量の出土量である。遺存のよい土器がやや多いわりに，破片がやや少ない印象を受ける。カマド内及びその周辺から多く出土した。１～４は千葉産の須恵器杯，５はロクロ土師器杯，６は千葉産の須恵器甕，７・８は常総型の土師器甕，９は石製の紡錘車である。

１は底部外面に「有」の朱書がある。２・３・５は非常に遺存がよく，３はまったく破損のない完形品である。２は口縁部と底部をわずかに欠損するだけの土器である。遺存はよいが，全体にやや細かく割れている。５は口縁・体部の一部を逆三角形状に欠損する他は遺存する土器である。欠損部に続く口縁・体部が1/2以上割れて接合する。二次的な被熱が顕著で，内面は灰白色に変色した部分が多い。また赤みや黒みも内外面にみられる。器面は荒れ，わずかに剥離痕もある。出土位置と被熱の状況から支脚転用の可能性が考えられる。欠損部・破損部は打ち欠き・打ち割りされた可能性がある。１・４は1/2前後の遺存である。１の遺存部分は口縁・体部の１箇所が破損するが，それ以上の破損はない。４の遺存部分には破損がない。

７・８は胴部外面に山砂が若干付着している。８は常総型の甕としては，器壁が薄い。６は口縁部を欠くが，全体で1/2強を遺存する。

９の石材は滑石である。やや扁平な紡錘車である。完形に近いが，上面の角部分が所々でわずかに欠損する。下面の孔周囲が窪む。その部分を除いて擦痕が多くみられる。下面は放射状である。上面は不整であるが，一部に円周状の部分がある。側面も横方向である。

３・５はカマド左袖上部から並んで出土した。３が前，５が後ろである。ともにやや傾いた倒位の状態である。５の破損部も土器の形を保って出土した。またカマド内からは，６が中・上層，７が中層，８が下層から出土した。８は右袖前方の床面に散っているが，近い位置である。６は中央の床面にやや遠く散っている。４はカマド右袖外脇の中層から倒位で出土した。２は左壁際奥寄りの下層から正位で出土した。破損しているが形を保って出土した。１は右壁際中央わずかに奥寄りの中層から出土した。かなり傾いた正位の状態であり，横向きとする方がよいかもしれない。

3・5はカマド廃棄の祭祀に関わるものと思われる。出土状況から，祭祀時にその場に置かれたことと，袖のより上部からややずり落ちたことの二通りのことが考えられる。なお後者の場合でも，祭祀に伴うものであろう。カマド近くから出土した4は中層からの出土であるが，人為的堆積と思われるため，3・5とセットの可能性がある。その場合4の欠損部も打ち欠きされた可能性が高いと思われる。また左右壁際の中・下層から出土した1・2も竪穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性が考えられる。なお1は上方から落下した可能性も大いにあるが，朱書をもつことから，祭祀的な出土状況とみてよいと思われる。1の欠損・破損も打ち欠き・打ち割りされたものかもしれない。また2の破損も意図的な可能性があるが，2の場合は土圧等による影響も考えられる。カマド内から出土した6もカマド祭祀に関わる可能性がある。その際に口縁部と底部が除去された可能性があるが，胴部の欠損がやや多いため，若干不明瞭である。しかしより上層から確認できれば，6の出土量は増えたことが考えられる。欠損が意図的である可能性を保留しても，土器の遺存量から祭祀に関わる可能性が高いと考える。また8も同様の可能性があると思われる。

SI－241（第263図，図版86）

位置　調査区中央東寄りの25L－20グリッドを中心に位置する。確認面は北西から南東にやや下っており，傾斜し始める部分に構築されている。

形状・規模　方形と思われるが，遺存が悪く，規模は不明である。

床面　遺存していない。

柱穴　主柱穴・出入口ピットともに検出されなかった。

壁溝　図示した北西壁・北東壁の線はわずかに残る壁溝の遺存部分である。他壁の状況は不明であり，北西壁・北東壁の壁溝も南側にどれだけ続くか不明である。

カマド　北西壁に位置する。壁での位置は不明である。本住居はカマド痕跡があるために，認識されたものである。方形プランからやや突出する部分に若干の焼土がみられる。近くから炭化物も検出された。構築材の山砂はみられない。焼土部分の窪みは確認面から3㎝～5㎝程度の深さである。

堆積土　カマド部分の焼土や炭化物以外は，ほとんど遺存していない。

出土遺物　非常に少量であるが，遺存のよいロクロ土師器杯が1点出土した（1）。図示できた遺物はその1点のみである。底部外面調整は回転糸切り後無調整である。底径が小さく，器壁の薄い土器である。カマド左袖外脇の床面上に存在したものと思われる。あまり細かく破損していないが正位・倒位等の状況は不明である。本来はより遺存がよく，完形または完形に近い土器の可能性も考えられる。

SI－243（第263図，図版86）

位置　調査区中央北東寄りの25K－72グリッドを中心に位置する。

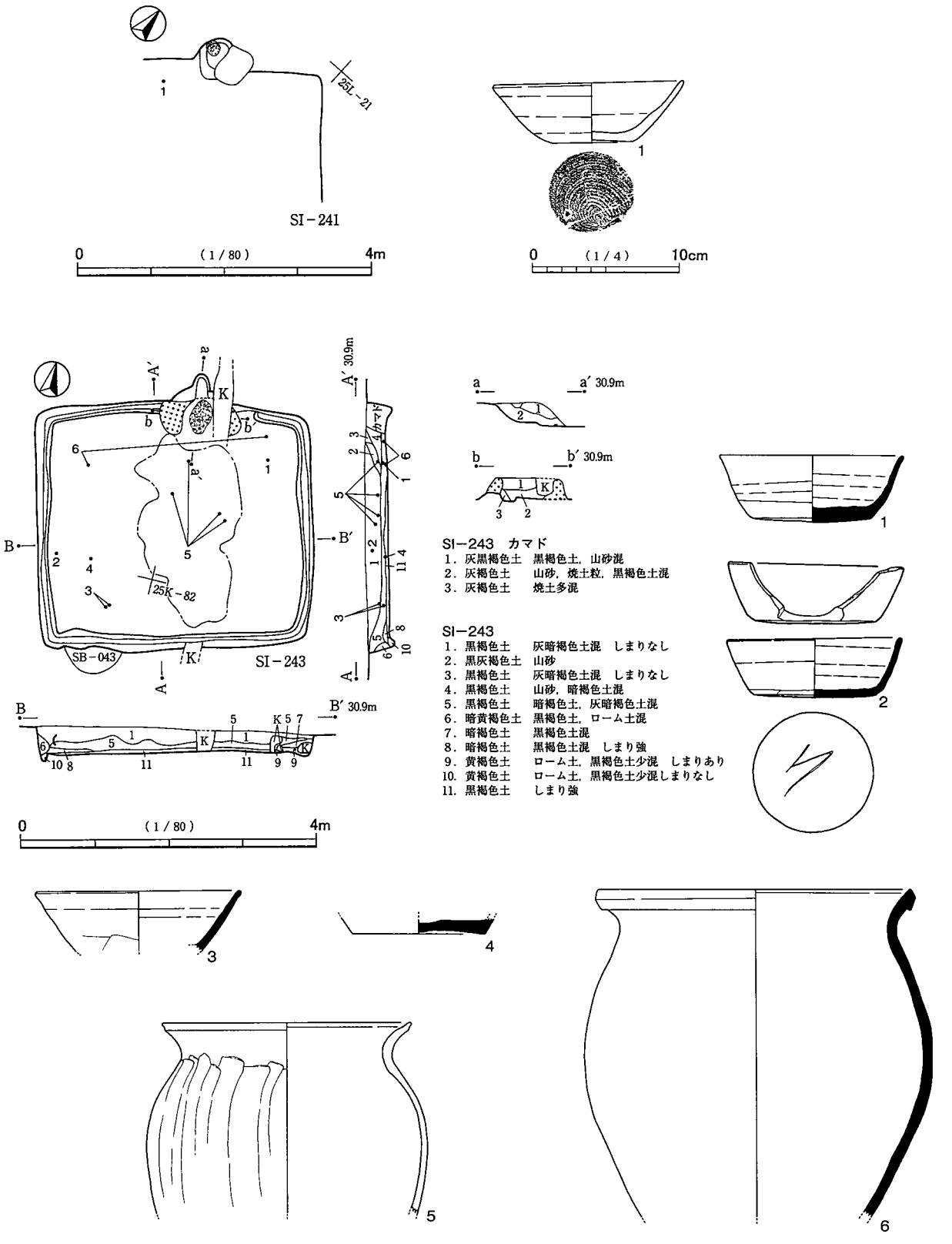
形状・規模　長さが3.4m，幅が3.8mのやや横長の方形をなす。確認面からの深さは20㎝～30㎝である。

床面　平坦で，左右の壁側を除いて硬化している。硬化は非常に強く，壁側との差が顕著である。

柱穴　出入口ピットは発掘時に検出することができなかったが，後に全景写真を検討したところ，南壁際中央やや右寄りに存在すると思われる。床面では方形にみえるが，周囲が硬化している影響かもしれない。現状で推定される形を破線で示した。ほぼカマドに対向する位置である。主柱穴は存在しない。

壁溝　全周する。

カマド　北壁やや右寄りに位置する。方形プランからの突出は小さい。現代の撹乱を受けて，右袖内側付近の遺存が悪いが，その他は比較的遺存がよい。なお撹乱は南壁側まで帯状に本住居を貫いている。構




第263図 SI－241・243

築材は山砂を主体とするが，下部は暗褐色土・ロームブロックの含有がやや多い。左袖内側は焼けて赤色化している。右袖も同様であったと思われる。火床部も赤色化した面がみられる。カマド内堆積土下層は山砂・焼土粒を多く含む。

堆積土　黒褐色土主体である。やや断定しがたいが，自然堆積と思われる。

出土遺物　少量であるが，遺存のよい土器を数点含む。分布は散在的であるが，カマド周辺がやや多い。図示できた遺物は6点である。1・2は千葉産の須恵器杯，3・4は新治窯産の須恵器杯，5は在地の土師器甕，6は千葉産と思われる須恵器甕である。

1は口縁端部をわずかに欠く箇所が多いが，完形に近い土器である。欠損は小さ過ぎるため，意図的なものとみることはできない。2は口縁・体部の一部を弧状に欠損するが，その他は割れもなく遺存する土器である。底部外面に記号と思われるヘラ書きがある。「S」字が直線的になったような形状である。欠損部は口縁部周で1/4程度であり，下部は底部周縁に達している。破断面は整った形態であり，打ち欠きされたものと思われる。器面はかなりざらつきがある。千葉産の須恵器であるが，頻繁な使用や二次的な被熱によることが考えられる。3は遺存が少ない。4は口縁・体部の全周を欠損するが，底部には欠損がない。底部内面が若干滑らかである。やや断定しがたいが，硯に転用された可能性がある。口縁・体部は意図的に除去されたものと思われる。

5は遺存が少ない。6は上半部の遺存がよいが，胴部下位の遺存は一部である。平行タタキの痕跡が胴部外面の一部にわずかにみられるが，ナデのためほとんど消されている。胴部内面の当て具痕も痕跡が弱く，器面はナデにより平滑にされている。色調は褐色であり，調整とともに土師器的な要素がみられる。

1は北東（左奥）隅寄りの下層から正位で出土した。2は西（左）壁際やや南（前）寄りの上層から横向きの状態で出土した。4は2の内側の下層から正位で出土した。6は下層出土であるが，カマドの両脇に広く散っている。3・5は中層出土である。下層出土でも，床面に密着したものはない。また2は上層出土であるが，上方から落下した可能性も考えられる。しかし1・2・4の出土状況に祭祀的様相をみるのは難しい。出土遺物がやや少量であるが，堆積土が埋め戻されているか判然とせず，むしろ自然堆積の可能性の方が高いと思われる。いずれにしても，竪穴廃棄後に多量の遺物が入り込んでいない。

重複遺構　南側でSB－043と重複し，本住居が切られている。ただし南西隅付近の一部を欠損するだけであり，影響は少ない。

SI－244（第264・265図，図版87）

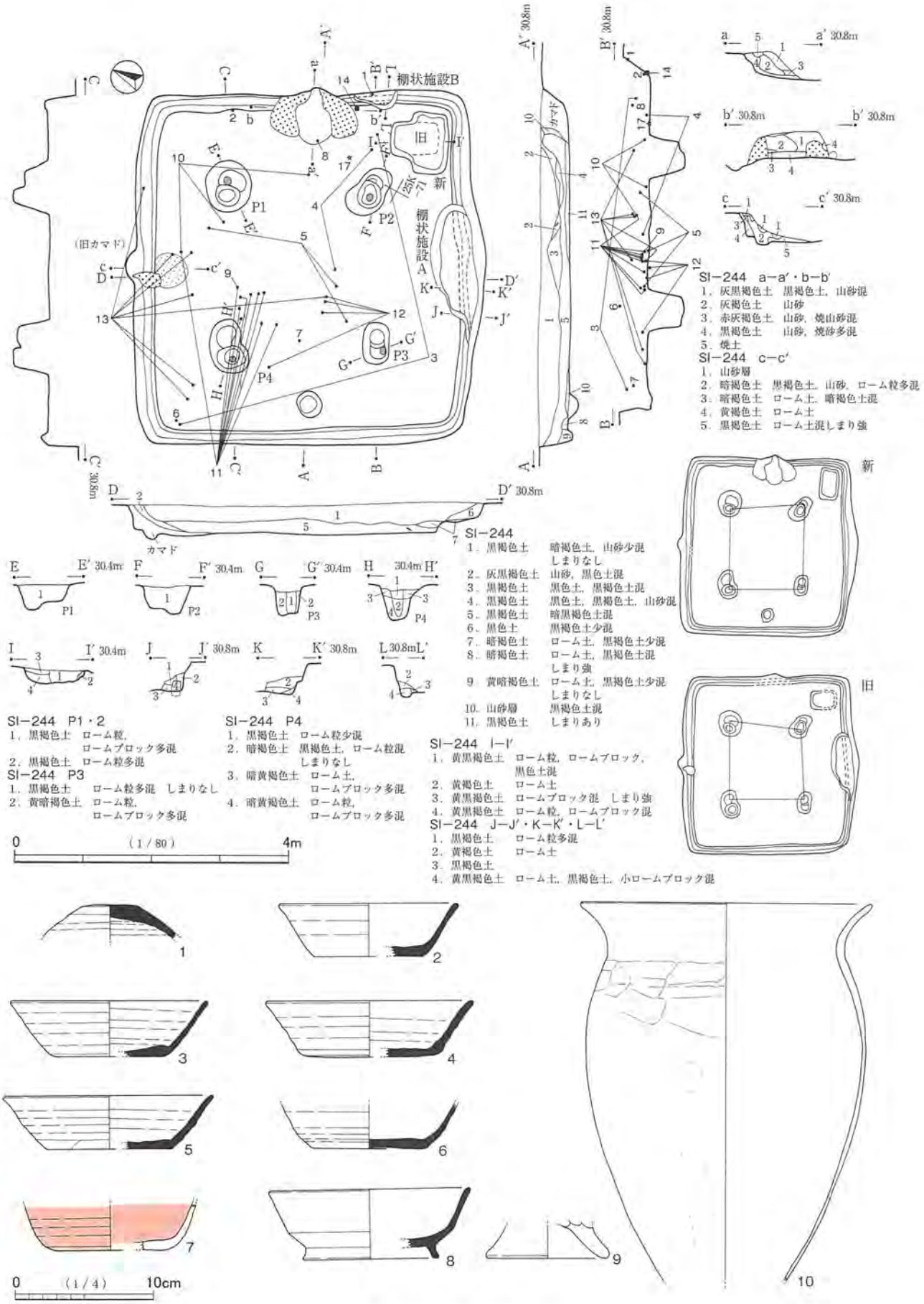
位置　調査区中央北東寄りの25K－60グリッドを中心に位置する。

形状・規模　新旧二つのカマドがあり，北東の新カマドを奥にしてみると，長さが5.2m，幅が5.0mの方形をなす。北西の旧カマドからみた場合は長さと幅が逆になる。確認面からの深さは50cmである。

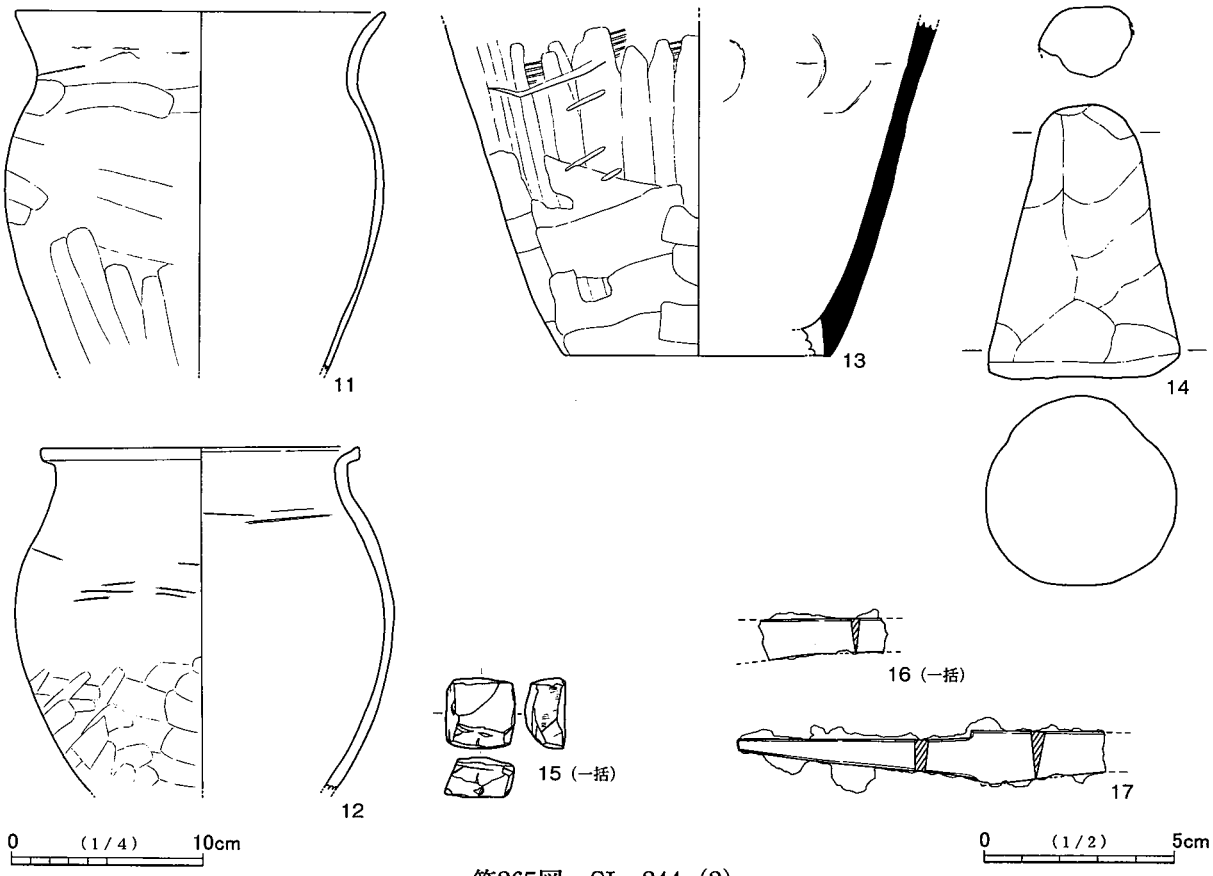
床面　四隅を主体として深く掘り込まれ，貼床が施されている。中央部分は貼床が施されていないか，薄い状態である。また一部の壁直下にも同様の部分がある。貼床を構成する土層は，ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土である。床面は平坦で中央がやや硬化している。

柱穴・貯蔵穴等　主柱穴が4箇所検出された。各柱穴は二つのピットが連接した形態である。また各柱穴の底面には，柱の当たりと思われる硬化部分がみられる。この部分は黒い染みと鉄分が付着している。堅くしまり，つるつるした触感をもつ。P1・P3・P4は1箇所の当たり痕が検出されたが，P2は2箇所みられる。このことと柱穴の形態から，本住居は建て替えられたことがわかる。新旧の竪穴に伴う主柱穴はやや判然としないが，現場での調査所見から，推定される対応関係を第264図中央右の1/160図に示した。

新竪穴に伴う出入口ピットが南西壁際中央で検出された。径は38cm，床面からの深さは13cmである。旧竪穴に伴う出入口ピットは検出されなかったが，南東壁際中央に存在したことが推測される。




第264図　SI－244 (1)




第265図　SI－244（2）

貯蔵穴が右奥（東）隅で検出された。新旧２箇所の貯蔵穴がある。ともに長方形の形態で，長軸が直交する状態で重複する。土層断面の様相から，竪穴の主軸に直交するものが旧貯蔵穴，平行するものが新貯蔵穴である。

南東壁際中央付近の土層は，下層が黒褐色土，中層が混じりけの少ないソフトロームである。この部分の壁がやや外側に広がっているため，壁が崩落したと思われるが，やや断定しがたい。南東辺の形態は当初からやや亀甲形状になることも考えられる。ここに棚や階段等の何らかの施設が存在した可能性がある。これを堆積土ではなく，何らかの施設とみて仮に「棚状施設Ａ」とすると，その規模は，長さが２ｍ，基底部の最大幅が65cm，上面の最大幅が50cm，床面からの高さは20cmである。「棚状施設Ａ」の両端は帯状の黒褐色土が若干延びており，「棚状施設Ａ」や壁に関わる何らかの痕跡の可能性がある。長さは不明であるが，北側の部分で，底部端から30cm程度と思われる。なお旧竪穴の出入口ピットが判然としないのは，「棚状施設Ａ」が存在することによるのかもしれない。

「棚状施設Ａ」が何らかの施設であるならば，棚状の施設はもう１箇所存在する。これを「棚状施設Ｂ」とすると，「棚状施設Ｂ」は北西壁際で，新カマドと貯蔵穴の間に位置する。規模は，長さが65cm，基底部の幅が28cm，遺存する上面の幅が20cm，床面からの高さが25cmである。構成する土層は，「棚状施設Ａ」と同様である。なお「棚状施設Ａ」・「棚状施設Ｂ」については，存在が成り立つか不明瞭であり，可能性の指摘に留める。

壁溝　全周する。

カマド　建て替え後の新カマドが北東壁中央に位置し，建て替え前の旧カマドが北西壁中央に位置する。ともに方形プランからの突出は小さい。旧カマド構築材は多くが除去されているが，左袖の下部が一部遺

存している。また床面に焼土範囲がみられるが，火床部の遺存である。

新カマドは比較的遺存良好である。両袖から続いて後天井の一部まで遺存する。両袖内側・煙道部奥壁及び火床部底面は焼けて赤色化している。底面は床面から窪まず，ほぼ平坦に続く。むしろ煙道部側はやや高まって煙道部の壁に続く。堆積土は下層に焼土を多く含むが，やや黒みも強い。その上部は崩落した山砂を多く含む。

**堆積土**　黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。主柱穴P3・P4は柱状の土層が観察され，柱痕と思われる。柱痕の土層は黒褐色土・暗褐色土，周囲は暗黄褐色土である。柱痕部分は周囲に比べ，ロームの含有が少ない。P1・P2の柱の根本部分が遺存していたと思われるが，土層断面で把握することができなかった。

**出土遺物**　やや多量の遺物が出土した。全体的に散った分布であるが，南東壁側中央がやや少ない。図示できた遺物は17点である。１は東海産の須恵器杯蓋，２～６は新治窯産の須恵器杯，７はロクロ土師器杯，８は新治窯産の須恵器高台付杯，９は武蔵型の土師器台付甕，10・11は武蔵型の土師器甕，12は常総型の土師器甕，13は新治窯産の須恵器甑，14は土製支脚，15は砥石，16・17は鉄製の刀子である。

１は蓋として図示したが，口縁部を欠損するため，杯の可能性もある。遺存はやや少ない。色調はやや暗い灰色で，断面内部はわずかに赤みを帯びる。外面に若干の自然釉が付着する。胎土は精良で，焼成は堅緻である。湖西窯産と思われる。他の遺物よりもかなり古い時期のものであり，混入品である。

２～８の杯類はいずれも遺存が少ない。７は内外面とも赤彩され，底部外面は回転ヘラケズリが施されている。内面の一部に煤が付着している。油煙の可能性があるが，遺存が少なく，不明瞭である。破損後に付着したようにも思われる。

９は脚部の破片で，端部の1/2程度が遺存する。10の胴部上位は1/2強が遺存する。外面に山砂が付着している。器面はかなり磨耗している。11は全体の遺存が少ないが，口縁部の遺存がかなりよい。器面はあまり磨耗していない。12はやや小型の常総型甕である。口縁部・胴部上位は割れているが，欠損はない。胴部外面上・中位はナデ，下位はヘラケズリが施されている。胴部外面上位に断続的に周回するヘラの当たり痕がみられる。ヘラケズリ以前にヘラミガキが施されたと思われるが，調整順としては逆の印象がある。胴部内面はナデ・ヘラナデが施されている。13はかなり大型の甑である。底部は５孔式である。色調は灰色で，焼成は堅緻である。胎土は白雲母や白色の小石を多く含む。

14は短いが遺存の良好な支脚である。欠損は上端面付近の一部で，下面は遺存する。15の石材は流紋岩で，硬く，やや緻密な材質である。方柱状の砥石で，小口面側の一部が遺存する。上下面・左右の両側面の４面がみられる。４面のうち，１面は凹凸やざらつきがあり，あまり使用されていない面である。図上部の平面を図化していない面が相当する。この面を下にした可能性があるが，遺存が少ないため，やや断定しがたい。残る３面はよく使用され，平滑である。一部に筋状の研ぎ痕がみられる。左上図は小口面側からみた図である。小口面及び折損面は凹凸やざらつきがあり，ほとんど使用されていない。

16は身の破片である。切先側と関は遺存していない。17は身のやや茎寄りから茎尻までの破片である。切先側はやや多く欠損する。錆のためにもろくなっている。背関は直角に切り込みが入る。刃関は斜めの切り込みか，直角関か不明瞭であるが，浅いものであろう。柄の木質が茎の裏面の一部に付着している。

14はカマド右袖外脇の床面から横に倒れた状態で出土した。本住居で使用されていたものが，遺棄された可能性がある。カマド廃棄の祭祀に伴い，外脇に置かれたことも考えられるが，その他の遺物に祭祀的

様相をみることが難しく，14だけでは判然としない。遺物の出土層位をみると，14以外で下層から出土したものに，２・４・９・12・17がある。このうち12・17は比較的遺存がよいが，他は遺存が少ない。また４・12はやや広く散っている。出土遺物には４・12以上に広く散っているものが目立ち，３・５・10・11・13を指摘できる。出土遺物の多くは廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－245A（第266図，図版87）

**位置**　調査区中央北東寄りの25K－80グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.5m，幅が3.9mのやや横長の方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

**床面**　全体に数cm～15cm前後の厚さで，貼床が施されている。貼床を構成する土層は，ローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土である。壁側が概して深いが，やや浅い部分もある。また中央もやや深い部分がある。貼床はやや黒みが強く，検出に困難な部分があった。そのため，発掘した床面はやや凹凸があるが，本来は平坦であったと思われる。左右の壁際を除いて硬化しており，特に中央が顕著である。

**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は46cm×33cm，床面からの深さは10cmである。主柱穴は存在しない。

**壁溝**　西壁南側付近では検出できなかったが，床面を掘り過ぎたと思われる。その他は巡っており，本来全周とみてよいであろう。

**カマド**　北壁やや左寄りに位置する。方形プランからやや大きく突出する。両袖は上部の遺存がやや悪いが，下部は遺存している。火床部は赤色化した面がみられない。カマド前側は竪穴の掘りかたがかなり深い。堆積土は中央の下層と煙道部側の下層に，焼土が多い。

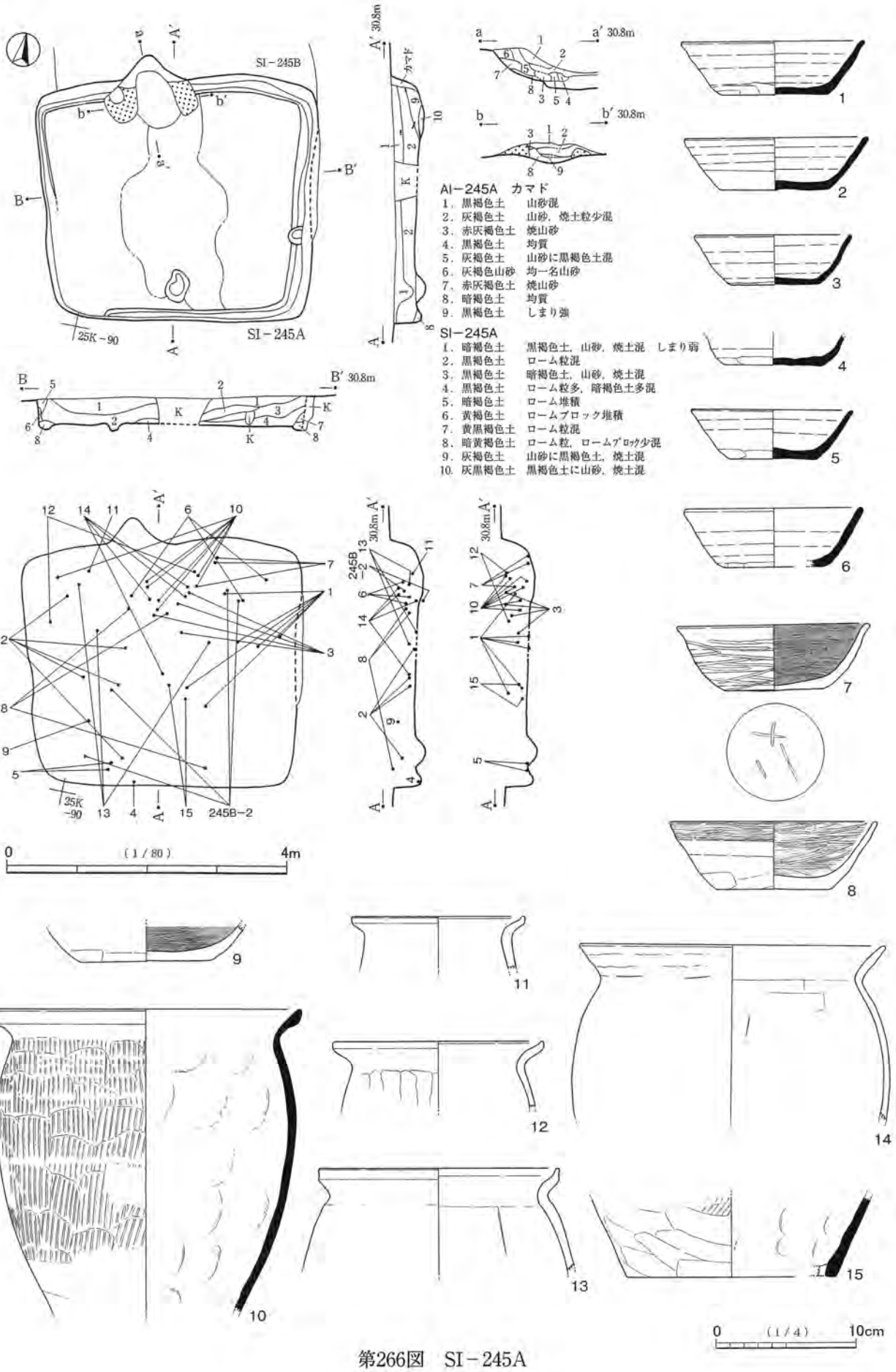
**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　土器片については重複するSI－245Bとの区別が付いていないため，総量が不明瞭である。しかし分布状態から本住居のものが非常に多く，SI－245Bのものが少ないと思われる。したがって本住居の遺物量はやや多量といえよう。分布は概ね全体的であるが，北側が多く，南東側が少ない。図示できた遺物は15点である。図示できない土器片量に対して，比較的高い割合である。１～６は千葉産の須恵器杯，７～９はロクロ土師器杯，10は千葉産の須恵器甕である。11～14は土師器甕で，13が常総型，他は在地の甕である。11・12は小型の甕である。15は千葉産の須恵器甑である。

図示した杯のうち１～３・５・７の５点は80％程度以上の遺存であり，比較的遺存のよいものが多い。しかし５を除いて全体的に若干割れており，欠損・破損に意図的な様相をみるのは難しい。５も破損は少ないが，同様である。７は底部外面にヘラ書きがある。２条の交差線「＋（×）」と２条の平行線「＝」であるが，弱く浅いため，一見してわかりやすいものではない。７・９は内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。また８も内面にヘラミガキが施されているが，黒色処理は施されていない。５は外面の所々に煤が付着している。煤はやや光沢があり，灯明具であった可能性もあるが，断定しがたい。７・９は器面が荒れている。

10は全体で1/2程度が遺存する。タタキ目痕は明瞭である。11～13は一部の破片であり，14も遺存が少ない。13は口縁部が1/3強遺存するが，胴部の遺存が少ない。11は被熱により，器面が著しく荒れ，赤色化や焦げ付きによる口縁部内面の黒ずみが顕著である。14の口縁部外面は接合痕が目立つ。15も遺存が少ない。底部は５孔式であるが，周縁孔の一部がみられるのみである。

甕はカマド周辺から出土したものが多い（10・11・12・14）。しかし出土層位は概して床面から浮いている。




第266図　SI－245A

その他の遺物の出土層位も，多くが同様である。４・５が床面から出土したが，それら以外は一部に床面から出土する破片があっても，接合する他の破片は浮いている。また多くが散って出土している。出土遺物はそのほとんどが，単に廃棄されたか流入したものであろう。

**重複遺構**　北側でSI－245Bと重複し，本住居が切っている。また西壁側やや南寄りや中央で，径70cm～80cmのピット２箇所に切られている。ピットは掘立柱建物の柱穴かそれ以降の土坑と思われる。なおピットについては，遺構番号を付与していない。

**SI－245B**（第267図，図版87・88）

**位置**　調査区中央北東寄りの25K－80グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　幅が3.7mの方形をなす。確認面からの深さは35cmである。長さは3.6m以上であるが，正確な数値が不明である。あまり幅と変わらない可能性がある。

**床面**　SI－245Aと重複する影響で，西側をわずかに掘りすぎたと思われ，若干低くなっている。その点を考慮すると，ほぼ平坦である。硬化面については，中央が遺存しないため，判然としない。

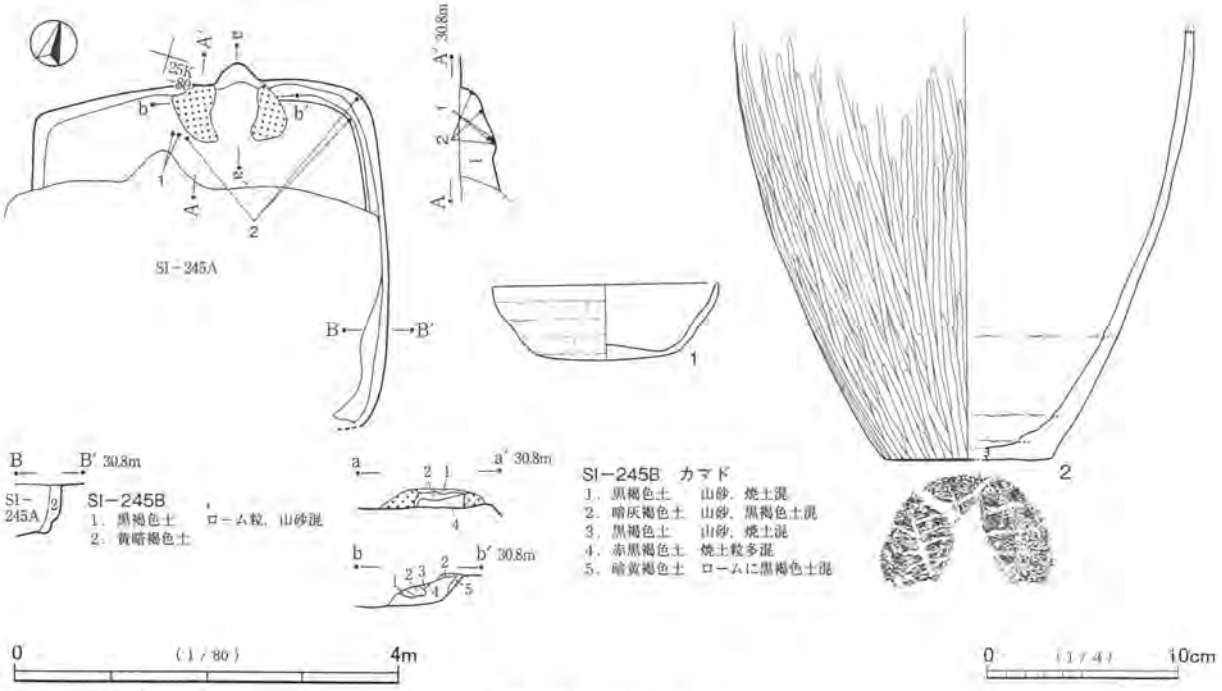
**柱穴**　出入口ピットが南壁際中央に位置する可能性があるが，SI－245Aに破壊されていると思われる。主柱穴は存在しない。

**壁溝**　北東側は巡る。北西側は検出できなかったが，全周する可能性があると思われる。

**カマド**　北壁やや右寄りに位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖が遺存するが，右袖の遺存がやや悪い。上部も若干流失している。火床部は赤色化した面がみられない。火床部底面は床面から窪まず，むしろ奥側はやや高まる。堆積土下層は焼土粒を多く含むが，やや黒みも強い。

**堆積土**　若干のローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土である。自然堆積と思われる。

**出土遺物**　SI－245Aで記述したとおり，土器片についてはSI－245Aのものと混在している。総量が不明瞭であるが，本住居のものは少ないと思われる。本住居のものとして明瞭な遺物の分布はカマド周辺で，散在的である。図示できた遺物は２点である。１は非ロクロの土師器杯，２は常総型の土師器甕である。




第267図　SI－245B

1は器壁が薄い点では作りがよいが，体部外面に接合痕がみられ，つなぎ目部分はやや雑な作りである。全体的にやや黒ずんでいる。2はヘラミガキが胴部のやや上位まで及んでおり，比較的丁寧な作りである。

1はカマド左袖外側前方の床面から出土した。2は1近くの床面と北東隅の中・上層から出土した。

**重複遺構**　南側でSI－245Aと大きく重複し，本住居が切られている。

**SI－246A・SI－246B**（第268・269図，図版87・88）

**位置**　調査区中央北東寄りの25K－90グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　四方の床面・壁が拡張された竪穴住居である。拡張の幅は各壁側とも大差がなく，概ね40㎝～50㎝である。拡張後の竪穴をSI－246A，拡張前の竪穴をSI－246Bとして記述する。Aは，長さが3.2m，幅が3.3mの方形をなす。確認面からの深さは40㎝である。Bは，長さが2.4m，幅も2.4mの方形をなす。Bは壁が遺存しないので，掘り込みの規模は上記の数値を上回る。確認面からの深さは45㎝であり，Aよりやや深くなる。Aの形態は，西辺が他より長いため，若干台形状である。

**床面**　Bの床面はほぼ平坦で，左右（東西）の壁側を除いて硬化している。Aの床面でB部分は，貼床が施されている。貼床を構成する土層は，ローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土である。貼床は薄く，場所によってはBの床面を整えた程度である。Aの床面もほぼ平坦である。中央がやや硬化しているが，A・Bの硬化面を明瞭に区別することはできない。

**柱穴**　出入口ピットが南壁側中央で検出された。Bの南壁際の位置であり，Bに伴うものであろう。遺存するAの南壁際では検出されなかった。拡張後も継続して機能したことも考えられるが，壁からやや離れており，断定しがたい。ピットの径は，32㎝×29㎝，Bの床面からの深さは12㎝，Aの床面からの深さは16㎝である。主柱穴は存在しない。

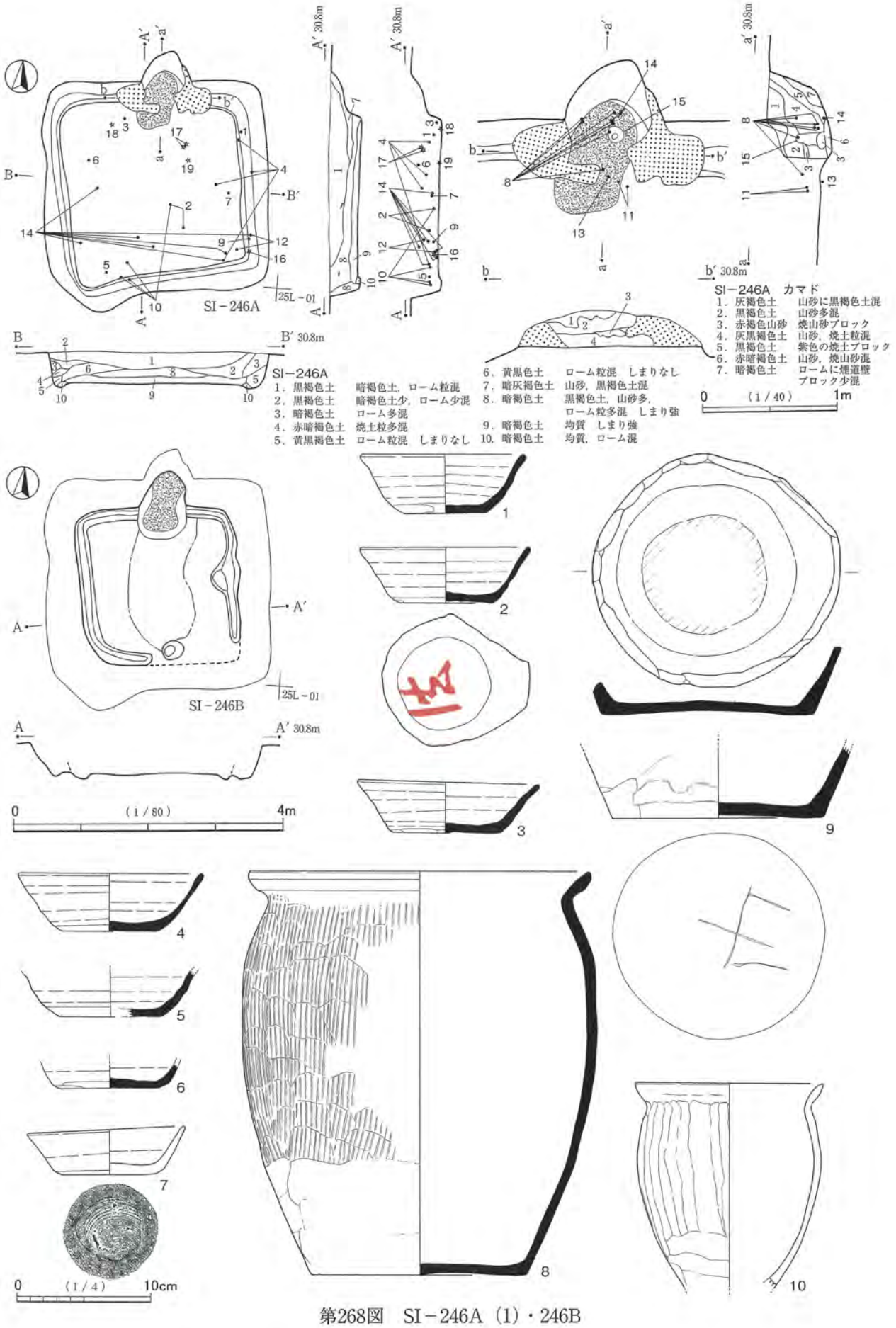
**壁溝**　A･Bとも全周する。Bの壁溝は南壁右（東）側で遺存していないが，本来は存在すると思われる。

**カマド**　A・Bとも北壁やや右寄りに位置し，方形プランからの突出はやや大きい。北壁が拡張されたときに，カマドも北に移行して作り替えられている。Aのカマドは上部が流失しているが，下半部の遺存はよい。天井は崩落しているが，部分的に左右の袖から続いて遺存している。構築材は山砂主体であるが，若干の黒褐色土を含む。右袖内側は赤色化した部分が遺存している。火床部底面も広く赤色化しているが，前側は貼床の下に続いており，Bの火床部底面が重なっている。土製支脚（15）が火床部奥側から立った状態で出土した。最終的な使用時の位置を留めるものであろう。支脚下端面は底面からやや浮いている。最終的な火床面は底面よりもやや上方であったと思われる。堆積土下層は焼土粒・焼土化した山砂を主体とする（6層）。中層は黒みが強く，天井部崩落前の堆積土である。上層は崩落した山砂を多く含む。

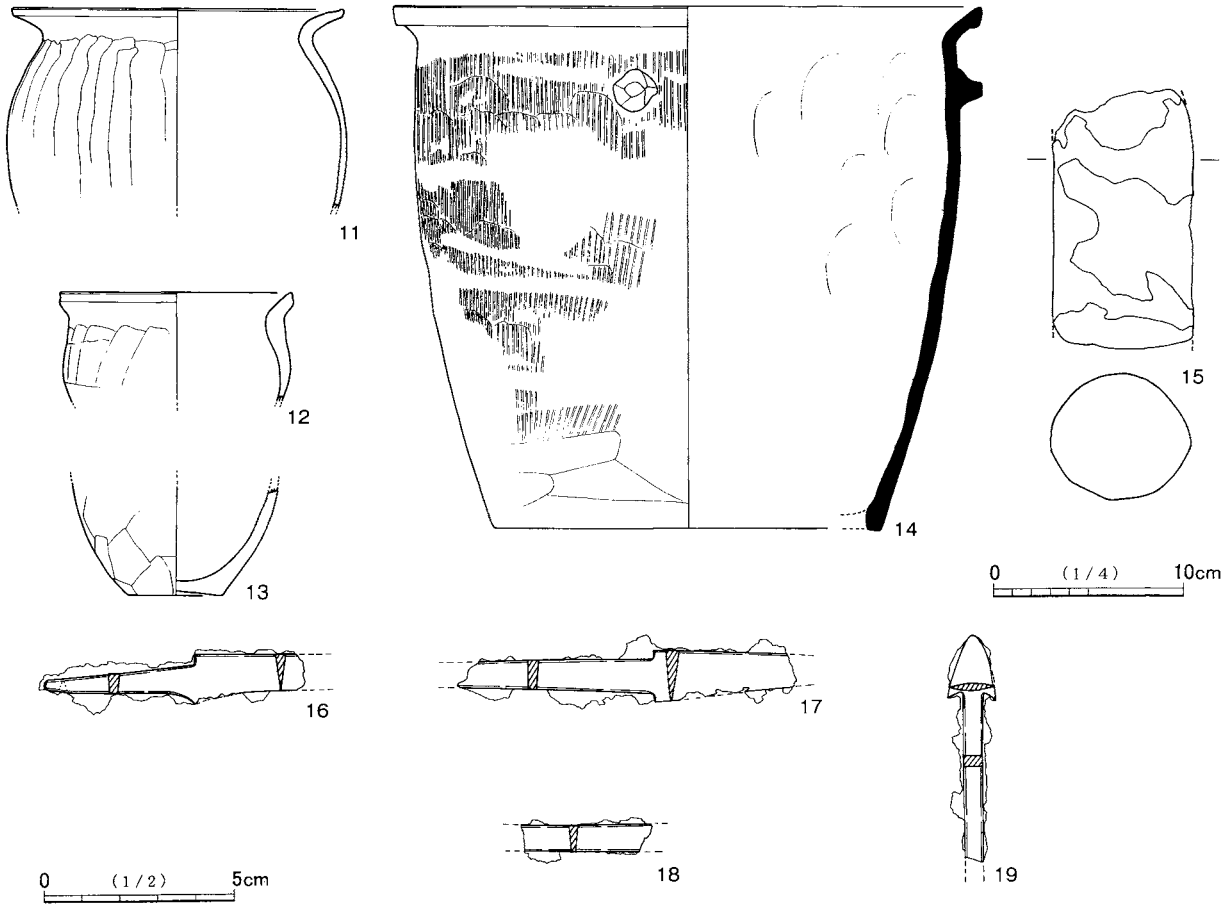
Bの構築材は当然のことであるが，完全に除去されている。しかし底面では赤色化した火床面が検出された。火床面はAの火床面からくびれて続くものであるが，Aよりもやや左（西）に寄っている。Aの竪穴と比べ，やや壁中央寄りに位置する。

**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体である。中層（8層）はローム粒の含有が多いが，上層（1層）は少ない。自然堆積と思われる。なお8層は山砂を多く含むが，その下の9層は含んでいない。9層が堆積した後にカマドの崩落が始まったものと思われる。

**出土遺物**　やや多量である。全体に分布するが，カマド内や北側にやや多い。図示できた遺物は19点である。1～6は千葉産の須恵器杯，7はロクロ土師器杯，8・9は千葉産の須恵器甕である。10～13は小型の土師器甕で，在地の土器である。14は千葉産の須恵器甑，15は土製支脚である。16～19は鉄製品で，16




第268図　SI－246A（1）・246B




第269図　SI－246A（2）

～18は刀子，19は鉄鏃である。

1は完形で，まったく破損がない。器面は荒れており，やや判然としないが二次的に火を受けているかもしれない。2は底部外面に「法」の朱書がある。底部及びその周辺が遺存するが，口縁・体部の遺存は一部である。3・4は60%程度の遺存であるが，5・6は遺存が少ない。7は口縁部の一部を欠損する以外は破損がない遺存良好な土器である。欠損部は打ち欠きされた可能性があるが，やや判然としない。

8の遺存は多くないが口縁部から底部まで遺存する。二次的な被熱により，接合面を境に色調の異なる破片がある。9は底部と胴部下位の一部が遺存する。底部には欠損がない。外面にヘラ書きがある。「巾」に似た形であるが，2条の直交線「＋（×）」と2条の平行線「＝」を組み合わせた記号であろう。底部外面は一部に煤が付着しており，二次的に火を受けたことが考えられる。底部内面中央は磨られており，滑らかで若干の光沢もある。胴部の破断面は小さく弧状に連続する部分がみられる。意図的に除去され，硯等に転用された可能性が考えられる。胴部下位は一部に遺存のよい部分があり，海側奥の立ち上がりの可能性がある。しかし底部内面に墨痕はみられない。そのため実際に硯であったか判然としないが，転用品であることは確実である。

10は口縁部から胴部下位まで半周弱程度の遺存である。胴部外面に煤が顕著に付着する部分がある。11は遺存が少ない。胴部は丸みをもち，器壁が薄い。12・13は被熱の状況から同一個体と思われる。強く長期に火熱を受けたと思われ，ともに赤みが強く，灰白色に変色する部分も多い。12の外面は磨耗も著しい。12・13は支脚に転用された土器と思われる。14も遺存が少ない。そのため図示した復元形は底部が大き過ぎると思われる。把手が1箇所遺存する。かなり崩れた形態で，接着も雑である。

16・17は身・茎の破片である。16・17とも切先側を多く破損する。16は茎尻が遺存する。16・17の背関は直角に切り込みが入る。17の刃関は斜めに切り込みが入る。16の刃関は錆のためにやや不明瞭であるが，かなり斜めになっていると思われる。背関よりもやや茎尻側に関をもつことも考えられる。18は茎の破片である。茎尻を欠き，関も遺存しない。19は切先から棒状部の途中まで遺存する鉄鏃である。鏃身は長三角形式で，浅い逆刺をもつ。錆膨れが顕著である。鏃身は小型で，棒状部も細い，小振りの鉄鏃である。

8・11・13・14はカマド内から出土した。8の出土層位は中・下層で，支脚15の周囲から出土した破片が多い。11は前側の下層から，13も前側の底面から出土した。14は奥側の底面から出土した。14は竪穴の前・左右の壁際まで広く散っている。出土層位は下層から上層に及ぶ。その他の遺物の出土層位も床面から上層にわたっている。遺存のよい1や9は東壁際下層からの出土であるが，詳細な様相は不明である。カマド内のものを含めて，出土遺物に祭祀的様相をうかがうことは難しく，多くが単に廃棄されたか流入したものと思われる。

SI－247（第270図，図版88）

**位置**　調査区中央やや北東寄りの24L－08グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.2m，幅が3.3mの方形をなす。ほぼ確認面上で床面が検出された。形態は比較的整った方形であるが，東（右奥）隅がやや張り出した形態である。

**床面**　平坦で，中央が硬化している。硬化は顕著で，周囲との差が明瞭である。壁側の床面は若干損なっている。

**柱穴等**　3箇所のピットが検出された。P1は左前（西）隅，P2は左（北西）壁際中央，P3は右前（南）隅に位置する。また右奥（東）隅部分も黒みの強い部分があり，掘り下げたが，不整形であり，ピットにはならなかった。P2は位置・規模から出入口ピットの可能性があるが，カマドに対向する位置ではなく，判然としない。なお右（南東）壁にカマドの痕跡はみられない。P1は貯蔵穴の可能性があるが，P3の性格は不明瞭である。本竪穴に伴うものかどうかも判然としない。土坑・ピットの分布は至近の位置には密集していないが，北方や南方にはみられるため，3箇所のピットは他の遺構の可能性も若干考えられる。なおP1・P3は掘りかたの可能性もあるが，ともに整った形態である。P1は深さもあるため，それについても判然としない。P1は，上端の径が75cm×70cm，床面からの深さが36cm，底面の径が52cm×49cmである。P2は，径が35cm，深さが13cmである。P3は，上端の径が53cm×48cm，床面からの深さが13cm，底面の径が35cm×28cmである。主柱穴は存在しない。

**壁溝**　カマド左側で検出できなかったが，浅いことと床面の遺存が悪いためと思われる。その他は巡っており，本来全周とみられる。

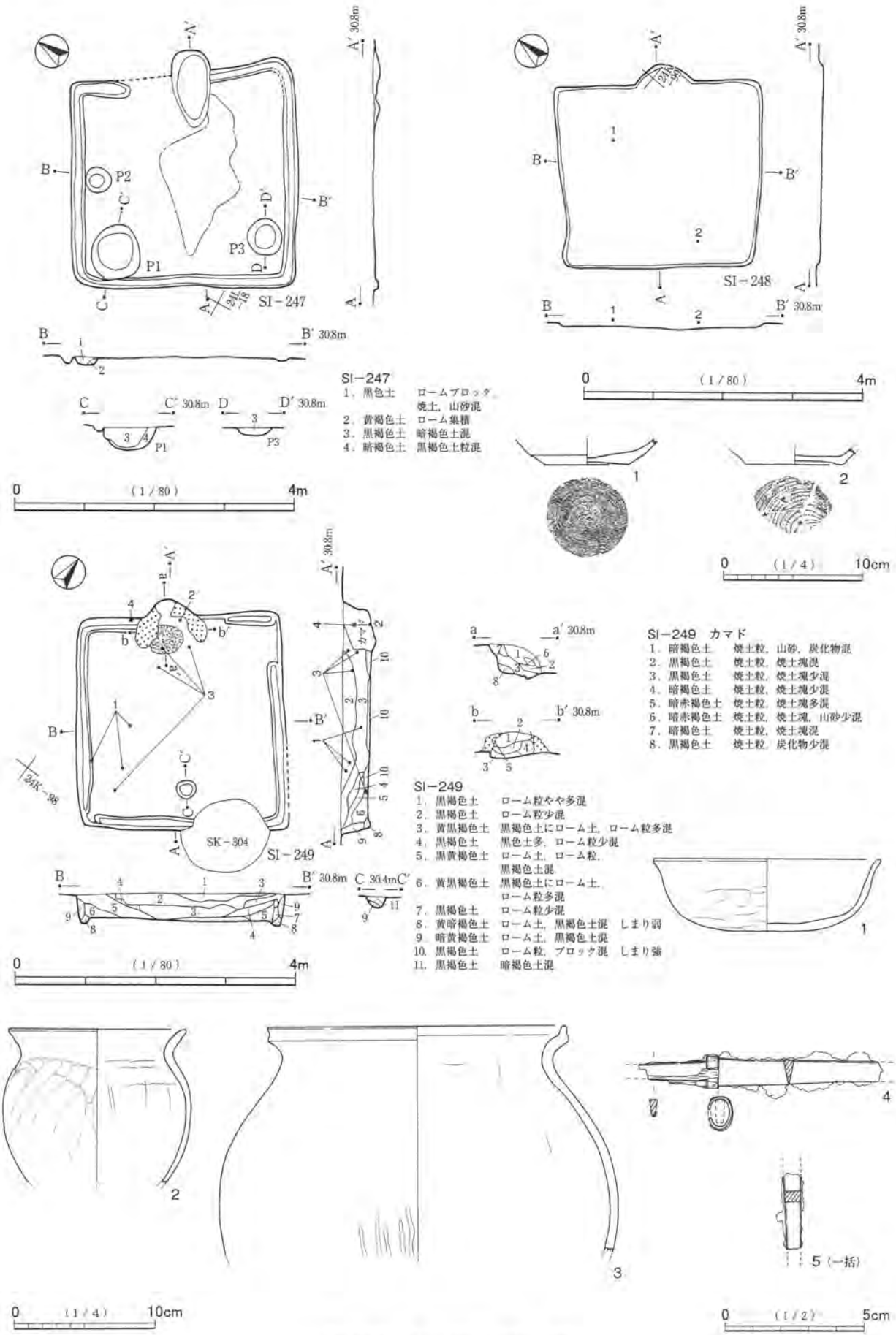
**カマド**　北東壁中央に位置する。底面の窪みのみの遺存である。若干の焼土粒・山砂を含む黒色土が堆積する。赤色化した被熱面は遺存していない。

**堆積土**　カマド部分がわずかに残る程度であり，ほとんど遺存していない。P1・P3の堆積土は黒褐色土主体である。P2も黒褐色土主体であるが，若干のロームブロックを含む。

**出土遺物**　ごく少量の出土である。図示できるものはない。

**その他**　出土遺物は奈良・平安時代の土器主体と思われるが，竪穴の時期を決定できるものはない。そのため帰属する時代が不明瞭であるが，周囲の様相から奈良・平安時代の可能性が高いと思われる。

SI－248（第270図，図版88）




第270図　SI－247・248・249

位置　調査区中央やや北東寄りの24K－98グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが2.7m，幅が3.0mの方形をなす。確認面からの深さは数cm～８cm程度であり，床面付近がわずかに遺存する竪穴住居である。

床面　ほぼ平坦である。硬化面はみられない。

柱穴　出入口ピットは検出されなかった。主柱穴は存在しない。

壁溝　検出されなかった。

カマド　北東壁中央に位置する。煙道部側が若干突出する。両袖等の構築体は遺存していない。カマド部分の堆積土に若干の焼土と山砂がみられるが，赤色化した火床面は遺存していない。

堆積土　黒褐色土である。

出土遺物　少量の出土で，散在的に分布する。図示できた遺物は２点である。１・２ともロクロ土師器杯である。ともに底部周辺の破片であり，遺存が少ない。１は回転糸切り後，底部周縁と体部下位に回転ヘラケズリが施されているが，２の底部は回転糸切り後無調整である。１はやや左奥側から，２は右前側から出土した。

SI－249（第270図，図版89）

位置　調査区中央北東寄りの24K－88グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.1m，幅が3.0mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

床面　部分的にローム粒・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土で貼床が施されている。貼床の厚さは最も厚いところで10cm強である。床面は平坦で，中央がやや硬化している。

柱穴　出入口ピットが南東壁側中央で検出された。径は26cm，床面からの深さは16cmである。壁直下ではなく，やや内側に位置する。主柱穴は存在しない。

壁溝　右（北東）壁北側と左前（南）隅で途切れるが，浅いためと思われる。床面が貼床を施されていることを考慮すると，全周とみてよいであろう。

カマド　北西壁中央からわずかに左寄りに位置する。方形プランから若干突出する。両袖は前側の遺存がやや悪いが，中央から奥側は比較的よく遺存し，後天井の一部も遺存する。構築材は山砂を主体とするが，下部は暗褐色土を含む。両袖内側は赤色化している。火床部底面は赤色化した面がみられないが，やや硬化している。底面は床面よりも若干窪んでおり，一部でやや深いが，カマド使用による程度のものと思われる。堆積土は焼土粒・焼土ブロックを含むが，概して黒みも強い。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体である。ローム粒の包含は最上層と下層にやや多く，中層に少ない。自然堆積と思われる。

出土遺物　やや少量の出土である。分布はカマド内から前方にやや多い。図示できた遺物は５点である。１は非ロクロの土師器杯である。２・３は土師器甕で，２は在地の小型品，３は常総型の甕である。４・５は鉄製品で，４は刀子，５は用途不明である。

１は丸底気味の底部で，やや大振りの器形である。底部の遺存はやや多いが，口縁・体部の遺存は少ない。２は口縁部・胴部上位が半周程度遺存する。胴部外面の一部に焼けた山砂が付着している。３は胴部がかなり丸みをもつ。口縁部の遺存が比較的よいが，胴部の遺存は少ない。

４は身の途中から茎の途中まで遺存する刀子である。切先と茎尻は欠損する。鎺は一部を欠くが，比較的よく遺存している。また柄の木質も鎺付近に多く遺存している。関部分は鎺と木質のためやや不明瞭で

あるが，背関はやや浅く直角に切り込みが入ると思われる。刃関はやや斜めになるか，直角的か判然としない。５は棒状の鉄製品である。釘，鉄鏃の棒状部等が考えられるが，特定しがたい。

２はカマド内奥側の底面から出土した。３もカマド前側・前方から出土したが，層位は中・上層である。破片の１点が遠く，左前（南）隅寄りの床面に散っている。４はカマド左袖外脇の壁際で，中層から出土した。１は中・上層からの出土である。図示した遺物に祭祀的様相をみることは難しく，出土遺物はほとんどが単に廃棄されたか，流入したものであろう。

**重複遺構**　前（南東）壁右側でSK－304と重複し，本住居が切られている。

SI－250（第271図，図版89）

**位置**　調査区南部最南端の24N－63グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.7m，幅が3.6mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

**床面**　四隅や壁側を主体としてやや深く掘り込まれ，貼床が施されている。。貼床を構成する土層は，ローム粒・ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土である。隅部の掘りかたは左前（南東）側を除いてピット状であり，当初は主柱穴かと思われたが，規模が大きく，柱穴としては浅いため，掘りかたの窪みとした。柱痕や柱の当たりもみられない。床面から隅部の掘りかた底面までの深さは16cm～24cmである。床面はやや凹凸があるが，貼床が施された影響であろう。本来はより平坦と思われる。全体にやや硬質であるが，顕著な硬化面はみられない。

**柱穴**　出入口ピットが東壁際中央で検出された。径は45cm×40cm，床面からの深さは22cmである。

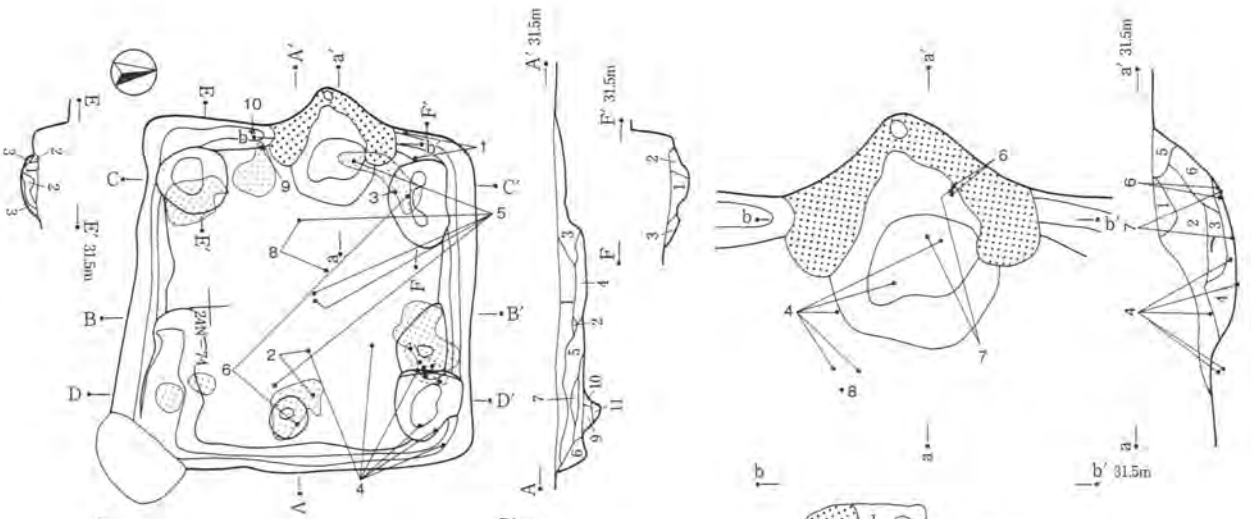
**壁溝**　全周する。

**カマド**　西壁右寄りに位置する。方形プランからの突出はあまり大きくない。山砂が前方に流出しており，両袖前側の遺存が悪いが，意図的な破壊とは思われない。奥側は比較的遺存がよい。後天井の一部が遺存し，煙道もみられる。構築材は山砂主体であるが，下部はロームブロックを多く含む。左袖内側は赤色化した部分が遺存している。また火床部・煙道部底面もやや赤みを帯びている。火床部底面の窪みは広く，やや深い。竪穴の様相からカマド使用によるだけでなく，当初から掘りかたがやや深かったことも考えられる。堆積土をみると，焼土ブロックは底面からやや浮いたところに多くみられる（３層）。

**堆積土**　焼土が下層に堆積している。面状をなす焼土は四方の壁側に分布し，竪穴の中心に傾斜して形成されている。下層は焼土の他，ローム粒をやや多く含むが，色調はやや黒みが強い。上層も黒褐色土主体で，ローム粒の包含が少ない。竪穴廃棄後，壁側が若干埋没した窪みで，不要物の焼却が行われたが，その後は自然堆積と思われる。

**出土遺物**　中量の出土量である。全体的に分布するが，南（左）側がやや少ない。図示できた遺物は10点である。１・２は千葉産の須恵器杯，３は千葉産の須恵器甕である。４～８は土師器甕で，５・６・７は武蔵型，４・８は在地の甕である。９は用途不明の鉄製品，10は鉄滓である。

１は口縁部の一部を若干欠損するだけであり，遺存のよい土器である。欠損部は不整な方形状である。遺存部分は若干割れて接合している。破損部は大きな弧状部分と小さな逆三角形状部分がある。欠損部とともに打ち欠き・打ち割りされた可能性があるが，やや断定しがたい。２も１と似た様相であるが，欠損部はやや大きい。欠損部の形態は逆三角形状で，かなり整っている。遺存する口縁・体部は全体に割れて接合する。欠損部は打ち欠きされたものと思われる。破損も打ち割りされた可能性があるが，やや断定しがたい。



SI−250

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 黒褐色土 | ローム粒少混　ややしまりあり |
| 2. | 淡褐色砂質土 | 黒色土混　しまりあり |
| 3. | 黒褐色砂質土 | ローム粒少　しまり弱 |
| 4. | 黒褐色土 | ローム粒，砂粒混しまり弱 |
| 5. | 褐黒色土 | ロームブロック，焼土塊多混　ややしまりあり |
| 6. | 暗黄褐色土 | ロームブロック多混　ややしまりあり |
| 7. | 暗赤褐色土 | 焼土主体　ややしまりあり |
| 8. | 褐黒色土 | ローム粒，焼土粒多混　やしまりあり |
| 9. | 褐黒色土 | ローム粒やや多，焼土粒少混　しまりあり |
| 10. | 暗褐色土 | ローム粒やや多　しまり強 |
| 11. | 暗褐色土 | ローム混　しまり強 |

SI−250　E−E′

1. 黒褐色土　ローム粒，ロームブロック少，焼土粒微混　しまりあり
2. 黒褐色土　ローム粒少，灰色砂やや多，焼土粒少混　しまり強
3. 褐色土　ロームブロック主体，暗褐色土少，焼土ブロック少混　しまりあり

0　(1/80)　4m

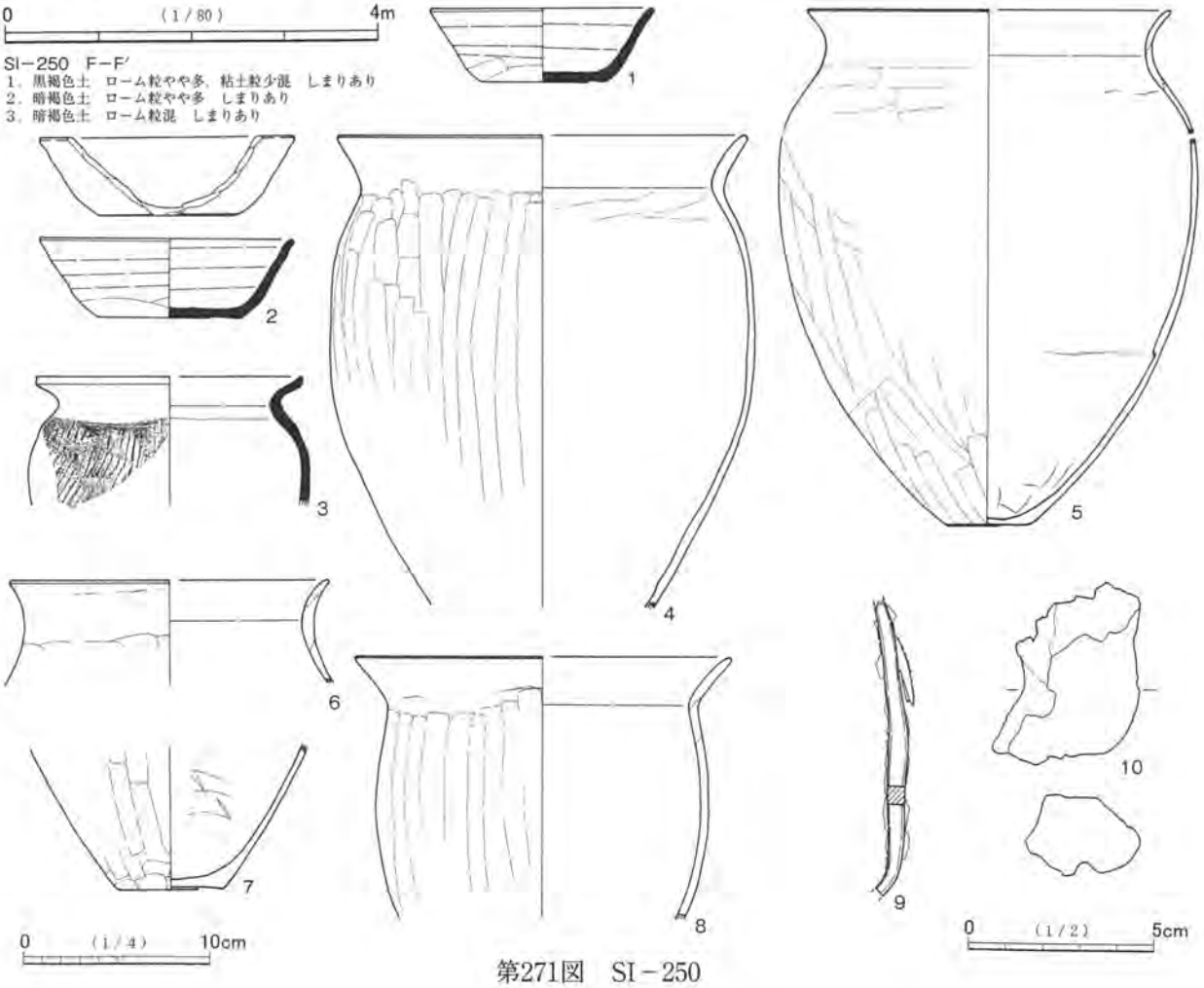
SI−250　F−F′

1. 黒褐色土　ローム粒やや多，粘土粒少混　しまりあり
2. 暗褐色土　ローム粒やや多　しまりあり
3. 暗褐色土　ローム粒混　しまりあり

SI−250　カマド

1. 黒褐色砂質土　焼砂粒少混　しまりなし
2. 暗褐色砂質土　ローム粒，焼砂塊少，黒色土混　しまりあり
3. 橙色砂質土　焼砂塊主体　しまりなし
4. 暗褐色砂質土　焼土塊，ロームブロック少混　しまりなし
5. 淡褐色砂質土　粘質　しまり強
6. 暗褐色土　ローム粒多，焼土粒少混　しまりなし

0　(1/40)　1m



0　(1/4)　10cm

0　(1/2)　5cm

第271図　SI−250

3は小型の須恵器甕である。遺存は少なく，一部の破片である。4・5はややまとまった量が遺存している。4は器壁が薄く，武蔵型的な甕であるが，色調が暗褐色であることとヘラケズリが縦方向であることから在地の甕と思われる。5は胴部の欠損が多いため，口縁部から底部まで連続して接合しないが，底部の遺存はよい。底径は小さく，器壁は胴部から続いて薄い。6・7・8は遺存が少ない。6は口縁部・胴部上位の破片，7は胴部下位・底部の破片で，同一個体と思われる。胴部の遺存が少ないため，連続して接合しない。

9は棒状の鉄製品である。やや細身で，断面は方形である。図の下部は細くなる。またやや曲がっているが，上部も緩やかに曲がっているため，当初のものか疑わしい。本来は一直線状であったことが考えられる。紡錘車の紡軸，鉄鏃の棒状部，釘等が考えられるが，特定しがたい。10は鉄分が抜けて，軽い質感である。

4～7はカマド内下層から出土したが，いずれもカマド前方及び対向する東壁側の中・下層まで広く散っている。1はカマド右外脇で，右奥（北西）隅側から出土したが，出土層位は中・上層である。また2は出入口ピット近くの中央側から出土したが，層位は同じく中・上層である。遺物出土状況に特段の祭祀的様相はうかがえない。出土遺物の大半が単に廃棄されたか，流入したものであろう。

SI－251（第272図，図版89）

位置　調査区南部南端の24N－52グリッドを中心に位置する。

形状・規模　幅が4.6mの方形をなす。確認面からの深さは45cmである。南西側の多くが調査区外に入るため，長さは不明である。

床面　調査できた範囲内では平坦である。硬化面は把握できなかったが，竪穴の規模から中央を主体に硬化していると予測できる。

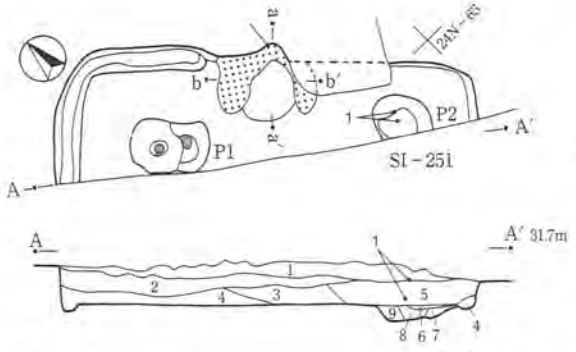
柱穴　4箇所の主柱穴のうち，カマド側の2箇所が検出された。左側のP1は2箇所のピットが連接しており，柱の当たりも2箇所みられる。これにより建て替えられた竪穴であることがわかる。なお右側のP2は浅く，柱位置となる主体部分は調査区外に入る。他の2箇所の主柱穴は調査区外に位置し，出入口ピットも調査区外の南西壁側中央に位置すると思われる。

壁溝　左奥（北）隅付近では巡っている。また右奥（東）隅付近も存在したが，発掘範囲が狭小なため，掘り抜いてしまった。竪穴の規模・様相から全周すると思われる。

カマド　北東壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。右袖付近に安全・防塵対策のためのネットの支柱が存在しており，右袖は一部しか発掘することができなかった。カマド付近には現代の構築物が存在したため，下部は遺存するが，上部の遺存が悪い。左袖内側には若干の赤色化部分がみられる。火床部は赤色化した面が不明瞭である。底面は床面から若干窪む。深さは10cm程度であり，あまり深くない。範囲が小さいがかなり発掘しにくかったため，やや不明瞭である。焼土・灰が堆積土下層にみられるが，焼土の厚い堆積はみられない。

堆積土　黒褐色土主体である。ローム粒の包含が概して多い。また焼土粒・炭化物粒の包含が中層に多い。ロームが多く，焼土等もみられるが，黒みが強いため，自然堆積の可能性の方が高いと思われる。

出土遺物　図示できた遺物は，ロクロ土師器高台付皿1点である。高台は全周欠損している。口縁部は一部の遺存である。内面の一部に煤が付着しており，二次的に火を受けたものと思われる。付着状況が接合破片によって異なっており，破損後の被熱と思われる。P2上の下層・中層から出土した。




SI－251　カマド

1．黒褐色砂質土　焼砂塊多　しまりなし
2．暗褐色砂質土　焼土塊，ロームブロック多混　しまりなし
3．にぶい橙色砂質土　灰，焼土混　しまりなし
4．黒褐色土　砂粒，焼土粒多混　しまりなし
5．橙色砂質土　焼砂　しまりあり
6．淡褐色砂質土　焼砂　しまりあり

SI－251

1．黒褐色土　ローム粒多　しまり弱
2．黒褐色土　焼土粒，炭粒，ローム粒多混　ややしまりあり
3．暗褐色砂質土　山砂ブロック含　ややしまりあり
4．黒色土　ローム粒，焼土粒多混　ややしまりあり
5．黒褐色土　焼土塊多，ロームブロック混　ややしまりあり
6．黒褐色土　焼土塊多，ロームブロック混　しまり強
7．暗褐色砂質土　ロームブロック，焼土塊，炭化粒，山砂混　しまりあり
8．暗赤褐色砂質土　焼土塊，山砂塊，ロームブロック多混　しまり弱
9．暗褐色土　ロームブロック多　しまり弱

0　(1/80)　4m

0　(1/4)　10cm

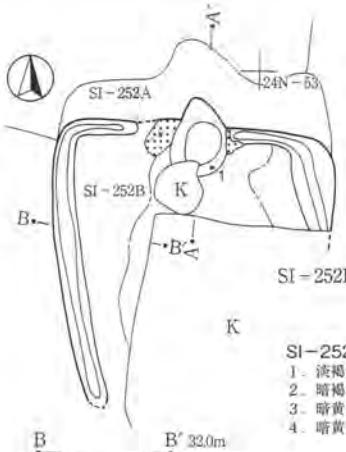
SI－252A　カマド

1　暗赤褐色砂質土　焼砂，灰，ロームブロック含　しまりなし

SI－252A

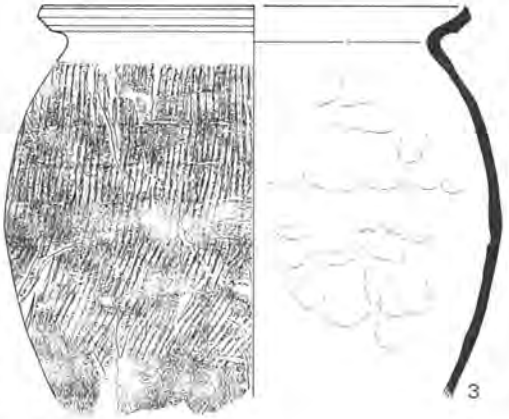
1．暗褐色土　ローム粒少　しまりなし
2．暗褐色土　ローム粒多　しまりなし
3．暗褐色土　ロームブロック多　しまりあり
4．黒褐色土　しまり弱
5．暗褐色砂質土　焼土粒，ロームブロック多混　しまり強

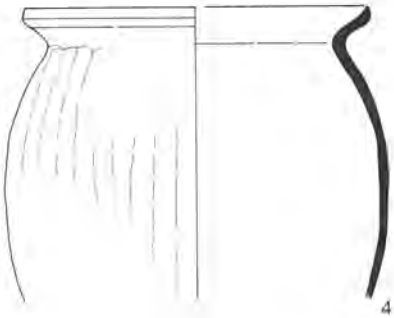
SI－252A




SI－252B

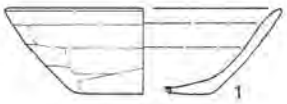
1．淡褐色砂質土　ローム粒，焼砂粒多混　しまりあり
2．暗褐色砂質土　ローム粒，焼砂粒多混　しまりあり
3．暗黄褐色土　ロームブロック主体　しまり弱
4．暗黄褐色土　ロームブロック主体　しまりあり




0　(1/80)　4m

SI－252B




0　(1/4)　10cm

0　(1/4)　10cm

第272図　SI－251・252A・252B

遺物量は少量である。発掘範囲が狭いが，カマド側を発掘していることを考慮すると，調査区外部分もあまり多く遺物を包含していない可能性が考えられる。

SI－252A（第272図，図版90）

位置　調査区南部南端の24N－52グリッドを中心に位置する。

形状・規模　中央から南東側が現代の建築物により大きく破壊されている。そのことと重複遺構の存在により，規模・形態が不明瞭である。幅が３m程度の方形をなすが，長さが不明である。確認面からの深さは15cmである。

床面　SI－252B上に構築されたが，床面の高さの差がやや少ないため，左（西）側については若干掘り過ぎ，SI－252Bの床を露呈したと思われる。中央から右（東）側は比較的遺存がよく，ほぼ平坦である。カマド前から中央にかけて硬化している。

柱穴　出入口ピットが南壁際に存在する可能性があるが，現代の建築物によって破壊されたと思われる。中央ややカマド寄りでピットが検出されたが，本住居を切る遺構と思われる。掘立柱建物の柱穴の可能性があるが，組の柱穴が不明瞭である。現代の建築物が存在する影響かもしれない。主柱穴は存在しない。

壁溝　明瞭な状態で検出されなかったが，有無については不明とする。SI－252B西側の壁溝の一部は本竪穴の壁溝の可能性も若干考えられるが，不明瞭である。

カマド　北壁中央に位置する。方形プランからやや大きく突出する。遺存状態は不良で，左袖はわずかな遺存である。また右袖も上部と前側をかなり欠損している。火床部底面はやや赤色化している。堆積土は焼土・山砂・灰及びロームブロックを含む。

堆積土　ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・黒褐色土であるが，遺存が少なく，全体の様相は不明瞭である。東側の床面に焼土が堆積する部分がある。自然堆積か人為的堆積か断定しがたい。

出土遺物　少量であるが，調査できた土量を考慮すると，包含の密度は低くない。なお土器片の多くは本住居のものとSI－252Bのものを区別できないが，本竪穴の方が多いと思われる。カマド内及び周辺からの出土が目立つ。図示できた遺物は４点である。１はロクロ土師器杯，２～４は千葉産の須恵器甕である。１は口縁部が外反して，端部が玉縁状に肥厚する。遺存は少ない。２～４も遺存はあまり多くない。２はやや小型の甕である。４は胴部外面に縦方向のヘラケズリが施されている。外面のタタキ目・内面の当て具痕とも消されていると思われるが，不明瞭である。灰色みのある色調であるが，二次的な被熱により，胴部外面中位に乳白色化する部分がある。

２・４はカマド内から，１はカマド右袖外脇から出土した。３は中央のピット上から出土した。柱穴に伴う可能性も考えられるが，本竪穴に廃棄された遺物が入り込んだ可能性の方が高いと思われる。

重複遺構　SI－252Bと大きく重複し，本竪穴が切っている。なお本竪穴はSI－252Bの建て替え後の竪穴かもしれない。また北側でSI－253と重複し，本住居が切っている。

SI－252B（第272図，図版90）

位置　調査区南部南端の24N－52グリッドを中心に位置する。

形状・規模　SI－252A同様，現代の建築物により大きく破壊されている。重複するSI－252Aの存在と合わせて，規模・形態がやや不明瞭であるが，幅・長さとも３m程度の方形をなすと思われる。確認面からの深さは数cm～20cmである。

床面　ほぼ平坦で，カマド前から中央にかけて硬化している。

柱穴　出入口ピットが南壁際に存在する可能性があるが，SI－252A同様，破壊されたと思われる。また同じピットにより本竪穴が切られている。ピットは本竪穴ではカマド前に位置する。主柱穴は存在しない。

壁溝　調査できた範囲内では巡っており，全周すると思われる。

カマド　北壁中央に位置する。方形プランからの突出はあまり大きくない。右袖の遺存はわずかであり，左袖の遺存も少ない。両袖・火床部底面に赤色化した部分はみられない。底面は床面からやや窪むが，4㎝～7㎝程度の深さであり，浅いものである。堆積土はやや多量のローム粒・焼土粒を含む。

堆積土　遺存が少なく，様相が不明瞭である。ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・黒褐色土と思われる。自然堆積か人為的堆積か断定しがたい。

出土遺物　SI－252Aとの重複により本竪穴に帰属する遺物が不明瞭であるが，かなり少量と思われる。図示できた遺物は土師器杯１点である。外面のヘラケズリが口縁部近くまで及び，非ロクロの杯と思われるが，やや不明瞭である。遺存はあまり多くない。カマドから出土した。

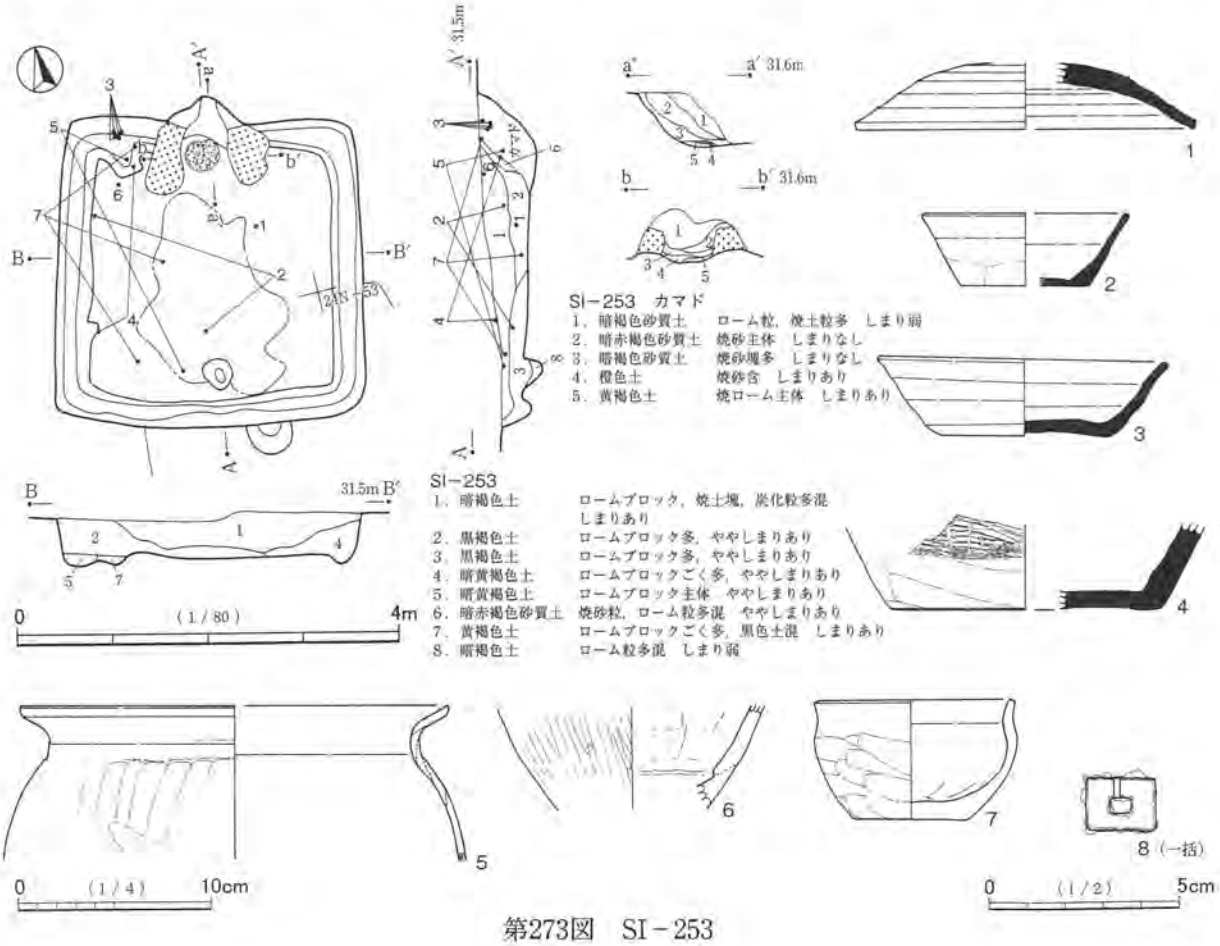
重複遺構　SI－252Aと大きく重複し，本竪穴が切られている。なお本竪穴はSI－252Aの建て替え前の竪穴かもしれない。また北側でSI－253と重複し，本住居が切っていると思われる。

## SI－253（第273図，図版90）

位置　調査区南部南端の24N－42グリッドを中心に位置する。確認面は北から南にわずかに下っている。

形状・規模　長さが3.3m，幅が3.2mの方形をなす。確認面からの深さは30㎝～50㎝である。

床面　やや凹凸があるが，ほぼ平坦である。壁際は竪穴構築に際してわずかに深く掘り込まれ，ロームブロックを多く含む暗黄褐色土で貼床が施されている。カマド前から出入口部にかけて硬化している。




第273図　SI－253

柱穴　出入口ピットが南壁際中央で検出された。径は33㎝×28㎝，床面からの深さは21㎝である。主柱穴は存在しない。

壁溝　全周する。やや幅が広いが，壁際の床面をやや掘り過ぎていると思われる。

カマド　北壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖の遺存はよい。構築材は山砂を主体とするが，基底部はロームブロックを多く含む暗褐色土である。両袖内側はかなり内部まで赤色化している。火床部も赤色化した面が明瞭である。底面は地山のロームが焼けており，その上に焼土がやや厚く堆積している（４層）。

堆積土　暗褐色土・黒褐色土主体である。ロームブロックをやや多く含むが，自然堆積と思われる。

出土遺物　少量である。散在的な分布であるが，北西隅側にやや集中している。図示できた遺物は８点である。１～４は新治窯産の須恵器で，１は蓋，２・３は杯，４は甕である。５は在地の土師器甕，６は常総型の土師器甕である。７は土師器鉢である。８は鉄製品で，座金具と思われる。

１はやや大型の蓋である。つまみ周辺は欠損する。口縁部は1/3弱の遺存である。２は小型の杯である。1/2程度の遺存である。３はやや大振りの杯である。口縁・体部の一部を欠損するが，かなり遺存のよい土器である。口縁・体部の一部が数片に割れて接合する。欠損・破損は意図されたものではないと思われる。二次的な被熱により内面に煤が多く付着している。また口縁部内面と体部外面下位・底部の一部が赤色化している。色調は暗黄灰色で，わずかに白雲母がみられる。

４は胴部下位から底部にかけての部分的な破片である。５は口縁部がやや「コ」の字状で，器壁もかなり薄いなど，武蔵型の甕的である。しかし色調が暗褐色で，胴部外面上位のヘラケズリが縦方向であることから，在地の土器と思われる。胎土や質感も武蔵型甕とは異なる。６は胴部下位の破片である。外面はヘラミガキが顕著に施されている。７は器形から古墳時代後期の土器が混入した可能性も考えられる。

８は長方形の鉄板の中央に長方形の孔がある鉄製品である。小型で，薄い製品である。図示した裏面は木製品等何らかのものに接着していた質感がある。目釘等の座金具と思われる。

図示した遺物のうち，３は上層からの出土であるが，北壁際からの出土であり，上方から落下したことも考えられる。遺物の様相から祭祀的な遺物の可能性もあるが，断定はしがたい。全体の平面位置をみると広く散っているものが多く，出土層位は概して中・上層主体である。一部不明瞭であるが，出土遺物の多くは単に廃棄されたか流入したものと思われる。

重複遺構　南側でSI－252A・SI－252Bと重複し，本竪穴が双方に切られている。なお本住居の方が深いため，欠損は上部に留まる。

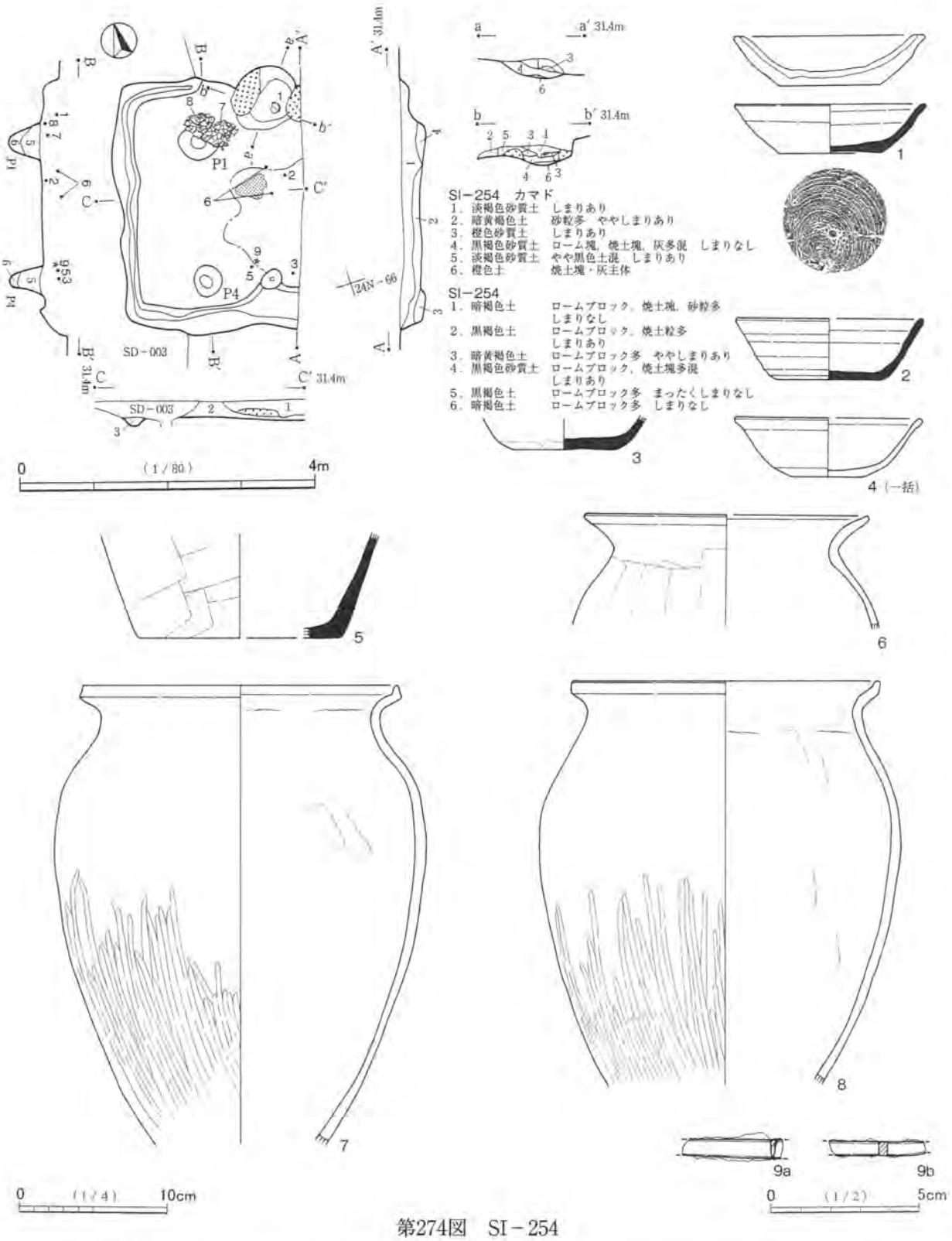
SI－254（第274図，図版90）

位置　調査区南部南端の24N－55グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.5mの方形をなす。確認面からの深さは30㎝である。右（東）側が調査区外に入るため，幅は不明である。仮にカマドと出入口ピットを結ぶ線を中軸線とすると，4.1m程度となり，かなり横長の方形である。ここまで横長か不明であるが，主柱穴の位置を考えると，やや横長のプランになると思われる。

床面　ロームブロックを多く含む暗黄褐色土で貼床が施されている。床面はやや凹凸があるが，傾斜はない。中央が硬化している。

柱穴　４箇所の主柱穴のうち，左（西）側の２箇所が検出された。右側の２箇所の主柱穴は調査区外に




第274図　SI−254

位置する。出入口ピットは南壁側に位置する。径は30cm×25cm，床面からの深さは10cmである。出入口ピットと南西側の柱穴P4はプランに対してほぼ並んで位置する。出入口ピットはP4と未検出の南東側主柱穴P3を結ぶ線上に位置すると思われる。

**壁溝**　調査できた部分は巡っており，全周すると思われる。出入口ピット部分の壁溝が広がって，ピットに接しているが，ある程度貼床が施されていたことが考えられる。

カマド　北壁に位置する。壁のどの位置になるかは不明瞭であるが，中央かやや右寄りと思われる。方形プランからの突出はやや大きい。両袖の後ろ半分程度が突出部に位置し，前半分程度がプラン内に位置する。右袖は内側半分程度を発掘できたが，外側は調査区外に入る。両袖は下部が遺存するが，床面までやや浅いため上部を欠損する。構築材は山砂主体であるが，基底部はロームブロック主体である。両袖内側には赤色化する部分がある。堆積土最下層は焼土ブロック・灰が主体である（６層）。火床部底面は若干窪むが，床面から５cm程度の深さであり，浅い。

堆積土　暗褐色土･黒褐色土主体である。ロームブロックの包含が概して多いが，自然堆積と思われる。なお山砂が竪穴の中央で，下層（２層）上部にみられた。２層はやや堅くしまっており，他住居のカマドや床面の存在が考えられたが，プランは検出されなかった。そのため山砂については，本住居のカマド構築材が流出したものか，他からの廃棄と思われる。

出土遺物　遺存のよい土器が数点出土した。図化できない土器片はやや少量である。しかし調査区外部分及び重複遺構による欠損を考慮すると，遺物の総量はやや多量になると思われる。分布はカマド周辺から中央側にみられ，東側は少ない。ただし東側は重複遺構による影響が若干考えられる。図示できた遺物は９点である。１は東金子窯産の須恵器杯，２・３は千葉産の須恵器杯，４はロクロ土師器杯である。５は千葉産の須恵器甕としたが，土師器の可能性もある。６は在地の土師器甕，７・８は常総型の土師器甕である。９は鉄製の刀子である。

１は口縁・体部を2/5程度欠損する土器である。欠損部は比較的整った弧状を呈し，打ち欠きされたものと思われる。欠損部に続いて口縁部から底部の一部まで破損している。打ち割りされた可能性があるが，断定しがたい。一部に山砂が付着し，器面は全体にやや赤みを帯びている。外面にやや赤みの強い部分もある。薄い煤が付着している部分もあり，二次的に火を受けたものと思われる。２・４は1/2以下，３は1/2程度の遺存である。４は底部･体部下位に回転ヘラケズリが施されており，底径の小さいものである。口縁部は外反している。

５は胴部下位から底部にかけての破片である。内外面の色調は明褐色である。断面内部はやや暗くなるが，灰色とはいえない。胎土は褐色粒を多く含む。須恵器窯で焼成されていない可能性がある。６は口縁部から胴部上位にかけての部分的な破片である。７・８はともに底部を欠くが，口縁部から胴部下位まで非常に遺存がよい甕である。出土状況から，底部は意図的に除去されたものといえる。かなり細かく割れているため，口縁部・胴部に接合しない破片やわずかな欠損があるが，欠損部分も底部周辺を除いて本来は遺存していたと思われる。ともに胴部外面に山砂が付着している。

９ａは身の破片である。切先をわずかに欠き，関部分も欠損する。刃側がやや鋭さに欠けるため刀子であるか若干の疑問がある。しかし錆によるためと思われ，一応小型の刀子としておく。９ｂは茎の破片である。関部分と茎尻を欠損する。接合しないが，９ａと同一個体と思われる。

１はカマド内下層から倒位で出土した。破損部分は他と離れずにまとまった出土状況である。なお１の後方から土製支脚片が出土したが，もろく崩れたため，図示していない。７・８はカマドの左前方及び主柱穴P1上で，床面に近い下層から出土した。口縁部をカマド前方側，底部を北壁左側に向け，直列に並んでつぶれた状態で出土した。７が右側，８が左側の位置である。８の胴部下位と７の口縁部は接しており，やや入れ子状である。２は中央の床面から出土したが，遺存のよい土器ではない。４～６・９は中・上層からの出土である。

1・7・8はカマド廃棄の祭祀に伴う遺物と思われる。7・8は入れ子状であることから，煙道部に使用されたことも考えられるが，1が存在すること及び本遺跡での類例が乏しいことから，祭祀に関わる可能性を高く考える。なお7・8の内面はやや黒ずんでいるが，通常の使用に伴う程度と思われる。その他の出土遺物には祭祀的様相がうかがえず，単に廃棄されたか流入したものであろう。

**重複遺構**　東側でSD－003と重複し，本住居が切られている。なお本住居の方が深いため，重複部分の壁下位・床面が遺存している。

SI－255（第275図，図版91）

**位置**　調査区南部南側の24N－35グリッドを中心に位置する。確認面は西から東にわずかに下っている。

**形状・規模**　長さが3.7m，幅が4.0mで，わずかに横長の方形をなす。確認面からの深さは15cm～30cmである。右前（南西）隅側が若干張り出しており，わずかに台形的な形態である。

**床面**　やや凹凸があるが，傾斜はない。一部，重複するSI－256の堆積土中に床面が構築されている。その部分もやや硬化しているが，他と比べると軟質である。その部分以外は全体に硬質であるが，中央がより硬化している。

**柱穴**　西壁際中央で出入口ピットが検出された。径は62cm×42cm，床面からの深さは25cmである。主軸方向に対して横長の形態である。竪穴内及び周辺にいくつかのピットがあるが，本住居を切る後世の撹乱である。主柱穴は存在しない。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　東壁右（南）寄りに位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖下半部が遺存する。構築材は山砂主体で，しまりがある。両袖内側はかなり内部まで赤色化している。火床部も赤色化した面がみられ，被熱により底面のロームブロックが硬化し，しまりがなくなっている。火床部底面は若干窪むが，床面から6cm程度の深さであり，浅い。カマド使用に伴う程度のものであろう。堆積土下層は黒みが強く，焼土の含有が少ない。

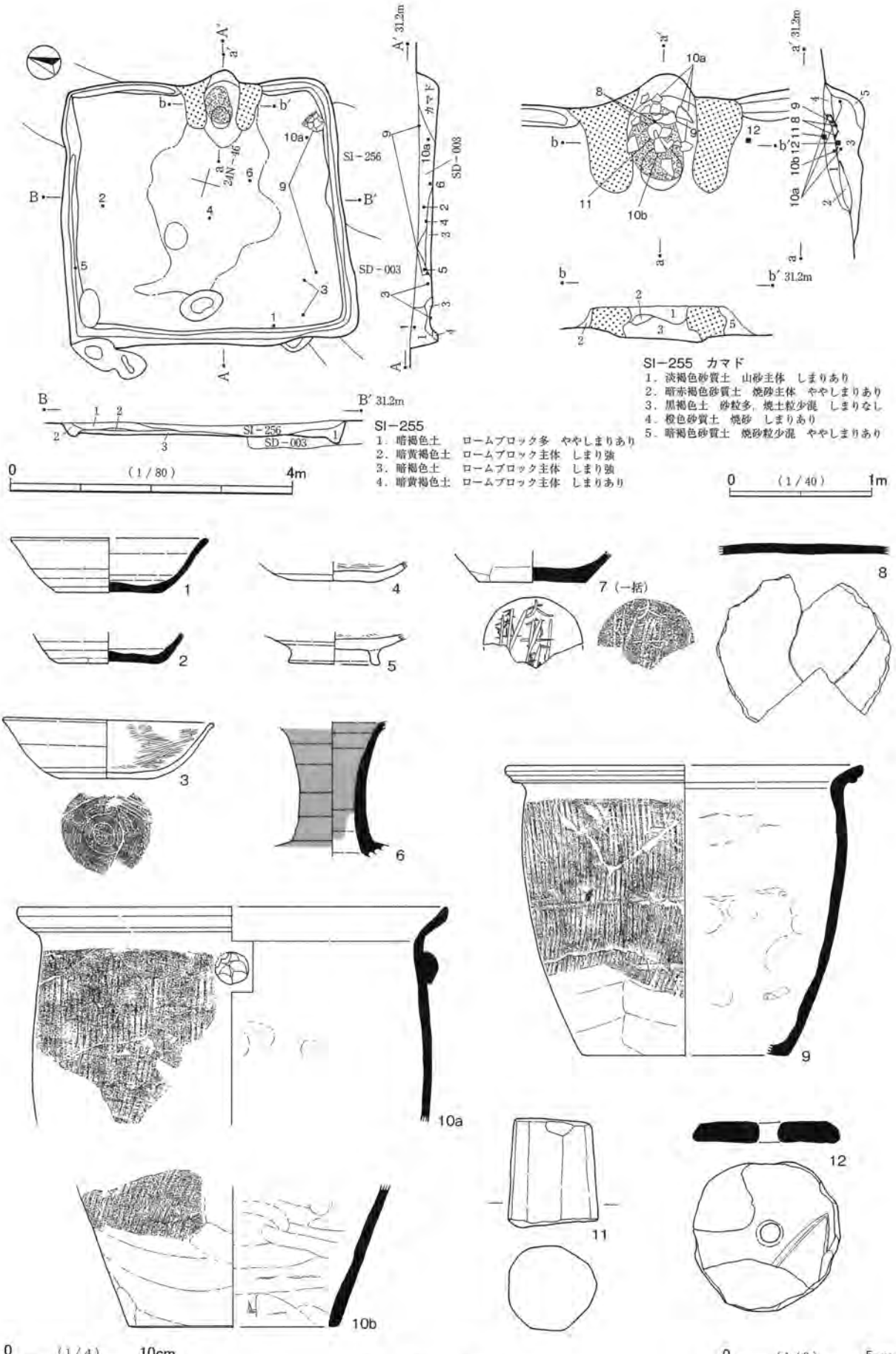
**堆積土**　暗褐色土主体で，ロームブロックの含有が多い。やや判然としないが自然堆積と思われる。

**出土遺物**　少量で散在的な出土である。図示できた遺物は12点である。1・2は千葉産の須恵器杯，3・4はロクロ土師器杯，5はロクロ土師器高台付杯，6は東海産と思われる須恵器長頸壷，7～9は千葉産の須恵器甕，10は千葉産の須恵器甑，11は土製支脚である。12は土製品で，紡錘車の紡輪である。

杯類に遺存の非常に良好なものはなく，欠損・破損にも意図的な様相はうかがえない。5は高台周辺に欠損がないが，杯部は大部分を欠損する。

6は須恵器長頸壷の頸部片である。内外面に暗緑色の釉が付着する。外面の色調は暗黄灰色，内面は黄灰色・灰色，断面内部は暗灰色である。外面に黒色の吹き出しが多くみられる。

7は底部周辺の破片である。やや小型の甕である。底部外面に「大真利」・「道」と書かれたヘラ書きがある。底部の欠損部に続く文字が存在したと思われる。なお文字を部分的に消すヘラミガキ状の痕跡があるが，これもヘラ書きの一種かもしれない。二次的な被熱により赤色化が著しい。また一部に山砂が付着している。8も底部の破片である。周縁が円形に加工されており，加工後は円盤状の土製品といえるものである。底部内外面に磨られた痕跡はみられない。破断面は比較的丁寧な加工である。角をとるため一部に磨られた可能性があるが，顕著な研磨痕はみられない。底部外面に「U」字状のヘラ書きがある。転用はこのヘラ書きが存在したためであろう。あるいは当初からその予定であったことも考えられる。ヘラ書


SI－255
1．暗褐色土　ロームブロック多　ややしまりあり
2．暗黄褐色土　ロームブロック主体　しまり強
3．暗褐色土　ロームブロック主体　しまり強
4．暗黄褐色土　ロームブロック主体　しまりあり
SI－255　カマド
1．淡褐色砂質土　山砂主体　しまりあり
2．暗赤褐色砂質土　焼砂主体　ややしまりあり
3．黒褐色土　砂粒多，焼土粒少混　しまりなし
4．橙色砂質土　焼砂　しまりあり
5．暗褐色砂質土　焼砂粒少混　ややしまりあり
SI－256
SD－003
カマド
A′ 31.2m
B′ 31.2m
a′ 31.2m
b′ 31.2m
0　(1／80)　4m
0　(1／40)　1m
7（一括）
0　(1／4)　10cm
0　(1／2)　5cm

第275図　SI－255

きは欠損部にかかるため２条の交差線かもしれないが，判然としない。このヘラ書きに交差する１条の線があり，それもヘラ書きの可能性がある。ただし「U」字状が強い刻線であるのに比べて弱く，土器製作時の痕跡とも思われる。

９はバケツ形の甕である。口縁部から底部まで連続して1/2弱を遺存する。被熱痕跡が強く，赤色化・灰白色化した部分が多い。器面の劣化も顕著である。胴部外面に若干の山砂が付着する。10はかなり大型の甑である。口縁部付近が1/2周強遺存するが，胴部の遺存は少ない。把手が１箇所遺存する。ボタン状のものでかなり崩れている。付着もやや雑である。５孔式の底部であるが，底部の橋状部は遺存しない。

11は下部側を多く欠くが，上端面はよく遺存し，広い平坦面をもつ。12は千葉産の須恵器甕の底部片が紡錘車に転用されたものである。上面と下面の区別が不明瞭であるが，平面図に図示した側がやや広いため，上面の可能性が考えられる。上下面とも一部の表面が剥落している。穿孔は丁寧であり，側面もよく研磨されている。平面図側が元の土器の底部外面である。「V」字状のヘラ書きがみられる。

８～11はカマド内から出土した。ただし９の主要部分は右（南）壁際奥（東）寄りの中層から出土した。また右壁側前（西）側にも散っている。10も一部の破片が９主要部分の近くから出土した。出土層位は下層である。12はカマド右袖外脇の下層から出土した。その他の１～６は散在的な出土である。７は出土位置が不明である。

カマド内及び周辺から出土した遺物は本住居で使用されていた可能性がある。また８の存在からカマド廃棄の祭祀に使用された可能性が考えられる。７は土器の状況からカマド内に存在した遺物かもしれない。この想定は想像の域を出ないが，そうであるならば８等の状況を補強する遺物といえよう。11については意図的に下部が除去されているかもしれないが，支脚はもろいため断定しがたい。12については祭祀的な出土状況か不明瞭である。その他の１～６や図化できなかった遺物の多くは，単に廃棄されたか流入したものであろう。

**重複遺構**　SD－003が本住居の左奥から右前を貫いており，本住居が切られている。なおSD－003の最も低い部分が本住居の床面と上下する位置にあり，床面は比較的よく遺存している。また南側でSI－256と重複し，本住居が切っている。

### SI－256（第276図，図版91）

**位置**　調査区南部南側の24N－45グリッドを中心に位置する。

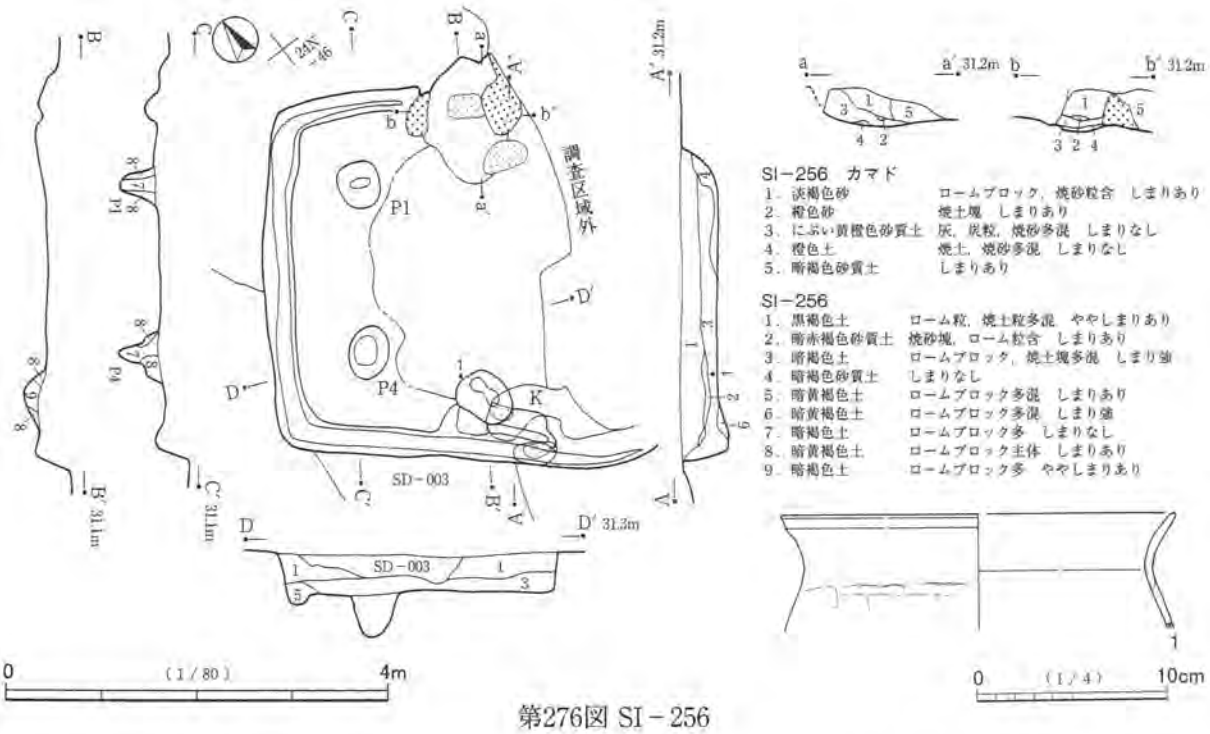
**形状・規模**　長さが3.9mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。右（南東）側が調査区外に入るため，幅は不明である。仮にカマド中央を中軸とすると，幅は4.3m程度であり，横長の方形となる。

**床面**　ほぼ平坦で，左（北西）の壁側を除いて中央主体に硬化している。

**柱穴**　４箇所の主柱穴のうち，左側の２箇所が検出された。右側の２箇所の主柱穴は調査区外に位置する。出入口ピットは南西壁際中央に位置する。径は61cm×43cm，床面からの深さは27cmである。

**壁溝**　調査できた部分は巡っており，全周すると思われる。

**カマド**　北西壁に位置する。壁のどの位置になるかは不明瞭であるが，主柱穴のバランスを考慮すると，比較的中央部分と思われる。方形プランからの突出度はSI－255に切られてやや不明瞭であるが，やや大きいと思われる。左袖はSI－255に切られて痕跡的な遺存である。右袖は比較的遺存がよいが，一部は調査区外に入る。焼土の分布が火床部のやや上層と右袖前方にみられる。堆積土下層は焼土を主体とする（４層）。被熱により底面のロームブロックが硬化し，しまりがなくなっている。




第276図 SI－256

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。ローム粒・ロームブロックの包含が概して多いが，自然堆積と思われる。なお山砂・焼土が南東壁際で，出入口ピット近くの下層（3層）上に分布する。3層はやや堅くしまっており，もう1棟別の住居の存在が考えられたが，プランは検出されなかった。

**出土遺物**　少量で散在的な分布である。図示できた遺物は武蔵型の土師器甕1点である。口縁部から胴部上位にかけての小破片である。

**重複遺構**　SD－003が本住居の上部を貫いている。また北側ではSI－255と重複している。本住居はその双方に切られている。なお両遺構よりも本住居の方が深いため，欠損は確認面から中・下位までの一部であり，本住居の壁下位・床面は欠損を免れている。

**SI－257**（第277・278図，図版91）

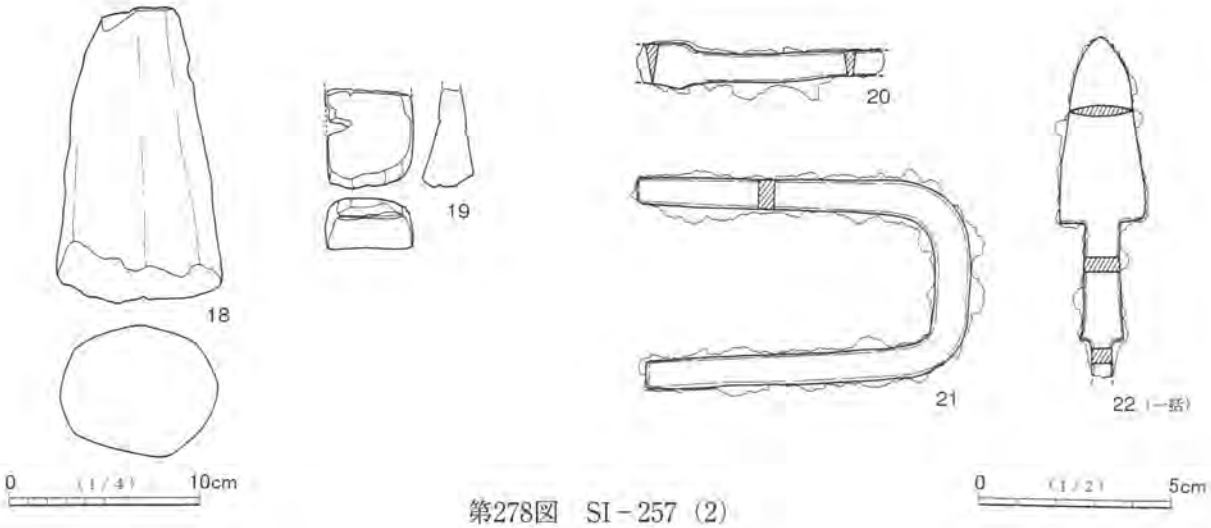
**位置**　調査区南部南側の24N－54グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　新旧二つのカマドがあり，西側の新カマドを奥にしてみると，長さが3.6m，幅が3.7mの方形をなす。北側の旧カマドからみた場合は長さと幅が逆になるが，大差はない。確認面からの深さは35cm～40cmである。床面も新旧の2面があり，建て替えられた竪穴と思われる。旧竪穴は新竪穴と比べて南辺と東辺が短いように思われ，拡張された可能性があるが，明瞭に観察できなかった。

**床面**　竪穴全体に貼床が施されている。貼床は2層に分かれ，床面は大きく構築し直されている。下層の床面は旧カマドに，上層の床面は新カマドに対応すると思われる。貼床を構成する土層はロームブロックを主体とする暗黄褐色土・黄褐色土で，下層は黄色みが強く，上層は下層よりもやや暗褐色土の含有が多い。貼床の厚さは新旧合わせて6・7cm～20cm強である。厚い部分と薄い部分があるが，隅部や壁際に偏っていない。また上層は比較的均一な厚さである。旧床面はやや不明瞭であるが，傾斜はしていない。硬化面の把握はできなかった。新床面はほぼ平坦である。硬化面が新カマドから対面の出入口ピットにかけてやや広くみられる。

**柱穴**　出入口ピットが東壁際中央で検出された。径は53cm×44cm，床面からの深さは23cmである。新竪

第277図　SI－257（1）




第278図　SI－257（2）

穴に伴うものである。南壁際中央に旧竪穴の出入口ピットの存在が予測されたが，検出されなかった。主柱穴は存在しない。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　新カマドが西壁中央に位置し，旧カマドが北壁ほぼ中央に位置する。ともに方形プランからやや大きく突出する。旧カマドは除去されているが，山砂・焼土が堆積土の一部に含まれており，特に下層・煙道部側に多くみられる。煙道部側は埋め戻されて，壁が構築されたと思われる。火床部底面には地山のロームが焼けて赤色化した面がある。底面は床面より若干窪むが，６cm～７cm程度の深さであり，あまり深くない。

新カマドの遺存はあまりよくない。両袖は壁側で遺存するが，前側はかなり欠損する。構築材は山砂主体で，しまりがある。土製支脚（18）が火床部やや左奥側から立った状態で出土した。やや左に寄っているが，最終使用時の位置を留めるものであろう。堆積土下層は焼土ブロックを多く含むが，黒みも強い土層である。火床部底面に赤色化した面はみられない。カマドは当初の壁溝上に構築されており，底面はやや不明瞭である。底面は新竪穴の床面から10cm程度の深さと思われる。

**堆積土**　黒褐色土主体である。ロームブロックをやや多く含むが，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　やや多量の遺物が出土した。全体的に散った分布であるが，中央がやや少ない。図示できた遺物は22点である。１～11はロクロ土師器杯，12～14はロクロ土師器皿，15は東海産と思われる須恵器壷，16は千葉産の須恵器甕，17は千葉産の須恵器甑，18は土製支脚，19は砥石である。20～22は鉄製品で，20は刀子，21は閂受け金具，22は鉄鏃である。

１は遺存良好な土器で，欠損部は口縁部の一部のみである。１及び12は体部外面に「二」と書かれた倒位の墨書がある。９～11も体部外面に墨書をもつ土器片である。９は小片で遺存が少なく，判読できない。10も小片で，「毛」の可能性があるが，断定しがたい。11は「大」で，正位の墨書である。14も底部内面に「夫」とみえる墨書がある。墨書は「奉」の省略形の可能性がある。墨痕は薄い。

１の欠損部は２箇所であるが，わずかなものである。１箇所は欠損部に続いて小さく破損するが，他に破損する部分はない。欠損部と破損部を合わせた形態は「W」字状である。もう１箇所の欠損部はより小さいものである。墨書は欠損部間に位置する。器面は二次的な被熱により全体的に荒れている。欠損・破損は打ち欠き・打ち割りされたものと思われるが，焼成があまいため，小さい方は意図的なものでないか

もしれない。12は遺存が少なく，破損に意図的な様相はうかがえない。

２は底部・体部下位の遺存が比較的よいが，口縁部・体部上位はほぼ全周欠損する。同一個体と思われる口縁部の小破片が１点ある。欠損部は打ち欠きされたことも考えられるが，やや断定しがたい。内面はヘラミガキが施されており，滑らかである。転用硯とも思われるが，これも断定しがたい。３～８も遺存があまり多くない。８は大型の杯である。３・８及び９は内面に黒色処理・ヘラミガキが施されている。９は３・８とは別個体である。また11も同一個体となるものはみられない。10に最も似た質感のものは12である。1同一個体の可能性があるが，10が小片のため断定しがたい。

13は底部に１条のひび割れがあるが，割れていない完形の土器である。ひび割れは内面に顕著で，わずかに外面に及んでいる。試しに水を注いでみたが，ひび割れのため漏れる状態であり，液体を溜めておくことはできない。その点で，現状では瑕疵のない完形品ではない。14は破損しているが，欠損はわずかで遺存のよい土器である。かなり細かく割れる部分があるため，欠損が生じたと思われ，本来は完形であった可能性がある。墨書部分も割れているが，多くが大形破片のところに位置する。二次的な被熱により，煤・油煙が内面に環状に付着しており，灯明具と思われる。墨書はその内側に位置する。底部は全体に突出し，さらに端部が突き出ている。リング状の高台ではないが，高台付皿といえるものである。底部外面には回転糸切り痕が顕著にみられる。

１・14の他，３・４も二次的に火を受けており，器面の荒れ・赤色化等が顕著である。４は内外面の一部に山砂が付着している。また５・６・８・12も火を受けた可能性がある。やや断定しがたいが，その他の土器も多くが火を受けているのかもしれない。

なおロクロ土師器としたうち，４・13は千葉産の須恵器かもしれないが，断定しがたいため，土師器としておく。他にも疑わしいものがあるが，４・13に準じた。

15は胴部の肩部外面と底部内面に，暗灰緑色の釉が付着している。肩部の釉は光沢をもつ。胎土は白色の小石を含むが，概して緻密である。また黒色粒の吹き出しがみられる。色調は灰色，焼成は堅緻である。

16・17は遺存が少ない。16は大型の甕である。内面の剥離が顕著である。17は甑であるが，把手部分は遺存していない。底部は５孔式である。

18は両端面とも一部を除いて遺存していると思われるが，上端部は若干欠損していることも考えられる。劣化が顕著であり，やや判然としない。19の石材は流紋岩である。方柱状の砥石の一部で，片側の小口面側が遺存する。図下図は小口面側の図で，面の長軸方向に筋状の研ぎ痕が１条みられる。強く深いもので，断面は「Ｖ」字状を呈する。小口面はあまり平坦でなく，本来の小口面がやや欠損しているのであろう。軟質の石材であり，小口面もかなり磨り減っていると思われる。図の上下面・左右の両側面は平滑である。折損面の使用は不明瞭であるが，面の短軸方向に擦痕がみられ，若干使用されていると思われる。割れており，一部で細かく接合している。20は刀子で，関部分周辺の破片である。茎は比較的多く遺存するが，茎尻を欠損する。背関・刃関とも斜めに切り込みが入る。しかし背関は錆の影響がなければ，直角的である可能性が考えられる。茎の破損部は錆に覆われており，古い欠損である。刃関は角をなさずに，やや緩やかに茎に移行する。21はほぼ完形の閂受け金具である。「Ｕ」字形の形態で，両脚部がやや長い。閂の受け幅は3.5cmである。脚端部は角張った形態である。やや薄くなるが，あまり尖っていない。図下側の端部はわずかに欠損していることも考えられる。仮に図示した面を表面とすると，両端とも表面側に若干上がっている。しかし大きな曲がりではないため，脚部先端は扉の外側に突き出ていない可能性がある。

22は切先から茎の上部まで遺存する鉄鏃である。鏃身は長三角形式で，かなり大型のものである。直角関であり，逆刺をもたない。棒状部はかなり短く，鏃身の方が長い。棒状部の側面は直線的であるが，茎に向かって若干広がっている。篦被は直角の両関である。

1は新カマドを奥にしてみた左前（南東）側の床面近くから正位で出土した。14は中央やや右前側の床面から倒位で出土した。13は右（北）壁際中央やや東で，旧カマド右脇の下層から正位で出土した。新カマド内からは18の他に，8・19と，16・17の一部が出土した。なお16・17はともに出入口ピット近くから出土し，また16は右奥隅，17は左壁際等に広く散っている。3の一部と12が新カマド前側から出土したが，3の一部は旧カマド内からも出土した。12は中層からの出土である。5は新カマド右袖外脇で，北壁際の下層から出土した。13の近くからは3の一部・15・21が出土したが，15は広域に散っている。

1・14は竪穴住居廃棄の祭祀に関わる遺物の可能性があるが，中途半端な位置関係であり，やや断定しがたい。また13も同様の可能性がわずかに考えられるが，床面からやや浮いており，断定しがたい。また12は新カマド近くからの出土であるが，かなり床面から浮いている。以上，一部の遺物に祭祀的である可能性が考えられるが，断定はしがたい。なお21は他から廃棄された他に，本住居の壁際または壁上方に保管されていたことも考えられる。しかし出土遺物は広域に散っているものも目立ち，多くは単に廃棄されたか，流入したものと思われる。

**重複遺構**　南東隅付近でSK－307，北壁や東壁北寄り等でSB－048と重複し，両者に本住居が切られている。

SI－258（第279図，図版92）

**位置**　調査区南部南側の24N－20グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが3.4m，幅が3.5mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

**柱穴**　南壁際中央で出入口ピットが検出された。径は42cm×39cm，床面からの深さは26cmである。

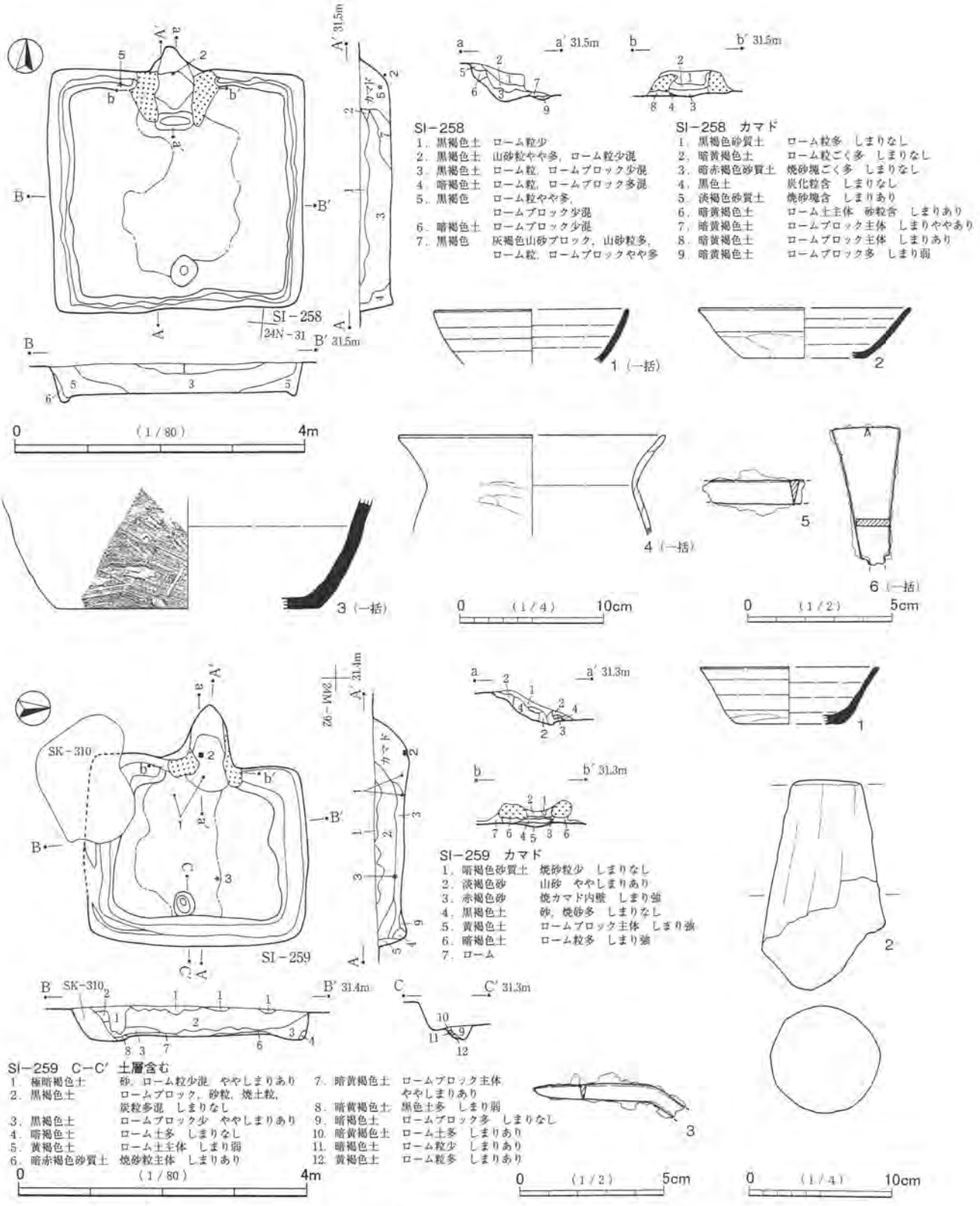
**壁溝**　全周する。カマド下にも存在する。

**カマド**　北壁中央に位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖は壁側の遺存がよいが，前側上部が欠損している。構築材は山砂主体で，しまりがある。両袖内側は焼けてかなり内部まで赤色化している。火床部は赤色化した面がみられない。カマドは壁溝を掘削した後に構築されている。底面前側が床面から5cm～7cm程度の深さで壁溝状に窪んでいる。灰のかき出し等，カマド使用に伴うものであろう。中央から奥側の底面も床面からはあまり深くない。堆積土下層は焼土ブロックを多く含む（3層）。前側は被熱したロームブロックが主体である（7層）。

**堆積土**　黒褐色土・暗褐色土主体である。壁際を除いてロームの含有が少なく，レンズ状に堆積しているため，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　ごく少量で散在的な出土である。遺存のよい遺物もない。図示できた遺物は6点である。1・2は新治窯産の須恵器杯，3も新治窯産の須恵器甕である。4は武蔵型の土師器甕である。5・6は鉄製品で，5は刀子，6は鉄鏃である。

3は白色の小石・砂粒を多く含む。色調は，外面が黒灰色，内面が暗灰色，断面内部が褐灰色である。焼成良好で堅緻な土器である。5は身の破片である。切先側・茎側とも欠損する。錆膨れが著しい。6は方頭斧箭式の鏃身周辺の破片である。棒状部はなく，鏃身から直角の両関を介して茎に移行する。茎はわ




第279図　SI－258・259

ずかな遺存である。刃部先端は直線的であるが，わずかに中央が高まる。

2はカマド内下層から出土した。5はカマド左袖外脇の下層から出土した。他の遺物は竪穴内での位置が不明である。

SI－259（第279図，図版92）

位置　調査区南部中央の24M－92グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが2.6m，幅が3.1mのやや横長の方形をなす。確認面からの深さは40cmである。

床面　竪穴全体に貼床が施されている。貼床を構成する土層はロームブロック主体の暗黄褐色土である。床面はほぼ平坦である。硬化面が中央を主体としてカマド前から出入口ピットまでみられる。

柱穴　東壁際中央で出入口ピットが検出された。径は33cm×28cm，床面からの深さは19cmである。

壁溝　全周する。かなり幅が広いが，壁際の貼床部分を掘り過ぎたものと思われる。

カマド　西壁中央に位置する。方形プランから大きく突出する。両袖の遺存はあまりよくない。ただし前側はあまりプラン内に出ていないと思われる。左袖前側の幅が広い部分は前天井の一部の可能性がある。構築材は山砂主体であるが，下部はロームブロックを多く含む。両袖内側は若干赤色化している。土製支脚（2）が中央やや左側の底面上から立った状態で出土した。やや左に寄っているが，出土状況からみて最終使用時の位置を留めるものと思われる。火床部には赤色化した面がみられない。焼土層は底面からやや高い位置にあり（3層），最終的な火床面はやや上方にあった可能性がある。堆積土下層は焼土を含むが，黒みもある土層である（4層）。底面の窪みは床面から5cm～6cm程度であり，かなり浅い。

堆積土　黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

出土遺物　少量で散在的な出土である。図示できた遺物は3点である。1は千葉産の須恵器杯，2は土製支脚，3は鉄製の刀子である。

1は二次的な被熱により赤色・灰白色・暗灰色に変色している。遺存は少ない。2は下端部側を若干欠損するが，出土時点では遺存していたように思われる。もろいため出土後に一部が崩壊したと思われる。3は小型の刀子で，身の破片である。関部分は遺存しない。茎寄りのところで折れ曲がっている。

1はカマド内及びカマド左袖前方の下層・床面から出土した。3は中央やや前（東）寄りの下層から出土した。

重複遺構　北西（左奥）隅付近でSK－310と重複し，本住居が切られている。

SI－260（第280図，図版92）

位置　調査区南部西端の23N－07グリッドを中心に位置する。

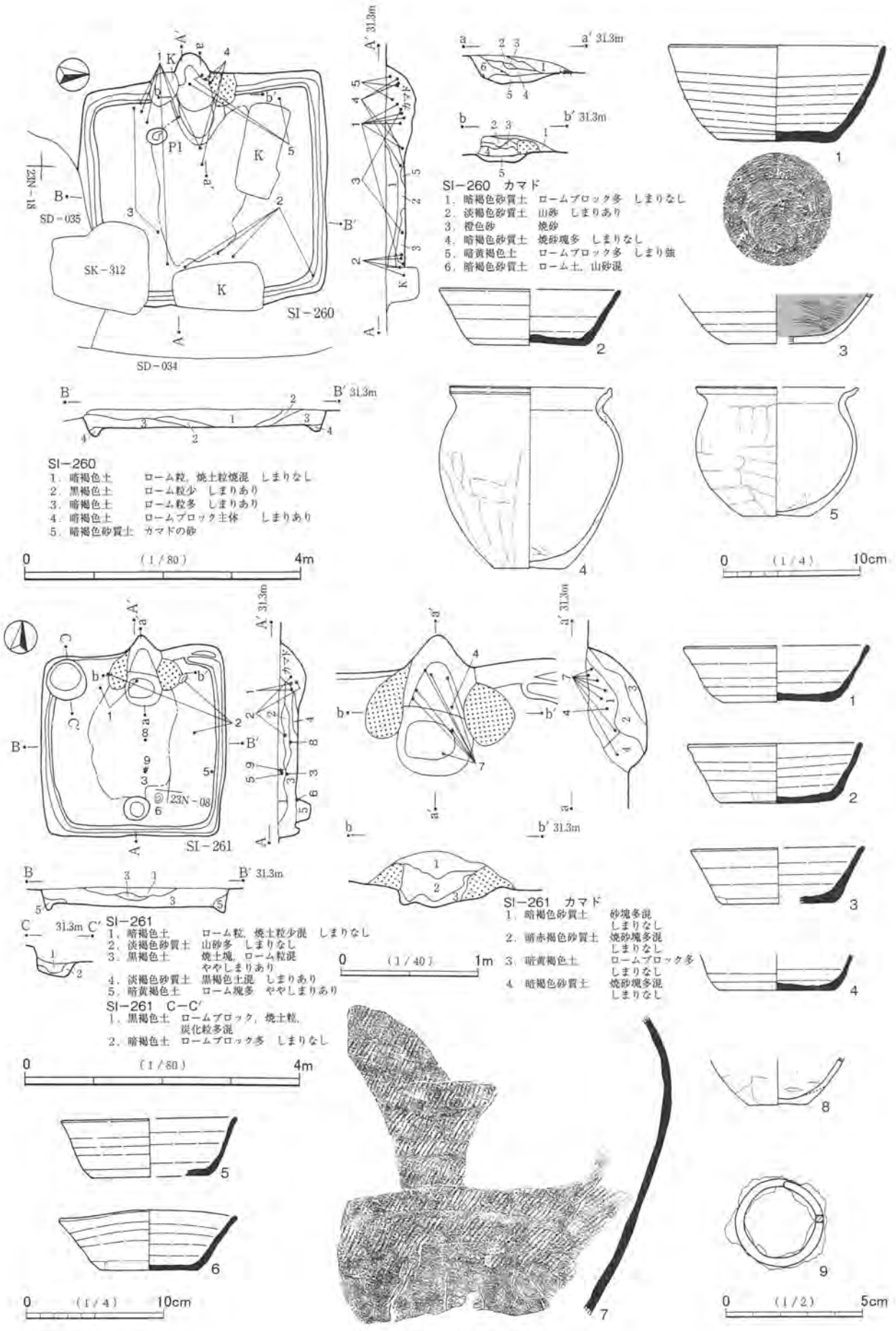
形状・規模　長さが3.4m，幅が3.5mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

床面　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

柱穴　出入口ピットは検出されなかった。東壁際中央に存在すると思われるが，その部分は撹乱を受けており，破壊されたのであろう。主柱穴は存在しない。カマド左袖前方で検出されたピットは本住居を切っており，主柱穴ではない。主柱穴は存在しないとみられる。

壁溝　全周する。

カマド　西壁中央に位置する。方形プランからの突出はやや小さい。右袖は遺存するが，左袖はほぼ遺存しない。構築材は山砂主体で，しまりがある。火床部は赤色化した面がみられないが，土製支脚が中央やや奥側で，床面とほぼ同じ高さから立った状態で出土した。土製支脚上には小型の土師器甕（4）がかぶせられていたが，顕著な被熱痕跡があるため，合わせて支脚として機能したものといえよう。なお土製支脚はもろく，崩壊したため実測していない。カマド底面は広くやや深く掘り込まれているが，当初または作り替え時の掘りかた底面である。最終のカマドは，掘りかたがロームブロックを多く含む暗黄褐色土（5層）によって埋められたか埋まった上部に構築されている。堆積土中・下層は焼土を多く含む（3・




第280図 SI－260・261

4層)。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。下層・壁際はロームの含有が多いが，中・上層は少ない。レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。

**出土遺物**　カマド内及びその周辺からややまとまって出土した。全体の遺物量は少量で，カマド以外は散在的な分布である。図示できた遺物は5点である。1は東金子窯産の須恵器杯，2は千葉産の須恵器杯，3はロクロ土師器杯である。4・5は小型の土師器甕で，在地の土器である。

1の遺存は60%程度である。欠損・破損に特に意図的な様相はうかがえない。2は遺存が少なく，3は小破片である。3は内面に黒色処理・ヘラミガキが施されている。

5は底部から胴部下位の遺存がよいが，口縁部から胴部上位をやや多く欠損する。被熱痕跡が顕著で，灰黒色・灰黄色・赤色に変色している。器面の磨耗も著しい。器壁が非常に薄い土器である。欠損部は土製支脚にかぶせるため意図的に除去されたことと，器壁が薄いため自然に破損したことの双方の可能性が考えられる。胴部内面の一部に焼土が付着している。4はほぼ完形の土器である。細かく割れており，胴部の所々に小さな欠損がある。被熱痕跡が顕著であり，黒色化・赤色化及び器面の剥離がみられる。剥離は内面中下位と底部付近の外面に著しい。また赤色化は下半部，黒色化は外面上半部に顕著である。

5は主としてカマド内からの出土であるが，一部の破片が右奥の上層に散っている。4はカマド内及びカマド前方の下層から出土した。1はカマド左袖周辺及びカマド前方の下層から出土した。2は東（前）壁側の下層・床面から出土した。撹乱がなければ，より多くの破片が出土したことも考えられる。3はやや広く散って中層・下層から出土した。

5は土製支脚とともに本住居で使用されていたものが，廃棄時に遺棄されたものである。出土状況に祭祀的な様相をみるのは難しい。4や1も本住居で使用されたものが遺棄された可能性が考えられる。

**重複遺構**　左（南）壁際でSD－035，左前（南東）隅付近でSK－312と重複し，ともに本住居が切られている。また前（東）壁中央付近と右奥（北西）側が撹乱を受けている。

**SI－261**（第280図，図版93）

**位置**　調査区南部西端の23M－97グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.6m～2.8m，幅が2.7mの方形をなす。確認面からの深さは30cmである。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

**柱穴**　出入口ピットが南壁側中央で検出された。径は37cm，床面からの深さは27cmである。北西(左奥)隅でピットが検出された。円形でやや大型の形態である。床面での径は60cm，底面径は48cm×40cmである。深さは，床面から19cm，確認面から45cmである。本住居に伴う貯蔵穴の可能性があるが，周囲に掘立柱建物が存在するため断定しがたい。主柱穴は存在しない。

**壁溝**　北壁側は円形のピットとカマドがあるため不明瞭であるが，全周とみてよいと思われる。

**カマド**　北壁中央やや右寄りに位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖が遺存するが，上部が欠損している。構築材は山砂主体で，しまりがある。下部はローム・暗褐色土を含む。火床部には赤色化した面がみられない。カマド底面は床面から20cm程度掘り込まれており，かなり深い。使用によるだけでなく，当初または作り替え時の掘りかたが深かった可能性がある。ただし竪穴自体の掘りかたは床面から浅いか，ほとんど掘り込まれていないようである。カマド内は焼土ブロックを多く含む土層が比較的厚く堆積している（2層）。

**堆積土**　暗褐色土・黒褐色土主体である。下層はロームの含有が多いが，上層は少ない。レンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。北西隅ピットの堆積土は，上層が黒褐色土，下層が暗褐色土で，全体にロームブロックの含有が多い。明瞭な柱痕はみられない。

**出土遺物**　少量で散在的な出土であるが，遺存のよい土器が数点みられる。図示できた遺物は9点で，カマド内及び周辺からの出土が多い。1～6は千葉産の須恵器杯，7は千葉産の須恵器甕である。8は小型の土師器甕で，在地の土器である。9は鉄製品で，用途は不明である。

6はひびが入っているが，破損のない完形の土器である。かなり歪みの大きい土器である。2はやや遺存のよい土器である。欠損・破損に意図的な様相はうかがえない。1は底部が遺存するが，口縁・体部は一部の遺存である。二次的な被熱により，一部が赤色化･黒色化し，器面の荒れが全体的に著しい。口縁･体部の欠損の多くは破断面が水平であり，意図的に除去された可能性がある。出土位置から支脚の補助道具に転用された可能性が考えられるが，断定はしがたい。また本来的には硯・砥石等への転用かもしれないが，これも断定しがたい。3・4・5は遺存が少ない。

7は口頸部が長く延び，胴部が丸みをもつタイプの土器である。やや大型の土器で，遺存は胴部の一部である。胴部内面の当て具痕は一部で痕跡が明瞭である。8の遺存は底部から胴部下位にかけての一部である。底径が小さい土器である。内面の一部に顕著な荒れがみられる。

9は環状の鉄製品である。平面形はほぼ円形を呈する。

6は南壁側やや右寄りで，出入口ピット近くの床面から正位で出土した。2は主要部分がカマド右袖外脇の下層からやや傾いた倒位で出土した。2の小破片はカマド内・カマド左袖付近及び右（東）壁側中央付近の下層・中層に散っている。1はカマド内及び周辺の下層から出土した。4・7はカマド内からの出土である。3・5・8・9は中・上層からの出土である。平面位置は5が壁際であるが，3・8・9は中央である。

6は竪穴住居廃棄，1・2はカマド廃棄の祭祀に関わる可能性があるが，1・2の様相からはやや断定しがたい。6もひびが入ったために遺棄されたのかもしれない。しかしいずれも本住居で使用されていた可能性が考えられる。中・上層から出土した遺物や図化に至らない土器片の多くは単に廃棄されたか流入した遺物であろう。

**SI－262**（第281・282図，図版93）

**位置**　調査区南部西端の23M－87グリッドを中心に位置する。

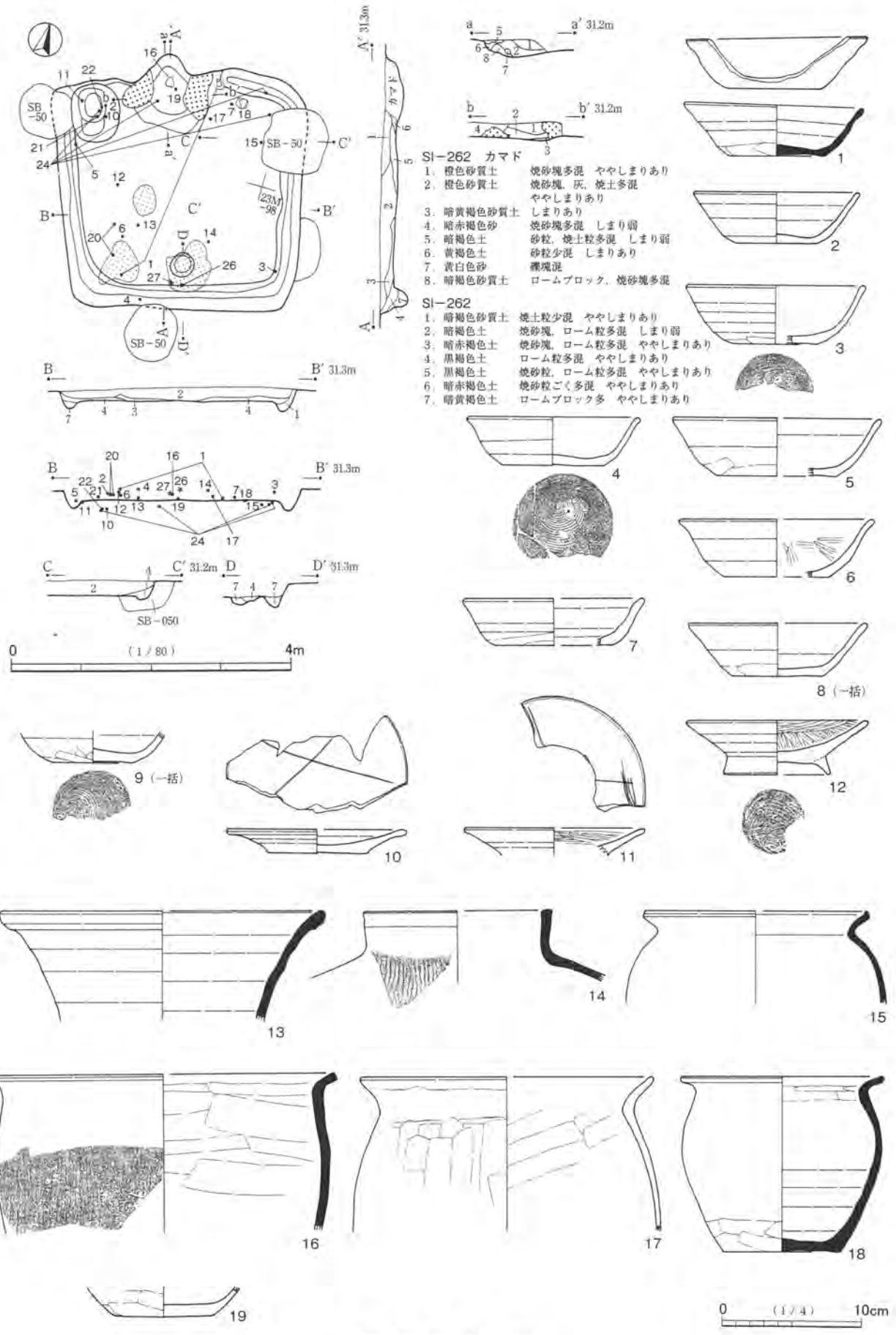
**形状・規模**　長さが3.3m～3.6m，幅が3.5mの方形をなす。確認面からの深さは20cmである。やや逆台形の形態を呈する。

**床面**　ほぼ平坦で，中央が硬化している。

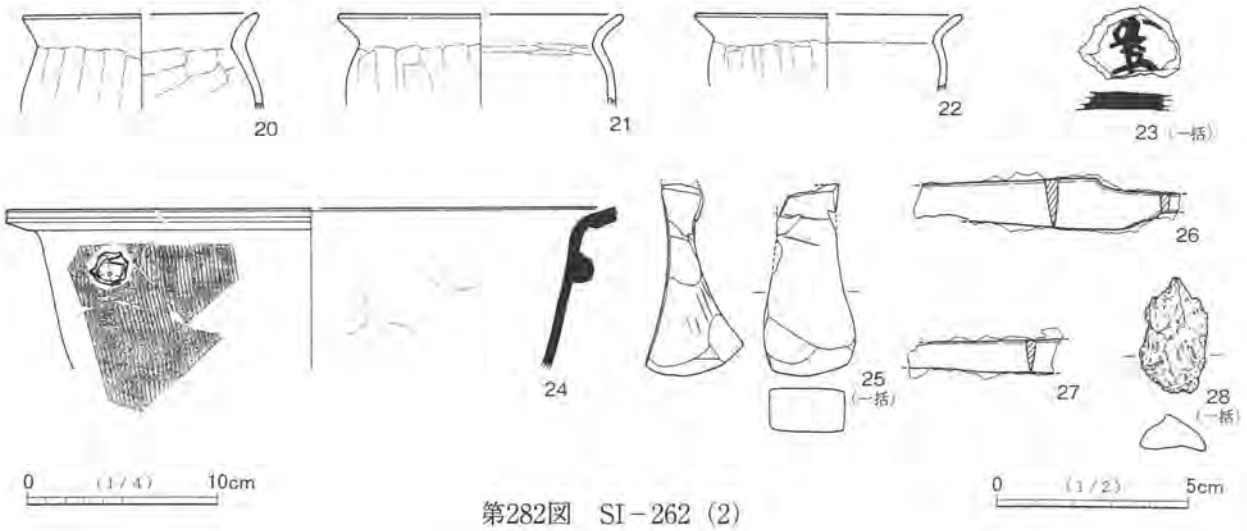
**柱穴等**　出入口ピットが南壁側中央で検出された。径は38cm×31cm，床面からの深さは12cmである。また近隣のSI－261同様，北西（左奥）隅でピットが検出された。楕円形でやや大型の形態である。床面での径は83cm×70cm，深さは，床面から23cm，確認面から40cmである。SI－261とともに本住居に伴う貯蔵穴の可能性があるが，同じく周囲に掘立柱建物が存在するため断定しがたい。主柱穴は存在しない。

**壁溝**　全周する。

**カマド**　北壁中央やや左寄りに位置する。煙道部側が方形プランから山形に突出する。確認面から床面までやや浅いために両袖の上部を欠くが，下部の遺存はよい。構築材は山砂主体で，混じりけが少ない。




第281図　SI－262（1）




第282図　SI－262（2）

両袖内側はやや赤色化している。火床部は赤色化した面がみられない。底面の窪みは浅く，床面から7cm程度の深さである。堆積土は焼土ブロックを多く含み（1層），下層（2層）は灰も多く含む。

**堆積土**　暗褐色土主体で，ローム粒の含有が多い。また床面上に焼土を多く含む暗赤褐色土が堆積している。焼土の集中範囲は竪穴の左前（南西）側付近にみられる。

**出土遺物**　やや多量の遺物が出土した。遺物分布はカマドの左右に多く，中央から左前側も比較的多くみられる。右（東）壁側の中央から前側はやや希薄である。図示できた遺物は28点と多いが，遺存のよい遺物はあまり多くない。1は千葉産の須恵器杯，2～9はロクロ土師器杯である。10～12はロクロ土師器皿で，10は無台，12は有台，11は無台か有台か不明である。13～16・18・23は千葉産の須恵器甕である。17・19～22は在地の土師器甕で，17以外は小型の甕である。24は千葉産の須恵器甑，25は砥石，26・27は鉄製の刀子，28は軽石である。

土師器としたもののなかで，2・5・7・10は千葉産の須恵器と区別が難しい。また8は回転糸切り痕をもつが，色調は暗褐色を呈する。土師器と思われるが，須恵器の可能性も若干考えられる。

10は内面に「×（＋）」の線刻がある。刻線は弱いが大きく刻まれている。11も内面に線刻がある。口縁・体部の一部の破片のためやや不明瞭であるが，10同様大きな「×（＋）」になると思われる。交差線と思われる片側には，さらに4条～5条の線刻が交差しているが，それらは不整で引っかき傷のような線刻である。交差部分も整っていない。23は甕底部の小片であるが，内面に墨書がある。欠損部に続いており，判読できないが，後世に書かれた花押かもしれない。

杯皿のうち，1・4は比較的遺存がよい。12は欠損部も多いが，1/2強の遺存である。その他の土器は1/2弱で，遺存が少ない。1は口縁・体部の1箇所が欠損する。欠損は口縁部周で1/3弱程度である。破断面は整った弧状を呈し，打ち欠きされたものと思われる。欠損部の反対側も小さく「U」字状に割れて接合しており，打ち割りされたことが考えられる。この部分と欠損部間の片側も割れて接合するが，これは自然な破損かもしれない。内外面に煤が付着し，特に外面は顕著で，一部に光沢もみられる。また赤みもかなり強い。二次的な被熱によるものであり，灯明具として使用されたことが考えられる。なお煤・油煙の付着状況から，打ち欠き以前に灯明具として使用されたと思われる。打ち欠き以後の使用については判然としない。

1以外の土器の欠損・破損に意図的な様相をみるのは難しい。図示した杯のほとんどが被熱痕跡をもつ。

皿についてはやや不明瞭であるが，12には器面の荒れ・剥離がみられ，火を受けたものと思われる。10・11も同様の可能性がある。

甕・甑類で遺存のよいものは18のみである。他はいずれも少なく，小破片のものも多い。13は口頸部が長く延び，胴部が丸みをもつタイプの甕で，かなり大型の土器である。14の胴部も顕著に丸みをもつが，口縁部が短く直立的に立ち上がる器形の甕である。15は小型の甕である。胴部外面のタタキ痕，内面の当て具痕とも判然としない。施されていない可能性があるが，施されていたとしてもナデによって完全に消されている。色調は黄褐色味が強いが，灰色の部分もある。器面はざらついており，須恵器であることに疑いはない。16はバケツ形に近い器形の甕である。被熱により胴部内外面の剥離や赤みが顕著である。

17は胎土に黒雲母を多く含む。18はロクロ成形の甕である。底部が大きく，敷物等の痕跡がみられる。色調は暗赤褐色で，胴部最大径付近の外面の黒みが強い。19は底部付近の破片である。器面は内外面とも剥離がみられ，特に内面は顕著である。20～22は口縁部付近の小破片で，互いに別個体である。20・22は被熱による赤みや剥離が顕著である。21は19と同一個体の可能性がある。20もその可能性があるが，21の方が可能性が高いと思われる。なお，ともに19とは別個体の可能性もある。23の底部外面は敷物等の痕跡がみられる。色調は赤褐色である。断面内部まで同様であるため，須恵器窯で焼成されていないことも考えられる。24は把手が１箇所遺存する。方台が崩れて丸みをもつ形態である。接着も雑であり，強く押しつけたため裏側の内面が若干ふくらんでいる。平行タタキは細かく，焼成は良好である。　25の石材は流紋岩である。本来は方柱状の砥石であるが，中央付近から片方の小口側が遺存する。右図の面を上面とすると，上下面は研ぎ減ってやや強い弧を描き，本来の中央付近がかなり薄くなっている。軟質の石材であり，薄い部分が若干割れている。上下面・左右の両側面は滑らかであるが，上面は薄い部分で使用による若干の段差がある。また左側面には筋状の研ぎ痕がみられる。小口面は丸みやざらつきがあり，使用前の石材の表面を留めている可能性がある。一部がやや平坦であり，若干使用されていると思われるが，使用頻度は低い。折損面もざらつくが，平坦であり，折損後に若干使用されていると思われる。

26は関部分付近の破片である。切先側・茎尻側を欠損する。背関は直角的に切り込みが入る。刃関は錆のため不明瞭である。関部分から幅を減じて茎に移行するが，浅い直角関をもつことも考えられる。27は身の破片である。切先・関部分とも遺存しない。切先に近い部分と思われる。

遺存のよい遺物の出土状況からみると，まず１の主要部分がカマド右袖外脇の床面近くから倒位で出土した。破片の一部が遠く左前（南西）隅部の中層に散っている。４は南壁際左寄りの中層から出土した。床面からやや高い位置であるが，上方から落下したことも考えられる。12は中央左側の下層から出土した。18はカマド右側で１近くの床面から横倒れの状態で出土した。その他の遺物の出土層位も床面から確認面までわたっている。なお確認面から床面までやや浅い住居であるため，上位から出土していても他との比較では中層程度とみてよいと思われる。

出土遺物のうち，１はカマド廃棄の祭祀に関わる遺物の可能性がある。しかしその他には祭祀的な様相と断定できる遺物がみられないため，やや根拠が弱い。18は遺存がよく，１近くから出土していることで若干の可能性が考えられるが，断定しがたい。出土遺物の多くは単に廃棄されたか，流入したものであろう。堆積土に焼土がみられることから，廃棄物の焼却時に廃棄されたものも多かったと思われる。

**重複遺構**　所々でSB－050と重複するが，本住居がSB－050を切っている。

**SI－263**（第283図，図版93）

位置　調査区南西部南寄りの23M－84グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長さが3.3m，幅が3.1mの方形をなす。確認面からの深さは40cmである。北西（左奥）隅が張り出しており，西（左）壁が長い。やや不整な台形状の形態である。

床面　ほぼ平坦である。左右の壁側を除いて硬化している。中央が他よりやや顕著な硬化である。

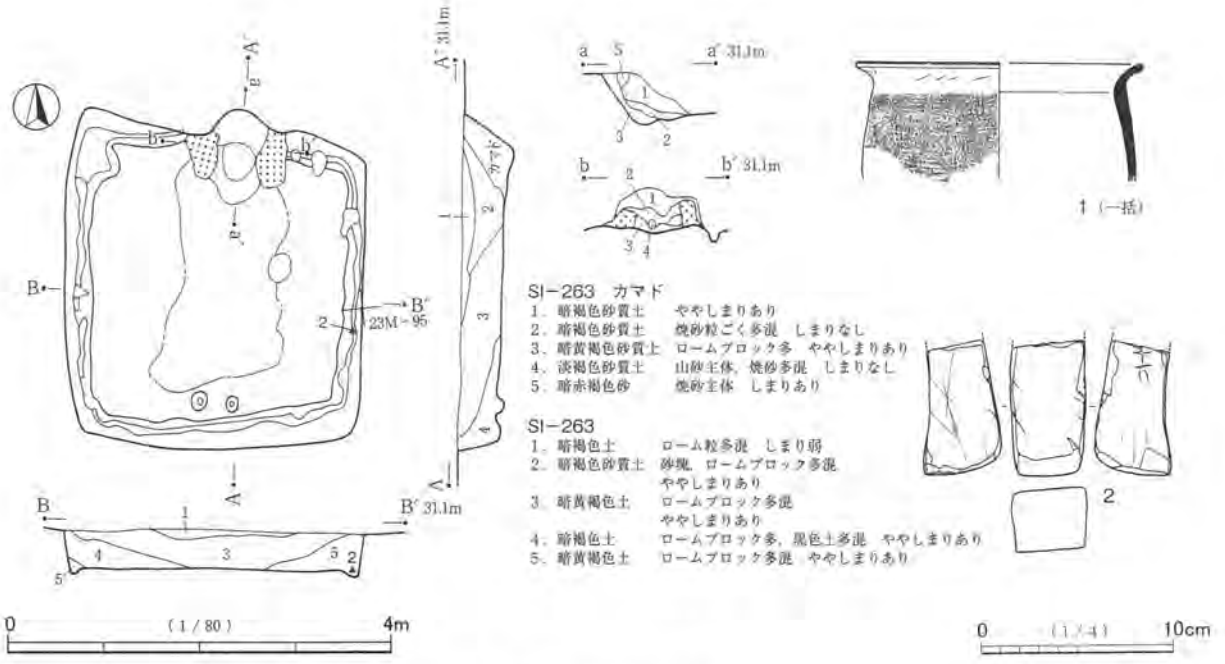
柱穴等　南壁際中央で２箇所のピットが検出された。ともにかなり浅いため，出入口ピットか断定しがたい。しかし撹乱を受けていないにもかかわらず，出入口ピットが確認されない竪穴もあるため，あまり掘り込まれずに設置された出入口施設があると思われる。主軸線の左右に位置するため，出入口施設に関わる可能性のあるピットとみておきたい。左側のものの径は18cm，床面からの深さは３cm，右側のものの径は17cm×14cm，深さは６cmである。両者が新旧関係をもつのか，同時に機能したのかは判然としない。浅いピットであるため，後者の可能性もあると思われる。主柱穴は存在しない。

壁溝　全周する。底面は凹凸が著しい。北東隅や南壁右側の壁溝はやや幅が広い。全体的な貼床は施されていないが，壁際の一部のみ床面が整えられたものと思われる。

カマド　北壁やや右寄りに位置する。方形プランからの突出は小さい。両袖は壁際の遺存がよいが，前側はかなり欠損している。構築材は山砂主体で，しまりがある。下部はロームブロックを多く含む。両袖内側は赤色化している。火床部は赤色化した面がみられないが，被熱により底面のブロック化が著しく，もろくなっている。土製支脚が中央奥側から立った状態で出土した。最終使用時の位置を留めるものであろう。もろいため，上部が欠損していると思われる。底面の窪みは浅く，深いところでも床面から10cm弱である。使用に伴う程度のものであろう。堆積土下層は焼土を多く含むが（２層），奥側はその下にロームブロックを多く含む土層が堆積している（３層）。

堆積土　全体にロームブロックの含有が多く，埋め戻されていると思われる。

出土遺物　少量で散在的な出土である。図示できた遺物は２点である。１は千葉産の須恵器甕である。遺存は口縁部から胴部上位までの1/4周程度である。胴部外面に横方向のタタキ目があるが，ナデによっ




第283図　SI－263

てかなり消されている。タタキ目については，当初ヘラナデの痕跡とも思われたが，胴部内面に当て具痕とみられる痕跡があるため，タタキ目とした。色調は外面が褐色，胴部内面が黒色である。断面内部に灰色味のある色調はみられない。

2は砥石で，石材は流紋岩である。本来は方柱状の砥石であるが，折損して片方の小口側が遺存する。中央図の面を上面とすると，上下面・左右の両側面は非常に平滑である。下面は他の面よりも緩やかな凹面をなす。また筋状の研ぎ痕が各面の所々にみられる。ただし右側面の折損面寄りにあるものは研ぎ痕とみるには疑わしい形態をしている。「十万」または「十六」と読める線刻文字の可能性があるが，やや判然としない。研ぎ痕が偶然にそのような形にみえるだけかもしれない。小口面・折損面はざらつきがあり，あまり使用されていない。

2は右（東）壁際やや南寄りの壁溝中から出土した。1は出土位置不明である。

## 第3節　竪穴状遺構

平面形は主として方形状であるが，カマドをもたない等，明確に竪穴住居と認められないものを竪穴状遺構とした。一部に不整な形態のものや，底面が平坦でないものを含む等，土坑との区別もやや不明瞭である。竪穴状遺構として括った遺構の性格をより細かくみると，カマドが失われた竪穴住居，カマドをもたない竪穴建物，建物遺構ではない何らかの遺構の3種類が考えられる。出土遺物がないか極少で，奈良・平安時代の遺構か不明なものを含むが，それらも便宜的に本節で掲載した。遺構の数量は11基である。

### SI－014（第284図，図版94）

**位置**　調査区西端の21L－17グリッドを中心に位置する。西方に谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　カマドが検出されなかったため，竪穴住居かどうか不明である。ただし至近に位置するするSI－015も小規模なため，竪穴住居の可能性があると思われる。主軸方位も不明であるが，辺の方向は北から45度程度傾いている。北西から南東方向の長さが2.3m，深さは25cmである。斜面にかかるため，南西壁側が流失している。

**床面**　北東から南西に下っている。硬化面はみられない。

**堆積土**　少量のローム粒・焼土粒を含む暗褐色土である。

**出土遺物**　出土遺物はない。そのため時代を特定しがたいが，本遺構の形態及び周囲の様相から奈良・平安時代でよいと思われる。

### SI－016（第284図，図版94）

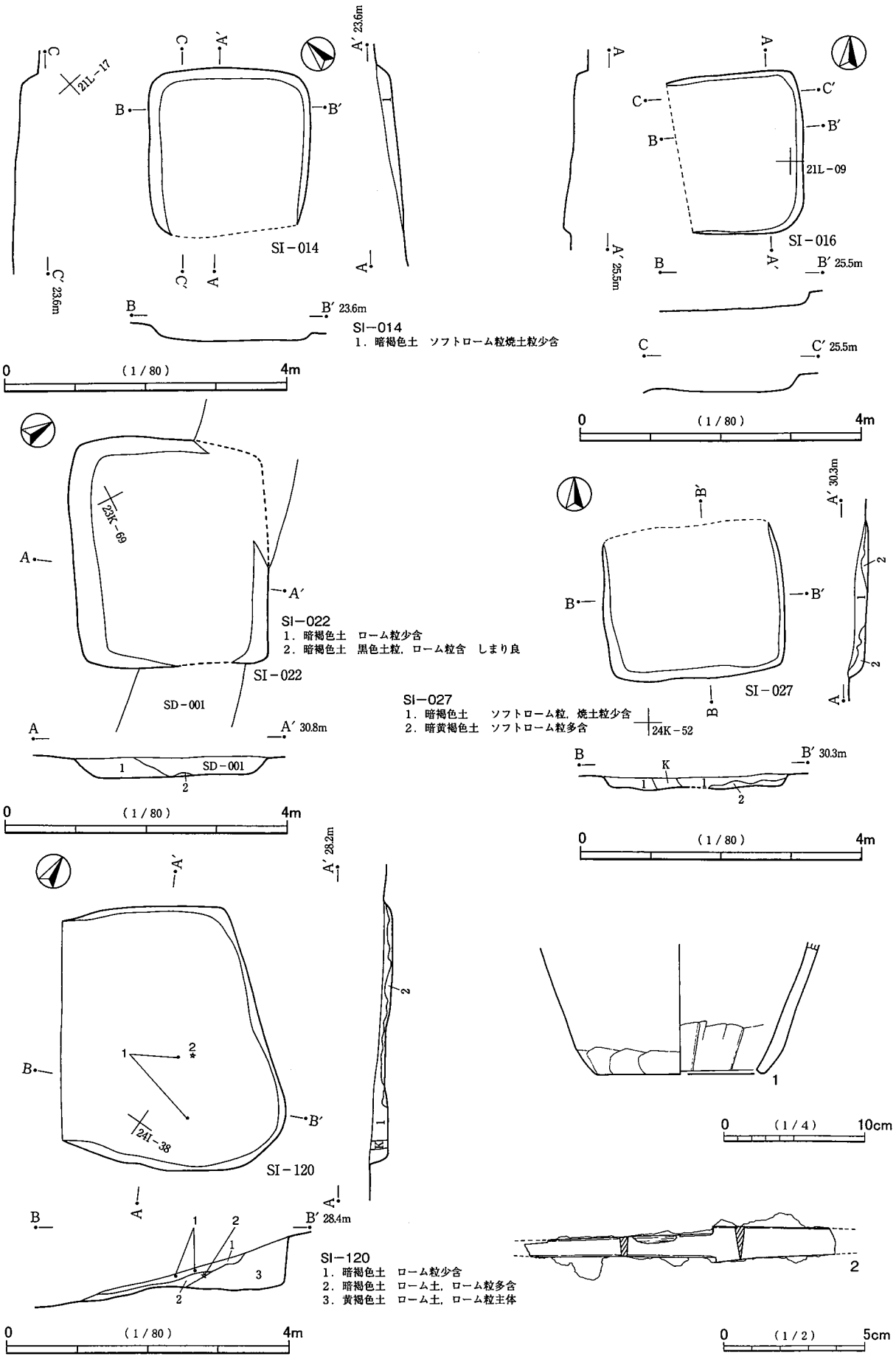
**位置**　調査区西端寄りの21K－98グリッドを中心に位置する。西方に谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

**形状・規模**　カマドが検出されなかったが，竪穴住居の可能性があると思われる。主軸方位は不明であるが，辺の方向はほぼ東西南北に沿っている。南北方向の長さが2.3m，深さは20cmである。斜面にかかるため，西側が流失しており，東西方向の長さが不明である。

**底面**　北から南にやや下っている。硬化面はみられない。

**出土遺物**　少量の遺物が出土しているが，図示できたものはない。

### SI－022（第284図，図版94）




第284図　SI－014・016・022・027・120

位置　調査区中央北西寄りの23K－59グリッドを中心に位置する。

形状・規模　長方形プランで，カマドが検出されなかったため竪穴住居かどうか不明である。長さが3.4m，幅が2.8m，深さは30cmである。

底面　小さな凹凸があるが，ほぼ平坦である。中央の一部が若干硬化していると思われる。

堆積土　少量のローム粒を含む暗褐色土である。

出土遺物　少量の遺物が出土しているが，図示できたものはない。

重複遺構　北側を通るSD－001に切られている。SD－001の底面と本遺構の底面がほぼ同じ深さのため，本遺構の底面を把握しがたい。

SI－027（第284図，図版94）

位置　調査区中央北端の24K－42グリッドを中心に位置する。北方に狭小な支谷を臨み，南から北に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　東西方向の長さが2.6m，確認面からの深さは20cmである。北壁側が流失しており，南北方向の長さが不明である。プランは方形を基調とするが，正方形的か長方形的か不明である。

床（底）面　南から北に若干下っている。硬化面はみられない。

カマド　検出されなかったが，失われた北壁に位置していた可能性が考えられる。

堆積土　暗褐色土で，上層はローム粒の包含が少なく，下層は多い。

出土遺物　少量の遺物が出土しているが，図示できたものはない。

SI－120（第284図，図版94）

位置　調査区中央西端の24I－27グリッドを中心に位置する。西方に支谷を臨み，確認面が東から西に下っている。

形状・規模　現状では斜面に位置するため，西側が流失している。プランは方形と思われるが，遺存が悪いため不明瞭である。東西南北から45度程度斜めに傾く建物遺構とみて記述する。北西－南東方向の長さが3.75m，確認面からの深さは，最も遺存のよい東隅部分で70cmである。北東－南西方向の長さが不明である。カマド・柱穴は検出されなかった。確認面では，暗褐色土の方形プランがはっきりみえていたが，掘り始めると斜面の上の方にソフトロームが多量に堆積しており，当初予想したものより大型になった。

床（底）面　高さの差がかなりあり，平坦でない。硬化面もみられない。

堆積土　上層は暗褐色土で，ローム粒の包含が少ないが，下層・壁際は黄褐色土で，ロームが多量に含まれる。ロームの含有が多いが，斜面に位置するため，人為的堆積と断定しがたい。

出土遺物　遺物量は少量で，散在的な出土である。図示できた遺物は２点である。１は常総型の土師器甑である。底部付近の破片で，小片から復元図化した。底部は単孔である。胴部内面下端際は丁寧な横方向のヘラナデが施されている。内面のヘラナデ後，下端部のヘラケズリ・ヘラナデが施され，平坦面が作り出されている。胴部外面下端際は横方向のヘラケズリが施され，器壁が若干薄くされている。下部を除く内外面はヘラナデ・ナデによる調整である。淡褐色の色調で，白雲母を多く含む。２は鉄製の刀子である。切先側と茎尻側を欠損するが，その間は遺存する。背関・刃関とも直角に切り込みが入る。柄の木質の一部が，茎に付着している。

その他　カマドが検出されないため，やや不明瞭であるが，奈良・平安時代の遺構と思われる。

SK－005（第285図）

位置　調査区西端の21L－14グリッドを中心に位置する。西方に谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　平面形は不整な方形である。長さは2.1m，幅は2.0mで，遺存のよい部分の深さは0.6mである。長軸の方向は北から西に30度程度振れている。遺存のよい北東壁は，掘り込みが２段であり，中位に若干の平坦面をもつ。北東側が深いため階段状の足場の可能性が考えられる。壁は傾斜が急なところと斜めに立ち上がるところがある。

底面　底面は比較的平坦であるが，南西側がやや低い。硬化面はみられない。

堆積土　暗褐色土主体で，白色粘土を含む。粘土の含有は上層に多い。

出土遺物　なし。

SK－006（第285図）

位置　調査区西端の21L－14グリッドを中心に位置する。西方に谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　平面形は楕円形である。長さは2.9m，幅は2.4mで，遺存のよい部分の深さは0.6mである。長軸の方向は北から西に20度程度振れている。

底面　底面は南西側にやや下るが，遺存のよい部分は比較的平坦である。

堆積土　暗褐色土主体で，白色粘土を含む。粘土の含有は上層に多く，下層に少ない。上層は少量の焼土粒を含む。

出土遺物　なし。

SK－008（第285図，図版94）

位置　調査区西側の22L－00グリッドを中心に位置する。西方に谷を臨み，北東から南西に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　平面形は方形と思われる。東壁側は遺存するが，それ以外の多くを欠損する。長さは2.5m，遺存する部分の幅は1.1m，遺存する深さは0.2mである。失われた北壁側にカマドがあるとすると，主軸方位はＮ－24°－Ｅである。

底（床）面　遺存が悪いが，本来は平坦と思われる。硬化面はみられない。

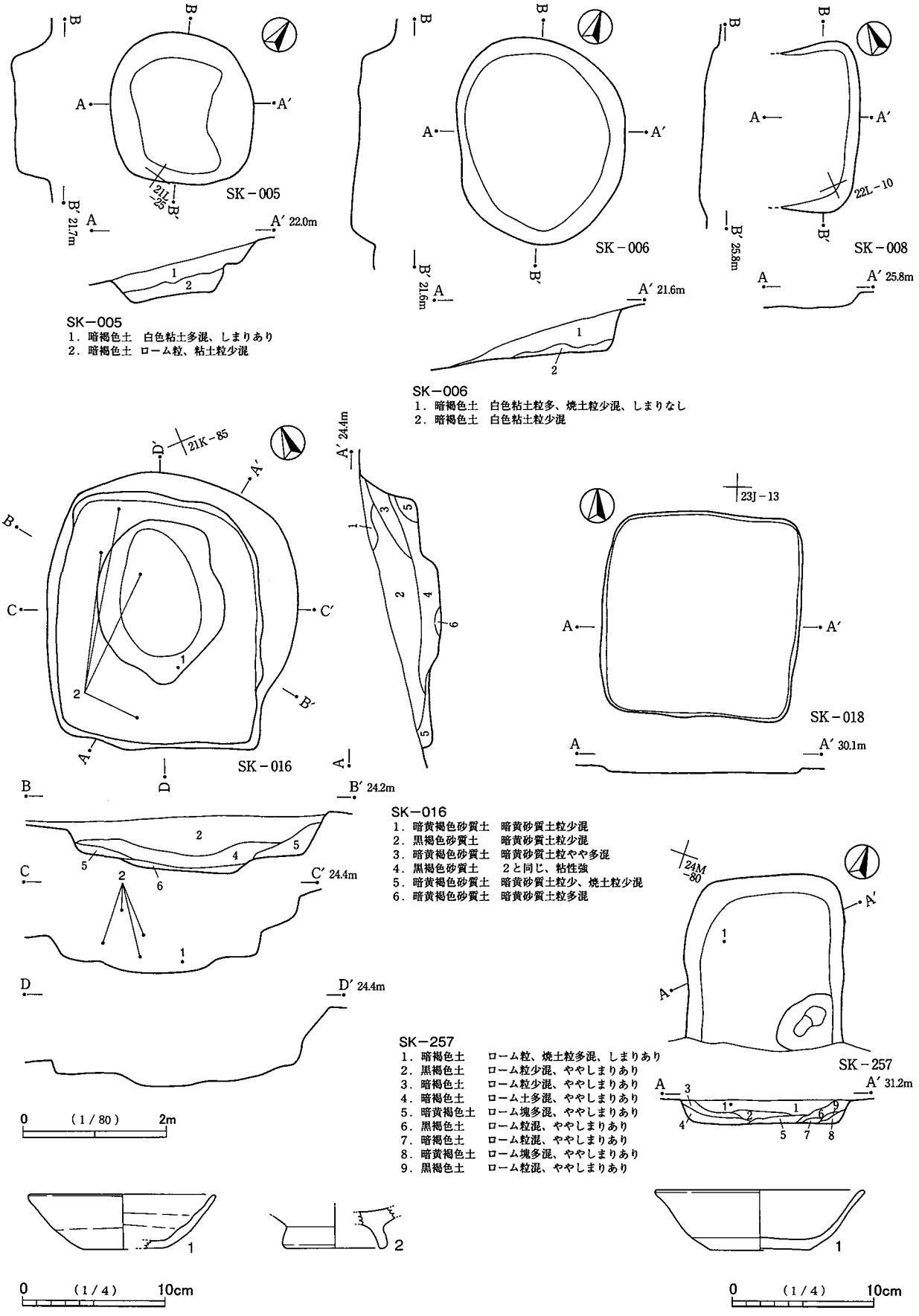
出土遺物　なし。

その他　遺存が悪いが，形態から奈良・平安時代の竪穴建物と思われる。

SK－016（第285図，図版94）

位置　調査区西端の21K－84グリッドを中心に位置する。西方に谷を臨み，東から西に下る緩斜面に立地する。

形状・規模　平面形は方形である。北壁側・東壁側で丸みをもつが，方形を基調とする。南北に長い形態で，長さは3.7m，幅は3.0mである。底面（床面？）で大きな窪みが検出された。形態は楕円形で，長径2.4m，短径1.8m，底面（床面？）からの深さは25cmである。この土坑状部分を除く，竪穴状部分の底面（床面？）までの深さは，遺存のよい部分で0.8mである。土層断面では土坑状部分と竪穴状部分との切り合い関係をみることができなかった。そのため，両者が一体である可能性があるが，断定しがたいと思われる。考えられるあり方は以下のような状況であろう。まず両者は別遺構であり，本来は切り合い関係があるというみかたである。次に本遺構は竪穴建物跡であり，土坑状部分が掘りかたとみる考えである。しかし貼床




SK－005
1．暗褐色土　白色粘土多混、しまりあり
2．暗褐色土　ローム粒、粘土粒少混

SK－006
1．暗褐色土　白色粘土粒多、焼土粒少混、しまりなし
2．暗褐色土　白色粘土粒少混

SK－016
1．暗黄褐色砂質土　暗黄砂質土粒少混
2．黒褐色砂質土　暗黄砂質土粒少混
3．暗黄褐色砂質土　暗黄砂質土粒やや多混
4．黒褐色砂質土　2と同じ、粘性強
5．暗黄褐色砂質土　暗黄砂質土粒少、焼土粒少混
6．暗黄褐色砂質土　暗黄砂質土粒多混

SK－257
1．暗褐色土　ローム粒、焼土粒多混、しまりあり
2．黒褐色土　ローム粒少混、ややしまりあり
3．暗褐色土　ローム粒少混、ややしまりあり
4．暗褐色土　ローム土多混、ややしまりあり
5．暗黄褐色土　ローム塊多混、ややしまりあり
6．黒褐色土　ローム粒混、ややしまりあり
7．暗褐色土　ローム粒混、ややしまりあり
8．暗黄褐色土　ローム塊多混、ややしまりあり
9．黒褐色土　ローム粒混、ややしまりあり

第285図　SK－005・006・008・016・018・257

の痕跡がみられない点がやや難点である。最後に本来このような形状であるとするみかたである。この場合，竪穴建物である可能性は低く，特に住居とは思われない遺構となる。主軸方位は不明瞭であるが，南壁側から北壁側に向かう方向を主軸方位とすると，N－23°－Eである。壁は急に立ち上がるが，北壁側・東壁側の上部はやや緩やかになる。

**底面**　土坑状部分を除く部分は北東から南西に向かって最大20cm程度下っている。土坑状部分の底面も北から南にやや下っている。土坑状部分の壁は緩やかに立ち上がる。

**堆積土**　黒褐色土主体であるが，全体的にやや砂質である。最上層の一部と壁際はやや黄色みが強い。

**出土遺物**　やや多量の土器片が出土した。図示できた遺物は２点である。１はロクロ土師器杯である。1/2弱の遺存で，細かく割れている。２はロクロ土師器高台付き杯の底部片である。器壁が厚い。

**SK－018**（第285図，図版94）

**位置**　調査区北西部の23J－12グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　長さが2.9m，幅が2.8mの方形をなす。確認面からの深さは10cmで，非常に浅い。主軸方位は不明瞭であるが，南壁側から北壁側に向かう方向を主軸方位とすると，N－3°－Eである。

**底（床）面**　比較的平坦である。硬化面はみられない。

**出土遺物**　少量の土器片が出土したが，図示したものはない。

**SK－257**（第285図，図版95）

**位置**　調査区南部の24M－80グリッドを中心に位置する。

**形状・規模**　南北に長い長方形である。遺存する長さは2.5mである。南壁側を検出できなかったため，本来の長さはそれ以上である。幅は2.2m，確認面からの深さは35cmである。壁は比較的急に立ち上がるが，やや緩やかなところもある。主軸方位は不明瞭であるが，南壁側から北壁側に向かう方向を主軸方位とすると，N－17°－Wである。

**底面**　底面は比較的平坦である。硬化面はみられない。南東側でSI－189と接する部分にピットがある。形態はおおむね楕円形である。長径は１m，短径は0.7m，底面からの深さは25cmである。ピット内の底面は凹凸があり，中央が深い。

**堆積土**　上層はローム粒と焼土粒を多量に含む。また全体的に複雑に堆積しており，埋め戻されていると思われる。

**出土遺物**　比較的多量の土器片が出土したが，SI－189と重複する影響と思われる。図示できた遺物はロクロ土師器杯１点である。底部が遺存するが，口縁・体部は1/4強の遺存である。回転ヘラケズリが底部全面と体部外面下位に施されている。器面は荒れており，内面は小さな剥離痕が多い。また内外面の一部に煤が付着している。

**重複遺構**　南側でSI－189と重複し，本遺構が切っている。SI－189の方が深く，本遺構はその上部に構築されたものであるが，堆積土の区別が難しかったため，本遺構の底面・壁を検出できなかった。

## 第４節　掘立柱建物跡・柵列・塀

**SB－001**（第286図，図版95）

調査区南西の22L－64グリッドを中心に位置する。柱穴を含むと思われる小規模の穴の集合をSB－001とし，掘立柱建物と扱ったが，長方形・方形の柱配置をみることができない。しかし，周囲に他の柱穴状

遺構がみられないため，その可能性がある遺構とする。

検出した小穴は13基である。そのうち推定される西辺と，推定南辺から一つ内側に入る３基の並びは直角をなす。南辺に相当する可能性のある３基は，柱筋の通りが悪く，不明瞭である。東辺と思われる部分のうち，３基は一直線上に位置するが，南隅のものは，直線上に位置しない。また，方形の形態からは，外側に開いている。北辺も柱筋が通らず，不明瞭である。仮に，検出された小穴で１棟の建物が構成されるとすると，総柱的な建物となるが，内部北側の小穴は，やはり柱筋の通りが悪い。各小穴間の距離も1.1ｍ～2.5ｍと，ばらつきが大きいが，推定南辺から一つ内側の３基間は，1.55ｍで等値である。各小穴の径をみると，小さいものは30㎝×22㎝，大きいものは60㎝×44㎝であるが，小規模のものが多い。深さは20㎝～44㎝である。

以上，非常に不明瞭であるが，桁行３間程度，梁行２間の掘立柱建物の可能性がある遺構と思われる。その場合の桁行長はおよそ5.7ｍ，梁行長は3.3ｍである。これで１棟であるならば，柱上部で調節したことになるが，建物としてあり得るのか，かなり疑問である。内側の小穴は床束の可能性があるが，それを含めて全体に穴の規模が小さく，倉となるような堅牢な建物ではない。構造については，不明瞭であるが総柱の可能性がある建物としておきたい。西辺からみた方位は，Ｎ－14°－Ｅである。１棟の建物遺構とすると，長辺を南北側の方向にとる建物である。面積も不明瞭であるが，１棟であるならば，19㎡弱程度と推測される。出土遺物はない。

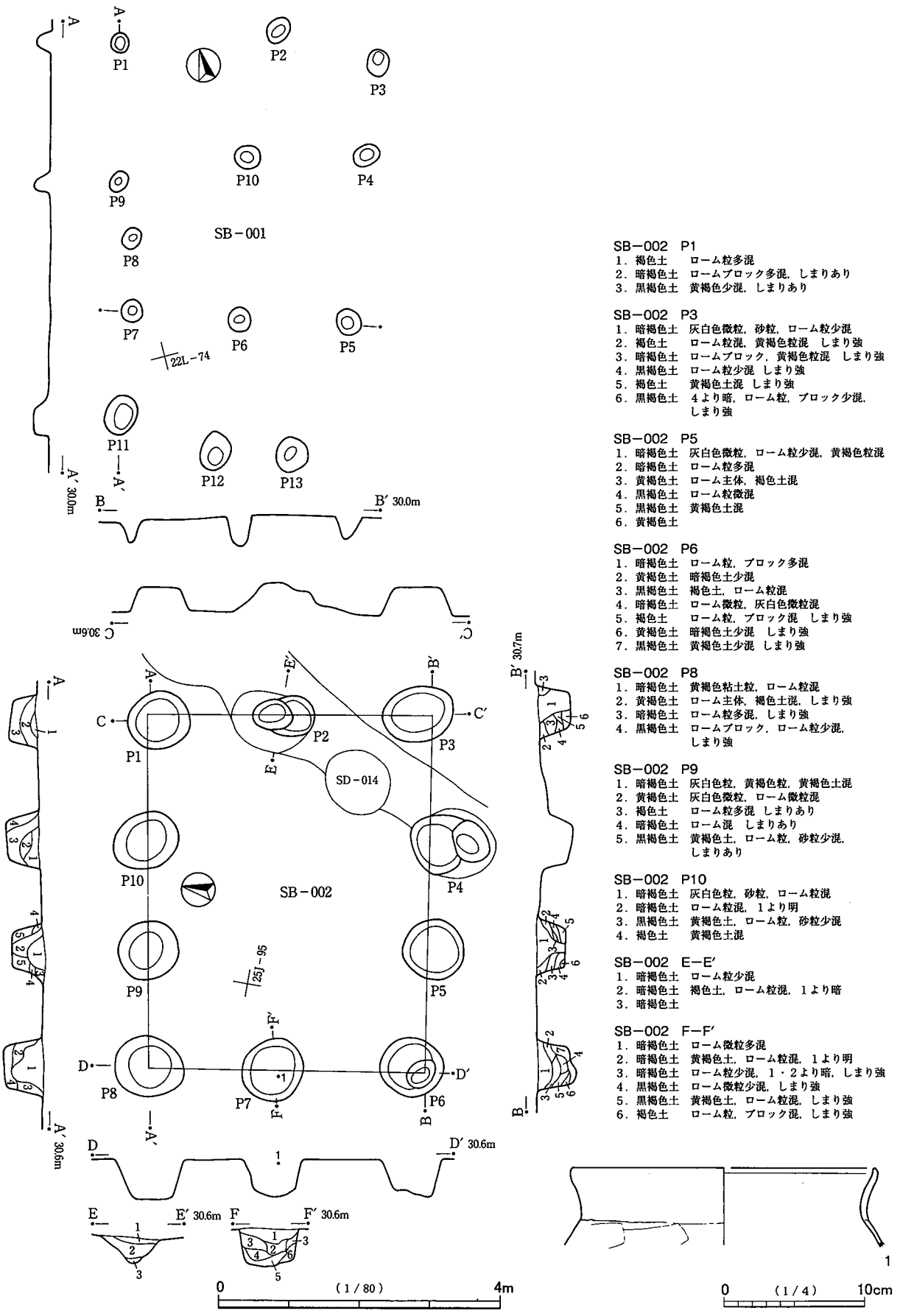
SB－002（第286図，図版95）

調査区東部中央（遺跡全体からみると北東部）の25J－95グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱東西棟建物で，規模は桁行5.1ｍ×梁行3.9ｍ～4.05ｍである。棟方向はＮ－81°－Ｅである。面積は20.85㎡である。SB－004と大きく重複するが，新旧関係は不明である。また東側で溝（道路）状遺構SD－014と重複し，切られていると思われる。柱痕は不明瞭であるが，P5やP9等の土層断面に，現れていると思われる。柱間寸法は，桁行では1.5ｍ～2.0ｍである。なかの間がやや短く，1.5ｍ～1.6ｍ，東の間と西の間が1.7ｍ～2.0ｍである。ただし実際の柱間は1.7ｍ程度の等間であるかもしれない。梁行では1.8ｍ～2.2ｍで，北の間がやや短く，南の間がやや長い。柱筋の通りは，南桁行中間柱穴がやや外に振れる以外は，比較的よい。柱掘りかたは円形･楕円形で，径は80㎝～およそ１ｍである。P2･P4はやや大きいが，SD－014と重複する影響であろう。確認面からの深さは40㎝～60㎝でやや差があるが，底面の標高の差は５㎝～６㎝程度であり，差は少ない。深さの平均値は50㎝である。堆積土については，柱痕が残ると思われるP5をみると，中央の柱痕部分はローム粒を若干含む暗褐色土である。周囲の埋土は，中・上層がローム粒を多く含み，下層は黒色土が卓越する。掘り上げて周囲に盛った土を，そのまま上から埋め戻した様相がうかがえる。P9も似ており，基本的な様相と思われるが，各柱穴によって若干の違いがみられる。

出土遺物は少量である。図示した遺物は土師器甕１点である。武蔵型の甕で，口縁部から胴部上位にかけての小破片である。P4の堆積土上層から出土した。

SB－003（第287図，図版95）

調査区東部中央の25J－93グリッドを中心に位置する。桁行２間×梁行２間の側柱建物で，規模は桁行3.4ｍ×梁行3.15ｍ～3.3ｍである。ほぼ方形の規模であるが，やや長い方を桁行，やや短い方を梁行とする。桁行方位はＮ－67°－Ｅである。面積は11.13㎡である。本遺構の上部に塚SX－004が存在するが，大きな影響を受けていない。柱痕については，P7の土層断面に，現れていると思われる。ほかは，P3・P6等に




SB－002　P1
1．褐色土　ローム粒多混
2．暗褐色土　ロームブロック多混，しまりあり
3．黒褐色土　黄褐色少混，しまりあり

SB－002　P3
1．暗褐色土　灰白色微粒，砂粒，ローム粒少混
2．褐色土　ローム粒混，黄褐色粒混　しまり強
3．暗褐色土　ロームブロック，黄褐色粒混　しまり強
4．黒褐色土　ローム粒少混　しまり強
5．褐色土　黄褐色土混　しまり強
6．黒褐色土　4より暗，ローム粒，ブロック少混，しまり強

SB－002　P5
1．暗褐色土　灰白色微粒，ローム粒少混，黄褐色粒混
2．暗褐色土　ローム粒多混
3．黄褐色土　ローム主体，褐色土混
4．黒褐色土　ローム粒微混
5．黒褐色土　黄褐色土混
6．黄褐色土

SB－002　P6
1．暗褐色土　ローム粒，ブロック多混
2．黄褐色土　暗褐色土少混
3．黒褐色土　褐色土，ローム粒混
4．暗褐色土　ローム微粒，灰白色微粒混
5．褐色土　ローム粒，ブロック混　しまり強
6．黄褐色土　暗褐色土少混　しまり強
7．黒褐色土　黄褐色土少混　しまり強

SB－002　P8
1．暗褐色土　黄褐色粘土粒，ローム粒混
2．黄褐色土　ローム主体，褐色土混，しまり強
3．暗褐色土　ローム粒多混，しまり強
4．黒褐色土　ロームブロック，ローム粒少混，しまり強

SB－002　P9
1．暗褐色土　灰白色粒，黄褐色粒，黄褐色土混
2．黄褐色土　灰白色微粒，ローム微粒混
3．褐色土　ローム粒多混　しまりあり
4．暗褐色土　ローム混　しまりあり
5．黒褐色土　黄褐色土，ローム粒，砂粒少混，しまりあり

SB－002　P10
1．暗褐色土　灰白色粒，砂粒，ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒混，1より明
3．黒褐色土　黄褐色土，ローム粒，砂粒少混
4．褐色土　黄褐色土混

SB－002　E－E′
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．暗褐色土　褐色土，ローム粒混，1より暗
3．暗褐色土

SB－002　F－F′
1．暗褐色土　ローム微粒多混
2．暗褐色土　黄褐色土，ローム粒混，1より明
3．暗褐色土　ローム粒少混，1・2より暗，しまり強
4．黒褐色土　ローム微粒少混，しまり強
5．黒褐色土　黄褐色土，ローム粒混，しまり強
6．褐色土　ローム粒，ブロック混，しまり強

第286図　SB－001・002

も可能性があるが，柱穴が概して浅く，不明瞭である。柱間寸法は，桁行でおよそ1.4m～1.9m，梁行ではおよそ1.4m～1.7mである。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形・楕円形で，径は70cm～１mである。確認面からの深さは24cm～42cmである。底面の深さの差をみると，中間の柱穴のうち，P2・P8がその両隅の柱穴より10数cm浅い。深さの平均値は34cmであるが，四隅では38cm，中間の４柱穴では31cmである。堆積土については，柱痕が残ると思われるP7が基本的様相である。P7の柱痕部分はローム粒を含む暗褐色土である。周囲の埋土は，上層がローム粒を多く含む黄褐色土，下層はローム粒の少ない暗褐色土である。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－004（第287図，図版95）

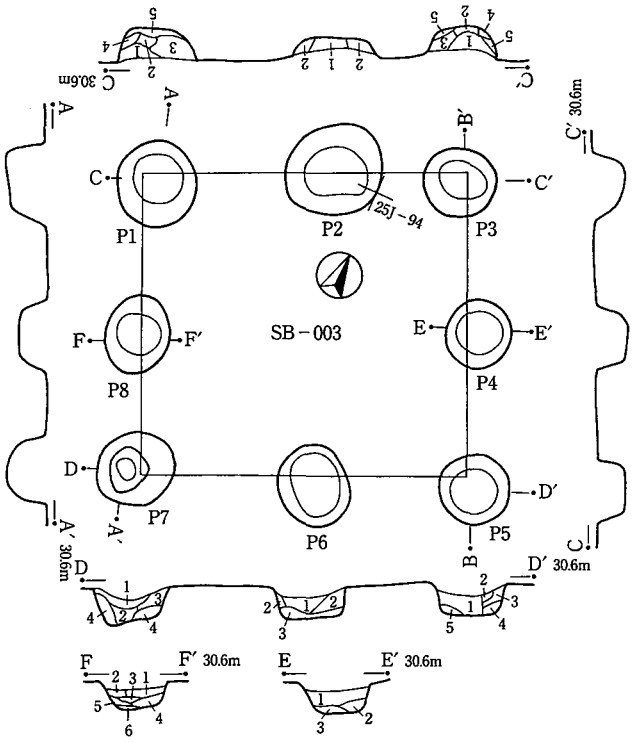
調査区東部中央の25J－83グリッドを中心に位置する。北側・西側に柱穴列があるが，東側・南側にはみられない。内側に小穴が１基あるが，長方形・方形の形態にならない。SB－002と大きく重複するが，新旧関係は不明である。また東方にSD－014があり，南北方向に走行している。東辺・南辺は，それらの存在により不明瞭であるのかもしれない。しかしSB－002等，他の掘立柱建物と比べて柱穴の規模が小さいため，直角をなす二面の塀とも思われる。内側に位置するP8は，西側柱穴列南第２柱のP2からほぼ直角をなして東1.44mのところに位置する。また北側柱穴列西第２柱のP5と対称的な位置に存在する。これについては，掘立柱建物を構成する柱穴の一つである可能性と，塀内側に存在する柱穴である可能性の双方を考えておきたい。北列・西列とも３間で，長さは北列が4.2m，西列が4.4mである。西列がやや長いが，差は少ない。西列の方位をみると，N－15°－Wである。柱痕は検出されなかった。柱間寸法は，北列で1.35m～1.5m，西列で1.4m～1.6mであり，差は少ない。柱筋の通りはよい。柱掘りかたはほぼ円形で，径は25cm～40cmである。確認面からの深さは24cm～36cmで，平均値は30cmである。P8が他よりもやや浅いが，大きな差はない。堆積土の状況は不明である。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－005（第287図，図版95）

調査区東部中央の25J－92・25K－02グリッドを中心に位置する。北西隅から西側にかけてSI－085と重複するため,北西隅柱穴（P1）は下部のみの遺存である。また，西側中間柱穴は検出されなかった。SI－085との新旧関係は不明である。建物範囲がSB－006と大きく重複するが，柱穴の切り合いは少ない。新旧関係は不明である。２間×２間でほぼ方形の建物である。やや長い南北方向を桁行，やや短い東西方向を梁行とする。規模は桁行3.98m×梁行3.86mである。検出された遺構中央部に保護樹木が存在し，調査ができなかったため，総柱建物となる可能性を否定できない。桁行方位はN－8°－W，面積は15.36㎡である。柱痕は不明瞭である。柱間寸法は，桁行・梁行とも1.8m～2.0m程度である。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形・楕円形で，径は82cm～1.03mである。確認面からの深さは14cm～47cmで，四隅の柱穴と中間の柱穴で差がある。深さの平均値は全体で29.5cm，隅柱穴で35cm，中間柱穴で22cmである。北側中間柱穴（P2）が深いため差がやや少なくなっているが，東辺・南辺の中間柱穴とその両脇の隅柱穴では,15cm程度の差がある。ただしP1は他の隅柱穴と同等の深さをもつP2よりも12cm深い。堆積土は，黒色土とローム粒・ロームブロックの混合土で，その割合によって変化がある。南辺中間柱穴（P6）は浅いが，壁側は黒褐色土中に黄褐色土が帯状に堆積しており，柱周囲の埋土が残っているのかもしれない。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－006（第288図，図版95）

調査区東部中央の25K－02グリッドを中心に位置する。桁行２間×梁行２間の側柱南北棟建物で，規模




SB－003　P1
1．暗褐色土　褐色土，ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒多混
3．黄褐色土　褐色土，黒色土混，しまりあり
4．褐色土　黄褐色土，ローム粒混，しまりあり
5．暗褐色土　ローム粒少混，しまりあり

SB－003　P2
1．褐色土　黄褐色土混
2．暗褐色土　細ローム粒少混

SB－003　P3
1．暗褐色土
2．暗褐色土　黄褐色土混，1より明
3．褐色土　黒色土，ローム粒混，しまり強
4．褐色土　ロームブロック混，しまり強
5．暗褐色土　細ローム粒混，しまり強

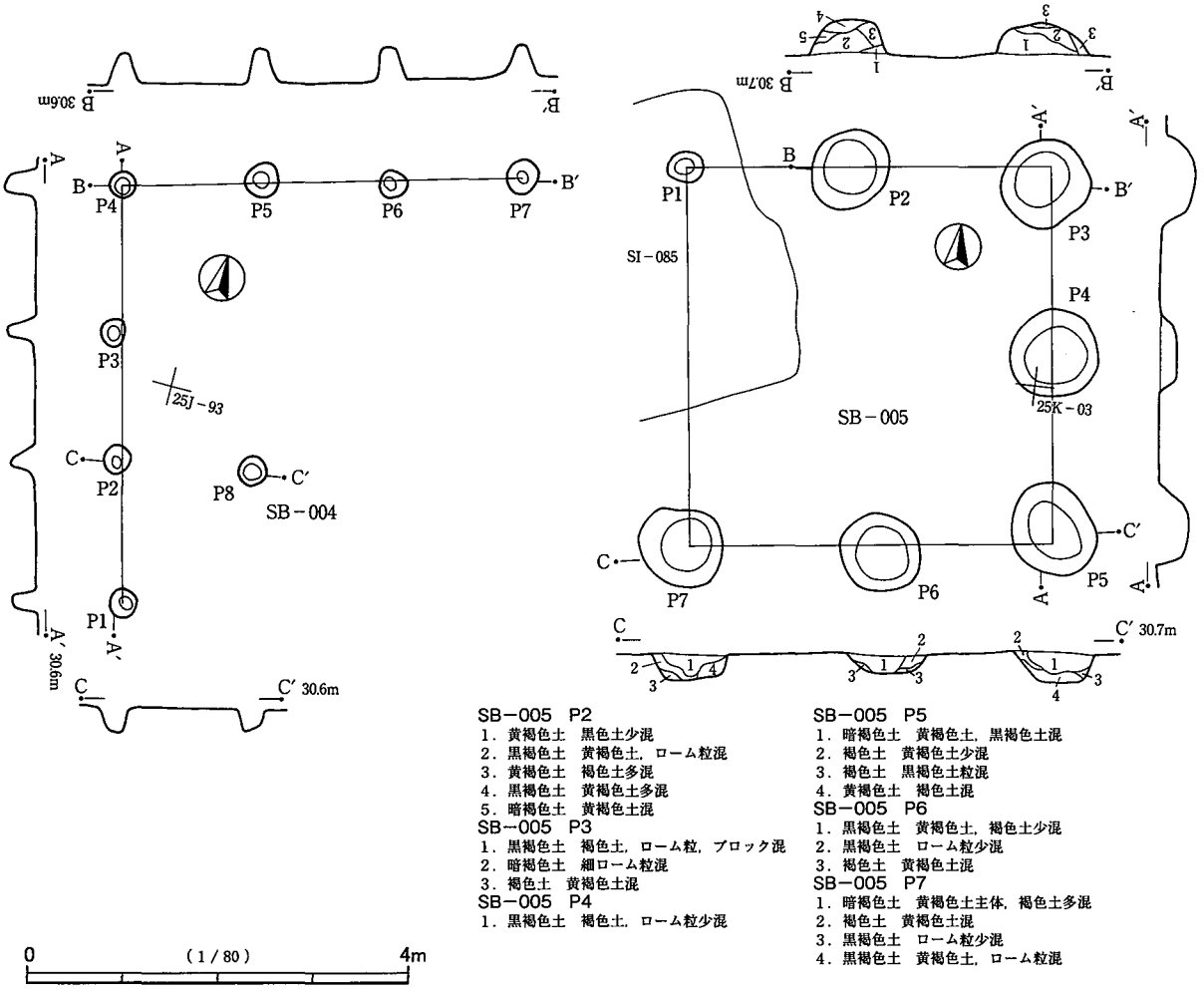
SB－003　P5
1．暗褐色土　細ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒，黄褐色土混
3．暗褐色土　ローム粒少混，1より明
4．暗褐色土　ローム粒，黄褐色土混
5．褐色土　ローム粒混

SB－003　P6
1．暗褐色土　細ローム粒少混
2．褐色土　黄褐色土，暗褐色土混，しまりあり
3．暗褐色土　ローム粒混，1より暗，しまりあり

SB－003　P7
1．暗褐色土　黄褐色土，細ローム粒混
2．暗褐色土　細ローム粒混
3．黄褐色土　褐色土少混
4．暗褐色土　ローム粒少混，1・2より暗，しまり強

SB－003　E－E′
1．暗褐色土　褐色土，ローム粒少混
2．黄褐色土　褐色土少混
3．褐色土　ローム粒少混

SB－003　F－F′
1．黄褐色土　褐色土混
2．暗褐色土　ローム粒少，褐色土混
3．暗褐色土　ローム粒少混，2より暗
4．暗褐色土　黄褐色土混，3より明，2より暗
5．黒褐色土　細ローム粒混
6．褐色土　ローム粒多混




SB－005　P2
1．黄褐色土　黒色土少混
2．黒褐色土　黄褐色土，ローム粒混
3．黄褐色土　褐色土多混
4．黒褐色土　黄褐色土多混
5．暗褐色土　黄褐色土混

SB－005　P3
1．黒褐色土　褐色土，ローム粒，ブロック混
2．暗褐色土　細ローム粒混
3．褐色土　黄褐色土混

SB－005　P4
1．黒褐色土　褐色土，ローム粒少混

SB－005　P5
1．暗褐色土　黄褐色土，黒褐色土混
2．褐色土　黄褐色土少混
3．褐色土　黒褐色土粒混
4．黄褐色土　褐色土混

SB－005　P6
1．黒褐色土　黄褐色土，褐色土少混
2．黒褐色土　ローム粒少混
3．褐色土　黄褐色土混

SB－005　P7
1．暗褐色土　黄褐色土主体，褐色土多混
2．褐色土　黄褐色土混
3．黒褐色土　ローム粒少混
4．黒褐色土　黄褐色土，ローム粒混

第287図　SB－003・004・005

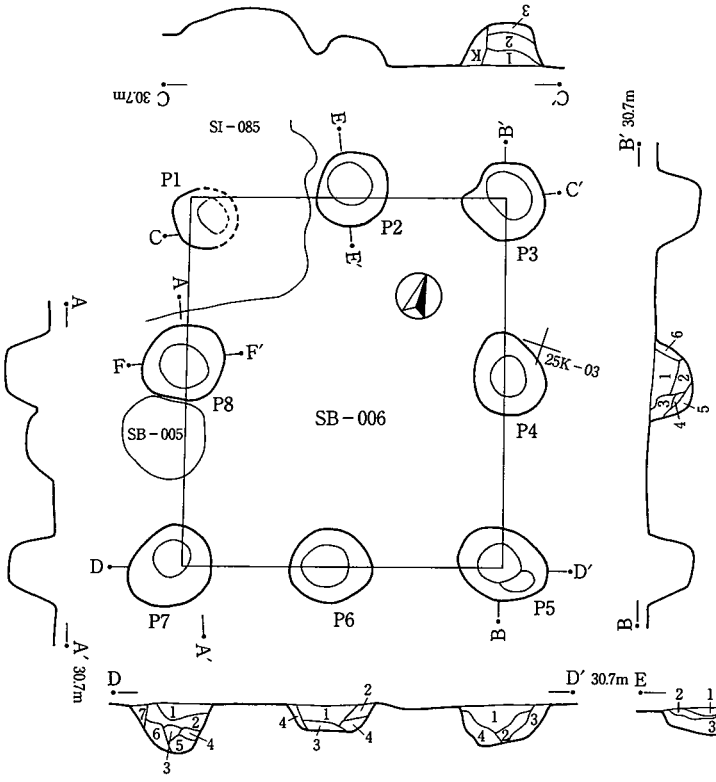
は桁行3.9m×梁行3.3m～3.4mである。棟方向はN－16°－Wである。面積は13.23㎡である。SB－005と大きく重複するが，新旧関係は不明である。また，北西側でSI－085と重複し，新旧関係は不明であるが，北西隅柱穴（P1）をやや損なっている。柱痕については，やや崩れているがP8の土層断面に，現れていると思われる。他は不明瞭である。柱間寸法は，桁行では1.7m～2.0m，梁行では1.5m～1.8mである。P1がややなかに入っているが，SI－085と重複する影響で十分な把握ができていないことも考えられる。P1以外の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形・楕円形で，径は70cm～94cmである。確認面からの深さは28cm～50cmである。四隅の柱穴が概して中間の柱穴よりも深い。深さの平均値は，撹乱等の影響があるP1を除くと40cmであるが，隅柱穴では47cm，中間柱穴では37cmである。堆積土については，柱痕が比較的よく残ると思われるP8が基本的様相であろう。中央の柱痕部分はロームブロックを若干含む黒褐色土である。周囲の埋土は，上層が黄褐色土，中・下層が黒褐色土・暗褐色土である。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－007（第288図，図版95）

調査区東部中央やや南寄りの25K－27グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行３間の側柱南北棟建物で，規模は桁行6.3m×梁行4.6m～4.7mである。棟方向はN－15°－W，面積は29.45㎡である。東側でSI－063と重複するため，東桁行中間柱穴が検出されなかった。新旧関係は不明である。柱痕は概して不明瞭であるが，P8の土層断面に，現れていると思われる。柱間寸法は，桁行では1.6m～2.5mである。なかの間が短く，端の間が長い。梁行の柱間寸法は1.0m～1.8mである。桁行同様，なかの間が短く，端の間が長い。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形・楕円形で，径は72cm～1.3m，確認面からの深さは22cm～74cmである。桁行・梁行の中間柱穴は，隅柱穴に比べて，径が小さく，深さも浅い。深さの平均値は，全体で44cm，隅柱穴では60cmである。中間柱穴は33cmであるが，西桁行は42cm，両妻側は28cmで，桁と梁で差がある。堆積土については，柱痕が残ると思われるP8をみると，中央の柱痕部分は暗褐色土で，上層はローム粒の包含がわずかである。周囲の埋土は上からおおむね黒褐色土・褐色土・暗褐色土である。上層はローム粒を多く含むが，色調は暗い。下層はローム粒の包含が少量である。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－008（第289図，図版95）

調査区東部北側の25I－82グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行３間の側柱南北棟建物で，規模は桁行5.8m～5.9m×梁行4.0mである。棟方向はN－9°－W，面積は23.9㎡である。柱痕は不明瞭である。柱間寸法は，桁行では1.75m～2.05m，梁行では1.1m～1.8mである。梁行側は，北側中間のP3と南側中間のP8の規模が大きいため，やや不明瞭であるが，両妻東端の間が，他よりも長いと思われる。西端の間・なかの間はそれよりも短く，1.1m～1.2m程度で同等の値と思われる。柱筋の通りはやや悪い。柱掘りかたは円形・楕円形であるが，やや不整な楕円形が目立つことから，柱は抜き取りされた可能性が考えられる。径は52cm～1.3mであるが，1.3mは楕円形柱穴の長径最大値である。短径の値は，最大値でも86cmである。確認面からの深さは20cm～60cmであるが，60cmの深さをもつ東桁行北第２柱穴（P5）はやや掘り過ぎているかもしれない。平均の深さは，全体で40cm，隅柱穴で41.5cm，中間柱穴で39cmであり，差が少ない。しかし，それは桁行側の柱穴に深さの差がないためであり，梁行の中間柱穴は，隅柱穴よりも10数cm浅い。堆積土は，多少のローム粒・ブロックを含む暗（黄）褐色土である。P6・P7・P10の土層には，柱痕と思われるところもあるが，中央と周囲の土層の差は少ない。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物は




SB－006　P3
1．褐色土　黒色土，黄褐色土混
2．黒褐色土　ローム粒，細ローム粒少混
3．黒褐色土　黄褐色土，褐色土少混

SB－006　P4
1．黒褐色土　褐色土少，ローム粒混
2．暗褐色土　褐色土，細ローム粒混
3．暗褐色土　細ローム粒混，1より暗
4．黒褐色土　細ローム粒微混，3より暗
5．暗褐色土　黄褐色土混
6．黄褐色土　褐色土混，しまりあり

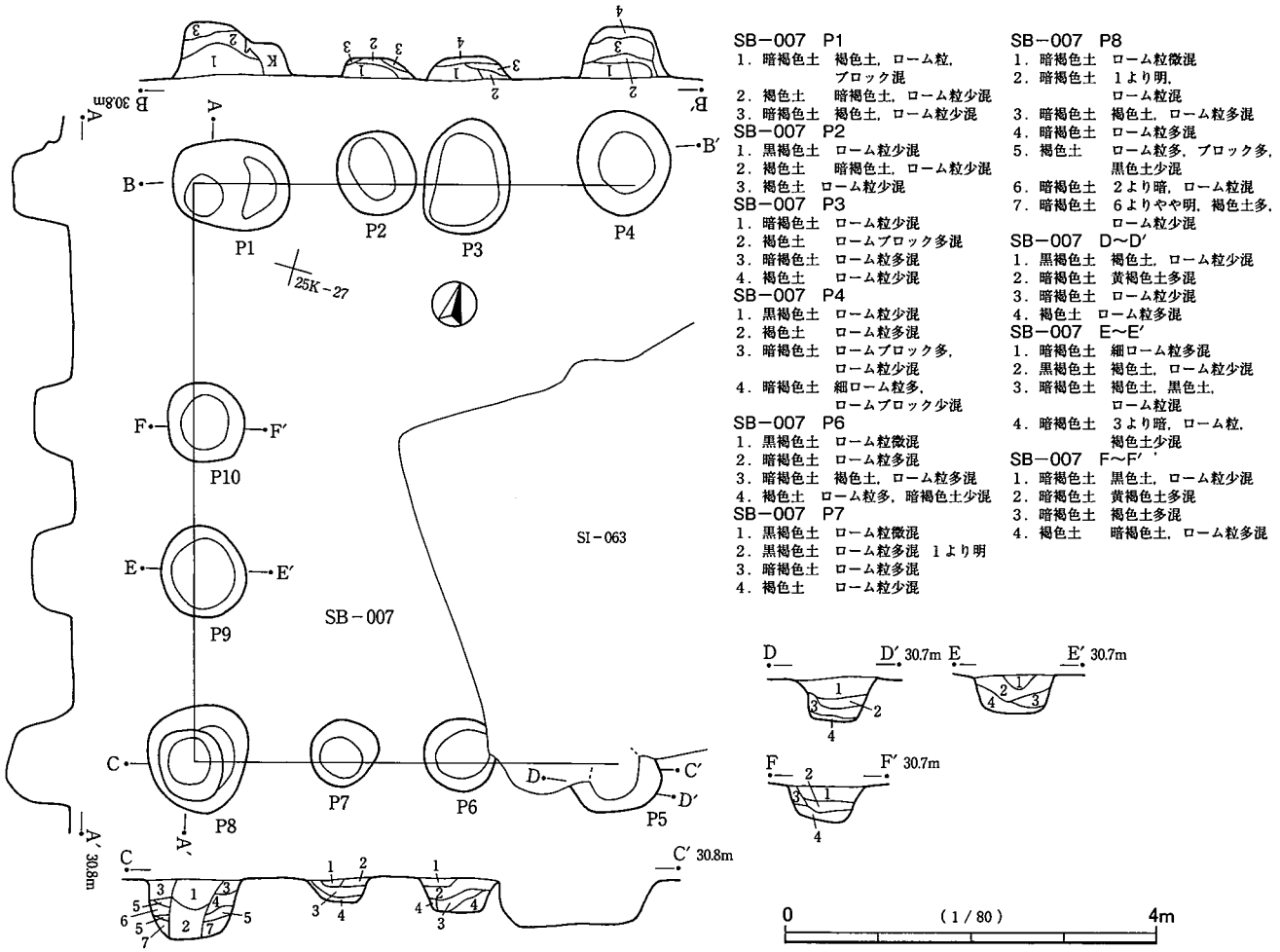
SB－006　P5
1．黒褐色土　褐色土，黄褐色土，ローム粒混
2．黒褐色土　細ローム粒少混，1より暗
3．黒褐色土　黄褐色土混，1より明
4．暗褐色土　黄褐色土，黒色粒混

SB－006　P6
1．黒褐色土　黄褐色土多，褐色土少混
2．暗褐色土　黄褐色土少混
3．黄褐色土　褐色土混
4．暗褐色土　黄褐色土混，2より暗

SB－006　P7
1．暗褐色土　黄褐色砂，ローム粒，褐色土混
2．黒褐色土　褐色土，ローム粒混
3．黄褐色土　褐色土混
4．黄褐色土　褐色土少混，3より明
5．暗褐色土　黄褐色土，ローム粒少混，しまりあり
6．褐色土　ローム粒多混
7．黄褐色土　褐色土微混，しまり強

SB－006　E－E′
1．黒褐色土　ローム微粒混
2．暗褐色土　ロームブロック，ローム粒混
3．暗褐色土　ローム粒少，褐色土混，2より暗

SB－006　F－F′
1．黒褐色土　ロームブロック微混
2．黒褐色土　ローム粒少混
3．黄褐色土　黒色土少混
4．黒褐色土　ローム粒微混，1・2より暗
5．暗褐色土　ローム粒混
6．黄褐色土　褐色土混




SB－007　P1
1．暗褐色土　褐色土，ローム粒，ブロック混
2．褐色土　暗褐色土，ローム粒少混
3．暗褐色土　褐色土，ローム粒少混

SB－007　P2
1．黒褐色土　ローム粒少混
2．褐色土　暗褐色土，ローム粒少混
3．褐色土　ローム粒少混

SB－007　P3
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．褐色土　ロームブロック多混
3．暗褐色土　ローム粒多混
4．褐色土　ローム粒少混

SB－007　P4
1．黒褐色土　ローム粒少混
2．褐色土　ローム粒多混
3．暗褐色土　ロームブロック多，ローム粒少混
4．暗褐色土　細ローム粒多，ロームブロック少混

SB－007　P6
1．黒褐色土　ローム粒微混
2．暗褐色土　ローム粒多混
3．暗褐色土　褐色土，ローム粒多混
4．褐色土　ローム粒多，暗褐色土少混

SB－007　P7
1．黒褐色土　ローム粒微混
2．黒褐色土　ローム粒多混　1より明
3．暗褐色土　ローム粒多混
4．褐色土　ローム粒少混

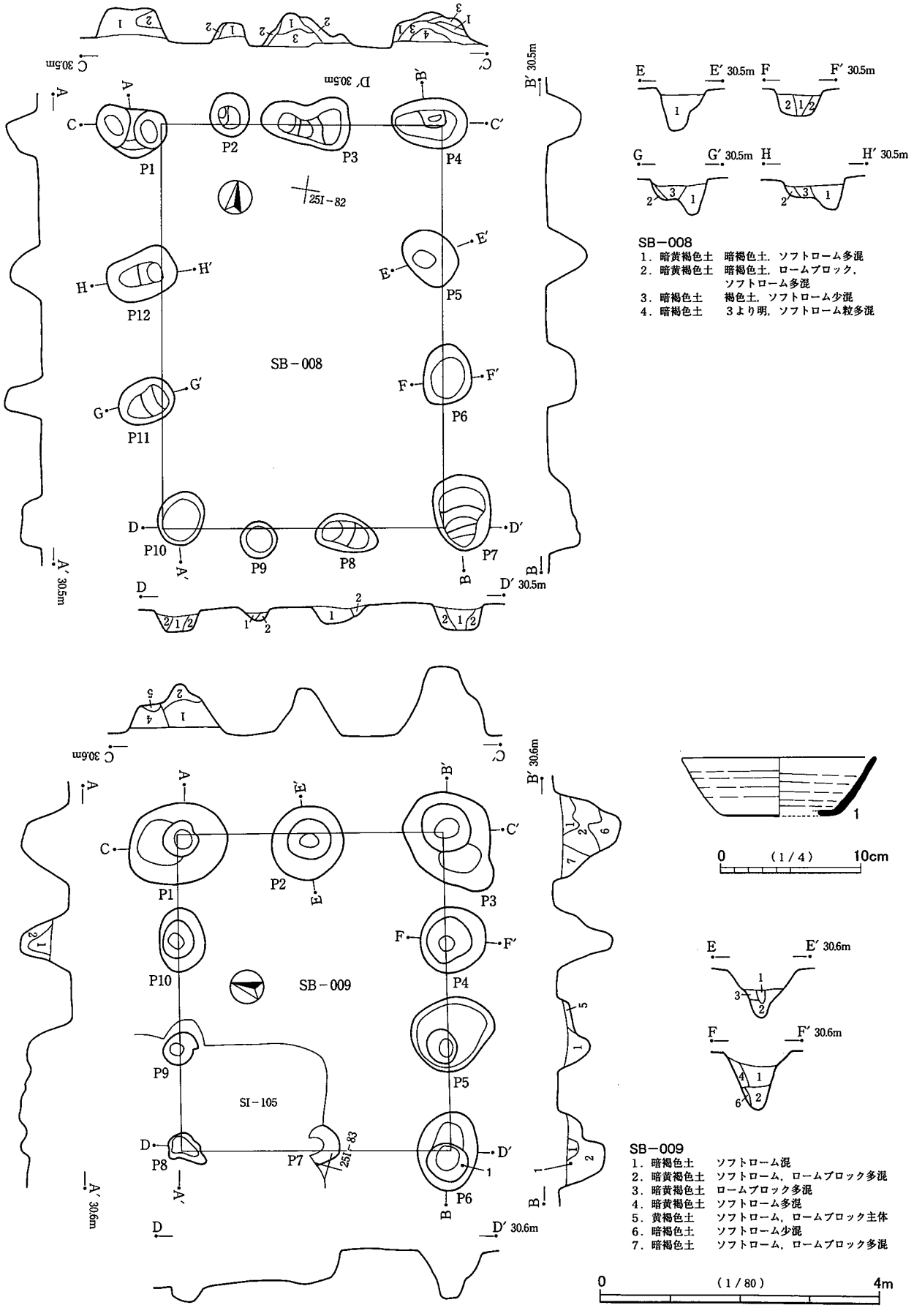
SB－007　P8
1．暗褐色土　ローム粒微混
2．暗褐色土　1より明，ローム粒混
3．暗褐色土　褐色土，ローム粒多混
4．暗褐色土　ローム粒多混
5．褐色土　ローム粒多，ブロック多，黒色土少混
6．暗褐色土　2より暗，ローム粒混
7．暗褐色土　6よりやや明，褐色土多，ローム粒少混

SB－007　D～D′
1．黒褐色土　褐色土，ローム粒少混
2．暗褐色土　黄褐色土多混
3．暗褐色土　ローム粒少混
4．褐色土　ローム粒多混

SB－007　E～E′
1．暗褐色土　細ローム粒多混
2．黒褐色土　褐色土，ローム粒少混
3．暗褐色土　褐色土，黒色土，ローム粒混
4．暗褐色土　3より暗，ローム粒，褐色土少混

SB－007　F～F′
1．暗褐色土　黒色土，ローム粒少混
2．暗褐色土　黄褐色土多混
3．暗褐色土　褐色土多混
4．褐色土　暗褐色土，ローム粒多混

第288図　SB－006・007




第289図　SB－008・009

ない。

SB－009（第289図，図版95）

調査区東部北側の25I－73グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱東西棟建物で，規模は桁行4.6m×梁行3.8m～3.9mである。棟方向はN－75°－E，面積は18.05㎡である。北西側でSI－105と重複するため，北西隅とその両隣の柱穴を損なっている。新旧関係は不明である。柱痕はあまり明瞭ではないが，P2・P6・P10の土層断面に現れているように思われる。柱間寸法は，桁行では1.5m～1.6m，梁行では1.9m～2.0mである。柱筋の通りはよい。柱掘りかたは円形・楕円形である。遺存の悪いものを除く確認面での径は68cm～1.62mである。隅柱穴は規模が大きく段状の断面をもつことから，当初の掘削が中間柱穴よりも広かったか，柱の抜き取り痕が顕著であることが考えられる。中間柱穴はP5のように大きいものもあるが，隅柱穴よりも小さいものが多い。確認面からの深さは46cm～96cmである。深さの平均値は68cmであるが，四隅では76cm，中間柱穴では63cmであり，隅の方がやや深い。中間柱穴のなかでも，P5とP7は他よりも浅い。堆積土については，柱痕が残ると思われる部分は，ローム粒を含む暗褐色土である。その周囲はローム粒・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土・黄褐色土であるが，P3・P4の下層にはローム粒の少ない暗褐色土もみられる。

出土遺物は少量である。図示できた遺物は新治窯産の須恵器杯１点である。口縁・体部の1/3程度と底部が若干遺存する。P6の堆積土上層から出土した。

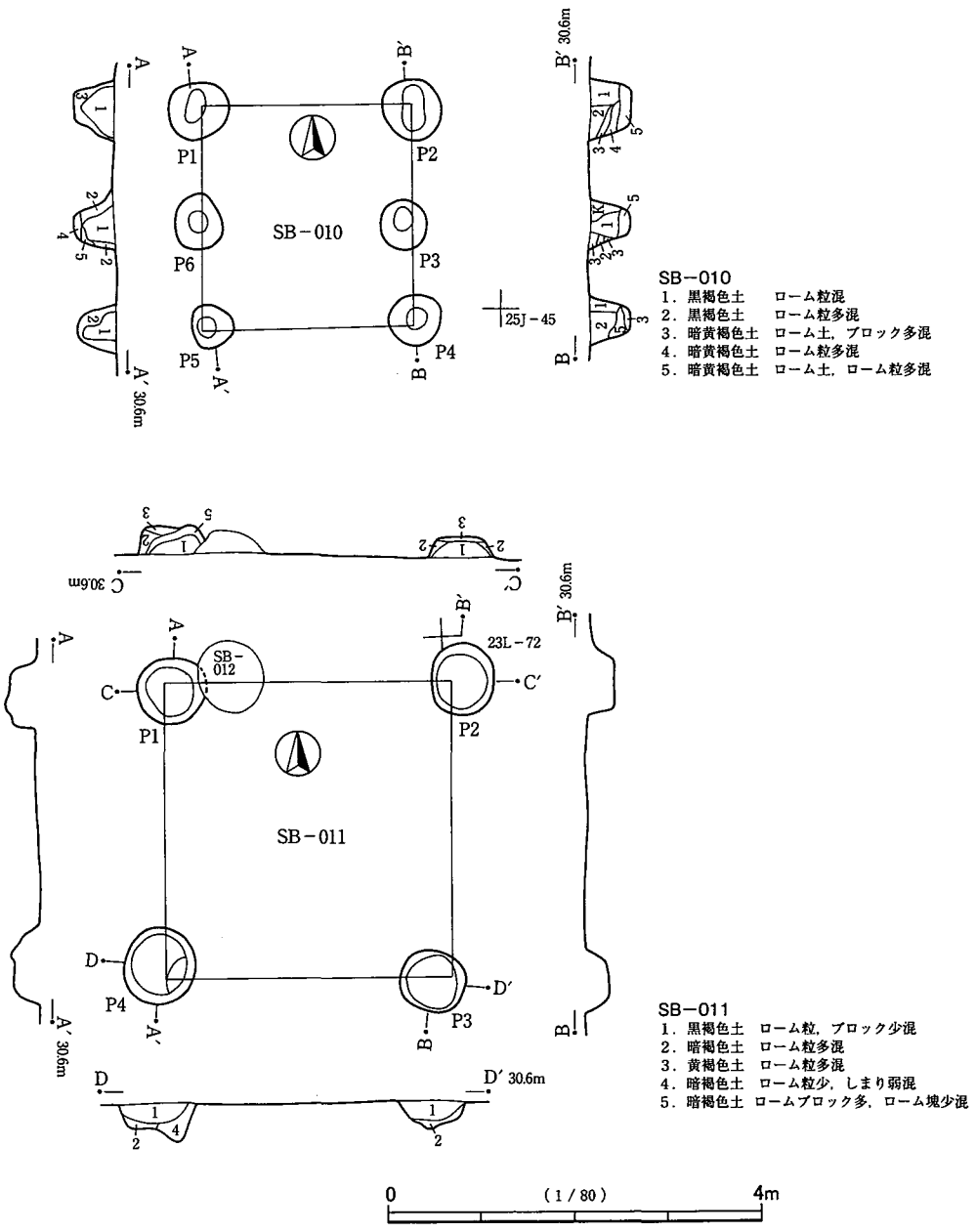
SB－010（第290図，図版95）

調査区東部中央の25J－34グリッドを中心に位置する。桁行２間×梁行１間の側柱南北棟建物で，規模は桁行2.4m×梁行2.3mである。棟方向はN，面積は5.55㎡である。柱痕は断面で確認された。西側の３柱穴と東側中間柱穴は中央にみられるが，東側両隅の柱穴は端に寄っていた可能性が考えられる。柱間寸法は，桁行では1.1m～1.3mである。梁行は１間のため，2.3mである。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は46cm～66cmである。確認面からの深さは42cm～46cm，平均値は44cmで，深さにほとんど差がない。柱痕部分の堆積土は，ローム粒を含む黒褐色土である。周囲の埋土は黒褐色土・暗黄褐色土・暗褐色土である。ローム粒・ロームブロックは概して多く含まれるが，P2やP6では下層にやや少ないところもみられる。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－011（第290図，図版96）

調査区南西部の23L－71グリッドを中心に位置する。１間×１間の側柱建物である。ほぼ方形の柱配りであるため，桁行・梁行を区別することが難しい。４柱で囲まれるプランはほぼ東西南北に沿っている。規模は東西辺3.2m×南北辺3.1mである。面積は9.95㎡である。北西隅柱穴がSB－012と重複する。土層断面ではSB－012が本遺構を切っているように観察されているが，重複部分が少ないため新旧関係は不明とする方が妥当であろう。柱痕は検出されなかった。柱間寸法は，１間×１間のため規模と変わらないが，柱穴中心で計測すると，東辺は3.3m，西辺は3.0m，南辺は2.95m，北辺は3.15mである。柱掘りかたは円形を基調とし，径は66cm～86cmである。確認面からの深さは28cm～42cmで，平均値は31cmである。部分的に深いところを除けば，ほとんど差がない。堆積土は，ローム粒を含む黒褐色土が主体である。ロームブロックの含有は少量である。各柱穴から遺物が出土しているが，出土遺物は少量である。図示できた遺物はない。

SB－012（第291図，図版96）

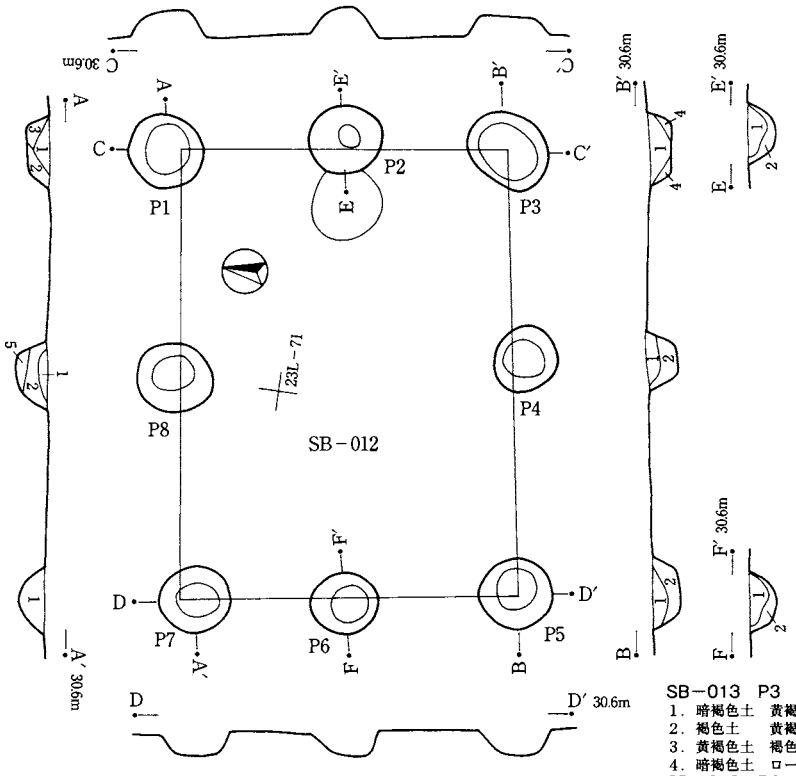


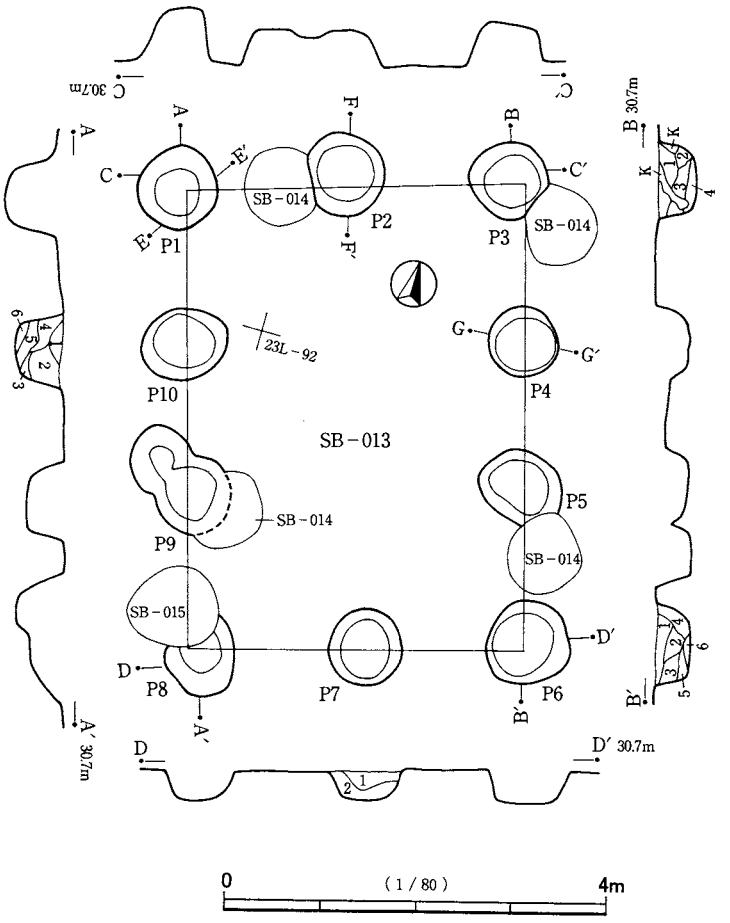

第290図　SB－010・011

調査区南西部の23L－71グリッドを中心に位置する。桁行２間×梁行２間の側柱東西棟建物で，規模は桁行4.7m～4.8m×梁行3.5m～3.6mである。棟方向はN－82°－E，面積は16.7㎡である。南東側でSB－012と重複する。土層断面では本遺構がSB－011を切っているように観察されているが，新旧関係は不明とする方が妥当であろう。柱痕は検出されなかった。柱間寸法は，桁行では2.3m～2.4m，梁行では1.6m～1.95mである。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は66cm～90cmである。70cm前後の規模のものが多い。確認面からの深さは24cm～34cmである。深さの平均値は，全体で29.5cmである。四隅と中間で深さの差はない。堆積土は基本的に，上層が暗褐色土，下層がロームブロックを多く含む褐色土である。出土遺物は少量である。図示できた遺物はない。

SB－013（第291図，図版96）

調査区南西部の23L－92グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱南北棟建物で，規模は




第291図　SB－012・013

桁行4.8m～5.0m×梁行3.6mである。棟方向はN－15°－W，面積は17.7㎡である。SB－014・SI－144と大きく重複し，南西側ではSB－015とも重複する。本遺構との新旧関係は，どの遺構についても不明である。柱痕は検出されなかった。柱間寸法は，桁行では1.5m～1.7m，梁行も1.65m～1.9mである。桁・梁ともほぼ等間である。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は70cm～94cmである。確認面からの深さは30cm～54cmである。深さの平均値は，全体で39cm，四隅で41cm，中間で38cmである。平均値でみると差が少ないが，それは南西隅柱穴（P8）がやや浅いことと，西桁行北第２柱穴（P10）のように隅柱穴よりも深い柱穴が存在することによる。細かくみると，北妻柱中間柱穴(P2)は北両隅柱穴よりも，底面レベルで15cm～25cm浅く，南妻柱中間柱穴（P7）も，南東隅柱穴（P6）よりも５cm浅い。桁行側でも，西側南第２柱穴(P9)は，底面レベルでP1より20cmも浅く，東側２柱穴も北東隅柱穴(P3)よりも６cm浅い。P8はSB－015と重複しているためやや不明瞭であり，柱位置が北寄りであれば，より深い可能性もある。以上のように，隅柱穴のなかには平均よりも深いものがやや多く，中間柱穴のなかには平均よりも浅いものがやや多い。堆積土は，黒褐色土・暗褐色土・褐色土である。ローム粒・ロームブロックを多く含む土層もみられるが，全体的にロームの含有がやや少ないように思われる。

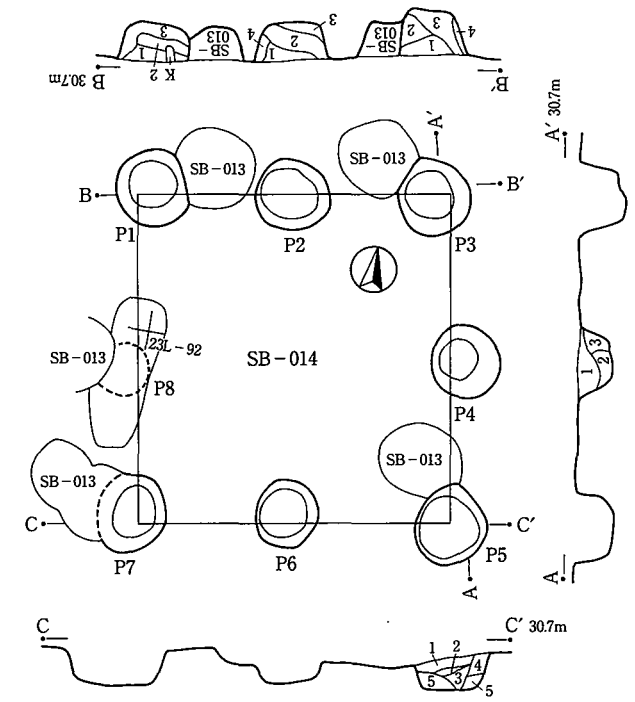
出土遺物はやや少量である。図示できた遺物は千葉産の須恵器甕または甑１点である。口縁部から胴部上位にかけての小破片である。P1から出土した。P1内での位置・高さは不明である。

SB－014（第292図，図版96）

調査区南西部の23L－92グリッドを中心に位置する。桁行２間×梁行２間の側柱南北棟建物で，規模は桁行3.5m×梁行3.3mである。柱配置は方形に近い形態であるが，やや長い方を桁行，やや短い方を梁行とする。桁行方位はN－10°－W，面積は11.7㎡である。SB－013・SI－144と大きく重複するが，新旧関係は不明である。西側ではSB－015が接近して位置する。また西側桁行中間柱穴は現代の耕作によると思われる掘削のため遺存していない。柱痕は検出されなかった。柱間寸法は，桁行では1.8m，梁行では1.5m～1.7mである。南側・東側の中間柱穴がやや内外に振れるが，実際の柱配置はより整っていたかもしれない。柱掘りかたは円形を基調とし，径は66cm～90cmである。確認面からの深さは36cm～50cmである。深さの平均値は，全体で41cm，四隅で43cm，中間で38cmである。差は少ないが，中間柱穴が隅柱穴よりもやや浅い。個別的にみると，南側中間柱穴（P6）がやや浅く，北東隅柱穴（P3）がやや深い。堆積土は，黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土である。下層・壁際は概してローム粒を多く含むが，中・上層はロームの含有がやや少ない。出土遺物は少量である。図示できた遺物はない。

SB－015（第292図，図版96）

調査区南西部の23L－91グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行３間の側柱建物である。ほぼ方形の形態であるため，桁行と梁行の区別が難しいが，わずかに長いと思われる南北方向を桁行とする。規模は桁行4.65m×梁行4.55mである。桁行方位はN－26°－Wで，かなり西側に傾く建物である。面積は21.1㎡である。西北側でSB－016とやや大きく重複し，南東隅でもSB－013と重複するが，新旧関係は不明である。また東方にSB－014が接近して位置する。柱痕は検出されなかった。柱間寸法は，桁行・梁行とも1.4m～1.7mである。柱筋の通りはやや悪い。柱掘りかたは円形を基調とし，径は58cm～114cmである。隅柱穴はやや大きく，中間柱穴はやや小さい。隅は径80cm程度，中間は径70cm程度を標準とすると思われる。なお西側桁行北第２柱穴（P12）の規模が大きいのは，SB－016と重複する影響である。確認面からの深さは26cm～54cmである。深さの平均値は，全体で38cm，四隅で47cm，中間で34cmである。隅と中間で差が



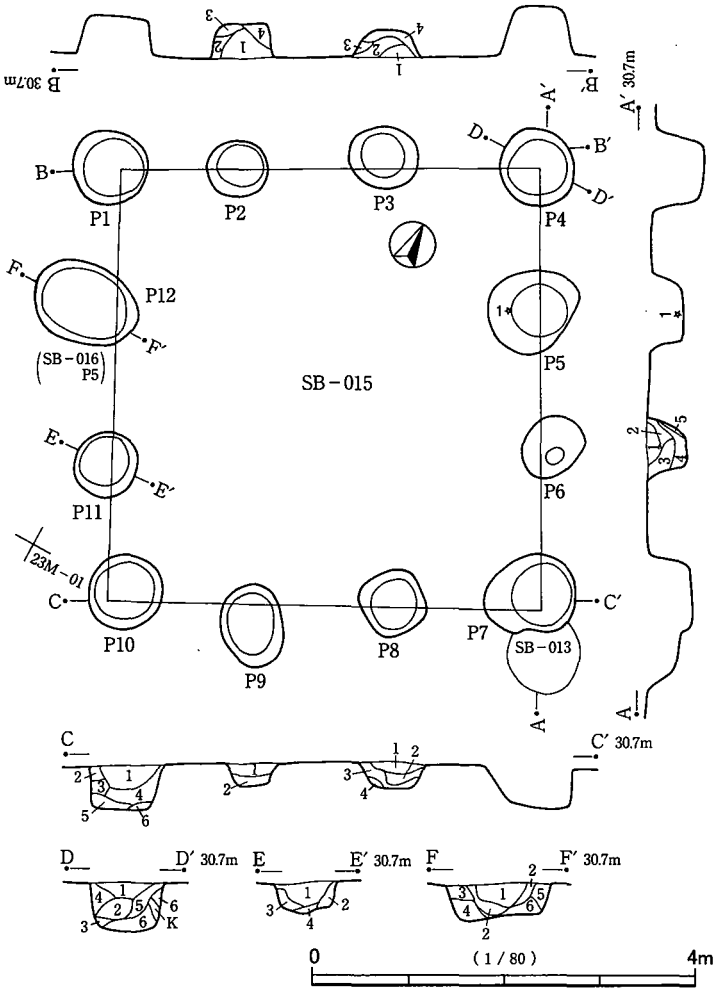

SB－014　P1
1．暗褐色土　細ローム粒少混
2．黒褐色土　ローム粒少混
3．暗褐色土　黄褐色土混

SB－014　P2
1．暗褐色土　黄褐色土，ローム粒少混
2．暗褐色土　ローム粒微混，1より暗
3．褐色土　　ローム粒多混
4．黄褐色土　褐色土混

SB－014　P3
1．暗褐色土　ローム粒微混
2．暗褐色土　ローム粒，ブロック混，1より明
3．黄褐色土　褐色土混，黒色土混
4．暗褐色土　ロームブロック混

SB－014　P4
1．暗褐色土　黄褐色土，ローム微少混
2．暗褐色土　ロームブロック少混
3．黄褐色土　褐色土少混

SB－014　P5
1．暗褐色土　黄褐色土少混
2．黄褐色土　褐色土少混
3．暗褐色土　ローム粒混
4．褐色土　　黄褐色土混
5．暗褐色土　ローム粒少混




SB－015　P2
1．暗褐色土　褐色土少，細ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒混，1より明
3．暗褐色土　ローム粒少混，1・2より暗
4．褐色土　　ローム粒混

SB－015　P3
1．暗褐色土　褐色土，黒色土，ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒多混，1より暗
3．褐色土　　ローム粒少混
4．褐色土　　黄褐色土，ローム粒微混，3より暗

SB－015　P6
1．黒褐色土　褐色土，細ローム粒微混
2．暗褐色土　褐色土，ローム粒少混
3．暗褐色土　褐色土多混
4．黒褐色土　褐色土少，黄褐色土，ローム粒微混
5．褐色土　　細ローム粒少混

SB－015　P8
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．暗褐色土　細ローム粒多，褐色土，
　　ロームブロック少混
3．暗褐色土　黄褐色土，褐色土混，1・2より明
4．褐色土　　黄褐色混

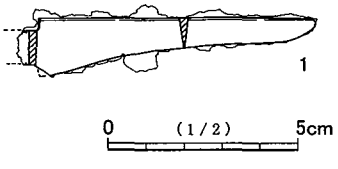
SB－015　P9
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．暗褐色土　黄褐色土混

SB－015　P10
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒多混，1より明
3．黄褐色土　褐色土多混
4．褐色土　　ローム粒，ブロック多混
5．黒褐色土　ローム粒多混
6．褐色土　　黄褐色土多混

SB－015　D－D′
1．暗褐色土　ローム粒多混
2．暗褐色土　ローム粒多混，黄褐色土少混
3．褐色土　　ローム粒多混
4．褐色土　　黄褐色土，ローム粒多混，3より明
5．暗褐色土　ローム粒多混
6．褐色土　　ローム粒，ブロック多混，3・4より明

SB－015　E－E′
1．暗褐色土　細ローム粒多，ブロック少混
2．黄褐色土　暗褐色土，黒色土，ローム粒混
3．褐色土　　細ローム粒多混
4．褐色土　　細ローム粒多，ブロック少混

SB－015　F－F′
1．暗褐色土　黄褐色土，黒色土，細ローム粒混
2．暗褐色土　細ローム粒混，1より暗
3．黄褐色土　暗褐色土混
4．暗褐色土　黒色土，黄褐色土混，1より明
5．黒褐色土　褐色土，ローム粒混
6．黒褐色土　ローム粒混，5より暗




第292図　SB－014・015

ある。実際の柱位置が判明しないので柱筋の通りが悪いとはいい難いが，掘りかたの並びはやや出入りがある。特に中間柱穴で目立つが，四隅間は整った形態を想定することが可能である。堆積土は，ローム粒を含む暗褐色土・黒褐色土・黄褐色土である。特に顕著な傾向はうかがえない。

出土遺物はやや少量である。図示できた遺物は鉄製の刀子１点である。切先から関付近までの破片である。茎は多くを欠損する。背関は直角に切り込みが入る。刃関は錆のために不明瞭である。現状では斜めになっているが，直角をなすことが考えられる。P5内の底面近くから出土した。

SB－016（第293図，図版96）

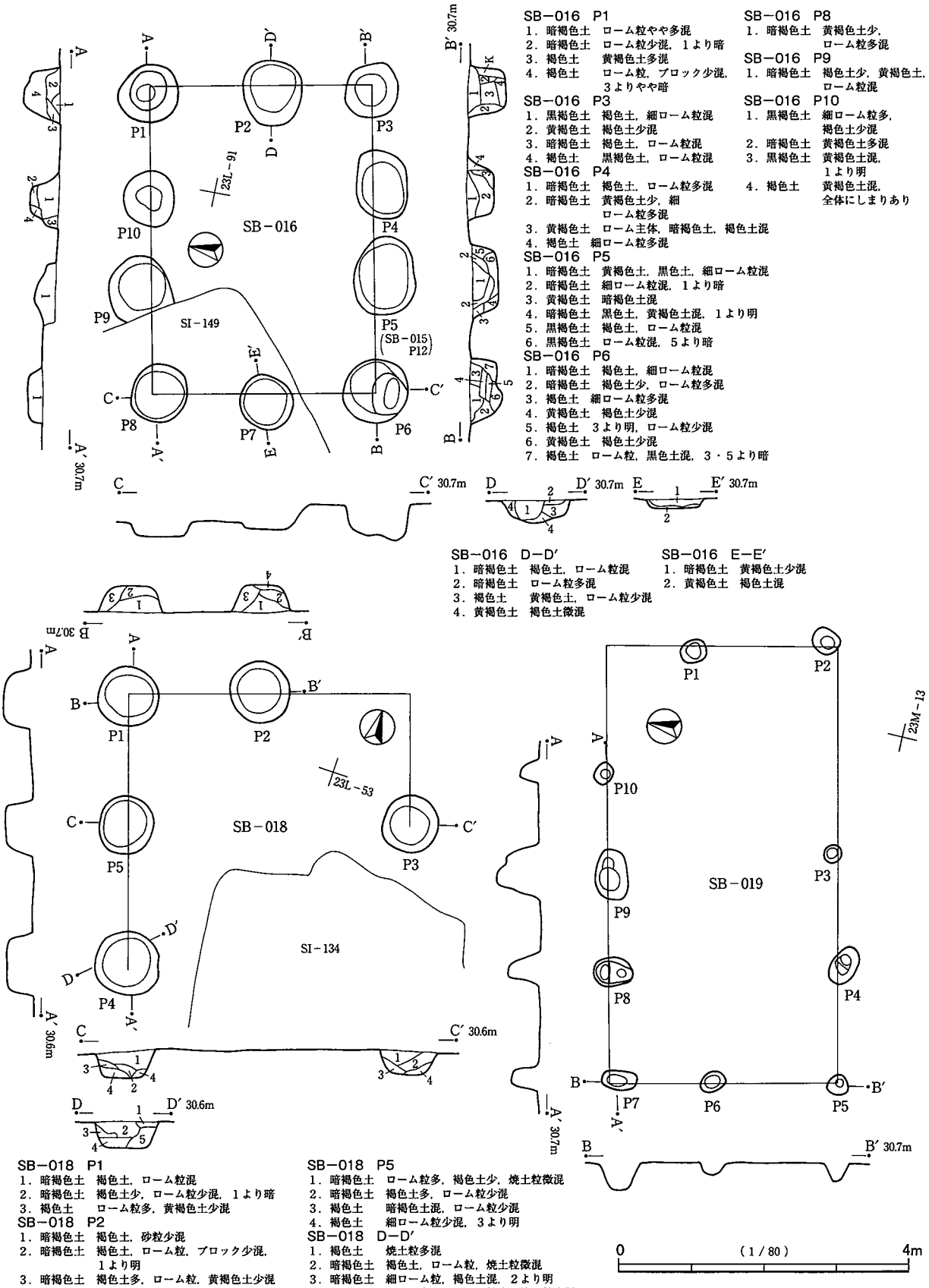
調査区南西部の23L－90グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱東西棟建物で，規模は桁行4.3m×梁行3.0m～3.1mである。棟方向はN－78°－E，面積は13.3㎡である。東側でSB－015，西北側でSI－149と重複するが，新旧関係は不明である。柱痕は概して不明瞭であるが，東妻柱中間柱穴(P2)の土層断面１層にその可能性があると思われる。柱間寸法は，桁行では1.3m～1.5m，梁行では1.４m～1.7mである。実際の柱位置が判明しないのでやや断定しがたいが，桁・梁とも等間と思われる。柱穴の並びは比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は70cm～114cmである。南桁行西第２柱穴（P5）の規模が大きいのは，SB－015と重複する影響である。掘りかたの長径は大きいものでも，本来90cm強程度であろう。確認面からの深さは28cm～52cmである。深さの平均値は，全体で40cm，四隅で49cm，中間で34cmである。隅と中間で差がある。堆積土はローム粒を含む黒褐色土・暗褐色土・褐色土・黄褐色土である。上層の色調はやや暗い傾向があると思われる。柱痕と思われるP2の１層はローム粒を含む暗褐色土である。周囲の土層のうち，上･下層はローム粒を多く含む。出土遺物はやや少量である。図示できた遺物はない。

SB－018（第293図）

調査区中央南西寄りの23L－52グリッドを中心に位置する。２間×２間の側柱建物であるが，南東隅と南側中央の柱穴はSI－134との重複の影響で検出されなかったので，本遺構とSI－134との新旧関係は不明である。また北東隅柱穴は撹乱を受けて欠失している。規模は南北3.8m×東西3.9mである。ほぼ同じ長さであり，桁行と梁行の区別が難しい。周囲の掘立柱建物をみると，東西に棟方向をもつものがあるが(SB－012･SB－033)，本遺構が同様であるか断定しがたい。南北側を桁行とすると，その方位はN－17°－W，東西側を桁行とすると，その方位はN－73°－Eである。面積は14.8㎡である。柱痕は検出されなかった。柱間寸法は，1.8m～2.0mである。遺存する柱穴の並びは比較的整っている。柱掘りかたはほぼ円形で，径は76cm～92cmである。確認面からの深さは34cm～39cm，深さの平均値は37cmである。隅の柱穴も中間の柱穴も，同様の深さである。堆積土は，黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土である。上層にローム粒が多く，色調も暗い柱穴がある（P1・P5)。P1～P3から千葉産須恵器の甕破片が出土している。しかし出土遺物は全体に少量で，図示できた遺物はない。

SB－019（第293図，図版96）

調査区南西部の23M－02グリッドを中心に位置する。東側で２箇所の柱穴が確認されないため，やや不明瞭であるが，桁行４間×梁行２間と思われる側柱東西棟建物である。規模は桁行6.1m×梁行3.2mである。棟方向はN－78°－E，面積は19.9㎡である。南東側でSI－136と重複し，そのため南桁行東第２柱穴は検出されなかった。また北東隅柱穴は，撹乱を受けて欠失している。柱間寸法は，桁行では1.3m～1.6m，梁行では1.3m～1.8mである。中間柱穴は桁･梁とも，不整な位置関係である。しかし建物の平面形態は，北東隅が不明であるものの，比較的整った長方形をなすと思われる。柱穴の規模は概して小規模であり，




SB－016 P1
1．暗褐色土　ローム粒やや多混
2．暗褐色土　ローム粒少混，1より暗
3．褐色土　黄褐色土多混
4．褐色土　ローム粒，ブロック少混，3よりやや暗

SB－016 P3
1．黒褐色土　褐色土，細ローム粒混
2．黄褐色土　褐色土少混
3．暗褐色土　褐色土，ローム粒混
4．褐色土　黒褐色土，ローム粒混

SB－016 P4
1．暗褐色土　褐色土，ローム粒多混
2．暗褐色土　黄褐色土少，細ローム粒多混
3．黄褐色土　ローム主体，暗褐色土，褐色土混
4．褐色土　細ローム粒多混

SB－016 P5
1．暗褐色土　黄褐色土，黒色土，細ローム粒混
2．暗褐色土　細ローム粒混，1より暗
3．黄褐色土　暗褐色土混
4．暗褐色土　黒色土，黄褐色土混，1より明
5．黒褐色土　褐色土，ローム粒混
6．黒褐色土　ローム粒混，5より暗

SB－016 P6
1．暗褐色土　褐色土，細ローム粒混
2．暗褐色土　褐色土少，ローム粒多混
3．褐色土　細ローム粒多混
4．黄褐色土　褐色土少混
5．褐色土　3より明，ローム粒少混
6．黄褐色土　褐色土少混
7．褐色土　ローム粒，黒色土混，3・5より暗

SB－016 P8
1．暗褐色土　黄褐色土少，ローム粒多混

SB－016 P9
1．暗褐色土　褐色土少，黄褐色土，ローム粒混

SB－016 P10
1．黒褐色土　細ローム粒多，褐色土少混
2．暗褐色土　黄褐色土多混
3．黒褐色土　黄褐色土混，1より明
4．褐色土　黄褐色土混，全体にしまりあり

SB－016 D－D′
1．暗褐色土　褐色土，ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒多混
3．褐色土　黄褐色土，ローム粒少混
4．黄褐色土　褐色土微混

SB－016 E－E′
1．暗褐色土　黄褐色土少混
2．黄褐色土　褐色土混

SB－018 P1
1．暗褐色土　褐色土，ローム粒混
2．暗褐色土　褐色土少，ローム粒少混，1より暗
3．褐色土　ローム粒多，黄褐色土少混

SB－018 P2
1．暗褐色土　褐色土，砂粒少混
2．暗褐色土　褐色土，ローム粒，ブロック少混，1より明
3．暗褐色土　褐色土多，ローム粒，黄褐色土少混
4．黒褐色土　ローム粒混

SB－018 P3
1．黒褐色土　褐色土少混
2．暗褐色土　褐色土，砂粒少，焼土粒微混
3．暗褐色土　黄褐色土少混
4．褐色土　ローム粒少混，明

SB－018 P5
1．暗褐色土　ローム粒多，褐色土少，焼土粒微混
2．暗褐色土　褐色土多，ローム粒少混
3．褐色土　暗褐色土混，ローム粒少混
4．褐色土　細ローム粒少混，3より明

SB－018 D－D′
1．褐色土　焼土粒多混
2．暗褐色土　褐色土，ローム粒，焼土粒微混
3．暗褐色土　細ローム粒，褐色土混，2より明
4．暗褐色土　褐色土多，細ローム粒少，焼土粒少混，3よりやや暗
5．褐色土　暗褐色土混，ローム粒少混

第293図　SB－016・018・019

やや簡素な作りといえよう。掘りかたは円形・楕円形で，径は24cm～70cmである。確認面からの深さは18cm～60cmである。深さの平均値は，全体で35cm，隅で33cm，中間で36cmである。隅と中間の差は少なく，むしろ通常とは逆に中間の方がやや深い。しかし，東西妻柱中間柱穴はともに18cmであり，他よりも浅い。また平面規模のわりに比較的深いものが半数程度ある。ただし長径・深さとも最大の北桁行中間柱穴(P9)は，一部に撹乱を受けており，その影響も考えられる。堆積土は多くが黒色土１層であり，ローム粒の含有は少ない。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－020（第294図，図版96）

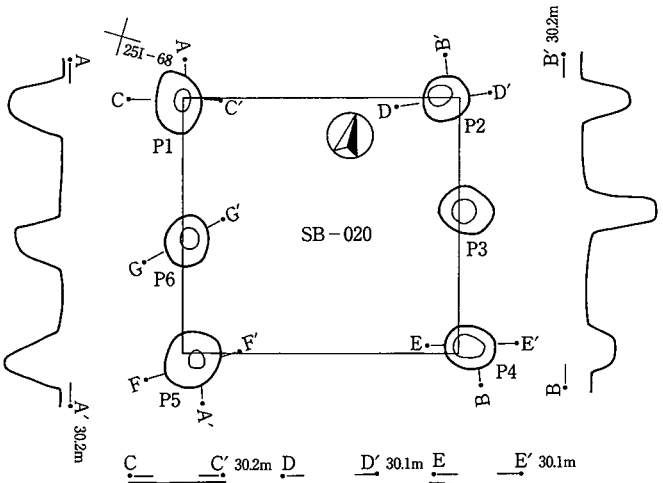
調査区東部北側の25I－68グリッドを中心に位置する。桁行１間×梁行２間の側柱東西棟建物で，規模は桁行2.9m×梁行2.7mである。棟方向はN－75°－E，面積は8.0㎡である。柱痕は不明瞭である。柱間寸法は，桁行は１間のため2.9m，梁行では1.25m～1.5mである。柱筋の通りはやや悪い。柱掘りかたは円形を基調とし，径は46cm～70cmである。確認面からの深さは32cm～72cmである。平均の深さは，全体で54cm，隅柱穴で50cm，中間柱穴で62cmである。西側中間柱穴(P6)は西両隅よりもやや浅いが，東側中間柱穴(P3)は他よりもかなり深い。逆に南東隅柱穴（P4）は他よりもかなり浅く，それが平均深度に影響している。堆積土は，ローム粒を含む暗褐色土・暗黄褐色土である。ロームを多く含む土層が上層にみられる場合と（P1），中層にみられる場合がある（P2)。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－021（第294図，図版96）

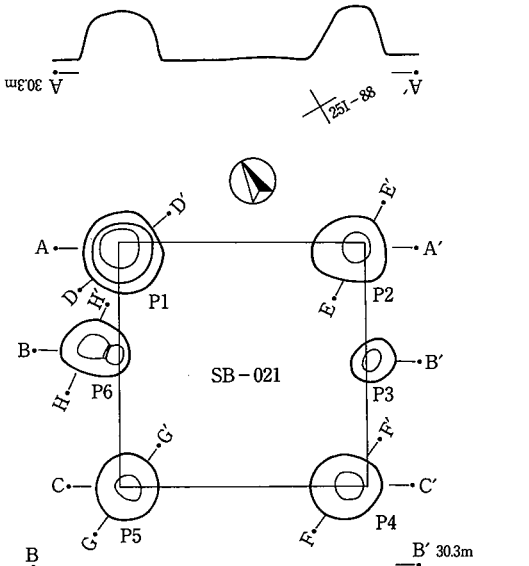
調査区東部北側の25I－87グリッドに位置する。桁行１間×梁行２間の側柱建物である。規模は桁行・梁行とも2.6mで，ほぼ方形を呈する柱配置である。棟方向はN－60°－Wで，東西南北方位からはかなり傾いている。面積は7.4㎡である。柱痕は不明瞭である。柱間寸法は，桁行は１間のため2.6m，梁行では1.1m～1.5mである。両梁行中間柱穴が隅間の柱筋からやや外側に突き出ている。柱掘りかたは円形を基調とし，径は42cm～88cmである。隅柱穴はやや大きく，径の平均が74cm，中間柱穴はやや小さく，径の平均が56cmである。確認面からの深さは50cm～60cmである。平均の深さは，全体で54cm，隅柱穴で54cm，中間柱穴で52cmであり，隅と中間との差は少ない。堆積土はローム粒を含む暗褐色土・暗黄褐色土である。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－022（第294図，図版96）

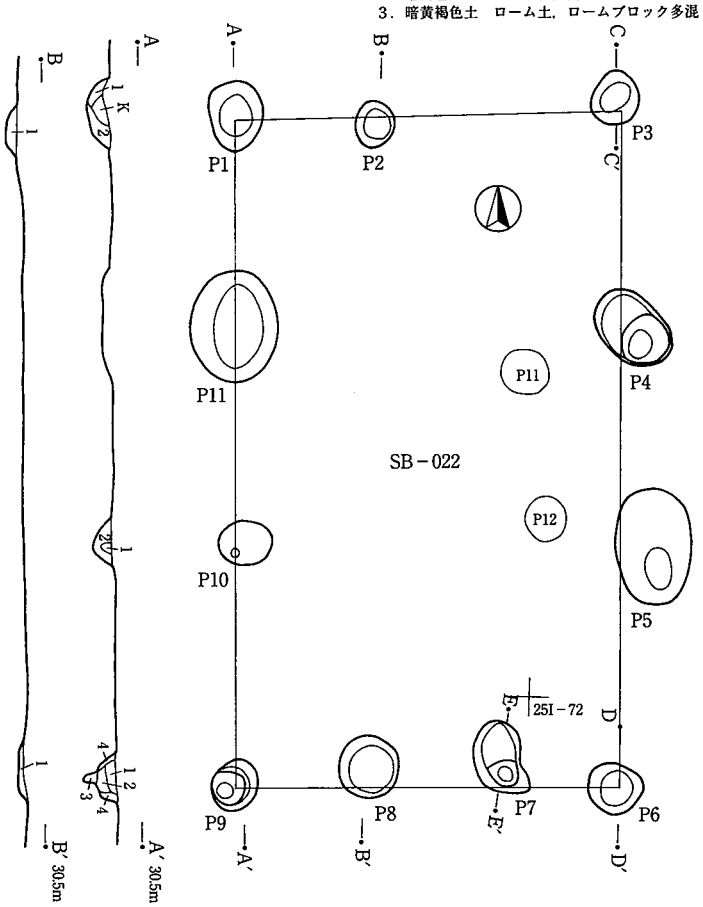
調査区東部北側の25I－61グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行３間の側柱南北棟建物で，規模は桁行7.1m～7.2m×梁行4.0m～4.1mである。棟方向はN－1°－W，面積は29.6㎡である。北東隅でSB－024と重複するが，新旧関係は不明である。また建物内部に他の遺構と思われる小穴が２基存在する。柱痕は不明瞭であるが，南東隅柱穴（P6）の土層断面１層が相当する可能性がある。柱間寸法は，桁行では2.25m～2.6m，梁行では1.2m～1.5mである。柱筋の通りは西側でよいが，その他はあまりよくない。柱掘りかたは円形・楕円形で，径は48cm～1.2mである。確認面からの深さは10cm～53cmである。概して浅いために，柱穴のなかには，明瞭な状態で検出できないものがある。特に東桁行南第２柱穴（P5）と西桁行北第２柱穴（P11）は規模が大きく，本来のものとは思われない。また北妻柱東第２柱穴は検出されなかった。逆に53cmの深さをもつ東桁行北第２柱穴（P4）は他よりもやや突出した深さであり，若干の違和感がある。平均の深さは，全体で24cm，隅柱穴で29cm，中間柱穴で21cmである。隅柱穴も浅いが，中間柱穴のなかには桁・梁とも特に浅いものが存在する。堆積土については，柱痕が残ると思われるP6をみると，中央の柱痕部分は少量のローム粒を含む暗褐色土である。周囲の埋土はローム粒・ロームブロッ

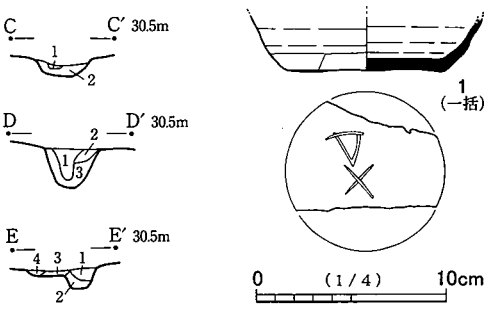



SB－020
1．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
2．暗褐色土　ローム粒混
3．暗黄褐色土　ローム土多混
4．暗黄褐色土　ローム土混
5．暗褐色土　ローム土混




SB－021　D－D′
1．暗褐色土　ローム粒，ローム土少混
2．暗褐色土　ローム粒，ローム土微混
SB－021　E－E′
1．暗褐色土　ローム粒，ローム土多混
2．暗黄褐色土　ローム粒，ローム土多混
SB－021　F－F′
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒少混
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒少混，1より明
3．暗褐色土　ローム土，ローム粒少混，2より明
SB－021　G－G′
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．暗黄褐色土　ローム土多混
SB－021　H－H′
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒少混
3．暗黄褐色土　ローム土，ローム土ブロック多混




SB－022　P1
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒混
SB－022　P2
1．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒主体
SB－022　P8
1．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒主体
SB－022　P9
1．暗褐色土　ローム粒混，やや砂質
2．暗褐色土　ローム粒混
3．黄褐色土　ローム土主体
4．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒混
SB－022　P10
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．暗黄褐色土　ローム土主体

SB－022　C－C′
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．暗褐色土　ローム粒混
SB－022　D－D′
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．暗黄褐色土　ローム土，ロームブロック混
3．暗黄褐色土　ローム土多混
SB－022　E－E′
1．暗褐色土　ローム粒，ローム土多混
2．暗褐色土　ローム粒混
3．暗褐色土　ローム土混
4．黄褐色土　ローム土混

0　（1／80）　4m

第294図　SB－020・021・022

クを含む暗黄褐色土で，特に下層はロームを多く含む。

出土遺物は少量である。図示できた遺物は新治窯産の須恵器杯１点である。底部を多く遺存するが，口縁部を欠損する。底部外面に線刻がある。「＋（×）」と「△」状の記号である。出土した柱穴は不明である。

建物内部の東桁行側に所在する２基の小穴は本遺構よりも深く，しっかりしている。北側のものは，深さが74cm，南側のものは深さが60cmである。北側のものは柱痕が明瞭であり，その部分の土層はローム粒を含む暗褐色土である。周囲の埋土は概してローム粒・ブロックを多く含む。P4の深い部分はこれらと組みになるものかもしれないが，周囲に対応する柱穴が存在しないため，様相は不明瞭である。

SB－023（第295図，図版96）

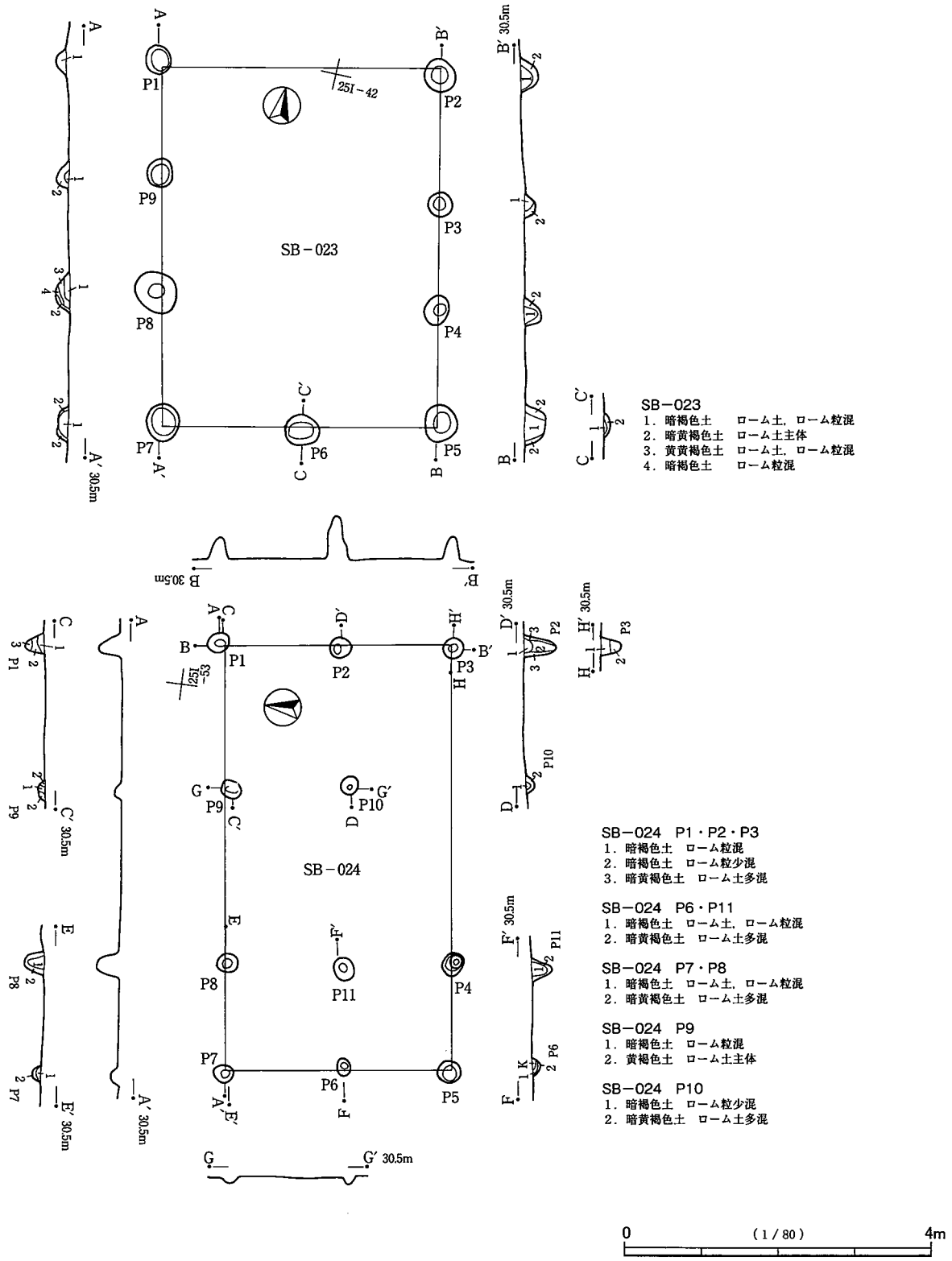
調査区東部北側の25I－42グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱南北棟建物で，規模は桁行4.7m×梁行3.6mである。棟方向はN－11°－W，面積は17.5㎡である。いくつかの土坑が内外に存在するが，本遺構の柱穴を損なうものはないと思われる。北妻柱中間柱穴が存在しないが，浅いために失われたと思われる。柱痕は不明瞭であるが，柱穴が小規模のため，柱穴部分がほぼ柱の位置である。柱間寸法は，桁行では1.4m～1.8m，梁行では1.8mである。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は30cm～60cmである。確認面からの深さは８cm～28cmである。平均の深さは，全体で18cm，隅柱穴で20cm，中間柱穴で16cmである。柱穴は概して浅いが，東桁行両隅の柱穴は他よりもやや深い。逆に南北両妻柱中間柱穴は，北側が失われ，南側が深さ８cmであり，他よりも浅い。堆積土はローム粒を含む暗褐色土・暗黄褐色土で，底面・壁際にロームを多く含むものが多い。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－024（第295図）

調査区東部北側の25I－52グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の総柱東西棟建物で，規模は桁行5.6m×梁行2.9mである。棟方向はN－84°－E，面積は16.6㎡である。南西隅付近でSB－022，北東隅側でSB－025と重複するが，新旧関係は不明である。またいくつかの土坑が内外に存在するが，本遺構の柱穴を損なうものはないと思われる。なお南桁行東第２柱穴については，保存樹木が存在するため，検出できなかった。柱痕は不明瞭であるが，柱穴が小規模のため，柱穴部分が柱の位置である。柱間寸法は，桁行で1.3m～2.4m，梁行では1.4m～1.6mである。桁行側なかの間が，東西両端の間よりも長い。柱筋の通りはやや悪い。柱掘りかたは円形を基調とし，径は22cm～32cmである。確認面からの深さは８cm～60cmであるが，最深である東妻柱中間柱穴（P2）の深さが，他よりも著しく突出しているため，疑問がある。２番目の深さは南桁行西第２柱穴（P4）の32cmであるが，この程度であれば妥当な深さであろう。P2を除外した深さの平均値は全体で20cmであるが，側柱のみが20cm，四隅が22cm，中間・床束が19cmであり，大差がない。また個々をみても，特に顕著な様相はうかがえない。堆積土はローム粒を含む暗褐色土・暗黄褐色土である。やや深さのある北東隅柱穴（P1）では，中層にロームの含有が少ない。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

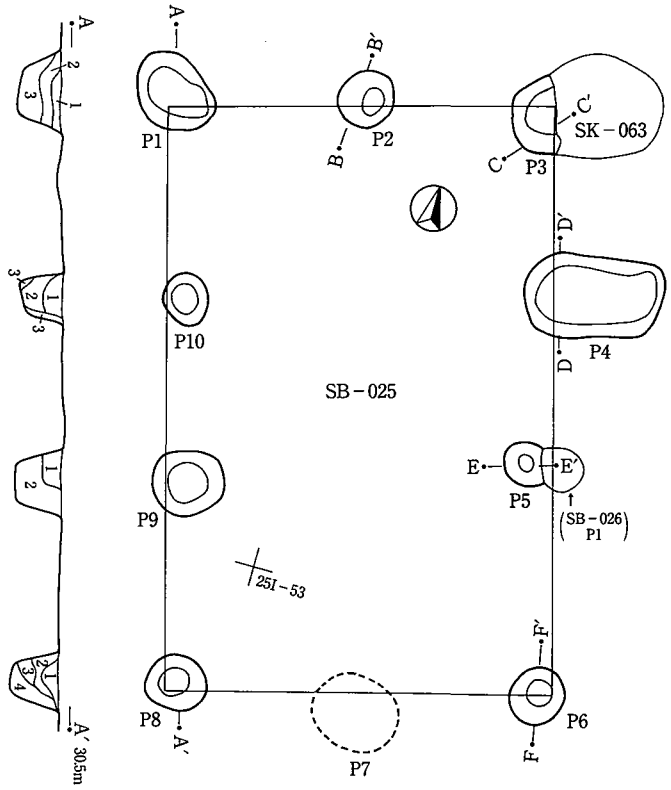
SB－025（第296図，図版96）

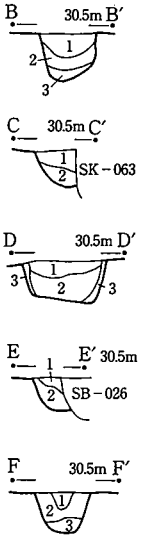
調査区東部北側の25I－43グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱南北棟建物で，規模は桁行6.2m×梁行4.0mである。棟方向はN－16°－W，面積は25.5㎡である。南西隅側でSB－024，東側でSB－026と重複するが，新旧関係は不明である。また周囲に存在する多くの土坑のうちのいくつかと重複して，南妻柱中間柱穴が失われ，東桁行北側柱穴も一部を損なっている。柱痕は概して不明瞭であるが，




第295図　SB－023・024

南東隅柱穴(P6)の1層にその可能性があると思われる。また南西隅柱穴(P8)の1層も同様かもしれない。柱間寸法は，桁行で1.95m～2.45m，梁行では1.9m～2.1mである。柱筋の通りはやや悪い。柱掘りかたは円形を基調とし，径は46cm～96cmである。確認面からの深さは40cm～50cmである。平均の深さは，全体・四隅・中間とも46cmで，差がない。堆積土については，柱痕が残ると思われるP6をみると，中央の柱痕部分はローム粒を含む暗褐色土である。周囲はローム粒・ロームブロックをやや多く含む土層である。出




SB－025　P1
1．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒多混
3．暗褐色土　ローム粒混

SB－025　P8
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒斑状混
3．暗褐色土　ローム粒少混
4．暗黄褐色土　ローム土多混

SB－025　P9
1．暗黄褐色土　ローム土多混
2．暗褐色土　ローム粒混

SB－025　P10
1．暗褐色土　ローム土混
2．暗褐色土　ローム粒混
3．暗黄褐色土　ローム土多混

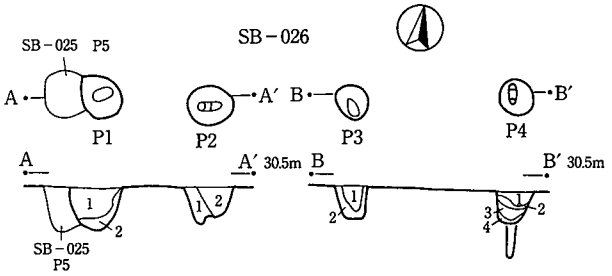
SB－025　B－B′
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混，やや砂質
2．暗褐色土　ローム粒混
3．暗黄褐色土　ローム土多，ロームブロック混

SB－025　C－C′
1．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒混

SB－025　D－D′
1．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
3．黄褐色土　ローム土，ロームブロック主体

SB－025　E－E′
1．黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
2．暗褐色土　ローム粒少混

SB－025　F－F′
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．暗黄褐色土　ローム土，ロームブロック混
3．暗褐色土　ローム粒混

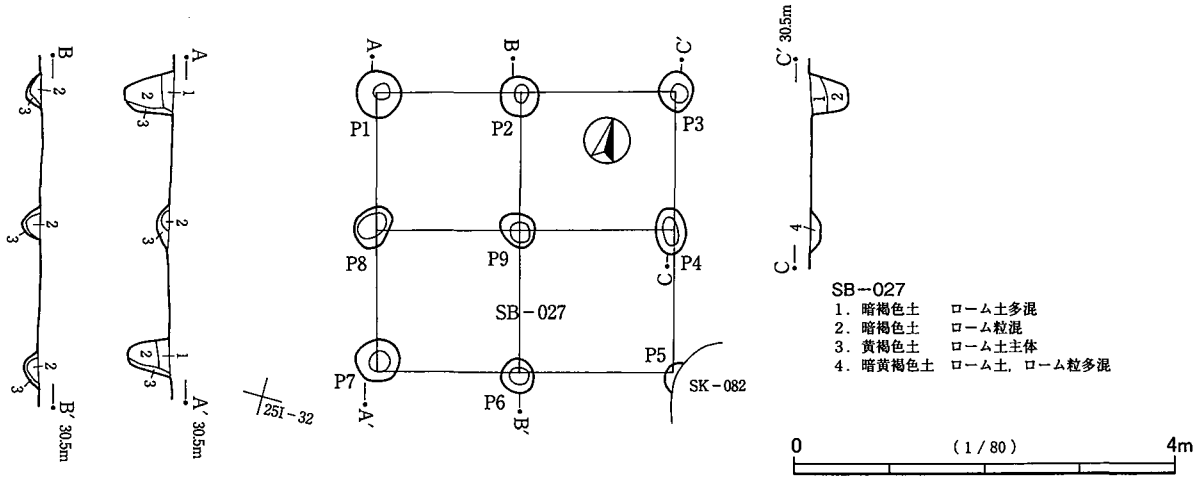



SB－026　P1
1．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
2．暗褐色土　ローム土，ロームブロック混

SB－026　P2
1．黒褐色土　ローム粒少混
2．黄褐色土　ローム土主体

SB－026　P3
1．暗黄褐色土　ローム土多混
2．黄褐色土　ローム土主体

SB－026　P4
1．暗黄褐色土　ローム土多混
2．黄褐色土　ローム土主体
3．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック混
4．黄褐色土　ローム土，ロームブロック混




SB－027
1．暗褐色土　ローム土多混
2．暗褐色土　ローム粒混
3．黄褐色土　ローム土主体
4．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混

第296図　SB－025・026・027

土遺物は少量で，図示できた遺物はない。

SB－026（第296図，図版96）

調査区東部北側の25I－43・44グリッドに位置する。ほぼ一直線上に位置する４基の柱穴である。西端の柱穴がSB－025と重複するが，新旧関係は不明である。周囲に多くの土坑が存在する。本遺構は掘立柱建物の桁行側柱穴かもしれないが，周囲の遺構のために組みとなる柱穴がみられない。現状では，柵列または塀としておきたい。長さは4.4mである。方向はN－82°－Eで，ほぼ東西方向である。柱痕は概して不明瞭であるが，東第２柱穴（P3）の１層にその可能性があると思われる。柱穴間は1.2m～1.7mである。柱掘りかたは円形を基調とし，径は34cm～50cmである。確認面からの深さは34cm～44cm，平均の深さは38cmである。堆積土は暗褐色土・黄褐色土で，ローム粒を多く含む部分が多い。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－027（第296図，図版96）

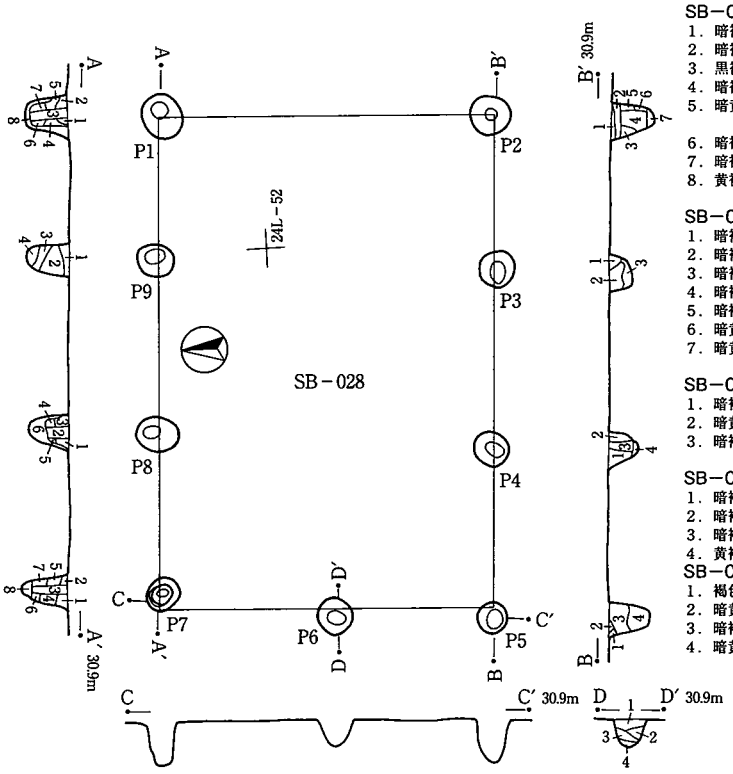
調査区東部北側の25I－22グリッドに位置する。桁行２間×梁行２間の総柱東西棟建物である。規模は桁行3.2m×梁行2.9mで，ほぼ方形の建物である。棟方向はN－75°－E，面積は9.50㎡である。南東隅柱穴（P5）がSK－082と重複し，切られていると思われる。また東西両辺の北側にSK－083・SK－084が所在するが，大きな影響を受けていない。柱痕は不明であるが，柱穴が小規模なため，柱穴の位置がほぼ柱の位置である。柱間寸法は，桁行では1.5m～1.65m，梁行では1.4m～1.5mである。柱筋の通りはよい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は32cm～50cmである。確認面からの深さは10cm～50cmである。南東隅が不明であるが，四隅とそれ以外に顕著な差がある。平均の深さは，全体で26cm，隅柱穴で44cm，側柱中間の柱穴と束柱を合わせて16cmである。堆積土はローム粒を含む暗褐色土である。深さのある隅の柱穴では上層の方がロームを多く含む。出土遺物はない。

SB－028（第297図，図版97）

調査区中央やや南側の24L－51グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱東西棟建物で，規模は桁行5.2m×梁行3.5mである。棟方向はN－95°－E，面積は18.85㎡である。柱痕と思われる土層が半数程度の柱穴でみられる。柱穴は小規模であり，柱穴の位置がほぼ柱の位置である。柱間寸法は，桁行では1.6m～1.9m，梁行では1.7m～1.8mである。桁梁とも近似した寸法であるが，桁行なかの間が東西両端の間と比べてやや長い。西妻柱の通りがやや悪いが，南北桁行の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は32cm～44cmである。確認面からの深さは26cm～50cmである。平均の深さは，全体で40cm，隅柱穴で46cm，中間柱穴で36cmである。四隅と中間で差があるが，北桁行側はあまり顕著でない。柱痕部分の土層は黒褐色土・暗褐色土で，ローム粒の含有は少ない。周囲の埋土は暗褐色土・暗黄褐色土で，下層にローム粒の含有が多い。出土遺物はない。

SB－029（第297図，図版97）

調査区中央やや南側の24L－71グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱南北棟建物で，規模は桁行6.15m～6.4m×梁行3.95m～4.1mである。棟方向はN－11°－E，面積は24.75㎡である。柱痕と思われる土層が柱穴４箇所でみられる（P3・P5・P6・P9）。柱穴は小規模であり，柱穴の位置がほぼ柱の位置である。柱間寸法は，桁行では1.9m～2.45m，梁行では1.9m～2.2mである。桁行東側の北の間が長く，なかと南の間が短い。桁行西側も東側ほどではないが，北の間が長い。以上により桁行中間の柱穴は対称位置からややずれている。梁行は，北側の柱間がやや長く，南側がやや短い。南妻柱の通りはやや悪い。




SB－028　P1
1．暗褐色土　　ローム粒微混　ややしまりあり
2．暗褐色土　　ローム粒微混　ややしまりあり
3．黒褐色土　　ローム粒微混　ややしまりあり
4．暗褐色土　　ローム粒多混　ややしまりあり
5．暗黄褐色土　暗褐色土，ローム粒やや多混，
　　ややしまりあり
6．暗褐色土　　ややしまりあり
7．暗褐色土　　ローム粒微混，ややしまりあり
8．黄褐色土　　ソフトローム主体，
　　ややしまりあり

SB－028　P2
1．暗褐色土　　ややしまりあり
2．暗褐色土　　ローム粒微混　ややしまりあり
3．暗褐色土　　ローム粒，2より多混
4．暗褐色土
5．暗褐色土　　3に似る
6．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック混
7．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック主体，
　　暗褐色土混

SB－028　P3
1．暗褐色土
2．暗黄褐色土　ロームブロック混，しまり弱
3．暗褐色土　　ローム粒1・2より多混
　　しまり弱

SB－028　P4
1．暗褐色土　ローム粒，ブロック混
2．暗褐色土　1に似る，ローム粒微混
3．暗褐色土　1・2より明　しまり弱
4．黄褐色土　ローム主体，褐色土微混

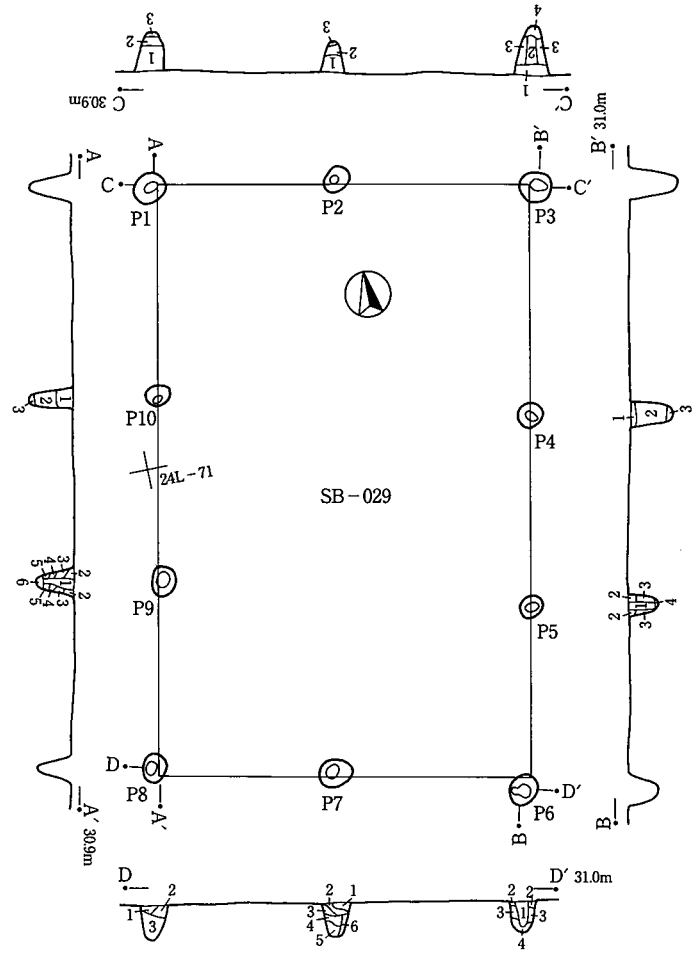
SB－028　P5
1．褐色土
2．暗黄褐色土　ローム，褐色土混
3．暗褐色土　　ローム粒微混
4．暗黄褐色土　暗褐色土，ローム粒混

SB－028　P6　D－D′
1．暗褐色土　　ローム粒微混
2．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック微混
3．暗褐色土
4．暗黄褐色土　ローム主体，褐色土混

SB－028　P7
1．暗褐色土　　しまり弱
2．暗褐色土　　しまり弱
3．暗褐色土　　ローム粒微混，しまり弱
4．暗褐色土　　ローム粒，ロームブロック微混
5．暗黄褐色土　褐色土，ローム混，しまりあり
6．暗褐色土　　ローム多混
7．暗黄褐色土　褐色土，ロームやや多混
8．褐色土　　ローム粒主体，ややしまりあり

SB－028　P8
1．暗褐色土　　ローム粒混
2．黒褐色土
3．暗褐色土　　ローム粒混，1に似る
4．暗褐色土　　ローム粒，ロームブロック混
5．暗褐色土　　4に似る
6．暗黄褐色土　ローム主体，暗褐色土均等混

SB－028　P9
1．暗褐色土　ローム粒微混，しまりややあり
2．黒褐色土　ローム粒微混
3．暗褐色土　ローム粒混，1より多混
4．暗褐色土　ローム粒微混




SB－029　P1
1．暗褐色土　　ローム土混，しまりあり
2．暗黄褐色土　ローム土多，しまりあり
3．黒褐色土　　ローム土混，しまり強

SB－029　P2
1．暗褐色土　ローム土混，ややしまりあり
2．暗褐色土　ローム土多，しまりあり
3．黒褐色土　ローム土混，しまり強

SB－029　P3
1．暗褐色土　　ローム粒少混，ややしまりあり
2．黒褐色土　　しまりなし
3．暗黄褐色土　ローム塊混，しまりあり
4．黒褐色土　　しまり強

SB－029　P4
1．暗黄褐色土　ローム土主体，ややしまりあり
2．暗褐色土　　ローム粒多混，しまりあり
3．黒褐色土　　ローム混，しまり強

SB－029　P5
1．黒褐色土　しまりなし
2．暗褐色土　ローム粒混，しまりあり
3．暗褐色土　ローム塊混，しまりあり
4．黒褐色土　しまり強

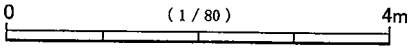
SB－029　P6
1．黒褐色土　　しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム多混，しまりあり
3．暗褐色土　　ローム粒混，しまりあり
4．暗黄褐色土　ローム土多混，しまり強

SB－029　P7
1．暗褐色土　　しまりなし
2．暗褐色土　　ローム少混，しまりなし
3．暗黄褐色土　ローム主体，しまりあり
4．暗褐色土　　ローム土混，しまりあり
5．暗杭褐色土　ローム土混，ややしまりあり
6．暗黄褐色土　ローム主体，しまりあり

SB－029　P8
1．暗黄褐色土　ローム粒多混，しまりなし
2．暗褐色土　　ローム少混，しまりなし
3．暗褐色土　　しまりなし

SB－029　P9
1．暗褐色土　　しまりなし
2．暗褐色土　　ローム少混，ややしまりあり
3．暗黄褐色土　しまりあり
4．暗褐色土　　ローム土少混
5．黒褐色土　　しまりあり
6．黒褐色土　　ローム少混，しまり強

SB－029　P10
1．暗褐色土　　ローム粒混，しまりなし
2．黒褐色土　　ローム塊少混，ややしまりあり
3．暗黄褐色土　ローム土多混，しまり強




第297図　SB－028・029

柱掘りかたは円形を基調とし，径は22cm～34cmである。確認面からの深さは30cm～54cmである。平均の深さは，全体で39cm，四隅で43cm，中間柱穴で37cmである。隅柱穴が中間よりもやや深いが，それほど大きな差ではない。個々をみると，北東隅柱穴（P3）が深く，北妻柱中間柱穴（P2）と東桁行南第２柱穴（P5）はやや浅い。また南東隅柱穴（P6）もやや浅い柱穴である。柱痕部分の土層は黒褐色土で，ローム粒の含有は少ない。周囲の埋土は暗褐色土・暗黄褐色土で，ローム粒・ロームブロックを多く含む柱穴と，あまり多く含まない柱穴がある。なお柱痕の有無に関わらず，最下層が固くしまる黒褐色土・暗黄褐色土となる柱穴が多い。色調は前者の方が多い。出土遺物はない。

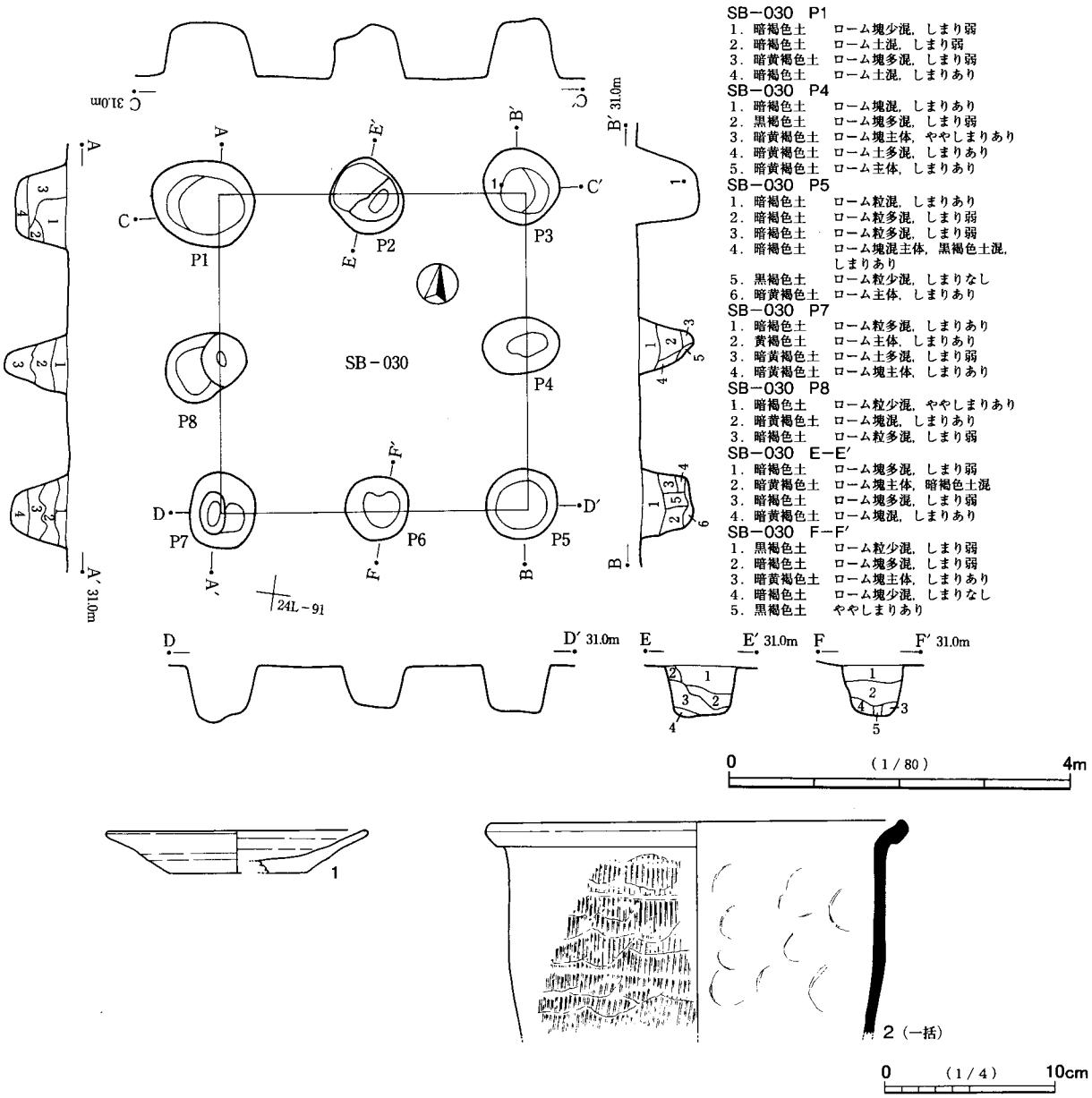
SB－030（第298図，図版97）

調査区中央やや南側の24L－81グリッドを中心に位置する。桁行２間×梁行２間の側柱南北棟建物である。柱配置がほぼ方形の建物であるが，わずかに長い南北方向を桁行とした。規模は桁行3.75m×梁行3.65mである。棟方向はN－7°－W，面積は14.3㎡である。南側でSB－031と重複するが，新旧関係は不明である。柱痕は多くが不明瞭であるが，南東隅柱穴（P5）で柱痕と思われる土層がみられる。また南側中間柱穴（P6）にも，わずかに柱痕が遺存すると思われる。柱間寸法は，桁行では1.8m～1.9m，梁行では1.65m～2.0mである。柱穴の規模が大きく，実際の柱位置は桁・梁とも等間の可能性がある。その場合，桁行と梁行の区別が難しい。柱穴の並びはよい。柱掘りかたは円形・楕円形で，径は70cm～1.2mである。中間柱穴は隅柱穴よりもやや小さい。確認面からの深さは50cm～75cmである。平均の深さは，全体と四隅でともに63cm，中間で62cmであり，ほとんど差がない。しかし個々にみると，最も浅いのは南側の中間柱穴（P6），最も深いのは西側の中間柱穴（P8）であり，中間柱穴に幅がある。柱痕部分の土層（P5・P6の５層）は黒褐色土で，ローム粒の含有は少ない。周囲の埋土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・暗黄褐色土である。

出土遺物はやや少量である。図示できた遺物は２点である。１はロクロ土師器皿である。口縁部から底部までの1/4弱の破片である。底部外面にヘラミガキ痕がある。ヘラ書きの可能性も若干考えられるが，不整であり，また多く施されているため，調整痕としておく。P3の堆積土下層から出土した。２は千葉産の須恵器甕または甑である。口縁部から胴部中位までの破片である。出土した柱穴は不明である。

SB－031（第299図，図版97）

調査区中央やや南側の24L－90グリッドを中心に位置する。桁行２間×梁行２間の側柱南北棟建物と思われるが，北西隅柱穴がみられないことと北側の柱配置が整っていないことからやや不明瞭な遺構である。また内部に柱穴状の土坑が１基あるが，中間柱穴の柱筋の交点上に位置せず，本遺構に伴うものか不明瞭である。本遺構に伴うとしても，柱穴ではないかもしれない。したがって総柱ではなく，側柱建物としておきたい。規模は桁行4.8m×梁行3.6mである。棟方向はN－8°－E，面積は推定18.4㎡である。北側でSB－030と重複するが，新旧関係は不明である。また撹乱により，東側・北側で一部を損なっている柱穴がある。北東隅柱穴（P2）で柱痕と思われる土層がみられるが，そのほかは不明である。柱間寸法は，桁行では2.3m～2.5m，梁行では1.65m～2.0mである。柱筋の通りはあまりよくない。柱掘りかたは円形を基調とし，径は56cm～90cmである。確認面からの深さは22cm～50cmである。平均の深さは，全体で37cm，隅で33cm，中間で39cmである。平均は中間の方が隅よりも深いが，個々にみると，東桁行の中間柱穴（P3）は浅く，南妻柱中間柱穴は両隅よりもかなり深い。なお内側の土坑は径80cm～90cm，深さが16cmであり，浅い遺構である。柱痕部分の土層（P2の１層）は黒褐色土で，ローム粒の含有が少なく，軟質である。

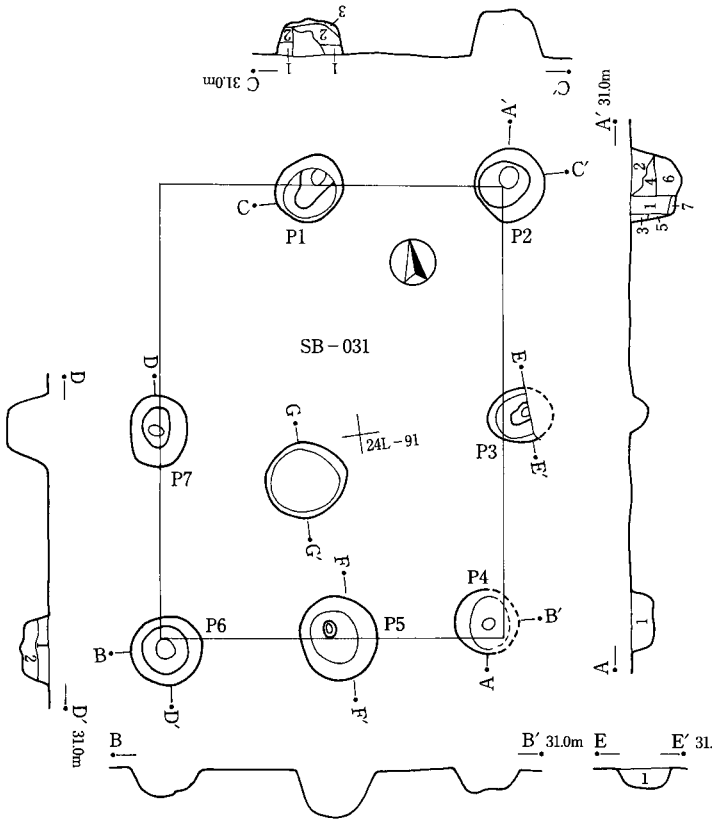



第298図　SB－030

周囲の埋土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・暗黄褐色土である。上層はローム粒が多く，下層はロームブロックが多いが，中層はややロームが少ない。柱痕下の最下層は黒褐色土で，固くしまっている。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

### SB－032（第299図，図版97）

調査区中央やや南側の23L－89グリッドを中心に位置する。桁行２間×梁行２間の側柱東西棟建物で，規模は桁行4.8m×梁行4.1mである。棟方向はN－83°－E，面積は19.8㎡である。SI－190と大きく重複し，一部の柱穴を損なっている。新旧関係は不明である。柱痕は多くが不明瞭であるが，南西隅柱穴（P7）で柱痕と思われる土層がみられる。柱間寸法は，桁行では2.3m～2.4m，梁行では1.9m～2.3mである。西妻柱の中間柱穴がややなかに入っているが，ほかの３辺の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は75cm～90cmである。確認面からの深さは26cm～52cmである。平均の深さは，全体で37cm，四隅で39cm，中間で35cmである。南北桁行の中間柱穴は隅よりもやや浅いが，西妻柱中間柱穴（P8）は隅より




SB－031　P1
1．暗褐色土　ローム粒多混，しまりあり
2．暗褐色土　ローム粒少混，しまりあり
3．暗黄褐色土　ローム塊多混，しまり強

SB－031　P2
1．黒褐色土　ローム粒少混，しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム粒多混，しまりあり
3．暗黄褐色土　ローム粒多混，しまりあり
4．暗褐色土　ローム粒混，しまりあり
5．暗褐色土　ローム粒混，しまりあり
6．暗褐色土　ローム塊多混
7．黒褐色土　しまり強

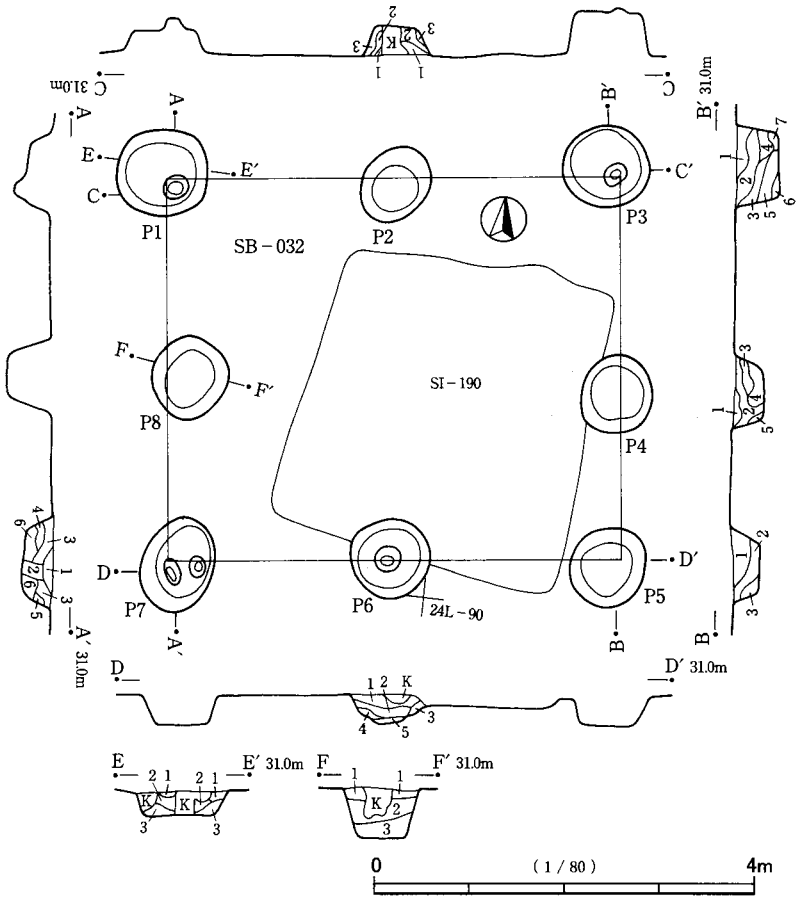
SB－031　P4
1．暗黄褐色土　ローム塊混

SB－031　P6
1．暗褐色土　ローム粒混，ややしまりなし
2．暗黄褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり

SB－031　E－E′
1．暗褐色土　ローム土多混

SB－031　F－F′
1．暗褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり
2．黒褐色土　ローム粒混，ややしまりあり
3．暗黄褐色土　ローム粒混，しまり強

SB－031　G－G′
1．暗褐色土　ロ　ーム粒多混，しまりあり
2．暗黄褐色土　ローム土主体，しまりあり




SB－032　P2
1．暗褐色土　ローム粒混，しまり弱
2．暗褐色土　ローム粒多混，しまり弱
3．暗黄褐色土　ローム土混，しまりやや弱

SB－032　P3
1．暗褐色土　ローム塊多混，しまりやや弱
2．暗褐色土　ローム塊多混，しまりあり
3．黒褐色土　ローム粒多混，しまりややあり
4．暗黄褐色土　ローム塊主体，しまりややあり
5．黒褐色土　ローム塊混　しまりややあり
6．黒褐色土　ローム粒混　しまりややあり
7．黒褐色土　ローム粒混　しまりややあり

SB－032　P4
1．暗褐色土　ローム塊多混，ややしまりあり
2．暗褐色土　ローム粒多混，しまり弱
3．暗褐色土　ローム塊混，しまり弱
4．暗黄褐色土　ローム土主体，しまりあり
5．暗黄褐色土　ローム土主体，ややしまりあり

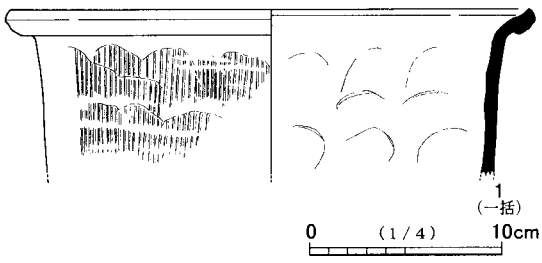
SB－032　P5
1．暗褐色土　ローム塊混，ややしまりあり
2．暗褐色土　ローム粒混，しまり弱
3．暗褐色土　ローム粒多混，しまり弱

SB－032　P6
1．暗褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり
2．暗褐色土　ローム土斑状混，ややしまりあり
3．暗黄褐色土　ローム土斑状混，ややしまりあり
4．暗黄褐色土　ローム土斑状混，ややしまりあり
5．暗褐色土　ローム土混，しまり強

SB－032　P7
1．暗黄褐色土　ローム粒多混，しまりあり
2．黒褐色土　ローム粒少混，しまりややあり
3．暗黄褐色土　ローム塊多混，しまりあり
4．黒褐色土　ローム粒少混，しまりあり
5．黄褐色土　ローム土主体，しまりあり
6．暗褐色土　ローム粒，ローム塊少混，しまりあり

SB－032　E－E′
1．暗褐色土　ローム粒少混，しまり弱
2．暗褐色土　ローム粒多混，しまり弱
3．暗褐色土　ローム塊混，しまりあり

SB－032　F－F′
1．暗褐色土　ローム粒混，しまりあり
2．暗黄褐色土　ローム塊混，しまりややあり
3．黒褐色土　ローム塊混，しまりやや弱




第299図　SB－031・032

も深い。柱痕部分と思われる土層（P7の２層）は黒褐色土で，ローム粒の含有は少ない。周囲の埋土はローム粒を多く含む土層が多い。

出土遺物は少量である。図示できた遺物は千葉産の須恵器甕または甑１点である。口縁部から胴部上位にかけての一部の破片である。出土した柱穴は不明である。

SB－033（第300図，図版97）

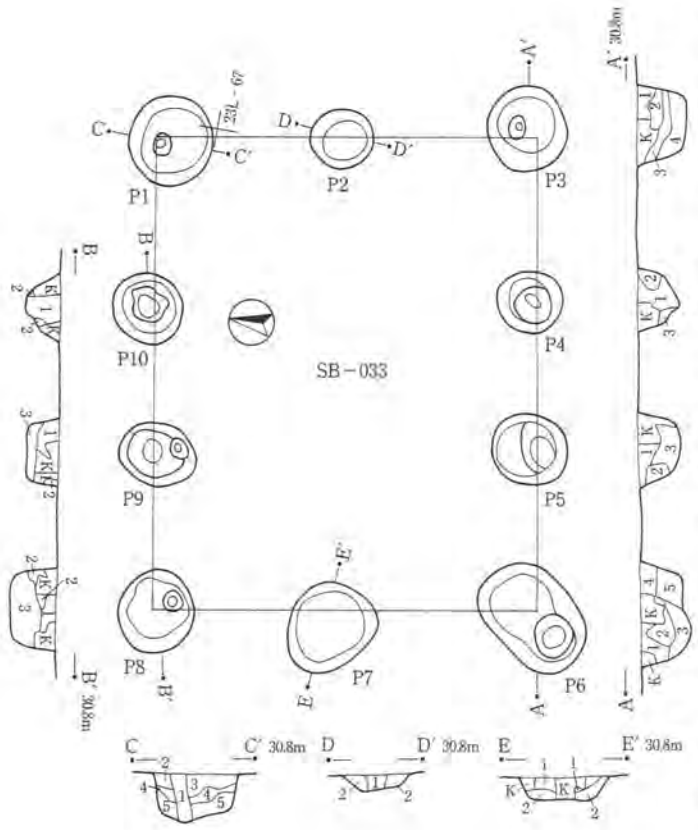
調査区中央やや南西の23L－66グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱東西棟建物で，規模は桁行5.0m×梁行4.0m～4.1mである。棟方向はN－79°－E，面積は20.4㎡である。他遺構との重複はないが，耕作機械による撹乱を平面で縞状に受けている。柱痕の土層は北東隅柱穴（P1）で明瞭であるほか，北側のP10・南側のP4・P6にも遺存していると思われる。柱間寸法は，桁行では1.5m～1.85m，梁行では1.85m～2.2mである。桁行なかの間が両端の間よりもやや短い可能性がある。しかし柱穴の規模が大きいため，実際の柱間隔はあまり差がないかもしれない。柱掘りかたは円形を基調とし，径は64cm～1.3mである。南西隅柱穴（P6）の長径が長いが，これを除けば１m以内の径である。中間柱穴はやや小さく，径70cm強，隅柱穴はやや大きく，径90cm弱が標準的な大きさである。確認面からの深さは18cm～52cmであり，径同様四隅と中間で差がある。平均の深さは，全体で41cm，四隅で52cm，中間で34cmである。なお中間柱穴でも，東西の妻柱は浅く，平均22cm，南北桁行側はやや深く，平均41cmである。柱痕部分の土層（P1の２層ほか）は黒褐色土で，ローム粒の含有は少ない。周囲の埋土はローム粒を含む暗褐色土・黄褐色土層である。ロームの含有状況は柱穴によって異なるが，P1では中層に最も多い。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－034（第300図，図版97）

調査区中央やや南側の23L－59グリッドを中心に位置する。桁行１間×梁行１間の側柱南北棟建物で，規模は桁行2.3m～2.4m×梁行2.0mである。棟方向はN－11°－E，面積は4.8㎡である。重複する遺構はないが，東方至近の位置にSI－183が所在する。本遺構との同時存在は考えられない。柱痕は土層断面図を作成した北側のP1・P2で明瞭であるが，作成していない南側のP3・P4も同様と思われる。なお柱穴底面は中央部が一段深く窪んでいるため，土層断面に関わらず，柱位置が明瞭である。柱間寸法は，１間×１間のため，規模と同様である。柱掘りかたはほぼ円形で，径は58cm～66cmである。確認面からの深さは66cm～76cm，平均の深さは72cmである。建物は小さいが，規模の大きい柱穴である。掘りかたは確認面から40cm～50cmの深さまでは垂直的であるが，そこで幅を減じ，20cm～30cm程度の深さで底面にいたる。下部の径は20cm～30cm弱程度である。柱の径はそれを若干下回るものと思われる。柱痕部分と思われる土層（P1・P2の２層）は若干のローム粒を含む黒褐色土で，軟質である。周囲の埋土はしまりがあり，中・上層の方が下層よりもローム粒・ロームブロックを多く含む。出土遺物はない。

SB－035（第301図，図版97）

調査区南部の24M－53グリッドを中心に位置する。２間×２間の側柱建物で，規模は東西4.45m×南北4.4mである。ほとんど正方形の柱配置で，柱間の間数も同じであるため，どちらが桁行でどちらが梁行か区別が付かない。建物の向きが東西南北からあまり大きく振れないため，桁行・梁行の代わりに東西・南北の方位を使用して記述する。南北が桁行であれば棟方向はN－10°－E，東西が桁行であれば棟方向はN－80°－Wである。面積は20.5㎡である。南側でSD－023と重複し，切られていると思われる。柱痕は浅い東側および南側中間のP4・P6を除いて，土層断面にうかがえる。北側中間のP2がやや不明瞭であるが，３・




SB－033　P3
1．明褐色土　ローム微粒，ブロック主体，黒色土粒少混
2．暗褐色土　黒色土，ローム微粒，ブロック多混
3．黒褐色土　黒色土，ローム微粒多混
4．暗褐色土　ローム微粒，ブロック主体，黒色土粒少混

SB－033　P4
1．黒褐色土　ローム微粒，ブロック少混，しまり弱
2．暗褐色土　黒色土，ローム微粒，ブロック多混
3．黒褐色土　黒色土，ローム微粒，ブロック少混

SB－033　P5
1．暗褐色土　ローム微粒，ブロック多混
2．暗褐色土　黒色土粒，ローム粒混
3．黒褐色土　ローム微粒，ブロック少混，しまり弱

SB－033　P6
1．明褐色土　ローム微粒，ブロックやや多混，
　黒色土粒少混
2．暗褐色土　ローム微粒少混
3．黒褐色土　ローム微粒，ブロック少混，しまり弱
4．暗褐色土　ローム微粒，ローム小粒多混
5．明褐色土　ローム微粒，ブロック主体，
　黒色土粒少混

SB－033　P8
1　暗褐色土　ローム微粒，ロームブロック混
2．黄褐色土　ローム微粒，ロームブロック主体，
　暗褐色土粒少混
3．暗褐色土　ローム微粒，ロームブロックやや多混，
　黒色土粒やや多混

SB－033　P9
1．黒褐色土　ローム微粒少混
2．黄褐色土　ローム微粒混
3．明褐色土　ローム微粒主体，黒色土粒少混

SB－033　P10
1．黒褐色土　ローム微粒少混，しまりやや弱
2．明褐色土　ローム微粒，ロームブロック主体，
　暗褐色土粒少混

SB－033　C－C′
1．黒褐色土　ローム微粒少混，しまり弱
2．黒褐色土　ローム微粒やや多混，1に似る
3．暗褐色土　黒色土，ローム微粒，ブロック多混
4．明褐色土　ローム微粒，ブロック主体，
　黒色土微粒少混
5．暗褐色土　黒色土，ローム微粒，ブロック多混

SB－033　D－D′
1．黒色土　ローム微粒少混
2．明褐色土　ローム微粒，黒色土粒少混

SB－033　E－E′
1．暗褐色土　ローム微粒，ブロックやや多混，
　黒色土粒少混
2．明褐色土　ローム微粒，ブロック主体，黒土粒，
　暗褐色土粒少混

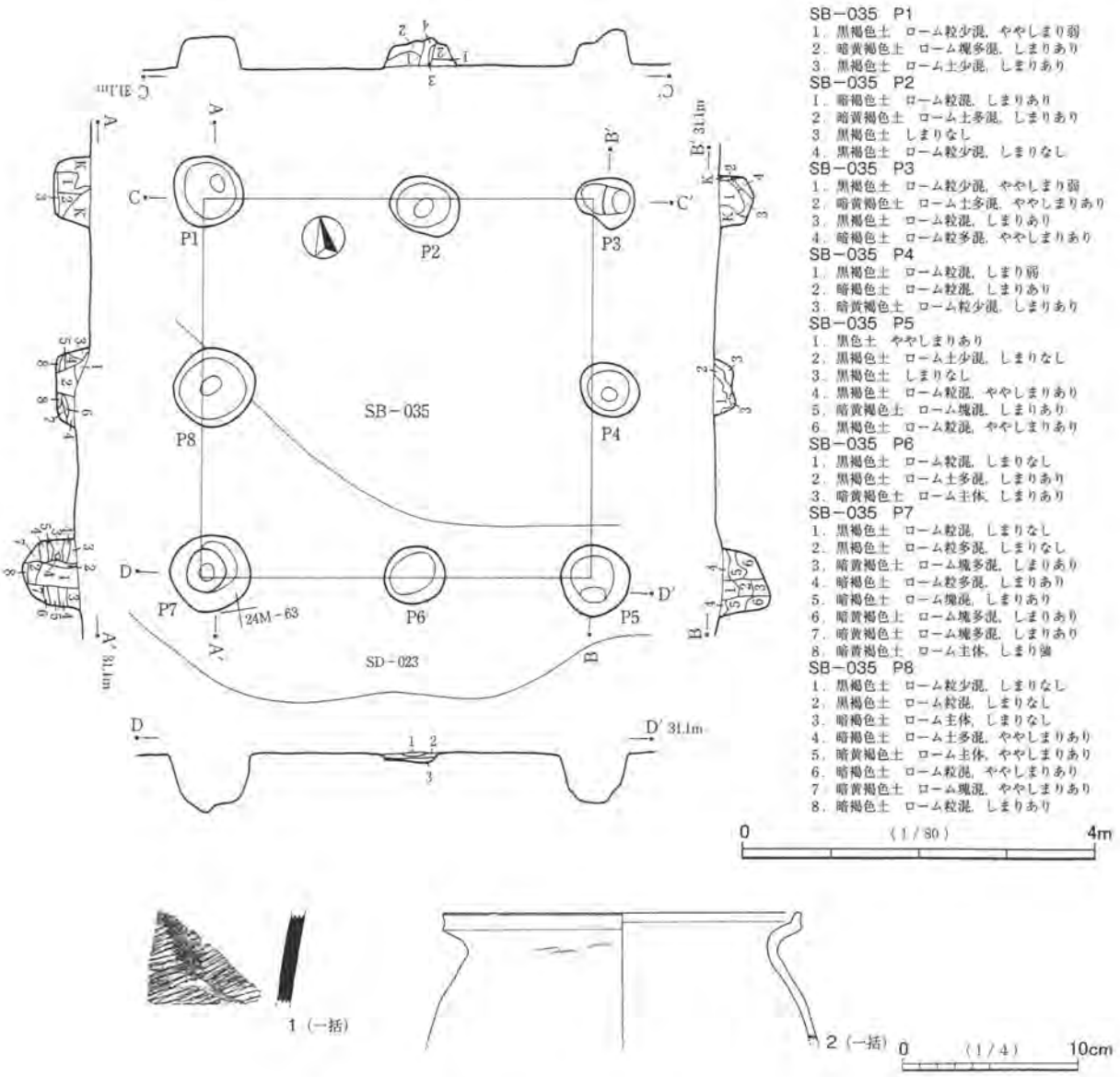
SB－034　P1
1．暗褐色土　ローム粒混，しまりあり
2．黒褐色土　ローム粒混，しまりなし
3．暗黄褐色土　ローム塊混，しまりあり
4．黒褐色土　ローム粒多混，しまりあり
5．暗褐色土　ローム粒少混，しまりあり
6．暗黄褐色土　ローム土多混，しまり強
7．黒褐色土　ローム粒混，ややしまりあり

SB－034　C－C′
1．暗褐色土　ローム粒少混，ややしまりあり
2．黒褐色土　ローム粒少混，ややしまり弱
3．暗黄褐色土　ローム塊多混，しまりあり
4．黒褐色土　ローム土混，しまりあり
5．暗黄褐色土　ローム土主体，しまりあり
6．暗褐色土　ローム粒混，しまりあり

0　(1/80)　4m

第300図　SB－033・034

4層が相当すると思われる。柱間寸法は，東西では2.1m～2.45m，南北でも2.1m～2.25mで，近似した数値である。北側西の間が他よりもやや長いが，柱穴規模がやや大きいため，実際の柱間寸法はより差が少ない可能性がある。柱筋の通りはやや出入りがあるが，それほど悪くはない。柱掘りかたは円形を基調とし，径は58cm～92cmである。確認面からの深さは20cm～75cmである。平均の深さは，全体で43cm，四隅で57cm，中間で30cmである。四隅と中間で差があり，特に南両隅と中間柱穴の差が顕著である。柱痕部分と思われる土層はしまりの弱い黒褐色土である。ローム粒の含有は概して少ないが，南西隅柱穴(P7)の下層はロー



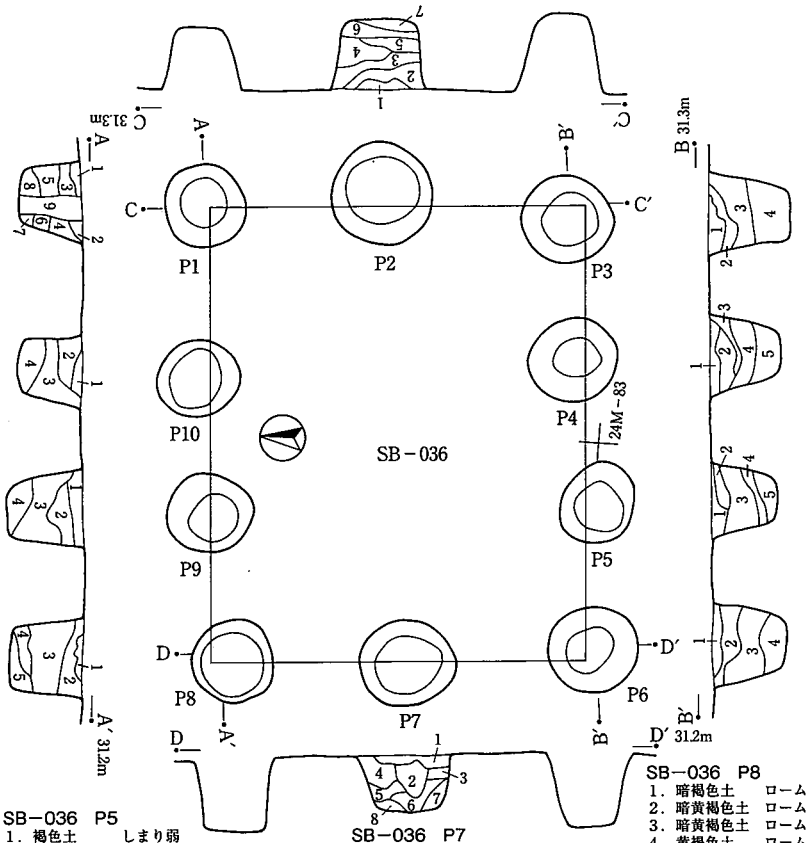

第301図　SB－035

ム粒を多く含む。周囲の埋土は細かく分けられるが，しまりがあってローム粒・ロームブロックを多く含む土層が多い。深いP7では下層にロームブロックを多く含む。

出土遺物は少量である。図示できた遺物は２点である。１は新治窯産の須恵器甕または甑の胴部片である。２は常総型の土師器甕である。口縁部周辺の一部の破片である。１・２とも，どの柱穴から出土したか不明である。

### SB－036（第302図，図版98）

調査区南部の24M－73グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱東西棟建物で，規模は桁行4.8m×梁行3.9mである。棟方向はN－86°－E，面積は19.7㎡である。柱痕の土層は北東隅柱穴（P1）で明瞭であり，またやや不明瞭であるが西妻柱中間柱穴（P7）の２層もその可能性がある。そのほかは不明である。柱間寸法は，桁行では1.5m～1.9m，梁行では1.85m～2.0mである。北桁行東の間がやや長いが，南桁行はほぼ等間と思われ，実際の柱間は等間に近いかもしれない。梁行の柱間は差が少ない。柱穴だけをみた柱筋の通りはやや悪いが，実際の柱位置はもう少し整っていることも考えられる。柱掘りか

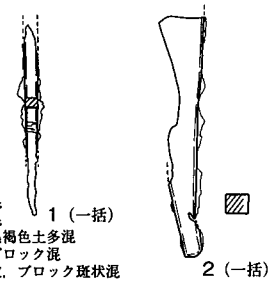



SB－036　P1
1．暗褐色土　ロームブロック混，しまり弱
2．暗褐色土　ローム粒，ブロック混，しまり弱
3．暗褐色土　2に似る，ロームブロック混，しまりあり
4．暗褐色土　ロームブロック微混，しまり弱
5．暗褐色土　ロームブロック微混，しまり弱
6．暗褐色土　ローム粒微混，しまり弱
7．暗褐色土　ロームブロック微混，しまり弱
8．暗褐色土　ローム粒，ブロック混，しまり弱
9．暗褐色土　ローム粒微混

SB－036　P2
1．暗褐色土　ロームブロック微混，しまりあり
2．暗褐色土　ブロック多混，ローム粒混，しまりあり
3．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック多混，しまりあり
4．黄褐色土　ローム粒，ブロック主体，暗褐色土混，しまり弱
5．黄褐色土　ローム粒，ブロック主体，しまりあり
6．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック主体，暗褐色土微混
7．黒黄褐色土　ローム粒，ブロック微混，しまり弱

SB－036　P3
1．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック多混，しまり弱
2．暗褐色土　ローム粒微混，しまりあり
3．暗褐色土　ローム粒，ブロック多混，しまりあり
4．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック3より多混，しまりあり

SB－036　P4
1．暗褐色土　しまりあり
2．暗褐色土　ローム粒，ブロック多混　しまりややあり
3．暗黄褐色土　2に似る，ローム粒，ブロック多混
4．暗黄褐色土　暗褐色土，ローム粒，ブロック混
5．暗褐色土　ローム粒，ブロック微混




0　（1/2）　5cm

SB－036　P5
1．褐色土　しまり弱
2．暗褐色土　ロームブロック混　しまりあり
3．暗褐色土　ロームブロック微混
4．暗黄褐色土　ローム，ブロック主体
5．黒褐色土　ローム粒微混

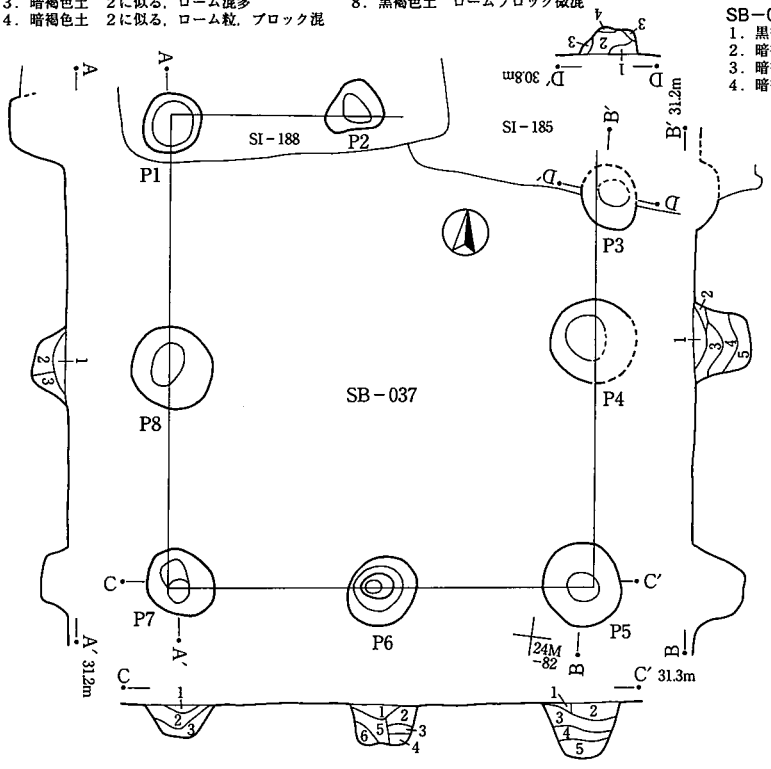
SB－036　P6
1．褐色土　しまりあり
2．暗褐色土　ローム粒，ブロック混　しまりあり
3．暗褐色土　2に似る，ローム混多
4．暗褐色土　2に似る，ローム粒，ブロック混

SB－036　P7
1．暗褐色土　ローム粒微混
2．褐色土　ロームブロック微混
3．黄褐色土　ローム主体
4．暗褐色土　ローム粒，ブロック多混
5．黄褐色土　ローム粒主体
6．黄褐色土　ローム主体，褐色土微混
7．黄褐色土　ローム主体
8．黒褐色土　ロームブロック微混

SB－036　P8
1．暗褐色土　ロームブロック微混
2．暗黄褐色土　ロームブロック多混
3．暗黄褐色土　ロームブロック，黒褐色土多混
4．黄褐色土　ローム主体，粒，ブロック混
5．暗褐色土　黒褐色土，ローム粒，ブロック斑状混

SB－036　P9
1．褐色土　ロームブロック微混
2．暗黄褐色土　ロームブロック微混
3．暗黄褐色土　ローム粒，暗褐色土混，ロームブロック混
4．暗黄褐色土　ローム主体，暗褐色土微混

SB－036　P10
1．黒褐色土　しまりあり
2．暗褐色土　ローム粒微混，しまり弱
3．暗褐色土　ロームブロック微混，しまり弱
4．暗褐色土　3に似る，ロームブロック大，しまり弱




SB－037　P4
1．暗褐色土　ロームブロック微混，しまり弱
2．暗黄褐色土　ローム粒，褐色土混，しまりあり
3．暗褐色土　ロームブロック微混，しまり弱
4．暗褐色土　ロームブロックやや多混，しまり弱
5．暗褐色土　ロームブロック少混

SB－037　P5
1．暗褐色土
2．暗褐色土　ローム粒，ブロック微混
3．暗褐色土　ローム粒，ブロック多混，しまり弱
4．暗褐色土　黒色土混，ローム粒，ブロック微混
5．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック多混，しまりあり

SB－037　P6
1．暗褐色土　ローム粒微混，しまり弱
2．暗褐色土　ローム粒，ブロック微混，しまりややあり
3．暗褐色土　ローム粒，ブロック微混，しまりややあり
4．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック，褐色土混，しまりややあり
5．暗褐色土　ローム粒微混，しまり弱
6．暗褐色土　ローム粒，ブロック多混，しまりあり

SB－037　P7
1．暗褐色土
2．暗褐色土　ローム粒，焼土粒微混
3．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック多混，しまりあり

SB－037　P8
1．暗褐色土　しまり弱
2．暗褐色土　ローム粒斑状混，しまり弱
3．暗褐色土　ローム粒，ブロック微混，しまりややあり

SB－037　D－D′
1．黒褐色土　ローム粒少混　しまり弱
2．黒褐色土　ロームブロック，砂粒，炭化粒多混，ややしまりあり
3．暗黄褐色土　ローム主体，黒色土混，ややしまりあり
4．黒褐色土　ローム粒微混，しまり強

0　（1/80）　4m

第302図　SB－036・037

たは円形を基調とし，径は75cm～1.1mである。確認面からの深さは60cm～85cmである。平均の深さは，全体で74cm，四隅で77cm，中間で73cmである。差はあまり大きくないが，四隅が中間よりもやや深く，特に南辺と西辺は明らかな差がある。両桁行の中間柱穴は平面規模の平均でも，わずかに小さいといえる。柱痕部分の土層はローム粒をわずかに含む暗褐色土である。周囲の埋土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土である。P1はあまりロームの含有が多くないが，他の柱穴でロームを多く含む土層もみられる。

出土遺物はやや少量である。図示できた遺物は棒状の鉄製品２点である。やや不明瞭であるが，１は鉄鏃の茎等木質の柄をもつもの，または釘が考えられ，２は釘の可能性が高いと思われる。１は非常に細身である。図の下端はそこで終わっている図としたが，錆の影響が大きいため，下方に続くことも考えられる。木目を横方向にとる木質が若干付着している。紡錘車の紡軸に遺存する繊維痕とは質感がやや異なると思われる。２はやや厚みのある製品である。やや判然としないが，先端が遺存すると思われる。また上部は頭部近くで欠損していると思われる。１はP6内，２はP1内から出土したが，ともに柱穴内での位置・高さが不明である。

SB－037（第302図，図版98）

調査区南部の24M－71グリッドを中心に位置する。桁行２間×梁行２間の側柱南北棟建物で，規模は桁行5.0m×梁行4.45mである。棟方向はN－6°－W，面積は推定23.4㎡である。北側でSI－185・SI－188と重複し，その影響で北東隅柱穴が不明瞭である。P3としたものがその一部に相当する可能性があるが，東桁行の中間柱穴（P4）にかなり寄っており，断定しがたい。実際の柱位置はSI－185のなかに入っていたものと思われる。本遺構と両竪穴住居との新旧関係は不明である。柱痕は多くが不明瞭であるが，南妻柱中間柱穴（P6）の５層が柱痕をとどめるように思われる。柱間寸法は，桁行では2.4m～2.6m，梁行では2.0m～2.2mである。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は64cm～86cmである。確認面からの深さは34cm～60cmである。北東隅柱穴を除く平均の深さは，全体で50cm，隅柱穴で51cm，中間で49cmである。平均の深さはほとんど差がないが，個々にみると，隅柱穴では北西のP1と南東のP5が深く，南西のP7が浅い。また中間の柱穴では，西側のP8と南側のP6は浅いが，東側のP4と北側のP2は深くなっているなど，若干の違いがある。P2が深いのはSI－188と重複する影響かもしれない。柱痕部分と思われるP6の５層はローム粒をわずかに含む暗褐色土で，しまりは弱い。周囲の埋土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・暗黄褐色土で，下層にロームが多い。なお他の柱穴では，中・下層にロームの含有の少ないものもある。出土遺物は少量である。図示できた遺物はない。

SB－038（第303図，図版98）

調査区南部の24M－51グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の東西棟建物で，規模は桁行4.8m×梁行4.55mである。内側に束柱の柱穴が１箇所あるが（P9），もう１箇所の柱穴が検出されないため，総柱となるか不明である。総柱の可能性はあるが側柱建物としておく。棟方向はN－88°－E，面積は推定23.0㎡である。南側でSI－185と重複するため，南桁行中間柱穴は失われ，南東隅柱穴（P3）の一部も欠損している。南西隅でもSI－188と重複するが，柱穴（P4）は検出された。また西側でもSI－187と接する程度に重複している。さらに北側でSB－039と重複するが，柱穴の切り合いはない。本遺構はSI－188のカマドを切っているのでSI－188よりも新しいが，他の重複遺構との新旧関係は不明である。柱痕と思われる土層がP9でみられるが，本遺構の柱穴が概して浅いこともあって，そのほかは不明瞭である。柱間寸法は，桁行では1.6m～1.7m，梁行では2.2m～2.4mである。柱筋の通りは一部に悪いところもあるが，

おおむねよい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は60cm～85cmである。確認面からの深さは，不明瞭な南東隅柱穴を除いて30cm～56cmである。平均の深さは，全体で35cm，四隅で39cm，中間・束柱の柱穴で33cmである。南西隅柱穴（P4）が特に深いが，それは切られるSI－188堆積土の地盤が軟弱なためであろう。その他の柱穴は，隅も中間もあまり差がない。柱痕と思われるP9の１層は少量のローム粒を含む暗褐色土である。周囲の埋土は暗褐色土･暗黄褐色土で，上層はローム粒を，下層はロームブロックを多く含む。

出土遺物はやや少量である。図示できた遺物はロクロ土師器杯１点である。胎土に黒雲母末を含む。底部内面に１条の火襷痕がみられる。須恵器的な痕跡の可能性があるが，その他の質感は土師器的である。P3内から出土したが，P3内での位置・高さは不明である。

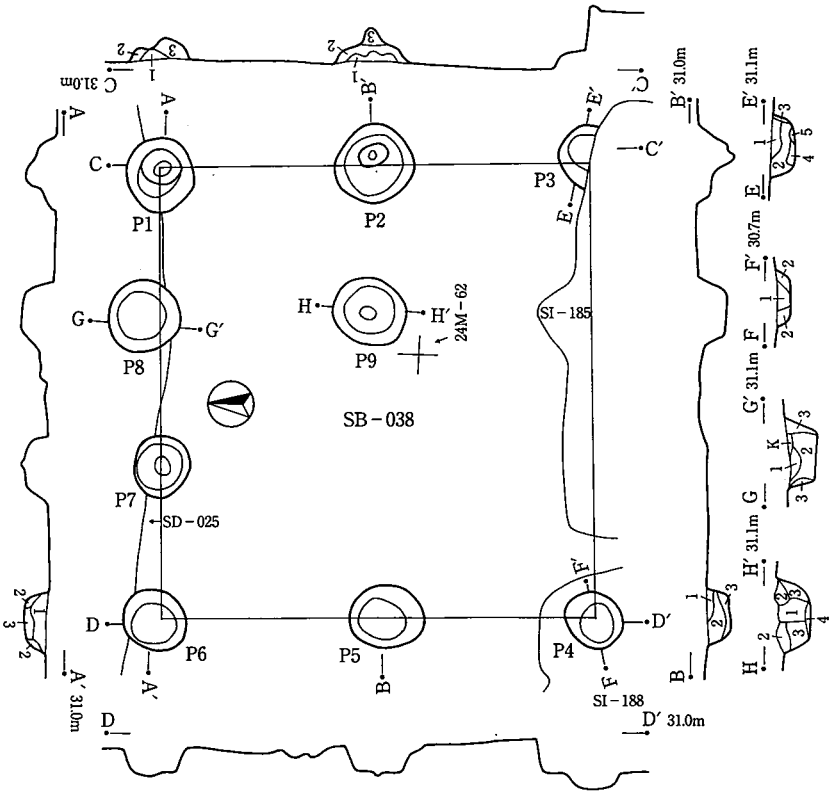
SB－039（第303図，図版98）

調査区南部の24M－52グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱東西棟建物で，規模は桁行5.65m×梁行4.0m～4.1mである。棟方向はN－85°－E，面積は23.9㎡である。SD－023と大きく重複している。SD－023が浅いため完全に失われた柱穴はないが，東妻柱中間柱穴（P4）の遺存が少ない。また上部を損なう柱穴がいくつかある。北桁行西第２柱穴はSK－248と重複する影響で検出されなかった。さらに南側でSB－038と重複するが，柱穴の切り合いはない。本遺構はSD－023・SK－248に切られていると思われるが，SB－038との新旧関係は不明である。柱痕は土層断面にみられるものがあり，北西隅柱穴（P7）が比較的明瞭である。南東隅柱穴（P2）・南桁行東第２柱穴（P3）はやや不明瞭であるが，柱痕と思われる土層がある。そのほかは不明である。柱間寸法は，桁行では1.7m～2.0m，梁行では1.7m～2.4mである。柱筋の通りは一部に悪いところもあるが，おおむねよい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は66cm～86cmである。確認面からの深さは12cm～62cmである。桁行中間柱穴は概して隅柱穴よりも浅く，両妻の中間柱穴はさらに浅い。平均の深さは，全体で38cm，四隅で50cm，中間で29cmである。さらに中間柱穴を桁と梁に分けると，桁行では35cm，梁行では19cmである。柱痕がよく遺存するP7の１・２層はローム粒を含む黒褐色土である。周囲の埋土は暗褐色土・暗黄褐色土で，中層にローム粒を多く含む。P2は全体にロームの包含が多く，柱痕と思われる部分にもロームが混入するなど，柱穴によって若干の違いがある。

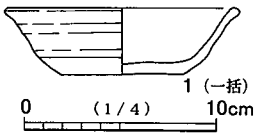
出土遺物はやや少量である。図示できた遺物は千葉産の須恵器杯１点である。遺存は少ない。色調に褐色の部分があるが，内面で黒ずむ部分が大きいことと，ざらつく質感から須恵器でよいと思われる。P1内から出土したが，P1内での位置・高さは不明である。

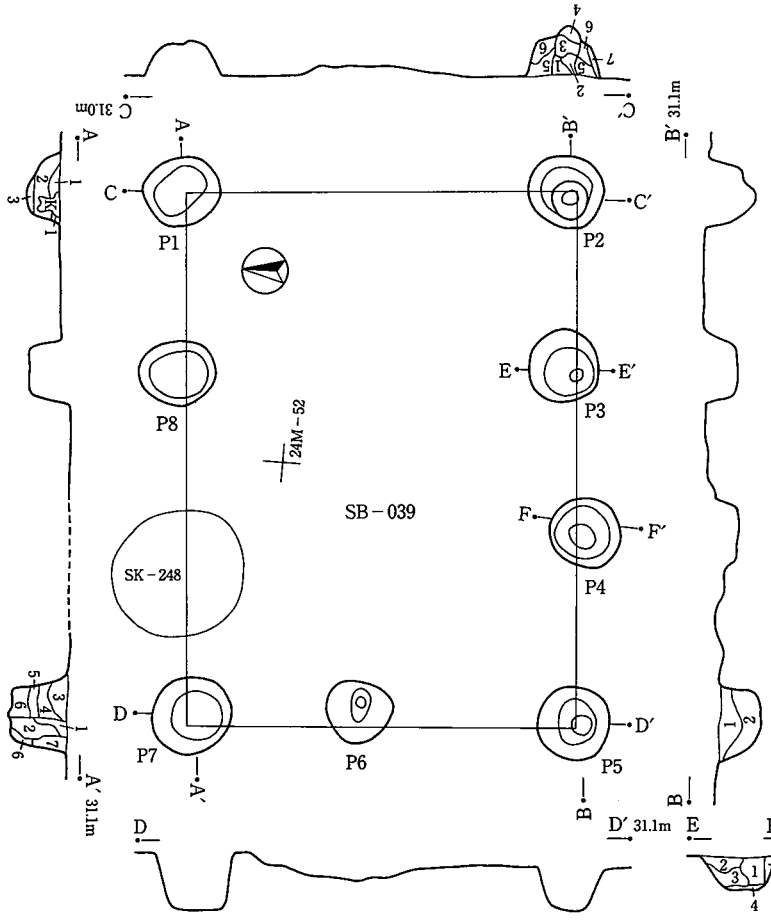
SB－040（第304図，図版98）

調査区南部の24L－93グリッドを中心に位置する。掘立柱建物を構成する柱穴群と思われるが，柱配置が不明瞭である。遺存がよいのは北辺と西辺であり，北辺は２間，西辺は２間か３間である。しかし，西辺柱筋上の最も南に位置する小穴（P8）は，他の柱穴と比べて径が小さく浅いため，隅柱穴の可能性は低いと思われる。東辺･南辺は中間柱穴が検出されなかったか，柱筋上に位置しない。このような状態で，かなり不明瞭であるが，桁行２間×梁行２間の可能性がある側柱南北棟建物としておきたい。南側中央にある小穴（P7）も２間×２間の建物の柱穴ではないと考える。推定要素が強いが，規模は桁行3.45m×梁行3.3m，面積は11.4㎡である。棟方向はN－14°－Eである。北東隅柱穴（P3）がSI－172と重複するが，新旧関係は不明である。またP3は，２間×２間の建物ではない柱穴または撹乱坑と重複している。柱痕は不明瞭であるが，北西隅柱穴（P1）の４層にその可能性があると思われる。柱間寸法は，桁行では1.6

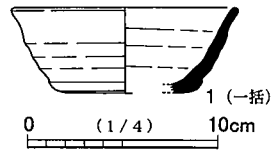


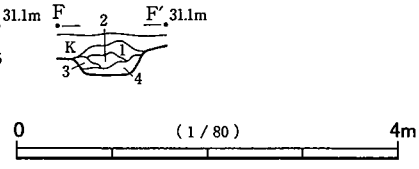

SB－038　P1
1．暗褐色土　ローム粒混，しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム土多混，ややしまりあり
3．暗黄褐色土　ローム土多混，しまりなし
SB－038　P2
1．黒褐色土　ローム粒多混，しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム土多混，ややしまりあり
3．暗黄褐色土　ローム粒，砂粒混，しまりあり
SB－038　P5
1．暗黄褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり
2．暗褐色土　ローム粒多混，しまりあり
3．黒褐色土　ローム粒混，しまりあり
SB－038　P6
1．黒褐色土　ローム粒混，ややしまり弱
2．暗黄色土　ローム塊混，ややしまりあり
3．黒褐色土　しまり弱
SB－038　E－E′
1．暗褐色土　ローム粒，砂粒混，しまりなし
2．暗褐色砂質土　ローム粒，焼土粒混，しまりあり
3．暗黄褐色土　ローム主体，しまりあり
4．暗黄褐色土　ローム粒，砂粒混，しまりあり
5．ローム
SB－038　F－F′
1．黒褐色土　ローム粒混，ややしまり弱
2．暗黄褐色土　ローム塊，焼土塊混，しまりあり
SB－038　G－G′
1．暗褐色土　ローム粒混，しまりなし
2．黒褐色土　ローム塊多混，しまりなし
3．暗褐色土　ローム粒多混，しまりなし
SB－038　H－H′
1．暗褐色土　ローム粒少混，ややしまりあり
2．暗褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり
3．暗黄褐色土　ローム塊多混，しまりあり
4．黒褐色土　しまりあり



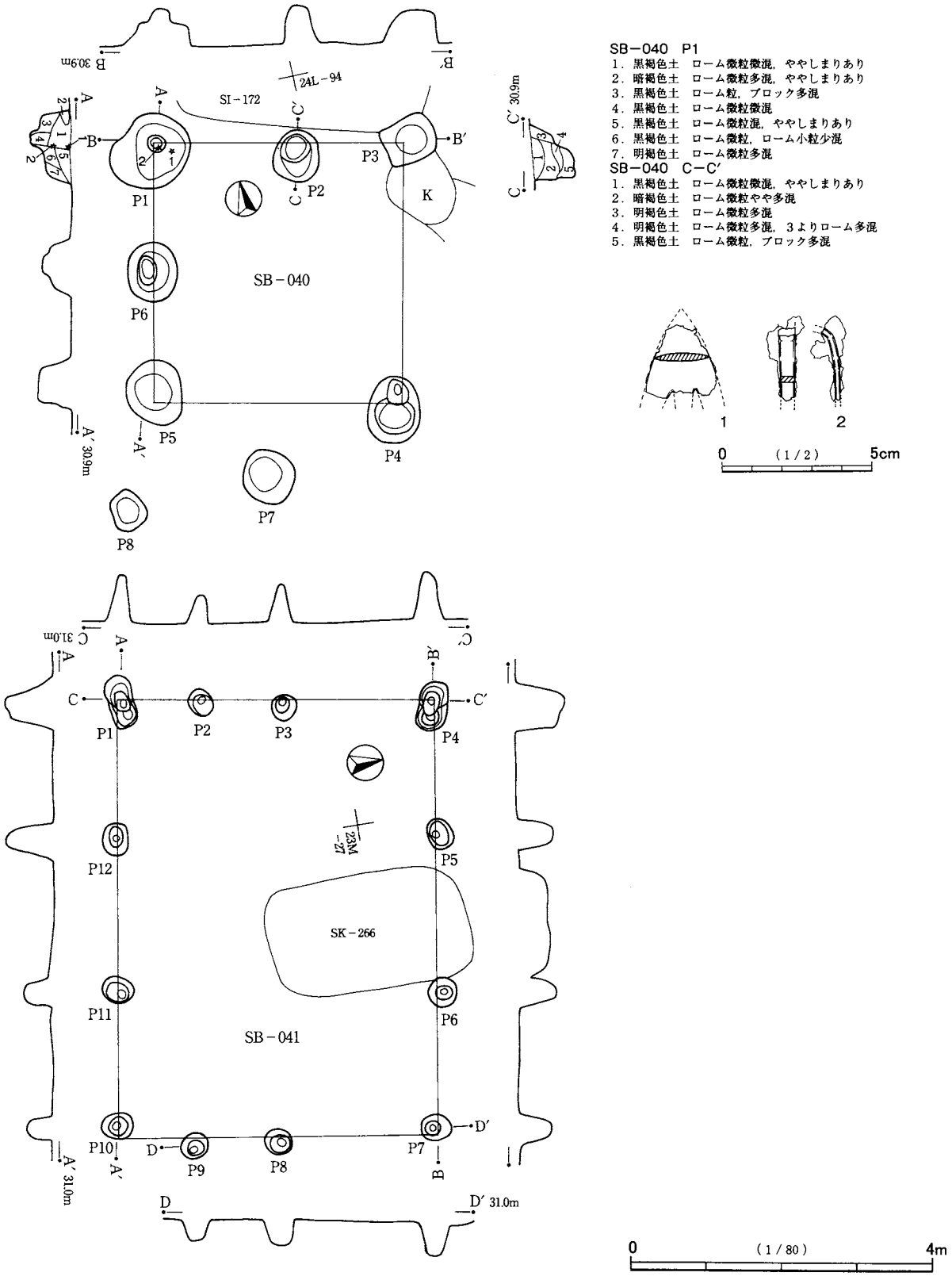




SB－039　P1
1．暗褐色土　ローム粒多混，しまりあり
2．暗褐色土　ローム粒，焼土粒混，しまりあり
3．暗褐色土　ローム粒少混，しまりあり
SB－039　P2
1．暗褐色土　ローム塊多混，ややしまりあり
2．暗褐色土　ローム塊少混，ややしまりあり
3．黒褐色土　ローム粒，焼土粒混，しまりなし
4．黒褐色土　ローム塊多混，しまりなし
5．暗黄褐色土　ローム塊大多混，ややしまりあり
6．暗黄褐色土　ローム塊多混，しまりあり
7．黒褐色土　ローム主体，しまりあり
SB－039　P5
1．黒褐色土　ローム粒少混，しまりなし
2．黒褐色土　ローム粒多混，ややしまり弱
SB－039　P7
1．黒褐色土　ローム粒混，ややしまり弱
2．黒褐色土　しまりなし
3．暗褐色土　ローム粒混，しまりあり
4．黒褐色土　ローム塊混，しまりあり
5．暗褐色土　ローム粒多混，しまりあり
6．黒褐色土　ローム粒混，ややしまりあり
7．暗褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり
SB－039　E－E′
1．暗褐色土　ローム粒混，しまりなし
2．暗褐色土　ローム粒多混，しまりなし
3．暗黄褐色土　ローム塊多混，しまりあり
4．暗黄褐色土　ローム塊混，しまり強
5．暗黄褐色土　ローム塊混，ややしまりあり
SB－039　F－F′
1．暗褐色土　ローム粒混，しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム粒大多混，ややしまりあり
3．黒褐色土　ローム粒，しまりなし
4．黒褐色土　ローム塊多混，しまりなし




第303図　SB－038・039




第304図　SB－040・041

m～1.7m，梁行では1.55m～1.85mである。柱掘りかたは円形を基調とし，径は60cm～1.1mである。北西隅柱穴（P1）の径が大きいが，他の柱穴の状況を合わせてみると，本遺構は建て替えまたは柱が抜き取られたことが考えられる。中間柱穴は隅柱穴よりもやや径が小さい。確認面からの深さはP7・P8を除いて，

38cm～65cmである。平均の深さは，全体で51cm，四隅で52cm，中間で47cmである。北梁行の中間柱穴(P2)は隅柱穴と同程度の深さであるが，西桁行の中間柱穴(P6)は浅い。柱痕と思われるＰ１の４層は少量のローム粒を含む黒褐色土である。周囲の土層は一部にローム粒をやや多く含むが，全体的にはロームの含有量が少ない。しかしP2は中・下層にロームが多い。

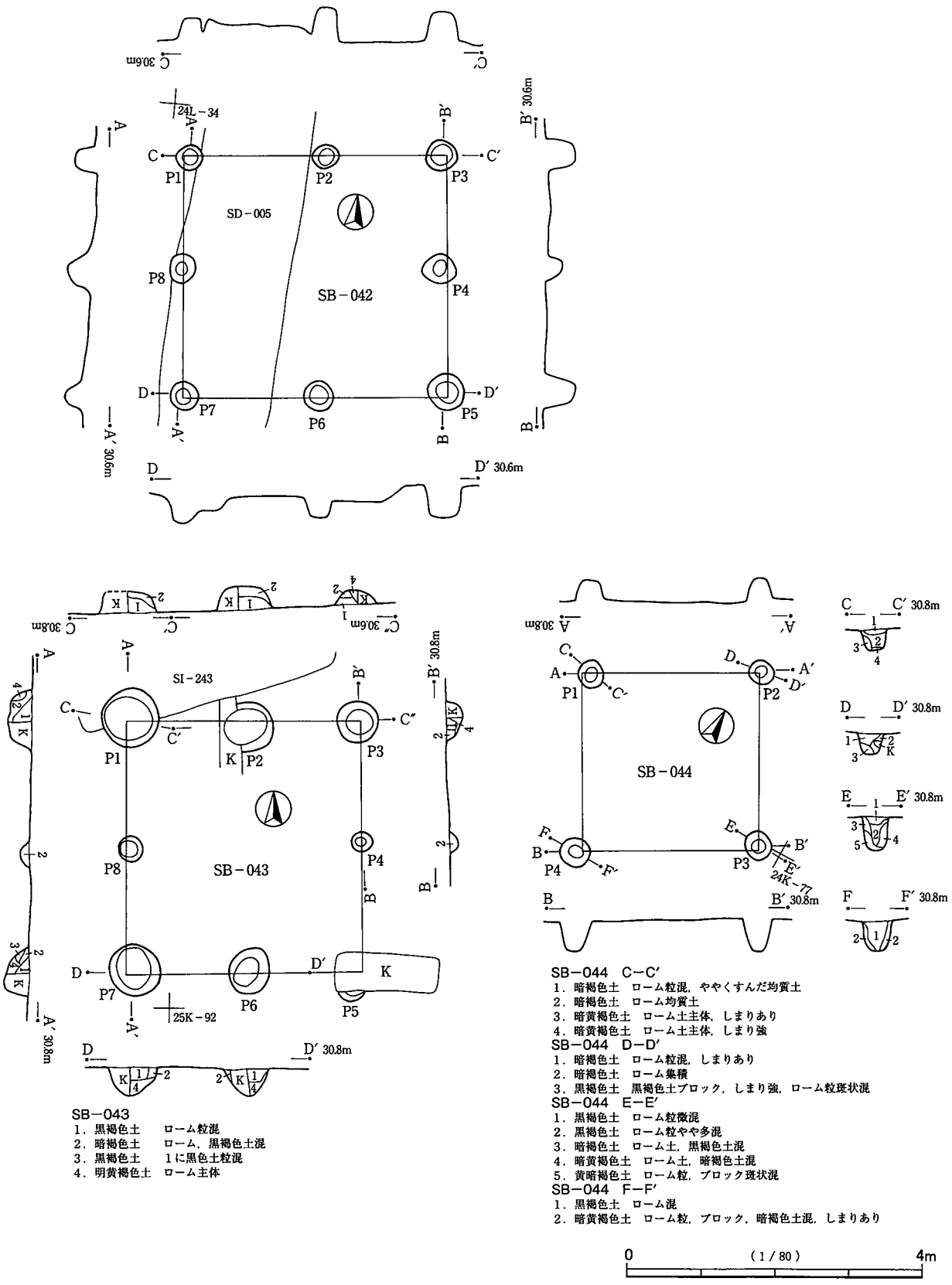
出土遺物はやや少量である。図示できた遺物は，鉄製品２点である。１は鉄鏃で，鏃身の破片である。長三角形式で，長い逆刺をもつと思われるが，逆刺は遺存しない。切先も欠損する。棒状部も鏃身との境で欠損していると思われる。２は棒状品の破片である。上部，下部とも遺存しない。鉄鏃の茎，紡錘車の紡軸，釘等が考えられる。図の上側でやや曲がっているが，釘の頭部に近い部分の可能性がある。しかし本来的なものか疑問があり，いずれにも特定し難い。２はP1柱痕部分の中層から出土した。１も２近くからの出土であるが，層位は上層である。

SB－041（第304図，図版98）

調査区南部の23M－27グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行３間の側柱東西棟建物で，規模は桁行5.85m×梁行4.2m～4.3mである。棟方向はＮ－81°－Ｗ，面積は25.5㎡である。北側中央でSK－266，南側中央でSD－026と重複し，一部の柱穴の上部に影響があるが，欠失するものはない。両者と本遺構との新旧関係は判然としないが，本遺構の方が古いと思われる。柱穴の規模が小さいため，柱穴の位置がほぼ柱の位置である。柱間寸法は，桁行では1.8m～2.1m，梁行では1.0m～2.0mである。梁行の柱間は長短あり，長い方の北側１間が短い方の南側２間分と同じ長さである。すなわち北側の１間を基準にすると，梁行の柱間は２間分であり，南側１間分が半分に分割されていることになる。棟は東西の中央に位置するP3・P8上にあり，その南側中間柱穴のP2・P9は出入口等，何らかの細かい造作のために必要な柱穴と考えられる。あるいは柱が細いために強度上で必要であるのかもしれない。桁行はなかの間が2.1m，東西両端の間が1.8mであり，なかの間が１尺分長い。柱筋の通りは東妻柱がやや悪いが，他の３辺は比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は32cm～70cmである。西両隅柱穴の長径が長いが，柱の抜き取りまたは建て替えに伴うものと思われる。これらを除けば，柱穴径は35cm～40cm程度である。確認面からの深さは26cm～64cmである。平均の深さは，全体で42cm，隅柱穴で51cm，中間で43cmであり，中間が隅よりも浅い。なお梁行南側のP2・P9は中央のP3・P8よりも浅く，中間柱穴のなかでも差がある。P3・P8の平均は42cm，P2・P9の平均は33cmである。桁行中間の平均は49cmであり，隅との差が少ない。柱穴は一部を除けば径のわりに比較的深いものである。堆積土は少量のローム粒を含む黒褐色土１層である。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－042（第305図，図版98）

調査区中央やや西寄りの24L－34グリッドに位置する。桁行２間×梁行２間の側柱東西棟建物で，規模は桁行3.6m×梁行3.3mである。棟方向はＮ－86°－Ｅ，面積は12.1㎡である。西側でSD－005と重複し，東側でも撹乱を受けている。SD－005と撹乱により，南東隅柱穴（P5）を除いて，上部に多少の欠損がみられる。SD－005との新旧関係は判然としないが，本遺構の方が古いと思われる。柱穴の規模が小さいため，柱穴の位置がほぼ柱の位置である。柱間寸法は，桁行では1.6m～1.85m，梁行では1.5m～1.75mである。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形で，径は32cm～50cmである。確認面からの深さは26cm～53cmである。平均の深さは，全体で44cm，隅では45cm，中間では43cmである。隅と中間との差は平均値では少ない。しかし個々にみると，東側中央は浅く，南側中央もやや浅い。逆に北側中央はやや深い。堆積土の




第305図　SB－042・043・044

様相は不明である。出土遺物は少量である。図示できた遺物はない。

SB－043（第305図，図版98）

調査区東部やや南寄りの25K－82グリッドを中心に位置する。桁行２間×梁行２間の側柱南北棟建物

で，規模は桁行3.4m～3.5m×梁行3.2mである。棟方向はN，面積は11.2㎡である。北西隅柱穴（P1）がSI－243の南辺を切っている。また撹乱に切られて，南東隅柱穴（P5）の大部分や南北妻柱中間柱穴（P2・P6）の一部を欠損している。柱痕は不明である。柱間寸法は，桁行では1.65m～1.8m，梁行では1.6mである。柱穴の規模に大きいものが多いため，実際の柱位置は端になる可能性もあるが，柱筋の通りは比較的よいと思われる。柱掘りかたは円形を基調とし，径は28cm～80cmである。東西両桁行の中間柱穴（P4・P8）は，径が30cm強程度と小さく，深さもともに12cmで，浅い柱穴である。これらを除いた柱穴径の短径は52cmである。P4・P8を除く柱穴の確認面からの深さは18cm～40cmである。平均の深さは，全体で27cm，隅では31cmである。中間では24cmであるが，南北のP2・P6の平均は36cmで，西側両隅と同程度である。堆積土は下層にローム粒を多く含む。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－044（第305図，図版99）

調査区中央の24K－66グリッドを中心に位置する。１間×１間の側柱建物である。ほぼ方形の柱配置であるため，桁行・梁行を区別することが難しい。建物の向きはN－28°－WまたはN－62°－Eで，東西南北から大きく振れている。規模は北西辺・南東辺（図の上下辺）が2.3m～2.5m×北東辺・南西辺（図の左右辺）が2.4mである。柱穴の中心間を結ぶと，わずかに歪んだ方形である。面積は5.95㎡である。柱穴は小規模であるが，P3・P4で柱痕と思われる土層がみられる。柱間寸法は，１間×１間のため規模と同じである。柱掘りかたはほぼ円形で，径は30cm～40cmである。確認面からの深さは30cm～44cmで，平均値は37cmである。北西側（P1・P2）がやや浅く，南東側（P3・P4）がやや深い。柱痕と思われる土層はローム粒を含む黒褐色土である。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

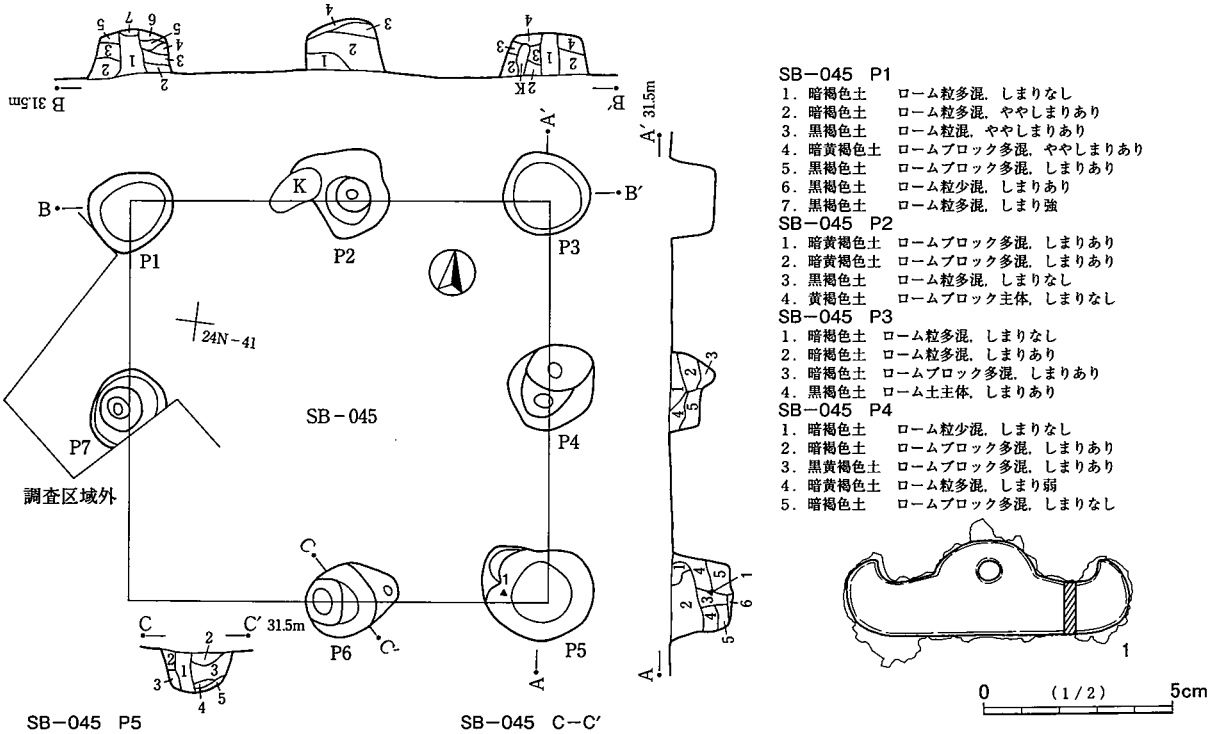
SB－045（第306図，図版99）

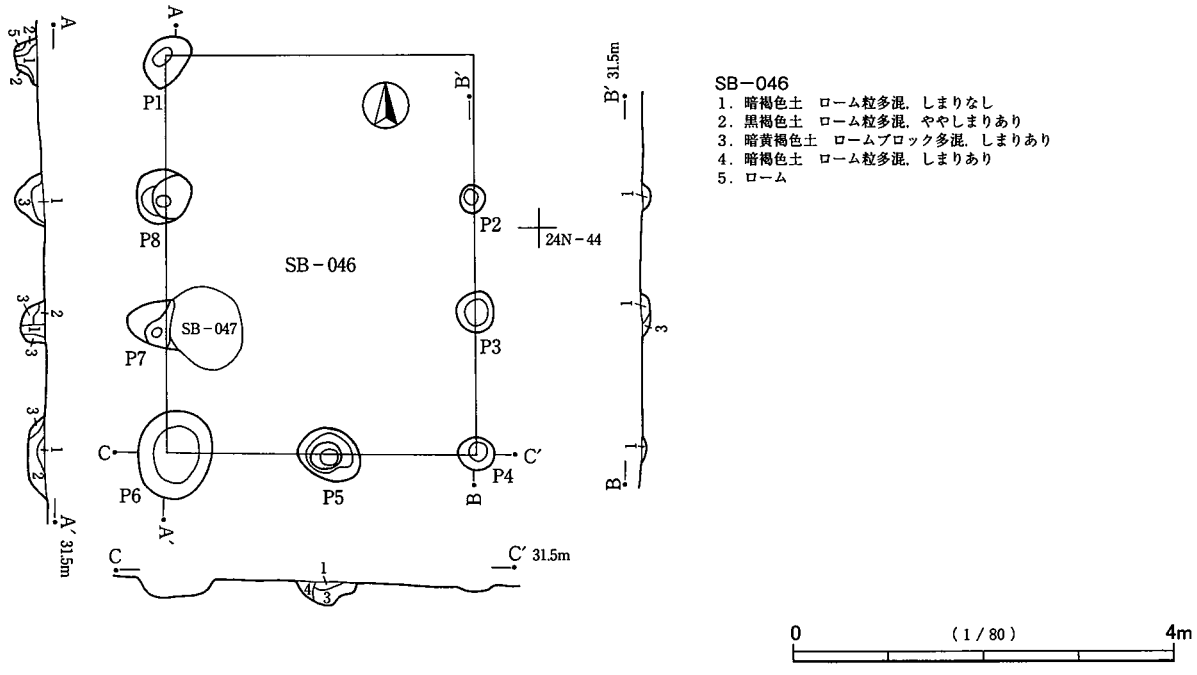
調査区南部の24N－41グリッドを中心に位置する。桁行２間×梁行２間の側柱東西棟建物である。南西隅柱穴は調査区外に位置する。方形の柱配置で，間数も同じであるため，桁行と梁行の区別が難しいが，やや長いと思われる東西方向を桁行とする。規模は桁行4.4m～4.5m×梁行4.2m～4.35mである。棟方向はN－82°－E，面積は19.15㎡である。周囲に小穴群があるが，本遺構と重複するものはない。周囲の小穴群のなかには掘立柱建物の柱穴もあると思われるが，組みとなる柱穴を見いだすことができない。本遺構の柱痕は土層断面にみられるものが多い。柱間寸法は，桁行では2.0m～2.35m，梁行では2.05m～2.15mである。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とし，径は74cm～1.22mである。確認面からの深さは44cm～66cmである。平均の深さは，全体で50cm，隅で53cm，中間で47cmである。北側・西側の中間柱穴は隅柱穴の深さと同程度であるが，東側・南側はやや浅い。柱痕部分の土層はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・黒褐色土で，しまりが弱い。周囲の埋土も概してロームを多く含むが，しまりがある。下層の色調に暗い傾向がある。

出土遺物は掘立柱建物としてはやや多いが，図示できた遺物は鉄製品１点である。完形の火打（燧）金で，かなり厚みがある。しかし錆による劣化が著しく，脆い状態となっている。中央の上部は半円形に高まり，その中央にやや大きい円孔が存在する。左右両端の上部もかなり高まっている。火打石をぶつける下縁側は直線的であるが，左右両端は丸みをもつ。P5の西寄り下層から出土した。

SB－046（第306図，図版99）

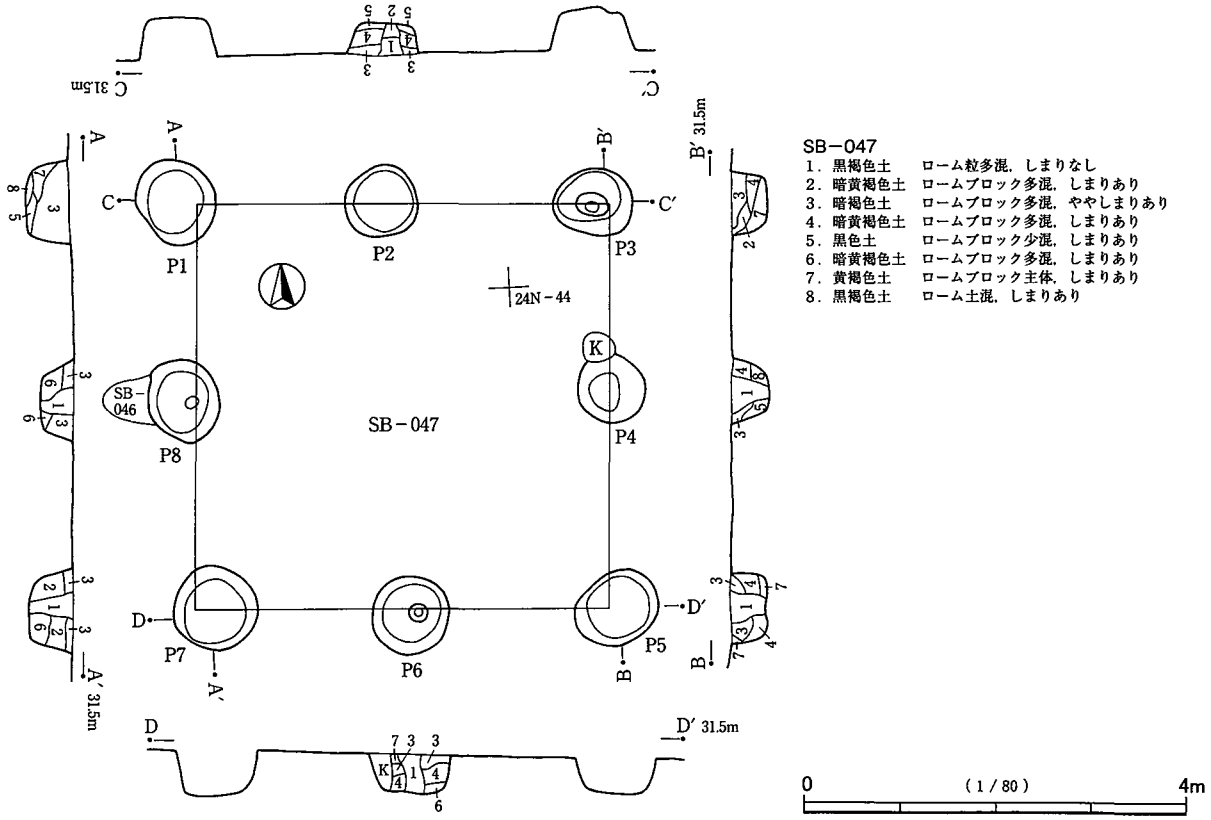
調査区南部の24N－43グリッドを中心に位置する。柱穴が浅いため遺存が悪く，北東隅柱穴と北妻柱中間柱穴は確認面の高さでは，失われたものと思われる。やや不明瞭であるが，桁行３間×梁行２間の側柱




第306図SB－045・046

南北棟建物と推定する。規模は桁行4.2m×梁行3.3mである。棟方向はN，面積は推定14.05㎡である。SB－047と大きく重複し，西桁行南第２柱穴（P7）の一部を損なっている。新旧関係は不明である。また周囲に小穴群があるが，本遺構と重複するものはない。柱痕はP7にみられ，北西隅柱穴（P1）の１層も可能性がある。そのほかは不明である。柱間寸法は，桁行では1.2m～1.7m，梁行では1.6mである。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とし，径はやや遺存のよい南西隅柱穴で80cm～92cmである。




第307図　SB－047

中間柱穴は遺存のよいもので径60cm～70cmであり，隅よりもやや規模が小さいと思われる。確認面からの深さは8cm～28cmである。底面の高さをみると，隅と中間に一定の差はなく，隅柱穴だけの比較でも，差がある。また東側がやや浅く，そのために遺存が悪くなっている。柱痕部分の土層はローム粒を多く含む暗褐色土で，しまりが弱い。周囲の埋土もローム粒・ロームブロックを多く含むが，ややしまりがある。出土遺物はない。

SB－047（第307図，図版99）

調査区南部の24N－43グリッドを中心に位置する。2間×2間の側柱建物で，規模は東西4.35m×南北4.3mである。ほとんど正方形の柱配置で，柱間の間数も同じであるため，どちらが桁行でどちらが梁行か区別が付かない。建物の向きがほぼ東西南北に添っているため，桁行・梁行の代わりに東西・南北の方位を使用して記述する。南北が桁行であれば棟方向はN－3°－E，東西が桁行であれば棟方向はN－87°－Wである。面積は18.75㎡である。SB－046・SB－048および小穴群と重複し，西側・南側・東側の中間柱穴（P8・P6・P4）の一部を損なっている。本遺構と他遺構との新旧関係は不明である。柱痕は土層断面にみられるものが多い。柱間寸法は，東西では2.1m～2.2m，南北でも2.0m～2.3mで，近似した数値である。隅柱穴中央間を結ぶと平行四辺形的な形態であるが，この場合でも中間柱穴の中央付近を通る。なお柱穴の規模が大きいため，実際の柱配置はより方形に近いかもしれない。柱掘りかたは円形を基調とし，径は68cm～90cmである。確認面からの深さは34cm～48cmである。平均の深さは，全体で41cm，四隅で45cm，中間で38cmである。中間柱穴の深さは，東側・南側ではその両隅と顕著な差がないが，西側・北側では，その両隅よりも浅い。柱痕部分はローム粒を多く含む黒褐色土で，ややしまりが弱い。周囲の埋土も概してローム粒・ロームブロックを多く含むが，しまりがある。なお一部の柱穴の下層はロームの含有が少ない

黒褐色土である。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－048A（第308図，図版99）

調査区南部の24N－44グリッドを中心に位置する。調査時にSB－048Aとされた遺構を２棟の掘立柱建物に分離した。調査時にSB－048Bとした遺構があるため，分離した遺構については整理段階でSB－048Cという遺構名を付けた。分離されたSB－048Aは２間×２間の側柱建物で，規模は東西4.1m×南北4.0mである。ほぼ方形の柱配置で，柱間の間数も同じであるため，どちらが桁行でどちらが梁行か区別が付かない。建物の向きがほぼ東西南北に添っているため，桁行・梁行の代わりに東西・南北の方位を使用して記述する。南北が桁行であれば棟方向はN－3°－W，東西が桁行であれば棟方向はN－87°－Eである。面積は16.4㎡である。SB－047・SB－048C・SK－315と重複し，検出された柱穴の半数が，一部を欠損している。他遺構との新旧関係は不明である。なお本遺構とSB－048Cは同規模の建物と思われ，わずかに位置をずらして建て替えたものと考えられる。

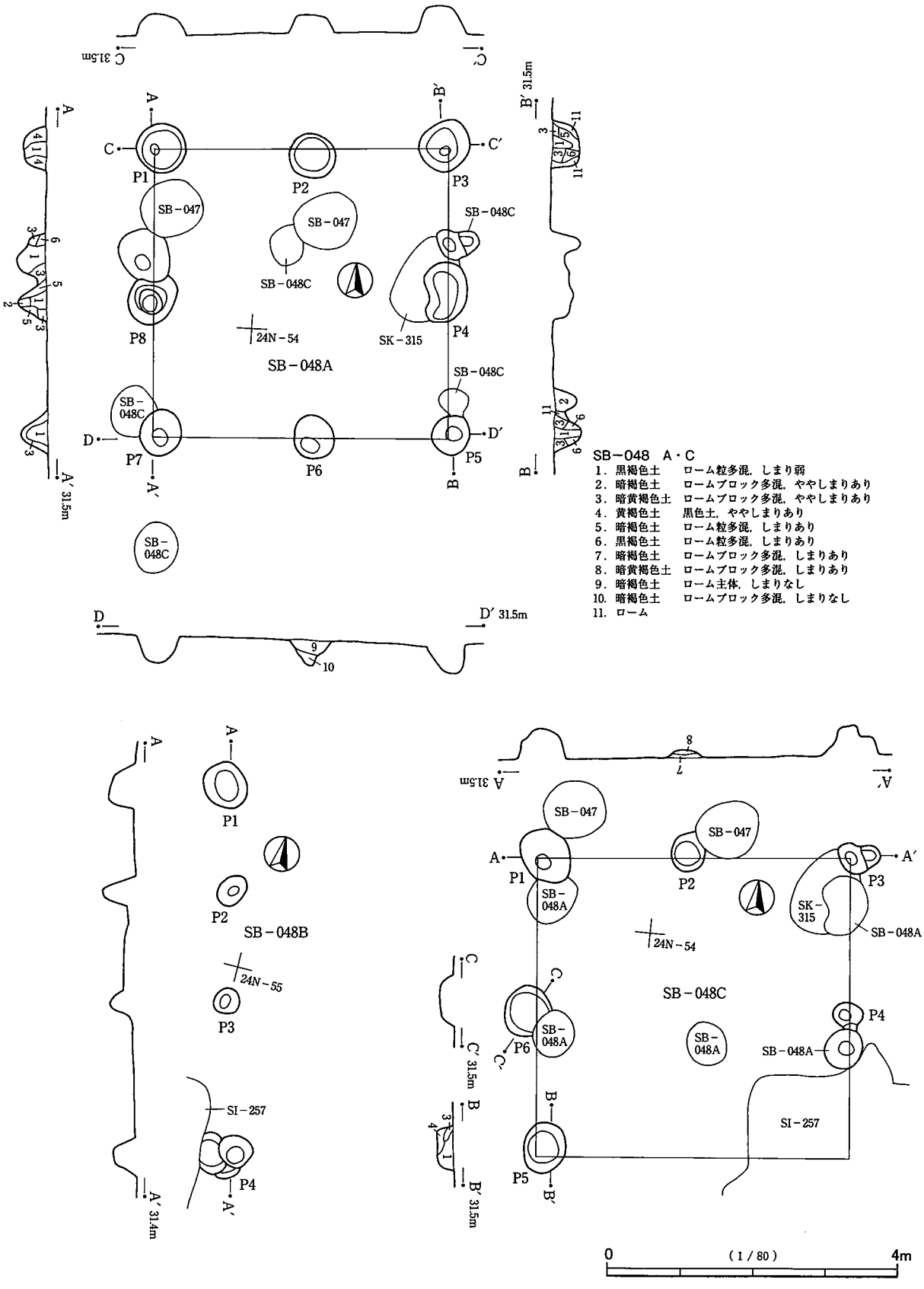
柱痕は柱穴が浅いためやや不明瞭であるが，土層断面にみられると思われる。柱間寸法は，東西では1.85m～2.1m，南北でも1.9m～2.1mで，ほぼ同じ数値である。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とする。径の計測値は，重複により上面形に影響を受けているものを除くと，50cm～72cmである。確認面からの深さは26cm～48cmである。平均の深さは，全体で35cm，四隅で39cm，中間で32cmである。中間柱穴の深さは，西側ではその両隅と顕著な差がないが，東側・北側ではその両隅よりも浅い。南側のものは南西隅と同等の深さであるが，南東隅よりは浅い。柱痕部分はローム粒を多く含む暗褐色土で，しまりが弱い。周囲の埋土もローム粒・ロームブロックを多く含むが，ややしまりがある。下層は黒褐色土で，上層に比べ色調の暗い土層である。出土遺物は少量と思われる。図示できた遺物はない。

SB－048B（第308図，図版99）

調査区南部の24N－44グリッドを中心に位置する。ほぼ一直線上に位置する４基の柱穴である。本遺構は掘立柱建物の桁行側柱穴かもしれないが，周囲に組みとなる柱穴がみられない。西方にSB－048A・SB－048C，東方にSD－003等の他遺構が存在するためかもしれないが，SD－003との間は若干の空間がある。現状では，柵列または塀としておきたい。南端の柱穴（P4）は３基の小穴が重なったような形態である。西方至近の位置にSI－257が所在する影響や他遺構の重複の他，本遺構自体の作り替えによること等も考えられる。南方に続く場合，本遺構よりも新しいと思われるSD－003に切られる可能性があるが，続くかどうか不明である。一方，北端の柱穴（P1）の北方には続かないと考える。現状の長さは5.15m，方向はN－15°－Wである。柱痕は不明である。柱穴間は1.5m～2.15mである。柱掘りかたは円形を基調とし，径は34cm～66cmである。確認面からの深さは30cm～44cm，平均の深さは35cmである。堆積土はローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土・暗黄褐色土である。出土遺物はごく少量と思われる。図示できた遺物はない。なお本遺構は調査時にSB－048Aの近くにある柱穴群のため，SB－048Bとされたが，SB－048Aとは向きが異なっており，別の遺構である。

SB－048C（第308図，図版99）

調査区南部の24N－54グリッドを中心に位置する。調査時にSB－048Aとされた遺構を，整理段階で２棟の掘立柱建物に分離したが，新たに分離された遺構が本遺構である。南東側でSI－257と重複する影響で，南東隅柱穴および南妻柱中間柱穴は検出されなかった。また検出された柱穴は南西隅柱穴(P5)を除いて，SB－047・SB－048A・SK－315のいずれかと重複している。他遺構との新旧関係は不明である。以上の



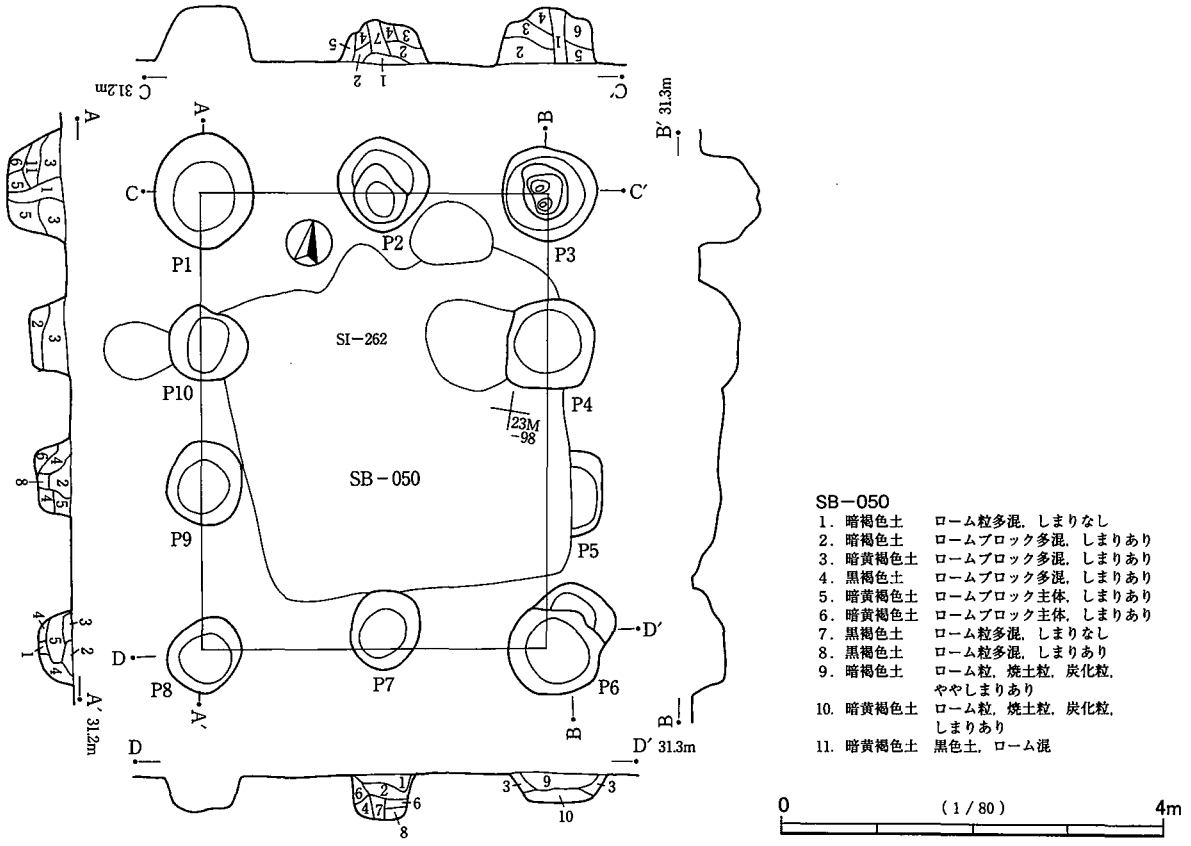

第308図　SB－048A・048B・048C

状況のためやや不明瞭であるが，2間×2間の側柱建物と思われる遺構である。規模は東西4.3m×南北4.1mである。ほぼ方形の柱配置であり，どちらが桁行でどちらが梁行か区別が付かない。建物の向きがほぼ東西南北に添っているため，桁行・梁行の代わりに東西・南北の方位を使用して記述する。南北が桁行で

あれば棟方向はN－5°－W，東西が桁行であれば棟方向はN－85°－Eである。面積は推定17.6㎡である。柱痕は不明である。柱間寸法は，東西では1.9m～2.15m，南北では2.0m～2.25mで，近似した数値である。柱筋の通りは不明瞭だが比較的よいといえそうである。柱掘りかたは円形を基調とし，径は，重複により上面形に大きな影響を受けているものを除くと，50cm～70cmである。確認面からの深さは14cm～40cmである。平均の深さは，全体で27cm，隅で33cm，中間で20cmであり，中間柱穴が隅柱穴よりもかなり浅い。堆積土はローム粒を多く含む暗褐色土を基調とし，部分的に黒褐色土やローム主体の土層がみられる。出土遺物は少量と思われる。図示できた遺物はない。なお本遺構とSB－048Aは，新旧が不明であるが建て替え前後の関係にあると思われる。

SB－050（第309図，図版99）

調査区南部の23M－97グリッドを中心に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱南北棟建物で，規模は桁行4.8m×梁行3.7mである。棟方向はN－10°－W，面積は17.9㎡である。大きく重複するSI－262に切られている。また本遺構の内外には柱穴群が存在し，別の掘立柱建物が存在することが確実であるが，長方形・方形の柱配置を確認することができない。その理由の一つに，西側に位置するSD－025に切られて欠失していることがあげられる。別の掘立柱建物のうち数基の柱穴は本遺構と重複するが，新旧関係は不明である。柱痕は北側柱列の土層断面に明瞭であり，南妻柱中間柱穴（P7）の７層にも可能性がある。その他は不明瞭である。柱間寸法は，桁行では1.5m～1.8m，梁行では1.7m～1.8mである。柱筋の通りは，P7がややなかに入っている以外は，比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とする。東側の中間柱穴がやや方形的であるのは，SI－262と重複する影響であり，本来のものではない。径は70cm～1.2mである。隅柱穴の




第309図　SB－050

径は南西隅を除いて１ｍ以上，中間柱穴の標準は80cm強程度と思われ，大きさにやや差がある。確認面からの深さは21cm～60cmである。平均の深さは42.5cm，隅柱穴では46.5cm，中間柱穴では40cmである。北側両隅は他よりも深いが，南側両隅は中間柱穴との格差がみられない。むしろ中間柱穴のP7の方が深い。中間柱穴のうち，東桁行南第２柱穴（P5）が最も浅いが，SI－262と重複して失われた部分がより深くなるかもしれない。柱痕部分はローム粒を多く含む暗褐色土･黒褐色土で，しまりが弱い。周囲の埋土もローム粒･ロームブロックを多く含むが，しまりがある。下層には色調の暗い黒褐色土がみられる柱穴が多い。掘立柱建物としては出土遺物がやや多いが，図示できた遺物はない。

SB－051A（第310図，図版99）

調査区南部の24N－24グリッドを中心に位置する。桁行２間×梁行２間の側柱東西棟建物で，規模は桁行4.2m×梁行4.0mである。方形に近い柱配置であるが，わずかに長い東西方向を桁行としておく。桁行方向はＮ－86°－Ｗ，面積は17.15㎡である。掘立柱建物または柵列か塀と思われるSB－051Bと重複するが，新旧関係は不明である。なおSB－051Bは整理段階で新たに掘立柱建物関係の遺構としたものである。本遺構は，調査時のSB－051から内側の柱穴２基をSB－051Bにまわし，側柱の柱穴だけとしたものである。柱痕は北側柱穴列の土層断面にみられるが，その他は不明瞭である。柱間寸法は，桁行では2.0m～2.3m，梁行では1.8m～2.1mである。柱筋の通りは比較的よい。柱掘りかたは円形を基調とするが，一部に不整な形態がみられる。径は不整な部分を除いて72cm～94cmである。確認面からの深さは24cm～52cmである。平均の深さは33cm，隅柱穴では35cm，中間柱穴では30.5cmである。四隅は概して中間より深いが，確認面の高低差を考慮すると，平均値以上の差がある。柱痕部分はローム粒を多く含む暗褐色土・黒褐色土で，しまりが弱い。周囲の埋土もローム粒・ロームブロックを多く含むが，しまりがある。下層には色調の暗い黒褐色土が堆積する柱穴がいくつかある。

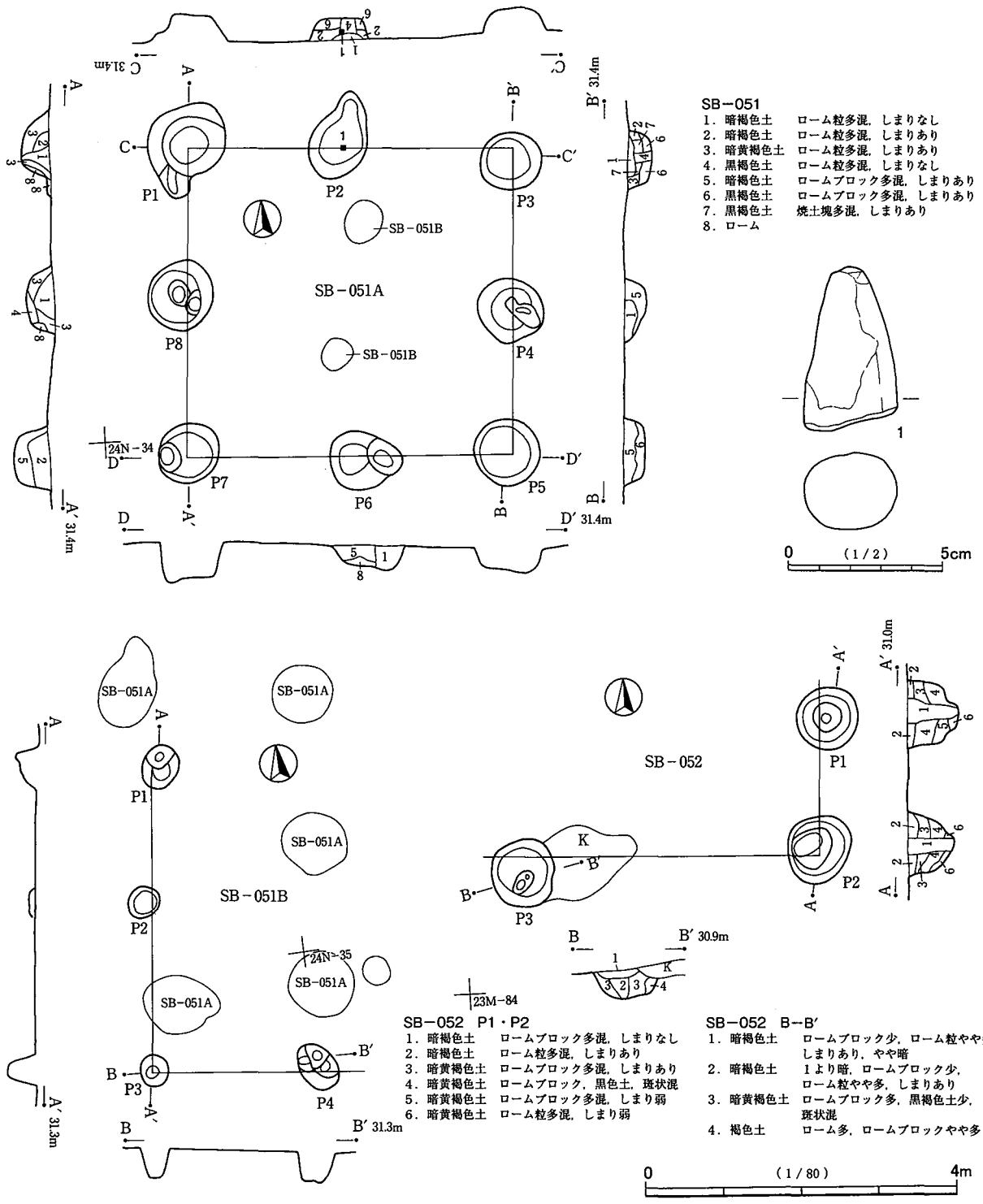
掘立柱建物としては出土遺物がやや多いが，図示できた遺物は土製支脚１点である。現状の下端面は平坦であるが，下部側を欠損していると思われる。上端側は遺存する。磨耗が著しい。P2中央の中層から横に倒れた状態で出土した。

SB－051B（第310図，図版99）

調査区南部の24N－24グリッドを中心に位置する。掘立柱建物の２辺の一部か，Ｌ字形の塀または柵列と思われる遺構である。柱穴は４基で，西側柱穴列が２間，南側柱穴列が１間の柱配置である。規模は西側柱穴列が3.95m，南側柱穴列が2.15mである。西側柱穴列の方向はＮ－８°－Ｅ，南側柱穴列の方向はＮ－82°－Ｗである。遺構位置がSB－051Aと大きく重複するが，柱穴の切り合いはない。新旧関係は不明である。なお本遺構は整理段階で新たに掘立柱建物関係の遺構としたものである。柱痕は不明である。柱間寸法は，西側では1.75m～2.2m，南側は１間のため規模と同じである。西側と南側の柱穴列間はほぼ直角をなすが，西側中間のP2は柱筋からやや外にずれている。柱掘りかたは円形を基調とし，径は36cm～66cmである。確認面からの深さは８cm～38cmである。P2が浅いほかは，30cm台の深さである。平均の深さは28cmであるが，P2を除くと35cmである。P2が浅いことから，本遺構は掘立柱建物の一部とも思われるが断定しがたい。出土遺物は少量と思われる。図示できた遺物はない。

SB－052（第310図，図版99）

調査区南部の23M－74グリッドに位置する。直角的な柱配置をなす３基の柱穴群である。やや不明瞭であるが１間×１間以上の掘立柱建物の一部と思われる。建物の向きは東西南北からの振れがほとんどなく，




第310図　SB－051A・051B・052

その南辺と東辺の一部が遺存する。遺存が少ないため，どちらが桁行で，どちらが梁行か不明である。現状の規模は，南側柱穴列間が3.9m，東側柱穴列間が1.7mである。南側の間隔が広く，中間に柱穴が１基存在した可能性を考えたい。浅いために失われたと想定するが，その場合，遺存する柱穴との深度差があり過ぎるとも思われる。写真では撹乱もみられないことから，中間に柱はなく，当初から長い柱間間隔であるのかもしれない。あるいは，東側の２基と南西側の１基は別の遺構であるかもしれないが，柱配置の様相から同一遺構としておきたい。南北方向が棟方向ならばその方位はN，東西方向が棟方向ならばその

方位はN－90°－W（E）である。柱痕は3基とも明瞭である。柱掘りかたはほぼ円形で，径は80cm～90cmである。確認面からの深さは，東北側の柱穴（P1）が64cm，南東隅柱穴（P2）が60cm，南西側柱穴（P3）が40cmであるが，P3の確認面がP1・P2の確認面より20cm低いことを考慮すると，ほぼ同じ深さである。柱痕部分は多少のローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土で，しまりが弱い。周囲の埋土はローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土・暗黄褐色土で，概してしまりがある。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

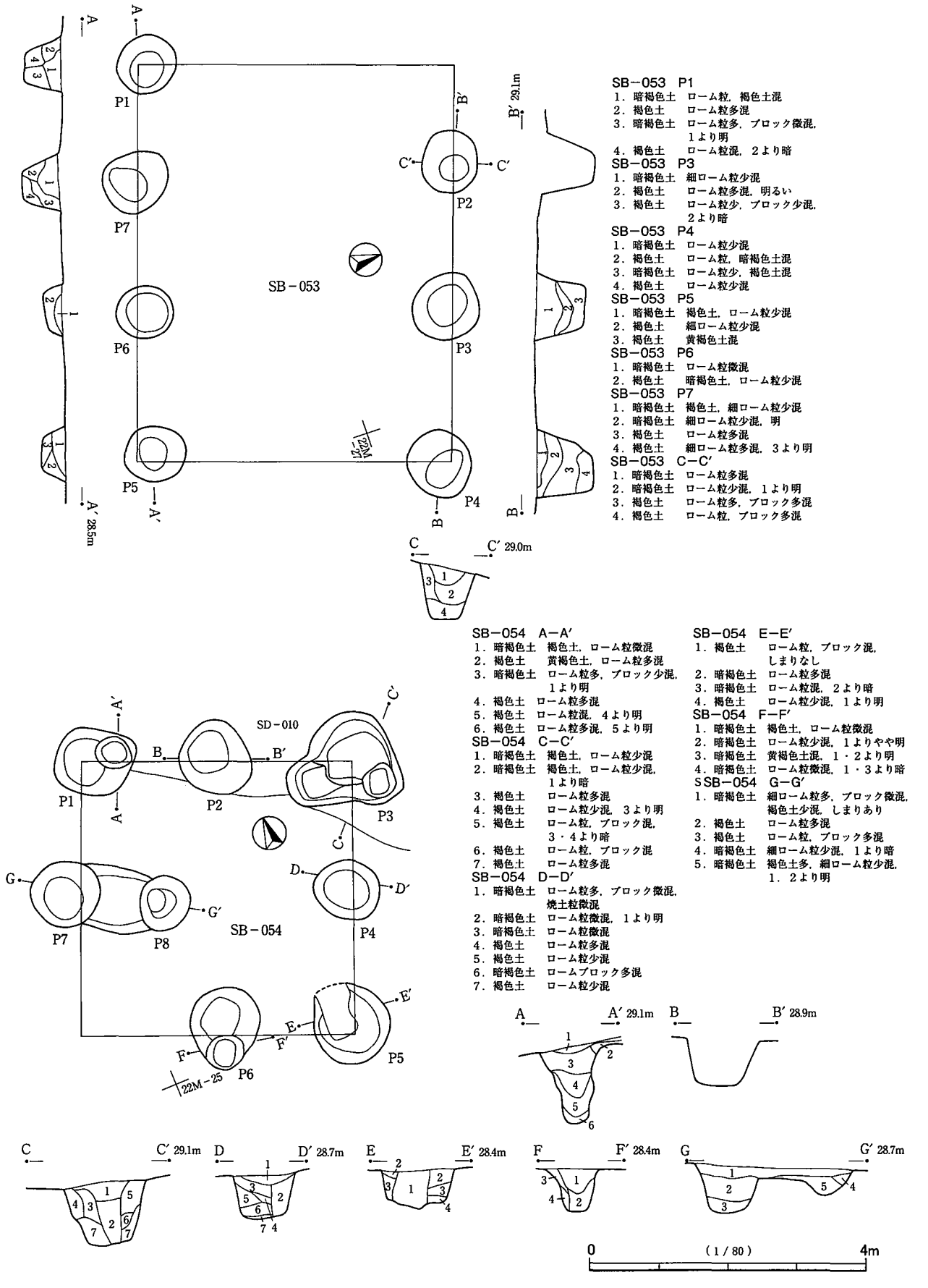
SB－053（第311図，図版99）

調査区南西部の22M－26グリッドを中心に位置する。桁行3間の側柱東西棟建物である。梁行は現状で1間であるが，中間柱穴が遺存しないためと思われ，本来は2間であろう。北西隅柱穴も検出されないが，西やや北に位置するSD－010または別の柱穴・土坑等に切られたためかもしれない。他に切り合うと思われる遺構はないが，周囲には柱穴群やいくつかの土坑が存在する。本遺構は土坑群として調査されたものを，整理段階で新たに掘立柱建物としたものであり，やや不明瞭な点がある。規模は桁行5.8m×梁行4.5mである。棟方向はN－73°－W，面積は推定26.95㎡である。柱痕は不明である。桁行の柱間寸法は1.8m～2.4mであるが，柱穴が大きいため，実際の柱配置は若干差が少なくなると思われる。なお北西隅柱穴が検出されないためやや不明瞭であるが，西側端の間は短い可能性がある。柱穴の並びは北側でややよいが，南側はあまりよくない。柱掘りかたは円形を基調とし，径は75cm～1.0mである。確認面からの深さは26cm～85cmであるが，南側の確認面が北側よりも70cm程度低いため，正確な比較ができない。遺存は南側が悪いが，絶対的な高さでは，むしろ南側の方が低い。底面の高さで最も深いものと最も浅いものの差は57cmである。最も高い北側中間柱穴（P3）を起点とすると，その両脇は10cm強深くなり，南側の東2穴（P5・P6）は21cm～25cm，西2穴（P1・P7）は50cm～57cm深い。以上の数値から考えると，北側柱穴列と南側柱穴列が同一遺構であるかやや疑問がある。あるいは調査時の設定・計測値に問題があるのかもしれないが，検証できない。平均値では中間が隅よりも6cm浅いが，双方に浅いものと深いものがあり，格差は認められない。ただし東西両妻の中間柱穴が存在するならば，他よりもかなり浅いものである。堆積土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土を基本とし，ロームは部分的に多くみられる。出土遺物はごく少量である。図示できた遺物はない。

SB－054（第311図，図版99）

調査区南西部の22M－15グリッドを中心に位置する。南西隅が検出されないが，2間×2間の側柱建物であろう。規模は直交する2辺とも4.0mである。ほぼ方形の柱配置で，柱間の間数も同じと思われるため，どちらが桁行でどちらが梁行か区別が付かない。建物の向きは東西南北から大きく振れている。東側柱穴列が桁行ならば，その方位はN－21°－E，北側柱穴列が桁行ならば，その方位はN－69°－Wである。推定面積は16㎡である。北側でSD－010と重複し，北側柱穴列の上部がやや欠損している。また周囲にはいくつかの柱穴・土坑が存在し，西側中間柱穴（P7）・北東隅柱穴（P3）はそれらと重複している。なおP7と重複するP8は柱筋の交点に位置しないので，本遺構に伴うものではないと考える。

本遺構は土坑群として調査されたものを，整理段階で新たに掘立柱建物としたものである。柱痕はP3の土層断面にみられる。また東側中間柱穴（P4）の2層も相当するかもしれないが，端に寄っており，断定しがたい。他は不明である。柱間寸法は，東西の柱穴列では1.85m～2.0m，南北でも1.8m～2.05mで，ほぼ同じ数値である。柱筋の通りはやや不明瞭であるが，P7がやや外に振れる以外は比較的よいといえ




SB－053　P1
1．暗褐色土　ローム粒，褐色土混
2．褐色土　ローム粒多混
3．暗褐色土　ローム粒多，ブロック微混，1より明
4．褐色土　ローム粒混，2より暗

SB－053　P3
1．暗褐色土　細ローム粒少混
2．褐色土　ローム粒多混，明るい
3．褐色土　ローム粒少，ブロック少混，2より暗

SB－053　P4
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．褐色土　ローム粒，暗褐色土混
3．暗褐色土　ローム粒少，褐色土混
4．褐色土　ローム粒少混

SB－053　P5
1．暗褐色土　褐色土，ローム粒少混
2．褐色土　細ローム粒少混
3．褐色土　黄褐色土混

SB－053　P6
1．暗褐色土　ローム粒微混
2．褐色土　暗褐色土，ローム粒少混

SB－053　P7
1．暗褐色土　褐色土，細ローム粒少混
2．暗褐色土　細ローム粒少混，明
3．褐色土　ローム粒多混
4．褐色土　細ローム粒多混，3より明

SB－053　C－C′
1．暗褐色土　ローム粒多混
2．暗褐色土　ローム粒少混，1より明
3．褐色土　ローム粒多，ブロック多混
4．褐色土　ローム粒，ブロック多混

SB－054　A－A′
1．暗褐色土　褐色土，ローム粒微混
2．褐色土　黄褐色土，ローム粒多混
3．暗褐色土　ローム粒多，ブロック少混，1より明
4．褐色土　ローム粒多混
5．褐色土　ローム粒混，4より明
6．褐色土　ローム粒多混，5より明

SB－054　C－C′
1．暗褐色土　褐色土，ローム粒少混
2．暗褐色土　褐色土，ローム粒少混，1より暗
3．褐色土　ローム粒多混
4．褐色土　ローム粒少混，3より明
5．褐色土　ローム粒，ブロック混，3・4より暗
6．褐色土　ローム粒，ブロック混
7．褐色土　ローム粒多混

SB－054　D－D′
1．暗褐色土　ローム粒多，ブロック微混，焼土粒微混
2．暗褐色土　ローム粒微混，1より明
3．暗褐色土　ローム粒微混
4．褐色土　ローム粒多混
5．褐色土　ローム粒少混
6．暗褐色土　ロームブロック多混
7．褐色土　ローム粒少混

SB－054　E－E′
1．褐色土　ローム粒，ブロック混，しまりなし
2．暗褐色土　ローム粒多混
3．暗褐色土　ローム粒混，2より暗
4．褐色土　ローム粒少混，1より明

SB－054　F－F′
1．暗褐色土　褐色土，ローム粒微混
2．暗褐色土　ローム粒少混，1よりやや明
3．暗褐色土　黄褐色土混，1・2より明
4．暗褐色土　ローム粒微混，1・3より暗

SSB－054　G－G′
1．暗褐色土　細ローム粒多，ブロック微混，褐色土少混，しまりあり
2．褐色土　ローム粒多混
3．褐色土　ローム粒，ブロック多混
4．暗褐色土　細ローム粒少混，1より暗
5．暗褐色土　褐色土多，細ローム粒少混，1，2より明

第311図　SB－053・054

そうである。柱掘りかたは円形を基調とし，径は85cm～1.7mである。なおP3がもつ最大値は他遺構と重複する影響であり，長径の標準としては１m強程度である。確認面からの深さは50cm～1.15mであるが，南側の確認面が低いため，差が大きくなり過ぎている。底面の標高値で比較すると，最も浅いのは北側中間柱穴（P2），最も深いのは北西隅柱穴（P1）で，その差は38cmである。平均の深さは隅の方が中間よりも13cm深い。個々にみると南側中間柱穴（P6）がかなり深いが，全体では差があるといえる。P3柱痕部分は少量のローム粒を含む暗褐色土で，下層は上層より暗い色調である。周囲の埋土はいくつかに分けられるが，概して柱痕部分よりも多くローム粒・ロームブロックを含む。出土遺物はやや少量である。図示できた遺物はない。

## 第５節　土坑

SK－010（第312図，図版100）

中央部地区やや北側の24K－91グリッドを中心に位置する。平面形は不整な楕円形であるが，底面や壁の状態等から，２基の円形土坑が重複した可能性が考えられる。しかし土層断面では切り合いを観察することができなかった。長径2.6m，短径1.7m，深さ0.3m～0.5m前後を計測する。底面は凹凸があり，中央やや北西（図の左）側で高まる部分がある。壁は急に立ち上がる。堆積土は暗茶褐色土主体である。上層と下層の一部でソフトローム粒を多く含むが，厚い中層ではロームが少量である。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－011（第312図，図版100）

西部地区やや北東側の22K－48グリッドを中心に位置する。古墳SX－001を切っている。平面形は円形に近い楕円形を呈し，長径1.2m，短径1.1m，深さ0.15m前後を計測する。底面は比較的平らであるが，壁際がやや高い。壁は斜めに立ち上がる。浅いため，確認面より上方が急か，緩やかか不明瞭である。若干量の土器片・石片が出土した。図示できた遺物はロクロ土師器杯１点である。口縁部から底部まで1/4弱が遺存する。割れて散った状態での出土である。

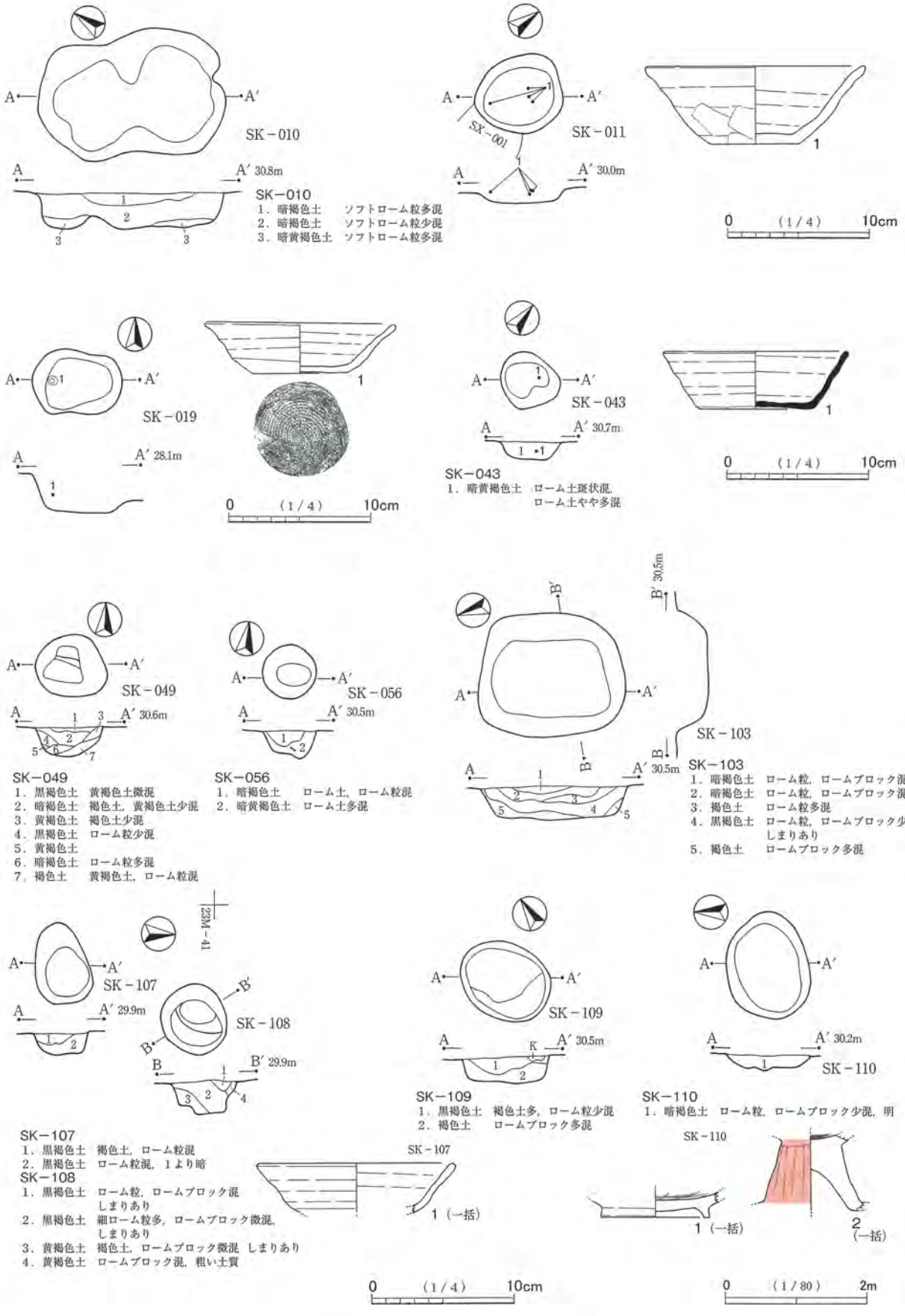
SK－019（第312図，図版100）

北西部地区東側の23J－36グリッドを中心に位置する。東方に谷を臨み，確認面が西から東に下っている。平面形はやや不整な楕円形を呈し，長径1.3m，短径0.9m，深さ0.5m前後を計測する。底面はやや凹凸がある。壁は比較的急に立ち上がるが，一部が緩やかである。完形に近いロクロ土師器杯１点（１）が，西壁際下層から正位で出土した。出土遺物はこの土器１点のみである。

１の欠損部は口縁端部の一部で，逆三角形状に欠けている。他には破損・欠損のまったくない土器である。内外面の一部に筋状の黒色物質が付着するが，炭化物と思われる。また若干の赤みを帯びる部分が内外面にやや多くみられ，火を受けていると思われる。欠損部は打ち欠きされたことが考えられるが，わずかな欠損であるため，やや断定しがたい。なお１の出土状況を細かくみると，欠損部は東やや北側に向いている。土器の傾きはほとんどなく，上方から落下した可能性は低い。

SK－043（第312図，図版103）

東部地区中央の25K－28グリッドを中心に位置する。平面形は不整な円形を呈し，径0.8m，深さ0.3m前後を計測する。底面はやや凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土で，ローム粒・ロームブロックを斑状に含む。下部はロームの含有がやや多くなるが，分層できるほどのものではない。




第312図　奈良・平安時代土坑（1）

若干量の土器片が出土した。図示できた遺物は千葉産の須恵器杯１点である。土坑中心から北東側で，中位からの出土である。1/2程度の遺存で，接合のない破片である。

SK－049（第312図）

東部地区北西側の25K－12グリッドを中心に位置する。東方至近に掘立柱建物群があり，本遺構も柱穴の一部の可能性があるが，組となる柱穴がないため，断定できない。平面形は円形を呈し，長径1.0m，短径0.9m，深さ0.4m前後を計測する。底面は段差がある。また中央がやや深くなり，丸みをもつ。壁は直角的に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体である。下層・壁際の一部はローム粒を多く含む。上層は黒みが強い。柱痕はみられない。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－056（第312図）

北東部地区やや南側の25I－52グリッドを中心に位置する。SB－024に切られている。SB－024の他，周囲に掘立柱建物群があり，本遺構も柱穴の一部の可能性があるが，組となる柱穴が不明瞭なため，断定できない。なおSB－024の柱穴は本遺構よりもかなり小さく，本遺構はSB－024とは別遺構である。平面は円形を呈し，径0.8m，深さ0.4m前後を計測する。底面は段差がある。壁は急に立ち上がる。堆積土は上層が暗褐色土，下層が暗黄褐色土で，下層はローム粒を多量に含む。柱痕はみられない。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－103（第312図，図版104）

中央部西側の23L－22グリッドを中心に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長径2.0m，短径1.7m，深さ0.5m前後を計測する。底面は平らである。壁はやや緩やかであるが，一部が急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土・黒褐色土主体である。下層はロームブロックを多く含み，中上位にもローム粒を多く含む土層がある。比較的多量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－107（第312図，図版104）

南西部地区中央の23M－41グリッドを中心に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.1m，短径0.8m，深さ0.3m前後を計測する。底面はやや凹凸がある。壁は緩やかな部分と急に立ち上がる部分がある。堆積土は黒褐色土主体で，ローム粒の含有は少量である。柱痕はみられない。比較的多量の土器片が出土した。図示できた遺物はロクロ土師器杯１点である。遺存は口縁・体部の一部である。

近くにSK－108が所在する。SK－108とともに柱穴状の遺構であるが，方形に組む柱穴が不明なため，掘立柱建物の柱穴としがたい。

SK－108（第312図，図版104）

南西部地区中央の23M－41グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，長径1.0m，短径0.9m，深さ0.5m前後を計測する。底面は段差をもつ。壁は一部で緩やかであるが，全体的に急である。堆積土は黒褐色土主体で，壁際はロームブロックを多く含む。柱痕はみられない。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－109（第312図，図版104）

南西部地区中央の23M－21グリッドを中心に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.3m，短径1.1m，深さ0.4m前後を計測する。底面は凹凸があり，若干の段差をもつ。壁は緩やかな部分と急な部分がある。堆積土は黒褐色土・褐色土で，下層はロームブロックを多く含む。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－110（第312図，図版104）

南西部地区中央の23M－21グリッドを中心に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.5m，短径1.2m，深さ0.2m前後を計測する。底面はやや凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がるが，浅いため，確認面よりも上方は急であるかもしれない。堆積土は暗褐色土であるが，やや明るい色調である。若干のローム粒・ロームブロックを含む。若干量の土器片が出土した。図示できた遺物は２点である。１はロクロ土師器高台付杯または皿である。高台部周辺が遺存するが，口縁･体部をほとんど欠くため，杯か皿か不明である。２は土師器高杯で，短脚の高杯である。杯部のほとんどを欠くが，脚部が比較的よく遺存する。しかし脚端部を欠損する。脚部外面と杯部内面は赤彩が施され，脚部内面も一部に赤彩が施されている。杯部内面は地の色調が黒灰色であり，赤彩前に黒色処理が施されている可能性があるが，不明瞭である。１は平安時代，２は古墳時代の遺物である。図示していない他の土器片は平安時代のものであり，本遺構の時期は平安時代以降と思われる。

SK－111（第313図，図版105）

南西部地区西側の22M－17グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，長径1.0m，短径0.9m，深さ0.4m前後を計測する。底面は段差をもつ。やや浅い部分は深い部分に向かって下るが，一部にやや平坦な部分がある。壁は緩やかに立ち上がるが，一部に急な部分がある。堆積土は暗褐色土・褐色土で，中・下層はローム粒・ロームブロックを多く含む。柱痕はみられない。出土遺物はない。掘立柱建物の柱穴状であるが，組となる柱穴が判然としない。

SK－112（第313図，図版105）

南西部地区西側の22M－07グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，長径0.9m，短径0.8m，深さ0.4m前後を計測する。底面は平らで，壁は直角的に立ち上がる。堆積土は黒褐色土・褐色土である。上層は黒みが強く，ロームの包含が少ない。柱痕はみられない。出土遺物はない。両隣に位置するSK－113・SK－115とは一直線上の位置関係である。それらとともに掘立柱建物をなす可能性があるが，方形を組む柱穴が不足している。あるいは掘立柱建物でなく，柵列であることも考えられる。

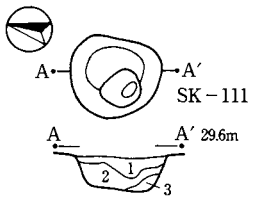
SK－113（第313図，図版105）

南西部地区西側の22M－06グリッドを中心に位置する。楕円形の土坑が二つ重なった状況と思われ，上面形はハート形を呈する。長径1.2m，短径1.2m，深さ0.4m～0.7mである。底面はかなり高低差のある段差をもつ。深い部分の底面は平らである。浅い部分は深い部分に向かって傾斜するが，一部でやや平坦である。壁は急に立ち上がる。堆積土は上層が暗褐色土，中下層が黄褐色土・褐色土である。ロームの包含は，中・下層に多く，上層に少ない。柱痕はみられなかったが，深い部分に柱があり，浅い部分は柱を抜き取った痕跡と思われる。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

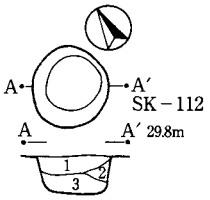
SK－115（第313図，図版105）

南西部地区西側の22M－08グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，径0.9m，深さ0.6m前後を計測する。底面は中央が窪んでおり，柱の痕跡と思われる。壁は急に立ち上がる。堆積土のうち，１・２層は暗褐色土で，ローム粒の含有が少ない土層である。中央部に柱状にみられ，柱痕と理解できる。その周囲の土層をみると，上層は黒みが強いが，下層は褐色土で，ローム粒・ロームブロックを多く含む。柱周囲に埋め戻された土層である。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

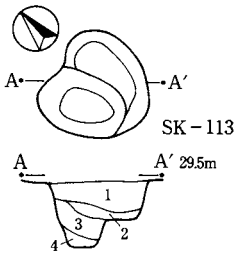
SK－112・SK－113・SK－115は掘立柱建物か柵列か判然としないが，SK－113・SK－115の様相から



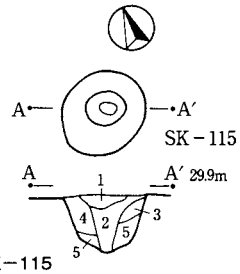

SK－111
1．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック少混
2．褐色土　ローム粒，ロームブロック多混，明
3．黄褐色土　褐色土少混



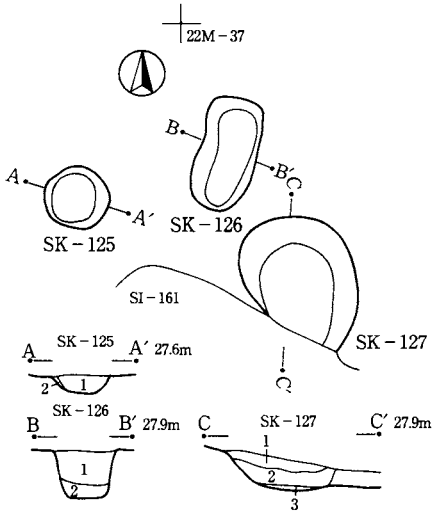

SK－112
1．黒褐色土　ローム粒，ロームブロック少混
2．褐色土　ローム粒多混
3．褐色土　ローム粒，ロームブロック，黒色土微混




SK－113
1．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック少混
2．黄褐色土　ロームブロック多，暗褐色土少混
3．褐色土　ローム粒，ロームブロック多混
4．褐色土　ローム粒多混



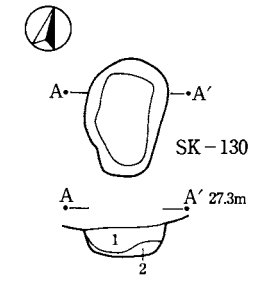

SK－115
1．暗褐色土　褐色土，ローム粒少混
2．暗褐色土　褐色土，ローム粒少混，1より明
3．黒褐色土　細ローム粒多，褐色土少混
4．暗褐色土　褐色土，細ローム粒，ロームブロック少混，1・2より明
5．褐色土　ローム粒，ロームブロック多混



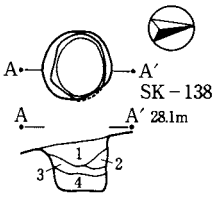

SK－125
1．暗褐色土　ローム粒少，褐色土少混
2．褐色土　黄褐色土混

SK－126
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．暗褐色土　黄褐色土少混，1より暗

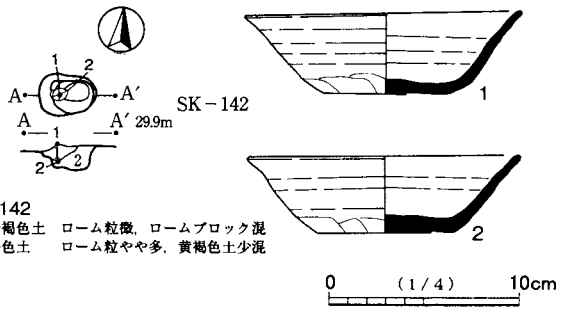
SK－127
1．暗褐色土　ローム粒少
2．暗褐色土　ローム粒多混，1より暗
3．褐色土　ローム粒少混



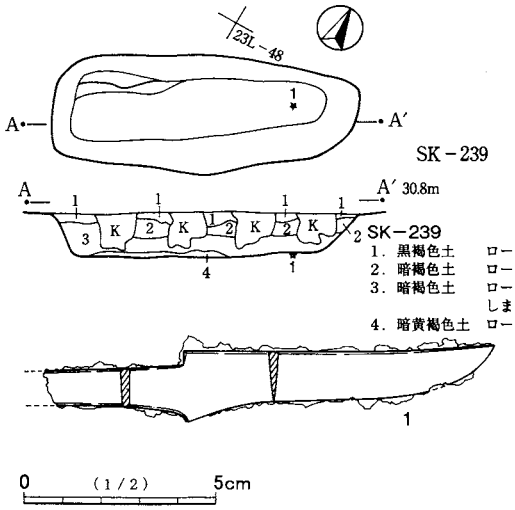

SK－130
1．暗褐色土　ローム粒少，焼土粒微混
2．褐色土　ローム粒，ロームブロック混



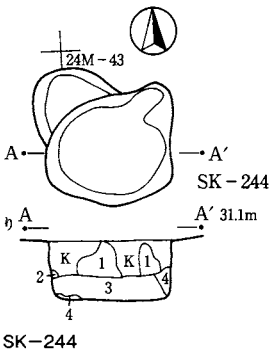

SK－138
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．暗褐色土　ローム粒微混，1より暗
3．褐色土　ローム粒，ロームブロック多混
4．暗褐色土　ローム粒少混，1・2より暗



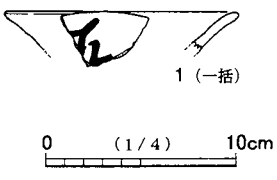

SK－142
1．暗褐色土　ローム粒微，ロームブロック混
2．褐色土　ローム粒やや多，黄褐色土少混

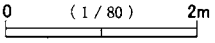



SK－239
1．黒褐色土　ローム粒混，しまりあり
2．暗褐色土　ローム粒混，しまりあり
3．暗褐色土　ローム塊，ローム粒混，しまりあり
4．暗黄褐色土　ローム塊主体，しまりあり




SK－244
1．黒褐色土　ローム微粒，ロームブロック少混
2．明褐色土　ローム微粒主体，暗褐色土粒少混
3．黒褐色土　1に似る，炭化粒少混
4．暗褐色土　ローム微粒少混




第313図　奈良・平安時代土坑（2）

確実に柱穴と考えられる。

SK－125（第313図，図版105）

南西部地区西側の22M－36グリッドを中心に位置する。南西に下る緩斜面に立地する。平面形は円形を呈し，径0.7m，深さ0.2m前後を計測する。底面は平らである。壁はやや緩やかに立ち上がる。しかし浅いため，確認面より上方は急になるかもしれない。堆積土は暗褐色土主体で，ロームの包含量は少量である。柱痕はみられない。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－126（第313図）

南西部地区西側の22M－37グリッドを中心に位置する。南西に下る緩斜面に立地する。平面形は隅丸長方形を呈し，長径1.3m，短径0.6m，深さ0.5m前後を計測する。底面はやや凹凸があり，また南側が北側よりも深い。しかし壁は北側の方が遺存がよい。壁は急に立ち上がる。堆積土は少量のローム粒を含む暗褐色土である。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－127（第313図）

南西部地区西側の22M－37グリッドを中心に位置する。南西に下る緩斜面に立地する。南側でSI－161と重複し，本遺構が切っている。平面形は不整な楕円形を呈する。長径は遺存長で1.3m，短径1.2m，深さ0.3m前後を計測する。底面は平らで，壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，上層はローム粒を少なく，下層は多く含む。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない

SK－130（第313図）

南西部地区西側の22M－49グリッドを中心に位置する。南西に下る緩斜面に立地する。平面形は不整な楕円形を呈するが，底面北側は長方形状を呈する。長径1.2m，短径0.8m，深さ0.3m前後を計測する。底面は北側から南側へ下っている。北壁側の傾斜はやや緩やかであるが，南壁側は急になる。硬化面はみられない。堆積土は少量のローム粒を含む暗褐色土主体である。下層・壁際はロームの包含が多い。土師器甕破片が少量出土したが，図示できたものはない。

SK－138（第313図，図版105）

南西部地区西側の22M－25グリッドを中心に位置する。北方の至近に掘立柱建物SB－054が位置する。本遺構も柱穴の一部の可能性があるが，組となる柱穴が不明瞭なため，断定できない。平面は円形を呈し，径0.8m，深さ0.5m前後を計測する。底面は平らで，壁は直角的に立ち上がる。堆積土は暗褐色土・褐色土で，中位にローム粒を多く含むが，上層と下層はロームが少ない。下層は上層よりもやや暗い色調である。柱痕はみられない。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－142（第313図，図版105）

南西部地区西側の22M－18グリッドを中心に位置する。平面は不整な楕円形を呈し，長径0.6m，短径0.5m，深さ0.3m前後を計測する。底面は凹凸があり，一部で段差をもつ。壁は西側でやや緩やかに立ち上がるが，その他は急である。堆積土は上層が暗褐色土で，ロームの包含はごく少量である。下層はやや多量のローム粒を含む褐色土である。

図示できた遺物は２点である。いずれも千葉産の須恵器杯で，ともに接合して完形となる土器である。１・２とも色調は褐色であるが，１は口縁部内外面の一部に強く黒色となる部分がある。焼成時のものとも思われるが，二次的な被熱痕跡の可能性も考えられる。２も被熱痕跡か断定しがたいが，口縁部外面の一部が黒色を帯びている。２は口縁・体部の1/2強を破損する。破損が意図的なものか不明である。

1は西側の確認面上から倒位で出土した。傾きはない。やや細かく割れているが，確認面上で検出されたためかもしれない。2は1の下方で，堆積土下層から出土した。倒位か正位か不明であるが，傾きはないと思われる。1と2は高さの差が21cmある。仮に2が正位の出土であるとして，図示した高さが1の最高点と2の最低点であった場合でも，1・2間には10cm強の堆積土が存在する。そのため合わせ口状の出土状況にはならない。1・2以外の出土遺物はごく少量の土器片である。

SK－239（第313図，図版106）

中央部地区やや南西寄りの23L－48グリッドを中心に位置する。平面形は細長い楕円形を呈するが，西側はやや角張っている。長径3.2m，短径1.3m，深さ0.5m前後を計測する。底面の長径は2.7m，短径は0.5m前後である。底面は東端部側が他よりも5cm～7cm高まっている。中央付近から西側にかけては，平坦であるが，西端部北側が段差をもち，10cm程度高まっている。しかし耕作機械による撹乱が顕著なため，この部分については壁がやや緩やかに立ち上がるのかもしれない。壁は全体に若干傾斜して立ち上がる。やや緩やかな部分とやや急な部分がある。堆積土は黒褐色土・暗褐色土主体である。下層はロームブロックを含む。

図示できた出土遺物は鉄製の刀子1点である。切先から茎の途中まで遺存する。茎尻側を欠くが比較的遺存がよい。ただし刃部は錆膨れにより1箇所折れており，接合しない。図は復元したものである。背関は直角に切り込みが入る。刃関も浅く直角に切り込みが入ると思われるが，錆膨れのためやや不明瞭である。茎の欠損部は錆に覆われており，古い欠損である。刀子は東端部側の底面から出土した。切先を東端部に，刃側を北側に向けた状態である。また刀子の長軸と本遺構の長軸はほぼ平行する。1以外の出土遺物は少量の土器片である。

本遺構は，その形態と刀子の出土状況から，墓跡と思われる。なお本遺構東北方の至近にSK－240・SK－241が位置するが，それらと同種の遺構の可能性がある。時期が奈良・平安時代でないことも考えられる。

SK－244（第313図，図版106）

南部地区北側の24M－43グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，長径1.4m，短径1.3m，深さ0.6m前後を計測する。底面は平らで堅く，壁は垂直的に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体である。ロームの包含量は少量である。下層に炭化物粒を少量含む。少量の土器片が出土した。図示できたものは，ロクロ土師器杯1点である。口縁・体部の小破片である。外面に正位と思われる墨書があるが，欠損部に続くこともあって判読できない。墨痕はやや薄い。

なお本遺構の北西側が張り出しているが，深さが20cm弱程度のやや浅いものである。周囲には耕作機械による撹乱が密に入っており，この部分も撹乱と思われる。

SK－245（第314図，図版106）

南部地区北側の24M－42グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，径1.3m，深さ0.5m前後を計測する。底面は平らで堅く，壁は垂直的に立ち上がる。堆積土は黒褐色土・暗褐色土主体で，壁際を除いてローム粒は少ない。焼土が底面よりやや上部にみられる。若干量の遺物が出土した。図示できたものは4点である。1はロクロ土師器杯である。内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。外面も口縁部付近はかなり黒ずんでいる。2は長頸壷である。須恵質の焼成であるが，内面は釉が施されている可能性がある。胎土にやや粒径の大きな小石を含む。外面の色調はやや黄色みを帯びた灰色である。須恵器より

も新しい時期の可能性が考えられる。３は千葉産の須恵器甕である。１～３はいずれも小破片である。４は鉄製の角釘で，かなり長さがある。錆のため所々でわずかに欠損するが，ほぼ完形である。重量感があり，新しい時期のものと思われる。位置のわかる１・３・４は堆積土中・上層からの出土である。

SK－246（第314図，図版106）

南部地区北側の24M－42グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，長径1.4m，短径1.3m，深さ0.5m前後を計測する。底面は平らで堅く，壁は垂直的に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体で，ロームの包含は少ない。上層は少量の山砂・焼土ブロックを含む。上位から中位にかけての一部が耕作機械による撹乱を受けている。少量の遺物が出土した。図示できたものはロクロ土師器杯２点である。１・２とも被熱による器面の荒れ・剥落及び変色がみられる。特に内面は顕著である。１は下層から出土し，２は下層・上層出土の破片が接合している。

SK－247（第314図，図版106）

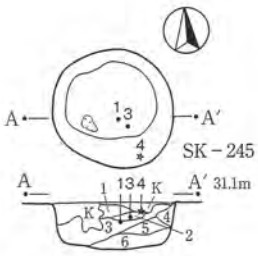
南部地区北側の24M－32グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，径1.1m，深さ0.6m前後を計測する。底面は平らで堅く，壁は垂直的に立ち上がる。堆積土は暗褐色土・黒褐色土で，ローム粒・ロームブロックをやや多く含む。上位は耕作機械による撹乱を受けている。若干量の遺物が出土した。図示できたものは３点である。１の器種は不明である。何らかの土器の脚部とみたが，口縁部かもしれない。内外面とも強いヨコナデが施されている。白色粒等の砂粒を多く含む。調整はやや雑ではみ出した端部内面もそのままの状態である。焼成も若干あまい。２は土師器甕である。口縁端部が内湾する。３も器種不明の製品である。外面は手持ちヘラケズリに近い粗いナデが施されている。やや角張っており，上からは円形ではなく，丸みをもつ方形となるように思われる。内面はナデが施されている。胎土はあまり精良でなく，白色粒等の砂粒・小石を多く含む。焼成もややあまく，あまり高温で焼成されていないと思われる。１・３の時期は奈良・平安時代でなく，かなり新しい可能性が考えられる。いずれも中・上層からの出土で，撹乱部分からの出土の可能性もある。

SK－248（第314図，図版107）

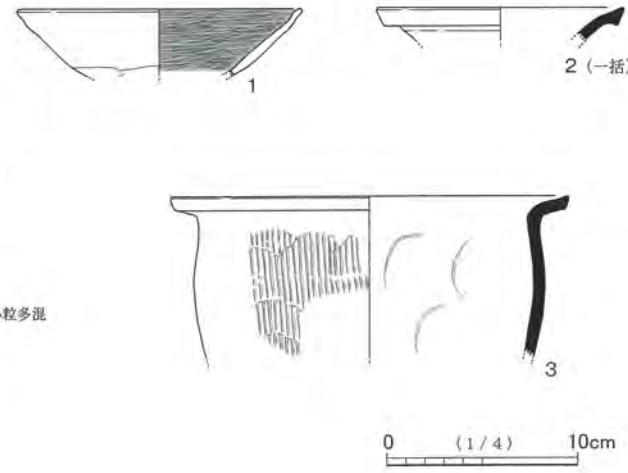
南部地区北側の24M－41グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，長径1.5m，短径1.4m，深さ1.2m前後を計測する。底面は平らで，硬化している。壁は垂直的に立ち上がる。堆積土は黒色土・黒褐色土主体である。中位を主体としてロームをやや多く含むが，色調は暗い。しかし全体的にかなり均一であり，一気に埋め戻された土層と思われる。上位の一部は耕作機械による撹乱を受けている。若干量の遺物が出土した。図示できたものは４点である。１・２はロクロ土師器杯である。体部の小破片で，ともに外面に墨書がみられる。遺存が少なく，双方とも判読できない。３は緑釉陶器碗である。内外面に深緑入りの釉が掛かっている。破断面内面は暗灰色の色調である。４は須恵器大甕の胴部破片である。外面は黒灰色の色調である。上部に黄灰色の自然釉がみられるので，肩部周辺の破片と思われる。内面の色調は暗灰色である。胎土は淡黄色の小石を多く含む。硬質の焼成であり，東海産であろう。４は南寄りの中層から出土した。１～３は出土位置が不明である。

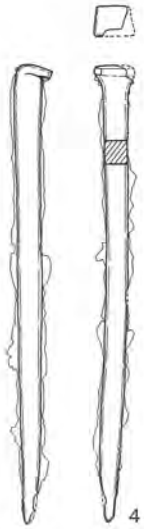
SK－249（第315図）

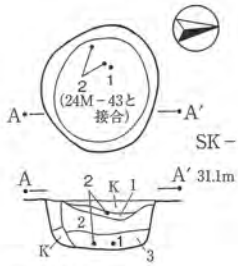
南部地区中央の24M－81グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，長径1.5m，短径1.4m，深さ1.2m前後を計測する。北側に若干張り出しているが，かなり浅い。本来的なものか不明瞭であり，形態や規模の対象から外している。底面は平らである。壁は垂直よりも内側に傾き，オーバーハングしている。底



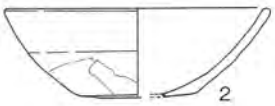

SK－245
1．黒褐色土　ローム微粒微混
2．暗褐色土　黒褐色土，ローム微粒・小粒多混
3．黒褐色土　ローム粒少混
4．明褐色土　ローム微粒多混
5．暗褐色土　ローム粒少混
6．黒褐色土　ローム微粒微混

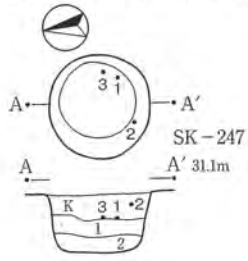


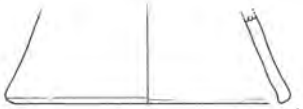



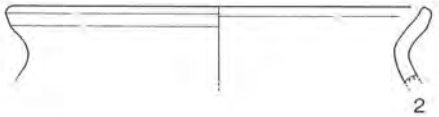

SK－246
1．黒褐色土　カマド構築材砂粒，焼土ブロック少混
2．黒褐色土　ローム微粒，ブロック少混
3．黒褐色土　ローム粒，ブロック微混

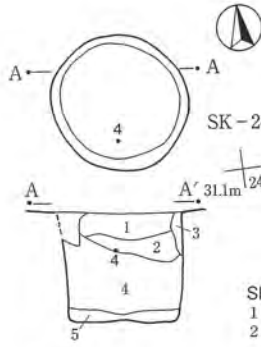



SK－247
1．暗褐色土　ローム粒多混
2．黒褐色土　ローム粒，ブロック多混






SK－248
1．黒褐色土　ローム微粒，小粒微混
2．黒褐色土　ローム微粒，小粒多，ブロック少混，しまり弱
3．黒褐色土　ローム粒少混
4．黒褐色土　ローム微粒，ブロック多混，しまりやや弱
5．黒色土　ローム微粒，小粒微混

第314図奈良・平安時代土坑（3）

面が確認面よりも広く，径が1.7m～1.8mである。粉状の骨の散布範囲が土坑中上位，堆積土４層程度のところにみられる。同様に粉状の骨及び炭化物・灰の散布範囲が下層から底面にかけてみられる。堆積土は黒色土・暗褐色土主体であるが，中・下層はローム粒・ロームブロックを多く含む。上層はロームが少ない。最上層は少量の焼土・山砂を含むが，南方至近に位置するSI－186からの流れ込みであろう。堆積土は埋め戻されている。

若干量の遺物が出土した。図示できたものは４点である。１は千葉産の須恵器杯である。底部付近の一部の破片である。外面の重ね焼き痕が顕著である。２はロクロ土師器杯である。底部から体部の一部の破片である。底部外面の調整は回転糸切り後無調整である。体部外面と底部外面に黒灰色の物質が付着しているが，墨書かどうか不明瞭である。特に体部は破断面と内面も黒ずんでおり，煤の付着と思われる。また底部内面にも黒ずむ部分があるが，同様に不明瞭である。３は新治窯産の須恵器甕である。白雲母と灰白色の小石を多く含む。４は土師器甕である。器壁が厚く，口縁端部外面はわずかに内湾する。

SK－250（第315図，図版107）

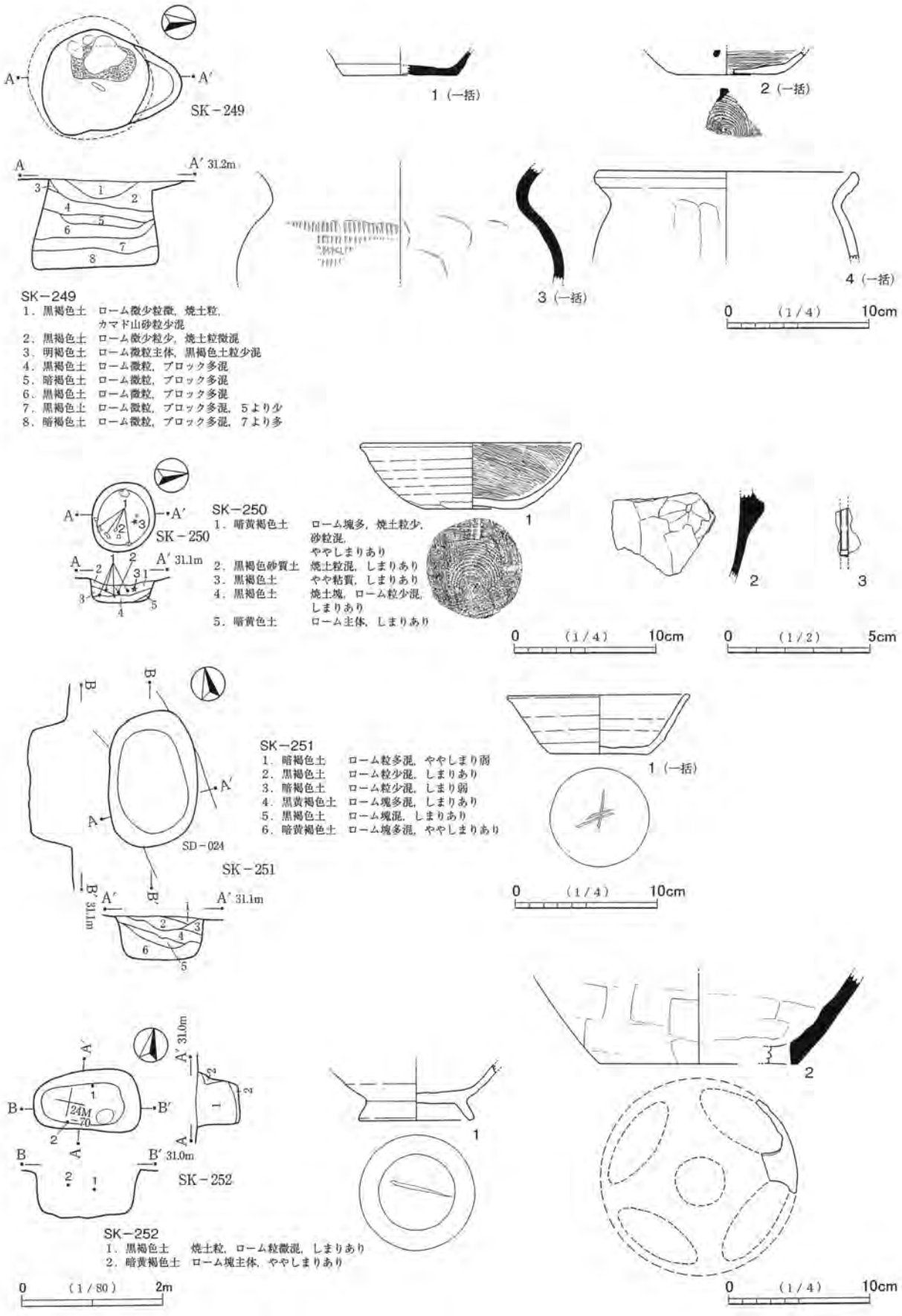
南部地区北側の24M－64グリッドを中心に位置する。SD－023と重複し，本遺構が切られていると思われる。平面形は円形を呈し，長径1.0m，短径0.9m，深さ0.3m前後を計測する。底面は平らで，壁は急に立ち上がる。堆積土は上位の一部が暗黄褐色土で，ロームブロックを多く含む。それ以外は黒褐色土主体で，ローム粒の包含は少量である。また全体に若干の焼土を含み，下位はブロック状のものがみられる。若干量の遺物が出土した。図示できたものは３点である。１はロクロ土師器杯である。底部は遺存するが，口縁・体部の遺存は2/5程度である。器面の剥離痕が底部内面に顕著である。２は把手をもつ甑の胴部破片である。千葉産の須恵器と思われるが，須恵器窯で焼成されていない可能性がある。外面は縦方向の手持ちヘラケズリが施され，内面はナデ調整である。タタキ目及び当て具痕はみられない。把手は不整な山形を呈し，貼り付けは雑である。３は棒状の鉄製品である。釘，紡錘車の紡軸，鉄鏃の茎等が考えられるが，製品を特定しがたい。１～３で，底面に接して出土したものはない。

SK－251（第315図）

南部地区北西側の23M－59グリッドを中心に位置する。SD－024と重複し，本遺構が切られていると思われる。平面形は楕円形を呈し，長径1.9m，短径1.2m，深さ0.6m前後を計測する。底面は平坦で，堅くしまっている。壁は急に立ち上がる。堆積土は中下位でロームブロックを多く含み，最上層もローム粒を多く含む。黒みの強い土層と黄色みの強い土層が互層となる部分もあり，埋め戻された土層とみてよいものである。少量の遺物が出土した。図示できたものはロクロ土師器杯１点である。口縁・体部の1/2と底部が遺存する。底部外面に「キ」状のヘラ書きがある。ヘラ書きの線はヘラミガキ状のものであり，かなりわかりにくいものである。色調は褐色であるが，口縁端部の一部が黒灰色に変色している。その周囲の内外面は器面の剥離が目立ち，二次的に火を受けたものと思われる。遺構内での平面位置・高さは不明である。

SK－252（第315図，図版107）

南部地区北西側の24M－70グリッドを中心に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長径1.5m，短径0.9m，深さ0.6m前後を計測する。底面は細かい凹凸はあるが，傾斜はない。壁は急に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体である。ロームの包含量も概して少ないが，最下層はロームブロックが主体である。その上面の南東側部分で，焼土が検出された。若干量の遺物が出土した。図示できたものは２点である。１はロクロ土師器高台付杯である。高台部周辺の破損で，底部には欠損がない。底部外面に１条線のヘラ書き




第315図　奈良・平安時代土坑（4）

がある。高台部は低く小さいもので，「ハ」の字に開く。器面の磨耗・剥離がみられ，特に内面に顕著である。北壁側中央の上層から出土した。２は千葉産の須恵器甑である。胴部下位から底部にかけての一部の破片である。５孔式の底部であるが，孔の遺存は周囲の２孔の一部である。胴部内面は強いナデ・ヘラナデが施されている。わずかに掌紋がみられる。胴部外面にはタタキ目がみられない。ヘラケズリにより完全に消されたと思われる。南壁側やや西寄りの上層から出土した。

SK－253（第316図）

南西部地区東側の23M－46グリッドを中心に位置する。SD－026と重複し，本遺構が切られていると思われる。平面形は円形を呈し，長径1.5m，短径1.4m，深さ0.8m前後を計測する。底面は細かい凹凸はあるが，傾斜はない。底面から壁へはやや丸みをもち，上部は垂直的に立ち上がる。堆積土は最上層が黒褐色土であるが，中層以下は暗黄褐色土主体で，ローム粒・ロームブロックを多量に含む。埋め戻された土層である。若干量の遺物が出土した。図示できたものは２点である。１はロクロ土師器杯である。内面は器面の剥離痕が顕著である。赤みの強い部分があり，二次的に火を受けている。２は鉄製の刀子である。刃部が遺存するが，茎は刃部際がわずかに遺存する。細身の刀子である。背関は浅く直角に切り込みが入る。刃関は錆による欠損のためやや不明瞭であるが，浅い直角関と思われる。１・２とも上層から出土した。

SK－255（第316図）

南西部地区北西側の24M－60グリッドを中心に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.5m，短径1.1m，深さ0.1m前後を計測する。底面は中央がやや低いがおおむね平坦である。壁はやや緩やかに立ち上がる。しかし浅いため，確認面より上方は急になるかもしれない。堆積土は黒褐色土主体である。下層は若干のロームブロックを含む。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

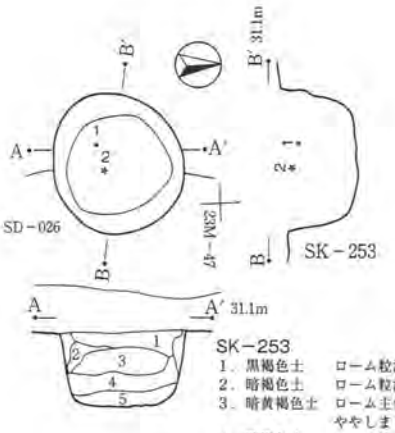
SK－256（第316図，図版107）

南部地区北西側の23M－79グリッドを中心に位置する。SD－024と重複し，本遺構が切られていると思われる。平面形は円形を呈し，長径0.9m，短径0.8mで，深さは浅い部分が0.15m前後，深い部分は0.5mである。浅い底面の南側に深いピットがある。底面の浅い部分は丸みをもち，壁は緩やかに立ち上がる。ピットは柱穴状の形態である。堆積土は山砂主体である。ピット内も底面まで山砂が充填されており，上部ほど焼けた山砂が多い。浅い部分も２箇所に焼けた山砂ブロックがあり，繊維が混入している。山砂は近隣に所在する竪穴住居のカマドの廃材であろう。若干量の遺物が出土した。図示できたものは２点である。１は千葉産の須恵器杯である。口縁部内面に油煙が付着しており，灯明具として使われた土器である。ピットの上部から出土した。内外面の一部に山砂が付着している。２は在地の土師器甕である。やや小型の甕である。口縁部から胴部中位付近までの一部の破片である。ピットの上部付近で，ほぼ確認面上から出土した。遺存が少ないが，本来はより多く遺存していた可能性がある。

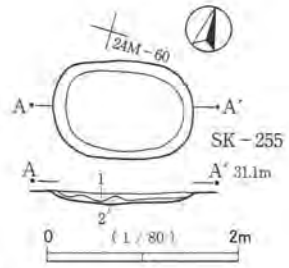
SK－264（第316図）

南西部地区東側の23M－55グリッドを中心に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.7m，短径1.4m，深さ0.5m前後を計測する。底面は平らで，壁は急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，若干のローム粒・ロームブロックを含む。若干量の遺物が出土した。図示できたものは２点である。１は千葉産の須恵器杯である。体部下位から底部にかけての破片である。体部の器壁がかなり薄い。遺構内での位置は不明である。２は土師器甕で，やや小型の土器である。内面は剥離痕が目立つ。やや東寄りの中位から出土した。

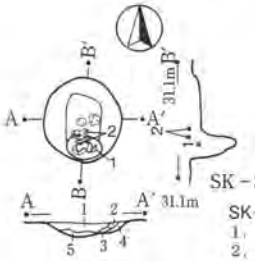
SK－265（第316図，図版107）



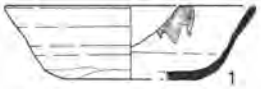

SK－253
1．黒褐色土　ローム粒混，ややしまりあり
2．暗褐色土　ローム粒混，しまりあり
3．暗黄褐色土　ローム主体，ローム塊多混，ややしまりあり
4．暗褐色土　ローム塊多混，ややしまあり
5．暗黄褐色土　ローム主体，ローム塊混，ややしまりあり

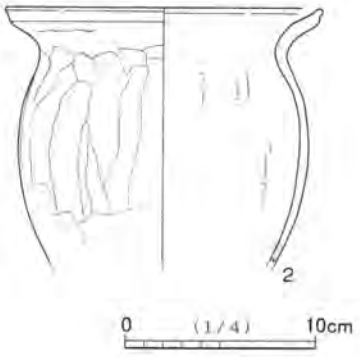


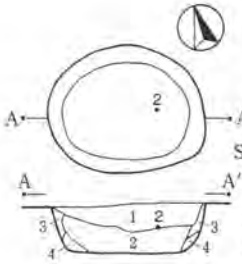

SK－255
1．黒褐色土　ローム粒少混，しまりやや弱
2．黒褐色土　ローム塊混，しまりややあり



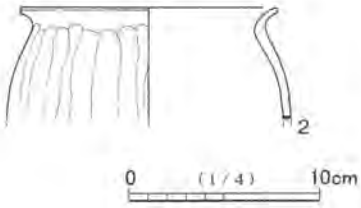

SK－256
1．淡褐色砂質土　山砂粒主体，しまり弱
2．黒褐色土　砂粒混，しまり弱
3．橙色砂質土　繊維混，しまり弱
4．暗黄褐色土　砂粒混，しまり弱
5．灰褐色砂質土　焼砂混，しまり弱

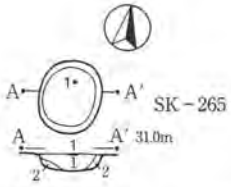




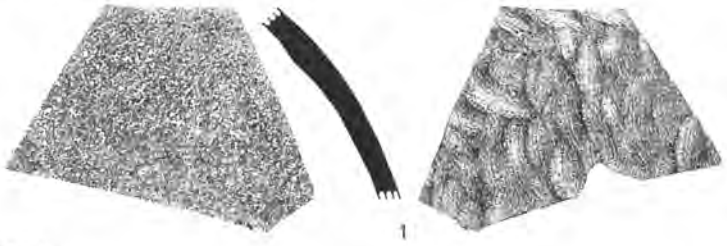



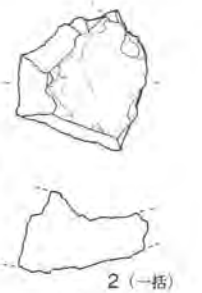

SK－264
1．暗褐色土　ローム塊，炭化粒混，しまりあり
2．暗褐色土　ローム微，焼土粒混，しまりあり
3．黄褐色土　ローム土主体，ややしまり弱
4．暗黄褐色土　ローム土混，しまりあり

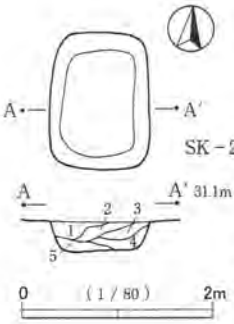


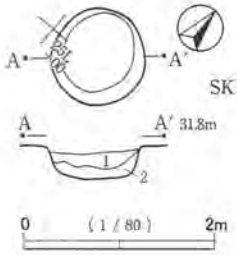

SK－265
1．暗褐色土　焼土粒混，ややしまりあり
2．暗黄褐色土　ローム土混，ややしまりあり






SK－276
1．暗褐色土　ローム粒混，ややしまりあり
2．暗黄褐色土　ローム塊混，しまりあり
3．暗褐色土　ローム塊混，ややしまりあり
4．暗黄褐色土　ローム土主体，ややしまりあり
5．暗褐色土　ローム塊少混




SK－294
1．黒褐色土　灰黒褐色土主体，黒色土，斑状均一混
2．灰黒褐色土　黒色土，ローム粒少混

第316図　奈良・平安時代土坑（5）

南西部地区やや東側の23M－44グリッドを中心に位置する。平面形は円形に近い楕円形を呈し，長径0.8m，短径0.7m，深さ0.2m前後を計測する。底面は中央がわずかに深く，やや丸みをもつ。壁は急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，若干の焼土粒を含む。若干量の遺物が出土した。図示できたものは2点である。1は須恵器甕である。大型の甕の胴部破片である。外面は自然釉が全面に付着している。灰緑色の色調を呈し，光沢をもつ部分も多い。内面は当て具痕が顕著である。当て具痕は同心円文であるが，かなり磨り消されている。東海産と思われる。1はほぼ確認面上から出土した。2は鉄滓で，椀形の鍛冶滓の一部である。

SK－276（第316図，図版108）

南西部地区東側の23M－25グリッドを中心に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長径1.5m，短径1.0m，深さ0.3m前後を計測する。底面はほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土・暗黄褐色土である。最下層（5層）はロームの包含が少ないが，その上部層（4層）はローム主体である。上・中位層も若干のローム粒･ロームブロックを含む。やや多量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－293（第317図，図版108）

中央部地区東側の24L－09グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，長径1.0m，短径0.9m，深さ0.3m前後を計測する。底面は平らで，壁は急に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体で，少量のローム粒を含む。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－294（第316図，図版108）

中央部地区東側の25K－90グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，径1.0m，深さ0.3m前後を計測する。底面は平らで，壁は急に立ち上がる。堆積土は少量のローム粒を含む黒褐色土である。下層は上層よりもややロームが多い。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－296A（第317図，図版109）

中央部地区東側の24L－09グリッドを中心に位置する。SK－296Bと重複し，本遺構が切っている。平面形は円形を呈し，径1.3m，深さ0.15m前後を計測する。底面は平らである。壁は緩やかに立ち上がるが，浅いため確認面より上方は急になるかもしれない。堆積土は若干量のローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土である。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－296B（第317図，図版109）

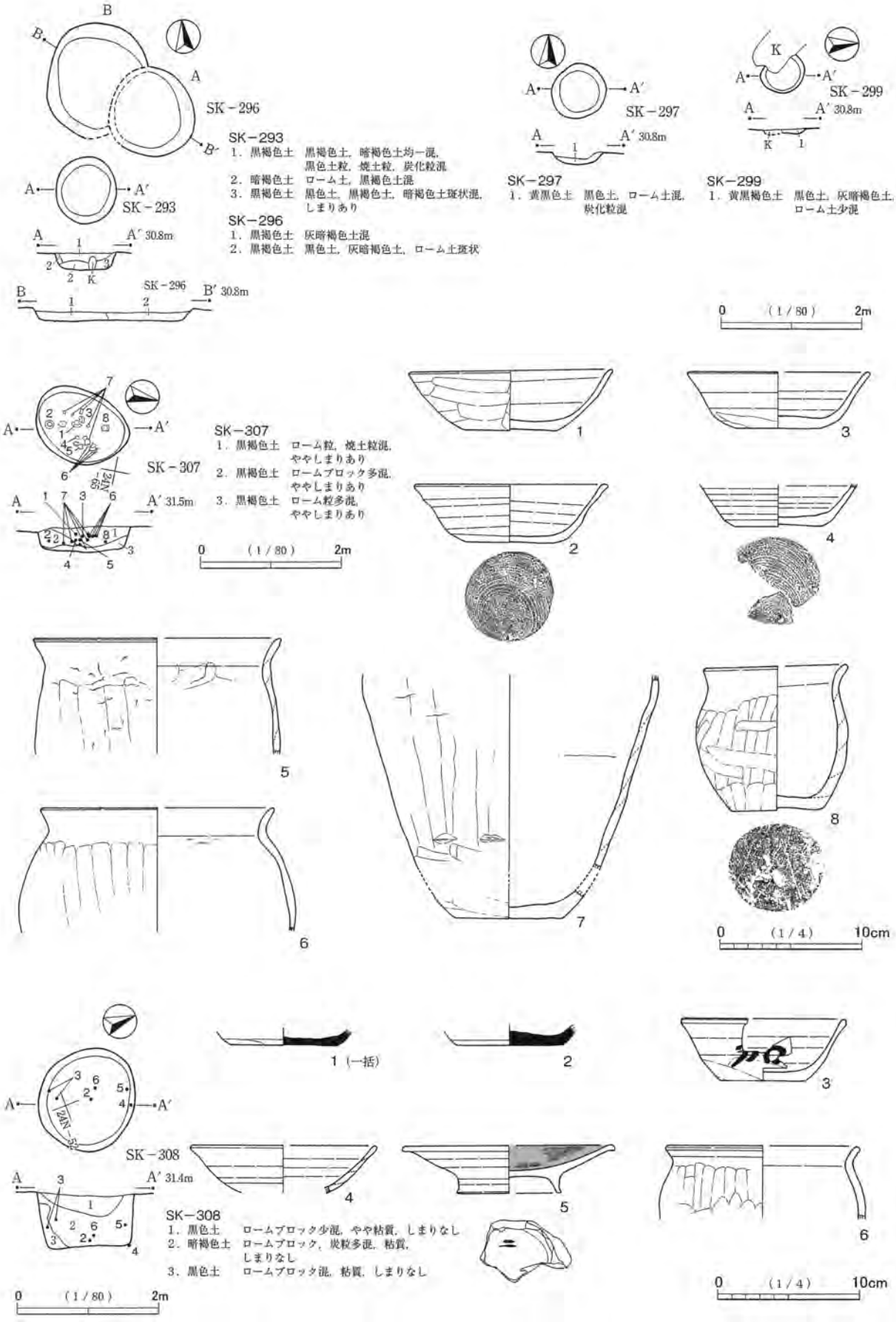
中央部地区東側の24L－09グリッドを中心に位置する。SK－296Aと重複し，本遺構が切られている。平面形は円形を呈し，長径が1.6m，短径が推定1.4m，深さ0.15m前後を計測する。底面は平らである。壁は緩やかに立ち上がるが，SK－296A同様浅いため，確認面より上方が急になる可能性がある。堆積土は少量のローム粒を含む黒褐色土である。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－297（第317図，図版109）

中央部地区東側の25L－00グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，径0.8m，深さ0.2m前後を計測する。底面は壁際がわずかに高く，若干丸みをもつ。壁は緩やかであるが，確認面より上方は急になる可能性がある。堆積土はローム粒・炭化粒を含む黒褐色土である。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－299（第317図，図版109）

中央部地区東側の24K－97グリッドを中心に位置する。西側が撹乱を受けて欠損する。平面形は円形を




第317図　奈良・平安時代土坑（7）

呈し，長径0.6m，短径0.5m，深さ0.1m前後を計測する。底面は攪乱により一部が不明であるが，ほぼ平坦であろう。壁は緩やかだが，確認面より上方は急になる可能性がある。堆積土はローム粒を含む黒褐色土である。少量の土器片が出土したが，図示できたものはない。

SK－307（第317図，図版110）

南部地区南側の24N－64グリッドを中心に位置する。SI－257を切っている。平面形は楕円形を呈し，長径1.3m，短径1.1m，深さ0.4m前後を計測する。底面は傾斜がないが，細かい凹凸がある。壁は急に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体である。ローム粒が南側に多くみられるが，その他はあまり多くない。下層も少量である。また若干の焼土粒を含む。

多量の土器片が出土した。図示できたものは8点で，土坑としては数が多い。1～4はロクロ土師器杯，5～8は在地の土師器甕で，8は小型品である。2はまったく破損のない完形である。1は2/3強，3は1/2強の遺存であるが，4は遺存が少ない。1は外面の手持ちヘラケズリが口縁端部近くまで施されているが，ロクロ成形の土器と思われる。2・4の底部調整は回転糸切り後無調整である。ただし2は体部下位の回転ヘラケズリが糸切り痕を切っている。2～4は器面が荒れており，特に3は顕著である。また2・3は一部に赤みを帯び，3は底部内外面がやや暗い色調である。4も外面に煤が付着しているが，若干光沢があり，油煙と思われる。4は灯明具の可能性があり，2・3も二次的に火を受けているが，1については不明瞭である。

5は小破片で，7も遺存が少ない。6の口縁部は1/2弱遺存するが，全体としては遺存が少ない。7はやや大型の甕である。胴部が長く，また膨らみがない器形である。5～7の遺存が少ないのに対して，8はかなり遺存のよい土器である。欠損部は口縁端部の数箇所である。非常に脆い土器であり，本来は完形であったかもしれない。上部の一部が若干割れて接合するが，中位以下は破損のない土器である。底部外面に木葉痕がみられるが，ナデによりやや不明瞭である。ただしナデはあまり丁寧なものではない。内面のナデも粗いものである。器壁が厚く，焼成はあまい。作りが雑で，やや手捏土器的な土器である。5～8は器面の赤みや，荒れ・剥離等がみられ，いずれも被熱痕跡が顕著である。6は外面の一部に山砂が付着し，7は底部内面に焦げた炭化物が付着している。

1～8はいずれも底面から若干浮いて出土した。1～3は正位での出土であるが，わずかに傾いていると思われる。8は横に倒れた状態で出土した。その他の土器と合わせて，出土状況に整然とした様相はみられない。しかし下記の諸点から，土器群には若干の祭祀性がうかがえる。まず割れのないまったくの完形土器が出土していること，第2に杯群の多くが火を受けており，灯明具が存在すると思われることであり，第3に手捏的な土器が出土していることである。出土土器群の一部または全部が何らかの祭祀に使用された後，若干の土量が堆積した窪みに一括して廃棄された，というような状況が想定される。そのさいに本遺構において焼却されたことも考えられるが，焼土量が少ないことから断定しがたい。なお土器群の多くは，本来的には日常的に住居で使用されていたものと思われる。

SK－308（第317図，図版110）

南部地区南側の24N－41グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し，長径1.5m，短径1.4m，深さ0.8m前後を計測する。底面は平らで，やや硬化している。壁は垂直的に立ち上がる。堆積土は黒色土・暗褐色土である。ロームの包含は少ないが，炭化粒を多く含む。埋め戻されていると思われる。

多量の遺物が出土した。図示できたものは6点で，土坑のなかでは多い。1・2は千葉産の須恵器杯，

3・4はロクロ土師器杯，5はロクロ土師器高台付杯である。6は在地の土師器甕で，小型品である。1・2は底部付近の破片である。1は底径がやや大きく，2は箱形的な器形になる可能性がある。1の底部外面は手持ちヘラケズリが，2の底部外面は回転ヘラケズリが施されている。3は1/2弱の遺存である。口縁・体部外面に「加」と書かれた墨書が正位でみられる。5も底部外面に「二」の墨書がある。内面に黒色処理・ヘラミガキが施されている。4の遺存は口縁・体部の一部である。端部の一部が黒ずんでおり，二次的に火を受けた可能性がある。6は口縁部から胴部にかけての一部の破片である。口縁部内面が強く焦げている。出土遺物は概して遺存が少なく，平面的にも層位的にも散在的な出土状況である。近くに所在する竪穴住居や掘立柱建物で使用されていたものが流入したのであろう。

SK－311（第318図，図版110）

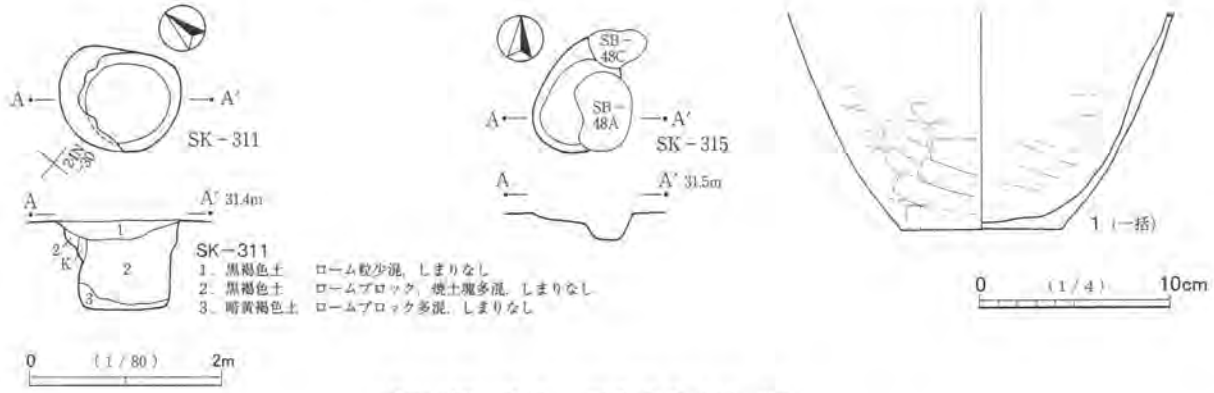
南部地区南西側の24N－30グリッドを中心に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.3m，短径1.1m，深さ0.9m前後を計測する。底面は平らで，やや硬化している。壁は垂直的で，やや内側に傾く部分もみられる。堆積土は3層に分かれるが，中層が厚い。中層はロームブロック・焼土ブロックを多く含む黒褐色土層である。上層はロームの含有が少なく，下層はロームブロック主体である。埋め戻されていると思われる。若干の遺物が出土したが，図示できたものはない。

SK－315（第318図）

南部地区南側の24N－44グリッドを中心に位置する。SB－048と重複するが，新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈し，長径1.2m，短径は推定0.9m，深さ0.3m前後を計測する。底面はSB－048との重複により不明瞭であるが，南から北にやや下っている。SB－048と無関係であれば，深い掘り込みはないと思われる。壁は緩やかに立ち上がる。少量の遺物が出土した。図示できたものは，在地の土師器甕1点である。胴部下位から底部にかけて一部が遺存する。胴部外面は横方向のヘラケズリが，底部外面もヘラケズリが施されている。内面はヘラナデが施されている。一部で歪んでいるが，概して器壁が薄く，比較的丁寧な作りの土器である。

## 第6節　遺構外出土遺物（第319・320図，図版230・231）

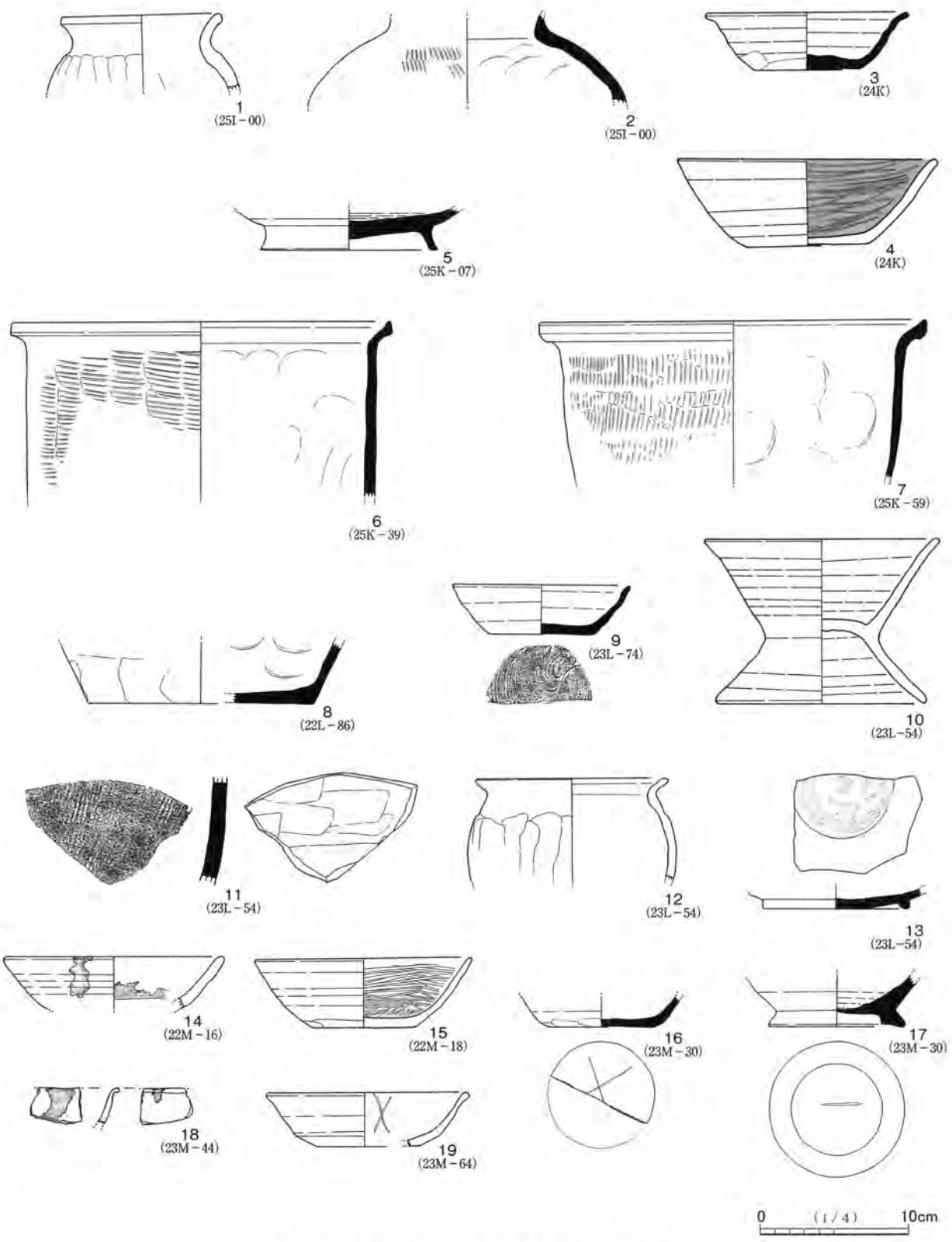
1は小型の土師器甕で，在地の土器である。器壁が厚い。2は新治窯産の須恵器短頸壺である。わずか




第318図　奈良・平安時代土坑（7）

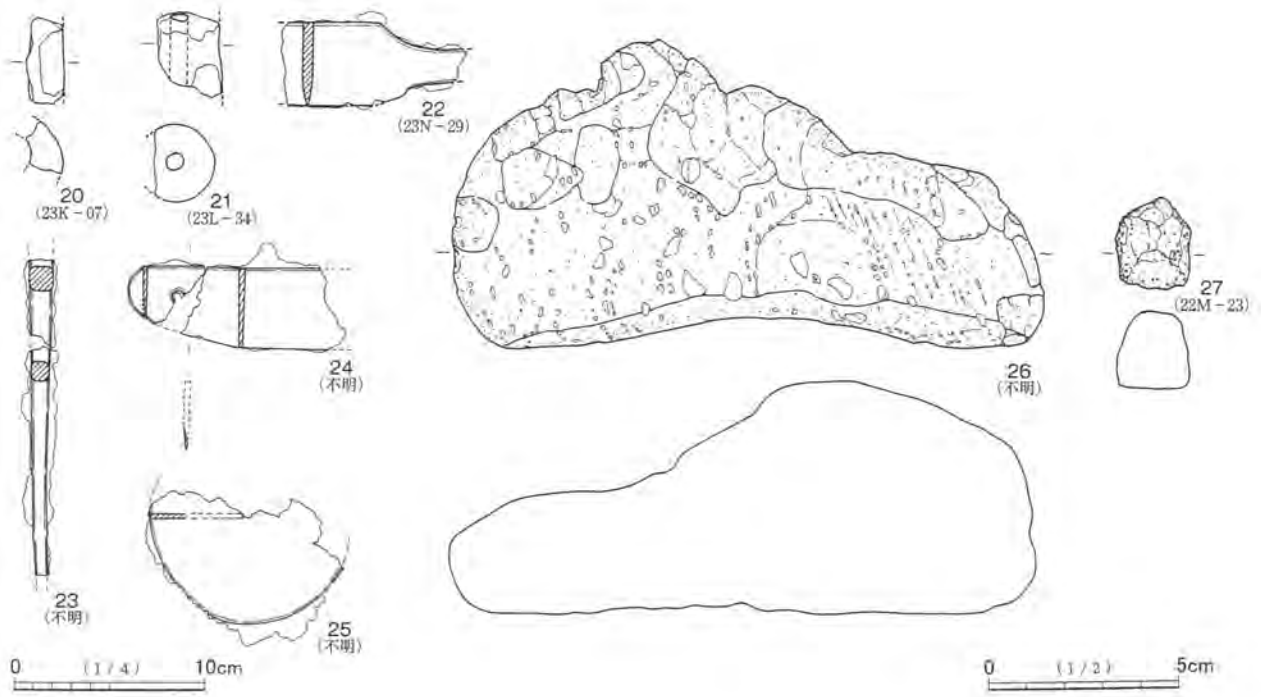
に遺存する口縁部は磨耗しているだけで，端部に近い可能性がある。非常に短い口縁部と思われる。胴部外面は丁寧なナデが施され，その前のタタキ目が痕跡的となっている。3は千葉産の須恵器杯である。4はロクロ土師器杯で，かなり大型の土器である。2/3程度が遺存する。内面に黒色処理・ヘラミガキが施

されている。底部外面中央に墨書かと思われるものがあるが，周縁にも黒ずみがあり，断定しがたい。煤の可能性も考えられる。欠損部の破断面は弧状を呈するが，遺存部分が細かく割れているため，意図的な様相とは思われない。5は新治窯産の須恵器高台付盤である。6は新治窯産の須恵器甕または甑である。遺存が少なく，口縁部が歪んでいるため，胴部が立った図となったが，本来はより傾きがあり，バケツ形の器形になると思われる。7は千葉産の須恵器甕または甑である。8も千葉産の須恵器甕である。9は東金子窯産の須恵器杯である。底部外面は回転糸切り離し後，無調整である。底部周縁で粘土が二重に貼り付けたような雑な様相を呈しているが，調整されていない。胎土は白色等の細砂粒を含み，概して緻密であるが，底部中央に小石がみられる。そこを境に割れており，破損の原因となったものかもしれない。色調は灰色で，焼成は良好である。10は足高高台付杯である。高台部がかなり大きい土器である。杯部はかなり遺存がよい。二次的な被熱により，内外面に細かい剥離痕が多くみられる。また煤も所々に付着し，特に口縁部外面の1箇所が顕著である。11は須恵器甕の胴部片である。内面は強いヘラナデにより，当て具痕が消されている。内外面の一部に滑らかな面があり，硯や砥石に転用されたものと思われる。褐色物質が内外面と破断面の一部に付着している。また外面は黄色みを帯びた部分もあるが，その部分は若干の光沢がみられる。なお外面の色調はやや暗い灰色である。褐色物質は朱墨または赤色顔料の可能性が考えられる。しかし黄色みを帯びた部分は透明感があり，古代のものとみるにはやや違和感がある。褐色物質も古代のものではないのかもしれない。産地は東海産と思われる。12は小型の土師器甕で，在地の土器である。13は須恵器高台付杯である。底部中央が高台の接地部とほぼ同じ高さか，わずかに突き出ている。色調は明るい灰色で，胎土は緻密である。湖西窯産の須恵器と思われる。底部内面に滑らかな面があり，硯に転用された土器である。14もロクロ土師器杯，口縁・体部の小破片である。内外面の一部に黒色物質が付着しているが，特に体部内面下位のものは濃い付着である。底部に続くと思われる。内面の黒色物質は濃い部分と薄い部分があり，細かいしわもみられる。剥落する様相もあるため，油煙ではなく，漆と思われる。漆容器またはパレットとして使われた土器と考える。15はロクロ土師器杯である。内面に入念なヘラミガキが施されているが，黒色処理は施されていない。16は千葉産の須恵器杯である。底部外面に現状で「×（＋）」の線刻がある。底部が1/2弱欠損するため，やや不明瞭であるが，「＋」以上の交差線にはならないと思われる。17は壺で，猿投窯産と思われる須恵器である。外面の色調は灰褐色で，赤みをもつ。内面の色調は灰色である。外面の一部に垂下する灰緑色の釉がみられる。また内面にも光沢をもつ降灰釉がみられる。高温で焼成されたため，胎土が膨張し，内面の一部が捲れ上がっている。底部には回転糸切り痕が遺存するが，高台接着時のナデにより，薄くなっている。また底部外面中央に1条線のヘラ書きがみられる。18もロクロ土師器杯の小片である。口縁部内外面に油煙が付着しており，灯明具として使われた土器である。内面は黒色処理・ヘラミガキが施されている。19はロクロ土師器杯で，一部の破片である。内面に線刻がみられる。「×」状のものと別の1条線である。「×」状のものの片方は口縁端部から底部まで，やや途切れ途切れであるが続いている。もう片方も欠損部まで続くが，その先は欠損のため不明である。1条の線刻は底部まで続かない。20は鞴羽口の小破片である。片側が灰黒色に変色しており，先端に近い部分が遺存している。21も鞴羽口の破片である。外径が細く，孔径も小さいものである。筒状のものの一部であろう。表面の一部は暗茶褐色に変色しており，羽口先端に近い部分と思われる。暗茶褐色部分の周囲は淡灰褐色の色調を呈し，その部分も比較的強く熱を受けている。外径や孔径の大きさから，SI－211の35と同一個体の可能性がある。ただし21の出土地点が遺跡中央西寄りであるのに対し，SI－211




第319図　奈良・平安時代遺構外出土遺物（1）

は遺跡南側に位置しており，両者間はかなり距離がある。その点が難点であるが，SI－211の35は先端側を欠損することから，両者は同一個体の可能性があると思われる。22～25は鉄製品である。22は刀子の刃部から茎にかけての破片である。背関は深いが，弧状をなす。刃関はやや浅く鈍角に切り込みが入る。刃部はやや幅が広く，背側も薄い。23は棒状の鉄製品である。紡錘車の紡軸，釘等が考えられるが，製品を




第320図　奈良・平安時代遺構外出土遺物（2）

特定しがたい。なお古代の遺物か，新しい時期のものか不明瞭である。24は穂摘具である。中央から片側の端部が遺存するが，逆側端部を欠損する。目釘孔が１箇所遺存するが，その部分を境に接合しない２片に割れている。刃側があまり尖らないが，使用による磨耗と，錆による影響の双方が考えられる。25は板状の鉄製品である。錆膨れが著しい。円版となる可能性がある形態であるが，中央の孔が判然としないため，紡錘車の紡輪と断定しがたい。製品名は不明としておきたい。26は軽石で，本遺跡から出土したもののなかでは最大のものである。２番目に大きいものの10倍以上の重さがあり，差が顕著である。竪穴住居から出土したものと思われるが，記載漏れにより，どの竪穴住居から出土したか不明である。27も軽石である。白みの強い色調である。

# 第6章　中・近世およびその他の遺構・遺物

## 第1節　概要

中・近世以外の遺構として何らかの根拠をあげることのできるものについては，前章までに掲載した。本章では，中・近世の遺構・遺物について記述するが，遺構に伴う遺物は少なく，遺構の詳細な時期決定をする根拠に乏しいものが多い。このため，ここで掲載するもののなかには，中・近世以外の遺構も含まれている可能性もある。また，ここでは中・近世の遺構・遺物に加え，帰属時期が不確実な遺構も掲載することを追記しておく。

本章で扱う遺構の種別毎の数量は，土壙墓７基，土坑124基，塚３基，小穴60基，溝状遺構（道路跡・境界跡・境界状柵列跡）34条，井戸状遺構１基を数える。これらの遺構種別名は，現場で呼称したものをそのまま使用しているが，井戸状遺構については本来の井戸跡としての性格は乏しい。

ここでは，以上の遺構について概要の記述を進めていくこととするが，詳細なデータは各遺構毎の観察表を参照されたい。

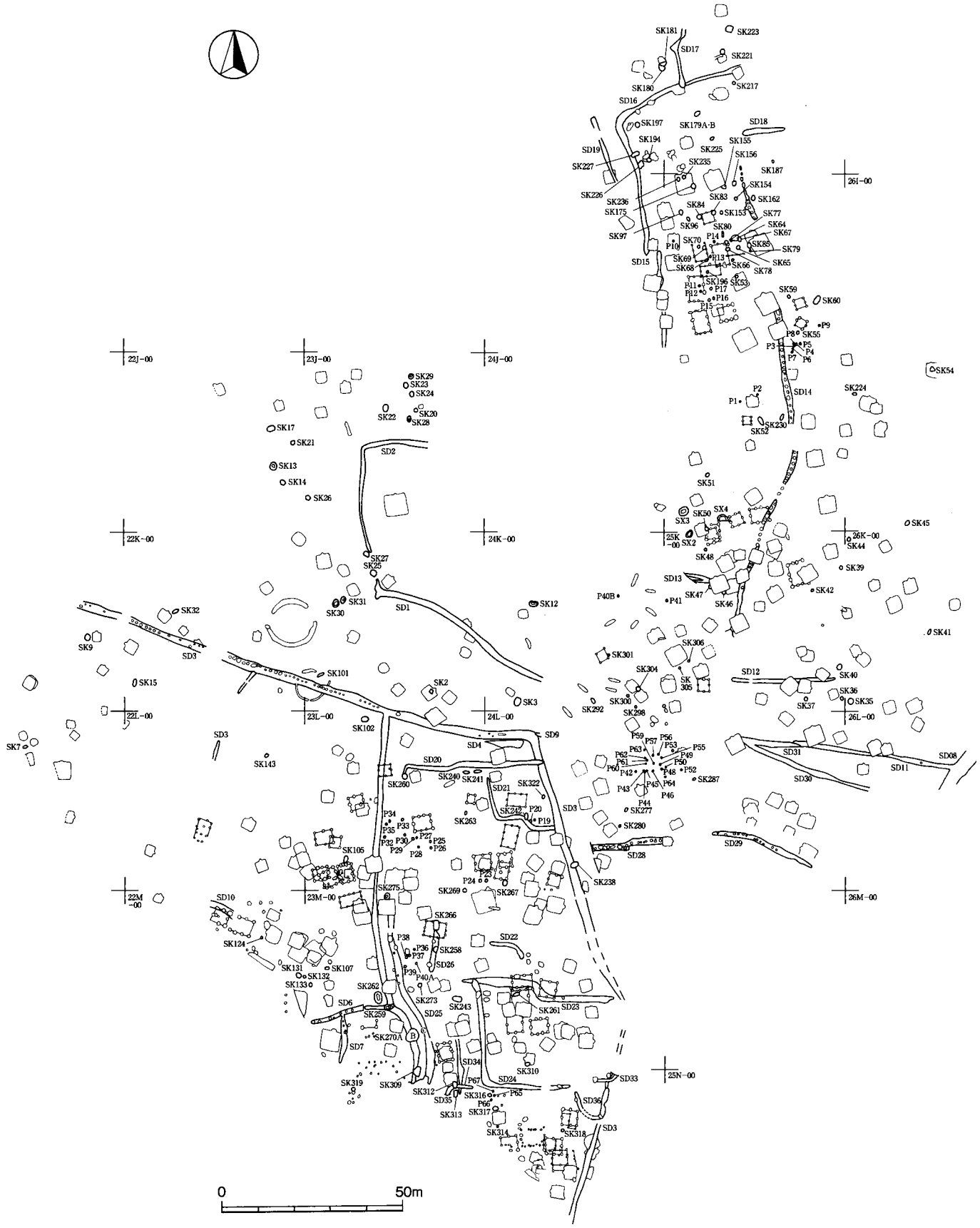
土壙墓は７基（SK－012・SK－013・SK－028・SK－029・SK－030・SK－031・SK－275）検出されたが，SK－275の１基を除くと，遺構数が比較的散漫な西側台地の北側に集中する。いずれも出土遺物はほとんどなく，詳細な時期決定をする根拠に乏しい。

土坑は124基（SK－002・SK－003・SK－007・SK－009・SK－014・SK－015・SK－017・SK－020～SK－027・SK－032・SK－035～ SK－037・SK－039～ SK－042・SK－044～ SK－048・SK－050～ SK－055・SK－059・SK－060・SK－063～ SK－070・SK－077～ SK－080・SK－083～ SK－085・SK－096・SK－097・SK－101・SK－102・SK－105・SK－124・SK－131～ SK－134・SK－143・SK－153～SK－156・SK－162・SK－175・SK－179A ～ SK－181・SK－187・SK－194・SK－196・SK－197・SK－217・SK－221・SK－223～ SK－227・SK－230・SK－235・SK－236・SK－240～ SK－243・SK－258～ SK－263・SK－266・SK－267・SK－269・SK－270A・SK－270B・SK－270C・SK－273・SK－277・SK－280・SK－287・SK－292・SK－295・SK－298・SK－300・SK－301・SK－304～ SK－306・SK－309・SK－310・SK－312～ SK－314・SK－316～ SK－319・SK－322）検出された。これらの土坑は，遺跡が立地する台地のほぼ全面にみられるが，西側台地の北西側がやや希薄で，東側台地の北側がやや密集気味である。時期については，遺構に伴う遺物がほとんどないため，土坑の多くは時期不明である。土坑のなかには出土遺物や形態等から，帰属時期が判明したものもある。それらはすでに，前章までに取り上げている。

塚は３基（SX－002～ SX004）検出され，ともに隣接して構築されている。台地中央部に北から南に侵入する支谷の先端部を望む，東側台地の西側縁辺部に立地している。SX－004の盛土中および，SX－002・SX－003の周辺から「新寛永」銭が出土しており，いずれも江戸期の所産と考えられる。

小穴は60基（P－001～ P－017・P－019・P－020・P－023～ P－030・P－032～ P－046・P－048～ P－050・P－052・P－053・P－055～ P－057・P－059～ P－067）検出された。検出状況は５か所前後で集中する傾向がみられ，いずれの小穴もほとんどが時期不明である。

溝状遺構については，道路跡・境界跡・境界状柵列跡を総称しており，34条（SD－001～ SD026・SD－




第321図　中・近世遺構位置図

028～SD031・SD－033～SD036）検出された。出土した遺物は銭貨や一部の鉄製品が遺構に伴うものと考えられるが，土師器・須恵器等の土器類のほとんどは流れ込みと思われる。時期的には中世に属するものが多いと思われるが，境界状柵列跡に関しては「新寛永」銭が出土しており，江戸期の可能性も考えられる。

井戸状遺構１基（SK－238）は遺跡中央部南側で検出された。ここでは井戸状遺構と呼称しているが，形態等からみて，本来の井戸跡とは考えにくいものがある。覆土には火山灰層がみられ，近世の所産と考えられる。

次節より，各遺構毎の記述を遺構番号順に進めることとする。しかし，遺構番号順の記述だと遺構検出地点がとびとびになり，位置の把握に混乱をきたす恐れがある。そのため，遺構の位置を大まかに把握することと，遺構の位置の記述に統一性を持たせるために設定した，地区区分（第１章「第６図　地区区分図」）を参照されたい。

## 第２節　土坑墓

検出された土坑墓を地区区分でみてみると，北西部３基，西部２基，中央部１基，南西部１基の計７基となる。このうち，北西部と西部及び中央部北側は遺構数が希薄な地区であり，南西部の１基を除けば，遺構数が希薄な地点に集中する傾向がみられる。

SK－012（第322図，図版100）

中央部地区北端の24K－42グリッド周辺，北側には北から南に侵入する支谷の先端部を望む，緩斜面上に単独で位置する。近接する遺構は，南西約1.5mに奈良・平安時代の竪穴状遺構がある。この地区は緩斜面上にあるため遺構は希薄である。平面形は本遺跡の土壙墓のなかでは唯一の隅丸長方形を呈し，長径2.3m，短径0.9m，深さ0.6m前後を測る。底面は平らで固く締まっており，壁は東側で直であるが，全般的には急に立ち上がる。出土遺物はなく，人骨も検出されなかった。

SK－013（第322図，図版100）

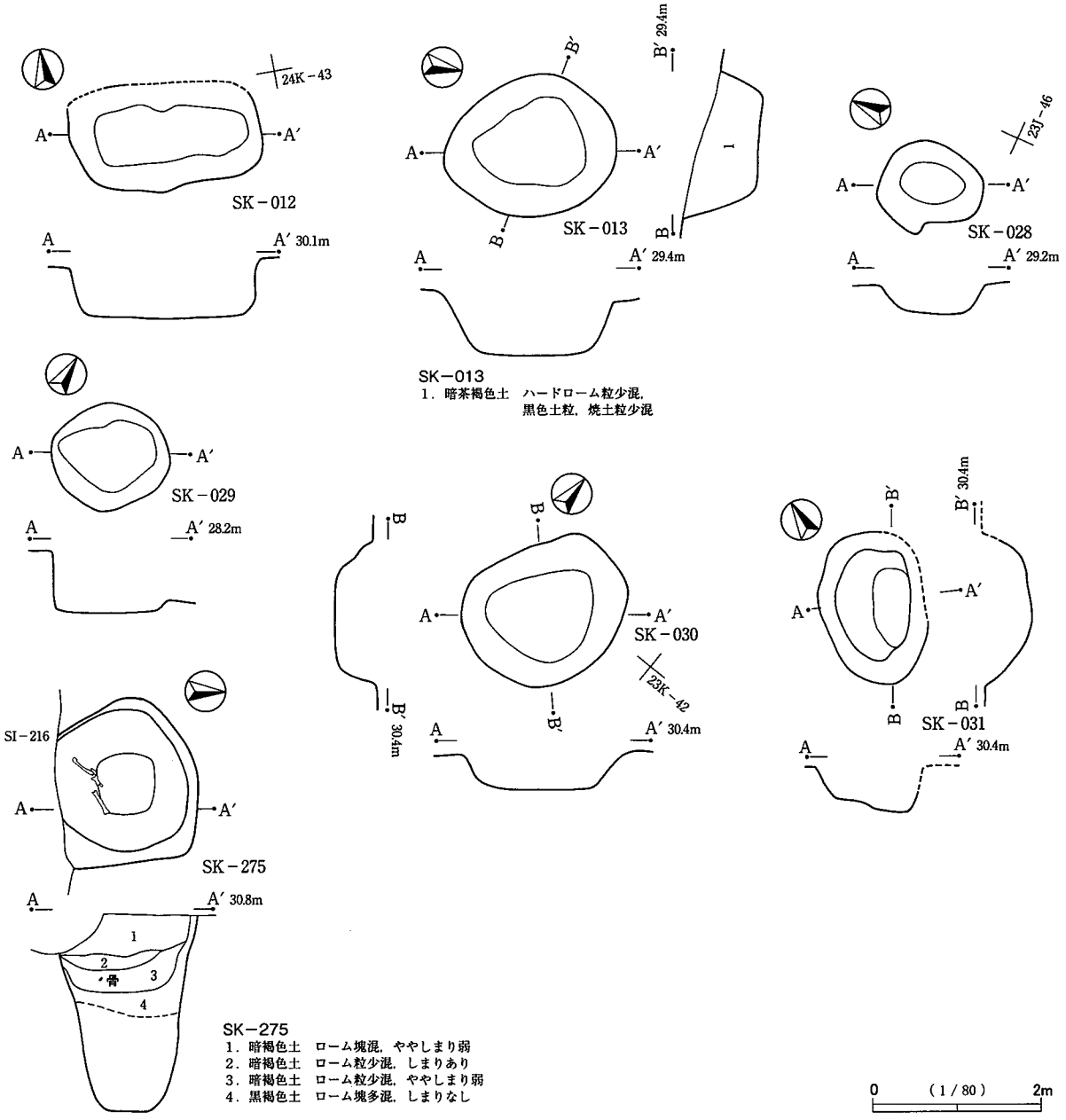
調査区西側台地の22J－88グリッド周辺，北西部地区では中央やや南西よりに単独で位置する。近接する遺構は中・近世土坑のSK－014で，約４m南東に隔たっている。平面形は不整形を呈し，長径2.1m，短径1.7m，深さ0.8m前後を測る。底面は平らで，壁は北側で急，南側でやや緩やかに立ち上がる。堆積土はハードローム粒及び焼土粒が少量ずつ混入する一層で，埋め戻された土層である。出土遺物はなく，人骨も検出されなかった。

SK－028（第322図，図版101）

調査区西側台地北東端部の23J－35グリッド周辺，北西部地区では東端に単独で位置する。東側に北から南に侵入する支谷を望む緩斜面上である。周辺には中・近世土坑が隣接し，SK－020が北東約２mに近接する。平面形は楕円形を呈し，長径1.2m，短径0.9m，深さ0.4m前後を測る。底面は平らで固く締まっているが，南東側の斜面に向かいやや傾斜している。壁は全体的に緩やかに立ち上がる。堆積土内からは流れ込みの土師器極小片が数点出土したのみである。人骨は検出されなかった。

SK－029（第322図，図版102）

調査区西側台地北東端部の23J－15グリッド周辺，北西部地区では最北東端に単独で位置する。SK－028から北へ約８m隔たる斜面上である。周辺には中・近世土坑が隣接し，SK－023が南西約1.5mに近接




第322図　土坑墓

する。平面形は楕円形を呈し，長径1.4m，短径1.3m，深さ0.7m前後を測る。底面は平らで固く締まり，壁は台地側に直，斜面側に緩やかに立ち上がる。出土遺物はなく，人骨も検出されなかった。

SK－030（第322図，図版102）

調査区西側台地の23K－41グリッド周辺，西部地区では北東に単独で位置する。北東約0.5mのすぐ隣には，土壙墓SK－031がある。平面形は楕円形を呈し，長径2.0m，短径1.7m，深さ0.4m前後を測る。底面は平らで締まりはよく，壁は南東側で急である以外は，全般的に緩やかに立ち上がる。出土遺物はなく，人骨も検出されなかった。

SK－031（第322図，図版102）

調査区西側台地の23K－32グリッド周辺，西部地区では北東に単独で位置する。南西約0.5mのすぐ隣には，土壙墓SK－030がある。平面形は楕円形を呈し，長径1.8m，短径は一部撹乱があるが約1.7m，深さ0.6m前後を測る。底面は若干の凹凸があるが締まりはよく，壁は全般的に緩やかに立ち上がる。堆積土内か

らは流れ込みの土師器極小片が数点出土したのみである。人骨は検出されなかった。

SK－275（第322図，図版108）

南西部地区北東側の23M－04グリッド周辺に位置し，一番近い土壙墓SK－030からは南へ約80mと，本跡のみが極端に隔たっている。この地区は各時代の遺構が密集している部分で，本跡は奈良・平安時代の竪穴住居跡を切っている。平面形はやや不正な隅丸方形を呈し，長径2.0m，短径1.8m，深さは極端に深く2.3m前後を測る。底面は平らで粘土層まで掘り込まれている。一端粘土層まで掘り込まれ，その後中段まで埋め戻され，土壙墓として使用されている。堆積土はローム塊・ローム粒が混入し，全体的にあまり締まりはない。この堆積土中面から，人骨片と獣骨片が出土したが，部分片のため種類を同定するには至らなかった。

## 第３節　土坑

土坑検出数は地区により偏りはあるものの，すべての地区から検出された。北西部８基，西部８基，中央部22基，南西部16基，南部９基，東部18基，北東部43基の計124基検出されている。このように，圧倒的に検出数が多いのは北東部で，遺跡全体の３分の１を占め，しかも中央に集中している。先にも記したように，遺構に伴う遺物が極端に少ないため，土坑の時期を決定する根拠に乏しいものがほとんどである。

SK－002（第323図）

中央部地区やや西側の23K－97グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－001を切っている。平面形は方形を呈し，長径1.8m，短径1.2m，深さ0.3m前後を計測する。底面は凹凸があり，壁は西側の一部で急な以外は緩やかに立ち上がる。堆積土はローム粒主体で，締まりは良い。遺物は堆積土上面から，流れ込みの土器極小片が数点出土したが，図示できたものはない。

SK－003（第323図，図版100）

中央部地区やや北側の24K－91グリッド周辺に単独で位置する。SK－002からは東へ約23m隔たっている。平面形は不整形を呈し，長径2.2m，短径2.0m，深さ0.4m前後を計測する。底面は平らで，壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，締まりはあまりない。遺物は堆積土上面から流れ込みの土器極小片が１点出土したのみである。

SK－007（第323図）

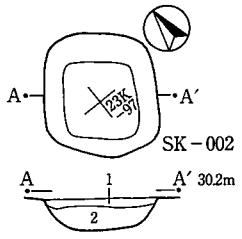
西部地区最西端の21L－24グリッド周辺に単独で位置する。遺跡全体からすると最西端部の緩斜面上である。平面形は長楕円形を呈し，長径1.7m，短径0.7m，深さ0.6m前後を計測する。底面は階段状のテラスが２段あり，壁は斜面側の一部で緩やかな以外は急に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体で，粘性が強く，下面からは若干の焼土粒が検出された。出土遺物はない。

SK－009（第323図）

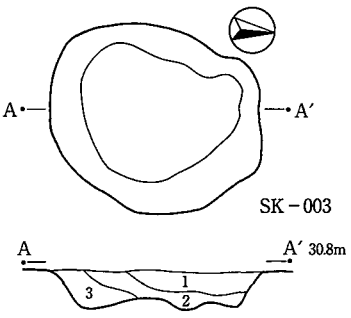
西部地区北西側の21K－57グリッド周辺に単独で位置する。平面形は不整形を呈し，長径1.8m，短径1.5m，深さ0.4m前後を計測する。底面はほぼ平らで，壁は直に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体で，ソフトローム粒を多く含み，あまり締まりはない。出土遺物はない。

SK－014（第323図，図版100）

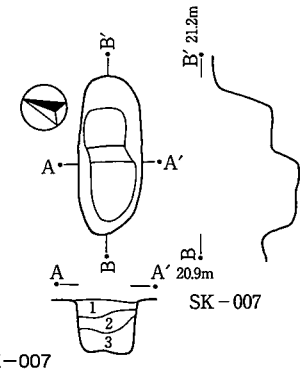
北西部地区南西側の22J－78グリッド周辺に単独で位置する。本跡から北西約３mの地点には土壙墓SK－013が所在する。平面形は円形を呈し，長径1.3m，短径1.2m，深さ0.8m前後を計測する。底面は若干



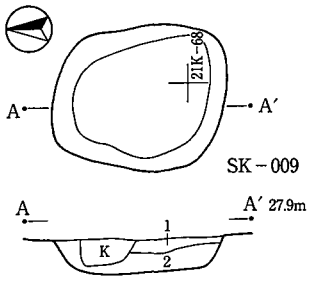

SK－002
1．暗黄褐色土　ローム粒やや多混，しまり強
2．暗褐色土　ローム粒少混



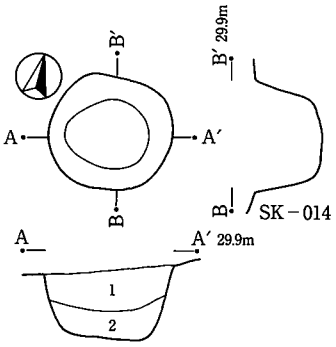

SK－003
1．暗褐色土　ハードローム粒少混
2．暗褐色土　ハードローム粒やや多混
3．暗褐色土　ソフトローム粒少混

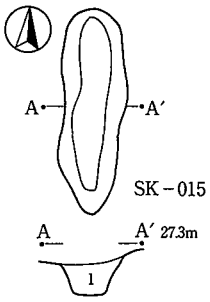



SK－007
1．暗黄褐色土　ローム粒多混，粘性強
2．暗褐色土　白色粘土粒多混，粘性強
3．暗黄褐色土　焼土粒少混，粘性強，しまりあり

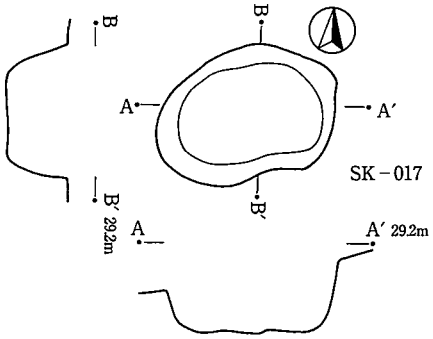


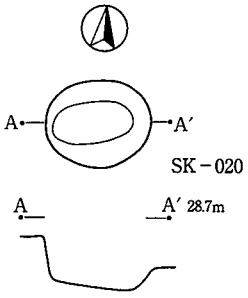

SK－009
1．暗黄褐色土　ソフトローム粒多混
2．暗黄褐色土　ソフトローム粒多混

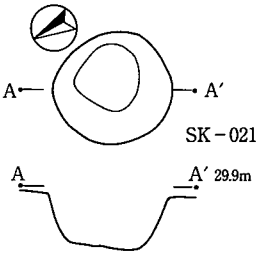


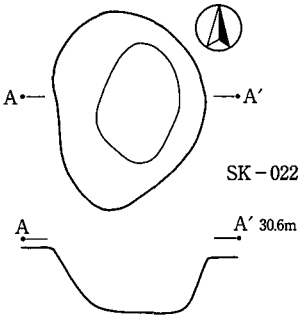



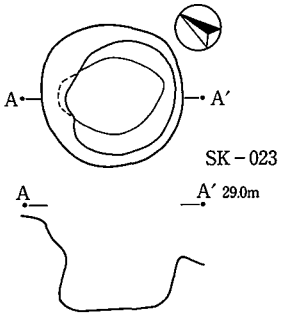

SK－015
1．暗褐色土　ハードローム粒少混

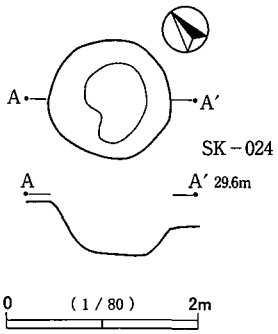



第323図　中・近世土坑（1）

の凹凸があり，東側に緩やかに傾斜している。壁はほぼ全面急に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体で，ハードローム粒を含む。出土遺物はない。

SK－015（第323図）

西部地区西側の22K－80グリッド周辺に単独で位置する。この地区は遺構が希薄な地区で，隣接する各遺構間の距離が離れている。平面形は長楕円形を呈し，長径2.2m，短径0.7m，深さ0.3m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁はほぼ全面急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ハードローム粒を少量含む。出土遺物はない。

SK－017（第323図）

北西部地区西側の22J－48グリッド周辺の緩斜面上に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.9m，短径1.4m，深さ0.8m前後を計測する。底面は凹凸があり，壁はほぼ全面急に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－020（第323図，図版100）

北西部地区東側の23J－36グリッド周辺の緩斜面上に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.1m，短径0.9m，深さ0.4m前後を計測する。底面は平らであるが斜面側に傾斜し，壁は斜面側が緩で他は急に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－021（第323図，図版101）

北西部地区西側の22J－59グリッド周辺に単独で位置する。本跡から北西約５ｍの地点には土坑SK－017が所在する。平面形は円形を呈し，径1.2m，深さ0.6m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，斜面側に傾斜する。壁は凹凸が目立ち，ほぼ全面急に立ち上がる。遺物は堆積土上面から，流れ込みの土器極小片が１点出土したのみである。

SK－022（第323図，図版101）

北西部地区東側の23J－34グリッド周辺に単独で位置する。本跡から西約６ｍの地点には土坑SK－020が所在する。平面形は不整形を呈し，長径2.1m，短径1.6m，深さ0.6m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，緩斜面側にやや傾斜する。壁は凹凸が目立ち，台地側が緩，緩斜面側が直に立ち上がる。遺物は堆積土上面から，流れ込みの土器極小片１点と石片１点が出土したのみである。

SK－023（第323図，図版101）

北西部地区北東端の23J－25グリッド周辺の緩斜面上に単独で位置する。本跡から約1.5mの範囲には，土壙墓SK－029と土坑SK－024が近接する。平面形は円形を呈し，径1.5m，深さ0.9m前後を計測する。底面は平らな楕円状を呈し，北西側がややオーバーハングしている。壁はほぼ全面直に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－024（第323図，図版101）

北西部地区北東端の23J－25グリッド周辺の緩斜面上に単独で位置する。本跡から北西約1.5mには土坑SK－023，南東約2.5mには奈良・平安期の土坑SK－019が近接する。平面形は円形を呈し，長径1.3m，短径1.2m，深さ0.5m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，緩斜面側にやや傾斜する。壁はほぼ全面緩に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－025（第324図，図版101）

西部地区北東端の23K－23グリッド周辺に単独で位置する。本跡の南には溝状遺構SD－001が近接する。平面形は不整形を呈し，長径1.6m，短径1.6m，深さ1.0m前後を計測する。底面は平らで，南側で一部オー

バーハングしている。壁は東西が緩，南北が直に立ち上がる。遺物は堆積土上面から，陶器極小片数点が出土したのみである。

SK－026（第324図，図版101）

北西部地区南端の23J－80グリッド周辺に単独で位置する。本跡から北西約６ｍには土坑SK－014が所在する。平面形は楕円形を呈し，長径1.6m，短径1.2m，深さ0.6m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁はほぼ全面急に立ち上がる。遺物は堆積土上面から，陶器極小片数点が出土したのみである。

SK－027（第324図，図版101）

西部地区北東端の23K－13グリッド周辺に単独で位置する。本跡の北には溝状遺構SD－002が近接する。平面形は楕円形を呈し，長径1.6m，短径1.3m，深さ0.9m前後を計測する。底面は平らで，西側で一部オーバーハングしている。壁はほぼ全面直に立ち上がる。遺物は堆積土上面から，流れ込みの石片数点が出土したのみである。

SK－032（第324図）

西部地区北西側の22K－42グリッド周辺に単独で位置する。遺構が希薄な地区で，本跡と同時期と思われる最も近い土坑SK－015までは約21m隔たっている。平面形は長楕円形を呈し，長径2.2m，短径0.9m，深さ0.5m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁はほぼ全面急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ソフトローム粒を疎らに含む。遺物は堆積土上面から，流れ込みの土器極小片数点と石片１点が出土したのみである。

SK－035（第324図，図版102）

東部地区中央やや南よりの26K－90グリッド周辺に単独で位置する。本跡から西約１ｍには土坑SK－036が近接する。平面形は円形を呈し，径1.7m，深さ0.3m前後を計測する。底面は中央部が若干が窪み気味のレンズ状を呈し，壁はほぼ全面急に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－036（第324図，図版102）

東部地区中央やや南よりの25K－99グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－035が近接する。平面形は楕円形を呈し，長径1.1m，短径0.8m，深さ0.2m前後を計測する。底面は中央やや南よりにピット状の小穴がみられ，壁はほぼ全面緩に立ち上がる。堆積土は黒褐色土を主体である。出土遺物はない。

SK－037（第324図，図版102）

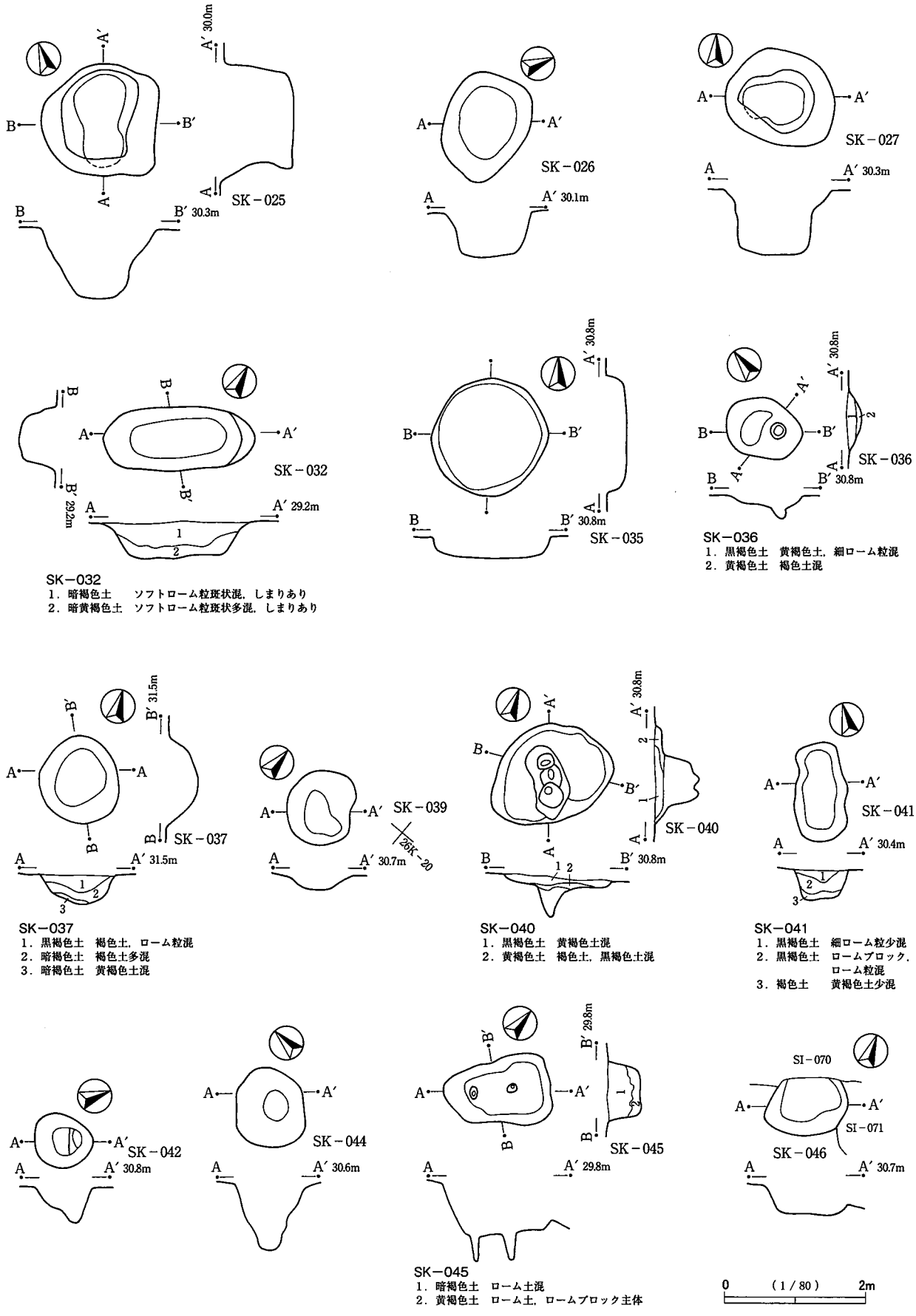
東部地区中央やや南よりの25K－87グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－036からは西へ約９ｍ隔たっている。平面形は円形を呈し，長径1.3m，短径1.1m，深さ0.4m前後を計測する。底面は中央部がレンズ状に窪んでいる。壁はほぼ全面急に立ち上がる。遺物は確認面から，土器小片１点が出土したのみである。

SK－039（第324図，図版102）

東部地区中央の25K－29グリッド周辺に単独で位置する。平面形は不整形を呈し，長径1.1m，短径0.9m，深さ0.2m前後を計測する。底面は平らで，壁はほぼ全面緩に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－040（第324図）

東部地区中央やや南よりの25K－79グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－036からは北へ約７ｍ隔たっている。平面形は不整形を呈し，長径1.8m，短径1.4m，深さ0.6m前後を計測する。底面は凹凸が著しく，３か所ほど窪んでいるため，木根の可能性も拭い去れない。遺物は堆積土下面から，流れ込みの土器小片




SK－032
1．暗褐色土　ソフトローム粒斑状混，しまりあり
2．暗黄褐色土　ソフトローム粒斑状多混，しまりあり

SK－036
1．黒褐色土　黄褐色土，細ローム粒混
2．黄褐色土　褐色土混

SK－037
1．黒褐色土　褐色土，ローム粒混
2．暗褐色土　褐色土多混
3．暗褐色土　黄褐色土混

SK－040
1．黒褐色土　黄褐色土混
2．黄褐色土　褐色土，黒褐色土混

SK－041
1．黒褐色土　細ローム粒少混
2．黒褐色土　ロームブロック，ローム粒混
3．褐色土　黄褐色土少混

SK－045
1．暗褐色土　ローム土混
2．黄褐色土　ローム土，ロームブロック主体

第324図　中・近世土坑（2）

３点が出土したのみである。

SK－041（第324図）

東部地区中央東端の26K－65グリッド周辺の緩斜面上に単独で位置する。本跡と同時期と思われる最も近い土坑SK－040までは約25m隔たっている。平面形は長楕円形を呈し，長径1.4m，短径0.7m，深さ0.4m前後を計測する。底面はほぼ平らで，壁は底面際でやや丸みをもち，直に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体である。遺物は堆積土中面から，流れ込みの土器小片１点が出土したのみである。

SK－042（第324図，図版102）

東部地区中央の25K－38グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－039からは南西へ約９m隔たっている。平面形は円形を呈し，長径0.8m，短径0.7m，深さ0.5m前後を計測する。底面は南側で若干のテラスをもち，北側が深めに掘り込まれている。壁は北側で急に立ち上がる。遺物は堆積土上面から，流れ込みの土器小片数点が出土したのみである。

SK－044（第324図，図版103）

東部地区中央やや北よりの26K－00グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－039からは北東へ約７m隔たっている。平面形は円形を呈し，長径1.1m，短径1.0m，深さ0.9m前後を計測する。掘り方は逆円錐状で底面は小さく狭まっている。壁は若干の凹凸があり急に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－045（第324図，図版103）

東部地区東端やや北よりの26J－93グリッド周辺の斜面上に単独で位置する。土坑SK－044からは東へ約15m隔たっている。平面形は不整形を呈し，長径1.5m，短径1.0m，深さ0.5m前後を計測する。底面はほぼ平らであるが，２か所にピット状のやや深めの小穴がある。壁は斜面側はわずかにしか遺存しないが，遺存する箇所は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色主体である。遺物は堆積土上面から，流れ込みの土器極小片が数点出土したのみである。

SK－046（第324図，図版103）

東部地区中央西側の25K－43グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－070・SI－071を切っている。平面形は不整形を呈し，長径1.2m，短径0.8m，深さ0.4m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，西側の壁はわずかにしか遺存していない。遺存する箇所は全体的に急に立ち上がる。遺物は堆積土中面から，流れ込みの土器小片が数点と石片１点が出土したのみである。

SK－047（第324図，図版103）

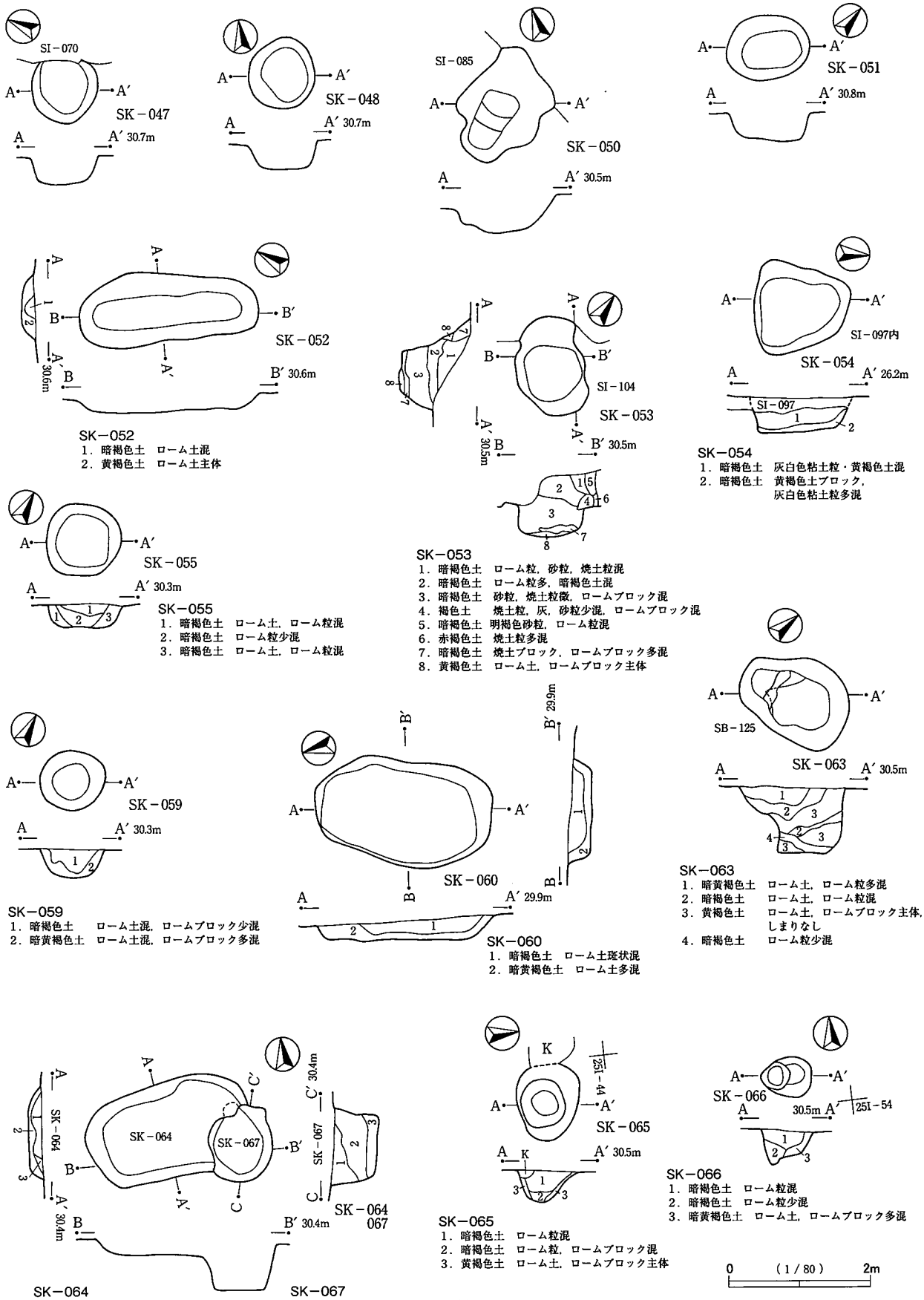
東部地区中央部西側の25K－32グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－070を切っている。同時期の土坑で近接するSK－046からは西へ約2.5m隔たっている。平面形は円形を呈し，径0.9m，深さ0.4m前後を計測する。底面は中央部が若干窪み，壁は全体的に直に立ち上がる。遺物は堆積土上面から，流れ込みの土器極小片が数点出土したのみである。

SK－048（第325図，図版103）

東部地区北西側の25K－12グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，径1.0m，深さ0.4m前後を計測する。底面はほぼ平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－050（第325図）

東部地区北西側の25J－92グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－085，掘立柱建物跡SB－005･SB－006を切っている。平面形は不整形を呈し，長径1.7m，短径1.4m，深さ0.5m前後を計測する。




SK－052
1．暗褐色土　ローム土混
2．黄褐色土　ローム土主体

SK－053
1．暗褐色土　ローム粒，砂粒，焼土粒混
2．暗褐色土　ローム粒多，暗褐色土混
3．暗褐色土　砂粒，焼土粒微，ロームブロック混
4．褐色土　焼土粒，灰，砂粒少混，ロームブロック混
5．暗褐色土　明褐色砂粒，ローム粒混
6．赤褐色土　焼土粒多混
7．暗褐色土　焼土ブロック，ロームブロック多混
8．黄褐色土　ローム土，ロームブロック主体

SK－054
1．暗褐色土　灰白色粘土粒・黄褐色土混
2．暗褐色土　黄褐色土ブロック，
灰白色粘土粒多混

SK－055
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒少混
3．暗褐色土　ローム土，ローム粒混

SK－059
1．暗褐色土　ローム土混，ロームブロック少混
2．暗黄褐色土　ローム土混，ロームブロック多混

SK－060
1．暗褐色土　ローム土斑状混
2．暗黄褐色土　ローム土多混

SK－063
1．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
3．黄褐色土　ローム土，ロームブロック主体，
しまりなし
4．暗褐色土　ローム粒少混

SK－064
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒，斑状混
3．暗黄褐色土　ローム土多混

SK－065
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック混
3．黄褐色土　ローム土，ロームブロック主体

SK－066
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒少混
3．暗黄褐色土　ローム土，ロームブロック多混

SK－067
1．暗黄褐色土　ロームブロック多混
2．暗褐色土　ローム粒多，ローム土混
3．暗褐色土　ローム粒，ローム土混，2より暗

第325図　中・近世土坑（3）

底面は中央部が若干窪み，壁は全体的に緩に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－051（第325図，図版103）

東部地区北西側の25J－72グリッド周辺に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.2m，短径0.9m，深さ0.4m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，北東側に傾斜している。壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－052（第325図，図版103）

東部地区北側の25J－45グリッド周辺に単独で位置する。平面形は長楕円形を呈し，長径2.5m，短径1.0m，深さ0.2m前後を計測する。底面は凹凸があり，北側に傾斜している。壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－053（第325図）

北東部地区南側の25I－54グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－104を切っている。平面形は不整形を呈し，長径1.4m，短径1.0m，深さ0.9m前後を計測する。底面は凹凸があり，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で焼土粒をやや多く含む。出土遺物はない。

SK－054（第325図）

東部地区北東端の26J－14グリッド周辺の斜面上に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－097を切っている。平面形は不整形を呈し，長径1.4m，短径1.2m，深さ0.5m前後を計測する。底面はほぼ平らで，壁は南側で直，北側で急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を少量含む。出土遺物はない。

SK－055（第325図，図版104）

北東部地区南端の25I－87グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，長径1.1m，短径1.0m，深さ0.4m前後を計測する。底面はほぼ平らで，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を少量含む。出土遺物はない。

SK－059（第325図，図版104）

北東部地区南側の25I－66グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，長径1.0m，短径0.9m，深さ0.4m前後を計測する。底面は若干丸みを帯び，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でロームブロック粒をやや多く含む。出土遺物はない。

SK－060（第325図，図版104）

北東部地区南東端の25I－78グリッド周辺の緩斜面上に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径2.5m，短径1.5m，深さ0.3m前後を計測する。底面はほぼ平らで，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でローム土を多量に含む。出土遺物はない。

SK－063（第325図）

北東部地区中央やや南の25I－33グリッド周辺に位置し，土坑SK－078，奈良・平安時代の掘立柱建物跡SB－025を切っている。この地点は同時期と思われる土坑が集中している。平面形は不整形を呈し，長径1.6m，短径1.1m，深さ0.9m前後を計測する。底面は平らで，壁は西側中段部分で緩やかな段をもち，それ以外は全体的に直に立ち上がる。堆積土は黄褐色土主体でロームブロックを多量に含み，埋め戻された可能性が高い。出土遺物はない。

SK－064（第325図）

北東部地区中央やや南の25I－33グリッド周辺に位置する。土坑が集中する地域で，土坑SK－067・SK

－77に切られている。平面形は隅丸長方形を呈し，長径2.3m，短径1.4m，深さ0.2m前後を計測する。底面は平らで，壁は緩に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でローム粒を斑状に含む。遺物は陶器極小片１点が堆積土上面から出土したのみである。

SK－065（第325図）

北東部地区中央やや南の25I－44グリッド周辺に単独で位置する。土坑が集中する地域で，周辺には多数の土坑が近接する。平面形は円形を呈し，長径1.1m，短径0.9m，深さ0.5m前後を計測する。底面は丸底気味で，壁は南側で急，それ以外は緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒をやや多く含む。遺物は流れ込みの土器極小片数点が，堆積土上面から出土したのみである。

SK－066（第325図）

北東部地区中央やや南の25I－43グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，長径0.7m，短径0.3m，深さ0.5m前後を計測する。底面は東側に一段のテラスを有し，西側でやや深くなっいてる。壁は西側で直，それ以外は急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒をやや多く含む。遺物は流れ込みの土器極小片１点が，堆積土上面から出土したのみである。

SK－067（第325図）

北東部地区中央やや南の25I－33グリッド周辺に位置し，土坑SK－064を切っている。平面形は円形を呈し，長径1.1m，短径1.0m，深さ0.6m前後を計測する。底面はほぼ平らで，北側で若干オーバーハングしている。壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を多く含む。遺物は陶器極小片１点が，堆積土上面から出土したのみである。

SK－068（第326図）

北東部地区中央やや南の25I－42グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の掘立柱建物跡SB－023を切っている。平面形は円形を呈し，長径0.8m，短径0.7m，深さ0.5m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を多く含む。出土遺物はない。

SK－069（第326図）

北東部地区中央やや南の25I－42グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の掘立柱建物跡SB－023を切っている。平面形は円形を呈し，径0.9m，深さ0.7m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒・ロームブロックを含む。出土遺物はない。

SK－070（第326図）

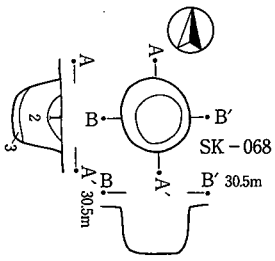
北東部地区中央やや南の25I－41グリッド周辺に位置し，土坑SK－069に近接する。奈良・平安時代の掘立柱建物跡SB－023を切っている。平面形は円形を呈し，長径0.8m，短径0.7m，深さ0.9m前後を計測する。底面は南西側で緩やかなテラス状を呈す。壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム土を含む。出土遺物はない。

SK－077（第326図）

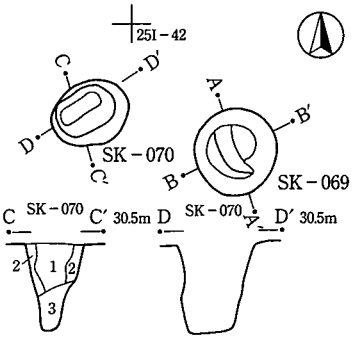
北東部地区中央やや南の25I－33グリッド周辺に位置し，土坑SK－064を切っている。平面形は円形を呈し，長径0.8m，短径0.7m，深さ0.3m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム土を含む。出土遺物はない。

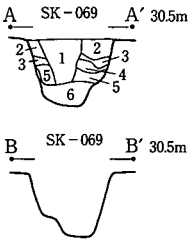
SK－078（第326図）

北東部地区中央やや南の25I－43グリッド周辺に位置し，土坑SK－063に切られている。平面形は円形



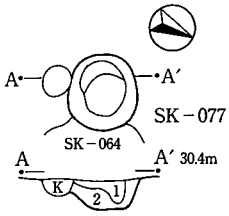

SK－068
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒，ローム土ブロック混
3．黄褐色土　ローム土主体



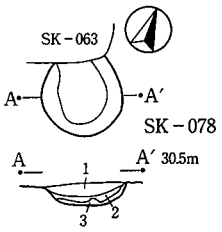




SK－069
1．暗褐色土　ローム粒混，やや砂質，しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム土，，ローム粒多混
3．暗褐色土　ローム粒混
4．暗褐色土　ローム粒，ローム土多混
5．暗黄褐色土　ローム土，ロームブロック多混
6．黄褐色土　ローム土，ロームブロック主体

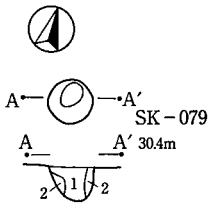
SK－070
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．黄褐色土　ローム土，ロームブロック主体
3．暗褐色土　ローム粒混



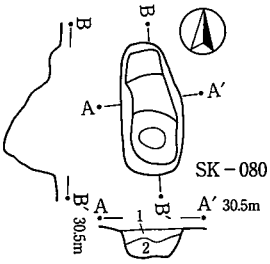

SK－077
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．暗黄褐色土　ローム土主体



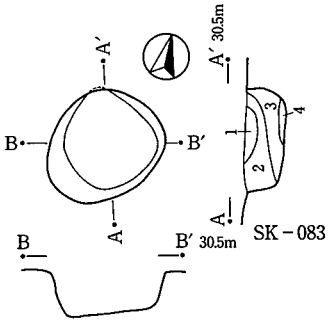

SK－078
1．黒褐色土　ローム粒少混
2．黒褐色土　ローム粒微混
3．暗黄褐色土　ローム土少混



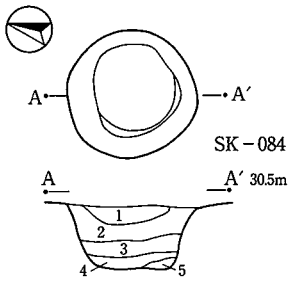

SK－079
1．暗褐色土　ローム土少混
2．暗黄褐色土　ローム粒多混



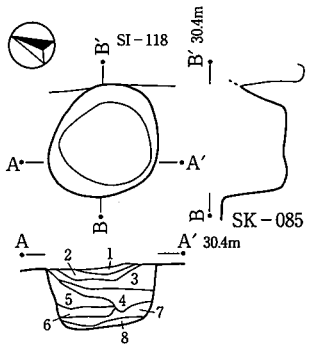

SK－080
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒，ローム土多混



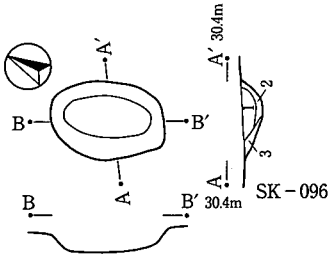

SK－083
1．暗褐色土　ローム粒，ローム粒混
2．暗黄褐色土　ローム粒，ローム土斑状多混
3．暗褐色土　ローム土，斑状少混
4．黄褐色土　ローム土，ロームブロック主体



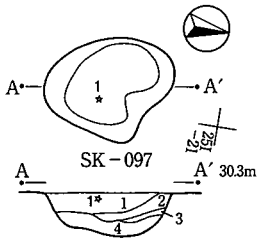

SK－084
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒斑状に混
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒混，1より明
3．黄褐色土　ロームブロック主体，しまりなし
4．暗褐色土　ローム粒，少混
5．黄褐色土　ローム土主体，ローム粒混



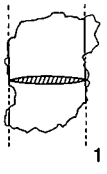

SK－085
1．暗褐色土　ロームブロック少混
2．暗褐色土　ロームブロック混
3．暗褐色土　ロームブロック微混，ローム土混
4．暗黄褐色土　ロームブロック混
5．暗黄褐色土　ローム土，ロームブロック混
6．黄褐色土　ローム土，ロームブロック多混
7．暗褐色土　ローム土，ロームブロック混
8．黄褐色土　ローム土主体，ロームブロック混

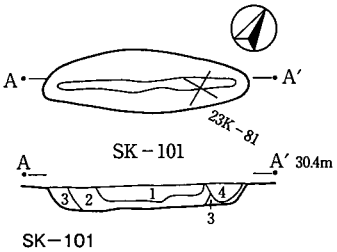



SK－096
1．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
2．暗褐色土　ローム7粒混
3．黄褐色土　ローム土主体




SK－097
1．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
2．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒混
3．暗褐色土　ローム粒混
4．暗黄褐色土　ロームブロック多混




SK－101
1．黒褐色土　ローム粒，ロームブロック混
2．明褐色土　ローム粒，ロームブロック多混
3．黄褐色土　ローム粒，ロームブロック多混
4．暗褐色土　ロームブロック混

0　(1/2)　5cm

0　(1/80)　2m

第326図　中・近世土坑（4）

を呈し，長径0.9m，短径0.8m，深さ0.2m前後を計測する。底面はレンズ状を呈し，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体でローム粒を含む。出土遺物はない。

SK－079（第326図）

北東部地区中央やや南の25I－45グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－085に近接する。平面形は円形を呈し，径0.5m，深さ0.3m前後を計測する。底面は半球状で，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム土を含む。出土遺物はない。

SK－080（第326図）

北東部地区中央やや南の25I－33グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－063に近接する。平面形は隅丸長方形を呈し，長径1.4m，短径0.6m，深さ0.3m前後を計測する。底面北側は浅いテラス状を呈し，南に向かって逆三角形状に掘り込まれている。壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を含む。遺物は流れ込みの土器極小片が数点出土したのみである。

SK－083（第326図）

北東部地区中央の25I－22グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の掘立柱建物跡SB－027を切っている。平面形は円形を呈し，径1.2m，深さ0.4m前後を計測する。底面は平らでやや西側に傾斜し，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を含む。出土遺物はない。

SK－084（第326図）

北東部地区中央の25I－22グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の掘立柱建物跡SB－027を切っている。平面形は円形を呈し，径1.3m，深さ0.7m前後を計測する。底面はほぼ平らで，壁は北側で急，それ以外は直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を斑状に含む。出土遺物はない。

SK－085（第326図）

北東部地区中央やや南の25I－44グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－118を切っている。平面形は円形を呈し，長径1.2m，短径1.1m，深さ0.7m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でロームブロックを多く含む。出土遺物はない。

SK－096（第326図）

北東部地区中央やや西の25I－21グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－084・SK－097に近接する。平面形は楕円形を呈し，長径1.2m，短径0.8m，深さ0.2m前後を計測する。底面はレンズ状を呈し，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でローム粒を多く含む。出土遺物はない。

SK－097（第326図）

北東部地区中央西よりの25I－20グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－096に近接する。平面形は不整形を呈し，長径1.4m，短径1.1m，深さ0.5m前後を計測する。底面は凹凸があり，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でローム粒を多く含む。遺物は柳刃状の鉄鏃が，堆積土上面から出土した。

SK－101（第326図）

西部地区中央東側の23K－80グリッド周辺に位置し，古墳SX－005を切っている。西部地区は遺構密度が低く，一番近くの土坑でも約17m隔たっている。平面形は長楕円形を呈し，長径2.2m，短径0.7m，深さ0.2m前後を計測する。底面は凹凸があり，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体でローム粒・ロームブロックを多く含む。遺物は石片数点が堆積土上面から出土したのみである。

SK－102（第327図）

中央部地区西側の23L－03グリッド周辺に単独で位置する。土坑SK－101からは南東へ約17m隔たっている。平面形は円形を呈し，長径2.0m，短径1.5m，深さ0.9m前後を計測する。底面は凹凸があり，北から南に傾斜している。壁も凹凸が顕著で，南側の一部でオーバーハングし，直に立ち上がる。それ以外は急に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体でローム粒・ロームブロックを多く含む。出土遺物はない。

SK－105（第327図）

南西部地区北側の23L－92グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の掘立柱建物跡SB－013・SB－014を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し，長径1.8m，短径1.2m，深さ0.4m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体でローム粒を少量含む。出土遺物はない。

SK－124（第327図，図版105）

南西部地区西側の22M－27グリッド周辺に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径0.6m，短径0.5m，深さ0.3m前後を計測する。底面はやや凹凸があり，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を少量含む。出土遺物はない。

SK－131（第327図）

南西部地区西側の22M－49グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－132が近接する。平面形は楕円形を呈し，長径1.4m，短径1.1m，深さ0.4m前後を計測する。底面はレンズ状を呈し，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を多く含む。出土遺物はない。

SK－132（第327図）

南西部地区西側の22M－49グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－131が約0.6m西に近接する。平面形は楕円形を呈し，長径0.7m，短径0.6m，深さ0.3m前後を計測する。底面は平らで，北西側に若干傾斜している。壁は北西側が直，それ以外は急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を多く含む。出土遺物はない。

SK－133（第327図）

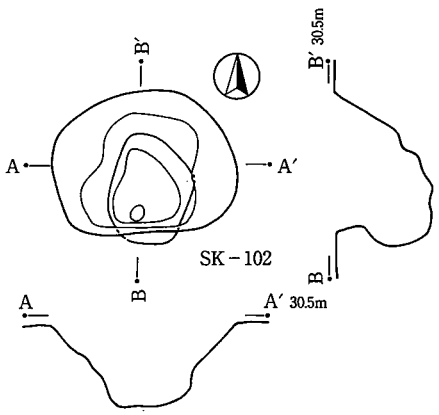
南西部地区西側の23M－50グリッド周辺に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.1m，短径0.8m，深さ0.3m前後を計測する。底面はほぼ平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でロームブロックを微量含む。出土遺物はない。

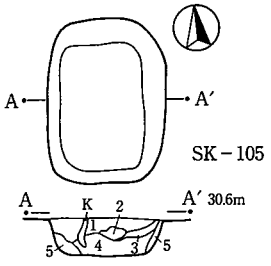
SK－134（第327図）

南西部地区西側の23M－40グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－152を切っている。平面形は円形を呈し，長径0.9m，短径0.8m，深さ0.4m前後を計測する。底面はほぼ平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体でロームブロックを多く含む。遺物は流れ込みの土器小片が１点出土したのみである。

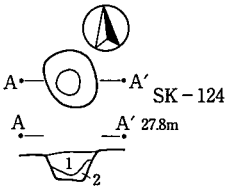
SK－143（第327図，図版106）

西部地区東側の22L－28グリッド周辺に単独で位置する。この地区は遺構が希薄な地区で，本跡に一番近い遺構でも約13m隔たっている。平面形は不整形を呈し，長径1.3m，短径0.7m，深さ0.5m前後を計測する。底面はほぼ平らであるが，中央に深さ30cm前後の小穴がみられる。壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土上面には焼土がやや厚めに堆積しており，埋没途中の窪みを利用して火が使用されたようである。出土遺物はない。

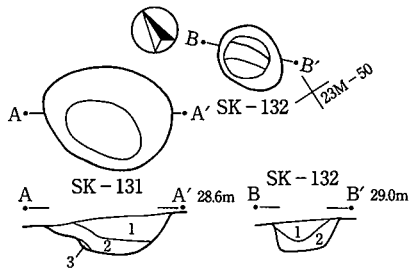



SK－105
1．黒褐色土　ローム粒，黄褐色土少混
2．黄褐色土　褐色土少混
3．黒褐色土　褐色土少混，1より暗
4．暗褐色土　褐色土，ローム粒少混
5．褐色土　ローム粒，黄褐色土少混

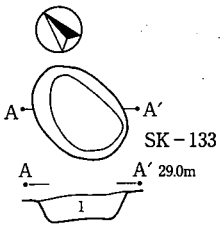



SK－124
1．暗褐色土　褐色土，細ローム粒混
2．褐色土　ローム粒，ロームブロック混
3．褐色土　細ローム粒混，明るい

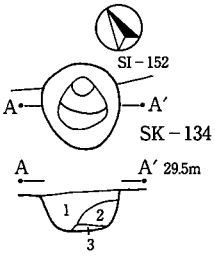



SK－131
1．暗褐色土　ローム粒多，ロームブロック少混
2．暗褐色土　ローム粒，褐色土混，
ロームブロック1より少混
3．褐色土

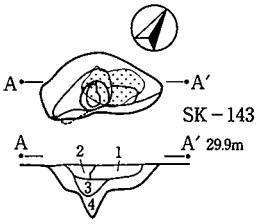
SK－132
1．暗褐色土　ローム粒多混
2．褐色土　黄褐色土多混，やや軟質



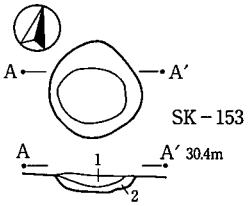

SK－133
1．暗褐色土　褐色土少，
ロームブロック微混



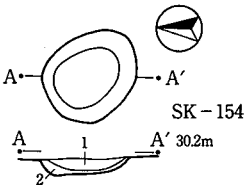

SK－134
1．黒褐色土　ローム粒少，
ロームブロック多混
2．黒褐色土　ローム粒少混
3．暗褐色土　ローム粒微混



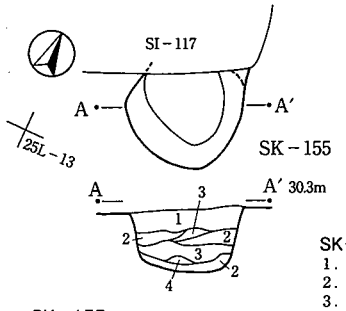

SK－143
1．赤褐色土　焼土主体，褐色土混
2．褐色土　焼土粒，ローム粒混
3．暗褐色土　ローム粒少混
4．暗褐色土　褐色土，黄褐色土，
焼土粒微混，3より明



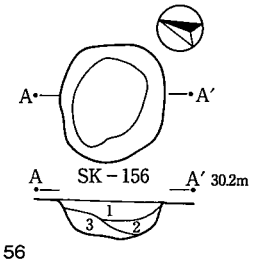

SK－153
1．暗褐色土　ローム土，
ローム粒多混
2．黄褐色土　ローム土主体



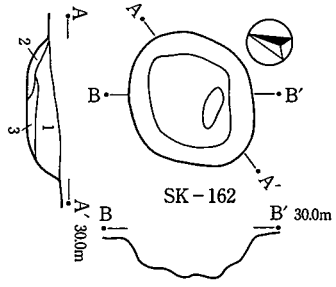

SK－154
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．暗黄褐色土　ローム土多混



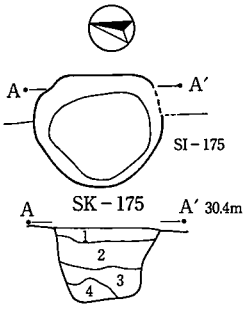

SK－155
1．暗褐色土　ローム土，ロームブロック混
2．暗黄褐色土　ローム土，ロームブロック多混
3．暗褐色土　ローム土，ロームブロック少混
4．暗褐色土　ローム土，ロームブロック混



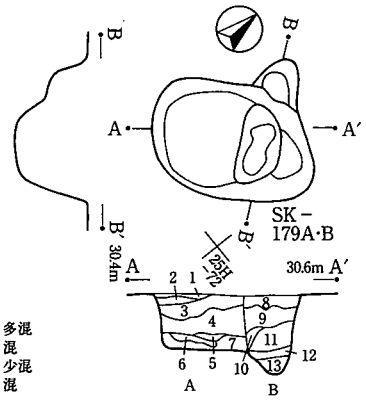

SK－156
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒少混
3．暗黄褐色土　ローム土，ロームブロック多混



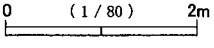

SK－162
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混，
2より暗
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒多混
3．暗褐色土　ローム粒混，1より暗




SK－175
1．暗褐色土　ローム土，ロームブロック多混
2．暗褐色土　ローム土，ロームブロック混
3．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック少混
4．暗黄褐色土　ローム土，ロームブロック混




SK－179
1．褐色土　褐色土粒主体
2．暗黄褐色土　ソフトローム粒，
褐色土微混，しまり強
3．暗褐色土　ソフトローム粒微混，
しまりあり
4．暗褐色土　3に似る，暗褐色土多混，
しまり強
5．暗褐色土　4に似る，暗褐色土多混，
しまりあり
6．暗黄褐色土　ソフトローム主体，
褐色土微混，しまりあり
7．暗黄褐色土　6に似る，暗褐色土少混，
しまり強
8．暗黄褐色土　ロームブロック微混，
しまりあり
9．暗黄褐色土　6に似る，暗褐色土少混
10．暗黄褐色土　ローム粒，ロームブロック混，
しまり弱
11．暗褐色土　ローム粒，ブロック，均一微混，
しまりなし
12．黄褐色土　ソフトローム主体，
ロームブロック多混
13．褐色土　ソフトローム主体，
ロームブロック微混，しまりあり




第327図　中・近世土坑（5）

SK－153（第327図）

北東部地区中央の25I－23グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－083に近接する。平面形は円形を呈し，径1.0m，深さ0.2m前後を計測する。底面はレンズ状を呈し，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を多く含む。出土遺物はない。

SK－154（第327図）

北東部地区中央やや東よりの25I－14グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，長径1.1m，短径0.9m，深さ0.2m前後を計測する。底面は若干のレンズ状を呈し，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を多く含む。出土遺物はない。

SK－155（第327図）

北東部地区中央の25I－03グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－117を切っている。平面形は円形を呈し，長径1.2m，短径1.0m，深さ0.7m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でロームブロックをやや多く含む。遺物は流れ込みの土器極小片が数点出土したのみである。

SK－156（第327図）

北東部地区中央やや東よりの25I－03グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－155からは東へ約1.5mと近接する。平面形は円形を呈し，長径1.3m，短径1.1m，深さ0.4m前後を計測する。底面は凹凸があり，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒をやや多く含む。出土遺物はない。

SK－162（第327図）

北東部地区中央やや東側の25I－14グリッド周辺に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.5m，短径1.3m，深さ0.3m前後を計測する。底面は凹凸が顕著で，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒をやや多く含む。遺物は陶器極小片が1点出土したのみである。

SK－175（第327図）

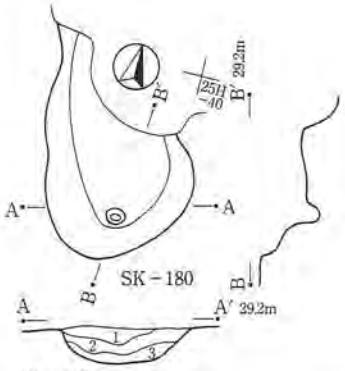
北東部地区中央の25I－02グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－115を切っている。平面形は円形を呈し，長径1.4m，短径1.2m，深さ0.8m前後を計測する。底面は平らで，北側に若干傾斜している。壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でロームブロックをやや多く含む。出土遺物はない。

SK－179A・B（第327図）

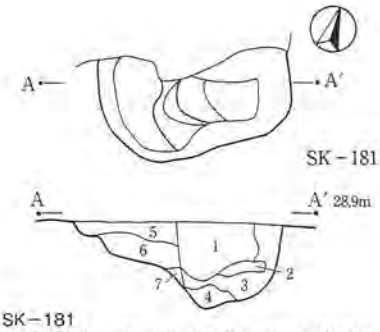
北東部地区北側の25H－61グリッド周辺に位置する。当初1基の土坑として調査を進めたが，土層断面から2基が重複していることがわかり，古い方をA，新しい方をBと区別した。平面形はいずれも不整形を呈し，Aは長径1.8m，短径1.2m，深さ0.6m前後を計測する。Bの規模の詳細は不明であるが，深さは0.8mを計測する。Aの底面は平らで，北東側をBがさらに深く掘り込まれ，壁はいずれも直に立ち上がる。堆積土はAが暗褐色土主体でBが暗黄褐色土主体である。遺物はA・Bいずれからも陶磁器極小片が数点出土したのみである。

SK－180（第328図）

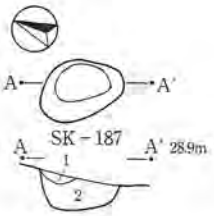
北東部地区北端の24H－49グリッド周辺に位置し，縄文時代の炉穴跡FP－007を切り，土坑SK－181に切られている。平面形は不整形を呈し，長径不明，短径1.5m，深さ0.4m前後を計測する。底面はレンズ状を呈し，南側の壁直下には小穴がみられる。壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒をやや多く含む。出土遺物はない。



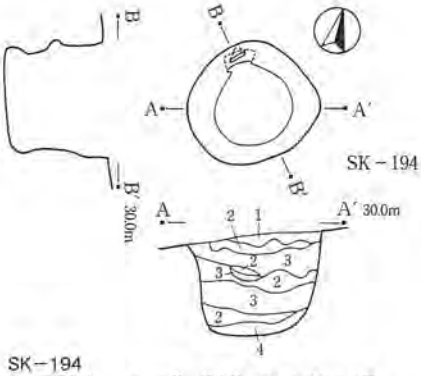

SK－180
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．暗褐色土　ローム粒，ローム ブロック少混
3．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混



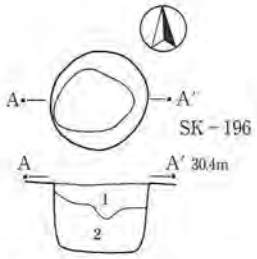

SK－181
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒，ローム ブロック少混
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒
3．暗褐色土　ローム土，ローム粒多混
4．暗黄褐色土　ローム土，ローム ブロック多混
5．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
6．黄褐色土　ローム土主体
7．暗褐色土　焼土粒多混



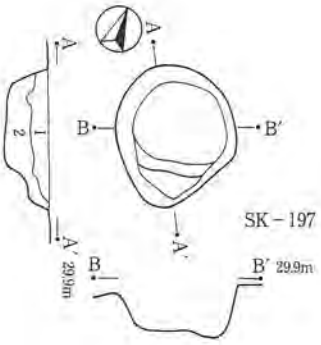

SK－187
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．黄褐色土　ローム土主体



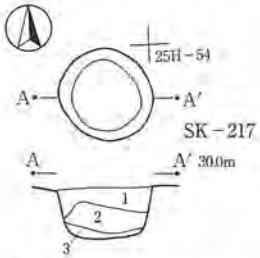

SK－194
1．暗褐色土　ローム粒，焼土粒，ローム ブロック混
2．暗褐色土　ローム粒，焼土粒少混
3．暗黄褐色土　ローム ブロック多混，焼土粒少混
4．暗褐色土　ローム土，ローム ブロック主体



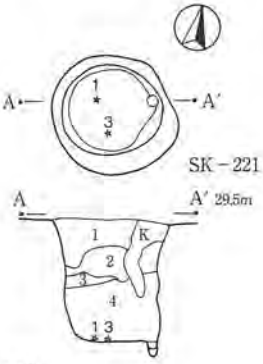

SK－196
1．褐色土　ローム粒，ローム ブロック多混，しまり弱
2．褐色土　1に似る，ローム ブロック少混，しまり弱



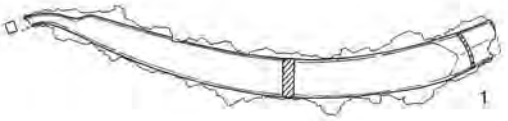

SK－197
1．暗黄褐色土　ローム塊多混，しまりあり
2．暗黄褐色土　ローム粒多混，しまり弱

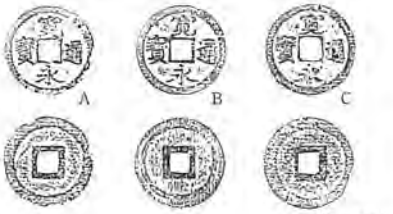



SK－217
1．暗黄褐色土　ローム塊多混，しまりあり
2．暗褐色土　ローム粒多混，しまりなし
3．黄褐色土　ローム塊主体，暗褐色土混，しまりなし

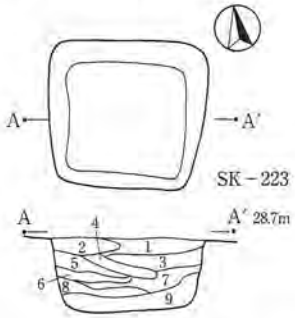



SK－221
1．暗黄褐色土　ローム土，ローム ブロック多混
2．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒混
3．暗褐色土　ローム土，ローム粒少混
4．暗黄褐色土　ローム土，ローム ブロック多混

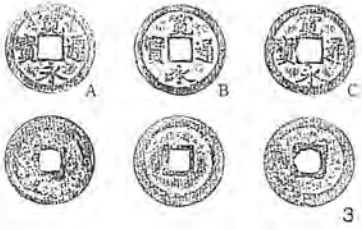



2（一括）




SK－223
1．暗褐色土　ローム粒，炭化粒多混，ややしまりあり
2．黒褐色炭化物　炭化物堆積層，ローム土少混，しまりあり
3．暗褐色土　ローム粒塊多，炭化物多混，しまりあり
4．暗褐色土　ローム粒，炭化粒多混，ややしまりあり
5．暗黄褐色土　ローム粒多，炭化物混，ややしまりあり
6．黒褐色炭化物　細炭化粒，ローム塊混，ややしまりあり
7．黄褐色土　ローム塊，炭化物，しまり弱混
8．黒褐色炭化物　炭化物堆積層，ローム塊混，しまりあり
9．暗黄褐色土　炭化物，ローム塊混，しまりあり




3

0　（1／80）　2m

0　（1／2）　5cm

第328図　中・近世土坑（6）

SK－181（第328図）

北東部地区北端の24H－49グリッド周辺に位置し，縄文時代の炉穴跡FP－007，土坑SK－181を切っている。平面形は不整形を呈し，長径2.0m，短径不明，深さ0.9m前後を計測する。底面は凹凸が著しく，雑な成形である。壁も凹凸があり，部分的に緩・急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒をやや多く含む。遺物は土器小片が１点出土したのみである。

SK－187（第328図）

北東部地区中央東端の25H－96グリッド周辺の緩斜面上に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径0.9m，短径0.7m，深さ0.4m前後を計測する。底面は平らで，壁は急に立ち上がる。堆積土は黄褐色土主体でローム土を多く含む。出土遺物はない。

SK－194（第328図）

北東部地区北西側の24H－99グリッド周辺の緩斜面上に位置し，縄文時代の炉穴跡FP－004を切っている。平面形は楕円形を呈し，長径1.4m，短径1.3m，深さ1.1m前後を計測する。底面は平らで，壁は北側中央部で一部オーバーハングしている。壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でロームブロックを多く含み，焼土粒も若干含まれる。遺物は流れ込みの土器極小片が数点と石が２点出土した。

SK－196（第328図）

北東部地区南側の25I－52グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の掘立柱建物跡SB－024を切っている。平面形は円形を呈し，径1.1m，深さ0.7m前後を計測する。底面は平らで，壁は直に立ち上がる。堆積土は褐色土主体でロームブロックを多く含み，基本的に同一層で，埋め戻しが行われた可能性が高い。遺物は石が１点出土したのみである。

SK－197（第328図）

北東部地区北西側の24H－78グリッド周辺の緩斜面上に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.5m，短径1.3m，深さ0.5m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，南側には一段高いテラス状の段がある。壁は急に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でローム塊・ローム粒を多く含み，埋め戻しが行われた可能性がある。出土遺物はない。

SK－217（第328図）

北東部地区北東側の25H－44グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，径1.0m，深さ0.6m前後を計測する。底面は平らで，壁は直に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でローム塊・ローム粒を多く含み，埋め戻しが行われた可能性がある。出土遺物はない。

SK－221（第328図）

北東部地区北東側の25H－33グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－125を切っている。平面形は円形を呈し，径1.3m，深さ1.3m前後を計測する。底面は平らであるが，東壁直下に小穴がある。壁はやや凹凸が目立ち，直に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でロームブロックを多量に含み，埋め戻しが行われた可能性がある。遺物は底面から名称不詳の鉄製品１点と寛永通寶３点，堆積土上面一括で寛永通寶３点がそれぞれ出土した。鉄製品は形状からみると，約130m南に隔たった塚SX－004の盛土中から出土した鉄製品と同一個体の可能性がある。また，出土した６点の寛永通寶はいずれも「古寛永」で，三枚重ねである。本跡は出土遺物から江戸期の所産といえる。

SK－223（第328図，図版106）

北東部地区北東端の25H－14グリッド周辺の緩斜面上に単独で位置する。この地区は遺跡全体での最も北端に位置する。平面形は方形を呈し，長径1.7m，短径1.6m，深さ0.8m前後を計測する。底面はほぼ平らで，壁は全体的に直に立ち上がり，ほぼ全面焼土化している。堆積土は黒褐色土が主体で，炭化物（炭）及び炭化流が多量に層をなしている。これらの状況から察するに，近世以降の炭焼き土坑の可能性が考えられる。出土遺物はない。

SK－224（第329図）

東部地区北東側の26J－20グリッド周辺の緩斜面上に単独で位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長径1.3m，短径0.8m，深さ0.8m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でローム塊・ローム粒を多く含み，埋め戻しが行われた可能性がある。出土遺物はない。

SK－225（第329図）

北東部地区中央北よりの25H－82グリッド周辺に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.0m，短径0.7m，深さ0.3m前後を計測する。底面はほぼ平らで，壁直下の部分では若干の丸みを帯びる。壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は褐色土主体である。出土遺物はない。

SK－226（第329図）

北東部地区西側の24H－98グリッド周辺の緩斜面上に位置し，溝状遺構SD－016に切られている。平面形は不整形を呈し，長径1.7m，短径1.5m，深さ1.1m前後を計測する。底面はほぼ平らであるが，北東側には二段の階段状のテラスを有する。壁は南側が直で，それ以外は緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，全体的にしまりがよい。遺物は流れ込みの土器小片が十数点出土している。

SK－227（第329図）

北東部地区西側の24H－98グリッド周辺の緩斜面上に位置する。溝状遺構SD－016に切られており，土坑SK－226から北へ約1.5mに近接する。平面形は不整形を呈し，長径2.2m，短径0.9m，深さ0.7m前後を計測する。底面は凹凸が著しく，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体で，全体的にしまりがない。遺物は流れ込みの土器小片が数点出土している。

SK－230（第329図）

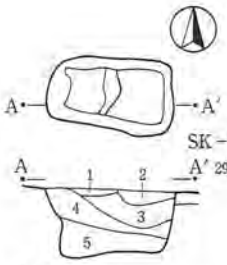
東部地区北側の25J－36グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－052から東へ約４m隔たっている。平面形は長方形を呈し，長径1.6m，短径0.6m，深さ0.7m前後を計測する。底面は全体的に平らであるが，中央部で約20cmの段を有す。壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でロームブロックを多く含む。出土遺物はない。

SK－235（第329図）

北東部地区中央やや北よりの25I－01グリッド周辺に位置し，古墳時代の住居跡SI－115を切っている。本跡は，土坑SK－236と同様に，住居跡床面を精査中に確認されたため，遺存するのは底面に近い部分のみとなった。遺存する部分の平面形は楕円形を呈し，長径1.1m，短径0.8m，深さ0.1m前後を計測する。底面は平らで，壁は底面に近い部分のみの遺存のため緩に立ち上がる。出土遺物はない。

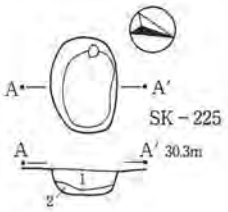
SK－236（第329図）

北東部地区中央やや北よりの25I－00グリッド周辺に位置し，土坑SK－235の西約80cmに近接する。土坑SK－235と同様に，古墳時代の住居跡SI－115を切っている。遺存する部分の平面形は楕円形を呈し，



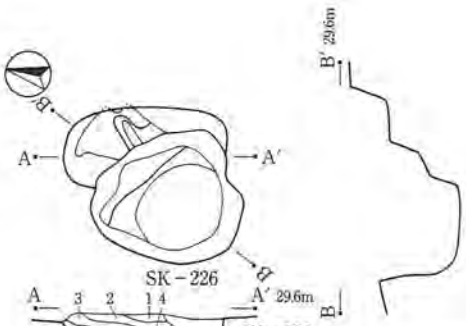

SK－224

1．暗褐色土　ローム粒混，しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム塊多混，しまり弱
3．黄褐色土　ローム塊多混，しまり弱
4．暗黄褐色土　ローム粒多混，しまりなし
5．黄褐色土　ローム塊主体，暗褐色土多混，しまりあり



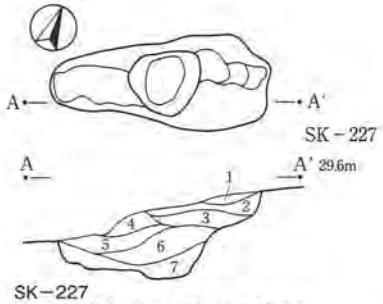

SK－225

1．褐色土　ローム粒微混
2．褐色土　1よりローム粒多混




SK－226

1．暗褐色土　しまりなし，粘性なし
2．暗褐色土　焼土粒少，黒色土粒混，しまりあり，粘性なし
3．暗黄褐色土　ややしまりあり，粘性なし
4．暗褐色土　ローム塊少混，ややしまりあり，粘性なし
5．暗黄褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり，粘性あり
6．暗黄褐色土　ローム塊混，しまりあり，粘性あり
7．暗黄褐色土　ローム主体，しまりあり
8．暗褐色土　ローム塊混，ややしまりあり
9．暗黄褐色土　ローム塊多混，ややしまりあり
10．黄褐色土　ローム主体，暗褐色土少混，しまりあり
11．暗黄褐色土　ローム塊主体，しまりなし

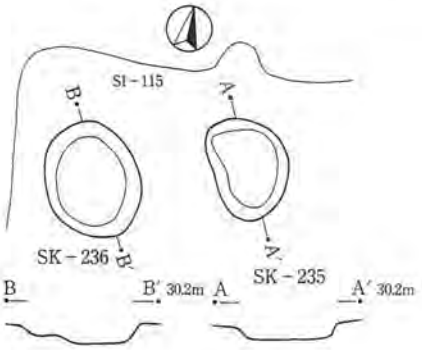


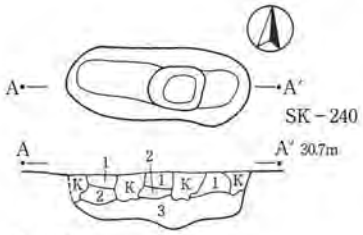

SK－227

1．暗黄褐色土　ローム塊多混，しまりなし
2．暗褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり
3．暗黄褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり
4．暗褐色土　ローム塊多混，ややしまりあり
5．暗黄褐色土　ローム塊主体，しまりなし
6．暗黄褐色土　ローム粒混，しまりなし
7．暗黄褐色土　ローム塊多混，しまりなし

SK－230

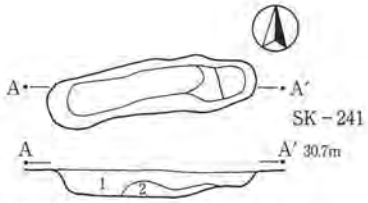
1．褐色土　ローム粒，ロームブロック多混，しまりあり
2．暗褐色土　ロームブロック，褐色土混，しまり弱
3．暗褐色土　ロームブロック，ローム粒，横縞状堆積，しまり弱
4．暗褐色土　ロームブロック，褐色土混，しまり弱
5．暗黄褐色土　ロームブロック微混，しまり弱
6．黄褐色土　ローム粒，ロームブロック主体，褐色土混，しまりややあり



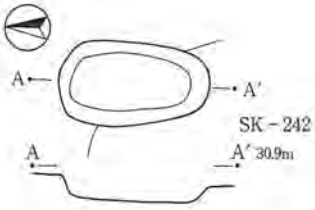

SK－240

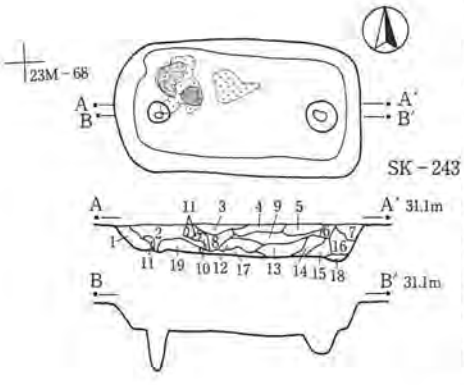
1．暗褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり
2．暗褐色土　ローム粒少混，ややしまりあり
3．黒褐色土　ローム塊混，ややしまりあり




SK－241

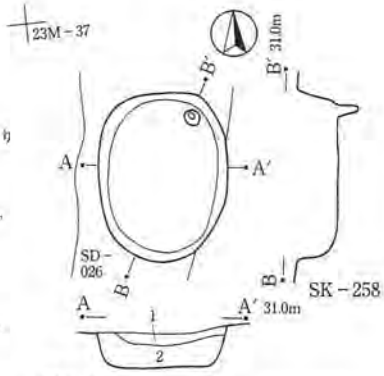
1．暗褐色土　ローム多混，ややしまりあり
2．暗黄褐色土　ローム塊混，しまり弱




SK－243

1．褐色土　ローム粒微混
2．暗褐色土　暗褐色土主体
3．暗褐色土　ローム粒微混，しまり弱
4．暗褐色土　ローム粒微混，しまりややあり
5．暗褐色土　ローム粒を1・2より多混，しまりややあり
6．暗黄褐色土　褐色土，ローム混
7．暗黄褐色土　褐色土，ローム混，4に似る，しまり強
8．暗黄褐色土　暗褐色土，ローム斑状混
9．暗黄褐色土　8に似る，ローム多混
10．暗褐色土　ローム粒微混，しまり弱
11．暗赤褐色土　焼土粒多混
12．暗褐色土　8・9に似る，暗褐色土多混
13．暗黄褐色土　ロームと暗褐色土斑状混
14．暗黄褐色土　ローム多混
15．暗黄褐色土　暗褐色土多混
16．暗黄褐色土　ローム斑状混，褐色土多混
17．暗赤褐色土　灰，焼土粒多混
18．黄褐色土　ローム粒，ロームブロック主体
19．橙色土　灰，炭多混




SK－258

1．暗黄褐色土　ローム粒多混　ややしまりあり
2．暗黄褐色土　ローム塊均一混，ややしまりあり

0　(1/80)　2m

第329図　中・近世土坑（7）

長径1.3m，短径1.0m，深さ0.2m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁は底面に近い部分のみの遺存のため緩に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－240（第329図，図版106）

中央部地区中央やや西よりの23L－38グリッド周辺に単独で位置する。平面形は長楕円形を呈し，長径1.9m，短径0.8m，深さ0.6m前後を計測する。底面は中央に若干の窪みがあり，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土を主体にし，ローム粒を多く含む。出土遺物はない。

SK－241（第329図，図版106）

中央部地区中央やや西よりの23L－39グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－240の東約80cmに近接する。平面形は細長楕円形を呈し，長径2.2m，短径0.6m，深さ0.3m前後を計測する。底面は東側で一段のテラス状を呈すほかは，全体的に平らである。壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土を主体にし，ローム粒を多く含む。出土遺物はない。

SK－242（第329図）

中央部地区中央やや南よりの24L－52グリッド周辺に位置し，溝状遺構SD－021に切られている。平面形は楕円形を呈し，長径1.6m，短径0.8m，深さ0.3m前後を計測する。底面は平らであるが，南側にやや傾斜している。壁は全体的に緩に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－243（第329図，図版106）

南部地区北西側の23M－68グリッド周辺に単独で位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長径2.6m，短径1.4m，深さ0.4m前後を計測する。底面は平らで，東西壁近くには小穴がそれぞれ１基ずつ検出された。この小穴の規模は，東側で径32cm，深さ22cm，西側で径22cm，深さ45cmである。底面中央から西側部分にかけては，焼土と炭化物（炭）が広範囲に検出された。壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は上部で暗褐色土主体，下部で暗黄褐色土主体で，全体的に焼土粒及び炭化粒を含む。このような状況から推察すると，火葬墓の可能性も考えられる。出土遺物はない。

SK－258（第329図）

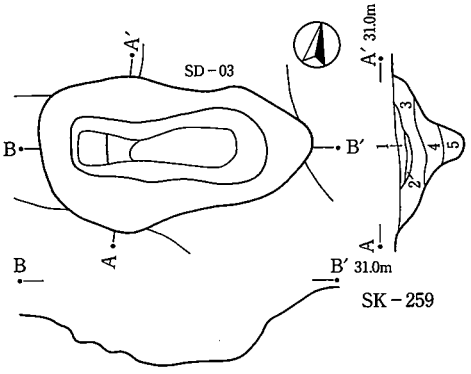
南西部地区東側の23M－37グリッド周辺に位置し，溝状遺構SD－026に切られている。平面形は楕円形を呈し，長径1.8m，短径1.4m，深さ0.4m前後を計測する。底面は平らで，北東隅に径18cm，深さ23cmの小穴が検出された。壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でローム粒とローム塊を多く含む。遺物は流れ込みの土器小片が数点出土した。

SK－259（第330図）

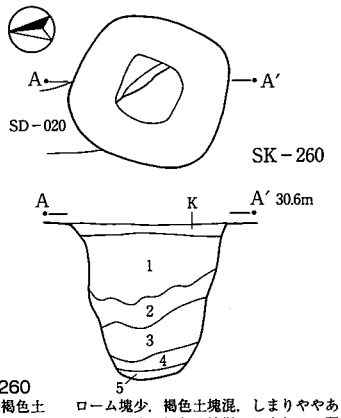
南西部地区南側の23M－64グリッド周辺に位置し，溝状遺構SD－003，SD－006に切られている。平面形は不整形を呈し，長径2.9m，短径1.7m，深さ0.7m前後を計測する。底面は極端に狭まり，凹凸がやや顕著である。壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，２層は宝永の火山灰を多く含む層である。出土遺物はない。火山灰の堆積により，時期は江戸中期以前にもとめられる。

SK－260（第330図，図版107）

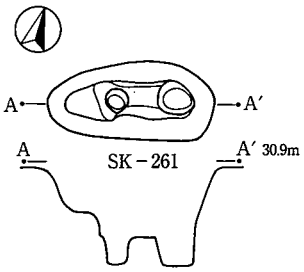
中央部地区西側の23L－34グリッド周辺に位置し，溝状遺構SD－020に切られている。平面形は隅丸方形を呈し，長径1.6m，短径1.6m，深さ1.7m前後を計測する。底面はほぼ平らであるが，若干北側に傾斜している。壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，全体的にローム塊が多く含まれ締まりがなく，埋め戻しが行われたようである。最下層は炭化粒を多量に含む。遺物は流れ込みの土器極小片

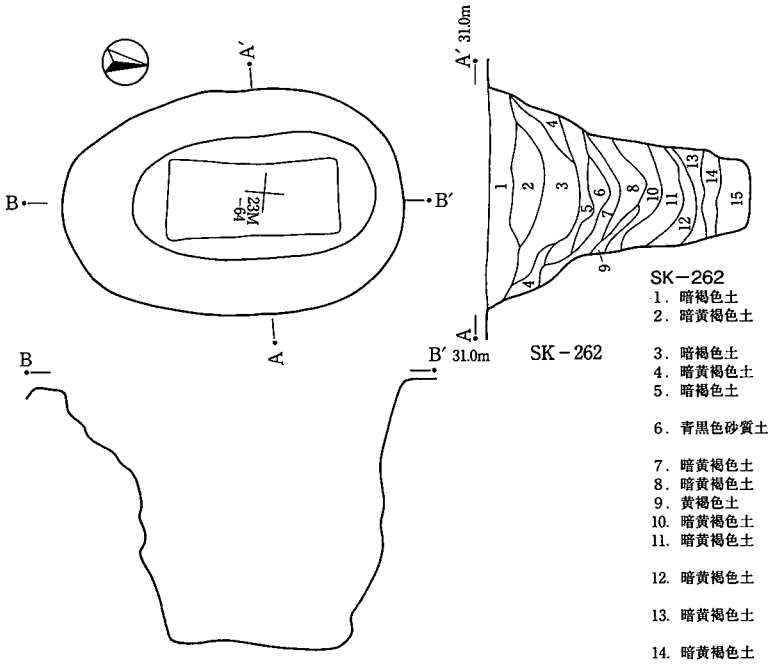



SK－259
1．暗褐色土　しまりなし
2．暗褐色砂質土　黒色火山灰混，しまりなし
3．暗褐色土　しまりなし
4．暗褐色土　ローム粒少混，しまりなし
5．暗黄褐色土　ローム粒多混，しまりあり

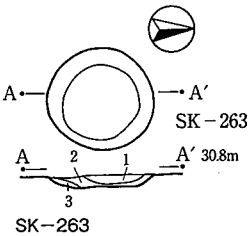



SK－260
1．暗褐色土　ローム塊少，褐色土塊混，しまりややあり
2．暗黄褐色土　ローム粒少，褐色土塊混，しまりやや弱
3．暗黄褐色土　ローム塊多混，しまりなし
4．暗褐色土　ローム粒微混，しまりなし
5．黒褐色土　炭化粒多混，しまりなし

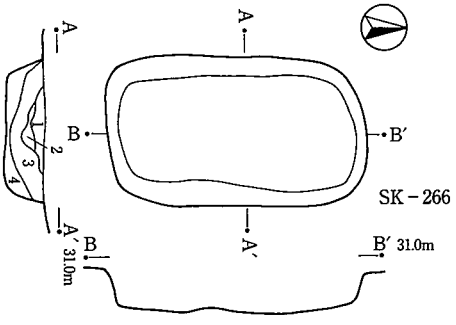


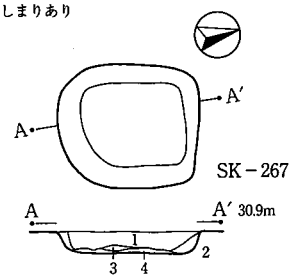

SK－262
1．暗褐色土　ローム微粒，ブロック多混　しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム微粒少，ブロック少混，しまりなし
3．暗褐色土　ローム微粒，ブロック微混，しまりなし
4．暗黄褐色土　ローム微粒，ブロック多混，しまりなし
5．暗褐色土　ローム微粒，ブロック多混，ややしまりなし
6．青黒色砂質土　ローム微粒混，黄褐色土，斑状混，しまりなし，宝永火山灰
7．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック多混，しまり弱
8．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック多混，しまり弱
9．黄褐色土　ローム主体　ややしまりあり
10．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック多混，しまり弱
11．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック多混，ややしまりあり
12．暗黄褐色土　ローム粒，ブロック多混，ややしまり弱
13．暗黄褐色土　ローム微粒，ブロック多混，ややしまり弱
14．暗黄褐色土　ローム微粒，ブロック主体，ややしまりあり
15．黒褐色土　ロームブロック少混，やや粘質，ややしまりあり




SK－263
1．暗褐色土　ややしまりあり
2．黒褐色土　ややしまりあり
3．暗黄褐色土　ローム土多混，しまり弱




SK－266
1．暗褐色土　黒色土，ローム粒多混
2．黒褐色土　黒色土，ローム粒少混
3．黒褐色土　黒色土，ローム粒微混
4．黒褐色土　黒色土，ローム粒少混




SK－267
1．暗褐色土　ローム粒，炭化粒混，ややしまりあり
2．暗褐色土　ローム粒，砂粒多混，ややしまりあり
3．暗黄褐色土　ローム粒多混，しまりあり
4．黄褐色土　ローム主体

0　(1/80)　2m

第330図　中・近世土坑（8）

数点が出土した。

SK－261（第330図，図版107）

南部地区北側の24M－51グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の掘立柱建物跡SB－038を切っている。平面形は長楕円形を呈し，長径1.8m，短径0.9m，深さ0.5m前後を計測する。底面には小穴が2基検出され，東側が径40cm，深さ30cm，西側が径24cm，深さ28cmを計測する。壁は西側の中段に緩やかに傾斜するテラス状の段を有す以外は直に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－262（第330図，図版107）

南西部地区中央やや南よりの23M－64グリッド周辺に単独で位置する。平面形は確認面で楕円形を呈し，長径3.6m，短径2.4m，深さ2.8m前後を計測する。底面は平らで長方形を呈し，長さ1.8m，幅0.8m前後を計測する。壁は若干の凹凸を呈しながら直に立ち上がる。堆積土中位の6層には「宝永の火山灰」が多量に混入しており，江戸中期以前の陥し穴と思われる。出土遺物はない。

SK－263（第330図）

中央部地区中央やや南西よりの23L－58グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，径1.0m，深さ0.1m前後を計測する。底面は平らで，壁は緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，しまりがある。出土遺物はない。

SK－266（第330図，図版108）

南西部地区東側の23M－27グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の掘立柱建物跡SB－041を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し，長径2.7m，短径1.6m，深さ0.5m前後を計測する。底面は若干の凹凸を呈し，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体で，細かなローム粒を含む。遺物は底面から15cm浮いた状態で，常滑大甕1点が出土したが，小片のため図示できなかった。

SK－267（第330図）

中央部地区南側の24L－91グリッド周辺に単独で位置する。平面形は隅丸方形を呈し，長径1.5m，短径1.2m，深さ0.2m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム粒，炭化粒を含む。出土遺物はない。

SK－269（第331図）

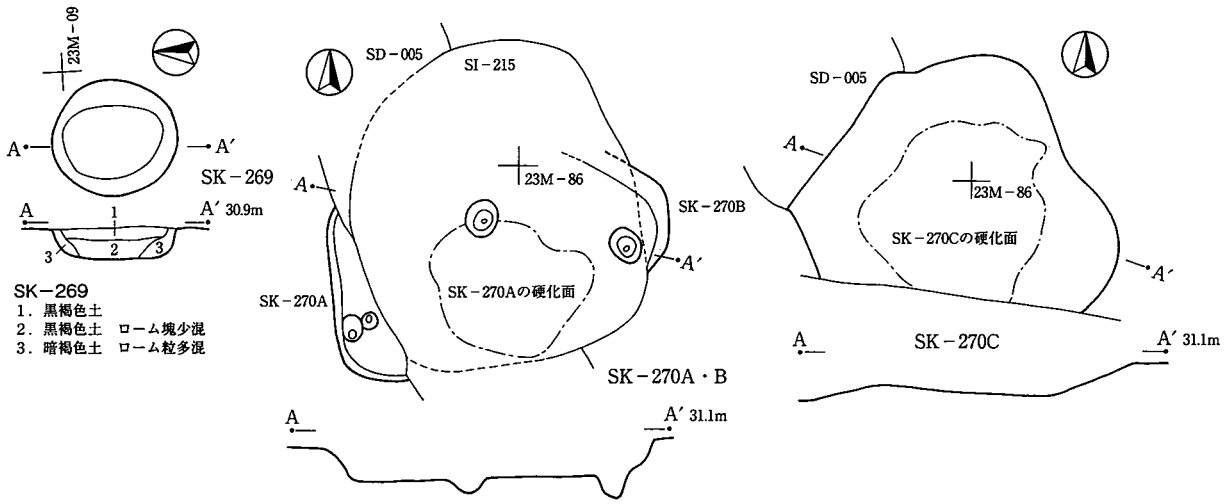
中央部地区南西側の23M－08グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，長径1.3m，短径1.2m，深さ0.3m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体で，ローム塊を少量含む。遺物は流れ込みの土器極小片が数点出土したのみである。

SK－270A（第331図，図版108）

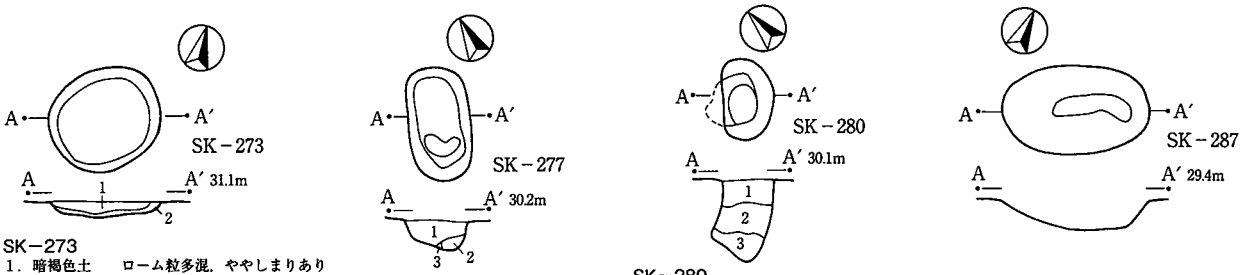
南西部地区南側の23M－85グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－215，溝状遺構SD－005を切り，土坑SK－270B・SK－270Cに切られている。重複が激しいため新旧関係を整理すると，（旧）SI－215→SD－005→SK－270A→SK－270B→SK－270C（新）である。本跡は3基の土坑の中では一番古く，破壊が著しいので平面形は不明である。推定規模は長径1.8m，短径1.6m，深さ0.3m前後を計測する。底面は住居跡SI－215の覆土中位に，緩やかなすり鉢状を呈す。底面中央やや東よりに不整形の硬化面が認められる。壁は極めて緩に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－270B（第331図，図版108）

南西部地区南側の23M－86グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－215，溝状遺構SD－



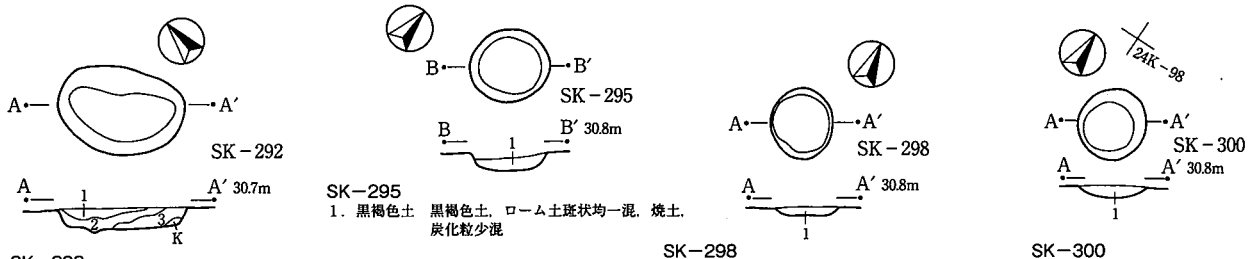

SK－269
1．黒褐色土
2．黒褐色土　ローム塊少混
3．暗褐色土　ローム粒多混




SK－273
1．暗褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり
2．暗黄褐色土　ローム塊主体，しまりあり

SK－277
1．黒褐色土　ロームブロック多混
2．褐色粘性土　ロームブロック主体
3．黒褐色土　ロームブロック主体

SK－280
1．明褐色土　ソフトロームブロック混
2．黒色土　ハードロームブロック少混，土質密
3．褐色土　ハードロームブロック多混主体

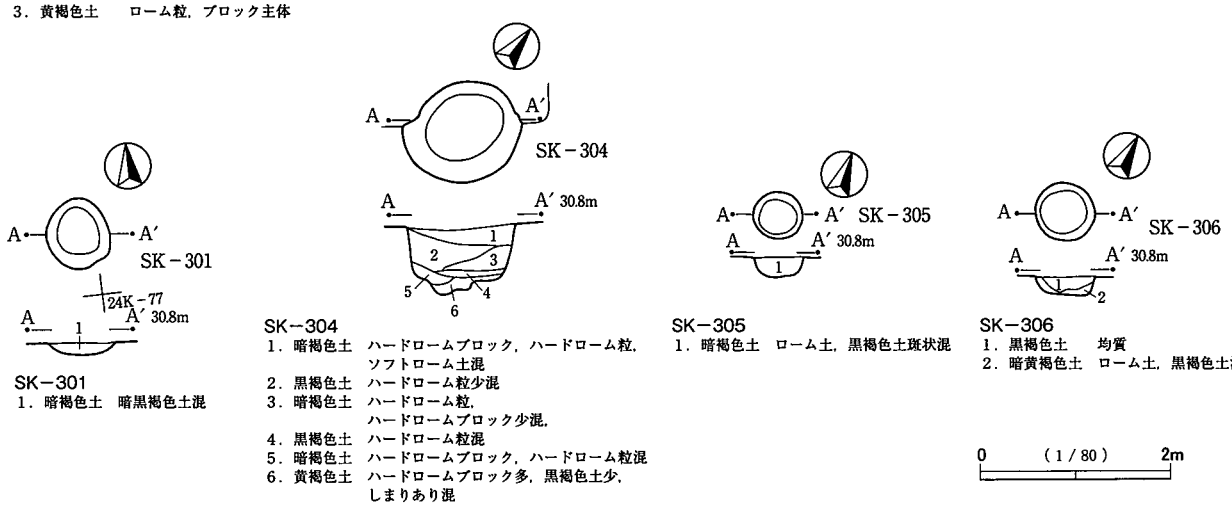



SK－292
1．黒褐色土　ローム粒多混，やや砂質
2．黄黒褐色土　ローム土主体
3．黄褐色土　ローム粒，ブロック主体

SK－295
1．黒褐色土　黒褐色土，ローム土斑状均一混，焼土，炭化粒少混

SK－298
1．黄黒色土　黒色土，ローム土混，炭化粒混

SK－300
1．黒褐色土　灰暗褐色土混




SK－301
1．暗褐色土　暗黒褐色土混

SK－304
1．暗褐色土　ハードロームブロック，ハードローム粒，ソフトローム土混
2．黒褐色土　ハードローム粒少混
3．暗褐色土　ハードローム粒，ハードロームブロック少混，
4．黒褐色土　ハードローム粒混
5．暗褐色土　ハードロームブロック，ハードローム粒混
6．黄褐色土　ハードロームブロック多，黒褐色土少，しまりあり混

SK－305
1．暗褐色土　ローム土，黒褐色土斑状混

SK－306
1．黒褐色土　均質
2．暗黄褐色土　ローム土，黒褐色土混

第331図　中・近世土坑（9）

005，土坑SK－270Aを切り，SK－270Cに切られている。重複が激しいため遺存状態は悪く，東側の一部分のみしか遺存せず平面形は不明である。推定規模は長径1.0m，短径0.3m，深さ0.3m前後を計測する。底面はSK－270Aの硬化面の上面に構築され，緩やかなすり鉢状を呈していたと思われるが，SK－270Cに破壊され詳細は不明である。遺存する壁は極めて緩に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－270C（第331図，図版108）

南西部地区南側の23M－86グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－215，溝状遺構SD－005，土坑SK－270A，SK－270Bを切っている。平面形は不整形を呈し，長径3.3m，短径2.6m，深さ0.3m前後を計測する。底面中央には硬化面があり，SK－270Aの硬化面の上面に構築されている。底面は緩やかなすり鉢状を呈しながら，壁は極めて緩に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－273（第331図）

南西部地区東側の23M－56グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，長径1.2m，短径1.1m，深さ0.2m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁は極めて緩に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－277（第331図，図版108）

中央部地区南東側の24L－57グリッド周辺に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.2m，短径0.7m，深さ0.3m前後を計測する。底面は凹凸があり，壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

SK－280（第331図）

中央部地区南東側の24L－57グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－277の南西約3.5mに近接する。平面形は不整形を呈し，長径0.8m，短径0.6m，深さ0.9m前後を計測する。底面は傾斜が強く，北西側でオーバーハングしている。壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土はロームブロックを多量に含む褐色土が，黒色土を挟み込むような堆積をしており，埋め戻しと考えられる。出土遺物はない。

SK－287（第331図）

中央部地区東側の25L－31グリッド周辺に単独で位置し，西側には小穴群が近接する。平面形は楕円形を呈し，長径1.5m，短径0.9m，深さ0.3m前後を計測する。底面は小さく長楕円形を呈し，壁は全体的に緩に立ち上がる。遺物は流れ込みの土器極小片１点が出土したのみである。

SK－292（第331図，図版108）

中央部地区中央やや東よりの24K－96グリッド周辺に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.4m，短径0.9m，深さ0.2m前後を計測する。底面は若干の凹凸を呈し，壁は全体的に急に立ち上がる。遺物は石片１点が出土したのみである。

SK－295（第331図，図版109）

中央部地区東側の25K－90グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，径0.8m，深さ0.2m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は黒褐色土で，焼土粒・炭化粒を少量含む。出土遺物はない。

SK－298（第331図，図版109）

中央部地区中央やや東よりの24K－98グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，長径0.8m，短径0.7m，深さ0.1m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は黄黒色土で，炭化粒を少量含む。出土遺物はない。

SK－300（第331図，図版109）

中央部地区中央やや東よりの24K－98グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－298から北西約2.5mに近接する。平面形は円形を呈し，長径0.8m，短径0.7m，深さ0.1m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は黒褐色土で，遺物は流れ込みの土器極小片が1点出土した。

SK－301（第331図，図版109）

中央部地区中央やや北東よりの24K－66グリッド周辺に位置し，掘立柱建物跡SB－044を切っている。平面形は円形を呈し，径0.7m，深さ0.1m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土で，出土遺物はない。

SK－304（第331図，図版109）

中央部地区中央やや北東よりの24K－88グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－248，SI－249を切っている。平面形は不整形を呈し，長径1.3m，短径1.1m，深さ0.7m前後を計測する。底面は凹凸が顕著で，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ロームブロックをやや多めに含む。出土遺物はない。

SK－305（第331図）

中央部地区北東側の25K－70グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，径0.5m，深さ0.2m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土で，ローム土・黒褐色土を斑状に含む。出土遺物はない。

SK－306（第331図）

中央部地区北東側の25K－71グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－305から北東約2.5mに近接する。平面形は円形を呈し，径0.6m，深さ0.2m前後を計測する。底面は平らであるが，北東側に若干傾斜する。壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体で，出土遺物はない。

SK－309（第332図）

南西部地区南西端の23N－06グリッド周辺に位置し，溝状遺構SD－005を切っている。平面形は不整形を呈し，長径2.7m，短径2.2m，深さ0.2m前後を計測する。形態的には竪穴状遺構の小規模なものともいえる。底面は平らで，溝と重複する部分に硬化面がみられる。壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ロームブロックをやや多めに含む。遺物は流れ込みの土器小片と石片が数点出土した。

SK－310（第332，図版110）

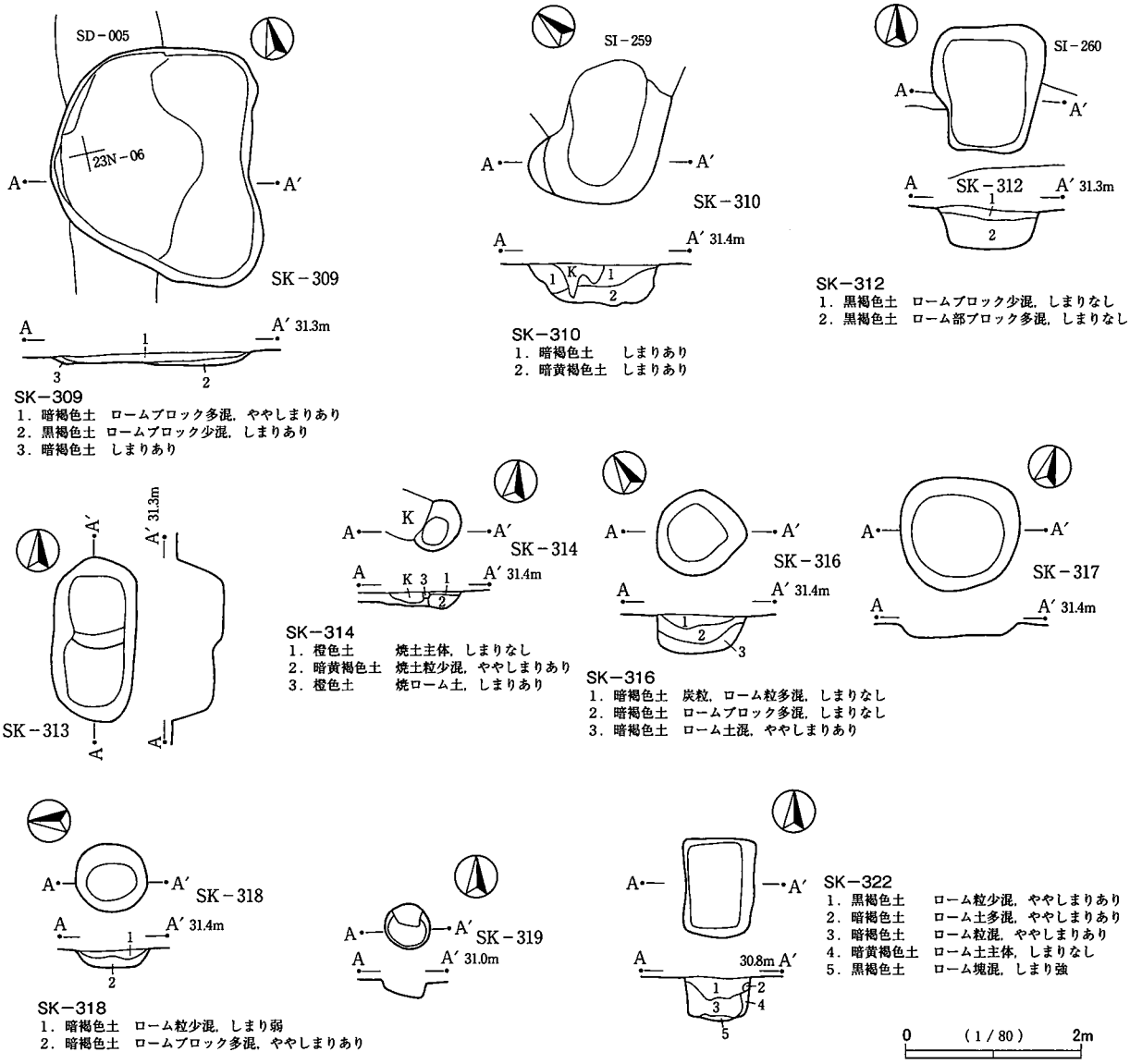
南部地区中央の24M－92グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－259を切っている。平面形は不整形を呈し，長径1.6m，短径1.4m，深さ0.5m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁は西側が緩で，東側が急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，締まりがある。出土遺物はない。

SK－312（第332図）

南部地区西側の23N－08グリッド周辺に位置し，奈良・平安時代の住居跡SI－260，溝状遺構SD－035を切っている。平面形は方形を呈し，長径1.5m，短径1.2m，深さ0.5m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体で，ロームブロックが含まれる。出土遺物はない。

SK－313（第332図）

南部地区西側の23N－18グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－312の南約0.5mに近接する。平面形は長楕円形を呈し，長径1.9m，短径0.9m，深さ0.5m前後を計測する。底面は平らであるが，南側が浅めで，北側が深くなっており，段状になっている。壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。




第332図　中・近世土坑（10）

SK－314（第332図）

南部地区南西側の24N－30グリッド周辺に単独で位置する。平面形は西側に現代の撹乱が入り，不明瞭であるが，円形を呈していたものと思われる。，長径0.6m，遺存する短径0.4m，深さ0.2m前後を計測する。底面は半球状を呈し，壁は全体的に緩に立ち上がる。遺物は陶器極小片が数点出土した。

SK－316（第332図，図版110）

南部地区西側の24N－10グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，径1.0m，深さ0.4m前後を計測する。底面は若干丸みがあり，壁は西側が直で，東側が急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム粒とロームブロックを含む。遺物は流れ込みの土器小片１点が出土した。

SK－317（第332図，図版110）

南部地区西側の24N－20グリッド周辺に単独で位置し，土坑SK－316からは北西に約３m隔たっている。平面形は隅丸方形を呈し，長径1.3m，短径1.3m，深さ0.1m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁はきわめて緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム粒とロームブロックを含む。遺物は流れ込みの土器極小片数点が出土した。

SK－318（第332図）

南部地区中央やや南よりの24N－34グリッド周辺に単独で位置する。平面形は円形を呈し，径0.8m，深さ0.2m前後を計測する。底面は平らで，壁は緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ロームブロックをやや多く含む。出土遺物はない。

SK－319（第332図）

南西部地区南端の23N－12グリッド周辺に位置する。平面形は円形を呈し，径0.5m，深さ0.2m前後を計測する。底面は平らで東側に傾斜し，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は黒色土主体で，炭化粒を多く含む。出土遺物はない。

SK－322（第332図）

中央部地区中央やや南よりの24L－43グリッド周辺に単独で位置する。平面形は方形を呈し，長径1.1m，短径0.8m，深さ0.5m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体で，ローム粒を含む。出土遺物はない。

## 第4節　塚

東部地区北西よりの25J－92グリッド周辺に3基検出され，北側から侵入する支谷の先端部を北西側に望む位置にある。3基はそれぞれ約3mから7mの範囲で近接し，3基ともに座布団状の低い盛土で小規模である。塚の周辺及びSX－004の盛土中からは「新寛永」銭が出土しており．3基ともに時期は近世江戸期の所産といえる。（第333図）の平面図で示した破線は，見かけの裾を表している。

SX－002（第333図）

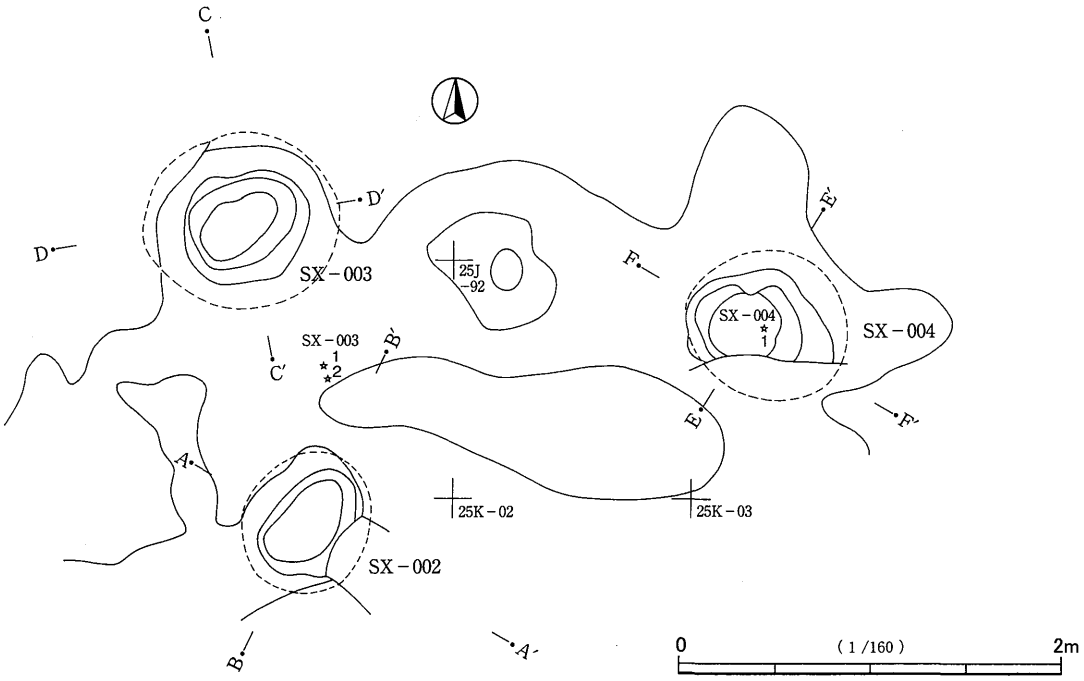
3基のなかでは南側の25K－01グリッドに位置する。北側約3mにはSX－003が近接し，北東側に約7m隔たってSX－004が位置する。見かけの墳端部平面はほぼ円形を呈し，長径3.0m，短径2.7m，盛土部分は旧表土上に構築され，最大高は約62cmを計測する。盛土は暗褐色土と黒色土が主体で，ロームブロックは混入していない。また，盛土部下の旧表土は厚く，盛土部の外側は薄いため，周辺の旧表土及びローム漸移層を盛土として利用したと考えられる。盛土中からの出土遺物はないが，北側約1.3mの地点で旧表土から数cm浮いた状態で「新寛永」銭が2点出土した。

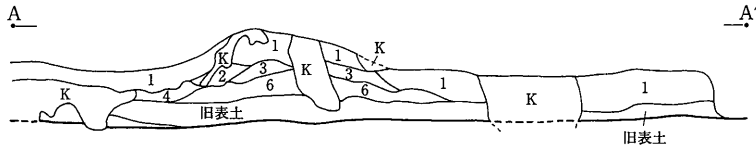
SX－003（第333図）

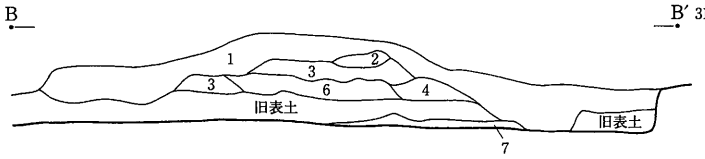
3基のなかでは北側の25J－81グリッドに位置する。南側約3mにはSX－002が近接し，南東側に約7.4m隔たってSX－004が位置する。見かけの墳端部平面はほぼ円形を呈し，長径4.2m，短径3.7m，盛土部分は旧表土上に構築され，最大高は約82cmを計測する。構築状況はSX－002とほぼ同一である。盛土中からの出土遺物はないが，南側約1.0mの地点で旧表土から数cm浮いた状態で「新寛永」銭が2点出土した。

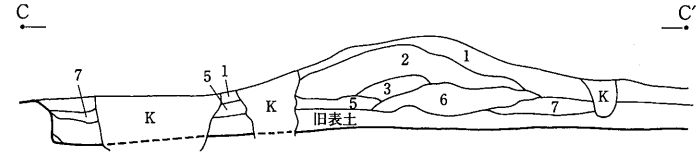
SX－004（第333図）

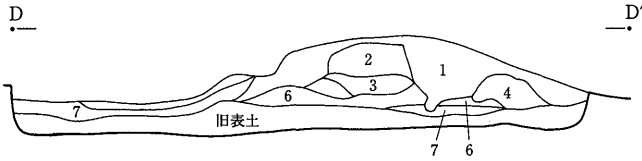
3基のなかでは東側の25J－93グリッドに位置する。南西側約7mにはSX－002が，北西側には約7.4m隔たってSX－003が位置する。見かけの墳端部平面はほぼ円形を呈し，長径3.5m，短径3.1m，盛土部分は旧表土上に構築され，最大高は約64cmを計測する。構築状況はSX－002とほぼ同一である。盛土中からの出土遺物は名称不詳の鉄製品1点及び「新寛永」銭1点が出土した。

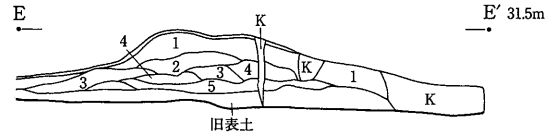


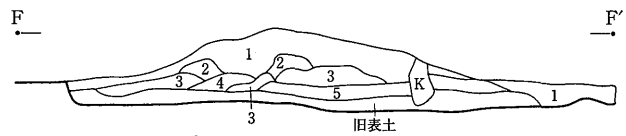



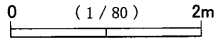



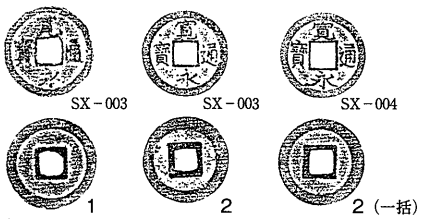



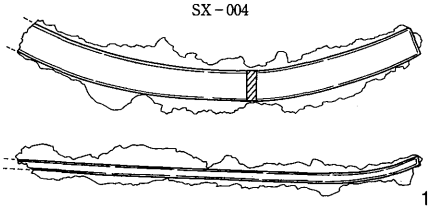

**SX－002・SX－003**

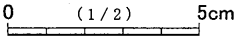
1．暗褐色土
2．黒褐色土・黄褐色土
3．暗褐色土・黄褐色土
4．褐色土・黄褐色土　褐色土主体、ローム混
5．黄褐色土
6．黄褐色土・褐色土　ローム主体、褐色土混
7．褐色土

**SX－004**

1．暗褐色土　表土層、しまりなし
2．暗褐色土　暗褐色土主体、黒色土・黄褐色土混
3．褐色土　褐色土主体、黄褐色土混
4．黒褐色土　黒褐色土主体、褐色土・黄褐色土混
5．黄褐色土　黄褐色土主体、褐色土・黒色土混




第333図　塚

## 第５節　小穴（第31表）

本遺跡全体で60基を検出し，検出地点は集中する傾向がある。なかには群をなさない単独の小穴も数基みられるが，大まかに５地点程度の群をなしている。出土遺物はほとんどなく，あっても流れ込みかどうかの判断が付かない土器の極小片がほとんどで，帰属時期を特定できる資料は乏しい。

P－001（第334図）

東部地区北端の25J－24グリッドに単独で位置する。平面形は円形を呈し，径0.5m，深さ0.2m前後を計測する。半球状に掘り込まれ底面は丸みがあり，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム土を少量含む。遺物は底面近くから土器極小片数点が出土したが，流れ込みかどうかの判断が付かないため，奈良・平安時代に帰属する可能性も残る。

P－002（第334図）

東部地区北端の25J－25グリッドに単独で位置する。平面形はほぼ円形を呈し，長径0.5m，短径0.4m，深さ0.3m前後を計測する。底面は丸みがあり，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム土・ローム粒を少量含む。出土遺物はない。

P－003（第334図）

北東部地区南端の25I－97グリッドに単独で位置する。本跡を含みP－004～P－008が近接し，全６基で一群を形成しており，この一群をＡ群と呼称する。平面形は楕円形を呈し，長径0.8m，短径0.4m，深さ0.6m前後を計測する。底面は小さく平らで，壁は南北が直，東西が急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム土・ローム粒を含む。出土遺物はない。

P－004（第334図）

北東部地区南端の25I－97グリッドに単独で位置し，Ａ群に属する。平面形は円形を呈し，径0.5m，深さ0.5m前後を計測する。底面はやや丸みがあり東側に若干傾斜し，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム土を少量含む。出土遺物はない。

P－005（第334図）

北東部地区南端の25I－97グリッドに単独で位置し，Ａ群に属する。平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.4m前後を計測する。底面は丸みを帯び，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム土を多量に含む。出土遺物はない。

P－006（第334図）

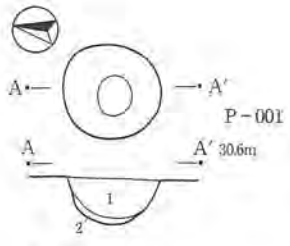
北東部地区南端の25I－97グリッドに単独で位置し，Ａ群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.5m，短径0.3m，深さ0.7m前後を計測する。底面は丸みを帯び，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム土・ローム粒を含む。出土遺物はない。

P－007（第334図）

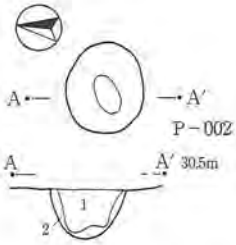
北東部地区南端の25J－07グリッドに単独で位置し，Ａ群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.9m，短径0.4m，深さ0.6m前後を計測する。底面はやや丸みを帯び，東側に中央がやや窪むテラスをもつ。壁は東側で急な以外は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム土・ローム粒を含む。出土遺物はない。

P－008（第334図）

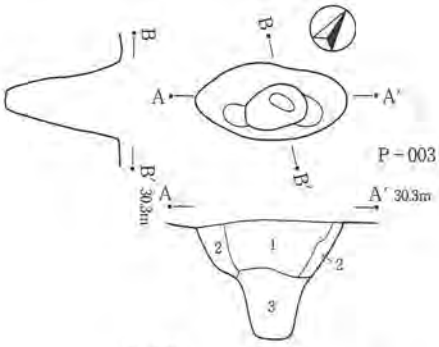
北東部地区南端の25I－97グリッドに単独で位置し，Ａ群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.5m，



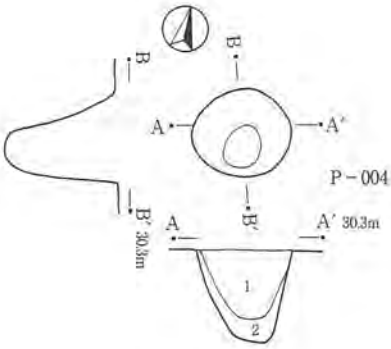

P－001
1．暗褐色土　ローム土少混
2．黄褐色土　ローム土主体



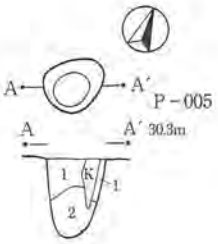

P－002
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒少混
2．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒窯状多混



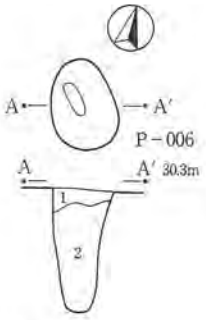

P－003
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．3記述なし



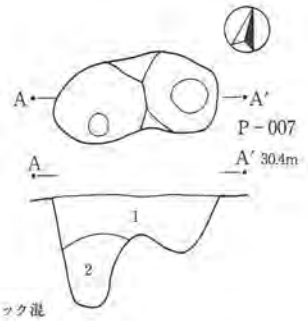

P－004
1．暗褐色土　ローム土少混
2．黄褐色土　ローム土，ロームブロック主体



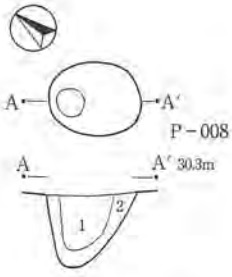

P－005
1．暗黄褐色土　ローム土多混
2．黒褐色土　ローム粒少混



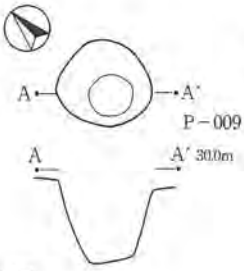

P－006
1．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック混
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒混

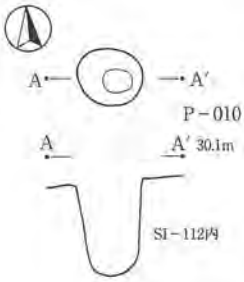


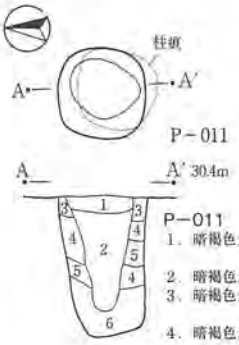

P－007
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒少混



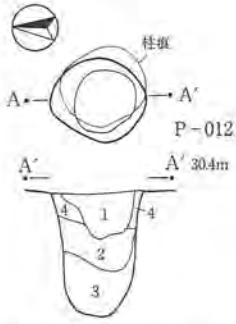

P－008
1．暗褐色土　ローム粒少混
2．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混



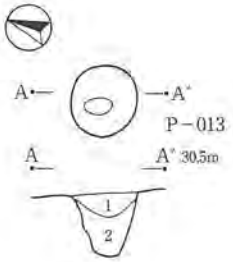



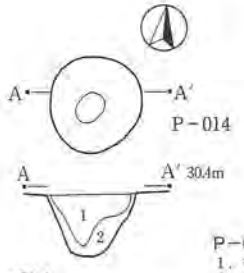

P－011
1．暗褐色土　ローム粒混，しまりなし
2．暗褐色土　ローム粒混
3．暗褐色土　ローム土，ローム粒多混
4．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
5．暗黄褐色土　ローム粒多混
6．黄褐色土　ローム土主体



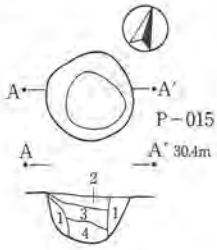

P－012
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
3．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
4．黄褐色土　ローム土，ローム粒主体



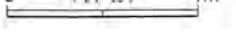

P－013
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混




P－014
1．黒褐色土　ローム粒混
2．暗黄褐色土　ローム土多混




P－015
1．褐色土　ローム粒，黒褐色土混，しまりあり
2．褐色土　ローム粒，暗褐色土混　しまりあり
3．黒褐色土　ローム粒混
4．暗黄褐色土　ローム主体，暗褐色土混，しまりあり




第334図　小穴（1）

短径0.4m，深さ0.4m前後を計測する。底面は小さく丸みを帯び，壁は南側で急な以外は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム粒を少量含む。遺物は底面近くから土器極小片数点が出土した。帰属時期は覆土の状況及び出土遺物から，奈良・平安時代の可能性も残る。

P－009（第334図）

北東部地区南東側の25I－88グリッドに単独で位置する。本跡はP－003～P－008の一群から約８m隔たってる。平面形はやや不整な円形を呈し，長径0.5m，短径0.4m，深さ0.4m前後を計測する。底面は平らであるが，北西側にやや傾斜する。壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－010（第334図）

北東部地区中央やや西よりの25I－30グリッドに，奈良・平安時代の住居跡SI－112を切って位置する。本跡を含みP－011～P－017が近接し，全８基で一群を形成しており，この一群をＢ群と呼称する。平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.5m前後を計測する。底面は丸みを帯び，壁は全体的に直に立ち上がる。しっかりした掘り込みの小穴で，黒褐色土が中央，両脇にローム粒とロームブロック混じりの暗褐色土がみられた。出土遺物はない。

P－011（第334図）

北東部地区南側の25I－62グリッドに，奈良・平安時代の掘立柱建物跡SB－022を切って位置する。Ｂ群に属する。P－012と同様に平面形は隅丸方形を呈し，長径0.5m，短径0.5m，深さ0.8m前後を計測する。底面は平らであるが，北側にやや傾斜する。壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム粒を含み，柱痕が明瞭に残っている。出土遺物はない。

P－012（第334図）

北東部地区南側の25I－72グリッドに，奈良・平安時代の掘立柱建物跡SB－022を切って位置する。Ｂ群に属する。平面形は隅丸方形を呈し，長径0.5m，短径0.5m，深さ0.6m前後を計測する。底面はやや丸みを帯び，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，ローム土・ローム粒を含み，柱痕が明瞭に残っている。出土遺物はない。

P－013（第334図）

北東部地区南側の25I－42グリッドに単独で位置し，Ｂ群に属する。平面形は円形を呈し，径0.4m，深さ0.3m前後を計測する。底面は小さく平らで，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体で，ローム土・ローム粒を多量に含む。出土遺物はない。

P－014（第334図）

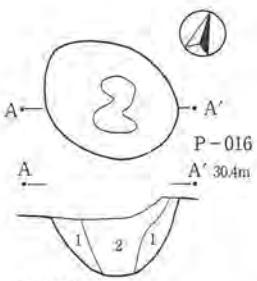
北東部地区南側の25I－32グリッドに単独で位置し，Ｂ群に属する。平面形は円形を呈し，径0.5m，深さ0.5m前後を計測する。底面は小さく平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は黒色土主体で，ローム粒を含む。出土遺物はない。

P－015（第334図）

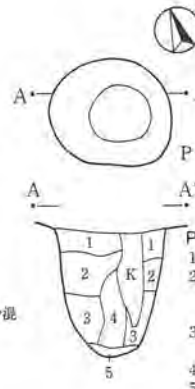
北東部地区南側の25I－72グリッドに単独で位置し，Ｂ群に属する。平面形は円形を呈し，径0.5m，深さ0.3m前後を計測する。底面はやや丸みを帯び，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は褐色土主体で，ローム粒を含み，全体的にしまりがある。出土遺物はない。

P－016（第335図）

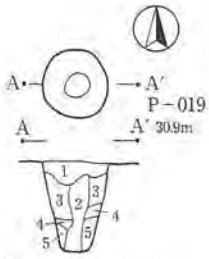
北東部地区南側の25I－72グリッドに単独で位置し，Ｂ群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.8m，



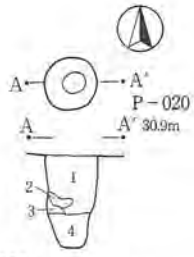

P－016
1．暗黄褐色土　ローム主体，褐色土少混
2．暗褐色土　ローム粒少混



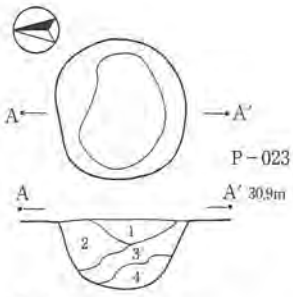

P－017
1．暗褐色土　ローム粒多混
2．暗黄褐色土　ローム塊，ローム粒多混，ややしまりあり
3．黒褐色土　ローム塊混，しまりあり
4．暗褐色土　しまりなし
5．黒褐色土　しまり強



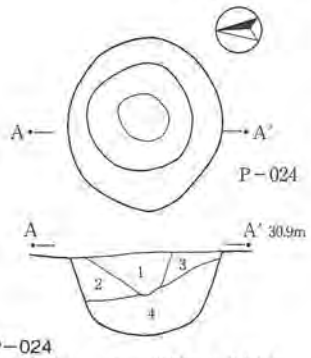

P－019
1．暗褐色土　ややしまりあり
2．黒褐色土　しまりなし
3．暗褐色土　ローム粒混，ややしまりあり
4．黄褐色土　ローム土主体，しまりあり
5．暗褐色土　ローム粒混，しまりあり



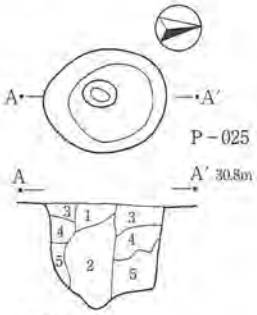

P－020
1．暗褐色土　しまりあり
2．黄褐色土　ローム土主体，しまりあり
3．黒褐色土　ややしまりあり
4．暗黄褐色土　ローム塊混，ややしまりあり



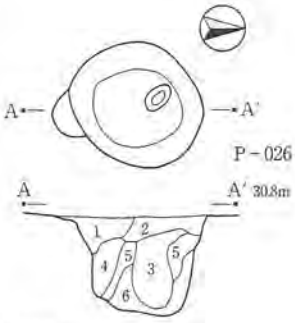

P－023
1．暗褐色土　ローム粒多混
2．暗黄褐色土　ローム粒多混
3．黒褐色土　ローム粒多混
4．暗黄褐色土　ローム塊多混



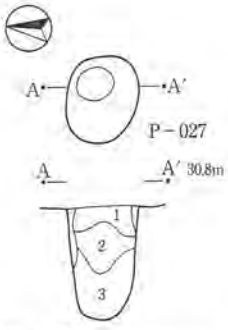

P－024
1．暗褐色土　ローム粒多混，しまりあり
2．暗黄褐色土　ローム塊混，黒色土斑状混，ややしまりあり
3．暗黄褐色土　ローム粒多混，しまりあり
4．暗褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり



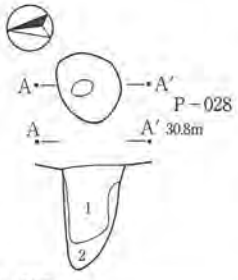

P－025
1．暗褐色土　ローム粒多混
2．暗褐色土　ローム粒少混
3．暗黄褐色土　ローム塊多混
4．暗黄褐色土　ローム塊多混
5．暗黄褐色土　ローム土多混



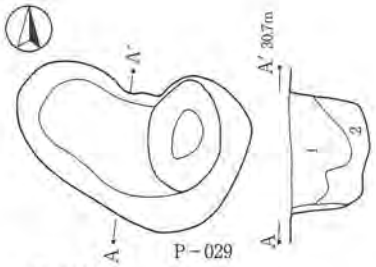

P－026
1．黒褐色土　しまり弱
2．暗褐色土　ローム塊少混，ややしまりあり
3．暗褐色土　ローム粒，砂粒混
4．暗褐色土　ローム粒少混
5．暗黄褐色土　ローム粒多混
6．暗黄褐色土　ローム土多混



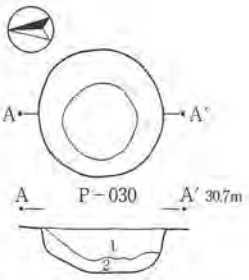

P－027
1．暗黄褐色土　ローム粒少混，しまりあり
2．黒褐色土　ローム粒少混，しまりなし
3．暗黄褐色土　ローム粒多混



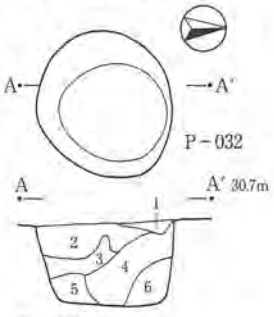

P－028
1．黒褐色土　ローム粒少混
2．暗黄褐色土　ローム粒多混



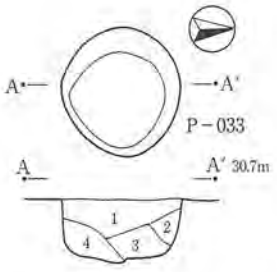

P－029
1．暗黄褐色土　ローム土多混，しまりなし
2．黄褐色土　ローム主体，しまりなし



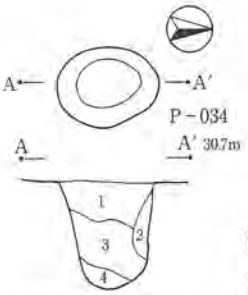

P－030
1．黒褐色土　ローム粒少混，しまり弱
2．暗黄褐色土　ローム主体



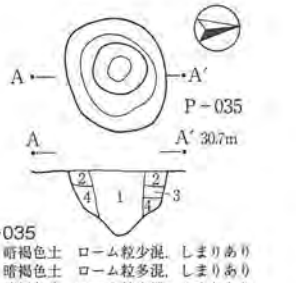

P－032
1．暗黄褐色土　ローム主体，しまりあり
2．暗黄褐色土　ローム粒多混，しまりあり
3．黒褐色土　ローム粒少混，しまりあり
4．黒褐色土　ローム粒多混，しまりあり
5．暗黄褐色土　ローム土主体，しまりあり
6．暗黄褐色土　ローム土混，しまりあり




P－033
1．暗褐色土　ローム粒混，しまりあり
2．暗黄褐色土　ローム土多混，しまりあり
3．暗褐色土　ローム粒少混，しまりあり
4．暗褐色土　ローム粒多混，しまりあり




P－034
1．暗褐色土　ローム粒少混，ややしまりあり
2．黒褐色土　ローム塊混，しまりあり
3．黒褐色土　しまりなし
4．黒褐色土　ローム塊多混，しまりなし




P－035
1．暗褐色土　ローム粒少混，しまりあり
2．暗褐色土　ローム粒多混，しまりあり
3．暗褐色土　ローム粒少混，しまりあり
4．暗褐色土　ローム塊混，しまりあり

0　(1/40)　1m

第335図　小穴（2）

短径0.6m，深さ0.4m前後を計測する。半球状に掘り込まれ底面は丸く，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土はローム主体で暗黄褐色を呈す。遺物は底面近くから土器小片１点が出土したが，流れ込みかどうかの判断が付かないため，奈良・平安時代に帰属する可能性も残る。

P－017（第335図）

北東部地区南側の25I－62グリッドに単独で位置し，B群に属する。平面形はやや不整な円形を呈し，長径0.7m，短径0.6m，深さ0.7m前後を計測する。底面は丸みを帯び，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土・黒褐色土主体でローム塊・ローム粒を含む。遺物は覆土上層から土器極小片数点が出土したが，流れ込みと思われる。

P－019（第335図）

中央部地区中央やや南よりの24L－62グリッドに単独で位置する。P－020が西側に近接するが，群としては把握できない。平面形は円形を呈し，径0.4m，深さ0.5m前後を計測する。底面は小さく平らで，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒を含み，柱痕の部分以外は全体的にしまりがある。出土遺物はない。

P－020（第335図）

中央部地区中央やや南よりの24L－62グリッドに単独で位置する。P－019が東側に近接するが，群としては把握できない。平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.5m前後を計測する。底面は小さく平らで，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土・暗黄褐色土主体で，全体的にしまりがある。出土遺物はない。

P－023（第335図）

中央部地区南側の24L－90グリッドに単独で位置する。P－024が西側に近接するが，群としては把握できない。平面形はやや不整な円形を呈し，長径0.7m，短径0.6m，深さ0.4m前後を計測する。半球状に掘り込まれ底面は丸く，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土・暗黄褐色土主体で，ローム粒を多量に含む。出土遺物はない。

P－024（第335図）

中央部地区南側の23L－99グリッドに単独で位置する。P－023が東側に近接するが，群としては把握できない。平面形はやや不整な円形を呈し，長径0.9m，短径0.8m，深さ0.4m前後を計測する。底面はやや丸みを帯び，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗褐色土・暗黄褐色土主体で，ローム粒を多量に含む。出土遺物はない。

P－025（第335図）

中央部地区南西端の23L－76グリッドに単独で位置する。本跡を含みP－026～P－035（P－031は欠番）が近接し，全10基で一群を形成しており，この一群をC群と呼称する。平面形は楕円形を呈し，長径0.7m，短径0.5m，深さ0.6m前後を計測する。底面は中央が窪み柱痕がみられ，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土・暗黄褐色土主体で，ローム塊・ローム粒を多量に含む。出土遺物はない。

P－026（第335図）

中央部地区南西端の23L－77グリッドに単独で位置し，C群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.7m，短径0.6m，深さ0.5m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒・ローム塊を含む。出土遺物はない。

P－027（第335図）

中央部地区南西端の23L－76グリッドに単独で位置し，C群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.5m，短径0.4m，深さ0.6m前後を計測する。底面は丸みを帯び，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でローム粒を含む。出土遺物はない。

P－028（第335図）

中央部地区南西端の23L－76グリッドに単独で位置し，C群に属する。平面形はやや不整な円形を呈し，長径0.4m，短径0.3m，深さ0.6m前後を計測する。底面はややとがり気味で平らではなく，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体でローム粒を含む。遺物は覆土上層から土器極小片数点が出土したが，流れ込みと思われる。

P－029（第335図）

中央部地区南西端の23L－76グリッドに単独で位置し，C群に属する。平面形は不整形を呈し，長径1.3m，短径0.6m，深さ0.4m前後を計測する。底面は凹凸があり，東壁直下は平面楕円形に数cmほど窪んでいる。壁は東側が急な以外は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でローム土を含み，全体にしまりはない。遺物は覆土上層から土器極小片数点が出土したが，流れ込みと思われる。

P－030（第335図）

中央部地区南西端の23L－65グリッドに単独で位置し，C群に属する。平面形は円形を呈し，径0.7m，深さ0.3m前後を計測する。底面は中央部が数cmほど窪み，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体でローム粒を少量含み，全体にしまりはない。遺物は覆土上層から土器極小片数点が出土したが，流れ込みと思われる。

P－032（第335図）

中央部地区南西端の23L－74グリッドに単独で位置し，C群に属する。平面形はやや不整な円形を呈し，長径0.8m，短径0.7m，深さ0.4m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。堆積土は暗黄褐色土主体でローム粒をやや多く含み，全体的にしまりは良い。出土遺物はない。

P－033（第335図）

中央部地区南西端の23L－65グリッドに単独で位置し，C群に属する。平面形はやや不整な円形を呈し，長径0.7m，短径0.6m，深さ0.3m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体でローム粒をやや多く含み，全体的にしまりは良い。遺物は土器小片数点が出土しているが，流れ込みかどうかの判断が付かないため，奈良・平安時代に帰属する可能性もある。

P－034（第335図）

中央部地区南西端の23L－64グリッドに単独で位置し，C群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.5m，短径0.4m，深さ0.6m前後を計測する。底面はやや丸みを帯び，壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体でローム塊をやや多く含み，全体的にしまりない。出土遺物はない。

P－035（第335図）

中央部地区南西端の23L－64グリッドに単独で位置し，C群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.6m，短径0.5m，深さ0.4m前後を計測する。底面は中央部が円形に窪み，柱痕がみられる。壁は全体的に直に立ち上がる。堆積土は黒褐色土主体でローム粒を含み，全体的にしまりがある。出土遺物はない。

P－036（第336図）

南西部地区東側の23M－36グリッドに単独で位置する。本跡を含みP－037～P－040Bが近接し，全6基で一群を形成しており，この一群をD群と呼称する。平面形はやや不整な円形を呈し，長径0.4m，短径0.3m，深さ0.4m前後を計測する。底面はとがり気味で平らでなく，壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－037（第336図）

南西部地区東側の23M－35グリッドに単独で位置し，D群に属する。平面形は不整な楕円形を呈し，長径0.7m，短径0.6m，深さ0.3m前後を計測する。底面はほぼ平らであるが，木の根状の深穴が2か所にある。壁は全体的に直に立ち上がる。出土遺物はない。

P－038（第336図）

南西部地区東側の23M－35グリッドに単独で位置し，D群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.8m，短径0.5m，深さ0.4m前後を計測する。底面は小さく細長く，西側に傾斜している。壁は全体的に急に立ち上がる。遺物は覆土上層から土器小片が数点出土したが，流れ込みと思われる。

P－039（第336図）

南西部地区東側の23M－45グリッドに単独で位置し，D群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.7m，短径0.6m，深さ0.2m前後を計測する。底面は若干の凹凸があり，中央やや西よりに浅い小穴がある。壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は暗褐色土主体で，しまりがある。遺物は覆土下層から土器極小片が数点出土しており，奈良・平安時代に帰属する可能性もある。

P－040A（第336図）

南西部地区東側の23M－46グリッドに単独で位置し，D群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.4m，短径0.3m，深さ0.3m前後を計測する。底面は平らであるが，北西側に若干傾斜する。壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－040B（第336図）

中央部地区北東側の24K－37グリッドに単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径0.7m，短径0.6m，深さ0.3m前後を計測する。底面は丸みを帯び，壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は褐色土主体でしまりがある。出土遺物はない。

P－041（第336図）

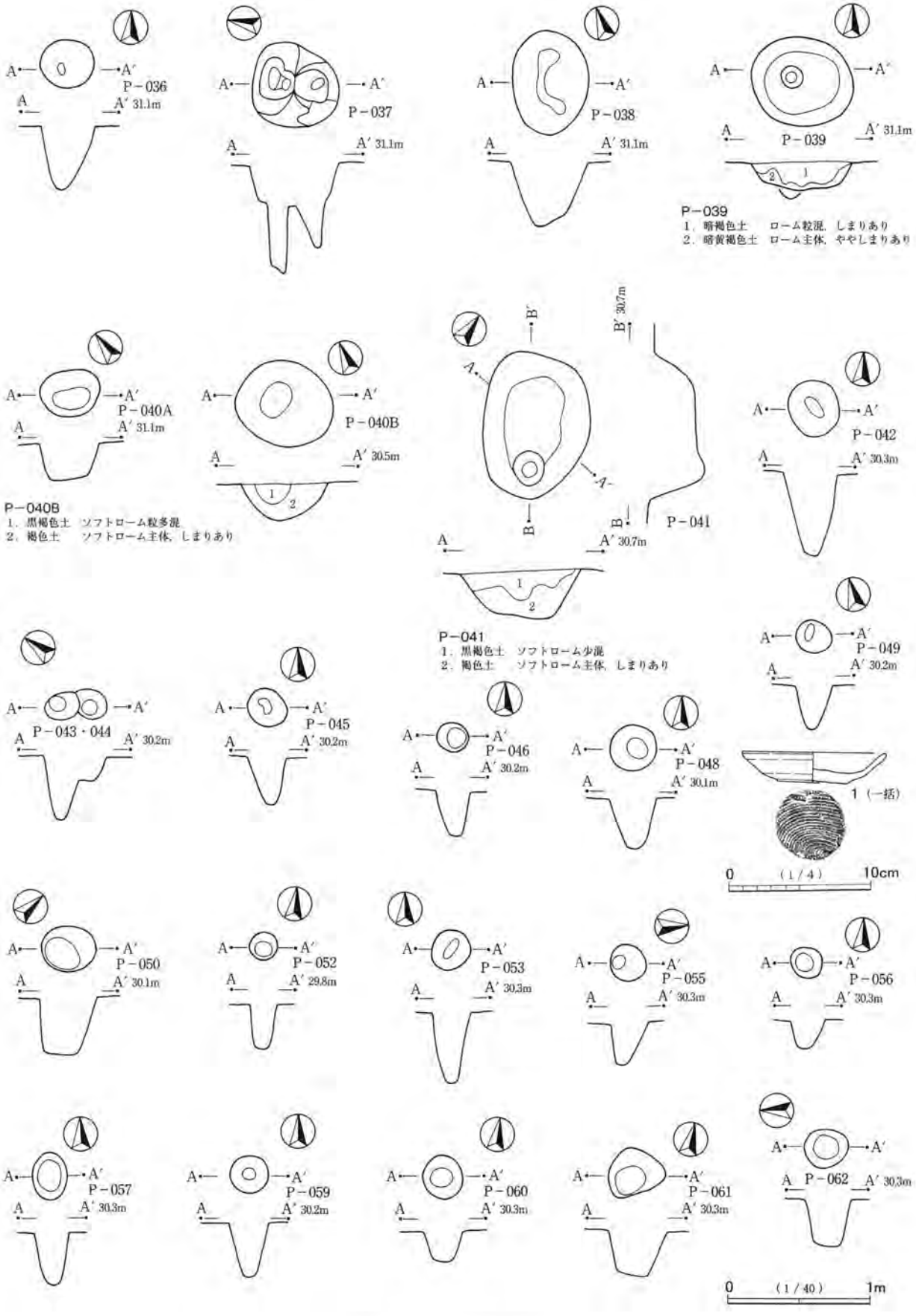
中央部地区北東端の25K－30グリッドに単独で位置する。平面形はやや不整な楕円形を呈し，長径1.0m，短径0.8m，深さ0.4m前後を計測する。底面は平らであるが，南壁直下に平面円形の小穴がある。壁は全体的に緩に立ち上がる。堆積土は褐色土主体でしまりがある。遺物は覆土上層から土器極小片数点が出土したが，流れ込みと思われる。

P－042（第336図）

中央部地区東側の24L－38グリッドに単独で位置する。本跡を含みP－043～P－064（P－047・051・054・058は欠番）が近接し，全19基で一群を形成しており，この一群をE群と呼称する。平面形は円形を呈し，径0.4m，深さ0.6m前後を計測する。底面は平らであるが，やや南東側に傾斜する。壁は全体的に急に立ち上がる。遺物は覆土上層から土器極小片数点が出土したが，流れ込みと思われる。

P－043（第336図）

中央部地区東側の24L－38グリッドにP－044を切って位置し，E群に属する。平面形は楕円形を呈し，


P－036
P－037
P－038
P－039
1．暗褐色土　ローム粒混，しまりあり
2．暗黄褐色土　ローム主体，ややしまりあり
P－040A
P－040B
P－040B
1．黒褐色土　ソフトローム粒多混
2．褐色土　ソフトローム主体，しまりあり
P－041
1．黒褐色土　ソフトローム少混
2．褐色土　ソフトローム主体，しまりあり
P－042
P－043・044
P－045
P－046
P－048
P－049
1（一括）
0　（1／4）　10cm
P－050
P－052
P－053
P－055
P－056
P－057
P－059
P－060
P－061
P－062
0　（1／40）　1m

第336図　小穴（3）

長径0.3m，短径0.2m，深さ0.5m前後を計測する。底面は小さく平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－044（第336図）

中央部地区東側の24L－38グリッドにP－043に切られて位置し，E群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径（0.3m），短径0.2m，深さ0.2m前後を計測する。底面は小さく平らであるが，P－043に切られているため詳細は不明。壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－045（第336図）

中央部地区東側の24L－39グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.3m前後を計測する。底面は小さく平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－046（第336図）

中央部地区東側の24L－39グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.3m前後を計測する。底面は小さく平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－048（第336図）

中央部地区東側の24L－39グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.4m前後を計測する。底面は丸みを帯び，壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－049（第336図）

中央部地区東側の24L－29グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.3m，短径0.2m，深さ0.3m前後を計測する。底面は小さく丸みを帯び，壁は全体的に急に立ち上がる。遺物はカワラケ1点と土器片数点が覆土中層から出土しており，帰属時期は平安時代から中世の可能性がある。

P－050（第336図）

中央部地区東側の25L－30グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.4m，短径0.3m，深さ0.4m前後を計測する。底面は平らであるが，北東側にやや傾斜する。壁は南側で直，北側で急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－052（第336図）

中央部地区東側の25L－31グリッドに単独で位置し，E群のなかでは最も東側にあたる。平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.3m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に直に立ち上がる。出土遺物はない。

P－053（第336図）

中央部地区東側の25L－20グリッドに単独で位置し，E群のなかでは最も北東側にあたる。平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.5m前後を計測する。底面は小さく平らで，壁は全体的に直に立ち上がる。出土遺物はない。

P－055（第336図）

中央部地区東側の24L－29グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.3m前後を計測する。底面は小さく平らで，壁は南側で直，北側で急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－056（第336図）

中央部地区東側の24L－29グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2m前後を計測する。底面はやや丸みを帯び，壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－057（第336図）

中央部地区東側の24L－29グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.3m，短径0.2m，深さ0.4m前後を計測する。底面はやや丸みを帯び，壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－059（第336図）

中央部地区東側の24L－29グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.4m前後を計測する。底面は小さく丸みを帯び，壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－060（第336図）

中央部地区東側の24L－29グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.2m前後を計測する。底面は平らであるが，東側にやや傾斜する。壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－061（第336図）

中央部地区東側の24L－29グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は不整形を呈し，長径0.4m，短径0.3m，深さ0.3m前後を計測する。底面は平らであるが，東側にやや傾斜する。壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－062（第336図）

中央部地区東側の24L－28グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.3m前後を計測する。底面は平らで，壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－063（第337図）

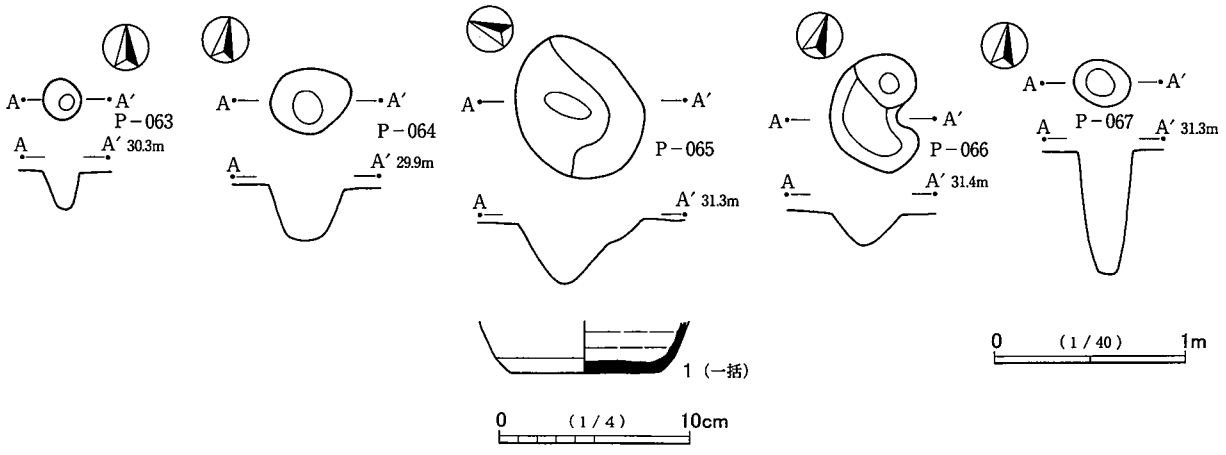
中央部地区東側の24L－28グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2m前後を計測する。径が小さいため，底面も狭い。壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－064（第337図）

中央部地区東側の25L－30グリッドに単独で位置し，E群に属する。平面形は楕円形を呈し，長径0.4m，短径0.3m，深さ0.3m前後を計測する。底面はやや丸みをもち，壁は全体的に急に立ち上がる。出土遺物はない。

P－065（第337図）

南部地区西側の24N－10グリッド周辺に単独で位置するが，SK－316・SK－317・P－066・P－067が近




第337図　小穴（4）

くに位置する。平面形は楕円形を呈し，長径0.8m，短径0.6m，深さ0.3m前後を計測する。確認面径はやや大きいが，底面は狭く，とがり気味である。壁は斜めに立ち上がる。遺物は覆土から奈良・平安時代の土器片が出土した。そのうち比較的遺存のよい千葉産の須恵器杯１点を図示した。口縁部を欠くが，底部は完存する。なお遺構の時期を表すものかどうか判然とせず，むしろ流れ込みの可能性の方が高いと思われる。

P－066（第337図）

南部地区西側の24N－10グリッド周辺に単独で位置する。平面形は不整な楕円形を呈し，長径0.6m，短径0.4m，深さ0.2m前後を計測する。底面はとがり気味で，壁は斜めに立ち上がる。遺物は覆土から土器片数点が出土したが，流れ込みと思われる。

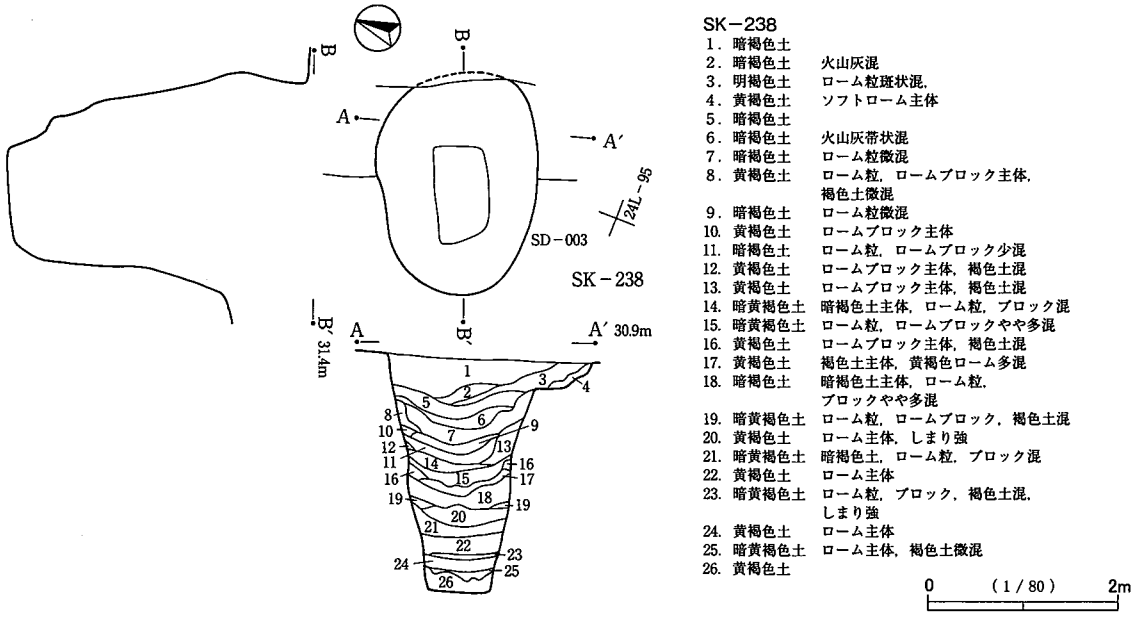
P－067（第337図）

南部地区西側の24N－10グリッド周辺に単独で位置する。平面形は楕円形を呈し，長径0.3m，短径0.2m，深さ0.6m前後を計測する。確認面径は小さいが，深さがあり，柱穴状の形態である。壁は垂直的に立ち上がる。遺物は覆土から土器片数点が出土したが，流れ込みと思われる。

## 第６節　井戸状遺構

SK－238（第338図，図版106）

中央部地区南側の24L－84グリッド周辺，遺跡の東側に侵入する支谷を望む，緩斜面上に位置する。溝状遺構SD－003に切られており，溝状遺構より古いことがわかる。平面形は上端で楕円形，下端になるにしたがい徐々に窄まり，長方形に近い状態を呈してくる。規模は長径2.3m，短径1.7m，深さ2.5m前後を測る。おそらく湧水地点まではまだ深いものと考えられるが，2.5m前後でしっかりした底面が検出されている。この点から考えると，本来の井戸跡ではなく井戸のように深い土坑またはシシ穴と考えた方が妥当である。壁面は若干の凹凸はあるものの滑らかで，下面に向かい徐々に窄まり気味になる。堆積土はレンズ状の堆積をみせ，自然堆積と思われる。この堆積土上面近くの６層は宝永の火山灰土層であり，このことから本跡の帰属時期は江戸中期以前といえる。堆積土中からは土師器・須恵器の小片が数点出土してい




第338図　井戸状遺構

るが，いずれも流れ込みである。

## 第７節　溝状遺構

溝状遺構は第１節概要で記述したとおり，道路跡や境界状柵列跡を含むものである。これら溝状遺構については観察表を作成しているため（第32表），遺構の記録は表と図面をもって代えることとし，個々の詳細な記述を省略する。また遺物についても観察表に記載しているが，観察記録が多くの表に分散しているため，ここでまとめて簡単な記述を行う。

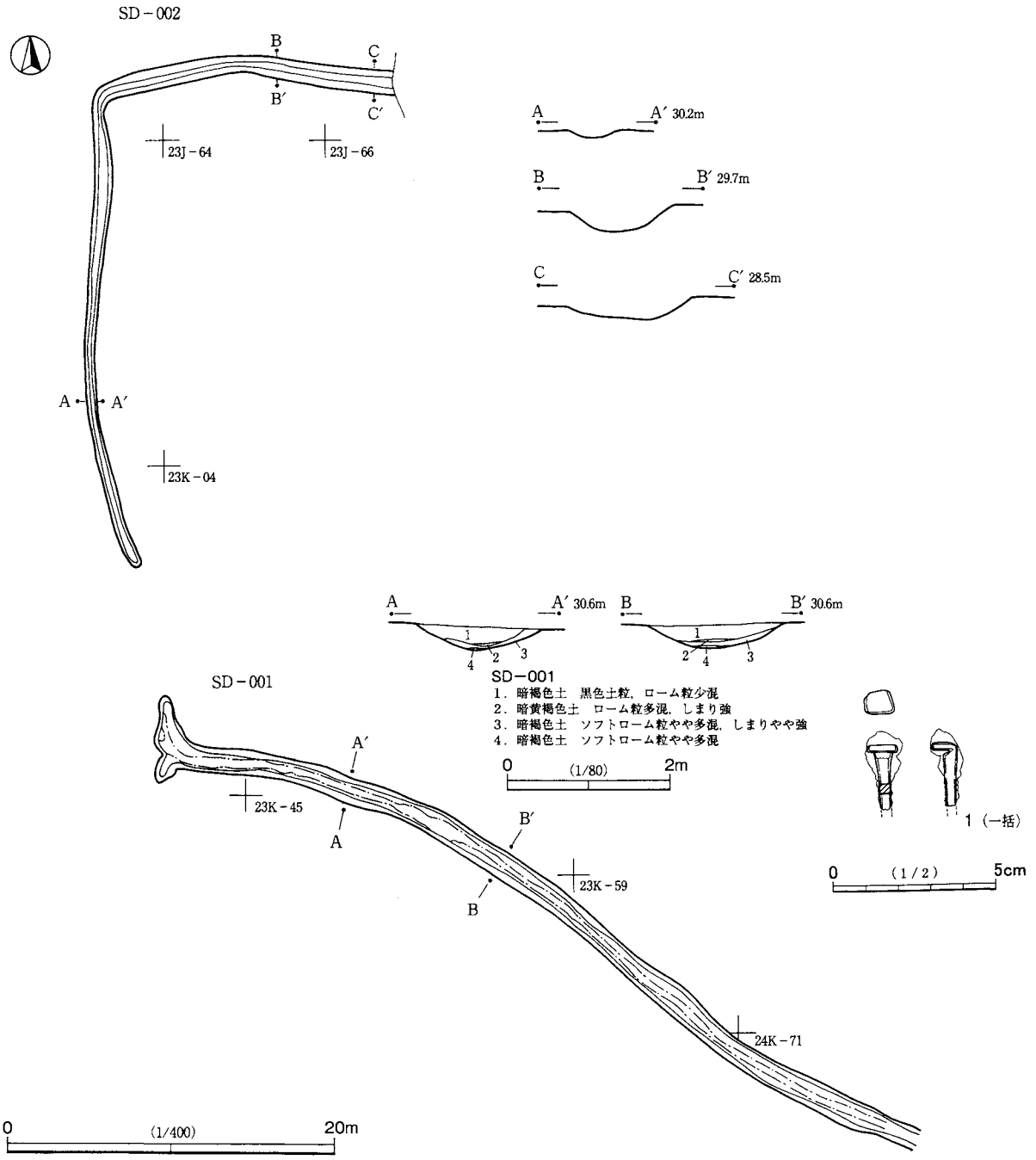
SD－001出土遺物（第339図，図版234）

１は鉄製の角釘で頭部付近の破片である。頭部は「Ｌ」字形に折れ曲がるタイプのものである。

SD－003出土遺物（第340・341図，図版228・229・237・239・240・243・244・247）

１～16は土器片である。そのうち４は古墳時代のものである。他は奈良･平安時代のものと思われるが，６は中世以降の可能性も考えられる。１・２は千葉産の須恵器杯である。１は底部外面にヘラ書きがある。一条の線状のものであるが，遺存部分が少ないため，交差線になるかもしれない。３はロクロ土師器杯である。４は土師器杯である。内外面に赤彩が施されている。５・６はロクロ土師器高台付皿とした。７はロクロ土師器高台付杯または皿である。５・７の底部は全体に突出する。８・９は灰釉陶器碗である。８の内面は滑らかな質感であり，硯等に転用された可能性がある。９は体部が図よりも傾斜すると思われる。内面は灰釉によって光沢があるが，底部中央付近は無釉である。10・11は須恵器壷で，ともに底部付近の破片である。10は内外面に淡緑色の釉が付着しており，特に底部内面と胴部外面の一部はガラス質となり，光沢をもつ。10も底部内面にわずかな釉の付着がみられる。10・11とも東海産と思われる。12～14は須恵器甕である。12・13は大型の甕の口縁部片である。12は横位の櫛描波状文が頸部外面に２段巡っている。一つの波状文は６条の沈線からなる。波状文間は無文である。胎土は白雲母を多量に含む。新治窯産の須恵器である。13も口縁部・頸部外面に文様がみられる。文様を上位からみると，まず口縁部直下に２条の横位平行沈線文が巡り，下位の沈線文をまたぐ形で，斜位の櫛歯列点文が施されている。その下方の頸部にも２条の横位平行沈線文と櫛歯列点文が施されており，よく似た文様帯がみられる。ただし列点文は縦位の方向であり，また頸部下位の沈線文にわずかにかかる程度の施文である。なお二つの文様帯間には若干の無文部分がある。櫛歯の本数は遺存部分をみる限りでは５本であるが，上位の文様は押圧が弱く，２本～４本程度の遺存である。胎土は白色粒等の砂粒を多く含む。比較的粒子が細かいが，一部に小石がみられる。色調は灰色である。焼成は良好であるが，わずかにあまい感じがある。胎土・焼成の雰囲気から新治窯産と思われるが，やや不明瞭である。14も比較的大型の甕の口縁・頸部片である。千葉産の須恵器である。15は常総型の土師器甕である。口縁部から胴部上位までの一部の破片である。16は須恵器甑である。胴部下位から底部にかけての一部の破片である。色調はやや褐色味を帯びるが，胎土に白色粒を多く含み，白雲母も若干みられることから，産地は新治窯産と思われる。

17は土製の紡錘車である。表面は滑らかで，焼成は良好である。18は土製の玉である。中央がやや角張っている。19は鉄製の紡錘車である。ほぼ紡輪の破片であるが，折れた紡軸の一部が孔内に錆付いて遺存している。紡輪は小型のものである。わずかな欠損や錆膨れがあるが，かなり遺存がよい。孔形は円形である。紡軸の横断面は多角形状を呈し，やや丸みをもつ。20は椀形の鍛冶滓の破片である。21は滑石製の紡錘車である。扁平な作りである。筋状の不整な線が上面にみられる。一部は鋸歯状，一部は環状である。



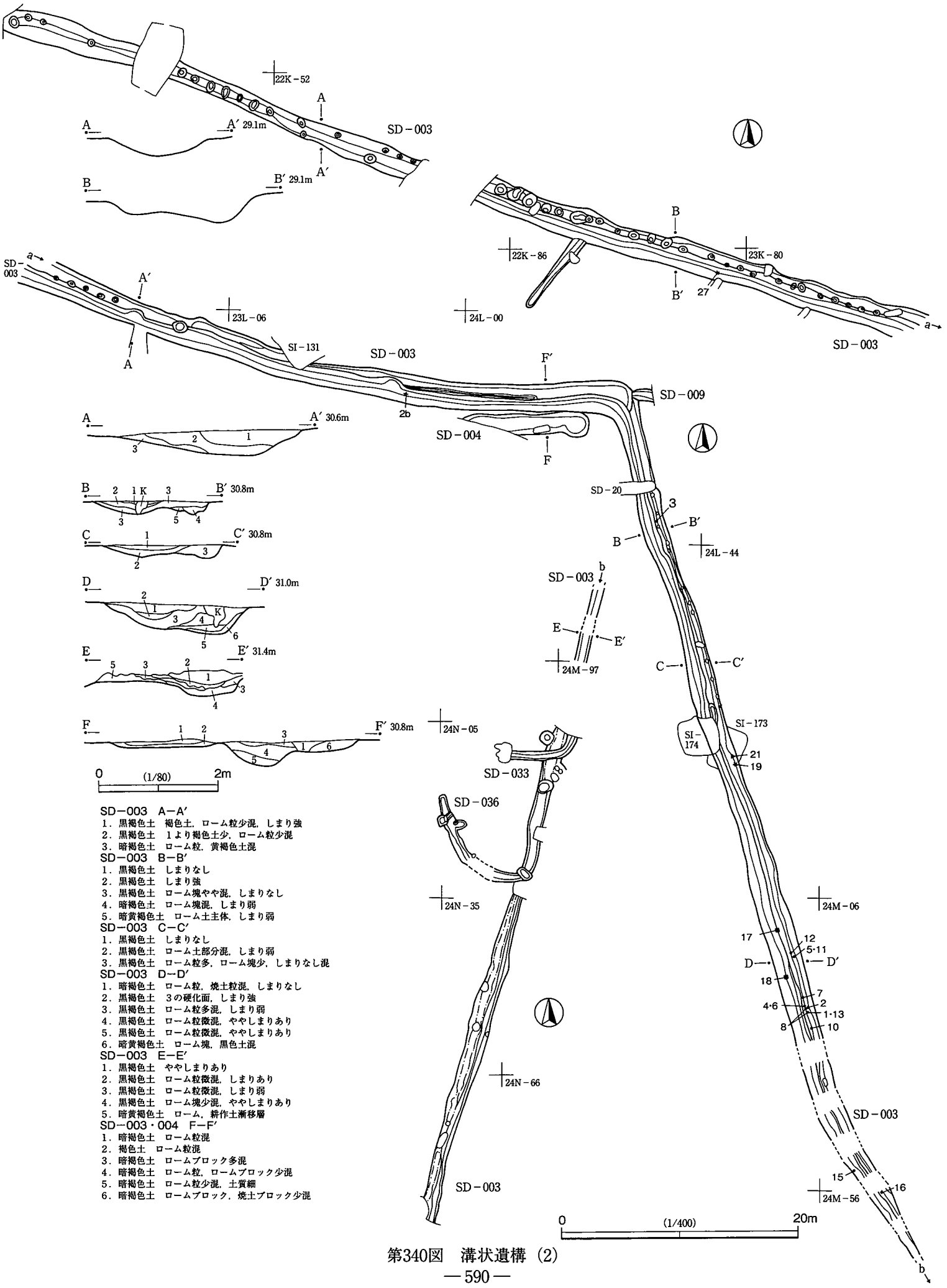

第339図　溝状遺構（1）

製作・使用に伴って付いたものではなく，意図的な線刻と思われる。22・23は軽石である。24～27は銭貨である。24は洪武通寶，25は元祐通寶，26・27は祥符元寶である。

**SD－005出土遺物**（第342図，図版229・234・240）

1はロクロ土師器杯である。2はロクロ土師器高台付皿と思われる。3は在地の土師器甕の胴部片である。外面に墨書と思われる黒色物がみられるが，煤の符着かもしれない。墨書の場合，遺存が少ないため判読不能である。4は棒状の鉄製品で，釘や鉄鏃の茎等が考えられる。観察表には釘として記載した。釘とみると，胴部から先端までの破片であり，頭部は遺存しない。5～7は銭貨である。5は（治？）平元寶，6は皇宋通寶，7は大観通寶である。

**SD－010出土遺物**（第342図，図版229）




SD－003　A－A′
1．黒褐色土　褐色土，ローム粒少混，しまり強
2．黒褐色土　1より褐色土少，ローム粒少混
3．暗褐色土　ローム粒，黄褐色土混

SD－003　B－B′
1．黒褐色土　しまりなし
2．黒褐色土　しまり強
3．黒褐色土　ローム塊やや混，しまりなし
4．暗褐色土　ローム塊混，しまり弱
5．暗黄褐色土　ローム土主体，しまり弱

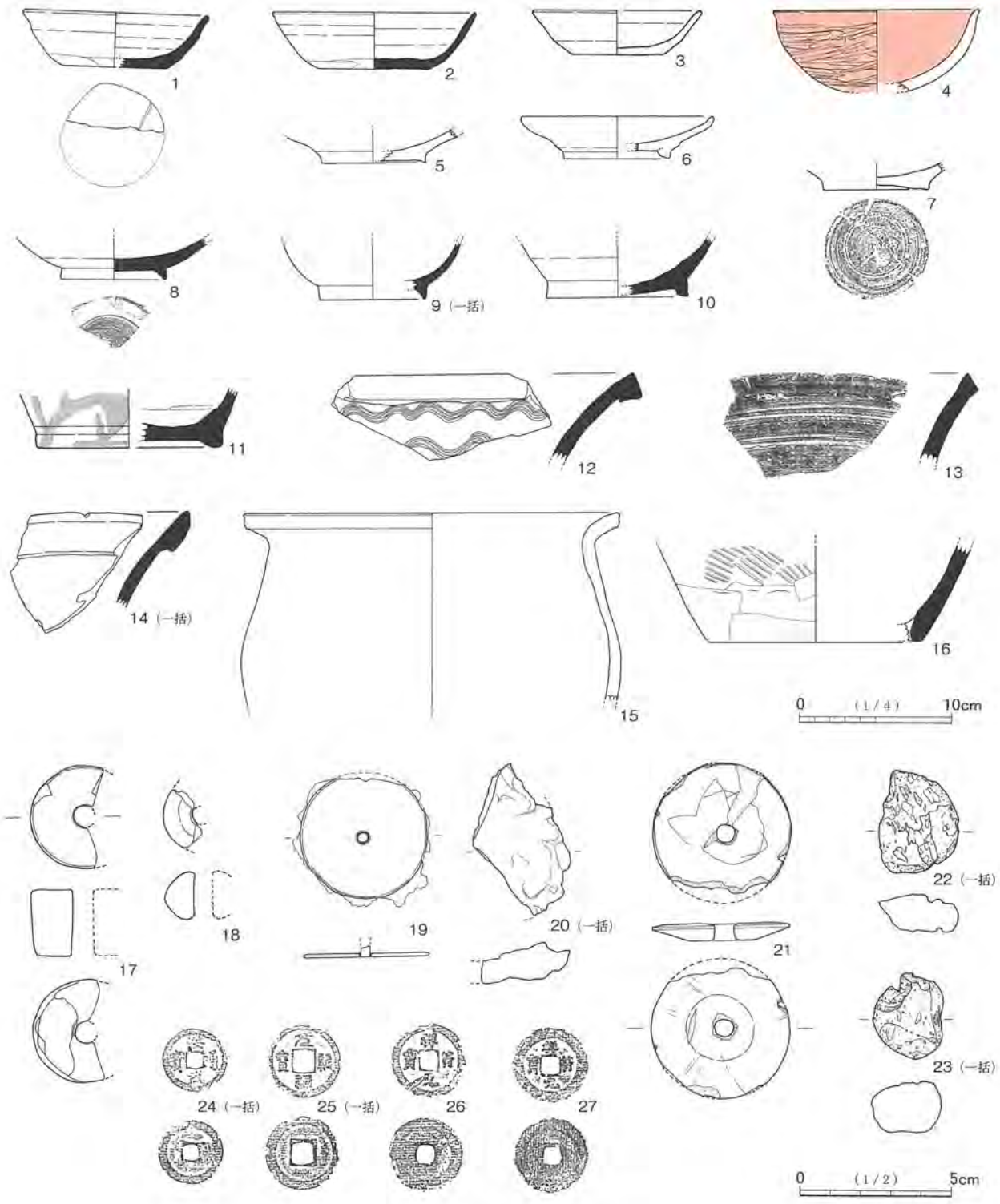
SD－003　C－C′
1．黒褐色土　しまりなし
2．黒褐色土　ローム土部分混，しまり弱
3．黒褐色土　ローム粒多，ローム塊少，しまりなし混

SD－003　D－D′
1．暗褐色土　ローム粒，焼土粒混，しまりなし
2．黒褐色土　3の硬化面，しまり強
3．黒褐色土　ローム粒多混，しまり弱
4．黒褐色土　ローム粒微混，ややしまりあり
5．黒褐色土　ローム粒微混，ややしまりあり
6．暗黄褐色土　ローム塊，黒色土混

SD－003　E－E′
1．黒褐色土　ややしまりあり
2．黒褐色土　ローム粒微混，しまりあり
3．黒褐色土　ローム粒微混，しまり弱
4．黒褐色土　ローム塊少混，ややしまりあり
5．暗黄褐色土　ローム，耕作土漸移層

SD－003・004　F－F′
1．暗褐色土　ローム粒混
2．褐色土　ローム粒混
3．暗褐色土　ロームブロック多混
4．暗褐色土　ローム粒，ロームブロック少混
5．暗褐色土　ローム粒少混，土質細
6．暗褐色土　ロームブロック，焼土ブロック少混

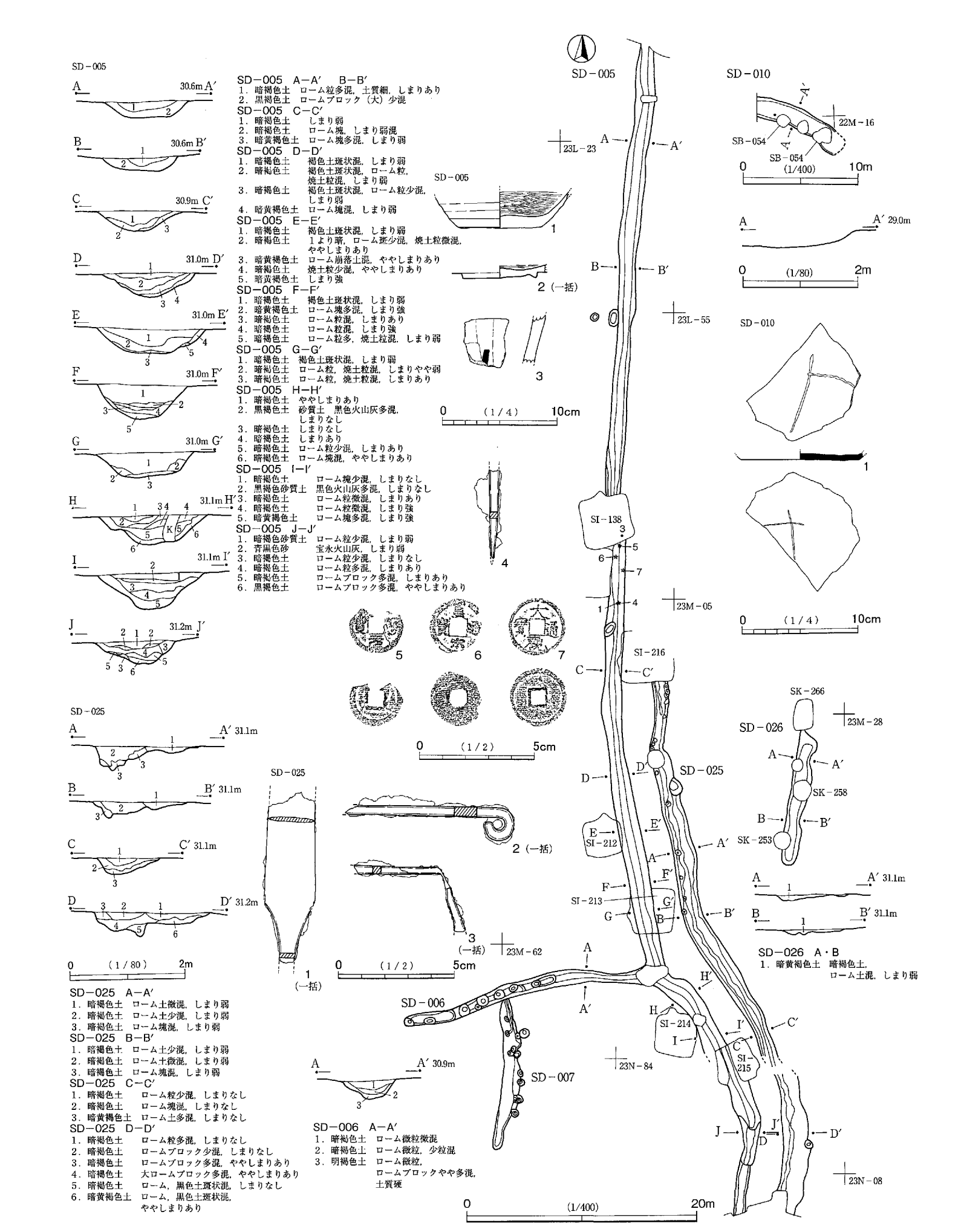
第340図　溝状遺構（2）



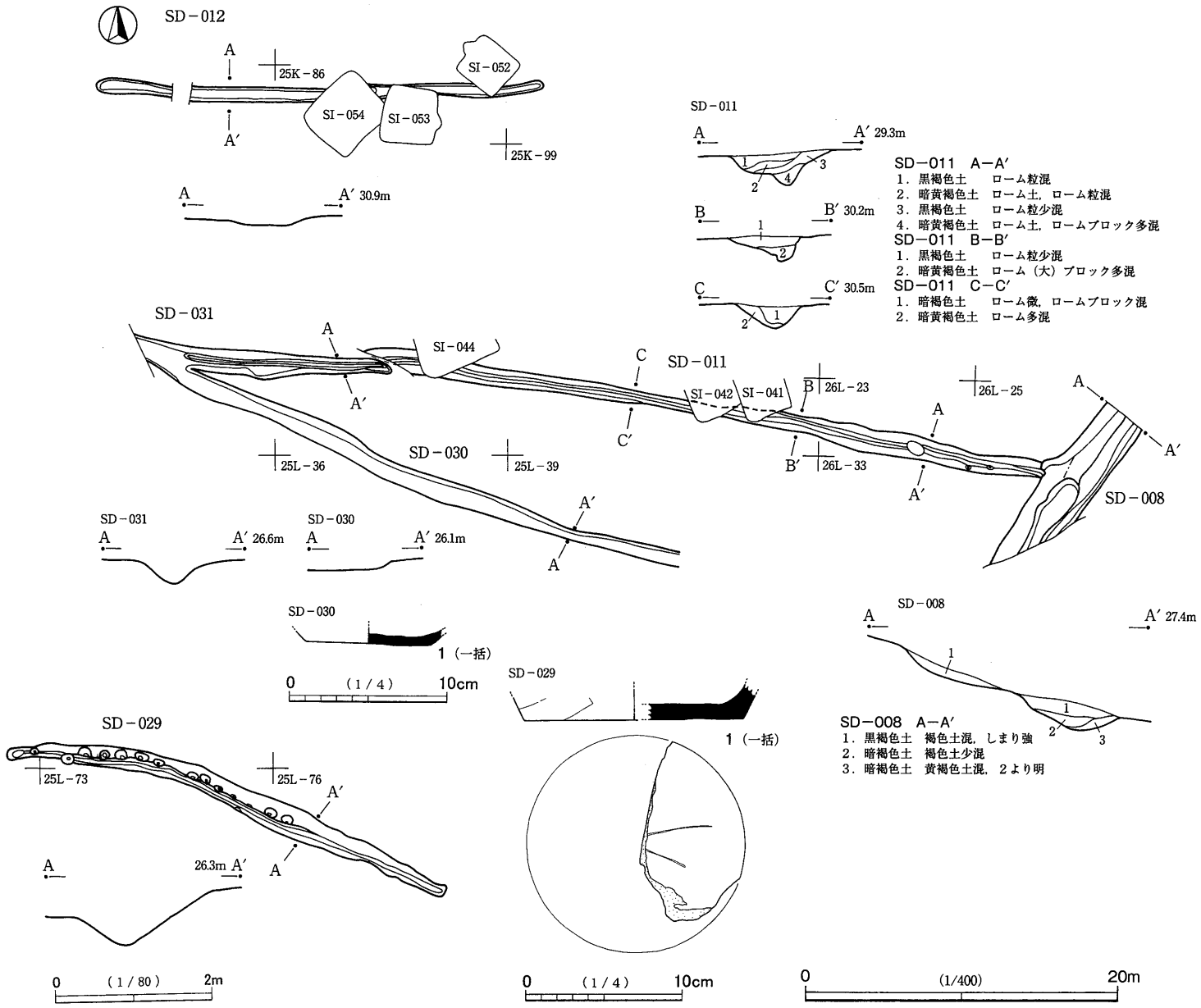

第341図　溝状遺構（3）

1は千葉産の須恵器甕である。底部内外面にヘラ書きがある。外面は「×（+）」状であり，内面も同様であるが，「米」状とも思われる。またヘラ書きの線に強弱があるため「T」状にもみえる。図の横線が強い線であり，断続的に押し引きした様相がうかがえる。その他に不整な環状または「ロ」状の線等があるが，ヘラミガキとの区別が難しい。器壁は薄く，精良な作りである。底部外面は敷物等の製作痕跡が残る。

SD－013出土遺物（第344図，図版247）


SD－005
SD－005 A－A′ B－B′
1．暗褐色土 ローム粒多混，土質細，しまりあり
2．黒褐色土 ロームブロック（大）少混
SD－005 C－C′
1．暗褐色土 しまり弱
2．暗褐色土 ローム塊，しまり弱混
3．暗黄褐色土 ローム塊多混，しまり弱
SD－005 D－D′
1．暗褐色土 褐色土斑状混，しまり弱
2．暗褐色土 褐色土斑状混，ローム粒，焼土粒混，しまり弱
3．暗褐色土 褐色土斑状混，ローム粒少混，しまり弱
4．暗黄褐色土 ローム塊混，しまり弱
SD－005 E－E′
1．暗褐色土 褐色土斑状混，しまり弱
2．暗褐色土 1より暗，ローム斑少混，焼土粒微混，ややしまりあり
3．暗黄褐色土 ローム崩落土混，ややしまりあり
4．暗褐色土 焼土粒少混，ややしまりあり
5．暗黄褐色土 しまり強
SD－005 F－F′
1．暗褐色土 褐色土斑状混，しまり弱
2．暗黄褐色土 ローム塊多混，しまり強
3．暗褐色土 ローム粒混，しまりあり
4．暗褐色土 ローム粒混，しまり強
5．暗褐色土 ローム粒多，焼土粒混，しまり弱
SD－005 G－G′
1．暗褐色土 褐色土斑状混，しまり弱
2．暗褐色土 ローム粒，焼土粒混，しまりやや弱
3．暗褐色土 ローム粒，焼土粒混，しまりあり
SD－005 H－H′
1．暗褐色土 ややしまりあり
2．黒褐色土 砂質土 黒色火山灰多混，しまりなし
3．暗褐色土 しまりなし
4．暗褐色土 しまりあり
5．暗褐色土 ローム粒少混，しまりあり
6．暗褐色土 ローム塊混，ややしまりあり
SD－005 I－I′
1．暗褐色土 ローム塊少混，しまりなし
2．黒褐色砂質土 黒色火山灰多混，しまりなし
3．暗褐色土 ローム粒微混，しまりあり
4．暗褐色土 ローム粒微混，しまり強
5．暗黄褐色土 ローム塊多混，しまり強
SD－005 J－J′
1．暗褐色砂質土 ローム粒少混，しまり弱
2．青黒色砂 宝永火山灰，しまり弱
3．暗褐色土 ローム粒少混，しまりなし
4．暗褐色土 ローム粒多混，しまりあり
5．暗褐色土 ロームブロック多混，しまりあり
6．黒褐色土 ロームブロック多混，ややしまりあり
SD－025
SD－025 A－A′
1．暗褐色土 ローム土微混，しまり弱
2．暗褐色土 ローム土少混，しまり弱
3．暗褐色土 ローム塊混，しまり弱
SD－025 B－B′
1．暗褐色土 ローム土少混，しまり弱
2．暗褐色土 ローム土微混，しまり弱
3．暗褐色土 ローム塊混，しまり弱
SD－025 C－C′
1．暗褐色土 ローム粒少混，しまりなし
2．暗褐色土 ローム塊混，しまりなし
3．暗黄褐色土 ローム土多混，しまりなし
SD－025 D－D′
1．暗褐色土 ローム粒多混，しまりなし
2．暗褐色土 ロームブロック少混，しまりなし
3．暗褐色土 ロームブロック多混，ややしまりあり
4．暗褐色土 大ロームブロック多混，ややしまりあり
5．暗褐色土 ローム，黒色土斑状混，しまりなし
6．暗黄褐色土 ローム，黒色土斑状混，ややしまりあり
SD－006
SD－006 A－A′
1．暗褐色土 ローム微粒微混
2．暗褐色土 ローム微粒，少粒混
3．明褐色土 ローム微粒，ロームブロックやや多混，土質硬
SD－010
SB－054
22M－16
23L－23
23L－55
23M－05
23M－28
23M－62
23N－84
23N－08
SI－138
SI－216
SI－212
SI－213
SI－214
SI－215
SK－266
SK－258
SK－253
SD－026
SD－026 A・B
1．暗黄褐色土 暗褐色土，ローム土混，しまり弱
0 (1/400) 10m
0 (1/80) 2m
0 (1/4) 10cm
0 (1/2) 5cm
0 (1/80) 2m
0 (1/400) 20m

第342図 溝状遺構（4）




第343図　溝状遺構（5）

1は軽石である。

SD－014出土遺物（第344図，図版240）

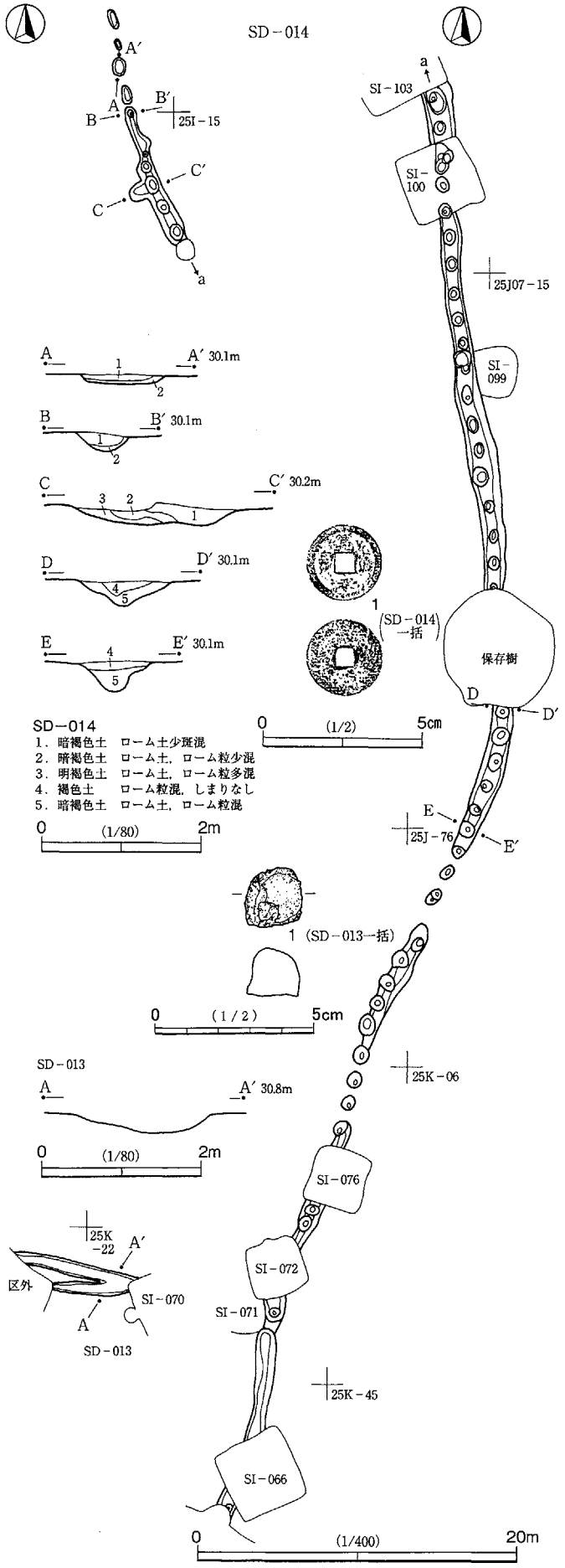
1は銭貨で，寛永通寶である。新寛永銭である。

SD－020出土遺物（第346図，図版234）

1は釘と思われる鉄製品である。頭部・先端部とも遺存しないため，やや判然としないが，図示した上位の径が太く，下位が細いため，釘の可能性が高いと思われる。

SD－023出土遺物（第346図，図版229・234・244）

1はロクロ土師器杯である。「得」の墨書が体部外面に正位で記入されている。やや灰色味を帯びる色調で，須恵器とも思われるが，土師器の可能性の方が高いと思われる。2は鉄製品で，刀子の破片である。図示した下辺の一部が尖っており，刃部とも思われるが，全体の様相から茎の可能性が高いと思われる。3は滑石製の紡錘車である。1/3程度の遺存である。表面も欠損が多い。




第344図　溝状遺構（6）

SD－024出土遺物（第346図，図版229）

1はロクロ土師器高台付杯である。高台はやや高さがある。2・3は須恵器甕である。2は千葉産，3は新治窯産である。3は底部の端に焼成後の穿孔がみられる。径は2.5㎜前後である。内面からみるとちょうど底部と胴部の境の位置である。破片となった後の穿孔と思われる。顕著な磨滅痕はみられないが，底部内面や断面の一部が若干磨られているようにも思われる。特に祭祀的な様相はうかがえないため，孔は何らかの転用に伴うものであろう。外面の一部に指紋がみられる。4は常総型の土師器甕である。

SD－025出土遺物（第342図，図版235）

1は鉄鏃としたが，やや大きすぎるように思われる。重量感があり，現代のヤスリとも思われる。2・3は用途不明の鉄製品である。2は平たい棒状となる部分が多いが，図示した右側で環状に丸まっている。図示した左側は欠損するが，細くなっており，端部に近いと思われる。重量感があり，現代の製品の可能性がある。3は細い棒状品で，中位で折れ曲がっている。その部分は遺存が悪く，より細くなっているが，元々細いのかもしれない。

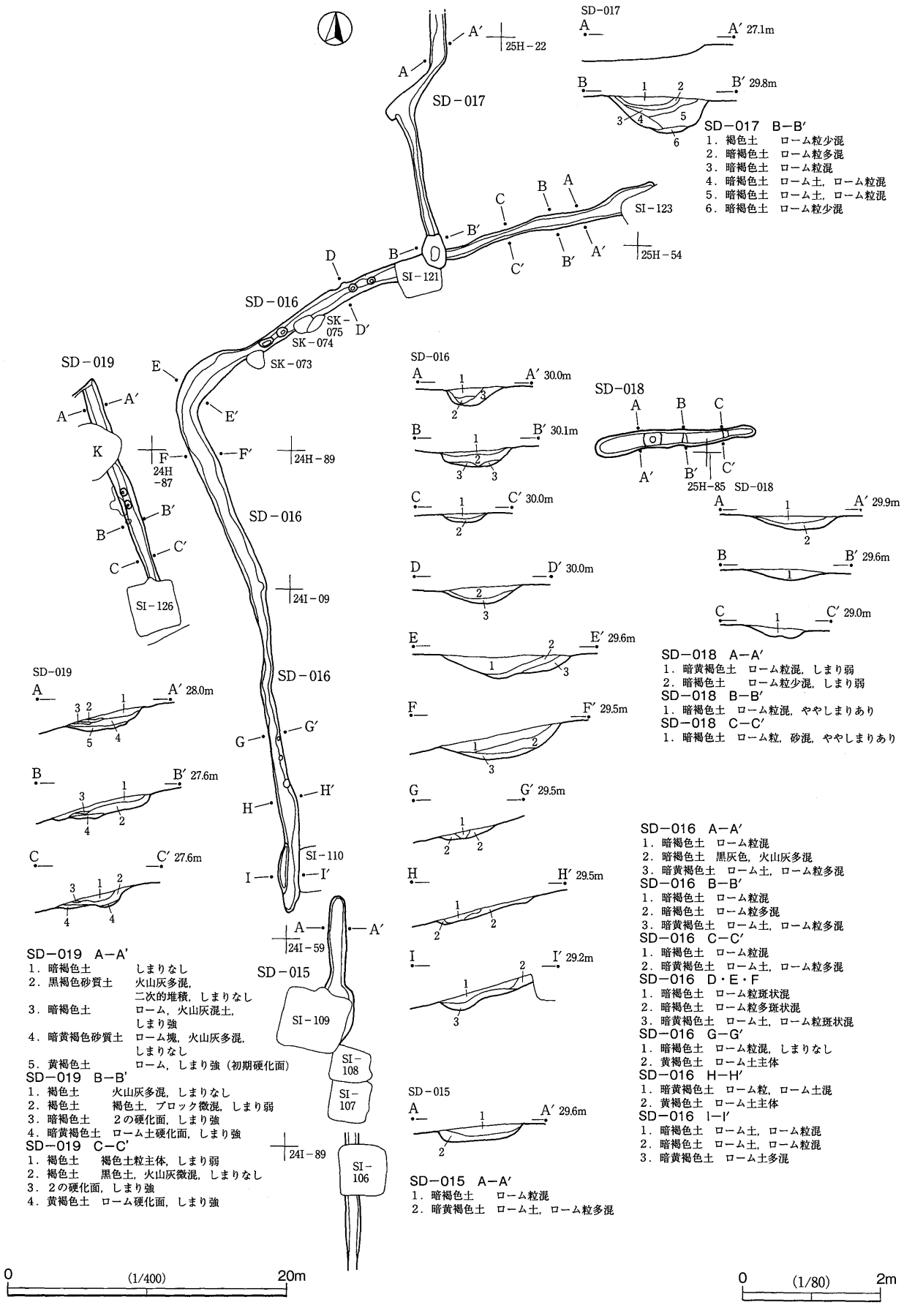
その他銭貨が1点出土したが，劣化が著しいため図示していない。銭貨名は不明である。

SD－029出土遺物（第343図）

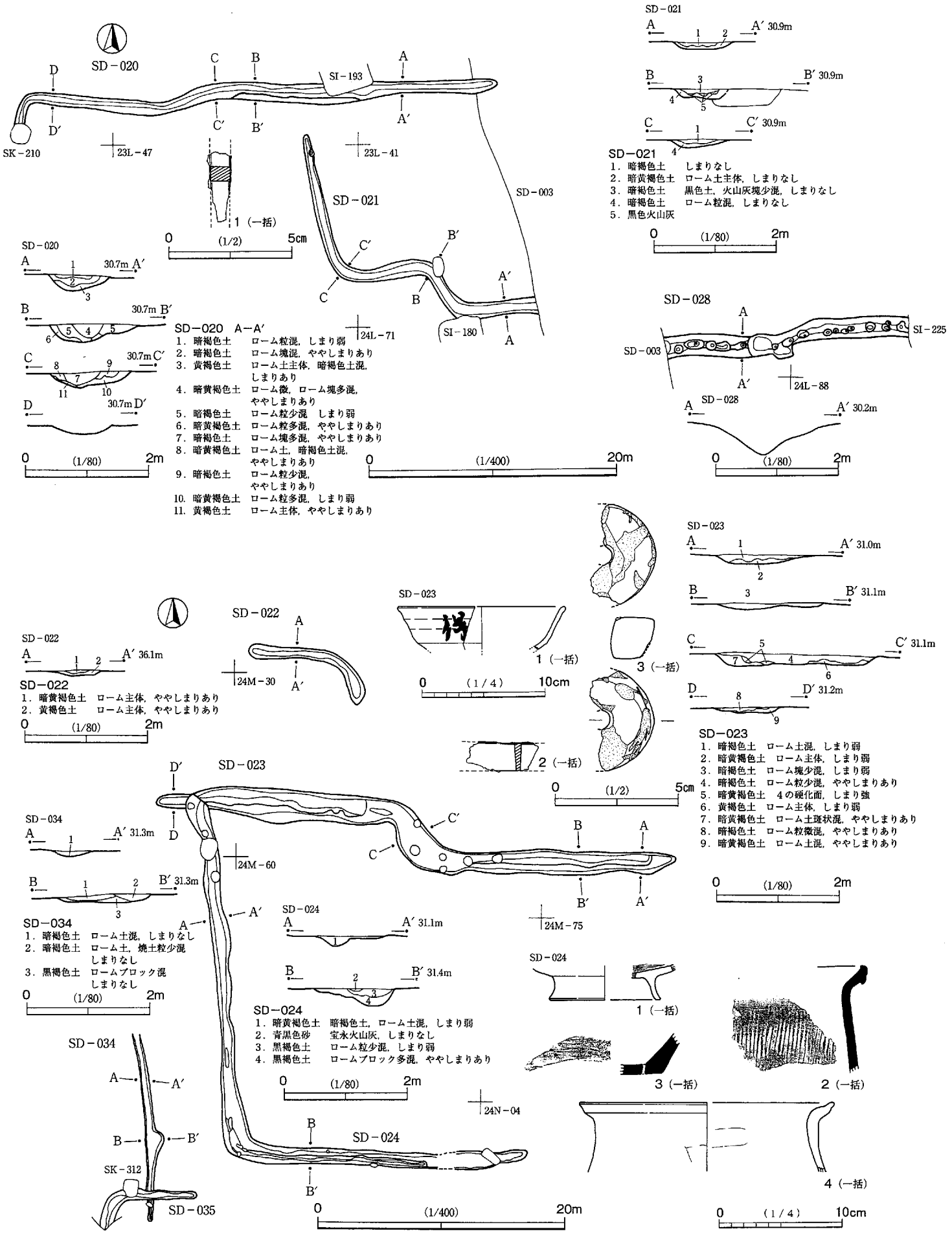
1は千葉産の須恵器甕である。底部外面にヘラ書きがある。2条の細い線がみられるが，遺存しない部分で交差し，「×（＋）」状になると思われる。

SD－030出土遺物（第343図，図版229）

1は千葉産の須恵器杯である。


SD－017
SD－016
SD－019
SD－018
SD－015
SI－123
SI－121
SI－126
SI－110
SI－109
SI－108
SI－107
SI－106
SK－073
SK－074
SK－075
25H－22
25H－54
24H－87
24H－89
24I－09
24I－59
24I－89
25H－85
SD－017 B－B′
1．褐色土　ローム粒少混
2．暗褐色土　ローム粒多混
3．暗褐色土　ローム粒混
4．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
5．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
6．暗褐色土　ローム粒少混
SD－018 A－A′
1．暗黄褐色土　ローム粒混，しまり弱
2．暗褐色土　ローム粒少混，しまり弱
SD－018 B－B′
1．暗褐色土　ローム粒混，ややしまりあり
SD－018 C－C′
1．暗褐色土　ローム粒，砂混，ややしまりあり
SD－016 A－A′
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗褐色土　黒灰色，火山灰多混
3．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
SD－016 B－B′
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒多混
3．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
SD－016 C－C′
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
SD－016 D・E・F
1．暗褐色土　ローム粒斑状混
2．暗褐色土　ローム粒多斑状混
3．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒斑状混
SD－016 G－G′
1．暗褐色土　ローム粒混，しまりなし
2．黄褐色土　ローム土主体
SD－016 H－H′
1．暗黄褐色土　ローム粒，ローム土混
2．黄褐色土　ローム土主体
SD－016 I－I′
1．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
2．暗褐色土　ローム土，ローム粒混
3．暗黄褐色土　ローム土多混
SD－019 A－A′
1．暗褐色土　しまりなし
2．黒褐色砂質土　火山灰多混，二次的堆積，しまりなし
3．暗褐色土　ローム，火山灰混土，しまり強
4．暗黄褐色砂質土　ローム塊，火山灰多混，しまりなし
5．黄褐色土　ローム，しまり強（初期硬化面）
SD－019 B－B′
1．褐色土　火山灰多混，しまりなし
2．褐色土　褐色土，ブロック微混，しまり弱
3．暗褐色土　2の硬化面，しまり強
4．暗黄褐色土　ローム土硬化面，しまり強
SD－019 C－C′
1．褐色土　褐色土粒主体，しまり弱
2．褐色土　黒色土，火山灰微混，しまりなし
3．2の硬化面，しまり強
4．黄褐色土　ローム硬化面，しまり強
SD－015 A－A′
1．暗褐色土　ローム粒混
2．暗黄褐色土　ローム土，ローム粒多混
0　(1/400)　20m
0　(1/80)　2m

第345図　溝状遺構（7）

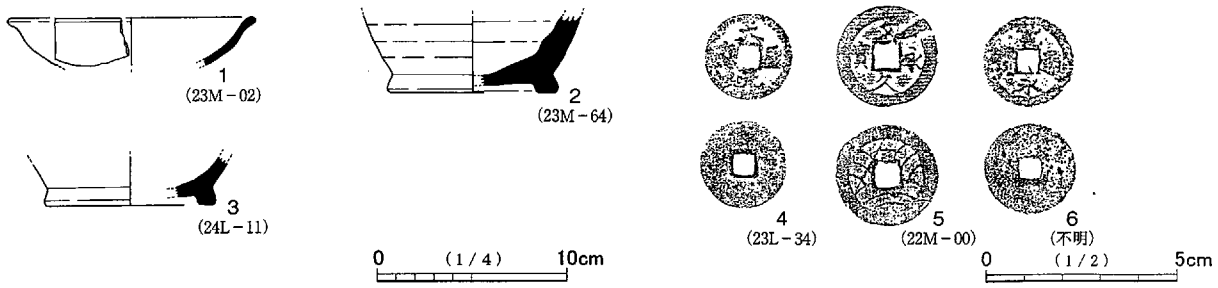

SD－020
SD－021
SD－003
SI－193
SK－210
23L－47
23L－41
24L－71
SD－020 A－A′
1．暗褐色土　ローム粒混，しまり弱
2．暗褐色土　ローム塊混，ややしまりあり
3．黄褐色土　ローム土主体，暗褐色土混，しまりあり
4．暗黄褐色土　ローム微，ローム塊多混，ややしまりあり
5．暗褐色土　ローム粒少混　しまり弱
6．暗黄褐色土　ローム粒多混，ややしまりあり
7．暗褐色土　ローム塊多混，ややしまりあり
8．暗黄褐色土　ローム土，暗褐色土混，ややしまりあり
9．暗褐色土　ローム粒少混，ややしまりあり
10．暗黄褐色土　ローム粒多混，しまり弱
11．黄褐色土　ローム主体，ややしまりあり
SD－021
1．暗褐色土　しまりなし
2．暗黄褐色土　ローム土主体，しまりなし
3．暗褐色土　黒色土，火山灰塊少混，しまりなし
4．暗褐色土　ローム粒混，しまりなし
5．黒色火山灰
SD－028
SI－225
SI－180
24L－88
SD－022
SD－022
1．暗黄褐色土　ローム主体，ややしまりあり
2．黄褐色土　ローム主体，ややしまりあり
24M－30
SD－023
SD－023
1．暗褐色土　ローム土混，しまり弱
2．暗黄褐色土　ローム主体，しまり弱
3．暗褐色土　ローム塊少混，しまり弱
4．暗褐色土　ローム粒少混，ややしまりあり
5．暗黄褐色土　4の硬化面，しまり強
6．黄褐色土　ローム主体，しまり弱
7．暗黄褐色土　ローム土斑状混，ややしまりあり
8．暗褐色土　ローム粒微混，ややしまりあり
9．暗黄褐色土　ローム土混，ややしまりあり
SD－034
SD－034
1．暗褐色土　ローム土混，しまりなし
2．暗褐色土　ローム土，焼土粒少混しまりなし
3．黒褐色土　ロームブロック混しまりなし
24M－60
24M－75
SD－024
SD－024
1．暗黄褐色土　暗褐色土，ローム土混，しまり弱
2．青黒色砂　宝永火山灰，しまりなし
3．黒褐色土　ローム粒少混，しまり弱
4．黒褐色土　ロームブロック多混，ややしまりあり
24N－04
SK－312
SD－035
1（一括）
2（一括）
3（一括）
4（一括）
0　(1/80)　2m
0　(1/400)　20m
0　(1/2)　5cm
0　(1/4)　10cm

第346図　溝状遺構（8）

## 第８節　遺構外出土遺物（第347図，図版23・240）

１は陶器の碗で，口縁・体部の破片である。底部寄りの内外面を除いて灰釉が施されている。なお中・近世の遺物としたが，平安時代の灰釉陶器である可能性も考えられる。２・３は陶器の壷である。３は灰緑色の釉が胴部外面に流下して，高台部との境に多く溜まっている。釉は底部内外面にもみられる。２も灰緑色の釉が胴部外面から高台の胴部側外面にかけて付着し，また内面にも散在的にみられる。

４～６は銭貨である。４は天聖元寶で北宋銭である。５は文久永寶，６は寛永通寶である。




第347図　中・近世遺構外出土遺物

# 第7章　まとめ

## 第1節　全体の概要

### 旧石器時代

9地点で旧石器時代の石器が確認された。石器群の出土層位によって，最下部から上層にむかって第1・第2・第3・第4文化層とした。第1文化層は立川ロームⅨ層の石器群で，第1・第2地点が該当する。第2文化層はⅦ層で，第3～6地点の石器群である。第3文化層はⅤ層で，第7・8地点の石器群である。第4文化層はⅢ層で，第9地点の石器である。

第1地点の総数は67点で，黒色頁岩のナイフ形石器他，硬質細粒凝灰岩や黒曜石の剥片が出土した。第2地点は1点で，珪質岩製の剥片である。第3地点は2点で，黒曜石の楔形石器・削器状剥片が出土した。第4地点は1点で，黒曜石のナイフ形石器である。第5地点は15点で，すべてが剥片である。石材は黒色安山岩主体で，黒曜石は皆無であった。第6地点の総数は300点強で，石材はすべて黒曜石である。ナイフ形石器，削器状の剥片，掻器状の石器等があるが，9割近くが砕片である。第7地点は9点で，石材は硬質頁岩一種である。彫器，石錐状剥片，石錐状石核，掻器状剥片がある。第8地点は10点で，そのうち礫が4点である。残る6点のうち黒色安山岩及び硬質細粒凝灰岩の大型剥片はともに石器としての使用が考えられる。硬質細粒凝灰岩のものは削器的な使用であろう。第9地点は1点の出土で，硬質頁岩製の台形石器である。なお本来は複数点存在したが，流失した可能性も考えられる。その他，遺構や包含層出土の石器として，硬質頁岩製の尖頭器，黒曜石の剥片がある。

第1地点と第6地点は石器製作跡であり，黒曜石の使用が多い。第6地点の黒曜石は信州産であろう。稲荷塚遺跡の石器群は地続きの小屋ノ内遺跡と比べて少なく，土地利用の頻度が低い。短期的な活動の場であったが，集落を営んだ場所ではないといえよう。

### 縄文時代

遺構は，早期の炉穴9基・陥穴18基，前期の竪穴住居4軒の他，時期が不明瞭な土坑5基である。また後期にチャートを用いた石器製作跡が確認された。遺物は早期から晩期末葉まで断続的に出土した。

早期の炉穴群は調査区の最も北側，東側台地の先端に位置する。陥穴群は北方から調査区中央に入る支谷の谷頭周辺に位置する。遺構を伴わない早期の土器群は出土量が少ない。前期の竪穴住居群は西側台地の北側に位置する。浮島系を主体とした土器が出土した点で注目される。土器群は住居周辺で多く出土した他，東側台地北端にもみられる。なお土坑・竪穴住居の一部から，イボキサゴやマガキ等の貝が出土した。中期の土器群は前期よりも少ないが，広範に分布する。前期から中期に変化する時期のものも存在する。後期も多量の土器群が出土した。石器製作跡は調査区西側で検出された。製作された石器は石鏃・石錐・削器・掻器などであり，石鏃未製品，使用痕のある不定型な剥片，石核もみられる。晩期の土器群は少量の出土である。時期的には後葉主体で，一部に弥生時代に入る土器群が存在する点で注目される。

### 弥生時代～古墳時代初頭

遺構は竪穴住居2軒である。しかしこの時期の土器が出土していないため不明な点が多い。1軒（SI－032）は方形の形態で，炉をもつことから弥生時代終末期から古墳時代初頭に属するものであろう。もう1軒（SI－122）は楕円形の形態で炉をもつものである。弥生時代後期から終末期に属するものと思われ

るが，縄文時代の可能性があるかもしれない。周囲に縄文時代の炉穴群があり，その一つを切っている。SI－032は西側台地の北端に，SI－122は東側台地の北端に位置する。両者は大きく離れているが，立地のあり方に共通性があるといえそうである。しかしSI－122の帰属時期が不明瞭なため断定しがたい。またSI－032は確認面から床面まで浅く，周囲に同時期の住居が存在した可能性も考えられる。

稲荷塚遺跡ではこの時期の土器片がほとんど出土せず，足跡は微々たるものである。遺構が低地や緩斜面に存在するのかもしれないが，不明瞭である。なお稲荷塚遺跡周辺では，中久喜遺跡・古屋城跡・御山遺跡で当該時期の竪穴住居や遺物が出土しており，特に中久喜遺跡は，遺構密度の高い様相がうかがえる。

古墳時代後期

前記の時代とは，かなりの空白期間があるため，ここでは分離して記述する。遺構は古墳２基，竪穴住居11軒である。古墳はともに円墳であり，西側台地の中央に位置する。また２基とも周溝のみの検出である。古墳に伴う遺物はみられず，築造時期は不明であるが，形態と周囲の遺跡の状況から古墳時代後期と思われる。確認面から周溝底面まで非常に浅いため，周囲に他の古墳の存在が考えられる。竪穴住居の時期は７世紀代主体と思われ，６世紀前半のものは存在しない。７世紀末頃と思われるものもあるため，比較的スムーズに次期に継続する様相がみられる。竪穴住居は11軒中10軒まで東側台地に立地する。そのうちの８軒は南側に比較的まとまって位置し，残る２軒はそれらとかなり離れて北側に位置する。西側台地には１軒（SI－029）のみ所在し，古墳SX－001から北東30数mのところに立地する。

墓域と居住域は完全な分離状態ではないが，おおむね占地が異なっている。古墳の時期が不明なため，集落が既に存在した墓域を避けて営まれたのか，居住域でない部分に古墳が築造されたのか不明である。この点については断定しがたいが，小屋ノ内遺跡の様相からは前者の可能性が高いと思われる。

奈良・平安時代

遺構は，竪穴住居229軒，竪穴状遺構11基，掘立柱建物53棟，柵列２条，土坑47基である。竪穴状遺構は性格が不明瞭である。残りの悪い竪穴住居や規模の大きな土坑の他に，カマドをもたない竪穴建物が存在するのかもしれない。掘立柱建物としたもののうち，２棟はやや不明瞭であり，そのうちの１棟（SB－004）は塀の可能性がある。また柵列とした２条も掘立柱建物の一部かもしれない。矩形に組めない柱穴があること，失われた柱穴があると思われることから，調査区内だけでも実際は53棟以上とみられる。竪穴住居と竪穴状遺構を合わせた竪穴建物も確認面から床面まで浅いものや，他遺構等が重複する部分があるため，およそ230軒は下限の数値である。また調査区外からかなりの遺構の検出が予想されるため，稲荷塚遺跡における遺構の総量は上記の数値をかなり上回るであろう。

中・近世その他

遺構は，土坑墓７基，井戸状遺構１基，塚３基，土坑124基，小穴60基，溝状遺構34条である。遺構に伴う遺物が少ないため，帰属時期が不確実なものを多く含む。なお土坑と小穴は厳密な区別ができない。また溝状遺構は道路跡及び柵列跡を含む。土坑墓はほぼ西側台地の北側に集中する。土坑は広く分布するが，東側台地の北側にやや密集し，西側台地の北西側がやや希薄である。小穴は５か所程に集中する傾向がある。塚は隣接して位置し，中央の支谷を臨む東側台地の西縁辺に立地する。図示できた遺物は非常に少ない。土坑の１基（SK－221）及び塚から寛永通寶と不明鉄製品が出土した。SK－221は土坑の項に掲載したが，土坑墓の可能性も考えられる。溝状遺構の一部からは北宋銭と寛永通寶が出土したが，これらが遺構の時期を表すものか，判然としない。

## 第２節　旧石器時代

今回の調査により出土した旧石器時代の遺物の特徴として幾つかの点をあげることができる。

これまでに調査された物井地区の旧石器時代関連の報告（注１～３）では、第Ⅸ層とした、いわゆる暗色帯中から大量の石器群が検出されている。出土した位置を鳥瞰すると、広い地域を円形あるいは環状に石器群が分布し、旧石器時代の人びとの活発な活動を想起させるものであった。そうした中にあって本遺跡の調査成果は、前３遺跡と比較すれば環状の石器群が発見された時期はともかく、総合的な見地からも土地利用の頻度は低かったものと思われる。これは石器群の集中規模・出土量の差となってあらわれている。出土数を量的にみれば、第６地点の300余点、次いで第１地点の67点となり、第５地点の15点と減少する石器群に象徴されよう。

また採用されている石材についてみると、石器製作の痕跡を確実に想定できた第１地点や第６地点では圧倒的に黒曜石の使用頻度が高く、第６地点に至っては全点黒曜石で占められていた。ここでの黒曜石の石質は透明度の高いガラス質であり、おそらく信州産を持ち込んだものと考えられる。しかも定型的な石器は僅少で、２地点を合わせてもナイフ形石器２点のみという状況となっている。一方、ほぼ同一の層順から検出された第５地点では出土量は少ないものの黒曜石の出土は認められず、石材の主体は安山岩であり剥片・砕片の類が出土している。安山岩は周辺遺跡で多用されており、大規模な石器集中地点を形成している。

こうした点を考慮すると、本遺跡において検出された石器集中地点はいずれも短期間に形成されたもので定住的な要素は持ち合わせていなかったものと推察できる。いわば本遺跡は、旧石器時代人の活動の場ではあっても長期にわたり集落を営んだ場所ではなかったということができよう。

参考文献

注１　古内　茂ほか　2005『四街道市小屋ノ内遺跡(1)』　(財)千葉県文化財センター
注２　渡辺修一ほか　1994『四街道市御山遺跡(1)』　(財)千葉県文化財センター
注３　岡田誠造　1994『四街道市出口・鐘塚遺跡』　(財)千葉県文化財センター

## 第３節　縄文時代・弥生時代

第３章において遺跡における縄文時代の調査結果について記載してきたが、ここでは本報告で取り扱った物井地区とその周辺域に焦点を当て、これまでに調査・報告されてきた縄文時代にかかわる遺構・遺物を含めて、その所見を述べておきたい。

物井地区は、その東側を印旛沼に注ぐ鹿島川により、西側は同じく印旛沼に注ぐ手繰川の支流によって開析された台地上に位置し、周辺には既に調査･報告された八木原貝塚（注２）、池花･池花南遺跡（注３）、御山遺跡（注４）、吉見台遺跡（注５）など注目される著名な遺跡が所在する。そこで、これらの遺跡を参考としつつ本遺跡で検出された遺構・遺物群のうち、注目できる二・三の事例について記しておきたい。

**前期後半の集落と浮島系土器**　本遺跡において浮島系土器を主体とした住居跡が４軒検出できたことは大きな成果であった。前述したように当該期の土器群は、房総北部域では常に諸磯系土器と浮島系土器が共存する状態で出土する。そうした中にあって本遺跡では、小規模とはいえど集落の一端が調査によって解明されることとなった。しかも出土した土器群からみると、明らかに浮島系土器群の優越性を示すものであり、印旛沼周辺における土器群のあり方を理解する上で貴重な資料を提供したものといえよう。このような遺跡を例にとると、船橋市古和田台遺跡（注６）、同飯山満東遺跡（注７）や集落の存在を推定でき

る千葉市宝導寺台貝塚（注８）がある。こうした点から房総における諸磯系と浮島系との関係をみれば、主体となる浮島系土器の存在は一層考慮する必要性が生じてくるものと思われる。また、これに後続する土器群も僅少ではあるが確認されている。第39図１・２（グリッド出土土器５）とした土器がこれに該当する。これは口縁部直下に鋸歯状の文様を形成する独特な口縁部を有するもので、物井地区内に所在する出口・鐘塚遺跡（注９）や池花南遺跡、著名な銚子市粟島台遺跡（注10）においても断片的に出土している。だが、これらの遺跡出土例では地文の縄文は認められない。輪積を利用した複合口縁と器面にみられる縄文施文という点とを重視すれば、次の下小野式土器へと継続する一過程で出現したものとみて大過あるまい。

**弥生時代初頭の土器**　次に、弥生時代初頭の壷形土器について取り上げてみたい。この壷形土器（第44図20～25）は、ほぼ器形を推定できるものの小破片が接合したものであり底部を欠損している。器面に施される条痕文は、いわゆる東海系土器に類似するものである。これと同様な土器は、物井地区内でも御山遺跡に胴部片のみではあるが確認されており、同時に遠賀川系土器の出土も指摘されている（注11）。さらに池花・池花南遺跡では、縄文晩期から弥生中期にかけて良好な土器群が出土している。こうした状況の中で、本遺跡での初期条痕文系の壷形土器や野沢Ⅰ式とも考えられる土器の出土は初期弥生文化の様相解明へと導く貴重な資料となるものといえよう。さらに当時の人びとは、縄文晩期から弥生時代へと変化する社会の中で一時的に居住地としていたとみて間違いあるまい。そのような中での異文化系土器の出土は、明確に西方との交流を物語る証左となろう。

**剥片石器の製作**　一方、石器についてみると、縄文後期に形成された剥片石器の製作跡が注目できよう。前述したように、本遺跡で検出された石器製作跡は隣接する小屋ノ内遺跡発見の製作跡と一体をなすものであり、製作技法や使用石材がチャートといった点で共通点を見い出せる。小屋ノ内遺跡では比較的大きな製作跡２か所と小規模なもの２か所が検出されており、本遺跡例を加えると計５か所において剥片石器が製作されていたことになる。製作された石器については石鏃・石錐・削器・掻器などであり、製品は少ない。こうした製作跡を物井地区周辺に求めると、池花南遺跡に石核・剥片を集中的に出土した地点が１か所確認されている。ここでは約350点が出土しており、使用石材は気泡を含有する粗悪な黒曜石ではあるが、縄文時代後期の加曽利Ｂ式土器に伴うものとされる。物井地区での調査では、時期的には加曽利Ｂ式期から安行式期にかけての製作跡とみることができるため、時期的には重複する時期となる。ただ石材が異なるため剥離法は若干相違するものと考えられる。池花南遺跡例も含めて、出土した剥片を観察するとしばしば使用痕と考えられる痕跡、あるいは微細な調整痕を施した小さな剥片を見出すことができる。何らかの目的で使用されたものと考えられるが、具体的な用途についての論考はなされておらず，今後の課題として残る。

以上、本遺跡の縄文時代から弥生時代初期の遺構・遺物について注目できる点を指摘してきたが、本遺跡周辺に所在する遺跡は，印旛沼に注ぐ鹿島川と手繰川の支流により形成された広大な台地の中に所在し，各時期では確実な集落は検出されていないものの遺物集中地点や土坑等の存在により早期から晩期を経て弥生時代初期へと続く一連の流れが把握できる。換言すれば、縄文時代における当時の人びとの動向が物井地区及びその周辺に集約されており，学術的にみても貴重な地域となっている。

参考文献

注１　古内茂・大内千年2006『四街道市小屋ノ内遺跡(2)』（財）千葉県教育振興財団

注２　米内邦雄・宮入和博1972『千代田遺跡』四街道千代田遺跡調査会
注３　渡辺修一1991『四街道市内黒田遺跡群』（財）千葉県文化財センター
注４　渡辺修一・横山仁1994『四街道市御山遺跡(1)』（財）千葉県文化財センター
注５　近森正・山岸良二1983『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市教育委員会
注６　西本豊弘・和田哲1973『古和田台遺跡』船橋市教育委員会
注７　野村幸希・清藤一順1975『飯山満東遺跡』（財）千葉県都市公社
注８　後藤和民1974『千葉市史－原始古代中世編－』千葉市
注９　岡田誠造1999『四街道市出口・鐘塚遺跡』（財）千葉県文化財センター
注10　寺村光晴ほか2000『粟島台遺跡』千葉県銚子市教育委員会
注11　設楽博己1991「関東地方の遠賀川系土器」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念事業会

## 第４節　奈良・平安時代の集落について

### １　下総国千葉郡物部郷と稲荷塚遺跡

#### （１）下総国における稲荷塚遺跡の地理的環境

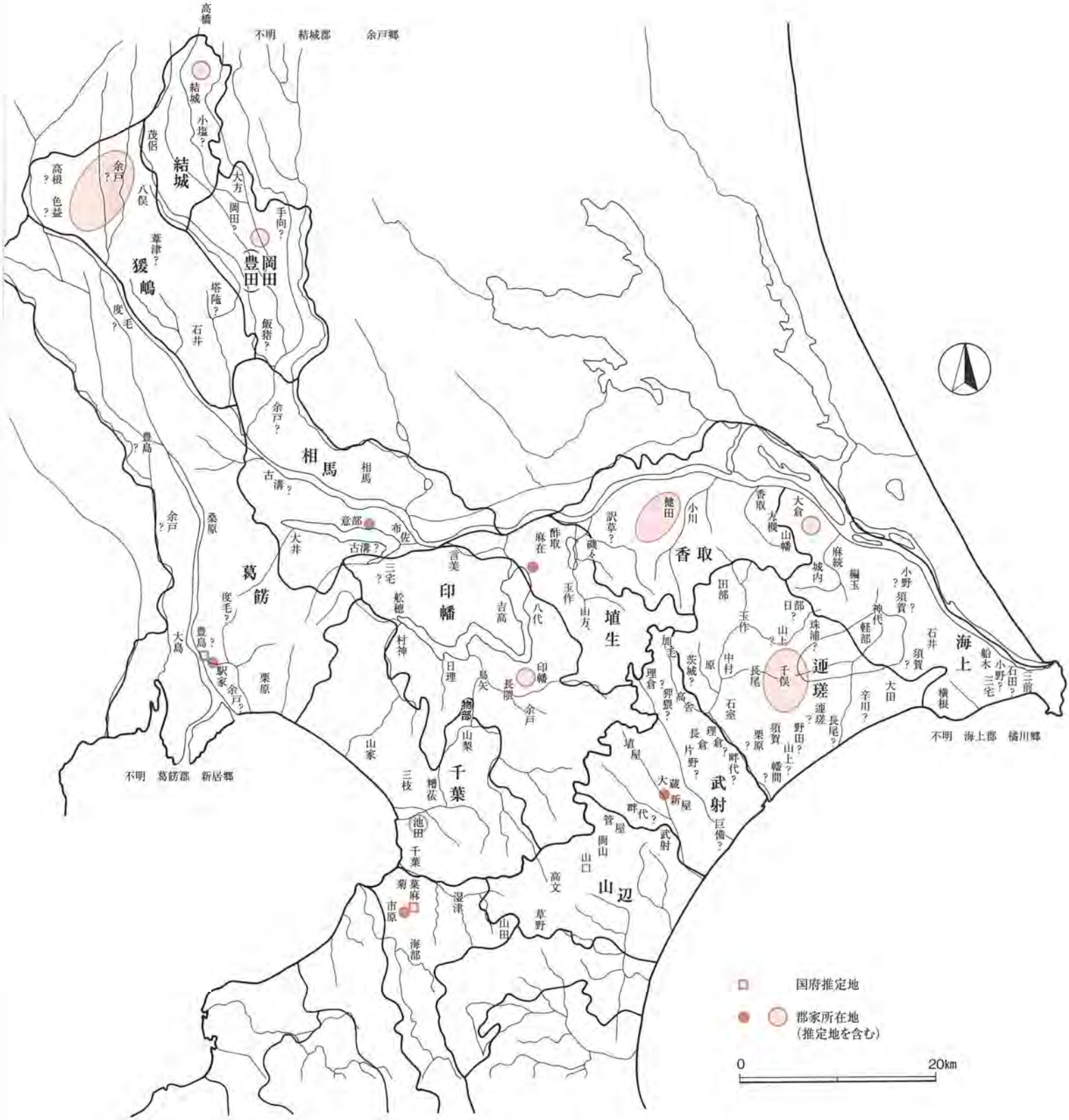
稲荷塚遺跡は2008年現在では千葉県四街道市物井に所在する。この地は奈良・平安時代においては下総国千葉郡物部郷の範囲内であり，なおかつ中心部といえる位置と考えられる。この物井という地名は奈良・平安時代の物部から変化したと推測される[1)]。

稲荷塚遺跡の南西に地続きで位置する小屋ノ内遺跡は，掘立柱建物群の一部が規格的な配置をもつ等の内容から，物部郷の中心集落とみられる遺跡である[2)]。稲荷塚・小屋ノ内両遺跡間には調査対象外の区域があるが，竪穴住居等の分布状況をみると，両者に切れ目がないと予測できる。しかしたとえ若干の空白域が存在したとしても，巨視的にみるならば稲荷塚遺跡は小屋ノ内遺跡と一連の遺跡と理解できる。

ここではまず，奈良・平安時代における稲荷塚遺跡周辺の空間的な状況を考えてみたい。

平安時代中頃に作られた辞書的な書物に『和名類聚抄』[3)]（以下，『和名抄』とする）があり，そのなかには律令制の行政区画である国・郡・郷が記載されている。第348図は下総国全域及び上総国の一部の郡郷名を地図上に記入したものである[4)]。郷の比定地については，『千葉県の歴史　通史編　古代２』のなかの「古代房総三国の郡・郷・里の変遷と比定地一覧」にしたがった[5)]。なお地図上の郷（里）名のなかには，再編等によって『和名抄』成立時点では既に消滅した郷（里）を含んでいるとみられる。各郷の地図への記入方法について述べると，位置の比定に比較的信頼性が高い郷名についてはそのまま記入し，信頼性が低い場合は郷名に疑問符のマーク「？」を付けて記入した。また比定地が二か所以上の場合には，各々の比定地に記入した。なおまったく手がかりのない郷については記入していない。記入した郷名については比較的信頼性が高い比定地でも，完全に正しいとは考えていない。これらの比定地でも，発掘調査の成果や文献史学・地誌学・郷土史等の研究の進展に伴って，常に検証され続ける必要があると考える。

下総国の場合，郷名の分布によって巨視的な集落分布の傾向がうかがえる。すなわち地図上で郷名の間隔が短い場合は集落の分布密度が高く，間隔があいているところは分布密度が低いといえるであろう。後者の場合は，特に分水界となるところに顕著である。なお以上は巨視的な把握の場合であり，一郡以下の集落分布を考える場合には問題がある。郷名の記載位置は遺称地を主としたものであるため，当然のことながら，空白域にも大規模集落が存在する場合がある。また郷（里）は行政的に設定されたものであるので，実態の「村」とは若干の齟齬が考えられる。なお郡や郷の境は河川・道路等によって明瞭な場合があるが，古代では不明瞭な部分もあったと思われる。分水界等の人口密度の低い地域では，線ではなく帯状




第348図　下総国郡郷等位置図

と思われる。またかなり入り組んでいる場合があることが考えられ，飛び地の存在も予想される。それ以上に，そもそも評（郡）里（郷）の設定にあたっては，その境が必ずしも明瞭である必要がなかったという側面があると思われる。したがって第348図では郡の境を図示しているが，おおよそのものであり，明

確な境界線をもたない場合も存在したであろう。

稲荷塚遺跡・小屋ノ内遺跡等物井地区の遺跡群は，地図上に太字で「物部」と記入した地点に位置する。下総国のなかではやや南西寄りの地点である。物部郷は千葉郡のなかでは内陸に位置し，北方及び東方は印幡郡[6]と境を接している。

第348図には，国府や郡衙の比定地も記入した[7]。下総国の場合，相馬郡衙及び埴生郡衙の位置はかなり明瞭であり，また下総国府と国府に隣接する葛飾郡衙も，比定地は絞り込まれているといえよう。なお参考として，上総国武射郡衙（島戸東遺跡）と，上総国府・市原郡衙推定地も地図上に記載した。上記以外の郡家所在地は不明瞭であり，図示した範囲の周辺も含めて考えている。なかには猨島郡家のように範囲がかなり広く，絞り込まれていない郡も存在する。

稲荷塚遺跡の所在する千葉郡の郡家も，比定地は特定されていないが，千葉郷または池田郷に所在すると思われる。下総国内においては東京湾岸の南側で，上総国府寄りの位置である。下総国府と上総国府を結ぶ官道にも比較的近い位置であろう。また大きくみれば，香取に向かう古東海道が分岐する河曲駅にも比較的近い位置と思われる。なお，池田郷・千葉郷に属する集落様相の把握については，当財団による千葉寺地区や千葉東南部地区等の調査・報告により，進展がみられる[8]。

第349図は房総周辺の駅路の変遷を図示したものである。河曲駅から香取へ向かう古東海道は池田郷から糟葹郷・山梨郷を通って印幡郡に至ると思われる。物部郷は山梨郷に隣接する郷であり，古東海道の駅路に近い位置に所在する郷である。また河曲駅から香取に向かう道筋の一つ目の駅に，鳥取駅がある。鹿島川の右岸側が比定地であり，印幡郡内に位置する駅家である。稲荷塚遺跡・小屋ノ内遺跡は鹿島川の左岸側に位置しており，鳥取駅から比較的近い位置に所在するといえよう。

鹿島川は印旛沼に注ぐ河川であるが，当時印旛沼等の内水面を介した物資の流通は非常に盛んであったと思われる。鹿島川も印旛沼から続く水上交通路の動脈の一つと考えられ，稲荷塚遺跡・小屋ノ内遺跡は陸上交通，水上交通のどちらにも便利な地点に位置する。逆にそのような場所であるために，一郷の中心部となり得たのであろう。

古東海道は鳥取駅から北東に香取神宮方面に向かう。印幡郡家の所在地は特定されていないが，古東海道と印旛沼が最も接

Ⅰ期（8世紀初め～771年）の駅路　● 稲荷塚遺跡 小屋ノ内遺跡

Ⅱ期（771年～805年）の駅路

Ⅲ期（805年～10・11世紀代）の駅路

第349図　駅路の変遷

（山路直充　2001「房総の駅路」『千葉県の歴史』通史編　古代2　千葉県史料研究財団から加筆・転載）

近する地点周辺に位置すると思われる。陸上交通と水上交通の結節点となる位置であろう。物部郷は印幡郡家と千葉郡家の間に所在するが，距離的には千葉郡家よりも印幡郡家に近い位置と思われる。物部郷は千葉郡に所在する郷であるため，行政的には千葉郡家との関わりの方が深かったと思われるが，地理的には鹿島川水系の遺跡である。また物部郷の範囲内には，鹿島川同様印旛沼に注ぐ手繰川が延びていたとみられる。稲荷塚遺跡・小屋ノ内遺跡については，隣接する山梨郷との交流が物的にもみられるが[9]，地理的な環境から鹿島川や手繰川流域に所在する印幡郡内の集落との交流もあったと考えられる。

（2）物部郷の範囲について

次に物部郷の範囲を考えてみたい。先述したように，物部郷の南には千葉郡山梨郷が位置する。「山梨」の名称は現在の四街道市に大字として残っている。四街道市山梨は鹿島川の支流である小名木川の南側及び東側一帯を指す地名である。その四街道市山梨の南東方は四街道市中台・成山であるが，成山に所在する南作遺跡（第４図３）８号住居跡からは，「…山梨郷長坏　大生部直罡（岡）麻…」と横位で二段に記載された墨書をもつ土師器杯が出土している[10]。南作遺跡からは奈良・平安時代の竪穴住居・掘立柱建物が多く検出されており，長文墨書土器の存在と合わせて，南作遺跡が山梨郷の中心集落の一つであることは確実である。

墨書土器及び南作遺跡周辺の奈良・平安時代集落を検討した天野努氏は，山梨郷の範囲を四街道市山梨から同中台・成山周辺，さらに佐倉市坂戸付近まで広がる「鹿島川左岸の東西，南北５㎞程の地域一帯」と想定している[11]。

山梨郷と物部郷の境は，地名や奈良･平安時代集落の分布状況から，鹿島川の支流である小名木川の中･下流とみてよいと考える。小名木川の北が物部郷，南が山梨郷である。なお小名木川上流の多くは山梨郷に属す可能性が高いと考えるが，四街道市和良比・千葉市若松町付近は山梨郷と千葉郡糟葹郷との境界付近になると思われる。

物部・山梨の両郷は鹿島川の左岸台地に位置しているが，鹿島川をはさんで，物部・山梨の対岸側は印幡郡とみられる。物部郷の東方は印幡郡鳴（鳥）矢郷，山梨郷の東方は鳴（鳥）矢郷及び（または？）印幡郡余戸郷と思われる。なお鳴(鳥)矢郷他の印旛沼南岸の諸郷は，郷域が比較的狭いと思われる。鳴(鳥)矢郷の東方は印幡郡長隈郷，印幡郷，西方は印幡郡日理郷が存在するとみられる。

物部郷の範囲について現在の地名からみると，物井の北西方・西方の四街道市千代田・内黒田，北方の四街道市亀崎，南方の四街道市長岡，南東方の四街道市栗山はその範囲内と思われる。千代田の西側及び内黒田付近は，鹿島川の西方にあって印旛沼に注ぐ手繰川の上流域である。河川等の自然地形からみるならば，物部郷の範囲は手繰川上流と小名木川及び鹿島川本流に挟まれた一帯付近といえよう。なお千代田をはじめ，内黒田・物井については，現代の開発のため，地形が少なからず改変されている。そのため，稲荷塚遺跡周辺の明治年間の地形図を図示した（第350図）。明治年間の地形が古代の様相をそのまま残しているとは思えないが，開発の進んだ現在と比べれば，より古代に近い状況と思われる。

物部郷の北側は亀崎北方の佐倉市吉見付近で，日理郷との境になると思われる。物部郷東側の境が鹿島川，南側の境が小名木川という河川によって明瞭であるのに対し，北側については地形上の明確な境界をみることができない。

物部郷の西南方は東京湾に注ぐ河川との分水界地帯となるため，奈良・平安時代の集落分布は比較的希

第350図　明治年間の地形

（1/40,000　明治15年測量　陸軍迅速測図）
「下志津村」「佐倉」「臼井村」「中村村」を合成縮小

薄と思われる。現在の地名からみて，四街道市鹿放ヶ丘周辺の地域である。そのため物部郷と周辺諸郷との境界は不明瞭と思われる。あるいは特に明確な境界をもたなかったのかもしれない。物部郷の西方の諸郷について北西から南西にみていくと，印幡郡村神郷，千葉郡山家郷，同三枝郷，同糟葹郷になると思われる。これらのなかでは三枝郷が物部郷と比較的近い位置関係にあると考えられる。

注

1　当財団職員　今泉潔氏のご教示による。この点については，物井地区の既刊の報告書である『小屋ノ内遺跡(3)』でも述べた。

糸川道行他　2007　『四街道市小屋ノ内遺跡（3）　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』　（財）千葉県教育振興財団

2　注１糸川他2007文献　糸川道行他　2006　『四街道市小屋ノ内遺跡（2）　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』　（財）千葉県教育振興財団

3　『和名類聚抄』は，源順が承平年間（931年～938年）に編纂した書物である。

4　地図については須田他1998文献を基に作成した。

須田勉他　1998　『千葉県の歴史　資料編　考古３（奈良・平安時代）』　（財）千葉県史料研究財団

5　宮原武夫他　2003　『千葉県の歴史　通史編　古代２』　（財）千葉県史料研究財団

6　「印幡」の表記については現在の「印旛」の他「印播」もあり，また古くは「印波」や人名のなかに「印葉」もみられるが，ここでは「印幡」を使用する。

7　国府・郡家推定地の記載については，下記の文献を参考とした。

小林信一他　2006　『研究紀要25』　（財）千葉県教育振興財団

8　奈良・平安時代における千葉寺地区の代表的な集落遺跡には，鷺谷津遺跡と観音塚遺跡がある。

白井久美子・田中裕他　2002　『千葉市鷺谷津遺跡　－都市基盤整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』　（財）千葉県文化財センター

白井久美子他　2004　『千葉市観音塚遺跡・地蔵山遺跡(3)　－都市基盤整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』　（財）千葉県文化財センター

千葉東南部地区については，高沢遺跡をはじめ，多くの遺跡が調査・報告されている。参考文献としては以下の神明社裏遺跡・六通貝塚を取り上げ，他については省略する。

関口達彦　2006　『千葉東南部ニュータウン36　－千葉市神明社裏遺跡１－』　（財）千葉県教育振興財団

西野雅人　2007　『千葉東南部ニュータウン37　－千葉市六通貝塚－』　（財）千葉県教育振興財団

9　小屋ノ内遺跡の竪穴住居SI-402から「山梨」の墨書をもつ土器が出土している。注１糸川他2007文献

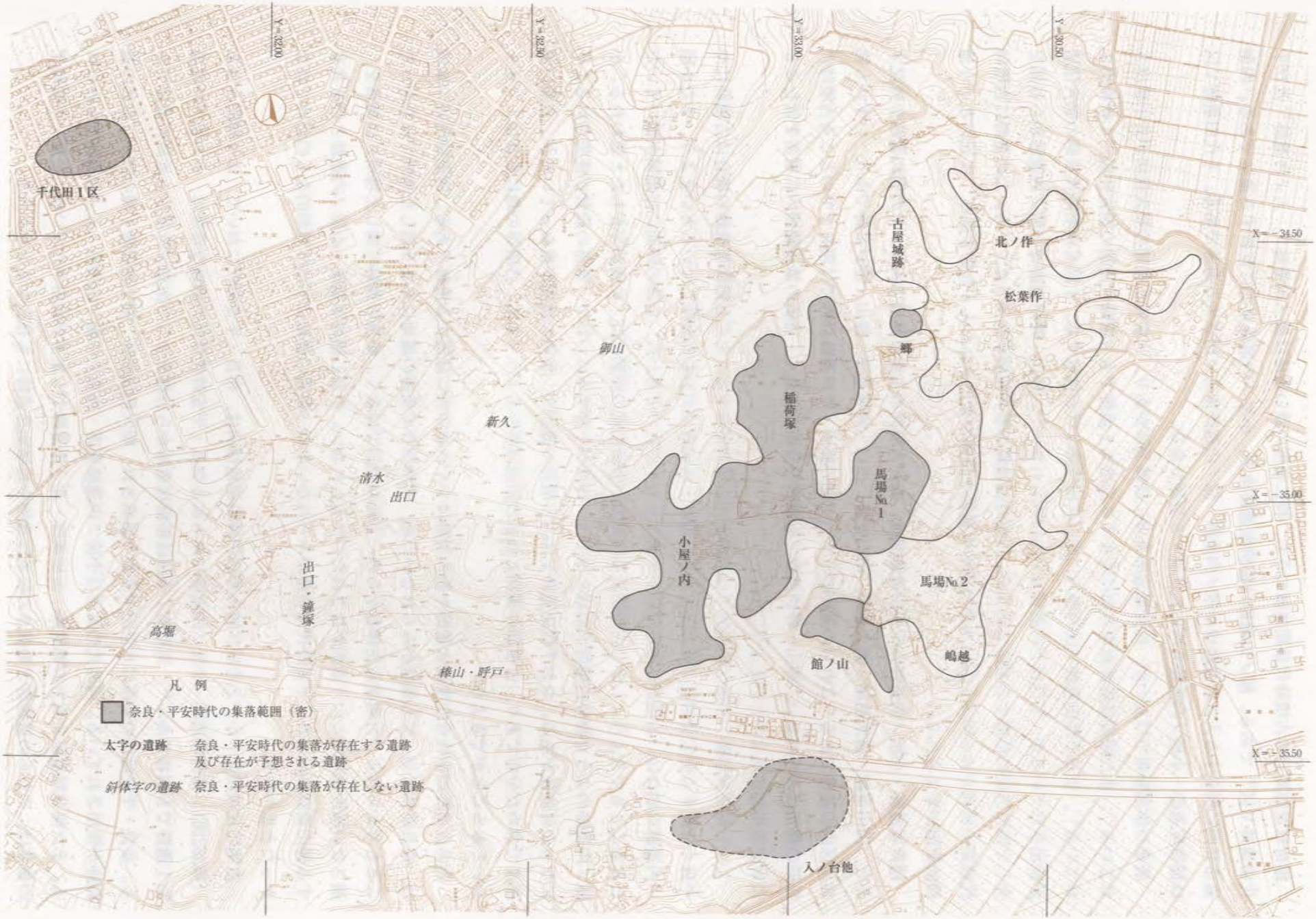
10　中山俊之他　2007　『千葉県四街道市南作遺跡　四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査（Ⅴ）』　（財）印旛郡市文化財センター

11　天野努　2005　「墨書土器からみた古代房総の郷と村と集落・家族」『千葉県文化財センター研究紀要24　－30周年記念論集－』）

## 2　古墳時代後期から奈良・平安時代における稲荷塚遺跡周辺

稲荷塚遺跡の調査で検出された古墳時代後期（７世紀末頃まで含む）の竪穴住居の数量は11軒であり，奈良・平安時代の約230軒と比べて非常に少ない。この様相は小屋ノ内遺跡においても同様である。両遺跡における古墳時代後期集落の範囲をみると(第351図)，稲荷塚遺跡では調査区東部及び西部北側であり，小屋ノ内遺跡に続く南部側にはみられない。また小屋ノ内遺跡では調査区の南側に偏っており，稲荷塚遺跡側の中央以北にはみられない。両遺跡間には調査区外の地域があるが，以上の様相からみて，古墳時代後期の集落は両遺跡間にかなりの空白域が広がると考えられる。奈良・平安時代の集落が切れ目がないとみられるのに対して，対照的な様相である。

第351図　遺跡周辺の古墳群・古墳時代後期集落分布（1/10,000）




第352図　遺跡周辺の奈良・平安時代集落分布（1/10,000）

稲荷塚遺跡周辺の古墳時代後期集落のうち，特に密度の濃い遺跡は館ノ山遺跡[1]，入ノ台遺跡[2]及び千代田遺跡Ⅴ区[3]である。館ノ山遺跡は稲荷塚遺跡南方，小屋ノ内遺跡東方に位置する遺跡である。四街道市長岡に所在する入ノ台遺跡は小屋ノ内遺跡・館ノ山遺跡南方に所在する遺跡である。千代田遺跡Ⅴ区は稲荷塚遺跡・小屋ノ内遺跡北西方に位置する遺跡である。

濃密な集落分布ではないが，稲荷塚遺跡東方には郷遺跡があり，古墳時代後期の竪穴住居が若干検出されている[4]。また稲荷塚遺跡南東方向に所在する馬場№1遺跡でも古墳時代後期の竪穴住居が1軒検出されている[5]。なお千代田遺跡Ⅴ区の西方には千代田遺跡Ⅰ区が位置する。Ⅰ区も古墳時代後期の竪穴住居が検出されているが，Ⅴ区ほどの濃密な分布はみられない[6]。棒山・呼戸遺跡は小屋ノ内遺跡から谷部を介して南西方向に位置する遺跡であるが，古墳時代後期の竪穴住居が検出されている。この遺跡に古墳時代後期の集落がみられるのは，当該時期の大規模な集落が検出された入ノ台第2遺跡[7]に近いという地理的要因が考えられる。

稲荷塚遺跡・小屋ノ内遺跡と千代田遺跡間は，物井古墳群の主要な範囲である。その間の遺跡を列記すると，御山遺跡，清水遺跡，新久遺跡，出口遺跡，出口・鐘塚遺跡，棒山・呼戸遺跡であり，いずれも物井地区内の遺跡である。これらの遺跡のうち，上記の棒山・呼戸遺跡以外では現在までのところ古墳時代後期の集落はみられない。棒山・呼戸遺跡でも濃密な分布ではなく，古墳の築造範囲内に集落を営むことに対する規制があったといえよう。

しかし稲荷塚遺跡・小屋ノ内遺跡では，若干の古墳が存在する。ただし稲荷塚遺跡の場合は古墳群にやや近く位置する竪穴住居は1軒のみであり，墓域と居住域はおおむね分離しているといえよう。また小屋ノ内遺跡の場合は，古墳群の築造時期が集落よりもやや古いと思われ，造墓の時期には規制が働いていたとみることもできよう。しかし古墳築造後の追葬や墓前祭祀の時期には，集落が存在したと思われる。小屋ノ内遺跡のような物井古墳群の周縁の地では，時期が下降するにつれて，集落の設営が優先されるようになった可能性がある。なお千代田遺跡Ⅴ区も古墳群の範囲と，集落の範囲が重なっているが，方形区画墓まで含めた分布であり，古墳群の範囲と集落の範囲は異なるようである。古墳群の地に集落は入り込まないとみることができよう。

物井古墳群の中核をなす清水遺跡や新久遺跡はやや台地中央に位置する遺跡である。両遺跡周辺の地域は，奈良時代に至っても集落がみられないため，水利面等で集落の選地にあまり適した場所ではなかったことも考えられる。古墳築造主体者からの一方的な規制ではなく，集落の選地に適した場所には集落を，適さない場所は墓域という選択がなされたのかもしれない。ただし稲荷塚遺跡・小屋ノ内遺跡と谷を共有する御山遺跡にも奈良・平安時代の集落がみられないため，集落の選地はやはり地形的なものだけではなかったと思われる。

古墳時代後期にうかがえる居住域と非居住域の選地傾向は，奈良・平安時代において，より鮮明となる（第352図）。稲荷塚遺跡・小屋ノ内遺跡にみられる奈良・平安時代集落の濃密な密度は，その東方の馬場№1遺跡でも同様である[8]。馬場№1遺跡は稲荷塚遺跡から谷部を介して南東に位置する近隣の遺跡である。奈良・平安時代の集落は8世紀中葉から形成され，竪穴住居25軒，掘立柱建物1棟のほか，古代の道路跡が検出されている。同時代の集落は小屋ノ内遺跡東方・南東方の館ノ山遺跡・入ノ台遺跡でもみられる。また稲荷塚遺跡北東方の郷遺跡・古屋城跡・北ノ作遺跡でも集落が検出されている。奈良・平安時代の集落は，それらの遺跡群と地続きの松葉作遺跡や馬場№2遺跡にも存在すると思われる。

一方，小屋ノ内遺跡・稲荷塚遺跡西方の地域においては，千代田遺跡Ⅰ区に若干の奈良・平安時代集落がみられるが，その間は比較的広大な空白域が広がっている。かつて物井古墳群の中核地域であった場所は，奈良時代に至っても御山遺跡等，一部が方形区画墓等の墓域として使用されている。御山遺跡は前代の古墳時代において，小屋ノ内遺跡以上に密な古墳の分布域であったが，その後も引き続き墓域として使用され，小屋ノ内遺跡のような一大居住地には転換しなかった。ただし墓域といっても，前代に古墳を築いた特定の有力層に連なると思われる。稲荷塚遺跡や小屋ノ内遺跡等において，竪穴住居に居住した一般庶民の埋葬については，ほとんど不明である。なお御山遺跡は墓域の他に畑地等の生産域やその他の土地利用も考えられるが，その実証は難しい。小屋ノ内遺跡西方の新久遺跡・出口遺跡・清水遺跡も御山遺跡と同様の状況であり，時代を確定することが難しい方形区画墓が検出されているのにとどまる。

以上のように小屋ノ内遺跡西方の地域も平安時代に進むと，墓制の様相は不明瞭さを増してくる。墓域としての利用は下火になると思われ，別の土地利用がなされたか，あまり利用されなかったことも考えられる。

千代田遺跡の様相はかなり不明瞭であるが，Ⅰ区は物井地区遺跡群とは別の集落群の一つになるものと思われる。水系も手繰川であり，鹿島川から離れる。

以上，稲荷塚遺跡周辺の奈良・平安時代の景観は，物部郷の中心集落である小屋ノ内遺跡を境に東西で明瞭な違いをもつ。物井遺跡群北方の四街道市亀崎周辺は比較的まとまった奈良・平安時代集落の分布が予想されるが，南西方の四街道市栗山周辺は分布があまり濃くないように思われる。

注

1　館ノ山遺跡は物井地区内の遺跡で，平成20年度現在，整理作業実施中である。

2　新井和之・中西克也　1990　『千葉県四街道市入ノ台第２遺跡発掘調査報告書』　四街道市教育委員会

3　米内邦雄他　1972　『千代田遺跡』　四街道千代田遺跡調査会

4　沼澤豊　2008　『四街道市郷遺跡・中久喜遺跡　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』　（財）千葉県教育振興財団

5　加藤有花　2007　『千葉県四街道市馬場№１遺跡』　（財）印旛郡市文化財センター

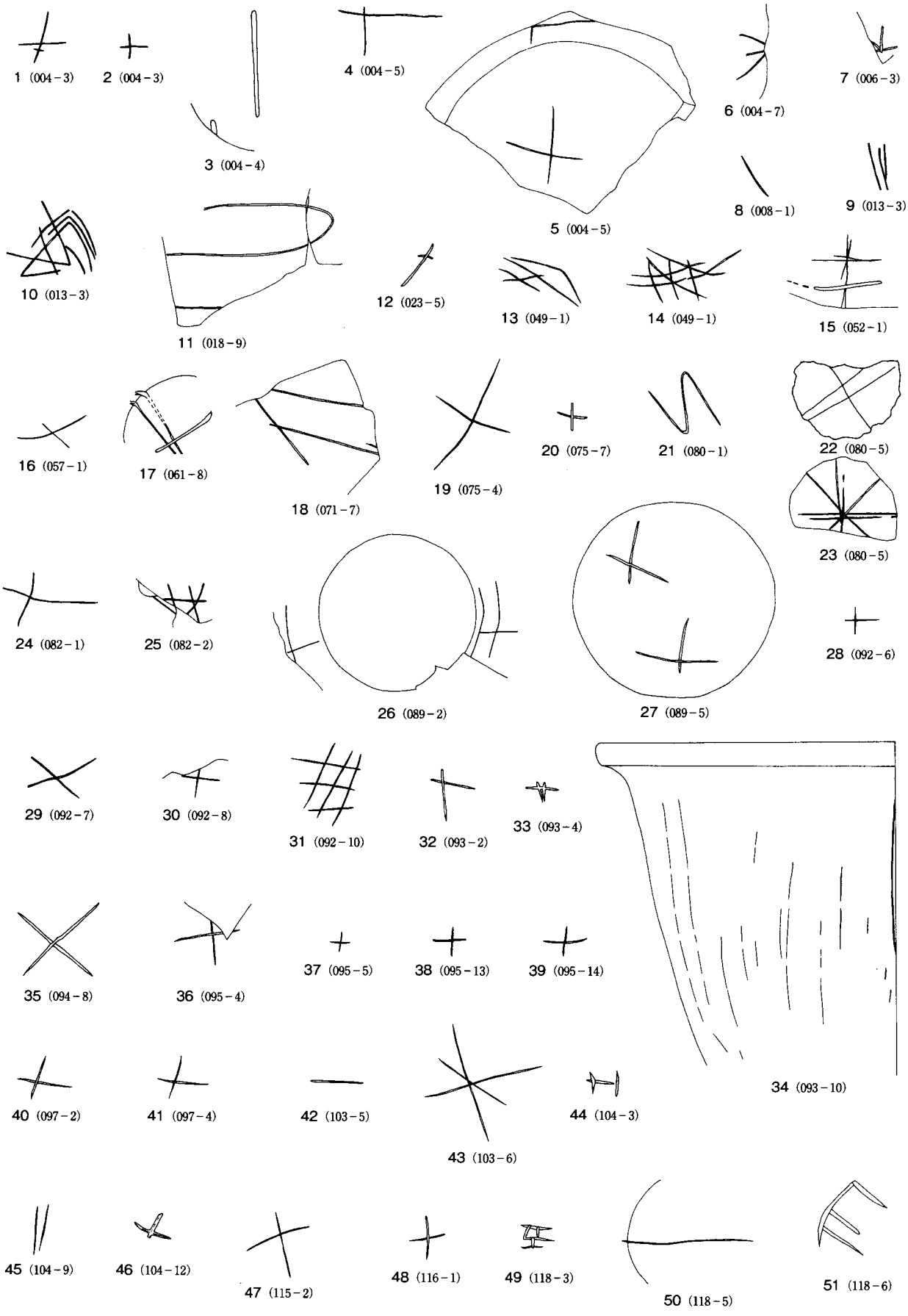
6　注３米内他1972文献。

7　注２新井他1990文献。

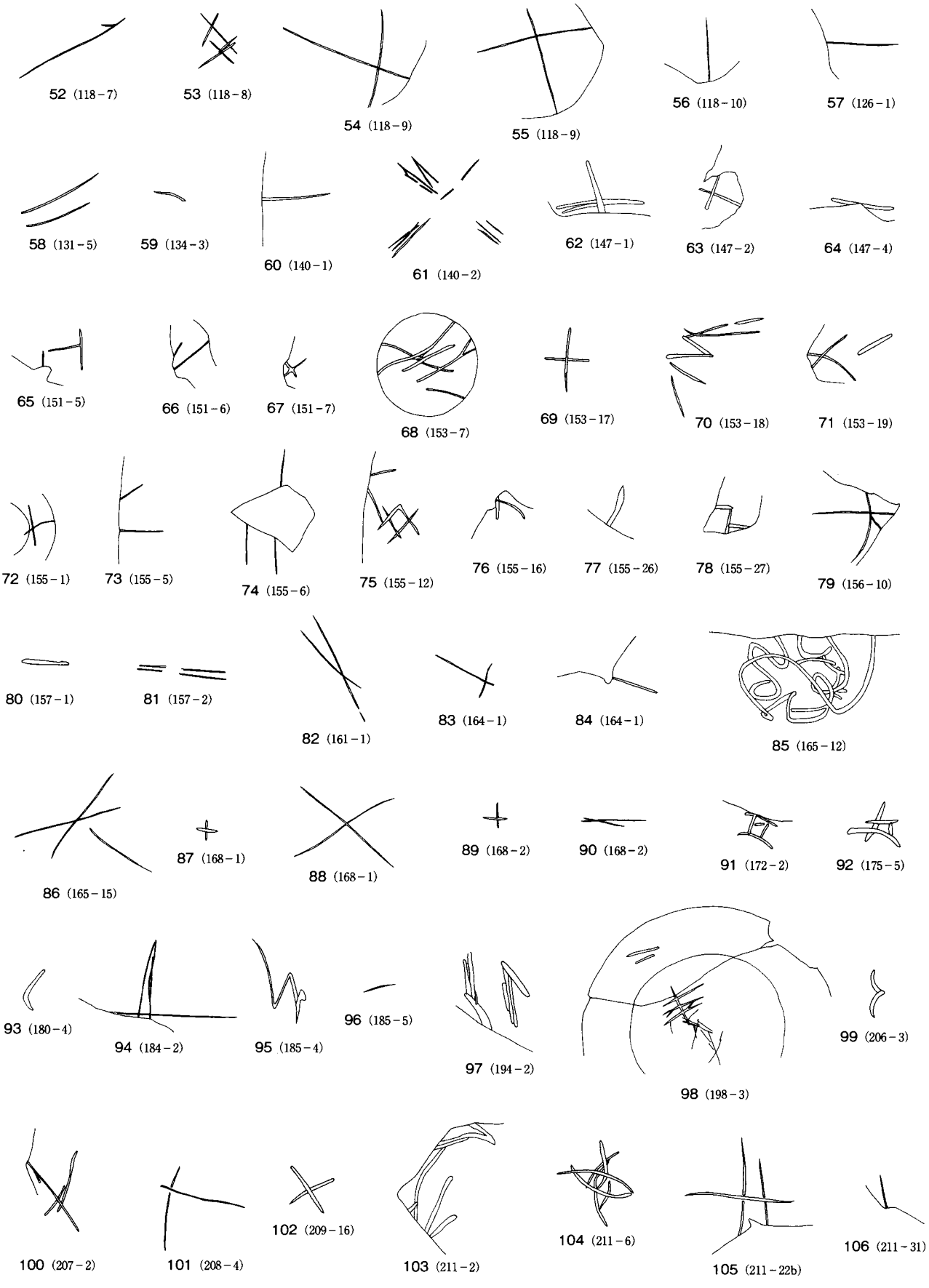
8　注５加藤他2006文献。

## 3　文字・記号資料及び打ち欠き・打ち割り土器について（第353～359図，第35～37表）

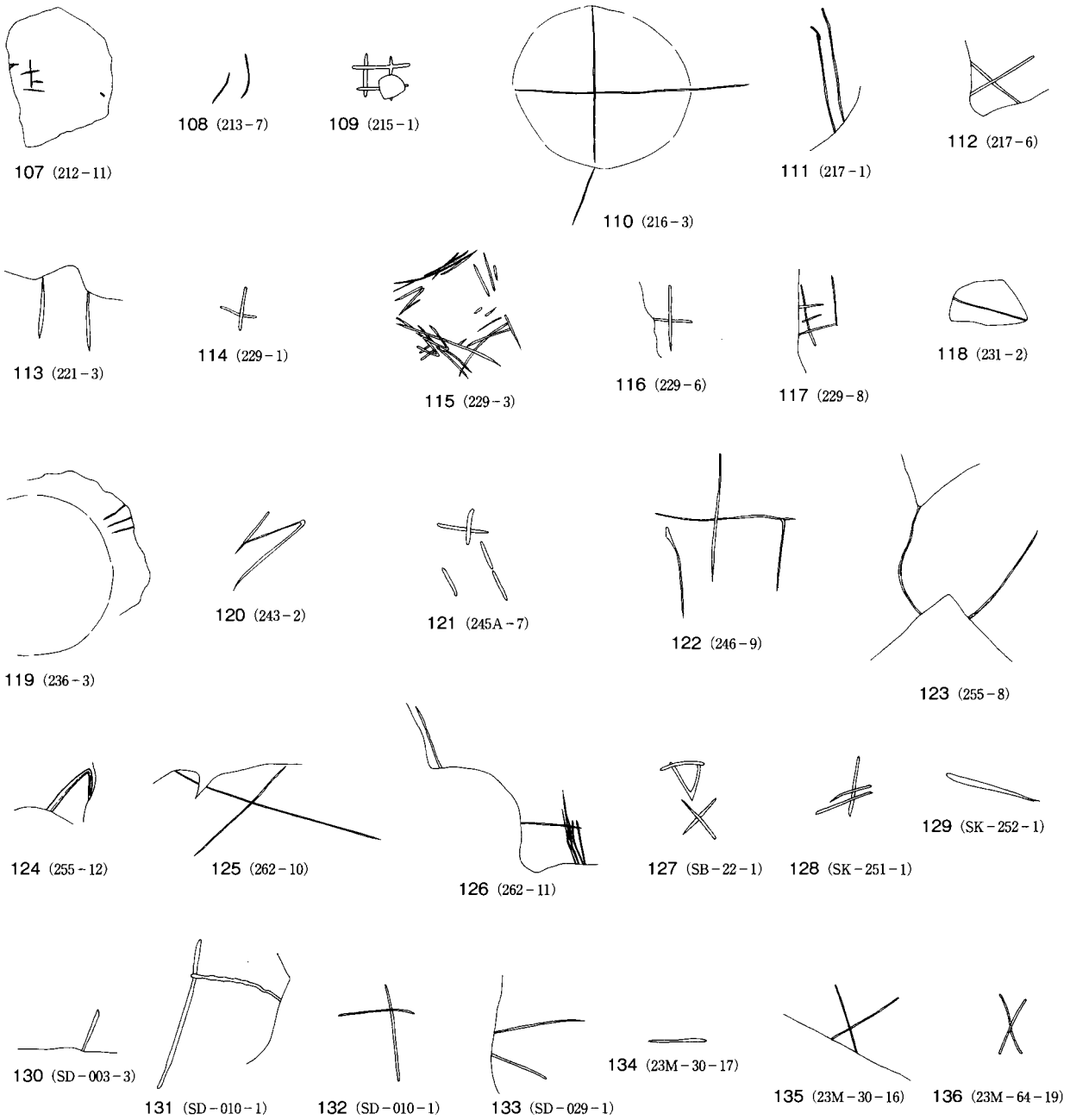
文字・記号資史料及び意図的に打ち欠きや打ち割りがなされた土器については，若干の検討を試みる予定で図面を作成した。しかし検討作業を行う時間がなくなったため，表と集成図をもって記録の提示としたい。




第353図　線刻・ヘラ書き土器一覧（1）

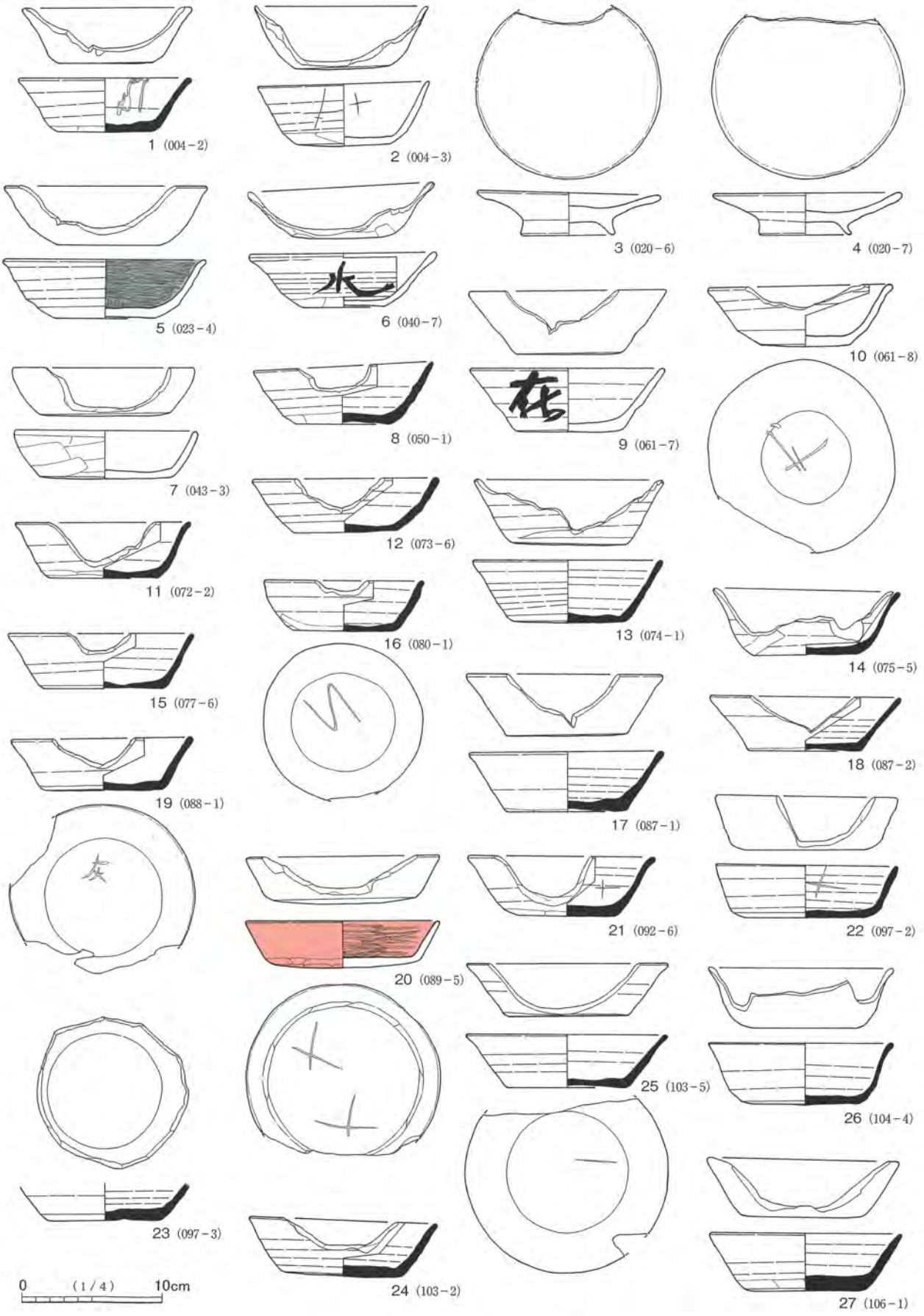



第354図　線刻・ヘラ書き土器一覧（2）

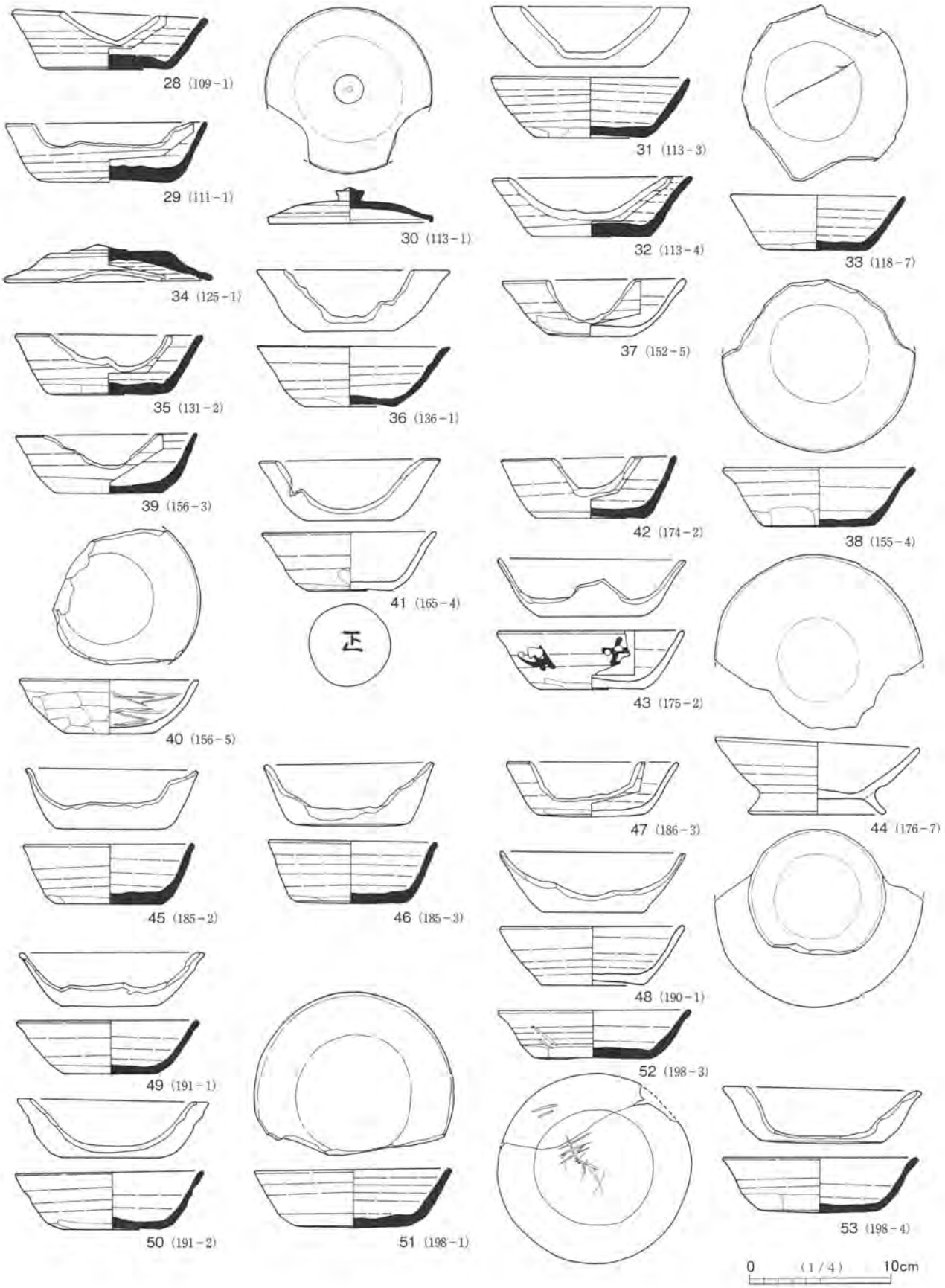



第355図　線刻・ヘラ書き土器一覧（3）

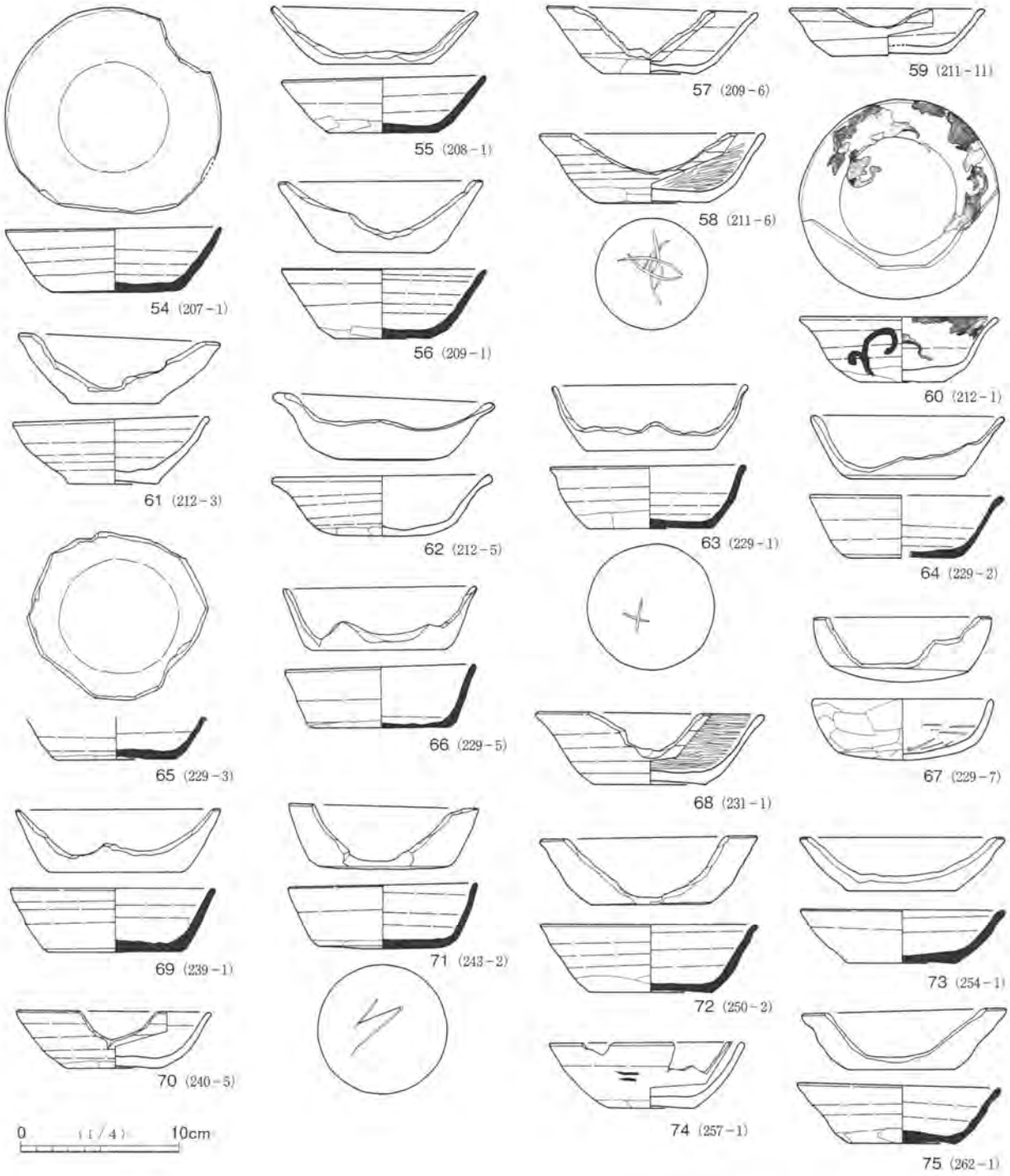
第356図　文字資料一覧（墨書・朱書・刻書）




第357図　打ち欠き土器一覧（1）




第358図　打ち欠き土器一覧（2）




第359図　打ち欠き土器一覧（3）

# 付 章　自然遺物の分析

## 第１節　貝サンプルの分析結果

縄文時代前期後葉の住居跡1軒，奈良・平安時代の住居跡1軒および，時期不明の土坑1基から貝層を検出し，サンプルを採取した。ごく断片的な資料ではあるが，縄文前期後葉の貝層検出例はごく稀であり，貴重なものといえる。採取したサンプルは，9.52㎜・4㎜・2㎜・1㎜メッシュの試験フルイによる水洗分離を経て，選別・集計・計測を行った。貝類の集計は4mm以上を対象とした。計測はパソコンに接続したデジタルノギスを使って行い，マイクロソフト・エクセルの分析ツールを使ってヒストグラムを作成している。分析は西野雅人が担当した。微細資料の選び出しは1mmまでを対象とし，微小貝と炭化種子を検出したが同定分析は未了である。動物骨は検出されなかった。

第１表　貝サンプル一覧

| ｻﾝﾌﾟﾙ名 | 時期 | 遺構 | 採取ﾘｯﾄﾙ | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| SI-025 | 縄文前期 | 住居跡 | 16.1 | 貝ブロック2か所一括 |
| SI-131 | 奈良･平安 | 住居跡 | 0.1 | 全量一括採取 |
| SK-104 | 不明 | 土坑 | 0.5 | 全量一括採取 |

第２表　貝類種名一覧

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 腹足綱 | 原始腹足目 | ニシキウズガイ科 | イボキサゴ | *Umbonium (Suchium) moniliferum* |
| | 中腹足目 | ウミニナ科 | ウミニナ科種不明 | Potamididae gen. & sp. Indet |
| 二枚貝綱 | ウグイスガイ目 | イタボガキ科 | マガキ | *Crassostrea gigas* |
| | マルスダレガイ目 | バカガイ科 | シオフキ | *Mactra quadrangularis* |
| | | フナガタガイ科 | ウネナシトマヤガイ | *Trapezium liratum* |
| | | マルスダレガイ科 | アサリ | *Ruditapes philippinarum* |
| | | | ハマグリ | *Meretrix lusoria* |
| | | | オキシジミ | *Cyclina sinensis* |
| | | オオノガイ科 | オオノガイ | *Mya arenaria oonogai* |
| | 計 | 8科 | 10種 | |

第３表　貝類同定結果

| | 縄文前期 | 奈良･平安 | 不明 |
|---|---|---|---|
| 種名 | SI-025 | SI-131 | SK-104 |
| イボキサゴ | | | 157 |
| ウミニナ科 | 183 | | |
| マガキ | 3205 | | |
| シオフキ | | 1 | |
| ウネナシトマヤガイ | 2 | | |
| アサリ | 4 | | |
| ハマグリ | 1 | 2 | |
| オキシジミ | 67 | | |
| オオノガイ | | | 2 |
| 合　計 | 3462 | 3 | 159 |

### １．貝層とサンプルの概要

SI－025（第32図･図版15･18）　縄文前期後葉･諸磯ｂ式・浮島Ⅱ～Ⅲ式期の住居跡の覆土上層に小規模な貝層を形成していた。貝層の大きさや層位の詳細は不明であるが，写真（図版18）をみると，確認面付近が中心であったようである。採取後の土も含む体積で約16リットルあった。

SI－131（第160図）　奈良・平安時代の住居跡

内覆土下層に貝殻が数点入っていた。貝殻の比較的強固な部分が辛うじて遺存したものとみられる。東京湾から持ち込まれた可能性が高く，些細な資料だが，古代の流通を考える上で重要である。

SK－104（第31図）　1.3m×1.1m，深さ0.3mほどの皿状の穴にイボキサゴ主体のごく小さな貝層を形成していた。遺構の形状は特徴がなく，貝以外の遺物を含んでいなかったため，時期・性格は不明であるが，便宜的に縄文時代の土坑として掲載した。印旛沼南岸付近に東京湾産のイボキサゴが持ち込まれた例は，縄文中期～晩期にみられる。

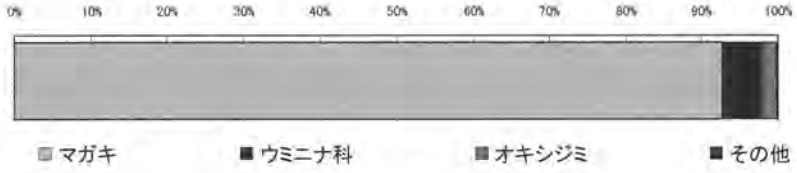
なお，SI－131とSK－104の試料は詳細な分析の必要がないと判断し，貝種の同定結果を表に示すにとどめ，以下ではSI－025の分析結果のみを記載する。

## 2．貝種組成

マガキ・ウミニナ科・オキシジミが大半である。なかでもマガキが圧倒的に多く，92.6％を占める。これに次ぐウミニナ科は5.3％，オキシジミは1.9％に過ぎない。ウミニナ科には少なくともウミニナとイボウミニナがみられた。このほかはわずかに混じっていた程度であるが，アサリ，ハマグリ，ウネナシトマヤガイがある。生息場所からみると，マガキ・オキシジミ・ウネナシトマヤガイ・ウミニナ類という湾奥の泥底干潟に多産する貝が中心である。ハマグリとアサリはやや沖よりの内湾砂泥底に多いが，個体数がごくわずかであるので，マガキ等と同じ漁場で採取された可能性がある。ウネナシトマヤガイはマガキ等に付着して持ち込まれたものであろう。

第４表　貝種組成

| 種名 | SI-025 | % |
|---|---|---|
| マガキ | 3205 | 92.6% |
| ウミニナ科 | 183 | 5.3% |
| オキシジミ | 67 | 1.9% |
| その他 | 7 | 0.2% |
| 合計 | 3462 | 100% |




第５図　貝種組成

第６表　貝類計測値分布

| ウミニナ科殻高 mm | | マガキ殻高 mm | | オキシジミ殻長 mm | |
|---|---|---|---|---|---|
| -10.0 | | -5.0 | | -5.0 | |
| -12.0 | 1 | -10.0 | | -10.0 | |
| -14.0 | 4 | -15.0 | 4 | -15.0 | |
| -16.0 | 7 | -20.0 | 49 | -20.0 | |
| -18.0 | 12 | -25.0 | 52 | -25.0 | |
| -20.0 | 8 | -30.0 | 60 | -30.0 | |
| -22.0 | 13 | -35.0 | 23 | -35.0 | 8 |
| -24.0 | 11 | -40.0 | 7 | -40.0 | 3 |
| -26.0 | 3 | -45.0 | 3 | -45.0 | |
| -28.0 | 3 | -50.0 | 1 | -50.0 | |
| -30.0 | 2 | -55.0 | 1 | -55.0 | |
| -32.0 | 1 | -60.0 | | -60.0 | |
| -34.0 | | -65.0 | | -65.0 | |
| -36.0 | | -70.0 | | -70.0 | |
| -38.0 | | -75.0 | | -75.0 | |
| 試料数 | 65 | 試料数 | 200 | 試料数 | 11 |
| 平均 | 19.86 | 平均 | 24.75 | 平均 | 32.68 |
| 標準偏差 | 4.24 | 標準偏差 | 6.51 | 標準偏差 | 2.26 |

## 3．計測値

マガキの左殻200個を抽出して計測した結果，平均24.8㎜，最大でも51mmであった。これはマガキとしてはとても小さいといえる。ウミニナ科は殻高の平均が19.9㎜であった。オキシジミは計測数が14個にすぎないが，殻長の平均は32.7㎜で，全体に大きさが揃っている。

## 4．その他の観察結果

マガキ　左殻の付着痕を観察したところ，第７表のようにウミニナ類に付いたもの（B）が多かった。ウミニナ類が付着した状態のものは現

第７表　マガキの付着痕

| | 9.52㎜ | 4mm | 計 | 比率 |
|---|---|---|---|---|
| A:付着痕なし，マガキに付着 | 27 | 47 | 74 | 38.9% |
| B:ウミニナ類に付着 | 73 | 19 | 92 | 48.4% |
| C:二枚貝に付着 | 2 | 2 | 4 | 2.1% |
| D:棒状のものに付着 | 3 | 0 | 3 | 1.6% |
| E:付着痕あり，不明 | 10 | 7 | 17 | 8.9% |
| 合計 | 115 | 75 | 190 | 100.0% |

状では5点のみであるが，痕跡のみの場合でも付着面が汚れていないものが多いので，遺跡内で剥がれたものが多かったと思われる。4mmメッシュのマガキに付着したもの（A）は，他の個体に付着して混獲された可能性も充分考えられるので，採取された個体の半数以上はウミニナ類に付着したものであったろう。また，9.52㎜のなかでみるとウミニナ類に付着したもののほうが，マガキに付着したものよりも大きめである。この状況から，マガキはカキ礁を形成しておらず，ウミニナ類や死亡したマガキの殻に付着しながら生息していたものと推定される。大きく成長することができず，個体群の規模もそれほど大きくなかったであろう。

**ウミニナ類**　上述のようにウミニナ類の一部はマガキの採取に伴って，死貝が持ち込まれたことが明らかである。ウミニナ類は183点あるが，3205点のマガキの何割かにウミニナが付いていたとすると，すべて混獲されたものと考えても不思議はない。ちなみに，ウミニナ類は縄文時代から現代まで殻頂部を切断して身を吸い出すという食習慣が知られており，最近，同じ物井地区の小屋ノ内遺跡の縄文早期の貝層にその可能性のある資料を認めた（西野2006）が，当遺跡の資料にはその傾向は認められなかった。

**オキシジミ**　オキシジミはマガキ・ハイガイと同様の漁場に多産し，縄文早・前期の貝塚をはじめとしてごく普通にみられる。しかし，マガキ・ハイガイ・ハマグリなどが多い場合は，大きな個体なら採取する，というやや価値の低い貝とみられていたらしい。本資料の場合は，ハイガイがいない漁場で食用に採取されたものであろう。ただし，採取量はごく少ない。マガキの付着対象としては二枚貝がとても少ない。これは漁場がマガキとは若干ずれていたからとも考えられるが，むしろオキシジミが若干砂に潜っているためではないか。

**ハマグリ・アサリ**　幼貝が数点みられる。残りは比較的良好なものが多い。マガキが付着したために混獲されたものも含めて，漁場付近の海域にわずかながら生息していたのであろう。

## ５．貝類採取の内容

以上の諸点から，食用に持ち込まれた貝種はマガキとオキシジミであると推定される。主にマガキの採取を目的としていたであろう。前期後葉は，急速な海退によって印旛沼周辺から貝塚がほとんど姿を消す時期にあたる。古鬼怒湾南岸全体でも四街道市木戸先遺跡７号住・８号住と合わせて３例に過ぎない。本資料は，そのような時期に，ウミニナ類に固着しながら生息していた小形のマガキを利用したことを示す内容であった。一方で，ウミニナ類は比較的大きな個体群を形成していた可能性が高いにもかかわらず，積極的に採取されることはなかったらしい。アサリやハマグリはごくわずかに幼貝が生息していたものの積極的に採取するまでに育つことができなかった可能性が高く，ハイガイはすでに姿を消していたらしい。漁場が遺跡からどの程度離れていたかは不明であるが，海産資源の利用が低調になった時期の生業を具体的に示す良好な資料ということができる。

文献

西野雅人2006　「貝サンプルの分析」『四街道市小屋ノ内遺跡(2)』　（財）千葉県教育振興財団

## 第2節　炭化種実の分析

### 1　分析の目的

平安時代の竪穴住居SI－058から保存状態が良好な炭化種実の塊が出土した。この種実塊に含まれる種を同定することは、古代の農業や食生活等を研究するうえで重要であるため、株式会社パレオ・ラボに委託して同定を実施した。その結果については第2項に報告し、第3項で考察を加えた。

### 2　稲荷塚遺跡から出土した炭化種実塊と炭化種実の同定

佐々木由香・バンダリ　スダルシャン（パレオ・ラボ）

(1). はじめに

稲荷塚遺跡は千葉県四街道市物井に所在する奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多く検出された集落遺跡で、下総国千葉郡物部郷の中心地と思われる小屋ノ内遺跡と一連の遺跡と考えられている。ここでは、平安時代（9世紀の半ば）の焼失住居跡である竪穴住居跡の覆土から得られた炭化種実塊および炭化種実を検討し、当時の生業や利用植物を明らかにすることを試みた。

(2). 試料と方法

炭化種実の検討は、調査区東部中央の26K－40グリッド周辺に位置するSI－058から出土した炭化種実塊および炭化種実である。SI－058はカマドを持つ長さ2.8m、幅2.6mの竪穴住居跡で、種実は住居跡の東壁付近から、廃絶後に堆積したと考えられている約20cmの覆土中（4層）に塊状で出土した（第102図）。試料の採取および洗浄は(財)千葉県教育振興財団によって行われた。

炭化種実の同定は、実体顕微鏡下で行った。塊や破片が多く、計数することが困難であったため、一部分を計数し、それ以外は計量した。同定された試料は、(財)千葉県教育振興財団に保管されている。

(3). 結果

同定した結果、草本植物のイネ炭化果実・種子とアワ炭化果実・種子の2分類群が同定された。イネとアワはほとんど果実（穎）で、果実または一部分果実が付着したものが多く、種子が希に見られた。種実塊は最大約3.0×2.5×2.0cmで、大きさの異なる塊が約10個あり、その他に数粒が固まっているイネ・アワの種実と、単独のイネ・アワ種実が多量に含まれた。またごく微量のイネ科と思われる中空の桿（茎）の破片や木材片が含まれていた。塊の表面を観察する限り、アワ果実を主体とし、イネ果実がほぼまんべんなく混じっていた。またイネとアワの比率は約2：8か、部分的にはそれよりもややアワが多かった。イネ果実・種子についてはある程度の大きさのものは分類し、アワ果実・種子は任意に100点を抽出して分類した。表1にそれぞれの重量を示す。

表1　稲荷塚遺跡から出土した炭化種実

| 分類 | 重量(g) |
|---|---|
| イネ・アワ炭化種実塊 | 2.33 |
| イネ・アワ炭化種実（小片塊含む） | 2.15 |
| イネ炭化果実・種子 | 0.40 |
| アワ炭化果実・種子（100点） | 0.03 |
| 合計 | 4.91 |

以下に、炭化種実の記載を示す。

1）イネ　Oryza sativa L.　炭化果実・種子　イネ科

果実の表面には規則的に配列する独特の顆粒状突起がある。長さ4.5～5.5mm、幅2.7～3.1mm程度。種

子の上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に中央がやや盛り上がる縦方向の2本の浅い溝がある。長さ4.7mm、幅3.0mm、厚さ2.1mm程度。未熟の種子が希に含まれており、種子の長さ1.3mm、幅1.0mm程度。

2）アワ　Setaria italica Beauv.　炭化果実・種子　イネ科

果実は紡錘形で横方向に細かい顆粒状の模様がある。長さ1.9～2.0mm、幅1.4～1.5mm程度。種子は小さいが厚みがあり、上面観は楕円形、側面観は円形に近い。胚の長さは胚乳の長さの2/3程度。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の臍がある。長さ1.3mm、幅1.1mm程度。未熟の種子が希に含まれており、長さ1.1mm、幅0.9mm程度。

(4). 考察

イネとアワはほとんどが果実であることや、塊は種子同士が炭化する際にみられる糊状に固着した状態ではなく脆かったことから、果実（穎）の状態で被熱したことが考えられる。イネとアワは個々の果実がランダムに混ざっていたことから、穂の状態ではなく、粒の状態であったことが推察された。また粒同士の間に空隙がなく、密度の高い塊状として出土した状況をあわせると、塊は被熱前からイネとアワが混ざった状態で密にあり、編組製品などの容器に入っていた可能性が高いと考えられる。

塊片が多いことと、2種類の果実と種子が混合した状態のため、それぞれの全体数を求めることは難しいが、任意に抽出したイネ種実10点の重さ0.05g、アワ種実100点の重さ0.03gであることと、イネとアワの比率が約2：8であることからおおよその目安として推定個体数を求めると、イネ種実は約200点、アワ種実は約13,100点含まれていたことが推定される。

種実と同じ層位からは炭化材や焼土が多量に出土しており、炭化材および遺物出土状況から失火ではなく、上屋の解体後に廃材が焼却されたと考えられている（第５章第１節）。覆土中から種実が塊状に出土した人為的な要因として、天井上に保管または天井から下げられていた種実入りの籠などの容器が落下したか、住居の廃絶時に伴って種実入りの容器が置かれたことなどが推察される。

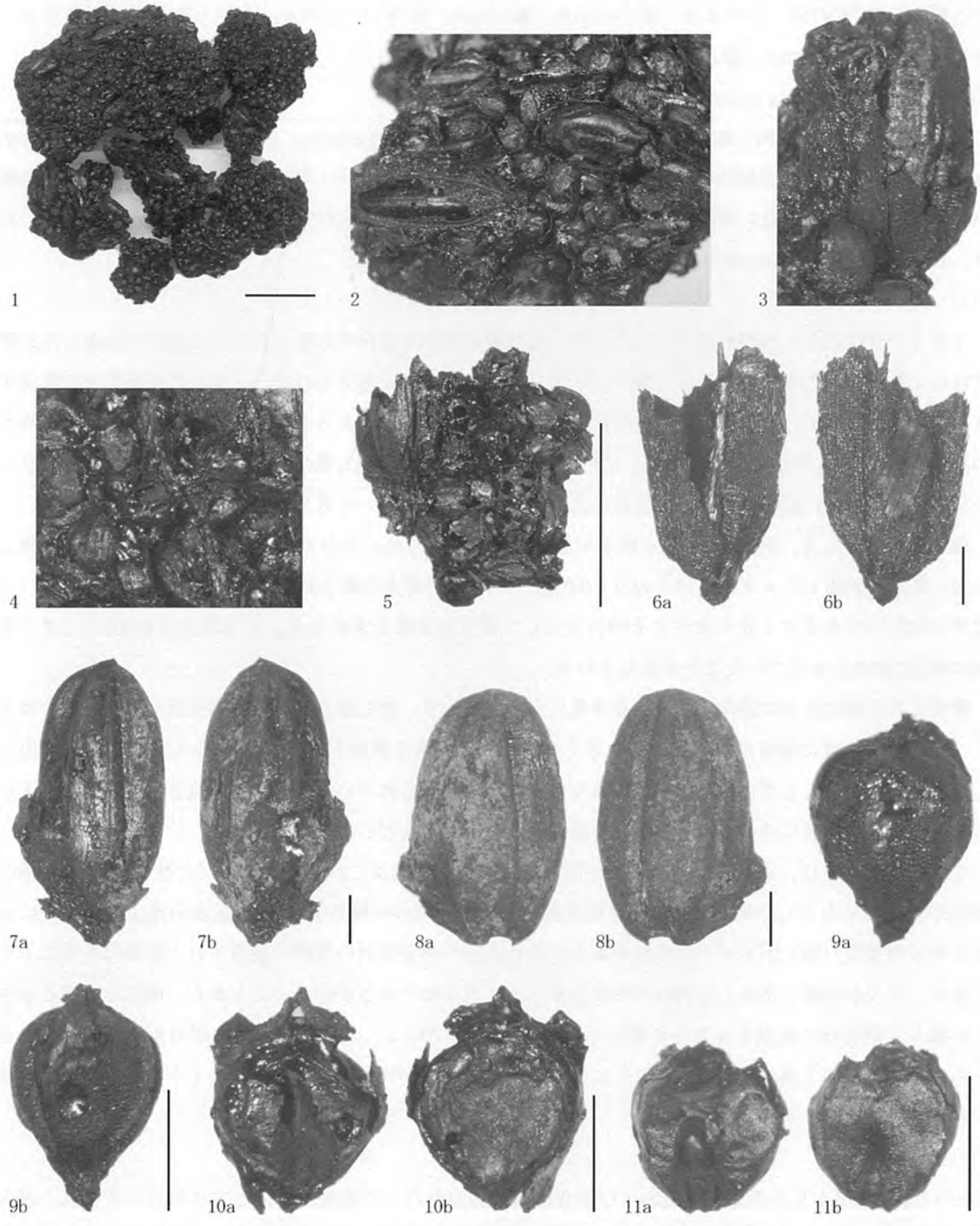
千葉県内の例では、塊状にイネとアワが混合して出土した例はこれまでになく（大谷, 2002）、2種類の穀物が混合して出土した類例として弥生時代後期の木更津市の中郷谷遺跡035号址から出土した壺内にイネとキビの果実（穎）が入っていた例がある。また県内の平安時代の遺跡で検出された穀類の主体はイネであり、アワが多量に出土した例はみられなかった。アワは大きさが小さいことから、肉眼では塊とならない限り、調査時に認識することが難しい。SI－058だけでなく、他の住居跡でも利用が推定できることから、住居跡内の土壌の水洗を行うことによって微細な種実が検出できれば、今後イネとアワの利用形態が明らかになることが考えられる。

(5). おわりに

SI－058から出土した炭化種実塊および炭化種実の同定を行った結果、イネとアワが見いだされ、何らかの容器に入った状態でイネとアワの果実（穎）が混合し塊となっていたことが推定された。

引用文献

大谷弘幸（2002）炭化種子からみた農耕生産物の推定．千葉県文化財センター研究紀要23, 141－179.




スケール1：1cm、2−4：任意、5：5mm、6−11：1mm

図版1　稲荷塚遺跡から出土した炭化種実

1．アワ炭化果実とイネ炭化果実塊，2．1の拡大，3．1のイネ炭化果実部分の拡大，4．1のアワ炭化果実部分の拡大，5．アワ炭化果実とイネ炭化果実塊，6．イネ炭化果実，7．イネ果実付着炭化種子，8．イネ炭化種子，9．アワ炭化果実，10．アワ果実付着炭化種子，11．アワ炭化種子

## 3　SI－058出土炭化種実塊について

前項で分析されたとおり、稲荷塚遺跡SI－058竪穴住居から出土した炭化種実はイネとアワであることが判明した。またイネとアワの比率は約２：８であり、果実の状態で被熱したことが考えられた。

分析により分かったことや考えられることについて前項と重複する部分があるが、以下に箇条書きすると、

①調理以前のイネとアワが穎の状態で混在する。

②何らかの容器に入っていた可能性が高い。

③イネに対しアワの量が非常に多い。

④調理後や調理直前のものでないことから、おにぎり状のものではない。

⑤稲荷塚遺跡周辺でイネ及びアワの栽培が行われていたことが確実である。

これまでの千葉県内の分析例では各時代にわたってイネの優位性がみられており[1)]、アワの検出は平安時代では県内で初めての事例である。このあり方が稲荷塚遺跡だけの特異性か、そうではなく普遍的なもののどちらであるかは速断できない。しかしアワの種実が小さいことを考慮すると、今後は検出事例が増えるのではないかと予想される。

次にイネとアワの混在状態であるが、通常の保管状態を反映しているとみるか、そうでないか大きく二通り考えられる。後者を考慮しなければならないのは他の出土遺物の状態による。SI－058では、線刻をもつ紡錘車が北東隅床面から出土し、また完形の土師器杯が床面から倒位で出土するなど、遺物や出土状況に祭祀的な可能性がうかがえる。炭化種実塊が祭祀的な状態であった場合、イネとアワの混在状態そのものや出土量の比率も、通常とは異なる人為が介在しているといえよう。

なお祭祀的なあり方についても二通り考えられる。一つは竪穴建物廃棄時の祭祀である。もう一つは，竪穴建物内に神棚的な施設があり，そこに穎状態のイネとアワが日常的に供献されていたという想定である。ただし後者については，実証することがかなり難しい。

SI－058の炭化種実のありかたは，前項でも言及されているように，容器に入れられて竪穴上部に存在したものが落下して燃焼したこと，あるいは祭祀に伴い廃材上に置かれ，燃焼したことなどが考えられる。そのあり方が仮に前者の場合，すなわち本来は祭祀的でない通常の保管状態を反映するものであったとしても、稲荷塚遺跡周辺における古代農民の食生活がイネにアワなどの雑穀を混ぜたものであったかどうかは断定しがたい。籾殻が付かない段階での混在であればその可能性があるといえるが，両方とも穎の状態であったからである。稲荷塚遺跡出土炭化種実の性格を理解するためには，食用・祭祀用の双方のあり方を含めて，今後の類例の増加に期待したい。

注

1　大谷弘幸　2002　「炭化種子から見た農耕生産物の推定」『研究紀要』23　（財）千葉県文化財センター

## 第５表　縄文・弥生・古墳時代竪穴住居跡観察表

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-005 | 第32図 | 15 | 縄文 前 | 隅丸長方 | 3.7×3.0×0.4 | N-16-W | 6.09 | 緩 | P1=53 | 炉/中央S/楕円 | － | 23K-32 | 単独 | 黒浜式,諸磯B式 | 床面はソフトローム層中に構築され踏み固められた痕跡はない |
| SI-007 | 第32図 | 15 | 縄文 前 | 隅丸方 | 3.3×3.2×0.2 | N-31-W | 8.15 | 緩 | － | － | － | 22K-38 | 単独 | 諸磯B式 | 床面はソフトローム層中に構築,炉跡・ピットともに未検出 |
| SI-025 | 第32図 | 15 | 縄文 前 | 隅丸長方 | 4.0×3.5×0.3 | N-58-E | 12.44 | 緩 | P1=56,P2=16 P3=27 | 炉2/S,SE/楕円 | － | 22K-09 | 単独 | 諸磯B式,黒浜式 | 床面はソフトローム層下部に構築され明瞭 |
| SI-028 | 第32図 | 16 | 縄文 前 | 不整 | 3.6×3.0×0.3 | N-25-E | 6.37 | 緩 | P1=31,P2=7 P3=12,P4=12 | 炉/SE/楕円 | － | 23K-22 | 単独 | 黒浜式 | 床面はソフトローム層中に構築 |
| SI-029 | 第58図 | 21 | 古墳 後 | 方 | 6.0×6.0×0.5 | N-8-W | 33.11 | 直 | P1=74,P2=60 P3=68,P4=85 | カマド/N/円 | 楕円/カマド右脇 120×100×55 | 23J-85 | 単独 | 杯3,小 鉢1,甕3,羽 口1,椀形鍛冶滓1 | 壁溝貯蔵穴部分で途切れる,出入口ピット,柱抜き取り穴あり,貯蔵穴周辺出土遺物多 |
| SI-032 | 第57図 | 19 | 弥生 末～古墳初頭 | 隅丸方 | 3.2×3.1×0.1 | N-78-E | 8.41 | 緩 | P1=31,P2=34 P3=16 | 炉/E/楕円 | － | 23J-11 | 単独 | 石製臼玉1 | 床面に硬化面はなく炉の焼土もわずかにみられるのみ,出土遺物は極めて少ない |
| SI-044 | 第60図 | 21 | 古墳 後 | 方 | 5.0×5.1×0.5 | N-19-W | 23.66 | 直 | P1=71,P2=75 P3=58,P4=49 | カマド/N/－ | － | 25L-18 | SD-011 | 蓋1,杯1,穂摘具1,砥石1 | 壁溝全周,出入口ピット,カマド火床部深く掘り込まれている |
| SI-051 | 第60図 | 21 | 古墳 後 | 方 | 3.4×3.3×0.5 | N-44-W | 10.18 | 直 | － | カマド/NW/－ | － | 26K-71 | SI-050 | 杯1 | 壁溝全周,出入口ピット,カマド火床部は被熱の痕跡はあまりない |
| SI-066 | 第61図 | 22 | 古墳 後 | 方 | 4.7×4.5×0.5 | N-30- W | 19.07 | 直 | P1=68,P2=38 P3=49,P4=34 | カマド/NW/楕円 | － | 25K-53 | SD-014 | 破片数点,支脚1 | 壁溝全周,出入口ピット,カマド煙道部は住居の壁を掘り込まず袖を壁に貼り付け垂直である |
| SI-079 | 第62図 | 22 | 古墳 後 | 方 | 3.3×3.5×0.6 | N-27-E | － | 直 | － | － | － | 25K-16 | SI-078 | 杯1,甑1,鉄鏃1,砥石1 | 遺存状態不良,検出された部分の床面は多少の凹凸がみられる |
| SI-083 | 第62図 | 22 | 古墳 後 | 隅丸方 | 3.8×3.3×0.4 | N-22-E | 8.83 | 緩 | － | カマド/NE/－ | － | 25K-06 | 単独 | 杯1,甕1,刀子1 | カマド煙道部のみ遺存,火床部ほとんど被熱の痕跡なし,床面の凹凸顕著,炭化種子（スモモ）出土 |
| SI-084 | 第63図 | 23 | 古墳 後 | 長方 | 4.4×4.8×0.3 | N-55-E | 12.92 | 緩 | P1=16,P3=20 P4=32 | － | － | 25J-84 | 単独 | 杯2,小型壺1,甕1,小型甕1,穂摘具1,砥石1 | ソフトローム中に構築され床面は軟質 |
| SI-115 | 第64図 | 23 | 古墳 後 | 長方 | 5.7×4.8×0.4 | N-11-W | 24.79 | 急直 | － | カマド/N/楕円 | － | 25I-01 | SK-175 SK-235 SK-236 | 杯1,杯6,甕4,小 型 甕1,甑1,小 型 台 付 椀1,支脚1 | 出土遺物のほとんどがカマド周辺に集中,甕10の中に椀7が入れ子状態で出土,カマド煙道は壁外に構築され緩やかに立ち上がる,支脚は左袖にもたれかかる状態で出土 |
| SI-116 | 第66図 | 23 | 古墳 後 | 方 | 2.9×3.4×0.5 | N-14-W | 8.80 | 直 | － | カマド/N/－ | － | 25H-81 | 単独 | 杯1,杯2,鉢1,甕3,甑1,手捏3,鉄製品1,支脚1 | 壁溝部分周,カマド両袖脇遺物集中（左袖脇甕2・支脚1,右袖脇杯2・鉢1・甑1）,カマド煙道部は壁外に構築され急に立ち上がる |
| SI-122 | 第57図 | 19 | 弥生 後～弥生 末 | 楕円 | 4.3×3.6×0.3 | N-94-W | 10.78 | 緩 | － | 炉/中央/不整 | － | 25H-53 | FP-001 | 杯1,甕1 | 床面中央の炉を中心に硬化面,炉の焼土はやや厚めに残る,同時期の遺物は皆無で実測遺物は流れ込み |
| SI-227 | 第67図 | 24 | 古墳 後 | 方 | 4.6×4.6×0.5 | N-27-W | 18.62 | 直急 | P1=52,P2=76 P3=58,P4=64 P5=40 | カマド/N/－ | － | 25L-13 | SD-031 | 小型甕1,甕1 | 東側台地南端に立地,壁溝は全周し広く深い,床面は平らで主柱穴はいずれも深くしっかりしている,北東コーナー部分に焼土集中 |
| SI-242 | 第67図 | 86 | 古墳 後 | 方 | 3.1×3.1×0.3 | N-26-W | (8.40) | 急 | － | カマド/N/－ | － | 25K-62 | 単独 | 平瓶1,軽石1 | 遺跡中央部やや東側に立地,壁溝部分周,出入口ピット,カマド周辺から出入口ピットにかけ床硬化面 |

## 第６表　古墳時代遺構出土土器計測表

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大径[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-029 | 1 | 土師 | 杯 | 35 | 14.0 | － | 4.0 | － | 橙褐色/橙褐色 | スコリア | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 丸底,底内ヘラ痕あり,内外面部分的に煤付着［カマド右脇］ |
| SI-029 | 2 | 土師 | 杯 | 45 | 14.4 | － | (4.1) | － | 黒褐色/黒褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ヘラナデ,ナデ | 底部大部分欠損丸底気味,内外面部分的に煤付着顕著［カマド右脇］ |
| SI-029 | 3 | 土師 | 杯 | 60 | (14.0) | 5.6 | 6.9 | － | 橙褐色/橙褐色 | スコリア | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラナデ | 底内剥離顕著,外面口縁下煤付着［下層］ |
| SI-029 | 4 | 土師 | 小鉢 | 15 | (10.0) | (8.4) | (2.9) | － | 褐色/黒褐色 | 長石,雲母 | ミガキ,ナデ/ヘラナデ,ナデ | 底部欠損,受口口縁,外面二次焼成を受け煤付着顕著［中層］ |
| SI-029 | 5 | 土師 | 甕 | 90 | 16.2 | 6.4 | 17.4 | 胴部(16.6) | 褐色/橙褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内面下半部剥離顕著,外面二か所に黒斑付着［カマド右脇］ |
| SI-029 | 6a | 土師 | 甕 | 30 | (16.6) | － | (17.0) | 胴部(18.8) | 暗赤褐色/暗赤褐色 | 長石,砂粒 | ヘラナデ/ヘラケズリ,ヘラナデ | 6bと同一個体,器面荒れている［カマド右脇,内］ |
| SI-029 | 6b | 土師 | 甕 | 5 | － | (9.0) | (2.6) | － | 暗赤褐色/暗赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/ヘラケズリ,ヘラナデ | 6aと同一個体,器面荒れている［カマド右脇］ |
| SI-029 | 7 | 土師 | 甕 | 80 | 16.6 | 8.4 | 27.0 | 胴部(22.3) | 暗赤褐色/暗赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/ヘラケズリ,ナデ | 二次被熱により内外面部分的に煤付着［カマド右脇,内］ |
| SI-044 | 1 | 須恵 | 蓋 | 99 | 15.8 | － | 4.1 | － | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | ほぼ完形,外面自然釉付着,東海産[床面] |
| SI-044 | 2 | 土師 | 杯 | 25 | (12.6) | － | (3.7) | － | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部欠損,内外面ともに磨滅顕著［中・下層］ |
| SI-051 | 1 | 土師 | 杯 | 70 | 12.0 | － | 4.0 | － | 橙褐色/橙褐色 | スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ミガキ | 内外面黒色処理,底部丸底［中層］ |
| SI-079 | 1 | 土師 | 杯 | 100 | 11.6 | － | 3.6 | － | 褐色/褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ミガキ,ヘラケズリ | 底部丸底,内外面ともに二次被熱により煤付着［床面］ |
| SI-079 | 2 | 土師 | 甑 | 10 | － | 11.0 | (4.5) | － | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英 | ミガキ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ,ミガキ | 底部片［下層］ |
| SI-083 | 1 | 土師 | 杯 | 30 | (12.8) | － | 4.0 | － | 黄褐色/黄褐色 | 雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ | 底部丸底,外面・破断面ともに劣化顕著［中層］ |
| SI-083 | 2 | 土師 | 甕 | 破片 | － | － | － | － | 橙褐色/黄褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,外面黒斑あり［中層］ |
| SI-084 | 1 | 土師 | 杯 | 60 | 12.0 | － | 4.3 | － | 黄褐色/黄褐色 | スコリア,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ,ヘラナデ | 底部丸底,底外黒斑あり,内外面及び破断面ともにやや劣化［中層］ |
| SI-084 | 2 | 土師 | 杯 | 95 | 13.0 | － | 4.4 | － | 黒褐色/黒褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ,ミガキ | 底部丸底,外面黒斑あり,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着　［下層］ |
| SI-084 | 3 | 土師 | 甕 | 90 | 22.4 | 8.6 | 34.7 | 胴部28.8 | 橙褐色/橙褐色 | 砂粒,石英,長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 内面胴部から底部にかけて広範囲に薄く剥離,底外周辺に黒斑あり［中層］ |
| SI-084 | 4 | 土師 | 小型壺 | 20 | 11.4 | － | (7.1) | － | 橙褐色/橙褐色 | 石英,長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | ひさご型,口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着・部分的に赤く変色［中層］ |
| SI-084 | 5 | 土師 | 小型甕 | 10 | － | － | － | － | 灰褐色/赤褐色 | 長石,雲母,砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ヘラケズリ、ナデ | 小型,口縁部片,内外面二次被熱によりやや厚く煤付着［中層］ |
| SI-115 | 1 | 須恵 | 杯 | 5 | (18.3) | － | (6.0) | － | 灰褐色/灰褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,東海産［中層］ |
| SI-115 | 2 | 土師 | 杯 | 100 | 12.2 | － | 4.4 | 13.0 | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | ヘラミガキ,ナデ/ヘラミガキ,ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底,底外黒斑・線刻あり『＋』,外面剥落顕著　［カマド右袖脇］ |
| SI-115 | 3 | 土師 | 杯 | 95 | 13.0 | － | 5.1 | － | 黒色/褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ヘラミガキ,ナデ/ヘラミガキ,ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底,内面黒色処理,外面煤付着顕著［カマド右袖脇］ |
| SI-115 | 4 | 土師 | 杯 | 55 | (14.0) | － | 4.9 | － | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底,器形の歪み激しい,内外面及び破断面の磨耗顕著,底内煤付着顕著,外面黒斑あり　［カマド左袖脇］ |
| SI-115 | 5 | 土師 | 杯 | 45 | (13.4) | － | 4.5 | － | 黒色/褐色 | 長石,スコリア | ヘラミガキ,ナデ/ヘラミガキ,ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底,内面黒色処理・磨耗顕著,外面黒斑あり　［一括］ |
| SI-115 | 6 | 土師 | 杯 | 30 | (13.6) | － | 3.9 | － | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底,内外面ともに磨耗・煤付着顕著　［中層］ |
| SI-115 | 7 | 土師 | 杯 | 95 | 17.2 | 3.6 | 7.4 | － | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底気味,内外面ともに黒斑あり,器面やや荒れている　［カマド右袖脇］ |
| SI-115 | 8 | 土師 | 手捏 | 10 | － | (7.0) | (3.4) | － | 灰褐色/橙褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ヘラナデ,ナデ | 底外木葉痕あり,内外面ともに二次被熱により煤付着　［一括］ |
| SI-115 | 9 | 土師 | 甕 | 80 | (20.2) | 7.0 | 27.6 | － | 黒褐色/赤褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 使用頻度が高く内外面ともに二次被熱により器面の剥離・煤付着が激しく全体に赤く変色している［カマド左袖脇］ |
| SI-115 | 10 | 土師 | 甕 | 45 | (18.0) | (6.8) | 28.5 | － | 黒褐色/赤褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 使用頻度が高く内外面ともに二次被熱により器面の剥離・煤付着顕著,内外面の胴上半部が口縁部にかけて煤が満遍なく付着［カマド右袖脇］ |
| SI-115 | 11 | 土師 | 甕 | 40 | 16.8 | － | (14.0) | － | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部完存,外面二次被熱により部分的に剥離・煤付着　［下層,カマド右袖脇］ |
| SI-115 | 12 | 土師 | 甕 | 15 | － | 6.2 | (8.9) | － | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,スコリア,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ミガキ,ナデ | 底部完存,底外木葉痕あり,内外面ともに二次被熱により剥離顕著,常総甕　［下層］ |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大径[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-115 | 13 | 土師 | 小型甕 | 25 | − | (6.0) | (13.8) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,白色針状物質 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | SI-117と遺構間接合,内面下半部剥離顕著,外面下半部煤付着［中層］ |
| SI-115 | 14 | 土師 | 甑 | 100 | 19.6 | 6.6 | 14.8 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 外面胴部から底部にかけ黒斑あり,外面部分的に二次被熱により赤黒く変色［カマド右袖脇］ |
| SI-116 | 1 | 須恵 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 灰色/灰色 | 長石,石英 | − | 流れ込み,底部のみ,底外線刻あり『+』［一括］ |
| SI-116 | 2 | 土師 | 杯 | 95 | 13.4 | − | 4.5 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ミガキ,ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底,内外面ともに二次被熱により剥離・煤付着顕著［下層］ |
| SI-116 | 3 | 土師 | 杯 | 95 | 12.4 | − | 3.8 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ミガキ,ナデ/ミガキ,ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底,内外面ともに部分的に黒斑あり,器面やや劣化［下層］ |
| SI-116 | 4 | 土師 | 鉢 | 95 | 14.8 | 6.9 | 8.8 | − | 黒色/黒褐色 | 長石,スコリア,石英 | ミガキ,ナデ/ミガキ,ヘラケズリ,ナデ | 大型,内面黒色処理,外面二次被熱により胴部中位から口縁部にかけ厚く煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ［床直］ |
| SI-116 | 5 | 土師 | 甕 | 100 | 15.3 | 7.0 | 21.0 | 22.2 | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ミガキ,ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により部分的に剥離・煤付着,外面胴部上半部から底部にかけて赤く変色［床直］ |
| SI-116 | 6 | 土師 | 甕 | 95 | (14.8) | 7.6 | 28.3 | 23.6 | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部のみ約半分欠損,外面二次被熱により部分的に煤付着［床直］ |
| SI-116 | 7 | 土師 | 甕 | 40 | − | 8.0 | (14.6) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ヘラナデ/ミガキ | 胴部下半部から底部にかけて遺存,内面下半部剥離顕著,外面底部周辺に黒斑あり［床直］ |
| SI-116 | 8 | 土師 | 甑 | 90 | 21.8 | 9.0 | 23.0 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,小石 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ヘラナデ,ナデ | 二次被熱により内面剥離顕著,外面胴部上半部から底部にかけて直線的に黒斑あり,底部近くに［床直］ |
| SI-116 | 9 | 土師 | 手捏 | 100 | 11.4 | 7.4 | 6.1 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,砂粒,雲母 | ヘラナデ,ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ［床直］ |
| SI-116 | 10 | 土師 | 手捏 | 90 | (11.0) | 6.3 | 5.8 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外無調整［中層］ |
| SI-116 | 11 | 土師 | 手捏 | 100 | 12.0 | 7.9 | 5.4 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,砂粒,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ［床直］ |
| SI-227 | 1 | 土師 | 甕 | 60 | 17.9 | 8.6 | 22.6 | 胴部(19.5) | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,内面下半及び外面中位から下位にかけ器面の剥落顕著［床面］ |
| SI-227 | 2 | 土師 | 小型甕 | 95 | 14.0 | − | 10.3 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部丸底気味,外面黒斑あり,内面中位から底部にかけ器面の剥落顕著［床面］ |
| SI-242 | 1 | 須恵 | 平瓶 | 90 | − | 3.6 | (7.5) | 胴部(11.8) | 灰色/灰色 | スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口頸部欠損,底部丸底気味,底外回転ヘラケズリ,東海産［下層］ |

## 第7表 古墳時代遺構外出土土器計測表

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 24L-51 | 1 | 土師 | 杯 | 20 | (12.0) | − | (3.3) | − | 黒色/黒褐色 | 長石,スコリア | ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,底部丸［一括］ |

## 第８表　奈良・平安時代竪穴住居跡観察表

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-001 | 第69図 | 24 | ９Ｃ | 方 | 3.2×3.7×0.3 | N-53-E | 9.78 | 急 | － | カマド/NE/－ | 隅丸方/Sコーナー　80×78×5 | 23K-97 | SK-002 | 甕1,杯1,甕1 | 壁溝全周,出入口ピット |
| SI-002 | 第69図 | 24 | ９Ｃ後半 | 隅丸方 | 2.8×3.3×0.3 | N-73-W | 7.13 | 急 | － | カマド/NW/－ | 円/Wコーナー 65×64×35 | 23K-52 | 単独 | 甑1 | カマド遺存不良,壁溝全周,床面中央に硬化面 |
| SI-003 | 第70図 | 25 | ９Ｃ中 | 方 | 2.8×3.1×0.2 | N-44-W | 7.47 | 直 | － | カマド/NW/円 | － | 23K-85 | 単独 | 杯2,甕3,杯2,甕1 | 床面部分的に硬化面,カマド手前に白色粘土の高まりあり |
| SI-004 | 第71図 第72図 | 25 | ８Ｃ④ | 隅丸方 | 2.7×2.8×0.3 | N-62-W | 5.41 | 緩 | P1=12,P2=17 P3=18,P4=20 | カマド/W/－ | － | 23K-68 | 単独 | 杯2,甕2,小型甕1,杯2,甕4 | 出入口ピット,カマド内よりほぼ完形の杯・甕出土 |
| SI-006 | 第72図 | 25 | ９Ｃ後半 | 方 | 2.9×3.2×0.2 | N-44-E | 8.05 | 緩 | － | カマド/NE/－ | － | 23K-98 | 単独 | 甕1,杯2,鉄鏃1 | カマド遺存不良 |
| SI-008 | 第73図 | 26 | ９Ｃ後 | 隅丸方 | 2.5×2.6×0.5 | N-32-E | 4.40 | 直 | － | カマド/NE/円 | 隅丸長方/SW 76×45×28 | 22M-01 | 単独 | 甕1,杯2,高台付皿1,甕1,鉄鏃1 | 西側台地最西端緩斜面に立地,カマド内出土遺物多 |
| SI-009 | 第74図 | 26 | ９Ｃ後半 | 隅丸方 | 2.5×2.9×0.3 | N-110-E | 5.52 | 緩 | － | カマド/SE/－ | － | 22L-71 | 単独 | 甕2,小型甕1,鉄鏃2,砥石1 | 西側台地最西端緩斜面に立地,カマド内出土遺物多 |
| SI-010 | 第75図 | 26 | １０Ｃ | － | －×3.4×0.4 | N-94-E | － | 急 | － | カマド/E/円 | － | 21L-67 | 単独 | 杯3,高台付杯1,甕1,甑3,鉄斧1,砥石1 | 西側台地最西端緩斜面に立地,約1/2遺存,カマド内出土遺物多,カマド本体は住居壁外に構築,カマド周辺部に硬化面 |
| SI-011 | 第76図 | 27 | ９Ｃ中 | (方) | 3.6×－×0.5 | N-15-W | － | 急 | － | カマド/NEコーナー/－ | － | 21L-24 | 単独 | 杯5,甕1,杯1,小型甕1,鉄製品（刀子1,鎌1,穂摘具1),石製品(紡錘車1,砥石1) | 西側台地最西端緩斜面に立地,約1/2遺存,隅カマド周辺部に硬化面 |
| SI-012 | 第77図 | 27 | ８Ｃ中 | 方 | 5.0×4.8×0.4 | N | (21.10) | 急 | P1=53,P2=35 P3=48,P4=31 | カマド/N/－ | － | 21L-36 | 単独 | 甕1,甑1 | 西側台地最西端緩斜面に立地,約4/5遺存,柱穴P2・P4抜き取り穴 |
| SI-013 | 第78図 | 27 | ８Ｃ③ | 隅丸方 | 3.5×3.6×0.6 | N-64-W | 9.22 | 急緩 | － | カマド/NW/－ | － | 22K-60 | 単独 | 杯4,鉢1 | 西側台地最西端緩斜面に立地,北コーナーから北西壁中央にカマド移築 |
| SI-015 | 第79図 | 28 | 不明 | (方) | 2.3×2.2×0.2 | N-98-E | 4.08 | 緩 | － | カマド/E/－ | － | 21L-07 | 単独 | 破片数点 | 西側台地最西端緩斜面に立地,遺存状態不良 |
| SI-017 | 第79図 | 28 | ９Ｃ後 | 不整 | 2.4×2.7×0.4 | N-34-E | 5.22 | 緩 | － | カマド/NE/－ | － | 21K-78 | 単独 | 高台付椀(灰釉陶器)1,杯3 | 西側台地最西端緩斜面に立地,カマド遺存不良 |
| SI-018 | 第80図 | 28 | ９Ｃ後 | 隅丸方 | 3.1×3.4×0.3 | N-43-E | 8.22 | 急 | － | カマド/NE/楕円 | － | 22K-42 | 単独 | 甕1,杯5,高台付皿2,鉢1,甕2,小型甕1 | 西側台地最西端緩斜面に立地,カマド遺存不良 |
| SI-019 | 第80図 | 29 | ９Ｃ中 | 方 | 2.6×2.4×0.3 | N-1-W | 4.67 | 緩 | － | カマド/N/－ | － | 21K-58 | 単独 | 甑1,高台付杯1,高台付皿1 | 西側台地最西端緩斜面に立地,カマド煙道部は大きく壁外に張り出し緩やかに立ち上がる |
| SI-020 | 第81図 | 29 | ９Ｃ中 | 隅丸方 | 2.3×2.3×0.4 | N-41-E | 4.87 | 急緩 | － | カマド/NE/－ | － | 22K-53 | 単独 | 杯2,甕2,杯3,高台付皿3,鉄鏃1,支脚1 | 西側台地最西端緩斜面に立地,カマド移築,カマド内出土遺物多 |
| SI-021 | 第82図 | 29 | ８Ｃ④ | 隅丸方 | 2.8×2.7×0.4 | N-64-E | 5.64 | 急 | － | カマド/NW/円 | － | 23K-58 | SD-001 | 大型甕1,甕1,杯1,小型甕1 | 壁溝全周,床面中央に押し潰された状態で須恵器の大型甕出土 |
| SI-023 | 第83図 | 30 | ９Ｃ中 | 方 | 3.3×3.1×0.3 | N-51-E | 8.27 | 急 | － | カマド/NW/－ | － | 23K-24 | 単独 | 杯3,甕2,壺(灰釉陶器)1,杯2,小型甕2 | 壁溝全周,カマド前から床面中央にかけ硬化面,カマド右袖周辺に遺物集中 |
| SI-024 | 第84図 | 30 | ８Ｃ③ | 隅丸方 | 4.2×3.9×0.4 | N-8-W | 13.45 | 直 | － | カマド/N/－ | － | 23K-11 | 単独 | 甕1,高台付盤1 | 壁溝カマド両袖付近で途切れる |
| SI-026 | 第84図 | 30 | 不明 | 方 | 3.0×3.0×0.5 | N-98-W | 11.62 | 直 | － | カマド/E/－ | － | 23J-30 | 単独 | 破片数点,実測遺物なし | 北西端緩斜面に立地,カマド焚き口部付近にロームを土手状に巡らしている |
| SI-030 | 第85図 | 31 | ９Ｃ | 長方 | 2.7×2.3×0.1 | N-2-E | 5.19 | 緩 | － | カマド/N/－ | － | 22K-57 | 単独 | 高台付皿1 | 遺存状態不良,出土遺物少 |
| SI-031 | 第85図 | 31 | ９Ｃ中 | 方 | 2.8×2.5×0.4 | N-18-W | 5.40 | 急 | － | カマド/N/－ | － | 22J-38 | 単独 | 甕1,杯1 | 西側台地北西端緩斜面に立地,カマド煙道部のみよく焼けている |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-033 | 第86図 | 31 | 9C後 | 隅丸方 | 3.0×2.9×0.4 | N-6-W | 7.02 | 急 | － | カマド/N/楕円 | － | 23J-22 | 単独 | 杯1,甕1,杯4,甕2 | 西側台地北端緩斜面に立地,カマド内出土遺物片とカマド外出土遺物片との接合が多い |
| SI-034 | 第87図 | 32 | 不明 | 方？ | －×－×0.1 | N-30-W | － | 急 | － | カマド/NW/－ | － | 22K-64 | SD-003 | 破片数点 | 約1/2遺存,遺存状態不良,実測遺物なし |
| SI-035 | 第87図 | - | 9C中 | 隅丸方？ | 3.2×－×0.5 | N-25-W | － | 緩急 | － | カマド/NW/－ | － | 22J-25 | 単独 | 杯1,甑1,杯2,甕2 | 約1/2遺存,カマド遺存不良だがカマド内出土遺物多 |
| SI-040 | 第88図 | 32 | 9C後 | 隅丸方 | 2.8×3.1×0.2 | N | 7.10 | 緩 | － | カマド/N/－ | 円/SWコーナー 65×63×53 | 26L-30 | 単独 | 甕3,甑1,杯7,甕3,鉄 鎌1,刀子1 | 遺存状態不良だが出土遺物多,床面中央から東側に硬化面 |
| SI-041 | 第89図 | 32 | 8C④ | 隅丸方 | 3.1×3.2×0.5 | N-23-W | 8.74 | 直 | － | カマド/N/楕円 | － | 26L-22 | SI-042 SD-011 | 杯1,蓋1,甕1,甕1,銅 皿1 | 堆積土は埋め戻しの可能性あり,壁溝全周,出入口ピット,カマドからカマド対壁にかけての床面中央に硬化面 |
| SI-042 | 第90図 | 33 | 8C② | 方 | 4.0×3.8×0.4 | N-24-W | (14.48) | 急 | P1=52,P2=30 P3=42,P4=34 | カマド/NW/－ | － | 26L-21 | SI-041 SD-011 | 杯1,高台付杯1,甕1 | 壁溝全周,出入口ピット,東壁下を除く床面全域硬化面 |
| SI-043 | 第91図 | 33 | 8C④ | 方 | 3.1×3.5×0.3 | N-24-W | 9.02 | 急 | － | カマド/NW/－ | － | 25L-19 | 単独 | 杯2,高台付盤1,甕2,甑1,杯2,甕2,支脚1 | 出入口ピット,東西壁下を除く床面全域硬化面 |
| SI-045 | 第92図 | 33 | 8C② | 隅丸長方 | 3.9×3.1×0.5 | N-49-W | 10.39 | 直 | P1=34,P2=38 P3=32,P4=30 | カマド/NW/－ | － | 25L-06 | 単独 | 杯2,杯1,甕1 | 壁溝全周,間仕切溝,出入口ピット,P2･P3抜き取り穴 |
| SI-046 | 第93図 | 34 | 9C前 | 方 | 2.6×2.6×0.4 | N-18-W | 6.15 | 直 | － | カマド/NW/－ | － | 25K-99 | 単独 | 杯3,甕1,杯1,穂 摘 具1,軽石2 | 出入口ピット,カマドからカマド対壁の床面中央硬化面,カマド内から破断した甕出土 |
| SI-047 | 第94図 | 34 | 8C④ | 隅丸方 | 3.8×3.6×0.2 | N-13-W | 11.59 | 急 | － | カマド/NW/円 | － | 26K-92 | 単独 | 杯1,杯1,甕2,刀子1 | カマド袖は地山掘り残しで構築,カマドから床面中央広範囲に硬化面 |
| SI-048 | 第95図 | 34 | 8C④ | 不整 | 3.5×3.2×0.3 | N-33-E | 8.86 | 急 | P3=18 | カマド/NW/－ | 楕円/Eコーナー 38×34×18 | 26L-04 | 単独 | 杯1,甑1 | 壁溝全周,出入り口ピット,四隅を除く床面西側広範囲に硬化面 |
| SI-049 | 第96図 | 35 | 8C③ | 隅丸長方 | 4.1×3.7×0.4 | N-61-E | 12.49 | 急 | P1=41,P2=44 P3=56,P4=47 | カマド/NE/－ 旧カマド/NW/－ | － | 26K-93 | 単独 | 杯1,甕1,甕3,鉄 鏃1,刀子1,軽石2 | 壁溝全周,カマド移築,P1抜き取り穴,北西壁下と東コーナーを除く床面全域硬化面 |
| SI-050 | 第97図 | 35 | 9C前 | 長方 | 3.2×2.7×0.3 | N-32-W | 7.32 | 急 | － | カマド/NW/円 | － | 26K-60 | SI-051 | 杯5,甕2 | 出入口ピット,カマド煙道発達,壁溝Sコーナーで途切れる,カマドからカマド対壁の床面中央に硬化面 |
| SI-052 | 第98図 | 35 | 8C② | 長方 | 3.3×2.8×0.4 | N-54-W | 8.20 | 直急 | P1=19,P2=18 P4=21 | カマド/NW/－ | － | 25K-78 | SD-012 | 杯1,石製紡錘車1 | 壁溝全周,出入口ピット,遺物は少なく小片 |
| SI-053 | 第98図 | 36 | 不明 | 不整 | 3.5×3.7×0.3 | N-95-E | (10.95) | 直 | P1=35,P2=26 P3=31,P4=29 | カマド/E/－ | － | 25K-87 | SI-054 SD-012 | 甕1,砥石1 | 堆積土は埋め戻しの可能性あり,壁溝全周,出入口ピット,床面全体貼床で中央やや凹む |
| SI-054 | 第99図 | 36 | 不明 | 長方 | 4.0×4.7×0.6 | N-47-W | (15.15) | 急直 | P1=28,P2=55 P3=22,P4=33 | カマド/NW/－ | － | 25K-86 | SI-053 SD-012 | 甕1,砥石1 | カマド袖遺存なし・火床部は被熱の痕跡はあまりない |
| SI-055 | 第100図 | 36 | 9C | 長方 | 2.6×2.7×0.3 | N-15-W | 5.75 | 急 | － | カマド/NW/－ | － | 25K-67 | SI-056 | 甕2,甕1,刀子1 | 出入口ピット,床面中央に硬化面 |
| SI-056 | 第100図 | 36 | 9C中 | 長方 | 3.1×3.5×0.5 | N-5-E | (9.65) | 直 | － | カマド/N/－ | － | 25K-77 | SI-055 | 杯1,砥石1 | 壁溝全周,床面中央に硬化面,カマド左袖破壊 |
| SI-057 | 第101図 | 37 | 8C③ | 方 | 3.0×3.0×0.5 | N-11-E | 7.58 | 急 | － | カマド/N/－ | － | 25K-95 | 単独 | 杯1,甕1,鉄鎌1 | 壁溝全周,出入口ピット,カマド煙道は急傾斜,床面中央広範囲に硬化面 |
| SI-058 | 第102図 | 37 | 9C中 | 隅丸方 | 2.8×2.6×0.5 | N-13-W | (6.49) | 直 | － | カマド/NW/－ | － | 26K-40 | 単独 | 杯2,甑1,杯2,甕1,台 付甕1,刀子1,鉄鏃1,石製紡錘車1 | 焼失住居,カマド遺存不良,床面中央に硬化面,炭化米等出土 |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-059 | 第103図 | 37 | 8C② | 隅丸方 | 4.1×4.1×0.4 | N-28-W | 14.93 | 急 | P1=28,P2=29<br>P3=49,P4=42 | カマド/NW/楕円 | − | 26K-42 | 単独 | 杯3,鉄鎌1,穂摘具1 | 壁溝ほぼ全周,出入口ピット,カマド壁側の基部は地山を作り出し煙道は急傾斜,床面ほぼ全域に硬化面 |
| SI-060 | 第104図 | 38 | 9C後 | 隅丸方 | 2.5×2.5×0.6 | N-8-W | 5.22 | 緩 | − | Aカマド/N/楕円<br>Bカマド/SW/− | − | 26K-46 | 単独 | 杯1,甕1,杯6 | 東側台地東端緩斜面に立地,壁溝部分周,床面西側に硬化面,カマド移築,移築前のカマド下にそれ以前の土坑あり |
| SI-061 | 第105図<br>第106図 | 38 | 9C後 | 不整 | 3.0×3.0×0.5 | N-10-W | 6.59 | 直 | − | カマド/N/− | − | 26K-21 | 単独 | 杯1,鉢1,甕3,杯9,皿1,鉄製品(刀子1,穂摘具2),支脚1 | 出入口ピット,東西壁下を除く床面全域に硬化面,カマド煙道に土器・支脚,煙道は一段のテラスをもって立ち上がる |
| SI-062 | 第107図 | 38 | 9C中 | 方 | 3.8×3.8×0.5 | N-21-W | 13.19 | 直 | P2=11,P4=46 | カマド/NW/− | − | 25K-19 | 単独 | 杯6,高台付杯1,甕2,杯4,甕1,鉄製品(刀子3,釘1) | 壁溝カマド右袖部分で途切れる,カマド煙道部は両脇に山砂が貼られ直に立ち上がる |
| SI-063 | 第108図 | 39 | 8C前 | 方 | 4.4×4.7×0.5 | N-32-W | 18.20 | 直 | P1=44,P2=21<br>P3=36,P4=46 | カマド/NW/− | − | 25K-27 | SB-007 | 杯2,鉢1,甕2,手捏1,鉄製品(刀子1,釘1),軽石1 | 壁溝部分周,出入口ピット,カマド壁から主柱穴内の床面に硬化面 |
| SI-064 | 第109図 | 39 | 8C③ | 隅丸方 | 3.9×4.0×0.4 | N-31-W | 14.45 | 直 | P1=68,P2=68<br>P3=57,P4=28 | カマド/NW/− | − | 25K-36 | 単独 | 蓋1,杯4,高台付杯1,甕1,甕1,支脚1 | 壁溝全周,出入口ピット,カマド壁から対壁床面に硬化面 |
| SI-065 | 第110図 | 39 | 9C後 | 隅丸方 | 2.6×3.1×0.2 | N | 6.65 | 緩 | − | カマド/N/− | − | 25K-45 | 単独 | 長頸壺1,甕1,甕1,支脚1 | 床面中央に硬化面,カマド焚き口部分がやや凹む |
| SI-067 | 第111図 | 40 | 8C② | 方 | 3.4×3.3×0.4 | N-38-E | 9.76 | 急 | − | カマド/NE/− | − | 25K-52 | 単独 | 蓋1,杯1,甕1,支脚1 | 壁溝全周,出入口ピットカマドから床面中央に硬化面,カマド右袖脇からほぼ完形の甕が押し潰された状態で出土 |
| SI-068 | 第112図 | 40 | 8C③ | 隅丸方 | 3.9×3.9×0.4 | N-18-W | 7.04 | 急直 | − | カマド/N/− | − | 25K-50 | 単独 | 杯1,甕1 | 床面は全体的に踏み固めが弱い,カマド右袖脇から甕が横倒しの状態で出土 |
| SI-069 | 第113図 | 40 | 9C中 | 方 | 2.7×2.5×0.4 | N-10-W | 5.89 | 直 | − | カマド/N/− | − | 25J-54 | 単独 | 杯1,甕2,杯1,小型甕2,支脚1 | 中央から南西にかけての覆土上層に焼土堆積,支脚 カマド内正位出土 |
| SI-070 | 第114図 | 41 | 8C③ | 隅丸方 | 4.6×4.9×0.5 | N-22-W | 19.27 | 急 | P1=48,P2=74<br>P3=58,P4=60 | カマド/NW/楕円 | 壁柱穴<br>P5=11,P6=20<br>P7=29,P8=22 | 25K-23 | SI-071<br>SK-046<br>SK-047<br>SD-013 | 蓋2,杯4,高台付杯2,甕1,甕2,小型甕1 | 同地点建替住居,壁溝全周,出入口ピット,壁柱穴4,カマド右袖内側にやや屈曲,カマド煙道部から甕出土 |
| SI-071 | 第115図 | 41 | 9C中 | 隅丸方 | (4.1×4.0×0.4) | N-12-E | 14.58 | 急 | P3=49,P4=45 | カマド/NW/不整 | − | 25K-33 | SI-070<br>SI-072<br>SD-013 | 杯1,甕2,甑1,杯3,甕1,刀子2 | 焼失住居,出入口ピット,床面中央に硬化面,カマド煙道部中位に焼土ﾌﾞﾛｯｸ塊あり,カマド対壁直下に主柱穴 |
| SI-072 | 第116図 | 41 | 9C前 | 隅丸方 | 3.3×3.4×0.3 | N-13-W | 9.78 | 急 | − | カマド/N/− | − | 25K-24 | SI-071<br>SD-014 | 杯2,甕1,小型甕1,甕1,支脚1,鉄鎌1 | 壁溝全周カマド煙道は一段のテラスをもって立ち上がる,北西コーナー壁際に刃部を上にして立てかけられた状態で曲刃の鎌が出土 |
| SI-073 | 第117図<br>第118図 | 42 | 9C前 | 方 | 4.1×4.2×0.5 | N-25-W | 15.57 | 直急 | P1=55,P2=48<br>P3=23,P4=26 | カマド/NW/円 | − | 25K-13 | SI-074<br>SI-075 | 蓋1,杯5,壺1,甕3,杯1,甕4,鉄製品(刀子4,鎌1) | 壁溝部分周,出入口ピット,床面中央から南東コーナーにかけて硬化面 |
| SI-074 | 第119図 | 42 | 8C③ | 隅丸 | (3.2×−×0.4) | N-17-W | − | 直 | − | カマド/NW/− | − | 25K-13 | SI-073<br>SI-075 | 杯1,高杯1,甕1,甕2, | 床面中央に硬化面,カマド内左袖脇から須恵器杯の打ち欠き土器出土 |
| SI-075 | 第120図 | 42 | 8C④ | 隅丸方 | 2.9×3.1×0.5 | N | 7.30 | 直 | − | カマド/N/円 | − | 25K-14 | SI-073<br>SI-074 | 蓋2,杯3,高台付杯1,甕1,蓋1,甕2,支脚1 | 床面中央に硬化面,床面中央やや高く東西壁側に緩やかに傾斜する,出土遺物はカマド周辺に集中する |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-076 | 第121図 | 42 | 8C③ | 方 | 3.5×3.6×0.4 | N-72-W | 11.04 | 急 | − | カマド/W/− | − | 25K-15 | SD-014 | 杯1 | 壁溝全周,出入口ピット,北壁下を除く床面全域に硬化面,出土遺物極少,カマド火床部は平坦でほとんど火を受けた様子はない |
| SI-077 | 第122図 | 43 | 8C④ | 隅丸方 | 4.2×4.1×0.6 | N-5-W | 13.93 | 直 | P1=53,P2=47 P3=63,P4=36 | カマド/N/円 | − | 25K-26 | 単独 | 杯6,蓋2,高台付杯1,杯1,甕1,小型甕1,鉄製品(刀子2,鏃2,穂摘具1),支脚1 | 壁溝はカマド右袖部分で途切れる,出入口ピット,東西壁下を除く床面全域に硬化面,カマド焚き口部前に支脚出土 |
| SI-078 | 第123図 | 43 | 9C前 | 隅丸方 | 3.7×3.4×0.4 | N-69-E | 10.51 | 直 | − | カマド/E/− | − | 25K-06 | SI-079 | 杯3,長頸瓶1,甕1,甕2,小型甕1,支脚1 | 壁溝全周,出入口ピット,カマド内出土遺物多,カマド左袖脇に支脚出土 |
| SI-080 | 第124図 | 43 | 8C④ | 方 | 4.0×3.8×0.5 | N-19-W | 13.32 | 急直 | P1=30,P2=29 P3=70,P4=45 | カマド/N/楕円 | − | 26K-33 | 単独 | 杯5,甕3 | 壁溝全周,出入口ピット,四隅を除く床面全域に硬化面,カマド火床部平坦 |
| SI-081 | 第125図 | 44 | 9C前 | 方 | 2.9×3.1×0.6 | N-28W | 7.79 | 直 | P1=10,P2=23 P3=18,P4=40 | カマド/N/− | − | 26K-02 | 単独 | 杯1,小型甕1 | 壁溝全周,出入口ピット,カマド破壊 |
| SI-082 | 第126図 | 44 | 8C③ | 方 | 4.6×4.8×0.4 | N-8W | 20.43 | 直 | P1=32,P2=46 P3=54,P4=31 | カマド/N/楕円 | − | 25J-89 | 単独 | 杯2,甕1 | 壁溝全周,出入口ピット,出土遺物は少ない,カマド袖は遺存良で内壁の被熱は激しい |
| SI-085 | 第127図 | 44 | 9C後 | 方 | 3.4×3.4×0.3 | N-21-W | 9.58 | 緩 | − | カマド/NW/− | 円/NEコーナー 37×35×13 | 25J-92 | SB-005 SB-006 SK-050 | 壺1,甕1,杯6,高台付皿1,甕3,小型甕1,鉄鏃1 | 壁溝部分周,出入口ピット,カマド内出土遺物多,両袖内側は激しく被熱し厚く赤化,火床部やや深め |
| SI-086 | 第128図 | 45 | 8C② | 方 | 3.1×3.2×0.3 | N-22-W | 8.45 | 緩 | − | カマド/NW/− | − | 25J-81 | 単独 | 杯1,杯1,小型甕1 | 遺存やや不良,出土遺物少 |
| SI-087 | 第128図 | 45 | 8C③ | 隅丸方 | 2.2×2.1×0.8 | N-24-E | 3.3 | 直 | − | カマド/NE/− | − | 24J-89 | 単独 | 杯7,甕2 | 平面プランの割に床面まで堀方は深い,西側壁に張り出しあり,隅カマド,明確な煙道部はみられない,壁溝全周,竈屋として使用か |
| SI-088 | 第129図 | 45 | 8C④ | 隅丸方 | 3.4×3.0×0.4 | N-17-W | 8.27 | 急直 | − | カマド/N/− | − | 25J-61 | 単独 | 杯3,高台付杯2,甕2,杯1,甕1 | 壁溝部分周,床面は平坦で比較的しまりはよい,南西コーナーの床面に焼土検出,カマド燃焼部上位から須恵器の高台付杯が伏せた状態で出土 |
| SI-089 | 第130図 | 46 | 8C② | 方 | 4.5×4.5×0.6 | N-8-W | 17.98 | 直 | P1=34,P2=47 P3=56,P4=51 | カマド/N/不整 | − | 25J-58 | 単独 | 杯4,甕1,杯3,甕2,鉄鏃1,軽石1 | 同地点建替住居,壁溝全周,出入口ピット,床面の四隅はやや軟質,壁溝は幅広で凹凸がある,上層から比較的大きな破片が出土しており住居廃棄後の凹みに投棄されたものと思われる,カマドの使用頻度は高く火床部はボロボロである |
| SI-090 | 第131図 | 46 | 9C後 | 隅丸方 | 2.7×2.6×0.3 | N-84-W | 5.64 | 急 | P3=47,P4=36 | カマド/W/楕円 | − | 25J-59 | 単独 | 杯1,甕1 | 北東側緩斜面に立地,壁溝部分周,出入口ピット,床面は全体に良く踏み固められている,カマド本体は壁外に構築され火床部の赤化は激しい,カマド左袖周辺に張り出し部あり |
| SI-091 | 第131図 | 46 | 9C前 | 隅丸方 | 3.2×3.6×0.4 | N-83-E | 9.05 | 急 | P=24 | カマド/E/− | − | 26J-40 | 単独 | 甑1,甕2 | 北東側緩斜面に立地,壁溝変則的に巡る,床面中央にピット,カマド火床部は平坦,煙道部は掘り込まず壁に両袖を貼り付けただけの構築 |
| SI-092 | 第132図 第133図 | 47 | 9C前 | 方 | 4.2×4.0×0.5 | N-42-W | 13.48 | 急直 | P1=39,P2=21 P3=53,P4=39 | カマド/N/楕円 旧カマド/W/− | − | 25J-37 | 単独 | 蓋2,杯8,高台付皿1,甕1,甑1,杯2,高台付皿1,甕2,鉄製品(刀子3,鏃4),砥石2,軽石1 | 壁溝全周,出入口ピット,カマド移築,床面は全体にしまりは良く平ら,出土遺物は多く鉄製品の比率が高い |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-093 | 第134図<br>第135図 | 47 | 8C③ | 隅丸方 | (4.1×－×0.8) | N-2-W | － | 急 | P1=78,P4=53 | カマド/N/不整 | 楕円/NEコーナー<br>110×70×36 | 26J-41 | 単独 | 蓋1,杯7,盤1,甕1,甕2,鉄鏃1,砥石1 | 北東側緩斜面に立地,出入口ピット,西壁中央部に階段状のテラスあり,カマド燃焼部中位から甕が横倒しの状態で出土,カマド袖内側は激しく赤化 |
| SI-094 | 第136図 | 47 | 9C後 | 隅丸方 | 3.2×3.3×0.2 | N-8-W | 8.38 | 緩 | － | カマド/N/－ | － | 25J-24 | 単独 | 鉢1,杯3,高台付皿1,甕4,鉄鏃1,鉄鎌1,軽石1 | 出入口ピット,床面中央に硬化面,床面中央やや東寄りから杯が伏せた状態で出土 |
| SI-095 | 第137図<br>第138図 | 48 | 8C④ | 方 | 4.1×4.4×0.8 | N-7-E | 14.35 | 急直 | P1=59,P2=71<br>P3=52,P4=63 | カマド/N/楕円<br>旧カマド/W/－ | － | 26J-21 | SI-096 | 杯11,高台付杯1,甕4,甑1,杯3,高杯1,甕2,鉄製品(刀子5,鏃1) | 北東側緩斜面に立地,壁溝全周,建替住居,カマド移築,新カマド周辺には構築材が散乱し住居廃棄前にすでに破壊された状態 |
| SI-096 | 第139図 | 48 | 8C④ | 方 | 2.9×3.4×0.8 | N | 8.39 | 直急 | － | カマド/N/楕円 | － | 26J-31 | SI-095 | 蓋3,杯3,甕2,杯2,甕1 | 北東側緩斜面に立地,壁溝は出入り口ピット部分で一旦途切れる,カマド両袖内側赤変 |
| SI-097 | 第140図 | 48 | 8C② | 不整 | (3.8×－×0.6) | N-1-W | － | 急 | P1=33,P2=26<br>P3=42,P4=29 | カマド/N/－ | － | 26J-04 | SK-054 | 杯3,甕1,杯1,甕3,小型甕1,砥石1,軽石1 | 北東端緩斜面に立地,東壁未検出,床面中央に硬化面,壁溝はコーナー部分で浅い,カマド火床部から須恵器の杯(打ち欠き・線刻土器)が正位で出土 |
| SI-098 | 第141図 | 49 | 9C中～後 | 隅丸方 | 3.1×3.4×0.2 | N-98-W | 8.79 | 緩 | － | － | － | 26J-00 | 単独 | 甕1,杯2,鉄鏃1 | 北東側緩斜面に立地,東壁未検出,床面は若干のすり鉢状を呈し中央に硬化面 |
| SI-099 | 第141図 | 49 | 不明 | 隅丸方 | (3.3×－×0.1) | N-3-E | － | － | － | カマド/N/不整 | － | 25J-17 | SD-014 | 破片数点 | 西壁未検出,カマド撹乱により破壊,検出された床面は全体的に硬化 |
| SI-100 | 第141図 | 49 | 8C④ | 方 | 4.4×4.5×0.3 | N-24-W | 17.35 | 急 | P1=62,P2=56<br>P3=60,P4=70 | カマド/NW/楕円 | － | 25I-86 | SD-014 | 杯1 | 壁溝は全周しやや深い,同地点建替住居,カマド一部破壊,出土遺物は極めて少ない |
| SI-101 | 第142図<br>第143図 | 50 | 8C③ | 方 | 5.5×5.5×0.4 | N-26-W | 28.04 | 直 | P1=58,P2=81<br>P3=62,P4=71 | カマド/NW/－ | － | 25I-94 | 単独 | 杯4,甕3,小型甕3,台付甕1,甑1 | 壁溝部分周,出入口ピット,カマド手前の床面大きく掘り込まれ右袖脇に焼土集中 |
| SI-102 | 第141図 | 50 | 8C中～8C後 | 隅丸方 | 2.2×2.2×0.4 | N-4-W | 3.75 | 直急 | － | カマド/NE隅/楕円 | － | 25J-01 | 単独 | 破片数点 | 平面プランの割に床面まで堀方は深い,隅カマドで焚き口部には大きな焼土ﾌﾞﾛｯｸがあり煙道はかなり急角度で立ち上がる,竈屋として使用か |
| SI-103 | 第144図<br>第145図 | 50 | 8C③ | 方 | 5.5×5.4×0.6 | N-28-W | 27.49 | 直 | P1=54,P2=55<br>P3=74,P4=67 | カマド/NW/不整 | － | 25I-75 | SD-014 | 蓋1,杯8,甕1,甑1,杯1,甕2,小型甕2,台付甕1,板状鉄製品1 | 壁溝全周,炭化種子(ｽﾓﾓ)出土,出入り口部直下とカマド内火床部に正位の状態で打ち欠き土器出土 |
| SI-104 | 第146図 | 51 | 8C④ | 方 | 4.3×4.2×0.5 | N-28-W | 15.59 | 直 | P1=59,P2=54<br>P3=64,P4=48 | カマド/NW/－ | － | 25I-64 | SK-053 | 蓋2,杯10,高台付杯2,甕3,杯1,鉢1,鉄製品(鏃2,釘2,環付1,板状1) | 壁溝部分周,出入口ピット,カマド遺存不良,床面は平らで全体的にしまっている |
| SI-105 | 第147図 | 51 | 9C中 | 隅丸方 | 3.1×3.2×05 | N-11-W | 8.15 | 直 | P1=12,P2=15<br>P3=15 | カマド/N/－ | － | 25I-72 | SB-009 | 杯2 | 壁溝全周,出入口ピット,カマド奥壁は山砂を貼っている |
| SI-106 | 第147図 | 51 | 9C中 | 隅丸方 | 3.5×3.5×0.5 | N | 9.63 | 直急 | － | カマド/N/－ | － | 25I-80 | SD-015 | 杯1,甕1 | 東側台地西端緩斜面に立地,壁溝部分周,出入口ピット,カマド煙道部は急に立ち上がる |
| SI-107 | 第147図 | 52 | 9C前～中 | 隅丸方 | 3.3×－×0.1 | N-9-E | (7.85) | 緩 | － | カマド/N/－ | － | 24I-79 | SI-108<br>SD-015 | 杯3,皿1,小型甕2,三彩陶器1,支脚1 | 東側台地西端緩斜面に立地,遺存悪い,カマド左袖周辺から三彩陶器の托が出土 |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-108 | 第148図 | 52 | 不明 | 不整 | 2.7×2.5×0.8 | N-98-E | (5.93) | 直 | − | カマド/E/− | − | 24I-69 | SI-109 | 杯1,杯3,土玉1 | 東側台地西端緩斜面に立地,壁溝部分周,カマド右袖前に焼土・炭化物が集中,カマド煙道の立ち上がりは住居壁をわずかに抉り垂直に近い |
| SI-109 | 第148図 | 52 | 8C③ | 方 | 4.2×4.6×1.1 | N-13-E | 18.69 | 急 | − | カマド/N/楕円 | − | 24I-69 | SI-108 SD-015 | 杯2,高台付杯1,高杯1,甕1,杯1,甕2,甑1,刀子1,砥石1,軽石1 | 東側台地西端緩斜面に立地,壁溝全周,床面は平らで特にしまった箇所はない,カマド煙道部は壁外に張り出し緩やかに立ち上がる |
| SI-110 | 第149図 | 52 | 8C② | 長方 | 3.3×2.7×0.9 | N-1-W | 6.96 | 直 | − | カマド/N/不整 | − | 24I-49 | 単独 | 杯1,小型甕1 | 堆積土はﾛｰﾑ土がかなり混入しており埋め戻しの可能性あり,壁溝は南西コーナーで途切れる,床面はやや凹凸があるが固く締まっている,カマド焚き口部周辺に山砂の固まり |
| SI-111 | 第149図 | 53 | 8C② | 方 | 4.2×4.1×0.4 | N-8-W | 15.67 | 急 | − | カマド/N/不整 | − | 25I-40 | 単独 | 杯2,甕1 | 壁溝全周,床面はやや凹凸はあるが固く締まっている,カマドの遺存は悪い |
| SI-112 | 第150図 | 53 | 8C中 | 長方 | (4.5×3.5×0.2) | N-2-E | (13.67) | 緩 | − | カマド/N/− | − | 25I-30 | P10 | 甕2 | 遺存状態不良,北東コーナー部分で硬化面確認,ほとんどの床面ははっきりしない,北壁中央部には山砂の痕跡があるが焼けていない |
| SI-113 | 第150図 第151図 | 53 | 8C③ | 隅丸方 | 3.4×3.5×0.7 | N-13-W | 10.90 | 直 | − | カマド/N/− | − | 25I-20 | SI-114 | 蓋2,杯9,高台付杯1,甕2,杯3,甕4,鉄製品(鏃1,刀子1,穂摘具2,椀形鍛冶滓1),支脚1 | 壁溝部分周,住居廃棄後の凹みで火を使用した痕跡あり,出土遺物は多く遺存状態も良い,床面はあまり締まりはなくやや凹凸がある,カマドはほとんど破壊されている |
| SI-114 | 第152図 | 53 | 8C② | 方 | 4.2×4.0×0.8 | N-15-W | (15.90) | 直 | P1=34,P2=36 P3=31,P4=41 | カマド/NW/楕円 | − | 25I-20 | SI-113 | 蓋1,杯1,高台付杯1,杯1,高台付杯1,甕2,鉄製品(鏃1,刀子1,鎌1) | 柱穴は埋め戻され床面は固く締まっている,カマド左袖は破壊されその周辺で杯や甕の破片が集中して出土 |
| SI-117 | 第153図 | 54 | 8C② | 方 | 5.0×5.1×0.6 | N-19-W | 23.37 | 直 | P1=64,P2=63 P3=51,P4=67 | カマド/NW/円 | − | 25I-02 | SK-155 | 蓋1,杯2,杯1,甕2,刀子1,軽石2 | 壁溝全周,カマド対壁周辺の床面で焼土の集中あり,壁はほとんど垂直で壁溝の部分で多少ｵｰﾊﾞｰﾊﾝｸﾞする |
| SI-118 | 第154図 第155図 | 54 | 8C④ | 方 | 5.2×5.0×0.7 | N-26-W | 24.85 | 直 | P1=56,P2=52 P3=58,P4=62 | カマド/NW/楕円 | − | 25I-45 | SI-119 | 杯10,高台付杯1,高坏4,甕1,甑1,小型壺1,杯2,甕4,鉄鏃1,銅製帯金具1,軽石4 | 壁溝全周,東西壁に3つずつ壁柱穴計6,床面は全体に軟質,カマド煙道部は壁外にありやや急に立ち上がる,壁はほとんど垂直で壁溝の部分で多少ｵｰﾊﾞｰﾊﾝｸﾞする |
| SI-119 | 第156図 | 54 | 9C後 | 方 | (2.9×3.3×0.3) | N-21-W | (7.99) | 緩急 | − | カマド/N/− | 楕円/NEコーナー 41×34×21 | 25I-34 | SI-118 SK-085 | 甕1,杯4,皿1,鉢1,支脚1,砥石1 | カマド内支脚正立,カマド両袖は破壊されﾛｰﾑ土の基底部が残存するのみ,SI-118との新旧関係は土層断面図によれば本跡の方が古い |
| SI-121 | 第157図 | 55 | 8C中 | 方 | 2.9×2.9×0.5 | N-162-E | (6.67) | 緩急 | − | カマド/SE隅/− | − | 25H-50 | SD-016 SD-017 | 甕1,甑1 | 東側台地北端部に立地,カマド内火床部に正立した状態で胴部外面及び口縁部内面に墨書のある甕出土『下総國千…大今在…』『大…村…』 |
| SI-123 | 第158図 | 55 | 8C中 | 不整 | 3.0×2.8×0.5 | N-30-W | (6.07) | 急 | − | カマド/N隅/楕円 | − | 25H-44 | SD-016 | 甕1 | ﾊｰﾄﾞﾛｰﾑ上面を床にしておりやや凹凸があるが締まっている,カマド構築材の中に繊維状のものが混入 |
| SI-124 | 第158図 | 55 | 8C中～8C後 | 方 | 3.5×3.2×0.8 | N-3-W | 7.27 | 急直 | − | カマド/NW隅/− | − | 25H-13 | 単独 | 甕1 | 東側台地最北端部に立地,壁溝ほぼ全周,住居とカマドの主軸が大きく異なる |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-125 | 第158図 | 56 | 8C③ | 不整 | 2.2×2.4×0.6 | N-6-W | 4.01 | 直 | － | カマド/N/－ | － | 25H-33 | 単独 | 蓋1 | 東側台地北端部に立地,床面に山砂と炭化材散乱,カマド天井部遺存 |
| SI-126 | 第159図 | 56 | 8C③ | 方 | 3.4×3.3×0.9 | N-13-W | 10.34 | 直 | － | カマド/N/不整 | － | 24I-07 | SD-019 | 蓋2,杯3,甕1,杯1,小 型甕1,砥石1 | 東側台地西端緩斜面に立地,壁溝北西コーナー部で途切れる,カマド煙道部は壁外でやや急に立ち上がる |
| SI-131 | 第160図 | - | 8C③ | 方 | 4.6×4.3×0.3 | N-39-W | 18.12 | 急直 | P1=21,P2=56 P3=55,P4=39 | カマド/NW/－ | － | 23L-07 | SD-003 | 蓋1,杯4,甕2,短 頸 壺1,杯1,甕1,砥石1 | 壁溝部分周,カマド側床面ほぼ半分に硬化面,カマド煙道部はほとんど壁外に張り出さず急に立ち上がる |
| SI-132 | 第161図 | 56 | 8C② | 隅丸方 | 3.3×3.4×0.3 | N-6-W | 9.12 | 緩 | － | カマド/N/－ | － | 23L-32 | 単独 | 杯1,杯1,甕1,小 型 甕1,穂 摘 具1,石 製 小 玉1,支脚1 | 壁溝カマド両袖付近で途切れる,出入口ピット,カマド火床部は床面よりやや低めに掘り込まれる |
| SI-133 | 第162図 | 57 | 10C前 | 方 | 2.5×2.6×0.1 | N-59-W | 5.38 | 緩 | － | カマド/W/－ | － | 23L-21 | 単独 | 杯1,高台付杯1 | 遺存状態悪い,床面は全体的に締まっている |
| SI-134 | 第162図 | 57 | 9C中 | 方 | 3.6×3.4×0.3 | N-85-E | 10.28 | 緩急 | － | カマド/E/－ 旧カマド/N/－ | － | 23L-53 | SB-018 | 甕1,甑1,杯3,高台付皿1,甕1,鉄鎌1 | 壁溝部分周,カマド移築,床面中央に硬化面 |
| SI-135 | 第163図 | 57 | 不明 | 方 | 3.5.×3.5×0.4 | N-2-E | 10.89 | 急 | － | カマド/N/円 | － | 23L-41 | 単独 | 杯1,甕1,鉄鎌1 | 堆積土はロームブロックが多く混入しており埋め戻しの可能性あり,壁溝ほぼ全周,出入口ピット,カマド両袖は全く遺存せず焚き口部付近で底部欠損の甕が倒立状態で出土 |
| SI-136 | 第164図 | 58 | 9C前 | 方 | 3.7×3.6×0.3 | N-10-W | 12.27 | 急 | － | カマド/N/円 | － | 23M-03 | SI-137 SB-019 | 杯2,大 型 甕1,甕1,杯2,小型甕2,刀子1 | 床面はやや凹凸があり硬化面はみられない,カマド両袖脇にはほぼ完形の杯が正位で出土 |
| SI-137 | 第165図 | 58 | 8C④ | 方 | 4.5×4.9×0.4 | N-14-W | 20.45 | 直 | P1=55,P2=58 P3=55,P4=57 | カマド/N/－ | － | 23M-13 | SI-136 | 甕2,高 台 付 杯1,鉄 製品1 | 壁溝はカマド壁側で途切れる,SI-136によりカマド破壊,出入口ピット |
| SI-138 | 第166図 第167図 | 58 | 8C④ | 方 | 4.5×4.5×0.6 | N-8-W | (17.32) | 緩急 | P1=45,P2=57 P3=64,P4=38 | カマド/N/楕円 旧カマド/E/－ | － | 23L-83 | SI-139 SI-140 SD-005 | 杯4,高台付杯1,甕4,甕1,砥石1 | 同地点建替住居,カマド移築,床面はやや凹凸があり中央に硬化面 |
| SI-139 | 第168図 | 58 | 8C④か | 方 | 3.4×3.7×0.4 | N-75-W | (11,40) | 直 | P1=11,P2=23 P4=22 | カマド/W/楕円 | － | 23L-93 | SI-138 SI-140 | 蓋1,高台付盤1 | 壁溝全周？,床面広範囲に硬化面,出入口ピット,柱穴は全体的に浅い |
| SI-140 | 第168図 | 58 | 8C④ | 方 | (4.5×－×0.4) | N-2-E | － | 緩急 | P2=56 P3=39,P4=55 | － | － | 23L-93 | SI-138 SI-139 SD-005 | 杯2,石製紡錘車1 | 壁溝部分周,出入口ピット,床面中央広範囲に硬化面,SI-139によりカマド破壊 |
| SI-141 | 第169図 | 59 | 9C後 | 方 | 3.0×2.9×0.3 | N-6-W | 6.48 | 緩 | P1=30,P4=33 | カマド/N/－ | － | 22L-78 | 単独 | 杯1,甕1,杯3,高台付皿1,甕1,鉄釘1,土製円盤1,軽石2 | 壁溝部分周,出入口ピット,床面中央小範囲に硬化面,カマド遺存せず |
| SI-142 | 第169図 | 59 | 9C中～後 | 不整 | 3.4×3.2×0.1 | N-17-E | 8.36 | 緩 | － | カマド/NE/－ | － | 22L-89 | SI-148 | 甕1,杯1 | 遺存状態不良 |
| SI-143 | 第170図 | 59 | 8C② | 方 | 3.0×3.2×0.2 | N-27-W | 7.88 | 緩急 | － | カマド/NW/－ | － | 22L-79 | SI-148 | 杯2 | 遺存状態不良 |
| SI-144 | 第170図 | 59 | 9C後半 | 方 | 2.2×2.5×0.1 | N-90-E | (4.45) | 急直 | － | カマド/E/－ | － | 23L-92 | SB-013 SB-014 | 甕1,甕1,刀子1 | 遺存状態不良,床面中央に硬化面,SB-013によりカマド破壊 |
| SI-145 | 第170図 | 60 | 9C後 | 不整 | 3.5×3.7×0.3 | N-10-E | 9.46 | 緩 | － | カマド/N/－ | － | 22L-66 | 単独 | 杯1,甕1 | 遺存状態不良,壁・床ともに締まりなし,床面凹凸顕著 |
| SI-146 | 第171図 | 60 | 8C前 | 方 | 3.3×3.2×0.5 | N-22-W | 8.88 | 直 | P1=70,P2=68 P3=46,P4=29 | カマド/NW/－ | － | 22L-87 | 単独 | 杯4,砥石1 | 壁溝部分周,カマド遺存良好,カマド煙道部は壁外に張り出しやや急に立ち上がる |
| SI-147 | 第172図 | - | 9C中 | 隅丸方 | 3.3×3.0×0.4 | N-112-E | 8.20 | 急 | － | Bカマド/E/－ Aカマド/N/－ | 楕円/Nコーナー 48×39×29 | 22M-18 | 単独 | 杯3,甕2,杯2,甕4,小 型甕1,鉄斧1,刀子1,砥石1,軽石1 | 壁溝部分周,カマド移築,新旧カマドともに袖が遺存しない,貯蔵穴は新カマド左袖側に構築 |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-148 | 第174図 | 60 | 9C中 | 長方 | 4.0×3.3×0.2 | N-20-W | 11.53 | 緩 | − | カマド/NW/− | 楕円/カマド左袖付近28×26×15 | 22L-89 | SI-142<br>SI-143<br>SI-149 | 長頸壺1,短頸壺1,杯1,杯2,高台付皿1,甕1 | 壁溝全周,床面中央に硬化面,カマド遺存不良,貯蔵穴はカマド左袖周辺に構築,SI-149よりも古い |
| SI-149 | 第175図 | 61 | 9C後半 | 方 | 3.8×4.1×0.2 | N-34-W | 13.38 | 緩 | − | カマド/NW/− | − | 23L-90 | SI-148<br>SB-016 | 杯2,甑1,刀子1,鉄製品1 | 遺存状態不良,カマド堀方のみ遺存 |
| SI-151 | 第176図<br>第177図 | 61 | 9C前 | 隅丸方 | 4.1×4.8×0.6 | N-64-W | 15.96 | 直急 | P1=40,P2=28<br>P3=27,P4=21 | カマド/NW/−<br>旧カマド/NE/− | − | 22M-28 | SK-114 | 蓋1,杯7,高台付杯1,甕3,杯4,坩1,甕2,銅製帯金具1,石製紡錘車1 | 西側台地の南西端緩斜面に立地,壁溝は南壁下で途切れる,出入口ピット,カマド移築,カマド煙道部は壁外に大きく張り出しやや急に立ち上がる |
| SI-152 | 第178図 | 61 | 9C後 | 隅丸方 | 3.6×3.9×0.6 | N-26-E | 11.7 | 直 | P4=21 | カマド/NE/楕円 | − | 23M-30 | SI-154 | 杯2,羽釜1,高台付杯1,甑2,杯3,小型甕1,鉄製品(刀子1,釘2 ,名称不詳1) | 西側台地の南西端緩斜面に立地,出入口ピット,重複するSI-154の床面の方がやや低くその部分に貼床を施す,カマド煙道部遺存不良 |
| SI-153 | 第179図<br>〜<br>第181図 | 61 | 9C中 | 方 | 4.2×4.4×0.7 | N-30-E | 15.72 | 直 | P1=42,P2=48<br>P3=24,P4=36 | カマド/NE/円 | − | 23M-31 | SI-154 | 杯3,灰釉陶器1,甕7,鉢1,甑1,杯2,高台付杯1,皿1,高台付皿3,甕4,鉄製品(紡錘車1,鑷1,雁又1,名称不詳1),砥石1 | 西側台地の南西端緩斜面に立地,壁溝部分周,床面中央部に硬化面,カマド煙道部は壁外に大きく張り出し緩やかに立ち上がる |
| SI-154 | 第182図 | 61 | 9C | 方 | 4.9×5.1×0.7 | N-42-E | 24.08 | 直 | P1=72,P2=61<br>P3=34 | カマド/NE/楕円 | − | 23M-30 | SI-152<br>SI-153<br>SI-156 | 大型甕1 | 西側台地の南西端緩斜面に立地,壁溝部分周,住居3軒に切られ遺存状態不良,P3及び南側壁溝はSI-152の貼床除去後に検出 |
| SI-155 | 第183図<br>第184図 | 61 | 9C前 | 方 | 4.0×4.0×1.0 | N-27-E | 14.43 | 急 | − | カマド/NE/楕円 | − | 22M-29 | SI-156 | 蓋2,杯11,高台付杯1,高杯1,甕5,甑1,杯4,甕3,銅製帯金具1,軽石2 | 西側台地の南西端緩斜面に立地,南東壁中央に床面より約10cm高いテラスあり,カマド煙道部は壁外に大きく張り出し急に立ち上がる |
| SI-156 | 第185図<br>第186図 | 61 | 9C前 | 方 | 4.7×4.5×0.7 | N-120-E | (19.56) | 直 | P1=38,P2=42<br>P3=37,P4=57 | カマド/SE/楕円 | − | 22M-39 | SI-152<br>SI-154<br>SI-155 | 杯4,甕3,甑1,杯4,支脚1,砥石1 | 西側台地の南西端緩斜面に立地,壁溝全周？,床面中央広範囲に硬化面,出入口ピット,カマド煙道部は壁外に大きく張り出しやや急に立ち上がる |
| SI-157 | 第187図 | 62 | 8C③ | 方 | 5.4×5.4×1.0 | N-11-E | 27.09 | 直 | P1=67,P2=76<br>P3=75,P4=69 | カマド/N/円 | − | 23M-81 | 単独 | 杯5,石製丸玉1 | 西側台地の最南西端緩斜面に立地,壁溝全周,床面ほぼ全域に硬化面,出入口ピット,カマドは半分以上壁外に張り出し煙道部は緩やかに立ち上がる |
| SI-158 | 第188図 | 62 | 9C後半 | 方 | 3.0×2.7×0.3 | N-38-E | (6.85) | 直 | − | カマド/N/− | − | 23M-61 | 単独 | 杯1,皿1,小型甕1 | 西側台地の南西端緩斜面に立地,壁溝部分周,遺存状態不良 |
| SI-161 | 第188図 | - | 8C④ | − | (−×−×0.3) | N-50-W | − | 緩 | P1=21,P2=47<br>P3=97,P4=78 | − | − | 22M-47 | 単独 | 杯1,甕1,杯1 | 西側台地の最南西端急斜面に立地,遺存状態極めて不良,出入口ピット |
| SI-162 | 第189図 | - | 8C中〜後 | − | (−×−×0.6) | − | − | 直 | P1=73,P2=90<br>P3=64,P4=52 | − | − | 22M-69 | 単独 | 蓋1,軽石1 | 西側台地の最南西端急斜面に立地,遺存状態極めて不良,出入口ピット |
| SI-163 | 第189図 | - | 9C後 | 不整 | 2.4×2.7×0.4 | N | 4.53 | 直 | − | カマド/N/− | − | 23M-51 | 単独 | 灰釉陶器1,杯3 | 西側台地の南西端緩斜面に立地,床面中央に硬化面,カマドは堀方のみ遺存 |
| SI-164 | 第190図 | 62 | 8C③ | 隅丸方 | 3.2×3.4×0.5 | N-79-E | 8.95 | 直 | − | カマド/E/楕円<br>旧カマド/N/− | − | 24M-55 | 単独 | 杯3,杯1,甕3,小型甕3,軽石3 | 壁溝全周,カマド・出入口ピット移築,旧床面及び壁面を掘り広げて新住居を構築,新カマドの遺存は良好 |
| SI-165 | 第191図<br>〜<br>第193図 | 63 | 9C中 | 方 | 4.0×3.9×0.5 | N-3-E | 15.82 | 急 | P1=60,P2=66<br>P3=72,P4=72 | カマド/N/不整<br>旧カマド/E/- | − | 24M-85 | SI-167 | 杯3,高台付杯2,高台付皿2,甕2,小型甕1,甑1,杯4,高台付杯1,甕5,刀子1,支脚1 | 西側台地の南端部に立地,建替住居,SI-165(旧)を埋めた後やや小型に建替直している,出入口ピット,3軒重複,SI-167→SI-165(旧)→SI-165(新) |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-167 | 第194図 | 63 | 8C中 | 隅丸方 | 3.1×3.7×0.4 | N-13-W | (10.05) | 直 | P1=53,P2=48<br>P3=54,P4=37 | カマド/N/不整 | − | 24M-85 | SI-165 | 甕2 | 西側台地の南端部に立地,床面中央に硬化面,3軒重複,SI-167→SI-165(旧)→SI-165(新) |
| SI-168 | 第195図 | 64 | 9C前 | 隅丸方 | 3.2×3.3×0.4 | N-7-W | 9.34 | 直 | − | カマド/N/円 | − | 24M-65 | 単独 | 杯2,高台付杯1,甕2,刀子1,穂摘具1 | 西側台地の南端部に立地,壁溝全周,床面中央に硬化面,出入口ピット |
| SI-169 | 第196図 | 64 | 10C | 隅丸方 | 3.6×3.4×0.2 | N-15-E | 10.51 | 急 | P1=15,P2=54<br>P3=29,P4=22 | カマド/NE/円 | − | 24M-44 | SI-177 | 灰釉陶器1,杯5,高台付杯1,甕1,甑2,鉄鎌1,軽石1 | SI-177の真上に四壁を拡張するように構築,壁溝全周,床面中央に硬化面,カマド焚口部・南東壁周辺に焼土集中 |
| SI-170 | 第197図 | 64 | 9C中 | − | (−×−×0.5) | − | − | 直 | − | − | − | 24L-95 | 単独 | 杯2,甕2,鉄鑿1,穂摘具1,砥石1 | 片隅のみ調査 |
| SI-171 | 第198図<br>第199図 | 65 | 9C前 | 方 | 4.6×4.4×0.5 | N-102-E | 16.50 | 直 | P1=41,P2=46<br>P3=36,P4=41 | カマド/E/不整 | − | 24M-03 | 単独 | 杯1,甕1,杯3,台付甕1,高台付皿1,甕1,鉄製品(鏃1,刀子1,鎌2,穂摘具1,釘1,椀形鍛冶滓1,名称不詳3),石製紡錘車1 | 壁溝カマド両袖付近で途切れる,出入口ピット,床面中央に硬化面,カマド左袖脇・北壁周辺に焼土集中,カマド煙道部は壁外に大きく張り出し緩やかに立ち上がる |
| SI-172 | 第200図 | 65 | 9C後 | 隅丸方 | 3.4×3.5×0.3 | N-15-E | 9.64 | 直 | − | カマド/N/円 | − | 24L-84 | 単独 | 杯2,鉄製品(鏃1,紡錘車1,引手状1),銅名称不詳1,砥石1 | 焼失住居,壁溝全周,床面中央・南壁中央直下に硬化面,壁上端がｶｯﾄされている |
| SI-173 | 第200図 | 65 | 9C後 | 長方 | 3.7×2.7×0.2 | N-14-E | − | 直 | − | − | − | 24L-74 | SI-174<br>SD-003 | 甕1,鉄鎌1 | 遺存状態不良 |
| SI-174 | 第201図 | 66 | 8C④ | 隅丸方 | 3.2×3.6×0.4 | N-11-W | 9.54 | 直 | − | カマド/N/楕円 | − | 24L-73 | SI-173<br>SD-003 | 杯2,杯1,甕1 | 壁溝全周,出入口ピット,カマド周辺から対壁にかけた床面中央に硬化面,カマドの遺存は良く煙道は急に立ち上がる |
| SI-175 | 第202図 | 66 | 9C中 | 方 | 3.1×3.4×0.5 | N-114-W | 8.83 | 直 | − | カマド/SW/楕円<br>旧カマド/NE/− | − | 24M-83 | 単独 | 杯1,杯1,皿1,高台付皿1,小型甕1,甕1,鉄製品(鎌1,釘1) | 西側台地の南端部に立地,壁溝全周,カマド移築,新カマドは壁溝を埋め戻し新しく貼床した後構築,住居廃絶後の凹みを利用して廃材を焼却した痕跡 |
| SI-176 | 第203図 | 66 | 10C | 方 | 3.6×3.5×0.2 | N-104-E | (10.93) | 緩 | − | カマド/E/不整<br>旧カマド/N/− | − | 24M-74 | SI-178 | 杯6,高台付杯1,砥石1 | 西側台地の南端部に立地,カマド移築,床面中央広範囲に硬化面,床面南北及び東側に山砂散乱,焼土・炭化材やや多い |
| SI-177 | 第203図 | 67 | 9C後 | 方 | 2.7×2.9×0.4 | N-19-E | 6.80 | 直 | − | カマド/NE/楕円 | − | 24M-44 | SI-169 | 杯1,鉢1 | 壁溝は深くしっかり掘り込まれている,出入口ピット,カマド両袖は遺存せず,床面中央広範囲に硬化面 |
| SI-178 | 第204図<br>第205図 | 67 | 9C中 | 方 | 4.2×4.2×0.6 | N-7-W | 15.95 | 直 | P1=61,P2=59<br>P3=73,P4=56 | カマド/N/− | − | 24M-74 | SI-176 | 甕2,甑1,杯1,皿2,小型甕2,鉄製品(刀子2,紡錘車1,釘3,椀形鍛冶滓1,名称不詳1) | 焼失住居,壁溝全周,主柱穴のうち2本はカマド壁直下に構築,カマド煙道部は大きく・両袖も大部分壁外に張り出す,出入口ピット,床面中央広範囲に硬化面 |
| SI-179 | 第206図 | 67 | 9C中 | 方 | 2.9×3.2×0.4 | N-74-W | 8.38 | 直 | − | カマド/W/− | − | 24M-03 | SI-192 | 杯1,甕1,杯1,甕1,支脚1,軽石1 | 壁溝カマド対壁中央で途切れる,遺存状態不良,カマド内出土遺物多数 |
| SI-180 | 第207図 | 68 | 9C前 | 隅丸方 | 3.4×3.4×0.5 | N-7-W | 9.95 | 直 | − | カマド/N/楕円 | − | 24L-72 | SD-021 | 蓋1,杯6,甕1,杯2,小型甕1,甕2,石製紡錘車1 | 壁溝部分周,出入口ピット,床面中央広範囲に硬化面,住居廃棄後の凹みで火を使用 |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-181 | 第208図 | 68 | 8C② | 方 | 3.7×3.8×0.4 | N-38-E | 12.67 | 直 | P1=36,P2=27 P3=41,P4=35 | カマド/NE/不整 | − | 24L-82 | 単独 | 杯3,甕1 | 壁溝は深くしっかりと掘り込まれている,出入口ピット,遺存状態不良,カマド煙道部は壁外にほとんど張り出さず急に立ち上がる |
| SI-182 | 第209図 | 68 | 8C③ | 方 | 3.1×3.4×0.5 | N-9-E | (9.38) | 直 | − | カマド/N/− | − | 24L-92 | SI-191 | 杯1,甕1,刀子1 | 壁溝部分周,床面中央広範囲に硬化面,カマド両袖破壊,カマド内より甕の破片散在出土,住居廃絶後の凹みを利用して火を使用した痕跡あり |
| SI-183 | 第210図 | 69 | 8C③ | 隅丸方 | 3.2×3.3×0.6 | N-15-W | 8.74 | 直 | − | カマド/N/− | − | 23L-59 | 単独 | 杯1,高台付杯1 | 壁溝全周,出入口ピット,床面広範囲に硬化面,カマド煙道部は天井部が若干遺存する |
| SI-184 | 第210図 | 69 | 9C前 | 隅丸方 | 3.1×2.8×0.3 | N-78-E | 6.98 | 急 | − | カマド/E/楕円 | − | 24L-30 | 単独 | 杯2,甕2 | 壁溝部分周,床面中央に硬化面,カマド両袖はﾊｰﾄﾞﾛｰﾑを掘り残して基部とする |
| SI-185 | 第211図 | 69 | 8C④ | 方 | 3.8×4.6×0.6 | N-3-E | 15.35 | 直 | P1=45,P2=54 P3=49,P4=29 | カマド/N/円 | − | 24M-62 | SI-188 SB-037 SB-038 | 杯6,蓋1,甕1,甕1,鉄鎌2 | 壁溝は広く深めに掘り込まれ全周,出入口ピット,カマド周辺を除く床面中央に硬化面,カマド煙道部はやや急に立ち上がる |
| SI-186 | 第212図 | 70 | 9C前 | 方 | 2.9×3.0×0.3 | N-91-W | 7.58 | 直 | − | カマド/W/楕円 | − | 24M-81 | 単独 | 杯2,甕2,杯1,甕1 | 壁溝部分周,出入口ピット,カマド壁及び対壁にかけ硬化面,カマド火床部に正位に置かれた完形の甕出土 |
| SI-187 | 第213図 | 70 | 10C | 方 | 3.4×3.6×0.2 | N-2-W | 10.90 | 緩 | − | カマド/N/− | − | 24M-60 | SI-188 | 灰釉陶器1,杯2,高台付杯1 | 床面中央に硬化面,住居廃棄後の凹みで火を使用,カマド煙道部は壁外に大きく張り出す |
| SI-188 | 第213図 | 70 | 9C前 | 方 | 3.7×3.4×0.4 | N-16-W | 11.10 | 直 | − | カマド/N/楕円 | 楕円/NWコーナー 47×42×15 | 24M-61 | SI-185 SI-187 SB-037 SB-038 | 杯3,杯1,甕2,刀子2,環状鉄製品1,砥石2 | 壁溝全周?,出入口ピット,床面中央に硬化面,SI-187によってカマド上部は削り取られている |
| SI-189 | 第214図 | 71 | 9C中 | 方 | (3.5×3.4×0.3) (3.0×3.0×0.3) | N-77-E | 11.51 (6.10) | 直 | − | カマド/NE/− 旧カマド/E/− | − | 24M-80 | SK-257 | 杯2,杯1,小型甕1,甕1 | 西側台地の南端部に立地,建替拡張住居,カマド移築,壁溝全周?,床面中央広範囲に硬化面,拡張前後の硬化面確認 |
| SI-190 | 第214図 | 71 | 9C後 | 方 | 3.2×3.1×0.1 | N-4-E | 8.89 | 緩急 | − | カマド/N/− | − | 24L-80 | SB-032 | 杯2 | 遺存状態不良,カマド内及びカマド周辺に土器片集中 |
| SI-191 | 第215図 第216図 | 71 | 9C前 | 隅丸方 | 3.9×4.3×0.6 | N-93-E | 15.16 | 直 | P1=23,P2=37 P3=45,P4=29 | カマド/E/不整 旧カマド/N/− | − | 24M-02 | SI-182 | 杯4,高台付杯1,高台付壺1,甑1,杯2,甕1,支脚1,鉄製品(雁又1,穂摘具1,釘1,椀形鍛冶滓1) | カマド移築,壁溝ほぼ全周,旧住居の出入口ピット,床面は若干の凹凸があり硬化面は認められない,カマド煙道部は壁外に大きく張り出し急に立ち上がる |
| SI-192 | 第217図 第218図 | 72 | 9C中 | 方 | 4.6×5.4×0.6 (建て替え後) | N-109-E | 19.66 | 直 | P1=38,P2=51,P3=54,P4=51,P5=58,P6=37,P7=38,P8=48,P9=38,P10=50,P11=43,P12=51 | カマド/NE/不整 カマド/N/− 旧カマド/N/− | − | 24M-12 | SI-179 | 杯2,大型甕1,甕2,甑1,杯2,皿1,高台付皿1,小型甕1,甕1,羽口1,鉄製品(刀子2,鏃1,棒状品2,鎹金1,椀形鍛冶滓2),軽石1 | 建替・カマド移築2回,いずれも壁溝部分周,中を除く旧と新の住居には出入口ピット,短期間の建替,カマド煙道部は壁外に張り出し急に立ち上がる |
| SI-193 | 第219図 | 72 | 8C④ | 方 | 4.0×3.9×0.5 | N-15-W | (13.97) | 直 | − | カマド/N/不整 | − | 24L-20 | SD-020 | 杯1,甑1,杯1,甕1 | 撹乱を受け遺存状態不良,壁溝全周?,床面の硬化範囲は撹乱により不明瞭,カマド煙道部は壁外に張り出し急に立ち上がる |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-194 | 第220図 | 72 | 9C中 | 隅丸方 | 2.8×2.8×0.3 | N-4-W | 6.77 | 直 | − | カマド/N/楕円 | − | 23L-88 | 単独 | 杯2,小型甕1,甕1,軽石1 | 撹乱を受け遺存状態不良,床面中央に硬化面,カマド煙道部は壁外に張り出しやや急に立ち上がる |
| SI-195 | 第221図 | 73 | 9C中 | 方 | 3.3×3.2×0.4 | N-3-W | 8.93 | 直 | − | カマド/N/楕円 | − | 24M-00 | SI-196 | 高台付皿1,高台付壺1,甑1,杯1,甕3,ミニチュア土器1,刀子1 | 壁溝は深くしっかり掘られ全周する,床面中央カマド寄りに硬化面,カマドの遺存は良く全体的に壁外に構築され煙道はやや急に立ち上がる |
| SI-196 | 第222図 | 73 | 8C② | 方 | 6.0×6.0×0.6 | N-12-W | 31.93 | 直 | P1=56,P2=68<br>P3=63,P4=89<br>P5=69,P6=52 | カマド/N/− | 楕円2/　カマド右袖付近<br>(L)50×40×28<br>(M)65×50×21 | 24M-00 | SI-195<br>SK-271 | 蓋1,杯1,杯2,台付甕1,小型椀1 | 壁溝全周,床面中央やや西よりに硬化面,出入口ピット,貯蔵穴2か所,主柱は6本で床面積は最大級,カマドは煙道部のみ壁外に張り出し急に立ち上がる |
| SI-197 | 第223図 | 73 | 8C③ | 方 | 3.1×3.6×0.1 | N-2-E | 10.79 | − | − | カマド/N/− | − | 23M-29 | 単独 | 甑1 | ほとんど床面のみ遺存,床面中央に硬化面 |
| SI-198 | 第223図 | 74 | 8C③ | 方 | 3.3×3.5×0.6 | N-20-W | 9.67 | 直 | − | カマド/NW/不整 | − | 23M-49 | 単独 | 杯4,杯2,小型甕1,甑1,刀子1 | 壁溝全周,壁溝内に規則的な凹凸,床面中央広範囲に硬化面,出入口ピット2か所で周辺に焼土あり,カマド煙道部は壁外にやや張り出し急に立ち上がる |
| SI-199 | 第224図 | 74 | 9C後 | 隅丸方 | 3.0×3.2×0.3 | N-60-W | 8.49 | 急 | − | カマド/NW/− | − | 23L-15 | 単独 | 杯1,甕1,杯7,砥石1 | NE壁側壁溝未確認,床面中央広範囲に硬化面,出入口ピット,カマド両袖内側は赤化しているが火床部は明確ではない |
| SI-200 | 第225図 | 74 | 不明 | 方 | 3.1×2.9×0.4 | N-12-W | 7.28 | 直急 | − | カマド/N/− | − | 23L-36 | 単独 | 大型甕1,甕2,刀子1,棒状鉄製品1 | 壁溝部分周,床面中央に硬化面,カマド遺存不良 |
| SI-201 | 第226図 | 75 | 9C後 | 長方 | (3.0)×3.7×0.4 | N-2-E | (10.71) | 直 | − | カマド/N/− | − | 23L-95 | SI-202<br>SI-207 | 甕1,杯4,小型甕1,加工土器片1,砥石1,軽石1 | SI-202とほぼ同一床面で重複,床面中央に硬化面,カマドはほとんど壁外に構築されている |
| SI-202 | 第227図 | 75 | 9C前 | 方 | 3.5×4.0×0.4 | N-5-W | 13.18 | 直 | P1=59,P2=51<br>P3=51,P4=62 | カマド/N/− | − | 23L-95 | SI-201<br>SI-207 | 蓋1,杯1,高台付杯1,甕1,杯1,甕2,鞴1,砥石1 | SI-201にカマドを破壊されている,床面中央広範囲に硬化面,床面中央部に補助柱穴二か所,柱穴の掘方はみな四角形 |
| SI-203 | 第228図 | 75 | 9C中 | 方 | 3.3×3.3×0.2 | N-3-W | 9.08 | 急 | − | カマド/N/− | − | 23M-04 | 単独 | 杯1,大型甕1,甑1,杯1,小型甕1,刀子1,釘1 | 遺存状態不良,カマド内から甕・甑出土 |
| SI-204 | 第229図<br>第230図 | 76 | 9C中 | 方 | 3.6×3.7×0.5 | N-100-W | 11.03 | 直 | − | カマド/W/− | − | 23M-06 | 単独 | 杯1,壺1,甕2,杯3,高台付杯1,小型甕5,甕1,鉄製品(鏃1,釘1,名称不詳1),支脚1,軽石1 | 焼失住居,壁溝全周,床面中央に硬化面,カマド火床部に正位の状態で支脚出土,カマド煙道部は壁外に大きく張り出し急に立ち上がる |
| SI-205 | 第231図 | 76 | 9C後 | 方 | 3.1×3.2×0.4 | N-10-W | 8.63 | 直急 | − | カマド/N/− | − | 23M-57 | SI-206 | 杯1,壺1,甕3,杯4,皿1,小型甕1,土器片円板1 | SI-206とほぼ同一床面で重複,壁溝全周,床面中央広範囲に硬化面,カマド煙道部のみ壁外に張り出し急に立ち上がる |
| SI-206 | 第232図 | 76 | 9C前 | 方 | 3.3×3.3×0.4 | N-26-W | 9.87 | 直急 | − | カマド/NW/− | − | 23M-57 | SI-205 | 杯3,甕2,小型甕2,甕1 | SI-205とほぼ同一床面で重複,壁溝全周,床面中央広範囲に硬化面,カマド改築 |
| SI-207 | 第233図<br>第234図 | 77 | 8C② | 方 | 5.3×5.3×0.6 | N-2-E | 26.26 | 直 | P1=65,P2=53<br>P3=65,P4=59 | カマド/N/− | − | 23L-95 | SI-201<br>SI-202 | 杯5,甕1,甕1,鉄製品(錐1,鎌1),軽石2 | 建替住居,カマド改築,壁溝深く構築され全周,出入口ピット,床面中央広範囲に硬化面,カマド煙道部のみ壁外に張り出し急に立ち上がる |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-208 | 第235図<br>第236図 | 77 | 9C後 | 方 | 2.9×2.9×0.3 | N-7-W | 7.02 | 直急 | − | カマド/N/不整 | − | 23M-78 | SI-209<br>SI-210 | 杯1,甕2,小型甕1,杯3,皿1,甕1,小型甕3,土器転用円板1,鉄製品(刀子3,棒状製品1,紡錘車2) | 焼失住居,壁溝部分周,床面中央からカマドにかけて硬化面,炭化種子出土,カマド本体は大きく壁外に張り出し,煙道部は急に立ち上がる |
| SI-209 | 第237図 | 77 | 9C中 | 方 | 3.9×4.0×0.4 | N-17-W | 13.17 | 直急 | P1=42,P2=31<br>P3=31,P4=29 | カマド/NW/− | − | 23M-78 | SI-208<br>SI-210 | 杯3,灰釉陶器1,甕2,甑1,杯5,高　杯1,皿4,甕2,軽石1 | 壁溝部分周,出入口ピット,床面中央から東側にかけて硬化面,炭化種子出土,床面中央と南東隅周辺に焼土集中,床面中央から東側にかけて硬化面,南壁の西よりにテラスあり |
| SI-210 | 第238図 | 77 | 9C前 | 方 | (3.6×−×0.5) | N-11-W | − | 直急 | − | カマド/N/楕円 | − | 23M-78 | SI-208<br>SI-209 | 甕1,支脚1 | 壁溝部分周,出入口ピット,北西コーナー部分に階段状のテラスあり,遺物のほとんどはカマド内出土 |
| SI-211 | 第239図<br>〜<br>第241図 | 78 | 9C中 | 方 | 3.5×3.6×0.3 | N-25-W | 10.32 | 直 | − | カマド/NW/− | − | 23M-89 | 単独 | 杯2,壺1,小　型　甕1,甕11,杯11,高台付皿4,小型甕2,甕1,鉄製品(棒状製品1,名称不詳1),羽口1 | 西側台地の南端部に立地,出入口ピット,床面中央に3面の硬化面を検出,壁溝は全周し広く深い,カマド煙道部は壁外へ大きく張り出しやや急に立ち上がる |
| SI-212 | 第242図<br>第243図 | 78 | 9C後 | 方 | 3.0×3.2×0.3 | N | 7.97 | 急 | − | カマド/N/− | − | 23M-43 | SD-005 | 大型甕1,杯12,甕1,鉄製品(鎌2,釘1,名称不詳1),支脚1,軽石1 | 出入口ピット,床面中央広範囲に硬化面,壁溝は全周し広く深い,カマドの遺存は不良で煙道部は壁外へ大きく張り出し急に立ち上がる |
| SI-213 | 第244図 | 78 | 9C中 | 方 | 3.9×3.8×0.4 | N-94-W | (12.39) | 直急 | − | カマド/W/− | − | 23M-54 | SD-005 | 杯2,甑1,杯6,甕2,門　金具1,砥石1 | 焼失住居,壁溝部分周,出入口ピットからカマド手前にかけて硬化面,カマド煙道部のみ壁外に張り出し急に立ち上がる |
| SI-214 | 第245図 | 79 | 9C前 | 方 | 3.5×3.6×0.6 | N-7-E | 10.28 | 直急 | P1=24,P2=23<br>P3=16,P4=20 | カマド/N/− | − | 23M-75 | SD-005 | 杯5,甕1,杯2,鉄　鎌1,土製紡錘車1 | 西側台地の南端部に立地,壁溝全周,出入口ピット・四隅・中央を除く床面に硬化面,カマド煙道部のみ壁外に張り出し急に立ち上がる |
| SI-215 | 第246図 | 79 | 9C | 不整 | (3.6×3.0×0.4) | N-15-W | (6.95) | 急 | − | − | − | 23M-85 | SD-005<br>SK-270 | 高台付杯1 | 遺存状態不良 |
| SI-216 | 第247図 | 79 | 8C③ | 方 | 4.8×4.4×0.5 | N-90-W | 19.22 | 直 | P1=54,P2=66<br>P3=77,P4=65 | カマド/W/− | − | 23M-14 | SD-005<br>SD-025<br>SK-275 | 杯3,高台付杯3,甕1,甕1,支脚1,鉄斧1,鉄鎌1 | 西側台地のやや南寄りに立地,壁溝は全周し深い,カマドから出入口ピットにかけての床面広範囲に硬化面,カマドはほぼ壁内に構築される,床面中央からやや北寄りに被熱により焼土化した硬化面あり |
| SI-217 | 第248図 | 80 | 9C中 | 方 | 2.9×3.0×0.3 | N-13-E | 7.45 | 急 | P2=14<br>P3=20,P4=42 | カマド/N/− | − | 24L-26 | 単独 | 杯2,短頸壺1,甕2,杯2,砥石1,石製紡錘車1 | 遺跡ほぼ中央部に立地,カマドから出入口ピットにかけての床面に硬化面,カマド煙道部は壁外に大きく張り出し緩やかに立ち上がる |
| SI-218 | 第249図 | 80 | 9C前 | 方 | 3.6×3.7×0.3 | N-22-W | 11.27 | 急直 | − | カマド/N/− | 楕円/Nコーナー<br>80×40×15 | 24L-35 | 単独 | 杯1,甕1,杯1,甕1,鉄　鎌1,軽石1 | 遺跡ほぼ中央部に立地,出入口ピット周辺に硬化面,壁溝はコーナー部分で大きく広がる,カマド右袖は破壊,煙道部は壁外に若干張り出し緩やかに立ち上がる |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-219 | 第250図 | 80 | 9C中 | 長方 | 4.2×3.6×0.4 | N-16-W | 12.8 | 急直 | P2=65 | カマド/N/− | − | 24L-46 | 単独 | 杯3,甕2,杯2,軽石2 | 遺跡ほぼ中央部に立地,出入口ピット,床面中央に硬化面,壁溝はコーナー部分で大きく広がる,カマド煙道部は壁外に若干張り出しやや急に立ち上がる |
| SI-220 | 第251図 | 81 | 8C③ | 方 | 3.3×3.5×0.2 | N-80-E | 9.57 | 緩急 | − | カマド/E/− | − | 24L-55 | 単独 | 蓋1 | 遺跡ほぼ中央部に立地,床面中央やや南寄りに硬化面,壁溝全周,カマド煙道部は壁外に若干張り出し緩やかに立ち上がる |
| SI-221 | 第251図 | 81 | 9C前 | 方 | 3.0×3.2×0.2 | N-37-W | 8.49 | 直 | − | カマド/NW/− | − | 24L-56 | 単独 | 杯1,甕1,小型甕1,鉄鎌2 | 焼失住居,遺跡ほぼ中央部に立地,床面中央小規模に硬化面,壁溝部分周,カマドは西側コーナー部分に寄って構築 |
| SI-222 | 第252図 | 81 | 9C前 | 方 | 3.2×3.4×0.2 | N-44-W | 9.17 | 緩 | P1=10,P2=31 P3=10,P4=19 | カマド/NW/− | − | 24L-67 | 単独 | 杯1,甕1 | 遺跡ほぼ中央部に立地,床面カマドから対壁にかけ硬化面,壁溝部分周,カマドは遺存不良 |
| SI-223 | 第252図 | 82 | 9C | 方 | (3.5×3.6×0.2) | − | (11.12) | 急 | P1=32 | − | − | 24L-86 | SI-224 | 杯1,甕1,刀子1 | 焼失住居,遺跡ほぼ中央部に立地,遺存不良,壁溝部分周,カマドは未検出 |
| SI-224 | 第252図 | 82 | 9C前～中 | 方 | (−×−×0.5) | − | − | 直 | P1=58 | − | − | 24L-86 | SI-223 | 杯1,杯1,甕1 | 一部分のみの調査 |
| SI-225 | 第253図 | 82 | 10C | 隅丸方 | (2.7×2.5×0.4) | N-85-E | (4.85) | 急 | − | カマド/E/− | − | 25L-70 | SD-028 | 高台付杯1,杯1 | 遺跡中央最南端に立地,遺存状態不良,床面は南側に向けて傾斜,カマド左袖基底部と堀方のみ遺存 |
| SI-228 | 第253図 | 82 | 10C | 長方 | 2.3×3.3×0.1 | N-31-W | 6.36 | 緩 | − | カマド/NW/− | − | 25L-60 | 単独 | 高台付杯1,甕2 | 遺跡中央最南端に立地,遺存状態不良,床面は南側に向けて緩やかに傾斜,カマドは堀方のみ遺存 |
| SI-229 | 第254図 | 83 | 8C④ | 隅丸方 | 3.6×4.1×0.5 | N-32-E | 12.58 | 直急 | P1=48,P2=39 P3=30,P4=49 P5=30 | カマド/NE/− | 楕円/NW壁下 74×68×30 | 25L-46 | 単独 | 杯6,高台付杯1,高杯1,甕1,甑1,杯1,支 脚1,刀子1 | 東側台地最南端部に立地,壁溝は全周し深くしっかりしている,カマド周辺から対壁直下の床面中央広範囲に硬化面,,カマド煙道部は壁外に大きく張り出し急に立ち上がる |
| SI-230 | 第255図 | 83 | 9C前 | 隅丸方 | 2.8×3.5×0.6 | N-13-E | 7.90 | 急 | P1=17 | カマド/NE/− | − | 25L-57 | 単独 | 杯1,高台付壺1,甕1,甑1,杯1,小型甕1,羽口2 | 東側台地最南端部に立地,床面中央小規模に硬化面,カマド遺存状態不良 |
| SI-231 | 第256図 | 83 | 9C中 | 隅丸方 | 3.8×4.4×0.6 | N-16-E | 14.54 | 直 | P1=33,P2=27 P3=26,P4=38 | カマド/N/− | 円/NW壁下 50×50×33 | 25L-67 | 単独 | 甕1,杯1,甕1,砥石1 | 東側台地最南端部の緩斜面に立地,床面主柱穴内側に硬化面,出入口ピット,カマド煙道部は壁外に大きく張り出しやや急に立ち上がる |
| SI-233 | 第257図 | 84 | 9C前 | 方 | (4.5×−×0.6) | N-62-W | − | 急 | P1=31,P2=37 P3=36 | カマド/NW/− | − | 25L-77 | 単独 | 灰釉陶器1,杯6,甑1,杯3,甕1,小 型 甕1,支 脚1,軽石1 | 東側台地最南端部の緩斜面に立地,出入口ピット,カマド煙道部は壁外にやや張り出し急に立ち上がる,堆積土は黒褐色単一土で床面は白色粘土層に構築されている |
| SI-234 | 第258図 | 84 | 8C中～8C後 | 方 | (−×2.8×0.5) | N-19-E | − | 直 | − | カマド/NW隅/− | − | 25L-66 | 単独 | 破片数点 | 東側台地最南端部の緩斜面に立地,床面中央小規模に硬化面,隅カマドで煙道部は直に立ち上がる |
| SI-235 | 第258図 | 84 | 9C | 方 | (−×2.7×0.3) | N-16-E | − | − | P1=42,P2=48 P3=45 | カマド/N/− | 楕円/NW壁下 88×76×34 | 25L-64 | 単独 | 甕1,支脚1 | 東側台地最南端部の緩斜面に立地,遺存部分が少ないため詳細不明,カマド煙道部は急に立ち上がる |
| SI-236 | 第259図 | 85 | 8C③ | 方 | (4.1×−×0.4) | N-80-W | − | 直 | P2=62,P3=65 | カマド/W/− | − | 25L-54 | SI-238 | 杯3,杯1,刀子1 | 東側台地最南端部の緩斜面に立地,半分以上をSI-238に切られている,カマド煙道部は緩やかに立ち上がる |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-238 | 第260図 | 85 | 9C前 | 長方 | 3.2×3.8×0.5 | N-22-W | 10.44 | 直急 | P1=42,P2=68<br>P3=45,P4=41 | カマド/N/－ | － | 25L-54 | SI-236 | 杯2,甑2,杯1,支 脚1,鉄鏃1,刀子1 | 東側台地最南端部の緩斜面に立地,出入口ピット,カマド周辺から対壁にかけ床硬化面,カマド煙道部は大きく壁外に張り出し緩やかに立ち上がる |
| SI-239 | 第261図 | 85 | 8C④ | 長方 | 3.1×3.9×0.4 | N-34-W | 10.59 | 直 | － | カマド/N/－ | － | 24K-59 | SK-289 | 杯2,高台付杯1,杯1 | 遺跡中央部に立地,床面中央に硬化面,カマド煙道部はやや壁外に張り出し急に立ち上がる |
| SI-240 | 第262図 | 85 | 9C前 | 方 | 2.7×3.1×0.4 | N-37-W | 7.61 | 直 | － | カマド/NW/－ | － | 24L-48 | 単独 | 杯4,甕1,杯1,甕2,石 製紡錘車1 | 遺跡中央部に立地,カマド周辺から対壁にかけ床硬化面,カマド煙道部は大きく壁外に張り出し急に立ち上がる,カマド内出土遺物多 |
| SI-241 | 第263図 | 86 | 9C後 | － | － | N-37-W | － | － | － | カマド/NW/－ | － | 25L-20 | 単独 | 杯1 | 遺跡中央部に立地,遺存状態は極めて悪く詳細不明 |
| SI-243 | 第263図 | 86 | 8C④ | 方 | 3.4×3.8×0.3 | N-14-W | 11.48 | 直 | | カマド/N/－ | － | 25K-72 | SB-043 | 杯3,甕1,甕2 | 遺跡中央部やや東側に立地,壁溝全周,カマド周辺から出入口ピットにかけ床硬化面,カマド煙道部は壁外に張り出し緩やかに立ち上がる |
| SI-244 | 第264図<br>第265図 | 87 | 8C② | 方 | 5.2×5.0×0.5 | N-62-E | 23.58 | | 新P1=53,P2=41<br>P3=47,P4=54<br>旧<br>P1=39,P2=52<br>P3=49,P4=45 | カマド/NE/－<br>旧カマド/NW/円 | 長方/Eコーナー<br>90×55×17　旧85×47×19 | 25K-60 | 単独 | 蓋1,杯5,高台付杯1,甑1,杯1,台付 甕1,甕3,支脚1,刀子2,砥石1 | 遺跡中央部やや東側に立地,建替住居,カマド移築,壁溝は旧住居で全周,建替後は部分的に壁溝を埋め土堤状のテラス及び出入口ピットを構築,カマド煙道部はほとんど壁外に張り出さず急に立ち上がる,貯蔵穴は同位置に向きを変えて構築 |
| SI-245A | 第266図 | 87 | 9C前 | 方 | 3.5×3.9×0.4 | N-12-W | 12.04 | 直 | － | カマド/N/－ | － | 25K-80 | SI-245B | 杯6,甕1,甑1,杯3,甕3,小型甕1 | 遺跡中央部やや東側に立地,壁溝部分周,カマド周辺か対壁直下にかけ床硬化面,カマド煙道部は壁外に張り出し緩やかに立ち上がる |
| SI-245B | 第267図 | 87 | 8C中～8C後 | 方 | (－×3.7×0.3) | N-21-W | － | 直 | － | カマド/N/－ | － | 25K-80 | SI-245A | 杯1,甕1 | 遺跡中央部やや東側に立地,SI-245Aに大きく切られる,壁溝部分周,カマド周辺か対壁直下にかけ床硬化面,カマド煙道部は壁外にやや張り出し急に立ち上がる |
| SI-246A | 第268図<br>第269図 | 87<br>・<br>88 | 9C前 | 隅丸方 | 3.2×3.3×0.4 | N-7-W | 8.13 | 直 | － | カマド/N/－ | － | 25K-90 | SI-246B | 杯6,甕2,甑1,杯1,甕1,小型甕3 | 遺跡中央部やや東側に立地,SI-246Bの拡張建替住居である,本跡の貼床除去後に旧住居の壁溝を検出,カマド煙道部は壁外に大きく張り出し直に立ち上がる |
| SI-246B | 第268図 | 88 | 9C前 | 隅丸方 | 2.4×2.4×0.5 | N-7-W | (4.87) | － | － | カマド/N/－ | － | 25K-90 | SI-246A | 遺物なし | 遺跡中央部やや東側に立地,壁溝及び出入口ピット・カマド火床のみ遺存,壁溝部分周 |
| SI-247 | 第270図 | 88 | 不明 | 方 | 3.2×3.3×－ | N-59-E | 9.41 | － | － | カマド/NE/－ | 楕円/Wコーナー<br>75×70×36 | 24L-08 | 単独 | 破片数点 | 遺跡中央部やや東側に立地,検出面ぎりぎりに床面が遺存,壁溝・,カマドの堀方・貯蔵穴・出入口ピット・硬化面を検出 |
| SI-248 | 第270図 | 88 | 9C後 | 方 | 2.7×3.0×－ | N-51-E | 7.19 | － | － | カマド/NE/－ | － | 24K-98 | 単独 | 杯2 | 遺跡中央部に立地,床面は締まりがなくカマドの堀方のみ検出,生活の痕跡はほとんど認められない |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-249 | 第270図 | 89 | 8C前 | 方 | 3.1×3.0×0.4 | N-39-W | 11.34 | 直 | − | カマド/NW/楕円 | − | 24K-88 | SK-304 | 杯1,甕1,小型甕1,刀子1,棒状鉄製品1 | 遺跡中央部やや北側に立地,壁溝は北・南コーナー部分で途切れる,出入口ピット,カマド煙道部は壁外に張り出し直に立ち上がる |
| SI-250 | 第271図 | 89 | 9C前 | 方 | 3.7×3.6×0.3 | N-86-W | 12.85 | 急 | − | カマド/W/− | − | 24N-63 | 単独 | 杯2,小型甕1,甕5,鉄釘1,椀形鍛冶滓1 | 西側最南端に立地,床面は凹凸が著しく壁溝は南東コーナーで大きく広がる,出入口ピット,カマド煙道部は壁外に張り出し穴状に残る,埋没途中の凹みで火を使用した痕跡あり |
| SI-251 | 第272図 | 89 | 不明 | 方 | (−×4.6×0.5) | N-42-E | − | 直 | P1=69,P2=23 | カマド/NE/− | − | 24N-52 | SI-252B | 高台付皿1 | 西側最南端に立地,ほとんどが調査区域外のため一部分の調査となった,カマド煙道部はほとんど壁外に張り出さない |
| SI-252A | 第272図 | 90 | 9C後 | 方 | (−×3.0×0.2) | N-2-W | − | 直 | − | カマド/N/不整 | − | 24N-52 | SI-252B SI-253 | 甕3,杯1 | 西側台地最南端に立地,床面硬化面・中央部にピットが検出され覆土内から遺物が出土した,カマド煙道部は大きく壁外に張り出す |
| SI-252B | 第272図 | 90 | 9C後 | 方 | (−×2.9×0.2) | N-2-W | − | 急 | − | カマド/N/− | − | 24N-52 | SI-251 SI-252A | 杯1 | 西側台地最南端に立地,床面カマド周辺から対壁にかけ硬化面,カマド煙道部は壁外に張り出す |
| SI-253 | 第273図 | 90 | 8C② | 方 | 3.3×3.2×0.3 | N-13-E | 11.48 | 直 | − | カマド/N/円 | − | 24N-42 | SI-252A | 蓋1,杯2,甕1,甕2,小型甕1,鉄製装飾金具1 | 西側台地最南端に立地,出入口ピット,幅広の壁溝が全周,床面カマド周辺から対壁にかけ硬化面,カマド煙道部は壁外に張り出し急に立ち上がる |
| SI-254 | 第274図 | 90 | 9C前 | 方 | (3.5×−×0.3) | N-20-E | − | 急 | P1=46,P4=52 | カマド/N/− | − | 24N-55 | SD-003 | 杯3,甕1,杯1,甕3,刀子1 | 西側台地最南端に立地,出入口ピット,住居形態やや歪,床面中央部に山砂・カマド周辺から対壁にかけ硬化面,カマド煙道部は壁外に張り出し緩やかに立ち上がる |
| SI-255 | 第275図 | 91 | 9C中 | 方 | 3.7×4.0×0.3 | N-80-E | 14.62 | 急 | − | カマド/E/楕円 | − | 24N-35 | SI-256 SD-003 | 杯2,長頸壺1,甕3,甑1,杯2,高台付杯1,支脚1,紡錘車1 | 西側台地最南端に立地,出入口ピット,壁溝全周,床面中央及び西側コーナーに若干の凹みあり,カマド周辺から出入口ピットにかけ硬化面,カマド煙道部は壁外に若干張り出し急に立ち上がる |
| SI-256 | 第276図 | 91 | 8C④ | 方 | (3.9×−×0.4) | N-34-E | − | 直 | P1=45,P4=48 | カマド/NE/− | − | 24N-45 | SI-255 SD-003 | 甕1 | 西側台地最南端に立地,出入口ピット,カマド周辺から出入口ピットにかけ硬化面,カマド遺存不良 |
| SI-257 | 第277図 第278図 | 91 | 9C後 | 方 | 3.6×3.7×0.4 | N-90-W | 13.21 | 直 | − | カマド/W/− 旧カマド/N/− | − | 24N-54 | SB-048 SK-307 | 壺1,甕1,甑1,杯11,皿3,支脚1,砥石1,鉄製品(刀子1,鏃1,閂1) | 西側台地最南端に立地,カマド移築,出入口ピット,カマド周辺から出入口ピットにかけ硬化面,カマド煙道部は壁外に大きく張り出し直に立ち上がる,旧カマドは火床部と堀方のみ遺存 |
| SI-258 | 第279図 | 92 | 8C② | 方 | 3.4×3.5×0.4 | N-3-W | 12.58 | 直 | − | カマド/N/− | − | 24N-20 | 単独 | 杯2,甕1,甕1,鉄製品(刀子1,名称不詳1) | 西側台地最南端に立地,出入口ピット,壁溝全周,床面中央部に硬化面,カマド煙道部は壁外に大きく張り出し直に立ち上がる |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | 燃焼施設［種別/位置/形］ | 貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-259 | 第279図 | 92 | ９Ｃ | 方 | 2.6×3.1×0.4 | N-83-W | (9.50) | 直 | － | カマド/W/－ | － | 24M-92 | SK-310 | 杯1,支脚1,刀子1 | 西側台地南端部に立地,出入口ピット,壁溝は幅広く全周,床面は貼床が厚くカマド周辺から出入口ピットにかけ硬化面,カマド煙道部は壁外に極端に張り出し緩やかに立ち上がる |
| SI-260 | 第280図 | 92 | ９Ｃ中 | 方 | 3.4×3.5×0.3 | N-95-W | (12.40) | 急 | P1=34 | カマド/W/－ | － | 23N-07 | SK-312<br>SD-035 | 杯2,杯1,小型甕2 | 西側台地南西端部に立地,他遺構及び撹乱により遺存やや不良,カマド煙道部は壁外に張り出しやや急に立ち上がる |
| SI-261 | 第280図 | 93 | ８Ｃ④ | 方 | 2.8×2.7×0.3 | N-4-W | 9.58 | 直 | － | カマド/N/－ | 円/NWコーナー<br>60×60×20 | 23M-97 | 単独 | 杯6,甕1,小型甕1,環状鉄製品1 | 西側台地南西端部に立地,出入口ピット,床面中央部に硬化面,壁溝はカマド左袖から貯蔵穴間で途切れる,カマド煙道部は壁外に張り出し急に立ち上がる |
| SI-262 | 第281図<br>第282図 | 93 | ９Ｃ中 | 方 | 3.5×3.5×0.2 | N-21-W | 11.83 | 急 | － | カマド/N/－ | 楕円/NWコーナー<br>83×70×23 | 23M-87 | SB-050 | 杯2,甕4,甑1,杯7,高台付杯1,皿2,甕2,小型甕5,刀子2,砥石1,軽石1 | 西側台地南西端部に立地,出入口ピット,床面に焼土3か所,壁溝はカマド左袖から貯蔵穴間で途切れる,カマド煙道部は壁外に張り出し緩やかに立ち上がる |
| SI-263 | 第283図 | 93 | ９Ｃ | 方 | 3.3×3.1×0.4 | N-10-E | 11.23 | 直 | － | カマド/N/－ | － | 23M-84 | 単独 | 甕1,砥石1 | 西側台地南西端部に立地,出入口ピット2か所,床面中央部に硬化面,壁溝は全周するが凹凸が激しい,カマド煙道部は壁外に張り出し急に立ち上がる |



## 第９表　奈良・平安時代竪穴状遺構観察表

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 規模［m］［長］×［幅］×［深］ | 主軸方位［°］ | 床面積［㎡］ | 壁［形状］ | 主柱穴深［cm］ | グリッド | 重複［旧］［新］ | 出土遺物［須恵器］［土師器］ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-014 | 第284図 | 94 | 奈良平安 | 隅丸方 | 2.4×2.3×0.3 | － | － | 緩 | － | 21L-17 | 単独 | － |
| SI-016 | 第284図 | 94 | 奈良平安 | － | 2.3×－×0.2 | － | － | 緩 | － | 21K-98 | 単独 | － |
| SI-022 | 第284図 | 94 | 奈良平安 | 長方 | 3.3×2.7×0.3 | N-114-E | － | 緩 | － | 23K-59 | SD-001 | － |
| SI-027 | 第284図 | 94 | 奈良平安 | 方 | 2.6×－×0.2 | N-89-E | － | 緩 | － | 24K-42 | 単独 | － |
| SI-120 | 第284図 | 94 | ８Ｃ末～９Ｃ初 | 不整 | 3.8×－×0.7 | － | － | 直 | － | 24I-27 | 単独 | 甑1,刀子1 |
| SK-005 | 第285図 | - | 奈良平安 | 不整 | 2.1×2.0×0.5 | N-31-W | － | 直急 | － | 21L-14 | 単独 | － |
| SK-006 | 第285図 | - | 奈良平安 | 楕円 | 2.9×2.4×0.5 | N-18-W | － | 直 | － | 21L-14 | 単独 | － |
| SK-008 | 第285図 | 94 | 奈良平安 | 不整 | 2.5×1.1×0.2 | N-24-E | － | 緩 | － | 22L-00 | 単独 | － |
| SK-016 | 第285図 | 94 | ９Ｃ中 | 隅丸長方 | 3.7×3.0×0.8 | N-23-E | － | 直急 | － | 21K-84 | 単独 | 杯1,高台付杯1 |
| SK-018 | 第285図 | 94 | 奈良平安 | 方 | 2.9×2.8×0.1 | N-3-E | － | 緩 | － | 23J-12 | 単独 | － |
| SK-257 | 第285図 | 95 | ９Ｃ末～10Ｃ初 | 隅丸長方 | (2.5)×2.2×0.3 | N-17-W | － | 急 | － | 24M-80 | SI-189 | 杯1 |

## 第10表　掘立柱建物跡・柵列・塀観察表

| 遺構No. | 時期 | 挿図 | 図版 | 規格[梁×桁] | 桁行長[m] | 梁行長[m] | 柱間寸法[m] | 面積[㎡] | 柱穴径[cm] | 柱穴深[cm] | 柱穴深平均[cm] | 桁行方位[°] | 位置[グリッド] | 備考 重複関係［新・旧］及び，出土遺物［須恵器・土師器］ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SB-001 | ? | 第286図 | 95 | 2間×（3間） | 5.7 | 3.3 | 1.4～2.5 | (19.00) | 30～40 | 16～44 | 24 | N-14-E | 22L-64 | 単独 |
| SB-002 | 9C前半 | 第286図 | 95 | 2間×3間 | 5.1 | 4.0 | 1.5～2.2 | 20.85 | 80～124 | 40～60 | 50 | N-81-E | 25J-95 | SD-014,SB-004，甕1 |
| SB-003 | ? | 第287図 | 95 | 2間×2間 | 3.4 | 3.2 | 1.3～2.0 | 11.13 | 70～100 | 24～42 | 34 | N-67-E | 25J-93 | SX-004 |
| SB-004 | 9C前半以降 | 第287図 | 95 | (3間)×(3間) | 4.4 | 4.2 | 1.4～1.6 | (18.48) | 24～40 | 24～36 | 30 | N-15-W | 25J-83 | SB-002 |
| SB-005 | 9C前半以降 | 第287図 | 95 | (2間)×(2間) | 4.0 | 3.9 | 1.8～2.1 | (15.4) | 82～100 | 14～34 | 27 | N-8-W | 25J-92 | SI-085,SB-006,SK-050 |
| SB-006 | 9C前半以降 | 第288図 | 95 | 2間×2間 | 3.9 | 3.3 | 1.6～2.0 | 13.23 | 70～94 | 28～50 | 41 | N-16-W | 25K-02 | SI-085,SB-005,SK-050 |
| SB-007 | 9C前半以降 | 第288図 | 95 | (3間)×(3間) | 6.3 | 4.6 | 1.0～2.5 | (29.45) | 74～128 | 22～74 | 44 | N-15-W | 25K-27 | SI-063 |
| SB-008 | ? | 第289図 | 95 | 3間×3間 | 5.9 | 4.0 | 1.1～2.0 | 23.90 | 52～130 | 20～60 | 40 | N-9-W | 25I-82 | 単独 |
| SB-009 | 9C後半以降 | 第289図 | 95 | 2間×3間 | 4.6 | 3.8 | 1.5～2.0 | 18.05 | 40～162 | 46～96 | 68 | N-75-E | 25I-73 | SI-105，杯1 |
| SB-010 | ? | 第290図 | 95 | 1間×2間 | 2.4 | 2.3 | 1.1～2.3 | 5.55 | 46～66 | 42～46 | 44 | N-0 | 25J-34 | 単独 |
| SB-011 | ? | 第290図 | 96 | 1間×1間 | 3.2 | 3.1 | 3.1～3.2 | 9.95 | 66～86 | 28～42 | 33 | N-0 | 23L-71 | SB-012 |
| SB-012 | ? | 第291図 | 96 | 2間×2間 | 4.8 | 3.5 | 1.6～2.4 | 16.70 | 64～90 | 24～34 | 30 | N-82-E | 23L-71 | SB-011 |
| SB-013 | 9C後半以降 | 第291図 | 96 | 2間×3間 | 5.0 | 3.6 | 1.5～1.9 | 17.70 | 70～94 | 30～54 | 39 | N-15-W | 23L-92 | SI-144,SB-014（不明），SB-015,SK-105，甕1 |
| SB-014 | 9C後半以降 | 第292図 | 96 | 2間×（2間） | 3.5 | 3.3 | 1.5～1.8 | (11.67) | 66～90 | 36～50 | 41 | N-10-W | 23L-82 | SI-144,SB-013（不明），SB-015,SK-105 |
| SB-015 | 10C代 | 第292図 | 96 | 3間×3間 | 4.7 | 4.6 | 1.4～1.7 | 21.10 | 58～114 | 26～54 | 38 | N-26-W | 23L-91 | SB-016，刀子1 |
| SB-016 | 10C代 | 第293図 | 96 | 2間×3間 | 4.3 | 3.0 | 1.3～1.7 | 13.33 | 70～110 | 28～52 | 40 | N-78-E | 23L-90 | SI-149,SB-015 |
| SB-018 | 9C前半以降 | 第293図 | 96 | (2間)×(2間) | 3.9 | 3.8 | 1.8～2.0 | – | 76～92 | 34～40 | 37 | N-17-W | 23L-52 | SI-134 |
| SB-019 | 9C前半以降 | 第293図 | 96 | (2間)×(4間) | 6.1 | 3.2 | 1.3～1.8 | (19.86) | 28～70 | 18～60 | 35 | N-78-E | 23M-02 | SI-136 |
| SB-020 | ? | 第294図 | 96 | (2間)×(1間) | 2.9 | 2.7 | 1.2～2.9 | 8.01 | 46～70 | 32～72 | 54 | N-75-E | 25I-68 | 単独 |
| SB-021 | ? | 第294図 | 96 | 1間×2間 | 2.6 | 2.6 | 1.1～2.6 | 7.38 | 42～88 | 50～60 | 54 | N-60-W | 25I-87 | 単独 |
| SB-022 | 8C後半以降 | 第294図 | 96 | 3間×3間 | 7.2 | 4.0 | 1.2～2.6 | 29.60 | 42～120 | 10～53 | 24 | N-1-W | 25I-61 | SB-024（不明），杯1 |
| SB-023 | ? | 第295図 | 96 | (2間) ×3間 | 4.7 | 3.6 | 1.4～1.8 | 17.54 | 30～60 | 8～28 | 18 | N-11-W | 25I-42 | SK-068,SK-069,SK-070 |
| SB-024 | ? | 第295図 | - | 2間×（3間） | 5.6 | 2.9 | 1.3～2.4 | 16.60 | 18～32 | 8～60 | 24 | N-84-E | 25I-52 | SB-022（不明），SB-25（不明），SK-056,SK-156 |
| SB-025 | ? | 第296図 | 96 | (2間) ×3間 | 6.2 | 4.0 | 1.8～2.5 | 25.52 | 50～150 | 40～50 | 46 | N-16-W | 25I-43 | SB-026,SK-063 |
| SB-026 | ? | 第296図 | 96 | – | 4.4 | - | 1.2～1.7 | – | 34～80 | 34～44 | 38 | N-82-E | 25I-43 | SB-025 |
| SB-027 | ? | 第296図 | 96 | (2間)×(2間) | 3.2 | 2.9 | 1.4～1.7 | 9.50 | 32～50 | 10～50 | 26 | N-75-E | 25I-22 | SK-083,SK-084,総柱 |
| SB-028 | ? | 第297図 | 97 | (2間) ×3間 | 5.2 | 3.5 | 1.6～1.9 | 18.85 | 32～48 | 26～50 | 40 | N-95-E | 24L-51 | 単独 |
| SB-029 | 9C中葉 | 第297図 | 97 | 2間×3間 | 6.3 | 3.9 | 1.9～2.5 | 24.75 | 24～34 | 30～54 | 39 | N-11-E | 24L-61 | 単独，甕1 |
| SB-030 | 9C後半以降 | 第298図 | 97 | 2間×2間 | 3.8 | 3.7 | 1.7～2.0 | 14.33 | 70～120 | 50～75 | 63 | N-7-W | 24L-81 | SB-031，皿1,甕1 |
| SB-031 | 9C中葉 | 第299図 | 97 | (2間)×(2間) | 4.8 | 3.6 | 1.7～2.5 | (18.40) | 56～90 | 16～50 | 34 | N-8-E | 24L-81 | SB-030 |
| SB-032 | 9C後半以降 | 第299図 | 97 | 2間×2間 | 4.8 | 4.1 | 1.8～2.4 | 19.82 | 70～94 | 26～52 | 37 | N-83-E | 23L-89 | SI-190，甕1 |
| SB-033 | ? | 第300図 | 97 | 2間×3間 | 5.0 | 4.0 | 1.5～2.2 | 20.40 | 64～130 | 18～52 | 41 | N-79-E | 23L-66 | 単独 |
| SB-034 | ? | 第300図 | 97 | 1間×1間 | 2.3 | 2.0 | 2.0～2.3 | 4.84 | 58～66 | 66～76 | 72 | N-11-E | 23L-59 | 単独 |
| SB-035 | 8C後半以降 | 第301図 | 97 | 2間×2間 | 4.5 | 4.4 | 2.1～2.5 | 20.50 | 58～92 | 20～75 | 43 | N-80-W | 24M-53 | SD-023，甕1,甕1 |
| SB-036 | ? | 第302図 | 98 | 2間×3間 | 4.8 | 3.9 | 1.5～2.0 | 19.70 | 75～110 | 60～85 | 74 | N-86-E | 24M-72 | 単独，鉄釘1,棒状鉄製品1 |
| SB-037 | 9C後半以降 | 第302図 | 98 | (2間)×(2間) | 5.0 | 4.5 | 2.0～2.6 | 23.40 | 60～90 | 30～60 | 45 | N-6-W | 24M-71 | SI-185,SI-188 |
| SB-038 | 10C代 | 第303図 | 98 | (2間)×(3間) | 4.8 | 4.6 | 1.6～2.3 | (23.00) | 52～85 | 26～52 | 34 | N-88-E | 24M-51 | SI-185,SI-188,SB-039（不明），SK-261,SD-023，杯1 |
| SB-039 | 10C代 | 第303図 | 98 | 2間×（3間） | 5.7 | 4.0 | 1.7～2.4 | 23.90 | 66～86 | 26～62 | 38 | N-85-E | 24M-51 | SB-038(不明),SK-248,SD-023，杯1 |
| SB-040 | 9C後半以降 | 第304図 | 98 | (2間)×(2間) | 3.5 | 3.3 | 1.5～1.9 | (11.40) | 50～110 | 22～65 | 44 | N-14-E | 24L-93 | SI-172，鉄製品（鏃1,名称不詳1） |
| SB-041 | 9C中葉 | 第304図 | 98 | 3間×3間 | 5.9 | 4.2 | 1.0～2.1 | 25.50 | 32～70 | 26～64 | 46 | N-81-W | 23M-27 | SK-266,SD-026 |
| SB-042 | ? | 第305図 | 98 | 2間×2間 | 3.6 | 3.3 | 1.5～1.7 | 12.10 | 32～50 | 22～45 | 34 | N-86-E | 23L-34 | SD-005,SK-272 |
| SB-043 | 9C前半以降 | 第305図 | 98 | (2間)×(2間) | 3.5 | 3.2 | 1.5～1.8 | (11.20) | 28～80 | 12～40 | 27 | N-0 | 25K-82 | SI-243 |
| SB-044 | ? | 第305図 | 99 | 1間×1間 | 2.5 | 2.4 | 2.4～2.5 | 5.95 | 30～40 | 30～44 | 37 | N-28-W | 24K-66 | SK-301 |
| SB-045 | ? | 第306図 | 99 | (2間)×(2間) | 4.5 | 4.3 | 2.0～2.4 | (19.15) | 74～122 | 44～64 | 50 | N-82-E | 24N-41 | 単独（一部調査区域外），燧鉄1 |
| SB-046 | ? | 第306図 | 99 | (2間)×(3間) | 4.2 | 3.3 | 1.2～1.7 | (14.05) | 28～92 | 8～30 | 20 | N-0 | 24N-43 | SB-047 |
| SB-047 | ? | 第307図 | 99 | 2間×2間 | 4.3 | 4.3 | 2.0～2.3 | 18.75 | 68～92 | 34～48 | 41 | N-3-E | 24N-43 | SB-046,SB-048A（不明），SB-048C（不明） |
| SB-048A | ? | 第308図 | 99 | 2間×2間 | 4.1 | 4.0 | 1.9～2.2 | 16.40 | 50～84 | 26～48 | 35 | N-3-W | 24N-44 | SB-046,SB-047（不明），SB-048C（不明） |
| SB-048B | 9C前半以降 | 第308図 | 99 | - | 5.1 | - | 1.4～2.2 | - | 36～66 | 30～44 | 36 | N-15-W | 24N-44 | SI-257 |
| SB-048C | 9C前半以降 | 第308図 | 99 | (2間)×(2間) | 4.3 | 4.1 | 2.0～2.3 | (17.63) | 34～76 | 14～40 | 29 | N-5-W | 24N-54 | SI-257,SB-047（不明）SB-048A（不明），SK-315 |
| SB-050 | 8C後半以降 | 第309図 | 99 | 2間×（3間） | 4.8 | 3.7 | 1.5～1.9 | 17.88 | 70～125 | 30～60 | 42 | N-10-W | 23M-87 | SI-262 |
| SB-051A | ? | 第310図 | 99 | 2間×2間 | 4.2 | 4.0 | 1.9～2.3 | 17.15 | 72～120 | 24～52 | 33 | N-86-W | 24N-24 | SB-051B（不明） |
| SB-051B | ? | 第310図 | 99 | (1間)×(2間) | 4.0 | 2.2 | 1.8～2.2 | - | 36～66 | 8～38 | 28 | N-8-E | 24N-24 | SB-051A（不明） |
| SB-052 | ? | 第310図 | 99 | (1間)×(1間) | 3.9 | 1.7 | 1.8～4.0 | - | 80～90 | 40～64 | 55 | N-90-W(E) | 23M-74 | 単独 |
| SB-053 | ? | 第311図 | 99 | 1間×（3間） | 5.8 | 4.5 | 1.7～4.5 | (26.95) | 75～100 | 26～85 | 58 | N-73-W | 22M-26 | 単独 |
| SB-054 | ? | 第311図 | 99 | (2間)×(2間) | 4.0 | 4.0 | 1.4～2.5 | (16.09) | 72～170 | 40～115 | 71 | N-21-E | 22M-15 | SD-010 |

## 第11表　奈良・平安時代土坑観察表

| 遺構No | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 長径[m] | 短径[m] | 深さ[m] | 壁[形状] | 位置[グリッド] | 出土（実測）遺物[須恵器][土師器] | 備考 重複[旧][新] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-010 | 第312図 | 100 | 奈良・平安 | 不整 | 2.6 | 1.7 | 0.5 | 直 | 24K-91 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-011 | 第312図 | 100 | 9C後 | 円 | 1.2 | 1.1 | 0.1 | 緩 | 22K-48 | (杯1) | SX-001 |
| SK-019 | 第312図 | 100 | 9C後 | 楕円 | 1.3 | 0.9 | 0.5 | 急 | 23J-36 | (杯1) | 単独 |
| SK-043 | 第312図 | 103 | 9C前 | 不整 | 0.8 | 0.8 | 0.3 | 緩 | 25K-28 | (杯1) | 単独 |
| SK-049 | 第312図 | − | 奈良・平安 | 円 | 1.0 | 0.9 | 0.4 | 急 | 25K-12 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-056 | 第312図 | − | 奈良・平安 | 円 | 0.8 | 0.8 | 0.4 | 急 | 25I-52 | 土器片数点 | SB-024 |
| SK-103 | 第312図 | 104 | 奈良・平安 | 隅丸長方 | 2.0 | 1.7 | 0.5 | 急 | 23L-22 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-107 | 第312図 | 104 | 9C後 | 楕円 | 1.1 | 0.8 | 0.3 | 急 | 23M-41 | (杯1) | 単独 |
| SK-108 | 第312図 | 104 | 奈良・平安 | 円 | 1.0 | 0.9 | 0.5 | 急 | 23M-41 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-109 | 第312図 | 104 | 奈良・平安 | 楕円 | 1.3 | 1.1 | 0.4 | 直 | 23M-21 | − | 単独 |
| SK-110 | 第312図 | 104 | 9C後 | 楕円 | 1.5 | 1.2 | 0.2 | 緩 | 23M-21 | (高台付杯1,高杯1) | 単独 |
| SK-111 | 第313図 | 105 | 奈良・平安 | 円 | 1.0 | 0.9 | 0.4 | 急 | 22M-17 | − | 単独 |
| SK-112 | 第313図 | 105 | 奈良・平安 | 円 | 0.9 | 0.8 | 0.4 | 直 | 22M-07 | − | 単独 |
| SK-113 | 第313図 | 105 | 奈良・平安 | 楕円 | 1.2 | 1.2 | 0.7 | 直 | 22M-06 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-115 | 第313図 | 105 | 奈良・平安 | 円 | 0.9 | 0.9 | 0.6 | 急 | 22M-08 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-125 | 第313図 | 105 | 奈良・平安 | 円 | 0.7 | 0.7 | 0.2 | 緩 | 22M-36 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-126 | 第313図 | − | 奈良・平安 | 隅丸長方 | 1.3 | 0.6 | 0.5 | 直 | 22M-37 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-127 | 第313図 | − | 奈良・平安 | 不整 | (1.3) | 1.2 | 0.3 | 緩 | 22M-37 | 土器片数点 | SI-161 |
| SK-130 | 第313図 | − | 奈良・平安 | 不整楕円 | 1.2 | 0.8 | 0.3 | 急 | 22M-49 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-138 | 第313図 | − | 奈良・平安 | 円 | 0.8 | 0.8 | 0.5 | 直 | 22M-25 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-142 | 第313図 | 105 | 9C中 | 不整楕円 | 0.6 | 0.5 | 0.3 | 急 | 22M-18 | (杯2) | 単独 |
| SK-239 | 第313図 | 106 | 奈良・平安 | 細長楕円 | 3.2 | 1.3 | 0.5 | 急 | 23L-48 | (刀子1) | 単独 |
| SK-244 | 第313図 | 106 | 9C後 | 円 | 1.4 | 1.3 | 0.6 | 直 | 24M-43 | (杯1墨書) | 単独 |
| SK-245 | 第314図 | 106 | 8C末～9C初 | 円 | 1.3 | 1.3 | 0.5 | 直 | 23M-42 | (甕1,長頸瓶1,杯1,鉄釘1) | 単独 |
| SK-246 | 第314図 | 106 | 9C後 | 円 | 1.4 | 1.3 | 0.5 | 直 | 24M-42 | (杯2) | 単独 |
| SK-247 | 第314図 | 106 | 8C中～8C末 | 円 | 1.1 | 1.1 | 0.6 | 直 | 24M-32 | (甕1,台付甕1,火舎1) | 単独 |
| SK-248 | 第314図 | 107 | 8C中～8C末 | 円 | 1.5 | 1.4 | 1.2 | 直 | 24M-41 | (甕1,陶器椀1,杯2墨書) | SB-039,SD-023 |
| SK-249 | 第315図 | − | 9C前 | 円 | 1.5 | 1.4 | 1.2 | 直 | 24M-81 | (杯1,甕1,杯1,甕1) | 単独,火葬墓? |
| SK-250 | 第315図 | 107 | 9C前 | 円 | 1.0 | 0.9 | 0.3 | 直 | 24M-64 | (甑1,杯1,不明鉄製品1) | SD-023 |
| SK-251 | 第315図 | − | 9C中 | 楕円 | 1.9 | 1.2 | 0.6 | 直 | 23M-59 | (杯1) | SD-024 |
| SK-252 | 第315図 | 107 | 9C中 | 隅丸長方 | 1.5 | 0.9 | 0.6 | 直 | 24M-70 | (甑1,高台付杯1) | 単独 |
| SK-253 | 第316図 | − | 9C後 | 円 | 1.5 | 1.4 | 0.8 | 急 | 23M-46 | (杯1,刀子1) | SD-026 |
| SK-255 | 第316図 | − | 奈良・平安 | 楕円 | 1.5 | 1.1 | 0.1 | 緩 | 24M-60 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-256 | 第316図 | 107 | 9C中 | 円 | 0.9 | 0.8 | 0.2 | 緩 | 23M-79 | (杯1,甕1) | SD-024 |
| SK-264 | 第316図 | − | 9C前 | 円 | 1.7 | 1.4 | 0.5 | 急 | 23M-55 | (杯1,甕1) | 単独 |
| SK-265 | 第316図 | 107 | 9C前 | 円 | 0.8 | 0.7 | 0.2 | 急 | 23M-44 | (甕1,椀形鍛冶滓1) | 単独 |
| SK-276 | 第316図 | 108 | 奈良・平安 | 隅丸長方 | 1.5 | 1.0 | 0.3 | 急 | 23M-25 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-293 | 第317図 | 108 | 奈良・平安 | 円 | 1.0 | 0.9 | 0.3 | 直 | 24L-09 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-294 | 第316図 | 108 | 奈良・平安 | 円 | 1.0 | 1.0 | 0.3 | 急 | 25K-90 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-296A | 第317図 | 109 | 奈良・平安 | 円 | 1.3 | (1.3) | 0.2 | 緩 | 24L-09 | 土器片数点 | SK-296B |
| SK-296B | 第317図 | 109 | 奈良・平安 | 円 | 1.6 | (1.4) | 0.2 | 緩 | 24L-09 | 土器片数点 | SK-296A |
| SK-297 | 第317図 | 109 | 奈良・平安 | 円 | 0.8 | 0.8 | 0.2 | 緩 | 25L-00 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-299 | 第317図 | 109 | 奈良・平安 | 円 | 0.6 | 0.5 | 0.1 | 緩 | 24K-97 | 土器片数点 | 単独 |
| SK-307 | 第317図 | 110 | 9C後 | 楕円 | 1.3 | 1.1 | 0.4 | 直急 | 24N-64 | (杯4,甕3,小型甕1) | SI-257 |
| SK-308 | 第317図 | 110 | 9C中 | 円 | 1.5 | 1.4 | 0.8 | 直 | 24N-41 | (杯2,杯2,高台付皿1,小型甕1) | 単独 |
| SK-311 | 第318図 | 110 | 奈良・平安 | 楕円 | 1.3 | 1.1 | 0.9 | 直 | 24N-30 | − | 単独 |
| SK-315 | 第318図 | − | 9C前 | 楕円 | 1.2 | (0.9) | 0.3 | 緩 | 24N-44 | (甕1) | SB-048A・C |

## 第12表　奈良・平安時代遺構出土土器計測表

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-001 | 1 | 土師 | 杯 | 10 | − | (7.0) | (2.5) | − | 黄褐色/黄褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面剥離顕著,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[下層] |
| SI-001 | 2 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ナデ /タキタ,ナデ | 還元やや不良,肩部片,千葉産　[上層] |
| SI-001 | 3 | 土師 | 甕 | 5 | (19.0) | − | (5.1) | − | 黒褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ヘラナデ,ナデ | 口縁部片,内面煤付着,常総甕　[中層] |
| SI-002 | 1 | 須恵 | 甑 | 20 | − | (13.0) | (12.8) | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石,石英 | ヘラナデ/ヘラケズリ,ヘラナデ | 底部5孔,千葉産　[下層・床直] |
| SI-003 | 1 | 須恵 | 杯 | 20 | − | (7.6) | (2.3) | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面中央灰色・両外側褐色の層をなす,体部中位から底部片,底外全面手持ちヘラケズリ,千葉産　[床直] |
| SI-003 | 2 | 須恵 | 杯 | 40 | − | 7.6 | (3.1) | − | 黒色/黒色 | 砂粒,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後ほぼ全面手持ちヘラケズリ,千葉産　[床直] |
| SI-003 | 3 | 土師 | 杯 | 95 | 12.0 | 6.4 | 3.3 | 12.4 | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部内外面墨書あり『上万』,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[下層] |
| SI-003 | 4 | 土師 | 杯 | 10 | (24.4) | (10.4) | (7.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 大型,内面磨耗・剥離顕著で煤付着　[中層] |
| SI-003 | 5 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰黄褐色/灰黄褐色 | 長石,砂粒 | ナデ/タタキ | 胴部中位片,千葉産　[床直] |
| SI-003 | 6 | 土師 | 甕 | 10 | (22.0) | − | (7.7) | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 口縁部から胴部上位片,常総甕　[上層] |
| SI-003 | 7 | 須恵 | 甕 | 15 | (34.4) | − | (22.5) | 胴部(37.8) | 黒褐色/黒褐色 | 砂粒,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,口縁部から胴部中位片,内外面煤付着,千葉産　[下層,床面] |
| SI-003 | 8 | 須恵 | 甕 | 10 | − | (14.4) | (8.7) | − | 黒褐色/黒褐色 | スコリア,長石,砂粒 | ヘラナデ/ヘラケズリ,ヘラナデ | 還元不良,内外面二次被熱による煤付着,千葉産　[中層,床直] |
| SI-004 | 1 | 須恵 | 杯 | 55 | (12.7) | 7.0 | 3.9 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元やや不良,底外回転ヘラ切り後外周手持ちヘラケズリ,千葉産　[中層] |
| SI-004 | 2 | 須恵 | 杯 | 95 | 12.2 | 6.8 | 3.9 | 12.4 | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,還元不良,底外全面手持ちヘラケズリ,内面油煙付着,灯明具として転用,千葉産　[上層] |
| SI-004 | 3 | 土師 | 杯 | 80 | 12.0 | 6.8 | 4.6 | 12.2 | 橙褐色/橙褐色 | スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,体部内外面線刻あり『+』,底外全面一方向手持ちヘラケズリ　[中層] |
| SI-004 | 4 | 土師 | 杯 | 50 | (12.6) | 8.0 | (3.9) | − | 黒褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外全面回転ヘラケズリ,底外2か所に直線的なヘラ書きあり　[床直] |
| SI-004 | 5 | 須恵 | 甕 | 10 | − | (14.0) | (4.5) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,砂粒 | ヘラナデ/ヘラナデ | 還元不良,底部片,胴部外面下位と底外にヘラ書きあり『+』,千葉産　[中層] |
| SI-004 | 6 | 須恵 | 小型甕 | 55 | 13.6 | (8.5) | 14.6 | 胴部(14.7) | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/タタキ,ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,底外一部に籾の圧痕あり,外面二次被熱により薄く剥離・煤付着,千葉産　[中層] |
| SI-004 | 7 | 須恵 | 甕 | 75 | 19.6 | (13.3) | 21.0 | 胴部22.1 | 黄褐色/黄褐色 | 砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外線刻あり詳細不明,千葉産　[下層] |
| SI-004 | 8 | 土師 | 甕 | 35 | − | 8.8 | (12.0) | − | 橙褐色/褐色 | 石英,長石,雲母 | ヘラナデ/ミガキ | 胴部下位から底部にかけて遺存,底外木葉痕あり,二次被熱により外面煤付着,常総甕　[中層] |
| SI-004 | 9 | 土師 | 甕 | 60 | 19.8 | 8.7 | 32.8 | 胴部(22.9) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ヘラナデ/ヘラナデ,ミガキ | 二次被熱により内面剥離,外面煤付着顕著,常総甕　[中層] |
| SI-004 | 10 | 土師 | 甕 | 95 | 15.5 | 5.5 | 18.0 | 胴部16.1 | 橙褐色/橙褐色 | 砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ﾊｹ | 二次被熱による器面の剥離が認められ煤が部分的に付着,底外木葉痕あり,三河産　[下層] |
| SI-004 | 11 | 土師 | 甕 | 50 | (20.6) | (11.2) | 31.0 | 胴部(23.1) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒 | ヘラナデ/ナデ,ミガキ | 内外面ともに器面の荒れが顕著,常総甕　[中層] |
| SI-006 | 1 | 土師 | 杯 | 15 | (15.0) | − | (3.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底部欠損,内外面ともやや磨耗　[中層] |
| SI-006 | 2 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 黒灰色/黒灰色 | 長石,砂粒 | ナデ/ナデ | 還元不良,口縁部片,千葉産　[一括] |
| SI-006 | 3 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 褐色/褐色 | 長石 | − | 底外ヘラ書きあり詳細不明　[一括] |
| SI-008 | 1 | 土師 | 杯 | 80 | 13.4 | 6.3 | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外一方向手持ちヘラケズリ後外周手持ちヘラケズリ,底外ヘラ書きあり『−』　[カマド内] |
| SI-008 | 2 | 土師 | 杯 | 65 | 14.4 | 6.8 | 4.2 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面二次被熱により煤付着,底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ　[カマド内] |
| SI-008 | 3 | 土師 | 高台付皿 | 50 | (14.5) | (8.1) | 4.3 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 体部外面墨書あり『加』,器面の劣化やや顕著,貼付高台　[カマド内] |
| SI-008 | 4 | 須恵 | 甕 | 35 | − | − | (24.3) | 胴部(43.4) | 灰褐色/灰赤褐色 | 長石,スコリア | ヘラナデ/タタキ | 還元やや不良,胴部のみ,千葉産　[カマド内,中層] |
| SI-008 | 5 | 須恵 | 甕 | 15 | (26.2) | − | (15.7) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒,白色針状物質 | ナデ/タタキ,ナデ,ミガキ | 口縁部から胴部中位片,破断面劣化,内外面ややや磨耗,千葉産[カマド内] |
| SI-009 | 1 | 土師 | 甕 | 70 | 20.6 | − | (23.5) | 胴部(22.4) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕　[カマド内,下層] |
| SI-009 | 2 | 土師 | 小型甕 | 30 | (14.4) | − | (13.4) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母 | ヘラナデ/ヘラケズリ | 底部欠損,内外面部分的に煤付着,在地甕　[カマド内,下層] |
| SI-009 | 3 | 土師 | 甕 | 10 | (20.0) | − | (9.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部から胴部上位片,内外面二次被熱により全面に煤付着,在地甕　[下層,床直] |
| SI-010 | 1 | 土師 | 杯 | 20 | (13.0) | (6.4) | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 底外一方向の手持ちヘラケズリ　[カマド内,遺構外] |
| SI-010 | 2 | 土師 | 杯 | 30 | (13.4) | (6.0) | 4.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒 | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ　[カマド内] |
| SI-010 | 3 | 土師 | 杯 | 65 | (13.5) | 6.2 | 4.4 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒 | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り,内外面剥離顕著　[カマド内] |
| SI-010 | 4 | 土師 | 高台付杯 | 95 | 14.4 | 7.0 | 5.5 | − | 赤褐色/橙褐色 | 長石 | ミガキ/ナデ | 内面下半部剥離顕著,底外回転糸切り後高台貼付[カマド内] |
| SI-010 | 5 | 土師 | 甕 | 20 | (20.0) | − | (21.7) | 胴部(22.2) | 黄褐色/黄褐色 | 長石,石英,雲母 | ヘラナデ/ヘラナデ | 底部欠損,内外面ともやや磨耗　[カマド前] |
| SI-010 | 6 | 土師 | 甑 | 25 | (26.4) | − | (15.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,雲母,砂粒 | ヘラナデ/ヘラナデ | 口縁部から胴部中位片,外面二次被熱により部分的に煤付着,把手あり　[カマド内,床面] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-010 | 7 | 土師 | 甑 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 把手三角形　[カマド内] |
| SI-010 | 8 | 土師 | 甑 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ | 底部片5孔,底外回転糸切り後ヘラケズリ　[下層] |
| SI-011 | 1 | 須恵 | 杯 | 65 | (13.0) | 7.4 | 4.2 | − | 灰白色/灰白色 | スコリア,長石,石英 | ナデ/ナデ | 底外全面回転ヘラケズリ,千葉産　[カマド内] |
| SI-011 | 2 | 須恵 | 杯 | 95 | 12.9 | 7.0 | 4.0 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底外全面手持ちヘラナデ,千葉産　[カマド周辺,床直] |
| SI-011 | 3 | 須恵 | 杯 | 85 | 12.9 | 6.4 | 4.2 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ | 還元やや不良,底外全面回転ヘラケズリ,歪み顕著,千葉産[カマド前] |
| SI-011 | 4 | 須恵 | 杯 | 100 | 12.9 | 6.0 | 4.2 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 還元やや不良,底外回転ヘラ切り後全面手持ちﾅｽﾞﾘ,歪みやや顕著,千葉産[カマド内] |
| SI-011 | 5 | 須恵 | 杯 | 55 | (13.1) | 6.8 | 4.4 | − | 黒色/黒褐色 | 長石,白色針状物質,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産[下層] |
| SI-011 | 6 | 土師 | 杯 | 40 | (14.2) | (6.4) | 5.1 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,底外全面回転ヘラケズリ[下層] |
| SI-011 | 7 | 須恵 | 甕 | 20 | (20.8) | − | (15.5) | 胴部(21.6) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア,砂粒 | ナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,外面二次被熱により煤付着,千葉産[カマド内,床直] |
| SI-011 | 8 | 土師 | 小型甕 | 50 | − | 5.8 | (9.2) | − | 橙褐色/黒褐色 | 長石,白色針状物質,石英 | ヘラナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕[中層] |
| SI-012 | 1 | 須恵 | 甕 | 20 | (21.0) | − | (9.5) | − | 灰白色/緑灰色 | − | ナデ/タタキ,ナデ | 内面頸部から外面肩部にかけて自然釉付着,内面当て具痕あり,東海産[床直] |
| SI-012 | 2 | 土師 | 甑 | 35 | (31.6) | (15.8) | 26.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/ヘラナデ | 内外面ともに二次被熱による煤付着[中層] |
| SI-013 | 1 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.2) | (6.4) | 4.2 | − | 黒色/黒褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 還元不良,内面二次被熱により煤付着,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[床面,一括] |
| SI-013 | 2 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.8 | 9.0 | 3.9 | − | 灰白色/灰白色 | スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元やや不良,内外面磨耗顕著,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産[下層] |
| SI-013 | 3 | 須恵 | 杯 | 100 | 14.1 | 8.0 | 4.1 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外一方向手持ちヘラケズリ,体部外面及び底外線刻あり,口縁部内外面油煙付着,灯明具として転用,茨城産[下層] |
| SI-013 | 4 | 須恵 | 杯 | 15 | − | (8.0) | (2.0) | − | 青灰色/青灰色 | 長石,白色針状物質,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ,南比企産[下層] |
| SI-013 | 5 | 土師 | 鉢 | 10 | (21.6) | − | (4.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ヘラナデ/ヘラナデ | 破断面劣化顕著　[一括] |
| SI-017 | 1 | 土師 | 杯 | 40 | (12.6) | (7.6) | 4.5 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り,二次被熱により煤付着[上層] |
| SI-017 | 2 | 土師 | 杯 | 75 | 14.0 | 7.2 | 4.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ[中層] |
| SI-017 | 3 | 土師 | 杯 | 30 | (13.0) | (7.0) | 3.6 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転糸切り後全面手持ちヘラケズリ[中層] |
| SI-017 | 4 | 灰釉陶器 | 高台付椀 | 20 | − | 9.0 | − | − | 灰白色/灰白色 | 長石 | ナデ/ナデ | 折戸53号窯式。内面一部に灰釉付着,底外回転糸切り後高台貼付,転用硯,東海産　[下層] |
| SI-018 | 1 | 土師 | 杯 | 55 | (12.4) | 5.2 | 4.3 | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,雲母,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 器面劣化,底外回転糸切り後外周ヘラケズリ[床面] |
| SI-018 | 2 | 土師 | 杯 | 95 | 13.2 | 6.4 | 4.0 | − | 橙褐色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ　[上層] |
| SI-018 | 3 | 土師 | 杯 | 50 | (14.9) | 7.2 | 6.0 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒 | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 内面煤付着顕著,底外回転糸切り後全面一方向手持ちヘラケズリ[床直,中層] |
| SI-018 | 4 | 土師 | 杯 | 95 | 12.9 | 6.2 | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り後無調整　[中層] |
| SI-018 | 5 | 土師 | 杯 | 10 | (12.2) | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | − | ナデ/ナデ | 底部欠損,器面磨耗顕著,口縁部内外面油煙付着,灯明具として転用　[下層] |
| SI-018 | 6 | 土師 | 高台付皿 | 85 | 14.6 | − | 3.5 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ | 高台部欠損,底外回転糸切り後高台貼付　[中層] |
| SI-018 | 7 | 土師 | 高台付皿 | 45 | − | (7.0) | (3.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 口縁部欠損,底外回転糸切り後高台貼付　[中層] |
| SI-018 | 8 | 土師 | 杯 | 75 | 16.6 | 8.1 | 6.7 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[中層] |
| SI-018 | 9 | 須恵 | 甕 | 10 | − | 14.0 | (3.3) | − | 黒褐色/黒褐色 | 砂粒,スコリア,白色針状物質 | ヘラナデ/ヘラケズリ | 底部片,還元不良,底外ヘラ書きあり,千葉産[下層] |
| SI-018 | 10 | 土師 | 小型甕 | 90 | 9.4 | 7.0 | 7.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,長石 | ナデ/ヘラナデ | 底外無調整,在地甕　[床面] |
| SI-018 | 11 | 土師 | 甕 | 10 | (18.0) | − | (7.0) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ | 内外面二次被熱により煤付着顕著　[床直] |
| SI-018 | 12 | 土師 | 甕 | 10 | (17.4) | − | (6.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒 | ヘラナデ/ヘラケズリ,ナデ | 破断面劣化,在地甕[中層] |
| SI-019 | 1 | 土師 | 高台付皿 | 70 | (14.3) | 7.4 | 3.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 体部外面墨書あり『加』,内面底外回転糸切り後高台貼付　[中層] |
| SI-019 | 2 | 土師 | 高台付杯 | 40 | − | − | (2.4) | − | 黄褐色/黄褐色 | スコリア | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部及び高台部欠損,底外回転糸切り後高台貼付,高台内回転ヘラケズリ　[下層] |
| SI-019 | 3 | 須恵 | 甑 | 15 | (22.4) | − | (13.0) | − | 赤褐色/赤褐色 | 雲母,砂粒 | ヘラナデ/タタキ,ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,二次被熱により部分的に煤付着,千葉産　[カマド内] |
| SI-020 | 1 | 須恵 | 杯 | 45 | (13.6) | 7.4 | 4.3 | − | 褐色/褐色 | 雲母,砂粒 | ナデ/ナデ | 還元不良,内外面磨耗顕著,底外回転ヘラ切り後全面手持ちヘラケズリ,千葉産　[カマド内,中層] |
| SI-020 | 2 | 須恵 | 杯 | 85 | 13.8 | 6.4 | 4.2 | − | 黒褐色/褐色 | スコリア | ナデ/ナデ | 打ち欠き土器?,還元不良,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,二次被熱により器面劣化,千葉産　[カマド前] |
| SI-020 | 3 | 土師 | 杯 | 95 | 11.5 | 6.8 | 3.7 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 打ち欠き土器?,底外静止糸切り後外周回転ヘラケズリ,口縁部の一部に油煙付着　[中層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-020 | 4 | 土師 | 杯 | 55 | (13.2) | 7.0 | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 打ち欠き土器?,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[カマド脇] |
| SI-020 | 5 | 土師 | 杯 | 40 | − | 7.2 | (2.6) | − | 黒色/橙褐色 | スコリア | ミガキ /ヘラケズリ,ナデ | 打ち欠き土器?,内面黒色処理,体部外面墨書あり,詳細不明,底外全面回転ヘラケズリ　[カマド内] |
| SI-020 | 6 | 土師 | 高台付皿 | 95 | 13.0 | 6.6 | 3.3 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 打ち欠き土器,貼付高台　[カマド内・脇] |
| SI-020 | 7 | 土師 | 高台付皿 | 90 | 13.5 | 6.6 | 3.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 打ち欠き土器,貼付高台　[カマド内] |
| SI-020 | 8 | 土師 | 高台付皿 | 30 | (14.2) | (7.2) | (2.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母 | ナデ/ナデ | 内外面磨耗顕著　[中・下層] |
| SI-020 | 9 | 須恵 | 甕 | 15 | (18.7) | − | (8.7) | − | 黒褐色/黒褐色 | 砂粒,雲母,スコリア | ヘラナデ,ナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,口縁部から頸部片,内外面二次被熱により煤付着顕著,千葉産　[カマド内] |
| SI-020 | 10 | 須恵 | 甕 | 15 | − | (15.2) | (10.2) | − | 黒褐色/黒褐色 | 砂粒,スコリア | ナデ/タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,底内剥離,千葉産　[カマド内,中層] |
| SI-021 | 1 | 土師 | 杯 | 90 | 13.6 | 8.1 | 4.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長 石,石 英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外静止糸切り後外周回転ヘラケズリ　[下層] |
| SI-021 | 2 | 土師 | 小型甕 | 45 | (14.0) | 7.3 | 16.5 | 胴部(14.8) | 赤褐色/黒褐色 | 長石,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ミガキ,ヘラケズリ,ナデ | 底外一方向手持ちヘラケズリ　[床面,下層] |
| SI-021 | 3 | 須恵 | 甕 | 30 | − | 17.4 | (15.8) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア | ヘラナデ/タタキ,ナデ | 還元やや不良,底内剥離顕著,内面やや劣化,茨城産　[中層] |
| SI-021 | 4 | 須恵 | 大型甕 | 50 | 45.0 | − | (72.5) | 胴部(67.0) | 青灰色/青灰色 | 長石,雲母 | ヘラナデ,ナデ/タタキ,ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底,頸部外面櫛描波状及び平行沈線文,内面当具痕あり,東海産　[床面,中層] |
| SI-023 | 1 | 須恵 | 杯 | 90 | 13.2 | 6.6 | 4.5 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,底外全面手持ちヘラケズリ,千葉産　[下層] |
| SI-023 | 2 | 須恵 | 杯 | 100 | 13.2 | 6.8 | 4.5 | − | 橙褐色/黒褐色 | スコリア,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,底外全面一方向手持ちヘラケズリ,二次被熱により外面煤付着,千葉産　[中層] |
| SI-023 | 3 | 須恵 | 杯 | 30 | (14.2) | (7.7) | 4.1 | − | 黒褐色/黒色 | 長石,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,器面やや劣化,底外全面一方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[床面] |
| SI-023 | 4 | 土師 | 杯 | 70 | 14.5 | 7.2 | 4.2 | − | 黒色/赤褐色 | スコリア | ミガキ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 打ち欠き土器,内面黒色処理,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[床面] |
| SI-023 | 5 | 土師 | 杯 | 85 | 12.9 | 5.3 | 4.6 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外ヘラ書きあり『×』,全面一方向手持ちヘラケズリ　[下層] |
| SI-023 | 6 | 須恵 | 壺 | 35 | − | − | (17.4) | 胴部(23.5) | 灰色/灰褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 口頸部及び底部欠損,外面肩部全面に灰釉付着,東海産 [床直] |
| SI-023 | 7 | 須恵 | 甕 | 15 | (31.0) | − | (13.2) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/タタキ,ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,二次被熱により内外面煤付着,内面当具痕あり,千葉産　[中層] |
| SI-023 | 8 | 須恵 | 甕 | 20 | − | (15.0) | (18.9) | − | 褐色/灰褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/タタキ,ナデ,ヘラナデ | 還元不良,内面指頭痕顕著,二次被熱により内外面煤付着,千葉産　[下層] |
| SI-023 | 9 | 土師 | 小型甕 | 20 | (12.4) | − | (5.2) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/ナデ | 二次被熱により内外面煤付着・赤色変色,在地甕　[床面] |
| SI-023 | 10 | 土師 | 小型甕 | 15 | (13.8) | − | (6.1) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/ヘラナデ | 二次被熱により内外面赤色変色・部分的に煤付着,在地甕　[中層] |
| SI-024 | 1 | 須恵 | 高台付盤 | 85 | 22.4 | 12.8 | 4.8 | − | 灰褐色/灰色 | 雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラケズリ後高台貼付,外面一部に煤付着,茨城産　[床面] |
| SI-024 | 2 | 須恵 | 甕 | 10 | − | 9.2 | (2.2) | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲 母,長 石,石英,砂粒 | ナデ/ナデ | 底部片,底外回転ヘラ切り後外周手持ちヘラケズリ,茨城産　[床面] |
| SI-030 | 1 | 土師 | 高台付皿 | 30 | (13.4) | 7.2 | 2.7 | − | 黒褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ミガキ,ヘラナデ/ナデ | 底外回転糸切り後高台貼付,内外面煤付着　[中層] |
| SI-031 | 1 | 土師 | 杯 | 90 | 12.8 | 6.3 | 4.4 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面墨書あり『丙』,内外面磨耗顕著,底外全面手持ちヘラケズリ　[床直] |
| SI-031 | 2 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 黄灰色/暗黄灰色 | − | ナデ/タタキ | 内面磨耗顕著,硯として転用,東海産　[下層] |
| SI-033 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | − | 6.6 | (2.8) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部欠損,還元不良,底外ヘラ切り後全面手持ちヘラケズリ,千葉産　[上・下層,カマド内] |
| SI-033 | 2 | 土師 | 杯 | 95 | 12.6 | 6.4 | 4.1 | − | 橙褐色/赤褐色 | スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により半分程度赤変,底部やや上げ底気味,底外全面手持ちヘラケズリ　[カマド前] |
| SI-033 | 3 | 土師 | 杯 | 30 | (13.2) | (6.4) | 4.0 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ,[中層,カマド右袖前] |
| SI-033 | 4 | 土師 | 杯 | 35 | (13.4) | (6.0) | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ,[カマド内] |
| SI-033 | 5 | 土師 | 杯 | 10 | (13.8) | − | (3.4) | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部欠損,体部外面墨書あり『加』,内外面煤付着　[下層] |
| SI-033 | 6 | 須恵 | 甕 | 10 | (21.2) | − | (7.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,口縁部から胴部上位片,千葉産　[上・中層,カマド内] |
| SI-033 | 7 | 土師 | 甕 | 20 | (21.0) | − | (10.4) | − | 褐色/褐色 | 雲母,砂粒 | ヘラナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部から胴部上位片,内外面二次被熱により煤付着顕著,在地甕　[カマド前] |
| SI-033 | 8 | 土師 | 甕 | 20 | (18.8) | − | (14.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部から胴部中位片,器面やや荒れている,在地甕[カマド内,中・下層] |
| SI-035 | 1 | 須恵 | 杯 | 98 | 12.1～12.9 | 8.2 | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 歪み大,底外ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[床面] |
| SI-035 | 2 | 土師 | 杯 | 70 | 10.8 | 6.3 | 3.3 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 全面回転ヘラケズリ,内外面二次被熱により煤付着　[床面,中層] |
| SI-035 | 3 | 土師 | 杯 | 100 | 11.2 | 6.4 | 4.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母 | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り後無調整,　[カマド内] |
| SI-035 | 4 | 土師 | 甕 | 85 | (17.6) | 7.4 | 16.9 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外全面ヘラケズリ,内外面二次被熱により煤付着顕著　[カマド内] |
| SI-035 | 5 | 土師 | 甕 | 35 | − | 6.4 | (9.8) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,白色針状物質 | ヘラケズリ/ヘラケズリ | 小型,底外全面ヘラケズリ,外面二次被熱により煤付着顕著　[カマド内] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-035 | 6 | 須恵 | 甑 | 15 | − | (14.2) | (8.5) | − | 褐色/褐色 | 砂 粒,長 石,白色針状物質 | ヘラナデ/タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,胴部下位片,内外面二次被熱により煤付着,千葉産 [床直] |
| SI-040 | 1 | 土師 | 杯 | 95 | 15.1 | 7.8 | 5.9 | − | 赤褐色/暗赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/ヘラナデ,ヘラケズリ | 底外全面ヘラケズリ,外面二次被熱により煤付着,内面剥離劣化顕著 [カマド内] |
| SI-040 | 2 | 土師 | 杯 | 25 | (13.0) | (6.0) | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,白色針状物質,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転ヘラケズリ,内外面二次被熱により煤付着, 内面一部剥離あり [一括] |
| SI-040 | 3 | 土師 | 杯 | 70 | 13.3 | 7.0 | 4.2 | − | 橙褐色/褐色 | 長石,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ | 底外回転ヘラケズリ,外面煤付着,打ち欠き土器? [床直,カマド内] |
| SI-040 | 4 | 土師 | 杯 | 40 | (14.2) | (6.4) | 5.0 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長 石,雲 母,白色針状物質 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転糸切り後無調整,内外面二次被熱により煤付着顕著 [カマド内] |
| SI-040 | 5 | 土師 | 杯 | 90 | 13.4 | 7.4 | 4.6 | − | 暗赤褐色/黒褐色 | スコリア,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外静止糸切り,外面二次被熱により煤付着顕著,内面体部中位から底内にかけ激しく剥離,打ち欠き土器? [床面] |
| SI-040 | 6 | 土師 | 杯 | 55 | 14.0 | 7.4 | 4.4 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面やや磨耗,外面二次被熱による赤変一部にあり底外回転糸切り後一部外周手持ちヘラケズリ, [床直,下層] |
| SI-040 | 7 | 土師 | 杯 | 55 | 13.4 | 5.8 | 3.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 体部外面墨書あり『水』,打ち欠き土器,底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ,内外面煤付着 [カマド内] |
| SI-040 | 8 | 須恵 | 甕 | 10 | (22.0) | − | (12.4) | − | 褐色/赤褐色 | 長 石,雲 母,砂粒 | ヘラナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,口縁部から頸部にかけて赤彩を施したように赤い,千葉産 [下層,床面] |
| SI-040 | 9 | 須恵 | 甕 | 5 | (21.2) | − | (6.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ヘラナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,内面二次被熱により部分的に剥離,千葉産 [下層,床面] |
| SI-040 | 10 | 須恵 | 甕 | 10 | − | (12.8) | (4.7) | − | 灰色/灰色 | 砂粒,スコリア | ヘラナデ/ヘラケズリ | 還元やや不良,底外全面ヘラケズリ,籾の圧痕かすかにあり,千葉産 [カマド内] |
| SI-040 | 11 | 土師 | 小型甕 | 5 | (12.6) | − | (4.0) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕 [中層] |
| SI-040 | 12 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ヘラナデ/タタキ | 外面黒斑あり,胴部内面当て具痕, 内面口縁部剥離顕著, 千葉産 [床面] |
| SI-040 | 13 | 土師 | 甕 | 20 | (19.6) | − | (10.2) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/ヘラケズリ | 内外面器面劣化,二次被熱により煤付着,在地甕 [下層,床面] |
| SI-040 | 14 | 須恵 | 甑 | 10 | (26.4) | − | (9.4) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒 | ヘラナデ/タタキ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により赤く変色,千葉産 [床面] |
| SI-041 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.7) | (8.5) | 4.6 | − | 灰色/灰色 | スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転糸ヘラケズリ,外面火襷あり,千葉産 [中・下層] |
| SI-041 | 2 | 須恵 | 蓋 | 5 | − | − | 4.6 | − | /灰褐色 | スコリア,白色針状物質 | /ナデ | 還元不良,摘部のみ完存,渦巻き状に成形,産地不明 [一括] |
| SI-041 | 3 | 須恵 | 甕 | 15 | − | − | (17.0) | 胴部(29.8) | 灰色/灰色 | 長 石,石 英,雲母 | ナデ/タタキ,ナデ | 頸部から胴部にかけて遺存,内面指頭痕多数あり,茨城産 [下層] |
| SI-041 | 4 | 土師 | 甕 | 90 | 18.0 | (7.8) | 18.1 | − | 暗褐色/暗褐色 | 長 石,砂 粒,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 甑として再利用,外面黒斑あり,内面劣化顕著,在地甕 [カマド内] |
| SI-042 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.6 | 8.3 | 3.8 | − | 灰黄褐色/灰褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,外面二次火熱により煤付着,茨城産 [下層] |
| SI-042 | 2 | 須恵 | 高台付杯 | 70 | (15.3) | 11.3 | (4.4) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 底外全面回転ヘラケズリ後高台貼付,東海産 [カマド内] |
| SI-042 | 3 | 土師 | 甕 | 70 | 21.1 | − | (14.5) | − | 橙褐色/暗橙褐色 | 長 石,砂 粒,雲母,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 外面胴部上端から下端まで二次被熱により煤付着顕著,武蔵甕 [中層] |
| SI-043 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (12.4) | (6.8) | 4.3 | − | 灰色/灰褐色 | 雲 母,長 石,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外全面多方向ヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-043 | 2 | 須恵 | 杯 | 15 | − | 6.6 | (1.6) | − | 灰白色/灰白色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 須恵器の杯の底部を円形に加工し硯として再利用,東海産 [下層] |
| SI-043 | 3 | 土師 | 杯 | 85 | 13.1 | 9.4 | 3.5 | − | 赤褐色/黒褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,内面二次被熱により剥離顕著,外面煤付着 [カマド内] |
| SI-043 | 4 | 土師 | 杯 | 90 | 12.6 | 8.1 | 4.7 | − | 暗橙褐色/暗橙褐色 | スコリア,雲 母,砂粒 | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り後無調整,内外面二次被熱により煤付着 [床面,下層] |
| SI-043 | 5 | 須恵 | 高台付盤 | 30 | (20.2) | (11.0) | 3.5 | − | 灰色/灰色 | 雲 母,長 石,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラケズリ後高台貼付,茨城産 [カマド内] |
| SI-043 | 6 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰黄褐色/灰黄褐色 | スコリア,雲 母,砂粒 | ナデ/タタキ,ナデ | 二次被熱により内面剥離顕著,茨城産 [一括] |
| SI-043 | 7 | 須恵 | 甕 | 45 | (38.0) | − | (16.5) | − | 灰色/灰色 | 長 石,砂 粒,雲母 | ナデ/タタキ,ナデ | 焼成は良好,胎土は白色雲母及び中粒の砂粒を多く含む,茨城産 [床面] |
| SI-043 | 8 | 土師 | 甕 | 35 | (21.6) | − | (18.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長 石,砂 粒,白色針状物質 | ナデ,ヘラケズリ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに粘土紐の痕跡と二次被熱により煤付着,在地甕 [下層] |
| SI-043 | 9 | 土師 | 甕 | 15 | (21.2) | − | (10.7) | − | 橙褐色/暗橙褐色 | 長 石,砂 粒,白色針状物質 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内面やや劣化,外面黒斑あり,常総甕 [下層] |
| SI-043 | 10 | 須恵 | 甑 | 5 | − | (15.8) | (10.1) | − | 灰黄褐色/灰黄褐色 | 長 石,砂 粒,雲母 | ナデ/タタキ,ヘラケズリ | 還元やや不良,内面指頭痕あり,茨城産 [中・下層] |
| SI-045 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.0) | (8.6) | 4.1 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外手持ちヘラケズリ,器面荒れ顕著,千葉産 [下層] |
| SI-045 | 2 | 須恵 | 杯 | 20 | (14.9) | (8.8) | 3.9 | − | 黒褐色/黒褐色 | スコリア,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後外周手持ちヘラケズリ,内外面煤付着顕著,茨城産 [上・下層] |
| SI-045 | 3 | 土師 | 杯 | 30 | (14.0) | − | 3.9 | − | 橙褐色/黒褐色 | スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底面丸底気味,内外面二次被熱により煤付着顕著,流れ込み [中・下層] |
| SI-045 | 4 | 土師 | 甕 | 5 | (21.0) | − | (5.1) | − | 黄褐色/黄褐色 | 石 英,雲 母,砂粒 | ナデ/ナデ | 口縁部片,器面荒れている,常総甕 [上層] |
| SI-046 | 1 | 須恵 | 杯 | 100 | 13.9 | 8.7 | 4.0 | − | 黒褐色/黒褐色 | 雲母,砂粒 | ナデ/ナデ | 還元不良,底外手持ちヘラケズリ,内外面ともに煤付着顕著,千葉産 [床面] |
| SI-046 | 2 | 須恵 | 杯 | 90 | 12.5 | 8.0 | 4.0 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長 石,石 英,砂粒 | ナデ/ナデ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後全面ヘラケズリ,二次被熱により内面剥離顕著,千葉産 [下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-046 | 3 | 須恵 | 杯 | 75 | 11.4 | 6.8 | 3.3 | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,底外多方面手持ちヘラケズリ,内外面ともに煤付着顕著,千葉産 [床面] |
| SI-046 | 4 | 土師 | 杯 | 100 | 12.2 | 6.2 | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転糸切り後全面回転ヘラケズリ [床面] |
| SI-046 | 5 | 須恵 | 甕 | 65 | (20.8) | (13.4) | 29.6 | 胴部(23.8) | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ,ヘラナデ/タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,外面二次被熱により煤付着,千葉産 [中・下層] |
| SI-047 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | (12.6) | (7.6) | 4.0 | − | 灰白色/灰白色 | 石英,雲母,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元やや不良,底外全面手持ちヘラケズリ,茨城産 [床面,下層] |
| SI-047 | 2 | 土師 | 杯 | 50 | (16.7) | (10.0) | 7.0 | − | 黒褐色/褐色 | 砂粒,雲母,スコリア | ミガキ,ナデ/ナデ | 大型,内面黒色処理,内外面二次被熱により煤付着顕著,底外回転ヘラケズリ [下層] |
| SI-047 | 3 | 土師 | 甕 | 20 | (21.2) | − | (20.9) | − | 黄褐色/黄褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ミガキ,ヘラナデ | 内外面二次被熱により煤付着顕著,常総甕 [下層,床面] |
| SI-047 | 4 | 土師 | 甕 | 30 | 21.8 | − | (16.6) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ミガキ,ヘラナデ | 二次被熱により外面煤付着,常総甕 [下層,床直] |
| SI-048 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.0) | (7.0) | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-048 | 2 | 土師 | 甑 | 5 | (24.0) | − | (5.6) | − | 赤褐色/褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,把手あり,外面黒斑あり [中層] |
| SI-049 | 1 | 須恵 | 杯 | 35 | (13.8) | (8.0) | 4.0 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ | 体部外面広範囲に格子目状の線刻あり,底外手持ちヘラケズリ,茨城産 [中・下層] |
| SI-049 | 2 | 須恵 | 甕 | 15 | − | (17.0) | (6.5) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ヘラナデ/タタキ,ヘラケズリ | 底部片,二次被熱によりやや赤味を帯びる,破断面劣化,茨城産 [中層] |
| SI-049 | 3 | 土師 | 甕 | 15 | (20.0) | − | (8.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,外面二次被熱により劣化顕著,武蔵甕 [中・下層] |
| SI-049 | 4 | 土師 | 甕 | 15 | (23.0) | − | (11.3) | − | 褐色/黄褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,外面二次被熱により煤付着,在地甕 [中・下層] |
| SI-049 | 5 | 土師 | 甕 | 30 | (24.0) | − | (14.5) | − | 褐色/赤褐色 | 石英,長石,スコリア | ヘラナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部から胴部中位片,二次被熱により外面帯状に煤付着,在地甕 [中層] |
| SI-050 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 12.8 | 6.0 | 4.5 | − | 灰色/灰色 | 石英,長石,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ | 打ち欠き土器,還元やや不良底外回転ヘラ切り後全面一方向ヘラケズリ,外面二次被熱により煤付着,千葉産 [床面] |
| SI-050 | 2 | 須恵 | 杯 | 60 | (13.0) | 7.0 | 4.2 | − | 黒褐色/黒褐色 | 石英,長石,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ | 還元不良,底外全面回転ヘラケズリ,内外面二次被熱により煤付着顕著,千葉産 [上層] |
| SI-050 | 3 | 須恵 | 杯 | 100 | 12.6 | 6.3 | 3.6 | − | 灰白色/灰白色 | 長石,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ | 器面やや磨耗,底外回転糸切り後無調整,南比企産 [カマド右袖脇] |
| SI-050 | 4 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.8) | 6.6 | 4.2 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ | 還元不良,底外全面一方向ヘラケズリ,内外面二次被熱により煤付着,千葉産 [カマド内] |
| SI-050 | 5 | 須恵 | 杯 | 90 | 13.5 | 7.2 | 4.0 | − | 黒色/黒色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産 [カマド内] |
| SI-050 | 6 | 須恵 | 甕 | 70 | 22.6 | 12.2 | 20.0 | − | 赤褐色/赤褐色 | 石英,長石,スコリア | ヘラナデ/タタキ,ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,内外面二次被熱により煤付着顕著,千葉産 [カマド内,床面] |
| SI-050 | 7 | 須恵 | 甕 | 30 | − | − | (21.8) | − | 灰色/灰色 | 石英,長石,スコリア | ナデ/タタキ,ナデ | 胴部内側から外側へ穿孔あり,内面指頭痕多数あり,茨城産 [中層] |
| SI-052 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.2) | 9.6 | 3.6 | − | 黒灰色/黒灰色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ | 底外回転ヘラ切り後全面ヘラケズリ,底外2か所にヘラ書き・線刻あり『+』『+』,茨城産 [床直] |
| SI-053 | 1 | 土師 | 甕 | 10 | (23.2) | − | (7.0) | − | 黄褐色/黄褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ヘラナデ,ナデ | 口縁部片,外面二次被熱により煤付着,常総甕 [床面] |
| SI-054 | 1 | 土師 | 甕 | 5 | (23.4) | − | (7.2) | − | 黄橙色/黄橙色 | 長石,石英,砂粒,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,器面やや劣化,在地甕 [下層] |
| SI-055 | 1 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 暗赤褐色/暗赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/タタキ | 還元不良,口縁部から胴部上位片,二次被熱により外面劣化,内面煤付着,千葉産 [カマド内] |
| SI-055 | 2 | 須恵 | 甕 | 10 | (17.0) | − | (6.0) | − | 黄褐色/黄褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ヘラナデ,ナデ | 還元不良,口縁部片,内外面二次被熱により煤付着,千葉産 [中層] |
| SI-055 | 3 | 土師 | 甕 | 5 | (20.0) | − | (6.0) | − | 黄褐色/黄褐色 | 長石,砂粒,スコリア,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ヘラナデ,ナデ | 口縁部片,内外面二次被熱により煤付着,在地甕 [中層] |
| SI-056 | 1 | 須恵 | 杯 | 100 | 12.8 | 6.8 | 4.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒,スコリア,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後全面一方向手持ちヘラケズリ,器面全体煤付着,千葉産 [床直] |
| SI-057 | 1 | 須恵 | 杯 | 80 | 13.6 | 8.0 | 4.2 | − | 灰色/灰色 | 雲母,スコリア,長石 | ナデ/ナデ | 底外回転ヘラ切り後無調整,内外面の一部に火襷あり,体部内面に線刻あり『×』,茨城産 [上・下層] |
| SI-057 | 2 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰色/灰色 | 雲母,砂粒,長石 | ヘラナデ/タタキ,ナデ | 口縁部片,器面及び破断面やや劣化,茨城産 [中層] |
| SI-058 | 1 | 須恵 | 杯 | 45 | (12.6) | 6.6 | 4.3 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,砂粒,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外回転ヘラ切り後三方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [上層] |
| SI-058 | 2 | 須恵 | 杯 | 85 | 12.7 | 6.6 | 4.0 | − | 黒色/黒褐色 | 石英,長石,雲母 | ナデ/ナデ | 底外全面手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-058 | 3 | 土師 | 杯 | 100 | 15.4 | 7.0 | 5.0 | − | 黒色/黒褐色 | 石英,長石,スコリア | ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転糸切り後全面回転ヘラケズリ,内面黒色処理,内外面磨耗及び煤付着顕著 [床直] |
| SI-058 | 4 | 土師 | 杯 | 小片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 外面墨書あり,小片のため詳細不明 [一括] |
| SI-058 | 5 | 土師 | 台付甕 | 5 | − | − | (3.1) | − | 黄褐色/褐色 | 石英,長石,雲母 | ナデ/ナデ | 脚部片,内外面ともに二次火熱により煤付着顕著 [床面] |
| SI-058 | 6 | 土師 | 甕 | 80 | 20.6 | 7.8 | 14.2 | − | 橙褐色/褐色 | 石英,長石,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内面下半部から底部に剥離及び煤付着顕著,外面口縁部及び胴下半部に帯状に煤付着,在地甕 [下層] |
| SI-058 | 7 | 須恵 | 甑 | 70 | (29.6) | (14.8) | 26.0 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,スコリア | ヘラナデ,ナデ/タタキ,ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,把手2方形,底部5孔,外面タタキ粗雑,内面指頭痕あり,千葉産 [中層] |
| SI-059 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.0) | (8.6) | 3.8 | − | 灰褐色/灰黒色 | 石英,長石,雲母 | ナデ/ナデ | 底外手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-059 | 2 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.2) | 9.6 | 3.6 | − | 灰褐色/灰褐色 | 石英,長石 | ナデ/ナデ | 底外手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-059 | 3 | 須恵 | 杯 | 30 | (14.2) | (10.0) | 4.5 | − | 灰白色/灰色 | 石英,長石,雲母 | ナデ/ナデ | 底外手持ちヘラケズリ,内面やや磨耗,茨城産[中層] |
| SI-060 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.2) | (7.4) | 3.6 | − | 黒褐色/黒褐色 | 石英,長石,砂粒 | ナデ/ナデ | 還元不良,底外回転ヘラケズリ,内外面ともに厚く煤付着,千葉産[中層] |
| SI-060 | 2 | 土師 | 杯 | 100 | 12.7 | 6.6 | 4.9 | − | 黄褐色/褐色 | 石英,長石,砂粒 | ナデ/ナデ | 底外多方向手持ちヘラケズリ,外面二次火熱により煤付着[下層] |
| SI-060 | 3 | 土師 | 杯 | 50 | (13.6) | 5.8 | 4.2 | − | 黄褐色/褐色 | 石英,長石,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後回転ヘラケズリ,内面やや磨耗,外面二次火熱により煤付着[下層] |
| SI-060 | 4 | 土師 | 杯 | 70 | (12.8) | 6.6 | 3.7 | − | 褐色/褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後全面回転ヘラケズリ,内外面二次火熱により煤付着[下層] |
| SI-060 | 5 | 土師 | 杯 | 30 | (11.2) | (5.6) | 4.6 | − | 赤褐色/赤褐色 | 雲母,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後手持ちヘラケズリ,内外面二次火熱により煤付着[一括] |
| SI-060 | 6 | 土師 | 杯 | 45 | (15.6) | 6.8 | 4.5 | − | 褐色/褐色 | 石英,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラケズリ,内外面二次火熱により煤付着[上・下層] |
| SI-060 | 7 | 土師 | 杯 | 小片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石 | − | 外面墨書あり,小片のため詳細不明,内面黒色処理[一括] |
| SI-060 | 8 | 須恵 | 甕 | 小片 | − | − | − | − | 赤褐色/赤褐色 | 雲母,長石,砂粒 | ナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,内外面煤付着,千葉産[下層] |
| SI-061 | 1 | 須恵 | 杯 | 85 | (13.1) | 6.8 | 3.9 | − | 黒褐色/黒褐色 | 石英,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外全面多方向手持ちヘラケズリ,口縁部の歪み顕著,内外面厚く煤付着,千葉産[上層] |
| SI-061 | 2 | 土師 | 杯 | 60 | (13.0) | 6.5 | 4.1 | − | 黄褐色/黄褐色 | 長石,砂粒,スコリア, | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外全面手持ちヘラケズリ,内外面ともにやや磨耗[カマド内] |
| SI-061 | 3 | 土師 | 杯 | 45 | (13.6) | (7.0) | 4.1 | − | 黄褐色/黄褐色 | 雲母,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外全面回転ヘラケズリ,器面やや磨耗[カマド内] |
| SI-061 | 4 | 土師 | 杯 | 60 | (16.0) | 8.0 | 4.8 | − | 褐色/黒褐色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ,外面煤付着顕著[中層] |
| SI-061 | 5 | 土師 | 杯 | 45 | (14.9) | 7.4 | 5.3 | − | 橙褐色/黒褐色 | 長石,砂粒,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ,内外面二次火熱により剥離煤付着顕著[カマド内] |
| SI-061 | 6 | 土師 | 杯 | 90 | 13.8 | 7.0 | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,長石,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ,口縁部歪み顕著[上層] |
| SI-061 | 7 | 土師 | 杯 | 90 | 13.8 | 7.4 | 4.6 | − | 褐色/褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,体部外面に墨書あり『在』,底外回転糸切り後無調整[上層] |
| SI-061 | 8 | 土師 | 杯 | 95 | 13.2 | 6.4 | 4.4 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,底外全面回転ヘラケズリ,底外ヘラ書きあり『井』,器面二次被熱によりやや劣化及び煤付着[カマド内] |
| SI-061 | 9 | 土師 | 杯 | 25 | (13.0) | (6.6) | 3.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により煤付着[下層] |
| SI-061 | 10 | 土師 | 杯 | 35 | (12.4) | (6.6) | 3.8 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ[床面,下層] |
| SI-061 | 11 | 土師 | 皿 | 40 | (12.8) | 5.5 | 2.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外全面手持ちヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により劣化顕著[中層] |
| SI-061 | 12 | 須恵 | 甕 | 20 | (22.8) | − | (19.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒,雲母 | ヘラナデ,ナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,胴部下半から底部欠損,内外面二次被熱により煤付着,千葉産[中層] |
| SI-061 | 13 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,口縁部片,外面磨耗顕著,千葉産[中層,床面] |
| SI-061 | 14 | 須恵 | 鉢 | 20 | (19.0) | − | (11.5) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産[床面] |
| SI-061 | 15 | 須恵 | 甕 | 20 | (13.0) | − | (12.5) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ヘラナデ,ナデ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産[中層] |
| SI-062 | 1 | 須恵 | 杯 | 85 | 12.8 | 6.7 | 4.4 | − | 灰色/灰褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後ほぼ全面回転ヘラケズリ,千葉産[下層,床面] |
| SI-062 | 2 | 須恵 | 杯 | 40 | (12.7) | (6.8) | 4.0 | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外全面手持ちヘラケズリ,千葉産[中層] |
| SI-062 | 3 | 須恵 | 杯 | 30 | (11.7) | (7.0) | 4.0 | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外手持ちヘラケズリ,千葉産[中・下層] |
| SI-062 | 4 | 須恵 | 杯 | 65 | (13.7) | (7.4) | 4.1 | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後ほぼ全面回転ヘラケズリ,外面二次被熱により煤付着,千葉産[中・下層] |
| SI-062 | 5 | 須恵 | 杯 | 35 | (13.5) | 7.6 | 4.0 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外全面回転ヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,千葉産[中層] |
| SI-062 | 6 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.3) | (6.4) | 3.7 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後ほぼ全面手持ちヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,千葉産[下層] |
| SI-062 | 7 | 土師 | 杯 | 40 | (11.0) | (6.9) | 3.7 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | − | 器面及び破断面劣化顕著[床直] |
| SI-062 | 8 | 土師 | 杯 | 40 | (15.8) | (7.4) | 4.4 | − | 黒色/黒褐色 | スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,底外全面回転ヘラケズリ[中層] |
| SI-062 | 9 | 土師 | 杯 | 35 | (12.6) | (6.0) | 3.7 | − | 黒色/黒褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,底外全面回転ヘラケズリ[下層] |
| SI-062 | 10 | 土師 | 杯 | 20 | (20.3) | (8.0) | 5.9 | − | 黒色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 大型,内面黒色処理,底外全面回転ヘラケズリ,外面厚く煤付着[中・下層] |
| SI-062 | 11 | 須恵 | 高台付杯 | 10 | − | − | (1.7) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 還元やや不良,貼付高台,千葉産[カマド左袖脇] |
| SI-062 | 12 | 須恵 | 甕 | 20 | − | (14.4) | (8.2) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/タタキ,ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,千葉産[上・下層] |
| SI-062 | 13 | 須恵 | 甕 | 15 | (29.0) | − | (14.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,内面指頭痕あり,千葉産[中・下層] |
| SI-062 | 14 | 土師 | 甕 | 30 | (18.6) | − | (20.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,長石,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ミガキ,ヘラナデ,ナデ | 口縁部から胴部下位まで遺存,内外面ともに二次被熱により器面劣化顕著,常総甕[中・下層] |
| SI-063 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 14.2 | − | 4.7 | − | 灰白色/灰白色 | 長石 | ナデ/ナデ | 内外面ともに磨耗顕著,底外回転ヘラ切り後無調整,茨城産[床直] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-063 | 2 | 須恵 | 杯 | 50 | (14.9) | − | 5.6 | − | 灰白色/灰色 | 石英,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部丸底気味,内外面,ともに磨耗顕著底外全面全面ヘラケズリ,茨城産 [上層,床直] |
| SI-063 | 3 | 須恵 | 鉢 | 30 | 11.8 | − | (9.2) | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元やや不良,口縁部片,千葉産 [床直] |
| SI-063 | 4 | 土師 | 甕 | 40 | 15.6 | − | (8.1) | − | 黄褐色/黄褐色 | 雲母,スコリア,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ,ヘラナデ | 口縁部完存,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕 [カマド内] |
| SI-063 | 5 | 土師 | 甕 | 60 | − | 8.0 | (17.6) | − | 黄褐色/黒褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ | 口縁部から胴部上位欠損,外面二次被熱を激しく受け煤が厚く付着 [下層,床面] |
| SI-063 | 6 | 土師 | 手捏 | 90 | 5.8 | 5.0 | 3.4 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ/ナデ | 内外面ともに煤付着 [中層] |
| SI-064 | 1 | 須恵 | 蓋 | 25 | (13.2) | − | (2.2) | − | 灰色/灰色 | スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 摘部欠損,天井部回転ヘラケズリ,茨城産 [中・下層] |
| SI-064 | 2 | 須恵 | 杯 | 35 | (13.2) | (8.4) | 4.3 | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-064 | 3 | 須恵 | 杯 | 40 | (14.0) | 9.0 | (3.7) | − | 灰白色/灰色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,器面磨耗顕著,茨城産 [中層] |
| SI-064 | 4 | 須恵 | 杯 | 45 | − | 8.0 | (3.8) | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部欠損,底外ヘラ書き刻書あり『不』,底外回転ヘラｷﾘ後多方向手持ちヘラケズリ,器面二次被熱により変色,破断面やや劣化,茨城産 [中層] |
| SI-064 | 5 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.2) | (8.0) | (4.1) | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,茨城産 [カマド右脇] |
| SI-064 | 6 | 須恵 | 高台付杯 | 15 | − | (9.0) | (2.1) | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 高台部のみ遺存,底外回転ヘラ切り後高台貼付,その後回転ヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-064 | 7 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,長石,砂粒 | ヘラナデ/ナデ,ﾊｹ | 口縁部片,内外面及び破断面ともに磨耗顕著,茨城産 [一括] |
| SI-064 | 8 | 土師 | 甕 | 10 | (22.0) | − | (9.3) | − | 黄褐色/黄褐色 | 雲母,長石,石英,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕 [中・下層] |
| SI-065 | 1 | 須恵 | 長頸壺 | 5 | (12.0) | − | (8.5) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 口縁部から頸部にかけ遺存,外面口縁部に自然釉環状に付着,東海産 [中・下層] |
| SI-065 | 2 | 須恵 | 甕 | 25 | (23.4) | − | (15.7) | − | 黒褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア,白色針状物質 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ | 内面二次被熱により厚く煤付着,千葉産 [下層,床面] |
| SI-065 | 3 | 土師 | 甕 | 55 | 17.0 | − | (15.0) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,石英,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ,ヘラナデ | 口縁部欠損,内外面ともに二次被熱により剥離・劣化・煤付着顕著,在地甕 [床面] |
| SI-067 | 1 | 須恵 | 蓋 | 40 | (14.8) | − | (3.7) | − | 灰色/緑灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 摘部径2.5cm,高1.1cm,外面自然釉付着,東海産 [カマド左袖脇] |
| SI-067 | 2 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.3 | 8.6 | 3.2 | − | 灰白色/灰白色 | 長石,石英,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により磨耗・変色・煤付着,茨城産 [カマド左脇] |
| SI-067 | 3 | 土師 | 甕 | 95 | 30.0 | 5.4 | 28.3 | − | 黄褐色/褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ロクロナデ/回転ヘラケズリ,ロクロナデ | ほぼ完形,二次被熱により内面下半分剥離・外面全面に炭化物及び煤付着顕著,在地甕 [カマド右脇] |
| SI-068 | 1 | 須恵 | 杯 | 75 | 13.0 | 9.0 | 4.3 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ | 還元やや不良,底部中央欠損,底外外周回転ヘラケズリ,茨城産 [カマド周辺] |
| SI-068 | 2 | 土師 | 甕 | 85 | 16.6 | (8.3) | (17.5) | − | 黒褐色/黒褐色 | 雲母,スコリア,長石,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により,内面磨耗・外面厚く煤付着,底部中央部を円形に打ち欠き甑として再利用,在地甕 [カマド右脇] |
| SI-069 | 1 | 須恵 | 杯 | 35 | (14.4) | (8.5) | (5.3) | − | 黒褐色/黒褐色 | 石英,スコリア,長石,砂粒 | ナデ/ナデ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着・変色顕著,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [カマド内一括] |
| SI-069 | 2 | 土師 | 杯 | 25 | (14.0) | (6.8) | 4.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面ともに磨耗顕著,底外回転ヘラ切り後無調整 [中・下層] |
| SI-069 | 3 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 赤褐色/褐色 | スコリア,長石,砂粒 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,口縁部片,千葉産 [中層] |
| SI-069 | 4 | 須恵 | 甕 | 25 | − | 15.2 | (14.6) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,雲母,スコリア | ヘラナデ/タタキ,ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外無調整,内外面二次被熱により部分的に煤付着,千葉産 [カマド内] |
| SI-069 | 5 | 土師 | 小型甕 | 5 | (13.0) | − | (4.3) | − | 黒褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 口縁部片,二次被熱により内面厚く煤付着,在地甕 [中層] |
| SI-069 | 6 | 土師 | 小型甕 | 25 | − | 6.4 | (5.3) | − | 橙褐色/黒褐色 | 砂粒,雲母,スコリア | ヘラナデ/ヘラケズリ | 底部片,二次被熱により内面剥離顕著・外面厚く煤付着,在地甕 [上・中層] |
| SI-070 | 1 | 須恵 | 蓋 | 25 | (16.0) | − | (2.3) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 摘部欠損,天井部回転ヘラケズリ,茨城産 [一括] |
| SI-070 | 2 | 須恵 | 蓋 | 15 | (16.0) | − | (2.1) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 茨城産 [中層] |
| SI-070 | 3 | 須恵 | 杯 | 55 | (14.2) | 8.2 | 4.2 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後全面一方向手持ちヘラケズリ,器面やや磨耗,茨城産 [床直] |
| SI-070 | 4 | 須恵 | 杯 | 30 | (11.5) | (7.8) | 3.6 | − | 黒灰色/黒灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [一括] |
| SI-070 | 5 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.0) | − | (2.9) | − | 青灰色/青灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 底部欠損,茨城産 [中・下層] |
| SI-070 | 6 | 須恵 | 杯 | 10 | (16.2) | − | (3.8) | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,体部外面朱墨あり破片のため詳細不明,内面磨耗顕著,i茨城産 [下層] |
| SI-070 | 7 | 須恵 | 高台付杯 | 85 | 14.7 | 9.0 | 5.4 | − | 灰白色/灰白色 | 石英,雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,その後高台貼付,器面やや磨耗,茨城産 [床面] |
| SI-070 | 8 | 須恵 | 高台付杯 | 85 | 15.7 | 10.6 | 5.2 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,小石 | ナデ/ナデ | 底外回転ヘラケズリ,その後高台貼付,茨城産 [中層] |
| SI-070 | 9 | 須恵 | 甕 | 25 | − | − | (21.0) | 胴部(28.0) | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/タタキ,ナデ,ヘラケズリ | 胴部片,内面当具痕あり,外面二次被熱によりやや赤く変色,茨城産 [カマド内] |
| SI-070 | 10 | 土師 | 甕 | 5 | (23.0) | − | (5.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,雲母,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 口縁部片,常総甕 [中層] |
| SI-070 | 11 | 土師 | 甕 | 5 | (23.5) | − | (7.4) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面二次被熱により赤く変色・煤付着顕著,在地甕 [中層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-070 | 12 | 土師 | 小型甕 | 15 | − | (6.0) | (5.5) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,スコリア,砂粒 | ヘラナデ/ヘラナデ | 内外面二次被熱により激しく変色・剥離・煤付着,在地甕 [下層] |
| SI-071 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.3) | 7.0 | 4.0 | − | 黒褐色/黒褐色 | 砂粒,長石,スコリア | ナデ/ナデ | 還元不良,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-071 | 2 | 土師 | 杯 | 30 | (13.0) | (7.0) | 4.2 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともやや磨耗,底外全面多方向手持ちヘラケズリ,内外面部分的に煤付着 [カマド内] |
| SI-071 | 3 | 土師 | 杯 | 70 | 12.5 | 6.4 | 3.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | 砂粒,長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底内剥離顕著,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ,器面ざらつきあり [床直] |
| SI-071 | 4 | 土師 | 杯 | 95 | 12.3 | 6.6 | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ [カマド内] |
| SI-071 | 5 | 土師 | 甕 | 10 | (21.2) | − | (14.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア,砂粒,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部から胴部中位まで遺存,器面やや荒れている,常総甕 [カマド内] |
| SI-071 | 6 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 赤褐色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ/タタキ | 胴部下端片,還元不良,千葉産 [下層] |
| SI-071 | 7 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 黒褐色/黒褐色 | 砂粒 | ナデ/- | SI-078と遺構間接合,還元不良,底外ヘラ書きあり『=』,千葉産 [下層] |
| SI-071 | 8 | 須恵 | 甑 | 5 | − | (16.4) | (12.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ヘラナデ/タタキ,ヘラケズリ,ヘラナデ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着顕著,千葉産 [中層] |
| SI-072 | 1 | 須恵 | 杯 | 100 | 11.9 | 7.4 | 4.0 | − | 黒褐色/黒褐色 | 砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面二次被熱により厚く煤付着,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [床面] |
| SI-072 | 2 | 須恵 | 杯 | 95 | 12.5 | 7.6 | 4.0 | − | 黒色/黒色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 打ち欠き土器,還元不良,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [カマド右袖脇] |
| SI-072 | 3 | 須恵 | 小型甕 | 30 | − | 6.6 | (6.3) | − | 灰白色/灰白色 | スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部片,内外面やや磨耗顕著,底外無調整,千葉産 [下層] |
| SI-072 | 4 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/タタキ,ヘラケズリ | 口縁部片,還元不良,器面やや劣化,千葉産 [中層] |
| SI-072 | 5 | 土師 | 甕 | 5 | (20.8) | − | (5.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 口縁部片,常総甕 [下層] |
| SI-073 | 1 | 須恵 | 蓋 | 5 | − | − | (2.1) | − | 褐色/褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 還元不良,摘部のみ遺存,千葉産 [上層] |
| SI-073 | 2 | 須恵 | 杯 | 15 | (13.0) | (7.6) | (4.1) | − | 灰白色/灰白色 | 雲母,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面中央は褐色・両外側は灰白色を呈し層をなす,内外面ともにやや磨耗,底外回転ヘラケズリ,千葉産 [中・下層] |
| SI-073 | 3 | 須恵 | 杯 | 30 | (12.8) | (6.6) | 4.0 | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面中央は褐色・両外側は灰白色を呈し層をなす,内外面ともにやや磨耗,底外回転ヘラケズリ,千葉産 [上層] |
| SI-073 | 4 | 須恵 | 杯 | 60 | (12.6) | 7.0 | 3.5 | − | 褐色/褐色 | 砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外全面一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [床面] |
| SI-073 | 5 | 須恵 | 杯 | 45 | (12.0) | (6.0) | 4.0 | − | 黄褐色/赤褐色 | 砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により器面荒れている,底外回転ヘラ切り後外周手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-073 | 6 | 須恵 | 杯 | 85 | 13.2 | 7.4 | 3.9 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,打ち欠き土器,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産 [上・下層] |
| SI-073 | 7 | 土師 | 杯 | 65 | (14.8) | − | 5.0 | − | 褐色/黒褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部丸底,外面煤付着 [上層] |
| SI-073 | 8 | 須恵 | 長頸壺 | 5 | − | − | (6.0) | − | 灰褐色/灰黄褐色 | − | ロクロナデ/ロクロナデ | 頸部片,内外面自然釉付着,東海産 [下層] |
| SI-073 | 9 | 須恵 | 甕 | 40 | (28.0) | − | (22.0) | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/タタキ,ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,内面指頭痕あり,千葉産 [下層] |
| SI-073 | 10 | 須恵 | 甕 | 45 | 25.4 | (15.6) | (21.0) | − | 灰褐色/黒灰色 | スコリア,砂粒,長石,石英 | ナデ,ヘラナデ/タタキ,ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,内外面ともに磨耗顕著,内外面ともに二次被熱により一部赤く変色,千葉産 [上・中・下層] |
| SI-073 | 11 | 須恵 | 甕 | 5 | − | − | − | − | 青灰色/青灰色 | 長石 | ナデ/タタキ | 胴部片,外面広範囲に自然釉付着,内面当具痕あり,東海産 [床直] |
| SI-073 | 12 | 土師 | 甕 | 75 | 20.0 | 8.0 | 16.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面黒斑あり,外面胴部中位から底部にかけて二次被熱により赤く変色,在地甕 [下層] |
| SI-073 | 13 | 土師 | 甕 | 5 | (19.0) | − | (5.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,武蔵甕 [下層] |
| SI-073 | 14 | 土師 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,常総甕 [下層] |
| SI-073 | 15 | 土師 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,常総甕 [下層] |
| SI-074 | 1 | 須恵 | 杯 | 75 | 13.6 | 7.8 | 4.5 | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,内外面二次被熱によりやや赤く変色し器面もやや劣化,底外全面回転ヘラケズリ,茨城産 [カマド内] |
| SI-074 | 2 | 須恵 | 高杯 | 破片 | − | − | − | − | 黄灰褐色/黄灰褐色 | 雲母,石英,長石 | ロクロナデ/ロクロナデ | 脚部片,器面及び破断面劣化,茨城産 [中層] |
| SI-074 | 3 | 須恵 | 甕 | 10 | (33.0) | − | (15.0) | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英,長石,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ | 内面二次被熱によりやや赤く変色,茨城産 [カマド内] |
| SI-074 | 4 | 土師 | 甕 | 95 | 21.2 | 5.4 | 28.1 | 胴部21.5 | 褐色/褐色 | 長石,雲母,砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により外面煤付着,特に下半部は厚く黒色を呈す,内面下半部剥離が激しい,底部は焼成後に穿孔され甑として再利用,武蔵甕 [カマド左袖脇] |
| SI-074 | 5 | 土師 | 甕 | 10 | (25.2) | − | (6.3) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,砂粒,スコリア | ヘラナデ/ヘラナデ | 口縁部片,内外面二次被熱により煤付着,常総甕 [カマド内] |
| SI-075 | 1 | 須恵 | 蓋 | 55 | (11.8) | − | 2.5 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 摘部完存,天井部回転ヘラケズリ後摘を貼付けナデ調整,千葉産 [下層,床直] |
| SI-075 | 2 | 須恵 | 蓋 | 30 | (18.0) | − | (3.4) | − | 灰黒色/灰黒色 | 雲母,石英,長石,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央は褐色・両外側は灰黒色を呈し層をなす,摘部欠損,天井部回転ヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により赤黒く変色,千葉産 [下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-075 | 3 | 土師 | 蓋 | 60 | 12.2 | − | (2.6) | − | 褐色/褐色 | スコリア,雲母,白色針状物質 | ミガキ/ミガキ | 摘部欠損,内外面ともに丹念に磨かれやや赤味を帯びる,甲斐または駿河産 [中・下層] |
| SI-075 | 4 | 須恵 | 杯 | 85 | 12.3 | 8.4 | 4.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底内線刻あり『×』,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-075 | 5 | 須恵 | 杯 | 75 | 13.2 | 7.4 | 4.9 | − | 灰褐色/褐灰色 | 石英,雲母,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央は褐色・両外側は灰褐色を呈し層をなす,打ち欠き土器,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-075 | 6 | 須恵 | 杯 | 70 | 13.0 | 7.8 | 3.9 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,器面全面黒色処理を施したように黒い,千葉産 [中・下層] |
| SI-075 | 7 | 須恵 | 高台付杯 | 95 | 10.2 | 7.0 | 5.3 | − | 灰褐色/黒褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ロクロナデ/ナデ | 還元不良,体部内面線刻あり『+』,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,その後高台貼付,千葉産 [床直] |
| SI-075 | 8 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ロクロナデ/ロクロナデ | 還元不良,口縁部片,千葉産 [中層] |
| SI-075 | 9 | 土師 | 甕 | 45 | (22.0) | (11.0) | (29.0) | 胴部(24.8) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 底部欠損,二次被熱により外面砂粒状の土が厚く付着,内面磨耗・煤付着ともに顕著,常総甕 [中・下層] |
| SI-075 | 10 | 土師 | 甕 | 20 | (20.0) | − | (21.6) | 胴部(23.5) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 内外面ともに二次被熱により器面はやや荒れ煤がまだらに付着,常総甕 [下層] |
| SI-076 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.0) | (8.0) | 4.0 | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ | 底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [カマド内] |
| SI-077 | 1 | 須恵 | 蓋 | 20 | − | − | (2.1) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 摘部及び周辺部遺存,破断面の一辺を砥石代わりに使用,茨城産 [下層] |
| SI-077 | 2 | 須恵 | 蓋 | 20 | (14.2) | − | (1.6) | − | 灰褐色/褐灰色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,摘部欠損,千葉産 [中層] |
| SI-077 | 3 | 須恵 | 杯 | 30 | (12.0) | (7.6) | 4.0 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,器面やや劣化,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-077 | 4 | 須恵 | 杯 | 35 | (12.8) | (7.8) | (3.4) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面やや劣化,底外手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-077 | 5 | 須恵 | 杯 | 30 | (12.4) | (7.6) | 3.8 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,器面やや劣化,底外手持ちヘラケズリ,千葉産 [中・下層] |
| SI-077 | 6 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.2 | 8.4 | 3.9 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,打ち欠き土器,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [床面] |
| SI-077 | 7 | 須恵 | 杯 | 50 | (12.0) | 6.6 | 4.0 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外全面手持ちヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-077 | 8 | 須恵 | 杯 | 20 | (13.2) | (8.0) | 4.1 | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-077 | 9 | 土師 | 杯 | 20 | (15.8) | (7.6) | 6.4 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,スコリア | ミガキ,ナデ/ミガキ,ナデ | 内外面ともに丹念に磨かれ赤彩を施したように赤味を帯びる,底外回転ヘラケズリ,甲斐または駿河産 [下層] |
| SI-077 | 10 | 須恵 | 高台付皿 | 20 | (13.8) | (9.0) | 2.7 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ | 還元不良,底内二次被熱により円形に厚く煤付着,底外回転ヘラ切り後高台貼付,その後接合部ナデ,茨城産 [カマド内,床面] |
| SI-077 | 11 | 土師 | 甕 | 15 | (21.0) | − | (11.0) | − | 橙褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,常総甕 [床面] |
| SI-077 | 12 | 土師 | 小型甕 | 10 | (10.0) | − | (4.6) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕 [一括] |
| SI-078 | 1 | 須恵 | 杯 | 100 | 12.9 | 7.0 | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,内面やや磨耗,底外全面手持ちヘラケズリ,千葉産 [床面] |
| SI-078 | 2 | 須恵 | 杯 | 90 | 12.4 | 6.4 | 3.8 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,外面半分赤黒く変色,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-078 | 3 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.8) | (8.0) | 4.3 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,外面黒っぽい変色部分あり,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-078 | 4 | 須恵 | 長頸壺 | 10 | (7.0) | − | (9.6) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石 | ロクロナデ/ロクロナデ | 口縁部から肩部まで遺存,内面口縁部と外面肩部に自然釉付着,東海産 [一括] |
| SI-078 | 5 | 須恵 | 甕 | 20 | − | (16.2) | (12.1) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ,ヘラナデ/タタキ,ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,内外面ともに二次被熱により器面は磨耗しやや赤く変色,千葉産 [中層,カマド内] |
| SI-078 | 6 | 土師 | 小型甕 | 破片 | − | − | − | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒 | ヘラナデ/ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕 [中層] |
| SI-078 | 7 | 土師 | 甕 | 70 | (20.5) | (8.0) | 31.3 | 胴部(22.2) | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ,タタキ | 内外面ともに二次被熱によりやや磨耗・煤付着,常総甕 [下層,カマド内] |
| SI-078 | 8 | 土師 | 甕 | 45 | (21.4) | − | (22.7) | 胴部(23.4) | 褐色/橙褐色 | 石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により磨耗顕著,常総甕 [床面,カマド内] |
| SI-080 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 11.4 | 7.2 | 4.6 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,外面火襷あり,底外一方向手持ちヘラケズリ,底外ヘラ書きあり『S』,千葉産 [床直] |
| SI-080 | 2 | 須恵 | 杯 | 50 | (12.8) | (8.4) | 4.7 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外一方向手持ちヘラケズリ,火襷痕が多くみられる,千葉産 [下層,床直] |
| SI-080 | 3 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.2) | (7.5) | 3.8 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面やや磨耗,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [一括] |
| SI-080 | 4 | 須恵 | 杯 | 25 | (13.0) | (8.6) | 4.1 | − | 灰白色/灰白色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外回転ヘラケズリ,火襷痕あり,千葉産 [一括] |
| SI-080 | 5 | 須恵 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/− | 底部片,杯の底部を丸く加工,底外多方向手持ちヘラケズリ,内外面ともに線刻あり『+』『+』,千葉産 [中層] |
| SI-080 | 6 | 土師 | 甕 | 20 | (24.2) | − | (27.3) | 胴部(29.4) | 褐色/褐色 | 雲母,長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 外面黒斑あり,内外面ともに二次被熱により煤付着,常総甕 [床面,床直] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-080 | 7 | 土師 | 甕 | 15 | (19.6) | – | (11.1) | – | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,内面剥離顕著,在地甕 [下層] |
| SI-080 | 8 | 土師 | 甕 | 5 | (22.0) | – | (5.8) | – | 黒褐色/橙褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 口縁部片,内面黒斑あり,常総甕 [中・下層] |
| SI-081 | 1 | 土師 | 杯 | 50 | (11.8) | (7.4) | 3.9 | – | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,底外回転ヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群 [下層] |
| SI-081 | 2 | 土師 | 小型甕 | 10 | (14.0) | – | (10.1) | – | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱を激しく受け厚く煤付着及び変色,在地甕 [一括] |
| SI-082 | 1 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.4) | (8.0) | 4.3 | – | 灰色/灰色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ | 体部外面線刻あり『×』,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-082 | 2 | 須恵 | 杯 | 25 | (15.0) | (9.2) | 4.0 | – | 灰白色/灰白色 | 雲母 | ナデ/ナデ | 内外面ともに磨耗顕著,体部外面線刻あり『廾』,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-082 | 3 | 土師 | 甕 | 10 | (23.0) | – | (9.0) | – | 橙褐色/橙褐色 | 石英,長石,雲母,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 外面一部黒斑あり,外面部分的に二次被熱により砂粒付着,常総甕 [カマド内,床面] |
| SI-085 | 1 | 土師 | 杯 | 55 | (13.6) | 6.8 | 4.1 | – | 褐色/褐色 | スコリア,雲母,砂粒,長石 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面及び破断面ともに磨耗顕著,底外回転糸切り後無調整,底外歪み大 [下層] |
| SI-085 | 2 | 土師 | 杯 | 40 | (13.2) | (6.2) | 4.0 | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により荒れ顕著,口縁部やや赤く変色,底外回転糸切り後外周ヘラケズリ [下層] |
| SI-085 | 3 | 土師 | 杯 | 25 | (12.6) | (7.0) | 4.0 | – | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに磨耗顕著,底内剥離激しい,底外回転糸切り後全面手持ちヘラケズリ [下層] |
| SI-085 | 4 | 土師 | 杯 | 40 | (12.8) | (7.0) | (3.8) | – | 黄褐色/黄褐色 | 長石,石英,,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面及び破断面劣化顕著,底外回転糸切り [一括] |
| SI-085 | 5 | 土師 | 杯 | 40 | (13.2) | (7.2) | 4.1 | – | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,口縁部一部赤く変色底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ [中・下層] |
| SI-085 | 6 | 土師 | 杯 | 20 | (12.6) | (6.0) | 3.6 | – | 褐色/黒色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,内面薄く剥離,底外回転ヘラケズリ [中層] |
| SI-085 | 7 | 土師 | 高台付皿 | 20 | – | (3.6) | (3.0) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ | 高台部片,内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着,底外回転糸切り後高台貼付,その後外周ナデ [中層] |
| SI-085 | 8 | 須恵 | 壺 | 45 | – | 9.2 | (15.2) | 胴部(18.0) | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 小型,胴部上位から口縁部欠損,底内と胴部上位外面に自然釉付着,底外高台貼付後外周ナデ,東海産 [下層,カマド内] |
| SI-085 | 9 | 須恵 | 甕 | 25 | – | (8.8) | (15.5) | – | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 胴部中位から底部遺存底外編物状の圧痕あり,内面に接合痕,千葉産 [中層,カマド内] |
| SI-085 | 10 | 土師 | 小型甕 | 20 | (13.6) | – | (8.4) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,二次被熱により外面荒れ顕著,胴部内面薄く剥離,破断面劣化顕著,内面口縁部のみ環状に煤付着,在地甕 [カマド内] |
| SI-085 | 11 | 土師 | 甕 | 20 | (17.4) | – | (22.3) | 胴部(20.0) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 長胴甕,底部欠損,二次被熱により外面部分的に荒れ,内面磨耗顕著,在地甕 [カマド内] |
| SI-085 | 12 | 土師 | 甕 | 30 | (17.8) | – | (19.0) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により劣化顕著及び煤付着,在地甕 [カマド内] |
| SI-085 | 13 | 土師 | 甕 | 20 | (18.5) | – | (22.0) | 胴部(20.6) | 褐色/橙色 | 雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ,タタキ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱によりやや磨耗・部分的に煤付着,在地甕 [中層] |
| SI-086 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.8) | (8.8) | 3.9 | – | 灰黒色/灰黒色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-086 | 2 | 土師 | 杯 | 100 | 11.8 | – | 3.3 | – | 赤褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともにやや磨耗,底部丸底,底外黒斑あり [床直] |
| SI-086 | 3 | 土師 | 小型甕 | 20 | – | 5.6 | (4.0) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ | 底部完存,外面黒斑あり,内外面ともにややざらつきがある,破断面やや劣化 [中層] |
| SI-087 | 1 | 須恵 | 杯 | 90 | 13.8 | 8.4 | 4.3 | – | 灰黒色/灰黒色 | 石英,長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,底外回転ヘラ切り後全面一方向手持ちヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により煤付着,茨城産 [中層] |
| SI-087 | 2 | 須恵 | 杯 | 85 | 13.6 | 8.2 | 4.0 | – | 灰白色/灰白色 | 石英,長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,外面二次被熱により煤付着,茨城産 [中層] |
| SI-087 | 3 | 須恵 | 杯 | 60 | (14.4) | 8.8 | 4.5 | – | 灰白色/灰白色 | 石英,長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外全面多方向手持ちヘラケズリ,内外面ともにやや劣化,茨城産 [中層] |
| SI-087 | 4 | 須恵 | 杯 | 60 | (13.8) | 8.4 | 3.9 | – | 灰色/灰色 | 石英,長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,外面二次被熱により大きく煤付着,器面及び破断面ともに磨耗顕著,茨城産 [中層] |
| SI-087 | 5 | 須恵 | 杯 | 45 | (14.4) | (8.4) | 4.3 | – | 灰色/灰色 | 石英,長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後回転手持ちヘラケズリ,その後外周ヘラケズリ,内面二次被熱により煤付着,茨城産 [中層] |
| SI-087 | 6 | 須恵 | 杯 | 25 | (14.0) | – | (4.5) | – | 灰白色/灰色 | 石英,長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面二次被熱により煤付着,器面及び破断面ともに磨耗顕著,茨城産 [中層] |
| SI-087 | 7 | 須恵 | 杯 | 25 | (14.6) | (8.6) | 4.5 | – | 灰色/灰黒色 | 雲母,石英,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外手持ちヘラケズリ,内外面二次被熱により煤付着,破断面やや劣化,茨城産 [中層] |
| SI-087 | 8 | 土師 | 甕 | 45 | 25.9 | – | (21.6) | 胴部(28.8) | 橙褐色/橙褐色 | 石英,雲母,長石,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ミガキ | 胴部下位から底部欠損,内外面ともに二次被熱によりやや劣化,常総甕 [中層] |
| SI-087 | 9 | 土師 | 甕 | 35 | (24.2) | – | (21.6) | 胴部(28.8) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 胴部中位から底部欠損,内外面ともに二次被熱によりやや劣化及び煤付着,常総甕 [中層] |
| SI-088 | 1 | 須恵 | 杯 | 80 | 12.9 | 8.4 | 3.8 | – | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,底外ヘラ書き刻書あり『友』?,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-088 | 2 | 須恵 | 杯 | 65 | (12.4) | 7.8 | 4.3 | – | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外全面回転ヘラケズリ,内外面ともにやや磨耗,千葉産 [下層,床面] |
| SI-088 | 3 | 須恵 | 杯 | 30 | – | 8.8 | (2.9) | – | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外全面多方向手持ちヘラケズリ,外面に火襷が多くみられる,茨城産 [上層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-088 | 4 | 土師 | 杯 | 45 | (12.0) | (7.2) | 3.8 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ,ヘラナデ | 内外面ともに二次被熱により器面やや荒れ煤広範囲に付着 [カマド内] |
| SI-088 | 5 | 須恵 | 高台付杯 | 55 | (9.6) | 6.8 | 4.5 | − | 灰色/灰色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外回転ヘラ切り後高台貼付,その後周辺回ナデ,外面二次被熱により煤付着,千葉産 [中層] |
| SI-088 | 6 | 須恵 | 高台付杯 | 95 | 15.5 | 9.8 | 7.5 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元やや不良,内外面ともに二次被熱により部分的に赤く変色,底外回転ヘラケズリ後高台貼付,千葉産 [カマド内] |
| SI-088 | 7 | 須恵 | 甕 | 20 | − | − | (19.9) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石 | ナデ/ナデ,タタキ | 内面当具痕あり,底面肩部に薄く自然釉付着,茨城産 [床面] |
| SI-088 | 8 | 須恵 | 甕 | 15 | (16.6) | − | (12.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ,タタキ | 内外面ともに二次被熱によりやや劣化・煤付着,千葉産 [カマド内] |
| SI-088 | 9 | 土師 | 甕 | 20 | (21.0) | − | (14.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,石英,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ヘラナデ,ナデ,ミガキ | 口縁部から胴部上位まで遺存,内外面ともに器面があれ,二次被熱により内面に薄く煤付着・外面砂粒付着,常総甕 [床直] |
| SI-089 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | (9.8) | (7.0) | 3.3 | − | 灰白色/灰白色 | 長石,雲母,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともにやや磨耗,底外全面回転ヘラケズリ,底部外縁部をケズリ込み高台風にしている,茨城産 [上層] |
| SI-089 | 2 | 須恵 | 杯 | 65 | (14.1) | 4.2 | 3.8 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,石英,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面二カ所に線刻あり『+』,底外全面回転ヘラケズリ,茨城産 [上・下層] |
| SI-089 | 3 | 須恵 | 杯 | 20 | − | (7.6) | (0.9) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面及び破断面ともに磨耗顕著,内面一部に油煙付着,灯明具として使用,底外全面手持ちヘラケズリ,茨城産 [上層] |
| SI-089 | 4 | 須恵 | 杯 | 45 | (13.4) | (8.4) | 3.8 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに磨耗顕著,底外手持ちヘラケズリ,茨城産 [中・下層] |
| SI-089 | 5 | 土師 | 杯 | 85 | 13.8 | 9.2 | 3.4 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 打ち欠き土器,打ち欠き以外はほぼ完存,内外面ともに赤彩,底外全面手持ちヘラケズリ,底外二カ所に焼成後のヘラ書きあり『×』 [中層] |
| SI-089 | 6 | 土師 | 杯 | 10 | (12.8) | (8.8) | 2.6 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ,タタキ | 内外面赤彩,破断面劣化顕著,内面部分的に剥離,底外手持ちヘラケズリ [カマド右袖部] |
| SI-089 | 7 | 土師 | 杯 | 15 | (14.8) | (15.0) | 3.0 | − | 赤褐色/橙色 | 長石,石英,スコリア | ヘラナデ,ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面赤彩,内外面ともに部分的に剥離,底外手持ちヘラケズリ [カマド左袖部] |
| SI-089 | 8 | 須恵 | 甕 | 20 | − | (14.2) | (9.0) | − | 黄褐色/黒褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ?/? | 底部片,内外面ともに器面の剥離顕著のため調整不明,外面部分的に煤付着,破断面劣化,茨城産 [中・下層] |
| SI-089 | 9 | 土師 | 小型甕 | 20 | (15.0) | − | (14.7) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒,白色針状物質 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着,在地甕 [中層,床面] |
| SI-089 | 10 | 土師 | 甕 | 10 | (21.0) | − | (6.3) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 口縁部片,外面二次被熱により広範囲に剥離,武蔵甕 [中層] |
| SI-090 | 1 | 土師 | 杯 | 20 | (14.0) | − | (3.7) | − | 黄褐色/黄褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともにやや磨耗 [P4柱穴内] |
| SI-090 | 2 | 土師 | 甕 | 5 | (18.0) | − | (5.9) | − | 褐色/褐色 | 石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面煤付着,在地甕 [下層] |
| SI-091 | 1 | 須恵 | 甑 | 10 | − | − | − | − | 灰黒色/灰色 | 長石 | ナデ/タタキ | 還元不良,把手部片,把手断面四角形,千葉産 [下層] |
| SI-091 | 2 | 土師 | 甕 | 35 | (20.0) | − | (23.5) | 胴部(24.8) | 褐色/褐色 | 雲母,長石,石英,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ヘラナデ,ナデ,ミガキ | 口縁部から胴部下位まで遺存,内外面ともに二次被熱により煤付着,常総甕 [中・下層] |
| SI-091 | 3 | 土師 | 甕 | 50 | (18.2) | (7.8) | 31.1 | 胴部(21.5) | 黄褐色/黄褐色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,常総甕 [カマド内] |
| SI-092 | 1 | 須恵 | 蓋 | 5 | − | − | (1.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 還元不良,摘部のみ遺存,千葉産,2と同一個体の可能性あり [下層] |
| SI-092 | 2 | 須恵 | 蓋 | 25 | (17.2) | − | (1.7) | − | 黒褐色/黒褐色 | 石英,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 摘部欠損,還元不良,外面回転ヘラケズリ,千葉産,1と同一個体の可能性あり [下層] |
| SI-092 | 3 | 須恵 | 杯 | 15 | (11.0) | (7.2) | 3.8 | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-092 | 4 | 須恵 | 杯 | 55 | (6.8) | 7.0 | 4.5 | − | 黒褐色/黒褐色 | 石英,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後無調整,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,千葉産 [上層] |
| SI-092 | 5 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.4) | (8.2) | 4.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,千葉産 [中層] |
| SI-092 | 6 | 須恵 | 杯 | 90 | 13.2 | 7.0 | 4.2 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,体部内面線刻あり『+』,底外全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-092 | 7 | 須恵 | 杯 | 40 | (12.2) | (7.8) | 4.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外ヘラ書きあり『×』,底外回転ヘラ切り後外周回転ヘラケズリ,二次被熱により内面剥離顕著,外面底部中心に煤付着,千葉産 [中層] |
| SI-092 | 8 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.0) | (7.0) | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外線刻あり『+』,底外多方向手持ちヘラケズリ,内外面一部煤付着,千葉産 [上・中層] |
| SI-092 | 9 | 須恵 | 杯 | 25 | (13.0) | (7.8) | 3.8 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-092 | 10 | 須恵 | 杯 | 20 | − | 6.6 | (2.4) | − | 灰褐色/灰褐色 | 石英,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外線刻あり格子状,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,千葉産 [床面] |
| SI-092 | 11 | 土師 | 杯 | 15 | (12.4) | (8.0) | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 破断面磨耗,底外回転ヘラケズリ,外面煤付着 [下層] |
| SI-092 | 12 | 土師 | 杯 | 60 | (16.2) | − | (5.8) | − | 黒色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ | 内面黒色処理,底部欠損,外面磨耗顕著,二次被熱により外面口縁部環状に煤付着 [中層,床面] |
| SI-092 | 13 | 須恵 | 高台付皿 | 10 | − | (8.0) | (2.4) | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラケズリ後高台貼付,千葉産 [中層] |
| SI-092 | 14 | 土師 | 高台付皿 | 10 | − | (9.6) | (2.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラケズリ後高台貼付,外面煤付着,破断面劣化 [中層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-092 | 15 | 須恵 | 甕 | 10 | – | (7.4) | (10.6) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,タタキ | 還元不良,底部片,内面指頭痕あり,内面二次被熱により剥離・外面赤く変色,千葉産 [中層] |
| SI-092 | 16 | 須恵 | 甕 | 破片 | – | – | – | – | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒 | ナデ/ナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により赤く変色,千葉産 [中層] |
| SI-092 | 17 | 土師 | 甕 | 55 | (23.0) | – | (25.9) | 胴部(26.0) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,石英,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラナデ,ミガキ,ナデ | 底部欠損, 内外面ともに二次被熱により剥離・煤付着顕著,常総甕 [下層] |
| SI-092 | 18 | 須恵 | 甑 | 25 | (32.8) | (13.4) | 27.8 | – | 黄褐色/黄褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,タタキ,ナデ | 還元不良,把手方形,内外面ともに二次被熱により薄くすす付着,千葉産 [中層] |
| SI-093 | 1 | 須恵 | 蓋 | 100 | 16.0 | – | 3.3 | – | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 天井部外面回転ヘラケズリ,茨城産 [床面] |
| SI-093 | 2 | 須恵 | 杯 | 70 | 13.2 | 7.3 | 4.2 | – | 黄灰色/黄灰色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底内ヘラ書きあり『×』,底外多方向ヘラケズリ,内外面及び破断面ともに磨耗顕著,茨城産 [中層,床面] |
| SI-093 | 3 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.0) | 8.0 | 4.2 | – | 黄灰色/黄灰色 | 長石,石英,砂粒,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱によりやや赤く変色及び磨耗顕著,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-093 | 4 | 須恵 | 杯 | 25 | (13.8) | (8.0) | 4.3 | – | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ,ヘラナデ | 体部外面線刻あり『廾』,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-093 | 5 | 須恵 | 杯 | 15 | (13.8) | (8.4) | 3.4 | – | 黄灰色/黄灰色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに火襷痕あり,底外多方向手持ちヘラケズリ,い茨城産 [一括] |
| SI-093 | 6 | 須恵 | 杯 | 15 | (12.8) | (8.0) | 4.0 | – | 黄灰色/黄灰色 | スコリア,長石,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面及び破断面ともに磨耗顕著,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-093 | 7 | 須恵 | 杯 | 15 | (13.8) | (8.0) | 4.2 | – | 黄灰色/黄灰色 | 雲母,長石,石英,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ,ヘラナデ | 内外面及び破断面ともに磨耗顕著,底外回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ,茨城産 [一括] |
| SI-093 | 8 | 須恵 | 杯 | 10 | (13.8) | – | (4.1) | – | 黄灰色/灰褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面及び破断面ともにやや磨耗,茨城産 [一括] |
| SI-093 | 9 | 須恵 | 盤 | 20 | (19.7) | (11.5) | 3.4 | – | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラケズリ後高台貼付,茨城産 [上層] |
| SI-093 | 10 | 須恵 | 甕 | 20 | (32.0) | – | (17.5) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 胴部外面に数条の直線の線刻あり,胴部下半部から底部にかけ欠損,還元不良,内面指頭痕あり,千葉産 [下層] |
| SI-093 | 11 | 土師 | 甕 | 65 | 20.0 | 8.8 | 29.4 | 胴部(25.3) | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,石英,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ヘラナデ,ミガキ,ナデ | 外面黒斑あり,内外面ともに二次被熱により煤付着,内面底部周辺と外面胴部下半部から底部にかけて剥離顕著,常総甕 [下層,床面] |
| SI-093 | 12 | 土師 | 甕 | 20 | (21.4) | – | (22.3) | 胴部(24.5) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ミガキ,ナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,外面下半部剥離顕著,常総甕 [一括] |
| SI-094 | 1 | 土師 | 杯 | 70 | (13.5) | 7.2 | 3.7 | – | 褐色/褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後全面回転ヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により煤付着 [床直] |
| SI-094 | 2 | 土師 | 杯 | 55 | (13.6) | 6.2 | 4.5 | – | 褐色/褐色 | 石英,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着 [床直] |
| SI-094 | 3 | 土師 | 杯 | 40 | (12.0) | (6.4) | 4.1 | – | 黄褐色/黄褐色 | 石英,長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り後無調整,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,内面油煙付着,灯明具として使用? [床直] |
| SI-094 | 4 | 土師 | 高台付皿 | 50 | (14.4) | – | (2.8) | – | 黄褐色/黄褐色 | 石英,長石 | ミガキ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後作りだし高台周縁にナデ,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着 [下層] |
| SI-094 | 5 | 須恵 | 鉢 | 65 | 11.0 | – | (13.2) | – | 褐色/褐色 | 石英,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,鉄鉢として使用?,千葉産 [下層] |
| SI-094 | 6 | 土師 | 甕 | 20 | (19.0) | – | (11.7) | – | 褐色/褐色 | 石英,長石,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕 [下層] |
| SI-094 | 7 | 土師 | 甕 | 20 | (19.0) | – | (9.3) | – | 橙褐色/橙褐色 | 石英,長石,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着・やや赤く変色,在地甕 [下層] |
| SI-094 | 8 | 土師 | 甕 | 5 | – | 15.0 | (1.2) | – | 橙褐色/褐色 | 長石 | – | 底部片,底外ヘラ書きあり『×』,内面激しく剥離,9と同一個体の可能性あり [下層] |
| SI-094 | 9 | 土師 | 甕 | 35 | – | – | (17.0) | – | 褐色/褐色 | 石英,長石,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ,タタキ | 胴部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,内面剥離顕著,8と同一個体の可能性あり,千葉産須恵器と明確な区別が付かない一群 [下層] |
| SI-095 | 1 | 須恵 | 杯 | 70 | (12.1) | (8.2) | 3.8 | – | 灰白色/灰白色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,器面の磨耗顕著,千葉産 [下層,床面] |
| SI-095 | 2 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.0) | 7.9 | 4.2 | – | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-095 | 3 | 須恵 | 杯 | 55 | (12.6) | 7.2 | 4.3 | – | 灰黒色/褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [床面] |
| SI-095 | 4 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.2) | 7.8 | 4.4 | – | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,SI-092と遺構間接合,底外ヘラ書きあり『×』,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [床面] |
| SI-095 | 5 | 須恵 | 杯 | 50 | (12.4) | 7.1 | 3.3 | – | 灰白色/灰白色 | スコリア,長石,白色針状物質 | ナデ/ナデ | 体部内面線刻あり『+』,底外回転糸切り後無調整,器面やや磨耗,南比企産 [下層] |
| SI-095 | 6 | 須恵 | 杯 | 35 | (12.8) | 7.5 | 3.2 | – | 灰白色/灰白色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,SI-096と遺構間接合,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-095 | 7 | 須恵 | 杯 | 60 | (12.4) | 7.6 | 4.0 | – | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [床面] |
| SI-095 | 8 | 須恵 | 杯 | 45 | – | (7.5) | (2.4) | – | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底部片,火襷あり,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [上層] |
| SI-095 | 9 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.2) | (8.2) | 4.1 | – | 黒褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-095 | 10 | 須恵 | 杯 | 40 | (11.8) | (6.6) | 4.2 | – | 橙色/橙褐色 | 雲母,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,火襷あり,内外面ともに二次被熱により煤付着・器面やや劣化,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-095 | 11 | 須恵 | 杯 | 35 | (12.1) | (8.4) | 4.1 | – | 褐色/褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転ヘラケズリ,千葉産 [中層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-095 | 12 | 土師 | 杯 | 40 | (12.0) | (6.8) | 3.6 | − | 褐色/褐色 | 雲母,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラケズリ　[中層] |
| SI-095 | 13 | 土師 | 杯 | 45 | (12.2) | (8.4) | 3.8 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部内面線刻あり『+』,底外回転ヘラケズリ,内面口縁下に環状に煤付着　[床面] |
| SI-095 | 14 | 土師 | 杯 | 35 | (13.0) | (9.2) | 3.7 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ミガキ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ,ミガキ | 体部内面線刻あり『+』,底外手持ちヘラケズリ後ミガキ　[中層] |
| SI-095 | 15 | 須恵 | 高台付杯 | 20 | − | (7.9) | (2.7) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,砂粒,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラケズリ,高台貼付,千葉産　[下層] |
| SI-095 | 16 | 土師 | 蓋? | 5 | − | (22.4) | (3.1) | − | 黒色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ミガキ,ナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 外面煤付着,破断面までおよぶ　[上・中層] |
| SI-095 | 17 | 須恵 | 甕 | 10 | − | − | (8.9) | − | 黄灰褐色/黄灰褐色 | 長石,砂粒,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,頸部片,千葉産　[下層] |
| SI-095 | 18 | 須恵 | 甕 | 70 | − | (16.6) | (23.5) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/タタキ | 胴部片,内面当具痕あり,茨城産　[床面] |
| SI-095 | 19 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 青灰色/青灰色 | 長石 | ロクロナデ/回転ヘラケズリ,ロクロナデ | 胴部下半部片,茨城産,20と同一個体の可能性あり　[床面] |
| SI-095 | 20 | 須恵 | 甕 | 5 | − | (15.3) | (4.7) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ヘラケズリ,タタキ | 底部片,底外無調整,茨城産,19と同一個体の可能性あり　[下層] |
| SI-095 | 21 | 土師 | 甕 | 15 | (22.2) | − | (18.5) | − | 黒色/橙褐色 | 長石,砂粒,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 口縁部から胴部まで遺存,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕　[中層] |
| SI-095 | 22 | 土師 | 甕 | 30 | (20.3) | − | (28.5) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ/ミガキ,ナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,外面やや赤く変色,常総甕　[下層] |
| SI-095 | 23 | 須恵 | 甑? | 破片 | − | − | − | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/タタキ,ナデ | 口縁部片,千葉産　[下層] |
| SI-096 | 1 | 須恵 | 蓋 | 5 | − | − | (1.4) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英 | ナデ/回転ヘラケズリ,ナデ | 摘部のみ遺存,茨城産　[一括] |
| SI-096 | 2 | 須恵 | 蓋 | 25 | (19.0) | − | (3.8) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/回転ヘラケズリ,ナデ | 摘部欠損,茨城産　[一括] |
| SI-096 | 3 | 須恵 | 蓋 | 15 | − | − | (2.1) | − | 黒褐色/褐色 | 長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,内面厚く煤付着,千葉産　[中層] |
| SI-096 | 4 | 須恵 | 杯 | 25 | (13.6) | (7.0) | (3.6) | − | 黒褐色/黒色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,内外面ともに焼成時の煤付着,千葉産　[中層] |
| SI-096 | 5 | 須恵 | 杯 | 25 | − | (7.6) | (2.6) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元やや不良,底外回転ヘラケズリ,内外面,千葉産　[中層] |
| SI-096 | 6 | 須恵 | 杯 | 15 | (11.8) | (8.0) | 3.6 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,底外回転ヘラケズリ,器面の磨耗顕著,千葉産　[上層] |
| SI-096 | 7 | 土師 | 杯 | 30 | (12.0) | (7.4) | 4.3 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面及び破断面やや劣化,底外回転ヘラケズリ　[一括] |
| SI-096 | 8 | 土師 | 杯 | 15 | (10.8) | (6.4) | 4.2 | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転ヘラケズリ　[中層] |
| SI-096 | 9 | 須恵 | 甕 | 35 | (19.0) | − | (15.6) | 胴部(21.0) | 黄褐色/橙褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,内面指頭痕あり,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産　[中・下層] |
| SI-096 | 10 | 須恵 | 甕 | 15 | − | (17.0) | (5.3) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ヘラナデ/ヘラケズリ | 還元やや不良,底部片,SI-095と遺構間接合,内外面ともに二次被熱により煤付着,茨城産　[下層,床直] |
| SI-096 | 11 | 土師 | 甕 | 60 | (20.0) | − | (18.4) | 胴部(22.2) | 黄褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,外面黒斑あり,武蔵甕　[床直,下層] |
| SI-097 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.0 | 7.8 | 3.7 | − | 灰色/灰色 | 石英,雲母,長石 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転ヘラケズリ後一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[下層] |
| SI-097 | 2 | 須恵 | 杯 | 90 | 13.0 | 8.5 | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 打ち欠き土器,体部内面線刻あり『+』,底外全面回転ヘラケズリ,茨城産　[カマド内] |
| SI-097 | 3 | 須恵 | 杯 | 50 | − | 8.2 | (2.7) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,石英,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 全面打ち欠き土器,還元不良,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[カマド左袖脇] |
| SI-097 | 4 | 土師 | 杯 | 90 | 12.6 | 7.6 | 4.2 | − | 褐色/褐色 | 石英,砂粒,雲母,スコリア | ミガキ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 外面黒斑あり,体部内面に線刻あり『+』,内外面ともに二次被熱により煤付着,器面やや劣化　[カマド左袖脇] |
| SI-097 | 5 | 須恵 | 甕 | 5 | − | (15.3) | (6.9) | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英 | ナデ/タタキ,ヘラケズリ | 底部片,内面当具痕あり,外面二次被熱により赤く変色,茨城産　[下層] |
| SI-097 | 6 | 土師 | 小型甕 | 10 | (12.8) | − | (5.7) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,外面黒斑あり,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕　[中層] |
| SI-097 | 7 | 土師 | 甕 | 10 | (20.0) | − | (7.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,内面器面の劣化やや顕著,在地甕　[下層] |
| SI-097 | 8 | 土師 | 甕 | 20 | (18.6) | − | (9.3) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部から胴部中位まで遺存,内外面ともに二次被熱により煤付着,常総甕　[床面] |
| SI-097 | 9 | 土師 | 甕 | 15 | (23.2) | − | (14.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ミガキ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,内面の劣化やや顕著,常総甕　[中層] |
| SI-098 | 1 | 土師 | 杯 | 5 | (12.5) | − | (4.4) | − | 黒色/黒褐色 | 石英,砂粒,スコリア | ミガキ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部欠損,外面上半部から内面黒色処理　[床直] |
| SI-098 | 2 | 土師 | 杯 | 10 | (12.4) | − | (2.8) | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着　[床面] |
| SI-098 | 3 | 須恵 | 甕 | 5 | − | (17.0) | (1.4) | − | 褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | − | 還元不良,底部片,内面激しく剥落,調整不明,千葉産　[床直] |
| SI-100 | 1 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.8) | (7.6) | (3.7) | − | 灰白色/灰白色 | スコリア,雲母 | ナデ/ナデ | 器面及び破断面ともに磨耗顕著,底外手持ちヘラケズリ,茨城産　[下層] |
| SI-101 | 1 | 須恵 | 杯 | 20 | (13.9) | (7.9) | 4.7 | − | 灰褐色/灰褐色 | スコリア,雲母,石英 | ナデ/ナデ | 内外面及び破断面ともに磨耗顕著,茨城産　[下層] |
| SI-101 | 2 | 須恵 | 杯 | 30 | − | − | − | − | 灰褐色/灰褐色 | スコリア,雲母,石英 | ナデ/ヘラケズリ | 底部のみ,底外回転ヘラケズリ,円盤状に加工,茨城産　[下層] |
| SI-101 | 3 | 須恵 | 杯 | 100 | 13.8 | 6.6 | 4.0 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外一方向手持ちヘラケズリ後外周手持ちヘラケズリ,茨城産　[床直] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-101 | 4 | 須恵 | 杯 | 100 | 13.6 | 8.0 | 3.9 | − | 灰褐色/灰黒色 | 長石,石英,砂粒,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱によりやや赤み変色,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-101 | 5 | 土師 | 甕 | 35 | (23.4) | − | (12.3) | − | 黄褐色/黄褐色 | 長石,雲母,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,外面磨耗顕著,内外面ともに二次被熱により煤付着,常総甕 [床面] |
| SI-101 | 6 | 土師 | 甕 | 10 | (20.8) | − | (5.5) | − | 黄褐色/黄褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,武蔵甕 [カマド内] |
| SI-101 | 7 | 土師 | 甕 | 60 | 22.2 | − | (28.9) | 胴部(28.2) | 黄褐色/黄褐色 | 長石,雲母,砂粒,石英 | ヘラナデ,ナデ/ヘラナデ,ミガキ,ナデ | 底部欠損,外面二次被熱により煤付着顕著,常総甕 [床面] |
| SI-101 | 8 | 土師 | 台付甕 | 破片 | − | − | − | − | 褐色/黒褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ/ヘラケズリ | 外面二次被熱により煤付着顕著,破断面劣化顕著 [下層] |
| SI-101 | 9 | 土師 | 甑 | 45 | (20.8) | (13.1) | (31.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ヘラナデ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着顕著,常総甑 [中層,床直] |
| SI-101 | 10 | 土師 | 小型甕 | 10 | (12.2) | − | (5.8) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着顕著,在地甕 [床直,中層] |
| SI-101 | 11 | 土師 | 小型甕 | 10 | (12.2) | − | (4.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着顕著,在地甕 [下層] |
| SI-101 | 12 | 土師 | 小型甕 | 95 | 11.6 | 6.4 | 8.5 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに接合痕明瞭,外面黒斑あり,在地甕 [一括] |
| SI-103 | 1 | 須恵 | 蓋 | 10 | − | − | (1.6) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 摘部のみ遺存,中央部突出,茨城産 [一括] |
| SI-103 | 2 | 須恵 | 杯 | 75 | (13.5) | 8.4 | 4.0 | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英, | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 打ち欠き土器,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により煤付着,茨城産 [カマド内] |
| SI-103 | 3 | 須恵 | 杯 | 60 | (13.8) | 8.6 | (4.1) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,内外面ともに磨耗顕著,茨城産 [床面] |
| SI-103 | 4 | 須恵 | 杯 | 85 | 14.1 | 9.0 | 3.7 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 打ち欠き・打ち割り土器の可能性あり,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,内外面ともに火襷あり,茨城産 [床面] |
| SI-103 | 5 | 須恵 | 杯 | 80 | 14.1 | 8.6 | 3.8 | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 打ち欠き土器,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,底外ヘラ書きあり『−』,茨城産 [床面] |
| SI-103 | 6 | 須恵 | 杯 | 70 | (14.3) | 8.0 | 3.9 | − | 灰白色/灰白色 | スコリア,長石,白色針状物質,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 器面磨耗顕著,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ,底外線刻あり『×』?,南比企産 [床面,下層] |
| SI-103 | 7 | 須恵 | 杯 | 40 | (14.0) | 7.8 | 3.9 | − | 灰褐色/灰褐色 | スコリア,長石,白色針状物質,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 器面及び破断面ともに磨耗顕著,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ,南比企産 [一括] |
| SI-103 | 8 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.4) | (9.3) | 3.7 | − | 灰色/灰色 | 石英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外一方向手持ちヘラケズリ,外面火襷あり,茨城産 [一括] |
| SI-103 | 9 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.6) | (7.2) | 3.4 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに火襷あり,底外手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-103 | 10 | 土師 | 杯 | 45 | (12.0) | (7.0) | 3.8 | − | 橙褐色/褐色 | 長石,石英,白色針状物質 | ナデ/ヘラケズリ,ヘラナデ,ナデ | 器面及び破断面劣化顕著,内外面ともに二次被熱により煤付着 [上層] |
| SI-103 | 11 | 土師 | 台付甕 | 5 | − | − | (4.8) | − | 橙褐色/赤褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 外面部分的に煤付着 [一括] |
| SI-103 | 12 | 須恵 | 甕 | 15 | − | (16.4) | (9.1) | − | 灰色/灰色 | 石英,雲母,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/タタキ,ヘラケズリ,ナデ | 底部片,内外面及び破断面ともにやや磨耗,茨城産 [床直] |
| SI-103 | 13 | 土師 | 甕 | 60 | 25.8 | − | (27.2) | 胴部(29.4) | 黒褐色/褐色 | 長石,雲母,砂粒,石英 | ヘラナデ,ナデ/ミガキ,ヘラケズリ,ナデ | 口縁部完存,内外面ともに二次被熱により煤付着・部分的に剥離顕著,常総甕 [床面] |
| SI-103 | 14 | 土師 | 甕 | 10 | (24.0) | − | (10.1) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部から胴部上位片,外面接合痕・黒斑あり,在地甕 [下層] |
| SI-103 | 15 | 土師 | 小型甕 | 20 | (12.0) | − | (6.0) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,砂粒,石英 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により剥落・煤付着顕著,在地甕 [床面] |
| SI-103 | 16 | 土師 | 小型甕 | 70 | (9.6) | 6.0 | 10.3 | − | 黒褐色/褐色 | 長石,雲母,砂粒,石英 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部完存,底外木葉痕あり,内外面ともに二次被熱により激しく煤付着 [カマド内] |
| SI-103 | 17 | 須恵 | 甑 | 5 | − | (17.6) | (6.8) | − | 黄灰色/黄灰色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 底部片,内外面及び破断面ともに劣化,茨城産 [一括] |
| SI-104 | 1 | 須恵 | 蓋 | 10 | − | − | (2.2) | − | 灰色/灰色 | 砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面及び破断面やや劣化,茨城産 [中層] |
| SI-104 | 2 | 須恵 | 蓋 | 5 | − | − | (1.1) | − | 青灰色/青灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 器面やや劣化,茨城産 [下層] |
| SI-104 | 3 | 須恵 | 杯 | 90 | 12.8 | 8.4 | 4.2 | − | 灰褐色/灰色 | 長石,雲母,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,内外面ともに二次被熱によりやや赤く変色・煤付着,底外全面回転ヘラケズリ・火襷あり,体部外面線刻あり『H』,千葉産 [中層] |
| SI-104 | 4 | 須恵 | 杯 | 70 | (13.2) | 7.6 | 4.4 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,還元不良,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-104 | 5 | 須恵 | 杯 | 35 | (12.0) | (7.2) | 3.4 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに火襷あり,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ,南比企産 [下層] |
| SI-104 | 6 | 須恵 | 杯 | 40 | (12.8) | (8.0) | 4.2 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [床直,下層] |
| SI-104 | 7 | 須恵 | 杯 | 35 | (10.0) | (5.6) | 3.1 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面口縁部及び底部に油煙付着,底外底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-104 | 8 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.6) | (8.4) | 4.0 | − | 灰褐色/灰黒色 | 長石,雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,内外面ともに劣化顕著,外面二次被熱により厚く煤付着,茨城産 [下層] |
| SI-104 | 9 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.4) | (9.0) | 4.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに火襷あり,底外回転ヘラケズリ,体部内面線刻あり『‖』,千葉産 [下層] |
| SI-104 | 10 | 須恵 | 杯 | 30 | (12.0) | (7.8) | 3.7 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面火襷あり,器面やや磨耗,底外回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-104 | 11 | 須恵 | 杯 | 45 | (13.8) | (7.9) | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により磨耗・赤み変色顕著,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-104 | 12 | 須恵 | 杯 | 35 | (12.4) | (8.6) | 4.0 | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により部分的に赤み変色・煤付着,底外回転ヘラケズリ,底外ヘラ書きあり『×』,千葉産 [下層] |
| SI-104 | 13 | 土師 | 杯 | 95 | 12.6 | 6.6 | 3.8 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着,底外回転ヘラケズリ [下層] |
| SI-104 | 14 | 須恵 | 高台付杯 | 50 | (13.6) | (9.0) | 5.3 | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面やや劣化,底外回転ヘラ切り後高台貼付,千葉産 [下層] |
| SI-104 | 15 | 須恵 | 高台付杯 | 40 | − | 9.0 | (4.0) | − | 灰褐色/灰黒色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部欠損,内面火襷あり,器面やや磨耗,底外回転ヘラケズリ後高台貼付,千葉産 [中層] |
| SI-104 | 16 | 土師 | 鉢 | 15 | (15.0) | − | (5.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着 [中層] |
| SI-104 | 17 | 須恵 | 甕 | 10 | (17.4) | − | (9.0) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部から頸部遺存,還元不良で器厚薄い,千葉産 [中層] |
| SI-104 | 18 | 須恵 | 甕 | 5 | − | − | 8.6 | − | 灰褐色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,内面当具痕あり,茨城産 [下層] |
| SI-104 | 19 | 須恵 | 甕 | 10 | − | − | (11.6) | − | 黒褐色/褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,内面当具痕あり,千葉産 [下層] |
| SI-105 | 1 | 須恵 | 杯 | 60 | (13.4) | 9.0 | 4.5 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により部分的に剥離・煤付着,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [カマド前,下層] |
| SI-105 | 2 | 須恵 | 杯 | 15 | (12.4) | (7.8) | 4.2 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着,底外回転ヘラケズリ,千葉産 [カマド内] |
| SI-106 | 1 | 須恵 | 杯 | 70 | (13.6) | 8.8 | 4.1 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,内外面ともにやや磨耗,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-106 | 2 | 土師 | 小型甕 | 100 | 12.6 | 5.6 | 15.0 | 胴部(13.0) | 黄褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面下半部剥離顕著,外面黒斑・煤付着顕著,底外多方向手持ちヘラケズリ,在地甕 [下層] |
| SI-107 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.2) | (6.4) | 4.1 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-107 | 2 | 須恵 | 杯 | 15 | − | (7.0) | (2.6) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-107 | 3 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.4 | 6.4 | 4.0 | − | 褐色/褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により赤く変色・煤付着,底外回転ヘラ切り後全面手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-107 | 4 | 土師 | 高台付皿 | 10 | (12.6) | − | (2.1) | − | 褐色/褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着 [カマド内] |
| SI-107 | 5 | 土師 | 小型甕 | 10 | (11.6) | − | (4.9) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により剥落顕著,在地甕 [カマド内] |
| SI-107 | 6 | 土師 | 小型甕 | 30 | (14.1) | 7.4 | 16.5 | − | 褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 二次被熱により内面下半部剥離顕著,外面厚く煤付着,在地甕 [下層] |
| SI-107 | 7 | 陶器 | 托 | 70 | 8.3 | 4.9 | (2.5) | − | 黄白色/黄白色 | − | − | 三彩陶器,内外面ともに緑色・黄色を四方に配すが大幅に流れている [下層] |
| SI-108 | 1 | 須恵 | 杯 | 15 | (13.2) | − | (4.2) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底部欠損,SI-109と遺構間接合,茨城産 [上層] |
| SI-108 | 2 | 土師 | 杯 | 70 | 13.5 | (7.7) | 4.5 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面下半部剥離顕著,内外面煤付着,在地杯 [中層] |
| SI-108 | 3 | 土師 | 杯 | 100 | 11.3 | 5.0 | 5.0 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ヘラケズリ | 外面体部から底部に黒斑あり,在地杯 [中層] |
| SI-108 | 4 | 土師 | 杯 | 40 | (11.5) | (6.2) | 4.5 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により磨耗・煤付着顕著,在地杯 [一括] |
| SI-109 | 1 | 須恵 | 杯 | 90 | 13.8 | 8.6 | 4.2 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,底外回転ヘラ切り後外周回転ヘラケズリ,茨城産 [カマド右袖脇,下層] |
| SI-109 | 2 | 須恵 | 杯 | 50 | (14.0) | 7.8 | 3.9 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-109 | 3 | 土師 | 杯 | 10 | (17.7) | (9.1) | 3.8 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに赤彩,底外手持ちヘラケズリ [一括] |
| SI-109 | 4 | 須恵 | 高台付杯 | 35 | − | (9.6) | 4.4 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラケズリ後高台貼付,茨城産 [下層] |
| SI-109 | 5 | 須恵 | 高杯 | 30 | − | − | (9.9) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 脚部片,透かし二か所,茨城産 [下層] |
| SI-109 | 6 | 須恵 | 甕 | 15 | (33.4) | − | (8.8) | − | 灰白色/灰白色 | 長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ | 内外面ともに磨耗顕著,内面当具痕あり,茨城産 [床面,下層] |
| SI-109 | 7 | 土師 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 外面墨書あり,小片のため詳細不明 [一括] |
| SI-109 | 8 | 土師 | 小型甕 | 5 | (14.2) | − | (6.5) | − | 黄褐色/黄褐色 | 石英,スコリア,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕 [中・下層] |
| SI-109 | 9 | 土師 | 甑 | 5 | − | (12.0) | (4.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ヘラケズリ,ヘラナデ/ナデ | 底部片,やや粒の大きい長石を多く含む, [下層] |
| SI-110 | 1 | 須恵 | 杯 | 35 | (13.4) | (10.0) | 3.7 | − | 灰白色/灰白色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともにやや磨耗,雲母を多く含む,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-110 | 2 | 土師 | 小型甕 | 15 | (13.7) | − | (6.6) | − | 褐色/黒褐色 | 石英,長石,砂粒,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,外面二次被熱により厚く煤付着,在地甕 [中層] |
| SI-111 | 1 | 須恵 | 杯 | 80 | 14.0 | 8.5 | 4.2 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,口縁部の歪みあり,底外全面一方向回転ヘラケズリ,茨城産 [カマド右袖脇,下層] |
| SI-111 | 2 | 須恵 | 杯 | 55 | (13.0) | (9.3) | 4.2 | − | 灰白色/灰白色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともにやや磨耗,雲母を多く含む,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-111 | 3 | 土師 | 甕 | 15 | (22.0) | − | (12.5) | − | 褐色/褐色 | 雲母,長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 底部欠損,内外面ともにやや磨耗,雲母を多く含む　[中層] |
| SI-112 | 1 | 土師 | 甑 | 15 | (32.0) | − | (7.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 口縁部のみ遺存,雲母やや多い,SI-109と遺構間接合,常総型　[床直] |
| SI-112 | 2 | 土師 | 甕 | 10 | − | (7.0) | (8.5) | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデナデ/ナデ,ヘラケズリ | 小型,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕　[下層] |
| SI-113 | 1 | 須恵 | 蓋 | 85 | 11.3 | − | 2.5 | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,内面二条の火襷あり,茨城産　[下層] |
| SI-113 | 2 | 須恵 | 蓋 | 60 | (19.0) | − | 3.0 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 天井部外面回転ヘラケズリ,雲母やや多い,茨城産　[下層] |
| SI-113 | 3 | 須恵 | 杯 | 80 | 14.2 | 8.3 | 4.2 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,茨城産　[中層] |
| SI-113 | 4 | 須恵 | 杯 | 80 | 14.0 | 7.8 | 4.3 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,内外面ともに火襷あり,底外全面多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[中層] |
| SI-113 | 5 | 須恵 | 杯 | 20 | (13.4) | (8.6) | (3.7) | − | 灰黒色/灰黒色 | 雲母,長石,石英,小石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,体部外面火襷あり,茨城産　[下層] |
| SI-113 | 6 | 須恵 | 杯 | 60 | (14.0) | 8.5 | 3.7 | − | 灰黒色/灰黒色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部内面火襷あり,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[下層] |
| SI-113 | 7 | 須恵 | 杯 | 70 | 10.8 | 6.5 | 3.8 | − | 灰白色/灰白色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに磨耗顕著・火襷あり,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,茨城産　[中層] |
| SI-113 | 8 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.4) | (7.8) | 3.8 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱によりやや赤く変色,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[床面] |
| SI-113 | 9 | 須恵 | 杯 | 35 | (13.6) | 7.9 | 4.2 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともにやや磨耗・火襷あり,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[中層] |
| SI-113 | 10 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.0) | (7.0) | 4.5 | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,二次被熱により内面剥落顕著・外面厚く煤付着,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[下層] |
| SI-113 | 11 | 須恵 | 杯 | 35 | − | 8.2 | (1.9) | − | 灰色/灰色 | 雲母,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部のみ円盤状に加工し硯として再利用,底外全面回転ヘラケズリ,茨城産　[上層] |
| SI-113 | 12 | 土師 | 杯 | 45 | (12.6) | − | 3.7 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに器面の磨耗顕著だが部分的に赤彩痕あり,底部丸底気味,底外全面ヘラケズリ　[中層] |
| SI-113 | 13 | 土師 | 杯 | 25 | (14.2) | − | (4.4) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに赤彩,底部欠損,外面ヘラケズリ後に丁寧なナデ　[中層] |
| SI-113 | 14 | 土師 | 杯 | 25 | (12.4) | − | (3.3) | − | 橙褐色/黒褐色 | 長石,石英,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,外面二次被熱により厚く煤付着　[中層] |
| SI-113 | 15 | 須恵 | 高台付杯 | 40 | − | (9.4) | (3.6) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部欠損,内外面及び破断面劣化,底外回転ヘラ切り後高台貼付,茨城産　[中層] |
| SI-113 | 16 | 須恵 | 甕 | 5 | (20.7) | − | (6.2) | − | 灰白色/灰白色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 口縁部のみ遺存,内外面激しく剥離,SK-226と遺構間接合,茨城産　[中・下層] |
| SI-113 | 17 | 須恵 | 甕 | 35 | (21.6) | − | (18.8) | (30.0) | 灰白色/灰白色 | 長石,雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 底部欠損,内外面剥離顕著,茨城産　[上・下層] |
| SI-113 | 18 | 土師 | 甕 | 25 | 15.6 | − | (6.6) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 小型,口縁部完存,外面黒斑あり,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕　[床面] |
| SI-113 | 19 | 土師 | 甕 | 10 | − | − | − | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,雲母,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラナデ,ナデ | 内外面ともに接合痕残る,常総甕　[中層] |
| SI-113 | 20 | 土師 | 甕 | 25 | − | 8.0 | (6.3) | − | 橙褐色/褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラナデ,ミガキ | 底部ほぼ完存,外面二次被熱により剥離・煤付着,内面ヘラナデ痕残る,常総甕　[中・下層] |
| SI-113 | 21 | 土師 | 甕 | 20 | (21.0) | − | (13.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,武蔵甕　[中・下層] |
| SI-114 | 1 | 須恵 | 蓋 | 45 | − | − | (3.0) | − | 灰色/灰色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 摘部完存,茨城産　[中層] |
| SI-114 | 2 | 須恵 | 杯 | 25 | (14.2) | (9.2) | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面及び破断面ともに劣化,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[床直] |
| SI-114 | 3 | 土師 | 杯 | 70 | 14.2 | − | 3.6 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ヘラナデ,ナデ,ヘラケズリ | 底部丸底,内外面ともに赤彩,二次被熱により磨耗顕著・煤付着　[カマド内] |
| SI-114 | 4 | 須恵 | 高台付杯 | 5 | − | − | (5.0) | − | 黄灰色/黄灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 底外回転ヘラケズリ後高台貼付,東海産　[一括] |
| SI-114 | 5 | 土師 | 高台付杯 | 20 | (14.4) | (9.6) | 4.4 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面ともに赤彩,底外回転ヘラケズリ後高台貼付,内外面ともに磨耗顕著　[カマド内] |
| SI-114 | 6 | 土師 | 甕 | 30 | (18.0) | − | (22.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,外面二次被熱により部分的に細かな砂粒付着,武蔵甕　[カマド内・中層] |
| SI-114 | 7 | 土師 | 甕 | 20 | (17.6) | − | (19.8) | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内面胴部上位から下位にかけ器面の劣化顕著,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕　[カマド内・中層] |
| SI-117 | 1 | 須恵 | 蓋 | 30 | (14.8) | − | (2.4) | − | 灰白色/灰白色 | 長石 | ナデ/ナデ | 内外面及び破断面ともに劣化顕著,茨城産　[下層] |
| SI-117 | 2 | 須恵 | 杯 | 40 | (14.5) | 9.0 | 3.3 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,茨城産　[中・下層] |
| SI-117 | 3 | 須恵 | 杯 | 35 | (13.4) | (7.4) | 3.7 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[下層] |
| SI-117 | 4 | 土師 | 杯 | 50 | (14.8) | − | 3.2 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英 | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ,ヘラナデ | 内外面ともに赤彩を施したように赤味を帯びる,器面の磨耗やや顕著　[中・下層] |
| SI-117 | 5 | 土師 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,砂粒 | ヘラナデ/ミガキ | 外面黒斑あり,胴部外面墨書あり『符』[中・下層] |
| SI-117 | 6 | 土師 | 甕 | 70 | − | − | (26.3) | − | 黒褐色/赤褐色 | 長石,砂粒,石英,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ヘラナデ,ミガキ | 胴部上半部から底部周辺にかけて遺存,二次被熱により内面全体煤付着,外面部分的に赤く変色・煤付着,常総甕　[中層] |
| SI-118 | 1 | 須恵 | 杯 | 65 | 13.8 | 7.8 | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともにやや磨耗,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[下層,床直] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-118 | 2 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.2) | 7.4 | 4.4 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 外面火襷あり,内外面ともにやや磨耗,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-118 | 3 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.7) | 7.2 | 4.9 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 体部外面ヘラ書き刻書の可能性あり「?」,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-118 | 4 | 須恵 | 杯 | 45 | (11.4) | 6.8 | 3.5 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面及び破断面ともに磨耗顕著,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,茨城産 [床面] |
| SI-118 | 5 | 須恵 | 杯 | 55 | 12.8 | 7.2 | 3.8 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底内線刻あり「−」,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [床直] |
| SI-118 | 6 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.2) | 7.2 | 4.3 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外ヘラ書きあり「E」,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-118 | 7 | 須恵 | 杯 | 60 | (12.3) | 7.4 | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 打ち欠き土器,底内線刻あり「−」,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [床直] |
| SI-118 | 8 | 須恵 | 杯 | 30 | − | 7.6 | (2.4) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外ヘラ書き・線刻2か所あり「×」「×」一部重複,口縁部欠損,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-118 | 9 | 須恵 | 杯 | 10 | − | 8.2 | − | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部のみ円盤状に加工,内外面ともにヘラ書き・線刻あり「×」,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-118 | 10 | 須恵 | 杯 | 5 | − | − | (0.6) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部のみ円盤状に加工した破片,内面線刻あり「−」,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-118 | 11 | 土師 | 杯 | 20 | (12.0) | − | (3.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア,砂粒 | ヘラナデ,ミガキ/ミガキ,ヘラナデ,ナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により磨耗・煤付着顕著 [床直] |
| SI-118 | 12 | 土師 | 甕? | 破片 | − | − | − | − | 黄褐色/黄褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ヘラケズリ | 胴部片?,外面墨書あり,小片のため詳細不明 [一括] |
| SI-118 | 13 | 須恵 | 高台付杯 | 45 | (14.4) | (8.0) | 5.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 外面部分的に煤付着,底外回転ヘラケズリ後高台貼付,茨城産 [床面] |
| SI-118 | 14 | 須恵 | 高杯 | 5 | − | − | − | − | 青灰色/青灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 高坏脚部片,透かしあり,茨城産 [下層] |
| SI-118 | 15 | 須恵 | 高杯 | 55 | − | − | (9.8) | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 高杯口縁部及び脚裾部欠損,内外面及び破断面ともに磨耗顕著,茨城産 [床直] |
| SI-118 | 16 | 須恵 | 高杯 | 5 | − | (13.0) | (3.3) | − | 灰白色/灰白色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 脚裾部片,内外面及び破断面ともに磨耗顕著,透かしあり,茨城産 [下層] |
| SI-118 | 17 | 須恵 | 高杯 | 5 | − | (15.0) | (2.0) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 脚裾部片,透かしあり,茨城産 [下層] |
| SI-118 | 18 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石 | タタキ/タタキ | 内面当具痕,外面自然釉付着,東海産 [下層] |
| SI-118 | 19 | 須恵 | 短頸壺 | 90 | 7.1 | 5.8 | 6.5 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面ともに丁寧なロクロナデが施されている,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-118 | 20 | 土師 | 甕 | 5 | (27.0) | − | (7.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により磨耗・煤付着顕著,在地甕 [中・下層] |
| SI-118 | 21 | 土師 | 甕 | 35 | − | 7.0 | (21.8) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ヘラナデ | 口縁部欠損,内外面二次被熱により剥離・煤付着顕著,在地甕 [床直,下層] |
| SI-118 | 22 | 土師 | 甕 | 15 | (23.0) | − | (17.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ヘラケズリ,ヘラナデ,ミガキ | 内外面ともに二次被熱により剥離・煤付着,常総甕 [床直,下層] |
| SI-118 | 23 | 土師 | 甕 | 10 | − | 7.0 | (11.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ヘラナデ/ヘラケズリ,ミガキ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底部木葉痕あり,常総甕 [下層] |
| SI-118 | 24 | 須恵 | 甑 | 5 | − | (16.0) | (11.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ヘラケズリ,ヘラナデ/ヘラケズリ,タタキ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,茨城産 [中層] |
| SI-119 | 1 | 土師 | 杯 | 75 | 13.1 | 7.5 | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ,器面やや磨耗 [カマド内] |
| SI-119 | 2 | 土師 | 杯 | 35 | (12.6) | (6.8) | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 器面の磨耗顕著,底外回転糸切り [一括] |
| SI-119 | 3 | 土師 | 杯 | 45 | (13.4) | (6.0) | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転糸切り後多方向手持ちヘラケズリ,外面黒斑あり [下層] |
| SI-119 | 4 | 土師 | 杯 | 70 | 12.7 | (5.8) | 4.1 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により全面煤付着,底外回転糸切り後無調整 [一括] |
| SI-119 | 5 | 土師 | 皿 | 75 | (12.8) | 4.6 | 2.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア,小石 | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転糸切り後無調整 [貯蔵穴内] |
| SI-119 | 6 | 須恵 | 甕 | 5 | (32.0) | − | (4.9) | − | 褐色/赤褐色 | 長石,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により剥離・煤付着,千葉産 [一括] |
| SI-119 | 7 | 土師 | 鉢 | 破片 | − | − | − | − | 褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | ヘラナデ/ヘラナデ | 口縁部片,二次被熱により器面赤く変色 [一括] |
| SI-120 | 1 | 土師 | 甑 | 5 | − | (12.0) | (9.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,小石 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラナデ | 底部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,常総型 [中層] |
| SI-121 | 1 | 土師 | 甕 | 95 | 26.3 | 6.2 | 32.6 | 胴部 21.8 | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ヘラナデ,ナデ | 口縁部内面を巡る「大…村…」墨書と胴部外面縦位に「下総國千…大今在…」墨書あり,二次被熱により外面胴部上半部から底部にかけ厚く煤付着,内面薄黒く変色,在地甕 [中・下層,床面] |
| SI-121 | 2 | 土師 | 甑 | 40 | − | 11.2 | (19.3) | − | 褐色/黄褐色 | 雲母,砂粒,長石 | ヘラナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部完存,二次被熱により内面薄黒く変色,外面やや荒れている,正立した甕の口縁部上に横位に置かれていた,常総型 [カマド内] |
| SI-122 | 1 | 須恵 | 杯 | 5 | − | (4.7) | (0.8) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部片,底外多方向手持ちヘラケズリ,流れ込み,産地不明 [一括] |
| SI-122 | 2 | 須恵 | 甕 | 5 | (17.0) | − | (1.9) | − | 灰褐色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 口縁部片,内面自然釉付着,流れ込み,東海産 [一括] |
| SI-123 | 1 | 土師 | 甕 | 5 | (16.0) | − | (4.6) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,器面やや磨耗,武蔵甕 [一括] |
| SI-124 | 1 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 青灰色/青灰色 | 長石 | ヘラナデ/タタキ | 胴部片,茨城産 [下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-125 | 1 | 須恵 | 蓋 | 95 | 14.6 | − | 2.6 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 打ち欠き土器,摘部きわめて低く中心よりもややずれた位置に貼付られている,茨城産 [下層] |
| SI-126 | 1 | 須恵 | 蓋 | 60 | − | − | (2.0) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 天井部回転ヘラケズリ後摘部貼り付け,内面ヘラ書きあり『−』,破断面やや劣化,茨城産 [中層] |
| SI-126 | 2 | 須恵 | 蓋 | 25 | (15.6) | − | (1.8) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 摘部欠損,内面煤付着,内外面及び破断面ともに劣化,茨城産 [中層] |
| SI-126 | 3 | 須恵 | 杯 | 95 | 14.2 | 8.8 | 3.9 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元やや不良,内外面ともに二次被熱により底部から体部下面にかけて煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [床面] |
| SI-126 | 4 | 須恵 | 杯 | 65 | (13.9) | 8.0 | 3.6 | − | 黒褐色/黒褐色 | 石英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-126 | 5 | 須恵 | 杯 | 55 | 12,1 | 7.6 | 4.0 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-126 | 6 | 土師 | 杯 | 75 | (13.0) | 9.0 | 3.8 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに赤彩,底外静止糸切り後外周手持ちヘラケズリ [中層] |
| SI-126 | 7 | 須恵 | 甕 | 15 | − | (22.0) | (9.8) | − | 黄褐色/灰褐色 | 石英,雲母,砂粒 | ヘラナデ/タタキ,ヘラケズリ | 還元やや不良,外面やや劣化,茨城産 [上・中層] |
| SI-126 | 8 | 土師 | 小型甕 | 100 | 10.5 | 5.6 | 8.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,雲母,石英,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラナデ | 外面黒斑あり,二次被熱により底内剥離・外面煤付着,在地甕 [床面] |
| SI-131 | 1 | 須恵 | 蓋 | 30 | (16.0) | − | (2.1) | − | 灰色/灰色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 摘部欠損,破断面やや劣化,茨城産 [床面] |
| SI-131 | 2 | 須恵 | 杯 | 85 | 13.2 | 8.4 | 4.3 | − | 灰褐色/灰黒色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 打ち欠き土器,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,外面厚く煤付着,茨城産 [床面] |
| SI-131 | 3 | 須恵 | 杯 | 45 | (14.1) | (9.8) | 4.5 | − | 灰色/灰色 | 石英,雲母,スコリア,長石 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面やや磨耗,底内大きく剥離,底外手持ちヘラケズリ,茨城産 [床面] |
| SI-131 | 4 | 須恵 | 杯 | 55 | (13.6) | 7.8 | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により斑状に煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [一括] |
| SI-131 | 5 | 須恵 | 杯 | 35 | − | 8.6 | (2.3) | − | 灰褐色/灰黒色 | 石英,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元やや不良,底部完存,底外ヘラ書きあり『=』,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [床直] |
| SI-131 | 6 | 土師 | 杯 | 20 | − | (6.6) | (2.6) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外墨書あり『千』,内面剥離顕著,底外手持ちヘラケズリ [一括] |
| SI-131 | 7 | 須恵 | 短頸壺 | 10 | − | − | (4.3) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 肩部片,外面薄く自然釉付着,内面接合痕が残る,東海産 [一括] |
| SI-131 | 8 | 須恵 | 甕 | 5 | − | − | (5.6) | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 頸部片,内外面に自然釉付着,東海産 [上層] |
| SI-131 | 9 | 須恵 | 甕 | 20 | (39.0) | − | (12.8) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 内面指頭痕若干残る,茨城産 [下層] |
| SI-131 | 10 | 土師 | 甕 | 40 | (24.2) | − | (30.0) | − | 橙褐色/橙褐色,黒色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ,ミガキ | 底部欠損,二次被熱により外面肩部から底部にかけて厚く煤付着,常総甕 [床面] |
| SI-132 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | − | 9.0 | (2.8) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部完存,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-132 | 2 | 土師 | 杯 | 15 | (14.0) | − | (4.6) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内面磨耗,外面剥離顕著 [一括] |
| SI-132 | 3 | 土師 | 小型甕 | 10 | (12.0) | − | (4.8) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着,在地甕 [下層] |
| SI-132 | 4 | 土師 | 甕 | 15 | (24.4) | − | (24.0) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 二次被熱により外面胴部上半部から底部にかけ厚く煤付着,内面剥離顕著,常総甕 [中層] |
| SI-133 | 1 | 土師 | 杯 | 20 | (12.0) | (5.6) | (4.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底外ヘラ書きあり『○』,外面体部煤付着,底外回転糸切り後無調整 [床直] |
| SI-133 | 2 | 土師 | 高台付杯 | 30 | − | 8.0 | (5.5) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内面やや剥離,底外全面回転ヘラケズリ後高台貼付 [床直] |
| SI-134 | 1 | 土師 | 杯 | 50 | (13.2) | 5.8 | 4.6 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外全面手持ちヘラケズリ [中層] |
| SI-134 | 2 | 土師 | 杯 | 70 | 11.9 | 6.5 | 4.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 全体的に丁寧な調整,底外全面多方向手持ちヘラケズリ,底外墨書あり肉眼では不鮮明『正−富』 [床面] |
| SI-134 | 3 | 土師 | 杯 | 30 | (12.2) | (6.2) | 4.0 | − | 黄褐色/橙褐色 | 長石,砂粒,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内面部分的に剥離,底外手持ちヘラケズリ,ヘラ書きあり『−』 [一括] |
| SI-134 | 4 | 土師 | 高台付皿 | 40 | (14.0) | (6.8) | (3.0) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により赤黒く変色・部分的に厚く煤付着,貼付高台 [床直] |
| SI-134 | 5 | 須恵 | 甕 | 10 | (25.0) | − | (13.8) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,千葉産 [下層,床直] |
| SI-134 | 6 | 土師 | 甕 | 15 | (18.6) | − | (13.6) | − | 褐色/赤褐色 | 雲母,長石,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面煤付着,外面赤く変色,在地甕 [下層,床面] |
| SI-134 | 7 | 須恵 | 甑 | 5 | (28.0) | − | (5.5) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元やや不良,口縁部片,把手不整形,千葉産 [下層] |
| SI-135 | 1 | 土師 | 杯 | 10 | (12.2) | − | (2.8) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により赤く変色 [一括] |
| SI-135 | 2 | 土師 | 甕 | 80 | 15.2 | − | (15.1) | − | 褐色/褐色 | 雲母,砂粒,長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により全面厚く煤付着,外面部分的に激しく剥離 [下層] |
| SI-136 | 1 | 須恵 | 杯 | 85 | 13.6 | 6.4 | 4.3 | − | 灰黒色/黒褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,打ち欠き土器,内外面ともに二次被熱により斑状に煤付着,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [カマド左袖脇] |
| SI-136 | 2 | 須恵 | 杯 | 50 | (14.1) | 6.7 | 4.8 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,内外面口縁部に煤付着,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [床直] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-136 | 3 | 土師 | 杯 | 100 | 13.2 | 7.2 | 3.7 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面油煙状のものが全面に付着し黒光りを呈す,底外多方向手持ちヘラケズリ　[カマド右袖脇] |
| SI-136 | 4 | 土師 | 杯 | 100 | 12.4 | 6.5 | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,白色針状物質 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 二次被熱により内外面斑状に煤付着,底外回転ヘラケズリ　[中層] |
| SI-136 | 5 | 須恵 | 大甕 | 15 | (53.0) | − | (18.5) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,タタキ/タタキ,ナデ | 還元不良,折り返し口縁,内外面ともに黒色処理を施したように満遍なく厚く煤付着,千葉産　[中層] |
| SI-136 | 6 | 須恵 | 甕 | 10 | − | (17.0) | (10.9) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,タタキ | 内外面及び破断面ともに激しく劣化,茨城産　[カマド内] |
| SI-136 | 7 | 土師 | 小型甕 | 35 | (14.0) | − | (10.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 胴部外面黒斑あり,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着・部分的に赤く変色,在地甕　[下層] |
| SI-136 | 8 | 土師 | 小型甕 | 20 | − | 6.6 | (7.0) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英 | ヘラナデ/ヘラナデ,ヘラケズリ | 底部完存,内外面ともに二次被熱により煤付着,底内剥離顕著,底外一方向手持ちヘラケズリ,在地甕　[下層] |
| SI-137 | 1 | 須恵 | 高台付杯 | 20 | − | 9.4 | (1.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,転用硯?,底外回転ヘラケズリ後高台貼り付け,千葉産　[床直] |
| SI-137 | 2 | 須恵 | 甕 | 5 | (21.1) | − | (4.0) | − | 灰黒色/灰黒色 | 雲母,石英,スコリア, | ナデ/ナデ | 還元やや不良,口縁部のみ,内外面ともに二次被熱により煤付着,茨城産　[下層] |
| SI-137 | 3 | 須恵 | 甕 | 15 | − | (15.6) | (9.1) | − | 灰色/灰色 | 雲母,スコリア,石英 | ヘラナデ,ナデ/タタキ,ヘラケズリ | 底部片,二次被熱により外面一部赤く変色,茨城産　[床面] |
| SI-138 | 1 | 須恵 | 杯 | 70 | (14.0) | 7.5 | 4.1 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[下層] |
| SI-138 | 2 | 須恵 | 杯 | 65 | (14.4) | 7.5 | 4.2 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[床直] |
| SI-138 | 3 | 須恵 | 杯 | 40 | (14.6) | (7.8) | 3.9 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[一括] |
| SI-138 | 4 | 須恵 | 杯 | 20 | (13.0) | (7.0) | (4.3) | − | 黄褐色/黄褐色 | 長石,スコリア,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,内外面ともに器面劣化・煤付着,底外手持ちヘラケズリ,千葉産　[一括] |
| SI-138 | 5 | 須恵 | 高台付杯 | 35 | − | 12.2 | (2.4) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部片,底外回転ヘラケズリ後高台貼付,茨城産　[下層] |
| SI-138 | 6 | 須恵 | 甕 | 20 | (28.8) | − | (14.4) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,雲母 | ヘラナデ,タタキ/タタキ,ナデ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,千葉産　[下層] |
| SI-138 | 7 | 須恵 | 甕 | 20 | (27.0) | − | (14.9) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,砂粒,石英,スコリア | ナデ,タタキ/タタキ,ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,内面当具痕あり,千葉産　[中層] |
| SI-138 | 8 | 須恵 | 甕 | 30 | − | (15.0) | (25.3) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | タタキ,ナデ/タタキ,ヘラケズリ | 口縁部欠損,内面当具痕あり,内面全体及び外面胴部下端部調整雑,茨城産　[下層] |
| SI-138 | 9 | 須恵 | 甕 | 40 | − | (16.6) | (23.7) | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,スコリア,砂粒 | ナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,口縁部欠損,内外面ともに二次被熱により満遍なく煤付着,内面指頭痕あり,千葉産　[下層] |
| SI-138 | 10a | 土師 | 甕 | 80 | 23.4 | − | (23.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着・部分的に黒斑あり,武蔵甕[カマド内] |
| SI-138 | 10b | 土師 | 甕 | 5 | − | 7.4 | (1.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ヘラナデ/ヘラケズリ | 底部片,10aと同一個体[カマド内] |
| SI-139 | 1 | 須恵 | 蓋 | 20 | − | − | (3.2) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ | 天井部回転ヘラケズリ後摘貼付,茨城産[カマド内] |
| SI-139 | 2 | 須恵 | 高台付盤 | 35 | − | 9.2 | (2.2) | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,その後高台貼付,硯として再利用?,茨城産　[床直] |
| SI-140 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.0) | (8.6) | 3.8 | − | 灰色/灰色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元やや不良,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,底外回転ヘラケズリ,底外ヘラ書きあり『−』,千葉産　[床直] |
| SI-140 | 2 | 須恵 | 杯 | 15 | − | − | (0.7) | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | −/ヘラケズリ | 底部を円盤状に加工,内外面ともに線刻あり『+』,外面墨書あり『東酒』,茨城産　[一括] |
| SI-141 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 12.2 | 8.2 | 3.4 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元やや不良,器面の磨耗顕著,外面全体に厚く煤付着,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,千葉産　[下層] |
| SI-141 | 2 | 土師 | 杯 | 55 | (13.0) | 6.2 | 4.4 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ　[下層] |
| SI-141 | 3 | 土師 | 杯 | 55 | (15.2) | (5.2) | 4.6 | − | 黒褐色/褐色 | 長石,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 二次被熱により内面剥離・煤付着顕著,外面部分的に煤付着,底外手持ちヘラケズリ[下層] |
| SI-141 | 4 | 土師 | 杯 | 35 | (13.0) | 6.6 | 3.8 | − | 褐色/褐色 | 石英,スコリア | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 二次被熱により内面剥離・煤付着顕著,外面部分的に煤付着,底外回転ヘラケズリ[一括] |
| SI-141 | 5 | 土師 | 高台付皿 | 40 | (14.5) | 6.0 | 2.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内面黒斑あり,器面やや磨耗,底内墨書あり『丈』,底外一方向手持ちヘラケズリ[下層] |
| SI-141 | 6-a | 須恵 | 甕 | 5 | (13.0) | − | (6.7) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 小型,口縁部片,6-bと同一個体,千葉産　[下層] |
| SI-141 | 6-b | 須恵 | 甕 | 5 | − | 8.2 | (4.8) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ | 小型,底部片,6-aと同一個体,底外多方向ヘラケズリ,千葉産　[下層] |
| SI-141 | 7 | 土師 | 甕 | 10 | (21.0) | − | (11.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕[下層] |
| SI-142 | 1 | 土師 | 杯 | 5 | (12.6) | (6.0) | (4.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英 | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 外面やや磨耗　[一括] |
| SI-142 | 2 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/タタキ | 胴部片,胎土密,南比企産[下層] |
| SI-143 | 1 | 土師 | 杯 | 45 | (13.4) | − | 4.4 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底,内外面斑状に薄く煤付着　[下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-143 | 2 | 土師 | 杯 | 30 | (14.0) | − | (3.1) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | 暗文,ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底,内外面ともに磨耗顕著,内面放射状暗文,畿内産土師器［下層］ |
| SI-144 | 1 | 須恵 | 甕 | 5 | (21.2) | − | (3.0) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ,タタキ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産　［床直］ |
| SI-144 | 2 | 土師 | 甕 | 20 | − | 10.0 | (5.0) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,雲母 | ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,内面激しく剥離,外面黒斑あり,在地甕　［床面］ |
| SI-145 | 1 | 土師 | 杯 | 20 | (13.0) | (5.8) | 3.9 | − | 黄褐色/黄褐色 | 石英,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 内外面ともに二次被熱により薄く煤付着,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　［下層］ |
| SI-145 | 2 | 土師 | 甕 | 20 | (17.6) | − | (12.0) | − | 褐色/黒褐色 | 雲母,長石,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面激しい二次被熱により厚く炭化状物質・煤付着,在地甕　［下層］ |
| SI-146 | 1 | 土師 | 杯 | 60 | 13.2 | − | 3.3 | − | 橙褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底,外面赤色部あり　［床面］ |
| SI-146 | 2 | 土師 | 杯 | 55 | (14.6) | − | 4.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ,ミガキ | 底部丸底,内外面部分的に厚く煤付着　［床面,床直,中層］ |
| SI-146 | 3 | 土師 | 杯 | 30 | (16.0) | − | 4.6 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 底部丸底,内外面ともに磨耗顕著［上層］ |
| SI-146 | 4 | 土師 | 杯 | 40 | (17.0) | − | 3.4 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ,ミガキ | 底部丸底,内外面黒色処理　［中・下層］ |
| SI-147 | 1 | 須恵 | 杯 | 55 | 12.6 | (6.8) | 4.1 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外ヘラ書きあり『+』,多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［下層・床面］ |
| SI-147 | 2 | 須恵 | 杯 | 25 | (14.0) | (6.7) | 4.4 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,底外ヘラ書きあり『+』,一方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［床直］ |
| SI-147 | 3 | 須恵 | 杯 | 50 | − | (6.4) | (3.6) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［床直］ |
| SI-147 | 4 | 土師 | 杯 | 50 | (14.8) | 6.4 | 5.3 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 体外墨書あり『明』,底外ヘラ書きあり『−』,底部内面剥離顕著,底外回転ヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群　［床直］ |
| SI-147 | 5 | 土師 | 杯 | 45 | (14.7) | 6.9 | 4.9 | − | 黄褐色/黄褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ミガキ/ヘラケズリ,ナデ | 底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ　［下層］ |
| SI-147 | 6 | 須恵 | 甕 | 50 | 23.4 | − | (30.0) | 胴部(28.8) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/タタキ,ナデ | 底部欠損,還元不良,内面二次被熱により剥離・煤付着顕著,外面広範囲に薄く煤付着,千葉産　［中・下層,床面］ |
| SI-147 | 7 | 須恵 | 甕 | 20 | (18.2) | (14.0) | (25.0) | 胴部(20.8) | 灰色/灰色 | 長石,石英,スコリア,砂粒,雲母 | ナデ/タタキ,ヘラケズリ,ナデ | 肩部欠損,還元やや不良,外面二次被熱により煤付着,千葉産　［下層,床面］ |
| SI-147 | 8 | 土師 | 甕 | 50 | 18.9 | − | (17.3) | 肩部(21.6) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ | 底部欠損,還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,器面凹凸目立つ,常総甕　［下層,床面］ |
| SI-147 | 9 | 土師 | 小型甕 | 5 | (12.0) | − | (2.7) | − | 黄褐色/黄褐色 | 長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕　［一括］ |
| SI-147 | 10 | 土師 | 甕 | 45 | (20.0) | − | (20.3) | 胴部(22.4) | 橙褐色/橙褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,外面二次被熱により厚く煤付着,器面凹凸やや目立つ,在地甕　［下層,床面］ |
| SI-147 | 11 | 土師 | 甕 | 40 | 19.1 | − | (15.0) | 胴部(25.0) | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ | 胴部下半部から底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,器面凹凸目立つ,常総甕　［下層］ |
| SI-147 | 12 | 土師 | 甕 | 15 | (20.2) | − | (13.8) | − | 褐色/褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 胴部下半部から底部欠損,外面激しい二次被熱により多量の炭化粒付着［下層,床面］ |
| SI-148 | 1 | 須恵 | 杯 | 20 | (16.0) | − | (4.1) | − | 黒色/黒色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底部欠損,内外面ともに黒色処理を施したように黒い,SB-016と遺構間接合,千葉産　［一括］ |
| SI-148 | 2 | 土師 | 杯 | 20 | (14.6) | (8.0) | 4.2 | − | 橙褐色/黄褐色 | 雲母,長石,白色針状物質 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともにやや磨耗,底外回転ヘラケズリ　［床直］ |
| SI-148 | 3 | 土師 | 杯 | 35 | − | (6.8) | 3.4 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部欠損,外面黒斑あり,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ　［床面］ |
| SI-148 | 4 | 土師 | 高台付皿 | 30 | (13.0) | 5.8 | 3.4 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面墨書あり『千』,内面柔らかい皮のようなもので磨き光沢あり,底外手持ちヘラケズリ後高台貼付　［床直］ |
| SI-148 | 5 | 原始灰釉陶器 | 長頸壺 | 80 | − | 9.2 | (24.1) | 胴部17.2 | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 折戸10号窯式か。内面頸部及び底部全面,外面頸部から肩部にかけて灰釉付着,貼付高台縁部に歪みがありやや不安定,東海産　［下層］ |
| SI-148 | 6 | 原始灰釉陶器 | 短頸壺 | 80 | (11.0) | 13.4 | 17.4 | 胴部22.2 | 灰色/灰色 | 長石（大） | ナデ/ナデ | 折戸10号窯式か。内面頸部及び胴部下半分から底部全面,外面頸部から肩部にかけて灰釉付着,貼付高台,骨臓器,東海産　［下層］ |
| SI-148 | 7 | 土師 | 甕 | 20 | (17.0) | − | (6.6) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着・磨耗顕著,在地甕［下層］ |
| SI-149 | 1 | 土師 | 杯 | 10 | (10.8) | − | (3.6) | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内面光沢あり,外面煤付着［一括］ |
| SI-149 | 2 | 土師 | 杯 | 5 | (11.8) | − | (3.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英 | ナデ/ナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により部分的に剥離［一括］ |
| SI-149 | 3 | 土師 | 甑 | 5 | − | (9.0) | (2.6) | − | 褐色/褐色 | 長石 | ヘラナデ/,ヘラケズリ | 底部片,内外面ともに二次被熱により煤付着［一括］ |
| SI-151 | 1 | 須恵 | 蓋 | 30 | (14.7) | − | (3.5) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面大きく剥離,東海産　［下層］ |
| SI-151 | 2 | 須恵 | 杯 | 90 | 13.1 | 7.0 | 4.0 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［床直］ |
| SI-151 | 3 | 須恵 | 杯 | 70 | (13.2) | 7.2 | 4.3 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面ともに磨耗顕著,底外回転糸切り後無調整,東金子産　［下層］ |
| SI-151 | 4 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.2) | (6.9) | (3.6) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 外面一部煤付着,底外回転糸切り後無調整,東金子産　［下層］ |
| SI-151 | 5 | 須恵 | 杯 | 25 | − | (7.5) | (2.3) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,還元不良,底外ヘラ書きあり『?』,回転ヘラケズリ,千葉産　［中・下層］ |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-151 | 6 | 須恵 | 杯 | 10 | − | (8.0) | (2.5) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,還元不良,底外線刻あり『−』,回転ヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-151 | 7 | 須恵 | 杯 | 10 | − | (6.8) | (1.8) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,還元不良,底外線刻あり『×』,回転ヘラケズリ,千葉産 [上層] |
| SI-151 | 8 | 須恵 | 杯 | 40 | (14.1) | 7.3 | (4.1) | − | 黄褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-151 | 9 | 土師 | 杯 | 75 | (12.8) | 6.3 | 3.8 | − | 黄褐色/黄褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により部分的に厚く煤付着,底外静止糸切り後手持ちヘラケズリ,調整やや雑 [中層] |
| SI-151 | 10 | 土師 | 杯 | 45 | (11.8) | (6.4) | (3.8) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により剥離・変色顕著,底外静止糸切り後外周手持ちヘラケズリ [中層] |
| SI-151 | 11 | 土師 | 杯 | 70 | 12.7 | 5.9 | 3.7 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面及び破断面ともに磨耗顕著,底外全面回転ヘラケズリ [上層] |
| SI-151 | 12 | 土師 | 杯 | 100 | 10.6 | 6.3 | 3.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともにやや磨耗,底外全面回転ヘラケズリ [下層] |
| SI-151 | 13 | 須恵 | 高台付杯 | 35 | − | (11.2) | (2.8) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともにやや磨耗,底外回転ヘラケズリ後高台貼付,茨城産 [上・下層] |
| SI-151 | 14 | 土師 | 坩 | 95 | (7.9) | 3.2 | 9.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ミガキ | 外面黒斑あり [上層] |
| SI-151 | 15 | 須恵 | 甕 | 25 | − | − | (14.5) | − | 黄褐色/褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産 [中層] |
| SI-151 | 16 | 須恵 | 甕 | 10 | (14.4) | − | (4.8) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,小型,口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産 [中層] |
| SI-151 | 17 | 須恵 | 甕 | 40 | (24.0) | − | (16.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,砂粒,白色針状物質 | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産 [上層] |
| SI-151 | 18 | 土師 | 甕 | 20 | (17.2) | − | (9.8) | − | 黒褐色/黒褐色 | 雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器厚やや薄め,在地甕 [下層] |
| SI-151 | 19 | 土師 | 甕 | 10 | − | − | (14.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 胴部片,内外面ともに二次被熱により煤付着 [上層] |
| SI-152 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.8 | 7.0 | 4.4 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-152 | 2 | 須恵 | 杯 | 25 | (12.2) | (5.4) | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに底部を中心に二次被熱により厚く煤付着,千葉産 [中層] |
| SI-152 | 3 | 土師 | 杯 | 10 | (13.4) | − | (3.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ | 体部内外面墨書あり『千』,内面正位,外面横位 [下層] |
| SI-152 | 4 | 土師 | 杯 | 85 | 15.3 | 7.6 | 5.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により全面煤付着,底外回転糸切り後無調整,千葉産須恵器と明確な区別がつかない一群 [上・下層] |
| SI-152 | 5 | 土師 | 杯 | 90 | 12.9 | 6.1 | 4.2 | − | 黄褐色/黄褐色 | スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,内外面ともにやや劣化,底外多方向手持ちヘラケズリ [カマド右袖脇] |
| SI-152 | 6 | 須恵 | 高台付杯 | 15 | − | (9.0) | (2.3) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 高台部片,底外回転ヘラケズリ後高台貼付,茨城産 [一括] |
| SI-152 | 7 | 土師 | 小型甕 | 10 | (13.0) | − | (5.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英 | ナデ/ナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕 [中層] |
| SI-152 | 8 | 須恵 | 甑 | 20 | (28.0) | − | (15.8) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,把手あり,内外面ともに二次被熱により赤く変色・煤付着,内面当具痕あり,千葉産 [中・下層] |
| SI-152 | 9 | 須恵 | 甑 | 35 | − | (14.6) | (22.5) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/タタキ,ヘラケズリ,ヘラナデ | 還元不良,口縁部欠損,底部5孔,内面当具痕あり,千葉産 [下層,床直] |
| SI-152 | 10 | 須恵 | 羽釜 | 5 | (23.6) | − | (3.2) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,千葉産 [上層] |
| SI-153 | 1 | 須恵 | 杯 | 55 | (13.7) | (7.0) | 4.3 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,器面の剥離顕著,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-153 | 2 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.0) | (6.2) | 4.4 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,千葉産 [一括] |
| SI-153 | 3 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.8) | (7.7) | (4.6) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底部欠損,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,千葉産 [下層] |
| SI-153 | 4 | 土師 | 杯 | 40 | (11.8) | 6.8 | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,,底外外周回転ヘラケズリ [中・下層] |
| SI-153 | 5 | 土師 | 杯 | 55 | 14.4 | 7.8 | 4.7 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により剥離顕著,外面黒斑あり,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ [下層] |
| SI-153 | 6 | 灰釉陶器 | Ⅲ | 10 | (15.6) | − | (1.7) | − | 灰褐色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 黒笹90号窯式。口縁部片,東海産 [一括] ,内面の一部に朱墨付着 |
| SI-153 | 7 | 土師 | Ⅲ | 50 | (12.6) | 5.0 | 2.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外ヘラ書きあり『=』数条,内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着,底外全面回転ヘラケズリ, [カマド内] |
| SI-153 | 8 | 土師 | 高台付Ⅲ | 55 | (13.7) | 7.4 | 2.5 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 底外回転ヘラ切り後高台つくり出し,その後外周ナデ,千葉産須恵器と明確な区別がつかない一群 [一括] |
| SI-153 | 9 | 土師 | 高台付Ⅲ | 60 | − | 6.6 | 1.7 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ | 口縁部欠損,底外回転糸切り後高台つくり出し,その後外周ナデ [中層] |
| SI-153 | 10 | 土師 | 台付Ⅲ | 25 | − | 7.2 | (1.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 底外墨書あり『千』,口縁部欠損,底外回転糸切り後高台つくり出し,その後外周ナデ [一括] |
| SI-153 | 11 | 土師 | 高台付杯 | 40 | (14.2) | (7.6) | 4.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ | 内外面ともに部分的に黒斑あり,器面の劣化顕著,底外回転ヘラケズリ後高台つくり出し,その後ナデ [カマド内] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-153 | 12 | 須恵 | 鉢 | 45 | (26.4) | 13.2 | 15.6 | – | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 大型,内面当具痕あり,千葉産 [中・下層] |
| SI-153 | 13 | 須恵 | 甕 | 10 | (31.2) | – | (11.0) | – | 灰褐色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元やや不良,千葉産 [カマド内] |
| SI-153 | 14 | 須恵 | 甕 | 5 | – | – | (11.7) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,外面黒斑あり,千葉産 [カマド内] |
| SI-153 | 15 | 須恵 | 甕 | 10 | (19.6) | – | (14.5) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着,外面一部赤く変色,千葉産 [カマド内] |
| SI-153 | 16 | 須恵 | 甕 | 25 | – | – | (19.3) | – | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/タタキ,ナデ | 還元不良,内面当具痕あり,千葉産 [下層,床直] |
| SI-153 | 17 | 須恵 | 甕 | 10 | – | (9.4) | (4.7) | – | 褐色/褐色 | 雲母,長石,スコリア | ヘラナデ/ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,底外ヘラ書きあり『+』,千葉産 [一括] |
| SI-153 | 18 | 須恵 | 甕 | 破片 | – | – | – | – | 黒褐色/黒褐色 | 石英 | ナデ/ヘラケズリ | 底部片,底外回転糸切り後底部を円盤状に加工,外面ヘラ書き・線刻あり『M』?,千葉産 [中層] |
| SI-153 | 19 | 須恵 | 甕 | 破片 | – | – | – | – | 黒褐色/橙褐色 | 長石 | ナデ/ヘラケズリ | 底部片,外面ヘラ書あり『×』『−』,千葉産 [一括] |
| SI-153 | 20 | 土師 | 甕 | 35 | (20.4) | – | (29.5) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ,ミガキ | 二次被熱により外面広範囲に炭化した山砂付着,また器面の剥離・煤付着顕著,常総甕 [中層] |
| SI-153 | 21 | 土師 | 甕 | 15 | (21.4) | – | (16.5) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面やや荒れている,常総甕 [カマド内] |
| SI-153 | 22 | 土師 | 甕 | 50 | 14.6 | – | (18.3) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,白色針状物質 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 小型,底部欠損,二次被熱により内面胴上半部から口縁部にかけ煤付着,外面やや荒れ部分的に赤く変色,在地甕 [下層] |
| SI-153 | 23 | 土師 | 甕 | 65 | 15.4 | – | (17.0) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア,砂粒,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 小型,底部欠損,二次被熱により外面広範囲に剥離・煤付着顕著,在地甕 [下層] |
| SI-153 | 24 | 須恵 | 甑 | 5 | – | (15.0) | (7.4) | – | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラケズリ/タタキ,ヘラケズリ | 底部片,調整やや雑,茨城産 [中層] |
| SI-154 | 1 | 須恵 | 大型甕 | 5 | (37.6) | – | (3.8) | – | 灰褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ | 折り返し口縁部片,還元不良,千葉産 [床直] |
| SI-155 | 1 | 須恵 | 蓋 | 70 | 11.4 | – | 3.0 | – | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 天井部外面回転ヘラケズリ後摘貼付,ヘラ書きあり『×』,千葉産 [下層] |
| SI-155 | 2 | 須恵 | 蓋 | 30 | (11.6) | – | 3.1 | – | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 天井部外面回転ヘラケズリ後摘貼付,千葉産 [一括] |
| SI-155 | 3 | 須恵 | 杯 | 90 | 12.9 | 6.4 | 3.9 | – | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [床直] |
| SI-155 | 4 | 須恵 | 杯 | 65 | 13.5 | 7.8 | 4.1 | – | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-155 | 5 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.4) | (8.0) | 3.5 | – | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外多方向手持ちヘラケズリ,ヘラ書きあり,千葉産 [中層] |
| SI-155 | 6 | 須恵 | 杯 | 60 | 12.0 | (8.2) | 4.1 | – | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラケズリ,線刻あり,千葉産 [下層] |
| SI-155 | 7 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.5) | (8.0) | (4.5) | – | 灰色/灰色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに磨耗顕著,底外二次被熱により激しく煤付着,回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [一括] |
| SI-155 | 8 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.2) | (6.6) | 3.3 | – | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面及び破断面ともにやや磨耗,底外回転糸切り後無調整,東金子産 [中層] |
| SI-155 | 9 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.0) | (7.0) | 3.8 | – | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-155 | 10 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.4) | (7.6) | 3.3 | – | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底外静止糸切り後無調整,東金子産 [床直] |
| SI-155 | 11 | 須恵 | 杯 | 15 | (12.0) | – | (3.6) | – | 灰色/灰色 | 長石,白色針状物質 | ナデ/ナデ | 底部欠損,南比企産 [一括] |
| SI-155 | 12 | 須恵 | 杯 | 5 | – | – | – | – | 灰褐色/灰褐色 | 長石 | ナデ/ヘラケズリ | 底部片,底外回転ヘラケズリ,底外2か所ヘラ書き・線刻あり『×』『井』,千葉産 [一括] |
| SI-155 | 13 | 土師 | 杯 | 50 | (11.6) | (7.8) | (4.2) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器と明確な区別がつかない一群 [床直] |
| SI-155 | 14 | 土師 | 杯 | 50 | (12.0) | 6.0 | 3.7 | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ミガキ/ナデ | 外面体部と底部の剥離・磨耗顕著のため底外調整不明 [上層] |
| SI-155 | 15 | 土師 | 杯 | 35 | (15.4) | (7.0) | 4.4 | – | 黒色/橙褐色 | 雲母,石英,スコリア | ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,外面磨耗顕著のため底外調整不明 [一括] |
| SI-155 | 16 | 須恵 | 杯 | 5 | – | – | – | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ヘラケズリ | 還元不良底部片,底外ヘラ書きあり,千葉産 [一括] |
| SI-155 | 17 | 須恵 | 高台付杯 | 15 | – | (8.4) | (2.3) | – | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 底部片,破断面やや劣化,茨城産 [一括] |
| SI-155 | 18 | 須恵 | 高杯 | 20 | – | – | (4.3) | – | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 脚部片,内外面及び破断面ともに磨耗顕著,脚部透かしあり,茨城産 [中層] |
| SI-155 | 19 | 須恵 | 甕 | 40 | (19.2) | – | (36.4) | 胴部(26.6) | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラケズリ/ナデ,ヘラケズリ,タタキ | 還元不良,二次被熱により内面剥離顕著・当具痕あり,底外胴上半部から口縁部にかけ厚く煤付着,千葉産 [床面] |
| SI-155 | 20 | 須恵 | 甕 | 10 | (28.6) | – | (11.5) | – | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,内面当具痕あり,千葉産 [上層] |
| SI-155 | 21 | 須恵 | 甕 | 5 | (19.2) | – | (7.0) | – | 橙褐色/橙褐色 | 雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,口縁端部二次被熱により赤く変色,千葉産 [一括] |
| SI-155 | 22 | 須恵 | 甕 | 5 | (37.9) | – | (9.2) | – | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,内面指頭痕あり,茨城産 [下層] |
| SI-155 | 23 | 土師 | 小型甕 | 20 | (14.4) | – | (8.1) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 小型,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕 [床直,床面] |
| SI-155 | 24 | 土師 | 甕 | 10 | (30.6) | – | (9.0) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内面ヘラによる当たりあり,外面黒斑あり,在地甕 [床面] |
| SI-155 | 25 | 土師 | 杯 | 5 | – | (8.6) | (1.3) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ミガキ/ヘラケズリ | 底部片,外面黒斑あり [一括] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-155 | 26 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | ナデ/ヘラケズリ | 還元不良,胴部片,外面ヘラ書きあり『−』,千葉産 [一括] |
| SI-155 | 27 | 土師 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 黄褐色/褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ | 底部片,底外ヘラ書きあり [一括] |
| SI-155 | 28 | 須恵 | 甑 | 20 | (32.8) | − | (20.0) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 内面当具痕あり,外面格子状タタキ目の模倣,茨城産 [床面] |
| SI-156 | 1 | 須恵 | 杯 | 10 | (11.6) | (6.4) | 3.7 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り後無調整,東金子産 [一括] |
| SI-156 | 2 | 須恵 | 杯 | 20 | (13.2) | (6.9) | (4.0) | − | 赤褐色/褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,外面部分的に煤付着,底外手持ちヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-156 | 3 | 須恵 | 杯 | 90 | 12.8 | 7.6 | 4.1 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,打ち欠き土器,内面ほぼ黒色,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-156 | 4 | 須恵 | 杯 | 20 | (13.7) | (6.8) | 3.8 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-156 | 5 | 土師 | 杯 | 45 | (12.6) | 6.4 | 3.8 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,器面やや劣化,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群 [上層] |
| SI-156 | 6 | 土師 | 杯 | 30 | (20.0) | (11.0) | 7.9 | − | 黒色/橙褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 大型,内面黒色処理,底外回転ヘラケズリ [下層] |
| SI-156 | 7 | 土師 | 杯 | 20 | (16.0) | (7.6) | (5.7) | − | 赤褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底部ほとんど欠損,内面赤彩を施したように赤味を帯びる [一括] |
| SI-156 | 8 | 土師 | 杯 | 30 | (15.2) | (6.6) | 4.1 | − | 黒色/橙褐色 | スコリア,石英,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面全体及び外面口唇部にかけ黒色処理,外面磨耗顕著,底外回転ヘラケズリ [中層] |
| SI-156 | 9 | 須恵 | 甕 | 70 | 21.0 | (14.4) | (27.0) | (23.1) | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,口縁部完存,内外面ともに二次被熱により煤付着,外面胴上半部から底部にかけ赤く変色,甑として再利用の可能性あり,千葉産 [床直,床面] |
| SI-156 | 10 | 須恵 | 甕 | 5 | − | − | − | − | 褐色/褐色 | 長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ | 還元不良,底部片,底外線刻あり『大』?,千葉産 [中層] |
| SI-156 | 11 | 須恵 | 甕 | 40 | − | 14.2 | (21.8) | − | 褐色/黒褐色 | スコリア,長石,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,内面当具痕あり,外面煤付着,千葉産 [上層] |
| SI-156 | 12 | 須恵 | 甑 | 20 | (30.0) | − | (22.1) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,把手四角錐,内面当具痕あり,千葉産 [下層] |
| SI-157 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 12.9 | 7.4 | 4.3 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外ヘラ書きあり『−』,内外面ともにやや磨耗,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-157 | 2 | 須恵 | 杯 | 95 | 14.0 | 8.2 | 4.1 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外線刻あり『=』,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-157 | 3 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.8 | 9.1 | 4.2 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに磨耗顕著,底外回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-157 | 4 | 須恵 | 杯 | 95 | 14.1 | 8.0 | 4.2 | − | 黒褐色/黒褐色 | 雲母,長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により器面劣化・厚く煤付着,底外回転ヘラ切り後無調整,茨城産 [中層] |
| SI-157 | 5 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.2 | 8.6 | 3.6 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに磨耗顕著,底外回転ヘラ切り後全面手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-158 | 1 | 土師 | 皿 | 95 | 13.8 | 5.4 | 2.8 | − | 黄褐色/黄褐色 | スコリア,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面に墨書あり『八』,内外面ともに磨耗顕著,底外回転糸切り後一部手持ちヘラケズリ,内外面口縁部二か所に油煙の痕跡あり,須恵器との明確な区別がつかない一群 [床直] |
| SI-158 | 2 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 黄褐色/黄褐色 | 石英,長石 | ナデ/ナデ | 体部外面に墨書あり,小片のため詳細不明 [一括] |
| SI-158 | 3 | 土師 | 小型甕 | 25 | (10.4) | − | (8.2) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ﾊｹ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面口縁部から外面胴部まで厚く煤付着,在地甕 [床直] |
| SI-161 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | − | 7.2 | (2.3) | − | 灰褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底部完存,底外ヘラ書きあり『×』,多方向手持ちヘラケズリ,二次被熱により部分的に煤付着,千葉産 [下層] |
| SI-161 | 2 | 土師 | 杯 | 45 | (12.4) | 7.0 | 3.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底外多方向手持ちヘラケズリ [中・下層] |
| SI-161 | 3 | 須恵 | 甕 | 5 | (39.6) | − | (14.8) | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 内面当具痕あり,茨城産 [中層] |
| SI-162 | 1 | 須恵 | 蓋 | 10 | (15.0) | − | (2.4) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに火襷あり,天井部外面回転ヘラケズリ,茨城産 [一括] |
| SI-163 | 1 | 土師 | 杯 | 95 | 15.5 | 7.5 | 4.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面墨書あり『千』,底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ [下層,床直] |
| SI-163 | 2 | 土師 | 杯 | 95 | 13.0 | 6.9 | 4.6 | − | 褐色/褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転糸切り後無調整 [下層] |
| SI-163 | 3 | 土師 | 杯 | 80 | (12.7) | 6.0 | (4.7) | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り後無調整 [中・下層] |
| SI-163 | 4 | 灰釉陶器 | 椀 | 35 | (15.2) | 7.5 | (4.5) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 折戸53号窯式。内面薄く灰釉付着,底外回転糸切り後高台貼付,東海産 [床直] |
| SI-164 | 1 | 須恵 | 杯 | 35 | (12.8) | (7.8) | (4.1) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底内線刻『+』・底外ヘラ書き『−』あり,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,茨城産 [中・下層] |
| SI-164 | 2 | 須恵 | 杯 | 65 | 13.8 | (8.8) | (3.7) | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともにやや磨耗,底外回転ヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-164 | 3 | 須恵 | 杯 | 35 | (13.0) | (7.0) | (4.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面墨書あり,判読不能,底外回転糸切り後全面回転ヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-164 | 4 | 土師 | 杯 | 70 | (15.2) | 10.4 | 4.9 | − | 赤褐色/赤褐色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により器面の変色・剥離・煤付着顕著 [カマド内] |
| SI-164 | 5 | 土師 | 甕 | 10 | (34.4) | − | (9.2) | − | 橙色/橙色 | 石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,二次被熱により外面煤付着,在地甕 [中・下層] |
| SI-164 | 6 | 土師 | 甕 | 15 | (22.6) | − | (14.1) | − | 黒色/褐色 | スコリア,長石,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,外面部分的に黒斑あり,武蔵甕 [中・下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-164 | 7 | 土師 | 甕 | 30 | (22.7) | − | (25.3) | − | 黒色/褐色 | 長石,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ,ミガキ | 底部欠損,内面広範囲に厚く煤付着しほぼ黒色を呈す,常総甕［下層］ |
| SI-164 | 8 | 土師 | 小型甕 | 100 | 10.4 | 6.2 | 6.5 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部に焼成後の小さな穿孔あり,調整やや雑,胴部外面黒斑あり,在地甕［カマド内］ |
| SI-164 | 9 | 土師 | 小型甕 | 30 | 11.1 | − | (5.2) | − | 褐色/褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕［カマド内］ |
| SI-164 | 10 | 土師 | 小型甕 | 35 | − | 6.0 | (6.1) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ヘラナデ/ヘラケズリ | 底部片,外面黒斑あり,在地甕［床直,下層］ |
| SI-165 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 12.3 | 5.8 | 4.1 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,外面二次被熱により広範囲に煤付着・部分的に赤く変色,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産［下層］ |
| SI-165 | 2 | 須恵 | 杯 | 100 | 13.6 | 8.0 | 4.3 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後外周手持ちヘラケズリ,千葉産［床直］ |
| SI-165 | 3 | 須恵 | 杯 | 100 | 14.0 | 6.8 | 4.5 | − | 褐色/黒褐色 | スコリア,長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,外面二次被熱によりほぼ全面厚く煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産［床直］ |
| SI-165 | 4 | 土師 | 杯 | 100 | 12.3 | 5.8 | 4.2 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,底外墨書あり『正』,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群［床直］ |
| SI-165 | 5 | 土師 | 杯 | 30 | (13.2) | 6.4 | 4.2 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面朱墨あり『得』,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群［床直,下層］ |
| SI-165 | 6 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | − | 体部片,墨書あり,判読不能［一括］ |
| SI-165 | 7 | 土師 | 杯 | 35 | 17.0 | − | (4.5) | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,石英 | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着［カマド内］ |
| SI-165 | 8 | 須恵 | 高台付皿 | 15 | (14.0) | (8.2) | 3.4 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 貼付高台,千葉産［上層］ |
| SI-165 | 9 | 須恵 | 高台付皿 | 85 | 13.7 | 8.0 | 3.4 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ | 還元不良,器面の荒れ顕著,内外面ともに煤付着,底外回転ヘラケズリ,その後高台貼付,千葉産［カマド内］ |
| SI-165 | 10 | 須恵 | 高台付杯 | 20 | − | (8.0) | (2.0) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ | 還元不良,高台部片,回転ヘラケズリ後高台貼付,千葉産［上層］ |
| SI-165 | 11 | 須恵 | 高台付杯 | 30 | (15.0) | (8.0) | 4.6 | − | 緑灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 底内を除く内面全体に自然釉付着,その自然釉が剥離した部分に朱付着,千葉産［床直］ |
| SI-165 | 12 | 土師 | 高台付杯 | 55 | 14.1 | 8.2 | 5.2 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英 | ミガキ/ナデ | 底内ヘラ書き文様あり,底外貼付高台内に墨書あり『物川』［上層］ |
| SI-165 | 13 | 須恵 | 甕 | 40 | (27.0) | − | (20.8) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 底部欠損,還元不良,内面当具痕鮮明,千葉産［カマド内,下層］ |
| SI-166 | 14 | 須恵 | 小型甕 | 5 | (14.3) | − | (6.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ | 口縁部片,還元不良,内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着,千葉産［中層］ |
| SI-165 | 15 | 須恵 | 甕 | 25 | − | (10.2) | (8.0) | − | 灰黒色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ/タタキ,ヘラナデ | 小型,底部片,還元不良,底外無調整線刻あり『×』『−』,千葉産［床面,下層］ |
| SI-165 | 16 | 土師 | 甕 | 100 | 15.2 | 8.8 | 14.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ,ヘラナデ | 小型,内面口縁部及び外面広範囲に黒斑あり,在地甕［カマド内］ |
| SI-165 | 17 | 土師 | 甕 | 55 | 21.6 | − | (17.0) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により広範囲に激しく煤付着,在地甕［床面］ |
| SI-165 | 18 | 土師 | 甕 | 15 | (27.0) | − | (15.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 外面黒斑あり,調整やや雑,常総甕［カマド前,床面］ |
| SI-165 | 19 | 土師 | 甕 | 15 | (22.0) | − | (8.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着,在地甕［下層］ |
| SI-165 | 20 | 土師 | 甕 | 35 | − | 6.1 | (9.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,砂粒,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 小型,底部完存,内外面ともに黒斑あり,底外全面ヘラケズリ,在地甕［床直］ |
| SI-165 | 21 | 須恵 | 甑 | 5 | (32.0) | − | (7.5) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元やや不良,千葉産［下層］ |
| SI-167 | 1 | 土師 | 甕 | 5 | (22.8) | − | (4.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,外面二次被熱により劣化,武蔵甕［カマド内］ |
| SI-167 | 2 | 土師 | 甕 | 10 | − | − | (13.6) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面ヘラの当具痕あり,外面二次被熱により広範囲に煤付着・肩部赤く変色,在地甕［カマド内］ |
| SI-168 | 1 | 須恵 | 杯 | 55 | (13.1) | 7.6 | 4.2 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,体部内面線刻『+』・底外ヘラ書き『×』あり,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,千葉産［床直］ |
| SI-168 | 2 | 須恵 | 杯 | 85 | (13.1) | 6.8 | 3.8 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | ,還元やや不良体部内面ヘラ書き『+』・底外線刻『−』あり,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産［床直,中層］ |
| SI-168 | 3 | 土師 | 高台付杯 | 25 | − | 7.8 | (1.9) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ | 底部片,底部周縁部を円形に加工,底外静止糸切り後外周回転ヘラケズリ,その後高台貼付,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群［下層］ |
| SI-168 | 4 | 土師 | 甕 | 10 | (22.0) | − | (6.2) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕［カマド内］ |
| SI-168 | 5 | 土師 | 甕 | 45 | − | 8.0 | (33.3) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ミガキ | 口縁部欠損,底外木葉痕あり,二次被熱により外面胴部上半部に炭化粒付着,常総甕［カマド内,下層］ |
| SI-169 | 1 | 土師 | 杯 | 50 | (12.2) | 5.5 | 4.3 | − | 褐色/褐色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転糸切り後一方向手持ちヘラケズリ［床直,下層］ |
| SI-169 | 2 | 土師 | 杯 | 55 | (12.0) | 5.0 | 3.8 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面やや劣化・外面広範囲に煤付着,底外回転糸切り後一方向手持ちヘラケズリ［床直］ |
| SI-169 | 3 | 土師 | 杯 | 40 | (12.4) | − | (4.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により外面激しく剥離［床直］ |
| SI-169 | 4 | 土師 | 杯 | 20 | (12.1) | (6.0) | (4.1) | − | 褐色/褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転糸切り後無調整［下層］ |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-169 | 5 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 褐色/褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 体部外面墨書あり,小片のため詳細不明 [一括] |
| SI-169 | 6 | 灰釉陶器 | 椀 | 10 | (16.0) | − | (4.3) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 黒笹90号窯式～折戸53号窯式。口縁部内外面に灰釉付着,東海産 [床直] |
| SI-169 | 7 | 土師 | 高台付杯 | 20 | − | (10.0) | (3.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 外面黒斑あり,底外回転糸切り後高台貼付 [床直] |
| SI-169 | 8 | 土師 | 甕 | 10 | (28.0) | − | (12.1) | − | 褐色/褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ,タタキ | 内外面ともに黒斑あり,器面・破断面やや劣化 [下層,床面] |
| SI-169 | 9 | 土師 | 甑 | 5 | − | (11.2) | (2.6) | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ | 底部片,底外回転糸切り後ヘラケズリその後穿孔,10と同一個体の可能性あり [カマド内] |
| SI-169 | 10 | 土師 | 甑 | 10 | − | (12.0) | (10.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラケズリ/タタキ,ヘラケズリ | 底外,回転糸切り後ヘラケズリ,9と同一個体の可能性あり [床面] |
| SI-170 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | (14.0) | (6.8) | 4.3 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面中央は褐色・両外側は灰色を呈し層をなす,底外回転ヘラケズリ,千葉産 [床直,下層] |
| SI-170 | 2 | 須恵 | 杯 | 15 | (13.4) | (6.4) | (4.4) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面ほとんどは褐色・両外側は極めて薄く灰黒色を呈し層をなす,底外手持ちヘラケズリ,千葉産 [床直] |
| SI-170 | 3 | 須恵 | 甕 | 5 | (36.4) | − | (4.0) | − | 灰色/灰黒色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 折り返し口縁部片,断面外面側は灰色・内面側はやや褐色に近い,千葉産 [床直] |
| SI-170 | 4 | 須恵 | 甕 | 20 | (23.4) | − | (17.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 砂粒,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により部分的に厚く煤付着・外面肩部に炭化砂粒付着,千葉産 [床面,下層] |
| SI-171 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.3) | (7.0) | 4.1 | − | 黒褐色/黒褐色 | スコリア,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底部断面中央は薄く灰黒色・両外側は褐色を呈し層をなすが体部から口縁部の断面にはみられない,底外回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-171 | 2 | 土師 | 杯 | 90 | 12.8 | 7.6 | 3.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外墨書あり『厨』,回転糸切り後外周回転ヘラケズリ,内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着・剥離顕著 [カマド内] |
| SI-171 | 3 | 土師 | 杯 | 35 | (15.8) | (8.0) | 4.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,雲母 | ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 器面及び破断面の劣化顕著,外面黒斑あり,底外全面回転ヘラケズリ [中・下層] |
| SI-171 | 4 | 土師 | 杯 | 30 | (15.7) | 8.4 | 5.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面体部火襷あり,底外黒斑あり,底外全面回転ヘラケズリ [床面,下層] |
| SI-171 | 5 | 土師 | 高台付皿 | 15 | (14.2) | (7.0) | 2.3 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラケズリ後高台つくりだし [床面] |
| SI-171 | 6 | 土師 | 台付甕 | 15 | − | 8.8 | (5.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石 | ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ヘラケズリ | 外面脚部接合のための指頭痕がみられる,武蔵甕 [中層] |
| SI-171 | 7 | 須恵 | 甕 | 15 | − | 12.8 | (13.1) | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/タタキ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底部付近の断面は中央灰黒色・両外側褐色を呈し層をなす,内面当具痕あり,千葉産 [カマド内,下層] |
| SI-171 | 8 | 土師 | 甕 | 55 | 21.2 | − | (19.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,長石,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 底部欠損,器面及び破断面の劣化顕著,二次被熱により外面口縁部から胴部中位にかけて煤付着,胴部中位から下位にかけて山砂付着,常総甕 [カマド内,床面] |
| SI-172 | 1 | 土師 | 杯 | 95 | 13.1 | 5.4 | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに広範囲の黒斑あり,底外多方向手持ちヘラケズリ [下層] |
| SI-172 | 2 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 褐色/褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 口縁部片,体部外面ヘラ書きあり『?』,器面の磨耗顕著 [下層] |
| SI-173 | 1 | 土師 | 甕 | 20 | (20.0) | − | (12.1) | − | 橙褐色/褐色 | 長石,雲母,砂粒,スコリア | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により剥離・煤付着顕著,在地甕 [床面,下層] |
| SI-174 | 1 | 須恵 | 杯 | 35 | (12.9) | (8.6) | (3.6) | − | 黄褐色/黄褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央は褐色・両外側は灰色を呈し層をなす,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [上層] |
| SI-174 | 2 | 須恵 | 杯 | 95 | 12.4 | 7.6 | 4.4 | − | 褐色/褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,打ち欠き土器,内面厚く煤付着,断面中央は褐色・両外側は灰色を呈し層をなす,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-174 | 3 | 土師 | 杯 | 30 | (11.6) | − | (3.5) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ,ミガキ | 底外多方向手持ちヘラケズリ [一括] |
| SI-174 | 4 | 土師 | 甕 | 30 | (20.2) | − | (25.9) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ヘラナデ,ナデ/ナデ,ミガキ | 内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着,内外面下位の剥離顕著,常総甕 [中層] |
| SI-175 | 1 | 須恵 | 杯 | 20 | (14.0) | (7.0) | 4.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面中央は灰色・両外側は褐色を呈し層をなす,,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [上層] |
| SI-175 | 2 | 土師 | 杯 | 75 | 13.2 | 7.3 | 4.1 | − | 橙褐色/褐色 | スコリア,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,体部外面横位に墨書あり『千』『七』,底外一方向手持ちヘラケズリ,外面一部剥離,千葉産須恵器と明確な区別がつかない一群 [カマド右袖脇] |
| SI-175 | 3 | 土師 | 皿 | 90 | 13.2 | 6.5 | 1.9 | − | 橙褐色/褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ | 底外墨書あり『生』,内外面ともに丁寧なナデ,底外多方向手持ちヘラケズリ [中層] |
| SI-175 | 4 | 土師 | 高台付皿 | 35 | − | 6.4 | (1.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 底外刻書あり『里』,二次被熱により内面剥離・外面煤付着,底外ナデ後高台貼付 [下層] |
| SI-175 | 5 | 土師 | 小型甕 | 20 | − | (5.8) | (2.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,石英 | ヘラナデ/ヘラケズリ | 底部片,底外ヘラ書きあり『?』,内外面ともに二次被熱により赤く変色 [下層] |
| SI-175 | 6 | 土師 | 甕 | 40 | (16.6) | − | (15.8) | 胴部(19.6) | 褐色/褐色 | 雲母,長石,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,外面広範囲に黒斑あり,在地甕 [下層,カマド内] |
| SI-176 | 1 | 土師 | 杯 | 45 | (13.2) | (6.0) | (4.3) | − | 赤褐色/黄褐色 | 雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ,ミガキ | 内外面口縁部広範囲に黒斑あり,底外手持ちヘラケズリ [カマド内] |
| SI-176 | 2 | 土師 | 杯 | 25 | (13.4) | (4.7) | 5.1 | − | 赤褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面口縁部の一部に黒斑あり,底外手持ちヘラケズリ [カマド内] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-176 | 3 | 土師 | 杯 | 95 | 13.4 | 5.3 | 4.2 | − | 黄褐色/黄褐色 | スコリア,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 全体に調整雑で歪みあり,底外回転糸切り後回転ヘラケズリ　[床面,床直] |
| SI-176 | 4 | 土師 | 杯 | 80 | (12.1) | 5.1 | (4.1) | − | 褐色/黒褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ[下層] |
| SI-176 | 5 | 土師 | 杯 | 60 | (12.8) | (5.7) | (4.7) | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面広範囲に煤付着,底外回転糸切り後回転ヘラケズリ　[カマド内,中層] |
| SI-176 | 6 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ | 体部外面墨書あり,小片のため詳細不明,底外回転糸切り　[一括] |
| SI-176 | 7 | 土師 | 高台付杯 | 90 | 14.5 | 9.8 | 5.5 | − | 黒褐色/褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ | 打ち欠き土器,二次被熱により内面全体に炭化物付着・外面高台内厚く煤付着,底外回転ヘラ切り後高台貼付　[床直] |
| SI-177 | 1 | 土師 | 杯 | 20 | (14.0) | − | (3.8) | − | 黒褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面厚く煤付着・外面部分的に赤く変色　[下層] |
| SI-177 | 2 | 土師 | 鉢 | 5 | (16.6) | − | (5.0) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 口縁部一部煤付着　[下層] |
| SI-178 | 1 | 土師 | 杯 | 95 | 13.0 | 6.8 | 4.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群　[床直,下層] |
| SI-178 | 2 | 土師 | 皿 | 20 | − | (7.2) | (1.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底内墨書あり『本』,底外一方向手持ちヘラケズリ　[下層] |
| SI-178 | 3 | 土師 | 皿 | 15 | (15.0) | (6.7) | (1.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒斑あり,底外回転ヘラケズリ[下層] |
| SI-178 | 4 | 須恵 | 甕 | 5 | (29.0) | − | (6.0) | − | 褐色/褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産[下層] |
| SI-178 | 5 | 須恵 | 甕 | 5 | (23.0) | − | (5.6) | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,二次被熱により外面煤付着,千葉産[下層] |
| SI-178 | 6 | 土師 | 小型甕 | 15 | (13.0) | − | (5.7) | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面の磨耗顕著,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕　[下層] |
| SI-178 | 7 | 土師 | 小型甕 | 50 | 14.0 | (6.7) | (14.3) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面口縁部・外面胴部下端部から上端にかけ厚く煤付着,在地甕　[中・下層] |
| SI-178 | 8 | 須恵 | 甑 | 破片 | − | − | − | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/タタキ | 還元やや不良,把手四角形,断面中央は褐色・両外側は灰色を呈し層をなす,千葉産　[下層] |
| SI-179 | 1 | 須恵 | 杯 | 35 | (12.7) | (6.8) | 4.0 | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[下層] |
| SI-179 | 2 | 土師 | 杯 | 90 | 15.4 | 7.6 | 4.3 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,石英,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面底部から体部中位にかけて厚く煤付着,外面部分的に赤く変色,低外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ　[上層] |
| SI-179 | 3 | 須恵 | 甕 | 20 | (23.1) | − | (28.3) | 胴部(24.0) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,二次被熱により内面胴部下位剥離顕著,外面肩部に厚く煤付着,千葉産　[カマド内,下層] |
| SI-179 | 4 | 土師 | 甕 | 65 | (21.2) | (8.6) | 27.1 | 胴部(21.4) | 橙褐色/橙褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により外面胴部中位から口縁部にかけ厚く煤付着,在地甕　[カマド内] |
| SI-180 | 1 | 須恵 | 蓋 | 35 | − | − | (3.0) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,外面天井部に火襷あり,断面中央は灰色・両外側は褐色を呈し層をなす,茨城産[上・中層] |
| SI-180 | 2 | 須恵 | 杯 | 65 | 12.2 | 6.6 | 4.3 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面やや劣化,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[上層] |
| SI-180 | 3 | 須恵 | 杯 | 45 | (12.8) | 7.6 | 3.9 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央は灰色・両外側は褐色を呈し層をなす,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産[中・下層] |
| SI-180 | 4 | 須恵 | 杯 | 70 | 13.5 | 7.0 | 4.0 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,体部外面横位に朱墨あり『至』?,底外朱墨・ヘラ書きあり判読不能,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産[中・下層] |
| SI-180 | 5 | 須恵 | 杯 | 50 | 12.3 | 7.2 | 3.9 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産[上層] |
| SI-180 | 6 | 須恵 | 杯 | 60 | (12.3) | 7.4 | 4.0 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに煤付着,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産　[下層] |
| SI-180 | 7 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.1) | 7.6 | 4.4 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,砂粒,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに煤付着,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[下層] |
| SI-180 | 8 | 土師 | 杯 | 90 | 13.0 | 8.2 | 4.1 | − | 褐色/褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,内面剥離やや顕著,底外多方向手持ちヘラケズリ[下層] |
| SI-180 | 9 | 土師 | 杯 | 40 | (11.7) | 7.4 | 4.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により外面煤付着・内面剥離顕著,底外回転糸切り後多方向手持ちヘラケズリ[下層] |
| SI-180 | 10 | 須恵 | 甕 | 20 | (30.0) | − | (19.5) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,底部欠損,内外面ともに二次被熱によりやや劣化,内面当具痕あり,千葉産　[中・下層] |
| SI-180 | 11 | 土師 | 小型甕 | 50 | 12.6 | − | (8.8) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,外面黒斑あり,在地甕　[中・下層] |
| SI-180 | 12 | 土師 | 甕 | 5 | (20.0) | − | (12.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により器面の剥離顕著,外面煤付着,常総甕　[中・下層] |
| SI-180 | 13 | 土師 | 甕 | 10 | (20.0) | − | (12.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,外面黒斑あり,在地甕[下層] |
| SI-181 | 1 | 須恵 | 杯 | 100 | 13.7 | 8.0 | 3.7 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[中層] |
| SI-181 | 2 | 須恵 | 杯 | 75 | (13.2) | 8.2 | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,砂粒 | ナデ/ナデ | 内外面ともにやや劣化,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[カマド右袖脇] |
| SI-181 | 3 | 須恵 | 杯 | 80 | 13.0 | 7.5 | 3.3 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[床直,カマド内] |
| SI-181 | 4 | 土師 | 甕 | 70 | 16.8 | − | (22.6) | − | 黄褐色/黄褐色 | 石英,長石,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,外面黒斑あり,内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着,常総甕　[下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-182 | 1 | 須恵 | 杯 | 35 | (13.7) | 8.2 | 3.8 | − | 灰黒色/灰黒色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外回転ヘラ切り後粗いヘラケズリ,茨城産 [床直] |
| SI-182 | 2 | 土師 | 甕 | 70 | − | 7.4 | (28.0) | − | 黒褐色/黒褐色 | 石英,長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ,ヘラナデ | 口縁部欠損,激しい二次被熱により内面剥離・磨耗・煤付着顕著,外面全体に厚く煤付着 [カマド内,中層] |
| SI-183 | 1 | 須恵 | 杯 | 45 | (12.8) | 7.4 | 3.8 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-183 | 2 | 須恵 | 高台付杯 | 30 | − | (8.0) | (2.0) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面及び破断面の劣化顕著,底外回転ヘラ切り後無調整のまま高台貼付,茨城産 [上層] |
| SI-184 | 1 | 須恵 | 杯 | 35 | (14.0) | (8.0) | 3.8 | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,スコリア,長石 | ナデ/ナデ | 還元やや不良,内外面ともに二次被熱により部分的に赤く変色,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-184 | 2 | 須恵 | 杯 | 45 | (12.0) | 8.0 | 4.2 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外線刻あり『+』,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [カマド内] |
| SI-184 | 3 | 土師 | 甕 | 5 | (20.0) | − | (9.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面口縁部・外面胴部上端厚く煤付着,常総甕 [カマド煙道部] |
| SI-184 | 4 | 土師 | 甕 | 20 | (20.0) | − | (12.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,白色針状物質 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により口縁部を除く全域に厚く煤付着,常総甕 [床直] |
| SI-185 | 1 | 須恵 | 蓋 | 10 | − | − | (2.3) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 天井部回転ヘラケズリ,外縁部より低く把手貼付,茨城産 [中層] |
| SI-185 | 2 | 須恵 | 杯 | 75 | 11.9 | 7.6 | 4.3 | − | 灰色/灰色 | スコリア,雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,還元やや不良,内外面及び破断面ともに劣化・火襷あり,外面部分的に煤付着,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [カマド右袖脇] |
| SI-185 | 3 | 須恵 | 杯 | 70 | 11.9 | 7.8 | 4.5 | − | 灰色/灰色 | スコリア,長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,還元やや不良,内外面ともにやや劣化・火襷あり,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [カマド右袖脇] |
| SI-185 | 4 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.0) | 8.5 | 3.9 | − | 灰褐色/灰褐色 | スコリア,長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外ヘラ書きあり『S』あり,内外面ともに火襷あり,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産 [床直,下層] |
| SI-185 | 5 | 須恵 | 杯 | 20 | (13.2) | (9.0) | 3.6 | − | 灰色/灰色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外線刻あり『−』あり,体部内外面ともに火襷あり,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-185 | 6 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.0) | (8.2) | 4.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに煤付着・火襷あり,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [床直] |
| SI-185 | 7 | 須恵 | 杯 | 40 | (12.0) | (8.0) | 4.2 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-185 | 8 | 須恵 | 甕 | 5 | − | (11.8) | (6.7) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/タタキ,ヘラケズリ | 底部片,外面自然釉・内面自然釉付着,底外無調整,東海産 [床直,下層] |
| SI-185 | 9 | 土師 | 甕 | 10 | (19.4) | − | (8.4) | − | 褐色/褐色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕 [床直] |
| SI-186 | 1 | 須恵 | 杯 | 55 | (13.0) | (7.4) | 3.7 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,底外多方向の手持ちヘラケズリ,千葉産 [カマド右袖脇] |
| SI-186 | 2 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.7) | (6.6) | 3.8 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面やや劣化,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-186 | 3 | 土師 | 杯 | 80 | 12.2 | 7.6 | 3.9 | − | 黒褐色/褐色 | スコリア,雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,二次被熱により内面全域・外面部分的に厚く煤付着,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群 [カマド内] |
| SI-186 | 4 | 須恵 | 甕 | 15 | − | − | (11.0) | − | 灰色/灰黒色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元やや不良,断面橙褐色,内面当具痕あり,二次被熱により外面広範囲に煤付着,千葉産 [中層] |
| SI-186 | 5 | 須恵 | 甕 | 10 | (38.0) | − | (14.1) | − | 灰褐色/灰褐色 | 石英,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面ほとんど褐色・両外側極薄く灰色の層をなす,口縁部片,内外面ともに二次被熱により胴上端部以下煤付着,千葉産 [カマド内] |
| SI-186 | 6 | 土師 | 甕 | 100 | 20.1 | 8.4 | 31.2 | 胴部22.7 | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ,ミガキ | 底外木葉痕あり,二次被熱により外面口縁部を除く広範囲に厚く煤付着,内面底部及び周縁部に黒斑あり,常総甕 [カマド内] |
| SI-187 | 1 | 土師 | 杯 | 20 | (11.8) | (6.0) | 3.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア | ナデ/ナデ | 器面の劣化顕著,底外回転糸切り後無調整 [床面,床直] |
| SI-187 | 2 | 土師 | 杯 | 40 | − | 5.6 | (3.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 石英,長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底部片,底外回転糸切り後無調整・粘土の捲れあり [床直] |
| SI-187 | 3 | 灰釉陶器 | 椀 | 5 | − | (6.4) | (2.2) | − | 灰白色/灰白色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラナデ | 黒笹90号窯式。底部片,底部を除く内外面に灰釉付着,底外回転ヘラナデ後高台貼付,東海産 [下層] |
| SI-187 | 4 | 土師 | 高台付杯 | 10 | − | (6.8) | (2.0) | − | 黄褐色/黄褐色 | スコリア,長石,雲母 | ナデ/ナデ | 底部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転糸切り後無調整,その後高台貼付 [下層] |
| SI-188 | 1 | 須恵 | 杯 | 25 | (12.5) | (7.0) | (4.2) | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面橙褐色・両外側薄く灰色の層をなす,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-188 | 2 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.6) | 7.8 | 4.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色・両外側極薄く黒褐色の層をなす,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-188 | 3 | 須恵 | 杯 | 20 | (13.5) | (7.8) | (3.4) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面中央灰色・両外側灰黒色の層をなす,底外回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-188 | 4 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面に墨書あり,小片のため詳細不明 [カマド内] |
| SI-188 | 5 | 土師 | 小型甕 | 60 | 14.4 | − | (10.5) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 小型,底部欠損,内外面ともに二次被熱により口縁部全域に厚く煤付着,外面全体赤く変色,在地甕 [下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-188 | 6 | 土師 | 小型甕 | 10 | (14.9) | − | (9.6) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 小型,底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,外面全体赤く変色,SI-188と遺構間接合,在地甕 [下層] |
| SI-189 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (11.7) | (5.7) | 3.2 | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 内外面ともに火襷あり,底外回転糸切り後無調整,東金子産[中層] |
| SI-189 | 2 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.4) | (6.8) | 5.3 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産[カマド内] |
| SI-189 | 3 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 黄褐色/黄褐色 | 雲母,石英 | ナデ/ナデ | 口縁部片,体部外面墨書あり,小片のため詳細不明 [下層] |
| SI-189 | 4 | 土師 | 小型甕 | 5 | (11.4) | − | (3.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,器面やや劣化,在地甕 [中層] |
| SI-189 | 5 | 土師 | 甕 | 15 | (18.2) | − | (10.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ミガキ | 二次被熱により内面剥離顕著・外面煤付着,常総甕 [カマド内] |
| SI-190 | 1 | 土師 | 杯 | 60 | 13.0 | 7.2 | 4.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石,石英, | ナデ/ナデ | 打ち欠き土器,二次被熱により内外面及び破断面に煤付着,底外回転糸切り後無調整 [カマド内] |
| SI-190 | 2 | 土師 | 杯 | 75 | 12.7 | 6.0 | 3.8 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着,底外回転糸切り後無調整 [カマド内,床直] |
| SI-191 | 1 | 須恵 | 杯 | 70 | 12.9 | 6.6 | 3.8 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,打ち欠き土器,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-191 | 2 | 須恵 | 杯 | 80 | 13.3 | 6.9 | 3.9 | − | 灰褐色/灰色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,打ち欠き土器,断面褐色,底外全面一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [上層] |
| SI-191 | 3 | 須恵 | 杯 | 35 | (13.2) | 7.2 | 4.0 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外朱墨あり『千』,断面中央は灰色・両外側は褐色を呈し層をなす,底外回転ヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-191 | 4 | 須恵 | 杯 | 35 | (14.5) | 6.8 | 4.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [上層] |
| SI-191 | 5 | 須恵 | 高台付杯 | 20 | − | 9.2 | (2.7) | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底部片,器面の磨耗顕著,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,その後高台貼付,茨城産 [床面] |
| SI-191 | 6 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 黒色/褐色 | 長石,雲母 | ミガキ/ナデ | 内面黒色処理,外面墨書あり『千』[一括] |
| SI-191 | 7 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 黒色/褐色 | 長石,雲母 | ミガキ/ナデ | 内面黒色処理,外面墨書あり『千』[一括] |
| SI-191 | 8 | 須恵 | 高台付壺 | 15 | − | 8.6 | (16.0) | − | 灰色/灰色 | − | ナデ/ナデ | 底内中央及び外面胴部上部に自然釉付着,底外回転糸切り後高台貼付,東海産[カマド内] |
| SI-191 | 9 | 土師 | 甕 | 45 | 17.3 | − | (16.4) | 胴部18.0 | 褐色/褐色 | 長石,雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着,在地甕 [カマド内,下層] |
| SI-191 | 10 | 須恵 | 甑 | 15 | (32.0) | − | (9.1) | − | 褐色/褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデタタキ | 口縁部片,二次被熱により内面剥離・外面煤付着,千葉産[カマド内,下層] |
| SI-192 | 1 | 須恵 | 杯 | 45 | (12.1) | 6.6 | 4.0 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面褐色,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [床直] |
| SI-192 | 2 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.2) | (6.0) | 4.0 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面橙褐色,底外一方向手持ちヘラケズリ後外周手持ちヘラケズリ,千葉産[下層] |
| SI-192 | 3 | 須恵 | 杯 | 25 | (13.8) | (7.6) | 4.6 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラケズリ,千葉産 [上・下層] |
| SI-192 | 4 | 須恵 | 杯 | 35 | (15.4) | 7.4 | 4.8 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,二次被熱により外面体部上位赤く変色,底外回転ヘラ切り後外周手持ちヘラケズリ,千葉産 [中・下層] |
| SI-192 | 5 | 土師 | 杯 | 70 | 13.2 | 7.4 | 4.4 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ [上・下層] |
| SI-192 | 6 | 土師 | 杯 | 40 | (13.8) | (6.4) | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群 [上・中層] |
| SI-192 | 7 | 土師 | 皿 | 30 | (14.6) | (7.4) | 2.3 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外一方向手持ちヘラケズリ [上・中層] |
| SI-192 | 8 | 土師 | 高台付皿 | 30 | − | 6.8 | (2.5) | − | 褐色/褐色 | 雲母,石英 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面斑状に煤付着,底外全面回転ヘラナデ後高台貼付 [床直,中層] |
| SI-192 | 9 | 須恵 | 大型甕 | 30 | (41.6) | − | (17.7) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,断面中央褐色・両外側灰黒色の層をなす,内面当具痕あり,千葉産 [中・下層] |
| SI-192 | 10 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰色/灰色 | 長石,石英 | ナデ/タタキ | 胴部片,外面ヘラ書き沈線文あり,南比企産[中・下層] |
| SI-192 | 11 | 須恵 | 甕 | 30 | (26.6) | − | (15.7) | − | 黒褐色/褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,胴下半部欠損,二次被熱により外面一部厚く煤付着,千葉産 [下層] |
| SI-192 | 12 | 須恵 | 甑 | 破片 | − | (14.0) | (1.7) | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ | 底部片,還元やや不良,断面中央灰色・両外側褐色の層をなす,千葉産 [下層] |
| SI-192 | 13 | 土師 | 小型甕 | 10 | (11.0) | − | (5.8) | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,雲母,白色針状物質 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,二次被熱により内面赤く変色,外面部分的に煤付着,在地甕 [中層] |
| SI-192 | 14 | 土師 | 甕 | 80 | 19.4 | (6.4) | (32.0) | 胴部23.5 | 褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 激しい二次被熱により外面全体に厚く煤が付着し器面の剥離もみられる,内面下半部器面の劣化顕著,常総甕[中・下層] |
| SI-193 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.6) | (8.0) | 4.3 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,雲母,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面灰褐色,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,千葉産[床直] |
| SI-193 | 2 | 土師 | 杯 | 85 | 13.2 | 7.4 | 4.4 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面赤く変色し厚く煤付着,外面斑状に煤付着,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群 [カマド内] |
| SI-193 | 3 | 土師 | 甕 | 15 | (23.0) | − | (13.1) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面斑状に煤付着,在地甕 [下層,カマド内] |
| SI-193 | 4 | 須恵 | 甑 | 25 | (29.6) | (14.7) | 30.8 | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ,ヘラケズリ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 器面やや劣化,内外面ともに二次被熱により部分的に赤く変色し下位に山砂付着,内面当具痕あり,茨城産 [カマド内] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-194 | 1 | 土師 | 杯 | 95 | 13.8～13.3 | 7.0 | 3.8 | – | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器形の歪み大,底外多方向手持ちヘラケズリ,黒斑あり　[床面] |
| SI-194 | 2 | 土師 | 杯 | 25 | (13.0) | (7.4) | (4.0) | – | 橙褐色/黒褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ | 底外ヘラ書きあり『?』,器面の劣化顕著,底外回転糸切り後無調整　[中層] |
| SI-194 | 3 | 土師 | 甕 | 10 | (16.0) | – | (7.8) | – | 橙褐色/黒褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕　[下層] |
| SI-194 | 4 | 土師 | 小型甕 | 15 | (14.0) | – | (8.2) | – | 橙褐色/黒褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕　[上・中層] |
| SI-195 | 1 | 土師 | 杯 | 100 | 10.9 | 5.8 | 3.4 | – | 黄褐色/黄褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面の口縁部周辺全体に油煙厚く付着,灯明具として使用,底外全面回転ヘラケズリ　[下層] |
| SI-195 | 2 | 須恵 | 高台付皿 | 80 | – | (13.0) | (3.0) | – | 灰色/灰色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,その後高台貼付,茨城産　[中層] |
| SI-195 | 3 | 須恵 | 高台付壺 | 15 | – | 9.2 | (3.6) | – | 灰褐色/灰褐色 | スコリア | ナデ/ナデ | 底部片,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ,その後高台貼付,産地不明　[中層] |
| SI-195 | 4 | 土師 | 甕 | 35 | (19.9) | (9.0) | 30.0 | 胴部(20.7) | 褐色/褐色 | 長石,雲母,白色針状物質 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により外面部分的に煤付着,内面ヘラ痕あり,在地甕[床直,中・下層] |
| SI-195 | 5 | 土師 | 甕 | 破片 | – | – | – | – | 褐色/褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ヘラケズリ | 胴部外面墨書あり,小片のため詳細不明[一括] |
| SI-195 | 6 | 土師 | 甕 | 20 | (23.0) | – | (10.7) | – | 褐色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部から胴部上位片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕[中・下層] |
| SI-195 | 7 | 須恵 | 甑 | 25 | – | (14.8) | (12.9) | – | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ヘラケズリ/ナデ,ヘラケズリ,タタキ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着,内面一部赤く変色,千葉産[中・下層] |
| SI-195 | 8 | 土師 | 手捏 | 20 | (3.9) | – | (3.8) | – | 褐色/褐色 | 長石 | – | [一括] |
| SI-196 | 1 | 須恵 | 蓋 | 25 | (17.0) | (5.6) | (2.7) | – | 灰色/灰色 | スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面朱墨用の硯として使用した痕跡あり,東海産　[下層] |
| SI-196 | 2 | 須恵 | 杯 | 80 | 14.9 | 6.0 | 4.2 | – | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後外周回転ヘラケズリ,茨城産　[床面,下層] |
| SI-196 | 3 | 土師 | 杯 | 40 | (13.2) | – | (4.1) | – | 褐色/褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部丸底　[床直,中・下層] |
| SI-196 | 4 | 土師 | 杯 | 90 | 10.3 | – | (4.0) | – | 褐色/褐色 | 長石,石英 | ナデ,ﾐｶﾞｷ/ナデ,ﾐｶﾞｷ | 底部丸底,口唇部破断面を研磨し杯として再利用,外面黒斑あり,内面部分的に剥離　[下層] |
| SI-196 | 5 | 土師 | 台付甕 | 10 | – | (9.8) | (4.7) | – | 褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ | 台部片　[一括] |
| SI-196 | 6 | 土師 | 小型椀 | 5 | (9.0) | – | – | – | 灰赤色/黒褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 器面及び破断面ともに磨耗顕著[一括] |
| SI-197 | 1 | 須恵 | 甑 | 破片 | – | – | – | – | 灰褐色/灰褐色 | 長石,砂粒 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,外面格子目のタタキ,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,千葉産　[床直] |
| SI-198 | 1 | 須恵 | 杯 | 90 | 13.9 | 8.0 | 4.2 | – | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,内外面ともにやや磨耗,底外全面回転ヘラケズリ,茨城産　[カマド左袖脇] |
| SI-198 | 2 | 須恵 | 杯 | 25 | (12.9) | (7.2) | 4.5 | – | 灰色/灰色 | 石英,長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[上・下層] |
| SI-198 | 3 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.6 | 8.4 | 3.5 | – | 灰褐色/灰黒色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,還元やや不良,底外及び体部外面線刻あり『?』,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[カマド右袖脇] |
| SI-198 | 4 | 須恵 | 杯 | 70 | 13.8 | 8.4 | 3.9 | – | 褐色/褐色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,還元不良,口縁部の内外面に環状に煤付着,底外回転ヘラ切り後多方向手打ちヘラケズリ,茨城産　[カマド右袖] |
| SI-198 | 5 | 土師 | 杯 | 25 | (12.8) | (6.8) | (3.8) | – | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面赤彩,底外多方向手持ちヘラケズリ　[下層] |
| SI-198 | 6 | 土師 | 杯 | 25 | (16.8) | (8.0) | (5.2) | – | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面体部に黒斑あり,内面全体に斑状の剥離あり　[下層] |
| SI-198 | 7 | 土師 | 小型甕 | 85 | – | 5.0 | (8.2) | – | 黒褐色/黒褐色 | 長石,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ | 口縁部欠損,二次被熱により外面全面及び内面上半部に厚く煤付着,内面下半部剥離顕著　[下層] |
| SI-198 | 8 | 土師 | 甑 | 10 | (29.0) | – | (9.5) | – | 褐色/赤褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ﾐｶﾞｷ/ナデ,ﾐｶﾞｷ | 内面赤彩を施したように赤く光沢がある[中・下層] |
| SI-199 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.6) | (6.0) | (4.2) | – | 灰褐色/灰色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,二次被熱により内面厚く煤付着及び部分的に斑状の剥離あり,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産[中層] |
| SI-199 | 2 | 土師 | 杯 | 50 | (12.0) | 6.4 | 3.9 | – | 褐色/褐色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ | 器面及び破断面やや劣化,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ　[下層] |
| SI-199 | 3 | 土師 | 杯 | 70 | (12.5) | 5.4 | 3.9 | – | 橙褐色/橙褐色 | 石英,スコリア | ナデ/ナデ | 二次被熱により内面の剥離及び煤付着やや顕著,底外多方向手持ちヘラケズリ　[中層,カマド内] |
| SI-199 | 4 | 土師 | 杯 | 60 | (13.7) | 6.2 | 4.3 | – | 褐色/黒褐色 | 石英,スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面部分的に剥離及び磨耗顕著,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[中・下層] |
| SI-199 | 5 | 土師 | 杯 | 35 | (14.5) | (7.0) | 4.4 | – | 黒色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ﾐｶﾞｷ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,底外全面回転ヘラケズリ　[中層] |
| SI-199 | 6 | 土師 | 杯 | 35 | (13.0) | (7.0) | 3.7 | – | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群　[カマド内] |
| SI-199 | 7 | 土師 | 杯 | 35 | (13.6) | (5.6) | 4.3 | – | 褐色/褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着及び斑状の剥離顕著,底外回転糸切り後無調整[中層] |
| SI-199 | 8 | 土師 | 杯 | 10 | – | – | – | – | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ﾐｶﾞｷ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面横位に墨書あり『南』,外面黒斑あり　[下層] |
| SI-199 | 9 | 須恵 | 甕 | 10 | (21.0) | – | (7.7) | – | 黄褐色/黄褐色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産　[中層] |
| SI-200 | 1 | 須恵 | 大型甕 | 破片 | – | – | – | – | 灰色/灰色 | 長石,白色針状物質,小石 | ナデ/タタキ | 胴部片,東海産　[下層] |
| SI-200 | 2 | 土師 | 甕 | 5 | (23.0) | – | (10.1) | – | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,二次被熱により内面の剥離激しい,外面広範囲に煤付着,在地甕　[中・下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-200 | 3 | 土師 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 褐色/褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 胴部外面墨書あり,小片のため詳細不明［一括］ |
| SI-201 | 1 | 土師 | 杯 | 40 | (13.6) | (7.8) | 4.1 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面黒斑あり,底外多方向手持ちヘラケズリ［下層］ |
| SI-201 | 2 | 土師 | 杯 | 55 | (13.2) | 5.8 | 4.3 | − | 褐色/褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面黒斑あり,底外一方向手持ちヘラケズリ［床直,下層］ |
| SI-201 | 3 | 土師 | 杯 | 15 | − | (7.0) | (2.1) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,底外一方向手持ちヘラケズリ［床直,下層］ |
| SI-201 | 4 | 土師 | 杯 | 15 | − | (8.5) | (4.8) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底内薄く黒色物付着,剥離顕著,外面の一部に黒色物付着　［中層］ |
| SI-201 | 5 | 須恵 | 甕 | 5 | (25.4) | − | (8.7) | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,千葉産　［床直,下層］ |
| SI-201 | 6 | 土師 | 小型甕 | 5 | (12.8) | − | (3.5) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,二次被熱により内外面厚く煤付着,外面部分的に赤く変色　［一括］ |
| SI-202 | 1 | 須恵 | 蓋 | 75 | 10.0 | − | 3.3 | − | 黒褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,外面天井部回転ヘラケズリ後円形摘部貼付,内面全面厚く煤付着,千葉産　［床直］ |
| SI-202 | 2 | 須恵 | 杯 | 35 | (12.8) | 7.6 | 4.3 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面やや劣化,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　［中層］ |
| SI-202 | 3 | 土師 | 杯 | 15 | (16.0) | (11.0) | 4.8 | − | 黒色/橙褐色 | 長石,石英 | ﾐｶﾞｷ/ﾐｶﾞｷ | 底部欠損,内面黒色処理［床面］ |
| SI-202 | 4 | 須恵 | 高台付杯 | 10 | − | (9.0) | (2.5) | − | 橙褐色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ,ヘラケズリ/ナデ | 底部片,還元不良,断面橙褐色,底外回転ヘラケズリ後高台貼付,千葉産　［下層］ |
| SI-202 | 5 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,断面中央は褐色・両外側は灰褐色の層をなす,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産　［中層］ |
| SI-202 | 6 | 土師 | 甕 | 5 | (23.0) | − | (5.8) | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,器面全体的に荒れている,外面厚く煤付着,武蔵甕　［一括］ |
| SI-202 | 7 | 土師 | 甕 | 10 | (26.0) | − | (6.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕　［床直,下層］ |
| SI-203 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (12.2) | (6.0) | 4.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,千葉産　［下層］ |
| SI-203 | 2 | 土師 | 杯 | 80 | 13.3 | 7.2 | 4.3 | − | 橙褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内面体部及び外面全体に厚く煤付着,底外回転ヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群　［カマド内］ |
| SI-203 | 3 | 須恵 | 大型甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石 | ナデ/タタキ | 胴部片,東海産　［カマド内,下層］ |
| SI-203 | 4 | 土師 | 小型甕 | 75 | (14.2) | 7.4 | 16.0 | 胴部(15.3) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により口縁部から胴部上半部にかけて煤付着　［カマド内］ |
| SI-203 | 5 | 須恵 | 甑 | 10 | − | (14.6) | (2.3) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,スコリア | ﾅﾃﾞ,ヘラケズリ/タタキ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面褐色,底部片,内面当具痕あり,千葉産［カマド内］ |
| SI-204 | 1 | 須恵 | 杯 | 35 | 12.9 | (6.8) | 4.7 | − | 灰黒色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,二次被熱により内面煤付着,千葉産［中・下層］ |
| SI-204 | 2 | 土師 | 杯 | 80 | 11.9 | 6.0 | 3.1 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着,底外回転糸切り後無調整　［上・下層］ |
| SI-204 | 3 | 土師 | 杯 | 95 | 14.7 | 7.4 | 4.4 | − | 黒褐色/橙褐色 | スコリア,長石,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,器面の磨耗やや顕著,底外一方向手持ちヘラケズリ　［床面］ |
| SI-204 | 4 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面墨書あり『加』,内外面ともに二次被熱により煤付着　［下層］ |
| SI-204 | 5 | 土師 | 高台付杯 | 30 | (14.3) | 7.3 | 5.8 | − | 赤褐色/赤褐色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により底内から体部内面の一部に斑状の剥離,底外回転ヘラケズリ後高台貼付［上・中層］ |
| SI-204 | 6 | 須恵 | 壺 | 10 | − | (8.6) | (3.2) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 底部片,底内全面自然釉付着,外面帯状に自然釉が流れ一部高台部にまで及ぶ,東海産　［中層］ |
| SI-204 | 7 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰色/灰色 | 長石 | /タタキ | 胴部片,破断面磨耗顕著砥石として使用した可能性あり,東海産　［中層］ |
| SI-204 | 8 | 須恵 | 甕 | 30 | (29.4) | − | (16.4) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産　［カマド内,中・下層］ |
| SI-204 | 9 | 土師 | 小型甕 | 5 | (12.8) | − | (4.6) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,外面墨書あり,小片のため詳細不明,二次被熱により内面煤付着,在地甕　［上層］ |
| SI-204 | 10 | 土師 | 小型甕 | 5 | (11.2) | − | (3.2) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,二次被熱により内外面厚く煤付着,在地甕　［中層］ |
| SI-204 | 11 | 土師 | 小型甕 | 5 | (9.0) | − | (2.6) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,二次被熱により外面磨耗顕著,在地甕　［カマド内］ |
| SI-204 | 12 | 土師 | 小型甕 | 10 | − | (5.8) | (2.3) | − | 赤褐色/褐色 | 長石,スコリア | ヘラナデ/,ヘラケズリ | 底部片,二次被熱により外面煤付着,在地甕［下層］ |
| SI-204 | 13 | 土師 | 小型甕 | 10 | − | (6.0) | (1.7) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英 | ヘラナデ/,ヘラケズリ | 底部片,二次被熱により内外面煤付着,在地甕［床面］ |
| SI-204 | 14 | 土師 | 甕 | 30 | (19.2) | − | (15.6) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,二次被熱により外面広範囲に煤付着,常総甕［中・下層］ |
| SI-205 | 1 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.0) | 6.1 | 4.7 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産［中層］ |
| SI-205 | 2 | 土師 | 杯 | 40 | (11.4) | (6.0) | (3.9) | − | 橙褐色/赤褐色 | 雲母,スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面赤彩を施したように赤味を帯びる,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　［床面］ |
| SI-205 | 3 | 土師 | 杯 | 70 | 13.0 | 6.2 | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底内全面厚く煤付着,斑状の剥離あり,底外回転ヘラケズリ後部分的に手持ちヘラケズリ［上・中層］ |
| SI-205 | 4 | 土師 | 杯 | 50 | 12.0 | (6.6) | 3.7 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面口縁部の一部に油煙付着,内面器面の剥離激しい,底外回転ヘラケズリ　［中・下層］ |
| SI-205 | 5 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ | 底外回転糸切り,墨書あり『丙』　［一括］ |
| SI-205 | 6 | 土師 | 皿 | 50 | (13.6) | (6.5) | (2.6) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群　［上層］ |
| SI-205 | 7 | 須恵 | 壺 | 35 | − | 12.6 | (11.6) | − | 灰色/灰褐色 | 長石 | ナデ/ヘラケズリ | 底部内外面に灰釉付着,底外全面回転ヘラケズリ後高台貼付,東海産　［床直］ |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-205 | 8 | 須恵 | 甕 | 50 | − | 13.0 | (23.3) | − | 黒褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,二次被熱により内面全体・外面底部周辺に煤付着,内面に当具痕あり,千葉産［床直］ |
| SI-205 | 9 | 土師 | 甕 | 25 | (20.4) | − | (12.4) | − | 黒褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,口縁部片,内外面ともに二次被熱により器面が荒れ煤付着,常総甕　［中・下層］ |
| SI-205 | 10 | 須恵 | 甕 | 30 | (30.5) | − | (14.0) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元やや不良,口縁部片,外面二次被熱により薄く煤付着,千葉産　［上層］ |
| SI-205 | 11 | 土師 | 小型甕 | 100 | 7.7 | 5.0 | 9.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 完形,胴部に筆先をそろえたと思われる墨書あり　［床直］ |
| SI-206 | 1 | 須恵 | 杯 | 10 | (10.4) | (7.0) | (3.6) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産　［下層］ |
| SI-206 | 2 | 須恵 | 杯 | 75 | 13.2 | 6.2 | 4.1 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面やや劣化回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［床直］ |
| SI-206 | 3 | 須恵 | 杯 | 45 | (13.3) | 7.2 | 3.8 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,底外ヘラ書きあり『人』？,千葉産　［床直,中層］ |
| SI-206 | 4 | 須恵 | 甕 | 15 | (28.4) | − | (18.0) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,白色針状物質 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面中央褐色・両外側灰褐色,内面当具痕多数あり,二次被熱により外面広範囲に煤付着,千葉産　［上・中層］ |
| SI-206 | 5 | 須恵 | 甕 | 15 | (30.8) | − | (13.5) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面褐色,内面当具痕あり,二次被熱により内面やや劣化,千葉産　［カマド内,カマド右袖脇］ |
| SI-206 | 6 | 土師 | 甕 | 10 | (20.8) | − | (18.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,長石,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ,ヘラナデ | 内外面ともに二次被熱により器面の荒れ顕著,広範囲に煤付着,常総甕［下層］ |
| SI-206 | 7 | 土師 | 小型甕 | 10 | (12.2) | − | (4.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着,在地甕　［床直］ |
| SI-206 | 8 | 土師 | 小型甕 | 10 | (10.6) | − | (4.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により剥離顕著,部分的に厚く煤付着,在地甕　［上・中層］ |
| SI-207 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 14.0 | 8.0 | 3.9 | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,打ち欠き土器,内外面ともに器面の磨耗・剥離が激しい,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　［カマド内］ |
| SI-207 | 2 | 須恵 | 杯 | 45 | (14.0) | (8.2) | 3.9 | − | 灰褐色/灰褐色 | 石英,雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外ヘラ書きあり『×』,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　［下層］ |
| SI-207 | 3 | 須恵 | 杯 | 50 | 13.6 | 7.4 | 4.0 | − | 灰褐色/灰色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ | 還元不良,外面体部中位から底部全面に薄く剥離,茨城産　［中・下層］ |
| SI-207 | 4 | 須恵 | 杯 | 30 | (14.0) | (8.3) | 3.9 | − | 灰黒色/灰黒色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,内外面ともに器面の磨耗顕著,二次被熱により底部内外面煤付着,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　［中層］ |
| SI-207 | 5 | 須恵 | 杯 | 30 | (15.0) | 8.6 | 3.3 | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　［床面］ |
| SI-207 | 6 | 土師 | 甕 | 10 | (23.0) | − | (8.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 口縁部片,常総甕　［中・下層］ |
| SI-207 | 7 | 須恵 | 甕 | 10 | (36.0) | − | (13.2) | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,石英, | ナデ/ナデ,タタキ | 内面全体に薄く剥離,当具痕あり,茨城産　［床面］ |
| SI-208 | 1 | 須恵 | 杯 | 60 | 12.9 | 6.8 | 3.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,打ち欠き土器,内外面ともに二次被熱により底部中心に厚く煤付着,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［下層］ |
| SI-208 | 2 | 土師 | 杯 | 60 | (12.9) | (6.2) | 3.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により器面の剥離激しく全体に赤く変色している［カマド内］ |
| SI-208 | 3 | 土師 | 杯 | 30 | (14.4) | (7.4) | 4.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により器面の剥離激しく全体に山砂が付着,底部の内外に煤厚く付着,底外回転糸切り後無調整［カマド内］ |
| SI-208 | 4 | 土師 | 杯 | 55 | (15.2) | 7.8 | 5.6 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ | 底内ヘラ書きあり『×』,底外回転糸切り後無調整で編物状の圧痕あり,器面はやや荒れ内外面体部から口縁部にかけに二次被熱により激しく煤付着［下層］ |
| SI-208 | 5 | 土師 | 皿 | 10 | (12.6) | − | (2.4) | − | 赤褐色/赤褐色 | スコリア,雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,外面赤く変色［床直］ |
| SI-208 | 6 | 須恵 | 甕 | 5 | (19.0) | − | (5.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元やや不良,口縁部片,外面二次被熱により全体が赤く変色,千葉産　［上・中層］ |
| SI-208 | 7 | 須恵 | 甕 | 10 | (28.2) | − | (8.2) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 還元やや不良,口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,器面部分的に赤く変色,千葉産　［カマド右袖脇］ |
| SI-208 | 8 | 須恵 | 小型甕 | 70 | (13.1) | 7.5 | 14.0 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 底外及び胴部下端を除く内外面全体は二次被熱により赤彩を施したように赤く変色,底外無調整で編物状の圧痕あり,底内斑状の剥離顕著,千葉産　［下層］ |
| SI-208 | 9 | 土師 | 小型甕 | 80 | 13.1 | 6.4 | 13.0 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに黒斑あり,技法的には須恵器といえる,内面胴部中位部分的に斑状の剥離あり,底外無調整,在地甕　［カマド内］ |
| SI-208 | 10 | 土師 | 小型甕 | 50 | − | 7.6 | (8.1) | − | 黒褐色/赤褐色 | 長石,砂粒 | ヘラナデ/ヘラケズリ | 内面全体二次被熱により真っ黒に煤が付着,その煤は破断面及び外面にまで及び胴部中位で切断後の被熱と思われる,在地甕　［カマド内］ |
| SI-208 | 11 | 土師 | 小型甕 | 5 | (13.1) | − | (4.9) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕　［床面］ |
| SI-208 | 12 | 須恵 | 甕 | 45 | (25.4) | − | (20.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 千葉産。ただし内外面に黒斑状の部分あり。内面当具痕あり,底部は意図的に削除されており甑として再利用されたと思われる［床直,下層］ |
| SI-209 | 1 | 須恵 | 杯 | 80 | 13.0 | 6.0 | 4.4 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,還元不良,断面褐色,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［下層］ |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-209 | 2 | 須恵 | 杯 | 80 | 13.6 | 6.0 | 4.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,口縁部の歪み大,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [上・下層] |
| SI-209 | 3 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.9 | 6.8 | 4.5 | − | 灰色/灰色 | スコリア,長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層,床直] |
| SI-209 | 4 | 土師 | 杯 | 40 | (12.1) | 6.6 | 4.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア石英, | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともにやや磨耗,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ [上層] |
| SI-209 | 5 | 土師 | 杯 | 35 | (15.0) | (7.0) | 4.1 | − | 黒色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 黒色処理が内面全体と外面口縁部まで及ぶ,外面やや磨耗,底外回転ヘラケズリ [中層] |
| SI-209 | 6 | 土師 | 杯 | 85 | 13.4 | 6.0 | 4.3 | − | 褐色/赤褐色 | 長石,砂粒,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,内外面ともに二次被熱により赤味を帯びる,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器と明確な区別がつかない一群 [下層] |
| SI-209 | 7 | 土師 | 杯 | 45 | (15.8) | 7.2 | 5.4 | − | 褐色/褐色 | スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面部分的に赤く変色している,底外多方向手持ちヘラケズリ [下層] |
| SI-209 | 8 | 土師 | 杯 | 25 | (14.0) | (6.4) | 4.4 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | SI-208・SI-210と遺構間接合,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群 [一括] |
| SI-209 | 9 | 土師 | 皿 | 35 | (13.2) | 5.8 | 3.0 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部厚め,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群 [下層] |
| SI-209 | 10 | 土師 | 皿 | 45 | (14.0) | 6.2 | 2.2 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部に一部煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群 [下層] |
| SI-209 | 11 | 土師 | 皿 | 35 | (15.0) | 7.6 | 1.4 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | SI-210と遺構間接合,底外一部煤付着・多方向手持ちヘラケズリ [下層] |
| SI-209 | 12 | 土師 | 皿 | 35 | (13.8) | 6.4 | 2.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ [下層] |
| SI-209 | 13 | 土師 | 蓋 | 30 | − | − | (1.4) | − | 赤褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ミガキ/ヘラケズリ | 天井部片,天井部外回転ヘラケズリ [上層] |
| SI-209 | 14 | 原始灰釉陶器 | 壺 | 40 | − | 8.6 | (14.6) | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 折戸10号窯式～井ヶ谷78号窯式。胴部外面灰釉付着,底外回転糸切り後回転ヘラケズリ,その後高台貼付,東海産 [下層] |
| SI-209 | 15 | 須恵 | 甕 | 15 | (19.4) | − | (8.3) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面褐色,口縁部片,内面当具痕あり,千葉産 [下層] |
| SI-209 | 16 | 須恵 | 甕 | 25 | (28.2) | 13.0 | 22.6 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラナデ | 還元不良,断面褐色,SI-205・208・210と遺構間接合,底外ヘラ書きあり『×』,内面当具痕あり,千葉産 [上層,床直] |
| SI-209 | 17 | 土師 | 甕 | 10 | (15.0) | − | (8.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 小型,底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,器面赤く変色しやや荒れている,在地甕 [下層] |
| SI-209 | 18 | 土師 | 甕 | 10 | (13.6) | − | (7.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 小型,底部欠損,器面及び破断面の磨耗顕著,武蔵甕 [床面] |
| SI-209 | 19 | 須恵 | 甑 | 15 | − | (16.2) | (11.0) | − | 橙褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,底部片,内面当具痕あり,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,千葉産 [下層] |
| SI-210 | 1 | 土師 | 甕 | 45 | 20.1 | − | (22.4) | 胴部(20.8) | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,石英,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により器面の磨耗顕著,内面薄く・外面厚く煤付着,武蔵甕 [カマド内,カマド前] |
| SI-211 | 1 | 須恵 | 杯 | 60 | (13.1) | (7.4) | 4.4 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-211 | 2 | 須恵 | 杯 | 25 | (13.3) | (6.6) | 3.9 | − | 灰色/灰色 | スコリア,雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面褐色,内面に暗文風のナデがみられる,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-211 | 3 | 須恵 | 杯 | 30 | (12.1) | (6.4) | 4.0 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-211 | 4 | 土師 | 杯 | 40 | (13.1) | 7.0 | 3.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに煤付着,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群 [下層] |
| SI-211 | 5 | 土師 | 杯 | 70 | (14.5) | 7.6 | 5.5 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア,長石 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着,底外回転糸切り後全面回転ヘラケズリ [床直] |
| SI-211 | 6 | 土師 | 杯 | 85 | 14.3 | 7.0 | 4.5 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,雲母,石英 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,内外面及び破断面ともに劣化顕著,底外ヘラ書きあり,底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ [カマド内] |
| SI-211 | 7 | 土師 | 杯 | 100 | 11.8 | 6.8 | 3.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面口縁部の一部と内面口縁部から体部中位にかけての片側半分に油煙密に付着,底外回転糸切り後全面回転ヘラケズリ [下層] |
| SI-211 | 8 | 土師 | 杯 | 85 | 12.8 | 7.2 | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面及び破断面ともに劣化やや顕著,底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ [床直] |
| SI-211 | 9 | 土師 | 杯 | 55 | 14.2 | 7.0 | 5.0 | − | 赤褐色/灰褐色 | 雲母,長石,砂粒 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により底内全面薄く剥離,外面ほぼ全面に厚く煤付着,内外面ともに部分的に赤く変色 [中・下層] |
| SI-211 | 10 | 土師 | 杯 | 85 | 14.9 | 7.0 | 5.0 | − | 黒褐色/褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 二次被熱により内外面の体部中位から底部全域に厚く煤付着,内外面の口縁部周辺は赤く変色,底外多方向手持ちヘラケズリ [下層] |
| SI-211 | 11 | 土師 | 杯 | 95 | 12.5 | 7.4 | 3.3 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,破断面劣化,内外面ともに二次被熱により煤付着,底内剥離顕著,底外回転糸切り後回転ヘラケズリ [床面] |
| SI-211 | 12 | 土師 | 杯 | 20 | (14.4) | − | (3.8) | − | 黒色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ | 底部欠損,内面黒色処理で外面口縁部までおよぶ [床面,床直] |
| SI-211 | 13 | 土師 | 杯 | 50 | (16.9) | 7.7 | 5.5 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともにやや磨耗,底外全面手持ちヘラケズリ [中・下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-211 | 14 | 土師 | 高台付皿 | 90 | 13.0 | 6.7 | 3.2 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ | 二次被熱により口縁部を除く内面全体に厚く煤付着,底外ロクロナデ後無調整,その後高台貼付　[中・下層] |
| SI-211 | 15 | 土師 | 高台付皿 | 90 | 12.6 | (6.0) | 3.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 高台部一部遺存,内外面ともに二次被熱により煤付着,内面広範囲に薄く剥離,底外回転糸切り後全面回転ヘラケズリ,その後高台貼付[カマド内] |
| SI-211 | 16 | 土師 | 高台付皿 | 30 | − | 6.2 | 2.1 | − | 黒色/橙褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ | 高台部片,底外刻書あり『里』,内面黒色処理,底外貼付高台[カマド内] |
| SI-211 | 17 | 土師 | 高台付皿 | 75 | 13.6 | (7.0) | 3.1 | − | 黒色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ | 内面黒色処理,底外回転糸切り後無調整,その後高台貼付[上層] |
| SI-211 | 18 | 灰釉陶器 | 長頸壺 | − | − | − | − | − | 灰色/灰色 | スコリア | ナデ/ナデ | 頸部片,頸部内外面ともに灰釉付着,東海産[中層] |
| SI-211 | 19 | 須恵 | 甕 | 10 | − | − | − | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,頸部から胴部上半部遺存,内面当具痕あり,千葉産　[床面] |
| SI-211 | 20 | 須恵 | 小型甕 | 10 | − | 4.7 | (7.0) | − | 灰褐色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面薄く煤付着,底外無調整で編物状の圧痕あり,千葉産　[床面] |
| SI-211 | 21 | 須恵 | 甕 | 10 | − | 10.0 | − | − | 灰褐色/褐色 | 長石,雲母,白色針状物質 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,2点同一個体,内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着,内面当具痕あり,底外無調整,千葉産　[カマド内] |
| SI-211 | 22a 22b | 須恵 | 甕 | 10 | (13.2) | 13.6 | − | − | 褐色/灰褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,2点同一個体,底外編物状の圧痕・ヘラ書きあり『キ』,内面当具痕あり,千葉産　[床面,下層] |
| SI-211 | 23 | 須恵 | 甕 | 10 | (30.0) | − | (8.7) | − | 褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,口縁部片,還元不良,内面当具痕あり,千葉産　[中・下層] |
| SI-211 | 24 | 須恵 | 甕 | 5 | (29.6) | − | (7.2) | − | 灰褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,口縁部片,還元不良,内外面ともに煤付着,千葉産　[床直,床面] |
| SI-211 | 25 | 須恵 | 甕 | 5 | (29.3) | − | (10.0) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面褐色,口縁部片,還元不良,内面当具痕あり,千葉産　[床面] |
| SI-211 | 26 | 須恵 | 甕 | 5 | (25.0) | − | (6.8) | − | 灰褐色/褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面中央は灰色・両外側は褐色を呈し層をなす,口縁部片,還元不良,千葉産　[一括] |
| SI-211 | 27 | 須恵 | 甕 | 5 | (29.3) | − | (6.5) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母,白色針状物質 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面中央は灰色・両外側は褐色を呈し層をなす,口縁部片,内外面ともに二次被熱により赤く変色,千葉産　[中層] |
| SI-211 | 28 | 須恵 | 甕 | 5 | (25.0) | − | (6.0) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,断面褐色,内外面ともに器面やや劣化,千葉産　[中層] |
| SI-211 | 29 | 須恵 | 甕 | 5 | (18.0) | − | (6.6) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産　[カマド内,床面] |
| SI-211 | 30 | 須恵 | 甕 | 5 | (20.4) | − | (9.3) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラナデ | 口縁部片,還元不良,内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着,内面当具痕あり,千葉産[中・下層] |
| SI-211 | 31 | 須恵 | 小型甕 | 10 | − | (10.2) | (8.2) | − | 灰褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,還元不良,底外編物状の圧痕・ヘラ書きあり,千葉産　[カマド内,床面] |
| SI-211 | 32 | 土師 | 小型甕 | 10 | (13.4) | 6.8 | (12.0) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 2点同一個体,底部完存,外面全体・内面口縁部まで厚く煤付着,在地甕　[中層,床直] |
| SI-211 | 33 | 土師 | 小型甕 | 5 | (15.5) | − | (7.0) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部を除く内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕　[床面] |
| SI-211 | 34 | 土師 | 甕 | 10 | − | 8.2 | (13.3) | − | 橙褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ | 口縁部欠損,二次被熱により外面広範囲に厚く煤付着,在地甕　[中・下層,床直] |
| SI-212 | 1 | 土師 | 杯 | 100 | 12.7 | 5.5 | 4.7 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,体部外面墨書あり判読不能,内面広範囲に油煙付着灯明用として使用,底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ　[下層] |
| SI-212 | 2 | 土師 | 杯 | 75 | 13.5 | 6.2 | 4.4 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により器面の剥離が顕著で特に外面の磨耗が激しい,底外全面手持ちヘラケズリ　[カマド内] |
| SI-212 | 3 | 土師 | 杯 | 75 | 12.5 | 5.8 | 4.3 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 打ち欠き土器,内外面部分的に煤付着,底外回転糸切り後無調整　[下層] |
| SI-212 | 4 | 土師 | 杯 | 50 | (13.6) | 7.2 | 3.8 | − | 褐色/褐色 | スコリア,雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 全体的に歪み大,内外面ともに二次被熱により器面の磨耗やや顕著,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[カマド内,下層] |
| SI-212 | 5 | 土師 | 杯 | 85 | 14.0 | 5.8 | 4.9 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,全体的に歪みあり,内外面ともに二次被熱により器面の磨耗・剥離やや顕著,底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ　[カマド内] |
| SI-212 | 6 | 土師 | 杯 | 30 | (13.0) | (7.4) | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面やや磨耗,底外広範囲に煤付着,底外回転ヘラケズリ　[中層] |
| SI-212 | 7 | 土師 | 杯 | 70 | 12.9 | 5.6 | 4.3 | − | 灰褐色/赤褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面磨耗顕著,底外回転糸切り後全面回転ヘラケズリ　[下層] |
| SI-212 | 8 | 土師 | 杯 | 30 | (12.9) | (7.2) | 4.3 | − | 灰褐色/褐色 | 長石,雲母,石英,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面薄く煤付着,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[上層] |
| SI-212 | 9 | 土師 | 杯 | 30 | (13.2) | (6.7) | 4.1 | − | 褐色/褐色 | 雲母,長石,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底内墨書あり『万』,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[下層] |
| SI-212 | 10 | 土師 | 杯 | 30 | (12.6) | − | − | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに器面の剥落顕著　[上層] |
| SI-212 | 11 | 土師 | 杯 | 10 | − | (6.3) | − | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,底内ヘラ書きあり,破片のため詳細不明,刻書の可能性あり,底外回転ヘラケズリ[中層] |
| SI-212 | 12 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 黄褐色/黄褐色 | スコリア | − | 体部外面墨書あり,小片のため詳細不明[一括] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-212 | 13 | 須恵 | 大型甕 | 5 | − | − | − | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/タタキ | 破片のため全体の器形不明,東海産 [下層] |
| SI-212 | 14 | 土師 | 甕 | 35 | 15.5 | − | (9.1) | − | 褐色/褐色 | スコリア,雲母,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部完形,内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着,在地甕 [下層] |
| SI-213 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.6 | 6.6 | 4.4 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,口縁部の歪みややあり,底外回転糸切り後回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-213 | 2 | 須恵 | 杯 | 100 | 13.7 | 6.8 | 4.0 | − | 黒褐色/褐色 | 雲母,スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-213 | 3 | 土師 | 杯 | 20 | (12.0) | − | (3.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着 [床面,床直] |
| SI-213 | 4 | 土師 | 杯 | 60 | 13.9 | 7.2 | 3.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ [中層] |
| SI-213 | 5 | 土師 | 杯 | 35 | (13.4) | (7.0) | 3.9 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外全面回転ヘラケズリ [中層] |
| SI-213 | 6 | 土師 | 杯 | 25 | (14.0) | (7.0) | 4.2 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面やや劣化,体部外面墨書あり,詳細不明,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群 [中層] |
| SI-213 | 7 | 土師 | 杯 | 15 | (17.6) | − | (3.8) | − | 黒色/橙褐色 | 長石,雲母,石英 | ミガキ/ナデ | 底部欠損,内面黒色処理,外面線刻あり [中層] |
| SI-213 | 8 | 土師 | 杯 | 10 | (17.6) | − | (4.7) | − | 黒褐色/橙褐色 | 長石,雲母,石英 | ミガキ/ナデ | 底部欠損,内面黒色処理 [下層] |
| SI-213 | 9 | 土師 | 甕 | 5 | (21.0) | − | (5.8) | − | 褐色/褐色 | 石英,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕 [床面] |
| SI-213 | 10 | 土師 | 甕 | 10 | (19.6) | − | (8.7) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により劣化・剥離が顕著,外面は特に厚く煤付着,在地甕 [床面] |
| SI-213 | 11 | 須恵 | 甑 | 55 | (33.8) | (14.2) | (31.8) | − | 褐色/褐色 | 石英,雲母,長石,砂粒 | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面上半部二次被熱により厚く煤付着,内面当具痕あり,底部5孔,千葉産 [上・中・下層] |
| SI-214 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (11.4) | (6.2) | 3.8 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ/ナデ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により斑状に煤付着,底外回転糸切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-214 | 2 | 須恵 | 杯 | 35 | (12.7) | (6.8) | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面漆付着,内面下位の漆大きく剥離,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [床直] |
| SI-214 | 3 | 須恵 | 杯 | 30 | − | (7.2) | (2.2) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,千葉産 [上層] |
| SI-214 | 4 | 須恵 | 杯 | 80 | 14.0 | 7.8 | 4.3 | − | 黒色/黒色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-214 | 5 | 須恵 | 杯 | 55 | (14.3) | 7.8 | 4.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-214 | 6 | 土師 | 杯 | 20 | (12.6) | (6.4) | 4.6 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面厚く煤付着,底外手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群 [上層] |
| SI-214 | 7 | 土師 | 杯 | 30 | (21.2) | 9.0 | (8.0) | − | 黒色/橙褐色 | 長石,石英 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面及び外面口縁部下にかけて黒色処理,底外黒斑あり,底外回転ヘラケズリ [中・下層] |
| SI-214 | 8 | 須恵 | 甕 | 5 | (25.5) | − | (13.5) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面褐色,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産 [中層] |
| SI-215 | 1 | 土師 | 高台付杯 | 20 | − | 7.2 | (2.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 底部片,底内線刻あり『井』,底外全面回転ヘラケズリ後高台貼付 [中層] |
| SI-216 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.8) | 7.6 | 4.2 | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともにやや劣化,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [中・下層] |
| SI-216 | 2 | 須恵 | 杯 | 35 | (14.0) | (8.0) | 3.8 | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-216 | 3 | 須恵 | 杯 | 90 | 13.8 | 8.0 | 4.2 | − | 灰色/灰黒色 | スコリア,長石,石英 | ナデ/ナデ | 底内線刻あり『+』,底外回転ヘラ切り後無調整,茨城産 [床直] |
| SI-216 | 4 | 須恵 | 高台付杯 | 45 | − | 9.0 | (4.3) | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面及び破断面ともに磨耗顕著,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,その後高台貼付,茨城産 [床直] |
| SI-216 | 5 | 須恵 | 高台付杯 | 45 | − | 9.4 | (4.0) | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面及び破断面ともにやや劣化,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,その後高台貼付,茨城産 [上層] |
| SI-216 | 6 | 須恵 | 高台付杯 | 45 | − | 10.2 | (3.2) | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,内外面及び破断面ともにやや劣化,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,その後高台貼付,茨城産 [上層] |
| SI-216 | 7 | 須恵 | 甕 | 5 | (31.0) | − | (6.8) | − | 灰黒色/灰黒色 | 雲母,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,断面褐色,茨城産 [中・下層] |
| SI-216 | 8 | 土師 | 甕 | 15 | (25.0) | − | (18.8) | 胴部(26.6) | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,長石,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,外面胴部部分的に山砂付着,常総甕 [中・下層] |
| SI-217 | 1 | 須恵 | 杯 | 75 | (12.2) | (7.4) | 3.8 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外ヘラ書きあり『=』,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [上層] |
| SI-217 | 2 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.8) | (6.6) | (3.7) | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内面煤付着,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [カマド内] |
| SI-217 | 3 | 土師 | 杯 | 30 | (12.4) | (6.4) | 4.3 | − | 褐色/褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転糸切り後多方向手持ちヘラケズリ [一括] |
| SI-217 | 4 | 土師 | 杯 | 80 | (17.4) | 9.4 | 5.3 | − | 褐色/褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着顕著,底外多方向手持ちヘラケズリ [カマド内] |
| SI-217 | 5 | 須恵 | 短頸壺 | 5 | (11.2) | − | (4.6) | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ/ナデ | 口縁部片,茨城産 [一括] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-217 | 6 | 須恵 | 甕 | 5 | − | (14.4) | (2.3) | − | 褐色/褐色 | 石英,長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ | 底部片,還元不良,断面中央灰色・両外側褐色で層をなす,底外ヘラ書きあり『×』,千葉産 [一括] |
| SI-217 | 7 | 須恵 | 甕 | 80 | − | 15.6 | (33.0) | 胴部(25.5) | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 口縁部欠損,還元不良,断面褐色,内外面ともに二次被熱により煤付着顕著,内面全域及び外面下半部激しい剥離,千葉産 [一括] |
| SI-218 | 1 | 須恵 | 杯 | 45 | 13.9 | 7.8 | 3.6 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,外面体部に火襷あり,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-218 | 2 | 土師 | 杯 | 60 | 11.0 | 6.4 | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群,在地 [一括] |
| SI-218 | 3 | 須恵 | 甕 | 5 | (18.0) | − | (4.9) | − | 灰褐色/黒褐色 | 雲母,スコリア,石英 | ナデ/ナデ | 口縁部片,還元不良,断面褐色,内面二次被熱により煤付着,千葉産 [一括] |
| SI-218 | 4 | 土師 | 甕 | 5 | (14.0) | − | (4.3) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着顕著,在地 [一括] |
| SI-219 | 1 | 須恵 | 杯 | 25 | (13.1) | 5.6 | 4.2 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央褐色・両外側灰褐色で層をなす,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-219 | 2 | 須恵 | 杯 | 45 | (13.4) | 6.4 | 4.3 | − | 褐色/褐色 | スコリア,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-219 | 3 | 須恵 | 杯 | 55 | (14.1) | 6.6 | 4.2 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-219 | 4 | 土師 | 杯 | 55 | (13.4) | 5.4 | 4.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転糸切り後多方向手持ちヘラケズリ [一括] |
| SI-219 | 5 | 土師 | 杯 | 25 | (14.5) | 7.4 | 3.9 | − | 黒色/橙褐色 | スコリア,雲母,長石 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,外面磨耗顕著,底外多方向手持ちヘラケズリ [一括] |
| SI-219 | 6 | 須恵 | 甕 | 5 | (33.0) | − | (7.6) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,断面中央灰色・両外側褐色で層をなす,千葉産 [一括] |
| SI-219 | 7 | 須恵 | 甕 | 60 | (20.4) | (10.4) | 22.0 | 胴部(20.5) | 褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 底部欠損,還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着顕著,外面部分的に赤変,千葉産 [中層] |
| SI-220 | 1 | 須恵 | 蓋 | 40 | (16.0) | − | 3.5 | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 天井部回転ヘラケズリ後摘部貼付,茨城産 [一括] |
| SI-221 | 1 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.2) | (7.6) | (4.2) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面灰褐色,外面火襷あり,千葉産 [上層] |
| SI-221 | 2 | 土師 | 小型甕 | 30 | 11.8 | − | (7.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部完存,内面剥離顕著,在地甕 [一括] |
| SI-221 | 3 | 須恵 | 甕 | 5 | − | − | − | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 底外ヘラ書きあり『=』,千葉産 [一括] |
| SI-222 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.0) | (7.4) | 3.9 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-222 | 2 | 土師 | 甕 | 5 | (22.0) | − | (11.3) | − | 褐色/褐色 | 雲母,石英長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,常総甕 [一括] |
| SI-223 | 1 | 土師 | 杯 | 20 | (14.0) | − | (3.6) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,石英,長石 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内面剥離顕著,外面煤付着 [一括] |
| SI-223 | 2 | 土師 | 甕 | 5 | (21.6) | − | (2.8) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕 [一括] |
| SI-224 | 1 | 須恵 | 杯 | 5 | (14.2) | − | (3.5) | − | 灰白色/灰白色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 底部欠損,内外面ともに磨耗顕著,茨城産 [一括] |
| SI-224 | 2 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母 | ナデ/ナデ | 外面墨書あり,小片のため詳細不明 [一括] |
| SI-224 | 3 | 土師 | 小型甕 | 10 | (14.6) | − | (6.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに磨耗・剥離顕著,在地甕 [床直] |
| SI-225 | 1 | 土師 | 杯 | 15 | (11.6) | (7.0) | 3.1 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 破断面劣化,底外回転糸切り後回無調整 [一括] |
| SI-225 | 2 | 土師 | 高台付杯 | 40 | − | 8.4 | (2.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ | 内外面及び破断面ともに磨耗顕著,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,その後高台貼付 [下層] |
| SI-228 | 1 | 土師 | 高台付杯 | 15 | − | (12.0) | (2.6) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 高台部片,内面調整雑,SI-225と遺構間接合 [一括] |
| SI-228 | 2 | 土師 | 甕 | 10 | (18.0) | − | (9.3) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により薄く煤付着,内面器面の剥離・磨耗やや顕著,在地甕 [一括] |
| SI-228 | 3 | 土師 | 甕 | 20 | (21.4) | − | (15.8) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部内側に屈曲,内面剥離やや顕著,在地甕 [一括] |
| SI-229 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 12.5 | 8.0 | 4.0 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,外面数本の火襷あり,底外ヘラ書きあり『×』,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [カマド左袖周辺下層] |
| SI-229 | 2 | 須恵 | 杯 | 90 | 12.1 | 6.6 | 4.0 | − | 灰色/灰色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,還元やや不良,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産 [西隅下層] |
| SI-229 | 3 | 須恵 | 杯 | 60 | − | 7.6 | (2.7) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 全面打ち欠き土器,底部完存,還元やや不良,底外多数のヘラ書きあり『W…』,底外回転ヘラ切り後外周手持ちヘラケズリ,千葉産 [カマド左袖周辺中層] |
| SI-229 | 4 | 須恵 | 杯 | 45 | (11.8) | (8.0) | 3.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転回転ヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| SI-229 | 5 | 須恵 | 杯 | 95 | 12.2 | 8.6 | 4.0 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,還元不良,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [出入口部床面] |
| SI-229 | 6 | 須恵 | 杯 | 20 | (10.8) | (6.6) | 4.3 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面及び破断面やや磨耗,還元不良,断面中央褐色・両外側灰褐色で層をなす,底外ヘラ書あり『+』,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [一括] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-229 | 7 | 土師 | 杯 | 90 | 11.6 | − | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ,ヘラナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,底部丸底,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ［カマド右袖脇下層］ |
| SI-229 | 8 | 須恵 | 高台付杯 | 40 | − | (7.6) | (3.7) | − | 黄褐色/黄褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ | 還元不良,口縁部欠損,器面やや磨耗,高台下端部外側に屈曲,底外線刻あり,千葉産［下層］ |
| SI-229 | 9 | 須恵 | 高杯 | 10 | − | − | (5.4) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ | 脚上端部片,焼成良好,茨城産［一括］ |
| SI-229 | 10 | 須恵 | 甕 | 50 | − | 16.0 | (18.8) | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ/タタキ,ヘラケズリ | 内面当具痕多数あり,胴下端部ヘラケズリ,底外無調整,茨城産［床面］ |
| SI-229 | 11 | 須恵 | 甑 | 5 | (33.8) | − | (13.5) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面褐色,内面指頭痕あり,把手四角形,千葉産［一括］ |
| SI-230 | 1 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.9) | 7.6 | (4.6) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,千葉産［一括］ |
| SI-230 | 2 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 黒色/黄褐色 | 長石 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,底外墨書あり小片のため詳細不明,内面黒色処理,底外手持ちヘラケズリ　［一括］ |
| SI-230 | 3 | 須恵 | 壺 | 10 | − | (16.0) | (4.8) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 断面灰褐色・両外側灰色で層をなす,底内自然釉付着,底外回転ヘラケズリ,東海産　［一括］ |
| SI-230 | 4 | 須恵 | 甕 | 65 | (26.8) | (13.8) | 24.7 | − | 灰褐色/灰褐色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元やや不良,胴下端部ヨコナデ,底外多方向ヘラケズリ,千葉産　［カマド内,床面］ |
| SI-230 | 5 | 土師 | 小型甕 | 10 | (12.0) | − | (6.1) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部から胴部上位片,内外面ともに二次被熱により薄く煤付着,在地甕　［一括］ |
| SI-230 | 6 | 須恵 | 甑 | 5 | (36.0) | − | (6.1) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,断面中央黄褐色・両外側褐色で層をなす,把手四角形,千葉産　［下層］ |
| SI-231 | 1 | 土師 | 杯 | 90 | 14.5 | 7.2 | 4.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,内外面ともに黒斑あり,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ［カマド内］ |
| SI-231 | 2 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 黒褐色/褐色 | 長石 | ナデ/無調整 | 底部片,底外線刻あり『−』,千葉産　［一括］ |
| SI-231 | 3 | 土師 | 甕 | 15 | (19.4) | − | (6.7) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部から胴部上位片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕　［床直,下層］ |
| SI-233 | 1 | 灰釉陶器 | 蓋 | 80 | 12.0 | − | 2.0 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 摘部欠損,内外面口縁部に環状に灰釉付着,天井部外面全面回転ヘラケズリ,東海産　［一括］ |
| SI-233 | 2 | 須恵 | 杯 | 70 | 11.6 | 7.4 | 4.2 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,内外面ともに火襷あり,底外全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［中層］ |
| SI-233 | 3 | 須恵 | 杯 | 60 | (11.8) | 7.0 | 3.3 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面中央褐色・両外面灰色の層をなす,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［中層］ |
| SI-233 | 4 | 須恵 | 杯 | 45 | (12.3) | 7.2 | 3.8 | − | 灰黒色/灰黒色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産　［床直］ |
| SI-233 | 5 | 須恵 | 杯 | 60 | 12.8 | 7.2 | 3.6 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央褐色・両外面灰色の層をなす,底外全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産［床直］ |
| SI-233 | 6 | 須恵 | 杯 | 30 | (11.4) | (6.0) | 4.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産　［一括］ |
| SI-233 | 7 | 須恵 | 杯 | 30 | − | 6.8 | (2.2) | − | 黒褐色/褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外朱墨あり『至』,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産［一括］ |
| SI-233 | 8 | 土師 | 杯 | 30 | (12.8) | (7.4) | 3.6 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに黒斑あり,外面二次被熱により一部赤変,底外多方向手持ちヘラケズリ［一括］ |
| SI-233 | 9 | 土師 | 杯 | 60 | 12.2 | 6.3 | 3.9 | − | 黒色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,外面やや磨耗,底外全面回転ヘラケズリ　［中層］ |
| SI-233 | 10 | 土師 | 杯 | 80 | 13.6 | 8.0 | 3.7 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに磨耗顕著,底外全面多方向手持ちヘラケズリ［一括］ |
| SI-233 | 11 | 土師 | 小型甕 | 20 | (14.6) | − | (8.1) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | ,胴部中位以下欠損,外面全域・内面口縁部環状に煤付着,在地甕［一括］ |
| SI-233 | 12 | 土師 | 甕 | 20 | (20.0) | − | (9.6) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面黒斑あり,胴部中位以下欠損,器面やや劣化,在地甕［下層］ |
| SI-233 | 13 | 須恵 | 甑 | 20 | (24.2) | (13.4) | (25.0) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 2点同一個体,還元やや不良,断面中央褐色・両外側灰褐色の層をなす,内面当具痕あり,千葉産　［カマド内一括］ |
| SI-235 | 1a | 須恵 | 甕 | 5 | (22.4) | − | (6.5) | − | 褐色/褐色 | 雲母,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 1bと同一個体,口縁部片,還元やや不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産　［カマド内］ |
| SI-235 | 1b | 須恵 | 甕 | 15 | − | − | (10.1) | − | 褐色/褐色 | 雲母,石英,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 1aと同一個体,還元やや不良,胴部片,内外面ともに二次被熱により煤付着千葉産　［カマド内］ |
| SI-236 | 1 | 須恵 | 杯 | 20 | (13.2) | (7.0) | 4.0 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面及び破断面やや劣化,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　［一括］ |
| SI-236 | 2 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.2) | (7.0) | 4.3 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面やや劣化,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　［一括］ |
| SI-236 | 3 | 須恵 | 杯 | 40 | − | 7.7 | − | − | 灰黄褐色/灰黄褐色 | 雲母,長石,スコリア, | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部内面線刻あり『三』,器面及び破断面劣化顕著,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,茨城産　［一括］ |
| SI-236 | 4 | 土師 | 杯 | 35 | (13.2) | (9.0) | 3.5 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着・部分的に剥離顕著,底外多方向手持ちヘラケズリ　［一括］ |
| SI-238 | 1 | 須恵 | 杯 | 100 | 13.5 | 8.2 | 4.4 | − | 灰褐色/灰褐色 | スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外墨書あり『高』,内外面ともに斑状に煤付着,底外全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［カマド右袖脇］ |
| SI-238 | 2 | 須恵 | 杯 | 80 | 13.4 | 6.4 | 4.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面一部に赤化あり,底外全面一方向手持ちヘラケズリ,体部下位まで及ぶ,茨城産　［下層］ |
| SI-238 | 3 | 土師 | 杯 | 25 | − | 7.0 | 3.3 | − | 黒色/褐色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,底外墨書あり『至』,底外回転ヘラケズリ　［一括］ |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-238 | 4 | 須恵 | 甑 | 10 | (27.0) | − | (13.6) | − | 褐色/褐色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面褐色,口縁部から胴部中位まで遺存,把手四角形,千葉産 [床面] |
| SI-238 | 5 | 須恵 | 甑 | 10 | (32.0) | − | (13.0) | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部から胴部中位まで遺存,内面当具痕あり,茨城産 [下層] |
| SI-239 | 1 | 須恵 | 杯 | 70 | 12.9 | 8.4 | 4.0 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,内外面ともに火襷あり,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産 [上層] |
| SI-239 | 2 | 須恵 | 杯 | 15 | (12.2) | (8.0) | 4.4 | − | 褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面一部に赤化あり,底外全面一方向手持ちヘラケズリ,体部下位まで及ぶ,千葉産 [下層] |
| SI-239 | 3 | 土師 | 杯 | 30 | 12.4 | − | (3.6) | − | 褐色/黒褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着 [一括] |
| SI-239 | 4 | 須恵 | 高台付杯 | 30 | (16.2) | (10.0) | 6.3 | − | 灰色/青灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 胎土密,内面やや赤化,底外回転ヘラ切り後高台貼付,永田・不入窯 [床面] |
| SI-240 | 1 | 須恵 | 杯 | 45 | (13.6) | 7.4 | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,底外朱墨あり『者』,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-240 | 2 | 須恵 | 杯 | 95 | 13.6 | 7.6 | 4.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | ほぼ完形,還元不良,底外全面一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-240 | 3 | 須恵 | 杯 | 100 | 12.5 | 6.8 | 4.0 | − | 青灰色/青灰色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,口縁部の歪み大,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [カマド内] |
| SI-240 | 4 | 須恵 | 杯 | 55 | 13.4 | 7.6 | 3.7 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産 [カマド右袖脇] |
| SI-240 | 5 | 土師 | 杯 | 90 | 12.3 | 6.2 | 3.7 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア, | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 打ち欠き土器,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ [カマド内] |
| SI-240 | 6 | 須恵 | 甕 | 55 | − | (11.2) | (26.0) | − | 褐色/褐色 | スコリア,石英 | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 口縁部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,外面部分的に赤化あり,底部ほとんど欠損,甑として再利用の可能性有り千葉産 [カマド内] |
| SI-240 | 7 | 土師 | 甕 | 20 | (20.0) | − | (6.8 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ | 口縁部片,器面やや劣化,常総甕 [カマド内] |
| SI-240 | 8 | 土師 | 甕 | 40 | (20.0) | − | (22.4) | 胴部(22.8) | 橙褐色/褐色 | 石英,雲母,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ミガキ | 底部欠損,内外面二次被熱により激しく劣化,外面厚く煤付着,常総甕 [カマド内] |
| SI-241 | 1 | 土師 | 杯 | 70 | 13.0 | 5.6 | 4.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り後無調整 [床直] |
| SI-243 | 1 | 須恵 | 杯 | 95 | 12.6 | 8.0 | 4.6 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,器面やや磨耗,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産 [下層] |
| SI-243 | 2 | 須恵 | 杯 | 80 | 12.0 | 8.2 | 4.2 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,打ち欠き土器,底外ヘラ書きあり『S』,全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [中層] |
| SI-243 | 3 | 須恵 | 杯 | 15 | (14.0) | − | (4.1) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,茨城産 [下層] |
| SI-243 | 4 | 須恵 | 甕 | 10 | − | 9.0 | (1.1) | − | 灰色/灰色 | 雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部完存,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-243 | 5 | 土師 | 甕 | 15 | (17.0) | − | (13.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕 [中・下層] |
| SI-243 | 6 | 須恵 | 甕 | 55 | 21.3 | − | (22.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ /タタキ,ナデ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着,外面広範囲に赤化あり,千葉産 [床直] |
| SI-244 | 1 | 須恵 | 蓋 | 30 | − | − | (2.6) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 摘部なし,外面一部に灰釉付着,東海産 [上層] |
| SI-244 | 2 | 須恵 | 杯 | 20 | (13.2) | (8.0) | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 還元やや不良,断面中央橙褐色・両外側灰色の層をなす,破断面はつるつるに磨滅しており砥石代わりに利用,底外一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-244 | 3 | 須恵 | 杯 | 35 | (14.4) | (7.8) | 4.1 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-244 | 4 | 須恵 | 杯 | 25 | (15.2) | (9.4) | 4.1 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,茨城産 [下層] |
| SI-244 | 5 | 須恵 | 杯 | 35 | (15.4) | (9.2) | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面及び破断面ともに磨耗顕著,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [床直,下層] |
| SI-244 | 6 | 須恵 | 杯 | 30 | − | (8.2) | (3.3) | − | 褐色/褐色 | 雲母,スコリア,石英 | ナデ/ナデ | 口縁部欠損,還元不良,底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,茨城産 [中層] |
| SI-244 | 7 | 土師 | 杯 | 15 | − | (8.0) | (3.4) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部欠損,内外面赤彩,底外回転ヘラケズリ [上層] |
| SI-244 | 8 | 須恵 | 高台付杯 | 25 | (14.8) | (10.0) | 5.1 | − | 灰色/灰黒色 | 雲母,スコリア,石英 | ナデ/ナデ | 還元やや不良,器面及び破断面ともに磨耗やや顕著,底外回転ヘラケズリ後高台貼り付け,茨城産 [中層] |
| SI-244 | 9 | 土師 | 台付甕 | 5 | − | (9.0) | (2.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ | 台部片,内外面ともに二次被熱により煤付着 [下層] |
| SI-244 | 10 | 土師 | 甕 | 40 | (21.4) | − | (27.7) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,外面広範囲に山砂付着,武蔵甕 [下層] |
| SI-244 | 11 | 土師 | 甕 | 35 | 19.4 | − | (19.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 胴部下位以下欠損,武蔵甕 [中・下層] |
| SI-244 | 12 | 土師 | 甕 | 70 | 16.8 | − | (18.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,口縁部完存,外面部分的に煤付着,常総甕 [下層,床面] |
| SI-244 | 13 | 須恵 | 甑 | 30 | − | (14.0) | (17.7) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 2点同一個体,内面当具痕あり,茨城産 [中・下層] |
| SI-245A | 1 | 須恵 | 杯 | 85 | 13.2 | 7.6 | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面中央褐色・両外側灰色の層をなす,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [下層,床面] |
| SI-245A | 2 | 須恵 | 杯 | 80 | 13.3 | 7.9 | 3.8 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,千葉産 [下層,床面] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-245A | 3 | 須恵 | 杯 | 85 | 11.3 | 6.2 | 3.7 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央灰黒色・両外側褐色の層をなす,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産［中・下層］ |
| SI-245A | 4 | 須恵 | 杯 | 30 | − | 7.0 | (2.2) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部欠損,還元不良,断面中央灰色・両外側褐色,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産［床直］ |
| SI-245A | 5 | 須恵 | 杯 | 80 | 11.7 | 6.2 | 3.6 | − | 褐色/褐色 | 石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,外面煤付着顕著,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産［床直］ |
| SI-245A | 6 | 須恵 | 杯 | 35 | (12.9) | (7.0) | (4.2) | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外手持ちヘラケズリ,千葉産［中層］ |
| SI-245A | 7 | 土師 | 杯 | 85 | (13.9) | 7.0 | 4.8 | − | 黒褐色/褐色 | 雲母,スコリア,白色針状物質 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ,ミガキ | 内面黒色処理,底外ヘラ書きあり『+』『=』,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ［中層,床直］ |
| SI-245A | 8 | 土師 | 杯 | 40 | (15.0) | (8.2) | 4.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ,ミガキ | 内外面ともにやや赤味を持つ,丁寧なミガキが内面から外面口縁部下まで及ぶ,底外多方向手持ちヘラケズリ　［中・下層］ |
| SI-245A | 9 | 土師 | 杯 | 40 | − | 9.4 | (2.5) | − | 黒褐色/橙褐色 | 石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,内面黒色処理　［中層］ |
| SI-245A | 10 | 須恵 | 甕 | 50 | (22.4) | − | (21.8) | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ,タタキ | 底部欠損,還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,外面広範囲に山砂付着,千葉産［下層］ |
| SI-245A | 11 | 土師 | 小型甕 | 10 | (12.4) | − | (3.8) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により器面の剥離顕著,在地甕［中・下層］ |
| SI-245A | 12 | 土師 | 甕 | 10 | (15.2) | − | (4.8) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕［上層］ |
| SI-245A | 13 | 土師 | 甕 | 10 | (17.2) | − | (7.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,常総甕　［下層,床直］ |
| SI-245A | 14 | 土師 | 甕 | 15 | (22.0) | − | (12.6) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面黒斑あり,器面やや劣化,在地甕　［中・下層］ |
| SI-245A | 15 | 須恵 | 甑 | 10 | − | (15.0) | (5.8) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ,ヘラケズリ/ヘラケズリ,タタキ | 還元不良,断面褐色,底部片,5孔,千葉産［下層］ |
| SI-245B | 1 | 土師 | 杯 | 35 | (11.9) | 7.4 | 4.0 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着［カマド左袖脇］ |
| SI-245B | 2 | 土師 | 甕 | 35 | − | 8.8 | (22.7) | − | 橙褐色/褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ミガキ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,SI-245Bと遺構間接合,常総甕［下層,床直］ |
| SI-246A | 1 | 須恵 | 杯 | 100 | 12.2 | 6.0 | 4.4 | − | 青灰色/青灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,内外面ともに部分的に赤化,底外全面一方向手持ちヘラケズリ,千葉産［下層］ |
| SI-246A | 2 | 須恵 | 杯 | 40 | (12.7) | 6.9 | 4.2 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,器面及び破断面やや劣化,底外朱墨あり『法』,底外回転ヘラ切り後全面一方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［下層］ |
| SI-246A | 3 | 須恵 | 杯 | 60 | 13.5 | 7.6 | 3.9 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央灰色・両外側褐色の層をなす,底外回転ヘラ切り後外周手持ちヘラケズリ,千葉産　［下層］ |
| SI-246A | 4 | 須恵 | 杯 | 60 | (13.8) | 7.0 | 4.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産　［中・下層］ |
| SI-246A | 5 | 須恵 | 杯 | 30 | − | 7.6 | 3.4 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部欠損,還元不良,断面褐色,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産　［下層］ |
| SI-246A | 6 | 須恵 | 杯 | 20 | − | 7.4 | (1.8) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底部片,底外回転ヘラ切り後全面一方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［中層］ |
| SI-246A | 7 | 土師 | 杯 | 90 | 11.8 | 7.0 | 3.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　［下層］ |
| SI-246A | 8 | 須恵 | 甕 | 45 | (25.4) | (16.0) | 30.0 | 胴部(26.2) | 赤褐色/赤褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,破損後の被熱により内外面及び破断面ともに煤付着,器面は赤褐色・黒褐色の斑状を呈す,千葉産　［カマド内］ |
| SI-246A | 9 | 須恵 | 甕 | 20 | − | 15.8 | 5.3 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ | 底部片,底部完存,底部内面擦り込まれた痕跡あり,還元不良,断面中央黒褐色・両外側褐色の層をなす,底外無調整,底外ヘラ書きあり『+』『=』,千葉産　［下層］ |
| SI-246A | 10 | 土師 | 小型甕 | 40 | (14.0) | − | (15.3) | − | 褐色/褐色 | 雲母,長石,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により部分的に厚く煤付着,在地甕　［下層］ |
| SI-246A | 11 | 土師 | 小型甕 | 20 | (19.6) | − | (10.4) | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕［カマド内］ |
| SI-246A | 12 | 土師 | 小型甕 | 20 | (12.4) | − | (5.6) | − | 赤褐色/褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,器面及び破断面ともに劣化顕著,在地甕,13と同一個体?　［中・下層］ |
| SI-246A | 13 | 土師 | 小型甕 | 30 | − | (5.0) | (5.7) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ヘラケズリ | 底部完存,外面二次被熱により厚く煤付着,12と同一個体?［カマド内］ |
| SI-246A | 14 | 須恵 | 甑 | 30 | (31.0) | (20.4) | 27.6 | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,把手円形,千葉産［カマド内,中層］ |
| SI-248 | 1 | 土師 | 杯 | 30 | − | 6.0 | (1.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,底部完存,外面部分的に煤付着,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ［下層］ |
| SI-248 | 2 | 土師 | 杯 | 5 | − | (7.0) | (1.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底部片,器面及び破断面やや劣化,底外回転糸切り後無調整　［下層］ |
| SI-249 | 1 | 土師 | 杯 | 35 | (16.4) | − | 5.2 | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ,ヘラナデ | 底部丸,底気味,内外面ともに赤彩を施したように赤化する部分と厚く煤が付着する黒色部分あり［中・下層］ |
| SI-249 | 2 | 土師 | 小型甕 | 30 | (12.8) | − | (11.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により赤化及び山砂付着,内外面口縁部に環状に煤付着［カマド内］ |
| SI-249 | 3 | 土師 | 甕 | 20 | 21.6 | − | (16.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ミガキ | 底部欠損,外面黒斑,内外面ともに二次被熱により煤付着,常総甕　［カマド内,床直］ |
| SI-250 | 1 | 須恵 | 杯 | 90 | 11.8 | 6.6 | 4.0 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面褐色,底外全面一方向手持ちヘラケズリ,千葉産［中層］ |
| SI-250 | 2 | 須恵 | 杯 | 80 | 13.5 | 7.4 | 4.3 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,打ち欠き土器,底外全面一方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［中層］ |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-250 | 3 | 須恵 | 小型甕 | 5 | (14.2) | − | (7.0) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元やや不良,断面中央褐色・両外側灰色の層をなす,千葉産　[中層] |
| SI-250 | 4 | 土師 | 甕 | 35 | (20.8) | − | (25.5) | − | 黒褐色/灰褐色 | 雲母,スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により全面厚く煤付着,在地甕　[中層] |
| SI-250 | 5 | 土師 | 甕 | 45 | (19.2) | 4.6 | (28.0) | − | 赤褐色/褐色 | スコリア,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 2個体同一個体,内外面及び破断面ともに激しく劣化,武蔵甕　[カマド内,中層] |
| SI-250 | 6 | 土師 | 甕 | 10 | (17.0) | − | (5.6) | − | 褐色/褐色 | スコリア,雲母,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により器面の剥落顕著,7と同一個体　[中層,カマド内] |
| SI-250 | 7 | 土師 | 甕 | 10 | − | 5.6 | (7.6) | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,内外面及び破断面ともにやや磨耗,6と同一個体　[カマド内] |
| SI-250 | 8 | 土師 | 甕 | 10 | (20.0) | − | (13.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により煤付着　[下層] |
| SI-251 | 1 | 土師 | 高台付皿 | 40 | (13.1) | − | (2.1) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,石英,砂粒 | ナデ/ナデ | 底外回転ヘラケズリ後高台貼付　[中・下層] |
| SI-252A | 1 | 土師 | 杯 | 10 | (15.0) | − | (3.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | SI-253と遺構間接合,底部欠損[カマド右袖脇] |
| SI-252A | 2 | 須恵 | 甕 | 10 | (19.2) | − | (10.2) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面中央灰褐色・両外側褐色の層をなす,千葉産　[カマド内] |
| SI-252A | 3 | 須恵 | 甕 | 30 | (22.2) | − | (20.5) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央灰褐色・両外側褐色の層をなす,内面当具痕明瞭,千葉産　[中層] |
| SI-252A | 4 | 須恵 | 甕 | 20 | (18.0) | − | (15.2) | − | 橙褐色/灰褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,二次被熱により器面の劣化やや顕著千葉産　[カマド内] |
| SI-252B | 1 | 土師 | 杯 | 40 | (14.4) | (7.2) | 4.5 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外一方向手持ちヘラケズリ[下層] |
| SI-253 | 1 | 須恵 | 蓋 | 40 | (17.7) | − | (3.5) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 摘部欠損,茨城産[下層] |
| SI-253 | 2 | 須恵 | 杯 | 40 | (10.6) | (6.8) | 3.8 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,内面火襷あり,外面部分的に煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[中・下層] |
| SI-253 | 3 | 須恵 | 杯 | 80 | 15.0 | 8.8 | 4.2 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面灰褐色,内面油煙状の墨が広範囲に付着,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　[上層] |
| SI-253 | 4 | 須恵 | 甕 | 5 | − | (14.2) | (4.5) | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石 | ナデ/タタキ,ヘラケズリ | 底部片,茨城産　[中層] |
| SI-253 | 5 | 土師 | 甕 | 5 | (22.5) | − | (8.0) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕　[中層] |
| SI-253 | 6 | 土師 | 甕 | 5 | − | − | (5.3) | − | 橙褐色/褐色 | 砂粒,雲母,長石 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,内外面ともに二次被熱により器面の剥落顕著,常総甕　[上層] |
| SI-253 | 7 | 土師 | 鉢 | 80 | 10.0 | 6.0 | 6.4 | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面底部周辺に規則的なヘラ痕が残る,内外面ともに黒斑あり,在地甕　[下層] |
| SI-254 | 1 | 須恵 | 杯 | 70 | 12.6 | 7.0 | 3.4 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ | 打ち欠き土器,底外回転糸切り後無調整,東金子産　[カマド内] |
| SI-254 | 2 | 須恵 | 杯 | 45 | (12.5) | (7.2) | 4.2 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,外面厚く煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[下層] |
| SI-254 | 3 | 須恵 | 杯 | 30 | − | 7.0 | (2.0) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,還元やや不良,断面褐色,千葉産　[中層] |
| SI-254 | 4 | 土師 | 杯 | 50 | (12.4) | 5.0 | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内面劣化やや顕著底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ　[一括] |
| SI-254 | 5 | 須恵 | 甕 | 5 | − | (13.6) | (7.0) | − | 橙色/橙色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ,タタキ | 内面当て具痕あり,底部片,千葉産　[中層] |
| SI-254 | 6 | 土師 | 甕 | 5 | (19.0) | − | (7.5) | − | 黒褐色/褐色 | 雲母,,スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内面二次被熱により厚く煤付着　[中層] |
| SI-254 | 7 | 土師 | 甕 | 90 | 20.4 | − | (31.0) | 胴部(25.2) | 黒褐色/橙褐色 | 長石,雲母,石英,砂粒 | ナデ/ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 底部欠損,内面二次被熱により広範囲に厚く煤付着,外面胴下半部から底部にかけ剥離顕著,常総甕　[下層] |
| SI-254 | 8 | 土師 | 甕 | 90 | 20.6 | − | (27.3) | 胴部(24.5) | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,石英,砂粒 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ,ミガキ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により広範囲に煤付着,器面の劣化顕著,常総甕　[下層] |
| SI-255 | 1 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.8) | 7.5 | 3.9 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,底外回転ヘラ切り後全面多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[上層] |
| SI-255 | 2 | 須恵 | 杯 | 15 | − | (7.2) | (2.1) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央灰褐色・両外側褐色の層をなす,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[中層] |
| SI-255 | 3 | 土師 | 杯 | 50 | (14.7) | 6.5 | 4.3 | − | 橙色/橙色 | 雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後回転ヘラケズリ[床面,下層] |
| SI-255 | 4 | 土師 | 杯 | 10 | − | (6.2) | (1.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,スコリア,白色針状物質 | ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,外面やや劣化,底外回転ヘラケズリ[下層] |
| SI-255 | 5 | 土師 | 高台付杯 | 20 | − | 6.5 | (2.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,スコリア,白色針状物質 | ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,底外回転ヘラケズリ後高台貼付　[下層] |
| SI-255 | 6 | 須恵 | 長頸壺 | 10 | − | − | (9.6) | − | 灰褐色/灰褐色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ | 頸部片,内外面ともに自然釉付着,内面下端部には釉が垂れている,東海産　[下層] |
| SI-255 | 7 | 須恵 | 甕 | 5 | − | (7.6) | (2.0) | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,スコリア | ナデ/ヘラケズリ | 還元不良,底部片,底外を除く器面の劣化顕著,底外刻書あり『大真利』『道』,千葉産[一括] |
| SI-255 | 8 | 須恵 | 甕 | 5 | − | − | − | − | 灰色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ/無調整 | 還元不良,底部片を円形に加工,断面中央褐色・両外側灰色の層をなす,底外ヘラ書きあり,千葉産　[カマド内] |
| SI-255 | 9 | 須恵 | 甕 | 45 | (25.0) | (14.6) | 20.5 | − | 灰褐色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元やや不良,内外面ともに二次被熱により器面の劣化顕著,外面被熱により部分的に赤化,千葉産[中・下層] |
| SI-255 | 10a | 須恵 | 甑 | 10 | (30.3) | − | (15.1) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,把手円形,外面被熱により部分的に赤化,10bと同一個体,千葉産[カマド内,下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-255 | 10b | 須恵 | 甑 | 5 | − | (14.8) | (9.9) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ,ヘラケズリ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元不良,外面被熱により部分的に赤化,10aと同一個体,千葉産［カマド内］ |
| SI-256 | 1 | 土師 | 甕 | 5 | (20.7) | − | (6.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,武蔵甕　［下層］ |
| SI-257 | 1 | 土師 | 杯 | 95 | 12.2 | 4.6 | 4.3 | − | 橙色/橙色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ | 打ち欠き土器,器面やや磨耗,体部外面逆位に墨書あり『二』,底外回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ［床直］ |
| SI-257 | 2 | 土師 | 杯 | 40 | − | (7.4) | (2.2) | − | 橙色/橙色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 器面及び破断面やや磨耗,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群　［下層］ |
| SI-257 | 3 | 土師 | 杯 | 40 | (13.4) | (7.4) | 4.6 | − | 黒色/橙色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,,底外多方向手持ちヘラケズリ［下層］ |
| SI-257 | 4 | 土師 | 杯 | 10 | (14.6) | − | (3.0) | − | 赤褐色/赤褐色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底部欠損,内外面ともに赤彩を施したかのような赤化した部分あり　［下層,床面］ |
| SI-257 | 5 | 土師 | 杯 | 65 | 13.4 | (7.0) | (4.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部一部遺存,底外回転ヘラケズリ［下層］ |
| SI-257 | 6 | 土師 | 杯 | 40 | (13.8) | (7.6) | 5.3 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群　［下層］ |
| SI-257 | 7 | 土師 | 杯 | 25 | (14.0) | (8.0) | (4.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部一部遺存［下層］ |
| SI-257 | 8 | 土師 | 杯 | 20 | − | (10.0) | (2.9) | − | 黒色/橙色 | スコリア,長石,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,内面黒色処理,底外一方向手持ちヘラケズリ,底外黒斑あり　［カマド内］ |
| SI-257 | 9 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 黒色/橙褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 口縁部片,内面黒色処理,外面墨書あり,小片のため詳細不明［カマド内一括］ |
| SI-257 | 10 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ミガキ/ナデ | 体部片,外面墨書あり『毛』？,小片のため詳細不明［一括］ |
| SI-257 | 11 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 体部片,外面墨書あり『大』［一括］ |
| SI-257 | 12 | 土師 | 皿 | 30 | (13.4) | − | (1.6) | − | 橙色/橙色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラナデ | 底部欠損,外面体部逆位に墨書あり『二』　［中層］ |
| SI-257 | 13 | 土師 | 皿 | 100 | 14.7 | 5.2 | 2.7 | − | 褐色/褐色 | スコリア,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外全面一方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群　［下層］ |
| SI-257 | 14 | 土師 | 皿 | 95 | 13.8 | 6.2 | 2.7 | − | 橙色/橙色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラナデ | 底内墨書あり『夫』,内外面ともに油煙付着,灯明皿として使用,底外回転糸切り後高台作りだし　［床直］ |
| SI-257 | 15 | 須恵 | 壺 | 20 | − | 9.4 | 16.4 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 内面底部及び外面肩部に自然釉付着,底外回転糸切り後高台貼り付け,東海産　［中・下層］ |
| SI-257 | 16 | 須恵 | 甕 | 5 | − | (23.0) | (6.0) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,還元不良,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,内面剥離激しい,千葉産［下層］ |
| SI-257 | 17a | 須恵 | 甑 | 5 | (31.0) | − | (7.0) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,器面やや劣化,千葉産［カマド内,下層］ |
| SI-257 | 17b | 須恵 | 甑 | 10 | − | (15.4) | (13.0) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 底部片,還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産［下層］ |
| SI-258 | 1 | 須恵 | 杯 | 10 | (13.4) | − | − | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底部欠損,器面やや劣化,外面煤付着,茨城産［一括］ |
| SI-258 | 2 | 須恵 | 杯 | 20 | (14.5) | (8.6) | (3.5) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面やや劣化,底外多方向手持ちヘラケズリ,茨城産　［カマド内］ |
| SI-258 | 3 | 須恵 | 甕 | 5 | − | (18.3) | − | − | 灰色/灰褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 還元やや不良,断面褐色,茨城産　［一括］ |
| SI-258 | 4 | 土師 | 甕 | 5 | (18.4) | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,外面剥離顕著,武蔵甕　［一括］ |
| SI-259 | 1 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.2) | (7.4) | (4.0) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央灰色・両外側灰褐色,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［下層,床直］ |
| SI-260 | 1 | 須恵 | 杯 | 60 | 15.6 | 8.6 | 7.1 | − | 灰白色/灰白色 | スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面及び破断面やや劣化,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ,東金子産［カマド左袖脇,下層］ |
| SI-260 | 2 | 須恵 | 杯 | 40 | (13.0) | (7.6) | 4.1 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央灰色・両外側褐色の層をなす,底外回転ヘラ 切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産　［床直,下層］ |
| SI-260 | 3 | 土師 | 杯 | 10 | − | (7.2) | (3.6) | − | 黒色/橙褐色 | 雲母,石英 | ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,外面黒斑あり,底外回転ヘラケズリ　［カマド左袖脇］ |
| SI-260 | 4 | 土師 | 小型甕 | 95 | 11.6 | 5.1 | 13.3 | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,内外面ともに胴部下位から底部にかけ剥離が激しく赤化,底外一方向手持ちヘラケズリ,在地甕［カマド内］ |
| SI-260 | 5 | 土師 | 小型甕 | 60 | (11.6) | 5.0 | 9.5 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ　［カマド内］ |
| SI-261 | 1 | 須恵 | 杯 | 50 | (13.2) | 7.8 | 4.1 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,器面やや劣化,内外面部分的に赤化,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産［カマド内］ |
| SI-261 | 2 | 須恵 | 杯 | 70 | (12.5) | 8.2 | 4.4 | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,器面やや劣化,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　［カマド両袖脇］ |
| SI-261 | 3 | 須恵 | 杯 | 10 | (12.4) | (8.2) | (4.0) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,底外手持ちヘラケズリ,千葉産　［中層］ |
| SI-261 | 4 | 須恵 | 杯 | 20 | − | (8.5) | (2.5) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部欠損,還元不良,断面褐色,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産　［カマド内］ |
| SI-261 | 5 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.6) | (8.6) | 4.2 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央灰色・両外側褐色の層をなす,底,外回転ヘラケズリ千葉産　［中層］ |
| SI-261 | 6 | 須恵 | 杯 | 100 | 12.7 | 7.1 | 4.4 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 歪み大,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産［床直］ |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-261 | 7 | 須恵 | 甕 | 15 | − | − | (21.6) | − | 青灰色/青灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ,ヘラケズリ | 胴部片,千葉産　[カマド内] |
| SI-261 | 8 | 土師 | 小型甕 | 5 | − | 4.4 | (3.3) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母 | ヘラナデ/ヘラケズリ | 底部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ　[中層] |
| SI-262 | 1 | 須恵 | 杯 | 80 | 12.7 | 7.0 | 3.9 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,打ち欠き土器,内外面ともに煤付着,底外回転ヘラ切り後全面一方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[中層,床直] |
| SI-262 | 2 | 土師 | 杯 | 45 | (11.8) | (6.0) | (3.7) | − | 橙色/橙色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,内外面ともにやや磨耗,底外回転ヘラケズリ[下層] |
| SI-262 | 3 | 土師 | 杯 | 45 | (12.6) | (6.0) | (4.2) | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により部分的に煤付着,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[中層] |
| SI-262 | 4 | 土師 | 杯 | 75 | 12.1 | 7.2 | 3.5 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[床直] |
| SI-262 | 5 | 土師 | 杯 | 20 | (14.8) | (8.6) | (4.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別が付かない一群[下層] |
| SI-262 | 6 | 土師 | 杯 | 20 | (13.7) | (7.6) | 4.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 外面黒斑あり,内外面ともに器面の剥離顕著[下層] |
| SI-262 | 7 | 土師 | 杯 | 20 | (12.6) | (8.4) | (3.4) | − | 褐色/褐色 | 石英,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別が付かない一群[下層] |
| SI-262 | 8 | 土師 | 杯 | 15 | (12.6) | (6.6) | (4.8) | − | 黒褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転糸切り後手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別が付かない一群〔一括〕 |
| SI-262 | 9 | 土師 | 杯 | 25 | − | (5.6) | (2.3) | − | 褐色/褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,内面やや劣化,底外回転糸切り後無調整　[一括] |
| SI-262 | 10 | 土師 | 皿 | 30 | (12.4) | (6.8) | (1.7) | − | 赤褐色/赤褐色 | 雲母,長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面線刻あり『×』,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別が付かない一群　[床面] |
| SI-262 | 11 | 土師 | 皿 | 20 | (12.6) | − | (1.9) | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内面体部に線刻あり『?』,内外面ともに二次被熱により煤付着　[床面] |
| SI-262 | 12 | 土師 | 高台付杯 | 60 | (12.6) | (7.4) | 3.9 | − | 橙色/橙色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ | 底外回転糸切り後高台貼り付けその後回転ヘラケズリ[下層] |
| SI-262 | 13 | 須恵 | 甕 | 5 | (23.0) | − | (7.8) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ | 口縁部片,還元不良,断面褐色,千葉産　[床直] |
| SI-262 | 14 | 須恵 | 甕 | 5 | (13.2) | − | (4.7) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産　[中層] |
| SI-262 | 15 | 須恵 | 甕 | 5 | (15.8) | − | 6.5 | − | 灰褐色/橙褐色 | 長石,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ | 口縁部片,還元不良,内外面ともにやや劣化,千葉産　[床面] |
| SI-262 | 16 | 須恵 | 甕 | 5 | (24.6) | − | (11.3) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ミガキ | 還元不良,口縁部内外面ともに煤付着,内外面部分的に赤化,胴部内外面ともに剥離顕著,千葉産[下層] |
| SI-262 | 17 | 土師 | 甕 | 5 | (20.8) | − | (11.0) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕　[下層] |
| SI-262 | 18 | 須恵 | 小型甕 | 60 | (14.2) | 8.4 | 12.6 | − | 灰褐色/黒褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ,ヘラケズリ/ナデ,ヘラナデ,ヘラケズリ | 千葉産。内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,内面底部周辺剥離あり,底外全面ヘラナデ[床面] |
| SI-262 | 19 | 土師 | 小型甕 | 5 | − | (7.0) | − | − | 褐色/褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラナデ | 内面二次被熱により激しく剥離,底外一方向ヘラケズリ　[床直] |
| SI-262 | 20 | 土師 | 小型甕 | 10 | (12.0) | − | (5.0) | − | 灰褐色/赤褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,外面部分的に赤化,在地甕　[下層] |
| SI-262 | 21 | 土師 | 小型甕 | 5 | (13.6) | − | (4.8) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕　[下層] |
| SI-262 | 22 | 土師 | 小型甕 | 5 | (13.6) | − | (4.0) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により剥離・赤化顕著,在地甕　[床面] |
| SI-262 | 23 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,砂粒 | ナデ/無調整 | 底部片,底内墨書あり,詳細不明,破断後の破片に書かれた花押の可能性有り,千葉産　[下層] |
| SI-262 | 24 | 須恵 | 甑 | 5 | (31.8) | − | (8.4) | − | 灰褐色/黒褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,内外面ともに二次被熱により煤付着,千葉産　[床面,カマド内] |
| SI-263 | 1 | 須恵 | 小型甕 | 10 | (15.0) | − | (6.1) | − | 黒褐色/赤褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,内面二次被熱により厚く煤付着,外面赤化,千葉産[一括] |
| SB-002 | 1 | 土師 | 甕 | 5 | (22.0) | − | (5.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,外面やや劣化,武蔵甕[P7内上層] |
| SB-009 | 1 | 須恵 | 杯 | 30 | (14.0) | (8.2) | 4.2 | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面及び破断面ともに劣化顕著,底外回転ヘラケズリ,茨城産　[P6内上層] |
| SB-013 | 1 | 須恵 | 甕 | 5 | (24.3) | − | (7.4) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,千葉産　[一括] |
| SB-022 | 1 | 須恵 | 杯 | 25 | − | 8.4 | (2.9) | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部欠損,還元やや不良,底外線刻あり『▽』『×』,茨城産　[一括] |
| SB-030 | 1 | 土師 | 皿 | 25 | (15.4) | (8.0) | 2.5 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石,石英 | ナデ/ナデ | 内面薄く剥離,底外手持ちヘラケズリ後ヘラ先によるナデ　[P3内下層] |
| SB-030 | 2 | 須恵 | 甕 | 10 | (24.6) | − | (12.5) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面褐色,内面当具痕あり,千葉産[一括] |
| SB-032 | 1 | 須恵 | 甕 | 10 | (28.0) | − | (8.7) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英,砂粒 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面褐色,内面当具痕あり,千葉産[一括] |
| SB-035 | 1 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/タタキ | 胴部片,還元やや不良,茨城産　[一括] |
| SB-035 | 2 | 土師 | 甕 | 5 | (20.4) | − | (7.3) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,長石,石英 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラナデ | 口縁部片,内面若干の剥離あり,常総甕　[一括] |
| SB-038 | 1 | 土師 | 杯 | 30 | (12.4) | (6.4) | 3.5 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 外面一部煤付着,底外回転ヘラケズリ,千葉産須恵器と明確な区別がつかない一群　[一括] |
| SB-039 | 1 | 須恵 | 杯 | 20 | (12.0) | (7.0) | 4.5 | − | 黒褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部大部分欠損,底外回転ヘラケズリ,千葉産[一括] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-011 | 1 | 土師 | 杯 | 25 | (15.6) | (6.2) | 5.5 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外多方向手持ちヘラケズリ　[中層] |
| SK-016 | 1 | 土師 | 杯 | 40 | (13.2) | (5.4) | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 内外面ともにやや劣化,底外回転糸切り　[下層] |
| SK-016 | 2 | 土師 | 高台付杯 | 5 | − | (7.4) | (2.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 底部片　[上・中・下層] |
| SK-019 | 1 | 土師 | 杯 | 95 | 13.5 | 6.6 | 3.7 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | ほぼ完形,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[下層] |
| SK-043 | 1 | 須恵 | 杯 | 45 | (13.1) | 7.8 | 4.1 | − | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後一方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[中層] |
| SK-107 | 1 | 土師 | 杯 | 10 | (14.0) | − | (3.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 器面劣化顕著　[一括] |
| SK-110 | 1 | 土師 | 高台付杯 | 20 | − | 7.8 | (1.8) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英 | ナデ,ミガキ/ナデ | 底部完存,高台貼り付け後回転ヘラケズリ　[一括] |
| SK-110 | 2 | 土師 | 高杯 | 30 | − | − | (5.4) | − | 赤褐色,橙褐色/赤褐色 | 長石 | ナデ,ミガキ,ヘラナデ/ヘラナデ | 脚部片,内外面赤彩　[一括] |
| SK-142 | 1 | 須恵 | 杯 | 100 | 14.6 | 6.6 | 4.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外回転ヘラ切り後多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[上層] |
| SK-142 | 2 | 須恵 | 杯 | 100 | 14.4 | 7.2 | 4.0 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[下層] |
| SK-244 | 1 | 土師 | 杯 | 5 | (12.3) | − | (2.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 口縁部片,体部外面墨書あり小片のため詳細不明　[一括] |
| SK-245 | 1 | 土師 | 杯 | 20 | (15.0) | − | (3.5) | − | 黒褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,体部内面黒色処理　[中層] |
| SK-245 | 2 | 須恵 | 長頸瓶 | 5 | (13.0) | − | (1.8) | − | 灰色/灰褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 口縁部片,内面灰釉付着,東海産　[一括] |
| SK-245 | 3 | 須恵 | 甕 | 5 | (21.0) | − | (8.5) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元やや不良,内面当具痕あり,千葉産　[中層] |
| SK-246 | 1 | 土師 | 杯 | 25 | (16.0) | (7.0) | 4.6 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,石英 | ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面剥離顕著,底外一方向手持ちヘラケズリ　[下層] |
| SK-246 | 2 | 土師 | 杯 | 45 | 14.0 | (6.0) | 4.7 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面ともに劣化顕著,底外回転糸切り　[下層] |
| SK-247 | 1 | 土師 | 不明 | 5 | − | (15.0) | (4.7) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 内外面ともに二次被熱により煤付着　[中層] |
| SK-247 | 2 | 土師 | 甕 | 5 | (22.4) | − | (4.0) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着　[上層] |
| SK-247 | 3 | 土師 | 不明 | 10 | − | − | (2.0) | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ | 内面二次被熱により煤付着　[中層] |
| SK-248 | 1 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 褐色/褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 体部片,体部外面墨書あり小片のため詳細不明　[一括] |
| SK-248 | 2 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | ナデ/ナデ | 体部片,体部外面墨書あり小片のため詳細不明　[一括] |
| SK-248 | 3 | 緑釉陶器 | 椀 | 10 | (13.6) | − | (3.5) | − | 緑灰色/緑灰色 | − | ナデ/ナデ | 底部欠損,東海産　[一括] |
| SK-248 | 4 | 須恵 | 甕 | 5 | − | − | − | − | 灰色/黒灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 胴部片,外面灰釉付着,東海産　[中層] |
| SK-249 | 1 | 須恵 | 杯 | 15 | − | (8.0) | (1.7) | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,還元不良,断面褐色,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,千葉産　[一括] |
| SK-249 | 2 | 土師 | 杯 | 10 | − | (7.0) | (1.7) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石 | ミガキ/ナデ | 底部片,内面剥離顕著,底外回転糸切り後無調整　[一括] |
| SK-249 | 3 | 須恵 | 甕 | 5 | − | − | (8.1) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 還元不良,断面中央灰色・両外側褐色の層をなす,茨城産　[一括] |
| SK-249 | 4 | 土師 | 甕 | 5 | (18.8) | − | (6.2) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,在地甕　[一括] |
| SK-250 | 1 | 土師 | 杯 | 60 | (15.6) | 7.0 | (4.7) | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石,石英 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底内剥離顕著,底外回転糸切り後多方向手持ちヘラケズリ　[中・下層] |
| SK-250 | 2 | 須恵 | 甑 | 破片 | − | − | − | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 胴部片,還元不良,断面褐色,把手を貼り付け後ヘラケズリ,千葉産　[中層] |
| SK-251 | 1 | 土師 | 杯 | 60 | (12.9) | (7.0) | 4.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面一部に剥離あり,口縁部周辺及び体部内面の一部に油煙付着,底外回転ヘラケズリ,底外中央に浅いヘラ書きあり『キ』　[一括] |
| SK-252 | 1 | 土師 | 高台付杯 | 30 | − | 8.2 | (3.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 底部完存,高台貼り付け後ナデ,底外ヘラ書きあり『−』　[中層] |
| SK-252 | 2 | 須恵 | 甑 | 10 | − | (14.0) | (6.5) | − | 黒褐色/黒褐色 | 石英,雲母 | ヘラナデ/ヘラケズリ | 底部片,還元やや不良,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,底部5孔,千葉産　[中層] |
| SK-253 | 1 | 土師 | 杯 | 30 | (13.5) | (7.1) | 3.5 | − | 赤褐色/橙褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面剥離顕著,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[上層] |
| SK-256 | 1 | 須恵 | 杯 | 25 | (13.2) | (7.0) | 3.9 | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内面の口縁部から体部中位の一部に油煙付着,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[下層] |
| SK-256 | 2 | 土師 | 甕 | 20 | (16.7) | − | (13.4) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,石英,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに二次被熱により赤味を帯び厚く煤付着,在地甕　[下層] |
| SK-257 | 1 | 土師 | 杯 | 50 | (14.8) | 7.0 | 4.3 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部完存,器面の劣化やや顕著,底外全面回転ヘラケズリ　[上層] |
| SK-264 | 1 | 須恵 | 杯 | 10 | − | (7.4) | (1.9) | − | 黒褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産　[一括] |
| SK-264 | 2 | 土師 | 小型甕 | 5 | (13.6) | − | (5.8) | − | 褐色/褐色 | 長石,石英,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,在地甕　[中層] |
| SK-265 | 1 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰色/黄灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 胴部片,内面当具痕あり,外面灰釉付着,東海産　[一括] |
| SK-307 | 1 | 土師 | 杯 | 60 | 14.1 | 6.4 | 4.5 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部周辺の内外面に二次被熱による煤付着,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産須恵器との明確な区別がつかない一群　[中層] |
| SK-307 | 2 | 土師 | 杯 | 100 | 13.3 | 6.3 | 4.3 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,砂粒,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部やや歪みあり,内面二次被熱により煤付着,底外回転糸切り後無調整　[下層] |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-307 | 3 | 土師 | 杯 | 50 | (12.7) | 6.0 | 4.1 | − | 赤褐色/褐色 | 長石,雲母,砂粒,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面劣化顕著,底外多方向手持ちヘラケズリ［中層］ |
| SK-307 | 4 | 土師 | 杯 | 20 | − | 6.2 | (3.0) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,砂粒,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,底外回転糸切り後無調整［下層］ |
| SK-307 | 5 | 土師 | 甕 | 5 | (17.4) | − | (8.2) | − | 橙褐色/褐色 | スコリア,長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱によりやや赤味を帯び薄く煤付着,在地甕［下層］ |
| SK-307 | 6 | 土師 | 甕 | 20 | (16.2) | − | 4.3 | − | 褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により器面の剥離及び劣化顕著,在地甕［中層］ |
| SK-307 | 7 | 土師 | 甕 | 10 | − | (7.6) | (17.3) | − | 灰褐色/褐色 | 砂粒,長石,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ | 口縁部欠損,内外面ともに二次被熱により劣化及び厚く煤付着,在地甕［中・下層］ |
| SK-307 | 8 | 土師 | 小型甕 | 95 | (9.8) | 6.5 | 10.5 | 胴部10.8 | 灰黒色/灰褐色 | 長石,砂粒,雲母,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口唇部欠損大,内外面ともに二次被熱により厚く煤付着,底部木葉痕あり,在地甕［下層］ |
| SK-308 | 1 | 須恵 | 杯 | 5 | − | (7.4) | (1.2) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,還元不良,断面褐色,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産［一括］ |
| SK-308 | 2 | 須恵 | 杯 | 5 | − | (7.5) | (1.4) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,スコリア,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,還元不良,断面褐色,底外全面ヘラケズリ,千葉産［下層］ |
| SK-308 | 3 | 土師 | 杯 | 45 | (11.3) | (6.0) | 4.4 | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面正位に墨書あり『加』,内外面の一部に煤付着,底外回転糸切り後多方向手持ちヘラケズリ［中層］ |
| SK-308 | 4 | 土師 | 杯 | 15 | (12.9) | − | (3.4) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,雲母,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内面一部に煤付着［底面］ |
| SK-308 | 5 | 土師 | 高台付皿 | 40 | (14.5) | (7.4) | 3.4 | − | 黒色/橙褐色 | スコリア,長石,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,底外高台貼り付け後回転ヘラケズリ,底外墨書あり『二』［中層］ |
| SK-308 | 6 | 土師 | 小型甕 | 5 | (13.4) | − | (5.2) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内面口縁部から外面全域に厚く煤付着,在地甕［下層］ |
| SK-315 | 1 | 土師 | 甕 | 10 | − | (8.5) | (11.3) | − | 褐色/黒褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ヘラケズリ | 外面二次被熱により厚く煤付着［一括］ |
| P-049 | 1 | カワラケ | 皿 | 95 | 10.2 | 5.0 | 2.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,石英 | ナデ/ナデ | 内面全域に油煙が薄く付着,中・近世の灯明受皿の可能性あり,底外回転糸切り後無調整［一括］ |
| P-065 | 1 | 須恵 | 杯 | 35 | − | 8.0 | (2.7) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,石英,白色針状物質 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部完存,還元不良,底外全面回転ヘラケズリ,千葉産［一括］ |
| SD-003 | 1 | 須恵 | 杯 | 40 | (12.2) | (6.8) | 3.6 | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面褐色,底外全面回転ヘラケズリ,底外ヘラ書きあり『−』,千葉産［下層］ |
| SD-003 | 2 | 須恵 | 杯 | 30 | (13.3) | (7.2) | 3.7 | − | 灰黒色/灰黒色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元やや不良,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,千葉産［中層］ |
| SD-003 | 3 | 土師 | 杯 | 15 | (11.0) | (6.0) | (2.9) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 内外面及び破断面ともに磨耗顕著,底外回転糸切り後無調整［中層］ |
| SD-003 | 4 | 土師 | 杯 | 10 | (13.6) | − | (5.5) | − | 赤褐色/赤褐色 | 長石,雲母,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ,ミガキ | 内外面赤彩,底部丸底［下層］ |
| SD-003 | 5 | 土師 | 高台付皿 | 10 | − | (6.9) | (2.2) | − | 橙褐色/橙褐色 | 雲母,スコリア,白色針状物質 | ナデ/ナデ | 器面及び破断面劣化・磨耗顕著,底外全面回転ヘラケズリ後作りだし高台［下層］ |
| SD-003 | 6 | 土師 | 高台付皿 | 20 | (12.7) | (7.0) | (2.8) | − | 褐色/褐色 | 雲母,スコリア | ナデ/ナデ | 器面及び破断面やや劣化,貼り付け高台［下層］ |
| SD-003 | 7 | 須恵 | 高台付杯 | 20 | − | (7.0) | (1.7) | − | 褐色/褐色 | 長石,砂粒,スコリア | ナデ/ナデ | 器面及び破断面劣化やや顕著,底外回転ヘラ切り後全面回転ヘラケズリ,作りだし高台［上層］ |
| SD-003 | 8 | 灰釉陶器 | 碗 | 10 | − | (7.0) | (2.7) | − | 灰白色/灰白色 | スコリア | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り後高台貼り付け,高台先端部やや尖り気味,東海産［中層］ |
| SD-003 | 9 | 灰釉陶器 | 碗 | 10 | − | (7.0) | (3.7) | − | 灰白色/灰白色 | スコリア | ナデ/ナデ | 内面灰釉付着,高台先端部やや尖り気味,東海産［一括］ |
| SD-003 | 10 | 須恵 | 壺 | 10 | − | (9.4) | (3.8) | − | 灰色/灰色 | スコリア | ナデ/ナデ | 底外回転ヘラケズリ後高台貼り付け,高台先端部平坦でやや内傾気味,東海産［中層］ |
| SD-003 | 11 | 須恵 | 瓶 | 5 | − | (12.0) | (3.9) | − | 黄灰色/黄灰色 | 長石,砂粒 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 内外面ともに部分的に灰釉付着,貼り付け高台,東海産［下層］ |
| SD-003 | 12 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰黒色/灰色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ | 口縁部片,内外面及び破断面ともにやや劣化,折り返し口縁部直下の頸部に櫛描波状文,茨城産［下層］ |
| SD-003 | 13 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 口縁部片,口縁部直下に二条の平行沈線文及び棒状工具による細かな方形刺突文あり,茨城産か［中層］ |
| SD-003 | 14 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰褐色/灰褐色 | スコリア,長石,雲母 | ナデ/ナデ | 口縁部片,還元不良,千葉産［一括］ |
| SD-003 | 15 | 土師 | 甕 | 20 | (24.8) | − | (12.7) | − | 褐色/褐色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,常総甕［上層］ |
| SD-003 | 16 | 須恵 | 甑 | 10 | − | (14.0) | (6.4) | − | 褐色/褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ,タタキ | 底部片,茨城産［上層］ |
| SD-005 | 1 | 土師 | 杯 | 35 | − | (7.2) | (3.1) | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,雲母 | ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部欠損,内外面及び破断面ともに磨耗顕著,底外全面回転ヘラケズリ［中層］ |
| SD-005 | 2 | 土師 | 高台付皿 | 10 | − | (6.4) | (1.1) | − | 赤褐色/橙褐色 | スコリア,長石 | ミガキ/ナデ | 底部片,内面赤彩を施したように赤味を帯びる,底外中央部が貼り付け高台と同一高［一括］ |
| SD-005 | 3 | 土師 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 褐色/黄褐色 | 長石 | ヘラナデ/ヘラケズリ | 胴部片,外面墨書あり,小片のため判読不能［中層］ |
| SD-010 | 1 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,石英 | ナデ/ヘラケズリ | 底部片,還元不良,断面褐色,底部内外面にヘラ書きあり『×』『×』,千葉産［上層］ |
| SD-023 | 1 | 土師 | 杯 | 10 | (13.6) | − | (3.5) | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 体部外面正位に墨書あり『得』［一括］ |
| SD-024 | 1 | 土師 | 高台付杯 | 10 | − | (8.8) | (2.7) | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石 | ナデ,ミガキ/ナデ | 底部片［一括］ |

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SD-024 | 2 | 須恵 | 甑 | 破片 | − | − | − | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,断面褐色,千葉産 [一括] |
| SD-024 | 3 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 黄灰色/黄灰色 | 長石 | ナデ/ナデ,タタキ | 底部片,穿孔あり,底外ヘラナデ,茨城産 [一括] |
| SD-024 | 4 | 土師 | 甕 | 5 | (20.4) | − | (5.6) | − | 灰褐色/灰褐色 | 雲母,長石,石英 | ナデ/ナデ,ヘラナデ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,常総甕 [一括] |
| SB-029 | 1 | 須恵 | 甕 | 5 | − | (14.0) | (2.2) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石 | ナデ/ヘラケズリ | 底部片,還元不良,断面中央灰色・両外側灰褐色の層をなす,底外ヘラ書きあり詳細不明,千葉産 [一括] |
| SD-030 | 1 | 須恵 | 杯 | 5 | − | (8.0) | (1.0) | − | 灰褐色/橙褐色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,底外多方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [一括] |

## 第13表　奈良・平安時代遺構外出土土器計測表

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存[%] | 口径[cm] | 底径[cm] | 器高[cm] | 最大[cm] | 色調[内/外] | 胎土 | 調整[内/外] | 備考[出土状況] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 25I-00 | 1 | 土師 | 小型甕 | 5 | (11.0) | − | (5.0) | − | 橙褐色/橙褐色 | 長石,石英,スコリア | ナデ,ヘラナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面及び破断面やや劣化,在地甕 [一括] |
| 25I-00 | 2 | 須恵 | 短頸壺 | 5 | − | − | (5.9) | − | 灰色/灰色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,タタキ | 器面の劣化顕著,内面当具痕あり,茨城産 [一括] |
| 24K | 3 | 須恵 | 杯 | 45 | (13.8) | (7.0) | 3.9 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 還元不良,断面中央灰色両外側橙褐色の層をなす,底外一方向ヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| 24K | 4 | 土師 | 杯 | 60 | 17.7 | 8.3 | 6.1 | − | 黒色/橙褐色 | スコリア,長石 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 内面黒色処理,底外全面回転ヘラケズリ [一括] |
| 25K-07 | 5 | 須恵 | 高台付盤 | 30 | − | (12.0) | (2.8) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,その後高台貼り付け,茨城産 [一括] |
| 25K-39 | 6 | 須恵 | 甕 | 10 | (25.8) | − | (11.8) | − | 灰色/灰色 | 長石,雲母 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,内面当具痕あり,茨城産 [一括] |
| 25K-59 | 7 | 須恵 | 甕 | 10 | (26.4) | − | (15.7) | − | 灰褐色/灰褐色 | 長石,雲母,石英 | ナデ/ナデ,タタキ | 口縁部片,還元不良,断面中央灰色・両外側灰褐色の層をなす,内面当具痕あり,千葉産 [一括] |
| 22L-86 | 8 | 須恵 | 甕 | 10 | − | (15.2) | (4.2) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,スコリア | ナデ/ヘラケズリ | 底部片,還元不良,断面褐色,千葉産 [一括] |
| 23L-74 | 9 | 須恵 | 杯 | 45 | (12.0) | (7.1) | 3.4 | − | 灰色/灰色 | 長石 | ナデ/ナデ | 底外回転糸切り後無調整,東金子産 [一括] |
| 23L-54 | 10 | 土師 | 足高高台付杯 | 60 | 15.8 | (14.0) | 11.2 | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,雲母,石英 | ナデ,ミガキ/ナデ | 内外面ともに細かな斑状の剥離あり,二次被熱により煤付着 [一括] |
| 23L-54 | 11 | 須恵 | 甕 | 破片 | − | − | − | − | 灰色/灰色 | 長石 | ヘラナデ/タタキ | 胴部片,内面に当具痕あり,東海産 [一括] |
| 23L-54 | 12 | 土師 | 小型甕 | 20 | (13.0) | − | (6.9) | − | 褐色/褐色 | 雲母,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 口縁部片,内外面ともに二次被熱により煤付着,在地甕 [一括] |
| 24L-13 | 13 | 須恵 | 高台付杯 | 15 | − | (10.0) | (1.4) | − | 灰色/灰色 | 長石,石英,スコリア | ナデ/ナデ | 底部片,底内磨耗顕著,硯転用の可能性あり,底外回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ,その後高台貼り付け,東海産 [一括] |
| 22M-16 | 14 | 土師 | 杯 | 20 | (14.8) | (7.0) | (4.7) | − | 橙褐色/橙褐色 | スコリア,長石 | ナデ,ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 器面やや磨耗,内面黒色処理,底外多方向手持ちヘラケズリ [一括] |
| 22M-18 | 15 | 土師 | 杯 | 10 | (15.0) | − | (3.6) | − | 褐色/褐色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部欠損,内外面ともに油煙?付着 [一括] |
| 23M-30 | 16 | 須恵 | 杯 | 30 | − | (7.2) | (2.1) | − | 黒褐色/黒褐色 | 長石,雲母,白色針状物質 | ナデ/ヘラケズリ,ナデ | 還元不良,断面褐色,底外線刻あり「×」,底外一方向手持ちヘラケズリ,千葉産 [一括] |
| 23M-30 | 17 | 須恵 | 壺 | 15 | − | 9.2 | (3.6) | − | 灰色/灰褐色 | 長石 | ナデ/ナデ,ヘラケズリ | 底部片,内面広範囲に剥離,器面部分的に灰釉付着,底外ヘラ書きあり「−」,東海産 [一括] |
| 23M-44 | 18 | 土師 | 杯 | 破片 | − | − | − | − | 黒色/灰褐色 | 長石,雲母 | ナデ,ミガキ/ナデ | 口縁部片,内面黒色処理,内外面ともに油煙付着 [一括] |
| 23M-64 | 19 | 土師 | 杯 | 10 | (13.7) | (7.0) | (3.6) | − | 褐色/褐色 | 長石,雲母,スコリア | ミガキ/ナデ,ヘラケズリ | 底部一部遺存,内面ヘラ書きあり「×」,底外回転ヘラケズリ [一括] |

## 第14表　銅製帯金具計測表

＊断面部位,（ ）現存値

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 製品名 | 全長(㎜) | 幅(㎜) | 厚(㎜) | 透し(㎜) 長 | 透し(㎜) 幅 | 現重量(g) | 遺存度(%) | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-118 | 第155図-26 | 238 | 銅製帯金具 | 33.0 | 24.1 | *6.8 | − | − | 13.33 | 99 | 一括 | (鉈尾) 裏金に錆膜か漆の塗面あり |
| SI-151 | 第177図-20 | 238 | 銅製帯金具 | 42.1 | 37.0 | *8.2 | − | − | 32.75 | 100 | 覆土中 | (鉈尾) 裏金に錆膜か漆の塗面あり |
| SI-155 | 第184図-29 | 238 | 銅製帯金具 | 39.0 | 23.5 | *1.0 | 26.6 | 3.7 | 9.89 | 60 | 覆土中 | (丸鞆) 裏金は遺存していない |

## 第15表　刀子計測表

＊断面部位,（ ）現存値

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 全長(㎜) | 身部(㎜) 刀身長 | 身部(㎜) 身幅 | 身部(㎜) 背幅 | 茎部(㎜) 長 | 茎部(㎜) 幅 | 茎部(㎜) 厚 | 遺存度(%) | 現重量(g) | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-011 | 第76図-9 | 232 | (134.5) | (75.5) | *9.8 | *2.0 | 59.0 | *5.0 | *1.8 | 95 | 14.36 | 覆土中 | 茎部完存,木質付着官 |
| SI-040 | 第88図-16 | 232 | (62.6) | (61.1) | *7.5 | *2.5 | *1.5 | − | − | 55 | 4.73 | 覆土中 | |
| SI-047 | 第94図-5 | 232 | (57.5) | (57.5) | *8.0 | *2.0 | − | − | − | 40 | 5.26 | 覆土中 | 6と同一個体 |
| SI-047 | 第94図-6 | 232 | (95.5) | (25.5) | *10.6 | *2.8 | 70.0 | *7.2 | *2.8 | 55 | 12.03 | 覆土中 | 5と同一個体,茎部完存 |
| SI-049 | 第96図-6 | 232 | (27.5) | (17.5) | *7.5 | *2.0 | (10.0) | *6.0 | *1.5 | 20 | 1.70 | 覆土上 | |
| SI-055 | 第100図-4 | 232 | (93.0) | (31.5) | *11.0 | *2.5 | 61.5 | *6.8 | *2.5 | 55 | 10.15 | 覆土中 | 茎部完存 |
| SI-058 | 第102図-8 | 232 | (113.8) | 91.4 | *12.8 | *2.5 | (22.4) | *8.2 | *2.8 | 80 | 11.06 | 覆土中 | 身部完存,柄木一部遺存 |
| SI-061 | 第106図-17 | 232 | (78.8) | (65.3) | *10.5 | *2.0 | (13.5) | *6.8 | *2.2 | 60 | 7.50 | 覆土中 | 全体に歪んでいる |
| SI-062 | 第107図-15 | 232 | (109.0) | (37.5) | *9.5 | *2.5 | (71.5) | *6.3 | *3.3 | 55 | 14.28 | 床直 | |
| SI-062 | 第107図-16 | 232 | (61.8) | (32.5) | *19.3 | *2.5 | (29.3) | *13.0 | *1.8 | 35 | 10.84 | 覆土中 | |
| SI-062 | 第107図-17 | 232 | (47.5) | (27.3) | *9.7 | *2.0 | (20.2) | *7.5 | *1.8 | 30 | 4.33 | 覆土中 | |

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 全長 | 身部（㎜） | | | 茎部（㎜） | | | 遺存度 | 現重量 | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | (㎜) | 刀身長 | 身幅 | 背幅 | 長 | 幅 | 厚 | (%) | (g) | | |
| SI-063 | 第108図-7 | 232 | (95.5) | (25.3) | *8.8 | *3.3 | 70.2 | *7.3 | *2.5 | 55 | 11.47 | 覆土中 | 茎部完存 |
| SI-071 | 第115図-9 | 232 | (109.5) | 81.2 | *12.3 | *2.8 | (28.3) | *10.0 | *3.3 | 75 | 14.10 | 床直 | 身部完存 |
| SI-071 | 第115図-10 | 232 | 157.5 | 92.7 | *11.0 | *3.2 | 64.8 | *8.5 | *2.7 | 100 | 15.53 | 覆土中 | 2点接合,完形 |
| SI-073 | 第118図-16 | 232 | (79.5) | (79.5) | *9.5 | *2.5 | – | – | – | 35 | 7.49 | 覆土中 | 身部のみ |
| SI-073 | 第118図-17 | 232 | (73.8) | (19.5) | *8.5 | *2.0 | 54.3 | *7.5 | *2.7 | 90 | 7.08 | 覆土中 | 2点接合 |
| SI-073 | 第118図-18 | 232 | (68.5) | (68.5) | *11.3 | *2.8 | – | – | – | 35 | 12.57 | 覆土中 | 身部のみ,19と同一個体? |
| SI-073 | 第118図-19 | 232 | (38.5) | – | – | – | (38.5) | *12.0 | *3.2 | 15 | 5.87 | 覆土中 | 茎部のみ,18と同一個体? |
| SI-077 | 第122図-14 | 232 | (58.0) | (58.0) | *10.5 | *2.6 | – | – | – | 35 | 7.19 | 床直 | 14・15と同一個体,身部のみ |
| SI-077 | 第122図-15 | 232 | (21.8) | (21.8) | *11.0 | *2.5 | – | – | – | 20 | 2.56 | 一括 | 15・17と同一個体 |
| SI-077 | 第122図-16 | 232 | (48.8) | (5.8) | – | – | (43.0) | *5.5 | *2.6 | 35 | 7.08 | 床直 | 14・17と同一個体,柄木遺存 |
| SI-077 | 第122図-17 | 232 | (82.2) | (74.0) | *7.0 | *2.0 | (8.2) | *8.5 | *3.0 | 70 | 7.53 | 床直 | |
| SI-083 | 第62図-3 | 232 | (116.5) | (51.0) | *14.0 | *2.8 | 65.5 | *7.2 | *2.8 | 70 | 14.00 | 覆土中 | 古墳時代後期,茎部完存 |
| SI-092 | 第133図-19 | 232 | (113.5) | (73.5) | *11.0 | *3.0 | (40.0) | *8.8 | *3.5 | 75 | 15.55 | 覆土中 | |
| SI-092 | 第133図-20 | 232 | (77.5) | (25.5) | *8.5 | *2.5 | 52.0 | *6.5 | *3.0 | 55 | 6.33 | 覆土中 | 茎部完存 |
| SI-092 | 第133図-21 | 232 | (29.5) | – | – | – | (29.5) | *6.5 | *2.8 | 20 | 1.65 | 覆土下 | 茎部のみ |
| SI-095 | 第138図-24 | 232 | (131.8) | 129.0 | *8.7 | *2.7 | (4.2) | *7.3 | *2.2 | 75 | 14.59 | 覆土中 | 3点接合,身部完存 |
| SI-095 | 第138図-25 | 232 | (86.0) | 70.0 | *12.0 | *8.9 | (16.0) | *6.4 | *2.6 | 55 | 8.56 | 床直 | 身部完存 |
| SI-095 | 第138図-26 | 232 | (78.5) | (60.0) | *8.9 | *2.6 | (18.5) | *8.3 | *2.8 | 50 | 7.77 | 覆土下 | |
| SI-095 | 第138図-27 | 232 | (60.1) | (42.3) | *11.5 | *3.6 | (17.8) | *5.8 | *2.7 | 40 | 6.33 | 覆土中 | |
| SI-095 | 第138図-28 | 232 | (43.3) | (43.3) | *8.4 | *2.6 | – | – | – | 20 | 3.19 | 覆土中 | 身部先端部のみ遺存 |
| SI-109 | 第148図-11 | 232 | (101.0) | (27.5) | *10.6 | *3.2 | 73.5 | – | – | 55 | 12.92 | 覆土中 | 広範囲に柄木遺存,茎部計測不能 |
| SI-113 | 第151図-24 | 232 | (52.7) | (18.4) | *8.9 | *2.5 | (34.3) | *5.6 | *2.3 | 40 | 5.13 | 床直 | |
| SI-114 | 第152図-10 | 232 | (38.0) | (19.4) | *9.8 | *3.5 | (18.6) | *9.2 | *2.1 | 20 | 4.67 | 覆土中 | |
| SI-117 | 第153図-7 | 232 | (116.2) | (60.8) | *10.1 | *3.0 | 56.0 | *7.0 | *2.3 | 70 | 12.06 | 覆土中 | 茎部完存,木片付着 |
| SI-120 | 第284図-2 | 232 | (110.6) | (43.8) | *12.0 | *3.5 | (66.8) | *7.0 | *3.0 | 70 | 11.18 | 覆土中 | 木片付着 |
| SI-136 | 第164図-9 | 233 | (102.5) | (31.0) | *13.5 | *2.3 | (71.5) | *7.7 | *2.8 | 65 | 15.77 | 覆土上 | 2点接合 |
| SI-144 | 第170図-3 | 233 | (16.8) | – | – | – | (16.8) | *5.3 | *1.7 | 5 | 0.84 | 覆土下 | 茎端部のみ |
| SI-147 | 第173図-14 | 233 | (46.8) | – | – | – | (46.8) | *8.3 | *2.5 | 15 | 4.85 | 覆土下 | 茎部のみ |
| SI-149 | 第175図-5 | 233 | (66.0) | – | *24.3 | *1.5 | – | *6.0 | *2.0 | 70 | 21.66 | 覆土中 | 三折れの為詳細計測不能 |
| SI-152 | 第178図-11 | 233 | (28.0) | (19.5) | *12.3 | *2.8 | (8.5) | *9.5 | *2.8 | 25 | 5.92 | 覆土中 | ねじ曲げの為詳細計測不能 |
| SI-165 | 第193図-23 | 233 | (44.5) | (22.0) | *6.5 | *1.5 | (22.5) | *6.0 | *1.5 | 35 | 2.64 | 覆土下 | 表裏面に別の遺物の錆付着 |
| SI-168 | 第195図-6 | 233 | (109.5) | (71.8) | *10.0 | *3.5 | (37.7) | *5.2 | *2.6 | 70 | 13.79 | 覆土下 | |
| SI-171 | 第199図-11 | 233 | (48.0) | (15.6) | *10.3 | *2.4 | (32.4) | *6.6 | *2.0 | 25 | 4.93 | 覆土中 | 柄木の遺存あり |
| SI-175 | 第202図-7 | - | (119.0) | (71.5) | *17.0 | *1.8 | 46.5 | *7.0 | *1.6 | 45.0 | 23.16 | 覆土上 | 茎部完存 |
| SI-178 | 第204図-9 | 233 | (98.0) | (98.0) | *9.5 | *2.5 | – | – | – | 60 | 1.12 | 覆土中 | 身部のみ |
| SI-178 | 第204図-10 | 233 | (98.5) | (10.5) | *19.5 | *3.0 | 88.0 | *9.5 | *4.5 | 45 | 26.28 | 覆土下 | 茎部完存,柄木の痕跡あり |
| SI-182 | 第209図-3 | 233 | (144.5) | (144.5) | *9.5 | *2.0 | – | – | – | 55 | 10.48 | 覆土下 | 先端部が屈曲している |
| SI-188 | 第213図-7a | 233 | (86.0) | (8.5) | *11.0 | *2.8 | 77.5 | *6.5 | *2.8 | 45 | 7.15 | 覆土中 | 茎部完存,7bと同一個体 |
| SI-188 | 第213図-7b | 233 | ('24.5) | (24.5) | *8.0 | *2.5 | – | – | – | 15 | 1.82 | 覆土中 | 身部先端部のみ,7aと同一個体 |
| SI-188 | 第213図-8 | 233 | (54.5) | – | – | – | (54.5) | *6.0 | *2.5 | 35 | 3.99 | 覆土下 | 茎部のみ |
| SI-192 | 第218図-16 | 233 | (141.5) | (75.5) | *9.3 | *3.0 | 66.0 | 6.0 | 2.7 | 95 | 14.92 | 覆土下 | ほぼ完形 |
| SI-192 | 第218図-17 | 233 | (45.8) | (24.0) | *8.0 | *2.2 | (21.8) | *7.0 | *2.0 | 20 | 2.89 | カマド内 | |
| SI-195 | 第221図-9 | 233 | (157.5) | 121.8 | *8.8 | *3.0 | (35.7) | – | – | 85 | 21.66 | 覆土下 | 柄木遺存顕著，刀身表裏植物繊維付着 |
| SI-198 | 第223図-9 | 233 | (55.5) | – | – | – | (55.5) | *6.0 | *2.5 | 30 | 3.36 | 覆土下 | 茎部のみ,柄木の遺存あり |
| SI-200 | 第225図-4 | 233 | (88.0) | 77.8 | *8.0 | *2.8 | (10.2) | *6.5 | *2.8 | 65 | 7.12 | 覆土上 | しのぎの一部遺存 |
| SI-203 | 第228図-7a | 233 | (88.0) | (32.0) | *10.4 | *2.5 | 56.0 | *5.0 | *1.8 | 55 | 6.79 | カマド内 | 茎部完存,7bと同一個体 |
| SI-203 | 第228図-7b | 233 | (29.5) | (29.5) | *7.0 | *2.5 | – | – | – | 15 | 2.02 | カマド内 | 身部のみ,7aと同一個体 |
| SI-208 | 第236図-14 | 233 | (217.0) | (117.5) | *9.0 | *2.5 | 99.5 | *7.5 | *2.8 | 90 | 23.07 | 床直 | 茎部に木質付着,ほぼ完形 |
| SI-208 | 第236図-15a | 234 | (30.8) | – | – | – | (30.8) | *5.5 | *2.6 | 5 | 1.63 | 覆土中 | 15bと同一個体 |
| SI-208 | 第236図-15b | 233 | (114.0) | (87.8) | *6.6 | *2.2 | (26.2) | *5.8 | *2.2 | 70 | 11.48 | 覆土中 | 15aと同一個体 |
| SI-208 | 第236図-16 | 233 | (95.5) | (48.5) | *12.2 | *3.2 | 47.0 | *6.0 | *1.8 | 65 | 10.21 | 床直 | 茎部完存,身部裏面に木質付着 |
| SI-223 | 第252図-3 | 233 | 187.8 | 123.0 | *22.0 | *2.2 | 64.8 | *8.7 | *3.8 | 99 | 31.68 | 一括 | 刃部の一部に木片付着,ほぼ完形 |
| SI-229 | 第254図-13 | 233 | (134.0) | (69.0) | *8.7 | *2.5 | (65.0) | *9.1 | *2.8 | 90 | 15.62 | 床直 | 折れ曲がりの為詳細計測不能 |
| SI-236 | 第259図-5 | 233 | (51.5) | – | – | – | (51.5) | *7.4 | *3.0 | 30 | 4.12 | 床直 | 柄木の付着あり |
| SI-238 | 第260図-8 | 233 | (70.2) | (56.0) | *10.0 | *2.9 | (14.2) | *8.7 | *2.5 | 45 | 7.78 | 床直 | SI-222出土鉄器と遺構間接合 |
| SI-244 | 第265図-16 | 233 | (33.7) | (33.7) | *8.8 | *2.3 | – | – | – | 20 | 3.67 | 一括 | 身部のみ |
| SI-244 | 第265図-17 | 233 | (97.2) | (36.0) | *12.5 | *3.8 | 61.2 | *8.3 | *3.6 | 60 | 15.04 | 床直 | 茎部完存 |
| SI-246A | 第269図-16 | 233 | (68.7) | (29.2) | *9.8 | *2.8 | 39.5 | *5.3 | *3.2 | 55 | 6.41 | 覆土下 | |
| SI-246A | 第269図-17 | 233 | (89.0) | (36.8) | *13.5 | *3.0 | (52.2) | *8.0 | *3.0 | 60 | 11.67 | 覆土上 | 3点接合 |
| SI-246A | 第269図-18 | 233 | (34.5) | – | – | – | (34.5) | *6.7 | *2.5 | 15 | 2.18 | 床直 | 茎部のみ |
| SI-249 | 第270図-4 | 234 | (87.5) | (59.0) | *8.8 | *3.5 | (28.5) | *5.5 | *3.3 | 45 | 8.93 | 覆土中 | しのぎ側面に木質付着 |
| SI-254 | 第274図-9a | 234 | (34.5) | (34.5) | *7.0 | *2.1 | – | – | – | 20 | 1.60 | 覆土中 | 身部のみ,9bと同一個体 |
| SI-254 | 第274図-9b | 234 | (33.0) | – | – | – | (33.0) | *5.0 | *3.0 | 20 | 1.86 | 覆土中 | 茎部のみ,9aと同一個体 |
| SI-257 | 第278図-20 | 234 | (64.5) | (12.0) | *11.0 | *3.5 | 52.0 | *7.0 | *3.0 | 35 | 5.74 | カマド内 | |
| SI-258 | 第279図-5 | 234 | (36.0) | (36.0) | *9.0 | *3.5 | – | – | – | 15 | 3.48 | 覆土下 | 身部のみ |
| SI-259 | 第279図-3 | 234 | (53.5) | (53.5) | *5.5 | *2.5 | – | – | – | 40 | 2.67 | 覆土上 | 身部のみ,屈折している |
| SI-262 | 第282図-26 | 234 | (71.0) | (55.0) | *13.0 | *4.5 | (16.0) | *6.0 | *3.0 | 40 | 10.75 | 覆土上 | 身部と刃先欠損 |

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 全長 | 身部（㎜） | | | 茎部（㎜） | | | 遺存度 | 現重量 | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | (㎜) | 刀身長 | 身幅 | 背幅 | 長 | 幅 | 厚 | (%) | (g) | | |
| SI-262 | 第282図-27 | 234 | (40.5) | (40.5) | *9.5 | *3.0 | − | − | − | 25 | 3.51 | 覆土上 | 刃部のみ |
| SB-015 | 第292図-1 | 234 | (78.5) | 73.0 | *8.0 | *2.0 | (5.5) | *9.0 | *2.0 | 60 | 7.84 | 一括 | 身部のみ |
| SK-239 | 第313図-1 | 234 | (119.0) | 82.0 | *13.0 | *2.5 | (37.0) | *9.8 | *2.5 | 85 | 19.00 | 床面 | 身部完存,2点接合 |
| SK-253 | 第316図-2 | 234 | (75.0) | 71.5 | *8.0 | *2.0 | (3.5) | *6.5 | *2.5 | 65 | 6.32 | 一括 | 身部のみ |
| SD-023 | 第346図-2 | 234 | (29.0) | − | − | − | (29.0) | *11.2 | *3.0 | 15 | 3.54 | 一括 | 茎部のみ |
| 23N-29 | 第320図-22 | 234 | (48.5) | (26.0) | *22.0 | *2.5 | (22.5) | 9.8 | 3.0 | 15 | 10.99 | 一括 | |

## 第16表　鉄鏃計測表

＊断面部位,（　）現存値

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 身の形態 | 全長 | 身部(㎜) | | | | 篦被部(㎜) | | | | 茎部(㎜) | | | 現重量 | 出土状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | (㎜) | 鏃身長 | 逆刺長 | 鏃身幅 | 鏃身厚 | 篦被長 | 篦被幅 | 下端幅 | 篦被厚 | 茎長 | 茎幅 | 茎厚 | (g) | | |
| SI-006 | 第72図-4 | 235 | 三角形 | (69.5) | (25.2) | - | *19.5 | *2.8 | (48.5) | *6.5 | - | *6.0 | - | - | - | 15.74 | 床直 | 篦被部から身部まで遺存 |
| SI-009 | 第74図-5 | 235 | - | (13.0) | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 0.34 | 一括 | 茎端部のみ遺存,4aと同一個体? |
| SI-049 | 第96図-7 | 235 | - | (61.0) | - | - | - | - | (38.0) | *4.5 | 7.0 | *2.8 | (23.0) | *2.1 | *2.2 | 4.42 | 覆土中 | 篦被部から茎部まで遺存 |
| SI-073 | 第118図-20 | 235 | 鏨箭 | (87.5) | - | - | *8.3 | *1.8 | 63.0 | *5.5 | 7.5 | *3.0 | (5.2) | *3.8 | *3.0 | 7.73 | 覆土中 | 篦被部から身部まで遺存,篦被部と茎部の境が不明瞭 |
| SI-077 | 第122図-19 | 235 | - | (35.0) | - | - | - | - | - | - | - | - | (35.0) | *4.5 | *3.0 | 3.10 | 覆土中 | 茎部のみ遺存 |
| SI-077 | 第122図-20a | 235 | 三角形 | (75.0) | 26.5 | 10.0 | *21.5 | *2.5 | 51.0 | *7.4 | 8.7 | *6.0 | (8.0) | - | - | 14.85 | 覆土上 | 20bと同一個体 |
| SI-077 | 第122図-20b | 235 | - | (41.0) | - | - | - | - | - | - | - | - | (41.0) | *3.0 | *2.5 | 1.55 | 覆土上 | 茎部のみ遺存,20aと同一個体 |
| SI-079 | 第62図-3 | 235 | - | (53.5) | - | - | - | - | (34.5) | *5.6 | 7.0 | *5.6 | (19.0) | *3.0 | *2.5 | 4.45 | 覆土中 | 古墳時代後期,茎部から篦被部まで遺存 |
| SI-085 | 第127図-14 | 235 | - | (43.0) | - | - | - | - | - | - | - | - | (43.0) | *3.0 | *3.0 | 3.70 | 覆土中 | 茎部のみ遺存,ほぼ直角に折り曲げられている,15と同一個体 |
| SI-085 | 第127図-15 | 235 | 長三角形 | (72.5) | (21.2) | - | *13.5 | *2.5 | (51.3) | *5.5 | - | *3.0 | - | - | - | 9.20 | 覆土中 | 篦被部から身部まで遺存,篦被部を直角に折り曲げている,14と同一個体 |
| SI-089 | 第130図-11a | 235 | 長三角形 | (56.0) | 34.5 | 14.0 | *17.5 | *1.8 | 28.0 | *6.6 | 8.0 | *5.0 | (8.5) | - | - | 8.59 | 床直 | 篦被部から身部までほぼ完形,11bと同一個体 |
| SI-089 | 第130図-11b | 235 | - | (58.5) | - | - | - | - | - | - | - | - | (58.5) | *2.8 | *2.4 | 2.86 | 床直 | 茎部のみ遺存,11aと同一個体 |
| SI-092 | 第133図-22 | 235 | 三角形 | (87.5) | 20.0 | - | *28.0 | *2.0 | 46.8 | *8.5 | 8.5 | *5.7 | (20.7) | *3.8 | *3.1 | 13.67 | カマド内 | 茎部一部欠損,全体的に傷みが著しい |
| SI-092 | 第133図-25 | 235 | - | (32.0) | - | - | - | - | - | - | - | - | (32.0) | *3.5 | *2.8 | 1.04 | 覆土下 | 茎部のみ遺存 |
| SI-093 | 第135図-13 | 235 | 三角形 | 115.0 | 22.0 | - | *15.5 | *1.8 | 40.5 | *9.5 | 8.0 | *3.0 | 52.5 | *3.8 | *3.0 | 14.89 | 覆土下 | 身部一部欠損,ほぼ完形 |
| SI-094 | 第136図-11 | 235 | - | (22.5) | - | - | - | - | - | - | - | - | (22.5) | *4.0 | *2.8 | 1.06 | 覆土中 | 茎部のみ遺存 |
| SI-095 | 第138図-29 | 235 | 長三角形 | (69.0) | 37.1 | - | *9.0 | *1.8 | 24.0 | *7.2 | 9.5 | *5.2 | (4.0) | *4.6 | *4.4 | 12.89 | 床直 | 茎部欠損,篦被から身部までほぼ完形 |
| SI-098 | 第141図-4 | 235 | - | (48.2) | - | - | - | - | - | - | - | - | (48.2) | *4.8 | *3.7 | 3.39 | 覆土中 | 茎部のみ遺存 |
| SI-104 | 第146図-20 | 235 | 三角形 | (85.5) | 8.9 | - | *7.5 | *1.9 | 58.8 | *7.9 | 8.2 | *4.0 | (12.0) | *3.0 | *2.8 | 9.14 | 覆土下 | 茎部欠損,篦被から身部までほぼ完形 |
| SI-104 | 第146図-21 | 235 | - | (32.4) | - | - | - | - | (29.2) | *8.0 | 8.9 | *2.7 | (3.2) | *4.7 | *3.1 | 3.89 | 床直 | 茎部一部と篦被下端部遺存 |
| SI-113 | 第151図-23 | 235 | 鏨箭 | (90.6) | (8.2) | - | *7.0 | *1.3 | (68.3) | *5.2 | 8.6 | *4.5 | (14.1) | *3.1 | *2.8 | 10.49 | 覆土上 | 身部と篦被部の境が不明瞭 |
| SI-114 | 第152図-8 | 235 | 長三角形 | (89.6) | (68.4) | (32.2) | *28.0 | *3.4 | 46.5 | *9.2 | 11.5 | *4.2 | (4.8) | *4.8 | *4.3 | 27.92 | 覆土上 | 篦被部から身部まで遺存・篦被部上端に木片付着 |
| SI-118 | 第155図-25 | 235 | 長三角形? | (95.3) | (14.0) | - | 10.8 | - | 72.8 | *5.0 | 6.0 | *3.8 | (8.0) | *2.3 | *1.8 | 10.67 | 覆土下 | 身部・茎部の一部欠損,身部は錆により断面形・厚さは不明瞭 |
| SI-153 | 第181図-27 | 235 | 雁又 | (147.5) | (64.0) | - | *11.0 | *2.5 | 83.5 | *4.5 | - | *4.0 | - | - | - | 20.87 | 覆土中 | 身部・茎部の一部欠損,2点接合 |
| SI-171 | 第199図-9 | 235 | - | (73.0) | - | - | - | - | (36.5) | *6.2 | 6.6 | *3.0 | (36.5) | *3.5 | *2.8 | 5.40 | カマド内 | 身部欠損,茎部に若干の歪みあり,2点接合 |
| SI-172 | 第200図-6 | 235 | 長三角形 | (133.8) | 22.5 | 3.0 | *7.2 | *2.0 | 106.5 | *3.8 | 7.1 | *2.8 | (7.8) | - | - | 9.99 | 覆土中 | 茎部欠損以外はほぼ完形,2点接合 |
| SI-191 | 第216図-12 | 235 | 雁又 | (48.0) | (48.0) | - | *9.0 | *2.0 | - | *12.2 | - | *2.5 | - | - | - | 11.80 | 覆土中 | 身部のみ遺存,裏面には木質が表面には植物の繊維痕あり |
| SI-192 | 第218図-18 | 235 | 三角形 | (94.8) | (34.0) | 12.3 | *35.7 | *2.5 | 34.5 | *9.5 | 9.3 | *3.5 | (39.1) | *4.8 | *3.5 | 16.16 | 覆土下 | 茎部欠損 |
| SI-204 | 第230図-16 | 235 | 長三角形 | (15.15) | 29.0 | 2.5 | *11.5 | *2.2 | 83.0 | *6.0 | 6.8 | *4.0 | (42.0) | *4.0 | *3.0 | 22.10 | 床直 | 2点接合,ほぼ完形 |
| SI-204 | 第230図-17 | 238 | 方頭斧箭 | (63.4) | 27.0 | - | 28.5 | 4.8 | (34.4) | *13.5 | - | *3.8 | - | - | - | 19.89 | 覆土下 | 身部は折り重ねられている |
| SI-218 | 第249図-5 | 235 | - | (61.2) | - | - | - | - | - | - | - | - | (61.2) | *3.7 | *3.5 | 6.92 | 一括 | 茎部のみ遺存 |
| SI-238 | 第260図-7 | 235 | 鏨箭 | 133.0 | 13.0 | - | *6.5 | *1.8 | 73.0 | *4.3 | 7.2 | *2.7 | 47.0 | *2.3 | *2.3 | 8.82 | 床直 | ほぼ完存,身部と篦被部の境が不明瞭 |
| SI-246A | 第269図-19 | 235 | 長三角形 | (59.8) | 17.3 | 2.0 | *11.8 | *2.0 | (44.5) | *5.0 | - | *2.8 | - | - | - | 5.04 | 覆土下 | 茎部欠損,身部ほぼ完形 |
| SI-257 | 第278図-22 | 235 | 長三角形 | (89.8) | (49.0) | - | *17.0 | *3.0 | 31.5 | *9.5 | 11.9 | *3.9 | (9.3) | *4.5 | *4.5 | 19.33 | 覆土下 | 茎部欠損 |
| SB-040 | 第304図-1 | 235 | 長三角形? | (24.4) | (24.4) | - | *18.5 | *2.4 | - | - | - | - | - | - | - | 4.97 | 一括 | 身部のみ遺存 |
| SK-097 | 第326図-1 | 235 | 柳刃? | (32.0) | (32.0) | - | *20.0 | *2.0 | - | - | - | - | - | - | - | 6.30 | 一括 | 身部のみ遺存,SI-257-22と同一個体の可能性あり |
| SD-025 | 第342図-1 | 235 | 柳刃? | (74.0) | (48.0) | - | *20.5 | *1.8 | - | - | - | - | (26.0) | *6.5 | *2.0 | 15.34 | 一括 | 身部先端部欠損,両側面に刃あり,出土地点約250m離れているがSB-40-1と同一個体の可能性あり |

## 第17表　鎌計測表

＊断面部位,（ ）現存値

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 全長 | 刃部（㎜） | | | 基部（㎜） | | | | 現重量 | 遺存度 | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | (㎜) | 長 | 身幅 | 背幅 | 長 | 幅 | 刃厚 | 背厚 | (g) | (%) | | |
| SI-011 | 第76図-10 | 236 | (177.5) | (122.0) | *17.0 | *2.2 | 55.8 | *32.0 | *1.5 | *2.5 | 65.35 | 98 | 覆土下 | ほぼ完形 |
| SI-020 | 第81図-12 | 236 | (44.5) | (21.5) | *12.0 | *2.0 | (23.0) | *15.0 | *1.6 | *3.0 | 6.72 | 20 | 覆土上 | 基部片 |
| SI-057 | 第101図-3 | 236 | (126.5) | (103.5) | *22.2 | *2.0 | 23.0 | *23.4 | *1.2 | *2.0 | 42.70 | 85 | 床直 | 木質付着あり |
| SI-059 | 第103図-5 | 236 | (29.3) | － | *19.0 | *1.8 | － | － | － | － | 5.29 | 15 | 覆土中 | 先端部のみ |
| SI-072 | 第116図-7 | 236 | (206.8) | (185.5) | *30.0 | *3.0 | 21.0 | *38.0 | *1.5 | *3.5 | 98.72 | 98 | 覆土中 | ほぼ完形 |
| SI-094 | 第136図-10 | 236 | (138.0) | (138.0) | *16.0 | *2.4 | － | *21.4 | *1.5 | *2.8 | 44.85 | 90 | 覆土中 | 刃部と基部の境不明瞭 |
| SI-103 | 第145図-18 | 238 | (52.0) | － | － | － | (52.0) | *21.8 | *1.2 | *1.2 | 9.11 | 20 | 覆土中 | 端部折り返しあり |
| SI-114 | 第152図-9 | 236 | (93.6) | (52.5) | *23.0 | *2.3 | 41.6 | *34.8 | *1.3 | *2.6 | 39.55 | 35 | 覆土上 | 基部ほぼ完存 |
| SI-134 | 第162図-8 | 236 | (44.3) | (10.0) | *33.2 | *2.5 | 34.3 | 33.8 | 2.5 | 2.5 | 16.74 | 15 | 覆土中 | 基部完存 |
| SI-135 | 第163図-3 | 236 | 177.2 | 145.9 | *19.5 | *2.5 | 31.3 | 29.8 | － | － | 52.47 | 95 | 覆土下 | 基部は錆膨張のため計測不能箇所あり |
| SI-169 | 第196図-11 | 236 | (137.4) | (90.5) | *28.2 | *2.5 | 46.9 | 31.5 | 3.0 | 3.8 | 53.11 | 70 | 覆土下 | 基部完存 |
| SI-171 | 第199図-13 | 236 | (184.4) | (139.6) | *24.2 | *2.0 | 44.8 | *35.0 | *1.0 | *2.5 | 74.59 | 98 | 壁溝内 | ほぼ完形 |
| SI-171 | 第199図-14 | 236 | (54.7) | － | － | － | (54.7) | *26.0 | *1.0 | *1.8 | 16.07 | 20 | 壁溝内 | 基部のみ |
| SI-171 | 第199図-16 | 237 | (37.5) | － | － | － | (37.5) | *22.8 | *1.0 | *1.0 | 5.83 | 35 | 覆土中 | 基部のみ |
| SI-173 | 第200図-2 | 236 | (44.5) | (44.5) | *23.5 | *1.4 | － | － | － | － | 9.10 | 15 | 一括 | 刃部片 |
| SI-185 | 第211図-10 | 236 | (50.0) | (50.0) | *16.0 | *1.2 | － | － | － | － | 4.30 | 20 | 覆土上 | 小型 |
| SI-185 | 第211図-11 | 236 | (16.0) | － | － | － | (16.0) | *11.5 | *1.7 | *2.0 | 1.99 | 5 | 覆土下 | 基部片 |
| SI-212 | 第243図-16 | 236 | (77.5) | (50.3) | *16.5 | *2.0 | 27.2 | *19.0 | *0.8 | *1.7 | 14.91 | 40 | 覆土下 | 小型 |
| SI-212 | 第243図-17 | 236 | (37.0) | (9.2) | *15.3 | *0.8 | 27.8 | *27.8 | *0.8 | *1.8 | 7.62 | 5 | 覆土中 | 小片 |
| SI-216 | 第247図-11 | 236 | (58.3) | (58.3) | *19.0 | *1.8 | － | － | － | － | 8.40 | 20 | 覆土下 | 刃部のみ,裏面植物繊維付着 |
| SI-221 | 第251図-4 | 236 | (98.0) | (98.0) | *26.7 | *3.2 | － | － | － | － | 29.42 | 50 | カマド一括 | 刃部のみ,裏面植物繊維付着 |
| SI-221 | 第251図-5a | 236 | (56.0) | (56.0) | *22.8 | *1.7 | － | － | － | － | 11.97 | 20 | カマド一括 | 刃部先端付近のみ |
| SI-221 | 第251図-5b | 236 | (40.5) | － | － | － | (40.5) | *35.0 | *1.0 | *2.9 | 17.49 | 20 | カマド一括 | 基部のみ,表面植物繊維付着 |

## 第18表　釘・錐・棒状製品計測表

＊断面部位,（ ）現存値

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 製品名 | 全長 | 断面幅 | 断面厚 | 頭部幅 | 頭部厚 | 現重量 | 出土位置 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | (㎜) | (㎜) | (㎜) | (㎜) | (㎜) | (g) | | |
| SI-058 | 第102図-9 | 235 | 釘 | (35.8) | *3.5 | *5.0 | － | － | 2.79 | 一括 | |
| SI-062 | 第107図-18 | 234 | 釘 | (64.3) | *4.0 | *2.5 | － | － | 3.45 | 覆土中 | 先端は尖頭状になっている |
| SI-063 | 第108図-8 | 234 | 釘 | (43.5) | *5.3 | *4.5 | 15.6 | 12.5 | 8.29 | 床直 | 頭部遺存 |
| SI-092 | 第133図-24 | 235 | 釘 | (49.0) | *6.0 | *5.0 | － | － | 5.77 | 覆土中 | |
| SI-104 | 第146図-22 | 234 | 釘 | (53.7) | *7.2 | *5.6 | － | － | 8.16 | 覆土上 | 中位片 |
| SI-104 | 第146図-23 | 234 | 釘 | (42.4) | *6.1 | *5.5 | － | － | 4.35 | 覆土上 | 中位片 |
| SI-141 | 第169図-9 | 234 | 釘 | (44.6) | *3.8 | *3.3 | － | － | 2.55 | 覆土中 | 中位片 |
| SI-152 | 第178図-12 | 234 | 釘 | (68.5) | *5.0 | *4.0 | － | － | 5.66 | 覆土上 | 「コ」の字にねじ曲げられている |
| SI-152 | 第178図-13 | 234 | 釘 | (50.5) | *6.3 | *4.0 | － | － | 3.61 | 覆土上 | 先端は尖頭状になっている |
| SI-171 | 第199図-12 | 234 | 釘 | (37.0) | *3.2 | *2.8 | － | － | 1.66 | 覆土上 | 2点同一個体 |
| SI-175 | 第202図-8 | 234 | 釘 | (35.0) | *3.5 | *3.5 | 6.5 | 3.0 | 2.86 | 覆土中 | 頭部遺存 |
| SI-178 | 第205図-13 | 234 | 釘 | (111.0) | *6.8 | *5.4 | 13.8 | 2.0 | 12.38 | 覆土下 | ほぼ完形 |
| SI-178 | 第205図-14 | 234 | 釘 | (37.0) | *3.4 | *3.6 | 10.5 | 1.8 | 1.83 | 覆土下 | 頭部遺存 |
| SI-178 | 第205図-15 | 234 | 釘 | (19.5) | *6.2 | *4.0 | 9.5 | 2.0 | 1.71 | 覆土下 | 頭部遺存 |
| SI-191 | 第216図-13 | 234 | 釘 | (46.0) | *4.0 | *2.8 | *6.0 | *1.5 | 2.92 | 覆土上 | 頭部直線的に遺存 |
| SI-191 | 第216図-14 | 237 | 棒状鉄製品 | (28.0) | *4.0 | *3.0 | － | － | 1.50 | 床直 | |
| SI-192 | 第218図-19 | 234 | 棒状鉄製品 | (39.5) | *4.0 | *3.0 | － | － | 1.88 | 床直 | |
| SI-192 | 第218図-20 | 234 | 棒状鉄製品 | (88.5) | *4.3 | *3.6 | － | － | 5.80 | 覆土上 | 紡錘車の紡軸? |
| SI-200 | 第225図-5 | 234 | 棒状鉄製品 | (61.0) | *8.0 | *6.5 | － | － | 16.91 | 覆土中 | |
| SI-203 | 第228図-6 | 234 | 釘 | (26.5) | *3.5 | *2.5 | 5.0 | 5.2 | 1.33 | 一括 | ４区一括,頭部遺存 |
| SI-204 | 第230図-18 | 234 | 釘 | (22.5) | *2.0 | *1.8 | － | － | 0.48 | 床直 | 中位片 |
| SI-207 | 第234図-8 | 234 | 錐 | (128.5) | *5.0 | *4.8 | － | － | 11.75 | 覆土下 | 先端は尖頭状になっている |
| SI-211 | 第241図-36 | 234 | 棒状鉄製品 | 89.0 | *25.5 | *19.5 | － | － | 133.76 | 覆土下 | 断面三角形 |
| SI-211 | 第241図-37 | 234 | 棒状鉄製品 | (71.7) | *5.8 | *4.6 | － | － | 9.58 | 一括 | １区一括，先端まで方形断面 |
| SI-212 | 第243図-18 | 234 | 釘 | (40.2) | *4.5 | *2.8 | － | － | 1.85 | カマド内 | 先端は折れ曲がる |
| SI-249 | 第270図-5 | 234 | 棒状鉄製品 | (27.5) | *6.0 | *3.7 | － | － | 2.44 | 一括 | 中位片 |
| SI-250 | 第271図-9 | 234 | 釘 | (80.0) | *4.8 | *5.0 | － | － | 9.09 | 覆土上 | 先端は折れ曲がる |
| SB-036 | 第302図-1 | 234 | 釘 | (50.4) | *3.5 | *2.5 | － | － | 1.78 | 一括 | 先端は尖頭状になっている |
| SB-036 | 第302図-2 | 234 | 棒状鉄製品 | (64.0) | *6.4 | *5.0 | － | － | 8.48 | 一括 | 中位片 |
| SK-245 | 第314図-4 | 234 | 釘 | (121.0) | *6.0 | *6.0 | 11.0 | 8.0 | 19.98 | 一括 | 先端部一部欠損,ほぼ完形 |
| SD-001 | 第339図-1 | 234 | 釘 | (20.5) | *3.4 | *3.0 | 9.0 | 2.5 | 1.92 | 一括 | 頭部遺存 |
| SD-005 | 第342図-4 | 234 | 釘 | (38.6) | *3.5 | *2.8 | － | － | 2.22 | 一括 | 先端部付近 |
| SD-020 | 第346図-1 | 234 | 釘 | (28.5) | *8.0 | *6.0 | － | － | 4.11 | 一括 | 中位片 |
| SD-025 | 第342図-3 | 234 | 棒状鉄製品 | (49.0) | *3.5 | *3.5 | － | － | 3.99 | 一括 | 中位で折れ曲がる |
| 不明 | 第320図-23 | - | 棒状鉄製品 | (83.7) | *6.2 | *6.3 | － | － | 6.21 | 不明 | 2点同一個体,紡錘車の紡軸? |

## 第19表　穂摘具計測表

＊断面部位,（　）現存値

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 全長 | 最大幅 | 断面幅 | 断面厚 | 穿孔径左 | 穿孔径右 | 現重量 | 遺存度 | 出土位置 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | (㎜) | (㎜) | (㎜) | (㎜) | (㎜) | (㎜) | (g) | (%) | | |
| SI-008 | 第73図-6 | 236 | (37.2) | - | *13.0 | *1.0 | - | - | 2.35 | 25 | 覆土上 | 穿孔2.5×1.8穿孔内繊維質付着,鎌？ |
| SI-011 | 第76図-11a | 237 | (44.0) | 20.0 | *20.0 | *1.5 | - | - | 4.27 | 40 | 覆土中 | 11bと同一個体,その他小片2点あり |
| SI-011 | 第76図-11b | 237 | (22.0) | 16.0 | - | - | - | 3.0×3.0 | 1.41 | 20 | 覆土中 | 釘頭4.5㎜×3.5㎜ |
| SI-040 | 第88図-15 | 236 | (87.0) | 29.0 | *1.2 | *1.2 | - | - | 13.56 | 90 | 覆土中 | 鎌？ |
| SI-044 | 第60図-4 | 237 | 79.0 | 18.8 | *11.8 | *1.4 | 4.0×3.0 | 3.5×3.0 | 8.29 | 99 | 覆土中 | ほぼ完形 |
| SI-046 | 第93図-6 | 237 | 101.5 | 19.5 | *16.0 | *1.8 | 3.4×3.5 | 4.0×3.1 | 14.61 | 99 | 床直 | 釘長左26.5㎜，右16.8㎜ |
| SI-059 | 第103図-4 | 237 | (33.5) | - | *16.8 | *0.8 | - | 3.5 | 3.01 | 25 | 覆土中 | 穿孔円形 |
| SI-061 | 第106図-18 | 237 | (51.5) | - | *14.3 | *1.5 | - | - | 4.82 | 40 | 覆土中 | |
| SI-061 | 第106図-19 | 237 | (60.5) | - | *19.5 | *1.3 | - | 4.5×3.4 | 7.10 | 50 | 覆土下 | |
| SI-077 | 第122図-18 | 237 | (33.0) | - | *18.5 | *0.8 | - | - | 2.13 | 15 | 一括 | |
| SI-084 | 第63図-8 | 237 | (51.5) | - | *14.0 | *1.5 | - | - | 4.13 | 40 | 覆土下 | |
| SI-113 | 第151図-25 | 237 | (56.8) | - | *21.8 | *0.8 | - | - | 7.52 | 35 | 覆土上 | |
| SI-113 | 第151図-26 | 237 | (27.3) | - | *17.0 | *1.2 | 4.0 | - | 2.48 | 30 | 覆土下 | 穿孔円形 |
| SI-132 | 第161図-6 | 237 | (48.7) | - | *12.3 | *0.8 | - | - | 3.83 | 55 | 覆土下 | |
| SI-168 | 第195図-7 | 237 | (50.5) | - | *22.0 | *1.6 | - | - | 7.29 | 45 | 覆土中 | 表裏面に藁状の物付着 |
| SI-170 | 第197図-6 | 237 | (54.6) | - | *20.0 | *1.4 | 4.0×3.6 | - | 7.38 | 50 | 覆土下 | |
| SI-191 | 第216図-15 | 237 | (84.8) | - | *32.5 | *1.5 | - | 4.5×3.2 | 14.83 | 60 | 床直 | 藁付着 |
| SI-207 | 第234図-9 | 236 | (40.8) | - | *22.0 | *1.4 | - | - | 5.17 | 10 | 覆土下 | |
| SI-214 | 第245図-10 | 236 | (119.8) | - | *22.3 | *1.7 | - | - | 20.45 | 90 | 覆土下 | 鎌？ |
| 不明 | 第320図-24 | 237 | (58.3) | - | *20.8 | *1.8 | - | - | 10.12 | 45 | 不明 | 出土遺構不明 |

## 第20表　その他の金属製品計測表

＊断面部位,（　）現存値

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 材質 | 製品名 | 全長 | 補足長 | 断面a幅 | 断面a厚 | 断面b幅 | 断面b厚 | 現重量 | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | (mm) | (mm) | (mm) | (mm) | (mm) | (mm) | (g) | | |
| SI-009 | 第74図-4 | 235 | 鉄 | ノミ | (56.5) | – | *6.8 | *5.0 | – | – | 10.24 | 覆土下 | 刃先部 |
| SI-010 | 第75図-9 | 238 | 鉄 | 鉄斧 | 71.5 | 刃部幅32.0 | 袋部幅31.5 | 袋部厚16.5 | – | 袋部板厚3.0 | 81.40 | 覆土中 | 折り返し式の袋状鉄斧,ほぼ完形 |
| SI-041 | 第89図-5 | 238 | 銅 | 銅製皿 | 復元底径81.0 | 高(9.0) | 高台高(5.5) | – | – | – | 7.07 | 覆土中 | 高台周辺のみ遺存 |
| SI-092 | 第133図-23 | 235 | 鉄 | 鑿 | (51.5) | – | *6.0 | *4.5 | *3.8 | *2.5 | 7.05 | 覆土中 | |
| SI-104 | 第146図-24 | 238 | 鉄 | 板状鉄製品 | (44.0) | – | *20.7 | *1.8 | – | – | 8.16 | 覆土下 | 両端部は同一方向にやや湾曲する |
| SI-104 | 第146図-25 | 238 | 鉄 | 壺金具 | (46.5) | – | *4.9 | *3.8 | 環部内径6.8 | – | 6.86 | 覆土中 | 先端部はやや湾曲気味 |
| SI-116 | 第66図-13 | 238 | 鉄 | 楔状鉄製品 | 23.0 | – | *8.0 | *1.6 | – | – | 1.67 | 覆土中 | 完形品の場合何らかの工具，破損品の場合刀子の茎 |
| SI-137 | 第165図-4 | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (34.8) | – | *15.5 | *1.2 | – | – | 4.41 | 一括 | 折り曲げられている |
| SI-147 | 第173図-13 | 238 | 鉄 | 鉄斧 | 66.5 | 刃部幅37.3 | 袋部幅36.8 | 袋部厚18.5 | – | 袋部板厚3.5 | 72.30 | 覆土中 | 折り返し式の袋状鉄斧,ほぼ完形,錆が厚い |
| SI-149 | 第175図-4 | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (36.0) | – | *4.5 | *2.0 | – | – | 1.51 | 覆土下 | 用途不明 |
| SI-152 | 第178図-14a | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (40.5) | – | *7.0 | *3.5 | – | – | 4.80 | 覆土上 | 14bと同一個体 |
| SI-152 | 第178図-14b | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (111.0) | – | *7.0 | *3.0 | – | – | 11.83 | 覆土上 | 棒状の工具？　2点接合,14aと同一個体 |
| SI-153 | 第181図-26 | 238 | 鉄 | 鉤座金具 | (57.0) | – | *21.2 | *1.2 | 孔径4.5×3.0 | – | 14.24 | 覆土中 | 覆輪状 |
| SI-153 | 第181図-28 | 238 | 鉄 | 鑷子 | (82.2) | – | *5.5 | *1.8 | 環部外径11.0 | 環部内径7.0 | 9.02 | 覆土中 | |
| SI-170 | 第197図-5a | 238 | 鉄 | 鑿 | (48.8) | – | – | – | 茎部*4.7 | 茎部*7.0 | 9.20 | 覆土下 | 大型,茎部のみ,5aと同一個体 |
| SI-170 | 第197図-5b | 238 | 鉄 | 鑿 | (99.5) | 刃部長83.7 | 刃部*7.0 | 刃部*11.0 | 茎部*4.7 | 茎部*8.1 | 30.60 | 覆土中 | 大型,刃部から茎部にかけて遺存,5bと同一個体 |
| SI-171 | 第199図-10a | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (33.5) | – | *6.8 | *5.5 | – | – | 3.43 | 覆土下 | 10bと同一個体 |
| SI-171 | 第199図-10b | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (37.0) | – | *6.0 | *5.5 | – | – | 10.37 | 覆土下 | 10aと同一個体 |
| SI-171 | 第199図-15 | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (51.5) | – | *19.3 | *3.7 | – | – | 13.28 | 覆土上 | |
| SI-171 | 第199図-17 | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (33.8) | (25.4) | – | *0.8 | – | – | 1.23 | 覆土下 | |
| SI-172 | 第200図-3 | 238 | 鉄 | 引手状鉄製品 | (50.5) | – | *6.5 | *5.8 | 環部外径35.4 | 環部内径21.5 | 15.89 | 覆土上 | |
| SI-172 | 第200図-5 | 238 | 銅 | 名称不祥 | (23.0) | – | *21.0 | *1.8 | – | – | 2.08 | 覆土下 | 銅製品断片 |
| SI-178 | 第204図-11 | 238 | 鉄 | 名所不祥 | (14.6) | – | *17.5 | *0.7 | – | – | 1.12 | 覆土上 | 鉄片 |
| SI-188 | 第213図-9 | 238 | 鉄 | 環状鉄製品 | 外径27.8 | 内径23.0 | *6.5 | *2.5 | – | – | 5.15 | 覆土中 | 金属利器の茎部を固定する柄木の箍? |
| SI-192 | 第218図-21 | 238 | 鉄 | 燧鉄 | 70.8 | – | *22.8 | *2.5 | 孔径5.3 | – | 11.46 | 覆土上 | |
| SI-202 | 第227図-8 | 238 | 鉄 | 鑿 | (71.0) | 刃部長43.0 | 刃部*4.6 | 刃部*2.5 | 茎部*4.8 | 茎部*4.0 | 6.91 | 覆土中 | 先端に小規模な刃部を作り出している |
| SI-212 | 第243図-19 | 238 | 銅 | 名称不祥 | (49.0) | – | *29.0 | *1.2 | 孔径8.0×10.0 | – | 7.49 | 覆土中 | 銅製品 |
| SI-213 | 第244図-12 | 238 | 鉄 | 門金具 | (106.3) | 最大幅52.8 | 先端部*4.8 | 先端部*2.0 | 後端部*8.0 | 後端部*5.2 | 33.97 | 覆土中 | 同一個体2点あり |
| SI-216 | 第247図-10 | 238 | 鉄 | 鉄斧 | 79.0 | 刃部幅41.0 | 袋部幅35.0 | 袋部厚19.0 | – | 袋部板厚3.3 | 115.65 | 覆土下 | 折り返し式の袋状鉄斧,ほぼ完形 |
| SI-253 | 第273図-8 | 238 | 鉄 | 装飾金具 | 18.0 | 幅13.5 | *5.0 | *2.0 | 孔長9.0 | 孔幅4.5 | 1.36 | 一括 | |
| SI-257 | 第278図-21 | 238 | 鉄 | 門金具 | 87.5 | 最大幅55.0 | *7.8 | *4.0 | 後端部9.0 | 後端部5.0 | 39.75 | 覆土下 | ほぼ完形 |
| SI-258 | 第279図-6 | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (49.5) | – | *12.5 | *2.5 | – | – | 9.83 | 一括 | ほぼ完形 |
| SI-261 | 第280図-9 | 238 | 鉄 | 環状鉄製品 | 外径32.0 | 内径25.5 | *3.0 | *2.5 | – | – | 9.24 | 覆土上 | 金属利器の茎部を固定する柄木の箍? |
| SB-040 | 第304図-2 | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (24.5) | – | *4.8 | *2.0 | – | – | 1.66 | 一括 | |

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 材質 | 製品名 | 全長 (mm) | 補足長 (mm) | 断面a幅 (mm) | 断面a厚 (mm) | 断面b幅 (mm) | 断面b厚 (mm) | 現重量 (g) | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SB-045 | 第306図-1 | 238 | 鉄 | 熔鉄 | 74.0 | − | *14.0 | *3.0 | 孔径5.5 | − | 30.21 | 覆土中 | ほぼ完形 |
| SK-221 | 第328図-1 | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (123.8) | − | *10.0 | *3.0 | − | − | 21.12 | 底面 | SX-004-1と同一個体の可能性あり |
| SK-250 | 第315図-3 | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (17.5) | − | *2.7 | *2.0 | − | − | 0.62 | 一括 | |
| SD-025 | 第342図-2 | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (73.5) | − | *10.0 | *4.5 | 後端部9.0 | 後端部5.0 | 15.57 | 一括 | |
| SX-004 | 第333図-1 | 238 | 鉄 | 名称不祥 | (106.0) | − | *8.0 | *2.2 | − | − | 13.01 | 一括 | SB-040-2と同一個体の可能性あり |

## 第21表　紡錘車計測表

＊断面部位,（ ）現存・復元値

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 材質 | 紡輪(mm) 下面径 | 紡輪(mm) 上面径 | 紡輪(mm) 厚さ | 穿孔径 (mm) | 軸(mm) 長 | 軸(mm) 径 | 現重量 (g) | 遺存度 (%) | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-011 | 第76図-12 | 244 | 滑石 | 28.0 | 36.5 | *14.0 | 7.0 | − | − | 21.15 | 95 | 覆土下 | 表面摩耗顕著 |
| SI-052 | 第98図-2 | 244 | 滑石 | (8.0) | (16.0) | *15.5 | (7.0) | − | − | 18.93 | 45 | 覆土下 | 上面欠損 |
| SI-058 | 第102図-10 | 244 | 滑石 | 32.0 | 37.5 | *18.0 | 8.0 | − | − | 47.73 | 99 | 床直 | 線刻文様及び線刻文字あり |
| SI-140 | 第168図-3 | 244 | 滑石 | (38.0) | 43.0 | *9.0 | 8.0 | − | − | 24.96 | 70 | 床直 | 下面1/2欠損 |
| SI-151 | 第177図-21 | 244 | 流紋岩 | 31.0 | 40.0 | *19.5 | 9.0 | − | − | 36.99 | 95 | 覆土下 | 表面若干摩耗 |
| SI-171 | 第199図-19 | 244 | 滑石 | 35.0 | 43.0 | *14.0 | 9.0 | − | − | 43.83 | 95 | 覆土下 | 下面中央部に径22mmの凹み |
| SI-180 | 第207図-14 | 244 | 滑石 | 26.5 | 33.0 | *15.5 | 6.5×8.0 | − | − | 32.63 | 99 | 覆土中 | ほぼ完形 |
| SI-214 | 第245図-9 | 244 | 土製品 | 32.0 | 44.0 | *14.0 | 7.0 | − | − | 30.44 | 100 | 覆土下 | 黒色,上面内側に凹む |
| SI-217 | 第248図-9 | 244 | カンラン岩(一部蛇紋岩化) | 38.0 | 44.0 | *13.5 | 7.2 | − | − | 50.95 | 99 | 覆土下 | 表面光沢あり,ほぼ完形 |
| SI-240 | 第262図-9 | 244 | 滑石 | 36.0 | 41.5 | *12.0 | 8.0 | − | − | 33.45 | 95 | 床直 | 下面中央部に径22mmの凹み |
| SI-255 | 第275図-12 | 243 | 須恵器 | 45.0 | 52.5 | *7.0 | 7.0 | − | − | 25.58 | − | 覆土下 | 須恵器甕の底部転用 |
| SD-003 | 第341図-21 | 244 | 滑石 | 21.0 | 45.0 | *5.5 | 6.0 | − | − | 16.69 | 80 | 覆土下 | 外輪部一部欠損 |
| SD-003 | 第341図-17 | 244 | 土製品 | (30.0) | 34.0 | *17.0 | 7.0 | − | − | 17.61 | 45 | 覆土上 | 外面にぶい赤褐色 |
| SD-023 | 第346図-3 | 244 | 滑石 | (34.0) | (44.0) | (*16.5) | (8.0) | − | − | 21.28 | 40 | 一括 | 破断面若干摩耗 |
| SI-153 | 第181図-25 | 239 | 鉄製品 | 56.0 | 59.0 | *2.0 | 5.0 | (144.5) | *4.3 | 55.96 | 70 | 覆土中 | 軸断面は方形 |
| SI-172 | 第200図-4 | 239 | 鉄製品 | (42.5) | 42.5 | *1.4 | 3.0 | − | − | 12.39 | − | 覆土中 | 紡輪のみ |
| SI-178 | 第205図-12 | 239 | 鉄製品 | 52.8 | 53.0 | *2.5 | 5.0×6.0 | (286.2) | *5.0 | 55.63 | 90 | 覆土中 | 軸断面は方形,糸遺存 |
| SI-208 | 第236図-17 | 239 | 鉄製品 | − | − | − | − | (105.0) | *4.8 | 8.34 | − | 覆土上 | 軸のみ |
| SI-208 | 第236図-18 | 239 | 鉄製品 | 44.5 | (45.5) | *2.0 | (3.0) | (213.6) | *3.0 | 22.60 | 95 | 床直 | 軸断面は方形 |
| SD-003 | 第341図-19 | 239 | 鉄製品 | 41.0 | (41.5) | *1.3 | 4.0×3.6 | − | − | 11.40 | − | 覆土中 | 紡輪のみ |
| 不明 | 第320図-25 | 239 | 鉄製品 | − | (55.0) | *1.2 | − | − | − | 17.31 | − | − | 紡輪? |

## 第22表　椀形鍛冶滓計測表

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 現全長 (mm) | 現幅 (mm) | 現厚 (mm) | 現重量 (g) | 出土状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-029 | 第59図-9 | 237 | 59.0 | 51.0 | 25.4 | 89.64 | 覆土上 | 古墳時代後期,メタルなし |
| SI-113 | 第151図-27 | 237 | 126.8 | 106.0 | 32.0 | 311.32 | 覆土上 | メタルなし |
| SI-171 | 第199図-18 | 237 | 70.0 | 59.6 | 25.5 | 74.39 | 覆土上 | メタルなし |
| SI-178 | 第205図-16 | 237 | 102.3 | 91.7 | 33.5 | 257.51 | 覆土下 | メタルなし |
| SI-191 | 第216図-16 | 237 | 75.0 | 54.0 | 23.0 | 95.64 | 覆土上 | メタルなし |
| SI-192 | 第218図-22 | 237 | 54.0 | 50.0 | 23.0 | 71.79 | 覆土下 | メタルなし |
| SI-192 | 第218図-23 | 237 | 69.5 | 69.0 | 23.0 | 110.52 | 覆土下 | メタルなし |
| SI-250 | 第271図-10 | 237 | 49.0 | 40.0 | 22.0 | 13.25 | 覆土上 | メタルなし |
| SK-265 | 第316図-2 | 237 | 37.2 | 34.3 | 21.8 | 32.38 | 一括 | メタルなし |
| SD-003 | 第344図-20 | 237 | 50.3 | 31.8 | 13.4 | 27.81 | 一括 | メタルなし |

## 第23表　支脚計測表

＊断面部位,（ ）現存値

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 材質 | 色調 | 計測値(㎜) | | | | 現重量 | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 上端部径 | 下端部径 | 断面径 | 高さ | (g) | | |
| SI-020 | 第81図-11 | 241 | 土製 | 赤褐色 | 31.0 | 60.0 | *63.5 | (191.0) | 615.0 | カマド内火床部 | 下部の一部を欠損 |
| SI-043 | 第91図-11 | 241 | 土製 | 赤褐色 | 36.0 | - | *52.0 | (103.0) | 269.7 | カマド内火床部 | 上端部のみ完存 |
| SI-061 | 第105図-16 | 241 | 土製 | 赤褐色 | 52.0 | - | *78.0 | (126.0) | 480.0 | カマド内煙道部 | 上端部のみ完存 |
| SI-064 | 第109図-9 | 241 | 土製 | 赤褐色 | 37.0 | 128.0 | *86.0 | 107.0 | 910.0 | カマド外左袖付近 | 完存 |
| SI-065 | 第110図-4 | 241 | 土製 | 赤褐色 | (67.5) | - | *68.0 | (98.0) | 290.0 | 覆土下層 | 上端部のみ遺存 |
| SI-066 | 第61図-1 | 241 | 土製 | 赤褐色 | - | 113.0 | *108.5 | (154.0) | 1,038.0 | カマド外右袖付近 | 古墳時代後期,上端部欠損 |
| SI-067 | 第111図-4 | 241 | 土製 | 赤褐色 | 31.0 | 120.0 | *104.0 | 177.0 | 1,460.0 | カマド内火床部 | ほぼ完存 |
| SI-069 | 第113図-7 | 241 | 土製 | 赤褐色 | 54.0 | 87.0 | *89.0 | 141.0 | 680.0 | カマド内火床部正立 | ほぼ完存 |
| SI-072 | 第116図-6 | 241 | 土製 | 赤褐色 | 23.0 | - | *86.0 | (146.0) | 670.0 | カマド外右袖付近 | 下端部欠損 |
| SI-075 | 第120図-11 | 241 | 土製 | 赤褐色 | 35.0 | - | *73.5 | (132.0) | 510.0 | 北西コーナー床面 | 下端部欠損 |
| SI-077 | 第122図-13 | 241 | 土製 | 赤褐色 | 48.0 | - | *77.0 | (150.0) | 570.0 | カマド焚き口部付近 | 2点同一個体不接合,下端部欠損 |
| SI-078 | 第123図-9 | 241 | 土製 | 赤褐色 | (62.0) | - | *106.0 | (154.0) | 1,330.0 | カマド外左袖付近 | 被熱による劣化顕著 |
| SI-084 | 第63図-6 | 241 | 土製 | 赤褐色 | 39.0 | - | *49.0 | (114.0) | 295.0 | 覆土下層 | 古墳時代後期,下端部欠損 |
| SI-107 | 第147図-8 | 241 | 土製 | 赤褐色 | (53.0) | - | *63.5 | (118.0) | 390.0 | カマド内火床部 | 下端部欠損 |
| SI-113 | 第151図-22 | 241 | 土製 | 赤褐色 | (48.0) | 75.5 | *78.5 | (138.0) | 750.0 | 覆土中層 | 上端部欠損 |
| SI-115 | 第65図-15 | 241 | 土製 | 赤褐色 | 51.0 | - | *103.0 | (160.0) | 1,210.0 | カマド外左袖付近 | 下端部欠損 |
| SI-116 | 第66図-12 | 242 | 土製 | 赤褐色 | 32.0 | - | *76.0 | (181.0) | 868.0 | カマド外左袖付近 | 下端部欠損 |
| SI-119 | 第156図-8 | 242 | 土製 | 赤褐色 | 58.0 | - | *80.5 | (242.0) | 1,400.0 | カマド内火床部正立 | ほぼ完存 |
| SI-132 | 第161図-5 | 242 | 土製 | 赤褐色 | 38.0 | - | *97.0 | 188.0 | 1,180.0 | カマド外焚口付近 | 下端部の多くを欠損 |
| SI-156 | 第186図-13 | 242 | 土製 | 赤褐色 | (50.0) | - | *92.5 | (128.0) | 620.0 | カマド内火床部正立 | 下端部欠損 |
| SI-165 | 第193図-22 | 242 | 土製 | 赤褐色 | (50.0) | - | *92.5 | (128.0) | 620.0 | カマド内火床部正立 | 下端部欠損 |
| SI-179 | 第206図-5 | 242 | 土製 | 赤褐色 | 43.0 | 80.0 | *84.5 | 109.0 | 465.5 | カマド内煙道部 | ほぼ完存 |
| SI-191 | 第215図-11 | 242 | 土製 | 赤褐色 | 43.0 | - | *76.8 | (123.0) | 525.3 | カマド内火床部正立 | 下端部欠損 |
| SI-204 | 第230図-15 | 242 | 土製 | 赤褐色 | (54.0) | - | *73.2 | 189.0 | 830.0 | カマド内火床部正立 | ほぼ完存 |
| SI-210 | 第238図-2 | 242 | 土製 | 赤褐色 | - | - | *91.8 | 217.0 | 1,490.0 | カマド内火床部正立 | 上端部の一部欠損,遺存良好 |
| SI-212 | 第243図-15 | 242 | 土製 | 赤褐色 | - | - | *96.0 | (255.0) | 610.0 | カマド内 | 両端部欠損,2点接合 |
| SI-216 | 第247図-9 | 242 | 土製 | 赤褐色 | - | - | *77.0 | (149.0) | 710.0 | カマド外焚口付近 | 2点接合,下端部欠損 |
| SI-229 | 第254図-12 | 242 | 土製 | 赤褐色 | 45.0 | - | *62.0 | (76.0) | 222.0 | 南コーナー床面 | 下端部欠損 |
| SI-233 | 第257図-14 | 242 | 土製 | 赤褐色 | 50.0 | - | *87.0 | (112.0) | 600.0 | カマド外右袖付近 | 被熱による劣化顕著,下端部欠損 |
| SI-235 | 第258図-2 | 242 | 土製 | 赤褐色 | 59.0 | - | *80.0 | (116.0) | 445.0 | カマド内火床部正立 | 被熱による劣化顕著,下端部欠損 |
| SI-238 | 第260図-6 | 242 | 土製 | 赤褐色 | 35.0 | - | *87.0 | (163.0) | 720.0 | カマド外左袖付近 | 下端部欠損 |
| SI-244 | 第265図-14 | 242 | 土製 | 赤褐色 | (50.0) | 100.0 | - | 145.0 | 790.0 | カマド外右袖付近 | ほぼ完存 |
| SI-246A | 第269図-15 | 243 | 土製 | 赤褐色 | - | - | *68.0 | (135.0) | 600.0 | カマド内火床部正立 | 両端部欠損 |
| SI-255 | 第275図-11 | 243 | 土製 | 赤褐色 | 55.0 | - | *62.0 | (77.0) | 250.0 | カマド内火床部 | 上端部のみ完存 |
| SI-257 | 第278図-18 | 243 | 土製 | 赤褐色 | - | - | *83.0 | (156.0) | 673.0 | カマド内火床部 | 被熱による劣化顕著 |
| SI-259 | 第279図-2 | 243 | 土製 | 赤褐色 | 48.0 | - | *77.0 | (146.0) | 690.0 | カマド内火床部正立 | 上端部完存 |
| SB-051A | 第310図-1 | 243 | 土製 | 赤褐色 | - | - | *61.0 | 106.0 | 210.0 | P2覆土中 | 被熱による劣化顕著,下端部欠損 |

## 第24表　土製品計測表

＊断面部位,（ ）復元・現存値

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 名称 | 色調 | 計測値 (㎜) | | | | 現重量 | 遺存度 | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 短径 | 長径 | 厚さ | 孔径 | (g) | (%) | | |
| SI-141 | 第169図-8 | 243 | 土器片円板 | 明黄褐色 | 73.0 | (74.0) | 14.0 | (12.0) | 37.2 | 55 | 一括 | 土器底部転用 |
| SI-201 | 第226図-8 | 243 | 加工土器片 | 暗褐色 | 26.0 | 33.0 | 16.0 | 4.0 | 11.5 | - | 一括 | 穿孔 |
| SI-205 | 第231図-12 | 243 | 土器片円板 | 暗赤褐色 | 62.0 | 64.0 | 10.0 | 11.0 | 40.0 | 100 | 覆土中 | 土器底部転用 |
| SI-208 | 第236図-13 | 243 | 土器片円板 | 暗褐色 | (44.0) | (47.0) | (7.0) | (7.0) | 7.0 | 45 | 一括 | 土器胴部転用 |

## 第25表　羽口計測表

＊断面部位,（ ）復元・現存値

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 材質 | 色調 | 計測値 (㎜) | | | | | 現重量 | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 上端部径 | 下端部径 | 中心孔径 | 断面径 | 長 | (g) | | |
| SI-029 | 第59図-8 | 243 | 土製 | 青灰色 | – | – | 26.0 | 75.0 | (90.5) | 265.5 | 覆土上層 | 古墳時代後期,アメ状溶着,還元・酸化被熱明瞭 |
| SI-192 | 第218図-15 | 243 | 土製 | 青灰色 | – | – | (16.0) | – | (26.0) | 6.5 | 一括 | 先端部片,アメ状溶着あり |
| SI-211 | 第241図-35 | 243 | 土製 | 褐色 | – | – | 12.0 | 45.0 | (157.0) | 435.0 | カマド内 | 支脚転用23L-34-21と同一個体 |
| SI-230 | 第255図-7 | 243 | 土製 | 黄褐色 | 41.5 | – | (25.0) | (80.0) | (113.0) | 490.0 | 覆土中層 | 器面及び破断面の劣化激しい |
| SI-230 | 第255図-8 | 243 | 土製 | 灰褐色 | – | – | (20.0) | (60.0) | (43.0) | 52.6 | 覆土中層 | 先端部片,アメ状溶着あり |
| 23K-07 | 第320図-20 | 243 | 土製 | 橙褐色 | – | – | (10.0) | (27.0) | (45.0) | 21.5 | 一括 | 還元被熱明瞭 |
| 23L-34 | 第320図-21 | 243 | 土製 | 青灰色 | – | – | (9.0) | (41.0) | (45.0) | 53.9 | 覆土上 | SI-211-35と同一個体,還元被熱明瞭 |

第26表　玉類計測表

＊断面部位,（　）復元・現存値

| 遺構 | 挿図番号 | 図版番号 | 名称 | 材質 | 計測値(㎜) | | | 孔径 | 現重量 | 遺存度 | 出土状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 短径 | 長径 | 厚さ | (㎜) | (g) | (%) | | |
| SI-032 | 第57図-1 | 243 | 臼玉 | 石製品（滑石） | 7.0 | 7.0 | 6.0 | 3.5 | 0.38 | – | 覆土上 | 弥生,管玉から臼玉に再加工か |
| SI-108 | 第148図-5 | 243 | 土玉 | 土製品 | 30.0 | 30.0 | *25.0 | 5.0 | 22.32 | 100 | 覆土中 | 煤付着 |
| SI-132 | 第161図-7 | 243 | 小玉 | 土製品 | 8.5 | 9.0 | 6.5 | 2.5～3.0 | 0.56 | 100 | 覆土下 | |
| SI-157 | 第187図-6 | 243 | 丸玉 | 石製品(ヒスイ) | 15.0 | 19.5 | 13.0 | 4.0～7.5 | 4.55 | 100 | 覆土中 | |
| SD-003 | 第341図-18 | 243 | 土玉 | 土製品 | (24.0) | (24.0) | *15.0 | 6.0 | 2.67 | 35 | 覆土下 | 摩耗顕著 |

第27表　砥石計測表

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 全長 | 最大幅 | 厚 | 現重量 | 石材 | 出土状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | (㎜) | (㎜) | (㎜) | (g) | | | |
| SI-009 | 第74図-6 | 245 | 45.0 | 40.0 | 30.0 | 58.34 | 流紋岩 | 覆土中 | |
| SI-010 | 第75図-10 | 245 | 51.0 | 33.0 | 25.0 | 62.85 | 流紋岩 | 覆土下 | 穿孔あり |
| SI-011 | 第76図-13 | 245 | 95.0 | 48.0 | 48.0 | 148.96 | 流紋岩 | 覆土下 | |
| SI-044 | 第60図-3 | 245 | 115.0 | 51.0 | 35.0 | 248.19 | 流紋岩 | 床直 | 古墳時代後期 |
| SI-053 | 第98図-2 | 245 | 109.0 | 61.0 | 27.0 | 181.50 | 砂岩 | 床直 | |
| SI-054 | 第99図-2 | 245 | 66.0 | 70.0 | 44.5 | 226.32 | 流紋岩 | 覆土中 | 穿孔あり |
| SI-056 | 第100図-2 | 245 | 131.0 | 110.0 | 15.5 | 252.95 | 流紋岩 | 覆土下 | |
| SI-079 | 第62図-4 | 245 | 71.0 | 44.5 | 44.0 | 122.16 | 流紋岩 | 床直 | 古墳時代後期 |
| SI-084 | 第63図-7 | 245 | 86.0 | 59.0 | 36.0 | 129.81 | 砂岩 | 床直 | 古墳時代後期 |
| SI-092 | 第133図-26 | 245 | 73.0 | 49.0 | 56.0 | 199.42 | 流紋岩 | 床直 | |
| SI-092 | 第133図-27 | 245 | 49.0 | 46.0 | 27.5 | 54.11 | 流紋岩 | 床直 | |
| SI-093 | 第135図-14 | 245 | 49.0 | 36.0 | 30.0 | 57.05 | 流紋岩 | 覆土中 | |
| SI-097 | 第140図-10 | 245 | 75.0 | 38.0 | 48.0 | 48.18 | 流紋岩 | 覆土中 | |
| SI-109 | 第148図-10 | 245 | 66.0 | 39.0 | 25.0 | 77.75 | 流紋岩 | 床直 | |
| SI-119 | 第156図-9 | 245 | 45.0 | 27.0 | 22.0 | 25.15 | 流紋岩 | 覆土下 | 断面三角形 |
| SI-126 | 第159図-9 | 245 | 73.0 | 43.0 | 21.0 | 81.63 | 石英片岩 | 床直 | 穿孔あり |
| SI-131 | 第160図-11 | 245 | 84.0 | 50.0 | 45.0 | 199.26 | 流紋岩 | 床直 | |
| SI-138 | 第167図-11 | 245 | 100.0 | 55.0 | 32.0 | 170.13 | 砂岩 | 床直 | |
| SI-146 | 第171図-5 | 245 | 130.0 | 57.0 | 63.0 | 345.00 | 流紋岩 | 床直 | |
| SI-147 | 第173図-15 | 245 | 179.0 | 110.0 | 14.0 | 573.00 | 緑色片岩 | 床直 | 石棺材を転用 |
| SI-153 | 第181図-29 | 245 | 61.0 | 61.0 | 23.0 | 102.00 | 流紋岩 | 一括 | |
| SI-156 | 第186図-14 | 245 | 23.0 | 23.0 | 16.0 | 7.65 | 流紋岩 | 一括 | |
| SI-170 | 第197図-7 | 246 | 190.0 | 89.0 | 71.0 | 1430.00 | 流紋岩 | 覆土下 | |
| SI-172 | 第200図-7 | 246 | 127.0 | 49.0 | 38.0 | 305.00 | 砂岩 | 覆土中 | |
| SI-176 | 第203図-8 | 246 | 41.0 | 42.0 | 16.0 | 45.53 | 流紋岩 | 一括 | |
| SI-188 | 第213図-10 | 246 | 54.0 | 26.0 | 16.0 | 27.28 | 流紋岩 | 一括 | |
| SI-188 | 第213図-11 | 246 | 104.0 | 46.0 | 41.0 | 194.75 | 流紋岩 | 覆土下 | |
| SI-199 | 第224図-10 | 246 | 60.0 | 53.0 | 32.0 | 96.60 | 流紋岩 | 覆土下 | |
| SI-201 | 第226図-7 | 246 | 76.0 | 54.0 | 37.0 | 172.36 | 流紋岩 | 覆土上 | |
| SI-202 | 第227図-9 | 246 | 28.0 | 29.0 | 24.0 | 26.91 | 流紋岩 | 覆土下 | |
| SI-213 | 第244図-13 | 246 | 91.0 | 69.0 | 34.0 | 165.20 | 流紋岩 | 覆土中 | |
| SI-217 | 第248図-8 | 246 | 47.0 | 41.0 | 10.0 | 24.22 | 流紋岩 | 一括 | |
| SI-231 | 第256図-4 | 246 | 83.0 | 39.0 | 24.0 | 73.55 | 流紋岩 | 一括 | 穿孔あり |
| SI-244 | 第265図-15 | 246 | 37.0 | 36.0 | 21.0 | 35.97 | 流紋岩 | 一括 | |
| SI-257 | 第278図-19 | 246 | 63.0 | 46.0 | 27.0 | 65.80 | 流紋岩 | 覆土下 | |
| SI-262 | 第282図-25 | 246 | 101.0 | 48.0 | 51.0 | 173.83 | 流紋岩 | 一括 | |
| SI-263 | 第283図-2 | 246 | 71.0 | 40.0 | 40.0 | 167.11 | 流紋岩 | 床直 | |

第28表　軽石計測表

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 全長 (mm) | 最大幅 (mm) | 厚 (mm) | 現重量 (g) | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-046 | 第93図-7 | 247 | 26.0 | 20.0 | 13.0 | 1.42 | 下層 | 白色系 |
| SI-046 | 第93図-8 | 247 | 25.0 | 13.0 | 9.0 | 0.73 | 一括 | 黒色系 |
| SI-049 | 第96図-8 | 247 | 66.0 | 56.0 | 26.0 | 14.65 | 床面 | 白色系 |
| SI-049 | 第96図-9 | 247 | 32.0 | 28.0 | 18.0 | 2.40 | 下層 | 白色系 |
| SI-063 | 第108図-9 | 247 | 31.0 | 23.0 | 17.0 | 4.02 | 下層 | 白色系 |
| SI-089 | 第130図-12 | 247 | 23.0 | 16.0 | 15.0 | 1.19 | 一括 | 白色系 |
| SI-092 | 第133図-28 | 247 | 21.0 | 14.0 | 9.0 | 1.69 | 一括 | 白色系 |
| SI-094 | 第136図-12 | 247 | 36.0 | 26.0 | 20.0 | 5.32 | 一括 | 黒色系 |
| SI-097 | 第140図-11 | 247 | 55.0 | 41.0 | 27.0 | 12.78 | 上層 | 白色系 |
| SI-109 | 第148図-12 | 247 | 22.0 | 15.0 | 14.0 | 1.40 | 一括 | 黒色系 |
| SI-117 | 第153図-8 | 247 | 31.0 | 24.0 | 19.0 | 3.29 | 中層 | 白色系 |
| SI-117 | 第153図-9 | 247 | 21.0 | 14.0 | 10.0 | 0.71 | 一括 | 白色系 |
| SI-118 | 第155図-27 | 247 | 32.0 | 41.0 | 24.0 | 11.25 | 中層 | 白色系 |
| SI-118 | 第155図-28 | 247 | 30.0 | 21.0 | 16.0 | 3.25 | カマド一括 | 黒色系 |
| SI-118 | 第155図-29 | 247 | 28.0 | 25.0 | 12.0 | 2.80 | 一括 | 黒色系 |
| SI-118 | 第155図-30 | 247 | 27.0 | 22.0 | 15.0 | 1.66 | 一括 | 黒色系 |
| SI-141 | 第169図-10 | 247 | 36.0 | 28.0 | 12.0 | 2.21 | 一括 | 白色系 |
| SI-141 | 第169図-11 | 247 | 20.0 | 12.0 | 8.0 | 0.42 | 一括 | 白色系 |
| SI-147 | 第173図-16 | 247 | 36.0 | 38.0 | 28.0 | 10.00 | 床面 | 白色系 |
| SI-155 | 第184図-30 | 247 | 31.0 | 28.0 | 24.0 | 6.95 | 中層 | 黒色系 |
| SI-155 | 第184図-31 | 247 | 46.0 | 35.0 | 22.0 | 9.26 | 一括 | 白色系 |
| SI-162 | 第189図-2 | 247 | 17.0 | 16.0 | 14.0 | 0.82 | 一括 | 黒色系 |
| SI-164 | 第190図-11 | 247 | 36.0 | 44.0 | 25.0 | 7.30 | 床直 | 白色系 |
| SI-164 | 第190図-12 | 247 | 48.0 | 42.0 | 24.0 | 11.52 | 一括 | 白色系 |
| SI-164 | 第190図-13 | 247 | 31.0 | 28.0 | 16.0 | 4.68 | 一括 | 黒色系 |
| SI-169 | 第196図-12 | 247 | 27.0 | 19.0 | 18.0 | 2.59 | 床直 | 黒色系 |
| SI-179 | 第206図-6 | 247 | 26.0 | 23.0 | 14.0 | 2.58 | 一括 | 黒色系 |
| SI-192 | 第218図-24 | 247 | 26.0 | 21.0 | 11.0 | 1.99 | 一括 | 白色系 |
| SI-194 | 第220図-5 | 247 | 60.0 | 30.0 | 22.0 | 11.35 | 上層 | 白色系 |
| SI-201 | 第226図-9 | 247 | 25.0 | 24.0 | 12.0 | 1.71 | 一括 | 白色系 |
| SI-204 | 第230図-19 | 247 | 25.0 | 22.0 | 12.0 | 1.29 | 中層 | 黒色系 |
| SI-207 | 第234図-10 | 247 | 41.0 | 36.0 | 22.0 | 7.02 | 一括 | 白色系 |
| SI-207 | 第234図-11 | 247 | 20.0 | 18.0 | 11.0 | 0.74 | 一括 | 白色系 |
| SI-209 | 第237図-20 | 247 | 23.0 | 22.0 | 15.0 | 2.34 | 一括 | 白色系 |
| SI-212 | 第243図-20 | 247 | 29.0 | 24.0 | 19.0 | 4.35 | 一括 | 白色系 |
| SI-219 | 第250図-8 | 247 | 53.0 | 44.0 | 25.0 | 14.71 | 床面 | 白色系 |
| SI-219 | 第250図-9 | 247 | 19.0 | 15.0 | 14.0 | 1.32 | 一括 | 白色系 |
| SI-233 | 第257図-15 | 247 | 33.0 | 24.0 | 20.0 | 4.20 | 一括 | 白色系 |
| SI-242 | 第67図-2 | 247 | 42.0 | 33.0 | 31.0 | 9.15 | 一括 | 白色系 |
| SI-262 | 第282図-28 | 247 | 31.0 | 18.0 | 9.0 | 0.89 | 一括 | 白色系 |
| SD-003 | 第340図-22 | 247 | 28.0 | 23.0 | 17.0 | 3.75 | 一括 | 白色系 |
| SD-003 | 第340図-23 | 247 | 34.0 | 26.0 | 12.0 | 2.90 | 一括 | 黒色系 |
| SD-013 | 第344図-1 | 247 | 19.0 | 18.0 | 15.0 | 1.81 | 一括 | 白色系 |
| 22M-23 | 第320図-27 | 247 | 24.0 | 20.0 | 21.0 | 2.71 | 一括 | 白色系 |
| 不明 | 第320図-26 | 247 | 156.0 | 81.0 | 62.0 | 174.56 | ? | 白色系 |

第29表　中・近世土坑墓観察表　　（ ）は推定

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 長径 [m] | 短径 [m] | 深さ [m] | 壁 [形状] | 位置 [グリッド] | 出土遺物 | 備考 重複 [旧] [新] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-012 | 第322図 | 100 | 中・近世 | 隅丸長方 | 2.3 | 0.9 | 0.6 | 直急 | 24K-42 | − | 単独 |
| SK-013 | 第322図 | 100 | 中・近世 | 不整 | 2.1 | 1.7 | 0.8 | 急緩 | 22J-88 | − | 単独 |
| SK-028 | 第322図 | 101 | 中・近世 | 楕円 | 1.2 | 0.9 | 0.4 | 緩 | 23J-35 | 土師器小片数点 | 単独 |
| SK-029 | 第322図 | 102 | 中・近世 | 楕円 | 1.4 | 1.3 | 0.7 | 直緩 | 23J-15 | − | 単独 |
| SK-030 | 第322図 | 102 | 中・近世 | 楕円 | 2.0 | 1.7 | 0.4 | 急緩 | 23K-41 | − | 単独 |
| SK-031 | 第322図 | 102 | 中・近世 | 楕円 | 1.8 | (1.3) | 0.6 | 緩 | 23K-32 | 土師器小片数点 | 単独 |
| SK-275 | 第322図 | 108 | 中・近世 | (隅丸方) | 2.0 | (1.8) | 2.3 | 緩 | 23M-04 | 骨片 | SI-216 |

第30表　中・近世土坑観察表　　（　）は推定

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 長径[m] | 短径[m] | 深さ[m] | 壁[形状] | 位置[グリッド] | 出土(実測) 遺物 | 備考 重複[旧][新],(地区) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-002 | 第323図 | − | 中・近世 | 方 | 1.8 | 1.2 | 0.3 | 緩 | 23K-97 | 土器極小片数点 | SI-001　(中央) |
| SK-003 | 第323図 | 100 | 中・近世 | 不整 | 2.2 | 2.0 | 0.4 | 急緩 | 24K-91 | 土器極小片1 | 単独　(中央) |
| SK-007 | 第323図 | − | 中・近世 | 長楕円 | 1.7 | 0.7 | 0.6 | 急緩 | 21L-24 | − | 単独,底面階段状　(西) |
| SK-009 | 第323図 | − | 中・近世 | 不整 | 1.8 | 1.5 | 0.4 | 直 | 21K-57 | − | 単独　(西) |
| SK-014 | 第323図 | 100 | 中・近世 | 円 | 1.3 | 1.2 | 0.8 | 急 | 22J-78 | − | 単独　(北西) |
| SK-015 | 第323図 | − | 中・近世 | 長楕円 | 2.2 | 0.7 | 0.3 | 急 | 22K-80 | − | 単独　(西) |
| SK-017 | 第323図 | − | 中・近世 | 楕円 | 1.9 | 1.4 | 0.8 | 急 | 22J-48 | − | 単独　(北西) |
| SK-020 | 第323図 | 100 | 中・近世 | 楕円 | 1.1 | 0.9 | 0.4 | 急緩 | 23J-36 | − | 単独　(北西) |
| SK-021 | 第323図 | 101 | 中・近世 | 円 | 1.2 | 1.2 | 0.6 | 急 | 22J-59 | 土器極小片1 | 単独　(北西) |
| SK-022 | 第323図 | 101 | 中・近世 | 不整 | 2.1 | 1.6 | 0.6 | 緩直 | 23J-34 | 土器小片1,石1 | 単独　(北西) |
| SK-023 | 第323図 | 101 | 中・近世 | 円 | 1.5 | 1.5 | 0.9 | 直 | 23J-25 | − | 単独　(北西) |
| SK-024 | 第323図 | 101 | 中・近世 | 円 | 1.3 | 1.2 | 0.5 | 緩 | 23J-25 | − | 単独　(北西) |
| SK-025 | 第324図 | 101 | 中・近世 | 不整 | 1.6 | 1.6 | 1.0 | 直緩 | 23K-23 | 陶器極小片数点 | 単独　(西) |
| SK-026 | 第324図 | 101 | 中・近世 | 楕円 | 1.6 | 1.2 | 0.6 | 急 | 23J-80 | 陶器極小片数点 | 単独　(北西) |
| SK-027 | 第324図 | 101 | 中・近世 | 楕円 | 1.6 | 1.3 | 0.9 | 直 | 23K-13 | 石数点 | 単独　(西) |
| SK-032 | 第324図 | − | 中・近世 | 長楕円 | 2.2 | 0.9 | 0.5 | 急 | 22K-42 | 土器小片1,石1 | 単独　(西) |
| SK-035 | 第324図 | 102 | 中・近世 | 円 | 1.7 | 1.7 | 0.3 | 急 | 26K-90 | − | 単独　(東) |
| SK-036 | 第324図 | 102 | 中・近世 | 楕円 | 1.1 | 0.8 | 0.2 | 緩 | 25K-99 | − | 単独　(東) |
| SK-037 | 第324図 | 102 | 中・近世 | 円 | 1.3 | 1.1 | 0.4 | 急 | 25K-87 | 土器小片1 | 単独　(東) |
| SK-039 | 第324図 | 102 | 中・近世 | 不整 | 1.1 | 0.9 | 0.2 | 緩 | 25K-29 | − | 単独　(東) |
| SK-040 | 第324図 | − | 中・近世 | 不整 | 1.8 | 1.4 | 0.6 | 緩 | 25K-79 | 土器小片3 | 単独　(東) |
| SK-041 | 第324図 | − | 中・近世 | 長楕円 | 1.4 | 0.7 | 0.4 | 直 | 26K-65 | 土器小片1 | 単独　(東) |
| SK-042 | 第324図 | 102 | 中・近世 | 円 | 0.8 | 0.7 | 0.5 | 急 | 25K-38 | 陶器小片数点 | 単独　(東) |
| SK-044 | 第324図 | 103 | 中・近世 | 円 | 1.1 | 1.0 | 0.9 | 急 | 26K-00 | − | 単独　(東) |
| SK-045 | 第324図 | 103 | 中・近世 | 不整 | 1.5 | 1.0 | 0.5 | 直 | 26J-93 | − | 単独　(東) |
| SK-046 | 第324図 | 103 | 中・近世 | 不整 | 1.2 | (0.8) | 0.4 | 急 | 25K-43 | 土器極小片1,石1 | SI-070・071　(東) |
| SK-047 | 第325図 | 103 | 中・近世 | 円 | 0.9 | (0.9) | 0.4 | 直 | 25K-32 | 陶器極小片数点 | SI-070　(東) |
| SK-048 | 第325図 | 103 | 中・近世 | 円 | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 急 | 25K-12 | − | 単独　(東) |
| SK-050 | 第325図 | − | 中・近世 | 不整 | 1.7 | 1.4 | 0.5 | 緩 | 25J-92 | − | SI-085,SB-005・006　(東) |
| SK-051 | 第325図 | 103 | 中・近世 | 楕円 | 1.2 | 0.9 | 0.4 | 急 | 25J-72 | − | 単独　(東) |
| SK-052 | 第325図 | 103 | 中・近世 | 長楕円 | 2.5 | 1.0 | 0.2 | 急 | 25J-45 | − | 単独　(東) |
| SK-053 | 第325図 | − | 中・近世 | 不整 | 1.4 | 1.0 | 0.9 | 直 | 25I-54 | − | SI-104　(北東) |
| SK-054 | 第325図 | − | 中・近世 | 不整 | 1.4 | 1.2 | 0.5 | 直急 | 26J-14 | − | SI-097　(東) |
| SK-055 | 第325図 | 104 | 中・近世 | 円 | 1.1 | 1.0 | 0.4 | 直 | 25I-87 | − | 単独　(北東) |
| SK-059 | 第325図 | 104 | 中・近世 | 円 | 1.0 | 0.9 | 0.4 | 急 | 25I-66 | − | 単独　(北東) |
| SK-060 | 第325図 | 104 | 中・近世 | 楕円 | 2.5 | 1.5 | 0.3 | 緩 | 25I-78 | − | 単独　(北東) |
| SK-063 | 第325図 | − | 中・近世 | 不整 | 1.6 | 1.1 | 0.9 | 直 | 25I-33 | − | SB-025,SK-078　(北東) |
| SK-064 | 第325図 | − | 中・近世 | 隅丸長方 | 2.3 | 1.4 | 0.2 | 緩 | 25I-33 | 陶器極小片1 | SK-067・077　(北東) |
| SK-065 | 第325図 | − | 中・近世 | 円 | (1.1) | 0.9 | 0.5 | 急緩 | 25I-44 | 土器極小片数点 | 単独　(北東) |
| SK-066 | 第325図 | − | 中・近世 | 円 | 0.7 | 0.3 | 0.5 | 直急 | 25I-43 | 土器極小片1 | 単独　(北東) |
| SK-067 | 第325図 | − | 中・近世 | 円 | 1.1 | 1.0 | 0.6 | 直 | 25I-33 | 陶器極小片1 | SK-064　(北東) |
| SK-068 | 第326図 | − | 中・近世 | 円 | 0.8 | 0.7 | 0.5 | 直 | 25I-42 | − | SB-023　(北東) |
| SK-069 | 第326図 | − | 中・近世 | 円 | 0.9 | 0.9 | 0.7 | 直 | 25I-42 | − | SB-023　(北東) |
| SK-070 | 第326図 | − | 中・近世 | 円 | 0.8 | 0.7 | 0.9 | 直 | 25I-41 | − | SB-023　(北東) |
| SK-077 | 第326図 | − | 中・近世 | 円 | 0.8 | 0.7 | 0.3 | 急 | 25I-33 | − | SK-064　(北東) |
| SK-078 | 第326図 | − | 中・近世 | 円 | (0.9) | 0.8 | 0.2 | 緩 | 25I-43 | − | SK-063　(北東) |
| SK-079 | 第326図 | − | 中・近世 | 円 | 0.5 | 0.5 | 0.3 | 直 | 25I-45 | − | 単独　(北東) |
| SK-080 | 第326図 | − | 中・近世 | 隅丸長方 | 1.4 | 0.6 | 0.3 | 急 | 25I-33 | 土器極小片数点 | 単独　(北東) |
| SK-083 | 第326図 | − | 中・近世 | 円 | 1.2 | 1.2 | 0.4 | 急 | 25I-22 | − | SB-027　(北東) |
| SK-084 | 第326図 | − | 中・近世 | 円 | 1.3 | 1.3 | 0.7 | 直急 | 25I-22 | − | SB-027　(北東) |
| SK-085 | 第326図 | − | 中・近世 | 円 | 1.2 | 1.1 | 0.7 | 直 | 25I-44 | − | SI-118　(北東) |
| SK-096 | 第326図 | − | 中・近世 | 楕円 | 1.2 | 0.8 | 0.2 | 緩 | 25I-21 | − | 単独　(北東) |
| SK-097 | 第326図 | − | 中・近世 | 不整 | 1.4 | 1.1 | 0.5 | 急 | 25I-20 | (鉄鏃1) | 単独　(北東) |
| SK-101 | 第326図 | − | 中・近世 | 長楕円 | 2.2 | 0.7 | 0.2 | 急 | 23K-80 | 石数点 | SX-005　(西) |
| SK-102 | 第327図 | − | 中・近世 | 円 | 2.0 | 1.5 | 0.9 | 直緩 | 23L-03 | − | 単独　(中央) |
| SK-105 | 第327図 | − | 中・近世 | 隅丸長方 | 1.8 | 1.2 | 0.4 | 急 | 23L-92 | − | SB-013・014　(南西) |
| SK-124 | 第327図 | 105 | 中・近世 | 楕円 | 0.6 | 0.5 | 0.3 | 急 | 22M-27 | − | 単独　(南西) |
| SK-131 | 第327図 | − | 中・近世 | 楕円 | 1.4 | 1.1 | 0.4 | 緩 | 22M-49 | − | 単独　(南西) |
| SK-132 | 第327図 | − | 中・近世 | 楕円 | 0.7 | 0.6 | 0.3 | 直急 | 22M-49 | − | 単独　(南西) |
| SK-133 | 第327図 | − | 中・近世 | 楕円 | 1.1 | 0.8 | 0.3 | 急 | 23M-50 | − | 単独　(南西) |
| SK-134 | 第327図 | − | 中・近世 | 円 | 0.9 | 0.8 | 0.4 | 急 | 23M-40 | 土器小片1 | SI-152　(南西) |
| SK-143 | 第327図 | 106 | 中・近世 | 不整 | 1.3 | 0.7 | 0.5 | 急 | 22L-28 | − | 単独,埋土中に焼土堆積　(西) |

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 長径［m］ | 短径［m］ | 深さ［m］ | 壁［形状］ | 位置［グリッド］ | 出土（実測）遺物 | 備考 重複［旧］［新］，（地区） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-153 | 第327図 | － | 中・近世 | 円 | 1.0 | 1.0 | 0.2 | 緩 | 25I-23 | － | 単独 （北東） |
| SK-154 | 第327図 | － | 中・近世 | 円 | 1.1 | 0.9 | 0.2 | 緩 | 25I-14 | － | 単独 （北東） |
| SK-155 | 第327図 | － | 中・近世 | 円 | 1.2 | (1.0) | 0.7 | 直 | 25I-03 | 土器極小片数点 | SI-117 （北東） |
| SK-156 | 第327図 | － | 中・近世 | 円 | 1.3 | 1.1 | 0.4 | 急 | 25I-03 | － | 単独 （北東） |
| SK-162 | 第327図 | － | 中・近世 | 楕円 | 1.5 | 1.3 | 0.3 | 緩 | 25I-14 | 陶器極小片1 | 単独 （北東） |
| SK-175 | 第327図 | － | 中・近世 | 円 | 1.4 | 1.2 | 0.8 | 直 | 25I-02 | － | SI-115 （北東） |
| SK-179A | 第327図 | － | 中・近世 | 不整 | 1.8 | 1.2 | 0.6 | 直 | 25H-61 | 陶器極小片数点 | SK-179B （北東） |
| SK-179B | 第327図 | － | 中・近世 | － | － | － | 0.8 | 直 | 25H-61 | 陶器極小片数点 | SK-179A （北東） |
| SK-180 | 第328図 | － | 中・近世 | 不整 | － | 1.5 | 0.4 | 緩 | 24H-49 | － | FP-007,SK-181 （北東） |
| SK-181 | 第328図 | － | 中・近世 | 不整 | 2.0 | － | 0.9 | 緩急 | 24H-49 | 土器小片1 | FP-007,SK-180 （北東） |
| SK-187 | 第328図 | － | 中・近世 | 楕円 | 0.9 | 0.7 | 0.4 | 急 | 25H-96 | － | 単独 （北東） |
| SK-194 | 第328図 | － | 中・近世 | 円 | 1.4 | 1.3 | 1.1 | 直 | 24H-99 | 土器極小片数点,石1 | FP-004 （北東） |
| SK-196 | 第328図 | － | 中・近世 | 円 | 1.1 | 1.1 | 0.7 | 直 | 25I-52 | 石数点 | SB-024 （北東） |
| SK-197 | 第328図 | － | 中・近世 | 楕円 | 1.5 | 1.3 | 0.5 | 急 | 24H-78 | － | 単独 （北東） |
| SK-217 | 第328図 | － | 中・近世 | 円 | 1.0 | 1.0 | 0.6 | 直 | 25H-44 | － | 単独 （北東） |
| SK-221 | 第328図 | － | 近世 | 円 | 1.3 | 1.3 | 1.3 | 直 | 25H-33 | （鉄製品1,寛永通宝6） | SI-125 （北東） |
| SK-223 | 第328図 | 106 | 近世 | 方 | 1.7 | 1.6 | 0.8 | 直 | 25H-14 | － | 単独 （北東） |
| SK-224 | 第329図 | － | 中・近世 | 隅丸長方 | 1.3 | 0.8 | 0.8 | 直 | 26J-20 | － | 単独 （東） |
| SK-225 | 第329図 | － | 中・近世 | 楕円 | 1.0 | 0.7 | 0.3 | 急 | 25H-82 | － | 単独 （北東） |
| SK-226 | 第329図 | － | 中・近世 | 不整 | 1.7 | 1.5 | 1.1 | 直緩 | 24H-98 | 土器小片数点 | SD-016 （北東） |
| SK-227 | 第329図 | － | 中・近世 | 不整 | 2.2 | 0.9 | 0.7 | 緩 | 24H-98 | 土器小片数点 | SD-016 （北東） |
| SK-230 | 第329図 | － | 中・近世 | 長方 | 1.6 | 0.6 | 0.7 | 直 | 25J-36 | － | 単独 （東） |
| SK-235 | 第329図 | － | 中・近世 | 楕円 | 1.1 | 0.8 | 0.1 | 緩 | 25I-01 | － | SI-115 （北東） |
| SK-236 | 第329図 | － | 中・近世 | 楕円 | 1.3 | 1.0 | 0.2 | 緩 | 25I-00 | － | SI-115 （北東） |
| SK-238 | 第338図 | 106 | 近世 | 楕円 | (2.3) | 1.7 | 2.5 | 直 | 24L-84 | 土器小片数点 | SD-003,井戸? （中央） |
| SK-240 | 第329図 | 106 | 中・近世 | 長楕円 | 1.9 | 0.8 | 0.6 | 急 | 23L-38 | － | 単独 （中央） |
| SK-241 | 第329図 | 106 | 中・近世 | 細長楕円 | 2.2 | 0.6 | 0.3 | 緩 | 23L-39 | － | 単独 （中央） |
| SK-242 | 第329図 | － | 中・近世 | 楕円 | 1.6 | 0.8 | 0.3 | 緩 | 24L-52 | － | SD-021 （中央） |
| SK-243 | 第329図 | 106 | 中・近世 | 隅丸長方 | 2.6 | 1.4 | 0.4 | 緩 | 23M-68 | － | 単独,火葬墓? （南） |
| SK-258 | 第329図 | － | 中・近世 | 楕円 | 1.8 | 1.4 | 0.4 | 急 | 23M-37 | － | SD-026 （南西） |
| SK-259 | 第330図 | － | 近世 | 不整 | 2.9 | 1.7 | 0.7 | 緩 | 23M-64 | － | SD-006,SD-003 （南西） |
| SK-260 | 第330図 | 107 | 中・近世 | 隅丸方 | 1.6 | 1.6 | 1.7 | 直 | 23L-34 | 土器極小片数点 | SD-020 （中央） |
| SK-261 | 第330図 | 107 | 中・近世 | 長楕円 | 1.8 | 0.9 | 0.5 | 急 | 24M-51 | － | SB-038 （南） |
| SK-262 | 第330図 | 107 | 近世 | 楕円 | 3.6 | 2.4 | 2.8 | 直 | 23M-64 | － | 単独,陥し穴 （南西） |
| SK-263 | 第330図 | － | 中・近世 | 円 | 1.1 | 1.1 | 0.1 | 緩 | 23L-58 | － | 単独 （中央） |
| SK-266 | 第330図 | 108 | 中・近世 | 隅丸長方 | 2.7 | 1.6 | 0.5 | 急 | 23M-27 | 陶器極小片数点 | SB-041 （南西） |
| SK-267 | 第330図 | － | 中・近世 | 隅丸方 | 1.5 | 1.2 | 0.2 | 急 | 24L-91 | － | 単独 （中央） |
| SK-269 | 第331図 | － | 中・近世 | 円 | 1.3 | 1.2 | 0.3 | 緩 | 23M-08 | 土器極小片数点 | 単独 （中央） |
| SK-270A | 第331図 | 108 | 中・近世 | 不明 | (1.8) | (1.6) | 0.3 | 緩 | 23M-85 | － | SI-215,SD-005 （南西） |
| SK-270B | 第331図 | 108 | 中・近世 | 不明 | (1.0) | (0.3) | 0.3 | 緩 | 23M-86 | － | SI-215,SD-005 （南西） |
| SK-270C | 第331図 | 108 | 中・近世 | 不整形 | (3.3) | (2.6) | 0.3 | 緩 | 23M-86 | － | SI-215,SD-005 （南西） |
| SK-273 | 第331図 | － | 中・近世 | 円 | 1.2 | 1.1 | 0.2 | 緩 | 23M-56 | － | 単独 （南西） |
| SK-277 | 第331図 | 108 | 中・近世 | 楕円 | 1.2 | 0.7 | 0.3 | 急 | 24L-57 | － | 単独 （中央） |
| SK-280 | 第331図 | － | 中・近世 | 不整 | 0.8 | 0.6 | 0.9 | 急 | 24L-67 | － | 単独 （中央） |
| SK-287 | 第331図 | － | 中・近世 | 楕円 | 1.5 | 0.9 | 0.3 | 緩 | 25L-31 | 土器極小片数点 | 単独 （中央） |
| SK-292 | 第331図 | 108 | 中・近世 | 楕円 | 1.4 | 0.9 | 0.2 | 急 | 24K-96 | 石数点 | 単独 （中央） |
| SK-295 | 第331図 | 109 | 中・近世 | 円 | 0.8 | 0.8 | 0.2 | 緩 | 25K-90 | － | 単独 （中央） |
| SK-298 | 第331図 | 109 | 中・近世 | 円 | 0.8 | 0.7 | 0.1 | 緩 | 24K-98 | － | 単独 （中央） |
| SK-300 | 第331図 | 109 | 中・近世 | 円 | 0.8 | 0.7 | 0.1 | 緩 | 24K-98 | 土器極小片1 | 単独 （中央） |
| SK-301 | 第331図 | 109 | 中・近世 | 円 | 0.7 | 0.7 | 0.1 | 緩 | 24K-66 | － | SB-044 （中央） |
| SK-304 | 第331図 | 109 | 中・近世 | 不整 | 1.3 | 1.1 | 0.7 | 直 | 24K-88 | － | SI-248,SI-249 （中央） |
| SK-305 | 第331図 | － | 中・近世 | 円 | 0.5 | 0.5 | 0.2 | 急 | 25K-70 | － | 単独 （中央） |
| SK-306 | 第331図 | － | 中・近世 | 円 | 0.6 | 0.6 | 0.2 | 緩 | 25K-71 | － | 単独 （中央） |
| SK-309 | 第332図 | － | 中・近世 | 不整 | 2.7 | 2.2 | 0.2 | 緩 | 23N-06 | 土器小片数点 | SD-005,小竪穴 （南西） |
| SK-310 | 第332図 | 110 | 中・近世 | 不整 | (1.6) | 1.4 | 0.5 | 急緩 | 24M-92 | － | SI-259 （南） |
| SK-312 | 第332図 | － | 近世 | 方 | 1.5 | 1.2 | 0.5 | 急 | 23N-08 | － | SI-260,SD-035 （南） |
| SK-313 | 第332図 | － | 中・近世 | 長楕円 | 1.9 | 0.9 | 0.5 | 急 | 23N-18 | － | 単独 （南） |
| SK-314 | 第332図 | － | 中・近世 | 円 | 0.6 | (0.4) | 0.2 | 緩 | 24N-30 | 陶器極小片数点 | 単独 （南） |
| SK-316 | 第332図 | 110 | 中・近世 | 円 | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 直急 | 24N-10 | 土器極小片1 | 単独 （南） |
| SK-317 | 第332図 | 110 | 中・近世 | 隅丸方 | 1.3 | 1.3 | 0.1 | 緩 | 24N-20 | 土器極小片数点 | 単独 （南） |
| SK-318 | 第332図 | － | 中・近世 | 円 | 0.8 | 0.8 | 0.2 | 緩 | 24N-34 | － | 単独 （南） |
| SK-319 | 第332図 | － | 中・近世 | 円 | 0.5 | 0.5 | 0.2 | 緩 | 23N-12 | － | 単独 （南西） |
| SK-322 | 第332図 | － | 中・近世 | 方 | 1.1 | 0.8 | 0.5 | 直 | 24L-43 | － | 単独 （中央） |

第31表　小穴観察表

（　）は推定

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 平面形 | 長径［m］ | 短径［m］ | 深さ［m］ | 壁［形状］ | 位置［ｸﾞﾘｯﾄﾞ］ | 出土（実測）遺物 ＊実測不可 | 備考 重複［旧］［新］ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| P-001 | 334 | － | 奈良・平安? | 円 | 0.5 | 0.5 | 0.2 | 急 | 25J-24 | ＊土器極小片数点 | 単独 |
| P-002 | 334 | － | 不明 | 円 | 0.5 | 0.4 | 0.3 | 急 | 25J-25 | － | 単独 |
| P-003 | 334 | － | 不明 | 楕円 | 0.8 | 0.4 | 0.6 | 直急 | 25I-97 | － | 単独　A群 |
| P-004 | 334 | － | 不明 | 円 | 0.5 | 0.5 | 0.5 | 直急 | 25I-97 | － | 単独　A群 |
| P-005 | 334 | － | 不明 | 円 | 0.3 | 0.3 | 0.4 | 直 | 25I-97 | － | 単独　A群 |
| P-006 | 334 | － | 不明 | 楕円 | 0.5 | 0.3 | 0.7 | 直 | 25I-97 | － | 単独　A群 |
| P-007 | 334 | － | 不明 | 楕円 | 0.9 | 0.4 | 0.6 | 直急 | 25J-07 | － | 単独　A群 |
| P-008 | 334 | － | 奈良・平安? | 楕円 | 0.5 | 0.4 | 0.4 | 直急 | 25I-97 | ＊土器極小片数点 | 単独　A群 |
| P-009 | 334 | － | 不明 | 円 | 0.5 | 0.4 | 0.4 | 急 | 25I-88 | － | 単独 |
| P-010 | 334 | － | 不明 | 円 | 0.3 | 0.3 | 0.5 | 直 | 25I-30 | － | SI-112　B群 |
| P-011 | 334 | － | 不明 | 隅丸方 | 0.5 | 0.5 | 0.8 | 直 | 25I-62 | － | SB-022　B群 |
| P-012 | 334 | － | 不明 | 隅丸方 | 0.5 | 0.5 | 0.6 | 直 | 25I-72 | － | SB-022　B群 |
| P-013 | 334 | － | 不明 | 円 | 0.4 | 0.4 | 0.3 | 直 | 25I-42 | － | 単独　B群 |
| P-014 | 334 | － | 不明 | 円 | 0.5 | 0.5 | 0.3 | 急 | 25I-32 | － | 単独　B群 |
| P-015 | 334 | － | 不明 | 円 | 0.5 | 0.5 | 0.3 | 急 | 25I-72 | － | 単独　B群 |
| P-016 | 335 | － | 奈良・平安? | 楕円 | 0.8 | 0.6 | 0.4 | 緩 | 25I-72 | ＊土器少片１点 | 単独　B群 |
| P-017 | 335 | － | 不明 | 円 | 0.7 | 0.6 | 0.7 | 直 | 25I-62 | ＊土器極小片数点 | 単独　B群 |
| P-019 | 335 | － | 不明 | 円 | 0.4 | 0.4 | 0.5 | 直 | 24L-62 | － | 単独 |
| P-020 | 335 | － | 不明 | 円 | 0.3 | 0.3 | 0.5 | 直 | 24L-62 | － | 単独 |
| P-023 | 335 | － | 不明 | 円 | 0.7 | 0.6 | 0.4 | 急 | 24L-90 | － | 単独 |
| P-024 | 335 | － | 不明 | 円 | 0.9 | 0.8 | 0.4 | 急 | 23L-99 | － | 単独 |
| P-025 | 335 | － | 不明 | 楕円 | 0.7 | 0.5 | 0.6 | 直 | 23L-76 | － | 単独　C群 |
| P-026 | 335 | － | 不明 | 楕円 | 0.7 | 0.6 | 0.5 | 直 | 23L-77 | － | 単独　C群 |
| P-027 | 335 | － | 不明 | 楕円 | 0.5 | 0.4 | 0.6 | 直 | 23L-76 | － | 単独　C群 |
| P-028 | 335 | － | 不明 | 円 | 0.4 | 0.3 | 0.6 | 直 | 23L-76 | ＊土器極小片数点 | 単独　C群 |
| P-029 | 335 | － | 不明 | 不整 | 1.3 | 0.6 | 0.4 | 直急 | 23L-76 | ＊土器極小片数点 | 単独　C群 |
| P-030 | 335 | － | 不明 | 円 | 0.7 | 0.7 | 0.3 | 急 | 23L-65 | ＊土器極小片数点 | 単独　C群 |
| P-032 | 335 | － | 不明 | 円 | 0.8 | 0.7 | 0.4 | 急 | 23L-74 | － | 単独　C群 |
| P-033 | 335 | － | 奈良・平安? | 円 | 0.7 | 0.6 | 0.3 | 直 | 23L-65 | ＊土器小片数点 | 単独　C群 |
| P-034 | 335 | － | 不明 | 楕円 | 0.5 | 0.4 | 0.6 | 直 | 23L-64 | － | 単独　C群 |
| P-035 | 335 | － | 不明 | 楕円 | 0.6 | 0.5 | 0.4 | 直 | 23L-64 | － | 単独　C群 |
| P-036 | 336 | － | 不明 | 円 | 0.4 | 0.3 | 0.4 | 急 | 23M-36 | － | 単独　D群 |
| P-037 | 336 | － | 不明 | 楕円 | 0.7 | 0.6 | 0.3 | 直 | 23M-35 | － | 単独　D群 |
| P-038 | 336 | － | 不明 | 楕円 | 0.8 | 0.5 | 0.4 | 急 | 23M-35 | ＊土器小片数点 | 単独　D群 |
| P-039 | 336 | － | 奈良・平安? | 楕円 | 0.7 | 0.6 | 0.2 | 緩 | 23M-45 | ＊土器極小片数点 | 単独　D群 |
| P-40A | 336 | － | 不明 | 楕円 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 急 | 23M-46 | － | 単独　D群 |
| P-40B | 336 | － | 不明 | 楕円 | 0.7 | 0.6 | 0.3 | 緩 | 24K-37 | － | 単独 |
| P-041 | 336 | － | 不明 | 楕円 | 1.0 | 0.8 | 0.4 | 緩 | 25K-30 | ＊土器極小片数点 | 単独 |
| P-042 | 336 | － | 不明 | 円 | 0.4 | 0.4 | 0.6 | 急 | 24L-38 | ＊土器極小片数点 | 単独　E群 |
| P-043 | 336 | － | 不明 | 楕円 | 0.3 | 0.2 | 0.5 | 急 | 24L-38 | － | P-044　E群 |
| P-044 | 336 | － | 不明 | 楕円 | (0.2) | 0.2 | 0.2 | 急 | 24L-38 | － | P-043　E群 |
| P-045 | 336 | － | 不明 | 円 | 0.3 | 0.3 | 0.3 | 急 | 24L-39 | － | 単独　E群 |
| P-046 | 336 | － | 不明 | 円 | 0.2 | 0.2 | 0.3 | 急 | 24L-39 | － | 単独　E群 |
| P-048 | 336 | － | 不明 | 円 | 0.3 | 0.3 | 0.4 | 急 | 24L-39 | － | 単独　E群 |
| P-049 | 336 | － | 平安～中世? | 楕円 | 0.3 | 0.2 | 0.3 | 急 | 24L-29 | ｶﾜﾗｹ1，土器片数点 | 単独　E群 |
| P-050 | 336 | － | 不明 | 楕円 | 0.4 | 0.3 | 0.4 | 直急 | 25L-30 | － | 単独　E群 |
| P-052 | 336 | － | 不明 | 円 | 0.2 | 0.2 | 0.3 | 直 | 25L-31 | － | 単独　E群 |
| P-053 | 336 | － | 不明 | 円 | 0.3 | 0.3 | 0.5 | 直 | 25L-20 | － | 単独　E群 |
| P-055 | 336 | － | 不明 | 円 | 0.3 | 0.3 | 0.3 | 直急 | 24L-29 | － | 単独　E群 |
| P-056 | 336 | － | 不明 | 円 | 0.2 | 0.2 | 0.2 | 急 | 24L-29 | － | 単独　E群 |
| P-057 | 336 | － | 不明 | 楕円 | 0.3 | 0.2 | 0.4 | 急 | 24L-29 | － | 単独　E群 |
| P-059 | 336 | － | 不明 | 円 | 0.3 | 0.3 | 0.4 | 急 | 24L-29 | － | 単独　E群 |
| P-060 | 336 | － | 不明 | 円 | 0.3 | 0.3 | 0.2 | 急 | 24L-29 | － | 単独　E群 |
| P-061 | 336 | － | 不明 | 不整 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 急 | 24L-29 | － | 単独　E群 |
| P-062 | 336 | － | 不明 | 円 | 0.3 | 0.3 | 0.3 | 急 | 24L-28 | － | 単独　E群 |
| P-063 | 337 | － | 不明 | 円 | 0.2 | 0.2 | 0.2 | 急 | 24L-28 | － | 単独　E群 |
| P-064 | 337 | － | 不明 | 楕円 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 急 | 25L-30 | － | 単独　E群 |
| P-065 | 337 | － | 平安後 | 楕円 | 0.8 | 0.6 | 0.3 | 緩 | 24N-10 | 杯1 | 単独 |
| P-066 | 337 | － | 平安後 | 不整 | 0.6 | 0.4 | 0.2 | 緩 | 24N-10 | 土器片数点 | 単独 |
| P-067 | 337 | － | 平安後 | 楕円 | 0.3 | 0.2 | 0.6 | 直 | 24N-10 | 土器片数点 | 単独 |

## 第32表　溝状遺構観察表

（　）未発掘部の推定を含む

| 遺構No. | 挿図 | 図版 | 時期 | 長さ［m］ | 施設備考 | 遺物［須恵］［土師］ | 重複［旧］［新］ | 位置［南から］ | 備考［南から］ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SD-001 | 第339図 | － | 中・近世 | 55.0 | 道路状遺構 | 鉄釘1 | SI-021,SI-022 | 24K,23K | 西北西直 |
| SD-002 | 第339図 | － | 中・近世 | 48.0 | 境界状遺構 | － | 単独 | 23K,23J | 南北折東 |
| SD-003 | 第340図<br>第341図 | 111 | 奈良・平安<br>中・近世 | (301.0) | 道路状遺構<br>境界状柵列遺構 | 杯2,高台付杯3,壺1,瓶1,甕3,甑1,杯2,高台付皿2,甕1,紡錘車（鉄1,石1,土1）,明銭1,宋銭3,土玉1,椀形鍛冶滓1,軽石2 | 多数 | 24N,24M,<br>24L,23L,<br>23K,22K,<br>21K | 北北東折<br>北北西折<br>西北西直 |
| SD-004 | 第340図 | 111 | 中・近世 | 11.0 | 道路状遺構 | － | 単独 | 24L | 東西直 |
| SD-005 | 第342図 | 111 | 奈良・平安<br>中・近世 | 104.0 | 境界状遺構 | 杯1,高台付皿1,甕1,北宋銭3,鉄釘1 | 多数 | 23N,23M 23L | 南北直 |
| SD-006 | 第342図 | － | 中・近世 | 22.0 | 境界状遺構 | － | 単独 | 23M | 東西直 |
| SD-007 | 第342図 | － | 中・近世 | 13.0 | 境界状遺構 | － | 単独 | 23M | 南北直 |
| SD-008 | 第343図 | － | 中・近世 | 13.0 | 道路状遺構 | － | 単独 | 26L | 北東直 |
| SD-009 | 第340図 | － | 中・近世 | 2.0 | 境界状遺構 | － | SD-003 | 24L | 東西直 |
| SD-010 | 第342図 | － | 中・近世 | 7.0 | 境界状遺構 | 甕1 | SB-054 | 22M | 西北西直 |
| SD-011 | 第343図 | 112 | 中・近世 | 44.0 | 道路状遺構 | － | 多数 | 25L,26L | 東西直 |
| SD-012 | 第343図 | | 中・近世 | (29.0) | 境界状遺構 | － | SI-052～ SI-054 | 25K | 東西直 |
| SD-013 | 第344図 | 112 | 中・近世 | 7.0 | 道路状遺構 | 軽石1 | SI-070,SI-071 | 25K | 西北西直 |
| SD-014 | 第344図 | 112 | 中・近世 | (130.0) | 境界状柵列遺構 | 寛永通寶1 | 多数 | 25K,25J,25I | 南北曲 |
| SD-015 | 第345図 | － | 中・近世 | (27.0) | 境界状遺構 | － | 多数 | 24I,25I | 南北直 |
| SD-016 | 第345図 | － | 中・近世 | 77.0 | 境界状遺構 | － | 多数 | 24I,24H,25H | 南北折<br>東北東直 |
| SD-017 | 第345図 | － | 中・近世 | 21.0 | 道路状遺構 | － | SD-016 | 25H | 南北曲 |
| SD-018 | 第345図 | － | 中・近世 | 12.0 | 境界状遺構 | － | 単独 | 25H | 東西直 |
| SD-019 | 第345図 | － | 中・近世 | 19.0 | 道路状遺構 | － | SI-126 | 24I,24H | 南北直 |
| SD-020 | 第346図 | 112 | 中・近世 | 41.0 | 境界状遺構 | 鉄釘1 | SI-191,<br>SK-260,SD-003 | 23L,24L | 東西直 |
| SD-021 | 第346図 | 112 | 中・近世 | 30.0 | 境界状遺構 | － | SI-180,SK-242 | 24L | 東西折<br>北北西折<br>西折<br>北北西直 |
| SD-022 | 第346図 | 113 | 中・近世 | 12.0 | 境界状遺構 | － | 単独 | 24M | 東西曲 |
| SD-023 | 第346図 | 113 | 奈良・平安<br>中・近世 | 44.0 | 境界状遺構 | 杯1,刀子1,石製紡錘車1 | 多数 | 24M,23M | 東西折<br>北西折<br>西直 |
| SD-024 | 第346図 | 113 | 奈良・平安<br>中・近世 | (54.0) | 境界状遺構 | 甕1,甑1,高台付杯1,甕1 | SK-251,SK-255 | 24N,24M,23M | 東西折<br>南北直 |
| SD-025 | 第342図 | 111 | 中・近世 | (49.0) | 道路状遺構 | 鉄製品（鏃1,閂1,釘1,銭1） | SI-216,SK-274 | 23N,23M | 南北曲 |
| SD-026 | 第342図 | | 中・近世 | 12.0 | 境界状遺構 | － | 多数 | 23M | 南北直 |
| SD-028 | 第346図 | 113 | 中・近世 | 20.0 | 境界状柵列遺構 | － | SI-225 | 24L | 東西直 |
| SD-029 | 第343図 | 113 | 中・近世 | 30.0 | 境界状柵列遺構 | － | SI-233 | 25L | 西北西直 |
| SD-030 | 第343図 | 113 | 中・近世 | 38.0 | 道路状遺構 | － | SI-227,SD-031 | 26L,25L | 西北西直 |
| SD-031 | 第343図 | 113 | 中・近世 | 17.0 | 道路状遺構 | － | 単独 | 25L | 東西直 |
| SD-033 | 第340図 | － | 中・近世 | 7.0 | 境界状遺構 | － | SD-003 | 24N | 東西曲 |
| SD-034 | 第346図 | 113 | 中・近世 | 16.0 | 境界状遺構 | － | SD-035 | 23N,23M | 南北直 |
| SD-035 | 第346図 | 113 | 中・近世 | 9.0 | 境界状遺構 | － | SI-260,<br>SK-312,SD-034 | 23N | 北東折<br>西直 |
| SD-036 | 第340図 | － | 中・近世 | 10.0 | 境界状遺構 | － | SD-003 | 24N | 東西曲<br>北北西直 |

## 第33表　中・近世遺構外出土土器計測表

（　）現存・復元値

| 遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器種 | 遺存［%］ | 口径［cm］ | 底径［cm］ | 器高［cm］ | 最大径［cm］ | 色調［内/外］ | 胎土 | 調整［内/外］ | 備考［出土状況］ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 23M-02 | 第347図1 | 陶器 | 碗 | 5 | (13.0) | － | (2.5) | － | 灰色/灰色 | 長石,スコリア | ナデ/ナデ | 底部欠損,内外面ともに灰釉付着　［一括］ |
| 23M-64 | 第347図2 | 陶器 | 壺 | 5 | － | (9.0) | (4.0) | － | 灰色/灰色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ | 底部片,外面に灰釉付着　［一括］ |
| 24L-11 | 第347図3 | 陶器 | 壺 | 5 | － | (9.0) | (2.6) | － | 灰色/灰色 | スコリア,長石 | ナデ/ナデ | 底部片,内外面に灰釉付着　［一括］ |

## 第34表　銭貨観察表

（　）現存値

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 銭貨名 | 材質 | W (g) | G (mm) | N (mm) | g (mm) | n (mm) | T (mm) | t (mm) | 始鋳年 | 書体 | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SD-003 | 第341図-24 | 240 | 洪武通寶 | 銅 | 2.60 | 21.36 | 16.92 | 6.76 | 4.96 | 1.33 | 0.86 | 1368 | 楷書 | 9区一括 | 明銭　1と二枚重ね（上） |
| SD-003 | 第341図-25 | 240 | 元祐通寶 | 銅 | 2.67 | 24.56 | 20.66 | 9.28 | 6.98 | 1.63 | 0.90 | 1093 | 篆書 | 9区一括 | 北宋銭　2と二枚重ね(下) |
| SD-003 | 第341図-26 | 240 | 祥符元寶 | 銅 | 2.51 | 24.50 | 19.38 | 7.86 | 5.83 | 1.23 | 0.79 | 1008 | 楷書 | 7区中層 | 北宋銭 |
| SD-003 | 第341図-27 | 240 | 祥符元寶 | 銅 | 3.26 | 25.09 | 16.99 | 7.14 | 5.61 | 1.35 | 1.10 | 1008 | 楷書 | 8区中層 | 北宋銭 |
| SD-005 | 第342図-5 | 240 | (治?) 平元寶 | 銅 | (1.38) | – | – | – | – | – | – | 1064 | 篆書 | 覆土中 | 北宋銭 |
| SD-005 | 第342図-6 | 240 | 皇宋通寶 | 銅 | (1.63) | – | – | 8.99 | 7.49 | – | – | 1039 | 楷書 | 覆土上 | 北宋銭 |
| SD-005 | 第342図-7 | 240 | 大觀通寶 | 銅 | 2.41 | 25.39 | 21.24 | 8.43 | 6.31 | 1.38 | 0.75 | 1107 | 楷書 | 覆土上 | 北宋銭 |
| SD-014 | 第344図-1 | 240 | 寛永通寶 | 銅 | 3.17 | 24.50 | 19.15 | 7.53 | 5.77 | 1.30 | 0.85 | 1668 | | 確認面 | 「新寛永」　確認面出土 |
| SK-221 | 第328図-2A | 240 | 寛永通寶 | 銅 | 3.20 | 24.20 | 19.73 | 7.68 | 5.63 | 1.40 | 0.74 | 1636 | | 覆土上 | 「古寛永」　おそらく10,11と三枚重ねであったものが本銭だけが剥がれたものと思われる |
| SK-221 | 第328図-2B | 240 | 寛永通寶 | 銅 | 2.90 | 24.30 | 19.78 | 7.28 | 5.29 | 1.18 | 0.65 | 1636 | | 覆土上 | 「古寛永」　11と二枚重ね（下） |
| SK-221 | 第328図-2C | 240 | 寛永通寶 | 銅 | 4.19 | 24.45 | 20.03 | 7.06 | 5.28 | 1.63 | 1.11 | 1636 | | 覆土上 | 「古寛永」　10と二枚重ね（上） |
| SK-221 | 第328図-3A | 240 | 寛永通寶 | 銅 | 3.83 | 24.34 | 19.46 | 7.74 | 5.69 | 1.53 | 1.03 | 1636 | | 底面 | 「古寛永」　13,14と三枚重ね（上） |
| SK-221 | 第328図-3B | 240 | 寛永通寶 | 銅 | 2.59 | 24.61 | 19.51 | 7.10 | 5.51 | 1.03 | 0.51 | 1636 | | 底面 | 「古寛永」　12,14と三枚重ね（中） |
| SK-221 | 第328図-3C | 240 | 寛永通寶 | 銅 | 3.07 | 24.33 | 19.25 | 7.67 | 6.45 | 1.15 | 0.68 | 1636 | | 底面 | 「古寛永」　12,13と三枚重ね（下） |
| SX-003 | 第333図-1 | 240 | 寛永通寶 | 銅 | 2.84 | 24.60 | 19.72 | 8.28 | 6.28 | 1.19 | 0.74 | 1668 | | 表土 | 「新寛永」 |
| SX-003 | 第333図-2 | 240 | 寛永通寶 | 銅 | 2.67 | 23.00 | 18.32 | 7.70 | 5.81 | 1.29 | 0.66 | 1668 | | 表土 | 「新寛永」 |
| SX-004 | 第333図-2 | 240 | 寛永通寶 | 銅 | 2.68 | 23.26 | 18.35 | 8.65 | 6.41 | 1.25 | 0.78 | 1668 | | 表土 | 「新寛永」 |
| 23L-34 | 第347図-4 | 240 | 天聖元寶 | 銅 | 2.59 | 23.63 | 18.77 | 8.01 | 5.45 | 1.29 | 0.80 | 1023 | 楷書 | 一括 | 北宋銭 |
| 22M-00 | 第347図-5 | 240 | 文久永寶 | 銅 | 3.55 | 27.09 | 19.61 | 9.24 | 6.34 | 1.11 | 0.69 | 1863 | 深字 | 一括 | 11波 |
| 不明 | 第347図-6 | 240 | 寛永通寶 | 銅 | 3.79 | 24.48 | 19.09 | 7.77 | 5.39 | 1.36 | 0.98 | 1668 | | 不明 | 「新寛永」　確認面出土 |
| SD-025 | – | 240 | ? | 鉄 | – | – | – | – | – | – | – | – | | 覆土中 | 劣化が著しく計測不能 |
| SI-171 | – | 240 | ? | 鉄 | – | – | – | – | – | – | – | – | | 覆土上 | 劣化が著しく計測不能 |
| SX-003 | – | 240 | ? | 鉄 | – | – | – | – | – | – | – | – | | 表土 | 1/3片,劣化が著しく計測不能 |

## 第35表　線刻・ヘラ書き土器一覧

| 遺構 | 時期 | 一覧 | 図版 | 器質 | 器種 | 種別 | 内容 | 部位 | 土器の状態（遺存%） | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-004 | 8C④ | 第353図-1,2 | 141 | 土師 | 杯 | 線刻 | 「+」「+」 | 体部内外面 | 接合有・他欠損有（80%） | カマド内 | 打ち欠き土器 |
| SI-004 | 8C④ | 第353図-3 | 141 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 「−」「−」 | 底部外面2か所 | 接合有・他欠損有（50%） | 床直 | |
| SI-004 | 8C④ | 第353図-4,5 | 142 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 「+」「+」 | 体部・底部外面 | 接合有・他欠損有（10%） | 中層 | 千葉産須恵器 |
| SI-004 | 8C④ | 第353図-6 | 142 | 須恵 | 甕 | 線刻 | 詳細不明 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（75%） | 下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-006 | 9C後半 | 第353図-7 | 142 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 詳細不明 | 底部外面 | 破片 | 一括 | |
| SI-008 | 9C後 | 第353図-8 | 142 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 「−」 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（80%） | カマド内 | |
| SI-013 | 8C③ | 第353図-9,10 | 144 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 「=」複雑 | 体部・底部外面 | 接合無・他欠損無（100%） | 下層 | 茨城産須恵器 |
| SI-018 | 9C後 | 第353図-11 | 145 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 楕円状 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（75%） | 下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-023 | 9C中 | 第353図-12 | 146 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 「×」 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（85%） | 下層 | |
| SI-049 | 8C③ | 第353図-13,14 | 150 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 格子目状 | 体部外面,広範囲 | 接合有・他欠損有（35%） | 中・下層 | 茨城産須恵器 |
| SI-052 | 8C② | 第353図-15 | 151 | 須恵 | 杯 | 線刻・ヘラ書き | 「+」「+」 | 底部外面2か所 | 接合有・他欠損有（40%） | 床直 | 茨城産須恵器 |
| SI-057 | 8C③ | 第353図-16 | 151 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 「×」 | 体部内面 | 接合有・他欠損有（80%） | 上・下層 | 茨城産須恵器 |
| SI-061 | 9C後 | 第353図-17 | 152 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 「廿」 | 体部外面 | 接合無・他欠損有（95%） | カマド内 | 打ち欠き土器 |
| SI-071 | 9C中 | 第353図-18 | 156 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 「=」? | 底部外面 | 接合有・他欠損有（破片） | 下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-075 | 8C④ | 第353図-19 | 157 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 「×」 | 底部内面 | 接合有・他欠損有（85%） | 下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-075 | 8C④ | 第353図-20 | 157 | 須恵 | 高台付杯 | 線刻 | 「+」 | 体部内面 | 接合無・他欠損有（95%） | 床直 | 千葉産須恵器 |
| SI-080 | 8C④ | 第353図-21 | 159 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 「S」状 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（95%） | 床直 | 打ち欠き土器,千葉産須恵器 |
| SI-080 | 8C④ | 第353図-22,23 | 159 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 「+」「+」 | 底部内外面 | 接合無・他欠損有（破片） | 中層 | 千葉産須恵器 |
| SI-082 | 8C③ | 第353図-24 | 159 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 「×」 | 体部外面 | 接合有・他欠損有（50%） | 下層 | 茨城産須恵器 |
| SI-082 | 8C③ | 第353図-25 | 159 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 「廿」 | 体部外面 | 接合有・他欠損有（25%） | 下層 | 茨城産須恵器 |
| SI-089 | 8C② | 第353図-26 | 162 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 「+」「+」 | 体部外面2か所 | 接合有・他欠損有（65%） | 上・下層 | 茨城産須恵器 |
| SI-089 | 8C② | 第353図-27 | 162 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 「×」「×」 | 底部外面2か所 | 接合無・他欠損有（85%） | 中層 | 打ち欠き土器,内外面赤彩 |
| SI-092 | 9C前 | 第353図-28 | 162 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 「+」 | 体部内面 | 接合有・他欠損有（90%） | 中層 | 打ち欠き土器,千葉産須恵器 |
| SI-092 | 9C前 | 第353図-29 | 163 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 「×」 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（40%） | 中層 | 千葉産須恵器 |
| SI-092 | 9C前 | 第353図-30 | 163 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 「+」 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（20%） | 上・中層 | 千葉産須恵器 |
| SI-092 | 9C前 | 第353図-31 | 163 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 格子目状 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（20%） | 床面 | 千葉産須恵器 |
| SI-093 | 8C③ | 第353図-32 | 164 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 「×」 | 底部内面 | 接合有・他欠損有（70%） | 中　層,床面 | 茨城産須恵器 |

| 遺構 | 時期 | 一覧 | 図版 | 器質 | 器種 | 種別 | 内容 | 部位 | 土器の状態（遺存%） | 出土状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-093 | 8C③ | 第353図-33 | 164 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『廿』 | 体部外面 | 接合有・他欠損有（25%） | 中層 | 茨城産須恵器 |
| SI-093 | 8C③ | 第353図-34 | 164 | 須恵 | 甕 | 線刻 | 直線数条 | 胴部外面 | 接合無・他欠損有（20%） | 下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-094 | 9C後 | 第353図-35 | 165 | 土師 | 甕 | ヘラ書き | 『×』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（5%） | 下層 | |
| SI-095 | 8C④ | 第353図-36 | 165 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『×』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（50%） | 床面 | 千葉産須恵器 |
| SI-095 | 8C④ | 第353図-37 | 165 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『+』 | 体部内面 | 接合無・他欠損有（50%） | 下層 | 南比企産須恵器 |
| SI-095 | 8C④ | 第353図-38 | 165 | 土師 | 杯 | 線刻 | 『+』 | 体部内面 | 接合無・他欠損有（45%） | 床面 | |
| SI-095 | 8C④ | 第353図-39 | 165 | 土師 | 杯 | 線刻 | 『+』 | 体部内面 | 接合有・他欠損有（35%） | 中層 | |
| SI-097 | 8C② | 第353図-40 | 167 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『+』 | 体部内面 | 接合有・他欠損有（90%） | カマド内 | 打ち欠き土器,茨城産須恵器 |
| SI-097 | 8C② | 第353図-41 | 167 | 土師 | 杯 | 線刻 | 『+』 | 体部内面 | 接合有・他欠損有（90%） | カマド左袖脇 | |
| SI-103 | 8C③ | 第353図-42 | 168 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『−』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（80%） | 床面 | 打ち欠き土器,茨城産須恵器 |
| SI-103 | 8C③ | 第353図-43 | 168 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『×』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（70%） | 床　面,下層 | 南比企産須恵器 |
| SI-104 | 8C④ | 第353図-44 | 169 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『H』状 | 体部内面 | 接合有・他欠損有（90%） | 中層 | 千葉産須恵器 |
| SI-104 | 8C④ | 第353図-45 | 169 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『‖』 | 体部内面 | 接合無・他欠損有（40%） | 下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-104 | 8C④ | 第353図-46 | 169 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『×』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（35%） | 下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-115 | 8C末〜9C初 | 第353図-47 | 172 | 土師 | 杯 | 線刻 | 『+』 | 体部外面 | 接合有・他欠損無（100%） | カマド右袖脇 | 古墳時代後期（鬼高期） |
| SI-116 | 7C代 | 第353図-48 | 173 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『+』 | 底部外面 | 破片 | 一括 | 流れ込み,茨城産須恵器 |
| SI-118 | 8C④ | 第353図-49 | 174 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『?』 | 体部外面 | 接合有・他欠損有（40%） | 中層 | 刻書？,茨城産須恵器 |
| SI-118 | 8C④ | 第353図-50 | 174 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『−』 | 底部内面 | 接合有・他欠損有（55%） | 床直 | 茨城産須恵器 |
| SI-118 | 8C④ | 第353図-51 | 175 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『E』状 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（40%） | 下層 | 茨城産須恵器 |
| SI-118 | 8C④ | 第354図-52 | 175 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『−』 | 底部内面 | 接合無・他欠損有（60%） | 床直 | 打ち欠き土器,茨城産須恵器 |
| SI-118 | 8C④ | 第354図-53 | 175 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き・線刻 | 『×』『×』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（30%） | 中層 | 2か所・一部重複,茨城産須恵器 |
| SI-118 | 8C④ | 第354図-54,55 | 175 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き・線刻 | 『×』『×』 | 底部内外面 | 接合無・他欠損有（10%） | 中層 | 底部円形に加工,茨城産須恵器 |
| SI-118 | 8C④ | 第354図-56 | 175 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『−』 | 底部内面 | 接合無・他欠損有（5%） | 中層 | 底部円形に加工,茨城産須恵器 |
| SI-126 | 8C③ | 第354図-57 | 177 | 須恵 | 蓋 | 線刻 | 『−』 | 内面 | 接合無・他欠損有（60%） | 中層 | 茨城産須恵器 |
| SI-131 | 8C③ | 第354図-58 | 177 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『=』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（35%） | 床面 | 千葉産須恵器 |
| SI-134 | 9C中 | 第354図-59 | 178 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 『−』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（30%） | 一括 | |
| SI-140 | 8C④ | 第354図-60 | 180 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『−』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（40%） | 床直 | 千葉産須恵器 |
| SI-140 | 8C④ | 第354図-61 | 180 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き・線刻 | 複雑『+』 | 底部内外面 | 接合無・他欠損有（15%） | 一括 | 底部墨書『東酒』,茨城産須恵器 |
| SI-147 | 9C中 | 第354図-62 | 181 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き・線刻 | 複雑『+』 | 底部内外面 | 接合無・他欠損有（15%） | 一括 | 千葉産須恵器 |
| SI-147 | 9C中 | 第354図-63 | 181 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『+』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（55%） | 下層,床面 | 千葉産須恵器 |
| SI-147 | 9C中 | 第354図-64 | 181 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『−』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（25%） | 床直 | 千葉産須恵器 |
| SI-151 | 9C前 | 第354図-65 | 183 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『−』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（50%） | 床直 | 千葉産須恵器 |
| SI-151 | 9C前 | 第354図-66 | 183 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『?』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（25%） | 中・下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-151 | 9C前 | 第354図-67 | 183 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『+』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（10%） | 一括 | 千葉産須恵器 |
| SI-153 | 9C中 | 第354図-68 | 184 | 土師 | 皿 | ヘラ書き | 『=』数条 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（50%） | カマド内 | |
| SI-153 | 9C中 | 第354図-69 | 185 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『×』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（10%） | 上層 | 千葉産須恵器 |
| SI-153 | 9C中 | 第354図-70 | 185 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 『M』状他 | 底部外面 | 破片 | 中層 | 円盤状に加工,千葉産須恵器 |
| SI-153 | 9C中 | 第354図-71 | 185 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 『×』『−』 | 底部外面 | 破片 | 一括 | 千葉産須恵器 |
| SI-155 | 9C前 | 第354図-72 | 186 | 須恵 | 蓋 | 線刻 | 『×』 | 外面 | 接合有・他欠損有（70%） | 下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-155 | 9C前 | 第354図-73 | 186 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『?』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（20%） | 中層 | 千葉産須恵器 |
| SI-155 | 9C前 | 第354図-74 | 186 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『?』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（60%） | 下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-155 | 9C前 | 第354図-75 | 186 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『×』『×』? | 底部外面 | 接合無・他欠損有（5%） | 一括 | 2か所,千葉産須恵器 |
| SI-156 | 9C前 | 第354図-76 | 186 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『?』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（5%） | 一括 | 千葉産須恵器 |
| SI-155 | 9C前 | 第354図-77 | 187 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 『−』 | 胴部外面 | 破片 | 一括 | 千葉産須恵器 |
| SI-155 | 9C前 | 第354図-78 | 187 | 土師 | 甕 | ヘラ書き | 『?』 | 底部外面 | 破片 | 一括 | |
| SI-155 | 8C③ | 第354図-79 | 188 | 須恵 | 甕 | 線刻 | 『大』? | 底部外面 | 破片 | 中層 | 千葉産須恵器 |
| SI-156 | 8C③ | 第354図-80 | 188 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『−』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（95%） | 中層 | 茨城産須恵器 |
| SI-157 | 8C③ | 第354図-81 | 188 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『=』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（40%） | 下層 | 茨城産須恵器 |
| SI-161 | − | 第354図-82 | 188 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『+』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（40%） | 下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-164 | 8C③ | 第354図-83,84 | 189 | 須恵 | 杯 | 線刻・ヘラ書き | 『+』『−』 | 底部内外面 | 接合有・他欠損有（35%） | 中・下層 | 茨城産須恵器 |
| SI-165 | 9C中 | 第354図-85 | 190 | 須恵 | 高台付杯 | ヘラ書き | 複雑 | 底部内面 | 接合有・他欠損有（55%） | 上層 | 底部外面墨書『物川』 |
| SI-165 | 9C中 | 第354図-86 | 190 | 須恵 | 甕 | 線刻 | 『×+』『−』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（25%） | 床直 | 千葉産須恵器 |

| 遺構 | 時期 | 一覧 | 図版 | 器質 | 器種 | 種別 | 内容 | 部位 | 土器の状態（遺存%） | 出土状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-168 | 9C前 | 第354図-87,88 | 191 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き・線刻 | 『+』『×』 | 底部内外面 | 接合有・他欠損有（55%） | 床直 | 千葉産須恵器 |
| SI-168 | 9C前 | 第354図-89,90 | 191 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き・線刻 | 『+』『−』 | 底部内外面 | 接合有・他欠損有（85%） | 床　直,中層 | 千葉産須恵器 |
| SI-172 | 9C後 | 第354図-91 | 193 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 『?』 | 底部外面 | 破片 | 下層 | |
| SI-175 | 9C中 | 第354図-92 | 193 | 土師 | 小型甕 | ヘラ書き | 『?』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（20%） | 下層 | 刻書？ |
| SI-180 | 9C前 | 第354図-93 | 195 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『?』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（70%） | 中・下層 | 体外朱墨『至』,千葉産須恵器 |
| SI-184 | 9C前 | 第354図-94 | 196 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『+』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（45%） | カマド内 | 千葉産須恵器 |
| SI-185 | 8C④ | 第354図-95 | 196 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『S』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（50%） | 床　直,下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-185 | 8C④ | 第354図-96 | 198 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『−』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（20%） | 下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-192 | 9C中 | − | 199 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 『−』 | 胴部外面 | 破片 | 中・下層 | 文様？,東海産須恵器,集合図には未掲載（住居挿図参照） |
| SI-194 | 9C中 | 第354図-97 | 199 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 『−』数条 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（25%） | 中層 | |
| SI-198 | 8C③ | 第354図-98 | 200 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『=』『×』 | 体部・底部外面 | 接合有・他欠損有（95%） | カマド右袖脇 | 千葉産須恵器 |
| SI-206 | 9C前 | 第354図-99 | 204 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『人』状 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（45%） | 床　直,中層 | 千葉産須恵器 |
| SI-207 | 8C② | 第354図-100 | 204 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『×』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（45%） | 下層 | 茨城産須恵器 |
| SI-208 | 9C後 | 第354図-101 | 205 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 『×』 | 底部内面 | 接合有・他欠損有（55%） | 下層 | 内外面二次被熱により煤付着顕著 |
| SI-209 | 9C中 | 第354図-102 | 205 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 『×』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（25%） | 床　直,上層 | 千葉産須恵器 |
| SI-211 | 9C中 | 第354図-103 | 206 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 複雑 | 底部内面 | 接合無・他欠損有（25%） | 下層 | 暗文風,千葉産須恵器 |
| SI-211 | 9C中 | 第354図-104 | 206 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 複雑 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（85%） | カマド内 | 打ち欠き土器 |
| SI-211 | 9C中 | 第354図-105 | 207 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 『キ』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（10%） | 床　面,下層 | 千葉産須恵器 |
| SI-211 | 9C中 | 第354図-106 | 208 | 須恵 | 小型甕 | ヘラ書き | 『−』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（10%） | カマド内 | 千葉産須恵器 |
| SI-212 | 9C後 | 第355図-107 | 209 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 『?』 | 底部内面 | 接合無・他欠損有（10%） | 中層 | 刻書？ |
| SI-213 | 9C中 | 第355図-108 | 209 | 土師 | 鉢 | 線刻 | 『−』 | 体部外面 | 接合有・他欠損有（15%） | 中層 | 内面黒色処理 |
| SI-215 | 9C | 第355図-109 | 210 | 土師 | 高台付杯 | 線刻 | 『井』 | 底部内面 | 接合無・他欠損有（20%） | 中層 | 刻書？ |
| SI-216 | 8C③ | 第355図-110 | 210 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『+』 | 内面全域 | 接合有・他欠損有（90%） | 床直 | 茨城産須恵器 |
| SI-217 | 9C中 | 第355図-111 | 211 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『=』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（75%） | 上層 | 千葉産須恵器 |
| SI-217 | 9C中 | 第355図-112 | 211 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 『×』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（5%） | 一括 | 千葉産須恵器 |
| SI-221 | 9C前 | 第355図-113 | 212 | 土師 | 甕 | ヘラ書き | 『=』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（5%） | 一括 | |
| SI-229 | 8C④ | 第355図-114 | 213 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『×』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（95%） | カマド左袖周辺下層 | 打ち欠き土器,千葉産須恵器 |
| SI-229 | 8C④ | 第355図-115 | 213 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『W』状『=』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（60%） | カマド左袖周辺中層 | 全面打ち欠き土器,多数のヘラ書き,千葉産須恵器 |
| SI-229 | 8C④ | 第355図-116 | 213 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『+』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（20%） | 一括 | 千葉産須恵器 |
| SI-229 | 8C④ | 第355図-117 | 213 | 須恵 | 高台付杯 | 線刻 | 数条の交差 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（40%） | 下層 | 刻書？,千葉産須恵器 |
| SI-231 | 9C中 | 第355図-118 | 214 | 須恵 | 甕 | 線刻 | 『−』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（5%） | 一括 | 千葉産須恵器 |
| SI-236 | 8C③ | 第355図-119 | 215 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『三』 | 体部内面 | 接合無・他欠損有（40%） | 一括 | 茨城産須恵器 |
| SI-243 | 8C④ | 第355図-120 | 216 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『S』状 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（80%） | 中層 | 打ち欠き土器,千葉産須恵器 |
| SI-245A | 9C前 | 第355図-121 | 217 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 『+』『=』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（85%） | 床　直,中層 | 内面黒色処理 |
| SI-246A | 9C前 | 第355図-122 | 218 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 『+』『=』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（20%） | 下層 | 底部完存,千葉産須恵器 |
| SI-255 | 9C中 | 第355図-123 | 221 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 『?』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（5%） | カマド内 | 千葉産須恵器 |
| SI-255 | 9C中 | 第355図-124 | 243 | 須恵 | 紡錘車 | ヘラ書き | 『?』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（5%） | カマド右袖脇 | 千葉産須恵器甕底部転用 |
| SI-262 | 9C中 | 第355図-125 | 223 | 土師 | 皿 | 線刻 | 『×』 | 内面 | 接合有・他欠損有（30%） | 床面 | 内面広範囲 |
| SI-262 | 9C中 | 第355図-126 | 223 | 土師 | 皿 | 線刻 | 複雑 | 内面 | 接合有・他欠損有（20%） | 床面 | 小片のため詳細不明 |
| SB-022 | 8C中〜末 | 第355図-127 | 224 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 『▽』『×』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（25%） | 一括 | 茨城産須恵器 |
| SK-251 | 9C中 | 第355図-128 | 226 | 土師 | 杯 | ヘラ書き | 『キ』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（60%） | 一括 | 底部完存 |
| SK-252 | 9C中 | 第355図-129 | 227 | 土師 | 高台付杯 | ヘラ書き | 『−』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（30%） | 一括 | 底部完存 |
| SD-003 | 9C前 | 第355図-130 | 228 | 須恵 | 杯 | ヘラ書き | 『−』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（40%） | 下層 | 千葉産須恵器 |

| 遺構 | 時期 | 一覧 | 図版 | 器質 | 器種 | 種別 | 内容 | 部位 | 土器の状態（遺存%） | 出土状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SD-010 | 9C中 | 第355図-131,132 | 229 | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 「×」「×」 | 底部内外面 | 破片 | 上層 | 千葉産須恵器 |
| SD-029 | 9C中 | 第355図-133 | - | 須恵 | 甕 | ヘラ書き | 「?」 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（5%） | 一括 | 千葉産須恵器 |
| 23M-30 | 8C中～末 | 第355図-134 | 230 | 須恵 | 壺 | ヘラ書き | 「－」 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（15%） | 一括 | 東海産須恵器 |
| 23M-30 | 9C前 | 第355図-135 | 230 | 須恵 | 杯 | 線刻 | 「×」 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（30%） | 一括 | 千葉産須恵器 |
| 23M-64 | 9C後 | 第355図-136 | 231 | 土師 | 杯 | 線刻 | 「×」 | 体部内面 | 接合無・他欠損有（10%） | 一括 | |

## 第36表　文字資料一覧

| 遺構 | 時期 | 一覧 | 図版 | 器質 | 器種 | 文字種別 | 内容 | 部位・方向 | 遺物の状態（遺存%） | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-003 | 9C中 | 第356図-1,2 | 248 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「上万」,「上万」 | 体部内外面・横位 | 接合有・他欠損有（95%） | 下層 | 胎土極めて密 |
| SI-008 | 9C後 | 第356図-3 | 248 | 土師 | 高台付皿 | 墨書 | 「加」 | 体部外面・正位 | 接合有・他欠損有（50%） | カマド内 | 器面の劣化顕著 |
| SI-019 | 9C中 | 第356図-4 | 248 | 土師 | 高台付皿 | 墨書 | 「加」 | 体部外面・正位 | 接合無・他欠損有（70%） | 中層 | 内面油煙状の付着 |
| SI-020 | 9C中 | 第356図-5 | 248 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「?」 | 体部外面・不明 | 接合無・他欠損有（40%） | カマド内 | 一部分のため詳細不明,内面黒色処理 |
| SI-031 | 9C中 | 第356図-6 | 248 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「丙」 | 体部外面・正位 | 接合有・他欠損有（90%） | 床直 | 肉眼ではほとんど不鮮明 |
| SI-033 | 9C後 | 第356図-7 | 248 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「加」 | 体部外面・正位 | 接合無・他欠損有（10%） | 下層 | 内外面ともに二次被熱により煤付着 |
| SI-040 | 9C後 | 第356図-8 | 248 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「水」 | 体部外面・正位 | 接合無・他欠損有（55%） | カマド内 | 打ち欠き土器,内外面煤付着 |
| SI-058 | 9C中 | 第356図-9 | 248 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「?」 | 体部外面・不明 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SI-058 | 9C中 | 第356図-10,11 | 248 | 滑石 | 紡錘車 | 刻書 | 「丁罡□」,「中」状 | 上面・側面 | 完形（100%） | 床直 | 外面全般に細かな使用痕あり |
| SI-060 | 9C後 | 第356図-12 | 248 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「?」 | 体部外面・不明 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明,内面黒色処理 |
| SI-061 | 9C後 | 第356図-13 | 248 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「在」 | 体部外面・正位 | 接合有・他欠損有（90%） | 上層 | 打ち欠き土器,内外面煤付着 |
| SI-064 | 8C③ | 第356図-14 | 248 | 須恵 | 杯 | 刻書 | 「不」 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（45%） | 中層 | 器面二次被熱により変色 |
| SI-070 | 8C③ | 第356図-15 | － | 須恵 | 杯 | 朱墨 | 「?」 | 体部外面・不明 | 接合有・他欠損有（10%） | 下層 | 一部分のため詳細不明 |
| SI-088 | 8C④ | 第356図-16 | 248 | 須恵 | 杯 | 刻書 | 「友」 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（80%） | 中層 | やや鮮明 |
| SI-109 | 8C③ | 第356図-17 | 248 | 土師 | 甕 | 墨書 | 「?」 | 胴部外面・不明 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SI-117 | 8C② | 第356図-18 | 248 | 土師 | 甕 | 墨書 | 「符」 | 胴部外面・正位 | 接合有・破片 | 中・下層 | 胴部中位片,外面黒斑あり |
| SI-118 | 8C④ | 第356図-19 | 248 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「?」 | 体部外面・不明 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明,器面の劣化顕著 |
| SI-121 | 8C中 | 第356図-20,21,22 | 248 | 土師 | 甕 | 墨書 | 「下総國千…大今在…」,「大…村…」 | 胴部外面・正位 口縁部内面 | 接合有・他欠損有（95%） | カマド内,中・下層 | 在地甕,内外面の胴部上半部から底部にかけ二次被熱による煤が厚く付着,胴部の墨書は「下総」以外は厚く煤が付着し肉眼ではほとんど不鮮明 |
| SI-131 | 8C③ | 第356図-23 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「千」 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（20%） | 一括 | 内外面ともに斑状の剥離顕著,鮮明 |
| SI-134 | 9C中 | 第356図24 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「正－富」 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（70%） | 床面 | 肉眼ではほとんど不鮮明 |
| SI-140 | 8C④ | 第356図-25 | 249 | 須恵 | 杯 | 墨書 | 「東酒」 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（15%） | 一括 | 内外面線刻あり「+」,底部を円盤状に加工 |
| SI-141 | 9C後 | 第356図-26 | 249 | 土師 | 高台付皿 | 墨書 | 「丈」 | 底部内面 | 接合無・他欠損有（40%） | 下層 | 内面黒斑あり,器面やや磨耗,やや不鮮明 |
| SI-147 | 9C中 | 第356図-27 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「明」 | 体部外面・正位 | 接合有・他欠損有（50%） | 床直 | 底部外面ヘラ書きあり「－」,やや不鮮明 |
| SI-148 | 9C中 | 第356図-28 | 249 | 土師 | 高台付皿 | 墨書 | 「千」 | 体部外面・逆位 | 接合無・他欠損有（30%） | 床直 | 内面油煙状の付着 |
| SI-152 | 9C後 | 第356図-29,30 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「千」,「千」 | 体部内面・正位 体部外面・横位 | 接合無・他欠損有（10%） | 下層 | 口縁部から体部中位片 |
| SI-153 | 9C中 | 第356図-31 | 249 | 土師 | 台付皿 | 墨書 | 「千」 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（25%） | 一括 | 底部片,器面及び破断面やや磨耗 |
| SI-158 | 9C後半 | 第356図-32 | 249 | 土師 | 皿 | 墨書 | 「八」 | 体部外面・正位 | 接合無・ほぼ完形（95%） | 床直 | 器面の劣化顕著,口縁部二カ所に油煙付着 |
| SI-158 | 9C後半 | 第356図-33 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「?」 | 体部外面・不明 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SI-163 | 9C後 | 第356図-34 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「千」 | 体部外面・正位 | 接合有・ほぼ完形（95%） | 下層,床直 | 体部中位から下端部に墨書 |
| SI-164 | 8C③ | 第356図-35 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「?」 | 体部外面・正位? | 接合有・他欠損有（35%） | 中層 | 一部分のため詳細不明 |
| SI-165 | 9C中 | 第356図-36 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 「正」 | 底部外面 | 接合有・完形（100%） | 床直 | 打ち欠き土器,千葉産須恵器と明確な区別がつかない一群 |

| 遺構 | 時期 | 一覧 | 図版 | 器質 | 器種 | 文字種別 | 内容 | 部位・方向 | 遺物の状態（遺存%） | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-165 | 9C中 | 第356図-37 | 249 | 土師 | 杯 | 朱墨 | 『得』 | 体部外面・正位 | 接合有・他欠損有（30%） | 床直,下層 | 千葉産須恵器と明確な区別がつかない一群 |
| SI-165 | 9C中 | 第356図-38 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『？』 | 体部外面・不明 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SI-165 | 9C中 | 第356図-39 | 249 | 土師 | 高台付杯 | 墨書 | 『物川』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（55%） | 上層 | 底内ヘラ書き文様あり |
| SI-169 | 10C | 第356図-40 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『？』 | 体部外面・不明 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SI-171 | 9C前 | 第356図-41 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『厨』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（90%） | カマド内 | 内外面ともに煤付着・剥離顕著 |
| SI-175 | 9C中 | 第356図-42,43 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『千』,『七』 | 体部外面・横位 体部外面・正位 | 接合無・他欠損有（75%） | カマド右袖脇 | 打ち欠き土器,やや不鮮明,千葉産須恵器と明確な区別がつかない一群 |
| SI-175 | 9C中 | 第356図-44 | 249 | 土師 | 皿 | 墨書 | 『生』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（90%） | 中層 | やや不鮮明 |
| SI-175 | 9C中 | 第356図-45 | 249 | 土師 | 高台付皿 | 刻書 | 『里』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（35%） | 下層 | 深くしっかりと刻まれている |
| SI-176 | 10C | 第356図-46 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『？』 | 体部外面・不明 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SI-178 | 9C中 | 第356図-47 | 249 | 土師 | 皿 | 墨書 | 『本』 | 底部内面 | 接合無・他欠損有（20%） | 下層 | やや不鮮明 |
| SI-180 | 9C前 | 第356図-48,49 | 249 | 須恵 | 杯 | 朱墨 | 『至』,『？』 | 体部外面・横位 底部外面 | 接合有・他欠損有（70%） | 中・下層 | 底部外面ヘラ書きあり,詳細不明,千葉産の須恵器 |
| SI-188 | 9C前 | 第356図-50 | - | 土師 | 杯 | 墨書 | 『？』 | 体部外面・不明 | 破片 | カマド内 | 小片のため詳細不明 |
| SI-189 | 9C中 | 第356図-51 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『？』 | 体部外面・不明 | 破片 | 下層 | 小片のため詳細不明 |
| SI-191 | 9C前 | 第356図-52 | 249 | 須恵 | 杯 | 朱墨 | 『千』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（35%） | 中層 | 千葉産須恵器 |
| SI-191 | 9C前 | 第356図-53 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『千』 | 体部外面・正位 | 破片 | 一括 | 内面黒色処理 |
| SI-191 | 9C前 | 第356図-54 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『千』 | 体部外面・正位 | 破片 | 一括 | 内面黒色処理 |
| SI-195 | 9C中 | 第356図-55 | 249 | 土師 | 甕 | 墨書 | 『？』 | 胴部外面・不明 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SI-199 | 9C後 | 第356図-56 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『南』 | 体部外面・横位 | 接合有・他欠損有（10%） | 下層 | 外面黒斑あり,器面煤付着 |
| SI-200 | 不明 | 第356図-57 | 249 | 土師 | 甕 | 墨書 | 『？』 | 胴部外面・不明 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SI-204 | 9C中 | 第356図-58 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『加』 | 体部外面・正位 | 破片 | 下層 | 内外面ともに二次被熱により煤付着 |
| SI-204 | 9C中 | 第356図-59 | 249 | 土師 | 小型甕 | 墨書 | 『？』 | 胴部外面・不明 | 破片 | 上層 | 小片のため詳細不明 |
| SI-205 | 9C後 | 第356図-60 | 249 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『丙』 | 底部外面 | 破片 | 一括 | かろうじて判読可能 |
| SI-205 | 9C後 | 第356図-61 | - | 土師 | 小型甕 | 墨書 | 筆先を揃えた墨痕 | 胴部外面 | 接合無・完形（100%） | 床直 | 小型甕の胴部外面に多数の墨痕あり |
| SI-211 | 9C中 | 第356図-62 | 250 | 土師 | 高台付皿 | 刻書 | 『里』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（30%） | カマド内 | 深くしっかりと刻まれている,内面黒色処理 |
| SI-212 | 9C後 | 第356図-63 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『？』記号? | 体部外面・不明 | 接合有・完形（100%） | 下層 | やや不鮮明,内面油煙広範囲に付着 |
| SI-212 | 9C後 | 第356図-64 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『万』 | 底部内面 | 接合有・他欠損有（30%） | 下層 | やや不鮮明 |
| SI-212 | 9C後 | 第356図-65 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『？』 | 体部外面・不明 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SI-213 | 9C中 | 第356図-66 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『？』 | 体部外面・不明 | 接合無・他欠損有（25%） | 中層 | 一部分のため詳細不明,千葉産須恵器と明確な区別がつかない一群 |
| SI-224 | 9C前～中 | 第356図-67 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『？』 | 体部外面・不明 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SI-230 | 9C前 | 第356図-68 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『？』 | 底部外面 | 破片 | 一括 | 内面黒色処理,小片のため詳細不明 |
| SI-233 | 9C前 | 第356図-69 | 250 | 須恵 | 杯 | 朱墨 | 『至』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（30%） | 一括 | 千葉産須恵器,やや不鮮明 |
| SI-238 | 9C前 | 第356図-70 | 250 | 須恵 | 杯 | 墨書 | 『高』 | 底部外面 | 接合無・完形（100%） | カマド右袖脇 | 千葉産須恵器,やや不鮮明 |
| SI-238 | 9C前 | 第356図-71 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『至』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（25%） | 一括 | 内面黒色処理 |
| SI-240 | 9C前 | 第356図-72 | 250 | 須恵 | 杯 | 朱墨 | 『者』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（45%） | 下層 | 千葉産須恵器,断面褐色 |
| SI-246A | 9C前 | 第356図-73 | 250 | 須恵 | 杯 | 朱墨 | 『法』 | 底部外面 | 接合有・他欠損有（40%） | 下層 | 千葉産須恵器,やや不鮮明 |
| SI-255 | 9C中 | 第356図-74 | 250 | 須恵 | 甕 | 刻書 | 『大真利…道?…』 | 底部外面 | 接合無・他欠損有（5%） | 一括 | 深くしっかりと刻まれている |
| SI-257 | 9C後 | 第356図-75 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『二』 | 体部外面・逆位 | 接合無・他欠損有（95%） | 床直 | 打ち欠き土器,器面やや摩耗 |
| SI-257 | 9C後 | 第356図-76 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『？』 | 体部外面 | 破片 | カマド内一括 | 小片のため詳細不明 |
| SI-257 | 9C後 | 第356図-77 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『毛』？ | 体部外面 | 破片 | 一括 | 鮮明だが小片のため詳細不明 |
| SI-257 | 9C後 | 第356図-78 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『大』 | 体部外面 | 破片 | 一括 | 2点接合,鮮明 |
| SI-257 | 9C後 | 第356図-79 | 250 | 土師 | 皿 | 墨書 | 『二』 | 体部外面・逆位 | 接合有・他欠損有（30%） | 床直 | やや不鮮明 |

| 遺構 | 時期 | 一覧 | 図版 | 器質 | 器種 | 文字種別 | 内容 | 部位・方向 | 遺物の状態（遺存%） | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-257 | 9C後 | 第356図-80 | 250 | 土師 | 皿 | 墨書 | 『夫』 | 底部内面 | 接合有･他欠損有（95%） | 床直 | やや不鮮明,内外面ともに油煙付着 |
| SI-262 | 9C中 | 第356図-81 | 250 | 土師 | 甕 | 墨書 | 『?』 | 底部内面 | 破片 | 下層 | 破断後の破片に書かれた花押の可能性有り |
| SK-244 | 9C後 | 第356図-82 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『?』 | 体部外面 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SK-248 | 8C中～末 | 第356図-83 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『?』 | 体部外面 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SK-248 | 8C中～末 | 第356図-84 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『?』 | 体部外面 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SK-249 | 9C前 | 第356図-85 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『?』『?』 | 体部外面・不明　底部外面 | 破片 | 一括 | 小片のため詳細不明 |
| SK-308 | 9C中 | 第356図-86 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『加』 | 体部外面・正位 | 接合有･他欠損有（45%） | 中層 | 鮮明 |
| SK-308 | 9C中 | 第356図-87 | 250 | 土師 | 高台付皿 | 墨書 | 『二』 | 底部外面 | 接合有･他欠損有（40%） | 中層 | やや鮮明 |
| SD-005 | 9C後 | 第356図-88 | 250 | 土師 | 甕 | 墨書 | 『?』 | 胴部外面 | 破片 | 中層 | やや鮮明 |
| SD-023 | 9C前 | 第356図-89 | 250 | 土師 | 杯 | 墨書 | 『得』 | 胴部外面・正位 | 接合無･他欠損有（10%） | 一括 | 鮮明 |

## 第37表　打ち欠き土器一覧

| 遺構 | 時期 | 一覧 | 図版 | 器質 | 器種 | 打ち欠き状況 | 土器の状態（打ち欠き率%） | 出土状況 | 備考（総合遺存度） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-004 | 8C④ | 第357図-1 | 141 | 須恵 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合無・他欠損無（15%） | 上層 | 打ち欠き片が接合,千葉産須恵器（95%） |
| SI-004 | 8C④ | 第357図-2 | 141 | 土師 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合有・他欠損無（20%） | カマド内 | 内外面線刻あり『+』『+』（80%） |
| SI-020 | 9C中 | 第357図-3 | 145 | 土師 | 高台付皿 | 弧状,1か所 | 接合有・他欠損無（5%） | カマド内・脇 | 上面から見ると弧状の打ち欠き（95%） |
| SI-020 | 9C中 | 第357図-4 | 145 | 土師 | 高台付皿 | 直線状,1か所 | 接合無・他欠損無（10%） | カマド内 | 上面から見ると直線状の打ち欠き（90%） |
| SI-023 | 9C中 | 第357図-5 | 146 | 土師 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合有・他欠損有（20%） | 出入口部床面 | 内面黒色処理（70%） |
| SI-040 | 9C後 | 第357図-6 | 148 | 土師 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合無・他欠損有（25%） | カマド内 | 体部外面正位に墨書あり『水』（55%） |
| SI-043 | 8C④ | 第357図-7 | 149 | 土師 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合無・他欠損無（15%） | カマド内 | 内外面ともに二次被熱により煤付着（85%） |
| SI-050 | 9C前 | 第357図-8 | 150 | 須恵 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合無・他欠損無（5%） | 床面 | 内外面煤付着,千葉産須恵器（95%） |
| SI-061 | 9C後 | 第357図-9 | 152 | 土師 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合有・他欠損無（10%） | 上層 | 体部外面正位に墨書あり『在』（90%） |
| SI-061 | 9C後 | 第357図-10 | 152 | 土師 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損無（5%） | カマド内 | 底外ヘラ書きあり『廿』（95%） |
| SI-072 | 9C前 | 第357図-11 | 156 | 須恵 | 杯 | 「V」字状,1か所 | 接合無・他欠損無（10%） | カマド右袖脇 | 打ち欠き片が接合,千葉産須恵器（95%） |
| SI-073 | 9C前 | 第357図-12 | 156 | 須恵 | 杯 | 「V」字状,1か所 | 接合有・他欠損有（5%） | 出入口部下層 | 内外面煤付着,千葉産須恵器（85%） |
| SI-074 | 8C③ | 第357図-13 | 157 | 須恵 | 杯 | 「V」字状,1か所 | 接合無・他欠損無（25%） | カマド内 | 打ち欠き破断面やや劣化,茨城産須恵器（75%） |
| SI-075 | 8C④ | 第357図-14 | 157 | 須恵 | 杯 | 「W」字状,1か所 | 接合有・他欠損無（25%） | 中層 | 打ち欠き2か所連続,千葉産須恵器（75%） |
| SI-077 | 8C④ | 第357図-15 | 158 | 須恵 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合無・他欠損無（5%） | 出入口部床面 | 外面部分的に赤化,千葉産須恵器（95%） |
| SI-080 | 8C④ | 第357図-16 | 59 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損無（5%） | 出入口部床直 | 底外ヘラ書きあり『S』状,千葉産須恵器（95%） |
| SI-087 | 8C③ | 第357図-17 | 161 | 須恵 | 杯 | 「V」字状,1か所 | 接合有・他欠損無（10%） | 中層 | 茨城産須恵器（90%） |
| SI-087 | 8C③ | 第357図-18 | 161 | 須恵 | 杯 | 「V」字状,1か所 | 接合有・他欠損有（10%） | 中層 | 茨城産須恵器（85%） |
| SI-088 | 8C④ | 第357図-19 | 161 | 須恵 | 杯 | 「V」字状,1か所 | 接合有・他欠損有（5%） | 出入口部中層 | 底外ヘラ書きあり『友』状,茨城産須恵器（80%） |
| SI-089 | 8C② | 第357図-20 | 162 | 土師 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損無（15%） | 出入口部中層 | 内外面赤彩,底外ヘラ書きあり『×』（85%） |
| SI-092 | 9C前 | 第357図-21 | 163 | 須恵 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合有・他欠損無（10%） | 出入口部中層 | 体部内面に線刻あり『+』,千葉産須恵器（90%） |
| SI-097 | 8C② | 第357図-22 | 167 | 須恵 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合有・他欠損無（10%） | カマド内 | 体部内面に線刻あり『+』,茨城産須恵器（90%） |
| SI-097 | 8C② | 第357図-23 | 166 | 須恵 | 杯 | 全面打ち欠き | 接合無・他欠損無（50%） | カマド左袖脇 | 砂粒を多く含む,千葉産須恵器（50%） |
| SI-103 | 8C③ | 第357図-24 | 168 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損有（10%） | カマド内 | 茨城産須恵器（75%） |
| SI-103 | 8C③ | 第357図-25 | 168 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合有・他欠損有（15%） | 出入口部床面 | 底外ヘラ書きあり『−』,茨城産須恵器（80%） |
| SI-104 | 8C④ | 第357図-26 | 169 | 須恵 | 杯 | 「U」字状,2か所 | 接合無・他欠損無（30%） | 下層 | 打ち欠き2か所間隔開,千葉産須恵器（70%） |
| SI-106 | 9C中 | 第357図-27 | 170 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損有（30%） | 出入口部下層 | 打ち欠き大,茨城産須恵器（70%） |
| SI-109 | 8C③ | 第358図-28 | 109 | 須恵 | 杯 | 「V」字状,2か所 | 接合有・他欠損無（10%） | カマド右袖脇 | 1か所は破片が接合,茨城産須恵器（90%） |
| SI-111 | 8C② | 第358図-29 | 171 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損有（15%） | カマド右袖脇 | 破断面中央はやや直線的,茨城産須恵器（80%） |

| 遺構 | 時期 | 一覧 | 図版 | 器質 | 器種 | 打ち欠き状況 | 土器の状態<br>(打ち欠き率%) | 出土状況 | 備考 (総合遺存度) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI-113 | 8C③ | 第358図-30 | 171 | 須恵 | 蓋 | 弧状,2か所 | 接合無・他欠損無 (15%) | 下層 | 2か所ほぼ同規模打ち欠き,茨城産須恵器 (85%) |
| SI-113 | 8C③ | 第358図-31 | 171 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合有・他欠損有 (15%) | 中層 | 破断面磨耗,茨城産須恵器 (80%) |
| SI-113 | 8C③ | 第358図-32 | 171 | 須恵 | 杯 | 逆台形状,1か所 | 接合有・他欠損有 (15%) | 中層 | 破断面やや磨耗,茨城産須恵器 (80%) |
| SI-118 | 8C④ | 第358図-33 | 175 | 須恵 | 杯 | 口縁部2/3 | 接合無・他欠損無 (40%) | 床直 | 「V」字状1か所・連続,茨城産須恵器 (60%) |
| SI-125 | 8C③ | 第358図-34 | 177 | 須恵 | 蓋 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損無 (5%) | 下層 | 破断面やや磨耗,茨城産須恵器 (95%) |
| SI-131 | 8C③ | 第358図-35 | 177 | 須恵 | 杯 | 「W」字状,1か所 | 接合無・他欠損無 (15%) | 出入口部床面 | 破断面磨耗顕著,茨城産須恵器 (85%) |
| SI-136 | 9C前 | 第358図-36 | 179 | 須恵 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合無・他欠損無 (15%) | カマド左袖脇 | 千葉産須恵器 (85%) |
| SI-152 | 9C後 | 第358図-37 | 184 | 土師 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合有・他欠損無 (10%) | カマド右袖脇 | 底内劣化顕著 (90%) |
| SI-155 | 9C前 | 第358図-38 | 186 | 須恵 | 杯 | 半面打ち欠き | 接合有・他欠損無 (35%) | 下層 | 破断面波状,茨城産須恵器 (65%) |
| SI-156 | 9C前 | 第358図-39 | 187 | 須恵 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合無・他欠損無 (10%) | 出入口部下層 | 破断面やや磨耗,千葉産須恵器 (90%) |
| SI-156 | 9C前 | 第358図-40 | 187 | 土師 | 杯 | 3/4面打ち欠き | 接合無・他欠損無 (55%) | 上層 | 器面やや劣化 (45%) |
| SI-165 | 9C中 | 第358図-41 | 190 | 土師 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合有・他欠損無 (20%) | 住居南東隅床直 | 底外墨書あり『正』,打ち欠き片が接合 (100%) |
| SI-174 | 8C④ | 第358図-42 | 193 | 須恵 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合無・他欠損無 (5%) | 中層 | 千葉産須恵器 (95%) |
| SI-175 | 9C中 | 第358図-43 | 193 | 土師 | 杯 | 「W」字状,1か所 | 接合無・他欠損無 (25%) | カマド右袖脇 | 「U」字状打ち欠き連続? (75%) |
| SI-176 | 10C | 第358図-44 | 194 | 土師 | 高台付杯 | 弧状,2か所 | 接合有・他欠損有 (30%) | 住居中央床直 | 体部・高台部2か所,体部内面全域炭化物 (70%) |
| SI-185 | 8C④ | 第358図-45 | 196 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損無 (25%) | カマド右袖脇 | 破断面劣化顕著,千葉産須恵器 (75%) |
| SI-185 | 8C④ | 第358図-46 | 196 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損無 (30%) | カマド右袖脇 | 破断面劣化顕著,千葉産須恵器 (70%) |
| SI-186 | 9C前 | 第358図-47 | 197 | 土師 | 杯 | 逆台形状,1か所 | 接合有・他欠損有 (15%) | カマド内 | 二次被熱により内外面厚く煤付着 (80%) |
| SI-190 | 9C後 | 第358図-48 | 198 | 土師 | 杯 | 半面打ち欠き | 接合有・他欠損有 (35%) | カマド内 | 破断面磨耗顕著 (60%) |
| SI-191 | 9C前 | 第358図-49 | 198 | 須恵 | 杯 | 「W」字状,1か所 | 接合無・他欠損無 (30%) | 下層 | 千葉産須恵器 (70%) |
| SI-191 | 9C前 | 第358図-50 | 198 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損無 (20%) | 上層 | 千葉産須恵器 (80%) |
| SI-198 | 8C③ | 第358図-51 | 200 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合有・他欠損有 (25%) | カマド左袖脇 | 茨城産須恵器 (90%) |
| SI-198 | 8C③ | 第358図-52 | 200 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合有・他欠損有 (25%) | カマド右袖脇 | 千葉産須恵器 (95%) |
| SI-198 | 8C③ | 第358図-53 | 200 | 須恵 | 杯 | 1/3面打ち欠き | 接合無・他欠損無 (30%) | カマド右袖脇 | 千葉産須恵器 (70%) |
| SI-207 | 8C② | 第359図-54 | 204 | 須恵 | 杯 | 弧状,「U」字状2か所 | 接合無・他欠損有 (15%) | カマド内 | 茨城産須恵器,1か所は破片が接合 (95%) |
| SI-208 | 9C後 | 第359図-55 | 204 | 須恵 | 杯 | 半面打ち欠き | 接合無・他欠損無 (40%) | 下層 | 千葉産須恵器 (60%) |
| SI-209 | 9C中 | 第359図-56 | 205 | 須恵 | 杯 | 1/3面打ち欠き | 接合無・他欠損無 (20%) | 下層 | 千葉産須恵器 (80%) |
| SI-209 | 9C中 | 第359図-57 | 205 | 土師 | 杯 | 「V」字状,2か所 | 接合有・他欠損無 (35%) | 下層 | 同一規模で2か所,1か所は破片が接合 (85%) |
| SI-211 | 9C中 | 第359図-58 | 206 | 土師 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損無 (15%) | カマド内 | 破断面磨耗顕著 (85%) |
| SI-211 | 9C中 | 第359図-59 | 207 | 土師 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損無 (5%) | 床面 | 破断面やや磨耗 (95%) |
| SI-212 | 9C後 | 第359図-60 | 208 | 土師 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合無・他欠損無 (20%) | 下層 | 体部外面墨書あり,判読不能,破片完全接合 (100%) |
| SI-212 | 9C後 | 第359図-61 | 209 | 土師 | 杯 | 「V」字状,1か所 | 接合無・他欠損無 (25%) | 下層 | 破断面若干の凹凸あり (75%) |
| SI-212 | 9C後 | 第359図-62 | 209 | 土師 | 杯 | 「W」字状,1か所 | 接合有・他欠損無 (15%) | カマド内 | 破断面やや磨耗 (85%) |
| SI-229 | 8C④ | 第359図-63 | 213 | 須恵 | 杯 | 「W」字状,1か所 | 接合無・他欠損無 (25%) | カマド左袖周辺下層 | 破片が2点接合,底外ヘラ書きあり『×』,千葉産須恵器 (95%) |
| SI-229 | 8C④ | 第359図-64 | 213 | 須恵 | 杯 | 半面打ち欠き | 接合有・他欠損有 (25%) | 西隅下層 | 破片が完全接合,千葉産須恵器 (90%) |
| SI-229 | 8C④ | 第359図-65 | 213 | 須恵 | 杯 | 全面打ち欠き | 接合無・他欠損有 (40%) | カマド左袖周辺中層 | 底外ヘラ書き多数あり『W(状)…』,千葉産須恵器 (60%) |
| SI-229 | 8C④ | 第359図-66 | 213 | 須恵 | 杯 | 半面打ち欠き | 接合有・他欠損有 (30%) | 出入口部床面 | 破片が3点接合,千葉産須恵器 (95%) |
| SI-229 | 8C④ | 第359図-67 | 213 | 土師 | 杯 | 1/3面打ち欠き | 接合無・他欠損無 (10%) | カマド右袖脇下層 | 打ち欠き部以外は完存 (90%) |
| SI-231 | 9C中 | 第359図-68 | 214 | 土師 | 杯 | 「V」字状,1か所 | 接合無・他欠損無 (10%) | カマド内 | 打ち欠き部以外は完存 (90%) |
| SI-239 | 8C④ | 第359図-69 | 215 | 須恵 | 杯 | 「W」字状,1か所 | 接合無・他欠損有 (25%) | 上層 | 千葉産須恵器 (70%) |
| SI-240 | 9C前 | 第359図-70 | 215 | 土師 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合有・他欠損無 (10%) | カマド内 | 内外面ともに二次被熱により劣化 (90%) |
| SI-243 | 8C④ | 第359図-71 | 216 | 須恵 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合無・他欠損無 (20%) | 中層 | 千葉産須恵器 (80%) |
| SI-250 | 9C前 | 第359図-72 | 219 | 須恵 | 杯 | 「U」字状,1か所 | 接合有・他欠損無 (20%) | 出入口部中層 | 千葉産須恵器 (80%) |
| SI-254 | 9C前 | 第359図-73 | 220 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合有・他欠損無 (30%) | カマド内 | 南比企産須恵器 (70%) |
| SI-257 | 9C後 | 第359図-74 | 221 | 土師 | 杯 | 弧状,「W」字状,2か所 | 接合有・他欠損無 (5%) | 床直 | 体部外面墨書あり『二』,打ち欠き片が接合 (95%) |
| SI-262 | 9C中 | 第359図-75 | 223 | 須恵 | 杯 | 弧状,1か所 | 接合有・他欠損無 (20%) | カマド右袖脇 | 千葉産須恵器 (80%) |

千葉県教育振興財団調査報告第613集

# 四街道市稲荷塚遺跡

－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－

〔第２分冊〕

平成21年３月25日発行

編　　集　　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　　行　　独立行政法人　都市再生機構
財団法人　千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡８０９－２

印　　刷　　株式会社　弘　文　社
千葉県市川市市川南２－７－２

# 四街道市稲荷塚遺跡

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ —

［第３分冊］

平成21年３月

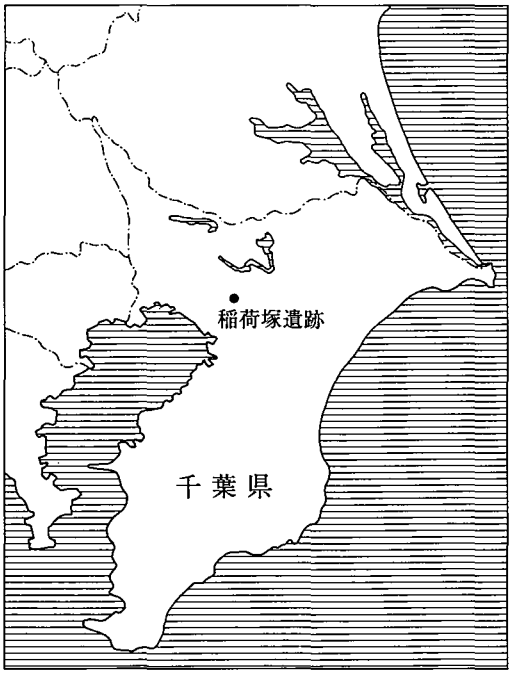
独立行政法人　都市再生機構

財団法人　千葉県教育振興財団

# 四街道市稲荷塚遺跡

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ —

［第３分冊］



# 第３分冊目次

図版目次

《第１分冊》

巻頭図版１　SI－004・SI－107・SI－121・SI－48出土遺物

《第３分冊》

図版１　遺跡周辺航空写真（昭和44年撮影）
図版２　稲荷塚遺跡空中写真(1)（北から）
稲荷塚遺跡空中写真(2)（南から）
図版３　稲荷塚遺跡空中写真(3)（北東から）
稲荷塚遺跡空中写真(4)（東から）
図版４　稲荷塚遺跡空中写真(5)（合成）
図版５　Ａ区空中写真 平成７年度（西から）
Ｂ区(北区)空中写真 平成８年度(南から)
図版６　Ｂ区（南区）及びＤ区空中写真
平成８年度（南から）
Ｅ区空中写真 平成８年度（南から）
図版７　Ｆ区空中写真 平成10年度（南西から）
Ｈ区空中写真 平成15年度（北から）
図版８　Ｃ区調査前 平成７年度（北西から）
Ｃ区確認調査終了 平成７年度（西から）
Ｇ区（南区）調査前 平成13年度（西から）
図版９　Ｇ区（南区）完掘 平成13年度（南西から）
Ｇ区（北区）完掘 平成13年度（南西から）
Ｇ区(中央区)完掘 平成14年度(北西から)
図版10　第１文化層第１地点（南から）
第２文化層第３地点（南から）
第２文化層第４地点（南から）
図版11　第２文化層第５地点（南から）
第２文化層第５地点（西から）
第２文化層第６地点（北から）
図版12　第３文化層第７地点（南から）
第３文化層第８地点（南から）
調査風景
図版13　縄文石器集中（22L－88付近）（北西から）
縄文石器集中（22K－79付近）（北から）
土層断面（22L－02）
図版14　FP－1（西から），FP－2（西から）
FP－3（西から），FP－4（南から）
FP－5（南から），FP－6（北から）
FP－7（北から），FP－8（南西から）
FP－9（西から）
図版15　SI－005（東から），SI－007（北から）
SI－025（北東から）
図版16　SI－028（東から），SK－033（南から）
SK－034（南から），SK－114（南から）
SK－271（西から）
図版17　SK－283（南から），SK－284（北西から）
SK－285（北東から），SK－288（東から）
SK－289(南西から),SK－290(北西から)
SK－291（南東から），SK－302（東から）
図版18　SK－303（東から），SK－320（北東から）
SK－321（南から），SI－025貝出土状況
（北東から），SK－001（南東から）
SK－038（南から），SK－104（北から）
SK－233（西から）
図版19　SI－032（南から），SI－122（東から）
図版20　SX－001（西から），SX－005（東から）
SX－005（北から）
図版21　SI－029（南東から），SI－029カマド（南東から），SI－044（西から）
SI－044遺物出土状況（西から）
SI－051(西から),SI－051カマド(南から)
図版22　SI－066(東から),SI－066カマド(南から)
SI－079（北東から），SI－083（東から）
図版23　SI－084(北から),SI－084遺物出土状況(東から），SI－115（南から），SI－115カマド付近遺物出土状況（南東から），SI－115カマド（南から），SI－116（南から），SI－116遺物出土状況（南東から），SI－116カマド（南から）
図版24　SI－227（南から），SI－001（北西から）
SI－002（東から）
図版25　SI－003（北東から），SI－003カマド（南東から），SI－004（南東から）
SI－006（東から）
図版26　SI－008(西から),SI－008カマド(南から)
SI－009（北から），SI－010（南西から）
SI－010カマド遺物出土状況（西から）
図版27　SI－011（南から），SI－011カマド遺物出土状況（南西から），SI－012（北西から）
SI－012カマド（南から），SI－013（南東から），SI－013カマド（南東から）
図版28　SI－015（南西から），SI－017（西から）
SI－018（西から），SI－018カマド遺物出土状況（南西から）

図版29　SI－019（南から），SI－019カマド（南から）
SI－020（南東から），SI－020遺物出土状況（南から），SI－020カマド遺物出土状況（南東から），SI－021（西から）

図版30　SI－023（西から），SI－023カマド（西から）
SI－024（南西から），SI－024カマド（南西から，SI－026（北東から）

図版31　SI－030（北西から），SI－031（南東から）
SI－033（南西から）

図版32　SI－034（北から），SI－040（北から）
SI－040遺物出土状況（東から）
SI－040カマド遺物出土状況（南から）
SI－041（南から），SI－041遺物出土状況（南から），SI－041カマド遺物出土状況（南から）

図版33　SI－042（東から），SI－042カマド（南から）
SI－043（東から），SI－043遺物出土状況（東から），SI－043カマド（南から）
SI－045（北東から），SI－045カマド（東から）

図版34　SI－046（東から），SI－046遺物出土状況（東から），SI－046カマド（南から）
SI－047（南から），SI－047遺物出土状況（南から），SI－048（南から），SI－048カマド遺物出土状況（南から）

図版35　SI－049（西から），SI－049カマド（西から）
SI－050（南から），SI－050遺物出土状況（東から），SI－050カマド遺物出土状況（南から）
SI－052（南東から），SI－052カマド（南東から）

図版36　SI－053（南から），SI－053カマド（西から）
SI－054（南東から），SI－054カマド（南から）
SI－055（上）・SI－056（下）（南から）

図版37　SI－057（南から），SI－057カマド（南から）
SI－058（東から），SI－059（東から），SI－059カマド（南から）

図版38　SI－060（西から），SI－060Aカマド（北東から），SI－060Bカマド（南から）
SI－061（東から），SI－061カマド遺物出土状況（南から），SI－062（南から），SI－062遺物出土状況（南から），SI－062カマド（南から）

図版39　SI－063（東から），SI－063カマド（南から）
SI－064（南から），SI－064カマド（南から）
SI－065（西から），SI－065カマド（南から）

図版40　SI－067（西から），SI－067遺物出土状況（西から），SI－067カマド（南から）
SI－068（北東から），SI－068カマド（南から）
SI－069（南から），SI－069カマド遺物出土状況（南から）

図版41　SI－070（南から），SI－070遺物出土状況（南から），SI－071（西から），SI－071カマド遺物出土状況（南から），SI－072（東から）
SI－072遺物出土状況（南から），SI－072カマド（南東から）

図版42　SI－073（下）・SI－074（中）（西から），SI－073カマド（南東から），SI－074カマド（南から），SI－075（西から），SI－075カマド（南から），SI－076（北から），SI－076カマド（東から）

図版43　SI－077（東から），SI－077遺物出土状況（東から），SI－077カマド（南から）
SI－078（北から），SI－078遺物出土状況（北から），SI－078カマド（西から）
SI－080（南から），SI－080遺物出土状況（東から），SI－080カマド（南から）

図版44　SI－081（南から），SI－082（西から），SI－082カマド（南から），SI－085（東から）
SI－085カマド遺物出土状況（南から）

図版45　SI－086（東から），SI－086カマド（南から）
SI－087（南から），SI－087遺物出土状況（北から），SI－087カマド（西から）
SI－088（南から），SI－088カマド遺物出土状況（南から）

図版46　SI－089（西から），SI－089カマド（南から）
SI－090（北西から），SI－090カマド（東から）
SI－091（西から），SI－091カマド遺物出土状況（西から）

図版47　SI－092（東から），SI－092遺物出土状況（東から），SI－092カマド（南から），SI－093（西から），SI－093遺物出土状況（東から）
SI－094（南から），SI－094遺物出土状況（東から），SI－094カマド遺物出土状況（南西から）

図版48　SI－095（南から），SI－096（南西から）
SI－096遺物出土状況（西から），SI－096カマド（南から），SI－097（南から），SI－097遺物出土状況（南から），SI－097カマド遺物出土状況（南から）

図版49　SI－098（南から），SI－099（東から）
SI－100（東から），SI－100カマド（南から）

図版50　SI－101（南から），SI－101遺物出土状況（西から），SI－101カマド（南から）
SI－102（南から），SI－102カマド（南西から）

SI－103（東から），SI－103遺物出土状況（北から），SI－103カマド遺物出土状況（南から）

図版51　SI－104（南から），SI－104遺物出土状況（東から），SI－104カマド（SK－053含む）（南から），SI－105（南から），SI－105カマド（南から），SI－106（東から），SI－106カマド（南から）

図版52　SI－107（右）・SI－108（左）（西から）
SI－107カマド遺物出土状況（南東から）
SI－108カマド遺物出土状況（西から）
SI－109（南から），SI－109カマド（南から）
SI－110（南から），SI－110カマド（南から）

図版53　SI－111（南から），SI－111カマド（南から）
SI－112（東から），SI－112カマド（南から）
SI－113遺物出土状況（東から）
SI－113（下）・SI－114（上）（南から）
SI－113カマド（南から），SI－114カマド遺物出土状況（南から）

図版54　SI－117（南から），SI－117カマド遺物出土状況（南から），SI－118（南から），SI－118カマド遺物出土状況（南から），SI－119（南から），SI－119カマド遺物出土状況（南から）

図版55　SI－121（南から），SI－121遺物出土状況（北西から），SI－123（南東から），SI－123カマド（南西から），SI－124（南から），SI－124カマド（南東から）

図版56　SI－125（西から），SI－125カマド（南から）
SI－126（南から），SI－126遺物出土状況（西から），SI－126カマド（南から）
SI－132（西から）

図版57　SI－133（南から），SI－134（西から）
SI－135（南から），SI－135カマド遺物出土状況（南から）

図版58　SI－136（左）・SI－137（右）（北西から）
SI－136カマド遺物出土状況（南から），SI－136カマド（南から），SI－138（西から）
SI－138カマド遺物出土状況（南から）
SI－139（中）・SI－140（右）（北西から）
SI－139カマド（東から）

図版59　SI－141（南から），SI－142（右）・SI－143（下）（北から），SI－144（南から）

図版60　SI－145（東から），SI－146（南から），SI－148（北から），SI－148遺物出土状況（西から）

図版61　SI－149（南東から），SI－151カマド遺物出土状況（東から），SI－152カマド遺物出土状況（南から），SI－151（北から）
SI－153カマド（南から）SI－154カマド（南から），上からSI－155・SI－156・SI－153・SI－154・SI－152（南東から），SI－155カマド（南から），SI－156カマド（西から）

図版62　SI－157（北から），SI－157カマド（南から）
SI－158（西から），SI－164（西から），SI－164カマド遺物出土状況（西から）

図版63　SI－165新（東から），SI－165新カマド遺物出土状況（南から），SI－165旧（北から）
SI－165旧カマド（西から）
SI－167（東から），SI－167カマド（南から）

図版64　SI－168（南から），SI－168カマド遺物出土状況（南から），SI－169（南から），SI－169カマド（南から），SI－170（西から）

図版65　SI－171（西から），SI－171カマド（西から）
SI－172（南から），SI－172カマド（南から）
SI－173（南から）

図版66　SI－174（南から），SI－174カマド遺物出土状況（南から），SI－175（北西から）
SI－175遺物出土状況（北から），SI－175カマド（北東から），SI－176（西から）
SI－176新カマド（西から），SI－176旧カマド遺物出土状況（西から）

図版67　SI－177（南から），SI－178（西から），SI－178カマド（南から），SI－179（北から）
SI－179カマド（南東から）

図版68　SI－180（西から），SI－180遺物出土状況（西から），SI－180カマド（南から）
SI－181（北西から），SI－181遺物出土状況（西から），SI－181カマド（南西から）
SI－182（南から），SI－182カマド遺物出土状況（南から），SI－182カマド（南から）

図版69　SI－183（南から），SI－183カマド（南から）
SI－184（西から），SI－184遺物出土状況（南から），SI－184カマド（西から）
SI－185（南から），SI－185カマド（南から）

図版70　SI－186（東から），SI－186カマド遺物出土状況（東から），SI－186カマド（東から）
SI－187（南から），SI－188（南から），SI－188遺物出土状況（南から），SI－188カマド（南から）

図版71　SI－189（北西から），SI－189 15年度全景（北から），SI－189カマド（西から）

SI－190（南から），SI－191（西から），SI－191カマド（西から）

図版72　SI－192(南から),SI－192カマド(西から)
SI－193（南から），SI－193カマド遺物出土状況（南から），SI－194（南から），SI－194カマド遺物出土状況（南から）

図版73　SI－195(南から),SI－195カマド(南から)
SI－196(南から),SI－196カマド(南から)
SI－197（南から）

図版74　SI－198（南東から），SI－198カマド遺物出土状況（南から），SI－199（南東から）
SI－199カマド（東から）
SI－200(南から),SI－200カマド(南から)

図版75　SI－201(南から),SI－201カマド(南から)
SI－202（西から），SI－203（西から），SI－203カマド遺物出土状況（南から）

図版76　SI－204（東から），SI－204カマド遺物出土状況（東から），SI－205（東から），SI－205カマド(南から),SI－206(南東から)
SI－206カマド遺物出土状況（南から）

図版77　SI－207(南から),SI－207カマド(南から)
SI－208(東から),SI－208カマド(南から)
SI－209（下）・SI－210（上）（東から）
SI－210カマド遺物出土状況（南から）

図版78　SI－211（北東から），SI－211カマド遺物出土状況（南東から），SI－212（南から）
SI－212カマド遺物出土状況（南から）
SI－213(西から),SI－213カマド(東から)

図版79　SI－214(北東から),SI－214カマド(南から)
SI－215（北西から），SI－216（東から）
SI－216カマド遺物出土状況（東から）

図版80　SI－217（南から），SI－218（南東から）
SI－219（南から）

図版81　SI－220（南から），SI－221（南東から）
SI－222（南東から）

図版82　SI－223（右）・SI－224（左）（南から）
SI－225（北から），SI－228（南から）

図版83　SI－229（西から），SI－230（南西から）
SI－231（南西から）

図版84　SI－233（西から），SI－234（南西から）
SI－235（南から）

図版85　SI－236（上）・SI－238（下）（南から）
SI－239(南西から),SI－239カマド(東から)
SI－240（南西から），SI－240カマド遺物出土状況（南から）

図版86　SI－241（南東から），SI－242（南から）
SI－243(南から),SI－243カマド(南から)

図版87　SI－244(西から),SI－244遺物出土状況(西から)，SI－244カマド（西から）
SI－245A（下）・SI－245B（上）（南から）
SI－245Aカマド（南から），SI－245Bカマド（南から），SI－246A（南から），SI－246Aカマド（南から）

図版88　SI－246A・SI－246B（南から）
SI－247（南から），SI－248（西から）

図版89　SI－249（南東から），SI－249カマド（南東から），SI－250（北から），SI－250カマド（東から），SI－251（北から），SI－251カマド（北西から）

図版90　SI－252A・SI－252B（北から），SI－252Aカマド遺物出土状況（西から),SI－253（北から），SI－253カマド（南から），SI－254（西から),SI－254遺物出土状況（北から）
SI－254カマド（南西から）

図版91　SI－255(北西から),SI－255カマド(西から)
SI－256（西から），SI－256カマド遺物出土状況（南西から），SI－257（北から）
SI－257新カマド遺物出土状況（東から）
SI－257旧カマド（南から）

図版92　SI－258(東から),SI－258カマド(南から)
SI－259（東から），SI－259カマド遺物出土状況（北東から），SI－260（東から）
SI－260カマド遺物出土状況（東から）

図版93　SI－261（南東から），SI－261カマド遺物出土状況（南から），SI－262（南東から）
SI－262遺物出土状況（南東から），SI－262カマド(南東から),SI－263(南西から)
SI－263カマド遺物出土状況（南西から）

図版94　SI－014（西から），SI－016（南西から）
SI－022（西から），SI－027（西から）
SI－120（南西から），SK－008（西から）
SK－016（西から），SK－018（北から）

図版95　SK－257（北から），SB－001（南から）
SB－002・SB－003・SB－004（東から）
SB－005･SB－006（東から），SB－007（南から），SB－008（東から）
SB－009（南から），SB－010（東から）

図版96　SB－011・SB－012（東から），SB－013～SB－016･SB－019（西から），SB－020（東から），SB－021（南東から），SB－022（南から），SB－023（北から），SB－025・SB－026（北から），SB－027（東から）

図版97　SB－028（東から），SB－029（西から）
SB－030（北から），SB－031（北から）
SB－032（北から），SB－033（東から）
SB－034（北から），SB－035（北から）
図版98　SB－036（西から），SB－037（西から）
SB－038（東から），SB－039（東から）
SB－040（西から），SB－041（北から）
SB－042（西から），SB－043（南から）
図版99　SB－044（南から），SB－045（東から）
SB－046・SB－047（北東から），SB－048A・SB－048B・SB－048C・（北から）
SB－050（南東から），SB－051A・SB－051B（北から），SB－052（東から），SB－053・SB－054（西から）
図版100　SK－003（北東から），SK－010（北から）
SK－011（西から），SK－012（北から）
SK－013（東から），SK－014（東から）
SK－019（南から），SK－020（北から）
図版101　SK－021（西から），SK－022（北から）
SK－023（南から），SK－024（北から）
SK－025（南から），SK－026（西から）
SK－027（南東から），SK－028（南から）
図版102　SK－029（南から），SK－030（西から）
SK－031（北から），SK－035（西から）
SK－036（南から），SK－037（南から）
SK－039（北東から），SK－042（東から）
図版103　SK－043（南から），SK－044（南から）
SK－045（東から），SK－046（北から）
SK－047（東から），SK－048（東から）
SK－051（南東から），SK－052（東から）
図版104　SK－055（南東から），SK－059（北から）
SK－060（南から），SK－103（北から）
SK－107（西から），SK－108（西から）
SK－109（北から），SK－110（北から）
図版105　SK－111（北から），SK－112（北から）
SK－113（北から），SK－115（北から）
SK－124（北から），SK－125（北から）
SK－138（北から），SK－142（西から）
図版106　SK－143（北東から），SK－223（西から）
SK－238（西から），SK－239（西から）
SK－240（西から），SK－241（東から）
SK－243（東から），SK－244～SK－247（北から）
図版107　SK－248（北から），SK－250（北東から）
SK－252（北から），SK－256遺物出土状況（南東から），SK－260（北西から）
SK－261（北から），SK－262（西から）
SK－265（東から）
図版108　SK－266（東から），SK－270A・SK－270B・SK－270C（北東から）
SK－275（東から），SK－276（南から）
SK－277（北から），SK－292（南から）
SK－293（東から），SK－294（南から）
図版109　SK－295（南西から），SK－296A・SK－296B（南西から），SK－297（南西から）
SK－298（南から），SK－299（南から）
SK－300（南から），SK－301（南から）
SK－304（北から）
図版110　SK－307（北から），SK－308（西から）
SK－310（北東から），SK－311（北西から）
SK－316（北西から），SK－317（東から）
図版111　SD－003（東から），SD－003（西から）
SD－003（東から），SD－003（北西から）
SD－003（北から），SD－004（北から）
SD－005（右）・SD－025（左）（北から）
SD－005（右）・SD－025（左）（北から）
図版112　SD－011（西から），SD－013（北から）
SD－014（南から），SD－014（南から）
SD－014（北から），SD－020（西から）
SD－021（北西から）
図版113　SD－022（東から），SD－023・土坑群（西から），SD－024（東から），SD－028（西から），SD－029（西から），SD－030・SD－031（南から），SD－034・SD－035（北西から）
図版114　第1～6地点出土石器
図版115　第7～9地点及び単独・出土石器
図版116　SI－005・SI－007住居跡出土土器
図版117　SI－025住居跡出土土器
図版118　FP－004炉穴出土土器（1）
図版119　FP－004炉穴出土土器（2）
図版120　FP－005・FP－008・FP－009（1）炉穴出土土器
図版121　FP－009（2）・グリッド出土土器（1）
図版122　グリッド出土土器（2）
図版123　グリッド出土土器（3）
図版124　グリッド出土土器（4）
図版125　グリッド出土土器（5）
図版126　グリッド出土土器（6）
図版127　グリッド出土土器（7）－1
図版128　グリッド出土土器（7）－2・（8）
図版129　グリッド出土土器（9）

図版130　グリッド出土土器（10）
図版131　グリッド出土石器（1）
図版132　グリッド出土石器（2）
図版133　グリッド出土石器（3）・(4)－1
図版134　グリッド出土石器（4)－2・(5)－1
図版135　グリッド出土石器（5)－2・(6)・(7)－1
図版136　グリッド出土石器（7)－2・(8)－1
図版137　グリッド出土石器（8)－2・(9)
図版138　グリッド出土石器（10）
図版139　グリッド出土石器（11）
図版140　土製品（抉状耳飾・土器片錘・焼成粘土塊・研磨土器片）
図版141　SI－001・002・003・004出土土器
図版142　SI－004・006・008出土土器
図版143　SI－008・009・010・011出土土器
図版144　SI－011・012・013・017・018出土土器
図版145　SI－018・019・020・021出土土器
図版146　SI－021・023・024・029出土土器
図版147　SI－029・030・031・033・035出土土器
図版148　SI－035・040・041出土土器
図版149　SI－042・043・044・045・046出土土器
図版150　SI－046・047・048・049・050出土土器
図版151　SI－050・051・052・053・054・055・056・057・058出土土器
図版152　SI－058・059・060・061出土土器
図版153　SI－061・062・063出土土器
図版154　SI－063・064・065・067出土土器
図版155　SI－068・069・070・071出土土器
図版156　SI－071・072・073出土土器
図版157　SI－073・074・075出土土器
図版158　SI－075・076・077・078出土土器
図版159　SI－078・079・080・081・082出土土器
図版160　SI－082・083・084・085出土土器
図版161　SI－085・086・087・088出土土器
図版162　SI－088・089・090・091出土土器
図版163　SI－091・092出土土器
図版164　SI－092・093・094出土土器
図版165　SI－094・095出土土器
図版166　SI－095・096・097出土土器
図版167　SI－097・098・100・101出土土器
図版168　SI－101・103出土土器
図版169　SI－103・104出土土器
図版170　SI－105・106・107・108・109出土土器
図版171　SI－109・110・111・112・113出土土器
図版172　SI－113・114・115出土土器
図版173　SI－115・116出土土器
図版174　SI－116・117・118出土土器
図版175　SI－118出土土器
図版176　SI－118・119・120・121・122・123出土土器
図版177　SI－124・125・126・131出土土器
図版178　SI－131・132・133・134・135出土土器
図版179　SI－135・136・137・138出土土器
図版180　SI－138・139・140・141・142出土土器
図版181　SI－142・143・144・145・146・147出土土器
図版182　SI－147・148・149出土土器
図版183　SI－151出土土器
図版184　SI－151・152・153出土土器
図版185　SI－153出土土器
図版186　SI－153・154・155出土土器
図版187　SI－155・156出土土器
図版188　SI－156・157・158・161出土土器
図版189　SI－161・162・163・164・165出土土器
図版190　SI－165出土土器
図版191　SI－165・167・168・169出土土器
図版192　SI－169・170・171出土土器
図版193　SI－171・172・173・174・175・176出土土器
図版194　SI－176・177・178・179出土土器
図版195　SI－179・180・181・182出土土器
図版196　SI－182・183・184・185・186出土土器
図版197　SI－186・187・188・189出土土器
図版198　SI－190・191・192出土土器
図版199　SI－192・193・194・195出土土器
図版200　SI－195・196・197・198出土土器
図版201　SI－198・199・200・201出土土器
図版202　SI－201・202・203・204出土土器
図版203　SI－204・205出土土器
図版204　SI－205・206・207・208出土土器
図版205　SI－208・209出土土器
図版206　SI－209・210・211出土土器
図版207　SI－211出土土器
図版208　SI－211・212出土土器
図版209　SI－212・213出土土器
図版210　SI－214・215・216出土土器
図版211　SI－217・218・219出土土器
図版212　SI－220・221・222・223・224・225・227・228出土土器
図版213　SI－229・230出土土器
図版214　SI－231・233・235・236出土土器
図版215　SI－236・238・239・240出土土器
図版216　SI－240・241・242・243・244出土土器
図版217　SI－244・245A・245B出土土器
図版218　SI－245B・246A・248・249出土土器

図版219　SI－249・250・251・252A・252B・253出土土器
図版220　SI－253・254・255出土土器
図版221　SI－255・256・257出土土器
図版222　SI－257・258・259・260・261出土土器
図版223　SI－261・262出土土器
図版224　SI－262・263，SB－002・009・013・022・029出土土器
図版225　SB－030・032・035・038・039，SK－011・016・019・043・107・110・142・244・245出土土器
図版226　SK－245・246・247・248・249・250・251出土土器
図版227　SK－252・253・256・257・264・265・307出土土器
図版228　SK－308・315，P－049・065，SD－003出土土器
図版229　SD－003・005・010・023・024・030出　土土器
図版230　遺構外出土土器（1）
図版231　遺構外出土土器（2）
図版232　鉄製品（1）
図版233　鉄製品（2）
図版234　鉄製品（3）
図版235　鉄製品（4）
図版236　鉄製品（5）
図版237　鉄製品（6），椀形鍛冶滓
図版238　鉄製品（7），銅製品
図版239　鉄製品（8）
図版240　銭貨
図版241　土製支脚（1）
図版242　土製支脚（2）
図版243　土製支脚（3），羽口，土製品，玉類
図版244　石製紡錘車
図版245　砥石（1）
図版246　砥石（2）
図版247　軽石
図版248　文字資料（1）（墨書・刻書）
図版259　文字資料（2）（墨書・朱墨・刻書）
図版250　文字資料（3）（墨書・朱墨・刻書）

報告書抄録　　巻末

# 写　真　図　版

図版1

遺跡周辺航空写真（約1／10,000　昭和44年撮影）

図版２

稲荷塚遺跡空中写真（1）（北から）

稲荷塚遺跡空中写真（2）（南から）

稲荷塚遺跡空中写真（③）（北東から）

稲荷塚遺跡空中写真（④）（東から）

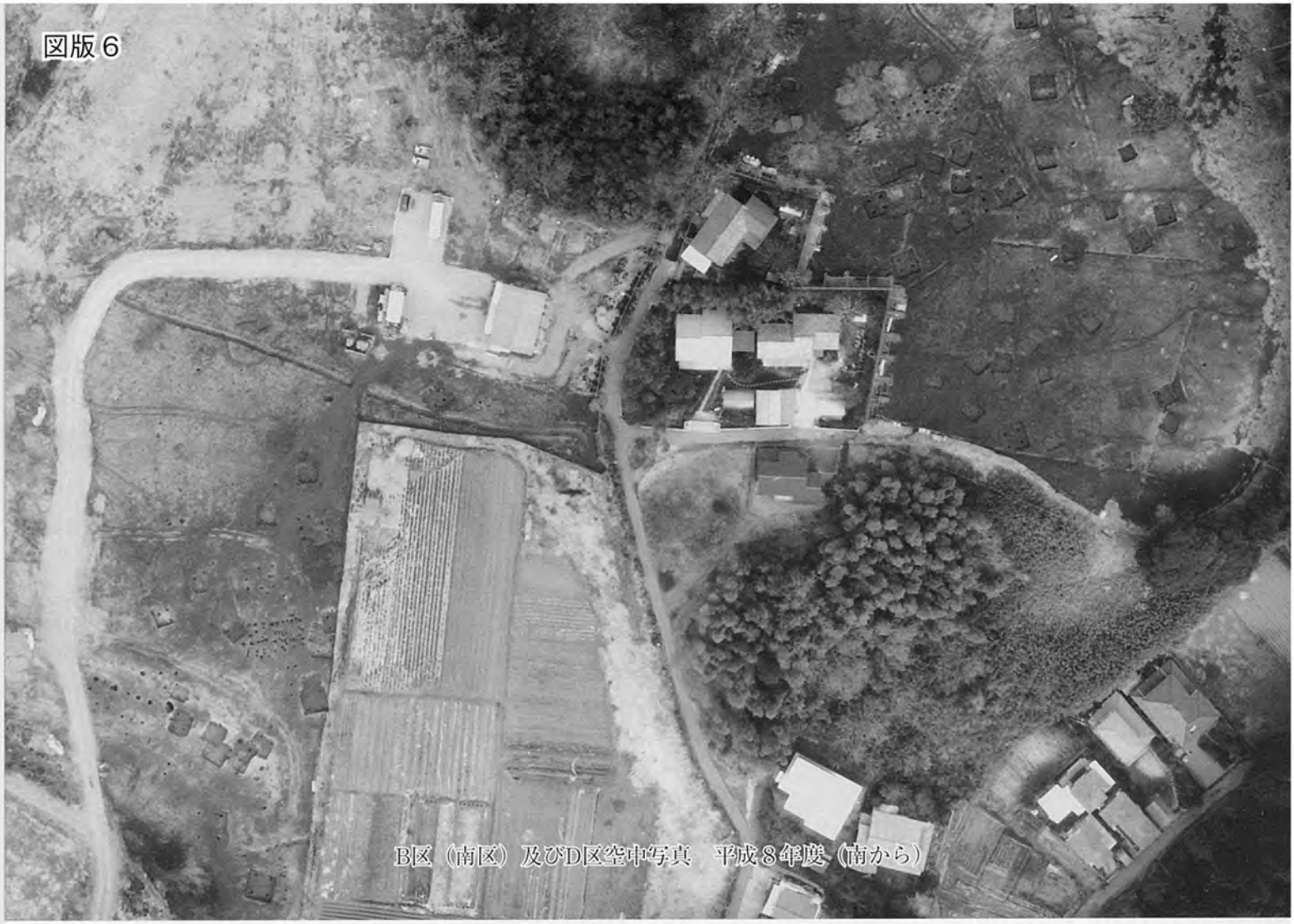
図版4

稲荷塚遺跡空中写真（5）（合成）

A区空中写真　平成７年度（西から）

B区（北区）空中写真　平成８年度（南から）

図版６



B区（南区）及びD区空中写真　平成８年度（南から）

E区空中写真　平成８年度（南から）

F区空中写真　平成10年度（南西から）

H区空中写真　平成15年度（北から）

図版8

C区調査前　平成７年度
（北西から）

C区確認調査終了　平成７年度
（西から）

G区（南区）調査前　平成13年度
（西から）

G区(南区)完掘
平成13年度(南西から)

G区(北区)完掘
平成13年度(南西から)

G区(中央区)完掘
平成14年度(北西から)

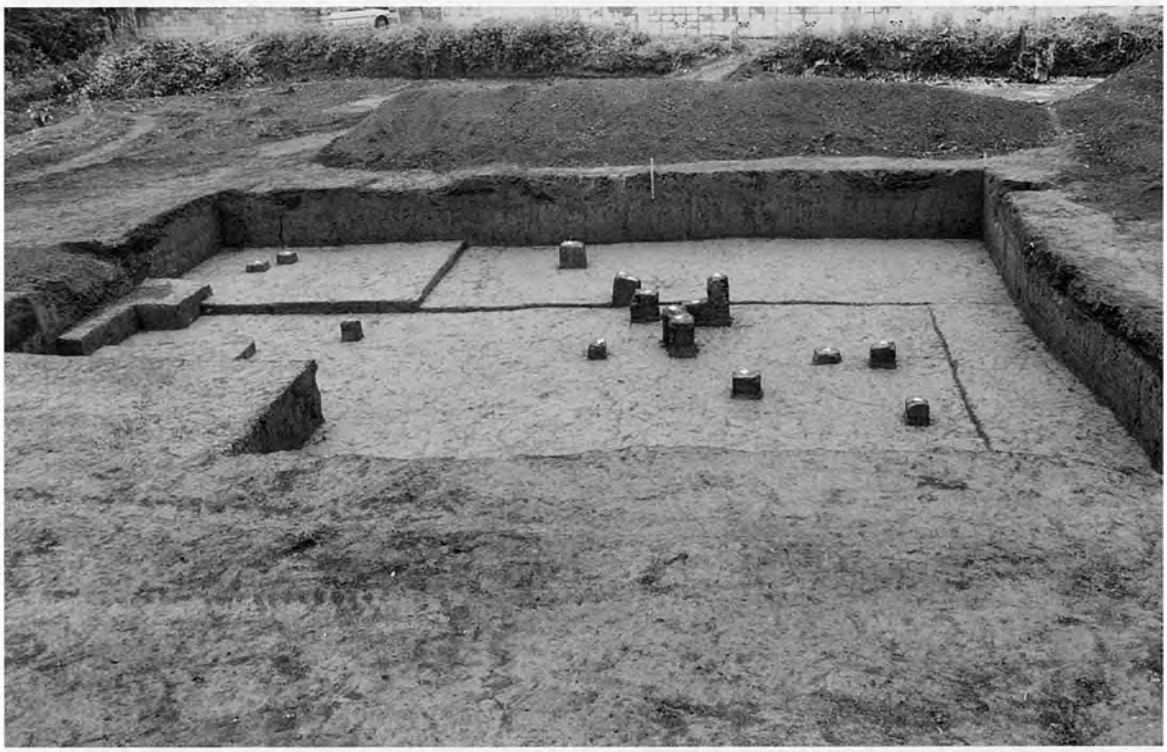
図版 10

第１文化層第１地点
（南から）

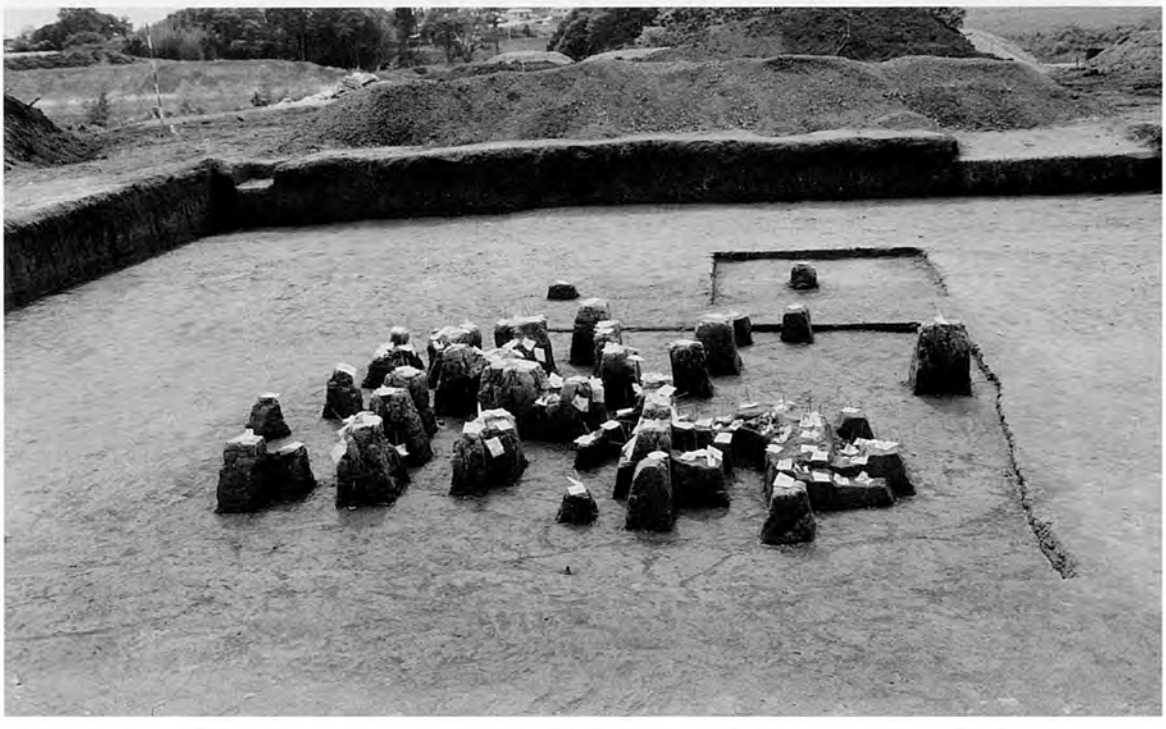
第２文化層第３地点
（南から）

第２文化層第４地点
（南から）

第２文化層第５地点
（南から）



第２文化層第５地点
（西から）



第２文化層第６地点
（北から）

図版 12

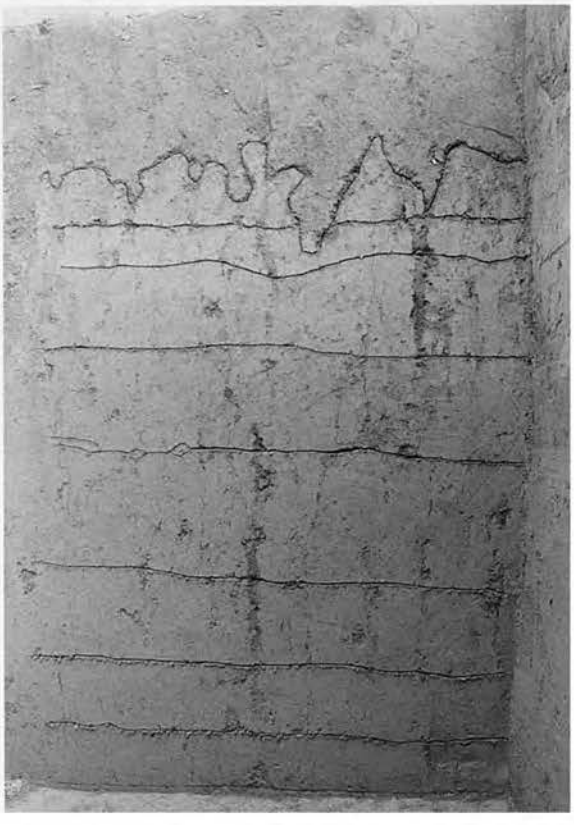
第３文化層第７地点
（南から）

第３文化層第８地点
（南から）

調査風景

縄文石器集中(22L－88付近)
(北西から)

縄文石器集中(22K－79付近)
(北から)



土層断面(22L－02)

図版14

FP－1（西から）

FP－2（西から）

FP－3（西から）

FP－4（南から）

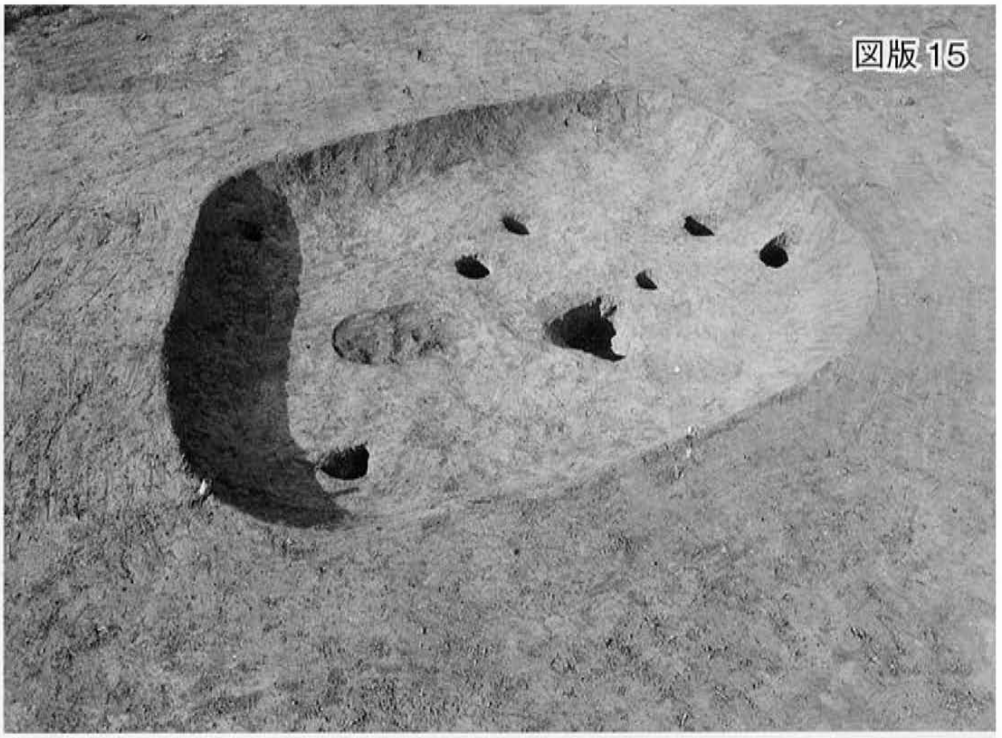
FP－5（南から）

FP－6（北から）

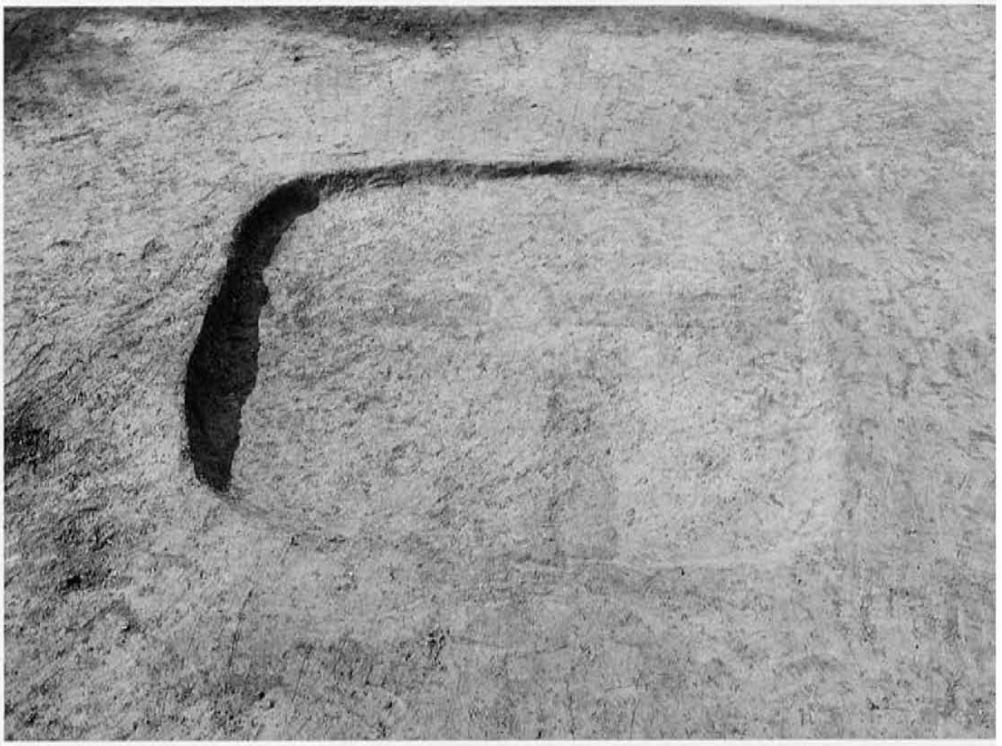
FP－7（北から）

FP－8（南西から）

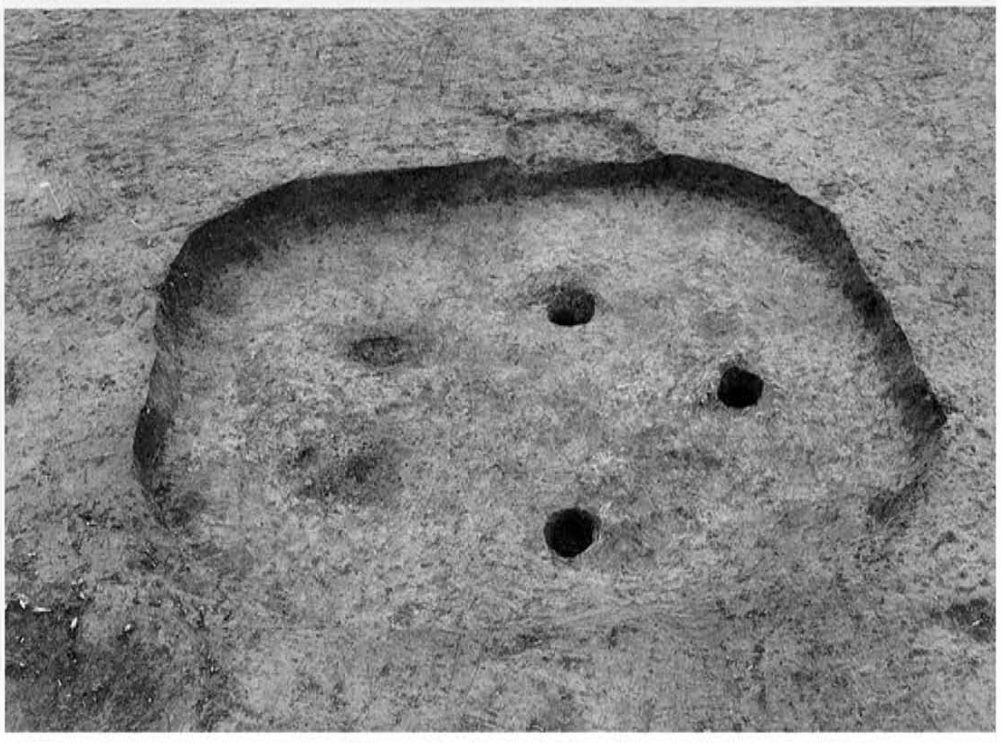
FP－9（西から）



SI－005（東から）

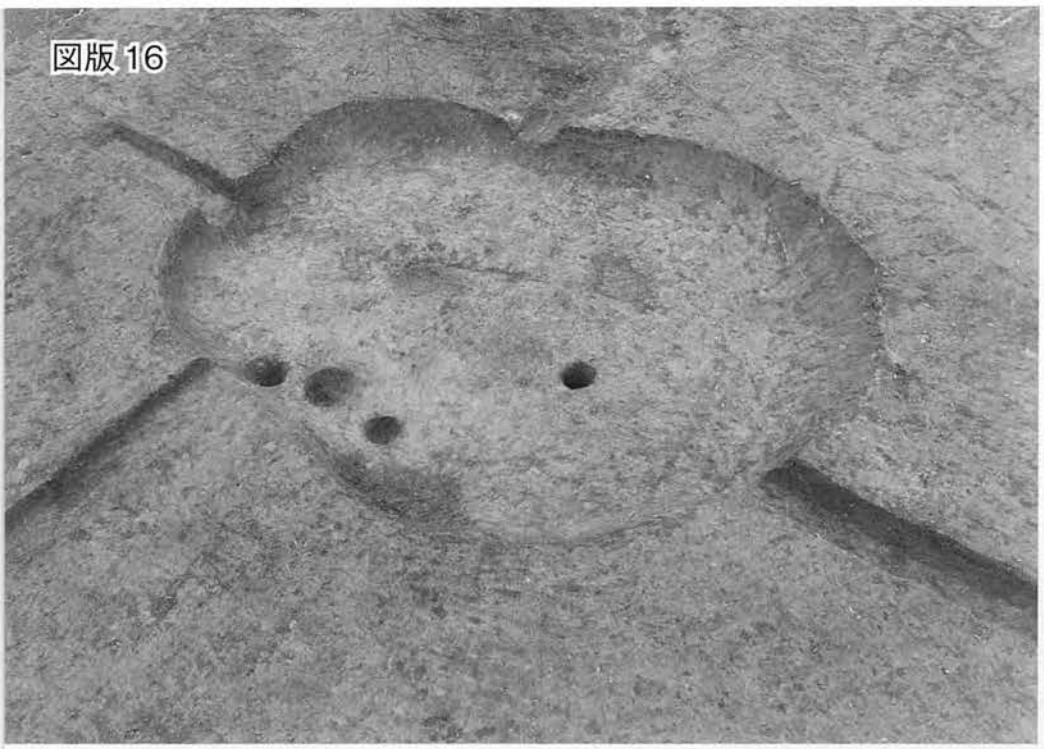


SI－007（北から）



SI－025（北東から）

図版 16



SI－028（東から）

SK－033（南から）

SK－034（南から）

SK－114（南から）

SK－271（西から）

SK－283（南から）

SK－284（北西から）

SK－285（北東から）

SK－288（東から）

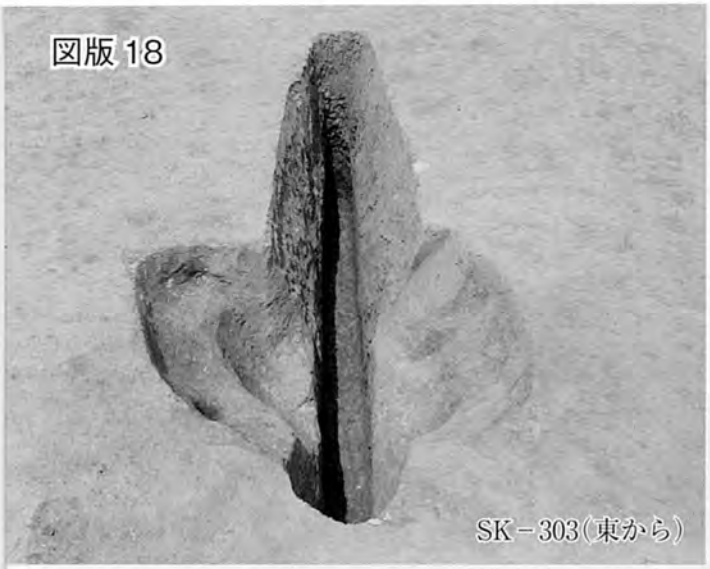
SK－289（南西から）

SK－290（北西から）

SK－291（南東から）

SK－302（東から）

図版 18


SK－303（東から）

SK－320（北東から）

SK－321（南から）

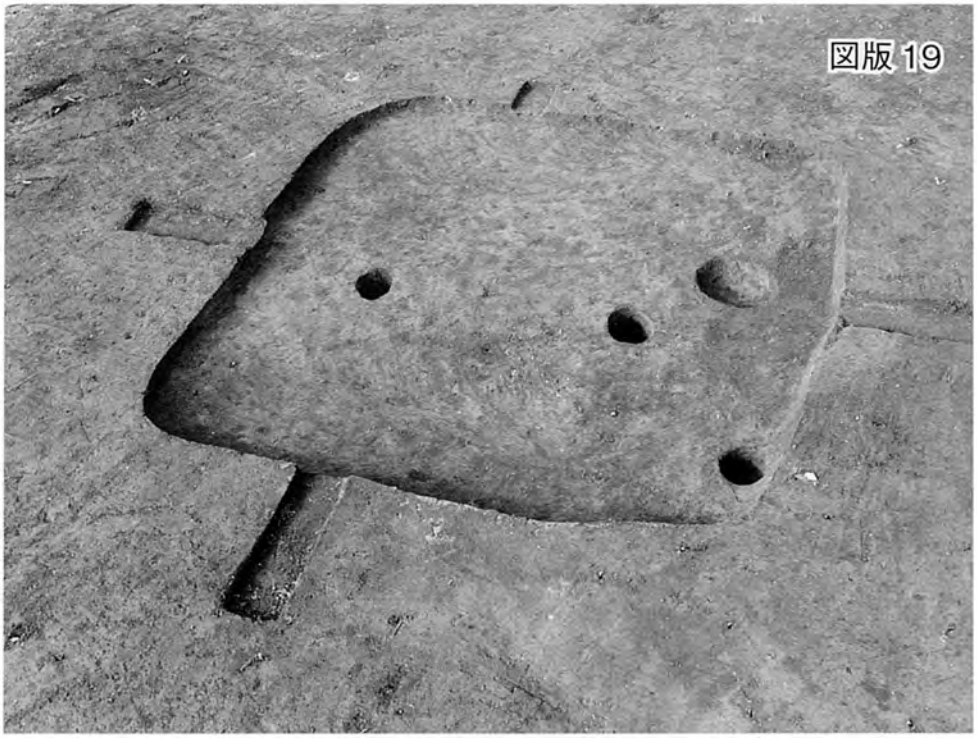
SI－025 貝層土状況（北東から）

SK－001（南東から）

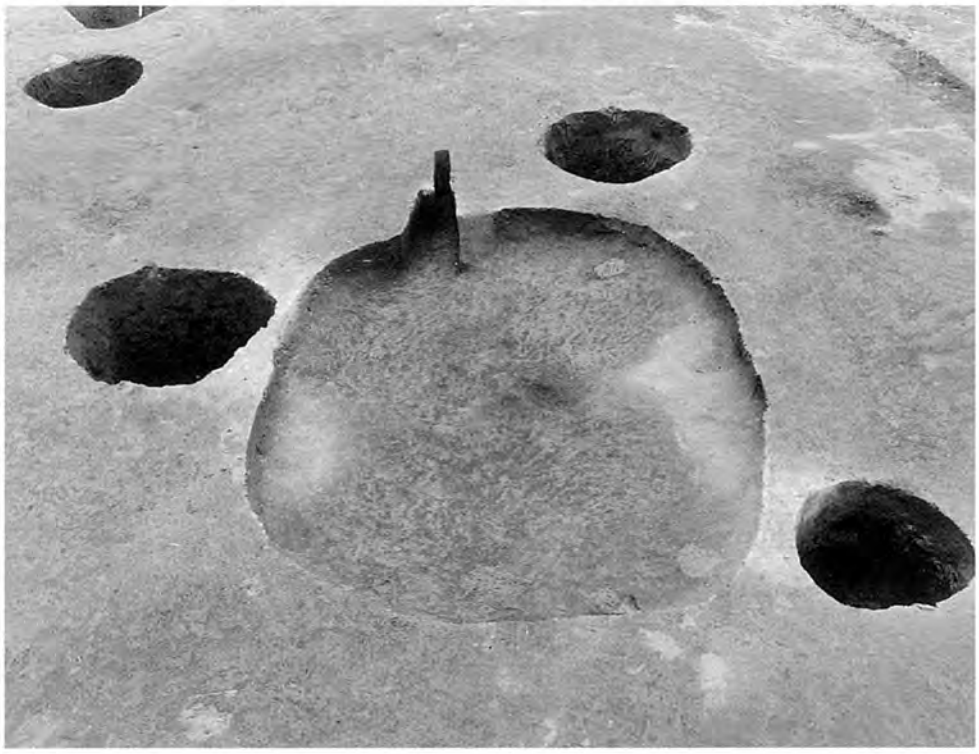
SK－038（南から）

SK－104（北から）

SK－233（西から）



SI－032（南から）



SI－122（東から）

図版20

SX－001（西から）

SX－005（東から）

SX－005（北から）

SI－029 カマド(南東から)

SI－029(南東から)

SI－044 遺物出土状況(西から)

SI－044(西から)

SI－051 カマド(南から)

SI－051(西から)

図版 22

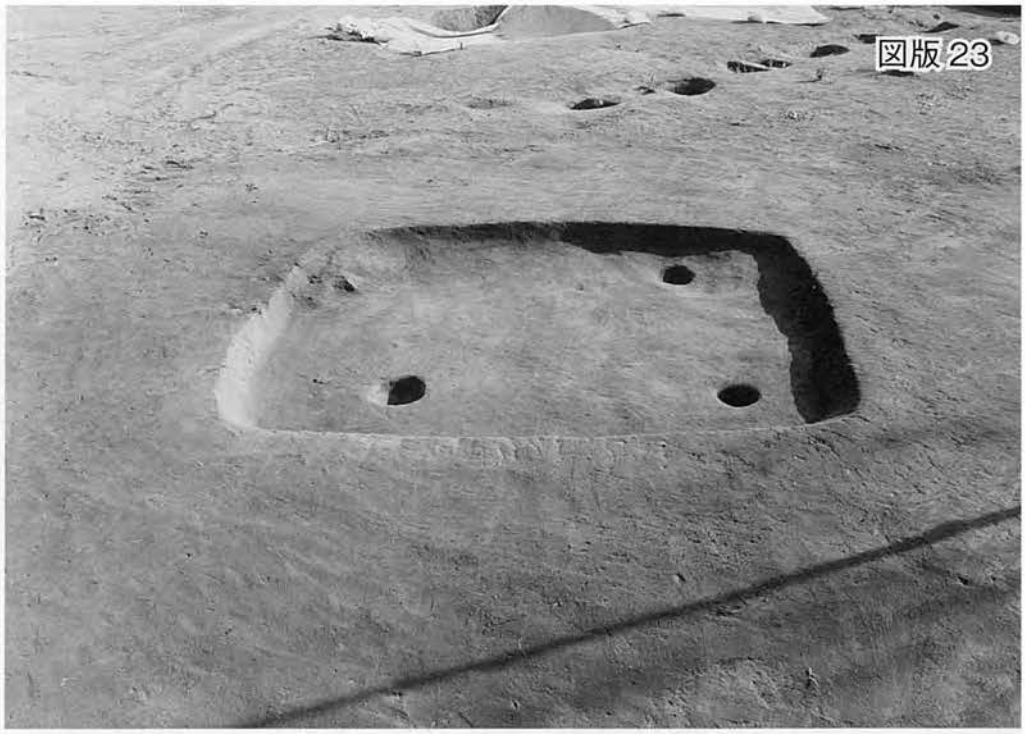
SI－066（東から）

SI－066 カマド（南から）

SI－079（北東から）

SI－083（東から）

SI－084 遺物出土状況（東から）



SI－084（北から）

SI－115 カマド付近遺物出土状況（南東から）

SI－115 カマド（南から）

SI－115（南から）

SI－116 遺物出土状況（南東から）

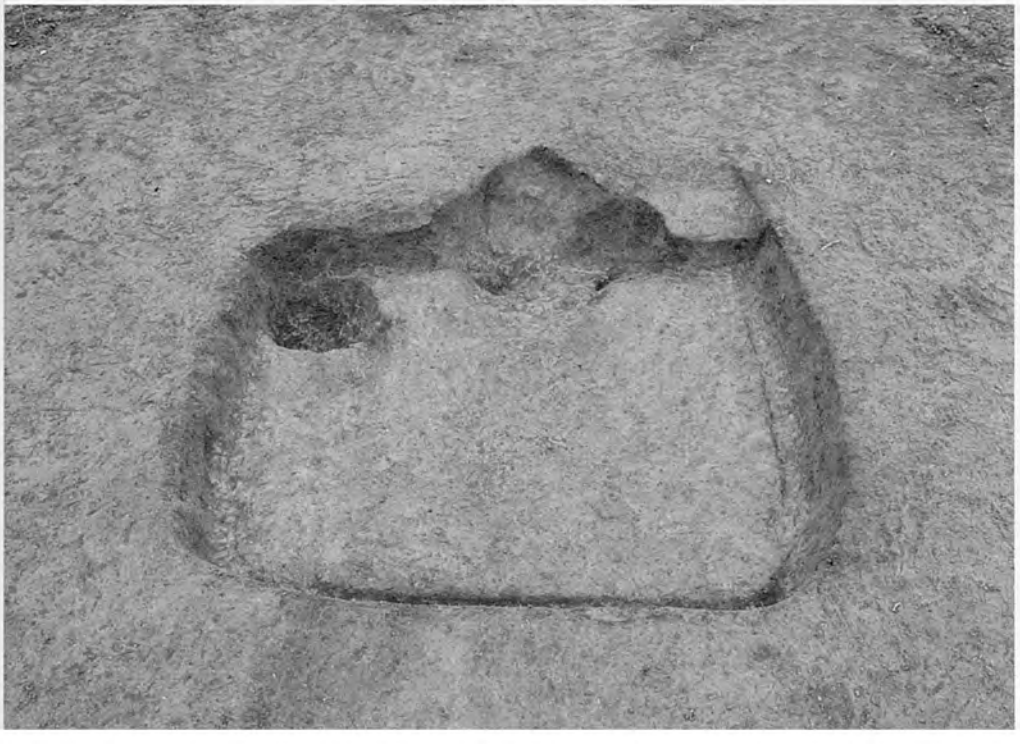
SI－116 カマド（南から）

SI－116（南から）

図版 24

SI－227（南から）

SI－001（北西から）



SI－002（東から）

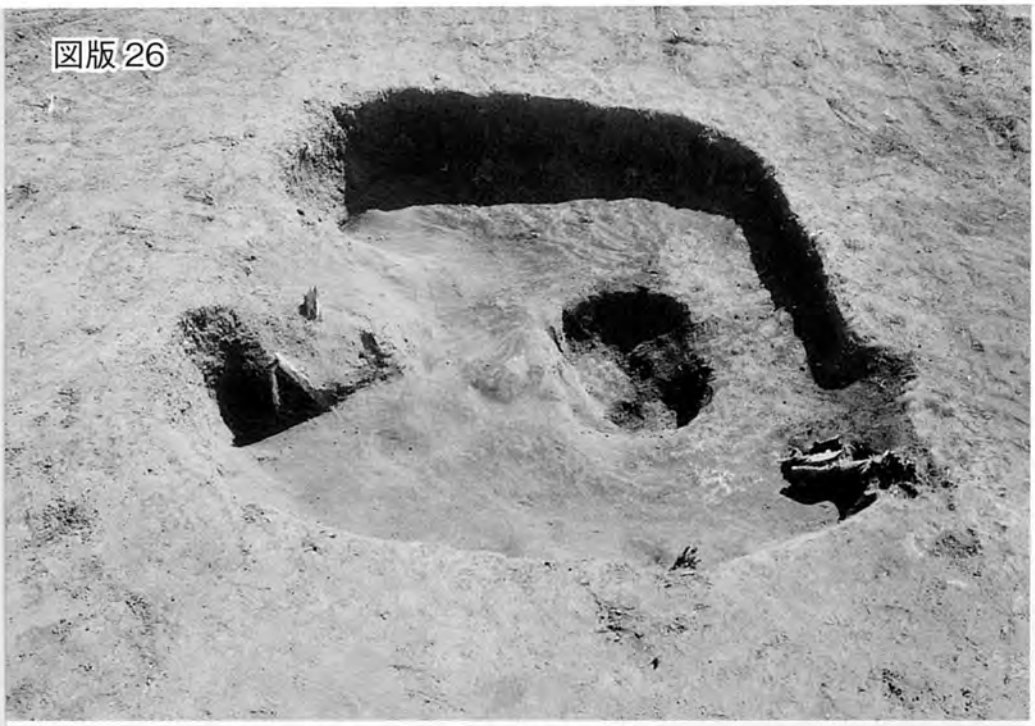
SI－003 カマド(南東から)

SI－003(北東から)

SI－004(南東から)

SI－006(東から)

図版 26

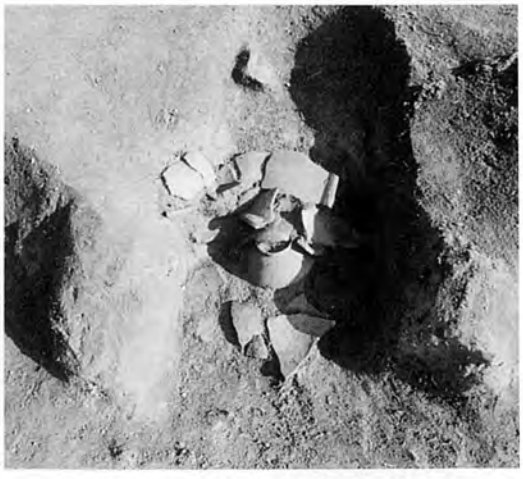


SI－008(西から)

SI－008 カマド(南から)

SI－009(北から)

SI－010(南西から)



SI－010 カマド遺物出土状況
(西から)

SI－011 カマド遺物出土状況
（南西から）

SI－011（南から）

SI－012 カマド（南から）

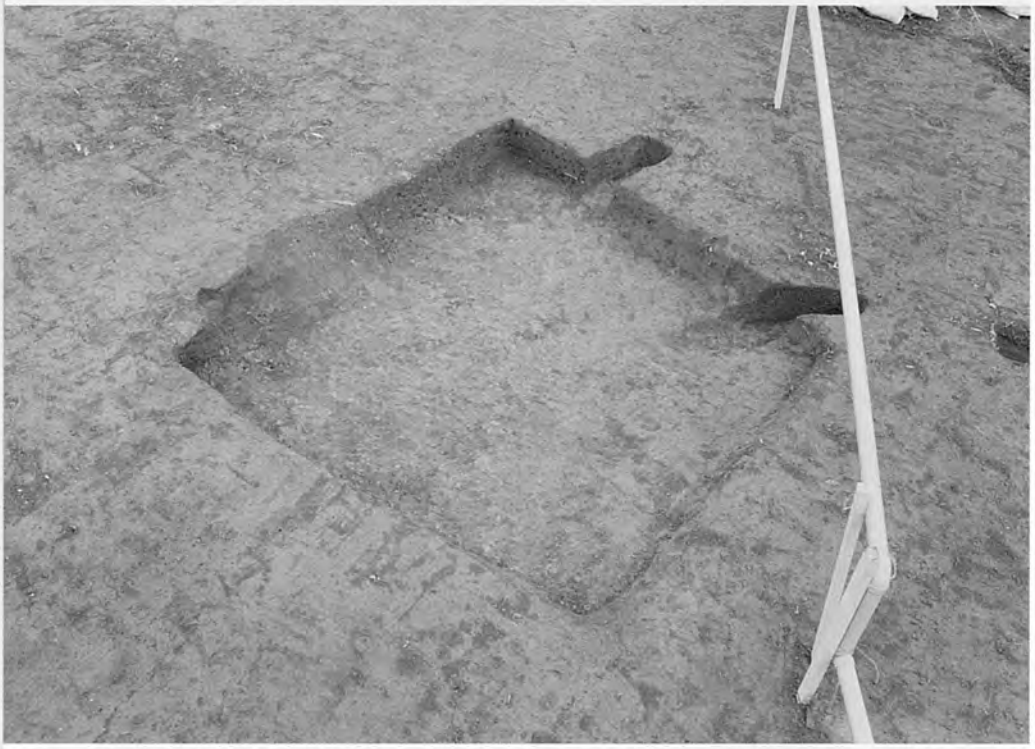
SI－012（北西から）

SI－013 カマド（南東から）

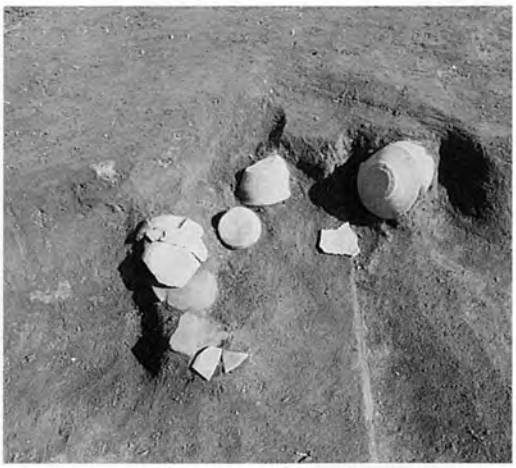
SI－013（南東から）

図版 28

SI－015(南西から)



SI－017(西から)



SI－018 カマド遺物出土状況
(南西から)

SI－018(西から)

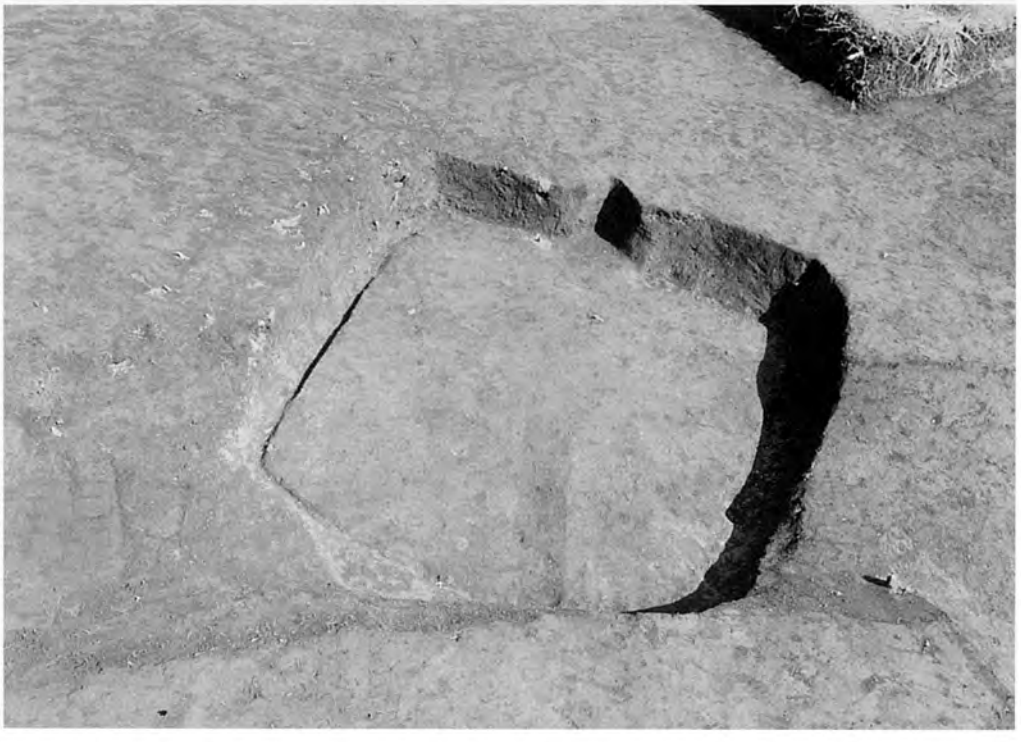
SI－019 カマド(南から)

SI－019(南から)

SI－020 遺物出土状況(南から)

SI－020 カマド遺物出土状況
(南東から)

SI－020(南東から)



SI－021(西から)

図版 30

SI－023(西から)

SI－023 カマド(西から)

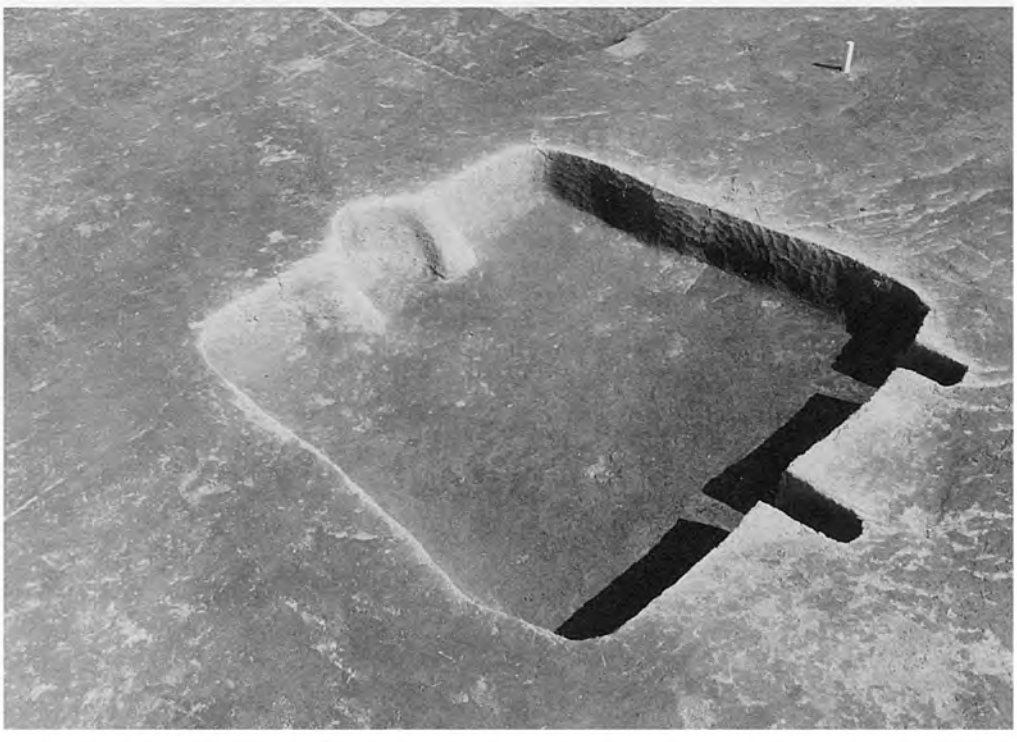
SI－024(南西から)

SI－024 カマド(南西から)

SI－026(北東から)

SI－030（北西から）

SI－031（南東から）



SI－033（南西から）

図版32

SI－034（北から）

SI－040（北から）

SI－040 遺物出土状況（東から）

SI－040 カマド遺物出土状況
（南から）

SI－041（南から）

SI－041 遺物出土状況（南から）

SI－041 カマド遺物出土状況
（南から）

SI－042 カマド(南から)

SI－042(東から)

SI－043 遺物出土状況(東から)

SI－043(東から)

SI－043 カマド(南から)

SI－045 カマド(東から)

SI－045(北東から)

図版34

SI－046(東から)

SI－046 遺物出土状況(東から)

SI－046 カマド(南から)

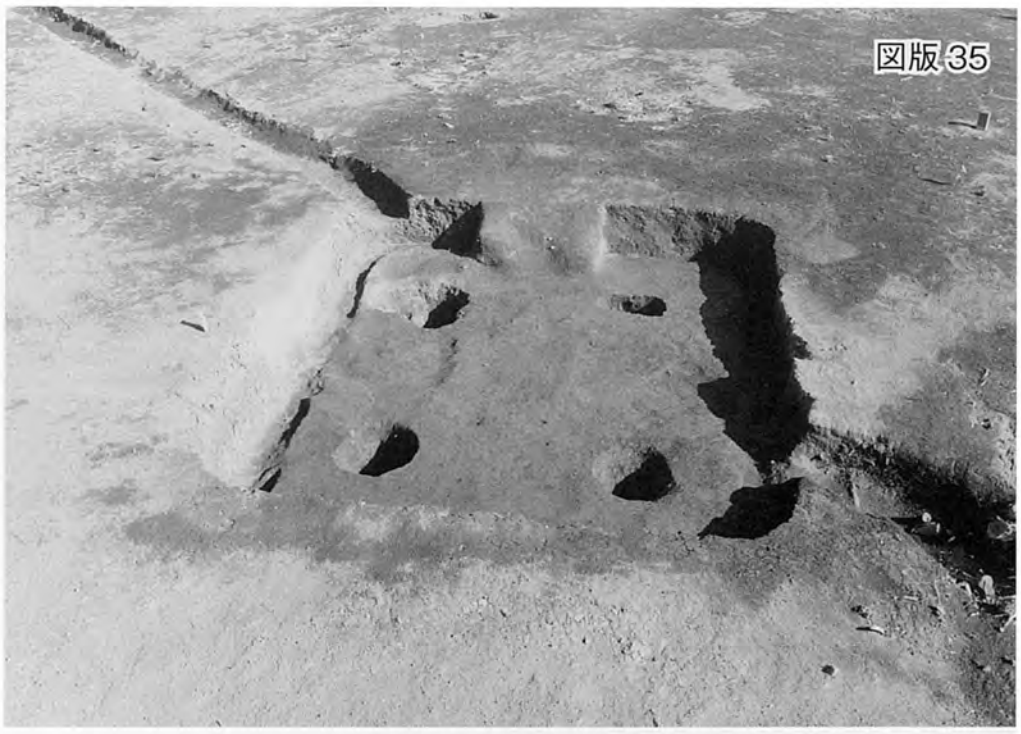
SI－047(南から)

SI－047 遺物出土状況(南から)

SI－048(南から)

SI－048 カマド遺物出土状況
(南から)

SI－049 カマド(西から)

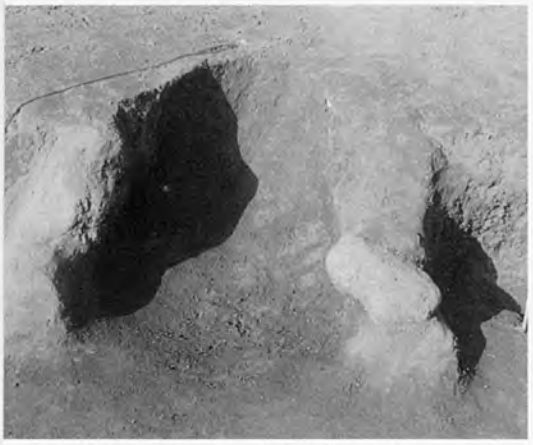


SI－049(西から)

SI－050 遺物出土状況(東から)

SI－050(南から)

SI－050 カマド遺物出土状況(南から)

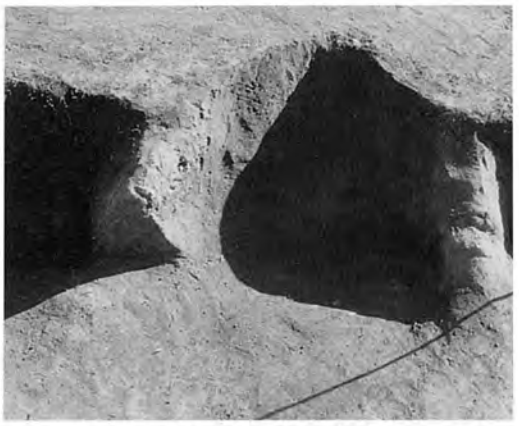


SI－052 カマド(南東から)

SI－052(南東から)

図版 36

SI－053（南から）



SI－053 カマド（西から）

SI－054（南東から）

SI－054 カマド（南から）

SI－055（上）・056（下）（南から）

SI－057 カマド(南から)

SI－057(南から)

SI－058(東から)

SI－059 カマド(南から)

SI－059(東から)

図版 38

SI－060(西から)

SI－060A カマド(北東から)

SI－060B カマド(南から)

SI－061(東から)

SI－061 カマド遺物出土状況
(南から)

SI－062(南から)

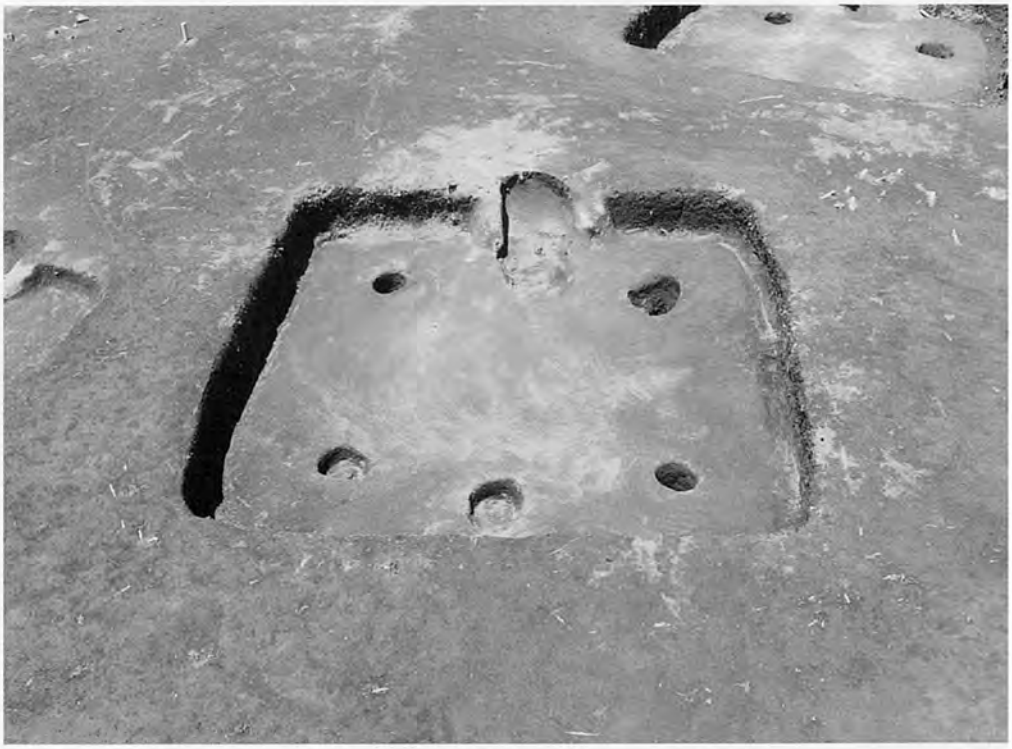
SI－062 遺物出土状況(南から)

SI－062 カマド(南から)

SI－063 カマド(南から)

SI－063(東から)

SI－064 カマド(南から)



SI－064(南から)

SI－065 カマド(南から)

SI－065(西から)

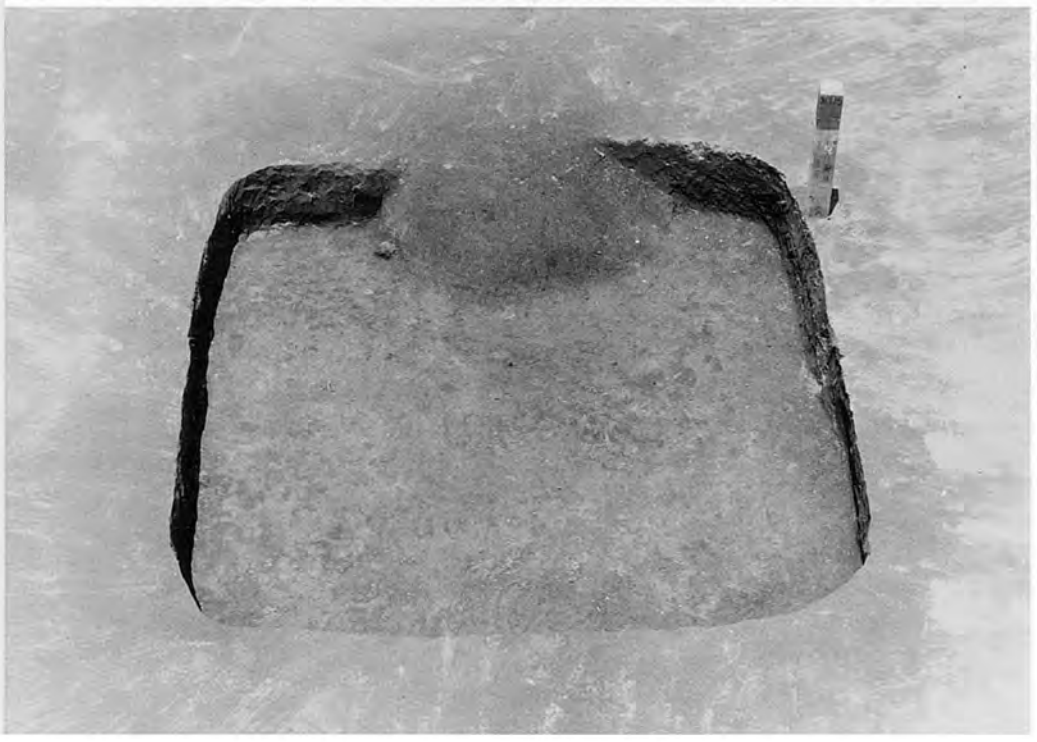
SI－067（西から）

SI－067 遺物出土状況（西から）

SI－067 カマド（南から）

SI－068（北東から）

SI－068 カマド（南から）



SI－069（南から）

SI－069 カマド遺物出土状況
（南から）

SI－070 遺物出土状況（南から）

SI－070（南から）

SI－071 カマド遺物出土状況
（南から）

SI－071（西から）

SI－072 遺物出土状況（南から）

SI－072 カマド（南東から）

SI－072（東から）

図版 42

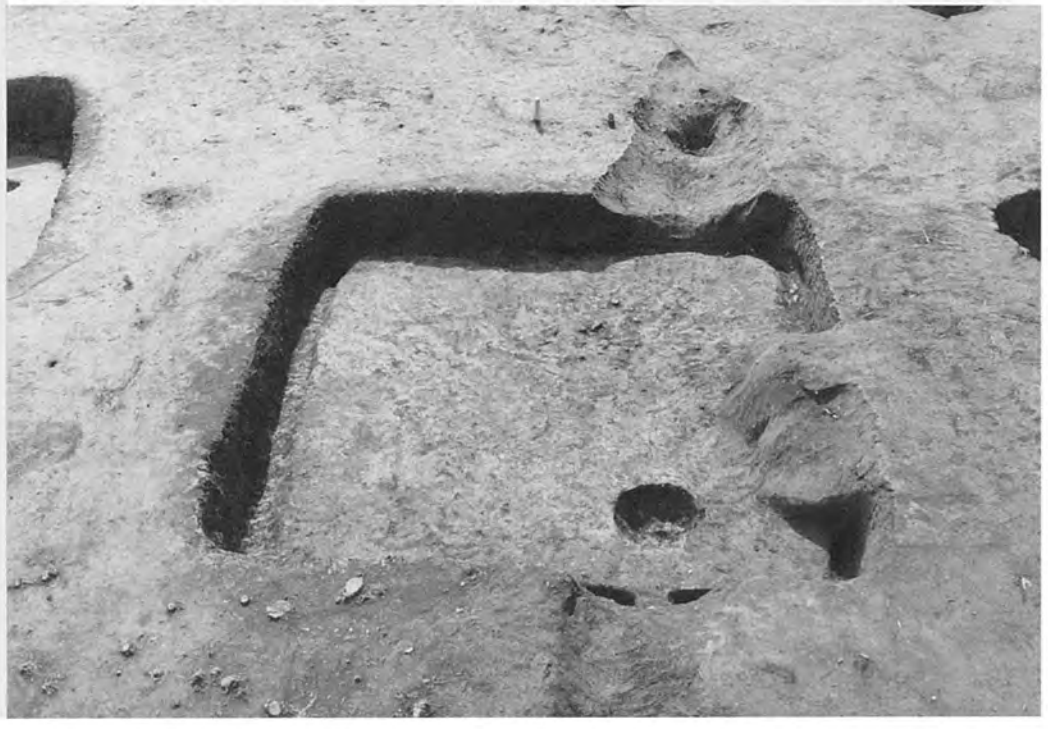
SI－073(下)・SI－074(中)(西から)

SI－073 カマド(南東から)

SI－074 カマド(南から)

SI－075(西から)

SI－075 カマド(南から)



SI－076(北から)

SI－076 カマド(東から)

SI－077 遺物出土状況（東から）

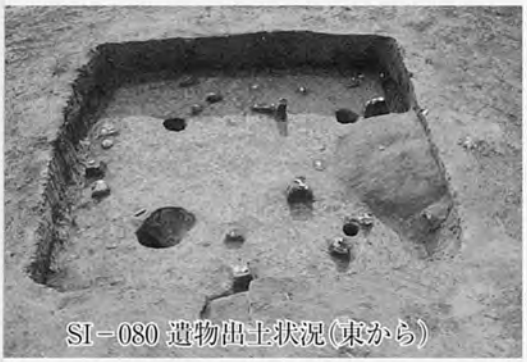
SI－077 カマド（南から）

SI－077（東から）

SI－078 遺物出土状況（北から）

SI－078 カマド（西から）

SI－078（北から）


SI－080 遺物出土状況（東から）

SI－080 カマド（南から）

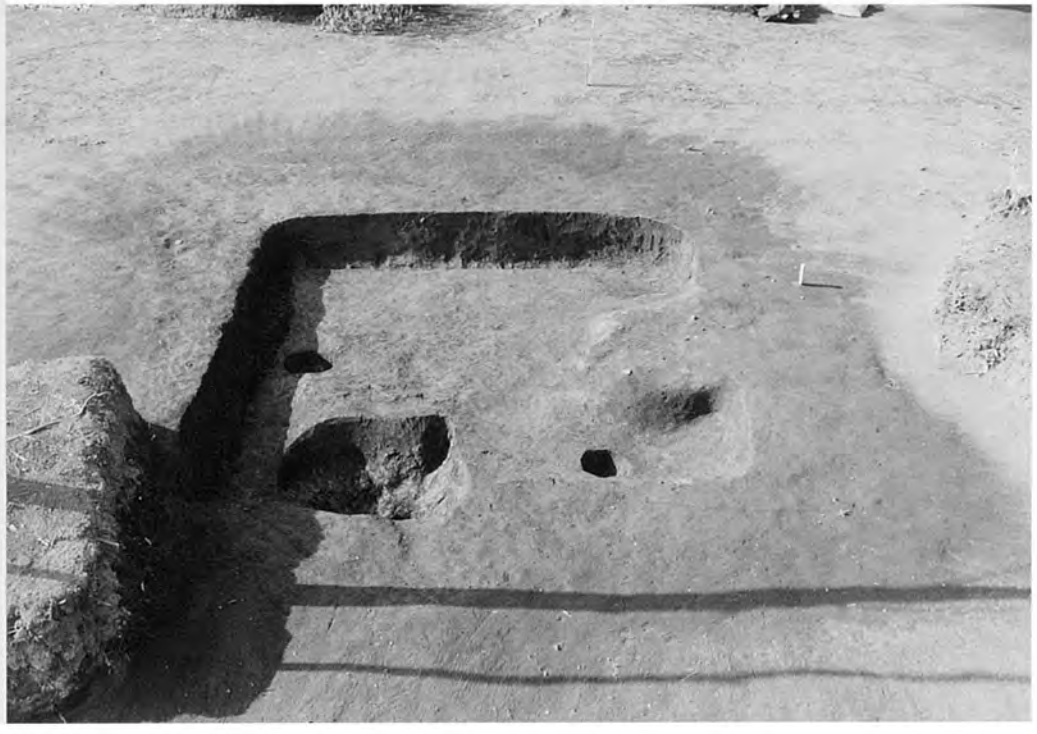
SI－080（南から）

図版 44

SI－081(南から)

SI－082 カマド(南から)

SI－082(西から)



SI－085 カマド遺物出土状況
(南から)

SI－085(東から)

SI－086 カマド(南から)

SI－086(東から)

SI－087 遺物出土状況(北から)

SI－087(南から)

SI－087 カマド(西から)

SI－088 カマド遺物出土状況
(南から)

SI－088(南から)

SI－089（西から）

SI－089 カマド（南から）

SI－090（北西から）

SI－090 カマド（東から）

SI－091（西から）

SI－091 カマド遺物出土状況
（西から）

SI－092 遺物出土状況(東から)

SI－092 カマド(南から)

SI－092(東から)

SI－093 遺物出土状況(東から)

SI－093(西から)

SI－094 遺物出土状況(東から)

SI－094 カマド遺物出土状況
(南西から)

SI－094(南から)

SI－095（南から）

SI－096（南西から）

SI－096 遺物出土状況（西から）

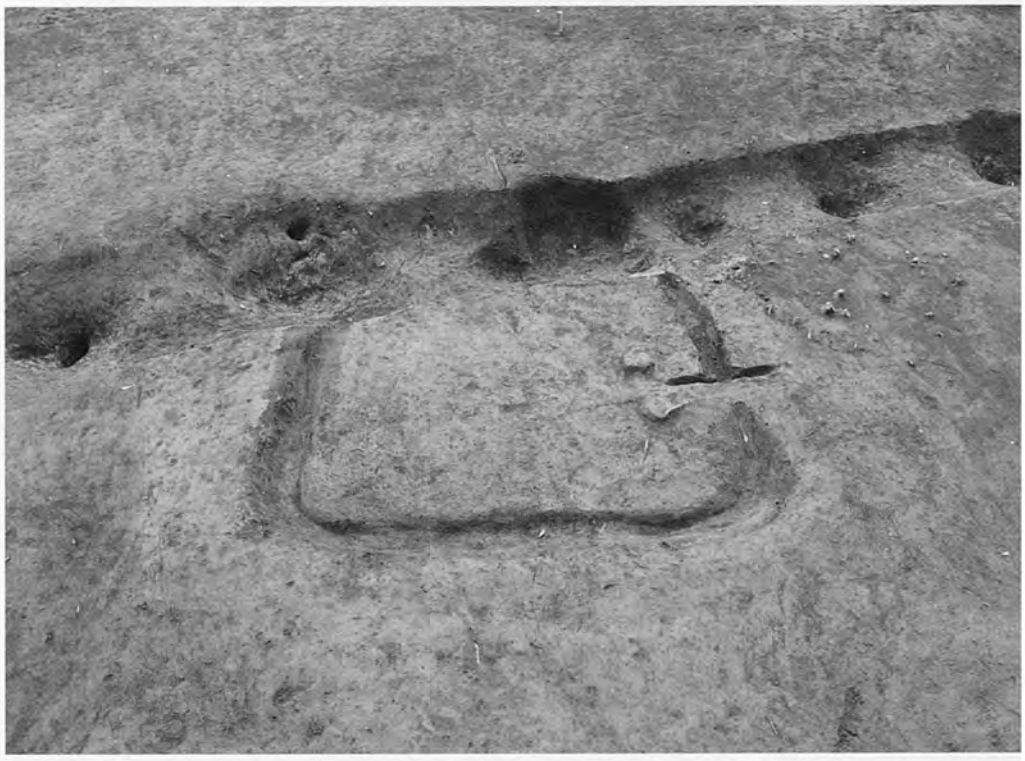
SI－096 カマド（南から）

SI－097（南から）

SI－097 遺物出土状況（南から）

SI－097 カマド遺物出土状況（南から）

SI－098(南から)



SI－099(東から)

SI－100カマド(南から)

SI－100(東から)

図版50

SI－101（南から）

SI－101 遺物出土状況（西から）

SI－101 カマド（南から）

SI－102（南から）

SI－102 カマド（南西から）

SI－103（東から）

SI－103 遺物出土状況（北から）

SI－103 カマド遺物出土状況（南から）

SI－104 遺物出土状況(東から)

SI－104 カマド
(SK－053含む)(南から)

SI－104(南から)

SI－105 カマド(南から)

SI－105(南から)

SI－106 カマド(南から)

SI－106(東から)

図版 52

SI－107（右）・SI－108（左）（西から）

SI－107 カマド遺物出土状況
（南東から）

SI－108 カマド遺物出土状況（西から）

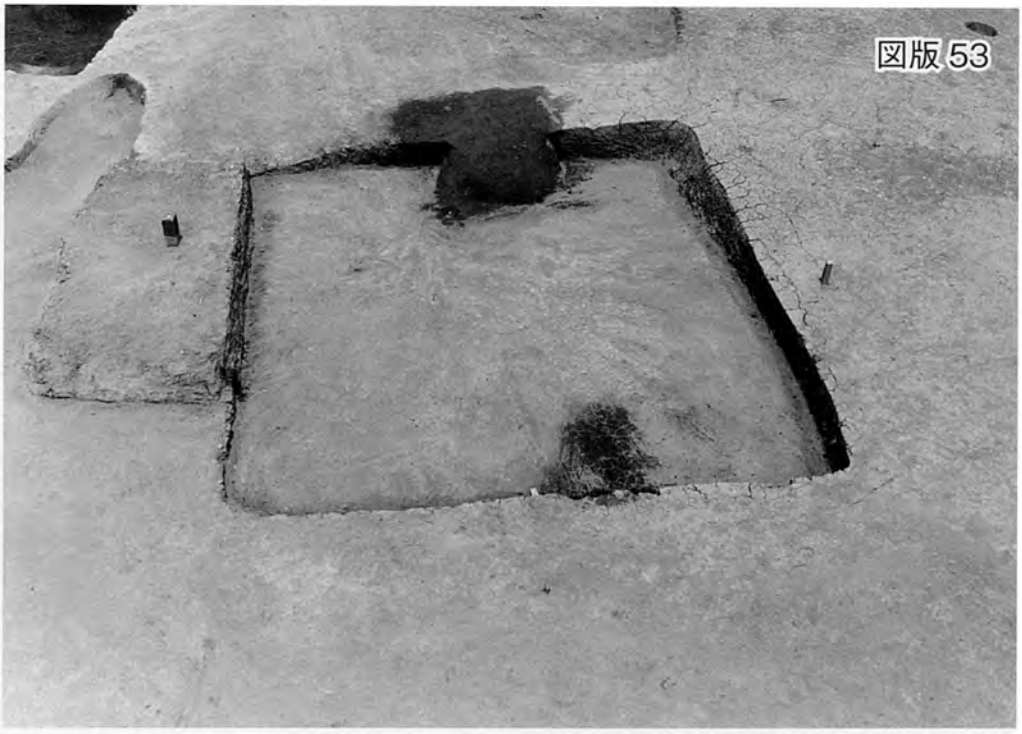
SI－109（南から）

SI－109 カマド（南から）

SI－110（南から）

SI－110 カマド（南から）

SI－111 カマド(南から)

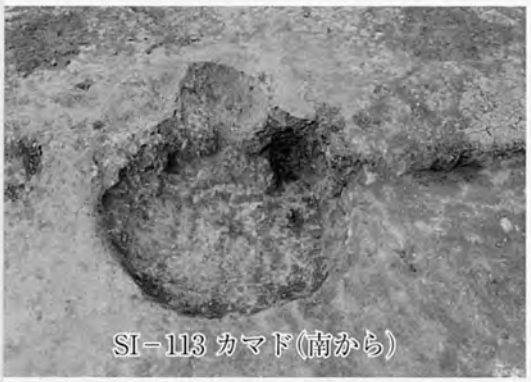


SI－111(南から)

SI－112 カマド(南から)

SI－112(東から)

SI－113 遺物出土状況(東から)

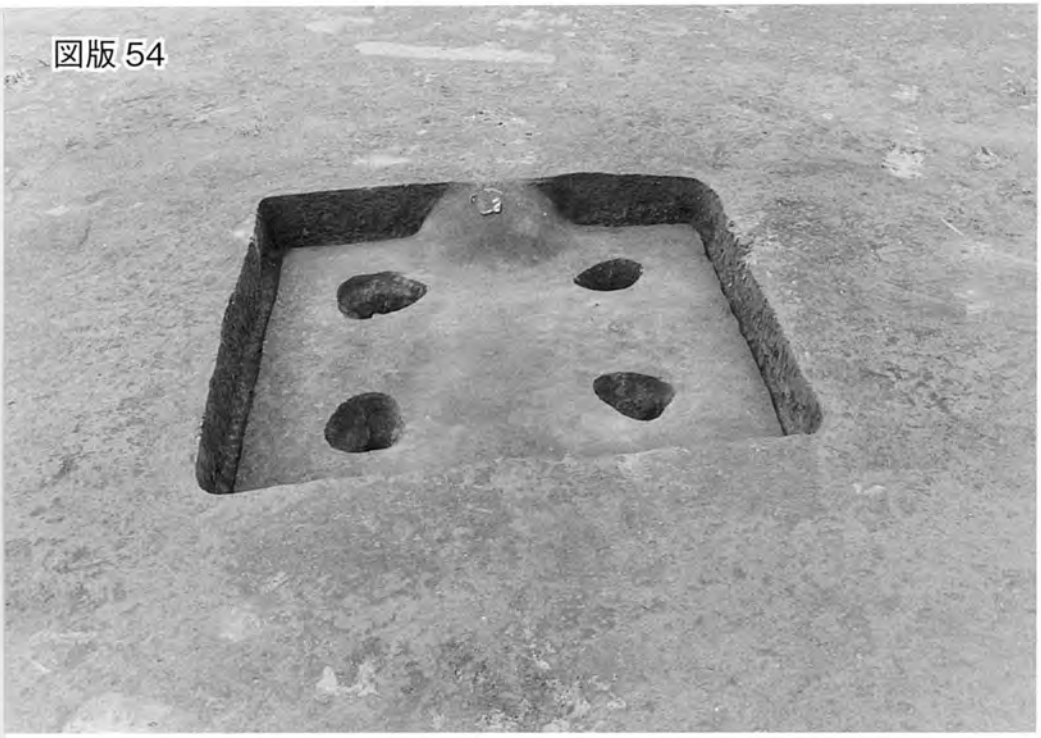


SI－113 カマド(南から)

SI－114 カマド遺物出土状況(南から)

SI－113(下)・SI－114(上)(南から)

図版 54



SI－117(南から)

SI－117 カマド遺物出土状況
(南から)

SI－118(南から)

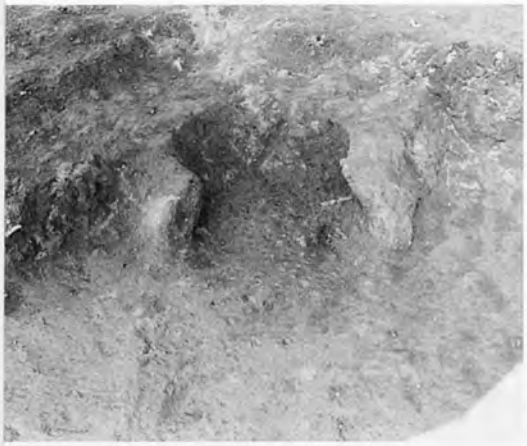
SI－118 カマド遺物出土状況
(南から)

SI－119(南から)

SI－119 カマド遺物出土状況
(南から)

SI－121 遺物出土状況(北西から)

SI－121(南から)



SI－123 カマド(南西から)

SI－123(南東から)

SI－124 カマド(南東から)

SI－124(南から)

SI－125(西から)

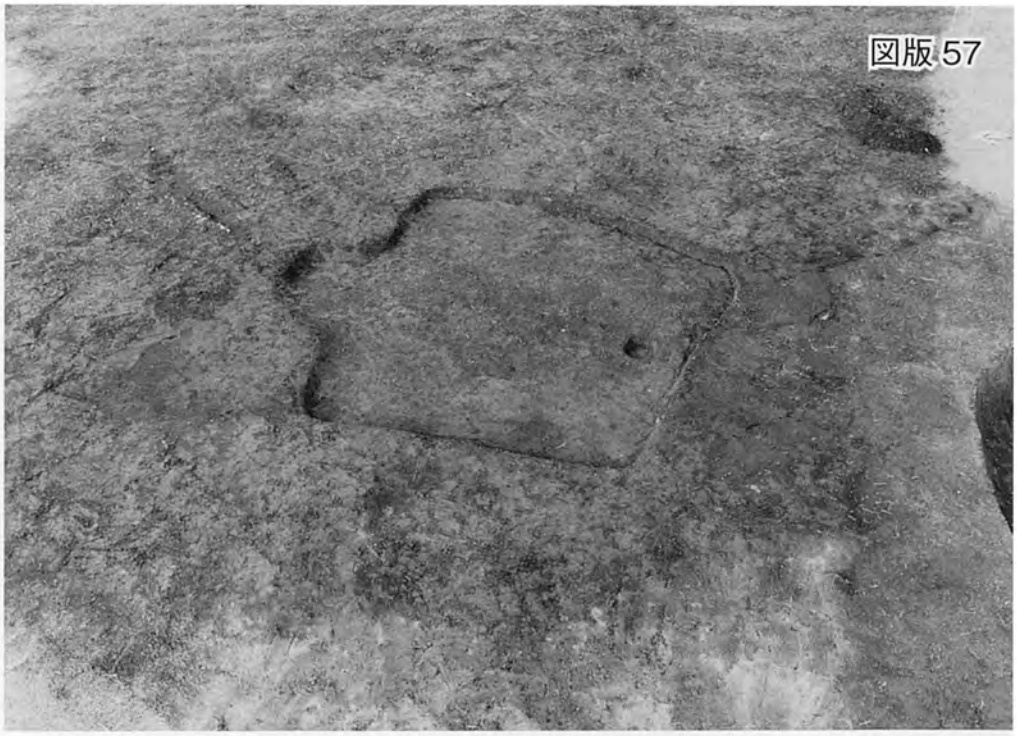
SI－125 カマド(南から)

SI－126(南から)

SI－126 遺物出土状況(西から)

SI－126 カマド(南から)

SI－132(西から)



SI－133(南から)

SI－134(西から)

SI－135 カマド遺物出土状況
(南から)

SI－135(南から)

図版58

SI－136(左)・SI－137(右)(北西から)

SI－136 カマド遺物出土状況(南から)

SI－136 カマド(南から)

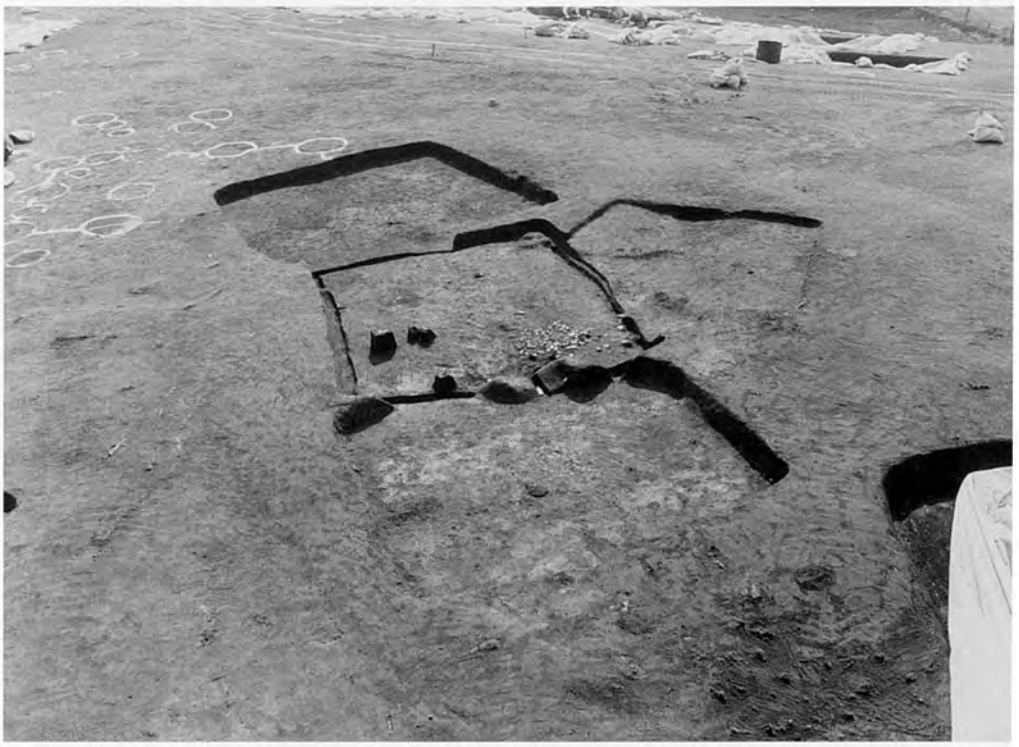
SI－138(西から)

SI－138 カマド遺物出土状況
(南から)

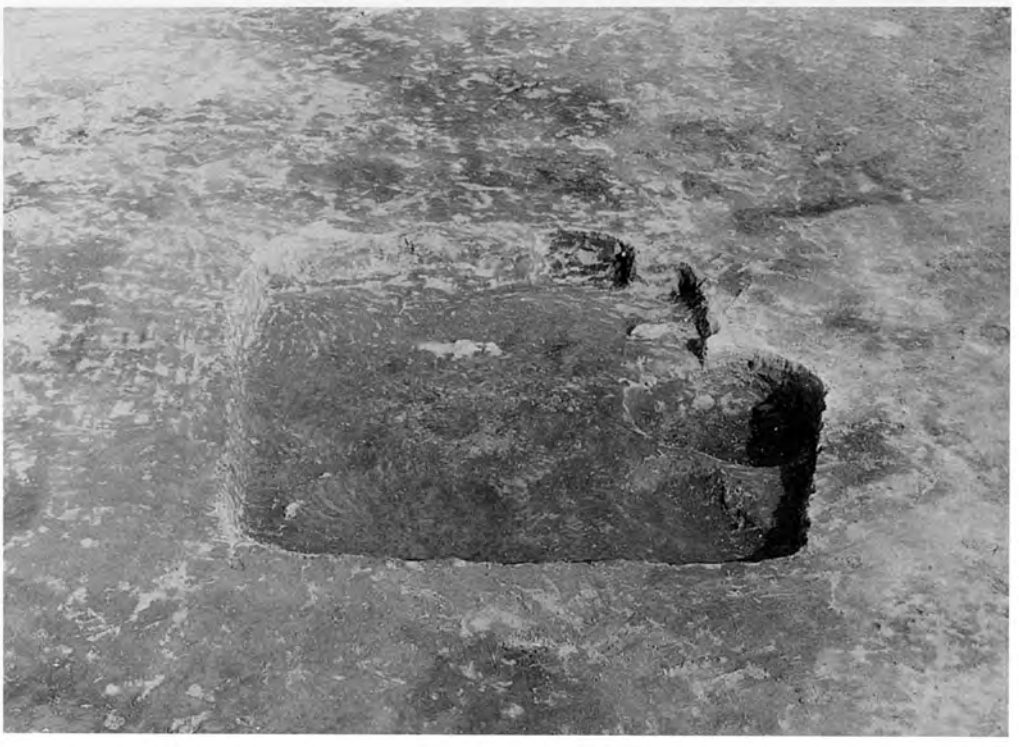
SI－139(中)・140(右)(北西から)

SI－139 カマド(東から)

SI－141(南から)

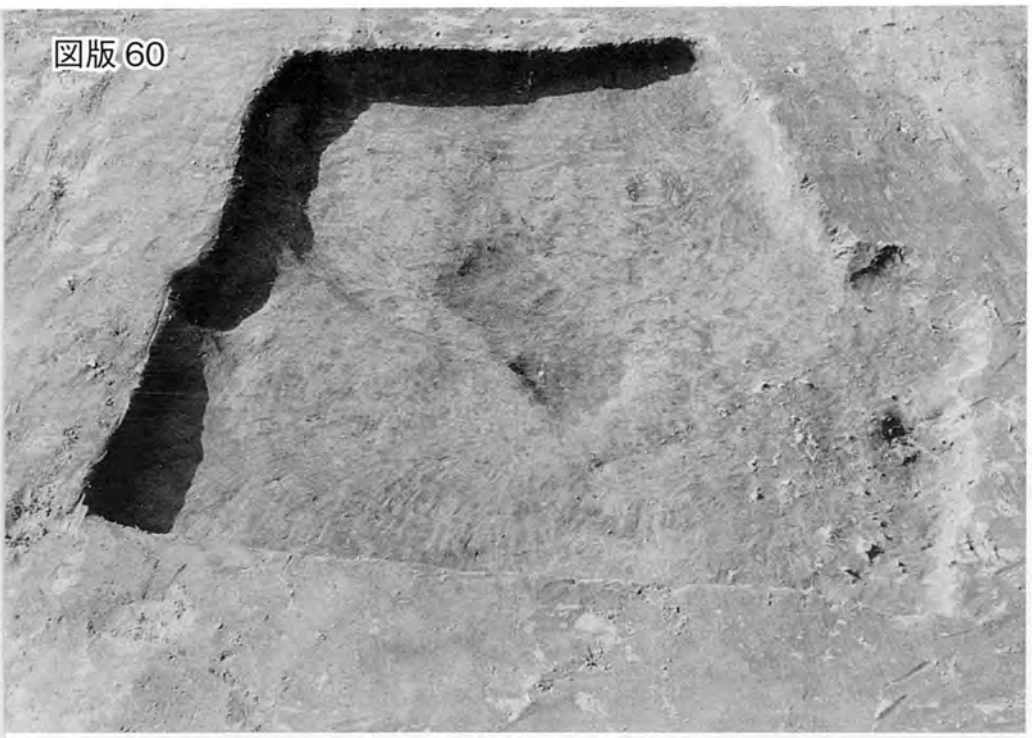


SI－142(右)・143(下)(北から)



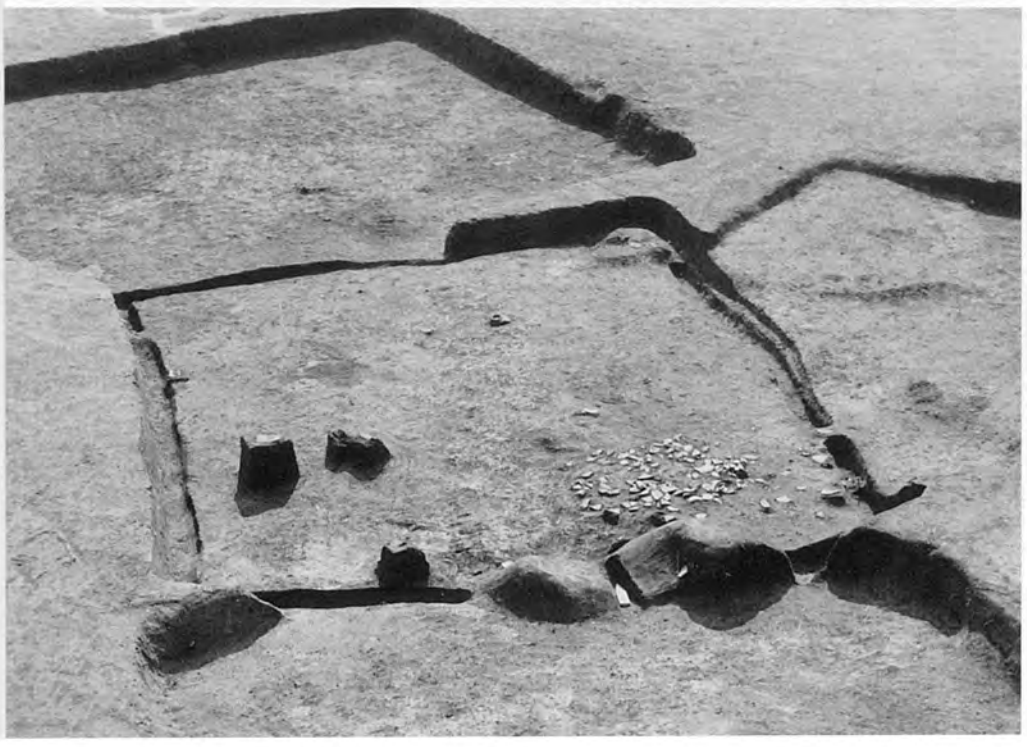
SI－144(南から)

図版60



SI－145(東から)

SI－146(南から)



SI－148(北から)

SI－148 遺物出土状況(西から)

SI－151 カマド遺物出土状況(東から)

SI－152 カマド遺物出土状況(南から)

SI－149(南東から)

SI－153 カマド(南から)

SI－154 カマド(南から)

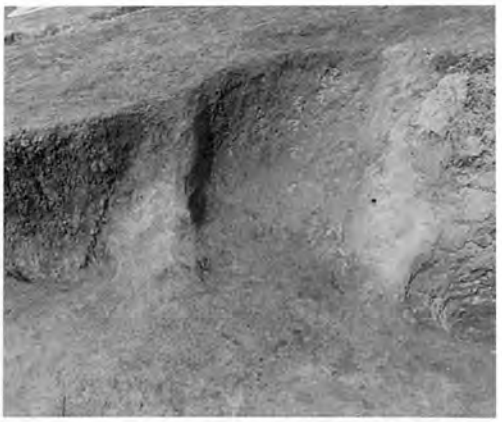
SI－151(北から)

SI－155 カマド(南から)

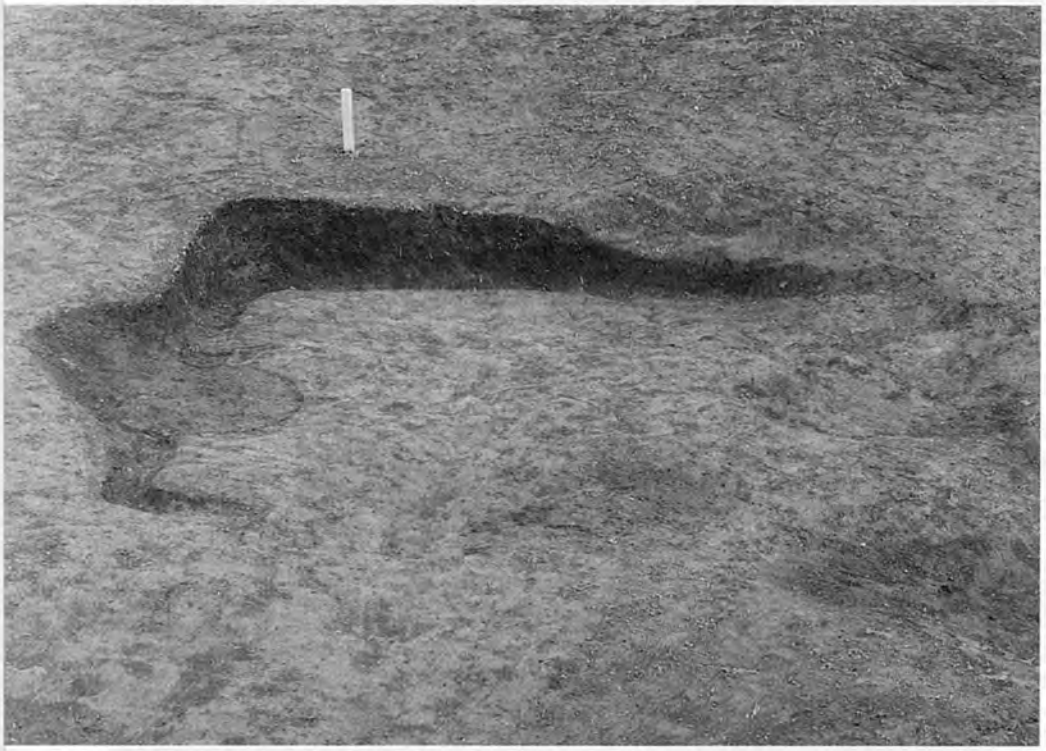
SI－156 カマド(西から)

上から SI－155·156·153·154·152(南東から)

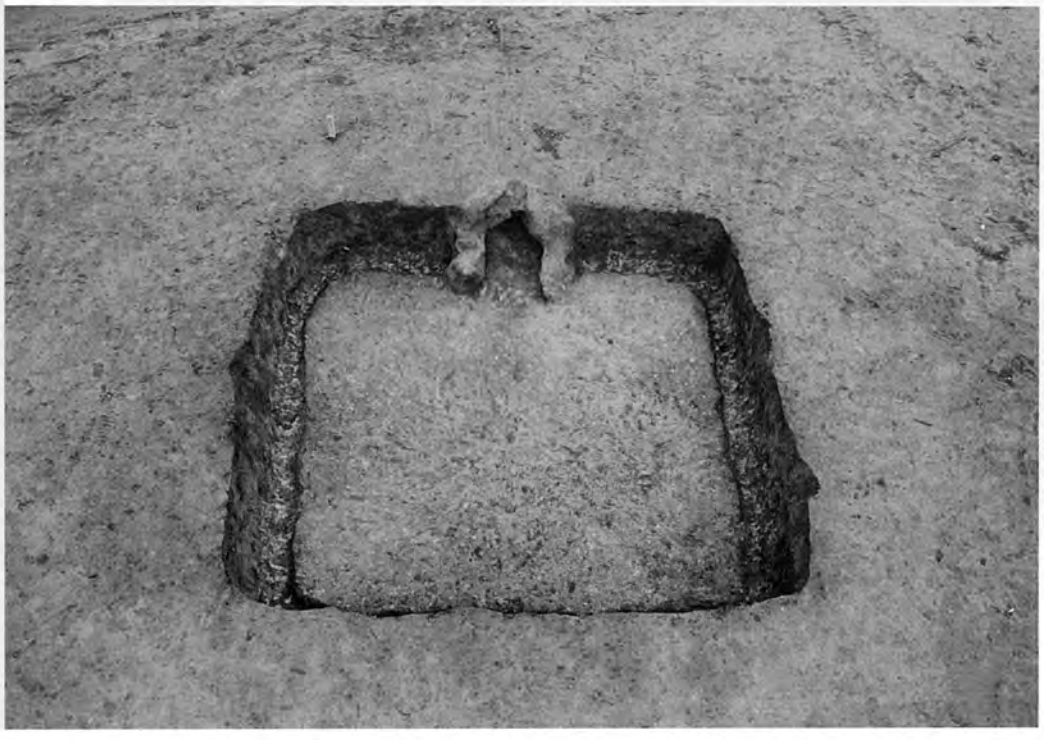
SI－157(北から)



SI－157 カマド(南から)



SI－158(西から)



SI－164(西から)

SI－164 カマド遺物出土状況
(西から)

SI－165 カマド遺物出土状況
（南から）

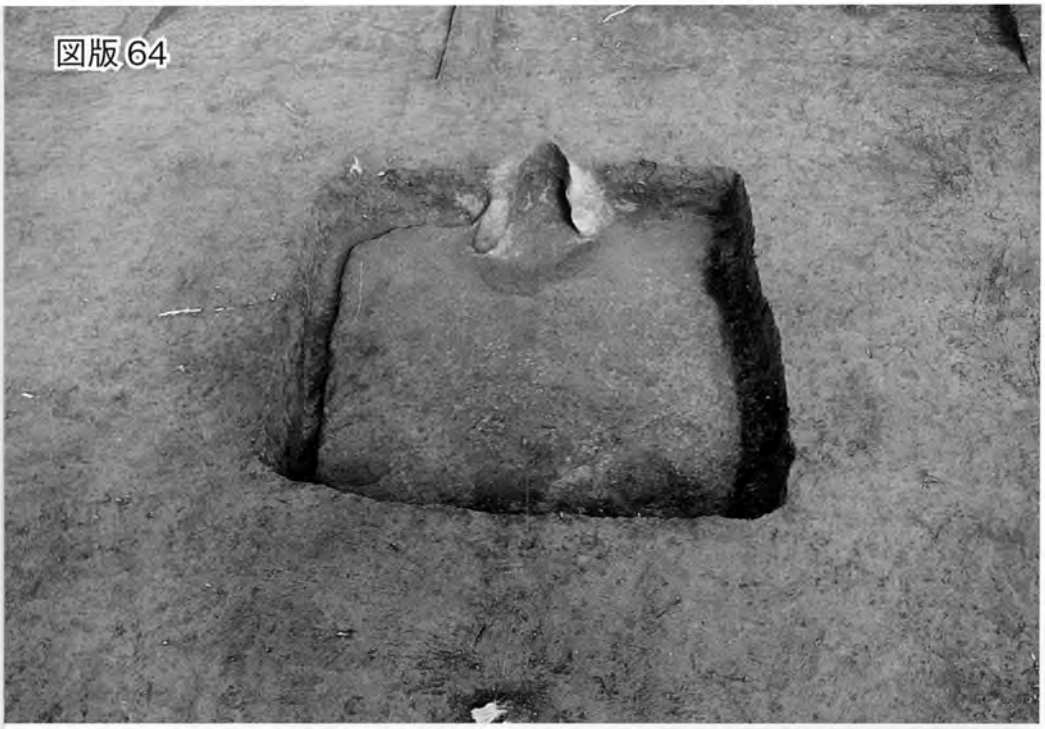
SI－165 新（東から）

SI－165 旧カマド（西から）

SI－165 旧（北から）

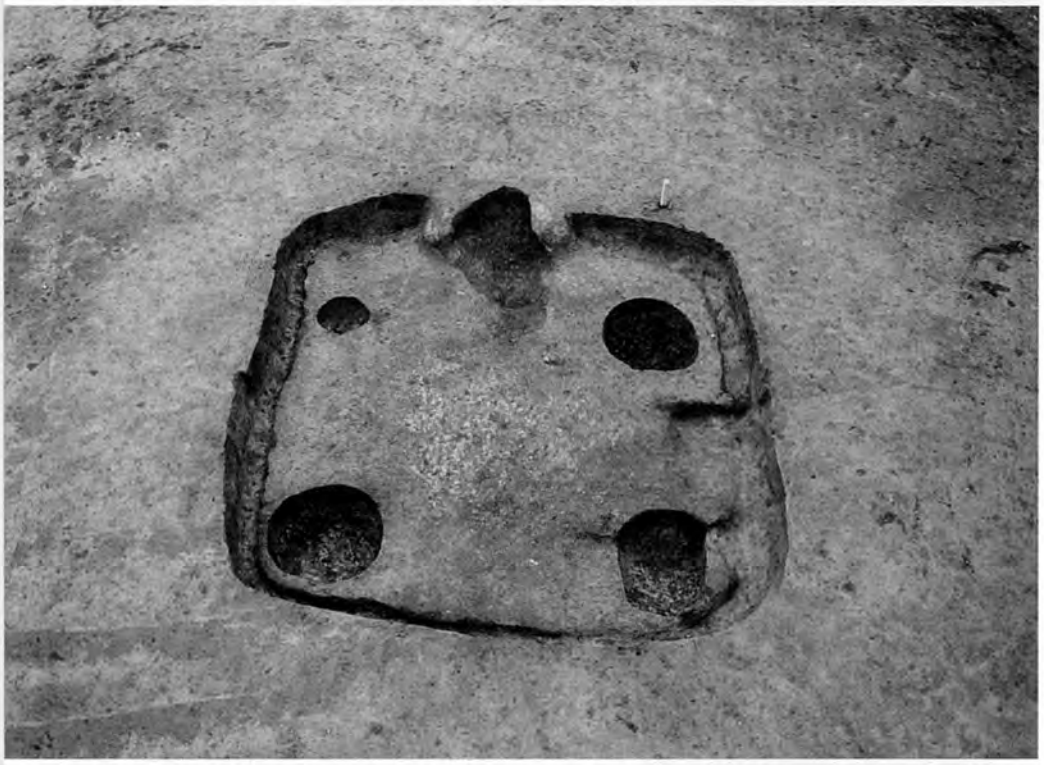
SI－167 カマド（南から）

SI－167（東から）



SI－168 カマド遺物出土状況
（南から）

SI－168（南から）

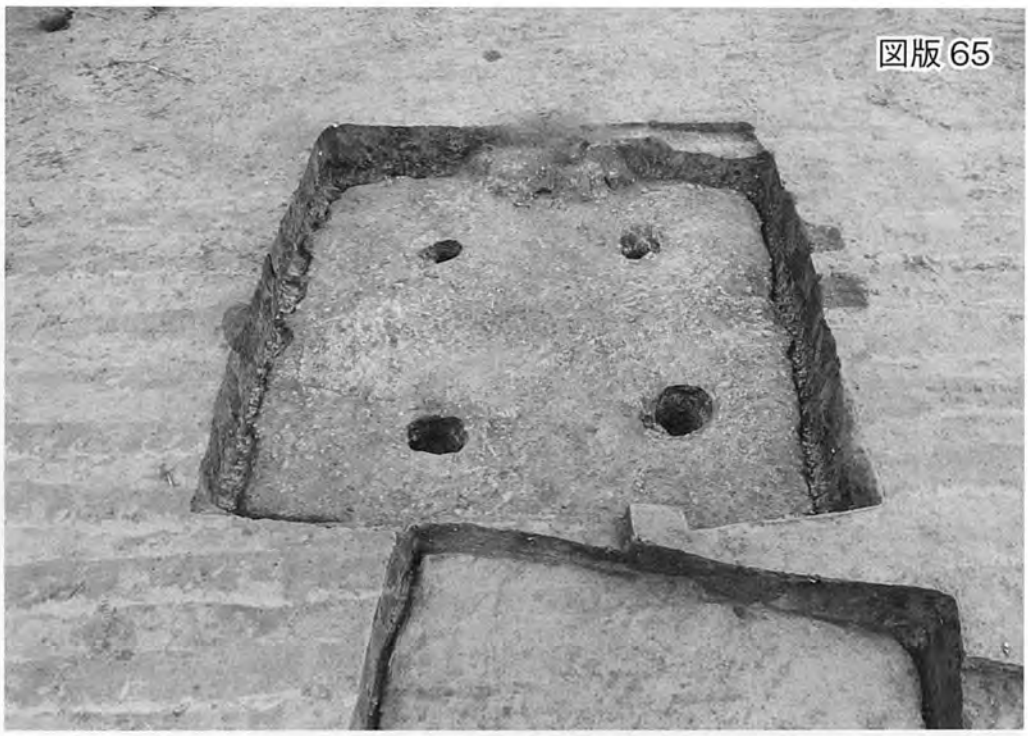


SI－169 カマド（南から）

SI－169（南から）

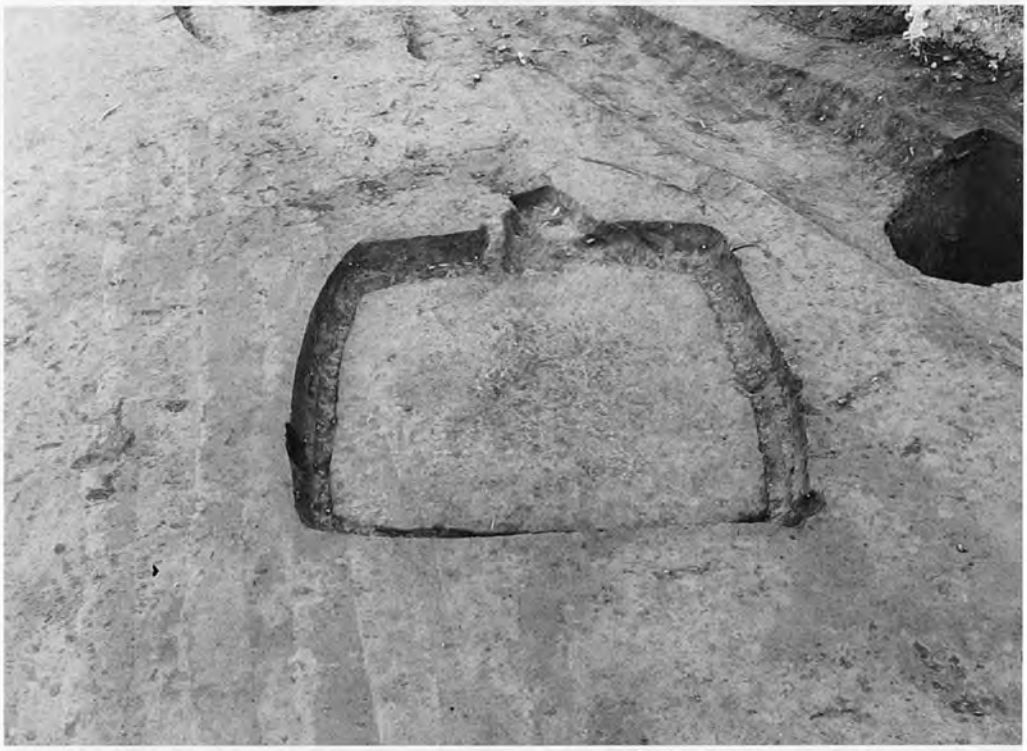
SI－170（西から）

SI－171 カマド(西から)



SI－171(西から)

SI－172 カマド(南から)



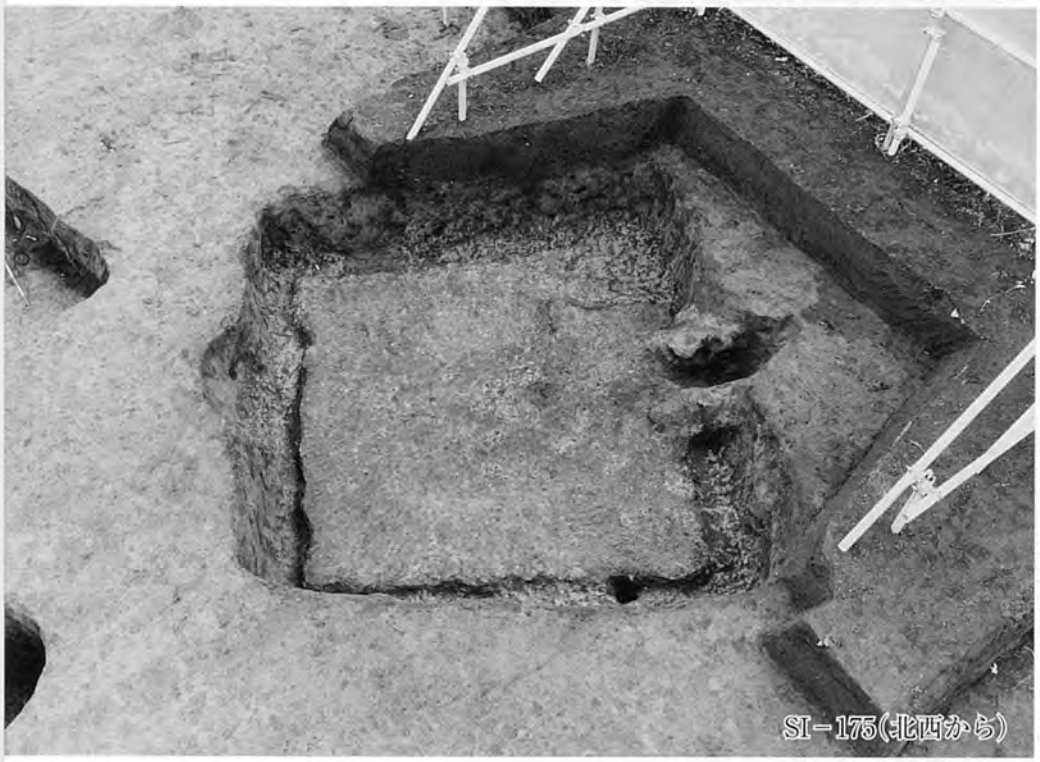
SI－172(南から)

SI－173(南から)

図版 66

SI－174（南から）

SI－174 カマド遺物出土状況
（南から）



SI－175（北西から）

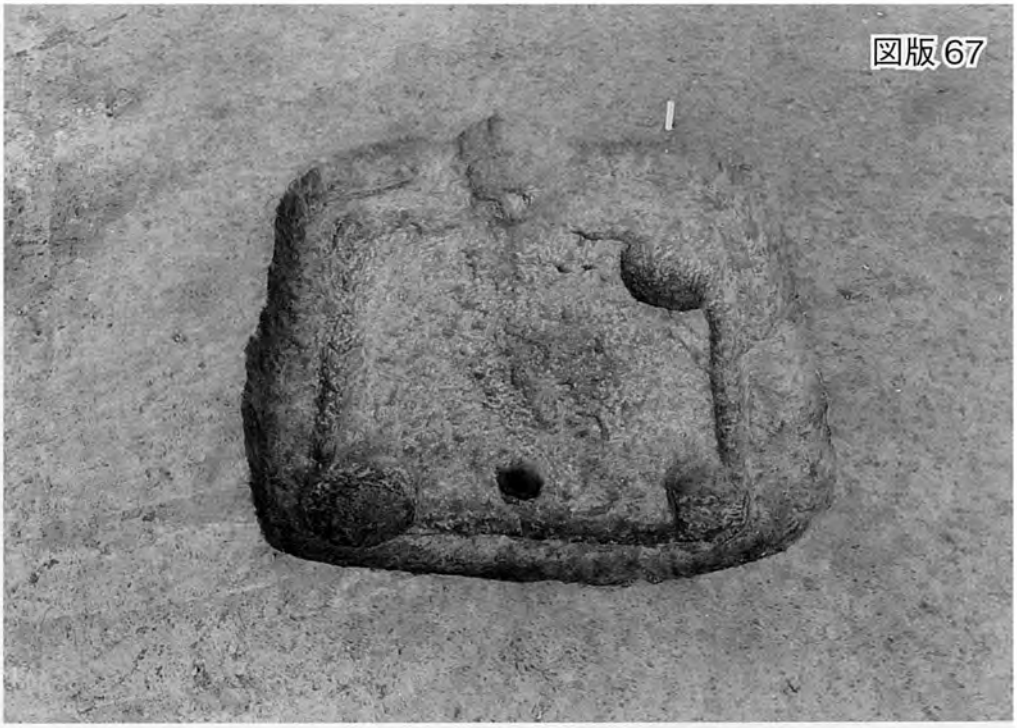
SI－175 遺物出土状況（北から）

SI－175 カマド（北東から）

SI－176（西から）

SI－176 新カマド（西から）

SI－176 旧カマド遺物出土状況
（西から）



SI－177(南から)

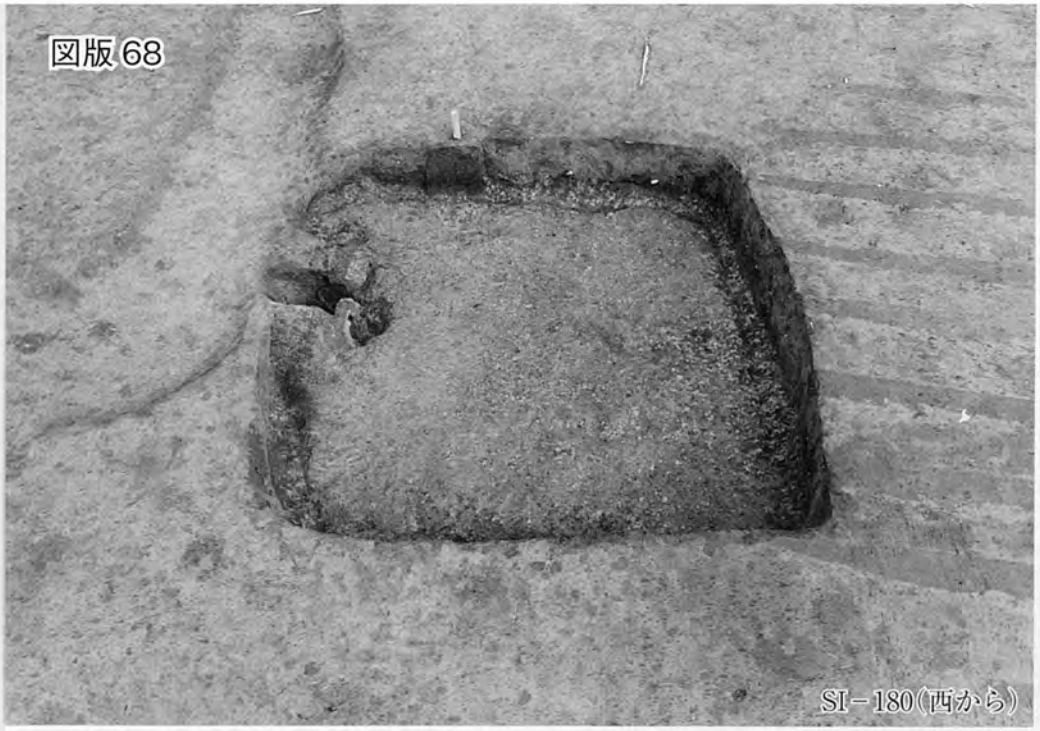
SI－178 カマド(南から)

SI－178(西から)

SI－179 カマド(南東から)

SI－179(北から)

図版 68


SI－180（西から）

SI－180 遺物出土状況（西から）

SI－180 カマド（南から）

SI－181（北西から）

SI－181 遺物出土状況（西から）

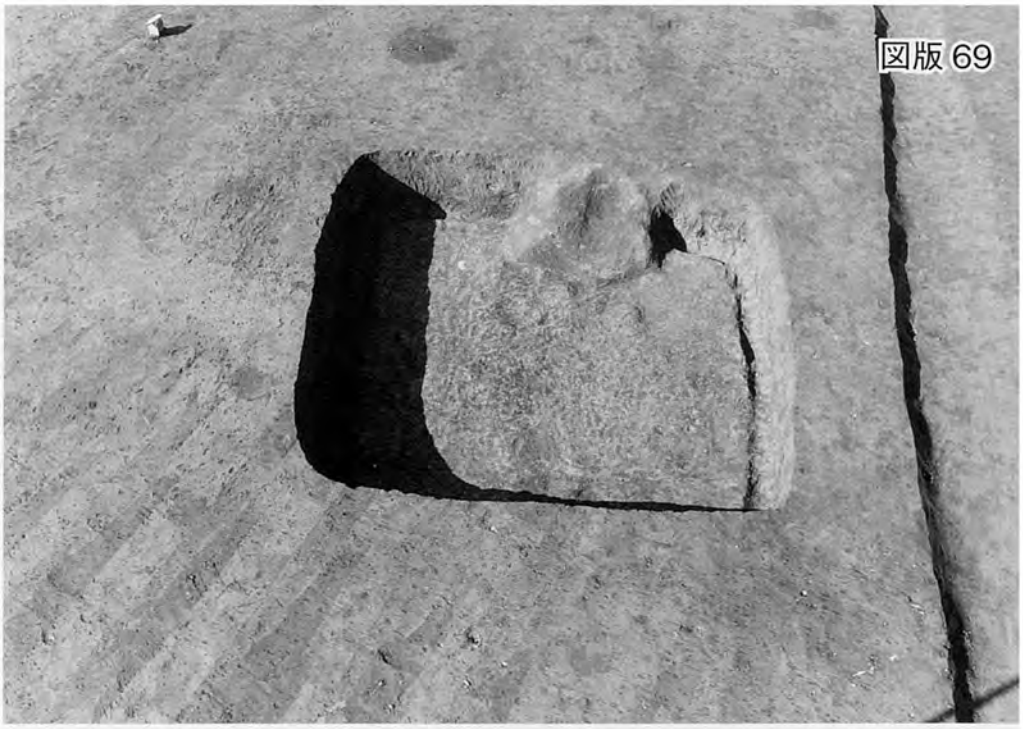
SI－181 カマド（南西から）

SI－182（南から）

SI－182 カマド遺物出土状況（南から）

SI－182 カマド（南から）

SI－183 カマド（南から）



SI－183（南から）

SI－184 遺物出土状況（南から）

SI－184（西から）

SI－184 カマド（西から）

SI－185 カマド（南から）

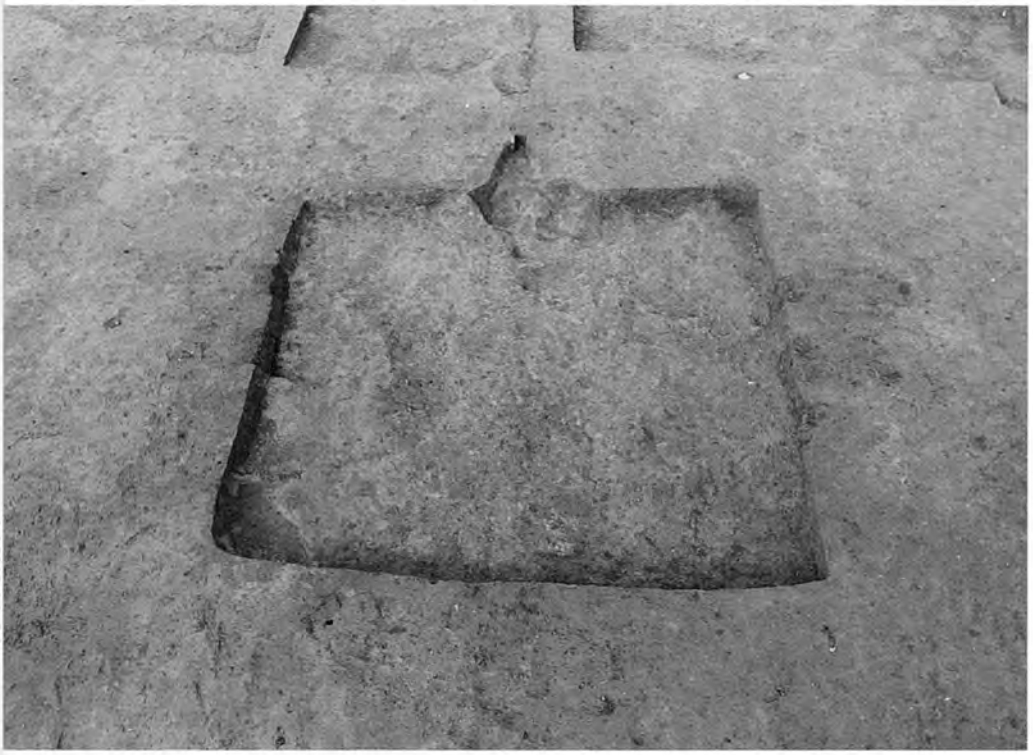
SI－185 カマド（南から）

図版 70

SI－186(東から)

SI－186 カマド遺物出土状況(東から)

SI－186 カマド(東から)



SI－187(東から)

SI－188(南から)

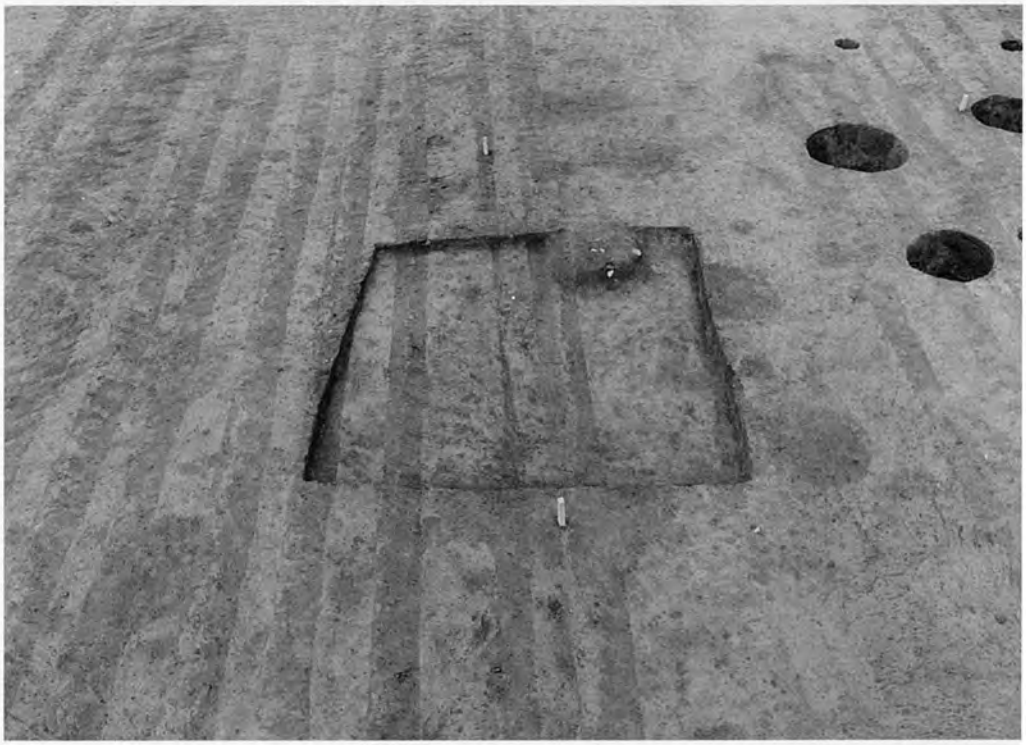
SI－188 遺物出土状況(南から)

SI－188 カマド(南から)

SI－189 15年度全景（北から）

SI－189 カマド（西から）

SI－189（北西から）



SI－190（南から）

SI－191 カマド（西から）

SI－191（西から）

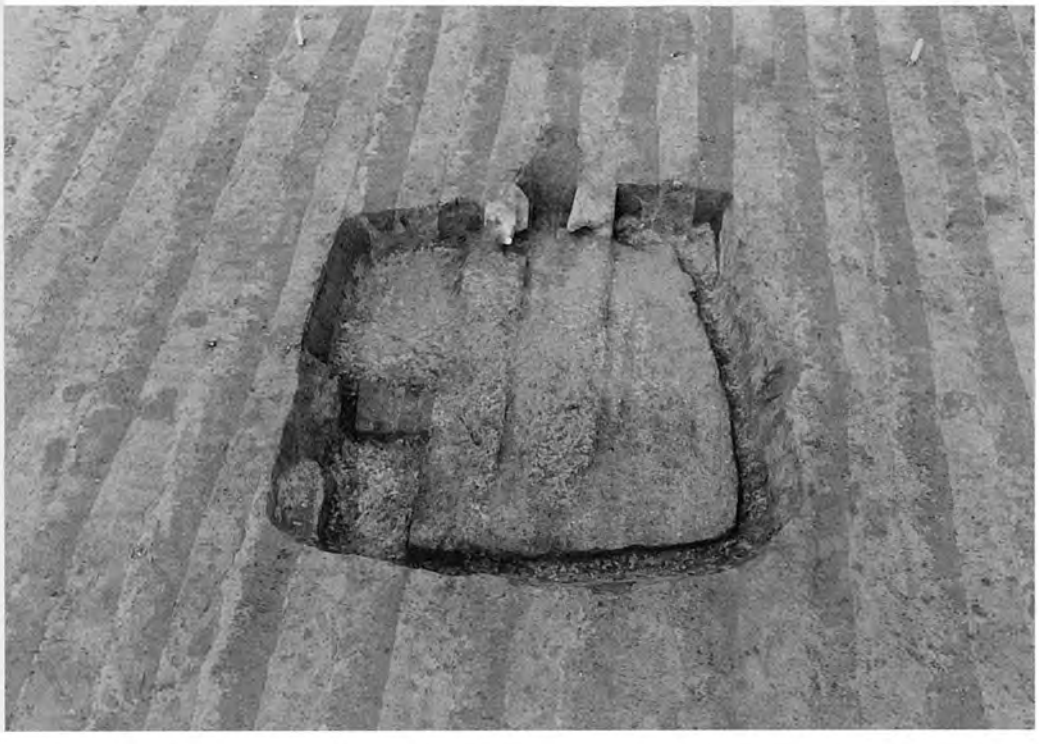
図版 72

SI－192(南から)

SI－192 カマド(西から)

SI－193(南から)

SI－193 カマド遺物出土状況
(南から)



SI－194(南から)

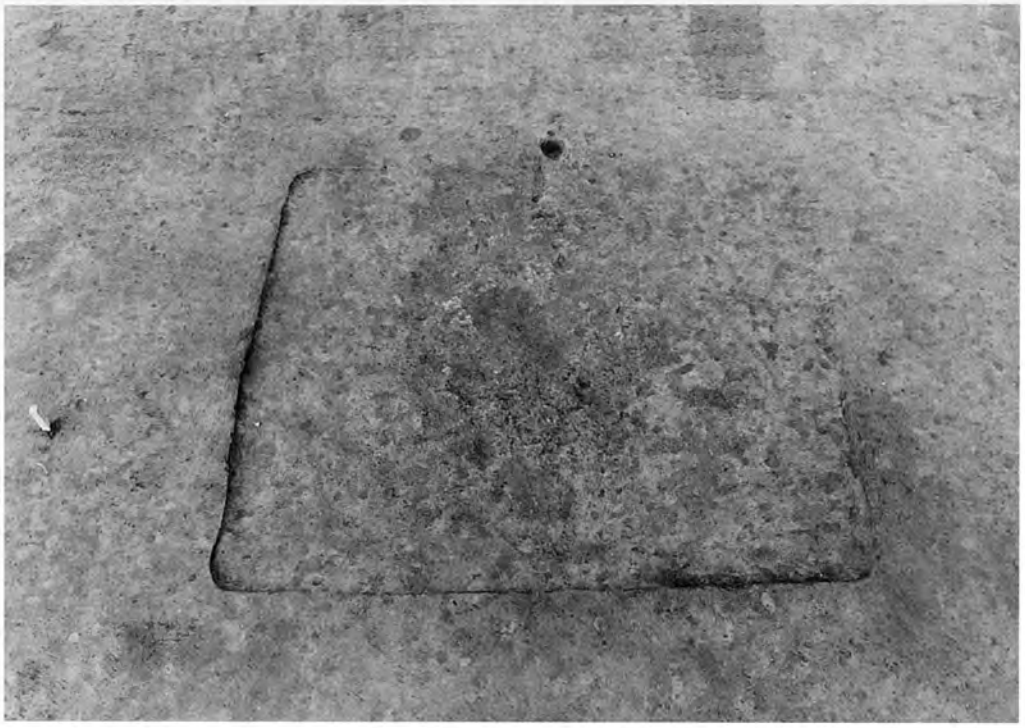
SI－194 カマド遺物出土状況
(南から)

SI－195 カマド(南から)

SI－195(南から)

SI－196 カマド(南から)

SI－196(南から)

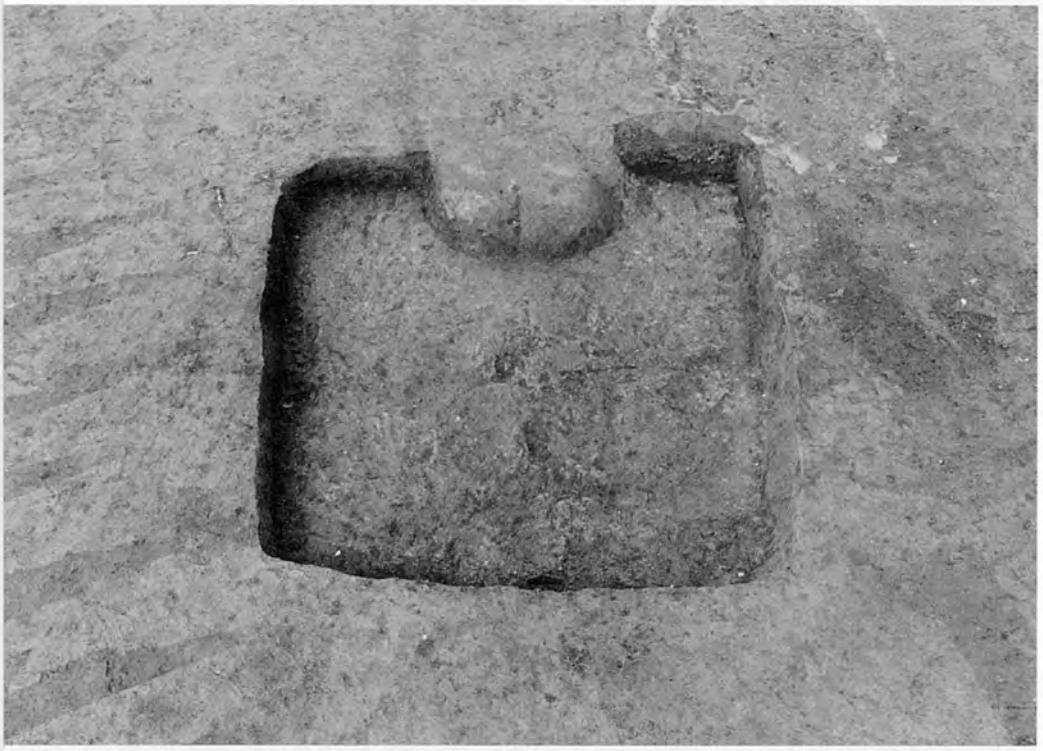


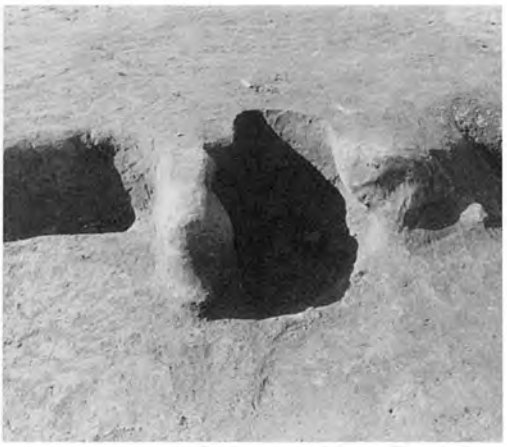
SI－197(南から)

図版 74

SI－198 カマド遺物出土状況
（南から）

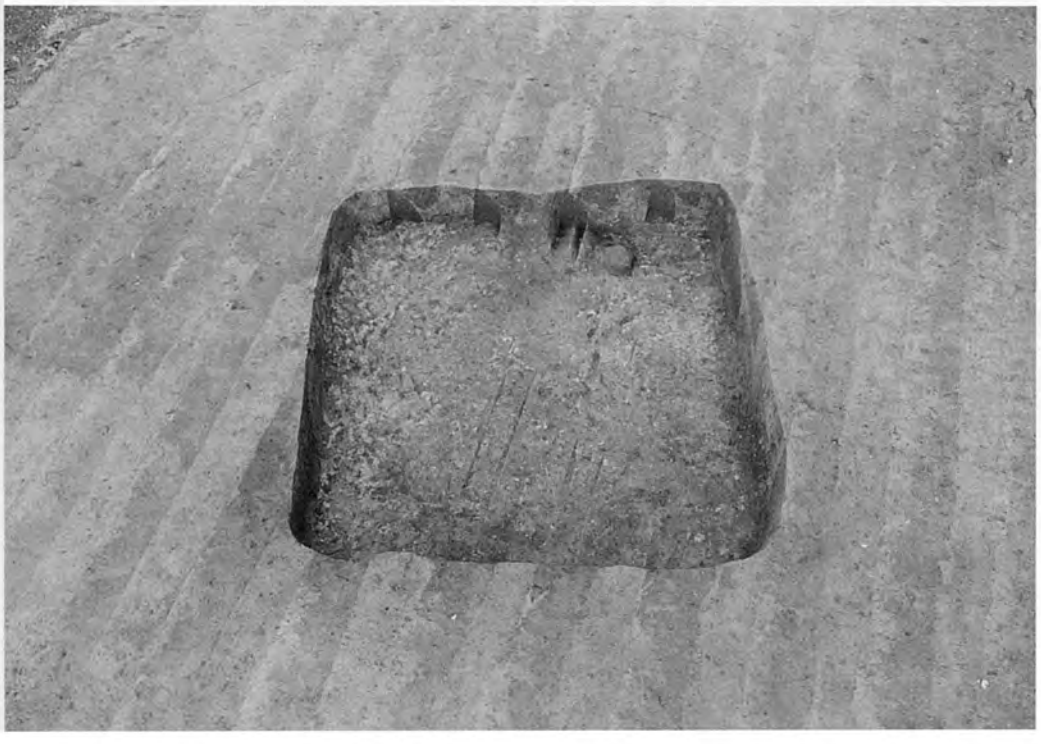
SI－198（南東から）





SI－199 カマド（東から）

SI－199（南東から）

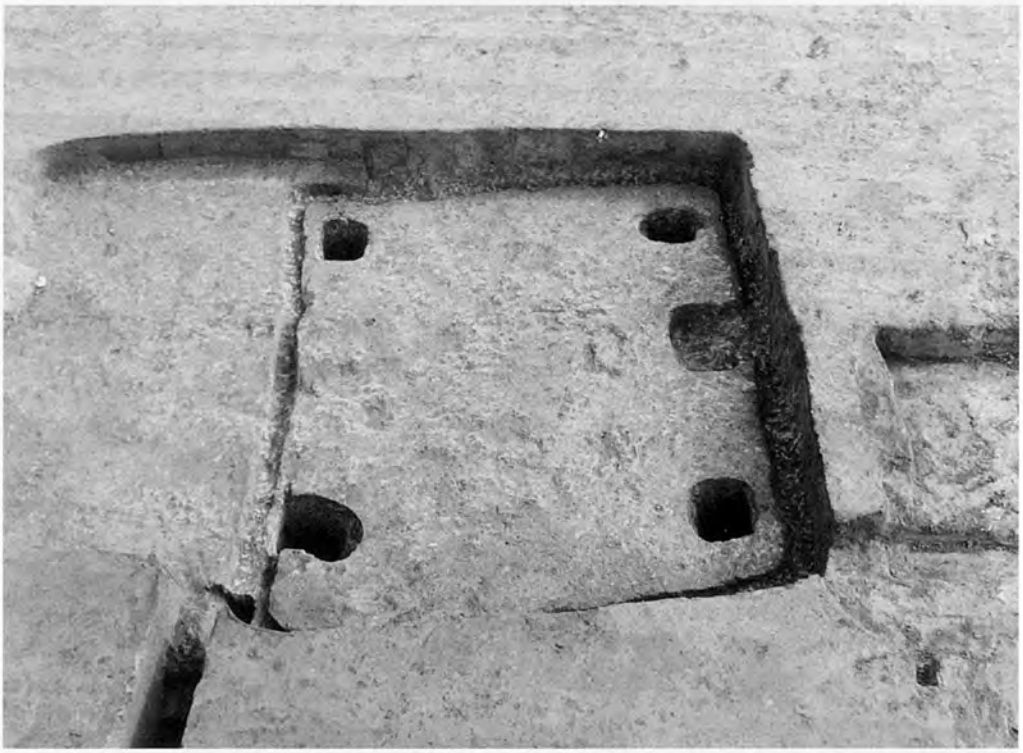


SI－200 カマド（南から）

SI－200（南から）

SI－201 カマド（南から）

SI－201（南から）

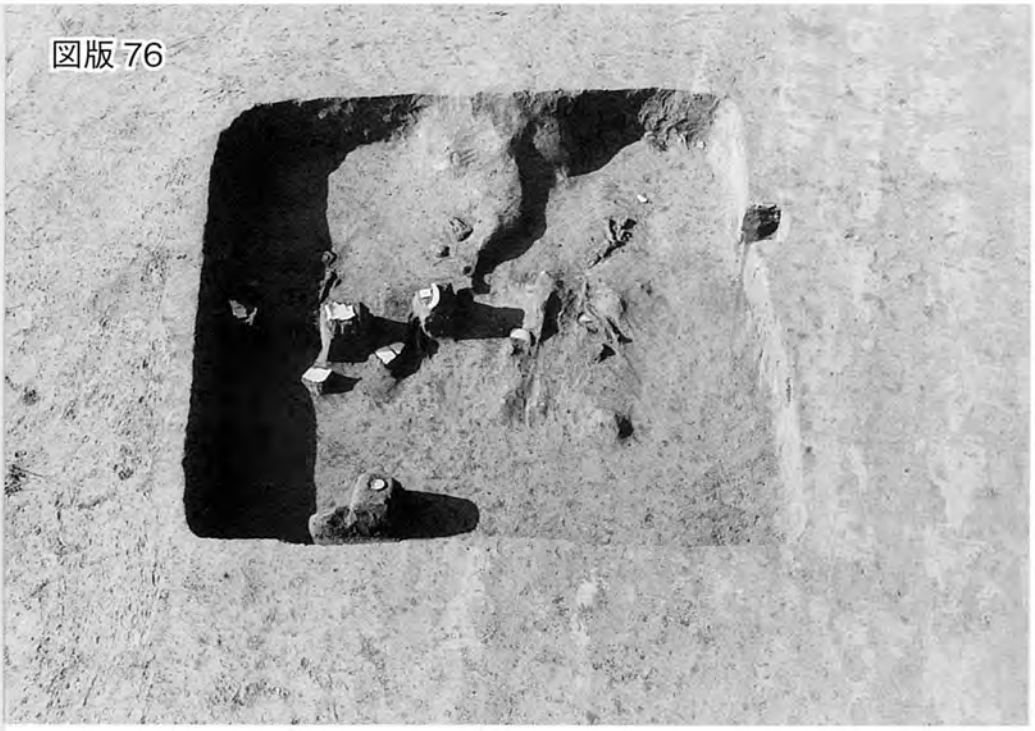


SI－202（西から）

SI－203 カマド遺物出土状況
（南から）

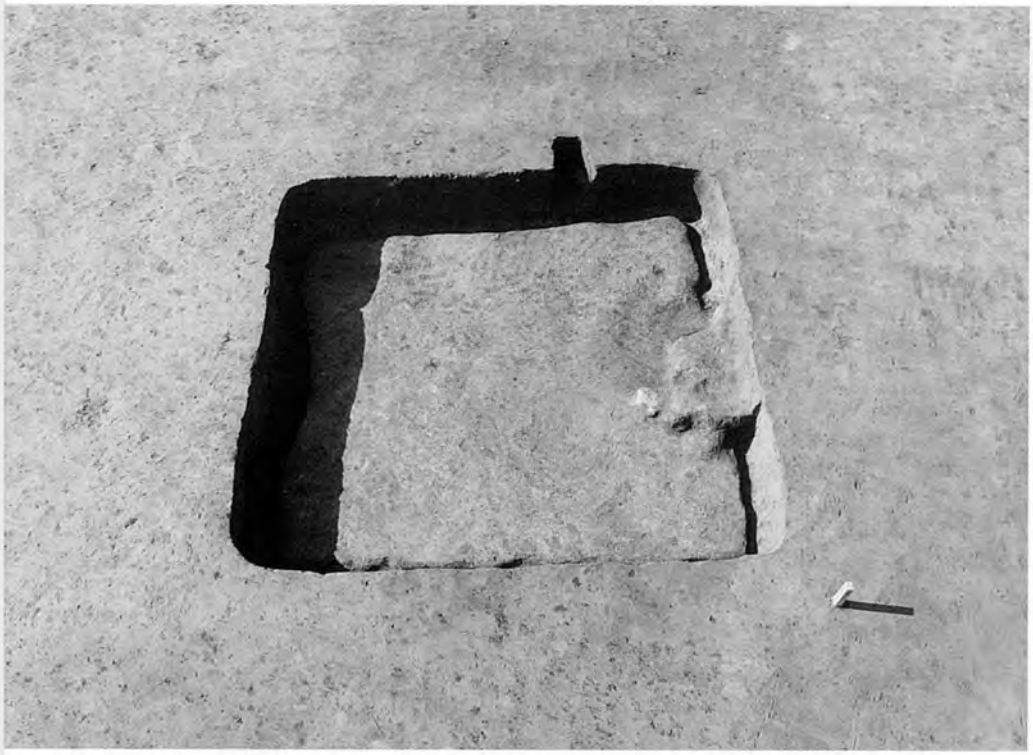
SI－203（西から）

図版 76



SI－204(東から)

SI－204 カマド遺物出土状況
(東から)



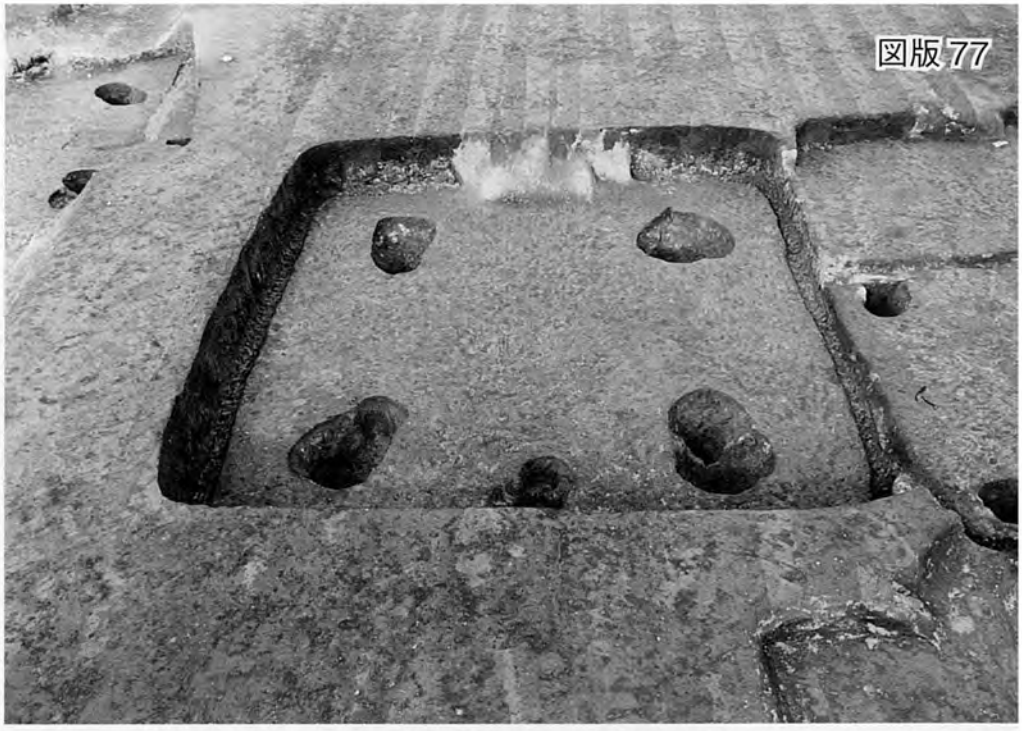
SI－205(東から)

SI－205 カマド(南から)

SI－206(南東から)

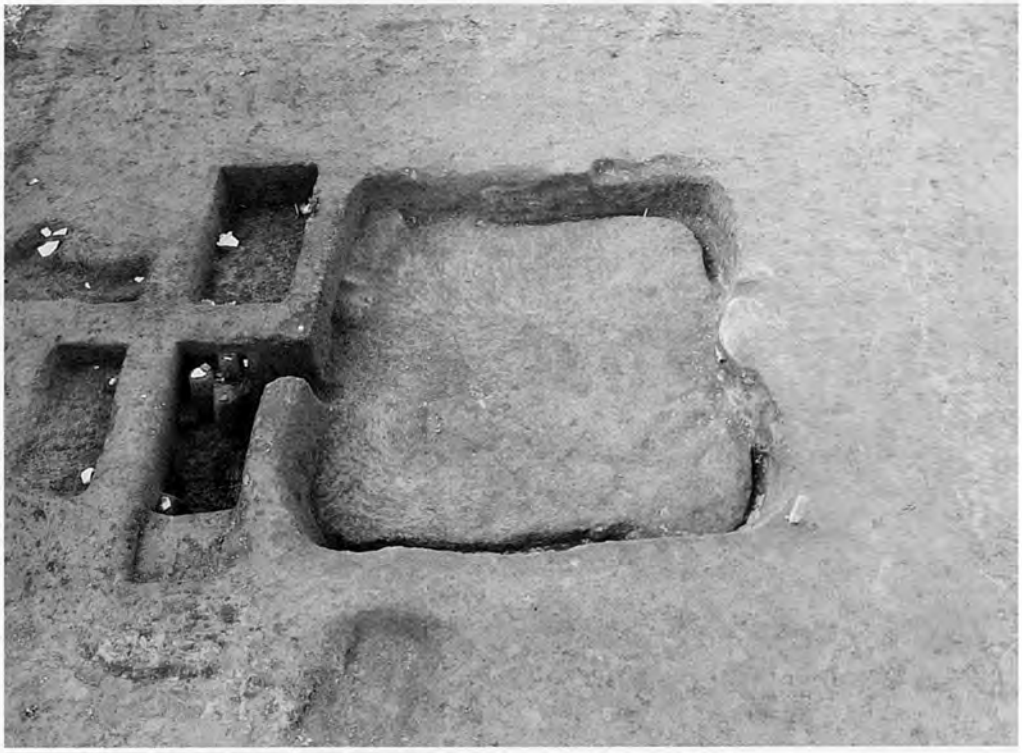
SI－206 カマド遺物出土状況
(南から)

SI－207 カマド(南から)



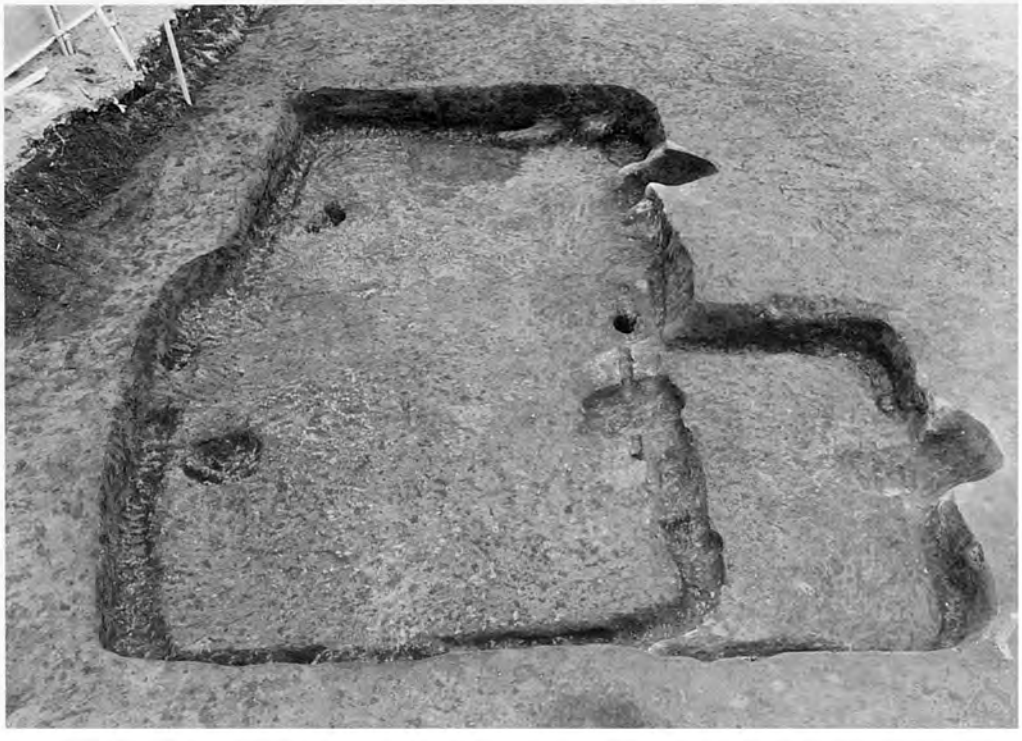
SI－207(南から)

SI－208 カマド(南から)



SI－208(東から)

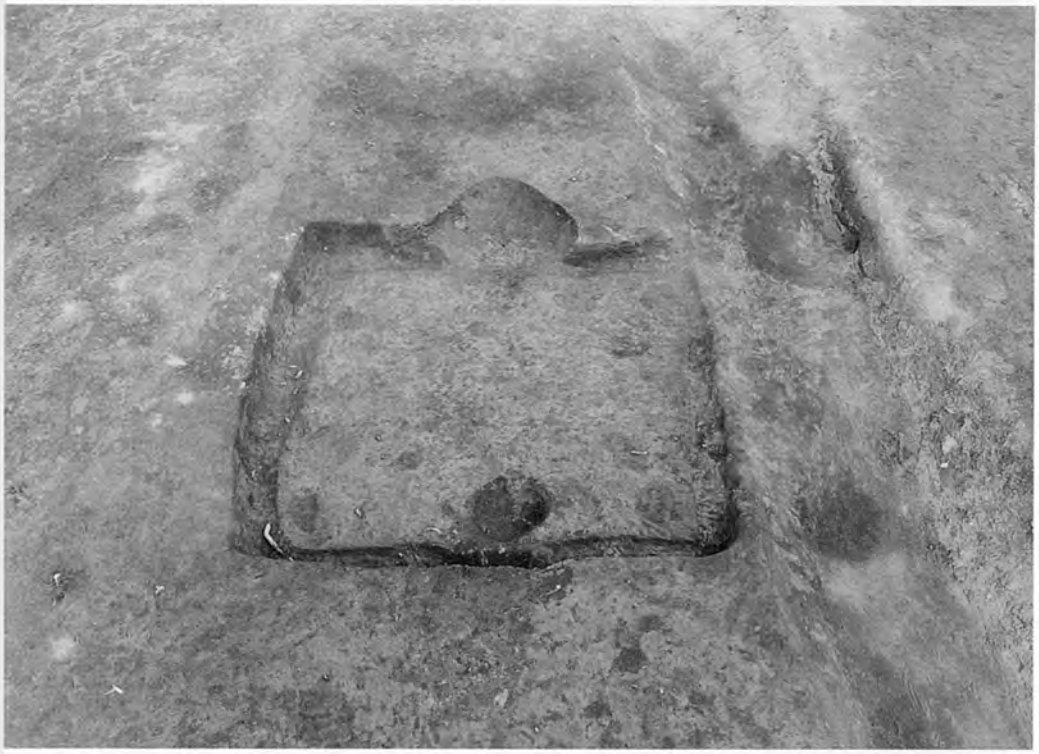
SI－210 カマド遺物出土状況
(南から)



SI－209(下)・SI－210(上)(東から)

SI－211(北東から)

SI－211 カマド遺物出土状況
(南東から)



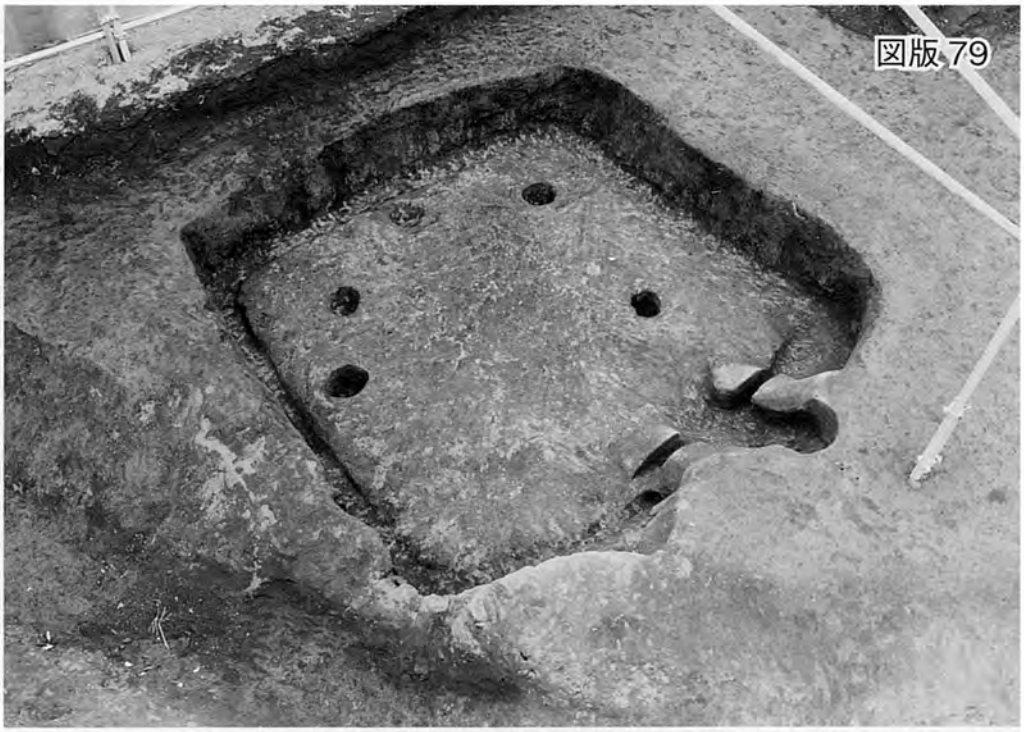
SI－212(南から)

SI－212 カマド遺物出土状況
(南から)

SI－213(西から)

SI－213 カマド(東から)

SI－214 カマド（南から）



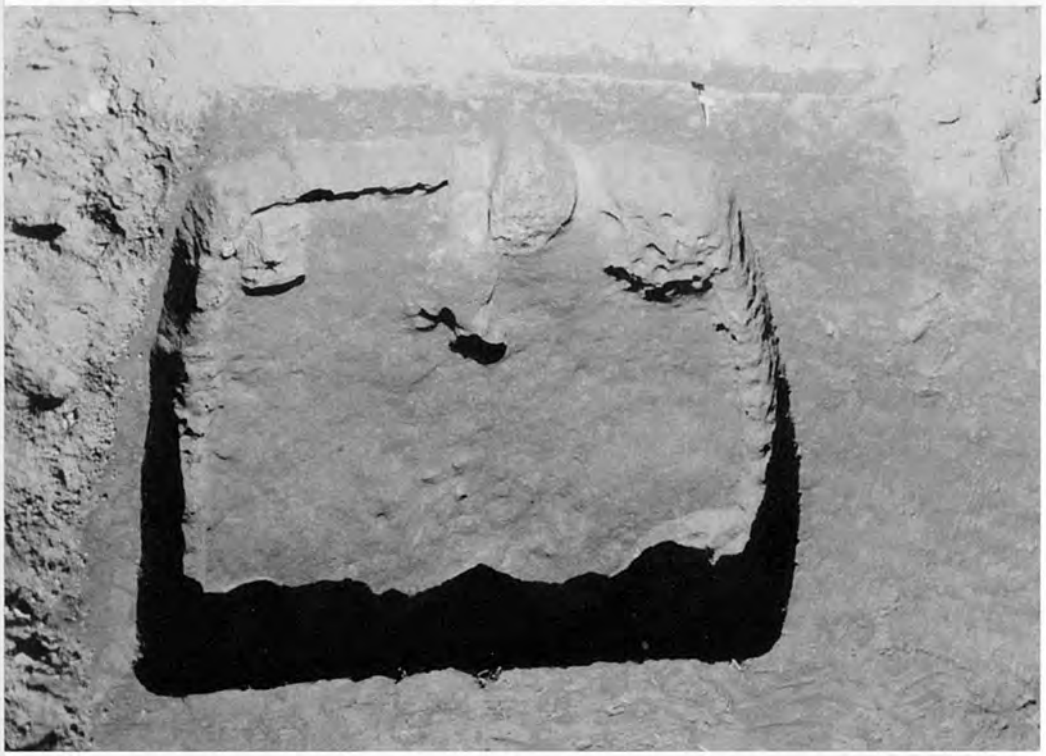
SI－214（北東から）

SI－215（北西から）

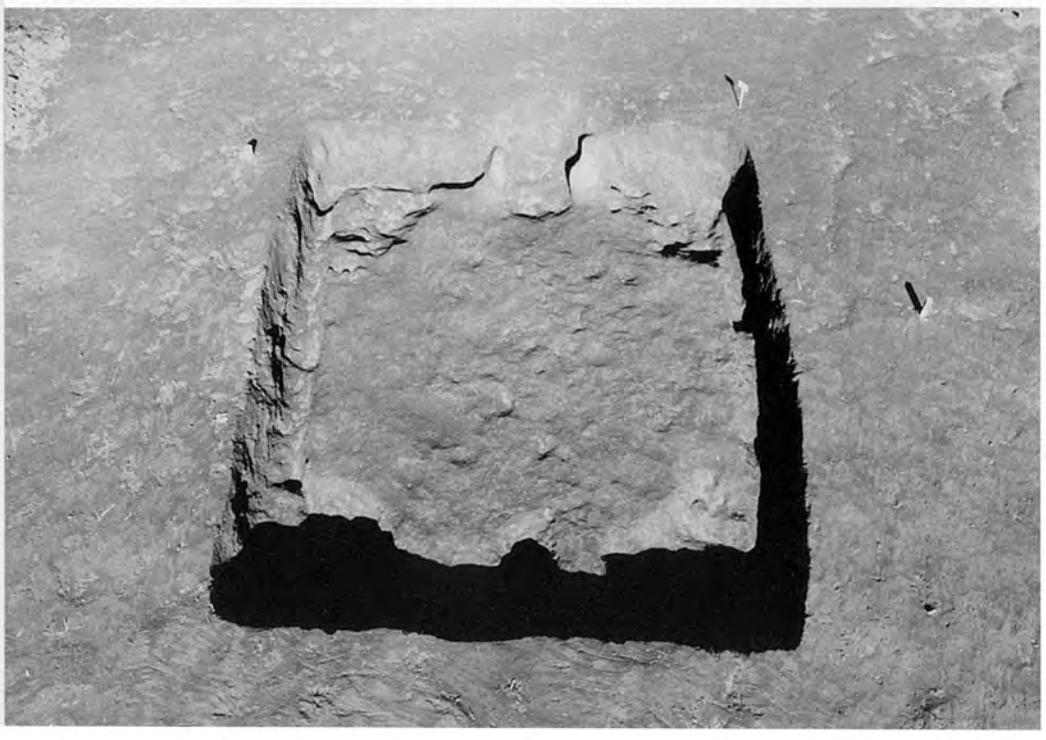
SI－216 カマド遺物出土状況
（東から）

SI－216（東から）

SI－217(南から)

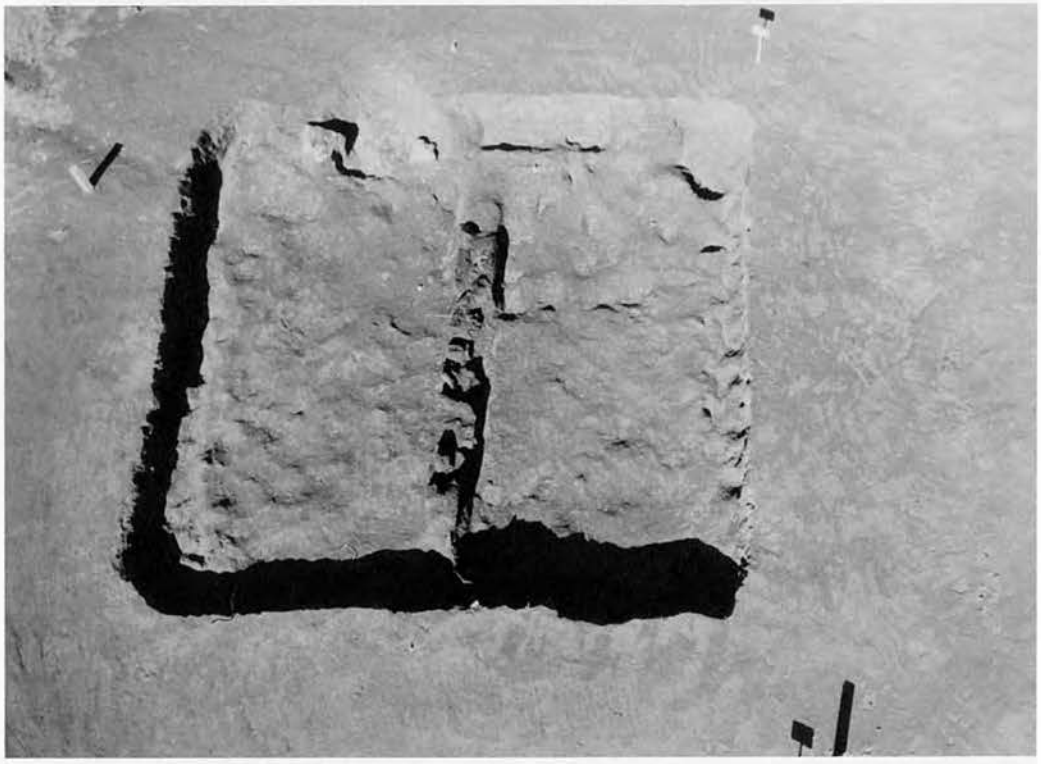


SI－218(南東から)

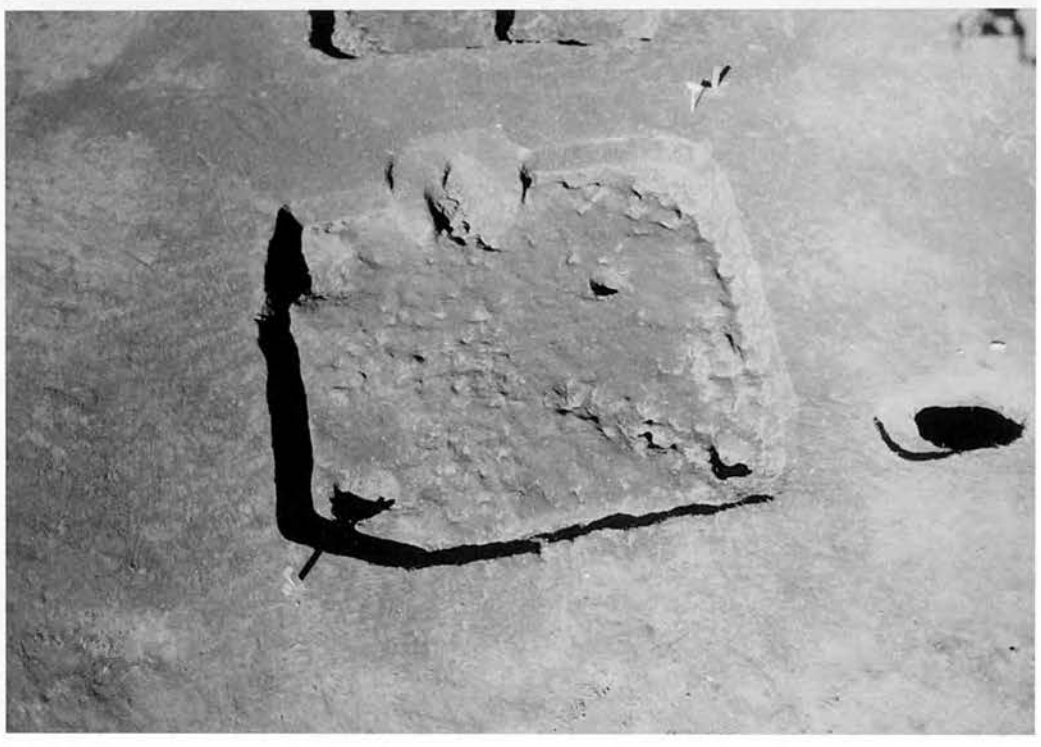


SI－219(南から)

SI－220（南から）



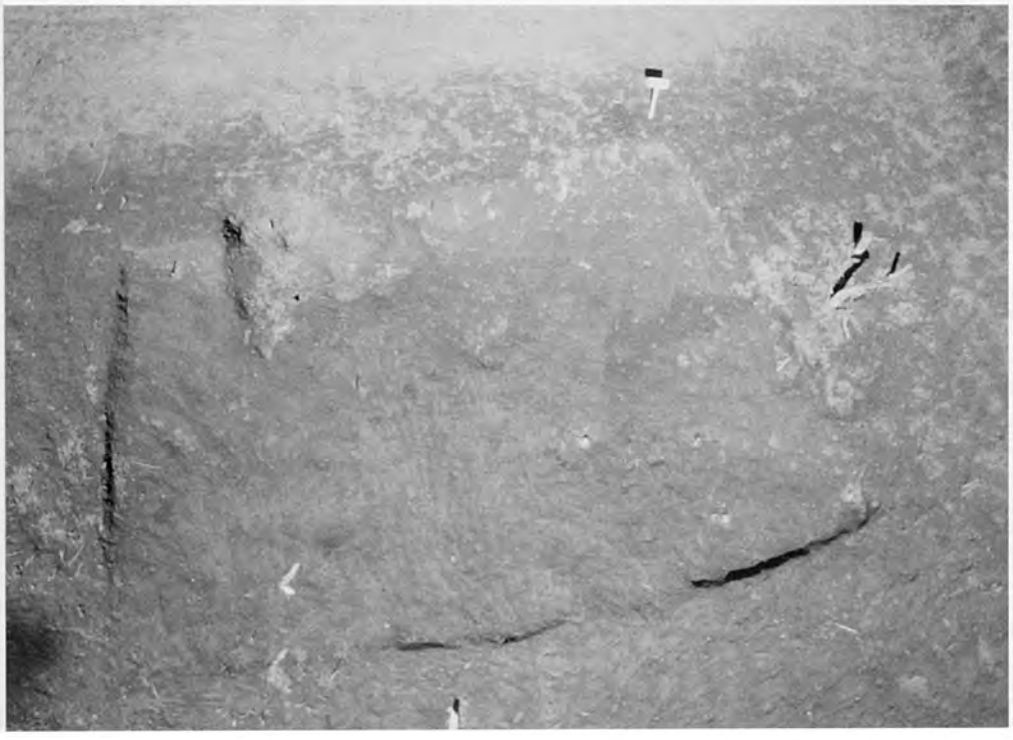
SI－221（南東から）



SI－222（南東から）

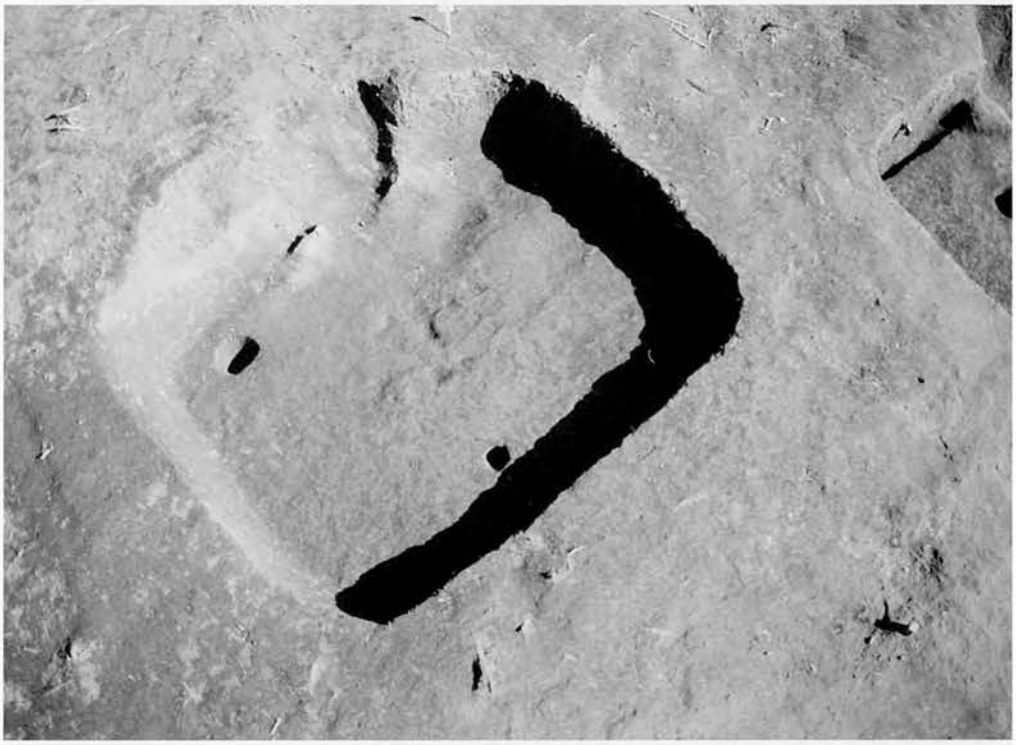
SI－223(右)・224(左)(南から)

SI－225(北から)

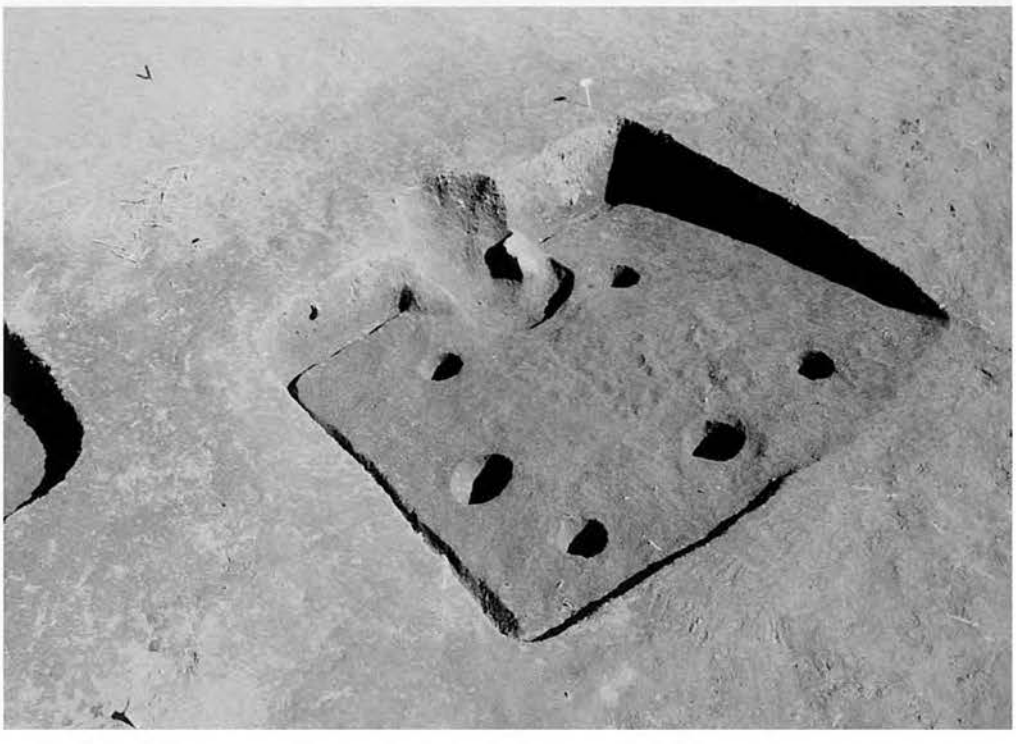


SI－228(南から)

SI－229（西から）



SI－230（南西から）



SI－231（南西から）

図版 84

SI－233(西から)

SI－234(南西から)

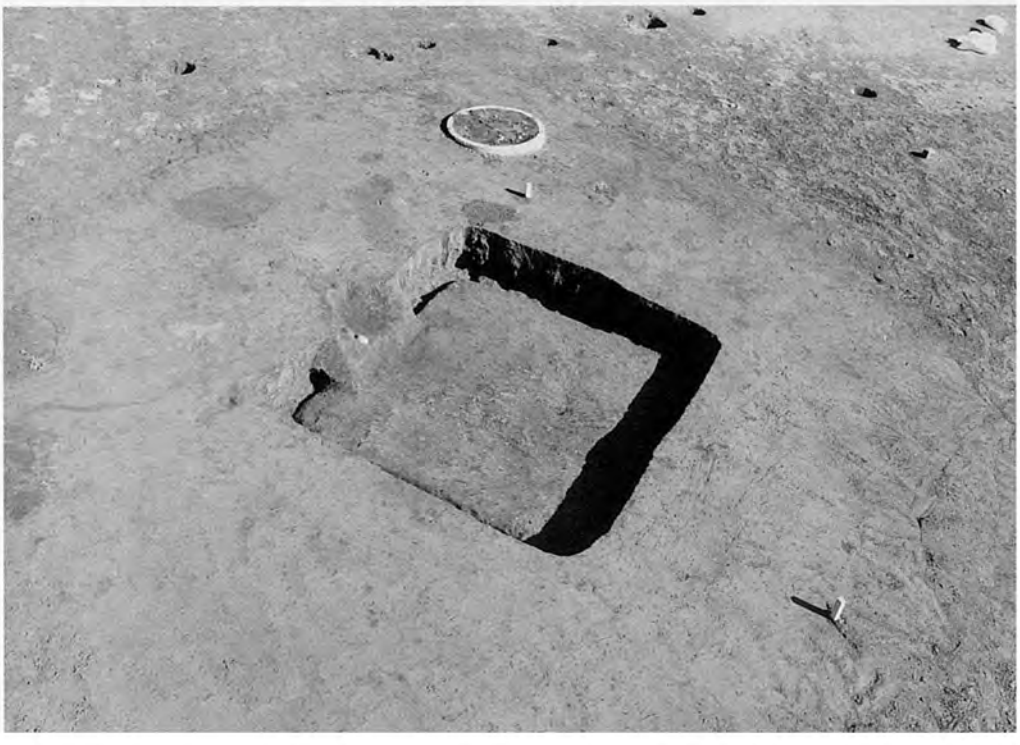
SI－235(南から)

SI－236(上)・SI－238(下)(南から)

SI－239 カマド(東から)

SI－239(南西から)

SI－240 カマド遺物出土状況
(南から)

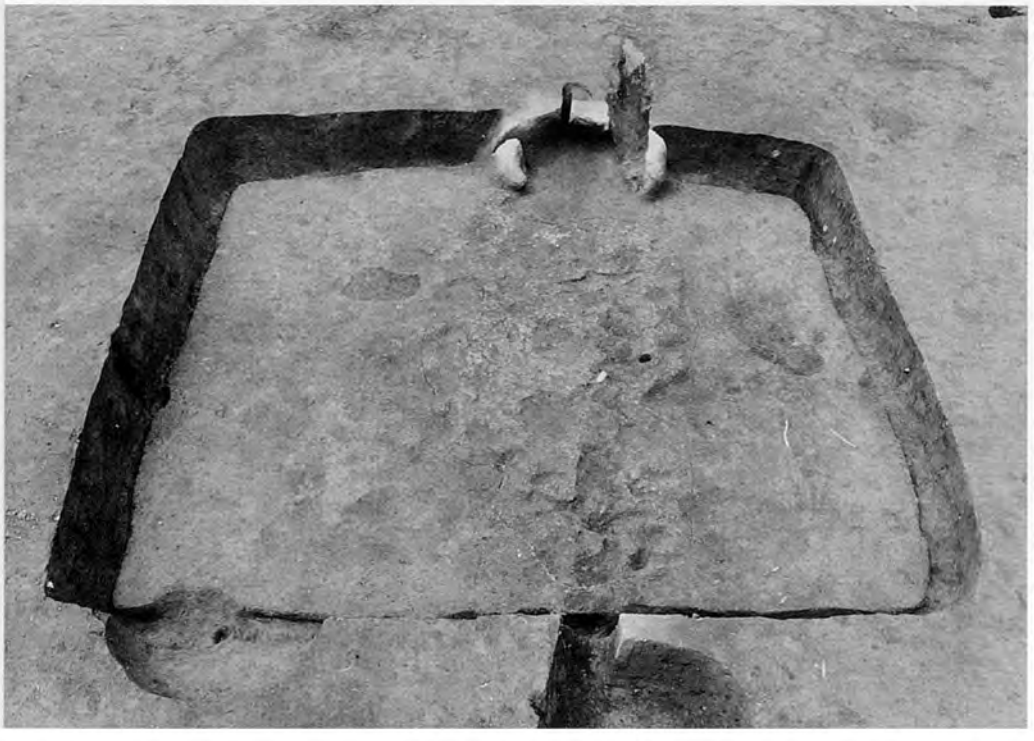


SI－240(南西から)

図版 86

SI－241(南東から)

SI－242(南から)



SI－243 カマド(南から)

SI－243(南から)

SI－244 遺物出土状況（西から）

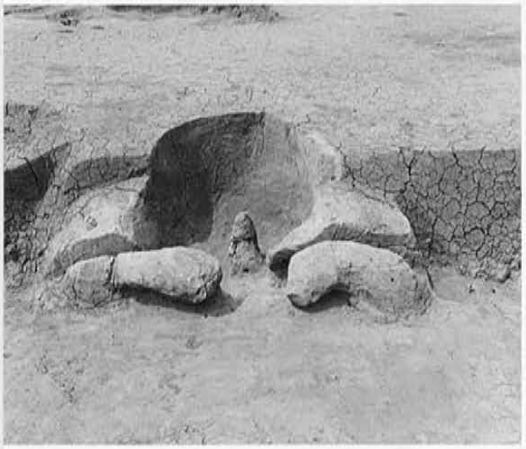
SI－244 カマド（西から）

SI－244（西から）

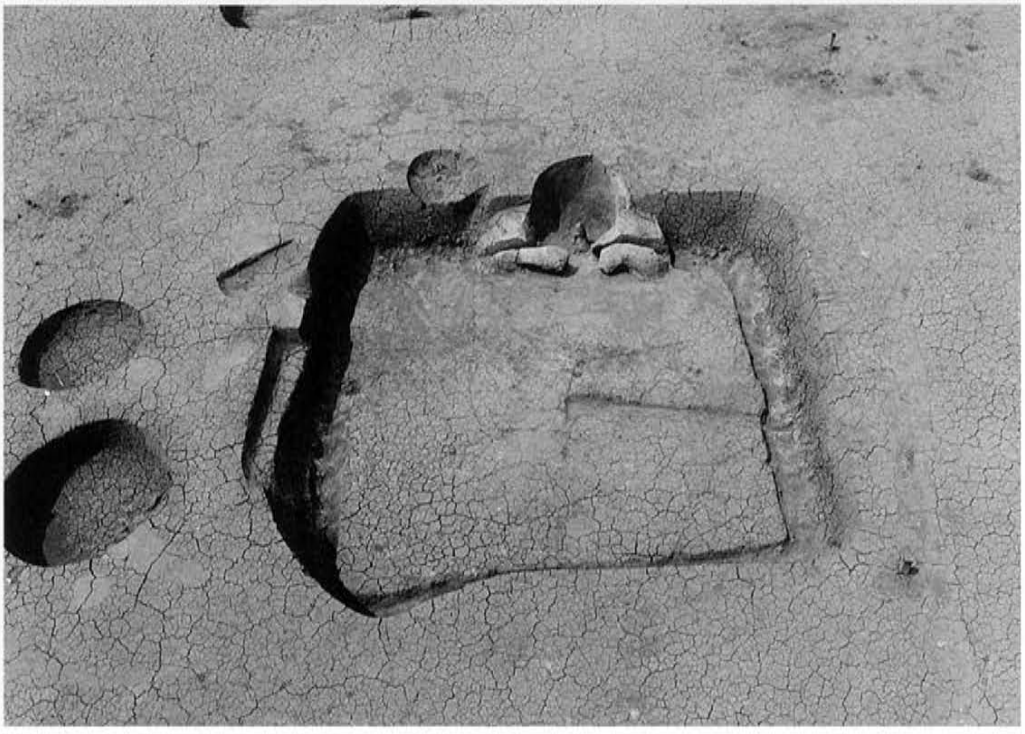
SI－245A カマド（南から）

SI－245A（下）・SI－245B（上）（南から）

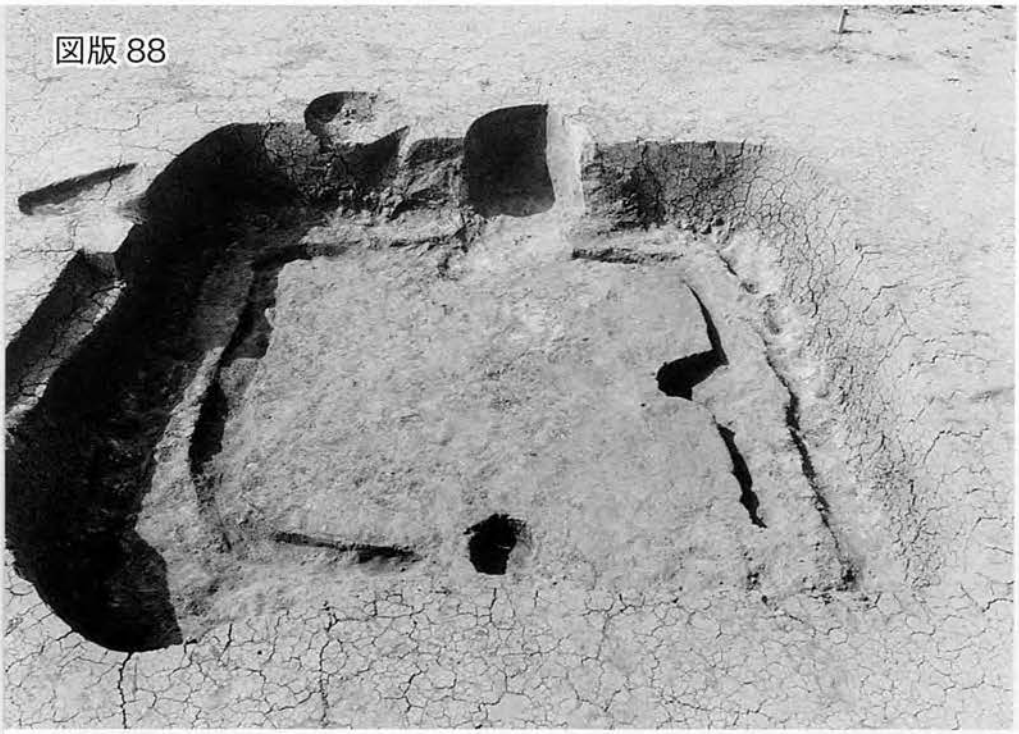
SI－245B カマド（南から）



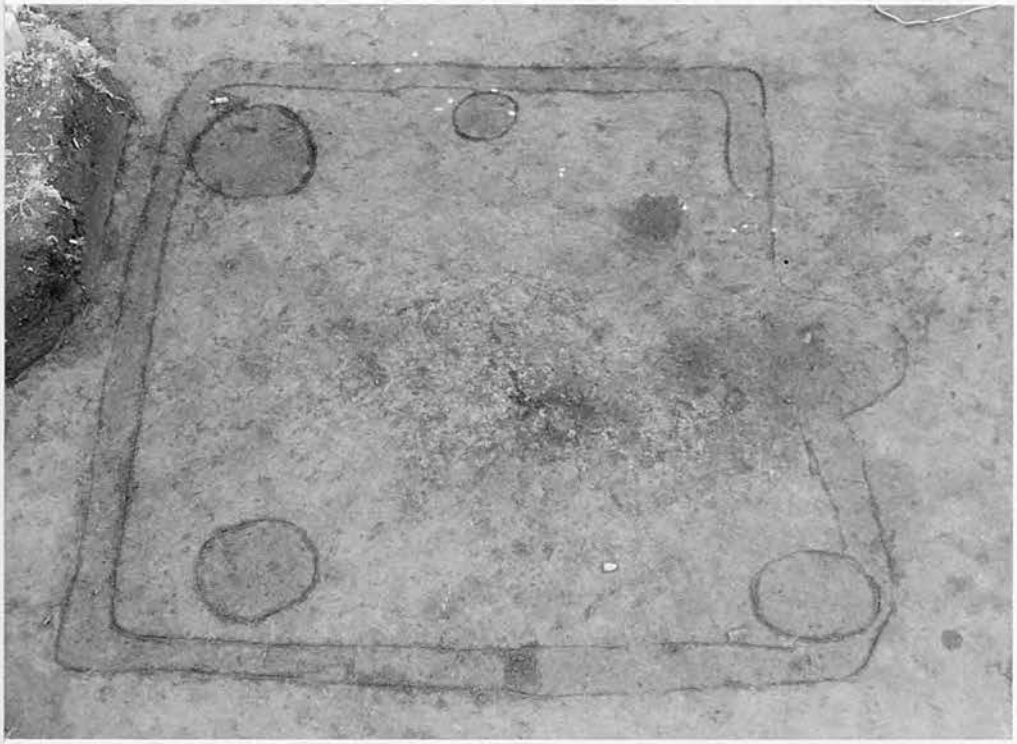
SI－246A カマド（南から）



SI－246A（南から）



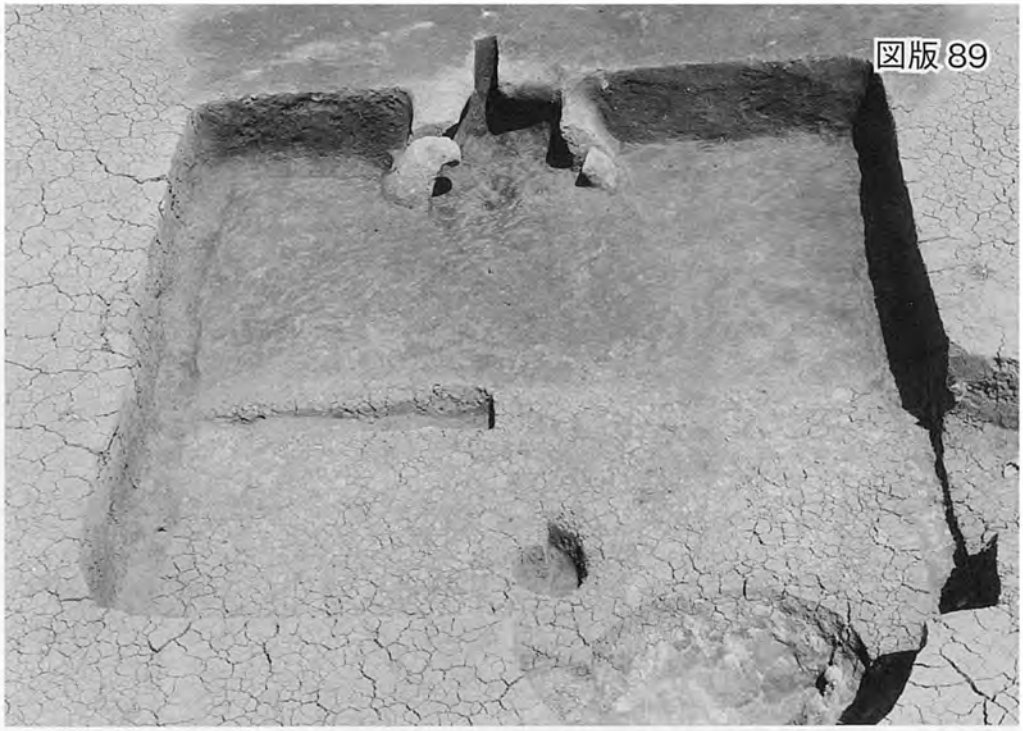
SI－246A・SI－246B（南から）



SI－247（南から）

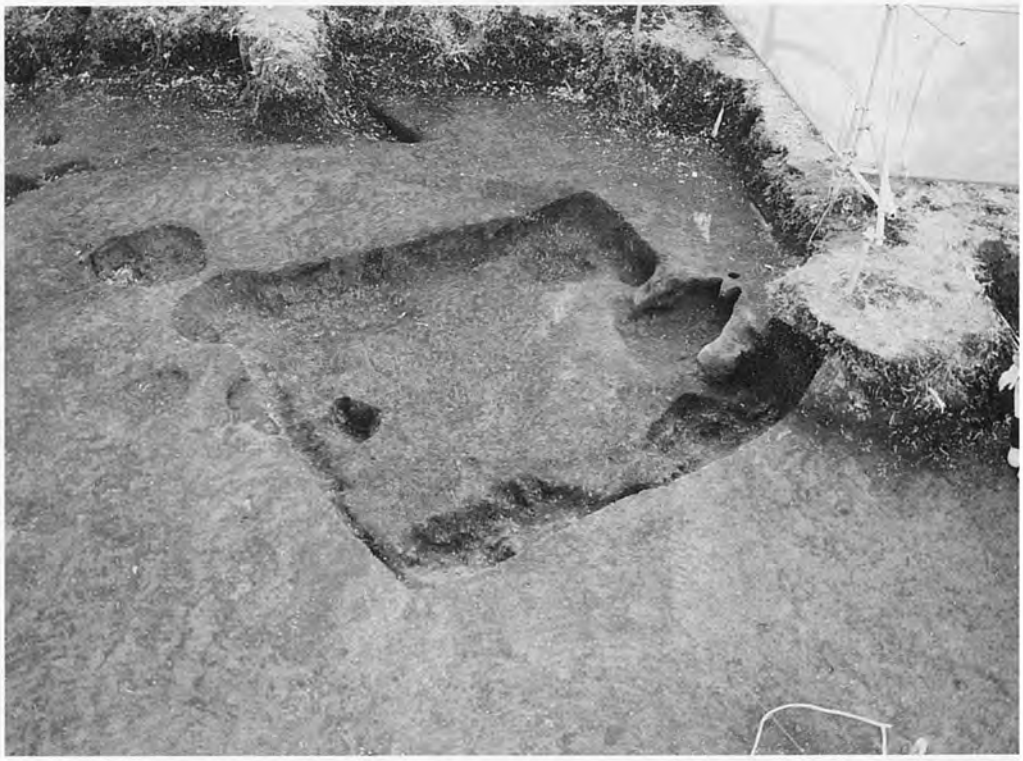
SI－248（西から）

SI－249 カマド（南東から）



SI－249（南東から）

SI－250 カマド（東から）

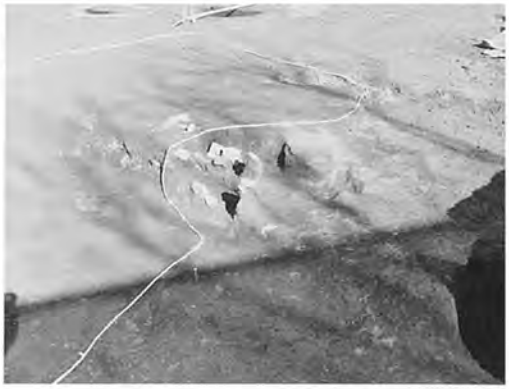


SI－250（北から）

SI－251 カマド（北西から）

SI－251（北から）

SI－252A・SI－252B（北から）



SI－252A カマド遺物出土状況
（西から）

SI－253（北から）

SI－253 カマド（南から）

SI－254（西から）

SI－254 遺物出土状況（北から）

SI－254 カマド（南西から）

SI－255 カマド（西から）

SI－255（北西から）

SI－256 カマド遺物出土状況
（南西から）

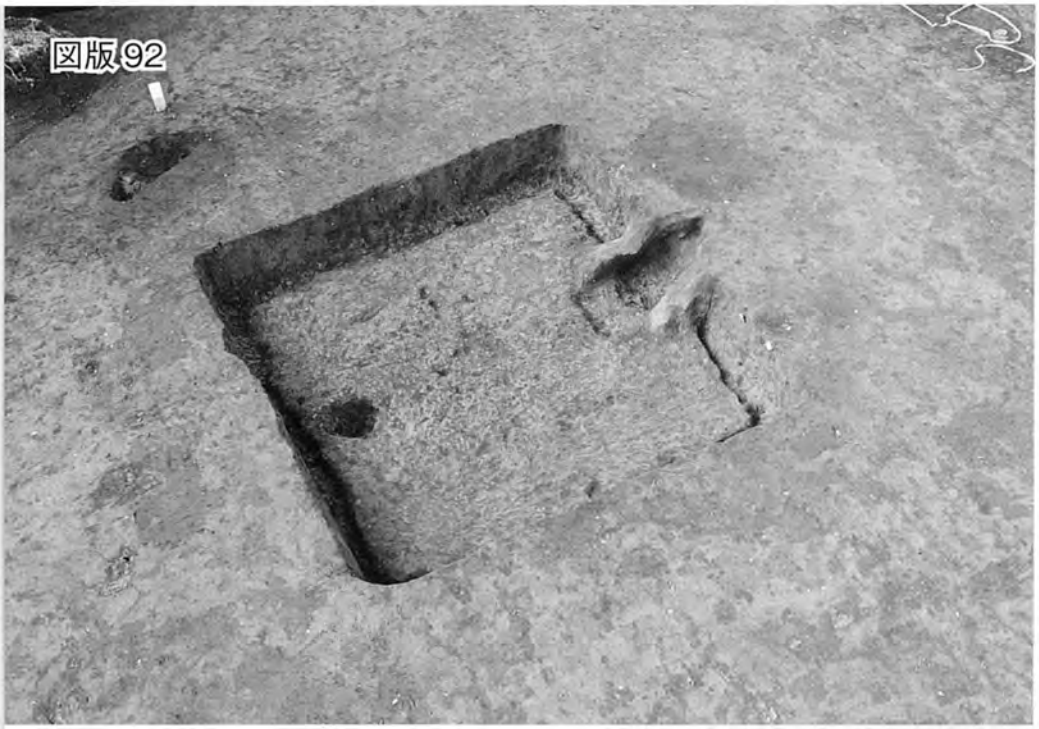
SI－256（西から）

SI－257 新カマド遺物出土状況
（東から）

SI－257 旧カマド（南から）

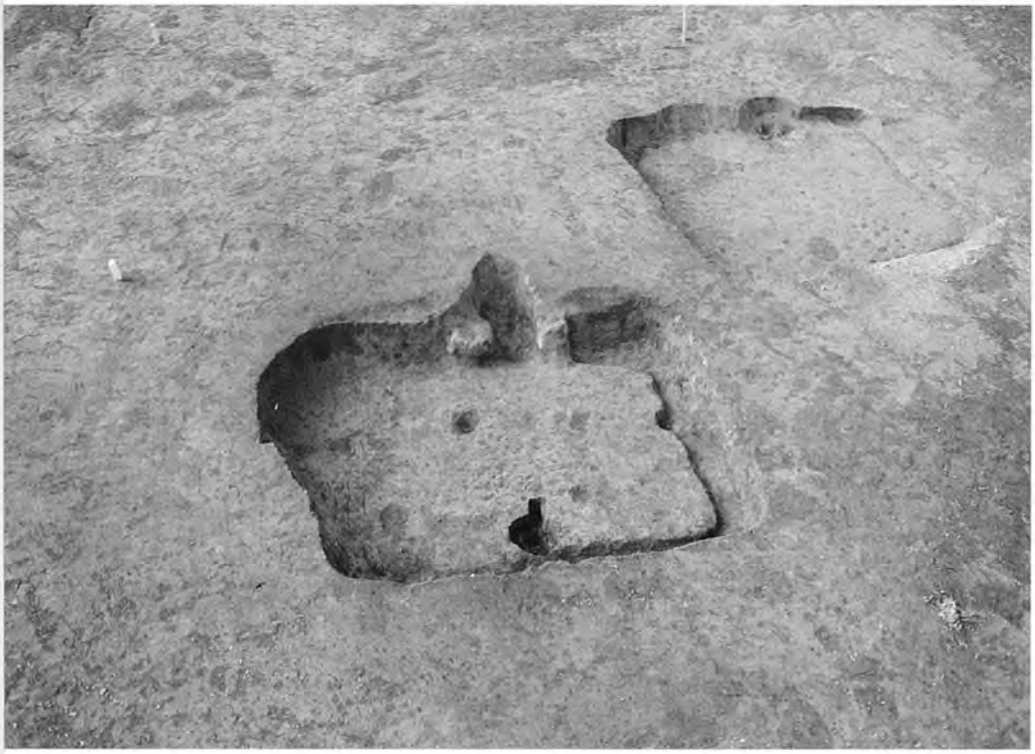
SI－257（北から）

図版92



SI－258 カマド(南から)

SI－258(東から)



SI－259 カマド遺物出土状況
(北東から)

SI－259(東から)

SI－260 カマド遺物出土状況
(東から)

SI－260(東から)

SI－261 カマド遺物出土状況
（南から）

SI－261（南東から）

SI－262 遺物出土状況（南東から）

SI－262（南東から）

SI－262 カマド（南東から）

SI－263 カマド遺物出土状況
（南西から）

SI－263（南西から）

図版94

SI－014（西から）

SI－016（南西から）

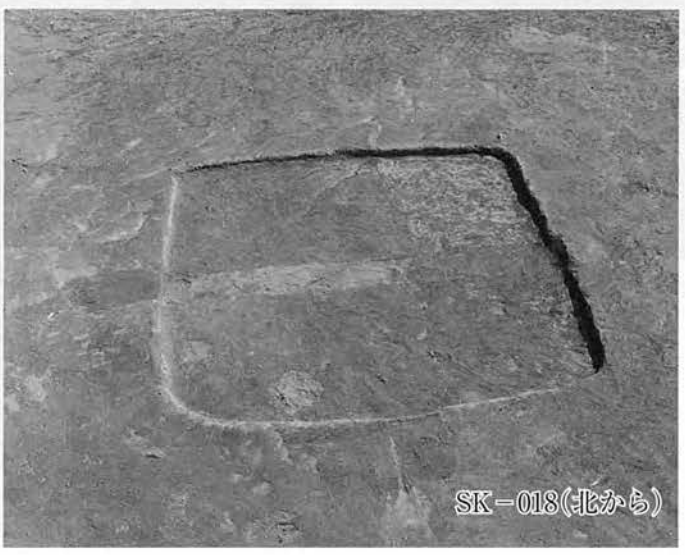
SI－022（西から）

SI－027（西から）

SI－120（南西から）

SK－008（西から）

SK－016（西から）


SK－018（北から）

SK－257（北から）

SB－001（南から）

SB－002・SB－003・SB－004（東から）

SB－005・SB－006（東から）

SB－007（南から）

SB－008（東から）

SB－009（南から）

SB－010（東から）

図版96

SB－011・SB－012（東から）

SB－013～SB－016・SB－019（西から）

SB－020（東から）

SB－021（南東から）

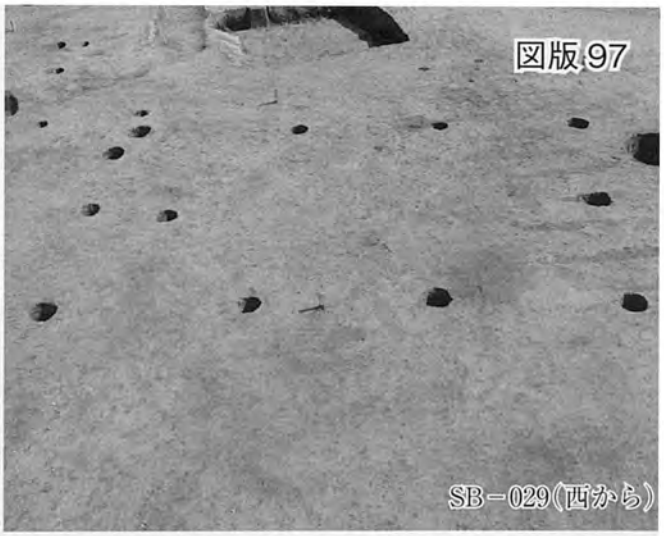
SB－022（南から）

SB－023（北から）

SB－025・SB－026（北から）

SB－027（東から）

SB－028（東から）

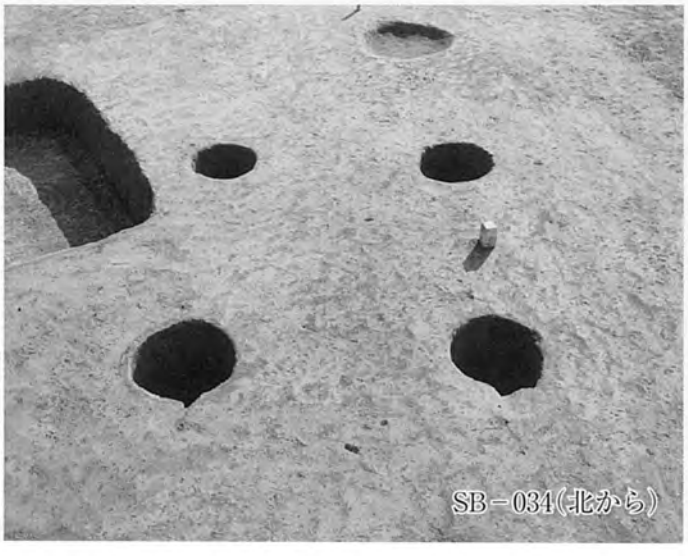

SB－029（西から）

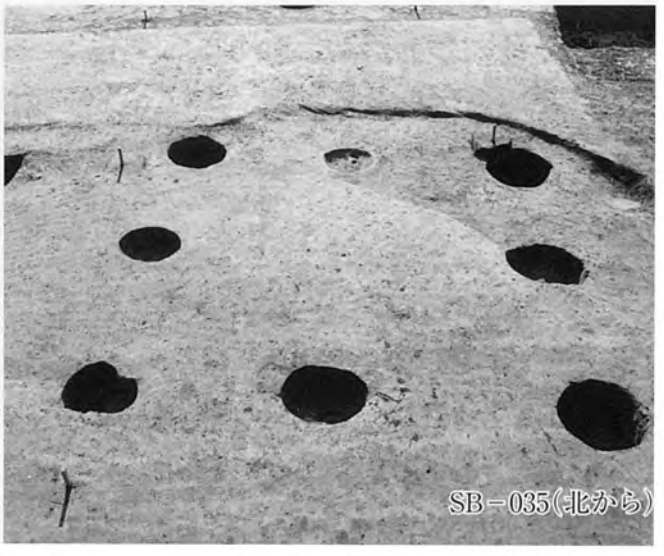
SB－030（北から）

SB－031（北から）

SB－032（北から）

SB－033（東から）


SB－034（北から）


SB－035（北から）

図版 98

SB－036（西から）

SB－037（西から）

SB－038（東から）

SB－039（東から）

SB－040（西から）

SB－041（北から）

SB－042（西から）

SB－043（南から）

SB－044（南から）

SB－045（東から）

SB－046・SB－047（北東から）

SB－048A・SB－048B・SB－048C（北から）

SB－050（南東から）

SB－051A・SB－051B（北から）

SB－052（東から）

SB－053・SB－054（西から）

図版100

SK－003（北東から）

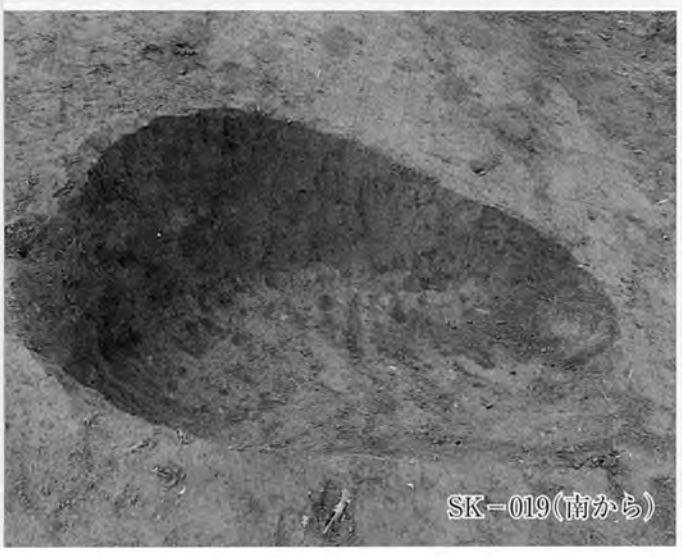
SK－010（北から）

SK－011（西から）

SK－012（北から）

SK－013（東から）

SK－014（東から）

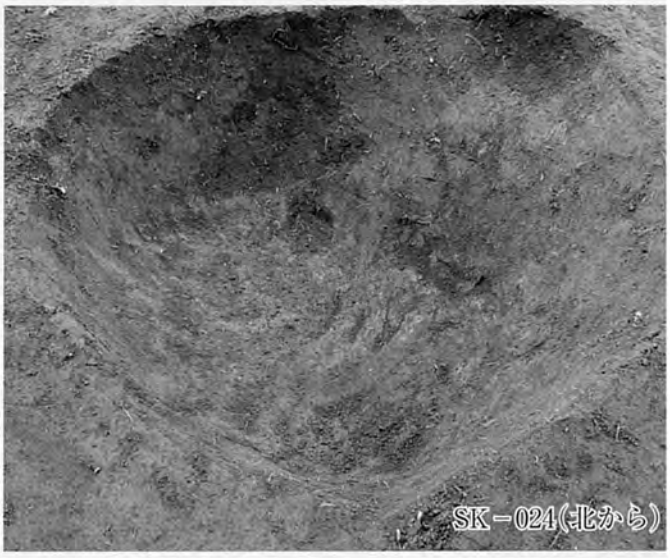

SK－019（南から）

SK－020（北から）

SK－021（西から）

SK－022（北から）

SK－023（南から）


SK－024（北から）

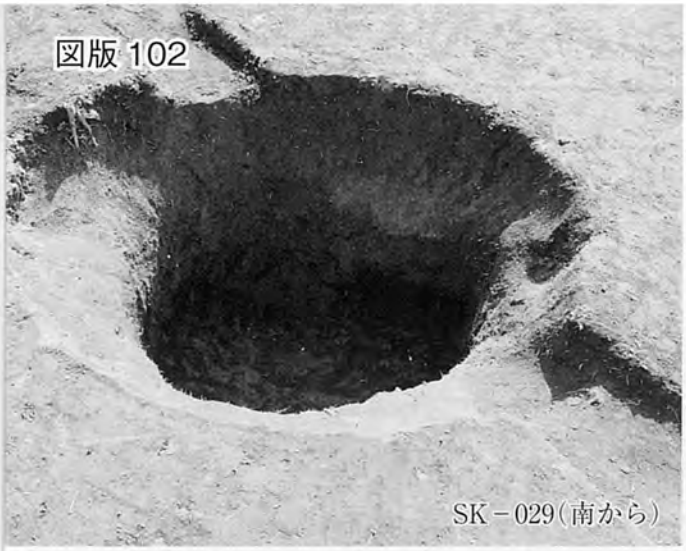
SK－025（南から）

SK－026（西から）

SK－027（南東から）

SK－028（南から）

図版 102


SK－029（南から）

SK－030（西から）

SK－031（北から）

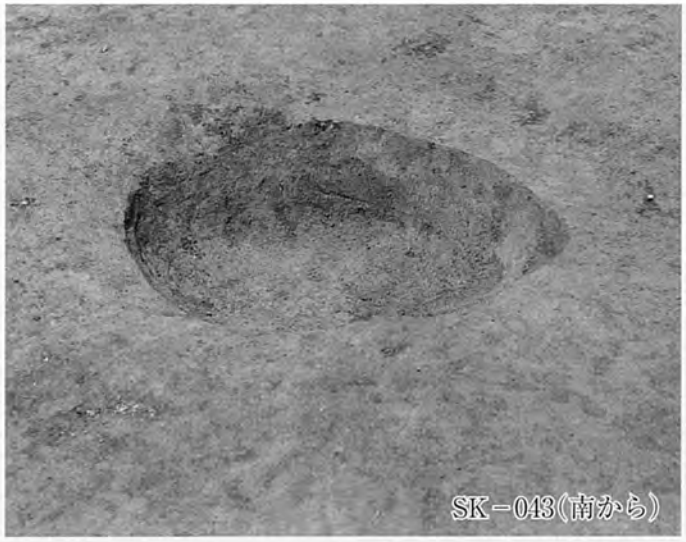
SK－035（西から）

SK－036（南から）

SK－037（南から）

SK－039（北東から）

SK－042（東から）


SK－043（南から）

SK－044（南から）

SK－045（東から）

SK－046（北から）

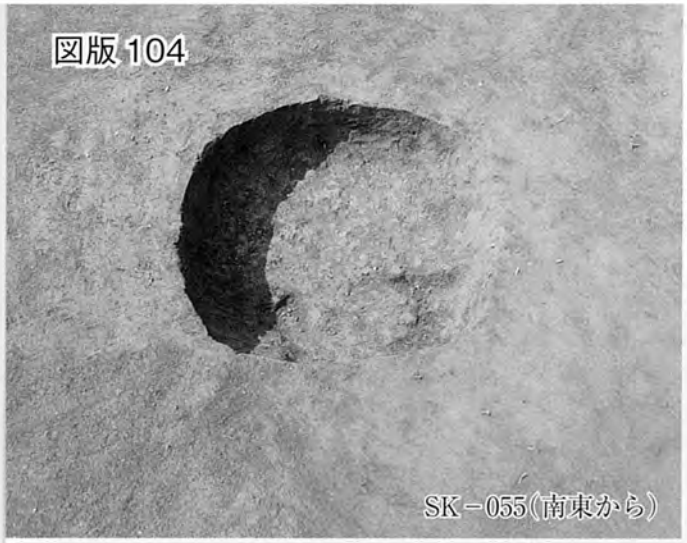
SK－047（東から）

SK－048（東から）

SK－051（南東から）

SK－052（東から）

図版 104


SK－055（南東から）

SK－059（北から）

SK－060（南から）

SK－103（北から）

SK－107（西から）

SK－108（西から）

SK－109（北から）

SK－110（北から）

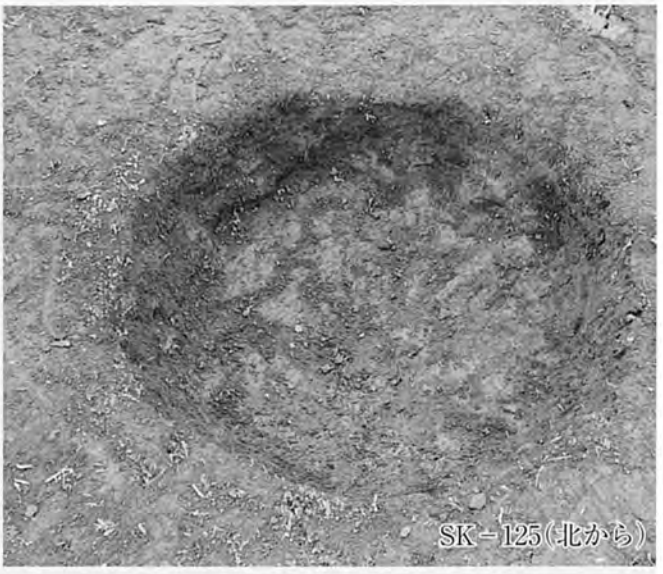
SK－111（北から）

SK－112（北から）

SK－113（北から）

SK－115（北から）

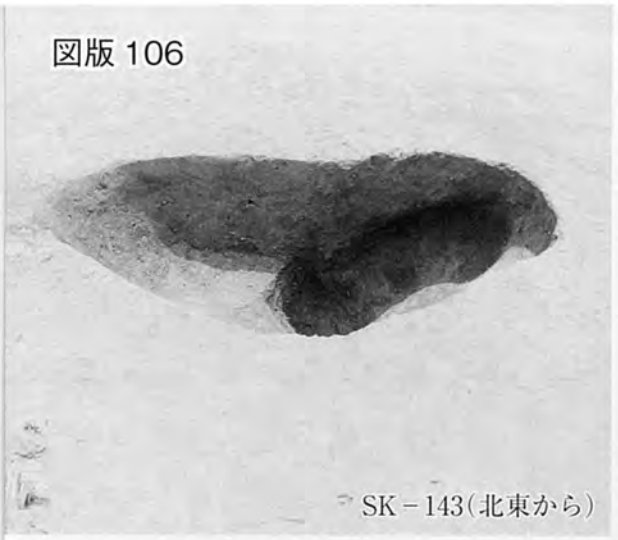
SK－124（北から）


SK－125（北から）

SK－138（北から）

SK－142（西から）

図版 106


SK－143（北東から）

SK－223（西から）

SK－238（西から）

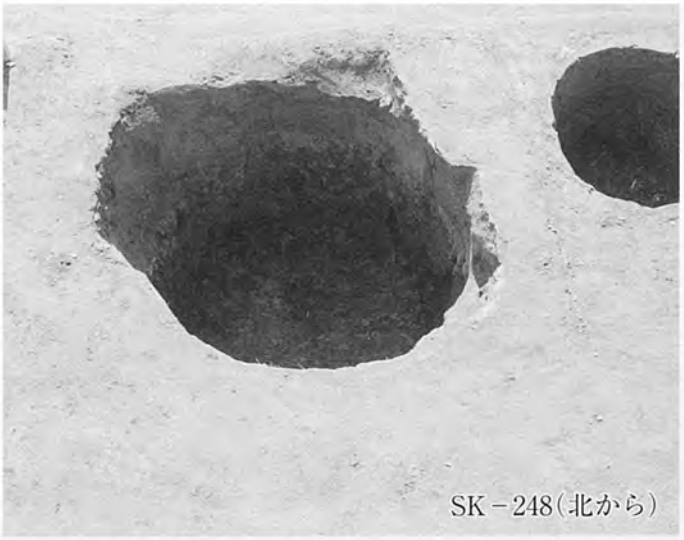
SK－239（西から）

SK－240（西から）

SK－241（東から）

SK－243（東から）

SK－244～SK－247（北から）


SK－248（北から）

SK－250（北東から）

SK－252（北から）

SK－256 遺物出土状況（南東から）

SK－260（北西から）

SK－261（北から）

SK－262（西から）

SK－265（東から）

図版 108

SK－266（東から）

SK－270A・SK－270B・SK－270C（北東から）

SK－275（東から）

SK－276（南から）

SK－277（北から）

SK－292（南から）

SK－293（東から）

SK－294（南から）

SK－295（南西から）

SK－296A・SK－296B（南西から）

SK－297（南西から）

SK－298（南から）

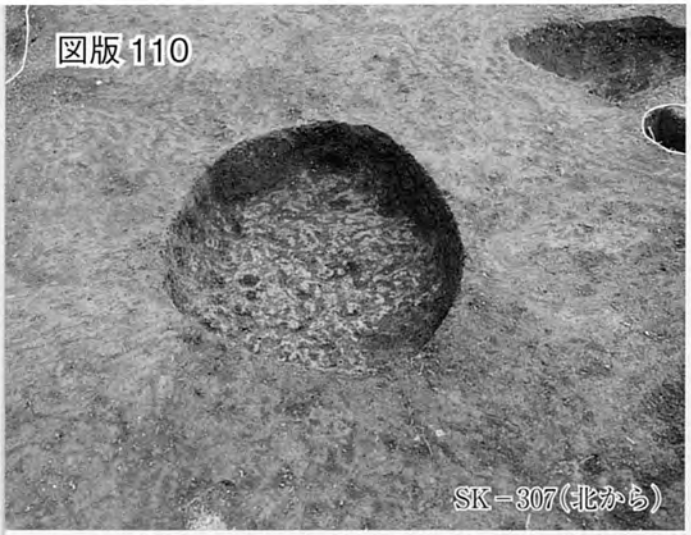
SK－299（南から）

SK－300（南から）

SK－301（南から）

SK－304（北から）

図版110


SK－307（北から）

SK－308（西から）

SK－310（北東から）

SK－311（北西から）

SK－316（北西から）

SK－317（東から）

SD－003（東から）

SD－003（西から）

SD－003（東から）

SD－003（北西から）

SD－003（北から）

SD－004（北から）

SD－005（右）・SD－025（左）（北から）

SD－005（右）・SD－025（左）（北から）

図版112

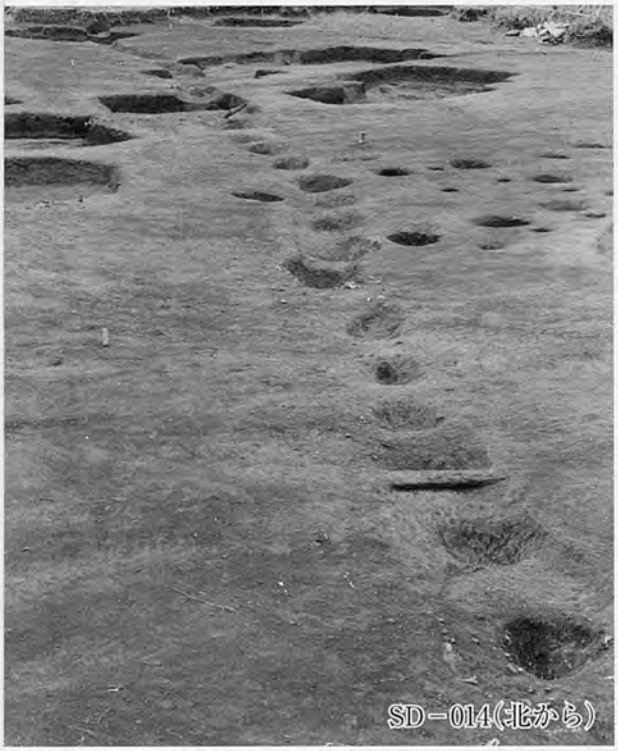
SD－011（西から）

SD－013（北から）

SD－014（南から）

SD－014（南から）

SD－020（西から）


SD－014（北から）

SD－021（北西から）

SD－022（東から）

SD－023・土坑群（西から）

SD－024（東から）

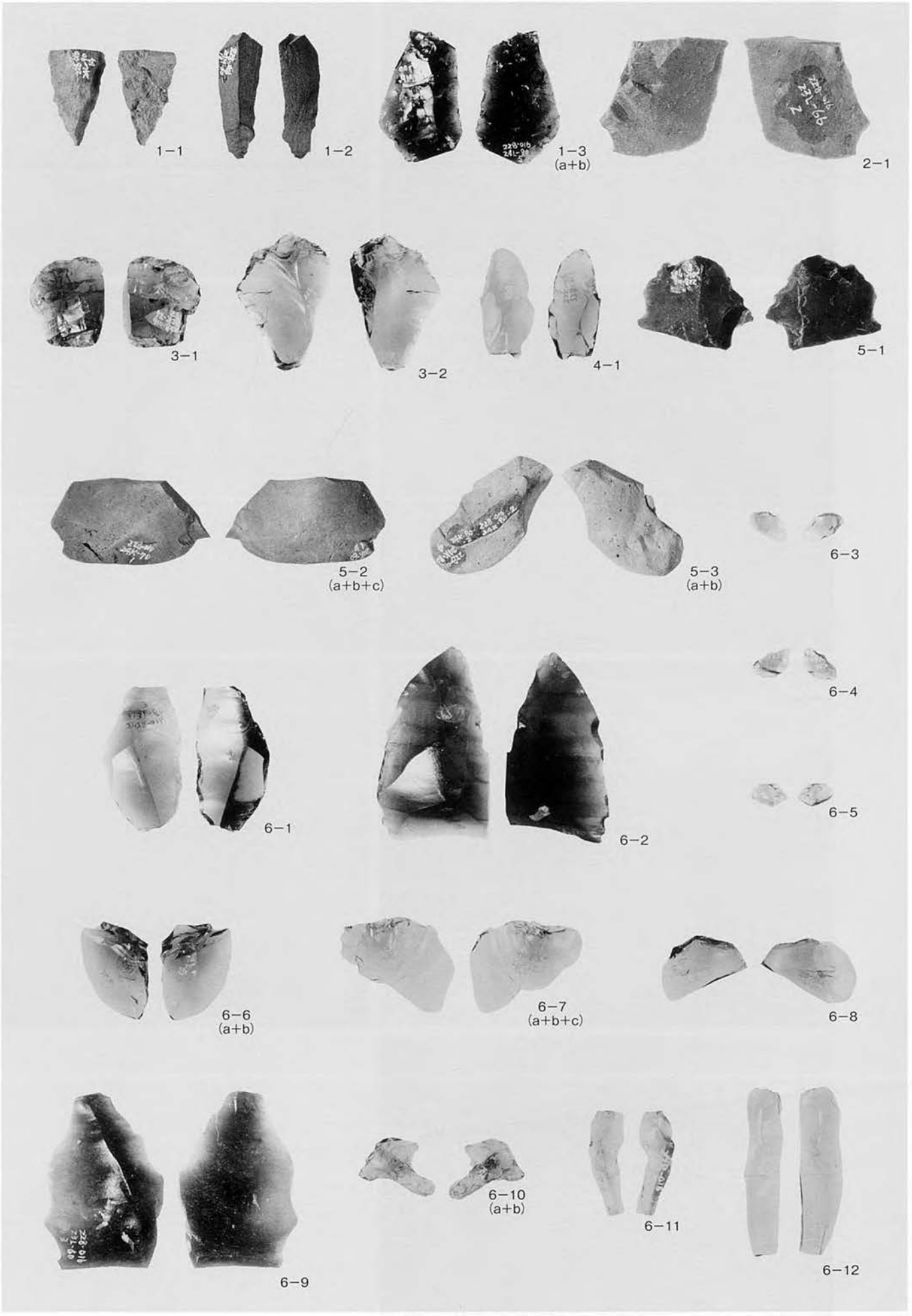
SD－028（西から）

SD－029（西から）

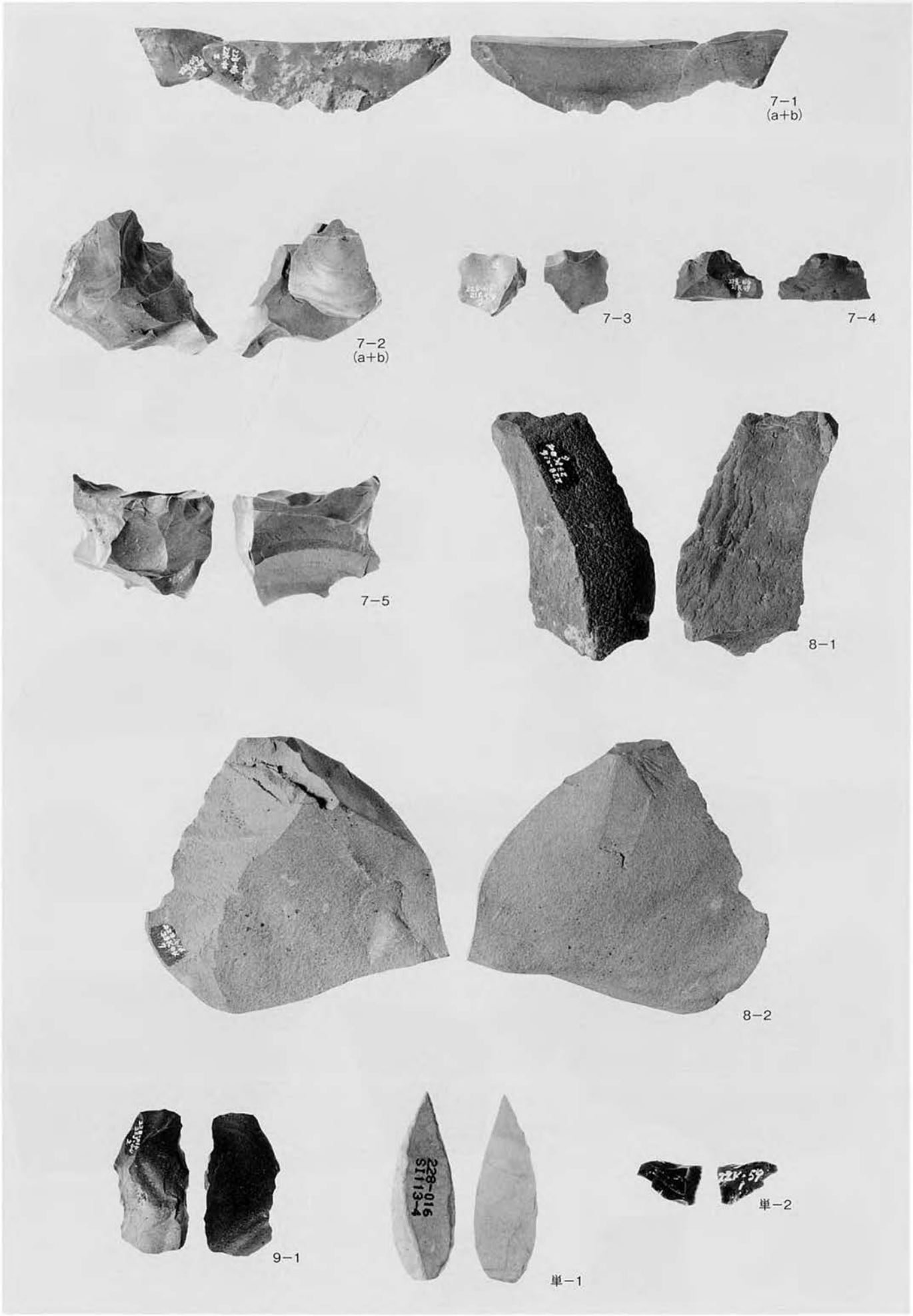
SD－030・SD－031（南から）

SD－034・SD－035（北西から）

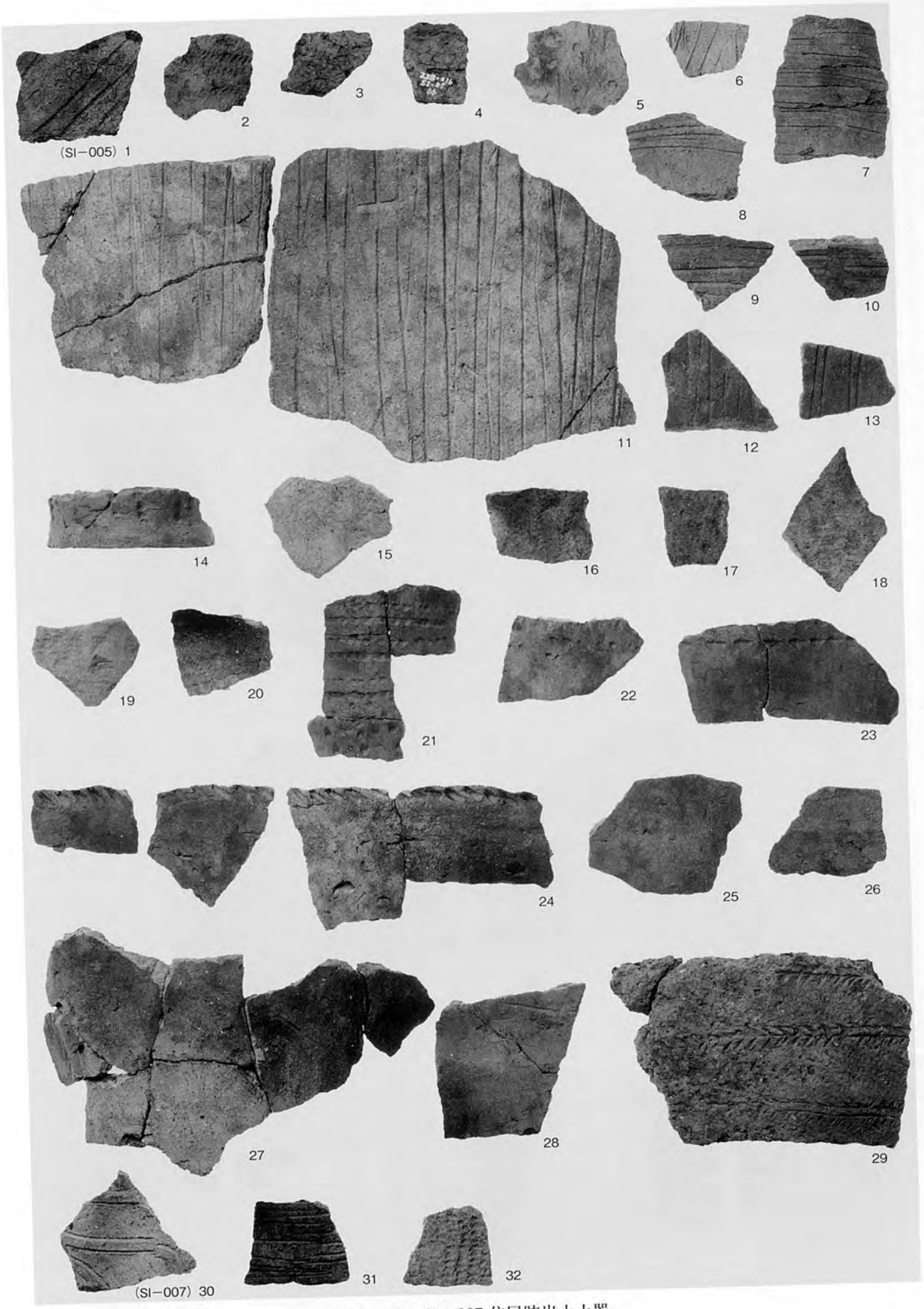
図版 114



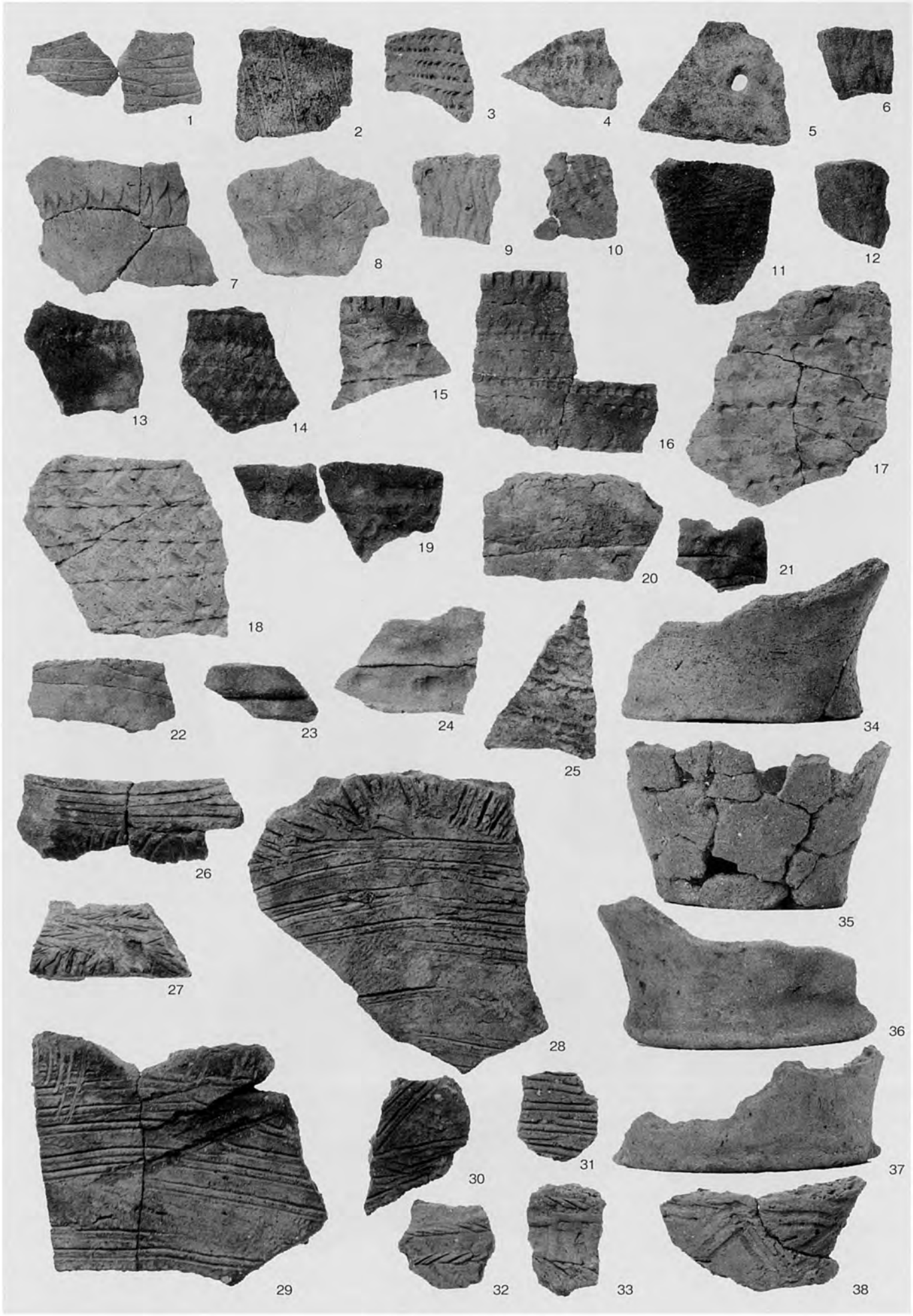

第１～６ブロック出土石器




第7～9ブロック及び単独・出土石器

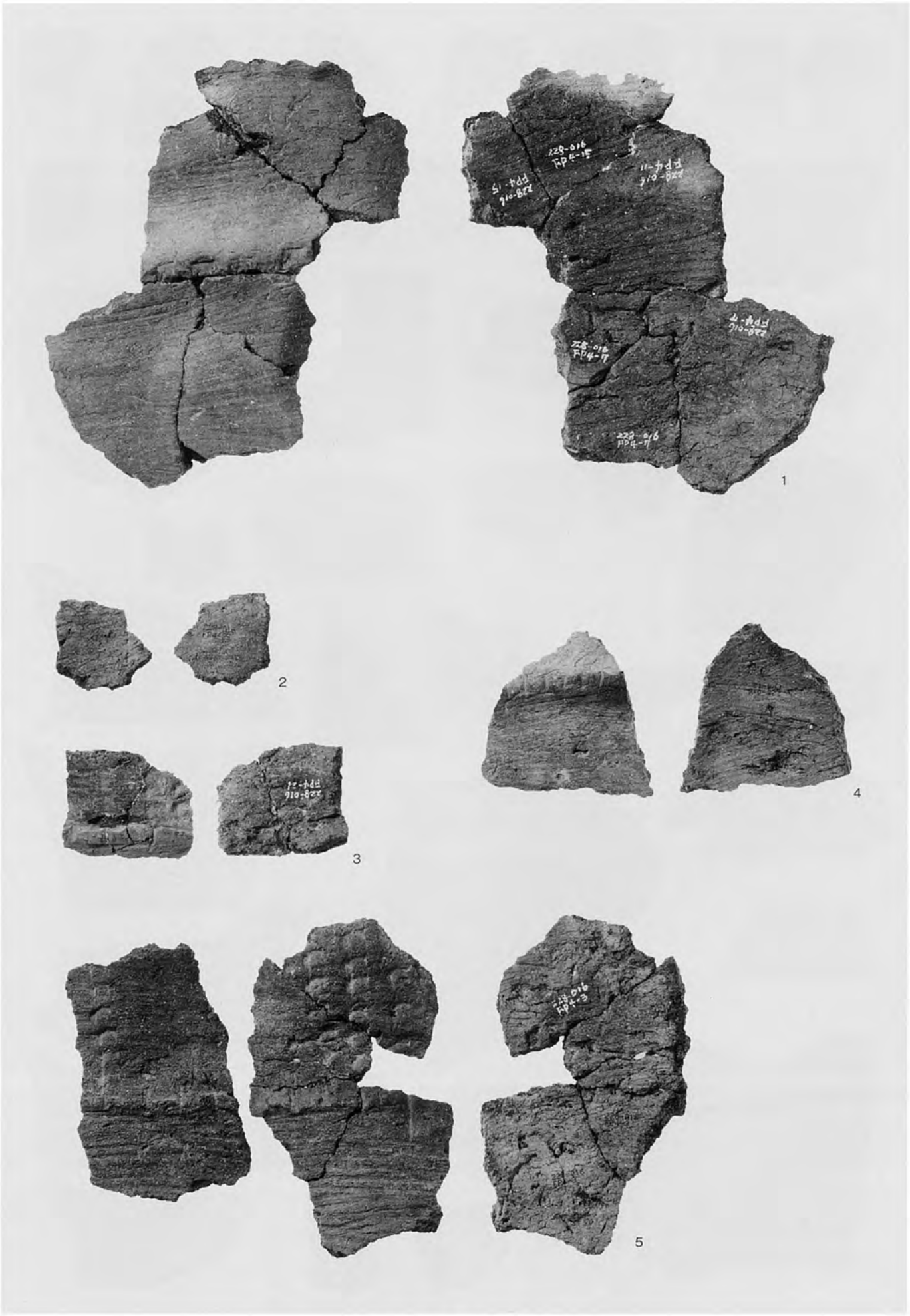



SI－005・SI－007 住居跡出土土器



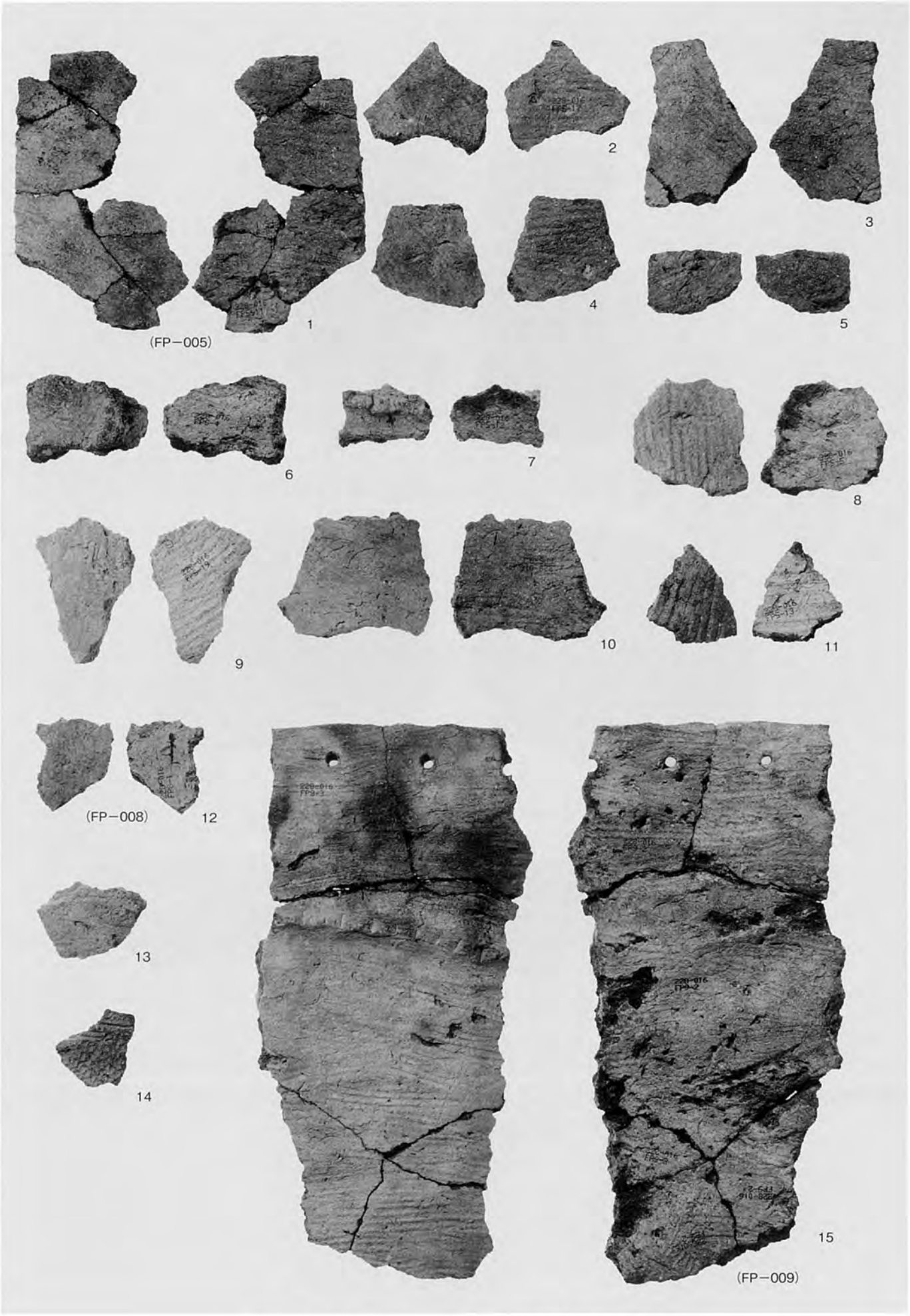

SI－025 住居跡出土土器

図版 118

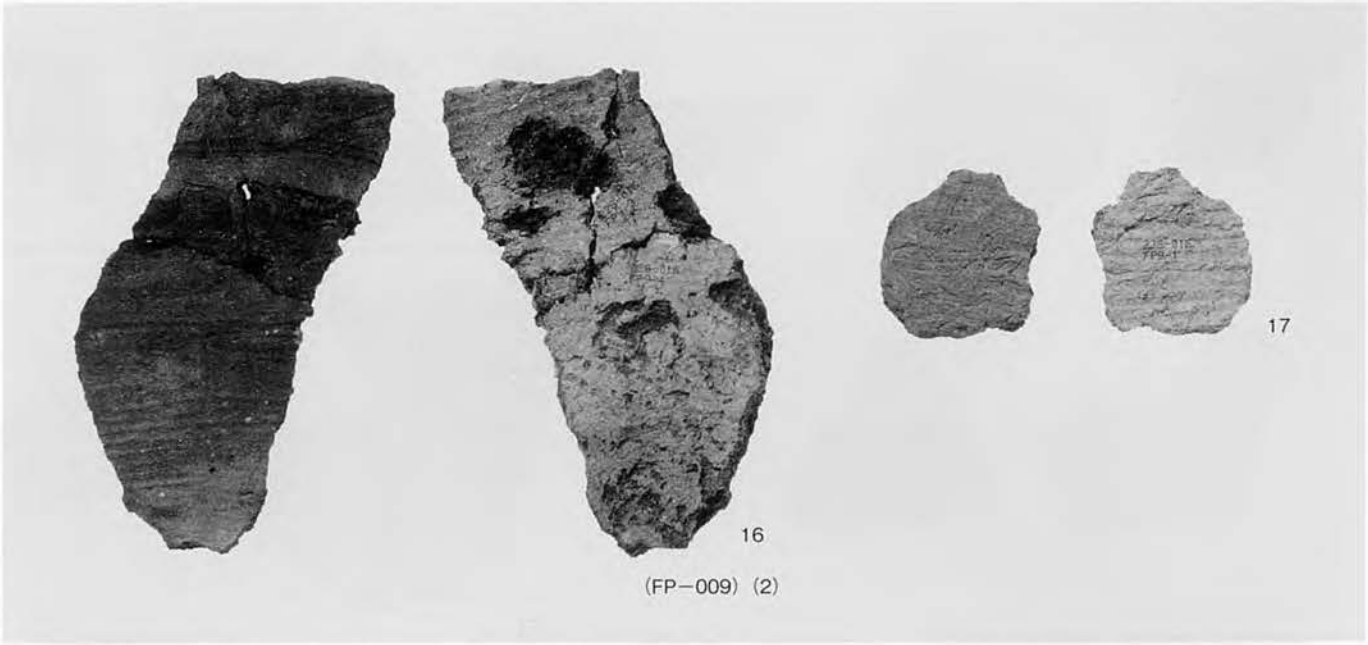


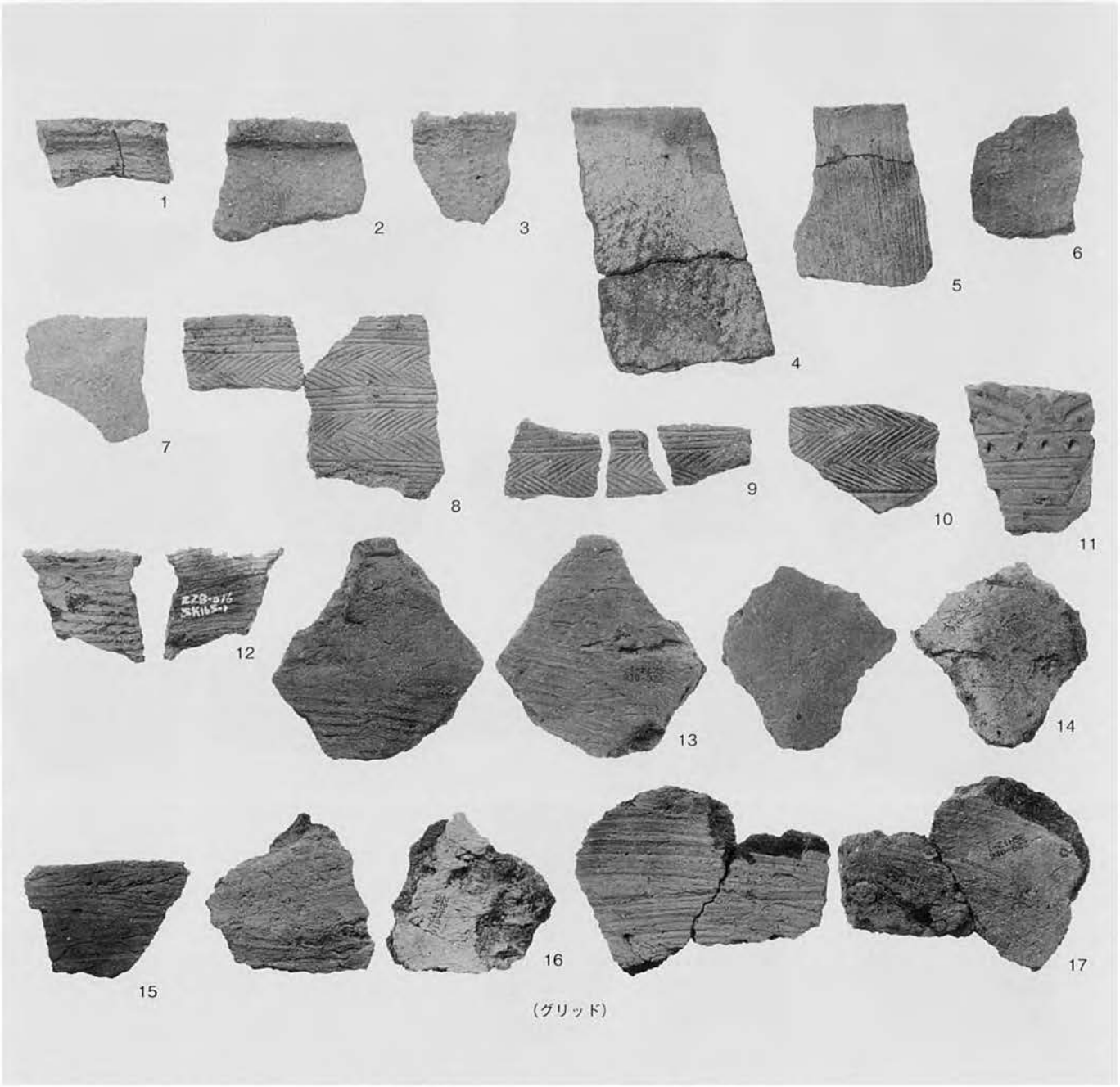
FP－004 炉穴出土土器（1）

FP－004 炉穴出土土器（2）

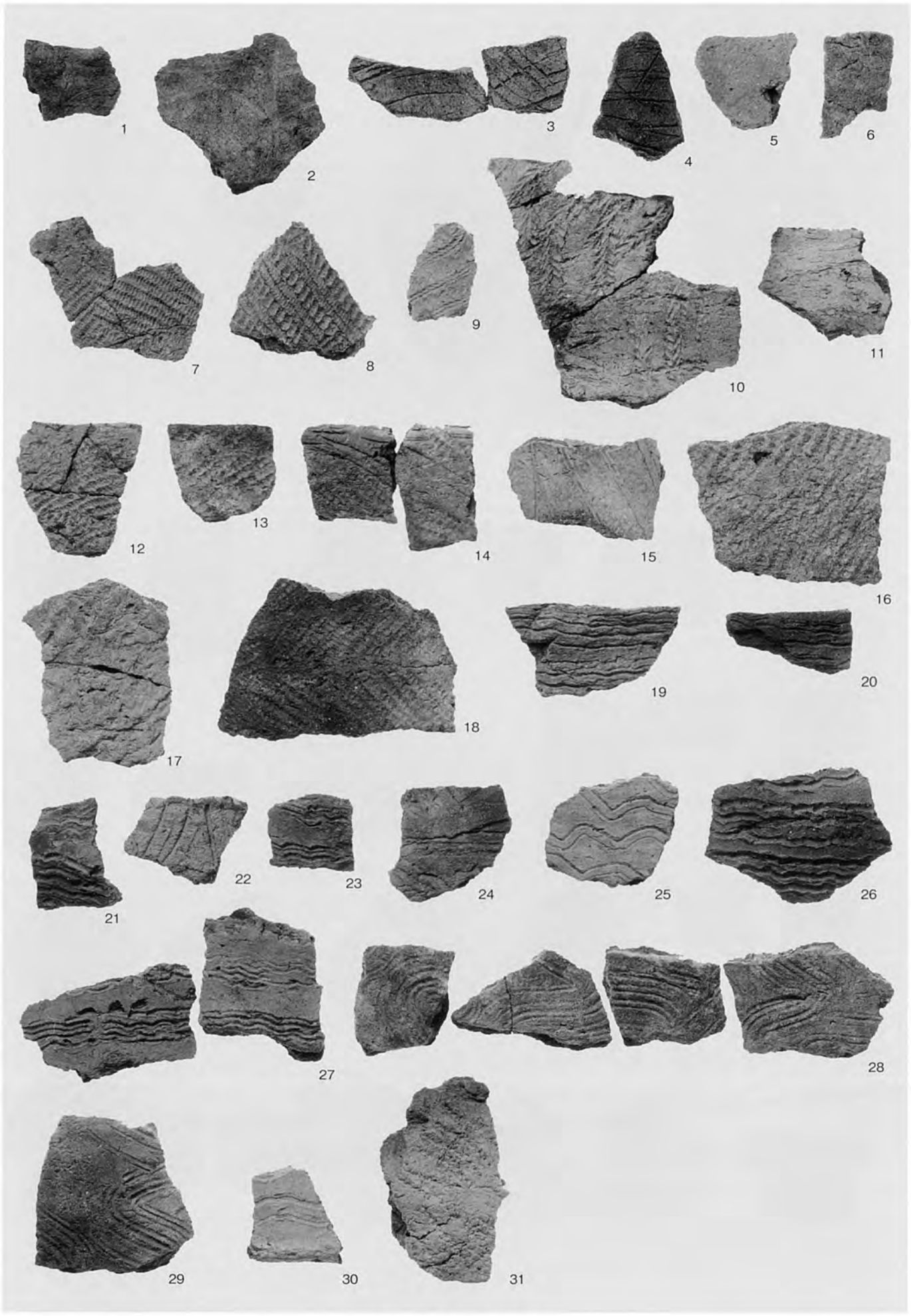



FP－005・FP－008・FP－009（1）炉穴出土土器

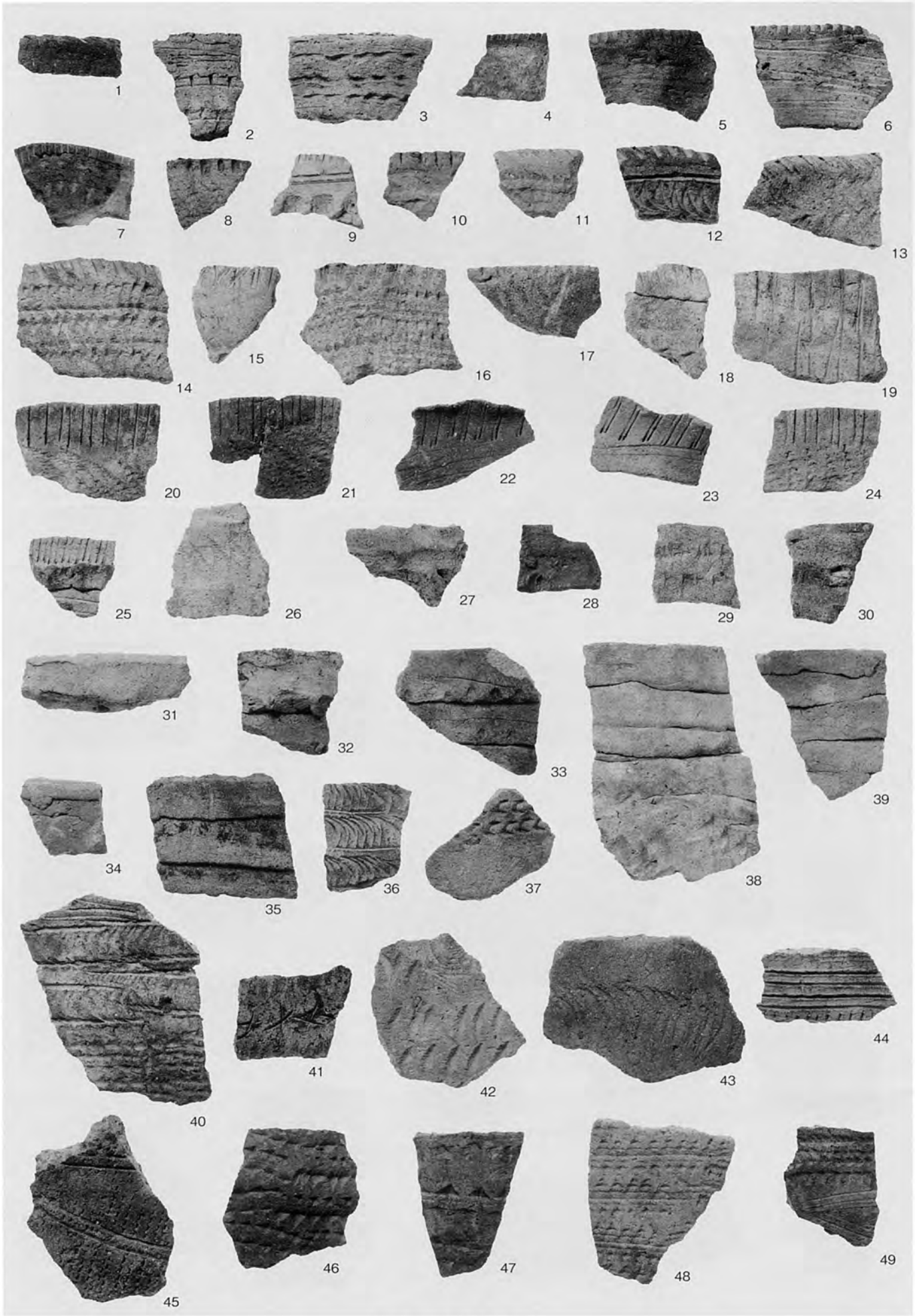


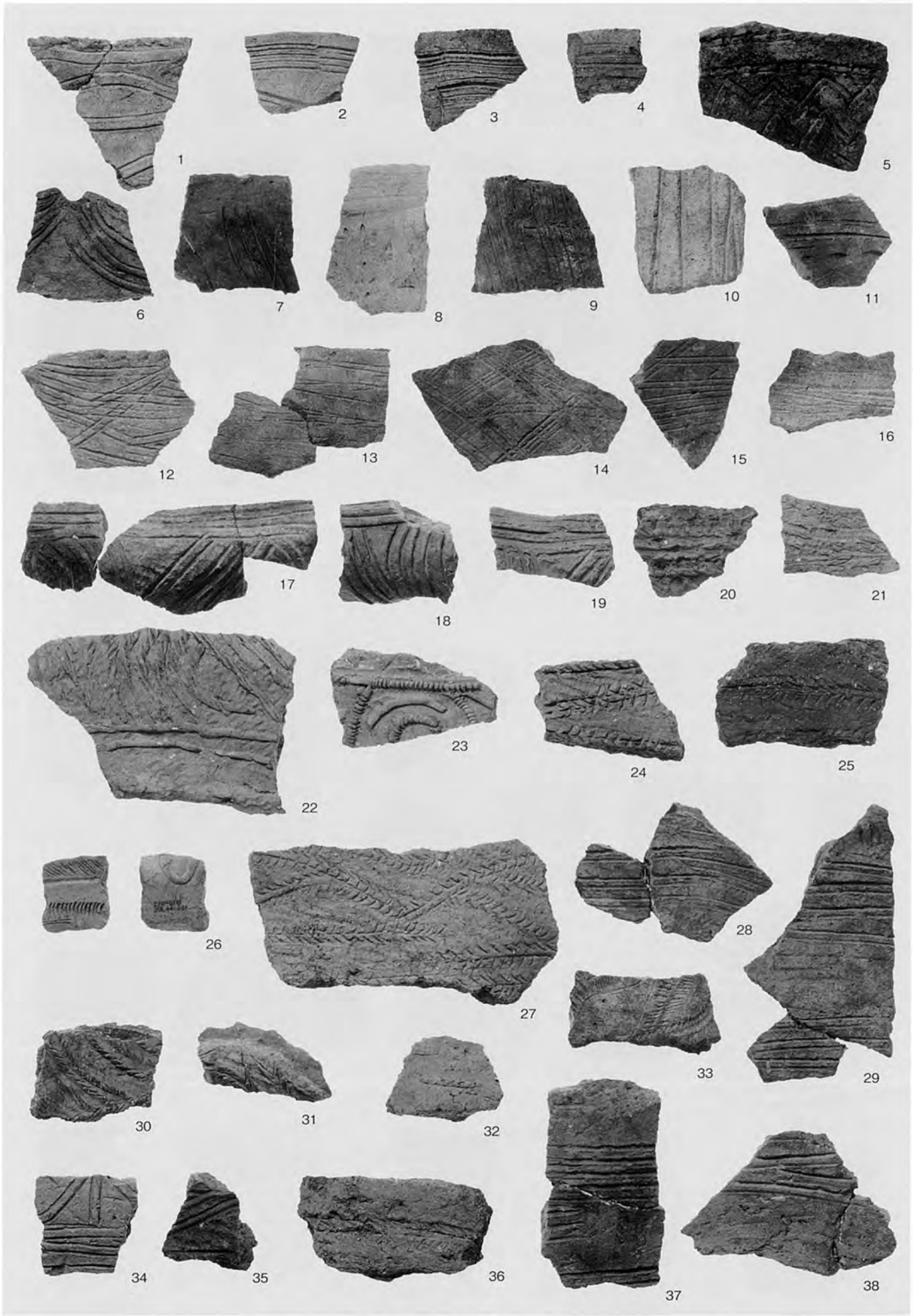

FP−009 (2) 炉穴・グリッド 出土土器 (1)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

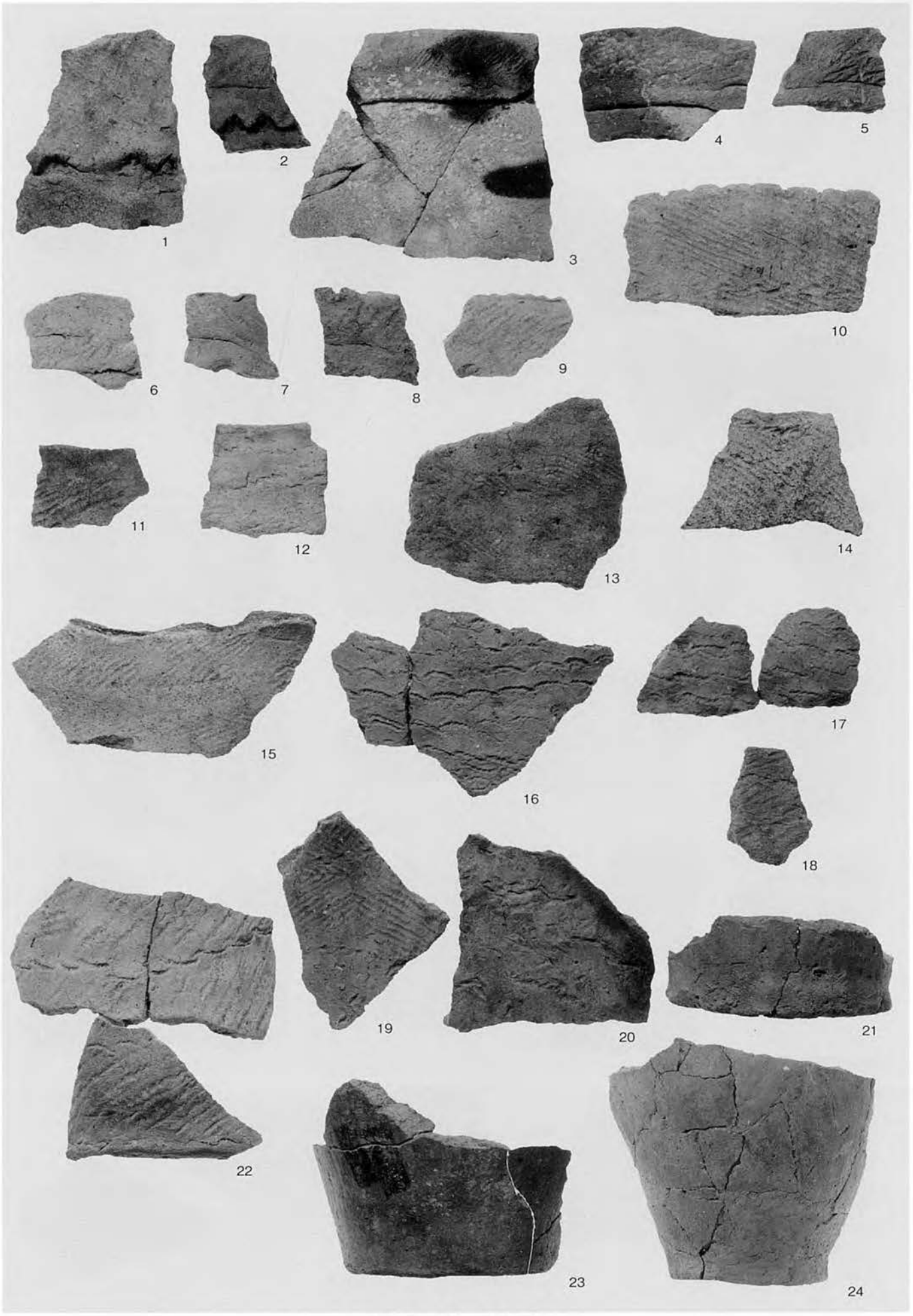
グリッド 出土土器 (2)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49

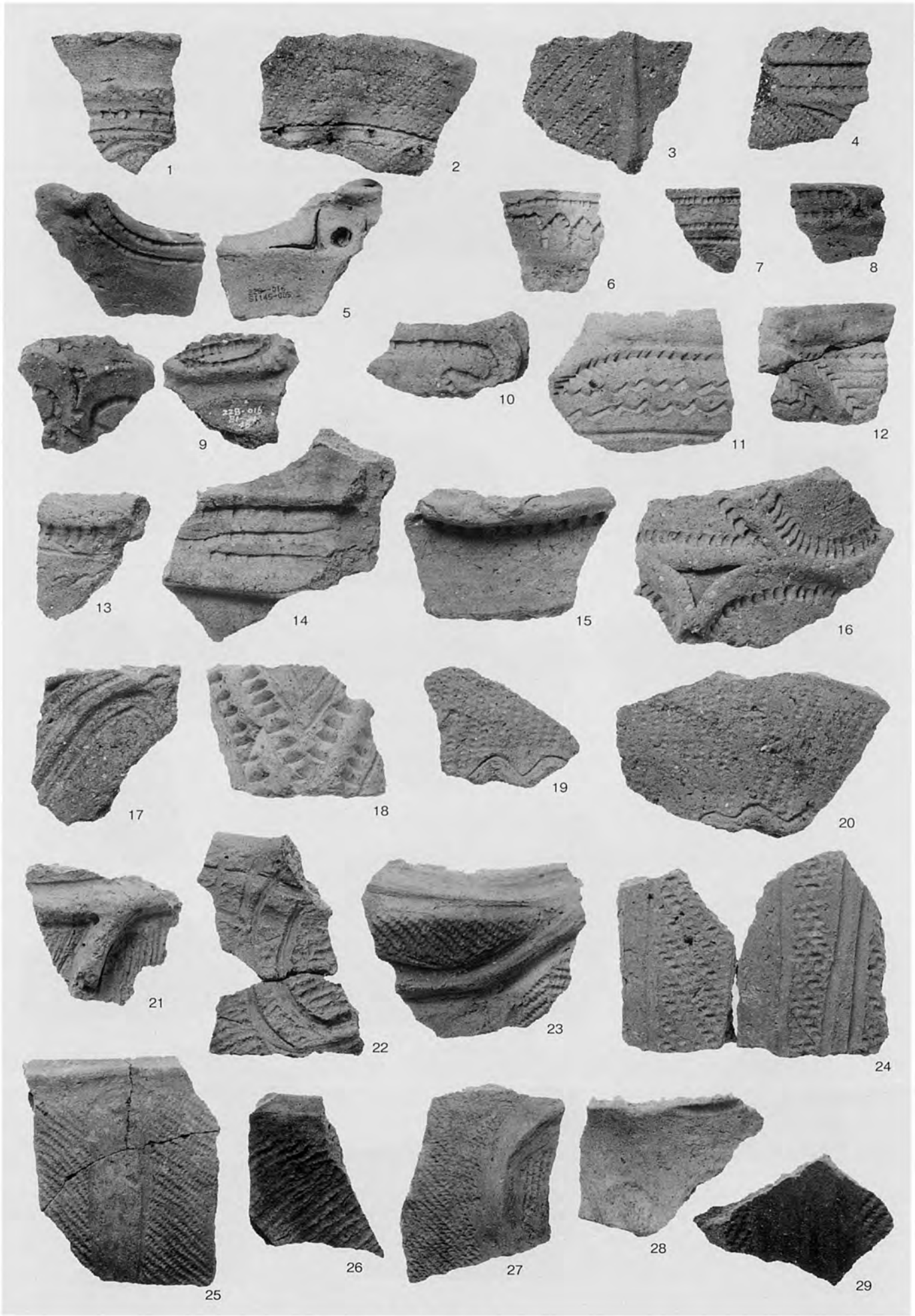
グリッド出土土器（3）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

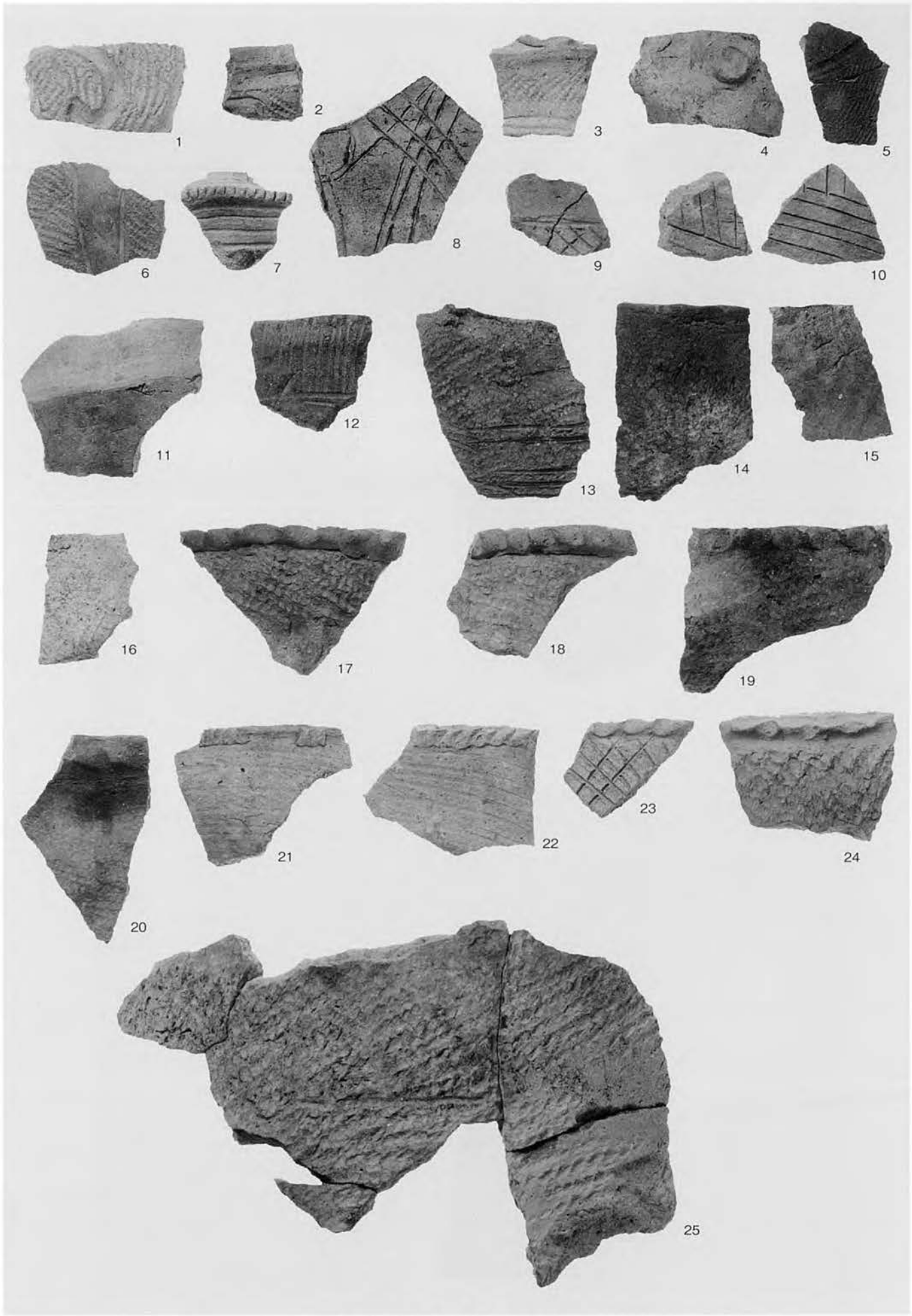
グリッド 出土土器 (4)



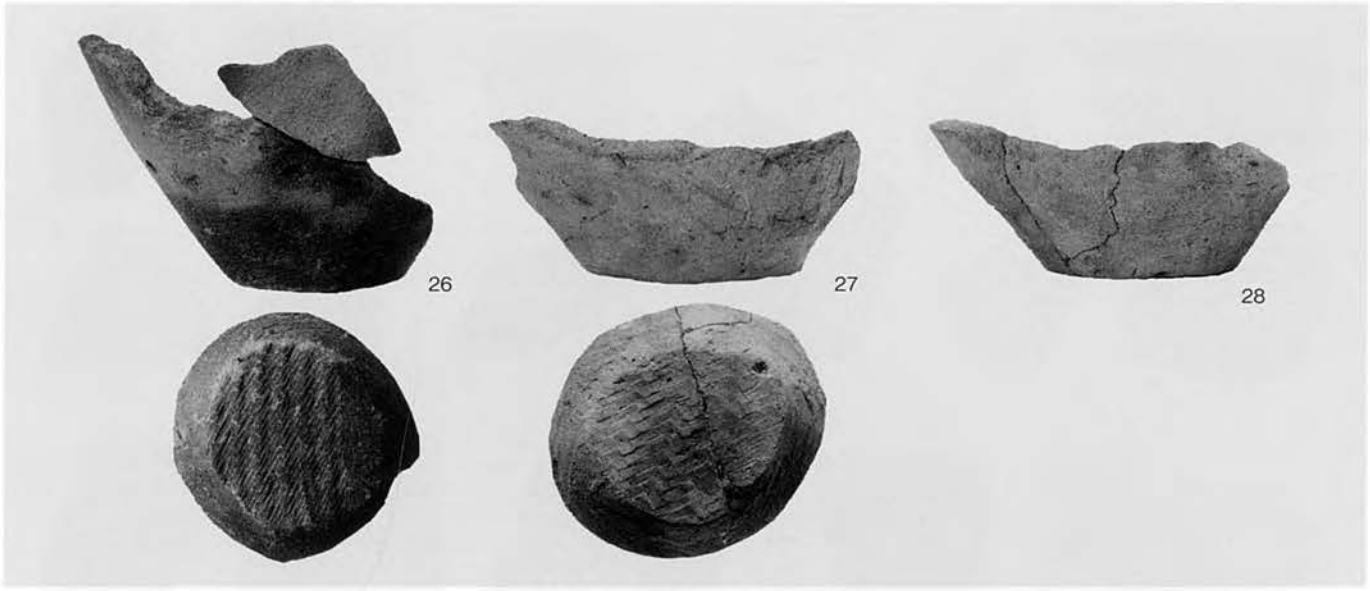

グリッド 出土土器 (5)



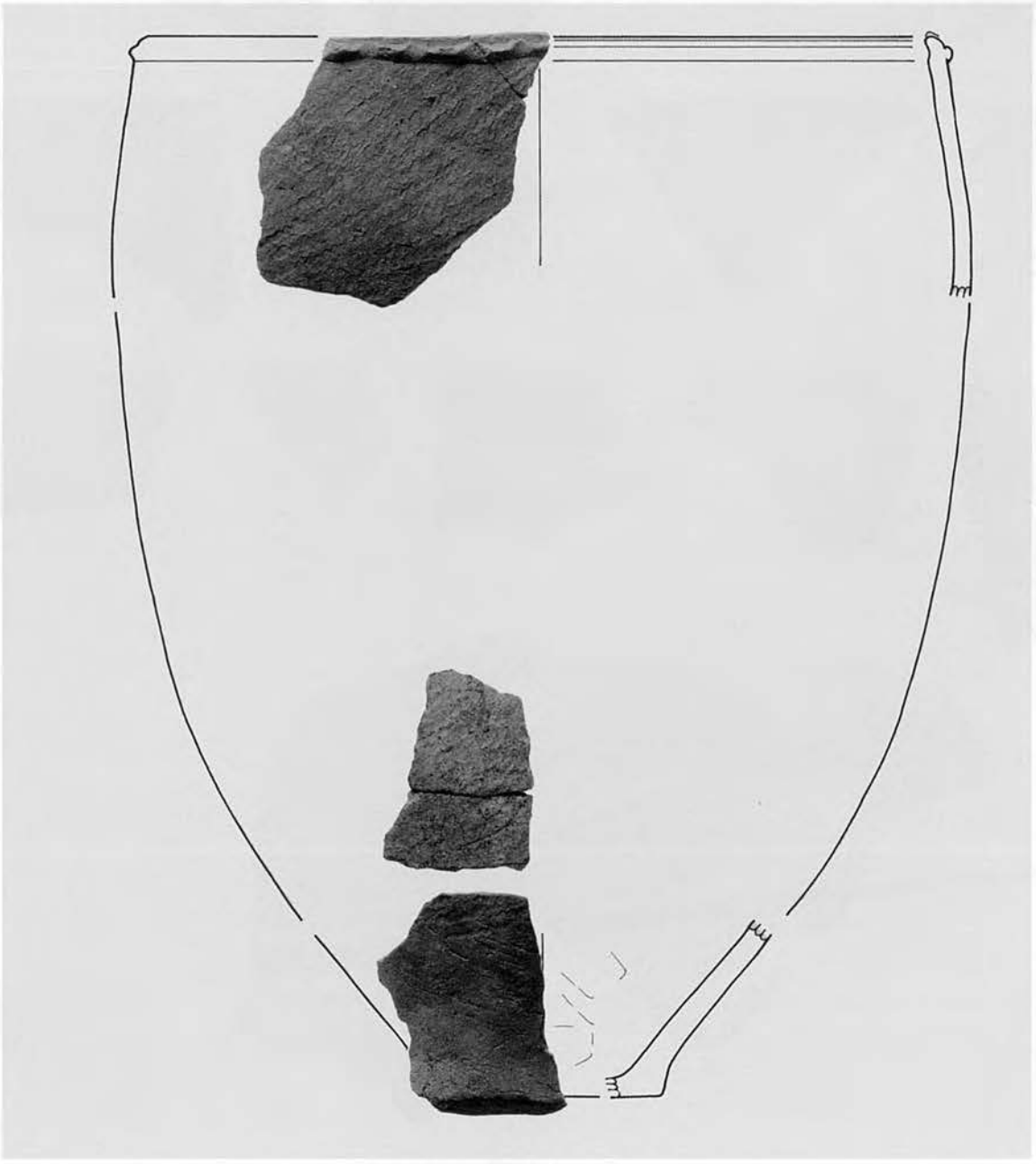

グリッド 出土土器（6）



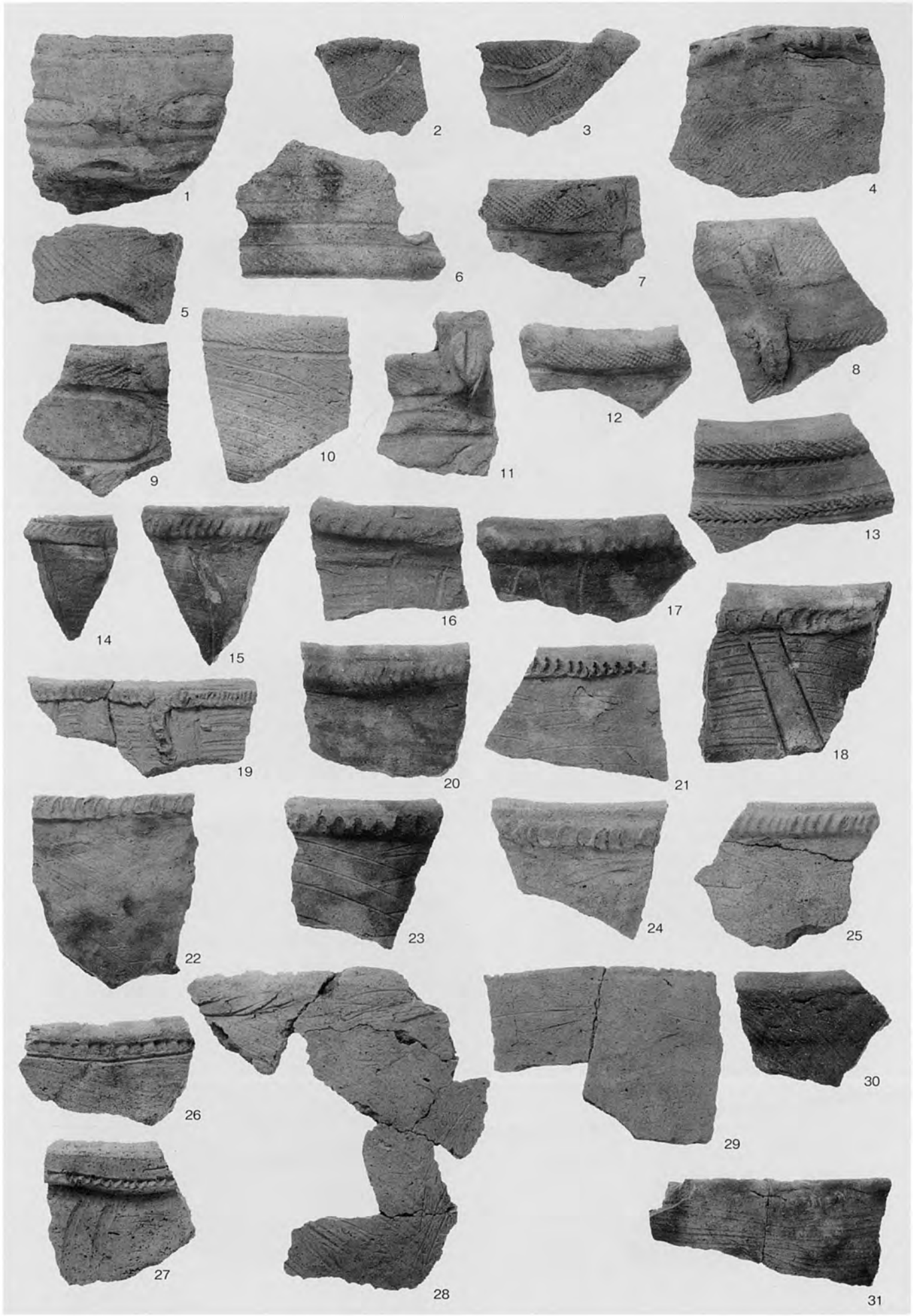

グリッド出土土器（7）－1



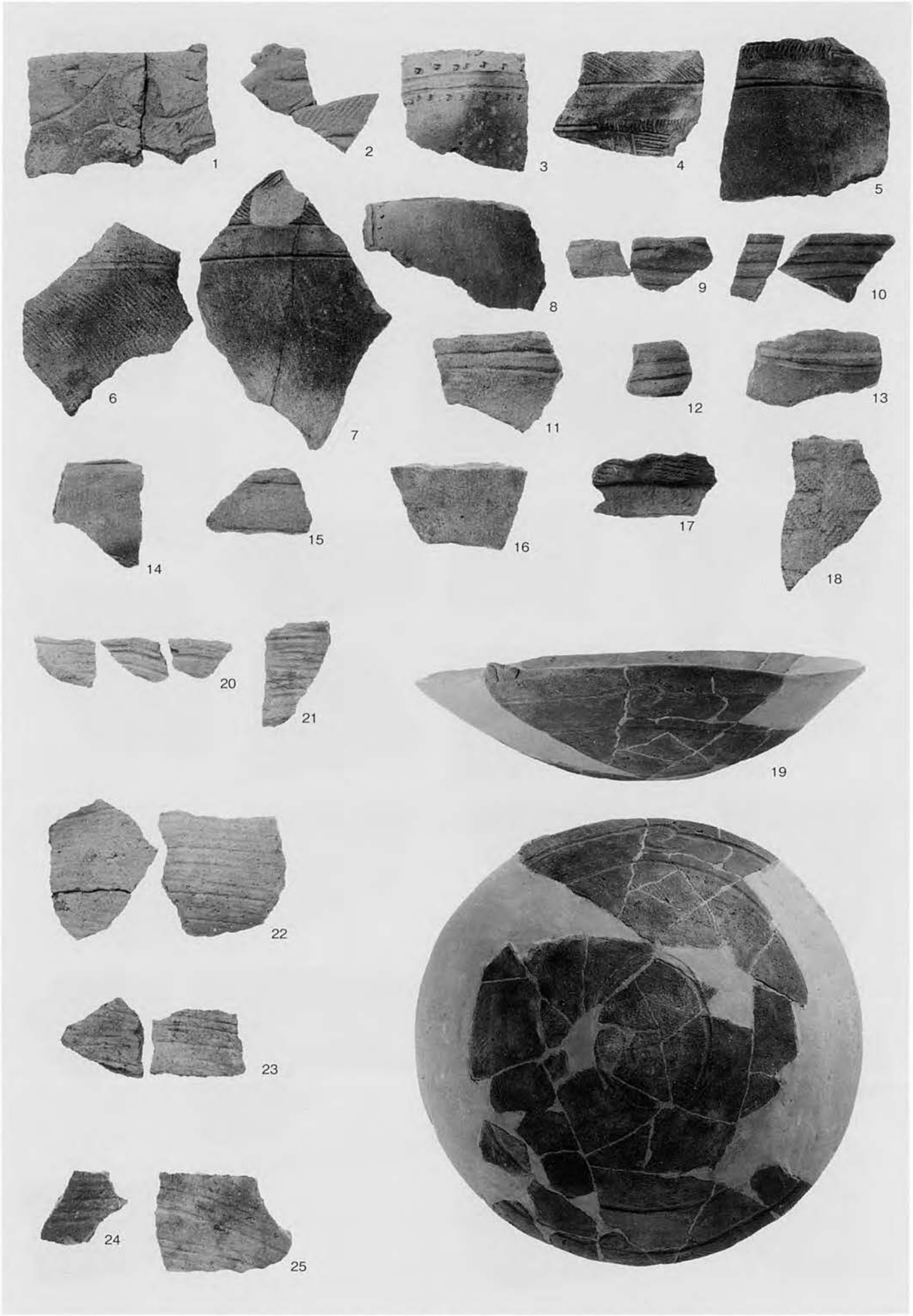

グリッド 出土土器（7）－2



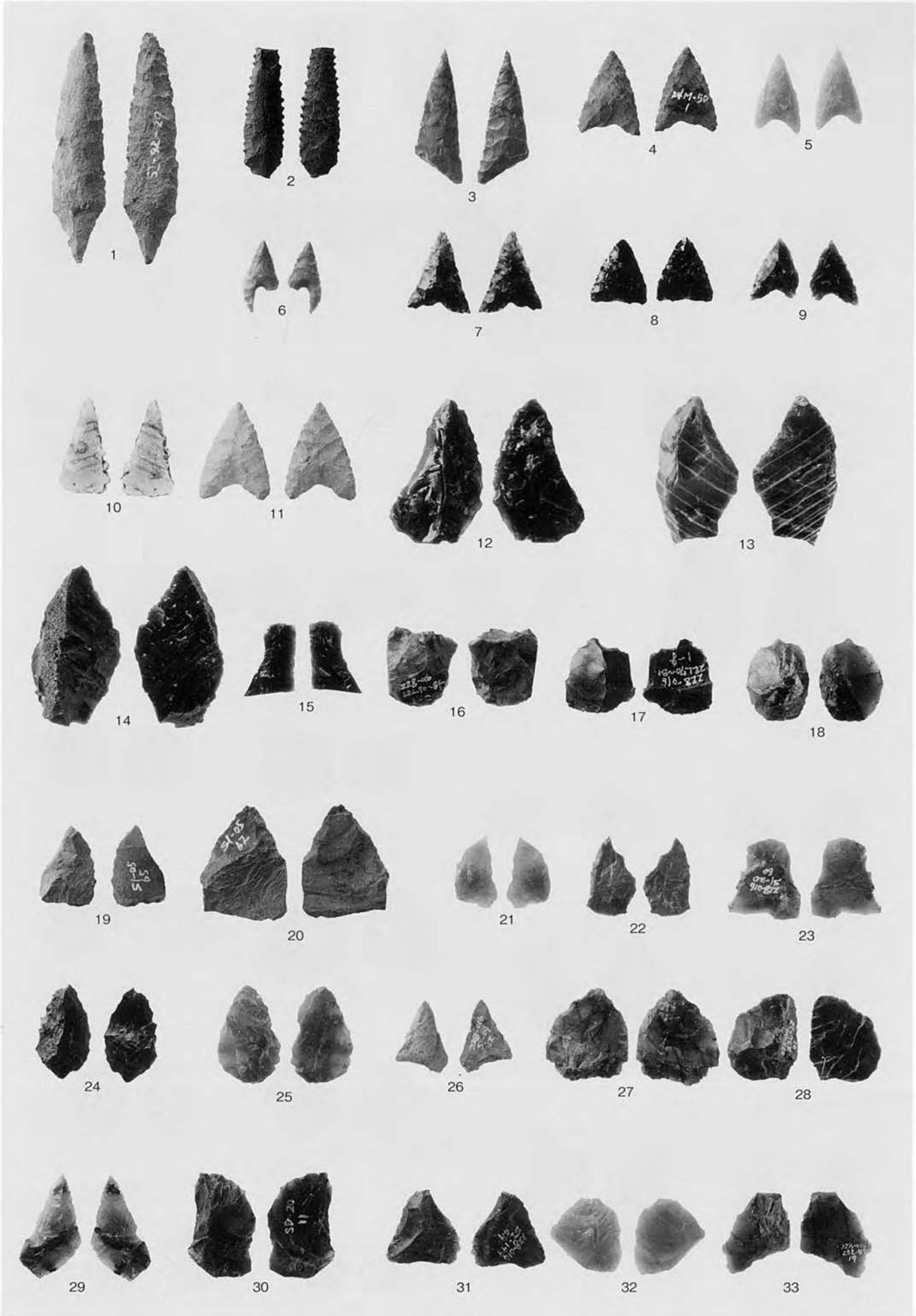
グリッド 出土土器（8）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

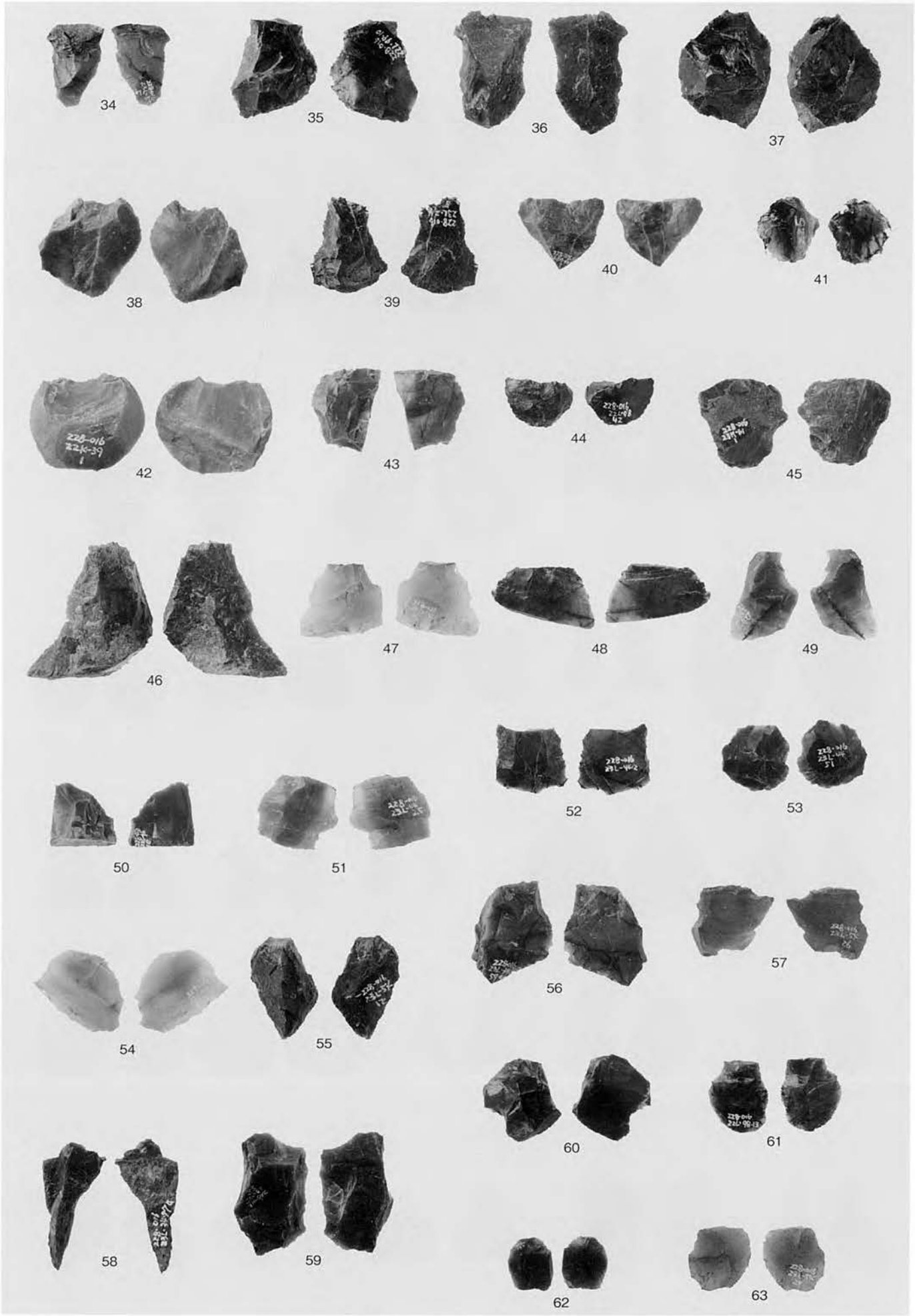
グリッド 出土土器 (9)



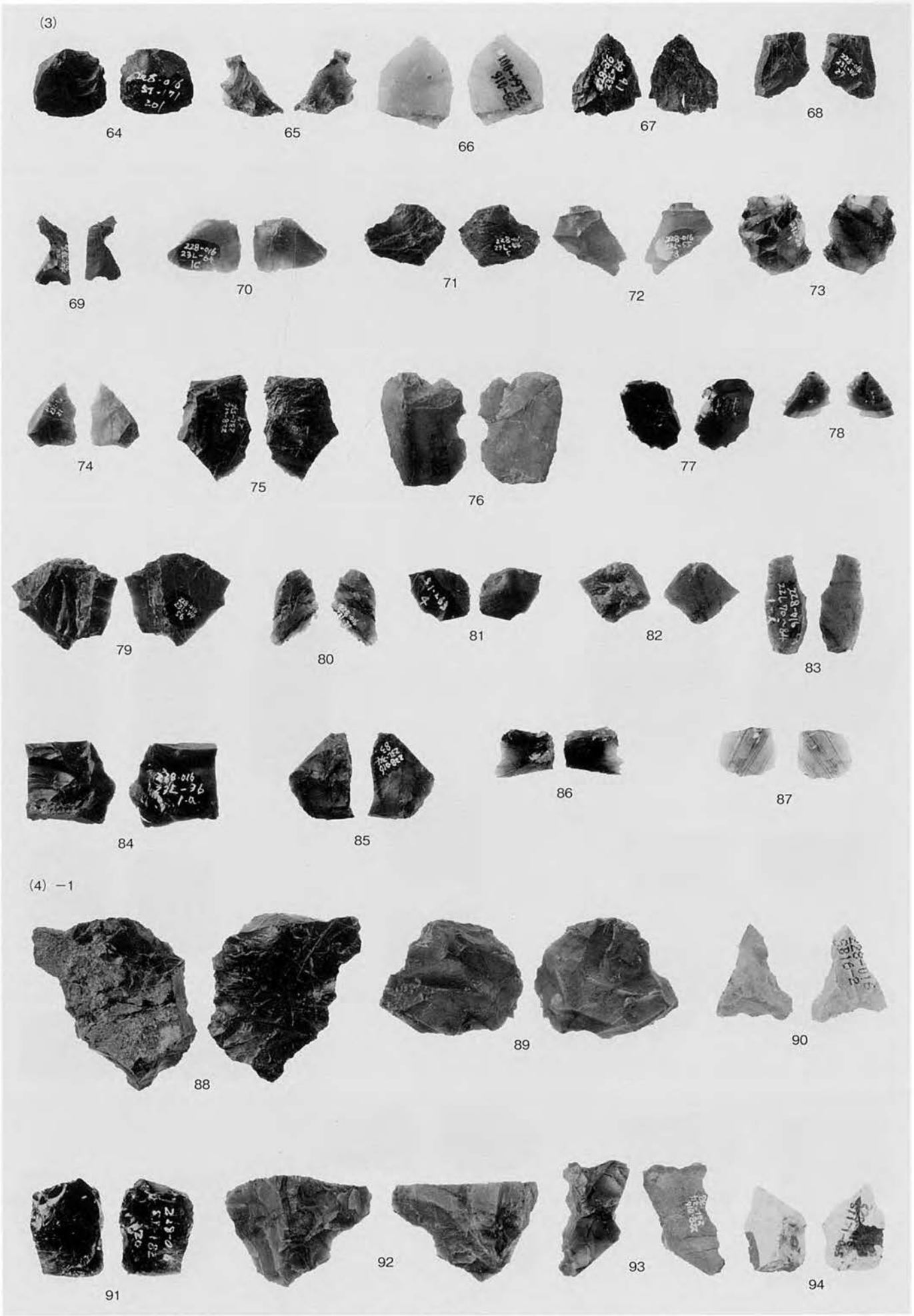

グリッド 出土土器（10）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

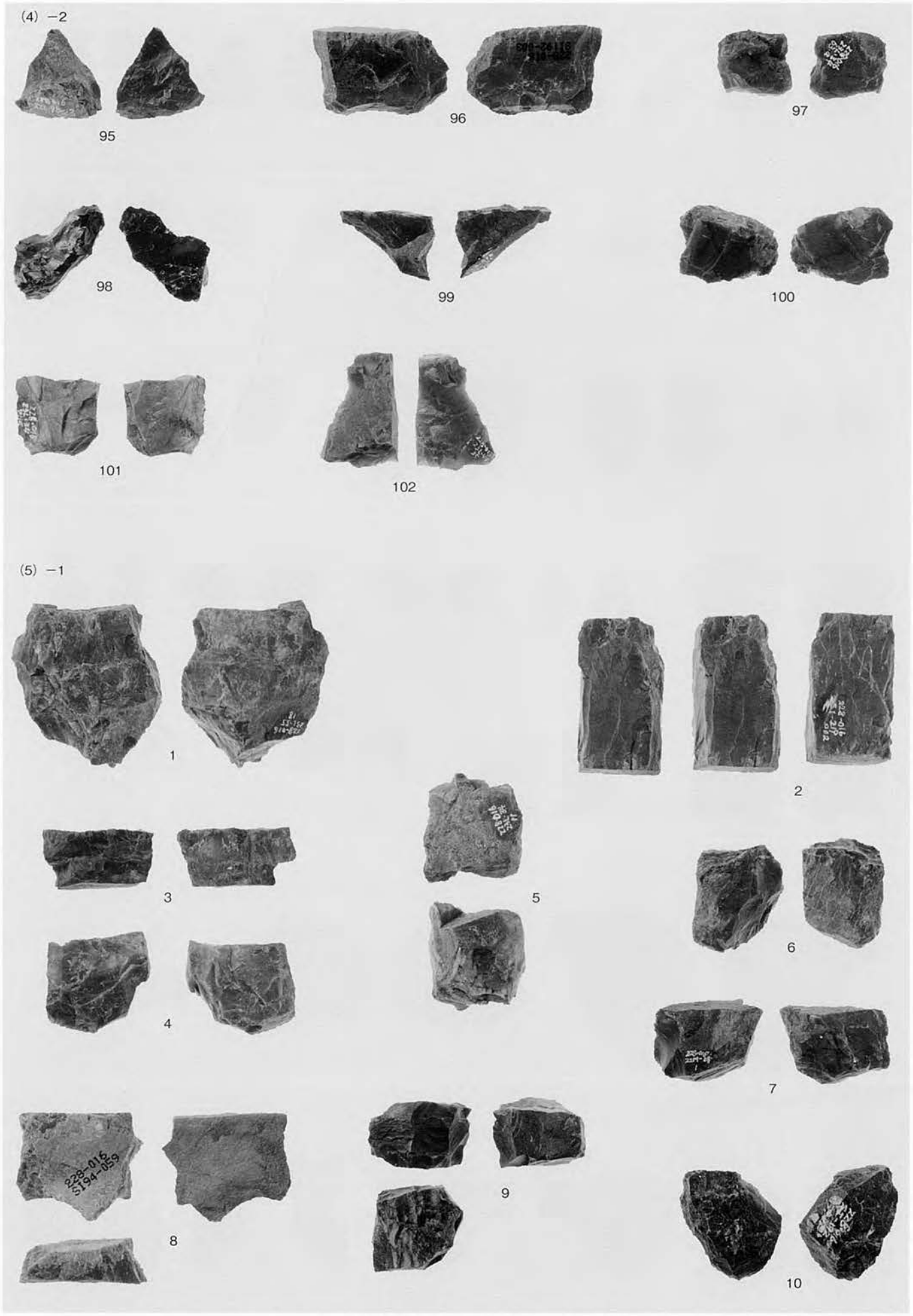
グリッド 出土石器 (1)


34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63

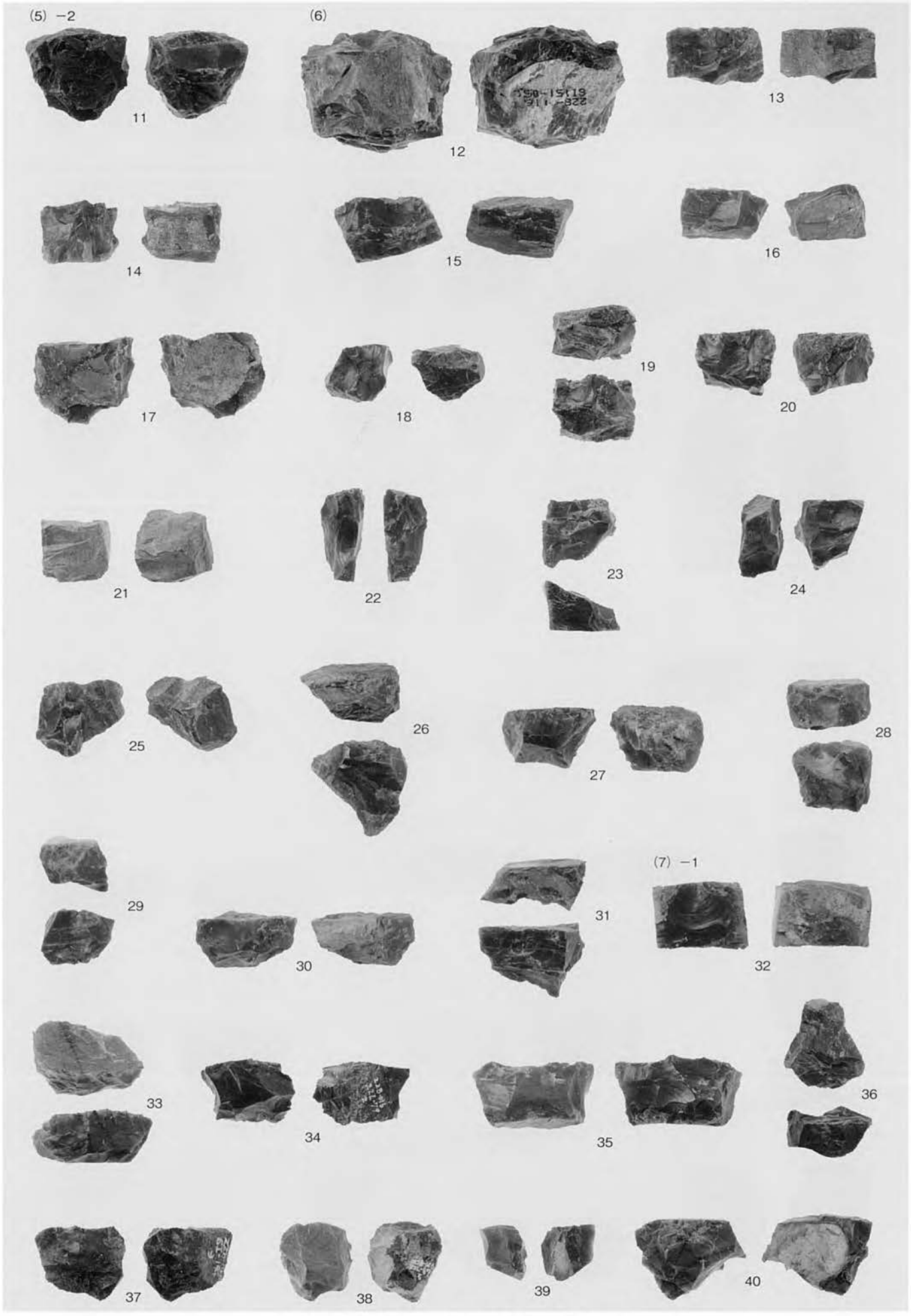
グリッド 出土石器 (2)



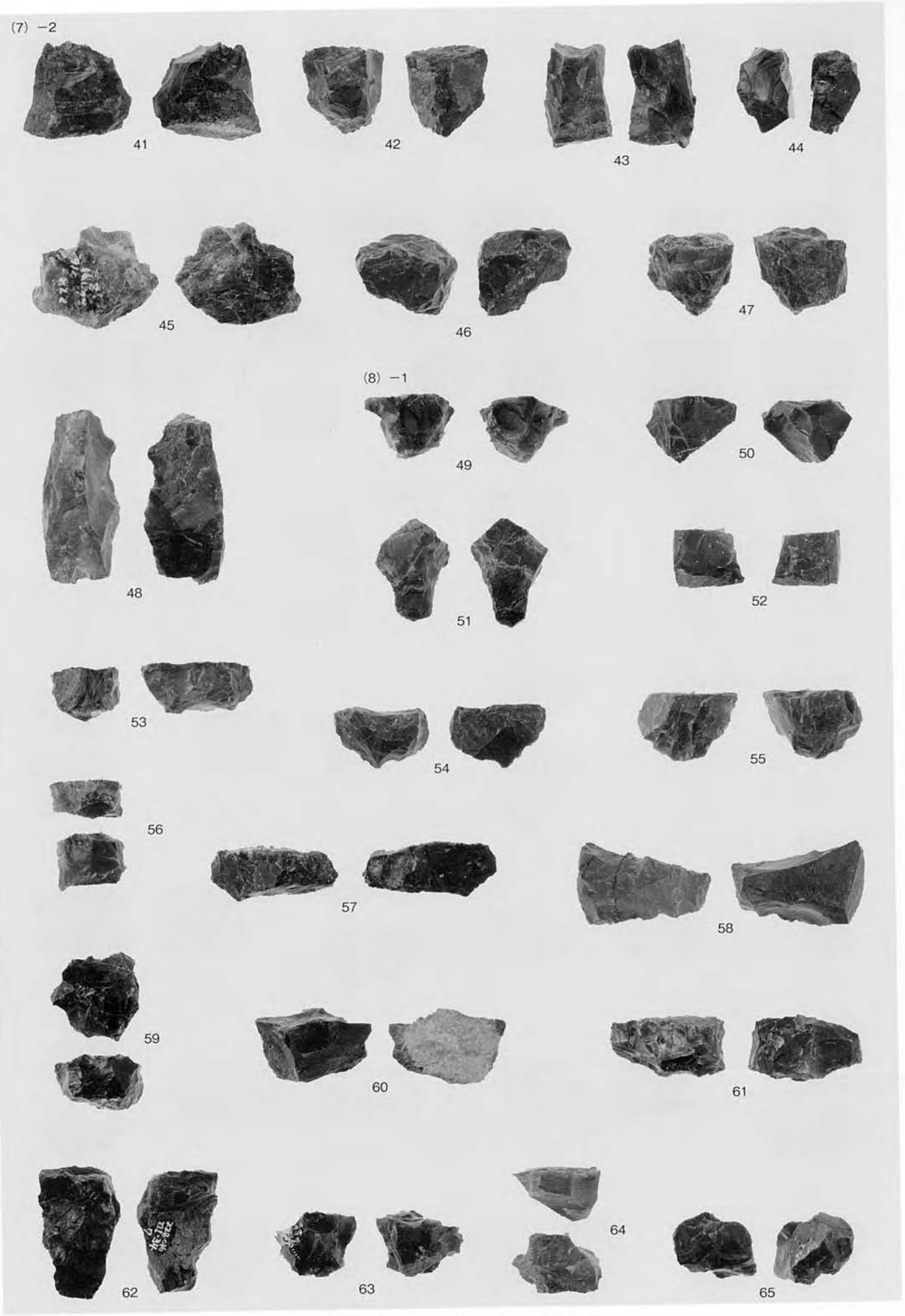

グリッド 出土石器 (3)・(4) − 1



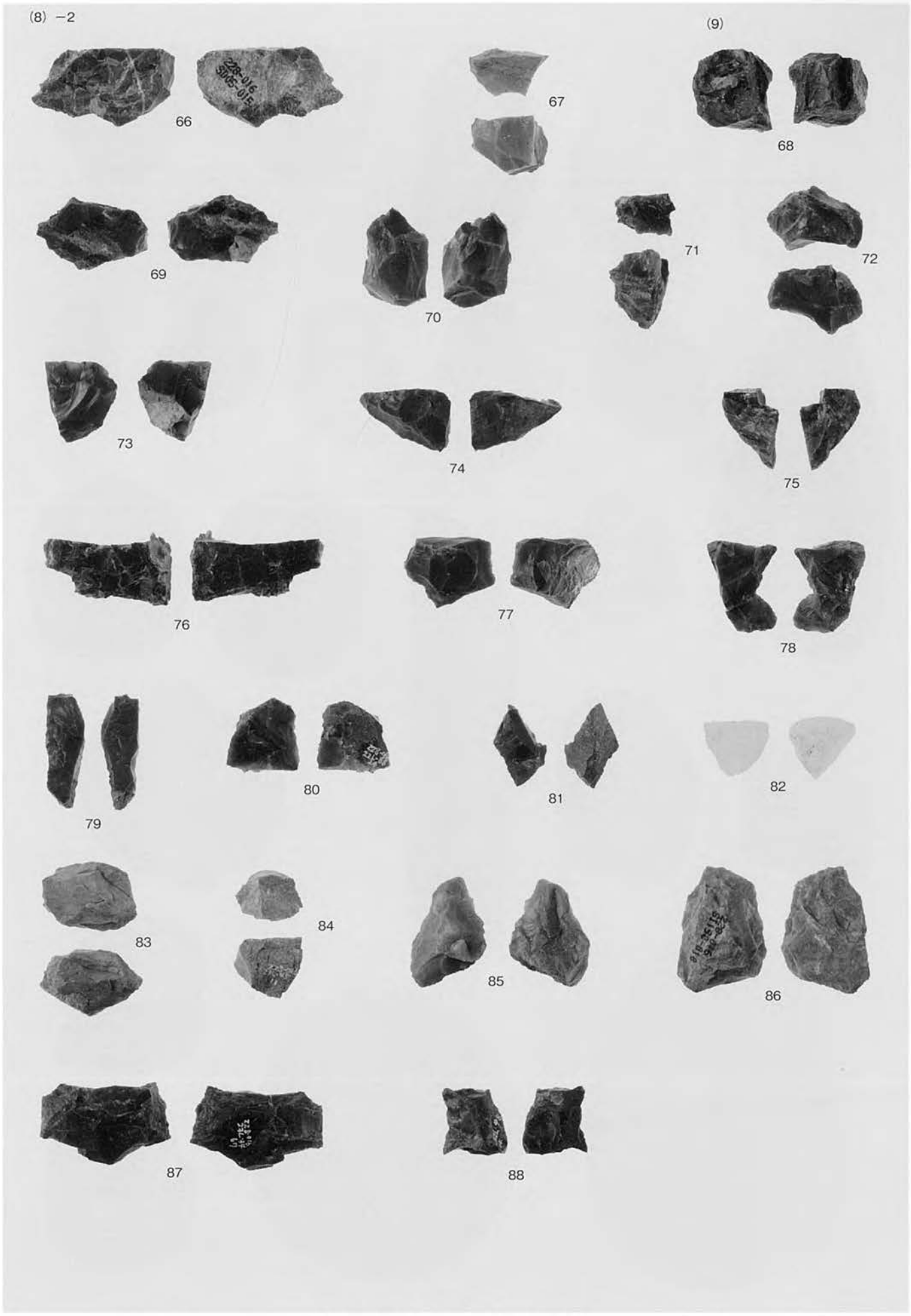

グリッド出土石器 (4) −2・(5) −1



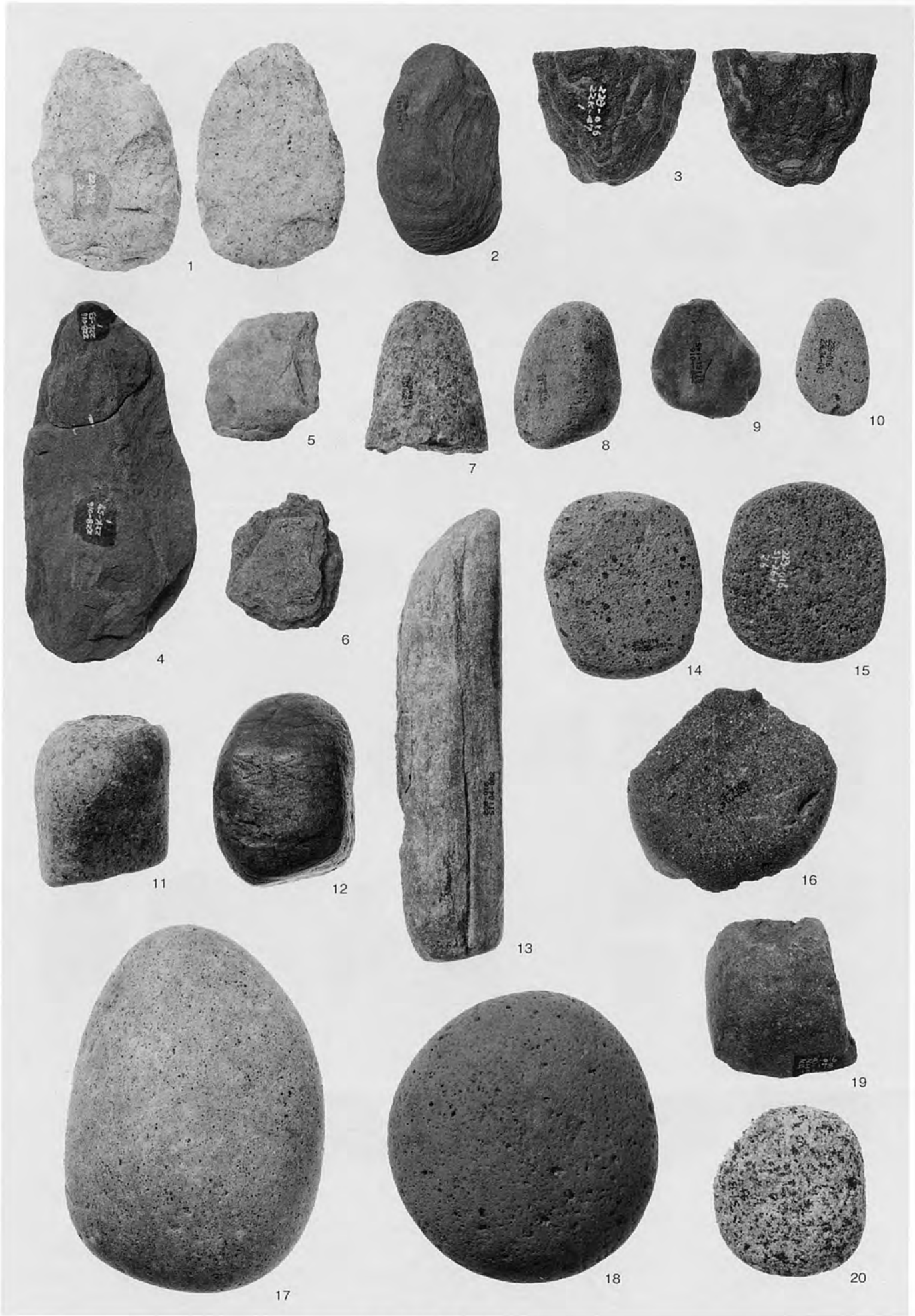

グリッド 出土石器 (5) − 2・(6)・(7) − 1



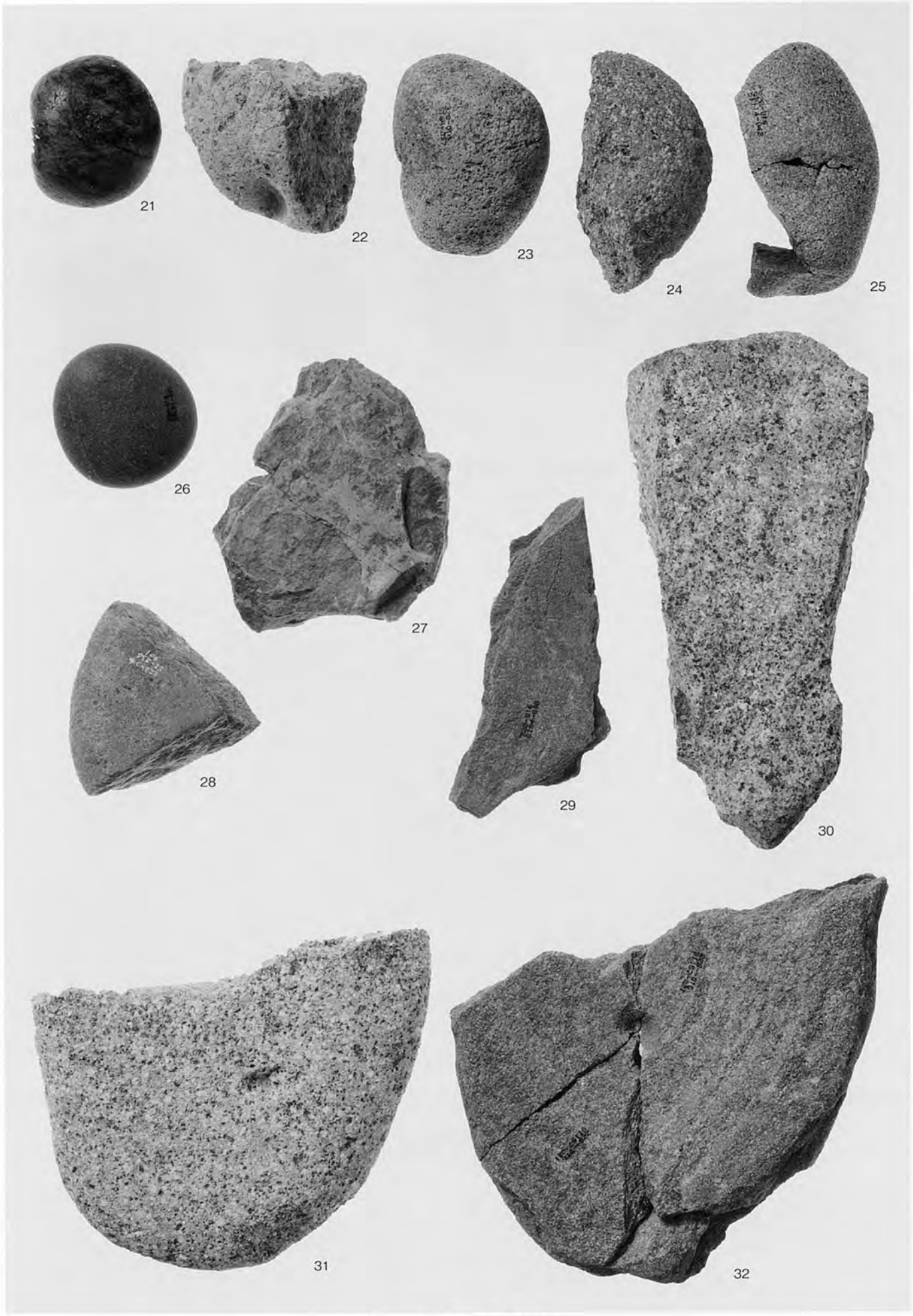

グリッド出土石器 (7) − 2 ・ (8) − 1




グリッド出土石器 (8) − 2・(9)

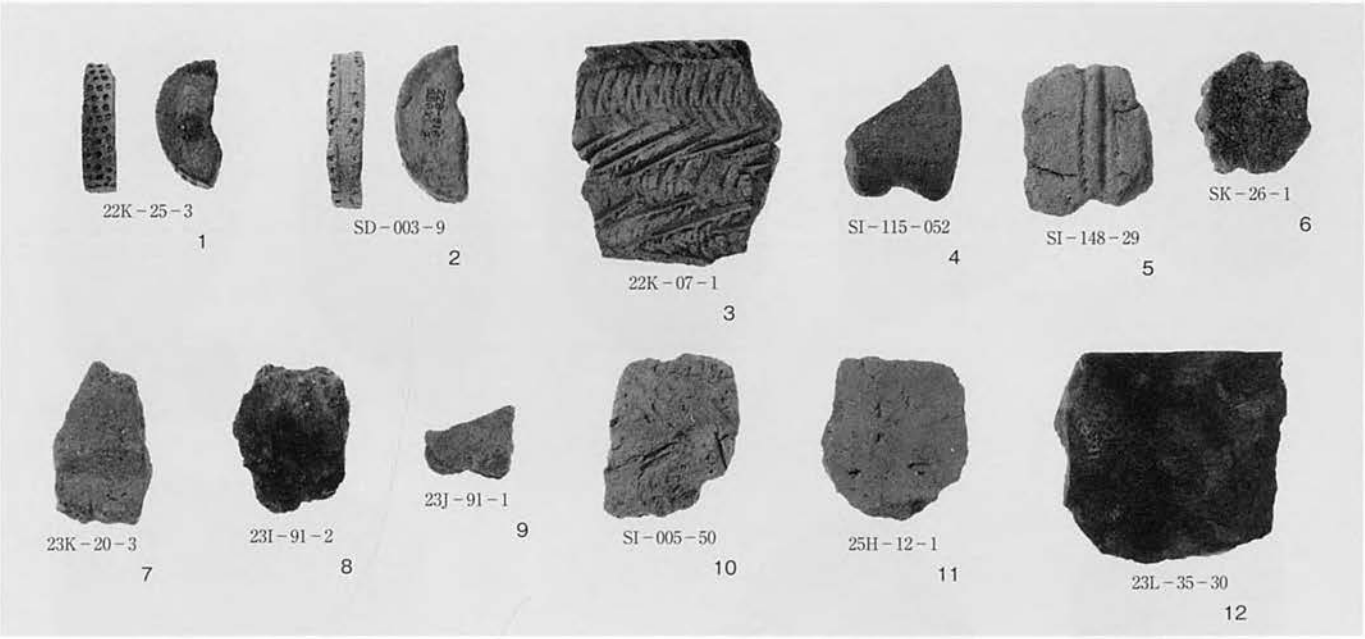



グリッド出土石器（10）




グリッド 出土石器（11）

図版 140




土製品（抉状耳飾・土器片錘・焼成粘土塊・研磨土器片）

SI−001−1

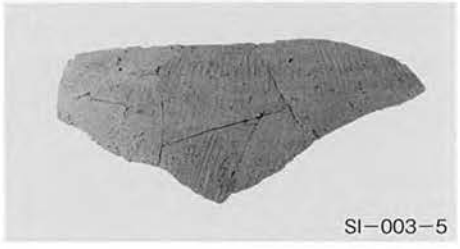
SI−001−2

SI−001−3

SI−002−1

SI−003−1

SI−003−2


SI−003−5

SI−003−3

SI−003−4

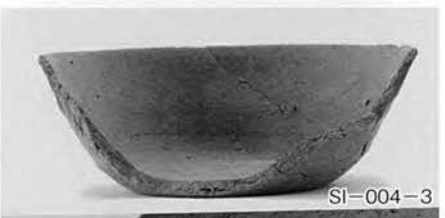
SI−003−6

SI−003−7

SI−003−8

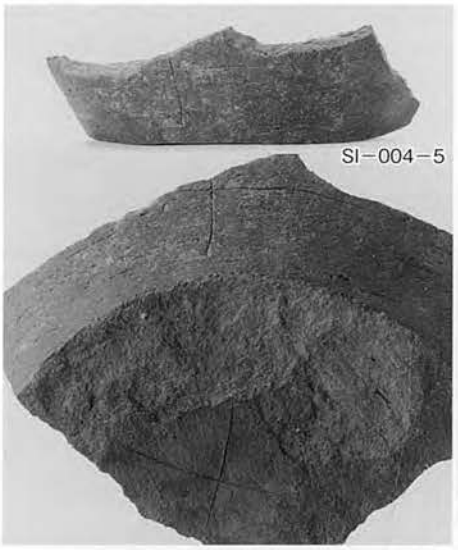
SI−004−1

SI−004−2


SI−004−3

SI−004−4

SI－001・002・003・004 出土土器


SI－004－5

SI－004－9

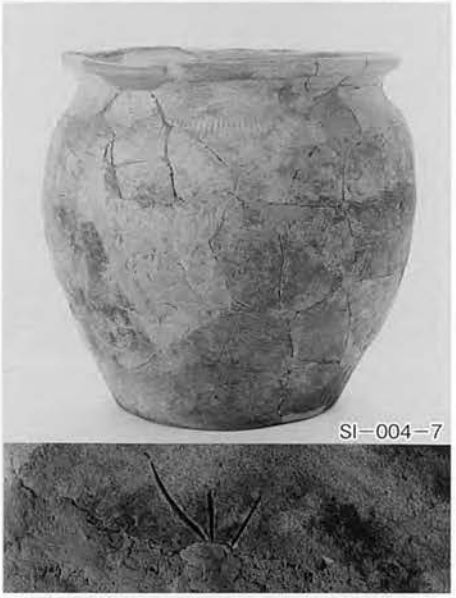
SI－006－2

SI－004－6

SI－004－10

SI－006－3

SI－008－1


SI－004－7

SI－004－11

SI－008－2

SI－008－3

SI－004－8

SI－006－1

SI－004・006・008 出土土器

SI−008−4

SI−008−5

SI−009−1

SI−009−2

SI−009−3

SI−010−1

SI−010−2

SI−010−3

SI−010−4

SI−010−5

SI−010−6

SI−010−7

SI−010−8

SI−011−1

SI−011−2

SI−011−3

SI−011−4

SI－008・009・010・011 出土土器

SI−011−5

SI−011−6

SI−011−7

SI−011−8

SI−012−1

SI−012−2

SI−013−1

SI−013−2

SI−013−3

SI−013−4

SI−013−5

SI−017−1

SI−017−2

SI−017−3

SI−017−4

SI−018−1

SI−018−2

SI−018−3

SI−018−4

SI−018−5

SI−018−6

SI−018−7

SI－011・012・013・017・018 出土土器

SI−018−8

SI−018−9

SI−018−10

SI−018−11

SI−018−12

SI−019−2

SI−019−1

SI−019−3

SI−020−1

SI−020−2

SI−020−3

SI−020−4

SI−020−5

SI−020−6

SI−020−7

SI−020−8

SI−020−9

SI−020−10

SI−021−1

SI−021−2

SI－018・019・020・021 出土土器

SI−021−3

SI−021−4

SI−023−1

SI−023−2

SI−023−3

SI−023−6

SI−023−4

SI−023−5

SI−023−7

SI−023−8

SI−023−9

SI−023−10

SI−024−1

SI−024−2

SI−029−1

SI−029−2

SI−029−3

SI−029−5

SI－021・023・024・029 出土土器

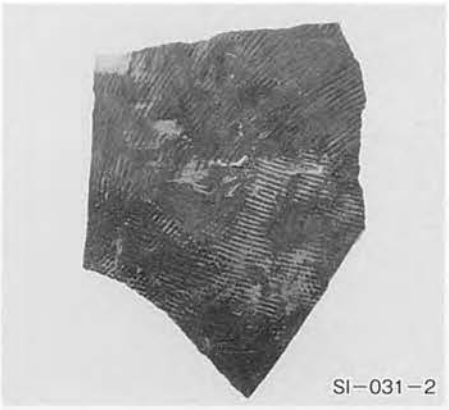
SI－029－4

SI－029－6

SI－029－7

SI－030－1

SI－031－1


SI－031－2

SI－033－1

SI－033－2

SI－033－3

SI－033－4

SI－033－5

SI－033－6

SI－033－7

SI－033－8

SI－035－1

SI－035－2

SI－035－3

SI－035－4

SI－029・030・031・033・035 出土土器

SI−035−5

SI−035−6

SI−040−1

SI−040−2

SI−040−3

SI−040−4

SI−040−5

SI−040−6

SI−040−7

SI−040−8

SI−040−9

SI−040−10

SI−040−11

SI−040−12

SI−040−13

SI−040−14

SI−041−1

SI−041−2

SI−041−3

SI−041−4

SI−035・040・041 出土土器

SI−042−1

SI−042−2

SI−042−3

SI−043−1

SI−043−2

SI−043−3

SI−043−4

SI−043−5

SI−043−6

SI−043−7

SI−043−8

SI−043−9

SI−043−10

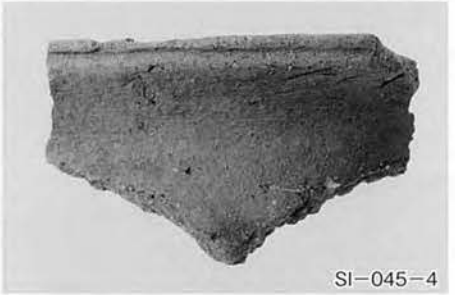
SI−044−1

SI−044−2

SI−045−1

SI−045−2

SI−045−3


SI−045−4

SI−046−1

SI－042・043・044・045・046 出土土器

SI−046−2

SI−046−3

SI−046−4

SI−046−5

SI−047−1

SI−047−3

SI−047−2

SI−047−4

SI−048−1

SI−048−2

SI−049−1

SI−049−2

SI−049−3

SI−049−4

SI−049−5

SI−050−1

SI−050−2

SI−050−3

SI−050−4

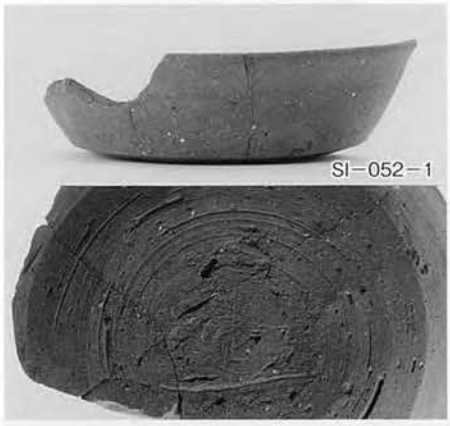
SI−050−5

SI－046・047・048・049・050 出土土器

SI－050－6

SI－050－7

SI－051－1


SI－052－1

SI－053－1

SI－054－1

SI－055－1

SI－055－2

SI－055－3

SI－056－1

SI－057－1

SI－057－2

SI－058－1

SI－058－2

SI－058－3

SI－058－4

SI－058－5

SI－058－6

SI－050・051・052・053・054・055・056・057・058 出土土器

SI－058－7

SI－059－1

SI－059－2

SI－059－3

SI－060－1

SI－060－2

SI－060－3

SI－060－4

SI－060－5

SI－060－6

SI－060－7

SI－060－8

SI－061－1

SI－061－2

SI－061－3

SI－061－4

SI－061－5

SI－061－6

SI－061－7

SI－061－8

SI－061－9

SI－058・059・060・061 出土土器

SI－061－10

SI－061－11

SI－061－12

SI－061－13

SI－061－14

SI－061－15

SI－062－1

SI－062－2

SI－062－3

SI－062－4

SI－062－5

SI－062－6

SI－062－7

SI－062－8

SI－062－9

SI－062－10

SI－062－11

SI－062－12

SI－062－13

SI－062－14

SI－063－1

SI－063－2

SI－061・062・063 出土土器

SI−063−3

SI−063−4

SI−063−5

SI−063−6

SI−064−1

SI−064−2

SI−064−3

SI−064−4

SI−064−5

SI−064−6

SI−064−7

SI−064−8

SI−065−2

SI−065−1

SI−065−3

SI−067−1

SI−067−2

SI−067−3

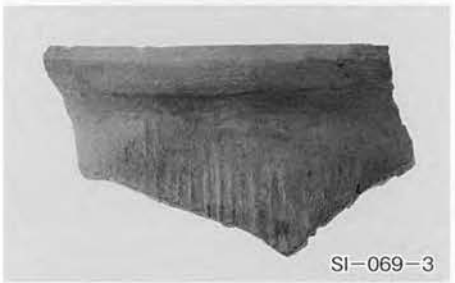
SI−063・064・065・067 出土土器

SI−068−1

SI−068−2

SI−069−1

SI−069−2


SI−069−3

SI−069−4

SI−069−5

SI−069−6

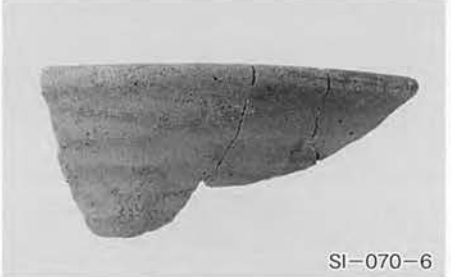
SI−070−1

SI−070−2

SI−070−3

SI−070−4

SI−070−5


SI−070−6

SI−070−7

SI−070−8

SI−070−9

SI−070−10

SI−070−11

SI−070−12

SI−071−1

SI−071−2

SI－068・069・070・071 出土土器

SI−071−3

SI−071−4

SI−071−5

SI−071−6

SI−071−7

SI−071−8

SI−072−1

SI−072−2

SI−072−3

SI−072−4

SI−072−5

SI−073−1

SI−073−2

SI−073−3

SI−073−4

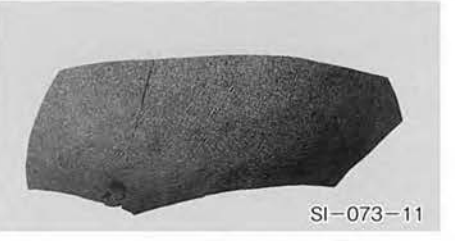
SI−073−5

SI−073−6

SI−073−7

SI−073−8

SI−073−9


SI−073−11

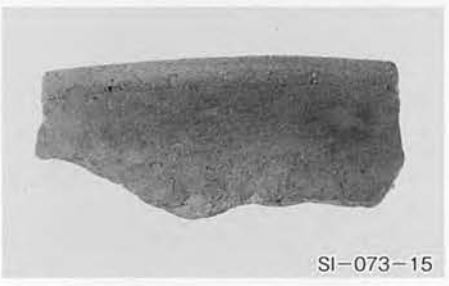
SI−071・072・073 出土土器

SI−073−10

SI−073−12

SI−073−13

SI−073−14


SI−073−15

SI−074−1

SI−074−2

SI−074−3

SI−074−4

SI−074−5

SI−075−1

SI−075−2

SI−075−3

SI−075−4

SI−075−5

SI−075−6

SI−075−7

SI−075−8

SI−073・074・075 出土土器

SI−075−9

SI−075−10

SI−076−1

SI−077−1

SI−077−2

SI−077−3

SI−077−4

SI−077−5

SI−077−6

SI−077−7

SI−077−8

SI−077−9

SI−077−10

SI−077−11

SI−077−12

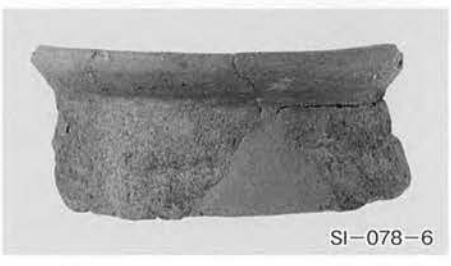
SI−078−1

SI−078−2

SI−078−3

SI−078−4

SI−078−5


SI−078−6

SI−075・076・077・078 出土土器

SI−078−7

SI−078−8

SI−079−1

SI−079−2

SI−080−1

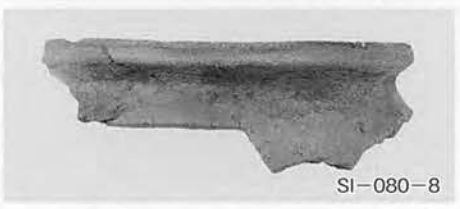
SI−080−2

SI−080−3

SI−080−4

SI−080−5

SI−080−6


SI−080−8

SI−080−7

SI−081−1

SI−081−2

SI−082−1

SI−082−2



SI−078・079・080・081・082 出土土器

SI－082－3

SI－083－1

SI－083－2

SI－084－1

SI－084－2

SI－084－3

SI－084－4

SI－084－5

SI－085－1

SI－085－2

SI－085－3

SI－085－4

SI－085－5

SI－085－6

SI－085－7

SI－085－8

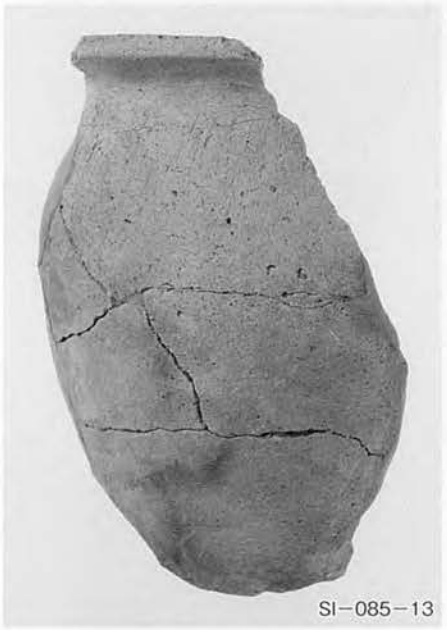
SI－085－9

SI－085－10

SI－085－11

SI－082・083・084・085 出土土器

SI－085－12


SI－085－13

SI－086－1

SI－086－2

SI－086－3

SI－087－1

SI－087－2

SI－087－3

SI－087－4

SI－087－5

SI－087－6

SI－087－7

SI－087－8

SI－087－9

SI－088－1

SI－088－2

SI－088－3

SI－088－4

SI－088－5

SI－088－6

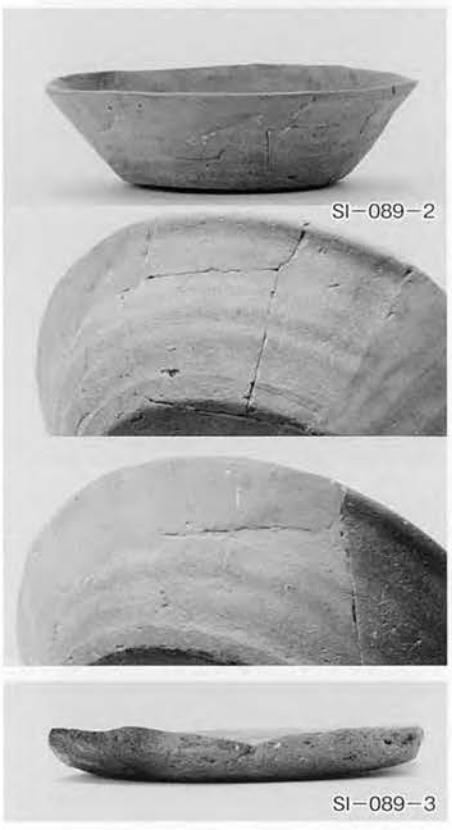
SI－088－9

SI－085・086・087・088 出土土器

SI－088－7

SI－088－8

SI－089－1


SI－089－2

SI－089－3

SI－089－4

SI－089－5

SI－089－6

SI－089－7

SI－089－8

SI－089－9

SI－089－10

SI－090－1

SI－090－2

SI－091－1

SI－091－2

SI－088・089・090・091 出土土器

SI−091−3

SI−092−1

SI−092−2

SI−092−3

SI−092−4

SI−092−5

SI−092−9

SI−092−6

SI−092−7

SI−092−8

SI−092−10

SI−092−11

SI−092−12

SI−092−13

SI−092−14

SI−092−15

SI−092−16

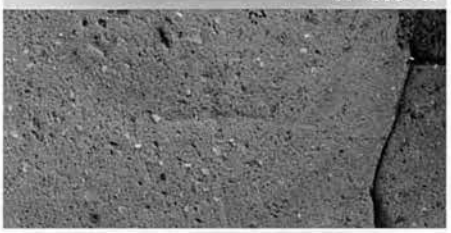
SI−092−17

SI−091・092 出土土器

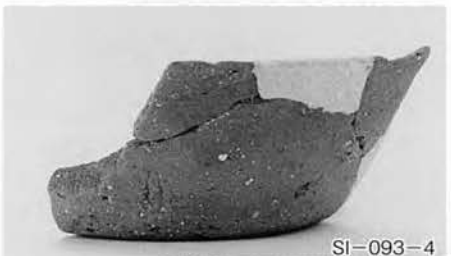
SI－092－18

SI－093－1

SI－093－2



SI－093－3


SI－093－4

SI－093－5

SI－093－6

SI－093－7

SI－093－8

SI－093－9

SI－093－10

SI－093－12

SI－093－11

SI－094－1

SI－094－2

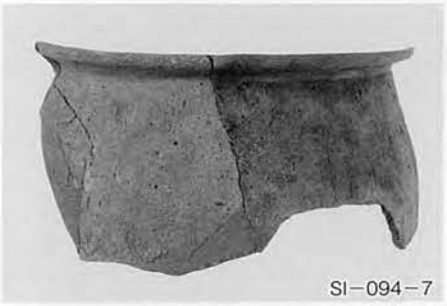
SI－094－3

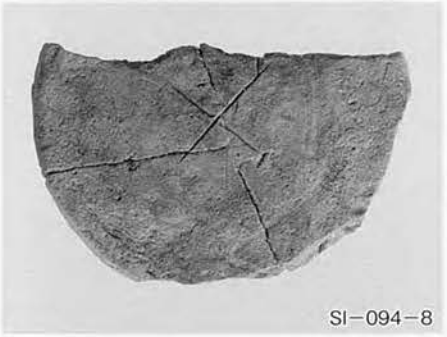
SI－094－4

SI－094－6

SI－092・093・094 出土土器

SI－094－5


SI－094－7


SI－094－8

SI－094－9

SI－095－1

SI－095－2

SI－095－3

SI－095－4

SI－095－5

SI－095－6

SI－095－7

SI－095－8

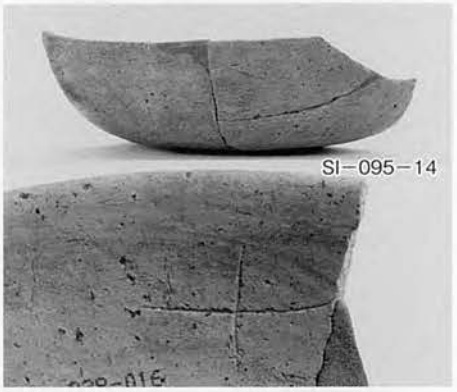
SI－095－9

SI－095－10

SI－095－11

SI－095－12

SI－095－13


SI－095－14

SI－095－15

SI－095－16

SI－095－17

SI－094・095 出土土器

SI－095－18

SI－095－19

SI－095－20

SI－095－21

SI－095－22

SI－095－23

SI－096－1

SI－096－2

SI－096－3

SI－096－4

SI－096－5

SI－096－6

SI－096－7

SI－096－8

SI－096－9

SI－096－10

SI－096－11

SI－097－1

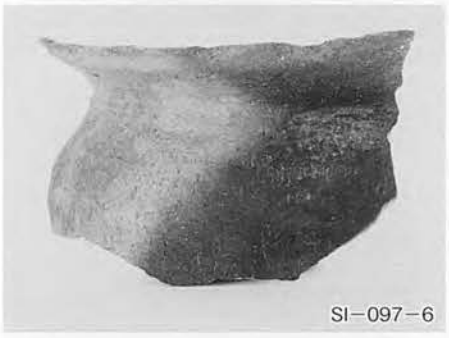
SI－097－3

SI－095・096・097 出土土器

SI－097－2

SI－097－4

SI－097－5

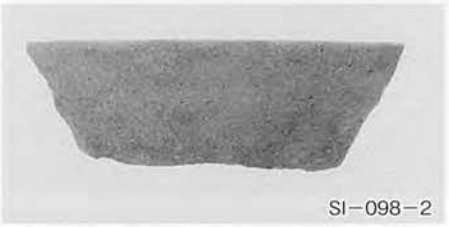

SI－097－6

SI－097－7

SI－097－8

SI－097－9

SI－098－1


SI－098－2

SI－098－3

SI－100－1

SI－101－1

SI－101－2

SI－101－3

SI－101－4

SI－101－5

SI－101－6

SI－101－7

SI－101－8

SI－101－10

SI－097・098・100・101 出土土器

SI−101−9

SI−101−11

SI−101−12

SI−103−1

SI−103−2

SI−103−3

SI−103−4

SI−103−5

SI−103−6

SI−103−7

SI−103−8

SI−103−9

SI−103−10

SI−103−12

SI−103−11

SI−103−13

SI−103−14

SI−103−15

SI−103−16

SI－101・103 出土土器

SI－103－17

SI－104－1

SI－104－2

SI－104－3

SI－104－4

SI－104－5

SI－104－6

SI－104－7

SI－104－8

SI－104－9

SI－104－10

SI－104－11

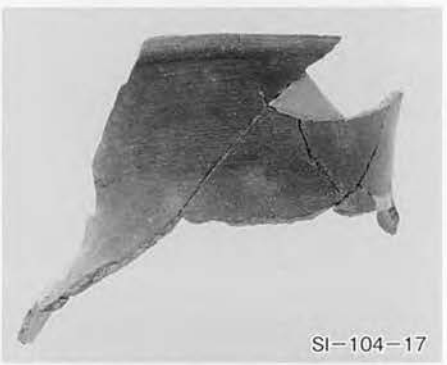
SI－104－12

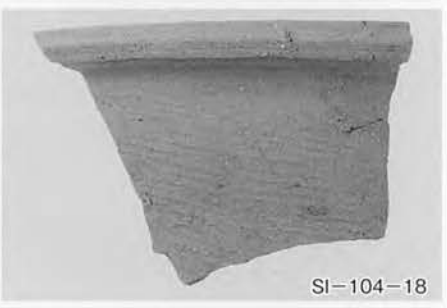
SI－104－13

SI－104－14

SI－104－15

SI－104－16


SI－104－17


SI－104－18

SI－104－19

SI－103・104 出土土器

SI－105－1

SI－105－2

SI－106－1

SI－106－2

SI－107－1

SI－107－2

SI－107－3

SI－107－4

SI－107－5

SI－107－6

SI－107－7

SI－108－1

SI－108－2

SI－108－3

SI－108－4

SI－109－1

SI－109－2

SI－109－3

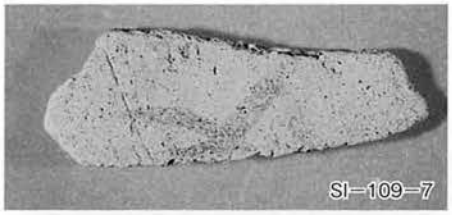
SI－109－4

SI－109－5

SI－109－6

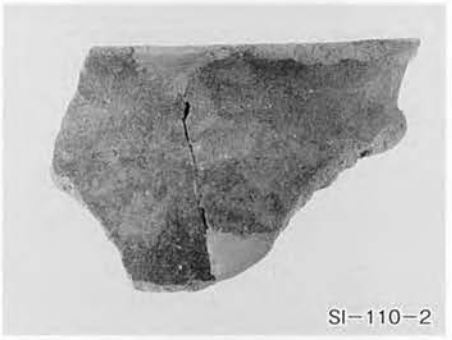
SI－109－8

SI－105・106・107・108・109 出土土器


SI−109−7

SI−109−9

SI−110−1


SI−110−2

SI−111−1

SI−111−2

SI−111−3

SI−112−1

SI−112−2

SI−113−1

SI−113−2

SI−113−3

SI−113−4

SI−113−5

SI−113−6

SI−113−7

SI−113−8

SI−113−9

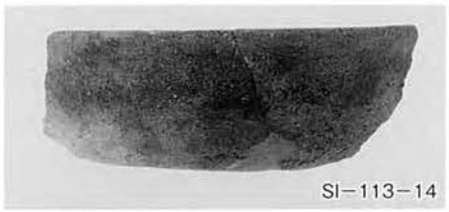
SI−113−10

SI−113−11

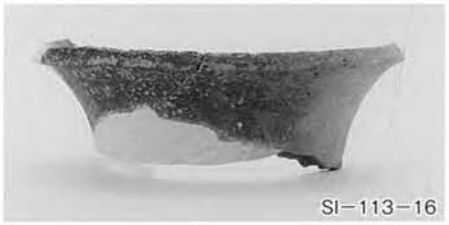
SI−113−12

SI−113−13

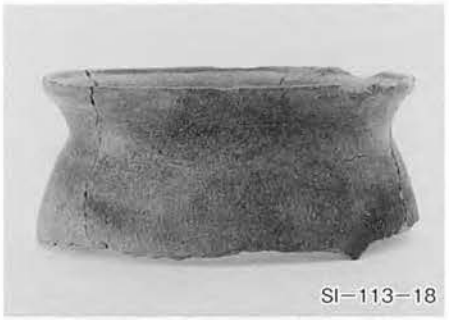
SI−109・110・111・112.・113 出土土器


SI−113−14

SI−113−15


SI−113−16

SI−113−17


SI−113−18

SI−113−19

SI−113−20

SI−113−21

SI−114−1

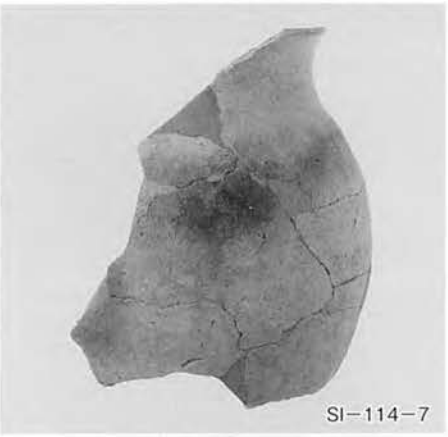
SI−114−2

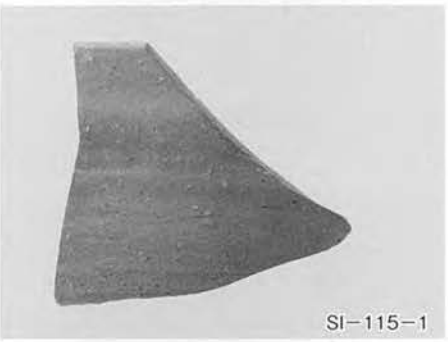
SI−114−3

SI−114−4

SI−114−5

SI−114−6


SI−114−7


SI−115−1

SI−115−2

SI−115−4

SI−113・114・115 出土土器

SI−115−3

SI−115−5

SI−115−6

SI−115−7

SI−115−8

SI−115−9

SI−115−10

SI−115−11

SI−115−12

SI−115−13

SI−115−14

SI−116−1

SI−116−2

SI−116−3

SI−116−4

SI−116−5

SI−116−7

SI－115・116 出土土器

SI−116−6

SI−116−8

SI−116−9

SI−116−10

SI−116−11

SI−117−1

SI−117−2

SI−117−3

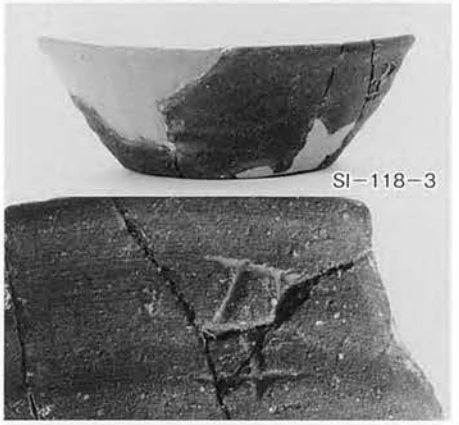
SI−117−4

SI−117−5

SI−117−6

SI−118−1

SI−118−2


SI−118−3

SI−118−4

SI−118−5

SI－116・117・118 出土土器

SI−118−6

SI−118−7

SI−118−8

SI−118−10

SI−118−11

SI−118−9

SI−118−12

SI−118−13

SI−118−14

SI−118−15

SI−118−16

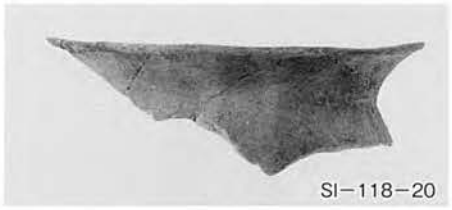
SI−118−17

SI−118−18

SI−118−19

SI−118−21

SI−118 出土土器


SI−118−20

SI−118−22

SI−118−23

SI−118−24

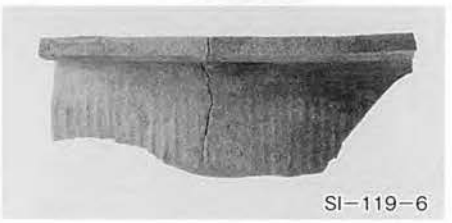
SI−119−1

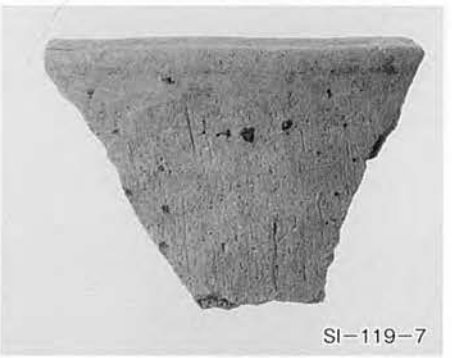
SI−119−2

SI−119−3

SI−119−4

SI−119−5


SI−119−6

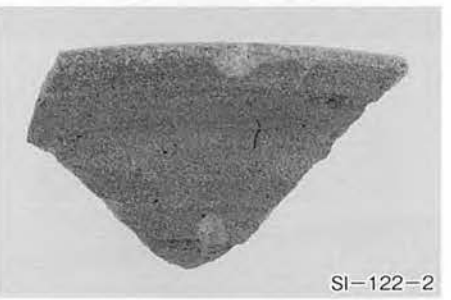

SI−119−7

SI−120−1

SI−121−2

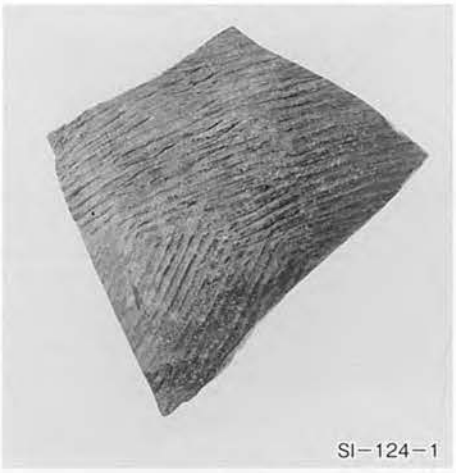
SI−121−1

SI−122−1


SI−122−2

SI−123−1

SI−118・119・120・121・122・123 出土土器


SI－124－1

SI－125－1

SI－126－1

SI－126－2

SI－126－3

SI－126－4

SI－126－5

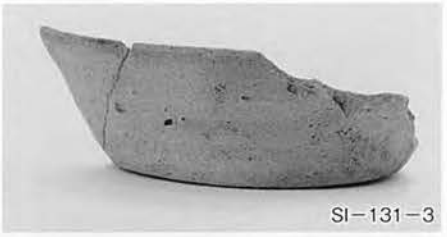
SI－126－6

SI－126－7

SI－126－8

SI－131－1

SI－131－2

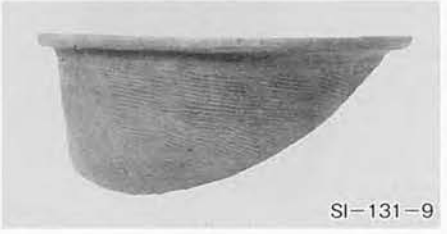

SI－131－3

SI－131－4

SI－131－5

SI－131－6

SI－131－7


SI－131－9

SI－124・125・126・131 出土土器

SI－131－8

SI－131－10

SI－132－1

SI－132－2

SI－132－4

SI－132－3

SI－133－1

SI－133－2

SI－134－1

SI－134－2

SI－134－4

SI－134－3

SI－134－5

SI－134－6

SI－134－7

SI－135－1

SI－131・132・133・134・135 出土土器

SI－135－2

SI－136－1

SI－136－2

SI－136－3

SI－136－4

SI－136－5

SI－136－6

SI－136－7

SI－136－8

SI－137－1

SI－137－2

SI－137－3

SI－138－1

SI－138－2

SI－138－3

SI－138－4

SI－138－5

SI－138－6

SI－138－7

SI－135・136・137・138 出土土器

SI−136−8

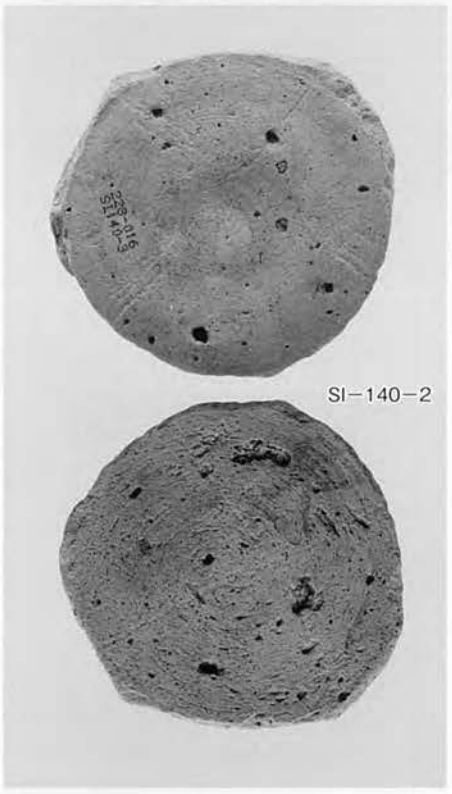
SI−136−9

SI−136−10

SI−139−1

SI−139−2

SI−140−1


SI−140−2

SI−141−1

SI−141−2

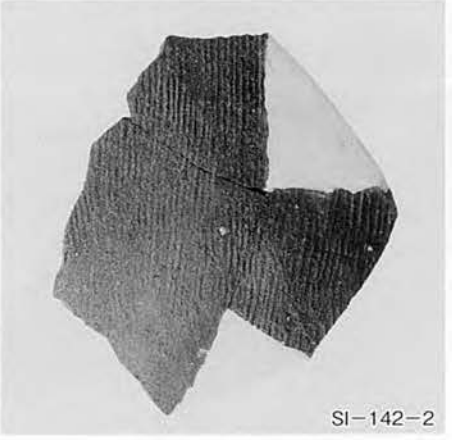
SI−141−4

SI−141−3

SI−141−5

SI−141−6

SI−141−7


SI−142−2

SI－138・139・140・141・142 出土土器

SI－142－1

SI－143－1

SI－143－2

SI－144－1

SI－144－2

SI－145－1

SI－145－2

SI－146－1

SI－146－2

SI－146－3

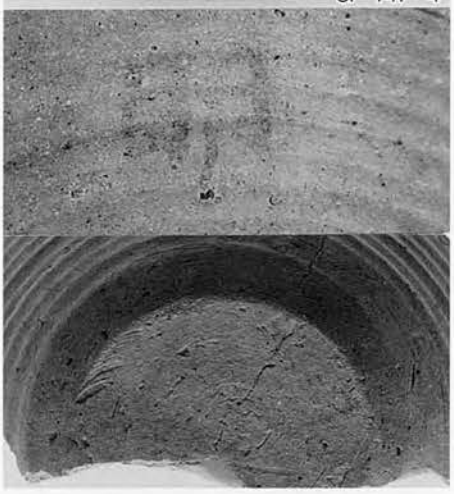
SI－146－4

SI－147－1

SI－147－2

SI－147－3

SI－147－4



SI－147－5

SI－147－6

SI－142・143・144・145・146・147 出土土器

SI−147−7

SI−147−8

SI−147−9

SI−147−10

SI−147−11

SI−147−12

SI−148−1

SI−148−2

SI−148−3

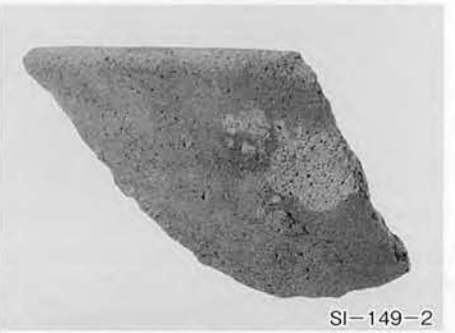
SI−148−4

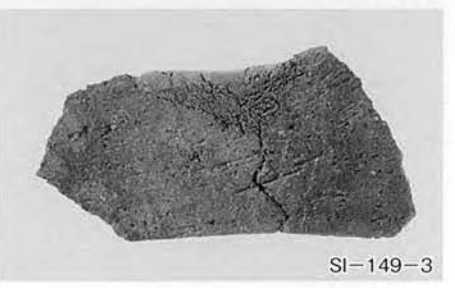
SI−148−6

SI−148−5

SI−148−7

SI−149−1


SI−149−2


SI−149−3

SI−147・148・149 出土土器

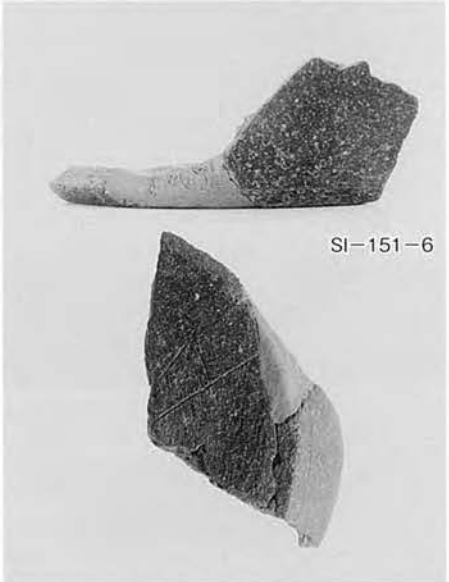
SI－151－1

SI－151－2

SI－151－3

SI－151－4

SI－151－5


SI－151－6

SI－151－7

SI－151－8

SI－151－9

SI－151－10

SI－151－11

SI－151－12

SI－151－13

SI－151－14

SI－151－15

SI－151－16

SI－151－17

SI－151－18

SI－151 出土土器

SI−151−19

SI−152−5

SI−153−2

SI−152−7

SI−153−3

SI−152−1

SI−152−8

SI−153−4

SI−152−2

SI−152−9

SI−153−5

SI−152−3

SI−153−6

SI−153−7

SI−152−4

SI−152−10

SI−152−6

SI−153−1

SI−153−8

SI−151・152・153 出土土器

SI−153−9

SI−153−10

SI−153−11

SI−153−12

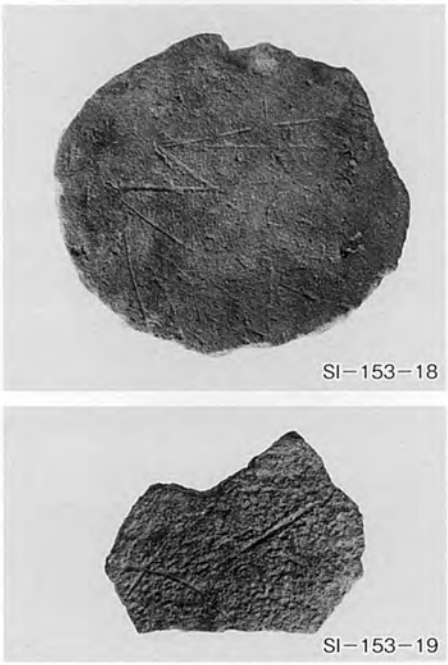
SI−153−13

SI−153−15

SI−153−14

SI−153−16

SI−153−17


SI−153−18

SI−153−19

SI−153−20

SI−153−21

SI−153−22

SI−153−24

SI－153 出土土器

SI−153−23

SI−154−1

SI−155−1

SI−155−2

SI−155−3

SI−155−4

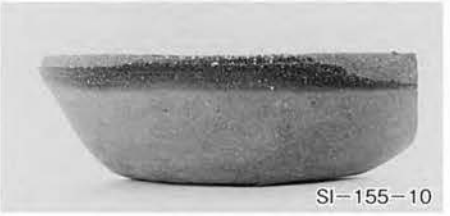
SI−155−5

SI−155−6

SI−155−7

SI−155−8

SI−155−9


SI−155−10

SI−155−11

SI−155−12

SI−155−13

SI−155−14

SI−155−15

SI−155−16

SI−155−17

SI−153・154・155 出土土器

SI－155－18

SI－155－19

SI－155－20

SI－155－21

SI－155－22

SI－155－23

SI－155－24

SI－155－25

SI－155－26

SI－155－27

SI－155－28

SI－156－1

SI－156－2

SI－156－3

SI－156－4

SI－156－5

SI－156－6

SI－156－7

SI－155・156 出土土器

SI−156−8

SI−156−9

SI−156−10

SI−156−11

SI−156−12

SI−157−1

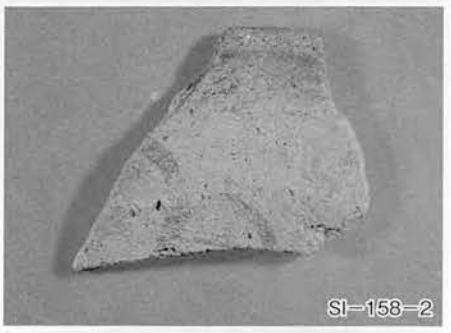
SI−157−2

SI−157−3

SI−157−4

SI−157−5

SI−158−1

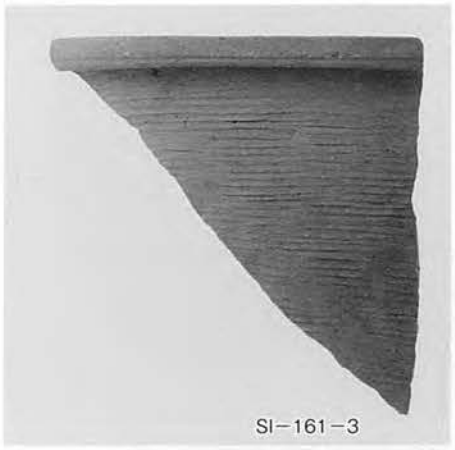

SI−158−2

SI−158−3

SI−161−1

SI−161−2

SI－156・157・158・161 出土土器


SI－161－3

SI－162－1

SI－163－1

SI－163－2

SI－163－3

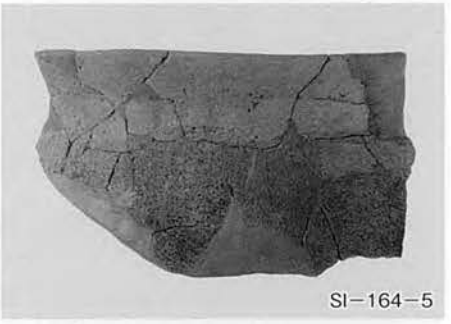
SI－163－4

SI－164－2

SI－164－1

SI－164－3

SI－164－4


SI－164－5

SI－164－6

SI－164－7

SI－164－8

SI－164－9

SI－164－10

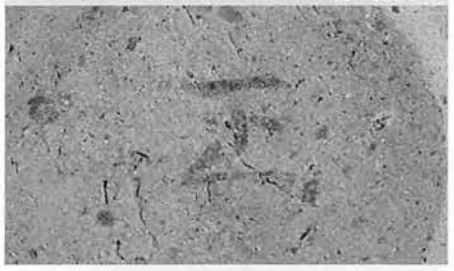
SI－165－1

SI－161・162・163・164・165 出土土器

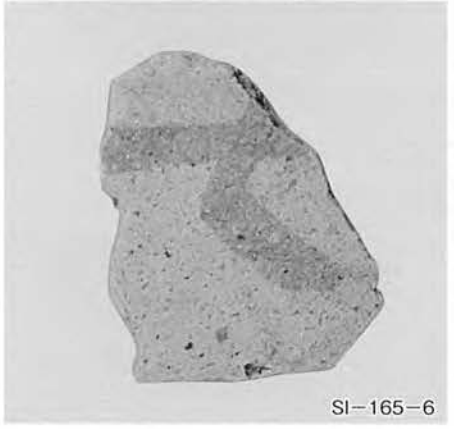
SI−165−2

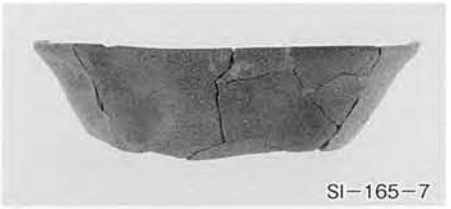
SI−165−3

SI−165−4



SI−165−5


SI−165−6


SI−165−7

SI−165−8

SI−165−9

SI−165−10

SI−165−11

SI−165−12

SI−165−12

SI−165−13

SI−165−14

SI−165−15

SI−165−16

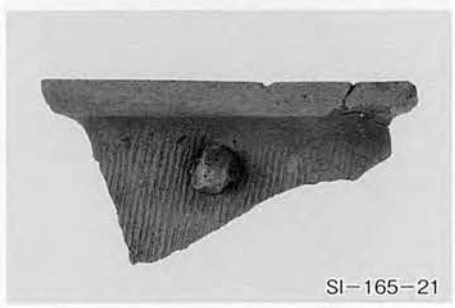
SI－165 出土土器

SI－165－17

SI－165－18

SI－165－19

SI－165－20


SI－165－21

SI－167－1

SI－167－2

SI－168－1

SI－168－3

SI－168－4

SI－168－2

SI－168－5

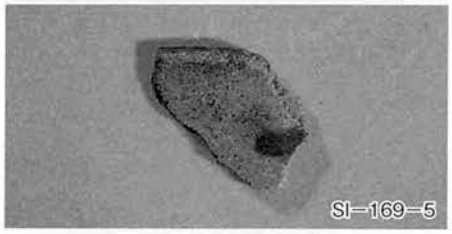
SI－169－1

SI－169－2

SI－165・167・168・169 出土土器

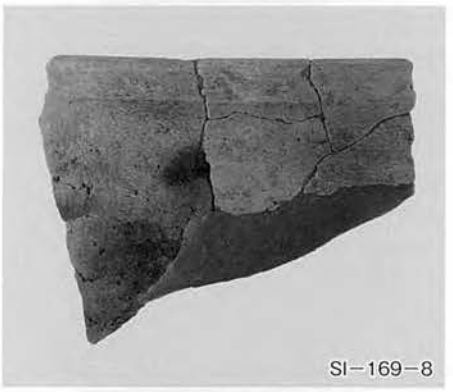
SI−169−3

SI−169−4


SI−169−5

SI−169−6

SI−169−7

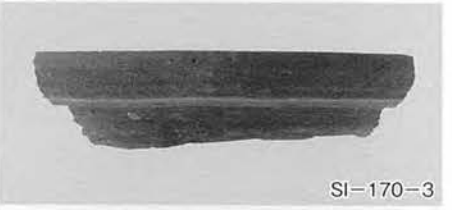

SI−169−8

SI−169−9

SI−169−10

SI−170−1

SI−170−2


SI−170−3

SI−170−4

SI−171−1

SI−171−2

SI−171−3

SI−171−4

SI−171−5

SI−171−6

SI−171−7

SI－169・170・171 出土土器

SI－171－8

SI－172－1

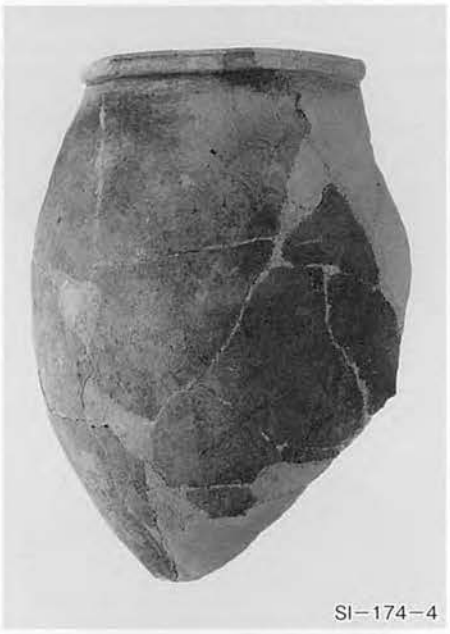
SI－172－2

SI－173－1

SI－174－1

SI－174－2

SI－174－3


SI－174－4

SI－175－1

SI－175－2

SI－175－3

SI－175－4

SI－175－5

SI－175－6

SI－176－1

SI－171・172・173・174・175・176 出土土器

SI−176−2

SI−176−3

SI−176−4

SI−176−5

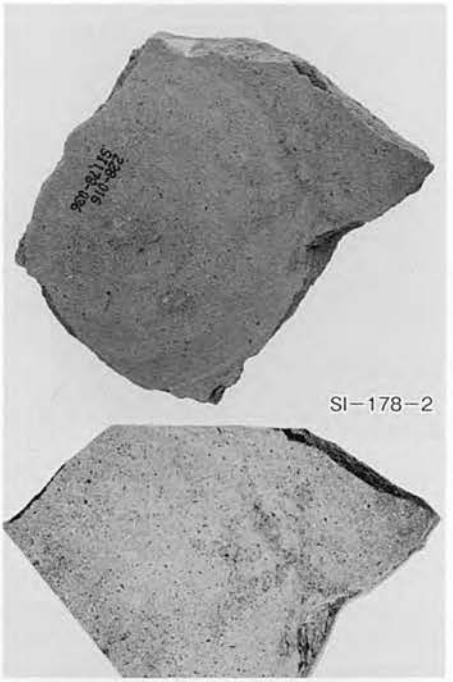
SI−176−6

SI−176−7

SI−177−1

SI−177−2

SI−178−1


SI−178−2

SI−178−3

SI−178−4

SI−178−5

SI−178−6

SI−178−7

SI−178−8

SI−179−1

SI−179−2

SI−179−3

SI−176・177・178・179 出土土器

SI－179－4

SI－180－1

SI－180－2

SI－180－3

SI－180－4

SI－180－5

SI－180－6

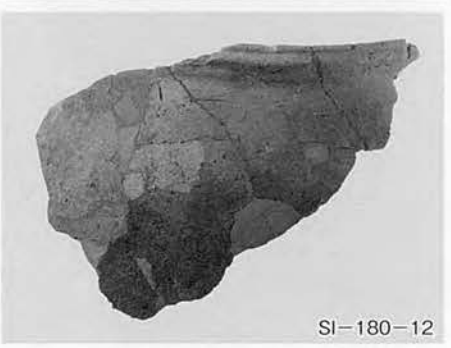
SI－180－7

SI－180－8

SI－180－9

SI－180－10

SI－180－11


SI－180－12

SI－180－13

SI－181－1

SI－181－2

SI－181－3

SI－181－4

SI－182－1

SI－179・180・181・182 出土土器

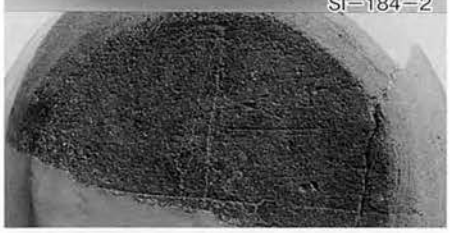
SI－182－2

SI－183－1

SI－183－2

SI－184－1

SI－184－2



SI－183－3

SI－183－4

SI－185－1

SI－185－2

SI－185－3

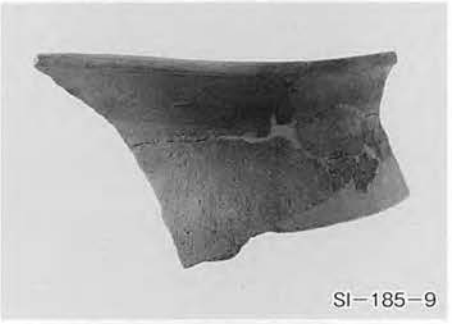
SI－185－4

SI－185－5

SI－185－6

SI－185－7

SI－185－8


SI－185－9

SI－186－1

SI－186－2

SI－182・183・184・185・186 出土土器

SI－186－3

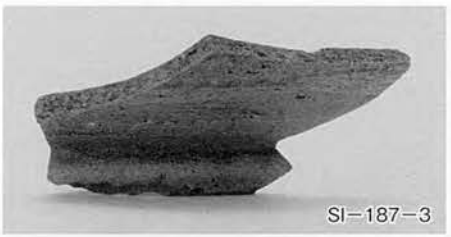
SI－186－4

SI－186－5

SI－186－6

SI－187－1

SI－187－2

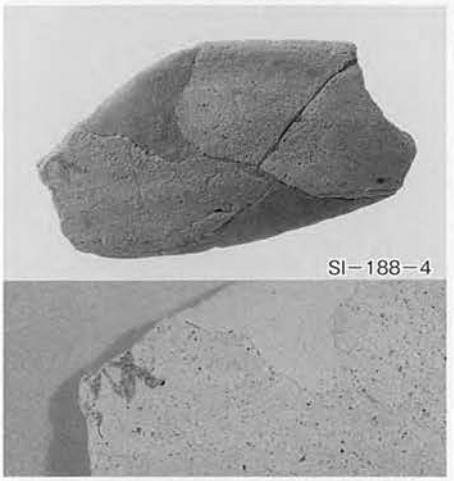

SI－187－3

SI－187－4

SI－188－1

SI－188－2

SI－188－3

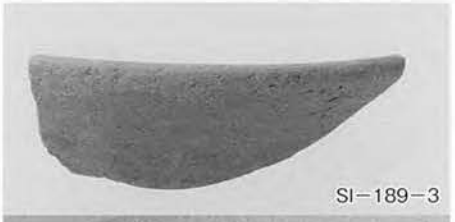

SI－188－4

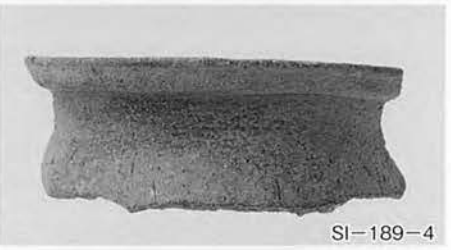
SI－188－5

SI－188－6

SI－189－1

SI－189－2


SI－189－3


SI－189－4

SI－189－5

SI－186・187・188・189 出土土器

SI－190－1

SI－190－2

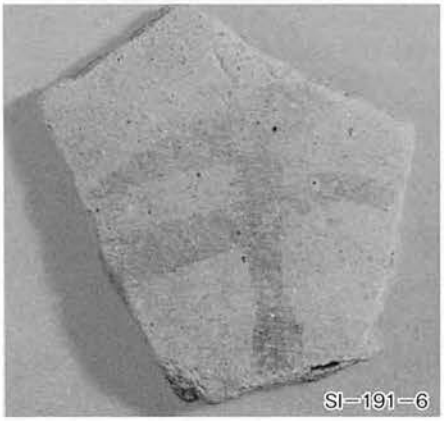
SI－191－1

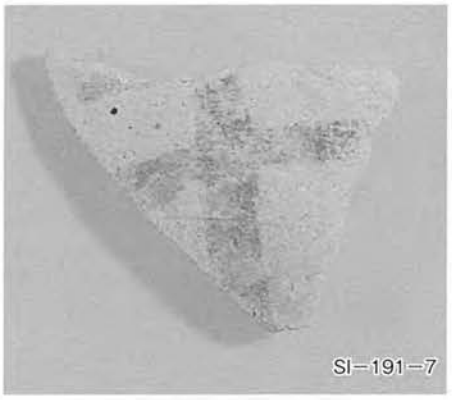
SI－191－2

SI－191－3

SI－191－4

SI－191－5


SI－191－6


SI－191－7

SI－191－8

SI－191－9

SI－191－10

SI－192－1

SI－192－2

SI－192－3

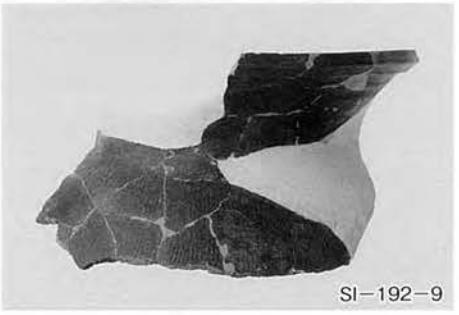
SI－192－4

SI－192－5

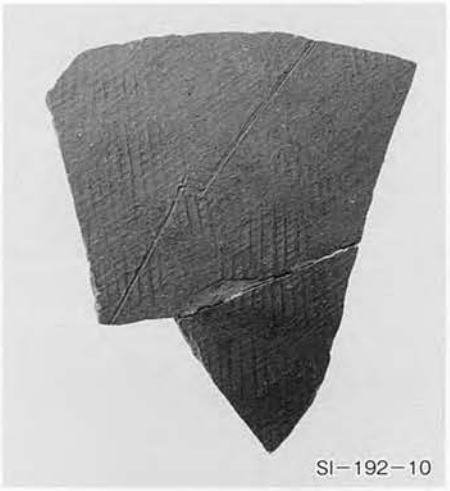
SI－192－6

SI－192－7

SI－192－8


SI－192－9

SI－190・191・192 出土土器


SI－192－10

SI－192－11

SI－192－12

SI－192－14

SI－192－13

SI－193－1

SI－193－2

SI－193－3

SI－193－4

SI－194－1

SI－194－2

SI－194－3

SI－194－4

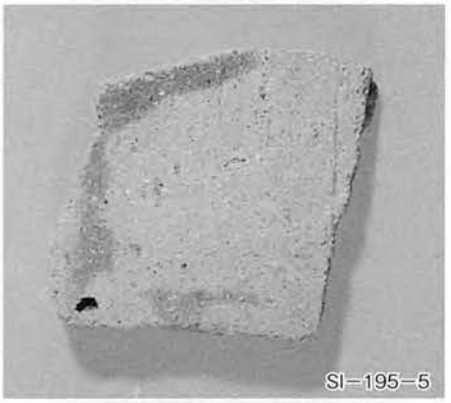
SI－195－1

SI－195－2

SI－192・193・194・195 出土土器

SI－195－3

SI－195－4


SI－195－5

SI－195－6

SI－195－7

SI－195－8

SI－196－1

SI－196－2

SI－196－3

SI－196－4

SI－196－5

SI－196－6

SI－197－1

SI－198－1

SI－198－2

SI－198－3

SI－198－4

SI－198－5

SI－198－6

SI－195・196・197・198 出土土器

SI－198－7

SI－198－8

SI－199－1

SI－199－2

SI－199－3

SI－199－4

SI－199－5

SI－199－6

SI－199－7

SI－199－8

SI－199－9

SI－200－1

SI－200－2

SI－200－3

SI－201－1

SI－201－2

SI－201－3

SI－201－5

SI－198・199・200・201 出土土器

SI－201－4

SI－201－6

SI－202－1

SI－202－2

SI－202－3

SI－202－4

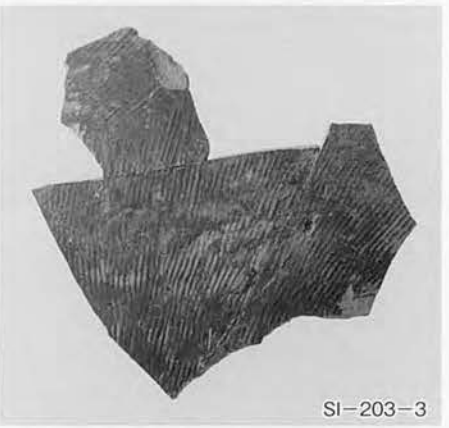
SI－202－5

SI－202－6

SI－202－7

SI－203－1

SI－203－2


SI－203－3

SI－203－4

SI－203－5

SI－204－1

SI－204－2

SI－204－3

SI－204－4

SI－201・202・203・204 出土土器

SI－204－5

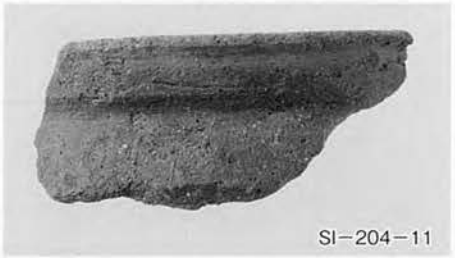
SI－204－6

SI－204－7

SI－204－8

SI－204－9

SI－204－10


SI－204－11

SI－204－12

SI－204－13

SI－204－14

SI－205－1

SI－205－2

SI－205－3

SI－205－4

SI－205－5

SI－205－6

SI－205－7

SI－205－8

SI－205－9

SI－205－10

SI－204・205 出土土器

SI−205−11

SI−206−1

SI−206−2

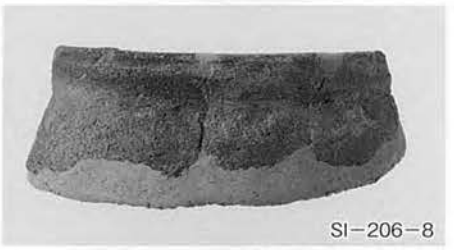
SI−206−3

SI−206−4

SI−206−5

SI−206−6

SI−206−7


SI−206−8

SI−207−1

SI−207−2

SI−207−3

SI−207−4

SI−207−5

SI−207−6

SI−207−7

SI−208−1

SI−208−2

SI−208−3

SI−205・206・207・208 出土土器

SI－208－4

SI－208－5

SI－208－6

SI－208－7

SI－208－8

SI－208－9

SI－208－10

SI－208－11

SI－208－12

SI－209－1

SI－209－2

SI－209－3

SI－209－4

SI－209－5

SI－209－6

SI－209－7

SI－209－8

SI－209－9

SI－209－10

SI－208・209 出土土器

SI−209−11

SI−209−12

SI−209−13

SI−209−14

SI−209−15

SI−209−16

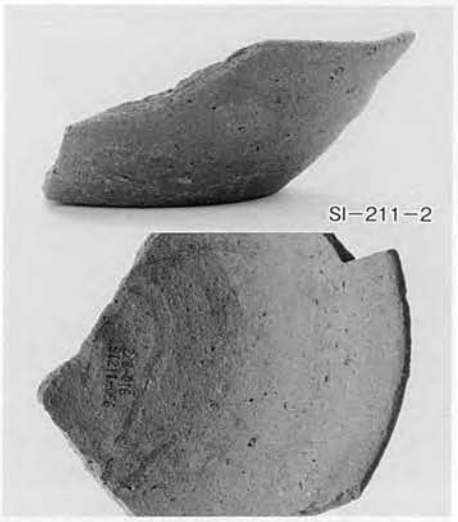
SI−209−17

SI−209−18

SI−209−19

SI−210−1

SI−211−1

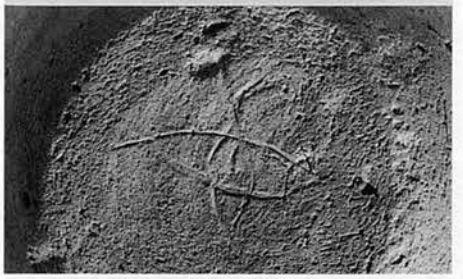

SI−211−2

SI−211−3

SI−211−4

SI−211−5

SI−211−6



SI−211−7

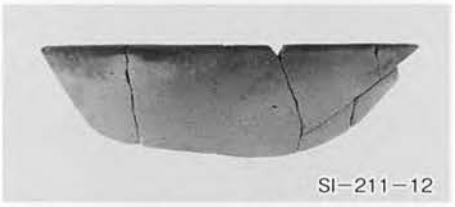
SI−209・210・211 出土土器

SI−211−8

SI−211−9

SI−211−10

SI−211−11


SI−211−12

SI−211−13

SI−211−14

SI−211−15

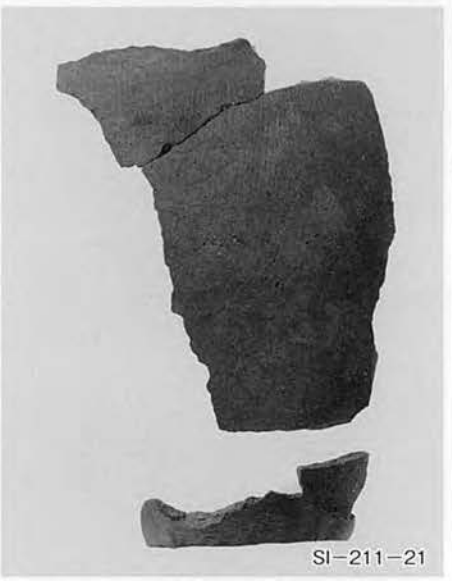
SI−211−17

SI−211−16

SI−211−18

SI−211−19

SI−211−20


SI−211−21

SI−211−22a


SI−211−22b

SI−211−23

SI−211−24

SI−211−26

SI−211 出土土器

SI−211−25

SI−211−27

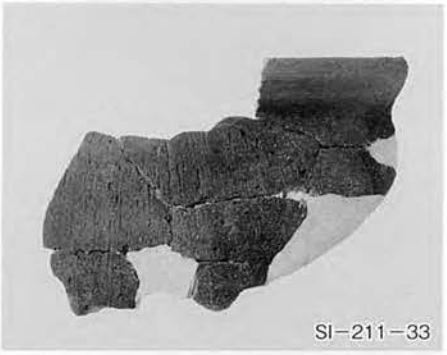
SI−211−28

SI−211−29

SI−211−30

SI−211−31

SI−211−32


SI−211−33

SI−211−34

SI−212−2

SI−212−1

SI−212−3

SI−212−4

SI−212−5

SI−212−6

SI−212−7

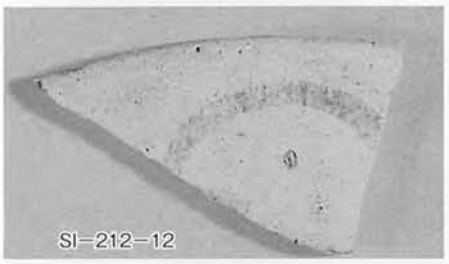
SI−212−8

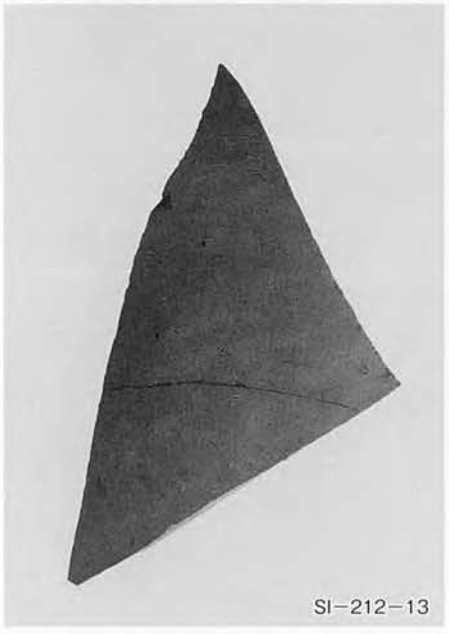
SI－211・212 出土土器

SI−212−9

SI−212−10

SI−212−11


SI−212−12


SI−212−13

SI−212−14

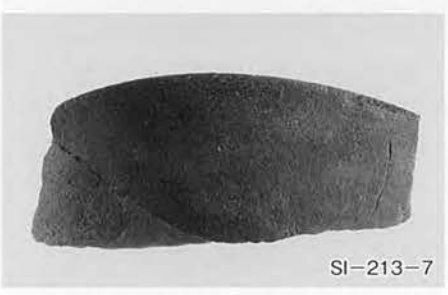
SI−213−1

SI−213−2

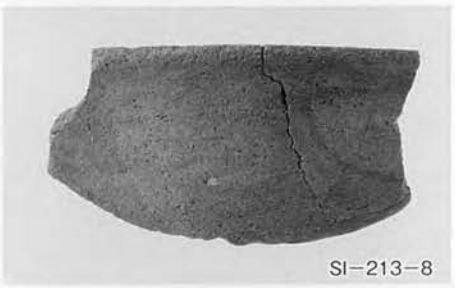
SI−213−3

SI−213−4

SI−213−5


SI−213−7

SI−213−6


SI−213−8

SI−213−9

SI−213−10

SI−213−11

SI－212・213 出土土器

SI−214−1

SI−214−7

SI−216−3

SI−214−2

SI−214−8

SI−215−1

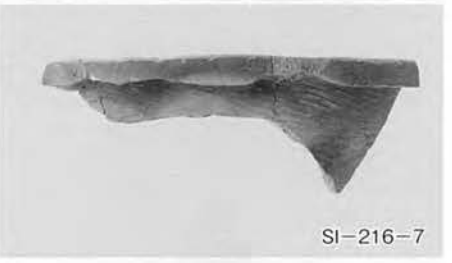
SI−216−5

SI−214−3

SI−216−6

SI−214−4

SI−216−1


SI−216−7

SI−214−5

SI−216−2

SI−216−8

SI−214−6

SI−216−4

SI−214・215・216 出土土器

SI−217−1

SI−217−2

SI−217−3

SI−217−4

SI−217−6

SI−217−5

SI−217−7

SI−218−1

SI−218−2

SI−218−3

SI−218−4

SI−219−1

SI−219−2

SI−219−3

SI−219−4

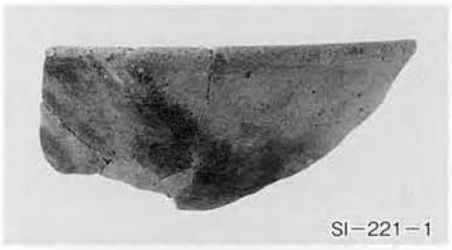
SI−219−5

SI−219−6

SI−219−7

SI－217・218・219 出土土器

SI－220－1


SI－221－1

SI－221－2

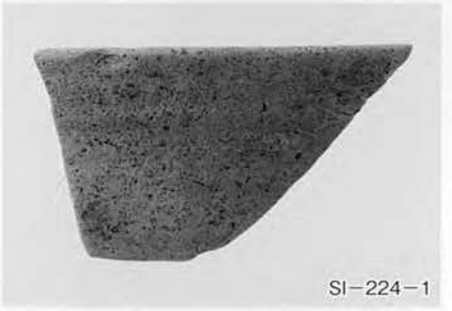
SI－221－3

SI－222－1

SI－222－2

SI－223－1

SI－223－2


SI－224－1

SI－224－2

SI－224－3

SI－225－1

SI－225－2

SI－227－1

SI－227－2

SI－228－1

SI－228－2

SI－228－3

SI－220・221・222・223・224・225・226・227・228 出土土器

SI−229−1

SI−229−2

SI−229−3

SI−229−4

SI−229−5

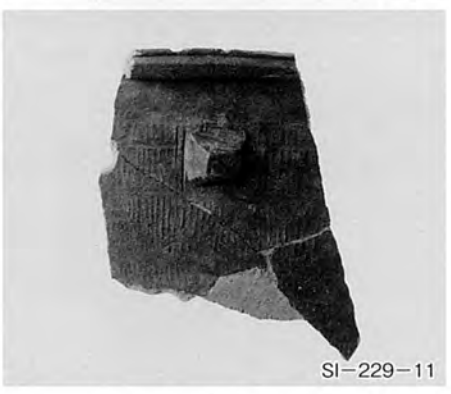
SI−229−7

SI−229−6

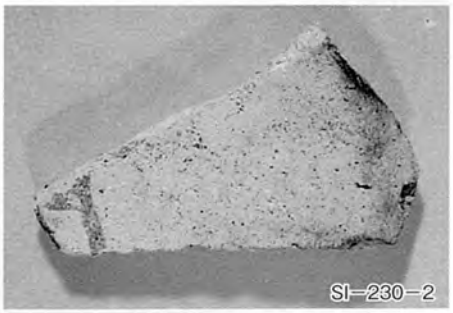
SI−229−8

SI−229−9

SI−229−10


SI−229−11

SI−230−1


SI−230−2

SI−230−3

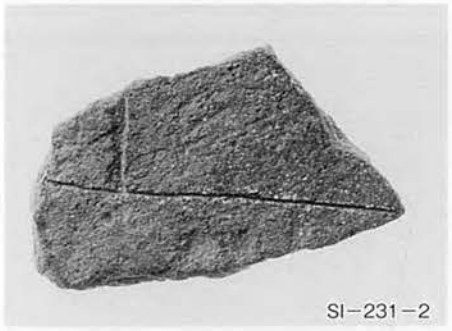
SI−230−4

SI−230−5

SI−230−6

SI－229・230 出土土器

SI−231−1


SI−231−2

SI−231−3

SI−233−1

SI−233−2

SI−233−3

SI−233−4

SI−233−5

SI−233−6

SI−233−7

SI−233−8

SI−233−9

SI−233−10

SI−233−11

SI−233−12

SI−233−13

SI−235−1a

SI−235−1b

SI−236−1

SI−236−2

SI−231・233・235・236 出土土器

SI−236−3

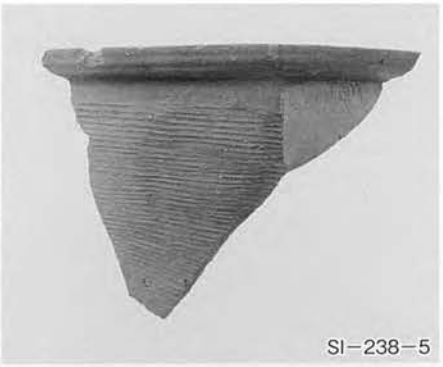
SI−236−4

SI−238−1

SI−238−2

SI−238−3

SI−238−4


SI−238−5

SI−239−1

SI−239−2

SI−239−3

SI−239−4

SI−240−1

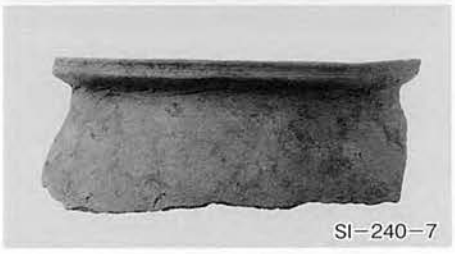
SI−240−2

SI−240−3

SI−240−4

SI−240−5

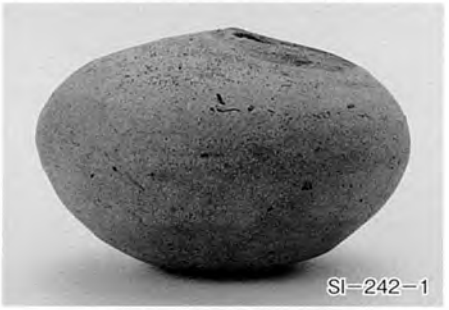
SI−240−6


SI−240−7

SI−236・238・239・240 出土土器

SI−240−8

SI−241−1


SI−242−1

SI−243−1

SI−243−2

SI−243−3

SI−243−4

SI−243−5

SI−243−6

SI−244−1

SI−244−2

SI−244−3

SI−244−4

SI−244−5

SI−244−6

SI−244−7

SI−244−8

SI−244−9

SI−244−10

SI－240・241・242・243・244 出土土器

SI－244－11

SI－244－12

SI－244－13

SI－245A－1

SI－245A－2

SI－245A－3

SI－245A－4

SI－245A－5

SI－245A－6

SI－245A－7

SI－245A－8

SI－245A－9

SI－245A－11

SI－245A－10

SI－245A－12

SI－245A－13

SI－245A－14

SI－245A－15

SI－245B－1

SI－244・245A・245B 出土土器

SI－245B－2

SI－246A－1

SI－246A－2

SI－246A－3

SI－246A－4

SI－246A－5

SI－246A－6

SI－246A－7

SI－246A－8

SI－246A－9

SI－246A－10

SI－246A－12

SI－246A－11

SI－246A－13

SI－246A－14

SI－248－1

SI－248－2

SI－249－1

SI－245B・246A・248・249 出土土器

SI－249－2

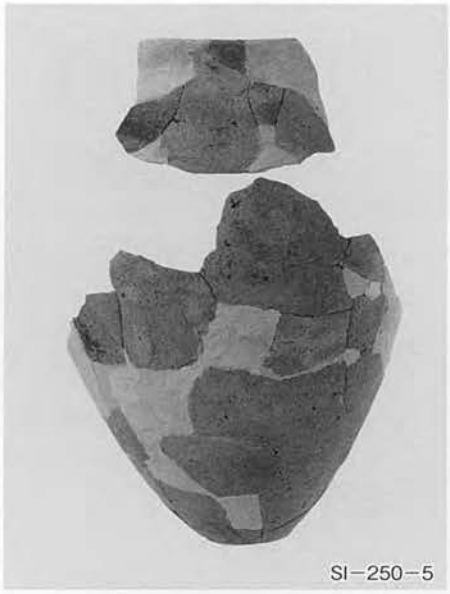
SI－249－3

SI－250－1

SI－250－2

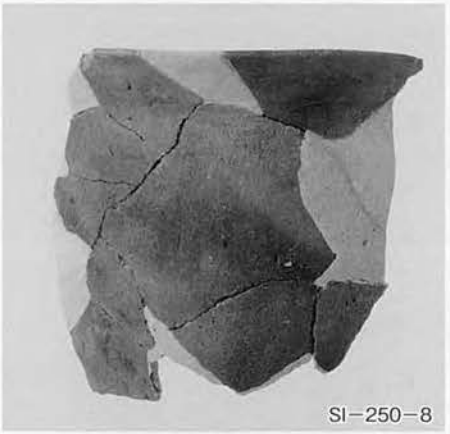
SI－250－3

SI－250－4

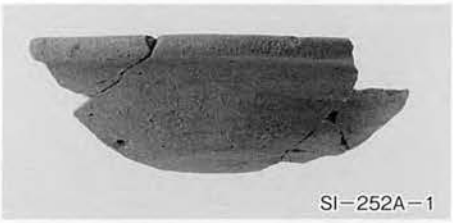

SI－250－5

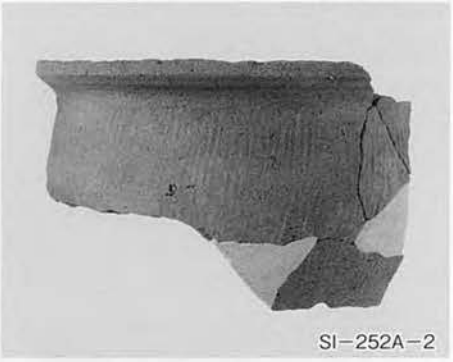
SI－250－6

SI－250－7


SI－250－8

SI－251－1


SI－252A－1


SI－252A－2

SI－252A－3

SI－252A－4

SI－252B－1

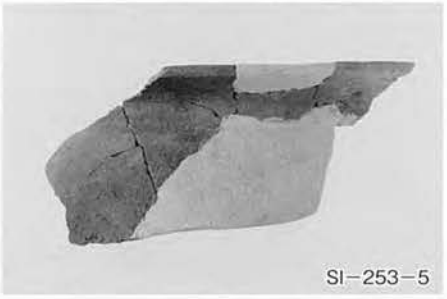
SI－253－1

SI－249・250・251・252A・252B・253 出土土器

SI−253−2

SI−253−3

SI−253−4


SI−253−5

SI−253−6

SI−253−7

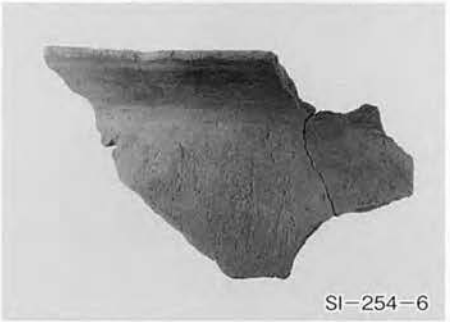
SI−254−1

SI−254−2

SI−254−3

SI−254−4

SI−254−5


SI−254−6

SI−254−7

SI−254−8

SI−255−1

SI−255−2

SI−255−3

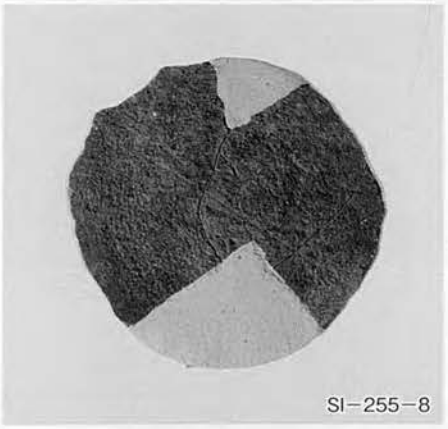
SI−255−4

SI−255−5

SI−255−6

SI−253・254・255 出土土器

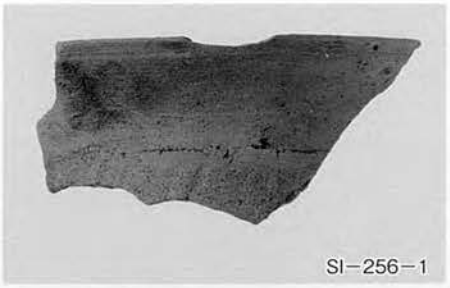
SI－255－7


SI－255－8

SI－255－9

SI－255－10a

SI－255－10b


SI－256－1

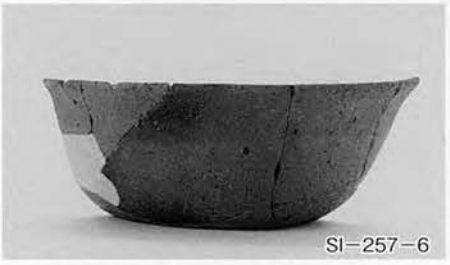
SI－257－1

SI－257－2

SI－257－3

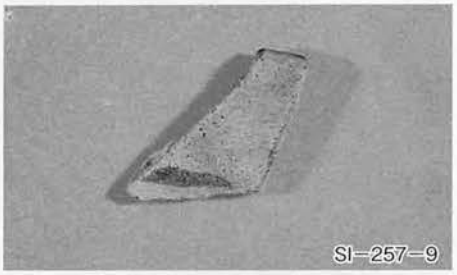
SI－257－4

SI－257－5


SI－257－6

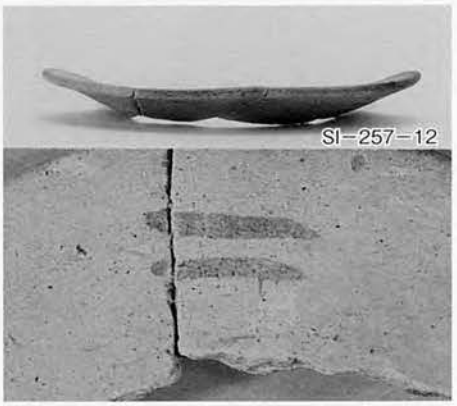
SI－257－7

SI－257－8


SI－257－9

SI－257－10

SI－257－11


SI－257－12

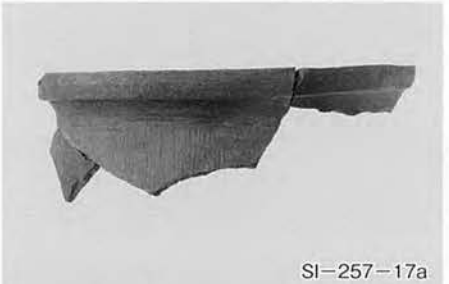
SI－257－13

SI－255・256・257 出土土器

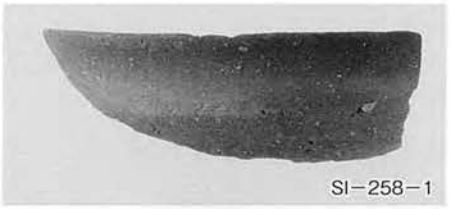
SI－257－14

SI－257－15

SI－257－16


SI－257－17a

SI－257－17b


SI－258－1

SI－258－2

SI－258－3

SI－258－4

SI－259－1

SI－260－1

SI－260－2

SI－260－3

SI－260－4

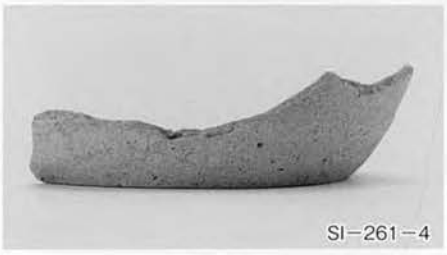
SI－260－5

SI－261－1

SI－261－2

SI－257・258・259・260・261 出土土器

SI−261−3


SI−261−4

SI−261−5

SI−261−6

SI−261−7

SI−261−8

SI−262−1

SI−262−2

SI−262−3

SI−262−4

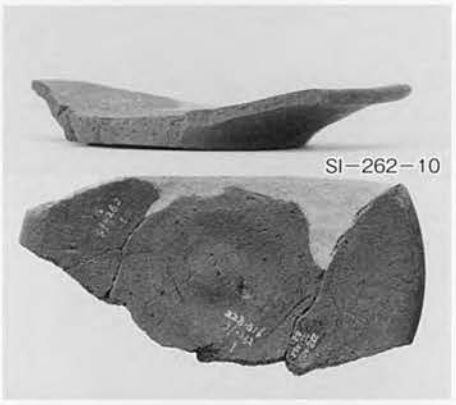
SI−262−5

SI−262−6

SI−262−7

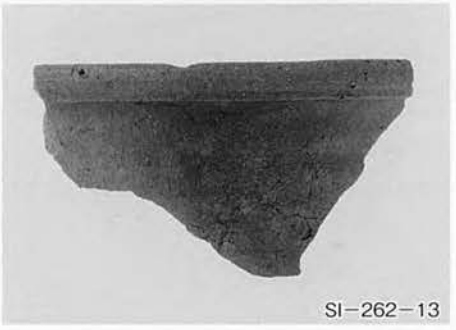
SI−262−8

SI−262−9


SI−262−10

SI−262−11

SI−262−12


SI−262−13

SI−261・262 出土土器

SI－262－14

SI－262－15

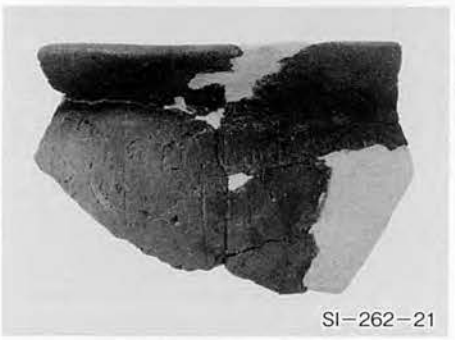
SI－262－16

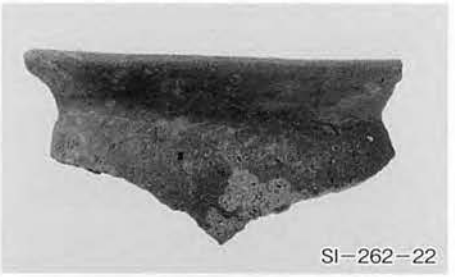
SI－262－17

SI－262－18

SI－262－19

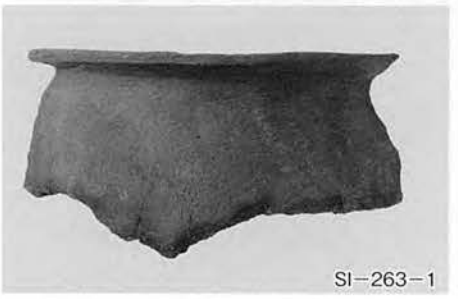
SI－262－20


SI－262－21


SI－262－22

SI－262－23

SI－262－24


SI－263－1

SB－002－1

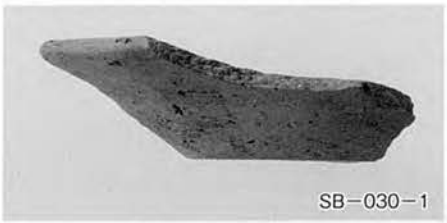
SB－009－1

SB－013－1

SB－022－1

SB－029－1

SI－262・263，SB－002・009・013・022・029 出土土器

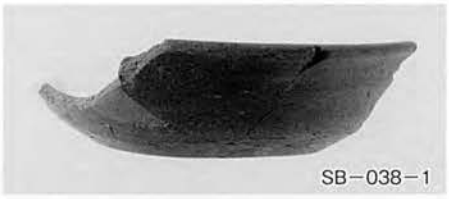

SB－030－1

SB－030－2

SB－32－1

SB－035－1

SB－035－2


SB－038－1

SB－039－1

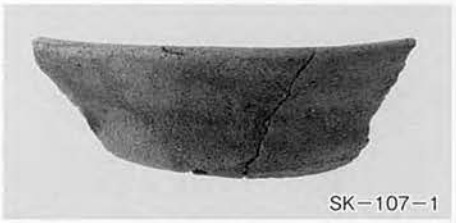
SK－011－1

SK－016－1

SK－016－2

SK－019－1

SK－043－1

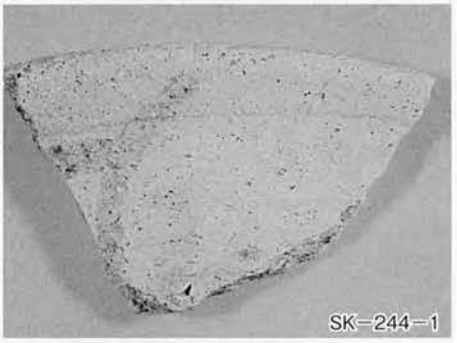

SK－107－1

SK－110－1

SK－110－2

SK－142－1

SK－142－2


SK－244－1

SK－245－1

SB－030・032・035・038・039，SK－011・016・019・043・107・110・142・244・245 出土土器

SK－245－2

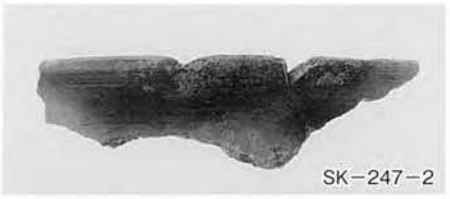
SK－245－3

SK－246－1

SK－246－2

SK－247－1

SK－247－3


SK－247－2

SK－248－1

SK－248－2

SK－248－3

SK－248－4

SK－249－1

SK－249－3

SK－249－2

SK－249－4

SK－250－1

SK－250－2

SK－251－1

SK－245・246・247・248・249・250・251 出土土器

SK－252－1

SK－252－2

SK－253－1

SK－256－1

SK－256－2

SK－257－1

SK－264－1

SK－264－2

SK－265－1

SK－307－1

SK－307－2

SK－307－3

SK－307－4

SK－307－5

SK－307－6

SK－307－7

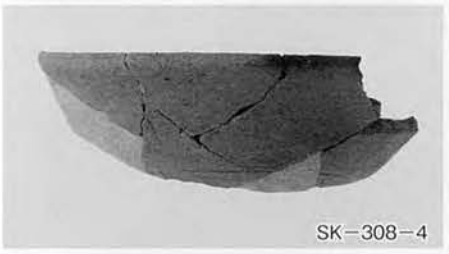
SK－307－8

SK－252・253・256・257・264・265・307 出土土器

SK－308－1

SK－308－2

SK－308－3


SK－308－4

SK－308－5

SK－308－6

SK－315－1

P－049－1

P－065－1

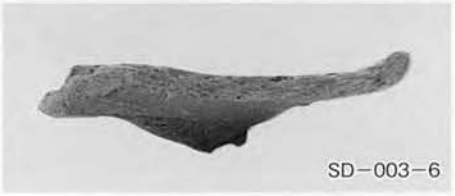
SD－003－1

SD－003－2

SD－003－3

SD－003－4

SD－003－5


SD－003－6

SD－003－7

SD－003－8

SD－003－9

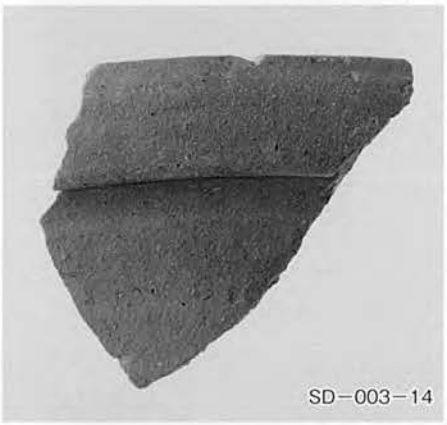
SD－003－10

SD－003－11

SK－308・315，P－049・065，SD－003 出土土器

SD－003－12

SD－003－13


SD－003－14

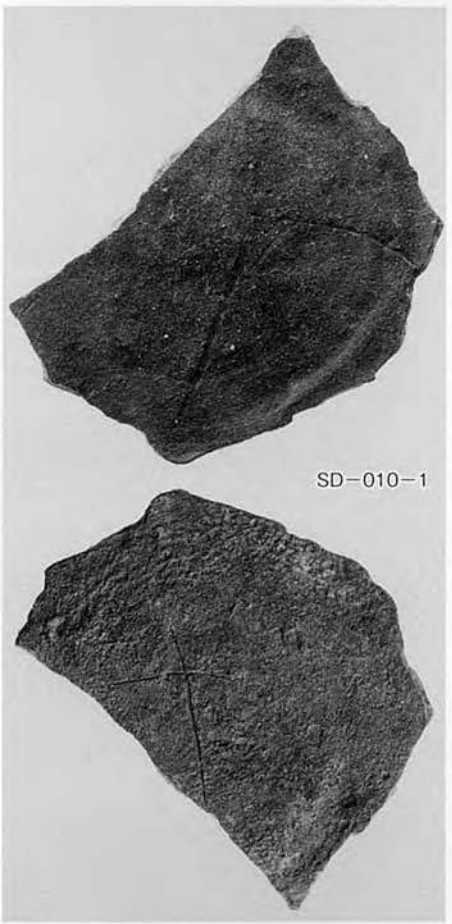
SD－003－15

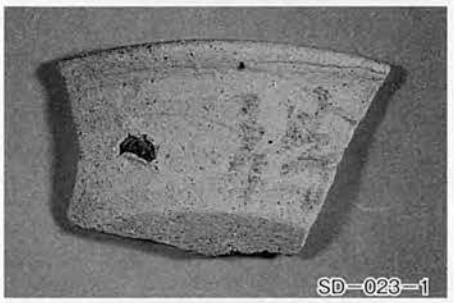
SD－003－16

SD－005－1

SD－005－2

SD－005－3


SD－010－1


SD－023－1

SD－024－1

SD－024－2

SD－024－3

SD－024－4

SD－030－1

SD－003・005・010・023・024・030 出土土器

24L－51－1

25K－39－6

23L－54－12

24L－13

25I－00－1

25K－59－7

22M－16－14

22L－86－8

25I－00－2

23L－74－9

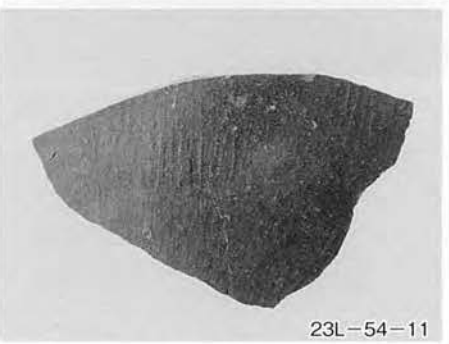
22M－18－15

24K－3

23L－54－10

23M－30
（第319図16）

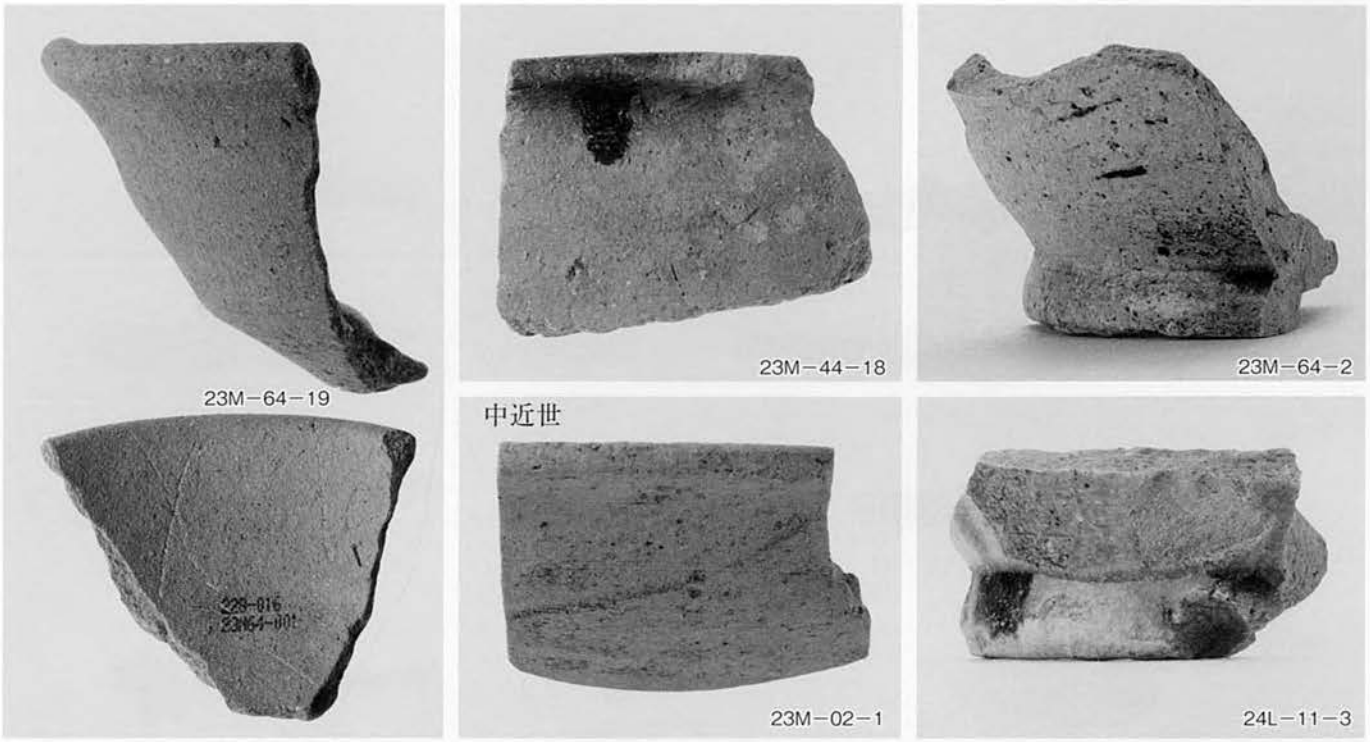
24K－4


23L－54－11

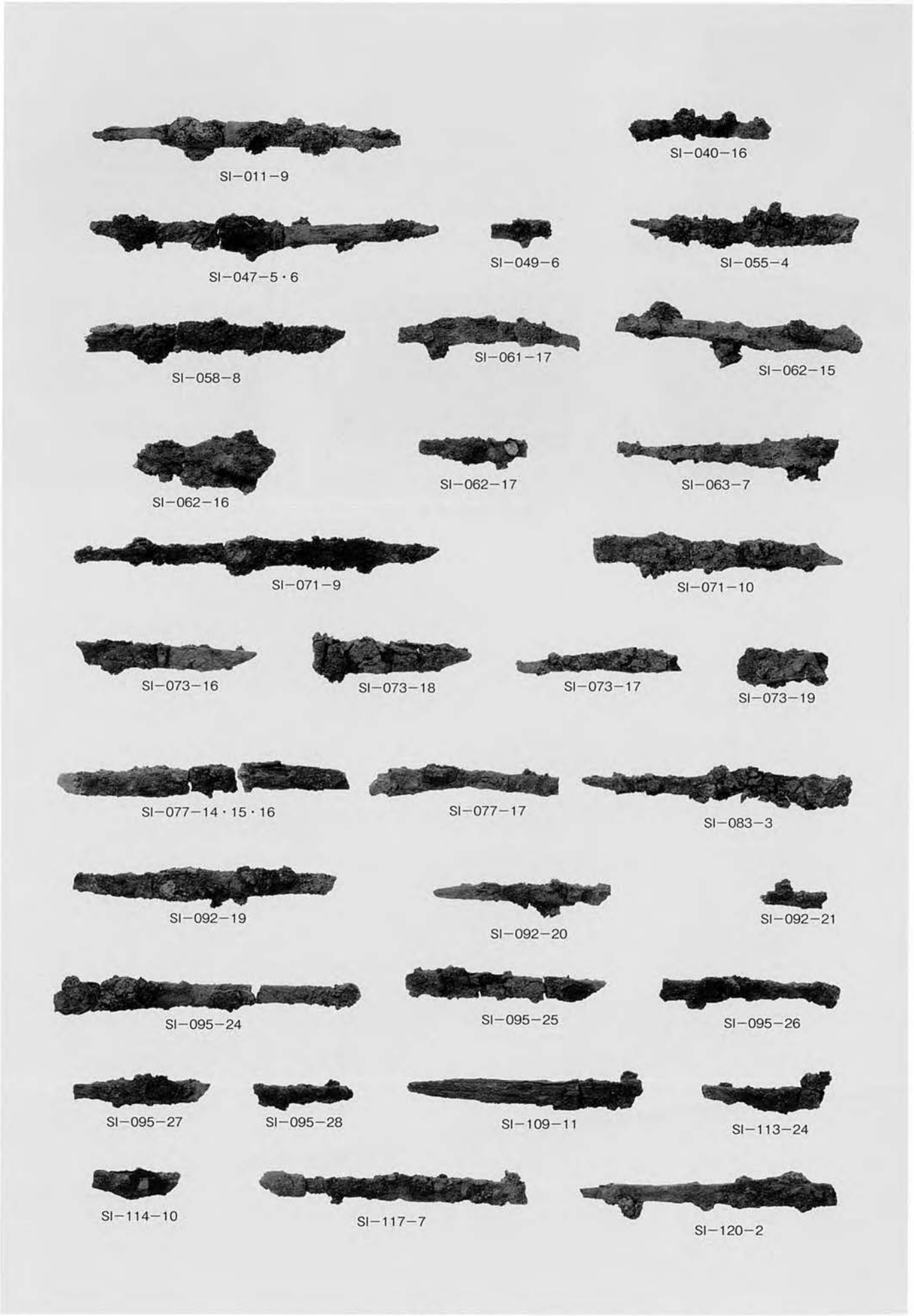
23M－30
（第319図17）

25K－07－5

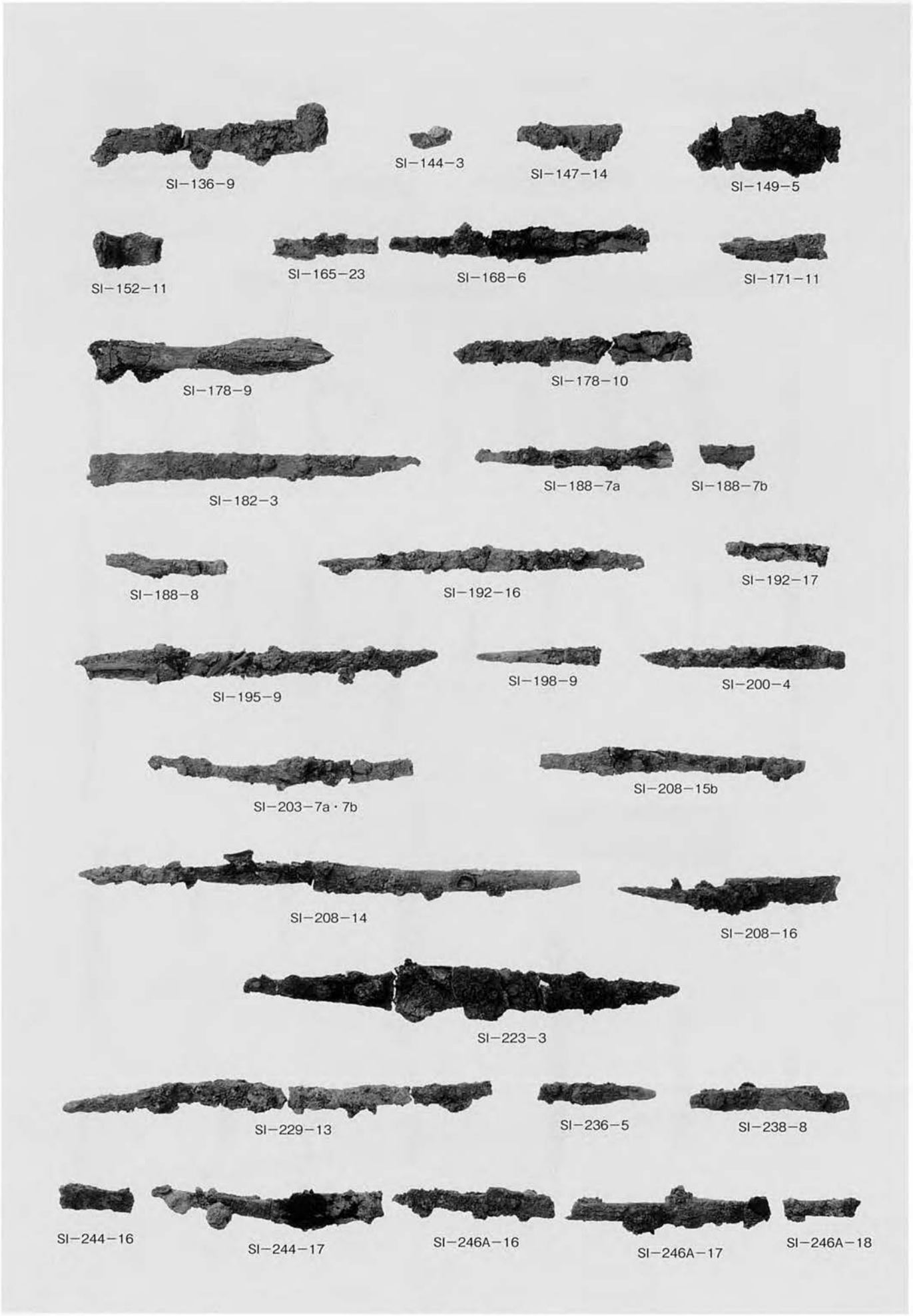
遺構外出土土器（1）



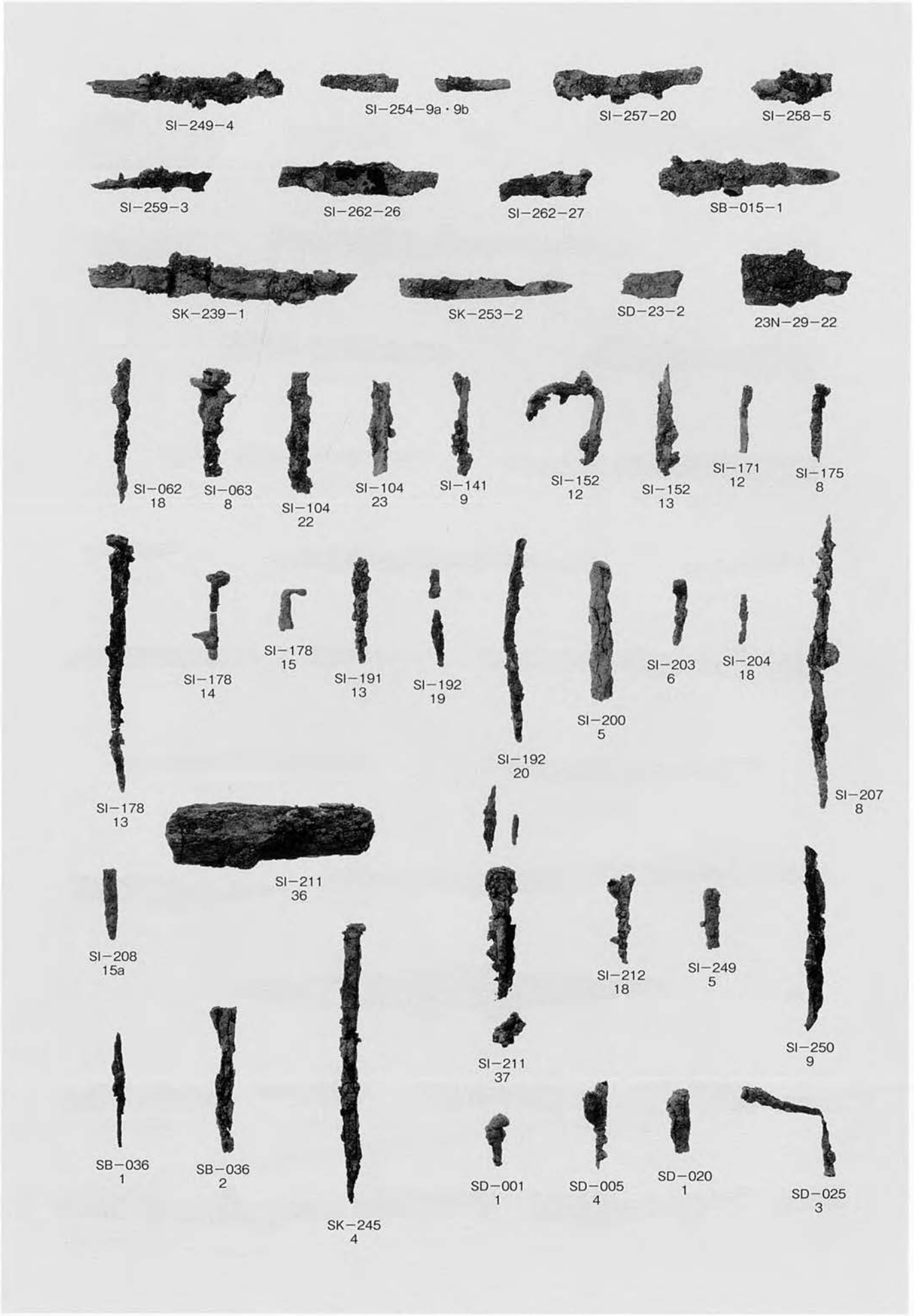

遺構外出土土器（2）


SI−011−9
SI−040−16
SI−047−5・6
SI−049−6
SI−055−4
SI−058−8
SI−061−17
SI−062−15
SI−062−16
SI−062−17
SI−063−7
SI−071−9
SI−071−10
SI−073−16
SI−073−18
SI−073−17
SI−073−19
SI−077−14・15・16
SI−077−17
SI−083−3
SI−092−19
SI−092−20
SI−092−21
SI−095−24
SI−095−25
SI−095−26
SI−095−27
SI−095−28
SI−109−11
SI−113−24
SI−114−10
SI−117−7
SI−120−2

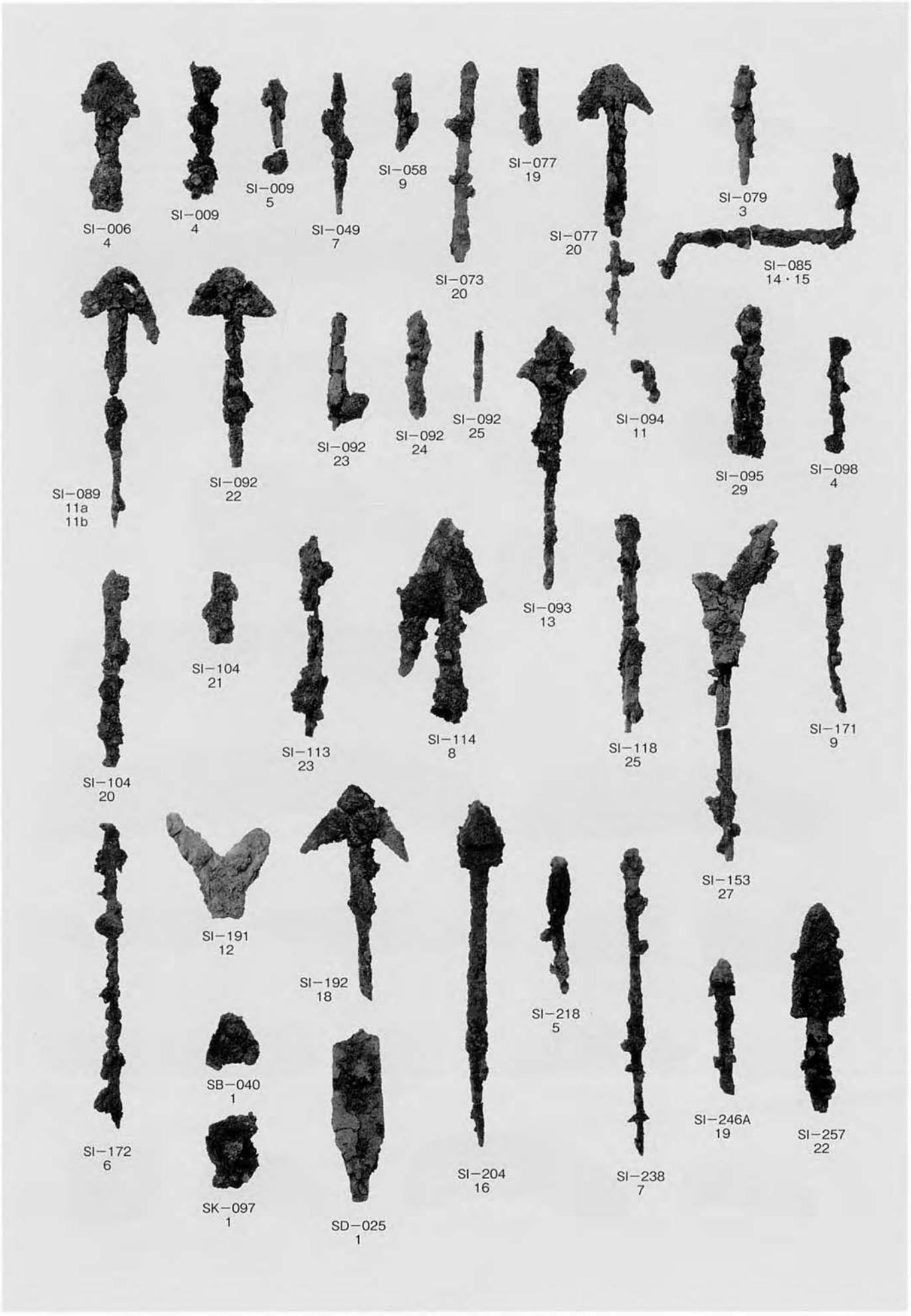
鉄製品（1）


SI−136−9
SI−144−3
SI−147−14
SI−149−5
SI−152−11
SI−165−23
SI−168−6
SI−171−11
SI−178−9
SI−178−10
SI−182−3
SI−188−7a
SI−188−7b
SI−188−8
SI−192−16
SI−192−17
SI−195−9
SI−198−9
SI−200−4
SI−203−7a・7b
SI−208−15b
SI−208−14
SI−208−16
SI−223−3
SI−229−13
SI−236−5
SI−238−8
SI−244−16
SI−244−17
SI−246A−16
SI−246A−17
SI−246A−18

鉄製品（2）


SI−249−4
SI−254−9a・9b
SI−257−20
SI−258−5
SI−259−3
SI−262−26
SI−262−27
SB−015−1
SK−239−1
SK−253−2
SD−23−2
23N−29−22
SI−062 18
SI−063 8
SI−104 22
SI−104 23
SI−141 9
SI−152 12
SI−152 13
SI−171 12
SI−175 8
SI−178 14
SI−178 15
SI−191 13
SI−192 19
SI−192 20
SI−200 5
SI−203 6
SI−204 18
SI−207 8
SI−178 13
SI−211 36
SI−208 15a
SI−212 18
SI−249 5
SI−250 9
SI−211 37
SB−036 1
SB−036 2
SK−245 4
SD−001 1
SD−005 4
SD−020 1
SD−025 3

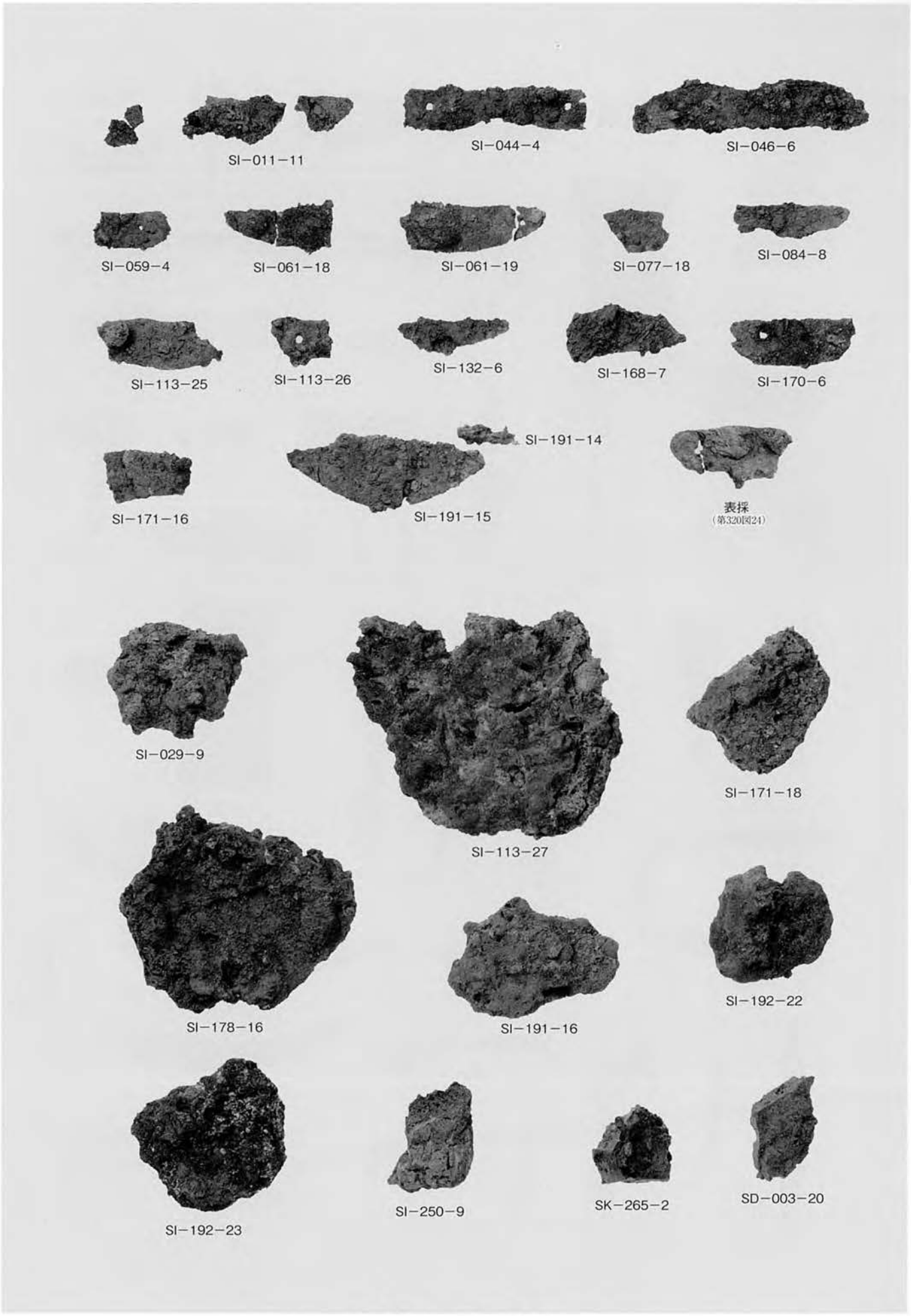
鉄製品（3）


SI−006
4
SI−009
4
SI−009
5
SI−049
7
SI−058
9
SI−073
20
SI−077
19
SI−077
20
SI−079
3
SI−085
14・15
SI−089
11a
11b
SI−092
22
SI−092
23
SI−092
24
SI−092
25
SI−093
13
SI−094
11
SI−095
29
SI−098
4
SI−104
20
SI−104
21
SI−113
23
SI−114
8
SI−118
25
SI−153
27
SI−171
9
SI−172
6
SI−191
12
SI−192
18
SB−040
1
SK−097
1
SD−025
1
SI−204
16
SI−218
5
SI−238
7
SI−246A
19
SI−257
22

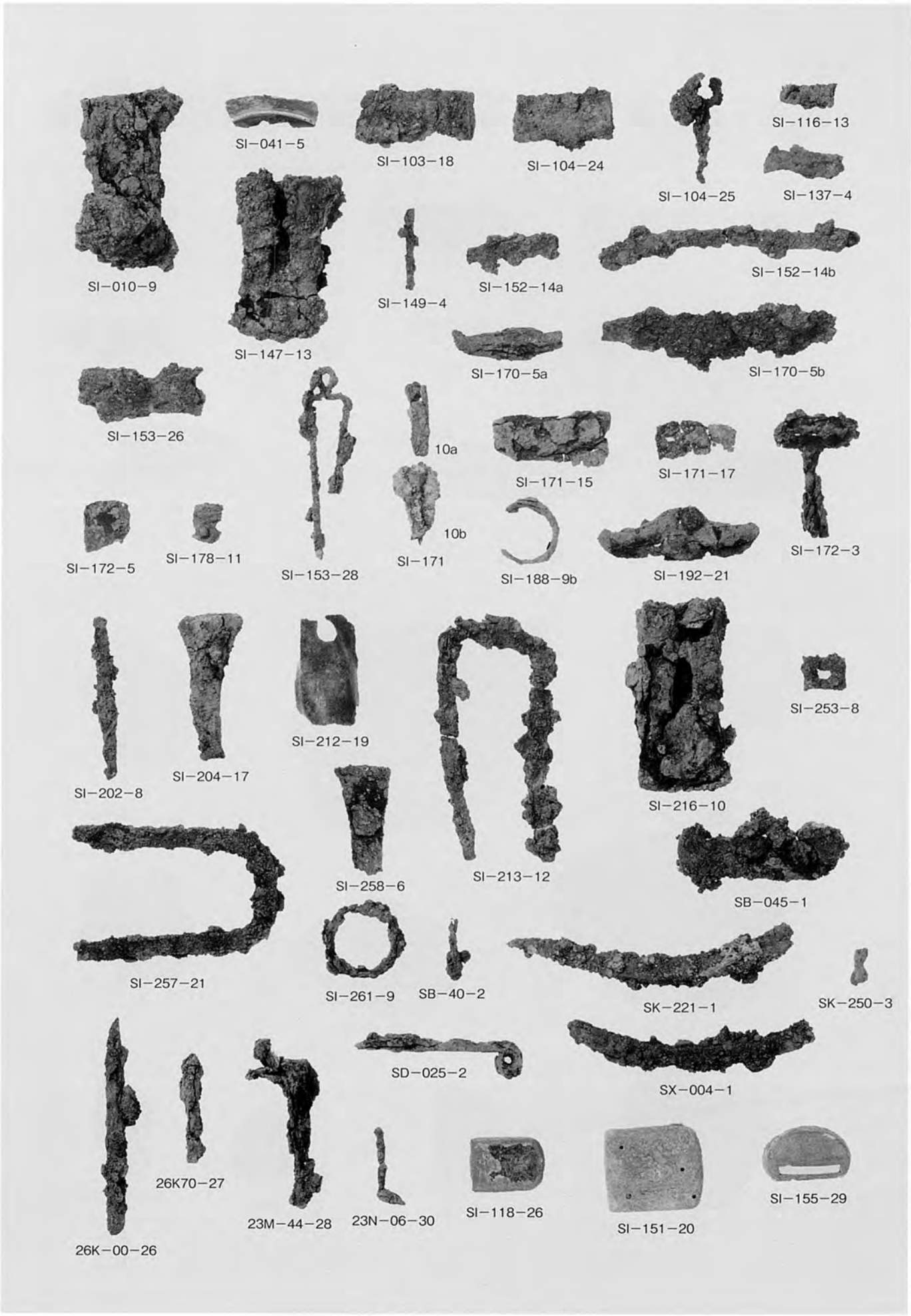
鉄製品（4）

SI−008−6
SI−011−10
SI−020−12
SI−057−3
SI−040−15
SI−059−5
SI−072−7
SI−114−9
SI−094−10
SI−135−3
SI−134−8
SI−169−11
SI−171−13
SI−171−14
SI−173−2
SI−175−7
SI−185−10・11
SI−207−9
SI−212−16
SI−212−17
SI−214−10
SI−216−11
SI−221−4
SI−221−5a・5b

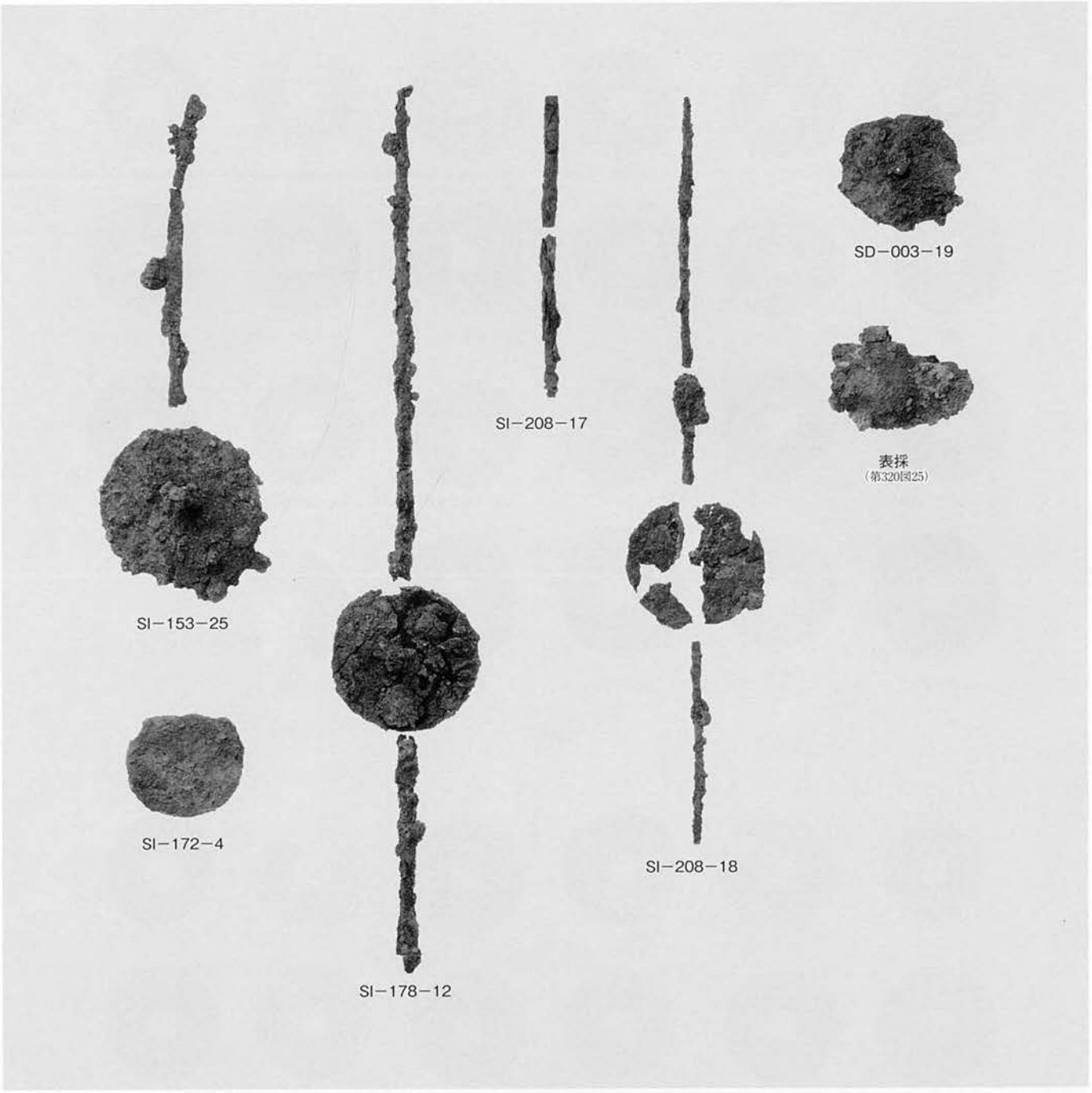
鉄製品（5）


SI−011−11
SI−044−4
SI−046−6
SI−059−4
SI−061−18
SI−061−19
SI−077−18
SI−084−8
SI−113−25
SI−113−26
SI−132−6
SI−168−7
SI−170−6
SI−171−16
SI−191−14
SI−191−15
表採
(第320図24)
SI−029−9
SI−113−27
SI−171−18
SI−178−16
SI−191−16
SI−192−22
SI−192−23
SI−250−9
SK−265−2
SD−003−20

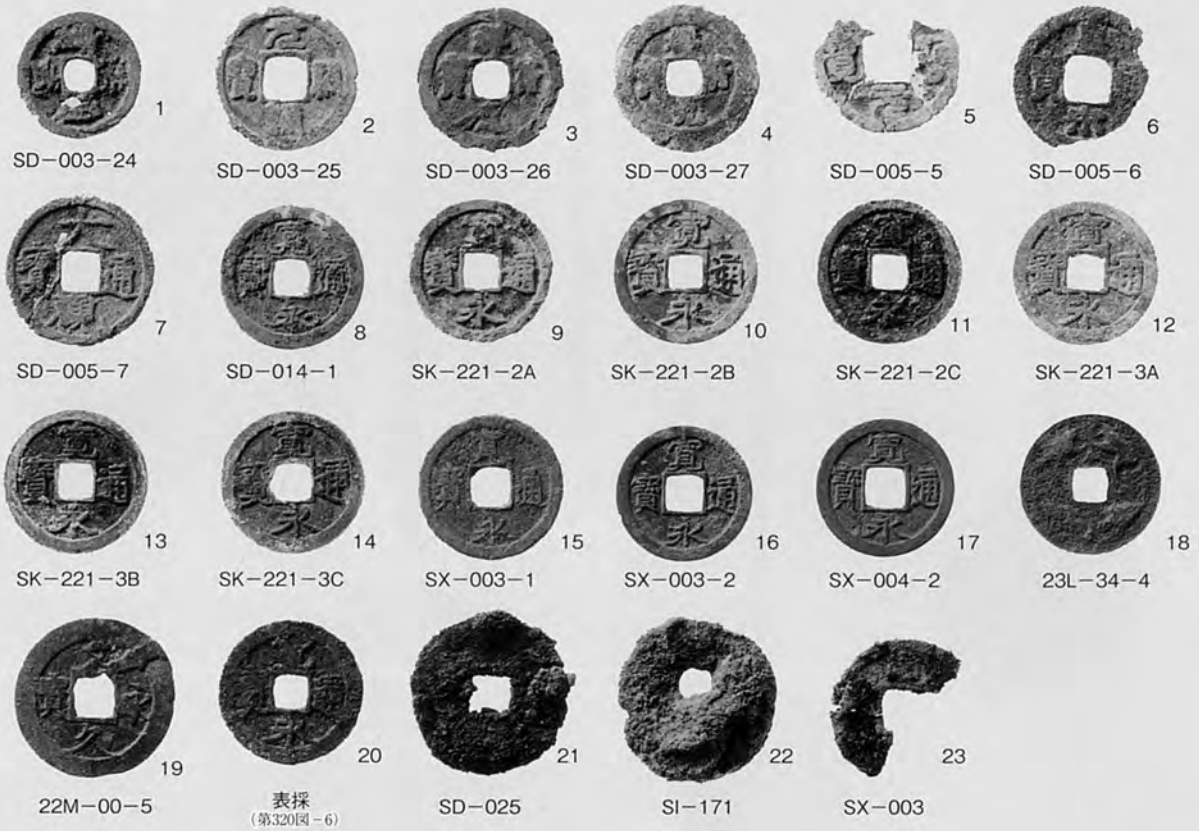
鉄製品（6），椀形鍛冶滓


SI−010−9
SI−041−5
SI−103−18
SI−104−24
SI−104−25
SI−116−13
SI−137−4
SI−147−13
SI−149−4
SI−152−14a
SI−152−14b
SI−170−5a
SI−170−5b
SI−153−26
10a
SI−171−15
SI−171−17
SI−172−5
SI−178−11
SI−153−28
10b
SI−171
SI−188−9b
SI−192−21
SI−172−3
SI−202−8
SI−204−17
SI−212−19
SI−213−12
SI−216−10
SI−253−8
SI−258−6
SB−045−1
SI−257−21
SI−261−9
SB−40−2
SK−221−1
SK−250−3
SD−025−2
SX−004−1
26K70−27
23M−44−28
23N−06−30
SI−118−26
SI−151−20
SI−155−29
26K−00−26

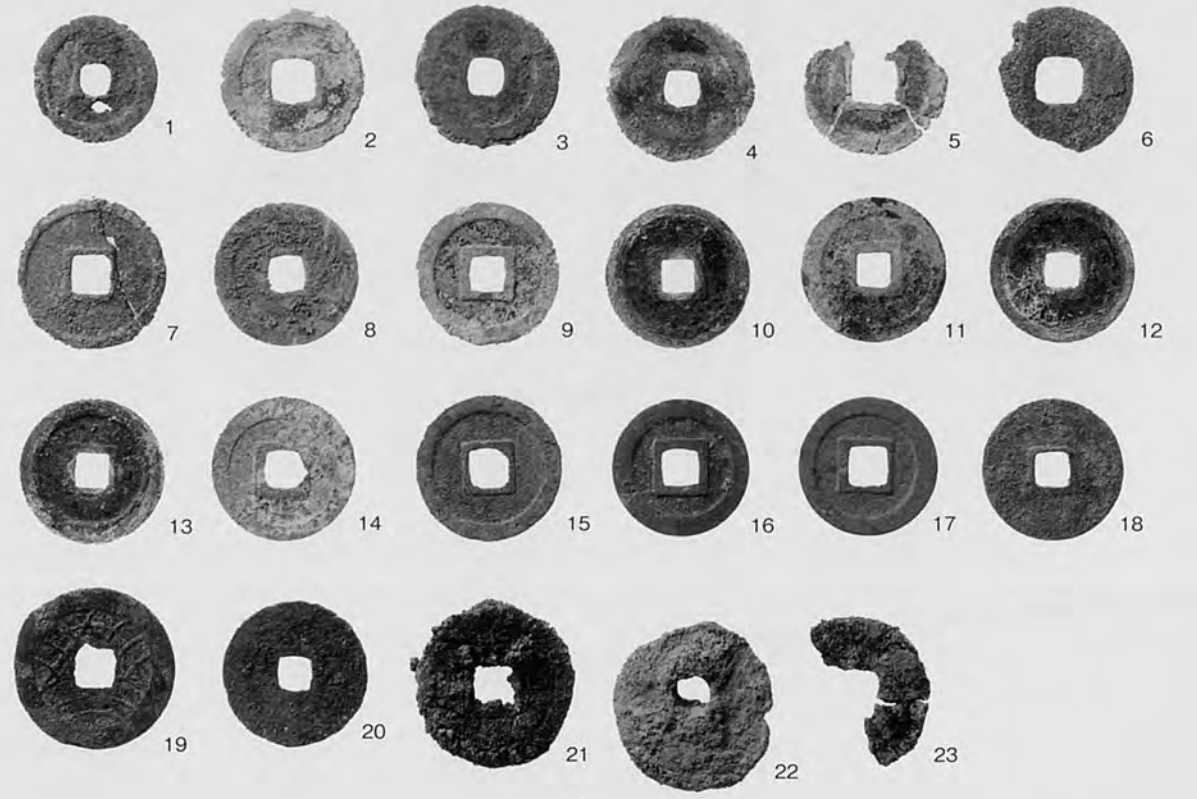
鉄製品（7），銅製品


SD−003−19
表採
（第320図25）
SI−208−17
SI−153−25
SI−172−4
SI−178−12
SI−208−18

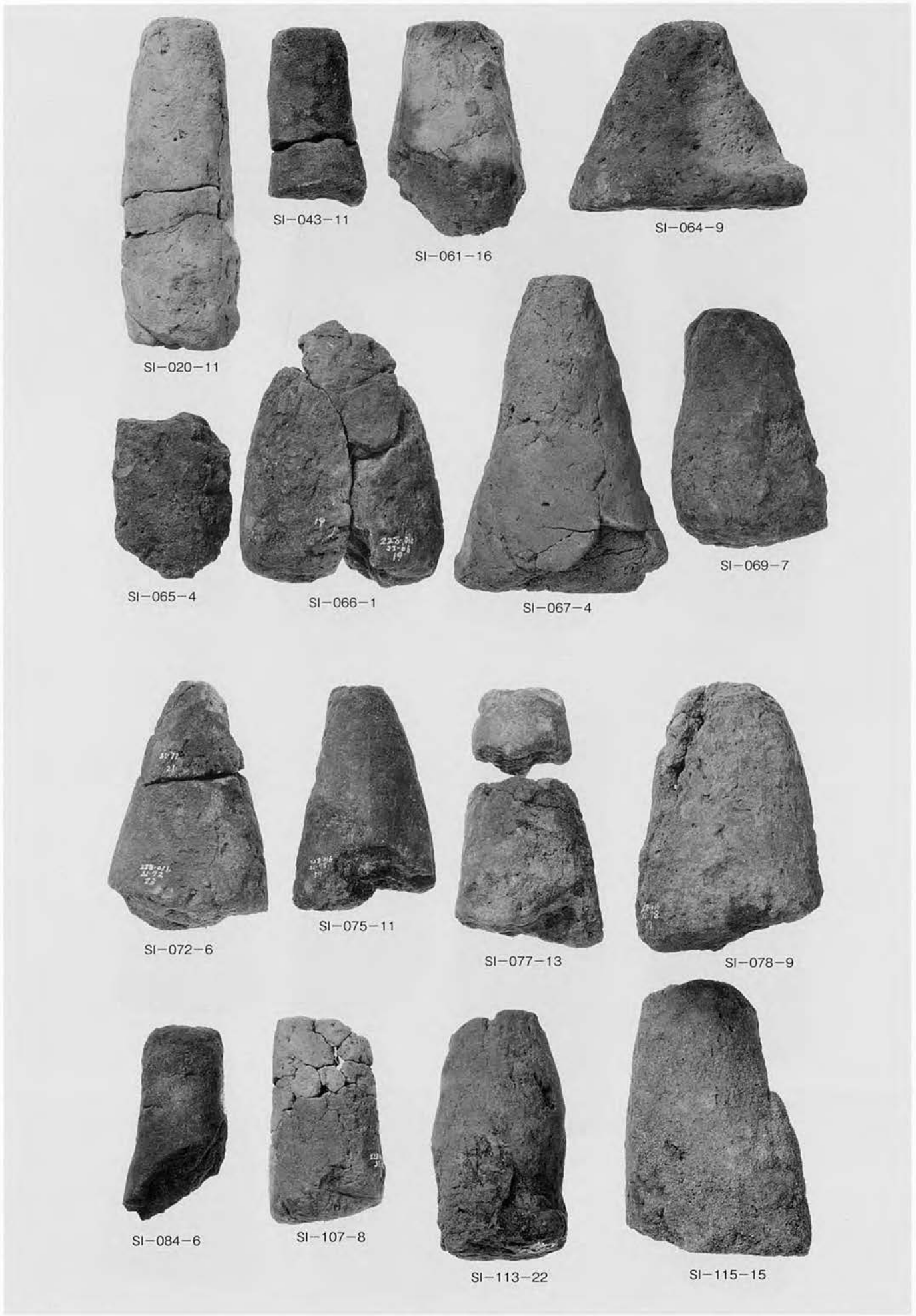
鉄製品（8）


1
SD−003−24
2
SD−003−25
3
SD−003−26
4
SD−003−27
5
SD−005−5
6
SD−005−6
7
SD−005−7
8
SD−014−1
9
SK−221−2A
10
SK−221−2B
11
SK−221−2C
12
SK−221−3A
13
SK−221−3B
14
SK−221−3C
15
SX−003−1
16
SX−003−2
17
SX−004−2
18
23L−34−4
19
22M−00−5
20
表採
(第320図−6)
21
SD−025
22
SI−171
23
SX−003

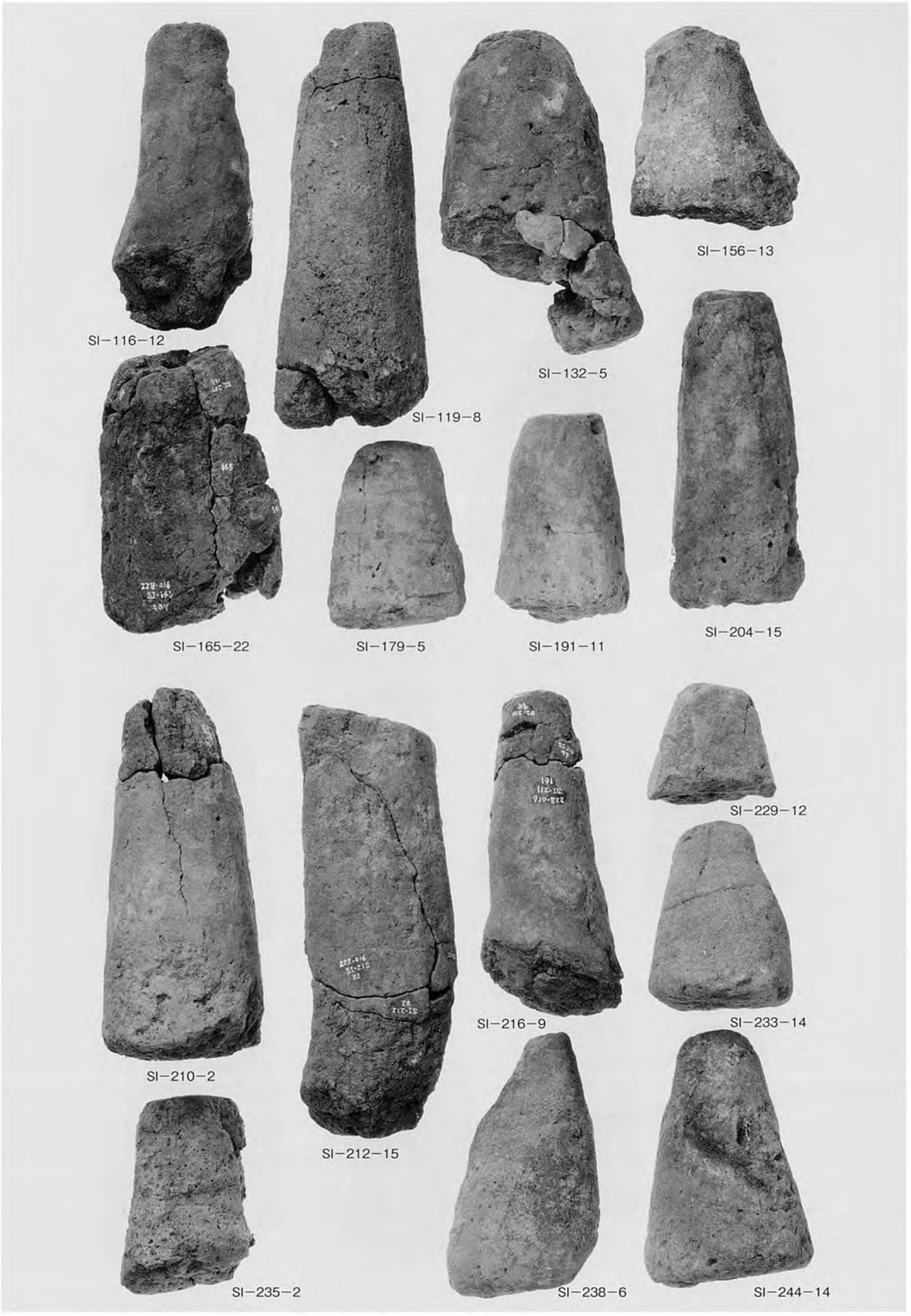
(表)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23

(裏)


SI−020−11
SI−043−11
SI−061−16
SI−064−9
SI−065−4
SI−066−1
SI−067−4
SI−069−7
SI−072−6
SI−075−11
SI−077−13
SI−078−9
SI−084−6
SI−107−8
SI−113−22
SI−115−15

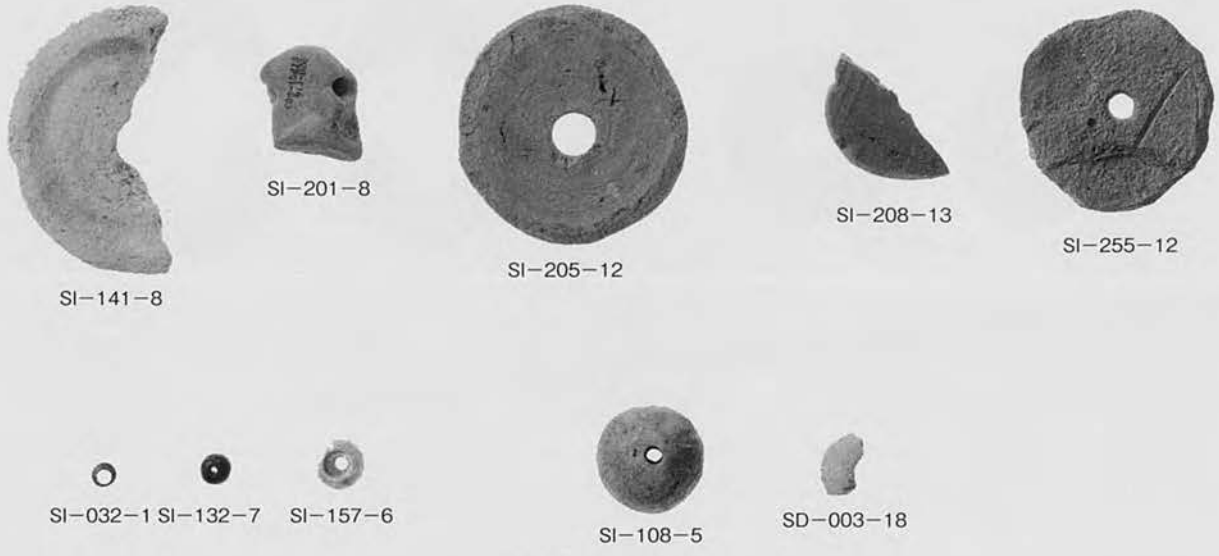
土製支脚（1）


SI−116−12
SI−119−8
SI−132−5
SI−156−13
SI−165−22
SI−179−5
SI−191−11
SI−204−15
SI−210−2
SI−212−15
SI−216−9
SI−229−12
SI−233−14
SI−235−2
SI−238−6
SI−244−14

土製支脚（2）

土製支脚（3）

羽　口




土製品，玉類

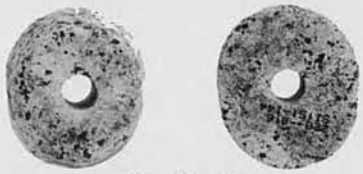
土製支脚（3），羽口，土製品，玉類

SI−011−12

SI−052−2

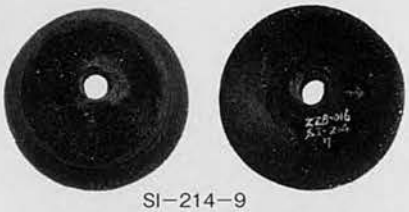
SI−058−10

SI−140−3


SI−151−21

SI−171−19

SI−180−14


SI−214−9

SI−217−9

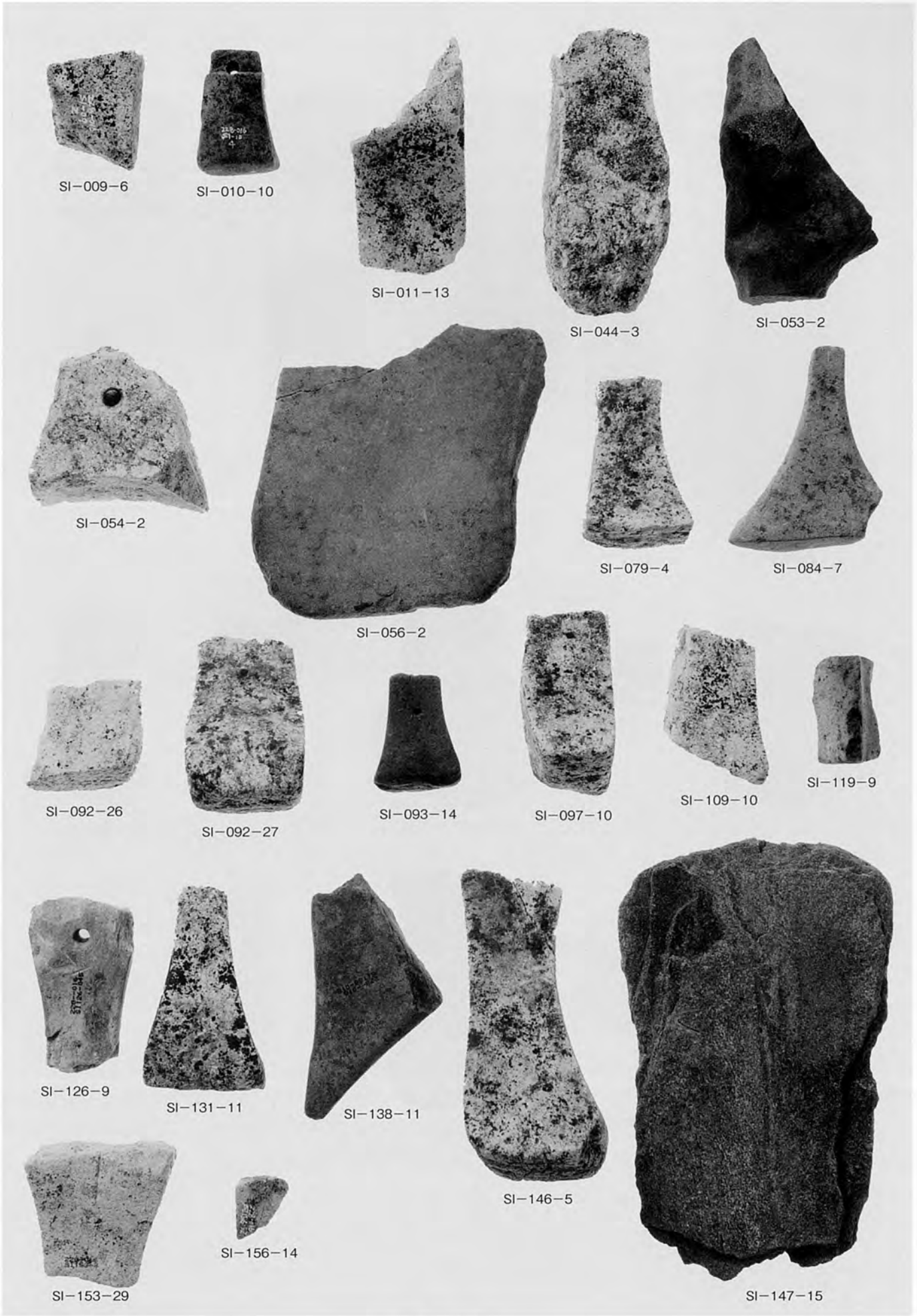
SI−240−9

SD−003−21

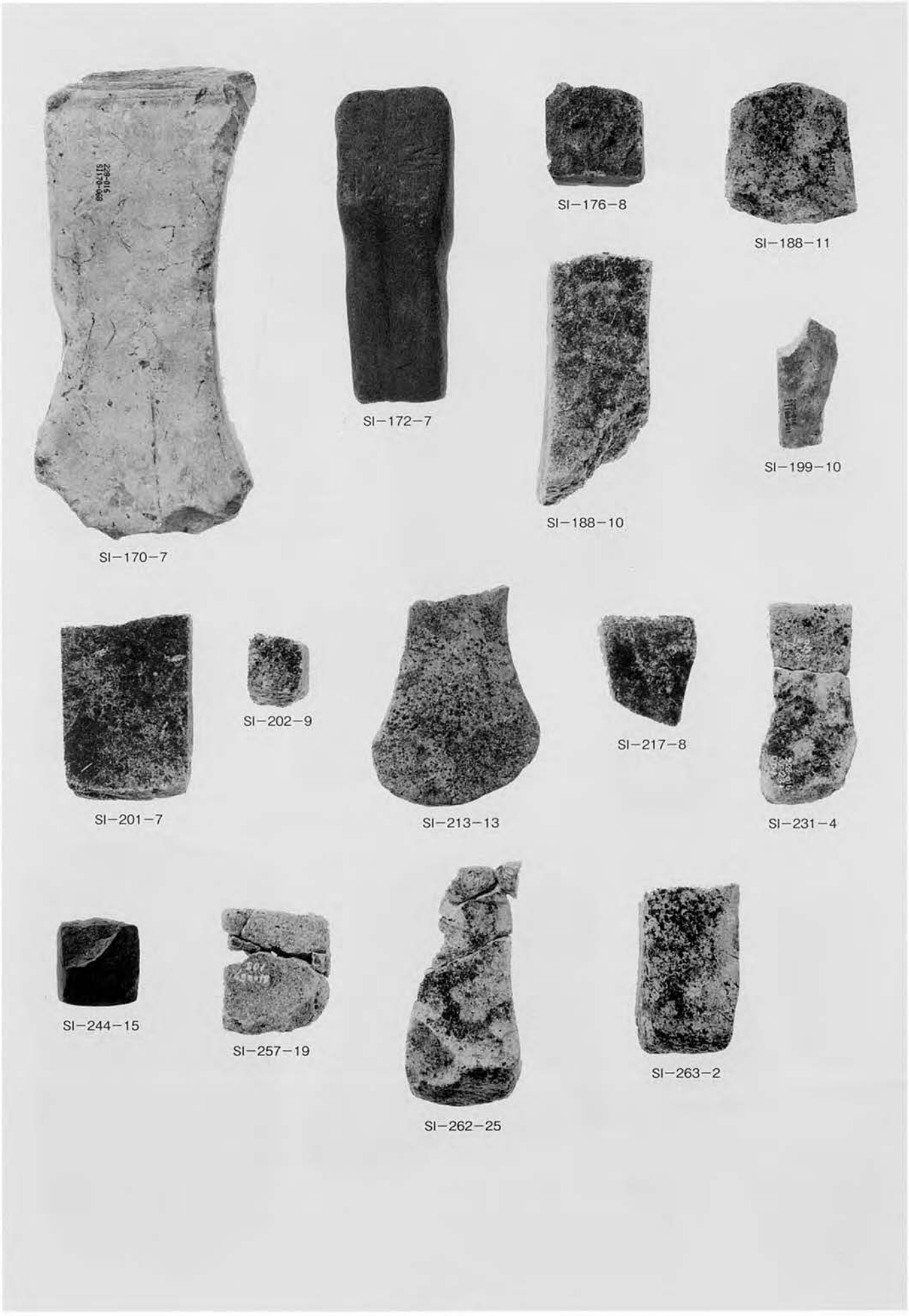
SD−003−17

SD−023−3

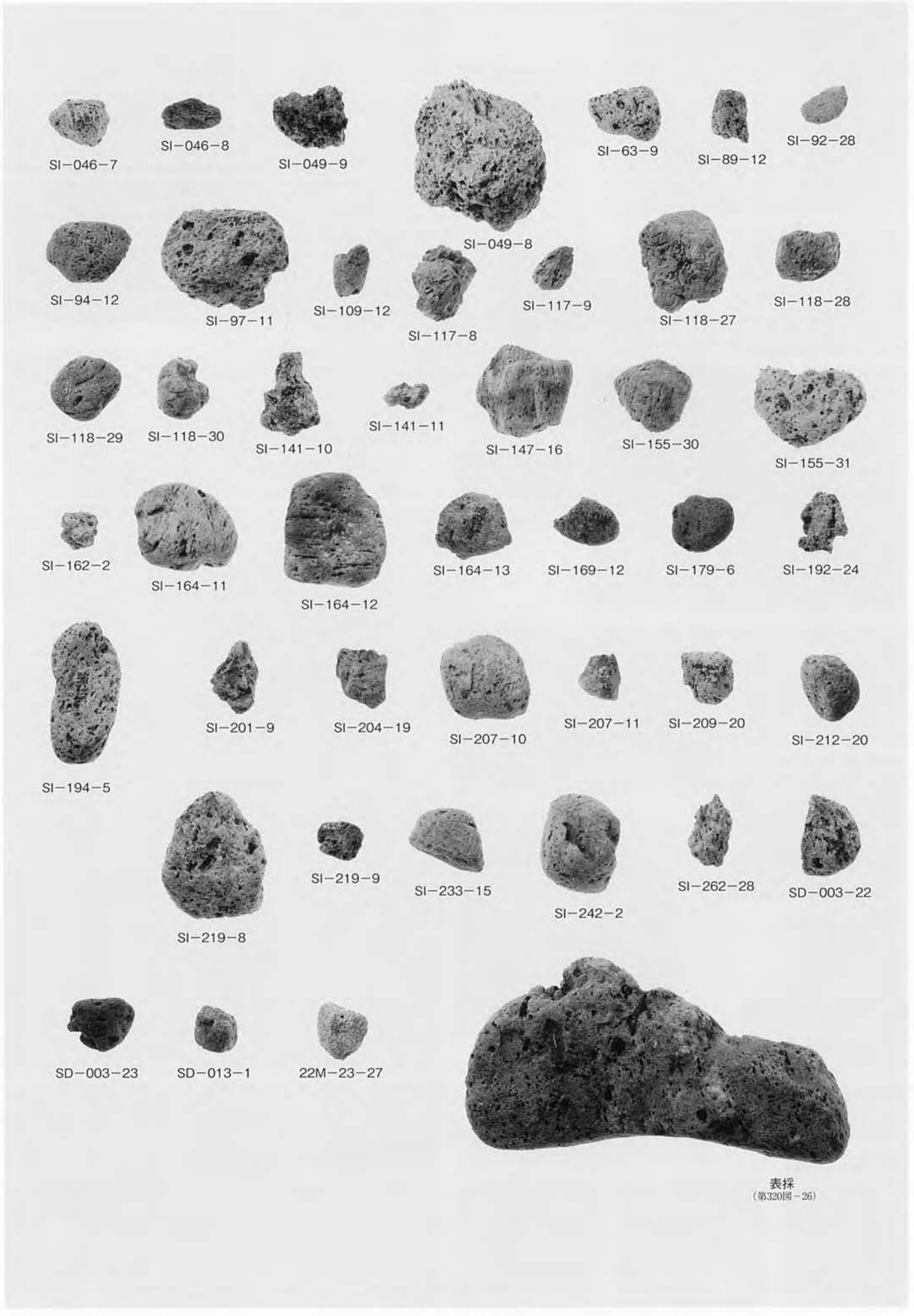
石製紡錘車


SI−009−6
SI−010−10
SI−011−13
SI−044−3
SI−053−2
SI−054−2
SI−056−2
SI−079−4
SI−084−7
SI−092−26
SI−092−27
SI−093−14
SI−097−10
SI−109−10
SI−119−9
SI−126−9
SI−131−11
SI−138−11
SI−146−5
SI−147−15
SI−153−29
SI−156−14

砥 石 (1)


SI−170−7
SI−172−7
SI−176−8
SI−188−11
SI−188−10
SI−199−10
SI−201−7
SI−202−9
SI−213−13
SI−217−8
SI−231−4
SI−244−15
SI−257−19
SI−262−25
SI−263−2

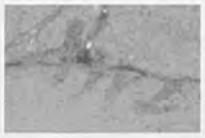
砥　石 (2)


SI−046−7
SI−046−8
SI−049−9
SI−049−8
SI−63−9
SI−89−12
SI−92−28
SI−94−12
SI−97−11
SI−109−12
SI−117−8
SI−117−9
SI−118−27
SI−118−28
SI−118−29
SI−118−30
SI−141−10
SI−141−11
SI−147−16
SI−155−30
SI−155−31
SI−162−2
SI−164−11
SI−164−12
SI−164−13
SI−169−12
SI−179−6
SI−192−24
SI−194−5
SI−201−9
SI−204−19
SI−207−10
SI−207−11
SI−209−20
SI−212−20
SI−219−8
SI−219−9
SI−233−15
SI−242−2
SI−262−28
SD−003−22
SD−003−23
SD−013−1
22M−23−27
表採
(第320図−26)

軽　石

1

2


3

4

5

20

21

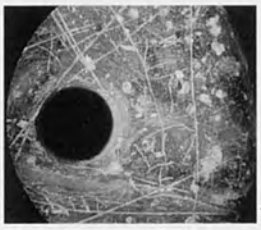
6

9

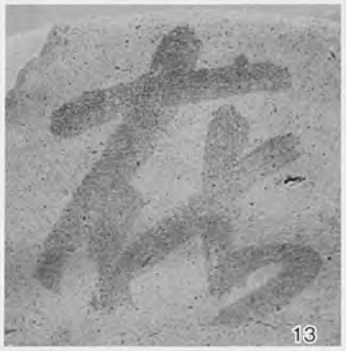
22

7

8


10

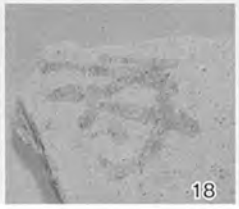
12

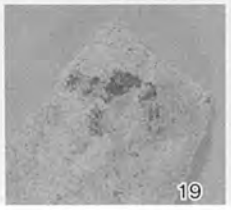

13

14

17

16


18


19

文字資料（1）（墨書・刻書）

23

24

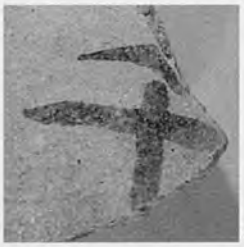
25

26

27

28

29


30

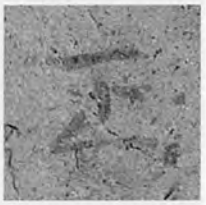
31

32

33

34

35


36

37

38

39

40

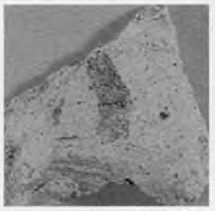
41

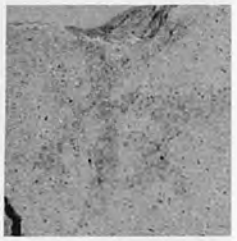
42

43

44

45


46


47

48

49

51

52

53

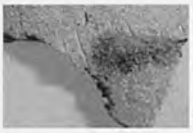
54

55

56

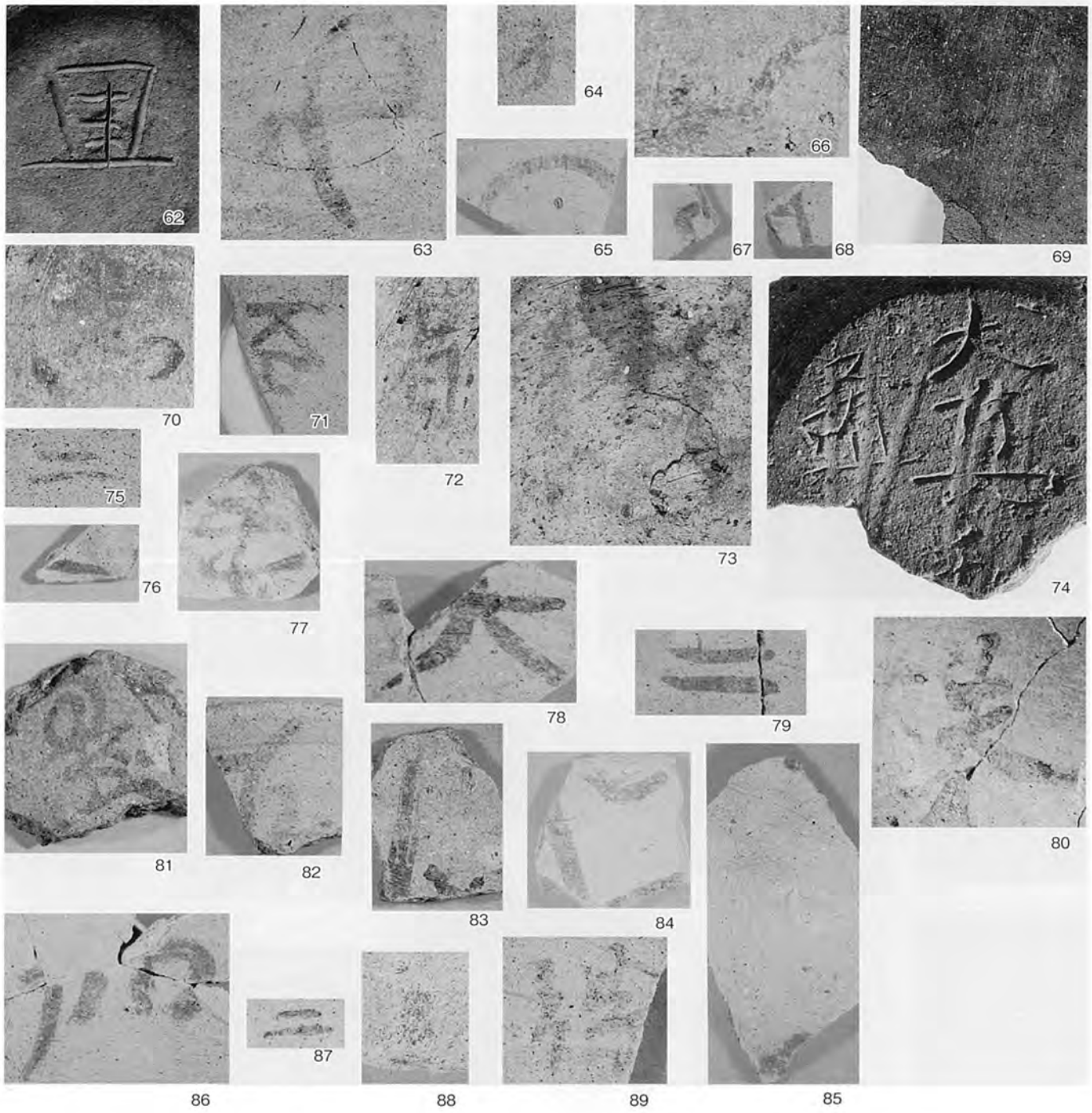
57

58


59

60

文字資料（2）（墨書・朱墨・刻書）




文字資料（3）（墨書・朱墨・刻書）

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | よつかいどうしいなりづかいせき |
| 書名 | 四街道市 稲荷塚遺跡 |
| 副書名 | 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | VII |
| シリーズ名 | 千葉県教育振興財団調査報告 |
| シリーズ番号 | 第613集 |
| 編著者名 | 岸本雅人・古内茂・糸川道行・西野雅人 |
| 編集機関 | 財団法人　千葉県教育振興財団　文化財センター |
| 所在地 | 〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡８０９－２　TEL 043-424-4848 |
| 発行年月日 | 西暦2009年３月25日 |

| 所収遺跡名（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 稲荷塚遺跡（いなりづかいせき） | 四街道市物井（よつかいどうしものい）字稲荷塚（あざいなりづか）1,298－2ほか | 12228 | 016 | 35度41分20秒 | 140度11分41秒 | 19941101～19950328 | | 独立行政法人都市再生機構物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査 |
| | | | | | | 19950403～19950531 | 14,000 | |
| | | | | | | 19950601～19960131 | 8,000 | |
| | | | | | | 19950621～19950630 | 360 | |
| | | | | | | 19951101～19960327 | | |
| | | | | | | 19960401～19960507 | 3,500 | |
| | | | | | | 19960403～19960930 | 6,000 | |
| | | | | | | 19960801～19970326 | 6,800 | |
| | | | | | | 19981007～19981215 | 2,650 | |
| | | | | | | 20020201～20020228 | 625 | |
| | | | | | | 20020501～20020610 | 970 | |
| | | | | | | 20040115～20040308 | 2,199 | |
| | | | | | | | 計 45,104 | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 稲荷塚遺跡（いなりづかいせき） | 包蔵地 | 旧石器時代 | 石器出土・出土地点 ９か所 | 旧石器時代石器（ナイフ形石器，楔形石器，削器，掻器，彫器，石錐，台形石器，尖頭器） | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 稲荷塚遺跡 | 包蔵地・集落跡 | 縄文時代 | 炉穴 9基<br>陥し穴 18基<br>土坑 5基<br>竪穴住居 4軒<br>石器製作跡 1か所 | 縄文土器（早期・前期・中期・後期・晩期），石器（有舌尖頭器，石鏃，削器，掻器，石錐，石鏃未製品等，石核，磨製石斧，打製石斧，敲石，磨石，砥石，石皿），貝（イボキサゴ，マガキ等） | 前期の竪穴住居群は浮島系土器を主体的に出土した。<br>チャートを素材とした後期の石器製作跡が検出された。 |
| | 集落跡 | 弥生時代～古墳時代初頭 | 竪穴住居 2軒 | | |
| | 集落跡 | 古墳時代後期 | 古墳 2基<br>竪穴住居 11軒 | 土師器，須恵器，土製支脚，鉄製品（穂摘具，鉄鏃，刀子），砥石，軽石 | |
| | 集落跡 | 奈良・平安時代 | 竪穴住居 229軒<br>竪穴状遺構 11基<br>掘立柱建物 53棟<br>柵列 2条<br>土坑 47基 | 土師器，須恵器，銅製品（腰帯・皿），鉄製品（刀子・鎌・穂摘具・紡錘車・鉄鏃・釘・鑿・鑿・鉄斧・閂受け金具・鉤座金具・燧鉄・鑷子等），椀形滓，石製品（紡錘車・砥石・玉・軽石），土製品（支脚・紡錘車・羽口・円板・玉） | 検出された集落は下総国千葉郡物部郷の中核集落の一部である。 |
| | 包蔵地・墓跡 | 中・近世 | 土坑墓 7基<br>井戸 1基<br>土坑・小穴 184基<br>塚 3基<br>溝状遺構 34条 | 銭貨（北宋銭・明銭・寛永通寶・文久永寶），鉄製品（釘，用途不明），カワラケ | |
| 要　約 | 本遺跡は，奈良・平安時代における大規模な集落遺跡の一つである。隣接する小屋ノ内遺跡は下総国千葉郡物部郷の中核集落とみられるが，両遺跡が所在する台地は連続しており，本遺跡は小屋ノ内遺跡と一連の遺跡と考えられる。注目される遺物として，「下総國千…大今在…　」及び「大…村…」と記載された長文墨書をもつ土師器甕がある。「千」は千葉郡を意味するものであろう。平安時代初め頃の竪穴建物から出土した。そのほか三彩托や骨蔵器と思われる灰釉陶器長頸壷・短頸壷が出土した。縄文時代では浮島系を主体とした前期の竪穴住居群が検出された。 | | | | |

千葉県教育振興財団調査報告第613集

# 四街道市稲荷塚遺跡

－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－

〔第３分冊〕

平成21年３月25日発行

編　　集　　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　　行　　独立行政法人　都市再生機構
財団法人　千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡８０９－２

印　　刷　　株式会社　弘　文　社
千葉県市川市市川南２－７－２